

白い犬

一条 秋

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

2010年3月。

大学進学のために夜行バスで京都へ向かっていた青年・加藤光秋は、その途中で突如白い空間に招かれ、自らを「神に近い者」と称する者から白い人型の機械を授かり、有無を言わず自分がいた世界とは異なるもう一つの世界、異世界へと送り込まれてしまう。

自分がいた世界と非常に似ていながらもやはり異なるその世界で、光秋は何を見、何を思い、何をなすのか。

初めて投稿させていただきました。処女作であり、内容、表現ともにいたらないところが多いと思いますし、かなり長い話になる予定ですが、とにかく最後まで書き切るつもりです。また、本作はパロディ、オマージュの要素を多分に含みます。見覚えがある場面を見かけて楽しんでいただけたらと思います。

興味をもつていただけたら、最後までお付き合いください。

目次

設定紹介

登場人物

メカニック

用語

旅立ち編

プロローグ 旅立ち

1 異世界

2 初陣

3 一戦の後

4 異世界の朝

5 スカウト

6 ESSO入隊

飛行起動実験編

7 飛行起動実験 前編

8 飛行起動実験 後編

『蜂の巣』攻防編

9 作戦と誕生日

10 怒りの犬

夏の想い人編

11 再会、あるいは出会い

12 アヤと光秋

13 穏やかな日々

14 外の世界

15 光秋の一面

16 市街戦

157

126

94

64

44

26

14

10

7

1

204

175

255

230

278

297

311

349

365

418

2 6	2 5	2 4	陸・空・ESO合同演習編	2 3	2 2	復帰編	565	2 1	2 0	1 9	1 8	1 7
話題は「ニコイチ」	演習準備	新戦力		予知出動	光秋スタイル			別れと再会、そして前へ	2人の中	復帰の前	新しい繋がりーアキ	白い犬
724	684	658		627	596				543	511	491	467

3 7	はじめの夜警編	3 6	3 5	3 4	3 3	3 2	3 1	808	3 0	2 9	2 8	2 7
闇夜の訪問者		京都観光の中で	生還祝い	事後説明	異界からの帰還	再会と覚醒	異界の使者		陸・空・ESO合同演習	演習前夜	光秋と曾我	演習の前
1046		1003	953	918	904	881	851			783	769	740

3 8	第二の使者	1081
3 9	一夜明けて	1071
4 0	虎の査問	1331
4 1	東京本部にて	1154
姉貴分の誕生日祝い編		
4 2	プレゼントを買いに	1198
4 3	護送中に	1225
4 4	姉貴分の誕生日	1257
病床の夢編		
4 5	病床の夢 前編	1268
4 6	病床の夢 後編	1308
サン教ベース攻防編		
4 7	緊急招集	1334

4 8	曾我との再会	1354
4 9	お茶の席の意見交換	1380
5 0	前夜の湯船	1412
5 1	思わぬ包囲戦	1429
5 2	少女の気持ち	1456
5 3	鬼との邂逅	1465
5 4	サン教ベース攻防戦 前編	1492
5 5	サン教ベース攻防戦 後編	1523
5 6	第二の使者再び	1551
5 7	事後のひと時	1575
5 8	帰省の誘い	1596

姉貴分の帰省編

5 9	伊部家	1630
6 0	夢の中の姉妹	1670
6 1	姉貴分の友達	1692
6 2	伝えられる気持ち、形になる想	1709
い		
6 3	気持ち新たに	1735
新年祝賀パーティー編		
6 4	仕事はじめ	1775
6 5	新年祝賀パーティー	1807
6 6	人の創りし巨人	1823
6 7	神の子供たち	1849
6 8	藤原の知ること	1884

転属編

6 9	転属命令	1894
7 0	少しでも一緒に	1910
7 1	久方の京都小旅行 前編	1943
7 2	久方の京都小旅行 後編	1975
7 3	見送る人たち	2005
7 4	別れの前に 前編	2044
7 5	別れの前に 中編	2085
7 6	別れの前に 後編	2123
加藤隊結成編		
7 7	転属1日目	2159

8 8	8 7	8 6	8 5	8 4	2298	8 3	2277	8 2	8 1	8 0	7 9	7 8
帰路の寄り道	ご近所めぐり 後編	ご近所めぐり 中編	ご近所めぐり 前編	姫君からの誘い		合衆国の機械巨人 後編		合衆国の機械巨人 前編	お姫様との再会	“次の人”	前任者の思惑	柿崎の歩み寄り
2417	2386	2366	2337	2326					2245	2230	2209	2182

1 0 0	9 9	不審事件捜査編	9 8	9 7	9 6	9 5	9 4	9 3	9 2	9 1	9 0	8 9
捜査協力 前編	手探りの主任業		加藤隊結成	撤収	使者の隊	修了試験 後編	修了試験 中編	修了試験 前編	試験前夜	少女たちとの語らい	試乗体験	レールガン
2869	2812		2778	2732	2680	2634	2588	2562	2252	2724	8524	6624

伊部姉妹東京再開編

109	菊の気持ち	32083166
108	平手の音	
3130		
107	渋谷予知捜査線 後編	
3099		
106	渋谷予知捜査線 前編	
105	ロブスター	30583026
104	徳川の誘い	
平手の音編		
103	追跡の乱入者 後編	299429582922
102	追跡の乱入者 前編	
101	捜査協力 後編	

115	姉妹との休日	34233386
114	姉妹の時間	
3341		
113	食い違い、確かめ合い	
112	一筋の光	332132653238
111	迎えに	
110	お詫びの席	

設定紹介

登場人物

主人公

・加藤 光秋
かとう こうしゅう

本作の主人公。ニコイチの専属パイロット。藤原隊隊員。超能力者支援機構^E三曹^S。

大学進学のために夜行バスで京都へ向かっていた途中、神モドキによつて異世界に送られ、その際に人型ロボット・ニコイチを授けられる。

生まれながらに目と耳に障害があり、普段からメガネを掛けている。特に右耳と左目は殆ど機能していない。もともと本人はあまり気にしておらず、多少の不便を感じながらも自分の体を受け入れている。

異世界に送られたことについては多少の不安を感じているものの、もともと遠くに行きたいという願望があつたため、思いの外に肯定的に捉えている。

性格は真面目で大人しく、やや臆病なところがあるが、きつかけがあれば時に大胆な行動に走る。

超能力者支援機構

藤原隊

・藤原 ふじわら 大吉 だいきち

藤原隊隊長。ESO三佐^エ。レベル6のサイコキノ。

逞しい体付きをもつ2メートル程の巨漢。髭を蓄えた強面の顔付きをしている。

鍛え上げた肉体による体術と高レベルの念力を駆使して戦う一方で、さまざまな知識を有した博識な面を備えている。

普段は冷静で思慮深く、人当たりのいい性格だが、場合によつては自ら先陣を切る豪快さも持ち合わせている。

・小田 おだ 仁 じん

藤原隊副隊長。ESO一尉。

藤原に次ぐ長身の男。藤原隊の中では最も冷静な性格。時に熱くなり過ぎてしまう藤原や、あまり考えずに行動してしまう竹田のフォロー役。

藤原の右腕として隊をまとめている。

・竹田 たけだ 柔蔵 じゆうぞう

藤原隊隊員。ESO二尉。

普段はやる気が高くぼんやりしていることが多いが、いざという時は率先して動くというやる時はやる性格。考えるより先に動く質であり、それ故にトラブルメーカーな面

がある。

ロボット好きであり、ニコイチに純粋な興味を抱いている。

・伊部 法子
いべ ほうこ

藤原隊隊員。ESO二尉。

薄黒い肌と長い黒髪を後ろで結った髪型が特徴の藤原隊の紅一点。

生まれはアフリカ北部。物心着く前に実の両親を紛争で失い、エジプトの施設にいたところを今の両親に引き取られる。実の娘として育ててくれた両親の気持ちに応えるためにESOに入る。

なにかと接する機会が多い光秋のことを気にかけている。

東京本部

・曾我 地球
そが がいア

日ESO東京本部特務部隊所属の特エス。サイコキノ。

普段はお淑やかな態度で好意的な印象を与える一方、興味を持った者や親しい者には小バカにするような態度を取る。

10代始めの頃から特エスの職務に就いているため、それなりの経験を持つ。

その他

・上杉 勇児
うえすぎ ゆうじ

E S Oの専属医。レベル8のサイコメトラー。

優れた医療知識と技術、サイコメトラーとしての感知能力を持ち、E S Oの職員たちの健康を預かる。こちら側での光秋の目の掛かり付けの医者となる。

女にだらしな性格であり、よく竹田とつるんでいる。

・大河原 おおがわら 創太郎 そうたろう

E S Oの技術者。ニコイチ調査班の主任。ニコイチの性能調査や武器の考案・製作などを行う。

壮年に差しかかる年齢ながら藤原にも負けない逞しい体付きをしている。

・加藤 かとう 綾 あや

戸松教授の人工的な超能力開花実験によって生まれた伊部法子のもう1つの人格。レベル7のサイコキノであり、また強力なテレパスの素質を持つ。

実験によつて伊部本来の人格は封じられ、それに伴い知能も退行してしまったため、光秋と出会った当初の精神年齢は赤ん坊程度だった。強力な能力に加えて人見知りが激しく職員たちでは手がつけられなかったものの、偶然出会った光秋に懐き、彼の指導の許で少しずつ知性を回復していく。

覚えは早く、伊部自身の記憶も手伝つて2カ月程度で肉体と同程度の精神まで回復した。その過程で伊部に戻ることは自分が消えることではないかと悩むようになるが、最

後は「伊部法子」とは異なる「加藤綾」という独立した人格を確立し、光秋の腕の中で眠りについた。

・戸松 学太^{とまつ がくた}

ESOの研究機関に所属する超能力研究者。彼の行った実験によって綾が誕生した。当初は強力な念力と、それを扱うには不吊り合いな精神の綾を警戒していたが、成長していくにつれて彼女と、彼女に深く関わる光秋を気に掛けるようになる。

自身の中にマッドサイエンティストと言うべき危険な欲求があることを自覚しつつも、それを抑えられる良心も持ち合わせている。

地球合衆国軍

・アレク タツカー

合空軍中尉。ペガサス小隊所属。

金髪に青い目の白色系男性。口は悪いが仲間と認めた者に対しては思いやりがある性格。

・横尾 富美子^{よこお ふみこ}

合陸軍中尉。レベル5のテレパス。

士官学校時代からの伊部の友人であり、卒業した現在も深い交流が続いている。

富野大佐の許で秘書官を務めている。

・横尾よしお 純じゆん

空軍士官学校の生徒。富美子の弟。ノーマル

タツカーの影響で白い犬、つまり光秋に憧れている。

戦闘機の操縦技術はかなり高い。

その他

・神モドキ

光秋を異世界に送り、ニコイチを授けた者。自称「人間が神と呼ぶものの極めて近い者」。人の形をした白い影の様な姿をしており、テレパシーの様なものでコミュニケーションをとる。

現時点では全くの未知の存在であり、世界と世界の間にはインスタントの世界を創り出したり、物質を異世界に転移させたりすることができる。

光秋に対しては、一応友好的な態度をとっている。

「神モドキ」という名前は光秋が方便上付けたものであり、自分から名乗ってはいない。

メカニック

機動兵器

・ニコイチ

識別番号UKD-01。神モドキが光秋に授けた“力”。身長10メートル、重量5トンの白い人型ロボット。

額に角を生やしたほぼ人の顔を模した頭部と、全体的に角張った体付き、丸身を帯びた四肢をもち、各関節が黒いカバーで覆われている。

操縦は2つの操縦桿とペダルによる手動操作と、考えたことを機体の動きに反映させるイメージ操作を併用して行う。

重火器の集中砲火を浴びても傷1つ付かない程の装甲と、50トンを片手で持ち上げる程の馬力を持つ。また、備品も含めて超能力が効かない性質を持ち、自力で飛行することができる。

・ゴレム・タンク

型式番号PHM-01。通称「ゴレタン」。合衆国がニコイチの様なロボット兵器を作る過程で生まれた従来兵器との過渡期的な機体。全高7メートル。

脚部の製作の目処が立たず、やむなく合軍の主力戦車であるM1エイブラムスの車体を流用して移動を可能とした。上半身はほぼ完全な人型であり、一つ目の頭部と五指を持つ腕、背部には2門の戦車砲が備わっている。

機動兵器用火器

・N砲

大河原主任が設計・主導開発したニコイチ用の火器。戦車砲を流用し、形は人間の銃に似せて作られている。N砲という名前は、「N^{ニコ}i^イk^コo^オi^イt^チi」の頭文字からとったものである。

本体上部に弾倉を指し込むことで弾が装填され、弾倉の種類を変えることで数種類の弾を撃つことができる。

また、命中率向上のためにレーザーポインターを用いた照準器が付いている。

もともとが戦車砲だったために丈夫にできており、砲身部分を竹刀の様に叩き付けることで接近戦でも使える。

・ガトリング砲

N砲に次ぐニコイチ専用の火器。命中率の向上を目的に開発され、連射性の高い武器となっている。

基本構造はN砲と同じだが、砲身は6本の回転式、弾倉は樽型になっている。砲身の構造と軽量化による強度の不足から、N砲の様な接近戦での運用ができない。

その他

・ESP ジャー
Jammer

通称「Eジャマー」。キノコの傘の形をした超能力妨害装置。人工念波を放出して影響下にある超能力を無効化、あるいは弱体化させる。

超能力の悪用を防止するため、重要な施設には必ず設置されている。一方で、反社会団体の手に渡って悪用されることもある。

出力は装置の大きさに比例するため、強力な妨害を行おうとすれば大型の物を用いるか数を揃えなければならなくなってしまう。小型化と高出力化の両立が目下の目標である。

用語

用語

・超能力

通常の物理法則から逸脱した現象を引き起こす能力。

9段階のレベル分けがされており、数字が大きいほどより強力になる。もつとも、8を超えると計測不能になるため、最高レベル9の中でも能力差が存在する。

能力にはさまざまな種類があり、同じ種類の能力でも人によつて発現形態に違いがあることもある。

今もつて未知の部分が多く、上記以外のことはあまりわかっていない。

超能力を持つ者は「超能力者」、「エスパー」などと呼ばれ、これに対して超能力を持たない者は「ノーマル」と呼ばれる。

組織・勢力

・地球合衆国

通称「合衆国」。三戦危機を経て、再び世界規模の戦火の発生を防止するために創られた人類初の統一政府。かつて地球上に存在した全ての国家が州として編入されており、

首都はニューヨーク。旧国際連合の施設を使い回している。

国家元首は大統領が務めており、4年に1度の全国民による直接選挙によって選ばれる。

一方で合衆国議会が存在し、各州の代表による議会政治が行われている。

各州には大幅な自治権を認めているものの、軍事力は全て政府が管理する合軍に一元化されている。

・地球合衆国軍

通称「合軍」。合衆国が保有する軍事力。かつて各国が有してした軍事力を統合して誕生した。最高指揮権は大統領が有しており、文民統制に基づいた運用がなされている。

陸・海・空の三軍に分かれており、それらを統括する統合参謀本部はパリにある。また、ESO実戦部隊は軍の下部機関という一面も備えている。

・超能力者支援機構

通称「ESO^{エス}」。超能力の研究や社会貢献などを目的とする政府機関。もともとは地球合衆国設立以前に各国に存在していた同様の機関を統合したものであり、超能力者とのノーマルの共存できる社会を作ること組織の理念に掲げている。

実行力として「実戦部隊」を設けており、有事の際、関係者に超能力者がいれば警察

権を行使できる。また、軍の下部機関という一面もあるため、軍事作戦に加わることもある。

実戦部隊は、ノーマルの主任1名に複数の超能力者で構成される「特務部隊」と、基本はノーマルで構成されるものの、能力の有無を問わない「一般部隊」の2種類があり、主力となる前者と、後方支援や雑務を担う後者から成る。よくいわれるのが、「警察より厳しく、軍隊より緩い組織」。

・Normal People

通称「NP」。超能力者の排斥を掲げる反社会的団体。超能力者を危険視する者、憎悪する者、あるいは単に差別意識を持つ者など、反超能力思想を持つさまざまな人々によつて構成されている。

人が大勢集まる場所で爆発物や銃器を用いてテロ同然の活動を行うという過激さから、一般的には危険な集団と認識されているものの、反超能力思想を持つ有力者から武器や資金などの提供を受けているため、また、横暴な超能力者による事件がたびたび起っているという社会背景から、常に一定の勢力を維持している。また、武器商人たちにとつても重要な顧客となっている。

現在は超能力者の支援機関であるESOを標的とした攻撃をよく行っている。

出来事

・第三次世界大戦危機

通称「三戦危機」。二次大戦後に起った大国同士のイデオロギーをめぐる対立を軸に、民族、宗教、超能力思想など、従来の対立構造が一斉に激化し、世界各地で繰り広げられた局地戦の総称。あまりの混乱に、事態打開のために当時の二大大国であるソビエトとアメリカが核兵器使用1歩手前まで追い詰められ、正に人類滅亡の危機に立たされた。

しかし、有識者や良識のある為政者たちの尽力により最悪のシナリオは辛うじて回避され、国際連合主導による各地の紛争の調停作業（「整理戦争」）が行われるのと並行して、2度とこのような事態を招くことを防ぐために、統一政府の樹立（後の「地球合衆国」）が行われた。

・整理戦争

三戦危機最後の約10年（90～99年頃）にかけて行われた国連主導の各地の紛争の調停作業。積極的な武力介入から平和的な仲裁まで、当時の世界が持っていたありとあらゆる手段を用いて数十年に渡って続いた局地戦を終息させ、統一政府樹立への足がかりとなった。

もつとも、武力介入のあまりの過激さに、批判的な者の中には一連のできごとを「蹂躪戦争」と呼ぶ者もいる。

旅立ち編

プロローグ 旅立ち

2010年3月13日土曜日午後11時。

かとうこうしゅう

薄ら雪の降る高速道路のバス停に、加藤光秋はいる。身長177センチ少々、短めの黒髪で少し痩せ型。顔の中心で五分五分に分けた髪型をし、茶色の目に厚めのレンズが入ったメガネを掛けている。薄朱地にチェック模様のワイシャツと深緑色のズボンを着、茶色のコートを羽織り、灰色地の厚い靴を履いている。背中には黒いリュックを背負い、右肩には斜め掛けに深灰色のカバンを提げている。

その傍らには母がいる。長い黒髪を後ろで一本に束ね、中肉中背といった顔付である。服装は光秋と比べて軽装で、オレンジ色の薄いコート一枚、荷物も持っていない。大学進学を機に、光秋は新潟から京都へ引っ越すことになり、母は今回、その見送りに来ているのである。

そうこうしている内に、目的のバスが来る。二人の前で停車して扉が開くと、制帽に背広姿の乗務員がグリップボードを手に降りて来る。光秋は乗務員に近づき、バスのチケットを見せるのと同時に、

「これ下をお願いします」

と、背負っていたリュックを差し出す。乗務員は、

「はい」

と応じてそれを受け取り、急ぎ足でバスの荷物置き場へ向かう。少しして急ぎ足で戻って来ると、光秋に判別用の番号が書かれた札を渡す。

受け取った光秋は振り返って母を見、

「それじゃあ」

「うん、じゃあね」

と言葉を交わし、バスに乗り込み、車体左側の前から三番目の席に座り、シートベルトを締める。

それから少しして扉が閉まり、バスが動き出す。

光秋は座席の上に置いてあるブランケットを広げて脚に掛け、靴を脱ぎ、背もたれを一杯に倒して寝る姿勢に入る。

——いよいよだ……—

大学生活や初めての独り暮らしに期待しながらも、まずは着いた後に備えて寝ようと努める。

一時間経った頃。

新生活への期待から来る興奮やバスの振動でなかなか寝付けなかった光秋だが、ようやくとうとうしてくる。

が、そう感じた次の瞬間、バスに激震が走る。

「……………」

車体が激しく揺れると同時に、光秋のやつときた眠気も完全に吹き飛ばす。

—どうした？ 事故か？—

と思った刹那、視界一杯に光が広がって……………

「……………」

気が付くと光秋は、真っ白な空間に一人になっている。霧に包まれているわけではなく、さながら純白の白紙の上に放り込まれたといった感じである。

そんな中に光秋は、浮いている。少なくとも、足や尻が地面に着いている感覚がない。一方で上下の感覚はあり、さっきまで座っていたにも関わらず、靴を履いて直立している。

—これは……夢？……いや、起きている時の質量を感じる。少なくとも夢じゃなさそう。とするとここは……………あの世か？—

そう思いだすと、自然と微笑みだす。

「皮肉だねえ。そんなもの否定してる奴に限って、案外行けるのかなあ？」

―残念ながら、否、安心しろ、かな？ここはそんな所じゃない―
と、何処からか声がする。

「……………」

誰もいないと思いついていた光秋は面食らい、若干の恐怖を覚える。

「誰だ！何処にいる！」

声の限りに叫ぶと、

―お前の後ろ―

「……………」

急いで振り返った光秋は、それを見てしばらく言葉を失う。

数十秒程間を置いて言葉を取り戻した光秋は、

「……………何だ……………あなたは？」

と、最初の疑問を口にする。

そこにいるのは人間ではない。形こそ人型だが、人間との共通点といえばそれくらいである。周囲以上に純白な体に衣類の類は見られず、光秋同様直立姿勢をとっている。顔は完全につぺらぼうで、口すらない。にもかかわらず、何処からか言葉は届くのである。

それは答え出す。

「オレはお前らが『神』と呼ぶ者、に極めて近い存在だ――

――『極めて近い』？……」「神そのものじゃないんで？」

「ああ、まだそこまでは達していない――

――神に近い存在……いや、それより今は――「じゃあ、ここは何処なんで？」

「ここは……そうだなあ。お前たちが知っている概念で言えば……」――

少し腕を組んで考えてから、不意に「神に近い者」はポンと手を打つ。

――異世界だな――

「異世界？」

――ああ。厳密に言えば世界、否、『宇宙と宇宙の狭間』、『中間地点』とでも言うべき……

か？――

「そうだとしたらここは、『無』と言われる所では？なのに僕は生きていと言う。少なくとも、空気と、あと自分の体とあなたが見えるってことは、光もあるってことでは？これはどういうことなんで？」

――……なるほど。事前調査の結果通り、賢い方だな――

――『調査』？――

――お前の知識からすれば、尤もな質問だ。答えは、創ったんだよ――

「創った？」

—そう、お前を生かすためにな—

「……………」

—さて、質問がもうなければ、そろそろ本題に入らせてもらう—

「本題？」

—ああ、これを見ろ—

そう言つて、「神に近い者」は右腕を上げる。

上げ終わると同時に、突然その背後に巨大な人型の物体が出現する。

「!?……」

現れた物体は、ビルの三階分かそれ以上の大きさを誇り、全体的に細身で角張った輪郭をしている。胸部が突き出る形となっており、腰回りは防具の様な板で覆われ、四肢は丸みを帯びている。色は周囲同様純白で、金属質であるが、関節や腰の辺りは黒いカバーで覆われており、足底は赤く塗られている。

何より特徴的なのは頭部である。おそらく人の顔を模したのであろう、上側に等間隔に配置された緑のレンズは目を、下側の横に走る線は口を、最下部の直方体型の突起は顎を想起させる。顎と目の周りも赤色であるが、こちらは少し透き通った色合いである。それらを覆う様にヘルメット型の頭頂をし、さらにその上には、四角形の薄い角状の突起が生えている。

「……………」

あまりの展開に、再び光秋は言葉を失ってしまふ。が、今回は先程より少し早く回復する。「驚き」に対する免疫が付いてきたのだろうか。

「これは……………」

——まず最終調整を行う——

「……………うわあ!」

光秋の問いを聞き流す様に「神に近い者」がそう言うのと、突然体が引つ張られる様に上昇し、十秒と経たずに物体の足元から胸の高さへ移動する。そして物体目掛けてゆつくりと前進し、それに合わせる様に物体の胸部上部が前にスライドし、開いた跡から座席がせり上がる。布の質感を持つ茶色いシートを中心に、肘掛の先端にフック状の棒を生やし、脇には右に二枚、左に一枚シートに脚を伸ばしたパネルが配置され、上部には頭を挟む様に左右に一本ずつ半円状に反り返った棒が生えている。左回りに回って椅子に着かされると、肩と腰の脇からそれぞれシートベルトが独りでに伸び、光秋の体を固定する。

「ちよ、ちよつと!」

——大丈夫だ、害はない——

続いて座席が床ごと降下し、それに合わせて先程の胸部上部——ハッチが閉まりだす。

座席が停止し、ハッチも閉まり切ると、光秋の周囲は一面の闇に覆われる。

—何を!?!……—

「神に近い者」に会った時以上の恐怖に襲われ、思わず生唾を飲む。

と、唐突にグウーンという音がしたかと思うと、今度は真正面から強い光が照射される。

「?!……」

目が慣れて見てみると、光の正体は先程まで左右にあつたパネルの一枚である。薄明かりの中、左右にも一枚ずつ見えることから、右側にあつたやつである。

—さっきのはこれの移動音か—

画面を見ると、上部に漢字で横書きに「生体登録」とある。

—『生体登録』?—

—始めるぞ—

「?!」

「神に近い者」の声が聞こえたかと思うと、今度は両腕が引っ張られ、フック状の棒—縦桿を掴ませられる。試しに放そうとするが、

—動かない?—

—大丈夫だ、じつとしている—

続いて半円状の棒が頭を固定し、光秋は完全に身動きが取れなくなる。

「……………!?……………どうするつもりだ?—」

と、棒からピツという電子音が聞こえたかと思うと、上から青い輪状の光が降りてきて光秋の体を精査する。同時に操縦桿からも同様の光が発し、手首側から指先へと精査していく。

「……………何をして—」

—失礼—

「え?……………!?」

メガネが勝手に額に上がると、中央パネルの上部中心から赤い光が放たれ、光秋の目を精査していく。

「!?……………」

眩しさに目をつぶろうとするが、精査が終わるまで瞼は動かない。それが終わると頭の固定が外れ、手を押さえていた力もなくなる。

「……………」

急いでメガネを戻してパネルを見ると、先程の表示の下に「脳波」「静脈」「指紋」「網膜」と加えられている。

光秋がそれを確認してすぐに、加えられた表示を塗り潰す様に大きく「登録完了」の

文字が表示され、パネルの明かりが消える。

再び真つ暗になったかと思うと、どこからかググググツという音と微かな振動が起り出し、それから一呼吸置いて周囲が明るくなる。

「!?……」

目が慣れて見てみると、床以外の視界一杯に、物体に入れられる前に光秋がいた白い空間が広がっている。そして真正面には、「神に近い存在」が立っている。

—これでこいつは、お前の言うことしか聞かなくなった。お前だけの“力”だ—
「“力”?……」

—さて、準備も済んだことだし、そろそろ行ってもらうか—

「行くって、何処に?」

—だから、異世界だよ—

『『異世界』って……?』

—さっきも言ったように、ここはあくまで中間点。目的地に行ってもらう。そのため
にそいつをくれてやったんだからな—

「……行つて、何をしろと?」

—それは今言う必要はない。お前が思った通りに行動しろ—

「そんな!」

—これ以上時間を無駄にするのも癪だ。早く行け—

そう言うのと、座席の両側のスペースに物体が現れた時と同様に突然光秋のカバンとリュックが現れる。リュックに至っては判別用のタグ付きである。そして「神に近い存在」が右手を前にかざすと、物体はゆっくりと後退を始める。

光秋は、急いで最後の疑問をぶつける。

「最後にこれだけ……その……なんで『力』ってというのが、ロボットなんです?」

—それか? それはな……—

そこで「神に近い者」は手を組み、胸を張って答える。

—ロボット兵器は漢おれじのロマンだ!—

「……………へえ?」

光秋は最初なにを言われたのか解からなかったが、数秒程してようやく頭が追いつく。

「……………ええええええ!!」

—じゃあ元気だな。健闘を祈る—

「神に近い者」はそう言い、手を振って見送る。

「大丈夫なのか!? そんな理由で!」

光秋が叫ぶ間にも「神に近い者」はどんどん小さくなり、光秋は物体と共に、白い空

間の深淵へと向かって行く。

1 異世界

「……………」

気が付くと、光秋の視界一杯によく晴れた青空と緑が広がっている。

「……異世界?—」

と思ったのも束の間、

「…………!?!」

突然物体が降下、否、落下を始める。

—さっきまでの力がなくなった!?!—「クソ!どうすれば?」

動揺する間にも、物体は落下を続ける。

—これまでか!—

光秋は覚悟を決め、固く目をつむって両手で頭を庇った直後、コクピットを軽い振動が襲う。

「……………」

数秒後、光秋は両手を解いて顔を上げ、正面のモニターに深めの森を背景に、手前に巨木の残骸と大量の土くれが映っているのを見る。

「たす、かった?……」

両手で体のあちこちを触ったり首を動かしたりして、五体の無事を確認する。

「どうやら……生きてるみたいね……」

それが終わると、光秋は外に出てみようと思う。

――木があるってことは、空気もあるだろうし、さっきの青空も地球のと大差なかったから、大丈夫だろう――

そう思い、ハッチの開閉装置を探すと、左肘掛の内側にある白い四角いボタンと、その隣の手前側にある車の窓開けの様な小さいレバーが目止まる。

――これか?――

そう思い、レバーを上にと上げると、座席が床ごと上昇する。

「!」

慌てて手を放すと、

「じゃあ、こつちか?」

と、白いボタンを押す。

と、頭上のモニターがスライドし、床と同じ大きさの孔を開ける。

「この後に、これか!」

と、再びレバーに手を掛け、今度は座席が止まるまで上げ続けると、機体に入れられ

た時に椅子が出てきた高さで止まり、機体顔面の直前に出る形となる。

「……………」

周りを見回すと、モニター同様、森を背景に樹木の残骸と土ぐれが散らばっており、機体の肩やハッチの上も少々土を被っている。

光秋はシートベルトを外し、正面のパネルを端に退け、床の右側に身を乗り出して恐る恐る下に目をやると、機体の腰辺りまで完全に地面に食い込み、それを中心に浅目のクレーターを形成しているのを見る。コクピットの出っ張りで引っ掛かる様にして止まったという感じである。

元来目が不自由で視力が低いことと相まってか高い所が苦手な光秋であるが、地面までの距離を二メートル少々と見積もり、行けると判断し、おっかなびつくりしながらも右側から下に降りてみる。機体を見ると、腕までも地面に埋まっており、白の装甲が所々茶色く汚れている。一方で、見える範囲では機体に目立った損傷はなく、ヒビも欠けも全く見られない。

「………どんだけ頑丈だよ、コイツは？」

苦笑いを浮かべながら率直な感想を言った直後、背後でバキツと枝を踏む音が響く。

「!?!」

光秋は慌てて音のした方向に体を向ける。

「!」

「動くな!」

視線の先に、緑色の服の上に黒いベストの様な物を着、銃を構えた人の姿を見る。

「!?……」

突然の事態に動揺する中、とりあえず敵意がないことを伝えるため、光秋はゆっくりと両手を挙げる。

それを見て、兵隊らしき人は左手でズボンのポケットから小型の通信機らしきものを取り出し、それにぼそぼそと吹き込む。その間も、目線と銃口は光秋から離さない。吹き込みが済むと通信機を仕舞い、銃口を光秋に向けたままゆっくりと近づいて来る。

距離が詰まるにつれて、光秋は兵隊の姿を詳しく観察し易くなる。

「?……女?」

遠くて判らなかつたのだが、顔付きから相手は女である。薄い黒色の肌をし、ヘルメットの下に長い黒髪を後ろで一本に束ね、すっきりとした顔立ちをしている。背は光秋より若干小柄である。よく見れば肘や膝にも、黒く丸い防具の様な物を着けている。

それが手にしている機関銃——正確には自動小銃なのだが、光秋にそんな銃器の知識はない——は、光秋もニュースでちらつと見る米軍が使うそれによく似ている。銃床から銃身の付け根まで木材を用い、引き金の前に長方形の弾倉が伸びている。

「……………」

不気味に黒照かる銃身を見、光秋は背筋に寒気を感じる。

兵隊が光秋から1メートル程手前まで近づいた辺りで、木々の影から3人、兵隊と同じ緑の服の上にベストや防具、ヘルメットをした者たちが現れる。髭を蓄え、遠目にも二メートルを超えていると思える大男を先頭に、その左右を女性兵士と同じ銃を構えた者たちが固めながら近づいて来る。観察し易い距離まで近づいて来て改めて見ると、やはり先頭の大男は優に2メートルを超えており、顔の下部を覆う様に生えた濃い顎髭を持つ容姿は、角張った顔付きと合わさってさながら「山賊のお頭」を想起させる。彼だけが腰の右側に拳銃を提げてこそのいるものの、他の3人と違い空手である。

大男の、光秋から見て右側の男は、背は大男と光秋の中間程。大男程ではないがこちらにもゴツイ顔付きである。髭は生やしていない。

左の男は、背は光秋と同じくらいである。

3人はいずれも、光秋と同じ黄色系の肌をしている。

大男が女性兵士の左隣まで近づくと、

「はいつか？」

と、彼女に向って問う。

「はい」

「我々が来るまで、何もなかったのか？」

「ええ。銃を向けたら、すぐに手を挙げて」

「……そうか……」

言うとき大男は、光秋のすぐ近く、手を伸ばせば触れられるくらいの距離まで近づき、光秋に観察の目を向ける。

「……」

それによつて光秋は、再三得体の知れないものへの恐怖を抱く。

——この人たちは、いったい？……—

と、

「身分証は？」

「……へ？」

「身分証は？」

「……ああはい！」

大男のドスの利いた声に肝を冷やしながらも、光秋はズボンの左脚部に設けられたポケットに手を伸ばす。

が、手が届く直前、大男の太い指が光秋の手首を鷲掴みにして動きを封じる。同時にかなりの力で締め付ける。

「痛！……痛た！」

「ある場所を言え！」

「左のポケットの……財布の中……です……保険証が……あります……」

言い終わると、大男は先程のポケットに手を入れ、薄黄色の二つ折りの財布を取り出す。財布を開いて保険証を取り出すと、それを見ながら光秋に質問する。

「名前は？」

「……加藤……光秋です……」

「歳は？」

「18……です」

「生年月日は？」

「91年、6月17日です……」

「んーん……」

大男は渋い顔を作って唸ると、右側の二番目の長身の方を振り向く。

「一尉、身体チェック！」

「はっ！」

長身が銃を肩に掛けながら近づくと、

「お前は手を高く挙げろ」

「は、はいー」

光秋は大男の命令通り、元々挙げていた手をさらに高く挙げ、万歳の体制になる。大男が長身に場所を譲って光秋の右側に移動すると、それに合わせて女性兵士も銃を構えたまま左に移動し、3人目の男性兵士も一歩前に出る。

長身は光秋のコートを脱がし、手首から触りだすと、左手の黒い時計を外し、精査が終わると、

「時計！」

と言って地面に置く。再び触りながら屈んでいき、脇の下を通った時、

「……………」

光秋は思わず笑い出しそうになるが、当然そんな雰囲気ではないので必死に堪える。長身は次に腰で手を止め、右のポケットから赤地にチェック柄のハンカチを取り出す。これも全開にして精査を終えると、

「ハンカチ！」

と言って、一応大雑把に畳んで光秋から見て時計の左隣に置く。次に右脚部のポケットで手を止め、そこから赤い二つ折りの携帯電話を取り出す。外側を舐める様に精査し、内側も開けて精査を終えると、

「携帯！」

と言つて、ハンカチの隣に置く。とうとう長身の手が足元に来ると、

「靴も脱ぐのか？」

と光秋は思うが、靴の上から触るだけで終わる。

長身はチェックが終わると、光秋の前に跪いた体制から大男を見上げ、

「身に付けていたのは、以上の様です」

と報告する。

「ウム！財布の方も当たり前の物しか入つておらん。それにこんなに時間が経つても何もせんということは、おそらくノーマルだな」

「ノーマル？……」

大男はポケットから女性兵士と同じ通信機を取り出すと、光秋に背を向け、ぼそぼそと報告を始める。

「？……」

光秋は生まれ付き右耳が殆ど聞こえないため、返つてきた通信もろくに聞き取れない。

通信が終わると大男は、

「小物はそいつのコートに包んでデカブツのそばに置いておけ。後で調査兼回収班が取りに来るそうだ」

そう言つて、元通りにした財布を長身に渡す。受け取つた長身は、
「はっ！」

と答えて、地面の小物と光秋のコートも持つて光秋の左側に移動する。
入れ違いに光秋の前に大男が立つ。

「すまんが、お前を連行する」

「れ、連行!?」「は、はい……」

どの道光秋は、そうとしか言えない。

光秋を中心に、前に大男、右に長身、左に男性兵士、後ろに女性兵士の陣形で、森の中を進んで行く。大男以外の3人は、いつでも撃てる体勢である。

「さながら僕は、地球に墜落した宇宙人か……」

肌寒さを感じながらも、光秋は自分のことをそう思う。

薄暗い視界の中、木の根に何度か足を取られながらも、20分程進むと視界が利いた広い野原に出る。そこからさらに5分程進んだ所で、光秋たちは違う一団と合流する。規模はそちらの方が多く、20人以上はいる。その殆どが、構えてこそいないが銃器を手をしている。

その内の1人が、光秋一行に近づいて来る。

大男が立ち止まって敬礼をする影から光秋がその人を見ると、背は光秋と同じくら

い、黒髪を短く切り揃え、「若い」という印象を抱かせる顔の男が返礼をして立っている。青い制服の様な物を着ているその男は防具の類を着けておらず、大男たちの緑服と見える部分が共通している。

後ろの一団も殆どが青い服に防具姿で、光秋の視界には、緑は2、3人しかいない。

大男が長身の側に退くと、男は一步進んで、光秋に観察の目を向ける。

「こいつか？報告にあつた不審人物とは？」

「はい、そうです」

大男が答える。

「落下物の近くにいろのを伊部^{いべ}二尉が発見。報告通り、不審な物は所持していませんでした」

「そしてこれだけ時間が経つのに、何もしないところからノーマルと推定、か？」

「はい」

「……ちゃんと調べてみるまでは、確定できんがな」

「はあ……ところで大佐、頼んでいた護送の方は？」

「報告のすぐ後にヘリの申請をさせた。そろそろ……」

男がそこまで言った辺りで、何処からかヘリ独特のローター音が聞こえ出す。

「噂をすれば」

男はそう言つて後ろを振り向き、上空を仰ぐ。

「……………」

光秋も男の視線を追つて上を見ると、前方に朝日を浴びながらこちらに向かつて来るヘリを見つける。

しばらくしてそれは、青服たちを挟んで光秋の正面に左側を向けて着地する。すぐに出来る様にするためか、ローターはまだ回り続けている。

青服たちが道を開けて光秋一行がヘリに近づく、例の如く光秋はそれに観察の目を向ける。

「……………」

操縦席には足元にも窓を設け、上部の窓も大きく設けられ、殆ど出っ張りのないすつきりとした緑色のボディは、光秋もニュースなどで自衛隊のヘリとして見たことがある。

「……………」

その上で違和感を覚えるのは、ヘリに描かれたマークと文字である。本来日の丸が描かれているはずの尾部の付け根には、国連のマークである円形の世界図があり、その下には「E・S・O」と書かれている。

—『E・S・O』?…………—

何の略かも解からないまま、大男が扉を開けるのに合わせて光秋は残りの3人に追いつてられる様にヘリに乗せられ、そのまま後部座席の右端に着かされる。ローターが回り続けているために、機内はかなり賑やかである。その隣に女性兵士が座り、長身と男性兵士は少し間合いを取って立ったまま光秋の様子を見る。その2人の影から、最後に大男が乗り込むのが見える。

「では、こ奴の身柄はこちらで」

「ああ、そちらの方がいいだろう。よろしく頼む」

男の言葉に敬礼で答えた大男は、扉を勢いよく閉めると、

「よし、出してくれ」

と指示を出す。パイロットが、

「了解」

と答えると、ローター音が増し、少し揺れたかと思うと、機体が上昇を始める。

—どうなることか……—

飛び始めてどれ程経つただろうか。

3人はずっと自分の配置を維持し、大男は操縦席の方に寄って、時折パイロットと何か話している。

「?……」

距離がある上にローター音も合わさって、光秋には会話の内容は全く聞こえない。

光秋自身は、高度が定まってからは右窓からの下界観賞に徹している。元来高い所が苦手な光秋だが、今は前2人の視線から逃れたい気持ちの方が勝っているのである。

「……………」

しばらくは山岳部が続き、集落らしき家の集まりがまばらに見える。それが田園地帯へと変わり、田植え前の剥き出しの大地が先程より殺風景な印象を与える。ようやくビルが見え出すと、それらを区切る様に敷かれた規則的な道路網も目に入る。

―田んぼといい、建物の造りといい、文明の方は僕がいた所と大差ないのか……―
もうしばらく進むと、光秋はヘリの進行方向に対して左右に多数のレーン伸ばす建物を見、その少し奥には赤基調のランドマークらしきタワーを見つける。

―……あの駅、京都駅みたいだな。上からは絵でしか見たことないけど。それにあの塔、京都タワーみたいだ……―

光秋の記憶では、目の前の二つは確かにそれらと似ているのである。

―でも、まさかな。似ているだけだろう……―

その後も摩天楼が続き、その中に何か所か周りより広い敷地を持った建物を見る。と、不意にヘリが空中停止し、そのまま目下の白基調の逆コの字型の建物に降下する。光秋はその建物の周囲にも、同じ様な色あいの大小複数の建物が建っているのを見

る。

コの字の内側、駐車場らしきスペースに着地すると、ローター音が弱まりだす。

「すまん。本来は上のヘリポートに停まるべきなのだが……」

『解からん相手だから早く隔離したい』、わかりますよ」

大男とパイロットのそんな会話が聞こえたかと思うと、大男はすぐに左側の扉を開けて外に出、

「出せ！」

と3人に命令する。

光秋は前の2人に引つ張られる様に立たされ、押し出される様に外に出る。

正面には、白基調の役所風の建物が建っている。優に10階はあり、光秋が見ているのはちょうどコの字の縦線に当たる所である。正面玄関前までの10メートル程の距離には、10人以上の防具を着けていない緑服が進路を作る様に両側に立っている。やはりヘリに乗る前に見た男の青服と同じデザインである。操縦席に控えていた大男も含めて再び銃を持った大勢に囲まれる光秋は、

——まるで犯罪者だ……——

と、心中に愚痴をこぼす。

——……?ここにも銃を持っていない人が何人かいるけど、どういうことだ?——

そんな疑問を抱いても答えてくれる当てもなく、再び後ろから押される様にして前に進む。

正面玄関の自動ドアをくぐると、受付や待合用の赤い長椅子が目止まる。が、受付も含め、そこには人っ子一人いない。そんなことに構わず、光秋は左に曲がってすぐ行った所のエレベーターに乗せられる。

広めにとられた空間の、入って奥右端に立たされる。続いて三人が入り、最後に大男が入って扉の右側にあるボタンを押す。

扉はすぐに閉まるが、なかなか動かず、一方で大男は、まだボタンの前で何かごそごそしている。と、その辺りからピツ、ピツという電子音がし、ようやくエレベーターは動き出す。体感から、おそらく降下しているのだろう。

しばらくして扉が開き外に出されると、光秋は両壁に等間隔にノブのない重そうな扉が並ぶ白一色の廊下に出る。

その内のエレベーターから左前にある扉の右横に立たされ、大男が左の備え付けの端末に身分証の様な顔写真付きのカードを通し、パネルに左手を押しつける。続けざまにピツという音がし、最後にパネルの何か所かを押すと、扉が開く。

押される様にそこに入られると、後ろから大男の声で、

「しげは、はやくいって」

と言われたのを最後に、扉が閉まる。

——…監……獄……!?——

それが光秋のその部屋に抱いた印象である。

外同様に白い壁や床なのだろうが、照明の調子が悪いためどちらかというと濃い灰色の部屋である。扉の前に立って右側には簡易ベッドがあり、その上に薄い敷布団と毛布、枕が畳んで置いてある。奥の左端にある便座はどこか粗末な印象を抱かせる。便器と同じ壁の、ベッド寄りの方に設けられた水道はコックが1つしかなく、暗に水しか出ないことを物語っている。そしてそれら以外には何も無い、寂しい所である。

立っただけでもないと思う、光秋はベッドに腰掛ける。

——…そういえば今何時だ?——

習慣で左手首に目を向けるが、そこに時計はない。

「そうだ、時計盗られたんだ……」

嘆息混じりにそう言い、不意に天井を見上げる。

「!?……」

そこには平行に設置された蛍光灯2本に挟まれる形で、キノコ型の機器が設置されている。円錐形のカサを下にし、短めの円柱形の脚を天井に付けた深緑の大型の機械である。脚の中央からも四方の壁に向かって1本ずつ、本体の小サイズ機が生えている。

—さつきからしてた空調とも違う音はこれか……—

そう思っても、光秋にはこれがなんの機器なのか見当もつかないと、

「……」

急に体中、特に瞼が重くなり出すのを感じる。

——……当然か、昨夜^{ゆうべ}からまともに寝てないもんなあ……用があれば、叩いてでも起こしてくれるだろう……—

そう思うと、奥に畳まれていた布団を敷いて、扉側に枕を置く。端の便器で用を足してから靴を脱ぎ、メガネを取って、毛布を被りながら横になる。

——……そういえばあの白いの、自分を『神に近い者』って……『神モドキ』にしよう……あの人………—

光秋の意識が夢よりも深みに沈むまでに、1分と掛からない。

2 初陣

どれくらい寝ただろうか。深い眠りから、徐々に光秋の意識が覚醒して来る。

「……………すごい夢だったなあ……………バスに乗ってたら異世界に飛ばされて、神様みたいのにロボット託されて、落ちたと思ったら兵隊に連れていかれて、牢屋に……………入れられて……………夢なのに内容が細かく思い出せる?……………まさか……………」

目を開けると、目の前には夢で見たキノコ型の機器がある。

「!」

急いで起きてメガネを掛け、周りを見回すと、夢の最後の場面である監獄にいる。

「……………夢じゃなかった……………」

光秋はベッドから足を下ろして靴を履き、そのまま立って大きく深呼吸をし、背伸びをすると、その足で水盤に向かい、顔を洗って口を漱ぎ、目を完全に覚まそうとする。

「……………どれくらい寝てた?」

ハンカチがないので上着で顔を拭いてから時計を探そうとするが、

「……………そうだ、盗られたのも夢じゃなかった」

理解すると、手探りで髪型を整え、腰に両手を当て、長考に入る。

—さて、これからどうするか……………—

と、突然蛍光灯が数回点滅し、部屋が微振する。

—!?…………地震か?—

と、今度はウーン、ウーンとけたたましいサイレンが鳴り響く。

「!?何だ?」

この事態に、光秋は急いで扉に駆け寄り、

—誰かいてくれ—

と、祈る思いで扉をガン、ガンと力一杯叩きながら、

「何です!何があつたんです!」

と、声の限りに叫ぶ。

何回かそれを繰り返していると、

「!?」

不意に扉が開き、こけそうになりながらもなんとかバランスを戻して上を見ると、今朝の女性兵士が立っている。防具類こそ外しているが、今朝同様の緑服を着、右肩に自動小銃を提げている。

「何が——」

「説明は後!速くついて来て!」

女性兵士は遮る様にそれだけ言うと、光秋が連れて来られた時に乗ったエレベーターに駆け寄る。

『ついて来い』って……」

「いいから！死にたくなかったら早く来なさい！」

「……………」

「死にたくなかったら」という言葉に悪寒を覚えた光秋は、言われた通りエレベーターに駆け寄り、直後に開いた扉に女性兵士を追う様に入る。兵士が1階のボタンを押すとすぐに扉は閉まるが、今度もすぐには動き出さない。

と、女性兵士が左手の手袋を脱ぎ、大男と同じ身分証の様なカードを取り出し、監獄の扉の時と同じことをボタン列の下の端末に行うと、やっとエレベーターが動き出す。

—あの大男もこれを？……そうか！囚人を入れる所だから、出入りが厳重なんだ！—
今更ながら、光秋はそんなことに納得する。

そして、

「何があつたんです？」

改めて、今一番の疑問を女性兵士に問う。

「襲撃！攻撃からしておそらくNP！超能力者の支援機関であるES_{エス}O_ソを目の敵にしている連中！」

「……………」

早口に説明されても、光秋には何のことか余計に解からなくなる。

「…………どうやら、もつと根本的なことから説明する必要があるみたいね」

女性兵士が同情的な目を向けてそう言う。

直後、目的階に着いたエレベーターの扉が開くと、蛍光灯が多数落ちた薄暗い中から響く銃撃音や爆音、怒声や悲鳴が光秋の耳を、何処からか漂って来る火薬や埃、何か焦げる臭いが鼻を突く。

「急いで！」

「！」

急かしながら駆け出る女性兵士を追って光秋もエレベーターを出て、右に曲がって駆ける。

どれくらい走ったか、突き当りをまた右折すると、裏口らしきドアが現れる。上半分がガラス張りのそれを、女性兵士が少し開け、外の様子を窺うと、今度は一杯に開け切り、外に駆け出す。光秋もそれに続く。

ドアから正面に位置する半円屋根の大きく口を開けた建物に向かって走り、着いた光秋は、そこに何枚もの幌で完全に覆われ、多数のワイヤーで固定された巨大な何かを積んだ大型トレーラーを目にする。

「?……」

「ここにいれば、たぶん大丈夫。三佐たちも頑張ってくれてるだろうし……搬入が終わったと思ったらこれなんだから!」

女性兵士のその言葉に、光秋はハツとする。

「……………じゃあこれ……………」

「そう。今朝あなたを拘束した場所に埋まつた、あのロボット」

「……………」

女性兵士がそう言うのと、光秋は幌の塊を凝視する。

「大変だったみたいよ。場所が場所だし、どういうわけかサイコネシスやテレポートが効かないから、掘り出すのも一苦労だったみたいだし。本部所属のレベル9^{ナイン}まで来たっていうのに……………」

「……………さつきから言ってるその超能——!」

そこでこれまでで最も大きな爆音が起こり、光秋の後の言葉をかき消す。

女性兵士と同時に急いで音のした方向に目をやると、

「戦車だ! 戦車が出た!」

「奴らあんな物まで!」

「ぐずぐずせんと! こっちも重火器で応戦しろ!」

数人の職員たちの悲鳴や怒声から、光秋はどのような内容を聞き取る。

「戦車って！……」

女性兵士の顔にも、僅かながら恐怖の表情が浮かぶ。

——戦争？……テロ？……

光秋はなんとか状況を理解しようとするが、ここからでは音や閃光くらいしか感知できない。

——じれったいなあ！——

そう思っている間にも、役所の違う裏口から数人、女性兵士とは違う服装——白衣や背広、中には私服を着た者たちが出て来る。光秋たちとは違う避難場所に行こうとしているのであろう彼らの何人かは、脚を引きずり、肩を担がれ、中には薄暗く遠目でも判るほどの血を流している者たちである。

——……どんな理由か知らないが、こんなことをしていい理屈にはならない！——
傷ついた人々の光景が、光秋にそんな思いを抱かせる。
が、

——でも、僕にはどうすることも……！——

そこで光秋は、昨夜の神モドキの言葉を思い出す。

——『これは、お前だけの“力”だ』……そうだ！今僕には“力”があるんだ！——

そう思うと、光秋は顔を幌の塊に向け、先程よりも強く凝視する。

「……どれ程のものか知らないが、ここで負けるんじや、持つ意味がない！」

そう断じ、すぐに荷台に上がって一番出っ張っている部分の幌を引き下ろすと、開けっ放しのコクピットと特徴的な頭部が現れる。

「……何をやる気!？」

女性兵士の制す様な声が飛ぶ。

「何って、コイツで出るんですよ!」

「無茶言わないで! まだ何も解かってないモノを使うなんて!」

「……一理ある」

女性兵士の言葉にそう思いながらも、火照り出した光秋の頭には大した効き目はない。

「……これは、僕の“力”なんです」

「え?」

「僕だけに与えられた、“力”なんです!」

そう言うのと、後は聞く耳持たんと言わんばかりにシートに取り付く。

光秋が横向きになっているシートになんとか腰掛けると、横に退けてあるパネルが自動で正面に移動し、中央のパネルの上部から赤い光が照射される。同時に頭部のバンド

からもピツという電子音が鳴り、中央パネルに目をやると、上から「脳波」「指紋」「網膜」と表示され、その左隣に「脳波」には○、「指紋」と「網膜」にはそれぞれ×が表示される。

「?……」

画面下部に目をやると、「メガネを外してください」と「手を操縦桿に置いてください」と表示されている。

「あ、ああ!」

光秋が指示通りメガネを額に上げ、操縦桿に手を置くと、再び赤い光が照射され、精査が済んだ後にパネルを見ると、それぞれ×が○に変わっている。と、今度は座席が自動で降下し、ハッチも独りでに閉まる。

「信じられない!何をやってもうんともいわなかったのに!」

女性兵士の驚愕の声を聞いたのも束の間、ハッチが閉まり切り、真っ暗になったかと思うと、上部から青い輪状の光が降りて来て光秋の体を精査し、パネルに「○ 静脈」の表示が加わる。

すると画面に大きく「確認終了」の文字が浮かび、周囲のモニターの点灯と同時にパネルも機体の概要図が中心に描かれた状態表示に変わる。左右のパネルにも様々な表示が現れる。その一つに「シートベルトを締めてください」というのがあったので、急

いで締める。締めると同時に、その表示は消える。

「さつて、この後どうするか？」

大口をたたいて乗ったはいいが、操縦法など全く知らないことを今になって思い出す。

光秋は周囲を見回しながら、

「マニュアルか何かないのか？」

と呟くと、その言葉に答える様に左側からカチャツという音がする。

「?……」

音のした辺りに目をやると、左肘掛正面のパネルの脚のレールの下が迫り出しているのを見つける。

「?……」

試しに引つ張り出してみると、それは白い手帳型の端末である。縦15センチ弱、横10センチ弱の大きさで、開いてみると左右二画面に多数の項目らしきものが表示されている。

「これか？」

光秋はそれを機体のマニュアルと判断し、「基本操縦」の項目を試しに押してみる。と、画面がそれに属する事項に切り替わる。

「よし！まずはコイツを立たせなきゃならないんだが……ええい！合いそうな所がない！」

仕方なく前のページに戻って、今度は「特殊操作」の項目を開くと、その中に「脳波によるコントロール」という事項を見つけ、試しにそれを開いてみる。

『本機はマニュアルだけでなく、脳波（イメージ）で操作することも可能です。行いたい動作を強くイメージすることで、機体もそれに合わせた動作を行います』

「これだ！」

光秋は説明に従って、機体が起き上がる様子を想像する。と、途端に体中に針金が食い込む様な、痛み程ではないが違和感を覚える。

「!?……何だ？」

慌ててマニュアルの続きを読む。

『本操作を行う際は、効率的な操作のために機体が置かれている周囲の環境がパイロットに適刺激となって伝わる場合があります』

「そういうことか！」——固定してるワイヤー——

違和感の正体が解つても機体を立たせるにはこの方法しかないため、光秋は違和感を堪えながら続行する。

徐々に上体が起き上がり、ついに腰から上が直立すると、上体を覆っていた数枚の幌

が舞い落ち、負荷に耐えかねたワイヤーが切れて四方に弾け飛ぶ。

（きやー！）

「！」

機体越しに女性兵士の悲鳴を聞いた光秋は、反射的に彼女がいる左下を見る。当たってこないようだが、鋭く切れたワイヤーの何本かが体のスレスレを掠めたようである。

—脚の方でもう一度あるだろうし、何より、こんな所に1人しておけないよ……コイツの頑丈さなら、一緒に行っても大丈夫だろう—

そう思った光秋は、イメージ操作で自由になった機体の左手を女性兵士の方へ差し出す。

（？……）

戸惑う彼女に、光秋は左肘掛のボタンとレバーを操作して機外に出、座席上から、
「乗ってください！」

と、大きい声で言う。

「……でも」

「こんな所に1人しておけません！早く！」

「……」

光秋がそう言うのと、女性兵士は恐る恐る機体の掌に乗る。光秋は彼女が完全に乗ったのを確認すると、腕を上げて掌をハッチの上に置く。腕の動きが止まると、女性兵士は素早くコクピットへ移動する。

と、その際光秋の背後で爆光が輝き、束の間暗中に彼女の薄めの褐色の肌と大きめの目をした整った顔立ち、後ろで一本に束ねた真っ直ぐな長い黒髪を浮き上がらせる。

——……綺麗な人だ……

その束の間に、光秋は彼女にそんな思いを抱く。今まで詳しく顔を見なかったことと、なにより先程の機体に入り込むまでのやり取りが彼女に対する警戒心を薄め、ある種の安心感を生んだのだろう。

女性兵士がコクピットに移って座席の右側に収まると、光秋はすぐに座席を機内へ降下させる。

「……」

「？」

女性兵士が何か言った気がしたが、光秋にはよく聞き取れない。

「すみません、左側で喋ってください。右は聞こえないんです」

そう言われて、女性兵士は左側へ移動する。

「どうするの？」

「とりあえず、コイツを完全に立たせます!」

そう言うのと、光秋は再び機体が立ち上がる様子をイメージする。機体の脚が動き出し、徐々に起き上がる。ついに固定していたワイヤーが切れ、下体を覆っていた幌も落ちて両脚も自由になると、その勢いで上に向かつて一気に立ち上がる。一点に重量の掛かった荷台を踏み潰しながらも天井を貫き、コクピット下部まで出て立ち上がり切ると、人が目を覚ます様に頭部のレンズに緑色の光が灯る。同時に機体の節々を覆うカバーの隙間から血の様な赤色をした燐光が漏れたかと思うと、すぐにかき消える。

「すみません倉庫。あと、トラック……」

「気にしなくていい。どの道、本舎の方がかなりボロボロだろうし、今更……」

「そう?じゃあ!」

光秋は倉庫がさらに壊れるのも顧みず、今度は機体を前進させる。が、

「……うつ!……」

3歩程歩いた辺りで全身を強い疲労感が襲い、特に頭には筋肉痛の様な鈍い痛みが走る。

「何だ……これは?……」

急いでマニュアルに目を走らせる。

『本操作を長時間行う際、初期の間は身体、特に脳に過負担が掛かる場合があります。使

用するに連れ軽減されていきますが、始めのうちは通常操縦の補助としての使用をお勧めします』

「……そういうことか」

再び光秋は「基本操縦」の項を開き、「移動」の欄に目を通す。

「……『左右いずれか、もしくは両方の操縦桿を前に倒すことで前進』」

読み上げながら、右の操縦桿を軽く倒してみる。すると機体はゆっくりと前進を再開し、天井を壊しながらもついに機体全体が倉庫から出る。

『操縦桿を倒した方に方向転換』

右に倒すと、同時に機体も右に曲がり、進行方向を役所風の建物へ向ける。3歩程歩いて止まると、

『『左右いずれか、もしくは両方のペダルを踏むことで』……『浮上』!?』——飛ぶのか？
コレー

これには半信半疑ながらも、試しに右のペダルを軽く踏んでみる。と、機体背部の円形部分の溝が白く光り出し、機体の両足が地面を離れ、ゆっくりと上昇を始める。

「……すごいー！」

女性兵士が驚きの声を漏らす間にも、機体は上昇を続け、ついに役所の屋上にまで達する。

そこから光秋は、役所の正面、駐車場側に瞬く銃撃の閃光、所々に上がる火柱や黒煙を認めると、素早くマニュアルに目を走らせる。

『浮遊時の移動法は歩行の時と同様』か……」

理解すると、

「ちよつと持つててください」

と、マニュアルを畳んで女性兵士の方に差し出す。

光秋は両手で操縦桿をしっかり握り、両足をペダルの上に置く。同時に顔が引き締まり、目付きも鋭くなる。

——……………行くよ——

心中に言うのと両操縦桿を深く倒し、一気に機体を前進させる。イメージの補助も加わって正面のコンクリート地に直進し、地面に激突する寸前で体勢を立て直し、両足で地面を数メートル挟って着地する。その前後、着地場所にいた人影は慌てて左右に回避し、そもそも戦闘そのものが数秒間止む。

光秋が下に目を向けると、戦火の明かりと、おそらくは映像に補正がかかっているのだろう、正門側に陣取る多数の人々と、門側に横一列に並んだ戦車3台がよく見える。

その集団はいずれも黒いスーツに黒いネクタイを締め、目の周りが完全に隠れるほどのサングラスを掛けた無個性な格好をしている。いずれも銃を持っているようだが、こ

こちらは拳銃や小銃と、服装に比べると多様である。

光秋が今度は戦車に注目すると、機体がそれに反応してか、3台それぞれに赤い丸のマークを付け、光秋の視界左側にその戦車の詳細が書かれた写真付きの情報が表示される。それによって光秋は、相手が90式戦車きゅうまるという最新の部類に入る戦車であることを知る。表示では暗い迷彩色であるが、目の前のは灰色一色に塗られている。全体的に角張った車体が印象的である。

—こいつ等らか!—

光秋の目の前の事態に対する怒りを引き映す様に、2つのレンズが強い光を放つ。

(何だ……コイツ!?)

(ESOの新兵器!?)

集団のそんな恐怖を含んだ声が聞こえたかと思うと、

(バカを言うな!こんなオモチャ、所詮コケオドシだ!)

別の者がそう反論すると、正面から小銃が放たれ、多数の銃弾がコクピット周辺を叩く。

「!」

息つく間もなく、直後に大勢による集中砲火が加えられる。

光秋は反射的に機体の両腕を前に出し、受け身の姿勢を取る。腕が頭部のレンズも隠

したために視界が塞がれ、弾が機体を叩くカンカンという音だけが響く。それに混ざって聞こえるバン、バンという爆音は、ロケット弾であろう。

「……………」

しばらくして不意にそれらの音が止むと、

（……馬鹿な！）

と、驚愕の声が聞こえ、光秋は腕を退かしてみる。自動で開いたいくつかの表示に集団の何人かの顔の拡大映像が映ると、目元こそサングラスで判らないが、その表情はいずれも驚愕の色に染まっている。

「……………」

光秋は中央パネルに目をやると、

「……………」

あれだけの攻撃を食らったにもかかわらず、警告1つ出していない状態表示を見、自身も驚愕する。

が、

（ええい、戦車だ！戦車砲で攻撃しろ！）

集団の誰かがそう叫ぶと、3台ある内の中央車の砲塔が持ち上がり、次の瞬間、爆音と共に砲弾が発射される。

「！」

再び両腕を前に出した直後、着弾し、腕越しにも強い爆光がモニターを埋める。が、振動の方は予想に反して非常に微弱であり、気を張っていてやっと感じる程度である。

腕を退かし、爆発の後に生じた黒煙が晴れると、再び集団たちの驚愕の顔が映し出される。

（……馬鹿な！……………）

「……」

光秋も再びパネルに目をやるが、今度も異常なしである。

「……………すーい……………」

女性兵士も驚愕の声を漏らす傍ら、光秋は小さく、

「行ける！」

と呟き、反撃を開始する。

「！」

右操縦桿を一杯に倒して素早く中央の戦車に近づくと、その砲塔を右手で力一杯殴りつけ、半分程叩き折ってしまう。

その間に左右に移動して距離を取った2台から立て続けに砲撃が行われるが、光秋は再び両腕を構えてこれを受け流す。左右とも砲撃が止むと、光秋は機体を左の戦車に歩

いて近づかせる。すると戦車から3人、こちらは薄布のラフな格好をした者たちが慌てて抜け出し、逃げる様に機体と戦車から離れる。

「……」

光秋は逃げた者には目もくれず、右手で砲塔を掴むと、そのまま機体の全長程の大きさの戦車を持ち上げてしまう。50トンもの戦車を、片手で軽々と持つてしまったのである。

「こんなモノオオオ！」

叫ぶと同時に状況への怒りをぶつける様に戦車を地面に叩きつけ、車体部分を粉々にしてしまう。

——あと1台——

と思つて最後の戦車の方を振り向くと、その砲塔のハッチが開き、中からこれもラフな格好をした者が出て来たかと思うと、その者は両手を大きく挙げる。

「？」

「降伏？」

女性兵士がそう言つた直後、周囲の黒服たちも銃を捨て、手を高く挙げる。いずれもその顔には、恐怖と悔しさが混ざり合った様な表情を浮かべている。

「終わった……のか？……」

そう思うと、光秋の怒りや興奮は徐々に冷め、元来の落ち着きを取り戻していく。

3 一戦の後

銃を捨てた黒服たちは次々と防具類を着けた緑服に囲まれ、役所の中に連行されて行く。おそらく、光秋が入られたあの部屋に運ばれているのだろう。

「……」

正面玄関の方に機を向けながら、光秋はその光景を呆然と見る。

そんな中、その作業に参加せず、光秋の機体に近づいて来る3つの人影がある。今朝の大男と長身、男性兵士である。3人とも緑服の上にベストを着け、ヘルメットを被り、大男以外の2人は向けこそしないが自動小銃を構えている。

光秋がハッチを開けて姿を現すと、

「「!?!」」

3人とも驚きの表情をする。

「伊部！なぜそんな所にいる?」

大男が光秋の隣の女性兵士に向かって叫ぶ。

「えーいや、その……」

女性兵士が答えに詰まっていると、

「貴様！」

と、長身が光秋に銃口を向ける。

「！」

「まつ、待ってください一尉！」

女性兵士が慌ててその行動を制する。

「成り行きなんです！彼が乗せてくれたんです！」

「とにかく貴様！」

再び大男が叫ぶ。

「まずは彼女を下に降ろせ！」

「は、はい！」

光秋はイメージ操作で機体に左脚を曲げて跪かせ、右手をハッチの上に持つて来る。

「乗ってください」

「うん……」

マニュアルを返した女性兵士が乗り込むのを見ると、光秋はゆつくりと手を地面に下ろす。先の戦闘の疲労から動きが若干鈍くなっているが、なんとか問題なくその動作をこなす。

地面に下りた女性兵士は、長身の許に駆け寄り、

「一尉！彼に敵対の意志はありません！銃を下ろしてください！」

と、長身が向ける銃口を下げさせる。

その傍らで大男は、

「よし、次は貴様だ！降りて来い！」

と叫ぶ。

「は、はい……」——『降りろ』と言われても、どうやって……—

そう思いながらも、光秋はマニュアルに目を通すと、「備品」という項目を見つけ、試しに開いてみる。様々な機器の名が羅列される中、「リフト」という欄に目星を付け、そこを開く。

——『ハッチ左の扉からリフトを引き出す』？——

図解付きの説明に従ってハッチの左側を探ると、手前にかんがりの幅のフタを見つけ、上に開いてみる。その下には、手前に肘掛にも付いているハッチの開閉ボタンがあり、その奥には幅の殆どを占める長い穴がある。図解に従って穴に左手を入れると、幅のある固い物を掴む。引き出してみると、丸みを帯びた三角形の輪に横棒が付いた奇異な装置が穴の中にロープを伸ばしながら出て来る。しばらく引つ張って伸びが止まると、光秋は再びマニュアルに目を向ける。

——『左の赤いボタンでロープの伸長、右の青いボタンで収縮』……——

マニュアルを畳んでシートの上に置き、図解に従って棒の赤いボタンを押しながら三角形の部分を引きと、その間にロープが現れ、一気に2メートル弱まで伸びる。

——なるほどなあ……

三角形のフックに左足を掛け、右手で棒を掴むと、光秋は左手で赤いボタンを押し、穴からロープを伸長させて地面に降下する。

機体の左膝の辺りに降りた光秋は、とりあえず敵意がないことを示すために両手を高く挙げて大男たちに近づいて行く。

と、

「……………」

突然脚の力が抜け、崩れる様にその場に座り込んでしまう。

「お、おい！どうした？」

大男が心配そうな声で駆け寄ると、グーツと光秋の腹が鳴る。あとの3人も続いて近づくと、光秋は、

「…………よく考えたら…………今朝から何も食べてなくて、その上…………こんなに暴れて…………その疲れも、出ちやつたみたいです……………」

弱々しい声でそう言うと、また、グーツと腹の虫が鳴る。

——さつきよりでない…………——

と、

「フ……………フハハハハハハハハハ！」

男性兵士が大口を開けて爆笑を始め、他の3人もつられる様に笑い出す。

「ハハハハハ！」「フフ、フ、フ！」「グツ、ハハハハハ！」

光秋も、我ながら漫画の様な滑稽な様子に可笑しくなり、頬を動かす。

「……………」

が、疲れた体からは声は出ず、疲労した表情筋で作った笑顔は、合わせ笑いか苦笑いの様な弱々しいものである。が、そんな笑いでも、体の奥が楽になる様な感じを覚えなくもない。

今までは、状況がわからないという緊張感や、戦闘中の興奮で、空腹感や疲労感といった動くのに都合の悪い感覚が抑えられていたのだろうが、機体を降りてからの「終わった」という安心感が抑力を弱め、そもそも時間的にも限界だったのだろう。脚に力が入らない光秋は、大男に背負われて、役所の中の広い空間の隅に椅子やテーブルが積み積まれている会議室の様な部屋に運ばれる。来るまでの道のりは、途中階段を上った以外は空腹で集中力が低下してよく覚えていない。

先に入った長身がパイプイスを広げ、光秋はそれに座る。散々とした意識の中、

……………この部屋は、比較的無事みたいだなあ……………

と考える。来る途中、壁が粉々に碎けた部屋や照明が点かなくなっている廊下を見てきたが、この部屋は壁に若干小さいヒビが入っているくらいで、灯りも空調も問題なく作動していることがそんなことを思わせる。

ヘルメットを脱いで部屋の隅に置いた黒い角刈り頭の長身と、黒髪を短く切り揃えた男性兵士が、光秋の前に折り畳み式のテーブルを置き、それを挟んでヘルメットとバストを脱いだ顎髭と繋がった黒い短い髪の大男もパイプイスを広げて座る。女性兵士は大男の右後ろに、長身は光秋から見てテーブルの右に、男性兵士は左にそれぞれ控える。その間にも光秋は、これ以上みつともないと場所を見せたくないと気を張るが、空っぽの体はろくに言うことを聞かず、体全体が徐々に沈んで行くのがわかる。

「……どうやら、そうとう腹ペコの様だな」

光秋のそんな様子を見て、大男が言う。

「無理もないか。よし、まず腹ごしらえと行くか。何か食べたい物はあるか？」

大男の質問に、光秋は、

「……米と……肉が……しよっぱい物が……」

と、大儀そうに答える。

「米と肉か……よし、近くに安い牛丼屋があるから、そこで頼んでやろう」

「……！」

「牛丼」という言葉に、光秋の頭が少し冴える。

——牛丼！——「よろしくお願いします！」

「よし、竹田^{ただ}、買つて来てくれ」

「オレつすかあ？……」

「竹田」と呼ばれた男性兵士が、面倒そうな顔で答える。

「三佐、そもそもあそこやつてるんすか？こんなことの後で？」

「奴らはあくまで、ここだけを狙ったんだ。建物は無事だろう。誰もいなければ、置手紙に『非常時の為頂く』とでも書いて持つて来ればいい。金は払えよ！」

「りょーかい！」

そう言うのと、竹田はベストも脱いで光秋から見えて正面左端にあるドアから出て行く。

しばらくして、竹田は息を弾ませて帰つて来る。同時に、右手に持った袋から漂う醤油の香ばしい香りが光秋の鼻をくすぐる。

——来た！——

「騒ぎが収まったか見に来た店員が1人いたんで、なんとか話してきました」

そう言いながら竹田は、テーブルの上に袋を置き、光秋の方を見る。

「ただし、牛丼だけで生姜とか薬味はなしだからな。味わって食えよ！」

「充分です！ありがとうございます！」

光秋は深々と頭を下げて礼を言くと、袋の中身を出す。

プラスチックの透明なフタを開けると、発泡スチロールの器に盛られた牛丼から湯気が上がり、先程以上に香りが鼻を突く。両手を合わせ、

「いただきます!」

と言うやいなや、急いで箸を割って掻つ込む様にありつく。
と、

「うー……ウフツ、ウフツ!」

急いで食べたせいで喉に詰まってしまう。鳩尾を打って治そうとするが、なかなか上手くない。

そこで長身が駆け足で部屋を出て、戻つて来るとその手には500ミリペットボトルの緑茶が握られている。

「急いで食うからだ。飲め!」

光秋は差し出されたお茶をすぐに飲んで、ようやく詰まりを治す。

「ありがとうございます」

「そう慌てんでも、誰も盗らんわ」

「……」

大男が笑顔でそう言う中、光秋はこの4人に対する警戒心が今朝よりも弱くなってい

ることを自覚する。監獄を出て以降、いろいろと親切にしてもらっているのがそう感じる原因だろう。が、元来の人見知りの性格から、完全に警戒を解いた気もしないという、我ながら微妙な心境である。

その後は特にトラブルもなく牛丼を平らげ、喉も渴いていたのでお茶も飲み干す。食べ終わると、また両手を合わせ、食べた物に対してもそうだが、それを提供してくれた2人への感謝も込めて、

「ごちそうさまですー！」

と、深々と頭を下げる。

「さて、腹も一杯になったところで、まずは自己紹介をさせてもらおうか」

大男がそう言つて、話を切り出す。

「儂は藤原大吉。ふじわらだいきち三佐で、我が藤原隊の隊長だ」

『隊長』?」——それに『三佐』って? やっぱり軍隊か何かなのか?——

「詳しい説明は、後でゆつくりする。まあ、よろしくな!」

そう言うのと藤原は、平均男性の足程はある大きな右手を差し出す。

「こちらこそ、改めまして加藤光秋です。よろしくお願いします!」

聞きっぱなしはよくないと思いそう返すと、光秋も手を差し出し、握手をする。

「……………」

藤原の握る手の強さに光秋は少し驚き、同時に、

——本当に大きいんだなあ——

と、藤原の手に感心してしまう。光秋の手も大きい方なのだが、藤原の比ではなく、なにより手が細いため、握られると殆ど相手の手に隠れてしまう。また外の寒さですっかり冷えてしまった光秋の手に比べ、湯たんぽの様に温かいその手の温度にも感心してしまう。

握手を解くと、次は長身が紹介を始める。

「俺は小田^{おだじん}仁。よろしくな！」

そう言つて、小田は軽く頭を下げる。光秋は黙礼で応じる。

と、光秋の頭が上がり切らない内に、

「オレは竹田^{たけだじゆうぞう}柔蔵！よろしく！」

と、男性兵士が右手を差し出す。

「……………」

光秋は急いでそつちに手を伸ばしてそれに答える。そんな竹田の態度に、

——せっかちな人だなあ——

と思つてしまう。

そこで、それまで藤原の後ろにいた女性兵士がテーブルに近づき、紹介を始める。

「私は伊部法子^{いべほうちこ}。こちらこそ、改めましてよろしく！」

彼女も一礼して言い、光秋も頭を下げてそれに答える。

その直後、コンコンと、ドアをノックする音が響き、

「今、いいかね？」

と、男の声で入場を求めてくる。

「どうぞ？」

藤原がドアの方に振り返って答えると、少々老けた印象を持ちながらも、藤原に劣らない逞しい体つきをした男を筆頭に、若そうで細身のスタイルの黒い長髪でそこそこ巨乳の女と、白衣姿の短い黒髪をした若い男が入ってくる。

「局長！」

藤原が筆頭の男に向かって少し驚いた様に言い、

「上杉^{うえすぎ}？ お前もなんだよ？」

竹田が若い男に向かって首を傾げて言う。

「いやいや、NPの襲撃があつたと聞いて、ちよつと様子見にね。何より、彼のことをねえ……」

「局長」と呼ばれた男が光秋を見ながらそう答え、近づいて来る。

「オレは、負傷者の手当てがひと段落したんで、そいつも調子悪いって聞いてちよつと診

察に」

若い男も光秋を見ながらそう答える。

席を譲った藤原に代わって、局長が光秋の正面に着くと、

「ESO^{エッソ}日本局長の東^{あずま}だ。君だな？突然空から降って来たと思ったら、表で跪いてるあのロボットに乗って、1人で襲撃を鎮圧してしまった男というのは？」

と、どこか信じられないといった表情でそう言う。

「は、はい……でも、無我夢中でしたから……」——他になんて言えば？……—

そう思いながら、光秋は渋々と答える。

「シー……まあ、君のおかげで敵味方とも少ない負傷者で済んだんだし、死者が出なかったのも事実だろう。礼を言う。ありがとう！」

東局長は、テーブル越しに少し皺の刻まれた右手を差し出しながらそう言う。光秋も手を出してそれに答える。

「……—」

藤原程ではないが、今度も強い力で握られる。

それに続いて細身も女も、

「局長の秘書の沖^{おき}です。私の方からも、どうもありがとうございます！」

と、軽く頭を下げながら言う。

そして、それまで後ろに控えていた若い男も前に出、光秋から見て東局長の右隣りに来る。

「オレもまずは自己紹介からだな。上杉勇児^{うえすぎゆうじ}、ESO専属の医者だ。よろしく!」

上杉も右手を差し出し、光秋もそれに答える。
と、

「まあ、会うのはこれで2度目なんだがな……」

「2度目?」

「ああ。お前が留置所にいる時に検査諸々で1度な。もつともお前、そんな時熟睡してたから。起こそうかと思ったが、あまりに気持ちよさそうに寝てたから、やめたがな」
「そ、それは……失礼しました!……」

光秋は自分の失敗に、肩身が狭くなる思いを感じる。

「気にすんな。こつちが勝手にやったことだし」

「ところで、上杉……」

そこで藤原が話に加わる。

「彼の調子は、どうなんだ?」

「ちよつと待ってください」

そう言う上杉は、目をつむって握手している手に若干力を込める。

——……何してるんだ？　そういうばこの人、『診察』って言うくせに聴診器も提げてないし……？」

光秋がそんなことを考えていると、不意に上杉は目を開ける。

「体調の方は、ほぼ正常ですね。ただ、さっきの戦闘や環境の急変から来る疲労やストレスがまだ残ってます。昼間たっぷり寝たみたいですけど、今夜も早めに休ませた方がいいかと」

「わかった」

藤原がそう答える傍ら、光秋は、

——何だ今の？　脈拍でも読んだのか？——

と、持ち合わせの知識から事態を推測しようとする。

と、

「『脈拍でも読んだのか？』って思っただろう？」

と、上杉に今考えたことをそのまま声に出される。

「!?……」

光秋が驚きの顔を隠せないでいると、

「悪い悪い、脅かしちゃって」

上杉はいたずらっ子な笑みを作って謝り、ようやく握手を解く。

「オレはサイコメトラーでね。触った所から色んな情報を引き出せるんだ」

『サイコメトラー』?」

その発言に光秋は、また驚きの顔をする。

元来物語好きの光秋は、SFやホラーなど色々な内容の話を本やテレビなど媒体を問わず見聞きしている。もちろんその中には、超能力モノも含まれている。そのフィクションで得た知識によれば、「サイコメトリー」とは、上杉の言う通り触った所から情報を得る能力であり、この能力を有する者を「サイコメトラー」と呼ぶ。そして光秋は、そういう超自然的な存在が実際にいてもいいと思っているところがある。が、いきなり「自分は超能力者だ!」と言われて、「はいそうですか」と鵜呑みにするほどお人好しでもない。

「……」

故に、光秋の表情は驚きの顔から、疑いの顔へと変わる。

それを見て、上杉は笑いながら、

「疑ってるな?」

と訊いて来る。

「そりゃあ……いきなりそんなこと言われて……」

「じゃあ、お前がこっちの世界に来るまでのいきさつ話してやるよ。留置所で診察つい

でに調べとけつて指示されてたしな。まず、夜行バスに乗つてたら、突然真っ白な空間に飛ばされた！」

「！——まだ誰にも話していないはず？」

「そこで人型の白い影みたいのに出会つて、表のあのロボットをもらつた！」

「……………」

「んで、その後演習場近くに落ちて、伊部二尉に発見され、ここに連れて来られた！とまあ、こんなところか。どうだよ？」

「……………その通りです！」

「ここまで言われて、光秋の懐疑心は殆ど消えてしまう。

それに加えて、

「では仕上げてら」

と、藤原が右手を押し出す様に前にかざすと、

「……………」

その動きに合わせて光秋のイスがメートル程後退し、さらに藤原が手を上に挙げる
と、それに合わせてイスも天井すれすれまで上昇する。

「どうだ？これがサイコキネシス！モノを動かす力だ！」

微笑みながら藤原は豪語する。

「わかりました！わかりましたから下ろしてください！高い所苦手なんです！」

すっかり疑う心が消えた光秋がそう言うのと、藤原はゆつくりと手を下ろし、それに合わせてイスも元々あつた位置に下りて行く。

下りながら光秋は、神モドキのことを思い出す。

—そういえば、神モドキさんが僕を機体に乗せた時も……じゃああの声も、テレパシーか何か？……—

光秋が元の位置に着地すると、

「では、我々はこの辺で本部に戻る。藤原君、支部長によりしく言っておいてくれ」

「はっ—」

東局長の言葉に藤原が敬礼で答えると、東局長と沖は部屋から出て行く。小田、竹田、伊部の3人も、敬礼してそれを見送る。

敬礼を解くと藤原は、

「……さて、今何時だ？」

と、小田に訊く。小田は左袖を軽くまくって腕時計を見ると、

「7時……50分ですね」

と答える。藤原は髭を撫でて少し考え込む。

と、

「……上杉には『早く休ませろ』と言われたが、あのデカブツをあのまま座りこませとくわけにもいかん。加藤君、だったな？最後にアレを、元あった場所に戻してくれんか？暗い内の方が目立たんですむ」

「……わかりました。ただ……アレが入ってた倉庫、壊してしまつて……」

「それなら、その近くに置いておくので構わん。頼む」

「……はい」

そう言つて光秋は立ち上がり、残つた面々と共に部屋を出る。

来た時はわからなかったが、さっきの部屋は2階にある。部屋のすぐ左隣にある階段を降りると、すぐ1階だからである。そしてそのすぐ左側のドアから出ると、正面に正門の壁があることから、ちょうどそこがコの字の下の横線の先端だと気付く。光秋は駐車場の方に目をやると、正面玄関の方を向いて跪く機体を見る。

光秋は機体に駆け寄り、リフトのフックに左足を掛け、左手で棒を掴む。説明を思い出しながら右手で青いボタンを押すと、リフトが上昇を開始する。それがコクピット付近に自動で停まると、光秋は右の手足をコクピットに掛け、這い上がる様に搭乗する。

「さてと、仕舞い方は？」

シートの上のマニアルを取つてリフトの仕舞い方を調べると、その説明の通り、まず青いボタンを押してフックと棒を繋ぐロープを収縮し、あとは穴に押し込める様に戻

し、フタをする。

席に着くと、開いたままのマニュアルを膝の上に置き、素早くメガネを上げて両手を操縦桿に置き、機外での生体認証を済ませる。降下しながらメガネを掛け直し、シートベルトを締め、静脈の確認も済ませる。モニターが点くとすぐに、イメージで機体を立ち上げ、あとは操縦桿で機体を倉庫の方に移動させる。

その中で光秋は、先程の自分の戦いのことを考える。

——…初めてとはいったものの、あれじゃあ頭に血が上った猿が暴れてるだけだ！——

光秋が自分の戦いをこの様に評価・反省するのは、小さい頃に空手をかじった経験が多少影響しているのだろう。が、初の、そして唐突な実戦を前に、事態の中では我を忘れてしまったのである。

考えながらも、ビルを擦らないよう慎重に狭い通路を抜け、全壊した倉庫の前に着くと、光秋は再び機体に左膝を着かせる。

機体から出ようとハッチのボタンに手を伸ばそうとした時、不意にマニュアルの「カプセル」という表示が目に入る。

「?……」

好奇心からマニュアルを持ってそこを開くと、まず備品のありかを表示する図解が目に入る。それに従って右肘掛正面のパネルのレールの下を手探りすると、円形の浅い窪

みを感じ、試しに押してみると、そこがせり上がる。

「……何だ？」

引つ張り出してみるとそれは、長さ15センチ程の太めのペンライトの様な形をしている。が、ライトにしては電球の部分が異様に小さく、そもそも電球というよりもテレビのリモコンの先端にある様な銀色の玉粒に似た形をしている。白い胴体に赤い縦に長い楕円のボタンと、その裏側に小さな赤いレバーが付き、レバーの上下にはそれぞれ「入」「出」と浮き彫られている。そしてボタンを右、レバーを左に、等間隔に挟まれる様に、頑丈そうな赤い長方形の出っ張りがある。

「……………」

手首を回して様々な角度から眺めてみる。

と、

（加藤君！いつまで入ってるんだ？ここに置いてくれれば充分だ。早く出て来い。上杉もさすがに心配しているしな）

正面からの藤原の呼び掛けに、

――外で調べればいい――

と思ひ、光秋は機外に出てリフトを出し、マニュアルとカプセルをズボンの脚ポケットの左と右にしまつて降下する。

降りるとすぐに、

「長かったが、何をやっていた？」

と藤原に訊かれ、光秋は右ポケットからカプセルを取り出し、

「中でこんな物を見つけたんです」

と言つて、それを藤原に差し出す。藤原はそれを取つて訝しげに眺める。

「何だ？これは？」

「マニュアルには、『カプセル』とありましたが？」

『カプセル』？」

「どれ、オレが」

上杉がそれを持つてサイコメトリーを試みる。

が、

「……う……!!?おかしい!何度やつても情報が伝わつてこない!」

と、驚きの表情をする。

「ロボット自体も、ESPや機械の測定を全く受け付けなかったと言う。加藤君をここに連れて来た白い奴の作った物には、そういう特性があるんじゃないですか？」

小田が推測を述べる傍ら、光秋はマニュアルに目を通す。

と、

「……………これに……………『収容』!?!」

カプセルの説明に驚きの声を上げる。

「何だ?」

声に驚いた藤原が光秋に尋ねるが、

「……………ちよつと!」

光秋はそれに答えず、急いで上杉の手からカプセルを取ると、説明に従って銀玉の方を機体に向け、レバーが「入」の方になっているのを確認し、その右横の四角い出っ張りを開いて中のレバー式スイッチを「切」から「入」に替え、ボタンを押す。

銀玉から白く細い光が放たれ、それが機体に当たった次の瞬間、

「!」

光の当点に向かって機体が瞬時に縮み出すと、そのままカプセルの中に吸い込まれてしまう。

「な、何だ今の!?!」

それを行った光秋を含め全員が驚きを隠せない中で、竹田が叫ぶ。

「……………」

気を取り直した光秋は、皆の方にカプセルを向けて説明する

「マニュアルによると、今のようにして機体を『収容』するそうです……………つまりこれが、

あの機体の容器！……いや、格納庫と言うべき物なんです！」

「……出す時はどうするの？」

伊部の質問に光秋は、機体のあつた方に振り向き、手を動かしながら答える。

「カプセルのレバーを『出』に切り替えて、あとは、またボタンを押すと……」

そう言いながら押すと、再び光が放たれる。と、今度はその光線を軸に機体が膨らむ様に出現し、照射が終わると、光秋の１メートル程前の位置に収容前同様、ハッチを開け、リフトを垂らし、左膝を着いた体勢で現れる。

「……すごいー！」

伊部が驚愕の声を漏らし、

「……なんというー！……」

藤原が驚きの顔で眩き、

「お前……スゲーもん持たされたな！」

竹田が光秋を見ながら言う。

光秋は再び機体を収容し、フタ付きのスイッチを「切」に替えながら、

「……そうですね……」——使いこなせるかな？……——

と、眩く様に答えながら、ふと不安を覚える。

と、

「……ヘクチュン！」

光秋は不安を吐き出す様な大きなくしゃみをする。

それを見て小田は、すまなそうに言う。

「すまん、コート返すの忘れてたな。とりあえず、今日はこの辺にして、休む前にシャワーでも浴びていくか？」

「シャワーかあ……できれば風呂がいいが、贅沢も言えんし……それでも暖まるだろうし、すつきりしたいしなあ……」――「そうさせてもらいます」

光秋が答えると、小田は続けて、

「よし、入ってる間に、君の荷物も持って来よう。こつちだ」

と、光秋をシャワー室へ案内する。

光秋が案内されたシャワー室は、正門側から見てコの字の建物の右隣にある、2階建ての白い三角屋根の建物、小田曰くの「寄宿舎」の1階にある。塀のすぐ前に建ち、コの字の建物―本舎に垂直に向くように建てられており、シャワー室のドアは門側と逆の面に設けられている。塀側の、ほぼ壁の隅に設けられている方が男用である。

光秋がドアをくぐって手探りで電気を点けると、左側には着替えや荷物を入れるかごをいくつか置いた4段の備え付け棚が、右側には大きな一枚鏡を備えた3つの洗面台が並び、正面にはモザイクガラスが張られたドアがある脱衣所に出る。

「タオルはそこにあるやつを使ってくれ。俺は君が浴びてる間に、荷物取って来るから」
光秋の後ろから小田が指差した場所――棚の手前には、白いバスタオルが数枚重ね置きされている。

「はい、お願いします」

そう言つてドアを閉めた光秋は、靴を脱いで棚の方へ移動し、上から2段目のかごに服を脱ぎ入れる。メガネもそこに入れると、バスタオルを1枚取つてガラス張りのドアをくぐる

シャワー室は壁一面が青く塗られ、簡単に区切られた個室が左右3つずつ、中央には線を引く様に青いベンチが2つ置かれている。脱衣所もそうだが、掃除が行き届いているのか清潔な印象を抱く。左側の手前の個室に入った光秋は、扉にタオルを掛けると、シャワーの射線から外れる様に立つて左側の赤い丸が描かれたお湯のコックを回す。出てきたお湯を触つてみると、

「熱ちー」

すぐに手を引っ込め、右の青い丸が描かれた水のコックを回し、湯加減を調節する。ちようどいい加減になると、それを頭から浴び、ふと長考に入る。

――……そういえば、水道の仕組みは、同じだな……いや、水道だけでなく、さっきの牛丼にしろ、箸にしろ、お茶にしろ、銃や戦車にしろ、文明や文化は、僕がいた所と変

わらない。今のところ唯一の相違点は、超能力者の有無、か……―

と、不意にガラスをノックする音と、

「俺だ、小田だ」

と言う声が響く。

「！」

光秋はよく声を聞くためにシャワーを止めながら、

「はい」

と答える。

「荷物は2つとも君の脱いだ服の隣に置いた。携帯や財布は灰色の方に入れていた。あと使ったタオルは、入口の横のかごに入れておいてくれば良い。着替えが済んだら、階段上がってすぐの1号室に来てくれ」

「わかりました」

光秋が答えると、ドアが閉まる音がし、小田が出て行つたと察する。

光秋は長考をやめ、速めに体の各部にお湯を流すと、扉を開け、掛けてあつたタオルを頭に被つてよく拭きながらベンチに腰掛け、他の部分もよく拭いてシャワー室を出る。

棚の方に目をやると、小田の言つた通りリュックとカバン、コートが服の入っている

かこの隣のかごに入っている。小田に言われた通りにタオルを入口の右横のかごに入れ、リュックから替えの下着と、濃い緑のズボン、白地に赤い線が描かれた上着を取り出す。

「……すぐそこみたいだし、靴下はいいか」

そう決めると、下着を着、ズボンを穿き、上着を着る。脱いだズボンからカプセルとマニユアルを取り出し、穿いている方のポケットに移すと、脱いだ服を軽く畳み、リュックに仕舞う。洗面台の上のドライヤーで髪を乾かし、若干整えると、コートを羽織り、荷物を持って裸足で靴を履いて電気を消し、外に出て小田の言った1号室へ向かう。

階段は来る時に見ており、本舎側にある。シャワー室側から始まって途中で折り返された吹き抜けのそれを上ると、4つの部屋があり、それぞれ1から4と番号がふられている。

——……3月くらいの気温に、シャワー後の肌はきつい——

そう思いながら、階段から一番手前の1号室のドアを開ける。

そこは六畳の畳み部屋である。入口から見て左側に襖が1つ、正面にはカーテンが掛かっていることから窓があるのだろう。先に来ていた小田と竹田が布団を敷いてその上に座っているのだが、それが2つある。

「?……」

光秋の疑問を察してくれたのか、小田が説明する。

「悪いが、後からこいつと一緒に寝てもらおう」

そう言いながら竹田を指さす。

「かまいませんが、なぜ？」

光秋はとりあえず部屋に上がって腰を下ろしながら尋ねる。

「元々、今日俺たち当直なんだ、夜警の」

小田が答える。

「夜警？」

「施設が施設だから、警備員じゃなくて俺たちがやらなきゃならないんだ。まあ詳しい

説明は、明日にさせてくれ」

「はい……」

そこで竹田が愚痴る様に言う。

「今朝は合軍と演習、夜がこれだから、きつくなると思ってたが、その上お前が降つてき

たり、NPが来たり……」

「そ、それは……」

光秋は、肩身が狭く感じる。

「ま、気にすんな！お前の方は事故みたいなもんなんだしな」

そう言つて竹田は立ち上がり、小田も続く。

「ま、先に寝てくれ。オレも後から来るから」

竹田がそう言うのと、2人は部屋から出て行く。

「……………」

1人残された光秋は、とりあえずカバンとリュックを枕元である窓側に移動させ、そのそばにコートを二つ折りにして置き、カバンのポケットから携帯電話と常時薬の目薬が入った小さい紙袋を、ズボンからカプセルとマニユアルを取り出し、それらを襖側に敷かれた布団の、横になって左側になる枕元に置く。紙袋から緑の小袋に入った容器を取り出すと、メガネを額に上げ、その中の水薬を左目に注す。

—これ冷蔵庫で保管しなくちゃいけないんだが……1日くらいいいか—

そう思いながらメガネを戻し、目薬を紙袋の上に置くと、横になって再び長考に入る。

……………『夜警』と言つてたけど、あの黒服たちの所にも行つてゐるのかなあ?……
そもそもあの白い機械、みんな僕にしか動かせないようなこと言つて……その上超能力者か……………—

考えながら5分程経つと、光秋は右手を枕の左側に伸ばして紙袋を取り、中から今度は青い袋に入つた容器を取り出す。メガネを上げ、中の薬を左目、右目の順に注すと、メガネを戻し、1分程目をつむり、開けると容器を片付けて紙袋の上に置く。

「……………右も左もわからない奴が、これからどうすればいいか……………」
光秋の中に、小さいながら不安が起る。

再び5分程経つと、紙袋からオレンジの袋に入った容器を取り出し、それも左、右の順に注すと、1分程目をつむる。目を開けると3つの目薬を紙袋に戻し、上体を起こして後ろに捻り、左手でカバンを寄せると、右手で紙袋をカバン内の元の位置に戻す。

灯りを豆電球にし、メガネを外して床に入る。上杉に早く寝るよう言われた光秋だが、半日近く寝ていたことと、なにより、起こった出来事を整理しようと、長考に入ってしまう。が、

「……………その辺にしとけ光秋！悪い癖だ。気持ちだけ先に行つて！——」

そう自分に言い聞かせ、それ以上、先のことを考えるのをやめる。

「わからないことをだらだら考えてもしようがない！とりあえず今は寝よう！明日もあるし。目をつむつて横になっていれば、そのうち寝る——」

そう思い、寝付くことに専念する。

「……………」

しばらく時間はかかったが、やがてその意識は夢の中へと沈んで行く。

4 異世界の朝

意識がゆっくりと覚醒し、瞼を開けると、カーテン越しの朝日と見覚えのない天井が見える。

——……朝か……—

そう思うと、光秋は携帯電話に手を伸ばし、開いて時計を見ると6時28分である。
左側から、

「グウー……グウー……」

と、低い軀がするので見てみると、薄っすら見覚えのある顔が、光秋の方を向いて寝ている。

——……この人確か……竹田さん？……—

メガネを外しているので大方の輪郭と色あいくらしか見えないが、それでも距離が近いことと、昨夜の記憶が手伝って名前を出せる。

——……寝ててもしょうがない—

なんとなしにそう思うと、光秋は掛け布団ごと上体を起こし、背骨を伸ばすようにして深呼吸をすると、メガネを掛け、布団から脚も出して一気に立ち上がる。電灯の豆電

球を消し、枕元の携帯電話、カプセル、マニュアルを脚のポケットに仕舞うと、カバンから青い鏡と黒いクシを出し、鏡を敷布団の上に置いて頭を整える。一通り解かして5対5に分けると、鏡とクシを仕舞い、リュックから白い靴下を出してそれを履く。カバンから黒いケースを取り出し、中から黒い髭剃り機を出すと、それを持って玄関から外の通路に出る。

—寒い！目が覚める！—

そう思いながら、そこで髭を剃る。鼻の下から顎、両頬と、左手で触って剃り具合を確認しながら剃り終わると、部屋へ戻って髭剃り機を片付ける。

—口と顔を洗いたいが、部屋には水道ないし……竹田さん起こすのもな……—

軀をかき続ける竹田の寝顔を見ながら悩んでいると、コンコンとノックの音がする。

「伊部です。竹田二尉、加藤君、起きてる？」

「はい」

竹田を起こささないと思える程度の声で返事をしながら、光秋は玄関へ向かう。

ドアを開けると、昨日と同じ緑服を着た色の黒い女が立っている。

「……おはようございます」

「おはよう。竹田二尉は？」

「まだ、寝ています……」

「そう。それじゃあそつとしておこう。昨日遅かったから。ところで、朝ごはん一緒にどう？」

——……早めに食べといった方がいいか……あ！そうだ——「じゃあ、そうさせてもらいます。その前に、水道つてどこですか？」

「この下に共同の水盤があるよ」

「わかりました。ちよつと待つててください」

光秋は部屋に戻ると、リュックからハンカチを出してポケットに入れる。

——鍵は……さつき出た時かかってなかったし、いいか——

コートを羽織つて、外に出る。

「お待ちせしました。食へに行く前に、下の水盤に寄らせてください。顔を洗いたくて」
「わかった。行こう」

そう言つて、二人は下へ向かう。光秋は途中の階段で手すりを掴もうとするが、冷たそうなのでやめ、ゆっくり降りる。

降りると光秋は、シャワー室のある側に案内される。昨夜は気付かなかったが、シャワー室以外にもいくつかドアがあり、階段から一番手前のドアを手で指される。

「……だよ、水盤は」

伊部がそう言うドアの上には、「共同水盤」という札がしてある。

「ありがとうございます」

光秋が中に入ると、薄明かりの中、左右両端に設けられた学校にあるような物と大差ない金属製の長水盤が目に入る。右側の一番手前のを使って口を漱ぎ、顔を洗う。

——うーん、目が覚める——

水しか出ない水盤にそう思いながら、ハンカチで顔を拭く。

外に出ると、

「えーと、伊部さん、ですよね？」

「ええ。そうだけど？」

「すみません、名前覚えるのが苦手で。もう一つ、トイレってどこですか？」

「そこ」

そう言つて、伊部は共同水盤からドア一つ挟んだドアを指す。

「あー君がそうなら、私も」

と言つて伊部は、水盤と指さしたドアの間のドアに入る。光秋も指さされたドアに入ると、入つてすぐに一面青いタイル張りの壁と、白い鏡付きの水盤が2つ左側のすぐ手前に並んでいるのが目に付く。奥の右側に3つの小用便器と、左側に3つの個室がある内、一番手前の便器で用を足し、ドア側の水盤で手を洗つて外に出る。

少しして、伊部も出て来る。

「お待たせ。ごめんなさい、昨日の内に教えておけばよかったね」

「いいえ、昨日はそんな疑問わく余裕もなくて……」

「……そっか、それもそうね。まあいつか、行きましょう」

「はい」

伊部が少し左前を歩く形で、二人は本舎の裏口へ向かう。

「寝ても覚めても景色は変わらないし、枕元にはカプセルとマニュアルもあつたし、今頃になって、ようやくこれが夢や幻じゃないって気がしてきました」

光秋が呟く様に言う。

「そう？ 私も、昨日のことが現実だったとは、起きてすぐは信じられなかったなあ。でも試しに竹田二尉の部屋に行つて声を掛けたら、君の声がして。驚いたのと同時に、『ああ、夢じゃなかった』って」

「今はますます、そう思います。起きてる時の重さを感じますから」
「重さ？」

「夢の中だと、どこかふわふわした様な、足が着いていない様な感じがするんです。起こっている事に対しても、そうなるまでのいきさつがわからない、でもそのことに疑問を感じない。今は、そんな感じはありません。現にさつきも、水周りの場所、聞くまでわからなかったし……」

「ふーん、そうやって夢と現実を区別してるんだ？」

「とりあえず、ですけどね……」

そこまで話すと、2人は最寄りの裏口に着き、伊部を先頭に中へ入る。

伊部の先導に従いながら、2人は本舎の食堂へ向かう。

「伊部さん、食べながら話せる範囲でいいんで、僕にこつちのいろいろな教えてくれませんか？」

「……いいけど？」

「お願いします！少しでもこつちの情報が欲しくて」

話しながら、2人は食堂へ入る。

入って右側に食事の受付とレジがあり、広い部屋の殆どがテーブルの列で占められている。朝早いためか、人影はまばらである。

「……すみません！僕、財布……」

「ああ、いいよ。私がまとめて出すから。だいたい、報告にはなかったけど、君の世界のこつちのお金と同じってわけでもないし」

「……そう、ですね。重ね重ねすみません……」——本当にすみません——

光秋は少し頭を下げて言う。

「いいよ。さあ、早く頼もう！」

伊部にそう言われ、光秋は近くの壁に貼つてあるメニュー表を見る。

「かなり色々あるなあ……よし、これにしよう」

頼みたい物を決めると、先を行く伊部に続いてトレーを取り、それを受付のレールの上に乗せる。

「トースト一つと、アイスコーヒー一つ」

「はい」

光秋の注文に、白い割烹着を着た少し年配の女性が答えると、少しして斜めに二つ切りになったトーストと、グラスにストローが入ったアイスコーヒーを手渡してくれる。

「砂糖とミルクは？」

「結構です」

光秋がそう答えてレジへ向かおうとすると、割烹着の女は思い出した顔をする。

「……！ちよつと！あなたまさか！……」

「？……」

「昨日NPを1人でやつつけたつていう！」

「！……もうそんなに話題に？」

「やつぱり！ありがとうね！おかげで私たち怪我しないで済んだわ！」

「え？いやあ……」

「加藤君！」

伊部の声がしてその方を向くと、レジ手前でトレーを持って立っている。

「！……すみません！では！」

その様子を見て、光秋は慌てて伊部の方へ向かう。

——他人ひとに感謝されるのはいいが、違う所に来て、調子が悪いんだな——

そう思いながら、伊部の許に着く。

「すみませんお待ちさせて！」

「いいけど……それより、そんなに足りるの？パンとコーヒーだけって？」

「朝はあまり入らないので、これでいいんです」

「そう？遠慮しなくても？……」

「遠慮ではなく、これでいいんです」

「そう？……」

そう言つて伊部は2人分の料金を払い、2人は最寄りのテーブルへ向かう。

「意外と少食なのね？昨日はあんなにがつついてたのに？」

「昨日は朝から何も食べてませんでしたから……そりゃあ、平時でも食べる時は食べますが、朝はあんまり……ただ、少しは何か入れないと、半日持ちませんから」

「そう」

テーブルに着くと、光秋は受付を背にしてコートを椅子に掛けて座り、伊部はその向かいに座る。

「いただきます」

光秋は軽く手を合わせて言い、

「手がちよつと汚いかもしれないが……まあ、ちよつとくらい大丈夫だろう——

と、コーヒーを一口飲んでパンを食べ始める。

「……ところで、伊部さんは朝から食べるんですね——朝から肉かあ……—

伊部のメニューは、ご飯にみそ汁、そして焼き肉とキャベツの千切り、飲み物は水である。

「そう？ 私や三佐たちは、いつもこれくらいだけど？」

「やつぱり、軍隊みたいな仕事をされてると、食べるんですね」

「そうね、訓練なんかでも……そうそう。こつちのこと教えるんじや？」

「そうだ。教えてください！」

「じゃあ、まず何から聞きたい？」

「……色々あるけど、とりあえず——「じゃあ、ここがどこか教えてください。国の名前とか、地名とかを」

「（ハハ）は……」

伊部は少し考え込む。

「わかった。正式に最初から言います。君が今いるここは、地球合衆国日本州、京都府京都市。ついでに言うとその北区」

「……………京……都!」

光秋の顔に驚きの色が浮かぶ。

「それ、僕が向かってた地名と同じです!」

「え? そうなの?」

「否、それだけじゃない!」

光秋の脳裏に、この建物に来るまでの景色が浮かぶ。

「昨日ここに来るまでに上から見た景色も、なんか見覚えがあっただんです! もちろん、あんまり高い所から景色を見ることなんてないんですけど。ただ、来る途中に見た大きな駅といい、その近くの赤い塔といい、まるで……」

「……………それって……」

伊部の顔色も曇りだし、そして恐る恐る続ける。

「まさか、京都駅と京都タワーというんじゃない? ……」

「その通り!」

「そんな!」

と、2人の叫び声に周囲の人々が驚き、一斉に2人の方を見る。

「……………」

2人とも慌てて頭を下げ、気を取り直す。

「最初の『地球合衆国』こそ知りませんが、後はほぼ、僕のいた世界と同じ言い方です」

「……………そうなの？」

「ええ。昨日ちらつと思っただんですが、この世界と僕のいた世界、文明や文化には大差がないのかもしれない」

「……………」

「……………まあ、場所の話はこの辺にして、次はこの組織のことを教えてください。ヘリには『E・S・O』であって、みんな『エソ』って呼んでますが、何の略で、どういった組織なんですか？」

「ああ、正式名称は『E^エS^スP^{パー}e^サr^{ボー}S^トu^{オー}p^ニp^{ゼー}o^{ショ}r^ンt^ン O^ニr^{ゼー}g^{ショ}a^ンn^ンi^ンz^ンa^ンt^ンi^ンo^ンn^ン』、『超能力者支援機構』っていう意味。主な目的は、超能力の研究と、それを用いた社会貢献」

「……………超能力の研究と社会貢献……………じゃあ伊部さんも、昨日の藤原さんみたいなことが？」

「私はできないよ、ノーマルだもの」

「『ノーマル』？」

「ああ、超能力者じゃない人のことよ。ウチの隊では、藤原三佐だけね」

「……みんながみんなじゃ、ないんですか？」

「そう。だから両者の違いからくるトラブルもあつてね、両者が共に生きる社会を作るのが、ESOの理念なの」

「……なるほど……」

話がそこまで進んだところで、

「2人とも早いな、おはよう」

「おはよう」

緑服を着た藤原と小田が、トレーを持って現れる。

「藤原三佐、小田一尉、おはようございます」

伊部が応じ、光秋も、

「おはようございます」

と、2人の方を向いて礼をする。

「2人で、何か話していたようだが？」

藤原がそう言いながら光秋の右隣に座り、小田はその向かいに座る。

「伊部さんに、このことについて教えてもらってたんです」

「ほう！それなら、僕らも協力しよう。何でも訊いてくれ」

「ありがとうございます。ならその前に、場所を換えさせてください。左耳でないと、上手く聞き取れないんです」

「……そうか？わかった」

藤原がそう言つて席を立ち、光秋もそれに続くと、2人は互いの席を交換する。その際光秋は、藤原と小田のトレーを見、2人とも伊部同様焼き肉定食であることから、

—やっぱり、よく食べるんだなあ。藤原さんなんて、米少し多いし—
などと考える。

2人が席に着くと、藤原が尋ねる。

「で？伊部からはどこまで聞いたんだ？」

「ここがどこかということと、この組織、ESOについてです。あ、最初の質問に答えた時伊部さん、『地球合衆国』つて言ったんですが、それってなんなんですか？」

「合衆国かあ……要するに、この世界の中央政府なんだがなあ……詳しく話すとすると……」

「何か？」

「こちらの歴史についてもちと話さねばならん」

「構いません。僕は、歴史好きですから」

「そうか？しかしどこから話すべきか……」

「……1000年程のことについて話しては？」

小田がフォローを入れる。

「……それもそうだな。より詳しいことは後から教えればいい。ウツフン！まずこの世界は、『西暦』という暦（しよみ）を使っているなあ」

—『せいれき』？—「僕のいた世界でもそうです！」

「何？」

「『西』の『暦』と書きます」

「『西の暦』？字まで同じか……」

—やっぱり！—

「……加藤君がさっき言っていたけど、こつちと加藤君のいた所って、本当に違いが少ないみたいね……」

伊部が言う。

「そうなのか？まあ、同じというのならば、かえって話し易い。この『西暦』なのだがな、1000年単位で『世紀』と区切るんだ」

—同じだ！—

「今が21世紀で、その前、20世紀の前葉のことだ。人類は、初の世界規模の大戦争、いわゆる『第一次世界大戦』を行った」

—出来事まで同じ！ご丁寧に名前までも！—

「その後、世界は一時期平和に戻ったが、約60年前、再び戦争が起きた。『第二次世界大戦』だ。それもなんとか終わり、再び平和が来ると思われた。が、現実は違った。アメリカとソビエドという2つの大国が、己のイデオロギーを世界に広め、勢力を拡大しようとして、戦争で疲弊した国々を支援した。中には両国が同時に手を伸ばし、そういった都合から分断された国も多々あった。そのような中で、イデオロギーをめぐる争いが起こった所もいくつかあった。もともと、世界の大部分は、互いに戦火を交えない睨み合いを続けていた。いわゆる『冷たい戦争・冷戦』だ」

—こんなにも同じ……か……—

「だが、それが突然、世界規模の熱戦に転化した」

「？……」

「発端は、今となってははっきりせん。だが、最初はイデオロギーをめぐる戦いだっただけで、宗教や民族の対立、さらには超能力思想まで加わり、世界各地で紛争規模の戦闘が繰り返された。農らが今いるここ、日本は、直接的な被害は受けなかったが、世界では激戦が続き、ついにアメリカとソビエドが、世界を壊すほどの攻撃に入るのも時間の問題と言われるところまで人々は追い詰められた」

—僕らの世界より……たちが悪い。『世界を壊すほどの攻撃』っていうのは、たぶん核

戦争のことだろう――

「ここに至って世界は、ようやく自分たちが自分たちを危機に陥れていることに気づき、国家間の利害を超えた統一政權、今日の地球合衆国こんちちを作るという目的の下に集い、各地の紛争を解決するために介入行動を行った。いわゆる、『整理戦争』だ」

――『整理戦争』……――

「そして2000年1月1日、20世紀最後の年に移り変わるのと同時に、地球合衆国が正式に制定された。ちなみに、冷戦期から整理戦争までの一連の出来事を、『第三次世界大戦危機』、通称『三戦危機』と呼んでいる」

「『危機』？」

「ああ。第一、第二と違って、本格的な戦争状態にはならなかったからな」

「……そう、ですか……」

「従来の柵しがらみ――国家、民族、宗教、人種、そういったあらゆるものからより自由であることを願って作られたのが、今の地球合衆国だ。とまあ、こんなとこだな。わかってくれたか？」

「だいたいですが、なんとか」――情報量こそ多かったけど、先生みたいな話し方、聞き取り易いなあ――

「そうか、それはよかった」

そこに、

「はよーすっ」

と、緑服の竹田がトレーを持って欠伸混じりに現れる。後ろには、

「オッス！」

と、白衣姿の上杉がトレー持ちで続く。

「竹田！いくらなんでも遅すぎないか？」

「すみませーん」

小田の叱責を欠伸混じりに受け流しながら、竹田は光秋の右隣に座る。上杉はその向かいに座る。光秋が2人のメニューを見ると、竹田は焼き肉定食、上杉はトーストとスクランブルエッグである。

「ところでお前、ここにいたのかあ。起きたらいないんで最初びっくりしたぜ。まあ、すぐにトイレかなにかだろうとは思ったけどよ」

竹田が光秋を寝むような目で見て言う。

「すみません。寝てたから起きさない方がいいかと思って……」

「そうだがよー……おまけにお前、布団も片付けてねーし」

「あー……………どこに仕舞っていいかわからなかったし、食べてからやろうと思って……………」

「ま、それはオレもなんだがな！ヒヒヒッ！」

そう言つて竹田は軽く笑う。

「……………どうも苦手な人だなあ……………」

「二尉、その辺にしといた方がいいつすよ！こいつそういうやり取り苦手なタイプみたいだし」

上杉が少し口元を笑みに歪めながら言う。

「そう？……………そうだな」

竹田は顔を笑みに歪める。

「たくお前らは……………」

小田がみそ汁をすすりながら、2人を横目で睨む。

「……………」

光秋はどうも居づらいと感じ、残りのパンとコーヒーを平らげ、

「ごちそうさまでした」

と手を合わせ、コートを羽織り、トレーを持って席を立つ。トレーの返却口を探そうと辺りを見回していると、

「それに比べて、加藤君は行儀がいいな」

と、小田が声を掛ける。

「え？……」

藤原が続く。

「まったく！さっきの話の聴き方といい、どちらかといえれば大人しい性格のようだな。これだけ見れば、昨日の騒動も嘘のようだが、まあそういう者に限って、腹の中に龍を飼っていたりするものだ」

「……………」

光秋はそんな言葉に対し、困った顔を返すしかない。

「……ああ、これどこに返せば？」

「ああ、そこに置いとけばいい」

言いながら小田が指さした方を見ると、受付の左隣に壁と一体化した台があり、すでにいくつかトレーが乗っている。

「あと、布団なんですが、どう片付ければ？」

「ん？わからんのなら、無理せんでも？」

藤原が答える。

「いいえ。布団は、僕の所にもありましたし、畳み方も知ってます！そのやり方でよければ……………」

「……そうか？まあ、ちゃんと決まっているわけでもないし、とりあえず掛け布団と敷布

団を別々に畳んで、枕と一緒に横の押し入れに入れておいてくれればいいが……」
「わかりました。ありがとうございます」

そう言つて光秋は一礼すると、返却口にトレーを返し、そのまま食堂を出て部屋へ向かう。

——『加藤君は行儀がいいな』……………クソ真面目といい子ちゃんしか、取り柄がないものな……………

そう思いながら部屋の前に着き、中へ入る。

光秋はコートをカバンとリュックの方に置き、カバンから紙袋を出し、布団の上に座つて青い容器の目薬を両目に注す。1分程目をつむると、カバンからポケットティッシュを出し、1枚出してあふれた目薬を拭き、袋の方をカバンに戻す。使ったちり紙と青い目薬を紙袋に重ねてカバンの上に置き、立ち上がつて押し入れの戸を開ける。自分が使つていた掛け布団を四つ折りに畳み、敷布団を三つ折りにして、敷布団の上に掛け布団、その上に枕を重ね、まとめて持ち上げて上下2段になっている押し入れの上の段に置く。そこでふと、竹田が使つていた布団が目に入る。

——……ついだし、いいか——

先程と同じ手順で布団を畳み、先程入れた布団の右隣に置く。

戸を閉めると、カバンのそばに座り、紙袋からオレンジの容器の目薬を出し、それを

両目に注す。1分程目をつむり、あふれた分を先程のティシュで拭く。目薬2つを紙袋に入れてそれをカバンに戻すと、外の寒気から鼻が出かかっていたのでティシュの汚れていない部分でかむ。部屋の中にゴミ箱がないので、仕方なくそれをズボンのポケットに仕舞うと、カバンから筒状のケースに入った歯ブラシと白チューブの歯磨き粉を出し、下の水盤へ向かう。

— 面白いえば昨日、歯あ磨いてなかったなあ —

そんな思いから心なしか丁寧に磨き、口を漱いで部屋に戻ると、ようやく人心地つく。ドアの方を向いて座ると、光秋の中に不意に昨夜以来の不安が蘇る。

「……………これからどうなるか……………考えても仕方ないんだろうが、な……………」

気持ちを抱えようと、ポケットからカプセルを出し、それを右掌で回しながら眺めてみる。

— 記憶が確かなら、この中にあの白いのが……………昨日のこと、夢じゃないんだよな —
そこでドアが開き、竹田が入ってくる。

「ん！オレの分まで片付けてくれたのか？」

「……………ええ。自分のがすぐ済んだんで……………」

「……………そっか、サンキュー」

先程のからかいとは別の、明るい笑顔でそう言うと、竹田はドアを閉め、靴を脱いで

部屋にあり、光秋の前に座る。

「……！お前、それ昨日の……」

竹田は光秋の右手のカプセルを見ながら、少し驚いた声で言う。

「え？……ああ。気晴らしにちよつと見てたんです」

「ふーん……」

少しの沈黙の後、竹田が不意に言い出す。

「なあ！その中身、あの白いロボット、もう1度出してみてくれよ！」

「……え？」

「もうすぐ勤務時間だから、その前、ほんのちよつとでいいんだ！ちようど外に広いスペースあるし。なんなら乗せてくれよ！相乗りでいいし、動かさなくていいから！頼む！この通り！」

そう言つて竹田は、両手を合わせて光秋に深く頭を下げる。

「……そう言われても……勝手にそんなこと……」

「勝手もなにも、持ち主はお前だろお！」

「……そう、ですけど……そもそもなんでそんなに見たいんですか？」

『『なんで』つてお前！男なら、こんなもの見たらほつとけないだろう！オレ、昨日の前の圧倒的な戦闘見て驚きもしたけど、それに負けないくらいワクワクしたんだぜ。』

『何かスゲーものが来たー!』って!」

言いながら、竹田は目を輝かせて光秋を見る。

そんな竹田の言動に、光秋は神モドキの言葉を、その時の自信に満ちた態度も含めて思いつく。

—『ロボット兵器は漢のロマンだ!』……こういうことか?……でも、僕ももう1度、アレを見ておきたい気持ちはある。自分が持っているものを、はつきりさせたいのも確かだ……!—「……わかりました。行きましょう!」

「ウオツシャー!サンキューな!」

竹田は立ち上がり、両手で拳を作って両腕を引くポーズをしながら答える。

そうと決まるや、光秋はコートを羽織って竹田と共に部屋を出、シャワー室側の広間に下りる。まだ朝早く、太陽は正門側から上がっている、その一帯は大きな影になっている。光秋はカプセルの電源を入れ、レバーを「出」にし、階段側からそこに先を向けてボタンを押す。カプセルの先から白い一条の光が伸びると、光秋から1メートル程先で進行をやめ、その一点を中心に巨大な人の形に膨らむと、寄宿舎の影の下に10メートルはあろう人型が左膝を着いて現れる。

「うっひょー!出た出た!」

竹田の興奮に拍車がかかる。

「早く乗ろうぜ！」

「その前に、僕が乗って生体認証をしなくちゃならないんです。ちよつと待つててください」

言うとう光秋はリフトに駆け寄り、それを使ってコクピットまで上昇し、リフトをハッチに収納して操縦席に座る。

生体認証を済ませてモニターが点くと、頭部を軽く竹田の方に向け、左手を差し出す。竹田が掌に乗るのを確認すると、光秋は手を持ち上げさせ、それと同時にハッチを開いて操縦席を外に出す。ハッチの上に手を乗せると、竹田が駆け足でコクピットに移り、光秋の左側に座席に掴まるようにして立つ。

「ひやおー！乗っちゃったぜ！結構いい眺めじゃねえか！」

首を振って辺りを見回しながら竹田が言う。

「僕は、高い所が苦手な方なんで、なんとも……」

「ん？操縦って、意外とシンプルなんだな？」

竹田が座席周りを見ながら言う。

「レバー2つと、ペダルが2つか？」

「ええ。これにあと、考えたことを直接動きに反映させる機能加わるようです」

「ふーん。そりや便利なことで……なあ！中に入れてみてくれないか？」

「わかりました」

光秋は座席を降下させ、ハッチを閉める。

「へー全画面か！結構見やすいなあ！……ん？この映像、上で見た景色とあんま変わらんようなあ？……」

「たぶん、上の頭部から撮った映像なんでしょう。あと音も、常時採取してるみたいですよ」

「ふーん……」

と、突然、

「！」

ガガガガツというけたたましい銃声と、バリバリツというガラスの割れる音が響き、光秋の体に緊張が走る。

（ESOの諸君に告げる！）

銃撃から間を置かず、耳が痛くなるほどの大音量の音が響く。

（我々はNormal Peopleである！）

光秋と竹田が音のする方に目をやると、本舎正面上空にヘリの機影が3機、中央の1機が前に出る形で滞空している。

——何だ？……——

光秋の意思を感知して、機影の映像の左下に拡大映像が、右下にヘリの情報が表示される。

（我々の目的は、昨晚諸君らが捕縛した我が同志たちの解放である！要求が聞き入れられれば、解放された同志たちも含め、我々は今日は大人しく撤収しよう！ただし！要求が聞き入れられない場合は、この支部の職員を役職に関わらず全員攻撃する！5分間だけ待とう！それまでに明確な答えが出ない場合、またその間に妙なマネをした場合も、その時点で攻撃を開始する！諸君らの賢い選択に期待する！）

「……あいつら、無茶なことを！」

声の主に対し竹田は怒りを露わにし、モニターに顔を近づけて表示されたヘリの情報を読み取る。

『A H— コブラ』か……奴ら、どっからこんなもん持ってきた！」

「……」

毒づく竹田と違い、光秋にはそんなヘリの知識も声の主の組織のこともわからない。

が、彼らが本気であり、場合によつては先程の発言を実行することは、先程の銃撃と拡大画面に映る黒い機体の左右に装備された複数の筒状の物体から推測できる。中身はおそらくミサイルである。

「……うしちゃいられねえ！加藤！すぐにオレを下に降ろしてくれ！」

先程までの笑顔は消え、緊張一色に染まった顔で竹田が言う。

「……………どうするんです？」

「三佐たちと合流する！どの道出勤が早まっちゃった！」

「……………わかりました！」

光秋は座席を外に出し、左手をハッチの上に持つてくる。

「そうだ！オレが降りたら、お前はコイツの中に隠れてろ！しっかりハッチを閉めてな
！」

「え？……………」

「寄宿舎の影にいるせいか、向こうはこつちに気付いてないみたいだ！下手に動くより
じっとしてた方がいい！それに見つかったとしても、コイツは戦車砲の直撃でもびくと
もしなかったんだ！たぶんコイツの中が、この近くで今一番安全な場所だ！わかったな
！」

「……………でも……………」

「部外者のお前に、これ以上面倒は掛けさせねえよ！これは、オレたちの仕事だ！」

「……………わかりました……………」

光秋が答えると、竹田は手の方へ移動し、乗ったのを確認した光秋はそれを下へ下ろ
す。時間を惜しむように竹田は手が着地する前にそこから飛び降り、本舎の方へ駆けて

いく。

残された光秋は、指示通り機内へ戻り、息を殺す。

「……………」

（時間だ！諸君らの回答を聞こう！）

再び放たれたヘリの声に対し、

（私は、本支部長の寺島^{てらしま}だ）

本舎の方からにも拡大された、しかし落ち着いた声が響く。

（君らの提案、『昨夜のメンバーを解放すれば撤収する』というのは、私個人としては実に魅力的だ。選択する価値は充分にある……………だがしかし！本支部を預かる立場として、そのような提案を飲むことは断じてできません！ここはお互いのため、君らの即時撤収を希望する。以上だ）

——これではダメだ——

（……………了解した……………諸君らを攻撃する！）

言い終わると同時に、中央のヘリが銃撃を再開し、本舎中央の上層階を破壊する。

（これが最後だ！同志を解放するか？）

（しない！）

（……………残念だ）

左右の2機も散開して銃撃を始め、本舎の左右中央各所の上層階から破壊していく。下から反撃の銃撃が上がるが、相手は動きまわる上に、2、3発当たったところでろくな損傷にもならない。屋上からも銃撃が開始されるが、こちらも下と対して変わらない。

そんな様子を嘲笑うかの様にへりは銃撃を続け、光秋のいる位置から何人かの悲鳴が耳に届く。

—あの中に、伊部さんや藤原さんたち、今朝すれ違っただけの人たちも、いるんだよな……ひよつとしたら、何人かあの戦闘に参加してるのかも……—

そう思うと、光秋の脳裏に今朝の言葉たちが、言った人々の顔と共に思い起こされる。

—『ありがとうね！おかげで怪我しないですんだわ！』……『意外と少食なのね？』……『加藤君は行儀がいいな』……『そういう者に限って、腹の中に龍を飼っていたりするものだ』……『お前はコイツの中に隠れてろ！』……みんな、いい人そうだな……藤原さんや小田さんのセリフはおだてだとしても、僕に何か、期待してるのかな？……—

そこで不意に、神モドキの言葉が蘇る。

—『これはお前だけの力だ』……そうだ！昨日もそう言って乗った！竹田さんはああ言って気を遣ってくれたけど、今僕には“力”がある！目の前には困ってる人たちがい

る！そして今とはとにかく……—

光秋は急いでシートベルトを締め、操縦桿を握る手に力を込めると、跪いている機体を立ち上げさせる。

「何かしたい！」

思いを声に出すと同時に機体を駆けさせ、本舎手前で右足で地面を蹴ると、そのまま一気に上昇し、中央のヘリに突っ込む。ヘリの胴体部に右から抱きつく様に取り付くと、一時ヘリが右に傾きながらも、光秋はなんとか両機の高さを保ち、右手にローターの基部を握らせ、勢いよくそれを引き抜き、下に捨てる。

（加藤！）

竹田の声が聞こえた気がしたが、構っている余裕はない。両側に装備されたミサイルにも引き千切り、機首の機銃も右の親指と人差し指で摘まんで潰すと、本舎正面に降下し、捕らえていたヘリを大型の模型を置く様に地面に下ろす。

と、

「！」

背中に銃撃を受け、光秋はすぐに機体を銃撃の来た方、本舎側から見て左の上空に振り向かせる。

「！」

間を置かず銃弾が殺到し、光秋は咄嗟に機体の右腕を前に出し、左半身を後ろに引かせて受けの姿勢を取る。相手は銃では無理と判断したのか、両側に装備されたミサイルを発射する。何発か機体の右腕に当たり、外れた何発かが機体の足元を挟む。光秋の右腕にも鈍い痛みが起るが、事態がそんなことを気にさせない。

「そっちの仲間だっているんだぞ！」

正面のヘリには最早、光秋の後ろにいる僚機が見えていないようである。

——このままじゃ、死人が出るのも時間の問題だ！——「……やるか！」

言うとき光秋は、受けの姿勢を取ったまま機体の左腕を腰に引いて上昇させ、急速に相手に接近して間を置かず左正拳突きを繰り出す。

「あさあ！」

気合いと共に放たれたそれはローターの羽を巻き込んで基部を粉碎し、推力を失ったヘリは地面へ落下する。光秋はすぐにそれを受け止め、前機と同じ手順で武器を壊すと、それも地面に置く。

——あと1機！——

そう思い上空を探すと、最後の機が本舎正面のだいぶ先を全力で引き上げているのを見る。

——……終わった……——

それを見て安心した光秋に追う気力はなく、ヘリ2機を足元にして直立した白い巨人が、もはや点になった機影を見送るだけである。

5 スカウト

へりが引き上げるのを見て戦いが終わったことを実感すると、知らぬ間に力んでいた光秋の体から力が抜け、心の方も落ち着いてくる。

と、

（加藤おー！）

「！」

先程の拡声器並みの大ききさで竹田の声が響き、一瞬驚いた光秋は慌てて声のした方を見る。本舎正面の方から機体の許へ駆けて来るヘルメットにベストを着け、右肩に自動小銃を掛けた竹田を見つけると、光秋は機体に左膝を着かせ、機外へ出てリフトで下へ降りる。

光秋が着地すると同時に、竹田が機体の許に着く。

「バカ野郎！隠れてろって言っただろう！」

竹田が厳しい顔で言う。

「……………だって、ほっとけなかったんです！」

「!?……………」

「僕には『力』があるのに、何もしないわけには……」

「……だからって、お前はESOってわけでも——」

「その辺にしとけ竹田」

竹田の言葉を遮る様に小田の声が飛ぶ。

「……」

2人が声のした方を向くと、いつからいたのか、竹田の後ろにヘルメットとベストを着けた小田、藤原、伊部が並んで立っている。藤原を中心に、光秋たちから見て右に立っている小田が続ける。

「確かに加藤君の参加がなければ、今回はマズかった。下手すりや、みんなあいつらに殺されてた」

「左様……」

藤原が続く。

「施設自体が昨日の戦闘でかなり傷んでいた。職員も夜通しの復旧作業で疲れていた。なにより、ここは市街地のど真ん中だ。下手な反撃はできん」

「でもこいつは、加藤はESOの職員でも、ましてや実戦部隊でもないんですよ！」

「竹田さん！」

光秋が竹田に一步近づく。

「まず、ご心配をおかけして、申し訳ありません！」

深々と頭を下げる。

「でも、僕にそんなふうにしてくれる人たちが、酷い目に遭わされるのを見てられなかった！コイツをもらう前ならまた態度は変わったかもしれないけど、今は……持っているから……」——勝手な言い訳……かな？——

「加藤！……」

「そのことだがな加藤君」

藤原が言う。

「実は支部長から、話がある」

「？……」

藤原が光秋の右側に退くと、黒い背広に緑のネクタイを着こんだ若干年配に見える男が近づいてくる。黒髪は短く切り揃えられ、背は光秋と同じくらいである。

「京都支部支部長の寺島だ。てらしまよろしく」

「……加藤です。よろしくお願いします……」

男の自己紹介に、光秋は軽く頭を下げて応じる。

「まず君には礼を言わねばな。ありがとう。我々を救ってくれて。それも2度もな」

「え？いやあ………先程も言いましたが、ほっとけなかっただけで……頭に、血が上つ

たようなものだし……」

「いや、結果を見れば、君は感謝されるに足ることをした。が、同時にそのことで、我々は君を咎めなくてはいいかん」

「?……」

「どんな事情であれ、一般人が私武装を持つて政府機関と反社会的団体の抗争に介入することは許されん。昨日1度ならまだ猶予があつたものの、君はそれを2回行つた。下手をすれば犯罪行為だ」

「しかし支部長!」

竹田が割つて入る。

「それはオレたちの力が及ばなかったからで、オレたちがつとしっかりしていれば、こいつが出てくることも——」

「君の言い分も尤もだ、竹田二尉」

支部長が続きを遮る様に言う。

「……へ?」

「我々の力不足が、君にこんな行動をさせてしまったというのも一理ある。だからして、私から君に提案がある」

——提案?——

「君……ESOに入らんかね？」

「……………」

すぐには何を言われたのかわからなかったが、少しずつ光秋の理解が追いついてくる。

「……………え!？」

「無論、無理にとは言わん。ただ入ってくれるのなら、君の今後の生活はESOが責任を持つて保障する。どうかね？」

「……………少し、考えさせてください」

「もちろんだ。すぐに答えが出せるようなことじゃない。なんなら、藤原三佐たちにESOのことを詳しく聴いてみるという。ただもし入るのなら、4月の入隊式に合わせた。諸々の準備もあるから、明日までに返事をもらいたい。短い時間だが、よく考えてくれ」

言うのと寺島は踵を返し、本舎の方へ消えていく。

「……………」

光秋はただ、その背を見送るだけである。

ふと横に目をやると、ほかの緑服たちがヘリのパイロットを連行し、残骸の処理について話し合う光景がある。

「伊部二尉から聞いたと思うが、我々ESOは超能力者とノーマルが共に暮らせる社会を作るために働いている」

寄宿舎の1号室で、ヘルメットとベストを脱いで左脇に置いた藤原が、窓側に胡坐をかいて話している。光秋はコートを脱いだ格好で、それに正座して向かい合い、話を聴く。

他の3人も防具類を脱いで部屋の隅に置き、藤原と光秋の会話を見ている。

寺島が去った後、機体をカプセルに収容した光秋は、藤原たちに導かれてここに戻ったのである。昨日・今日の襲撃で本舎内の接客用の部屋がいずれも使えなくなったことと、復旧作業そのものの邪魔にならないようここが選ばれたのだろう。

藤原は続ける。

「そのために、両者間のトラブルを解決したり、超能力者が社会貢献を行える場を作るのも仕事の内だ。そしてそういう場の1つが、我々『実戦部隊』だ。実戦部隊は、『一般部隊』と『特務部隊』に分かれていてな、主に活躍するのが後者だ。ノーマルの主任1人に数人の超能力者で構成されるんだがな、まあ儂ら一般は、その後方支援や諸々の雑務が主な任務だ」

「とうとうとは……」

光秋が口を開く。

「僕が配備されるのは、その『一般部隊』ということに？」

「そうだな。君自身はノーマルだし、そうなるだろう」

「するとやっぱり……訓練とかもきついんでしょね？」

「まあ、それはな……」

「僕、運動の方はあまり自信なくて……」——いや、そうじゃないな……—

「そんなに心配しなくてもいいと思うぞ」

光秋の右側に立っている小田が言う。

「支部長の言い草からもわかるが、上はあくまでも君の持つてるそのロボットが欲しいんだ。そして、それを動かせるのが君しかいないから君も欲しいと、そんなとこさ。だから仕事の内容も、ソイツの調査が主だろうし、現場に出るにしたって、昨日・今日みたいにそれに乗って行くことになるんだろうし、そんなに深刻にならなくてもいいと思うぞ」

——やっぱり……本当に欲しいのは、僕じゃなくてあの白いのか……—

「一尉の言う通りだぜ」

光秋の左隣に立っている竹田が言う。

「仕事のこともそうだし、なにより、まだ素性がよくわからないお前を、しかも会って2日で入れたいなんてよっぽどのことだぜ！ しかも入ったら生活も保障するって、いい話

じゃねえか！」

「それは……そうですけど……」

「それによ！」

言いながら竹田はしゃがみ込み、右腕を光秋の首に回す。

「上手くいけば、オレたちの隊に入れるかもしれないんだぜ！」

「え？……」

「そうになったら、オレが兄貴分として手とり足とり色々教えてやるよ！」

「はあ……………」

光秋は困った顔をする。

「竹田ではないが」

藤原が再び口を開く。

「儂らも例え違う隊になっても、君の手助けをしよう。思えば、君がこちらに来て最初に儂らに会ったのも、何かの縁だろう。協力は惜しまん」

小田と、藤原の右側に正座している伊部も、深く頷く。竹田に至っては何度も深く頷く。

「ありがとうございます。ただもう少し、今度は一人で考えさせてください」
「構わんど。君の人生だ」

藤原がそう言ってくれる。

「ありがとうございます！」

光秋が軽く頭を下げると、藤原たちは防具類を持って静かに部屋を出ていく。シュ！シュ！と、光秋の拳が空を切る。藤原たちが出ていった後からずっと、気持ちの整理をつける準備体操代わりに窓側を向いて突きの練習をしているのである。

もうしばらく続けると、光秋は構えを解いて肩を軽く回しながら深呼吸を1つし、その場に胡坐をかいて長考に入る。

——『上はあくまでもそのロボットが欲しいんだ。仕事の内容も、ソイツの調査だろうし、現場にも乗って行くことになるだろうし』『まだ素性がよくわからないお前を』しかも体に問題のある僕を、『会って2日で入れたいなんてよつぼどのことだぜ！』しかも生活も保障するって、いい話じゃねーか！』……確かにそれはそうだ。僕には今、頼れる人がいない。向こう側には親戚も沢山いたけど、今は僕1人だ！この話は、今の僕には蜘蛛の糸かもしれない！食うため働くなんて、仕事に就く上では一番不純な動機かもしれないけど、背に腹は代えられない！選ぶ道は、もう決まってるはずなのに……踏ん切りがつかない……違う世界に行くのが怖いんだな。物理的にはもう来てるクセにさあ！進学先に京都を選んだのは、学びたい学科が、哲学科があつたのもそうだが、それ以上に、1人で遠くに行ってみたいという冒険心からだ！なによりこの決心がつけた

のは、京都と新潟が地続きだったから。いざとなれば、最悪歩いてでも帰れるって担保があつたからだ！でも今は、それさえない。ここと故郷^くに繋がっているとも……限らない………

光秋の首が、少しずつ下がっていく。

と、ドアがコンコンツとノックされる音が響く。

「伊部だけど」

「……あーはい！」

光秋は長考をやめ、ドアを開ける。

「なにか？」

「ちよつと早いけど、お昼にしない？今朝は早かつたし、加藤君殆ど食べてなかつたし」
「え？」

そう言われて携帯電話を開くと、時刻は11時半を回っている。

「また、食堂で？」

「いいえ、あそこはさっきの騒ぎでだいぶ傷んじやつたから。代わりに、近くにいいお店があるの、一緒にどう？もちろん、私の奢りで」

「……………」

光秋は腹に意識を集中してみる。

—そういえば、だいぶ空いてきたな……他人に2度も奢ってもらうのもどうかと思うが……ま、非常時だし、いつか——「じゃあ行きます。ちよつと待っててください」

部屋に戻った光秋は、荷物のそばに置いてあるコートを羽織り、駆け足で部屋を出ていく。

光秋が案内された所は、支部の近くにある中規模のレストランである。昼近くということもあつて少々混んでいるが、それでも空き席の中から場所を選ぶ余裕はある。

伊部の注文から店員に奥のテーブル席に案内された2人は、差し出されたメニューに目を通す。

「……じゃあ、僕はチャーハンを」

「そう、じゃあ私は……ハンバーグセットにしようかな」

そう言うのと伊部は呼び出し機を押し、来た店員に2人分の注文を伝える。

店員が去ると、伊部は光秋に尋ねる。

「どう？ さっきの件、考え決まった？」

「……大方決まりかけてるんですが、最後の一步がどうしても出なくて……」

「まあ、確かにいい条件だけど、組織が組織だから、覚悟とかもいるよねえ。まあでも、あと半日あるんだし、ゆつくり考えればいいよ」

「そうですね……ところで、伊部さんはなんでESOの、それも実戦部隊に入ったんです

？」

「え？」

ちようどそこで2人の注文した料理が運ばれてくる。それぞれの側に料理を置いた店員が立ち去ると、伊部が訊き返す。

「どうして、そんなことを？」

「あーいえ、ただちよつと参考になるかなあと……」

『参考』か……いいよ、教えてあげる。ただその前に、ちよつと身の上話をさせてちようだい」

「どうぞ」

「実は私ね、生まれは日本じゃないの」

「？……」

「出身は、アフリカ北部のどこか。具体的な場所はわからない」

——『わからない』？自分の出身地なの？——

「私が生まれたのは、80年代の終わり頃。正確な年は言わないよ！ただ……そう。今朝藤原三佐が話してた、整理戦争の少し前なの」

ナイフとフォークでハンバーグを切り分けながら伊部は話を続ける。それをレンジでチャーハンを口に運びながら聴いている光秋の脳裏に、1つの単語が浮かぶ。

——……戦災孤児……？——

「その顔は、察してくれたみたいね」

「あーいや……」

「いいの。その方が話を進め易いし」

「はあ……」——強い人だなあ……——

「で、1歳頃の私がエジプトの施設にいたところを、今の両親に引き取られたの。この話を初めて聴いたのは……小学校、高学年くらいだったかな……最初は、言われたことが信じられなくて泣いたりしたけど。でもね、後から、これは実は感謝すべきことなんだって思い始めたの。そりやそうよね。養女の私を、ここまでちゃんと育ててくれたんだもん。でね、そんな両親の気持ちに応えるにはどうしたらいいだろうって考え出して、中学の頃に人助けのできる仕事に就くことだって結論に至って。で、実際にそんな仕事は何かって考えた時、思いついたのが警察とESOだったの。ただ、私のやりたいことに適したのはESOの方かって。三佐は言ってなかったけど、ESOは事件の関係者に超能力者の存在が認められた場合、その人が被害者・加害者を問わず警察と同様の権限を持つことができるの。今の時代、超能力者が関係者の中にいないことの方がないんだけどね。それに、ESOの仕事内容はかなり豊富だから、こっちに入った方が私に向いてるなって思っ。高校を出たら、専門の学校に入って頑張ったなあ。そしたら

首席で卒業しちゃって……あ、ごめんなさい。話が逸れたね」

「あーいえ……」

「まあとにかく、私の場合は、人助けがしたかったから……かな」

「なるほど……」——人助けかあ……—

「どう？参考になった？」

「はい！……ところで、話のついでに、僕のことも話させてください」

「？……いいけど、どうして？」

「教えられっぱなしというのも、どうかと思ひまして」

「……そう、どうぞ」

「では。伊部さんもうわかってると思いますが、僕、目と耳に障害があるんです」

「目の方は、メガネでそうかとは思ってたけど。耳の方は昨日の騒ぎの中で聞いた」

「ええ。どっちも生まれつきで、左目と右耳は殆ど使い物になりません。目の方は、生まれてすぐにわかったみたいなんですけど、耳の方は気付くのが遅かったんです。小学校、4年か5年の頃ですね、ちゃんとそうなんだって気付いたのは」

「そう……やつぱり、色々大変なんでしょうね……」

「ええまあ……でも、僕の世界にも、僕より酷い人たちなんて沢山いたし、それに僕は
はんばもの
……半端者ですから」

『『半端者』?』

「少なくとも健常者ではない。かといって異常の方も大したものでもない。でもやはり、ちよつとしたところで、制限や支障が起こる。あつちにもこつちにも、徹しきることができないんです。でも、だからこそ、自分で自分の立ち位置を定めなきやつて思つてるんです!」

自分の考えを声に出して言えたことで、光秋は少し気分がよくなる。

「……そう。強いんだ、加藤君は」

「?……………」

伊部はそれ以上何も言わず、食事に専念する。光秋も訊きづらさを感じて食べることに集中する。

ただ、光秋の頭の中では、ある言葉が響き続けている。

——人助け……………か……………

寄宿舎に戻った光秋は、再び胡坐をかいて長考に入る。が、その心持ちは、先程よりもずつと軽くなっている。

——人助けか……………確かに人に感謝されるのは好きだ!それに、あの力を効果的に活かせるのは、やつぱりそれなんだろう。なにより……………——「やつぱり背に腹は代えられない……………よなあ……………」

思いを声に出した光秋は、立ち上がってコートを羽織り、速足で部屋を出る。

本舎を左に迂回して正面に出ると、昨日・今日の攻撃で傷んだ地面の修復作業にあたっている藤原隊を見つけ、光秋は他の作業員の邪魔にならないように注意してそちらに向かう。

「藤原さんーん！」

ある程度距離を詰めた光秋が叫ぶと、作業指揮にあたっているヘルメットを被った藤原が顔を向ける。

そばまで来た光秋は息を整えると、藤原の目を真っ直ぐ見て言う。

「藤原さん……………いえ、藤原三佐！」

「……」

光秋の言い直しに、藤原の顔も締まる。

「支部長室の場所、教えてください！」

光秋の言葉に、藤原は僅かに口を歪めながらも引き締まった顔で頷き、

「小田！すまんがしばらく指揮を頼む」

と、小田に指揮を譲り、光秋に目配せして正面玄関へ向かう。光秋も心なしか締まった顔で後に続く。

——決心は……………ついた！——

藤原、光秋の順にエレベーターから降りると、本舎の5階に出る。

―意外だな、てつきり最上階にあると思つてたけど―

そんなことを考えながら、光秋は藤原の後を追う。エレベーターから右に少し進むと、右手に丈夫そうな両開きの木製のドアを見、2人はその前で立ち止まると、藤原はヘルメットを脱いで左脇に抱え、右手でドアを2回ノックする。

「藤原大吉三佐です！」

「入りましたえ」

ドア越しに寺島の声を聞くと、藤原は右の丸ノブを回してドアを押し、中に入る。光秋も続く。

光秋が部屋に入ると、ドアを押さえていた藤原がそれを閉め、部屋の中央まで進んで直立不動になる。少し遅れて藤原の右隣に並んだ光秋もそれに倣う。

寄宿舎の部屋の倍はあろう広さの部屋には、両側に様々な色の入った木製の棚が置かれ、光秋の左後ろには黒い長ソファアが1つとその前に1人用のソファアが2つ、それらの間に木製の脚の短い長テーブルが置かれている。寺島は光秋たちの正面、窓側に置かれた広い木製の机に就き、何かの書類に目を通してゐる。机の上には他にも多くの紙束があり、それらが両側に積み重なって小さな壁を成している。

寺島が書類から目を上げると、藤原が口を開く。

「お忙しいところ申しわけありません。加藤光秋が、支部長に話があるとのことと案内しました」

「わかった。加藤君、私に話とは？」

「はい。今朝の、ESOに入らないかという件について、考えがまとまりましたので、その報告に」

「わかった。聴かせてくれ」

「では、自分はこれで」

藤原がそう言って立ち去ろうとすると、

「ああ待った」

寺島が右手を伸ばして止める。

「君もいてくれ。場合によっては、後で君にも話がある」

「……自分にも、ですか？」

「ああ。だがまずは、加藤君の答えを聴こう。言ってくれ」

「はい。僕は……入ります！ ESOに！」

光秋が言うのと、寺島は左手首の腕時計に目をやる。

「念のため訊くが、現在午後2時少し前だ。私の提示した期限は明日。まだ時間はたっぷりあるが、やはりもう少し考えるという気はあるかね？」

「ありません！ 仮にあつたとしても、結論は今と同じだと思います。このまま不安の中にいるよりも、自分から何かしたいので。問題が起きたりしたら……その時はその時で考えます。どの道今の僕に、そこまで考えられる余裕はないので」——……正直に喋り過ぎたかな？——

「……わかつた。だが最後にもう1度訊こう。考え直す気はあるかね？」

「ありません！」

「……了解した。君を一般公募採用の1人として、4月から本支部の一般部隊に配属する」

「はい！」

「そしてここで、藤原三佐、君にも話がある」

「……はい？」

「4月から彼を、君の隊に配属する」

「——……」

光秋と藤原は同時に驚いた顔をする。

「自分の隊にですか？」

「そうだ」

「しかし、なぜ？……」

「彼はこの世界に来てまだ日が浅い、浅過ぎる。しかし、君らとは比較的親しくしていると聞いている。ならば、わざわざ新顔のところにやるよりも、少しでも見知っている者たちのところにやった方が、彼もやり易いという私の判断だ」

「はあ……」

「あと、彼にこちらのことについて研修ついでに少々教育を施してほしい。さすがに義務教育程の知識もない者を現場に出すわけにもいかんからな」

「……了解しました！」

藤原は敬礼して言うと、光秋の方に体を向ける。

「ということで加藤君、いや、今から加藤と呼ばせてもらう。仕事の時は、あるいは三曹ともな！」

「……はい！」

藤原が右手を差し出すのを見て、光秋も右手を出して握手する。その手で藤原が敬礼するので、光秋もその見よう見まねで返礼してみせる。

と、

「そうだ！支部長！」

光秋が寺島の方を向いて言う。

「1つ伺いたいことが」

「何か？」

「僕の生活を保障してくれるという話ですが、新居の方には、いつ移れますか？」

「それに関しては、幸いにもこの近くに空き部屋を持つ小さな職員寮がある。が、諸々の手続きや家財道具の設置などで、住めるまでには少々時間がかかる。まあ、極力急がせるが、それまでは引き続き寄宿舎にいてくれ」

「……わかりました」

「それと、君がここで正式に働く以上、戸籍などの身元をはつきりさせるものも作らねばならん。明日からその手続きも並行して行うので、よろしくな」

「……はい」

「では、失礼します」

藤原がそう言つて2人でドアの方に向かおうとしたその時、ブーツブーツと、突然光秋の携帯電話のマナー音が鳴る。

「……………」

始めはこんな時に鳴ってしまったと驚く光秋だったが、次第にそもそも電話がかかってきたという事態への驚きに変わる。

「まだ、誰にも番号教えていないはず！——「三佐！一度これを押収した時、誰かに番号を教えましたか？」」

「いや、調べはしたが、まだ一部の者しか……それに知っていても、わざわざかけてくるようなことはしないはずだ。とりあえず、出てみる!」

「……はい」

電話を開くと、画面には「送信元不明」という見慣れない表示がある。

光秋は恐る恐る電話に出る。

「……もしもし?」

（よお。住む場所決まったそうだな）

「?……」

電話の向こうから聞き覚えのある声が響く。少しして、光秋はそれが誰か思い出す。

「その声もしかして………神モドキさん?」

（なんだ? オレに勝手に名前を付けたのか?）

「ちよつと待ってください!」

光秋は電話機から顔を離す。

「誰からだ?」

藤原が小声で訊く。

「僕をこつちに送ってきた者です!」

「!」

藤原と寺島の顔に緊張が走り、光秋は電話を再開する。

「もしもし！」

（勝手に名前を付けやがって……）

「でも、名前がないと呼びにくいですし」

（……ま、そんなに悪くもないからいいか）

「それより、何です突然？」

（ん？ ああ。住む場所が決まったらしいんでな、残りの荷物を送る事前連絡だ）

「『残りの荷物』って？………！」

突然、光秋と藤原、支部長の間の床から30センチ程の空中に、大小複数の段ボール箱と赤い大きなカバンが出現し、次々と床へ落ちる。

「『……………』」

（届いたか。じゃ、また用があれば連絡する）

神モドキがそう言い残すと、電話は一方的に切られる。

「……………」

光秋は電話を仕舞い、現れた物たちを近づいて見てみる。と、

「これ、全部僕のも物です！」

「何！」

藤原が驚きの声を上げる。

「間違いありません！段ボールの方は、前もって新居になるはずだった所に送った物ですし、それにこのカバン！」

光秋は赤い大カバンのチャックを開けてみる。中には多くの着替えや予備の歯ブラシなど様々な備品が入っている。

「これ、後から親が持ってきてくれることになった荷物です！」

「……………」

藤原と寺島は、目の前の現実を整理することで精一杯のようである。

寺島との会話の後、光秋は現れた荷物を新居に運んでもらうよう支部長に頼み、許可をもらってその新居を藤原と見に行く。

正門から出て正面―東に5分程歩くと鴨川があり、その途中の路地裏にその新居はある。2階建ての各2部屋という造りであり、壁の色が綺麗なので新し目という印象を受ける。中の間取りは、入ってすぐ左に洗面所付きの風呂場、その隣にトイレ、トイレの正面にIH式コンロが1つと三段の食器棚が付いた台所がある。いずれも廊下に沿う形で配されており、その先には六畳程の居間があり、ドアの反対側には大窓と、その外に小さなベランダがある。大窓がほぼ北向きのため少々薄暗いが、光秋はその間取りと広さを充分気に入る。

見学から戻ると、殆どの時間をマニュアルの興味のある項目の走り読みに使ひ、でなければ支部の敷地内を軽く散歩して過ごす。

夕方になると、光秋は食事に誘われ、テーブル席の一番右でコートを脱いで目の前のお好み焼きが焼けるのを待っている。

「にしても、まさか本当に同じ隊になるとはなあ」

夕方の午後6時過ぎ。藤原隊全員と光秋、上杉とで支部近くのお好み焼き屋で鉄板を囲みながら、光秋のちようど対極―向かい席の左側に座る竹田が言う。食堂の修復が間に合わないの、竹田の提案によりみんなここで夕食をとることになったのである。「まったく。二尉、予知能力に目覚めたんじゃ？1度ちゃんと調べてもらった方がいいですよ」

竹田の真向かいに座る上杉がニヤけた顔で言う。

「お前らなあ……」

光秋の真向かいに座る小田が、渋い顔で焼け具合を見ながら言う。

「三佐と加藤君……もとい、加藤の話で重要なのもう1つの方だ！」

「左様」

竹田と小田の間に少々狭苦しそうに座る藤原が腕を組んで言う。

「支部長室に物体が、それも複数レポートしてきた。この事実重い」

「?……どういことです?」

竹田が言う。

「ちよつと二尉、忘れたんですか?」

光秋と上杉の間に座る伊部が言う。

「支部長室をはじめ、ESO施設の各所には、強力なEジャマーが設置されてるんですよ」

「あ!そつか!」

「『Eジャマー』ってなんですか?」

光秋が話に加わり、藤原が答える。

「正式には『ESP Jammer』^{ジャマー}、つまり『超能力妨害装置』のことだ」

——『妨害装置』?——

「強力な人工念波を放出して、影響範囲内の全ての超能力を無効にする。本来は超能力犯罪者への対抗策として使うのだが、ESOでは組織に反感を持つ者が超能力攻撃をしてきた際に対応するため、施設内の各所に設置してある」

「……つまり、あの白いの、僕は勝手に神モドキって呼んでるんですが、それはその機械を無視して荷物を送ってきた……と?」

「考えられるのは次の3つ」

小田が言う。

「加藤の言う『神モドキ』は、俺たちの知っている超能力とは仕組みが違うものを使うのか。もしくはレベルが桁外れに高く、Eジャマーでは抑えきれなかったか。あるいは、Eジャマーに対抗する技術を持っているのか」

「オレとしては、3つ目の可能性が高いと思いますよ。現に、レベル^{エイト}8のオレの透視を全く受け付けない品々をこいつに持たせて寄こしてんですから」

光秋を右の親指で指しながら上杉が言う。

「能力を封じる技術があそこまで高いなら、逆にそれに対抗する技術も高いんじゃないかな、いつすか？」

「その考えは少々迂闊ではないか？」

藤原が言う。

「向こうが我々のことを調べ上げた上で、加藤とあの白いのを送ってきたのだとしたら、ある程度対抗する機能があってもおかしくはない。ならば、単に技術力の差というだけではすまん。加藤曰くの神モドキ自体に、我々を超えた力がある可能性も捨て切れん」

「まあ、そうっすけど……………」

上杉が言葉に詰まる。

「…………あのところで」

光秋が再び話に加わる。

「さつきから言ってるその『レベル』って、なんですか?」

「ああ、能力の強さのことだ」

上杉が答える。

「9段階あつてよ、数字が大きいほど能力も強力になるんだ。例えば、オレはレベル8のサイコメトラーだから、より詳しい情報を読み取れるってわけだ。本来はそういうのを測定する機械があるんだが、見た目からある程度わかることもある」

「例えば?」

「例えば? そうだなあ……あ、藤原三佐だな」

——三佐?——

「儂か?」

光秋と藤原は、そろって少し驚いた顔をする。

「ええ。三佐はサイコキノですね。サイコキネシスの場合、7以上から自分の体を浮かせることができるんだが、三佐はできない。つまり、6以下ってことが判るわけだ」

「なるほど……」

「だかな!」

藤原が言う。

「それはあくまで6以下と判っただけで、4以上からの危険度は大して変わらん！このことは忘れるな加藤！」

「は、はい！」

「上杉も、加藤にいらん隙を作るようなことを言うな！」

「オレはただ、親切に教えてやっただけっすよ！」

上杉が口を尖らせて言う。

「まーまー、三佐も上杉も」

竹田が割って入る。

「その辺にしときましよう。ちようどこいつも食べ頃だし」

そう言つて竹田は、自分の前で焼かれているお好み焼きをヘラで切り分ける。

「それもそうだな」

小田もそう言つて目の前のやつを4つに切り分けると、一切れを光秋に寄こす。

光秋は一礼してそれを皿で受け取ると、食前の言葉を呟く様に言つてテーブルの端に置いてあるソースの容器を取る。

「次、オレな」

上杉がそう言うと、光秋は自分の分を塗つて容器を渡す。割り箸でソースを塗り広げると、小さく切つて口に運ぶ。

——…けっこういけるな——

寄宿舎の1号室に戻った光秋は、シャワー等を済ませると、手持ちの青チェック柄のパジャマに着替え、布団を敷き、その上に座って長考に入る。

——昨日の夜は不安だったのが、今は少し軽い。先が少しは見えたからだな。神モドキさんが荷物を送ってくれたおかげで、引越しの方も早まりそうだし——

支部長の配慮から、新居に移るまでこの部屋は光秋1人で使わせてもらっている。光秋もその方が気楽なのである。

——…今何時だ？——

そう思い、携帯電話を開くと21時ちょうどである。

——少し早い、明日も早いだろうし……——「寝るか」

言いながら、待ち受け画面に映る家族写真が目に入る。夜行バスに乗り込む2、3時間前にデジタルカメラで撮って電話機に移してもらったそれは、画面スペースの都合上画面を左に横にしてはじめて正しく見える。仏間の前で撮ったそれには、写真の右下にコートを羽織った光秋がオレンジ色の服を着た犬——シーズーを抱いて跪き、その左隣に祖父、祖母、伯母の順に座り、それらの後ろに右から母、父、妹、従姉が立ち姿で写っている。

——記念と、万一のために撮っておいてよかった……軍みたいなところに入ったら、み

んな、特に爺ちゃん辺りなんて言うかなあ………考えてもしようがない！背に腹は代えられないし、もう『入る』と言っちゃったんだし！まあ、どうしても合わなかったり、嫌になったら、『やめる』って選択肢もあるんだし。といあえず、今日は寝よう！――

光秋はそう思うと、電話のアラームを6時にセットして枕元に置き、灯りを豆電球にして床に着く。

6 ESO入隊

翌日、3月16日火曜日。この頃になって光秋は、こちらの世界の時間と自分がいた世界の時間がほぼ完全に同期していることを知る。つまりこちらの世界でも、今年は2010年なのである。

その日からしばらくは、慌ただしい日々連続である。身分資料製作の翌日にはESO入隊の手続き、その翌日にはようやく新居に移り、その後は1人暮らしに慣れることに忙しくなる。幸いというべきか、光秋は元来1人好きなので予想より早く新生活に慣れる。

また、大部分の時間をこの世界の常識についての教育と、ESOの仕事をつこなすための研修に費やすことになる。

23日には制服の採寸のため再び支部へ向かい、そこで光秋は鏡越しに、ESOの緑の制服を試着した自分の姿を見る。左の襟元に白紙の階級章が付いた警官服と軍服の中間の様なそれを着た姿は、我ながら似合っているという印象を抱かせる。

— なんか、複雑だな…… —

そして入隊式前夜、31日水曜日午後9時50分。職員寮の自室。

ドア側から見て左の壁に備え付けられたフックに「三曹」の階級章が付いた制服の掛かったハンガーを掛け、肘掛付きの赤いデスクチェアにパジャマ姿で座つてそれを見ながら、光秋は長考に耽る。

——……いよいよ明日だ。当初の予定とはだいぶ違ったが、明日から本格的に新生活が始まる！……予定が変わつた割には、あんまり落ち込んでないよな、僕。やつぱりどこかで、こういうことを望んだのかなあ？……そうだろうさ。結局京都行きも、違う遠い世界に行きたいというのが、一番の動機みたいなもんなんだつたし……だな。本当に違う遠い世界に来てしまった……さて、明日も早いし——「寝るか」

言うとう光秋は、イスごと真後ろに振り返り、そこに置かれた脚の長いベッドに梯子をかけ、布団に入り込んで床に着く。

翌朝、4月1日木曜日午前6時。

「……………」

アラームで目が覚めた光秋は、すぐに起きて風呂場の洗面所に行つて口を漱ぎ、その足でトイレで用を足すと、ワイシャツとズボンに着替え、トースト2枚とアイスコーヒーの朝食を済ませて後片付けをし、身なりを整え、上着を着て荷物の確認を済ませ、いつでも出られるようにする。

机の上の時計を見ると、7時半過ぎである。

―式は9時からだから、8時過ぎに出ればいい―
そう思うと、イスに座って窓側にベッドに接触する様に置かれた机に手を置いて、外の景色に目をやる。

8時ちょうど。

―そろそろ。と、その前に……―

イスから立ち上がってそれをフック付きの壁に退けると、屈伸運動を10回、拳立て10回、腹筋10回、突きの練習15回を行う。趣味と体作りを兼ねて家にいた時も断続的に行っていたが、アパートに移ってから習慣化し、前2つに加えて朝の気付けも理由に加わる。

それらが済むと光秋は、

「さてと、行くか!」

と、腕時計を左手に巻き、薄黄色の二つ折りの財布をカバンに入れ、フックに掛けている制帽を被ってカバンを右肩に斜め掛けし、戸締り等を確認しながら玄関に向かう。制靴をしっかりと履くと、ドアを開けて外に出、鍵を閉めて戸締りを確認し、支部へ向かう。

表通りを5分程歩いて正門前に着くと、本舎前ではまだ準備が行われており、新入隊者の数もまばらである。

——早く来すぎたかな？——

そう思いながら光秋は、門の前で待つことにする。

しばらくして左手首の腕時計を見ると、8時半である。敷地内の方に目をやると、準備の方も終わったようである。

——そろそろ、だな——

そう思い、門をくぐると、完全に修復された本舎の前に並べられた百はあろうパイプイスの列に向かう。

歩きながら上着の右ポケットからESOの緑の手帳を出し、身分証明書を兼ねたIDカードが挟んである一番後ろのページを開き、カードに記されたのと同じ番号の書かれた札が背もたれに貼られたイスを見つけ、イスの下にカバンを置いてそこに座り、手帳をポケットに戻す。

「……………」

式が始まるまではリラックスするよう努めながらも、脚を肩幅に開き手を握って腰の近くに置くという中学の時に習って以来の公式の場での座り姿勢の基本は崩さない。

しばらくして席もだいぶ埋まってきたところで腕時計を見ると、9時ちようどを指している。

——この時計は2分程進んでるから、あと2分くらいか——

そう思い周りに目をやると、最終チェックに奔走する職員や本舎近くに設けられたテーブル席で落ち着かないような態度をとる高官らしき人たちの姿が見える。

そして、9時。

（ただいまより、2010年度、超能力者支援機構京都支部、実戦部隊入隊式を始める）
拡声器を通したアナウンスが響き渡る。

（全員、起立！）

本舎前にいる全員が一斉に立ち上がると、正面玄関の直前に設置された演台に、光秋から見て左側から寺島が上り、中央に置かれたマイクの所まで進み出る。

（京都支部支部長の寺島正一郎^{せいいちろう}だ。君たちの入隊を、心から祝福する。君たちも知つての通り、本支部は、先日2度にわたるNPの襲撃を受けた。死者こそ出なかったものの、負傷者の中には、未だに入院している者も多くいる。君たちはそんな危険な場所に自らの意志で赴き、旧時代の悪癖を引きずり、自由という考えを履き違えた者たちを止めるためにここに來たのだと私は了解する。私のスピーチはここまでだ。以降、本支部で、力の限り頑張つて欲しい。以上）

そう言つて寺島が右手で敬礼すると、周囲が一斉に返礼する。寺島が來た道に戻つて台を下りると、再びアナウンスが響く。

（着席！）

全員が一斉に座る。

その後、他の高官たちの演説や入隊者代表の宣誓が行われる。もともと光秋は、それらの名前や内容を殆ど覚えられない。

そして、最後のアナウンスが入る。

（ではこれより、各自自分の配置場所に移動し、そちらの指示に従うように。以上。解散）

そう言われ、次々に散っていく入隊者の中で、光秋も立ってカバンを掛け、その中から事前に渡された資料を取り出し、その説明に従って藤原隊の許へ向かう。

資料に従って他の入隊者たちとエレベーターで地下1階に降りた光秋は、そこから左に向かつて窓のない通路をしばらく歩き、実戦部隊待機室エリア6号室前に着くと、制服の着崩れがないか軽くチェックする。

—よし！—

確認が済むと、右手でドアを2回ノックする。

「加藤光秋三曹、入ります！」

右手で丸ノブを回し、ドアを押して素早く部屋に入つてすぐに閉めると、正面の藤原隊一同に対し、右手で敬礼をする。

「ウム！よく来た」

光秋の真正面に立つ藤原が右手で返礼しながら近づく。

「これでお前も、晴れて藤原隊の一員だな！カ・ト・オ！」

光秋の左側に控えていた竹田が、右腕を光秋の首に回しながら顔一杯に笑みを浮かべて言う。

「はい……ありがとうございます……」

光秋は困った顔をしながらそれに答える。

「さて、入隊祝いだ」

光秋の前まで近づいた藤原は、上着の左ポケットをさぐると、中から白い小包を取り出して光秋に差し出す。

「……？」

「開けてみる」

「……はい」

藤原に言われ光秋は、その場で箱を開けてみる。

と、

「？……数珠？」

中には緑色のビーズを紫のゴム紐で輪にした、直径が掌程の小さな数珠が入っている。円の対極になる形で二つ、そして紐の結び目のそばに一つ、透明なビーズが通され

ている。

「儂ら藤原隊の一員の証だ。まあ困った時の神頼みというか、お守りも兼ねてな」

藤原が説明すると、4人とも左袖を下げ、それぞれ手首にした同じ数珠を見せる。

「あーありがとうございます！」

頭を下げて礼を言った光秋は、みんなに倣って数珠を左手首に通し、時計の手前に固定する。

光秋が数珠を通したのを確認すると、藤原が真剣な顔をする。

「ようし！新メンバーも加わったところで早速………飯だ！」

「ー……………」

光秋と竹田が絡み合ったままこけ、

「三佐！」

藤原の後ろに立つ小田と伊部が呆れた顔で言う。

「時計を見ろ、もうすぐ12時だ！腹が減っては何とやらというだろう。さあ、食堂へ前進！」

周囲の様子を風と受け流しながら、藤原は部屋を出て食堂へ向かう。

「……………」

あとの4人も拍子抜けした顔でそれにくる中で、光秋は思う。

—僕、大丈夫かな?.....—

それから数日は、今までの生活リズムに仕事加わったこと、そして仕事そのものに慣れるよう努める日々が続く。中でも光秋に最も苦になったのは、射撃訓練である。ESO正式採用の黒く少し重い拳銃を持って何度も撃つが、なかなか人型の標的の中央に当たらない。

「やはり目か?」

「ですね……」

訊いてくる藤原に、そう返すしかないのが光秋である。

しかし一方で、楽しみと言えることもできる。その1つが、入隊以前から行われている藤原自らによる光秋の教育、及び研修である。近代史と超能力関係の学問、そして実戦部隊に必要な知識が主な内容であり、光秋が大学進学後にドイツ語を習う予定だったことを聞いてからはそれも教えてくれるようになる。それらを光秋は、真面目に取り組む範囲内で楽しむ。

そしてもう1つの楽しみが、UKD—01—ゼロワンあの白い機体の起動実験兼慣熟訓練である。現状、これが光秋の一番の楽しみとなっている。もともと、あくまで比較的にである。

「UKD—01」とは、入隊後すぐに行われた最初の起動実験の前に藤原から合衆国政

府の命名ということで聴いた名前である。

『UKD?』

『UnKnown Doll』の略だそうだ。訳せば、『未確認人形』と言ったところか?』

——『未確認人形』、か……—

そんな生活が始まって1週間程経った、4月12日月曜日。

光秋は月曜独特の疲れを抱きながら、午後の仕事の合間をぬって近くの自動販売機で買った紙コップのコーラを左手に、本舎地下の通路のベンチで一息ついている。制帽は脱いで左脇に置き、シャツの第1ボタンは外し、右手には携帯電話が横にして握られている。その待ち受け画面に映る家族写真をコーラをすすって見ながら、光秋は感慨に耽る。

——……なんとか1週間もった。楽しみも見つかった。先のことはわからないが、今のところ順調だ—

「なに見てるの?」

「!」

突然話しかけられ、光秋の肩が一瞬跳ね上がる。

声のした方に目をやると、右側に伊部が立っている。

「二尉！すみません、ボーっとして気付かなかったもので！」

「ううん、こつちこそ脅かしちゃったみたいね」

言いながら伊部は、光秋の左隣に座ろうとする。光秋はすぐに電話機を閉じ、制帽を被り直して席を空ける。

「ところで、まだ毎日制帽被ってるね」

座りながら伊部が言う。

「他の新入りは先週中に殆どが被るのやめちゃったし、私なんかも、今じゃ大きな作戦とか、式の出席の時くらいにしか被らないのに」

「頭になにか乗せてる方が落ち着くんです。あと、格好からやる気も出るし」

「そう？ま、それならいいけど。ところで、さつきからなに見てるの？」

伊部が光秋の開いた電話機を覗き込む。

「……家族写真？」

「ええ、家を出る2、3時間くらい前に僕の頼みで撮ってもらったんです」

「ふーん、大家族ね」

「故郷くこじゃあ、3世代暮らしが普通なんですけどね」

「そうなの？左に写ってるこの二人、お姉さんと妹？」

「正確には従姉と妹です」

「へー、この犬もかわいい！」

「シーズですね。僕が10歳の時から飼ってるんです」

「……そう………」

伊部は少し悲しそうな目をして言う。

「気を遣わせたかな？……あ、そうだ！いい機会だし、訊いておこう——話は変わりますが、二尉」

光秋は電話を上着の左ポケットに仕舞いながら言う。

「この近くに、眼科の病院ってありますか？」

「眼科？」

「ええ。ほら僕目のことがあるから、定期的に調べなきゃいけないんです」

「ああ、それなら、上杉君に頼むといいよ」

「上杉さんに？」

「うん。彼、専門は外科だけど、他の分野にもある程度通じてるみたいだから」

「……わかりました。ありがとうございます」

光秋は軽く頭を下げながら言う。

と、腕時計で時刻を確認すると、

「あ、いかん！もうすぐ実験の時間だ！」

残りのコーラを急いで飲み干し、ゲップを堪えながら立ち上がってコップを近くのゴミ箱に捨ててゐる。

「では、僕はこれで」

「うん。私も後から見に行くけど、頑張つて！」

「はい！」

そう言つて光秋は、シャツのボタンを閉めながら最寄りのエレベーターに駆ける。

――目は上杉さんに頼む、か。なにより二尉と話ができたし、なんか元氣出た！――

起動実験も終わり、機体に左膝を着かせて機外に出た光秋は、制帽を脱ぎながら一つ安堵の溜息をつく。正面には、ビル街の中に沈み始める真っ赤な夕陽がある。

――今日もなんとか勤まつた……――

と、下から、

「加藤お！」

「！……」

竹田の声がし、光秋は席に座ったまま左側に身を乗り出す。

「なにかー？」

「疲れてつとこ悪いがよ、また乗せてくれよー！」

「……今ですかー？」

「そー、今！」

「……まいつか」「わかりましたー！」

光秋は機体の左手を竹田の近くに差し出し、いつもの要領でコクピットに上げると、

「加藤お！ 僕らも頼むー！」

右側から藤原の声が聞こえ、見ると小田も一緒にいる。

「はーい！」

右手に2人を乗せて上に上げる。

と、

「私もお願あい！」

今度は左側に伊部の姿を見る。

「二尉もですかー！」

「わるいー？」

「いえ！」

左手を出して伊部も上に上げる。

伊部がコクピットに移ったのを確認した光秋は、右側に藤原の声を聞く。

「ほお！ これはいい眺めだ！」

「……！三佐、危ないですよ！」

光秋が目をやると、藤原は機体右肩の中央に立つて景色観賞をしている。

「三佐がそうなら、オレも！」

と、竹田もコクピットから左肩へ移る。

「へー！確かにいい眺めだ！」

「竹田二尉まで！」

「大丈夫！ちゃんと気を付けるよ！」

「それより加藤、立たせてみてくれないか？」

藤原が言う。

「えー！」

「ちゃんと気を付ける」

「……落ちてでも知りませんよ！」

そう言いながらも、光秋はいつもより気を遣って機体を直立させる。

——よく怖くないな……

「ほお！立つとまたよく見えるな！」

藤原が言う。

「ところで、加藤」

竹田が言う。

「コイツの名前、もう決めたか？」

「名前？これはUKD—01っていうんじゃ？……」

「そういうことじゃなくてよ、番号じゃ味気ねえだろう？せつかなんだしよ、ちゃんとした名前、付けてやったらどうよ？」

「……て言われても……」

「そうか！じゃあオレが付けてやるよ！」

竹田が目を輝かせる。

「そうだな………角が生えてるから、オニガーンってのは？」

「却下！」

藤原と、操縦席の右側に掴まり立ちしている小田が同時にはっきりと即答する。

「B級アニメ発の安っぽいオモチャみたいだぞ！……それになんとなく聞いたような

……」

小田が続ける。

と、

「……あ、そうだ！」

光秋が言う。

「物に名前を付けるなら、ぜひ付けたい名前があったんです!」

「なに?」

伊部が訊く。

「……ニコイチ!」

「『ニコイチ』?」

藤原と竹田が繰り返す。

「ええ、2つで1つって意味です。どこで聞いたかは忘れたけど。2は複数の最小単位ですから、みんなで1つ、つまり一丸という意味もあると、僕は考えてます」

「ニコイチか……」

小田が呟く。

「まあ、竹田の案よりは締まってるし、言い易いし、俺はいいと思うぞ」

「そうだな、俺も賛成だ」

「私も。一丸って意味を持つ名前なんて、いいじゃない!」

「しゃーねー、持ち主の意見を優先すつか。よし、今からコイツは、ニコイチだ!」

「ありがとうございます! 名前の通り、隊の象徴になれるくらい頑張ります!」——……一言多かったかな?——

「新入りが生意気言うんじゃないよ!」

案の定、竹田に怒られる。

そんな光景を前にしながら、白い巨人はなにも語らず、ただ前を向いて沈みゆく夕陽を額に生えた一本角に反射させるだけである。

飛行起動実験編

7 飛行起動実験 前編

4月23日金曜日早朝。

高高度の青空の中を、ニコイチの白い機体が南へと駆けていく。

そのコクピットに納まる光秋は、ESOの緑の制服姿であるが、制帽は膝の上に置いてあり、その左耳には専用の通信機が付いている。

右肘掛の内側に埋め込まれる様に収納されていたこの通信機は、スピーカー部が白いフック型であり、そこから伸びる白い脚の先には豆粒大の黒いマイクが口の左端に位置する形で付いている。光秋の体に合わせてあるのか、付け心地も音質も良好に感じられ、付けっぱなしでも周りの音も充分に聴きとることができる。

カプセルとマニュアルは、収納と充電を兼ねて元あった場所に納めてある。

……雲一つないいい天気だなあ。今日の飛行実験にはちょうどいいか――

モニターの左側から照りつける太陽光を見ながら、光秋はそんなことを考えてみる。

――実験に協力してくれる合衆軍……藤原三佐は、『合衆国樹立と同時に各国の軍を解体・統合したのが、今の合衆国軍だ』と言っていたが……どれほどのものか……ま、そ

れは行つてからのお楽しみか――

そう思うと光秋は、数珠の巻かれた左手の腕時計に目をやる。

――7時50分……三佐には『8時半までに着けばいい』と言われているが……――

考えながら左パネルに表示されている地図を見、赤い三角で示される現在地と、赤い点でマーキングされた目的地までの距離を目測する。

――このまま飛んでも間に合う、が……――

右パネルのリーダー表示を見、

――近くに影はなし……ま、余裕がある方がいいか――

そう決めると、足を掛けている右ペダルを若干深く踏む。

それに合わせて速度を増したニコイチが、青空の中を直進して行く。

8時ちょうど。

周囲を木々で覆われている中で、そこだけ学校のグラウンド2つ分程の広さを誇る草原に、2人の男が向かい合つて立っている。1人は緑の制服姿に素頭の藤原三佐。もう1人はデザインは同じでも青色の制服を着、制帽を右脇に抱えている若い男である。

2人の周りでは、青や緑の制服やグレーのツナギを着た人々が、地域行事で見られる様な脚長の白テントや、大型のカメラなどを多数忙しく設置し、少数の白衣姿の人たちが指示や作業補助をする光景がある。

藤原が少し驚いた様に言う。

「まさか、陸軍の大佐が視察に来られるとは……」

「大佐」と呼ばれた正面の男が答える。

「ESOの方に無理を言って、なんとか見学させてもらえることになった。UKD—01にも、あのメガネの青年にも、改めて会いたかったのだな」

「加藤に？」

「ああ。ESOの、それも君の隊に入ったのだろうか？なら、今後共同任務に就く機会もあるだろうからな。どれ程の者か、この目で見ておきたい」

「はあ……………」

そこで大佐は、左手の時計を見、雲1つない上空を見回してみる。

「……………まだ来ないのか？」

藤原も左手首の腕時計を見て言う。

「慣熟訓練を兼ねて、支部から単独飛行をさせました。半までに来るよう言っておりまして、もうしばらくかと……………」

「……………ん？あれじゃないか？」

「……………」

大佐が藤原の背後上空を右手で指し、藤原もその指の先を目で追う。

その先には、青空の中にポツンと浮かぶ白い点がある。が、2人が見ている間にも、その点は徐々に人型とわかるほどに距離を詰めて来る。

地図上で点と三角が重なったのを確認すると、光秋はモニターの下部を見回し、前方に藤原から合流地点として知らされた広場を見つけ、

「あれか！」

と呟きながら、そこに向かって高度を下げながら前進する。

光秋の思考を感じたモニターが、視界右側に広場の拡大映像を映す。それによつて光秋は、広場の所々で行われているカメラ類の観測機器や、データ収集所となる白テナの設置作業を見る。

と、その映像の中に、周囲の作業と距離をとつて並んで立つ2つの人影を見つける。

「?.....」

その映像ではぎりぎり人とわかる程の点でしかなく、さらに拡大された映像が、最初の映像の右側に重なる様に表示される。

——三佐と……もう1人は青服？合軍の人か？——

そう思う間に2つの映像は消え、ニコイチは藤原たち2人のそばに着地する。

(加藤、早かったな?)

モニター越しに左半身を前に向けた藤原が言う。

光秋は右パネルを触れて操作し、外部スピーカーを作動させ、

「早い方がいいと思いますして」

と、映像の藤原に言う。

もつとも、外の2人にとってそれは、

「……まるで、一本角の巨人が喋っている様だな」

と言う、真正面から向き合っている大佐の眩きの様な感覚を与える。

光秋はニコイチの左膝を着かせ、制帽を被って機外に出て機体から降り、2人の許へ駆け寄る。

「加藤三曹、ただ今到着しました！」

「うむ」

言いながら右手で敬礼すると、藤原は頷いて返す。

敬礼を解くと、光秋は大佐を見やりながら言う。

「三佐、この方は？」

と、

「おいおい、覚えてないのか？」

と、大佐が不機嫌そうに話し出す。

とみのへいぞう

「富野平造陸軍大佐だ。自己紹介こそ初めてだが、お互い顔見知りなんだがな。この場

所で」

—この場所です？ここは、確か僕が初めて現れた……………！—

光秋はハツとし、藤原たちに連行させた先で会った若い印象の男を思い出し、目の前の大佐にその記憶が重なる。

「…………あの時の!?…………失礼しました！」

動揺した光秋は、反射的に敬礼をする。

「まったく！会ったことそのものを忘れているとは。こんな鈍い者が新兵器のパイロットとは先が思いやられる」

「……………」

富野大佐にそう言われた光秋は、恥ずかしさと情けなさで顔を俯ける。

と、そこに、光秋の左側に設置されているテントから、伊部二尉と、肩に先が着くくらいの短い黒髪をした日系の青服女性が、3人の許に駆け寄って来る。

「大佐、席の準備が完了したそうです」

「わかった」

青服の女性に短く返すと、富野は女性を左脇に従える様にしてテントの方へ歩き出す。

「三佐、こちら準備ができたようです」

「ウム」

伊部に頷いて返すと、藤原は、

「加藤、お前も来い。協力してくださる空軍のパイロットの方々を紹介する」

と言って、伊部を右に従えてテントに向かう。

「あ、はい！」

と、光秋も2人の後に続く。

歩きながら光秋は、

「やっちまったもんはしょうがないかあ……」

と、大佐の件を割り切ろうとする。

テントの前には、飛行服を着た5人の屈強そうな男たちが、各々にヘルメットを脇に抱えて並んでいる。

そんな彼らに向かって藤原は敬礼し、

「古谷大尉、ふるやこちらが、ニコ……UKD-01の専属パイロット、加藤三曹です」

と、光秋を紹介する。

「！」

光秋は先の件を頭から振り払って敬礼をする。

「古谷大尉」と呼ばれた中央に立つ茶色いチリ毛をした光秋より頭一つ分程背の低い

男は、空いている左手で返礼をしながら、

「こんな若者が、新兵器のパイロットを？」

と、驚きを隠さずに言い、藤原はそれに微笑んで答える。

「ええ。ですがご心配なく。これまでの起動実験では、常に良好な成績を残しています。今回の様な実戦に近いものこそ初めてですが、こ奴ならやってくれますよ」

と、光秋の左肩を右手で軽く叩く。

「……大佐といい、この大尉といい、アレは新兵器つてことになってるのか……にしても、期待されてるな、僕……」

藤原の言葉に、光秋は少し尻の座りが悪い思いを抱く。

パイロットたちが自機に待機するために去った後、入れ違いに、ツナギの上に白衣を羽織った白髪混じりの頭に藤原に劣らないガツシリとした体格の男がテントに近づいてくる。よく見ると、背丈は古谷大尉と同じくらいである。

「UKD—01起動実験班主任の大河原です。お会いできて光栄です、藤原三佐」

白髪の男の自己紹介に、藤原は、

「こちらこそ、部下がお世話になっております」

と、握手をして返す。

「君とも、きちんと会って話すのは初めてだったな、加藤三曹」

「はい、今日もよろしくお願いします」

顔を向けて言う大河原主任に、光秋はそう返す。

「ああ、こちらこそよろしく。もつとも、今日はいつもの様に無線で指示を出せばいいというものではないからな。その辺をよろしく頼むよ」

最後の方は笑顔で言った主大河原は、テント下のパイプイスに腰掛けている富野の許に行く。

「あなたともお会いできて光栄ですよ、富野大佐。整理戦争の英雄にこんな所で会えるとは」

軽く礼をしながら大河原は言う。

——『整理戦争の英雄』？——

大河原の言葉に、光秋は心中に首を傾げる。

大河原の挨拶に、富野は立ち上がって、

「こちらこそ、無理を言つて見学を許可していただきありがとうございます。ESOの新兵器の力、とくと拝見させていただきます」

と、最後は口だけを歪めた笑みで言う。

主任に案内され、藤原隊一行はニコイチの正面に移動する。

全員が立ち止まると、大河原は白衣の右ポケットから携帯電話を取り出し、どこかに

連絡を取る。

「ああ俺だ。例のモノ、コンテナから出してここに置いてくれ……そう、ここだ。場所はそつちからも見えてるだろう？……ああ、慎重にな！よろしく頼む」

「あの主任、『例のモノ』とは？」

藤原が尋ねる。

と、一同の目の前に深緑色をした金属製の物体が現れる。

「[[[[「……………」]]]]」

「……主任、コレは？」

物体に目を丸くする一同を代表して、藤原が問う。

「私が設計・主導開発をした、UKD-01専用の火器です」

大河原が言うそれは、直方体の本体を中心に、円柱形の砲身とニコイチ大の引き金が伸び、銃の形状を形作っている。

「戦車の砲塔を流用した物で、これに5発の砲弾が入った弾倉が付きます。三曹、ちよつと」

「はい？」

大河原に手招きされ、光秋は近くに来る。

「コレの予備弾倉を付けるための器具を01の脚に付けたいんだが、作業がし易いよう

に立ち上げてくれ」

「わかりました」

言うとき光秋は、すぐにコクピットに上がり、認証を済ませてニコイチを立ち上げる。そうしながら光秋は、モニターに映るニコイチの視点から、改めてニコイチ専用の火器を見下ろしてみる。

「コレが現れた時の、あれがテレポートか？神モドキさんがニコイチを出した時のと同じだ。にしても……」「コレ、物々しいなあ……」

ニコイチを立たせ終わった光秋は、テントのそばに立って腕を組み、大河原たちの作業を見物している。

ニコイチの両腿に形を合わせた輪を浮かせて取り付け、細かい固定作業を行うツナギ姿の作業員たちは、皆宙に浮いている。そしてニコイチの足元には、彼らや輪を支える様に両手を上にかざすツナギたちの姿もある。またニコイチの正面側には、光秋同様に距離をとって作業を見物している竹田二尉がいる。

「あれがサイコキネシス——念動力か？散々浮かされてきたが、浮かされてる人を見るのは初めてだなあ……」

と、

「加藤」

「……小田一尉？」

光秋の左側から、小田が歩み寄って来る。

「何か？」

「いやあ、お前さん、あんなふうに動きのある超能力を見たのは初めてだったよな？」
小田はニコイチの作業風景に顔を向けながら言う。

「ええ」

「ああやってニコイチを立たせた状態で降りたのも、初めてだったよな？」

「ええ」

「どうだ？降りた時、股の間のあれに寒気感じたか？」

「ええ……って！ええ？」

光秋は少し動揺する。

「ハハッ、冗談だよ。まさかちゃんと答えるとは思わなかったが」

「……一尉！……」

光秋の顔が少し険しくなる。

「わるいわるい。そうふくれるな。ところで……」

そこで小田は笑顔を消し、真顔になる。

「三佐が言ったことは、あんまり気にするなよ」

「三佐の？何です？」

「ほらあ、古谷大尉だっけ？あのパイロットさんと話してた時に言ってただろう。お前ならやつてくれるって」

「ああ。別に、そんなに気にしてません。やることをやるだけです」

「そうか？ならいいんだが……空中戦は初めてなんだから、無茶はするなよ」

「はい、大丈夫です。無茶をする気はありません。ただ……」

「ん？」

「期待されたら、それに応えたいという気持ちもあるのも、事実です」

「それはそれでいい。が、とにかく無茶だけはするな！事故なんて起きたら洒落にならん。御身大事だぞ！」

「……はい」

と、

「……お前が、あのホワイト・ドールのパイロットか？」

「？……」

第三者の声がかけられ、声のした方——光秋の右後ろに2人が目をやると、飛行服を着た短めの金髪に光秋とほぼ同じくらいの背丈の白色系の男が、光秋を睨みつける様な目をして立っている。

「…………はい…………」

光秋は恐る恐る返事をする。

「イエローが、あんな飛行美の欠片もない物を飛ばしやがつて！」

静かだがあからさまな怒気を含んだ声で言うと、それまで距離をとっていた金髪は速足で光秋に近づき、

「!?」

右手でその胸倉を掴んで顔を寄せさせる。

「おまけに、なんで俺たちがそのテストに駆り出されて、やられ役をやんなきやいけないんだ！ええ？」

「……………」

今度は少し怒鳴り声で言われ、光秋は身をすくませる。

「中尉、その辺にしていただこう！」

金髪の飛行服の襟の階級章を一見した小田が強い口調で言う。

「……………」

その言葉に金髪は、渋々手を放す。

「ついでに先程の発言、統一政府が樹立された今の時代には、時代錯誤以外の何物でもないんじゃないか？」

「……偉そうに」

小田の言葉に金髪は、聞こえるか聞こえないかの声で呟くと、

「何だこの野郎！」

いつからいたのか、竹田が大声で怒鳴りながら大股で3人の許へ近づき、左手で素早く金髪の胸倉を掴む。

「さつきから黙って聴いてりゃあ！何が気に入らねえのか、オレの後輩にイチヤモンつけるは、一尉には口答えするは！」

怒鳴りながら、竹田は右手で拳を作り、

「何だってんだ！」

叫びながらそれを金髪の顔面に繰り出す。

が、

「竹田！」

「！」

小田の一喝に、竹田は寸前でその拳を止める。

「お前も、その辺にしとけ」

「けど一尉、こいつ——」

「ESOと空軍の関係を悪化させる気か？」

「……」

続きを遮る様に言われたその言葉に、竹田は渋々拳を下ろし、胸倉から手を放す。

「中尉、間もなく実験の開始時間だ。お互い、そろそろ持ち場に戻る頃だろう？」

「……」

小田の言葉に金髪は無言を返し、「面白くない」といった顔を向けたのを最後に、光秋たちに背を向け、速足でその場から離れて行く。

光秋は、その背を少し沈んだ顔で見送る。

——気分悪いな……—

8時55分。

器具と予備弾倉の取り付け作業の終了を聞いた光秋は、すぐにコクピットに戻って制帽を腰の右側と肘掛の間に挟み置き、待機状態に入る。が、その表情は先程の一件を引きずってか、少し暗い。

と、

（仮設管制より01へ。三曹、聞こえてるか？）

大河原の声が左耳の通信機から聞こえる。

「こちら01、良好です。よく聞こえます」

（よし。今から目の前の武器の説明をする。まず、実際に持ってみてくれ）

「了解」

応じると光秋は、イメージでニコイチをしゃがませ、右手で取っ手を握って左手を砲身に添えると、人が長銃を抱え持つ様にしてその砲を持ち、直立する。

（見ての通り、基本的な構造は人間用の銃と変わらない。引き金を引けば弾が出る。ただ、命中率を上げる工夫がしてある。砲口を地面に向けて、左の支持棒を奥に回してくれ）

「はい」

光秋は指示通り、ニコイチの左手に左の奥に伸びる支持棒を握らせ、それを奥に向かって回す。と、砲身付け根上部の台形型の突起から、地面に向かって赤い光線が伸びる。

——これは……—

（レーザーポインターだ。これで少しは当て易くなるだろう。消す時は、手前に回すんだ）

「はい」

光秋が教えられた通り棒を手前に回すと、レーザー光は消える。

（よし。次は弾の装填だ）

大河原が言い終わると同時に、ニコイチの左の足元に深緑色の薄めの直方体をした弾倉がテレポートして来る。

（ソレを上部の窪みに差し込むんだ）

「はい」

光秋は左手で弾倉を取ると、その長辺を本体上部の窪みに合わせ、弾倉の上を押す様にして差し込む。

（そうだ。左右の予備も同じ様にやればいい。弾倉1つに5発の弾が入ってる。今回は訓練なのでペイント弾だ）

「わかりました」

（ここまでで、なにか質問は？）

「……ありません」

（よし。武器の説明も済んだし、そろそろ実験開始時刻の9時だ。離陸して会敵予定地に向かつてくれ）

「了解」

光秋はそこで鼻から大きく息を吸い、先の件のモヤモヤを吐き出すつもりで口から息を出す。

—今は目の前のことに集中する時だ！三佐の期待に応えるためにも、いい結果を出す

！――「加藤光秋、UKD―01ニコイチ、出ます！」

腹から声を出すと共に右ペダルを踏み、背部の円形を光らせた白い巨人が、周囲に弱い風を吹かしながら大空へと上昇して行く。

定高度まで機体を上昇させた光秋は、右パネルのレーダー表示、その外円に示される方位を確認しながら、ニコイチを南へ前進させる。

それと同時に、大河原から通信が入る。

（仮設管制より、参加機各機へ。これより改めて本実験の説明を行う。本実験は、UKD―01の飛行時の起動データ、及び戦闘時のデータの採取が目的である）

――プラス、僕にとっては実戦を想定した訓練か……―

（仮想敵を務めるペガサス小隊は、01の保有火器1発の被弾で撃墜。01は、機銃百発の被弾で撃墜とする。なお、模擬ミサイルは1つ50発分だ。会敵次第、実験開始とする。以上）

通信が切れると、光秋はモニター映像とレーダーの見回しを交互に行い、砲をいつでも撃てるよう身構える。

と、ピピツという接近警報が響く。

「！」

同時に前方の映像が拡大され、青空の中を横一列に飛ぶ5機の黒い戦闘機が映し出さ

れ、各機に赤丸のマーカ―が付けられる。合わせてその右隣に敵機の詳細が表示される。

—『F—22』……—

曲線主体の形状に、広めの台形型の主翼と、左右と上2つの尾翼が特徴的である。

—ステルス機か……ということは一

光秋はレーダーに目をやるが、そこには何も映っていない。

「レーダーは役に立たん、か……が、やってやる！」

言うとき光秋は右ペダルに力をかけ、ニコイチを加速させて敵機群との距離を詰める。

—見つけた！—

隊長機を頂点にVの字の編隊を形成し、その最左翼を務める金髪の男も、青空の中に浮かぶ白い点を視認する。正面パネルのレーダーに目をやるが、前方の機影は映っていない。

—向こうもステルスか！—「ますます憎たらしい！」

酸素マスク越しに怒気を含んだ声で呟く。

と、古谷の声でヘルメットに通信が入る。

（ペガサス・リーダーより各機。目標を捕捉した。各自散開して、目標を包囲しろ！）

（ペガサス2、了解！）

(ペガサス^{スリー} 3、了解！)

「ペガサス^{フォー} 4、了解！」

(ペガサス^{ファイブ} 5、了解！)

返信が終わると同時に4機は編隊を崩し、金髪の男―ペガサス4は左に迂回して目標の後方に回り込もうとする。

―5対1の中を突っ込んで来るからよ！―

中央機を残して4機がバラバラの方向に飛ぶと、それを追って拡大表示も4つ追加される。

が、それらを無視して、光秋は中央の1機を目標に決める。同時に全ての拡大表示が消え、距離に比例して直径が拡張するマーカーのみが相手機の位置を告げる。

前方に砲口を向け、距離を詰めてマーカーが適当な大きさになると、レーザーポインタを照射し、光線がマーカーの中心に来た一瞬、

「！」

習慣的に右人差し指が引き金を引く動きをし、完全同期したニコイチの指が砲の引き金を引く。

ドンッ！という爆音と共に砲口から弾が放たれ、同時に砲本体右の横穴から爆風と薬莖が排出される。

放たれた弾は目標に直進し、

―行ける!―

と光秋が感じた一瞬、

「!」

目標は弾の左側に回避し、そのまま旋回するかと思つたのも束の間、ニコイチにかつて機首の機銃を撃ちながら前進して来る。

「!」

咄嗟に右に回避し、銃弾と目標が通り過ぎるのを待つてやり過ごす。

が、

「!」

今度は背骨あたりに針で刺される様な不快感を感じ、反射的に振り返つて感の差してきた辺りに一射する。

ろくに狙いも付けずに放たれた弾は、しかし、放つた先のニコイチに直進している相手機に命中し、機首先端からキャノピー前部を緑色に染める。

「当たつた?」

思わず光秋は驚きを声に出す。

(ペガサス3撃墜。離脱せよ)

知らない男性の報告を聞く傍ら、光秋はふと思ひ出す。

—そういえばマニュアルに、『乗り慣れて機体と体が馴染んでくると、視聴覚以外の五感にも働きかけて状況を伝える』とあったが……—「こうゆうことか!……」—さながら今のは触覚?……—

仮設管制では、その様子を最寄りのカメラで捉えてテーブルの上のモニターで観戦する光景がある。

「始まってすぐに1機撃墜かあ!やりますねえ」

大河原はその映像をパイプイスに座って見ながら、藤原に言う。

「当然!我が藤原隊の一員なのですから」

大河原の右隣に座る藤原は誇らしげに返す。

と、そこに小田が割って入る。

「しかし主任、いくら01が高性能でも、5対1はハンデがありすぎるのでは?加えて加藤は、体に問題が……」

「もちろん、こちらもそれを把握した上で、さらにはこれまでに得られた01のデータを分析した結果、この設定にしたのです。01と彼の力をもつてすれば、大丈夫でしょう」

「はあ………」

こう返されると小田は、それ以上何も言えない。

「ところで、三曹が発進の際に言っていた『ニコイチ』とは、何ですか？」

大河原の質問に、藤原が答える。

「ああそれは、我々の間での01の愛称です」

「ほお、愛称ですか？……なかなかいいネーミングですね」

大河原は微笑んでそう言うと、モニターに顔を戻す。

光秋は相手に捕捉されないようにニコイチを縦横に移動させながら、右下を樹上すれすれに低空飛行する1機を次の目標に定める。

現高度を維持して自機の手速を上げ、目標と並行飛行を行う。照準を合わせると、

「！」

素早く引き金を引き、目標の背部を緑色に染める。

「よしー！」

（ペガサス5撃墜）

報告を聞きながら、思わず声が出る。

が、直後、

（イエロー！）

「！」

通信機から怒声が響き、耳の痛さに光秋は一瞬顔をしかめる。

（調子に乗るなよ！）

—さつき絡んできた人！—

続いた声色に、光秋はそう判断する。

通信から一拍遅れて届いた左の脇腹の冷たい不快感に、

——……また！——

光秋は素早くニコイチを跳ねる様に上昇させる。

足元を銃弾と相手機が過ぎて行くのを確認すると、

—そっちがその気なら！—

と、ソレを次の目標に決め、上空からその後を追う。

「おお！加藤がドッグ・ファイトに突入したぞ！」

その様子をモニターで見ながら藤原が言うと、竹田が藤原の右肩に寄って映像を注視する。

「相手は誰です？」

「さあ？この映像からだとそこまでは……」

と言う大河原の返事を半ば聞き流しながら、

「もしあの金髪だったら……」

と、竹田の顔が徐々に怒りに歪み、

「加藤お！ボコボコにしてやれえ！なんだったらホントに墜としちまええ！」

と、相手には聞こえないとわかっているにも関わらず、映像の中のニコイチに怒鳴り散らす。

その傍らで小田は、

「竹田、お前なあ……あと唾を跳ばすな……」

と、呆れ顔で右手で頭を抱える。

光秋は前下方の目標に照準を合わせ、ニコイチの指を引き金にかける。が、それを引こうとした刹那、

「！」

目標が急加速し、上昇して縦に弧を描き、背面飛行に入った直後、

「！」

光秋は鳩尾に刺す様な冷気を感じ、一拍遅れて放たれた銃弾を前進して回避し、振り返って後方に移動したはずの目標を捜すが、見失ってしまう。

「くっ！」

と、

「！」

同時に起こった右の首筋の寒気と接近警報に、光秋はすぐに後退する。

と、その前を相手機が1機通り過ぎて行く。

「?……通り過ぎただけって?……」

が、間を置かずに通信が入る。

（ビビってんのか? イエロー!）

金髪の男の笑い声である。

「なんの!」

応じた光秋は、右ペダルを一杯に踏んでその後を追う。すぐに間合いを詰め、目標に砲口を向ける。

—後ろを取った!—

と思ったその時、

（甘いんだよ!）

金髪の声が無線を駆けると、目標は横2列に並んだジェット孔の光を強め、瞬く間にニコイチを振りきる。

—こっちはこれが限界だってゆうのに……空気抵抗か! 予想はしていたが……

—

と、次の瞬間、

「!」

光秋は背中に寒気を感じ、接近警報が鳴る。が、今回は反応が遅すぎた。振り返る途中、放たれた模擬ミサイルがニコイチの右胸部に命中し、ボンツという爆音を立てながらその周囲に小規模の爆光を咲かせる。

その光をモニター越しに浴び、爆発の微振に身を揺られながら、光秋は顔を歪める。

「くっ！」——あと一発！——

と、今度は、

「……………」

頭頂を冷氣が貫き、光秋は思わず顔を直上に向け、ニコイチもそれに合わせて顔を上げると、右舷前部の扉を開いてミサイルを掴んだ腕を広げながら直進して来る黒い機体を見る。

（もらったぞイエロー！）

金髪の声がそう言うと同時に放たれたミサイルは、徐々に光秋の視界を埋めていく。

——これまでか！……………——

と、光秋は判定上の撃墜を覚悟する。

が、直後、

（「!?」）

横から割り込む様に殺到した銃弾がミサイルに数カ所穴を開け、ソレはニコイチに当

たる直前で爆発する。

（何だ!?!）「実弾!?!」

金髪と同時に眩くと、光秋は銃弾の来た方、自機の前方に目をやると、合わせて動いたニコイチの目がそのかなり先に複数の機影を捉える。

「?……」

拡大映像が表示されると、そこには少なくとも5機、黄色く塗られた戦闘機が映っている。

——何だ!?!……——

光秋の体に寒い緊張が走る。

8 飛行起動実験 後編

光秋は表示されたデータ映像に目を走らせ、前方の機種を確認する。

—『F—14』?……旧式か?—

拡大映像、データ映像共に、相手機のF—22よりも細身の機体と横に長い主翼が特徴的である。が、拡大映像の中のソレは、全機とも左右の主翼の付け根下部に、遠目にもミサイルとわかる物体を1基ずつ付けている。

(所属不明機多数接近!全機直ちに退避せよ!)

(何ぼさつとしてんだイエロー!こっちは模擬弾しか積んでないんだぞ!)

「……………ああ、はい!」

管制からの連絡と金髪の怒声でハツとした光秋は、すぐに振り返って先行する3機に続く。

が、光秋がニコイチの速度を上げようとした直前、

「!」

接近警報が鳴ると同時に、背中全面を冷気が襲う。その不快感は先程までの比ではなく、さながら冷たいナイフを突き付けられる様な感じである。

反射的にリーダーに目をやると、後方の複数の機影から自機に向かって急速接近して来る影を見る。

「くっ！」

咄嗟にニコイチを振り向かせ、左腕を縦に構えて前に出すと、間を置かずそこにミサイルが1発着弾する。

「……………」

模擬弾よりも大きく明るい爆光を浴び、爆発から来る微振をやり過ごしながら、光秋はニコイチを受けの姿勢をとらせたまま前方の3機を追う様に後退させる。

「何だ？こいつら？……………」

同じ頃。

仮設管制でも、事態を把握しようと皆躍起になって機器と睨み合いをしている。

「クソー！なんでこんなに接近されるまで気付かなかった!？」

大河原主任が両の手を握り締め、険しい顔で言う。

「周辺基地からの報告によりますと、『監視衛星からの映像では突然現れた』とのことです！奴ら、その場所までレポートして来たのでしょうか……………」

男性職員の報告に、大河原はますます顔を歪める。

「Eジャマーを設置しなかったツケか！……………しかし、何処から今日の情報が漏れた？

……」

「大河原主任」

「?……」

静かに呼び掛けられた声に大河原は振り向くと、それまで後ろに設置されたテーブル上のモニターで光秋たちの戦いを静観していた富野大佐が、制帽を被ってイスから立っているのを見る。

「よろしければその所属不明機の相手、私にやらせていただけませんか?」

「……やって、いただけるんですか?」

「ええ。今日の見学を許可していただいたお礼に」

「……それなら……よろしくお願いします!」

「……」

富野は口元の不敵な笑みを返事になると、

「中尉、車を用意!現場へ向かう」

と、左隣の女性、今朝伊部二尉と共に富野を呼びに来たその人に顔を向けて命令する。

「はっ!」

女性は右手で敬礼して答えると、テントの左側の先へ駆け出していく。

「我々も行くぞ!竹田、車の用意!」

「了解！」

藤原三佐の命令に答えると同時に、竹田二尉は女性と同じ方に駆けて行く。

「三佐？」

富野が顔を向けると、藤原は、

「儂の部下が危険なのです！なにより今回の実験はESO主動なのです！本来我々が行くのが筋です！」

と、富野の目を真つ直ぐに見て返す。

「……………」

顔を戻した富野はそれ以上なにも言わず、車を待つことに専念する。

横に並んで先行する3機の下後方に追いついた光秋は、前方から自分たちの方へ向かって来る影を映像で確認する。拡大映像が左右に表示されると、先程まで相手機を務めていたF-22である。左の機は、機首にまだ薄つすらとペイントの跡が残っている。

——さっきの？——

（ペガサス3より各機。これよりペガサス5と共に、所属不明機の迎撃を行う。各自速やかに回避を！）

男の声で通信が入る。

(こちらペガサス・リーダー。すまない。2人とも、気を付けてな)
(了解！)

光秋たちの上空を通過しながら返事をする、2機は後方の編隊へと直進して行く。
続いて古谷大尉の声で通信が入る。

(ペガサス・リーダーより、ペガサス2、ペガサス4へ。今の内にベースに帰還して、実弾に換装！奴らを迎え撃つぞ！)

(了解！)

(加藤三曹)

「はい」

(君も出撃地点に戻れ。このまま飛んでもいられないだろう？)

「了解！」

と、光秋が答えた直後、

(そつち行つたぞ！逃げろ！)

と、ペガサス3の声が響く。

「！」

光秋はリーダーに目をやると、右側から1機が迂回しながら迫って来るのを見ると、間を置かず右から銃弾が放たれる、

(散れ！)

「！」

古谷の指示に、光秋はニコイチを後退させる。

と、

(メーデー！メーデー！敵に付かれた！何とかしてくれ！)

と言う声を聞き、次いで上空で垂直上昇を続けるF-22と、ソレを追う主翼を機体後方へと閉じた黄色いF-14の拡大映像を見る。

——絡んできた人！——

声色からそう判断した光秋は、すぐに2機の方へ向かおうとする。

が、

——……！そうだ！今は模擬弾しか積んでない！——

と思い止まり、すぐにニコイチを滞空させる。

——今は、助けられない……——

悔しさに、奥歯を強く噛み締める。

が、

「……………！」

不意に光秋の脳裏に閃きが浮かぶ。

—ペイント弾……コイツの頑丈さ……レーダーには映らない……怪力……—「やれるかもしれない！」

そう断じると、ニコイチの左手に砲の支持棒を握らせ、砲口をいつでも撃てるように構えて2機の方へ全速力で直進する。拡大映像が消え、下から金髪の機を追うF—14が距離を詰めるのを見る。

「させるか！」

一喝し、両機の間割り込むと、同時にF—14から放たれた機銃がニコイチの前部を叩く。

（イエロー!?）

金髪の驚きの声を聞くが気を止めず、光秋の意志を拾って正面機のキャノピーに絞り込んで表示された赤マーカーと、放ったレーザーの筋が合わさった一瞬、

「！」

光秋の意志と同期したニコイチの指が引き金を引き、放たれたペイント弾が正面機のキャノピーを緑に塗り潰す。撃つてすぐに正面機の上部に回り込んだニコイチは、左腕を腰に引き、

「あさあ！」

と言う光秋の気合いと共に左正拳突きをその背に叩き込む。腹まで貫通させると、光

秋は素早く腕を引き戻し、後退して相手から距離をとる。

尾部のジェット光が消え、腹を下にして失速から落下に移ったその機の緑に塗られたキャノピーが弾け飛ぶと、次いで放たれた2つの操縦席から白い大きなパラシュートが2つずつ開かれ、足元の森へ向かってゆっくりと降下して行く。

その2人を視界の右端に捉えながら、光秋は、

「よしー！」

と、狙い通りの結果に小さく歓声を上げ、次の標的を探す。

と、

「！」

左から味方機が目の前を横切り、次いで、

（イエローー！）

と言う金髪の声が通信機に響く。

（お前が、何で俺を助けた？）

「何でって……目の前に死にかけてる人がいたら、助けるのが当然です！」

（……………）

はつきりと返した光秋は、ニコイチの周囲を左から右へと旋回し続ける金髪の機を意識の外に置いて索敵を再開する。

と、

(……乗れよ)

と、金髪の声がかかる。

「え?……」

(この上に乗れ!今のままで連中とやり合うには、お前は遅すぎるんだよ!)

旋回を続ける機から急かす様に言われた光秋は、

——理ある、が……—「コレ、5トンはあるんですよ?」

(いいから、来い!)

「……了解!」

と返し、ニコイチの前方へ直進を始めた金髪機を追う。

ニコイチが金髪機の上に付き、両機が完全に速度を合わせ切って並行飛行に入ると、光秋は左手を伸ばして金髪機の左の吸気口に指先を引っかけ、そのまま落下する様に一気に機体を密着させる。

(くっ!……)

金髪が機体の失速と降下に向めき声を上げるがすぐに持ち直し、光秋もニコイチ背部の推進機器を作動させて、2機は安定飛行を取り戻す。全長19メートル弱に達するF—22は、背部にニコイチが乗ってもまだ若干余裕がある。

—さながら、黒い怪鳥に乗った人か……！—

感慨を抱いたのも一瞬、光秋は2機の前方を左へと通過して行く黄色い機を見つける。

（まずはアレに仕掛けるぞ！）

「了解！」

光秋の返事と共に金髪機は速度を上げてその機を追跡し、自機を相手の左に付ける。並行飛行に入った一瞬、

「！」

光秋は照準が合うとすぐに砲を一射し、キャノピーが緑に染まると間を置かず金髪機から離脱して上に回り込み、

「あさあ！」

と、相手の背部へ左突きを食らわす。

すぐに金髪機に追いついて先程の要領で再び取り付くと、光秋は後ろに右目をやって2人分のパラシュートの降下を確認する。

（よし！この調子で行くぞ！）

「了解！」

光秋は腹の底からの声を通信機に吹き込む。

が、直後、

「！」

接近警報が響くと同時に、背後に強い冷気を感じる。

「後ろ？—

すぐにニコイチの頭部が振り返ると、視線の先に2機に向かって急接近をかけるF—14を見る。

「間に合うか？—

と、光秋がそちらに砲口を向けようとした瞬間、

「!？」

後ろの機は、2機の少し手前で突然胴体部から炎を上げて爆発し、残った機首と両翼も胴体部との付け根を燃やしながら落下して行く。

「?……」

光秋がその光景に目を奪われていると、

（加藤！待たせたな！）

と、通信が入る。

「!……藤原三佐？」

（ああ！遅まきながら応援に来た！）

「じゃあ今のは……」

（あれは儂ではなく、富野大佐だ）

「富野大佐？」

言いながら光秋は、今朝見た若い印象の顔を思い出す。

―あの人が、今のを！……―

（もつとも、儂らも負けてられん！うおおおおお！）

「！」

藤原の雄叫びが通信・外音スピーカーに共に響くと同時に、右側の樹林の中から胴体底部に貫通痕を開け、そこかしこがボロボロに傷んでいるF-14が縦に回転しながら現れ、その進行先の別の機の右翼に体当たりする。ぶつかって行つた方はそのまま下に落下し、ぶつかられた方は右翼を根こそぎ失い、徐々に高度を落としていく。

―今のが、三佐の！……―

（生身の連中に負けてられん！俺たちもいくぞ！）

「了解！」

金髪の激に光秋が答えると、ちょうど正面から1機接近して来る。

光秋は素早く照準を合わせ、砲を一射する。が、

「！」

弾は発射されず、カチツという空振りの音が鳴る。

「弾が！」

（何やってんだよ！）

金髪が怒鳴る間に、標的からミサイルが一射される。

——ホント、何やってんだ！——

光秋は咄嗟に右肘を右の吸気口に引つ掛け、

——冷気もろくに感じず！——

自分に毒づきながら左手で空弾倉を鷲掴み、砲本体から外したそれを前に投げつける。狙い通りミサイルに当たると、誘爆したミサイルが2機と標的の間に爆発の壁を作る。

それを目くらましにして離脱した光秋は標的の上を取り、

「！」

ニコイチの右脚を伸ばし、それに連動して足先底面の、本来は不整地などで機体を固定するために使う剣先の様な形をした2本の爪を伸ばして標的に蹴りを入れる。胴体中央に入った右蹴りは先端の爪を奥まで食い込ませ、小さな誘爆を起こした標的はそのまま前に流れる様に落下していく。

再度金髪機に取り付いた光秋は、

（弾の補充、忘れんなよ！）

「わかってますよ！」

と、金髪の小言に強めに答えながら、再び右肘を吸気口に引つ掛け、左手で左腿の予備弾倉を掴んでそれを砲に装填する。

その直後、2機の右隣に味方機のF-22が付き、通信が入る。

（ペガサス・リーダーより、ペガサス4、01へ。実弾への換装が終了した。待たせたな）

（古谷隊長！）

（タツカー、ここは任せて、お前もベースに戻れ）

（いえ、俺はこのままコイツと——）

と、続きを遮る様に、

（避ける！）

と、古谷の絶叫が通信を駆ける。

「！」

同時に光秋も背部を貫く冷氣と接近警報を感じ、

「後ろです！」

と、通信機に叫ぶ。

咄嗟に金髪機は左へ、古谷機は右へ回避し、遅れて3機の間を銃弾が多数通過して行

く。

いち早く右旋回して後方へと戻った古谷機は、先程銃撃してきた機を見つけると、その後を追いつながら自機を上昇させる。

「中尉！僕らも行かないんですか？」

光秋がなかなか古谷機に続かない金髪機を急かすと、

（まあ見てな。ウチの隊長の力！）

と、余裕のある声が返ってくる。

「？……」

その言葉に、光秋は右後ろに目を向け、拡大表示された古谷機とその標的の空戦を観る。

と、それまで上昇を続けていた古谷機が突然鋭角を描く様に急降下を始め、その先の標的へと突っ込んで行く。が、標的は古谷機と接触する直前に左へと回避し、古谷機の突進をやり過ごす。

しかし、

（そー！）

古谷機は標的の回避運動に同期して機首を左に向け、標的の右横腹に機銃を叩き込む。

古谷機が素早く離脱する後ろで、標的は右腹から数本の黒煙を上げながら落下していく。

その光景を拡大映像越しに観た光秋は、

「……すごい！」

と、目を丸くして思わず眩く。それに続いて、

（さすが古谷隊長！やっぱり予知能力持ちは違いますねえ！）

と、金髪の若干興奮した声が響く。

（部下が隊長をおだてるんじゃない！あと超能力もそうだが、俺の場合はそれ以上に経験と技術力だ！）

（了解。わかってますよ）

古谷大尉の説教に、金髪は軽い調子で答える。

—あれが、三佐たちとも違う超能力者の戦い方……—

光秋は先程の古谷戦をどのように判断する。

ふと右パネルのリーダー表示に目をやると、

「01より各機。所属不明機の数が少なくなっています。一部は、機影の動きから見て撤退を始めている模様」

と、状況報告を通信機に入れる。

直後、

「！」

右腹の冷氣と接近警報を感じた光秋は、

「右です！」

と、反射的に叫ぶ。

（わかつてる！）

答えながら金髪は自機を左に旋回させ、近づいてきたF-14をやり過ごす。

（コイツ！まだやる気か？）

——コレが最後か……—

周囲の状況からそう判断した光秋は、金髪機に通信を送る。

「中尉！」

（わかつてる、コイツが最後だ！）

金髪が冷静に答えると、先程やり過ぎた機が2機への追撃を始め、それを察知した金髪が自機を左回りにUターンさせ、標的と正面から対峙する。

「僕が撃ったら、高度を下げて離脱を！」

（了解！）

静かな声の通話が終わると、金髪機は後部のジェット噴射を最大にして標的へと突進

する。

標的のキャノピーに合わせた赤マーカーが徐々に拡大していく中、光秋は砲のレーザを点け、マーカーの中心にレーザが重なった刹那、

「！」

素早く引き金を引くと同時に金髪機から離脱し、金髪は自機の高度を下げ、標的の底面すれすれを通過して行く。

標的の左上に回り込んだ光秋は、砲の取っ手を両手で握ると、そのまま砲を後ろへ一杯に振り上げ、

「あざあー！」

と、気合いと共に力一杯砲身を振り下ろし、標的機首の根元を粉砕する。

落下に入った機首をすぐに左脇に抱え込むと、光秋は一面緑に染まったキャノピーに砲を持ったままの右手を置いてパイロットの脱出・逃亡を防ぐ。

右パネルのレーダーに目をやると、周囲にはもう機影はない。

「終わった……か……」

ホッとした声で呟くと、光秋は視線を左パネルの地図に移し、現在地の赤三角と、出発地点を意識して表示された赤い点の位置関係を確認する。

「01より仮設管制へ。これより所属不明機のパイロットを連れて帰還する」

言いながら光秋は、ニコイチを現方位から2時の方向に向け、ゆっくりと前進する。出発地点上空に着いた光秋は、広場に着地すると、抱えていた機首を足元に下ろし、ニコイチを一步下げて左膝を着かせる。

ハッチを開けて操縦席を上げると、機首から引きずり出された2人の飛行服姿の周囲を、防具一式を着けて機関銃で武装した緑服5人が取り囲んで視界の右側へ連行する光景があり、光秋はそれを直に見ることになる。

——……顔見られたかな？——

若干保身の心配をしながら、左手でハッチの左端を探ってリフトを取り出し、慣れた手つきでそれを展開させ、左足を掛けてゆっくりと地面に降りる。

地上に足を着けると、遠くから自動車のエンジン音が聞こえ、次いで、

「加藤おー！」

と、藤原の声を後ろから聞き取る。

「……………」

振り返った光秋は、視線の先に緑に塗られた大きな目のトラックと、その左側の助手席の窓から身を乗り出してこちらに目をよこす藤原を見る。

トラックがニコイチの左足元、光秋の正面に停まると、藤原はすぐに助手席から降りて速足で光秋に近づく。

「まったく無茶をしておって！……」

「すみません」

「三佐の言う通りだ！」

トラックの右のドアを開け、運転席から降りた小田が加わる。

「無理するなと言ったろう！」

「……はい」

「まあ……そのおかげか死人も出ず、攻撃してきた連中も何人が捕らえることができたから、今日はこの辺にしとくが……」

「……そういえば、攻撃してきた人たちって誰なんです？」

光秋はちよつとした興味から藤原に訊く。

「まだ断言はできません、が……」

「サン教の過激派でしょう」

高い柵が設けられたトラックの荷台の後方から、伊部を後ろに従えて現れた竹田が言う。

「あんな目立つ黄色で戦場に来るのは、連中くらいだ」

『サンキョウ』って、何なんです？」

光秋の質問に、小田が答える。

「5年くらい前から勢力を伸ばしてる新興宗教だ。俺も詳しくは知らんが、信者の一部には今回の様な反社会的行動をとる者もいるらしい」

「宗教……ですか……」

光秋は、呟く様な返事をする。

と、

「……にいたか」

富野が中尉の女性を左に伴って現れ、光秋の前に歩み寄る。

「……………」

富野の観察する様な視線に、光秋は思わず緊張する。

「演習用装備で敵に挑むとは、勇敢どころか、自殺行為も甚だしいな！」

「……………」

言葉通りとまではいかなくとも、少々軽率な行いだつたと自覚し始めていた光秋に返す言葉はなく、知らず知らずのうちに顔が俯く。

「まあまあ大佐。農らの方からよく言っておきましたので、今回はその辺で勘弁してやってください……それに、あのどこか派手な戦い方、若い頃の誰かさんに似ていたよ
うな?」

「……………」

藤原の最後の言葉に、富野は薄っすら頬を赤らめ、隣の中尉も右手で口を隠して笑いを堪える。

——……どういう関係なんだ？この2人——

と、俯きながらも光秋が藤原と富野の關係に疑問を浮かべた直後、富野は、
「ウフンッ！」

と咳払いをする。

「まあ、その話はさておき。パイント弾を目くらましに使った氣転と、被疑者2名を確保した実績は認めよう」

「……………」

富野のその言葉に、光秋は顔を上げ、富野の顔を見る。

「とりあえず、共に作戦を行う上では問題なさそうだ。君の今後に期待しよう」

「……………あ、はい！」

予想外の言葉に、光秋は思わず敬礼をする。

富野はそれに応じず、藤原に目を向ける。

「三佐、森の中に落ちた被疑者の搜索をしたい。作戦會議に顔を出してくれ」

「はっ！」

藤原が応じると、富野は傍らの中尉を伴って左前方の白テントへ向かう。その一行の

後を、

「俺も付き合います」

と、小田も続く。

ニコイチの足元に残された光秋、竹田、伊部は顔を見合わせ、

「ま、オレは三佐や一尉よりは心配しなかったけどな」

と、竹田が気楽に言う。

「二尉、それはそれでどうかと……」

伊部の言葉に、竹田は、

「だって、ロボットがヒコキごときやられるわけねーだろう？ オレ的には、あの金髪野郎もついでに墜としとしてもよかったんだが」

と、冗談ともつかない調子で言う。

「二尉、それはいくらなんでも、言い過ぎでは……」

と、光秋が言った直後、

「悪いが、その金髪野郎の登場だ」

と、光秋の背後から声がする。

「「！」」

3人が声のした方に顔を向けると、そこに飛行服姿の金髪が、両腕を胸の前で組んで

立っている。

「デメエー！」

「ダメです！」

真つ先に殴りかかろうとする竹田を、伊部がその左手を両手で掴んで引き止める。それにも構わず竹田は、

「何しに来た！また加藤に絡みにか？それとも今朝の続きか？オレはどっちだっていいんだぜ！」

と、罵声を飛ばす。

が、金髪はそれを無視して光秋に近づくと、

「その……さつきは、悪かったよ。怒鳴りつけたりして」

と、右頬を右人差し指でかきながら、照れた様子で言う。

「…………え？」

予想外の言葉に、光秋は咄嗟に返事に詰まり、

「!?…………」

後ろで暴れていた竹田も固まる。

「あと、ありがとな。さつき助けてくれて」

「ああ、それは……さつきも言いましたが、当たり前というか、自分のためでもあります

から」——見捨てて、後味が悪くなるのも事実だ——

「そう、なのか?……そうか」

そう言つて金髪は、飛行服の手袋を外して、その色白の右手を光秋に差し出す。

「……!」

「紹介が遅れたな。俺はアレク・タツカー。合空軍のパイロットだ」

「……光秋・加藤です。こちらこそ」

そう言つて光秋も右手を差し出し、タツカー中尉と握手を交わす。

「ま、よろしくたのむぜ、ジャップ!」

「『ジャップ』、ですか?」——日本人の蔑称……—

「デメエ!」

と、竹田が伊部の制止を振り切つて前に出ようとした直後、

「二尉!」

と、光秋はその正面に右手をかざして、竹田の前進を制する。

「……………!?!」

「……………いいんです」

動転する竹田に、光秋は穏やかな目を向けて言う。

——でも、イエローの時と違って、悪意を感じない……けつこういい人かもなあ……—

そう思いながら光秋は、
タツカーの白い顔に、
再び目を向ける。

『蜂の巣』 攻防編

9 作戦と誕生日

5月6日 木曜日 正午。

休み明けの勤務を半日こなした光秋は、支部近くの牛井屋、そのカウンター席の右隅で、制帽をテーブル下の荷物置きに置いて一人黙々と昼食をとっている。

と、背後から、

「……あれ？ 加藤三曹？」

と、聞き覚えのない男の声に名前を呼ばれる。

「？……」

光秋は口の中の牛丼を飲み込んで振り返ると、横に並んで立つ2人の緑服の若い男たちを見る。

「……誰だっけ？」

元来顔と名前を覚えるのが苦手な質の光秋が記憶を探ろうとすると、

「やっぱり！ 我ら本年度採用者のエース！」

と、右の男が話し掛けてくる。光秋の名前を呼んだ声である。が、その台詞は、どこ

か芝居がかった様な違和感を感じる。

—エース？ 僕が？……—

思いながら光秋は、自分の顔を左の人差し指で指し、2人に尋ねる目を向ける。

「そうそう！ 就任前にNPの武装集団を1人で、それも2回も退け、先日の我らが合衆国の誇る新兵器の起動実験の際に起こった偶発戦では、実弾なしで何機もの敵を墜とし、サン教の過激派を2人捕らえたという実力者と、まさかこんな所で会えるとはなあ！」
左の男が嬉しそうな顔で言う。が、その声には、どこか刺す様な響きがある。

「……それはちよつと大袈裟じゃあ？……」

と、光秋が反論すると、

「何を仰る！ 現に実力を認められたからこそ、正式に就任する前から新兵器のパイロットに採用されたんでしょう！」

と、右の男が断言する調子で、両手を前に出して大袈裟な身振りをしながら言う。

「ま、まあ………そうとも？……」—アレは僕しか動かせないから、とも言えないしなあ……—

光秋は曖昧な返事しか思い浮かばない。

と、左の男が、

「ハア—」

と、大きな溜め息をつき、

「こんなに実力があつて、それでいて謙遜な人が、よりによつて藤原組長率いるヤクザ隊の所屬とは……」

と、頭と肩を下ろして嘆く様な声で言う。

—『ヤクザ隊』?—

と、突然右の男が、後ろから左の男の両肩を掴み、

「し！本人の前で失礼だろう！」

と、形だけの注意をする。

左の男は、

「それもそうだな。すまない加藤三曹、今言つたことは気にしないでくれ」

と、口先だけの謝罪をして、右の男と一緒にそそくさと店の奥へと移動する。

「……厭味、か?」—にしても『ヤクザ隊』って?……—

気になりながらも光秋は、残りの牛丼を口に運ぶ。

食後、支部地下の水盤で歯磨きを済ませた光秋は、藤原隊の待機室に戻る。

ドアを開けると、

「……お、加藤。早かつたなあ」

と、先に戻つて暇そうに椅子に腰掛けている竹田二尉に言われる。

竹田の右隣の椅子の上に置いてある自分のカバンに歯ブラシと歯磨き粉の入った筒状のケースを仕舞いながら、光秋は訊く。

「他の皆さんは？」

「まだ食ってるんじゃないか？」

カバンを左端に下ろして座った光秋は、先程のことを訊くことにする。

「ところで二尉、訊きたいことがあるんですが……」

「んー？」

「昼を食べてたら、ウチの隊のことを『ヤクザ隊』って言ってた人たちがいたんですが、どういう意味なんです？」

「ああ、そのことかあ……その前にお前、それどこで聞いたんだ？」

「支部近くの牛丼屋で、後から入って来た同僚2人にです。顔までは、覚えてません」

「オッサンだったか？」

「いえ、『本年度採用』って言ってた、若い男2人です」

「……新入りかあ」

と、竹田は困った顔で言う。

「……二尉がこんな顔するなんて、珍しいな――」

「新入りにまで浸透してんのかあ……」

「なにか?……その、やつぱり蔑称かなにかで?」

「まあ、そうなんだがさあ。まあ、一種の妬みだな」

「妬み?」

「ああ。まだ話してなかったっけな? 藤原隊はもともと、隊長の藤原三佐と小田一尉と、オレでできてたんだよ」

「はい?」

「部隊編成の最小人数だったんだが、どいつもけつこうやり手だったから、小さい隊の割にかなり活躍できてよ、上にもいい評価もらってたんだよ」

「はい?」

「ただ、それが面白くねえ他の隊の連中がな、三佐のあの髭面を、『隊長ってゆうより組長だ』って言いだして、そこから、『藤原組長率いるヤクザ隊』って、一部で呼ばれるようになったちまつたんだよ」

「……そういうことですか」

「まあ、悪口とはいえ強そうだからいいんだけどよ。オレなんか言われ始めた頃、それを逆手にとつて、同僚とのケンカなんかでヤクザ映画の真似ごとなんかしたけどよ」

「はあ……」

光秋は、制服を着崩し、サングラスを掛けた竹田が、

——『奥歯ガタガタイわしたろかあ?』——

などと言いながら、人の下顎に拳銃を突き付けている様子を想像してみる。

「まあそれでも、それまでのメンツとは毛色が違う伊部が来た時は、これで少しは収まるかと思っただがなあ。挙句未だに新入りにまで伝わってるとは……ま、一度付いたレッテルはなかなか剥がれねえってことかあ……」

と、竹田は遠くを見ながら、独り言の様に言う。

——……妬みかあ……統一政府ができて、超能力者も存在する様なこの世界にも、そういうのが未だにあるんだあ……——

と、不意に待機室のドアが開き、

「おおお前たち、やはりここにいたか!」

と、藤原三佐が顔を出す。

「三佐? 何か?」

光秋が訊くと、

「突然でなんだが、上の会議室で緊急の連絡がある。2人ともすぐ来るように」と応じて、藤原は顔を引っ込める。

「りようかい」

「了解」

答えながら竹田と光秋は席を立ち、先を行く藤原を追って竹田は部屋を出、光秋も制帽を深めに被り直して、ドアの左横にある照明のスイッチを切ってそれに続く。

速足で通路を進みながら、光秋は、

―『藤原組長』、かあ……確かに僕も、初めて会った時は『組長』、というより『山賊のお頭』なんて印象を持ったけど、実際付き合ってみれば、博学で、優しい人だ……第一印象なんて、得てして当てにならないって、今までの人生で経験してること……なのに、未だにそれに左右されてしまう僕ってのは、本当にバカ、いや、自覚してるだけまだマシのアホといったところか……―

と考えながら、藤原と竹田に続いて最寄りのエレベーターに乗り込む。

本舎2階の会議室、光秋が初の戦闘の後に運ばれた部屋に入った光秋は、竹田の後に続いて、前から2列目の中ほどのパイプイスに座り、連絡が始まるのを待つ。

周囲には、光秋の目分量で50人程の緑服があり、その殆どが同様に席に付いて、ひそひそと周囲と小声で話しながら連絡が始まるのを待っている。

元来人の多い所が苦手な光秋であるが、藤原の「緊急の連絡」という言葉と、それによつてできた今の周囲の状況から来る緊張感、そして左隣に見知った顔である竹田がいるというある種の安心感で、今は平気でいられる。

と、伊部二尉と小田一尉が部屋に入ってきて、光秋の右隣に座る。

「遅かったですねえ。なにかあったんで？」

首を右に回して左耳を聞き取り易い位置に移動させた光秋が、右に座っている伊部に訊く。

「お昼。この時間、どこも混んでてねえ……」

「ああ」

小声で言う伊部の返事を、光秋は周囲のざわつきの中からなんとか聞き取り、頷いて相槌を打つ。

その直後、それまで左端に立っていた藤原が一同の正面に進み出る。それと同時にざわつきがピタリと止む。

「……」

光秋は部屋全体が少し重い緊張感に包まれた様に感じる。

正面に置かれたホワイト・ボードの前に立った藤原は、

「えー、今回集まってもらったのは、近々行われる対NPの大規模作戦についての連絡である」

と、語り出す。

「今回の目的は、京都から大阪にかけて散在する奴らの一大拠点、通称『蜂の巣』、これの制圧である！」

藤原がそう言った瞬間、光秋以外の全員の表情が硬くなる。

「……そんなに危ない所なのか？」

と、光秋が周囲から薄々察する傍ら、藤原はさらに続ける。

「我々は、来月奴らがそこで集会を開くという情報を入手した。が、現在確認されているだけで、ここの武装は自動小銃百丁、拳銃二百丁、その他ロケット弾等の重火器多数。あくまでも確認された範囲でだ」

「そりゃあ……本当に危ないな！——

「以上の規模から、今回は州警・合陸軍との共同作戦となる。開始予定は6月18日の早朝。これ以上の詳細は、追って連絡する。各自当日までに調子を整え、万全の態勢で挑むように！以上！」

そこで一同が一斉に立ち上がり、一拍遅れて光秋も立つと、一斉に藤原に向かって敬礼をする。返礼をした藤原が、

「解散！」

と、言うのと、皆一斉に部屋の出入り口へと向かう。

その中で光秋は、イスに腰を戻し、少し顔を俯ける。

「僕の誕生日の翌日、か……」

待機室に戻った光秋は、一緒にテーブルについている左隣の竹田に、今一番の疑問を

尋ねる。

「ところで二尉。『蜂の巣』って、どの辺りにあるんですか？」

「んー？オレも詳しい場所までは知らないんだけどよー」

「知らないって？」

「だって、行く時はどうせ、特務の方からテレポーターの4、5人呼んで、適当な所に集合して、部隊ごと移動させるんだろうし」

「ああ、なるほど」

「ただ確か、廃ビルだって聞いたことがあるなあ……」

「廃ビル、ですか……」

「たく、休み明けからこんな大仕事の予告をよー！」

と、竹田は独り天井に向かって愚痴る。

「……………」

光秋はそれに対して、返す言葉を持ってない。

翌日の5月7日から、京都支部の実戦部隊はいつも以上に訓練漬けの日々となる。

銃器の射撃訓練や、体術の訓練、州警・陸軍との共同訓練まで、様々な訓練が行われる。

が、それらの片隅で藤原隊は、個々の射撃訓練こそ参加するものの、殆どの時間を光

秋はニコイチの操縦訓練に、他の4人はソレとの連携訓練に費やす。

5月18日火曜日午後2時50分。

本舎裏の、ニコイチにとってはあまり広いとはいえないグラウンドの片隅で、午後の訓練の小休止をとっている光秋は、左膝を着いたニコイチの操縦席を機外に出し、制帽を右脇に挟み、シートベルトを外して少し疲れた体をそこに納めながら、目線をぼつぽつと雲が浮かんでいる青空に向け、物思いに耽っている。

——……イメージ操作、最初に比べたらだいぶ負担が掛からなくなった。時々自分の体と区別できない程自然に動かせるもんなあ……にしても……やっぱり三佐たちには負担掛けてるかなあ？コイツの超能力耐性を考慮して、隊全員で、現場近くまで本隊とは別行動で行くって言うってたし。耐性のことすっかり忘れてた竹田二尉なんか、『そうだった！』って、本気で驚いてたし………光秋、その辺にしとけ！そればかりは不可抗力だ！しかたがない！………だな！悩んでもしょうがない！——

そう割り切つてすぐに、左下から、

「加藤くーん！」

と、伊部の声を聞く。

光秋が声のした辺りを見下ろすと、ニコイチの左膝のそばで、両手でメガホンを作った伊部が光秋の方を見上げている。

「なにかあー?」

と、光秋は腹に若干力を込めて返事をする。

「そろそろお、訓練再開するよおー!」

「りようかあーい!………うふっ!」

立て続けに大声を出した光秋は、小さく咳をする。

—久々に大きい声出すからなあ……—

そう思いながら、左耳に付けたままの通信機の位置を若干調整すると、シートベルトを締めて席を機内へ下ろす。

ハッチを閉めると、

—あと、普段あんまり話さないからなあ……—

と、右手で筋肉痛のする両頬を軽く揉む。が、心なしか元気を回復したという自覚もある。

「さてと!」

それを最後に、光秋は心身を共に訓練時のそれに切り替わる。

5月26日水曜日午後0時45分。本舎1階。

午後の訓練の前にトイレに立った光秋は、ドアを開けてすぐに、左側の水盤で手を洗っている灰色のツナギを着た大河原主任と会う。

「おお、三曹！」

「！」

光秋は軽く頭を下げてそれに答える。

「いやあ、先日はすまなかつたなあ。こつちの不手際で、あんなことになってしまつて」
大河原はハンカチで手を拭きながら言う。

「ああ、いえ……」

「にしても、まさか砲身を竹刀として使うとはなあ」

「ああ、あれは、咄嗟に思いついただけで……」

「しかし、まさかN砲、ああ、私は01の愛称である『ニコイチ』の頭文字を取つて、アレをそう呼んでいるんだがな、その欠点があんなふうに活きるとはなあ」

「欠点？」

「ああ、前にも説明したが、アレは戦車の部品を使用しているから、丈夫な分重くてなあ。データ上、ニコイチなら問題なく持てるから説明の時は言わなかつたんだが。その質量さえも武器にするとは……」

「だから、あれは単なる思いつきで……」

「まあ、その発想力を、『蜂の巣』でも活かしてくれ」

「！……」

『蜂の巣』という単語に、光秋に一瞬緊張が走る。

「ははは、そんなに硬くならんと！まあ、しつかりな」

「……ああ、はい！」

微笑みながらトイレから出て行く広い背中を、光秋は少し遅れて敬礼をして見送る。

「……主任も、僕のことを評価してくれてるみたいだ」

そう思いながら光秋は、最寄りの便器へ向かう。

と、不意に先日の牛井屋の2人のことを思い出す。

「……光秋、結果だ！結果を出せ！そうすれば、あの言葉も言葉通りの意味を持つ！

……だな——

そう考え、浮かんだ思い出を頭から追い出す。

6月4日金曜日午後9時。

帰宅してひと風呂浴びた光秋は、青チエック柄のパジャマに着替え、イスに座つて物思いに耽つている。

「確か藤原三佐が駆け足で教えてくれたことによれば、NP、正式にはNormal People、超能力者の排除を理念とする、武装テロ組織……『奴らの主張によれば、超能力者はその能力故に既存の社会を混乱させ、文明を衰退させ、最終的に人類そのものを滅ぼす』とのことだ」……人の新しい在り方……かもしれないものを否定する

者たちの理屈が、これかあ……統一政権ができて、様々な事情で争う世界。超能力者ができて、未だ差別や偏見を克服しきれない人々……この世界は、僕がいた世界以上に可能性に溢れながら、僕の世界以上に、それらを持て余しているのかもしれない……

と、それまで意識の外にしていた雨音が、少し激しくなつて耳を突く。

「……そろそろ、寝るか……」

そう呟くと、光秋はイスから立つて、カーテンの隙間に手を入れ、風を入れるために全開にしてある大窓を閉め、鍵を掛ける。

6月9日水曜日午後7時半。

本日分の訓練を終えた光秋は、本舎の食堂で、1人黙々とどんをすすっている。

と、

「はい、いっ。」

伊部が正面の席にトレーを置いて訊く。

「どうぞで」

光秋が答えると、伊部は椅子を出して腰を下ろす。

「……そういえば、こうして2人になるの久しぶりだなあ……」

光秋がそう思ったすぐ後、

「……やっぱり、慣れるとねえ……」

「え？」

「……前にね、まだ帽子被ってるって話したじゃない」

「はい……」

「ただ、今は目が慣れたせいとか、被ってない方に違和感感じて……」

「……ああ」

光秋の制帽は今、足元のカバンの上に置いてある。

「……ところで、二尉」

「なに？」

「いや……今度の作戦、頑張りましょうね！」——いや、それが言いたいんじゃない——

「ええ」

微笑んで答えた伊部を前に、光秋は、それ以上にも言えなくなる。

6月17日木曜日夕方。本舎1階。

作戦を翌日に控え、いつもより早めに訓練を終えた光秋は、制帽を足元のカバンの上に脱いで廊下のベンチに腰を下ろして一息ついている。

ふと左手の時計を見ると、6時半である。

——母^{かあ}の話だと、確か今頃生まれたんだっけなあ……おめでとう、光秋……——

心中に言つてすぐ、光秋は独り身の虚しさを感じる。
と、

「……加藤くん」

と、左側から声が掛かる。

「……伊部二尉。どうしました？」

「……誕生日、おめでとう」

「？……なんで知ってるんです？教えた覚えは……」

「交換した携帯のデータの中に入ってたよ？」

「え？……ああ、そうだ！すみません、すっかり忘れてた」

「で、加藤くん今年でいくつだっけ？」

「19です
じゅうく」

「そう……」

応じながら、伊部は光秋の左隣に腰を下ろす。

「……」

その状況に光秋は、無条件に心地いい感覚を覚える。

「じゃあ、あと1年でやっと成人かあ」

「ですね。まだ皆さんと飲みには行けません」

「……それなら心配しなくていい。私飲めない口だから」

「そうなんですか？」

「そう。飲んだ時の記憶に、いい思い出は一つもない」

「ああ……でも、たかが20年足らずとはいえ、色んなことがありました。物心つく前だから覚えてませんが、生まれて早々目の手術して……あれは、小学校に上がる前、何日か入院して、また手術受けて。麻酔のガスを送るマスクから、子供心にも甘ったるい味のガスが来たところまでは覚えてるんですけどねえ……」

「……小さい頃は、大変だったのね……」

「大きくなつてからも面倒でしたよ。中学の頃なんか、周りと上手く付き合えなくて、それが原因か、本当におかしかったのか、しょっちゅう体調崩して、休みがちで……」

「……そう」

「ただその甲斐あつてか、少しはその辺上手くやれるようになった気がします。まあ、あの頃に比べれば、ですけどね……」

「まあ、確かに付き合いが上手い方とは、言えないよね……」

「ええ。昔から取り柄といったら、真面目と、いい子くらいで……」

『『いい子』はどうか知らないけど、私は加藤くんの真面目なところ好きだよ。ただそういう割に、最近は無茶する機会も増えてるみたいだけどもねえ。ここが襲撃された日とか」

「……僕だって、臨機応変に対処する力は、多少は持ってますよ！あれはその結果です！」

「冗談よ」

「……………」

「さてと……………」

と、伊部はベンチから立ち上がる。

「明日も早いし、今日はこの辺にしよう。じゃ」

そう言つて右手を軽く振り、右へと歩き始めた伊部を見て、光秋は、

「はい、おやすみなさい」

と言つて、右手を軽く上げて見送る。

「……………やっぱり、好きなのかな？—」

伊部の背中を見ながらそう思った直後、上着の左のポケットに入れてある携帯電話が2回振動し、画面を開くと、先日世話になった合空軍のタッカー中尉からメールが来ているのを見る。

『Happy Birthday ジャップ』

「……………この人はこの人で、好意を持てそうだ……………」

6月18日金曜日午前8時10分。

早朝にも関わらず、緊張感から光秋には眠気が全くない。いつも通り制服・制帽を着た体を、白のワゴン車の右後部座席に納めている。その表情は、硬い。

「そんなに緊張すんなよ」

座席の左に座る竹田が、軽い調子で言う。が、その顔も、いつものどこか不真面目そうなそれではなく、あからさまに強張って見える。

「二尉の言う通りだよ。訓練通りやれば、絶対上手くいー!」

光秋と竹田の間に座る伊部が、半ば自分に言い聞かせる様に言う。

「ええ、そうですね……」

汗ばんだ両手を合わせながら、光秋は静かにそれだけ言う。

「加藤だけでなく、2人もだぞ」

前部左座席に座る藤原が、ポツポツと雨が打つフロントガラスを見ながら声だけよこす。

「……………それはそうっすけど、やつぱり、こういう作戦でこういう移動すんの初めてで、落ち着かなくって……」

竹田が俯いて言う。

「それは、出発の時にも話しただろう」

右の運転席でハンドルを握る小田が言う。

「ニコイチがテレポートで運べない以上、包囲陣形を敷く本隊とは一緒に行けない。だからこうして、ありふれた車で現場近くまで行くしかない」

「そう……すけど……」

竹田は、それ以上話すのをやめる。

「……」

そのやり取りに、光秋は自分がお荷物になっている様な罪悪感を感じながらも、すでに「不可抗力」と割り切ったと思い出し、黙って右側の雨に濡れた窓を見つめる。

と、遠くからゴロゴロ、ゴロゴロと、雷鳴が響くのを聞く。と、

「……」

光秋は自分の左腕に、伊部の両腕がスがる様に伸ばされていることに気付く。

「そういや、伊部も大丈夫か？」

竹田が俯いていた顔を上げ、光秋たちの方を見て言う。

「大丈夫って？」

「伊部は、雷が苦手なんだよ」

光秋の質問に、竹田はそう答える。

「え？ そうなんですか？」

光秋の問いに伊部は、

「……………」

顔を下に伏せることを返事にする。

「…………さて、ドライブはここまだ。そろそろ降りるぞ」

藤原がそう言つて間もなく、ワゴン車は近くの人気のない広場へと左折し、入口近くで停車する。

素早くドアを開けて車から降りた光秋と竹田は、車体後部の荷物入れへと駆け寄り、光秋がドアを上げて開けると、竹田は積んである大小複数の黒く重い箱を1つずつ車体右側の雨打つ地面へと運ぶ。

光秋以下4人も参加してその作業を終えると、皆次々と箱を開け、中から取り出したヘッドフォン型の通信機と、緑の丸いヘルメット、黒い防弾ベスト、節々を覆う防具を身に付ける。皆が取り出した自動小銃に弾倉を込める中、1人だけ制帽の光秋は、右脛に茶色い皮の質感のホルスターを巻きつけ、拳銃の銃床から弾倉を込めてそれをホルスターに仕舞う。

空になった箱を荷物入れに戻し、その箱の山の上に光秋は制帽を置き、ドアを閉める。
と、

「加藤」

後ろから防具に身を固めた竹田が話し掛け、1人ヘッドフォンを付けていない光秋は

振り向いて、

「はい？」

と応じる。

「ウチの隊で、オレより階級低いの、お前だけだよな？」

「……ああ、そうですね」

「だよな。伊部は同じだし、三佐と一尉は上だし！」

「はい……」

「つまり、オレがイバって命令できるのは、お前だけってことだ！」

「はい？……」

「そういう奴が一人いるのといないとじゃ、仕事に対するやる気が違うって、この三カ月でよく判った！」

「はい？……」——二尉はなにが言いたいんだ？——

「だからよ！……ここでつまんねえ怪我して、隊から外れるような真似だけは、オレのために絶対にすんなよ！」

言い終えると竹田は、薄赤い顔をしたのも一瞬、光秋の返事を待たずに車体右側に集まる藤原たちの許へ行く。

「……わかってますよ！」

光秋は微笑みを浮かべて、機関銃を右肩に提げた竹田の背に咻くと、その後が続く。
「三佐、そろそろ出しますか?」

光秋の呼び掛けに、藤原は左手の腕時計を一見する

「そうだな、頼む」

「了解」

答えた光秋は、左手で防弾ベストを前に引き、その隙間からなんとか右手を上着の左内ポケットに伸ばし、ニコイチの白いカプセルを取り出す。

車体右側、何もない空き地に向かって光秋はカプセルから白い光を放ち、すぐに実体化した左膝を着いたニコイチのリフトを掴んでコクピットへ上がり、認証を済ませると、右肘掛にカプセルを納め、入れ違いに通信機を左耳に付け、ハッチを開けて機外へ席を上げる。

「準備完了!」

「よし!訓練通り、竹田と伊部はコクピットに!」

藤原が命令する間に、光秋は伊部を右手に、竹田を左手に乗せ、2人をコクピットへ運ぶ。2人がコクピットに移ったのを確認した光秋は、座席を機内へ戻し、ハッチを閉める。

（よし!次は濃と小田だ!）

ヘッドフォンの左スピーカーから伸びるマイクにそう吹き込んだ藤原に応じて、光秋は右手に藤原、左手に小田を掴むと、立ち上がって、2人を掴んでいる両手を慎重に胴体の方へ寄せる。

（いいぞ！やってくれ！）

カメラの死角からそう呼び掛けた藤原に、光秋は、

「了解！」

と通信を送り、右ペダルを軽く踏み込む。

背部の円を白く輝かせたニコイチは、徐々に足を地面から離し、雨が降りしきる黒の強い灰色の空へと昇って行く。

10 怒りの犬

高度を一定まで上げた光秋は、左手で左パネルに触れ、事前に『蜂の巣』の位置を入力した地図を呼び出す。そこに表示された赤点に従って、ニコイチを若干左に向け、それに合わせて地図も回転し、ニコイチの向いている方を上に表示する。赤点が図の上部中央に来て現在地の赤三角と直線で結ばれたのを確認した光秋は、右レバーを前に倒してニコイチを前進させる。

「……にしても、三佐と一尉もご苦労だなあ」

操縦席の左側に掴まり立っている竹田二尉が呟く。

「訓練中、コクピットに全員入れないとわかるや、『自分たちは掴んで運べ』つてよお。おまけに梅雨で雨は降るし、外は蒸すし。こん中こそ快適な状態に保たれてるがよお」

誰の返事も期待しないまま話し続ける竹田に、光秋は、

「怖いのを誤魔化してるのか？」

という印象を抱く。

（竹田、独り言はそこまでだ）

藤原三佐の通信を聴き、竹田は口を閉じる。

(これより各自のコールサインを確認する。儂がF・リーダー、小田がF・2、竹田がF・スリー、伊部がF・4、加藤がF・5。以後通信の際は、コールサインを用いるように)

(「了解」)

それから1分とせず、目標である10階建ての直方体型の廃ビルと、その周囲の大小の廃屋群がモニターに拡大表示される。

光秋は訓練通りそれ以上の前進をやめ、ニコイチをその場に滞空させる。

——心霊モノの定番にできそうな所……—

それが光秋の第一印象である。

全体が茶色地の外壁は、映像に映る範囲でも所々大小のヒビや黒いシミ汚れがあり、いくつか穴も開いている。窓ガラスも何枚か割れ、左側の手前に階段を納めているのであろう小屋を持つ屋上のフェンスは外側に大きくひん曲がつており、転落防止の務めを果たせそうにない。周囲の建物も、似たり寄つたりの状態である。

——無整備による老朽化か？今の持ち主さんたちがなにか仕掛けたのか？……—

と、光秋がそんなことを考えた直後、突然目標のビルを囲む形で大勢の人だかりと、青地に白にラインが入った数台の放水車が現れる。隣近所の大小の廃屋を挟んで、百メートル程の距離をとっている。

——本隊か！早いな——

光秋がそう思う間に、外音スピーカーに拡声器を通した男の声が流れる。

（建物内の Normal People の諸君に告ぐ！我々は超能力者支援機構、合衆国陸軍、及び日本州警察の共同部隊である！諸君らは完全に包囲された！無駄な抵抗はせず、速やかに投降せよ！言う通りにすれば、身の安全は保障する！）

—さて、どうなるか？—

と、次の瞬間、目標のビルの中程にある割れた窓から、赤々と照る小物が落とされる。

—火炎瓶！—

光秋が直感した直後、それは目標のビルの正面に一直線に延びる道路に落ち、一瞬強く輝く。

「……………来るな！」

光秋が小声で呟いてすぐ、その爆発を合図に目標のビルの隙間という隙間から無数の発砲光が起こる。少し遅れて部隊側からも放水や銃撃が行われ、着弾した箇所から催涙弾の白煙が発生する。

（やはりこうなったか……F・リーダーよりF・5！手はず通りに！）

「了解！」

光秋は訓練通りにニコイチの速度を上げて目標へ直進し、部隊側の少し前の上空に着くと、左に半回転してビルに背を向け、そのまま落ちる様に足元の火炎瓶が落ちた道路

に降下する。着地の直前、背中の円部を一拍灯し、藤原と小田が受ける衝撃を若干軽減して足を着けると、すぐに左膝を折って機体の影に2人を下ろす。

背部に銃弾や火炎瓶を受けながらも、光秋はそれらを無視して操縦席を機外へ出し、そこにニコイチの両手を伸ばして伊部と竹田を掴み、2人も機体の影に下ろす。

4人が自動小銃の安全装置を素早く外す間に、光秋は機内へ戻り、正面モニター越しに建物同士の間を埋める様に縦長の金属製の盾が横に並び、その合間や廃屋の影から自動小銃で専用の催涙弾を放つ部隊員たちを見る。

(F・リーダーよりF・5！準備完了だ！前進！)

「了解！」

言々と光秋はニコイチを立てて振り返り、今度は雨と放水でずぶ濡れになり、所々薄つすらと狭い範囲を白煙に覆われている廃ビルを見る。

—いつかの時代の占領事件みたいだ—

前後の光景が光秋にそんな感慨を抱かせる。光秋にとって今の自分の周囲状況は、以前テレビの特集で観た大学の占領事件の光景に近いと感じるのである。が、機体正面にいくつもの銃弾を受け、体の方にも痛いとも言えない、鬱陶しい感覚を覚えながら、

「銃器がないだけ、向こうの方が少しましか」

と付け加える。

そう考える間にもニコイチは歩を進め、目標との距離を少しずつ詰めていく。それに合わせて後ろの藤原たちも後に続き、ニコイチの影から出て散発的に目標に催涙弾を撃ち込む。

さらに若干距離を詰めると、光秋は目標の方から複数の怒声を聞く。

(ESOの犬どもが、偉そうなことを！)

(怪物の支援者に下げる頭はねえ！)

と、光秋は正面右側から少々の寒気を感じ、一瞬遅れで鳴った接近警報を聴くと、視界に砲弾を捉える。

「！」

(白い犬が！目障りなんだよ！)

目標の右上辺りから怒声が響くと同時にそれはニコイチの右肩に着弾し、光秋は同じ位置に鈍い痛みを感じる。

——『犬』、か……人型であることと角は無視か……が、『白い犬』、なかなかいいな——蔑称として放たれたその言葉を、元来犬派を自負する光秋はかなり気に入る。

さらにニコイチは銃・砲弾の着弾の火花をあちこちに受けながらも、傷一つ付くことなく平然と前進を続ける。と、光秋はここで、自分の男が昂ぶっていることを自覚する。

——……所詮、僕も雄か……——

そう言葉にした光秋は、同時に自分が高揚感を抱いていることも自覚する。それらはいずれも、これ以前の3度の実戦や、普段の訓練で気分が上がった時にも体験していることなのだが、ここまではつきりと自覚したのは今回が初めてなのである。

と、藤原の声で通信が入る。

(F・リーダーより各自！どうやらNPの奴ら、Eジャマーを作動させているようだ！見つけ次第停めろ！)

「……………」

聴きながら光秋は返事も忘れてモニターを見回し、Eジャマーの発見に努める。

と、

(F・4よりF・リーダーへ！目標の右のビル内に発見！停止に向かいます！)

と、伊部の声が通信機に響く。

光秋はモニターの右下部に、機関銃を抱えて走る伊部の姿を見る。

その後、

「！」

光秋は伊部の左の腿から血が噴き出し、バランスを崩して前に倒れかけるのを見る。

—弾がかすった？—

が、間を置かず、首の左側からも血が噴き出し、伊部の体は後ろに引つ張られる様に

倒れ込む。倒れてもなお首と腿からの出血は続き、雨が打ち続ける道路に2つ、赤い小さな水溜りを作りだす。

「！」

その光景を凝視する光秋は、「コールサインで呼び合え」という藤原の命令など頭から吹き飛び、急ぎ通信機に絶叫する。

「二尉！」

が、伊部は仰向けに倒れ込んだまま何も言わず、指1本動く気配がない。

——通信機の不調だ！——

そう自分に言い聞かせた光秋は、右パネルに触れて外部スピーカーを作動させる。

「二尉！伊部二尉！大丈夫ですか!？」

声の限りに放たれたその言葉は、周囲の騒音に混ざって伊部だけでなく周りの人々にも届く。

が、肝心の伊部は少量の出血が続く体を横たえたまま、全く反応がない。

「……………」

その光景に光秋は、体中から血の気が引いていくのを感じる。

(F・2、3！F・4を救助！)

(了解！)

返事と共に小田と竹田は伊部の許に駆け寄ろうとするが、銃撃が激しく、なかなかニコイチの影から遠くに踏み出せない。

「……………」

その様子を視界の右端に見た光秋は、視線を横たわる伊部に移し、次いで攻撃を続ける正面の目標の廃ビルに向ける。

「お前たちが！…………お前たちの所為で……………貴様たちが…………貴様らが、邪魔するから……………二尉が！……………」

そう思う間に、血の気が失せて何処も冷たいはずの光秋の体に二力所だけ―腹と頭だけに、平時においても異常なほどの熱が起こり、ほんの数秒の間に熱はどんどん拡大していく。

そして、

「貴様等あー！」

臨界に達した熱は怒りとなり、絶叫という形をもって外へ放たれる。作動したままの外部スピーカーから放たれた絶叫は周囲の者全員の耳を貫き、敵・味方を問わず聴いた者全てに多少の恐怖心を呼び起こさせる。

しかし、事態はそれで終わらない。

突然、光秋の絶叫の広がりを見現するかの如く、ニコイチの肘や膝、腹部などの各関

節を覆う黒いカバーの上下の隙間から、血の様な赤い色をした燐光が漏れだす。

「……………」

赤い霧の様な質感を持つその光が輝きを増すと、ニコイチの中に納まる光秋は操縦席の上部から伸びる2本の腕に頭を固定され、自分の五感がニコイチの感覚機能と完全に同期し、10メートル大の巨人の感覚へと拡大していくのを知覚する。その感覚はいつものイメージ操作で感じられる一体感の比ではなく、自分の体とニコイチの操縦席との物理的な境界さえも曖昧にしてしまう。

その拡大感が増すに連れ、節々から放たれる燐光もその輝きを強める。

そして拡大感と光の強さが一定値を超えると、それを表現するかの如く、各関節を覆うカバーがコクピットから末梢へと押し開けられる様に開放し、その下に隠れていた光源―血の赤に輝くニコイチの骨格を露わにする。腹部の骨格は左右3つずつに分かれており、色、形共に皮膚を剥がされた腹筋を想起させる。首のカバーも下から上へと開いていくと、顎と目周りの赤い部分も強く発光し、カメラのレンズも普段の緑から血走の様な赤へと変色する。それに合わせて額の角の内側から三角形の角が突き出て延長し、元々あった下部も合わせて刀の様な長い三角形の角を形成する。

それらの変化が終わると、ニコイチは天を仰ぎ、口の様に見える頭部下部を走る線に境に、顎を持つ下側がグワツと下顎の様に大きく開き、開いた穴からも赤い光を放ち始

めたのも一瞬、

グオオオオオオオオ！

と、光秋の絶叫の声色とも違う、しかしその怒りを表すかの様な、獣の咆哮の様な叫び声を上げ、露出した各関節から放たれる赤い燐光をより一層強める。

その叫びが刺激になってか、雨が一層強く降り出す。

叫び終わるとニコイチは口を閉じ、正面の目標を凝視する。と、赤い燐光を放ちながら正面の廃ビルへと疾走する。

正面からの集中砲火をもものともせず、10秒とかからずにビルの前に着いたニコイチは、滑る様に止まると同時に、腰溜めにした右拳をビルの3階に食らわす。

ガゴォーン！という爆発の様な音を上げながら拳は建物の中を進み、進路上の壁や家具、柱や、その中の鉄骨を発泡スチロールでも壊すかの様に粉碎していく。

腕が一杯に伸び切ると素早く拳を引き戻し、ニコイチは自分の空けた穴に顔を近づけ、中を覗く。

穴のすぐ右横には、埃で薄汚れた黒い背広一式を着込み、顔が半分は隠れる様なサングラスを掛けた男が1人尻もちを着いており、ヌツと現れたニコイチと目が合うと、

(……うわああああああ！)

と、悲鳴を上げると共に右腰に提げていた拳銃を両手で持ち、ニコイチの顔に向けて

闇雲に乱射する。

が、至近距離で撃たれた弾でさえ、ニコイチには着弾の火花を爆ぜさせるだけで傷を付けることはできず、何度が引き金を引いているうちに男の拳銃は弾が尽きてしまう。理解した男は銃を殴り捨て、両腕を這わせてその場から逃げようとするが、手が空回りしてなかなか退くことができない。

「……………」

ニコイチを通してその男の様子を見る光秋は、その光景に不快感を覚え、身の内の怒りをますます強くさせる。

—こんな連中に、二尉は！…………—

その思いがニコイチの右腕を自身のその如く動かし、結局何センチと退けなかった男の体を掴むと、その手を顔の前へと運ぶ。

元来純白のニコイチの顔は、燐光に照らされて赤味を帯び、赤く変色した両目と合わせ、さつて光秋の怒りの形相をそのまま引き映す。

そんなモノと否応なしに対峙させられた男は、ニコイチの手の中で嗚咽を漏らし、サングラスの合間から大粒の涙を流しながら、

（…………た、助けてくれ…………命だけは…………命だけは…………殺さないでくれえ！）

と、震える声で命乞いをする。

が、男のその行動は、光秋の怒りを余計に増幅させる。

「……………投降勧告を蹴つたのはそつちだろう！それを自分が危なくなったら『助けてくれ』だあ？……………そんな性根の連中に、二尉が！」

最後は叫び声で放たれたその言葉は、入れっぱなしの外部スピーカーを通じて男の耳にも届く。言い終わると同時に光秋は、男を握る手に力を込める。

命乞いの返答を受けた辺りから意識が遠退き始めていた男は悲鳴一つ上げず、ズボンの足元に雨粒とも違う水滴をいくつも垂らし出す。

「……………」

それがますます光秋の怒りに拍車を掛け、右手にさらに力を込めると、光秋はニコイチ越しに男の全身の骨がミシミシと悲鳴を上げ始めるのを感じる。

その直後、

（加藤……………くん……………）

「……………」

消え入りそうな伊部の声を聞いた光秋は、右手に込めていた力を一気に抜き、ニコイチを声のした背後へと振り返らせる。

そこには右腕を小田の肩に掛けながらも、左手でヘッドフォンのマイクを口に寄せて両目をこちらに向ける伊部の姿がある。

——大丈夫……だった？……—

その理解が光秋の怒りを鎮め、腹と頭を白熱させる熱を冷やしていく。それに合わせて赤い燐光も輝きを落とし、完全に光が消えると節々のカバーが末梢からコクピットに向かって閉じていく。額の角も収縮し、両目も緑色へと戻る。同時に、拡大した知覚が自身へと戻っていく感覚を覚え、操縦席に納まる自分を自覚した光秋は、頭を固定している腕が外れるのを感じる。

自由になった頭を前に出した光秋は、モニター越しに改めて伊部の無事を確認する。

「……よかった……—」

と、突然光秋は腹に耐えがたい程のむかつきを、頭部に金属の帯で締め付けられる様な激痛を感じる。

——………外の空気！………—

その思いに反応して操作を待たずにハッチが開き、操縦席が上昇する。

「—」

機外に出るとすぐに両手でパネルを端に退け、前屈みになって正面に一気に嘔吐する。喉に逆流する物の苦酸っぱい味と焼かれる様な不快感を覚えながらも、楽になるためと吐き続け、足元を自身の中の物で汚す。

一通り出し終わると、

「ゲフツ……ゲフツ……」

と数回むせ、上体をイスの背もたれに戻す。
と、

「……………」

突然意識が遠くなり、視界が闇に覆われていく。

それを引き映すかの様にニコイチは足元の道路に尻もちを着き、その振動で目標のビルのガラスを数枚割ると、カメラの輝きが消える。両腕を力なく垂れ下げると、手の中の男はそこから抜け落ち、地面に倒れ込む。

「……………」

光秋は目を閉じて頭を俯け、その意識は、深い深い闇の淵へと沈んでいく。

「……………」

「……………」

真つ暗な意識の下、遠くで誰かが話しているのを光秋は知覚する。自分の体が地に着いておらず、ふわふわ浮かんでいる様な感じがする。

「……………寝てたのか？……………」

そう思うと、まぶたがゆつくりと開き、見覚えのない白い天井が目に入ると、

「……………！加藤！」

視界の右横から、心配そうな表情をした竹田の顔が現れる。

「……………竹田二尉？……………」

掠れ声で答えた光秋は、続けて左横に白衣姿の上杉を見る。

上杉は黙って右手を光秋の額に添えると、

「……………容体は安定してる。やっぱり突発的なもんでしたかね？」

と、医者らしい口調で言う。

「オレ、三佐たちに知らせてくるよ！」

と、竹田は光秋の視界から消える。

上杉が手を離すと、光秋は、

「……………ここは、何処だ？」

と、体を起こそうとする。が、

「……………うっ……………」

少し上体を上げただけで頭に鈍い痛みを感じ、思わず左手を当てる。

「無理すんな。もう少し寝てろ」

と、上杉は両手で光秋の肩を軽く押し、再び横にさせる。

「……………はっはっ」

「京都支部の医療棟だ。お前あれから5時間は寝てたんだけ」

「……………」

上杉にそう言われて光秋は、自分が白いベッドが両端にいくつも並んでいる部屋にいること、そのベッドの1つに寝ていること、メガネが外されていること、脚のホルスターがなくなっていること、着ていた防具一式と上着が脱がされ、上はワイシャツだけになっていること、全て閉めていたワイシャツのボタンの内、上の3つが開いていることを意識する。

「……………！」

そして、ここにいる前の出来事を思い出す。

「……………どうなったんです？あれから。作戦は？伊部二尉は無事なんですか？」

「二尉なら、この棟の女性区画にいる。首と脚に弾がかすってけっこう出血したみたいだが、命に別状はねえよ」

「……………それは、よかった！……………」

聞いた光秋は、体が少し楽になるのを感じる。

と、

「加藤、目が覚めたそうだな」

視界の外から藤原の声が響くと、上杉は光秋の左側に寄って腰を曲げ、ベッドを起ここ

すレバーを引き上げる。

光秋の上半体はベッドに押される様にして起き上がり、真正面に制服姿の藤原を、右側の手前に竹田を、その奥に小田を見る。

光秋が上杉から渡されたメガネを掛け終ると、若干の心配顔をしている藤原が話し出す。

「まず、伊部のことだが……………」

「それなら、上杉さんに聞きました。ここの女性区画にいるって。無事なんですよね？」
「ああ、なんとか。今は安静にして眠ってる……………」それと、もう1つ教えることがある」

——……………作戦のこと、か……………——

「お前が気を失った後、NPの多くはニコイチの威力を見て素直に投降した。だがな……………」

「……………」

「度胸があるのか、冷静なのか、少数の何人かは混乱に乗じて逃げた……………一網打尽というわけには、いかんかった……………」

「……………」

光秋は、先程の楽な感じが徐々に体から出て行くのを感じる。

「……………そんなに落ち込むなよお！お前だけの所為ってわけでもなんだし」

竹田が極力明るい声で言う。

「とりあえず、回復したらあの……なんと言うのか……ニコイチが暴走、した時のことを教えてくれ。上に報告する必要があるんでな」

言葉に迷いながらの小田に、光秋は、

「了解です……ところで、そのニコイチはどうなりました？」

と尋ねる。

「人目と雨を防止するためにブルーシートを被せて、あの場に監視付きで置いてある。もつとも、あの一帯は合衆国設立以前の経済混乱の影響で廃れた町で、今じゃ人通りなんてないんだがな。そっちも、治ったら取りに行ってくれ」

「……はい」

小田の答えに、光秋はそう返す。

藤原たちが出て行つた後、光秋はそれまでいた緊急病室から一般病室に移り、医療職員に手伝ってもらつて体を洗い、医療用の白い寝巻に着替える。

光秋以外誰もいない4人部屋の、右手にある大きな窓から見える曇り空を横になつて見ながら、光秋は長考に入る。

——……『結果を出す』って気合い入れてた奴が、ざまあないなあ……おまけに伊部二尉も、守れなかった！……“力”があるのに……結局……——

光秋の目頭が、どうしよもなく熱くなる。

6月19日土曜日午前8時。

病室でお粥とよく煮込まれた品々の朝食を終え、上杉の診察を受けている光秋の許に、制服姿の藤原、小田、竹田が訪れる。

「加藤、どうだ、調子は？」

竹田が部屋に入っつてすぐに言うと、光秋は、

「おかげさまで、だいぶ楽になりました」

と、昨日からの落ち込みを引きずった顔で言う。

「ほら、待機室に置きっぱなしだったカバン」

と、小田が右肩に提げていた光秋のカバンをベッドの右側に下ろす。

「ありがとうございます」

光秋が応じると、ベッドの左隣に立つ上杉が、若干光秋に目配せしながら言う。

「オレの診た感じでも、肉体的には充分回復してきてます。明日には退院できるでしょうけど……………」

「ウム。それはいいのだが……………」

光秋の正面に立つ藤原が、少し困った顔で言う。

「加藤、実はな、昨日の夜に、軍とESOの緊急会議が開かれてな……………ニコイチの、

当分の使用停止が決定された」

「……………え？」

藤原の言葉に、光秋は初め呆然とする。

「……………どういふことですか？それは」

「作戦に参加した部隊から、ニコイチの暴走に関する報告が多数寄せられてな。それを受けて上層部は、しばらく停止させて様子を見るとの結論を出した」

「……………当然と言えば、当然か……………」
「当分って、どれくらいですか？」

「儂もまだそこまでは知らん」

「僕は、どうなりますか？その間の生活保障は？」

「それは心配いらん。お前はしばらく自宅待機だそうだが、保障の方はちゃんと続く」

「ま、長期休暇だと思つてのんびりしてこいよ！」

ベッドの右側に立った竹田が、左腕を光秋の首に回して明るい声で言う。

が、光秋は視線を落とす。

「……………保障が続くとわかつただけいいが……………汚名返上の機会はなしか……………」

そう思うと、光秋は無性に伊部に会いたい衝動に駆られる。が、

―それは三佐たちが帰ったらにしよう―

と、なんとか耐える。

と、

「加藤」

と、藤原が話し出す。

「実はな、あの作戦には、富野大佐も参加されていてな。お前への伝言を預かっている。『仮にも組織の一員である以上、どのような事情にしろ、作戦行動に混乱をきたした事実』は重い！ましてや、任務中に私情で行動を起こすなど、言語道断だ！今回の様な処遇で済んだだけ感謝することだ！』」

——……………仰る通りです！——

光秋は自分なりに、今の立場やそれによつて生じる責任を理解していると自負している。だからこそ、その視線がますます落ちる。

「…………『だが、そう言われていた者の中にも、現在、かなりの権限と責任を持つ地位にまで上がっていった者もいる』」

「……………」

「『このままで終わるか、上に行く者の一人となるか。君次第だ』…………とのことだ」

「……………」

光秋は相変わらず下を向いたままだ。が、一方でこれは覚えるべきことと漠然と判断し、頭の隅に今の太助の言葉を記憶する。

「……ついにて、儂からも言わせてくれ」

藤原は続ける。

「お前が、今の様な戦い方を、つまり、ニコイチによる格闘戦を続ける気なら、猪突猛進に、闇雲に敵に突っ込んで行く様な戦い方はするな！もう一つ、お前の様な戦い方をする上で重要なのは、力の量や奇策な技よりも、速さだ！敵より速く動くことを心掛ける！……以上だ」

「……………」

この言葉も光秋の気分をすぐにどうこうさせるものでもないが、富野の言葉と同じ様な感覚を覚え、一応記憶する。

と、

「では、儂らはこれで本舎に戻る。お大事にな」

藤原が言うのと、小田と竹田がその後が続いて出口に向かう。

「ありがとうございます」

と、光秋が軽く礼をして応じると、

「……あ、そうそう！」

と、小田が足を止めて光秋の方を振り返る。

「明日退院するんなら、家に戻る前に本舎の待機室に寄ってくれ。そこで報告書用の聴

き取りするから」

「……了解です」

「退院早々悪いがな。が、その内容次第じゃ、お前の復帰も早まるかもしれんからな」

「……………」

小田はそれ以上言わず、藤原と竹田に続いて部屋を出る。出口の前で竹田が笑顔を向けてバイバイと右手を振つたのを最後に、藤原がドアをずらして閉める。

藤原たちの話声が充分遠くなるのを確認した光秋は、左に立つ上杉に顔を向ける。

「上杉さん、僕も伊部二尉にお見舞いしたいのですが、今日辺りよろしいですか？」

「……悪いが、それはできねえ」

「なぜです？」

「二尉は今日、念のための再検査があるんだよ。一通り詳しく調べるみたいだから、会う暇はねえと思うぞ」

「……………わかりました」——それなら……………しかたない……………」

そう思いながらも光秋は、どうしよもない虚しさを感じる。

夏の想い人編

11 再会、あるいは出会い

6月20日日曜日午前9時。

体調の方はすっかり回復した光秋は、唯一持っている服であるESOの緑の制服を着、右肩にカバンを斜め掛けして医療棟から本舎の藤原隊の待機室へ向かう。

小型器への録音と自筆による書き取りを行う小田一尉に、光秋はニコイチが暴走した時のことを話す。

撃たれた伊部二尉と『蜂の巣』である廃ビルを見たら抑えようのない怒りに駆られたこと、ニコイチとの今までにない一体感を感じたこと、衝動的にNPの1人を握り潰しかけたこと、無事な伊部の姿を見て、頭が冷めたこと。

「……以上が、僕のニコイチでの体験です」

「……了解だ。今の言葉、俺が責任持つてしっかり上に報告しておく!」

「……おねがいます」

その後光秋は、職員寮の自室へと向かう。

6月21日月曜日午前11時すぎ。

朝の間に連絡を受けていた光秋は、白地に黄の縦線が入った服と深緑のズボンを着た姿を藤原三佐が運転する白い軽トラックの助手席から降ろし、正面に力なく座り込むニコイチに歩み寄る。

日がまともに入らない曇り空の下、立ち入り禁止の黄色いテープをくぐると、コクピットの右側に掛けられた長梯子を上って、右肘掛に納めてあるカプセルを取り出し、左の脚ポケットに入れる。

「……」

その時イスの上に通信機が置きっぱなしになっているのが目に入り、右手で肘掛に納める。と、

「……濡れてるなあ――」

伸ばした指先が、イスに染み込んだ湿気を感じ取る。

「……………」

ふと脳裏に、雨の中、咄嗟に操縦席を上げて嘔吐した時の記憶が蘇る。そうなるに至るまでの記憶にも気が行きそうになるが、なんとか堪えて、ハッチの左端からリフトを出して下へ降りる。

地面に着くとすぐに、

「持ってきたか？」

と、着地場の近くで待っていた制服姿の藤原に訊かれ、

「はい」

と応じて、左手に持ったカプセルを見せる。

「よし」

応じた藤原は速足でニコイチの右側に向かい、両手で長梯子を持って機体から離れる。

「いいぞー」

「了解！」

応じた光秋は右手でカプセルのレバーを「入」に切り替え、先端をニコイチに向けて左の親指でボタンを押す。放たれた白光がすぐにニコイチ腰部部分に当たり、そこを基点に機体が縮小し、カプセル内へと収容される。

と、ニコイチが消えると同時に、光秋の少し前にバシヤツと音を立ててまとまった量の水が落ちる。

「あれは……」

ニコイチが消えたことで正面に現れた梯子を抱えた藤原の問いに、光秋は、「おそろく、ニコイチの操縦席に染み込んでいた水です。カプセルはニコイチとその備品しか吸収しませんから、取り残されて落ちて来たんです」

と、マニュアルから得た知識を基にして説明する。

「うーむ……」

訊くと藤原は梯子の脚先を地に着け、左手を上から下へ下げる仕草をする。と、その動きに合わせて梯子が上から段階ごとに収縮し、最後には藤原の頭頂までの長さになる。

藤原はそれを左脇に抱えて軽トラックへ向かい、光秋もカプセルを左脚ポケットに入れてそれに続く。

藤原が荷台の右前部に梯子を置くのを見た光秋は、ドアを開けて助手席に乗り込み、少し遅れて藤原が運転席に乗り込むと、席の左側からシートベルトを伸ばして締める。藤原もシートベルトを締めると、エンジンを掛けて車を右回りにUターンさせ、来た道に戻る。

「ニコイチは今まで通り、お前が管理することになる。が、基本的に使用はおろか、カプセルから出すことも禁止だ……さすがに、そうしなければ対処できない事態が生じたらお前の判断で出していいだろうがな」

最後の方は微笑んで放たれた藤原の言葉に、光秋は、

「はい……」

と、覇気のない声で応じる。

「……………」

同時に光秋は、脚ポケットに仕舞ったカプセルに意識を集中し、自分がお気に入りのおモチャを取り上げられた子供の様な、幼稚な喪失感を抱いていることを自覚する。その自覚が、一昨日に比べてだいぶ持ち直してきた心を、再び沈めさせる。

——つくづくしようもない奴だな、僕は……………」

7月1日木曜日午前10時。

白地に赤と青の短い線の模様が入った半袖のワイシャツに、薄手の薄茶色い長ズボンという服装をし、茶色いサンダルを履いた光秋は、目の定期検査のためにESO京都支部の医療棟を訪れている。

「眼圧は正常、特に異常も見当たらず」

光秋から見て左側にある机に体を向け、その上にあるカルテにボールペンを走らせながら白衣姿の上杉が言う。

「他に何か、気になることは？」

「……特にありません……ただ……」

応じた光秋は、顔を少しだけ上杉の方に近づける。

「竹田二尉から聞いたんですが、伊部二尉が転院したって、本当ですか？」

「ああ。再検査でちよつと気になる箇所が見つかったってんで、専門の病院に移ったら

しい」

上杉が顔を上げて答える。

「それ、どこかわかりますか？」

「それがよお、詳しいことはオレも知らないんだよ。お前が退院した翌日にとんとん拍子で手続きが済まされて、その日の内に移っちまってよ。その上担当してたオレたちには、どこが悪いとか、どこに移ったのか一切説明なしでよお！」

上杉は最後の方は若干怒りを込めて応じる。

「そう、ですか……………」――結局、見舞いにも行けんか……………」

ここ数日で精神面がだいぶ回復してきた光秋だが、上杉から聞いた現実が、また若干心を沈ませる。

「……………加藤お前、もしかして伊部二尉のこと……………」

「……………そういうことは……………とりあえず、目薬はいつも通りで！」

「わかったよ、3種類1本ずつな……………でも、確かに二尉はなかなかの美人だもんなあ？」

「……………ありがとうございました！」

ニヤケ声で言われた上杉の言葉を受け流した光秋は、立ち上がって座っていた丸椅子の左側に置いてある灰色のカバンを右肩に掛け、ドアに向かって振り返る。

と、

「あ、ちよつと待った！」

上杉が後ろから声を掛け、光秋は首を回して左耳を向ける。

「悪いが、この後ちよつと付き合ってくれねえか？」

「なにか？」

「いやあ、ちよつと野暮用だよ。人手が必要でさあ」

「……………まいつか、どうせ暇だしな——」わかりました」

「サンキュー！とりあえず本舎のロビーで待つてくれ。少ししたら、オレも仕事片付けて、目薬持つて行くから」

「……………わかりました」

応じた光秋は前に向き直り、ドアに向かう。

「……………涼しいなあ……………」

本舎ロビーの長椅子に座る光秋は、天井から来る冷氣に大いに心地よさを感じる。短距離とはいえ30度近い炎天下を歩いてきた身には、冷房の効いた室内に対して他の感想はない。

「……………にしても、上杉さんの用事ってなんだろう？……………」

そう思った直後、光秋の前にある正面玄関の自動ドアが開き、首に金色の円形の飾りが付いた首飾りを掛け、青と白の縦縞柄の半袖のワイシャツに青いジーパン姿の上杉

が、左肩に黒い大きな目のバッグを提げて現れる。

「悪い、待たせたな」

「いえ」

光秋が応じると、上杉は右手で光秋を手招きする。

「?……」

光秋はカバンを掛けたままの体を立たせ、上杉の許へ近づくと、

「実はよ、用つてのは、今夜合コンに付き合つて欲しいんだよ」

「ええ!」

上杉に予想外の内容を聞かされた光秋は、大きな声を上げて動揺する。

「……なんで僕なんです?」

「いや、オレの周りの人間にさ、『すごい新入りが来た』つてお前のこと紹介したら、『今度の合コンに呼んで』つて頼まれてさあ」

「いや、しかし……」

「なんだよ?」

「……僕はまだ未成年ですし、さすがにそういうことは……」

「あつそう。じゃあ今回分の目薬いらなのな?」

「えー！」

「冗談だよ！ほれ」

笑いながら上杉はバッグに右手を入れ、白い紙袋に入った目薬を差し出す。

「まあ、とにかく来てみるよ。かわいい子いっぱいいるし、いい気分転換になるだろうし」

「……いや、しかしやっぱり………」

返事に困りながら光秋は目薬の袋を受け取り、それを自分のカバンに仕舞う。

「ホント、お前って真面目なあ」

「……それしか取り柄がなくて……」

「ふーん。まあ、無理して来いとは言わねえし、まだ時間もあるしな。とりあえず、これからちよつと買い物に行くから、それには付き合ってくれよ」

「……それくらいなら——」わかりました。ただ行く前に、ちよつと寮に寄らせてください。目薬を仕舞って行きたいので」

「わかった。じゃあ、正門前で待ち合わせだ」

「はい」

職員寮の自室の冷蔵庫に目薬を仕舞った光秋は、速足で京都支部へと戻る。支部の白い塀を右手にして進み、視界に正門を捉える。

と、

「よう、加藤！」

と、赤い半袖のワイシャツに茶色い半ズボンを履いた竹田二尉が、塀の影から上杉を従えて現れ、右手を軽く上げる。

「竹田二尉？なぜここに？」

「ん？こいつ、オレに今日の合コンのこと黙っててよ！」

「……」

竹田は左手の親指を横に向け、左隣でバツの悪い顔をする上杉を指す。

「もつとも、オレの情報網を甘く見ちゃイケねえよなあ？上杉い？」

「……敵いませんよ、竹田二尉には……」

向けられた竹田の皮肉を込めた笑みに、上杉は苦笑いで答える。

と、竹田は光秋の方に向き直る。

「というわけで、オレもお前らの買い物に同行する」

「仕事は？」

光秋はふと浮かんだ疑問を口にする。

『蜂の巣』作戦の時の後始末に休日返上したから、今日はその振替だよ」

「……そうですか」

竹田が何の気なしに言った「蜂の巣」という単語に、光秋は少し気落ちするが、すぐに持ち直す。

「さ、行こう行こう！」

と、竹田は機嫌よく光秋の方に歩き出す。

「……」

「……………」

その後を気落ちした上杉と、無表情の光秋が続く。

竹田一行は、支部近くの十字路を右折して緑の天井を持つアーケードの下を東進し、鴨川に掛かる橋を渡る。

しばらく進むと、不意に、

「おーい、ジャップ！」

と言う声を聞く。

「……………」

声に聞き覚えのある光秋は、立ち止まり、辺りを見回す。

と、

「こつちだ！こつち！」

「……………」

光秋が左に目をやると、白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンを履いた金髪の男が、向かいの歩道から右手を振っている。

「タツカー中尉！」

光秋が応じると、タツカーは車道を横切って3人の許へ駆け寄る。

「こんな所で奇遇だなあ」

「中尉こそ、仕事の方は？」

「俺は今日非番だよ。ちよつとこの辺観光してたら、お前が見えてよ」

そこで上杉が、光秋の左肩を叩く。

「加藤、こちらさんは？」

「ああ、合空軍でパイロットをしている、タツカー中尉です。中尉、こちらESO専属医の上杉さんです」

「どうも、アレク・タツカーだ」

「上杉勇児です」

言いながら、2人は互いの右手を差し出して握手をする。

「……？」

その時光秋は、タツカーが上杉の首飾りを一見するのを見る。

と、光秋の右側に立つ竹田が、

「挨拶なんてしないでいいんだよ！」

と、ムツとした顔で呟く。

「ところでお前ら、これからどこ行くんだ？」

「お前にや関係ねえだろう」

タツカーの問いに、竹田が棘のある声で応じる。

「俺はジャップに訊いたんだが？」

と、タツカーも若干怒気を含んだ声で応じる。

と、

「――」

竹田がタツカーを凝視し、タツカーも竹田の目を直視する。

「……………」

2人の睨み合いに、光秋と上杉は東の間恐怖するが、すぐに光秋はタツカーに、上杉は竹田に駆け寄り、

「中尉！僕たちこれから買い物に行くんです！一緒にどうですか？」

「二尉！まずは服！服屋行きましょ！ね！」

と、何とか2人をなだめる。

――どうなることか……………――

と、光秋はその様子に不安に駆られる。

タッカーを加えた一行は、しばらく東進して、中規模の服屋に入る。

4人ともバラバラになって店内を見て回る中、買う気も見えない気もなくうろついている光秋の許に、上杉が近寄る。

「加藤、悪かったな。気分転換のはずが、余計な気遣わせて……」

「いえ……ところで、今夜の飲み会、僕なんかより竹田二尉を呼んだ方がよかつたんじゃ？　なんで黙ってたんです？」

「いや、二尉は普段の付き合いならいいんだが、酒が入ると、なあ……」

「ああ——そういうものか？……」

上杉の言い様に、光秋はなんとなく納得する。

午後0時。

竹田とタッカーの衝突もなく、無事に服屋での買い物を済ませた一行は、その近くのレストランに入り、露天席の白い円テーブルを囲んで昼食をとる。

「ところでタッカー中尉って、4月にあったニコイチの飛行実験に参加した、あの？」

光秋の右側に座る上杉が、ミートソースを食べながら尋ねる。

「ああ。途中でサン教に割り込まれたけどなあ。こいつと一緒に片付けてやったよ！」

光秋の左側に座るタッカーが、右手にホットドッグを持ちながら光秋を左手で指さし

て言う。

「そんな時ついでに、お前もやられてりやあな！」

光秋の向かいに座る竹田が、右手のスプーンでカレーを口に運びながらタツカーに挑発的な言葉を掛ける。

「何？」

タツカーが竹田の方を睨みつけると、右手のフォークにミートソースを巻いていた光秋が、

「ところで、中尉って日本語が堪能ですね？」

と、すぐに話しを逸らすことも兼ねて、親しい関係になった時から疑問に思っていたことを言う。

「あれ、話さなかったっけ？俺の母親は、日本育ちの米日ハーフなんだよ」

「初耳です」

「そうか？ガキの頃からよく日本語で昔話とか聞かせてもらったり、日本の実家に行けば爺ちゃんから日本語で色々教えてもらったりしたからなあ……極東方面に配属されてしばらく経つのもあるが、俺の場合は基礎ができてたんだろうなあ……」

「……ちよつと待っててくださいよ？」

上杉が加わる。

「母親の代でハーフってことは、中尉の爺さんか婆さんの代で……」

「ああ、俺の爺ちゃんが日本人だ」

「てことは、二次大戦が終わった頃に2人とも結婚されてるんですか?」

「終戦後間もなく日本で結婚したって、母親が婆ちゃんから聞いた話を聞いたな」

「……まだ年寄りの中には『敵国アメリカ』のイメージが強い時期に結婚かあ……愛の力っすかね?」

「さあな?」

——『愛の力』、か………柄じゃない!——

光秋は束の間感慨にふけるが、すぐにそれを頭の隅に退ける。

「もつとも、戦闘機乗りは父親の血筋なんだがな——」

と、タッカーが続けようとした直後、バァーン!という耳を貫く程の爆音が辺り一帯に響き渡る。

「「「!」」」」

4人ともすぐに反応し、首を巡らして爆音の源を探す。

と、

「……あれじゃないですか?」

光秋が右後ろにある10階程の高層ビルの上部を右手で指す。指の先には、ちょうど

光秋たちの方に向かって壁に大穴が空いている。

「あれって……」

竹田が椅子から腰を浮かせて呟く。

「……ESOの研究施設じゃねえか？」

タツカーが引き継ぐ。

「ええ、そうです！オレも何度か入ったことがあります！」

上杉が肯定する。

「……超能力の暴走か？」

——暴走!?!——

竹田の言葉に、光秋が若干背筋を寒くした、次の瞬間、

「!」

大穴の上の方に点程の影を見ると、それはみるみる大きくなり、光秋に迫る。

「……な!」

光秋は足元に置いてあるカバンも忘れ、思わず椅子から立ち上がり、そのまま後ずさろうとする。

が、3歩と退かない内に影は光秋に達する。

「!」

その際に生じた衝撃で、光秋は後ろに押されて尻もちを着く。

同時に周囲の固定されていない物は全て飛ばされ、竹田たちもテーブルと一緒に光秋の左に１メートル強程吹っ飛ぶ。

「……………痛つつう……………」—なんとか、生きてる？…………—

目をつむっている光秋は、尻の強打した辺りを左手で摩る。

と、左側から、

「ジャップ！無事か？」

と、タツカーの声が聞こえ、ふと目を開ける。

と、

「……………！」

光秋は目の前に、白い院内用の寝巻を着た黒い長髪に黒色の肌をした女が、地面から数センチ浮かんで自分を見下ろしているのを見る。

いつもは後ろに１本に結ってある髪が解けて広がっている点を除けば、それは、

——…伊部……二尉？…………—

と、

「アヤあ！」

「アヤあ！」

「?……」

光秋は大穴の開いた建物の方から、白衣を着た2人の男たちが叫びながらこちらに駆け寄って来るのを見る。

と、

「!……」

女は光秋の肩に両手を掛けて寄り添い、白衣の男たちを一見すると、光秋に怯えた表情を向ける。

「?……?……ア……ヤ?……」

光秋には、そう眩くのが精一杯である。

1 2 アヤと光秋

「アヤ」と呼ばれた黒色の女が放してくれないことと、光秋自身がESOの一員であることから、光秋は女を左側に寄り付けたまま共に白衣の男たちに大穴の空いた建物に連れられる。竹田二尉たちも各々の身分証を示して同行する。

白衣たちが携帯電話で連絡を取りながら、エレベーターで8階に着いた光秋一行は、例の大穴が空いた広めの部屋に通され、それぞれ横一列に並べられたパイプイスに座る。一番右に座った光秋の左手には、黒色の女が体を浮かせながらぴったり付いている。

一行の正面には、黒い髭を豊かに蓄え、メガネを掛けた頭の薄い白衣の男が、肘掛の付いた立派な赤茶の椅子に薄茶色のスーツのズボンと茶色い皮靴を履いた脚を組んで座っている。両脇には白衣姿の男を2人立たせて従えている。

「まさかアヤの行った先に、ESOの関係者が3人もいるとは思わなかったよ」
髭が言う。

「念のため言っておくが、我々が行っていることは上位機密に指定されている。君らも立场上、今回のことは黙っておいてくれ」

言いながら、メガネ越しのその目には釘の先端の様な鋭さがある。

「で？伊部二尉に何をしたんです？戸松教授とまつ」

光秋の左隣に座る上杉が、鋭い目を向け返して言う。

「やっぱり伊部二尉なのか？」

と、光秋が思いながら女と顔を合わせる傍ら、

「なぜ私の名を？」

と、髭が冷静に問い返す。

「オレたちESOの医者の間じゃ、あんたはちよつとした有名人だ。『腕は確かだが、暗い噂が絶えない人』ってことだな」

「……なるほど」

上杉の返答に、教授は呟く様に言う。

「……ところで、いったい何があつたんです？」

とうとう耐え切れなくなった光秋が口を開く。

「彼女のことを伊部二尉と仰りますが、この変わり様は？……」

言いながら光秋は、自分の左肩に両手を添えて床から数センチ宙に浮いている女に目やる。

「伊部法子二尉が先日負傷したことは、君らも彼女の知り合いならば知っているな？」

教授が言う。

「その際に受けた精密検査で、彼女には潜在的な超能力者の素質があることが判明した。政府と二尉本人に許可を取った上で、我々は脳にあるその中枢を電氣的に刺激して、能力の人工的な開花を図る実験を行った」

「……つまり、今ここにいる伊部は、その失敗作だど？」

上杉の左隣に座る竹田が、怒気を含んだ声で言う。

「！」

その明文文化された言葉が、光秋に教授の首を絞めたがる衝動を起こさせる。
が、

「……………」

自身の精一杯の自制心と、傍らの伊部の顔をした女に醜いところを見せたくないという自尊心が、なんとか光秋を思い留まらせる。

「いや、失敗ではない。現に彼女は、御覧の通りレベル7セブン以上のサイコキネシスに目覚めた……だが、実験を行った昨日の昼から、ずっとこの調子だ……」

言いながら教授は、女に目を向ける。

「どういふことだ？」

一番左に座るタツカー中尉の言葉に、上杉が右手を女の頭頂に添える。

「……………いつは……………」

「?……………」

光秋は上杉の言葉に意識を集中させる。

「超能力中枢を中心に……………二尉のとは違うネットワークが形成されてる?」

「どういふことですか?」

光秋が問う。

「ん……………要するに、『伊部法子』とは別の人格になってる……………て言えばいいのかなあ?」

「……………なるほど。君はサイコメトラーか。おかげで、我々の仮説は立証されたわけだ」

しどろもどろな上杉の説明に、教授が応じる。

「我々も、君の診立てと同じ様な仮説を立てた。一種の多重人格だな。故に我々は、今日の前にいる彼女を『アヤ』と呼んでいる」

『アヤ』?」

光秋が言う。

「人格が、中身が変わるということは、その人物のアイデンティティーも変わる。故に、名も変えた方がいいということだ。違うかね?」

—それは!……………そう、かもしれない……………—

「我々の予想では、彼女は伊部二尉のネットワークを利用して知識の一部を取り出して

いる。現に誕生してまだ一日と経っていないにも関わらず、すでに生後6カ月程の知識を得ている。故に、彼女に知的刺激を与えることによって、最終的には『伊部法子』の人格と統合させることができると考えている」

「ふーん？そんな時本人にぶっ飛ばされなさいいな！」

竹田が教授に鋭い視線を向ける。

「まったくくだ！」

タツカーが続く。

「……彼女はあくまでも、自分の意志で我々に協力したのだ！それに、君らも他人事ひとごとの様に言えることはできませんよ。実験を許可したのは政府だが、主導は合衆国陸軍が行っているのだから！」

その時だけは教授は、竹田とタツカーの言葉に対する不快感を露わにして言う。

「……………」

そして「主導は合衆国陸軍」という言葉には、2人の口を閉ざすだけの「力」があった。

その横で光秋は、

「……………」なるほど、中尉は合軍人で、二尉は軍の下部組織でもあるESOの一員だから、これ以上は言えないんだ……………にしても、なんで軍がこんな実験を……………そうか！エス

パーは強力な戦力になるけど、高レベルは数が少ない。自然に出てくるのを待てないから、いつそ！……………」

と、事態を整理し、納得する。

と、

「……………ところで君、確か、加藤三曹だったね？」

と、教授が光秋を見ながら言う。

「はい？」

光秋が応じると、教授は、

「こんな若者が、01のテストをなあ……………」

と、小声で呟きながら立ち上がり、光秋の方へ歩み寄る。

「君、どうやらアヤに気に入られているようだ」

「……………そうなんですか？」

応じる光秋の後ろでは、教授が竹田とタツカーを黙らせた辺りから、「アヤ」と呼ばれている女が、

「きゃっ！きゃっ！」

と、声を出して喜びながら光秋の髪の毛を引っ張る遊びに興じている。

「痛い、痛いよ！やめて……………」

今まではなんとか耐えていた光秋だが、いよいよ限界になったので女の手を離させてやめさせる。

と、教授は光秋の正面に立ち、膝を折って目線を合わせる。

「どうだろう、彼女が回復するまで、しばらく我々を手伝ってはくれないか？もちろん、礼はするよ」

「いや、しかし……………」

光秋は言葉に詰まる。

「……………我々が観る限り、アヤがここまで他人と一緒にいるのは初めてのことなんだが嫌かね？」

「いや……………手伝うといっても、実質子守りの様なことでしょうか？僕はそういうのは……………」

「……………そうかあ。では仕方がない。アヤ……………」

と、教授は右手をアヤに伸ばす。

直後、

「ヤア！」

アヤの叫びと共に教授は後ろへと飛ばされ、その先にある壁に大の字に開いた体を叩き付けられる。

「「「……………」」」

光秋たち4人は、その光景に口を開けて啞然とする。

「1日の観察で、我々にはつきり解かったことが1つあつてね……」

壁に体をもたれ掛けて尻もちをつく教授が言う。

「アヤは、極度の人見知りの様で、我々に慣れん様なのだ……加藤君、頼むよ！今のこれを含めて、もう7回はこんな目に遭っている！これ以上やられると、流石に体が……………」

「……………」

教授が言う左横で、教授の部下らしき2人の白衣も光秋に助けを求める視線を寄こす。

「……………弱つたなあ……………」

と思つたものの、直後、

「……………わかりました、引き受けます」

と、光秋ははつきりと言う。

「ジャップ？」「加藤？」「……………」

タツカーと竹田が驚きの声を上げ、上杉も視線を寄こす中で、光秋の中には一つの思いが浮かんでいる。

——……伊部二尉を守れなかったツケを、払う！——

上杉を残して部屋を出た光秋たちは、白衣たちに1階下にある応接室に通され、そこで待つようにいわれる。

『『こうしゅう』。わかる？』『『こうしゅう』』

赤い長ソファアの左側に座る光秋は、右隣に光秋の左腕を抱いて座るアヤの目を真つ直ぐに見て、右手で自分の胸を指しながら、自分の名前を教える。一方で、

——夜の飲み会は、断らんくちやな——
とも考える。

「……お前の名前じゃ、言葉初心者には言い辛いんじゃないのか？」

ガラス製の脚の短いテーブルを挟んで光秋の正面に座るタツカーが言う。

「とは言っても、関わる機会が増えるのは僕ですからね。名前を覚えてもらわないことには……それに……」

応じながら光秋は、アヤの口に目をやる。

アヤは口を大儀そうに動かしながら、

「(ハ)……お……しゅ……、お……しゅ……」

と、光秋の発音を真似ようと一生懸命声を出している。

「ほら、だんだん言える様になってきたじゃないですか」

光秋は、アヤの頭を右手の先で軽く撫でながら言う。
と、

「お待たせです」

上杉が光秋の左側にあるドアを押して入ってくる。

「わざわざ残って、なにやってたんだよ？」

光秋の左前に座る竹田が問う。

「なんでもかんでも加藤にやらせるつてのは、限界がありますからね。こつちが指名した女性も参加させるよう話付けてきたんですよ」

——女？……………あ——「風呂とか、着替えとかのことですか？」

「その通り」

光秋の問いに、上杉はそう応じる。

「……………ひよつとしてそれ、横尾中尉よしおか？」

「ええ」

竹田の問いに、上杉はすぐに答える。

「……………ヨコー中尉って誰です？」

光秋は竹田と上杉の方を向いて尋ねる。

「伊部の士官学校時代の同期だよ。今でも親しい仲みたいだし、確かに適任かもな」

——……あの人か！——

竹田の返事に、光秋は4月末のニコイチの飛行実験の時に見掛けた、伊部と並んで富野大佐を呼びに来た短い黒髪の女性合軍兵士の顔を思い出す。

——そういえばその少し後の日に、伊部二尉が話してくれたつけ。自分はESO関係の学科で、中尉は……どこだったか忘れたが、とにかく違う学科の人でよく話す人がいたって……

思いながら光秋は、アヤの顔に視線を移す。

——……黒目が大きいんだな……

と、思った直後、

「……コーシユ……」

と、アヤの口から今までで一番はつきりとした光秋の名前が発音される。

「……そう、コーシユ……」

光秋はぎこちなく微笑みながら、右手でアヤの頭を撫でる。

7月2日金曜日午前8時。

白地に赤と緑の縦縞が入った半袖のワイシャツに緑の長ズボンを着、サンダルを履いた光秋は、昨日の研究所の職員が運転する黒い公共車の後部右口から降りると、左の席に置いてある赤いカバンを左肩に、いつも使う灰色のカバンを右肩に提げ、振り返つ

て正面にある建物に向かって歩き出す。朝日に照らされた森林を背景に、太陽光発電機になつてゐる後ろへと伸びる斜め屋根に、白一色の外壁というシンプルな造りである。

その横に2つに並ぶ白いドアの内、光秋から見て右側のドアが勢いよく開くと、薄めのピンク色のワンピースを着たアヤが、長い黒髪を揺らしながら飛び出て光秋に抱きつく。

「…………ちよつと！アヤ…………」

両手を首に回され、着替えや日用品が入った両肩のカバンに加えてアヤの体重も引き受けることになつた光秋は、倒れまいと下体全体に意識を集中し、なんとかバランスを取る。

「コーシュー…コーシュー！」

満面の笑みを浮かべるアヤに、光秋は微笑みながら、

「こういう時、服装でも褒めてあげるものかな？」「その服、けっこう似合うよ」と応じる。

と、

「…………」

光秋は近づいてくるエンジン音を聞き、振り返ると、黒い公共車がUターンして右から左へ引き返すのと入れ替わる様に、左側から来た緑の軽乗用車が光秋とアヤの前に停

車する。右の運転席のドアが開くと、白い半袖のワイシャツに青い長いスカートを着た短めの黒髪の女性が現れる。

「横尾富美子中尉、ですね？」

光秋が問う。

「ええ。あなたが、加藤光秋君？法子からよく聞いてたけど……」

横尾中尉が、光秋の背中越しに顔を出すアヤに目を向けながら言う。

「二尉から？」

「ええ、『可愛い後輩がきた』って……」

言う横尾は、顔を少し俯ける。

「……………そう、ですか…………」

光秋は応じると、アヤに向き直ってその顔を注視する。

「……………やめとけ光秋！ここにいるのは、僕が知ってる伊部法子じゃない！アヤという…………昨日初めて会った、まだよくわからない人だ！——」

自分に言い聞かせた光秋は、再び横尾の方に振り向き、

「とりあえず、荷物片付けさせてもらいます」

と言って、アヤが浮かんで光秋の首を軸に右後ろへと流れるのを見ながら、建物の左のドアへ向かう。

荷物を片付け終えた光秋は、横尾と協力してアヤの指導に専念する。服の着替え方、用の足し方、食事のし方、歯の磨き方、入浴のし方など、与えられる知識をアヤは順調に、教えられた通りにこなし、覚えていく。

—もう少し手間が掛かるかと思ったが、やっぱり精神面はどうでも、肉体面は一度やったことのやり直しだからかね？—

指導の途中に光秋は、そんなことを考えてみる。

午後8時。

「じゃあ、私は今日はこれで」

「ありがとうございます」

光秋が軽く礼をして応じると、横尾は車の窓を閉め、車をUターンさせて夜の闇の中へ消えて行く。

アヤの部屋のドアを開けてそれを見送る光秋は、自分の左肩に両手を添えて浮かぶピンクチェックの上が半袖、下が長ズボンのパジャマを着たアヤに目をやる。

—とりあえず、今日ので生理面の自分のことはできるようになったんだ。まずこれを覚えてくれないと、生活もろくに成り立たんからなあ—

今日の成果をそのように振り返ると、ふと右手を伸ばしてアヤの頭を撫でる。？

13 穏やかな日々

7月3日土曜日午前7時。

食事等を済ませ、白い半袖のＴシャツと緑の長ズボンを着た光秋は、アヤの部屋の前に立ってドアを2回ノックする。

「アヤ、光秋だ。入るぞ」

言うとき光秋は、左手をズボンの左腰のポケットに伸ばして鍵を取り出し、開錠して丸ノブを回し、ドアを開ける。

玄関でサンダルを脱いだ光秋は、中に入ってすぐ左に風呂場がある廊下を進むと、居間との仕切りであるピンク色のカーテンに左手を掛ける。

「アヤ、開けるよ」

と言ってカーテンを左にずらす。

と、

「！」

驚いたのも一瞬、光秋はすぐにカーテンを閉め直す。

―油断した！そうだよ、充分考えられることだった――「ごめんアヤ。なんにも言わな

かったからさあ……」

カーテンに背を向け、右手を頭に置いた光秋は、軽い自省を覚えながら言う。

が、今見た上半身裸のアヤの背中、その綺麗な黒い肌は、なかなか脳裏から離れない。

——……羞恥心も覚え直し、か……

と、背後のカーテンが開く音を聞き、光秋は振り返る。目の前にはピンクのワンピースを着たアヤが、顔を少し上げて、不思議そうな表情をして光秋のすぐ前に立っている。

「……コーシユー？」

「ああ、いや……ところで、朝ご飯なにがいい？」

「パン！」

「わかった、ちよつと待ってて」

元氣な注文に応じた光秋は、朝食を作るために自室へ向かう。

アヤがトーストと牛乳、光秋が慣れない手で剥いたリングの朝食を終えると、光秋は戸松教授の作成した指導の説明書に従って、アヤに文字の読み書きを教え始める。

「これが『あ』だ。いいかい、『あ』」

アヤの部屋の中央にある脚の短い丸テーブルに画用紙を置き、その中程に黒いクレヨンで大きく「あ」と書きながら、光秋は左側に座るアヤに説明する。

「……………ああ…………」

「そう、『あ』。書いてみて」

そうやって光秋はアヤにクレヨンを渡し、自分が書いた字の下辺りを右の人差し指で指す。

右手でしっかりとクレヨンを持つアヤは、若干先端が震えながらも、見事に大きく「あ」と書いてみせる。

「あー」

「そう、これが『あ』——初めてなのに、かなり上手い！説明には、『何らかの形で知的刺激を与えれば、そこから連鎖的に知能が回復するはず』とあったが？……」

光秋がそう思う間に、アヤは、

「いー……うー……えー……おー」

と、紙の左側の空白に自分から書いた字を読み上げる。

「……そうーそうだよアヤー——こういうことか——」

光秋は微笑みながら右手でアヤの頭を撫で、アヤも笑顔を返す。

30分程でひらがなを一通り終えると、光秋とアヤは気分転換と運動を兼ねて小屋の近所の草原の散歩に出る。

——この周辺も、合衆国政府の直轄地だと教授から聞いた。自然保護を名目に、こういう土地が散在していることも……なるほど、見事なもんだ——

強い日差しの下、迷彩柄の小さい丸帽子を被った光秋は、周囲の開かれた草原と、ここからは青く見える遠くの山々を見ながら思う。

と、自分の左肩に両手を添えて浮かびながら進む、薄ピンクのツバの大きい帽子を被ったアヤを見る。

「アヤ、ちゃんと歩いて進みな。そうしないと『散歩』にならない」

「はい」

素直に応じたアヤは、ゆっくりと地面に両足を着け、ピンクのサンダルを履いた足で歩きだす。ただ両手は、光秋の肩に添えたままである。

—にしても、なにからなにまでピンク尽くしかあ……研究所の人たちが用意したと聞いたが……似合ってるからいいものの、ワンパターンというか……—

目の前のアヤの服装と部屋の布物全般の記憶から、光秋はそんなことを思う。

しばらく歩くと、2人の前に森林が広がり、その内の根元が座り易くなっている樹の下に腰を下ろす。

「かなり歩いたなあ」

光秋は、日陰の中でそよ風の涼しさを感じながら言う。

「ちよつと疲れたあ」

左隣に座るアヤが、脚を伸ばしながら言う。

「少し疲れるくらいが、案外ちょうどいいんだよ。その分、お昼も美味^{うま}くなる」
「ホント?」

「君の疲れ次第」

「じゃあアヤ、帰り走っていく!」

「いやいや、そりや疲れすぎだよ。夏はあんまり、明るい内は騒がない方がいい」
「ナ、ツ?」

「こんなふうに、暑い季節のことを『夏』っていうんだよ」

「暑い嫌い」

「そういうわけにもいかないよ。暑いからこそ、いいこともあるんだし」

「どんな?」

「例えば……アヤや僕が毎日食べてる米。あれは、今暑い時に、どんどん成長して、夏の次の季節、『秋』には、僕らが食べる様なあんな形になるんだ。もし今涼しかったりしたら、米がなくなっちゃうかもしれない」

「それはヤツ!……じゃあ、暑い我慢する」

「……にしても、アヤに会えて、僕はよかったかもしれない」

「どうして?」

「こんな所に来られたからだよ。ここは、全部が全部じゃないが、故郷^{くわに}を思い出す」

「ク、ニ？」

「『ふるさと』とも言うな。自分が生まれた場所だよ」

「自分が、生まれた場所……………」

言うときアヤは、少し顔を俯ける。

「……………変なこと思わせちゃったかな？」

そう感じた光秋は、アヤの気を取り直すことも兼ねて話題を変える。

「なにより、こんな広くて静かな所に来ると、世界について色々考えたくなる」

「セカイ？」

アヤが顔を上げて言う。

「君や僕、他にもいろんなモノがある、目の前に広がっているもの、とでも言えばいいのかな？人によつては、『宇宙』って言う人もいるけど」

「ウチユ……………」

「まあとにかく、今見てる目の前の景色とか、どこからか聞こえてくる鳥や虫の声、風の音とか、肌で感じる風の涼しさ、日の光の暑さとか、草や樹の独特の匂いとか、そういった、体で得られた情報から、人は、いや、生き物は、世界を認識するんだろう。それを僕は、『知感』^{ちかん}って呼んでるんだけどね」

「ふーん……………」

光秋が目を横にやると、アヤは難しそうな顔をしている。

「……ちよつと、難しすぎたかな？」

「うん……」

「ま、今すぐ全部解からなくてもいいよ。ただ、とりあえず聞くだけ聞いておいて欲しい。なにかの役に立つかもしれないから」

「……うん」

「それじゃ。さつき、世界を、色んなことを感じるのが知感だつて言つたけど、でも、1人が一度に知感できることなんて、世界のほんの一部なんだろう」

「……どういうこと？」

「例えば僕らは、今日の前の草原や山は見ることができる。でも、こうしてる間にも、僕らの見えない所では、すごく悲しんでる人がいるかもしれない。逆に、すごく幸せを感じてる人がいるかもしれない。でも僕らはそれを知らない。いわゆる、『知感の限界』だね」

「……なんか、大変そう」

「だな。でもだからこそ、こうやって外に出て、いろんなものを感じたり、他の人と話し合つて、足りない知感を補い合わなくちゃいけないかもしれない。それに、世界は広い……と、偉そうなことを言つてるけど、実際の僕は、人付き合いが苦手な質質^{たち}だ」

「ふーん？」

と、アヤが返事をした直後、

「！コーシュー！」

と、アヤは左腕を見ながら驚いた声を上げる。

「ん？」

光秋が右手でアヤの腕を引いて見てみると、手首の近くに赤い腫れを見つける。

「ああ、こりや蚊だな。そうだ、そういう季節だった」

「カあ？アヤ、病気？」

「いや、蚊っていう虫がいて、それに刺されるとこうなるんだ。小屋に薬があつたから、それ塗れば治るよ」

「……なんかかゆい！」

「じゃあ速く帰って塗ろう。ただかゆいからって、無暗にかかない方がいい。かえって酷くなる」

「んーん！」

アヤがそう言ったのを最後に、2人は立ち上がって前に歩み出す。

小屋に戻った光秋とアヤは、薬塗りを済ませて、光秋手製のチャーハンの昼食をとり、文字教育を再開する。

午後1時から始めて30分程でカタカナを一通り終えると、簡単な漢字の書き取りに入る。

休憩を挟みながら4時まで書き取りを行うと、光秋は一息ついて、夕食の調理を行う。大皿一枚に盛った野菜炒めと、作り置きのご飯とみそ汁の夕食をアヤの部屋で2人で食べると、光秋は食器等の片付けを行い、アヤは風呂に入る。

片付けを終えた光秋がアヤの部屋を訪ねると、ピンクチェックのパジャマに着替えたアヤが、居間の床に寝むような目をこすって座っている。

「眠いのか？」

光秋が尋ねる。

「……うん」

アヤが答えると、光秋はズボンの左のポケットから携帯電話を取り出し、画面を開いて時計を見る。

「7時ちよい前……ちよつと頑張らせすぎたかな？……散歩かな？——「眠いんなら、無理せず寝た方がいいぞ」

「でも……」

「やりたいことがあるなら、今日寝て、明日ゆっくりやればいいよ」

「……じゃあコーシユ、アヤが寝るまで……いて！」

「ああ」

光秋が応じると、アヤは廊下側に立つ光秋には右側にある柵付きのベッドに入り、ピンのタオルケットを掛けて玄関側を頭にして横になる。

光秋がベッドのそばに腰を下ろすと、1分とせずにアヤは寝入ってしまう。

「おやすみ、アヤ……………」

アヤの額を軽く撫でながら、光秋は小さな声で言う。

7月4日日曜日午前9時。

小屋の前に停まった黒い公用車の後部右口から現れた白衣姿の戸松教授を、灰色の半袖に茶色の長ズボンを着た光秋がアヤの部屋の前に出迎える。

「おはようございます」

「おはよう。早速だが、アヤの様子は？」

「体調はよさそうです。今朝もちゃんと食べてましたし……能力や人格の方は、まだはつきりとした変化は……」

「いや、そういうことではなくて……」

「……………ああ。なるほど——」定期検査のことは今朝の内に知らせましたし、機嫌もいいです。初めてお会いした時の様なことには、なり難いかと」

「……………そうか……………」

戸松が浮かぬ顔で応じると、光秋は右に退いて左手でドアを指し、教授とその後ろの黒い医療カバンを持った白衣2人を部屋に通す。

「また壁に叩き付けられるのを恐れてるか。わからんでもない、が……」

白衣たちに続いて部屋に入った光秋は、その背中たちに理解を示しながらも、煮え切らない自分を自覚する。

「アヤ、おはよう。久しぶりだね」

「おはようございませ……」

戸松の挨拶に、居間に腰下ろしたアヤが光秋から教えられた通りに応じると、教授は手を振って2人の白衣にカバンの中のノートパソコンと帯状の機器を設置させる。

パソコンをテーブルの上に、それと数本の線で繋がっている帯状の機器をアヤの額に設置すると、2人の白衣はそれぞれの電源を入れ、1分程して戸松を含む3人は、パソコンの画面を注意深く眺め始める。

「脳波の測定か？」

居間の手前に立ってその光景を見る光秋は、教授たちの行動をそう推測する。

と、近くで車のエンジン音とその停車音が聞こえたかと思うと、

「加藤三曹ですか？」

と、後ろから呼び掛けられる。

「はい？」

言いながら光秋は振り向き、玄関先に灰色のツナギと帽子を着た男性の姿を認める。

「補充品の確認と、サインお願いします」

—ああ、そうだった！—「はい」

応じながら光秋はツナギの許に歩み寄って、グリップボードに留められた「水」、「洗剤」などの品名と量が書かれた補充品の一覧表に目を通し、右手でボードに付いているボールペンを持つて表の右下に「加藤 光秋」とサインをする。

ボードを受け取ったツナギが表の確認をする間に、光秋はツナギの合間に目をやり、戸松たちの公用車の後ろに停まるコンテナ状の荷台を持つ2台のトラックと、そこから多数の段ボール箱を運び出すツナギたちの姿を見る。

玄関先に着いたツナギの1人が、

「これ、どちらに？」

と、右側から両手で抱えた段ボールを顎で指しながら尋ねると、光秋は、

「玄関先に並べておいてください。あとはこっちでやります」

と返す。と、今度は左から、

「貯水タンクはどこです？」

と、両手に白い大容量のポリタンクを持ったツナギに尋ねられると、光秋は外に出て

小屋の左端に移動し、右手を小屋の裏側へ伸ばし、

「この裏の、白い丸いやつです」

と応じる。

ツナギが一礼して裏に向かうのを見送ると、光秋は振り返って作業が続くトラックを見る。

―急造工事で水道が引けず、僕が運転できなきや町に買い物にも行けず、結局ESOの補給網を利用するしかない、か……この人たちには、ここで何が行われているか知らされてないだろうし、忙しくてその好奇心も湧かんだろうなあ……都合、ボードの兄ちゃん、段ボールの兄ちゃんと、ポリタンクの兄ちゃんの3人だけだし―

と、光秋がそこまで考えると、

「加藤三曹?」

「!」

右からボードを右手に持ったツナギに呼び掛けられ、光秋は顔を向ける。

「補充品の受け取りは確認しました。何か持って行く物は?」

「……いえ、今回はけっこうです」

「わかりました」

ツナギが答えたところで、

「荷物の搬送、完了しました！」

「水の補充、完了しました！」

と、2人のツナギが駆け寄って報告する。

「了解。では加藤三曹、我々はこれで」

「ありがとうございます」

光秋の一礼を後ろに、3人はそれぞれトラックに乗り込み、普通車より若干時間を掛けてUターンをして来た道を引き返して行く。

「……補給は終わったのかな？」

アヤの検査を終えたのか、玄関先に立つ教戸松の声に、光秋は体を後ろに向ける。

「はい。そちらは？」

「微々たるものだが、回復には向かっている様だ。君の尽力に感謝するよ」

「僕は大したことはありません。教授の説明の通りにやってるだけです」

「君だからこそ、彼女にそういうことができるのだよ。現にさつきやつと、能力測定もできたのだからな。君が躰けてくれたおかげか、無闇に壁に叩き付けられなくなった」

「それは言ったじゃないですか、初めてお会いした時の様にはなり難い」と

「そうだが……それによると、彼女のサイコキネシスはレベル7だ^{セブン}そう。君も気を付けてな」

そう言う教授は、医療カバンを持った2人の白衣を従えて車に戻り、来た道を引き返して行く。

―レベル7……確かレベルは9段階だから、9中の7。かなり高いな―
教授たちの車を見送りながら、光秋はそんなことを考えてみる。
と、

「コーシユ―?」

いつの間にか玄関先に立っていたアヤの声に、光秋は振り返る。

「ん?」

「先生と、なに話したの?」

「いや、別に……それより、傷まない内にこれ片付けちまおう」

言いながら光秋は、右手で玄関脇に積まれた段ボールを指す。

「はーい」

アヤが応じると、2人は段ボールを光秋の部屋に運び込み、フタを開けて中身を仕分けする。食品は冷蔵庫に、洗剤は洗濯機や台所水盤のそばに、石鹼類は風呂場に、と、物があるべき場所に置いていく。

その作業を一通り終え、玄関近くに開いた段ボールを重ね置きした光秋が居間に戻ると、

「?……」

居間の中央に、未開封のまま置きっぱなしになっている中規模大の箱を1つ見つめる。

「いかん、1つ気付かなかったか」

言いながら光秋は箱に歩み寄り、テーブルの上のハサミで封を切る。

光秋はハサミをテーブルに戻し、フタを開けると、

「?」

「なに?」

アヤが光秋と向かい合う位置に腰を下ろして箱の中を見る。2人の視線の先には、縦に並べ詰めされた4冊の薄い本と、その上に四つ折りの白紙が乗っている。

アヤが紙を取って開くと、光秋はそれを手紙と理解する。

「『アヤちゃんの』……これなんて読むの?」

アヤから差し出された手紙を左手で受け取った光秋は、右手でメガネを軽く前にずらして続きを読む。

「『助けになると思うので送らせていただきます。ご利用ください。横尾 富美子』……横尾中尉から?」

言うとき光秋は、一番手前の1冊を出して表紙を見つめる。

——『かぐやひめ』？——

そこには愛嬌のある平安女性の絵と、上の方に大きい字で「かぐやひめ」という題名が印刷されている。他の3冊も出してみると、「ももたろう」、「シンデレラ」、「いつすんぼうし」と、いずれも絵本である。

——『助けになる』？……………！——「そうか絵本かあ！確かにこれは……」

「エ、ホン？」

「本っていうのは、お話や自分の伝えたいことを字で書いて、こんなふうに束ねた物のこと。絵本っていうのは、それに絵を加えた物のことだよ。確かに、これなら助けになる！」

「なんで？」

「これなら、楽しみながら言葉の勉強ができる。なにより、本自体面白いと思うぞ」

「ふーん？」

解からないという顔をしながらも、アヤは試しとばかりにパラパラと本をめくってみる。

それを見ながら光秋は、

——表をちゃんと見なかったから気付かなかったんだな。しかし本かあ……確かに、これは使える。中尉には後でお礼を言つとかないとなあ……………——

と、先日会った横尾の顔を思い浮かべる。

7月5日月曜日午前10時50分。

白地に赤と青の線模様が描かれた半袖のワイシャツに緑の長ズボン、迷彩柄の帽子にサンダルを着た光秋は、白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンを着たタツカー中尉の運転する車の右助手席に数冊の本が入ったビニール袋を膝に抱いて座っている。

「なあ、ジャップ……」

左の運転席でハンドルを握るタツカーが言う。

「はい？」

「ちよつと気になることがあるんだが……」

「なにか？」

「お前さ……アヤと、伊部二尉？……のことを、ゴツチャに見てないか？」

「？……」

予想外の質問に、光秋は束の間返事に困る。

「……………沈黙は肯定の証、と取っていいのかな？」

と言うタツカーに、光秋は、

「そんなことは……………」

と、少し強い調子で返す。

「……それは、中尉の感じ過ぎじゃ？」
とも付け加える。

「バーカ、鈍感にパイロットが勤まるか。少なくとも俺は、自分は繊細な奴だと思ってるよ」

と、タツカーは静かに返す。

「……………」

2人の間に、沈黙が横たわる。

しばらくして、タツカーの黒い乗用車は光秋とアヤが住む小屋の前に停車する。

シートベルトを外した光秋は、タツカーの方を向き、

「今日はありがとうございました」

と、軽く頭を下げる。

「気にすんな。どうせ非番で暇だったからな」

と、中タツカーは軽い調子で返す。

光秋は袋を持つて右のドアから降りると、

「よろしければ、お茶でも飲んでいきませんか？」

と、ドアの間から尋ねるが、

「いや、遠慮しとく」

と、タツカーはすぐに断る。

「そうですか？」

「2人きりの愛の巢に単身で乗り込むほど、俺はバカじゃないんでな」

「え？」

「さあ、速く行つた行つた！」

タツカーの言葉に、光秋はすぐにドアを閉め、数歩下がって車から離れる。

光秋が距離を取つたのを確認したタツカーは、車をUターンさせて来た道に戻つて行く。

それを見送る光秋の心中は、少しザワつている。

——『アヤと二尉をゴツチャにしてるんじゃないか？』、『二人きりの愛の巢に』……僕は、ちゃんとアヤを見てるのか？ただその姿に、伊部法子の面影を見てるだけじゃないのか？——

すぐに答えの出せない自問を振ると、光秋は振り返つて小屋へ向かう。

——確かに、今日の前にいるアヤを見ず、早く伊部法子に戻つて欲しいって感じることは、あるな……………

歩きながらそれだけははっきりさせると、光秋はアヤの部屋の前で立ち止まる。

「……………」

1 回大きく深呼吸をして気持ち切り替えると、右手でドアを2 回ノックする。
「アヤ、ただいま」

言うとき光秋は鍵を開け、ドアを開けると、

「おつかえり！」

「……………」

ピンクのワンピースを着たアヤが跳びかかる様に抱き付き、光秋は後ろに吹き飛ばされそうな体をなんとかその場に押し留める。

「寂しかったあー！」

光秋の胸に顔を付けて甘えるアヤに、光秋は右手で頭を撫でる。

「ごめんごめん。アヤの本を買ってきたんだが、待たせちゃったな」

「本？」

光秋の言葉に、アヤは顔を上げて嬉しそうな表情を向ける。

「ああ、これ」

答えながら光秋は、アヤの体を少し離して左手の袋を差し出す。

「……………コーシユー！ありがとう！」

袋を受け取ったアヤは満面の笑みで言い、両手で袋を抱えて居間へ駆けていく。

その背を見ながら、光秋は思う。

—そうだよ。今回の買い物にしたって、アヤが喜ぶと思つて……少なくとも、アヤと二尉をゴツチャには見ていない！……なら、もう少し目の前のアヤのことも、考えてやるべきか……………

7月10日土曜日午後6時。

コンコンという自分の部屋のドアがノックされる音に、白いTシャツに薄黄色の長ズボンを着た光秋は、

—来たな——「はい」

と返して玄関に歩み寄り、ドアを開ける。

「オッスー・加藤。おじゃましませーす」

赤い半袖のワイシャツに茶色い半ズボンを着た竹田二尉がビニール袋を持った右手を上げて中に入ると、その後ろから青い半袖のワイシャツに茶色い長ズボンを着た上杉、

「ようー」

白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンを着たタツカ、
「ジャマするぜ」

緑の半袖のTシャツに青いジーンズを着た横尾が続く。

「こんばんは」

いずれも手にビニール袋を持っている。

4人に続いて光秋も居間に向かうと、先に4人に混ざって丸テーブルの廊下側に腰を下ろしているアヤの右隣に座る。

と、

「ごめんなさいね。アヤちゃん大勢が苦手なのに、こんな人数で押し掛けて」

と、アヤの左隣に座る横尾が、アヤを見て言う。

「大丈夫、です……」

とアヤが気恥ずかしそうに応じると、光秋が、

「今日の小パーティのことは、昨日竹田二尉から連絡をいただいた際に言っている。それに、たまには僕以外の顔を見るのも、刺激になるでしょうし」

と、付け加える。

「それはよかった」

と、横尾はホッとした顔で応じる。

「よくねえよ！ まったく」

タツカーを挟んで光秋の右隣に座る竹田が、袋から食品用のトレーや大き目のペットボトルを出しながら、半ば愚痴る声で言う。

「昨日の夜加藤に電話した後、掛け直してきてこいつも来るって言うから……それさえないきや……」

目を左にやった竹田は、タツカーを見ながらそう続ける。

「こつちだつて、横尾中尉を誘つてちよつと遊びに行こうと連絡したら、あんたに先越されてて仕方なく……」

不満そうな目を竹田に寄こしたタツカーが返す。

「まーまー、今日は喧嘩はなしで、楽しく行きましようや」

竹田の右隣に座る上杉が、6つの紙コップにウーロン茶を注いで各々に配りながら言う。

「ところでよう、加藤」

竹田がウーロン茶を一口すすつて言う。

「こないだ、お前買い物に出た時、送り迎えこいつに頼んだそうだな？」

そう言つて竹田は、左の親指でタツカーを指す。

「はい？」

光秋が答えると、

「オレという奴がいながら……」

と、不満の籠った声を出す。

「そう言われても、二尉はその日仕事でしたし、対して中尉は非番だと聞いてたので……」

「そうだがよー……」

そう言うのと竹田は、右手に持った割り箸でトレイから2、3の品を紙皿に取ってそれを口に運ぶ。

「ところでアヤちゃん、その服なかなか似合ってるな」

上杉が紙コップを右手に持ちながら言う。

「ありがとうございます……」

と、アヤがぎこちなく返すと、光秋は、

「僕もなかなかいいと思うんですが、なにぶん布物は全部こんな色ばつかで、違う服も、着せてやりたいんですがねえ……」

と、以前から思っていたことを口にする。

「買い物に連れて行ってあげたら？ 休みの日なら私が車出すけど？」

「そう思うんですが、街へ行くことを、戸松教授が許可してくれるかどうか……」

横尾の問いに、光秋はそう応じる。

「アヤちゃん、レベルいくつだ？」

「7です」

上杉の質問に、光秋はそう答える。

「7? かなり高いな! ……でも一応、アクセサリー付けねばなんとか……」

「アクセサリー?」

上杉の言葉に、光秋とアヤは同時に聞き返す。と、タツカーが、

『リミッター・アクセサリー』、超能力抑制機のことだよ。お前知らないのか?」

と、少し驚いた調子で説明する。

「こいつ、機械に疎いんだよ!」

と、竹田がすぐに光秋を指さして言う。

—そうだ、タツカー中尉には、僕が異世界人つてこと言っていない!—というか言えないんだよな、機密の内だから……が、『アクセサリー』……要するに、Eジャマーの個人版か? ……Eジャマー、か……—

その単語に光秋は、雨の中、首から血を噴き出して倒れる伊部の姿を思い出す。

「……加藤?」

「……あ、はい!」

上杉の呼び掛けに、光秋はハツとし、我に返る。

「これだよ、アクセサリー」

言いながら上杉は、右手で服の中に隠れていた円形の首飾りを出す。

「……！」

それ見て光秋は、アヤと初めて会った日に上杉が同じ物を首に提げていたこと、上杉と初めて会ったタツカーがその首飾りをチラツと見たことを思い出す。

「これが？」

「横尾中尉も付けてるぞ」

と言う上杉の言葉に、光秋が横尾に目をやると、横尾は左手を上げて手首の腕輪を見せる。

「中尉も？」

光秋の驚きに、横尾は、

「あれ、法子や竹田二尉から聞いてない？私、レベル 5 ^{ファイブ}5のテレパスだけど？」

と、首を傾げて応じる。

それを聞いて光秋は、

「初耳ですが……とにかく、それを付ければアヤの能力も抑えられて、人前に出ても大丈夫だと言える？」

と、話を本題に戻すと、上杉が、

「完全ってわけにはいかないな。タツカー中尉が言ったように『抑制機』と言っても、最高出力でも4つまで落とすのが限界だ。ただ、それで実質レベル3 ^{スリー}だから、今のまま丸

腰でつていうよりは話が通り易いかもな」

と応じる。

「よかつたら、私が今度適当なの買つて送るけど?」

と言う横尾の言葉に、

「それに、行くんなら行くで、オレと上杉も付き合うぜ?」

「オレもつすか?」

と、竹田と上杉が続き、

「あんただけに任せられるか!俺も行く!」

と、タツカーも続く。

と、

「ありがとうございます。ただ……」

言うとき光秋は、ゆつくりとアヤの方に顔を向け、

「アヤ、お前は どうしたい?」

と、静かに尋ねる。

「アヤは……知らない人がいっぱいいるとこ、嫌い……でも……コーシユーや、横尾さんたちが一緒なら……我慢できる、かも……」

「行くかい?」

光秋の問いに、

「……………行く!」

アヤははつきりと答える。

「よし、じゃあ、来週の休みはどうだ?」

竹田のその言葉をきっかけに、6人は食べながら詳しい予定を協議し始める。

午後9時。

「この調子じゃあ、伊部に戻るのも早いかな。じゃあな、2人とも」

玄関先で振り返った竹田が、左手を上げ、少し機嫌のいい声で言う。

「はい、お休みなさい」

左手にアヤを従えた光秋が応じると、竹田はドアを閉め、タツカー等3人が待つ車に向かう。

車のエンジン音がある程度遠ざかると、光秋とアヤは振り返って、パーティの片付けが済まされた居間に腰を下ろす。

—来週の土曜日、17日かあ……—

と、光秋が出かけの日程を確認すると、

「コーシユー」

と、左からアヤが話し掛ける。

「ん？」

「タケダさんたち、なんでコーシユーのこと『カトー』って言うの？コーシユーはコーシユーでしょ？」

「ああ。加藤って言うのは、僕の名字だよ」

「ミヨージ？」

「なんて言ったらいいかなあ？……つまり、どこの家の者かっていうのを、はつきりさせるために付けるものなんだけど……アヤには、ちよつと解かり難いかな？」

「アヤには、ミヨージないの？」

「ないけど……そうだ！僕が付けよう！」

と、突然思い浮かんだことを声にした光秋は、アヤの返事を待たずに速足で玄関へ向かい、アヤの部屋から画用紙束とクレヨンのケースを持って戻ってくる。

テーブルに束とケースを置いて座ると、光秋は左に置いた束から紙を一枚取って自分の前に置き、右前に置いたケースから右手で黒いクレヨンを取って紙に大きい字を縦書きする。

——戸籍登録するわけじゃなし。『アヤ』って名前も、これが大多数だろうし、いいだろう……本来は筆と墨で書くものだが、それも仕方ない……—「できた！」
言うとう光秋は、紙を持ってそれを左に座るアヤに見せる。

「綾、これがお前の名前だ！」

そう言つて光秋が見せている紙には、大きく「加藤 綾」と書かれている。

「……なんて読むの？」

『カトウ アヤ』。漢字で書くところなるんだよ」

「カトオ？……コーシユーと同じ！」

「ああ。同じだ！」

「……やったー！」

言いながら綾は、顔に笑みを浮かべる。

「ねえ、コーシユーはなんて書くの？」

「僕？僕は……」

答えながら光秋は、紙束からもう一枚取り、

「加……藤……光……秋、と！」

と言いながら、大きく「加藤 光秋」と黒いクレヨンで書き上げる。

「こう書くんだよ」

「ミヨージ、同じ！」

「そう、同じだ」

光秋の返事に、綾は笑顔を返す。

が、その笑顔にはいつもより若干影があることを、光秋はついに気付けない。

7月11日曜日午後1時。

灰色の半袖に緑の長ズボンを着た光秋は、両手に横尾から届いた小包の段ボール箱を抱え、一礼してそれを運んできた補充品を運ぶトラックを見送る。

頭を上げると自室に戻り、箱の封を開けて中身を取り出す。首飾り型のアクセサリーと、「しらゆきひめ」の絵本である。

——……アクセサリーの方は昨夜送ると聞いていたが、一緒に新しい本まで送ってくれるとはなあ——

横尾の心遣いに感謝すると、光秋はその2つを左手に持つて綾の部屋へ向かう。

ドアの前に着いた光秋は、右手で2回ノックする。

「綾、光秋だ。入るぞ」

言いながらドアを開けて中に入り、居間のテーブルの、光秋から見ると左側に元氣なく俯いて座るピンクのワンピース姿の綾の許に歩み寄る。

——今朝からずっとこの調子だよなあ？……——

綾の様子をそう感じながら、光秋はテーブルの廊下側に腰を下ろす。

「綾、昨日話してたアクセサリー、届いたよ」

そう言つて光秋は、左手の首飾りを綾の前に出す。

「うん……………」

「？」

素っ気ない返事を気にしながらも、光秋は続いて絵本を差し出す。

「あとこれ、横尾ちゆ……………さんから、新しい本が」

「……………本……………嫌い……………」

「!?」

綾のその一言に、光秋は少し驚かされる。

「どうした？いつもは喜んで読むのに？」

「……………イベって、誰？」

「！」

その言葉に光秋は、昨夜の竹田の去り際の姿を思い出すと共に、

「あの時かあ……………」

と、その時の竹田の言葉を気にしなかった自分に若干の呆れを抱く。

「タケダさんが帰る時、綾の方見て『早く戻る』って言ってたし！ヨコーさんたちも、買
い物の話が終わったら、時々綾の方見て『イベ』とか『ホーコ』とか言ってたし！誰？」
左から身を乗り出して迫る綾に、光秋は、

「そろそろ、潮時かあ？……………」

と、綾に、加藤綾と伊部法子の関係を話すことを決める。

「それは……なんて言ったらいいかなあ？……簡単に言うと、伊部法子っていうのは……『お前の前の人』だ」

「?……前の人?」

「……ああ……」

我ながら空想的な輪廻論の様な言い方、その様な言い方しかできない自分に、光秋は軽いもどかしさを覚える。

――が、解かり易く言うには、この言い方の方がいいか……――「戸松先生は知ってるよな? たまに頭の検査に来る、メガネに髭の人」

「うん……」

「あの人が、伊部法子って人の中にあつた超能力、お前が宙に浮いたり、触れずに物を動かしたりできる『力』を引き出して、その結果生まれたのが、お前、加藤綾だ……」

「……………」

綾は黙ったままだが、その表情からは、光秋の言葉の意味をきちんと理解しようとする努力しているのがわかる。

「僕がこうして、お前にいろんなことを教えてるのは、頭がよくなれば、伊部さんが戻ってくるって、そう先生に教えられて、僕も伊部さんには戻ってきて欲しいから、協力し

てるんだ」

「……………じゃあ、頭よくなったら、綾、いなくなっちゃうの?」

自分を真つ直ぐに見詰めてくる綾の両目に、光秋は不安が宿っていると感じる。

「……………いなくなるって言いは、どうかと思うな。前の人が戻ってくる、つまり、元に戻るって言った方が……………」

「でも、前の人に戻ったら、もう、綾はいないんでしょ?」

「……………綾……………」

「綾、消えたくない!頭よくなつて消えるのなら、本も勉強ももうしない!なんにもしない!嫌い!」

「……………それは、ちよつと話が違うんじゃないか?」

「……………?」

「人間は、いや、生き物は、生きている。生きていく上では、変わることも必要なんだよ」

「……………変わる?」

「そう。前に、世界の話をしたよな」

「……………うん」

「世界っていうのは、いろんなモノが互いに影響し合う場所でもあるんだ。その中で、変わっていくからこそい続けられることもあるんだよ。無理に変わらないでいようとす

るからこそ、おかしくなることもある」

「……………」

「それに、わざわざこんな難しいこと言わなくなつて、放つておいても生き物は変わるもんなんだよ。綾がいい例だ」

「……………綾、が？」

「だって、もう変わつてるじゃないか。昨日までは本や勉強が好きでしようがなかったのに、竹田さんたちの言葉を聞いて、今は嫌いになつて。これも変わる、変化の一種だ。そもそもこの前まで綾、ちゃんと喋ることもできなかったんだよ。それが今は、ちゃんと喋つて、自分の考えていることを伝えている。人見知りだって、だいぶよくなつてきた」

「……………」

「もちろん、全部が全部変わるわけではないし、変わることがいいつてわけでもない。ただ生きてる以上、なにもしないつてわけにはいかないし、生きる上で、なにかする上で、変わつていくこともあるし、その必要が生じることもあるんだよ。普段はゆつくり少しずつだから、変わつていくことに、なかなか気付けないだけだね」

「……………光秋の言うこと、わかりたい、けど……………でもそういうふうにつて、光秋は綾より、イベさんが好きなの？」

「……………それは、僕にもよくわからない」

「え？…………」

「伊部さんとは、確かに仲よかったけど、まだまだ知らないことの方が多かった。それは綾についても言えることだよ」

「綾にも？」

「ああ。綾は変化が早いから、これから僕の知らない綾が出てくるだろうし、そもそも、知らない人のことを、好きとも嫌いとも言えないよ」

「…………じゃあ、綾が頭よくなつて、変わつて、光秋が綾のこといっぱい知ってくれたら、綾のこと、好きになつてくれる？」

「…………それは、わからない。その変わった綾が、僕が好きになれる綾かどうか、まだわからないから。ただ、綾が僕に好かれる努力をしてくれたら、好きになるかもしれない」

「…………イベさんよりも？」

「…………それも、綾次第としか言えないな」

「……………」

綾は少し俯き、考え込む様な顔をする。

と、

「じゃあ綾、変わる！変わつて、光秋が好きになれる人になるようにドリヨクする！」

綾はそう言って、光秋の目を真っ直ぐに見る。

「綾……………」

光秋は、綾のその態度に嬉しさを感じる。
が、

——…綾の消えたくないって話を、僕は太袈裟なこと言って、すり替えちゃったんじゃないか？——

と、自分の言葉に対する不安が、一瞬脳裏を過る。

14 外の世界

7月17日土曜日午前10時半。

迷彩柄の帽子に白地に赤と青の線模様が描かれた半袖のワイシャツ、薄黄色の長ズボンにサンダルを着て、右肩にカバンを斜め掛けした光秋は、京都駅構内に建ち並ぶ服屋の入口手前に立って、綾と横尾中尉の買い物が終わるのを待っている。

「そーいや加藤……」

右隣に立つ黄色いTシャツの上に白い半袖のワイシャツを羽織り、青いジーンズを着た上杉が言う。

「はい？」

「なんで駅の中の店に行こうって言い出したんだよ？服屋ならオレがいいとこ知ってつから、そこに連れてこうと思ったのに……」

「確かに今回は、『服を買う』って目的で来ましたが、僕はあいつに、外の世界を見せてやりたかったんですよ。ここなら、なかなかいいでしょう？」

「……そういうこと……ただそれにしたって、オレならもつといい場所知ってるぜえ？」
「僕が知ってる適地は、ここしかなかったんです」

「フーン……………」

上杉が静かに答えると、光秋は首を巡らして左側の広間とその左奥に続く飲食店街の通路、右側に伸びるコンビニや飲食店が散在する白い通路を、そこを散々と歩いて行き来する人々を見回してみる。

「初めて来た時と、あんまり変わんないなあ……もともと、初めての方はこことは厳密には違うんだが……しかし、場所は違えど、いつ来てもすごい人の数だなあ、ここは

そんな感慨を抱いていると、

「そっぴいやさあ……………」

と、上杉の右隣で中腰になっている青いＴシャツに茶色い半ズボンを着た竹田二尉が口を開く。

「加藤お前、アヤのこと『お前』とか『あいつ』って言うのな？」

「え？……………」

竹田のその指摘に、光秋はハツとする。

「……………そっぴい、そっぴい………今まで気付かなかった……………しかし、そんな呼び方の仲になったって、僕はまだまだ綾のこと、殆どわかってないのかもしれない。現にこの間の日曜だって、綾が思いつめてたこと、全然気付けなかった……………」

と、光秋はその時綾に言った言葉を思い出す。

—『好かれる努力をしろ』、か……………よく言ったもんだ……………僕も、色んな綾を好きになる努力を、すべきなのかな?…………—

「…………おい、ジャップ?」

「!」

左から腕組をして立つ白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンを着たタツカー中尉に呼び掛けられ、光秋は我に返る。

「中尉……………なにか?」

「いや、考え込んでたみたいだから、どうしたのかと」

「ああ、いえ……………なんでも……………」

言いながら光秋は、右手をタツカーの前に出して軽く振る。
と、

—みんな、ちよつと来て—

と、音とは違う横尾中尉の声が4人の頭に直接響く。

—!……………これが、テレパシー?—

若干の戸惑いから、光秋はつい右手を頭に添えてしまう。

「?……………」

タッカーが光秋のその仕草を不思議そうな顔で見ると、竹田が立ち上がって、
「よし、中尉のお呼びだ。行くぞ！」

と、右隣にある店の入り口に入っていく。

その後を追う上杉が、

「まったく、横尾中尉くらのテレパスが一人いると、こういう時便利つすよねえ」

と、呟く様に言う。

「ほら、ジャップ、行くぞ」

「あ、はい！」

自分を抜いて左前に行くタッカーを追いながら、光秋は、

「……話には聞いていても、直接体験するのはこれが初めてなんだよな……神モドキさんの時は知識がないのと、状況把握で精一杯で、そこまで気が回らなかったし……テレパス……空耳や聞き違いなんかと違って、はつきり聞こえた。でも聴覚を使ったわけじゃない、か……にしても初めてのそれが、『ちよつと来て』って、日常的な内容とはな……」

と、新体験の感動と、その内容のありきたりさに対する憤りを感じる。

一行が店に入って奥まで進むと、薄赤いＴシャツに白い薄手の長ズボンを着、右肩に茶色いハンドバッグを提げた横尾が、試着室の青カーテンの右隣に立って待っている。

一行が近付いてくるのを確認した横尾は、

「来た来た！」

と言つて、カーテンの方に顔を向け、

「アヤちゃん、来たよ。いい？」

と、微笑んで問う。

カーテン越しに綾の声で、

「はい！」

と返事が聞こえ、試着室の前に一行が並ぶと、横尾が、

「では……」

と、微笑みながらカーテンを左から右へとずらす。

「……………」

試着室にいる綾を見た光秋は、思わず絶句してしまう。それまでピンクのワンピース姿しか知らなかった綾が、白い半袖のワイシャツに赤チェックのロングスカートを着、首の金色の首飾りがその魅力を引き立てているからである。

——綺麗だ……………

光秋の脳裏に、漠然とそんな言葉が浮かぶ。

と、

「おいジャップ！」

「！」

右隣に立つタツカーに肘で小突かれ、光秋は我に返る。

「あ？ ああ！……」

「どうした？ 鳩が豆鉄砲食らった様な顔して？」

ニヤケながらのタツカーの言い回しに、光秋は、

「……中尉、そんな言葉どこで覚えたんです？」

と、思わず尋ねてしまう。

「昔祖父さんが言ってた」

と、タツカーが答えると、

「だがオレも、今回ばかりはそいつの言うことに賛成だな！」

と、光秋の左側に上杉を挟んで立っていた竹田が歩み寄り、

「お前、アヤに見惚れてボーっとしてただだらう？」

と、光秋にニヤケた顔を近づける。さらに、

「ホーント、こんな美女と同棲とは羨ましいねえ！」

と、ニヤケた上杉に後ろから頭を指で小突かれる。

「同棲って……」

と、光秋が弱々しく言い返すと、

「光秋！」

サンダルを履いて試着室から出た綾が、光秋の前に歩み寄る。

「…………どう？」

と、真つ直ぐな視線を向ける綾に、光秋は、

「…………ああ、なかなか、いいと思うよ…………」——ぎこちないな…………——

と、自分でもそう自覚しながら答える。

と、

「…………！」

フツと綾が笑ったかと思うと、

「そう…………」

と、その口から笑気を含んだ声を光秋は聞く。

その後、綾と横尾がもうしばらく店内を見て回り、数着の服を購入すると、一行は駅の外に出てその近所を徘徊する。

京都駅の八条通り側にある広場を歩いている光秋は、

「あそこ……に座るか？」

と、左前にある段差の柵を指さす。

「うん」

と、左隣を歩くワンピースに戻って服が入った紙袋一つを両手持ちする綾が応じると、2人は柵に歩み寄る。

光秋は先に腰を下ろすと、左に立つ綾を見、

「熱いから気を付けて」

と、一言警告する。

が、

「え？」

と、光秋の方を見た綾の空いている右手の先が直に柵に触れ、

「あっつー……」

と、綾は急いで右手を引く。

「だから言ったのに……」

その様子を見て、光秋は思わず言ってしまう。

「金属は熱を溜め易いから、直接触るとそうなるんだよ」

「そんな」と言ったって……あたし知らなかったもん！……」

光秋の言葉に熱冷ましに右手を振っている綾は少し膨れた顔で応じると、今度は地肌が触れないように慎重に腰を下ろす。

「ベンチが少ない……いや、ないんだよな、この駅……」

正面を向いた光秋が、ふと愚痴をこぼす。

と、後ろにいた竹田が2人に追いつき、光秋の右側に歩み寄る。

「加藤、オレたちそのコンビニで買物してくるけど、なんか欲しい物あるか？」

「そう、ですね……じゃあ、ウーロン茶お願いします。綾は？」

「あたしもそれで」

「了解」

言うのと竹田は来た道を引き返し、少し離れた所で待っているタツカー、上杉、横尾と合流し、一行は光秋と綾の背後にある駅の通路に消える。

―にしても、今日も暑いが、まあ、8月よりましか……―

光秋がそんなことを考えると、

「ねえ……」

と、綾が話し掛けてくる。

「ん？」

「なんであたしだけ、みんなと色が違うの？」

「色？」

「ほら」

言うとは綾は、自分の右腕を光秋の左腕にくっ付ける。

「ああ……」

綾の言いたいことを理解した光秋は、その2本の腕を見比べる。どちらの肌も黒っぽい色なのだが、綾の方ははっきりとした濃い色合いなのに対し、光秋の方はそれに比べて薄く、シャツの袖の合間からは茶色がかかった白色も覗いているのである。

「それはさあ、綾の前の人、伊部さんが生まれたのが、アフリカつて言う、暑い土地だからだよ」

「暑い土地？……ここも、暑いよ？」

「アフリカの暑さは、こんなもんじゃないんだよ。その暑さの元になる強い日差しから体の奥を守るために、皮膚が黒くなるんだよ」

「光秋も、ちよつと黒いよ？でも服着てる所は、白い？」

「同じことが、直接日の当たってる所に一時的に起こってるんだよ。綾なんかは、それが当たり前になって、いつつもそうなってるんだ」

「ふーん………」

光秋の大雑把な説明に、綾は解かった様な、解からない様な顔を返す。

「……前に、世界の話をしたよな？」

「うん？」

光秋の唐突な言い出しに、綾は首を傾げて応じる。

「今僕が言ったのは、あくまで人から聞いた話で、実際に僕がそこに行つて、調べたわけじゃないんだ……いわゆる、じがくもん耳学問だな」

「うん?……」

「アフリカつていうのは、ここからずっと遠くにあるから、気軽に行けるもんでもないんだ……」

「ウチからここまでも、遠かつたよ?」

「それとは比べ物にならないくらい遠いんだ。それだけ世界は、広いんだよ……」

「ふーん……」

再び綾の微妙な表情に、光秋は、

「まあ、本格的な外出が今回初めての綾には、ちよつと難しかったかな?」

と、その心情を察してみる。

と、

「おーい!待たせたー!」

と、左手にビニール袋を持った竹田を先頭に、買い物に行つた一行が右側から2人の方に歩み寄ってくる。

7月20日火曜日午後8時半。

上着が半袖の青チェックのパジャマを着た光秋は、自室の居間で一人廊下に背を向け、床に腰を下ろしている。左手に持った赤い携帯電話を操作し、それを左耳に当てる。

（……………もしもし?）

「あ、戸松教授ですか? 加藤です」

（加藤君?）

「ちよつとお時間よろしいでしょうか?」

（かまわんが、なにかね?）

「次の綾の検査のことなんですが、そちら、ESOの研究施設で行うことはできますか?」

（……………設備そのものはこちらの方がいいのだし、可能ならそれに越したことはない。
が…………）

その声色に、光秋は電話越しに戸松の渋い顔を想像する。

「大丈夫ですよ。現にもう何度かこちらに検査に来りましたが、いつも綾は大人しくしてますし、最近は分別だって充分付いてきてるんです。先日だって、アクセサリーの着用を条件に、街に行くことも許可してくださったじゃないですか」

（そうだが……………）

「…………正確なデータが取れば、そちらも本来の目的を果たし易くなるのでは?」

(……………わかった。今回はこちらでやってみよう)

「ありがとうございます！」

(で、迎いのことだが…………)

「それは大丈夫です。ここから街まで降りて、タクシーを拾います」

(……………そうか……………)

「では次回、そちらでお願いします」

(ああ、わかった)

「では、失礼します」

それを最後に、光秋は通話を切る。

「よしー」——これで検査の後、2人で京都観光でもできる！近いうちにまた、綾にいろんなものを見せてあげられる！——

その思いに光秋は、顔を微笑ませる。

7月23日金曜日午前10時。京都市北区の路上。

迷彩柄の帽子に白地の半袖のワイシャツ、薄黄色の薄手の長ズボンを着て左肩にカバンを斜め掛けし、白い靴下に黒いスニーカー靴を履いた光秋は、光秋の左腕を両手で抱いて並んで歩くピンクの帽子に白い半袖のワイシャツ、赤チエックのロングスカートを着、ピンクのサンダルを履いて首に金色の首飾りを掛けた綾に目をやる。

「とりあえず、検査の方問題なかったし、よかったかな?」

「……………うん」

少し困った顔で言う光秋に、綾も少し表情を曇らせて応じる。

が、綾はすぐに、

「そういえば戸松先生、あたしたちが帰るとき、嬉しそうだったね」

と、微笑んで言う。

「確かななあ。綾の変わりぶりに、いい意味で驚いてたよなあ……『女らしくなった』って……………」

言いながら光秋は、その時の戸松の白い歯を見せる笑顔を思い出す。

「僕も、先生とは長い付き合いじゃないけど、少なくともあんなあからさまに笑ったところを見たのは、初めてだなあ……」——綾のこと、少しは人並みに見てくれたのかな?——と、

「……………」

光秋は、右手に伸びる2車線の車道の左側に停められた明るい黄色いワゴン車を目にする。選挙カーの様に上に演台を乗せ、車体と同じ様な色あいの黄色い背広を着た小太りの男が、左手にマイクを、右手に拳を作って熱弁している。

(……………わかっていただきたいのは、一部の、教義を履き違えた愚か者たちと、我々、サン

教の教義を一語一句理解し、実践している真つ当な信者たちと一緒にしないでいただきたいということですよ！)

—サン教！……—

車体上部の四隅に設置された拡声器越しに聞こえたその単語に、光秋は若干意識をワゴン車の方に向ける。

(我々サン教は、本来平和的な手段による教義の実践を目指しています！しかし！一部の愚か者たちは、その教義を自分たちの都合のいいように解釈し、先のESO襲撃事件の様な、暴挙の言い訳にしているだけなのです！サン教の名を騙^{かた}つて悪事を働く者たちの存在は、我々真つ当な信者たちとしても、非常に悲しいことで………)

「……」

そこまで聞いたところでワゴン車の前を通り過ぎた光秋は、そこで意識を向けることをやめる。

——…『一部の行儀悪い奴らの所為で、その集団全員が悪く見える』つか、高校の先生が言ってたつけ。もつとも、僕はサン教がどういう集団かよく知らないから、今の演説と、3カ月前の戦闘だけで、判断するわけにもいかんかあ……—「宗教、か……」

「シューキョー？」

光秋の呟きに、綾が顔を向ける。

「ああ……前に話した、世界の見方とか、価値観とか、そういうのの一種と考えてくれればいいよ」

光秋の我ながら大雑把な説明に、綾は、

「んー……………」

と、よく解からないと描いてある顔を返す。

——……家の方こそ浄土真宗だけど、僕自身は無宗教だしなあ……………これ以上の説明は、言えんよなあ……………——

綾の顔を見ながら、光秋はそんなことを思う。

15 光秋の一面

しばらく歩いて西進を続けた光秋と綾は、喫茶店の野外席で緑色の丸テーブルを挟んで脚を休める。

「……光秋、その緑の、なに？」

左手に持つグラスからストロー越しにミルクティーを飲む綾が、光秋の時計と数珠を巻いた左手が持つプラスチックカップに目をやる。

「抹茶って言うんだ。厳密には、それにひと手間加えた、飲み菓子だがね……」

言うとき光秋は、ストロー越しにそれを一口する。抹茶のほろ苦さ以上に、混ぜてあるクリームのがきが口内に広がる。

それを見た綾は、少し警戒した目で問う。

「おいしいの？あたしにはあんまり、そう見えないけど？」

光秋はもう一口すすって、

「人それぞれだけど、僕はこういうの好きだよ。あと饅頭まんじゅうとかな」

と答え、綾はストローをくわえたまま、

「ふーん？……」

と応じる。

と、光秋は、綾のミルクティーに目をやり、

「だいたい、綾が飲んでるそれにしたって、これと同じ物からできてるんだぞ」

と、右手のカップを軽く揺らして言う。

「?……どういうこと?」

「どっちも、茶葉っていう葉っぱの出汁なんだよ。まあ、僕が飲んでるこれは、厳密にはちよつと違うけど……」

「でも、どっちも色違うよ?」

「大元は同じなんだよ。ただ作りたいお茶に合わせて、葉を発酵させるんだ」

「ハツコウ?」

「僕も詳しくは知らないが、一定の条件が整った環境にしばらく置いて、葉を変化させることだよ。緑茶なんかは、発酵はさせないけど、綾の飲んでるそのミルクティーの元になる紅茶は、充分発酵させるらしい。この間京都駅で飲んだウーロン茶なんかは、その中間くらいらしい」

「ふーん?」

と応じながら、綾はストロー越しにミルクティーを一口する。

と、

「……………」

光秋はその直後、左手に伸びる歩道の前方から4人、明らかに染めた色をした髪、光秋から見れば柄の悪そうな男たちが、横に広がって歩いて来るのを見る。

「……………」

光秋は男たちの方を見ないよう意識し、抹茶を一口すすって、右の足元に置いてあるカバンに目のやり場を求める。

そんな光秋の態度を見た綾は、少し顔を歪めて、

「?……………光秋?」

と問う。

その直後、2人の許を通り過ぎようとしていた男たちの内、一番喫茶店側を歩いていった両耳が隠れるほどの赤い長髪をした赤い半袖の上下を着た男が綾に目をやり、

「おっ!かわいい子ハッケーン!」

と、光秋には耳触りな声をよこす。

赤毛のその声に反応して他の3人も足を止め、綾の方に寄って来る。

「うわっ!確かに美人やなあ!」

「色黒の髪ながああ」

綾の左後ろに付いた緑の髪を短く刈り込んだ赤いTシャツに黒い長ズボンを着た男

と、右後ろに付いた青い長髪に紫の半袖と長ズボンを着た男が、言いながら綾に品定め
の目を向ける。綾の左隣に付いた長い金髪の白いシャツの上に黒い半袖を羽織り黒い
長ズボンを履いた男が、光秋にチラッと目をやると、
「こんなダサいのなんかより、オレらと遊ばへん？」

と、右手を綾の首に掛けてくる。

「……………」

顔を引きつらせて固まった綾に、右隣の赤毛も左手を伸ばす。

が、直後、

「ヤーア！」

と、目を固く閉じた綾が絶叫すると、周りを囲んでいた男たちがそれぞれの背後へと
吹き飛ばされる。

「綾！」

光秋はすぐに椅子から立ち、綾の右隣へ駆け寄る。

「……………だつて……………怖かった、から……………」

と、俯いた綾は震える声で言う。

光秋は後ろから両手を綾の両肩に添え、体の震えを止めるつもりで手に若干力を込め
ると、

「わかる！僕も怖かった！でも、そんなふうに“力”を使ったら、かえって人を怒らせるだけだ！」

と、強すぎる言い方にならないよう意識して言う。

直後、

「テツメエー！」

喫茶店の窓ガラスに叩き付けられた金髪が、右手で後頭部をさすりながら顔一杯に怒りを浮かべて立ち上がる。

「こいつ！エスパーかあ！」

車道との境になっている柵に頭頂をぶつけた赤毛が、両手で頭を抱えながら光秋と綾を睨みつける。

「！」

光秋は素早く綾を背後に隠し、綾も椅子から立って光秋の両肩に両手を添えて隠れる様にする。

光秋は開いた両手を前にかざし、

「ちよつと、待ってください！」

と、半分は無駄を承知で、男4人を説得しようとする。

「彼女、ちよつと事情がありまして、時々こうなっちゃうんです！それでも、ガラスも柵

も壊れてないし、皆さん無事でしよう！」

しかし、

「うるせえ！」

右から金髪が一直線に光秋に突っ込んで来る。

——案の定？——

一瞬そう思うと、光秋はすぐに向かい合つて反射的に右半身を後ろに引き、左腕を縦に前に出して金髪が繰り出した右拳を受け止める。

が、

「おらあー！」

「！」

後ろから赤毛に背中、それも胸の裏側を力一杯に蹴られ、光秋は一瞬息が詰まる。体が前に倒れていくところに間髪入れず、

「そらあー！」

「！」

金髪が鳩尾に右拳を入れ、光秋は痛みと息苦しさの中、背中から地面へ崩れ落ちる。

「……………」

殴り蹴られた痛みと息苦しさ、地面に頭をぶつけた衝撃から、光秋の視界が一時真っ

暗になる。

そんな中、

「デメエ！こつち来いやつ！」

「イヤアツ！……」

「やかましい！来いやつ！」

「光秋！」

「……………！」

声の限りに放たれた綾の叫びに、光秋は目を開け、声のした方―視界上部、歩道側に目をやる。

と、左腕を青髪、右腕を緑髪に掴まれた綾が光秋の方に顔を向け、

「光秋！光秋！」

と、叫びながら視界の右端へと引きずられて行く光景を見る。

「……………！」

その光景に光秋は、雨の中、首と太腿に血の尾を引いて崩れ落ちる伊部二尉の姿を思い起こす。

―もう、やらせない！―

心中に明白に浮かんできたその思いが光秋の体を素早く立たせ、男たちの後を追わせる。

立つた拍子に頭から帽子が脱げるが、今の光秋が感知できることではない。光秋は、すでに激しているのである。

「貴様等！」

叫ぶと同時に、光秋は右の緑髪の後頭部に鳩尾に溜めていた右正拳突きを打ち込み、

——『速く動け！』——

と浮かんだ言葉に合わせて、左の青髪を素早く見、その下顎に左突きを見舞う。右に迂回した光秋は、両腕を押さえていた2人が離れたことで自由になった綾の体を両手で後ろに押して男たちから少しでも離すと、前を行く赤毛と金髪に突進する。

「——」

背後の異変に気付いた2人は、突っ込んでくる光秋を目にして驚愕する。

が、それも一瞬、

「てめえ！」

と、右側を歩いていた赤毛が光秋に近づき、肩溜めにした右拳を食らわせる。

「——」

それを前に出していた左腕で受けた光秋は、右腕を腰溜めにし、

——効率的な……！——

一気に赤毛の鳩尾に右正拳突きを叩き込む。

—殴り方くらいはわかる！—

赤毛は両手で鳩尾を抱え込み、

「ゲッ……………」

と呻いて両膝を着く。

直後、

—後ろ！—

「！」

光秋は声の様なものを聞くと同時に、脳裏に自分の背後を、その上方から緑色の大きな丸い物が自分に向かって落ちてくる光景を浮かべる。浮かんだ光景に従って、すぐに両脚で地面を蹴って後退する。

その一瞬後、光秋が立っていた辺りに脳裏に浮かんだ緑色の大きな丸い物が、ガシヤツと大音を立てて落下してくる。

—さっきのテール？—

理解した光秋が前に目を向けると、正面の金髪が、

「チツ」

と舌打ちする音を聞く。

—念力か！—

その理解が光秋に、

――勝たねば死――

という思いを新たに起こさせ、その身を突進させる。

――『速く動け！』――

その言葉から光秋は壊れたテーブルを飛び越え、一気に金髪へと近づく。右腕を腰に引く。

が、繰り出そうとした直前、

「舐めんなやつ！」

「！」

金髪の怒声を聞くと同時に、光秋は後ろに吹き飛ばされ、壊れたテーブルに叩き付けられる。

「……」

尻もちを着いた光秋は、緑のプラスチック片が数個宙を舞うのを見る。

と、突然、

「！」

光秋は首に絞められる様な圧迫を感じ、思わず両手を首に添えて息をしようともがく。

「……………?」

若干湿気が浮かんだ視界で前を見ると、金髪が右手を前に出し、何かを握る様な動作をしている。

「ノーマルが、デカイ面すんなやつ!」

言いながら金髪は、前に出した手をより握り締め、殆ど拳の形にする。

「……………」

それに合わせて光秋の首の圧迫も強まり、その意識がいよいよ遠のき始める。

が、直後、

「……………エフツ! エフツ! ハア—ツ! ハア—ツ! ……」

突然首の圧迫が消え、両手を下ろした光秋は数回むせると、口を大きく広げて空気を取り込む。

「なっ!?!」

金髪が手を上げたまま驚愕の表情を浮かべると、

(コラそこ!—すぐにやめなさい!—)

と、拡声器越しの怒声が響く。

「……………」

光秋が前方の車道に目をやると、赤々とサイレンを灯したパトカー2台と、それに続

いて走るキノコ型の大きめのEジャマーを天井に乗せた緑の車が1台、光秋たちの方へ向かって来る。

—ESO?—

光秋が理解すると、

「ヤベッ!」

金髪は光秋を通り越して一目散に駆け出し、地面に蹲っていた他の3人もそれに続く。

先頭のパトカー1台が光秋から少し離れた所で停まると、その前部の左右のドアから青黒い制帽と水色の半袖のワイシャツ、青黒い長ズボンを着た警察官2人が急いで降り、若い男の方が光秋に駆け寄る。

「大丈夫ですか?」

正面で左膝を着いた警官が、心配そうな顔で光秋を見る。

「ええ、なんとか……」

と、光秋は若干掠れた声で応じる。

「なにかあ、身分証明はお持ちですか?」

京訛り独特のイントネーションで警官が尋ねると、光秋は右手を右の脚ポケットに伸ばして黄色い財布を取り出し、そこから取り出したIDカードを警官に渡す。

「ESOの、『加藤光秋』さん？」

「はい」

と、背後から、

「そつちはどうやあ？」

と、少し年季が入った様な声が響き、若い警官が、

「大丈夫みたいです。そつちは？」

と返す。

「ダメや。この嬢ちゃん、なに訊いても震えるばかりで、うんともすんとも言わへん」
言いながら声の主——小太りの中年警官が、後ろから光秋の左前に歩み寄る。

若い警官は立ち上がると、光秋のIDを中年警官に渡す。

「……ESO人か？」

「はい」

IDを見ながらの中年警官の問いに、光秋は答える。

「さやかあ……とりあえず、パトカー乗ってくれへんか？事情訊くから」

「はい……」

と、光秋は腰を浮かす。

と、

「……………」

体を動かしした瞬間、全身の所々に鈍い痛みと、胸部に激痛が走り、再び尻もちを着く。

「お、おい？どうした？」

と、中年警官が両膝を折って顔を光秋に近づける。

「痛みで……………立てなくて……………」

「そうかあ……………」

言うところ中年警官は若い警官に目配せし、光秋の左腕を中年警官が、右腕を若い警官が首に抱えてパトカーへと運ぶ。光秋の帽子とカバンを両手で抱えた綾も、恐る恐るその3人に続く。

光秋は後部の右席に乘せられ、綾は車道に面した左のドアから隣に乗り込む。

左前の助手席に着く中年警官が光秋の方を向いて、

「ダメそうか？」

と問う。

「……………はい」

「そりゃあんちゃん、いくらESOかて、見たところノーマルやろ？それがエスパーと喧嘩して無事って、そっちの方がおかしいわ」

「……………絡んできたのは、向こうです！」

息苦しさの中、光秋はなんとかそれだけ言う。

「さよかあ？まあどっち道、事情聴取の前に医者に診てもらった方がええか？……」
「……じゃあ、ここにできませんか？」

言いながら光秋は、左手で腰の左ポケットから紙切れを出し、中年警官に渡す。

「？……」
「ESOの施設やんか？」

「非常時の際は、いつもここで診てもらってるんです。ESOの施設だし、かまわないでしょう？」

「ん、まあ、それなら……おい」

「はい」

右の運転席に着く若い警官が、中年警官から施設の住所が書かれた紙を渡され、それを一見して車を出す。

椅子に体を沈める光秋は、右の窓越しに歩道に横たわるテーブルの残骸を見ながら、ふと思う。

—嘘をつくのは、気分のいいもんじゃないな……が、このまま真つ直ぐ警察だかESOだかに行くわけにもいかん……—

心中に言いながら、左隣に不安そうな顔をして光秋のカバンを抱えて座る綾をチラッと見る。

——とりあえず、戸松教授に相談しよう……………」
しばらくして光秋は、フロントガラスの左側にESOの研究施設を見る。

「……………」

戸松教授の顔が浮かぶと同時に、若干の不安に襲われる。

——ドヤされるかな？ま、そんなときやそんな時だが……………」

光秋と綾を乗せたパトカーが施設の正面入口の前で停まると、事前に連絡を受けて待っていた白衣姿の戸松と部下の白衣2人が、左半身を綾に支えられた光秋を出迎える。

光秋は綾に介抱されながら、なんとか両隣に部下を従える教戸松の許に歩み寄ると、顔を近づけて極力小声で言う。

「すみません、教授……………」

と、戸松も小声で、

「連絡から事態は概ね察している。とりあえず中へ」
と応じて、1人入口へ向かう。

「はい……………」

応じた光秋と、それを支える綾が続こうとすると、

「おい、あんちゃん！」

と、後ろから中年警官の声が掛かる。

「はい？」

光秋が振り向くと、白衣2人の間に立つ中年警官が右手に光秋の帽子を乗せたカバンを持つて差し出している。

「忘れもんや」

「あ！すみません……」

一礼した光秋は右手を伸ばしてそれを受け取り、もう一礼して入口へ向かう。

と、綾が申しわけない顔を浮かべて小声で言う。

「ごめん……」

「いや、僕の方こそ気付かなかった……」

光秋がそう応じると、正面のガラス張りの自動ドアが左右に開く。

戸松に続いて最寄りのエレベーターで上へ上がった光秋と綾は、戸松の診察室に通される。

光秋は靴を脱いでその簡易ベッドに横になり、戸松の胸周りと後頭部の簡単な触診と聴診器検査を受ける。

「ざっと診たところでは、特に不全箇所は見当たらん。しばらく安静にしていれば落ち着くだろう」

光秋の左側にいる戸松は聴診器を耳から外しながら言い、座っている椅子を回して光秋に背を向け、机で書き物を始める。

「はい……」

戸松の言葉に、光秋は小さく応じる。

光秋は、足元側で光秋の帽子を入れたカバンと自分の帽子を抱えて心配そうな顔で丸椅子に座る綾を一見すると、再び口を開く。

「あの、教授……すみませんでした」

「ん？……」

戸松は振り向かず、短く応じる。

「こんなことになってしまって……」

「……確かにな」

戸松は手を止めて言う。

「警察から連絡を受けた時は、さすがに肝が冷えたよ。私も少し油断していたのではないかとね。だが、予想に反して君の名前が出たので、私はもう一度驚いた」

「……………」

光秋は、なんと返していいかわからない。

「……………しかしな」

と、戸松は椅子を回し、再び光秋の方に体を向ける。

「まずは、詳しく話してくれないか？なにがあったのか」

「……はい……検査を終えた後、2人で街を歩いていて、ちよつと休憩しようと、喫茶店のテラス席で一息ついてたんです。そしたら……柄の悪そうな男4人に綾が絡まれて、怖さのあまり、4人とも吹き飛ばしてしまつて……」

「サイコキネシスでか？」

「……はい」

「うむ………」

「……そうしたらその人たちが怒つて、綾を連れて行こうとして………」

「ん？サイコキネシスで吹き飛ばしたんじゃないかなかったかね？」

「アクセサリー付きでしたから、そんなに遠くには飛びませんでした」

「……なるほど」

「それで、今度は僕が、連れて行かれる光景を見て……頭に、血が上つて……その人たちに殴り掛かつてしまつて……」

「振り返ちに、『仲間の1人のサイコキノに吹き飛ばされ、首を絞められた』、と？警察の連絡では、そこしか聞いていないが？」

「……そうです」

「んーん……………」

戸松は右手を額に当て、目をつむって眉間に皺を寄せる。

「……確かに、あまり感心できることではないな」

「……………」

強い口調ではないのだが、今の光秋には少々堪える。

「アヤは上位機密に格付けされる存在なのだ。回復の一環として市街の散策を許可したが、やはり軽率な行動は控えるべきだな」

「……………」

「だがな……………」

「……………」

「聞けば、そもそもは絡んで来た者たちが原因なのだし、君はあくまでも、アヤを助けようとして騒ぎを起こしてしまったのだらう?」

「……はい!それは!」——それは、本当だ!——

「まあ、暴力と警察沙汰に発展させたのは少々遺憾だが、基本的には立派な行為じゃないか。なにより機密であるアヤを、第三者の手に渡すことを防いでくれたのだからな。そう気を落とさんでもいい」

「……………」

言うと戸松は立ち上がり、

「コーヒーでも淹れよう」

と、光秋の足元側にあるドアへ向かう。

「！」

光秋は慌てて上体を起こし、

「ありがとうございます！」

と、戸松の背に深く一礼する。と、

「！……痛っ！……」

再び胸周りを、先程より少しましになった痛みが襲う。

「まだ大人しくしていた方がいい」

戸松が顔だけ向けて言う。

「はい……ところで、下に待たせている警察の方たちは？」

「それなら、一緒に君らを待っていた部下たちに、『2人のことはESOで処理する』と伝えるように言っている。今頃帰りの途中じゃないかね？」

「それは……」

「アヤのことが部外者に知れたら、私も立場がないからな」

そう言うのと、戸松はドアを引いて部屋から出て行く。

「……………」

その背中を見送ると、光秋は戸松に言われた通り再び上体を横にする。

と、それまで隅で大人しくしていた綾が、椅子ごと光秋の頭側に移動し、カバンと帽子を足元に置いて顔を近づける。

「光秋……………ごめんね。あたしのせいで……………」

「いいんだよ。教授に言われて、少し自信付いた。これでよかったって。僕も確かに、男はああいうものでありたいって考えは、あつたからね……………もつとも所詮、個人的な美学だがね……………」

「そう……………それと、ありがとう……………」

「……………」

光秋は返事の代わりに、綾のお礼に対する嬉しさの微笑みを浮かべる。

が、光秋は少しして笑みを消すと、

「でも、綾にそういうやり方はダメだつて言つた後に僕があれじゃあ、説得力がないよなあ……………」

と、溜め息混じりの声で言う。

「それは、先生だつて言つてたじゃん。悪いのは向こうで、光秋はあたしを助けようしたんだつて。光秋がそんなこと言うことはないよ!」

「そうなんだがねえ……………」

と、光秋はなんとなしに綾の首に目をやる。

「……………」

そこには光秋の想定に反して、銃弾が掠ったことでできた傷跡などなかった。

——入院中に消したか？……………当然か。男ならまだしも、女ならな……………でも、医療技術の発達は、時に悲しいな……………」

目の前の事態に光秋は、大事な時の思い出の跡が消えた様なもの悲しさを覚える。思ひ出の内容そのものは決しているものではなく、そもそもそんな考えを持つこと自体、自分勝手なことだと理解しているのだが、それでもそう思うことをやめられないのである。

——あの日のことに関して、僕は独りで苦しめつてことか？……………——と、

「でも……………」

「……………」

綾は顔を俯け、光秋は考えていたことを頭の隅に退けることができる。

「やっぱり、あの時の光秋、怖かった……………」

「……………」

「いつも優しい光秋が、あんなふうには怖い顔して、痛いことして……………」

「……………そんなに、怖かったか？」

「……………いつもの光秋じゃなかった……………」

「そりゃあ、僕だって人間だもん。喜怒哀楽、笑う時があれば、怒る時だってあるさあ。自分で見たわけじゃないから強く言えないけど、綾が見たその怖い僕だって、僕の一部なんだよ」

「あの光秋も、光秋の一部？」

「そう。同じモノでも、見方や見る角度を変えただけで違って見えるもんなんだよ。例えば、皿だな」

「……………お皿が、なんで？」

「皿つてのは、真横から見れば薄く長く見えるだろう」

「うん」

「でも真上から見れば、広く丸く見える。同じモノを見ているのに、見る位置を変えただけで全然違って見えるだろう」

綾は目を閉じ、光秋が言ったことを想像してみる。

「……………あ。ほんとだ」

「そういうことはさ、世界全部について言えることなんだろう。何事にも良い点と悪い

点があるし、見方次第で良し悪しが入れ替わることだつてある。見知っているモノの中に新しいモノを発見することだつてある。今回の場合綾は、その言い方に当てはめれば、僕の知らなかった部分を発見したんだろう」

『『発見』……なの？光秋が、あの人たちの所為で『変わった』んじゃないくて？』

「……………発見だろう？綾と会う少し前にも、すごく怒ったことがある」

光秋は、ニコイチの中で激怒した時のことを思い出す。

「だからあれは、僕に新しい何かが加わつて変わったんじゃないくて、元々僕の中にあつたものなんだよ」

「そう、なの……………」

綾の表情が曇る。

「ただ……………」

と、光秋は少し強い調子で言う。

「勘違いしちゃいけないのは、怖い僕つてのも僕の一部であつて、僕の全てじゃない。綾は、優しい僕がいるつてことも、知ってるんだろう？」

「……………うん」

「それならいいさ。少なくとも、なにも悪いことしてない奴を、怒ったりしないさ」

「……………」

光秋の言葉に、綾の表情が少し晴れる。

「ま、僕も他人のことは言えないがね……こういう理屈を知ってても、一度持った印象って、なかなか払えないものだから……」

光秋が自評を述べたところで、戸松が3つの白いマグカップを乗せたトレイを持って部屋に入ってくる。

「話声が聞こえたが、お邪魔だったかな？」

教授はトレイを机に置きながら、光秋と綾の方を見て言う。

「いいえ。ちよつと講義をしてただけです。もう終わりました」

と、光秋は冗談気分で返す。

「そうか……」

と、戸松は左手でマグカップ一つを光秋に差し出す。

上体を起こして両手でそれを受け取った光秋は、カップ越しにも伝わる熱と、中身のほんのり白い湯気を立てるコーヒーを見る。

「……あの、教授」

「ん？」

戸松は綾にもコーヒーを渡しながら応じる。

「淹れてもらってなんですが、今夏ですが……」

「ホットでなければ、淹れる意味がないだろう」

言うとは教授は、右手に持ったカップから一口する。

「……………まあいい。とりあえず今は、毎日一応続けてきた筋トレと突きの練習に感謝だ。少なくともそれで、綾の解放は叶ったんだからな。あと非常時に備えて、今回は動き易い靴とズボンで来た自分の準備のよさも――

若干自惚れていると自覚のある思いを浮かべると、光秋は両手で持ったカップから慎重に一口する。

「……………」

光秋には不快に感じる程の熱さと、コーヒー独特の苦みが口の中に広がる。

――ただ、綾に傷がないことに今日まで気付かなかったのは、僕の鈍さ、いや、愚鈍の証明だな……………――

その自己認識は、光秋にはコーヒー以上に苦いものである。

午後6時。

体調が回復すると、光秋は綾と施設近くのレストランの露天席で夕食をとる。

――そういえば、ここだよなあ…………――

光秋は右手に持ったハヤシライスのスプーンを皿に置くと、左前に建つ施設を眺めてみる。

—僕と綾が、初めて会ったのは……………」

思いながら光秋は、ハヤシライスを一口分口に運ぶ。

「……………」そういえば、あれはなんだったのかなあ？」

「あれって？」

光秋の呟きに、向かい合って同じ物を食べていた綾が視線を寄こす。

「いやな、さっきの喧嘩の時、一瞬声？……………」が聞こえてさ……………」

「声？」

「僕も興奮してて記憶に自信がないんだけど、『後ろ！』って声と、テーブルが後ろから飛んで来る光景が見えて、咄嗟にその2つに従って、避けちゃった……………」

「テーブルのことなら、あたしも言おうと思ったよ。でも、声が出なかった……………」それに光秋がすぐ避けちゃったから、言い損ねたし……………」

「そうか……………」—そういえばあの声色、綾のに似てたような……………」いや、思い込みかな？綾はテレパスじゃないし、記憶そのものも、当てにならないし……………」

光秋は、また一口ハヤシライスを口に運ぶ。

7月28日水曜日午後7時。小屋の綾の部屋。

「なあ綾、明日なんだがさあ……………」

ピンクのワンピースを着た綾と、向かい合って夕食をとっている灰色の半袖に緑の長

ズボンを着た光秋が、箸とご飯茶碗を持つ両手を休めて言う。

「ん？……」

ちょうど左手に持った茶碗からみそ汁をすすっていた綾は、茶碗を丸テーブルに置いて応じる。

「この間はなんだかんだでメチャクチャになっちゃったし、その埋め合わせとか、やり直してわけじゃないが、また行かないか？ 街に」

「……明日も、検査？」

「いや。今度はついでじゃなくて、始めから散策目的で行くんだよ」

「……………」

綾は表情を若干曇らせる。

「……嫌か？」

「……この間みたいなことになったら、嫌……………」

「大丈夫、そうなくても、僕がなんとかする。それに、ああいう人たちの方が、少ないもんだよ？」

「……………」

「……まあ、無理強いはいしない」

言うところ光秋は、右手に持った箸をテーブル中央の大皿に伸ばし、その上の野菜炒めを

一口分摘まんで左手のご飯と一緒に口に入れる。

「……………本当？」

「？」

綾の唐突な言葉に、光秋は一瞬返事に困る。

「本当に、なにかあつたら、なんとかしてくれる？」

「……………ああ。なんでもってわけにはいかないが、できる限りのことはな。もともと僕は、そのために綾のそばにいるんだ」

「……………じゃあ……………行く！」

「そりゃよかった！」

その一言に光秋は、嬉しい気分になる。

7月29日木曜日午前11時50分。

迷彩柄の帽子に白地の半袖のワイシャツ、薄黄色の薄手の長ズボンに白い靴下、黒地のスニーカーを着た光秋は、左隣のピンク帽子に白い半袖のワイシャツ、赤チエツクのロングスカートにピンクのサンダルを着、首に金色の首飾りを提げた綾と並んで、木陰下のベンチに座る。正面には、鴨川の涼しげな景色が広がっている。数珠の巻いてある左手の腕時計に目をやると、足元の右側に置いたカバンから青みがかった黒色の布箱を取り出し、それを2人の間に置く。

「ちよつと早いが、昼にしよう」

言いながら光秋は、カバンから先程自動販売機で買った2本のペットボトルのウーロン茶を取り出し、これらも2人の間に置く。そのまま布箱のチャックを開けると、小さい保冷剤4つに囲まれた、ラップに包まれた白い大きめのおにぎり6つが顔を出す。

光秋は右手でその中の1つを適当に取ると、

「はいよ」

と、綾に渡す。

「いただきます」

綾はそう言つてラップを剥がすと、大口を開けて両手に持ったおにぎりに噛り付く。

と、

「……………」

目をつむり、口を固く結んで悶絶する。

「梅がいったか?—」

思いながら光秋は、ペットボトルのふたを開けて差し出し、それを受け取った綾は中身を一気に4半分程飲んでしまう。

「大丈夫か?」

「これ、なに?」

綾は左手に持ったおにぎりを見て言う。

「梅干しだよ。握り飯の定番」

答えながら光秋は、左手の未開封のおにぎりに目をやる。

「……握り飯っていうより、飯団子って感じだけどな……やっぱり、普段しないからなあ……」

言いながら光秋は、そのおにぎりのラップを開ける。

綾はその様子を見ながら、残っているおにぎりをさつきより慎重に平らげ、ラップを丸めて布箱に戻すと、2個目を取って開封し、小さい口を開ける。

「……………！……………これ、美味しい！」

「？……………ああ、それ味噌だな」

「お味噌？」

「ああ……………」

答えながら光秋は、自分のおにぎりを一口かじる。

「あ、僕のもだ」

「お味噌って、いつもおみそ汁に入れる？」

「ああ。梅干し以外、具がなかったからさ」

「あたし、こつちの方が好きだなあ」

「そう?それなら、五時起きして作った甲斐があつたよ」

言うとき秋は、口元に笑みを作る。

と、

「?……綾?」

表情を少し引きつらせた綾が、光秋の方に体を寄せてくる。

光秋が左側に向けられている綾の視線を追うと、

「……?」

その先―2人から1メートル程離れた辺りに、1羽の土鳩が川側へとトボトボ歩いているのを見る。

「鳩だよ」

「……………」

光秋が話し掛けても、綾は変わらず少し怯えた体を寄せ続ける。

「……ああ、そうか。初めて見るからなあ―」大丈夫。こつちがなにもしなきゃ、向こうもなにもしないよ」

「……ほんと?」

「ああ。もつとも、近づいただけで向こうから逃げるから、なにもしようがないと思うけどな」

「…………じゃあ……………」

綾は怯えを若干弱め、光秋から体を離す。

光秋は、おにぎりを一口かじると、

「しかしまあ…………平和だねえ……………」

と、遠くを見る目をして呟く。

正面に広がる河原、そこに走っている道を徒歩や自転車、犬連れなどで行き来する人々、道の合間にある草原で地をつつく鳩たち、川の中央へと降り立つ光秋の知らない長い首と脚を持つ白い鳥。そういった光景が、光秋にそんな感慨を持たせるのである。

——寮が川に近かったから、散歩の時なんかによく見た光景だが……………久しぶりってことが、また違うふうに見せるのかな？——

と、

「へーワ？」

綾が尋ねる。

「ああ。こんなふうに、みんな穏やかで、悲しんでる人が1人もいないような状態のこ
と、とでも言えばいいのかな？」

光秋は、少し言葉に困りながらも説明する。

「ふーん…………いいね、へーワ……………」

綾が呟く様にそう言うと、光秋はおにぎりを一口かじる。

しばらくして昼食を食べ終わった光秋と綾は、布箱と飲み干したペットボトルをカバンに片付けると、そのままベンチに腰掛け続け、河原の光景を眺めている。

光秋は、両瞼が重くなるのを感じる。

——直接日が当たらず、それでいい風が来て、心地いいんだなあ………………—
ぼんやりした頭でそう考えていると、綾の頭が光秋の左肩に掛かる。

「綾……眠いのか？」

「……………うん」

応じる綾の両目は、瞼で半分程閉じられている。

「……………僕もだ」

返すと、光秋は大口を開けて目に少し涙を浮かべながら欠伸をする。

と、直後、

「……………」

光秋は川向うに並び建つビル群の合間から、遠目にもよく見える黒煙が上がるのを見、同時に離れた所から響く爆発音を聞く。

——？……………事故か？——

ただならぬ気配に眠気は完全に吹き飛び、意識がはつきりすると、その目は上がり続

ける黒煙を凝視する。

「……」

綾もそんな光秋の様子から再び恐怖を抱き、両手を光秋の左腕に絡ませて身を寄せ
る。

直後、

「！」

光秋の左の脚ポケットに入れてある携帯電話が振動し、光秋はすぐに左手を伸ばそう
とする。が、

「……………」

綾が身を寄せていることを思い出すと、代わりに右手で携帯電話を取り出す。

——藤原三佐？——

画面の表示を確認すると、右手を伸ばして電話を左耳に当てる。

「はい？」

（加藤か？今何処だ？）

電話越しに藤原の緊張した声が響く。

「鴨川を散歩していますか？」

（すぐに迎いを寄こす。ニコイチを持って支部に来てくれ！）

「何か？」

（NPの蜂起だ！仲間の釈放を求めてきた。時間内に要求が聞き入れられん場合、無差別攻撃を行うとの声明も入った！）

「……………じゃあ、さっきの爆発は……………」

（そつちでも見たのか？あれは小手調べだ。自分たちは本気だと言っているんだ！）

「……………わかりました。じゃあ……………」

光秋は辺りを見回し、左側に掛かる橋を目に留める。

「支部から東に少し行った所の橋で待ちます！」

（了解した！）

言い終わると藤原の側から電話は切れ、光秋は立ち上がりながら携帯電話を左の脚ポケットに戻す。

「さあ、綾！」

右肩にカバンを掛けた光秋は、左腕の綾を連れて橋の方へ速足で向かう。

橋への緩い坂を上りながら、綾が不安な顔を向ける。

「……………また嫌なこと？」

「ああ。これからそれを何とかしに行くんだ」

「……………光秋が、なんとかしてくれるの？」

「ああ。そのつもりだ」

光秋は、左の脚ポケットに携帯電話と一緒に仕舞ってあるニコイチのカプセルを意識する。

橋の近くに着いて2分程経った頃。

光秋は左にかなりの速度で自分たちの許に近づいてくる緑の車両を見付ける。

—あれか？—

そう思つてすぐ、車両は光秋と綾の前で急停止する。軍用車らしいカクカクした車体の前上部には、小型の機関銃が設置されている。

車体前部右の窓が素早く開くと、ESOの緑の制服に身を包んだ竹田二尉が慌てた顔を出し、

「加藤、後ろだ！速く乗れ！」

と指示する。

「！」

光秋は返事の代わりに素早く動き、後部右のドアを開けて急いで綾を乗せ、左の席に着いたのを見ると自分も跳び込む様にして席に着き、ドアを閉める。

同時に、

「どうぞぞー！」

と、竹田に向かって叫ぶ。

「！」

竹田は素早く車を後退させてそのまま右折すると、今度は跳ねる様に前に左折して来た道に戻る。

「……………」

シートベルトをしていない光秋と綾は、その間自分の体を支えるのが精一杯である。車の走りが落ち着くと、光秋は左の脚ポケットに左手を添える。

「万一に備えて、出かける時はいつも持つようにしてた習慣が役に立ったな！しかし……………」

「ああ。使用禁止は一時解除だそうだ。それに今回は、向こうの数も装備もかなりいいみたいだし、人手が必要なんだろう？」

「そういうことですか……………」

話している間に京都支部の白い建物が見え、十字路の赤信号を無視して左折した竹田は一気に支部の正門へ突っ込む。

「……………」

弧を描いて右折した車体が門をくぐり、敷地の駐車場に半回転して停まる中、光秋と綾は再び体を支えることで手一杯になる。

車が完全に停まると、光秋は前席に身を乗り出し、右の運転席の竹田と顔を合わせる。

「二尉ところで、綾を支部に置きっぱなしにはできませんよ?」

「?.....なんでさ?」

「なんでって、機密!」

「.....ああ!」

「戸松教授の所へ連れて行くのは?」

「ん.....やめといった方がいい。川の方こう側はもう危険と見た方が.....」

「じゃあ.....! 一般人の保護を名目に、支部から離れた所で綾を見ててくれませんか?」

「ええ!」

「このままここにいたら機密漏れになりますし、教授の所に連れて行けないともなれば、それが妥当です!」

「.....わかったよ。じゃあとりあえず、南側にでも移動するさ」

竹田は左の人さし指で右側を指す。

「お願いします!」

言うとき光秋は体を引っ込め、綾と顔を合わせ、両手を綾の肩に乗せる。

「綾、僕がいない間、竹田さんの言うことよく聞け! そうすりゃあ、とりあえず大丈夫だ」

！」

「……嫌なこと、なんとかしに行くんだよね？」

「ああ！」

「……わかった」

「……」

綾の表情が少し曇るが、光秋は気付きつつも掛ける言葉一つ思い付けず、右手で帽子を脱いで右肩のカバンと一緒に綾に差し出す。

「僕のいない間、預かっててくれ」

「……うん」

綾の返事を聞くと、光秋はドアを開けて車から降りる。

「じゃあ、綾も気を付けてな！」

それを最後に、光秋はドアを閉める。

光秋がすぐに3歩程下がると、車は門へ向かい、右折して塀に隠れる。

直後、

「加藤！」

「！」

右後ろから聞こえた声に光秋は振り返ると、制服を着た藤原と、その後ろに小田一尉

が続いて駆け寄ってくるのを見る。

「?……竹田は?」

光秋の前に着いた藤原が、辺りを見回しながら言う。

「来る途中に避難していた一般人を発見し、現在安全な場所に搬送しています」

「避難だと?……」

「三佐、今はそれよりも」

藤原の右隣に立つ小田が言う。

「!……そうだったな! 加藤、頼む」

「はい!」

藤原に言われた光秋は、左手を左の脚ポケットに伸ばしてカプセルを取り出すと、その先端を左側の空間に向ける。レバーを「入」から「出」に切り替え、ボタンを押すと、先端から放たれた白い光が1メートル程進み、ぐんぐんと拡張すると、力尽きた様に座り込む白い巨人―ニコイチが実体化する。

光秋はすぐにその左側に駆け寄ると、右手で伸ばしてあるリフトを掴み、上昇する。上り切ると右手1本でリフトをハッチに仕舞い、メガネを軽く上げながら操縦席に着き、カプセルを左肘掛に仕舞って両手を操縦桿に置く。両端から正面へ移動したパネルの上部から赤い光が放たれ、両目を精査する。同時に左右の操縦桿の握り手から青い光

が放たれ、両手を精査する。イスの頭部から伸びる腕からピツという音が鳴る。中央パネルに「脳波」、「指紋」、「網膜」の照合一致が表示され、イスが機内へと降下する。

右手でメガネを戻しながら、光秋は、

——実戦は、『蜂の巣』以来一ヵ月^{ひとつき}ぶりだが……——

と、小さな不安を抱く。

降下が終わり、ハッチが閉まりパネルの光以外の闇に覆われると、頭上から円形の青い光が放たれ、光秋の全身を精査する。中央パネルに「静脈」の照合一致が表示されると、機内のモニターが一斉に灯り、機体周囲の光景を映し出す。

——……やつてやる！——

不安を振り払った光秋は左手で右肘掛にある通信機を取って左耳にはめ、操縦席のシートベルトを締める。

座り込んでいる体勢から立ち上がる様子を想像し、ニコイチの体もそれに完全に同期して動き、10メートルの巨体を直立させる。

「……とりあえず」

光秋は操縦桿から離れた右手に目をやると、機体の稼働を意識しながら手をゆつくりと握り、広げてみる。視界の端に表示されたニコイチの右手の映像は、その手の動きに寸分狂わず合わせてくれる。もう一度握り、広げてみると、映像の手は誤差も狂いもな

く光秋の手の動きに合わせてくれる。

「よし！」

（加藤、どうだ？）

左耳の通信機から藤原の声が響く。

「問題ありません。行けます！」

（加藤三曹？大河原だ！）

「主任？」

（今回は敵の数が多い！新装備で出てもらう！）

「新装備って？……！」

言うやニコイチの足元に、人間用の物をニコイチ大に拡大した様な巨大なガトリング砲が出現する。両手で取り上げて見てみると、手前にある黒い直方体の本体から前に向かって六本の細長い銃身が伸び、その先端と、先端と根元の間辺りが円形の金板で束ねられている。本体左上部には樽型の弾倉らしき物が、右上部には大型のライト状の照準器らしき物が設置されている。左下部には1本の突起が伸びている。

右手で下部の持ち手を掴み、左手で突起を持った光秋は、

「主任、これは？」

と、通信機に言う。

（君がない間に、ESOの技術部で開発した物だ。N砲のような間に合わせと違って、人間用の技術を本格的にニコイチに合わせた物だよ。もつとも、取り回しをよくするために軽量化したから、N砲より脆くなってしまった。くれぐれも、竹刀の様な使い方はしないでくれ！）

「……わかりましたが、こんな物々しいもので出て行つて、NPを刺激しませんか？」

（どの道、もうすぐ要求の指定時間が切れる。始めから無茶な要求だったんだ）

（主任の言う通りだ）

藤原が加わる。

（儂らの今回の任務は、NPの制圧だ。お前は先行して、連中が設置したEジャマーを破壊してくれ。その後、近畿一帯のESOの本隊が現場で合流する）

「……了解！」

（三曹）

大河原主任が言う。

（今回は予備弾倉の荷台を付けている暇がない。すまんが、その1つだけで出てくれ）

「予備なしですか？」

（弾倉1つにもかなりの弾数があるし、本隊合流後、補給品を運ぶ）

「……了解！」

（悪いな。しかし、君ならできる！弾は大事にな！）

「はい！」

言う光秋は、ニコイチを右―正門側に向ける。

「加藤光秋、ニコイチ、出ます！」

右ペダルを踏み込むと、機体背部の円が白く発光し、ガトリング砲を保持したニコイチは真つ直ぐ上昇する。

「まったく！あいつはお父さんかよ……」

両手でハンドルを握る竹田が、別れ際の光秋の綾への言葉を思い出しながら呟く。

が、後部左席に光秋のカバンを抱えて座る綾には、耳にも入らないことである。

―嫌なことをなんとかしてくれるって……光秋………―

別れ際の光秋のただならぬ様子が、綾を不安にさせ、視線を下に落とさせる。
と、

「お！加藤が出たか！」

「！」

右のバックミラーを見ながらの竹田の言葉に、綾はすぐに顔を振り向かせる。

「……？」

が、少し黒みがかった後部ガラス越しには、綾の地面を駆ける光秋という予想に反し

て、青空へと上昇する白い巨人が目撃される。

綾は巨人を目で追いながら、

「竹田さん、光秋、いないよ?」

と、質問の声で言う。

「?……白いデカイのが見えるだろう?」

「うん」

「そんなだよ」

「……え?」

「あれ?加藤から聞いてないのか?あの白いの『ニコイチ』っていつてよ。アレに加藤が乗ってんだよ」

「……………」

すぐには竹田の言ったことが信じられない綾は、上昇を続ける白い巨人——ニコイチを一層凝視する。

「……………」

と、綾はニコイチの両手に黒く長い大きな物が抱えられていることに気付く。

「あれ機関砲?……………!何で名前知ってるの?それに、何でこんなに嫌な気持ちに……」

怖い気持ちになるの?……………——

綾はニコイチを見ていらなくなり、顔の向きを前に戻して光秋のカバンを強く抱いて怖さを抑えようとする。

と、

「……………」

脳裏に先程まで河原で一緒にくつろいでいた光秋の様子が浮かぶ。それを契機に、いろいろなことを教えてくれる光秋、料理を作ってくれる光秋、綾にはよくわからない小難しいことを生き生きと話す光秋、と、綾が知る限りの光秋の姿が次々と思ひ浮かぶ。

「……………」そう！光秋はあんな嫌なものそばなんかにいない！竹田さんが嘘ついてる！

綾が持つ穏やかな光秋像が、竹田の事実に基づく説明を押し退けようとする。

「……………」確かめる！

心中にそう断じた綾は首飾りを外すと、それを光秋の帽子と一緒にカバンの中に入れ、光秋の見真似でカバンを右肩に斜め掛けにする。

「……………」アヤ？

背後の異変を感じた竹田が声を掛けるが、綾は応じず、左のドアを開ける。

「!?……………」お、おい！

開ける際の音で振り向いた竹田が止める間もなく、綾は車外へと跳び出し、そのまま

一気に体を上昇させる。

「アヤー！」

突然の事態に戸惑いながらも、竹田は綾を追おうと前に向き直る。

と、

「！」

目前に電柱が迫っているのが目に入り、急いでハンドルを左に切る。

「！……………」

竹田はすれすれのところで電柱との衝突を回避する。

単身上昇を続ける綾は、自分の帽子を右手で押さえながら辺りを見まわし、ニコイチを捜す。

—あんなのに光秋が乗ってるわけない！あたしの目で確かめる！—

その思いが今の綾の行動の原動力となり、先程の恐怖心も抑えてくれるのである。

高度を一定まで上げた光秋は、

—あれか！—

と、右の操縦桿を倒し、先程河原でも見た遠くに立ち上る黒煙に向かってニコイチを前進させる。同時に右ペダルを若干深く踏んで、ニコイチの速度を上げる。

「……………見つけた！」

自分より少し高い高度を飛んでいるニコイチを発見した綾は、すぐに体をそちらに近づけようとする。

が、直後にニコイチは視界の右側へ移動を始め、速度を上げて綾との距離を離していく。

「……逃がさない!」

そう言いつつも、普段飛び慣れていないせいか思うように距離を縮められず、むしろ綾とニコイチの距離はどんどん開いていく。

が、

「……」

綾の両目は、徐々に小さくなるニコイチの背を捉え続けている。

鴨川上空を越えた辺りで、光秋は前方から刺す様な悪寒を感じ始める。

「……………近いな」

そう呟いた直後、悪寒が胸一点に集中すると同時に接近警報が響き、

「……………!」

モニター正面に黒いヘリの拡大映像とその情報が表示される。

拡大映像が消えてモニターに直接ヘリが映し出されると、間を置かずヘリの両舷の箱状の装備からミサイルが1発ずつ、計2発がニコイチに放たれる。

「！」

光秋は右手に持ったガトリング砲を後ろに退くと、左腕をコクピットの前に横向きに差し出してミサイルを受け流す。

「……」

黒煙の拡大と左腕の鈍い痛みの中、光秋はガトリング砲の砲口をへりに向け、照準を合わせようとする。

が、

——……ここで弾を無駄に使うわけにもいかんか！——

咄嗟にそう断じて機体を左に移動させると、素早くへりの右前に接近し、力加減に注意しながら右足でへりのローターを蹴り外す。

飛ぶ力を失った機体が眼下の道路に落下を始める直前、光秋は左手でへりの尾部の付け根を掴み、機体前部のコクピットにガトリング砲の砲身を置いてパイロットの逃亡を防ぐ。

すぐに左耳の通信機を意識しながら藤原の顔を想像する。

「UKD—01より三佐」

(何か?)

通信機から藤原の声が響く。

「NPのものと思しき武装ヘリを1機確保。指示願います」

（こちらからも確認している。武装を外して道路に下ろせ。パイロットの身柄は後から来る他の隊に任せろ）

「了解」

（あと加藤、攻撃の前に勧告だ。忘れているぞ）

「……………すみません！」

（それと、市街地なので動きが制限されるかもしれないが、当たり過ぎには注意しろ。ニコイチの装甲が頑丈なのは事実だが、いつまでも持つとも限らんからな）

「……………それもそうか？」「わかりました」

言うところ光秋は足元の2車線道路に着地し、砲身でコクピットを押さえたままヘリを置いてその上に馬乗りになると、空いている左手で両側のミサイルをむしり取り、機首の機銃を潰す。

直後に後方から緑の装甲車5台が駆けつけ、ニコイチとヘリの周囲を囲む。

光秋は右手で右パネルを操作し、外部スपीカーを入れると、

「では、後頼みます」

と言つて、ニコイチを一定高度まで上昇させると、前進を再開する。

飛び立つニコイチを後方の上空から凝視する綾は、徐々にニコイチを見る自分の心の

変化に気付き始める。

——…なんだろう？あの白い大きい、前にも見た気がする。見てると、ちょっとほっとする？…それに……なんで光秋が重なるの？—

綾の目には、前方に行くニコイチの背に、光秋の顔が重なって見えるのである。が、なぜそう見えるのかは、綾自身にも全くわからない。

16 市街戦

光秋がしばらく摩天楼の上空を前進し続けると、藤原三佐から通信が入る。

（加藤、監視衛星によると、Eジャマーは全部で6基。内1基がお前の斜め左前方に設置されている）

「確認します」

光秋が応じると、モニターの左側にビル群の隙間からキノコ型の緑の大型機器が顔を覗かせる拡大映像が表示され、その映像枠の右側から白く太い矢印が伸び、通常映像のビル群の足元を指し示す。同時に左パネルの地図にも、現在位置を示す赤三角のすぐ近く―左上に赤丸が表示される。

―そこか！―

光秋はガトリング砲を両手保持させ、矢印の方向へ高度を下げながら直進する。

拡大映像と矢印が消えると、足元に映像にあつたEジャマーを見つける。

「目標発見！指示願います」

（破壊せよ！）

「了解！」

藤原の指示に応じると、モニター下部に映るEジャマーに赤丸のマーキングが施され、光秋はガトリング砲の砲口をマーカーに合わせる。

が、直後、

（やつぱり白い犬だ！抜かるな！）

怒気を含んだ声が外音スピーカーから響くと、Eジャマー周囲の建物の影から一斉砲撃が起こる。

「!？」

光秋はすぐに上昇をかけながら後退してそれを回避すると、Eジャマー周囲の建物の中から武装した黒いスーツに顔が半分隠れる程のサングラス姿の集団がぞろぞろと湧いて出てくるのを見る。

—さっきのヘリ以来静かだったのはこのためか！しかし！—

光秋は再び外部スピーカーを入れる。

「こちらはESO、京都支部実戦部隊所属、UKD-01である！全員即時武装解除し、投降せよ！従わない場合は、実力行使する！」

と、

（喧しい！）

怒声と同時に1発の砲弾がニコイチに向かって放たれる。

「……」

光秋は機体を右にずらしてそれを回避する。

「了解した。実力行使する！」

言うとうがトリング砲を再びEジャマーに向ける。

「アレさえ壊せばいい！」

左手に握った砲本体左側の突起を奥に回すと、右上部に設置されたライトから赤いレーザーが放たれ、マーカーの中央にそれを合わせる。

「！」

右の人さし指で引き金を引くと、6本の砲身は時計回りに回転しながら数発の砲弾を吐き出す。

本体右側から小振りのドラム缶程の空薬莖が排出させる傍ら、ほぼ全弾が命中したEジャマーは装甲越しの光秋にも不快に感じる程の轟音と爆光を上げて炎上する。

突起を手前に引いてレーザーを消した光秋は、Eジャマーの黒煙で視界良好とはいえない中、爆風で体勢を崩して倒れたNPたちを走査する。

「……重傷者は……いないみたいね——」

そう判断すると、若干上昇して前進を再開する。

——そういうえば、実弾を使うのは今回が初めてだったな……——

そう思うと光秋は、操縦桿から離れた右の掌を見やる。

—今回は……………人を殺すのか？……………—

その掌には、発砲時にニコイチを通して感じた反動の痛みがまだ残っている。

一連の光景を後方のビルの屋上から隠れる様に身を低くして見ていた綾は、より困惑することになる。

—何でアレから光秋の声がするの？しかも何で、あんな嫌なこと言つて、あんな嫌なことするの？……………—

目の前に新たに立ち上った黒煙を見ながら、綾はそんなことを考えてみる。

と、

—『怖い僕だって、僕の一部なんだよ』—「……………アレもそうなの？……………光秋……………」

前に聞いた光秋の言葉を思い出し、どうしようもなく悲しい気持ちになる。

胸に風穴が開いてしまった様な感覚を覚えながら、綾は再び飛び立ち、ニコイチの後を追う。

「UKD—01より三佐。目標1基を破壊しました。次の位置を」

痛みの感慨をいったん隅に置いた光秋は、通信機に事務的な声を吹き込む。

（了解した。次はしばらく先の左前だ）

——左前?……——

藤原の報告からその方向を意識すると、再びビルの合間のEジャマーを映した拡大映像と、そこから伸びる矢印が表示される。

光秋は先程よりも慎重に矢印の許に近づくと、横向きに伸びる2車線道路の中央に設置されたEジャマーを捉える。

「目標発見!」

(破壊せよ!)

と、直後、

「!」

左右のビルの影からEジャマーを挟む形で戦車が2台現れ、一斉にニコイチを砲撃する。

「また戦車か!」

思わず声を上げると、高度を上げながら後退する。

上空での回避を続けながら、光秋は外部スピーカーを入れ、

「こちらはESO、京都支部実戦部隊所属、UKD-01である!即時武装放棄し、投降せよ!従わなければ、実力行使する!」

と、相手に呼び掛けるが、砲撃は止まない。

「了解した！実力行使する！」

言うとう光秋は両手保持しているガトリング砲をEジャマーに向け、すぐに照準を合わせて引き金を引く。

砲撃を受けたEジャマーが爆炎を上げる傍ら、2台の戦車は尚も砲撃を続ける。

「行かせてはくれんか！」

上空で左右に忙しく回避を続ける光秋は、2台の行動をそう解釈する。

「……なら！」

断じるや、素早く左へ弧を描く様に移動し、道路に足が着くすれすれまで降下すると、そのまま滑る様に戦車の1台に接近し、

「！」

左脚を上げてその足底を戦車の砲身の根元に落とす様に叩き込む。

砲身が跳ぶ様に外れると、光秋はEジャマーが起こす黒煙を切つて宙を滑り、

「！」

もう1台に急接近してこれにも左足を叩き込む。

「これでいいか？」

心中に言うとう上昇し、上空で左折して前進する。

「（ちら01・ニコイチ、目標を破壊。次は？）」

（そこから右前だ）

藤原の指示に、光秋は機体を若干右に寄せる。

後方のビルの屋上に腰を下ろしてニコイチの背を凝視する綾は、ここに来て行動の原動力となつているニコイチと光秋へのある種の好奇心と、周囲から来る未経験の異様な雰囲気―不快感ともいえるそれから離れたいという欲求の心の中でのバランスが若干変わり始める。

「みんな、嫌なことばかり考えてる！……………」

思わず手で両耳を塞ぐが、頭に直接流れ込んでくる様な不快感は、尚も綾を苦しめる。
「…………どうしちゃったんだろ…………あたし？」―光秋と一緒にいる時は、こんなことなかった！

…………戻りたい……………「でも、まだ……………」

自分に言い聞かせる様に呟いた綾は、言うことを聞き難くなってきた体を鞭打つ様に飛び立たせ、ニコイチの後を追う。

モニター右側に映るEジヤマーの拡大映像、そこから伸びる矢印の許へ向かう光秋は、左側に新たに表示された先程と同型同装備の黒いヘリ2機が映る拡大映像に目をやる。

と、

……………後ろ？―

背中に刺す様な悪寒を感じると同時に接近警報が響き、咄嗟に跳ねる様に垂直上昇して悪寒から逃れる。足元に目をやると、黄色い戦闘機が1機過ぎて行く。

—F—14? しかも、あの色!—

(加藤!聞こえるか?)

「三佐!」

(今入った情報だ。サン教過激派の戦闘機が現場に数機テレポートしてきた)

と、間合いを詰めて通常映像に切り替わった正面のヘリ2機からミサイルが数発放たれ、光秋は右に大きく移動してそれらを回避する。

「今黄色い戦闘機を1機確認しました。しかし、何故サン教まで?」

(そこもNP同様、現体制に不満があるからな。ESOや合軍の様な政府機関は叩ける時に叩きたいのだろう。上手くすれば、今ならNPだけの所為にもできるからな)

「狐と狸の化かし合いですか?」

言いながら光秋は、正面が空いたのを機に矢印への前進を再開する。

が、

「!」

目の前に再び黄色い戦闘機が現れ、ニコイチに向かって機首の機銃を放つ。

光秋は沈む様に高度を下げ、上を行く銃撃とマーカーが付いた戦闘機をやり過ごす。

—NPならまだしも、部外者が邪魔をするなよ！—

心中に言いながらマーカーを目で追い、ガトリング砲の砲口とレーザーをそれに合わせる。結果機体が完全に逆さまになってしまいが、気にせず引き金に指を掛ける。

—当たるなよ！—

数発の弾が砲口から放たれ、内何発かが戦闘機後部の翼やエンジン部付近に当たる。

一回転して機体の上下を戻した光秋は、振り返って正面に表示された所々から細かい黒煙を上げる戦闘機の拡大映像に目をやる。

—コクピットは……大丈夫みたいね……！—

そう判断した直後、機首のキャノピーが跳んで外れ、2つの操縦席が放出されるのを確認する。

と、

「……？」

光秋は、通常映像に映る落下していく戦闘機の影から、小さな別の影が現れるのを見る。

——……人？——

光秋の疑問に反応したモニターが、正面にその影の拡大映像を表示する。

「……………」——綾！——

突然のことに思わず声を上げそうになるものの、なんとかそれを飲み込んで映像を凝視する。

映像には、薄ピンクのツバの大きい帽子を被り、白い半袖のワイシャツに赤チエツクのロングスカートを着、灰色のカバンを右肩に斜め掛けにした、黒い長髪に黒い肌の女が宙を飛んでいる様子が映し出されている。

—どう見ても綾だよな!? 何でここに?—

直後、

「!」

右の脇腹に悪寒を感じ、同時に響いた接近警報に、光秋は咄嗟に水平に後退をかける。

直後に視界の右側から現れた黒いヘリが、機首の機銃を撃ちながら目の前を過ぎて行く。

と、

「!」

光秋は右前方に、綾に迫るもう1機のヘリを見る。

—切れろ!—

咄嗟に左耳の通信機にそう念じると、綾に迫るヘリに突進する。

「もうやらせないんだよ!」

瞬時にヘリの左側に着くと、腰溜めにした左拳を力加減を少々意識しながらローターに叩き込む。飛ぶ力を失って落下に入りそうになったヘリ胴体をすぐに抱え受けると、振り返って通常映像に映る目の前に浮かぶ綾を見る。

が、直後、

「！」

光秋の右側からもう1機のヘリが迫り、綾もそれに気付いて光秋の視界の左側へと一直線に退避する。

光秋がそれを目で追ったのも一瞬、不意にモニター左側に表示されている矢印が目に入る。

——……綾！そっちに行くな！——

咄嗟のことに声が出ず、すぐに抱えているヘリを左近くのビルの屋上に置き、綾の方に体を向けたその時、

「！」

光秋は通常映像に、先程まで快調に浮遊していた綾の体が突然落下を始めたのを見る。

——Eジャマーの影響下に入った！——

断じるや右ペダルを一杯に踏み、右の操縦桿を前に一杯に倒して綾の許に直行する

と、綾の下に付いて速度を合わせながら降下し、左肘掛のスイッチを押してハッチを開く。直後に若干上昇をかけると、綾の細身の体がコクピットに吸い込まれる様に落下してくる。

「……………」

膝で綾の体を受け止めた光秋は、その衝撃から脚の付け根周りに一瞬激痛を感じ、少しの間絶句する。

その間にも光秋の意思を拾ったハッチが自動で閉まり、地面に足が着く直前、ニコイチは弾む様に急上昇をかけて再び高高度を取る。

激痛から立ち直った光秋は、操縦桿を握る左腕の上に乗っている綾の顔を凝視する。

「……綾！どうしてここに？」

少し怒った調子で言われた光秋の言葉に、綾も本気で驚いた顔で光秋を凝視し、

「光秋!……………」

と、半ば悲鳴の様な声を出す。

と、光秋の視界正面に再び矢印が入り込む。

「……………まあ、話は後だ。今はアレを……………」

光秋は言った直後に、背筋に鋭い悪寒を感じ、素早く左に移動する。

視界の右端を銃撃が過ぎるのを見ながら振り返ると、ニコイチの正面からヘリが1機

迫る。

「！」

直後にヘリは機首の機銃を乱射し、あまりの激しさに光秋は上下左右へと大きく動いて不規則に回避を続けることで手一杯になる。

—クッ！—

同じ頃。京都支部本舎前。

「加藤お！加藤おー！」

藤原三佐は左手に持った小型無線機に何度も呼び掛けるが、無線機のスピーカーからはノイズズーっ聞こえてこない。

「……ダメか」

「管制室に照会してみては？」

藤原の右隣に立つ小田一尉が言う。

「そうだな」

藤原は無線機のツマミを回し、周波数を合わせる。

「こちら藤原隊の藤原だ。管制室、聞こえてるか？」

（こちら管制室。聞こえます）

スピーカーから若い男の声が響く。

「UKD—01の様子はどうか？」

（01ですか？それが……）

「……何だ？」

（先程のそちらの報告通り、Eジヤマー2基の破壊はこちらも衛星で確認したのですが、3基目の手前でサン教の飛行機を撃墜したあたりからどうも動きが妙で……）

「妙？」

（01は戦闘時の動きが速いので、見失わないようにすると動きを正確に捉えることとの遠近調整が難しく、こちらも全ての動きを掴んでいるわけではないのですが、どうも回避行動しか見られなくなつて）

「ウーム……」

（その直前にも、一瞬ですがコクピットが開いたような？……）

「何？……まあ了解した。ご苦労」

言うところ藤原は、無線機の周波数をニコイチのそれに戻す。

両腕を胸の前で組んだ藤原は、

「ウーン……」

と、一声唸る。

「避けるだけとは、加藤の奴、どうしたんだ？」

「やはり久々の戦闘ですし、そうでなくとも突然の大きい規模の作戦です。調子が悪いのでは？」

「そうなのか？……」

小田の言葉に、藤原は眉間に皺を寄せる。

と、

「どうかね？」

「！」

背後から掛けられた声に藤原と小田が振り向くと、両袖を肘まで捲くった白いワイシャツに茶色いスーツ用ズボンを着た寺島支部長が、本舎正面玄関から2人の許に小走りで駆け寄って来る。

「支部長！部屋におられなくて大丈夫なのですか？」

藤原が心配の声を掛けるが、駆け寄った寺島は、

「なあに、私とて無線機は持っているし、いざとなれば何処にいてもやられるものだよ。で、どうなんだね三佐、現場は？」

と、涼しい顔で返す。

「Eジャマー2基を破壊しましたが、3基目の防衛をなかなか突破できないようです。あと不確定情報ですが、加藤三曹自身に不調が起きた可能性が」

藤原の説明に、寺島は右手で顎を撫でる。

「……敵のEジャマーは、6基だったな？」

「はい」

藤原が答える。

「つまり01は、3分の1を破壊してくれたわけか……それなら、通常戦力と並行すれば、エスパ―戦力もなんとか活かせるか？……よし！本隊の進撃を各支部長に進言する。君らも準備を！」

「はっ！」

藤原と小田が敬礼すると、寺島は本舎へと駆ける。

綾を膝の上に乗せたままの光秋は、銃弾が横殴りの豪雨の如く迫る中、ニコイチを左に大きく移動させてそれを回避する。

「綾、そろそろ降りてくれ！乗っかられてるとどうもやり辛い！」

左への移動を続けながら、少し興奮した声で言う。

「あーうん……」

綾が少し戸惑った顔で答えて体を前に向けると、正面に並んでいたパネルが左右に避けて道を開ける。

光秋は横目で、綾が操縦席の左後ろに移動して両手で背もたれをしっかりと掴むのを確

認すると、パネルが正面に戻ったのをきっかけに視線を正面のへりに戻す。

「！」

左への横這いを続けていたニコイチを上昇させると、へりの真上に付いて間合いを詰め、腰溜めにした左拳をローターの中央に叩き込む。力を絞つてあるため粉碎はされないが、大きな衝撃をともに受けたローターは不調を起こし、横一の字に停まつてしまう。直後に左手でへりの尾部を掴むと、辺りを見回して適当な置き場所を探す。

が、

「！」「光秋！」

右脇腹を突く悪寒、接近警報、綾の悲鳴をほぼ同時に知覚し、視界の右端に1発のミサイルを捉えた光秋は跳ねる様に上昇してそれをかわす。

すぐにミサイルが来た方に体を向けると、正面下方に、先程ローターを壊してビルの屋上に置いたもう1機のへりを見る。

と、

「！」

へりは機首の機銃を放ち、光秋はニコイチを上下左右に振って回避する。

「——あいつら、まだやるのか？——」

と、

（白い犬！聞こえるかあ！）

「？」

銃撃を続けるヘリから拡声器を通した怒声が響く。

（貴様には一カ月前の借りがあんだあ！倍にして返してやる！おい、やれ！）

（は、ハイ！）

気弱そうな声が聞こえた直後、ヘリは両側に装備した残りのミサイル7発全てをニコイチに向けて放つ。

——『蜂の巣』組の残党か！——

思いながら右手のガトリング砲を正面に向け、照準を付けずに引き金を引く。手首を時計回りに回しながら放たれた砲弾がある種の壁を形成し、それに触れたミサイルがニコイチの遙か前方で次々と火球に転じていく。

続けて銃撃が迫るが、光秋は高度を下げながら後退してそれを避けると、一直線にヘリへと接近する。

正面に付くやヘリに覆い被さる様に位置し、機首部のコクピットにガトリング砲の砲口を突き付ける。同時に外部スピーカーを入れる。

「もういいでしょう！丸腰同然でこれ以上、何をしようって言うんです！」

怒鳴ると光秋は左手に持つもう一機のヘリを屋上のヘリの左隣に置き、左手で両側の

ミサイルを外し、機首の機銃を潰す。

右隣のヘリの機銃も潰すと、光秋はニコイチを右に向け、正面に据えた矢印に直進する。

しばらく進んで矢印が消えると、光秋は足元の路上にEジヤマーを発見する。

左手に突起を握らせ、両手保持したガトリング砲の砲口をEジヤマーに向け、マーカーとレーザーを合わせる。

が、

「ー」「ひっ！」

Eジヤマー周囲のビルの影から多数の砲弾が放たれ、光秋は綾の悲鳴を意識の隅に聞きながらニコイチを水平に後退させる。

——ここでもか！——

心中に毒づきながら、目の前のEジヤマーを恨めしそうに凝視する。

——光秋が怒ってる？これも光秋の一部？あたしが発見した、光秋の一部？……あの私たちの所為で、変わっちゃった光秋？……

——!?……声が頭の中に入ってくる？——

突然の不可思議な事態に光秋は一瞬呆然とするが、すぐに気を取り直して左手を左耳

の通信機に当てる。

——…無線はまだ切ってるはずだ。外からも爆発音くらいしか聞こえないが？今の声は？……—

と、

——…何だろう？前にもこんなふうに光秋を見た憶えがある。イスに掴まって、必死なってる光秋の横顔を見た憶えが……コレを見るのも初めて、中に入るのも初めて、そこに座ってる光秋を見るのも、初めてのはずなのに………懐かしい？—

—まただ！また声が？………テレパシーか？そういえば前に横尾中尉がやったのと、なんとなく感じが似ているような？……それに、この声色と、話してる内容は………まさか！—「綾？」

言いながら光秋は、思わず左後ろで掴まり立ちをしている綾の方へ顔を向ける。

「え？……」

突然顔を向けて呼び掛けられた綾は、戸惑った顔を返す。

と、

「！」「ああ！」

光秋が声のことに気を取られたために、後退の速度が鈍くなったニコイチの右肩に砲弾が1発着弾し、光秋と綾の視界右側に閃光が広がりコクピットを微振が襲う。

—考えるのは後だ！—

そう断じた光秋は顔を正面に戻し、前進しつつ上昇をかける。マーカーとレーザーを合わせて照準を取りつつEジャマーの真上に付くと、視界の隅に右パネルの表示を確認する。

—スピーカーは入ってるな！よし！—

直後、

「撃つぞ！死にたくない奴はすぐに下がれ……………」

叫んだ5秒後、光秋は右の人さし指で引き金を引く。数発がEジャマーに直撃して爆光と轟音を上げると、Eジャマーから赤い炎と黒煙が上る。

……………人は、大丈夫みたいね……………

燃えるEジャマーの周囲を走査した光秋はそう断じ、ニコイチを前進させてその場から離れる。

距離を取りながら、脳裏に藤原の顔を浮かべて通信機に念を送る。

「こちらニコイチ。目標を破壊しました」

（加藤か!?)

藤原の驚いた声が通信機から響く。

（了解したが、今まで何で無線を切って…………いや、それに關しては後だ！支部長の進言

で、じきに本隊が現場出勤する。お前は一度下がって補給と休息をとれ)

「?……目標はまだ3基程あるんじゃないやあ?」

(充分だ。とにかく一度下がれ)

「……了解」

答えた光秋は、振り返って来た道を戻る。

しばらくの間、光秋は左パネルの地図を確認しながら京都支部を目指す飛行を続ける。

と、1基目のEジャマーがあつた辺りを過ぎてから、光秋と綾は眼下の道路にESOの緑の車両群が次々とレポートして来るのを見る。

ニコイチと入れ替わる様に現場の方向へと向かうそれらの車両は、竹田が2人の迎えに使った物と同型の物もあれば、荷台に人や武器類を積んだトラックもある。それらが視界の内の道路全てを埋める様にして、車線を無視して現場に直進しているのである。

「……………さながら、戦争かな?」

それまで沈黙だったコクピットの中で、光秋は思わず呟いてしまう。

「センソー?」

綾が尋ねる。

「ああ。ちよつと大袈裟な言い方かもしれないがな、こんなふうに、互いに暴力を向け合

うこと、さつき河原で話した『平和』とは、逆のもの、とても言えいいのか？」

「……ボリーヨク……さつき光秋がやったことも？」

「……だろうな……」——自覚していても、いざ言われると……いや、綾に言われるから……辛いのか？——

と、不意に浮かんだ光秋の意思を拾ったモニターが、右側に両手保持しているガトリング砲の拡大映像を表示し、光秋はそれを感慨の目で見つめる。

——ニコイチは、確かに大きな“力”を持っていて、兵器然としている。でも、僕が暴力だけの人間じゃないように、ニコイチにも、それだけであって欲しくない！……僕だけの“力”と言うのなら、そうでありたい！——

そこまで考えると、光秋は遠い背後から響く爆音を聞く。

正面に鴨川を捉えると、光秋は大河原を思い浮かべ、通信機に吹き込む。

「こちらニコイチ。大河原主任、聞こえますか？」

（ああ三曹。どうした？）

「三佐の指示で後退して、間もなく支部に着くのですが、補給等はどちらに行けば？」

（ああ、すまん。まだ支部から運び出してないんだ。本隊の出勤が早まってこっちの準備は間に合わなかったんでな。とりあえず、支部の方に来てくれ）

「了解」

言うとう光秋は、今度は上杉に通信を繋ぐ。

(……もしもし?)

―電話に繋がったか―「上杉さん? 加藤です」

(加藤? お前今出勤中じゃあ?)

「補給のために支部に向かつてます。もうすぐ着くんですが……本舎前の駐車場に出て待つてくれませんか?」

(何だよ? どつか怪我したか?)

「いえ、それとは別の問題で………」

言いながら、左後ろの綾の方に若干視線を向ける。

(……わかった。駐車場とこだな?)

「はい。お願いします」

言うとう光秋は通信を切り、支部へ直行することに専念する。

少しの間飛んで、眼下に支部本舎前の駐車場を捉えると、ゆっくりと垂直降下し、本舎中央部の近くに着地する。

と、

(三曹!)

大河原の声が通信機と外音スピーカーから同時に響き、光秋は声のした方―左下の辺

りに目をやる。

と、頭にヘッドフォンを被り、上着の袖を肘まで捲くり上げた灰色のツナギを着た主任が、右手でヘッドフォンの右スピーカーから伸びるマイクを口に近づけ、ニコイチを仁王立ちになって見上げているのを見つける。

「はい？」

光秋は通信機越しに応じる。

（ニコイチの脚に予備弾倉の荷台を取り付けるから、そのまま立たせておいてくれ）

「了解です」

（どうだ？新しい武器は）

「……………」

一瞬、綾の方を見る。

——こいつの前で、そういう話は……………だが、答えないわけには…………——「弾が多い分、長時間使えて助かります」

（そうか！それは、苦勞して作った甲斐があつた）

「……………！主任！N砲はまだあるんですか？」

（ああ。あることはあるし、使える状態だが？）

「補給ついでに用意してください！」

(?.....ガトリング砲では、やはり不満か?)

「いえ、両方持つて行くんです。N砲なら、接近戦でも使えますし」

(なるほど。だが、これから取り付ける荷台はガトリング用の物だから、弾は最初に積んだ5発しか持つて行けんぞ?)

「結構です。主力はあくまでもガトリング砲、近くなったらN砲でいきますから」

(わかった。すぐ用意しよう)

言うとは振り返り、ヘッドフォンのマイクに何か吹き込みながらニコイチから駆けて離れていく。

——これで少しは、気を遣った戦い方ができるかな?——

と、

「光秋、また嫌なことしに行くの?センサーに……」

綾が後ろから問いかける。

「……………あれは、厳密には戦争って程じゃないよ。それに……………」

光秋はシートベルトを外すと、体を左後ろに向け、綾と顔を合わせる。

「嫌なものを何とかするために行くんだって、言っただろう?」

「そうだけど……………そうだけど……………」

言いながら、綾は顔を俯ける。

「それより僕は、お前が何であそこにいたのか知りたいね。竹田さんはどうしたんだ？」と、

（加藤お！オレはここだー！目の前の足元だよ！見つけられねえのかー？）

上杉の声が外音スピーカーから響く。

「……しようがない。その話は後にしよう」

言うとう光秋は前に向き直り、外部スピーカーを入れる。

「はい。ただ今」

言いながら正面の足元に立つ白衣を羽織った上杉を見つめ、左右に目をやって荷台の取り付け作業がまだ始まっていないことを確認すると、外部スピーカーを切つて、左膝を着いてニコイチを屈ませ、上杉の許に左手を差し出す。

上杉が掌の中央にしゃがんで親指を立てた右手を差し出したのを合図に、ニコイチを立てさせてハッチを開け、左手をハッチの上に置いて上杉を手から下ろす。

左手で左肘掛のレバーを上げて操縦席をハッチから綾の頭が出るぎりぎりまで上げると、右手を外に出して、

「上杉さん、こっちです！」

と、声の大きさに注意しながら上杉を招き寄せる。適温に保たれているコクピットに、夏特有の暑さが入り込んで来る。

「なんだよ、ここそこそ………とお!?」

言いながら歩み寄ってきた上杉は、眼下のコクピットの中で操縦席に右手を添えて自分を見上げている綾を見、束の間言葉を失う。

「……!」

少しして調子を直した上杉は、顔を巡らせて誰も見ていないことを確認すると、ハツチに両手を着いて屈み、顔をコクピットに入れると、

「何でアヤちゃんがいるんだよ!」

と、驚きを含みながらも音量に注意を払った声で問う。

「僕もよくわからないんですが……」

と、光秋は弱々しく答える。

「とにかく、補給が済み次第また出なきやいけません。綾を乗せたままでは行けませんし、かと言ってこのまま降ろしたら機密に触れます。何かいい案ありませんか?」

「オレに言われてもなあ………どつか別の場所で降ろして、後で迎えに行くつていうのは?」

「さすがに知らない所で1人つきりにはできませんよ。殊にこんな状況じゃ」

「だよなあ………」

2人の間に、しばし沈黙が流れる。

と、

「……………」

光秋の頭に、ふと案が浮かぶ。

「被災者に支給する、オレンジ色のけっこう大きい毛布がありますよね？」

「あ？……ああ、あるけどよ？」

「すぐに持ってきてください！それを綾の頭から被せて……」

「……………」なるほど！顔が隠れるし、オレが連れてけば避難者つてことにも！」

「ええ！後はすみませんが、上杉さん、見ていてもらえませんか？」

「了解だ！じゃあ、まず下ろしてくれ」

「はい」

言うとき光秋は操縦席を機内へ下ろし、モニター正面にハッチの上に立つ上杉を確認すると、左掌をハッチの上に乗せ、それに上杉が安定した体勢で乗るのを見ると、ハッチを閉めて左膝を着いてニコイチを屈ませ、左手を慎重に地面に下ろす。

掌から下りた上杉は、近くにある本舎の正面玄関へと駆けていく。

—本舎の中を通って、医療棟に向かうのか？—

遠くなる上杉の背を見ながら、光秋はそんなことを考えてみる。

と、

「光秋……………」

後ろから綾が呼び掛ける。

「また、あたしを置いて行っちゃうの?」

光秋は再び体を綾の方に向け、互いの目を合わせて答える。

「危険なところなんだよ。綾だつてきつき、危ない目に遭つただろう?」

「……………」

光秋の言葉に、綾は軽く頷いて答える。

「この白いの、ニコイチつて言うんだがさ、頑丈にできてるから、僕はまだ安全なんだよ。ただその安全にしたつて、ずっと保障できるものでもないし、そうでなくとも、何が起こるかわからない場所に行くんだ。綾を連れては行けないよ」

「わかる……けど……………」

呟く様に言いながら、綾は顔を俯ける。

と、

（三曹?）

大河原の声が通信機と外部スピーカーから同時に響く。

「はい?」

と、体を前に向け直した光秋は声のした方―左側を見ながら通信機に言い、すぐ近く

に大河原の姿を見つける。

（何で座らせているんだ？）

「……………すみません！すぐ立たせます！」

大河原の言葉にハツとした光秋は、慌て言いながらすぐにニコイチを直立させる。

（そこまで慌てんでもいいが、何かあつたのか？）

「ちよつと、上杉医師に用がありまして……」

（ウエスギ？……………ああ！あの女にだらしない専属医だな。本部でも医者よりそつちのことで有名だぞ）

「はあ？……………」

（おおつといかん！こちらも待たせてすまん。今取り付けを始めるから、今しばらく待つてくれ）

「了解」

通信が終わると大河原は、ニコイチの背部側へと駆けていく。

荷台の取り付け作業はすぐに開始され、ニコイチの両腿に1つずつ、外側にガトリング砲の弾倉を2つ運べる容器が付いた輪が、サイコキネシスで浮き上げられたツナギたちによって固定されていく。

その様子を意識の隅に感じながら、光秋は綾の方に体を向け直す。当の綾は、立ち疲

れたのか、背もたれの側面に背中を預け、床に腰を下ろしている。

―座らせてあげたいが、僕がイスから離れるとニコイチが止まるしな……………―と、

（おーい！待たせた！）

ニコイチの正面の足元に左腕にオレンジ色の毛布を抱えて立つ上杉の声が、外部スピーカーから響く。

……………ちようにいいか？―

そう思いながら体を前に向ける光秋は、通信機を主任に繋ぐ。

「主任、加藤です。作業に後どれくらい掛かりますか？」

（ん？荷台の取り付けはもうすぐ終わるが？）

「……………わかりました」―上杉さんには、少し待ってもらうか―

（ああただ、その後弾倉の積み込みがあるが？どかしたか？）

「いえ、用事を頼んだ上杉医師が戻ってきてくれたので、終わり次第コクピットに上げよう。あとそれなら、予備弾の積み込みは僕がやりますが？」

（そうか？それなら……………じゃあ、後は頼む。ちようにど取り付けも終わったし、動いても大丈夫だ）

「了解です。ありがとうございます」

言いながら光秋は、頭を軽く前に倒して礼をする。

（おーい加藤！まだかあ？人型ロボットに見降ろされるつてのは、意外と怖いんだぜー！）

上杉の声に光秋は、ニコイチの左膝を着かせると、上杉の許に左手を差し出す。上杉が掌の上で体を安定させたのを確認すると、ハッチを開いて左手をハッチの上に置く。再び外の熱気が入り込んでくる。

光秋は操縦席をぎりぎりまで上げながら、

「すみません。お待ちせしました」

と、手から下りてコクピットを見下ろす上杉に詫びる。

「ほれ、頼んでた毛布」

言いながら上杉は、左手の毛布を光秋に投げて渡す。それを光秋は前に差し出した両手で受け取る。

と、上杉はその場にしゃがみ込むと、ハッチに着いた左手を基点に光秋と綾に背を向け、足の方から慎重にコクピット内に下りてくる。

光秋の右前に着地した上杉は、光秋の方に振り返ると、右手に持ったタツパを差し出す。

「？」

それは小さ過ぎたのか、モニター越しでは光秋にはわからなかった物である。

「あとこれは、食堂からの差し入れだ」

「差し入れ?……ありがとうございます」――後で、食堂にお礼に行かんとな――

思いながら光秋は、毛布を膝の上に置いて両手でタツパを受け取る。

直後、

「!」

光秋は左後ろから刺す様な悪寒を感じ、すぐにハッチを閉めて操縦席を下ろすと、素早くシートベルトを締める。

「?……おい、加藤?」

突然のことに驚いた上杉に、光秋は、

「何処かに掴まってください!綾もだ!」

と返し、素早く立たせたニコイチを悪寒の来る方――左後ろへと向け、同時に両手で持ったガトリング砲の砲口を正面上方に向ける。

正面上空に黄色い戦闘機を捉えたのも束の間、その戦闘機の両翼から――発ずつミサイルが放たれる。

「!」

光秋はガトリング砲の引き金を引き、砲口を左右に振って弾幕を張ると、弾に触れた

ミサイルが2つとも火球に転じる。

が、かなりの距離を空けて迎撃したものの、爆発で生じた衝撃波はコクピットを若干揺らし、周囲の建物のガラスにヒビを入れ、中には完全に割れる物も出る。

—こんな所にまで！—

毒づきながら光秋は、右パネルのレーダー表示に目をやり、ミサイルの迎撃のために見失った先程の戦闘機を捜す。

——……！そこか！——

ニコイチを真後ろへと振り返らせ、右ペダルを踏んで一気に上昇し、眼下に黄色い戦闘機を捉える。

素早く照準を合わせ、引き金に指を掛ける。

が、

「……………」

戦闘機の下に本舎を見、一瞬発砲を躊躇する。

その間に戦闘機は照準から逃れ、ニコイチの後方へと過ぎて行く。

「……………おい、加藤！……こじやあ」

「わかつてます！」

右後ろに両手で背もたれを掴んで立つ上杉に、光秋は戦闘機を目で追いながら返す。

―向こうの両翼にはまだ1発ずつミサイルがある。ここでまたミサイルや飛行機を爆発させたら、大惨事になる!―

その認識が、光秋に発砲を躊躇わせる。

―それにこの武器じゃあ、流れ弾の問題だって……―
と、

(退避だ!退避!本舎から離れろ!)

大河原の怒声が外部スピーカーから響く。

それを聞いた光秋は、

「……主任!」

と、戦闘機の動きに合わせて砲口を右へと流しながら、通信機に吹き込む。

(何だ?)

「N砲はどうなってるんです?」

(下だ!足元を見ろ!)

―足元?……―

言われて光秋は目を下方に向けると、

―!あつた!―

正門の塀寄りの所に、地面に直置きしてあるN砲を見つける。弾倉もすでに装填され

ている。

光秋はすぐにその近くに着地し、右手のガトリング砲を置いてN砲に持ち替える。

直後、

「！」

正面から来る悪寒と接近警報を感じた光秋は、跳ねる様に一気に上昇する。少し遅れてニコイチがいた辺りに銃弾が殺到し、地面のコンクリートを抉る。

光秋は足を過ぎて行く戦闘機を目で追いながらニコイチを振り返らせ、大きく間を開けて旋回した戦闘機がニコイチ目掛けて突っ込んで来る。

「……」

光秋は右半身を後ろに引いて左腕を縦に前に出し、受けの姿勢を取る。

「……！」

戦闘機が右翼のミサイルを撃ったのを合図に、光秋は前に出る。

が、直後、

「！」

戦闘機は機首の機銃を撃ってミサイルを誘爆させ、その爆光の中に隠れる。

——目隠し？——

そう理解した光秋は目を右へ左へと動かして戦闘機を再び捉えようとするが、爆光の

眩しさが手伝って見つけることができない。

—クッ！何処に……—

と、

—……！上！—

—また声!?上?—

再び聞こえた声に戸惑ったのも一瞬、光秋は視線を上に向ける。上空に自分に向かって一直線に突っ込んで来る影を見つけるや、それとの間合いを一気に詰め、正面に戦闘機のキャノピーを入れた刹那、

「—」

左肩の上に位置させた右腕を素早く横一の字に右に払い、N砲の砲身を機首の付け根に叩き込む。

光秋は胴部と泣き別れになった機首を素早く左脇に抱え、落ちて行く胴部を拾おうと降下する。

と、胴部はすぐに宙に停止し、それと同高度を取って滞空した光秋が下を見ると拡大映像が表示され、本舎駐車場の中央で両手を上にかざしている数人のツナギを見る。

—作業員さんたちが、受け止めてくれたか!—

そう思う間にも胴部はゆっくりと降下し、それを追い抜いて光秋は先程地面に置いた

ガトリング砲の近くに着地する。

ニコイチに左膝を着かせ、脇に抱えていた機首を地面に置くと、そのキャノピーの周囲を5人程の緑服が拳銃や自動小銃を向けて取り囲むのを見る。

と、右後ろに立つ上杉が、

「どうする？……じゃ降りられねえぞ？」

と、光秋に尋ねてくる。

「……！主任！」

光秋は通信機に呼び掛ける。

（何だ？）

「ガトリング砲の予備弾は何処です？積み込み次第出ます」

（ああ、本舎の裏手だ。今移動させる）

「いえ、それなら自分で行きます」

言うとう光秋は左手で地面のガトリング砲を拾って立ち上がり、ある程度上昇して正面の本舎へと前進し、その裏手の広間へ着地する。右側の足元には、ガトリング砲の弾倉を4つ積んだ無人の大型トラックが止まっている。

光秋はニコイチに左膝を着かせて屈ませると、

「上杉さん」

と、上杉に目をやって呼び掛け、ハッチを開けて操縦席を機外に出す。

その間にも光秋の前を通って席の左側へ移動した上杉は、綾に帽子を脱がせて光秋の膝の上にあつた毛布を頭から被せる。

光秋はN砲を地面に置いた右手をハッチに置き、帽子を両手で抱くように持った毛布に隠れた綾が右隣の上杉に付き添われて掌に向かうのを見る。

「……………綾」

光秋はその背に呼び掛ける。

「今度は、絶対付いて来たらダメだぞ。さつきもそうだったし、今の飛行機だって危なかったけど、これから僕が行く所はもっと危なくて、怖くて、嫌なんだから」

「……………」

強くはないがはつきりとした調子で言うと、綾は振り向かずに毛布下の頭を軽く頷け、上杉と共に掌に乗り込む。

光秋は2人が手の上で体を安定させるのを確認すると、ゆっくりと手を下ろし、地面に着いた2人が医療棟へ向かう背中をしばし見送る。

「……………さてとね！」

そう言つて気持ち切り替えると、機内へ戻つてハッチを閉め、左手のガトリング砲も置いて両手を右のトラックの荷台に伸ばし、ガトリング砲の弾倉を1つずつ両腿の荷

台に積んでいく。4つ全てを積み終わると、右手にガトリング砲、左手にN砲を持って立ち上がる。

鼻で大きく息を吸い、吐くと、

「行くかね……」

と呟いて、右ペダルを軽く踏む。

本舎の屋上まで上昇すると、光秋は背後に振り向いて高度を上げながら前進する。鴨川を越えた辺りまで進むと、光秋は通信機を藤原に繋ぐ。

「こちらニコイチの加藤。藤原三佐、どうぞ」

「こちら藤原！何か？」

そう答える藤原の声の後ろからは、散発的に銃声や爆音が響いている。

「補給・休息を終え、ただ今現場に向かっています。僕は何処に行けば？」

「そうだな……ん？ヌオツ！」

「！」

通信機から響く爆音が光秋の左耳を打つ。

「三佐！」

「……無事だ！」

「！……………」

いつも通りの藤原の声に、光秋は安堵する。

（ちようどいい。儂らに合流しろ。場所は……いや、やはり発煙筒を上げる。色は赤だ）
「了解！至急向かいます！」

言うと光秋は前進を止め、周囲に目を凝らす。

「……あれか！」

視界の右端に赤い煙の柱を見つけるや、その方向へ急ぎ前進する。

煙の柱と距離を詰めた光秋は、その根元に視線を落とすと、縦に伸びる2車線道路を舞台に、手前側に周囲の建物の影に隠れながら応戦の銃撃を行う緑服たちと、距離を置いて奥側から建物の瓦礫でバリケードを築いてその影から銃撃を行う黒服たちを見る。

（加藤！）

通信機から藤原の声が響く。

「はい！」

（奥にEジャマーがあるだろう。あれが最後だ。破壊してくれ！）

藤原の言葉で前方に目をやった光秋は、前後を2台ずつ戦車で囲まれたEジャマーを見つける。

「了解！」

言うと光秋はEジャマーへと直進し、それに気付いた黒服たちや戦車4台からの集中

砲火を弧を描く様に上昇してかわすと、Eジャマーの真上に着いて左手のN砲を真下に向ける。

—両手塞がつててレーザーが使えないが、こんなところか？—

モニター正面下部に映るEジャマー、その赤丸のマーカーに砲口を合わせるよう意識し、

「……………」

一瞬後に引き金を引く。

砲口から放たれた砲弾がEジャマーを直撃し、その爆発がEジャマーを粉碎して爆風に煽られる戦車4台の中央に赤々と燃える爆炎を咲かせる。

「よしー」—死んで、ないよな？……………」

心中に不安を覚えながらも声を出して呟くと、光秋は背後に振り返って外部スピーカーを入れる。

「NPは、直ちに武装解除の上投降せよ！最後のEジャマーを破壊した！」

が、直後、

「！」

光秋は背後に無数の悪寒が刺さる感覚を覚え、急いで振り返る。

「！」

視界の正面に、ざっと見て20機程の黒いヘリの一団が我先にと自分たちの許へ直進して来るのを見る。

と、

（白い犬が！またしても！）

と言う拡声器を通した怒声を外音スピーカー越しに聞いた直後、距離を詰めたヘリの一団から一斉に無数のミサイルが放たれる。

「……………そっちの味方だっているんだぞ！」

怒鳴りながら少し前に出た光秋は、右手のガトリング砲を前に向け、砲口を左右に大きく振って次々とミサイルを火球に変える。

が、

「……………なっ！」——弾切れ!——

突然空回りを始めた砲口を見てそう判断するが、同時にまだ数発ある撃ち漏らしたミサイルが徐々に近づいてくる光景も見る。

「……………くっ！」

と、

（加藤お！避けろお！）

「？」

外音スピーカーから響いた藤原の声に思わず背後に振り返りと、足元に防具一式で身を固めた藤原が、燃え盛るEジヤマーと他の緑服たちが乗員たちの退車を急かしている戦車4台を背にして仁王立ちになっているのを見る。

直後、素早く両手を上に上げた藤原の動きに合わせて、すぐ後ろの戦車2台の砲塔部が車体から分離して宙に浮き、空を切る様に前に出された藤原の手の動きに合わせて砲塔部2つが急上昇を掛けながら前進する。

「!? うおっ!」

自分に向かって来る砲塔2つに声を上げた光秋は、素早く降下してそれらを避けるのと、目で追ったそれらがゆるやかに軌道を変えて手近なミサイル2つに当たって誘爆させるのを見る。

「!」

光秋は思わず背後に向き直る。

と、最初の2つに続いて残り2つの砲塔が、4台の車体が、燃え盛るEジヤマーがニコイチの頭上を飛んで、それぞれミサイルに当たって誘爆を起こさせる。

と、今度はコンクリート片を主とした瓦礫群が濁流の様にニコイチの上を過ぎ、ミサイルが全弾掃討された宙を一目散に駆けてNPのヘリ群に殺到する。ヘリの一団は機首の機銃を連射して襲いかかる瓦礫群を砕いて迎撃するが、瓦礫はただでさえ数が多い

上に後から後から次々と来るために、多くは銃撃を抜けてヘリのプロペラに当たり、ローターの基部を傷つけ、機銃を歪め、機首のコクピットのフロントガラスを砕く。瞬く間にヘリは全機落下を始め、藤原が素早く両手を前にかざすと、一瞬間で止まってゆっくりと降下を始める。

「すごい！……あれが三佐の“力”！……—「あれが、超能力戦！……」
ニコイチを後ろに向け直した光秋は、足元の藤原を見、思わず呟く。

直後、

「！」

正面の上方から来る悪寒と接近警報を感じた光秋は、視線を上に向けると、遠くに10機の黄色い戦闘機群を見つける。左右に5機ずつに分かれ、それぞれがV字の編隊を組んで接近して来るのである。

「NPの次は、サン教か！」

軽い怒りを含んだ小声を呟きながら左手のN砲を脇に捨て、空いた手でガトリング砲の空弾倉を鷲掴んでそれも脇に放り、素早く左腿の予備弾倉を1つ掴んで装填する。

ガトリング砲を両手で持って飛び立つと、それと同時に戦闘機群から一斉に放たれたミサイルがニコイチに殺到する。

「僕だけを狙ってくれてよかったさ！」

言いながら光秋はガトリング砲を前に向け、

「！」

砲口を左右に振って自分に迫り来るミサイルを火球に変えていく。

「迎撃が楽だからな！」

そう言う頃にはミサイルは全弾破壊され、しかし一方で、ろくに狙いを付けず撒き散らす様な撃ち方をしたためにガトリング砲の残弾も尽きてしまう。

光秋はガトリング砲を脇に放ると、高度を上げながら戦闘機群に直進する。

（加藤！速く動け！猪突はするな！）

通信機から聞こえる藤原の声が、光秋に、

——『速く動け！』——

と言う言葉呼び起こさせ、ニコイチに戦闘機群の上を取らせる。

——左から！——

断じると同時に左下の編隊の先頭の1機に素早く接近し、戦闘機の機首付け根の左上を取る。

直後、

「！」

ニコイチは腰溜めにした右拳を繰り出して機首の付け根を粉碎する。

瞬時に光秋は右の戦闘機の機首右側に接近し、

「！」

右腕を腰に引きながらその付け根に左正拳突きを叩き込むと、さらに右の戦闘機の許に素早く移動し、その左を取って、

「！」

左腕を引きながら機首の付け根に右正拳を食らわす。

右腕を引きながら左へ並行移動し、左の戦闘機の左側を取った直後、

「！」

体を戦闘機の方に向けると同時に機首付け根に右突きを見舞う。

瞬時に左に移動してこの編隊最後の1機の左を取ると、

「！」

右腕を引きながら機首付け根に左突きを入れる。

——次！——

そう思い、左腕を引きながらもう1つの編隊がいる背後に振り返る。

光秋は視界の右端に先頭の1機を捉えると、素早く接近して右を取り、

「！」

機首の付け根に右突きを入れる。

すぐに右腕を引いて左前に前進し、

「！」

2 機目の機首右側に右突きを入れると、瞬時に左に並行移動して、

「！」

3 機目の機首右側に左突きを入れる。

左腕を引きなら背後に振り返ると、正面に捉えた4機目に接近し、

「！」

機首の左側に右突きを入れ、すぐに左に移動すると、

「！」

最後の1機の機首左側に左突きを食らわす。

「！……………」

光秋は左腕をゆっくり引いて両拳を腰の辺りに落ち着けると、

「……………ふうう……………」

と、鼻から大きく吸った息を口から大きく吐き出して、興奮で火照った自分を冷ます。

17 白い犬

深呼吸して落ち着いた光秋は、ニコイチを左に向けて眼下を見下ろしてみる。

視線の先には、光秋が撃墜した戦闘機の胴と機首が路上で両手を天にかざして立つ10人程の緑服たちによってゆっくり下ろされる光景がある。

と、

(……………白い犬……………)

「?」

外部スピーカー越しに、呟く様な声を聞く。

と、

(……………白い犬!)

(白い犬!)

(白い犬!)

手をかざして戦闘機を下ろしている人たちの合間に散々と立つ緑服たちが、明らかにニコイチを見上げて口々に言い出す。

「……………?」

その光景に光秋が唾然として、口々の声は徐々にリズムをとり出し、戦闘機を近くの平地に置いた10人も含めてその場の全員が拳を作った片腕をテンポよく上下する。

白い犬！

白い犬！

白い犬！

白い犬！

白い犬！

「……………」

他人^{ひと}からこの様に見られた経験などない光秋は、呆然としながら永遠に続くかと思える程のその光景を眺めるだけである。

しばらく経った頃。

——……………そろそろ下りよう——

そう決めた光秋は、未だ「白い犬！」の合唱を続ける緑服たちを眼下に見ながら、ニコイチを彼らがいる足元の路上に降下させる。

ニコイチが着地すると、緑服たちは一斉に、

（オオ——！）

と雄叫びを上げ、中には両腕を上げてガッツポーズを取る様な者も出る。

「……………」

光秋は照れとも気恥ずかしさとも言える感情を抱きながら、外部スピーカーを切つて左耳の通信機に吹き込む。

「三佐」

（おお！何だ？）

そう応じる藤原三佐の声までも、どこか熱気を含んでいる。

「近くに他の機影は見えませんか、見たところ鎮圧は終了した様ですので、一旦支部に戻りたいのですが？……」――綾が心配だ……―

（んー……………そうだな。後はニコイチがなくなるとも充分だ。支部で報告を済ませたら、帰宅してもかまわんぞ？）

「わかりました」

言うとき光秋はニコイチを前に歩かせ、率先して道を開けてくれる緑服たちの間を通つて先程放ったガトリング砲を左手に、N砲を右手に拾う。

と、光秋が飛び立つために右足をペダルに掛ける直前、

（あ、加藤！）

藤原よりは冷静そうな小田一尉の声が通信機から響く。

「はい？」

（戻るのなら、俺も乗せてくれ。お前の報告を記録しなくちゃならんからな）

「えっ!!……」

思わず通信機に拾われない程度の小声で驚く。

（どうした？）

「あ、いえ……」――綾のこと……しかし、報告するなら記録役は必要だし、断つたら不審がられるだろうしなあ……――「了解です。どこにいます？」

（お前のすぐ後ろだ）

言われて背後に振り返ると、正面の足元に緑服の上に防具一式を着け、右肩に自動小銃を掛けた小田を見る。

ニコイチに左膝を着かせると、N砲を置いた右手を差し出し、その上に小田がしっかりと乗るのを確認した光秋は、ハッチを開けて操縦席を機外に出す。

外に出ると再び夏の暑い気候にさらされるが、

「……」

今回はそれに加えて煙や埃の様な臭いが鼻を突く。

光秋は右手をハッチの上に置いて小田が操縦席の左側へ移動すると、席を機内へ下ろし、右手にN砲を持たせながらハッチを閉め、立ち上がってゆっくりと上昇し、進路を

右に向けて前進する。

その後ろでは、少しは興奮が冷めた緑服たちが、それでもニコイチを目で追う光景がある。

「……あ、そうだ。一尉、よろしければ」

言いながら光秋は、左手で膝の上に置きっぱなしになっていたタツパを取り、操縦席の背もたれの左側を白い手袋をした右手で掴みながら立つ小田の方に差し出す。

「なんだ？」

「食堂からの差し入れです。補給で戻った時にもらつて」

「ん。じゃあ……」

言う和小田は両手の手袋を脱いで左手でタツパを受け取り、ふたを開ける。

「なんです？」

「おにぎりが3つだ」

光秋の問いに、小田は中身を見ながら返す。

「お前も食うか？ もともとお前の差し入れなんだし」

「……いえ、今はいいです」

「そうか？……」

言う和小田は右手で海苔で包まれたおにぎりを1つ取り、大口で一口かじる。

それを視界の端で見る光秋は、

――湿った海苔が苦手なんだよな……………」

などと考えながら、何となしに右手のN砲に目をやる。

「……………」よかれと思ったんですがねえ……………」やっぱり欲張っちゃいけないですね……………」

「ん？」

おにぎりを飲み込みながら、小田は光秋の呟きに応じる。

「いえね、弾数の多いガトリング砲と、接近戦でも使えるN砲、2つ持つて行けば便利かと思ったんですが……………」実際はレーザーが使えないから照準に自信がなくなるし、いざという時すぐに弾の補充ができないし、もう少しよく考えるべきだったって……………」

「なるほどな……………」

「それに僕は結局、最後にやった格闘戦の方がどうも性に合って……………」ニコイチの補助があるとはいえ、やっぱり射撃にはあまり自信がなくて……………」

「まあ、目のことがあるんだ。しょうがないさ。それに、その性に合う格闘戦で戦闘機を全滅してくれたおかげで、みんなの士気は上がったんだ。いいじゃないか」

「そうですか……………」そもそも、なんでみんなあんなに喜んだんです？」

「……………」俺もよくわからん。ただ、お前が戦闘機を次々墜としていった時、なぜか気分が高

揚したんだよな……戦場みたいな所にいると、みんなああなるんだろう?」

「はあ……………」

光秋はそこで何と返していいかわからず、つい黙ってしまふ。

京都支部本舎の正面に着地した光秋は、ニコイチに左膝を着かせ、ハッチを開けて機外へ出ると、N砲を置いた右手をハッチの上に上げる。そこに小田が乗り込むのを確認すると手を地面に下ろし、小田が手から下りたのを確認すると左耳の通信機を右の肘掛に納め、シートベルトを外し、操縦席から立ち上がりながら左肘掛に納めてあるカプセルを取り出す。

カプセルをズボンの左のポケットに入れると、ハッチの左端からリフトを出し、それに左足と両手を掛けて降下する。

リフトを放して着地すると、ニコイチの正面側——光秋から見て左側から、右手にタツパを持った小田が歩み寄ってくる。

「ごちそうさま。1ついただいた。なかなか美味かったぞ」

「お礼は、食堂の人たちに言ってください」

言いながら小田はタツパを差し出し、光秋はそれを両手で受け取りながら返すと、

「三曹! 戻ったか」

言いながら、大河原主任がツナギを10人程引き連れて本舎の正面玄関から光秋と小田の許に歩み寄ってくる。

「はい。現場の方も、ひと段落したので」

タツパを右手に持ちながら、光秋はそう返す。

「ん。とりあえず、ニコイチを一度立たせてくれ。脚の器具を外す」

「……………はい」

大河原の言葉にハツとした光秋は、すぐに小田にタツパを返してリフトを掴み、コクピットへと上がる。

—久しぶりで、忘れてたな……………—

上りながらそんなことを考えると、コクピットに上がってリフトをハッチに仕舞い、席に着いて認証を行う。

—あと終わった後の安心感もあるんだろうな……………—

イスが機内へ下りる間にそんなことを考え、静脈の認証が済んでモニターが点くと、光秋は左手のガトリング砲を地面に置き、ニコイチを直立させる。

すぐに取り外し作業が開始されるのを横に見ながら、光秋は機外へ出てリフトで下りる。

着地すると、先程と同じ位置に立っている大河原に歩み寄る。

「取り外しが終わるまで、どれくらい掛かります?」

「残弾の安全管理もあつて、すぐにはなあ……とりあえず、30分といったところか?」
「……………わかりました」

と、光秋の右前に立つ小田が、

「その間に、報告済ませればいいだろう」

と加わる。

「……………ですね。では、後お願いします」

そう言つて一礼すると、光秋は小田の後を追つて本舎の玄関へ向かう。

自動ドアを開くと、2人は最寄りのエレベーターに乗り込み、地下1階に向かう。

「ニコイチ、すぐ仕舞わないと気になるか?」

「はい……手元ないと落ち着かなくなつて……………」

左隣に立つ小田がタツパを返しながら尋ね、光秋は両手でそれを受け取りながら返す。

藤原隊の待機室に通された光秋は、『蜂の巣』の報告の時の様に、防具一式を外した小田の自筆と録音器を前に一通りの報告を行う。

新装備のガトリング砲装備の上で出撃したこと、現場へ向かう途中に鴨川付近でNPのヘリを戦闘不能にしたこと、その後現場に直行し、ガトリング砲でEジャマー1基を

破壊したこと、2基目のEジャマーをガトリング砲で破壊し、その際に護衛の戦車2台を戦闘不能にしたこと、3基目のEジャマーの手前でサン教の戦闘機1機とNPのヘリ2機を戦闘不能にした後、ガトリング砲でEジャマーを破壊したこと。

「その時通信が途絶えて、管制室に連絡したらハッチが開いたって報告があつたんだが、何があつたんだ？」

——……綾を入れた時か！——

小田の問いに、光秋は内心軽い動揺を覚えつつ、

「……何かの拍子に、膝がスイツチに当たったみたいで……すぐに閉めました。通信に關しては、僕も戦闘に夢中だったので、よく覚えていません」

と、平静としながら答える。

「ん……………」

と短く応じると、小田は右手のボールペンをメモ紙に走らせる。

——顔に出たかな？……………——

束の間不安に襲われるが、小田がそれ以上追究してこないのを報告を再開する。

3基目のEジャマーを破壊した後、藤原の指示で補給と休息を兼ねて支部に戻ったこと、予備弾倉を積む荷台をニコイチに装備する際、光秋の方からN砲の装備を要求したこと、荷台の取り付けが終了した辺りで支部がサン教の戦闘機1機の奇襲を受け、光秋

がN砲で機首を叩き折ることでこれを戦闘不能にしたこと、その後ガトリング砲の予備弾倉を4つ積み、N砲とガトリング砲を装備して再び現場へ向かったこと、藤原の要請を受けて援軍に駆けつけ、N砲でEジャマーを破壊したこと、NPのヘリ部隊のミサイル攻撃をガトリング砲で迎撃し、サン教の戦闘機10機をニコイチの格闘戦で戦闘不能にしたこと。

「……………と、こんなところですね」

光秋は、報告からひと呼吸おいて言う。

「了解した。他に言っておきたいことは？」

「……あ、ニコイチの武装に関して、もっと改良の余地があります。照準器なんかは、引き金の近くにボタンを設けた方がいいかと」

小田の問いに、光秋はすぐに浮かんだことを答える。

「了解だ。記録しておく。もう1つ、今回は『蜂の巣』の時みたいに、暴走の兆候はなかったんだな？」

「はい。強いて言えば、当たり前の戦闘の興奮くらいで」

「わかった」

言うところ小田はボールペンを走らせ、それが終わるとペンを置いて光秋と顔を見合わせる。

「これなら、復帰の時期が早まるかもしれないな。上手くすれば、ESOのアイドルだ」
「アイドル？」

小田の唐突な言葉に、光秋は思わずオウム返ししてしまう。

「僕がですか？」

「さっきのみんなの熱狂ぶりを見ただろう？『白い犬うー！』ってな」

「はい？……」

光秋はどう応じていいかわからず、

「とりあえず、記録ありがとうございます。ニコイチが心配なんで、今日はこれで。失礼します」

と一礼し、部屋を出て最寄りのエレベーターに乗り込む。

1階に上がった光秋は、駐車場に置きっぱなしになっているニコイチの許に向かう。

正面玄関を通ると、目の前に脚の器具が外されたニコイチと、その足元で武装や器具の確認作業を行っているツナギたちの姿を見る。

光秋はニコイチに歩み寄りながら、

「大河原主任！」

と、辺りを見回しながら叫ぶ。

「ああ、三曹。見ての通り、もう外した。仕舞ってかまわん」

「はい」

光秋の右側に置いてあるガトリング砲の砲身の影から顔を出した大河原が答えると、光秋は応じて左手を左の脚ポケットに入れてカプセルを取り出し、それをニコイチに向けてレバーを「出」から「入」に切り替え、ボタンを押す。

カプセルの先端から白い光線がコクピット部に向かって放たれ、光の当点を中心にニコイチは縮小し、それを吸い込む様に光線はカプセルの先端へと戻る。

ニコイチの収容を終えると、

「御苦労さまでした！」

と言つて一礼し、カプセルを左の脚ポケットに仕舞つて振り返つて駆け足で本舎へ向かう。

自動ドアをくぐると左側の通路を直進し、突き当たりで右に曲がり、目の前のドアを開けて本舎の裏側に出ると、歩調を速めて医療棟へ向かう。

—今のコース……伊部二尉がニコイチの所に案内してくれた道だよな……………—

ふと、光秋の脳裏にその時の光景が浮かぶ。

上杉の診察室の前に着くと、光秋は1つ深呼吸して息を整え、ドアをノックすると返事を待たずに開ける。

「上杉さん！」

「！……加藤!?……」

突然の訪問に、ドア側から見て左の椅子に座っていた上杉は思わず立ち上がって光秋と顔を合わせる。

「……NPは？」

「その件はもう終了しました。僕には帰宅許可も出されてます」

「ああ……そう?……」

光秋の返答に応じつつ、上杉は椅子に腰を下ろす。

光秋はドアを閉めながら、

「……綾は？」

と、上杉以外人影がない部屋の中を見回して問う。

「ああ、ここに連れ込んですぐに戸松教授から連絡がきてよ。無事だつて言ったら、『すぐに迎えに行く』って一方的に言ってきて……んでここまで部下連れで来たと思ったら、アヤちゃん連れてそそくさと出てつちまつてよ……」

——つまり、今は教授のところか……—

光秋は上杉の説明をそう理解する。

「それで、その後連絡は？」

「それが全然」

「!?……」

その上杉の返答に、光秋は頭が若干熱を帯びるのを自覚する。

「全然って、上杉さんの方から連絡はしなかったんですか?」

光秋は険しい声と言ひ方にならないよう注意しながら問う。

「もちろん、オレだって何回も電話したさ! オレはあんまりあの人信用してないしな!」

上杉は若干不満を含んだ強い調子で答え、ひと呼吸置いて落ち着くと、

「でも、何回かけても繋がらないんだよな……………」

と、平時の口調で続ける。

直後、

「!」

光秋は左足に携帯電話の振動を感じ、同じポケットに入れてあるカプセルが共振してブーツブーツと耳にくる音を聞く。

素早く左手を左の脚ポケットに伸ばし、携帯電話を取り出して画面を開き、左耳に当てる。着信表示には、「戸松教授」とある。

「もしもし!?!」

（あ、加藤君か?）

「教授!」

「!」

電話越しに聞こえた教授の声に光秋は思わず大声を上げ、その声に上杉もハツとする。

「今どちらに? いやそれより、綾は?」

(彼女なら、騒ぎが収まってすぐに例の小屋に送り帰したよ)

「帰した?」

(我々がもう大丈夫かと話し合っていたら、『帰りたい』と言い出すんでな、施設の車で送って行つた。その時携帯のバッテリーが切れててな、君の部屋で充電させてもらつて、それで今かけているんだが)

「それはいいんですが、今綾一人なんですか?」

(ああ。彼女がそうしてくれと。この電話も、帰路の車の中でかけているんだが)

「大丈夫ですか? その……安全とか?……」

(?……ああ。大丈夫だよ。事件現場とあの小屋と、大分距離がある。そもそも、もう殆ど収まったんだらう?)

「はい……まあ、わかりました。ありがとうございます」

言うとう光秋は一礼し、電話を切つて左の脚ポケットに仕舞う。

「なんだって?」

上杉が問う。

「本人の要望で、家に戻ったそうです」

「今まで連絡が付かなかったのは？」

「電話の電源が切れていたそうです」

「ふーん？……」

光秋の返答に、上杉は渋い顔を作る。

「それなら、僕も家に戻ります」

「おう。気を付けてな！」

「では」

光秋は上杉に一礼し、振り返ってドアに向かう。

と、

「……!？」

突然開いたドアから小田が現れ、光秋は一瞬心臓を跳ね上げる。

「一尉!!」

「やっぱりここにいたか」

言うと小田は右手を差し出し、

「?……」

光秋はその手にタツパが掴まれているのを見る。

「忘れ物だ」

「……………すみません！」

頭を深めに下げながら、光秋は両手でタツパを受け取る。

「ところで一尉、なんで加藤がここにいてるってわかったんです？」

光秋同様に驚いている上杉が、椅子から腰を浮かせて問う。

「ん？こいつが待機室から出て行つて少しして、タツパがテーブルの上に置きっぱなしになってるのに気付いてな。慌てて追いかけたら駐車場にはもうニコイチがなくて、帰ったかと思ったんだ。そうしたら大河原主任が本舎の方に行つたことと、作戦中から上杉に用がある様子だったことを教えてくれて、もしやと思つて来てみたら……」

「案の定、オレの診察室にいた、と？」

「ああ。2人とも、なんかあつたのか？」

「いえ、もう済みました！」

上杉が強めの調子で応じる。

「そうか？……………それにしても、竹田はどこまでいったんだ？一向に帰つてこないが？」

「！」

小田が何気なく言つた言葉に、光秋は綾のことと目の前の騒動ですっかり忘れていた

竹田二尉のことを思い出す。

「ああ一尉、何なら、僕が捜してきますが?」

「お前が?……しかし……」

「どうせもう帰りますし、散歩がてらです。一尉はこの後、事後処理で忙しいでしょうし」

「そうか?……それなら……頼むか」

「了解です。では」

言うとき光秋は小田の左脇をすり抜けて部屋から出ると、振り返って室内の小田と上杉に一礼し、ドアを閉める。

京都支部の正門をくぐった光秋は、とりあえず最後に竹田を見た際、彼が向かって行った右へ歩を進める。ふと右手に持ったタツパに目をやり、

「傷まないだろうか?……大丈夫か?……」

と、現状ではどうにもならないことを考えてみる。

しばらく歩道を直進すると、道の端に立ち止まって左手を左の脚ポケットに伸ばし、携帯電話を取り出して竹田の番号にかける。

「……………」

10回以上着信音を鳴らしても竹田が出る気配はなく、

—かけ直すか?—

と、左耳から電話機を少し離れた直後、

(……………もしもし?)

電話越しに、竹田の狼狽を含んだ声を聞く。

「二尉? 加藤です」

(ああ……………あのよお加藤、アヤのことなんだけど……………)

—申しわけなさで一杯になっている—

竹田の声を光秋はそう感じる。

「いなくなつたことなら心配いりません。今、家にいます」

(……………マジか!?)

先程までの暗さが嘘の様な生気に富んだ声がスピーカーから響く。

「ええ……………とところでその様子ですと、だいぶ捜したようですね?」

(当たり前だろう。機密だし、後輩だし、後輩の女なんだし!)

「……………最後のが余計な気がしますが……………とにかく、もう大丈夫です。それより、すぐに支

部に戻ってください。小田一尉が渋い顔してましたよ」

(りよーかい!……………とところで、お前これからどうすんだ?)

「帰宅許可が出たので、家に帰ります。綾のことも心配なんで」

（足どうすんだよ？）

「近くで、タクシーでも拾います」

（バカ。こんな騒ぎの後だぜえ？タクシーなんてしばらく来ねえよ）

「ああ、そうか……」

（ちようどいい。オレが乗せてつてやるよ）

「……しかし二尉は……」

（いいのいいの。お前が捜すの手こずったつて言えば、一尉も少しは納得するだろう）

——……そういうもんか？でも、早く帰つた方がいだろうし……——「じゃあ、お言葉に甘えて。どちらで待ち合わせれば？」

竹田が指定した待ち合わせ場所に向かう途中、光秋は小さな本屋を見つける。

——結局今日も台無しになつちまつたし、その埋め合わせに……——

そんなことを考えながらその本屋に入ると、薄めの文庫本を1冊買い、その本が入つたビニール袋とタツパを右手に再び歩を進める。

歩きながら光秋は、ふと先程の戦闘を振り返つてみる。

——そういえば、今日も起つてたな……——

鼻からフーッと溜め息を吐くと、

——僕は正真の野郎、いや、牡だな……——

と、軽い虚しさを覚える。

―それに、この間チンピラと素手でやりあった時は、あっさりやられて、今回ニコイチに乗ってやったら大活躍か………生身の、なんと弱いことかな………―
そうしているうちに、光秋は指定された2車線道路の小さな十字路に着く。

「……………」

右の歩道から左右前後を見回して竹田の車を捜しながら、歩道の端で立つて待つ。

しばらくすると、緑色の軍用車が徐々に速度を落としながら右側から近づき、光秋の前に停車する。

左前部のドアの窓が下ろされると、右側の運転席に座っている竹田が体を開けた窓の方に伸ばし、光秋と顔を合わせる。

「待たせたな。乗れよ」

「はい」

光秋は窓から流れ出る心地よい冷気を感じながら返事をする、左前部のドアを開けて車に乗り込み、助手席に座ってタツパと袋を膝の上に置き、シートベルトを締める。

窓を閉めながら車はゆっくりと前進を始めると、竹田は何となしに横目で光秋の膝の上を見る。

「加藤、それは？」

光秋は竹田の視線を追い、それが自分の膝の上の物を指しているのを見る。

「ああ。タツパは、作戦中に食堂から差し入れられたものです。袋は、綾への……詫び、と言うのかな？その土産です」

「詫びって？」

「今日ほんととは、鴨川を散策してたんですよ。僕が誘って……それがこんなことになっちゃって、それで、本を1冊」

「本かよお……ほんととお前ら本好きだねえ……お前も訓練の合間とか、よく読んでたし………！悪い……」

考えなしに言ってから、竹田の表情が若干曇る。

「いいんです。今日のこと、復帰も少し早まりそうですし」

「そう？……なら、いいや……んで、なんの本よ？」

「怪談ものです。暑いですし、僕も読みたいし」

「？……絵本じゃないのか？横尾中尉からはこの間そう聞いたけど？」

「あれは、少し前に卒業しました。そう考えると、これもすぐいらなくなると思います
が」——……最後には、僕自身もな……—

光秋がそんなことを思う間にも、車は2車線道路の左側を前進し続ける。

しばらく走ると、竹田と光秋を乗せた車は、光秋と綾が住む小屋の少し手前に到着す

る。

「ここら辺でいいか？」

「はい」

竹田に答えながら、光秋はシートベルトを外して左のドアを開け、右手にタツパと本が入った袋を持つて車外へ出る。

ドアを閉めると、直後に竹田が窓を開け、顔を近づける。

「じゃあ、アヤにもよろしくな」

「はい。ありがとうございます」

言いながら、光秋は一礼し、顔を上げると3歩程下がる。

「じゃあなー」

と言って竹田は窓を閉め、車をUターンさせて来た道を帰っていく。

光秋は見えない所に行くまで車の後を見送ると、振り返って右前に建つ小屋―家に向かう。

18 新しい繋がりーアキ

光秋は綾の部屋の前に着くと、左手でドアを2回ノックする。

「綾！僕だ。ただいま」

言うとき光秋は、左手で丸ノブを回す。

が、

「……!?」——開かない?——

何度ノブを回しても、ドアは全く開かない。

——……あ！鍵か——

そう思と左手で左の腰ポケットに入っている鍵を取り出し、それを鍵穴に入れて回す。

しかし、

「……!?」——鍵も回らない?——

何度回そうとしても、左手に力を込めても鍵は回らず、とうとう光秋は右手のタツパを地面に置き、その上に本が入った袋を置いて、両手で鍵を持って回すが、

「！……………」

渾身の力を込めても鍵は全く動かず、これだけ手こずっていても中から開けてくれる気配も一向にない。

「綾！いるんだろう？！どうも鍵の調子がおかしい。開けてくれ」

光秋はドアに向かって叫ぶが、少し待っても返事は一切ない。

「……………まさか、外に出てるのか？！」

ふと考えた、直後、

「……………ないで……………」

「！」

光秋はドア越しに、消え入りそうな綾の声を聞く。

「綾！いるんならドアを開けてくれ！どうも調子が――」

「来ないで！」

「！」

自分の言葉を遮る様に言われた綾の強い声に、光秋は束の間絶句する。

「……………綾？」

「……………今は……………光秋見たくないの……………」

光秋は声の具合から、綾と少し距離があることを察する。

「居間か?……綾が鍵を封じている?でも居間には、万一用のEジャマーが……切ったのか?」「綾、突然そんなこと言われても、僕も困るよ!せめて何でこんなことをするのか、理由を話してくれ!」

言うとき光秋は、鍵から放した両手をドアに当て、左耳をドアに向けて耳を澄ませる。

「……………光秋は、何でアレに乗ってるの?」

「え?……………」

「何でニコイチって、あんなのに乗って、あんな怖い物持って、嫌なことするの!」

綾の声に徐々に怒気が籠る。

「……………言っただろう?何かあったら何とかするって。そりゃあ、この間の喧嘩とは全然規模が違うが、結局僕は、その約束を守るために――」

「でも!」

綾の絶叫が光秋の言葉を遮る。

「でも……………何でアレに光秋が乗るの?何で嫌な人たちと同じことするの?約束は約束だけど、光秋には、やっぱりあんなこととして欲しくない!光秋は、優しくて、静かで、いろんなこと教えてくれて、おかしいことがあったら小さく笑って……………いつもあたしと一緒にいる時の光秋でいて欲しいのに!……………なのに……………全然違う光秋になつて……………」

綾の声に徐々に悲しみが籠ってくる。

それを聞いて光秋は、

「……………そろそろ、話す時かな?—

と、漠然とはしているが、ある種の決意を抱く。

光秋は顔をドアに向ける。

「……綾……これから僕が話すこと、今の綾には、子供だましのお話にしか聞こえないかもしれない。でも、全部本当のことなんだ。しばらく、僕の話聞いてくれ」

「……それが、アレに乗る理由なの?」

若干陰気を含みながらも、概ね落ち着いた綾の声が応じる。

「それも含めて話す。とにかくしばらく、僕の話聞いてくれ」

「……………わかった……」

綾が短く答えると、光秋は軽く深呼吸して、ゆっくりと話し出す。

「僕はな……この世界の人間じゃないんだ」

「?……………どういうこと?」

綾の戸惑いを含んだ声が訊く。

「言葉通りの意味だよ。例えば話や冗談なんかじゃない。僕は、今僕らがいるこの世界とは違う世界から来た、否、送られた、もつと言うと連れて来られたと言った方がいいか

？」

「連れて来られた？」

「そう。今が7月だから、もう4カ月くらい前か。大学に進学して、よそに引越すことになってな、夜行バスに乗って移動してたんだよ。そしたら、バスが突然揺れだして、地震かと思った次の瞬間には、真っ白な空間に1人で立ってた」

「……………」

「そこで、神モドキさんに会った」

「かみもどきさん？」

「これは僕が勝手に付けた名前なんだがね。白い人の形をした、大きな“力”を持った者だよ。その人が僕を呼んで、ニコイチをくれて、僕をこの世界に送った」

「……………」

「初めてこつちに来た時、ニコイチに乗ってたんだがね、動かし方がよくわからなくて、森の中に派手に墜落したよ……」

言いながら、光秋の脳裏にその時の記憶が浮かび、口元に苦笑いが浮かぶ。

「降りてニコイチの様子を見てたら、伊部さんに会った。といっても、向こうは最初僕のこと不審人物と思って、銃向けてたけどな。まあお互い状況がわからなかったから、当然と言えば当然だけど……で、その後京都支部、さっきの騒ぎが起こつてすぐに、竹田

さんに連れて行ってもらったあそこに運ばれて、その夜に、さっきの騒ぎを起こした人たちの仲間があそこを襲って、怪我人もかなり出た」

「……………」

「その時、僕は自分の意思でニコイチに乗った。初めてね。僕には、そういう“力”があつたからな」

「力?……………」

「そう。“力”……………それで、四苦八苦しながらニコイチを動かして、なんとか襲ってきた人たちをやつつけて、僕が危ない人じゃないって周りに理解してもらった」

「……………」

「でも翌朝、襲ってきた人たちの仲間が来て、その時もなんとかニコイチで撃退して、それでESOに、今務めてる仕事に入らないかって誘われた。最初は迷ったよ。綾も見ただろうが、今日みたいな目に遭うことだってある仕事だからね。でも頼れる人なんて誰もいないような所で生きていくには、僕自身が働かなくちゃいけない。そんな中での誘いだつたからね……………で、なんだかんだ悩んでたら、伊部さんが言ってくれたんだよ。『自分はお助けをするためにESOに入った』って」

「お助けを、するために?……………」

「ああ。正確には思い出せないけど、そんな感じのことを言ってくれて、それで僕は、E

SOに入る決心が付いた」

「……………それが、ニコイチに乗る理由？」

「そう。ニコイチの力を一番いい方向に活かすために、僕はアレで人を救おうと考えた。ただ現実には、今日みたいに暴力に訴えることもある。僕自身、自分のできることを一杯やろうとしたら、あれで限界なところがあるんだよ。だから今日とか、この間みたいに、綾から怖いって思われる僕になっちゃうんだろうな……………」

「……………」

「もつとも、ESOに入ろうって決めた最大の動機は、食っていくためって、仕事をする上では一番不純な動機だけだな……………それに、時には守れなかった人もいるんだよ……………」

光秋の声が若干暗くなる。

「守れなかった人？」

「ああ……………伊部さんだ」

「……………」

ひとつき

「1カ月くらい前に、さつき話したESOを襲った人たちの集まりを取り囲んで、一気に捕まえるってことをやったんだよ。その時、僕はニコイチに乗っていた。それなのに伊部さんは撃たれて、大怪我をした。僕は、それを防げなかった……………」

「……その後で、あたしが生まれたの？」

「ああ。確か、怪我の様子を見るために、あっこっち検査して、頭を調べたらサイコキノの素質があつて、伊部さんも合意の上でそれを引き出す実験をやつて、そうして生まれたのが綾だつて……………」

「……そう、なんだ……」

「……………」

綾の言葉を聞くと、光秋はドア越しに自分の許に近づいてくる足音を聞く。
と、

「……………」

鍵が開く音がするとドアが押し開かれ、数歩下がった光秋は、玄関先に立つ白の半袖のワイシャツと赤チェックのロングスカートを着た綾の姿を見る。

「綾？……………」

「光秋も、辛いんだね……………」

と、綾は静かに言う。

「……ああ。でも、誰かがやらなくちゃいけないし、僕にはそういう力があるんだよ。例えば綾に、嫌なことをする人たちと同じ様に見られてもな。なにより、もう見たくないし、繰り返し返したくないんだよ。大事な人が、傷つくつていうのをさ……………」

「……………わかった……………入って」

「ああ。あつとー!」

言うとき秋は、鍵穴に刺しっぱなしの鍵を左の腰ポケットに入れ、地面に置いていたタツパと袋を右手で持って部屋の中へ入る。

ドアを閉めると靴を脱ぎ、綾に続いて居間に入る。綾がテーブルの、廊下側から見て右側に腰を下ろすと、秋は廊下を背にして腰を下ろし、タツパと本が入っている袋をテーブルの上に置く。

「……………ごめん」

俯く綾が、呟く様に言う。

「ん?」

「光秋のことよく考えないで、あたし、勝手なこと言つて……………」

「いいよ。突然あんなの見せられて、びっくりしたんだよね? 言わなかった僕だつて……………」

「……………そうだよ! なんて言つてくれなかったの?」

「……………本当はニコイチのことも、さつき話した僕のこと、無暗に他人ひとに言つちやいけないんだ。ただ綾は……………その、僕にとって特別だから……………」

「特別?」

「……ああ……それに、綾は無暗に他人に話さないと思って……」

「………あたしのこと、シンヨウしてるの？」

「……まあ、そんなところかな？……」

「ふーん？……」

綾の口元が薄っすらと微笑みの形をとる。

と、

「光秋にとってあたしが特別なら、あたしにとつても光秋は特別？」

「………それは、綾が僕をどう思うかだよ」

「そう？じゃあ、特別だ！」

さっきまでの陰気さが嘘の様に、綾は顔一杯に笑みを浮かべて言う。

「特別ついでにさ……今から光秋のこと、『アキ』って呼んでいい？」

「アキ？」

「そう。あたしだけの特別な呼び方！」

——………あだ名みたいなもんか？まあ、いいか？——「いいよ。ところで、なんで『ア

キ』なんだ？」

「光秋の『秋』^{しゅう}って字は、『あき』って読むでしょう。だから『アキ』

「なるほど。ただそれなら、光^{こう}の字でなにか考えないか？」

「いいの！あたしだけの呼び方だもん！」

「そう？それならな……………あつ！そうだ」

思い出した様に言うと、光秋はテーブルの上に置いた袋を綾の方に差し出す。

「物で解決っていうのもどうかと思うが、とりあえず、今日の遠出も台無しになっちまったお詫び」

「……………本？」

「ああ」

「ありがとう！」

言うと綾は両手で袋を掴み、笑顔でそれを胸に押し当てる。

「……………あと、これもさ。悪くならないうちに食べちまおう」

言うと光秋はフタを開け、綾と自分の間にタツパを置く。

「これは？」

「仕事中にもらった差し入れ。夕飯までまだ時間あるが、まあ、せっかくだしさ…………」

「ふーん？じゃあ…………」

言うと綾は、右手をタツパに伸ばす。

と、

「待った！」

光秋は少し強い声で言い、右の人さし指で廊下を指す。

「食べる前に、水盤で手え洗ってこい」

「はい」

言うとは綾は立ち上がって風呂場に向かい、その水盤の水を両手に流す。光秋も綾と入れ替わりに水盤の水を両手に流す。

居間に戻るとそれぞれ元の位置に腰を下ろし、右手で海苔の包まれたおにぎりを一つずつ取る。

「それじゃあ、いただきます」

「いただきます」

光秋に続いて綾も言う、2人は同時におにぎりを一口かじる。

と、

「うっ！………」

綾が両目を固く閉じて悶絶し、光秋は口内に広がる独特の酸味からその理由を察する。

「……………梅だったな……………」

言いながら光秋は、綾には悪いとは思いつつも、綾が騒ぎが起こる前に見せてくれたのと同じ様な表情を見ることができて安堵する。

7月30日金曜日午前10時。

白のTシャツに薄緑色の長ズボンを着た光秋は、サンダルを履いて夏の日差しの下に出ると、家の正面の車道の少し前で立ち止まり、右手を右の脚ポケットに伸ばしてカプセルを取り出す。それを前に向け、レバーを「入」から「出」に切り替えてボタンを押すと、目の前に仁王立ちする白い巨人―ニコイチが現れる。

ニコイチに歩み寄ると、垂れ下っているリフトを掴んで上昇し、操縦席に着いて認証を済ませながら機内へ入る。モニターが灯ると、垂れ下っているニコイチの両腕を正面に突き出す様に上げ、ハッチを開いて操縦席を機外へ出す。

「綾ーいいぞー！」

光秋が正面の家に向かって叫ぶと、光秋の部屋のドアが開き、白のTシャツに青い長ズボン、ピンク色のサンダルを着た綾が洗濯かごを両手で持つてニコイチに歩み寄ってくる。

ニコイチの足元の近くまで来ると、綾はかごを足元の草原に置き、両手をかごにかざして軽く目をつむる。おもむろに両目を開け、下にかざしていた両手を上に上げると、綾の手の動きに合わせてかごの中の青いタオルケットが大きく開いて高く舞い上がり、ニコイチの右上腕側に覆い被さる様に着地する。

「上手いじゃないか！」

その光景を見て、光秋は率直な感想を言う。

「じゃあ、次！」

言うとは綾は、右手を右下からタオルケットが掛かっている方向―左上へと直線を描く様に振り、洗濯かごの中にある洗濯バサミを一つ舞い上げる。綾の手の動きに合わせてニコイチの右腕の肘側に飛んだ洗濯バサミは、しかし、腕の下側にある垂れ下っているタオルケットの近くに来ると、戸惑った様に動きを止める。

「あーん！飛ばしながらだと上手く挟めない！」

綾の声に光秋は、

「僕にハサミを寄せ。その後で、僕の体を浮かせるんだ」

と、席を立てハッチの方に歩きながら言う。

「わかった！」

言うとは綾は洗濯バサミをハッチの上にいる光秋の方へ移動させ、光秋がそれを受け取るのを見ると、両手を光秋の方に伸ばし、ゆっくりと手前側に引く。

その動きに合わせて光秋の体はハッチの高さを保ったまま宙に浮き、ニコイチの右肘の方へ移動する。

―生身で浮いたのはこれで2度目……いや、三佐に初めて浮かされた時は椅子に座ってたから、身一つはこれが初めてか………ちよつと怖いが、綾なら大丈夫だろう―

そんなことを考えている間に、光秋はニコイチの右肘側の下部に着き、左手で垂れ下っているタオルケットを押さえ、右手の洗濯バサミでそれを挟む。

「よし！もう一個、飛ばせそうか？」

「……………ちよつと、自信ない」

光秋が首を右後ろの下に向けて訊くと、綾はそう応じる。

「わかった。一度僕を下に下ろせ」

光秋がそう言うのと、綾は両手を下へ下ろし、それに合わせて光秋も地面に着地する。

光秋は洗濯かごに歩み寄ると、中から洗濯バサミを一つ取ってニコイチの右肩の方へ向かう。タオルケットの肩側の下に着くと、

「よし。上げてくれ」

と、綾の方に体を向けて言う。

「はい」

応じると、綾は光秋に向かって両手をかざし、その手を上へ上げて光秋の体をゆつくりと浮かせる。

光秋はタオルケットの近くに着くと、左手でそれを押さえて右手の洗濯バサミを挟む。

「よし！一度下ろして。今度はシートだ」

「はい！」

応じながら、綾はゆっくりと光秋を下ろし、着地したのを確認すると、かごに向けた両手を上へ上げて青いシーツを舞い上がらせ、それをニコイチの右腕の手首側に掛ける。

その間に光秋は、かごから洗濯バサミを2つ取り出し、いつでも飛べるようにする。

「今度も上手くできた！アキ、いい？」

「ああ」

答えると、綾は光秋をシーツの方へ上げ、着いた光秋はニコイチの手首側、肘側の順に洗濯バサミを挟んでいく。

「終わった」

「はい」

光秋の言葉に応じた綾は、両手をゆっくり下ろして光秋を着地させる。

着地した光秋は、綾の許に歩み寄って左手で洗濯かごを持ち、

「そろそろ綾の部屋の分が終わる頃だろうから、取ってくる」

「うん」

と、自分の部屋へ向かう。

部屋に着くと止まっている洗濯機のプラグを抜いて蛇口を閉め、中から洗濯ものを取

り出してかごに入れると、その中から枕カバーを取って居間へ向かい、居間の奥、窓側に置いてあるハンガーラックの右側に掛かっているハンガーの1つを取ってれに枕カバーを掛けて竿の中央辺りに吊るす。竿の左側には、先に洗濯した光秋の枕カバーが掛かっている。

掛け終ると、光秋は左手にかごを持って外に出、綾の許にかごを下ろす。

「もう一仕事、頼む」

「うん」

言う綾は、先程と同じ手順でピンクのタオルケットとピンク色のシーツをニコイチの左腕に掛け、光秋を浮かせて手首側から順に洗濯バサミを挟んでいく。

「よし！終わりだ。綾！そのまま僕をコクピット……ニコイチの胸の所に乗せてくれ」
「わかった」

言う綾は左上にかざしていた両手を正面——ニコイチのハッチの方へ向け、光秋がその上に着地すると、手を下ろしながら少し張りつめていた精神を落ち着かせる。

ハッチに下りた光秋は操縦席に腰を下ろし、自動で始まった認証のために一度機内へ下りると、認証が済むと同時にハッチを開けて機外へ出る。

操縦席を上げ切ったところにちょうど綾もハッチに下り立ち、席の左側へと歩み寄る。

綾が椅子の背もたれを両手でしっかり掴んで下を見、

「ホントに高あい！」

などと言えば、光秋は、

「危ないからやめろ。落ちたら怪我じゃすまんよ」

と、少し脅しを含んだ注意をする。

「うん……ところでアキ……」

光秋の方へ身を寄せた綾が、顔を合わせて言う。

「ん？」

「なんでこんなことしようと思ったの？」

「ニコイチを物干しにすること？」

「うん」

「家に付いてる物干しじゃあ、一度にこんなには干せないし、それに、一度やってみたかったんだよ。ニコイチの身近な平和利用ってやつをな」

「？……どういこと？」

「僕は、ニコイチを単なる暴力装置にしたくないんだ。こういう穏やかな使い方を、一度してみたかったんだよ」

「ふーん？……」

「……そうだ、ニコイチで思い出したが、昨日言い忘れてたことがあった」

「昨日？」

「ああ。綾に、ニコイチのこと黙ってた理由、もう一つあるんだ」

「黙ってた理由って……えーつと……言っちゃいけなかったからって以外に、まだ？」

「ああ………言ったら、綾に怖がられるかと思つて……」

「怖がる？」

「ああ。この間怒つたところを見られただけで怖がられたんだから、こんなの持つてると知れたら、どうなるかと……なにより一緒にいれば、言う必要もないかと思つてたけど……結局言わなかったが故に、余計に驚かせちゃったな………」

「………それなら、もう大丈夫。昨日はアキが言つた通り、ちよつとびっくりしただけで………それにね、あたし飛行機とか機関銃は好きになれないけど、コレ、ニコイチは好きになれそう」

「?………どうして？」

「だって、アキをこっちの世界に連れて来てくれて、アキを今まで嫌なものから守つてきてくれたものだもん。それに今だって、暴力以外の役にたつてるし」

言いながら綾は、肘掛に置いてある光秋の左手に両手を添える。

「そう言つてもらえると、僕も今日の物干しの案思い付いてよかったよ」

「うん……アキの手って、ちよつと毛深いね」

綾は唐突に、指の第二関節まで産毛で覆われている光秋の手の甲をしげしげと見ながら言う。

「男はこんなもんだよ。さて!」

応じると光秋は、ニコイチに念を送り、前に突き出されている両腕を胴の左右へ伸ばす。

「この方が、乾きも早いだろう。それと綾。今日僕が勝手にニコイチを出したこと、みんなには言うなよ」

「?……なんで?コレ、アキのものじゃあ?」

「そうだけど、あんまり無暗に出すもんじゃないんだよ。今日はさっき言ったことがしなくて出したけど、本当はダメなんだ」

「ふーん?わかった」

「頼むよ………」

言いながら光秋は、綾に自分のニコイチについての理想を言えたこと、綾の前でそれを実行できたことを嬉しく思う。

19 復歸の前

8月1日日曜日午後7時半。

灰色のＴシャツに迷彩柄の長ズボンを着た光秋は、赤いＴシャツに黄色い半ズボンを着た綾と共に、食べ終わった食器を盆に載せている。

と、光秋の手が不意に止まる。

「そうだ綾。僕、明日ちよつと出かけてくる」

「どうしたの？」

「この間のタツパ、そろそろ返してきたいし、目の定期検査もそろそろ行った方がいいしな。ついでに散髪もしてくる」

言いながら、放っておけば耳が隠れる程に伸びた髪を撫でながら言う。

「あたしも行っちゃダメ？」

「行ってもどうせ、僕のこと待ってるだけだぞ？それならさ、家のこと頼むよ——支部に近づけるわけにもいかんしな——」

「……わかった」

「悪いな。この間買った本でも読んで待っててよ」

「うん……………」

午後8時。

洗い物を済ませた光秋は、自室の居間に一人で座り込み、左耳に携帯電話を当てる。

「……あ、上杉さん？加藤です」

（ああ、なんだ？）

「明日、目の検査を頼みたいんですが？」

（ああ、いつものやつな。了解。いつ頃だ？）

「10時頃お願いします」

（10時な。わかった。待ってるぜ）

「お願いします」

8月2日月曜日早朝。

迷彩柄の帽子を被り、白地に赤、青、黄、緑のチェック柄が描かれた半袖のワイシャツに緑の長ズボン、白の靴下、灰色の靴を着、右肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋は、綾と光秋の家がある敷地から出るとタクシーを拾い、ESO京都支部へ向かう。

9時半に支部の正門の前に着くと、光秋はまず本舎の食堂へ向かい、

「おにぎり……ちそうさまでした」

と、礼をしてタッパを返し、その後玄関前の長椅子に腰を下ろして時間を潰すと、数

珠が巻かれた左手首の腕時計で9時50分になったのを確認し、医療棟の上杉の診察室へ向かう。

医療棟に入るとすぐに、帽子を脱いでカバンに仕舞う。

時間通りに着くとカバンを置いて椅子に座り、上杉からいつもの手順で目の診察を受ける。

「……………よし！今回も特に異常なし」

上杉は光秋の額に当てている左手を離しながら言う。

「薬も、いつも通りか？」

「はい。3種類1本ずつで」

「了解」

言々と上杉は椅子を回して光秋に左肩を向けると、机の上のカルテに書き込みをする。

「では。ありがとうございます」

言々と光秋は床に置いていたカバンを右肩に掛け、真後ろにあるドアへ向かう。

「おう。お大事にー」

医療棟1階の受付で会計と目薬の受け取りを済ませると、光秋はカバンから取り出した帽子を被りながら外に出、正門をくぐって最寄りの床屋へ向かう。

床屋に着くと、頭全体を一センチ、両の揉み上げを根元から切ってもらい、顔の毛も剃ってもらうと、すっきりした気分になる。

会計を済ませて外に出ると、

「……………」

光秋は左側から向かってくるタクシーを見つけ、それを止めて乗り込み、綾が待つ家へ帰る。

敷地の手前でタクシーを降りると、光秋は歩いて家へ向かう。

綾の部屋の前に着くと、ドアを2回ノックし、

「ただいまあ」

と言いながらドアを開ける。

が、

「……………」

綾の返事はなく、サンダルを脱いで居間に来ても誰もいない。

「綾あー?」

と、光秋がカバンを下ろしながら呼んでみると、

「あーこっちこっちー!」

と、光秋の部屋の方から綾の声を聞く。

「？」

光秋は下ろしたカバンを持ってサンダルを履いて小走りで玄関を出ると、右隣の自分の部屋のドアを開ける。

と、

「おかえりなさい」

白いTシャツに薄黄色の長ズボンを着た綾が、居間のテーブルに食事の準備をしている手を休めて顔を光秋に振り向けて出迎えてくれる。

「ただいま……………なにやっつてんだ？」

光秋はドアを閉めながら、少し驚いた顔で尋ねる。

「少し前にそろそろアキが帰ってくるような気がして、お昼作ってなかったから、冷蔵庫の中探したらこれが」

と、綾はテーブルの中央に置かれた金ざるに盛られたうどんに目をやる。

「確かに、帰ってきてから作ろうと思ってたから、なにもしてこなかったが……………」

思いながら光秋は、居間の隅にカバンを置き、左手から時計と数珠を外し、右の脚ポケットから財布を出して、それらをカバンに仕舞い、帽子も取って仕舞う。

「……………箱の説明を見て作ったのか？」

カバンから取り出した目薬を冷蔵庫に仕舞いながら、なにげなく問うと、

「え?……」

今度は綾が驚いた顔を向ける。

「……………そう言えば、何でだろう?説明なんて読んでないのに……………」

「読んでない?」

「うん。冷蔵庫の中探してたら、これならできそうって思って、あとは…………特に意識しない……………」

言いながら綾は、顔を下に向ける。

—僕は教えてない……………こんなことを根拠にするものかどうかと思うが、伊部二尉の記憶が戻ってきてるのか?……………—

光秋は束の間、そんなことを考えてみる。
が、

「まあいいや。作ってくれてありがとう。食べよう」

「……………そうだね。後で考えよう」

2人はそう言うと、光秋は廊下側から見て左側に、綾は右側に腰を下ろす。

「いただきます」

言うとう光秋は合わせた手を解いて右手に箸を持ち、一掴み分のうどんを綾が用意してくれたつゆに浸けて口にすすする。

——……………うまいな。味も、技術も……………——

8月3日火曜日午後8時。

食事と入浴を終えた光秋は青チエツクのパジャマに着替え、自室で1人壁にもたれてくつろいでいる。

と、

「……………！」

上着の左胸のポケットに入れてある携帯電話が振動し、取って開いてみると竹田二尉からである。

「はい?」

左手に持った電話を左耳に当てて言う。

（あ、加藤? オレだけど）

「なにか?」

（明日さあ、ちよつと出て来てくれねえか? ニコイチ付きで）

「?……………突然どうしたんです?」

（この間の騒ぎの鎮圧で、実戦部隊に予想以上の怪我人が出てさあ、瓦礫の片付けの人手

が足りなくて思う様に進まねえんだ。だから明日さあ)

「それはわかりましたが、ニコイチは使用停止のはずじゃあ?」

(緊急措置だよ、緊急措置。藤原三佐が支部長に進言して、支部長が上層部に働きかけたんだ。上もこの間の戦闘報告を観て、もう停止令を解いても大丈夫だと思つたみたいでさあ、その前の事前チェックつてことで、許可が出たらしい)

「……………わかりました。それで、いつ、どこに行けば?」

(9時半に、支部に来てくれ。そこで詳しい説明をする)

—支部か……となると、制服を着て行つた方がいいな。早めに出て寮に寄るか—「了解です。9時半に支部ですね」

(ああ。よろしくな)

「はい」

光秋は電話を切るとそれを胸ポケットに入れ、玄関でサンダルを履いて外に出、綾の部屋のドアをノックする。

「綾、入るぞ」

中に入つて居間に進むと、赤チェックのパジャマを着た綾が、光秋から見て右側に置いてあるベッドに仰向けになっているのを見る。

「突然だが、明日出かけることになった」

「なに？」

上体を起こした綾が、光秋の方を見て訊く。

「この間の騒ぎの後片付け、人手が足りないから来てくれて。だから明日早いし、帰ってくる時間もわからんから、食事はこの前みたいに適当に作って済ませてくれ」

「仕事？」

「そういうことになるな」

「……わかった」

「ごめんな。早めに帰れるようにする」

「うん」

「じゃあ、明日早いんで、お休み」

言うとき光秋は振り返り、玄関へ向かう。

「お休み」

綾の返事がその後を追う。

サンダルを履き、光秋は外に出る。と、

「……あのまま、抱いておけばよかったか？—

そんな考えが頭に浮かぶ。

が、次にはその考えをフンツと鼻で笑う。

—バカなこと言っていないで早く寝ろ！……そうだな—
断じると、光秋はそそくさと自室に戻る。

8月4日水曜日。

6時に起床した光秋は、赤紫と白の縦縞柄の半袖シャツと茶色い長ズボンに着替えると、朝食と身なり等の出かけ支度を済ませ、白い靴下を履き、7時半に灰色のカバンを右肩に斜め掛けし、黒いスニーカーを履いて部屋を出る。

——……まだ寝てるだろうし……—「いいか」

と、綾の部屋のドアに向けていた顔を前に向け、敷地の外へ向かって歩き出す。

敷地から出ると、少し歩いてタクシーを拾い、寮の手前的大通りで降りる。細い路地を少し歩くと、久々の職員寮が目に入る。

自室のドアの前に立つと、左の腰ポケットから鍵を取り出し、ドアのカギを開けて中に入る。

1カ月の間閉めっぱなしで出てきた部屋は少し埃っぽく、湿気を含んでいる。

カバンを下ろした光秋は、換気として居間の大窓を開けると、押し入れを開けてそこに仕舞ってあるESOの緑の制服に着替える。携帯電話、財布、カプセル、鍵をそれぞれ、上着の左ポケット、右ポケット、左の内ポケット、ズボンの左の腰ポケットに入れ替えると、数珠が巻かれた左手首の腕時計を見る。

— 8時50分……— 「まだ余裕だな」

言うと光秋は両腕を大きく回して深呼吸すると、脚を肩幅に開いて右腕を腰に引き、左腕を前に出して突きの姿勢をとる。朝の軽運動習慣の1つである。

— 今日とはとりあえず、これだけ—

と、15本の突きの素振りを済ませると、赤い背もたれの椅子に腰を下ろす。

— やつぱりこれやると、気合いが入るな—

しばらく椅子に腰かけてリラックスすると、光秋は再び腕時計に目をやる。

— 9時15分……そろそろ……— 「行くかね」

言うと椅子から立って大窓を閉め、カバンを右肩に斜め掛けし、机の上に置いていた制帽を被り、玄関に置いてある制靴を履いて外に出、ドアに鍵を掛けて支部へ向かう。

5分程歩くと、光秋は支部の正門をくぐり、塀を背に本舎前の駐車場を見回す。

— 支部に来るようにしか聞いてないからな……その先を訊くべきだった……—
と、

「加藤お！」

「……！」

呼ばれて光秋は辺りを見回すと、本舎の正面玄関から駆け足で自分の許へ近づいてくる制服姿の竹田を見つける。

竹田は光秋の前で止まると、少し呼吸を荒げる。

「悪い！来る部屋を言わなかったな！」

「いえ……あ！おはようございます」

光秋は低く礼をする。

「……ああ！おはよう。とにかく、ウチの隊の待機室に来てくれ。そこで今日の説明する」

「了解です」

言うとき光秋は、竹田に続いて本舎へ向かう。

最寄りのエレベーターで地下1階に下り、待機室の方へ進むと、光秋は竹田に続いて部屋に入る。

「おはようございます」

光秋が礼をして入ると、

「！」

室内の椅子に腰かけていた制服を着た藤原三佐と小田一尉が、立ち上がって光秋に寄り添って出迎えてくれる。

「加藤！よく来たな！」

藤原が光秋の両肩に足のように大きな手を置いて言う。

「突然ですまんが、復歸の前準備と思って頑張ってください！」

「いえ。どうせ暇してたんです。構わず使ってください」

「ウムー！」

光秋が応じると、藤原は深く頷いて両手を光秋の肩から離す。

と、光秋の左前に立つ小田が、

「これで伊部が戻れば、藤原隊としても完全復活なんだがな」

と、苦笑いをして言う。

「……………」

光秋と竹田に一瞬緊張が走るが、すぐに立ち直った竹田が、

「まあ小田一尉、その話はまた後で……そうそう！作業の説明始めましょうよ！」

と、藤原と小田を急かす。

「そうだな」

藤原が応じると、4人はそれぞれ椅子に座り、藤原から瓦礫の撤去作業の説明を受ける。

作業の説明を終えると、光秋は全員に支給された手拭いを首に掛ける。

駐車場に出てニコイチを出現させると、スポードリンクが入ったクーラーボックスをコクピットの左側に積み込み、ヘルメットを被った竹田をコクピットの右側に相乗り

させ、同じくヘルメットを被った藤原を右手に、小田を左手に掴み、一定高度まで上昇して藤原隊の担当地区へ向かう。

大小の瓦礫が散乱する現場に着くと、光秋はニコイチの左膝を着いて藤原と小田を地面に下ろし、竹田を下ろすためにハッチを開けて操縦席を機外に出す。

と、

「やっぱ暑っちなあ……」

と、竹田がぼやく。

同時に、上空に上り切った太陽の焼かれる様な熱さを感じる。

竹田はハッチの上に進み出ると、ニコイチの足元に待機している藤原と小田を見える。う。

「三佐あ！今日も上着脱いで作業しましょうよ！」

「だから、制服の着崩しは禁止だと言ってるだろう！昨日は流石の猛暑に許可したが、そう何度も……」

言いながら、藤原は首に掛けてある手拭いで額の汗を拭う。

と、藤原の右隣に立つ小田が、

「三佐。竹田の言う通り、今日も脱いで作業しましょうよ。熱中症なんか起こされて、ただでさえ少ない人手が余計少なくなったら困ります」

と進言すると、藤原は若干渋い顔をしながらも、

「そうか?……まあ、それは……そうか?……よし!上着は脱いでいい!」

と、ハッチの上の竹田を見て言う。

「了解!……やれやれ!……」

と、竹田は光秋の許に上着を脱ぎながら歩み寄り、

「加藤、預かっててくれ」

「了解です」

と、脱いだ上着を丸めて光秋の膝の上に置き、両手でクローラーボックスを持ってハッチの上に進み出る。立ち止まってボックスを置いた竹田は、ワイシャツの上のボタンを3つ程外し、両袖を肘までまくり上げる。

光秋はニコイチの右手をハッチの前に寄せ、そこに竹田がボックスを持って乗るのを見ると、掌をゆつくりと地面に下ろす。竹田が掌から下りるのを確認する際、ボタン外しも袖まくりもしていないワイシャツ姿の藤原が掌に詰め寄って竹田を叱る様な光景を見るが、何と言っているのかはわからない。

竹田がボックスを持って掌から下りると、光秋は操縦席を機内へ下ろし、ハッチを閉めてニコイチを立てさせて撤去作業に入る。

支部での説明に従って、光秋と藤原は人の背丈以上の大型の瓦礫をニコイチやサイコ

キネシスで、小田と竹田はそれ以下の小型の瓦礫をスコップや軍手をした手で一輪車に積んで、所定の集積地に集めていく。

小田と竹田がスコップでコンクリート片をそれぞれの一輪車に積み込む横で、藤原は瓦礫の山に両手をかざし、持てるだけの大型瓦礫を宙に浮かせると、それらを抱える様に集積地へ歩いていく。

光秋も持てるだけの瓦礫をニコイチに持たせると、集積地に向かう。

と、5歩と歩かないうちに、

（加藤おー！）

「ー！」

竹田の怒気を含んだ声が外音スピーカーから響き、光秋は足を止める。

（歩くな！浮け！振動で気が散るんだよ！）

「すみません！」

竹田の声に外部スピーカーを入れて応じると、右ペダルを少しだけ踏み、ニコイチを地面から少しだけ浮かせて宙を滑る様に集積地への進行を再開する。

以後光秋は、少し浮いた状態で作業を続ける。

午後0時。

光秋はニコイチを正座させ、前屈みにした胴を両手で支えて四つん這いにさせるとコ

クピットから降り、そうして作った日陰の下に行く。そこにはすでに、藤原が運んできた適当な大きさの瓦礫が4つ、四角を描いて並べられ、藤原たち3人が支給された弁当を片手にその上に腰を下ろしている。

光秋は空いているニコイチの右手近くの瓦礫に座り、その上に置いてあつた弁当を膝の上に置き、

「いただきます」

と手を合わせて小声で言うと、付属の割り箸を割って食べ始める。

と、光秋の左隣——ニコイチの肘近くに座る小田が、

「しかしこのニコイチって奴は、つくづく大したもんだなあ。あんなに動いても触って平気な発熱量なんて……」

と、左手を少し後ろに伸ばし、膝部分の装甲を手の甲で小突きながら言う。

それに対して、光秋の正面——左手近くに座る竹田も、

「コクピットも快適つすよ。ちようどいい温度に保たれてて」

と相槌を打ち、小田も、

「ああ！俺もこの前乗ったが、確かにな」

と応じる。

と、竹田が、

「しっかし、もつと重機ないのかねえ？ そっちの数増やせば、こつちも楽になんのに」
と愚痴ると、光秋の右隣に座る藤原が、左手に持ったペットボトル内のスポーツドリンクを飲み干して、

「それはもつと瓦礫の多い箇所を当たっていると説明したろう。第一、この中に重機なんぞ動かせる奴がいるのか？」

と、やや叱る声で言う。

そんなやりとりを意識の端で聞きながらも、光秋の意識の大部分は周囲の景観に向けられ、箸を持つ手を動かしながら長考に耽る。

— NPの人たちも、言いたいことがあつてこんなことをしたんだろうが………やつぱり暴力を正当化する理由には、ならんよな………僕が言えたことだろうか？………それに………

思いながら、藤原たちやニコイチの合間に覗く瓦礫の山に目をやる。

— 今回も、守れたと言えるんだろうか？………

と、

「………加藤？」

「！」

藤原の呼び掛けに、光秋はハツとする。

「はい？」

「今心ここに在らずといった感じだったが、どうした？」

「いえ、考えることをしてただけです」

本当に心配した顔で尋ねる藤原にそう言つて返すと、光秋は弁当を膝の上に置き、左手で左端に置いたペットボトルを持つて中のスポーツドリンクを一口飲む。

食後、藤原隊の許に來た支給隊に弁当の容器を返却すると、光秋は脱いだ上着を左肩に掛け、なんとなしに周囲を散策してみる。制帽一つ被つただけの頭で瓦礫の周りを歩くのは少し緊張するが、

——いざとなれば、藤原三佐が掘り起こしてくれる——

という考えが、この好奇心に基づく行動をとらせるのである。

少し歩くと、光秋はなんとなしに視線を下に下ろす。

と、

「……………」

右側の瓦礫の中に、コンクリートや鉄骨とは質感の異なる小さな物を捉える。

「？」

足を止め、見つけた物の近くにしゃがみ込むと、それを掘り出してみる。

——手袋をしてくればよかった——

軽い後悔を抱きながら手を切らないように注意して瓦礫を退かすと、木製の写真立てが顔を出す。掘り出す前に見掛けたのは、その右上の角のようである。

「……………」

それを両手で持つてよく見てみると、所々に大小の傷があるが、中の写真は無事のようである。どこかの青々とした森林を背景に、春物の私服を着た4人組が写っている。若い印象の男女と、その足元に立つ幼い姉弟である。きょうだい女の子の方が背が高く見えるので、光秋はこちらが上の子と判断する。

「……………家族か……………」

そう呟くと、光秋はそれを持って来た道に戻る。

光秋が藤原たちの許に戻ると、3人はニコイチの日陰から出て作業を再開する気配を見せている。

「藤原三佐！」

光秋が歩きながら呼び掛けると、藤原は光秋の方に顔を向ける。

「どこまで行っていた？」

尋ねる藤原の前に止まると、

「散策していたら、こんな物を拾ったのですが」

と、右手に持った写真立てを差し出す。

「?……写真か」

藤原が眩きながらそれを受け取ると、小田と竹田も2人の許に寄って来る。

「なんすか?」

藤原の左隣に立つ竹田が訊く。

「加藤が拾ったそうだ」

藤原は竹田に写真立てを見せると、軍手をした左手で長い顎髭を撫でる。

「やっぱり、持ち主に届けるべきですよね?」

「ウム。支部に帰ったら、搜索願の届け出を調べてみるか……」

光秋の問いに、藤原はそう応じる。

「顔がわかっていれば、近隣住人のデータとも照会できますしね」

藤原の右隣に立つ小田もそう続ける。

「よし!・とりあえずそうするか。各自作業再開だ」

「〔了解〕」

藤原の号令に3人が答えると、光秋はそのまま写真立てを藤原に預け、左肩に掛けていた上着を羽織ってニコイチに乗り込み、撤去作業を再開する。

午後6時。

作業時間が終了し、藤原隊はニコイチに乗って支部に戻る。

駐車場に着地したニコイチを収容しながら、

「こりやあ、しばらく続くな――」

と、光秋は作業の進み具合を考えてみる。

解散すると、光秋は真つ直ぐ寮の自室へ向かい、私服に着替えて脱いだ制服一式と予備のワイシャツをカバンに詰め、部屋を出てタクシーを拾い、綾が待つ家へ向かう。

敷地の手前でタクシーを降りた光秋は、最寄りのバス停で時刻表をメモしてから家へ向かう。

家の前に着く頃には、空は僅かな赤味を残すだけで、殆ど暗くなっている。

「……………灯り?――」

光秋は自分の部屋の方だけに灯りが点いているのを不思議がりながら、

「綾か?――「ただいま?」

と言つて、自室のドアを開ける。

と、

「おかえり!」

嬉しそうな声が居間から響き、ピンクのワンピースを着た綾が光秋を出迎えてくれる。

「ご飯できてるよ!早く食べよう」

「また作ってくれたのか？」

訊きながら光秋は、玄關から居間のテーブルに2人分の食事が並べられているのを見る。

「アキがいないと暇だから。さ、早く！」

「ああ。ちよつと待った」

言うと光秋は、靴を脱いで居間へ向かう。

——………夫婦じゃないんだから………——

思いつつ、困った様な、嬉しい様な表情を浮かべる。

8月9日月曜日夕刻。

いつも通り撤去作業を終えた藤原隊一行は、ニコイチに乗って支部へ戻る。

光秋がニコイチを収容し終えると、

「加藤」

と、上着を右肩に掛けた藤原が呼び掛ける。

「はい？」

「言い忘れていたが、お前の復歸、来月には叶いそうだ」

「来月？」

「ああ。鎮圧作戦と撤去作業の報告から上が検討して、来月から正式復歸となった。も

ちろん、ニコイチの使用禁止令も正式に解除される」

「！ありがとうございます！」——ようやく、ちゃんと戻ってこれる！——

その思いから光秋は、深々と頭を下げる。

8月13日金曜日。

光秋は撤去作業を終え、家に帰宅する。

白いTシャツに黄色い半ズボンを着た綾に迎えられると、光秋は上着と制帽が入ったカバンを居間に置き、ワイシャツのボタンを2つ開けながら、綾が用意してくれた食卓に着く。

と、

「そうだ。今日で今までやってた仕事が終わったから、明日久々に2人でどっか行くか？」

「もう行かなくていいの？」

光秋の問いに、綾は向いに座りながら応じる。

「なにも起こらなければ、9月まではのんびりできる」

「そう……でも突然言われてもなあ……」

「ま、急がなさ」

言うところ光秋は、手を合わせて食事を始める。

8月14日土曜日昼。

結局家でくつろぐことにした光秋と綾は、昼食をとると、綾の部屋で昼寝をする。

白い半袖のワイシャツに青い長ズボンを着た綾は、ベッドの枕を床に置いてそこに頭を載せ、白いTシャツに緑の長ズボンを着た光秋は、綾の腹を枕代わりにする。

左耳を腹に付けて綾の寝顔を目の前に臨む光秋は、腹の中の水音を聞きながら、

「これは……最高の贅沢かもしれない………」

と、眠気で鈍った頭で考えてみる。メガネは外してテーブルの上に置いてあるのだが、距離が近いために綾の寝顔はよく見え、加えて、綾の独特な体臭が鼻をくすぐり、それがますます幸福感を与える。

と、

「……………ねえ……………」

「んっ……………」

綾が目をつむったまま話しかけ、光秋は仰向けになって左耳を綾の方に向けて応じる。

「アキがいた世界って、どんなところ？」

「……………どうした？突然」

「別に……………ただこの間話してくれた、別の世界っていうのが気になって」

「……………ニコイチのことを説明した、あの日?」

「うん…………あれからちよつと、興味があつて」

「と言つてもなあ……………こつちと大して変わんないよ。最大の違いは、僕の世界には超能力者がいないってことかな……………」

「ふーん…………じゃあさあ、光秋がここに来る前に住んだところ、故郷^{ふるさと}つて、どんなところ?」

「…………故郷か……………田舎だよ。家の周りは田んぼばかりで……………この時期だと、だ
いぶ背が伸びた稲が一面に広がつて、青々とした……………」

「涼しい印象を与える……………」

「?……………」

突然綾が自分の言おうとしたことをそのまま言ったことを不思議がりながらも、光秋
はとりあえず話を続ける。

「家の近くに、長く真っ直ぐに伸びた緩やかな坂があつてな……………」

「周りは高い山に囲まれて……………」

「坂の真ん中辺りに立つて周りを見回すと……………」

「どんぶりの底みたいな場所……………」

「……………なんでわかるんだ?」

「……………なんでだろう?アキの話聞いてたら、頭の中に景色が浮かんできて、言つてみたん

だけど……………」

そこで綾は大きく欠伸をし、右手を光秋の左掌に添える。

「……アキの手、硬いね。それに掌なんか、あっちこっち特に硬い……」

言いながら綾は、光秋の左掌の中央とその上、薬指の付け根の3カ所にあるイボを右手で撫でる。

「手が硬いのは、ニコイチの操縦で操縦桿を強く握るからな。ただ、綾が今撫でてるイボは、元からだよ。中学くらいの時に、なぜかできてさ。右手にもあるよ」

言うとき光秋は、右手を綾の目の前にかざす。その中指の付け根と第一関節のすぐ下にも、皮膚が硬くなつてできたイボがある。

「……………痛くない？」

「いや。なにも感じない」

「ふーん？」

「ただ、僕はけっこう気に入ってるんだよ。今じゃ僕の、アイデンティティーの一部なんだから」

「アイデンティティー？……」

綾が欠伸混じりに訊く。

「昔の自分と今の自分、未来の自分はどんなに変わっても、あくまで連続したものだって

考え。この場合は、その証って意味かな」

「ふーん……………」

応じながら綾は、寝息を立て始める。

——…自分が自分であることの証だよ。僕の場合イボだけじゃなく、目と耳の不具合もな。これは身体的なものの。精神的なものは、人格とか、記憶か……………だから、加藤綾と伊部法子は、体は同じでも別人なんだよな……………——

光秋は綾の寝顔を見ながら、少し冴えてきた頭でそんなことを考えてみる。
同時に、ある疑問も浮かぶ。

——綾は……………テレパスなんじゃないのか？——

8月15日日曜日。綾の部屋。

灰色のTシャツに茶色の長ズボンを着た光秋が、左手に持った腕時計を見つめてテーブルの前にいる。

2分早いその時計の針が12時2分を指すと、

——黙祷！——

と、心中に叫び、目をつむる。

1分程して目を開けると、食事を運んで来た白いTシャツに薄黄色の長ズボンを着た綾が光秋の向かいに座り、

「なにしてるの?」

と、好奇心の声で訊く。

「僕の世界では、今日は終戦記念日だな。黙祷を捧げてた」

「もくとう?」

「目をつむつて、亡くなった人たちを祈ることだよ」

「ふーん?」

言いながら綾は、盆に載っているそうめんの入ったざるをテーブルの中央に置き、2つのお碗をそれぞれの許に置く。

と、直後、

「……………」

「綾?」

綾は突然右手を頭に当て、束の間その体勢で固まる。

と、

「……………三戦危機……………」

「?」

綾の口がか細い声で言う。

「…………それを終結させるための、整理戦争……………その上で築かれた、地球合衆国

……」

「……綾？……」

そこでやっと、綾は右手を頭から離す。

「……どうした？」

「……アキが『終戦記念日』とか『もくとう』とか言ってたら、急に頭に浮かんできたんだけど……」

「……………」

「なんのこと？」

「……この世界の歴史だけど……まあいい！とにかく食べよう！」

「……………」

光秋は話を逸らし、綾もそれ以上言わず、食事を始める。

光秋はそうめんをすすりながら、ふと考えてみる。

——僕は歴史は教えていない。簡単な読み書きくらいだ。なのに綾は今、教えてもいいな
い近代史のことを言った？……………綾が読んだ本の中に書いてあったか、あるいは

……………伊部二尉が戻りかけてる……………——

8月19日木曜日午前10時半。

戸松教授の許で定期検査を終えた光秋と綾は、そのまま周辺を散策する。

迷彩柄の帽子にチェック模様の半袖のワイシャツ、緑の長ズボンを着、白い靴下と灰色の靴を履き、左肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋の左手と、ピンクの帽子に白い半袖のワイシャツ、黄色い半ズボンを着、首飾りを付け、ピンクのサンダルを履いた綾の右手が絡まる様に握られ、お互いに歩調を合わせてゆつくり進んでいく。

「……………回復、順調そうだってな……………」

「……………うん……………」

光秋が呟く様に言うと、綾も短く応じ、それ以上その話題に触れない。

―『この調子なら来月頃には完全だろう』……か……………伊部二尉が戻ってくるなら、喜ぶべきことなのに……………なぜか素直に喜べん……………―

思いながら光秋は、並んで歩く綾に視線を向ける。

―……………綾と離れたくないのか？……………そうかもしれない、が……………綾は今の状況、どう思ってるんだろう？自分が自分でなくなる、いや、戻る感じっていうのは……………―

そう思っても、光秋に尋ねる勇気などない。

と、綾の足が止まる。

「……………」

光秋も一拍遅れて足を止め、綾の視線を追って左側を向くと、近くに大型スーパーを見る。

「なんか買ってく？」

「いや、いいな。昨日補充が来たばっかだし」

綾の問いに、光秋は首を振って応じる。

「……そっか。そうだよねえ……じゃあ、もっといろいろ見て行こう！」

綾は笑って言うのと、光秋を引つ張る様に駆けだす。

引かれながら光秋は、綾の明るそうな様子に若干安堵するが、未だ綾への不安は消えない。

——本心からの行動か、それとも……不安を誤魔化すための強がりか……——

20 2人の中

8月27日金曜日午後8時半。

入浴を終えた光秋はバジャマに着替え、綾の部屋で壁にもたれてくつろいでいる。
と、

「……………」

胸ポケットに入れてある携帯電話が振動し、それを取って表示を見ると、タツカー中尉からである。

「はい？」

電話を左耳に当てる。

（ジャップ？俺、明日休みが取れてさ、また大勢で出かけないか？横尾中尉や上杉も誘つてさあ）

「明日ですか……」

（何だよ。なんか用事あるのか？）

「ちよつと待ってください」

言うのと光秋は電話を耳から離し、左隣で寄り添う様に腰を下ろしている綾を見る。

「誰？」

「タツカーさん。明日みんなで出かけないかって。どうする？」

「行く！」

綾の即答を聞くと、光秋は再び電話を耳に当てる。

「もしもし？」

（どうする？）

「行きます。ところで、足は？」

（9時半頃に車でそっちに行く。俺も久しぶりの休みだから。楽しませてくれよ）

「わかりました。とりあえず、9時半頃ですね」

（ああ。よろしくな）

「はい。では、明日」

（ああ）

そう言うと、タツカーの方から電話は切られ、光秋は携帯電話を胸ポケットに戻す。

「9時半頃に迎えが来るって」

「うん」

「じゃあ、僕もそろそろ寝る」

「うん。お休み」

「お休み」

言うとう光秋は、玄関でサンダルを履いて部屋を出る。

自室に入ると電気も点けず、薄明かりの中真つ直ぐベッドに向かい、携帯電話とメガネを枕の左端に置いて横になる。携帯電話を開いて時刻を見ると、8時50分である。

と、電話の画面に表示された家族写真が目に入る。

――綾には、結局見せなかったな……………家族と言える人がいない綾に、変な影響与えるかと心配してのことだが……………いや、今更悩むのはやめよう！どうせ今更だ――

そう断じると、光秋は電話を畳んで枕の左端に戻し、右側に寝返りをうつ。

……………そういえば最近、独りの布団が寂しいな……………――

8月28日土曜日午前9時15分。

迷彩柄の帽子に白い半袖のワイシャツ、黄色い長ズボン、黒いスニーカー靴を着、左肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋と、ピンクの帽子に白い半袖のワイシャツ、赤チエツクのロングスカート、ピンクのサンダルを着、首飾りを付けた綾は、家の前に立って迎えるのを待っている。

――ちよつと早く出過ぎたかな？――

光秋が数珠の巻かれた左手首の腕時計を見て時間を確認しながらそんなことを考える、

「アキ……………」

と、左隣に立つ綾が声を掛ける。

「ん？」

「今まで黙ってたんだけど、あたし、この間補充で来た横尾さんが送ってくれた本。あれが読めたの……」

「……あの、英語の本？」

「うん。アキは、教えてないよね」

「……ああ。すごい、な？……」

光秋の返事が少しきこちなくなる。

「そんなに難しい文章じゃなかった。読んでるとね、頭の奥から、単語の意味とか、文法の決まりとかが浮かんでくる感じがするの」

「……………」

「アキが終戦記念日の話をしたあたりから、突然、知らないはずなのに、すごく懐かしく感じる人や場所が浮かぶこともあるの……………あたし、もうすぐ消えちゃうんだね」

「……………いや、前にも言ったが、消えるのとは違う。変わっていくだけだ！……………綾らしさ、念力とか、今までの思い出とか、そういうのはちゃんと残るはずだ。脳みそは一緒なんだし！」

綾の一言に、光秋は少し動揺する。

「そうだけどね……でも、他人の思い出が加わったあたしは、あたしと言えるのかな？」

「……………綾……………」

光秋には、返す言葉がない。

「それとね、もう1つ気になることがあるの」

「……………なに？」

「アキ昨日、あたしの部屋を出た後、家族写真見せるかって悩んでたよね？」

「……………」

「その後、あたしに近くに来て欲しいって、考えてたよね？」

「……………ああ。なんでわかるんだ？」

「あたし時々、確信はないんだけど、アキの考えてることがわかるときがあるの。落ち着いてる時は特に。集中すれば、アキの考えが言葉として頭に入ってきたり、アキが感じたことを、感じることもできるみたい」

「……………それは……………まさか……………」

光秋の脳裏に、チンピラにテーブルを投げ付けられた時に聞こえた声と、NPの騒動制圧中にニコイチのコクピットで聞こえた声の記憶が蘇る。

「……………綾。これは超能力に関してはあるくなく知識がない僕の推測だけど……………お前は、

テレパスかもしれない」

「テレパス？」

「そう。他人の考えがわかる能力。今までは念力ばかりに注目してたからわからなかったけど、今度先生の所に行ったら、調べてもらおう」

「……………うん」

綾は短く返事をする。

と、

「あのさ、さっきの話なんだけど……………あたしがいなくなって、伊部さんが帰ってきてても、あたしと伊部さんが混ざったような人が来ても、きつとアキのことを好きになってくれると思うよ」

「…………それはそれで嬉しいね。嫌われるより好かれる方がいいのは確かだ。でもな……………今のお前ならわかるだろうが、お前がさ、僕にそういう気持ちを持ってくれたのは、ただ状況が特別だったからだろう。他人にしろ異性にしろ、僕以外と深い関わりが殆どなかったから…………綾が僕をどう思っているかは知らないが、現実問題として、僕はそんな大した奴じゃないよ…………」

「それはちよつと、失礼じゃない？」

綾は少し膨れて言う。

「あたし、アキと初めて会った時のこと、昨日の、うんうん、ついさっきのことみたいに憶えてるんだから！」

「初めて会った時……憶えてるのか？」

「うん！あたしあの時、尻もち着いたアキの後ろに、白い光が見えた」

「白い光？後光でも射してたのか？」

「そこまでは、よくわからないけど……でも、見てると安心する、優しい光だった。だから、その光の源だったアキを、信じてみようって思った」

「……光ねえ……その時から、テレパスの素質があつたのかな？」

「わからないけど……ただ、そんな光を見せてくれたアキが、仕方ないにしても暴力をふるった時は、ちよつと混乱した」

「……………」

「もちろん、人にはいろんな面があるってことも、今ならわかるけど……………」

と、綾はハツとした顔をし、光秋の正面に立つ。

「ねえ！検査なんか待ってないで、ちよつと試してみない？」

「試すってなにを？」

「今までは聞こえてくる声をただ聞いてただけだけど、意識して思いつきり能力を使えば、あの時見た光がなんなのか、詳しくわかるかも。初めて見た時は、すぐに消えちゃっ

たから」

「……要するに、僕の心を覗くのか？」

「……嫌？」

「……」

その理解に、光秋は少し渋い顔をする。

が、

「……わかった、やってみるか。ただ、注意して欲しい」

「なに？」

「僕だって、今の自分は概ね好きだ。でもな、始めからこうじゃなかった。いろんな経験をして、今の僕になったんだ。その経験の中には、あんまり他人^{ひと}に言えないことや、褒められたもんじやないことも沢山ある。可能なら、そういうのは見ないようにするか、見てもすぐに忘れてくれ」

「わかった」

「じゃあ帰って来たら、さっそく——！」

光秋が全て言い終わらないうちに、綾はアクセサリーの電源を切り、両手を光秋の両肩に置く。

「帰ってからじゃなくて、今すぐ」

言うとう綾は両目を閉じ、半開きにした口を光秋の唇に付ける。

——綾！……………

光秋は束の間動揺するが、それも綾の唇の心地よさから隅に追いやつてしまう。

……………なら……………

光秋も両目を閉じ、両腕を綾の脇に通して背中に手を回すと、綾の体を抱き寄せる。肺を満たすつもりで深く息を吸って綾の体臭を取り込むと、口の中で互いの舌の先を合わせていく。

「……………」

2人の周囲には、夏の暑さとは別の熱気が広がっていく。

同じ頃。

1台の黒い大型乗用車が、人通りの少ない道を走っている。

その車の3列ある椅子のうち、中央列の右側には白い半袖のワイシャツに黒い長ズボンを着たタツカーが座っている。

「ホント、上杉には感謝だ。俺の車じゃあ5人は乗れないからな」

『5人』って、オレはなしかよ？」

タツカーの独り言に、最前列左側に座る赤い半袖のワイシャツに茶色い半ズボンを着た竹田二尉が噛み付く様に応じる。

と、

「……」

2人の間に刺す様な空気が起こる。

「！」

右側の運転席に着く白いTシャツに水色の半袖を羽織り、白い長ズボンを着た上杉と、タツカーの左隣に着く緑の半袖に赤いロングスカートを着た横尾中尉はそれを敏感に察知し、すぐに2人を鎮めようとする。

「2人とも！せつかくの休みなんすから、喧嘩はなしでいきましようよ」

「上杉君の言う通り！これから加藤君とアヤちゃんも加わるんだし。ね！」

「……」

上杉と横尾の作り笑いを聞いた説得に、2人は渋々矛を収める。

と、

「……！」

携帯電話の着信音が鳴り出し、気付いた竹田が右の腰ポケットから電話を取り出す。

「なんだよ！こんな時に戸松教授からだ！」

表示を見てそうぼやきながら、竹田は電話を右耳に当てる。

「はいい？」

（竹田二尉？私だが！加藤君とアヤを知らんか？）

電話越しの戸松の声は、やけに焦っている。

「今向かつてるところすけど？」

（！ちようどいい！実はさつきから加藤君と連絡が着かんのだ！）

「え!？」

竹田の声に上杉たちが顔を向ける。

「何です？」

上杉が問う。

「加藤と連絡が着かねえってよ」

「二尉、ちよつと電話を……教授、上杉です。電源が切れたか、電波の入りが悪いんでしょう」

上杉は竹田が近づけた電話に向かって言う。

と、

（それが、樂觀視もしてられん！）

と、車内一同の耳に入る声で戸松は答える。

「どういふことだ？」

タッカーが訊く。

（我々も今向かっているとこで―）

と、戸松が全部言い終わらないうちに、上杉たちが乗っている車の右横を黒い公用車が追い抜いて行く。

「！教授！教授うー！」

すぐに戸松の車と気付いた竹田は左の窓から身を乗り出し、左腕を一杯に振って合図する。

それに気付いた公用車は道の左端に停車し、上杉の車もそのすぐ後ろに停車する。

公用車から降りた白衣姿の戸松が上杉の車に駆け寄つてくると、上杉は窓を開ける。

と、

「楽観視できないって、どういうことだ？」

タツカーが後部席から運転席の窓に向かって身を乗り出して問う。

「んん……実はな……」

戸松は窓から顔を車内に入れ、車内の4人にしか聞こえない大きさの声で言う。

「先程、研究を支援している合軍のスタッフから連絡があつて、脳への電気刺激を続けて『アヤ』の能力を完全に定着させろと言つてきた」

「「「「！」」」」

教授の言葉に、タツカーたちは絶句する。

「それって!」

「そう、『伊部法子』の人格を完全に消すことと同義だ。私を支援している合軍のタカ派たちは、彼女が元に戻ることが気に食わんらしい。さすがに断ったが、あの様子では、力づくでもアヤを奪う気だ」

横尾の驚愕の声に、戸松は真面目な顔で応じる。

「……待てよ!」

上杉がハツとする。

「電話が通じないのってまさか、もう軍の部隊が行つてることじゃ!」

「……恐らく」

戸松が深刻な顔をする。

「!こっしちやいらねえ!上杉!」

竹田が発車を急かす。

と、

「その前に二尉、ちよつと」

と、上杉は竹田の右耳に小声で耳打ちをする。

心地いい熱気の中にある光秋は、胸の中の綾が発する体温や体臭、質感を全身で感じ、合わせた唇からくる触覚が心地よさをさらに高め、幸福感に包まれていく。

と、

——?——?——

不意に光秋は瞼の裏の闇の中に一点の光を見つけ、それが視界一杯に広がっていくのを見る。

直後、

——?——?——綾?——

光秋の胸の中から綾の実感が消え、

代わりに良し悪しの付け難い独特な匂いが嗅覚を突いてくる。

——?——

ゆつくりと目を開けると、見覚えのない白い壁が広がっている。

と、

——『目が覚めたかね?』——

と、聞き覚えのある声を聞き、少し間を置いて視界の右側からメガネを掛け髭を蓄えた薄い頭の男がヌツと顔を出す。

——戸松教授?——

と、光秋が理解した直後、

——!——?——?——

心中にわけもなく重い不安が広がり、光秋はそんな自分に戸惑つてしまう。

—何だ？何でこんな不安に……—

と、

—『とりあえず、脳波を計らせてもらおう』—

と、戸松は両手で持った細い線がいくつか付いたバンドの様な物を近づけると、

—嫌！——？—

心中に恐怖と聞き覚えのある声の絶叫を感じ、戸松の顔が視界から消える。

—今の声……綾？……これは、綾の記憶!?思い出か！生まれた日—

光秋が直感的にそう理解すると、綾のものである視界は右を向き、手前に自分が寝ている白い医療用ベッドと、奥に壁に体をもたれ掛けて尻もちを着く戸松の姿を見る。

——……？——？——

数人の白衣姿に囲まれた中、綾はどこからか穏やかとも激しいと付かない独特な気配を感じ、辺りを見回してみる。光秋も同期してそれを感じる。

と、綾は壁の一点を見つめ、気配はその方向の下から来ていると知る。

——(ハハ)——

直後、

綾は少し力んで壁を吹き飛ばすと、開けた穴から外に出、気配の源を正確に探り、一気に接近する。距離を詰めるに連れ、光秋は後ずさろうとする気配の源をはつきりと捉える。

——………僕？——

直後に気配の源——光秋は尻もちを着き、ゆつくりと目を開けて絶句した顔を綾に向ける。

と、

——………——

綾は尻もちを着いている光秋の背後から、白い霧の様な不定形な輝きが起こるのを見る。

——綾が言ってたのはこれか——

理解しながら光秋は、自らが放つその光をまじまじと見る。

——………確かに、見てると気持ちいい。川の水に映った、太陽の様な………——
と、

——『アヤあ！』『アヤあ！』——

白衣たちの声が響くと同時に、光秋の背後の光はフツと消えてしまう。

直後に光秋は、

—この人に着いて行きたい—

という綾の想いを感じ取る。

居間のテーブルの上で、光秋が黒いクレヨンでを持って紙に大きく字を書いている。
と、

—『できた!』—

と言つて、光秋は書いていた紙を綾に見せる。そこには「加藤綾」と書かれている。

—『綾、これがお前の名前だ!』—

光秋のその一言で、綾はすごく嬉しくなる。

—綾にも名前がある!—

が、その嬉しさの中には、一点の染みの様な不安がある。

—……イベつて、誰?綾、いなくなっちゃうの?—

—……この時からか……—

綾の伊部法子に対する不安がこの時からあったことを理解した光秋は、それに気付けなかつた自分に再び呆れを覚える。

—僕は愚鈍だ!—

居間のテーブルの前に座る綾は、死に対する恐怖にも似た漠然とした不安を胸一杯に

抱いている。

と、

——『人間は、いや、生き物は、生きている。生きていく上では、変わることも必要なんだよ』——

——………かわる？………——

光秋のその言葉が、綾の耳に印象深く残る。

と、

——『綾が僕に好かれる努力をしてくれたら、好きになるかもしれない』——
この一言が綾の中の不安を和らげ、

——光秋に好かれる人になる！——

と言う決意の様な想いを抱かせる。

——そんなこと言ったな。僕が忘れてたことを、お前は………——

目の前のカーテンが開くと、竹田、上杉、タツカ、光秋が一行に並び、綾の試着した服を見物する。

その中で綾の意識は、

——光秋、どう思うかな？——

というところで殆ど埋め尽くされている。

当の光秋は絶句し、何も言わないが、綾は漠然と喜んでいると感じる。

——…よかった！——

——『貴様等！』——

——…………——

両腕を押さえられている中、綾は初めて光秋の激怒した声を聞く。

直後に腕を押さえていた2人が倒れ、光秋は綾を突き飛ばす様にして前進するが、

——…………！——…………——

綾はすれ違いざまに見た光秋の激した顔に、恐怖する。

——こんなに怖い顔だったのか!?!——

光秋でさえ、綾の目から見た自分を怖いと思う。その目は、獣の目である。

と、綾は不快感を覚えて上を見ると、壊れたテーブルが光秋の真上に浮かんでいる。

——…………後ろ！——

と言う声は声にならず、テーブルは光秋に向かって落下する。

が、直後、光秋は地面を蹴って後ろに跳び、テーブルを避けてしまう。

——…………——

そのことに綾は、束の間の安堵を覚える。

——やっぱりあれは、綾だったんだ！——

ビルの屋上に伏せる綾の目前を、ガトリング砲を持った白い巨人——ニコイチが縦横無尽に舞う。

——

それを見る綾の胸は、状況が一向に飲み込めない困惑と、ニコイチに対する嫌悪と安心が入り乱れている。

ニコイチのкокピット、その操縦席の背もたれの左側にしがみつく様にして立つ綾は、イスに納まる光秋の必死さに圧倒される。

——光秋が怒ってる？これも光秋の一部？あたしが発見した、光秋の一部？……あの人たちの所為で、変わっちゃった光秋？……

同時に、その光景に強い既視感を覚える。

——……何だろう？前にもこんなふうに光秋を見た憶えがある。イスに掴まって、必死なってる光秋の横顔を見た憶えが。コレを見るのも初めて、中に入るのも初めて、そこに座ってる光秋を見るのも、初めてのはずなのに……懐かしい？——

——これは、あの時кокピットの中で聞いた声？……やっぱ綾は、テレパスなんだ——

光秋自身もその時のことを思い出し、そう理解する。

そして、

———この頃から、伊部二尉の記憶が戻りかけてたんだ……—
居間に両脚を抱いて座る綾は、光秋の声をドア越しに聞く。

—光秋も、辛いんだ……—

光秋が語るニコイチに乗る理由、この世界に來た経緯を聞く中で、綾はそう感じる。

———

その思いが綾を玄関に向かわせ、自ら閉じたドアを開けさせる。

———

ドアの向こうには、若干の疲れを覗かせながらも、綾の見慣れた穏やかな光秋が立っている。

ニコイチのkokopittoの左側に立つ綾は、ニコイチの左右に大きく広げられた腕、そこに干されて風になびく布団を見、視線をニコイチの頭部へ向ける。

表情のない白い顔は、しかし、乗り手の様子を引き映した様に穏やかな印象を与える。

—やっぱり、好きになれそう……—

思いながら綾は、視線をイスに納まる光秋に向ける。

———アキも……—

———綾……—

居間で横になる綾は、腹に光秋の頭を乗せ、眠気で意識が遠くなりながらもその重み

を心地よく感じる。

―あたしの中に、確かにアキがいる。あたしの中に……………こういうのを、幸せって言うのかな……………―

――綾……………綾……………―

光秋は、自分がこの時感じたことと同じことを綾も感じてくれていたことをすごく嬉しく思う。

と、

――……………！――

綾の視界がゆっくりと遠ざかってゆき、それに合わせて光秋の中の綾の感覚も徐々に遠退いていく。

「……………！」

体中に覆い被さる様な重さを感じ、光秋は我に帰る。

目を開けると、綾が光秋に体をもたれ掛けている。

2 1 別れと再会、そして前へ

光秋にもたれ掛った綾は、少しも動かず、何も話そうとしない。

「……………綾？」

と、光秋が体を少し前に動かすと、綾はそのまま背後に向かって倒れていく。その拍子に綾の帽子が脱げる。

「！」

咄嗟に両腕を伸ばして受け止めると、その上体を右腕に預けて左膝を着き、左手で綾の右頬を軽く叩きながら、

「綾！あーや！」

と呼び掛けてみるが、

「……………」

綾は全く反応しない。

「……………！……………まさか！」

光秋はすぐに左手を綾の首に当てる。

「……………脈は……………あるか！」

次に左耳を綾の鼻に近づけ、耳を澄ます。

「……………呼吸も、してる……………どうなってるんだ？」

直後、

「……………」

光秋は自分たちの許に近づいてくる車のエンジン音を聞く。

―迎えか！これで……………否！違う！―

近づいてくるエンジン音はやけに大きく、耳に自信のない光秋でさえ複数の車が来ると判る。

少し間を置いて、光秋の左前方にある車道から10台の黒い乗用車が次々と現れ、光秋と綾の前に間を置きながらも、2人を囲む様に停車していく。

―何だ？この人たち……………―

目の異様な事態に若干の恐怖を覚えながらそう考えた直後、車のドアが一斉に開き、車内から黒いスーツにサングラスを掛けた男たちが現れる。

「どうかなさいましたか？」

光秋たちの一番近くにいる黒服が優しげな声で歩み寄ってくるが、その言葉と周囲の状況からくる押し潰される様な雰囲気との落差が、かえって光秋の恐怖心を増長させる。

「……………」

男たちに対して直感的に危険を感じた光秋は、

「何者です！あなたたちは！」

と、大した効果は期待できないと知りつつ、威嚇の強い声を出し、上目づかいに男を睨みつける。

「我々は合軍の戸松教授の支援者です。教授からの頼みで彼女を迎えにきたのですよ」
歩み寄った男は足を止め、事務的な口調で応じる。

「何の頼みです？」

「機密事項です。我々にお話しする権限はありません」

「教授からの連絡は聞いていませんか？」

「緊急のことで連絡がいつてなかったのでしょうか？」

「では今から確認してもよろしいでしょうか？」

「ええ、どうぞ」

光秋は左の脚ポケットから携帯電話を出し、戸松教授にかける。
が、

「……………!?繋がない?—」

左耳から離して画面をよく見ると圏外になっている。

「どうしました加藤三曹？早くご確認を」

男は少し嘲笑う様な声で言う。

「くっ……………」——こうなつたら！——

光秋は電話をポケットに戻すと、そのまま左手でカプセルを掴む。
が、

「およしなさい」

男は刺す様な声で言う。

「あなたがUKD—01に乗り込んで我々を踏み潰すより……」

男たちは右手を上着の内ポケットに伸ばす。

「我々があなたを蜂の巣にする方が遥かに早い」

「……………」

その言葉に、光秋の体が固まる。

「こちらも手荒なマネはしたくありません。むしろあなたが彼女を寝かし付けてくれたおかげで、予定よりだいぶ穏便に済ませられそうなのですよ？」

「……………」

男の声を聞きながら、光秋は周囲に目を走らせて状況打開の道を探ろうとする。

——確かに、ニコイチに乗るには時間が掛かる。かといって素手で仕掛けても、勝てる

見込みはない！向こうが銃を持っているのもそうだが、多勢に無勢。囲まれて逃げ道がない。何よりこいつらは、プロだ！NPやサン教なんかの寄せ集めとは違う！恐らく丸腰の1対1でも僕の方が圧倒的に不利だ。普通の喧嘩にさえ勝った記憶のない僕には……

と、男たちは内ポケットに手を伸ばしたまま光秋たちとの距離を詰めてくる。

「さあ、彼女を引き渡してください。心配なさらずとも、彼女にもあなたにも、言う通りにすれば危害は加えません」

——…仮にそれが本当でも、こんな連中に綾を渡すわけには………しかし、どうすれば……

打開の道が見出せず、光秋はせめてと言わんばかりに綾を抱く両腕に力を込める。

その間にも男たちは、光秋と綾との間合いを詰めてくる。

——…ここまです………「クッ！………」

そう理解しつつも、光秋は綾を抱く腕に一層力を込める。

と、直後、

「よく言うぜ！」

——!?上杉さん？——

光秋は聞き覚えのある声の叫びを聞き、声のした方——左前方を見る。

と、黒の大型車が1台、光秋たちの方へ真っ直ぐに突っ込んで来る。

「!?」

光秋が突然の事態に動揺している間に、大型車は男たちの車を撥ねる様に退かし、男たちが慌てて避けるのを傍らに光秋と綾の前で急停止する。

直後に右後部のスライドドアが開き、車内から半身を出したタツカー中尉が急かす声で言う。

「ジャップ! 乗れ!」

「?.....あ! ハイ!」

活路が開いたと直感した光秋は綾を抱えて車に駆け寄ると、綾を投げる様に中央列に寝かせ、自身も転がる様に車に乗り込む。

「上杉! 出せ!」

ドアを閉めながら間を置かずにタツカーが叫ぶと、運転席に着く上杉は返事をするのも惜しんですぐに車を後退させ、開け放たれた右の窓に向かって、

「教授! 後は頼みます!」

と叫ぶと、そのまま左折して敷地内の草原を一直線に疾走する。

——教授が?——

光秋は一瞬気になったが、床に伏せる様に座っている体勢では確認のしようがない。

その間にも車は速度を上げ、男たちとの距離を離していく。

「了解だー！」

上杉の呼び掛けに応じた戸松教授は、光秋たちと男たちの間を分断させる様な位置に車を停めさせ、男たちの側に面した右後部のドアから降りると、大きく張った胸の前で両腕を組み、白衣姿を仁王立ちさせる。

「ここから先は、この私が通さん！」

「戸松教授うー……」

男の中の1人が唸る様に言う。

「いいえ、通していただきますよ！いくらプロジェクトの中心人物である教授でも、邪魔をするなら！」

別の1人が怒りを押し殺した声で言う、男たちは一斉に内ポケットから拳銃を出し、全員がそれを戸松に向ける。

が、

「ほおう？やるかね？」

戸松は臆する様子のなく言う。

「あんなことをしてしまったマッドサイエンティストの辞書にも一応、『良心』という文字はあってね！」

と、戸松は急に男たちの背後に目を凝らす。

「お！来たな」

「？」

その言葉に男たちが振り返ると、自分たちも通つて来た車道から1台の緑の軍用車が現れ、男たちのすぐ後ろに停車する。

と、車の左前部の窓が開き、竹田二尉が身を乗り出す。

「三佐！あの髭の人です。連絡したの」

「？」

男たちが再び戸松に目をやると、

「では藤原三佐！後は頼みますよ！」

と、戸松は右手を口の横に添えて叫ぶ。

「？……」

男たちが再び振り返ると、

「了解した！」

と、軍用車から多分な怒りを含んだ声が響き、右後部のドアが開くと、白い道着に身を包み、腰に黒帯を締め、顔一杯に怒りを刻んだ藤原三佐が現れる。

「貴様等かあ！儂の部下に付きまとう変質者は！」

藤原から雷の様な絶叫が発する。

「へ、変質者?」「?」「……?」

男たちが動揺する中、1人が上着の胸ポケットから手帳を出し、左手に持ったその身分証明のページを開いて藤原に見せる。

「我々は陸軍の特殊部隊の者だ! ESOの連中か? 任務の邪魔だ! すぐに立ち去——」
身分証明の男は言い終わらないうちに顔面に殴られた様な衝撃を受け、そのまま地面に崩れ落ちる。

「!……………」

男たちが倒れた男から藤原に視線を向けると、右正拳が突き出されている。

「小悪党風情が軍の名を出すとは、笑止千万! 儂らは部下から、そちらの髭の方から部下2人が変質者の集団に追い回されていると言う通報があったと言う話を聞いて駆け付けたのだ!」

「……………」

藤原の言葉に男たちは、「再三教授を見やる。

「……」

教授は、歯を見せている。

「クソッ! おい! Eジャマーだ!」

「はい！」

男の1人が1台の後部トランクに駆け寄り、中から2つのスーツケースの様な物を出して地面に置き、フタを開けて藤原の方に向ける。内側には上下に2つずつ、Eジャマー特有の緑の円盤が設けられており、すでに電源が入っている。

「よし……いつらも片付け………」

男の指示が終わらないうちに、藤原はその男に瞬時に駆け寄って鳩尾に渾身の左突きを入れ、男は仰向けに倒れる。

「フン！超能力を封じれば儂を殺せると思ったか！残念だが、儂は竹田に呼ばれるまで支部で格闘戦の自主訓練をしていてなあ。体は温まっとるんだ！」

「……………」

銃を向けながらも、男たちの顔から一斉に血の気が失せていく。

「さてと……………ここからが訓練本番だあ！」

そう叫ぶと、藤原は男たちの中に突っ込んで行く。

男たちは何とか銃口を合わせようとするが、その前に藤原の丸太の様な手足が跳び、1人また1人と地面に崩れ落ちていく。

「ハア！まだまだ終わらんぞお！」

藤原が雄叫びを上げる傍ら、軍用車の前で棒立ちする竹田は、

「一尉、オレたち手伝わなくていいんすかねえ？」

と、答えがわかつている口調で右隣に立つ白いＴシャツに青いジーンズを着た小田一尉に訊く。

「手伝いたきや手伝えばいいが、そうすると三佐にボコボコにされるぞ？」

「そーすねえ……………」

竹田が応じると、2人はそれ以上何も言わず、藤原に襲われている男たちに若干憐れみを含んだ視線を向ける。

戸松は目の前の様子を見て、

「フッ！見たか！私のコネクションを」

と、勝ち誇った笑みを浮かべている。

男たちとの距離をだいぶ開けた光秋たちは、森林の下に車を停め、綾の様子を診ている。

「……………体の方は、特に異常はないが？」

左のスライドドアを開けて立つ上杉が、光秋の膝を枕にして眠る綾の額から右手を離して言う。

「お前らオレたちが来る前、いったい何してたんだ？」

「…………綾には、テレパシーの能力があつたみたいなんです」

上杉の質問に、カバンを外して足元に置いた光秋は綾の顔を見ながら答える。

「僕に対して気になることがあったようで、試しに能力を使ってみたら、こんなことに……」

「それなら、まだ加藤君の中に入ったままなんじゃない？」

前部左席に着く横尾中尉が、光秋の方に顔を向けて言う。

「どうなんだジャップ？何か感じるか？」

上杉に代わって運転席に座るタツカーに訊かれて、光秋は自分の中に意識を集中してみる。

「……………いえ、特に変わった感じは……」

「どっちにしろ、寝たきりの人間を抱えたままいつまでも逃げられませんよ。アヤちゃんを起してあいっら撃退するか、すぐに伊部二尉に戻して奴らの追う理由をなくすしかない」と

「……………だな」

上杉の言葉にタツカーが応じる。

「二度敷地から出て、教授の研究所に向かうか？そこなら、どっちの選択肢も可能だろう」

が、

「待つて！」

横尾の制す声が響く。

「……そんな余裕はなさそう！」

「……………」

横尾が窓を開けて耳を澄ましなげらうと、タツカーと上杉もそれに倣う。

「……………」何だ？—

光秋も耳を澄ますが、季節特有の蟬の音くらいしか聞こえない。

と、

「……………」最低でも、5機？」

「それもけっこう近い！」

上杉がささやく様に言い、横尾も同様の声で応じる。

「何です？」

「ヘリだよ」

光秋の問いに上杉が応じる。

「段々近づいてる」

直後、

（森の中に隠れている者たちに告ぐ！）

蟬の音をかき消す拡声器の音が響く。

（いるのはわかつている。大人しく彼女を引き渡せ！言う通りにすれば君たちに危害は加えない。ただし！抵抗すれば容赦しない）

——……………ここまでか……………

光秋はそう思うと、1回大きく深呼吸をする。

「……………中尉たちは、逃げてください」

「「？」」

静かに放たれた声に、3人の顔が一斉に光秋に向けられる。

「ここは僕がニコイチで引き受けます。その間に緩を連れて、遠くへ」

「いや、それはまずい！」

タツカーが言う。

「この辺の樹の背丈じゃあ、ニコイチは隠せない。出した途端に樹の間から出て、お前が乗り込む前にやられるぞ！」

「……………それでも、他に方法はないでしょう？」

「……………」

光秋の返事に、タツカーは口籠ってしまふ。

「では、さっそく」

と、光秋は立ち上がろうとする。
が、

「！」

車の正面にある木々の合間に黒いヘリが1機降下し、開いた左右のドアから自動小銃の銃口が光秋たちに向けられる。左右と後ろにもヘリは降下し、車は5機のヘリに囲まれてしまう。

「……………」

（これが最後だ。彼女を引き渡せ！）

ローター音に負けない拡声器の音が響く。

「……………」

光秋は周りを見回すが、3人は金縛りに遭った様に動かない。

（……………了解した。実力を以て対処する）

直後、5方向から2列ずつの銃弾が車に殺到する。

「！」

光秋は目を固く閉じ、上体を綾に被せる。

「……………う……………」 —弾が、当たらない？—

不思議に思った光秋は目を開け、ゆっくりと上体を起こし、正面を見る。

と、

「！」

フロントガラスを埋め尽くす程の銃弾がガラスの少し前で宙に浮いて止まっているのである。

光秋は急いで首を回すと、左右の銃弾も同じ様に宙に浮いて止まっているのを見る。

「……………なっ!？」

上杉が前に出した腕の合間からその光景を見て声を上げると、タツカーと横尾も腕を下ろす。

「！」

直後、止まっていた銃弾が後ろに弾き飛び、同時に5機のヘリも玩具の様にその場から遠くへ弾き飛ばされてしまう。

「……………念力!？」

光秋は半ば当てずっぽうに呟くと、顔を膝の上の綾に向ける。
と、

「……………?……………」

突然意識が遠くなり、綾に顔を向けたまま自失していく。

「……………!」

気が付くと光秋は、白く輝く広大な空間に、左腕で両脚を抱いて座っている。

目の前には、白の半袖のワイシャツに赤チェックのロングスカートを着た綾が、膝を折って光秋と目線を合わせて座っている。

光秋は服装こそ白い半袖シャツに薄黄色の長ズボンであるが、サイズがやけに小さく、それを着る体も小学校低学年程の背丈になっている。

—何だ？これは……………—

そう疑問を抱く一方で、光秋の意識にはちょうどこれくらいの背丈の頃の、そして、未だに内面の奥に巣食う、自身にとってあまり気分がよくない価値観が湧き上がってくる。

幼い光秋は顔を俯け、右手を目の前の車の玩具に伸ばし、それを飽きずに前後に動かしている。

—なにしてるの？—

綾が静かに訊く。

—遊んでる—

幼い光秋は顔を上げず、車を動かす手を休めずに短く答える。

—独りで？みんなと遊ばないの？—

—……僕は、みんなと違うから—

—違う?—

—うん。みんなと同じ様に遊べないから、独りで遊んでる—

—……あたしが、一緒に遊んでもいい?—

—いいよ。独りがいい。独りなら自分の好きにできるし、誰にも迷惑かけないし—

—迷惑って?—

—みんなが僕と一緒に遊ぶと、迷惑する……うんうん、遊びだけじゃなくて、なにをやっても僕がみんなと同じにできなくて、邪魔になつて迷惑する。独りなら、そんなの気にしないでいいから—

—気にならない、のかな?—

—うん……いつそ僕なんか、このままここで独りでいればいいんだ—

—え?—

—そうすれば、誰にも迷惑かけない。誰の邪魔にも……ならない。僕なんて……ここでじつとしてた方が……—

言いながら、幼い光秋は車を持つ手を微かに震わせ、眼頭を熱くさせる。
と、

—結局、あの光がなんだったのかわからなかったけど……—

綾はそう呟くと、両腕を幼い光秋に伸ばす。

幼い光秋は両脇に腕を通されると、車から手を離し、立ち上がった綾の胸の中に強く抱きかかえられる。

—アキ、自分がいることが迷惑だなんて言わないで—

両目を閉じた綾は、幼い光秋の左耳に顔を近づけ、優しい声で言う。

—みんなと違ってたつていい。アキは、アキだからこそできることだつてある。元の世界にもそうだけど、この世界にだつて、アキを大切に想つてくれている人が絶対にいる。あたしが、その1人なんだから！—

—……………—

幼い光秋の目に、涙が溢れ出る。

—だから、こんな所で独りでいるのはやめて。世界は広い、1人の知感ちかんには限界がある。だからこそ、自分から進んで行く。それを教えてくれたのは、アキでしょう？—

—……………あぁ！……………—

光秋は両腕を綾の首に回し、力一杯涙を流す。

綾は光秋を抱える腕に力を込め、光秋の想いを受け止める様に強く抱きしめる。

—……………？……………涙？—

気付けば光秋は、両目から大粒の涙を流している。

と、

「……………アキ……………」

「綾！」

膝の上で目を覚ました綾を、光秋は両腕で自分の胸に力一杯に抱きしめる。急いで抱き寄せたために少々乱暴な動作になってしまったが、光秋は綾を認識した途端、自分と綾の間に僅かでも空間があることが許せなかったのである。

「……………どうしたのアキ？ 泣いたりして」

「……………よく、わからないけど……………お前がそばにいてくれることが、どうしようもなく嬉しい！」

背に両手を回しながら微笑んで訊く綾に、光秋は涙声だがはつきりと応じる。

「ありがとう……………僕に出会ってくれて……………僕を好いてくれて……………」——何で、僕は綾は別人なんだ？ どんなに強く抱きしめたって、結局は違う体同士。完全に1つになることは、できない！ 今は、その事実が、すごく悔しい！……………」

綾を抱く光秋の腕に一層力が込められる。

と、

「おい、ジャップ……………」

タツカールの困惑した声に、光秋は綾を抱く腕を少し緩め、自失から回復して初めて周りを見回してみる。

と、タツカーと横尾、上杉が、哑然とした顔を光秋と綾に向けている。

「大丈夫か？ 魂が抜けた様な顔したと思つたら、急に泣き出して……挙句アヤに泣きついて……」

「ていうかアヤちゃん、何したんだ？」

タツカーに続いて、上杉が問う。

「あたしはただ、アキに精一杯優しくしてあげただけだけど？」

上杉の方を向いた綾は、当たり前のことを説明する様な調子で言う。

「アキの中でおしゃべりしてただけ。それだけで、アキ、すつきりしたから……ただ……」

「？……………！」

少し暗い表情に、光秋は綾の言おうとすることを察してしまう。

「イベさんが、そろそろ起きるみたい」

「……………」

光秋は、自身の心中が重くなるのを感じる。

「あとどれくらい？」

「わからないけど……そんなに時間ない。でも……あたしは、アキのこといろいろ知れて、おしゃべりもできて、もう、満足だから……………」

言うとは綾は、光秋に満面の笑みを向ける。

「……………いつかはこうなるって、わかってたのに……僕だって、綾のことをどんな好きになってるって自覚してたのに……伊部二尉のことと一緒にくたに考えて、ちゃんと向き合おうとしなかったから——」僕は、遅すぎた……………」

光秋は小声で弱々しく呟くと、再び綾を抱き寄せ、左耳に口を寄せる。

「……………めん、綾……………」

と、

「ジャップ！さっき使おうとしたもの、今が本当に使い時だろう？」

「……………！」

タツカーの言葉に、光秋は急いで左の脚ポケットからニコイチのカプセルを取り出し、綾と共にソレを見つめる

「……………」

「後始末は俺たちがやっておくからよ、悪いと思ってるならせめて、最後の瞬間まで、2人つきりでいてやれよ」

「タツカー中尉……………ありがとうございます！」

言うとは光秋は、綾と一度離れて車正面の木々の合間に駆け寄る。

左手に持ったカプセルを前に向け、レバーを「入」から「出」に切り替え、ボタンを

押すと、先端から放たれた光が人型に膨らみ、目の前に左膝を着いたニコイチが現れる。

光秋はすぐにニコイチに駆け寄り、リフトを掴んでコクピットに上がると、リフトをハッチに仕舞い、操縦席に着き、カプセルを右の肘掛に仕舞い、帽子を脱いで膝の上に置く。機内に下りながら認証を済ませると、ハッチを開けて機外に出、その間にニコイチの前に移動していた綾の許にニコイチの右手を差し出す。

綾が手に乗ると、光秋は逸る気持ちを抑えて手を慎重にハッチの上に置き、綾が操縦席の左側に移動して背もたれにしっかりと掴まるのを確認すると、ニコイチの右手を下ろして直立させる。

「上杉さん！横尾中尉も！ありがとうございます！」

眼下に並んだ3人にそう叫びかけると、光秋は急いでシートベルトを締め、右ペダルを軽く踏んで、ゆっくりとニコイチを上昇させる。

「バーカ。遅くなんかねえよ……」

「え？」

左隣に立つ上杉の呟きに、横尾が顔を向ける。

上杉は徐々に小さくなるニコイチを見上げながら、

「いえね、加藤が小声で言ったんですよ、『僕は遅すぎた』って。でも、どんなにすごい能力や才能を持ってたって、誰か一人をあんたふうにとことん好きになるなんて、めっ

たにできることじゃないし、そういうのに、早いも遅いもないだろうって」と答える。

「……気付いたその時が、Just time、か……………」

横尾の右隣に立つタツカーが、呟く様に言う。

「さて！センチメンタルはここまでだ。そろそろ後始末にかかろう」

「……そうね」

「ですね」

タツカーの言葉に、3人は振り返って車に向かう。

「とりあえず陸軍が関わってるなら、横尾中尉だ。頼む」

「そんな一方的に振られてもね……………」

と、タツカーと横尾が話しながら歩き、上杉は2人の後を付いていく。

高度を一定まで上げると、ニコイチは前方に向かって水平飛行を始める。

光秋がコクピットを機内に下ろさないのは、その時間を惜しんでのことでもあるが、それ以上に、

―せめて最後まで、綾に、直に世界を感じさせてあげたい！―

少し進むと、ニコイチは前進をやめ、滞空に入る。

と、

「……………綾……………」

左側に控えていた綾が操縦席の正面に移動し、パネルを左右に退けて光秋に抱きついてくる。

「……………最後まで、こうしてていい？」

左耳に口を寄せてささやかれた問いに、光秋も操縦桿から離れた両手を綾の背に回し、

「いい。むしろ、そうしていてくれ」

と、綾を抱き寄せ、回した腕に力を込めて言う。

「あと……………もう一つお願い」

「ん？」

「……………」

綾は両目を閉じ、口を半開きにする。

「……………」

光秋も目を閉じ、口を半開きにすると、顔を近づけて口と口を合わせる。

光秋と綾は、互いの舌を撫で、互いを抱く腕に力を込め、互いの温もりを感じ、互いの体臭で鼻をくすぐる。

「……………いや、別人だからこそ、こうやって抱き合うことができる！自分自身を恋

人にすることはできないが、他者がいるからこそ……綾……—

そう思った光秋は口を一層強く当て、両腕に一層力を込める。

と、

「……………!?!」

光秋は綾の口が離れるのを感じ、急いで目を開けると、目を閉じて後ろに倒れ掛かっている綾を見る。

「……………綾?……………」

光秋が静かに呼び掛けると、綾はゆっくりと目を開ける。

「……………加藤くん?……………」

「……………気が付きましたか?伊部二尉……………」

言いながら光秋は、背中に戻っていた両手を操縦桿に掛ける。

伊部二尉も光秋から体を離し、床に立つと、寝起き間もない様な顔で辺りを見回して
みる。

「……………(どこどこ?)あと私たち、なんでニコイチに乗ってるの?」

「……………ちよつと問題が起こったんですが、もう解決しました。とりあえず、戸松教授
の許に案内します」

「……………?なんで加藤くん、戸松教授のこと知ってるの?」

「……………実験の協力と呼ばれたんです。詳しいことは、教授に直接訊いてください」
「……………そう?……………」

光秋の適当な受け答えに、伊部は腑に落ちないといった顔を向ける。

「とりあえず、席を下ろしますので、椅子に掴まってください」

「うん……………」

光秋の事務的な言葉に、伊部二尉は首を傾げながら応じ、背もたれの左側に掴まる。それを確認した光秋は、左の肘掛のレバーを下ろし、操縦席を機内へ下ろす。

「……………もう、直接見せる必要もないんだ……………」

ハッチを閉めると左パネルの地図で現在地を確認し、ニコイチをやや左に向けて前進する。

少しして白い小屋の上空に着くと、光秋はモニター越しに眼下の様子を見る。

黒服の男たちの車と姿はすでになく、小屋の前で道着を着た藤原と白衣を羽織った戸松がなにごとか話し合い、藤原の右後ろに停まっている軍用車の前部に小田と竹田がおつかかつて2人の会話を眺める光景がある。

と、ニコイチに気付いた竹田が上を向いて右腕を大きく振り、それを合図に光秋はゆっくりと降下を始める。

着地すると、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ハッチを開いて操縦席を機外へ上げ、二

コイチの右手をハッチの上に置き、伊部がそれに乗ると、手を慎重に地面に下ろす。手から降りた伊部が、

「藤原三佐！小田一尉！竹田二尉まで！いったいどうしたんです？」

と、驚きの声を上げるのを、光秋は微かに聞きながらシートベルトを外し、右の肘掛からカプセルを取って左の脚ポケットに入れ、席から立ち上がる。伊部に藤原たちが駆け寄るのを視界の端に見ながら、リフトを出し、下へ下りる。

光秋が地面に着くと、後ろから来た上杉の車がニコイチの左前に停車する。

車から上杉たちが降りてくるのを見、伊部は再び、

「上杉君にフミ！それにタツカー中尉も！三佐たちといい、どうしたんです？」

と、驚きの声を上げる。

「あー、オレら教授に呼ばれて……」

と、上杉が歯切れ悪く言いながら横尾と共に伊部に歩み寄っていく傍ら、タツカーは光秋の許に歩み寄ってくる。

「……………戻ったんだな」

「……………はい……………」

タツカーの言葉に、光秋は短く応じる。

と、タツカーは光秋の左肩に右手を置き、顔を合わせる。

「お前は、自分の行動が遅すぎたって言ったようだが、上杉が言ってたぜ。どんなにすごい能力があつたって、誰か一人をとことん好きになるなんて、なかなかできることじゃないって。そういうのに、早いも遅いもないってな」

「……………」

「あと、これは俺の言葉だが、気付いたその時こそ、Just time なんじゃないか？」

「気付いたその時こそ、ジャスト・タイム？……」

「ああ。お前は気付いて、最後の最後に行動を起こした。それでいいじゃないか」

「……………」

その言葉に光秋は、胸の内が軽くなる感じを覚える。

「タツカー中尉、ありがとうございます。おかげで、綾との思い出が、悲しい思い出にならなくて済みそうです」

「そうか……………」

言うのとタツカーは、後ろを振り向く。

「……………」

光秋もその視線を追い、大勢に囲まれている伊部を見る。

その後、タツカーたちの尽力と、なによりも確保の対象である伊部が元に戻ったこと

で、光秋たちが軍の特殊部隊に追われることはなくなった。

9月1日水曜日。

光秋は伊部と共にESOに復帰し、訓練漬けの日々を送っている。

そして、9月8日水曜日午前10時。

ESOの緑の制服を着た光秋は、制帽を膝の上に置き、ニコイチのコクピットに納まっている。ニコイチの白い巨体が雲の少ない青空の下を駆け、眼下には視界一杯に緑が広がっている。

と、

「……………」

光秋は視界の右端に、そこだけ土が剥きだしになって長方形を描いている箇所を見る。少し前まで、綾と過ごした場所である。

—騒動のあった翌日には、取り壊されちゃったもんな……………—

光秋は、家の跡に目を合わせる。

—写真も、撮らなかったからな。僕の写真をあんまり好まない質が、仇になったか……………あの跡でさえ、時間が経てば草に覆われる……………綾と過ごした時間の証が、どんななくなっていく……………—

と、直後、

（加藤くん！）

伊部のよく通る声が、光秋の左耳の通信機から響く。

（定時連絡、遅れてる！訓練だからって、もう少し気を引き締めて！……………それとも、どこか調子悪い？）

「いいえ！ちよつと考えごとをしてただけです。以後、気を付けます！」

伊部の心配した声に、光秋は元気に答える。

同時に、先程までの考えを頭の隅に追いやる。

——くよくよしててもしょうがない！証は残らなくても、思い出は残るさね。なにより

……………こんなことじゃ、綾に合わせる顔がない！——「よし！」

光秋は気合いを入れると、右ペダルを少し深く踏み込む。

少し速度を上げたニコイチが、青空と緑の山々の間を駆けてゆく。

復帰編

22 光秋スタイル

9月8日水曜日午後8時半。

その日の訓練を終え、京都支部の食堂で夕食を済ませて職員寮の自室に帰宅した光秋は、ひと風呂浴びてパジャマに着替えると、居間の椅子に腰を下ろし、天井に吊り下がっている電灯を見つめながら長考に耽っている。

――昼間の訓練で感じた、このままじゃいけないっていうのは、事実だ……綾との思い出を突のあるものにするためにも、そこからなにか学ばないと……！――

そこまで考えると、不意に黒服の男たち相手に何もできなかったこと、いつかのチンピラとの小競り合いでも大した働きがでなかったこと、それらとは対照的にニコイチに乗った上ではNPやサン教を相手に1人で大いに活躍したことを思い出す。

――……ニコイチがあれば大活躍だ。でもそれじゃあ、今でこそまだ大丈夫だが、そのうちニコイチに依存してしまう。依存物を作るのは、好きじゃない。対して生身では、途端に目立った活躍ができなくなる。毎日突きの練習こそしているが、それだけじゃあ、やはり足りんな……となると、もつと体の、それも格闘戦の能力を高めるべき

か。射撃の方はもとも期待できないし、よしんばできたとしても、今度は銃に依存してなんの進展にもならない。それに格闘戦の能力を上げれば、ニコイチの基礎能力の底上げくらいにもなるだろうし――「よし！明日藤原三佐に相談してみよう！」

訓練の時間割の相談もそうだが、光秋の中に「格闘戦」という言葉が浮かんだ時、同時に藤原の髭の顔も浮かんだのである。

9月9日木曜日午前8時。

朝食等を済ませ、ESOの緑の制服に着替えた光秋は、灰色のカバンを右肩に斜め掛けし、制帽を被って玄関へ向かう。白い靴下を履いた足を制靴に入れると、外に出、ドアに鍵を掛けて支部へ向かう。

5分程歩いて支部本舎の正面玄関をくぐると、最寄りのエレベーターに乗り込み、地下1階で降りると藤原隊の待機室へ向かう。

待機室の前に着いてドアを開けると、すでに藤原がドアに近い椅子に座り、新聞を開いて読んでいる。

「おはようございます」

「おお、おはよう」

光秋がドアを閉めて右手で敬礼をしながら歩み寄ると、藤原も新聞から目を離し、顔を向けて応じてくれる。

——読んでる時に話し掛けるのも……………まいつか。早い方がいいだろうし——

光秋は藤原の近くの椅子に座ってカバンを床に下ろしながらそう決めると、左前の藤原に顔を向ける。

「三佐、ちよつと相談があるのですが」

「なんだ？」

光秋の言葉に、藤原は新聞を畳んでテーブルに置き、顔を合わせて応じる。

「訓練の内容についてなんですが、格闘戦を重視したものとして欲しいのです」

「……………どういふことだ？」

「僕は、射撃の腕はあまり期待できませんし、ニコイチが最大の取り柄の様なものです。しかし、ニコイチがある時とない時の能力差が著しい。これでは、そのうちニコイチに依存してしまう。そんな事態を避けるために、生身での能力をもっと上げたいのです」
「なるほど、それで格闘戦か……………ウム、わかった。確かにお前の言うことにも一理ある。お前がよければ、早速今日から始めてみるのもいいだろう」

「ありがとうございます！」

光秋は軽く頭を下げる。

「あと三佐、もう一つお話が」

「なんだ？」

「その訓練なのですが、指導を三佐にお願いしたいのです」

「儂に？」

「はい……………やつぱり、難しいですかね？時間の都合とか……………」

「いや、そういうことなら、いくらでも都合はつけよう。ただ、本当に儂なんかでいいのか？」

「はい！僕の知る限り、三佐程この頼みに適切な人はいません」

「……………そうかあ……………それなら、な……………わかった、引き受けよう。ただ、毎日は無理だな」

「いいえ、充分です！ありがとうございます！」

光秋は先程よりも深く頭を下げる。

「とりあえず、小田たちが来たら上で始めてみるか」

「はい！よろしくお願いします！」

と、光秋が3度礼をした直後、ドアが開き、制服姿に手荷物をそれぞれの肩に掛けた小田一尉と伊部二尉が入ってくる。

「「おはようございます」」

「ウム、おはよう」「おはようございます」

2人の挨拶に、藤原と光秋は同時に返す。

「残りは竹田だなあ……」

と、藤原が小田と伊部が椅子に着くのを見ながら呟くと、

「ウーッス……………」

と、制服の襟元を緩め、右肩に黒いカバンを掛けた竹田二尉が、まだ眠気の残る目をしてドアから入ってくる。

「よし。これで全員そろったな」

竹田が椅子に着くのを見た藤原が立ち上がりながら言う。

「さっそくだが、全員外のグラウンドに移動だ」

「朝っぱらから、なにすんすか？……」

藤原の言葉に、竹田が欠伸混じりに問う。

「行つてから説明する。さあ、行くぞ！」

言うど藤原は先陣切つてドアへ向かい、光秋、伊部とそれに続く。

「竹田、襟締めろ。あといいい加減目え覚ませ」

小田が竹田を注意する声が背後に響く。

本舎の裏にある、春頃にはニコイチの訓練も行われていたグラウンドに移動した藤原隊は、本舎側の端に集合する。

左手首の数珠と時計を外して上着のポケットに仕舞った光秋は、藤原を正面に、本舎

側に横に並んで立つ小田たち3人を左に見ながら、軽く両肩を回し、手首を振ってひと呼吸する。

「加藤、お前格闘技の覚えはあるか？」

「空手をかじったことがあります」

藤原の質問に、光秋はそう答える。

「ウム。では、ちよつと見せてくれ」

「はい」

応じると、光秋は拳を作った両腕を前に伸ばし、3回腕を引く練習をすると、左腕を伸ばし、右拳を腰溜めにする。

「そーいやあ、加藤が生身でこういうことするの、これが初めてじゃねえか？」

と、藤原の側に立っている竹田の眩きを合図に、

「！」

光秋は左腕を素早く腰に引くと同時に右拳を前に突き出す。

その後同じ要領で4本突きをすると、1つ深呼吸をしながら両肩を大きく回す。

「やっぱり肩が張るな」「こんなところです。言い方は悪いですが、効率的な殴り方くらいはわかります」

突きの際に肩に余計な力が入ってしまう悪癖を自省しながら、そう報告する。

「ウム。経験者だけに筋はいいな……試しがてら、儂と組んでみるか？」
「え……………」

藤原が何となしに言った言葉に、光秋は束の間返事に困ってしまう。

「しかし……しばらくまともにやってないですし、三佐相手には……………」

「ニコイチでやってるだろう。それに手加減もする。なにより直接手合わせしてわかることもある。やるぞ！」

「はい……………」

言い切られるや、光秋はやや自信のない声で応じる。

「小田、審判を頼む」

「はい」

3人の中央に立っている小田が、藤原と光秋の許に歩み寄ってくる。

「組手の作法はわかるな？」

「はい、だいたいはい」

藤原の質問に光秋が答えると、2人は互いに歩み寄って一定の距離を取り、両手両脚を揃えて礼をすると、左脚を前に出して脚を縦に広げ、左拳を顎の高さで前に出し、右拳を胸の前に置く。

「……………」

光秋はゆっくり呼吸を整えながら、藤原の目を見る。

直後、

「始め！」

「！」

小田の号令と同時に、藤原の岩の様な左拳が繰り出される。

「！」

光秋はそれを左腕で受けつつ後退して間合いを取ろうとするが、藤原は光秋を追いながら左突きを繰り返してくる。

と、5発目の突きを受けた直後、

「守ってたら勝てない……なら！」

そう断じた光秋は、6発目の突きを受けると左脚を1歩前に出し、

「！」

胸元に置いていた右拳を藤原の鳩尾目掛けて繰り出す。指の甲に布の感触を覚えたのも一瞬、素早く右手を胸元に引き戻す。

「そこまで！加藤の勝ちだ」

小田がそう判定すると、光秋と藤原は両手両脚を揃え、礼をする。

「……」

光秋はひと呼吸して、乱れた息を整える。

「スゲーじゃん加藤！三佐に勝つなんてさあ！」

すっかり目を覚ました竹田がそう言いながら寄ってくるが、光秋は、

「いえ、久しぶりということもあって、あんまり上手くできませんでした」

と、素っ気なく応じる。

「確かに、いい動きとは言えんな。が、やはり筋はいい。訓練さえ積みめば、ものになるかもしれない」

藤原はそう言つて歩み寄り、右手で光秋の左肩を叩いてくれる。

「ありがとうございます」

光秋は藤原の顔を見て応じる。

「よし。各自それぞれで仕事を開始しろ！加藤は儂と残れ」

「「了解！」「」」

藤原の号令に4人は敬礼をして応じると、小田たちは本舎へ向かう。

「さて、始めるか」

「はい。お願いします」

残された藤原と光秋は、短い言葉を交わす。

藤原と2人きりになった光秋は、軽い準備体操を終えると、小休止を挟みながら藤原

から突きや受け、蹴りの指導を受ける。光秋にとっては復習の様なものだが、それでも構えの甘い箇所をいくつか指摘される。

と、日もだいぶ高くなつた頃。

「……………」

光秋の左前に腕を組んで立つ藤原の上着から、携帯電話の振動音が響く。

「すまん。ちよつと待ってくれ」

言うのと三藤原は光秋に背を向けて電話に出、光秋は構えていた左蹴りの姿勢を崩し、軽く足首を振つてみながら藤原の電話に耳を傾けてみる。

「もしもし? ……ああ、アレか。……了解、すぐに」

言うのと藤原は電話を上着に仕舞い、光秋に顔を向ける。

「すまんが急用ができた。今日はここまでにしてくれ」

「わかりました」

「有事の際は小田の指示に従え」

「はい」

光秋の返事を聞くと、藤原は真つ直ぐに本舎へ駆けていく。

藤原が本舎に消えるまで見送つた光秋は、左手を上着の左ポケットに伸ばし、時計を出して時刻を確認する。

——11時15分かあ……少し早いが、飯にするか——

そう決めると時計を左ポケットに戻し、訓練の閉めに突きの練習を10本やって軽い体操をし、左ポケットから出した時計と数珠を左手首に巻きながら本舎へ向かう。

本舎内の食堂に着いた光秋は、運動後の空腹感から焼き肉定食を注文し、適当な席に着いて制帽をテーブル下の物置に置き、食事を始める。

12時前のためか、席の埋まり具合は散々としている。

「……」

油っぽい焼き肉は疲れた体に活力を与え、塩味の野菜スープはさっぱりとしており、栄養だけでなく味覚的にもバランスが取れていると感じる。

と、肉をのせた白飯を口に入れた直後、

「加藤お」

「?……」

名前を呼ばれて後ろを振り向くと、竹田と白衣を羽織った上杉がトレーを持って自分の許に来るのを見る。

竹田が光秋の正面に座ると同時に、光秋の左前に着いた上杉が口元を歪めて話し掛ける。

「聞いたぜ。藤原三佐に弟子入りしたんだって?」

「……そんなんじや。ただ、三佐なら適任そうだから頼んだけけです」

光秋は口の中のものを読み込むひと呼吸を置いてから応じる。

「でもさあ、初日から午前中一杯やってたんだろう?」

竹田が言う。

「そりゃあ、訓練なんですからちゃんとやらないと」

「相変わらず真面目だねえ?」

光秋の受け答えに、竹田は少しかう様な調子で応じると、カレーライスを一口分口に運ぶ。

「ところで………」

と、上杉が先程とは打って変わってやや真剣な顔をする。

「その……あれから1週間以上経つが、大丈夫か?」

「?……なにがです?」

「いや、その………」

「?………ああ、あれか――」

上杉の曖昧な言い方に、光秋はなにが言いたいのかを察する。

「綾とのことならご心配なく。気持ちの整理なら、完全にはいきませんが、大方済みました」

「そう？……それならいいんだけどさ……………」

少しほっとした様子で言う、上杉は箸を定食の焼き魚に伸ばす。

「大丈夫ってんなら訊くけどさあ」

竹田が言う。

「お前たちが住んでた小屋壊されて、そこにあつたもんはどうしたんだよ？」

「僕の私物は壊される前に寮に送り返されて、それ以外の、綾に関わりのある物は全て、教授が研究の参考にとって持っていききました」

「……てことは、アヤちゃんとの思い出の品は一つもなしだよ！」

上杉が少し興奮した口調で訊く。

「ええ」

「あのハゲヒゲエ……………」

竹田が怒気を含んだ声で言う。

が、2人とは対照的に、光秋は落ち着いた調子で言う。

「でも、僕の手元に残ったって、しばらくはまともに見れなくて、押し入れの奥に仕舞うのが落ちでしょうし、それなら、この方がよかったと思います。捨てる決心なんて、もつと着かないでしょうし…………ただ、それはそれ。僕もそれなりの歳なんだから、自分の問題くらい自分で捌けます。どうしてもダメなら、助け舟も出しますけど、それにしたつ

て自分でできるんだから、お二人が心配したり怒ったりすることじゃないですよ」

「……それならいいんだけど……」

上杉は落ち着いた声で応じると、魚の一片を口に運ぶ。

と、

「……あれ？加藤くん」

「！」

再び呼び掛けられた光秋は、トレイを持った伊部が後ろから自分の許に来るのを見る。

伊部は光秋の左隣に座ると、

「竹田二尉に上杉君も。お昼の食堂で会うなんて珍しいですね？」

と、2人を見ながら言う。

「ああ、オレたちが来たら、珍しくこいつもいてよお」

「僕は、訓練が早めに終わったんで、たまには食堂で昼食もいいかと思って」

竹田が光秋をスプーンで指して説明し、光秋は事情を話す。

「フーン？……何？また2人して加藤くんイジメてたの？」

伊部の軽く睨み付ける問いに、

「イジメてませんよ！ねえ二尉？」

「ああ！話してただけだ。加藤からも言ってくれよ」

と、上杉は慌てて竹田に振り、竹田二尉も光秋に振る。

光秋は伊部と顔を合わせ、

「竹田二尉の言う通り、ちよつと話してただけです」

と、落ち着いた声で言う。

「そう？……上杉君はまだしも、竹田二尉はからかいが過ぎることがあるから……」

そう言うのと、伊部は自分の焼き魚定食に箸を着け始める。

光秋は箸を動かしながら、隣の伊部を横目で見ると、

「……綾と同じ、黒い肌に長い黒髪、匂い……でも、違う。伊部二尉は後ろに束ねて
るっていうのもそうだが、そこにいるのは伊部法子であつて、加藤綾じゃない……い
かんいかん！また引きずつてる！——」

そう考えると、光秋は少なくなつた残りの食事を駆け脚で平らげ、

「ごちそうさまです」

と、手を合わせて早口に言つて、

「では、僕はこれで」

と、誰の返事も待たずに立ち上がり、トレーを持って返却口に向かう。

トレーを返すと食堂の出口へ向かう。

と、

「加藤くーん！」

「！」

後ろから伊部に呼び止められ、振り返るとすぐに制帽を差し出される。

「？」

「忘れ物」

「……あーありがとうございます」

言いながら光秋は一礼して制帽を受け取り、苦笑いを浮かべてそれを被ると、振り返って出口へ向かう。

——やっちゃったなあ………………—

地下の待機室に向かうと、光秋はカバンから歯ブラシを出して最寄りのトイレで歯磨きを済ませる。

食後の一息を終えると、射撃訓練を1時間程行い、その後は再びグラウンドに出て休憩を挟みながら日が暮れるまで格闘戦の自主訓練を行う。

食堂で夕食をとってから帰宅し、ひと風呂浴びてパジャマに着替え、ドライアーで髪を乾かし、目薬を注しながら、洗濯物を窓側に置いてあるハンガーラックに掛けていく。

それら必要事項を全て終え、椅子に着いた光秋が机の上の時計を見ると、8時半であ

る。

—とりあえず、今日も1日勤まったし、訓練の方も、なんとかかなりそうだな。適度に疲れたから、今日はよく眠れるかも……。竹田二尉たちには大丈夫だと言った後で、伊部二尉に綾の影を見ようとしたなあ……。いかなよなあ、これじゃあ……。ま、やりちまったもんはしようがない。ちよつと早い……。明日も早いし、寝るか—

そう決めると、光秋は右側の脚が長いベッドに梯子を掛け、トイレで用を足して風呂場の水盤で口を漱ぎ、顔を洗い、居間に掛かっているバスタオルで顔を拭くと、玄関の戸締りを確認し、机の上に置いてあるカプセルをベッドの上の枕の左脇に移動させ、ベッドに上って胸ポケットの携帯電話もカプセルのそばに置き、灯りを消してタオルケットをかける。

メガネを取ってカプセルの近くに置き、携帯電話を開いて時刻を確認すると、9時ちようどである。

9月10日金曜日早朝。

いつも通りの時間に出勤した光秋は、いつも通り待機室に顔を出すと、カバンを持ってグラウンドに向かい、格闘戦の自主訓練を始める。

午前9時。

「よお加藤！ やってんなー！」

「！」

後ろから竹田の声に呼び掛けられた光秋は、突きの構えを解いて振り返ると、竹田を先頭に、小田と伊部の3人が自分の許へ歩いてくるのを見る。

「おはようございませす」

「おはよう。三佐知らないか？」

竹田の左隣に立つ小田が歩を止めて訊く。

「いいえ、僕が来た時からいませんでした。三佐のカバンがあつたので、朝から用事があ
るんだらうと思って、顔を出したらすぐにここに來たんですが……」

「そうか……電話も繋がらんし、昨日は結局支部に帰ってこなかったし、どうしたんだか
なあ……」

「はあ……」

小田の少し困った顔に、光秋は相槌を打つことしかできない。

「大方、仕事に手こずってんでんでしょう？三佐デスクワーク苦手ですし。万が一事件
に巻き込まれてつてことになつても、あの藤原三佐が死ぬことたあないですよ」

竹田は気楽そうにそう言うのと、光秋に顔を向ける。

「それより加藤、昨日の三佐みたいに、オレとも組んでみねえか？」

「え？二尉、空手の覚えあるんですか？」

「いや全然」

「……………」

竹田の即答に、光秋は内心少し呆れる。

「二尉、それじゃやめておいた方がいいですよ？」

「大丈夫だって。プロレスのテレビ中継なんかはよく観てるし」

「観てるだけじゃあ……」

「加藤の言う通りだ」

小田が加わる。

「お前も、訓練とはいえ真剣にやらないと怪我することくらい知ってるだろう！しかもろくに知識もなにのに……」

「一尉まで。大丈夫ですよ。オレガキの頃からケンカ強い方でしたし」

叱る様に言う小田に、竹田は能天気に戻す。

「とにかく加藤、早く始めようぜ！」

言うのと竹田は左脚を前に出し、左拳を顎の前に出して右拳を胸元に置く。

「……………」わかりました。一尉、審判をお願いします」

竹田の様子に、光秋は半ば諦めて姿勢を構える。

が、一方で竹田のいい加減な態度に対し、

—少し見せてやる!—
という反感も自覚する。

「やれやれ……………」

と、小田は呆れ顔を作って光秋と竹田の間に立ち、光秋の左肩と竹田の右肩に手を置く。

「始め!」

号令と同時に小田は光秋の左側に下がり、竹田は一気に間合いを詰めてくる。

「そらあ!そらあ!」

竹田が左拳を立て続けに繰り出し、光秋はそれを左腕で受ける。

「どうした加藤お!仕掛けねえのかあ!」

そう挑発しながら竹田は右拳を突き出すが、

「!」

直前に後退して間合いを取った光秋はそれが当たるのを回避する。

直後、竹田の左足が光秋の胸に跳ぶ。

「!」

光秋はさらに後退してそれをやり過ぎ、直後に竹田は直立のバランスを取ろうと上体を揺らしてしまう。

光秋から見れば、竹田の構えや攻撃法はどこか甘い。が、なぜかある種の狂気を感じ、1カ月程前の記憶を呼び覚ます。

—いつかのチンピラたちと大差はないか！なら！—

光秋は前進して竹田との距離を詰め、

「！」

竹田の顎に向かって左突きを繰り出す。

—超能力がない分—

竹田がそれを左腕で受けた直後、

—こっちの方が毛1本まし！—「あさあ！」

気合いと同時に右拳を竹田の鳩尾に叩き込む。

刹那、手に布と竹田の体の質感を覚える。

と、

「うっ！……………」

「……………」

絞り出す様な声を聞いたかと思うと、竹田は両手で鳩尾を押さえて崩れる様に両膝を着く。

「……………」

すぐには何が起こったのかわからず、光秋は組手の構えのまま呆然とする。

「ああ言わんこつちやない！伊部、上杉呼んできてくれ」

「はい！」

小田が呆れた顔で言うと、伊部は医療棟へ駆けていく。

と、呆然状態から脱した光秋は、構えを解いて竹田に歩み寄り、中腰になって頭の高さを合わせると、

「……………二尉、大丈夫ですか？」

と、心配そうな声で訊く。

「やりすぎたか……………」

と、

「心配しなくても、ちよつと強く当たっただけだろう？こいつだって少しは鍛えてるんだし、寧ろいい葉になっただろう。そうだな？竹田」

「はい！中途半端にやつちやいけないってよくわかりました……………」

と、竹田を見下ろす形で小田は言い、竹田は絞り出す様な声で答える。

と、

「二尉！加藤にやられたって本当ですか！」

伊部に連れられた上杉が驚きの声を上げながら駆け寄り、すぐに上着とワイシャツの

ボタンを外させて右手を竹田の鳩尾に当てる。

「……………ざっと診た感じ、特に異常はなさそうですね。しばらく安静にしていれば治りますよ」

「それなら、待機室に運ぶか……」

小田がそう言うと、

「じゃあ、オレが連れてきますよ」

と、上杉は竹田の左腕を肩に回して2人で立ち上がり、そのまま並んでゆつくりと本舎へ歩いていく。

「……………」

それを光秋は、浮かない顔で見送るしかない。

と、

「加藤」

「……」

後ろから小田に呼び掛けられ、光秋は背後に振り返る。

「今のことで、変な気は起こすな」

「?……………」

「あいつだって、この手の訓練は少しくらい受けてるんだ。さっきの様なチャランポラ

んな態度で臨めばこうなることくらい、やる前から予想しておくべきだったんだ。お前はちゃんと真面目にやった。だから気に病むなよ」

「そうですが……僕の方にも反省はあります。ちよつとムキになってしまつて……大人気ないです」

「なら、それくらいにして、次は気を付けろ」

「はい……………」

「じゃあ俺は、竹田を見てくる」

言う和小田は本舎の方へ歩き出す。

「……………」

光秋は、黙つてその後ろ姿を見送る。

と、

「加藤くん」

伊部が左隣に立つて話しかけてくる。

「伊部二尉……情けないところ見せちゃいましたね……………」

「二尉も『気に病むな』つて言つてたでしょう。加藤くん自身も反省してるんだし、いいじゃない……それより、気分転換にジュースでも買つて飲まない?」

「…………じゃあ、僕持ちで」

「上官に奢ろうなんて10年早い！」

伊部は微笑みながら叱る様に言う。

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

「うん。それじゃあ、行こっか」

言うのと伊部は本舎に向かつて歩き出し、光秋もその後が続く。

本舎地下の紙コップの自動販売機で、光秋はサイダーを、伊部はウーロン茶をかうと、近くのベンチに腰を下ろす。

光秋がサイダーを一口すすると、

「……ところで、『蜂の巣』戦の後、どうだった？」

左隣に座る伊部が、顔を向けずに訊いてくる。

「どうって、言いますと？」

「私、あの時負傷して、加藤くんがどうなったかわからなかったでしょう」

「ああ……とりあえず、しばらくニコイチは使用禁止になりました。僕も自宅待機を命じられて……今だから言えますけど、最初の頃は辛かった。気が付くと、台所の包丁が頭に浮かんて、でもなんとか気を立て直して、早まったことはしませんでした……」

「……………そんなに堪えた？ニコイチの暴走が」

「ええ、危うく人を殺しかけたりもしましたからね……………でも、その後自分の時間を持

てたのは、よかったと思います。気持ちの整理も、なんとかつけられましたし——綾にも、会えたりし……—

「その間の出来事が、格闘戦の自主訓練をしようって動機になったの？」

「ええ」

「……そつかあ………とここで、加藤くんが人前で組手なんかやったのって、昨日の藤原三佐とのあれが初めて？」

「ええ、こつちに来てからはあれが初めてですが………なにか？」

「うん、さっきの竹田二尉との組手、なんか見覚えがあるような気がしてね……」

「見覚え？」

「うん。前にも竹田二尉みたいなの……どっちかっていうとやんちゃな性格の人と、加藤くんが殴り合った気がするんだけど……」

「!?……」

伊部の言葉に、光秋は束の間言葉を失う。

「心当たりない？」

「……いいえ………おそらく、デジャブでしょう。頭の調子が悪いと、始めて見たものを記憶と勘違いしちゃうっていう」

「そうかなあ?………私、夏の2カ月くらい記憶ないから……」

「……………」

伊部の呟きに光秋は何も言わず、紙コップからまた一口する。

「……………」

伊部もそれ以上何も言わず、静かにウーロン茶を飲む。

飲みながら光秋は、伊部が今言った記憶について考えてみる。

——二尉が言ったのは、あのチンピラたちとの喧嘩の記憶？……あれは綾の記憶だ。伊部二尉は、ちゃんと伊部法子として戻って来たはず。なのに何で……………いや、脳みそはあくまでも一緒だから、さっきの組手がきっかけで、思い出したのか？……………——

脳に関する知識が少ない光秋は、そこまで考えることで精一杯である。

伊部と別れた光秋は、グラウンドに戻り、気を取り直して訓練を再開する。

その休憩の際、光秋は近くの日陰に腰を下ろし、カバンから出したタオルで汗を拭きながら、先程の竹田との組手を思い返してみる。

——構えも攻撃も甘いのに、何であんなに怖く感じたんだろう？……………そういえば二尉の突き、けっこう痛かったな……………——

思いながら、左腕の竹田の突きを受け止めた箇所を見てみる。

——形こそいい加減でも、力はあるんだ……………！……………力……………技術……………気持ち……………そういうことか？——

唐突に合点する。

「つまり、『能力』——この場合は腕っ節のことだが——これの強さと、『能力』を効果的に使う術——『技術』。この2つがちゃんと揃ってこそ、れっきとした『技』になる。徒に手足を振り回すだけでは、隙ができる。逆に知識だけあっても、それを活用できるだけの力がなければ、机上の空論。力と知識——『能力』と『技術』——この2つが揃ってこそその『技』。もう1つに、その『技』を制御し、場合によっては封じることがする『心持』——つまり、自分のことを把握する自覚や、周囲を見極める判断力か………いわゆる心・技・体とは、こういうことか？ 当たらずとも遠くはないと思うが………だとすると、二尉に狂気のようなものを感じたのも納得だな。二尉は『技術』は甘い、それでも力はあるから、相手によつては誤魔化しが効く。しかし本人は、そのどちらも自覚している様子がなかった。その、『技術』と『能力』と『心持』の不統合さが、狂気を感じさせた、か………コツの様なものを思い付いた方がいいが、問題は実践………——」

「それは、訓練と経験あるのみか………」

と、タオルをカバンの上に置いて日陰から出、訓練を再開する。

午後8時半。

ひと風呂浴びてパジャマに着替えた光秋は、自室の居間の椅子に座つてくつろいでい

る。

ふと、昼間のことを思い返す。

—前にも“力”や“心”について考えたことはあるが、ちよつときこちないとはいえ、あそこまで言葉にまとめられたのは初めてだな……………格闘技を覚えていく上での流れと言えなくもないが……………ただ…………—

と、綾の顔を思い出す。

—現実上、腕を鍛えて強くなるに越したことはないが、綾から学んだものが、本当にこれでよかったんだろうか？ 暴力を嫌う綾から学んだものが、暴力の効率化…………あ

……………かとう加藤のかとう葛藤…………—

唐突に思いついた駄洒落に、口元が苦笑いに歪む。

—いや、昼間の考えで言うところの“技”だって、ニコイチと同じ様に道具—手段に過ぎない。結局は使う者、その心持次第で、毒にも薬にもなるって、それだけか…………なら、“技”もニコイチも常に薬であるように、僕の心も鍛えればいいだけのことが…………少なくとも、『蜂の巣』の時の様に、“心持”も“技術”もタガが外れて、感情任せに力を振り回す事態は、金輪際あっちゃいけない！—

と、

「……………」

胸ポケットの携帯電話が振動し、光秋は左手でそれを取って表示を見る。

—大河原主任？……なんだろう？—

そう思いながら、電話を左耳に当てる。

「はい？」

（あ、三曹？君、明日出勤だったよな？）

「ええ、第二土曜日ですし」

（実は、ニコイチについてまた調べることができた。明日は、アレのマニユアルを持って来てくれ）

「マニユアルですか？」

（ああ）

「わかりました。では明日^{あす}」

（ああ、頼むぞ）

そう言うのと、大河原の方から電話は切れる。

「……………マニユアルかあ」

そう呟くと、光秋は椅子を机に寄せ、机の引き出しを開けて探してみると、

「……………そうだ。ニコイチの肘掛に仕舞ったままだ」

思い出すと引き出しを閉め、机の上のカプセルを見る。

「……………さすがに夜中に、しかも住宅密集地ですわねにもなあ……………」明日

早めに行つて、駐車場で出せばいいか？……………いいな」
そう決めると、光秋は椅子から立ってトイレへ向かう。

23 予知出動

9月11日土曜日早朝。

ESOの緑の制服を着、右肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋は、京都支部の正門をくぐると、立ち止まって右手を上着の内ポケットに伸ばし、カプセルを取り出す。

その先端を前に向け、レバーを「入」から「出」に切り替え、ボタンを押すと、1メートル程前方に白い光が広がり、その光が左膝を着いた白い巨人——ニコイチを形作る。

カプセルを内ポケットに戻すと、光秋はニコイチの左前に歩み寄り、垂れているリフトを掴んで胸部にあるコクピットに上昇する。

操縦席の左側を探って白い電子手帳の形をしたマニュアルを取り出すと、それを上着の左のポケットに入れ、地面に降り、カプセルにニコイチを収容すると、本舎地下の待機室へ向かう。

藤原隊の待機室前に着いた光秋がドアを開けると、室内は真つ暗であり、手探りで照明のスイッチを点けてみると、まだ誰もいない。

とりあえずと中に入ってカバンを下ろし、椅子に腰かける。

「……そういえば、待ち合わせ場所決めなかったなあ……」——ま、待ってりやまた連

絡があるだろう……」

昨夜の大河原主任との電話でのやり取りを思い出しながらそう思うと、

「……………」

左ポケットの携帯電話が振動し、取って表示を見ると大河原からである。

「はい。おはようございます」

（おはよう三曹。今どこにいる？）

「藤原隊の待機室ですが？」

（マニュアルは持ってきてくれんだな？）

「はい」

（わかった。俺が今からそっちに向かうから、ちょっと待っていてくれ）

「了解です」

そう言うのと、光秋は電話を切り、左ポケットに戻して椅子から立ち上がる。

「待つてる間、ちよつと」

と、手足を軽く回して、自主訓練を始める。

少しして、小田一尉と伊部二尉が部屋に入ってくる。

「おはよう」

「おはようございます」

2人分の挨拶に、光秋は突きの練習をしながら答える。

「?……今日はどうしたの? 部屋の中で練習して」

椅子に着きながらの伊部の問いに、光秋は、

「今朝は、大河原主任と、待ち合わせが、ありまして。ここに、いなきや、いけないんです」

と、手を休めずに答える。

「大河原主任ねえ……………」

と、小田が呟くと、

「うーっす」

と、竹田二尉が部屋に入ってくる。

「あれ加藤? なんでここで練習してんだよ?」

「大河原主任との待ち合わせで、ここにいないくちやいけないんだそうだ」

「ふーん?」

小田の返答に、竹田は眠気が残っている顔で応じる。

そんな光景を傍らに見ながら、光秋は訓練を続ける。

午前8時50分。

「三曹、待たせたな」

言いながら、灰色のツナギを着、白髪混じりの頭にガツシリとした体格をした大河原が部屋に入ってくる。

光秋は突きの練習の構えを解き、左ポケットを探りながら、

「いいえ、そんなことは」

と応じつつ、大河原に歩み寄る。

「はい、ニコイチのマニユアルです」

「うん」

言いながら光秋は左手に持ったマニユアルを差し出し、大河原はソレを受け取って開こうとする。

しかし、

「……う………んん？……開かんぞ？」

大河原は両手に力を込めて開けようとするが、マニユアルは一枚板の様にびくともしない。

「え？ちよつと……」

と、光秋は大河原からマニユアルを取って開いてみる。

と、

「……?開きましたよ?」

と、大河原の時の不動さが嘘の様にあつさり開き、左右1面ずつの画面がそれぞれ点く。

「?……まあいい、ちよつと貸してくれ」

「はい」

大河原は首を傾げながらも右手をマニュアルに伸ばし、光秋は両手をマニュアルから離す。

と、その直後、

「!?」

大河原がマニュアルの画面を見ると、左右2つとも消灯している。

「な、何故だ!?さつきまでちゃんと点いていたのに?」

大河原が驚きの声を上げるのを見ながら、光秋は、

「……………まさか――」

と、右手をマニュアルに伸ばし、その指先をマニュアルの端に付けてみる。

と、

「!?……………」

マニュアルの画面が2つとも点き、大河原は目を丸くする。

マニュアルに指先を付けて離す動作を、光秋はテンポの長短を変えながら5回程行ってみる。

「……」

いずれも、光秋の指が触れている間だけ画面が点いている。

「……どうやら、マニュアルを読むのにも僕の認証が必要みたいですね……」

マニュアルの端に右の指先を付けながら、光秋は結論を述べる。

「そのようだな……」

マニュアルに表示されている項目の中から適当なものを右の人さし指で突いても反応がないのを見て、大河原は諦めた様に応じる。

「しようがない。三曹、『機体構造』という所を押して見せてくれ」

「はい」

大河原から渡されたマニュアルを左手で受け取ると、光秋は言われた項目を右手の人さし指で突いて表示させ、マニュアルの上辺を持って大河原に見せる。

大河原はズボンのポケットから手帳とボールペンを出してマニュアルの表示をメモし、箇所によっては図解を丸写ししていく。

「まったく。君をこっちに送ってきた者、神モドキか？面倒な物を作ってくれた。機密保持なんだか、我々をからかっているのか、よくわからんよ……」

「……………」

大河原のぼやきを聞きながら、光秋は大河原の読むペースに合わせて画面を右の人さし指で上から下に撫でていく。

「……………」そういえば、ニコイチと僕の事情を知ってるのは、実験班では主任と、一部の上級スタッフだけだったな……………カプセルの収容機能やニコイチの飛行機能なんかは、一般には新手の超能力って説明されてるみたいだし……………」

午前9時。

「……………」ふう、やっと終わったあ」

眩きながら大河原がマニュアルの画面から顔を離すと、光秋はマニュアルの表示を項目の一覧表に戻し、二つ折りにして左ポケットに戻す。

「三曹、また観るかもしれないから、今後も常にかけてきてくれ」

「はい」

大河原は手帳とペンをツナギに仕舞いながら光秋の左ポケットに目をやり、光秋はそれに頷いて応じる。

と、プルルル、プルルル、と、ドアの向いの壁に備え付けてある内線が鳴り出し、小田が席を立ててそれに出る。

「はい、藤原隊……………！了解！すぐに向かいます！」

緊迫した声で素早く受話器を置くと、小田は険しい顔で振り返って指揮官の声を出す。

「予知出動！京都駅付近の3カ所で爆発が起こる。各自防具着用、拳銃、通信機所持の上、現場に急行！藤原隊、出るぞお！」

「一了解！」

光秋たち3人も素早く応じると、ESOの緑の手帳を持つて内線の左の壁に置いてあるそれぞれのロッカーに取り付き、手帳からIDカードを出してロッカーを開錠し、防具を着付けていく。

一番左のロッカーの前で防弾ベスト、ヘルメット、節々のプロテクターを着けた光秋が、腰に巻くガンベルトに手を伸ばそうとすると、

「伊部と加藤はニコイチで先行しろ。俺と竹田は車で行く」

と、小田の指示が飛ぶ。

「はい！」

防具一式を着けた伊部と同時に応じると、光秋は脚に巻くホルスターを取り出してそれを右脹脛に巻き、拳銃に弾を込めてホルスターに仕舞うと、ロッカーを閉めて先に準備が完了していた伊部を追って部屋から出、最寄りのエレベーターに駆け込む。

「加藤くんは、予知出動始めてだったよね？」

「はい。研修の時にそんなのがあると聞いたくらいで……」

そんな短い会話の間にエレベーターは1階に着き、扉が開くや2人はすぐに駆け降りて正面玄関から駐車場に出る。

立ち止まると、光秋は右手を防弾ベストの中に押し入れて内ポケットからカプセルを取り出し、ニコイチを出して乗り込み、起動させるとヘルメットを膝の上に置き、左耳に通信機を付けてシートベルトを締め、伊部を右手ですくってコクピットに乗せ、ハッチを閉めて右ペダルを軽く踏み込み、ゆっくりと上昇する。

高度を一定まで取ると、光秋は左パネルの地図に目をやる。

地図はすでに光秋の思考を拾って京都駅の位置を赤い点で表示し、光秋はその点が正面になるようにニコイチを左に向けさせ、

「！」

右の操縦桿を一杯に倒してニコイチを前進させる。

少しして、光秋の通信機から小田の声が響く。

(F・2よりF・5へ。^{ファイブ}聞こえてるか?)

「ええ、良好です」

左隣に立つ伊部が顔を近づけてくるので、光秋は通信機を耳から外して伊部にも聞こえるようにする。

——ニコイチの中だと、普通の通信機器は使えないからな——
そのために、ニコイチの速度を若干落とすことになる。

（予知部によると、発生確率は85パーセント。さつき言った以上の正確な位置と爆発の規模は不明だが、死傷者が出る確率も高いそうだ）

「爆発の原因は？」

光秋が問う。

（不明だ）

「？……不明って、結果があるからには原因があるでしょう！」

（予知ってのはそんなもんなんだよ）

竹田の声加わる。

（わかる時はとことんわかるが、わからねえ時は今回みたいに半端な情報量しか出ない。
引っ掛かってくれただけマシさ）

「……そんなもんですか？」

（そんなもんだ）

光秋の渋い顔を浮かべての問いに、小田がキツパリと言う。

——……いい加減な……——

小田は続ける。

（だがな、可能性がある以上、なんなりとやってみせなきゃならんのが俺たちESO実戦部隊だ。いつも通りきっちりこなせ）

——…それもそうか——「了解です」

（あと加藤）

「はい？」

（もし爆発物が手で持てるような物だったとしても、降りて処理しようなんて考えるな。ニコイチの中から出るなよ）

「……了解です……しかし、なぜそこまで？」

（……新入りを怪我させて、三佐に睨まれたくないからな）

「わかりました」

小田の一拍の間を気にしつつも、光秋ははつきりと応じる。

——…一尉も、心配してくれてるんだ。ただ、仕事の内容上、ちよつと過保護な気もするが……増長もいかんか。ここは一尉の言うことを聞いて、自制しよう……そもそも現場に行ったら、怖くて自分から出たがらないかもしれないかもしれんし——

そう考えると、光秋は口元を少し緩める。

と、

（伊部、加藤と一緒に聞いているな）

「はい」

小田の声に、伊部は通信機のマイクに向かって答える。

（竹田も聞け。隊長不在だからこそ、隊の看板に泥を塗る様な仕事はするな！他の隊と警察も後から来るそうだが、そいつら来る前に終わらせることを目標にしろ！いいな！）

（「了解！」）

3人同時に答えると、光秋は通信機を左耳に戻し、右の操縦桿を再び一杯に倒してニコイチの速度を上げる。

京都駅上空に着くと、光秋は高度を少し下げ、その場でニコイチをゆっくりと回転させて爆発の原因になりそうなものを捜す。

伊部も光秋が見ている方向と逆の方に目を走らせながら共に搜索する。
と、

「……………」

光秋は正面下方―駅の裏側―八条側辺りから漠然とした寒気を感じる。

その意思を拾って正面モニターが寒気の元がある辺りを拡大表示し、駅側の道路脇に駐車している荷台に幌を被せた大型トレーラーを映し出す。

「この車がどうかした？」

「微かにですが、寒気を感じるんです。ニコイチの機能で、いつも危険を感知するとそう教えるんです」

「あの車に何かあるってこと？」

「……」

伊部の問いに、光秋は首を傾げる。

と、直後にトレーラーの運転席から2人の黒服が出て荷台の後部に駆け寄るや、幌を勢いよく引き下ろし、その下から茶色い装甲をした戦車が現れる。

「!?」

あまりの光景に2人は束の間絶句するが、光秋はすぐに気を取り直して、

「まさか……」

と、幌を下ろした黒服の1人に意識を集中させる。

すぐに戦車の映像の右隣に、戦車を見守る様に見つめる黒服の映像が映し出される。

「顔を覆う程のサングラス、黒のスーツにネクタイ……やつぱり……」 「あれ、NPじゃないですか？」

「まさか……テロ？」

光秋の問いかけに、伊部は驚愕の声を上げる。

直後、拡大映像の戦車の砲塔が持ち上がる。

——……撃つ——

そう直感した光秋はニコイチを戦車の正面に直行させ、着地の寸前に赤丸のマーキングが表示された戦車を拡大映像が消えた正面パネルに見据えると、ゆつくりと両足を地面に着き、右パネルを操作して外部スピーカーを作動させる。

「こちらはESO京都支部所属、UKD-01である！即時武装解除の上投降しろ！」
が、戦車はトレーラーの運転席を轢き潰しながら道路に下りて後退し、ニコイチから距離を取ろうとする。

その様子を見ようと、ニコイチと戦車の周囲に一定の距離を置いて野次馬が集まり始める。

直後、

「！」

戦車の砲塔が火を噴き、光秋は咄嗟に左腕を前にした組手の構えをしてそれを受け流す。

光秋と馴染んできたニコイチは、自分の体そのものの様に完全に同期し、体が訓練時に動く要領で動いてくれる。

が、

「……」

同時に光秋の左腕―ニコイチの腕が砲撃を受けた辺りに相当する箇所―には、以前よりも明確な鈍い痛みが走る。

光秋は砲撃に驚いた野次馬が散り散りに逃げるのを視界の端に見ながら、その痛みを吹き飛ばすつもりで、

「もう一度言う。武装解除の上投降しろ！」

と、外部スピーカーに叫びかける。

が、戦車はさらに1発放ち、光秋は左腕でそれを受け流す。

「……了解した。実力行使する！」

言うとは戦車との間合いを一気に詰め、後退しようとする戦車の砲身を左手で鷺掴み、素早く手前に引いて砲塔を車体から引き千切ってしまう。

引き千切った砲塔を車体の上に置くと、ニコイチに左膝を着かせて左手を砲塔の上に置き、左耳の通信機に小田の顔を思い浮かべながら意識を集中させてマイクに吹き込む。

「F・5よりF・2」

（何だ？）

「現場付近でNPと思しき戦車を1台戦闘不能にし、捕獲しました」

（何だ?!）

通信機のスピーカー越しに小田の驚愕の声が響く。

「状況からして、爆発の原因は彼らのテロ行為と思われます。予知では3カ所で起こると。他にもいる可能性があるので、応援を寄こして彼らの確保をお願いします。応援が来次第、こちらは再捜査を始めます」

（了解だ、すぐに寄こそう。場所は？）

「京都駅の裏側……」

「八条側」

「八条側です」

操縦席の左側に立つ伊部が言い、光秋はそれを伝える。

（了解……周囲の被害は？）

小田の問いに、光秋はモニター越しに辺りを見回してみる。

「サツと見たところ、怪我人や壊れた物はありません。2回の砲撃がありました、いずれもニコイチで受け止めました」

（了解。幸先いいな！）

「はい！」

応じるや、外音スピーカーから多数のサイレン音が響き始め、正面に目をやると5台のパトカーが赤ランプを輝かせながら一列になって自分の許へ来る。

パトカー群はニコイチから少し離れた辺りで停車し、1台から2人ずつ、水色の半袖の制服の上に黒い防弾ベストを着た警官が降り、計10人がニコイチの許へ駆け寄る。9人が拳銃を構えて戦車を包囲し、1人がややおっかなびつくりしながらニコイチに最も近づき、両手を口元に添えて叫びかける。

（応援の連絡を受けて来た京都府警ですが、『白い犬』さんでしょうか？）

――渾名の方でしたか……―「はい」

思いつつ、光秋は外部スピーカー越しに応じる。

（ここは我々に任せて、捜査を再開してください）

警官の言葉を聞きつつ、戦車の車体からTシャツ姿の男が1人引きずり出されるのを確認した光秋は、

「了解。後は頼みます」

と、ニコイチの左手を砲塔から離して直立させ、右ペダルを軽く踏んで上昇する。再び京都駅の上空に着くと、光秋はニコイチをゆっくりと回転させて調査に入ると、

「加藤くん、腕大丈夫？」

伊部が心配そうな顔を向ける。

「大丈夫と言いますと？」

「ニコイチが被弾すると、加藤くんにも痛みが伝わるんでしょう？ さつきね……」

「……顔に出てましたか？」

「少し、辛そうな顔してた……」

「……………大丈夫ですよ、少しは慣れたんですから。それより、今は……」

「そう、だけど……………」

伊部はそれ以上言わず、視線をモニターの左側に向ける。

——……………戦車に夢中になって2人逃がした。仮にもう2台あるとしても、計画を変更して逃げる可能性も……………

伊部同様にモニターに視線を走らせながら、光秋はそんなことを考える。

直後、

「！」

正面から先程よりも明確な悪寒を感じ、同時に響いた接近警報を聞くと、自分に向かって突進してくる1発の砲弾を捉える。

「……………」

光秋は縦に伸ばしたニコイチの両腕を前に出して砲弾を受け止めると、両腕を素早く払って黒煙を掻き分ける。

砲弾の来た方——駅正面側に意識を集中させると拡大映像が表示され、トレーラーの荷

台に乗ったまま砲口をこちらに向ける戦車を映し出す。

―続ける気か―

心中に呟くと、光秋はその戦車の許に直行する。

瞬く間に戦車の前に着地すると、

「！」

ニコイチの右足を高く上げ、素早く叩き下ろして砲身を押し折ってしまう。

間を置かず右に回り込んでトレーラーの後ろに着くと、ニコイチの両手を戦車の履帯の上に置き、

「フンッ！」

と、一気に力をかけて履帯部分を潰し、同時にトレーラーの荷台も潰れて両車とも動けなくなる。

直後にサイレンの音を聞いた光秋は、数台のパトカーが瞬く間に戦車を包囲するのを見ると、

「ESO京都支部の者です。後頼みます」

と、外部スピーカーに吹き込む。

直後、

「！」

駅の八条側に寒気を伴った圧迫感を覚える。

今潰した戦車の砲撃を感じた時とは少し違う感覚に、自分が狙われているわけではないと感じつつも、

――どの道、危ない！――

と、ニコイチを浮かせて駅の八条側の圧迫感が来る辺りに急行する。

進路を左寄りにしつつ一気に駅を飛び越えると、光秋は眼下に車道から歩道に乗り入れようとしている1台の戦車を見つける。

と、

「！」

不意に光秋は、その場所が綾と初めて遠出をした時に並んで腰かけていた場所だと気付く。

「……」

光秋の脳裏に、柵に腰掛けて綾としたおしやべりのこと、服選びに外で待つていた時に駅の印象を感じたこと、白い半袖のワイシャツに赤チエツクのロングスカートを着た綾を初めて見た時、束の間見惚れたことの記憶が瞬時に蘇る。

目前の戦車は上空のニコイチを意に介さず、砲口を真っ直ぐ駅の方へ向ける。

「！」

その射線上に腰掛けた柵が入っていることに気付いた光秋は、瞬間的に激する。

「……やめろおおー！」

その絶叫は外部スピーカーを通して外に響き、驚いた砲撃手の動きを一瞬止めるが、光秋の知ることはない。

叫んだ勢いで右の操縦桿を一杯に倒し、戦車との間合いを一気に詰めると、足元の舗装に多少のヒビを入れる勢いで着地し、戦車の真ん前に立ちはだかる。

戦車は慌てた様に砲口をニコイチの胸部に向け、至近距離で一射する。

「！」

直前に光秋はニコイチの両腕を縦に前に出して砲撃を受け止める。

が、

「うっ………」

間を置かずもう一撃が腕に当たり、その痛みに光秋は、

「……この野郎お——」

と、怒りの目でモニターの戦車を睨みつける。

そんな光秋の怒りを表現する様に、ニコイチの節々を覆う黒いカバーの上下の隙間から、薄っすらと血の赤色をした燐光が漏れ始める。

「……………」

モニター越しにその燐光を見るや、「蜂の巣」戦で自分を失い、暴力装置となって暴れてしまった時の記憶が浮かぶ。

——いかん！もう、あんなふうになっちゃいけない！——

深呼吸して怒りを鎮めようとすると、それに合わせて赤い燐光も、空気に溶け込む様にゆつくりと消えていく。

何とか怒りを鎮め切り、燐光が完全に消えたのを確認すると、光秋は燐光が発して以来固まってしまった戦車の砲身をニコイチの右手で掴み、鉋細工でも扱う様に砲塔本体の方にU字状に曲げてしまう。

と、

「……？」

砲塔上部にある丸い出入り口からTシャツ姿の男が上体を出す。

——降伏か？——

光秋がそう思ったのも束の間、男は口の前にある機関銃を両手で掴むと、その銃口をニコイチに向け、

（うわあああああ！）

と、悲鳴の様な絶叫を上げながら引き金を引く。

「……」

多数の銃弾がニコイチの胸部から顔面に殺到するが、いずれも傷など付けられず、小さな火花を爆ぜさせるだけである。光秋自身も、痛みにも満たない鬱陶しさを覚えさせるだけに終止する。

少しの間光秋は、

—無駄だろうが……非正規部隊の弾の数が減ってくれば、それはそれで助かる—
と、相手が諦めるのを待つが、

「……………」

あまりのしつこさに、ついに外部スピーカー越しに呼び掛ける。

「何度やっても無駄です！ コイツの装甲は、銃弾くらいじゃ破れない！ 大人しく投降しなさい！」

と、

（煩い！）

男は銃撃をニコイチの顔に集中させ、モニターに大きな火花を映し出させる。

（ESOの白い犬が！偉そうなことを言うな！……お前は、自分の女房を、怪物じみた奴に殺された人間の気持ちが、わかるかあ！）

「……」

最後は涙声で放たれた言葉に、光秋はサイコキノに絞殺されそうになった時のことを

思い出す。

——…エスパーといえど詮は人間。いい奴もいれば悪い奴もいる、か……これだけの装備と人手を持つ組織なんだから、単純な差別思想の集団つてわけでもないよな……だがな——

思うとニコイチの右手を戦車に伸ばし、親指と人さし指、中指で機関銃を摘まんで潰してしまう。

(……………)

唯一の対抗手段らしきものを失った男は、崩れ落ちる様に口の中に消えていく。

——殺しを、それも無差別殺人を、認めるわけにはいかんのでな……………——

その光景を見ながら心中に呟くと、光秋は外部スピーカーを切って左耳の通信機のマイクを口元に寄せ、小田の顔を浮かべる。

「F・5よりF・2へ」

(何だ?)

「戦車をもう2台潰しました。予知の方はどうです?」

(ちよつと待て)

言うと小田は通信を切る。

光秋は外音スピーカー越しに近づいてくる多数のサイレン音に、

―パトカーがここにも来る―

と判断し、沈黙を続ける戦車の履帯部にニコイチの両手を乗せると、念のためそれも押し潰して完全に動きを封じる。

パトカーが戦車の周囲を包囲すると、

「ESO京都支部の者です。後頼みます」

と言に残し、駅の上空に戻る。

上昇しつつ、光秋は先程の自分の対応を自省する。

―銃撃をすぐにやめさせなかったのは、少し自惚れじゃないか？躊躇ならまだしも、それはいけない！相手を甘く見て力を抜いたり、玩具おもちゃの様な扱いをしていると、思わぬしっぺ返しを受ける……増長はいけないと最初に言ったのになあ……今後気を付けよう―

と、左隣に立つ伊部も、

「……さっきの、銃撃をしばらく放置したのは、どうかと思うよ」

と、やや叱る声をかける。

「はい……以後、気を付けます」

それに対して光秋は、厳粛な声で答える。

ニコイチが駅上空に着くと、

(F・2よりF・5へ)

と、光秋は通信機越しに小田の声を聞く。

「はい」

(今照会した結果、3カ所爆発の予知は消えたそうだ)

「！それじゃあ……」

(任務完了だ)

少し笑みを含んだ声で小田は答える。

(とりあえず、いったん駅の前で合流しよう)

「了解」

言うところ、光秋は、ニコイチを駅正面側に向かわせる。

駅正面の道路の右端に緑の軍用車を見つけると、

—あれか—

と、その近くにニコイチを着地させ、左膝を着かせる。

ハッチを開けて機外へ出ると、ニコイチの右手で伊部を地面へ下ろし、自分もリフトで下へ降りると、上着の内ポケットから出したカプセルにニコイチを収容し、ソレを内ポケットに戻す。

光秋の左後ろに停まっている軍用車から、防具一式を着た竹田と小田が降りると、

「やったな加藤お！」

と、駆け寄ってきた竹田が光秋の首に左腕を回し、顔を引き寄せさせる。

「1人で予知阻止とはよお！」

「……」

満面の笑みで続ける竹田に、光秋は少し戸惑った微笑みを返す。

と、

「……！」

正面に向かい合って話している伊部と小田を見た光秋は、

「すみません」

と、竹田の腕を払い、左前に立つ小田の許に速足で駆け寄る。

「一尉！」

「おお、今伊部と話してたところだ。お手柄だな」

小田は伊部に向けていた顔を光秋に向け、微笑みを浮かべて言ってくれる。

が、光秋は若干不安の表情を浮かべる。

「ありがとうございます。ただ……」

「？……ああ。取り逃がしのことも聞いている。警察に頼んで、この辺り一帯に捜査網を張ってもらった……今は、テロを阻止して多くの命を救えたことを喜ばいいさ」

「……はい」

小田にそう言われると、光秋は気持ちが少し楽になる。

「ニコイチを仕舞ったんなら、車でいったん支部に戻ろう。その中で2人の聴き取りをする」

「はい」

小田の言葉に光秋と、その右隣に立つ伊部は同時に答え、藤原隊一行は軍用車に乗り込み、京都支部へ向かう。

京都支部へ向かう間、後部右席に座る光秋は、前部左席で忙しく手帳にペンを走らせる小田に向かって、一連の出来事を報告する。

ニコイチで京都駅上空に着いた時、駅の八条側に戦車を積んだ大型トレーラーを発見、これを沈黙させたこと。予知捜査再会のために駅上空に戻ると駅正面側から砲撃を受け、それが切掛けでもう1台の戦車を発見、沈黙させたこと。再び八条側に戦車を発見、沈黙させたこと。

「……僕からは、以上です」

「わかった」

小田が答える頃には、車は支部の正門をくぐっている。

小田はペンを止めると、真後ろに座っている伊部に顔を向ける。

「伊部、お前の方は待機室でやらせてくれ」

「はい」

伊部が応じると、車は本舎の近くに停車する。

1人残った竹田が車を本舎の裏手に運んでいく傍ら、小田たちは降りて藤原隊の待機室に向かう。

待機室に着くと、光秋は防具一式を外してロッカーに仕舞い、右脛脛のホルスターも外すと、拳銃を抜いてそれも仕舞う。

拳銃から弾を抜いてそれらも仕舞うと、ロッカーを閉じて振り返り、一足先に後片付けを済ませた小田と伊部がテーブルを挟んで向かい合つて座っているのを見る。

「……………ちよつと、ひと息入れてくるかあ——」

伊部が小田に自分の車内での報告とほぼ同じ内容を話しているのを聞きながら思うと、光秋は2人に静かに一礼し、部屋から出ていく。

紙コップの自動販売機でサイダーを買った光秋は、近くのベンチに座つてそれをちびちびと飲む。

「……………久々の大仕事……………ちよつと疲れたなあ……………」

思いながら、鼻で小さく溜息をつく。

と、

「やっぱりここか」

「！伊部二尉……」

光秋の左側に現れた伊部は、自動販売機に歩み寄る。

「予知出動って、普通のより疲れるよね？原因見付けるのに神経すり減らすから……」
アイスコーヒーを買いながら言う、伊部は光秋の左隣に腰を下ろす。

「ええ……でも、無事阻止できて、よかったです」

光秋は前を向いたまま言う、サイダーを一口すする。

「そうねえ……」

伊部も前を向いたまま応じると、コーヒーを一口すする。

「……そうそう。聞き取りの途中で警察から連絡がきて、逃げた人たちも捕まったって。やっぱりNPだったみたい」

「それはよかった。ちよつと心配してたんです」

「そう……ところで、加藤くん」

「はい？」

「最後の戦車を止めようとした時、『やめろお！』って、すごい声で怒鳴ってたけど、なにかあったの？」

「……いえ、向こうが今にも撃ちそうだったので、つい血が上ってしまって……それだ

けです」

「そう?……私、一瞬だけど、あの場所を懐かしく感じたんだよねえ……」

「?……」

「もちろん、京都駅は時々利用するんだけど、そういう時の記憶とはちよつと違う……穏やかな感じ、て言えばいいのかな?」

「……………まさか、綾?……………いや、まさかな……………おそらく……………」またデジャブでしよう。でなきや、緊張で変な感じがしただけでしよう」

「そうかなあ?……………」

「僕は、心理学なんてわかりませんが、大方そんなところでしょう」

「んーん……………」

光秋に応じながらも、伊部は煮え切らない顔をする。

光秋はサイダーの残りを飲み干すと、立ち上がって紙コップをゴミ箱に捨てる。

「では僕は、グラウンドで訓練してきます」

言うのと光秋は、伊部の返事を待たずにエレベーターへ向かう。

陸・空・ESO合同演習編

24 新戦力

9月13日月曜日午前8時20分。

いつもより遅めに部屋を出た光秋は、速足で京都支部の正門をくぐる。

「加藤くーん！」

「！」

後ろから伊部の声に呼び掛けられると、立ち止まって振り向き、並んで歩いてくる小田一尉と伊部二尉を見る。

「おはようございます」

「おはよう」

光秋の挨拶に小田と伊部が同時に答えると、光秋は伊部の右隣に着き、3人で並んで歩きます。

「珍しいな？加藤がまだ待機室にいないなんて」

一番左を歩く小田が、一番右を歩く光秋に目配せして言う。

「今朝、うっかり寝坊しまして。6時に起きるはずが、半に起きちゃって……」

「それでも、竹田二尉はまだ来てないんでしょうねえ……」

真ん中を歩く伊部が諦めた様に言う。

藤原隊の待機室に着くと、光秋はテーブルの椅子に座り、床に置いたカバンから四つ折りの新聞を取り出して広げたそれを読み始める。

と、

「加藤くん新聞読むの？」

テーブルを挟んで光秋の左側に座る伊部が、少し驚いた様子で問う。

「はい。いつもは、出る前にサッと読んでから行くんですけど、今朝は時間がなくて」
答えると、光秋はページをめくる。

少しして、

「うーっす………」

と、竹田二尉が眠い目をして部屋に入ってくる。

「竹田！またお前が最後だぞ」

小田が叱る様に言う。

「すんませーん……………加藤の奴、もうグラウンドか？」

周りを見回しながら、竹田は欠伸混じりに呟く。

「！」

その言葉にハツとした光秋は、新聞を少し下げて竹田を見る。

「おはようございます」

「！・加藤お？」

竹田は伊部以上に驚いた顔をする。

「三佐かと思つた……てか、お前新聞読むの？」

「はい。いつもは出かける前に読むんですが、今朝は時間がなくて」

と、竹田の背後のドアが開き、

「おはよう！」

活気のある声と同時に、藤原三佐が入ってくる。

「！・三佐！」

竹田は先程以上に驚いた顔で後ろを振り向き、光秋は急いで新聞を畳んでカバンに仕舞うと、

「「おはようございます」」

と、小田と伊部に合わせて、返す。

「ウム」

頷くと、藤原はテーブルのそばに右手に持っていたカバンを置いて言う。

「早速だが、全員本舎前の駐車場に来てくれ」

「また加藤と組手でもするんすか？」

竹田が藤原の背に向かって問う。

「違う。お前たちに見せたい物があつてな。まあ行けばわかる」

言うのと藤原は振り返つてドアへ向かい、小田、伊部、竹田、光秋の順にそれに続いて部屋を出る。その際最後尾の光秋は、ドア脇のスイッチで部屋の照明を消し、ドアを閉める。

光秋が一行の最後尾に着いてエレベーターへ歩み出すと、先頭を歩く藤原が振り向いて目を向ける。

「そうだ加藤。儂のいない間、ずいぶんと活躍してくれたそうだな？」

「……あ、はい」

「報告書を読んだが、1人でテロ阻止とは。隊長として、儂も鼻が高い」

「……………」

藤原は微笑んで言うが、光秋は少し複雑な気持ちになる。

「……1人ではありません。伊部二尉もいましたし、なによりニコイチの力です」

「私はなにもしてないよ。ただコクピットにいただけ」

伊部は口元を歪めて反論し、藤原もそれに続く。

「それにだ、確かにニコイチのおかげでもあるんだろうが、その“力”は加藤にしか扱え

んのだから、『加藤のおかげ』ということにしても、まあ間違いではないだろう」
「それもそうですが……………」

2人の反論に、光秋は口籠ってしまふ。

「とにかく、儂が言いたいのは、よくやった、ということだけだ。今後とも頼むぞ」
「……………はい」

複雑な気持ちを払えないものの、光秋は少しばかりの嬉しさを覚える。

エレベーターの前で一行が立ち止まると、藤原は再び口を開く。

「あと、そのことで後で話がある」

—話?—

「……………勲章でも渡すんすか?」

「いや。だが渡すことは渡すな」

竹田の問いに、藤原は曖昧な答えを返す。

—なんだろう? 僕なにかしたかな?……………—

光秋は若干の不安を覚えるが、

—……………後でわかることか—

と、気を取り直し、開いたエレベーターに藤原たちに続いて乗り込む。

エレベーターから降りた藤原隊一行は、正面玄関を通って駐車場に出る。

そこにはすでに、ツナギの上に白衣を羽織った大河原主任が、足元に大きな目の段ボール箱を置いて待っている。

「主任、お待たせしました」

「三佐、ご苦勞さまです」

藤原と大河原が言葉を交わす傍ら、一行の1番右に立つ光秋は、

「何だろう？」

と、期待とも不安ともつかない気持ちを強める。

と、大河原は白衣から携帯電話を取り出し、どこかと連絡を始める。

「あ、俺だが……ああ、すぐに寄こしてくれ。本舎の正面だぞ」

念を押す様に言った直後、光秋たちの目の前に巨大な物体がレポートしてくる。

「「「「……………」」」」

現れた異様な物体に、藤原と大河原以外の全員が絶句する。

戦車の車体の上——本来なら砲塔がある所に、5メートル程の全長を持つ人の上半身を模したものが乗っているのである。全体的に角張った輪郭を持つソレは、5本の指が伸びた両腕と、目に相当するカメラが1つ付いた四角い頭部を持っている。カメラは横に走るレールに備え付けられており、ある程度視界を動かせるようである。最も特徴的なのは、両肩の上の2門の砲身である。背負われている背中を覆う程の箱から伸びたその

砲身が、いかにも兵器という印象を与える。そんな上半身が、腰に相当する下が広い台座を介して車体に繋がれ、履帯から頭部まで7メートルは有している。

「……よし、無事に届いた。ご苦労」

ザツと見回してから電話を切った大河原の横で、ソレは背後上空から照りつける日光を浴びて、ESO色と言うべき緑の装甲に光沢を輝かせる。

「……………コレは……………」

「コレは、何なんです?」

左から2番目に立つ小田が、口が回らなくなっている光秋と同じことを驚きを隠さずに訊く。

「ニコイチを人類の手で再現する計画に基づいて作られた、試作品だ」

大河原が事務的に答える。

「ニコイチを再現、て……」

一番左に立つ竹田が呟く様に言う。

「ニコイチとは全然違うじゃないっすか! だいたい、脚ないし」

「そう言うな……」

怒る様に続ける竹田に、大河原が冷静に応じる。

「上半身の方は、それほど難しくはなかった。胴体を重機の運転席に見立て、腕はマニ

ピュレーターの技術を基にすればよかったからな」

と、右から2番目に立つ伊部が、

「……まにぴゅれーター？ ってなに？」

と、光秋の左耳に口を寄せて歯切れ悪く小声で聞いてくる。

「ロボットアーム、機械の腕のことです」

光秋も伊部の顔に口を近づけて小声で答え、伊部は軽く頷いて理解を示す。

そんな2人に構わず、大河原は説明を続ける。

「問題なのは下半身だった。人間程の大きさのものならまだしも、10メートル大のものとなると殆ど前例がない」

「？……その人間大のやつを、そのままでかくすりゃいいんじゃない？」

竹田が不思議そうに問う。

「いや、そう簡単にもいかん。これだけの大きさになると、上体の重さを支え得る強度が必要になるし、歩かせるならバランス感覚の問題だってある。何より解決しなければならんのは、振動だ」

「振動？」

竹田がオウム返しする。

「10メートルくらいならそんなでもないんだろうが、こんな大きさのものが歩こうも

のなら、1歩踏み出すことになんかの揺れがコクピットを襲う。それらの問題を解決した『脚』の製作がかなり難航しててな……」

「……………」

大河原の説明から、光秋は先日彼の行動目的を察する。

「あのマニュアル見せてっていうのは、ニコイチの構造を参考にするためだったのか？」

「だからその代わりに、陸軍の主力戦車を流用してどうにか移動はできるようにした」「ところで……なぜこのようなものを作られたんですか？」

大河原が言い終わったところで、小田が訊いていいのかどうか迷っている様子で訊く。

「ニコイチのあまりの高性能に、軍やESOの上層部、それと一部の技術者たちが興味を示してな。試験的に、人間の手で同じ様なものを作ってみようということになったんだ」

「はあ……」

「高性能なのは、ニコイチだからじゃあ？……………」

大河原の返答に小田は力なく答え、光秋は心中に呟く。

と、

「……」

不意に伊部がハツとする。

「三佐、ひよつとしてしばらくいなかったのは……」

「ああ。コレの受領の書類を書くのに少し手間取つてな」

藤原は伊部の顔を見て答える。

「……じゃあコレ、ウチの隊で使うんですか？」

小田が驚いた顔で訊く。

「そうだ。そのために皆に集まって見てもらったんだ」

「！」

藤原がそう答えると、竹田の目が急に輝きだす。

と、竹田は右手を高く挙げる。

「ハアイ！オレ乗ります！」

が、

「やる気があるのは結構だが、コイツは2人乗りなんだ。上半身と下半身に1人ずつ必要なんだよ」

と、大河原が冷静に言い、藤原が、

「そうだな。もう1人は……小田、お前がやれ」

と、小田に目をやる。

「えー……俺ですか？」

言いながら、小田は顔を曇らせる。

「……？」

そんな一尉の表情に、光秋は面倒臭さ以上の、僅かながらの影の気配を感じる。

「ああ。お前が上、竹田が下をやればいいだろう」

「ええー！」

藤原の決定的な言い方に、竹田は異議の声を上げる。

「まあまあ」

大河原はそう言いながら、足元に置いていた段ボール箱を開け、中から取り出したA4程の冊子を竹田、小田、藤原、伊部の順に配る。その厚さは1センチ少々はある。

「コイツの解説書だ。各自読んでいつでも動かせるようにしておけ」

藤原が言う。

「私もですか？」

「当然だ」

伊部の問いに、藤原は即答する。

と、

「?……………あの、三佐、僕には?」

1人だけ冊子をもらっていない光秋が問う。

「お前はニコイチの一層の慣熟に励めばいい。コレのおかげで、儂らも少しはお前の支援ができるようになる」

「はあ……………」

言いながら光秋は、伊部が持つ冊子に目をやる。

その表紙には、『PHM—01 ゴレム・タンク解説書』とある。

大河原とゴレム・タンクを駐車場に残し、藤原隊一行は地下の待機室に戻る。最後に入った光秋がテーブルに座ると、その正面に座る藤原が口を開く。

「ところで加藤、さっき話があると云ったが」

「はい」

応じると、藤原は足元のカバンから1枚の紙を取り出し、光秋に差し出す。

「?……………」

光秋はそれを受け取ると、細かい字を読もうと右手でメガネを少し前にずらす。

「…………『加藤光秋、夏季のNPによる暴動鎮圧、及び先日の京都駅破壊阻止における貴官の功績を称え』…………『2010年9月13日をもって』——」

「『二曹への昇格を命ずる』?」

左隣に座る竹田が首を近づけてよく通る驚きを含んだ声で読み上げると、

「……………」

藤原の右隣に座る伊部と、その隣に座る小田も目を丸くする。

「……………二曹への……昇格？……………」

すぐには信じられず、光秋は書かれていることの意味を何とか理解しようとする。
と、

「スゲーじゃん加藤お！」

竹田が歓声を上げながら光秋の首に右腕を回す。

「普通二曹への昇格は1年務めないとダメなのに、半年で！」

「三佐、どういうことです？」

竹田の歓声を受けて小田が問う。

「いやあ、昇格の話は夏の暴動鎮圧の頃から出ていたんだが、加藤が待機期間中だったことと、竹田が言ったような規則から見送られていたんだ。が、先日のテロ阻止の功績あすまから、2つ実績があるならいいだろうということで上層部の意見がまとまって、東東局長が許可を出したそうだ」

——東局長…………—

藤原の言葉から、光秋はこちらの世界に來た初日の夜に会った藤原にも負けない逞し

い体つきをした初老くらいの男を思い出し、手元の紙の右下に目をやる。

そこには、「超能力者支援機構日本局長 東^{あずま} 信三^{しんぞう}」とある。

「さて、新兵器の受領と加藤の昇格も済んだことだし、これでやつと10月の合同演習の下準備は整ったわけだ」

「……………え？」

嬉々として言った藤原に、光秋は一瞬啞然とし、紙から顔を上げる。

「!?……………」

同時に竹田と伊部も、驚きの顔になる。

「…………あのー、三佐……………演習ってなんのことです？」

伊部が恐る恐る訊く。

と、

「!?」

今度は藤原と小田が驚く。

「三佐まさか、まだ言ってなかったんですか？」

小田が問う。

「あのー、オレも聞いてないんすけど……」

「お前には俺が言った」

「あ、そう?.....」

小田の返答に、竹田はバツが悪そうに小さくなる。

と、固まっていた藤原が口を開く。

「ウム.....よく考えたら、伊部と加藤には言っていないな.....」

「結局、演習ってなんなんですか?」

光秋がメガネの位置を戻しながら藤原に問う。

「10月に、空軍と陸軍、ESOの功績の多い隊との合同の演習があつてな。ウチも参加することになったんだ」

「いつ決まったんです?」

伊部が問う。

「連絡があつたのは8月の終わり頃だ。小田が受けて、儂と竹田に報告した。その時儂が、伊部と加藤に復帰次第伝ええると言ったが.....言つた気になつていたな.....」

「いつやるんです?」

光秋が問う。

「10月2日」

——10月2日?.....それなら、大丈夫か——

藤原の答えに、光秋はその日予定がなく、変更事項が生まれないことにホツとする。

と、

「……………待てよ」

小田の顔が曇る。

「このタイミングでの新兵器の受領……三佐の『下準備が整った』って発言……！まさか！」

「ああ。今度の演習は、アレの運用試験も兼ねている」

「……」

藤原の返答に、小田は右手で頭を抱える。

「3週間もせずにあんな斬新兵器に慣れろと？」

「大河原主任の方から頼んできたんだ！『ギリギリいい機会に間に合ったから何とかしてくれ』とな」

「だからって……」

「……あああ！決まったものはしょうがないだろう！」

叫んだ勢いで藤原は立ち上がる。

「とにかく、時間が惜しい！加藤！早速グラウンドで訓練だ！」

「は、はい！」

気まずさを誤魔化す様に言われた藤原の言葉に、光秋は慌てて紙をカバンに仕舞い、

急いで立ち上がる。

「小田！竹田！試運転を兼ねて駐車場に置きっぱなしのアレを本舎の裏手に移動させろ！」

「はい！」

小田と竹田も慌てて立ち上がる。

「……三佐、私は？」

「ウム……小田たちに付いて行け！見て覚えろ！」

「はい！」

伊部の質問に答えると、藤原は光秋と速足でドアへ向かい、小田たちも冊子を片手に部屋から慌ただしく出ていく。

グラウンドに着いた光秋は、軽い準備体操を終えると、藤原から指示された突きの練習を始める。

しばらくすると、

「……………」

光秋は右後ろから独特の大きな音を聞き、手を休めて音の方を振り向くと、本舎の影から先程の履帯の脚を持つ半人型マシン——ゴーレム・タンクが現れるのを見る。

——ちよつと、怖いな……………——

ソレが動く光景に、思わずそんな印象を抱く。

ゴーレム・タンクは光秋の右後ろの近くで停まると、胴体下部の四角いハッチから小田が、車体前部中央の丸いハッチから竹田が出てくる。

竹田はそのまま車内の椅子に座って冊子を読みだが、小田は下に開いたハッチの右端からリフトを出し、下に降りて近くの日陰に移動してから冊子を開く。

機体の左後ろから伊部が現れたのを見たところで、

「さてー再開するぞー」

と言う藤原の声を聞き、光秋は再び突きの構えをする。

しばらくして、光秋と藤原はグラウンドのその場で休憩に入る。

と、

「……」

日陰に座り込んで冊子を読む小田を見た光秋は、ゴーレム・タンクの操縦士に指名された時に影の様な顔をしたことを思い出す。

「……どうしたんだろう？」

思いつつ、自分の中で心配と好奇心が同時に起こるのを自覚する。

「………訊いてみるか？」

そう思うと、光秋は小田の許に歩み寄る。

光秋の前に腰を下ろす藤原は、その背中を目で追いはするが止めようとはしない。
光秋は小田の前で立ち止まると、

「一尉?……」

と呼び掛ける。

「どうした?」

小田は冊子から顔を上げながら返す。

「……目上の人を見下ろすのも失礼か――」

そう考えた光秋は脚を折って中腰になり、小田と視線を合わせる。

「先程、ゴーレム・タンの操縦士に指名された時、少し浮かない顔をされた気がしたんですか?」

「ああ。顔に出てたか……」

「やっぱり?」――見間違いつてわけじゃなかった――「……何か、あつたんですか?」
「……………」

小田は冊子を閉じて右脇の地面に置くと、視線を靴の先に向ける。

「……遠くを見る目?――」

小田の目に、光秋はそんな印象を抱く。

「お前には、まだ話してなかったな……………いや、お前だけじゃない。他人^{ひと}に話すのは、

何年ぶりかな?」

小田は呟く様に言う。

「……俺は、もともと陸軍で戦車乗りやってたんだよ。砲手だった」

「大砲を撃つ人ですよね?」

「ああ………ただ、撃てない砲手だった……」

「?……」

「5年くらい前、俺が今の伊部くらいの歳の頃、『朝鮮内戦』ってのがあった。三佐から聴いてるだろう?」

「はい。春の研修の時にちよつと……合衆国成立の少し前に、朝鮮半島の2つに分裂していた国が『朝鮮共和国』っていう1つの国に統合したって。それが今の朝鮮州だったかな?合軍への合流を嫌った旧国軍の残党が蜂起したと。州内の軍では抑えきれなくなつて、日本や中国から鎮圧部隊を派遣して、1ヵ月程で鎮静化したって……!」

まさか!——

「物覚えがいいんだな……それにその様子じゃあ、察してくれただか」

「あ、いえ………興味のあることだけです!」——…何言ってるんだ僕は——

咄嗟に言つた場違いな発言に光秋は恥ずかしくなる。

が、小田はそんなことを気にせず、目をつむって微笑む。

「そう。俺はその鎮圧部隊に参加していた。当時は、まだ士官学校出たての青二才少尉だった……ちょうど『三戦危機』も過ぎて、平和な時期だったからな。訓練漬けの毎日にやっと来た実戦の機会は魅力的だった。意気揚々と出陣していったんだがな……半島の南部に上陸して、現場に進行する途中で待ち伏せを食らってな、スコップを必死で覗いて、何とか敵兵を捉えた……それが、生身の男だった」

「……………」

「その瞬間、引き金を持つ手が凍っちまった。車長が『早く撃て』って言った気がしたが、よく覚えてない……その間に、向こうはバズーカだかロケット弾だかを撃ってきて、それで俺が乗ってた戦車は粉々に吹き飛んだ」

と、小田は上着とワイシャツの左袖を肘まで捲くって光秋に見せる。

「……………」

光秋は、小田の数珠が巻いてある手首から肘にかけて残る赤い火傷の痕を見る。

「……………その時の、傷ですか？」

「ああ。もつとも、助け出された時はこんなもんじゃなかったらしい。全身火傷まみれで、皮膚移植やらなんやらで大変だったそうだ。ただ、俺はその時呆けてみたいで、治療中の記憶が殆どない……それでもな、比較的軽傷だったこの部分だけは残してくれっ

て、必死で頼んでた記憶だけはなんとか残ってる」

「……………」

光秋は、小田の火傷の痕から目を離すことができない。

「その後、なんとか復帰するんだが、あまりにお粗末な結果に軍に居づらくなつて、ES Oに転属して、京都支部に配備された。それに合わせて、『奇跡的に生還した名誉』とか言つて、二尉に昇格した」

と、小田は正面に腰を下ろしている藤原を見る。

「三佐に会つたのは、そんな時だったな………当時は一尉だった。俺と同じ様に軍でへまして転属してきたらしく、いろんな隊を転々としていたらしい。俺と言えば、すっかり白けて、放っておけば自暴自棄になりかけてる有様だった………そんな俺に、三佐初対面でなんて言つたと思う?」

「……………」

微笑んでかけられた問いに、光秋は首を傾げる。

『儂は、整理戦争の途中で命令拒否を起し、そのまま逃げる様に帰ってきた。だが、方法はさておき、儂の方にも理由があつてしたことだ。儂はあの地で見た光景を、おそらく一生忘れないだろう………それ故にだ、儂は万人平和の世の中を作りたいと、切に願つた』

—『万人平和の世』?……………」

話しているのはあくまでも小田なのだが、光秋は藤原が直に話しているような感覚を覚える。そしてその一言が、妙に耳に残る。

『お前たちの事情は問わん。儂が指揮する隊に入った以上、それを理念に頑張つて欲しい』つてよ……………」俺には、その言葉が一条の光に感じられたよ。空っぽになって俺に、目標を持たせてくれたからな……………」

「……………」

「だが……………」

と、小田は左前に停まっているゴーレム・タンクに視線を向ける。

「その果てに、また戦車みたいなものに乗ることになるとはな……………」おまけに……………」

小田は地面に置いてある冊子を軽く叩く。

「こいつによれば、背中の大砲は上の奴が操作するらしい。つまり、また砲手もやるってことだ。そう思うと、な……………」三佐は、何を考えてるんだ?」

呟く様に言うのと、小田は顔を俯ける。

と、

「……………」一尉」

光秋は、静かに口を開く。

「これは推測ですが、三佐は、一尉に立ち直って欲しいから、敢えて指名したんじゃないですか？」

「……………立ち直る？」

「はい。僕は、まだ三佐や一尉のことはよく知りません。ただ、よくある話だと、失敗した時と同じ様な状況に置いて、それを乗り越えさせるっていうのがあるじゃないですか。一尉が未だにその時のことを引きずっているなら、三佐はそれを吹っ切らせたくて、わざわざ指名したんじゃないやあ、ないでしょうか？……………もう一つ考えられるのは……………単に三佐にデリカシーがなくて、適当に指名したって、ことですけど……………変な本の読み過ぎですかね？」

「……………」

小田は束の間考え込む顔をする。

と、

「……………フツ」

「？」

不意に口元を歪め、光秋は少しハツとする。

と、小田は微笑みを浮かべた顔を光秋に向ける。

「なるほど。お前の言うことにも一理あるかもな。もつとも、三佐がデリカシーに欠け

る人間であるのも事実だが……せつかくだ、都合よく解釈させてもらう………ありがとう
とな」

「……………いええ！」

光秋からすれば、単に当てずっぽうな推測を言っただけである。それで礼を言われたのだから、少々動揺してしまう。

と、

「加藤お！そろそろ始めるぞお！」

「はい！」

後ろから立ち上がった藤原に呼び掛けられ、光秋は振り向いて応じる。

小田に一礼すると、光秋は立ち上がって藤原の許へ駆けていく。

午後0時40分。本舎地下1階。

食堂での藤原隊一行との昼食を終え、歯を磨いた光秋は、紙コップの自動販売機近く
のベンチに腰かけて一息つきながら、先程の小田との会話を思い返してみる。

——一尉にだって、一尉の人生があるんだよなあ……にしても、一尉が語り聞かせてく
れた『朝鮮内戦』の話し……僕にとっては教科書の中のことでしかないことでも、一尉
みたいにその場において、その空気に触れた人たちがいるんだよなあ………祖父ちゃん
が昔話する時のことを思い出しちゃった………——

と、数珠が巻いてある左手の腕時計を見る。

—45分……少し早い、そろそろグラウンド行くか—

そう決めるとベンチから立ち上がり、最寄りのエレベーターへ向かう。

—三佐の言う、『万人平和の世』……僕も懂れるな。ニコイチの“力”を以てすれば……て、そんな単純なことでもないが、少なくともあんな“力”を授かった以上、それをそういうことに使うのは、授かった者の責務……いや、そういう縛る様な言葉じゃないなあ。もつと自発的なあ……いい言葉が思い付かんなあ………言葉貧乏奴め………—

午後8時。

訓練を終えて帰宅すると、光秋は風呂を沸かし、少し熱めの湯に浸かる。

「……………」

肩まで体を沈めてリラックスしながら、再び小田との会話を思い返してみる。

—立ち直り……引きずっているなら吹っ切らせたくて、か………大口を叩いたが、それは僕にも言えることなんだよなあ………—

ふと脳裏に、綾の顔が浮かぶ。

25 演習準備

9月14日火曜日午後0時50分。本舎地下1階。

昼休みが終わる頃、光秋と藤原三佐は揃ってエレベーターに乗り込み、本舎裏のウインドヘ向かう。

「……そういえば加藤」

「はい？」

左隣に立つ藤原が話しかけ、光秋は顔を向けて応じる。

「夏の暴動鎮圧の後片付けでお前が見つけた写真、持ち主が見つかったそうだ」

「！それはよかった」

言いながら、光秋は瓦礫の撤去作業の合間に拾った家族写真を思い出す。写真の絵の記憶こそそう覚えだが、

——平凡で、幸せそうな家族……——

という印象だけはよく覚えている。

その間にエレベーターは1階に着き、扉が開くと藤原、光秋の順に降りると、

「あー！実戦部隊の方ですか？」

「……………」

突然の呼び掛けに、藤原は声のした方——左側に目をやり、光秋もその視線を追う。

藤原と光秋の視線の先には、2人と同じESOの緑の制服を着た、背中の上半分を覆う程長い濃い茶髪を結わずに垂らしている女が立っている。身長は光秋より一回り程高く、白の強い黄色系の肌と細見の顔立ちをしている。

「……………！いかん！いかん！——」

と、光秋は自重しつつも、つい視線を制服の上からでも充分目立つ豊かな胸部に持つていつてしまう。

茶髪の女は2人の許に歩み寄ると、

「一般の、藤原隊長はどちらでしよう？」

と、どこか品のある雰囲気で訊いてくる。

「儂が藤原だが？」

「！それはよかった。しゅにーん！」

藤原が答えるや、茶髪は右側に呼び掛ける。

それに応じて、正面玄関前のロビーに立っていた茶色いスーツを着た男が藤原と光秋の許に歩み寄ってくる。背丈は茶髪よりさらに少し高く、藤原程ではないがガツシリと

した体つきをしている。顔つきは若干の丸みを残すものの全体的に角張っており、適度な長さに伸びた黒髪は八方に膨れ上がっており、ライオンの鬘を想起させる。

「一般部隊の藤原隊長ですか？」

茶髪の右隣に着いたスーツが問う。

「ええ……そちらは？」

藤原の質問に、スーツは上着に右手を入れ、左の内ポケットからESOの手帳を取り出し、開いて見せる。

「日本ESO東京本部、特務部隊藤岡^{ふじおか}隊長、藤岡です。こちらは部下の曾我^{そが}」

「本部の？」

茶髪を一見しながらのスーツの紹介に、藤原は少し驚いた声を出す。

「……」

光秋も目を凝らしてスーツの手帳の身分証を見ようとするが、距離があることと対象が小さいためによく見えず、左側の顔写真をぼんやりと捉えるのが精一杯である。

「……………そんな方々が、儼に何か？」

「いえ、我々も10月の合同演習に参加するのですが、こいつが藤原隊に興味があると言うので、その前に挨拶しておきたいと」

藤原の質問に、藤岡と名乗ったスーツが曾我と呼んだ茶髪に目をやりながら答える。

と、

「……ところで、噂の白い犬はどちらです？」

茶髪が問う。

「……」

藤原は渋い顔で周りを見回すと、

「……でそういう話しは……とりあえず、上の応接室に案内しましょう」

と、声の大きさに注意して答える。

「?……………ああ、上位機密の事柄ですもんね」

茶髪は少し首を傾げてから納得した声で応じる。

藤原は光秋に顔を向け、

「というわけで加藤、すまんが自主訓練だ」

と、すまなそうに詫び、光秋は、

「了解です」

と言つて一同に一礼し、右の通路を通つて本舎の裏に向かうとする。

が、直後、

「ちよつと待つて！」

と、茶髪に呼び止められる。

「?……」

光秋が歩を止めて振り返ると、

「お茶の用意は? あなた、隊長の従兵でしょう?」

と、茶髪は首を傾げて続ける。

「じゅ、従兵って……」 「ああ、いやあ……」

茶髪の言葉に光秋が動揺していると、

「こ奴は従兵ではありません。とにかく早く行きましょう。お茶の方も儂が手配させます」

と、藤原がスーツと茶髪を急かしてちようど開いた背後のエレベーターに乗せる。

「……」

エレベーターに乗る直前、茶髪は首を傾げて光秋を見やる。

「……」

光秋は釈然としない思いを抱くも、

「……ま、いつか」

気を取り直し、振り返って改めて本舎裏のグラウンドへ向かう。

グラウンドに着くと、光秋は一通りの準備体操をして突きの練習に入る。

いろいろと構えを変えながら10分程その練習を続け、

—そろそろ、蹴りの練習に入るか？……—
と考え始めたその時、

「……………」

被っていた制帽が後ろに脱げ、慌てて構えを解いて振り返る。

—風かな？—

本舎に向かつて高度を下げながら進んでいく制帽を見ながらそう推測するが、

「!？」

直後に制帽は一気に舞い上がり、光秋は帽子を追って急いで顔を上に向ける。

と、

「……………」

本舎屋上のフェンスの近くに、ゴマ粒程の大きさに見える1人の人影を見る。右手を日除けにして目を凝らしてみるが、

「……………」

それでも光秋には、ぼんやりとした人影が見えるだけであり、顔や服装の判別はできない。

直後、

「!？」

人影がフェンスの上に跳び上がり、次の瞬間には地面へ落下する。

——10階はあるぞ！……ダメか………

瞬時に諦める間にも、人影は速度を上げながら落下していく。

と、

「……？」

人影は4階に達すると同時に、宙に停止する。

——念力——サイコキネシスか………

目の前の状況を整理する間にも、人影は徐々に高度を下げながら光秋の許へ近づいてくる。

人影が光秋の正面に下り立つと、

——……さっきの！——

光秋はそれが、先程エレベーターの前で見た茶髪の女だと気付く。

——えーつと………

急いで名前を思い出そうとするが、なかなか出てこない。

と、

「………あなたが、白い犬？」

茶髪が光秋の顔を真つ直ぐに見ながら訊いてくる。

「?.....あ.....はい?」

突然の質問に困惑しつつも、光秋は近くに誰もいないのを簡単に確認してから短く答える。

「ふーん?」

茶髪は少し表情を曇らせる。

と、

「.....藤原隊長は、つまらない冗談を言ったわけじゃなかったのね?」

「.....」

棘がある様なことを言いながら、茶髪は目を細めて顔を光秋に近づけ、正面・左右から観察の視線で見回す。

そうされながら光秋は、

—さつきと違うような?.....—

という思いを茶髪に抱く。どこことなく品のよさを感じた先程の印象は消え、どこか他人^{ひと}を見下す、というよりも小バカ^こにしている様な印象を与えてくるのである。

茶髪は光秋を見回すのをやめ、顔を正面に戻すと、

「.....名前は?」

と訊いてくる。

「加藤……光秋です……えーっと……」

「^そ曾我ガイア。日本ESO東京本部特務部隊、藤岡隊所属の特エス。よろしくね、メガネのワンちゃん」

「……」

口元だけの微笑みに、光秋は呆然としてしまう。

と、

「はい」

「……」

茶髪は右手に持った制帽を差し出し、光秋が少し驚きながらもそれを受け取って一礼すると、本舎の方に振り返り、上げた右手を軽く振りながら歩き去っていく。

「……………何だ……あの人？」

制帽を両手で持つて茶髪の背を見送る間、光秋はその思いで一杯になる。

しばらくして気を取り直した光秋は、本舎に背を向け、蹴りの構えを取って練習を再開する。

右蹴りの素振りをやっていると、

「加藤お！」

「?…………」

左後ろから呼び掛けられ、構えを解いて声のした方向に振り返ると、本舎の方から速足で駆け寄ってくる藤原を見つける。

光秋の前に着いた藤原は、

「すまんすまん。今終わったところだ」

と、少し息を荒げて詫げる。

「いえ、僕は僕で、マイペースにやってみましたから。ところで、お話の方はどうでした？」
「ああ。お前が白い犬だと言ったら、2人とも口を開けて驚いていたぞ。特に娘の方は声まで上げておった。まあ、従兵と勘違いした後だ。無理もない」

微笑みながら藤原は面白いものを説明する様に答え、光秋は小さく苦笑いを返す。

「……………」

笑いつつも、光秋の脳裏に再び、曾我と名乗った茶髪とのやり取りが思い出される。

9月21日火曜日午後6時半。本舎裏のグラウンド。

訓練を終えた光秋は正面の藤原に一礼すると、振り返って疲れた体を本舎の食堂へ向かわせる。

と、

「ああ！そうだ加藤」

「はい？」

後ろから藤原に呼び止められ、光秋は応じながら振り返る。

「明日なんだが、朝から人と会う用事があつてな。すまんが自主訓練だ。終わり次第合流するがな」

「わかりました」

応じると、光秋は軽く頭を下げる。

「すまんな」

「いえ」

藤原の詫びに返すと、光秋は食堂へ向かう。

9月22日水曜日午前8時半。

いつも通りに出勤して待機室に荷物を置いた光秋は、1人本舎を背にグラウンドに立つと軽く準備体操をし、脚を肩幅に開いて左拳を前に出して突きの構えを取ると、気付けを兼ねて突きの練習を10本行う。

構えを解くと、上着の内ポケットのカプセルに意識を向ける。

「そういうば、しばらく乗ってないなあ……」――演習では乗ることになるんだし、いい機会だからコイツの訓練もしておくか――

と、右手を内ポケットに入れてカプセルを取り出し、その先端を前に向ける。レバーを「入」から「出」に切り替えてボタンを押すと、1メートル前方に左膝を着いた白い

巨人―ニコイチが現れる。

光秋は垂れ下っているリフトを掴んで上昇し、操縦席に着いて認証を済ませると、カプセルを右の肘掛に収め、制帽を脱いで膝の上に置き、イメージ操作でニコイチを立ち上げらせ、本舎に背を向けさせる。

ニコイチの左拳と左足を前に出させ、右拳を胸の前に置かせて組手の構えを取らせると、

「……………」

左突きを素早く2回、右突きを1回出させて両腕を構え直す。

「よしー」

体の様に自分の意思を忠実に体现してくれるニコイチと、ニコイチとの馴染みが進んでいる自分に、光秋は軽い満足感を覚える。

「……………さてとね」

一言呟いて呼吸を整えると、光秋はより激しい動きをしようとする。
と、

―『歩くな！浮け！振動で気が散るんだよ！』―
と言う竹田の怒声を思い出し、

―……………浮くかあ―

と、右ペダルを軽く踏み、ニコイチの足底を30センチ程浮かせて、脚の動きも加えたより激しい動きの練習を始める。

左突きを素早く2回出し、右突きを1回出す。体勢を直して左蹴りをし、足が下がり切ると同時に右突きをし、体勢を整えて左、右と間を置かずに突きを放つ。

「……」

右拳を胸元に引くと、組手の姿勢のままひと呼吸入れる。

と、

「……?」

光秋は背後上空からヘリのローター音がするのを外部スピーカー越しに聞き、後ろへ意識を向ける。それを拾ってニコイチはほぼ人間そのものの動きで本舎の方に振り返り、2つの緑のレンズのカメラを屋上に向ける。

と、モニター越しに、屋上のヘリポートに災害地で避難民を運ぶ時に使う様な胴長の緑のヘリ―CH―47チヌークが着陸しようとしているのを見る。

正面にヘリ後部を捉えた拡大映像が映し出され、地球合衆国の印である円形に描かれた世界図と、その下の「E・S・O」の文字から、光秋はそれがESOのヘリだと理解する。

―昨日三佐が言ってた用事の人かな?―

思う間に拡大映像は消え、ヘリが着陸すると、ヘリ前部を映した別の拡大映像が映し出される。前部のドアが開くと、若干老けた感じがしつつも藤原の様な逞しい体つきをし、茶色のスーツを着た男が、ドアの裏に備え付けてあるタラップを降りてくる。

———

少し時間が掛かって、光秋はその男がESO日本局長―東信三だと気付く。

「！」

すぐにハッチを開けて席を機外へ上げ、制帽を被ると、屋上を右に向かって進んでいく東に右手で敬礼をする。その動きに合わせて、ニコイチも右手で敬礼をする。

―気付いてくれるか？……！――

思うや、自分の目では点にしか見えない何人かの人影の内、1つが歩を止めてくれるのを見る。

さすがに返礼してくれたかまではわからないが、止まっていた時間の長さで、

―ニコイチなら目立つ―

という考えから、光秋は相手がわかってくれたと考える。

人影の一行が屋上中央にある階段とエレベーターが入っている小屋に消えるまで見送ると、光秋は自分とニコイチの敬礼を解き、操縦席を機内へ下ろす。

―三佐の用事って、局長なのか？……！――

思いながら光秋はハッチを閉め、再び本舎に背を向けてニコイチの慣熟訓練を再開する。

ニコイチの訓練をしばらく行くと、光秋はニコイチを仕舞って格闘訓練に入る。

しばらくして、光秋は近くの日陰に腰を下ろして休憩に入る。ズボンの右のポケットからハンカチを取り出し、所々に薄つすらと浮き出た汗を拭きながら、

—だいぶ涼しくなったなあ……………—

と、季節の変化を感じてみる。

と、

「やっぱり！加藤君」

「？」

突然呼び掛けられるや、声のした方——本舎のある左に顔を向け、黒い背広と膝まである細身のスカートを着、肩に着く程の短めの黒髪に服の上からでも目に着く豊かな胸をした光秋くらいの背丈の女がゆっくりと歩み寄ってくる。

——……誰だっけ？——

光秋はその女性に見覚えを感じるのだが、どこで会ったのか、何と言う名前なのか、どうしても思い出せない。

その間に、女性は光秋の左隣に着く。

——……………しようがない——

観念した光秋は、ハンカチをポケットに戻し、立ち上がって体を女性の方に向け、「えーつと？……………」

と、恥を含んだ声で名前を訊こうとする。

「ああ、久しぶりだし、ちよつと会っただけだから覚えてないか。沖おきです。沖おき愛あい」
——オキ アイ？……………！——

様子を察してくれた女性の自己紹介に、光秋は、こちらに来て初めての夜に会った、東の横に控える様に立っていた長髪の女を思い出す。

「局長の秘書さん！」

「ええ」

光秋のハツとした声に、沖は微笑んで応じる。

と、

「……………あれ？でも冬に見た時は、髪がもつと長かったような？……………」

と、うろ覚えの記憶と目の前の沖との違いを口にしてみる。

「ああこれ？今年暑かったから」

沖は左手で髪を摘まむと、笑顔で教えてくれる。

——……女の人が髪を切るのは、男性関係で何かあった時、と聞いたことがあるが………いや、昔の話だろう。僕の考え過ぎか——

光秋は不意に浮かんだ疑念を隅に押しやると、

「昨日、藤原三佐が用事があると話していましたが、やはり局長となにか？」

と、屋上に東を見掛けた時の疑問を訊いてみる。

「そう。来月の演習で話しがあつて」

「やっぱり」

と、今度は沖が、

「ところでどう？ ESOの仕事には慣れた？」

と訊いてくる。

「ええ。といつても、殆ど訓練ばかりですが」

「その割には、この間大活躍だったんでしょ？ 特例で二曹に昇格したんだし」

「！」

沖のその言葉に、光秋は一瞬ハツとする。

「……ご存じなんですか？」

「知ってるもなにも、局長が辞令にサインする時、私はそれを横で見てたんだから」

「ああ、そうか……」

「それに」

言うとは、視線を左に向ける。

「アレも、隊の実績が認められたからこそ託されたんだし」

「……」

光秋も沖の視線を追って右を見、その先にゴーレム・タンクが収まっている簡単な造りの小屋を認める。光秋がこちらに来た日、ニコイチが初起動した時に壊した倉庫の跡地に建てられた、正面以外の三面の壁と後ろに向かつて斜めに伸びる屋根でできた7メートル少々的小屋である。雨風はしのげ、上空からの撮影も概ね防いでいるのだが、全体的に粗末な印象を受ける。

ゴーレム・タンクを受領した翌日に慌ただしくできたそれを見て、光秋は束の間、

——『こんな掘立小屋じゃ機密保持も何もありませんよ!』

『わかつとる! 早急に手配はする』——

と言っていた小田と藤原の渋い顔を思い出すと、

「ええ、まあ……………」

と、半ば生返事をする。

沖は視線を前に戻すと、さらに続ける。

「総局長だって、加藤君や藤原隊のことよく見てくれてるみたいだし」

——総局長？——

聞き慣れないが覚えのある言葉に、光秋は春の研修で教わったESOの組織構造を大雑把に思い出してみる。

——えーつと……………ESOってのは、各地に支部があつて、そこを預かる支部長。その上に、各州に1つずつ本部があつて、州全体を管理する局長。それで確か……………そうだ！ニューヨークに全国のESOを取りまとめる総本部があつて、そのトップが総局長！……………？……………！てことは……………——「ESOのトップが、ですか!？」

理解から来る驚きで、光秋は少し大きい声を上げる。

「ええ。だって、UKD—01にはESO上層部の注目が集まっているし、合軍だって」
「ああ、そうか……………」

沖は冷静な声で返し、光秋は呟きながら理解する。

と、沖は左手首に巻いてある腕時計に目をやる。

「そろそろ局長と三佐の話しも終わる頃だから、私はこれで。頑張つてね！」
振り向きながら右手を振つて言う、沖は来た道を辿つて本舎正面側へ向かう。
「はい。ありがとうございます」

光秋はその背に軽く一礼して応じる。

沖の背中が本舎の影に消えると、

「……………さてとね!」

と呟いて気持ち切り替え、訓練を再開する。

しばらくして藤原も合流し、それから午前一杯は光秋と藤原の2人による訓練となる。

午後0時半。

昼食と歯磨きを済ませた光秋は、藤原隊の待機室で椅子に腰を下ろし、満腹になった体を寛がせている。

と、

「……………」

ドアが開く音に顔を右に向けると、伊部が入ってくるのを見て一礼する。

「加藤くん、午前中グラウンドで誰かと話してたみたいけど、誰?」

「!?……………なんで知ってるんです?」

伊部は光秋の正面の席に向かいながら問い、光秋は若干驚きを含んだ声で返す。

「ゴーレム・タンクの下半身の中で冊子……………というかマニユアルと、実物の見比べしてたら、窓からこっち向いてたのが見えたから」

「ああ。沖さんです。東局長の秘書の」

「沖一尉?」

「ああ、あの人一尉か——」はい。局長が藤原三佐に用があつたそうで、それに付いてきたみたいで、色々褒められました」

「ふーん？……褒められた、ねえ？……」

「？……感じすぎかな？」

そう思いながらも、光秋は伊部の言葉と視線に棘の感触を覚える。

そんな息苦しい雰囲気を変えたいのもあつて、光秋はふと浮かんだ疑問を問う。

「そういうええ、軍の階級が大・中・少なのに、ESOは一・二・三ですよ。なぜです？」

「あれ？研修で聴いてない？」

「……」

返ってきた伊部の声色がいつも通りであることに内心ホツとする。

「ESOっていうのは、ニューヨークに総本部があるけど、平和な時は本部以下の管理は各州政府に一任されてるの」

「それは覚えてます」

「で、日本には昔自衛隊っていうのがあつたでしょう？」

「はい……僕の方では、まだあるんですが」

「そうなの？まあそれはともかく、要するに、日ESOの階級は自衛隊の名残^{にち}つてこと」

「ああ、なるほど」

疑問も片付いたことで、光秋はすつきりする。

「……春の研修で聴かなかった？」

「聴いたんでしょうが……短い時間に色々言われたので、取りこぼしたのかも。すごく頭痛がした記憶があります」

伊部の問いに答えながら、光秋はその時の記憶を少し思い返してみる。

「……なるほどね」

伊部は納得の顔をする。

「じゃあ復習ついでに、1つ問題」

と、口元を歪めて遊びの声を出す。

「ESOができる前の日本の超能力機関の名称は？」

「……『超能力者管理機構』」

「正解！」

光秋の回答に、伊部は微笑んで応じる。

それに続く形で、光秋は伊部の問題が切っ掛けで思い出したことを言う。

「ちなみに、合衆国設立以前には、世界各国に同じ様な機関、つまり、超能力の研究と超能力者が活躍できる場を作る機関が最低1つずつあって、それらを解体・統合したのが、今日のESO——『超能力者支援機構』である」

一気に言い切ると、伊部に確認の視線を送る。

「その通り。そつちはよく覚えてるね？」

「さっきの問題が切っ掛けで思い出したのと、もともと歴史の話が好きで……組織の話となると、どうも聞き慣れなくて……」

「ふーん？……」

伊部の返事を聞きながら、光秋は数珠が巻いてある左腕の腕時計を見る。

——0時50分。そろそろか？——「そろそろ午後の訓練の時間なんで、僕はこれで」
言うとき伊部に一礼して椅子から立ち上がり、ドアへ向かう。

「そう？頑張ってね」

と、伊部の声が後ろから掛けられ、廊下に出た光秋はまた一礼し、ドアを閉めて最寄りのエレベーターへ向かう。

光秋が部屋から出ていくと、伊部は光秋が沖のことを話した時のことを思い返す。

「……………私、なんでちよつとイラついたんだろう？」

思い返してみても理由は浮かばず、模糊とした気分だけが残る。

9月24日金曜日午前8時40分。

本舎を背に藤原が来る前の自主訓練をする光秋は、一息つこうと構えを解き、なんとなしに首を回してみる。

と、

「……………」

不意にゴーレム・タンクの小屋―一応の格納庫―のそばに、小田らしき人影を見掛ける。

―なんだ？…………—

体を格納庫の方―左側に向けて目を凝らしてみるが、距離があることと、相手が格納庫の影にすることで、結局よく見えない。

と、人影がこちらの視線に気付き、歩み寄ってくる。

人影が日の下に出て距離を詰めてくれると、

……………やっぱり―

光秋はそれが、やはり小田であることを確認する。

「おはよう」

「おはようございます」

小田は光秋の許に着くと活気の籠った声で言い、光秋も軽く頭を下げて返す。

「今朝も頑張ってるな」

「いつものことです」

小田の言葉に、光秋は当たり前という調子で答える。

「ところで、一尉も今朝からどうしたんです？」

「ん？ああ。演習もいよいよ近いからな、ちよつとアイツの様子見を」

言いながら、小田はゴーレム・タンクを指す。

「なるほど。どうです？ゴレタンは」

「ごれたん？」

光秋の言葉に、小田は音だけ真似て訊き返す。

「ああ、ゴーレム・タンクの略です」

「ああ！『ゴーレム・タンク』、略して『ゴレタン』か！」

光秋が少し慌てて付け加えて言うと、小田は納得の声を出し、光秋の質問に答える。

「夏のNP鎮圧の帰りに、ニコイチに相乗りしたことがあっただろう」

「はい？」

「俺にとつて、それがロボットに乗った最初の体験だからか、コクピットが狭苦しく感じるな。もつとも、ニコイチの方が贅沢な造りで、普通の兵器はあんなもんだって、頭では解ってるんだけどな」

「……そんなもんですか……そういえば、動かす訓練もだいぶ苦労してますもんねえ……」

「ああ……」

光秋の指摘に、小田は殆ど諦めた声を出す。

「デカさが半端じゃないから、ここですることにも限りがあるからな。殆どぶっつけ本番で動かすことになりそうだ。格納庫の件と合わせて三佐に相談して、手配するってことになったが……どうなることか……」

小田が呟く様に言う、光秋は視線を小田の後ろにやってゴレタンを見る。

「最大の特徴である背中の大砲も、実射はできませんからねえ……」

「それだよ。履帯もそうだが、アレの間に合わせ感の原因はな」

「？」

「マニュアルに書いてあったんだが、背中にはもともとジャンプ力補助のためのロケット推進機が付く予定だったらしい。それを砲撃戦特化のために今のあの装備に換装したとあるが……要するに、ジャンプするために必要な『脚』の開発が遅れて、用がなくなくなった推進機の代わりに大砲取り付けて、とりあえず砲撃機、支援機として完成させたって、そんなところだろう」

「……そんなとこ……ですかね？……」

「ああ……言っておくが、あくまで俺の推測だ。無暗に他人ひとに喋るなよ！特に大河原チームには！」

「ああ！はい！」

小田は慌てて付け加え、光秋はすぐに応じる。

「ただ、間に合わせでもなんでも、ニコイチの支援機であることには変わりないですから、いざという時は頼みますよ」

「それなら心配するな。仕事は真面目にやるよ」

光秋が少し真面目に言った言葉に、小田も同じ様な調子で答える。
と、

「おお、小田もいたか」

「――」

小田の後ろからかけられた声に、光秋は顔を右側に動かし、小田も後ろを振り返ると、本舎から2人に許に歩み寄ってくる藤原を見る。

「おはようございます」

「ウム、おはよう」

小田と光秋の挨拶に、藤原は快活に応じる。

「じゃあ俺、そろそろ本舎に戻る」

「はい」

光秋の返事に右手を挙げて返すと、小田は本舎へ向かって歩き出す。

その背中を見送ると、光秋は藤原と訓練に入る。

午後6時半。

訓練を終えた光秋は、藤原に一礼する。

と、

「……ああ、そうだ加藤。明日の朝、演習のことで皆に連絡があるんで、待機室で待っててくれ」

——連絡?……——「わかりました」

思い出した様に言う藤原に応じると、光秋はもう一礼し、振り返って本舎の食堂へ向かう。

9月25日土曜日午前8時20分。

出勤し、藤原隊の待機室に入った光秋は、誰もいない部屋の明かりを点け、右肩に斜め掛けしている灰色のカバンをドアに1番近い椅子の足元に置くと、軽い準備体操をして突きの練習に入る。

少しして、小田と伊部が部屋に入ってくる。

「おはよう」

「おはようございます」

2人の挨拶に、光秋は手を休めずに応じる。

また少しして、藤原と、眠い目をした竹田が部屋に入ってくる。

「おはよう」「うーっす」

光秋はそこで構えを解き、テーブルに着いている小田と伊部と共に、

「「おはようございませう」」

と2人に返す。

藤原と竹田が荷物を下ろしながら椅子に座り、光秋が肩を回しながら足元にカバンを置いた椅子に腰を下ろすと、

「さて、皆揃ったな」

と、光秋の左前に座る藤原が、周りを見回しながら言う。

「昨日言った通り、10月の演習について話がある。まず、皆の配置を発表する」

「！」

藤原のその言葉に、竹田はようやく目をはっきりさせる。

「ゴーレム・タンクは小田と竹田。小田が上、竹田が下だ」

「はい」「ウッス」

藤原の右隣に座る小田と、左隣に座る竹田がそれぞれ応じる。

「加藤はニコイチ」

「はい」

「我が隊は加藤のニコイチを主力として前に出しつつ、ゴーレム・タンクで後方から援

護、これを基本とする。もともと、状況によつて多少の変化は起こるだろうがな。それで、伊部」

「はい」

光秋の左隣に座る伊部が答える。

「お前は加藤と共にニコイチに乗り、加藤の補佐を」

「はい」

——上官が補佐?……—

光秋は一瞬変な感じを覚えつつも、すぐにそれを隅に追いやる。
と、

「……ところで、三佐の配置はどうなるんです?」

「儂も前に出る。近距離での加藤の援護が基本だな」

小田の問いに、藤原はそう答える。

「さて、配置の話は以上だな。次に、演習が行われるのは10月2日だが、その前日、1日の朝から演習の準備に出る。泊りがけになるので、各自で荷物の整理をしておくように」

——泊りがけ……—

その言葉が、光秋には少し気に掛かる。

「その後2日間の休暇の後、通常勤務に戻る。以上。何か質問は？」

言うとは藤原は、周りを見回してみる。が、誰も手を挙げる。

「よし。時間は少ないだろうが、各自先程の配置で動けるよう、訓練を怠らんでくれ」

言うとは藤原は立ち上がり、光秋を見る。

「では加藤、グラウンドに移動。訓練を始める」

「はい」

応じながら立ち上がると、光秋は藤原の後を追って部屋から出ていく。

光秋は午前中を藤原との格闘訓練で過ごし、午後からは藤原を仮想敵に伊部とのニコイチの操縦訓練に入る。

午後2時。

本舎を背にすると、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ハッチを開けて操縦席を機外に出し、休憩に入る。

寛ごうとシートベルトを外す横で、伊部は光秋の左隣から正面に移動し、ハッチの上に腰を下ろす。

と、

「……」「一尉」

「ん？」

光秋は正面の空に視線を向けながら呟く様に言い、伊部は応じながら光秋の顔を見る。

「……強く、正しく生きるって、難しくて大変ですね」

「え？」

唐突な発言に、伊部は少し驚いた顔をする。

「どうしたの？突然」

「いえね、ときどき考えるんですよ。理想の生き方があっても、実践は難しいって。要は愚痴です」

「ああ、そう？……」

「……」

光秋は視線を膝に向ける。

「あと、何で僕なんだろうって考えるんです。ニコイチを託されたのが」

「それは……何か適性があつたんじゃないの？」

「適性っていったって、僕は機械に関しては疎い方ですし、車も運転しちやいけないんですよ。視力のことです」

言いながら、光秋は視線を徐々に伊部に向ける。

「勉強はできる方でしょうけど、それにしたって中の下くらいでしょうし、僕にとって

『特別』って言葉は、『優れてる』じゃなく、『劣ってる』って意味しかなかった……おまけにこんな劣等感の塊が、何で……すみません。喋り過ぎました」

思わず顔を俯ける。

「別にいいけど……どうしたの？いつも静かな加藤くんが、今日はよく喋るじゃない？」
「喋りたくなる時があるんです。ときどき……」

「ふーん？それはそれでいいんじゃないの？」

言いながら、伊部は口元を少し微笑ませる。

「……強いてこうなった理由の心当たりを挙げるなら、僕が違う世界に行きたいって少なからず望んだことと、〃力〃が欲しかったってことですかね？神モドキさんは僕を呼んだ時、僕のことを調べたって言うてましたが……いったい何が気に入ったのか？……」

「……それこそ神モドキだけに、『神のみぞ知る』ってやつじゃないの？」

「そうかもしれないが……いくら操縦がし易くても、車も運転しちやいけないような奴に、こんなモノを渡す意図がわからなくて……」

言いながら、光秋は右の肘掛を軽く叩く。

と、

「おおい！訓練再開するぞお！」

「はあい！」

ニコイチの下から藤原が叫び掛け、光秋はシートベルトを締めながら、伊部は光秋の左側に移動しながらそれぞれ返す。

光秋が操縦席を機内に下ろしている途中、伊部は光秋に顔を近づけると、

「そのうちわかるよ。それに加藤くんなら、ニコイチを悪用しないことだけは確かだし」と、微笑んで言ってくれる。

「……ありがとうございます」

言うとき光秋はハッチを閉め、気持ちを訓練時のそれに切り替える。

午後6時40分。

訓練を終えた光秋は、藤原、伊部と共に本舎の食堂で夕食を摂る。

焼き肉を噛み切るのに手こずっていると、

「おーみんなおそろいで」

トレーを持った上杉が現れ、光秋の正面に座る。

「?……竹田はどうした?」

光秋の左前に座る藤原の問いに、上杉は箸を持ちながら、

「二尉なら、疲れたって言ってとっとと帰りました……つつても、オレも疲れてるんですけどねえ……」

と、溜め息混じりに答える。

「医療棟、そんなに大変？」

光秋の左隣に座る伊部が問う。

「そつちはぼちぼち……ただ、オレも演習に招集されたんすけど、持つて行く医療道具の荷造りが手間で……」

「？上杉さんも？……ああそうか。演習なら怪我人も出るだろうから、それで――
やつと噛み切った肉をよく噛みながら、光秋は納得する。

と、

「ところでさあ、加藤」

「……はい？」

上杉が光秋に顔を向け、光秋は少し急いで肉を飲み込んでから応じる。

「三佐に弟子入りして一カ月くらいになるけど、月謝とかどうしてんだ？」

「……ゲツシャ？……」

上杉の問いに、光秋は束の間言葉を失う。

「正規の訓練じゃなく、個人授業みたいなもんなんだから、タダつてわけにはいかないだろう？」

「……！」

続けて言われた言葉に、光秋はハツとする。

「……そういえば、全く考えていませんでした……」

正直に言いながら、光秋は視線を藤原に向ける。

と、

「……フツ」

「？」

光秋の視線に、藤原は口元を笑みにして答える。

「心配せんでも、儂は金が欲しくてやつとるんじゃない。今までもそうだが、今後とも無料で指南してやる」

「……………」

藤原の言葉に光秋は深く一礼するが、どこか尻の座りの悪さを感じる。

「三佐も太っ腹つすね？」

「懐には余裕があるからな。それに、加藤を鍛えておけば、儂らも現場で少しばかり楽ができるしな。強いて言えば、それが月謝よ」

上杉の言葉に、藤原は笑顔で答える。

「……それならそれでいいか？今まで通り、コツコツ真面目にやっていけば……いいか！ただ……金のことには気が回らなかった。僕はやつぱり、坊やだな……」

その自覚が、少しでも胸に痛く感じる。

9月30日木曜日午後6時。本舎裏のグラウンド。

いつもより早くニコイチの操縦訓練を終えると、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ハッチを開けて機外へ出、右手に乗せた伊部を慎重に地面に下ろす。

伊部が手から降りると、自分もリフトを掴んで地面に下り、ニコイチをカプセルに収容して藤原と伊部の許に速足で近寄り、伊部の右隣に着く。

「設備の問題から大したことはできなかったが、いよいよ明後日だ」

「はい」

藤原の言葉に、伊部と光秋は疲れた体なりのいい返事をする。

「もっとも、明日は明日で準備がある。儂は小田たちと、ゴレタンの輸送があるので先に出る。2人は8時まで現地に到着しろ」

「春に飛行実験をやった、あそこですよね？」

藤原の指示に、光秋は確認の質問をする。

「そうだ。遅れるなよ」

「はい」

「他に質問は……ないな。よし、解散」

「ー」

伊部と光秋は敬礼で答えると、藤原を先頭にして本舎の食堂へ向かう。

「とりあえず6時半……40分頃に支部に集合して、ニコイチで向かうってことで」
「りょうかい」

藤原の後を追いながら、光秋は左隣を歩く伊部に確認の声をかけ、伊部も同意する。

午後7時。

帰宅した光秋は、携帯電話の充電と明日の荷作りを始める。

灰色のカバンに、下着の上下と靴下を3枚ずつ、予備のワイシャツ、予備のハンカチ1枚、大き目のビニール袋1つ、充電を終えた髭剃り機とクシと小さい鏡を詰めた袋を入れると、冷蔵庫に視線を向ける。

——…目薬は、明日入れればいい。食糧も支給されるから、余計なもんはいらんだろ
う……—「こんなところか」

眩く様に断じると、カバンを隅に置き、制服を脱いでひと風呂浴び、青チエツクのパジャマに着替える。

椅子に書いて3種類の目薬を注す合間、光秋は充電を済ませた携帯電話のアラームを5時に設定し、それをベッドの枕元に置く。

最後の目薬を注してそれを冷蔵庫に戻すと、椅子に腰を下ろし、電灯に目をやって長考に入る。

——…考えてみれば、こっちに來てもう半年以上かあ……—

光秋の腦裏に、いくつかの光景が思い浮かぶ。

こちらの世界に來た最初の日の晩と翌朝、NPの襲撃を受け、それをいずれも自分が撃退したこと。ニコイチの飛行実験中に乱入してきたサン教の戦闘機をタツカー中尉と撃退したこと。NPの拠点「蜂の巣」を制圧する作戦の中で伊部が撃たれたことに激怒し、一時自分を失ったこと。綾と外出中に不良に絡まれ、その中のサイコキノに絞殺されそうになったこと。市街地でNPが蜂起し、それを鎮圧に出たこと、綾を確保するために來た陸軍の特殊部隊に囲まれ、危うく撃ち殺されそうになったこと。その後へりからの銃撃を受けたが、綾のおかげで助かったこと。先日、京都駅でのテロを阻止したこと。

——…よくもまあ、生きてたもんだ……哲学科に入り損なつた進学志望が、よくやるよ……—

我がことながら感心してしまう。

そして、

——…綾……—

一瞬浮かんだ顔を隅にやると、光秋は椅子を回して机に向けていた体を右後ろにある冷蔵庫に向け、その上に置いてある写真立てに目をやる。その中には、光秋の携帯電話

の待ち受け画面の映像と同じ、家を出る2、3時間前に撮った家族写真が収められている。

——…みんな、どうしてるだろうか?……いや、どの道ここにいたらわからんことだ。僕がいらないなら、僕がいらないりの生活を送ってるだけだろう……明日も早いし、今日はもう寝よう!——

そう決めると、立ち上がって椅子を部屋の隅にやり、窓の鍵が閉まっているのを確認してベッドに梯子を掛ける。玄関の鍵も確認し、用を足し、風呂場の水盤で口を漱いで顔を洗い、梯子を上ってベッドに入る。

枕元の携帯電話を開いて時刻を確認すると、午後9時10分である。電話を枕の左脇に置き、メガネもその近くに置くと、灯りを消し、布団を被る。

26 話題は「ニコイチ」

10月1日金曜日午前5時。

「……………」

携帯電話のアラーム音で目覚めた光秋は、すぐにベッドから出ると食事や着替えなどを心なしに焦って済ませ、注し終えた目薬3つを灰色のカバンに入れ、荷物の確認をする。

「着替え、よし。ハンカチ、よし。髭剃りと、クシ、鏡、目薬は今入れたし……あと入れっぱなしの歯ブラシと歯磨き粉、ちり紙……いいな」

断じると、左手首に腕時計と数珠を巻き、上着のポケットに財布と携帯電話、ニコイチのマニキュアル、胸ポケットにカプセル、ズボンのポケットにハンカチと部屋の鍵を入れる。

机の上の時計に目をやると、6時10分である。

—そろそろ……と、その前に—

用を足し、風呂場で口を漱いで顔を洗うと、気合い入れに突きの練習を15本行う。制帽を被ってカバンを右肩に斜め掛けし、戸締りと荷物の確認をすると、制靴を履き、

ドアの鍵を閉めて鍵をズボンの左ポケットに入れ、京都支部へ向かう。

支部の正門前に着いた光秋は、周囲に伊部がいないと見ると、門を背に敷地の外で待つことにする。

6時半。

「加藤くん！」

「！」

名前を呼ばれた辺りを見回すと、制帽を被り、左肩に大きなカバンを提げた伊部が右から速足で寄ってくるのを見つける。

「ごめん！待った？」

「いえ……じゃあ、行きますか」

そう返すと、光秋は胸ポケットからカプセルを取り出し、先端を本舎前の駐車場に向け、左膝を着いたニコイチを出現させる。

リフトに歩み寄り、カバンを提げている分いつもと調子が違うために注意してコクピットまで上がり、カバンを操縦席の正面の床に置く。席に着き、カプセルを右の肘掛に納め、制帽を膝の上に置いて認証を済ませると、伊部の許にニコイチの右手を差し出し、ハッチを開けて機外へ出る。

伊部が掌に乗って体を安定させるのを見ると、その間にシートベルトを締めた光秋は

手を慎重にハッチの上に置き、伊部がコクピットに移ると席を機内に下ろしてハッチを閉める。

ニコイチを直立させると、左パネルの地図に従って門の方を向いているニコイチを右に向け、右ペダルを踏んで一気に上昇する。

「じゃあ、行きます」

「どうぞ」

左隣に立つ伊部の返事を聞くと、光秋は右の操縦桿を前に倒してニコイチを前進させる。

と、

「！」

左耳に通信機を付けた直後、忘れ物を思い出す。

――予備のメガネ……まいつか――

すぐに割り切ると、心なしかペダルを深く踏み込む。

薄暗い空の下、ニコイチが前進を始めて少しすると、光秋は正面を見つつ伊部に意識を向ける。

「目的地までしばらくかかりますが、脚大丈夫ですか？」

「大丈夫」

言うとは伊部は、床に置いてあるカバンからビニールシートと小さめのクッションを取り出し、シートを床に敷き、その上にクッションを置いて操縦席の左側を背もたれにして腰を下ろす。

「スペースがあるのはいいんですが……予備の椅子がないからなあ……」

「修学旅行のバスじゃないんだから」

光秋の呟きに、伊部は微笑を含んだ声を返す。

「……そういえば、ニコイチってなにで動いてるんだっけ？」

「?……どうしたんです?突然」

伊部の思いがけない質問に、光秋は思わず訊き返す。

「ちよつとした興味だよ。私の実家、電気屋でね。そのせいか、他人^{ひと}より機械に興味があつて」

「なるほど……あれ?でもこの前、マニピュレーターの意味が解からなかったような?」「ああいう専門的なのはダメだけど、家電くらいならだいたいはね。で、結局なにで動いてるの?」

「燃料つてことですか?」

「そう」

「……」

伊部の質問に、光秋は春に行われたニコイチの調査の記憶と、ESO入隊前後にマニユアルを斜め読みした時の記憶を思い出す。

「それが……大河原主任のチームが調べた時、外からは給油口とか充電器みたいなものは発見できなかったそうです。僕もマニユアルでちよつと見てみたんですが……」

言うのと左手を上着の左のポケットに伸ばしてマニユアルを取り出し、開いて右の人さし指で何度か画面を触れる。

「！ちよつと！手え離して大丈夫なの？あと、前見てないと……」

操縦桿とモニターから手と目を離れた光秋を見て、伊部は驚きの声を上げる。

「大丈夫ですよ」

言いながら光秋は伊部の方に上体を向け、右手で上部を持ったマニユアルの画面を見せる。

「単純な動作なら、人間、というよりも生き物の反射の様に意識せず勝手にやってくれます。一度動きが軌道に乗ればなおのこと。なにか近づいてくれば、避けられれば自動で避けるし、どうしてもダメなら警報なり寒気なりで教えてくれますよ」

「そっ……」

不安そうに応じながら、伊部はマニユアルに目をやる。

マニユアルには、ニコイチの内部構造を簡単に示した概略図と、その合間を縫う様に

書かれた説明文が、左右両画面に渡って表示されている。

「ここを見てください」

言うとき光秋は、ニコイチの全体図の胸周りを指で突き、コクピットとその周囲を左から見た断面図を表示させる。全体図の時にはあつた詳細な説明文はなく、コクピットとその真後ろにある大型の円柱形の部品――おそらくは飛行時に背中の中身の隙間から洩れる光の光源となつてゐるそれ――が大きく映し出され、図の合間に部品の名称が小さく書かれてゐる。

「ニコイチは基本的に電気で動いてるらしいんですが……」

「じゃあ、コクピットの後ろのコレが発電機？」

光秋の言葉を受けて、伊部は円柱形の部品を指す。

「いえ、よく見てください。ソレは蓄電器です」

「え？」

光秋の言葉に、伊部は目を凝らして部品の名称を見る。確かに「蓄電器」と書かれてゐる。

「蓄電器って……」

「ええ、あくまでもソレは電気を溜めるだけで、発電してゐるわけじゃありません。厳密には大元のエネルギー源を電気に変える変換機と、各所に電気を振り分ける送電機の機

能を兼ねてゐたいですが。つまり、外にエネルギーを得るための器官がなく、内にもそれらしい物が無い。火力発電で言うところの石油や、原子力発電で言うところのウランにあたるものがニコイチの場合なんなのか、未だに解からないんです」

「……」

光秋の説明に、伊部は口を噤む。

「ただ、ちよつとここを見てください」

「？」

言われて伊部は光秋が指した操縦席の真下と蓄電器とを繋ぐS字状の管を見る。

「コレって……電気を送る配線でしょう？」

「おそらく、そうなんでしょうが……」

伊部の言葉に、光秋は一瞬迷った顔をするが、

「……いや、二尉ならいいだろう。言おう！——」

すぐに考えを決め、続きを話す。

「僕が考えるに、ニコイチの燃料って、僕なんじゃないかって思うんです」

「？……どういふこと？」

「こつちに来る前に本で読んだことがあるんですが……曰く、感情をエネルギーにするって」

「……」

「もちろん、なにかの論文なんかじゃなく、小説のフィクションですがね。特殊な機器で意思を感じて、それを他のエネルギーに変換するっていう。つまりこのS字の管は、コクピットで得た僕のことを変換装置に送るための物じゃないかって……もう少し解かり易く言えば、ニコイチを肉体として、僕はその魂にあたるといったところか。ただ僕は、こういう心身の二分化という考えがあまり好きでないので、すぐく馴染み合ってる時に限って言えば、体の延長、義手・義足なんて表現を借りて『義体^{ぎたい}』って考えてるんですが……」

周りを意識の外に置いて一気に持論を言うと、光秋は伊部にゆっくりと意識を向ける。

「……」

伊部はなにも言わず、ただ遠くを見る目を寄こす。

「……当初の質問と少しズレてしまったみたいですが……要するに、ニコイチのエネルギー源は僕かもしれないってことです。ちょうどイスの頭掛けにも脳波を撮る為の腕がありますし、感情が高ぶった時に圧倒的に強くなったこともありますし……もちろん、厳密に調べたわけじゃないですが……」

「……」

補足を言つても遠い目を向けるだけの伊部に、光秋は漠然とした不安を覚える。

「……二尉からすれば、例え仮説でも、僕の言つてることなんて子供の空想にしか聞こえないんでしょうが……」

重く感じる沈黙に、光秋は思わず明文化された不安を呟いてしまう。

と、

「…………別に、そういうことじゃなくて……ちよつと、理解が追いつかなかつたつていうか……」

「はあ……」

伊部は慌てて応じるものの、光秋はパツとしない返事をする。

「……」

少し迷つてから、光秋はさらに続けることにする。

「ただ、どんなに現実離れたことでも、『あり得ない』とは、少なくとも言い切ることではないでしょう？ 現に僕からすれば、異世界の存在や超能力の実在なんて、ついこの間までフィクションでしかなかつたんですから。同じ理屈……とも言えませんでしょうが、本で読んだ様な感情をエネルギーにする機関が実在するかもしれない。そもそも人間が『知っていること』と、『知らないこと』の数を比べた時、どっちが多いと思います？」

「……知らないこと?」

「でしょ!一見不可思議に見える現象でも、それはあくまでも人間がそれを説明する知識を持つていないだけのことでしかない。もちろん、調査を続けられれば『解かること』になるんでしょうが……だから、いくら非理屈的に思えることでも、頭ごなしに『あり得ない』とするのは、どうかと思うんです」

「……まあ、一理あるよね」

光秋の少し熱のこもった話に、伊部はやや消極的な相槌を打つ。

「……ところで、そのこと大河原主任には話したの?」

「いいえ」

伊部の質問に、光秋はすぐに答える。

「さすがに、専門家に話す程の勇氣は……」

と、先程までの熱が抜けた弱々しい声で続ける。

「主任、というよりも調査班の人に話したことといえば、振動対策と基本構造くらいですかね」

「歩いても殆ど揺れない訳?」

「ええ……」

言うところ光秋は、マニュアルの概略図のコクピット部分を触れて拡大させる。

「ここを見てください」

「?……」

言いながら拡大図のコクピット正面を指さし、伊部はその部分に目を凝らす。

「表面との間に隙間がある?」

「ええ。コクピットそのものが1つの箱になっていて、周りの部品から少し離れてるんです」

「反発した磁石が宙に浮いてる様な感じ?」

「おそらく。ただ、これが磁力によるものかどうかは解かりませんが、こうすることで、歩いたり被弾した時の振動を伝わり難くしてるんですね。それでもときどき揺れるのは、さっきのS字管みたいに、どうしてもコクピットに繋がなきゃいけない部品から伝わってくるんでしょう」

「なるほど……振動を起き難くするんじゃないやなくて、伝わり難くしたのか」

「ええ」

「で、基本構造っていうのは?」

「ちよつと待ってください……」

伊部の言葉に、光秋はマニュアルの映像を全体図に戻し、新たにニコイチ全体の正面からの断面図を表示させる。

コクピットを中心に赤い骨組みが末梢に向かって1本ずつ伸びており、腹部はそれが左右3つずつに割れていて腹筋を想起させる。頭部には箱状の部品があり、それらを覆う形で外側を白い装甲が取り囲んでいる。

「ご覧の通り、けっこうシンプルな造りなんです。マニュアルによると、この赤い骨組みがコクピットで拾った僕の意思を適所に伝えて、よくやるイメージ操作を可能にしています。頭のこの箱は、モニターや通信機、あと空調なんかの管理をしてるそうで、これらを守るのが、ニコイチの特徴である白い装甲ですね。もともと、装甲の限界まではマニュアルにはありませんでした……さっきの『義体』の話に当てはめれば、箱は脳みそ、骨組みは骨格兼神経、装甲は皮膚にも見えますよね」

「確かに、言われてみればねえ……一応、機械の映像見てるってわかってるんだけど……ちよつと気持ち悪くなってきた……」

光秋の説明に、伊部はマニュアルから目を逸らしながら応じる。

「……」

そんな伊部の様子を見て、光秋は上体を前に向け直してマニュアルを自分の許に寄せ、その画面を項目の一覧に戻して左の肘掛に納める。

「僕は勝手に、頭の箱を『Nブレイン』、骨組みを『Nフレーム』、装甲を『Nメタル』と呼んでるんですがね」

「ふーん?……」

「ついでに、背中の円形の飛行装置を『Nクラフト』と呼んでるんですが……ある意味でコイツは、擬似エスパーマシーンですよ。感覚の強化や、推力らしい推力なしに空を飛んで。超能力者が備えてるものを機械的に付け加えた様な感じがします」

「確かにねえ……」

正面を向いた光秋の補足と感想に、伊部は操縦席の左側に背中をもたれ掛けて応じる。

——……7時か。少しのんびりしすぎたな——

左手の腕時計で時刻を確認した光秋は、両手を操縦桿に置くと、右ペダルを少し深く踏んでニコイチの速度を上げる。

しばらくして、ニコイチは演習場付近の上空にさしかかる。

——7時50分。なんとか間に合ったか……——

腕時計で時刻を確認しながら、光秋はホッと安心する。
直後、

「!」

機内に接近警報が鳴り響き、伊部は身構え、光秋は警報と同時に左から来る寒気を感じ、すぐにニコイチを静止させてモニターに目を巡らす。

と、

「！」

ニコイチの正面間近を1機の黒い飛行機が左から右へと高速で横切っていく。

「?……」

突然のことに、光秋と伊部に緊張が走る。

と、

(驚いたか? ジャップ。俺だよ!)

「その声!……タツカー中尉!」

左耳の通信機越しの嬉しそうな声色に、光秋は白色系の肌に短い金髪、青い目をしたアレク・タツカー合空軍中尉の顔を思い浮かべる。元来耳に自信がない光秋であるが、すぐ耳元で声を聞いたことと、自分のことを「ジャップ」と呼ぶ人はタツカーしかないということからそう確信する。

「タツカー中尉?」

「ええ」

顔を寄せた伊部の問いに答えつつ、光秋は右パネルのレーダー表示に目をやってタツカー機の影を探す。

が、

——レーダーの範囲内いると思うんだが……見当たらない？ステルス機か？——
そう思つてすぐに、正面側に漠然とした気配を感じる。

——……こつちか——

その気配に従つてニコイチを少し前進させると、右前方に向こうからも近づいてくる
黒い戦闘機を見つける。

——あれか——

そう思うと、通信機にタツカーの声が響く。

（お前にしちやあ遅いんで、ちよつと心配したぜ）

伊部が通信機に右耳を近づけるのを視界の端に見つ、光秋はマイクに吹き込む。

「それは……どうもすみません」

（ま、伊部二尉とのフライトなら、時間も掛かるか？）

「?……中尉、なんで二尉が一緒乗つてゐるって知つてゐるんです？」

（さっきの会話が無線から聞こえたんだよ）

「ああ、そうか……」

（とりあえず、今はここまで。また後で下で会おう）

通信機越しにそう言う、正面の戦闘機——タツカー機が比較的ゆっくりとした速度で
ニコイチの右横を通り過ぎていく。

光秋はそれを追う様にニコイチを振り返らせると、

「はい。そちらも気を付けて」

と、タツカー機の背に向かって返し、振り返って着地予定地へ向かう。

27 演習の前

学校のグラウンド2つ分はあろう広場の片隅にニコイチを着地させると、光秋は左膝を着かせてカバンを持った伊部二尉を地面に下ろし、自分も制帽を被ってカバンを右肩に斜め掛けし、リフトで降りてニコイチを収容し、そのカプセルを上着の胸ポケットに仕舞う。

と、

「おおい！2人とも！」

「！」

小田一尉の呼び掛けに、2人は後ろを振り返り、自分たちの許に駆け寄ってくる小田の姿を見つける。

「小田一尉、おはようございます」

「おはようございます」

伊部が挨拶し、光秋もそれに続く。

「おはよう」

2人の近くに來た小田はそう返すと、

「とりあえず、荷物置いて野營地の設置作業だ。あの辺で指示を仰いでくれ」と、後ろを指す。

「はい」

2人が同時に返事をする、

「野營地は夕方までに完成させないといけないし、他にもいろいろやる必要があるから。ペキパキ頼むぞ!」

小田はそう言つて来た方へ駆け戻つていく。

「慌ただしいな……」「じゃあ、行きますか」

「そうね」

光秋の言葉に伊部が応じると、2人は速足で小田が駆けていった方へ向かう。

野營地の設置作業が行われている所、その少し手前にある大量の手荷物が地面に直に置かれている所にカバンを置いた光秋と伊部は、速足で作業場の方へ向かう。

伊部が監督官らしき人を見つけ、2人でその許へ行くと、合軍の青い制服を着た中年くらいの男に今夜の寢室となるテントの設置を命じられる。ちやうど同じ作業に就いていた竹田二尉と合流し、3人で協力して作業を始める。

光秋は組み立ての説明書を見たり竹田たちの指示を聞いたりしながら、2人より半動作分遅れやや四苦八苦しながらも、なんとか作業をこなしていく。

—この手のことをあんまりやらなかったからなあ……そのツケか……—

それでもしばらくすれば一通りの作業にも慣れ、周囲の他の作業に興味を向ける余裕が出てくる。

青服・緑服問わず、殆どの人手は光秋たちと同じ緑色のキャンプで使う様なドーム型テントの設置に就いているが、中には小屋程の大きさがある白地に赤十字が描かれた病院用テントや、司令部となる緑屋根の脚長テント、光秋には何のためのものかよくわからない大型テントの設置に就いている者たちもいる。また、それらの合間を縫う様に大小様々な荷物を右へ左へ運んでいる者たちもいる。

と、

「……？」

光秋は藤原三佐と小田の姿が見えないことに疑問を感じる。

「竹田二尉」

「なんだ？」

竹田は作業を続けながら応じ、光秋も手を休めずに続ける。

「そういえば、藤原三佐と小田一尉の姿が見えないんですが、2人はどこです？」

「三佐は隊長たちの打ち合わせだろう？一尉は、オレたちとは違う仕事だろう？」

「……二尉もわからないのか？」

竹田の言い方から、光秋はそう感じる。

「……後で会ったら訊けばいいか――」

そう断じると、目の前の作業に集中する。

日もすっかり高くなった頃にテントの設置作業を完了すると、光秋は装備品の運搬作業に就かされる。

指示された積み下ろし場所へ行くと、トラックやテレポートによって運ばれた物資が部類ごとに仕分けして積まれており、その中から黒い丈夫そうな箱が積まれている所に向かい、内1つを両手で抱える様に持って所定の場所へ運ぶ。

「……重いな……箱自体も重いんだろうが、中身は銃器かな?――」

そんなことを考えながら歩いていると、

「……?」

後ろから右の肩周りを小突かれ、歩きながら振り返ると、同じ様な箱を両手で抱え持ってすぐ後ろを歩いている小田を見る。

「二尉」

「寝床の組み立て、終わったそうだな」

小田は光秋の右隣に着きながら言う。

「ええ」

光秋は歩きながら応じ、小田も歩きながら続ける。

「俺も朝からこうして荷物運びやってるが、そっちも昼までには終わりそうだな……ちよつと、疲れてないか？」

「大丈夫ですよ。この程度、昔からよくやってましたし、訓練漬けで基礎体力も伸びてるでしょうし。いい運動です」

小田の少し心配を含んだ声に、光秋は疲れを見せずに応じる。

「そうか……ああそうそう。大河原主任が呼んでたぞ」

「主任が？」

「ああ。作業がひと段落したらでいいんだが、装備の説明があるから後で来てくれと」

「わかりました。ありがとうございます」——なんだろう？……—

思いながら、光秋は小田と並んで歩を進める。

所定の場所に着くと、2人は同じ箱が並べられている所に箱を下ろし、光秋はその先で箱の中身の仕分けが行われているのを見る。

青服や緑服が箱から中身を取り出し、銃器や模擬弾を種類ごとに分けて並べており、その後ろは武器庫の様相を呈している。

——……物々しいな——

思いながら光秋は、小田を追う様に振り返って積み下ろし場へ向かう。

と、

「……？」

右前から箱を抱え持った制服が2人並んで歩いてくる。制服はデザインこそESSOや合軍のそれと同じなのだが、制帽からズボンまで白なのである。

——なんだ？……—

後ろへ行き過ぎていく白服たちを視界の端に見ながら、光秋は先に行く小田の右隣へ駆け寄る。

「一尉、あの白い服の人たち、なんですか？」

「ああ、さつきすれ違った奴らか？士官学校の生徒だよ」

「生徒？」

「ああ。白の制服は、士官学校生の制服なんだ。俺も昔着てたが……懐かしいな」

「……そうですか」

言葉通りの小田の懐かしむ顔に、光秋は短く相槌を打つ。

しばらくの間、光秋は小田と共に積み下ろし場と仕分け場の往復を繰り返す。

最後の箱を運び終わると、

「終わりましたね。さつき言ってた大河原主任ですが、どこに行けば？」

と、左隣に立つ小田に問う。

「その前に、今何時だ？」

小田の質問に、光秋は左手の腕時計を見る。

「12時5分です」

「なら、昼飯食ってから行けばいい。主任たちの方も飯の時間だろうし、遅れると炊事の連中に迷惑かけるからな」

「そうですか？」——……それもそうか。腹も減ったし、一尉の言うことも然りだしな——

「わかりました」

「ちようどいい。一緒に行こう」

「はい」

言うとき光秋は、小田の後に続いて食事に向かう。

食事場に着いた光秋は、小田の後に続いて食事を配っている列へ並び、配られた大小4つに区切つてある四角い一枚皿に盛られた食事を両手で持つて席を探す。

折り畳み式のテーブルが何列か並び、脚長テントの屋根で即席の食堂を成している所を見回していると、

「……？」

左隣に一枚皿を両手で持つて立つ小田に腕を小突かれ、視線を追つて左側に目をやると、

「……！」

藤原と竹田、伊部が集まって食事をしているテーブルを見つけ、小田と共にそこへ向かう。

「おー！尉、加藤もか」

「……」

2人に気付いた竹田に、光秋は一礼を返し、竹田の正面に座っている伊部の右隣の丸椅子に着き、小田は光秋の正面に着く。

「おお！今食べ始めようと思ったところだ。やつと隊全員揃ったなあ」

竹田の右隣りに座る藤原はそう言いながら、右手に持った箸を一枚皿に伸ばす。

光秋も手を合わせ、箸に右手を伸ばす。

と、

「よう！ジャップ！」

「！タツカー中尉！」

合軍の青い制服を一式着こんだタツカー中尉に呼び掛けられ、タツカーが自分の右隣に着く。

「お前も来てんのかよ……」

竹田が嫌そうな顔で呟くと、

「二尉、食事時にケンカはなしですよ」

白衣を羽織った上杉が光秋の右前に着きながら言い、

「そうそう。明日には協力して戦うんだし」

青服一式を着た横尾中尉が後を続けながら、伊部の左隣に着く。

「富野大佐も来てるんだよね？」

「うん。でも今は軍の偉い人たちと別の場所で食べてるみたい」

伊部の問いに、横尾は右手に箸を持ちながら返す。

——富野大佐……—

その名を聞いて光秋は、短い黒髪をした若い印象を持つ顔と、「蜂の巣」戦の後に藤原を通して言われた、自分は激励と捉えている言葉を思い出す。

——『このままで終わるか、上に行く者の1人となるか、君次第だ』……—

と、

「……！ピュア！遅いぞ」

「すみません、混んでて」

「？……」

タツカーに応じた聞き覚えのない声色に、光秋は右側に目をやると、白い制服を一式着た短い黒髪に光秋と同じくらいの体つきをした、歳も大して変わらない様に見える男

が上杉の左隣に座るのを見る。

と、

「純！」「純君！」

「？」

横尾と伊部の驚いた声に、光秋はそちらに顔を向ける。

「どちら様です？」

「横尾純君。フミの弟さん」

「弟？……」

伊部の返答に、光秋はそう思いながら右端の白服に視線を向ける。

「なんだ？横尾中尉とピュアって姉弟きょうだいだったのか？」

「ええ……というか、中尉と姉も知り合ってたんですか？」

タツカーの驚きを含んだ問いに、純も少し驚いた調子で返す。

「知り合いというか……まあ知り合いだな……」

タツカーの歯切れの悪い返答に、光秋は右手に箸を持ちながら、

「関係の切っ掛けは、綾だもんな。機密に触れるから、はつきりとは言えないか……」

――

と、小田と藤原を意識の隅に捉えながら思う。

それがわかってか、横尾は話しを逸らす様に、

「ところで、純が空軍士官校に行ってるのは知ってたけど……中尉、教官でも教導隊でもないですね？」

と、タツカーに尋ねる。

「ああ……経験者の声を聴くつてことで、偶に学校の方に顔を出すんだよ。それが切っ掛けで知り合ったんだ」

「そっかあ……」

タツカーの返答に、横尾は頷きながら返す。

「そんな授業もあるのか……」

光秋はそう思いながら白飯を口に運んでいると、

「……ところでひよつとして、あなた白い犬さん？」

と、純に好奇心の目で問われる。

「え？……」

口の中の物を飲み込みつつ、突然のことに戸惑った光秋は横尾と藤原に顔を向ける。

「大丈夫、純は『言うな』って言ったことは言わないから」

「はあ……」

横尾の言葉に応じながら、光秋は純の方へ顔を向け、

「そうですが?……」

と、声の大きさに注意して答える。

途端に純は目を輝かせ、

「本当に!」

と、嬉しそうな声を上げ、光秋の方へ身を乗り出す。

「同世代のエースとこんな所で会えるなんて感激です! あ! 握手してください!」

「!?……」

興奮気味な言動に圧倒された光秋は、箸を置いて右手を差し出し、それを純に両手で力強く握られる。

「ありがとうございます!」

嬉しそうに言いながら純が頭を下げて椅子に座り直すと、

「ところで、あんたなんで加藤君が白い犬だつて知ってるの? 機密に触れるから私は一切喋ってないはずだけど?」

と、横尾が問う。

「タツカー中尉の話に最近よく出てくるんだよ。もちろん名前は伏せてたけど、『メガネのジャップがすごい』って」

「……ちなみに、どんな話です?」

純の返答から、光秋は漠然と嫌な予感を感じる。

「えつと……UKD-01の飛行実験中に割り込んできたサン教の戦闘機を実弾なしで全滅させたとか、専門家でも手が付けられなかった高レベルサイコキノを手懐けたとか、あとは……」

「ちよつと待った!」

思わず手をかざして純の話しを止めた光秋は、居心地が悪そうな顔をしているタツカーを見る。

「中尉、勝手に話を作らないでくださいよ!」

「んん……」

タツカーはバツが悪そうに俯く。

「えーじゃあ、全部嘘なんですか?」

「……」

純の驚いた顔に、光秋は少し考えてから、

「実弾なしで戦闘機を撃退したのは事実です。ただし全滅じゃない。他の話も、なにを話したかは知りませんが、事実を少し誇張したものでしょう」

と答える。

「そうなのか……」

と、純は少し残念そうな顔をしながらも、

「……でも、誇張の分を差し引いたって、やっぱりすごいと思いますよ」

と、嬉しそうに言う。

「……ありがとうございます」

と、光秋は軽く頭を下げて言いつつ、

「そういうもんか？……そういうもんか……普段の弱々しさを知ったら、がっかりするだろうなあ……」

そんなことを考えてみる。

と、

「……！ そうだ！ 主任が呼んでたんだ！——」

思い出し、殆ど手を付けていない食事を急ぎ足で平らげる。

一同の中で真っ先に食事を終わると、

「ごちそうさまです。一尉、主任はどこに来るように言っていましたか？」

と問う。

「大型装備の保管場所だ。さっきまで俺たちが箱を運んでた場所の近くだぞ」

「ありがとうございます」

言うのと光秋は席を立て皿を返却場に返し、今朝カバンを置いた場所へ向かう。

大型ポリタンクの水で菌磨きを済ませた光秋は、速足で装備品置き場へ向かう。

「……！」

山積みの弾薬の中に白髪に灰色のツナギを着た後ろ姿を見つけると、

「大河原主任！」

と、その背中に呼び掛ける。

「！おお、三曹！あ、いや失礼。二曹になったんだったな」

大河原は振り返りざまに言い、光秋はその前で止まる。

「装備について話があると聞きましたが、なんでしょう？」

「うん。ちよつと来てくれ」

言う大河原は振り返って歩き出し、光秋もその後が続く。

少し移動すると、2人は正面に、黒い6つの砲口を持つ巨大な銃器が置かれた台を認める。

「ニコイチのガトリング砲ですね」

「そうだ。ただNP蜂起制圧戦の報告を受けて、若干の改良がしてある。あそこを見てくれ」

光秋の確認に、左隣に立つ大河原は砲の持ち手側を指す。

「？……！」

目を凝らした光秋は、持ち手の引き金近くに一の字に伸びる短めの突起を見つけ。

「あの突起ですか？」

「そう。制圧戦の報告で、君、両手が塞がると照準器が点けられないと報告したな」

「……あ、確かに」

大河原に言われて、光秋は小田にその様なことを言ったことを思い出す。

―綾のことでいろいろあつて、忘れてたんだな……―「で、あのツマミで点けられるんですか？」

「ああ。注文通り片手でな。下に傾けるとレーザーポインターが点く。水平に戻すと消える仕組みだ。N砲にも同様の改良がしてある。ただ、構造の複雑化を防ぐため、支持棒の点灯機能は廃止させてもらった。初めのうちは慣れてきたのと変わって戸惑うかもしれないが、気を付けてくれ」

「了解です」

「それと、もう一つ見せたい物がある。こっちへ」

「?……」

大河原に言われて、光秋は再び後を追って歩き出す。

ガトリング砲を挟んで反対側に着くと、振り返った大河原は、

「これだ。見てくれ」

と、右手で横の台を指す。

「?……!」

大河原の手を追って左側を向いた光秋は、台の上に置かれた巨大な一枚板の様な物を目にする。

緑色をしたほぼ長方形のそれは、一辺が緩い弧を描いており、その少し手前にはコの字を縦にした様な持ち手らしき物が付いている。

「これは?……」

「ニコイチ用の盾……というより、防具と言うべきかな?」

正面を向きながら言われた光秋の問いに、大河原は一枚板を見ながら答え、説明を始める。

「戦車用の装甲を流用して、手から肘までを覆うように作った。何枚か重ねてあるから、戦車砲なら種類にもよるが2発は耐えられるだろう。気休め程度だろうが、ないよりましだろう」

「防具?」

光秋はすぐに浮かんだ疑問を口にする。

「なぜわざわざ? Nメタル……その、僕が勝手にニコイチの装甲をそう呼んでるんですが、あれはもともとかなり丈夫にできています。確かに、いつまでも持つという保証は

ありませんが、追加装甲の様なことをしなくとも……」

一氣に言った光秋に、大河原は顔を合わせて応じる。

「確かに、手ぶらの状態でも充分な防御力があることは実証されている。だが君が言った通り、限界がわからない以上、備えておくに越したことはない。加えて、君自身のためでもある」

「?……僕自身と言いますと?」

「ニコイチが被弾すると、それが痛みとして君にも伝わるんだろう? 京都駅テロ阻止の報告書で読んだよ」

「はい……?」

「痛みの度合いにもよるだろうが、それによって、『パイロットの心身に異常が起こり、作戦に支障をきたす可能性アリ。補助的な防具装備の開発を求める』と、報告書にあったんだ。そうならばと、あり合わせで作ってみたんだ」

「?……テロ阻止の時、僕は痛みのことなんて報告してない……! まさか、伊部二尉?」

そう考えると、光秋は伊部が痛みのことを心配してくれたことを思い出す。

——二尉が……——

思いながら盾に目をやると、少し嬉しくなる。

「そういうことなら……確かに必要かもしれませんね」

呟く様に言うと、光秋は顔を前に向け、

「ありがとうございます！大河原主任」

と、少し深めに一礼する。

と、大河原は、

「いや。礼を言うのはこっちだ。寧ろ謝らねばならんな」

と、すまなそうな顔で応じる。

「う……どういことです？」

「ニコイチでの運用実績次第では、『ゴーレム』の正式装備に採用するかもしれない。それを言ったら、他の装備やゴーレム・タンクもだがな。要するに、君を半ばモルモット扱いしているということだ。が、現状ではニコイチしかないのだから、その辺は勘弁してほしい」

「それは……」

少し深刻な内容に、光秋はそれ以上言えなくなる。

と、

「……！」

『ゴーレム』の名前が出たことを思い出し、光秋は雰囲気を変えることも兼ねて前から抱

いていた疑問を問う。

「そういえばゴレタン、あ、僕が勝手に付けたゴーレム・タンクの略なんです、アレの型番、H……」

「PHM—01か？」

「そうです。どういう意味なんです」

『Prototype Human Machine』、日本語に直せば、『人類の機械の試作品』と言ったところか？ニコイチが一応異種族によつて作られたことに対応して付けられたんだ」

「なるほど……でえ、正式機の『ゴーレム』の方はどうなんです？」

「ん……最大の問題である脚の完成の目処も付いたし、今年中か、年が変わつてすぐの頃には試作機1機ができるといったところか」

「……そうですか……」——もう少し考えて喋るんだったな……—

訊いてしまつて、光秋は少し不安になる。

「?……どうした？」

「ああいえ、うつかり訊いておいてなんですが、少し気になってたんです。図らずとも自分がこの世にもたらした物が、世の中を変えていく。それが物々しい方向に進んでしまふかもしれないことが……」

「物々しいって?……」

「例えば……その新しい物が原因で、新しい争いが起こってしまう、とか……」

「……」

光秋の言葉に、大河原は口を結んだ渋い顔を返す。

「……まあ確かに、人間の歴史とはそういう側面があるのも事実だな。君の所はどうか知らないが」

「僕の方も同じですよ」

「そうか?……まあそれでも、もしそうなった時に気に病むのは、君ではなく我々開発者の仕事だよ」

「え?」

「それはそうだろう?ニコイチはまだしも、『ゴーレム』は我々この世界の人間が作ったんだ。それで問題が起これば、作った者が責任をとるのが道理だ……もつとも、ESOや合軍の管理体制を営めちやいかながな。『ゴーレム』、及びそれに続く兵器群は、合衆国政府の下にある!万が一その構図が壊れた時、その時にそれを戻すことが君の役目だよ!」

「はあ……」

大河原の若干櫛が籠った言葉に、光秋は少し圧倒される。

と、

「……」

大河原は熱が引いた顔をし、先程より落ち着いて続ける。

「……その、我々が責任をとると言った後で、君に後始末を押し付ける様なことを言ってしまったな……とにかく！万一の時に汚名を頂くのは我々だ。それに関して、君は心配しなくていい。それ以前に、君はもう少し自分の所属する組織の管理力を信じたまえよ」

「……はい」

半ば励ましてもらった手前、光秋はそれ以上のことを言えなくなる。

と、

「……」

模糊とした気持ちを隅に押しやろうと、光秋はあることを思い付く。

「主任……その完成品した『ゴーレム』ですが、部類上どこに置かれるんです？」

「……部類というと、どういうことだ？」

「例えば……戦闘機はいろいろ種類があっても、結局『戦闘機』という部類に分けられますし、戦車や軍艦にしても、最後はそれぞれの部類に置かれます。それと同じ様に、『ゴーレム』はどこに置かれるのかと思います」

「そういうことか。しかし、そうだなあ……」

言いながら大河原は腕を組み、眉間に皺を寄せる。

「ゴースト・タンクならぎりぎり戦車に置きそうだが、履帯や車輪がなく、脚で移動するような物となると……新しい部類を作るしかないだろうな。寧ろ、その方が一番落ち着くかもしれない」

「やっぱり、そうなりますか」

予想通りの展開に、光秋は沈んでいた気持ちに少々の活気が生じるのを感じる。

「なら、お願いがあります」

「なんだね？」

「その新しい部類の名称ですが、『メガボディー』としていただきたいんです」

「『メガボディー』？」

光秋が真つ直ぐに目を合わせて言った言葉に、大河原は目を丸くする。

「……直訳すると、『巨大な体』という意味だが？」

「その通りです」

光秋は大河原の目を見続けながら言う。

「ニコイチに乗っていると、自分の境界が曖昧に感じるものがあるんです」

「『蜂の巣』戦の報告にあったようにか？」

大河原の問いに、光秋は一瞬顔を曇らせるものの、すぐに続ける。

「……あんな特殊な場合に限らず、普段の操作でも我が身の様に、いえ、そのものと言つていいほどの一体感を感じるんです。そんなニコイチが基になっていいるなら、それに続く物にも、せめて名前だけでも同じ様な感じを出してあげたいんです。それに、小難しい上に物々しい名称とその略語を付けられるより、シンプルかつそんなに物騒な感じがなくていいじゃないですか」

「んーん……」

一氣に言うと、大河原は腕を組み直して考え込む。

「……わかった。俺の一存では決められないが、候補として上に報告しておこう」

「ありがとうございます！」

光秋は制帽を脱ぎ、深く頭を下げる。

と、

「ここにいたかあ」

「?……!」

知っている声に制帽を被り直して首を巡らせると、後ろから歩み寄ってくる竹田と上杉を見つめる。

「二尉、なにか?」

「いやあ、一尉にお前がどこになにしに行つたかつて訊いたら、ニコイチの装備の話だつて聞いて、面白そうなんでオレも見に」

「オレは二尉に誘われて」

竹田に続いて上杉も答える。

「うおーこれ新装備かよー」

盾を目にした竹田は、光秋たちを眼中の外に置いてその許に駆け寄る。

「二尉、ガキじゃないんだから……」

光秋の右隣に着いた上杉が、少し呆れた顔で言う。

「二尉！午後からまたすることあるんじゃないんですか？」

「三佐はなにも言わなかったし、一尉はオレたちがここにいて知つてんだ。用があつたら呼びに来るつて」

光秋が少し大きい声で訊くと、竹田は答えつつ、移動しながら盾を舐める様に見つめる。

と、

「あの二曹、彼は？」

大河原が上杉を見ながら光秋に尋ねると、上杉は自ら、

「ああ、上杉勇児、ESOの専属医です。そちらは、大河原主任ですね？二尉からときど

き聞いてます」

と、自己紹介する。

「ウエスギ?……ああ! 君がか」

「?……大河原主任つて確か、もともと本部の所属ですよ?……え! ひよつとしてオレ、本部でも有名ですか!」

大河原の少し驚いた顔に、上杉は嬉しそうな顔をする。

「ま、まあな……」

それとは対照的に、応じる大河原の顔は少し気まずい表情になる。

そんな大河原を見て、光秋は夏に大河原から聞いた上杉の評判を思い出す。

—そういや、あんまりいいもんじゃなかったよなあ……『女にだらしない』……—
思いつつ、大河原に同情を覚える。

と、

「なあ加藤!」

盾を見終えた竹田が、2人の気まずさを吹き飛ばす様な覇気のある声で光秋の左隣に歩み寄ってくる。

「コレ、試しにニコイチで持ってみろよ」

「今ですか?……」

盾を指しながら言う竹田に、光秋は大河原を見る。

「いや、せつかくだからそうしてもらおうか。本番までにある程度慣れておいた方がいいだろう。ついでにガトリング砲の方も」

「……わかりました」

大河原に応じると、光秋は真後ろを向いて上着の内ポケットからカプセルを取り出し、正面に左膝を着くニコイチを出現させる。

カプセルを内ポケットに戻すと、駆け寄って搭乗し、認証を済ませるとすぐに立ち上がって台の方へ3歩程前進する。屈んで左手を盾に伸ばし、手の甲を下にしてその持ち手を掴む。右手でガトリング砲の持ち手を掴むと、そのまま立ち上がり、砲と盾を持った両手を下ろした直立の姿勢をとる。

「こんなところか？」

（いいじゃねえか！様になってるぜ！）

外音スピーカーから竹田の興奮した声が響く。

それを聞いた光秋の意思を拾って、大河原、竹田、上杉が写る拡大映像がモニター正面に表示される。

（せつかくだ、決めポーズの1つもとってみろよ！）

「ポーズですか？」

はしやぎ声で言う竹田に、光秋は外部スピーカーを作動させて訊き返しつつ、

「じゃあ……」——ついでに……——

と、左腕を正面に構えて盾を前に出し、その腕を素早く腰に引いて入れ違いにガトリング砲を前に向け、

「！」

空に狙いを定めると同時にニコイチの親指で持ち手の突起を下ろしてレーザーを点け、引き金を引く。

（いいじゃん！いいじゃん！決まってるじゃん！カメラ持つてくりやよかったなあ）

弾倉を付けていないガトリング砲の砲身が勢いよく空回りする下で、竹田の興奮した声が響く。

（二尉、それは困るな。装備品もニコイチも重要機密に属するんだ。無許可の撮影は禁止だぞ）

「主任、もう少しガトリング砲を持たせてください。先程仰った様に、慣れておきたいんです」

大河原の注意の声を聞いた光秋は、外部スピーカーに吹き込む。

（かまわんよ。君が使うんだし、時間も押している。存分にやってくれ）

「ありがとうございます」

言うとう光秋は、親指で持ち手の突起を元に戻してレーザーを消し、屈んで盾を台の上に戻す。

「二尉もそろそろ戻った方がいいんじゃないですか？加藤の見てて思ったんですけど、ゴレタンの動作確認とかあるだろうし」

「ええー？……でもなあ……」

上杉の指摘に、竹田は未練らしい目でニコイチを見上げる。

「それがいい。練習不足で事故なんて起されたら洒落にならんからな」

大河原が真顔で言う。

「ほら、主任もああ言ってるんですし」

「うん……」

上杉に促された竹田は渋々振り返り、少し重い足取りでこの場を後にする。

「……」

大河原も用を思い出したのか急ぎ足でこの場を去り、ニコイチだけが残される。

28 光秋と曾我

大河原主任たちの様子を拡大表示で確認し、独りになった光秋はニコイチを立ち上がらせ、左手でガトリング砲の支持棒を掴んで両手保持する。

「……！」

ハツとした光秋は素早く後ろを振り返り、砲口を真ん前に向けてレーザーを点ける。
が、

「？……！」

習慣的に持ち手の突起ではなく、支持棒を回してしまう。

「いかなあ……」——支持棒の方が癖になつてる。が、慣れないと困るからな——

そう思つて気を取り直すと、ガトリング砲を下に下げる。

「……！」

素早くガトリング砲を前に構え、持ち手の突起を下げたレーザーを点けて引き金を引く。

——よし——

ちゃんとできたことに若干の勢いを得ると、体勢や向きを何度も変えて発砲の動作を

体に覚えさせる。

しばらくして、動作の覚えに自信を持つと、

「こんなところか?・・・」――せつかく出したんだから――

と、発砲の動きに突きや蹴りなどの格闘戦、近くの敵を想定した動作も加えてみる。散発的に発砲しつつ距離を詰め、腰溜めにした左突きを放つ。振り返りざまに左蹴りを出す。

そうした流れから、右ペダルを踏んで空中戦の訓練に入る。

両手保持したガトリング砲の引き金を引きながら高速で前進する。撃つのをやめると同時に、敵がいると想定した空域を視界の中心に見据えつつ急上昇をかける。急停止すると同時に砲を右手で持ち、両腕と左脚を腰に引いて右脚を地上に向けて真っ直ぐに伸ばし、

「!」

落ちる様に想定空域に右蹴りを放つ。樹林の先に接触する寸前に蹴りの体勢を解いて急停止し、ゆつくりと高度を取り直す。

「なかなか、いいかな?……」

思い通りに動いてくれるニコイチに、光秋は少し気分よく呟く。

直後、

「?」

光秋はモニター越しに漠然と視線を感じる。ニコイチの感知機能の精密さから思い過ぎの可能性をすぐに捨て、辺りを見回してみる。

と、

「……!」

背後を振り返るや、上空に浮かんでいる人影を見つける。

光秋の意思を拾った拡大映像が表示されると、その中に緑服一式を着た長い茶髪の女を見る。

—あれは……!—

光秋の脳裏に、どこか他人ひとを小バカして接してきた女の記憶が思い浮かぶ。

「曾我さん?」

かなり印象が強い記憶に、元来名前覚えが悪い光秋でさえすぐに思い出してしまふ。と、

(その声! やっぱりこの間のワンちゃん?)

——……しまった! 外部スピーカー入れっぱなしだった! —

映像内の曾我の驚きに、光秋もハツとしてしまふ。

その直後、曾我は驚きの表情を吹き消し、以前の様に他人を小バカにする様な、下目

づかいな表情になる。

（それならそれでいいわ。あなた、確か二曹だったわよね。上官として命じます！ソコから出てきて顔見せなさい！）

—上官つて……あ、特エスは准尉相当だったな……—

一応の納得をすると、光秋はハッチを開いて席を機外に出しながら制帽を被り直し、曾我を直に見ると黙って敬礼をする。それが最も無難に思えるからである。

「おもしろそうなことやつてるじゃない？」

曾我は微笑みを浮かべながら言う。

「……」

もつともその笑みは、光秋の背筋に寒気を与えてくる。

「……明日が本番なんで、最終訓練にと……」

「フーン？……」

寒気を払った光秋が応じると、曾我は胸の前で両腕を組み、少し考え込む。
と、

「！」

何か思い付いた顔をし、不敵な笑みを浮かべる。

「じゃあ訓練ついでに、アタシとひと勝負しない？」

「勝負？」

「そ。その大砲、レーザーポインターが付いてるんでしょう？それで10分以内にアタシを捉えられたら君の勝ち。どう？」

「『どう』、と言われても……」――遊んでる暇なんて……――

「いいじゃない。君には動きまわる的を捉える訓練になるんだし、どの道アタシが命令すればそれまでだしね」

――……それもそうかあ――

曾我の最後の言葉に、光秋は納得、というよりも諦める。

「では……お願いします」

言うとき光秋は席を機内へ下ろし、ハッチを閉めて制帽を膝の上に置き、いつでも始められるようにする。左手首の時計に目をやると、1時20分を指そうとしている。

モニター正面に映る曾我也、左手首の腕時計を見る。

（それじゃあ、行くわよお………スタート！）

――この時計で30分まで！――

左手を操縦桿に置きつつ時間確認をした光秋は、すぐにガトリング砲を両手保持して砲口を曾我に向ける。

が、向ける直前に曾我は素早く上昇し、それを避けてしまう。

——やっぱり！簡単にはか？——

心中に呟きつつ、光秋はすぐに砲口を上に向ける。

が、その間に曾我はニコイチの後ろに回り込んでしまう。

「……！」

それを追って後ろを振り返ると、視界一面を細かな大量の塵が覆い隠す。

「何だあ？」

（下に落ちてた枯れ葉や土を巻き上げたのよ！これくらいやらなきや、おもしろくも訓練にもならないでしょ）

思わず上げた驚嘆の声に、曾我が若干の笑気を含んだ声で答える。

——念力か！——

思いつつ、光秋はニコイチの目を四方八方に向けてみるが、どの方向も塵が視界を塞いでいる。

「クッ！」

小声で呟くと、右ペダルを一杯に踏んで急上昇を行い、なんとか塵の中から脱出する。

「……」

視線を下に向けると、塵でできた巨大な球が上の方から散り散りに崩れていくのを見る。

—ニコイチを核に球状に覆つてたのか！道理でどこを向いても……—

思うと光秋は、右パネルのリーダー表示に目をやる。

—さすがに小さすぎてコレには映らんか……なら！—

パネルから目を離すと右ペダルを踏んでさらに上昇し、モニターを隅から隅まで舐める様に注視する。

「……！」

曾我を見つけるという意思を拾ったモニターが視界の右下に拡大映像を映し出し、その中に上空を見上げる茶髪に緑服の女が映し出される。

—いた！—

思うと同時に拡大映像と入れ替わって表示された赤丸のマークに砲口を向け、レーザーを点けようとする。

が、

「あつ！」

誤つて支持棒を回してしまい、レーザーを点け損ねる。

「また！」—やっぱり癖になつてる！—

思わず心中に自分を毒づく。

直後、

「！」

光秋はモニター越しに塵の塊が猪突して来るのを見、慌てて右に大きく移動してそれを避ける。

その間に、再び曾我を見失ってしまう。

——さっきの間が隙になったか！——

一瞬の後悔を抱きつつ、再びモニターを走査する。

が、直後、

「！」

左前から軽い圧力の様なものを感じ、咄嗟に右に避けて視界の左端を塵の塊が過ぎていくのを見る。

——クソオ！何処だ？——

心中に毒づきつつ、光秋は砲口を真ん前に向けて視線と同期させ、ニコイチを縦横に振って曾我を見つけようとする。

と、

——……いかん！気が立ってる。これじゃ見つかるものも見つからない……—

そう自覚した光秋は、ニコイチを振るのを止め、一つ鼻で深呼吸し、自分を落ちつけようとする。

—コイツの機能と、なによりも自分を信じる……—
 そう自分に檄を飛ばすと、砲口を下に下ろし、平静になるよう努め、じつと宙に止まる。

「……」

と、

「……」

真後ろから寒気を感じさせる笑みを含んだ視線を感じると同時に、素早く振り返って視界の中央に小さく見える曾我とそれに重なるマーカーを捉え、砲口を前に向けて持ち手の突起を下げてレーザーを点ける。

が、レーザーが点く直前に曾我は上に避け、狙いを外してしまう。

—クッ……が、今の調子でいけば勝てる!—

外しながらも曾我に掠めるまでのことができたことに自信をつけ、光秋はレーザーを消してニコイチを上昇させつつ、目で曾我を追う。

その頃。

2人が空戦を行っている辺りから少し離れた場所では、移動中だった青服の高官たちが足を止め、木々の合間から見えるその様子を興味深い目で見物している。

5人いる高官の内4人は、頭に白いものが混ざっていたり、顔に小皺が刻まれたりし

ている年配者なのだが、その中に一人、黒い髪を短く切り揃え、顔つきから「若い」という印象を抱かせる男がいる。合衆国陸軍大佐、富野平造^{へいぞう}である。

「下を飛んでる大きい方は、新兵器の01だな。上の小さい方は？……」

「ESOの特エスでしょう？ なんであれ、訓練熱心なのはいいことだ」

「そうですね。これで我々が地球合衆国も安泰といったところか……」

高官たちが口々に言うことに、富野は社交辞令で応じる。

が、一方でその目には、どこか懐かしいものを見る色がある。

「……」

曾我に再びマーカーを重ねると、光秋はすぐに砲口を上に向け、持ち手の突起に右の親指を掛ける。

が、

「！」

背後から軽い圧迫を感じ、上昇を続けつつも左に回避し、視界の右端を塵の塊が過ぎていくのを見る。そのために一瞬曾我から目を離してしまつたが、表示し続けているマーカーのおかげで見失うことはない。

——今度こそ！——

思いつつ、光秋は再び砲口を上に向けて曾我の背に合わせ、持ち手の突起に指を掛け、

「……！」

突起を下ろしてレーザーを点ける。
が、

「！」

レーザーが当たる直前、曾我は左へ大きく動いてそれを避けてしまう。

——惜しい！……！

思うと光秋は、左手首の時計に目をやる。

「25……6分か」——あと4分……！

その認識に、再び気が立ちそうになる。

——……いかん、また！……落ち着け！まだ4分ある！——

そう思うと、右ペダルを踏んで上昇速度を上げ、適当な高度で滞空して下を見る。

「……！」

すぐに曾我を捉えたマーカーを視界の右上に見つけると、ニコイチを下に向け、両腕を伸ばして砲口と視線を一直線にし、マーカー目掛けて急降下する。

「……！」

マーカーが徐々に拡大していくのを見つつ、持ち手の突起に親指を掛ける。

それに気付いてか、曾我は射線の上方へ逃れるが、光秋は焦らずに曾我を追って砲口

を上方へずらし、接近を続ける。

「……」

いよいよ樹上が迫ってくると、その少し前で弧を描く様に水平飛行へ入り、樹上すれすれの高度で曾我の後を追う。

「……」

右ペダルを深めに踏み、曾我との距離を詰める。

「……今……」

距離を詰めたと確信するや、親指で突起を下ろす。

が、

「！」

直後に曾我は右に逃れる。

しかし、

「……………」

一瞬後に砲口を右に向け、レーザーポインターに曾我の背を捉える。

「……………終わった？」

眩きつつ、ペダルを徐々に上げてニコイチの速度を落とし、少し進んだ辺りで滞空すると、レーザーを消したガトリング砲の砲口を下ろし、振り返って曾我がいるであろう

辺りを見る。

と、曾我がゆつくりとこちらへ近づいてくる。

（今何時？）

外音スピーカー越しの曾我の問いに、光秋は左手首の時計を見る。

「1時……28分です」

（始めたのがだいたい20分頃だから、制限時間内、かあ……）

言いながら曾我は、ニコイチのハッチの上に降り立つ。

（ちよつと出てきなさい）

「はい……」——この状態で開けて大丈夫かな？——

ハッチ上の曾我を気にしつつ、光秋は左肘掛の白いハッチ開閉ボタンを押す。

光秋の意思を拾ってか、ハッチはいつもよりゆつくりと開き、開き切ると左肘掛のレバーを上げて操縦席を機外へ出す。そうしながら、膝の上の制帽を被る。

機外へ出ると、正面に胸の前で腕を組んで立つ曾我を見る。

「ま、手加減してあげたとはいえ、なかなかやるじゃない？」

「はい……」

他人を小バカにする視線を向けながら言われた言葉に、光秋は無難そうに返事をする。

と、

「……ただ……」

「?……」

曾我が呟く様に言った直後、曾我から伝わってくる背筋が寒くなる様な雰囲気、少しながら弱まったように感じる。

「……明日の本番は今みたいにはいかないわよ！組分けがどうなるかは知らないけど、別々になったら覚えてらっしゃい！」

下目づかいながら微笑んで一気に言うと、曾我は振り返って飛び立ち、上昇しながら光秋の許を離れていく。

「……」

その背に向かって光秋は、黙って敬礼をする。

——悪い人じゃないんだ……が、難しい人だ……—

遠退いていく曾我を見ながら、そんなことを思う。

「……さてと、訓練の続きしよう……あ、そうだ」

長くなると感じると、左肘掛から通信機を取って左耳にはめ、上着の内ポケットに入っていたカプセルを右肘掛に納める。

操縦席を機内に下ろしつつ制帽を膝の上に置くと、光秋は個人訓練を再開する。

29 演習前夜

それからしばらくの間、光秋は再びニコイチでの単独訓練に入る。

ガトリング砲に慣れる他に、飛行や格闘の訓練も休みを挟みつつ並行して行う。

午後2時50分。

ガトリング砲を元の場所に戻し、空中での格闘訓練を行っていると、左耳の通信機に連絡が入る。

（加藤。小田だ。至急野営地、お前たちが今朝テント組み立てた辺りに集合しろ。明日のことで連絡がある）

「了解、すぐに向かいます」

通信機越しに返事をする、光秋は左パネルの地図で現在位置と目的地の位置関係を確認し、ニコイチを2時くらいの方角に向けて前進する。

野営地の少し手前にある広場に着陸すると、光秋は通信機を納め、カプセルを取り出し、制帽を被ってニコイチから降りる。左膝を着いたニコイチをカプセルに収容してソレを上着の内ポケットに仕舞うと、野営地に向かつて歩き出す。

少し歩くと、緑色のテント群が見えてくる。光秋はその中に、藤原隊の誰かがいない

かと歩きながら目を凝らしてみる。

「自分のテントの場所訊いてなかったからなあ……」

と呟くと、

「加藤お！こつちだ！」

「……………」

返ってきた小田一尉の呼び声に首を巡らせ、左側のテントの合間に手招きしている小田を見付け、その許に速足で歩み寄り、軽く一礼する。

「お待たせしました」

「ん。こつちだ」

小田はそう応じ、振り返って歩き出す。光秋もその後が続く。

少し歩くと2人は、テントの前に藤原三佐、竹田二尉、伊部二尉が集まっているのを見、その許に歩み寄る。他のテントの前にも、同じ様な人の集まりがある。

「お待たせしました」

光秋は3人に向かつて一礼し、テントの入り口前に立つ藤原が、

「ウム。では、明日の演習についての連絡を行う」

と、左手に持った冊子に目を向けながら応じる。

「まずその想定だが、武装集団が合軍の仮設基地を占拠、正規軍がこれを奪還する。我が

藤原隊は正規軍の所属となる。集合時間は8時ちょうどだ。遅れるなよ。これ以上の詳細は、集合時に追って知らされる。また我が隊は今回、ニコイチとゴレタンの評価試験も務めねばならない。いつも以上に気を引き締めるように。またいつものことだが、演習とはいえ模擬弾等には少量の火薬も含まれているからな。くれぐれも、油断しないように。連絡は以上だが、何か質問はあるか？」

「……」

藤原の問いに、小田たちは沈黙を返す。が、光秋は、

「ウチは正規軍……あの紙によその隊のことも書いてあるのかな？」

と、藤原が持つ冊子に好奇心の目を向ける。

藤原は周りを見回し、質問はないと判断する。

「ウム。では各自解散して、訓練を再開するように」

「……」

「……」

藤原が言い終わると、小田たちは一斉に敬礼し、光秋も少し遅れて慌てて敬礼する。敬礼を解くと、小田たちは振り返ってテントから歩き出す。

と、

「三佐」

1人残った光秋は藤原に近寄る。

「なんだ？」

「その紙に、他の隊の配置も書いてありますか？」

言いながら、藤原の冊子を指す。

「ん？書いてはあるが？」

「少しの間貸していただけませんか？」

「どうかしたか？」

「いえ、ちよつと好奇心から……」

「ウーム……構わんが、訓練はいいのか？」

「休憩中に少し見るだけです」

「それならいいが……お前なら失くすこともないか」

「ありがとうございます」

言いながら藤原は冊子を差し出し、光秋は軽く一礼してそれを受け取る。

「儂はその辺りで鍛えとるから、読み終わったら持つてきてくれ」

「はい」

返事を聞くと藤原は前に歩き出し、光秋はその背に一礼する。

1人になった光秋は、明るい場所で読もうと野営地を後にする。

野営地から少し離れた広場に着いた光秋は、冊子をパラパラとめくり、

「……………」

「参加者所属一覧」と書かれたページを見つける。題の下には表が載っており、左から順に「名前」、「識別番号」、「所属部隊」、「演習時の所属」が書かれている。

試しに人さし指で表の細かい字をなぞりながら自分の名前を探してみる。

「……………」あつた――

題が付いたページの次のページの半ば辺りに自分の名前を見つけると、指を右に動かして「所属部隊」と「演習時の所属」を見る。

「『日本E S O 京都支部・実戦・一般・藤原隊』、『正規軍』……………」

表の見方を覚えると、ページを適当にめくって知っている名前を探してみる。

「……………」お、タツカー中尉か。所属は、『正規軍』か。同じ組だな。他は…………『横尾純』。さつき会った人だな。え…………『正規軍』かあ――

と、

「……………」

光秋の脳裏に、先程の曾我の言葉が浮かぶ。

「『組分けがどうなるかは知らないけど、別々になったら覚えてらっしゃい!』……………」
どうだろう?――

若干の不安を覚えつつ、曾我の名前を探してみる。

—曾我、曾我あ……—「あれ？」

「曾我」という名がいくつか書かれている箇所を見つけるが、「ガイア」と読めそうな文字は見つからない。

「……まさか……」

光秋は半信半疑ながら、指で表をなぞって目星を付けた名の「所属部隊」を見てみる。

—主任の名前は、三佐みたいな名前だったよな……—

そこには、「日本ESO東京本部・実戦・特務・藤岡隊」と書かれている。

—……やっぱりこの人か？—

思いつつ、光秋は「名前」に目をやる。

そこには、「曾我地球」と書かれている。

—『地球』と書いて『ガイア』かあ……なるほど。しかし親もすごい名前つけるなあ

……大地神かあ……—

感心しつつ、光秋は曾我の「演習時の所属」を見る。

—……！『正規軍』……—

同じ組と知って、少し安心する。

—少なくとも、雪辱戦でボコボコにされる心配はなくなつた……か？……—

不意に先程の曾我の記憶を思い出し、心中に再び小さな不安が起こる。

―僕あの人がどういう人間か、まだよく知らないからなあ……案外味方でも後ろから撃つたりして……いや、人を疑うのはよくないな！どの道明日になればわかることだし―

思うと光秋は、冊子を閉じる。

「さてと！」―休憩は終わりだ。三佐に返してこないと―

心中に呟くと、光秋は藤原を探し始める。

と、

「加藤くん！」

「！」

突然の呼び掛けに、声がした方に顔を向けた光秋は、左前に伊部を見る。

「二尉？……」

「休憩はすんだ？さつきからずっと待ってたのに」

「待ってた？……あつ！ニコイチの訓練……」

「そう！」

「……」

伊部の少し怒気を含んだ声に、光秋は身が縮む様な気になる。

「……………すみません」

「まあいいけど。とりあえず、それ三佐に返してこよう」

「はい」

応じると光秋は、伊部の後に続いて歩き出す。

「………」

広場の人影たちの中に藤原を見つけた光秋は、伊部と共に速足で歩み寄る。

「藤原三佐あ！」

「！」

光秋の呼び掛けに、周囲の青服や緑服たちに混じって訓練をしていた藤原は手を止めて顔を向ける。

「おお、加藤。伊部もか？」

「これ、ありがとうございます」

言いながら、冊子を藤原に差し出す。

「もういいのか？」

「はい」

「ウム……」

応じた藤原は、右手を伸ばして冊子を受け取る。

「どうだ、一緒に？」

藤原は左拳を示しながら光秋を訓練に誘うが、

「いえ……僕は今、コツチを優先しないと……」

光秋はそれを断りつつ、右手で上着の内ポケットからカプセルを出して示す。

「そうだったな」

「……」

光秋は藤原に一礼して後ろに振り返ると、

「二尉、お待たせしました」

と、カプセルからニコイチを出し、リフトに駆け寄る。

「……」

周りから見られている様な違和感を覚えつつ、

―感じ過ぎだろう―

と思うことでその覚えを隅に押しやり、操縦席に着いて認証を済ませ、カプセルを右肘掛に納め、通信機を左耳に付け、制帽を膝の上に置く。

右手で伊部をコクピットに乗せてハッチを閉めると、左膝を着いているニコイチを立ち上げらせ、右ペダルを軽く踏んでゆっくりと上昇させる。

高度を一定まで上げると、光秋は席の背もたれの左側に掴まって立つ伊部を見る。

「ところで、なにします?」

「そうねえ、三佐もないし……私はあくまで加藤くんのフォローだから、とりあえず支部ではできなかったニコイチの本格的な動きに慣れておきたいな」

「じゃあ適当に飛んだり、素振りしたりってこと?」

「うん。そうして」

「了解」

言う光秋は右操縦桿を前に倒し、ニコイチを前進させる。

「……」

意識の多くを操縦に向けつつも、横目で伊部の顔を見つめる。

——伊部二尉のこと忘れて勝手に休んだこと、まだ怒ってるかな?……いや!もう過ぎたことだ!いつまで考えててもしょうがない……だな。それより、目の前のことに集中しよう!——

心中に言い切つて気持ち切り替えると、光秋はニコイチを急停止させ、腰に引いた右拳を勢いよく前に放つ。

午後6時。

休憩を挟みながらの訓練を終えた光秋は、ニコイチを広場の片隅に下ろして左膝を着かせ、右手で伊部を地面に下ろす。左耳の通信機を肘掛に戻し、カプセルを取って制帽

を被り、自分もリフトで降りると、カプセルにニコイチを収容する。カプセルを上着の内ポケットに仕舞うと、伊部の許に歩み寄り、その右隣に着いて2人で食事場へ向かう。

伊部に続いて食事を受け取ると、周りを見回し、2人で食事ができそうな席を探す。と、

「……」

両手で持った一枚皿に一瞬視線を向け、若干の不安を覚える。

「カレーかあ……」

と、

「ジャップ！中尉！」

「！」

突然呼び掛けられた光秋は、左隣の伊部の視線を追って右側を見、少し離れた所に向かい合って座る青服姿のタッカー中尉と白服の横尾純を見つける。

「！タッカー中尉」

応じるや伊部に目をやり、軽く頷いたのを確認すると、2人でタッカーたちの許へ向かう。

光秋はタッカーの右隣に座りつつ、

「奇遇ですねえ」

と、タツカーと純に言う。

「俺たちはさつき訓練終わったところだから」

タツカーは応じつつ、右手のスプーンでカレーを口に運ぶ。

「僕らもです」

返しつつ光秋も、右手に持ったスプーンでカレーを口に運ぶ。

「……」

それを飲み込むと、光秋は喉の奥に軽い痒みの様な感覚を覚え、左手に持ったコップの水を一口飲む。

痒みが退くと、

「……そういえば、中尉の制服姿見るのも今回が初めてですね」

と、思い付いたことを言う。

「そうだったけ？」

「ええ。初めて会った時は飛行服でしたし、その後はたいい私服で……」

「……そうだったな」

応じるとタツカーは、カレーを口に運ぶ。

「……白い犬さんって、けっこうなことない話するんですね？」

光秋の左前に座る純が加わる。

「どんな話を期待してましたか？」

光秋は少々の好奇心を覚えつつ返す。

「どんなって……例えば、さりげなく武勇伝とか言うのかと……」

「僕はそんなものありませんよ。運よく——もしくは悪く——ニコ……01のパイロットになれたっただけで、その辺にいくらでもいる、当たり前の人間です……期待を裏切つてすみません」

「ああいや！裏切るなんて……」

冗談の声で言った光秋に、純は慌てて返す。

と、光秋の前に座る伊部が、

「ちよつと！純君の方が年上なんだから、そんなにあたふたしないの」

と、顔を向けて注意する。

「！……ボクの方が年上？」

伊部の言葉に純は、少し驚いた顔をする。

「そう。加藤くん、今確か……」

「19です」
じゅうく

「……ボクより3つ下なんだ……」

純は呟く様に言う。

「……」

光秋は、カレーを食べて水を飲む動作を繰り返す。
と、

「……！そういうば、まだちゃんと自己紹介してなかったですね」

言いつつ光秋は、スプーンを皿の上に置いて右手を純に差し出す。

「加藤光秋です」

「！横尾純です！こちらこそよろしく」

純は少し慌てつつ、右手で光秋の手を少し強く握る。

「えーつと……『純さん』でいいですか？『横尾さん』だと、お姉さんと混同しそうですね」

「ええ……じゃあボクも、『光秋君』で、いいですか？」

「僕の方はどう呼んでもらってもかまいませんよ」

互いの確認に応じると、光秋はカレーを口に運び、それを飲み込むと水を飲む。

「……」

両耳の奥がいよいよ痒くなってくる。

それでも二口三口食べていると、我慢も限界に達し、

「……………」

光秋はコップの残り水を一気に飲み干すと、両手の人さし指を両耳に入れ、耳の穴の中を強くかく。

「?……………」どうしたジャツプ?」

その様子を見てタツカーが問う。

「いや、カレー食べると、耳の奥が痒くなつて……」

手を止めて問いに答えると、再び耳の穴をかく。

「あれ?でも……………」加藤くんアレルギーなんて?」

「そんな大袈裟なもんじゃありませんよ。ただどうも、スパイスが合わないみたいで

……………」山葵^{わさび}なんかは大丈夫なのに……………」

心配そうな顔をする伊部に応じると、光秋はコップを持って水のおかわりを貰いに行

く。
食事場近くのポリタンクの許に着くと、光秋は蛇口をひねってコップの8分目まで水を注ぐ。

と、

「……………」おお、奇遇だな」

「?……………」

蛇口を閉め終わると同時に後ろから声をかけられ、振り返ると、

「！」

正面に、青服姿に右手に空のコップを持った富野大佐を見る。

「富野大佐！……お久しぶりです！……」

予想外の事態に動揺しつつ、光秋は思わず敬礼してしまう。

「ふん……」

富野は返礼せず、光秋の右脇を横切ってポリタンクの水をコップに注ぐ。

「……」

光秋は富野の方に体を向けつつも、突然の大人物との遭遇になにを話したらいいのかわからなくなる。

——大佐、つまり僕よりずっと上だし！この世界じゃ大物みたいだし！なにより最後に見せた姿が『蜂の巣』での失態だし！……—

心の中で半べそをかく様な声を上げる。

と、

「昼の訓練の相手は、ESOの特エスか？」

富野が振り返りながら訊いてくる。

「！……はい！本部の……」

「ふん……」

緊張した声で答えると、富野は光秋の許に歩み寄る。

「以前と比べれば少しは動きがよくなったようだが、それで1人相手に、しかも反撃らしい反撃もない上で10分近くかけるようでは、まだまだだな」

「はい……」——見ていたのか?——

「まあ、多少の進歩は認められたようだしな。明日に期待する」

言うとき富野は、光秋の左脇を横切つて去っていく。

「……はい!ありがとうございます!」

気を取り直した光秋は後ろに振り返り、敬礼をしながら遠ざかつていく富野の背に言う。

——……氣に掛けてくれてるといふのか?……周りの人たちの話を聞く限り、整理戦争時代の大物みたいだが……でもやっぱり、苦手だな……——

食事場へ戻つた光秋はタツカーたちを見つけると、テーブルにコップを置いて自分が座つていた席に着く。

「……いやに遅かつたな?」

「ああ……水汲んでたら、富野大佐に会つちやつて……」

「トミノ?……」

光秋の返答に、タツカーは知らないという顔を返す。

「陸軍の富野大佐ですよ。名前は確か……平造って」

「整理戦争の英雄の一人、『炎の貴公子』のことですよ」

光秋と伊部が補足を言ってみるが、タツカーは、

「と言われても、なあ……」

と、知らないという顔を向け続ける。

と、

「光秋君、平造兄さんと知り合いなんですか？」

純が話しに加わる。

「兄さん？」

純の言葉に、光秋とタツカーが少し驚いた顔で訊き返す。

「その、父が特エス時代に主任を務めてて、それが縁で家にもよく遊びに来てて……中尉には話しませんでしたっけ？」

「……ああそういや、ピュアの親父さん、ESOじゃかなり有名なんだっけ？」

「横尾主任の活躍は、未だに日ESOでは伝説的扱いですよ……そういえば、純君とフミって、その人の子供だったね」

——大佐の通り名、『炎の貴公子』なんていうのか……それに、特エスだったんだ……そ

れに……

タツカーが少し納得する顔を、伊部が思い出した顔をする横で、光秋はそんなことを思いながら純に視線を向け、

「この人のお父さんが主任……」「世間って狭いなあ………」
と、小声で呟く。

午後7時半。

食事を終えた光秋は、トイレに寄った後に荷物置き場へ行き、自分のカバンを右肩に斜め掛けして藤原隊のテントへ向かう。その途中で、齒磨きのためにポリタンクの前に立ち寄る。

「……この辺だよなあ？……！」

昼間の記憶を頼りに自分のテントを見つけ、扉のチャックを開けて靴を脱いで中へ入ると、テントの奥に3人分の荷物が運び込まれているのを見る。

と、

「……？」

薄明かりの下で、光秋は小さな違和感を覚える。

「伊部二尉の荷物が……ああそうか。寝る時は別なんだ……」
すぐに納得すると、扉のチャックを閉め、テントの布越しに僅かに入ってくる薄明か

りの下、扉と反対側の荷物置き場の近くに腰を下ろす。

自分のカバンを前に下ろすと、

—どうせシャワーすらないし……いいな—

と、中から目薬が入った袋を取り出し、制帽をカバンの上に置いて3つの内の1つを左目に注す。

—明日何時起きだっけ？—「後で訊いとかんと……」

呟きつつ、注した目薬とその袋をカバンの上に置き、上着のポケットから財布を、ズボンのポケットから鍵を出し、2つをまとめてカバンの奥に入れる。入れ違いにワイシャツと下着の上下1枚ずつ、靴下一足、大き目のビニール袋を1枚出し、着ていたワイシャツと下着、靴下と着替えて脱いだ方をビニール袋に入れる。

「ハンカチは……いいな」

あまり使わなかったのでハンカチは替えないことにすると、ビニール袋の口を閉じてカバンに仕舞う。

そうしつつ、目薬を3つとも注し終え、袋をカバンの中に仕舞った頃、テントに小田が入ってくる。

「お、加藤……」

「小田一尉……お疲れ様です」

光秋が応じると、小田は扉のチャックを閉め、扉の近くに腰を下ろす。

「一尉、明日の起床時間って、何時ですか？」

「確か、6時だったな」

「ありがとうございます」

小田に礼を言うと、光秋は上着のポケットから携帯電話を出し、アラームの時刻を5時50分に合わせてポケットに戻す。

「—そういや今何時だ？」

そう思つて光秋は、左手首の腕時計を見る。蛍光塗料の光を出す針は、7時50分を指している。

「—7時50分……少し早いだろうが、明日も早いしなあ……—」

そう思うと、カバンを他の荷物の方に置き、荷物の近くに置いてある寝袋を1つ取つて袋から布団を出し、それを床に広げる。

「なんだ？もう寝るのか？」

「はい。今日はけっこういろいろありましたし、明日も早いし。この後は、特に予定もないでしょう？」

「—そうだが……—」

小田に応じつつ、光秋は枕にした袋をさつきまで腰を下ろしていた辺りに置き、右側

に携帯電話と腕時計、数珠、カプセルを置く。

「ところで、藤原三佐と竹田二尉は？」

両脚を寝袋に入れながら訊く。

「まだ飯だろう？ 訓練やめた時間が遅めだったし、2人ともよく食うしな。特に竹田は上杉と会って、話し込んでたしな」

「……上官と先輩を指し置いて寝るのも失礼かな？——」

そう思うと、寝袋の奥に伸ばしていた両脚を体の方へ引き戻す。

「？……どうした？」

「いやあ、よく考えたら、上官と先輩を指し置いて寝るのもどうかと思ひまして……」

小田にそう答えながらも、光秋は瞼が重くなり始めているのを自覚する。

それを見て小田は、

「いや、眠いんなら寝てもいいぞ。三佐には俺から言っておくから」

と言ってくれる。

「……いいんですか？」

「体調管理も仕事の内だ。その分、明日しっかりやれよ」

「はい。ありがとうございます。お休みなさい」

「おう、お休み」

小田の返事を聞くと、光秋は上着を簡単に畳んでカバンの上に置き、メガネをカプセルのそばに置いて寝袋の中で横になる。ワイシャツのボタンを2つ外して首元を楽にし、チャックを閉めて目を閉じる。

「……………」

寝る気になった体が寝付くのに、大して時間は掛からなかった。

10月2日土曜日午前5時50分。

「……………」

耳元に携帯電話のアラーム音を聞いた光秋は、目を覚まし、アラームを止めて寝袋のチャックを開け、一気に上体を起こす。

「……………」

深呼吸と背骨伸ばしを一緒に行い、メガネを掛け、カバンの上の上着を着ると、枕元の小物をポケットに入れ、腕に巻いていく。

カバンからクシと鏡、髭剃り機を取り出し、髪を整えると、寝ている藤原たちを踏まないように注意して出口に向かい、扉のチャックを開けて靴を履いて外に出、チャックを閉める。

「寒い……………」

秋の早朝の寒気を感じつつ髭剃りを済ませ、靴を脱いでテントに戻ると、自分の寝袋

の右隣に寝ていたワイシャツ姿の小田が上体を起こす。

「――尉、おはようございます……」

「……ああ、おはよう……」

光秋が声の大きさに注意して言うと、小田は欠伸混じりに応じる。

光秋が自分の寝袋に戻ってクシと鏡と髭剃り機をカバンに仕舞い、寝袋を畳んでいると、

「ン、ンンンン！」

光秋の足側に寝ていた藤原が唸る様な声を上げながらワイシャツ姿の上体を起こす。

「三佐、おはようございます」

「おはようございます」

「ああ……おはよう……」

寝袋を畳んでいる小田と光秋が続けて言うと、藤原は欠伸混じりに返す。

光秋が寝袋を片付け終えた頃、

「竹田！いつまで寝てんだ。起床だぞ！」

畳み終えた寝袋を左脇に抱えた小田が、藤原の左隣に寝ている竹田を揺すって起す。

「……う……あ……はよっす……」

ようやく起きた竹田は制服の上着を着たままの上体をゆっくりと起し、寝ぼけ顔で欠

伸混じりに言う。

「おはようございます」

それに光秋は応じつつ、扉のチャックを開けて靴を履いて外に出、藤原たちが出てくるのを待つ。すぐに出てくると思い、扉のチャックは開けたままにしておく。

少しして、上着を着た藤原と小田が出てくる。

また少しして、寝ぼけ顔の二尉が出てくると、

「よし、皆そろったな。まずは食事だ！」

「「は、」」

藤原の号令に光秋たちは応じ、全員で食事場へ向かう。

歩きながら光秋は、ふと思ってみる。

——いよいよ今日だ……——

30 陸・空・ESO合同演習

午前7時40分。

朝食等を済ませた光秋は、藤原隊一行に混ざつて正規軍側の集合場所である大型テントへ向かい、前側中央辺りの席に着く。すでに多くの席が埋まつており、光秋をはじめ、今日は青服も緑服も皆制帽を被り、多少緊張の表情を浮かべている。

と、

「……」

「?……」

右隣に座る小田一尉がなにか言つた様に聞こえ、光秋は顔を右に向ける。

「なにか?」

「ん?……ああそうか、右聞こえなかったんだな。『お前、昨日早く寝て正解だったな』つて言つたんだよ」

「?……どういふことですか?」

「俺も泊りがけの演習なんて久しぶりだから、忘れてたんだがな……」

言いながら小田は、右隣に座る竹田二尉と藤原三佐に目をやり、顔を光秋に近づけて

小声で続ける。

「2人の酇が煩くて、昨夜^{ゆうべ}なかなか寝られなかったんだよ」

「酇、ですか？」

「ああ。三佐もそうだが、竹田はそれ以上に煩くてな。収まるまで寝付けなかった……」

「……あ、だからその前に寝た僕を、『正解』って」

「そういうことだ」

言う和小田は、光秋から顔を離す。

そんな小田を横目で見ながら、光秋は、

——詳しい状況は知らないが……災難でしたね……——

と、心の中で劳いの言葉を掛ける。

午前8時。

正面の大型スクリーンに青一色の映像が投影され、それまで響いていた多数のひそひそ声が止むと、

「……！」

光秋は視界の右端に、演台に立つ青服一式を着た富野大佐を見る。

「起立っ！」

号令と同時にテント内の全員が一斉に立ち上がり、

「敬礼っ！」

という言葉と同時に一齐に敬礼する。

「！」

光秋も突然の大声に少し驚きつつ、右手で敬礼をする。演台の富野も、それに右手で返礼する。

テント内の全員が敬礼を解き、座り終わると、演台上のマイクを通して富野の声が響き渡る。

（諸君、私が今回の演習で正規軍側の総指揮を務める、合衆国陸軍大佐、富野である。よろしく頼む。さて、本演習の想定であるが……）

富野の言葉に合わせて、スクリーンに単純な絵で表された図解が映し出される。

（本地から北へ約30キロ先に設置された仮説基地を武装集団が占拠、これを奪回することである）

富野の説明に合わせて、映像右側に映る「本地」と書かれた赤い四角から「仮説基地」と書かれた青い四角に白い太い矢印が伸び、その上に「奪回」という文字が表示される。

（そこで）

言うと同時に、映像が広範囲の森林を上から見たものに替わる。

（まず空軍を主体とした航空戦力を前に出し、敵の注意をこれに引き付ける）

説明に合わせて、下の赤い円から上の青い円に「航空戦力」と書かれた太い水色の矢印が伸びる。

（その間に、戦車を主力とした地上部隊を慎重に前進させ）

赤円から青円に向かって、4本の細く黄色い「地上部隊」と書かれた矢印が伸びる。

（機会を見て、敵地に一斉攻撃をかける。先発の航空戦力もこれに合流する）

言うと同時に、青円に大きく「一斉攻撃」と書かれた文字が重なり、少ししてスクリーンの映像が消える。

（以上が、今回の作戦概要である。武装集団側の戦力であるが、具体的な情報はない。こちらよりやや劣るといったことしかわからん。各員充分注意するように。作戦開始は午前9時ジャスト。なにか質問は？）

「……」

テント内の全員は、沈黙を返す。

（では、各自準備にかかれ。1時間後に作戦を開始する。解散！）

大佐が言い終わると、再び、

「起立っ！」

という大声と同時にテント内の全員が立ち上がり、

「敬礼っ！」

という声と共に一斉に敬礼する。

敬礼を解くと、皆一斉に後ろの出口へ向かう。

光秋もそれに続こうと歩き出そうとすると、

「いよいよだね。頑張ろう！」

「はい！」

左隣に立つ伊部二尉に言われ、顔を向けて気合の籠った声で応じる。

人波に混ざってテントの外に出ると、光秋は藤原隊一行に合流して正規軍側の装備品置き場へ向かう。

全員が防弾ベストとプロテクター、ヘルメット、光秋以外がヘッドフォン型の通信機を着け、それぞれの拳銃に模擬弾を込める。

その傍ら、

「加藤」

と、弾を込めた拳銃を右腰のホルスターに仕舞った藤原が、右脛脛に拳銃を入れたホルスターを巻き付けている光秋に話しかける。

「はい？」

左膝を着いている光秋は、藤原を見上げて応じる。

「ニコイチは空軍と共に先発だ。身支度が整い次第、大河原主任の許でそっちの準備に

入れ」

「ニコイチも？」——……ああ、『空軍を主体とした』つか——「了解。ちようど準備も終わったんで、早速」

言うと光秋は立ち上がり、振り返って大型装備が置かれている場所へ速足で向かう。

「伊部も、準備が終わったら向かえ」

「了解」

歩きながら、後ろから藤原に應じる伊部の声を聞く。

少しして光秋は、灰色のツナギの上に白衣を羽織った大河原主任が、左に置かれている台の上のガトリング砲を見つめているのを見つける。

「大河原主任——」

「……おお、二曹」

呼び掛けると、大河原は顔を向けて応じる。

光秋は大河原の許に着くと、

「お待たせしました。今日はよろしくお願いします」

と、軽く頭を下げ、すぐに右手を防弾ベストの合間に押し込んで上着の内ポケットからカプセルを取り出し、その先端を右側の広場に向けてニコイチを出現させる。

「ん——こちらも、演習も評価も、いい結果が出るのを期待しているぞ——」

大河原はそう言う、右手で敬礼をする。

「……………」

大河原の初めての敬礼に少し戸惑いながらも、光秋は右手で返礼し、リフトに駆け寄ってコクピットに上がる。

席に着いてヘルメットを膝の上に置き、カプセルを右肘掛に納め、認証を済ませると、シートベルトを締めて左膝を着いたニコイチを立ち上げらせ、ガトリング砲の許へ歩み寄る。その間に、右肘掛から通信機を取り出して左耳に付ける。

ガトリング砲の近くに着くと、

（よし二曹、その状態でしばらく待機）

「了解」

通信機越しに大河原の指示を聞き、短く応じる。

（荷台の取り付け開始！急げよお！）

直後に大河原が指示を出すと、ニコイチの両腿に予備弾倉を運ぶための荷台の取り付け作業が開始される。

その間光秋は、

（観測機器の設置急げよ！01の貴重なデータ採集の機会なんだからな）

（作戦開始まで後30分だ。作業遅いぞ！）

（弾薬と盾を早く移動させろお！敵がわからないんだから、弾が多いガトリング砲だぞ！）

といった、外音スピーカーや通信機から聞こえるいくつもの声に耳を傾けてみる。

5分程して、通信機越しに大河原の声が届く。

（二曹。取り付け完了だ。動いていいぞ）

「了解」

応じると、直後に足元に5つの弾倉と、盾を乗せた台が現れ、屈んで4つの弾倉を腿の荷台に乗せ、ガトリング砲を右手に持って1つを装填し、左手に緑の四角い盾を持て立ち上がる。

と、

（加藤くん。お待ちせ）

「どこです？」

通信機から聞こえた伊部の声に、光秋は辺りを見回しながら返す。

（ニコイチの足元、左側）

——左……——

言われた辺りを捜して防具一式を付けた伊部を見つけると、光秋は屈んで盾を台の上に戻し、空いた左手を伊部の許に差し出す。ハッチを開けて席を機外へ出し、伊部が

乗った手をハッチの上に置く。伊部がコクピットに移ると、席を機内へ下ろしてハッチを閉め、再び盾を持って立ち上がる。

—これで、いつでもよし、かあ……—

と、光秋は心中に呟く。

と、

「もうすぐ本番だね……」

左側に立つ伊部が、少し緊張を含んだ声で言う。

「ええ……やってやるだけです。とりあえず、訓練通り左側の視界をお願いします。知つての通り、僕には殆ど死角ですから」

「うん……任せて!」

光秋の静かな気合を含んだ言葉に、伊部は少しだけ緊張がほぐれた声を返す。

午前8時59分。

作戦開始まで1分を切った時、光秋は通信機越しに聞き覚えのない男の声を聞く。

(こちら管制室。ただいまから作戦開始の時間合わせを行う。各自準備にかかれ)

それを聞いて、光秋は左耳から通信機を離し、

「時間合わせを始めるそうです。僕の時計だと少し早いんで、伊部二尉お願いします」

と、左手に持ったそれを伊部に近づける。

「了解」

応じると、伊部は左手首の腕時計を見る。

少しして、再び通信が入る。

（時間合わせ開始）

「！」

その言葉で、光秋と伊部の体が一瞬固くなる。

（10、9、8、7、6、5、4、3、2、1、0。作戦開始！）

「！」

通信が終わるや、光秋はすぐに通信機を左耳に戻し、両手両足を操縦桿とペダルに置いていつでも出られるようにする。身も心も、完全に臨戦態勢である。

直後に違う男の声が通信機から響く。

（UKD-01は航空部隊と合流の上、先行せよ。合流後はアレク・タッカー中尉の指揮下に入れ。なお、01は機銃100発の被弾で撃墜とする。ミサイルは50発分である）

—タッカー中尉？—「了解」

応じると、光秋は通信が切れているのを確認して伊部を見る。

「航空部隊と先行、以後はタッカー中尉の指揮下に入れと。あと、ニコイチは機銃100

発の被弾で撃墜と」

「了解」

「では」

と、光秋は右ペダルをゆっくりと踏み込む。

ニコイチ背部の円形の溝―Nクラフトから白い光が放たれると同時に、両足が地面から離れ、光秋と伊部を乗せたニコイチはゆっくりと上昇していく。

高度を上げつつ、光秋は左パネルの地図に目をやり、演習場敷地内にある正規軍側の飛行場の位置を確認し、ニコイチをやや右に向けて前進する。

少しして、光秋は前方左側に多数の黒い点を見つける。その意思を拾ってモニター左側に拡大映像が表示され、その中に黒い戦闘機群―F―22の編隊が映し出される。

―あっちゃ―

思いつつ右操縦桿を若干左前に倒し、右ペダルを深めに踏んで少し速度を上げる。ニコイチは弧を描く様に左に旋回し、V字を書いて飛ぶ編隊の先頭機の右上に着く。同時に伊部も通信をよく聞こうと光秋の左耳に顔を寄せてくる。

「……」

光秋は「F・5」か「UKD―01」どちらを名乗ろうかと少し考えると、目前の戦闘機と左耳の通信機を意識する。

「UKD—01より……」

（レッド・リーダーだ）

光秋が相手の呼び方に詰まっていると、タツカーの声で通信が入る。

「レッド・リーダー。これよりそちらの指揮下に入ります。今日はよろしくお願いします。タツカー中尉」

（こちらこそだ）

タツカーの返事を聞くと、光秋は編隊の後方に下がろうとする。

と、

（待てジャップ！）

「！……？」

タツカーがすぐに制止させる。

（お前はそのまま、俺の隣にいろ）

「？……了解」

タツカーの指示に少し疑問を感じながらも、光秋は言われた通りタツカー機の右上に着き直して並行飛行する。

と、

（レッド・リーダーより各機）

タツカーの声で編隊全機に通信が入る。

（間もなく会敵予想空域に入る。気を引き締めろ。特に白服ども！お前らには貴重な戦闘機会なんだ。無暗に前に出るとは言わないが、真面目にやれよ！）

（了解！）（了解！）……………

複数の緊張した声が応じる。

（それから01）

「はい」

（お前は俺と前に出ろ。しっかりと付いてこい！）

……………そういうことですか――

そう言われて、光秋は先程のタツカーの指示を納得する。が、同時に若干の不安を覚える。

――しかし、僕の様なまだまだ素人寄りの奴に務まるか？……………いや、素人意識はやめよう。実戦だって何度か経験してるし、今日のために訓練も怠らなかつた。なにより……

思いながら視線を左に向け、顔を寄せている伊部をちらつと見る。

――二尉がいるんだ！――「了解！」

自信を取り直したことと不安を追い出すつもりで、覇気のある返事をする。

直後、

「！」

接近警報を聞くや右パネルのレーダー表示に目をやり、自機的前方に多数の機影を見る。

——向こうも飛行機か……—

（来たな……俺と01が先行する。他は後から続け）

「了解」

タツカーの指示に応じつつ、光秋は左手の盾を胸の前で一の字に構えて前に出し、速度を上げたタツカー機を追って前に出る。

同じ頃。

武装集団側の大型テントでは、

「航空部隊より入電！敵航空部隊らしき影を視認。間もなく接触！」

と、緊張を含んだ報告が響く。

一方、

「……了解した」

冷静な声で応じた短い黒髪に細身の顔つきをした青服の男は、パイプイスに座って正面のテーブルに両肘を着き、口の前で両手を組む姿勢を崩そうとしない。

それどころか、

「……予想通り」

と、組んだ手で隠している口元に薄っすらと微笑みを浮かべている。

正面から向かって来る飛行機の輪郭がモニター越しにある程度わかる距離まで来ると、光秋はモニターの右端に映し出された情報表示を見る。F―22よりも全体的に細身な印象を与える機体図は、光秋も少しだけ見覚えがある。

―『F―15』? ……確か、自衛隊で使われてたな―

そんなことを考えていると、

「……!」

不意に正面から寒気を感じ、操縦桿を握る手に若干力を込める。

―来るな……―「中尉」

(ああ……散開!)

「!」

左隣を飛ぶタツカーの指示と同時に、光秋は一気に上昇をかける。

直後、

「!」

下から多数の悪寒を感じ、視界の端に赤い円のマークをいくつも捉えると、右手の

ガトリング砲を下に向け、砲口を縦横に不規則に振りながら引き金を引く。

直後にマーカーがあつた辺りに小さな爆光が咲く。

—模擬ミサイル!—

意識の隅で理解しつつ、上昇から弧を描く様に前進に移る。

直後、

「!」

光秋は接近警報と左から来る強い寒気を感じ、

「左真横!」

同時に伊部の声を聞いて素早く砲口を左真横に向け、ろくに視線も向けずに即引き金を引く。

と、

(ブルー—撃墜。帰還せよ)

と、光秋は通信機越しに聞き、直後に前を前部にいくつかの赤インクを付けたF—15が通り過ぎていくのを見る。

「墜としたか……二尉、ありがとうございます!」

「おれはいい。今私は加藤くんの左目なんだから。それより、上!」

—嬉しいこと言ってくれちゃって……—

思いつつ、光秋は伊部の言葉と接近警報、上から来る寒気に従って上を見、正面に近づいて来るマーカーが付いた影を捉えると、後退しつつそれに砲口を向け、右の親指で持ち手の突起を下ろしてレーザーを点ける。

マーカーの中央にレーザーを合わせた一瞬、

「！」

すぐに引き金を引き、目の前のF-15の機首から背面を赤く染める。

（ブルー10撃墜。帰還せよ）

通信を聞きながら後退しつつ、光秋は目前を墜とした相手機が行き過ぎていくのを見る。

「次！」

上空での戦闘の光は、戦闘空域から離れた木々の合間からもよく見える。

航空部隊の少し後に出発した地上部隊の面々も、ときどき顔を上げてそれを見ている。

部隊の後方に着いてゆつくりと前進するゴーレム・タンク、その上部コクピットに納まる小田も、正面、左右、上部に備え付けられた四面のモニターを通して、その光を不安そうな目で見ている。

—航空部隊が敵の注意を引き付けるって言ったって、こんなデカブツがいたら見つか

るんじゃないか？—

思いつつ、小田は正面モニターの下側に視線を落とす。

戦車の車体を流用したゴレタンは、もともと戦車の移動も視野に入れた演習場内の林道を通れないことはない。現に今も、2列になって進むゴレタンの車体部分の元となったM1エイブラムス戦車群の左列に着き、上部に目をやりさえしなければ戦車隊の行軍としてはありふれた光景を作っている。

問題はその上部——両肩に1門ずつ大砲を背負った人の上半身を模した部分である。車体も合わせて7メートルはある巨体は、戦車群を隠してくれている木々にもう少しで達してしまう程であり、E S O 色とでもいべき緑の塗装も、秋も中頃の紅葉混じりの葉の色の中では、近づかれれば目立って見つかってしまう恐れがある。

—初めてで慣れてない上に、脚の速い戦闘機に見つかったら……ゴレタンは、もともとこういう使い方じゃないんだろうな……—

思いつつ、小田はなんとなしに左モニターに目をやる。

「……」

行軍開始からすでに20分は経とうとしているのに、未だ目が慣れない戦車群の合間を歩く歩兵たちが、ゴレタンに好奇の目を寄こしている。

—ま、なんであれ、『ニコイチの援護』という本分だけは全うしたいな……—

思うと小田は鼻から大きな溜め息を吐き、視線を正面モニターに向ける。

「！」

背後から多数の悪寒を感じた光秋は、振り返りざまにガトリング砲を左から右に横一の字に振りながら発砲し、正面にいくつもの爆光を咲かせる。

直後、

「！上？」

頭上に漠然とした気配を感じ、すぐに砲口を上に向ける。

と、

「待って！」

「！」

伊部の制止に、引き金に掛けた指を寸のところで止め、頭上を後ろから前へ行き過ぎる機影をよく見る。

「……F—22？味方か」

理解した直後、後に続く様に多数の機影が自分の頭上を行き過ぎていくのを見る。

「後ろにいた人たちが追い付いた……」

「みたいね」

呟きに伊部が返すのを聞くと、光秋は右ペダルを深く踏んで爆光が集中している前方

へとニコイチを駆けさせる。

——混戦してきたな……大丈夫か？——

光秋が思う「大丈夫？」とは、自分が味方を誤射してしまう心配である。少なくとも、自分はニコイチという特異な物に乗っているため、味方に撃たれることはないと概ね確信している。

——……ま、万一の時は、また二尉が止めてくれるか——

そう思うことで、浮かんだ不安を隅に押しやる。

と、

（レッド9、レッド12撃墜。帰還せよ）

——！味方がやられた？——

光秋が通信内容を解した直後、

「！」「斜め上！」

接近警報と悪寒、伊部の声をほぼ同時に知覚し、上方を向いて接近してくるF—15を捉える。

直後に相手機は、右翼付け根にある機銃を放つ。

「！」

避けるには間に合わないと直感し、左手の盾を素早く横向きに前に出してそれを受け

流す。そうしつつ、後退して相手から距離を取ろうとする。
と、

（気を付けろ！そいつは古谷隊長だ！）

—フルヤ？……！—

タツカーの警告に、光秋は飛行実験の時に会った茶色いチリ毛の予知能力者のパイロットを思い出す。

—手強い？—

思いつつ、目前を下方へと行き過ぎるマークが付いた古谷機を目で追う。

直後、

「！」

後ろからの悪寒と接近警報を感じ、振り返りざまにガトリング砲を不規則に振りながら放ち、間近に迫っていたミサイル数基を小さい火球に変える。

—1人にかまっていられる状況じゃないか—

理解しつつ、光秋は四方に目を走らせながらニコイチを上昇させる。

と、

「……？」

光秋は視界の右端に、木々の間から立ち上がる細い黒い煙を見る。

「二尉、あれって?」

「なに?……?」

言いながら、光秋は周囲を警戒しつつもモニター右側に表示された煙の拡大映像を見、伊部も視線を追ってその映像を見る。

と、

「!」

2人は拡大映像越しに煙の近くに小規模の爆発が起こるのを見、光秋はすぐに通信機に意識を向ける。

「01よりレッド・リーダー!」

（何だ!）

タツカーの少し焦っている声が応じる。

「地上に爆発を確認。事態の確認に向かいたいのですが」

（爆発?……よし!）

（ブルー3撃墜。帰還せよ）

タツカーの小さな歓声が上がると同時に、撃墜報告の通信が入る。

（戦闘機は地べたの面倒まで見れん。だが気になる情報なのも確かだな……よし、確認行きを許可する）

「了解」

応じると光秋は、2本の煙が立ち上っている辺りにニコイチを向かわせる。

その間にもさらに2回爆発が起き、煙は4本になる。

光秋は煙が上っている辺りの上空に着くと、ゆっくりと高度を下げて木々の合間の様子を見る。

と、

（白い犬だあ！）

「!?」

外部スピーカー越しに突然の怒声を聞いたかと思うと、木々の間から多数の砲弾が跳び出す。

「加藤くん！」

「！」

伊部の声を意識の端に聞きながら、光秋は慌てて青インクが付いている盾を前に出してそれらを受け流す。盾越しに複数の小さい爆光が照り、光秋の左腕も軽い衝撃を覚える。

「?.....敵軍!?!」

「.....?」

静かに行軍を続ける小田は、右パネルの端に薄い靄が映っているのを見る。

—なんだ?—

思いつつ、右手を操縦席の頭掛けの右端に伸ばし、コの字型の取っ手を引いて、小田側には面積の殆どを占める画面が、モニター側には中央に大きなレンズが1つ付いたスコープを引き出し、右パネルの靄の映像の辺りに合わせる。それはもともとゴレタン背部の大砲の照準器であるが、望遠機能もあるために右下に付いているツマミを回して靄を拡大して見る。

と、

—……煙?—

スコープ画面に4本程の黒色の煙を見、被っているヘッドフォン型の通信機でゴレタンの近くを歩いている藤原と、下の車体部分に納まる竹田に通信を送る。

「F・2よりF・リーダー、F・3」

（何だ?）

藤原の声が応じる。

「右……2時の方向辺りに4本の煙を観測」

（煙だと?）

直後、

「!」（ぬおっ!）

モニター越しに車列前方左側に爆光が輝くの見、同時に藤原の驚きの声を聞く。
と、

「……?」

スコープを頭掛けの脇に戻した小田は、爆炎が燃えている辺りから防具一式を身に付け、それぞれ銃器を持った青服たちが躍り出てくるのを見る。

「……!」

よく見るとその一団は、全員左腕に青い腕章を巻いている。

「……武装集団?」

同じ頃、正規軍側のテントでは、

「地上部隊各隊より入電!『現在武装集団の攻撃を受けている。応援を要請』とのことです!」

通信兵の緊迫した声が響き渡る。

パイプイスに納まっている富野は、

「……やっぱりこうなるかあ……」

と、左後ろに控えている横尾中尉にしか聞こえないくらいのうんざりした声で呟くと、

「待機中の特エスを回せ！そのまま合流して作戦続行」

と、指揮官の声で指示を飛ばす。

「あとテレポーターを一人こちらに回せ。私も出る」

言いながら、富野はイスから立ち上がる。

「？……大佐も、で、ありますか？」

「そうだ。早くしろ！」

「！了解！」

通信兵の少し戸惑った返事を聞きつつ、富野は防具置き場へ向かい、その後ろを横尾が追う。

「……大佐、いくら演習とはいえ、総指揮官自らが前線に赴くのは少々問題では？」

富野の後を追いつながら、横尾は少し厳しい声で言う。

「君も知っているだろう？ 私は、もともとこういう大所帯の指揮は苦手なんだ。それに、私は地上部隊と合流はしない。今の騒ぎが収まったら、すぐに戻ってくる」

富野はそう応じると、テントの端に置いてある箱を開けて防弾ベストを取り出し、それを胴体部に着付け始める。

それを見て横尾は、

「……わかりました。私もお供させていただきます」

言うやいなや、自分も防弾ベストを取り出して着付け始める。

「フミ！」

「今は職務中です。富野大佐」

「……」

横尾の厳しい返事に、富野は押し黙ってしまふ。

「……それに、今日参加しているテレポーターはいずれも7人以上ですから、大人2人分くらい の質量なら余裕で運べるはずですよ」

そう続けながら、横尾は防具を着付けていく。

「……………」

木々の間から殺到する銃弾や砲弾を盾で受けつつ、光秋はモニターに目を走らせて近くに着地できそうな場所を捜す。

と、

「富野大佐の作戦、読まれてたみたいね」

「ですわね……………」

左隣の伊部の呟きに応じつつ、適当な場所を見つけた光秋は後退しつつ高度を下げ、木々の下、正規軍の戦車隊の前に降り立つ。

と、

（白い犬が来た！）

（続けえ！勝てるぞお！）

複数の歓声が外音スピーカーから響く。

——…期待されてるな——

意識の隅でそう思う。

直後、

「！」

木々の中から武装集団側のエイブラムスが1台現れ、間を置かず砲弾を放つ。

「！」

すぐに盾を前に出し、それを受け流す。

——ミサイル2発でダメなら、砲弾も2発か？——

爆光に目を細めながらそう考えると、右ペダルを軽く踏んでニコイチを少し浮かせ、盾を構えた左半身を前にして滑る様に前進する。

青い腕章を巻いた歩兵たちが慌てる様に端に除けるのを目の隅で見つつ、光秋はマーカーが付いた前方の戦車に意識を集中する。

「……………」

相手の砲撃を盾で受けつつ一気に距離を詰め、砲身の先まで寸での所まで来た直後、

「！」

ニコイチは跳ねる様に宙に舞い上がり、戦車の上を取る。

光秋はすぐに持ち手の突起を下げてレーザーを点け、マーカールの中心にレーザーが合った一瞬、

「！」

引き金を引き、下の戦車上部を赤く染める。

そのまま地面から少し浮いた高さまで下り、振り返ると、正規軍が武装集団を自分が撃破した戦車の前まで後退させているのを見る。

が、直後、

「！」

後ろから多数の寒気を感じ、すぐに振りかえる。

と、

「……………」

林道の奥から何台もの戦車が2列に並んで現れる。

……………しばらく地上戦か――

心中に呟くと、一番手前にいる右前方の戦車に狙いを定め、盾を前に出しつつ一気に滑る様に距離を詰める。

マーカーとレーザーが合った一瞬後、

「！」

ガトリング砲を一射し、戦車の前面を赤くする。

そのまま左の戦車にも一射し、跳ねる様に木々の頂きギリギリまで上がって手前側の戦車を手当たり次第に赤くしていく。

と、

「前！」

「！」

接近警報と伊部の声を聞いた光秋は、すぐに盾を前に出して被弾していない奥側の戦車群からの砲撃を受け流し、同時に高度を保ちつつ徐々に後退し、距離を取ろうとする。「もつと高度を上げれば？」

「いや、そうすると木が邪魔で相手が見えなくなる。やり合うならこの方がまだ楽なんです……！」

伊部に応じつつ、光秋はろくに狙いも付けずに盾の影から応戦のガトリング砲を撃つ。

と、

（レッド・リーダーより01。状況報告遅れてるぞ！どうなってる？）

通信信機からタツカーの怒声が響く。

——いかん。忘れてた！——「こちら01！現在武装集団側の戦車部隊と交戦中。少し押されてます。応援に何機か寄せませんか？」

（地上でも？無理だな。こつちも手一杯だ！）

「了解！——じゃあ仕方ない！——

断じると、光秋は砲撃の防御と応戦に集中する。
が、

「……！——」

ガトリング砲の弾が尽きてしまう。

——充填してる時間がない！どうする？——

と、

（盾で戦車隊の方へ風を起こせ！）

「!？」

通信機から響いた聞き覚えのある声に、光秋は直感的に従って一気に地面寸前まで下り、砲撃が弱くなった一瞬の間にガトリング砲を脇に捨て、

「!」

持ち手を手前にして右手に持ち替えた盾を素早く正面下方に向かって振る。

団扇の様に動いた盾は強い風を起こし、周囲に落ちていた枯れ葉や折れた枝などを武装集団の戦車隊の方へ舞い上がらせ、近くいる歩兵の何人かはよろけて転んでしまう。

直後、

「！」

光秋は舞い上がった枝や枯れ葉が瞬時に燃え上がり、戦車隊に覆い被さる様に落ちるのを見る。

「…………このやり方、富野大佐！」

「！」

確信的な呟きに、光秋は思わず伊部の方を見る。

—これが、富野大佐の戦い方！…………—

心中に感嘆を呟きつつ、昨夜ポリタンクの前で会った富野の顔を思い浮かべると、

（どうも演習というのは力加減が難しいが、これでこの場の戦車隊は全滅と判定させてもらおう）

「……………」

外音スピーカー越しに指示を出してきたのと同じ声色——富野の声を聞くと、戦車隊を覆っていた火が一瞬で消える。

光秋はニコイチを完全に着地させると、通信機に意識を向ける。

「こちらUKD—01。富野大佐、どちらです？」

（後ろを見る）

「?……!」

返ってきた声に従って後ろを見回してみると、左側の足元に防具一式を着付けた富野と、その右後ろに控える様にして立つ横尾を見つけ、ハッチを開けて席を機外へ出す。

「……ありがとうございます! おかげで助かりました!」

外に出た途端に鼻を突いてきた煙の臭いに軽い不快感を覚えながらも、富野の方に顔を向けて大きい声を出しながら頭を下げる。

と、

「礼はいい。というか、そんな暇があるのか? 作戦はまだ終わっていないぞ!」

「!……はい!」

返ってきた富野の軽い怒声に光秋は素早く応じ、少し慌てながら機内へ戻る。
ハッチを閉め切ると、

（この処理は私がやる。君は元の配置に戻れ）

と、通信機越しに富野の指示を受ける。

「了解!」

応じると、光秋は放ったガトリング砲の許に歩み寄って屈み込み、盾を地面に置いてガトリング砲を右手に持ち、空になった弾倉を外して左腿の荷台の前側の弾倉と付け替える。

「……何かに使えるかな?」

ふとそう思い、空弾倉を空いた左の前側の荷台に入れ、左手に盾を持って立ち上がり、右ペダルを踏んで一気に上昇する。

「空の弾倉なんてどうするの?」

『何かに使えるかな?』と思つて、とりあえず持つて来ただけです」

伊部の問いに思つた通りのことを話し、通信機に意識を向ける。

「UKD-01よりレッド・リーダー。戦車部隊の殲滅、完了しました。今からそっちへ向かいます」

(了解。早めに頼む。こっちももう一息だ)

タツカーのやや焦っている声が応じる。

と、

「……! 加藤くん! 10時の方向に発煙筒確認。色は黄色」

「えっ!?!」

少し緊迫した伊部の声に、光秋はモニター左側に目をやり、拡大表示に映し出された

木々の合間から上る黄色い煙と、その近く一帯を薄つすらと覆う黒い煙を見る。

「黄色——訓練時の救難信号!——」01よりレッド・リーダー! 発煙筒を確認! 色は黄色。至急救援に向かいます!——」難去つてまたか……—

「何い!?! ええい、しょうがない! 早く行つて片付けて来い! こつちも余力が出てきたから、レッド11を応援に回す」

「了解!」

応じるやニコイチを斜め左に向け、右ペダルを一杯に踏んで黄色い煙目掛けて突進する。

と、

（レッド11より、UKD—01）

——この声……純さん!——

通信機越しの聞き覚えのある声に、昨夜の夕食の席で会った横尾の弟の顔を思い出す。

（これより貴官の支援に就きます）

「了解。よろしくお願いします」

応じつつ左隣に並んで飛ぶF—22を確認し、そのまま並行飛行を続ける。

黄煙が上がっている辺りの上空の近くに着くと、光秋は徐々に高度を下げていく。

「……」

黄煙の手前まで近づくと、木の葉の影にゴレタンの箱を背負っている様な後ろ姿を見つめる。

「ゴレタン！三佐たちの隊！……！」

理解した直後、ゴレタンは両肩から伸びる大砲を一射して爆音を響かせ、排気の風圧で周囲の木の葉を舞い上げ、前方に小さな爆炎を2つ輝かせる。

「こちら正規軍所属、UKD—01！これより支援に入る！」

外音スピーカー越しに叫びつつ、光秋はゴレタンの少し前辺りに降下して自軍の戦車隊の直上に着き、

「！」

予想通り展開していた武装集団側のエイブラムス戦車群に素早くガトリング砲の掃射を浴びせる。マーカーすら付いていない2列の戦車群が、瞬く間に赤く染まっている。

同時に純機も上空から機銃掃射を行い、歩兵がニコイチを攻撃しないように牽制してくる。

攻撃開始から1分程で敵の戦車群を全滅させると、光秋はゴレタンの右隣が空いているのを見つけてそこに着地し、藤原の顔を浮かべながら通信機に意識を向ける。

「UKD—01よりF・リーダー。無事ですか？」

（なんとかな……）

藤原の若干の安堵を含んだ声が応じる。

（こちらF・2）

小田の声が加わる。

（奇襲でこっちも大分やられたがな。お前らが来てくれなかったら、俺たちも危なかった……）

（ホント。ニコイチさまさまっていかさ）

「いえ……」

加わった竹田の声に、光秋は短く応じる。

と、

（あーあ、出番なくちやったわねえ……）

「?……」

外部スピーカー越し——それもかなり近く——で聞き覚えのある少し残念がる声を聞いた光秋は、自分とニコイチの首を左右に回してみる。

と、

「!」

ニコイチの右肩の上に防弾ベストを着た曾我を見つけ、心臓が跳ねる様な感覚を覚える。

「曾我さん!? いつからそこに?」

すぐに通信を繋げて呼び掛ける。

(ここに上がってきたのはついさつき。でも現場に來たのはあなたより少し先よ。これから頑張ろうと思って張り切ってた、全つ部あなたにやられちゃって……)

両腕を組んだ曾我は芝居じみた不服そうな声で応じるが、そんなものでも光秋には肩身の狭い思いを抱かせる。

「はあ……」

(ま、アタシの仕事はまだあるからいいけど……)

言うとう曾我は、ニコイチの肩から浮き上がって戦車隊の前部へと飛んでいく。

「……」

光秋はその背を目で追いつつ、しばらく呆然としてしまう。

と、

「……? 加藤くん!」

(レッド11より01。状況終了でしょう? 早く航空部隊と合流しないと!)

「……! ああ、はい! 大至急! では、僕らはこれで」

伊部と純の呼び掛けで気を取り直した光秋は、右ペダルを踏んでニコイチを上昇させながら外音スピーカーに吹き込む。

すぐに適度な高度まで上がると、左前に行く純機を追って前進する。
と、

「……今の人、昨日の訓練で一緒だった特エス？」

「……………見てたんですか？ 昨日の……………」

伊部の突然の問いに、光秋は見失わないように青いマーカーが付いた純機を見つつ問い返す。

「うん。だって、訓練のために待ってたって言うってたじやない。一尉に場所訊いて捜しに行ったら、そこでドッグ・ファイトしてるのが見えて……………」

「ああ、そうか……………」

「で？ 昨日の訓練で一緒だった人？」

「ええ。本部所属の、曽我さんといいます」

「ふーん……………」

光秋の紹介に、伊部は興味がない声を返す。

しばらくして、光秋は前方に多数の爆光を捉える。

「UKD—01より航空部隊！ これより合流します」

通信機越しに言うとは盾を胸の前に出し、その影からガトリング砲の砲口を正面に向け、右ペダルを一杯に踏んで一直線に駆け出す。

と、

「……！」

左から来る寒気と接近警報を感じるや、直後に垂直に急上昇し、素早く砲口を下に向けてレーザーを点け、左から迫ってくるマーカーが付いたF-15に一射する。

が、

「……！」

相手機は左に大きく動いてそれを避け、機首をニコイチに向けて上昇し、距離を詰めてくる。

（気を付けろ！そいつは古谷隊長だ！）

「！」

通信機越しのタツカーの警告に一瞬恐怖を覚えるも、光秋はすぐにレーザーとマーカーを合わせて一射する。

が、

「！」

古谷機は左に避けると同時に機銃を放ち、ニコイチの盾をますます青く染める。

「クッ！」——動かないと！——

思うや光秋は、上昇をかけて古谷機と距離を取り、そのまま弧を描く様に動いて古谷機の後ろに着き、

「！」

頭を下に向けたままマーカーとレーザーを合わせる。

が、直後、

「左！」

「！」

伊部の叫びと接近警報、悪寒を感じ、光秋は右ペダルを一杯に踏んで頭から落下以上の速さで降下する。

一瞬後に体の上下を戻して上を見ると、左上空のF—15に後ろから模擬弾が殺到するのを見る。

（ブルー4撃墜。帰還せよ）

——タツカー中尉か？——

そう思った直後、

（レッド・リーダーよりレッド11。やるじゃないか！）

（は、はい！）

—純さんが!……—

通信を走った応答を聞きつつ、上空を左から右へ行き過ぎるF—22を見ながら、光秋は純の顔を浮かべる。

直後、

「!」

光秋は接近警報と真上から来る寒気を感じ、すぐに砲口を上に向け、正面から突っ込んで来るF—15にマーカーとレーザーを合わせる。

「……」

引き金に指を掛け、力を込める。

が、直後、

「!?!」

射線上の宙に左から右へと一の字に青色の稲妻が走ったかと思うと、直後にその辺りに縦横無尽に同時に多数の稲妻が走る。

—何だ!?!—

目の前の異様な事態に、光秋は咄嗟にF—15に付けていた照準を解き、右ペダルを一杯に踏んで後退しつつ高度を下げて稲妻から距離を取る。

「あれって……」

「稲妻……ではないでしょう……」

伊部の困惑した声に、光秋は言わずもがなな返事をする。

「稲妻——雷つて、雨雲と地面の電子の関係で起こるって聞いたことがあるし、それなら縦向きに走るはずですよ。あんなふうに横向きに走ったりしない。そもそもこの辺に雷が起こるような雲なんて出てないでしょう？……」

言いながら、光秋は横目で周囲の空を走査し、雲など殆どない快晴であること、あつたとしても遠くに消え入りそうな小振りの雲が3つ4つ程度しかないと確認する。

——雷が起こる要素なんてない！じゃあ？……——「プラズマの自然発生か？……」

思わず聞きかじり程度でしかない知識での推測を呟いてみる。

と、

「……！」

集中発生していた稲妻が消えたかと思うと、ガシャーン！と耳を貫く程の轟音が外音スピーカーカー越しに響き、その辺りに窓ガラスでも割った様な蜘蛛の巣状の亀裂が走る。次の瞬間には空色をした破片が四方に飛び、黒い大穴が顔を出す。

「……空が……割れた？！……」

飛び散った空の破片が宙に溶ける様に消えていくのと、上空に空いた大穴を呆然と見つめつつ、光秋は恐怖を含んだ声で呟く。

3 1 異界の使者

異様な事態からの衝撃から立ち直ると、光秋は大穴からかなり離れた辺りでニコイチを滞空させ、左耳の通信機に意識を向ける。

「UKD—01より各機。演習空域に異常事態発生。周りからも確認できますか？」——
……声が震えてるな——

言いながら、自身が抱いている恐怖を自覚する。

（こちらレッド・リーダー。こちらからも確認できてる……いったい何だ？）

——こつちが訊きたいですよ……——

通信機越しのタッカー中尉の呟きに、光秋は心の中で思わず呟く。
と、

「……！」

穴の中から黒い物体が吐き出される様に現れ、物体が出ると同時に穴は空に溶け込む様に消えてしまう。

光秋はすぐにモニター右側に表示された拡大映像に目を凝らし、穴から出てきた黒い物体が人型であることを確認する。腕や脚はニコイチと同じように丸みを帯びおり、

節々は黒いカバーで覆われているが、脚は膝から足先に向かって広がる扇状である。両腕には肘から手首までを覆う長八角形状の分厚い盾の様な物が付いたり、その手首側には3本の細い縦穴が空いている。胴体部上部を殆ど覆うほどの2枚の装甲板は胸筋を想起させ、その下には長八角形の赤い扉の様なものが付いている。半球形の頭部には円形のカメラらしきものが2つと、3本の穴を持つ排気口の様なものがあり、それぞれ目と口に見えないでもないが、それ以上に、目はガスマスクのレンズの様な無表情な印象を与え、排気口は口というよりも嚮くわを想起させる。

黒い人型がゆつくりと地上に降下するのを見つつ、光秋は拡大映像の右隣に出た情報表示に目をやる。

が、

—?……『該当データ無し』?—

表示内には拡大映像と同じ映像の上に「該当データ無し」という文字を重ねて映すだけであり、説明欄も全て「不明」と書かれている。唯一「全長」の欄だけが「10メートル」とあるだけである。

—10メートル……ニコイチと同じくらいか—

と、

（演習参加者全員に告ぐ！異常事態発生。監視衛星の映像から未確認機を確認。至急演

習中止。各自実弾に換装後、アンノウンを包囲せよ！繰り返す！」

通信機から男の慌てた声が響き、光秋は左隣に立つ伊部二尉に顔を向ける。

「演習中止、実弾に換装後、コイツを包囲せよと」

「……了解」

若干の不安を含んだ伊部の返事を聞くと、光秋は前を向き、視界の右端にF-15を先頭にした編隊が行き過ぎるを見、自分も左パネルの地図で現在位置を確認し、黒い人型の上を左に迂回して装備品置き場に直行する。

と、

「……………加藤くんが現れた時と、同じだね……」

「!？」

伊部の呟きに、光秋はハツとし、顔を向ける。

「今の、どういうことですか？」

「え？ああ、加藤くんがニコイチに乗って落ちてくる前にも、さつきみたいに稲妻が走って、空に穴が開いたの……ただあの時は、割るような感じじゃなくて、空間が液体でも混ぜる様に歪んで、白い穴が開いた感じだった気が……加藤くんは覚えてない？」

「いや、僕は……真つ白な空間の中を進んで行っただけと思ったら、いきなりこの場所に出たって感じで、こっちに来る前後がどうなったかわからなかったんです」

「そうなの？」

——しかし、だとしたらあの黒い人型……神モドキさんに関係が？……………

その推測が、光秋の恐怖と不安を一層強める。

装備品置き場上空に戻った光秋はゆっくりとニコイチを着地させると、通信機に意識を向ける。

「こちらUKD—01。ただ今戻りました。実弾への換装お願いします」

（大河原だ。了解した）

大河原主任の緊張を含んだ声が応じる。

「それと主任、N砲も持ってきてあるんですね？」

（あるが？）

「それも用意しておいてください。相手の能力がわからない以上、できるだけ備えておきたいんで」

（了解だ。とりあえずまず、ガトリング砲の方を先にやる。そこで待機していてくれ。あああと、安全のため盾と砲は下ろしてくれ）

「了解……」ここで待機してくれと」

「わかった」

伊部に報告すると、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ガトリング砲と盾をニコイチの

左右に置き、椅子の背もたれに寄りかかって実弾の用意が終わるのを待つことにする。伊部もヘルメットを取って椅子の左脇に腰を下ろし、2人は束の間の休息を楽にして過ごすように努める。

が、

——……いかなあ——

漠然とした不安と恐怖から、光秋は体中の不快な力みを取れずにいる。
と、

（加藤お！）

「！」

通信機から上杉の声が響く。

「上杉さん？なにかな？」

「！」

光秋の応答に、伊部も顔を向けて興味を示す。

（ニコイチの足元にいる。ちよつと出てきてくれ）

「はい？……」

応じると、光秋は伊部を見、

「上杉さんが『出てきてくれ』と。ハッチ開けます」

用件を伝えてハッチを開け、操縦席を機外へ出す。

―足元って……！―

下を見回し、ニコイチの左膝の近くに白衣姿に右手に持った通信機を耳に当てている上杉を見つけると、光秋は顔を向けながら通信機越しに言う。

「なにか？」

（スポーツドリンクの配給だ。上げてくれ）

言いながら上杉は、左脇に抱えている物を示す。光秋にはよく見えないが、スポーツドリンクが入った水筒かペットボトルと察する。

「了解」

応じると、ニコイチの左手を指し出し、通信機を白衣のポケットに仕舞った上杉が乗った手をハッチの上に置く。

光秋の前に来ると、上杉は右手に持ったペットボトルを指し出す。

「ほい」

「ありがとうございます」

礼を言つてそれを受け取ると、光秋は早速フタを開けて一気に四半分程飲む。演習と異常事態から来る緊張で少しばかり溜まっていた疲労感が心なしに軽減し、少しでも糖の味を覚えたことで僅かながら安らいだ気分になれる。

「ところで、なんで医療班の上杉君がこんなことを？」

上杉からペットボトルを受け取りながら伊部が訊く。

「配給担当のスタッフは皆待機者が大勢いるとこに行っちゃって、今は暇な医療班も手伝わされてるんすよ」

「……そう」

「……」

上杉の「今は」という言葉に、光秋は一層不安を抱く。

その様子を見てか、上杉は微笑を作りながら、

「そんな顔すんなよー。根拠はないけど、これからも暇だと思うし、なんかあっても、世界の合軍とESOのエース軍団相手じゃ、何が相手だろうとひとたまりもねえって！それにほら、天下の白いお犬様もいることだし！」

と、努めて明るい声で言い、両手で光秋の両肩を軽く叩く。

「ありがとうございます………」

光秋も明るく努めた声を返すが、不安は減ることはない。

——神モドキさんに関係があるなら……あるいは………——

同じ頃、異常事態の報告を受けて現場に來た富野大佐は、左隣に立つ横尾中尉と共に、木々を挟んで視線の先に直立している黒い人型を凝視する。

その周囲は、多数の戦車が砲口を黒い人型に向けて円形に包囲し、上空では常に4機の戦闘機が旋回を続けながら交代で待機している。

そんな状況にも関わらず、黒い人型は棒立ちになったまま指一本動かす気配もない。
と、

「富野君！」

「！」

呼び掛けられた富野は声のした右後ろを振り向き、短い黒髪に細身の顔つきをし、青服の上に富野たち同様防弾ベストを着た男が駆け寄ってくるのを見る。演習時、武装集団側の指揮をしていた男である。

「安彦^{やすひこ}か？ 珍しいな、現場に来るなんて」

「衛星からの映像だけじゃね。直接見なきゃわからないこともあるさ……で……」

富野と顔見知りの口を利きながら、「安彦」と呼ばれた青服は黒い人型に目を向ける。「出現時の様子は衛星からの映像で観たが、派手な登場にわりに、その後力カシみたいに動かない……と？」

「ああ。我々がこれだけの戦力を向けても気に留める素振りすら見せない。アレに『気』といえるものがあればの話しだが……もつとも我々も、相手の能力がわからない以上、無暗に刺激して戦闘を行うようなりスクも犯せん……」

富野はもう一言言いたそうな顔をするが、すぐにその言葉を飲んでしまう。

安彦はそれを察した様な顔をし、

「だね。今のところ、紳士協定といったところか……」

と、静かな声で返す。

（二曹！実弾の用意完了だ。今そつちに送るから、模擬弾と換えてくれ）

「了解です」

大河原の通信に答えた直後、ニコイチの足元に5つのガトリング砲の弾倉がテレポトして来る。

「じゃあ、上杉さん降りてください。換装が済んだらすぐ出ないといけないんで」

「了解……医者がこんなこと言うのも変かもしれないが……怪我すんなよー」

「……はいー」

光秋が意識して覇気のある返事をする、上杉はハッチの上に置きっぱなしになっているニコイチの左手に乗り、光秋はそれをゆっくりと地面に下ろす。上杉が手から降りるのを確認すると、操縦席を機内に下ろしてハッチを閉め、ニコイチの両腿の荷台の模擬弾と足元の実弾を交換する。

右手に持ったガトリング砲の弾倉も交換し、左手に盾も持つと、左隣に椅子に掴まり立っている伊部を見る。

「じゃあ……行きます」

「どうぞ」

返事を聞くと、ペットボトルのスポーツドリンクを軽く一口飲んでそれを膝の上に置き、両手を操縦桿に置いてニコイチを直立させる。

光秋がガトリング砲の弾の交換を終えた頃。

「！」

富野大佐は目の前の黒い人型の目が緑色に光ったかと思うと、その扇形の両足がふわっと地面から浮き上がり、上昇を始めるのを見る。

「動き出した!？」

富野の右隣に立つ安彦が驚愕の声を上げる間に、黒い人型は上空に待機していた戦闘機群よりも高い高度まで急上昇し、体を後ろに振り返らせると背面にあるニコイチと同じ形の円形の溝が露わになる。しかし、ニコイチが溝から白い光を放つのに対し、黒い人型は黒い影の様な不定形なものを放出している。

一瞬後、黒い人型は背面の溝を少し吹かすと、かなりの速さで前進を始める。

黒い人型の上空に待機していたタツカーは、人型が自分たちを歯牙にもかけずに飛び去ったのを見、強い反感を覚える。

――野郎！何者か知らねえが、マンガみてえなふざけた格好しやがつて！その上俺たち

は無視かよ！——「各機！あの黒い奴を追うぞ。俺に続け！」

一気に言うやタツカーは自機のF—22のジェット光を強め、拳程の大きさになりつつある黒い人型の後を追う。

（（了解！））

同時に応じた純を含めた他のF—223機もタツカー機の後を追う。

「……！」

ニコイチを立ち上がらせ、右ペダルに足を置こうとした刹那、光秋は前方から冷たい刃物を押し当てられる様な強い悪寒と不快感を覚える。

——何だ？……

思いつつ、正面の悪寒を感じる辺りに目を凝らす。

と、

「！」

その意思を拾ってモニターに表示された拡大映像に、光秋はこちらに向かって上空を一直線に飛んでくる黒い人型を見る。

「こつちに来た!？」

左隣でヘルメットを被ろうとしていた伊部が驚愕する間にも、人型は高度を下げながら真つ直ぐニコイチへと接近してくる。

「……！」

光秋は意を決し、通常映像に切り替わった人型に赤いマーカーが付くのを見ると、すぐにガトリング砲を向け、レーザーとマーカーを合わせて引き金を引く。多数の弾が人型に殺到し、着弾で発生した黒煙が人型を覆い隠す。

「……やったか？」

モニター越しに見る限り撃った弾の殆どが人型に当たった様子に、緊張した声で呟く。

しかし、

「！」

人型は煙を掻き分けてニコイチとの距離を一気に詰め、肩溜めにした右拳を繰り出す。

「！」

咄嗟に大きく後退してそれを避けると、盾を胸の前に構えつつ再びガトリング砲を放つ。

が、

「!？」

多数の弾が人型に当たり爆発を起こすものの、人型には損傷どころか傷一つ付くこと

がない。

と、

（ジャップ！上昇しろ！）

「！」

通信機のタツカーの声を聞き、光秋は右ペダルを一杯に踏んで急上昇をかける。

直後に人型の背後の4機のF―22から8発のミサイルが放たれ、人型を中心に巨大な火球が咲く。

「今度こそ、やったか？……」

火球の上を横一列になって飛ぶ4機のF―22を見下ろしながら光秋は呟く。

だが、

「！」（馬鹿な!?!）

タツカーの驚きと同時に、人型は火球の中から飛び上がって一気にニコイチに迫る。

同時に右腕の盾の手首側の穴から包丁の様な形をした三本の刃やいばを生やし、間合いを詰めたニコイチにそれを突き出す。

「！」

光秋はすぐに後退して刃を避け、近距離でガトリング砲を放つ。

が、人型はそれを意に介さず、高く上げた右腕を振り下ろす。

「!」

光秋は後退をかけつつ、胸の前に出した盾でそれを受ける。

「……!?」

一瞬後、左腕に浅い切り傷の痛みを覚えたかと思うと、視界の端に大小3枚の緑の板が落ちていくのを見、盾が持ち手部分だけになっていると理解する。

―盾を切った!?―「コノオ!」

瞬間的に激するや、残った盾を脇に捨てると同時に右脚を伸ばし、人型の腹部に力一杯の蹴りを喰らわす。

まともに喰らった人型はバランスを崩した様子で後ろに飛ばされ、その隙に光秋は急上昇して人型と距離を取る。

直後、

(二曹!)

大河原から通信が入る。

「主任?何か?」

(ソイツにガトリング砲は効果がないようだ。N砲を送るからガトリング砲を放せ!)

「了解!」

言うのとすぐに光秋はガトリング砲の持ち手から手を放し、ガトリング砲が消えたのと

入れ違いに現れたN砲の持ち手を掴んで砲口を下にいる人型に向ける。

「！」

すでに体勢を立て直して突進してくる人型に向かって2発連続で放つ。

が、人型は両腕の盾を前に出して2発とも無傷で受け流し、再び一気に間合いを詰める。

「クッ！」

人型が左拳を放つ直前、光秋は相手の右側に回り込み、

「！」

近距離で人型の右肩に向けて一射する。

命中し、爆発に煽られた人型は左拳を空振りさせた体勢のまま左に落ちる様に飛ばされ、その間に光秋は再び上昇して距離を取る。

—これだけやっても何ともないってことは、コイツ……ニコイチと同じ！——
目前の無傷の人型を見て出した漠然とした理解に、より一層の恐怖を覚える。
が、一方で、

——……待てよ——

光秋は間合いを保ったまま人型に一射し、

「！」

当てられた人型が間合いを詰める間に左に回り込んで横腹に左蹴りを入れる。

よろけた人型から後退して間合いを取りつつ、

—やっぱり！見た目通りニコイチよりも頑丈そうだが、同時にニコイチよりも重くて遅いんだ！—

と、相手の短所を見つけ、光秋は少しだが自信を持つ。

「それなら！」

「？どうすの？」

伊部の問いには答えず、光秋は人型の後ろに回り込み、

「！」

一気に間合いを詰めて人型の背の円形部分に右蹴りを入れ、間髪いれずにN砲を一射する。

すぐに後退して間合いを取りつつ、

「コイツ、ニコイチより遅いんです。今の様に一撃離脱を繰り返していけば、いずれは！」

伊部に結論から出した戦い方を説明する。

—もう一丁！—

思いつつ、光秋はこちらを振り返った人型の左に迂回し、

「！」

背後に回り込んで背中に左蹴りを入れ、N砲を向けて引き金を引く。
が、

——しまった！——

砲弾は放たれず、その間に振り返った人型の広い左足がニコイチ胸部のコクピットを正面から蹴り上げ、光秋は胸が爆発した様な激痛を覚える。

「うっ………」

自分の小さな呻き声を意識の隅に聞きながらも、束の間意識が遠退き、ニコイチは背中から力なく地面に落下していく。

背中が地面に着く直前、

「加藤くん！」

「！」

伊部に左肩を強く揺すられて我に返るや、咄嗟に右ペダルを踏んでNクラフトを吹かし、弾む様に急上昇してなんとか体勢を立て直す。

——いかん。油断したな——

心中に自省を呟いた直後、光秋は接近警報が鳴ると同時に右側に菱形の編隊を組んで近づいてくる4機のF—22を見つける。

（俺の上に乗れ！）

—タツカー中尉か！どれだ？—

通信機の声聞いて思った直後、その意思と通信源を拾ってか、菱形の先頭機に青いマーカーが付き、光秋はその機の真上に接近して左手を吸気口に引っ掛け、落ちる様にタツカー機に密着する。

直後に右後ろから迫ってくる悪寒と接近警報を感じ、

「急いで！」

と、通信機に怒鳴り、すぐにタツカー機を先頭にした編隊が急速に人型から間合いを取る。

間を置かず、光秋は大河原に通信を送る。

「主任！弾の補給を！」

（そんなに速く動いていては無理だ！せめて速度を落とさんとここにいるテレポーターでは届けられん！）

「……」

大河原の返答を受け、光秋は後ろを振り向いて様子を見る。

が、速度こそニコイチや戦闘機に劣るものの、未だ間合いを詰めんと執拗に迫いかけてくる人型を認め、

——無理だ！——

即断する。

「速度を落としたら奴に捕まります！この状況で失速なんて無理です！」

（だが、このままだと補給もできんぞ！）

「！……」

大河原の返答に、光秋は押し黙ってしまう。

と、

（まったく！）

「？」

外音スピーカー越しに聞き覚えのある声を聞いたかと思うと、視界の右端を小さい影がすれ違う。

「！」

「あれって！」

伊部の呟きを聞きつつ、顔を向けて追ってみると、拡大映像の中に人型に正面から接近する曾我の背を見る。

「曾我さん！離れて！」

防弾ベストしか付けておらず、頭部にいたっては素頭の曾我を見、光秋はすぐに通信

機に呼び掛ける。

が、

（あんなオモチャみたいな相手に、いつまで手間かけてるの！）

怒った声で返すや、曾我は滞空して右手を勢いよく前にかざす。

しかし、

（……あれ？）

——やっぱり！——

曾我の戸惑った声を聞き、光秋は薄々予想していたことを確信に変える。

——超能力耐性か！——

直後、

「！」

人型が左手を曾我に伸ばすのを見るや、タツカー機から離れて上昇し、人型を真下に捉える。

「！」

瞬時に右脚を真つ直ぐに伸ばし、右ペダルを一杯に踏んで急降下をかけ、人型の頭上に落とし蹴りを喰らわす。

体勢を崩した人型が落下するのを横目で見つつ、光秋は左手で曾我を掴んで上昇す

る。

（ちよつと！放しなさい！）

ニコイチの手を両手で叩きながら怒る曾我を顔の前に持つてくると、光秋は心なしにカドスが利いた声で通信機越しに言う。

「退がってください！アレには超能力は効かないんです！」

（？……どうということ？あなた何でそんなこと……）

と、曾我が困惑した顔で応じた直後、

「！」

光秋は真下から急速に迫ってくる悪寒と接近警報を感じ、

「話しは後！とにかく離脱して！」

早口に応じ、左手を開いて曾我が全速力で上昇しつつ後退するのを見届ける。

直後、

「！」

光秋は下に目前まで迫った人型を見、人型は3本の刃を生やした両腕をニコイチの口ピットへ伸ばす。

咄嗟に後退しつつ上昇して間合いを取ろうとする。

が、

——間に合わない!——

が、直後に人型の背後に爆光が咲き、前によけた拍子に両腕の刃がニコイチ両腿の弾倉の荷台の輪を切る。

落ちていく荷台とガトリング砲の弾倉、体勢を立て直そうとしている人型を視界の端に見つつ上昇を続け、

——攻撃? 何処だ? ——

光秋は下界を見回す。

と、

「!」

モニター右側に表示された拡大映像越しに、木々の合間から隠れる様にして砲身を伸ばすグレタンを見つける。

直後、

(加藤! 無事か?)

通信機から小田一尉の声が響く。

——声が震えてる? ——「小田一尉! ありがとうございます!」

一瞬小田の声の調子に疑問を抱くものの、光秋はすぐに礼を言う。

と、

（待たせたな！そのまま上昇を続けろ。巻き込まれるぞ！）

「？」

通信機越しの藤原三佐の指示に疑問を感じつつも、すぐに右ペダルを深く踏んで人型との間合いをさらに開ける。

ニコイチが充分に距離を取った直後、

（各自一斉砲撃！撃てえ！）

「！」

通信機に富野大佐の声が響いたかと思うと、下界に広がる緑の合間から次々と砲弾が上がり、ニコイチに迫ろうとしている人型をタコ殴りにする。

四方八方から休みなく殺到する無数ともいえる砲撃に、人型は前後左右に煽られ、すぐに大きな黒煙の中に消える。

「……………これは……………」

（有事に備えて用意しておいた戦車や重火器類の一斉攻撃だ。これなら黒い奴もひとたまりもあるまい！）

光秋の驚愕を含んだ呟きに、藤原は自信満々の声で説明してくれる。

「……」

その間も休みなく黒煙に向かって行われる無数の砲撃に、光秋はそちらにも漠然とし

た恐怖を覚える。

「……凄い……」

——……これが……戦争？——

伊部の声を聞きつつ、光秋の心中にそんな言葉が浮かぶ。

しばらくすると砲撃は散発的になり、やがて地上からの砲火が止んで黒煙がゆっくりと晴れる。

と、

「……！」

光秋は眼下に、前に組んだ両腕をゆっくりと開く無傷の人型を見る。

「……」

（……馬鹿な……！？）

声が出ない光秋に代わる様に、藤原の静かな驚愕が通信機越しに響く。

と、

「！」

表情のない顔を上げた人型はニコイチを見据え、光秋は全身に冷えたナイフを当てられる様な非常に強い悪寒を覚える。

直後、

（コノオオオ！）

（中尉！無茶です！燃料だってもう殆どないんですよ！）

「！」

通信機にタツカーと純の叫びを聞いて気を取り直すや、人型に背後から機銃やミサイルを放ちながら迫るF—22を見る。

—タツカー中尉？……！——

思った直後、人型は銃弾を意に介さず、ミサイルを左腕の盾で受け流しながら振り返り、間近まで迫ったタツカー機に右腕の刃を伸ばす。

「中尉！」

（！）

光秋が思わず叫ぶのと同時に、タツカー機は人型の左に回り込み、切っ先が左翼の底を擦れるもののなんとか刃の直撃を回避する。

「……コノオオオ！」

叫びつつ、光秋はN砲の持ち手を両手で持つて高く上げ、人型の背後に急降下して頭部にその砲身を叩きつける。

が、

——折れた!?……！——

視界の端に本体から離れた砲身が跳ぶのを見た直後、人型は振り返りざまに右回し蹴りを喰らわし、光秋は左脇腹に激痛を覚えながら地上へ落下する。蹴られた弾みでN砲本体も落としてしまう。

「……！」

しかし今度は意識が遠退くことなく自力で体勢を立て直し、樹上直前で滞空して上を見る。

直後、

「！」

人型が右腕の刃を伸ばしながら頭から一気に降下し、後退しようとするが間に合わず、目前までの接近を許してしまう。

一杯に伸ばされた腕先の3本の刃がニコイチの頭上に迫る。

「ダメか！」

が、直後、

「！」

人型の背に爆光が咲き、よろけた隙に一気に後退して間合いを取る。

「……！」

直後に響いた接近警報に上を見ると、多数のF—15・F—22の混成編隊が後ろか

ら前へと行き過ぎ、何機かは人型にミサイルを放つのを見る。

と、

（ブルー・リーダーより先行していた各機へ。遅くなった。各自一度後退して補給に入れ。その間我々が引き継ぐ）

（古谷隊長！……）

光秋は通信機越しに、古谷大尉の指示とタツカーの安堵の声を聞く。

と、

（うわあ！）

「！」

突然通信機に響いた男の絶叫に辺りを見回すと、人型が縦横に動き回って戦闘機からの攻撃を回避しつつ、近い間合いに入った戦闘機に刃や拳を当てて次々と撃墜していくのを見る。

「……」

光秋が見る限り、撃墜機のパイロットはいずれも脱出に成功しているが、コクピットの間近に刃を突き刺すという乗り手の生命を考えているとは言い難い戦い方に、身の奥から熱が湧き上がってくる様な感覚を覚える。

そして、

「あんなことしてたら、その内死人が出る！」「……そんなこと！」
小さな叫びとなって現れた熱は光秋自身を前進させ、上空にいる人型に一気に間合いを詰めると、

「！」

人型の頭部に腰溜めにした右拳を見舞う。

それによつて人型の体勢が崩れると、瞬時に人型の上方に移動し、

「！」

頭頂に渾身の右蹴りを喰らわす。

あまりの力に、人型は下の広場に背中から落下する。

「加藤くん！」

伊部の叱責の声が飛ぶが、光秋は応じずに人型を追つて間合いを取りつつ広場に着地し、左半身を前に出して組手の構えをする。

「……！」

人型が起き上がるやNクラフトを吹かして滑る様に近づき、頭部に左突きを連続して2発入れる。

同時に光秋の中の熱も強まり、それを表す様にニコイチの節々のカバーの隙間から赤い燐光が漏れ出す。

しかし、

「！」

光秋は構わず右拳を人型の胸に入れ、右蹴りを腹に見舞って人型を後ろに飛ばし、そのまま右脚を前に出して右構えの組手の体勢になる。

一連の動きから光秋の中の熱が強まるのと比例して、燐光は輝きを増す。

「……！」

そこでモニター越しにようやく燐光に気付き、ハッとす。

「ちよつと、これ！」

「いかん！ また……それに……」

伊部の慌てた声を聞きつつ、光秋は起き上がろうとしている人型に目をやる。

「恐怖で思い付かなかったが、あれにももしかしたら、誰か乗ってるんじゃないか？ それにこのままじゃ、また『蜂の巣』みたいに！……」

その認識が熱を少し冷やして冷静にさせ、燐光の輝きを弱めさせていく。

「……」

鼻で大きく深呼吸して熱を鎮め、燐光を完全に消すと、人型が体を引きずる様に立ち上がり、両腕先の刃を引っ込める。

「降伏か？ さすがに限界か……」

と、

「……!?」

光秋は背後に多数の雷鳴を聞き、振り返るとガラスが割れる様な轟音を響かせて正面の空間に黒い大穴が空く。

直後、

「!」

背後を人型に掴まれ、そのまま抵抗する間もなく穴の方に押されてしまう。

「!……………」

「……………」

伊部が左腕に縋る様にもたれてきた感覚を最後に、光秋の意識は黒一色になる。

3 2 再会と覚醒

「……………！……………！！」

我に返った光秋は、荒野の様な殺風景な場所にニコイチを棒立ちさせ、頭上に夜の様
な暗い空が広がっていることに気付く。

どこからか届く星明かり程度の光とニコイチのモニターの補正機能でなんとか周囲
の様子はわかるが、それでも視界は著しく悪い。

——……………闇の世界——

モニター越しの映像から、自然とそんな印象を抱く。

「……………！！」

「二尉！」

光秋の左腕を掴んでいた伊部二尉も我に返った様に周りを見回し、光秋はその方に顔
を向ける。

「……………は？」

「わかりません。僕も気付いたらこうなつて……………ただ、状況から考えると……………」

言いながら光秋は、つい先程黒い人型に宙に空いた黒い大穴に押し入れられたことを

思い起こす。

「……あの穴の中？」

「……」

伊部の言葉に、首肯を返す。

と、

「……！　そういえば黒い奴は!? 気付いた時にはもういませんでしたか？」

穴に入った時の記憶から黒い人型のことを思い出した光秋は、慌てて周りを見回し、

「……！」

正面上空に浮かぶ人型を見つけ、滑る様に後退して距離を取る。

同時に人型もゆっくりと降下し、若干足元をよろけさせながら地面に着地する。

——やっぱり、限界なのか？——

油が切れかかっている様な人型の鈍い動きに、光秋はそう考えてみる。

が、直後、

「!?」

人型の頭上に背景以上に暗い黒雲が発生する。周囲がかなり暗いにも関わらず異様に映える黒雲は、人型の肩幅程に膨らむと、中央から一条の細い渦を人型の腹部の赤い長八角形の扉へと伸ばし、そのまま吸い込まれていく。

黒雲を吸い込み切ると、人型は一瞬両目を緑色に輝かせ、左半身を前に出して構える。
「……」

その挙動に先程までの鈍さはなく、光秋は演習場での緒戦に感じた悪寒と恐怖を思い出す。

が、

「……やる気か！」

その記憶を押しやる様に意識して覇気のある声を出し、操縦桿を握り直してニコイチの左半身を前に出して構える。

「気を付けて！……ここでは恐らく、向こうの方が有利」

「！」

伊部の静かな忠告に、光秋は思わず目をやる。

「自分の有利な場所に敵を誘い込んで戦うのは常套手段。私たちにはこの場所に関する知識が全くないんだし……それに、黒い雲を吸い込んでからのアレ、さつきまでと違う！」

「……それもそうか——「はい！」」

応じると、光秋は正面の人型に視線を戻す。

直後、人型は滑る様にニコイチに接近し、右拳を繰り出す。

「！」

光秋はそれを左腕で受け、後ろに押されそうになるのを何とか踏み止まり、

「！」

当たり所の痛みを堪えて人型の腹部に右蹴りを入れる。

蹴りの力で人型が後ろに押されている間に右脚を後ろに戻し、滑る様に接近し、

「！」

頭部に左突きを2発、胸部に右突きを1発入れる。

それで後ろによろけた人型は、急上昇して間合いを取る。

「！」

光秋もすぐに右ペダルを深く踏んでそれを追う。

と、

「！」

上昇していた人型は右脚を伸ばして降下蹴りをかけ、光秋は少し後退してそれを避ける。

が、直後、

「！」

人型はすれ違いざまにニコイチの胸部を右拳で横から殴り、胸に痛みを覚えながら光

秋は後ろに落下する。

「……！」

Nクラフトを吹かして地面直前で体勢を立て直すと、上の人型を見る。

「！」

目前まで迫った人型は肩溜めにした左拳を放ち、光秋は両腕を胸の前で組んでそれを受ける。

「……………」

殴られた勢いで地面に押し落とされ、左腕に痛みを覚えながら後ろに数メートル押される。

その間、後ろにした右足を地面に押しつけ、地表を浅く削って殴られた力を殺す。ニコイチが止まると、光秋は両腕を下ろして前を見る。

「！」

正面に迫った人型が肩溜めの右拳を放とうとする直前、姿勢を低くしてそれを避け、

「！」

間を置かず、腰溜めにした右拳を人型の腹部に入れて後ろに押しやり、滑る様に後退して間合いを取る。

「……」

左半身を前にして構えると、光秋は滑る様に間合いを詰め、

「！」

人型の頭部に左突きを2発入れ、胸部に右蹴りを放つ。

が、

「！」

放った右脚は人型の左腕に掴まれ、そのまま持ち上げられて右側に捨てる様に放り投げられる。

「！」

Nクラフトを吹かしつつ、地面に足を着いて投げられた力を殺す。

止まり切ると、光秋は左を前にして構えるが、

「……いかん！ばててきてる！——

同時に体中に危機的な疲労を覚える。

——演習の緊張と向こうの世界での戦いの疲れ、それに恐怖心、未知の環境……小休止がもたらえたとはいえ、殆ど無休でやってたのもあるから、無理もないか………が！——
思うや正面に立つ人型を見据える。

——もう少しもつてくれ！こんな所で死ぬのは御免だ！——

そう思うことで自身に活を入れ、疲れを紛らわそうとする。

直後、人型が右腕先に刃を伸ばし、それを前に突き出して迫ってくる。

「!」

光秋はすぐに後退しつつ上昇して間合いを取るが、

「頭まで疲れたか? 周囲把握……注意力が散漫になつてゐる気が……」

その傍らで自身への危機感を抱く。

そして、これが隙になる。

「!」

一瞬の考え事の中に人型は目前まで迫り、光秋は寸前のところで左に動いて突き出された右腕の刃を避ける。

が、

「!」

直後に人型の右蹴りが腹部に当たり、腹が破けたかのような痛みを覚えながら後ろに飛ばされる。

そして、

「!」「うっ!」

疲労と痛みで光秋の心身の反応はいよいよ鈍くなり、手動操作も思考操作もできないまま背中から地面に落下し、全身の痛みとコクピットの微振を感じ、伊部の小さな悲鳴

を意識の隅に聞く。

「……加藤くん、大丈夫？」

横向きになつてゐるコクピットで、伊部は席の背もたれを支えに光秋の左側に顔を出して訊く。

「……何とか……」

疲労と痛みで思うようにならなくなつてきた体の中から、光秋は絞り出す様に言う。
と、

「……！」

人型がニコイチの上に跨る様に降り立ち、右腕を肩溜めにして刃の先をニコイチに向けてくる。

「……ここまでか？……」

漠然と思いつつ、光秋は血の気が失せた顔の伊部が、縋る様に自分の左腕を両手で掴むのを目の端で見る。

「……この人と一緒に逝けるなら、悪くないか……」

人型の刃が一気に迫る。

が、光秋にはその間が、すぐくゆつくりに感じられる。

――綾にもう一度会いたかったな……いや……」

刃がコクピットに迫る。

——綾のところに行くのか？………………—

知らぬ間に、口元が笑みの形に歪む。

直後、

「アキ！」

「！」

聴覚を打った声に口の笑みなど吹き消し、光秋は伸び切った人型の右腕を力を込めた両手で掴んで刃の先が装甲に接する寸前に止める。

「『アキ』って!?!……………」

驚きの声を上げながら左隣を見る。

と、

「……………」

後頭部のゴムを外し、髪を広げた伊部が目元に薄つすらと涙を浮かべながら微笑みかけるのを見、掴まれている左腕に先程より掴む力が弱くなったと感じる。

「……………アキ」

「…………綾」

その呼び掛けと、伊部の時とは違う、強いていえば柔らかい雰囲気、光秋は目の前

に在るのが伊部法子ではなく、加藤綾だと確信する。

直後、

「！」

人型が突き出している腕に力を込める。

「話しは後だ！」――まずは、ここを乗り切らんと――

断じると、光秋は両手にさらに力を込める。

――勝手だったかもな。『二尉だけでも』って発想を持たず、一緒に死ねて嬉しいなんて考えは――

両腕を徐々に伸ばし、人型の刃を遠ざけていく。

――この人が、こいつがいるから、頑張らんと――

その腕の動きに合わせる様に、ニコイチの節々のカバーの隙間から赤い燐光が漏れ出す。

――こいつを守りたい！……何より……――

燐光の輝きが増すに従って腕の力も増し、伸び切った両腕に押さえられた人型の右腕は寸分も動く気配を見せなくなる。

――まだ生きたい！……生きて……！――

人型が左腕の刃を伸ばしてそれを繰り出そうとするのを見、光秋は右脚を素早く動か

す。

—生きてこいつと！—

心中に叫ぶや、両手を離すと同時に人型の胸部に右蹴りを入れて上空へ突き飛ばす。人型が放物線を描いて飛んで背中から落下する傍らで、光秋は上体をゆつくりと起し、両手を地面に置いて体を支えながらゆつくりと立ち上がり、仁王立ちになる。

その間にも節々の燐光は輝きを増し、周りの闇を押し退ける様に周囲を血の赤色に照らす。

「……………」

光秋は目をつむって鼻で大きく息を吸い、吐きながらゆつくりと目を開け、正面の立ち上がりとしてゐる人型を見据える。

同時に自分の知覚が四方に拡大する感覚を覚え、それに合わせてニコイチの節々の力バーが胸部のコクピットから末梢へ向かって開き、血の色に輝く骨格——Nフレームを露出させる。頭部の角も伸長し、「蜂の巣」戦で見せた暴走状態と同じ姿になる。

が、その時と違って、今回両目は赤くならず緑のままである。光秋の方も、頭を椅子から伸びる2本の腕に固定され、自分の体と操縦席の境界が曖昧になる感覚を覚えるが、同時に左隣で自分の生身の腕に手を添えている綾の存在も普段通りに知覚できているのである。

そして、激怒しかなかったあの時と違い、今は、

—ここを乗り越える！—

という明確な意志を自覚し、ニコイチの機能と同期し、拡大された知覚で周囲の状況も見えている。

「……」

人型が若干よろけつつ立ち上がると、光秋は左半身を前にして構える。光秋の意思と完全に同期したニコイチは、両目を一瞬強く輝かせ、いつも以上に自分の体の如く動いてくれる。

体勢を立て直した人型は、右腕の刃を突き出しながら迫る。

「！」

刃が繰り出される直前、光秋は姿勢を低くしてそれを避け、間を置かずに左突き、右突きを人型の胸部に食らわして後ろに突き飛ばす。

人型はよろけながら5、6歩後ずさると、一気に上昇する。

「！」

光秋もそれを追って上昇し、2機は高高度で並んで滞空する。

光秋が再び左半身を前にして構えるや、人型は左の刃を突き出して接近してくる。

一瞬恐怖を覚えるが、

―守っていたらダメだ！攻めなきゃ！―

すぐに断じ、構えの姿勢を維持しながら前進する。

―『速く動け』―

意識の隅に藤原三佐の言葉を思い出した直後、光秋は人型の左の刃を屈んで避け、

「！」

胸部に右突きを食らわす。

突き飛ばされた人型が体勢を立て直す前に接近し、

「！」

頭部に左突き、胸部に右突きと右蹴りを入れる。

人型がさらに突き飛ばされるや、光秋は人型の真上に上昇し、両腕と左脚を腰に引き、右脚を真っ直ぐに伸ばす。

直後、

「あさあ！」

腹の底から気合を出すと同時に、火矢の如く人型に急接近する。

一瞬後、光秋の落とし蹴りを頭頂に受けた人型は、そのまま地面に突き落とされる。

光秋は数メートル程進んでから停まると、人型の落ちた辺りと距離を取ってゆつくりと着地する。

正面に仰向けに落ちた人型が体を引きずる様にゆつくりと立ち上がろうとするのを見、その頭部に蹴りが当たった頭頂から左目の上部にかけて走る大きな亀裂を捉える。弱っているという印象を抱かせる人型の動きに、光秋は好機を感じる。

―決めるなら、今だ……しかし……―

一方で、演習場での戦闘で抱いた疑念――人が乗っている可能性を思い起こすと、

「大丈夫……」

光秋は、生身の聴覚で綾の声を聞く。

「アレに人はいない。すごく嫌なもの」

「……生物は乗ってないのか？」

「うん！」

「……テレパスの力か？」

「ニコイチが……アキが手伝ってくれるから」

「?……わかった！」

応じるや、左半身を前にして構えて右拳を腰に引き、そこに意識を集中する。それに合わせて、右腕から放たれる燐光が徐々に他の部分よりも輝きを増していく。

―わかった理屈を訊くのは後だ。今は、ここを乗り切る!―

綾の言葉だけを根拠にそう断じると、光秋は何とか直立した人型を凝視する。

疑念を払うには根拠が弱いのではないか、という思いを意識の隅に抱きつつも、綾への信頼の方が遥かに勝っていると自負する。

「嫌なものはあそこ。あの赤い所から感じる!」

—あの赤い八角形か!—

綾の指摘に、人型の胸部の下にある赤い八角形の扉に狙いを定める。

「……!」

人型が完全に体勢を立て直した一瞬後、光秋は滑る様に瞬時に間合いを詰め、

「あさあ!」

腹の底からの気合と共に人型の八角形部分に渾身の右正拳突きを見舞う。

他の部分以上に強く輝く赤い燐光を纏った右拳は八角形部を粉碎し、そのまま人型を背部まで真一文字に貫通する。

すぐに右腕を引くと、上昇しつつ人型から間合いを取る。

腹部辺りに大穴が空いた人型は、穴の周囲に漏電らしき光を3、4本走らせると、力なく前に倒れ込み、そのまま動かなくなる。

「今度こそ……終わった……のか?……」

知らぬ間に、若干の安堵を含んだ声が漏れる。

同時に、Nフレームの輝きも徐々に弱まり、燐光が完全に消えると、節々のカバーが末梢からコクピットに向かって閉まり、頭部の角も収縮する。それに合わせて、光秋のニコイチ大に拡大した知覚も自分の体へと戻っていく。

頭部を押さえていた椅子の腕が外れると、光秋は未だピクリとも動かない人型を見る。

—これだけ経つても動かないってことは……本当に、終わつたんだ！……—

その認識が完全な安堵を覚えさせ、力が抜けた体から安心の溜め息が漏れる。

と、

「……—」

突然、それまで殆ど暗かった視界に、純白の光が広がり出す。

「何!？」

綾の怯えた声を聞きつつ、光秋は握られている左腕に力がかかるのを感じる。

その間にも光は広がり、瞬く間に光秋の視界を埋め尽くしていく。

「……—」

気付くと光秋は、モニター一面が白一色で埋め尽くされているのを見る。

—故障か?……いや……—

「……—ハハ、どハハ?」

綾が怯えた顔で辺りを見回すのを横に見つつ、

——ここは……まさか！——

と、光秋は自分たちが置かれている状況を薄々予感する。

直後、

——よう！半年ぶりか——

「！」

背後から聞き覚えのある声を聞いた、というよりも頭に直接感じた光秋は、ニコイチを後ろに振り向かせる。

正面に、大人程の大きさの白い顔のない人型が現れる。

「……神モドキさん——やっぱり……」

「……あれ、アキが前に話してた？」

「そう」

モニター越しに神モドキをまじまじと見ながら訊く綾に、光秋は短く返す。

——そうそう。あの世界の超能力者の女も一緒だったな——

——？……『超能力者の女』？——

神モドキの言葉に疑念を感じつつ、光秋は左肘掛のハッチの開閉ボタンに左手を伸ばす。

と、

—ああ、ちよつと待った。今回はソイツ、お前のいうニコイチに乗つてることを前提にして空間を創つたから、空気は用意してない。出ない方がいいぞ—

「！」

神モドキの言葉に、光秋は慌てて手を引つ込め、

—スケールのでかいズボラが！—

と、思わず心中に言う。

と、

—まあ、いろいろ言いたいことがあるんだろうが、まずは……—

「？……！」

神モドキが言うや、光秋はモニター越しの目前に白い長方形の板の様な物が現れるのを見る。

「これは？」

—ニコイチを構成している主成分の塊だ。生き物でいうタンパク質、機械的には予備部品と言うべきかな？ニコイチの左腕を見てみる—

「？……！」

言われた通り左腕に目を凝らすと、腕に3本の切り傷を見つける。傷自体は細くそれほど大きいものではないのだが、かなり深く付いており、傷口からNフレームが露出し

ている。

「……………盾が切られた時痛みを感じたけど、あの時腕も切れてたんだ！——
思いつつ、演習場での戦闘を思い出す。」

「それで、この板は？」

「—そいつを傷口に当てろ—」

「?……」

神モドキに従って、右手に持った白い板を左腕の傷口に当てる。

と、

「!？」

板が腕に染み込む様に消え、同時に傷口も跡形もなく消える。

「これは?……」

「—機械で言う予備部品と言ったろう。ニコイチを構成しているその物質はな、破損個所に当てるとあとは勝手にそれを塞ぐんだよ—」

「—なるほど……と!——」

目の前で起こったことに感心しつつも、気を取り直した光秋はモニターに映る神モドキの顔部分を注視する。

「ところで……あの黒い人型、送り込んだのは神モドキさんですか？」

—コイツのことか?—

言うと神モドキは、左手を横に伸ばす。

「!」

直後に神モドキの左後ろの現れた人型に、光秋は戦慄する。

—安心しろ。コイツはもう完全に死んでる。お前が急所を正確に壊したからな—

「!……」

神モドキに言われて、光秋は人型の胸部下に空いた穴を見る。

「それなら……で、どうなんです? やっぱりあなたが?」

—いや、オレじゃない—

「じゃあ、誰です? そもそもソレは何です?」

—詳しくは言えない。ただこれだけは教えておこう。オレの様な存在は、オレだけじゃないってことだ—

—……他にも、神モドキさんの様なのが?—

—そりやそうだ—

—……テレパシーか—

話していないのに神モドキが応じた理由を察し、勝手に心を読まれたことに光秋は少々不快感を覚える。

—だってそうだろう？ お前とその女のいた世界それぞれに、種として同一のヒトがいるんだ。さらにいえば、同じ一つの世界にも、同じ様に知性を持ち、文明を持つ異種族はいる。オレの様な存在が他にいたって、なんら不思議じゃない。ま、そいつもオレと同じ様な考えで動いているとは限らないがな—

—……それもそうか—「じゃあその人型は、その存在が……」

—ああ。造りそのものはニコイチと大差ない。違いといえば、ニコイチは様々な状況に対応できるバランス重視の汎用型として作ったが、ソイツは力と装甲に重点を置いた攻撃機だな。あとは、人が乗るか否かくらいだ—

—………今更なんだが、とんでもない物と戦ってたんだな—

力なく佇む人型を見、光秋は背筋に寒気を覚える。

と、

—にしても、半年でソイツをここまで制御できるようになったかあ。前に暴走してから不安な状態が散発してたんで、オレも心配してたが……有性生物は異性が絡むとうかする傾向にあるからなあ……—

「？」

神モドキの言葉に、光秋は再び疑念を抱く。

「その言い方……もしかして、僕のことをずっと見てたんですか？」

—ああ。もともとそうやってお前を選んだんだし、ESOに入ると決めた時も電話しただろう—

—確かに……—

理解するや、少し表情が曇る。

—安心しろ。向こうに送る前もそうだが、節度は考えてある。私生活も必要最低限のことしか見ていない。それに、『ずっと』でもないな。『定期的』と言った方が合ってる。大きな事態の場合は、ニコイチの反応を感じて臨時で見ることもあるがな—

「……『必要最低限』がどの程度かはわかりませんが、それなら—昨日大河原主任が僕のことを『モルモット』と言っていたが……神モドキさんにとつてもそうか……—

一連の説明を、光秋はそうのように理解する。

と、

「……あの……神モドキさん」

それまで蚊帳の外だった綾が恐る恐る言う。

「……アキを、元の世界に戻してくれませんか」

「—綾……—」

突然の発言に、光秋は意表を突かれる。

「だって、知らない所に連れてこられて、独りぼつちで……アキが可哀そう！……あ

と……………あたしもそこに連れて行つて欲しい！」

—綾…………—

綾の顔を見つつ、光秋は想われている嬉しさと、綾が自分の今の状況を過剰に捉えているのではないかという思いを抱く。

—お前、愛されてるねえ……だが、そうはいかない。オレの目的はまだ果たされていないから—

言うとき神モドキは、右手を前にかざす。

と、

「……………」

初めて神モドキと会った時の様に、ニコイチが勝手に後退を始める。

—あー、そうそう。コレも持ってけ。トロフィー代わりだ—

言うとき神モドキは左手も前に出し、それに合わせて人型もニコイチの方へ流れてくる。

「トロフィーって……………」

光秋が戸惑う間に、神モドキは徐々に小さくなっていく。

33 異界からの帰還

「……………」

呆然としているところを我に返ると、光秋は演習場の大型装備品置き場にニコイチを棒立ちさせていることに気付く。

「戻ってきた？……………」

眩きながら周りを見回すと、右隣の地面に黒い人型が仰向けに倒れ込んでいる。
と、

（加藤！無事か？）

「……………戻ってきた！——」

左耳の通信機から響いた藤原三佐の心配した声に、光秋は強い実感を持ち、同時に体から疲れが湧き出てくるのを感じる。

「無事です！あ……………伊部二尉も！」

（そうか……………すぐにそっちへ行く！少し待ってろ）

口が滑りそうになりながらも通信機越しに应じると、光秋は左隣の綾を見ると、
と、

「……」

「?……綾?」

綾が左側から光秋の膝に倒れ掛かり、大儀そうに頭を上げて顔を合わせる。

「……………ごめん……………いきなり起きたから、疲れちゃって……………それに、イベさんが、もう……………起きる、から……………!」

「……………」

寝むような様子で切れ切れに言うや、綾はいきなり光秋の顔に近づき、押し付ける様に唇と唇を合わせてくる。

少しして口が離れると、綾は倒れる様に光秋の膝の上に寝込んでしまう。

「綾……………綾!」

焦った声を掛けながら揺すってみる。

と、

「……………ん……………加藤くん?」

伊部二尉が、少し寝ぼけた顔で起き上がる。

「……………もう、いないか」

寂しさを覚えつつ、光秋はそう理解する。

と、

（加藤！伊部！）

「！」

外音スピーカー越しに藤原の声を聞いた光秋は、周りを見回して右側に自分の許に近づいてくるゴレタンと多数の車を見つけ、ゴレタンの車体部分に腰を下ろして防具一式を着けた藤原が右手を振っているのを確認する。

「……藤原三佐？………！そうだ！あの黒いのは？」

「もう終わりましたよ」

ようやく意識がはつきりしてきた伊部の問いに、光秋は応じながら足元の人型を指し示す。

「！………夢じゃ……」

「？」

伊部が小声でなにか言いかけるが、直後に、

「？………なんで髪解けてるんだろう？ゴム知らない？」

「どこかに落ちてませんか？」

と、質問に応じつつ、シートベルトを外して左の肘掛から身を乗り出して床を捜してみる。

人型との戦いに夢中で気付かなかったが、2人のヘルメットと飲みかけのペットボト

ルがコクピット後部に押しやられている。

——よく考えたら、だいぶよく動いたもんなあ……！——「ありましたよ」

思いつつ、操縦席のそばに落ちていた黒い髪留め用のゴムを拾って伊部に差し出す。

「ありがとう」

応じながら受け取った伊部はそれを口に銜え、両手で長髪を後ろに束ねてゴムで締め
る。

ゴレタンがニコイチの右前に停車すると、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ハッチを
開けて機外へ出る。その間に、伊部は2つのペットボトルを拾ってヘルメットを被り、
光秋にもヘルメットを渡す。

機外に出ると、光秋はニコイチの右手をハッチの上に置き、

「どうぞ」

と伊部に呼び掛け、伊部が掌に乗るとそれをゆっくりと地上へ下ろす。

伊部が掌から降りたのを確認すると、光秋は右の肘掛に通信機を納めてカプセルを取
り出し、防弾ベストを退かす様にして上着の内ポケットに入れ、ヘルメットを被って席
を立ち、リフトを出して下へ降りる。

周りを見ると、ニコイチと人型の周囲に人だかりができています。

リフトから降りると内ポケットからカプセルを出し、その先端をニコイチに向けて収

「……大丈夫です……ちよつと疲れが出たみたいで………」

光秋は右手を上げて応じるが、体中に鉛が付いた様な重さを感じ、疲れていると自覚する。

―考えてみたら、あの暗い空間での戦いでもうばててたんだ……からげんき空元氣もさすがに限界か……―

「念のためだ、上杉の所へ運ぶ。竹田、車を持ってこい」

「はい!」

そんなことを思っている間に藤原が指示を出し、竹田が人混みを掻き分けて駆けていく。

伊部も光秋の前にしやがみ、心配な顔で問う。

「大丈夫?」

「……大丈夫ですよ………」

光秋は、言葉通りであるよう努めながら返す。

「退いてくれ!急患なんだ!速く!」

怒声とクラクションを響かせながら、竹田が人混みを掻き分けて光秋の左前に緑の軍用車を停める。

と、

「三佐。私も付いていきます」

伊部が光秋の左腕を肩に回して立ち上がらせ、車まで並んで歩く。

「そうしてくれ。加藤はゆつくり休め。後のことは儂らに任せろ」

「ありがとうございます………」

藤原の言葉に、光秋は少し申しわけないと思いつつ返す。

伊部に手伝われる様にして、光秋は後部左の席に沈む様に座り、伊部も右の席に座ると、前部右の運転席に着く竹田が後ろを見やり、

「いいか？ 出すぞ」

と確認する。

「どうぞ」

伊部が応じると、車は人混みを掻き分けながら後退し、左折してゴレタンが来た方向へ向かう。

「そうだ。これ飲んでおいたら？ 少しは楽になるかも」

言いながら、伊部は両手のペットボトルを見比べ、

「……こっちだね。私殆ど飲んでなかったから」

と、左手の中身が四半分程減っている方を差し出す。

「ありがとうございます………」

受け取ると、光秋はキャップを開けて中のスポーツドリンクを一口飲む。

「……………」

すっかり温くなってしまっているものの、若干の甘さが体中に溜まった疲労感を和らげてくれる。

5分程して、一行を乗せた車は白地に赤十字が描かれた病院用テントの前に停まる。

光秋は車から降りると、右手で車の屋根を掴む様にして、ろくに力が入らない脚をなんとか立たせる。

「来たか」

「上杉？」

テントから出てきた白衣を羽織っている上杉に、車から降りた竹田が応じる。

「一尉からの連絡で聞いてます。速く」

「おう。伊部」

「はい」

竹田に応じつつ、車から降りた伊部は光秋の許に駆け寄り、左肩を首に回させる。

「……」

それに対して光秋は、伊部への申しわけなさと、自分への少々の情けなさを感じる。

「あんなに戦った後だから、仕方ないといえばそうだが……………」「すみません……………」

思わず小声で呟く。

「なに言ってるの？別に謝ることなんてないよ。加藤くんは今日頑張ったんだもん！」

「……………はい……………」

テントに向かいながら返された伊部の言葉に、少しだけ気分が楽になる。

「ほら、オレにも」

「ありがとうございます」

駆け寄ってきた竹田にも右腕を回され、光秋は両脇を2人に抱えられる形でテントに入る。

テント内には左右に2つずつベッドが置かれており、光秋は左手前のベッドに近寄る。左手首の数珠と腕時計を外して上着のポケットに仕舞い、防弾ベストとプロテクター、上着、右脹脛のホルスターを外して竹田に渡す。

靴を脱いでベッドに上がると、ワイシャツのボタンを2つ外し、メガネを外して枕元の左側に置き、布団を被って横になる。

——終わったんだ……………——

楽な体勢になったことで疲労感がどつと沸き出すと共に、強い安堵を覚える。

「……………」

加えて強烈な眠気も覚え、光秋の意識は一気に遠ざかっていく。

「……………」

「……………」

「……………」

「……………」

暗い意識の中、光秋は遠くで複数の人が話しているのを感じる。なにを話しているのかはわからないが、1人はかなり興奮していることは何となしにわかる。

……………なんだ？……………

「加藤が運ばれたって聞いて……………加藤！」

「寝てるだけですよ！調べたけど、特に異常も見当たらなかったし」

——上杉さんと、もう1人は……………タツカー中尉？——

意識がはつきりしていく中で、光秋は興奮している声がタツカー中尉のそれであることに気付く。

——なんだろう？……………

思いながらゆつくりと瞼を開けると、声のする方——右の足側に、飛行服姿のタツカーと上杉を見る。

「！かと……………ジャップ！」

光秋の視線に気付いたタツカーが、速足で歩み寄ってくる。

「……タツカー中尉」

呟く様に応じると、光秋は上体をゆっくりと起し、深呼吸をしつつ体を伸ばすと、左枕元のメガネをかけてタツカーを見る。

「もう少し寝てた方がいいんじゃないか？」

光秋の左側に歩み寄りながら上杉が言う。

「……大丈夫そうです。ぐっすり寝たら、疲れも取れたみたいで」

まだ若干の疲れを覚えつつも、寝る前に比べてずっと軽くなった感じに、光秋はそう応じる。

「どれ？」

上杉は右手を光秋の額に当てると、目をつむって集中する。

「……確かに。もう粗方回復してるみたいだな」

「なんだよ。心配して損したぜ……」

上杉が手を離しながら言うのと、タツカーが安堵した顔で呟く。

「お前が勝手に心配してたんだろ？」

「……」

加わってきた嫌味を含んだ声を聞き、光秋は左の足側に制服姿の竹田が丸椅子に座っていることに気付く。その右隣には、飛行服姿の純が立っている。

「まあとにかく、無事でよかったじゃないですか」

少々焦りを浮かべた純が、タツカーと竹田を見やりながら言う。

「心配かけてすみません。お騒がせしました」

言いながら、光秋は深く頭を下げる。

と、

「……ところで、伊部二尉は？」

「昼飯取りに行ってるよ。もう12時回ってんだ」

周りを見回しながら訊く光秋に、竹田が応じる。

「しかし、前は5時間も寝てたのに、今回は運び込まれたのが10時半頃だから、1時間半くらいでほぼ回復か……そう考えると、すげえもんだな」

光秋を見ながら、上杉は本当に感心している様子で言う。

と、

「……！加藤くん！もう大丈夫なの？」

「伊部二尉……大丈夫です。お騒がせしました」

両手で2枚重なっている一枚皿を持った制服姿の伊部がテントに入りながら心配そうな顔で問い、光秋は頭を下げながら応じる。

その間に、上杉はテントの隅から小さい机の様な台を持ってきて、

「ほれ。食卓だ」

と、それを光秋の脚を跨がせるようにベッドの上に置く。

「ありがとうございます」

光秋が応じると、伊部はベッドの右側に歩み寄り、

「タッカー中尉と、純君も来てたのね」

言いながら、重なっていた一枚皿の1つと、皿の上に載せていた水の入ったコップ1つをテーブルの光秋の許に置く。

「……」

食べ物の前にして、光秋は思い出した様に急激な空腹感を覚える。

「私は加藤さんと一緒に食べてるから、みんなも食べてきたら？」

「そうだな。上杉」

「はい」

伊部が出口近くに置いてある丸椅子を1つベッドの左側に運びながら言うと、竹田は応じながら立ち上がって出口へ向かい、上杉もそれに続く。

一方、

「俺はいい」

「……ボクも」

タツカーと純はそう応じ、タツカーは光秋に顔を向ける。

「ジャップ、食べ終わってからでいいが……何が起こったのか、訊かせてもらおうぞ。着替えてからまた来る」

言うのとタツカーは出口に向かい、純も一礼してその後が続く。

「やつぱり、か……予想はしてたが……」

2人が出て行った出口を見ながら、光秋はそう思う。

「ま、こうなつた以上は、話すべきか……『機密』と言って引き下がる様な人でもないだろうし、タツカー中尉にも僕のことを知っておいてもらった方が、僕も心強いと思うてるのは確かだ……それはそうと……」

思うと光秋は、台の上の一枚皿に視線を落とす。

「今は食べよう!——」

思うや両手を合わせて皿の上の箸を右手に持ち、白飯と肉主体の昼食を食べ始める。

「……その時は、伊部二尉のも立ち会ってもらいたいな……」

左手に持ったコップで水を飲みつつ、左側で丸椅子に座つて同じ物を食べる伊部を見ながらそう思う。

34 事後説明

しばらくして光秋と伊部二尉が昼食を食べ終わると、同じく昼食を済ませた竹田二尉と上杉、青服に着替えたタツカー中尉と純が、テントに入ってくる。

「食事は終わったみたいだな」

「……はい……」

ベッドの正面に立つて言うタツカーに、光秋は左手に持ったコップの残りの水を飲み干し、目を見て応じる。

「じゃあ、話してもらおうか。あの黒い奴は何か。お前は知ってるんだろう？それに、突然消えて何処で何してたのか。黒い奴とお前とはどういう関係なのか」

「お前の知ることじゃねえよ」

ベッドの左側の丸椅子に座る竹田が小声で言う。

「俺はジャップに訊いてる。どうなんだ？」

タツカーは語調を強める。

「……機密事項に触れる可能性がありますか？」

「あんな派手にやった後で、機密も秘密もないだろう。それに、俺はちゃんと黙っておく

よ……」

光秋の言葉に返しながら、タツカーは左隣に立つ純に目をやる。

「ボクも、ちゃんと黙っておきます。そもそも光秋君が白い犬だっというのも、機密だったんでしょ？」

「……それもそうだし、やっぱりこうなるか——

純の言葉とタツカーの予想通りの行動にそう思いつつ、光秋は左側で丸椅子に座る伊部に目をやる。

「……いいんじゃない？中尉や純君の言うことにも一理あるし」

少し考える顔をしてから、伊部はそう応じる。

「伊部——」

「まあまあ、二尉……」

面白くないという顔をする竹田を、ベッドの右側に立つ上杉が鎮める。

「伊部二尉が言う通り、2人の言うことは一理あります。それにタツカー中尉は、オレたちと一緒にあることに関わったんですから、信用できると思いますよ？」

言いながら、上杉は伊部を見、光秋を見る。

——綾のことか——

「……わかったよ」

上杉の言葉に竹田は渋々合意し、顔を右に逸らす。

「……………では」

伊部の「どうする？」と言っている視線に応じる様に、光秋はタツカーと純に事情を話すことを決心する。

「その前に一つ」

「なんだ？」

光秋の言葉にタツカーが応じる。

「今日の話を話す前に、僕の経緯^{いきざつ}を話す必要があります」

「理解に必要なんだろう？別に構わないが」

「……………念のため言っておきますが、これから話すことは皆事実です。おそらく途中で口を挟みたくなるかもしれませんが、僕がいいと言うまで、最後まで聞いてください」

「わかった」

「……」

「……………では」

タツカーの返事を聞き、純の頷きを見た光秋は、いよいよ話し始める。

「……………結論から言うと……………僕はこの世界の人間じゃないんです」

一旦言葉を切ってタツカーと純を見る。

「……」

光秋の予想に反して、2人とも真顔のまま、聞き手の体勢を崩さないでいる。

「……これは比喩というわけではなく、言葉通りの意味なんです」

念を押すと、光秋は3月のことを話し出す。

3月の半ば頃、大学進学の引越しのために夜行バスに乗り、気付いたら真っ白な空間にいたこと。

「……最初はあの世かと思いました」

そこで神モドキに出会ったこと。

『神モドキ』っていうのは、僕が勝手に付けた名前なんですけど」

それにニコイチを渡され、この世界に行かされたこと。

「……あとは中尉たちも知ってると思いますが、運ばれた先の京都支部でNPを撃退して、その功績でESOに入れてもらって、今日までやってきたわけです……ここまでの、なにか言いたいことは？」

言う光秋は、タツカーと純の顔を交互に見やる。

「いいや。ピュアは？」

「いえ、ボクも」

「……意外ですね。こんな荒唐無稽なこと聞いて、特に驚かないなんて」

存外平常心で応じる2人に、光秋は少し驚く。

「少し前なら、そうだったかもな……」

タツカーが応じる。

「だが、突然空が割れて、そこからマンガみたいな人型ロボットが出て来て、拳句の果てにほんの2時間くらい前にそんなのと一戦交えた後じゃ、お前のそのC級映画みたいな話も信じてしまうよ」

「確かに……でも、僕がデマカセを言っているとは思わないんですか？」

「そんな訳のわからないデマカセを言うくらいなら、もっとましなことを言うのが普通じゃないのか？」

「……それもそうですね」

「前置きが終わったんなら、早く本題に入ってくれないか」

「……そうですね。では」

タツカーに急かされ、光秋は続きを話し出す。

「まず、あの黒いのですが、さっき話した神モドキさんとは別の………なんと言うのか？……超存在？……によって作られた、ある種の兵器です。次に、突然消えて何処に行っていたかという……僕もなんて言っていないのか……暗い空間にいました」

「暗い空間？」

純が首を傾げる。

「ええ。おそらくこう表現するのが一番かと思います。星明かり程度の明るさがあるだけの暗あい空と、荒野みたいな殺風景な大地がずーっと広がっているだけの空間に……確か、連れて行かれたんですね？」

伊部を見ながら、光秋は確認する。

「うん。確かニコイチの後ろに黒い穴が空いて、黒い奴に押し込められたんだよね……で、気付いたら加藤くんが言った暗い空間にいた」

「……それで、そこで黒い奴と戦って、倒しました」

「どうやって？」

タツカーが問う。

「お前、こっちの世界の戦闘で武器使い果たしてただろう？ 暗い空間とやらに行く前まではカラテでやり合ってたが、殆ど互角だったじゃないか」

「最初の内はそうでした……いや、向こうが少し優勢だったかな。夢中だったんで、あんまり詳しく覚えてませんが。ただ、もう少しでやられそうになって、『ここまでか』って思った時に……」

そこまで言うと、綾の顔が脳裏を過る。

「……突然、『蜂の巣』の時の様な感覚を覚えたんです」

「―!」

その言葉に、竹田と上杉が目を見開く。

「おい!それって……」

それまでそっぽを向いていた竹田が、光秋の方に顔を向けながら驚いた声を出す。

「大丈夫です。今回は暴走せず、ちゃんと制御できました。それだけはよく覚えてます」

「……綾のおかげ……かな……?――」

返しつつ、半ば確信的にそう思う。

「その『蜂の巣』の時の様な感覚って?」

純が問う。

「ああ……」――そうだ、2人は知らないんだ――「ニコイチと一体化するって言えばいいんでしょうかね?自分の体と、操縦席の境界が曖昧になって、まるで自分の体の様にニコイチを動かせるようになるんです」

「……反射的に操縦できるようになる、てことか?」

タツカーが確認する。

「いえ、そんなんじゃない、考えただけでその通りにニコイチが動いてくれるんです。普段も複雑な動作はそうやってしてるんですが、今話してるのはそんなもんじゃない、自分の仮の体……『義体』として動かせるんです」

「……」

タツカーと純は、今一つ解りかねるといった顔をする。

「……まあいいや。それで、その『義体』とやらの状態になって、アイツを倒したのか？ カラテで？」

「はい」

タツカーの問いにすぐに応じる。

「その後、さっき話した神モドキさんの白い空間に呼ばれて、そこで黒い奴が何なのかとか、超存在のことを聞いて、こっちに戻ってきた、というか、戻ってこさせられたんです。後は、すっかり疲れ果てて、ここで寝てました………僕の話はこんなところでしょうか……」

話し終えると、光秋はタツカーと純、竹田、上杉、伊部の順に顔を見やる。

「……黒い奴までこっちに戻ってきたのは？」

竹田が問う。

「神モドキさんが僕らをこっちに送る時に一緒に送ったんです。『トロフィー』とか行っていました」

と、答え終わるやどこからか携帯電話の振動音が鳴り出す。

「？………！」

音を辿って右側を見ると、光秋は頭側に置かれた丸椅子の上に自分の上着が畳まれて置かれているのを見る。音はそこから鳴っているようである。

—僕のか?……—

思いつつ、上着を取って掛け布団越しに膝の上に置き、左のポケットから振動している携帯電話を取り出す。

「すみません。ちよつと……」——こんな時に誰が?……まさか——

タツカーたちに断りを入れつつ、光秋はE S Oに入る少しに前、京都支部の支部長室でのことを思い出す。

画面を開くと予想通り「送信元不明」の表示があり、相手を半ば確信しつつ電話を左耳に当てる。

「……もしもし?」

(ああ、オレだ)

確信通り、神モドキの声が響く。

「……神モドキさん」

「「「!」」」

光秋の呟きを聞き、タツカーたちに緊張が走る。

それを目の端で見つつ、光秋は電話を続ける。

「……………なにか?」

(オレとしたことが、送り忘れた物があつてな。今お前のそばに送る)

「送り忘れた物?……………!?!」

呟く様に返すと、テントの外で数回雷鳴が鳴り、直後にドスン!という重いものが低い高さから落ちる音が響く。

「何だあ!?!」

竹田が驚きの声を上げながらテントの外に駆け出し、タツカーたちもそれに続く。

「……………」

1人残った光秋も、急いで上着を置いていた丸椅子の下にある制靴を取って履き、左手に掛かりっぱなしの携帯電話を持つて外へ向かう。目が覚めてから始めてまともに体を動かすために、足取りはややふらついている。

若干頼りない足取りでテントから出ると、

「……………」

正面に多数の白いブロックが積み上げられ、それをタツカーたちが驚きの目で眺めている。

ブロック1つ1つは正六面体の形をしており、大きさはニコイチの掌に納まるくらい、それが5つずつ2段に積まれている。

——この白いの……！——

光秋は白い空間で見た白い板のことを思い出し、電話を左耳に当てる。

「神モドキさん、これは……」

（さつき説明した、ニコイチの予備部品だよ）

——やつぱり……——

「……これ、何だつて？」

思いつつ光秋は白いブロック群に目をやり、振り向いた竹田がブロック群を指しながら訊いてくる。

「ニコイチの予備部品だそうです。そういえばさつき言わなかったけど、白い空間でも似た様な物を見ました」

光秋は電話から少し顔を離して応じる。

と、

「ちよつと貸せ」

竹田の右隣に立っていたタツカーが振り返って光秋に近寄り、電話を奪う様に取りつて右耳に当てる。

「お前か？ ジャップが話してた神様モドキつてのは」

「……」

光秋も左耳を電話に近づける。

（お前は……ああ。あいつの近くにいた奴の1人か）

「……俺はアレク・タツカーだ！覚えておけ！」

思い出した様に言う神モドキに怒鳴ると、タツカーは電話を光秋に返す。

「……もしもし？」

（たく。怒鳴らくてもいいじゃねえか。なあ？）

電話越しに光秋は、神モドキの不満そうな声を聞く。

「はあ……それより……」

言いながら、ブロック群を見る。

「なんでこんな物を送ってきたってです？それもこんなに。しかも半年も経って」

（オレとは別の奴が、またお前にちよつかいを出した時のためにだよ。今まではそんなことはなかったが、一度あればまたあるかもしれないからな。それに、予備は数が多いに越したことはないだろう？）

「それは、まあ……」——またあんなのが来るってのか？——

一瞬背筋に悪寒が走る。

（使い方はさっきやった通り、塊を傷に当てればいい。あとは必要な量が勝手に移動し、数秒で傷を塞ぐ。ただし破損箇所によつては、それだけじゃ直せない所もある。その場

合は、またオレの所に呼ぶ。これだけ説明すれば充分だろう。じゃあな)

「―あつ……」

光秋の返事を待たずに、電話は一方的に切られる。

「……」

神モドキの少し勝手な態度に若干の不満を覚えつつ、光秋は携帯電話をズボンの左のポケットに仕舞うと、

―とここで……―

ブロック群を少し困った思いで見つめる。ちよつと上杉が一番右下のブロックを右手で触っているところである。

同時に、伊部が自分の許に近づいてくる。

「伊部二尉……これ、どうしましょう?」

「んー……」

ブロック群に困った顔を向ける光秋に、伊部は少し考える。

「とりあえず、カプセルに入れてみたら? ニコイチの主成分の塊なら入るでしょう」

「……それもそうか」

応じると速足でテントに戻り、ベッドの上の上着の内ポケットにカプセルが、他のポケットに小物たちが入っていることを確認してそれを羽織る。

と、

「…………『ニコイチの主成分の塊』？これは、神モドキさんが白い空間で言ったことだよな？その時、伊部二尉は緩だったよな……なんで二尉の口からこんな語彙が出たんだ？—」

不思議に思いつつ、光秋は上着のボタンを締めながら速足で外に戻る。

伊部のそばに着くと、内ポケットからカプセルを出し、カプセルが「入」になつていることを確認すると、右手に持ったその先端を上段中央のブロックに向けてボタンを押す。

が、

「…………？」

カプセルの先端から放たれた光線は狙ったブロックに当たるものなにも起きず、少しして光線の放出も終わる。

「入らない？」

伊部が意外そうな顔をする。

「……たぶん、あの状態じゃ入らない、そもそもカプセルが認識しないのか、カプセルの容量がニコイチ一体で一杯なんでしょう」

カプセルとブロック群を見やりながら、光秋はとりあえず浮かんだ推測を言う。

―後でマニュアル見て確認しておこう……―

そう思いながら、カプセルを内ポケットに戻す。

「カプセルには仕舞えないのか……」

言いながら、ブロックから手を放した上杉が光秋と伊部の許に歩み寄ってくる。

「そうみたいですよ……」

光秋が応じる。

「じゃあとりあえず、大河原主任に来てもらうか。トラックと、あればだがクレーンか何かを持参で」

最後の方は淡い顔で言う、上杉は右の親指で後ろのブロック群を指す。

「まさかと思ってサイコメトリ―してみたが、何の情報も伝わってこない。アレにもやっぱ、超能力は通じねえみてえだ」

「そうですか……」

短く応じると、光秋はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、大河原主任に電話をする。

少しして、大河原の心配した声が電話越しに響く。

（二曹！寝込んだと聞いたが……もう大丈夫なのか？）

「はい。お騒がせしました」

光秋は軽く頭を下げながら応じる。

「ところで主任。今お時間ありますか？」

（ん？ 黒い奴の片付けが終わったところだから、あることはあるが）

「すみませんがトラックと……」——あ、いや。積み込みはニコイチでやればいいか。ついでにマニユアルも見たいし——」を持って、病院用のテントの前に来てください。トラックはなるべくたくさん積めるやつで」

（？……いったいなにをするんだ？）

「神モドキさんからまた送り物が届いたんで、その搬送に」

（何？）

大河原は驚きの声を上げる。

（わかった。すぐに向かう。病院用テントの前だな）

「はい。お願いします」

（了解だ）

言うところ大河原の方から電話は切られ、光秋は携帯電話を上着の左ポケットに仕舞う。

「クレーン頼まなかったけど、いいのか？」

電話の間に歩み寄っていた竹田が訊く。

「ニコイチで積み込みます。それに、マニユアルにアレの記述があるかも確かめたいし」

ブロック群を見やりながら応じると、光秋は内ポケットからカプセルを出し、「入」を「出」に切り替え、テント側に先端を向けてボタンを押し、左膝を着いたニコイチを出現させる。

カプセルを内ポケットに戻してリフトでコクピットに上がり、席に着いて認証を済ませると、左肘掛からマニュアルを取り出し、画面を開いてカプセルの項を見る。

「やっぱり容量はニコイチ1体分なんだ」

（どうした?）

外音スピーカー越しのタツカーの声に、光秋はハッチを開けて席を機外に出す。

「やっぱり、カプセルに仕舞えないようです。ニコイチ1体分しか入らないって……やっぱり、大河原主任を待った方がいいですね」

ニコイチの手前側に立つ竹田たちと、ブロックのそばにいるタツカーと純を見ながら応じると、マニュアルの画面を元に戻して左肘掛に戻し、

「……どうせなら、充電しとくか」

と、内ポケットのカプセルを右肘掛に納めて、そのまま待つことにする。

少しして、緑の大型トラックがブロック群の右側に停まる。

「二曹、待たせたな。コレか、送り物というのは」

右の運転席から降りた灰色のツナギを着た大河原が、ブロック群を見ながら通りのい

い声で言う。

「ところで、なんでニコイチに乗っている？」

「コイツで積み込みます。ソレ超能力効かないみたいで」

「なんだと？」

ニコイチの上からの返事に聞き覚えのある声が応じるや、制服姿の藤原三佐が左の助手席から降り、ブロック群の前に駆け寄って両手をかざす。

「フンッ………」

少しして藤原は両手を下ろし、光秋に顔を向ける。

「確かに、ダメだ………加藤、もういいのか？」

「はい。お騒がせしました。ところで、なぜ三佐もここに？」

「大河原主任がここに向かっていている途中でばったり会ってな。お前の様子見に乗せてもらったんだ」

「俺は、よく考えたら積み込みの人員を連れてこなかったんで、ちょうどいいと三佐に頼んだんだが……」

話に加わりながら、大河原も藤原の左隣に立って光秋を見上げる。

「サイコキネシスが通じないなら、しょうがないか……では二曹、頼む」

「はい」

光秋が応じると、藤原と大河原はトラックのそばに寄り、タツカーたちも端に寄って道を開ける。

光秋はシートベルトを締めると、席を機外に出したままニコイチを立ち上げらせ、ブロック群のそばに歩み寄る。

ブロック群を上から見て、後ろにももう5つあることに気付く。

―5個が上下4組ずつだから、20個か……―

思いつつ、ブロックを左右の手に1つずつ持たせ、高い柵があるトラックの荷台に移していく。

荷台全体に敷き詰める様に置き、余ったブロックを運転席側のブロックの上に重ねると、

「終わりました」

と、トラックの助手席側に立って作業を見ていた大河原と藤原に呼び掛ける。

「ご苦労。とりあえず装備品置き場へ運ぼう。間に合えば、黒い奴と一緒に持つて行ってくれくかもしれないな」

そう言う大河原は運転席側に寄ってドアを開け、藤原を見る。

「三佐は？」

「儂はけっこう。こいつらと歩いていきます」

「ん、それでは」

言うと大河原はトラックに乗り込み、Ｕターンして来た方へ戻る。

光秋はニコイチから降りてカプセルに収容し、それを内ポケットに戻すと藤原の許に歩み寄る。

「改めまして三佐、お騒がせしました」

軽く頭を下げながら言う。

「うむ。元気になってなによりだ……そうだ。それなら一緒に来てくれ。今回のことの報告を高官たちにしなければならん」

「はい」

応じると、光秋は振り返ってタツカーたちに一礼し、藤原の後を追って大河原が行った方へ歩き出す。歩きながら上着のポケットから時計と数珠を取り出して左手首に巻く。

「しかし、演習が実戦になるとはなあ……」

「そうですね……」

藤原の呟に、光秋も呟く様に応じる。

「しかもその敵が、全く得体の知れんもの——真正正銘のアンノウンとは………ことが済んだ後、つまりお前たちが帰ってきた後も、高官たちは上を下への大騒ぎだったぞ」

「それは……そういえば、あの黒い人型はどうしたんです？ 主任がちらつと、『一緒に持つて行つてくれるかもしれない』と言つてましたが」

「アレかあ……主任に聞いたところでは、合軍の基地に運んでサンプルとして調べるそうだ。もつとも、主任も詳細はわからないようだったがな」

「サンプル、ですか……」——当然か。ニコイチに次ぐ異世界の産物だもん……もつともそれを言つたら、僕もそうなんだが……—

そんなことを思いつつ、光秋は藤原の後を追いつける。

しばらく藤原の後ろをついていくと、前方に大型のテントが見えてくる。

——あれ、今朝演習の説明を受けた……—

富野大佐がスクリーンを用いて作戦説明をしている時を思い出しながらそう思い、加えて藤原の足取りからそのテントに向かっていると察する。

と、

「三佐。加藤」

「……—」

右側から呼び掛けられて顔を向けると、制服姿に制帽を被つた小田一尉が2人の許に歩み寄ってくる。

「小田一尉」

光秋が応じると、小田は光秋の左側に近付き、

「三佐、加藤も」

と、歩きながら持っていた2つの制帽を2人に渡す。

「うむ」

「ありがとうございます」

足を止めずに応じながら受け取ると、2人はすぐにそれを被る。

「もう大丈夫なのか？」

「はい。お騒がせしました」

小田の心配を含んだ問いに、光秋は頭を下げて返す。

少しして大型テントのそばまで来ると、藤原はその右隣に建つ小振りのテントへ向かい、小田と光秋もそれに続く。

「大きい方じゃないのか？……」

ふとそう思う。

布扉の前に着くと、

「失礼します」

藤原は右手で敬礼をして中に入る。小田も敬礼をして後につき、光秋も2人に倣ってそれに続く。

テント内には制服に制帽を着けた富野大佐と、富野から「安彦」と呼ばれた細身の男が、出入り口の反対側に置かれた折り畳みの長テーブルに肘を着いて座っており、その前には2つのパイプイスが置かれている。出入り口から見て左側には小さめの机と椅子が、机の上にはノートとペン、小型の録音器が置いてある。

藤原は少し歩いて立ち止まり、小田がその左隣に、光秋が右隣に着く。

「藤原大吉三佐、加藤光秋二曹、参りました」

「記録係の小田仁一尉、参りました」

「ん。3人とも席に着いてくれ。早速始めたい」

「「は」」

藤原と小田にテーブルの右側に座る富野が応じると、小田はノート等が置かれた机に、藤原は正面の左の椅子に座る。

「……『査問』っていうのを映画がなにかで見たが、それみたいだなー」

思いながら光秋も右の椅子に座るが、同時に僅かながら再び緊張を覚える。

「地球合衆国陸軍中佐の安彦英男だ」
やすひこひでお

テーブルの左側に座る男が言う。

「加藤二曹」

「……はい」

少し緊張を含んだ声で応じる。

「まず、君の名前と所属、階級を述べてくれ」

「はい」――正式名でいった方がいいか?――「超能力者支援機構、京都支部実戦部隊一般、藤原隊所属、加藤光秋二曹です……」

言ってから、横目で小田が素早くノートにペンで記述をしているのを見る。

「ん。黒い人型兵器出現から、その撃破までの経緯を話してくれ」

「はい……まず、演習中に空に雷の塊の様なものを発見、直後にそこから黒い大きな穴が現れ、そこから黒い人型が現れるのを見ました。その後、実弾への換装のために装備品置き場へ戻り、換装準備が整うまで待機。換装後、人型と会敵、交戦に入りました……その後……」――言っているのか?――

暗い空間のことを思い出し、話すべきか悩んでしまう。

「どうした? 続けたまえ」

急に口をつぐんだ光秋に、安彦は急かす様に言う。

「……少々、その……荒唐無稽な話になりますか?」

「構わん」

富野が言う。

「それを言ったら、我々とはつくに荒唐無稽な状況の中にいるんだ。気にせず見たまま

聞いたままを話せ」

「はい……その後、再び現れた黒い穴に人型に押し入れられ、気付いた時には、暗い荒野の様な場所にいました……」

言ってから富野と安彦の顔を見、なにも言わないのを見て話を続けることにする。

「そこで再び人型と会敵、交戦に入りました。あ、その直前に、人型の胸の下の赤い部分に黒い雲の様なものが入り込むを見ました」

「黒い雲？」

安彦が一瞬眉をひそめる。

「……交戦中、一度やられそうになりましたが、ニコ……UKD-01が『蜂の巣』で見せた状態に変化、赤い部分に一撃を入れ、なんとか撃墜しました」

「『蜂の巣』の!？」

富野が明らかな驚きを含んだ声を上げる。

「その後、こちらに帰還したのか？」

「いえ、その前に……白い空間に呼ばれました」

安彦の問いに、光秋は言葉に困りながらも答える。

「白い空間?……」

安彦が首を傾げる。

と、

「君がこちらの世界に来る途中で寄ったという、白い人型がいる場所のことか？」

「はい」

「ああ……わかった。続けてくれ」

富野の問いに応じると、安彦が小さく納得の声を上げて先を促す。

「はい。白い空間と呼ばれて、白い人型……に会いました」

一瞬「神モドキ」と言おうかと思ったが、結局言わないことにする。

「そこで黒い人型が、他の白い人型の様な存在によつて作られた一種の兵器であることと、白い人型の様な存在が他にもいることを教えてもらいました……加えて、01の修理もしてくれました。その後、こちらの世界に帰還しました……報告は以上です」

「……なるほど」

安彦が呟く様に応じる。

と、

「『暗い荒野の様な場所』と言ったな。詳細を話してくれ」

富野が促す。

「はい。星明かり程度の明るさの空と、暗い荒れ地がどこまでも続く、殺風景な所でした……これ以上は説明のしようがありません。それで全てなんです」

『蜂の巣』の時の様な状態になったと言ったが、また暴走したのか?」

富野が続けて訊く。

「いえ。01と一体化する様な感覚は同じでしたが、今回はある程度恣意的に動かせたと思います。周りの状況も把握できていたので」

「……そうか……」

富野は呟く様に返し、少し考える顔をする。

「白い空間にいた際、01を修理してもらったと言ったが、詳しく教えてくれ」

安彦が指示する。

「はい。自分でもその時気付いたのですが、演習場での交戦で、01の左腕に傷ができていたんです。それを直すために、白い人型曰く、『01の主成分の塊』の板をもらい、それを傷口に当てて塞ぎました」

「傷口に当てる……それだけか?」

「はい」

「……」

光秋の返答に、安彦は少し驚いた顔をする。

と、

「01の主成分の塊ですが、二曹が回復後、こちらに送られてきました」

「何!?!」「!」

藤原の捕捉に安彦が声を上げ、富野が考え顔を中断する。

「01の起動実験班の大河原主任が装備品置き場へ搬送しました。間に合えば、黒い奴と一緒に運ばれるでしょう。間に合わずとも、後から送られると思いますが」

「……」

「……」

藤原が応じると、富野と安彦は黙ったまま互いを見やる。

と、

「……わかった。退出していい」

「はっ。加藤」

「……はい」

富野の指示で立ち上がった藤原の呼び掛けに応じると、光秋も後に続いて出口へ向かう。

と、

「あ、ちよつと待った」

「「?」……」

安彦に呼び止められ、藤原と光秋は振り返る。

「今回の一件だが、軍とESO、それらの関係者以外には漏らすな」
「……」

安彦の針の様な視線に黒い人型と対峙した時の様な悪寒を覚え、光秋は東の間返答ができなくなる。

「了解です」

「……！」

言いながら藤原が敬礼をし、光秋もそれに倣うと、2人はテントから出て来た道を戻る。少し遅れて小田も後から追い付く。

テントからかなり離れた辺りでいったん立ち止まると、ようやく緊張から解放された光秋は、無意識に力んでいた体を緩ませ、

「ふうー……………」

と、安堵の息をつく。

「査問つていうのを聞いたことがあります、あんな感じなんですかね？」
「大袈裟な。そんなに緊張したか？」

左後ろに立つ小田が微笑を浮かべて言う。

「まあ、ことがことだ……」

右前に立つ藤原が、こちらでも少し安堵した顔で言う。

「とりあえず、儂らの仕事は殆ど終わった。あとは荷物の片付けをして、帰るだけだ」
「……ですね」

藤原の言葉に、小田も安堵した顔で応じる。
と、

「……？」

遠くにジェット機の噴射音を聞いた光秋は、辺りを見回して小さな機影が左から右へと行き過ぎるのを見る。

「けっこうデカイな……輸送機か？」

光秋の視線を追った小田が、右手を口除けにして言う。

「黒い奴を回収に来た機じゃないか？ そうなら、あの様子だとニコイチの部品の積み込みも間に合ったようだな」

藤原も2人の視線を追って言う。

「……さて、片付けにいくぞ」

「はい」

「……はい」

視線を下ろした藤原に、小田と光秋も視線を下ろして応じ、前進を再開する。

「……そうだ、帰ったらみんなで飯でも食いに行くか。いつもの店に。加藤と伊部

の生還祝いに」

「いいですね。明日は休みだし、偶には」

歩きながら提案する藤原に、小田は賛成の声で応じる。
が、

「生還祝いつて……そんな……」

光秋は少し困った顔をする。

「そう気張るな。あくまでも名目だ。それに、偶には息抜きも必要だぞ」

「そうですか？……それなら」――確かに、偶には飲み会っていうのも、な……―

小田に言われて困った顔を消すと、心なしか楽しみを覚える。

3人はしばらく歩いて竹田と伊部と合流すると、荷物の片付け作業に向かう。

道中、藤原が食事に行く話を伝え、

「マジっすか！ やったー！ 久しぶりに飲むぞお！」

と、竹田が非常に喜ぶのを前に見つつ、光秋は左隣を歩く伊部に問う。

「タツカー中尉と純さんは？」

「あの後、飛行場に行くつて。さっきたくさん飛行機が飛んでるのを見たから、基地に帰ったのかも」

と、

「おい、竹田」

「ちよつとくらしいいでしょ。上杉にもメールしとこ」

咎める視線を送る小田にかまわず、竹田は取り出した携帯電話を操作する。

「……私も、後でフミを誘おうかな」

それを見て伊部は呟く様に言い、光秋も、

——じゃあ僕も中尉を……—

と思つたものの、

——……いや、どうしようかな……—

前を歩く竹田を見、誘うかどうか迷う。

午後3時。

テントの解体や装備品の撤収等を終えた光秋は、伊部と共にニコイチに乗り込み、足元にいる藤原、小田、竹田を見る。

「では、お先に」

「ああ。一度支部に戻って自主解散しろ。6時にいつもの店に集合だ。伊部、教えてやれ」

「了解です」

「では」

藤原の指示に返すと、光秋は操縦席を機内へ下ろしてハッチを閉め、右ペダルを軽く踏んでニコイチを上昇させる。左パネルの地図で位置関係を確認すると、右操縦桿を倒して前進する。

左隣の伊部がカバンからビニールシートとクッションを出してそれに座るのを横目で見つつ、先程のことを確認する。

「横尾中尉への連絡は？」

「ニコイチに乗る少し前にした。すぐに返事がきて、純君とタツカー中尉も誘うって」「そうですか」――迷うこともなかったな……――

と、

「…………ごめん、なんか急に疲れちゃって……支部に着くまで寝かせてくれない？」

伊部が寝むそうに言う。

「いいですよ。ただ、横になれませんが……」

「大丈夫。わるいけど、着いたら起して」

「了解です」

「……………」

光秋が応じるや、伊部は操縦席の左肘掛に背を預け、両目を閉じる。

「…………それじゃあ、なるべく揺れないようにしなきゃな――」

寝入った伊部を横目で見ると、心なしか慎重な移動をするように努める。

しばらくして京都支部上空に着くと、光秋は本舎を前にして正門側にゆつくりと着地し、ニコイチの左膝を着かせる。

「……………着いたあ？」

その際の微震で起きた伊部が、目をこすりながら欠伸混じりに訊いてくる。

「はい。揺れで起しちゃいましたか？」

シートベルトを外しながら光秋は応じる。

「うん…………でも、起してつて頼んだわけだし……………」

言うのと伊部は伸びをし、光秋はハッチを開けて操縦席を機外へ出し、ニコイチの右手をハッチの上上げる。

シートとクツションを仕舞つて左肩にカバンを提げた伊部が掌の上に移動すると、光秋はそれをゆつくりと下ろす。

伊部が掌から降りたのを確認すると、左耳の通信機を右肘掛に納め、カプセルを取り出して上着の内ポケットに入れると、操縦席の下に置いたカバンを右肩に斜め掛けし、リフトを出して地面へ下りる。

内ポケットから出したカプセルにニコイチを収容してソレを戻すと、光秋は左隣に立つ伊部を見る。

「じゃあ今日は、お疲れ様」

「お疲れ様です」

一礼した伊部に、光秋も一礼で応じる。

「とりあえず、いったん解散。一度帰宅して着替えなんかを済ませたら、5時半に正門前に集合。これでいい？」

「了解です」

「じゃあ、また後で」

「はい」

光秋が応じると、2人は正門をくぐり、光秋は左、伊部は右へ向かう。

35 生還祝い

5分程歩いて職員寮の自室に帰宅すると、光秋はカバンの中身を取り出し、目薬やクシなどの備品を室内のもともとあつた場所に戻し、布物をまとめて洗濯機に放り込む。身に付けている小物とメガネを外して机の上に置き、制服一式を脱いで壁のフックのハンガーに掛ける。

私服の着替え一式とバスタオルを用意し、着ていたワイシャツと下着、靴下も洗濯機に入れ、洗剤を入れて回すと、着替えとタオルをその上に置き、風呂場に入る。

—できればひとつ風呂浴びたいところだが、また出るし、時間も心配だしな……—
—そう思いながら頭からシャワーを浴び、それでも多少はすつきりとした気分になつて風呂場から出ると、洗濯機の上のバスタオルで体を拭く。

—……伸びたな……そろそろ切らないと……—
頭を拭いていると、そんなことを考える。

—明日休みだし、切りに行くか？ ついでに部屋の掃除もして……—
などと考えながら体拭きを終え、用意した下着と白のワイシャツ、薄黄色のズボンを着、机の上のメガネを掛ける。

ドライヤーやクシで髪型を整えてそれらを片付けると、洗濯が終わるまで椅子に座って一息つこうとする。

——…そうだ、歯あ磨いとくか。せつかくの集まりだし、きれいにしといた方が——
そう思うや風呂場の水盤に向かい、備え付けの鏡棚から先程戻したばかりの歯ブラシと歯磨き粉を取り出し、歯を磨きながら居間の椅子へ戻る。

磨き終え、水盤で歯ブラシを洗って口を漱ぐと、ピー、ピーという洗濯の終了音を聞き、居間のベランダ側に置いてあるハンガーラックに洗濯物を干していく。

全て干し終わると、机の上の時計を見る。

——5時10分……そろそろだな……——

思うと光秋は新しいハンカチをズボンの右ポケットに入れ、白い靴下を履く。左手首に時計と数珠を巻き、ズボンの左ポケットに携帯電話とカプセル、鍵を入れ、カバンに財布を入れて右肩に斜め掛けすると、玄関に向かう。

白のスニーカーを履いて外に出ると、ドアに鍵を掛けて支部へ向かう。

京都支部の正門前に着くと、光秋は辺りを見回して伊部がいないことを確認し、携帯電話を出して時計を見る。

——5時17分……もう少しかな？——

思いながら携帯電話を仕舞い、門を背にして伊部を待つ。

少しして、

「ごめん。待った？」

言いながら、薄黄色の服の上に白い薄手を羽織り、薄茶のスボンを着、左肩に小さめのカバンを提げた伊部が門の右側から歩み寄ってくる。

「いえ、そんなには」

「そう？じゃあ、行こっか」

「はい」

光秋が応じると、2人は門の左側に歩き出し、最寄りの地下鉄の出入り口へ向かう。地下鉄駅に下りると、光秋と伊部は券売機で切符を買って改札機を通り、ホームに続く階段を下りる。

ちようど来た電車に乗り込むと、まばらに人がいる車内でドア近くの座席が空いているのを見付け、そこに並んで座る。

「横尾中尉たちは？」

カバンを座席の下に置いて脚で隠す様になっている光秋が、左隣でカバンを膝の上に置いていゝる伊部を見ながら訊く。

「フミは場所知ってるから自分で来る。タッカー中尉と純君は後から来るって」

「どういう店なんです？これから行くとこ」

「繁華街の路地裏の、小さな居酒屋。料理が美味しくてね。ウチの隊はなにかあると、いつもそこなの」

「そうなんですか……」

「私の入隊祝いの時も、そこだったなあ……」

伊部は少し懐かしむ様に言う。

「入隊祝い……」――僕の時にはなかったが？……ああ。訓練やら研修やらでそれどころじゃなかったか……

思いながら、光秋はESOに入ったばかりの頃を思い出す。

と、電車が停車し、光秋の右隣にあるドアから散々と人が乗り込んで来る。

――そいえば、電車を利用するのも久しぶりかあ。高校の頃は毎日乗ってたのに……ふと、そんなことを思う。

各駅停車をしつつしばらく進むと、電車のアナウンスが目的の駅の名を告げる。

（四条、四条です）

「！」

それを聞いて光秋はカバンを右肩に斜め掛けしながら立ち上がり、伊部も左肩にカバンを提げながらそれに続くと、2人は右隣のドアの前に移動する。

電車が停まり、ドアが開くと、2人はいくらかの人々と一緒にホームに降り、だいぶ

混んできた車内を後にする。

「こつち」

と言つて右に向かう伊部の後を追つて、光秋はホームを歩き出す。と、少し進んだところで、

「……フミ！」

伊部は前方に横尾中尉を見つけ、声をかける。

「法子・加藤君も」

振り返りながら応じると、青いワイシャツに濃い青のジーンズを着、右手にハンドバックを持った横尾は2人の許に歩み寄り、光秋は軽く頭を下げる。

「ちようどさつき着いたとこ」

「タイミング合つたんだ」

横尾と伊部が並んで話しながら進み、光秋はその後に続く。

人の波を縫う様にホームを進み、階段を上つて改札機を通り、ホーム以上に人でごつたがえしている駅内の通路を逸れないように進んで行く。

その間、伊部と横尾は横に並んでときどき会話もしているようだが、光秋は人混みの中に2人を見失わないようにするのが精一杯であり、会話に加わつたり聞いたりする余裕はない。

——…：帰り道、わかるかな？——

加えてそんな心配も抱く。

しばらく歩いて出入り口の階段を上ると、3人は高層ビル街を走る4車線道路脇の歩道に出る。そこからまた歩いて車1台が通れるくらいの路地に入り、また少し進むと、

「ほら、（ハハ）」

言いながら伊部は立ち止まり、光秋も視線を追って右側に建つ質素な趣の店を見る。若干年季の入っている、一階建の和式造りである。

「今何時？」

「5時55分です」

横尾の問いに、光秋は左手の腕時計を見て応じる。

「ちょうどいいね。入ろう」

言うのと伊部は入り口前に掛かっている暖簾をくぐって木製の戸をずらして中に入る。横尾もそれに続き、最後に電話を仕舞って入った光秋が戸を閉める。

3人が入るとすぐに、

「伊部、横尾中尉、加藤、こっちだ」

と、左側から藤原三佐が呼び掛け、顔を向けると、畳の上の長テーブルの周りに白い

上着に灰色のズボンを着た藤原と、灰色の上着に黒いジーンズの小田一尉、赤い上着に茶色いズボンの竹田二尉、青チエック柄の上着に白いズボンの上杉が、座つてこちらを振り向いている。

「お待たせしました」

「どうも」

応じながら伊部と横尾はテーブルに歩み寄り、光秋も一礼して続く。

靴を脱いで畳に上がると、光秋は各々の手荷物が置かれている右端にカバンを置き、手前側の右端に座る。

「タツカー中尉と純は？」

光秋の対角線上——壁側の左端に座る上杉が訊く。

「少し遅れて来るみたい。先に始めていいって」

上杉の左前に腰を下ろしながら、横尾が応じる。

その際に光秋は、伊部が左隣に座るのを見つつ、上杉の左隣に座る竹田が面白くないといった顔をするのを見る。

「それならお言葉に甘えて、始めさせてもらおう」

竹田の左隣に座る藤原が言う、その左隣に座る小田がテーブルの端に置かれているメニユー表を取り、テーブルの中央に置く。

藤原、竹田、上杉が中心になって、光秋には名前を聞いただけではよくわからない料理をいくつか決め、それぞれメニューを見て自分の飲み物を決める。

皆が決め終わると、

「加藤くんは？」

と、伊部が訊いてくる。

「すみませんが、メニュー貸してください。字が読めなくて」

「ああ、ごめん」

応じると伊部はメニュー表を取り、光秋に渡す。

「……ウーロン茶でいいか」

メニューを見てそう思い、表をテーブルの中央に戻す。

私服の上に黒いエプロンを掛けた女の店員が人数分の水を運びに来ると、上杉が注文を頼む。

上杉が藤原、竹田と決めた品々とビールを3つ頼み、それに続いて小田がウイスキーの水割りを、横尾がレモンのチューハイを、伊部がウーロン茶を頼む。

「加藤は？」

「僕もウーロン茶で」

上杉の問いに、光秋も左後ろに立つ店員を見て応じる。

注文を確認し終えた店員に一同を代表して上杉が応じると、店員は厨房に向かう。
と、店の戸が開く音が響く。

「……中尉、純」

顔を向けた上杉の呼び掛けに、光秋も左後ろを振り返る。

「いやあ、遅れてすみません」

言いながら、水色のシャツの上に青い上着を羽織り、黒いズボンを着た純が一同の許に歩み寄り、白い上着に黒いズボンを着たタツカーが戸を閉めてそれに続く。

「タイミング悪かったなあ。ついさつき頼んだところだ」

自分の真向かいに座った純に上杉が言う。

「運んできた時に頼みます」

そう返すと、純はテーブル中央のメニューを取る。

タツカーは、

「よう」

と呼び掛けながら光秋の右前——テーブルの端に座り、光秋は軽く一礼する。

「中尉」

「おう」

注文を終えた純がメニューを前に差し出し、タツカーは応じながらそれを受け取る

と、

「なににした？」

と、左手に持ったメニューを見ながら、光秋に目配せして問う。

「ウーロン茶です」

「酒じゃないのか？」

「まだ未成年なんで」

「ああ、そうだったな。んーん……」

タツカーが唸っている間に、先程の店員が左手にグラスがたくさん載った盆を持って一同の許に来る。

「お待たせしました」

言いながら、店員はビールのジョッキ3つを一手に持って上杉、藤原、竹田の許に置き、水割りのウイスキーのグラスを小田、チューハイのグラスを横尾、ウーロン茶のグラスを伊部と光秋の許に置いていく。

と、

「あ、すみません」

純が店員の顔を見て言う。

「追加でウーロン茶1つと、中尉は？」

「……ウイスキーを水割りで」

純に問われたタツカーは、メニューを見ながら応じる。

「かしこまりました」

応じると、店員は盆を左脇に抱えてエプロンのポケットから伝票とペンを出し、書きながら確認をすると、

「少々お待ちください」

と言つて、厨房に向かう。

「さて、まず乾杯といきたいところだが……」

言いながら、藤原は純とタツカーを見やる。

「2人の分が来るまで、少し待とう」

「すみません……」

藤原の言葉に、純は軽く頭を下げる。

少しして、純のウーロン茶とタツカーのウイスキーが運ばれて来ると、藤原は一同を見回し、

「では……」

と、右手に持ったジョッキを高く上げ、よく通る声を上げる。

「加藤と伊部の危機的状况からの生還を祝つて、カンパアイ！」

「カンパニー！」

一同もそれぞれにグラスを高く上げて続く。

全員での乾杯を終えると、光秋は手が届く範囲にいる伊部、タツカー、小田の順にグラスを合わせ、

「いただきます」

と呟く様に言うと、中のウーロン茶を一口飲む。

料理の入った大皿がいくつかと人数分の小皿、割り箸が運ばれて来ると、光秋は近くの煮物入りの大皿から汁の染みた茶色い大根と輪切りにした烏賊を二切れずつ小皿に取り、大根を箸で切り分けて口に運ぶ。

——大根の煮物かあ、久しぶりだな……—

と、

「……ところで三佐」

伊部が周りの様子に気を配りつつ、近くの者にしか聞こえないくらいの声で言う。

「今回のこと、世間にはなんて言うんです？」

——……それもそうだ。『異界からの使者ロボットと交戦しました』、なんて言えない。言ったところで信じる人がいない——

思いつつ、光秋も藤原を見る。

半分程飲み終えたジョッキを置くと、藤原は伊部の許に顔を寄せる。

「実弾の管理ミスによる誘爆事故ということだ。真相は上位機密に指定、演習参加者全員は今回のことについては誰にも話してはならん、とのことだ」

「了解です」

「……まるで怪奇ドラマの隠蔽みたいだな。話の綻びに気付いた主人公が事件を辿っていくと、とんでもない真相が待ち受けているっていう……………」

藤原と伊部の話に、光秋は烏賊を摘みながらそう思う。

と、

「……………にしても、あれだな」

「なんです?」

小田がウイスキーのグラスを置きながら呟き、光秋は顔を向ける。

「ん…………春頃にお前や中尉と会ったと思ったらもう10月で、しかも中尉とはお前たちとの縁とはいえ、一緒に飲み合うようになるなんて、不思議なもんだなあって」

「ああ、そう言えば…………」

応じつつ、光秋は小田と共にタツカーを見やり、視線に気付いたタツカーも小皿に盛ったレバー焼を食べる手を止める。

「確かに、言われてみれば…………あつ!」

と、タツカーはなにかを思い出した顔をし、直後にバツの悪い顔を小田に向ける。

「そういえば、まだ言ってませんでしたね……あの時は、すみませんでした」

言いながら、タツカーは小田に頭を下げる。

『あの時』?……」

小田は首を傾げる。

「ほら、ニコイチの飛行起動実験の時、俺がこいつに突つかかって一尉がそれを止めた時、俺一尉に暴言吐きましたよね」

「……………ああ。あつたな」

「その時のこと、まだ謝ってなかったんで……」

言いながら、タツカーは光秋の方に顔を向ける。

「お前には一応謝ったが……誤解を与えたかもしれないで、念のため言っとく」

「誤解？」

「始め、お前のことを『イエロー』呼ばわりしただろう」

「……そう言えば」

言いながら光秋は、タツカーに胸倉を掴まれて怒鳴られた時のことを思い出す。

「あの時、俺ニコイチがどうしても気に入らなくてムシヤクシヤしてて、ついああ言っちゃったけど、俺は人種差別者じゃない。ただなにかと面白くなって……つい、言っちゃまっ

「たんだ……」

言いながら、タツカーは曇った顔を俯かせる。

「いえ、過ぎたことですし、それにその後なにかとお世話になったし、もう気にしてません」

「そうか？……それなら」

光秋に言われて、タツカーは顔を上げる。

「……愛称みたいなもんだからいいが——ただ、未だに『ジャップ』呼ばわりですけどね？」

思いつつ、光秋は少し笑った顔をする。

「それは、ほら……」

案の定、タツカーは困った顔で返事に詰まる。

と、

「いやいや。そうでもないぜ加藤」

話を聞いていたのか、上杉が加わる。

「現に今日、お前が寝込んだ時なんて——」

「ちよつと待て上杉！」

続く言葉を遮る様にタツカーは慌てて大声を出す、上杉はそれに少し驚きつつも、

「なんです中尉？隠さなくてもいいでしょう？」

と、ニヤケ顔で言う。

「そうそう。言つてやれ上杉」

竹田も口元を歪めながら言う。

「では」

「だからやめろつて！」

話し出そうとする上杉をタツカーは必死な顔をして止めようとするが、

「いいじゃないですか、中尉」

純にもウーロン茶を飲みながら言われ、

「ピュア、お前まで……」

と、呻く様に言いながら脱力する。

——なんだろう？——

光秋もそんなタツカーを見ながら興味を覚え、上杉を見る。

「私も聞きたい」

伊部も言う。

「えー、では改めまして……加藤が起きるちよつと前に、タツカー中尉、純君と一緒にテントに來たんですがね、そんな時、中尉つてばすごく慌てて、『加藤は無事か！』つて青い

顔で言つて。一緒にいた純君の方が狼狽しましたよ」

「……」

上杉の説明に、タツカーはあからさまに頬を赤らめ、力なく下を向く。

—そういえば起きる少し前、中尉の声で「加藤」つて……いや、意識戻つてすぐだから、記憶に自信がないな……—

そんな2人の様子を見て、光秋はその時のことを曖昧に思い出す。

—ただ……—「中尉、ありがとうございます」

「……」

光秋の礼に、タツカーは若干赤味が引いた顔を上げ、尻の座りが悪そうに視線を上に向ける。

と、

「私からも、ありがとうございます。タツカー中尉」

「……」

伊部にも言われると、タツカーは両目を固く閉じて驚搦んだウイスキーを一気に飲んでしまう。

それを見つつ光秋は、伊部に意識を向ける。

—『私からも』、かあ……—

心中に眩くと少し嬉しくなり、ウーロン茶を一口飲む。

その後しばらくの間、光秋は食べて飲んで、同席者一同の会話に耳を傾ける。

「にしても今の店員の娘^{むすめ}がかわいかったなあ……後で声かけてみようかな？」

「あー、いや……」

光秋と対角線上の左端に座る上杉に、右前の純が返事に困っていると、

「まーたお前は！悪い癖だぞ……」

左隣に座るジョッキ入りのビール3杯目を飲みきろうとしている竹田が赤くなり始めた顔でやや舌をもつれさせて言い、その左隣で藤原が、

「お前もほどほどにしておけ。いつもそうやって飲み過ぎて、後で面倒になるんだからな」

と、4杯目のビールに口を付けながらも、変わらない顔色で釘を刺す様に言う。

それを見て光秋は、

「上杉さんが女にだらしないっていうのはたびたび聞いてたが、こういうことか――」

と、主に大河原主任から聞いた話を漠然と納得する。

一方で、

「まあ中尉、今後とも加藤とは仲良くしてやってくれ。こいつは隊の人間以外とは殆ど関わらないからな」

光秋の前に座る小田は、ウイスキーのお代りに頼んだ焼酎の水割りを飲みながら左前のタツカーに言い、若干朱が差し始めたタツカーも、

「ええ。というか、こいつは俺の命の恩人ですからね」

と、2杯目のウイスキーを飲みながら返す。

それを聞いて光秋は、

——……飛行実験の時のことか——

と、ニコイチでタツカーのF—22の背に乗った時のことを思い出す。

と、

「……加藤くん！」

「！あーはい？」

突然伊部に呼び掛けられ、少し慌てて左を見る。

「何度も呼んだけど、聞こえなかった？」

「はい……やつぱ大勢だとダメですね——だいぶにぎやかになってきたし……—

伊部に応じつつ、光秋は来た時よりも人が多く、わさわさと話声が飛び交うようになった店内を意識する。

「そつか……ごめん」

「いえ……ところで、なんです？」

「ああ、せっかくの休みだし、明日か明後日、一緒に金閣寺でも行かない？」
「え……」

唐突に言われた伊部からの誘いに、一瞬呆然とする。

―それはつまり……………デート？なわけない！―

すぐに気を取り直すと、伊部の左隣に座る横尾を見る。

「横尾中尉もご一緒には？」

「私はダメ。休みは明日一日だけだし、どうせ今日の疲れで寝てるだろうし」

応じながら、横尾は2杯目のレモンチューハイを一口飲む。

「フミは関係ないよ。私と加藤くんの2人。だつて加藤くん、こつち来てから寮と支部の往復で、どこにも行っていないでしょう。私も時間ができたらどっかに遊びに行こうと思つてただけど、一人じゃつまらないし」

―いや、綾と一緒にほつき歩いてたことがあります……なんて言えないよなあ。それに、確かに名所なんかにはまだ行ってないな。それに、伊部二尉と……………―

思い浮かんだ綾の顔に若干後ろめたさを覚えつつも、伊部の言葉に光秋は嬉しさを感じる。

「じゃあ……………行きます」

「ありがとう」

「ただ、明後日にしてくれませんか。明日はちよつと片付けたいことがあって」
「なに？」

「部屋の片付けです。ここんとこ演習でどたばたしてて、疎かになってて」

「そう？ わかった。明後日ね」

「はい」

伊部は微笑みを浮かべ、光秋は静かにそれに応じる。

と、光秋は不意に思い付いたことを言う。

「……………ところで、二尉、誕生日いつですか？」

「え？ どうしたの？」

急に訊かれた伊部は、少し面食らった顔をする。

「いえ、僕の時にお祝いしてもらったんで、そのお返しがしたくて。それに、皆さんの分も訊きたいし……ひよつとして、もう過ぎちゃいました？」

光秋は少し不安な声で訊く。

「うんうん、大丈夫だよ。私は11月17日」

「11月17日、ありがとうございます」

言いながら、光秋はズボンの左ポケットから携帯電話を取り出し、伊部が言った日付を記入する。

「横尾中尉は？」

「9月21日」

「ありがとうございます。小田一尉は？」

「え？」

タツカーと話していたところに突然訊かれ、小田は一瞬なんだという顔をする。

「誕生日、教えてください」

「ああ。10月11日」

「ありがとうございます。タツカー中尉は？」

「え！あ、いやあ……」

少し困った顔を見ると、タツカーは視線を一瞬竹田に向け、光秋に顔を近づけて小声で言う。

「後で教える」

「はあ……」

その行動に首を傾げながらも、光秋は藤原を見る。

「三佐は、誕生日いつです？」

「儂か？儂は7月3日だ」

「ありがとうございます。竹田二尉は？」

「え!？」

光秋に訊かれるや、顔が赤くなり始めた竹田は飲んでいたジョッキから口を離し、

「あー、そのー……………」

と、視線を上に向けて戸惑った声を出す。

「?……………」

光秋がその行動に首を傾げていると、

「3月3日だ」

と、上杉がニヤケた声で言う。

「!上杉! テメエ!」

舌をもつれさせながらも、竹田は怒った顔を上杉に向ける。

「どうかしたんですか?」

怒る理由がわからない光秋が訊くと、竹田の怒りを意に介さない素振りの上杉が言う。
う。

「加藤、3月3日はなんの日だ?」

「3月3日?……………」

「おい上杉! マジでやめろって!」

竹田が平時においては珍しい真剣な顔をしつつ、光秋は、

「あ！……雛祭ですか？」
ひなまつり

と、思い付いたことを言う。

「正解！」

「……………」

上杉は嬉しそうに返し、竹田は顔を俯ける。

「？……あの、二尉、どうかしましたか？」

そんな竹田を見て、光秋は居心地の悪さを感じながらも問う。

「お前よー、雛祭って、要するに女の行事だろ」

「はい？………」

「そんな日に男として生まれるってことはだよ、男のくせに乙女座に生まれるのの次に恥ずかしいことなんだよ！」

「………そこまで言いますか？」

「言うよ！お前にはわからんねえだろうがな、オレは昔つからなにかとそのことをネタにされてきたんだよ。まあ、そのここからかった奴らはタダじゃおかなつたけどな」

—『タダじゃ』って……二尉、何したんです？—

思いつつも、それを声にする勇氣は光秋にない。

「………せめてもの救いは、一番恥ずかしい乙女座生まれにならなかったことだよ」

「二尉、それはさすがに偏見じゃ——」

「悪かったな！一番恥ずかしい奴で」

光秋の言葉を遮る様に、やや顔の赤味を増したタツカーが竹田を睨み付ける。

「?……タツカー中尉?」

あまりの様子に、光秋は思わず訊く。

「ジャップ、後で教えると言ったが、こうなったらもういい。俺の誕生日は8月23日だ」

「8月23……ありがとうございます」——さつき二尉の方を見たのはこういうことか？この日は乙女座の日……てことなのか?——

思いつつ、光秋は竹田とタツカーの日付を携帯電話に記入する。元来星占いなどに興味は薄い光秋は、星座と暦の関係など殆ど知らないでピンとこないのである。

「こいつ、さつきから黙って聞いてりゃ」

竹田を睨み続けながら、タツカーは静かな声で言う。

と、竹田が突然立ち上がる。

「……二尉?」

ニヤケが少し弱まった上杉が声をかけるが、竹田はそれに構わずタツカーの右隣に移動する。

「……何だよ」

タツカーが露骨に言うのと、竹田は膝を折って目線を合わせる。

直後、

「同じ痛みを分かち合う同志よお！」

大声で叫びながら、真つ赤な顔をした竹田はタツカーに抱き付く。

「な、何だよ!？」

タツカーが驚愕の声を上げるが、竹田は両腕を放さず、

「さつきはああ言ったけどよ、結局オレのことをわかつてくれるのはお前みたいな奴だけだあ!それがこんなに身近にいたなんてえ!」

と、舌をもつれさせながら言う。

「……あれはいよいよね」

「いよいよって?」

タツカーに抱き付く竹田を見ながら言う伊部に、光秋が訊く。

「二尉、すっかり酔っちゃったの」

「ああ……」

伊部の一言に、光秋は竹田の真つ赤な顔を見ながら納得する。

「だから言わんこっちゃない……しょうがない。中尉、しばらくそいつの相手頼む」

小田が呆れ顔をしながら言う。

「何で俺が！」

「まあまあ、そう言わず」

タツカーの反論に構わず、藤原が竹田のジョッキと小皿をタツカーの近くに置く。

「……………わかりましたよ。とりあえず、いったん離れろ。気持ち悪い」

観念したした様にタツカーが言う、竹田は体を離しながら、

「よし！今日はまだまだ飲むぞお！店員さん！ビール2つ！」

と、機嫌よさそうに近くにいた店員に注文をする。

「……………あーつと。ところで、上杉さんは誕生日いつです？」

一連の光景から気を取り直した光秋は、上杉を見ながら訊く。

「4月20日」

「ありがとうございます」

返しながら、携帯電話に日付を記入する。

「純さんは？……………あ、そういえば、純さんの連絡先まだ教えてもらってませんでしたね」

「そういえばそうだね……………いい機会だし、ボクからも教えてほしいな」

「はい」

純の言葉に応じると、光秋は立ち上がって純の左隣に移動し、互いの携帯電話の番号

を教え合う。

「ありがとうございます。で、純さんの誕生日は？」

「8月19日。光秋君は？」

「6月17日です」

「6月17日ね。ありがとう」

純のお礼に光秋は軽く頭を下げて応じ、自分の座っていた場所に戻る。

純から訊いた日付を記入しようと携帯電話を操作すると、

「……純さん、もう入れてる」

すでに記入されている日付を見、携帯電話を左ポケットに仕舞う。

しばらくの間、光秋は再び食べて飲み、周りの話しに耳を傾ける。

右隣のタツカーは、初めこそ竹田との飲み合いを嫌そうにしていたが、今では2杯目のビールを飲みながら、5杯目のビールを飲んでいる竹田とそろって赤い顔をし、光秋にはよく聞き取れない言葉で大声で談笑している。

「人同士って、つづつづ解らんもんだ……それとも、酒の力か？」

2人の初対面時から先程までのやり取りを思い出しながら、そんなことを思う。
と、

「それにしても、ESOってこういう時いいですよねえ……」

「なにが？」

テーブルの左端に座る純の呟きに、光秋の左隣に座る伊部が訊く。

「いや、休みが2日ももらえて。陸軍もそうみたいですけど、空軍も明日1日しか休めなくて。正規も候補生も関係なしですよ」

右隣の横尾をちらつと見ながら、純はそう返す。

「そりゃあ、よく言われるように『警察より厳しく、軍より緩く』がESOだからな」
純の正面に座る上杉が、グラス入りのウーロン茶を飲みながら赤味の差し始めた顔で言う。

と、伊部の正面に座る藤原が、グラス入りの焼酎の水割りを飲む手を置くと、赤い顔を伊部に向け、

「そういえば伊部はまだ飲んでないな、1杯くらいどうだ？」

と、若干舌をもつれさせて言う。

「三佐、伊部は……」

「いえ。私は結構です」

藤原の左隣に座る小田が顔を若干赤らめながらも咎める声で言い、伊部二尉もすぐに強い口調で言う。

が、

「そんなこと言わずに、チューハイ一杯くらいいいじゃない！」
横尾が赤い顔で言い、

「そうそう。全部飲まなくても、残った分はオレが飲みますよ」
上杉もニヤケ顔で言う。

「いや、でも……」

「決まりだな。すみませーん！」

伊部が返事に詰まっている間に、藤原が有無を言わずに店員を呼び、
「ウーロンハイーっ」

横尾が勝手に注文をしてしまう。

「ちよつと三佐！フミも！」

2人に非難の目を向ける伊部を見つつ、光秋は、

「—そういえば伊部二尉って、酒は飲めないって言ってたよな。飲んだ時の記憶にいいものはないとも……大丈夫か？—」

と、少し心配になる。

「そういえば、加藤と純もまだ飲んでないな。伊部のが来たら頼むか」
「三佐！それはさすがに。僕まだ未成年です」

藤原の提案に、光秋は慌てて伊部以上に強く言う。

「そうか……それならしょうがないな……」

藤原は諦めた様に言いつつ、純を見る。

見られた純は消え入りそうな声で、

「ボクも、お酒は……ちよつと……」

と、拒否の意思を示すが、ちよつと伊部のものを持つて来た店員に、横尾が素早く注文してしまう。

「ウーロンハイもう一つ」

「姉ちゃん!」

純は非難の声を上げるが、

「……」

横尾は虚ろな表情を返すだけである。

伊部は自分の許に置かれたウーロンハイのグラスをしばらく眺めると、

「……じゃあ」

と、観念した様にそれを右手で持ち、軽く一口飲む。

「……二尉、大丈夫ですか?」

光秋は思わず声をかける。

「ゲホッ……大丈夫……」

咳を１つし、光秋の顔を見て答えると、伊部は食事を挟みつつまた何口か飲む。

「……」

グラスの中身が減るのに比例する様に伊部の目の焦点が徐々に合わなくなってくるのを見て、光秋はどうしても心配になる。

——本当に大丈夫かな？……

そう思ったすぐ後に純の分も運ばれ、純は渋々といった顔でそれを飲み始める。

しばらくしのの間、光秋は料理を口に運びつつ、伊部の飲酒を若干の心配を込めた目で見守る。

グラスを飲み干す頃には、伊部の目はすっかり虚ろになる。これが白色系か黄色系なら、今頃真っ赤になっているだろう。

「……………さて、そろそろお開きにしましょう」

左手首の腕時計を見ながら小田が言い、赤い気分が悪そうな顔をした藤原が、

「そうだな……すみませーん！勘定を」

と、絞り出す様な声で店員を呼び、渡された表を見て一同に言う。

「……各自、小田に3000円出してくれ……」

「えー！もう終わりっすかー!?」

もつれた舌で抗議する竹田の声を聞きつつ、光秋は右端から自分と伊部、横尾のカバ

ンを取ってそれぞれの許に置き、自分の灰色のカバンから財布を出し、財布から千円札3枚を出して、

「お願いします」

と、小田に渡す。

集金が終わると、光秋は藤原が若干ふらつきながらも立ったのに続いて立とうとする。

と、

「……！」

伊部が左肩に寄り掛かってくる。

「二尉？」

「……ごめん、ちよつと立つの手伝って……」

「ああ、はい」——できあがってるなあ……—

伊部の虚ろな表情とややふらついている目を見てそう思いながら、光秋は立ち上がって伊部に右手を差し出し、それを右手で掴んだ伊部を引っ張り上げる様に立ち上がらせると、自分のカバンを右肩に斜め掛けして靴を履く。

伊部もカバンを提げて靴を履くと、頼りない足取りで出口へ向かい、光秋はそのすぐ後をいつでも手が伸ばせる心構えで続く。

「ありがとうございました」

と言う店員の声を聞きつつ、なんとか自力で外に出た伊部に光秋も続き、純、横尾、上杉、藤原、竹田とタツカーも店を出る。

危なっかしい足取りで立つ伊部の右隣に控えつつ、光秋は右前に立つ気分が悪そうな顔の純を見る。

「大丈夫ですか？」

「……なんとかね……酒つてどうも苦手で……」

「はあ……」

大儀そうに言う純に、光秋はいま一つ実感が湧かない様子で応じる。

——飲んだことないからなあ……——

会計を済ませた小田が出てくると、藤原は一同を見回す。

「さて、今日はこれで解散だ。各自、帰路に気を付けてな。解散」

光秋はそれに一礼で応じ、小田に左肩を支えられながら歩く藤原に続いて、左隣を頼りない足取りで歩く伊部に気を配りつつ、駅に向かって来た道を戻り出す。後ろに横尾が続く。

と、

「よーし！ 違う店で飲み直すぞー！」

「おー！」

直後に竹田がタツカーと肩を組んで言い、右隣のタツカーも上機嫌な声で応じる。

「ピュア！お前も来い」

「上杉！お前も付き合えよ」

「えー！いやあ、ボクは……もう結構です！」

「オレも今日はもう……て！ちよつと!」

タツカーと竹田の誘いに、純は逃げる様に横尾の後に続き、上杉は竹田とタツカーに両腕を掴まれて藤原たちとは反対方向に連れて行かれる。

——大丈夫かな？……

後ろに目配せしながら、光秋は3人、特に上杉の身を少々案じる。

小田と藤原を先頭に大通りを歩いている途中で、伊部と横尾はいよいよ一人で歩けなくなり、伊部は光秋に、横尾は純に右肩を支えながら駅を目指すことになる。

駅入り口の階段を注意して下り、行きとは打って変わって人氣が殆どない地下通路を進んで行く。それぞれ券売機で行き先までの切符を買って改札機をくぐり、ホームに下りる。

少ししてやってきた電車に横尾姉弟以外が乗り込み、光秋は残った2人に一礼する。

「では」

直後にドアが閉まり、走り出した人がまばらな車内で、小田と光秋は近くの席に藤原と伊部を座らせ、自分たちは2人の前に吊革を掴んで立つ。

ひと駅過ぎた頃、

「三佐、次ですよ」

光秋の右隣に立つ小田が、藤原を揺すりながら声を掛ける。

「ん？……ああ……」

まぶたが重そうな顔で応じると、藤原は大儀そうに席を立ち、すぐ後に流れたアナウンスに従って近くの右側のドアの前にのそのそと移動する。

電車が停まり、ドアが開く。

「三佐、帰路お気を付けて」

「ああ……」

小田の見送りに応じると、藤原はややふらつきつつも電車から降り、改札口へ向かう。ドアが閉まり、再び電車が走り出すと、光秋は少し心配して訊く。

「大丈夫でしょうか？三佐」

「まあ、いつも家にはちゃんと帰れてるみたいだから大丈夫だろう。それに三佐なら、非常時には酔いも吹っ飛んで対処できるさ」

「……それも、そうですね」

小田の答えに、我ながら不思議と納得する。

しばらくして光秋が降りる2つ前の駅を過ぎると、小田は伊部を揺すつて声を掛ける。

「伊部、次だぞ」

「……はあい……」

焦点のはつきりしない目で応じると、伊部は腰を浮かそうとする。
が、

「……立てません……」

虚ろな顔に若干狼狽を浮かべる。

「おいおい。だから言わんこっちゃない。お前の寮まで結構あるんだぞ。駅からなら俺よりも遠いし……」

と、小田が困った顔をしていると、

「……一尉、僕も次で降ります」

言うや光秋は、伊部を抱える様に立たせて右肩で支える。

「え？でもお前、次の次で降りるんじゃない……」

「切符代は同じです。それにこの辺は、偶に買い物やなんやで来ますし……二尉の送り、手伝います」

「そうか？じゃあ……」

小田が応じるとアナウンスが響き、それに従って光秋は、伊部を右肩で支えながら一緒に近くの右側のドアの前に移動し、小田もいつでも手が伸ばせる体勢でそれに続く。電車が停まり、ドアが開くと、光秋はホームとの隙間に注意しつつ伊部と一緒に降り、後から降りた小田の後を追って歩き出す。

ホームをしばらく歩いて階段を上り、改札機の前に来ると、伊部を支えつつ自分と伊部から渡された切符を改札機に通してぐり、立ち止まって先を行く小田に声を掛ける。

「一尉。これはおぶっていった方がいいかもしれません。さっき階段上った時も危なかったかったし」

「そうか。じゃあ俺が」

「いえ、僕がやります」

歩み寄ってくる小田にそう返すと、光秋は伊部を小田に預け、自分のカバンを左肩に、伊部のカバンを右肩に提げ、腰を低くして小田に手伝ってもらいながら伊部を背負う。

「大丈夫か？せめてカバンくらい」

「いえ、大丈夫です。それに途中で別れるなら、最初から持っていた方が」

背中に適度な重さを感じつつ、光秋はそう応じる。

「……お前、一人で伊部の寮まで行くつもりか？」

「はい。そのつもりですが」

「場所知ってるのか？」

「二尉がいますから、わかります」

「でもなあ……」

ぐったりした伊部を見ながら、小田は心配そうな顔をする。

と、伊部は重そうに顔を上げ、絞り出す様に言う。

「……一尉、大丈夫です……私まだ寝てません……」

「そうか？……それなら……」

心配顔で応じると小田は歩き出し、光秋もそれに続く。

地下通路をしばらく歩いて階段を上り、2車線道路脇の歩道に出る。右手には光秋が金銭のやり繰りに利用する銀行や、そういった用で近くまで来た時に利用するスーパーがあり、道路を挟んで向かい側の右前には明日にでも行こうと思っていた理髪店がある。いずれも閉店間際の雰囲気を出しながら夜の闇に煌々とネオンサインを光らせている。

小田が右に向かって歩き出し、光秋も伊部を背負い直してそれに続く。

「途中までは道が一緒だから案内も兼ねて行くが、本当に大丈夫か？」

光秋と伊部を見つつ、小田は尚も心配顔で言う。

「大丈夫ですよ。そうですね？二尉」

「……大丈夫……まだ寝てません……」

「……ならいいんだが……」

2人の返事に、小田はそれ以上触れるのをやめる。

「ところで、伊部二尉って飲むといつもこんな感じなんですか？」

「いつもというか、俺もこいつが飲んでるところを見るのは、入隊祝いに無理して飲んだ時以来だからな。飲めないっていうのは、その前から聞いてたが」

光秋の問いに、小田は思い出す様に答える。

「そうなんですか」

「そもそも、あんなふうに飲み会をやつたのも久しぶりだしな……竹田が所構わずもどすのを見なかった分、貴重なケースかもな」

「はあ……」

笑みを含んで言う小田に、光秋は返事に困る。

話している間に小田の寮の前に着き、3人は足を止める。周りが暗く、十分な光もないため、光秋には3階建であること以外の特徴はわからない。

「もうしばらく真っ直ぐ行つて、3つ目の路地を右に曲がる。しばらく歩くと見えてく

と思うんだが……夜だしな……」

伊部の寮までの道を教えつつ、小田はまた心配顔をする。

「真っ直ぐ行つて、3つ目の路地を右ですね。二尉もいますから、大丈夫ですよ。ねえ、二尉」

応じると、光秋は伊部に呼び掛ける。

「……うん……だいじょうぶ……」

「……なら。じゃあ、またな。2人とも気を付けて。お休み」

「お休みなさい」

「……おやすみなさい……」

光秋と伊部が返すと、小田は寮の自室へ向かう。

それを見送ると光秋は伊部を背負い直し、再び歩き出す。

2人以外に出歩く者はおらず、車も殆ど通らない。

「……」

2人きりになった所為か、光秋は背中一面にかかる重さや、互いの服を挟んで伝わってくる体温、左の耳元に届く息遣い、鼻をくすぐるアルコール臭を若干含んだ口臭、と、背中の伊部を先程よりやや強く意識してしまう。

「……！ いかんいかん！……えーつと、1つ目の路地越えたな……」

変な気を起さないよう自戒し、気を逸らそうと寮までの道のことを考えようとすると、

「……」

「?……なんですか?」

伊部がもつれた舌でなにか言つたのを聞き、光秋は訊き返す。

「………おとうさん……」

「?……」

「私、もつとがんばるから……がんばって、らくさせてあげるから……加藤くんもがんばってるし、負けてられないから……」

「……こりゃあ、酔いが頭に回つたか?それとも寝ぼけてるのか?……」——「僕はお父さんじゃありませんよ」

「わかつてる!」

光秋の返事に、伊部は少し怒った声で答える。

「……私、がんばるのはとくだから……がんばってペンきょうして、士官学校入って、やつとえそに入れて、おかあさんもよろこんでくれて……」

「………」

喋り続ける伊部を背負い直しながら、光秋はなんともいえない奇妙な持ちを覚える。

「……………」

その後、伊部は寝入ってしまったのか静かになる。

光秋は3つ目の路地を右に曲がり、寮らしき建物を探しながら歩き続けるが、周りが暗いためよくわからない。

「二尉。寮はどこです？」

揺すつて尋ねると、伊部は重そうに右手を上げ、

「……………あそこ」

と、街灯に照らされている右前の門を指し、光秋はそこへ向かう。

門をくぐると、正面に3階建の建物が見え、光秋は伊部に左耳を向けて訊く。

「何階です？」

「……………2階……………」

答えに従って寮の玄関をくぐり、近くの階段を慎重に上る。

2階に着くと、光秋はまた左耳を伊部に向ける。

「何号室です？」

「……………210号室……………」

答えを聞くと左側に並ぶドアの番号を見ながら進み、「210」と書かれたドアの前で止まる。

「着きましたよ」

「……うーん……」

唸る様な返事を聞くと、光秋は膝を曲げ、背中から伊部を下ろす。

下りた伊部は右手をズボンのポケットに入れて鍵を取り出し、開錠してドアを開ける。

「……！二尉、これ」

そのまま部屋に入ってしまったいような伊部に、光秋は慌てて右肩に提げたカバンを差し出す。

「……あ……ごめん……じゃあ、おやすみ」

「お休みなさい」

「……ありがとね……こうしゅうくん……」

「え？」

言うतすぐに、伊部は部屋に入ってドアを閉める。

等間隔に並んだ電灯の頼りない明かりがあるだけの廊下に残された光秋は、左肩に提げていたカバンを右肩に斜め掛けし、来た道を引き返す。

「……今『こうしゅう』って……いや、聞き違いかなんかだろう」

呟くと、階段を下りて玄関を出、門をくぐる。

表通りに向かつて路地を歩きながら、ふと長考に入る。

——……二尉も、いろいろ大変なんだな……そりやそうか。首席で卒業したって言つてたから、そりや頑張るよなあ………そんな伊部二尉に比べて、僕はニコイチがなきゃ………そりやあ、訓練は一生懸命やつてるし、実戦でも真剣だけど………いや、二尉の様な人と、無取り柄で弱い僕を比べることがそもそも間違ひなのかもしれない。そうだとすると、弱い者なりの自尊心は捨てたくないね………そういやあ、前にニコイチへの依存を心配してたよなあ………

表通りに出たところでそんなことを思い出し、左に曲がりながら、光秋はズボンの左ポケットにあるカプセルに意識を向ける。

——……依存云々と言つてきたが、もともと人間つて、道具を利用することで生き残つてきた生き物だから、道具に頼ろうとするのは、ある意味自然なんだろう。僕の場合はニコイチだけじゃなく、今掛けてるメガネだってそうだ。メガネって道具があるから、僕は常人並みの視力が得られる。問題は、それこそ頼り切つてしまうことだな。メガネの方は不可抗力だから仕方ないとして、ニコイチも道具として利用すれど、吞まれちゃいけない、か………そのためにも、吞まれないだけの強さを持つために鍛える、訓練を一生懸命する、か………道具だけじゃなく、いろんなことにいえるかもしれないが、少なくとも僕はそれをやろうとしてる。とりあえずは、それでいいんじゃないか？伊部二尉に

感じたことも、それでなんとかなるような気がする……………」あ」

伊部のことを考えて、光秋は明後日の遠出のことを思い出す。

―待ち合わせの時間と場所、訊かなかったな……………」明日、電話で訊けばいいか」

そう決めると、少しばかりすつきりした気分で、心なしか家路を急ぐ。

寮の自室に着くと、光秋は居間の電気を点けて荷物を整理し、風呂を入れながら歯を磨く。

お湯が溜まるとすぐに風呂に入り、体を洗って寝巻への着替えを終え、目薬を注し終えると、ベッドの枕元に携帯電話とカプセルを置き、自分も梯子を上ってベッドに入る。携帯電話を開いて時計を見ると、10時55分である。

―ただでさえいろいろあったし、こりや明日遅起きかな……………」

そんなことを思いながら灯りを消し、布団を被る。

10月3日日曜日早朝。

「……………」

耳元で鳴るアラーム音に目を覚ますと、光秋は枕元に手を伸ばして携帯電話を操作し、音を止めて時計表示を見る。

―……………7時か……………いい加減起きないとな……………」

眠気を多分に含みつつ思うと、布団を退かしながら上体を上げ、深呼吸を一つする。

「……よく寝たな」

小声で呟くと枕元のメガネを掛け、ベッドから下りる。

— やっぱ遅起きになったか……ま、休みだからいつか……—

寝ぼけ気味な体を自覚しつつそう思うと、活動を開始する。

昨日着ていた白のワイシャツと薄黄色のズボンに着替え、朝食、簡単な自主訓練、新聞読み等を済ませると、部屋の全ての窓を開けて掃除を始める。演習中心の生活でやや疎かになっていたため、いつもやる居間の掃除機掛けやトイレ掃除、風呂掃除に加えて、普段はやらないような場所も心なしか丁寧に掃除する。

それが終わると、財布を持って散髪に出掛け、頭全体を1センチ程切ってもらい、顔中の薄毛も剃ってもらう。

寮に帰る途中でコンビニに立ち寄り、菓子パン2つと500ミリペットボトルのミルクティー1つを買い、それを昼食にする。

食後は以前買った本を読み返したり、なんとなくしにテレビを見たりと、かなり脱力した時間を過ごす。

午後7時半。

夕食と入浴を済ませた光秋は、寝巻姿で居間の椅子に座り、左手に持った携帯電話で伊部に電話する。

「……」

（もしもし？）

「伊部二尉？加藤です。今、大丈夫ですか？」

（うん。どうしたの？）

「明日の金閣行きなんですが、待ち合わせの時間と場所、どうします？」

（あ、そうだった。言わなかったね……9時に、支部の前でどう？）

「9時に支部前ですね。わかりました。ありがとうございます」

（……ところで）

「はい？」

（……私昨日酔っぱらったみたいだけど、なんか変なことしなかった？）

「あー……」

言われて光秋は、背負っていた伊部がした身の上話を思い出す。

「いや、特には……」

（そう？ならいいけど……）

「特に暴れたとか、騒いだってことはなかったですよ」

（そう……ありがとう。じゃあ、明日、支部の前でね。お休み）

「お休みなさい」

言つて電話を切ると、光秋はそれを寝巻の胸ポケットに入れる。

「あれは別に、『変なこと』じゃないよな……………」

呟くと、机の左前にある3段筆筒の許に移動し、その上に置いてあるテレビの電源を入れ、リモコンで適当にチャンネルを回す。

「……………」

たまたま映つた近代史の特番がツボにはまり、左耳にイヤホンをはめると、テレビの前にしゃがんでそれを見る。

午後9時。

番組が終わつて机の上の時計を確認すると、光秋はテレビを消してイヤホンを外す。

―明日は早いし、寝よう―

ベッドに梯子を掛けて用を足し、戸締りを確認して床に着く。

10月4日月曜日午前8時40分。

6時に起床して朝食等を済ませた光秋は、赤チェックのワイシャツに緑のズボンを着、左手首に時計と数珠を巻いてズボンのポケットに小物を入れる。

「さて、行くか……………」

呟くと、右肩に灰色のカバンを斜め掛けし、灰色の靴を履いて自室を出る。

出てすぐに、門の周りを掃除している寮の管理人に会う。

「あれ？加藤さん。今日は非番？」

「はい」

白髪を蓄えたツナギ姿の老人が京訛りの語調で問い、光秋は一礼しながら応じる。

「さては、いい人？」

「そんなじゃないですよ」

からかう様な管理人の言葉を受け流すと、一礼して京都支部に向かう。

——……：そういうや、夏の間いなかったことも、『いい人』ってことにされてたもんなあ。

一応『仕事で』とは言っておいたが……—

歩きながら、ふとそんなことを思い出す。

36 京都観光の中で

京都支部の正門前に着くと、光秋は門を背に、視線を右側に向けて伊部二尉を待つ。

8時55分。

「ごめん。待った?」

白のワイシャツに水色のロングスカートを着、左肩に小さいカバンを提げ、長髪を後ろに束ねた伊部が、速足で駆け寄ってくる。

—あの格好は……………!—

その服装に光秋は、白い半袖のワイシャツに赤チエツクのロングスカートを着、髪を広げた綾の姿を、一瞬だが伊部に重なって見る。

「……………」

「…………加藤くん?」

「…………あ、いえ、今来たところです」

伊部の声で我に返った光秋は、すぐにそう応じる。

「…………じゃあ、行きましようか」

「うん…………?」

伊部が首を傾げつつも応じると、2人は最寄りのバス停へ向かう。

「そういえば加藤くん、髪切った？」

「はい。昨日……………」

バス停に着いて少しして、目的の市バスが来る。光秋と伊部はそれに乗り込んで、後部右側の席に並んで座る。

走り出した車内には光秋たちを含めて5人しかおらず、光秋と伊部以外は前側の席に着いている。

—そういえば、バスも久しぶりだな…………—

窓側で外の景色に目をやりながら、カバンを膝の上に置く光秋は不意にそう思う。

「……………そういえば」

「はい？」

伊部が呟く様に言い、光秋は左に顔を向ける。

「昨日電話した後で思ったんだけど…………私、一昨日どうやって帰ったわけ？」

「覚えてないんですか？」

光秋は少し驚きながら訊き返す。

「駅に加藤くん和小田一尉と一緒に降りたところまでは覚えてるんだけど、そこから家までの記憶が曖昧で…………」

「話だけ聞いてると、『あり得ない帰宅』みたいですね」

「なにそれ？」

「どうやって帰ったのかわからないのに家にいるっていう、怪談とか都市伝説ですよ」

「ふーん？……で、それはいいんだよ。まさか本当に不思議なことが起こったわけじゃないだろうし……確か、誰かと一緒に帰った気がするんだけど……一尉だっけ？」

「僕です」

「加藤くん？」

伊部が意外そうな顔をする。

「でも、私の寮の場所なんて……」

「教えてもらいながら行きました。たぶん、そのことを忘れてるんでしょう——ついでに、おぶっていったことも忘れてるのか？——

伊部の話す様子から、光秋はそう推測する。

「そうだったんだ。ありがとね」

「いえ」——……礼なら一昨日言われましたよ——

伊部の礼に応じながら、光秋は別れ際のことを思い出す。

しばらくして、

（次は、金閣寺前）

というアナウンスが流れると、伊部がボタンを押してバスを停め、光秋と伊部は金閣寺前のバス停に降りる。

「ふっち」

と言う伊部の後を追って、光秋は左側に向かい、少しして左に伸びる横断歩道を通って反対側に渡り、正面にある緩やかな坂を上っていく。

柵付きの狭い歩道を進むと、正面右側に密集して生える木々に挟まれた砂利敷きの道が見えてくる。

——どっかで見たような……——

その光景に、光秋は若干の既視感を覚える。

生垣手前の横断歩道を渡ってその道に入ると、道脇に生える木々や生垣、正面に建つ門といった景色に、光秋は再び既視感を覚え、

——……！ そうだ、中学の修学旅行で来たな——

と、その正体を思い出す。

門の左隣にある券売所でそれぞれ入場券であるお札を買ってパンフレットをもらい、左端にある入場門から中へ入る。

少し進むと、池を挟んで建つ特徴的な金色の建物が見え、2人は左に曲がって拝観地に入り、その左端に移動して池を挟んで建つ金閣を眺める。

「……」

快晴の下で金色に輝く建物を見ながら、光秋は移動の際に近くを通った右隣の20人程の集団を見やる。

―通りかかった時に聞こえた声、日本語じゃなかったよな。いや、僕の耳だから、どうかの訛りがそう聞こえただけかもしれないが、どうも団体さんみたいだし……朝鮮、いや、中国人かな？こつちでも中国は景氣がいいみたいだし……―

耳に自信がなく、中国語の知識など皆無だが、ニュースで知った経済状況と自分と大して変わらない黄色系の顔つきから、一人遊び感覚でそう判断する。

と、

「ほんと、いつ観てもきれいだねえ」

伊部が建物を見ながら言う。

「ええ……ただ僕は、どつちかっていうと銀閣の方が好きなんですよね」

「そうなの？」

「ええ。金閣はどうも派手すぎて性に合わないというか……銀閣は質素で落ち着いた感じがあって、そつちの方が僕も落ち着きます」

「ふーん……確かにね。こつちはあんまり落ち着かないかも」

光秋の返答に、伊部は一層金閣を注視して言う。

「そうだ。いい機会だし、もっといろいろ教えてくれない？」

「いろいろって、なんですか？」

「例えば……………アヤって誰？」

「……………!？」

すぐには何を言われたのかわからず、束の間呆然した後、光秋は伊部を見る。

「……」

伊部の方も光秋に顔を向け、2つの目で凝視している。

「……………いや……………何のことを——」

「恍けないの!」

ぎこちない返答を遮る様に、伊部はまじまじと光秋を見る。

「今まで言わなかったけど、私、昨日のこと切れ切れだけど記憶してるんだよ。黒い空間で黒い奴にやられそうになった時、意識が遠くなつて、遠くから加藤くんの声で、アヤ、アヤって……………私、この夏の記憶が殆どないんだけど、それと何か関係あるの？」

「……………それは……………機密になるので、僕からは何も……………」

「昨日、タツカー中尉と純君には話してたでしょう？」

「!」

伊部にそう返されて、光秋はその時のことを思い出す。

—あの時、少し考えた顔をしてたのはこのためか？だとしたら……………女つて怖！—
「それなら、私にも話してくれていいでしょう？心配しなくても、ちゃんと黙っておくから」

「……………それなら…………」

伊部にそう続けられると、光秋は半ば諦める様に言う。

「ただ……………僕の方も上手く説明できる自信はありません……………自分の中の整理が付き切っていないところがあるんで…………」

「いいよ。話して」

「……………では」

言うとき光秋は、金閣の方に顔を向ける。

「……………二尉、『蜂の巣』で負傷した後、別の病院に移されましたよね」

「うん」

「原因は、検査で潜在エスパーであることが判り、そこで超能力を人為的に引き出す実験に参加することになったから」

「詳しいね？」

「戸松教授に教えてもらいました」

言いながら、3カ月程前に会った頭の薄い髭を蓄えたメガネの白衣を思い出す。

「7月に入つてすぐ、僕は上杉さんと竹田二尉、タッカー中尉の4人で、ちょうどESOの研究施設の近くで買い物をしてたんです。昼食を摂つてたら突然施設の一部が爆発して、そこから僕の前に現れたのが綾でした……言い換えれば、伊部二尉、あなただったんです」

「？」

「……超能力を引き出す際に行つた脳への電気刺激、その結果生まれた二尉のもう一つの人格、それが綾です」

言うとき光秋は再び伊部に顔を向け、2人は顔を合わせる。

「なんでもサイコキノとして目覚めたはいいけど、代償に『伊部法子』としての記憶が封じられてしまったそうで、知能は赤ん坊並みでした。なぜだか僕に懐いて、教授による知的刺激を与えることで伊部二尉に戻るのだと聞いて、僕はあいつの……そう、教育係になつたんです。それが、僕と綾の関係、と言いましようか……」

「……私の、もう一つの人格？……」

「要はそういうことですね」

「……………」

「……………」

光秋が言い切ると、2人の間に沈黙が広がる。

しばらくして伊部が、

「……解った……その、完全に理解したってわけじゃないけど、要点はなんとかね」と、やや歯切れ悪く言う。

「……少々荒唐無稽かもしれませんが、事実です」

「昨日のことに比べたら、充分ありそうだけどね」

―確かに。異界から殺し屋ロボットが来るより、実験の所為で多重人格者になるって方がまだありか……―

微笑みを浮かべて応じる伊部に、光秋も共感しつつそう思う。

「……じゃあ、とりあえず進もうか。せっかく来たんだし。歩きながら他にも教えて」

「……はい」

伊部の言葉に光秋は応じ、2人は拝観地から通路に戻って順路通りに進む。

池の縁に沿って歩き、金閣の脇を通り、緩やかな石敷きの階段を上っていく。

その間にも、光秋は左隣に並んで歩く伊部と綾のことについて話す。

「そのアヤつて人、サイコキノって言ってたけど、レベルは？」

「7です」

「けっこう高いね」

「ええ。それから、レベルは確認してませんが、テレパスでもあります」

「そう……加藤くんは教育係だつて言つてたけど、具体的にになしてたの？」

「基本的に、教授の用意したマニュアルに従つて、読み書きや初歩的な算数を教えてました。たまに竹田二尉や横尾中尉たちと出掛けたりもしました」

「フミも知つてたの？」

「馴染みでは竹田二尉と上杉さん、タツカー中尉、横尾中尉が知つてます。ときどき手助けしてもらつたこともあるし。ただ、藤原三佐と小田一尉は知らないはずです」

「そう……で、昨日私の氣が遠くなつてる間に、またアヤが出てきたつてこと？」

「そういうことになりますね。僕も綾だつて気付いた時は、少し驚きました。でもそのおかげで黒い奴を倒せて、またこつちに戻つてくることができたんです」

「……じゃあ、私が今生きてるのも、加藤くんとアヤのおかげ、か……」

「いえ、綾のおかげですよ。諦めかけた僕を奮い立たせて、勝つチャンスくれたんですから……」

言ふと光秋は顔を右に向け、金閣が目立つ下の景色を見る。

しばらく歩いて庭園部分を過ぎ、出口門をくぐつて階段を下りていると、

「あそこでなにか食べよう」

「はい。少し小腹も空いたし」

左前の小店を見ながらの伊部の提案に、光秋も視線を追いながら合意する。

階段を下り切つて少し歩き、左にある砂利敷きの休憩用広場に入る。小店の受付に歩み寄ると、2人はメニュー表を見る。

「……じゃあ、ソフトクリームの抹茶を。加藤くんは？」

「じゃあ……茶団子一つ」

「はい」

店員が応じるとそれぞれが料金を払い、少しして注文の品を受け取ると、2人は振り返つて右側のベンチに座る。

「……入場料もそうだが、ここは僕がまとめて持つべきだったか？ いや、言つたところで、前みたいに『上官に奢るなんて』って言われるのがオチか――」

串に刺さつた3つの団子の内の1つを食べつつ、左隣の伊部に意識を向けながら、光秋はそんなことを思う。

と、

「……………」

目の前を小店の方に向かって並んで横切る白色系の男女が目に入り、その手と手が繋がれていることに気付く。

――カップル……恋人か……――

その認識が、光秋に温かな気分を抱かせる。

「……どうしたの？」

「！」

伊部に呼び掛けられて、光秋は我に帰る。

「いや……あの人たち見てたら、気分がよくなつて……」

「?……」

光秋に言われて伊部も視線を追うと、小店の前に立つ2人を見る。

「……恋人、ですかね？」

「……みたいね」

注文を済ませて空席を探す2人を見ながら、光秋と伊部は言う。

「ああいうの、好きなんですよ。見てるとほっとするっていうか……」

「そう……そういえば、加藤くんとアヤ……ちゃんって、どういう関係だったの？」

呟く様に言いながら2つ目の団子を口に入れる光秋に、伊部がソフトクリームを舐めながら問う。

「どういうって、さつきも言った通り、教育係とその教え子——」

「そういうことじゃなくて……その……」

光秋の言葉を遮る様に言うと、伊部は戸惑う素振りを見せつつ、自分たちと反対側のベンチに座る先程の白色系の2人に目をやる。

「ああ、そういうことか——……さつき、僕の中で整理が付き切っていないところがあると言いましたよね……二尉の訊きたいことが正にそれです。ただ、二尉が感じている様な、あんな感じではないと思いますよ」

伊部の視線を追って前方の2人を見ながら答える。

「そう……」

「……なんでしようね、あの関係は？ 恋人じゃあない。ある種の兄妹かと言えば、それより近かった気がします。親子……でもないでしょうね。もつとも、事実上の親といえる戸松教授は、綾にとってはせいぜい掛かり付けの先生くらいの認識しかなかったようですよ……」

「そう……難しいんだ？」

「ええ——……？ 待てよ……ひよつとして二尉、事実関係のことを気にしてるんじゃないのか？ もしそうなら……うん。いい機会だし、ここは誤解を招かないようにはつきり言つとこう——「……その、二尉」

「ん？」

「……どういう関係だったかはともかく、事実はありませんでしたので……安心してください？……」

言つてみて、光秋は少し気恥ずかしくなる。

「事実?.....ああ、そういうこと」

—この言い方……僕の考え過ぎだったか……ますます恥ずかしい……—

「加藤くんとアヤちゃんがいたのって、私が意識取り戻した後にニコイチで下りた、あの小屋だよな?」

「はい」

答えながら光秋は、綾との家であつた今はない白い小屋を思い出す。

「あそこに、2人つきりで住んでたの?」

「2人きりというか、ええ。ときどき教授や二尉たちや、日用品の補給も来ましたが、原則2人だけです」

「それで事実はない、か……」

「本当ですよ!」

「……フフツ」

「?」

光秋が少し強く言うと、伊部が口元を微笑ませる。

「……何か?」

「うんうん。加藤くんがムキになってるのが、少し可笑しくて」

「……」

「別に、加藤くんの言葉を疑ってるわけじゃないよ。若い子が異性と2人でいてなににもなになんて、すごいなーって」

「僕にも、それくらいのは自制はあります。なにより『異性と2人』と言っても、綾は僕といた殆どの時間、精神的には子供、それも幼児くらいだったんですよ。いくらなんでもあるわけ……なにより、伊部二尉の体でもあるんですから」——……言いすぎたか？——

最後の一言に光秋は軽い後悔を覚え、それを誤魔化すつもりで最後の団子を食べる。

「そっか……ありがとう」

「……………」

伊部のお礼に、光秋は返事に困ってしまう。

と、

「……でもね……私、そんなにきれいじゃなにから……」

少し俯きながら、伊部はささやく様に言う。

「……？あの、それは……」

「……士官学校にいた頃、好きな人がいてね……」

「……ああ、なるほど——」「……そうなんですか——」その人となあ……——

伊部の言いたいことを察し、顔を見やりながら、

「そりゃあ、二尉なら人は来るよな……——」

と、光秋は心底納得する。

「……加藤くんの夢を、壊しちゃったかな？」

からかう様な、しかし僅かながらの申しわけなさを含む微笑を向けると、伊部はソフトクリームを頬張る。

「いいえ、気にせず。僕だって、そんなきれいな人間でもなければ、そこまで子供でもありませんよ」

右手の親指と人さし指で弄ぶ串を見ながら、光秋はそう返す。

「でも、そんなこと話しちゃっていいんですか？僕なんか」

「さっきから訊いたり教えてもらったりだから、少しはこつちのことも言わないと、フェアじゃないでしょう？」

「そうですか？」

「前に加藤くんがそうしたじゃない」

「？……ああ」

言われて光秋は、ESOに入る直前、伊部と昼食時にした身の上話を思い出す。

「だから、私も教えたの……ただ、誰にも話さないでよ」

「話しませんよ、こんなこと……ああそうそう。二尉も綾のことは……」

「話さないよ。少なくともフミたち以外にはね」

「お願いします」

言うとう光秋は、ベンチを立って左側のゴミ箱に串を捨てに行く。
戻ってきた光秋が座り直すと、

「……ところで、アヤちゃんは加藤くんのことなんて呼んだの？」
と、伊部がソフトクリームを舐めながら訊いてくる。

「初めの内は『光秋』と。ただ途中から、『アキ』と呼んでました」
『アキ』？……あだ名？」

「ええ。たぶん、『光秋』の『秋』の字からなんでしょうが」

「……アヤちゃんはあだ名で呼んでたか」

「？」

伊部は光秋が辛うじて聞き取れるくらいの声でささやく。

「……二尉？」

「……なら、私も今から『光秋くん』って呼ばせてよ」

「え？」

唐突な申し出に、光秋は面喰う。

「もちろん、今みたいなプライベートや、2人だけの時だけど」

「……構いませんが、唐突になぜ？」

「ん?……アヤちゃんに負けたくないから、かな?」

「!?……………」

「なーんてね!親睦を深めるためだよ。だから、光秋くんも私のこと、『二尉』って呼ぶのはやめて」

「——早速使ってる……—「いや、でもそれは……やっぱり仕事柄、上下関係は大事にしないと……」

「仕事の時はいいんだよ。私が言ってるのは私生活のこと」

「はあ……いやでも、やっぱり上官や先輩に向かってそんな口の利き方は……」
「会ってすぐの頃は、『伊部さん』って呼んでくれてたじゃない」

伊部は口を尖らせる。

「あの時は、まだESOに入る前でしたから……」

「それに、本人がいいって言うてるならいいじゃない」

「……まあ……」

「試しにここで、私のこと『二尉』を付けずに呼んでみて」

「はい……………伊部……さん?」

「やればできるじゃなの!」

言いながら、伊部は光秋に笑みを向ける。

— いいのか? …… まあ、本人がいいって言うんなら、いいか! —

そう思つて割り切ると、光秋も伊部に微笑みを返す。

ソフトクリームを食べ終わると、伊部はベンチを立つてコーンの包み紙を左のゴミ箱に捨て、それを見て光秋も立ち上がる。

「じゃあ、行きますか」

「うん」

言うと2人は並んで歩き出し、休憩用広場を出て左に進み、さらに左折して入つてきた道を戻る。

と、

「ひつたくりよお!」

「!」

女の叫び声に、光秋と伊部は背後を振り向き、手提げ鞆を左脇に抱えた黒い上着を羽織つた男が自分たちの方へ突進してくるのを見る。

「!」

「二尉!」

伊部が左肩のカバンを放つて男に向かつて駆け出し、一瞬遅れて光秋もそれを追う。

「女が! 退けえ!」

叫ぶと男は右手に持った小型のナイフを距離を詰めた伊部に突き出す。

――避けて――

という光秋の声は声にならず、ナイフの先端が伊部の身に迫る。

が、

「！」

「!?……………」

一瞬後に伊部は右に避けてナイフをかわし、直後に男の鼻に左突きを入れ、まともに喰らった男は後ろに崩れ落ちる。

「?……………」

あまりのことに、光秋は束の間何が起こったのか解らなくなる。

と、

「光秋くん！」

「あ！はい」

「警察に電話」

「はい」

伊部の指示で我に帰ると、ズボンの左ポケットから携帯電話を取り出し、言われた通り警察に通報すると、伊部が落としたカバンを拾って伊部の許に歩み寄る。

「……」

ナイフと鞆を取り上げられ、寺の関係者や経営スタッフらしき数人の男に囲まれ、座り込んで項垂れているひったくり犯と、何度も頭を下げながら礼を言う鞆の持ち主である女性、両腕を胸の前で組んで男に警戒の目を向ける左隣の伊部を見比べながら、光秋は、

「……すごいですね」

と、思わず感想を漏らす。

「三佐から指導を受けたのは自分だけだと思った？」

警戒の態度を維持しつつも、伊部は口元を微笑ませて応じる。

「なるほど……ああ、カバン」

「ありがと」

納得の声を呟くと、光秋はカバンを伊部に渡す。

直後に遠くからサイレンの音が響き始めたかと思うと、すぐにパトカー1台が砂利道の入り口前に着き、それから降りた若い男の警官3人がひったくり犯を囲む人々の許に駆け寄ってくる。

それを見るや、

「この人です！」

と、伊部はひたくり犯を指し示し、警官の1人が応じると、男の前に屈んで手錠を取り出す。

「……」

男は俯いたまま黙って両手を差し出し、手錠がはまる電子音が2回鳴ると、そのまま警官2人にパトカーの方へ連行される。

その間にもう1人の警官は、伊部や光秋、被害者の女性など、関係者から簡単に事情を訊き、少し遅れてパトカーに乗り込み、再びサイレンを響かせて去っていく。

「……なんか、気分悪くなっちゃったわね」

「まあ……」

パトカーを見送りながらの伊部の呟きに、光秋は曖昧な返事をする。

「あそこはやっぱり、僕が頑張るべきじゃなかったか？ なんか終始伊部さんの付き人みたいな立ち位置で……」

「……とりあえず、動いてお腹も空いたし、お昼にしよう」

「……あーはい」

少し遅れて伊部に応じると、光秋は後を追って金閣寺の敷地を出る。

伊部に連れられて坂の右側の歩道を下りて行き、坂の下側の土産屋、その2階にある軽食屋に入り、隅の方のテーブルにカバンを下ろして向かい合って座る。

「……私は、カレーにしようかな。光秋くんは？」

メニューを差し出ししながら訊いてくる伊部に、光秋はそれを受け取って目を通す。

「……じゃあ、チャーハンで」

「チャーハンね」

伊部が応じたちようどその時、私服の上にエプロンを掛けた女の店員が盆に載せた水を運んで来る。

「すみません。カレー一つと、チャーハン一つ」

店員が水を置き終わるや、伊部は光秋から取ったメニューを見ながら注文をする。

注文を聞いた店員が去っていくのを見ながら、光秋は先程のことを思い返す。

「……やつぱり、あそこでは僕が前に出るべきじゃなかったか？伊部さんが先に出た
とはいえ……これじゃあ、何のために藤原三佐の指導を受けてきたのか……あの時
と、何にも変わってないんじゃないか？……」

不良に絡まれた時と、家の前で黒服たちに囲まれた時、その時自分は何もできなかった悔しさを思い出す。

「……問題は、伊部さんを先に行かせちゃったことなんだよなあ……」
と、

「……光秋くん？」

「……あ！はい？」

伊部に話しかけられ、光秋は我に帰る。

「どうしたの？暗い顔でぼーっとして」

「いえ、なんでも」

「そう？……」

首を傾げながらも、伊部は話を続ける。

「そういうえば、アヤちゃんってテレパスでもあつたんだよね？」

「はい。もつとも、念力の方に気を取られてて、気付いたのはかなり後になってからです
が……レベルがわからないと言ったのは、そもそも測定する時間がなかったからです」

「気付いた時には、もう私に戻っちゃったのね？」

「ええ……」

応じつつ、光秋はニコイチのコクピットで、腕の中の綾が伊部に戻った時のことを思い出す。

と、店員が注文の品を運んできたので、2人は食事を始める。

右手に持ったスプーンでチャーハンを口に運びながら、光秋は綾が伊部に戻る前に
行った体験を思い出す。

——精神感应、ていうのか？綾は、僕に自分を見せてくれた。もしかしたら、いや、お

そらく綾も、僕のことを見たんだろう。もともとそのためをやったことでもある。この体験も整理し切れてないことの一つだが、留めておく価値のあることなのは確かだ……とりあえず、さっきのこととよくよくするのはもうようそう。過ぎたことだ。次気を付ければいい――

と、伊部がカレーを食べる手を止め、光秋を見る。

「光秋くん」

「はい？」

「無理に訊き出そうってわけじゃないけど、悩んでることがあったら、遠慮なんかしないで私に言いなさいよ」

「？……はい、ありがとうございます……？」

「そんな首傾げることじゃないでしょう。私と光秋くんは今や秘密を共有する、ある意味共犯関係なんだし」

「共犯って……」――他に言い方ないんですか？――

「それに、私にとつて光秋くんは、部下で、後輩で、同僚で、あと………」

「……弟分、ですか？」

言葉が詰まった伊部に、光秋は思いついたことを言ってみる。

「そう！弟分なんだから……だから、何かあったら私に言いなさい」

「……はい」

静かに応じると、伊部の気持ちに光秋は少し気分がよくなる。

食事を終え、カバンを提げてそれぞれ会計を済ませて店を出ると、バス停に向かいながら、伊部は光秋に訊く。

「今何時？」

「12時10分です」

光秋は左手の腕時計を見ながら応じる。

「お昼早かったからなあ………ねえ、せっかくだし、もう1か所どつか行かない？」
「もう1か所？」

伊部の提案に、光秋は訊き返す。

「嫌？それとも、この後用事ある？」

「いいえ、いいですよ。ところで、どこ行きます？」

「そうねえ………下鴨神社はどう？」

「しもがも神社？」——知らないな—

「知らない？」

「ええ。どこです？」

「光秋くんの寮のそばの、川の下流にあるんだけど……森があつて気持ちいいよ」

「じゃあ、そこで」――森?どんな場所なんだ?――

思いつつ、光秋は伊部を追って来た時と反対方向のバス停へ向かう。

バス停に着いた光秋と伊部は、しばらくしてやって来たバスに乗り込み、右後方の2人席に並んで座る。

しばらくバスに揺られ、光秋の寮の近くにある川を過ぎ、さらに進んで「下鴨神社前」というバス停で降りる。

「こつち」

先導する伊部に続いて、光秋は2車線道路脇の左の歩道を進んで行く。

と、

「……光秋くん、アヤちゃんと一緒にいた時、ずっとあの小屋にいたの?」

伊部が訊いてくる。

「いえ。ときどきこんなふうには、2人で町を散策することはありましたよ。教授の所に検査に行った時の寄り道だったり、それを目的に出て来たり」

「そう。じゃあその時、どこか名所に行ったりしたんだ」

「いえ、そういうんじゃないくて……僕が知ってる所を2人でぶらつくだけで、今日みたいな名所巡りはしませんでした」

「しなかったの?ただ歩いてただけ?」

伊部は意外そうな顔をする。

「歩いてただけというわけでは。食事したり、買い物したり……………ただ、僕としては何処に行くかつてよりも、綾と一緒にあちこち回れるってこと自体が楽しくて…………」

「……………そっか」

応じると、伊部はそれ以上言わずに歩を進め、光秋もそれに続く。

しばらく歩くと左に鬱蒼とした森が見え始め、少し進んで左に曲がると、森の間に伸びる幅の広い砂利道の前に着く。

舗装路から左に曲がってその砂利道に入ると、光秋は顔を上に向け、木々の葉で空が覆われているのを見る。

「……………涼しい？……………日が当たらないせいかな？——」

季節以上に涼しく感じる気温に、そんなことを思う。

「夏になればちょうどいいんだけど……………この時期はちよつとねえ……………夏になったらまた来る？」

「いいですね」

伊部の誘いに、光秋は気のある返事をする。

砂利道を右側に寄ってしばらく進み、小川に掛かる小さい橋を渡ると、朱色の柱が目立つ大きな門が正面に建つ広場に出る。

そのまま門に向かって歩き続ける伊部に、

「伊部さん。ちよつと」

と、光秋は声を掛け、

「入る前に、手え洗っておきましょうよ」

と、右側に建つ手洗所を見ながら言う。

「そうだね。作法だし」

伊部も同意すると、2人は手洗所に歩み寄り、置いてある杓子に水を入れ、それを両手に流す。

光秋が杓子の水を左手に移し、それで口を漱いでいると、

「口も？」

伊部が意外そうな様子で問う。

「……確か、口も漱がなくちゃいけないって」

口の中の水を出した光秋が答え、伊部もそれに倣って口を漱ぐ。杓子を戻し、ハンカチで手を拭きながら門をくぐる。

入ってすぐ正面にある舞台を眺めつつ右に迂回し、もう1つ門をくぐって拝殿に入ると、光秋は十二支の字が書かれた暖簾を掛けた小さな社が左右端と中央に並んでいるのを見る。

—なんだ？—

「自分の干支の所にお参りするの」

首を傾げているところに伊部が教えてくると、光秋は「未」と書かれた暖簾が掛かっている社の賽銭箱に十円玉を入れ、拍手を2回打って手を合わせ、軽く頭を下げる。

伊部も別の社で同じことを済ませると、2人並んで中央に並ぶ社の後ろにある本神社の拝殿にお参りする。

光秋は賽銭箱に十円玉を入れ、拍手を打って頭を下げると、左隣で同じことをしている伊部がそれを解くのに合わせて参りの姿勢を解く。

振り返って門に向かいながら、伊部は光秋に訊いてくる。

「なにお願ひした？」

「なにも。僕、ああいうのにあんまり頼らない奴なんで」

「そう……」

光秋の返事に、伊部は少しつまらなそうな顔をする。

「お参りは、その神様への挨拶って考えがありますから……そう言う伊部さんは？」

「私はね——」

「あ、やっぱりいいです」

「なんでよ！」

言葉を遮られて、伊部は不満そうな顔をする。

「こういうのって、他人ひとに言うとお効果がなくなるって聞いたことがあるんで……だから、言わない方がいいです」

「そうなの？」

光秋の説明を聞きながら、2人は門をくぐる。

光秋が真っ直ぐもう1つの門に向かおうとすると、

「こつち」

「?……」

伊部が右に曲がり、光秋もなぜかと思いつつその後が続く。

真っ直ぐ歩いて鳥居をくぐり、さらに歩いて神社の敷地から出、路地を通って2車線の道路に出ると、

「……………」

光秋は左側に先程降りたバス停を見つける。

「こつちから来た方が近かったんじゃないや?……」

「そうなんだけど……せつかくだし、森林浴にもなったでしょう?」

「まあ……ま、面白かったしな」

伊部に説明に、光秋は納得を返す。

「ところで、今何時？」

「……2時です」

伊部の質問に、光秋は左手首の腕時計を見ながら応じる。

「2時か………せつかくついでに、ちよつと京都駅行つてみない？」

「かまいませんよ」

光秋が応じると、2人は最寄りのバス停に寄つてバスを待つ。

しばらくして、2人は来たバスに乗り込み、最後尾の長椅子の右側に並んで座る。

通路側に座る光秋がやや混んでいる車内を見ていると、

「………そういえば」

と、窓側に座る伊部が話し掛けてくる。

「はい？」

「京都駅テロ事件の時、光秋くん怒ったけど、あれもアヤちゃん絡み？」

「………はい」

言いながら、光秋は初の予知出勤で向かった京都駅でNPに叫んだこと、そうする原因となった綾との京都駅での記憶を思い出す。

「やっぱり、デジャブじゃなかったか……」

—そんなふうに返したなあ………—

伊部の漏らした眩きに、光秋は事件後の会話を思い出す。

京都駅の正面側に着くと、2人は特に目的があるわけでもなく、辺りを散策する。駅周囲のビル街を巡ってみたり、光秋の希望で書店に入ってみたり、駅の中をふらついたり、構内の商店を見て回ったりしていると、

「……………」

光秋は、夏は綾と腰掛け、先月にはニコイチ越しに怒声を響かせた柵の近くに来ていることに気付く。

「……………」

左隣を歩く伊部を意識しながらも、光秋は誘われる様に構外に出、柵のそばに歩み寄ってしまう。

「……………」

左前にある柵をしばらく見つめていると、

「……………疲れたし、ちよつと座らない？」

「……………そうしますか」

伊部の誘いに応じると、2人並んで柵に腰を下ろす。

正面の路上には所々色違いの箇所があり、

—ニコイチが下りた時のヒビを舗装したのか…………—

そう光秋は解釈する。

「……………アヤちゃんとも、こうして？」

「……………ええ」

左隣に座る伊部に、光秋は遠くを見る目で応じる。

「……………服を買いに来たんですよ。ここの服屋に。その時は、タツカー中尉と竹田二尉と、上杉さんと、横尾中尉が一緒でした……………」

「そう……………」

「……………服買った後、さつきみたいにその辺散策して、で、2人でここで休んだんです……………夏だから、熱かったなあ……………」

眩きながら光秋は、綾が柵に手を触れて熱がったことを思い出す。

「そう……………大事な、思い出の場所、か……………」

「ええ……………」

「……………だから、ああもなるか……………」

——……………事件の時のことを、思い出してるのか？——

視線を上に向ける伊部に、光秋は路上の色違い部分を見ながらそう思う。

「……………前に、三佐に格闘戦の指導を頼んだ時、夏の出来事がきっかけだって話したよね？」

……………その出来事って、アヤちゃんのこと？」

「……ええ」

伊部の質問に、光秋は静かに返す。

「……どんなことだったの？」

訊いていいのか迷っている様子の伊部に、光秋は2つの記憶を思い出しながら答える。

「……こうして京都駅の周辺を散策して何日か後、戸松教授の所に定期検査に行つて、その帰りに、喫茶店の外の前席でお茶してたんです。そしたら、柄の悪い人たちに絡まれて、その時僕は、大したことができなくて……」

「……そう」

「もう一つ。綾が伊部さんに戻る少し前、タクシー中尉たちと出掛ける予定があつて、家の前で待つてたんです。そうしたら、今度はタカ派の陸軍の部隊に取り囲まれて、中尉たちが来てくれなかったら、もう少しで綾を盗られるところでした」

「そんなことが？」

「ええ……言い訳をすれば、どちらも僕にとつて不利な状況だったんですよ。一方は戦鬪のプロで、ざっと20人はいて、おまけに全員拳銃持つてましたし。もう一方も5人いて、内1人はサイコキノでしたし……」

「それは……確かに不利ね……」

「……で、綾とのことを実のあるものにしたいと考えた時、もっと生身での能力を高めるべきだと思ったんです」

「なるほどね……ところで、その時アヤちゃんは どうして たの？ 陸軍の方は E ジャマーがあつた だろうから、結局 不利な ままだ だろうけど、一応 高レベルのサイコキノ なんだし、不良くらい どうかで きたんじや？」

「不良の時は、僕が止めたんです。そういうふう に力を使うのは、ダメ だろう っ て 思 っ て たから。もつともその後、怒つた相手を僕が空手で迎えてしまつたんで、説得力がなくなつてしまいました が……」

「それは、アヤちゃんを守るために やつ た ン だ から、正当防衛 でしょう。光秋くんは間違つてないよー」

「ありがとうございます。それも そう ン だ ン ですけど……陸軍の時は、綾 気絶 して て」

「気絶？」

「テレパスでもある っ て 言 い ま し た よ ね。それを 確 か め て み よ う っ て こ と に な っ て、僕を相手に、精神感応、てい う ン ですか？それを や っ て み た ン だ す け ど、その時、氣を失つちやつて……」

「精神感応……慣れなかつたり、深く 繋 が り す ぎ る と、そういう こ と も あ る っ て 聞 い た こ と は あ る け ど……何したの？」

「僕は、超能力に関しては全くなくて、専門的なことは解りませんが……感じたままを言うなら、お互いを見た、としか……」

『お互いを見た？』

「テレパシーを試みてすぐ、でもないかな？時間の感覚が飛んでた気がするんで……とにかく、確かすぐに、綾の視点から見た、というか、感じたときか思えない感覚が、僕の中に流れ込んできたんです。それで、これは綾の生まれてから今日までの記憶なんじゃないかって」

「……記憶が、流れ込んできた……？」

「記憶だけじゃなくて、その時感じたこと、感想とか、感情なんかも感じた気がします。で、僕が綾を感じたんなら、綾も僕を感じたんじゃないか。で。だからお互いを見た……感じたって。気を失ってたのは、それが原因じゃないか？って……」

「……………」

一連の説明に、伊部は難しい顔をしながら首を捻る。

「……すみません、僕の説明が下手で」

「そういうことじゃないんだけど……んーん……」

「……なんだかんだ言って、主観的なことですからね……完全に伝えるっていうのは、難しいから……………」

眩く様に言うと、光秋は再び遠くを見る目を正面に向ける。
しばらくして、

「……そういえば、今何時？」

「もうすぐ5時ですね」

伊部の問いに、光秋は左手首の腕時計を見ながら応じる。

「5時か……どっか食べに行く？」

「そうですね……昼が早かったし」

光秋は腹の空き具合を窺いながら返す。

「どこかにいい所ありますか？」

「バス降りた方の地下に、レストラン街があるけど」

「じゃあ、そこで」

「なに食べるかは、見て決めればいいか」

「ええ」

応じると光秋は柵から立ち上がり、駅の正面側へ歩き出し、伊部もそれに続く。

駅構内を通って正面側に出、地下に下りた光秋と伊部は、しばらくレストラン街を見て回ると、結局パスタ屋に入って向かい合って座り、それぞれ注文をする。

注文の品が来るのを待っていると、

「……でも、ちよつと羨ましい」

伊部がコップの水を飲みながら呟く様に言う。

「なにがです？」

「光秋くんとアヤちゃんの関係がどうだったにしろ、好きではあつたんでしょう？」

「……ええ、まあ……」

「光秋くん曰くの、『お互いを感じた』って。好きな人とそんなに深く繋がれるなんてね……」

「……まあ……」

伊部の言葉に、光秋は返事に困る。

直後に注文の品が運ばれ、2人は食事を始める。

右手に持ったフォークにミートソースを巻き付けながら、光秋はカルボナーラを口に運ぶ伊部に目をやる。

「……『深く繋がる』……どうだろうか？ 感じたのは確かだ。でも、本当はもつと多くのことが入って来たんじゃないのか？ 特に印象的な部分だけが記憶に残ったんじゃないのか？……それに……」

光秋は、昨日神モドキと会った時の綾を思い出す。

「『アキが可哀そう！』……いや、そうじゃないよ綾。僕は寧ろ、今の状況を望

んでいた。可哀そうなんかじゃない……………互いを感じ合えても、尚も考えに齟齬が生まれる……………人間って、そんな便利でもなければ、利口でもないからな……………僕は特に……………

食事を終えると、光秋と伊部は地上に上がる。日はだいぶ傾いており、空は暗くなっている。

「……………今日は、この辺にしますか？」

「そうね……………明日からまた仕事だし、そろそろ帰って休んだ方がいいかも」

空を見ながら言う光秋に伊部が応じると、2人は最寄りの地下通路の階段を下り、それぞれ駅までの切符を買って地下鉄のホームに下りる。

電車を待つている間、光秋は左隣の伊部を見やりながら声を掛ける。

「伊部さん」

「なに？」

「さつき、僕のことを羨ましいって言ってましたけど、そうでもないかもしれません」
「……………どういふこと？」

「深く繋がり合えても、やっぱり別の人間である以上、相手のことを完全に解るのは無理かもしれないってことです。現に昨日、そういう齟齬の場面に遭って……………」

「そうなの？」

「ええ……………それに、繋がったのは綾の力によるのであって、僕はなんにもしてません」
——結局、無取り柄か……………——

と、光秋は不意に思い付いたことを言う。

「そういえば、綾の記憶がときどき出てくるようなこと言っていましたよね？」

「え？ うん。記憶っていうか、それこそ既視感みたいなものだけど？」

「案外伊部さんの方が、綾と繋がってるんじゃないですか？ 体は共有してたんだし。自分の中に強く意識を向けたら、案外話し掛けてきたりして」

「ええ？……………」

光秋の半分は思い付きに、伊部は微笑を浮かべながらも試しとばかりに両目を固く閉じ、呼吸を落ち着かせてみる。

「……………」

それを光秋は期待半分、面白半分で見ろ。

「……………ダメだね。自分の中からはなんにも聞こえてこない」

「そうですか……………」——そりゃあ、そう上手くいかないよな……………」

目を開けて首を振って言う伊部に、光秋は静かにそう返す。

と、ホームに電車が入ってきて、開いたドアから2人はそれに乗り込む。時間上帰宅ラッシュなのか、車内はかなり混んでおり、2人は並んでドアの近くの吊革を掴む。

しばらくして、電車は伊部が降りる駅に着く。

「いろいろあったけど、今日は楽しかった。また明日ね」

「はい。また明日……」

何人かに混じって下車する伊部に光秋がそう返すと、ドアが閉まり、電車は再び走り出す。

少しして次の駅に着くと、光秋は人波に混ざって下車し、改札を通過して地上に出、真っ直ぐ寮へ向かう。日は完全に落ち、空はすっかり暗くなっている。

自室に着いた光秋は、荷物の整理や入浴等を済ませ、青い寝巻に着替えると、椅子に座って長考に入る。

——……確かに、今日は楽しかった。が、自分の無能さを改めて自覚させられた日でもあるなあ……格闘技は未熟、ニコイチはあくまで他力、相手のことをわかり切れる力もない、ないない尽くしだ……それが僕だというのならそうだが、このままじゃ僕の肩身が狭い。なにか他人に誇れるものはないだろうか？……いや、やめておこう。格闘技は練習を続けられれば上達してくる。やがては取り柄にもなるだろう。それより今何時だ？……—

思いつつ、机の上の時計を見る。

—8時50分かあ……明日早いし、今日はさんざん騒いだし……寝るか—

思うと光秋は、用を足しに椅子から立ち上がる。

10月5日火曜日午前8時。

ESOの緑服一式を着、右肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋は、いつも通りに京都支部に出勤する。

—この間まで忙しくて、それで2日休みだから、リズム狂うな……—
などと考えながら、支部の正門をくぐろうとすると、

「光秋くーん！」

「！」

左から呼び掛けられて顔を向けると、制服姿の伊部と小田一尉が近づいてくるのを見る。

「おはようございます」

「おはよう」

伊部と小田が同時に返すと、3人は小田を中心に横に並んで本舎へ向かう。

小田の右隣を歩きながら、光秋は、

—さて、今日も訓練頑張るか！—

と、気持ちを切り替える。

はじめての夜警編

37 闇夜の訪問者

10月6日水曜日正午。

午前中の格闘戦訓練を終えた光秋は、藤原三佐と共に本舎内の食堂へ向かう。

空腹を覚えつつ焼き肉定食を注文すると、同じ物を大盛りで頼んだ藤原と一緒にトレーを持ち、人混みの中から空いている席を捜す。

「……三佐、あそこ空いています」

「うむ」

光秋が小田一尉と伊部が向かい合って座っているテーブルを見つけ、藤原が応じると、2人はそのテーブルに向かい、それに気付いた小田が声を掛ける。

「三佐、加藤。先頂いてます」

「うむ」

応じながら藤原は小田の左隣に座り、光秋も小田たちに一礼しつつ伊部の右隣に座る。

「竹田は？」

「上杉と外に行きました」

箸を持った藤原の問いに、小田は骨を抜いた秋刀魚の塩焼きをつまみながら答える。

「……」

伊部も小田と同じく焼き魚定食を食べているのを見た光秋は、手を合わせて自分も食事始める。

しばらくして、

「……そういえば、ふと思ったんだが」

「なんです？」

小田の呟きに、伊部が応じる。

「ん。加藤は、いわゆる異世界人なんだよな？」

「……はい……？」

小田の唐突な質問に、光秋は首を傾げながら答える。

「ニコイチは神モドキっていう、加藤とはまた違う世界の奴が造った物で、この間演習の時に現れた黒い奴も、また違う世界の奴が造った物……んーん……」

「……どうしました？」

言ってから顔をしかめて首を傾げる小田を見て、光秋が訊く。

「いや、異世界とかパラレルワールドとか、映画や漫画なんかでよく聞くけど、俺はいま

いちよく解らなくてな……この世界とは違う世界?……」

「……………僕なりの解釈でよければ、説明しますか?」

「頼む」

光秋の少し考えてからの提案に、小田はすぐに応じる。

「言っておきますが、あくまでも僕なりの解釈であつて、これが正しいって保障はありませんよ」

言いながら、光秋は空になっている自分の茶碗とお碗を4人の中心に置く。

「とりあえず、このご飯茶碗をこの世界、いや、宇宙として、お碗を僕がもとめた宇宙とします。それぞれの宇宙は、別々に分かれて存在しているため、例えば僕のいた宇宙で何が起こつても」

言いながらお碗の中で箸をデタラメに動かし、

「この宇宙には何ら影響はありません」

茶碗の中に箸で円を描く。

「つまり2つの宇宙は、完全に独立して存在しているんです。ただ」

と、2つの碗の間の上に箸を置く。

「神モドキさんは、こんなふうに2つの宇宙に橋渡しをして、一時的に繋げることができるとでしょう。僕がこつちに来る前に見た白い空間が、この箸ということですよ」

「……なるほどな」

応じながらも小田は、いま一つ解り切れていない顔をする。

「で、その別の宇宙ってのはどうやってできるんだ？」

小田の問いに、光秋は3人の空いている腕を取って自分の手元に重ね置きする。

『ビックバン』という言葉をご存じですか？」

「宇宙誕生の際に起る、一種の爆発のことだろう？」

藤原が答える。

「ええ。つまり……」

光秋は3人から取った腕を3つ、最初の2つの腕の周りに適当に置いていく。

「こんなふうに、ビックバンがいくつか別々に起って、出所が違う宇宙が複数生まれたというのが一つ。もう一つは……」

そこで2つ重なった腕を中央に出し、

「ビックバンとは、宇宙の膨張のことですから、時間が経つにつれてどんどん広がってきます」

言いながら上の腕をゆっくりと持ち上げていく。

「その過程で、広がりにはムラができていって、最終的に分裂してしまう」

と、持っていた腕を手前側に置く。

「結果、2つの別々の宇宙ができてしまう、ということですから……あとまあ、ある時点で、『あの時こうしていたら』って考えることがありますけど、実は『こうしていたら』っていう自分が他の世界にいて、ここにいる自分とは違う人生を歩んでいるっていう考えもあります……ここまで来るとややこしくなるんで、これ以上は触れません」

「……………」

一連の説明に、3人は無言を返事にする。

「……最初に言いましたが、この考えが正しいという保証はありません。ひよつとしたら全然的な外れなことを言ってるのかもしれないし、その場合は僕の空想ということになってしまいます……もつとも、『確かなことなどない』というのが、僕の考えの軸の様なものですが……現にこんな体験をするまで、そもそも異世界の存在そのものも空想の産物と思っていて、それが覆ってしまつて……すみません、僕の説明が下手で……」

補足を言っていて虚しくなった光秋は、思わず言ってしまう。

「いや、そういうわけじゃないんだが……」

「話が私たちには、壮大すぎるっていうか……」

小田と伊部がぎこちなく応じる。

「儂はそうでもないがな」

「さすが三佐」

藤原の言葉に、小田は少々敬意を込めて応じる。

10月13日水曜日午前10時。本舎裏のグラウンド。

組手の構えをとった光秋は、藤原が持つバックに何回も突きを入れていく。

と、

「二曹！」

「！」

大河原主任の声に2人は訓練を中断し、光秋は左の本舎の方を見る。

「訓練中すまないが、ちよつと時間あるか？」

言いながら、灰色のツナギ姿の大河原は2人の方に歩み寄り、光秋は藤原を見る。

「三佐、すみませんがちよつと」

「かまわん。行つてこい」

藤原に一礼を返すと、光秋も大河原の許に歩み寄る。

「なにか？」

「突然ですまんが、ちよつとニコイチを出してくれないか？」

「？……わかりました」

言うとき光秋は上着の内ポケットからカプセルを出し、右側の空間に左膝を着いたニコイチを出現させる。

「よし。俺をコクピットに上げてくれ。用はそこにあるんだ」
「わかりました」

大河原に応じると、光秋はリフトでコクピットに上がって認証を済ませ、右手に大河原を乗せてハッチに上げる。

手からコクピットに移ると、大河原はポケットからUSBメモリーを出し、光秋に差し出す。

「これは？」

「この間の演習に乱入してきた未確認機のデータだ。ニコイチのコンピューターにも入れておいてくれ」

—あの黒い奴か……—「了解」

応じると、光秋はそれを中央パネルの左側面上部にある差し込み口に差し、画面を何度か触って中身を読み込ませる。

—『UKD-02』、ニコイチと同じ型番……『未確認人形その二』か……当然か—
読み込んだ情報を確認しながら、敵対した機体にニコイチと同じ型番がふられていることに複雑な思いを抱く。

パネルからUSBを抜き取り、それを大河原に返そうと周りを見回すと、

「……主任、何してるんです？」

操縦席の左側に屈んで巻尺を椅子のあちこちに当てている大河原を見る。

「ん？ああ、昨日伊部二尉に頼まれてな。この辺に補助席を作って欲しいと。その採寸だよ」

「補助席？」

「ああ。立ちっぱなしだと疲れる上に、激しい動きをした時危険だというんでな。ただ俺の方も、演習時のニコイチやゴーレム・タンクのデータの整理とか、いろいろあつて忙しいから、いつできるかわからんとは言つてあるがな。今日のこれやデータ渡しだつて、やつと時間ができてしてるようなもんだからな」

「そうですか……」——ああ。だから演習休みの後からゴレタンがなくなつてゐるんだ——

大河原の話を聞いて、光秋はニコイチの頭部を挟んだ後ろを意識し、そこにあつたゴレタンが粗末な印象を与える小屋ごとなくなつてゐることに納得する。

——三佐に訊いても、主任が持つていったらしいこと以外解らなかつたが、なるほど、データ取りか……—

そんなことを思っていると、

「……よし、こんなものだろう。ご苦労さん。下ろしてくれ」

「はい」

採寸を終えて巻尺をツナギに仕舞う大河原に応じると、光秋はUSBを返して大河原

が乗った右手をゆっくりと地面に下ろす。

大河原が手から降りると、光秋もリフトで地上に降り、ニコイチをカプセルに収容してそれを内ポケットに戻す。

「時間を取ってすまない。とりあえず、補助席の件は楽しみにしていてくれ」
「はい」

本舎の方へ立ち去る大河原に一礼しつつ応じると、光秋は振り返って藤原の許に向かい、訓練を再開する。

10月18日月曜日午前9時半。

午前中の訓練は遅れると藤原に連絡した光秋は、目の定期検査のために医療棟の上杉の診察室を訪れる。

「よし、眼圧は正常。なにか気になることは？」

「ありません」

カルテに書き込みをしながら訊く白衣姿の上杉に、制服の光秋はそう返す。

「薬はいつも通り？」

「はい。3種類1本ずつで」

「了解。じゃあ下で、会計と薬もらって。お大事に」

「ありがとうございました」

一礼すると、光秋は足元の灰色のカバンを左肩に提げ、上に置いていた制帽を被つて丸椅子を立ち、出口へ向かう。

と、携帯電話の着信音楽が鳴り響き、上杉が白衣からそれを出してすぐに電話に出る。

—知らない曲だな……？—

聴き覚えのない曲に、光秋はそんなことを思う。

「ハイハイ……いやあ、今日は忙しくて無理だわ。その代わり、明日早めに帰れるようにするからさ……」

——……彼女からか？——

嬉しそうに電話をする上杉に、光秋はそう思いながら部屋を出る。

10月22日金曜日午後6時。

訓練を終えた光秋は、藤原と並んで本舎へ食事に向かう。

と、左前に行く藤原が、

「……そうだ、また忘れるところだった」

と、何かを思い出した声を上げる。

「加藤、来週ウチの隊が夜警の当番だから、着替え等忘れんようにな」

「わかりました……」——夜警？……ああ。ここの見回りか——

応じつつ、光秋はこちらに來た最初の日に、藤原たちがそれを行っていたことを思い

出す。

10月29日金曜日午後6時。

訓練を終えた光秋は、藤原と共に食堂へ向かい、先に来ていた小田、竹田、伊部、上杉と一緒に夕食を摂る。

「あーあー、また夜警当番だよー」

光秋の左前に座る竹田が、朝から何度も言っている愚痴を溢す。

「しょうがないだろう、必要なことなんだから。寧ろ翌日休める分、半年前よりいいだろう?」

「そーっすけど……」

右隣に座る小田の指摘に、竹田は面倒そうな顔で応じる。

と、

「……あ。すみません」

携帯電話の着信音楽が鳴り出し、小田の前に座る白衣姿の上杉がすぐにそれに出る。
——違う曲?——

先日診察室で聴いたのと違う音楽に、光秋は違和感を覚える。

「はい?……わかつてるって!もう少ししたら帰るから……うん……うん……わかつてるって!オレも愛してるよ!じゃ」

——彼女……か？——

嬉しそうに話す上杉の様子や電話の内容から、光秋は違和感を増しつつそう推測する。

と、また違う着信音楽が鳴り出し、上杉はすぐに出る。

「はい？……いやあ悪い、今日は遅くなりそうなんだよ。その代わり、明後日の予定はばっちりだから！……オレも寂しいよお……うん、じゃあ。愛してるよ！」

——さつきと言っていることが……—

味噌汁をすすりつつ、光秋の上杉に対する違和感は増加する。

と、また着信音楽が、今度は診察室で光秋が聴いた曲が鳴り出し、上杉はすぐに出る。

「はい？……いやあ、今日は遅くなりそうでさ……え？いいよお！」

上杉の顔に明らかな焦りが浮かぶ。

「食事はこつちで済ませるからさ……うん、いいよ。それより、来週楽しみにしてっから……うん。じゃあ。愛してるよ！」

そう言つて電話を切り、白衣にそれを仕舞うと、上杉は溜め息を溢す。

「ふーう……」

「……上杉君、ひよつとしてまた？」

光秋の左隣に座る伊部が、表情を曇らせながら知っている様子で問う。

「……」

「……」

小田と、光秋の前に座る藤原も、同じ様な顔をする。

「ええ。家に来るって言われた時は焦りましたよ」

「……まさか……浮気ってやつか？」

上杉の返事から、光秋はさっきの電話がどういふことなのか察する。

「たく。今度は何人だ？」

「3人です」

「三又!？」

竹田の質問に対する上杉の回答に、光秋は思わず声を出す。

「そんなに驚くなよ。今回はましな方だぜ。あそつか、お前はあのこと知らないんだっけ？」

「なんです？」

竹田の言葉に、光秋は訊き返す。

「ありやあお前に会う少し前、2月だったな。さっきみたいに女捌いててよ、アパートに帰ったらその時つき合ってた女5人全員と玄関で鉢合わせだよ」

「二尉！」

「それは……」

上杉は眉間に皺を寄せ、光秋は背筋に寒気を覚える。

「でだ、こいつは上手く逃げただけど、アパートには女たちが張り込んで行き場がない。んで、オレの寮に泣きながら転がり込んで来て、心優しいオレはほとぼりが冷めるまで温かく迎え入れてやった、というわけだ」

「一部誇張してますけどね。オレ泣いてないし、二耐いかにもウザったそうにしてたでしよー!」

上杉が補足する。

「そうだっけ? まあとにかく、今回は頼みの綱のオレも夜警でいないからな。せいぜい気を付けろ」

「ご心配なく。現に今調整したところですし」

竹田のからかい顔に、上杉はムツとして応じる。

そんな2人を見つつ、光秋はどうしても思ってしまう。

「そもそも浮気しなけりや、そんなことにもならないんじゃないのか?—

食事を終えると、上杉は早々に帰宅し、小田たちも荷物を持って寄宿舎へ向かう。藤原と光秋も本舎地下の待機室へ荷物を取りに行ってから向かい、藤原隊一同は寄宿舎2階の1号室に集合する。

——ここ使うのも、3月以来だなあ……—

六畳一間の部屋で制靴を脱ぎながら、光秋は少し懐かしさを覚える。

部屋に上がると、カーテンが閉まっている窓を背にした藤原を中心に、一同は円形に向かい合う形で腰を下ろす。光秋は藤原の右前に正座する。

藤原が話し出す。

「さて、今回は初めての加藤もいるので、確認を兼ねて説明しておく。夜警を行うのは、10時、1時、4時の3回。各自が担当の施設を回る。異常を発見したら、すぐに知らせるように」

言いながら、藤原は各々に部屋に置いてあった懐中電灯と小型の通信機を渡す。

「配置は……どうするかな？」

「加藤は医療棟に回した方が。あそこは一番無難ですし、実地訓練ということで」

「ウム。その方がいいか。それでいいか？」

光秋と藤原の間に座る小田の提案に、藤原は光秋を見ながら確認する。

「はい」

「ウム。小田は本舎でいいな？」

「はい」

「よし。後は……」

言いながら、藤原は自分の左側に座る竹田と伊部に顔を向ける。
と、

「加藤」

「？」

小田に呼び掛けられた光秋は、その方に身を寄せる。

「今の内に、これの使い方教えておく。お前初めてだろう？」

「—いいえば……—」「はい。お願いします」

通信機を示しながら言う小田にハツとしつつ応じ、その使い方を教えてもらう。

光秋が通信機の使い方を一通り覚えるのと同じ頃に、竹田と伊部、藤原の配置も決まる。

「よし。後は部屋割だな。伊部は1人3号室でいいとして……」

「俺は加藤と一緒に、2号室で」

右隣の伊部を見ながら言う藤原に、小田は素早く応じ、その理由を光秋はすぐに察する。

「……軒か—」

「そうか。じゃあ、俺は竹田とここで」

「ウツス」

藤原の確認に、光秋の右隣に胡坐をかく竹田は短く応じる。

「ウム。では、各自10時まで待機。今の内に仮眠でもとっておけ」

「「了解」」

一斉に応じると、光秋はカバンを持って小田と伊部と共に1号室を出る。

「ああ一尉、僕ちよつとシャワー浴びてきます。一尉は？」

「俺は飯の前に行ったから、先寝てる」

「私も行く」

光秋の言葉に小田と伊部はそれぞれ答えると、小田は2号室へ、伊部は光秋と一緒に下へ向かう。

「僕、歯あ磨いてから行きますんで」

「そう。お先に」

伊部にそう言って別れると、光秋は共同水盤で歯磨きをしてからシャワー室へ向かう。

脱衣所に入ると、左側の棚に制服が入っている籠を2つ見つける。

—1つは服の大きさからいって三佐か。もう1つは……？—

思いつつ、光秋も服を脱いで籠に入れ、棚の左脇に重ね置きされているバスタオルを1枚取ってシャワー室に向かう。

——ここも久しぶりだなあ……—

と、こちら側に来た日に思いを馳せながら入ると、

「ん？加藤、遅かったな？」

バスタオルを腰に捲いて部屋の中央のベンチに座る藤原と、その右隣に同様の姿で座る竹田を見る。

「お二人もシャワーですか？」

「ああ。濃も汗かいたからな」

「オレはいいって言ったけど、三佐が『臭いから入れ』って」

左手前の個室に移動しながらの光秋の問いに、藤原と竹田はそれぞれ応じる。

「そういえば、上では訊かんかったが、今日のことでなにか質問はあるか？」

「……」

藤原の質問に、光秋は個室のドアの前で足を止めて2人の方を見る。

「……………いえ、特には……………ただ、やっぱり場所が場所だけに、拳銃はいるんですよね……………」

光秋は待機室にカバンを取りに行った際、藤原の指示で拳銃と弾倉、それを収めるガンベルトをカバンに入れて持って来たこと、藤原も同じことをしたことを思い出しながら言う。

「それはな。いざという時にすぐ対処するための夜警だからな」

「ま、心配すんなって。三佐はこう言ってるけど、全部の施設にEジャマーは24時間効いてんだし、防犯設備だつてかなりあるし。さーつと見て、寝れる時間少しでも確保できるようにすりゃいいんだよ」

「お前はもう少し気を引き締めろー!」

竹田の助言とも軽口ともとれる言葉に、藤原は眉を寄せる。

「……わかりました。気は引き締めますが、死なない程度に頑張ります」

2人にそう返すと、光秋は個室に入つてタオルを掛け、シャワーを頭から浴びる。

— やつてやるだけ、か…………… —

しばらくして、バスタオルで体を拭きながらシャワー室を出た光秋は、脱衣所で藤原と竹田の服がなくなっているのを見て、2人が部屋に戻つたと解する。

体をよく拭いて下着を変え、ワイシャツとズボンと靴下を着て部屋のドライヤーで髪を乾かし、上着を羽織つてカバンを左肩に提げて脱衣所を出る。

と、

「あ、光秋くんも今出たところ?」

ほぼ同時に外に出てきた制服を羽織つた伊部と鉢合わせる。

「あー、はい……」

生返事をしつつも、普段束ねている髪が広がっている伊部に、光秋は綾の姿をどうしても思い起こしてしまい、気まずさを感じてやや速足で2階へ向かってしまう。

「?……」

伊部は首を傾げつつもそれに続く。

「どうしたの?」

「いえ……伊部さんて、風呂上がりの時は髪ほどいてるんですね……」

左隣に着いた伊部に、光秋はとりあえず思ったことを言う。

と、

「……シャンプー……石鹸か?」

体臭とも違う伊部から発する独特の匂いが鼻をくすぐる。

「それはね。お風呂入ってる時とか、寝る時はゴム外すね」

「ですよね……」

伊部の返事に曖昧に返しながら、光秋は階段を上って2号室の前で止まる。

「では、また後で」

「うん」

3号室の前に立つ伊部の返事を聞くと、光秋は部屋に入ってドアの鍵を閉める。

豆電球の心許ない明るさの中、カバンと上着を置き、すでに寝ている小田に注意しつ

つ、押し入れから布団一式を出してその左隣に敷き、携帯電話のアラームを9時50分に合わせ、メガネを取って光秋も仮眠に入る。

「……………」

左耳元のアラーム音を聞いた光秋は、虚ろだった意識を一気に覚醒させてアラーム音を切り、すぐに上体を起こして左枕元に置いてあるメガネを掛ける。

「んーん……………」

「おはようございます」

唸りながら起きた小田に挨拶しつつ、立ち上がって電灯を点ける。

「……………」

「……………おはよう」

その光で若干目が沁み、小田も目を細めながら応じる。

光秋はカバンの上の上着を着ると必要な備品をポケットに入れ、あるいは身に付け、腰に巻いたガンベルトを調整する。拳銃に弾倉を込めてホルスターに仕舞うと、先程身に付けた備品とカプセルを持っていることを確認し、小田に顔を向ける。

「ちよつと下で顔洗ってきます」

「俺も行く。目え覚まさないとな」

そう返すと小田もカバンから備品を出して身に付け、光秋が部屋の灯りを切って小田

がドアに鍵を掛け、2人は共同水盤へ向かう。

光秋が制帽を左脇に挟んで口を漱ぎ顔を洗う横で、小田も顔を洗う。

ハンカチで顔を拭きながら外に出ると、2人は藤原たち3人が2階から下りてくるのに気付き、その許に歩み寄る。

「ウム。みんな揃ったな」

藤原の確認を聞きつつ、光秋は左前に立つ伊部の髪が後ろに一本に結つてあるのを見る。

「やっぱり伊部さんでいる時は、この方が落ち着く――」

「では、10時の夜警を始める。皆気を付けてな。異常を発見したらすぐに知らせるよ
うに」

「「はい」「ふぁーい……」」

藤原の号令に4人が応じる中、竹田は寝むような顔で欠伸混じりに応じる。

「いい加減起きろ!」

「ぐっ!」

その左隣に立っている小田が頭に右手刀を叩き込み、竹田はようやく目が覚める
解散して医療棟へ向かった光秋は、1階で唯一まともな灯りが点いている救急用口か
ら中に入り、右側の受付に座る女看護師にガラス越しに会釈する。

「夜警の方？」

「はい」

「そう……今日入院患者はいませんし、当直の先生も1階の仮眠室で寝てますので、私とあなたと先生以外誰もいませんから」

「わかりました……」——眠いのかな？——

看護師のどこか無愛想な態度を違うと思いつつもそう解釈すると、光秋は一礼して歩き出す。

上着のポケットから懐中電灯を出して灯りを点け、廊下を巡回する。

——夜のこういふとこつて、やっぱちよつと怖いな……——

灯りに照らされた中途半端な視界にそんなことを思い、若干の恐怖も自覚しながら、1階の巡回を終える。

階段で上の階に上がって巡回することを繰り返していると、上杉の診察室の近くに来たことに気付く。

——上杉さん、大丈夫かなあ？……大丈夫だったら、今頃女の人とよろしくやってんだろうな……——

そんなことを思いながら、光秋は診察室の前に歩を進める。
と、

「……………!？」

カンツという軽い金属が落ちる様な音を聞き、一瞬驚いて辺りを懐中電灯で照らして見回す。

「……………聞き違いか？」

眩きながらも、今度は耳を澄ましてみる。

「……………」

…………グウ…………グウ…………。

「?……………」

小さく規則的な唸り声の様な音が聞こえ、光秋はその音に意識を集中させる。

と、

「……………?……………上杉さんの部屋？」

その音が上杉の診察室の中から発していることに気付く。

…………念のため…………

もともと耳に自信のない光秋は懐中電灯を切って足音をたてないように注意してドアの前に近づき、ドアに左耳を付けて集中する。

「……………」

…………グウウウ…………グウウウ…………。

—やっぱり、ここか！—

先程よりも鮮明に聞こえる音に光秋は確信し、音をたてないように注意しつつ速足で2メートル程戻った所にあるT字路の影に隠れると、上着から通信機を出して藤原に連絡する。

「三佐！加藤です」

（どうした？）

通信機越しに藤原の緊張した声が応じる。

「今上杉さんの診察室の近くにいます、部屋の中から妙な音がするんです」

（妙な音？）

「はい。『グウー、グウー』っと、唸り声の様な音が」

（……わかった。念のため小田と竹田を向かわせる。2人が来るまで待機）

「了解」

応じると、光秋は通信機を切って上着に仕舞い、T字路の影から顔を少し出して左後方にある診察室のドアを見る。

「……………念のため、か？」

小声で呟くと懐中電灯を上着に仕舞い、先程までとは異なる恐怖を若干覚えつつも右腰のホルスターから拳銃を取り出す。訓練通りに安全装置を外して持ち手部を両手で

しつかりと持ち、いつでも撃てるようにする。

—こういうのはどうも好きになれないが、命も惜しいんでな……自信ないけど……—
少しして、それぞれに懷中電灯を持った小田と竹田が駆け足で合流する。

「状況は？」

小田が訊く。

「その後、動きはありません」

「わかった。三佐」

光秋に応じながら、小田は上着から出した通信機に連絡を入れる。

（何だ？）

「ただ今加藤と合流。現在診察室の2メートル程手前にいます」

（ウム……よし、中を調べろ。指揮はお前に一任する）

「了解」

応じると、小田は通信機を仕舞って懷中電灯を消し、右腰のホルスターから拳銃を出して安全装置を外す。竹田もそれに続く。

「んで、どうします？」

「部屋の鍵は開いてたか？」

竹田が小田に訊き、小田は光秋に訊く。

「いえ、音がするとわかったらすぐ離れたので、確認してません」

「そういう時は鍵の確認くらいしとけ」

「すみません……」

小田に軽く怒られ、光秋は少し俯く。

「まあいい。とりあえず接近して俺たちも確認する。行くぞ」

言う和小田は拳銃を両手で構えた姿勢で診察室に静かかつ素早く近づき、竹田と光秋もそれに続く。

ドアの前に着くと、小田は息を殺してドアに右耳を当てる。

「……………確かに、何か音がするな」

と、再びカンツという音が響く。

「!?何だ今の音?」

「中から聞こえましたか?」

ドアに耳を当てたまま訊く小田に、光秋が尋ねる。

「ああ」

「僕も最初、その音で立ち止まって、それから唸り声に気付いたんです」

「ここ、上杉の診察室でしょう? 案外あいつじゃないですか?」

「それはないだろう? あいつなら今頃アパートで女と一緒にのはずだ」

「あ、そつか……」

小田の返事に、竹田は思い出した様に言う。

「……さて」

咄くと、小田はドアの取っ手に左手を掛け、ゆっくりと横にずらしてみる。

「……開いてる？」

予想に反して鍵が掛かっていないことに若干驚き、グウウウという音がよりはつきり聞こえるようになる。

「……よし、中に入る。俺が最初に行く。加藤は俺の後に、竹田は最後尾で灯りを頼む」

「了解」

小田の指示に2人は応じ、小田を先頭に光秋、竹田の順に並び、竹田は左手に懐中電灯を持ってドアを照らす。

「中に入ったらすぐに銃を構えろ」

「……」

小田の緊迫を含んだ指示に、光秋は若干緊張する。

「行くぞ……ゴ―!」

「!」

言うと同時に小田はドアを開け放ち、3人は部屋に雪崩れ込むや拳銃を構える。

と、

「「?.....」」

「グウウウガアア.....グウウウガアア.....」

3人は竹田が照らす灯りの中に、青いワイシャツに白いズボンを着た上杉が、椅子の背もたれに体を預けて熟睡しているのを見る。

「上杉?.....」

「何やってんだ.....」

竹田と小田が目点をし、光秋は拳銃を下ろして部屋の灯りを点ける。

—唸り声に聞こえたのは軒か.....—

思いながら部屋を見回すと、診察机の上に袋詰めof ビーフジャーキーと缶ビールが3つ置かれ、上杉の足元にも缶ビールが2つ転がっている。明るい場所がよく見ると、上杉の頬がかなり赤くなっているのがわかる。

—カンツッっていうのはこれが落ちた音か.....—

拳銃の安全装置を掛け直してホルスターに仕舞いながら思う間に、拳銃を仕舞って懐中電灯を消した竹田が、上杉の許に近寄って右手で頬を軽く叩く。

「おい、上杉。おい」

「.....う.....う.....あ?.....おはようございます.....」

目が覚めた上杉は、寝惚けた顔で答える。

「おはようじゃねえよ。こんなところで何やってんだよ？女が来てんじゃねえのか？」

「女？……ああ、来ましたよ……」

竹田の問いに、上杉は舌をもつれさせながら答える。

「飯食つてそのまま帰ったんすよ。したら部屋に2人来てて。なんでも、もともと家で待つてた娘ん所に、最後に電話掛けてきた娘が近くまで来たからつてんでやつて来て、そこでオレの浮気がバレて………んで、オレが部屋に入るなり2人で奥に引つ張つていつて、三又も白状させられて、その娘も呼ぶように言われて……後はもうオレ吊るし上げつすよ！」

——怖っ！——

話を聞きながら、光秋は背筋に寒気を覚える。

「んで、3人でオレのこと取り囲んで……リンチされそうな雰囲気だったから、もう慌てて逃げて、それこそ裸足で逃げ出してきましたよ！」

——だろうな……—

靴下しか履いていない上杉の足を見て、光秋は呆れながらそう思う。

「でもね、逃げたはいいけど、行き場所がなくなっちまったんすよ。アパートにはまだ3人いるだろうし、竹田二尉は今日夜警でいないし。で、仕方なくここに来たんすよ……」

「机の上のビールとつまみは？」

拳銃を仕舞った小田が訊く。

「これは……『とりあえずこんな時は飲もう』と思って、来る途中のコンビニで買ってきました」

「……………」

呆れ顔を浮かべた小田は、右手で頭を抱える。

「……………まあいい。とりあえず、こんな所にいたらまた騒ぎになる。竹田、寄宿舎に連れて行け」

「オレがつすかあ？」

「いいから行け！」

「りょーかい！おら！行くぞ上杉」

小田の指示に不満そうに答えると、竹田は上杉を引きずる様に部屋から出て行く。

「……………」

小田と2人きりになった光秋は、大きな気まずさと、それ以上の申し訳なさを覚える。

「一尉……申し訳ありませんでした！」

言いながら、深々と頭を下げる。

「……………まあ、初めてで、緊張していたのもあるんだろう……三佐には俺が報告しておく。」

以後、充分氣を付けるように！」

「はい——」

小田の念押しに、光秋は直立不動の姿勢で大真面目な気持ちで答える。

小田が灯りを消して2人は部屋を出ると、小田は懷中電灯を点けて来た道を戻り、光秋はその背に深く一礼し、懷中電灯を点けながら小田と逆方向に歩き出して夜警を再開する。

——……やつちまつたもんはしょうがない、か……次氣を付けよう……—

しばらくして、最上階である7階までの見回りをし、医療棟の巡回を終えた光秋は、寄宿舎に戻ろうと最寄りの階段へ向かう。

「早く寝て、次をきちんとこなそう……」

階段へ向かう途中、左側に窓が並ぶグラウンド側の廊下を歩いていると、

「……………」

またカンツという音を聞く。

「また上杉さんか？……」

呆れた声で呟くと、振り返って左手の懷中電灯で床を照らし、中央辺りに転がるビール缶を見つけてそれに歩み寄る。

が、

「……う……………」

3 歩程近づいて、光秋はこの光景の異常さに気付く。同時に、上杉の件でどこか油断していた気分が一気に醒める。

「……おかしい！ さっきここに缶なんてなかった。上杉さん以外には誰にも会わなかったし、そもそも今日は当直の先生と看護師さん以外ここには誰もいないはずだ。その2人だって、1階の救急口にいるはず。仮にこの階にいるとして、こんなことをする理由がわからない……………テレポート……………もない！ Eジャマーが効いてんだからできないはず……………」 「じゃあ、この缶は何処から？……………」

直後、

「！」

カンツ、カンツと、さらに2つの缶が床に落ち、驚いた光秋は一步退り、懐中電灯を振って辺りを見回す。

と、

「これが、奴が選んだものか――

――!? テレパシー? 神モドキさん……………」 「じゃない!」

脳に直接届く様な声、その感触の違いに光秋は即断し、感覚上声がした辺りである天井に懐中電灯を向ける。

と、

「……………」

電灯の灯りの中に、周囲の闇から湧き出る様に黒いサッカーボール程の大きさの球体が現れ、ゆっくりと下に下り始める。

「……………」

懐中電灯でそれを追いつつ、光秋は、周囲以上に暗い、闇を凝縮した様な、自分よりもずっと小さな球体から、直に体を押されていると思える程の強い威圧感を覚える。

黒い球体が目線の辺りで止まると、光秋は固まりつつある口に鞭を入れて声を出させる。

「……………あなたは……………何です?……………」

—お前をこちらに呼んだあ奴、お前の言う神モドキと同じ、肉を脱し、時空の檻からも解き放たれた存在—

「神モドキさんと、同じ……………」

—どうかな? 我の贈ったギフトは—

—ギフト?……………神モドキさんと同じ存在……………贈り物……………!—

それらの言葉に、光秋は黒い人型を思い出す。

「まさか!」

—そう。お前たちがUKD—02と呼ぶアレを送ったのは、我だ—

「……………」

光秋の体から急速に血の気が引き、口が一気に乾いていく。

同じ頃、夜警を終えた伊部は、寄宿舎へ戻ろうとグラウンドを歩いていく。
と、

—アキ！—

「!?……………アキが、光秋くんが危ないの?……………」

突然頭に響いた声に戸惑いつつも、伊部は直感的にそんなことを感じ、感覚が来る右側に建つ医療棟を見上げる。

—今の声が、アヤちゃん?…………—「あそこで何かあるの?……………」

漠然ながらそんな理解をすると、医療棟の上階からする直感的な感覚に引かれる様に、伊部は非常用口へ駆け出す。

受付を通り過ぎた際に看護師に怪訝な目を向けられるが、伊部の知るところではない。
い。

—何だろう?直感で動くにしても、いつもはもつと慎重なはずなのに…………—
冷静な部分でそう思いつつも、脚は特に意識せずともその身を最寄りの階段へ運ぶ。

38 第二の使者

「……………何を、する気です?」

黒い球体と対峙する光秋は、乾いた口で何とかそれだけ告げる。

—そう怯えるな。今回は奴が選んだものがどんなものか興味を持つて、顔を見に來ただけだ。ただ、手ぶらはどうかと新たなギフトを用意したかな—

「……………」

黒い球体の返答に恐怖した刹那、窓の外の上空に多数の稲妻が縦横に走る。

直後にガシャーン!という轟音が響くと同時に空が割れ、割れたガラス窓の亀裂の様な穴から夜空以上に暗い闇が覗く。

間を置かず、穴から黒い人型が現れ、ガラス1枚隔てて光秋を見据える。

「……………」

丸みを帯びたヘルメット状の頭部に円形の2つのレンズ、排気口のような縦に板が並ぶ口という、どこかガスマスクを想起させる顔に睨まれ、光秋は生唾を飲み、

—フッフ…………—

黒い球体の嘲笑う様な声を聞く。

直後、

「伏せて！」

「！」

知っている声に反射的に従って屈んだ光秋は、声がした背後を振り向き、

「……！伊部さん!？」

廊下の先に拳銃を両手で構えた伊部が立っているのを見る。

黒い球体を撃つと察した光秋は、

「勝てない！ダメだ！——

と直感するがそれは声にならず、伊部は2発発砲し、放たれた銃弾は瞬く間に黒い球体に達する。

が、

「……」「!？」

弾は2発とも黒い球体の数センチ前で止まり、その光景に光秋は絶句し、伊部は驚愕の表情を浮かべる。

「つまらん——

言うと同時に弾は床に落ち、黒い球体は闇に溶ける様に姿を消す。

直後、

「！」

視界の右端に黒い人型のレンズが輝くのを見た光秋は、咄嗟に振り返って伊部の許に駆け、一拍遅れて放たれた人型の肩溜めの右突きをかわす。

壁の破片や粉埃が舞う中、光秋は左手で伊部の右手を取って最寄りの階段へ向かつて駆ける。

が、

「……………」

背後から人型の左拳が壁を突き破りながら迫る。

「……………」

光秋は伊部を自分の前に引き寄せて両腕で強く抱き、不可能と承知しつつも背中の人型の拳を受けようとする。

拳が到達する刹那、

「……………!？」

光秋は足が床から離れた感覚を覚えたかと思うと、一瞬後には伊部を抱いたまま廊下を高速で直進する。正面の突き当たりの壁が押される様に吹き飛び、空いた穴から空に躍り出て人型の拳から逃れる。

——念力?……………まさか!——

ハツとしつつ腕の中の伊部を見る。

「……アキ」

「……………綾」

顔を向かい合わせて微笑む綾に、光秋は確信の声で呟く。

直後に2人の体が急速に右下へ降下し、最後の数センチはゆつくりと下りて医療棟の端に着地すると、光秋は棟の影にいる人型を見やる。

—今のでこつちを見失つてくれたか?……………とにかく、この隙に!—

人型に対する多少の恐れを自覚しつつもそう考えて自分を奮い立たせると、右手を上着の内ポケットに入れてカプセルを取り出す。

「僕はニコイチに乗る。綾は棟の影に隠れて」

「……………アヤつて……………え!?ここは……………」

—……………戻っちゃったか—

周りをキョロキョロと見回す伊部に、光秋は少しでも残念に思いながらそう判断する。

「光秋くん!いったい何が……………」

「説明は後で。今は三佐たちに連絡を。僕は奴を何とかします!」

「わ、わかった!……………」

困惑気味の伊部の返事を聞くと、光秋は左を向いてカプセルからニコイチを出現させ、急ぎ乗り込んで認証を済ませる。

制帽を左脇に挟んでシートベルトを締めた直後、

「！」

光秋は背後に鋭い悪寒を感じ、すぐに右ペダルを一杯に踏んで急上昇する。

直後に人型がニコイチがいた辺りに右突きを放つのを見降ろしつつ、後退しつつさらに上昇して距離をとり、補正が掛かっているモニター越しに月や星、街灯などの弱い灯りに照らされ、振り返ってニコイチを見上げる人型を見る。

全体に丸みを帯びた細見の体つきはUKD—02よりもニコイチに近いが、胸部にコクピットらしき出っ張りはなく、腰回りに装甲板もない軽装さは身軽な印象を与える。両肩には人型の手程の長さの棒が1本ずつ伸び、背後には翼を想起させる五角形の板が左右に2枚ずつ生えている。腹部には02同様、長八角形の赤い扉の様なものが付いている。

「アレさえ壊せば——」

思いつつ、光秋は腹部の扉を一瞬凝視する。

直後、

「！」

人型のガスマスクの様な顔が急接近するや、すぐに左腕を前にして構えつつ右腕を腰に引き、

「あさあ！」

間合いを詰めてきた人型の腹部の扉に右正拳突きを放つ。

が、

—貫けない!?—

拳は扉に命中したものの、人型を地面に向かって吹き飛ばすだけに終わる。

—今のままじゃあ……赤くならないとダメなのか?—

右手に薄っすらと痛みを覚えつつ、光秋は奥歯を強く噛む。

その間に人型は背中中の円形の溝を黒く吹かして体勢を立て直し、一気に上昇してニコイチの上に着く。それを見上げながら光秋は、

—否、一発でダメでも、何度も殴りつければ!—

気を取り直し、上昇して人型に迫り、

「!」

右突き、左突きを人型の腹部に入れる。

が、

—まだか!—

人型には傷一つ付かず、上空に吹き飛ばすだけに終わる。

人型はすぐに体勢を立て直して滞空し、

「!」

すかさず光秋は右拳を腰溜めにして人型に接近する。

しかし、

「!」

一瞬後に人型は左手を左肩の棒に伸ばしてそれを勢いよく振り下ろし、光秋は咄嗟に左腕を前に出しつつ急いで後退する。

「……………」

充分に距離をとって滞空すると、人型が持つ棒の先から赤い光が伸び、それが5、6メートル程の刃を形成しているのを見る。

—光の剣?…………—「あんなのアリか?…………!」

思わず言った直後、左手首の辺りに薄っすらと熱さを感じ、ニコイチの同じ箇所を見ると、

「!?!」

その部分の装甲が僅かではあるが爛れた様に変形しているのを認める。

—ここ、さっき受けた辺り…………アレで焼いたのか?—

思いつつ、光秋は人型の光の剣を凝視する。

「アレに触れたらNメタルでもダメ、か……」

直後、

「！」

人型が剣を突き出して突進し、光秋は慌てて上昇しつつ後退して距離をとる。

「これじゃ迂闊に近づけない！——」

思いつつ、奥歯を噛み締める。

その間に人型はニコイチの後ろ側に回り込み、光秋は下を見て振り返りながら人型を目で追う。

と、人型は背中の板それぞれに付いている円形の溝を吹かし、本体のものと合わせて5つの溝に押されて瞬間的にニコイチに迫り、左手の剣を突き出す。

「！」

光秋は紙一重で何とかそれをかわすや、右拳を腰に引く。

が、

「！……」

一瞬早く人型に右蹴りを入れられ、腹に激痛を覚えながらグラウンドに向かって落ちる。

「……」

落下直前に気を取り直すと、右ペダルを一杯に踏んでNクラフトを吹かし、医療棟に背中が接触する寸前で止まる。

「クソ！あの光の剣にビビって動きが遅くなってる！……」
心なしか鈍い自分の挙動に、光秋は思わず毒づく。

直後に人型が正面に降り立ち、左手の剣を振り下ろす。

「！」

咄嗟に両手で人型の左手首を掴んでそれを止めるが、

「！」

人型は右拳を放ち、ともに食らった光秋は胸部に激痛を覚える。

その間にも人型は右拳を肩に引き、もう一撃放とうとする。

直後、

（加藤お！）

「！」

外部スピーカー越しに藤原三佐の叫びを聞くと同時に、人型の左脇腹に大きな瓦礫が突っ込む。

衝撃で体勢が崩した隙に光秋はNクラフトを吹かし、両手で人型の左手を押して距離

を開け、

「!」

その腹部に右蹴りを入れて吹き飛ばすや、すぐに上昇して人型と距離をとる。

—今の声、三佐?……!—

思いつつ下界を見回すと、右側に拡大映像が表示され、その中に藤原と伊部を見る。

直後、

「!」

5つの溝を吹かした人型が一気にニコイチに迫り、両手で持った剣を振り下ろす。

と、

(光秋くん!)

「!」

外部スピーカー越しに伊部の叫びを聞き、光秋は右ペダルを深く踏んで落下以上の速さで垂直降下してそれをかわす。

直後、

「?……」

右上の辺りに寒気とも違う違和感、強いていうなら心地よさともいう様な感覚を覚え、それを感じる辺りに顔を向けると、

「!?」

夜空を背景に伊部が体を大の字に広げて自分の許に落ちてくるのを見て、光秋は慌ててハッチを開く。

「……………」

吸い込まれる様に背中から入ってきた伊部を膝の上に受け止め、脚周りに軽い痛みを覚えつつ急いでハッチを閉めると、前進しつつ上昇して止まっている間に接近してきた人型と距離をとる。

左側にある伊部の顔を見ながら、光秋は戸惑った様子で問う。

「どうやって……………」

「……………綾が、手伝ってくれたから……………」

「?……………!」

本人も言い方に困っている様な伊部の答えを聞きつつ、光秋は背後に強い悪寒を感じ、

「話しは後。今は——」

振り返って人型と対峙する。

「……」を繰り返します!」

言うとうと光秋は左腕を前にして構え、右ペダルを一杯に踏んで人型に接近する。

距離を詰めるや、人型は左手の剣を突き出す。

「！」

光秋は姿勢を低くしてそれを避け、腹部に右突きを入れて人型を吹き飛ばす。

―さつきより動きがいい……伊部さんのおかげか？―

伊部を見やりながら、恐怖心が若干薄まって先程より動きがよくなったことを実感する。

直後に人型は体勢を立て直し、5つの溝を吹かしてニコイチの左側に回り込む。

「！」

視覚が殆ど機能していない左側に回り込まれ、束の間人型を見失ってしまう。

と、

「……………」「後ろ！」

背後から来る悪寒と伊部の叫びを同時に感じ、すぐに振り返る。

「！」

左手の剣を振り上げる人型をすぐ正面に捉え、一瞬硬直する。

刹那、

―こんなところで！―

膝の上の伊部が心なしか体を寄せてくる感触にそんな言葉を起し、ニコイチの左腕を

上げさせる。

同時に知覚がニコイチ大に広がる感覚を覚え、それに合わせてニコイチの節々のカバーが開いてNフレームを露出させ、赤い燐光が夜の闇を照らす。

操縦席の腕が頭を固定し、額の角も伸びて光秋とニコイチの一体化が完了すると同時に、人型の剣が左腕に迫る。

と、

「！」

腕を薄つすらと覆っているNフレームの光に剣が触れ、装甲に接する寸前で止まるや、左蹴りを腹部に入れて人型を吹き飛ばす。

「……！」

咄嗟のことに啞然としつつ左腕を見ると、光秋は装甲に傷一つ付いていないことを確認する。

——この光、物理に干渉するのか？……一種の念力か——

自らが発する燐光を見ながら、漠然と理解する。

直後に人型が剣を突き出して迫り、光秋は屈んでそれを避け、右手で人型の左手を驚愕で力を含め、

「！」

持っている剣ごと握り潰すと同時に腹部の扉に腰溜めにした左突きを入れて人型を吹き飛ばす。

と、人型の腹部の扉に僅かだがヒビが入るのを見る。

―あと一撃！―「よし！」

言うとき光秋は左腕を前にして構え直し、腰に引いた右拳に意識を集中する。

「……………」

意識が増すに連れて右腕、特に掌のNフレームが他の箇所以上に輝きを強め、光の強さが一定まで達した刹那、

「！」

光秋はNクラフトを全開にして人型の間近に迫り、

「あさあ！」

腹の底からの気合と共に赤い光を纏った渾身の右正拳を人型の腹部に放つ。

が、

「!?」

拳が触れる直前、人型は落下以上の速さで急降下してそれを避け、外れた右拳は人型の顔の左側面を掠って頬周りの装甲を抉り、血の赤色をしたNフレームを露わにする。

「……………」

皮膚が剥がれて筋肉が露出した様な人型の顔に一瞬恐怖し、その間に人型は後退し
つつ上昇する。

と、上空に数本の稲妻が走って黒い穴が空き、同時に人型が上昇速度を上げる。

「逃げるか！」

言うや光秋は上昇し、人型を追おうとする。

が、

「待って！」

「！」

伊部の制止に、すぐに止まる。

「深追いは危険」

「……そう、ですね。手負いの敵は何をするかわからない……」

釘を刺す伊部に素直に返しつつ、光秋は人型が穴に入り、穴が夜空に溶け込む様に消えるのを見る。

——……終わったあ……——

心中に安堵の声を呟くと、知覚の拡大感が消えていくと同時にNフレームの輝きが消え、節々のカバーと角が閉じてニコイチがいつもの姿に戻ると、光秋は足元のグラウンドにゆつくりと降下する。

人型との戦いで気付かなかったが、正面の本舎を挟んだ駐車場側にはいくつもの赤ランプが煌々と灯っており、それに照らされてこちらに向かつて来る大勢の人影を見つ、光秋は地面に着地し、左膝を着いて機外へ出、右手に載せた伊部をゆっくりと地面に下ろす。自分もシートベルトを外して制帽を被り、若干の疲れを覚えつつ席を立つてリフトに歩み寄る。

と、腰の右側が思い出した様に痛みを覚える。

—拳銃なんて挟んでたからなあ……—

右腰のホルスターに納まる拳銃を意識しながらそう思うと、リフトを出して下へ降りる。

と、

「加藤お！伊部え！無事かあ！」

叫びながら本舎側から駆け寄ってくる藤原と、それに続く懐中電灯を持って先を照らす小田と竹田を見、リフトから降りた光秋は疲れを含んだ顔で応じる。

「はい、なんとか……」

「…………お、おい！何だこりゃ!？」

懐中電灯の明かりに照らされたニコイチの左手首、その破損状態に、竹田が驚きの声を上げる。

「あの黒い人型にやられました。あの光の剣、二尉たちも見たでしょう？」

返しつつ、竹田の視線を追って、光秋も懷中電灯に照らされた爛れた様なニコイチの左手首を見る。

と、

「藤原三佐！」

黒いスーツ姿の寺島支部長が本舎から呼び掛け、藤原隊一同はその方に顔を向ける。頼りない明るさの中で、光秋は駆け寄ってきた寺島のワイシャツの襟のボタンが2つ外れていることと、ネクタイがないことに気付く。

——急いで来られたか……——

慌てて着替えて出てきたという感じの寺島の服装に、そんなことを思う。

「だいたいの話は聞いた。アンノウンは？」

「もう撤退しました。中……小破程度には追い込みましたが、撃墜はできませんでした」
寺島の問いに、光秋はすぐに答える。

「ん。支部と周辺の被害状況は？」

「医療棟が所々やられました。他の建物は無事です。ガラスが何枚か割れたかもしれませんが。周辺の被害は、今のところ未確認です」

「人的の方では、医療棟に当直医と看護師がいましたが、アンノウン出現直後に非難させ

ました。他の一般職員も同様です」

寺島の再度の問いに、小田と伊部がそれぞれ答える。

「……よし。周辺も含めて被害の全容確認を急がせる。藤原隊は大至急本件の報告書を作成、でき次第私に直接提出しろ」

「了解。全員、待機室に向かうぞ」

「『了解』」

寺島の指示に藤原が答えると、一同は寺島に敬礼をして本舎地下の待機室へ向かう。光秋も内ポケットにニコイチを収容したカプセルを仕舞い、藤原たちに続く。

待機室に着くと、光秋はテーブルを挟んで録音器とパソコンを持ってきた小田と向かい合わせに椅子に座り、光秋の左隣に伊部、角を挟んで右隣に藤原、その真向かいに竹田が座る。

「急ぐから、今回は聞き取りながら作成する。早速始めてくれ」

「はい」

パソコンと録音器の準備ができた小田に返すと、光秋は話し始める。

「事の発端は……上杉さんの件の後順調に巡回をして、最上階を回っていた時に、この前の演習の時の黒い人型、UKD-02ですっけ？ソレを送り込んできたものに遭遇しました」

「!？」

「親玉の登場、というわけか……」

光秋の言葉に小田と竹田は驚愕し、藤原は険しい顔で呟く。

「見た目は黒い球体で、大きさはサッカーボールくらい。テレパシーで話し掛けてきて、02を送ったのが自分だということと、今回現れたのは僕の様子を見るためだったこと、手ぶらではなんなんですかの体型……UKD-03とでもいうのか？……を、送ってきたことを話していました……その後、伊部さ……二尉が駆け付けて、黒い球に発砲しました」

「伊部が？……本当か？」

「はい」

小田の確認に、伊部はすぐに答える。

「でも、何で伊部が？……人型、ここでは03とでもしておくが、アレが現れるところで見たのか？」

「いえ、そういうわけじゃ……なんというか、勘というか……」

「自力で浮かんでニコイチに飛び乗ったことと、関係があるのか？」

「!？」

「……」

藤原の指摘に、竹田はあからさまに驚いた顔をし、伊部は観念した様に顔を俯ける。そんな伊部の様子を見て、光秋は、

「……ああ。あの時三佐に見られたか……そろそろ潮時かな？」

と、綾の件をこれ以上藤原と小田に隠せないと察する。

「それに竹田、お前も何か知っているな」

「え！えー？何のことです？」

「恍けんでもいい。顔に書いてある」

「……」

藤原の追及に、竹田は何も言えなくなる。

「どういふことですか？」

小田が藤原に顔を向けて訊く。

「ニコイチが『蜂の巣』の時のように赤くなるのは見たか？」

「はい。関係箇所への連絡の途中に」

「そうなる前に、伊部が宙に浮いてニコイチに飛び乗った。儂は何もしていないが、あれはどう見てもサイコキネシス、それも少なくとも7はあるはずだ。お前にそんな力があるとは聞いていないが」

言いながら、藤原は伊部を見る。

「いや、だから……」

「竹田二尉。いいんです」

竹田の歯切れの悪い言葉を遮る様に、伊部は顔を上げて言う。

「いいって……お前……」

「だいたいのはことは光秋……加藤くんから聞きましたから」

「……加藤から？……」

「……」

呟く様に言いながら竹田は光秋を見、光秋はその視線に少々の居心地の悪さを感じる。

「……いったい、何がどうなってるんだ？」

左手で頭を掻きながら、小田は竹田、伊部、光秋を見回して問う。

「……それについても、追って話します」

光秋は意を決し、そう答える。

「そうか？……じゃあ、とりあえず続きを」

「はい」

小田に促され、光秋は話を再開する。

「伊部二尉が黒い球に向かって、確か2発撃ちましたよね？」

「うん」

光秋の確認に、伊部は短く答える。

「しかし2発とも、黒い球に着く直前で止まり、その後に確か、『つまらん』と言って消えました。その後に03が動き出して、伊部二尉の能力、詳細は後で話しますが、それで医療棟から脱出し、地面に下りてニコイチに搭乗し、03と交戦しました。結果は03の左手と、あの光の剣の発生器を握り潰し、頭部の左側面の装甲を破損させ、撃墜こそできませんでしたが、何とか撤退させました」

「ん……で、伊部のその力については？」

「それは……どこから話せば……」

小田の問いの答えを考えつつ、光秋は頭の回転が鈍くなりつつあることを自覚し、瞼を重く感じ始める。

「……どうした？」

「！あ、いえ……」

小田の呼び掛けに、光秋はハツとして答える。

と、

「疲れたんでしょう。睡眠もそこそこにあんなのと戦って。あとプレッシャーも相当あっただろうし」

伊部が光秋を見ながら言う。

「二尉、加藤くんは少し休ませてあげてください。そのことについては、私が説明します」

「いえ、いいです。その件については僕が一番の当事者ですし、これくらい」

伊部の提案を遠慮しつつ、光秋はなんとか眠気を覚まそうとする。

しかし、

「否、その件については伊部に頼もう。加藤は少し休め」

と、藤原が言う。

「大丈夫です」

「今はよくても後で響く。これからもずっと忙しいことになるだろうからな。お前がすべきことは一通り済んだ。だから今、休める時に休んでおけ」

「もっと忙しいって……」

「演習の時の様な簡単な査問があるかもしれない。それに備えて、それこそ一番の当事者であるお前は、今は寄宿舎で休め。命令として言っている」

「……それもそうか……」「では、そうさせていただきます」

藤原の言葉に納得して応じると、光秋は席を立って一同に一礼する。

と、

「ああ加藤。最後にこれだけ教えてくれ」

小田が呼び止める。

「ニコイチの左手首が破損していたが、あれも03の所為か？」

「はい。あの光の剣が掠めた時に」

「わかった」

「……」

小田の返事に黙礼で返すと、光秋は寄宿舎へ向かう。

「まったく。今回は上杉のバカ騒ぎだけで済むと思えば……」

光秋が部屋から出るのを追う様に、竹田が愚痴を呟く。

本舎裏口からグラウンド側に出た光秋は、大型の照明が設置されて昼間さながらに照らされる医療棟とグラウンドを視界の左端に眺めつつ、真っ直ぐ寄宿舎へ向かう。

と、

「加藤二曹！」

「……………」

大河原主任の呼び掛けを聞き、光秋は左側を向いて駆け寄ってくる灰色のツナギを見る。

「大河原主任……………なにか？」

「『なにか?』じゃない。現れたアンノウン、UKD—02と同じ様な物だったんだろう。大丈夫か?」

頭が回りにくくなってきた光秋の問いに、大河原は心配した顔で返す。

「大丈夫です。ご覧の通りなんとか退けましたから……あ、そうだ。戦闘中、僕アンノウンの手を握り潰したんです。グラウンドにも欠片が落ちてるかもしれませんが。手ごろなサンプルになりませんか?」

「何?」

半ば思いつきで言ったことに、大河原は興味を示す。

「わかった。搜してみよう……で、君はこれから何処に?」

「寄宿舎です。少し寝かせてもらうことになりまして……」

言いながら、光秋は右手で口を隠して小さく欠伸をする。

「ああ、それもそうか。呼び止めてすまんかったな」

「いえ……」

「まあ、欠片の件を教えてくれたことはありがたい。早速搜そう」

「お願いします……」

応じると、大河原は振り返ってグラウンドの方へ駆けていき、光秋も寄宿舎への移動を再開する。

寄宿舎の2号室に着くと、光秋は部屋の灯りを点け、携帯電話を取り出して脱いだ上着を二つ折りにしてカバンの上に置き、その上に制帽を置く。

―ドアの鍵は一尉が持つてゐるから、開けっぱなしでいいよな？……―

そんなことを考えながら腰のガンベルトを外してホルスターから拳銃を出し、安全装置が掛かっているのを確認して弾倉を取り出し、拳銃を戻したガンベルトと弾倉をカバンの中に入れる。左手首の数珠と腕時計も外してカバンに入れ、ワイシャツのボタンを2つ外しながら敷きっぱなしの布団の腰を下ろす。

―どれくらい寝ていいか聞かなかつたが……―「とりあえず、2時間くらいいいか」
0時10分を指している携帯電話の時計を見つつ呟くと、光秋は2時にアラームを合わせて携帯電話と外したメガネを右の枕元に置き、紐を引いて電灯を豆電球にして布団に入る。

―……………さつきまで確かに眠かつたのに、少し動くとダメだな……………―

若干呟え始めた意識でそう思いつつも、それから少しして、光秋は眠りにつく。

39 一夜明けて

「……」

「?……………」

覚醒に向かいつつある意識の隅で、光秋は誰かに呼ばれたような気を感じる。
が、未だに強い睡魔が、そんな感覚を呆気なく退けてしまう。

「……………」

「……………」

「加藤!」

「!?」

大声で呼ばれながら強く揺すられ、ハッと目を覚ますと、先程までの強烈な睡魔が嘘の様に消えてしまう。

「……小田一尉?」

左側に腰を下ろして自分を見下ろすワイシャツ姿の小田を認めつつ、光秋はゆっくりと上体を起こす。

「おはようございます……」

「おはよう。かなりよく寝てたな」

「はい……」

欠伸混じりに返しつつ、光秋は背後から射す薄っすらとした光に照らされる部屋を眺める。

「……………？……………電気点いてないよな？……………てことは!?」

電灯が点いていないのにそこそこ部屋が明るいことを理解して一気に意識が覚醒するや、すぐに振り返ってカーテンを挟んで射す弱い朝日を見、次いでメガネを掛けて携帯電話を取って開く。

「……………」

画面には「アラーム時間が過ぎました」と表示され、すぐにそれを消して時計を見ると、「10/30 Sat 5:30」と表示されている。

「しまったあ！……………」

アラーム音に全く気付かなかったことと、5時間以上も寝てしまったことに、光秋は思わず顔を俯ける。

「……………すみません。寝過ぎました……」

「いや、俺も今起きたところだぞ」

「え？……………」

小田の返しに、光秋は顔を上げる。

「お前が出ていつてから三佐や伊部たちの報告も聞いて、報告書まとめて出したら、三佐が俺たちもしばらく寝た方がいいって言つて解散したんだ」

「そう、ですか……」

小田の説明に、光秋は安堵する。

「それはともかく、飯食いに行くか？これから偉いさんたちに根掘り葉掘り訊かれるから体力付けとかんと」

「はい……ああ、ちよつと」

小田の誘いに答えると、光秋はカバンから髭剃り機を出して髭を剃り、小田に続いて布団を押し入れに仕舞う。

「そういえば、通信機と懐中電灯渡したままだったよな。出してくれ」

「ああ、はい」

小田の指示に、それらのことをすっかり忘れていた光秋は、上着を取り上げてポケットを探り、通信機を出して小田に渡す。

と、

「……？……あれ？」

「どうした？」

「懐中電灯が見当たらず……」

小田に答えつつ、光秋は上着の中を探すが、懐中電灯は出てこない。

「……あー」——まさか、あの時落としたか？——

ハツとしつつ、医療棟で人型の拳から逃れるために伊部に駆け寄った際、無意識に懐中電灯を手放したと察する。

——おそらくそうだろう。その後懐中電灯の記憶なんてないもん……—
「今度はなんだ？」

若干狼狽を浮かべる光秋に、小田が問う。

「……一尉、懐中電灯、医療棟に落としてきたかもしれません……」

「な！上着の中じゃないのか？」

「はい……それによく考えたら、医療棟から脱出してから懐中電灯使いませんでしたし……」

小田の確認に、光秋は申しわけない思いで答える。

「んー……まあ、事情が事情だし、しょうがないか。医療棟なら、現場検証か修理の時に見付かるだろうし」

「瓦礫に潰れて壊れてる可能性大ですが……」

小田の言葉に、光秋は付け加える様に言う。

「その時はその時だ。とりあえず、事情は俺が説明しておくから」
「すみません……」

小田に応じながら、光秋は深々と頭を下げる。

「……とりあえず、そのことは一度置いといて、飯食いに行こうぜ」

「はい……」——それもそうだ……事情が事情なんだし、やつちまったもんは仕方ないか
……

小田の言葉を追う様に無理やり納得すると、光秋は小田と共に上着を羽織り、制帽を被って、それぞれ荷物を持って部屋を出る。

「みんなまだ寝てるみたいだから、伊部を呼んできてくれ。俺は三佐と竹田を」
「わかりました」

小田の指示に答えると、光秋は3号室へ向かい、ドアを2回ノックする。

「伊部さん？光秋です。一尉が朝食にしようって」
「……………」

——……寝てるのかな？——

返事がないことにそう思いつつ、光秋はドアノブを試しに回してみる。

——開いてるじゃないのよ……——「不用心だなあ……」

思わず呟くと、ドアをゆっくりと引いて室内を見る。

2号室同様にカーテン越しの昇り始めた朝日に照らされてはいるものの、中の様子を
知るにはまだ不十分な明るさである。

「伊部さん?……」

呼び掛けつつ、光秋は玄関まで進んでみる。

「……すう……すう……」

「寝てるのか……」 「伊部さん!」

微かな寝息を聞き、少し大きい声で言う。
が、

「……すう……すう……」

「ダメか……」

伊部が起きる気配はなく、光秋は渋々制靴を脱ぎ、薄暗い中で足元に注意しつつ布団
に歩み寄り、その右脇に屈んで伊部の肩を揺する。

「伊部さん。伊部さん」

「……んー?……」

ようやく反応を見せると、伊部はゆっくりと目を開けて光秋を見る。
と、

「!?光秋くん?」

「！」

驚きの声を上げてすぐに上体を起こし、その反応を見て光秋も驚く。

「何で？ 鍵は……」

「開いてましたよ？」

「え？……あー！」

光秋の戸惑いつつの返答に、伊部は思い出した顔をして頭を右手を置く。

「そうだ。仕事終わった後どつと疲れが出て、掛けるの忘れたまま寝ちゃったんだ……」

「はあ……」

曖昧な返事をしつつ、光秋はボタンが3つ外れたワイシャツに解けた長髪の伊部が頭を抱えるのを見る。

「……ところで、朝早くからなにか？」

「ああ、一尉が朝食にしようって。それで呼んできてくれと頼まれたんです」

右手を下ろした伊部の問いに、光秋が応じると、

「朝食か……」

返しつつ、伊部は枕元の携帯電話を取って画面を見る。

「わかった。部屋片付けていくから、ちよつと待ってて」

「はい」

伊部に返すと、光秋は制靴を履いて外に出る。

——……起こすためとはいえ、女の人の部屋に勝手に入ったのは迂闊だったか？——
ドアの前で待ちながら、光秋は今更ながら考えてしまう。

少しして、髪を一本に束ねて制服の上着を着、カバンを左肩に提げた伊部が出てくる。

「お待たせ」

「じゃあ、行きますか」

「うん」

光秋の言葉に伊部が頷くと、2人は階段の方へ歩き出す。

同時に1号室から小田、藤原三佐、竹田二尉、上杉が出てくる。

「おはようございます」

「おはよう」

「うーっす……」

「おはようございます……痛てて……」

光秋と伊部の挨拶に、制服姿の藤原と小田が同時に、襟元が開いた竹田が欠伸混じりに、白衣を羽織った上杉が左手で頭を撫でながら応じる。

「二日酔いだな」

「ですね……ちよつと下のトイレ行ってきていいですか？」

様子を見て言う小田に応じながら、上杉は優れない顔で訊く。

「かまわんぞ」

「ああ、僕も」

藤原が応じると光秋もそれ続き、一行は階段を下りて1階へ向かう。

上杉に続いて光秋もトイレに入り、右端に立つと、小田が左隣に並んで立つ。

「……そういえば、夜に伊部から聞いたが、夏の間もけっこう大変だったんだな」

「はい……」

小田の言葉に、光秋は一瞬綾の顔を思い浮かべて応じる。

「俺や三佐には療養中としか聞かされてなかったが……まさかな……」

「……」

小田の呟きになんと返していいかわからず、光秋はことを済ませるとすぐに水盤へ向かい、手洗いと口漱ぎ、顔洗いをしてハンカチで各部を拭きながら外へ出る。

「?……」

その光秋の一連の行動を、上杉は左端で眺めながら首を傾げる。

光秋は外で待っていた藤原と、竹田、伊部の許に歩み寄り、トイレから出てきた小田と上杉もそれに加わる。

「よし。それじゃあ、食堂に行くか」

藤原がそう言つて歩き出すと、一行はそれに続いて食堂へ向かう。

本舎の食堂に着くと、藤原隊一行はそれぞれ朝食を注文して1つのテーブルにまとまつて座り、食事を始める。

一行以外にも何人か食事をしている人がいるが、皆心なしに寝むような顔をしている。

—僕が寝た後も、いろいろ大変だったんだな……—

白飯を口に運びつつ周りの表情を見て、光秋はそんなことを思う。

と、光秋の左前に座る藤原が声を掛ける。

「そうだ加藤」

「はい?」

「小田たちは昨日聞いたんだが、今日の10時に昨日のことの詳しい聴取が行われる。状況から言つてお前が重点的に訊かれるだろうから、そのつもりでな」

「はい」——『聴取』……物々しい言葉だな——

ニユースくらいでしか聞かない言葉に、一瞬背筋に悪寒が走る。

「?……加藤、昨日なんかやっただんですか?」

「……ひよつとして上杉さん、昨日のこと何にも覚えてないんですか?」

藤原の右隣に座る上杉が首を傾げて訊き、そんな上杉の様子に光秋はまさかと思ひな

がら尋ねる。

と、

「こいつなら昨日、オレたちが仕事終えて部屋戻った時、ぐっすりと熟睡してやがったよ」

上杉の正面に座る竹田が口を尖らせて言う。

「診察室から1号室に連れていってすぐ寝て、そんな時とあんまり変わってなかったから、多分騒ぎの間もグースカ寝てたと思うぜ」

「はあ……」——よっぽど酔い潰れてたのか、あの状況でも寝れる程の大物なのか?……—
続けて話す竹田に、光秋は後半は冗談と自覚しつつそう思う。

「……結局、なにがあっただんです?」

「戦闘だよ」

「戦闘!?!」

「ああ」

竹田の返答に上杉は驚きの声を上げ、さらに詳しいことを説明する竹田に顔を近づける。

と、携帯電話の振動音が響きく。

「濃か?……支部長?……」

言いながら、藤原は上着のポケットから携帯電話を出して右耳に当てる。

「もしもし?……はい?……本部で……?了解です……」

「どうかしましたか?」

戸惑いながら電話を切った藤原に、光秋の正面に座る小田が訊く。

「それが、今加藤に話した聴取なんだが、12時に東京本部でやることになった」

「ええ!」

藤原の返答に、光秋の左隣に座る伊部が声を上げる。

「どうして突然?」

「それはわからん。とりあえず、10時に迎えのヘリが来るから、それに間に合うように準備するようにとのことだ」

「ヘリ、ですか……」

藤原の返答に、伊部は呟く様に言う。

「……ことがことだから、中央で対処したいのか?……東京か……どうであれ、タフな時間になりそうだ……」

漠然とそんなことを考えつつ、光秋はみそ汁を一口すする。

食事を終えると、上杉は医療棟へ、藤原隊一行は待機室へ向かい、各々のロッカーに拳銃とガンベルトを仕舞って一度解散する。

光秋は寮の自室に戻ると、昨日の下着類とワイシャツを洗濯機に入れ、上着を椅子の背もたれに掛け、ワイシャツを着替えて椅子に腰を下ろして一息つく。

「……………東京つてことは、局長も聴取に顔を出すのかな？ 演習の時の富野大佐みたいに……………」

思いつつ、演習時の聴取のことを思い出す。

「東京かあ……………どうも苦手なんだよ……………にしても、だいぶ寒くなってきたな。そろそろコタツ出すか……………」

薄っすらと感じる肌寒さに、こんな状況でも季節は移り変わっていくのだと感じる。

「……………そういえば、三佐にいつ帰るのか訊かなかったな……………まあ、聴取だけやってとんぼ返りつてことだとは思うが……………念のため着替えだけ持っていくか？—」

そう思うと椅子から立ち上がって筆筒に歩み寄り、下着一式と予備のハンカチを出してカバンに入れる。

再び椅子に腰を下ろすと、光秋は足元にある今日の新聞を取り、一面に目を通す。
と、

「……………もうか？……………」

左下に「E S O 京都支部またも襲撃か？」という小さな見出しを見つけ、予想以上の早さで昨夜のことが新聞に載ったことに驚きつつ、その記事を読む。

『昨夜十一時頃、ESO（超能力者支援機構）京都支部において複数の轟音が響き渡り、当支部の職員が一斉に駆け付ける騒ぎがあった。ESOからの公式な発表はまだ出ていないが、付近の住民の話しでは大きな人型の影が二つ飛び回っていたとの証言もあり、超能力関係でのトラブルがあつたことが予想される』

「……………どうなるのか……………」

聴取に対して強くなつた不安を呟くと、光秋は他の記事にも目を通す。

しばらくして新聞を読み終えると、机の上の時計を見る。

— 7時半か……………9時半までに集合と言われたが……………行くか。部屋に籠つてもしょうがないし—

そう思うと椅子から立ち上がり、背もたれに掛けてある上着を着て手荷物を確認し、カバンを右肩に斜め掛けして制帽を被り、玄関で制靴を履いて京都支部へ向かう。

—……………そういえば、昨日は暗くてわからなかったが、どうなってるんだろう？—

支部の正門をくぐったところで、光秋は昨夜の戦闘跡に軽い好奇心を覚え、本舎を左に迂回してグラウンド側へ向かい、周りを見回してみる。

「……………」

置きっぱなしになっている大型の照明や、僅かだが所々挟れているグラウンド、最上階に大穴が空き所々傷付いた医療棟に、束の間呆然とする。

と、

「……………」

医療棟の本舎側に向いて空いている穴——昨夜人型から逃れる際に綾が空けたものが目に入り、光秋はその光景に既視感を覚える。

「なんだ？……………ああ、あれだ——」

少し考えて、綾と初めて会った時のことを思い出し、思わず微笑んでしまう。

「光秋くん」

「……伊部さん」

呼び掛けられて後ろを振り向くと、カバンを左肩に提げた伊部が歩み寄ってくる。

「早いですね」

「そつちこそ。まだ2時間くらいあるのに、どうしたの？」

「寮でじつとしてても仕方ないと思って。あと、この辺の様子が気になって……伊部さんは？」

「光秋くんと同じ。特にこの辺の様子、今まで暗くてわからなかったから、明るくなったら見てみようと思って」

「なるほど……」

応じると、光秋は医療棟の穴に視線を戻す。

「……なに見てるの？」

光秋の左隣に立つた伊部が、光秋の見ている辺りを見ながら訊いてくる。

「あの医療棟の、本舎側に空いてる穴ありますよね」

「うん」

光秋が穴を指さし、伊部がそれを追って応じる。

「あれ、昨日綾が空けたんですよ。人型から逃げるために」

「そうなの？」

驚きの表情を浮かべる伊部に、今度は光秋が、その答えを察しつつも訊いてみる。

「……その時のこと、憶えてませんか？」

「うーん………なんとなく、かな？………人型の手が迫ってきた時までははっきり憶えてるんだけど、その後地上で光秋くんに話し掛けられるまでが曖昧で」

「そうですか……」

ほぼ予想通りの答えに、光秋は静かに納得する。

「まあ、それですね、ちよつと懐かしいこと思い出しちゃつて」

「なに？」

「綾と初めて会った時のことです。あの時も高い所の壁に大穴を開けて僕の所に来ましたから……壁に穴を開けるのが好きな奴だなあつて……」

「そう」

「……言つときますけど、最後のは冗談ですよ。最初の時は分別がなかったからで、昨日のは緊急退避のためで、どっちも不可抗力みたいなものだったんですから」

「わかつてるよ」

光秋の几帳面な補足に、伊部は微笑んで返す。

「……………そういえば、綾で思い出したけど、昨日は三佐たちになんて報告したんです？」

「この前光秋くんが私に話してくれたことを話した。私のもう一つの人格ってこととか、光秋くんが教育係だったってこととか……………あと、UKD-02を倒した時にも現れたこととかね」

「なるほど……………！」

伊部の答えに応じると、光秋は昨夜の戦闘の中で伊部がニコイチに飛び込んだことを思い出す。

「そういうえば昨日、ニコイチに飛び込んだときに『綾が手伝ってくれた』って……………どういうことですか？」

「ああ……………なんて言えいいのかなあ？……………声がしたの」

「声？……………なんて言ったんです」

『行かなきゃ』って。そしたら体がふわっと浮いて、気付いたらニコイチを見下ろす高さにいた。その後に光秋くんが受け止めてくれて……」

『受け止めた』って言いますか？……」

応じつつ、光秋は伊部が落ちる様に膝の上に乗ってきたことを思い出す。

「ちようど私も、光秋くんの近くに行つてあげたいって思つててね……あの声、やっぱり綾だった気がする」

「……それで、『綾が手伝つてくれた』と？」

「うん………そういえば、その前にも綾の声を聞いた気がするんだよね」

「前にも？」

付け加える伊部に、光秋はオウム返しに訊く。

「うん。巡回終わつて、寄宿舎に帰ろうとしてたのね。そしたらいきなり、『アキ！』って緊迫した声が聞こえて。それと一緒に光秋くんが危ないって強く感じて……あとはもう直感的に、医療棟の最上階まで駆け上がった……そしたら本当に光秋くん、危険そうな何かと一緒にいて……」

「……ああ！だからあの時来てくれたんですね」

言われて光秋は、今更ながら昨夜伊部が都合よく自分の許に来てくれたことを不自然だと理解すると同時に、そうなった理由に納得する。

「……あの時も、綾が何か感じたのかな？」

「……でしようね……前にも話しましたが、あれはテレパス、それもかなりレベルが高いみたいだったから……あの黒い球体——黒球くろたまのただならぬ気配を感じたのかもしれない」

言いながら、光秋は昨夜黒球と対峙した時に感じた威圧感と、それによつて生じた恐怖心を思い出す。

「……あるいは、光秋さんと繋がってたからかもね」

「え？……」

伊部の唐突な言葉に、光秋は顔を向ける。

「どういうことです？」

「光秋さんと綾、精神的に強く繋がったことがあるんだよね？」

「はい……」

「それが今も続いてて、光秋くんを介して感じた危機感を私の中の綾が感じた、てことも考えられるかも……もちろん、半分は私の予想。超能力関係にはそんなに明るくない私のね」

「いえ、例えば予想でも……なんて言うのかな……気分のいい話ではありません——僕の中に綾が……その一部みたいなものだけでもあるっていう考えは、悪くない……いや、む

しろ嬉しい！――

伊部の説明に、光秋は率直な感想を言いつつそう思う。

「……とりあえず、僕はそろそろ待機室に行きます。伊部さんは？」

「私も、そろそろ行こうかな……」

光秋の問いに伊部が応じると、2人は本舎へ歩き出す。

待機室に入ると、光秋と伊部はドアに近い側の椅子にテーブルを挟んで向かい合って座る。

しばらくして、カバンを右肩に提げた小田が入ってくる。

「2人とも、もう来てたのか」

「はい。寮でじつとしてもしようがなくて」

「私も」

光秋と伊部の返事を聞きつつ、小田は光秋の右隣に座る。

「……そういえば、今は一尉も綾のこと知ってるんだよね――」

小田の顔を視界の端に見つつ、光秋は今更ながらそんなことを思う。

と、

「……………どうした？」

「！」

視線に気付いたのか、顔を向けて話し掛ける小田に少し驚く。

「『どうした』、と言いますと?……」

「いや、さつきから俺のこと見てるから」

「ああいや……………『そういえば一尉は、綾のこと知ってるんだよねー』と、思いまして……………」

「ああ。伊部のもう一つの人格で、強力なサイコキノ。加えて、夏に俺と三佐が突然呼び出された原因になった人物のことな…………伊部から聞いた話しじゃ、確かお前その教育係だったんだろう?」

「はい」

「自宅待機中は寮でゆっくり休んでるかと思っていたが、そんなことに巻き込まれてたとはな……………」

「……………」

淡々と事実だけを語る小田に、光秋は返事に困る。

「……………話は変わりますが、一尉ご出身は?」

沈黙に耐えかねて、光秋は咄嗟に浮かんだことを訊いてみる。

「俺は千葉。加藤は確か新潟だったよな?」

「はい。こちらのとはまた違います…………伊部さんは?」

「私は岩手。実家が電気屋なのは、前に話したつけ？」

「はい」

「新潟か……行ったことはないが、酒が美味いつて印象があるんだよね……お前がいた方もそうだろう？」

「あー……」

小田の質問に、光秋は再び返事に困る。

「僕は酒についてはよくわかりません……」

「ああ、そうか。未成年だったな」

「はい……」——いかん。会話が続かん……—

再度の沈黙に、光秋は気まずさを感じる。

「私もお酒の話は……ちよつとねえ……」

と、少し表情を曇らせた伊部が呟く。

と、

「なんだ？みんなもう来てたのか」

左肩にカバンを提げた藤原が部屋に入ってくる。それを見て光秋は小田たちと一緒に一礼しつつ、

——よかった……—

と、沈黙から救われたと感じる。

—前から思ってたことではあるが……話し下手だなあ……………—

伊部の左隣に座る藤原を見ながら、光秋は苦い物を噛む様にそう思う。

しばらくして、

「うーっす」

欠伸混じりに言いながら、左肩にカバンを提げた竹田が部屋に入ってくる。

光秋はそれに一礼しつつ、左手の腕時計を見る。

—8時10分か…………—

寝むような顔をした竹田は藤原の左隣に座ると、大きく口を開けて欠伸をする。

「んーん…………やっぱ中途半端に寝るもんじゃねえな…………」

「帰ってからまた寝たのか？」

竹田の独り言に、小田が問う。

「小言ならかんべんしてくださいよ。昨日たいして寝られなかったんだから、別にいいでしょう？…………」

言いながら、竹田はまた大きな欠伸をする。

しばらくして、光秋は腕時計を見る。

—9時か…………—「三佐、迎えのへりが来るのは何時でしたっけ？」

「10時だ。今何時だ？」

「9時です」

「あと1時間か」

「はい……」

呟く様に言った藤原に、光秋は短く応じる。

「……」

同時に、ヘリに乗るといふ緊張から、掌が若干汗ばむのを感じる。

9時45分。

「よし。そろそろ屋上行くぞ」

「「「はい」」」

左手の腕時計を見て言った藤原に一同たちは答え、光秋以外の4人はロッカーを開けて制帽を取り出して各々のカバンに入れる。

光秋も右肩にカバンを斜め掛けすると、藤原を先頭にした一行に続いて最寄りのエレベーターへ向かう。

最後尾の光秋が乗り込むのを確認すると小田が10階のボタンを押し、ドアが閉まるとエレベーターは上昇を始める。

しばらくして10階に着くと、一行は藤原を先頭にエレベーターを降り、少し歩いた

所にある階段を上って突き当たりのドアを開け、正面にヘリポートがある本舎の屋上に
出る。

最後に屋上に出てドアを閉めた光秋は、不意に初めてニコイチに乗った時のことを思
い出す。

—そういえば初めてニコイチで浮いた時、ここまで上がったんだよなあ……—
思うと少し前に進み、左のグラウンド側から右の駐車場側へと顔を動かしてみる。
と、駐車場側のフェンスの近くに立つ伊部が目に入る。

—そういえばあの時も、伊部さんと一緒だったな……—

初めてニコイチを起動させた時のことを思い出しながら、床一杯に赤く「H」と書か
れたヘリポートへ歩み寄る。

その際光秋は、極力遠くを見ることが、フェンスに近づかないことを心掛ける。

10時ちょうど。

本舎屋上のヘリポートに緑色のヘリ——UH——Yヴェノムが着陸すると、

「乗り込め！」

回りっぱなしのローター音に負けない藤原の号令が飛び、一行はヘリに乗り込む。
光秋はカバンを足元に置いて後部座席の右端に座ると、

—このヘリ、こつちに初めて来た日に乗せられたやつかな？—

と、うろ覚えに考えつつ、若干の緊張と恐怖を覚える。

――飛び始めたら寝よう！――

心中にそう断じた直後、最後に乗り込んだ藤原がドアを閉め、操縦席に向かって何か言うと、ヘリはゆつくりと上昇を始める。

光秋はすぐに左隣に座る伊部の右肩を左手で軽く叩き、顔を近づけると、

「少し寝ます。着いたら教えてください」

と手短に言うや、返事を待たずに目を閉じる。

「?……」

その行動に伊部は首を傾げるが、光秋の知ることではない。

当の光秋は、

――早く着いてくれ！――

と、瞼越しに伝わってくる振動を感じつつ、心中に絶叫することで精一杯である。

40 虎の査問

飛行の微振に揺られつつ、光秋は右側の窓に頭を預けて中途半端な眠りに就く。

「……………」

「光秋くん。もうすぐ着くよ」

「！」

左肩を揺すられながらの伊部の呼び掛けに、光秋はすぐに目を開けて頭を上げる。

少々凝った首を左右に曲げると、

「……………」
「ありがとうございます……」

と、若干眠気が残る目で返す。

ヘリが着陸すると、光秋から見えて正面左端に座っていた藤原三佐が、すぐ右にあるドアを開けてカバンを持ってヘリから降り、それぞれに荷物を持った小田一尉、竹田二尉、伊部、光秋の順にそれに続く。

ドアを閉めた光秋が振り返ると、ヘリから少し離れた所に集まっている藤原たちを見つけ、その許に駆け寄る。

「よし。全員揃ったな。行くぞ」

光秋が合流するや、藤原がカバンから紙を取り出しながら言い、その紙を見ながら5メートル程先にある階段を目指し、一行もそれに続く。

——……屋上、といったところか……京都支部より高い気がするな——

目測でも20階はあろう周囲のいくつかのビルを見、それらに負けない高さを持つ自分が今いる屋上のことを考え、光秋は腰周りに寒気を覚える。

一行は藤原を先頭に階段を下り、最後尾の光秋は左側の手すりを持ちながら一行と逸れないようにその背を追う。

と、光秋のすぐ前を歩く伊部が、こちらを見やりながら訊いてくる。

「光秋くん、ひよつとして高所恐怖症？」

「恐怖症って程じゃあ……まあ高い所は苦手です。あと宙に浮くものとか……」——そういえば、前にもそんなこと言ったような……あ……—

答えつつ、光秋は藤原に初めて念力で浮かされた時のことを思い出す。

「ニコイチではよく飛んでるのに？」

「自分で動かす分には平気なんですがね……」

続けて問う伊部に、光秋は踊り場で振り返りながら応じる。

階段を下りると一行は左に曲がり、少し歩いた所にあるドアの前で止まる。

「……だな。12時までここで待機するぞ」

「「「はい」」」

手に持った紙とドアの上の番号板を見比べて言う藤原に全員が答え、ドアを開けて部屋に入る。

—11時10分……あと50分か……—

ドアをくぐりつつ、光秋は左手首の腕時計で時刻を確認する。

と、携帯電話の振動を感じ、上着の左ポケットからそれを取り出して画面を開く。

—大河原主任?—「ちよつとすみません」

藤原たちに断つて廊下に出ると、光秋は電話を左耳に当てる。

「はい?」

(二曹か?もう東京には着いたか?)

「はい。今待機中です」

(聴取は確か12時だったな)

「はい」

(ちよつと下の格納庫まで来てくれ。昨日の戦闘でニコイチが破損したと言っただろう。その調査と修理をしたい)

「調査つて……主任今どちらです?僕は東京ですが」

(テレポートで俺もさつき来たんだ)

「あ、そうか。そうでした……」——その手があつたな。僕は利用しないからすっかり忘れてた——「ちよつと待つてください」

言うと光秋は電話を顔から離し、ドアを開ける。

室内には脚の短いテーブルを囲む様に、2人用の長ソファアが2つと、1人用のソファアが2つ、互いに向かい合う形で配置されており、ドアから見て正面奥側の1人用ソファアに座る藤原に声を掛ける。

「三佐、大河原主任が、ニコイチの破損の調査と修理をしたいから来てくれと言ってますが、かまいませんか？」

「どこでやるんだ？」

「ちよつと待つてください」

言うと光秋は電話を左耳に当てる。

「主任、どちらに行けばいいですか？」

（格納庫区画だ。隊の中で誰か知らないか訊いてくれ）

「わかりました……格納庫区画だそうです」

電話越しに応じると、再び顔を離して言う。

「それなら、俺が一緒に行こう」

光秋から見て左の長ソファアの奥側に座っている小田が言う。

「ウム。どの道ニコイチの修理は必要か……わかった。行つてこい。ただし早めに戻つてくるようにな」

「わかりました。主任、今向かいます」

（わかった。待つてゐるぞ）

藤原に応じると光秋は電話越しに言い、電話を上着のポケットに戻す。

「では一尉。案内お願いします」

「ああ」

部屋に入つてカバンを隅に下ろしながら言う光秋に、小田は応じながら腰を上げる。

「竹田、お前はどようする？」

「行きません。傷の付いたニコイチなんて見たくもない」

小田の問いに、右の長ソファアの奥側に座る竹田は忌々しげに答える。

「それなら、私もお茶かなにか買つてきます」

右の長ソファアの手前側に座っていた伊部が立ち上がる。

光秋はカプセルが上着の左の内ポケットにあることを確認すると、藤原と竹田に一礼し、小田と伊部に続いて部屋を出る。

2人の後を追つて最寄りのエレベーターに乗り込むと、光秋は奥の壁の中央辺りに背中を寄せる。

と、光秋の左隣に立つ伊部が、

「二尉。お茶買いに行く前に、私もニコイチの破損状況ちよつと見たいんですが、よろしいですか？」

と、ドアの右側のボタンの前に立つ小田に訊く。

「構わんぞ。実を言うと、俺も興味あるしな」

小田が1階のボタンを押しながら答えるとドアが閉まり、エレベーターが下り出す。

「……やつぱり、気になりますか？」

下りていくエレベーターの動きを感じながら、光秋は2人の顔を見ながら訊く。

「そりゃあ、昨日は暗くてちゃんと見えなかったし……私は光秋くんの補佐役でもあるから、ニコイチのことはできるだけ知っておきたいし……」

「戦車隊の集中砲火を受けても傷一つ付かなかったニコイチの装甲が傷付いたんだから、俺だって興味というか……恐れの一つも感じるさ」

「それもそう……ですね……」

伊部と小田、特に小田の言葉に、光秋も強く同意する。

同時に、初めてニコイチに乗った時のNPの集中砲火を筆頭に、戦車砲やミサイルの直撃を幾度となく受け、それに耐えてきたニコイチの装甲——Nメタルの破格の強固さを思い出し、それを傷付けた昨夜の人型の光の剣に再び恐怖を覚える。

— 思えば、UKD—02の時も僅かだが傷が付いた……マシン同士の性能が大差ないなら、最後は使う人間の……僕の力量が問われるってわけか……—

と、

「ところで、光秋……加藤くんにか欲しい物ある?」

伊部が訊いてくる。

「いえ、伊部さ……二尉に任せます……そもそもさつきから緊張してきて、あんまり食欲がないんです……」

答えつつ、人型への恐怖を隅に押しやる。

「なんだお前ら? いつの間にか名前とさん付で呼び合う仲になったのか?」

先程の言いかけを聞いた小田が、伊部と光秋の顔を見ながら言い、

「にしても、伊部は名前で呼んで加藤は名字にさん付てのは、どういう距離感だ?」

と、少し笑いながら続ける。

「伊部さん……二尉がそう呼べって言ったんです。さん付で呼べって。僕のこととはなんと呼んでくれてもかまいませんが……」

「私も、特に深い意味はありません……光秋……加藤くんとは仲良くしてあげたいだけで……それに、あくまで2人の時だけですから……」

光秋と伊部は互いを見やりながら、言葉に困った顔で応じる。

「いや、別に2人だけの時じゃなくてもそれでいいんじゃないか。大事な時だけきちんとしてれば……違和感があるのは、加藤の名字にさん付の方なんだがな」

「……………」

小田の付け加えに、光秋はどう応じていいか困ってしまう。

そうしている内にエレベーターは1階に着き、ドアが開くと小田を先頭に一行はエレベーターを降りる。

小田の後を追って光秋は廊下を進み、少し歩いた所にあるドアから外に出、円形の屋根をした格納庫が多数ある場所に出る。

—京都支部でニコイチが運び込まれた倉庫に似ている。が、デカイな……—

ニコイチを初めて動かした際に壊してしまった倉庫のことを思い出しつつ、光秋は記憶の中のそれと目の前の物の大きさを比べてみる。京都支部の倉庫は横になったニコイチを入れただけでは一杯になっていたが、目の前の格納庫は全長10メートル程のニコイチが直立したまま入ってもまだ5メートル程余裕があり、広さは京都支部のグラウンドの半分はある。

「さて、主任はどこか……」

呟く様に言った小田に続いて、伊部と光秋は格納庫同士の間を碁盤の目の様に走る通路を進む。

光秋は歩きながら顔を左右に振り、シャッターが上がり切っている倉庫の中でヘリや軍用車の整備が行われているのを見る。

と、

「二曹！」

「！」

大河原の声に光秋は立ち止まり、周囲を見回すと、左前の格納庫前に灰色のツナギ姿の大河原を見つけ、その許に速足で歩み寄る。小田と伊部もそれに続く。

「お待たせしました」

「いや。とりあえず入ってくれ」

光秋に応じた大河原の後に続いて、3人は中程まで上がっているシャッターをくぐって格納庫の中に入る。照明が点いていないために薄暗い倉庫内を中央辺りまで進むと、大河原は立ち止まって3人の方を振り返る。

「早速だが、ニコイチを出してくれ」

「はい」

応じると、光秋は左の内ポケットからカプセルを出し、先端を右に向け、左膝を着いたニコイチを出現させる。

「細かい所まで調べたいから立たせてくれ」

「わかりました」

大河原に応じた光秋はニコイチに歩み寄り、リフトを掴んで上昇する。

その間に天井の照明が一斉に点き、格納庫内が一気に明るくなる。同時に、周囲にいたツナギたちがニコイチの周囲に集まり、何人かは念力で宙に浮いて、見える範囲での破損状況の調査を始める。

急な明るさに目の不快感を覚えつつもコクピットに入って認証を済ませ、

「動かしませう」

と、外音スピーカー越しに周りのツナギたちに知らせたニコイチを直立させる。

と、それまでは暗くて気付かなかったが、光秋はモニター越しに、反対側の壁を背にする形でゴレタンが置かれているのを見る。

——ここに運ばれたのか……？——

思いつつ、その左隣に、数本の鉄骨や光秋にはよくわからない機械の様な物が組み合わさってできた2本の柱の様な物を認める。さらによく見ると、2本の柱は最上部が台の様な物で繋がっている。

——アレってまさか……——

ゴレタンの上半身と柱自体の形状からその正体を察しつつ、光秋はハッチを開けてニコイチを降ろす。

ニコイチの左脇に立って爛れた左腕をカメラで撮っている大河原を見つけると、

「主任。アレって、まさかゴーレムの脚ですか？」

と、その許に歩み寄りながら柱の様な物を指して問う。

「そうだ。先日やつと組み上がってな」

大河原はカメラを下ろしながら答える。

「ということは、もうすぐ正式なゴーレムができるんですか？」

それまで伊部と共に壁側に立ってニコイチの左腕の爛れを眺めていた小田が問う。

「いや、そうもいかん」

言いながら、大河原は小田に顔を向ける。

「ご覧の通り、脚自体は後は装甲を付けるだけなんだが、脚の動きのプログラムがまだできていないんだ。あと、あの上に付けるゴーレムの上半身がまだ製造中だな。まあ、こっちは一度作った物をまた作るだけだから、プログラムの問題よりはマシだろうがな……」

言いながら、大河原はニコイチの正面側に移動して撮影を再開する。

「……プログラムができないってのはどういうことだ？」

伊部と共に光秋の許に来た小田が、2人の顔を見ながら訊く。

「……つまり、どういう動きをすべきか、動き自体を制御する情報がまだできてないって

ことでしょうか？僕も機械にはあんまり詳しくないんで、よくは知りませんが、歯切れが悪いことを自覚しつつ、光秋は聞きかじりの知識で応じる。

「俺もコンピュータはちよつとな……伊部はこういうの詳しいんだろ？」

「ええ、まあ……ところで、時間大丈夫ですか？」

「！」

伊部の言葉に、光秋は腕時計を見る。

「11時35分。そろそろ戻った方が」

「だな。お茶も買わなくちやいかんし」

「ちよつと待つててください」

小田にそう告げると、光秋は大河原の許に駆け寄る。

「主任。そろそろ時間が迫ってきたんで、一度戻らせてください」

「ん？もうそんな時間か？だが、まだ調査が……」

「ニコイチはこのまま置いていきます。聴取が終わり次第取りに来ます」

「そうか？……じゃあ、そうしてくれ」

「わかりました。ニコイチをお願います」

そう言つて一礼すると、光秋は小田と伊部の許に駆け寄る。

「まだ調査途中なんで、ニコイチは後で取りに来ることにさせてもらいました。行きま

しよう」

「わかった」

小田が答えると、3人は藤原と竹田がいる部屋へ向かう。

1階の自動販売機でペットボトルのお茶を5つ買った光秋たちは、エレベーターに乗り込んで藤原たちの部屋がある30階へ向かう。

「明るい所で改めて見て思ったが……破損箇所そのものはそんなに広くないが、ニコイチにあんなはつきりとした傷が付くのは、やっぱり衝撃だな」

「ですね……」

ドア側に立って両手にペットボトルを1本ずつ持つ小田に、同じく両手にペットボトルを持つ光秋は深く頷く。

その間にエレベーターは30階に着き、ドアが開くや3人は心なしか速足で部屋へ向かう。

T字の廊下を左に曲ろうとした直前、合衆国軍の青い制服を着た者が5人程右から横切つて来たので、一行は止まって彼らが行き過ぎるのを待つ。

と、

「！」

小田が右手のペットボトルを左脇に挟み、その左隣の伊部が右手に持っていたペット

ボトルを左手に持ち替え、同時に緊張の表情で敬礼する。

「？」

なんだと思いつつも、小田の右隣に立つ光秋もすぐに2人に倣って敬礼し、その視線を追うと、前後2列になって歩く青服4人の中央に、口周りに黒い髭を蓄えたやや年配の男を見る。

青服一式に身を包んだ背丈は光秋よりも少し低いのだが、細く締まった険しい顔立ちは、それだけで見る者に威厳を感じさせる。制帽を被っているため髪型はわからないが、見える範囲では短く切り揃えているようである。

「！」

行き過ぎる直前に男は目だけを動かして光秋を一見し、その視線に光秋は人型から感じたのとは別種の威圧感を覚え、思わず生唾を飲む。

男を中心にした青服の一行が通り過ぎると、3人は敬礼を解き、

「「はあー……」」

と、思わず安堵の息を漏らす。

「……すごい雰囲気の人でしたね」

脇のペットボトルを右手に持ち直しながら、光秋は率直な感想を述べる。

「そういえば、加藤は知らなかったんだな。あの人が誰か」

小田がペットボトルを右手に持ち直しながら言う。

「?……そんなにすごい人なんですか?」

「毛^{マオ}アジア方面司令。東アジアとその周辺一帯の全軍を管理する、この辺の最高責任者で、何者にも媚びず服せすの姿勢から、通称『黄金の虎』って呼ばれてる」

「司令……虎ですか……」

伊部の説明に、光秋は呆然としながら返す。

「……まさかとは思うが」

「なんです?」

部屋への歩みを再開しながらの小田の呟きに、光秋が訊く。

「いや、司令今日の聴取に参加するんじゃないだろうなあと思つて……」

「あり得ますね。最高責任者が散歩でこんな所に来るわけないし……一応、ESOは合軍の下部機関でもあるんだし……」

伊部が応じる。

「軍のトップが参加するかもしれない……!……よく考えればそうだが、つくづくとんでもない事態になってるんだな……」

小田と伊部の会話から、光秋は改めてことの重大さを認識し、精神的な重圧が心なしか増したと感じる。

部屋の前に着くと、小田を先頭に中に入る。

「戻りました」

「ウム。伊部も一緒か？やけに遅かったな？」

「すみません。ちよつと時間掛かつちやつて」

部屋の奥側正面のソファアに座る藤原にドアの前に立った伊部が応じている間に、光秋は右の長ソファアの奥側に移動し、竹田にペットボトルを渡す。

「どうぞ」

「サンキュー」

応じつつ、竹田はフタを開けて中のお茶を飲み始める。

小田も移動して藤原にペットボトルを渡しながら、

「そういえばさつきそこで、毛司令を見かけましたよ」

と、先程のことを報告する。

「毛司令だと？」

ペットボトルを受け取りつつ、藤原は束の間目を丸くする。

「一尉の予想では、聴取に参加するかもしれないですよね？」

竹田の右隣に立ったままペットボトルのフタを開けつつ、光秋は藤原の右隣に立つ小田を見ながら言い、お茶を一口飲む。

「ああ。その可能性大だろう」

返すと、小田もお茶を一口飲む。

「毛司令か……ウーム……」

「なにか？」

腕を組んで険しい顔をする藤原に、光秋は竹田の左隣に座りながら訊く。

「いや。司令は、指揮官としては非常に優秀で知られているが、同時にタカ派の筆頭としても有名でな。少々強引なところがあつてな……」

——タカ派の筆頭……

藤原の説明に、光秋は綾のことを思い出し、左前のソファーでお茶を飲む伊部を見やる。

——まさか、綾が生まれるきっかけになった計画も、その人の指示で？……いや。決めたつけはよそう。情報が少なすぎる——

一瞬浮かんだ疑念を隅に押しやると光秋は、またお茶を一口飲む。

と、ドアがノックされ、

「失礼します」

と、緑服一式を着た男が入ってくる。

「聴取の時間になりましたので、部屋までのご案内に参りました。1人ずつ案内いたし

ます。まずは加藤二曹」

「はい！」

突然の呼び掛けに、光秋は慌ててペットボトルのフタを閉めてテーブルの上に置き、すぐに立ち上がる。

襟周りと制帽の具合を確認すると、迎えの緑服の後に続いて部屋を出、その背中を追う。

——1人ずつなのか……

そう思いながらしばらく廊下を進むと、正面にドアが現れる。

迎えはその前で立ち止まり、

「こちらです」

と、そのドアを示す。

光秋はそのまま歩哨になった迎えに一礼すると、もう一度襟周りと制帽を確認し、

「……」

一つ深呼吸をしてドアをノックする。

「加藤光秋二曹、入ります」

言いながらノブを回し、部屋の中に入る。

正面には長テーブルを挟んで5人の高官がおり、中央に茶色いスーツ姿の東局長が、

その左隣には毛司令が座っている。後の3人は光秋の知らない顔だが、いずれも壮年くらいに青服である。加えて毛の右後ろには、若い男の青服が1人立っている。

「よく来たな。まあ楽にして、座ってくれ」

「はい」

東の言葉に若干緊張を含んだ声で答えると、光秋は高官たちの正面に設置された椅子に腰を下ろす。

「まず、名前と所属、階級を述べてくれ」

「はい。超能力者支援機構、京都支部実戦部隊一般、藤原隊所属、加藤光秋二曹です」

手前の録音器の電源を入れた東の問いに、光秋は緊張を抑えることを意識しながらよく通る声で答える。

「早速だが、昨夜起きた京都支部襲撃について話してくれ」

「はい……」

毛の左隣の高官に応じると、光秋は昨夜のことを話し始める。

夜警のために医療棟の見回りをしていた際、最上階で黒い球体に遭遇したこと。

「私はそれを、黒球と呼んでいます」

「名前など後でいい。続けてくれ」

「はい……」——余計だったかな？……——

高官たちの眩きに、光秋は居心地の悪さを感じる。
と、

「わかった。さがってよろしい」

「はい」

東の指示に応じると、光秋は椅子から立ち上がり、高官たちに敬礼をして部屋を出る。
ドアを開けると、歩哨になっていた迎えがそれに気付く。

「お疲れ様でした。先程の部屋までご案内いたします」

「はい」

応じると、迎えの背中を追って後に続く。

——……あ……入った時に敬礼するの忘れた……—

歩きながら失敗を思い出し、少々恥ずかしくなる。

4 1 東京本部にて

藤原三佐たちが待つ部屋の前に着くと、光秋は迎えが開けたドアをくぐる。迎えはその後ろから、

「次、伊部二尉お願いします」

と、部屋の中に呼び掛ける。

「はい」

応じて部屋を出ていく伊部を見ながら、光秋は竹田二尉の左隣に座る。

「どうだった？司令いたか？」

竹田の問いに、光秋はテーブルの上の飲みかけのお茶を一口飲んでから答える。

「……はい。あと東局長も。他にも3人軍の高官がいましたが、誰かまではわかりません」

と、光秋の正面に座る小田一尉が言う。

「……終わったんなら、ニコイチ取ってきたらどうだ？調査とか修理とかももう終わってるだろうし」

「いや、でも、ここで待機してなくて大丈夫ですか？」

言いながら、光秋は部屋の奥に座る藤原を見る。

「いや、別に構わんだろう。お前はもう済んだのだし、なにかあったら農らが連絡すればいい。行つてこい」

「……わかりました」

そう言われると、光秋は立ち上がってドアへ向かう。

「行き方、わかるか？」

「二度行つたんで、多分大丈夫だと思います」

小田の問いに応じると、光秋は部屋を出て先程のエレベーターに乗り、1階のボタンを押して壁に背中を預ける。

「……にしても、さっきはやつちまったなあ……ま、次気を付けよう。もつとも、こんなことに参加する機会がまたあるつても困ったもんだが……」

そんなことを考えている間にドアは閉まり、エレベーターは下へ向かう。

少しして、エレベーターは1階に着く途中で止まり、ドアが開く。

と、

「!？」

開いたドアの真ん前に、緑服姿に長い茶髪の女——曾我地球ガイアを認め、光秋は心臓を跳ね上げる。

「……………」

曾我の方も一瞬驚いた顔をするが、すぐにそれを妖しい微笑に変えてエレベーターに乗り込む。

「あら、メガネのワンちゃん？こんな所で会うなんて、奇遇ね」

「曾我さん……………」

緊張した声で応じる間にドアは閉まり、エレベーターは降下を再開する。

「京都でひと騒ぎあったって聞いたけど、まさか本部に来るなんて……………で？時間は開いちやったけど、あの時の話、してくれる？」

「話？……………」

真正面に迫ってくる曾我に、光秋は首を傾げながら応じる。

「演習に乱入してきたロボットのこと。話は後って言ったつ切り、あなたとはあの後会えなかったから」

「……………あ……………そう言えば……………」

言いながら、UKD—02に迫る曾我をニコイチで掴んで強い調子で離脱するように言った時のことを思い出す。

「で？結局アレは何だったの？」

「……………僕も詳しいことは……………」

「恍けないの!」

「!.....」

曾我の強い口調に、光秋は震え上がる。

「あの時の様子は何か知ってるって感じだったし、突然ロボットと消えたと思ったら、ソレ倒した状態で戻ってきて、おまけにヘトヘトになってたじゃない!」

「!.....あの時、いたんですか?」

「遠くからだけだね。それでもわかりやすいバテ具合だったし、ロボットはお腹に大穴開けてたし!.....ロボットもそうだけど、あなた何者?」

迫っていた体を離しながら、曾我は先程より落ち着いた調子で問う。

「.....演習の時のことに関しても、僕自身のことに関しても、僕からは何とも言えません.....一つ言えるのは、それらが上位機密に属することで、僕の一存では話せないということです」——タッカー中尉たちには話したが、あれはある程度親密だったからだ。曾我さんとは殆ど交流ないし、然るべき立場の人でもない。さすがに許容範囲外だ!——

そう考えつつ、光秋は曾我の目を見てはつきりと返す。

「.....機密じゃあ、しょうがないか.....なーんか上手く言い逃れられたって感じだけど.....」

「.....よかった——」

多少不満を含んだ様子で曾我は応じ、光秋は内心安堵しつつ一礼で返す。

そこでエレベーターは1階に着き、開いたドアから光秋が降りるのに続きながら曾我が訊いてくる。

「ところで、どつか行こうとしてたの？それくらいは教えてくれてもいいでしょう？」

「ニコ……UKD-01、あの白いのの修理を頼んであつて、ソレを取りに」

「そう……それ、アタシも見に行っちゃダメ？」

「え？……なぜです？」

「別に。ただ、面白そうだから」

曾我の唐突な頼みに、光秋は少し考える。

——修理の見学くらいなら、いいか？……いや、修理つてことは、あのブロックがあるかも。アレを見せるのは流石にまずいか……——「と言つても、修理なんてもう終わつてると思いますし、仮にやつてたとしても、内部構造の機密保持やら、作業の邪魔になるやらで入れないと思いますよ」

「邪魔は悪かつたわね」

「すみません……とにかく、行つたところで作業は見れないでしょうし、せいぜい棒立ちの01が見えるくらいですよ？」

「別にそれでもいいわよ。機密にしたつて、見て大丈夫なくらいになるまで外で待つて

るし。アタシ今時間あるから」

—それなら……いいか?こう来ると断る理由もないだろうし……—「わかりました。ただ、スタッフさんの方にも確認取りますから、見れるとは限りませんよ」

「わかったわよ。で?どこでやってんの、それ」

「こつちです」

応じると、光秋は曾我を伴って先程の格納庫へ向かう。

記憶を頼りに廊下を進み、外に出、ニコイチを置いていった格納庫の前に着くと、後ろの曾我を見やる。

「ちよつと待つててください」

言い残すと半分開いているシャッターをくぐり、大河原主任を捜す。

「……大河原主任!」

ニコイチの足元に大河原を見つけると、速足で歩み寄る。

「おお、二曹」

「作業、終わりましたか?」

「破損箇所の確認と撮影は殆ど終わったんだが、修理がまだだ」

「そうですか……実はニコイチを見たいと言っている人が外にいます、入っても大丈夫ですか?」

「誰だ？」

「本部の特務部隊の人です。先日 of 演習で少しお世話になって」

「ESO の者か……だが、今関係者以外に入つてこられるのは困るな」

「では、作業が終わつてからは？」

「それならいいが」

「わかりました。ちよつと待つててください」

言つと光秋は、速足で曾我の許へ向かう。

「まだ作業の途中なんで、もう少し待つてください」

「わかつた。どれくらい？」

「そこまではわかりませんが、作業量自体はあと少しみたいです。終わリ次第呼びに来ます」

必要事項を伝えると、大河原の許へ戻る。

「呼びに来るまで、中見ないでください」

「わかつてるわよ」

シャッターをくぐる前の念押しに、曾我は心得ている様子で応じる。

大河原の許に着くと、光秋は何をすべきか問う。

「待つようにと、中を見ないように言つてきました。で、修理はどうします？」

「その前に、念のため足の裏も調べておきたい。一度ニコイチを浮かせてくれ。修理はその後だ」

「わかりました」

応じるとニコイチに乗り込み、認証が済むや右ペダルを軽く踏んでニコイチを１メートル程上昇させる。

すぐにカメラを持ったスタッフが２人駆け寄り、左右の足の裏を調べていく。

２人が足の裏から出るのを見ると、光秋はニコイチを着地させ、外音スピーカーを入れる。

「主任、調査終わりました。修理の方は？」

（少し待ってくれ。それと、スピーカーはやめて通信機で話してくれ）

「はい」

応じると右肘掛けに収まっている通信機を左耳に付け、大河原の顔を思い浮かべる。

「主任？通信機付けました」

（わかった……おお。来たな）

通信機越しに大河原の声を聞くと、光秋はニコイチの足元に立つ大河原の視線を追ってシャッター側を見る。

と、大型の木箱がスタッフの押す台車に載って運ばれてくる。

（この中に例のブロックがある。出して使ってくれ。それと調査の結果、破損箇所は左腕——その大きな傷だけだ）

右隣に着いた箱を指しながら大河原は説明し、その間に台車を押してきたスタッフによつて箱の蓋は取られ、演習の時に神モドキから送られた白いブロックが顔を出す。

「了解です」

応じると、光秋は屈んで右手を伸ばしてブロックを取ろうとする。が、ニコイチの指の太さが箱の隙間に入らず、左手で箱を持つてそれを右手の上で反すことでブロックを出す。

右手にブロックを持つと、ソレを左手首の傷口に当て、塗り薬を付ける要領で傷を塞いでいく。

傷を完全に消すと、ブロックを箱に戻して台車に載せる。

「修理終了しました」

（よし。見学したいという人を呼んできていいぞ）

「わかりました」

通信機越しに大河原に応じると、光秋は中腰になっているニコイチに左膝を着かせ、コクピットを降りて曾我の許に速足で向かう。

「曾我さん。お待ちせしました」

「おつそーい」

「すみません。こつちです」

曾我の軽い不満に応じつつ、光秋は倉庫の中に招く。

「アレです。01」

「……演習の時も見ただけど、やっぱり大きいわね」

右手でニコイチを指す光秋に、その左後ろに立つ曾我は顔を上げながら応じる。

「二曹、その人か？見学したいというのは」

「はい」

大河原の問いに答えつつ、光秋はその許に歩み寄る。

「曾我ガイア。東京本部所属の特エスです。どうぞよろしくお願いします」

「こちらこそ、大河原です。よろしく」

軽く頭を下げながらの曾我の自己紹介に、大河原は微笑んで返す。

——人はこの淑やかさに騙されるか……伊部さんの時も感じたが、やっぱり女は怖い——
初対面の時の様な品がある自己紹介を行う曾我を横目で見つつ、光秋は背筋を若干震わせる。

「ねえ、操縦席見せてよ」

「それは……どうです？主任」

曾我の頼みに、光秋は大河原を見る。

「まあ、ESOの人間だし、見るだけならな。ただ、撮影は遠慮してください」

「わかりました」

「じゃあ……」

曾我が応じると、光秋はリフトで上昇して席に着き、認証を済ませると足元に曾我を
捜す。

が、

「……あれ？」

足元には大河原しかない。

と思っていると、

「……うお!」

突然モニター一杯に曾私の顔が映り、慌ててハッチを開けて外に出ると、ハッチの上
に屈んだ曾我を見る。

「ちよつと! いきなり足元動かしたら危ないじゃない!」

「そんな所にいたらどっち道危ないですよ。そもそもどうやってここに……ああ、そう
か。サイコキノでしたね」

怒りながら言う曾我に、光秋はそんなことを思い出しながら返す。

「そうよ。大河原さんに、ここEジャマー点いてるか訊いて、点いてないって言うから自分で上がってきたの」

「なるほど……」

「まあいいわ。それより……」

機嫌を直しながら言う、曾我はコクピットに歩み寄る。

「この前は気付かなかったけど、けっこうスツキリしてるのね？」

「はい……ひよつとして、曾我さんもこういうの好きなんですか？」

右隣から操縦席を好奇心の目で覗き込んでいる曾我に竹田の姿が重なったので、試しに訊いてみる。

「別に。ただ物珍しいから見てるだけだけど。そもそも『も』ってなに？」

「ウチの隊の先輩に、こういうメカっていうか、そういうのが好きな人がいまして」

「そう……」

興味がない様子で返しつつ、曾我は操縦席を観察し続ける。

と、

「光秋くん！」

左下から名前を呼ばれ、顔を向けるとニコイチを見上げる伊部を見つける。

「誰？」

光秋の視線を追った曾我が訊く。

「ウチの隊の先輩です」

応じつつ、光秋はニコイチの右手を伊部の許に差し出し、その上に伊部が乗ったのを確認すると慎重にハッチの上に運ぶ。

「伊部さん、もう終ったんですか？」

「うん。それで、光秋くんこっちに行つたつて三佐に訊いて来たんだけど……そつちの人は？」

掌からコクピットに移りつつ、伊部は曾我を見ながら訊く。

「曾我さんです。ほら、演習の時に会った」

「ああ、光秋くんの手合わせしてくれた人」

光秋の説明に、伊部は個人同士での練習のことを思い出す。

「あの時はどうも。先輩がお世話になりました」

「いえ、別に。ワタシから言つたことですから」

伊部の軽く頭を下げながらのお礼に、曾我は品がある調子で返す。

と、

「?……」

「なにか？」

軽く首を傾げる伊部に、曾我は不思議そうに問う。

「ああいえ。演習で見かけた時は、なんていうか……もつと気が強い人かと思ったんですけど。ほら、一人でアンノウンに突っ込んでいたり、光秋くんに止められた時ごく怒ったりしてたから」

「あー、あれは……お、おほほほほ、おほほほほ……」

伊部の指摘に、曾我は狼狽の表情を浮かべ、あからさまな作り笑いをしながら自分の下にゆつくりと降りる。

――逃げたな……――

着地後に駆け足で格納庫から出ていく曾我を横目で見ながら、光秋は少し気まずい思いを抱く。

「……僕たちも行きますか。修理も終わったし」

「そうだね」

応じると伊部はニコイチの掌に移り、光秋はそれを慎重に地面に下ろす。伊部が掌から降りたのを確認すると、光秋もリフトで下へ降り、ニコイチをカプセルに収容してそれを上着の内ポケットに入れる。

「……」

大河原を見かけると、光秋はその許に速足で歩み寄り、伊部もそれに続く。

「主任。本日はありがとうございます」

「なあに。俺たちはそれが仕事みたいなもんだし、そもそも写真を撮っただけだ……そうそう。昨日君が言っていたサンプルのことだがな、グラウンドをくまなく探したら、大小いくつかの破片を採取できた。UKD-02やニコイチのブロックと合わせていい研究材料になるだろう。こちらこそ礼をいう」

「いえ……」——そうだ。そんなこと言ったな。眠かったから記憶に残りにくかったのか？——

返しつつ、光秋は昨夜のことを思い出す。

と、大河原は光秋の左隣の伊部を見る。

「そうそう伊部二尉。頼まれていた補助席ができたんで、一緒に持つていってくれ」

「ありがとうございます！」

嬉しそうな表情を浮かべながら、伊部は格納庫の奥に向かった大河原に深く頭を下げる。

戻ってきた大河原から一抱え程の大きさの二つ折りになっている席を両手で受け取るともう一度頭を下げ、光秋もそれに倣うと、2人は倉庫を出て藤原たちが待つ部屋へ向かう。

「……持ちましようか？」

「大丈夫」

補助席を抱え直しながら、伊部は光秋の申し出を断る。

「それより、これで今まで以上に光秋くんの補佐ができる。きちんと腰を落ち着けられるようになったからね」

「確かに」

「光秋くんの目の代わりだけじゃなくて、他にもなにかできるかも」

「なにかって？」

「それは……これから見つけていこう」

「……僕としては、目代わり耳代わりだけで充分なんですけどね」

「光秋くんはそれでいいだろうけど、私だってチームに貢献したいの。もっと積極的にね」

「わかってますよ」

応じながら、光秋はドアを開けて伊部を先に入れ、自分も中へ入る。

少し進むと2人はエレベーターに乗り込み、光秋は奥右端の壁に背中を預ける。

と、

「……!?!」

一緒に乗り込んで前に立った緑服の男の横顔を見る。

——いやに若く見えるな……中学生くらい？でもそんな年の子があんな格好してるわけないし……童顔ってやつか？——

背丈こそ光秋より頭一つ分小さいくらいだが、制帽以外の緑服一式を着た男の顔付きには明らかな幼さがあり、そんな外見上の年齢好と、ESOという公的機関の制服を着ているという目の前の事実、光秋は違和感を覚えるのである。

少しして男はエレベーターから降り、光秋はなんとなしにその背中を目で追う。

「……どうしたの？」

エレベーターが動き出すと同時に、光秋の左隣に立つ伊部が訊いてくる。

「どうしたって、なにが？」

「さつき乗り合わせた人のこと、ずっと見てたじゃない」

「ああ。いやに若いけどいくつかな？童顔ってやつかな？って」

「ああ、確かにね……でも、やっぱり見たままの年じゃないかな？特エスかも」

「特エス？」

思わぬところで出た単語に、光秋は訊き返す。

「どういうことですか？なんで見たままの年——中学生くらいなら特エスなんです？」

「子供でも、ある程度能力が強いと特務部隊に入ることがあるの」

「え！……それって大丈夫なんですか？」

「もちろん、本人や保護者の合意を得てからだけどね。さっきの人、曾我さんだっけ？あの人もけっこう若かったし、演習の時も慣れた感じだったから、小さい時にESOに入ったのかも」

「……なるほど」――確かに念力の使い方が上手いというか……戦い慣れしてたな――

伊部の指摘と演習前の手合わせの時の記憶から、光秋は伊部の予測を半ば確信する。と、

「曾我さんかあ……」

伊部が天井を見ながら呟く。

「なんか、ちよつと変わった人だったね……人によつて態度がはつきりしてるっていうか……」

「確かに……悪い人ではないんでしょうけど、僕は少し苦手ですね。ああいう気の強いタイプは……」

曾我の顔を思い浮かべながら、光秋も呟く様に言う。

少ししてエレベーターは30階に着き、2人はエレベーターを降りて部屋へ向かう。

部屋の前に着くと光秋はドアを開け、伊部、光秋の順に中に入る。

「遅かったな？」

「ちよつと話し込んでたんで……三佐は？」

左の長ソファアの奥側に座る小田に返しつつ、光秋は空の奥側のソファアを見ながら訊く。

「聴取中。三佐で最後だ……ニコイチの方は、もう大丈夫なんだな？」

「はい。損傷は左腕だけでしたし、それも例のブロックで修復しました」

小田の問いに、光秋は右の長ソファアの手前側に座りながら答える。

「……伊部、それは？」

光秋の右隣に座る竹田が、光秋の正面に座る伊部が抱えている補助席を見ながら訊く。

「この前大河原主任に頼んでおいたニコイチの補助席です。できたから持っていつてくれって」

答えつつ、伊部は補助席をソファアの右端に立て掛ける。

「……ところでさ、加藤」

「はい？」

竹田の呼び掛けに、光秋は顔を向ける。

「演習の時に来たあのブロック、ニコイチの予備部品での？アレなんて呼んでんだ？」

「なんてと言つても……ただブロックとしか。他になんて言えば？」

「せっかくだからさ、アレにも名前付けてみようぜ。ニコイチの装甲材みたいなもんだ

から……『ニコイチウム』ってどうよ？」

「なんですそのマンガみたいなネーミングは？」

竹田の幾ばくかの真剣さを含んだ言葉に、光秋は少し呆れた様子で返す。

「いいじゃねえか。格好いいし」

「格好いいって……」

「じゃあ他に案あるのかよ？」

「……今まで通り、『ブロック』でいいでしょう？」

「それじゃ味気ねえだろう。せめてもう少し考えてさ」

「もう少し……じゃあ、『Nニウム』とか？」

「なんだよそれ？」

「いや、ニコイチの物質だから、頭文字を取って、『Nニウム』です」

「オレには『ブロック』と五十歩百歩だよ」

「……そもそも、なぜアレにも名前付けるんです？」

「スーパードボットの素材にはそれっぽい名前を付けるのがお約束なんだよ」

「はあ……」

「……」

竹田のマンガ的な、しかしあくまで真剣な発言に、光秋は返事に困り、小田と伊部は

少し笑う。

「それにだ、気晴らしだよ。気晴らし。ユーモアの一つもなきやあ、息が詰まるつてもんだ」

「ユーモア、ですか?……」

続けて言われた竹田の言葉に、光秋は若干の理解を覚えるものの、いま一つの煮え切らなさを感じる。

と、

「竹田にしちゃあ、珍しくまともなこと言うな」

「ほんと」

小田が竹田を見ながら微笑を浮かべ、伊部もそれに続く。

「それどういう意味っすか?」

竹田が顔をしかめるが、小田はそれにかまわず光秋を見る。

「まあ、確かに仕事柄、面白いことの一つもなきやあ堪えるな。それに、固有名詞があるとなにかと便利だし、いいじゃないか?『ニコイチウム』」

「……それもそうですね」

小田の説明に、光秋は先程よりは納得する。

――確かに固有名詞があれば、それを言うだけで通じる。現に僕も、ニコイチの各所に

いろいろ付けたしな。それと、『ユーモア』か……ただ……—「結局、その名前つてのは『ニコイチウム』なんですか？」

3人の顔を見回しながら、光秋は一番気になっている部分を訊く。

「いいだろう？ かつこいいし」

竹田が応じる。

「一応、光秋くんも前に似たようなこと言つてたよね？」

「なんだよ？」

「あー……Nメタルつて……といってもあれは、ニコイチの装甲を指して言つたんです
が……」

伊部の言葉を受けての竹田の問いに、光秋は少々気恥ずかしさを覚えながら答える。

『Nメタル』ねえ……じゃあ、ブロックである分には『ニコイチウム』、装甲になったら『Nメタル』でどうだ？」

言いながら、小田は光秋と竹田を見回す。

「んー……まあ、加藤の案も微妙に捨て難いし……いいか！」

「僕はどっちでも……」—なにが違うんだ？……—

少し悩んでから了解する竹田に、光秋は素朴な疑問を抱く。

「よし！じゃあ、ブロックのことは『ニコイチウム』、装甲になったら『Nメタル』ってことで決まりだな」

そんな両者の顔を見回しながら、小田がまとめる様に言う。
と、

「なにが決まりなんだ？」

藤原が訊きながら部屋に入ってくる。

「ちよつとニコイチのことで……それより、聴取どうでした？」

応じつつ光秋が問う。

「儂らの報告を基に、軍とESOの上層部で協議するそうだ。その結果は追って伝えると言っていた」

「……わかりました」

奥側のソファアーに腰を下ろしながら答える藤原に、光秋は若干の不安を覚える。
と、

「……そういえば、今何時？」

伊部が視線を寄こしながら訊き、光秋は腕時計を見る。

「1時15分です」

「お昼過ぎかあ……どうりでお腹空くと思った」

「飯にするか。局長が、帰りのヘリの準備に少し時間が掛かると言ってたしな」

「本部の食堂に行けるんすか！ヨッシャ！」

伊部の呟きに藤原が答え、それに竹田が嬉しそうに応じる。

「よし。各自荷物をまとめて食堂へ向かえ」

「「「はい」」」

藤原の号令に4人は応じ、各々ソファアールから立ち上がって自分の荷物を持つ。

光秋も飲みかけていたお茶をカバンに入れると、4人に続いて部屋を出、藤原を先頭にして最寄りのエレベーターへ向かう。

開いたドアから一行はエレベーターに乗り込み、光秋は入口から見て手前右端に立ち、壁に背中を預ける。

と、

「こうなると、あの黒い奴らにも名前付けた方がいいか？……どう思う加藤」

「……二尉に任せます」

右隣から半ば真剣な様子で意見を求めてくる竹田に、光秋は無感動に返す。

「なんの話だ？」

「いや、さつき竹田が、ニコイチのブロックに名前付けようって言い出しまして……」

光秋の正面に立つ藤原の問いに、藤原の左隣に立つ小田が先程の自分たちのやり取り

を語りながら説明する。

その間にエレベーターは目的の階に着き、藤原を先頭にした一行は食堂へ向かうと、

「……？」

光秋は、補助席を抱えた伊部が藤原の右隣に寄つてなにごとか話すのを見る。

「……ダメだな――」

2人の会話を聞こうと意識を向けるが、少し距離があること、2人の話す声がそれ程大きくないこと、なにより左前を歩く竹田の、

「なにがいいかなあ……敵だからあんまりかつこよくするのもなあ……」

などという独り言に掻き消されて、2人がなにを話しているのか全く聞こえない。

そうしている間に一行は食堂の入口をくぐり、入つてすぐ右側にあるメニュー表を見る。

「……日変わり定食にするか――」

光秋も表を見ながらそう考えていると、

「光秋くん、なににする？」

左隣に立つ伊部が訊いてくる。

「日変わり定食に。伊部さんは？」

「んー……私もそれにしようかな」

「みんな決まったか？」

「「はい」」

一番左に立つ藤原が一同に訊き、4人はそれぞれに返す。

「それなら、荷物を置きに行くぞ。席も確保したいしな」

言うのと藤原は奥に進み、一同もそれに続く。

昼時を少し過ぎているものの、テーブルは6割程が埋まっている。それでも受付近くに全員が座れる場所を見つけ、それぞれ椅子の上や脇に荷物を置いて受付に向かう。

トレーを持って注文の品を受け取り、支払いを済ませてテーブルに戻ると、全員で食べ始める。

「……そういえば伊部さん、さっき三佐となに話してたんです？」

テーブルの右端で白飯を口に運びつつ、光秋は左隣でみそ汁をすする伊部に訊く。

「ああ、後で話そうと思ってただけだね、大河原主任にもらった補助席の座り心地を知りたいから、私帰りはヘリじゃなくてニコイチにしたいって頼んだの。もちろん光秋くんがよければだけど」

「ああそつか……僕はいいですよ。ちょうどいい機会だし。そんな大したことでもないし」

「じゃあ、帰りお願いできる？三佐も光秋くんがよければいいって言ってたから」
「はい」

応じると、光秋は大皿に盛られたトンカツを一切れ口に運ぶ。
と、

「……すみません。藤原隊のみなさん、ですよね？」

やや控えめな声が掛かる。

「……！」

光秋は口の中の物を飲み込みながら声がした方に顔を向けると、そこにトレイを持った見覚えのあるスーツ姿の女性が立っている。

「やつぱり、加藤君。お久しぶりです」

「沖一尉？……お久しぶりです」

思いがけない人との出会いに若干驚きつつ、光秋は演習前に見た肩に届く程度の長さの髪をした沖一尉に応じる。

同時に、

——今回はちゃんと思いつけた！——

心中に小さな満足感を呟く。

「沖一尉？……おお。局長秘書のな」

伊部の左隣に座る藤原が思い出した様に言う。

「本日はお疲れ様でした。私はまだ聞いていないんですが、どうでしたか？聴取」
「それより、立ち話もなんだから座ったらどうです」

沖の問いに答える代わりに、伊部の正面に座る小田が自分の右隣の空席を示す。
「いいんですか？」

「どうぞ。食事は大勢の方がいいでしょうし」

席を見ながら問う沖に、伊部が促す様に返す。

「それに、こんな美人と飯が食える機会そうそうねえもんな」

光秋の正面に座る竹田が笑みを浮かべながら言う。

「竹田！」

「冗談すよ」

「[「……」]」

小田の叱る声に竹田は表情を変えずに返し、光秋、伊部、沖は苦笑いする。

「では、お言葉に甘えて……」

苦笑いを浮かべつつ応じると、沖は小田の右隣に移動し、トレイをテーブルに置こうとする。

と、

「うお!？」

「すみません!」

トレーの端が小田の右肩に引っ掛かり、その弾みでトレーの左端に置いてあったコップが倒れ、中の水が小田の上着の右肩を濡らす。

「いや、大丈夫です。時間が経てば乾きますから」

突然のことへの驚きを抑えつつ、小田は沖を見ながら努めて冷静に言う。

「でも制服びしょびしょ!ちよつと待ってください!」

動揺を隠さずに言う、沖は慌ててトレーをテーブルに置き、ズボンの右ポケットからハンカチを取り出して小田の右肩を拭く。

「いや、本当に大したことないですから」

顔を向けて言いながら、小田は自分の肩を拭き続ける沖の右手に左手を伸ばし、小田の手が沖の手に触れる。

直後、

「……………」

沖は肩を拭いていた手を止め、小田も手を伸ばしたまま固まってしまふ。

「……………」

一連の光景を小田の肩が濡れたことへの若干の動揺を覚えつつ見ていた光秋は、明ら

かに硬直してしまった2人の頬が心なしか赤くなるのを見る。

「……そう……ですか？……それじゃあ……」

か細い声でそれだけ言うと、沖は右手を引いてハンカチを仕舞って席に着く。

「……………」

小田も左手を戻し、気まずそうな視線を目前のトレーに落とす。

その2人の様子と、それを困った顔で見る藤原と伊部、面白いものを見る目を向ける竹田を確認し、

「……なんか尻の座りが悪いな……話題を変えんと……」

と、光秋は未だにトレーに目を落とす小田に顔を向ける。

「そういえば一尉、ここの道に詳しくかったですよね。なにかやつてたんですか？」

「え？あぁ……」

ハツとしつつ、小田は顔を上げて光秋を見る。

「陸軍からESOに移った話は前にしたよな」

「はい」

「その時、俺いったん本部に、ここに来たんだよ。1ヶ月くらいで藤原隊への配属が決まって、すぐに京都に移っちまったけどな」

「なるほど」

「陸軍にいたんですか？」

沖が小田を見ながら訊く。

「ええまあ……一応、元戦車乗りで……と言っても、すぐにへばつてやめてしまいました
が……まあ、だからこんな格好してるんですがね。ハハッ……」

歯切れが悪そうに言つてぎこちなく微笑みながら、小田は上着の襟を摘まんで示す。

「そう、ですか……」

沖もぎこちなく返すと、迷つた様にトレーの上の箸を右手で持つて食事を始める。

——……まいつたな。また……そうだ——「そういえば、三佐もここに詳しい感じがしま
したが？ さつきも真つ先に食堂に向かつたし」

またも尻の座りの悪さを感じた光秋は、藤原に話を振る。

「ん？……ああそうか、話してなかったな」

食事の手を止めながら、藤原は思い出した様に言う。

「僕は東京の出身でな。ここには何度か出入りしてたんだ」

「三佐も特エスだったんですか？」

「いや。超能力関係の検査やら相談やらだ。何度か声も掛けられたが、家の方針で全て
断つていた」

「断つた？」

「儂の家は、代々軍人の家系でな。子供の頃からずっと士官になることを期待されていた」

「……そうなんですか」

意外なところで藤原の家庭の事情を聞き、少し意表を突かれる。

「儂もそんな家で育ったせいとか、迷わず士官学校、いや、当時は防衛大学だったか？そこに進学して、士官になって、しばらく陸軍にいた……が、勤めてる間に仕事が肌に合わなくなつてな。小田と同じ様にESOに転職したというわけだ」

「……そうですか」

応じつつ光秋は、束の間黙った藤原の遠くを見る様な目に、漠然とだが暗いものを感じる。

「が、それは……少なくとも今は触れないでおこう。その方がいい気がする……」
直感的にそう断じると、みそ汁を一口する。

「……………」

「……………」

小田と沖が若干落ち着かない様子を見せるものの、6人は静かに食事を続ける。

結局少々居心地の悪い雰囲気の中で食事を済ませると、藤原隊一行と沖はトレーを片付けて食堂を出る。

と、藤原の携帯電話に着信が入る。

「はい?……了解した。すぐに向かう」

短く応じると、藤原は一行を見やる。

「ヘリの準備が整った。屋上に向かうぞ」

「「はい」」

藤原の指示に、藤原隊の4人は同時に応じる。

「京都に戻られるんですか?」

「ええ。もともと、聴取が目的で来ましたから……」

藤原隊一同を見ながら訊く沖に、小田がぎこちなく応じる。

「……それなら、その前に小田一尉、ちよっとお時間よろしいですか」

「はい?……」

沖のやや強い口調に、小田は首を傾げつつ応じると、沖の後に続いて近くのT字通路の左側に消える。

「?」

その2人の様子を、光秋は不思議そうに見る。

少しして2人は曲がり角から一行の許に戻り、沖一尉は一行に敬礼する。

「お手間を取らせて申しわけありません。帰路のご無事を」

「ウム。ありがとうございます」

「[[[-]]」

藤原の返事に合わせて一行は返礼し、沖は振り返って廊下の角に消える。

「なにしたんです？」

「……角に連れられて、アドレス交換してくれて頼まれた」

竹田の問いに、左手に持ったままの携帯電話を見ながら小田は呆然と答える。

「ヒュー！上杉がいたらなんて言いますかね？」

「勘違いするな！」

口笛を吹く竹田に、小田は少し焦りを見せつつも咎める声で言う。

「こんなことの後だ。今後も仕事で一緒になる機会も増えるだろうから、互いに連絡先は知っておいた方がいいと思ったんだ」

「『こんなこと』……」

小田の言葉に、竹田程ではないものの、2人のやり取りを若干の好奇心を持って見ていた光秋は、少々の不安を覚える。

「今後一緒にいる、か……それもそうだ。まさかあれで終わりじゃあるまい……」
思いつつ、黒い穴に消える顔の側面の装甲が抉れた人型を思い出す。

「まあ、小田の言うことはともかく、竹田。軽口もほどほどにしておけ。帰るぞ」

「……………」

藤原の声に、光秋は人型の記憶を隅に押しやり、一行は最寄りのエレベーターへ向かう。

エレベーターに乗り込んで一気に最上階まで上がると、屋上に通じる階段を上つて外に出る。

正面のヘリポートには来た時と同じ型のヘリ——UH—1Yヴェノムが停まっており、一行はその許に歩み寄ると、小田、竹田、藤原の順にヘリに乗り込む。

「では、儼らは先に出る。2人は京都支部に着いたら自主解散しろ。気を付けてな」

「了解です」

「ありがとうございます」

入口で振り返った藤原に、伊部と光秋はそれぞれ返す。

「あとの2人は別の物で帰る。出してくれ」

操縦席の方に向けて言うのと、藤原はドアを閉め、ヘリはローターを勢いよく回転させて屋上を飛び立つ。

少しの間それを見送ると、光秋は顔を下ろして左隣の伊部を見る。

「じゃあ、僕たちも帰りますか」

「そうだね。これも試したいし」

両手で抱えた補助席を見ながら伊部が返すと、光秋は上着の内ポケットに右手を伸ばし、カプセルを取り出そうとする。

と、

「……ここでニコイチ出して大丈夫ですかね？アレ5トンくらいはあるって……」

「大丈夫だと思うけど……念のため下行く？」

「……それがいいと思います。5トンが載ってゴトンと床が落ちたら洒落になんないし」

「アー……………」

「……ウフン！行きましょう」

伊部の若干困惑を含んだ苦笑いに咳払いをすると、光秋は階段を下りてエレベーターへ向かい、伊部も少し困った顔をしてそれに続く。

「言うんじやなかった……か？」

エレベーターに乗り込んで1階のボタンを押しながら、光秋は若干恥ずかしい思いを抱く。

「……とりあえず、格納庫区画で適当な所探しますか」

「そうだね」

光秋の確認に、右隣に立つ伊部は短く答える。

「……駄洒落か……光秋くんにもユーモアのセンスあつたじゃない」

「あまり面白くありませんが……」

微笑みを浮かべながら続ける伊部に、光秋は自嘲気味に返す。

1階に着くと2人はエレベーターを降り、裏口をくぐって格納庫区画に出ると、光秋は辺りを見回す。

「……ここを出してもいいですかね？ 通路の広さも充分あるし」

「そうね。いくらもないし」

伊部の返事を聞くと、右手を上着の内ポケットに伸ばしてカプセルを取り出し、その先端を前に向け、左膝を着いたニコイチを出す。コクピットに上がってカバンを右端に置いて制帽を脱ぎながら操縦席に着き、起動させる。

ニコイチが動き出すと、光秋はカプセルを右肘掛に収め、ハッチを開けて機外に出、右手を伊部の許に差し出す。

伊部がその上に乗るのを確認すると、右手を慎重にハッチの上に上げる。

伊部はすぐにコクピットに移り、左肩に提げていたカバンに被っていた制帽を入れて床に置き、補助席の取り付けを始める。

右側に付いている2つのクリップを操縦席左のパネルの脚のレールに掛け、左側に付いている2本の脚を伸ばし、二つ折りになっている背もたれを開いて椅子の形にする。

「よし。こんなところかな?」

「なんか、まさにバスの補助席ですね……そういえば伊部さん、前にそんなこと言ったっけ」

取り付けを終えた伊部を見ながら、光秋はそんなことを思い出す。

「正にそれがヒントなんだけどね……うん。座り心地もなかなか」

座布団くらいの厚さのクッションが敷かれた席に腰を下ろしながら、伊部は機嫌よく言う。

「じゃあ、操縦席下ろします」

「どうぞ」

伊部の返事を聞くと、光秋は操縦席を機内に下げてハッチを閉じる。

その間にシートベルトを締め、左隣に座る伊部も背もたれの肩の辺りから2本、腰の辺りから2本伸びたシートベルトを締めるのを確認すると、光秋は右足を右ペダルに掛ける。

「じゃあ行きます」

「了解……あ、そうそう。帰り、少しきつ目に飛んでみて。コクピットにも少し負荷が掛かる感じに」

「なぜです?」

「戦闘中……というか、急いで動いてる時の座り心地も確認しておきたいの。あと席の強度もね。問題があるようなら、明日大河原主任に頼んで直してもらわないと」

「なるほど。確かに、それは前提にすべきですね」――昨日の今日だしな……――

伊部の頼みに応じつつ、光秋は再び昨夜の人型を思い出す。

「了解です。それじゃあ、しつかり掴まってください。行きます！」

そう言つて人型の記憶を隅に押しやると、ペダルをゆつくりと踏み、ニコイチを数センチ浮遊させる。

と、

「！」

直後にペダルを一杯に踏み込み、ニコイチを一気に上昇させる。

上昇する間にパネルの地図を一見して京都支部の方向を確認し、雲の高さに達すると、間を置かずにその方向にニコイチを急転換させ、上昇時の速度のまま前進する。

少しして若干速度を落とすと、横目で伊部を見る。

「どうです？」

「今のところ大丈夫。席自体丈夫にできてるんだらうけど、やっぱりコクピットがよくできてるのかも」

「そうでしょうね」――なんだかんだ言つて、やっぱりよくできてるんだよね――

思いつつ、光秋は神モドキの白い顔を思い出す。

「もう少し続けます？……といっても、今飛んで思ったんですが、ただきつく飛ぶだけじゃ席の検証にならないと思います。一度三佐と模擬戦でもした方が早いかと」

「……それもそうかな……じゃあ補助席の試験はおしまい。これくらいの速度でゆっくり帰ろう」

「了解です」

応じると、光秋は地図に目をやって進行方向の確認をする。

「……そういえば、そろそろ誕生日でしたよね」

「あ、覚えててくれた？」

ニコイチを前進させながらなしに浮かんだことに、伊部は嬉しそうに返す。

「11月17日……女性にこんなことを訊くのは失礼かもしれませんが、いくつになるんです？」

「ナイシヨ。ていうか、失礼とわかってて訊いてくる？」

「嫌なら答えなくてもいいんです。ちよつとした好奇心ですから……ただ伊部さん、僕とそんなに歳離れてる感じはしません」

「まあね。少なくとも20代ってことは教えてあげる」

「……やっぱ、歳取ると歳を隠したがるものなんですかね？」

「女の場合は特にね」

「はあ……」

伊部の返答に、光秋は吐息の様な返事をする。

しばらく飛ぶと、ニコイチは京都支部の駐車場に降り立つ。

「お待たせしました……伊部さん？」

話し掛けても答えない伊部に首を傾げつつ、光秋は左隣を見る。
と、

「……………」

伊部は顔を前に垂らしてうたた寝をしている。

——歳の話が終わってから静かだとは思ってたが、いつの間に寝たんだ？——「伊部さん
！着きましたよ！」

思いつつ、光秋はシートベルトを外して左手で伊部の右肩を揺する。

「……………」

「着きましたよ」

「……………あぁ、ごめん。寝ちゃってた？」

「はい……そんなに座り心地よかったですか？」

ハツとした伊部に応じつつ、光秋はニコイチに左膝を着かせ、ハツチを開けて席を機

外に出す。

「そうかも。あと昨日からの疲れも出たのかもね。黙って青一色の映像見てたら、ついうとうとしちゃって」

「それは……」

目を擦る伊部に応じつつ、光秋は右手をハッチの上に載せ、操縦席から外して折り畳んだ補助席とカバンを持った伊部がその上に乗ると、慎重にそれを地面に下ろす。

伊部が手から降りたのを見ると、光秋は右の肘掛からカプセルを取り出し、カバンを右肩に斜め掛けして制帽を被り、リフトで降りてカプセルにニコイチを収容する。

「とりあえず、藤原三佐の指示通り自主解散ということで？」

ニコイチを収めたカプセルを上着の内ポケットに仕舞いながら、光秋は左隣に補助席を抱えて立つ伊部に問う。

「そうね。一応、私から三佐に連絡しておく。お互い早く帰って、ゆっくり休もう」

「はい。では、お疲れ様でした」

「お疲れ様でした」

言いながら、光秋と伊部は互いに礼をし、正門へ向かう。

門をくぐると、光秋は伊部を見、

「では、また月曜日に」

言いながら、もう一度一礼する。

「うん。また」

そう言つて返すと、伊部は右に曲がつて寮へ向かう。

「……」

少しの間その後ろ姿を眺めると、光秋は振り返つて、自分も寮へ向かう。

11月1日月曜日午前8時半。

ESOの制服一式を着て右肩にカバンを斜め掛けした光秋は、心なしか焦りながら京都支部の正門をくぐる。

――寝坊したなあ……やっぱ休みが入るとどうも怠けちまつて……―

と、

「光秋くん!」

「!」

後ろからの呼び掛けに振り返ると、緑服姿にカバンを左肩に提げ、両手で折り畳み式の補助席を抱えた伊部が駆けてくる。

「おはようございます」

「おはよう!」

返しながら、伊部は自分の左隣に並んでくる。

――…さて、今日も頑張るか！――
そんな伊部を一見して心中に眩くと、光秋は正面に建つ本舎へ向かう。

姉貴分の誕生日祝い編

42 プレゼントを買いに

11月1日月曜日午前8時35分。

伊部と共に出勤した光秋は、エレベーターで地下1階に降り、藤原隊の待機室へ向かう。

ドアを開けると、藤原三佐が部屋の奥側左の椅子に座って新聞を読み、小田一尉が左隅のロッカーの前に立っている。

「おはようございます」

「ウム。おはよう」

「おはよう。珍しいな。2人揃ってこんな時間に」

「うっかり寝過ごしまして」

「僕もです」

2人の挨拶に藤原は新聞を下ろして応じ、小田は藤原の右隣の椅子に座りながら返すと、伊部と光秋はそれぞれ答える。

と、

「そうだ三佐。今日お時間ありますか？」

抱えていた折り畳み式の席をテーブルの脚に立て掛けると、伊部は藤原の許に歩み寄る。

「なんだ突然？」

「光秋くんもだけど、先日大河原主任からいただいたニコイチの補助席の乗り心地を確かめたくて。単に移動するだけなら問題ないのは、本部からの帰路でわかつたんですが、戦闘中、というか、激しい動きの時の様子が知りたくて、三佐とニコイチの模擬戦をお願いしたいんです」

「……………そうだ。この間の帰りにそんなこと言ったな」

伊部の話を聞きつつ、光秋は先日の東京本部からの帰りにニコイチの中で交わした会話を思い出す。

「なるほど。確かに、早めに調べておいた方がいいことではあるか……………しかし、儂一人より戦車や戦闘機の大群を相手にした方が効果的じゃないのか？」

「それはそうです。でも実戦がいつ始まるかわからないし、場合によっては主任に改良を頼まない。もちろん、三佐の仰る様なことも検討しています」

新聞を畳んでテーブルの上に置いて考える顔をする藤原に、伊部はそう付け加える。

「……………よし。なら今から始めるか。加藤、今朝の訓練はニコイチでの模擬戦、ということ

でいいな？」

「僕はいけません。三佐や伊部さんが言うように、早めに調べるべきことですし——ニコイチの一層の慣熟にもなるしな。僕の場合は、最終的にはニコイチ頼りなんだから——」

藤原と光秋の応答に、伊部はそれぞれに頭を下げる。

「そうと決まれば、早速グラウンドに行くぞ」

「はい」

藤原の号令に伊部と光秋は応じ、部屋を出た藤原に続いて伊部もカバンを置いて席を抱えて続く。

光秋もカバンをテーブルのそばに置いて行こうとすると、

「頑張つてな。竹田が来たと言つとく……たくアイツは……」

小田が左手首の腕時計を見ながら呆れた様子で言う。

「ありがとうございます」

応じると、光秋は部屋を出て藤原と伊部が乗り込んでいる最寄りのエレベーターに駆け入る。

本舎裏のグラウンドに着くと、藤原は肩を回して準備体操を始める。

その間に光秋は上着の内ポケットからカプセルを取り出し、その先端を本舎の方に向

けて左膝を着いたニコイチを出現させ、コクピットに乗り込んで認証を済ませる。

起動するとハッチを開けて操縦席を機外に出し、右手に伊部を載せてコクピットに運ぶ。

コクピットに移るや、伊部は抱えていた折り畳み式の席を広げて操縦席の左隣に取り付け、それに腰を下ろしてシートベルトを締める。

光秋もシートベルトを締めると、足元の右側で準備体操を終えた藤原を見る。

「三佐！こっちの準備は整いました。いつでもかまいません」

「こっちもだ。いつでもいいぞ。で、具体的にどうする？」

返ってきた藤原の問いに、光秋は伊部を見る。

「とりあえず、厳しくいきますか？」

「そうね。今日この後の仕事に支障が出ない程度に厳しく」

伊部の意見を聞くと、光秋は藤原に向き直る。

「この後の仕事に支障が出ない程度まで厳しくお願いします」

「了解した」

応じると、藤原はグラウンドの本舎の反対側に駆け、ニコイチと対峙する形になる。

その間に光秋も操縦席を機内に下ろしてハッチを閉め、左耳に通信機を付ける。

（加藤は儼から寸止めを取ったら勝ち、儼はニコイチの頭を取ったら勝ち、5分程の時間

制、これがルールだ。いいか？)

「了解です」――8時50分か――

モニター越しの藤原の指示に、光秋は左手首の腕時計を見ながら外音スピーカー越しに応じる。

「三佐。時間は私が。今8時50分です。51分になったら開始で」

伊部も左手首の腕時計を見つつ、パネルに顔を近づけて言う。

(了解だ。まず礼から始める)

「はい」

藤原に応じると、光秋はニコイチを直立させ、藤原が頭を下げると同時に一礼させる。両足を肩幅に開き、両拳を腰の辺りに構える。

「……………」

自身も両手を操縦桿の上に、両足をペダルの上に置くと、小さく深呼吸する。

「始め!」

「!」

伊部の号令が響くや、光秋は左脚を大きく前に出して姿勢を低くし、腰溜めにした右拳を藤原に放つ。

が、

「!?」

跳躍してそれを避けた藤原はニコイチの拳の上に乗し、真っ直ぐに伸びた右腕の上を駆け昇ってくる。

瞬く間に右肩の上に達すると、藤原はニコイチの頭部右側を捉えて右腕を腰に引く。

「!」

横目でそれを見た光秋はすぐにニコイチを立ち上げ、その際の揺れでバランスを崩した藤原は肩から落ちる。

と、

「!?」

突然土煙が舞い上がり、モニター越しの光秋の視界を遮る。

「目潰しか! 何処だ?」

思いつつ周囲を見回して藤原を捜すが、視界は全て土煙で覆われおり、藤原どころか周囲の建物も満足に見えない。

「これじゃ曾我さんの時と同じだ!」

見付けられない焦りの中、演習前の模擬戦を思い出して歯軋りする。

直後、

「足元右!」

「！」

伊部の指示した方に目を向けると、藤原がニコイチの右足の上に飛び乗り、右肘の突起の上に飛び上がるのを見る。

「！」

咄嗟にニコイチを前に傾けて落とそうとするが、藤原はそれをものともせず、右腰の装甲板の上に飛び、そこからさらに右肩の上に飛び上がる。

「！」

光秋は左手を伸ばして肩の上の藤原を捕らえようとするが、藤原はそれをかわして左腕の上へ駆け、ニコイチの顔の真ん前に迫る。

左肘の上で右拳を腰に引いた藤原を見るや、光秋は左腕を払って藤原を落とす。

——対人、それも模擬戦となると、やっぱりやり辛い！——

再び土煙に消えた藤原を捜しつつ、齒痒さを覚える。

——……少し上から見てみるか——

土煙に覆われた視界にそう思うと、光秋は右ペダルを踏んで上昇する。グラウンド全体に広がる土煙を認めつつ、その中に潜む藤原をなんとか見つけようと目を凝らす。

と、

「……………」

土煙がゆつくりと消え、グラウンドの中央に立つ藤原が露わになる。

「どういふつもりだ？……」

予想外の事態に思わず眩くと、光秋はニコイチを見上げる藤原を凝視し、それに合わせてモニター右側に藤原の拡大映像が表示される。

影像越しに藤原は、右手を挙げて2回招く動きをする。

「次で決めるか……」「なら！」

それに応える様に光秋はニコイチを藤原の正面に着地させ、左腕を前に出して構える。

藤原も同じように構える。

「……………」

鼻から深く息を吸い、口からゆつくりと吐く。

直後、

「！」

光秋は左脚を大きく踏み出して姿勢を低くし、腰溜めにした右拳を藤原に放つ。

が、藤原は先程と同じ様にはその上に飛び乗り、一気に右肩まで駆け上がった腰溜めにした右拳を放とうとする。

——そう来ると思った！——

それを横目で見た光秋は、腰に引いていた左拳を放つ。

「そこまで！」

「！」

伊部の号令が響くや、光秋と藤原は互いに当たる寸前で拳を止め、手を開きながら腕を下ろす。

光秋は顔を右側のモニターへ向け、それに合わせてニコイチの頭部も右肩の上の藤原を見る。

「……引き分け、ですか？」

「……そうだな……ほぼ同時だった。引き分けだ」

ニコイチの顔を見ながら藤原が答えると、光秋は左手を藤原の許に指し出し、乗ったのを確認すると手を慎重に左側に移動させる。ハッチを開けて操縦席を機外に出すと、ハッチの上に左手を置いて藤原がコクピットに移る。

「なかなか手こずらせてくれたな」

「いえ、結局引き分けです。それに、身長差が5倍もあるのにこうも翻弄されるなんてつくづくデカければ勝てるわけじゃないことを思い知らされました」

充実した笑みを浮かべる藤原に応じると、2人は互いに礼をし、光秋は伊部を見る。

「ところで伊部さん。本題の補助席の方はどうです？」

「うーん……特に問題ないかな。本部からの帰りにも言ったけど、もともとコクピットのできがいいから振動は少ないし、それに……」

「それに？」

「やつぱり対人、それも個人戦だと、動きもそんなに激しくならないし」

「やつぱり……」

模擬戦前に藤原が言った懸念を口にされ、光秋は思わず呟く。

「まあ、問題がないならいいだろう。儂と加藤にも慣熟になったんだからな。とりあえず、終わりならこのまま訓練に入りたいんだが」

「そうですね。どうです伊部さん？」

「どうぞ。私もこの後、戦闘機かなにかの訓練の話、少し真剣に考えないといけないし」伊部の返事を訊くと、光秋は低く屈み過ぎているニコイチに右膝を着かせ、左手の上に乗った藤原を地面に下ろす。

その間に伊部は補助席を操縦席から外して折り畳み、ハッチの上に差し出した右手に乗って地面に下りる。

光秋もリフトで地面に降りると、カプセルにニコイチを収容してソレを上着の内ポケットに戻す。

「では、私はこれで」

そう言つて伊部は藤原と光秋に一礼し、本舎へ戻る。

「よし、儂らも訓練始めるぞ」

「はい」

藤原の呼び掛けに、本舎へ向かう伊部の背中から顔を離しながら応じると、光秋は上着等を置きにグラウンドの端に向かう。

——……結局、竹田二尉来ないか——

不意にグラウンドを見回して自分と藤原以外誰もいないのを確認し、ふと思う。

11月2日火曜日午後0時。

午前中の訓練を終えた光秋は、藤原と共に食堂へ向かう。

トレ―を受け取つて空いている席を探していると、

「……」

光秋は小田が座っているテーブルを見つけ、藤原と一緒にそこに向かう。

「ああ三佐、加藤。先いただいてます」

2人を認めた小田が焼魚を摘まみながら言う。

「うむ」

短く返すと藤原は小田の左隣に座り、光秋はその向かいの席に座る。

「伊部さんたちは？」

「食堂が混んでるから、外に食へに行つた。というか、俺が行かせたんだ」

「行かせた？」

「ああ。昼休みは限られてるからな。ただ、俺は三佐に渡す物があつて……」

言う和小田は、テーブル下の物置棚から大きな封筒を取り出す。

「この間の件の報告書が来ました」

「！」

小田の言葉に光秋は一瞬ハツとするが、小田はそれに気付かずに封筒を藤原に差し出す。

「ざつと読ませてもらいましたが、演習の時同様、黒い人型のことには触れず、超能力関係の事故ということにするそうです」

「そうか。俺も後で読ませてもらう」

応じると、藤原は封筒を受け取つてテーブル下に置く。

「……僕らの……僕のことについては、何か？」

小田の方を見ながら、光秋は恐る恐る訊く。

「なにも。褒めるでもなく、貶すでもなく。平常通りにつてことだろう」

「平常通り……ありがとうございます」——平常通り、か……ま、なにか言われるよりいい

小田に礼を返しつつ、内心少しほっとする。

「……三佐、僕も後で読ませてください」

「かまわんぞ」

「ありがとうございます」

報告書の内容に興味を持った光秋は藤原に頼み、食事を再開する。

昼食を終えると、3人は待機室に戻り、光秋はカバンから歯ブラシを出して最寄りの水盤へ歯磨きに向かう。

それを済ませて部屋に戻ってくると、左では椅子に腰を下ろした藤原が先程の報告書を読み、テーブルを挟んで右では小田がその様子を見ながら休憩している。

歯ブラシをカバンに仕舞うと、光秋は小田の左隣の席に座る。

「うーむ……」

溜め息混じりの声を出しながら、藤原は持っていた紙の束をテーブルに置く。

「確かに、平常通りか……読み終わったから読んでもいいぞ」

「ありがとうございます」

藤原の感想を聞きつつ応じると、光秋は左上がクリップで留められたノートくらいの厚さの紙束を取って観る。

専門的な用語や略称が多いために殆ど斜め読みになってしまいが、それでもある程度

のことをなんとか読み取る。

小田が言ったように、称賛も咎めもなく普段通りに勤務を続けるようにとのこと。人型のことは機密扱いとし、10月29日未明の一件は夜勤で残っていた特エスの不注意による事故とすること。

—確かに演習の時と同じか……が、今回の隠蔽、ちよつと無理ないか？それともこつちではこれで通じるのか？……とりあえず一ついいことは、こつちはお咎めなしってことか—

2 機目の黒い人型——UKD—03が現れたことで、ニコイチと他の2機の分類を分けたこと。

—『UKD—01』改め、『MB—00』……『MB』？……『メガボデイ』の略なら、大河原主任が僕の意見を通してくれたか。でもって、『UKD—02』改め『DD—01』、『03』改め『DD—02』……『DD』——『^{ダー}ark ^{ドール}Doll』、か……—
新たに振られた番号を眺めつつ、残りの分をパラパラと捲って一通り目を通す。
読み終わると上下を逆にし、

「とりあえず、お咎めなしってことはいいですね」

感想を呟きながらテーブルに置いて藤原の許に返す。

と、ドアを開けて竹田と伊部が入ってくる。

「あ、三佐も読んだんすか？この間の報告書」

藤原の前に置かれた報告書を見ながら竹田が訊く。

「ああ。加藤もさつき読んだところだ」

「へー………てことは加藤」

「はい？」

竹田の呼び掛けに、光秋は顔を向ける。

「例のそこ読んだか？『DD』んとこ」

「はい」

「『ダーク・ドール』って、上もかなり洒落た名前を付けるじゃないの！『ダーク』ってところがいかにも敵って感じがするし！」

「……水を注すようでなんですが、おそらくそういう意味ではないかと……」

若干はしやぐ竹田を見て、光秋は野暮かと思いつつも言ってしまう。

「じゃあ、どういう意味なんだよ？」

「つまり、よく解らない物ってことでしょう」

少々機嫌を損ねた竹田に応じつつ、光秋は自分の考えを述べる。

「あるはずだけど正体が解らないから『暗黒物質』、『ダークマター』といったり、遺物が発見されないからその期間の様子が解らないっていうんで『暗黒時代』といったり、真っ

暗の中じやなにも見えない——解らないから、よく解らないものに『暗黒』とか『ダーク』ってよく付きますよ」

「いちいち御尤もだなお前は……この間の続きじやねえが、ユーモアの一つも覚えたらどうだよ」

不満に顔を歪めながら、竹田は口を尖らせて返す。

「ユーモアならありますよ。ねえ」

それまで竹田の後ろに立っていた伊部が、光秋を見ながら言う。

「え?……ああ」

「三佐たちが先に帰った後に言ってたでしょ。えつと……」

「5トンが載ってゴトンと床が落ちたら洒落にならない」

「[「……………」」」

伊部の意図を察した光秋の発言に、室内が季節の影響とは異なる寒気に包まれる。

「……さあ加藤、午後の訓練始めるぞ!」

「……は、はい!」

妙に気合いの籠った藤原の呼び掛けに応じると、光秋は後を追って部屋から出る。

——言わなきゃよかったか?……—

エレベーターに向かいながら、後悔と恥ずかしさを覚える。

11月6日土曜日午後9時。ESO職員寮の自室。

パジャマ姿の光秋は、以前買った文庫本をなんとなしに一通り読むと、それを正面の机の上に置き、凝り固まった背中を伸ばす。

「……」

座っている椅子の背もたれに背中を預けて首を左に向けると、備え付けのフックに吊るしてあるカレンダーが目に入る。

—伊部さんの誕生日まで、あと1週間ちよいか……………—

そんなことを思いながら、17日のメモ欄にボールペンで書いた「伊部」という記述に意識を向ける。視力の都合上文字自体はここからでは見えないが、先日その記述を書いたことはしっかりと覚えている。

—明日あたり、プレゼント買いに行ってくるか……でも、伊部さんが喜びそうなものなんて……いや、こういうのは気持ちだ。それに近所のデパート探し回れば、いい物の1つ2つあるだろう—

そう思うと、背もたれに掛けていた上体を起す。

11月7日曜日午前10時10分。

白いワイシャツに緑のズボン、白のスニーカーを着、左手首に数珠を巻いて右肩にカバンを斜め掛けした光秋は、寮から歩いて5分程の所にあるデパートの前に来ると、入

口の前に設置してある売り場の案内を観る。

「……………とりあえず、貴金属の所にでも行ってみるか―

漠然と決めると自動ドアをくぐり、最寄りのエスカレーターに乗って3階へ向かう。

3階に着くと、左側の壁に設けてあるこの階の地図で現在位置と貴金属品売り場の位置を確認し、示されている場所へ向かう。

売り場に着くと、ガラスケースの中で金色に輝くネックレスや指輪などを見て回ってみるが、

「……………たっかいなあ……………」

0がいくつもついている値段に、思わず表情を曇らせる。

―ある程度予想はしていたが、こうまで……………伊部さんへの贈り物とはいえ、自分の懐事情に響くことはできません……………「ん……………」

唸りながらガラスケースから顔を離すと、再び売り場の中を散策してみる。

「……………」

少し歩いた所に数種類の首飾りがフックに重ね掛けされて売られているのを見つけ、その許に歩み寄って内1つを右手で寄せてよく観てみると、

「……………これ、アクセサリーか」

見覚えのあるデザインと近くに立て掛けてある看板から、それが超能力抑制機器であ

るリミッターアクセサリーであることに気付く。

—こんなあからさまに、それもけつこうな種類が売られてるんだな……アクセサリー、か……—

手の内のアクセサリーを眺めながら、光秋はふと綾のことを思い出す。

——…と、伊部さんにこれ渡してもしようがないんだよ……しゃーない。とりあえずここは諦めて、他の目ぼしい場所探すか—

そう思うとアクセサリーを離し、最寄りのエスカレーターに移動してそこにある地図を観る。

——…服屋か—「さつきよりは値段も問題もないだろうし……行ってみるか」

地図上に服屋を見つけてそう呟くと、位置関係を確認してそこに向かう。

しかし売り場に来てすぐに、光秋は後悔する。

—迂闊だった……女物のコーナーを物色するのは、やっぱり恥ずかしいな……が！—
気を取り直すと、女物の服が売られている辺りを見て回る。といっても、1つ1つ立ち止まって吟味する勇氣はなく、左右の大量の服が掛かった棚を見回しながら進む。

—こういう態度が、挙動不審に見られたりするんだよね……？—

そんなことを思いながら歩いていると、正面に小さい布物を並べた棚が目に入り、その近くに歩み寄る。

——…髪留めか——

棚から伸びた長いフックにたくさん掛かっているゴムが入った輪状の布を見てそう思う。

と、

——髪留め……！——「これいいじゃないのよ！」

長髪を後ろに1本に束ねた伊部を思い出しながら嬉々として呟くと、その棚の前を左右に行き来して、多様な柄や形の中から伊部に合いそうなものを選ぶ。

——ピンク……は、どっちかというと綾向きだよなあ……白、か………ま、プライベートル用と断ればいいだろうし、これかな——

迷いながらも白地に赤いフリルが付いたものを選び出し、一応値段も確認すると、それを持ってレジへ向かう。

「すみません。これ包んでもらうことってできますか？」

「はい。プレゼントですか？」

「はい」

店員に包装を頼み、代金を払って白い紙袋に包まれた髪留めを受け取ってカバンに入れると、光秋は服売り場を後にする。

——よし。プレゼントの用意はいいな……にしても、さすがに寒くなってきたな……——

「帰ったら、いよいよコタツ出すか……」

下りのエスカレーターに運ばれながら、プレゼントを用意できたことにほっとしつつそう呟く。

11月8日曜日午前8時15分。

いつもより少し遅く寮を出た光秋は、心なしか速足で支部へ向かう。

正門をくぐって少し進むと、

「光秋くん！」

「おはようございます」

「おはよう」

左から伊部に呼び掛けられて挨拶し、2人は並んで歩く。

「もう11月か……ずいぶん寒くなったよね」

「ですね。僕昨日、いよいよコタツ出しました」

「コタツか……私もそろそろ出そうかな」

そんな会話を交わしながら、2人は本舎の玄関をくぐってエレベーターに乗り込む。

「……そういえば伊部さん、来週誕生日でしたよね」

「そうだけど？」

「なにか予定ありますか？」

「今のところは……ていつても、平日のど真ん中だしね」

「……もしよかったら、一緒に食事行きませんか?……!」

なんとなしに言った言葉を思い返し、光秋は我ながらハツとする。

「え?……」

「もちろん、仕事帰りに近所の料理屋に寄って、少しい物食べて誕生祝いってことですけど……ダメですか?」

「ダメじゃないけど……それなら、私の部屋に来る?」

「伊部さんの!?……いいんですか?」

「うん。あんまり大したものじゃないけど、手料理作って、2人で誕生会。どう?」

「いいですけど……祝ってもらう人に料理させちゃっていいんですか?」

「いいのいいの。祝ってあげるって人がいるんだがら、こつちもそれくらいしないと」

「じゃあ……そうしますか。伊部さんの部屋で、2人で誕生会」

「了解!」

そこでエレベーターは地下1階に着き、2人は開いたドアから出て待機室へ向かう。

「とりあえず、詳細はまた後で」

「わかった」

——……自分から言い出したとはいえ、すごいことになったな………というか、僕凄

いこと言い出したな！――

伊部の返事に喜びつつも、光秋は心中に驚きの声を挙げる。

10月16日火曜日午後6時。

その日の訓練を終えた光秋は、藤原と並んでグラウンドから待機室に行つて荷物を取ると、そのまま一緒に食堂へ向かう。

――いよいよ明日だ！――

1週間程前に決めた伊部との約束を思い出しながら、光秋は訓練の疲れが和らぐ程の嬉しさを覚える。

と、

「そうだ加藤。儂と伊部は明日早くから用事があつて出かけるから、訓練はなしだ。なにかあつたら小田の指示に従え」

――？……伊部さんも？――「なにかあるんですか？」

左隣を歩く藤原の知らせに、光秋は少し驚きながら訊く。

「前に話してたニコイチの模擬戦のことで、いろいろと打ち合わせをしにな。本来ならお前も連れて行つた方がいいのかもしれないが、そうすると隊の余力がなくなるんだ」

「ああ……」

相槌を打ちつつも、一抹の不安が胸を過る。

―明日大丈夫かな?……後で電話しとこ―

藤原との夕食を終えて寮の自室に戻ると、光秋は掛けていたカバンを下ろし、伊部に電話をしようと椅子の背もたれに掛けた上着から携帯電話を取り出す。

直後、

「!」

携帯電話が振動し、少し驚きながらも画面を開く。

―小田一尉?……―

画面に映る名前に首を傾げつつ、電話を左耳に当てる。

「はい?」

（ああ加藤か? 実はさっき三佐から電話があつて……）

「明日出かける件なら、さっき本人に聞きましたか?」

（ああ聞いてたか。ただもう一つ知らせがあつてな。さっき緊急で入った仕事で、明日ウチの隊が護送車の警護を引き受けることになった）

「護送の警護?」

（詳しいことが明日話すが、とりあえずそのつもりで、いつも通りに出勤してくれ）

「……わかりました。ありがとうございます」

（じゃあ、よろしくな）

「はい。お休みなさい」

（お休み）

応じると、電話は小田の方から切れ、光秋は携帯電話を顔から離しながら今聞いたことを思い返す。

—護送車の警護？……どうなるんだろう？……—「とりあえず、約束の確認がてら今のこと相談するか」

一人呟くと、伊部に電話をかける。
が、

「……………」

しばらく着信音を鳴らしても出る気配はなく、

—かけ直すか？—

と、思った直後、

（もしもし？）

やっと伊部は電話に出る。

「あ、伊部さん？加藤です。明日のことで相談したいことがあるんですが、今大丈夫ですか？」

（大丈夫。電話出るのに時間掛かってごめん）

「いえ。それで相談なんです。三佐から聞きましたが、明日出かけるって。約束の時間大丈夫ですか？確か、6時に正門の前で待ち合わせですよ。」

言いながら、カバンから手帳を出してカレンダーに書いたメモを見ながら確認する。

（ああ、それね。大丈夫。打ち合わせそのものは大して時間掛からないと思うし、約束の時間までには支部に帰れると思うから）

「それならいいんですが。あと僕の方も緊急で用事が入って、詳しいことは明日行かないとわからないんですが、約束に遅れる可能性も……」

（用事って？）

「護送車の警護です。さつき小田一尉から電話があつて。今はこれ以上のことはわかりません」

（そう……でも、少しくらい遅れても、寮も仕事場も近いし、早く来た方は待つてればいいでしょう）

「それで大丈夫ですか？」

（私はね。光秋くんは？）

「僕もかまいません。じゃあ、とりあえず予定通り6時に正門前で待ち合わせつてことで」

（了解。明日楽しみにしててね）

「はい。では、お休みなさい」

（お休み）

伊部の返事を聞くと、光秋は電話を切る。

「とりあえず、予定通りつてことでもいいか……ああそうだ」

先程の会話を思い返しながら呟くと、机の上に置いていた先日買った伊部へのプレゼントが入った包みをカバンの中に入れる。

—これで、誕生祝いの方は準備完了だな。さあて……—

急遽入った仕事に若干の不安を覚えつつ、光秋は風呂に入る。

43 護送中に

11月17日水曜日午前8時10分。

少々の不安を覚えつつもいつも通りの時間に出勤した光秋は、エレベーターで地下1階に下り、藤原隊の待機室へ向かう。

ドアを開けると、先に来ていた小田一尉が左側の椅子に座っているのが目に入る。

「おはようございます」

「おお。おはよう」

小田の返事を聞きつつ部屋に入ると、光秋は右肩に斜め掛けしていたカバンを下ろし、テーブルを挟んで小田の向かいに座る。

「小田一尉。さっそくですが今日の仕事の内容教えてもらえますか」

「まあ待て。竹田が来るまで待ってくれ。2人に別々に説明するのは面倒なんでな」

「……それもそうですね。すみません」

席に着くなり訊いた光秋に小田はやんわりと返し、光秋もどこか焦っている自分を自覚して大人しく黙る。

「……ただ、二尉が来るのを待ってたら遅くなるんじゃないやあ？あの人いつも9時近くに来

るでしょう?」

「それについては、半までに来るようになっておいた。確かに遅刻ギリギリの奴だが、来いと言われればちゃんと来る奴だ。大丈夫だろう」

「それならいいんですが……」

光秋の不安に小田は左手首の腕時計を一見しながら応じ、光秋も自分の左手首の腕時計を見て時間を確認する。

— 8 時 20 分 …… —

それから少ししてドアが開き、

「うーっす……」

寝むそうな顔をした竹田二尉が入ってくる。

「よし。全員揃ったな」

欠伸をしながら光秋の左隣に座る竹田を見つつ、小田は上着から手帳を出してページを捲る。

「早速だが、昨日連絡した護送の件の詳細を説明する。本日 9 時 10 分に支部を出て、京都刑務所で護送車と警察の警護車と合流、囚人 1 名をここの医療棟まで護送する。車列の先導はウチがする」

「医療棟ですか?」

予想外の場所の名前が出たので、光秋は思わず訊き返す。

「そうだ。そもそも今回のことは、これから護送する囚人が体調不良を起こしたことが原因で、刑務所内の医者が調べたところインフルエンザの可能性が高いことがわかったんだ。それで、精密検査と治療のためにウチに運ばれることになったってわけだ」

「インフルエンザですか……」——そういえばもうそんな季節か……—

小田の説明に、光秋は場違いと知りつつもそんなことを思う。

「他に質問はあるか？」

「……ありませんよ。とつとと行つてさつきと済ませちまいましょ」

「そうだな。よし。全員制帽と防弾ベスト着用、拳銃を携帯して本舎の前に向かえ。身分書も忘れるな」

「了解！」

竹田の返答に小田はそう返して号令すると、3人はロツカーから防弾ベストとガンベルト、拳銃、予備の弾倉を出してそれらを身に付け、エレベーターで1階へ向かう。

「竹田、裏から車取つてきてくれ」

「はい」

上昇中の小田の指示に応じた竹田は、ドアが開くや本舎の裏側に駆けて行く。

光秋は小田と共に本舎の玄関前に移動し、少しして裏手から走ってきた竹田が運転す

る屋根にEジャマーを積んだ軍用車に乗り込む、

左前の助手席に小田、右後ろに光秋が乗ったのを確認すると、右の運転席に座る竹田は車を正門に向かわせ、右折して南進する。

光秋はシートベルトを締めると、左胸のカプセルと右脇の拳銃を触って確認する。

——いよいよかあ……大丈夫かなあ……——

「緊張するか？」

心中に呟いた不安に応じるかのように、小田が声を掛けてくる。

「そりゃあ、初めてですから……それに僕らが動くってことは、護送するのは超能力者なんでしょう？」

「心配するな。そのためのEジャマーだ」

応じつつ、小田は天井を指す。

「それに、囚人は妨害装置付きの手錠してるし、そもそも具合悪いんだ。変な気は起こさねえよ」

竹田も話しに加わる。

「付け加えるなら、その能力つてのもレベル3の透視能力。攻撃性はないし、護送車の中にもEジャマーは付いてる。少なくとも囚人に攻撃される可能性は低い」

「……じゃあ、なんでわざわざ護送がいるんです？ それもESOの？」

小田の補足に、光秋そんな疑問を覚える。

「もちろん、万全の備えがあつても不測の事態は起こりえるからな。囚人の脱走とか。そうした時に備えて、やっぱり人間の手はいるし、超能力が絡めばESOの仕事にもなる。が、それ以上に俺たちが注意しなきゃいけないのは、護送中の超能力者を狙った超能力者に反感を持つ連中の襲撃だ。前にも何度か護送中の超能力者の襲撃事件があつて、実際に死者も出てる」

「超能力者への反感？NPですか？」

小田の説明に、光秋はさらに問う。

「そういうグループももちろん注意しなきゃいけないが……ま、差別感情つてのは簡単に生まれるもんなんだよ……」

「はあ……」

小田の曖昧な説明に、光秋は模糊とした気持ちを抱きつつ応じる。

——『差別感情つてのは簡単に生まれる』、か……それは確かにそうだろう。僕のいた側でも、昔も今も、多かれ少なかれ差別は存在した……差別……自分とは違うもの、そう“規定したもの”を排除しようとする気持ち……——

そこまで考えると、綾と外出した際にサイコキノの不良に絡まれたことを思い出し、次いで初めての予知出動で聞いたNPのメンバーの言葉を思い出す。

—『お前は、自分の女房を、怪物じみた奴に殺された人間の気持ちだが、わかるかあ!』
……一応、超能力者の側にも恨まれる原因はあるわけか……普段は圧倒的で手出しできないような奴が、二重三重と枷を付けられて無力化されてる。そしてそんなのが手の届く距離にいれば、抑えられた側は何かしてやろうと思うだろうな……そして僕らの主な仕事は、そうした人たちから囚人を守ること、か……?—

そこまで考えて、光秋はまた疑問を抱く。

「ところで一尉、護送される囚人って、なにやった人なんです?」

「窃盗だ。詳しいことは聞いてないが、確か空き巣やって捕まったって……」

「空き巣、ですか……」——とりあえず傷害事件じゃない、か……ま、例えそうだったとしても、やっぱり私刑はいけないよな。罪は法で裁く、そうしなければ切りがない。なら、今はその囚人さんを守ることを頑張ればいい………なんであれ、無事に済んで予定通りに間に合えばいいんだが………—

仕事への姿勢を確認する一方で、若干の自戒を覚えつつも伊部との約束という私情に思いを巡らせる。

京都刑務所の門の前に着くと、竹田は車の窓を開け、手帳を開いて守衛にIDカードを示す。

「護送車の警護に来た藤原隊だ」

「ああ。お待ちしてました」

竹田の言葉に応じると、守衛は小屋の機械を操作して一行の前に堅く立ちはだかる門を内側に向かつて開け、手帳を引つ込めた竹田はすぐに車を前進させる。車が行き過ぎると、門はすぐに閉まる。

堅く閉ざされた門に、光秋は一瞬寒気を覚える。

少し進むと、3階建てのレンガ造りの建物の前にワンボックス型のパトカーと通常型のパトカーが停まっているのが見え、その許に着くと一行は車を降り、同時にワンボックスの後ろに停まっているパトカーからも長袖の制服一式に防護用のベストを着た警官が2人降りて一行の許に歩み寄ってくる。

「本日護送車の警護、及びE S O 京都支部までの先導を務めさせていただきます、藤原隊です！」

「！」

言いながら小田は警官2人に敬礼し、後ろに控える様にして立つ竹田と光秋もそれに続く。

「こちらこそ、本日はよろしくお願いします！藤原隊長」

「！」

右に立つ初老程の男性警官が返礼し、左に立つ若い女性警官もそれに続く。

「あ、いえ、藤原は別件で隊を空けておりまして、私は副長の小田といいます」

男性警官の間違いに、小田は苦笑いしながら訂正を入れる。

「ああ。失礼いたしました」

「でも隊長がいないって、大丈夫なんですか？」

「あ、バカ！失言です。申しわけありません！」

「！」

謝ったそばからの女性警官の言葉に、男性警官は慌てて頭を下げ、女性警官もハツとした顔でそれ做う。

「いえそんな……ご安心ください。隊長不在だからこそ、チームの看板に泥を塗る様な仕事はしません。そうだな」

「はい！」

少し困った顔をしつつもきっぱりと返した小田に、竹田と光秋もはつきりと応じる。

と、左側に建つレンガ造りの建物から、5人程の警官に囲まれる様にして作業着の様な物の上に薄手の黒いコートを羽織った男が出てくる。

男の両手が縄の伸びた手錠で繋がれているのを見て、光秋は彼が護送する囚人なのだと察する。

が、一方で、

—思ったより大人しそうだ……—

白髪がやや多めの頭と自分より二回り程小柄で華奢な体型、いくつか皺が浮かんだ壮年くらいの顔付きにそんな印象を覚える。同時に血色の薄い顔色に、本当に具合が悪いのだという実感を抱く。

男がワンボックスに運ばれるのを見て、一行と警官たちは一礼して各々車に乗り込む。

男がワンボックスに乗ったのを確認すると、竹田は車をＵターンさせて前進し、ワンボックスの護送車、パトカーの順にそれに続く。

車列が門の前まで来ると、それを確認した守衛が門を開き、藤原隊一行が乗る軍用車を先頭にした車列は表通りへ向かう。そして最後尾のパトカーが表に出ると、門は再び堅く閉ざされる。

刑務所を後にすると、車列は太い道を通って一路京都支部を目指す。

その中で光秋は、いよいよ始まった警護の仕事に若干の緊張を覚える。

「……ところで一尉」

そんな気持ちを紛らわせることも兼ねて、光秋は先程の警官たちとの会話で感じた疑問を、右前の小振りな機器を操作して車の天井のＥジヤマーを作動させている小田に訊くことにする。

「隊のリーダーの肩書きって、やっぱり『隊長』ですよ?」

「そうだが。どうした?」

「いえ、ウチの場合は、藤原三佐、みたいに、階級で呼び合ってますけど、あれはどういうことなんです?」

「ああ、大した理由はない。単に三佐が『隊長』って呼ばれるのが嫌なだけだ。かと言って、まさか『藤原さん』なんて呼ぶわけにもいかないから階級で呼び合って、気付いたらそれがウチの風習になったってだけだ」

「はあ……」——それって大丈夫なのか?……ま、少し楽になったからいいか……—

説明に首を傾げつつも、僅かだが緊張の緩和を感じたのでよしとする。

片側2車線の太い道を進んでいると、一行は赤信号で停まっているワゴン車を見る。左右の車線変更用の道にも同型の車が1台ずつ停まっているために避けて通ることができず、やむを得ず車列は直進用の中央列で停車する。

「たぐよお……」

と、竹田が苛つきを含んだ呟きを漏らしたすぐ後に信号は青に変わる。

が、前の3台はいずれも動き出す気配がない。

「?」

「何だってんだ!」

光秋が首を傾げる傍ら、竹田は怒気を含んだ声を上げながらクラクションを2回鳴らす。

「そう焦るな」

「そう言われても……」

——二尉も緊張してるのか——

小田の落ち着ける様な言葉に苛った語調で応じる竹田に、光秋は少し不安を覚える。

直後、

「!?!」

正面に停まっているワゴン車の後部右の窓が開き、そこから小振りのブロックが投げ込まれる。

一行の車のフロントガラスに当たったそれが轟音を上げるのを見て、3人はハッとする。

「投石? 何の真似だ!?!」

小田が驚愕の声を上げる間にも、左右に停まっているワゴン車の後部の窓からもコンクリートのブロックが次々と投げ付けられ、一行の車の上に散乱する。

「話に聞いてた事態ですか!?!」

「だな。よりによって言ったそばから遭うなんて」

前部席の間から身を乗り出してやや興奮した声で訊く光秋に、小田は苦い物を噛む顔で応じる。

と、ブロックが投げ付けられる音に混ざって、

「くたばれ！超能力犯罪者！」「警察が罪人守ってんじゃねえぞ！」「エスパ―最良のES
Oの犬が！燃えちまえ！」

と言った罵声が、フロントガラス越しに聞こえてくる。

「NPですか？」

「判らんが、どうやら待ち伏せされたみたいだな」

罵声の内容から感じた光秋の問いに、小田は静かに応じる。

と、

「NPだとしたら使いつ走りだろうがな！」

興奮した声を上げながら竹田が車のドアを開けようとする。

「何やってんだ！」

「向こうがその気ならこつちもやってやるまでつすよ！」

急いで引き止めた小田に、竹田は睨み付けながら返す。

「馬鹿なことばよせ！それよりバックだ！この場から離れるぞ」

小田が言い返すや、光秋はすぐに後ろを見るが、

「ダメです。後ろも塞がれてます！」

後ろも2車線ともワゴン車で塞がれ、車列の最後尾のパトカーにもブロックが投げ付けられているのを認める。

直後、

（小田副長！）

車内に備え付けてある通信機から先程の男性警官の声が響き、小田はすぐにマイクを取る。

「はい！」

（たった今応援を要請しました！間もなく到着します）

「了解！何とかもたせましょう。聞いたな竹田。応援が来るまで耐えろ。その間に向こうの投げる物も尽きるはずだ。わかったな！」

「了解……」

マイクを戻しながら諭す様に言う小田に、竹田は渋々応じてドアから手を離すが、

「『！』『！』」

投石が止んだかと思ったのも束の間、前後に停まっていた計5台のワゴン車から、顔全体を覆うヘルメットをした者たちが次々と降りて、各々が手に持った金属バットや鉄

パイプで車列を叩き始める。

「！」

ヘルメットで顔を隠して襲ってくる車外の2人に恐怖を覚えつつも振り返った光秋は、襲撃者の多くが護送車に取り付いているのを見る。

「二尉、護送車が危険です！あの人たち車壊して囚人や運転手なんかも殴り殺す勢いですよ！」

「だとしても出るな！応援を待つ」

「車が壊れたら護送ができなくなります。ましてや囚人が死のうものなら……」

「護送車は普通の車より頑丈にできている。5分くらいはもつ。どの道俺たちだって、こいつらの所為で外に出られん！」

「……」

車外をバットで叩き続けるヘルメットたちを睨み付けながら小田に言い切られ、光秋は押し黙ってしまう。

が、直後に車列の後方から鋭い銃声が響く。

「「!?」」

一行は慌ててその方を振り向くと、前部左の窓ガラスを割られたパトカーから女性警官がヘルメットたちに引きづり出されようとしているのを見る。

その光景を見た瞬間、

「！」

光秋の脳裏に伊部との約束と具合の悪そうな囚人の顔が思い浮かぶ。

——こんな所で時間を喰うわけにはいかない！——

それらが具体的な言葉呼び起こし、それが同時に目の前の光景に対する怒りに転化する。

次の瞬間には防弾ベストをはだけて右腕を上着の内ポケットに伸ばし、カプセルを取り出すや右後部の窓を少し下げ、その間からカプセルを上空に向かって突き出す。

「避けるおお！」

声の限りに叫ぶやカプセルのボタンを押し、カプセルの先端から白い光線が上空に向かって伸び、1メートル程進んだ所で左膝を着いた姿勢のニコイチを出現させる。

1メートル程上空で出現したニコイチは、落下して足元の中央分離帯のブロック塀を碎き、周辺にやや強い揺れを起す。

突然の事態に驚いて車列とニコイチから距離を取るヘルメットたちを横目に捉えつつ、光秋は車のドアを開けてニコイチのリフトに駆け寄る。

「待て加藤！」

小田は慌てて止めようとするが、すでに光秋には聞こえない。

リフトを掴むや上昇して操縦席に着き、認証を済ませる間に習慣的に制帽を右脇に置いてシートベルトを締める。

「！」

モニターが点くやニコイチを直立させ、車列に群がるヘルメットたちを睨み付ける。それに合わせてニコイチの頭部も足元を見下ろす姿勢になり、10メートルの巨人が人々を見下ろす形になる。

外部スピーカーが入っているのを視界の隅で確認すると、

「今すぐに車列から離れろ！さもないと……」

腹の底から叫び、車列前方右のワゴン車を両手で抱え、それを腕の長さ一杯に高く掲げる。

それを見た途端、ヘルメットたちは我先にとバットを放り投げて車列から離れ、何よりもニコイチから逃げ出し、知らぬ間に少し離れた辺りに集まっていた野次馬たちの中に駆け込んでいく。

直後に遠くからサイレンの音が多数響き、モニター越しにそれを聞きながらヘルメットたちが散り散りに逃げていく様子を見て、光秋は激した頭が冷めていくのを自覚する。

同時に、

— やつちやつたなあ……—

持ち上げていたワゴン車を足元に置きつつ、軍用車に目をやって小田の顔を思い浮かべる。バツの悪さを感じながら肘掛から出した通信機を左耳にはめ、軍用車の方に意識を向ける。

「……一尉」

不安を覚えつつ、光秋は通信機越しに小さく呼び掛ける。

(……とりあえず降りて車に乗れ。襲撃者は応援に任せて、俺たちは護送を再開する)
「はい……」

静かな声で言われた小田の指示に応じると、光秋は通信機を戻し、ニコイチから降りてカプセルに収容し、ソレを内ポケットに戻しながら車の後部右の席に乗り込む。

直後に車列は、開いた右の車線を通って前進を再開する。

——……これは、帰ったら覚悟しておかんな——

重い沈黙が漂う車内で、光秋は座席越しの小田の背中を見て生唾を飲む。

パトカーと護送車がサイレンを鳴らしながら、車列は全速力で京都支部へ向かう。

しばらくして支部の門をくぐると、車列は本舎を左に迂回して裏へ回り、医療棟の玄関前に停まる。

停車するや、小田はシートベルトを外しながら、2人に静かに指示を出す。

「竹田、車整備に回しておけ。加藤、先に戻るぞ。話がある」

「はい」

「はい……」

竹田と光秋が返すと、小田は車を降り、光秋もそれに続く。

2人が降りたのを確認すると、竹田は所々傷がついた車を整備班の許へ向かわせる。

囚人が護送人に連れられて医療棟に入るのを横目で見つつ、光秋は小田の後を追って車列最後尾のパトカーの許へ向かい、前部右の運転席ドアの前に止まる。

「では、我々はこれで失礼します……!」

「!……」

窓が開くや小田は車内の警官2人に敬礼し、光秋も慌ててそれに倣う。

「了解です。我々も囚人の手続きが済み次第戻ります」

「帰路お気を付けて」

運転席の男性警官にそう返すと、小田は本舎へ向かい、光秋も車内の2人に一礼する。
と、

「!」

顔を上げる時に反対側の窓ガラスが大きく割れているのが見え、一瞬悪寒を感じる。

——やつぱり、危なかったんだな……——

先程のことを思い出しながらそう思うと、光秋は小田の後を追って本舎へ向かう。

「……………」

「……………」

待機室へ向かう間、小田と光秋の間には重い沈黙が横たわる。そうなる理由を理解している光秋には、自分からそれを破る度胸などない。

待機室に着くと、小田は静かな声で指示する。

「まず装備品を片付けろ。話しはそれからだ」

「はい……」

小さく応じると、光秋はロッカーに歩み寄って防弾ベストと拳銃、ガンベルト、予備の弾倉を仕舞う。

小田も仕舞い終わったのを見ると、光秋はその後が続いてテーブルのそばに移動する。

小田はテーブルを背にし、光秋は棒の様に直立不動になってそれに向き合う。

「お前は頭が悪い訳じゃない。だから、自分が何をしたか解ってるな」

「はい」

静かに問う小田に、光秋は目を合わせて応じる。

「だが、敢えて言わせてもらおう。俺たちはチームで動いている。いろいろな意見が出るの

はいいことだが、最後は意志決定権のある者に従わなければならない。あの状況ではそれは俺だった。つまりお前は、俺の命令に従って車の中で待機していなければならなかったんだ」

「はい」

「……お前の言い分も聞こう。何故命令に違反した？」

「パトカーから連れ出されそうになってた女性警官の方を見た時、殺されるんじゃないかと思いました。それに足止めが長引けば、囚人の方の体調も余計に悪くなるのではと思いました。それを防ぎたかったんです……ただ、やり過ぎてしまったとも感じています。ニコイチを使ったことは……あと、命令違反を犯してしまったことも……」

「……一応、反省はしてるみたいだな」

「はい……」

「だが、けじめだ。一つ絞らせてもらおう」

「はい」

「念のためメガネは外しておけ」

言われてすぐにメガネを外し、上着の内ポケットに仕舞う。

「足を肩幅に開け。手を後ろで組め。顎を引け。歯を食い縛れ」

矢継ぎ早に出る小田の指示に、光秋はその通りに応じていく。

そして、

——……来るぞ——

歯を強く噛み締めた直後、

「今後こんな勝手なマネはするな！よく覚えとけえ！」

「……………」

怒声と同時に小田の右拳が飛び、左頬に激痛を覚えながら体が右側に少し傾く。

「グラウンド10周の後、俺に始末書を提出しろ。今日中にだ」

「……………はい！」

続けて出された小田の指示に、光秋は殴られた際に落ちた制帽を被り直しつつ、若干の戸惑いを含みながらも応じ、すぐに部屋を出てエレベーターへ向かう。

——案の定、か……………しかし、殴られるのは覚悟してたが、懲罰まで食らうとは……………

内ポケットから出したメガネを掛けつつ、未だに痛みが引かない左頬を擦りながら項垂れる。

グラウンドに着くと、光秋は脚周りの準備体操を手短に済ませ、

「さっさと済ませよう」

と、グラウンドを時計回りに勢いよく走り始める。

が、はじめのうちに飛ばし過ぎたせいか、6周目を終える頃には足を重いと感じ始め

る。

そして10周を走り切ると、

「ハア……ハア……ハア……」——今何時だ？——

すっかり息切れしつつ、重くなった左腕を上げて手首の時計を見る。

——1時かあ……——「もうこんな時間か……」——始末書も書かなきゃならないが……いいな。先に食べよう。どの道何か入れないともたないし——

襟のボタンを外して火照った体に風を入れながら断じると、空腹感も加わってより重くなった足で食堂へ向かう。

——あんまり時間を掛けずに食べられる物…………あと伊部さんとの約束もあるから量もいらないう……——

食堂に着くなりそんなことを考えながらメニュー表を眺めると、光秋はうどんを注文する。

大きめの器と水入りのコップを載せたトレイを持って席を探していると、

「おーい！加藤」

「！」

左側の席に座る白衣姿の上杉に呼び掛けられ、その向かいの席に座る。

「どうも……上杉さんも遅い昼食ですか？」

食べかけの定食が載ったトレイを見ながら訊くと、光秋は渴ききった喉に水を流し込んでうどんを食べ始める。

「まーな。それより、竹田二尉から聞いたぜ。小田一尉に鉄拳食らったって？」

「ええ、まあ……」

先程のことを話題に出され、表情が曇る。

「……でも、殴られて当然のことをしたわけですから」

間を置いてやつと浮かんだ言葉を口にする、うどんを一口する。

「まーねー。待機命令を無視してニコイチに乗っちゃうんだから、やる時はホント大胆だよなお前」

「まあ……」

「ただ、一尉も少し悩んでたみたいだぞ」

「う………どういふことですか？」

「二尉から又聞きした話だから、信憑性に不安が残ると前置きしておくけどな、使った車整備に回して待機室に戻ったら、一尉が暗い顔して座ってて、事情を訊いたら、『殴ったのはやり過ぎたかもな』って漏らしたって」

——一尉……—

上杉の話を聞いて、光秋は小田に対して申し訳ない気持ちになる。

が、

「否、だからこそ、次気を付けよう！どの道あと始末書書いて今日中にさなきやならなんだ。のんびりもしてられない！」「上杉さん。ありがとうございました」

そう断じて一札すると、速めにうどんを平らげて早々に席を立つ。

おかわりした水を一気に飲み干すと、すぐにトイレを返し、速足で待機室へ向かう。

「……そう言えば、始末書ってどうやって書くんだ？」

歩いている間にふと思った光秋は、エレベーターの手前で立ち止まって少し考える。

「こんなこと初めてだが……しょうがない。待機室に行つて、二尉か一尉に訊くしかないか……」

浮かんできた小田の顔に気まずさを覚えつつもそう決めると、エレベーターに乗り込み、地下1階に着くと待機室へ向かう。

ドアの前に着くと、

「……」

小田に殴られた時の記憶が脳裏を過ぎり、普段何気なく開けているドアが開け難く感じる。

「……が、いつまでも引きずつてゐるわけにもいかんよな——「よし！」」

小さく気合を入れると、ドアノブに手を掛け、一気に開ける。

と、

「あれ?……」

予想に反して部屋の電気は消えており、すぐに点けても部屋には誰もおらず、思わず拍子抜けする。

— なにかあったか?……—

思いつつ、上着の左ポケットから携帯電話を出して画面を開くと、小田からのメールが届いているのに気付き、それを開く。

『警察から連絡があつて、さっきの襲撃犯の一部を捕まえたらしい。取り調べに立ち会うから竹田と二人しばらく外す。何も無いと思うが、留守番頼む。』

— ……これ来たのいつだ?—

メールを読み終わるや、着信の時間を確認する。

— 12時52分?……まだ走つてて気付かなかったか……今は……1時40分か——
「……でも『しばらく』って、どれくらい掛かるんだ?……竹田二尉もいないとなると、帰って来るまで待つしかないか……」

言いながら、光秋は伊部との約束に間に合うか不安を覚える。

午後2時10分。

メールに気付いてから30分程経つが、小田たちが帰ってくる気配はなく、椅子に腰

を下ろした光秋は抑えられない焦りから左足の貧乏揺すりが止まらない有り様である。

——いつそ電話してみるか？……いや、変な時に掛けたらまずいよな……—

思いつつ、ポケットから出しかけた携帯電話を戻すと、小田の顔が思い浮かぶ。

——この間に始末書書けつてことなのか？それが帰ってきてできてないつてことになる、一尉また怒るだろうな……でも、書き方が分からないんじゃないだろうか。結局怒られようと帰ってくるまで待つて、帰ってきたら即行で教えてもらうしかない。結局そういうことだ……—

そう考えて割り切ると、不意に伊部の顔が浮かぶ。

——伊部さんの方はどうなつてんだろう？演習の日程決まったかな？……とりあえず、遅れるかもつてメールしておいた方がいいか……—

思うやポケットから携帯電話を取り出し、

『待ち合わせですが、都合で遅れるかもしれません。ごめんなさい。』

とメールを打ち、それを伊部に送信する。

「……ま、氣い揉んでも仕方ない。留守番してろつていわれたからここを動くわけにもいかないし、本でも読むか」

独り言を言いながら携帯電話をポケットに戻すと、光秋はカバンから文庫本を出し、小田のことを考えないように努めながらそれを読む。

本を読んだり、室内でできる軽い自主訓練をしたりしながら、光秋は小田たちの帰りを極力意識しないようにして待つ。

そして、午後4時40分。

「……お帰りなさい」

ドアを開けて小田と竹田が入ってくるのに気付くや、光秋は読んでいた本に葉を挟んでカバンに仕舞い、椅子から立ち上がって2人の許に歩み寄る。

「おー……たぐどいつもこいつも強情で手間が掛かるぜ……」

「まったくだ」

光秋に応じながら竹田は疲れた顔で呟き、小田も深く頷く。

「御苦労さまです……」

そんな2人の様子を見て光秋は一瞬躊躇するが、すぐに気を取り直し、
「お疲れの所悪いのですが……始末書の書き方教えてください！」

一気に言っ頭を深く下げる。

「まだ書いてなかったのか？」

「はい。書き方がわからなかったの……それで教えてもらうために待っていました」
「わからな……ああそうか。確かにな」

「……」

小田の納得した声を聞き、内心ほっとしながら頭を上げる。

「それは俺のミスだな。竹田、教えてやれ」

「オレがつすか？」

小田の指示に、竹田は面倒臭そうな顔をする。

「俺は護送と襲撃犯の取り調べの報告書書かなくちやならないからな。それに今でこそなくなったが、お前ウチに来た時は始末書書きの常習犯だったろう」

「そうつすけど……」

小田の蒸し返しに、竹田は顔をしかめる。

「とにかく、頼んだぞ」

「りょーかい。加藤来い。まず紙のある場所教える」

「はい」

小田の指示に観念すると、竹田はそう言つて部屋を出、光秋もそれに続く。

竹田に連れられて、光秋は地下1階にある事務室に向かい、始末書を取つて待機室に戻る。

部屋ではすでにテーブルに着いた小田がパソコンで報告書を書いており、竹田と光秋はその向かいに座る。

「さて、さつさと済ませるぞ」

「はい」

右隣に座る竹田に応じると、光秋は始末書に書かれている項目に従い、時に竹田に助言を乞いながら、私物のシャープペンシルで始末書を書き進めていく。

命令違反を犯したこと、それが私情によるものであること、それに対する反省の言葉を書き終えると、それらをボールペンで慎重に清書し、消しゴムでシャープペンシルの下書きを丁寧に消し切ると、消し残しやインクの擦れがないかを確認し、なんとか完成させる。

――終わったあ……――

硬くなつた右手首を振りながら思うと、光秋はでき上がった始末書を持つて席を立ち、向い側で報告書を書き続けている小田の許に歩み寄る。

「一尉、お待たせしました」

「ん？ ああ」

右隣に立つ光秋に顔を向けて応じると、小田は差し出された始末書を受け取る。

「そこにも書きましたが、今後今回の様な勝手な行動はしません。申し訳ありませんでした！」

直立不動の姿勢で言い切ると、光秋は深く頭を下げる。
と、

「おお、みんないるな」

藤原三佐がドアを開けて入ってくる。

「三佐。遅いお帰りで」

小田が光秋の影から顔を出して応じ、光秋も振り返って藤原を見る。

「……………三佐が帰ってきた？」

「儂がいけない間に、ずいぶん面倒なことになったようだな」

「ええ。今報告書書いてたところですよ」

藤原と小田が話している横で、光秋はふと違和感を覚える。

そして、

「……………今何時だ？」

ハツとし、すぐに左手首の腕時計を見る。

「6時10分！——一尉！始末書は出しましたよね！」

「あ？ああ…………」

「他にすることは？」

「な、ないが…………」

「では、今日はこれで失礼します。御苦労さまでした！」

急な問いに驚く小田に一礼すると、光秋はカバンを掴んで部屋を出、エレベーターに

駆け込む。

――始末書書くのに夢中になって伊部さんのこと忘れてた!――

ゆつくりと動き始めたエレベーターの中で、焦りつつもそのことを深く反省する。

1階に着いたエレベーターが開くや、光秋はすぐに駆け降りて正門へ向かう。

が、

「……やっぱりな………」

そこに伊部の姿はなく、知らぬ間に落胆の声を漏らす。

腕時計を見ると、6時15分を指そうとしている。

「はあ……いないよな……そりやそうだ。15分の遅刻だぞ。さすがに怒って帰っちゃったよな……はあ………」――明日どの面下^{つち}げて会えばいいんだ……――

門の周囲を未練たらしく見回しながら呟くと、思わず深い嘆息が漏れる。

と、

「光秋くん?」

「!?!」

後ろから呼び掛けられた光秋はすぐに本舎の方を振り向き、

「伊部、さん?………」

制服を着て左肩にカバンを提げた伊部を見る。

すっかり暗くなっていたものの、周囲の微かな灯りで、どこか戸惑った顔をしているのが辛うじて判る。

「あの、どこに……」

「ああ、ごめん。今三佐と一緒に戻ってきたところで、その……ちよつとトイレに」

「あ……ああ……そうですね……」——それもそうだ。三佐がついさつき部屋に來たつてことは、伊部さんも一緒に帰ってきたんだから、どの道約束より遅れてくるんだ——

眩きながら事態を整理し、ひとまずの安堵を覚える。

「……とりあえず、私の部屋行こっか」

「……………そうですね。伊部さんの手作り料理、楽しみだ」

伊部の言葉に光秋はハツとしつつも返し、持ちっぱなしだったカバンを右肩に斜め掛けする。

「あんまり期待しないでよ」

伊部がそう返すと、2人は伊部の寮へ向かつて歩き出す。

4 4 姉貴分の誕生日

「……そういえばさ」

「はい？」

街灯や店から漏れる明かりが照らす夜道を並んで歩いていると、不意に伊部が話し掛け、右隣を歩く光秋は目をやりながら応じる。

「都合で遅れるかもしれないってメール来たけど、なにかあったの？」

「ああ……」

伊部の質問に、光秋は今日の失敗を思い出して少し気落ちする。

「……護送車の警護があるって、昨日連絡しましたよね」

「うん」

「それやつてる途中で、車列が襲撃されました」

「襲撃!?!」

突然出た物騒な言葉に、伊部は驚きの声を上げる。

「で、どうしたの？」

「その時小田一尉が指揮を取ってたんですが、応援が来るまで待ってっていう指示を無視

して、僕ニコイチに乗り込んじやって……要するにキレたんでしょね……で、襲撃犯たちが乗ってきた車を、こう持ち上げて……」

言いながら、光秋は物を掴んだ両手を上げる動作をする。

『今すぐに車列から離れろ』って叫んだんです。そしたら襲撃犯はみんな逃げていったけど、結局命令違反を犯したわけで……帰ったら一尉にゲンコツ食らって、グラウンド10周と始末書書くことになりました……」

「それは……」

「それで、走り終わってから始末書書こうと思ってたんですが、初めてでなにをどうしていいかわからなくて、一尉や二尉に訊こうと思ってても2人とも襲撃犯の取り調べに行っていないくて、仕方なく2人が帰ってくるまで待つてから書こうと思って、それだと約束の時間に間に合わないかもしれないと思って、それでそのメール送ったんです」

「なるほどね……」

「……で、帰ってきた二尉に頼んで教えてもらいながら始末書書いたんですが、それに夢中になり過ぎて、三佐が待機室に来たのを見て慌てて正門に向かった、と言うわけです」
伊部の相槌を挟みながら、光秋は嘆息混じりに説明する。

「……短い一日で、いろいろ大変だったのね」

「そういうことですね……ダーク・ドールを相手にするよりはずっとマシでしょうけど、

その分力加減も考えなきゃいけないし」

「それはね……」

「……ま、なにはともあれ、問題はひと段落したし、僕自身きちんと反省したんです。次気を付けねばいい……ですよ？」

「そうね……とりあえず、今日はもう仕事の話はやめとこ。今晚ゆっくり休んで、明日また頑張る。それでいこう」

「そうします」

伊部に応じると、光秋は余計なことを頭の隅に追いやつて意識を前に向け直す。

しばらく歩くと、2人は地下鉄の駅の出入り口に差しかかる。

「もう少し行くと一尉の寮で、そこから3つ目の角を右ですよ？」

以前来た時のことを思い出しながら、光秋はなんとなしに訊く。

「そう……そういうえば、光秋くん一度部屋の前まで来たんだよね……私よく憶えてないけど……」

「ええ……」

伊部の少し曇った表情に、光秋も返事に迷いながら返しつつ、酔っ払った伊部を背負って初めてその部屋の前まで来た時のことを思い出す。

その間に小田の寮を過ぎ、3つ目の角を曲がって路地に入り、3階建ての寮の前に着

く。

「210号室、でしたよね？」

「うん」

思い出したことを言った光秋に伊部は応じながら、2人は寮に入って階段を上がり、2階の端のドアの前に着く。

伊部はズボンの左のポケットから鍵を出して開錠し、ノブを引いてドアを開けると、
「入って」

と、先に入って玄関の灯りを点けながら光秋を招く。

「お邪魔します」

応じつつ、光秋は伊部に続いて玄関に入って靴を脱ぎ、短い廊下を進んだ先にあるドアをくぐって居間に入る。

先に入った伊部が紐を引いて蛍光灯を点けると、八畳程の広さに足の短い丸テーブルやベッド、小型のテレビ、すでに点いている電気ストーブなどが置かれた部屋が明らかになる。

「僕の部屋より少し広いですね。机みたいな大きな家具がないからかもしれないかもしれませんが……」

好奇心の目で部屋を見回しながら、光秋は率直な感想を述べる。

「そうなの？とりあえず座つて。今ぐはん温めるから」

「はい」

カバンを床に置き、脱いだ上着をドアの右隣にあるクローゼットに仕舞いながら伊部は返し、光秋は廊下に消える伊部を見ながら応じると、カバンをドアのそばに置いてその上に脱いだ上着と制帽を置き、ワイシャツのボタンを2つ開けて丸テーブルのそばにドアに背を向ける形で正座する。

——……よくよく考えたら、女の人の部屋に入るなんて初めてじゃないか？親戚や、小さい頃は友達の家遊びに行ったことはあるけど、血縁のない……成人女性の部屋を訪ねるのは初めてだな——

好奇心一杯に部屋を見回しながら、ちよつとした感動を覚える。

「座布団使えばいいのに」

言いながら、料理を載せた盆を持って伊部が部屋に入ってくる。

「ああ……ありがとうございます」

部屋の観察に夢中でドアの音に気付かなかった光秋が呆然としている間に、伊部は盆をテーブルの上に置いて光秋の右隣のベッドの上にある座布団を差し出してくれる。

「足も崩して、楽にして」

「はい……」

応じつつ、光秋は座布団の上に尻を着いて胡坐をかく。

伊部も自分の分の座布団を取って光秋の左前に置き、盆のカレーライスとサラダ、コップに入った水を2人分置いていく。

全て置き終えると、伊部は盆をテーブルの下に置き、座布団の上に腰を下ろす

「……カレーですか」

テーブルの上のカレーに目を落としながら、光秋は不安な声を漏らす。

「うん。大丈夫、甘口にしておいたから」

「はあ……」

伊部は微笑を含んで返すが、光秋のカレーに対する不安は消えない。

と、

「あぁ、そうだ」

光秋はカバンを引き寄せると、中から用意しておいたプレゼントの包みを取り出す。

「お誕生日おめでとうございます!」

微笑みを浮かべながら、両手で持ったそれを伊部に差し出す。

「私に?」

「はい……といつても、僕こういうのよくわからないから、中身のセンスはあんまり期待しないでください……」

「そんなこと……開けていい?」

「どうぞ」

光秋の返事を聞くと、伊部は封を破って白地に赤いフリルが付いた髪留めを出す。

「シュシュだ! ありがとう!」

中身を見るや、伊部は笑みを浮かべてくれる。

「それシュシュっていうんですか? 名前まではわからなかったんで……」

「付けてみていい?」

「どうぞ」

光秋が応じると、伊部は付けていた髪留めのゴムを解き、貰ったばかりのシュシュで髪を束ねる。

「どう?」

「ええ、似合いますよ」

髪を示す伊部に、光秋は微笑んで答える。

「よかった」

「……さつきはああ言いましたが、一応似合うと思って買いましたからね」

「それもそっか。じゃあ、プレゼントもいただいたし、食べよっか」

「はい。いただきます」

伊部の勧めに応じると、光秋はスプーンを持ってカレーを食べ始める。

「……そういえば伊部さんて……その、孤児だつて、言つてましたよね？ 今日が誕生日だつてどうして判つたんですか？」

カレーを何口か食べて痛くなり始めた喉に水を流しながら、光秋は少し言葉に迷いつつ、ふと浮かんだ疑問を訊く。

「ああ。今日は私が今の両親に引き取られた日で、それで誕生日が今日になったの。本当の日付はわかんない」

「そうですか……すみません。変なこと訊いて……」

伊部の答えに返すと、気まずさからカレーを速口で食べる。

「別に。氣い遣いすぎ」

「……そうですか？」

応じつつ、痒くなり始めた左耳の奥を掻く。

それを見て伊部は、少し驚きを浮かべる。

「そんなに辛い？ 甘口なのに」

「甘口でも、どういうわけかダメなんです……」

言うと光秋は水を一口飲み、口直しにサラダを少し食べる。

「ふー……」ちそうさまです」

カレーとサラダを食べ切って水を飲み干すと、光秋は満足そうに手を合わせる。

「お粗末さま」

伊部も水を飲みながら満足そうに返すと、テーブルの下から盆を取り出し、空になった食器を載せていく。

「片付け手伝いましょうか？」

「うんうん、いいよ。座ってて」

言うのと伊部は全ての食器を盆に載せ、それを持って台所へ向かう。

手伝いを断られた光秋は、ドアに消える伊部を見送りつつ、

「いいんですか？伊部さんの誕生日いつてことで来たのに、準備も片付けも任せちゃって」

と、少し申しわけなさを感じながら言う。

「こんなの大したことじゃないよ。それに、誕生日を一緒に祝ってくれる人がいるって、それだけで充分嬉しいもん」

水が流れる音に混ざって、ドア越しに伊部の声がそう応じる。

「それならいいんですが……」

ドアの方を振り向きながら言うのと、光秋はテーブルの方に向き直り、左手首の腕時計を見る。

—7時10分か……明日も早いし、そろそろ帰るか？……とりあえず、皿洗いが終わるまで待とう—

思いつつ、ドアを見やる。

少しして皿洗いを終えた伊部が部屋に入ってくると、座布団から立ち上がる。

「そろそろ帰ります。明日も早いんで」

上着を羽織りながら言う、伊部は少し残念そうに応じる。

「そうだね。泊っていつて言いたいところだけど、着替えもないし」

「そうだとっても、一人身の女の人の部屋に泊るなんてできませんよ。職場に変な噂がたっちゃう」

上着のボタンを締めてカバンを右肩に斜め掛けしながら言う、光秋は制帽を被って玄関へ向かう。伊部も後に続く。

制靴を履くと、光秋は伊部の方に振り返り、一礼しながら言う。

「それじゃあ、カレーごちそうさまでした。また明日」

「こちらこそ、誕生祝いありがとう。プレゼントもね」

伊部が髪を束ねているシユシユを示しながら返すと、光秋はもう一礼して部屋を出、階段を下りて寮を出る。

路地を抜けて表通りに出ると、来た道を辿って自分の寮へ向かう。

—さすがにこの季節になると夜は冷えるなあ……—
吹き付ける風に両手を上着のポケットに入れながら思うと、今日一日のことを思い出
す。

—警護に行つて襲われて、一尉に殴られて、それで最後は伊部さんの誕生祝いか……
盛り沢山の一日だったな……—「ま、こんな日もあるか……」

なんとなしにそう呟くと、光秋は寒さに追い立てられる様に家路を急ぐ。

病床の夢編

45 病床の夢 前編

11月25日木曜日午後0時40分。

昼食を終えた光秋は、一息つこうと藤原隊の待機室へ向かう。

「ああ加藤、お前に手紙が来てたぞ」

—手紙？ 誰からだ？—「ありがとうございます……」

部屋に入るや椅子に座っている小田一尉に茶封筒を差し出され、首を傾げつつそれを受け取ると、テーブルを挟んで小田の向いに座り、宛名を見る。

—『藤原隊 白い犬様』？—「一尉、これって!?!……」

書かれている宛名に驚きの声を上げつつ、小田を見据える。

「とりあえず開けてみる」

「はい……」

戸惑いつつも、微笑を浮かべた小田に言われた通りに封筒を開けると、中から三つに折られた便箋を取り出す。

「?」

封筒をテーブルに置いて便箋を開くと、それを読み始める。

―『拝啓 白い犬様 先日の護送任務の際は、危ないところを助けていただきありがとうございます。とうございしました』……―「これって……この間の警官の方ですか？」

最後に書かれている「村山 花」という名前こそ知らないが、一通り読んだ内容から、光秋は手紙の送り主を察する。

「そう。ついでに言うとな性の方な」

「！」

小田の説明を聞くと再び手紙を一見し、ゆっくりと小田に視線を戻す。

「護送任務の翌日、お前が三佐と外で訓練してる時に電話があつてな。是非お礼を言いたいって。でも時間がないから手紙にするんで、お前の名前を覚えてくれってな」

「それで、なんで『白い犬』なんです？」

小田の説明に返しつつ、光秋は封筒の宛名を再見する。

「俺がその名前で出すように頼んだからだよ」

「またなんで？」

「理由はいろいろあるが、一番の理由は、通り名の方がかつこいいと思ったからだ」

「……なんか、竹田二尉みたいなこと言いますね」

「そう言うな。それに無暗に名前を知られない方が、お前にとっても都合がいいだろう。」

有名になり過ぎてストーカー気質のファンが付くよりはな」

「まあ……」――確かにな……それに『加藤光秋』という具体的な人間よりも、『白い犬』というニコイチとセツトで……ニコイチを通して見られる存在の方が、みんなの夢も膨らむし、人知れず戦うっていうのは悪くない、か……―

小田に曖昧に応じつつも、満更でもないと自覚しつつそう思う。
と、

「?」

光秋は小田が微笑みを浮かべ続けていることに気付く。

「どうした?」

その視線に気付いたのか、小田が訊いてくる。

「いえ、一尉が嬉しそうな顔をするので、どうしたのかと……」

「そりゃあ、部下が……仲間が感謝されてるんだ。嬉しくなるさ」

「仲間……ですか……」

その言葉に、光秋はどう返していいか困ってしまう。

「……でも、前はこの時のことで怒ってたんじゃない?」

「怒ったのは、あくまで命令違反に対してだ。それはそれで問題だが、他人^{ひと}の命を救おうとしたことは、それだけで称賛ものだ……」

そこまで言つて小田は、光秋から視線を逸らすと右頬を搔く。

「まあなんだ、要するに……次はもう少し利口にやれ……さーて、トイレトイレ……」
言うと小田は席を立ち、眩きながら部屋を出ていく。

ドアに消える小田の背中を見送りつつ、光秋は先程言われたことを思い出す。

「『他人の命を救おうとしたことは、それだけで称賛ものだ』、か……やり方に多少問題があったとはいえ、やろうとしたこと自体は、やっぱり間違つてはいなかったんだ。それこそ、次はもう少し利口にやればいいんだ！――」

その認識は、先日から胸の内に引つ掛かつていたものを解消してくれる。

「……そんなじゃま、僕もそろそろ行くか」

すつきりした心境で気持ち切り替えると、手紙を戻した封筒をカバンに仕舞い、午後の訓練に向かう。

12月4日土曜日。

「……………」

携帯電話のアラーム音に目を覚ました光秋は、音を止めると画面の時計を見る。

――6時……起きなきゃ……――

眠気を残しつつもそう思うと、掛け布団ごと上体を起こす。
と、

「……？」

体中に薄つすらと痛みを覚える。

—なんだ？……風邪かな？……—

痛みの具合や鉛が付いた様に重い体の感覚からそう推測する。

「……でも、休むわけには……」

仕事のことを思いながらそう呟くと、動く度に軋む様に痛む体をベッドから下ろし、着替えや朝食といった出勤の準備をする。

その間にも体の痛みや重さは治まらず、喉の痛みまで感じ始める。

—やっぱり休むか？……でも、それ程でもない様な……行くだけ行って、ダメだったら帰らせてもらうか……—「ゲッフ！……ゲッフ！……」

咳き込みながらそう思うと、光秋はトレーニング以外の準備を済ませ、カバンを右肩に斜め掛けして京都支部へ向かう。

体全体を引きずる様に歩いて京都支部の本舎に着くと、光秋はエレベーターに乗り込み、背中を壁に預けて地下に下りる。

—……やっぱり厳しいかな？—

思いつつ、痛む脚を擦る。

地下1階に着くと、動きが鈍くなっている足なりに速く藤原隊の待機室へ向かう。

「おはようございます……」

喉に響かない程度の声で挨拶しながら部屋に入ると、先に来ていた藤原三佐が広げている新聞を下ろして顔を出す。

「おお。おはよう」

返事を聞きながら、光秋はテーブルを挟んで藤原の向いの席に腰を下ろす。

「どうした？ 顔色が優れんが」

「ちよつと、風邪ひいたみたいで……ゲッフ！ゲッフ！」

藤原の問いに、左手で口を覆って咳をしながら答える。

「……なので、今日の訓練は休ませてください」

「了解したが、そもそも来て大丈夫なのか？」

「やるだけやってみます……それに、ここにいた方が上杉さんにもすぐに診てもらえるし……ゲッフ！」

「ウム……とりあえず、無理はするな。後で全員に説明するが、今月は空軍との演習が入ってるからな。お前がいけないと話にならん」

「はい……」――演習？……この間伊部さんが頼みに行つたやつか？……――

喉が痛まないよう短く応じつつ、光秋は先週のことを思い出す。

しばらくして、小田一尉と伊部二尉が部屋に入ってくる。

「おはようございます」

「おお。おはよう」

「おはようございます……」

2人の挨拶に、藤原と光秋はそれぞれ返す。が、藤原の声に比べて光秋の声は擦れる様であり、体調の悪さが表れている。

それを感じてか、伊部が心配そうな顔で訊いてくる。

「光秋くん、元気なさそうだけど大丈夫？」

「風邪ひいたみたいで、今日は無理のない範囲で頑張ります……ちょっと失礼……」
鼻声で応じると、光秋は足元のカバンからポケットティッシュを出して涙をかむ。

「ほんとに無理するなよ」

「はい……」

小田に应じると、使った紙をズボンのポケットに仕舞う。

午前8時。

「うーっす」

寝むそうな顔をした竹田二尉が部屋に入ってくると、藤原はテーブルに着いている一同を見回して言う。

「よし、皆揃ったな。早速だが、先日話していた演習の件で連絡がある」

その間に、竹田は光秋の右隣に座る。
と、

「ゲッフ！ゲッフ！……」

直後に光秋は左手で口を覆いながら咳をする。

「なんだ、風邪か？」

「ええ……やつちやつたみたいで……ゲッフ！」

竹田に擦れた声で応じつつ、また咳をする。

それを見つつ、藤原はカバンからメモを取り出して説明を始める。

「えー、日程は12月22日の午前9時、場所は春にニコイチの飛行試験をやった演習場、相手は空軍の古谷大尉のチー——」

「ゲッフ！ゲッフ！……」

藤原の言葉を遮る様に、光秋はひと際大きな咳をし、息が少し荒くなる。

「ちよつと、大丈夫？顔もなんか赤いけど」

言いながら、光秋の正面に座っている伊部が右手を額に付けてくる。

「かなり熱いじゃない！今日はもう帰った方が……」

言いながら、伊部は心配そうな顔を藤原に向ける。

「ウム。確かにな……」

顔全体に朱が注した光秋を見つつ、藤原も表情を曇らせる。

「よし。上官として命令する。体調が回復するまで自宅療養しろ」

「はい……」——命令ならいいか？……—

擦れた声で藤原に返しつつ、光秋は鈍くなり始めた頭で少し考える。

「その前に、上杉さんの所に寄っていいいですか？」

「構わんが、今いるか？」

光秋の申し出に、藤原は左手首の腕時計を見ながら不安げな顔をする。

「ちよつと待つてください……」

それに応じる様に竹田はズボンのポケットから携帯電話を取り出し、上杉に掛ける。

「あ、上杉？ お前今医療棟いる？……加藤が風邪ひいたみたいでさ、今帰るように言われたんだけど、その前に診てもらいたいんだってよ。大丈夫か？……ん。わかった。じゃあ今からよこすから、待っててくれ。じゃ……いつもの診察室にいるから、真っ直ぐ来てくれるよ」

「ありがとうございます……ゲッフ！」

竹田の説明に、光秋は咳をしながら応じる。

「それじゃあ、僕は今日これで……」

言いながら、光秋は席を立てて足元のカバンを右肩に斜め掛けする。

「医療棟まで送っていった方がいいんじゃないか？」

やや足元が心許ない光秋を見て、伊部の左隣に座る小田が言う。

「それじゃあ、私行きます」

応じながら、伊部は席を立てて光秋の許に歩み寄る。

「大丈夫ですよ……ゲッフ！」

「いいから。さ、行こう」

伊部に促されて、光秋は医療棟へ向かう。

伊部に付き添われて医療棟の前まで来ると、光秋は足を止める。

「ありがとうございます。後は……」

「そう？……じゃあ、後で連絡して」

「はい……それじゃあ……」

伊部に一礼すると、光秋は医療棟の玄関をくぐってエレベーターに乗り込む。

「はあ……」

吐息を漏らしながら今朝よりも重く感じるようになった体を壁に預け、ドアが開くと動かす度に痛む足で上杉の診察室へ向かう。

診察室の前に着くとドアを2回ノックし、

「どーぞー」

ドア越しの上杉の返事を聞いて中に入る。

「おお、待ってたぞ風邪ひき」

「お願いします」

白衣姿で椅子に座る上杉に応じつつ、光秋はカバンを置いて制帽をその上に置き、上杉の前の丸椅子に腰を下ろす。

「じゃあ、まずこれ脇に挟んで」

「……体温計ですか？」

「ああ」

上杉の返事を聞きつつ、上着とワイシャツのボタンを外して渡された体温計を左脇に挟む。

その間に上杉は光秋の額に右手を当て、しばし目をつむって集中すると、机の上のカルテにボールペンを走らせる。

体温計が鳴ると、それを脇から出して上杉に差し出す。

「38度5分。触診の結果を考えても、確実に風邪だな。とりあえず薬出しとくから、家に帰って安静にしてろ。水分と栄養補給もしっかりな」

「はい……ありがとうございます……」

体温計を受け取ってカルテになにか書きながら言う上杉に、光秋は鼻声で礼を言い、

服装を整えると診察室を後にする。

エレベーターで1階に下りると、光秋は受付前の長椅子に座り、次々と出てくる涙をかみながら呼び出しを待つ。

——……緑^{あお}くなってきたな……異物を出そうと頑張つてはいるんだ……—

若干ばうつとする頭でそんなことを思いながら、何枚目かの涙を cand テイシユを丸めて上着のポケットに入れる。

名前を呼ばれて会計と薬の受け取りを済ませると、重い体を引きずつて寮へ戻る。

——……寮つて、こんなに遠かったっけな?—

いつも通りの道を歩いているのに妙に遠く感じることに疑問を覚えつつ、やつとの思いで寮の自室に着く。

——……体洗った方がいいか?……いいか……—

カバンを置いて浴室で手洗いとうがいをしながらぼんやりと考えると、先程受け取った薬が入った紙袋をカバンから出して机の上に置き、上着から出した携帯電話とカプセルをベッドの枕元に置く。

制服から青チエツクのパジャマに着替えると、枕元にティシユの箱を、ベッドの足元にゴミ箱を置き、ベッドに掛けた梯子を上つて布団の上に尻を着く。

——とりあえず……寝よう……—

力一杯に洩をかみ、使った紙をゴミ箱に捨てながら断じると、メガネを携帯電話のそばに置き、掛け布団を被って横になり、いくらもせずに寝入ってしまう。

制服を着た光秋は、いつもと同じ道を歩いて京都支部に向かう。

— 光秋くん。足元に気を付けて—

— ?……足元?……—

何処からか聞こえた伊部の声に歩を止めると、足元を見下ろす。

— !?—

そこには何人もの人間が白い巨大な足に踏み潰され、嘔き出た大量の血が辺りを真っ赤に染めている光景が広がっている。

— ……………—

束の間言葉失っていると、自分がニコイチのコクピットで操縦席に座っていることに気付く。

と、

— !?—

ニコイチの右手が勝手に動き出し、一杯に開いた掌を惨状から逃げ惑う人だかりに伸ばす。

— やめろ!—

言うや光秋は意識を集中し、右手の動きを止めようとする。が、右手は動きを鈍らせることなく人だかりに向かう。

——こ、この！——

さらに意識を集中させつつ左右の操縦桿をデタラメに動かしてみるが、手は一向に止まらず、ついに人だかりの1人を掴んで持ち上げる。

その手の中で激しくもがく白い半袖のワイシャツに赤いロングスカートを着、黒く長い髪を広げた人を見た時、光秋は言葉を失う。

——綾!?!……——

そして、

——!——

ニコイチの手に徐々に力が加わり、手の中の綾を握り潰そうとする。

——!……!——

その感触は光秋自身の右手に伝わり、柔らかな体に徐々に力が掛かる感覚に焦りを覚えつつも、それを何とか止めようとニコイチの右手に渾身の念を送り、左右の操縦桿を激しく振り回す。

が、直後、

——!……!……!——

モニター越しにグシャツという音が響き渡り、同時に光秋の右手に柔らかいものが潰れる感触が伝わる。

———
恐る恐るモニターを見ると、今度はいつも通り素直に光秋の意思に反応したニコイチの右手が、ゆつくりと手を開きながらその掌を示す。

———
冴える様な赤一色に染まった掌から赤い欠片がいくつか落ち、それを追って光秋は顔を下ろし、肉片が浮かぶ血溜まりを挟んで肩から上と腰から下に分かれた綾の体を見る。

と、口の両端から血を流し、苦痛に歪んだ表情で固まった綾と目が合う。

——うあああああ——

「……………」

ハツとした光秋は目を見開き、白い天井を視界に入れる。

———夢、かあ……………

見慣れた天井と周囲の壁、布団を被ってベッドで横たわっている自分を把握して、状況を理解しつつ安堵の息を漏らす。

——酷い夢だ…………—

思いつつ、右手を布団から出して掌を見る。

「……」

血で汚れてもいなければ人を握り潰した感触もない掌にほっとしつつ、力を抜いて右手を額に載せる。

と、

—汗かいたな……—

未だ熱が引かない額がじつとりと濡れていることに気付き、合わせて体中が汗ばんでいるのを感じる。

—着替えなきゃ……—

思いつつ、重い体を億劫そうに起し、梯子を伝ってベッドから下りる。

パジャマの上を脱ぎ、多量の汗が染み込んだシャツを脱ぐと、脱いだシャツで額や体に残っている汗を拭き取る。それを洗濯機に入れると、箆笥から新しいシャツを出して着替える。

——…：…：…：…：…：…：—

パジャマを着ながらそう思うと、枕元のメガネを掛け、連絡の有無の確認も兼ねて携帯電話を取って画面を開く。

11時半を示す時計を確認しつつ、メールが1件来ているのを見てそれを開く。

—伊部さん?—

『検査の結果どうでしたか? 具合が落ち着いたらいつでもいいので電話ください。待ってます。』

—これいつ来た?……9時半……そういえば、後で連絡してって言われてたな—
別れ際の言葉を思い出し、光秋は伊部に電話を掛けようとする。

—11時半……ま、『いつでもいい』っていつてるし、いいか—
時間を気にしつつもメールの言葉を優先し、通話ボタンを押す。

「……」

(もしもし?)

「あ、伊部さん? 加藤です」

鼻声を出しながら、光秋は左耳に当てた電話越しに応じる。

「今メール見たんですが……時間大丈夫ですか?」

(うん。大丈夫)

「すみません……帰ってからずっと寝てて」

(うんうん気にしないで。それより、具合どう?)

「今朝よりはいくらか……いや、あんまり変わらないですね……でも薬貰ったんで、お昼の後に飲めば、少しは楽になるかと」

（そう……ねえ、よかったらこれから行くか？）

「え!？」

伊部の突然の申し出に、光秋は驚きの声を上げる。

「いいですよわざわざ……仕事だつてあるし……そもそも伊部さん、僕の寮の場所知らないでしょう?」

（そんなの三佐に訊けばすぐ分かるし、支部からそんなに遠くじゃないんでしょ?）
「まあ……伊部さんの寮に比べれば近いですけど……」

（それに仕事だつて、急いでやらなきゃいけないものもないし、お昼ご飯買って行くから）

「でも……部屋は散らかつてるし……僕バジャマですし……」

（病人がそんなこと気にしてるんじゃないの。とにかく、今から三佐に許可と道訊いて行くから。待つてね）

「あ……」

光秋の返事を待たず、伊部の方から電話が切られる。

——伊部さんも強引だな……が、確かに病人が気を遣うもんでもないか……ここは伊部さんの好意に甘えさせてもうらうかな……もつともそれを言ったら、伊部さん、いや、藤原隊のみんなにはいつも甘えてる気もするが……—

少しは調子が戻ってきた頭でそんなことを考えつつ、光秋は押し入れから灰色のセーターを出してそれを羽織り、ベッドに入って脚に布団を掛け、上体を起こした姿勢で伊部を待つことにする。

午後0時。

——……伊部さん、遅いな——

携帯電話で時刻を確認しつつ、光秋は一向に來る気配のない伊部を心配する。

——やっぱり、抜けられなかったのかな？それともなにかあったか？……——
と、

「……！」

携帯電話が振動し、光秋はすぐに電話に出る。伊部からだ。

「もしもし？」

（あ、光秋くん？……）

電話越しに、伊部の若干狼狽を含んだ声が響く。

「……やっぱり、ダメでしたか？」

（うんうん。仕事の方はちゃんと三佐に許可取ってきたから問題ないの。ただ……光秋くんの寮の場所がわからなくて……）

「？……三佐に訊かなかったんですか？」

（そうじゃなくて、教えてもらった道を進んでるんだけど、どうしても寮が見付からなくって……大通りから路地に入って少し行った所にあるって訊いたんだけど……）

—ああ、なるほど……—「ああ、確かに見つけ難いかもしれませんね……伊部さん、どこにいますか？」

（表通り、支部寄りかな。もう一度教えてもらった道を試すところだけど）

「……じゃあ、僕が迎えに行きましようか？」

（え、いいよ。まだ具合悪いんでしょう）

「そうですが……ゲッフ！……」

（ほら……）

「……でも、このままじゃ伊部さん寮に着かないし、そうしないと僕もお昼食べられないし……」

（そうだけど……）

「路地の入り口——橋の手前の本屋と弁当屋の間で待ってます。わかりますか？」

（うん。今向つてるところ）

「じゃあ、そこで待っていてください。今から行きます」

（うん……ごめんね。無理しないで）

「すぐそこですから……それじゃあ、後で」

伊部の申し訳ない声に応じて電話を切ると、重い体をベッドから下ろす。

—この格好は……いいか。路地までだし—

人目を気にする必要がないと判断すると、光秋はセーターのポケットに携帯電話とカブセル、鍵を入れ、押し入れから出した厚手の茶色いコートを羽織り、裸足で制靴を履いて伊部の元へ向かう。

少々頼りない足で約束の場所に着くと、光秋は左右を見回して伊部を探す。
と、

「お待ちせ」

左から制服姿に左肩にカバンを提げ、右手に大きなビニール袋を持った伊部が速足で寄ってくる。

「いえ、今来たところ——ゲッフ！ゲッフ！……行きましょう……」

「うん」

伊部の返事を聞くと、光秋は伊部を伴って来た道に戻る。

真つ直ぐの道突き当たりまで進み、右に曲がつてすぐの所で止まると、光秋は後ろの伊部を見る。

「……です、僕の寮」

「あ、……かあ」

光秋が指した2階建て4部屋の寮を見て、伊部はようやく合点がいった様な顔をする。

「この辺何度も通ったけど、全然わからなかった」

「まあ、確かに慣れてないと気付き難いかもしれませんが……隠れ家みたいで面白い——ゲッフ！ゲッフ！……早く入りましょうか……」

「そうだね」

伊部が応じると、光秋はドアの鍵を開け、2人は中に入る。

居間に進むと、光秋はコートを脱いで押し入れに戻し、ベッドの梯子を片付けて、ベッドの下から茶色いチェック柄の布団が掛かったコタツを引き出す。

「入っててください……僕ちよつと」

コタツの電源を入れながら言う、光秋は風呂場に行つてうがいと手洗いをする。

「几帳面だね」

「風邪ひいてるのもあるんで……」

廊下を背にしてコタツに入る伊部に応じつつ、光秋は暖房に設定したエアコンを入れ、自分も伊部の左前からコタツに入る。

「まあね……さ、ご飯にしよう。私が迷つてたせいで遅くなっちゃったし」

言いながら、伊部はビニール袋をコタツの上に置き、中からチューブ容器のゼリーや

紙カップのヨーグルト、スポーツドリンクのペットボトルなどを取り出す。

「そんなこと……それより、本当に仕事の方大丈夫なんですか？」

伊部からゼリーのチューブを渡されながら、光秋は未だに気になっていたことを訊く。

「大丈夫。三佐に許可とつて、午後から休ませてもらうことになったから。それに、三佐が言つてたよ。『加藤がいないとウチの戦力が低下するから、しっかり看病してやれ』つて」

「それは……」

チューブを片手に藤原の口調を真似て言つた伊部の言葉に、光秋はありがたさと申し訳なさを覚える。

「あと一尉が、『加藤は大事な主力だから、ちゃんと見てやれ』つて」

「はあ……」

伊部に返しつつ、光秋は喜ぶべきか迷つた顔でチューブのゼリーを吸う。

「……ところで、二尉はなんて？」

「『女先輩に看病なんて羨ましいな』つて」

「はは……」

竹田らしい言葉に納得の苦笑いを浮かべつつ、光秋はまた一口ゼリーを吸う。

「……みんなに、そんなふうに期待してもらって、それでこのザマっていうのは……少し、情けないです……」

俯いて思わず言うのと、光秋はチューブに残ったゼリーを一気に吸い切る。

「そんなことないよ。風邪くらいみんなひくし、光秋くんこっちに來てからいろいろあったから、疲れが出たんだよ」

言いながら、伊部はゼリーを吸い切った光秋にプラスチックのスプーンを載せたヨーグルトのカップを差し出す。

「それは……まあ、そうでしょうね……夏の一時いっしきこそ比較的穏やかでしたけど、こっちに來てからはしよっちゅう問題……主に戦闘に巻き込まれて……」

差し出されたヨーグルトを一口食べつつ、光秋は脳裏にNPやサン教、DDとの戦闘、先日の護送の際の襲撃を浮かべる。

「そう。そんな状況で今まで一生懸命やってきたんだから、偶には風邪くらいひくよ」
「……そう……そうですね」

伊部の言葉に納得した様子で返すと、光秋はヨーグルトを早々と平らげ、手を伸ばして机の上の薬の袋を取り、説明書を読むと伊部から渡されたスポーツドリンクで2錠の薬を一度に流し込む。

そのまま残りのスポーツドリンクも飲み干すと、

「少し寝ます……その前にちよつと……」

光秋はコタツを出て風呂場に向かい、そこで歯を磨く。

用を足して居間に戻ると、伊部がベッドを見上げながら訊いてくる。

「このベッド、どうやって上がるの？」

「普段は梯子を使うんですが、今はコタツあるから……」

「退かそうか？」

「いえ」——あんまり気は進まないが……——「ちよつとすみません」

言うとき光秋は羽織っていたセーターを隅に退かしている椅子の背もたれに掛け、コタツを踏み台にして素早くベッドの上に這い上がる。

「少し寝ますんで、好きにしてください……鍵は冷蔵庫の所に掛かってますし、テレビはイヤホンが付いてるんで」

「了解。私も一息入れさせてもうらうね」

「それじゃあ、お休みなさい」

「お休み」

伊部の返事を聞くと、光秋はメガネ等を枕元に置き、右半身を下にして伊部に背を向ける形で横になる。

「……………」

風邪薬のせいかな、いくらもせずに寝入ってしまう。

しばらくして、光秋はゆっくりと目を開ける。

——…今度は、変な夢見なかったな……—

覚め切っていない頭でぼんやりとそう思うと、仰向けの体を左に向け、枕元の携帯電話を開いて時刻を確認する。

—2時半……だいたい寝ちゃったな……—

思いながら電話を戻すと、再び仰向けになる。

と、

「……？」

額になにかが貼り付いているのを感じ、右手でその辺りを触れてみる。

——…ああ、熱冷ましのシート……伊部さんが貼ってくれたか……—

布の様な感触と額に伝わる冷たさからなにかを察し、ぼんやりとそう思うと、光秋は再び寝入ってしまう。

またしばらくして、光秋は再び目を開ける。

——…いかん。また寝ちゃったか——

覚め切らない頭でそう思うと、ゆっくりと上体を起こし、ベッドの下を見る。

—伊部さんがいない……帰ったのか？—

コタツが仕舞われていることと、ベッドに梯子が掛かっていることからそう思うと、光秋は背中が濡れているのを感じる。

—また汗かいたな……そうだ。水摂とらないと……—

詰まり気味の鼻を勢いよくかみながらそう思うと、メガネを掛け、ベッドを下りて冷蔵庫を開け、先程伊部が買ってくれていた2リットルのスポーツドリンクのペットボトルを出し、台所の棚から出したコップ一杯に注いだそれを一口に飲み干す。

——…汗かいたか、薬が効いたのか、少し楽になったな——

一連の動きを通して、体が今朝より軽く感じる。

——…今何時だ？——

ペットボトルを冷蔵庫に戻しながらそう思うと、枕元の携帯電話を開く。

—3時か……寝過ぎもよくないし、本でも読むか—

そう思うとベッドの梯子を退け、風呂場へ行つて口を漱いで顔を洗う。濡れた顔を拭くと椅子の背もたれのセーターを羽織り、そのポケットに電話とカプセルを入れ、ベッドの下からコタツを出して電源を入れ、本棚から出した文庫本を持つてその中に足を入れる。

—鍵がない……てことは、伊部さんまた戻ってくるな—

冷蔵庫の扉のフックに掛けてある寮の鍵がないのを見てそう察すると、本を読み始め

る。

しばらくして、

「……………」

ドアの鍵が開く音が響き、光秋は読んでいた本を閉じてカーテン越しにドアの方を向く。

廊下を歩く音が数回響くと、

「あ、起きた？」

カーテンを除けて黒いコートを羽織った伊部が顔を出す。

「……………買い物に行ってたんですか？」

「うん。あと寮に戻って着替えてきた」

諸々の物が入ったビニール袋を見ながら訊く光秋に、伊部はポケットから出した部屋の鍵を冷蔵庫のフックに掛けながら応じると、買ってきた物を冷蔵庫に詰めていく。

「……………いろいろ買ってきてくれたみたいですが、そんなにあっても僕食べ切れませんよ。ただでさえ最近自炊しない上に、今風邪ですし」

スポーツドリンクやヨーグルトなどと一緒に冷蔵庫に詰め込まれていく野菜や卵、調味料などを見て、光秋はそれらの処理に困ってしまう。

「いいの。私も今日はこっちで食べてくから」

「え!?!……」

予想外の伊部の返事に、思わず驚きの声を上げる。

「それって……伊部さんが作るってことですか?」

「もちろん」

「いいんですか?この間も御馳走してもらったばかりなのに」

「この間は私の誕生日祝いでしょう。今回は光秋くんの看病。全然違うんだから、気にしないでいいの」

言い切ると、伊部は空になったビニール袋を片付け、コートを脱いでそのフードを壁に備え付けてあるフックに掛け、風呂場に行つて手を洗うと、コタツに青いジーンズを履いた足を入れる。

「ふう……コタツあったかい……」

灰色のセーターを着た上体をコタツに寄せながら、伊部は小声で呟く。

「……それ」

前屈みになつてテーブルに顔を寄せた伊部の後頭部を見て、光秋は伊部の髪がいつものゴムではなく、赤いフリルの付いた物で束ねられていることに気付く。

「ああうん。誕生日に光秋くんがくれたシユシユ。寮に帰った時に、せっかくだから着けてきたの……似合う?」

「ええ。とても」

「ありがとう」

光秋の現状での精一杯の力強い返事に、伊部は嬉しそうに応じる。同時に光秋も、

「早速使ってくれたか！しかし、やっぱりよく似合う！」

と、伊部の微笑みを見て自分も嬉しくなる。

が、一方で、

「……」

伊部の顔を近くでよく見た光秋は、先程の夢のことを思い出してしまい、僅かだが気分が後退するのを感じる。

「……どうしたの？」

そのことが顔に出たのか、伊部が少し心配した顔で訊いてくる。

「いえ、ちよつと思ひ出しちゃって……伊部さんに電話する前に見た、嫌な夢を……」

「夢？……どんな夢？」

「……細かい所は忘れちゃいましたが……そう、ニコイチを上手く制御できずに、他人を傷付けてしまう夢です」

言葉を選びながら、夢の概要だけが伝わるように慎重に答える。

夢の大部分を忘れてしまったのは本当のことであるが、ニコイチで人を踏み潰し、綾

を握り潰し、綾の死体と目が合って絶叫したことは鮮明に憶えており、その部分——特に綾に関する部分——は言ってはならない気がしたから、伊部の前で言う勇気がなかったからである。

「……でも、しよせん夢ですから」

「そうだね。光秋くんなら、そんなことにはならない」

「……」

気まずさを誤魔化そうと独り言として言った言葉に伊部が期待を込めた声で応じ、束の間応答に困る。

「……テレビでも観ますか？夕飯にもまだ早いし」

「そうだね」

伊部の返事を聞くと、光秋はコタツから出てテレビを点けに行く。

午後4時50分。

「さてと。そろそろ作るね」

机の上の時計で時間を確認した伊部はコタツから出て立ち上がり、居間と廊下を仕切るカーテンの裏に消える。

「お願いします……」

カーテン越しに应じると、光秋は溜まっていた涙を一気にかむ。

少しして、詰まり気味の光秋の鼻でもわかる醤油風味の匂いが広がってくる。それから少しして、

「できたよ」

カーテンが開かれると、伊部がうどんの入ったどんぶりを光秋の前に置く。

「ありがとうございます」

「先食べて」

「いただきます」

伊部が箸が入ったコップを置きながら言うと、光秋は両手を合わせて台所に立つ伊部を見ながら言い、うどんを食べ始める。

菜っ葉やニンジン、長ネギなどの野菜を大量に入れた具はいかにも滋養の塊であり、醤油と溶き卵を含んだスープは麺によく合い、味も上等なものである。

何口かうどんをすすっていると、伊部も右手に鍋を、左手に箸が入ったコップを持って居間に入り、台拭きを挟んで鍋をテーブルに置き、コップも置いてコタツに入る。

光秋が鍋の中身を見ると、自分が食べているのと同じうどんである。

「……すみません。どんぶり一つしかなくて」

「いいよ。洗い物が少なくて済むし」

言いながら、伊部は冷蔵庫からスポーツドリンクを出して自分のコップに注ぎ、光秋

の許にペットボトルを差し出すと、鍋に箸を入れてうどんを食べ始める。

——……まあ、もともと独り身だし、しょうがないか——

スプーンツドリリンクを注ぎながらそう思うと、光秋も再びうどんをすすする。

スプーンツドリリンクを飲みながらうどんを食べ終わると、光秋は風邪薬を出し、コップに残ったスプーンツドリリンクでそれを口に流し込む。

「ごちそうさまです」

「お粗末さま。思ったより食欲はあるみたいだね」

「ええ。もともと食べる気はありましたし、こういう時こそ、ちゃんと食べなきゃって」
「そうだね。顔色も昼間よりだいぶよくなってきたし」

「そうですか？……そう言えば、体もだいぶ楽になった気が……薬飲んだし、汗もかきま
したからね」

「だね」

光秋との会話を交わしつつ、伊部は食べ終わった食器を重ねて台所に運び、水盤で皿
洗いを始める。

——……これじゃ姉というより、お母さんだな……病人がそんなこと言ってもし
ょうがないか——

皿洗いをする伊部を眺めながらそう思うと、光秋は風呂場に行つて歯を磨く。

磨き終わるとコタツに入り、先程読んでいた文庫本を再び読み始める。

少しして皿洗いを終えた伊部もコタツに入っていると、

「僕、そろそろ風呂に入らせてもらいます」

それを見た光秋は本を机の上に置いて言う。

「もう？」

机の上の6時15分を指している時計を見ながら、伊部は意外そうに言う。

「休みの日は、いつもこれくらいに入りますが」

「でも、風邪ひいてる時にお風呂は……」

「シャワー浴びるだけです。どの道汗かいたから着替えないといけないし」

「それなら、私が拭いてあげるけど」

「！」

伊部の突然の提案に、光秋は一瞬心臓を跳ね上げる。

「いいですよ……それに、拭くんじゃなくて流さないとスツキリしないし。すぐに終わらせますから」

慌てて言いながら額のシートを剥がしてゴミ箱に入れ、コタツを出て下着とパジャマの着替えを用意し、羽織っていたセーターを椅子の背もたれに掛けて廊下に出る。

カーテンを閉めると、素早く着ている物を脱いで洗剤と一緒に洗濯機に入れ、フタを

閉めて回し始めた洗濯機の上に着替えを置くと、速足で風呂場に入る。

「寒い！どの道とつとと終わらせた方がいいな」

風呂場の寒さに震え上がると、光秋はメガネを外してバスタブの角に置き、シャワーを持って熱さを調整したお湯を頭から浴びる。左手で浴びている箇所を擦りながら体中を浴び終えると、風呂場に掛かっているタオルで体を拭き、蛇口でメガネを軽く水洗いして風呂場を出る。

メガネや髪を拭こうと着替えを置いた洗濯機の前に向かうと、

「……しまった！バスタオル忘れた」

ハツとしつつ束の間狼狽すると、渋々カーテン越しに居間の方を見る。

「やむを得んか……」 「伊部さん」

「なに？」

カーテン越しに伊部が応じる。

「すいませんが、そつちに掛かっているバスタオル取ってください」

「バスタオル？どこ？」

「壁のフックに掛かっているやつです。テレビの前の」

「ああ、あったあった」

「ありがとうございます」

言いながら、光秋はカーテンの端から右手を差し出し、伊部が差し出しだバスタオルを受け取って手を引つ込める。

——……よく考えたら、伊部さんからすれば布一枚隔てた向こうにすつぽんぽんがいるわけだよな。危ない危ない——

思いつつ、受け取ったバスタオルを首に掛け、水気を拭き取ったメガネを掛けると、髪を軽く拭き、体中の細かな水気を拭き取る。

下着の上下を履き、水色のチエック柄のパジャマを着て頭にバスタオルを被ると、カーテンを開ける。

「どうも失礼しました」

「うんうん。どうだったお風呂？」

「シャワーだけなんでなんと。治ったらちゃんと入りますさ」

伊部と話しつつ、光秋はある程度髪を拭いてバスタオルを壁のフックに掛かっているハンガーに掛け、押し入れからドライヤーを出して髪を乾かすと、椅子の背もたれのセーターを羽織り、冷蔵庫から目薬が入った袋を出し、コタツに入って3つある内の1つを左目に注す。

「それ、いつも注してるの？」

コタツの上の袋と光秋が持っている目薬を見ながら伊部が訊く。

「はい。眼圧を下げるんだって。小学校……3、4年の頃からずっとですかね」
「毎日？」

「ええ。朝晩2回」

「ふーん……やっぱり、大変なんだ」

「まあ……」

伊部との会話を交わしつつ、光秋は2つ目の目薬を注す。

その間に洗濯が終わわり、光秋はコタツから出て大窓の前のハンガーラックに置いてある洗濯かごを取りに行く。

「私がやるけど」

「いいですよこれくらい。大した量じゃないし」――さすがに女の人には下着見られるのも嫌だしね――

そう思いながら伊部の申し出を断ると、光秋はかごを持って洗濯機の前に向かい、中の洗濯物をかごに移してラックの前に運ぶと、下着類が伊部の目に付かないことを意識して竿の中央に来るように干し、他の物はその両脇に干して全体が密集するように掛けていく。

全て掛け終わるとコタツに入り、3つ目の目薬も注すと、3つの目薬を袋に入れて冷蔵庫に仕舞う。

「そういえば、熱はどう?」

コタツに入り直す光秋を見ながら伊部が訊く。

「だいぶ下がったと思いますよ。そんなに熱くないし」

応じつつ、光秋は額に手を当てて熱さを確かめる。

「そう……念のため体温計で計つとく?」

「いえ、この部屋体温計ないんです。持つてきてないんで」

「そう……じゃあ」

「?……!」

言うや伊部は右手を伸ばして光秋の額に触れ、光秋は心臓を跳ね上げる。

「うーん……確かに、私とそんなに変わらないかな?」

左手を自分の額に当てて熱さを比べつつ、伊部は首を傾げながら言う。

「ええ……まあ……」

伊部が手を離すのを見つつ、光秋は若干動揺を浮かべた顔でそれだけ言う。

と、ベランダに通じる大窓が光秋の視界の端に入り、閉まっているカーテンの隙間からすっかり暗くなった外が見える。机の上の時計に目をやると、7時を指している。

「ところで、そろそろ帰らなくていいんですか?」

「え? まだ7時だよ?」

「でも、外すつかり暗いですし、遅くならないうちに帰った方が」

「でも光秋くん……」

「僕のことなら大丈夫です。体調もだいぶよくなってきたし、後は寝るだけです。それより伊部さんこそ、半日近く風邪ひきと一緒にいたんですから、伝染らないように早く帰って休んだ方がいいですよ」

「そんなに軟^{やわ}じやないよ……でも、本人がいいって言うならね。それに、季節的にも油断はできないか……わかった。今日はこれで帰るね」

言う^と伊部はコタツから出、壁のフックに掛けてあつたコートを羽織つて玄関へ向かう。光秋もその後を追う。

玄関で靴を履くと、伊部は振り返る。

「一応、明日も来るから」

「何時頃です？」

「うーん、遅くても10時には来るかな。呼び鈴鳴らすから」

「わかりました。ありがとうございました」

「じゃあ、お大事に」

「はい。帰り気を付けてください」

言いながら光秋は頭を下げ、伊部はドアを開けて外に出る。

ドアが閉まると、光秋は鍵を掛けて居間へ向かう。

——来てくれたのにこっちから帰れて、追い出したみたいで失礼だったかな？……でもま、さっき言ったことも確かだし、明日も来るって言ってるし、いいか——

一瞬迷ったもののすぐに断じると、コタツに入って机の上の文庫本を取る。
と、

「……伊部さんが来た、か……」

伊部が座っていた所を見て感慨を覚えながら呟くと、光秋は本に視線を落とし、8時半頃に就寝する。

46 病床の夢 後編

12月5日日曜日午前8時。

光秋はベッドで布団を被りつつも、その意識は中途半端に冴えている。

——……………起きるか——

さすがに寝過ぎていると思って心中にそう呟くと、布団ごと上体を起こし、少し伸びをしてメガネを掛け、ベッドから降りる。

「……………昨日よりは、ずっとましだな」

重さや痛み、熱が退いた体にそう呟くと、朝食の準備をしつつベージュのズボンに灰色のTシャツ、黒チエツクの上着に着替え、エアコンを点け、コタツを出して朝食を摂り、朝の分の風邪薬を飲む。

食事の片づけ等を済ませると、

——一応、今日もトレーニングはやめとこ——

コタツに入って新聞を読む。

しばらくして新聞を一通り読み終わると玄関の呼び鈴が鳴り、光秋はコタツから出て玄関へ向かう。

—伊部さんかな—

思いながらドアを開けると、黒いコートを着て赤いフリルのシュシュで髪を束ねた伊部が立っている。

「おはようございます」

「おはよう。具合どう？」

「昨日よりずっといいです。まだ本調子じゃないだろうけど」

言いながら、2人は居間へ向かう。

居間に着くと、伊部はコートを脱いで壁のフックに掛け、風呂場の水盤で手を洗って青いズボンを履いた足をコタツに入れる。

「ふー、寒かった……」

「そんなに寒かったんですか？」

灰色のセーターを着た上体をコタツに寄せながら呟くと、先に入っていた光秋が訊く。

「うん。風が強くてね……ところで、光秋くんの風邪はだいたい治まったみたいね。顔色もいいし、赤くもないし」

「おかげさまで。喉もすつきりしましたし、なんぎ——だるい感じも取れました」

「そう。よかった」

「はい」

「……」

「……」——いかん。会話が途切れた……—

光秋が応じたのを最後に2人の会話は止まり、そのことに若干の焦りを覚える。

—そう言えば、昨日もこんな感じだったよな……せつかく来てくれたのに黙^{だんま}りつていうのは、いかんよな……あ—

そんなことを考えていると、光秋の視界に先程まで読んでいた新聞が入る。

—そういや、サン教関連で気になる記事があつたよな……それについて話振ってみるか——「……あの」

「そう言えばね」

同時に呼び掛けてしまい、2人とも言葉に詰まる。

「……なんです?」

「光秋くんこそ」

「伊部さん先でいいですよ」

「そう?……それじゃあ。昨日帰ってから藤原三佐から電話がきて、光秋くんの具合訊いてきた」

「三佐からですか……あれ?でもなんで僕に直接掛けないんです?」

「様子がわからないから、寝込んでる時に掛けたりしないように気を遣ったんでしょ」
「ああ、なるほど。で、なんて答えたんです？」

『大丈夫ですよ。だいぶ回復しました。熱も下がって顔色もよかったですよ』って。それしたら三佐、『奴はひよろひよろしているようで丈夫だからな』って、自分のことみたいに自慢げに話してた」

「へー、三佐が……」

応じつつ、伊部の説明にあつた藤原を想像して、光秋は少し嬉しくなる。

「で、光秋くんが言おうとしたのは？」

「ああ、今朝観た新聞にちよつと気になる記事がありました……」

言いながら、新聞を持つて記事が載っている面を開き、そこを指しながら伊部に渡す。そこには昨日の午後、新潟で起こったサン教過激派による警察署襲撃事件についての記事が載っている。幸い襲撃犯は10人程という小規模なものであり、凶器も金属バットや鉄パイプであつたため、短時間で鎮圧され、襲撃された警察署及び周囲には大した被害は出なかつたということが書かれている。そして、サン教本部も襲撃犯たちのことは関知していないという主旨のコメントを述べている。

「……どうです？」

伊部が記事を読み終えるのを見計らつて、光秋は問う。

「ESO実戦部隊の一員として言わせてもらえば、反社会的行動をとった襲撃犯たちを赦すわけにはいかないな。被害が最小限に抑えられたのが不幸中の幸いだけだ」

「伊部さん個人としては？」

「私個人？うーん……さつきと同じかな。どの道犯罪者を野放しにしておくわけにはいかないし」

「なるほど」

「そう言う光秋くんは？」

「僕は、確かに伊部さんが言うように犯罪を赦すわけにはいかないってところはあります。他人^{ひと}の命を一方的に脅かすものなら尚のこと。ただこの記事から感じたのは、こういう宗教組織が政府機関を攻撃するっていう構造が、僕が元居た世界と似通ってるなっ
て」

「そうなの？」

「ええ。もつともこういう新興宗教じゃなくて、かなり歴史のある宗教に由来するみたいですが……一応、僕が物心つく頃には、新興宗教が事件を起こすことはありましたが。ただ、それこそ物心つき始めた頃なんで、詳しいことはよくわかりませんが」

「そうなんだ……私と同じだね」

「？」

伊部が呟く様に言ったことが引つ掛かりつつも、光秋は話を続けることにする。

「もともとの記事を読んだのは、『新潟』って文字が飛び込んできたからなんですけど……といっても、事件があったのは新潟市で、僕が住んでた所とはまた違うんですが……それを言ったら、そもそも新潟は新潟でもまた違う新潟なんですけどね……それはいいんだ。ただ記事を読んだら、昔祖父が言ってたことを思い出しまして」

「お祖父さんの言葉？なんて言ってたの？」

『『宗教戦争ほど厄介なものはない。命が惜しくないんだから』って……確か、さつき話した宗教絡みの事件のニュース観てた時に言ったと思いますけど……こういう話を観ると、そのこと思い出しちゃって」

「そう……命が惜しくないっていうのは？」

「神様——信仰しているものに命を差し出してしまうからそうです。命が惜しくくなれば、それこそ自爆だの特攻だのできてしまう。さらに自分たちの信じることは絶対だ、必ず正しいんだって認識が持たれれば、百人千人殺すことも躊躇わなくなる。要するに、傍から見ればおかしい……恐ろしいことをする精神的ハードルが低くなるんでしょうね」

「……なるほどね。確かに言ってるかも」

「勿論、宗教そのものが悪いなんて言いません。人間ってそんなに強くないから、精神的

な支えを求めることは、寧ろ普通だと思えます……ただ、信仰っていうのは一種の感情だからなあ……感情に訴えてことを起せば、確かに收拾が付き難い。僕の世界の今がそうです。僕の世界も大同士のイデオロギーに基づく戦争が起りそうになって、それがなんとか不発に終わるや、入れ替わる様に民族や宗教の紛争が世界各地で起って、それが21世紀を迎えて10年が経つ今も続いてて……！」

一人でそこまで話して、光秋は伊部が遠い目をしていることに気付く。

「……すみません。少し自分の世界に入ってしまった……」

「うんうん。私も話に着いて行けなくて、ごめん……」

「そんなことはいいんですが……まあ、体調が回復した証と受け取ってくればいいかと」

「それはそうだね。話してる時の光秋くん、なんか生き生きしてた」

「ええまあ……こういう話が好きなんで」

「そっか」

「……まあ、せっかくなんでまとめさせていただくと……いろいろ言いましたけど、要するに暴力で——争いでものごとを解決しようっていうのはおかしいってことと、感情的にならず、少し冷静になってものごとを見る必要がある、ということで」

「そうですね。光秋先生？」

強引に話を終わらせる光秋に、伊部は笑みを浮かべて応じる。

「止してください。本当に、こういう話に興味があるって程度のことですから……」もし今頃、サン教みたいな組織が向こう側にあったり、ESOに拾ってもらえなかったりしたら、僕もそういうところに入ったかもしれないから……！——

若干の危機感を覚えながらそう思うと、光秋は携帯電話の振動に気付き、ズボンのポケットから出して画面を開く。

「メール？」

「ええ……一尉と二尉からです」

伊部の問いに画面を見ながら応じると、同時に来たメールをそれぞれ観てみる。

小田一尉は、

『具合どうだ？少しはよくなったか？落ち着いたら連絡くれ。』

竹田二尉は、

『よ！風邪治ったか？にしても、姉さん女房に看病されるなんて羨ましいぜ！』

と、2人の性格がよく出ている内容だ。

——『姉さん女房』は余計です——

思いながら、光秋は小田に、

『心配かけてすみません。おかげさまでだいぶよくなりました。明日からまた出るの

で、よろしく願います』

竹田には、

『おかげさまでだいぶよくなりました。ただ、「姉さん女房」は余計です!』
と、それぞれに返信のメールを打つ。

——…ま、少なくとも今は、そういう心配はしなくていい……かな?—

伊部の顔を見ながらメールを送ると、光秋は少し安心しながらそう思う。

しばらくの間、2人はコタツに籠って本を読んで過ごす。伊部は光秋の部屋にある物を借りて読んでおり、一定のペースを保って読んでいるところを見ると気に入っているようである。

と、光秋は机の上の時計を見る。

——11時半か……—「そろそろお昼にします?」

「そうだね……ちよつと早いけど、そうしよつか。なににする?」

「外食でもいいですよ。ちよつと外の空気も吸いたたいし……前行ったあそこ、こつちに初めて来た時に奢ってくれたとこ、あそこ行きませんか?ちようど近くですし」

「具合がいいならそれでもいいけど?ほんとに歩いて大丈夫?」

「粗方治つてますし、明日には出勤するつもりなんです。大丈夫でしょう。そんな遠くじゃないし、体の慣らしも兼ねて行きましようよ」

「そう。それじゃあ、行こっか」

伊部が応じると、2人はコートを羽織り、光秋はコートの右ポケットに財布を、ズボンの左ポケットに鍵を入れてコタツの電源を切る。

——……すぐ帰ってくるし、いいか——

エアコンの電源は切らないことにすると、光秋は伊部と共に玄関へ向かい、それぞれ靴を履いて外に出、ドアの鍵を掛けて食事に向かう。

路地を通って表通りに出ると、2人は正面の横断歩道を渡り、反対側の歩道を左に進む。

「……確かに風強いですね。寒い」

「でしよ」

吹き付ける強めの風に、光秋は伊部が言っていたことに納得し、左隣を歩く伊部は身を縮めて応じる。

少し歩いて目的の店に入ると、奥から男性店員が出てくる。

「いらつしやいませ。何名様でしょう？」

「2人です」

「こちらへどうぞ」

伊部の返事に応じると、店員は2人を店の奥へ案内する。

昼時とあつてかなり混んでいる店内を進むと、2人席に通され、光秋と伊部は四角いテーブルを挟んでそれぞれ席に着く。

「なににする?」

「ちよつと待つてください……」

伊部が開いてくれたメニュー表に顔を近づけ、光秋は食べたい物を選ぶ。

「じゃあ、トマトソースを」

「パスタのやつね。私は……ミートソースにしよう。他にない?」

「いいえ」

光秋が応じると、伊部は呼び出しボタンを押す。

「トマトソース一つと、ミートソース一つ」

「かしこまりました。少々お待ちください」

やって来た女性店員に注文を告げると、伊部は運ばれてきた水を一口飲む。

と、携帯電話の振動音が2回鳴り、伊部はコートのポケットからそれを出して画面を開く。

メールなのか何度かボタンを操作し、少しして電話をコートに戻す。

「誰からです?」

「田舎の友達。年末帰ってこられるか訊かれたけど、わからないって打っておいた」

「ふーん……確か、岩手でしたよね。出身」

「うん。そういえば最近、全然帰ってないな……お正月辺りはどうなるかね……」
話している間に注文の品が運ばれ、光秋は右手にフォークを、左手にスプーンを持ってトマトソースのスパゲティを食べようとする。

と、伊部は再び携帯電話を出し、背部のカメラで自分のミートソースを撮影する。
「どうしました?」

「え? けっこう美味しそうだったから、さっきのメールの友達に画像送ってあげようと思つて。食通だからこういうの送ると喜ぶの」

「へー、そういう人っているんですね?」

光秋が浮かんだ感想を言う間に、伊部はボタンを操作して友達にその画像を送信し、電話を戻してミートソースを食べ始める。光秋もそれに続く。

「それが高じて、雑誌の料理記者になったって言つてたくらいだからね」

「へー……」——料理記者かあ……

食べながら語られる伊部の友達のエピソードに、光秋は漠然とした感慨を覚える。
しばらくして食事を終えると、2人は席を立てて会計に向かう。

「どうしよう? 昨日のこともあるし、ここは僕が持った方が……いや、やめとこ。
前に同じ様なことを言つて怒られたっけ——」

光秋が以前のことを思い出していると、案の定伊部は勘定を別々に頼み、2人はそれぞれの料金を払って店を出る。

強風に震えながら寮に戻ると、光秋はコートを脱いで椅子の背もたれに掛け、コタツの電源を入れる。コートをフックに掛けた伊部はすぐに入り、光秋も風呂場で手を洗って台所の水盤で風邪薬を飲み、歯ブラシをくわえながら入る。

「……ほんと光秋くんって几帳面だね」

「んー……」

「あ、いいよ。終わってからで」

「んー……」

歯ブラシをくわえたままで満足に話せない光秋を見て、伊部は会話を止める。

少して歯磨きを終えると、光秋は風呂場に行って口を漱ぎ、再びコタツに入る。

「几帳面と言いましたけど、悪くなる時はなるんですよ。それが一番悔しくて」

「それはそうだね。報われない努力ほど悲しいものはないから……」

光秋に応じながら、伊部は大口を開けて欠伸をする。

「ごめん。お腹一杯になったら眠気が……ちよつと寝かせて」

「どうぞ。あ、なんなら……」

言うとき光秋は立ち上がり、ベッドの上の枕を取って伊部に差し出す。

「ありがとう。じゃあ、ちよつとだけ……………」

枕を受け取りながら言う、伊部はそれを敷いて頭を載せ、少しして寝入ってしまう。
「ん……………」

左側を下にして寝る伊部を見て、光秋は携帯電話を取り出し、そのカメラを作動させて伊部の寝顔を一枚撮る。

「！」

「……………」

予想より強いシャッター音とフラッシュに一瞬驚くが、伊部はかまわず眠り続けている。

「…………とりあえず、コタツ切るか。点けっぱなしだと風邪ひくし――」

思うと光秋はコタツの電源を切り、撮った画像を改めて見てみる。

「…………こうして見ると、伊部さんって美人ってだけじゃなくて、かわいいところもあるよな…………綾……………」

唐突に浮かんだ名前に、自分で驚く。

「……なんで綾が…………そりゃあ、体は一緒なんだろうけど……………」

そこまで考えて、以前タツカー中尉から聞いた言葉が浮かぶ。

「『お前さ…………アヤと、伊部二尉……………のことを、ゴツチャに見てないか？』……………」

いかな。これじゃあの時と一緒だ。今日の前にいるのは『伊部法子』なんだ。『加藤綾』じゃない。なら、今は伊部さんを見てあげなきゃいけないんだ。そうしないと、綾にも伊部さんに対しても失礼になる……ただ……—

最後の一線で煮え切らない気持ちを持て余しながら、光秋は携帯電話を閉じてセーターの左ポケットに仕舞う。

伊部の画像を撮って以降、光秋は余熱でも充分温かいコタツに足を入れ、文庫本を読んで過ごす。

しばらくして、

「……………ん……………ん……………」

「……………おはようございます」

コタツで寝入っていた伊部が、唸りながら起き上がる。

「……………おはよう……………今何時？」

「4時40分です」

寝起き顔で欠伸混じりに訊く伊部に、光秋は机の上の時計を見ながら答える。

「けっこう寝ちゃったなあ……………うーん……………」

呟く様に言うと、伊部は両腕を上げて唸りながら伸びをする。

「お疲れじゃないですか？もう殆どよくなったし、今日は早めに帰って休んだ方が……………」

「大丈夫。そういうんじゃないから。お腹が一杯になって眠くなっただけだから……」
「ならいいんですが……」

光秋がやや心配しながら返すと、伊部は首を左右に回す。

「もうすぐ5時か………夕飯なににしよう……」

「またどっか行きますか?」

伊部の目を擦りながらの問いに、光秋は思い付いたことを返す。

「それもいいけど……冷蔵庫の中の物、あれからいじつてないでしょう?」

「ええ……また作るんですか?」

伊部の言いたいことを察し、光秋は少し遠慮がちに問う。

「嫌?」

「嫌じゃないですが、その……」

「遠慮しなくてもいいの。一応まだ病欠中なんだし、私がやりたいってのもあるから」

「それなら……お言葉に甘えて……あり物でいいですよ」

「だからさあ……なにができるかなあって……」

言いながら伊部はコタツから出て、冷蔵庫の中を調べ始める。

「……………女房っていうか、あれじゃお母さんだな――」

伊部の背中を見ながら、光秋はそんなことを思う。

少しして、伊部は昨日買ってきた物の残りで夕食を作り始める。

「……なにか手伝いましようか？」

コタツに腰を下ろしている光秋は、仕切りのカーテン越しに伊部に呼び掛ける。

「うーん……いいかな。そんな大したことはしないし。それにここの台所、狭いから2人でやると動き難いかも」

「まあ、確かに……」

「気にしないで、そこで本でも読んで」

「はい……」

カーテン越しの伊部に応じると、光秋は若干尻の座りの悪さを覚えつつ、手元の文庫本に目を落とす。

少ししてカーテンが開き、右手にどんぶり、左手に箸が入ったコップを持った伊部が入ってくる。

「お待たせ。すぐ持ってくるから先食べて」

「はい」

目の前に置かれた昨日と同じ様なうどんが盛られたどんぶりを見ながら応じると、光秋は冷蔵庫からスポーツドリンクのペットボトルを出し、中に残っている分をコップに注ぐ。

その間に、伊部も鍋に入ったうどんを持ってきてコタツに入り、光秋の許にコップを差し出して残ったスポーツドリンクを全て注いでもらう。

「それじゃあ、いただきます」

「どうぞ」

伊部が応じると、光秋は合わせた手を解き、右手に箸を持ってうどんを一口する。

「……うん。やっぱりいいですね」

「そう?」

「昨日は舌に自信がなかったから言いませんでした、なかなか美味しいですよ」

「ありがとう。でも、褒めてもなにも出ないよ」

「そんなじゃありませんよ。思ったことを言っただけです……こう言くと、生意氣って思われるかもしれませんが……」

「なに?」

「……伊部さん、将来いい奥さんになれると思いますよ。もつと言うといいお母さんに……」

若干気恥ずかしくなりながら言うと、照れ隠しにうどんを掻き込む様に食べる。

「いい奥さんっていうのはよく聞くけど、お母さんっていうのは初めて聞いたなあ……」
微笑みを浮かべながら応じると、伊部もうどんを一口する。

「……でも、そう思いたくもありませんよ。僕なんかのためにここまでしてくれて」

「それは、前にも言ったでよ。光秋くんは私の弟分なんだから」

「はあ……」——『弟分』……か……

再び尻の座りの悪さを感じつつ、伊部が言ったことを口の中で復唱すると、光秋はうどんを一口すすする。

「……ところで、伊部さん前に士官学校時代に付き合ってた人がいるって言ってましたよね」

調子の悪さをなんとかしようと、光秋は思いついたことを言ってみる。

と、

「ん？……うん……」

——変なこと訊いちやったかな？……

伊部が若干顔を俯けるのを見て、少し後悔する。

「……別に、言い辛ければ言わなくてもいいんです。ただ、なにぶんそういう関係……男女関係ってものに乏しくて、つい好奇心が出てしまうというか……」

「そうなの？光秋くんモテそうな感じだけど？」

「またあ。モテませんよ。顔だってそんなパツとする方じゃないし、性格だって自分で言うのもなんですけど気難しくって、付き合いも上手い方じゃないし。伊部さんくらい

ですよ。こんなのにここまでしてくるのは……ああ、あと綾もいたか」

思い出した様に言うと、光秋はふと綾の顔を思い浮かべる。

「綾、ねえ……」

「……僕のことはいいんですよ。伊部さんはどうだったんです？」

「私は……」

呟く様に応じながら、伊部は遠くを見る目になる。

「……私は、けっこうあつたかな。誰かに好意を向けられること」

「士官学校時代の人とか？」

「うん。その人は陸軍志望で、私がいたESOのコースとはまた違うんだけど、共通授業でよく一緒になって……というか、あの人の方から積極的に関わってきたかも」

「ふーん？……」――積極的、ね……

「よくフミと3人でつるんでたなあ……卒業後はドイツの方に配属されたって聞いているけど……あれから会ってないけど、元気かなあ」

「ドイツ、ですか……」

遠くを見る伊部に呟く様に返すと、光秋はうどんを一口すする。

しばらくしてうどんを食べ終えると、光秋は残ったスプーンドリンクで風邪薬を流し込む。

「ぐちそうさまです」

「お粗末さま」

光秋の言葉に応じると、伊部は食器類を鍋に重ね置きし、台所に運んで皿洗いを始める。

「……さて」

咄くと、光秋はコタツから出、伊部の後ろを通つて風呂場に向かい、水盤の蛇口を回して風呂を入れる。

「お風呂入るの？」

「はい。体調も殆どよくなつたし、昨日入れなかつたんで」

伊部の寄こした声に、光秋は湯加減を調節しながら返す。

「あ、ひよつとして、そつち水出なくなりました？」

「それはいいんだけど、ほんとに大丈夫？」

「大丈夫ですよ。寧ろひと風呂浴びてスッキリした方が気持ちいいんだ」

伊部に応じながら、光秋は風呂場から出てコタツに戻る。

5分程して程よく溜まつたお湯を止めると、光秋は台所にまだ伊部がいるのを見、

「……もう少し待つか」

歯ブラシを持つて風呂場を出、再びコタツに入る。

一通り磨き終わってコタツから出ると、入れ違いに皿洗いを終えた伊部がコタツに入る。

水盤で口を漱ぐと、光秋は居間に戻って着替え一式とタオルを用意する。

「では、入らせてもらいます。テレビでも観ててください」

「りようかい。ごゆっくり」

伊部の返事を聞くと、光秋は仕切りのカーテンを閉め、脱いだ服を洗剤と一緒に洗濯機に入れ、閉めたフタの上に着替えを置く。洗濯機を回すと風呂場に行き、湯船に肩まで浸かる。

「ふー……………ドイツかあ……………」

2日ぶりの入浴に知らぬ間に安堵の溜め息を漏らすと、先程の会話を思い出し、吐息混じりに呟く。

——伊部さんの恋人か……………いや、元恋人か?……………恋人……………想い人か……………——

脈絡のない思考をしていると、不意に綾の顔が浮かび、そのことが綾との精神感応の際に観た光景を——幼い姿をした自分を優しくも力強く抱きしめてくれた綾を思い出させる。

——……………あそこまでしてくれた綾に、僕は結局、何もしてやれなかったな……………『氣付いた時がJust time』、とは言ったものの……………——

そこまで考えたところで滴が頭に落ち、ハツとした光秋は長考を中断する。

「……ま、どっち道過ぎたこと、か……………」

そう呟いて綾のことを隅に押しやると、風呂から出て体を洗う。

2日ぶりということもあっていつもより心なしか丁寧に洗うと、再び風呂に浸かって温まり、少しして風呂桶の栓を抜いてあがり、桶の上の物干しに干してあるタオルで体を拭く。

その間に湯が抜け切ると、シャワーで風呂桶を軽く水洗いし、風呂場を出る。

洗濯機の上のバスタオルを取って髪を拭き、体中の細かな水気を拭き取り、水色のチエック柄のパジャマに着替えると、バスタオルを首に掛けてカーテンを開ける。

「長かったね。30分くらい?」

「いつもこんなもんですよ。今は寒いのもあるかもしれないけど」

コタツに入って文庫本を読んでいる伊部に応じつつ、光秋は冷蔵庫から目薬の袋を出し、コタツの上に置いたそれから1本出して左目に一滴注す。

「お風呂好きなんだ」

「て言う程でも……好きかと言えば好きですよ。1日1回は入らないとスツキリしなくて」

伊部に応じつつ、光秋はバスタオルをハンガーに掛け、押し入れからドライヤーを出

して髪を乾かす。

「……ところで、そろそろ帰らなくて大丈夫ですか？」

終えたドライヤーを押し入れの戻しつつ、光秋は6時20分を指している机の上の時計を見て問う。

「んー……明日もあるし、そろそろ帰ろうかな……もう完全なんでしょう？」

「殆ど。とりあえず、明日はちゃんと出勤できると思いますよ」

「……じゃあ、もうちよつとしたら」

伊部の返答を聞きつつ光秋はコタツに入り、2本目の目薬を注す。

少しして洗濯機が止まり、ハンガーラックに洗濯物を干し終えた光秋が3本目の目薬を注し終えると、

「……じゃあ、そろそろ行こうかな」

伊部は読んでいた文庫本を机の本棚に戻し、フックに掛けてあるコートを羽織る。

「2日もわざわざ、ありがとうございました」

目薬の袋を冷蔵庫に戻しながら言うとう、光秋は伊部に続いて玄関へ向かう。

「気にしないの。私は光秋くんの姉貴分なんだから。じゃあ、また明日。お休みなさい」
「お休みなさい」

光秋が応じると、伊部はドアを開ける。

赤フリルのシユシユで束ねた黒髪がドアに隠れると、光秋はドアの鍵を閉め、コタツに向かう。

——……姉貴分、か……

伊部の言葉を口の中で呟きつつ、コタツに足を入れる。

「……………」というか、好意のある人に『姉』とか『女房』じゃなく、『お母さん』を見てしまう男って、どうなんだ……………」

なんとなしに浮かんだ疑問を口にする、天井に目のやり場を求める。

12月6日月曜日午前7時半。

朝食等を済ませた光秋は、ESOの制服の上に緑のコートを羽織り、灰色のカバンを右肩に斜め掛けして支部へ向かう。

正門をくぐると、

「光秋くん！」

「！」

後ろから呼び掛けられて振り返ると、左隣の小田一尉と並んで歩く伊部を見る。

「おはようございます」

「おはよう」

「体、もういいのか？」

「だいたい。今日は試運転ということで、あまり無理はしませんが、概ね大丈夫です」
小田の問いに応じると、光秋は伊部の右隣に着き、3人で本舎へ向かう。

―さてと。休んだ分、無理のない範囲で取り戻すか！―

サン教ベース攻防編

47 緊急招集

12月7日火曜日午前7時半。

ESOの制服の上に緑のコートを羽織り、右肩に灰色のカバンを斜め掛けした光秋は、強い冷風に追いついて立てられる様に支部本舎に入る。

——ふ……寒かった……

両手にはめている茶色い革製の手袋をコートの中のポケットに仕舞いながら心中に呟くと、開いたエレベーターに乗り込み、地下1階へ向かう。

扉が開くと藤原隊の待機室へ向かい、ドアを開ける。

「おはようございます」

「おお、おはよう」

椅子に座って新聞を読んでいる藤原三佐の返事を聞くと、光秋は部屋の奥のロッカーへ向かい、脱いだコートを自分のロッカーに入れる。

「三佐。今日はもう完全なんで、いつも通り訓練の御相手お願いします」

言いながら、テーブルを挟んで藤原の向いに座る。

「そうか？わかった。気を引き締めてな」

「はい」

新聞から顔を上げて言う藤原に、光秋はよく通る声で応じる。

少しして小田一尉と伊部が、8時近くになって竹田二尉が出勤すると、

「よし。加藤行くぞ」

「はい」

藤原と光秋は部屋を出てエレベーターで1階へ上がり、グラウンドを挟んで医療棟の向いにある運動棟へ向かう。

12月15日水曜日午前10時。運動棟の屋内アリーナ。

人気のないがらんだうの端で、藤原と光秋は制帽を脱いで並んで腰を下ろし、格闘戦の訓練の小休止をとっている。

「いよいよ1週間後だな」

「演習ですか？」

「ああ」

光秋の確認に、左隣に座る藤原は同意を返す。

「お前も基礎ができていたとはいえ、だいぶ上達したな」

「ありがとうございます……実戦も、経験しましたからね……」

思い出した様に言うと、光秋の脳裏にDD-01、02と戦った時の記憶が過ぎる。

「そうだが……どうだ？ 久しぶりに儂と組手でもするか？」

「組手ですか？」

言いながら、光秋は3カ月程前に藤原と初めて組手をした時のことを思い出す。

「あれから随分修練を積み、あまつさえ実戦も経験したんだ。あの時よりはいい勝負ができるだろう」

「そうですが……ただ、実戦と言っても、ニコイチを使つたものでしたし……」

「それでもかまわんさ。どの道、実際に手を合わせれば、どのくらい上達したのか判るといふものだ。生身での経験作りにもなるしな。やるぞ！」

「……はい」

藤原の押し通す様な言い方に短く応じると、2人は立ち上がってアリーナ中程へ向かう。

一定の間隔を空けて互いに向かい合うと、光秋はあることに気付く。

「……審判がいませんか？」

「やむを得ん。今回は儂が兼任する。相手に一撃当てた方の勝ちということでもいいだろう」

「了解です。では」

——……そういえば、この間ニコイチでやった時は引き分けに——ニコイチでやつても引き分けになったが………否、考えるのは止そう。ただやるだけだ！——

直後、

「始め！」

「！」

—速く動き、攻める！—

一瞬そんな言葉が浮かぶや、左突きを2発入れる。

藤原はそれらを左腕で受け止め、腰に引いた右拳を放つ。

!

咄嗟に後退してそれをかわすと、光秋も腰に引いた右拳を出す。

が、藤原も後退してそれをかわし、間合いが空いた2人は互いに右側に位置をずらしながら相手の出方を窺う。

数歩移動した直後、

光秋は腰に引いた右拳を放ち、藤原の鳩尾を取るが、

「……………」

藤原は左腕を前に出してそれを受け止め、間を置かず右蹴りを出し、光秋の鳩尾に束の間息ができない程の激痛が走る。

「……………ゲッフ！」

思わず構えを解いて左手を胸に当てると、小さく咳をする。

「儂の勝ちのようだな」

「……………ですね」

藤原の声に光秋は息を整えて応じると、2人は姿勢を正して礼をする。

「やはりこうなりますか……………」

「そう言うな。初めて組んだ時よりは確実に上達している。ただ焦り過ぎなところがあるな。短時間で決めなければならんとは言え、もう少し周りをよく見るようにしろ」

「はい……………それでは、引き続き訓練の相手お願いします」

藤原の助言に応じると、光秋は訓練を再開する。

12月21日火曜日午前8時。

——いよいよ明日か……………今日も訓練頑張ろ！——

明日に迫った空軍との合同演習を思いつつ、光秋は訓練に向かうエレベーターの中で気合いを入れる。

直後、

（緊急連絡。緊急連絡。実戦部隊所属で次に呼ばれる隊の者は、直ちに本舎会議室に集合せよ。繰り返す……藤原隊……）

「……………何でしょう?」

「さあな?……………とりあえず行くぞ」

「はい」

突然のアナウンスに若干戸惑いつつも、光秋は左隣の藤原に応じ、1階になっているボタンを押し直して2階へ上がり、会議室へ向かう。

室内にはすでに疎らに人がおり、光秋は左隣に座った藤原に続いて最前列中央辺りのパイプイスに座る。

……………まるで『蜂の巣』の時みたいだな――

続々と部屋に入ってくる緑服たち、そこから漂うただならぬ気配に緊張を感じつつ思う。

と、

「……………!」

小田一尉、竹田二尉、伊部が部屋に入ってくるのを見た光秋は、自分の右隣の席に座る3人に一礼する。

「何でしょう?」

「さあな?」

「なにしろ、朝っぱらからなんだよ……」

光秋の問いに小田は首を傾げながら応じ、竹田は欠伸混じりに愚痴る。

「でもこの光景、半年前の『蜂の巣』みたいですね」

「確かに。ひと騒動起こるのは間違いないな」

——伊部さんも同じこと考えたか——

周囲を見回した伊部の感想に小田が応じるの聞きつつ、光秋は場違いと自覚しつつもちよつとした感心を覚える。

しばらくして部屋が緑服たちで埋まってくると、それまで左端に立っていた二佐の男性が前に出る。

——……実戦部隊長?それだけ大事なのか?——

名前こそ知らないものの、光秋は正面の男性が京都支部の全実戦部隊を総轄する立場にあることを思い出し、それだけの人物が事情説明に出てきたことに、改めて重大な連絡があるということを認識する。

部屋の照明が消えて正面のホワイトボードの前に天井からスクリーンが降り、それに天井の映写機からの明かりが投射されると、その右端に立つ実戦部隊長が話し出す。

「今回集まってもらったのは、東京本部から重大事項の予知がなされた報告があったためである」

—予知、か……—

3カ月程前に聞いて以来のその言葉に、光秋はその時起った京都駅でのNPのテロ未遂事件を思い出す一方で、半信半疑な気持ちになる。

「昨夜、本部の予知部からサン教の中心人物——不落日光ふらくにつこう、本名坂本一郎さかもといちろうが、同団体過激派の拠点とされている秋田山中のベースに向かうという連絡があった。我々は各支部の部隊、及び州警察、軍と協同で彼の身柄を確保し、同時に本ベースの制圧を行う」

実戦部隊長の言葉に合わせて、スクリーンの右側に「不落日光（本名 坂本一郎）」と下方に書かれた写真が、左側にベースの位置を示した地図が表示される。

—思ったより人当たりがよさそうな人……—

それが光秋が写真を見て感じた印象である。

ホームページかなにかから取ってきたと思しき写真には、黒いスーツを着た初老程の若干痩せた男性がステージの上でマイクを持って話している光景が写っており、それを見る限り、光秋には反社会的行動を起こす、あるいは煽動するような人物には見えない

のである。

が、一方で、

——しかし、印象に囚われるわけにもいかんか。この人の過激派との関係は知らないが、この人当たりのよさそうなところに騙されるのか？……—

と、理性的な部分で考えてもみる。

その間にも、小田が手を上げて実戦部隊長に質問する。

「不落がそのベースに入るといふ情報は、予知だけなのですか？」

「本部の追加調査、及び警察からの連絡によると、今日の早朝に不落が本ベース入りしたのは事実だそうだ」

——裏は取れた、か……—

実戦部隊長の返答に、光秋は思いながら納得する。

「秋田支部の調べでは、ここは銃器だけでなく、航空機や戦車なども多数保有しており、軍の地方基地一つ分に相当する戦力が確認されている。各自そのことを念頭に置いておくように。詳細は後ほど説明するが、作戦は明日開始される。各自早急に準備をし、15時までにグラウンドに集合せよ。以上。何か質問は？」

——……危険度は『蜂の巣』以上……か……—

続く実戦部隊長の説明に、光秋は背筋に悪寒を感じる。

「ないようなら、これで説明を終了する。解散！」

実戦部隊長が言った直後に部屋の照明が点き、座っていた緑服たちが一斉に立ち上がった敬礼する。

——おわじと大事とは思っていたが……とんでもないことになったなあ………………—

敬礼をしつつ、光秋は心中に嘆息を吐く。

藤原の指示の下、藤原隊一行は一度待機室へ向かう。

「とりあえず、明日の演習は中止ですね……」

地下に下りるエレベーターの中で、光秋は言わずもがななことを言う。

「そうだね……でも考えようによつては、演習よりも貴重な機会が巡ってきたってこともね」

「伊部さんは強いですねえ……」

伊部の前向きな返事に、光秋はただ感心するだけである。

「そりやあ私だって、いきなり実戦で補助席の具合を試すのは不安だけどね。乱戦中に留め具が外れて怪我したり、そのせいで光秋くんの操縦の妨げになったりなんて嫌だし……」

「まあ、それはそうですが……」

光秋が呟く様に応じる間に、エレベーターは地下1階に着き、一行は待機室へ向かう。

部屋に入ると、藤原は一同を見回して言う。

「とりあえず、3時までに出掛ける準備をしなければならん。作戦の期間がわからんから一度解散して、各自着替え等必要な物を用意するように」

「しかし三佐、全員が出ると緊急の連絡などがあつた場合に困ります。順番を決めて代わる代わる出では？」

「そうだな」

小田の提案に、藤原はすぐに応じる。

「では、まず伊部と加藤からだ。一度帰って荷物を用意しろ」

「了解です」「わかりました」

藤原に指示に伊部と光秋は同時に応じ、それぞれコートを羽織ってカバンを持ち、部屋を出てエレベーターへ向かう。

「……ところで、なんで僕たちからなんでしょう？ 寮までの距離を考えたら、三佐たちが先の方が……」

エレベーターを待っている間、光秋はふと疑問を呟く。

「私たちはニコイチで行くからでしょう。他の人たちはテレポートで行くんだろうけど、私たちはそれより早く出ないといけないから。この間に現地の集合地点とかも訊くつもりなのかも」

「なるほど」

伊部の返答に光秋は応じると、扉が開いたエレベーターに2人で乗り込む。

1階に着くと、伊部と光秋は速足で正門へ向かい、

「じゃあ後で」

「はい」

と、短い挨拶を交わしてそれぞれの寮へ向かう。

―秋田、北国か……冷蔵庫がなくても大丈夫かな………期間がわからんし……とりあえず1週間分持つていくか―

自室に着くやそんなことを考えながら、光秋は目薬や下着の着替えなど、必要な物をカバンに詰めていく。

一通り荷造りを終えると、部屋の戸締りを確認し、荷物が詰まったカバンを右肩に斜め掛けして部屋を出、速足で支部へ戻る。

「戻りました」

言いながら光秋が待機室に入ると、

「よし、次竹田だ」

「ウツス」

テーブルの奥側に座っている藤原の指示に、手前側に座っている竹田が応じ、ロッ

カーから出したコートを羽織って入れ違いに出ていく。

「加藤」

「はい？」

脱いだコートをロッカーに仕舞いながら藤原に応じると、光秋はその許に歩み寄る。

「お前がいない間に、集合地点の詳しい場所を訊いておいた。後でニコイチに入力しておけ。それと、お前と伊部はニコイチで先に出てもらう」

「了解しました」――……伊部さんの言う通りになったか――

先程の会話を思い出しつつ、光秋は集合地点が書かれたメモを藤原から受け取り、それを上着の左ポケットに仕舞う。

と、

「お待ちせしました」

伊部が部屋に入ってくる。

「おお、来たか。では、小田」

「はい」

それを見て藤原と、テーブルを挟んで向かいに座っていた小田が席を立ち、それぞれロッカーからコートを出す。

「そうだ伊部。演習中止の件、空軍の方に連絡入れておいた。と言っても、タツカー中尉

の隊も招集されたみたいだがな」

「ありがとうございます」

——中尉も来るのか……—

コートを羽織りながら報告する小田に伊部が応じる傍ら、光秋はタツカーの金髪の顔を思い浮かべる。

その間に藤原と小田はカバンを持って部屋を出、光秋とコートを仕舞った伊部はテールブルを挟んで向かい合って座る。

「伊部さんが言ってたこと、当たりました。さつき三佐から集合地点のメモもらいました」

「そう。後でニコイチに入れておかないかね」

「ええ……」

伊部に応じると、光秋は上着の左ポケットを意識する。

しばらくして荷造りを終えた藤原たちが戻ってくると、藤原隊一行は待機室で時間にくるのを待つ。光秋と藤原が軽い格闘戦訓練をする以外は、静かな時間が過ぎる。

——嵐の前触れ………なんて、縁起でもないか——

小休止中にそんな言葉が浮かぶが、光秋はすぐにそれを隅に追いやる。

そうしている間に、午後0時になる。

「そろそろ昼にするか。全員食堂に移動」

「了解」

藤原の指示に4人分の堅い声が応じると、一行は食堂へ向かう。

「食欲は大して湧かん……が、今の内にちゃんと食べとかなとダメだよな……—
強い緊張感を覚えつつもそう思うと、光秋は定食を頼み、一行が待つテーブルに座る。

光秋が箸を取った直後、

「そうだ加藤。それと伊部」

光秋の正面に座る藤原が、光秋とその左隣の伊部を見ながら言う。

「お前たちは食事が済んだ後、1時半頃にさっきのメモの場所に先行しろ。3時までには着くようにな」

「了解です」

伊部と同時に応じると、光秋は食事を始める。

食事が済むと、藤原隊一行は待機室へ戻る。

午後1時20分。

「……そろそろ出ます」

テーブルに座っていた光秋は立ち上がりながら言うと、ロッカーからコートを出してそれを羽織る。

「じゃあ私も」

「伊部さんは半頃に来てください。僕は先に行つて、ニコイチの準備してますから」
腰を浮かしかけた伊部にそう言うと、光秋はカバンを右肩に斜め掛けする。

「では、お先に」

「おお。気を付けてな」

藤原の返事を聞くと、光秋は部屋を出て本舎前の駐車場へ向かう。

正面玄関を出ると、上着の内ポケットからカプセルを取り出し、正面の広場に左膝を着いたニコイチを出現させる。左側に垂れ下っているリフトを掴んで上昇し、カバンを椅子の右脇に置き、右の肘掛にカプセルを納め、脱いだ制帽を右脇に挟みながら席に着く

機内に入りつつ認証を済ませると、左ポケットから集合地点が書かれたメモを出し、そこに書いてある場所を左パネルの地図に入力する。

「……三佐つて字上手いなあ」

パネルを触れて操作しつつ、意外に綺麗な藤原の字に思わず感心する。
と、

「光秋くーん!」

「!」

下から呼び掛けられて光秋はニコイチの左膝の辺りを見下ろすと、左肩に大きなカバンを提げ、両手で折り畳まれた補助席を抱えて立ち、制帽にコートを羽織った伊部がこちらを見上げている。

「もう時間ですか？」

言いながら、光秋は左手首の腕時計を見る。

「少し早いけど、私もこれ取り付けなきゃいけないし、上げてくれる」

「わかりました」

補助席を抱えて示す伊部に応じると、光秋はニコイチの左手を差し出し、伊部が乗ったそれを慎重にハッチの上へ上げる。

コクピットに移ると伊部はカバンを下ろし、操縦席の左側に補助席を取り付ける。

「よしー！」

少し揺すつて具合を確認めると一言呟き、それに座る。

「じゃあ、そろそろ行きますか。ちょうど半ですし」

「そうだね。お願い」

時計を見ながらの確認に伊部が応じると、光秋は席を機内へ下ろし、ハッチを閉める。右の肘掛から通信機を取って左耳に付け、シートベルトを締めると、伊部もシートベルトを締めたのを確認し、ニコイチを直立させる。

「それじゃあ、行きます」

言うのと右ペダルを軽く踏み、背中のNクラフトを輝かせたニコイチが、雲の多い空にゆっくりと上昇する。

雲より上の高度に達すると、光秋は地図を見ながら右の操縦桿を捻ってニコイチの向きを変え、右ペダルを深く踏んで前進する。

「……到着までしばらく掛かります。よかつたら寝てください」

ニコイチが前進を始めてからしばらくして、光秋は左隣に座る伊部を横目で見ながら言う。

「そうもいかないでしょう。光秋くんが働いてる時に、姉貴分の私がお昼寝なんてしてられないからねえ」

「そういうもんですか？」——……少し緊張してるか……当然か——

応じつつ、光秋は伊部のどこことなく落ち着かない様子を察する。

「……………やつぱり、緊張しますか」——……僕もか——

言わずもがななことを言って、自分も心なしに緊張していることを自覚する。

「そりゃあね。久しぶりの大きな作戦だし、今朝の説明にもあったように、規模もだいぶ大きいみたいだし……」

「ですねえ……」

「だからこそ、こつちも大規模部隊で挑もうつてことなんだろうし、そのためのニコイチってことなんだろうけど……………」

「ニコイチをそういうふうに言われるのは……どっちにしろ、キナ臭さが強いですね。なんか嫌です……」

「私もそう……でも、私はそれが仕事だから……」

「それはそうです……僕だって、今の自分の立場が解ってるつもり——いえ、解ってます。それが仕事だと言われれば、やってやるだけです……………ただ、そのことについてどう思うか、どう感じるかくらいは、自由でしょ？」

「それはそうだけど、それが仕事に影響する様なら……」

「それは大丈夫です。仕事は仕事と割り切つて、やってみせるだけです……………」

伊部の控え目な指摘に、光秋は強めな調子で返す。

が、言葉を重ねるごとにどこか虚しさを覚える。

「……さっきの話ですが、よかつたら本当に寝ててください。これから忙しくなるだろうから、休める時に休んでおいた方が」

「でも光秋くんが……」

「僕は大丈夫です。それに、ニコイチに乗ってる間、伊部さんは僕の左目代わりなんです。いざって時に調子が悪くなったら困ります。要は僕のために言ってるだけです」

ら、気にしないで休んでください」

「……それじゃあ、そうさせてもらおうかな……」

言うと伊部は目をつむり、背中を背もたれに預ける。

——『伊部さんは僕の左目代わりです』、か……我ながら言うじやないか！今度言う機会があれば、もつといい雰囲気の中で言ってみたいねえ……——

その様子を横目で見ながら、光秋は自分で言った言葉に嬉しくなり、僅かだが口元に微笑を浮かべ、気持ち若干楽になったと感じる。

48 曾我との再会

1時間半程飛行すると、ニコイチは目的地付近の上空に到達する。

「伊部さん、そろそろ着きます」

「ん……ああ、もう……？」

言いながら光秋が左手を伸ばして揺ると、小さく寝息をたてていた伊部は若干の眠気を浮かべつつ目を開けて応じる。

「……私、熟睡してた？」

「ええ。これからのこと期待してます」

若干の恥じらいを見せる伊部に冗談混じりに応じつつ、光秋はニコイチを降下させる。

厚い雲を抜けると、2人はモニター越しに塗り潰された様な真っ白な下界が広がっているのを見る。少しだが雪も降っている。

——『トンネルを抜けると、そこは雪国だった』、か……雲を抜けたら正に雪国だ——雪化粧した山々を見ながらそう思うと、光秋は地図を見つつ集合地点へ向かう。

地図の赤点で示された地点に向かって高度を下げつつ接近すると、山の合間に複数の

建屋の様な物が密集している場所を見付ける。

「あそこでしょうか？」

「……そうみたいね。他にそれらしい場所もないし」

「では」

地図を見ながら言う伊部に応じると、光秋は集合地点と思われる所に接近する。

と、男の声で通信が入る。

（接近中の人型機に告げる。貴官の所属と飛行目的を明らかにせよ）

「ESO京都支部藤原隊所属、UK……MB-00です。目的は、これから開始されるサ
ン教過激派施設制圧作戦への参加のため、集合地点へ向かっています。こちらでよろし
いのでしょうか？」

左耳の通信機を意識しつつ、光秋はそのマイクに吹き込む。

（了解。照会も終了した。ヘリポートへの着陸を許可する）

「了解」——そういえば、軍だかESOだか知らないが、正規の施設に着地するのはこれが
初めてだな……—

思いつつ、光秋は指示に従って手前側にあるヘリポートにニコイチを着地させる。

ニコイチに左膝を着かせると操縦席を機外へ出し、右手をハッチの上に上げる。

——やっぱ冷えるなあ……—

吹き付ける冷風に震え上がりつつ、荷物をまとめた伊部が掌に乗るのを確認すると、光秋は慎重にそれを下ろし、伊部が降りるのを見ると通信機を肘掛に仕舞い、自分も荷物をまとめてリフトで雪が積もった地面に降り、カプセルにニコイチを収容してそれを上着の内ポケットに入れる。

「ところで、この後何処に行けばいいんでしょう？」

右肩に斜め掛けしたカバンを掛け直しながら、光秋は伊部も知らないだろうと思いつつも訊いてみる。

「メモにはなんて？」

「こここの位置しか書いてません。いくつか建物があつたけど、何処に行けばいいのか……」

と、途方に暮れていると、

「MB—00 専属の加藤二曹でありますか？」

突然呼び掛けられ、光秋は伊部と一緒に声のした方を見やると、合軍の青い制服の上に青いコートを羽織った男が駆け寄ってくる。

「そうですが？」

「当基地所属のペ伍長であります」

光秋が応じると、2人の前で踵を合わせた東洋系の合軍兵は敬礼と言う。

「京都支部からMB—00が到着次第、パイロットの二曹と補佐役の伊部二尉を迎えに出るようにとの要請がありました。ただ今から集合場所にご案内いたします」

「それは……よろしくお願いします！」

自分よりもいくらか年上に見えるベ伍長の丁寧な態度に戸惑いつつも、光秋は氣を取り直して返礼し、伊部と共にペの後を着いていく。

—伍長だから、えーつと……僕より1つ下なのか……1つ違いで年下に対してもこうも腰が低くなるって、これが軍隊、もしくはそれに準じる組織なのかね？……それとも、普通の会社なんかでもこうなんだろうか？……そう考えると、年功序列つてのはそういう部分に関しては氣が楽かもな……にしても、伍長とか曹長とか、軍の位つてのはややこしいねえ。ESOなんかは自衛隊の位を使つてから、ますますややこしい……—

集合場所に向かう間、光秋はペの背中を見ながらそんなことを考えてみる。

ペの後ろに着いてしばらく歩くと、光秋と伊部はいくつかある建物の1つ、その会議室に通される。

「間もなく各部隊も到着しますので、こちらでお待ちください」

「ありがとうございます」

敬礼して部屋から出ていくペにそう返すと、光秋はよく効いた暖房にコートを脱ぎな

がら伊部を見る。

「今の人、州外からの人ですかね？」

「中国か朝鮮辺りじゃないの？名前もそれっぽかったし」

なんとなしに浮かんだ光秋の疑問に、伊部は大量のパイプイスが並んだ室内を見渡してコートを脱ぎながら応じる。

と、

「……来ましたね」

2人が立っている扉の反対側に面した窓越しに、光秋は大勢の人々がテレポートしてくるのを見る。

「とりあえず、席確保しとこっか」

「ですね」

伊部に応じると、光秋は前から3列目の中央辺りの席に荷物を下ろして腰を下ろし、伊部もその左隣に座る。

少しして部屋に警察、合軍、ESOの制服の上に防寒着を羽織った人たちが大勢入ってくる。

と、

「あれ？ワンちゃ——加藤君！」

「！曾我さん！」

突然の呼び掛けに右前を向いた光秋は、ESOの制服一式の上にコートを羽織った曾我を見て少し驚く。

「まさか貴方まで来てたなんてね」

「曾我さんこそ」

「アタシは当然よ。こういう時のための特エスなんだから」

「……それもそうですね」

「えーっと、曾我さん、ですっけ？」

光秋と曾我が話しているところに、伊部が体を寄せながら加わる。

「……イラついてる？」

伊部の声に、光秋は微かな怒りを感じる。

「はい？……ああ！本部に来た時加藤君と一緒にいた……」

「……最後に会った時のこと思い出したか」

応じつつ、曾我は少し気まずい顔をする。その表情から光秋は、伊部の指摘に作り笑いを浮かべながら逃げる様に去って行った曾我を思い出す。

「えーっと……」

「伊部です。伊部法子。京都支部藤原隊の所属で、光秋くんの補佐役です」

「補佐?……東京本部藤岡隊所属の曾我地球です」^{ガイア}

伊部の自己紹介に束の間首を傾げつつも、曾我は笑みを浮かべて返す。

「ガイアさん?……光秋くんとは仲良くしてもらってるようで」

「いえ、そんな……あ、えーつと……作戦ではよろしくお願いしますね。それじゃあ」

伊部の微笑みながらも棘のある語調に、曾我は若干怖気た顔で応じ、そそくさと部屋の後ろ側の席へ向かう。

その背中を見送ると、光秋は右手で頭を抱えて悔やむ様な顔をする伊部を見る。

「さつき、どうかしましたか?なんか機嫌悪かったような」

「そういうわけじゃないんだけど……なんか最近、たまーにああなるんだよね。訳もなくイラついて、ついキツイ態度とっちゃって……」

言いながら、伊部はゆっくりと顔を上げる。

「……そういえば、前に支部に来た沖一尉を話した後も、どこか機嫌悪そうだったよな……僕意識されてる?……で、違う気がする……まさかとは思うが……」

半信半疑に思いつつ、光秋は伊部を見る。

「もしかしたらですけど……伊部さんの中の綾が反応してるんですかね?」

「んー……そうなのかな?」

「僕も推測ですけど。ただ、DD—02に——初めて黒球に遭遇した時、綾が教えてくれたから僕の所に駆け付けたようなこと言っていましたよね。あと、夏以降、何度かまた表に出てきてましたから、伊部さんの中に綾が居続けているのは確実でしょう。なら、表立ってない時も、なにかしらを感じて反応して、それが伊部さんを通じて表れるっていうのは、あながち間違いじゃない気がします」——そういや、綾も伊部さんの思い出やなんか浮かぶようなこと言ってたもんな……—

推測を言いながら、光秋は綾との同棲が終わる少し前のことを思い出す。

「そういうものなのかなあ……」

「あくまで推測ですけど」

「……だとしたらだけど……」

「はい？」

「……綾って、けっこう嫉妬深いのかもね」

「……………ああ……………まあ、そういうことになりますかね……」

伊部の指摘に、光秋は返事に困る。

——タツカー中尉や竹田二尉、上杉さんとも会うことは会ったけど……殆どの時間、それも異性としては僕としかいなかったから……世界を見せてやるなんて考えてたが、やっぱり足りなかった……足りない過ぎたか……………——

光秋がそんなことを考えている間に、室内の席は全て埋まり、座れなかった何人かは部屋隅に立ち、部屋の前側中央の演壇に合軍の制服を着た中年くらいの男性が進み出る。

「本作戦の総合指揮を執ることとなった、陸軍大佐の島^{しま}である」

中年男性——島大佐が演壇上のマイクに吹き込む間にその後ろに大型のスクリーンが下り、部屋の照明が消える。

「早速だが、作戦の概要について説明させていただきます」

言いながら、島は壇上のパソコンを操作し、それに合わせてスクリーンに秋田山ベースの上空写真が映し出される。

——思ったよりデカイな——

影像を観て光秋は一番にそう思う。

写真には自分たちが今いる基地の様に山の合間に複数の建物が写っており、滑走路と思しき長い広場まである。

——山中ベースなんて言うから、もっと狭く苦しいものを想像してたが……——

そんなことを思う間にも、島はパソコンを操作しながら説明を続ける。

「まず、警察・陸軍を主力とする部隊をベース周辺にレポートさせて包囲、投降勧告を行った後、これを拒否、または抵抗する様ならベース内に突入、抵抗勢力を捕縛しつ

不落の身柄を確保、本ベースの制圧を行う。航空戦力、及び超能力者は必要に応じて包囲部隊の支援を行う」

—包囲して突入、制圧……なら僕の役目は、その支援か……？—

島の説明に合わせて切り替わるスクリーンの映像を見ながら、光秋は自分のすべきことを考えてみる。

「今『支援』と言ったが、確認されている戦力からして、サン教側からの強い抵抗が予想される。各自はそのつもりで——つまり、『支援』という言葉を超える事態が起こることを前提にしてもらいたい。特に超能力者はEジヤマーの作動に充分注意するように」

—『支援』という言葉を超える事態が起こることを前提に』、か……どの道、楽はできそうに……安心はできそうにない、か……—

島の念押しに、光秋は思いながら苦笑いを浮かべる。

「作戦開始時刻は、明日の早朝6時。それまでに各自、準備を整えておくように。以上。何か質問は？」

—6時か……ちゃんと寝れるだろうか—

島がいくつか挙がる質問に答えている間に、光秋は手近なことを心配する。

「他には……ない様なので、これで説明を終了する。各自解散！」

「！」

島の号令に、光秋は周りと一緒に立ち上がって敬礼し、照明が点くとカバンを左肩に提げ、畳んだコートを右腕に掛けて伊部と共に部屋を出る。

2人並んで人混みの中を進みながら、光秋と伊部は藤原三佐たちの姿を探す。

「……………藤原三佐！」

「おお。そこにいたか」

ひと際目立つ背中に伊部が呼び掛けると、2人の前を歩いていた藤原は足を止め、その後ろに立つ小田一尉と竹田二尉とも合流する。

「そろったのなら、ひとまず部屋割の確認だ。荷物も置いてこよう」

「了解です」「わかりました」

藤原の指示に伊部と光秋は応じ、光秋は腕に掛けていたコートを羽織ってカバンを右肩に斜め掛ける。

伊部もコートを羽織ると、藤原隊一行は今いる建物の玄関へ向かう。

「行きの時、天候大丈夫だったか？」

「はい。雲の上でしたから」

小田の問いに、光秋は歩きながら応じる。

「それにしても、サン教の連中よくこんな場所に基地なんて造ったな。中にいても寒くて敵わないぜ」

「それはそうですけど……冬だけです。寒いのは」

竹田の愚痴に、光秋は少し冷えてきた手を意識しながら返す。

「そういうもんか？……そうなのか？伊部」

「私の家がある所はそうですね」

「ふーん……？」

伊部の返しに、竹田は唸る様に応じる。

そうしている間に、一行は今晚の宿になっている建物に着き、事前連絡を受けた藤原に従って2階へ向かう。

「私は、ここですね」

そう言うと、伊部は自分に割り振られた部屋に入り、光秋たち4人は少し進んで自分たち宛に宛がわれたドアの前に着く。

「……ここだな」

部屋の番号を確認しながら藤原が言う。

「じゃあ、一旦荷物置きますか」

「そうだな」「うつす」「はい」

小田の言葉に3人がそれぞれ応じると、光秋は3人に続いて部屋に入る。

「……こんなところだろうと思ったけど、愛想のねえ部屋だな」

左右に二段ベッドが1つずつ置いてあるだけの部屋に、竹田が率直な感想を漏らす。
「屋根の下で寝れるだけいいじゃないですか」

「そうだがよ」

ドアの脇にカバンを置きながら言う光秋に、竹田もカバンを置きながら返す。

と、呼び出しの放送が入る。

（招集連絡。招集連絡。E S O 京都支部所属藤原隊は、至急大型装備品置き場に集合せよ。繰り返し……）

「なんででしょう？」

「さあな。行ってみればわかるだろう。行くぞ」

光秋の問いに応じながら藤原は指示を出し、一行は藤原を先頭に部屋を出る。

と、後ろから小田が光秋の右肩を叩き、右耳に顔を寄せる。が、

「そっち聞こえない方です」

光秋の指摘に、小田はすぐに左耳に顔を寄せ直し、

「今夜は覚悟しておいた方がいいぞ。𩺰いびきの大合唱だ」

小声で言って追い抜いていく。

——……ああ。三佐と二尉と同じ部屋だもんな……—

前に行く小田の背中を見ながら、光秋は苦笑いをしつつ言わんとすることを理解す

る。

少し進んで伊部と合流すると、藤原隊一行は玄関の地図で位置関係を確認し、大型装備置き場へ向かう。

——……………意外と歩くな——

前に行く藤原たちの背中を見つつ、光秋は地図で確認した位置関係、その予想以上に目的地までの距離があることに對してそう感じる。

——上からや地図で見たのとじゃ、距離感が変わるのも当然か……そもそも雪で一面白く塗り潰されてたから、基地の敷地と周辺の山の境界もよく判らんし……………——

光秋がニコイチ越しに見た景色を思い出しながら考える間に、一行は大型装備置き場に着く。

その名の通り大量の大きなケースやコンテナ、数台の戦車などが並んでいる合間を歩いていくと、光秋は正面に数人に囲まれたゴレム・タンクを、その足元に灰色のツナギの上に緑色のコートと羽織った大河原主任を見付ける。

「おお、みんな、こつちだ」

右手を振りながら大河原は言い、一行はその許に集まる。

「呼び出して、主任ですか？」

ゴレタンを見やりながら小田が訊く。

「そうだ。今回の作戦でコイツを使うことになってな。操作のチェックをしてもらうために呼んだ。実戦で使うのは初めて……否、DD-01の時以来だろうが、整備については万全だ。機体状況については抜かりない。データ取りの意味合いもあるから、明日はよろしく頼む」

「……わかりました」

「ヨッシャ！」

大河原の説明に、小田は仕方ないという顔で、竹田は嬉しそうな顔で応じる。

「それから二曹」

「はい？」

「君にも見せたい物がある。ちよつと来てくれ」

「?……わかりました」

「他は残ってゴレタンのチェックに当たってくれ。わからないことがあれば、その部下たちに訊いてくれ」

「了解です」

大河原がゴレタンを囲んでいたスタッフたちを指しながら言い、藤原が応じる。

「では二曹、こっちに」

「はい」

応じると、光秋は大河原に続いて歩き出そうとする。

と、伊部が大河原を呼び止めて問う。

「あの、私も一応ニコイチの要員なので、そっちに行つていいですか？」

「ああそうだったな。それなら、念のためだ。二尉も一緒に来てくれ」

「はい」

伊部が応じると、3人は大河原を先頭にして歩き出す。

大型装備品の合間を進むと、地面に敷いた鉄板の上に置かれたN砲の前に案内される。

と、

「！」

光秋は前回の戦闘で破損したために付け根から取り換えられた砲身の下に、刀の刀身は
の様な形をした刃が付けられているのを見る。

「主任……これって……」

呟く様に言いながら、光秋はN砲の周囲を廻つてよく見てみる。

砲身下側から左に向つて歩いてみると、刃は砲身よりも少し長く、砲口の少し手前と砲身の付け根、それらの中間の3力所から支柱が伸び、円形の先端に砲身を銜え込む形で固定されているのがわかる。

「N砲の接近戦での使い勝手を向上させるための追加装備だ。今までは砲身を叩き付けて対象を『砕いて』いたが、これで『斬る』ことができる。対象をより効率的に破壊できるとなったわけだ。さらに、チタンベースの合金製刃の強度とニコイチの怪力が合わされば、大抵の物は難なく斬れるだろうな」

「はあ……」

N砲を廻る光秋を見ながら大河原は嬉々と説明し、光秋はそれに困った顔で応じる。

——まあ、飛び道具よりはマシだろうし、接近戦に強くなるのはいいが……また新しい武器か……—

シコリの様な思いを感じつつ、砲をひと廻りした光秋は大河原と伊部の許へ歩み寄る。

「ガトリング砲と盾も用意してある。盾の方にも改良を施しているんだがな。状況に応じて交換すればいいだろう。それと、N砲で使用できる弾の種類も増やしてみた。これにまとめておいたんで、後で観ておいてくれ」

「はあ……」

大河原がコートの右ポケットから出した紙を受け取ると、光秋は弾の種類と効果が書かれているそれを一見し、自分のコートの左ポケットに仕舞う。

「……あのN砲ですが、ちよつと持ってみてもいいですか？」

「かまわんよ。明日までにある程度慣れてもらわなければならんのだし、試しに少し使ってみるといい」

「ありがとうございます」

後ろの砲を見やりながらの間に大河原が応じると、光秋は上着の内ポケットからカプセルを出し、その先端を近くの広間に向けて左膝を着いたニコイチを出現させる。

と、伊部もN砲を見ながら申し出る。

「私も乗せて。私もアレの具合見ておきたいし」

「いいですけど、椅子は……」

「気にしないで」

「わかりました」

応じると、光秋はリフトを掴んでコクピットに上がり、認証を済ませてニコイチを起動させると、操縦席を機外に出して伊部の許に右手を差し出す。

ハッチに上げた掌から操縦席の左側に伊部が移ると、席を機内へ下ろしてハッチを閉め、シートベルトも締めると右手でN砲の持ち手を掴んで立ち上がる。

「……確かに斬れ味はよさそうだな……！……！」

モニター越しに微かな光を反射する刃を見ながら小声で呟くと、2回程振り下ろしてみ。

（どうだ？）

「まだなんとも……」

外部スピーカー越しの大河原に、光秋は外音スピーカーを点けて返す。

「実戦で使わない限り、具合は判りませんよ」

（それもそうだ。俺はちよつとゴレタンの方を見てくるから、使い終わったらそこに置いといてくれ）

「わかりました」

外音スピーカー越しに光秋が応じると、足元に立つ大河原は先程来た道に戻っていく。

大河原の背中が見えなくなると、

「……さて……—「どうしましょ？」」

言いながら、光秋は席の左側に掴まり立っている伊部を見る。

「どうって、N砲の練習すればいいでしょう」

「と言つても、射撃と違つて振り回してただけっていうんじゃ……僕剣道の心得もありませんし」

「だからこそだよ。素振りしてるだけでも違うからやってみな。いつもの空手と要領は同じだと思ふけど」

「その言い方、伊部さんはこういうのやったことあるんですか？」

「中学の時剣道部だった」

「なるほど」

「短い間だけだね」

「でも、経験者は語る、かあ……………わかりました。それなら」

応じると、光秋は両手でN砲の持ち手を握り、以前テレビで観た剣道の稽古の見真似で右脚を少し前に出し、砲を正面に構える。

「ところで、伊部さんは大丈夫ですか？立ちっぱなしで」

「気にしないで。光秋くんがコレに慣れることが優先だから」

「……………それもそうか」「わかりました……………」

多少気にしつつも応じると、光秋は前を向いて一つ深呼吸し、これもテレビの見真似でN砲の素振りを始める。

しばらく振り続けると砲を持った右手を下ろし、操縦桿から離れた自分の両手を見つめる。

「どうしたの？」

伊部が若干心配を浮かべた顔で訊く。

「いえ、ちよつと、手に馴染んだかな？つて……………そりゃあ、自分の手を見てもしやうがな

いんですが、感覚的には本当に手を動かしてる感じなんで、どうしてもこっちを見てしまつて……」

と、

「!?」

ニコイチの頭に何かが当たり、モニターの右側が白い物で覆われるのを見て光秋はハツとする。

その時、

（また面白そうなことやってるじゃない？）

「その声……曾我さん？」

外部スピーカー越しの聞き覚えのある声に応じると、光秋はハツチを開けて機外へ出る。

と、右側の地面に立つてこちらを見上げている曾我を見付ける。

—じゃあ、さっきのは……—

思いつつ、シートベルトを外して体を右側に逸らし、ニコイチの右目辺りに付いている白い物を見る。

——……これ雪だ——「曾我さん！脅かさないでくださいよ……」

「なんだと思ったの？」

体を向け直して若干の非難を含んだ声を出す光秋を風と受け流しつつ、曾我は念力でゆっくりと上昇してハッチの上に降り立つ。

「あ……伊部二尉もいらしたんですか……」

下からでは見えなかったのだろう伊部の姿を見て、曾我は少し怖气る。

「ええ。私は光秋くんの補佐役ですから」

それに対して伊部は、微笑みながらも少し棘のある調子で応じる。

「……伊部さん」

「……………ごめんなさい」

光秋の指摘に、我に帰った伊部は軽く頭を下げる。

「さつきもそうだけど、ときどきこうなっちゃって……あんまり意味はないんで、気にしないください」

「……そう、ですか？……ところでワンちゃ——加藤君、なにしてたの？」

恐る恐る伊部に応じると、曾我は調子を取り戻して光秋に訊く。

「新しい装備の訓練を」

言いながら、光秋は視線をN砲へ向け、ニコイチの右手をハッチの高さまで上げて砲を示してみせる。

「なにこれ？ 刀？」

「強いて言うなら、銃剣に近いんでしょうね。接近戦向けの装備です」

「接近戦か……アタシにはあんまり縁がないけど」

「光秋くんは接近戦、それも格闘戦に向いてるから、装備もそれに合わせたんです」

曾我と光秋の会話に、伊部が補足説明をしながら加わる。

「そうなの？」

「ええ、まあ……もともと射撃上手くないですし、やっぱり性格が出るんでしょうね
……………」

曾我に応じながら、光秋はN砲に視線を向ける。

と、

「……………あ」

弾倉を取り付ける窪みが目に付くと、光秋は大河原から渡されたN砲の弾のリストのことを思い出し、左手をコートの左ポケットに伸ばしてそれを取り出す。

「忘れてた。これもあつたんだ」

「ああ、それ」

「なに？」

光秋の呟きに伊部が応じ、曾我がリストを見ながら問う。

「アレの弾の一覧表です。そっか、これにも目通しておかないといけないんだよね」

伊部が砲を見やりながら応じつつ、リストに顔を寄せる。

—今何時だっけ?……—

思いつつ、光秋は左手首の腕時計を見る。

—4時40分か……—「N砲の方はそろそろやめますか。どの道射撃訓練と違って、こういうのは実際に何か斬ってみないとどうも感覚が掴めなくて……とりあえずニコイチは仕舞って、別の所でゆっくりこれのチェックしましょう」

「光秋くんがそれでいいなら、そうしよつか」

リストを軽く振りながら言う光秋に、伊部は顔を離しながら返す。

「じゃあ、伊部さん降ろします。曾我さんは……」

「アタシは自分で降りれるから」

光秋に应じるや、曾我は少し浮かんで高度を下げながらニコイチから離れていく。

「じゃあ……」

曾我がある程度離れたのを確認すると、光秋はN砲を鉄板の上に戻し、ニコイチに左膝を着かせて右手で伊部を地面に降ろす。

右脇に挟んでいた制帽を被り、右の肘掛からカプセルと取ってリフトで下に降りると、カプセルにニコイチを収容してソレを上着の内ポケットに仕舞う。

「お待たせしました。では」

曾我が投げた雪が取り残されて下に落ち、ニコイチのいた辺りにできた雪の跡を見
て言う、光秋は伊部と曾我と共に来た道に戻る。

しばらく進むと、ゴレタンが置かれている辺りに来る。

「移動すなら、主任と三佐に一言言っておいた方がいいかもね」

「そうですね」

左隣を歩く伊部の指摘に、光秋は首肯する。

「じゃあ、私三佐の方行つてくるから、光秋くん主任の方お願い」

「わかりました。曾我さん、先に行つてください。他にも用があるでしょ？」

「アタシはこの辺で待つてる。2人に付いて行つた方が面白そうだしね。特エスの打ち
合わせはさつき終わつたから。その帰りにワンちゃ——加藤君たちを見かけたんだ
どね」

「それなら……じゃあ」

右隣を歩く曾我に応じると、光秋はゴレタンのそばで指示を出している大河原の許に
速足で歩み寄る。

「大河原主任！」

「おお、二曹」

光秋の呼び掛けに、大河原は振り返りつつ応じる。

「N砲の試し終わったんで、鉄板の上に置いときました」

「そうか。わかった」

「じゃあ、後お願いします。僕はこの後、基地の方に戻って弾のリスト確認しますから」

「了解だ。しっかり目を通してくれよ」

「はい。では」

応じつつ一礼すると、光秋は伊部の許へ向かう。

「終わった？」

2人が合流したのを見て曾我也加わる。

「はい。じゃあ、行きますか」

「そうだね」

光秋の返事に伊部も続くと、3人は建物がある方へ向かう。

49 お茶の席の意見交換

しばらく進むと、光秋、伊部、曾我の3人は先程作戦説明が行われた建物に入る。

「えーっと、休憩室みたいなところは……」

呟きつつ、伊部は右の人さし指を伸ばして地図を探る。

「……………こみたいだね。行く」

「はい」

応じると光秋は伊部の後を追ひ、曾我もそれに続く。

「そう言えば、さつき三佐から聞いたんだけど、一尉、ゴレタンの操作にだいぶ苦戦してるみたい」

「そうなんですか？」

思い出した様に言う伊部に、光秋は意外に思いながら返す。

「でも、一度やってたのに」

「そうなんだけどね……………やっぱり時間が空くとダメみたい。特に腕の操作とか、前例ないしね」

「ああ、そうか……………確かに、今までの機械とは違いますからね」

「あのー、さつきから話の中心になつてゐるそのゴレタンって？」

「ああ、ここに來る途中にあつた——」

話に加わつた曾我に光秋が説明を始めようとした、その時、

「!?」「ああ!」

光秋の左脚に何かが当たり、同時に小さい悲鳴が響く。

「!」

慌てて悲鳴がした辺りを見ると、緑の制服にコートを羽織つた短い赤毛の少女を見る。

「ああ、ごめんなさい……」——子供?小学生?……特エスか?——

反射的に謝りつつも、180センチ近くの身長がある自分の腰辺りにやつと届くくらいの背丈の子供がESOの制服を着ていることに驚く一方、冷静な部分で東京本部で見た光景を思い出して推測してみる。

と、

「ごめんじゃないよ!これどうしてくれんのさ、オッサン!」

「?」

突然怒り出した少女が右手を前に出し、光秋はその手にオレンジ色の液体が入つた紙コップが掴まれているのを見る。

「?」

「アタシのオレンジジュースどうしてくれんのさって言っただよ! まだちよつとしか飲んでなかったのに!」

言われて光秋は、コップの中身が半分以上なくなっていることに気付く。同時に、

——……ああ……

ハツとして左手でコートを触つてみると、左ポケットの周囲が濡れていることに気付く。

「弁償しろよ! あんた二曹ってことは、アタシより下だろ。命令したっていいだ!」

「はあ……………」

唾を飛ばす勢いで怒る少女に、光秋は思わず圧倒される。

と、

「桜^{さくら}あ!」

少女の背後——通路の奥から、女物のスーツの上に緑のコートを羽織った東洋系の女性^{せい}が、長く伸びた黒髪を揺らしながら駆け寄ってくる。

「すみません! ウチの子が失礼なことを」

一行の許に着くや、女性^{せい}は光秋に向って深く頭を下げる。

「ああいえ、こつちもちよつと前方不注意があつたので、別に……」

突然の謝罪に戸惑いつつも、光秋はすぐにそう返す。

「いいえ、本当にすみません。さあ桜、こっち来な」

「でもコイツが……」

「コイツなんて言わないの。ジュースならまた買ってあげるから。それに、来年は5年生なんだから、いつまでもそんなことでいちいち怒らないの」

「……」

女性の言葉にムツとしつつも、「桜」と呼ばれた少女は女性の後に続いて光秋たちが来た方へ歩いて行く。

「ふうー……………」

2人の姿が見えなくなると、光秋は思わず安堵の息を漏らす。

「なんか、すごい嬢ちゃんでしたね……でも何であんな子供が？」

「特工スよ。本部所属の人間隊^{いるま}。実力はあるみたいだけど、さつきみたいな態度の悪さの方が目立ってるってところ……ていうか、『嬢ちゃん』って……」

光秋の発言に渋い顔をしつつ、曾我が説明する。

「それより光秋くん、コート大丈夫？」

「ああ……」

伊部の指摘に、光秋はジュースがかかった左ポケットの中のリストを手探りする。

「とりあえず、リストは無事です。でも外側べた付くな……」

「洗ってきたら。染みになっちゃう」

「いやでも、そうすると休憩室に行けなくなるから、後でいいですよ」

「私はこの辺で待つてるよ。曽我さんは？」

「アタシも別にかまいませんよ」

「……それなら、ちよつと水盤のあるところ探してきます」

言うとき光秋は、正面の通路を速足で歩き出す。

少し歩いた所にトイレを見付けると、そこに入って水盤で水をかける様にしてコートを洗う。

「……こんなところかな？」

一通り洗い終わると、ハンカチで水気を拭く。

―それにしても、さつきは思わず圧倒されてしまったな。迫力があつたのは確かだが、子供相手にさすがにビビり過ぎだったか？……『男でしょ！情けない』、とか言われそうだ……………」

曽我の顔を浮かべて苦笑いすると、光秋は2人の許へ戻る。

「お待たせしました」

「どう？落ちた？」

「なんとか」

移動を再開しながらの伊部の問いに、光秋は未だ水気が残っている辺りを擦りながら答える。

—後は自然に乾くの待つしかないか……………—

光秋がそんなことを思いながら歩くと、3人は休憩室となっている多目的室に入る。いくつかの長テーブルとパイプイスが並んでいる室内には緑や青の制服を着た人々が疎らにおり、3人は入口近くのテーブルに座る。

「さて、では…………」

呟くと、光秋は右手をコートの右ポケットに伸ばし、先程洗う際に入れ替えておいたリストを取り出す。

「えー……徹甲弾、散弾、あとは…………よくもこういういろいろと……………」

読み慣れない字が羅列されたリストを遠い目で眺めつつ呟き、左隣の伊部と正面の曾我に手伝ってもらいつつ、弾の名称や特性の記憶を行う。

しばらくして一通り覚える頃には、光秋は重い頭痛を感じる。

「はあ…………こりや、早く始めて正解でしたね」—そうでなくや、明日どうなってたかわかったもんじやない。今だって不安だが……………—

痛む頭に左手を添えつつ、嘆息混じりに呟く。

「あんなロボット扱えるえるくせに、こういうのはダメなの？」

「いろいろあるんですよ。僕にも……」

曾我の問いに、光秋は半ば投げやりに返す。

と、頭の疲れを癒すことも兼ねてふと思ったことを訊いてみる。

「……………話は変わりますが、曾我さん、さっきのことあんまり言いませんね」

「さっき？」

「ほら、来る途中でジュースかけられて子供に怒られた件。我ながら、子供相手にあそこまで圧倒されたことに少し情けないと思ってたんですよ。曾我さんなら、なにか言ってくるかと思ってたけど……」

「まあ、普通の子供ならね…………でも、相手は特工ス、それも入間隊の子だから……」

「……………どういうことですか？」

曾我の言わんとすることがわからない光秋は、素直に首を傾げる。

「……………まさか、知らないの？」

「ああそっか、光秋くん知らないんだ」

それを見て曾我は少し戸惑った顔をし、伊部が思い出した様に言う。

「なんですか？」

「入間隊って、日ESOでもけっこう有名なんだけどね。その理由っていうのが、所属し

てる特エスが全員レベル9ってことなの。というか、レベル9の超能力者を一つに集めたのが入間隊なんだけどね」

「……………それって……………」

「つまりあなたは、最高レベルの超能力者、それともかなり興奮してた子の相手をしてたってこと」

「……………ああ!」——下手すりや怪我してたかもしれないなかったってことか……………」

伊部の説明と曾我の補足に、光秋は以前戸松教授が壁に叩き付けられていた光景を思い出し、先程自分が置かれていた状況を理解する。

「さっきも言ったけど、入間隊は態度が悪いことで有名でね。それに確かサイコキノがいるって聞いたし、下手したら吹き飛ばされてたかもしれないわね。冗談抜きで」

「ははあ……………」

正に今思ったことを曾我が口に出し、光秋は苦笑いを漏らす。

「……………まあ入間隊に限らず、子供の特エスはちよつとツツパツてる子が多いのは確かなんだけどね……………アタシも他人のこと言えないし……………」

「……………もしかして曾我さんも?」

2人から目を逸らす様に言う曾我に、伊部が問う。

「ええまあ……………今でこそ少し気が強い程度で通ってますけど……………小さい頃は主任に迷惑

をかけました」

—『少し気が強い』?—

苦笑い混じりに応じる曾我に、光秋は京都支部で初めて会った時の若干高圧的な態度、DD—01に突っ込んで行つた際の猛進な姿、東京本部でニコイチの見学をやや強引に頼んできた時のことを思い出しつつ、少しだけ首を傾げる。

「何か?」

「いえ、何も」

若干棘のある視線で睨み付ける曾我に、光秋は短く即答する。

と、

「おージャップ」

「……タツカー中尉」

後ろから呼び掛けられて振り向くと、光秋は入口の前に青服一式の上に青いコートを羽織つたタツカー中尉を見る。

「伊部二尉もお揃いで……こちらの女性は?」

光秋の右隣に歩み寄りながら、タツカーは曾我を見て問う。

「東京本部所属の特エスの曾我さんです。曾我さん、こちらタツカー中尉。空軍のパイロットです」

タツカーの問いに答えつつ、光秋は曾我にタツカーを紹介する。

「曾我ガイアと言います。よろしく」

「アレク・タツカーです。こちらこそ、こんな美人と知り合えて光栄です」

「フフ。お上手ですね？」

曾我は光秋と初めて会った時の様な品のある感じで、タツカーは制帽を取った右手を胸の前に持ってきてやや腰を低くして自己紹介する。

「……なんか、いつもと違うような……？」

そんなタツカーの振る舞いに、光秋は軽い違和感を覚える。

と、

「……ん？どうしたジャツプ？」

光秋の視線に気付いたタツカーが、制帽を被り直しながら訊いてくる。

「いえ、中尉、なんかいつもと違うなあと思って……」

「ああ、私もそう思ってた」

光秋の返事に伊部も続く。

「なんていうか……いつもの勇ましさが薄まつてるっていうか……紳士的？」

「ああ、そんな感じですね」

伊部の迷いながらの感想に、光秋は納得しながら続く。

「そりゃあ、俺は士官、それも一兵卒じゃなく学校出の方だから。レディの前でそういうふう振舞うのは当然だ。学校で教官に散々言われたしな。『戦時においてはともかく、平時においては士官たる者紳士であれ』ってな」

「紳士、ですか……」——そういえば士官学校出って言ったら、いわゆるエリート——社会的地位の高い人だからなあ……そういうものかなあ……—

「でも中尉、私と接する時は普通ですよな？」

光秋が感慨に耽っている横で、伊部は若干棘のある語調で問う。

「伊部二尉はほら……いろいろ……主にジャップのことで関係があったからさ、士官としての振る舞いよりも、親愛の情を優先してさ」

「随分都合のいい紳士だことで……ま、堅苦しいのは嫌だからいいんですけどね」

少し困りながら答えるタツカーに、伊部は束の間膨れつつもすぐに微笑んで応じる。

「……どの道エリートとは縁のない僕が考えても、しょうがないんだけどさ……—そんな2人のやり取りを眺めつつ、光秋は割り切った様にそう思う。

「……ところで、みんなでなにやってるんだ？」

少々の居心地の悪さに話題を変えたいこともあつて、タツカーは気になっていたことを訊く。

「ニコイチが使える弾の種類が増えたので、その確認を。中尉は？」

リストを示しながら答えつつ、光秋は訊き返す。

「俺はさつき明日の打ち合わせが終わったんだが、基地に帰るためのテレポーターの手配が遅れるって言うで、ちよつと休憩に」

「基地に帰る?……基地つてここじゃあ……」

タツカーの言葉の意味が解らず、光秋は首を傾げる。

「空軍の基地だよ。こんな山の中の滑走路もない様な所じゃ、戦闘機なんて運用できないだろう」

「ああ、そっか」

「ちようとしつかりしてよ? 白い犬さん?」

タツカーの説明に納得する光秋を見つつ、曾我はからかう様な笑みを浮かべる。

「それなら、リストの確認も一通り済んだことだし、私たちも少し休憩しません? 中尉も一緒に、お茶でもどうです?」

「そうしますか。正直、頭から煙が出そうだったんだ。冷たい物が欲しいです」

伊部の提案に、光秋はリストをコートの左ポケットに仕舞いつつ、頭の疲れを思い出しながら応じる。

「それっじゃあ、俺もお言葉に甘えようかな」

「アタシもいいんですか?」

タツカーが賛成する横で、曾我は遠慮がちに問う。

「いいでしょう。大勢の方が楽しいでしょうし」

「そう?……じゃあ」

光秋が応じると、曾我は嬉しそうな顔をする。

「じゃあ、なにか買つて来ますね。曾我さん、一緒に来て」

「それなら僕が」

イスから立ち上がりながら言う伊部に、光秋は腰を浮かせて申し出る。

「いいから。光秋くんは中尉として。曾我さんお願い」

「わかりました」

伊部に応じながら曾我も立ち上がると、2人は休憩室を出ていく。

「……」

残された光秋はタツカーを見やり、タツカーは光秋の正面に座る。

「……それにしても、よかつたんですかね?」

「なにが?」

光秋の主語のない問いに、タツカーは訊き返す。

「女の人2人にお茶用意させたことです。こういう時こそ男が率先してやるべきなんじゃないかと、思つたんですが……」

「さつき話してたことに当てはめれば、確かに。でも、やると言っていることを止めるのもどうかと思うし、別にいいんじゃないか」

「まあ……確かに男とか女とか、必要以上に拘るのもどうかと思いますし……それこそさっきの話で感じたことを言えば、紳士とかエリートとか、僕には縁がないですからね……」

「そうなのか？」

「家は普通の……中流の家庭ですよ。豪勢じゃないけど、食うには困らない。先祖代々そんな感じですよ。その時代その時代の、中流というか、庶民というか、そういう位の家でしたから。僕自身、立身出世よりも生活していく力を持てるかの方が、こうやって実際に仕事に就くまでの命題でしたから……もつともこれには家柄というよりも、体のことの方が大きいんですが……」

「体？」

「あれ、言つてませんでしたっけ？僕、生まれ付き目と耳が悪くて」

「ああ、だからメガネか」

「はい……だから、就ける仕事が少ないことへの不安とか、就いたらどんな仕事であろうとまず精一杯やろうとか、そういう思いがあつたんですが………実際、危ないことも多いけどかなりいい仕事に就けたし、ニコイチや周りの力を借りながらですけど、なん

とかこなせてるからいいんですが……」——そうして尽くせるようになった力を向ける家は——家族は、ここにはいないんだよな……」——

その心中の眩きは、光秋にどうしようもない虚しさを覚えさせる。

「なに急に湿^し気^けたツラしてんだよ」

顔に出たのか、タツカーが微笑みを浮かべて言う。

「いえ………仕事に就けたのはいいけど、尽くせる人はここにはいないなと思って……」

「尽くす？」

「給料をもらつても、こつちにいる限りは全部自分のために使わざるを得ません。もちろん自分のために稼ぐ、自分の生活を立てるために稼ぐのは前提ですが、そうじゃなくて……家——家族のために役立てることができない、そうできる相手が、こつちにはいないなつて……」

改めて言葉にしてみても、光秋は再び気が沈む感じを覚える。
と、

「……こつちには家族や、家族に代わる様な人間がいなくてか？ バカ言うな」
「!？」

タツカーの若干強い語調に、光秋は少し驚く。

「家族みたいな奴なら、もういるだろう。ひと夏一緒に過ごした奴がよ」

「……綾のことですか？」

「ああ。もう消えちまったのかもしれないが、それでも——」

「いえ、綾は消えてません。まだ伊部さんの中にいます。前みたいにはいかないけど、ときどき出てくるみたいです」

タツカーの言葉を遮ると、光秋は一気に説明する。

「そうなのか？なら好都合じゃねえか。家族とまた会えるかもしれないねえんだがらよ……それに、上杉から聞いたが、伊部二尉ともけっこう仲よくやってんだらう？」

「ええ、まあ……それなりによくしてくれてますが………」

言いながらタツカーは顔をニヤケさせ、光秋は少し困った顔をする。

「だったら、その関係をもっと大事にすればいいさ。それにアヤも消えてないってんなら、尚のこといいじゃねえか」

「……そうですね」

「それに、ちょうど姫君2人のお帰りだ」

「！」

タツカーの言葉にハツとしつつ、光秋は視線を追って入り口を見やると、両手に飲み物を持った伊部と曾我が歩み寄ってくる。

「お待たせ。はい」

「ああいえ……ありがとうございます」

伊部が差し出した缶入りのお茶を受け取りつつ、光秋は礼を言う。

——……………金の話が心の問題の話に変わっちまった気もするが……でも、タツカー中尉の言う通りだよな。今の僕には、伊部さんがいる。僕のことを弟分って言ってくれる人が……それに、綾とだってまたいつか、前みたいにまとまった時間一緒にいられる機会が来るかもしれない。その時こそ、精一杯尽くしてやればいい！なにより、家に帰るまでは死ねない！何が何でも生き抜いて、また自分の家に帰ってやる……………その時は伊部さんと……綾と一緒に行けたら……………——

「光秋くん？」

「……………え?!はい……………?」

突然の伊部の呼び掛けに驚きつつ、光秋は左隣に座った伊部の顔を凝視していたことに気付く。

「さっきから私のことじーつと見て、どうしたの?」

「ああいえ、何でも」

若干狼狽を覚えながら返すと、光秋は急いで缶のフタを開け、冷たいお茶を流し込む様に飲み始める。

「……」

その行動に、タツカーと、その右隣に座る曾我はは微笑みを浮かべる。

——とにかく！明日の作戦はヘマをしないように気を付ける。それが今一番大事なことだ。しばらくはそのことに集中する。それでいいだろう！——

一気に缶の半分程を飲み干したところで口を離すと、光秋は心中にそう断言する。

「……それにしても、突然こんなことになっちゃうなんて……本当なら、明日中尉たちと模擬戦だったのに……」

缶を傾けてお茶を飲みながら、伊部は溜め息混じりに呟く。

「そう落ち込まなくても……整理戦争が終わった今となっちゃ、実戦は貴重な機会なんだから。ま、戦闘になるって決まったわけでもないが」

「それはそうですね……」

——『戦争』……『実戦』……『戦闘』……——

タツカーと伊部のやり取りを聞き、光秋はその言葉を苦い物を噛む様に心の中に復唱してみる。

「……どうしたの加藤君？ 難しい顔して」

光秋の表情に気付いた曾我が、缶コーヒーを飲みながら訊いてくる。

「ああいえ……中尉の話聞いてたら、なんか複雑な気持ちになっちゃって……」

「俺の話がなんだよ？」

缶コーヒを飲みながらタツカーも訊いてくる。

「戦争とか、実戦とか、そういうのを聞いてると、なんか嫌な気持ちになっちゃって。僕らが参加するっていうんなら尚のこと……ただ、僕はそれが仕事なわけだから、そうも言ってられない。仕事ならちゃんとしなくちゃって思いもあつて……すみません。自分の中でも整理がつかなくて……」

歯切れの悪さを自覚しながら応じると、光秋はテーブルの上のお茶の缶に視線を落とす。

「……要するに、お前は戦争……と言うか、争いごとが嫌いつてことか？」

「まあ……そうなりますね」

確認するタツカーに、光秋顔を上げて納得しつつ応じる。

「……と言うか、争いが嫌いじゃない人なんていますか？」

「今回相手をするサン教が正にそうだろう。あと超能力者排斥団体のNPとか……あとはスケールが小さいところでは、町のゴロツキとかね」

「あと、直接戦うわけじゃないけど、兵器メーカーとかね。ま、そっちは好き嫌いじゃなくて、戦争があればお金になるってことなんだろうけど」

「それはそうでしょうけど……」

タツカーと曾我の答えに、光秋は口籠ってしまふ。

「私は、光秋くんが言う様なこと嫌いだな」

その横で、伊部がお茶をすすりながら応じる。

「俺だつて好きつてわけじゃないさ。ただ事実としてそういう連中もいるつて言つただけで」

「アタシも、何も戦争が好きつてわけじゃ……ただ中尉が言つた様に、現実さはつき言つた通りでしょう？」

「……………だから、変えていかなくちやいけないんですよ」

タツカーと曾我の言葉に、光秋は静かだが強い調子で返す。

「変えるつて言つてもな……」

タツカーが戸惑つた顔をする。

「伊部さん、ありがとうございます。せっかくですから、もう少し話させてください」
「別に構わないぜ。今はフリートーキングなんだから」

タツカーの返事を聞くと、伊部のおかげで調子を得た光秋は話し始める。

「確かに中尉たちの言っていることも一理あります。そういう人——争いを好む人たちもいるのが現実です。でも、現実をただ現実として受け入れるだけが人間じゃないでしょ？ 例えば……そう、川を楽に渡りたいと思つたから橋を掛けるし、山を楽に越えた

いと思ったからトンネルを掘る。肌の色で差別されるのはおかしいと思ったからそれを是正する運動が起こって、性別で扱いに違いがあるのはおかしいと思ったから男女平等って考えが生まれ、浸透してきた。そうやって周囲——世界に働きかけて少しずつ変えていく、変えられないまでもなにかしらの影響を与えていくのもまた人間でしょ。少し話に飛躍があつたかもしれないませんが、僕が言いたいこともそういうことです」

言っている間に、光秋は夏に綾と過ごした時のことを思い出す。

——あの時も、そういえばこんなふうに僕の考えてることを話したつけ……………あの時もう少し上手く伝えてあげてれば……………否、今はよそう。言つても仕方ない——

束の間の後悔を隅に押しやると、話を続ける。

「……………さつき、おかしいから変えるって言い方をしましたが、僕の場合はもう一つ、すごく感情的なことですが……………僕はとにかく、争いが嫌いなんです……………だから、争いを克服した世界を創りたいって思うんです」

「……………どうしてそんなに嫌なの？」

曾我の問いに、光秋はお茶を一口飲んで応じる。

「どうしてと言われても……………感情の問題ですから、嫌なものは嫌なんだとしか言えませんがね……………ただ、例えば他人^{ひと}がしている喧嘩を見た時は、無条件で不快な気持ちになりませんし……………あと強いて言えば、学校教育の影響ですかね。平和教育とか言つて、そう

いうことを小さい頃から教え込まれたのがあるんでしょう」

「それはアタシの時もあつたなあ……ていうか、ここにいるみんな整理戦争世代だから、そういうことはみんなやってたんじゃない？中尉はどうです？」

「……どうだったかなあ」

—そういうのとはまた違うんだが……でもまあ、曾我さん僕のこと知らないから仕方ないか。迂闊に喋れないし—

昔を懐かしむ顔でタツカーに尋ねる曾我を見ながら、光秋は心の中で口をつぐむ。

「……………ああそうだ、もう一つ。たぶん、祖父の影響があるんだと思います」

「お祖父さん？」

「ジャツプの祖父さん、戦争に行つたのか？」

「いいえ」

曾我とタツカーの質問に、光秋はすぐに応じる。

「祖父が徴兵された時は、もう戦争が終わる頃でしたから、戦場には行つてません。せいぜい地元近くの訓練所に集められて、訓練だけして終戦を迎えました。その前は、飛行機なんかを使う燃料の工場に勤めてたそうですけど……ただ、当時の思い出話とか、その前の戦争に行つた身内の話とか聞いていると、戦争嫌だなって、自然に思うようになるんです……………」

言いながら、光秋の脳裏にはいくつかのことが思い浮かぶ。

まだ家にいた頃、祖父に見せてもらった両脇に薄い紙製の御守がぎつしりと詰まった小さな持仏と、アルミ箔に包んだ上で貴重品を入れる箱に大事そうに仕舞われていた慰問品のタバコ。それらを見せる際に必ず聞かされた祖父の祖父——高祖父の出兵の経歴。食事時の昔話に語った祖父の戦時中の思い出と、徴兵経験。

——『戦争しに行ったのか殴られに行ったのかわからなかった』って言ってたよな……

戦後の暮らし。家の庭に祖父が設けた地蔵、その両脇に納めてある戦場跡から持ってきたという石。小田一尉の朝鮮内戦時の体験談と、左腕の火傷の痕。

——祖父ちゃんの話が過去なら、一尉の話は今なんだよな……今でも、ああいうことはあるんだよな。向こうでもこっちでも……

そして、綾のこと。

——『いいね、ヘーワ』………あいつも、そんなこと言ってたっけ………

心の中にふと呟くと、先程から頷きながら話を聞いている伊部を一見する。

「あとは、それこそこっちに来ていろいろありましたから………あとはまあ、生来の臆病な性格もあるんでしょうが………そんなことが、争い——避けられ得る衝突を嫌う理由ですかね」

自嘲を浮かべながら言う、光秋はまた一口お茶を飲む。

「『避けられ得る衝突』？」

光秋が最後に言った言葉を返しつつ、曾我が首を傾げる。

「ああ、僕の中で言葉の使い分けです。生きている以上どうしても避けられない、必然的に起ってしまう衝突が『戦い』。努力……工夫次第で避けられ得るものが『争い』」

「……具体的にどう違うんだ？」

タツカーが問う。

「『戦い』は、もう少し言えば命を繋ぐために起る衝突ですね。生きるためには食べなければいけないけど、それにしただけで、肉なら食べられる側と戦って得なければいけないし、野菜なら天候とか、野生の動物とか、そういうものから守りながら育てなければいけないし、いずれにせよ、食べ物一つ得るためにも何かと衝突しなければいけないわけですよ」

「まあな」

タツカーが頷く。

「他にも、ただ生きてるだけでもいろんなものと衝突する……身を守る必要が生じてくるでしょう。洪水や地震なんかの自然災害とか、熊や蜂なんかの危険な生き物とか。そういうのから身を守るために……生き残るために生じる、生きる以上避けられない衝突の

ことを、僕の中では『戦う』って言うんです。逆に『争う』は、主に人災に対して使いますね。さつきまで話してた戦争とか、人が起す衝突って、工夫やちよつとした我慢なんかで避けられ得るでしょ。そういう、避けられ得るけど起つてしまう衝突が『争い』………と、ここまで殆ど一人で喋つてしまいましたが……僕が言いたいこと解りましたか？」

3人を見回しながら控え目に問うと、光秋はお茶を一口飲む。

「……ええ……なんていうか………」

「お前の平和主義者っぷりは充分伝わってきたよ。さすがジャパニーズだな……」

「そういうのとはまた違うんですね……」——この光景、前に食堂でパラレルワールドの話をした時……あと、伊部さん相手に宗教の話した時みたいだな………——

曾我とタツカーが歯切れ悪く応じる様子に、光秋はその時のことを思い出す。

と、

「ふっ……この前もこんなことあったっけ。光秋くんが珍しくよく話して、みんなポカーンってしてること」

「ええ、確か……」——伊部さんも憶えてたか——

微笑みながら言う伊部に、光秋は少し嬉しく思いながら返す。

「あの時とこの間は、私もポカーンとしてたなあ……でも、今回の話は少し解るかも」

「アタシも解らないわけじゃないですけど……」

曾我が困った顔で応じる傍ら、伊部は話を続ける。

「さつきも言った様に、私も争いごとは嫌い。光秋くんが言う様に、不快とか怖いっていうのもあるけど……戦争は、私の大事な人たちを奪ったから……」

——……伊部さん——

その一言に、光秋は伊部が言おうとしていることを察してしまう。

「……どういふことですか？」

先程までと違った雰囲気を感じてか、曾我が恐る恐る問う。

「私、戦災孤児だから」

「！」

「え？でも、『伊部』って……『法子』って……」

しれっと答える伊部に、曾我は驚きを浮かべ、タツカーが戸惑いながら問う。

「それは養子先で付けてもらった名前。物心つく前だったから、自分じや名前わからなかったし……でも、今では『伊部法子』が私の本当の名前なんだって思ってるから。私はいくまでも日本人で、今の両親が本当の両親なんだって思ってるようにね」

「……確か、その御両親の気持ちに応えたくてESOに入ったんですね」

「なんだジャップ。お前は知ってたのか？」

以前聞いた話を思い出した光秋に、タツカーが訊いてくる。

「ええ。前に今の様な話をしてもらつて……というか、曾我さんは殆ど会つたばかりだから知らなかつたとして、中尉は今までわからなかつたんですか？その……伊部さんの肌の色とか……」——この言い方はちよつと不味かつたかな？——

言いながら、光秋は図らずとも伊部を傷付けてしまったのではないかと不安になる。

「いや、イエロー……黄色人種の中にも黒っぽい色合いの奴はいるから、伊部二尉もそうなのかと……あと、名前が日系だつたから尚のことさ……」

「私は、てつきり昔ギヤルだつたのかと……」

「あー……そう言えば高校時代、よくそういう人に間違えられたつけ」

曾我に応じながら、伊部は昔を懐かしむ顔を浮かべる。

「でも、間違える方の気持ちもわからなくもないんだよねえ。私ずっと岩手に住んで、出身のアフリカと比べて紫外線そんなに強くないから、どうしても中途半端な色になつちやつて……て、沖縄以外なら日本中どこにいても大して変わらないだろうけど……」

——……とりあえず、大丈夫か？……感じ過ぎだつたか……——

笑みを浮かべて話す伊部を見て、光秋は先程の言葉を気にしていない様子に安堵する。

「……………話が逸れちゃつたけど……さつき言つた様に、今の両親を本当の両親と思つ

て大事にしてるつもり。でも、顔も知らないとは言え、やっぱり生みの親がいたことも忘れたくない。そして……生みの親を奪った戦争を赦すわけにはいかない。だから理由はどうあれ、光秋くんが言った様な戦争を避けようって話には賛同する」

「ありがとうございます……もう少し上手く言えればいいんですけどね……」

同意してくれる伊部に、光秋は嘆息を漏らしながら返す。

「それでも、自分の考えをまとめて言えることはすごいと思う。前に言った様に、やっぱり『光秋先生』だね」

「やめてください……先生なんて言われる様な人間じゃありませんよ、僕は………」

思い出した様に言う伊部に、光秋は苦笑いを浮かべながら返す。

「『光秋先生』？」

好奇心の顔で訊き返す曾我に、伊部は光秋が風邪で休んだ時のことを話しながら説明する。

と、タツカーが2人の様子に注意しつつ、顔を寄せて光秋に訊いてくる。

「確かに、さつきまで情けない顔してた奴が途端に饒舌になったよな……向こう側で何かやってたのか？」

「いえ、大したことは……ただ、もともとものを考えるのが好きだったところはあります。それが高じてというのか、高校を卒業してからは哲学科のある大学に入る予定でし

たから」——その途中でこつちに來ちやつただけだなあ……それにしても、そんなに情けない顔だったのか……？」

光秋も2人——というより曾我に注意しつつ、タツカーの言葉を気にしながら応じる。

「哲学科かあ……でも、合ってるかもな」

「なんです？」

タツカーの呟きに、曾我が伊部との会話を中断して訊いてくる。

「こいつ、ハイスクール出た後哲学科のある大学入るつもりだったんだそうだ」

「哲学科？」

タツカーの答に、曾我が意外そうな顔をする。

「また難しそうな所を……」

「あ、でも、光秋くん確かに合ってるかも」

「……そんなに合ってる様に見えます？」

曾我がの呟きに続いて言った伊部に、光秋は首を傾げながら返す。

「うん。さつきみたいに自分の考えを整理して話せるところとか」

「どうも……あんまり上手くなかった気もしますけど……」

応じる伊部に先程と同じことを言いつつ、光秋は褒められたことを喜んでいいのか

迷った顔をする。

「まあ伊部さんが言うことも確かですよええ……じゃあ、なんで大学行かずにESOに入ったの？」

「！」

曾我の質問に、光秋は思わず心臓を跳ね上げる。

―進学の引越しの時にこっち側に来てしまつて……なんて口が裂けても言えんよな。どうする……？―

内心動揺しつつも何とか上手い理由を探そうと伊部とタツカーを見やるが、2人の顔にも僅かだが動揺が浮かんでいる。

「えーつと……家庭の事情で、やむを得ず進学を諦めたんです。あんまり詳しく訊かないでください……ちよつと複雑な事情が………」

「はいはい。また機密だとか言うんでしょ」

「ええ、まあ………」―とりあえず、納得してくれたか……―

歯切れの悪い回答を遮る様に曾我は応じ、光秋は心中に安堵の息を漏らす。

と、携帯電話の着信音が響き、タツカーが上着の右ポケットから出したそれを右耳に当てる。

「はい？……了解です。すぐに……テレポーターの準備が整ったから、俺はもう行く。」

なかなか面白い時間だったぞ」

切った電話を仕舞いながら言う、タツカーは空になったコーヒーの缶を持って立ち上がる。

「とりあえずお前の考え、わからんでもない。ただ、明日の作戦はしっかりな」
「それはそうです。やるべきことはしっかりやります」

一応合意してくれるタツカーに、光秋はその目を見返しながら返す。

「それならいいんだ。じゃあな。伊部二尉と曾我さんも、明日はよろしく」

「こちらこそ」

「期待しますよ」

伊部と曾我の返事を聞くと、タツカーは右手に空き缶を持って部屋を出ていく。

「そう言えば、今何時？」

伊部の問いに、光秋は左手首の時計を見る。

「5時50分ですね」

「三佐たちの方、そろそろ終わったかな？」

「さあ……」

呟く様に訊く伊部に、光秋は残ってるお茶を飲み干しながら返す。

「アタシもそろそろ行きます。主任からメールが来たので」

携帯電話を見ながら言うと言我は席を立ち、空き缶を持って部屋を出ていく。

「……私たちも行く？夕飯にしよっか」

「そうですね。時間もいいし」

言うと言部と光秋も立ち上がり、光秋はコートの左ポケットにリストが入っていることを確認する。

空き缶を持って部屋を出ると、2人はそれを最寄りのゴミ箱に捨て、伊部の記憶を頼りに食堂へ向かう。

50 前夜の湯船

建物内をしばらく歩くと、光秋と伊部は食堂へ入る。

食堂内の造りは京都支部のそれと大差なく、それぞれメニュー表の中から食べたい物を選び、カウンターでトレーを受け取って席を探す。

6時という時間帯であるためか、6割程埋まっているテーブルの中から伊部がカウンター近くに空いている場所を見付け、2人はそこに向かい合って座る。

「……にしても、さつきは危なかったですね」

生姜焼き定食に箸を着けるや、光秋は溜め息混じりに呟く。

「曽我さんに大学に行かなかったことを訊かれたこと？」

「ええ……」

トンカツ定食を食べながら確認する伊部に、光秋は白飯を食べながら答える。

「ま、曽我さんの方から切り上げてくれたからよかったんですけどね……」

「まあねえ……そう言えば光秋くんって、本当なら大学生なんだよね」

「ええ」

「……やっぱり、せっかく受かった学校に行けないのって辛い？」

「……」

遠慮がちに訊く伊部に、光秋はDD―01との戦闘の後、神モドキに自分を元の世界に戻すよう頼んだ綾の姿を重ねる。

「……まあ、少しは……でも、今の状況も悪い気はしません。そりゃあ、さつき話した様に争いごとに巻き込まれるのは嫌ですけど、違う世界に来て、ニコイチに乗って、できることを精一杯やって……少なくとも退屈はしませんから。あと、遠い所に行って独り暮らしっていうのもやってみたかったんで。まあ、だから進学先を京都にしたんですが……」

上着の胸ポケットのカプセルを意識しながら言うと、光秋はみそ汁を一口する。

「それならいいんだけどね……今の話だけ聞けば、マンガかなにかの主人公みたいだし、確かに退屈はしないだろうね」

一瞬間に陰が差したものの、すぐに伊部は微笑みを浮かべて言うてくれる。

「でもやつぱり、家族や友達と会えないのは寂しくない?」

「中尉と2人の時にも同じ様な話になりました。その時、こつちにも家族みたいな人はいるから、その人を大事にすればいいって、思えるようになりましたから」

言いながら、光秋は伊部の目を見る。

「……?」

「なに？」と尋ねる顔をする伊部に、光秋はさらに続ける。

「僕のことを弟分つて言ってくれたでしょ」

「ああ、そういうことか……それもそつか。私は光秋くんの姉貴分なんだし、確かに家族みたいな人か」

合点がいくと、伊部は笑みを浮かべる。

「それに……綾もいますから」

女の人の前で他の女の話をするのはどうかと一瞬迷ったものの、光秋は一気に言ってしまう。

「会うことは難しいけど、でもいなくなつたわけじゃない。ちゃんと伊部さんの中にいて……本当のところはよくわからないけど、僕自身とも繋がってるみたいですから………いるんなら、また会えますから………」

そう続けると、光秋は言った内容から感じる気恥ずかしさを誤魔化すために肉と白飯を流し込む様に口に入れる。

「お姉さんとしては、少し妬けちやうかな？」

「……」

微笑みながら言う伊部に、光秋は返事に困つてさらに白飯を口に放る。

と、

「おお！お前たちも来ていたか」

「！」

藤原三佐の声に光秋は後ろを振り返り、各々にトレーを持った藤原、小田一尉、竹田二尉を見る。

「お先にいただきます」

「ウム」

伊部に藤原が応じると、3人はそれぞれ伊部と光秋の周りの席に座る。

「どうでした？ゴレタン」

「まあ、なんとかな……………」

光秋の問いに、左隣に座った小田は焼き鮭定食に手を付けながら多分に疲れを含んだ声で応じる。

「やっぱ時間が空くとダメだ。感じ取り戻すにこんなに掛かっちゃった」

と、右隣の竹田がラーメンをすすりなが疲労を浮かべる。

「少なくとも、明日の作戦には参加できる程度にはなったようだがな。もともと、主力はあくまで加藤、アレはその援護だがな」

「主力、か…………ま、死なない程度に頑張るだけさ」

左前で大盛りの生姜焼き定食を食べながら言う藤原に軽いプレッシャーを覚えるも

の、光秋はみそ汁を飲みながら努めて気楽に考えるようにする。

「……そう言えば、前々から気になってたんですが、NPもそうですけど、ああいう反社会的団体……言ってしまうえばテロリストと呼ばれる人たちって、どうやって装備を調達してるんです？銃器くらいなら百歩譲って手に入れられなくもないでしょうけど、戦車とか戦闘機とか、結構大規模な物も持ってますよね」

会話が途絶えたのを見て、光秋は以前から薄々疑問に思っていたことを周りに訊いてみる。

「そりゃあもちろん、そういうメーカーからだろうな。後は、おそらく軍の横流しだろう」

言いながら、小田はみそ汁をすすする。

「メーカーっていうのはまだ解りますけど、横流しって？軍の中にそういう団体に武器を回す人がいるんですか？」――話として聞いたことはあるが、本当にそんなことが……？――

「確証はないが、状況から考えてそういうことだろうな。回収した兵器の中には、以前軍の中で使われていた物や、正式採用から漏れた物もあったから、単にメーカーから購入したじゃないだろう。もっとも、武器会社から購入するにしたって、軍や政府の関係者、それも高い地位にいる人間の伝手がなきや、見ず知らずの民間人が買える様なこと

にはまずならないだろうがな」

首を傾げる光秋に、小田は鮭の身をほぐしながら応じる。

「……軍や政府の高官の中にも、テロリストに協力する人がいるってことですか？ 話には聞いたことはありますけど……やっぱり、思想的な問題ですか？ 超能力者排斥とか、今回なら信仰とか」

「そういう部分も確かにあるだろうな。あとは横流しの際にもらう賄賂や、軍以外の納品先を見付けることで武器会社を儲けさせて経済を回していく目的もあるだろうな」

聞きかじりの知識を交えながらの問う光秋に、藤原が肉を食べながら応じる。

「……やっぱり、そういうのってあるんですね……」

静かに返すと、藤原や小田が語る現実には煮え切らないものを感じ、光秋は顔を俯ける。

「にしても、お前よくそんな話解るよな。オレなんてさっぱりだぜ」

「僕がそういう話に興味があるのは確かですけど……少なくとも僕のいた側の僕と同世代は、少なからず解りますよ」

ラーメンをすすりながら心底感心した顔をする竹田に、光秋は顔を上げながら不意に湧いた同世代をも含めた自尊心を込めて返す。

「そういうもんかねえ？……」

「お前はもう少し解らないと困るんだがな……」

軽く応じてまた一口ラーメンをすすする竹田に、小田は呆れた顔を向ける。

——……さつき曾我さんも言つてたが……こつちでも——統一政権ができたはずのこつちでも、やつぱり争いを喰い物にする人たちがいるのか……—

先程の会話を思い出しつつ、光秋は模糊とした気持ちを覚えながらみそ汁をすすする。食事を終えると、藤原隊一行は部屋に戻る。

藤原たちと一緒に部屋に戻った光秋は、カバンから歯ブラシを出し、最寄りの水盤の前で歯を磨く。

——……にしても、とんでない日になったもんだ——

右手に持った歯ブラシを動かしながら、今朝のことを思い出す。

——突然呼び出されて、大きな作戦の説明を聞いて、あまつさえ秋田まで来ちまった……本来なら、明日タツカー中尉たちと演習があつたのに……ま、予定は変わることもある、か。それに、こういう時のために日々訓練してるんだし、いい機会か。少なくとも、明日はきちんと仕事をこなすさ………すんなり済むに越したことはないが……—半ば祈る様に心の中に呟くと、歯ブラシを出して口を漱ぐ。

光秋が部屋に戻ると、

「おお、戻ったか。4人揃ったことだし、大浴場にも行くか」

左のベッドの下の方に腰掛けている藤原が、ドアの前の光秋、左隣の小田、向いのベッ

ドに腰掛けている竹田を見ながら提案する。

「そんなのあるんですか？」

予想外のことに、光秋はカバンに歯ブラシを仕舞いながら訊き返す。

「案内には描いてあったぞ」

「でも、風呂用のタオルは持つてきてませんよ？」

答える藤原に、光秋は続けて訊く。

「心配しなくても、京都の宿舎みたいに風呂場にあるだろう」

「……それもそうですね」

小田の指摘に、光秋は納得しながら応じる。

「では、みんなで行くか」

「はい」「うつす」

藤原の提案に小田、光秋、竹田は同時に応じ、各々着替え等を用意すると、4人揃って大浴場へ向かう。

藤原を先頭にしばらく歩くと、上に「大浴場」と書かれた札があるドアの前に着き、中に入るとそれぞれ靴を棚型の下駄箱に入れてロッカーが並んでいる脱衣所に上がる。

ハンガーが掛かっているロッカーの中に脱いだ服などを入れ、ベルトが付いた鍵をそれぞれ左手首に締めてロッカーの脇のタオル置き場からタオルを取ると、4人はガラス

張りの戸をくぐつて浴室に入る。

「ひよおー！広いなあ！」

25メートルプール程の広い浴槽に、首にタオルを掛けた竹田はしゃぐ声を上げる。その背中を見つ、腰の辺りにタオルを下ろしている光秋は、

「やつぱり、三佐体付きすごいよなあ。一尉も負けてないし……二尉も普段ぼんやりしてるのに、ある所はちゃんとあるもんなあ……」

と、メガネがないにも関わらずよく判る3人の肉付きのいい体格に感心する。

「三佐は胸板厚いし、腕も太いしなあ。あれで本気で殴られたら痛いじゃ済まないだろうな……一尉は腹筋割れてるし、二尉は手足立派だしなあ……」

思いながら光秋は、自分の腹を見つつそこに右手を添える。日頃から鍛えているため、光秋の体付きも決して貧弱ではない。同年代の男性の割にはやや細めの体格ながらも、全体的に引き締まった肉付きは均整のとれた健康的な体を形作っている。が、近くに藤原たちの様な人々がいれば、どうしても見劣りしてしまうのである。

「ま、言つてもしょうがないか……」

そう思うことで虚しい比較を割り切ると、光秋は腰の前に下ろしていたタオルを畳んで頭に載せ、浴槽のそばに置いてある洗面器で体を流し、同じようにしている藤原たちに続いて湯船に浸かる。

「ふうー……ただの水道水のくせに、風呂が広いとそれなりに気持ちいいですね」

「ああ。ここに勤めている人たちにとっては、数少ない楽しみだろうな」

「……」

左隣で小田と藤原が話すのを聞きながら、肩まで湯に浸かった光秋は気持ちいがほぐれる感覚を覚える。

「……確かにこんな広い風呂もいいが、普段の一人用の浴槽の方が落ち着くなあ。一人ゆつくり入ってる方が好きだ………」

藤原たちの会話を受けて、意識の片隅でそんなことを思う。

「こうして広い風呂に入っていると、なんか歌いたくなりますよねえ」

「歌うなよ。他の人もいるんだ」

「ほんとに歌いやしませんよ……」

一行の右端に腰を下ろしている竹田が気持ちよさそうに呟くと、その右隣の小田が穏やかだが釘を刺す声で応じる。

小田の言う通り、浴室には光秋たち以外にも人がおり、藤原隊の様に数人で固まって、あるいは一人で湯船に浸かっていたり、戸の左隣に並んでいる蛇口の前で体を洗ったりしている。

そんな光景を見ながら10分程浸かっていると、

——……そろそろかな——「体洗ってきます」

体が温まったと感じた光秋は立ち上がってタオルを前に持ち、浴槽から上がって蛇口の前に向かい、その前に置いてある風呂椅子に座る。

前に置いてある洗面器に蛇口からお湯を入れ、腰に当てていたタオルを軽く洗って絞ると、それにボディソープを付けて体を擦っていく。一通り洗い終わるとタオルを洗面器に残っているボディソープを洗い流し、絞って丸めたそれを備え付けの鏡の前に置き、シャンプーで髪を洗う。

シャワーで泡を流しながら髪を後ろに分け、体中の泡も流すと、自分が使った辺りを水で洗い流し、丸めていたタオルを再び腰に当てて浴槽へ向かう。

——三佐たちは……——

すでにいなくなっていた藤原たちの姿を探すと、それぞれ蛇口の前で体を洗っているのを見辛い目でなんとか確認し、光秋はタオルを頭に載せて一人浴槽に浸かる。

10分程浸かって温まると、

——……そろそろ上がるか——

立ち上がりながらタオルを腰に当てる。

それと入れ違う様に、ちょうど体を洗い終えた藤原が浴槽に入ってくる。

「先によります」

「ウム。なんだったら先に寝ててくれ。明日は早いからな」

「はい。そうさせてもらいます」

すれ違う際に藤原にそう応じると、光秋は浴槽から上がり、空いているシャワーで体を流し、濡らしたタオルを絞ってそれで髪と体を拭き、タオルを洗って浴室を出る。

戸の前に敷かれたタオルで足裏をよく拭きつつ、左手に置かれた使用済みのタオルを入れる籠にタオルを入れ、右手に3つ並んだ籠からバスタオルを1枚取ってロッカーの許に移動しながら体中の水気を拭いていく。

一通り拭き終わると左手首の鍵を取ってロッカーを開け、バスタオルを戸の上に引つ掛け、メガネを掛けて制服を着ていく。

ズボンとワイシャツを着るとバスタオルで髪をよく拭き、それを首に掛けて水盤の前に行き、備え付けのドライヤーで髪を乾かす。

乾いた髪を真ん中で分ける形に整えると、水盤でメガネのレンズを水洗いし、バスタオルで拭いて掛け直す。時計やカプセルが入っている上着を羽織って制帽を被り、バスタオルを使用済みの籠に入れ、脱いだ下着等が入ったビニール袋を左手にもってコート

と、

「光秋くん！」

呼び掛けられて首を回すと、女湯のドアの前に立つ伊部を見付ける。その後ろには曾我が立っている。

「伊部さんも風呂でしたか、曾我さんも」

応じながら、光秋は同じ様に制服を羽織った伊部と、袖を通さずに肩に掛けた曾我の許に歩み寄る。

「……」

風呂上がりのため髪を下ろしている伊部に、反射的に綾を思い浮かべてしまう。

「行く途中でばったり会ってね。そのまま一緒に入っちゃった」

「三佐たちは？」

「まだ入ってます。先に上がると言ったら、なんだったら寝ててくれて……」

曾我に続いて伊部が訊いてきた質問に、光秋は2人のワイシャツ越しの胸元に行きそうになる視線をなんとか抑えつつ、先程のことを思い出しながら応じる。

「じゃあ、しばらく上がらないかな……先に一緒に帰ろっか」

「はい」

伊部に応じると、光秋は2人と共に部屋へ向かう。

「温泉じゃないのは惜しいけど、脚が伸ばせるお風呂つてやっぱりいいですねえ」

「うん。機会があれば、今度みんなで本当に温泉行かない？」

「……」

そんな会話を交わしながら歩く曾我と伊部の後ろに続きながら、光秋は洗濯物を入れたビニール袋が気になり、それを抱えているコートに隠す様に包む。

「ところで、加藤君」

「あ、はい？」

ちようど包み終わったところで、左前を歩く曾我が顔を向けながら声を掛けてくる。

「さつきからアタシたちの後ろにいるけど、並んで歩けばいいのに」

「いやあ、さすがに3列は。すれ違う人や急いでる人の邪魔になりますし」

光秋が応じる間にも、一行の右手を大量のタオルを抱えた青服の男がすれ違って行く。

—タオルの補給か……—

大浴場へ向かう青服の背中を見やりながら、光秋はそうのように判断する。

「光秋くんの言う通りだね。悪いけどこのまま行こっか」

「気にしないでください。いつものことですから」——そう言えば昔っから、大勢で移動する時って大抵最後尾に着いて、みんなの後追いだったもんなあ………それにしても——

伊部に応じつつ昔のことを思い出しながら、2人の後ろ姿を見ている光秋は、不意に甘い香を覚える。

嗅覚として感じたわけではなく、2人の僅かに水気を帯びた長髪や、風呂上がりの所為か若干朱が差した頬を見て、唐突に“甘い香”というものを連想したのである。

—女の香り、か？……………！いかんいかん！—

浮かんできた言葉にハツとすると、その言葉も甘い香もすぐに頭から追いやる。

—上官、先輩を変な目で見るわけにはいかんからね—

断じると、前を行く2人の日常的なおしゃべり——主に先程の温泉話を受けた会話に耳を傾けつつも、再び先程の様なことが浮かんでこないように意識して歩く。

「じゃあ、明日はよろしくお願いします」

「こちらこそ。白い犬の実力期待してるから」

「あんまり抱え込まないでね」

「はい。お休みなさい」

「お休み」

曾我と伊部に応じると、光秋は背後に2人の返事を聞きながら別れ、自分に宛がわれた部屋へ向かう。

ドアをくぐって明かりを点けると、洗濯物の袋をカバンに入れ、入れ違いに目薬が入った袋を取り出し、カバンの上に丸めたコートを置いてドアから見て右のベッドの下段に腰を下ろす。

—次の注せるの待つてる間に、トイレ行ってくるか—

思いながら3種類ある目薬の1つを注し、部屋を出て最寄りのトイレに向かう。用を足して戻ってくるとさらにもう1つ注し、そのままベッドに腰を下ろして3つ目が注せるようになるまで待つ。

—……文庫本の1つも持つてくるんだったなあ。こういう半端な時間に前読んだ本の気に入った部分を読むのって、けっこういい時間潰しになるんだよなあ……—
ベッドの上に置いてある布団一式を敷いて携帯電話のアラームを設定しながら、光秋は思考を持て余す。

と、藤原たちが部屋に戻ってきたのに気付いて一礼する。

「まだ起きていたのか」

「目薬がまだ1本あるんで……それろそろかな」

藤原に応じると、光秋は3つ目の目薬を注し、目薬が入った袋をカバンに戻す。

「儂は歯を磨いてくるんで、みんな先に寝てくれ」

「ああ、俺も行きます」

「お休みなさい」

言うのと藤原と小田は歯ブラシを持つて部屋を出、光秋はその背に挨拶して見送る。

「……竹田二尉はもう磨いたんですか？」

脱いだ上着をカバンの上に置いてベッドに腰を下ろしつつ、光秋は向かいのベッドの下段に座っている竹田に訊く。

「いや。一日くらいいしなくても大丈夫だろ」

「磨かないんでね……気を付けた方がいいですよ。僕なんていつも磨いてるのに、検査の時は必ず引つ掛かるくらいですから」

樂觀的に返す竹田に應じると、光秋は制靴を脱いでベッドに上がり、枕元の右側に上着から抜いておいた携帯電話とカプセルを置く。

——小田一尉が恐れる二重奏が始まる前に寝よ——「お休みなさい」
「おお。お休み」

例の軀のことを考えながら竹田の返事を聞くと、21時半を指す携帯電話を閉じてメガネを枕元の右側に置き、布団を被る。

——明日は、死なない程度に頑張ろう——
そう思ったのを最後に、光秋は寝ることに専念する。

5 1 思わぬ包囲戦

12月22日水曜日午前4時。

「……！」

携帯電話のアラーム音に起きた光秋は、すぐにそれを止め、メガネを掛けながら布団から出ると、カバンから出した髭剃り機で髭を剃り始める。

「おはようございます」

「おはよう」

起きてベッドの上の段から降りてきた藤原三佐と小田一尉に挨拶すると、光秋は一通り剃り終わった髭剃り機をカバンに戻し、入れ違いに出した鏡を見ながらクシで髪を整えて部屋を出、最寄りのトイレへ向かう。用を足し、水盤で手と顔も洗うと、部屋に戻って1つ目の目薬を注す。

「竹田！ いい加減起きろ」

「うーん……」

身支度を整えている小田の呼び掛けに唸りながら起きる竹田を横目で見つ、光秋はカバンの上に置いてある上着を羽織り、そのポケットに入っていた腕時計と数珠を左手

首に付ける。

枕元のカプセルを内ポケットに、携帯電話を左のポケットに入れ、ボタンを閉めて2つ目の目薬を注すと、目薬をカバンに仕舞い、布団一式を畳んでベッドの端に寄せる。

「よし。朝食に行くぞ」

「はい」「うつす」

一通り準備を終えた藤原の号令に3人は同時に応じ、光秋はコートを羽織り、制帽を被ってカバンを右肩に斜め掛けし、藤原たちが続いて部屋を出る。

少し歩くと、

「おはようございます」

「おはよう」「うつす」「おはようございます」

制服の上にコートを羽織った伊部と合流し、藤原隊一行は食堂へ向かう。

「寝れた？」

「思ったよりなんとか。今日もよろしくお願いします」

左隣に着いて両手で持つ補助席を抱え直しながら問う伊部に、光秋は軽く頭を下げて返す。

食堂に着くと中はほぼ満席であり、各々にトレイを持った一行はなんとかまとまって座れる席を見付けて朝食を摂る。

——…三佐ってやつぱり食べるんだなあ——

トーストとサラダを牛乳で流し込む様に口に入れながら、光秋は藤原の食事に思わず感心する。メニューは違えどみんな比較的少食で済ませているところを、藤原は焼き肉定食、加えてご飯大盛りときている。

そんなことを考えながら朝食を終えると、一行は近くの水盤で歯を磨き、光秋はもう一度顔を洗う。

藤原を先頭に装備品置き場へ向かうと、一行は制服の上にヘルメット、防弾ベスト等の防具一式、ヘッドフォン型の通信機を身に付け、拳銃が入ったガンベルトを腰に回す。光秋は右の脹脛にホルスターを付ける。

「準備はいいな」

「……はい！……」

藤原の号令に、一同はコートを羽織りながら応じる。

「では、作戦開始時刻まではゴレタンで待機する。行くぞ」

「……了解……」

藤原に応じると、一行はゴレタンの許へ向かう。

薄つすらと雪が降る道をしばらく進んでゴレタンの前に着くと、小田と竹田がそれぞれゴレタンの上下に乗り込む。

「ニコイチも出します。さすがに外で待つのはきついでしょう?」
「そうだな。よし、頼む」

その傍らで光秋は藤原の了解を得ると、上着の内ポケットからカプセルを出し、ゴレタンの右隣の広間に向けた先端からニコイチを出現させる。

乗り込んで起動させると、伊部と藤原をコクピットに上げ、伊部が操縦席の左側に補助席を設置するのを横目で見つっハッチを閉める。

— 5時20分……開始まで後40分か……—

腕時計で時間を確認しつつ、光秋は掌が薄っすらと汗ばんでいるのを感じる。

— やっぱり、緊張してるな……—

思いつつ、右の肘掛から取った通信機を左耳に付ける。

と、ちょうど大河原主任から通信が入る。

（加藤二曹）

「大河原主任?何か」

（装備品の準備が整ったので、こっちにきてくれ。昨日N砲を見せた所だ。荷台の取り付けもしなければならん）

「ああ、了解です。すぐに」

通信機越しに应じると、光秋は操縦席の右隣に立つ藤原を見る。

「大河原主任から、装備品の準備ができたので取りに来てくれと。このまま行きますか？」

「いや、それなら僕はゴレタンに移ろう。降ろしてくれ」

「わかりました」

応じると、光秋はハッチを開けて藤原を地面に下ろし、シートベルトを締める。

伊部もシートベルトを締めたのを確認すると、ニコイチを浮かせて大河原が言った場所へ向かう。

「やっぱり寒いんだなあ。ニコイチの空調は大したものだ――」

ハッチを開けた際に流れ込んできた冬の凍えた空気と、閉めた後の暑くもなく寒くもない程良い温度に保たれたニコイチのコクピットに、場違いと思いつつも感心する。

少しして昨日N砲を見た辺りに着地すると、大河原から通信が入る。

（そのまま立たせてくれ。荷台の取り付けを行う）

「了解です」

通信機越しに返すと、ニコイチの左右の太股にN砲の弾倉用の荷台が取り付けられる。

と、

（二曹、ちよつとハッチを開けて出てきてくれ）

「?……ああ、はい」——なんだ?——

思いつつ、光秋は大河原の指示通りハッチを開けて席を機外へ出す。

すぐに灰色のツナギの上に灰色のコートを着た大河原が、念力で浮かんでハッチの上に下りてくる。

「あれ? 主任ってサイコキノでしたっけ?」

「部下に上げてもらったんだ。それより、遅くなつてすまんが、作戦目標の位置情報だ。入力しておいてくれ」

光秋の疑問に答えつつ、大河原はコートのポケットから出したメモを差し出す。

「君らが引き上げた後に上から渡すように言われたんだが、会う機会がなくてな」

「わかりました。ありがとうございます」

大河原に返すと、光秋はメモに書かれた情報をニコイチの地図に入力する。

「昨日あの後、忙しかったんですか?」

光秋が入力している様子を見つつ、伊部が問う。

「ああ。装備品の確認作業に時間を食つてな。伊部二尉も、テストも満足にないままの装備で現場に立たせることになって、申し訳ない」

応じながら、大河原は伊部が座っている補助席に視線を向ける。

「いいえ。私より小田一尉たちの方が大変ですから。光秋くんだって、殆どぶつつけ本

番で新装備を使うんだし」

「それもそうなんだがな……いくら試さなければならぬ物がたくさんあるとは言え、一度にこうもいろいろでは、俺たちも大変だよ……………」

伊部に応じつつ、大河原は愚痴る様に言う。

「入力終わりました」

「うん。ちょうど取り付けも終わった様だな」

顔を上げた光秋に应じると、大河原は左右の太股の様子を確認する。

「リストにも書いておいたが、弾の種類によつて弾倉が色分けされている。間違えないようにな」

「はい」

「では、武運を祈る。おーいー！」

言う大河原は地面の部下を呼んで念力で下へ降り、光秋はメモをコートのポケットに入れ、席を機内へ下ろしてハッチを閉める。

数歩進んで地面に敷かれた鉄板の許に歩み寄ると、その上に置いてある装備品を身に付けていく。

―灰色―徹甲弾か。で、こつちの緑の方が榴弾つと……―

リストに書かれていた色を思い出しつつ、上部に灰色と緑の線が描かれた弾倉を、そ

れぞれ右と左の荷台に積む。

（二曹）

「はい？」

（昨日少し話した様に、盾にも扱い易いように改良を施してある。見てくれ）

「はい」

通信機越しに大河原に応じると、光秋は鉄板の上の盾を見る。

表側を下にして置かれているそれは、持ったら肘の辺りに来る部分に開いた輪の様な物が追加されている。

「下側に腕……輪みたいなのが付いてますが？」

（それでニコイチの腕を挟んで固定する。それで弾込めの時も盾を手離さなくてすむだろう）

「なるほど。ありがとうございます」

さり気ない気遣いに礼を言うと、光秋は左前腕の肘の近くを輪で挟み、もともと付いている上部の持ち手を握って盾を装備する。

右手に榴弾の弾倉が装填された刃付きのN砲を持つと、ニコイチは一通りの装備品を付け終える。

「……やっぱり、ひと騒ぎ起きますかね？」

モニター越しに右手のN砲を見ながら、光秋は胸の中の不安を吐き出す様に言う。

「それは、相手も抵抗する力を持つてゐるわけだし、やめろと言つて大人しくやめてくれる様な人たちなら、こんなことにはなつてないだろうね……………怖い?」

伊部の問いに、光秋は顔を向ける。

「怖いのもあります。それと、嫌だなつて…………昨日言つた様に、争い——避けられる衝突に加わるつていうのは、あんまりいい気がしません…………でも、必要ならやります!僕にはそうするための“力”があつて、それが仕事ですから」

右の操縦桿を握る手に若干力を込めて断じると、光秋は前を向く。

直後、藤原から通信が入る。

(加藤。聞こえるか?)

「はい?」

(指揮所からの指示を伝える。ニコイチは航空隊と先行して、別命あるまで上空で待機しろ。気を付けてな)

「了解です。三佐たちもお気を付けて」

応じると藤原の方から通信は切れ、光秋はもう一度伊部を見る。

「航空隊と先行して、上空で待機だそうです……………行きます」

「うん!」

伊部が深く頷くと、光秋は右ペダルを踏んでニコイチを上昇させ、先程入力した地図の情報に従って目標地点へ向う。

飛び立って少しして、ニコイチは航空隊と合流する。

（クロウ1よりMB—00へ。編隊の後方へ回られたし）

「了解」

通信機越しに隊長と思しき女の声に応じると、光秋は指示通り三角形を描いて飛ぶ編隊の後ろに着く。

—クロウ——カラスか。確かにカラスの群れみたいだな……—

目の前に広がる20機程のF—22の編隊を見ながら、ふとそんなことを思う。

しばらく飛ぶと、モニター越しに目標地点が見えてくる。

山の合間に複数の建物が隠れる様に建ち並んでいる様は先程までいた基地と同じ印象を抱かせるが、こちらは平野に近いために基地よりも敷地は広く、体育館程の大きさの建物やグラウンド程の広さの空き地がいくつか目に入る。建設時に使われた物の成れの果てか、建物群の外れには重機やスコップなどの工事道具が錆び付いたまま放置されている。

（クロウ1より各機。間もなく作戦空域に入る。警戒を厳となせ）

（了解）

「了解」

隊長の注意を促す通信に口々に応じる声に混ざって光秋も応じると、腕時計を見る。

— 5時59分……もうすぐか —

思う間に時計は6時を指し、同時に目標の敷地の外周を囲む形で地上部隊がテレポトとして来る。

— 始まった! —

生唾を飲むと、光秋は操縦桿を握る手に心なしか力を込める。

(サン教信者に告ぐ。我々は州警、軍、ESOの合同部隊である。我々の目的は、本ベースの制圧、及び諸君等の逮捕である。諸君等には武器の違法所持、傷害、殺人など複数の容疑が掛けられている。我々はすでに君たちのベースを包囲した。抵抗せず、速やかに投降せよ。今から5分間だけ待つ。それを過ぎても投降する気配がない場合、我々は実力を行使する)

— さあて、これですんなり終われば万々歳なんだが…… —

外部スピーカー越しに拡声器の声を聞きながら、光秋は僅かながら期待しつつ思う。

そして、沈黙の5分間が過ぎる。

(勧告の時間が過ぎた。これより実力を以って諸君等を拘束する)

— 結局こうなるか —

案の定という気持ちを抱くと、光秋はベースを凝視して指示が来るのを身構える。

直後、

（作戦中止！繰り返す。作戦中止！航空隊は基地に帰還。地上部隊は現状のまま待機！）

「!?」

通信機と外部スピーカー越しの慌てた声に咄嗟に何を言われたのか解らず、光秋は伊部を見る。

「伊部さん、今、作戦中止って……」

「うん……………!?!」

狼狽する光秋の呼び掛けに、伊部も戸惑いながら返す。

と、

（加藤！）

藤原の焦りを含んだ声が通信機越しに響く。

「はい?」

（お前は地上で儂らと合流しろ。わかるか?）

「えー……………はい。すぐ行きます」

光秋の意思を拾ってモニターにゴレタンの拡大映像が表示され、すぐに映像から伸び

る矢印が指している辺りに降下する。

ベース側を向いているゴレタンの後ろに着地すると、光秋はすぐに左膝を着かせ、ハッチを開けて機外へ出る。

「作戦中止って、突然何です？」

ゴレタンの車体部分後部に立ってニコイチを見上げる藤原を見付けるや、光秋は通信機越しに問う。

（わからん。今情報待ちだ）

返答を聞くと光秋は伊部を地面へ下ろし、自分も膝の上のヘルメットを被り直してリフトで降りて藤原の許へ向かう。

「情報待ちって、土壇場で何です？」

車体の上の藤原を見上げながら、苛々を含んだ声で問う。

直後、通信機に連絡が入る。

（各員に告げる。こちら作戦指揮所。目標ベース内に人質らしき存在が複数確認された。地上部隊はベース周囲を包囲。別命あるまでその場で待機せよ。繰り返し）

「……人質？」

予想外の言葉に、光秋は藤原と伊部を見やると、2人も動揺を浮かべた顔を返す。

「小田、聞こえたな。ゴレタンのカメラでベースの方を確認してくれ」

「ニコイチの方でも見てみます」

通信機越しに指示を送る藤原に言うと、光秋は駆け足でコクピットに戻って機内へ下り、ニコイチを立ち上がらせてベースの建物の1つに合わせた拡大画面の倍率を上げていく。

「……」

程よい大きさに合わせると、画面の中の窓越しに人影を見る。大人と思われる影が3つ程、10人程の子供の相手をしているのがわかる。

——人質って、あの子供らのことか？——

拘束や暴行こそ受けていないものの、大勢の子供が一カ所に集められている様子に、光秋は半ば確信しながらそう思う。

と、

（こちら小田。屋内に人質らしき影を確認。しかもこれ見よがしにこっちの方を向いている部屋のいくつかに分けて監禁されてますね）

「！」

小田の通信に、光秋はニコイチの首を振って他の部屋、他の建物内も見てみる。言葉通り、自分たちの方を向いている部屋のいくつかに10人程の子供が集められている。「こちらでも確認しました。いずれも子供みたいですね。歳は、小さいので幼稚園児く

らい、大きいので……高校？……中学生くらいですかね。一部屋に10人くらい集められてますね。全部合わせればかなりの数になります」

部屋の様子を映したいくつかの拡大画面を見ながら、光秋は通信機越しに藤原隊一同に報告する。

その間にも、光秋は目の前の光景にゆっくりと怒りが湧いてくるのを自覚する。

—子供を人質にとる？これが大人のやることかっ！子供を守る立場の大人が、子供を盾にするって……—

今すぐニコイチで突っ込んで助けに行きたい衝動に駆られるが、冷静な部分がそれを抑える。

—集団行動中だ。勝手なマネは許させない。仮に突っ込んで行つたとしても、一度に助けられるのは一部屋か二部屋くらい。今見ている建物以外にも監禁されている可能性は大。みすみす大多数の人質を殺す行為だしな……それに……—

—そこまで考えて、不意に昨日ぶつかった少女の顔が思い浮かぶ。

—他人^{ひと}のことを言えたきりじゃないよな。子供を……二十歳^{はたち}にも満たない子を利用してゐるって意味じゃあ……—

思いながら、鼻で深い溜め息を吐く。

「どつちにしろ、早く次の指示をくれ………」

焦る気持ちを吐き出す様に、小さく呟く。

午後0時10分。

「……なかなかきませんね、次の指示」

「対策を考えてるんでしょう。私たちは待つしかない」

「そうですね……」

ニコイチの操縦席で支給された弁当を食べながら、光秋は左隣の補助席に座る伊部と言わずもがなの会話を交わす。

待機の指示が出てすでに6時間近くが経ち、その間自分たちには何の音沙汰もないことが、光秋に言わずもがなと分かっていてもそんなことを言わせるのだ。

もともと、その間何事もなかったというわけではなく、モニター越しに見えるベースの周囲にはEジヤマーが等間隔に設置されて超能力による攻撃、及び逃亡を防ぐ処置が取られ、包囲を維持するための人員の手配とシフトの編成が行われた。

——完全に籠城戦の構えだな……望みが薄かったとはいえ、素直に投降してハイ終わりというて欲しかったが、一番嫌なパターンになったなあ……—

雪がちらつき始めた外の景色を見ながら、光秋は溜め息混じりにそう思う。

——長くなるなあ、これは………唯一よかったのは、念のためと思つて1週間分の着替えを持つてきたこと、か？………ハハ………—

基地に置いてきた荷物のことを思いながら、独り渴いた笑いを漏らす。

午後6時。

（各員に告ぐ。農らのシフトはただ今をもって終了。基地に戻るぞ）

「了解……」

通信機越しの藤原の指示に疲れた声で応じると、光秋は右ペダルに足を掛けてニコイチを上昇させようとする。

と、藤原の通信が入る。

（加藤。ニコイチはここに置いていく。伊部と一緒に降りてこい）

「何故です？」

突然の指示に、光秋は驚きながら問う。

（ニコイチはこちらの大きな戦力と認識されてるからな。そんな物が迂闊に動けば、相手を刺激する。それにニコイチが退いた後を隙と思って攻撃してくる可能性がある。要は現状維持のためだ）

「なるほど……わかりました」——ニコイチを手離すのは不安だが………そうやって、“力”に依存しちゃうんだよね——

一抹の不安を隅に押しやると、光秋はカプセルに伸ばしていた手を引き、左耳の通信機を肘掛に納める。

「向こうを刺激しないようにニコイチは置いて行くそうです」

「そう。なら補助席もこのままの方がいいか」

「ええ」

伊部に藤原の指示を報告すると、光秋は直立していたニコイチに左膝を着かせ、操縦席を機外へ出して右手で伊部を地面へ下ろす。

掌から伊部が降りたのを確認すると自身もハッチの上に立ち、リフトの許に屈んでフタを開けて操縦席に付いているのと同じハッチの開閉ボタンを押す。操縦席が機内へ下り、閉まり出したハッチの上で落ちないようにバランスをとる。閉まり切るとリフトを出し、下へ下りる。

ニコイチと同じ理由なのだろう、この場に置いていかれるゴレタンから降りた小田たちと合流すると、光秋は基地まで送ってくれるテレポーターが待つ地点まで移動する。

—ああでも、やつぱニコイチないと不安だなって思っちゃうなあ……—

途中一度だけ振り返ってニコイチの背中を見ながら、光秋は正直な気持ちを自覚する。

—ま、あつても肝心な時に出せないんじゃないや、ないのと大差ないんだろうが……そういうのとは別に、落ち着かないな……—

綾と最後に過ごした日のことを思い出しつつ、空になった上着の内ポケットを意識す

る。

「ま、これも修行、とも思うしかないか――

そう思つてこの場でのニコイチへの執着を断ち切ると、黙つて藤原たちの後を追つて歩く。

しばらく歩くと10人程の人だかりの許に着き、その中央に立つ緑服の男に藤原が二言三言報告をする。

「では、全員集まつた様なので出発します。もう少し私の許に寄つてください」

中央の男がそう呼び掛けると、光秋は周囲と同じ様に男との距離を詰める。

「そう言えば、瞬間移動つてこれが始めてだよな。いつもニコイチで移動するから…….どんなだろう?――

新しいことに対する若干の不安を覚えていると、中央の男は目を閉じ、呼吸を整える。

直後、

「!」

男はカツと目を開き、

「……!?!」

一瞬後、光秋は自分が基地の敷地内に立つていることに気付く。

「……」

始めてのことに若干気が動転している光秋をよそに、一緒に来た人たちは中央の男に礼を言つてそれぞれ去つて行く。

「……！」

それを見て気を取り直した光秋も、とりあえずと中央の男に一礼し、藤原たちの後に続く。

——本当に一瞬なんだなあ！……でも、慣れないと戸惑うな……——

始めてのテレポートにそんな感想を抱きながら、自分たちに割り振られた部屋へ向かう。

12月23日木曜日午後1時。

包囲が始まつて1日以上が経つが、双方共に動きはない。

午前7時からニコイチのコクピットに収まる光秋は、変化しない現状への苛立ちを隠せず、操縦桿に置いた右手の人さし指を上下させる。

——ただ座つてるだけというのは辛い……こんなことなら、外で組手でもしてる方がマシだ！——

感情的な部分でそう思いながら激しく吹雪いている外を見やる一方で、シフト時間中は突然の事態に備えて臨戦態勢でいなければならないことも理解しており、そうした抑圧と終わりの見えない緊張が、光秋を余計に焦らせ、心労させる。

と、

「……なんかおかしい」

「？」

左隣の補助席に座る伊部が右手で顎を撫でながら呟き、光秋はそちらに顔を向ける。

「どうしました？」

「……光秋くん。ちよつと無線使いたいから、ハッチ開けて」

「？……はい」

「ちゃんと屈んでね。ベースから攻撃されるかもしれないから」

「はい」

少し考えた伊部の指示に首を傾げながらも応じると、光秋は直立していたニコイチを正面に鎮座するゴレタンの影に隠れる様に左膝を着かせ、ハッチを開ける。

「……………」

開けた途端にそれまで快適な温度に保たれていたコクピットに極寒の強風と雪が入り込み、せめて雪だけでも防ごうとニコイチの右手をコクピットの上に持つてきて傘にする。

その間にも、伊部は被っているヘッドフォン型の通信機、その左のスピーカーから伸びるマイクを左手で掴んで口元に寄せる。

「藤原三佐。伊部です。聞こえますか？」

（おお、聞こえる。どうした？）

「……」

その通信は藤原隊全員と繋がっており、光秋も苛立ちの気分直しにと、左隣の伊部と左耳の通信機越しの藤原の会話に耳を傾ける。

「サン教の行動、おかしいと思いませんか？人質をとっているのに、それについての声明を出さないなんて」

「！」

伊部の指摘に、光秋はハツとする。

（確かに。儂もさっきから考えていたところだ）

「普通人質がいるなら、それを誇示して要求を突き付けますよね。今の場合だと、全部隊の即時撤収とか」

（そうだ。だが奴らはせいぜい窓際に集めて存在を示すだけで、すでに1日以上沈黙を保っている……何が狙いか……）

「……」

藤原の呟きに、光秋は心中の緊張が余計に強くなるのを感じる。

12月24日金曜日午後8時。

本日も睨み合いだけで終わったシフト時間を終え、基地に戻った藤原隊一行は、食後の入浴を終えて部屋へ向かう。

と、

「……！」

「どうしました？」

左前を歩く小田がなにかに気付いた様に上着のポケットを調べるのを見て、光秋が問う。

「メールだ……沖一尉からだな」

右手で二つ折りの携帯電話を開いて操作しながら小田は応じる。

部屋に入ると、光秋は持っていた脱いだ下着類が入ったビニール袋をカバンに仕舞い、代わりに目薬が入った袋を取り出し、携帯電話を取り出した制服の上着をカバンの上に置く。

——洗濯物が溜まったなあ……それにもう3日もこのワイシャツで寝てるし………そろそろ一度帰って着替えたいところだが……—

心労による疲れが溜まった体をベッドに腰掛けながら、当分無理だと分かっていることを思わず望みつつ目薬を注す。

と、自分の正面のベッドに座って携帯電話を操作し続ける小田が目に入る。

—まだなにかあるのかな……？—

普段はあまり携帯電話をいじらない小田の珍しい光景に、思わず好奇心の目を向ける。

「さつきからどうしたんすか一尉？珍しくケータイいじって」

同じことを思ったのか、光秋のベッドの反対側に座っていた竹田が小田の許に近づいてくる。

「ん？ああ……気付かない間に何件か来ててな……」

応じながら、小田は携帯電話の操作を続ける。

その時、

「……あーこらー！」

「沖愛？……ああ。局長秘書の」

小田から電話を掠め取った竹田が、画面を見ながら思い出した様に言う。

「そういやこの間メアド交換してましたよね……ヒョオー！けっこう来てんな。一尉もなかなか——！」

茶化しを遮る様に、小田は左手で作った拳骨を竹田の頭頂に振り下ろし、ゴーン！という重い音を響かせる。

「痛ってえ！……」

「すぐに返すか、もう一発食らうか、どっちだ？」

「……返します」

左拳を示しながらドスの利いた声で問う小田に、竹田は頭を擦りながら電話を返す。

「おお怖っ！……竹田二尉、大人気ないことはやめましょうよ……」

一連の光景を見ていた光秋は、小田に軽い恐怖を、竹田に呆れを感じながら、2本目の目薬を注す。

と、それまで光秋のベッドの上の段で横になっていた藤原が顔を覗かせる。

「小田が暴力に訴えるとは珍しいな。しかし竹田、女性関係であまり他人をからかうものではないぞ」

「そんなんじゃないかもしれません！」

一瞬照れた様な顔をしてそう言い切ると、小田は竹田のベッドの上の段に上がって布団を被ってしまふ。

「あーあ、不貞寝しちゃったよ。一尉もやるなって褒めようとしただけなのに……」

小田が寝る上段を見上げながら、竹田は口を尖らせる。

「……ところでよ、加藤。お前も、伊部とはどうなの？」

「え？」

思わぬところで話を振られ、光秋は注そうとしていた目薬の手を一旦止めて返事に

困つてしまう。

「……伊部さんとは、別に……男女の関係つてわけじゃ………」

「そうなのか？　そう言う割には、オレたちの中じやお前が一番仲よくしてそうだけど」

「それは僕が後輩だから、いろいろ面倒見てくれてるんでしょ？　伊部さん曰く、僕は『弟分』だそうですから」

『『弟分』、ねえ……でもほら、アヤのこととかもあるし——』

「竹田！」

竹田の言葉を遮る様に、上方から藤原と小田が同時に咎めの声を上げる。

「三佐にも言われただろう。その辺にしてとつと寝ろ」

「今のは別にからかったわけじゃ……」

「そうだとしても、あまり他人の事情に口挟むな……特にさつき言おうとしたことは、加藤にはあまり……」

「……まあ、そうつすね。悪かったな加藤」

小田の指摘に素直に納得すると、竹田は光秋に軽く頭を下げる。

「ああいえ、そこまで気にする程のことじゃないんで……」

頭を下げる竹田に少し困った気分で応じると、光秋は3本目の目薬を注し、それらが入った袋をカバンに戻す。

「とりあえず、ちよつとトイレ行つてきます」

妙な居心地の悪さから離れたいのもあつてそう言ふと、光秋は部屋を出る。

—まさかこつちにも話を振られるとはなあ……でもまあ、一尉の拳骨はさすがにやり過ぎだったかもしれないが、緊張の連続の合間にああいう日常的な状況に遭えるのは、いいことかもしれないな。おかげで、少しでも気持ちが楽になったかも……—

最寄りのトイレへ向かいながら、重いものが取れた様な気持ちを覚える。

52 少女の氣持ち

12月25日土曜日午後1時。

午前7時からのシフト時間を終え、藤原隊一行は基地の食堂へ向かう。

「人員増強万々歳だなあ。イライラする時間が減つて助かるぜ」

「ですね」

食事を載せたトレイをテーブルに置きながら言う竹田二尉に、正面に座る光秋はほつとした氣分で返す。

「人員が増えて1回当たりの時間が1日の四半分くらいに減つたからな。その分緊張する時間も減つて、精神には優しいや——」

そんなことを思いながら手を合わせると、遅い昼食のフライの盛り合わせ定食を食べ始める。

「でもなあ、待つだけつてやつばじれつてえよなあー。ひと思いにゴレタンとニコイチで殴り込みかけて、連中ボコボコにできればいいのによおー」

「いや、ボコボコにしちやダメでしょ。ちゃんと捕まえないと」

「それに、下手に動いて人質を危険にさらすわけにもいきませんし」

竹田の愚痴に、光秋と、その左隣に座る伊部がそれぞれ返す。

「わーってるよ。だからじれってえんだ……」

「まあ、気持ちはわかりますけどねえ……」

多分な不満を含んだ顔で応じると竹田はみそ汁を一口すすり、光秋は共感の声で呟く。

直後、

「ぎげんなよっ!」

「!?」

テーブルを力強く叩く音と共に怒声が響き渡り、光秋は心臓を跳ね上げながら声がした方——右奥のテーブルを見る。

「なんだ?」

「さあ……?」

竹田の右隣に座る藤原三佐と、その右隣に座る小田一尉も声がした方を向く。同時に、食堂にいる全員の目がその辺りに向けられる。

直後に声がした辺りに座っていたESOの制服を着た子供が、脇目も振らずに駆け出す。

「桜!」

子供の向いに座っていたスーツの上にESOのコートを着た女性が呼び掛けるのも聞かずに、子供は食堂から出ていく。

「……………あの子どこかで……………」

駆け出していった短い赤毛の子に光秋が既視感を覚えていると、

「今の子、この間のジュースの子じゃない？」

「……………ああ」

伊部の指摘に、基地に來た初日にぶつかってジュースを溢されて怒った少女のことを思い出す。

「そうだ。あの子だ……………また怒ってた様だけど、なにかあったのかねえ？」

少女のことを多少気にしつつ、光秋は白飯を口に運ぶ。

昼食を終え、部屋に荷物を置いた光秋は、気晴らしにと基地内の見学を思い付く。

手始めにと現在宿舎となっている建物の中を巡っていると、

「……………」

廊下の先の突き当たりに設置されている自動販売機、その右隣のベンチに、先程食堂から駆け出ていった赤毛の少女が座っているのを見る。

「引き返す……………のも不自然だよな。なにより避けてるみたいで失礼だろうし……………でも昨日の今日のさつきだしなあ……………」とりあえず、黙ってさり気なく通ろう。それが無難

だ――

初対面の時と先程の不機嫌な少女の顔を思い出して気まずさを覚え、通りたくないと思う一方であからさまに態度に出すのは失礼だろうとも思い前進し続けることを選ぶと、あまり少女を見ないよう心掛けて左に曲がろうとする。

しかし、

「……あーこの間のジュースのオッサン」

「……………どうも……………」

少し近づいたところで気付かれてしまい、洩々返事をする。

――この間と同じコート羽織ってたからか……………？ いや、こんな分厚いレンズのメガネしてる奴はそういないから特徴になるか……………――

気付かれた原因について考えつつ、光秋は少女の前に歩み寄る。

「……………オッサン、今アタシのこと避けようとしたらどう？」

「……………まあ、正直に言うとなね。初対面の時といい、さっきの食堂の時といい、全く機嫌が悪かったから……………というか、僕の呼び方は『オッサン』で決定的なのか？」

下手に誤魔化しても仕方がないと思って正直に答えつつ、気になったことを訊いてみる。

「不満？」

「一応まだ19^{じゅうく}。二十歳^{はたち}にもなっていないんだが……そう呼びたいならいいけど」
「そうなの？」

光秋の答えに、少女は意外そうな顔をする。

「そうなんだよ。というか、その言い方だといくつだと思ってたんだ？……まあ、それはいいや。ところで、さつきはなにかあつたのかい？あんな大声出して」

「……なんでそんなこと訊くのさ」

光秋の質問に、少女は不機嫌そうに返す。

「深い意味はない。ただ気になったから訊いただけだよ。嫌なら答えなくていい」

「……」

光秋の正直な返答に、少女は少し考える。

と、

「……今日がなんの日か、知ってる？」

「？」

ぎりぎり聞き取れるくらいの小声で唐突に問われ、光秋は少し考える。

「今日？……12月25日……あ。クリスマス？」

「うん……」

短く返すと、少女は先程までの不機嫌さを消し、代わりにどこか物悲しそうな顔で俯

く。

「本当は今日、アタシんちでクリスマスパーティーやるはずだったんだよ。アタシんち、アタシが特エスで家にいないことが多いから、家族に会えるのってなかなかないから……楽しんでしてたのに………」

「作戦が長引いて、帰れなくなっただけ？」

「……………うん……………」

途中で黙り込んでしまったために後を引き継いで言った光秋に、少女は消え入りそうな声で応じる。

「そっか……………そりゃあ、怒鳴りたくもなるか……………」

「わかったみたいに言うなよ……………」

応じる光秋に、少女は不満そうな小声で返す。

「家族に会えないのが寂しいって意味でなら、わかるよ。僕も訳ありで、今そんな状態だから」

「別に！寂しくなんて……………」

光秋の言葉を否定しようとしてし切れず、少女は黙り込む。

「……………」

それを見て光秋は膝を折って中腰になり、座っている少女と視線を合わせるようにす

る。頭一つ分程低くなった光秋が、少女を見上げる形になる。

「僕もさ、訳あつて3月から家族に会つてないんだよ。もともと一人好きだからそんなに苦には感じないけど、それでもときどき寂しいとか、会いたいって思う時がある」——今はその中に綾も入つてゐるしな……—

少女の目を見ながら言いつつ、心の中にそう付け加える。

「……なんかあつたの？」

「それは悪いが言えない。その理由自体が機密扱いだから」

少し興味を持った様子の少女に、首を横に振りながら答える。

「でも、僕でないとできないことがあるからここに呼ばれた、それだけは言える。そして僕は、今は手が出せないけど、その時が来たらやるべきことを精一杯やるつもりだ。君がここにいるのも、それと同じだろう？ 君でないとできないことがあるから、ここに留まつてもらつてゐる」

「でも……だからって何でアタシがここまで損しなきゃ……」

落ち着いて語りかける光秋に、少女は湿気を帯び始めた声で返す。

「そこなんだよなあ……今言つた様に、君の“力”が必要とされてゐるのは事実。でも、本来子供を守らなきゃいけない大人が、子供を利用し、あまつさえ家族と会う機会さえ奪う……僕は自分の意志でESOにいるからいいとして、君の場合は、ちよつと難しい

なあ……」

包囲が始まってすぐに思ったことを思い返ししながら、光秋は吐息を吐く様に言う。

——……どうも口で言つてると上手くいかなあ……—

思う様に少女の気持ちを变えられないもどかしさにそう思うと、光秋は腰を上げて自動販売機の前に立つ。

——これでどうなるってわけじゃないが……—「なにか飲みたいものあるか？」

「……え？」

そうすることに若干の迷いを感じながらも声を掛けると、少女は俯いていた顔を上げる。

「この間のお詫びというか、なんか1つ買つてあげる——と言うか、買わせてくれ」

「え？でも……」

「これ缶だからさ、今飲みたくなかったら後で飲めばいいし、入間主任だっけ？なんか言われたら、この間ぶつかったおじさんがお詫びにくれたって言えばいいよ」

先程一応拒否した呼び方を自分で言ってみて、それがどこか馴染む感じに少し可笑しくなる。

その間にも上着のポケットから財布を出し、小銭を自動販売機に入れていく。

「……………じゃあ……」

それを見て少女はベンチから立ち上がり、光秋の右隣に立つ。

「……………これ。オレンジジュースがいい」

「ん」

言いながら少女はそれを指さし、光秋はボタンを押して出てきた缶を差し出す。

「……………あんまり上手く相談？……………できなかつたけど、今回はこれで勘弁して欲しい。また機会があれば。じゃあ」

言うとき光秋は振り返り、基地内の見学を再開する。

「あ……………あのさー」

「？」

ジュースを受け取った少女に呼び掛けられ、一度足を止めて振り返る。

「……………ありがとう……………」

「ああ……………頑張れ、とは迂闊には言えないけど、お互い、死なない程度に頑張ろう」
照れくさそうに言う少女にそう返すと、光秋は前を向いて再び歩き出す。

——子供と接するのは苦手なはずなんだが……………綾のおかげかな？意外とちゃんと話せた……………にしても、自分にしかできないことがあるからここにいてっていうのは事実。ただ……………必要とされてるからいるっていうのは、なんか違う気がするな……………——
少女との会話を思い出しながら、光秋は心の中に引つ掛かるものを感じる。

53 鬼との邂逅

12月26日日曜日午後6時。

本日のシフトを終えた藤原隊一行は、基地へ帰還すると真っ直ぐ食堂へ向かい、一つのテーブルにまとまって夕食を摂る。

と、

「……藤原？」

「?……鬼崎一尉!」

突然の呼び掛けに振り返った藤原三佐は、驚きながらもどこか嬉しそうな顔をする。

「?」

向いに座っている光秋はそれを見ながら藤原の視線を追うと、少し離れた所に合軍の制服を着た屈強な男がトレーを持って立っている。

身長こそ170センチ程と藤原よりずっと低いものの、服の上からでもわかる体付きは藤原にも負けない筋肉質であり、サッパリとした禿頭と右頬に走る縫い目痕の様なものが目を引く。

—如何にも軍人さん、それも最前線でバリバリやる人って感じだな……—

さまざまな特徴に対して、「鬼崎」と呼ばれた縫い目の男に光秋はそんな印象を抱く。その間にも、

「どうぞ座ってください！」

「おう。それと、今は中佐だ」

「失礼しました」

と、藤原の勧めに応じて縫い目の男は左隣の席に座り、2人は食事をしながら話を続ける。

「どうしてこちらに？」

「作戦に参加するために決まってるだろう。明日の会議にも呼ばれてんだ。人質救出と並行しての拠点制圧、実に俺たち向きの仕事だ」

「まったくです！」

嬉しそうに応じる藤原を見ながら、光秋は左隣の伊部に身を寄せる。

「どちら様です？」

「さあ？ 私も知らない」

光秋の問いに、伊部も鬼崎を見て首を傾げながら返す。

と、藤原の右隣に座る小田一尉が遠慮がちに問う。

「……お話のところすみませんが、もしかや三佐が陸自にいた頃の方ですか？」

「そうだが」

「……………三佐からかねがね聞いていました！藤原隊副隊長の小田と申します。三佐が以前おられた部隊の方とお会いできて光栄です」

縫い目の男の返事に、小田も嬉々として応じる。

「……………あのお、三佐？結局この人誰です？」

未だ話に着いていけない藤原と小田以外を代表して、小田の右隣に座る竹田二尉が問う。

「お前は前に聞いただろう。三佐が旧陸自の頃に所属してた部隊の上官だ」

「陸自の頃、ですか…………」

小田の説明に、光秋は呟く様に返す。

「……………そうか。加藤と伊部にはまだ話してなかったな」

みそ汁で口を湿らせると、藤原は2人を見ながら思い出した様に言う。

「こちらは鬼崎中佐だ。小田が言った様に、儂がESOに入る前にいた部隊の上官で、いろいろと面倒を見てくれた方だ」

「鬼崎だ。周りからはよく『オニザキ』と呼ばれるがな。藤原んとこに新しく入った部下か。一つよろしく頼む」

「伊部法子二尉です。こちらこそよろしくお願いします」

「竹田柔蔵。同じく二尉です」

「加藤光秋二曹です！同じく……お願いします……」——伊部さんと同じこと言っちゃったよ……—

縫い目の男——鬼崎中佐の自己紹介に、伊部と竹田、光秋は姿勢を正して返す。が、光秋は鬼崎の容姿に緊張してしまい、少しおかしなものになつてしまふ。

「……ところで、三佐が以前いらした部隊って何処なんですか？」

調子の悪さを誤魔化すことも兼ねて、光秋は疑問に思つたことを訊いてみる。

「ん？まあ……詳しくは機密で言えないんだがな。掻い摘んで言うと、敵のアジトに力チコミに行つて制圧すんのが主な仕事だな」

「……そうですか——言えないところって……それに……三佐の容姿が原因で、ウチの隊が陰で『ヤクザ隊』って呼ばれてるのは聞いたが……こちらの方がよっぽどヤクザっぽいな……—

鬼崎の引つ掛かる説明と強面な口調に、光秋は背中に寒気を感じる。
と、

「……お前、加藤とか言つたな」

「はい……—

鬼崎が睨む様な目で問い、光秋はさらに強い悪寒を覚える。

「線の細そうな奴だな。ESOに入ってどれくらいだ？」

「えー、4月からですから……8カ月程……」

「1年にも満たねえのか？それとお前、あんま運動しないタイプだろう？」

「……激しいものはあまり。ただ、ESOに入ってから、藤原三佐に鍛えてもらってますが」

「フン……どっちにしろ、こんなひよろひよろの面倒まで見ねえといけねえとは、お前も苦労すんな」

「……悔しい、けど……線が細い——『臆病』ってことならいくらか当たってるから、強く反論できない……」

藤原に同情する様に言う鬼崎を見ながら、光秋は苦い物を噛む様にそう思う。

直後、ドンツ！という重い物が落ちる様な音が響く。

「!？」

光秋は驚きつつも音のした辺りに目をやると、怒りの形相を浮かべた竹田が左手でトレーの上のコップを握り締めている。その周囲には水が散らばっている。

「叩き付けたのか？」

光秋が理解する間にも、竹田は怒りを隠さずに言う。

「あんなオッサ……中佐殿。さつきから黙って聞いてりや、オレの後輩を戦力外みたい

に言いやがって！言つとくがコイツは——」

「竹田！」

竹田の言葉を遮る様に、藤原が強い口調で言う。

「その辺にしておけ。所属が違うとはいえ上官だぞ」

「……………了解」

静かではあるが有無を言わせない様子で告げる藤原に、竹田は渋々黙る。

「鬼崎中佐も、その辺にしておいてください。確かに加藤はESOに入ってまだ日が浅く、いろいろと未熟なところもあります。ですが、それなりの実績を上げていますし、本人が言った様に日々鍛錬を積んでいるのです。見てくれだけで決め付ける様な言い方はやめていただきたい」

「フン。お前も言うようになったじゃねえか……………まあ、確かにバカにした様な言い方だったのは認める。すまんかった」

「……………いえ……………」

藤原の反論に素直に頭を下げる鬼崎に、光秋は意外に思ひながら応じる。

「だがな、やっぱり線が細い感じはどうも気に入らん。合軍とESOって所属こそ違うが、今は命を預け合うんだ。もう少しドンと構えてくれねえと困るぜ」

「……………努力します」

顔を上げた鬼崎の言葉に、光秋は姿勢を正し、心なしに強い調子で応じる。

「……それにしても、藤原と知り合ってもう10年くらいになるか。学校出たての、今のこいつ等くらいの若僧が、今じゃ佐官とはな」

「紆余曲折ありましたがな。だからこそ、今でこそ頼りないと思われる加藤も、そのうち化けますよ」

「……どうだかな?」

みそ汁をすすりながら返す藤原に、鬼崎は気のない返事をする。

その時、光秋は鬼崎の言葉に疑問を感じる。

「……10年くらい?……今の僕たちと同じくらい……?」 「あの、失礼ですが三佐って、今いくつですか?」

「ん?今年の7月で35だが?」

「ええ!」

首を傾げて応じる藤原に、思わず驚愕の声を上げる。

「なにを驚く?」

「いや!三佐って30代?てつきり50代かと思つてまして……」

光秋の反応に驚く藤原に、光秋は思つたことを正直に言う。

「そう……なのか……?」

「まあ、確かに実際より老けて見えるよな。髭面とか口調とかな」

「中佐まで……」

便乗した鬼崎の的確な指摘に、藤原は眉間に皺を寄せる。

「ははは………」

そんな2人を見ながら、光秋は渴いた微笑を漏らし、みそ汁をすすする。

夕食を終え、鬼崎と別れた藤原隊は自分たちの部屋へ向かう。

藤原たちの後を追う光秋は、左隣を歩く伊部があらさまに不機嫌な表情を浮かべていることに軽い緊張感を覚える。

—さつきからずつとこうだよな……—「伊部さん、さつきからどうしたんです?」

「なにが?」

意を決して訊く光秋に、伊部は声色にも不機嫌さを含ませて応じる。

「食事が終わってからずつとムスツとしてますけど、どうしたんです?」

「……オニザキ中佐の所為だよ」

続けて問う光秋に、伊部は吐き捨てる様に言う。

「キザキ中佐です……ひよつとして、僕のことをいろいろ言ったことですか?」

「そう! 竹田二尉に一番盗られちゃったけど、私だつて頭にきてたんだから」

訂正しつつ確認する光秋に、伊部は両目を吊り上げながら応じる。

「頭ごなしに使えないみたいに言つて、謝つたと思つたら線が細いのが気に入らないとか言つて。光秋くんも何か言い返せばよかたのに！上官でも、階級が下の人をバカにしているわけじゃないんだが。一歩間違えたらパワハラだよ！」

「……確かに、悔しいとは思いました」

興奮気味になつてきた伊部に、光秋は静かに返す。

「でも……中佐が『線が細い』つていうのをどういう意図で言つたのかは判りませんが……『臆病』、という意味なら、事実だから否定はできません。謝罪の後の言葉も考えると、やっぱりそういった意味だろうとは思いますが」

「だからつて、ホントに何も言い返さなくてよかつたの？それもあんな言い方されて」

「確かに言い方はアレでしたが……事実ならそれを素直に受け入れなければいけないと思います。さつき中佐にも言つた様に、今後はもう少しドンと構えるように心掛けますし……それに……」

「それに？」

「三佐が指摘した様に、中佐の僕に対する評価……というか、印象が見ただけのものなら、実戦で能力を示して覆せばいいだけのことです。どの道、中佐の様な人は論より実証つて人でしょうし、その方が手っ取り早いでしょう——ま、中佐がそういう人つても印象だが……」

「……それもそう、かな？……まあ、光秋くんがそれでいいなら、私はそれでいいけど」
「ありがとうございます……あと、僕のことですら怒ってくれて」

「当然でしょ。私は光秋くんの姉貴分なんだから」

「姉貴分、か……ま、なんであれ、気に掛けてくれるのは嬉しいな………しかし……」

伊部の気持ちを引っ掛かりつつもありがたく思う一方で、光秋は今一番の問題に感心を向ける。

——実証——結果を出す、か……まるで『蜂の巣』の時だな。もともと、あの時よりはいくらか強くなったんだ。心も体も……—

「蜂の巣」での暴走が脳裏に浮かび、次いでNPの蜂起事件、京都駅テロ未遂事件、合同演習、DD—01、02との戦闘の記憶が過ぎていく。そして、

——もう、あんな醜態は晒さない！——

それらの記憶が、そんな強い思いを抱かせる。

その時、

「加藤！」

「………はい？」

小田に呼び掛けられ、考え事に集中していた光秋は我に帰る。

「聞いてたか？」

「あ、いえ……すみません……」——いかん。大事な話してたか——

小田の問いに素直に答えつつ、光秋は大事な話を聞き逃してしまったことに恥ずかしくなる。

「明日、三佐は作戦会議に出るから現場に行かないんだよ」

「だから小田に指揮を任せた。明日は小田の指示に従え。と言つても、包囲の継続だろうがな」

「はい！」

小田と藤原の説明に、光秋は恥ずかしさを掃うことも兼ねて強く応じる。
が、

「ちゃんと話聞いてとけよ」

「はい……」

小田の注意に、再び恥ずかしくなる。

——まあ、次気を付けよう。とりあえず、今は包囲作戦をきちんとこなす。その上で、本格的な作戦で結果を出せばいい……—

そこまで考えると、不意に先日風邪をひいた時に見た夢を思い出す。

——少なくとも、あんなことはさせない！……今回も……この先も！——

ニコイチで握り潰した綾の姿を頭から掃って断じると、光秋は前に行く藤原たちに続いて部屋へ向かう。

12月27日 月曜日 午後0時。

午前8時からニコイチの操縦席に納まる光秋は、モニター越しに相変わらず沈黙を続けるベースを眺めつつ、昼食に支給されたカップ麺をすすする。

「やっぱ、冬の包囲戦の食事といったらカップ麺ですね」

「そうなの？」

光秋の呟き、左隣の補助席で同じものを食べている伊部が訊き返す。

「こつちのことは知りませんが、僕のいた方でカップ麺が浸透したのって、こんなふう
に冬の包囲戦で、これを食べてる警察の人たちの映像が中継されたからって言われてま
す……だからちよつと言ってみただけですけど」

「ふーん……？」

光秋の説明に応じると、伊部はカップ麺を一口すすする。

しばらくして食事を終え、食べ終えたカップを片付けるために伊部を外に下ろすと、
光秋は直に浴びる冷風に震えながら伊部の帰りを待つ。

——しっかし、よくあんなこと思い付いたよなあ……慣れてきたのかな……？——

先程の会話を思い出しながら、そんなことを考える。

が、

「……いや、待てよ……………これって油断じゃないか!?—

ハツとしつつ、自分の気の緩みを自覚する。

「それじやいかん! 少なくとも現場にる間はいかん!—」「…………いかにいかに!」
言いながら、気持ちを切り替えようと両頬を2回叩く。
と、

「光秋くーん!—」

「あ、はい!—」

帰ってきた伊部に応じると、光秋はニコイチの右手を差し出して伊部をコクピットへ上げる。伊部が補助席に座ると、操縦席を機内へ降ろす。

「…………安堵と緊張のバランスはちゃんと考えないと!—」
ハッチを閉めながら、光秋は心中に自戒を呟く。

午後2時15分。

シフトを終えた藤原隊一行は、テレポートで基地に戻る。

「…………どうしてもこの感覚に慣れませんね」

「私も…………普段滅多にやらないからね」

一瞬で長距離を移動する感覚への不慣れを愚痴る光秋に、伊部も同意の声で応じる。

と、携帯電話の振動音が響き、小田がコートのポケットから出した電話に出る。

「もしもし?……了解。すぐ向います。藤原三佐からだ。会議の内容を知らせるから食堂に来るようにと」

「はい」「ウツス」「わかりました」

電話を仕舞いながらの説明に、伊部、竹田、光秋がそれぞれ応じると、4人は食堂へ向かう。

しばらく歩いて食堂に入ると、先に来ていた藤原が座っているテーブルから4人を手招きする。

「こつちだ」

呼び掛けに応じた4人がテーブルに着くと、藤原は一同を見回す。

「まず、今日の務めご苦労だった。特に小田、指揮官代行よくやってくれた」

「いいえ」

藤原の労いに右隣に座る小田は短く応じ、他の3人は軽く頭を下げる。

「それでだ、今日の会議で、ベースへの突入作戦が決定された」

「……いよいよ、か」

続く藤原の報告に、その左前に座る光秋は少しだけ生唾を飲む。

「作戦開始は30日の朝8時。陸軍特殊部隊『天岩戸』あまのいわとが各建屋に突入し、人質救出と並

行して各所を制圧、今回の目標である坂本の身柄を確保する。我々をはじめ、他の者はこれの援護を行う。激しい抵抗が予想されるので、充分注意するように……ここまですで何か質問はあるか？」

一旦話を区切ると、藤原は周りを見回しながら問う。

——太陽神が引き籠った所の名前を持つ部隊が、太陽神を崇める人たちの引き籠りを解く、か……皮肉だな………特殊部隊………言えないところ………突入^{カチコミ}………まさかな——
その様子を見ながら、光秋は先日のお話を思い出して一瞬鬼崎の縫い目痕の顔を浮かべるものの、すぐにそれを頭から追いやる。

「……ない様だな」

「あのオッサ………中佐たちの邪魔をする奴をブチノメスだけでしょ？」

藤原の確認に、その右前に座る竹田が大雑把なまとめで応じる。

「あまりそういうことを声に出すな。儂は何も言つとらんぞ。概ねそういうことだがな………それと加藤」

「はい？」

竹田に鋭い視線を向けて注意しつつ同意すると、藤原は光秋を見やる。

「今言つた通りの役割りだが、事前の説明でも聞いている様に、ベースには大規模な戦力があるだろう。儂らの主力は、当然お前とニコイチになる。もちろん、儂や小田たちも

力の限り支援をするが、一つよろしく頼む」

「はい！いつものことですから……それに僕だけじゃなくて、伊部さんもいますし」

よく通る声で応じつつ、光秋は左隣の伊部を見る。

「そうだったな。伊部も、加藤のフォロー頼むぞ」

「はい！」

藤原の呼び掛けに、伊部は胸を張って応じる。

と、

「あれ。みなさんおそろいで」

「！」

意外な声に呼び掛けられた光秋は後ろを振り返ると、ワイシャツの上に黒いスーツを羽織り、食事を載せたトレイを持った上杉が立っている。

「上杉!?なんでこんなところにいるんだよ?」

「俺も呼ばれたんすよ。大きな作戦が始まるから、医者の手が不足しないようにつて」

同じ様に上杉を見る藤原隊一同を代表して問う竹田に応じると、上杉はトレイを置いて光秋の右隣に座る。

「遅い昼食ですか?」

「ああ。午前中に来たんだけど、打ち合わせなりなんなりで忙しくつてよ」

光秋の問いに、上杉はトレイの上のカツ丼を食べながら応じる。

「でもよ、上杉が来たってことは、後方支援では頼りになる戦力が来たってことだよな」
「それもそうだな。怪我をしても保障はあるわけだ」

テーブルに身を乗り出して上杉を見ながら言う竹田に、小田もどこか安心した様子で返す。

「それ程でも……ありますけど？大船に乗った気でいてくださいよー！」

「図に乗りおつて」

上杉が照れながらも張った胸を左手で叩いて示し、藤原が笑みを浮かべる。

「私たちだけじゃなくて、タツカー中尉や曾我さんもいるしね」

「そうですね」

微笑みを浮かべて言う伊部に、光秋も笑いながら応じる。

「そうだ。それこそ伊部さんだけじゃないもん………みんなでやるんだー」

その思いは、光秋に適度な安堵を感じさせてくれる。

12月28日火曜日午前8時。

相変わらず慣れないレポートで現場に着いた光秋は、軽い不快感を追い払うように努めながら藤原たちの後を追ってニコイチの許へ向かう。

と、

「……？」

近づいてくるローター音を聞き、思わず顔を上げると、厚い雲に覆われた灰色の空によく映える赤い小型のヘリが1機ベースの方へ飛んでいくのを見る。

「ありやあ民間機か？」

右手で日除けを作った小田がベース上空辺りで留まったヘリを見ながら言うと、

「テレビ局のヘリじゃないのか？」

「誰だよ撮影許可出したの」

「仕事がやり難くなるなあ」

一緒に来た他の人々から不満の声が漏れる。

「確かにそうだが……報道の自由の観点からは、ある程度公開しなければならんからな。あまり気にするな。いつも通りにいくぞ」

「「はい」」

藤原の言葉に小田たちは同時に応じ、それぞれの機体に乗り込む。

午前10時。

シフト時間が始まって2時間経った頃、ゴレタンの車体内に待機している藤原から通信が入る。

（すまん。基地から呼び出した。後の指揮は小田に任せる）

「了解……」——突然何だろう？——

通信機越しに応じつつ、光秋はゴレタンの車体部分から出てテレポーターが待機している場所へ駆けていく藤原をモニター越しに見る。

他の隊からも同様に駆けていく人々を見て、

——作戦全体のことなのか？……—

と、少しだけ考えてみる。

その時、

「……！」

モニター越しにヘリのローター音が響き、光秋は考えるのを中断する。

見上げた空には、局が異なる中継ヘリが5機程、互いに距離をとって飛んでいる。

「三佐が言う様に、必要なかもしれないけど……やっぱり矢面に立つ人間としては不満かな……」

「向こうにもこつちの様子が変わっちゃいますからねえ……」

ヘリを見ながら独り言の様に言う伊部に、光秋も視線を追いながら応じる。

「まあねえ……向こうがテレビ観てればだけど」

「観てるでしょう……」

「観てるかなあ……」

遠くを見る様な顔でなんとなしに言い合いながら、2人はベースへと視線を戻す。

午後1時。

シフトを終えた藤原隊一行が基地に戻るや、小田の携帯電話に藤原から連絡が入る。

「はい?……了解。すぐに。三佐が今日の呼び出しのことで連絡があるそうだ。食堂に行くぞ」

「「はい」」

竹田、伊部、光秋は同時に応じ、一行は食堂へ向かう。

少しして食堂に着くと、先日と同様に先に来ていた藤原に手招きされて一同はテーブルに着く。

「三佐、急に呼び出されて、どうしたんすか?」

藤原の右前に座る竹田が、待ちきれないとばかりに問う。

「今からそれを説明する」

応じると、藤原はひと呼吸置いて一同を見回す。

「要点から言うと、作戦の開始が明日の朝8時に繰り上げられた」

「えー……すみません。でもどうして」

思わず声を出してしまったことを謝りつつ、藤原の左前に座る光秋は理由を問う。

「今朝入った情報によると、人質と思われていた子供たちは、どうやら立て籠もっている

信者たちの子供らしい」

「!?…………つまり……」

藤原の説明にハツとしつつ、光秋は先を促す。

「つまり、自分たちの子供を窓際に置いて、人質がいるように見せていたんだ」

「なるほどな……あれ?」「あの、三佐」

「何だ」

今度は右手を挙げて質問の意思を示す光秋に、藤原は短く返す。

「それと作戦の繰り上げと、なんの関係があるんですか?」

「それを今説明する」

「加藤、少し落ち付け」

「……すみません」——喋り過ぎたな……—

藤原の返事とその左隣に座る小田の注意に、光秋は少し興奮していることを自覚しながら口を閉じる。

「上の考えによると、誘拐してきた人質ならともかく、信者の子供ならばサン教の一部として対処してもいいだろうとのことだ。加えて、もともと短期決戦だった作戦が長期化してしまい、現場にも疲れが見え始める頃だろうから、早く終われるのなら一日でも早くした方がいいというものもある」

―信者の子供ならいいって、それはそれでおかしくないか？それに、『一部として対処する』って？……！――

先程の反省から声に出さないものの、作戦決定の経緯に不安を感じる光秋は、不意に銃撃戦に子供が巻き込まれる光景を想像し、背筋に悪寒を感じる。

「と、こんなところか。何か質問はあるか？」

「はい」

藤原がその一言を言うのを待ってから右手を挙げるや、光秋はすぐに問う。

「子供たちが信者の子ということですが、それは確かなんですか？」

「確かじゃないやこんな決定しねえだろう」

「その根拠です」

代わりに応じる竹田に、光秋はそう付け加える。

「特エスによる透視とテレパシー、それと工作用の機器による総合的な判断だ、ちなみに、信憑性はかなり高いぞ」

「そう、ですか……あれ？でもベース周辺にはEジャマーがありましたよね。そんな所で超能力なんて使えたんですか？」

「Eジャマーを無効化する装置を使っただけだそう」

解答から別の疑問を抱いた光秋に、藤原はそう補足する。

「そんな物が？」

「儂も詳しくは知らないが、開発中の試作品を試験ついでに回してもらったらしい。本来はEジャマーが悪用された際の対抗装置らしいがな」

—ああ、ああいう時か……—

藤原の説明に、光秋は夏のNP蜂起事件の際に高出力Eジャマーが使用されたことを思い出す。

「もう一つ。子供たちもサン教の一部として対処することですが、それはどういうことで……」

「どういう、とは？」

「つまり……」

藤原の訊き返しに、光秋は先程浮かんだ光景をどう説明すべきか言葉に迷う。

と、

「光秋くんは、子供たちが作戦に巻き込まれて怪我をしないかって、それを心配してるんでしよう？」

「はい……」

左隣に座る伊部の問いに、光秋は頷きながら同意する。

「なるほどな」

呟くと、藤原は微笑を浮かべる。

「安心しろ……とまではさすがに言えんが、使用する弾はゴム弾だ。撃つ距離にもよるが、基本的に殺傷能力はない。万が一当たっても、流血沙汰にはならんだらう。それに、突入隊の中にはその辺をよく考慮する人もいる」

「あのオッサ……中佐殿が？」

藤原の説明に、竹田が意外そうな顔をする。

「いい加減その言い方はやめろ。仮にも上官だぞ。そもそも僕は鬼崎中佐とは言つとらん……もつとも、相手は必死で抵抗するだろうからな。完全に無血というわけにはいかんだろうが……」

「それは……理解しています。僕だつて他人ひとのことは言えませんか」

竹田に注意した後の藤原の補足に、光秋は実戦でニコイチ越しに引いた引き金の感触を思い出しながら、半ば自分に言い聞かせる様に応じる。

「まあな……ただ、初対面の時のことを考えれば難しいかもしれんが……」 あの人
“を信じてはくれないか”

「……あの人……鬼崎中佐か？」

唐突に頼みごとをする藤原に、光秋は少しの間返事に困ってしまう。

「短い間だが、儂がかつていた部隊の人たちと、儂の面倒を見てくれた“あの人”を信じ

てくれ。あの人たちなら、余計な血は流さんとな」

「……………」

「…………ダメか？」

沈黙の光秋に、藤原は不安そうに問う。

と、光秋はゆつくりと話し出す。

「……………流石に、まだよく知らない、しかも初対面での印象がよくない人を信じるというのは、難しいです。ただ……………」

そこで区切ると、光秋は藤原の目を見て続ける。

「信じてくれと言う三佐を信じることはできます……………だから、子供たちの件についてはそれで大丈夫です」

「…………そうか」

光秋のよく通る返答に、藤原は微笑を浮かべて応じる。

「他に質問は？……………ない様だな。では、明日はしっかり頼むぞ。今度こそ終わらせる！」

「…………はい！……………」

藤原の宣言に、4人ははつきりと応じる。

―あとは、自分の仕事に集中するだけだな―

先程の心配を隅に押しやる様に、光秋は心中にそう断じる。

午後7時。

「ふーう……………」

早めの夕食を終えた光秋は、大浴場の浴槽に肩まで浸かり、小さく吐息を漏らす。右隣には小田、藤原、竹田、来る途中で合流した上杉がそれぞれ寛いでいる。

「やっぱデカい風呂はいいよな……………」

「そーっすね……………オレもこんな風呂がある家買えるくらい頑張らないとな……………」

「……………」

竹田と上杉の会話を聞きながら、光秋は頭に載せたタオルが落ちないように注意しつつ、湯に浸した手で顔を洗う。

「……………今度こそ、終わらせるんだよな——」

顔に触れる温かさに安堵する一方で、頭の片隅に先程の藤原の言葉を思い出し、明日へ向けて気を引き締める。

——一つよかったのは、下着の替えがもうなかったから、パンツの着続けをしなくて済むってことだな…………——

作戦が早まったことに我ながらしょうもない感想を抱くと、光秋は浴槽から上がって体を洗う。

しばらくして一同そろって浴室から出ると、

―下着の着続けも考えないといけないな。次はそうしよう―
と、光秋は入浴前に履いていたパンツを履きながら半ば真剣に思い、着替えを済ませて部屋へ向かう。

部屋に着くと、光秋はカバンから目薬を取り出す。

「明日は5時に起きろ。いろいろと準備があるからな」

「はい」

「えー、5時起きかよー……」

藤原の指示に竹田だけが愚痴を返すのを聞きつつ、光秋はベッドに腰を下ろして順次目薬を注し、その合間に携帯電話のアラームの時刻を合わせる。

全員が寝る準備を整えると、光秋はワイシャツ姿で布団に潜り込み、直後に竹田が灯りを消す。

―明日で終わらせる……だから今日はしっかり寝よう―
横になった直後に再度そう思うと、光秋は眠りに落ちていく。

54 サン教ベース攻防戦 前編

12月29日水曜日午前5時。

「……………」

携帯電話のアラームが鳴ると同時に起きた光秋は、それをすぐに止めると、体を起して身なりを整え始める。

直後に藤原三佐と小田一尉が同時に起き、竹田二尉が小田に起されて全員起床する。それぞれ準備を整えると、藤原を先頭にして食堂へ向かう。

途中で伊部が合流し、最後尾を歩く光秋の左隣に着く。

「眠れた？」

「なんとか。伊部さんは？」

「……………なんとか」

光秋の訊き返しに、伊部は意識した微笑みで返す。

食堂で焼き肉定食を食べ、近くの水盤で歯を磨いて出掛ける準備を整えると、

「さーてね」――暴れてくるか――

光秋は他人に聞かれない程度の声で呟き、藤原たちと共に装備品置き場へ向かう。

制服の上から防具一式を着け、その上にコートを羽織った藤原隊一行は、テレポートで現場周辺まで来るとニコイチとゴレタンの許へ向かう。

ニコイチに乗り込んだ光秋は、伊部を乗せて左隣の補助席に座ったのを確認すると、包囲初日からそのままになっていたN砲と盾の具合を確認する。

「盾の輪は……緩んでないみたいだな。N砲は……とりあえず刃に汚れは見られないし、大丈夫かな。弾は……緑だから榴弾だったよな――

モニター越しに走査してそう判断すると、左手首の腕時計を見る。

「7時か……」「あと1時間ですね……」

呟きながら顔を上げ、昇り始めた朝日に照らされているベースを見る。モニターの補正機能も手伝って、少ない光量にも関わらず細部までよく見ることができる。

昨日まで随時何機か飛んでいたテレビ局のヘリは、安全と作戦の邪魔にならないよう退避させられ、人員の交代で出る音も妙に少なく、現場は異様な静けさに包まれている。

「……やつぱり、怖い?」

「そりゃあ、怖くて、嫌ですよ」

伊部の問いに、光秋は正直に応じる。

「でも、前にも言った様に、仕事ですから……それに、“力”云々っていうのもそうだけど、今ここにいるのは、自分で決めたことの結果ですから。ESOに入らって、ニコイ

チをそのために使うって決めた時の、結果ですから……損も得も、ちゃんと受け入れます」

「そう………そうだね」

光秋の静かな決意に、伊部はただそつと応じてくれる。

7時55分。

—あと5分か……—

操縦桿を握る手に薄つすらと汗を浮かべつつ、光秋は何度目かわからない時間の確認をする。

「そろそろ時間だから、立たせて」

「わかりました」

伊部の指示に応じると、左膝を着いているニコイチを立ち上がらせる。

「補助席の調子はどうです？」

「今のところ大丈夫。戦闘中に留め具が外れないといいけど」

光秋のふと浮かんだ疑問に、伊部は留め具を見やりながら応じる。

直後、

「！」

正面から刺す様な悪寒が走り、光秋はニコイチに地面を蹴らせて跳び上がる。

左腕の盾を前に出すと同時にNクラフトを吹かしてゴレタンの頭上を一気に行き過ぎると、盾に砲弾が直撃し、左腕に押される様な感じを覚えると同時にモニター一杯に黒煙が広がる。

左腕を振って黒煙を振り払い、悪寒を感じた辺りに意識を向けると、倉庫らしき建物の中から砲口をこちらに向けた黄色い74式戦車の拡大映像が表示される。

—始まった!—

(作戦開始! 制圧部隊を死守しろ!)

思うと同時に怒声の指示が通信を駆け、光秋は映像の中の74式に集中する。

その意思を拾って左の履帯に赤いマーカーが表示され、N砲のレーザーをその下側ギリギリに合わせる。

「!」

引き金を引くと同時に榴弾が放たれ、履帯を吹き飛ばす。

直後に光秋は加速し、74式の真ん前に立つ。

「……」

殺気の籠った目を引き映したニコイチの目が74式を見下ろし、怯えた乗員たちが慌てて戦車から降りていく。

——……使ってみるか——

乗員たちが離れたのを視界の端に確認すると、光秋はN砲の刃を74式の上に下ろし、

「！」

一気に振り上げたそれを力一杯に振り下ろし、多少の手応えを感じながら車体を真つ二つにする。

「こりやあまた……！」

斬られた戦車と、戦車を斬っても刃こぼれ一つせず冷たい輝きを放ち続ける刃を見比べて、自分がしたこととわかっていながら驚嘆の声を漏らす。

「ぼんやりしない！右から何か来るよ！」

「！」

パネルのレーダーを覗き見る伊部に叱責されて気を取り戻すや、接近警報と右からの悪寒を感じて倉庫の天井を突き破って上昇し、直後に倉庫が黒煙と炎を上げて爆発する。

倉庫があつた場所のそばに戦車3台が並んでいるのを捉えるや、光秋は中央の奴に狙いを付ける。

が、

「！」

新たな接近警報と悪寒に正面を見るや、2機の黄色い武装ヘリがこちらにミサイルを撃ってくる。

——……避けたら流れ弾が！——

咄嗟に断じると光秋はN砲を向かってくるミサイル4発に向け、残弾4発を放って3発迎撃、残り1発を盾で受け流す。

膨れ上がった爆炎に紛れて右のヘリに急接近するや、左に伸ばしたN砲の刃にニコイチの腕力と推力を乗せて擦れ違い様にローターの根元を斬る。

振り返ってもう1機のヘリの後ろを取ると、

「！」

右蹴りを入れてローターを砕く。

落ちていくヘリを拾おうと意識を向けると、2機共に一瞬空中に静止し、直後にゆつくりと下りていく。

——念力？——

（アタシを忘れないでよ！）

疑問に思っているや外音スピーカー越しに呼び掛けられて上を見ると、防具一式の上にコートを羽織った曽我が念力で浮いている。

「曽我さん？Eジャマーは？」

（さつきからの撃ち合いでもう何基か壊れたわよ）

背後を指す曾我の指を追って振り返るや、2基のEジヤマーが黒煙を上げ、若干の装甲を施した護送バスと装甲車が数台、ベースに取り付こうと猪突しているのを見る。

「制圧部隊の車ね」

「ええ……」

伊部の言葉に短い相槌を打ちつつ、光秋は曾我に視線を戻す。ちようどヘリ2機を下ろし終えたところだ。

（殺さずに墜とそうつての？やるじゃ——）

「！危ない！」

曾我の言葉を遮る様に叫ぶや、光秋は曾我の許に急接近し、左腕を曾我の背に回す。直後に盾を銃撃が叩き、ニコイチの上をヘリが1機過ぎていく。

「大丈夫ですか？」

（え？……ええ……！）

「気を付けてください」

（わかってるわよ！）

光秋の問いと注意に、束の間呆然としていた曾我は慌てて応じ、不機嫌に返すが、
「空中戦は全方位警戒。常識ですよ」

（その声、伊部二尉！……す、すみません……）

上官である伊部の指摘には素直に応じ、少し小さくなる。

（……と、とにかく！アタシもいるんだから、少しは周りに任せなさい！）

「わかりました。でも、気を付けてくださいね」

立ち直った曾我の助言を嬉しく思いつつ、光秋はニコイチを上昇させ、現場全体を俯瞰できる位置に停まる。

下を見ると、いくつかの建屋周辺に装甲車が何台か取り付き、場所によつては制圧作戦の影響か、窓から薄い煙を上げている所もある。しかし、ベースの大部分は未だに手が回っていない印象を受ける。

「制圧、あんまり進んでないみたいですね」

「抵抗が激しいからね。戦車のバリケードがくせ者みたい」

「じゃあ、そのくせ者を何とかしますか！」

伊部との会話で断じるや、光秋は手近な建屋の前に並んで備え付けの機関銃を撃っている5台の戦車部隊に目を付け、その許に急降下する。

高度を下げながら空になった弾倉を中央車の前に投げ付け、乗員たちが怯んで銃撃が止んだ一瞬に着地し、中央車とその左隣の砲身をN砲で斬る。

すぐに左前に跳んで戦車の上を取り、右側2台の砲身も斬る。

「！」

宙を蹴って一番左の戦車の上を取り、右足を叩き下ろして砲身を押し折ると、光秋は戦車5台を見下ろし、

「まだやりますか？言つとくけど、銃弾じゃ喧嘩にもなりませんよ」

と、ドスの効いた声で問う。

その声と、何よりもニコイチを通じて放たれる威圧感に、乗員たちはすぐに戦車から降り、光秋たち以上に厚い防具に身を包んだ制圧部隊によって近くの護送バスに乗せられていく。

「……少し、言葉が過ぎましたかね？」

「無駄な戦闘を早く終わらせるためだから、あれくらい当然。むしろもつとキツク言つていいくらい」

「そう、ですか……ですね！」

伊部の言葉に束の間抱いた疑念を払い、光秋は気を取り直すと、

（そのデカいの！）

——……鬼崎中佐！——

通信機越しの聞き覚えのある声に、光秋は禿頭に縫い目の顔を浮かべると同時に、反

射的に体を強張らせる。

周囲を見回すと、目の周りだけが空いた覆面を被った大柄な青服——体格と声から光秋は十中八九鬼崎中佐と推定する——が戦車のそばに仁王立ちしているのを見付ける。

（支援に感謝する。後は俺たち任せて他をあたってくれ）

「了解です！」

ヘッドフォン型通信機のマイクを口に近づけて言う覆面——鬼崎に、光秋は緊張を含んだ声で応じる。

（……ま、『戦力外』ではなさそうだな。それなりに期待してるぞ、細いの）

「……………あ、はい！」

覆面からの予想外の言葉に動揺しながらも、光秋は短く応じる。

覆面が人数を集めて建屋へ入っていくのを見ると、光秋は左腿の荷台に懸架されている榴弾の弾倉をN砲に装填し、再び上昇する。

「オニザキ中佐に貸しができたね！」

「キザキ中佐ですよ……まあ、確かに予想外の言葉でしたけど——『期待してる』、か……」

嬉々と言う伊部に思ったことを伝えるながら、光秋は覆面の言葉を噛み締める様に口の中で言う。

と、

「……見て！」

「！」

伊部の指さす先を追うと、光秋は左10時くらいの上空に黄色いF-14が複数テレポートして来るのを見る。

「戦車よりは喧嘩になりそうなのが出てきましたね」

「図に乗らないの」

「そんなんじゃないですよ！」

伊部の注意にあくまでも正直に返すや、光秋はF-14の編隊の下側に接近し、手近な1機の右翼をすれ違いざまにN砲で斬り落とす。

——さて、僕の仕事をしますか！——

墜とした機のパイロットが脱出するのを視界に端に捉えつつ、男が昂り始めたのを自覚しながら次の標的を探す。

同じ頃、ゴレタン周辺。

（小田あ！撃てえ！）

「！」

車体部分の上に乗って念力の壁で攻撃を防いでいる藤原の指示に、スコープを覗く小

田は若干震える右の指で背部二連装砲の引き金を引く。

2つの弾はゴレタン正面で砲撃を続ける2台の74式のすぐ後ろに着弾し、相手が怯んで攻撃が止んだ一瞬、

(！)

藤原の右平手を下に叩き付ける様な動きに合わせて2台の履帯と備え付けの機関銃が潰れ、砲身が押し折れる。

行動不能になったと見るや、自動小銃を構えた青服や緑服が2台に押し寄せ、乗員たちを拘束していく。

(空中戦では儂らの出番はないな。タツカー中尉たちに任せるしかないか)

「ですね。というか……！」

空を見上げて言う藤原に応じつつ、右側を掠った砲弾に小田は肝を冷やす。

「こっちはこっちで手一杯ですからね」

(全くだ！竹田、位置を変えるぞ)

(了解！……オレだってもっと活躍してえのに……)

愚痴りながらも藤原の指示に合わせてゴレタンを移動させる竹田の顔を想像しながら、小田は心の中で言う。

——悪いな加藤。だが、こっちも命懸けだ——

スコープとモニター越しに正面の戦車部隊を認めると、小田は作戦開始からいくらかマシになった震える指で引き金を引く。

赤いマーカーが付いたF—14の上を取り、N砲の砲口を向ける。瞬時に照準を合わせた刹那、

「！」

光秋は引き金を引き、放たれた榴弾は標的の左翼を吹き飛ばす。

パイロットが脱出したのを確認すると、次の標的を探すために辺りを見回す。

直後、

「！」

接近警報と背後からの悪寒を感じ、振り返ると咄嗟に左腕の前に出す。

着弾したミサイルが盾を砕き、光秋は黒煙の向こうにさらに複数の悪寒を感じる。

——間に合わんか！——

回避する時間がないと判断すると、盾の輪だけを残した左腕の前に出し、装甲を直接撃たれることで感じる軽い痛みに備える。

その時、

（俺たちを忘れてもらっちゃ困るぜ！）

「！」

通信機から聞き覚えのある声が響いたかと思うと、左横から銃撃が走り、ニコイチに迫っていたミサイルを火球に変えていく。

そして爆発で生じた黒煙を切り裂く様に、1機のF-22が目の前を過ぎていく。

「タッカー中尉！」

「空軍が来たみたい！」

声と目の前の機から金髪を想起した光秋は歓喜を上げ、左側を見る伊部は次々とテレポートしてくるF-22の部隊に安堵の笑みを浮かべる。

「よし！」

一時は乱れた調子を取り戻すと、光秋はさらに上昇し、見下ろした先を飛んでいる1機に狙いを定める。

「！」

N砲で右翼を吹き飛ばすと、それで注目した10機程が機首を向けて迫ってくる。

何機かは友軍機に墜とされるものの、それを掻い潜った5機が接近する。

それに対し、光秋はN砲で先頭の1機の左翼を吹き飛ばすと、一気に高度を下げて向ってくる4機とすれ違う。

「！」

すれ違いざまに1機の左翼を斬り落として弾ける様に再上昇し、上昇を続ける3機の

背中を取るや、N砲で左と中央の機の右翼を撃ち砕き、刃を振り下ろして左の機の左翼を斬り落とす。

その時、

「！」

接近警報と背中 of 悪寒を感じるや空になった弾倉を掴み、振り返りざまに投げ付けると間近まで迫っていたミサイルに当たって誘爆させる。

「危なかったあ……」

「流れ弾みたいだけど……曾我さんのこと言えないね」

肝を冷やしなから言う光秋に、伊部も左手で額の汗を拭いながら返す。

と、正面下方の空に再びF-14の集団がテレポートしてくる。

「向こうも増援か」

「あの数……徹甲弾じゃダメですね」

伊部に返しつつ、左の荷台に積まれた灰色の線が描かれた弾倉を見やりながら断じると、光秋は通信機に意識を向ける。

「大河原主任。加藤です。散弾の補給を！」

（了解した。おい！）

通信機越しに大河原主任の指示を聞いてすぐに、ニコイチの少し上辺りに黄色い線が

描かれた弾倉がテレポートしてくる。

落下を始める直前にそれを左手で掴むと、素早くN砲に装填する。

「うしー！」

気合を入れると右ペダルを一杯に踏み、増援部隊に接近する。

試しにと部隊中央辺りを飛ぶ3機に狙いを付け、

「……！」

3機の中央辺りを狙って一射する。

砲口から吐き出されると同時に弾は先端を破裂させ、拳大程の金属球を雨の様にばら撒く。

左右を飛ぶ機は片側の翼を、先頭の機はエンジン周りをズタズタにされ、見る間に高度を下げていく。

「守りの弱い敵なら、今みたいに一度に大勢墜とせるみたいね」

「ええ。でも拡散が思ったよりも広いから、味方を巻き込まないように注意しないといけませんね」

伊部の評価に光秋が補足を加えた直後、増援の一部がこちらに接近してくる。

「！」

光秋も急加速を掛けると、先頭の1機の右翼をすれ違いざまに斬り落とし、振り返っ

てN砲を一射、旋回が間に合わず背中を見せたままの5機程を一気に飛行不能にする。

「でも、やっぱり使えますね、これ」

先程の評価に付け加えると、光秋は撃ち漏らした残り3機の銃撃をかわしながらそれぞれの翼を斬り落としていく。

と、

「ベースから少し離れ過ぎてない？今の位置だと制圧部隊の援護ができない」

「？……そうですね。少し戻ります。その前に！」

伊部の注意に地図で位置関係を確認して応じると、光秋は置き土産にN砲を一射して3機程飛行不能にしてからベースの方向へ向かう。

少し飛ぶと前方に戦闘機とも違う影を見付け、その意思を拾ったモニターが拡大映像を表示する。

「!？」

その映像を見て、光秋は心臓を跳ね上げる。

「これ、テレビ局のヘリじゃ？」

「確かにそうみたい！でも何で？飛行禁止で撤収したはず……」

よく映える赤基調のヘリの映像を見ながら視線を向けると、伊部も明らかな動揺を浮かべている。

と、

「……！」

接近警報と背後から悪寒を感じ、光秋は振り返りざまに一射する。

迫っていたミサイル群の中央で散弾がばら撒かれ、近くの物は鉄球に叩かれて誘爆し、遠い物はその爆発に巻き込まれて火球に転じる。

が、

—3発か！—

誘爆を免れた3発がニコイチに迫り、光秋は咄嗟に避けようとするが、

「ダメ！へりに当たる！」

「！」

伊部の言葉にハツとし、そのまま留まろうとする。

刹那、

「！」

左側を過ぎようとする1発が目にとまり、次の瞬間には左手で右の荷台に残っていた徹甲弾の弾倉を投げつける。

すれ違う直前にそれはミサイルに命中し、至近距離での爆発にニコイチが僅かに煽られる。

直後、

「！」

受け身を取る暇もなくミサイル2発が直撃し、爆発に煽られたニコイチはバランスを崩して地上に落ちる。

「……伊部さん、大丈夫ですか？」

胸周りに軽い痛みを覚えながらも、光秋は伊部の無事を確認する。

「……なんとかね。補助席の耐久テストにはちょうどよかったかも」

「そりゃよかった」

伊部の冗談ともつかない返事に返しながら、光秋は背中から落ちてしまったニコイチを立たせ、鉄屑の様な物が散乱している周囲を見回す。

「……包囲中に見えた重機置き場か――」

思いつつ、ニコイチがその内の1台に乗っていることに気付く。

クレール車かなにかだったそれは、落ちた際に直撃したのだろう、運転席部分が粉々に潰れており、辛うじて原型を留めている履帯の上とその周囲に錆の浮いた破片が散乱している。

「！………やられた！」

N砲の様子を見ようと顔を向けると、その本体部分が大きく凹んでいるのに気付く。

「さっきの爆発で凹んだみたいね。これはもう使えないよ」

「わかってますよ。こんなんでも撃つたらコレまで爆発する」

伊部の注意に応じつつ、安全のために弾倉を外して左の荷台に載せ、周りを見回す。

「といつても、銃剣だけで戦線復帰っていうのも不安ですからね。他に武器になりそうな物は……！」

呟きながら探すと、左の足元に鎖が付いた大きな鉄球を見付け、左手で鎖を持つて上げてみる。と、鉄球と反対側にクレーンの腕が付いていることに気付く。

「ビル解体用の鉄球かな？ さっき潰しちゃったやつの一部みたい」

「ですね……」——多少錆が浮いてるのが気になるが……戦闘機くらいならいけるか？——

「ちようどいい。これ使おう」

伊部に応じながらそう断じると、光秋は左手でクレーンの腕をしっかりと掴んで上昇する。

と、目の前にF-14が1機迫ってくる。

——ちようどいい！——「オリヤアアアア！」

断じるや、光秋は左手を後ろに引き、一瞬後に叫びながら前に向って力一杯振り下ろす。その手に持った鉄球は円を描く様に戦闘機に引き寄せられ、ニコイチの腕の力と重力を加えた大質量を左翼に叩き付ける。

相手の翼は付け根から粉々にされ、あつという間に失速していく。

「よし！使えるな」

予想以上にいい使い勝手に、光秋は嬉々として言う。

と、

「あのへり、まだ」

「！」

伊部の言葉に光秋は振り返り、相変わらず滞空し続ける赤いへりを見るや外部スピーカーを点けて怒鳴る。

「そのへり、さっさと離脱しなさい！……危ないですよ」

感情的に「撃ち落とすぞ！」と喉まで出かかった言葉を飲み込んで言い換える。

それに続く様に伊部が、

「それと、あなたたちの行為は公務の妨害に当たります。これ以上ここでの撮影を続けるなら処罰の対象になりますよ」

と、怒鳴りはしないものの威圧する様な語調で付け加える。

2人の声を聞き付けたのか、ベース側から緑服のサイコキノが3人飛んでくる。

（どうしたんで……て！テレビ局のへりじやなにですか!?）

——ちようどいい——「すみませんが、そのへりの誘導頼みます。こちらは制圧部隊の援

護に行くので」

（ああ、了解しました！）

「お願いします」

通信機越しのやり取りを終えると、光秋はヘリをサイコキノたちに預けてベース上空へ向かう。

ベース全体を俯瞰できる高さまで上昇すると、2人は足元を見下ろす。

「制圧、だいぶ進んでるみたいですね」

「そうみたいね。終わるのも時間の問題かな」

光秋と伊部が言う様に、すでに建屋の9割程に制圧部隊が入っており、2人が話している間にも拘束された人々が次々と最寄りの護送バスに乘せられている。

その時、

「!?」

ベース中央辺りの建屋内から銃撃が起こり、開け放たれている大扉から何かが出てくる。

光秋の意思を拾った拡大映像が表示されると、

「?……何だありや!?!」

思わず驚きの声を上げる。

それは簡単にいつてしまえば、全身黄色に塗られた全長9メートル程の人型ロボットである。ただ、ニコイチとは雰囲気が異なっている。

頭に相当する部分に前と左右をガラスで覆ったコクピットがあり、土管を繋いだ様な太い両腕を振りながら四角い両足でぎこちなく前進している。左腕先端の4砲身ガトリング砲を制圧部隊や拘束されている人たちに向けて乱射し、右腕の先に付いた小さな口から出す火炎を振り回している。

制圧部隊が銃器で反撃するものの、装甲はそれなりに堅いのかなかなか傷付かず、コクピットもガラスは防弾なのか割れる気配がない。

体形がどこか野暮ったいくせに、両腕の武器の所為で危険を感じさせるといふ、なんともちぐはぐな印象を抱かせる。

——……しかし何であれ、攻撃してる以上は止めないと——

断じると、光秋はその黄色い野暮ったいロボットの前に降下し、

——コイツで——

左手の鉄球に意識を向ける。

直後、

(加藤！退けえ！)

(竹田！待て！………て！クソオオオ！)

「！」

通信機から竹田の叫び声と小田の慌てた絶叫が聞こえたかと思うや、背後から全速力で突進してくるゴレタンを見、咄嗟に地面を蹴って右に避ける。

次の瞬間、

（オオオオオオオオ！）

一気に懐に入ったゴレタンの右ストレートが小田の叫びと共に放たれ、それが野暮の胸辺りに直撃する。

ゴレタンの運動エネルギーと腕の力を乗せた一撃は野暮を押し倒し、雪を巻き上げながら背中から転倒させる。

（竹田……後で覚えてろよ！……）

粗い呼吸を挟みながらも、車体部の竹田を睨み付けている様な小田の声が通信越しに響く。

「え？……あー……伊部さん、こういう時どうすれば……」

「私に訊かないで……」

（加藤。そいつは農らに任せて、お前は補給に行け。もう弾がないんだろう）

突然の事態に光秋と伊部が狼狽していると、藤原の通信が入る。

「三佐？……いや、しかし……」

（この程度、儼らでも何とかなる）

（たまにはオレらにもいいところ見させろよ！）

（俺はあまり気が進まないが……お前だけが頑張らなきゃいけないルールはないんだ。
ここは俺たちに預けろ）

——藤原三佐、竹田二尉、小田一尉……—「ありがとうございます！」

藤原たちに応じると、光秋は基地に向って飛び立つ。

「補給してこいつて言われたの？」

「はい。ここは任せて行けって」

伊部の確認に、光秋は一瞬藤原たちを振り返りながら応じる。

「それなら、ガトリング砲回してもらおう」

「そのつもりです。今から連絡入れ——」

「着いてから言おう」

遮る様に言いながら、伊部は操縦桿を握る光秋の左手に右手を重ねる。

「……………」

その行動と、少しだけ力を籠めて握ってくる伊部の手に、光秋は思わず押し黙ってしまう。

「……………いや……………でも、急がないと」

「それだと、ガトリング砲受け取ってすぐ行っちゃうでしょ」

「そうですよ!」

話が見えない伊部の言い方に、光秋は少し苛ついた声を返す。

「だって、早く戻らないと——」

「補給ついでに、光秋くんも少し休んでいこう」

「大丈夫ですよ。それに制圧ももうすぐ終わるみたいだし」

「だからこそ。追い詰められた敵は何をするかわからないんだから。さっきのロボットみたいに」

「……………」

「そういうことに備えて、光秋くんの調子を少しでも回復しておかないと。そうでなくともさっきからずっと戦ってたんだから、休んだ方がいい。ほんの少しリラックスできればいいの。補給にかかる時間を延ばせば言い訳も立つし、腿の荷台もガトリング砲のやつに換えてもらおう。それを着いてから言うの」

「……………」

伊部の強くはないが理のある言い方に、光秋は返事に困ってしまう。

「……………」でも……………ロボットのことを言うなら、尚更早く戻った方がいいんじゃない? 三佐たちが危ないですよ!」

「でも、任せろって言ったんでしょ」

「……ええ……」

「だったら、アレは三佐たちに任せなさい。光秋くん一人が頑張らなきゃいけないことはないんだから」

——「……『お前だけが頑張らなきゃいけないルールはないんだ』……しかし……」

伊部の言葉に、光秋は先程の小田の言葉を思い出す。が、自分だけが休むことにどうしても後ろめたさを感じてしまう。

と、

「……三佐を信じるって、昨日言ったでしょう」

「え？……ああ、はい」

「だったら、今こそ信じなさい。私も保障する。三佐たちならアレくらい大丈夫。ゴレタンだってあるんだし……だから、着いたら少し休んで。もしものためと思って」

「………わかりました」

真つ直ぐ目を見て言う伊部に、光秋はようやく納得する。

すると今度は、伊部に対して申し訳ない気持ちが起こる。

「……すみません。気を遣わせちゃって」

「そういうこと言わないの。私は光秋くんの補佐役としてここにいるんだから、これく

らい気を回すのは当然。そもそも姉が弟のことを考えるのは当たり前で……それに、戦闘じゃ私何もできないし、これくらいやらせてよ」

「そうですか？……そうですね」

伊部の言葉になんとなく納得すると、光秋は基地に戻ることに意識を向ける。

同じ頃。

―加藤にああまで言った以上、俺たちも格好つけないとな！―「竹田、ここからは俺の指示通りに動け。わかったな！」

（ウッス！）

「とりあえず少し後退しろ。奴との距離をとる」

（了解！）

念を押して言った指示に竹田が応じたのを聞くと、小田はすぐに後退の指示を出して野暮との間合いをとる。

その間に自力で立ち上がることを諦めた野暮がサン教のサイコキノ2人に背中を押される形で立ち上がり、ゴレタンに左手のガトリング砲を向ける。

―コイツはかえって邪魔だな……―

そう思うと、小田は両肩の砲身を上に真っ直ぐに上げる。

―お前と同じニコイチのでき損ないなんだろうが……―「俺たちのゴレタンを見くび

るな！竹田！一氣に前進しろ！」

（了解！）

叫ぶ様に指示を飛ばすや、一氣に最大速度まで加速したゴレタンが野暮に突っ込んでいく。

野暮がガトリング砲を浴びせ、回避ができないゴレタンは全弾をまともに受けてしまう。

しかし、

「見くびるなと言った！」

この程度の弾では戦車と同等の装甲はそう簡単に抜けない。

「オオオオオオオ！」

弾丸の雨に構わず小田は右拳を一杯に引き、絶叫と同時に腰の入った右ストレートが野暮の胸に放たれる。

が、

「!?」

拳は野暮の胸に達する寸前に念の壁に阻まれてしまう。

すかさず野暮が右手の火炎放射器を突き出し、ゴレタンの頭部を赤々とした炎が炙る。

「チッ！後退だ！」

炎で埋め尽くされるモニターに舌打ちするや、小田は指示を飛ばす。

「タコ殴りにして大破、乗り手は引きずり出そうと思ってたが、お付きのサイコキノが面倒だな……捕縛は諦めるか？」

そう思うと、両肩の砲の引き金を一瞬見やる。

直後、

「！」

野暮がガトリング砲を撃ってきたかと思うや、唐突にモニターが消え、コクピットが闇に包まれる。

「何だ!? 当たったのか? 否、カバーは防弾のはず……」

（一尉? どうしたんです?）

動揺する小田に、竹田が慌てて通信を送る。

「モニターが落ちた！」

（はあ? ……て、アイツ来ましたよ!）

「しょうがない! とにかく動き回って距離をとれ。これじゃ攻撃もできん」

（動き回れって?）

「お前に任せる！」

（ああ—もう! やつてやらあ!）

ヤケクソに叫ぶや、竹田は後退して迫ってくる野暮から距離をとり、直後に火炎放射の直撃をかわす。

ある程度距離をとると左に弧を描く様に曲がり、背後から迫ってくるガトリング砲の流れ弾が起す雪煙りから逃げる様に野暮の周りを回る。

—にしても、何でカメラが? ……もしかして、さっきの火炎放射か? —

暗い中で揺られながら、小田は先程接近した時のことを思い出す。

—つまり、さっきの火炎放射で温められて脆くなったところに攻撃を食らって抜かれたってことか? ……「クソッ!」

失念していた自身と、意外に脆い自機に思わず唾棄すると、小田は藤原に通信を送る。

「三佐!」

（小田? すまん。こっちはさっきのサイコキ——ぬお!）

「三佐! ……クソツタレ!」—これじゃあ、加藤と伊部に格好がつかねえじゃねえか……! —

藤原との通信が突然切れたことに怒声を上げつつも、小田は何とかこの状況を——それも光秋が戻ってくる前に——打開しようと思案を巡らせる。

55 サン教ベース攻防戦 後編

小田一尉たちが野暮と戦っている頃、基地上空に到着した光秋は、装備品置き場に大河原主任を見付け、その近くの広間にニコイチを着陸させる。

「主任。N砲が破損しました。ガトリング砲とそれ用の荷台、予備の弾倉をお願いします」

（破損？……おお、了解した。すぐ準備させる。盾も失くしたようだが、それは？）

「いいです。時間ないから。武器だけで」

（了解した）

通信機越しにやり取りをしながら、光秋はN砲を近くの鉄板の上に置く。

「ふうー……」

両腿の荷台の交換作業が開始されるのを見ながら、知らぬ間に力んでいた肩から力を抜く。

「やっぱり、大丈夫じゃなかったでしょう？」

「……そう、ですね……」

伊部の指摘に、図星を突かれた尻の座りの悪さを感じる。

「今後は、もう少しローテーションのこととかも考えないとね。ニコイチがどんなにタフでも、光秋くんは疲れるんだから」

「……そうですね。改めてチームの大切さを思い知らされます……どんなに強くて、どんなにいろいろできて、やっぱり一人じゃ限界あるんですよ……」——どの道、僕自身はそんなに強くもなければ、できることも限られるしな……—

伊部の言葉を素直に受け入れながら、光秋は改めて個人の力の限界と、チームの重要性を噛み締める。

「そう。だから私がいて、三佐たちがいて、タツカー中尉や曾我さんがいるんだから」
「そうですね」

「それにしても、こうなるならお茶くらい持つてくればよかったね。次の機会の時は積んでおこうか」

「そうですね」——……同じ相槌……能がねえなあ、僕……—

自分の会話能力の低さに呆れている間にも、荷台の交換作業は順調に進んでいく。
少しして交換が終了し、ガトリング砲と予備の弾倉4つが用意される。

（二曹！準備できたぞ。積み込み頼む）

「了解です」

通信機越しの大河原に応じると、光秋は鉄球を地面に置き、両手で弾倉を腿の荷台に

積み込んでいく。

積み終わると右手にガトリング砲、左手に鉄球を持ち、いつでも飛び立てるようにする。

その様子を見ていた大河原が、通信機越しに訊いてくる。

（その鉄球も持っていくのか？）

「ええ。意外と使えるんです。なんなら新しい武器にこういうの加えてくれませんか？」

（俺の仕事をバカにされてるみたいだな）

「……………そんなつもりはありませんよ！」

（冗談だ。といっても半分だがな。ま、どうしてもというのなら、後でレポートでも提出しろ。鉄球の利点をよく書いてな。そうしたら考えよう）

「はあ……………」

（だから、ちゃんと戻ってこいよ）

「……………はい！」

大河原の言葉にはつきりと返すと、光秋は右ペダルに足を掛ける。

「じゃあ伊部さん、行きます！」

「うん。もうひと頑張りしよう！」

伊部が明るい顔で応じてくれたのを見ると、光秋はニコイチを上昇させ、ベースへ向けて一直線に飛んでいく。

その頃。

「ハア！」

気合いと共に藤原三佐は右拳を突き出し、その動きに合わせて野暮を立たせていた黄色い防寒具を着たサイコキノの男1人に念を放つ。

が、

「！」

放たれた方は左手をかざして念の壁を張り、衝撃を打ち消す。

——こいつ、6！儂と同等か……厄介だな——

思いつつ、藤原はもう1人のサイコキノの女が右手を指鉄砲にして連射してくる念を右側に走りながら避け、野暮が出てきた建屋の中に身を隠す。

「否、それ以上かもしれない……儂一人では……」

扉の影から顔を出しつつ、藤原は小田たちに援護を頼もうとゴレタンを見るが、ゴレタンは未だにガトリング砲を乱射する野暮の周りを回り続けている。

「ダメか。クッ！」

ゆつくりと迫ってくる2人のサイコキノに、藤原は奥歯を噛み締める。

その時、

「アタシも混ぜてもらおうかしら？」

「「!?」」

唐突に聞こえた女の声に、藤原とサイコキノ2人は上空を見上げ、緑服の人影を認める。

直後、

「「!?」」

サイコキノ2人の周りに雪が舞い上がり、球状に吹き荒れる小型の吹雪が2人を覆う。

——コントロールに秀でた念力!?何者だ?——

敵の動きを封じた技量に感心しつつ再び上空を見ると、人影は藤原の許に下りてくる。

「大丈夫でしたか？」

「あなたは確か……藤岡隊の……」

「曾我地球ガイアです。お久しぶりです。藤原三佐」

記憶を辿る藤原に、曾我は微笑んで返す。

と、サイコキノ2人は背中合わせに両手を前にかざし、渾身の念を放出して吹雪を蹴

散らす。

「あら、意外とやるじゃない？」

「このー！」

涼しい顔で応じる曾我に、女の方は右の指鉄砲から強い念を放つ。

「……」

曾我は余裕の表情で左手をかざし、女が放った念を防ぐ。

しかし、

「……………」

連射、それもかざしている掌一点を狙った集中攻撃に、広く張った念の壁のその部分は揺らぎを見せ始め、曾我の表情は曇ってくる。

と、

「ハアー！」

曾我の右隣から跳び出した藤原が、気合と同時に突き出した右拳から念を放つ。

「がつ……………」

真つ直ぐに入った衝撃は女の鳩尾を直撃し、その場に崩れて気を失う。

「千尋！クツ！」

女の右隣に立つ男は2人を睨み付けると、両手をかざしてありったけの念の衝撃を放

っ。

—不味い！これは……—

強力かつ広範囲の念に防ぐことも避けることもできないと直感した藤原は、思わず立ち尽くしてしまう。

が、

「!?」

衝撃が届く刹那、藤原と曾我の前に広く丈夫な念の壁が張られ、男が放った衝撃を防ぎ切る。

「……………」

気配を感じて後方上空を向いた藤原は、そこにESOの制服とコートを着た赤毛の少女——光秋に缶ジュースを買ってもらった彼女が、右手をかざして浮かんでいるのを見る。

直後、

「!?」

少女が壁として張っていた念を男に放つのを見て、藤原は驚愕する。

「やめろ！死んでしまっぞ！」

藤原が叫ぶ間にも男は背中から地面に押し付けられ、隣で気絶している女諸共地面に

押し込まれていく。

「やめろと言っているのが聞こえないのか！このままでは2人とも潰れてしまうぞ！」
藤原の叫びも虚しく、少女は2人を押し付けることをやめようとしな

「……………」

その間に少女の顔に浮かんだ表情——現場には似つかわしくない子供らしい、それでいて少し影がある微笑みに、藤原は戦慄する。

「……………」

ベースへ向かっている途中、光秋は前方から来る奇妙な感覚に眉を寄せる。

——いつもの悪寒に近い……殺気？でも、僕に向いているわけじゃない……それに、どこか喜んでる？……否、喜ぼうとしてるのか？——

直後、

——死んじやえ！——

——！やめろお！——

唐突に聞こえた女の、それもまだ幼い——無邪気な、それでいて何かを堪えている様な——声に、光秋は咄嗟に心の中で強く叫ぶ。

「……………」どうしたの？」

光秋の顔が一瞬険しくなったのを見て、伊部が心配そうに訊いてくる。

「あ、いや……なにか声が聞こえたような気がして……」

「声？……テレパシー？でもニコイチには超能力耐性が……」

「空耳かもしれないませんが、とにかく嫌な感じがして……とにかく、急ぎましょう」

伊部に応じると、光秋は前進に意識を向ける。

光秋が叫んだ際にニコイチの節々から僅かに赤い燐光が漏れ出たのだが、2人には知る由もないことである。

光秋が心中に叫んだ一瞬後。

「やめろお！」

「！」

突然頭の中に響いた怒声に、赤毛の少女は咄嗟に念力の放出をやめ、鳥肌が立った体を抱く様に両手を引っ込ませる。

「何だ？……否、今はそれよりも！」

突然怯えた様な態度をとる少女に首を傾げながらも、藤原は倒れている2人の許に駆け寄る。

「……！」

曾我もハツとしつつそれに続く。

（……やべえ！）

「どうした？」

暗闇の中を揺られ続ける小田は、通信機越しに竹田二尉の焦った声を聞く。

（燃料がもうなくなります！このままじゃ動けなくなっちゃう！）

「何だとい？」——そろそろ正念場か——

驚愕の声を上げつつも、小田は冷静な部分で腹を括ろうとする。

——落ち付け。コイツだって人型兵器の端くれなんだ。何のために2本の腕が付いてると思ってる！それに、近付けば奴は上側を狙うはず。目立つからな。最悪竹田は大丈夫だろう。サイコキノは……通信が途絶えたままのところを見ると、三佐が引き付けてくれているはずだ。さっきみたいに邪魔は入らない！……——「よし！」

いつかの不確定要素に不安を抱きながらも、小田は竹田に指示を出す。

「竹田。俺が合図したら奴を正面に入れて一気に突っ込め」

（え？……また殴り付けるんすか？）

「そうだ。肩の大砲が使えん以上、それしかない」

（でも、アイツまだ撃ってきますよ？それに近づいたら火炎放射も！）

「四の五の言ってる場合じゃない！とにかく、俺が合図したら突っ込め。いいな」

（……了解！）

不安を含んだ声で竹田が応じると、小田は正面のハッチを開ける。

「……………」

呼吸を整え、操縦桿を握る手の力を調節する。

そして、

「今だ！」

（！）

小田の合図に、竹田はゴレタンを急激に右折させ、野暮を正面に捉える。直後に全速力で接近し、みるみる野暮が視界を埋めていく。

その間にガトリング砲がゴレタンの装甲を叩き、開け放たれたハッチの周辺にも何発か当たるが、すでに気にしている余裕は小田にはない。

「……」

右腕を肩一杯に引かせ、いつでも放てるようにする。

銃撃を耐え切り、野暮の懐に入った刹那、

「オラアアアアアア！」

腹の底からの叫び声と共に、ゴレタン渾身の右ストレートが放たれる。

同時に野暮が火炎放射を放ってゴレタンの上部を炙るものの、拳は構わず野暮の胸に吸い寄せられていく。

念の壁の邪魔もなく進んだ拳は野暮の胸部を凹ませ、後ろに転倒させる。さらに、速

度に乗せたままの車体が野暮の上に乗り上げ、80トンの重量がその下半身を粉碎する。

「……がつ……は……は……どうだつ！」

火炎放射が放たれた際に咄嗟に息を止めたことと、今までの疲労から、小田は肩で息をしながらも、トドメとばかりに動かなくなつた眼下の野暮を睨み付け、宣告の様に叫ぶ。

ベース付近まで来た光秋は、拡大映像越しに野暮がゴレタンに行動不能にされたのを見る。

「一尉たち、やったみたいですね！」

「言つたでしょう。三佐たちを信じろつて」

「はい！」

応じる伊部に、光秋は微笑を浮かべて応じる。

——自分で言つた言葉……それを思い起こさせてくれたのも、伊部さんがいたからか……何が『何もできない』だ！伊部さんが隣にいてくれたから、こういうことも——三佐たちを信じることもできた！——

その事実を噛み締めながら、光秋は野暮に乗り上げたゴレタンの許に着地する。

——ハッチが？——「一尉！無事でするか？」

ボロボロの頭部と開いているハッチを見て小田の身を案じるや、すぐに通信を繋ぐ。

（ああ、なんとかな……どうだ！お前ばかりに格好はつけさせなかったぞ！）

「……………ええ！すごいです！一尉の勇姿を見れなかったのが残念ですよ！」

予想に反して威勢がいい返事を聞き、ハッチから身を乗り出した小田の無事な姿を確認して、光秋は安堵の笑みを漏らしながら応じる。

（オイ！オレも頑張ったんだぞ……………運転手だけど…………）

「わかってますよ！二尉の操縦技術を見られなかったのも残念です」

（へっ！口が上手くなりやがって！）

最初は強気に、後の方は弱々しく言う竹田に、光秋は少し可笑しいと思いながら返すと、竹田の微笑を含んだ怒声が返ってくる。

「2人とも無事なの？」

「はい！一尉も二尉も元氣そうです」

「三佐は？」

「ああそうだ。一尉、三佐は？」

伊部の指摘にハツとし、小田に確認をとる。

（それが…………途中から通信が切れて——）

（おお！終わったようだな）

「……………三佐！どちらに？」

小田の返答を遮るように聞き覚えのある声を乗せた通信が響き、光秋は安堵の笑みを漏らしながら問う。

（ニコイチの正面だ。こつちからは見えるぞ）

「……………ああ！見えました！」

教えられた辺りを見ると、光秋は野暮の残骸の近くに立つ藤原を確認する。

「……………あれって、曾我さん？」

「みたいですね」

伊部に応じながら、光秋は藤原の後ろに立つてニコイチを見上げる曾我を認める。

その間にも、藤原は野暮のコクピットに歩み寄り、

（……………完全にノビているな）

通信機越しに漏らしながら念力でハッチを開け、おそらく転倒の際の衝撃で気絶した野暮のパイロットを引きずり降ろすと、先程よりも静かになってきた周囲を見回す。

（制圧も粗方終わったようだしな……………加藤、すまんがこのデカブツをテレポーターの待機地点まで運んで基地に送るように言ってくれ。いろいろと気になることがある）

「了解です」

応じると、光秋はガトリング砲と鉄球を地面に下ろし、野暮の頭側に移動する。

「一尉、コレを回収するので退いてください」

（いや、それが……）

（もうガス欠でよ、足が動かねえんだよ）

「えー……」

小田と竹田の返答に、光秋は困った顔をする。

「どうしたの？」

「ガス欠で動かないって」

伊部の問いに困り顔で答えていると、曾我から通信が入る。

（アタシが動かそうか？）

「曾我さん？ いいんですか？」

（乗り上げてるのを下ろせばいいんでしょう？ 特エスのサイコキノにこんなの朝飯前よ。戦車みたいなものの乗り手さんたちも、それでいいですね？）

（特エスか？……ああ、頼む）

（それでは）

小田の了解を得ると、曾我はゴレタンに右手をかざす。履帯が独りでに回転し、ゴレタンは野暮の脚から下りていく。

「なるほど。念力にはあんな使い方もあるんですね」

「出力こそレベル9には及ばないんだろうけど、曾我さんはコントロールに優れてるみたいね」

伊部と感想を交わしながら、光秋は野暮の背中を押して起し、両脇に腕を入れて持ち上げる。持ち上げた拍子に下半身の部品がぼろぼろと落ち、骨組みらしき物が辛うじて付いているだけになる。

「三佐、脚の部品が……」

（細かいのは儂が拾う。お前は本体の方を。基地への連絡もしておく）

「わかりました」

応じると、光秋は野暮を抱え直し、ニコイチを少し浮かせて滑る様にテレポーターの待機地点へ向かう。

少し進んで待機地点に着くと、光秋は外部スピーカーを作動させる。

「すみません。コレを基地まで送ってください」

（ああ、連絡にあつたやつですね。了解です）

外音スピーカー越しに緑服の男の返事を聞くと、その男の近くに野暮を寝かせ、邪魔にならないように少し離れて着地する。

それを見た男は両手を正面の野暮にかざし、目をつぶってしばし集中する。と、カツと目を見開き、直後に野暮はそこから消えてしまう。

—そういえば、テレポートの『行く時』を見たのは初めてだったなあ。『来る時』はさんざん見たけど……—「本当に一瞬で消えるんですね。今はもう基地なんですよ？」

「そうだね。瞬間移動だから」

「さっきの曽我さんといい、改めて見ると超能力つて普通に——当たり前に使う分にはすごく便利ですよね……」——どんな素晴らしい“力”も、所詮は使う人間次第、か……

—

伊部に返しながら、光秋は夏に超能力者の不良に襲われたこと、綾とニコイチを物干しにして布団を干したことを思い出す。

—それは、僕にも言えることなんだよな—

思いながら、右の操縦桿を軽く撫でる。

「……どうかした？」

「あ、いえ……戻りますか」

伊部の少し心配した声に応じると、光秋は再びニコイチを少し浮かせ、滑る様にベースへ戻る。

ベースが見える所まで来たその時、

「！」

レーダーに複数の影が映り、光秋が慌てて空を見上げると、四方から黄色い戦闘機や

へりがベース周辺に集まってくる。

―残存が！何かやらかす気か？―

思った直後、集まってきた航空機たちは残っているミサイルを互いに向けて撃ち合う。

―同志討ち!!―

相手の行動に、光秋は驚きながらも首を傾げる。

直後、

「!」

互いに向かい合っていたミサイル群が消えたかと思うと、一瞬後にベース上空にテレポートして垂直に降ってくる。

―これが狙い?―「味方もまだいるんだぞ!」

あまりの行動に思わず叫ぶ。

直後、

(加藤お!受け取れえ!)

通信機から藤原の叫びが聞こえるや、ベースの方からガトリング砲が飛んでくる。

「!」

光秋は反射的に右手でその持ち手を掴み、左手で支持棒を持って構えるや、迫りくる

ミサイル群に向けてソレを掃射する。

狙いなど定めず、砲口を縦横に振ってばら撒かれた弾はミサイルを次々と火球に変え、撃ち漏らしや残骸は藤原や曽我をはじめとするサイコキノたちによって防がれる。

「ふう……何とか!」

「でも何でこんな?……」

「……追い詰められて自棄^{やけ}になったんじゃないんですか?」

眉を寄せる伊部に、光秋は息を整えながら思い付いたことを返す。

直後、

（坂本がいらないぞ!）

（現場から離脱するヘリがある! さっきの攻撃は囷か）

「!」

通信機から響いた焦りを含んだ声に、光秋の意思を拾ったモニターが前方上空の映像を表示し、こうしている間にも急速にベースから離れていく大型のヘリを映し出す。

—逃げた? 自分だけ? ……自分が助かるために、大勢の人を……部下の命も危険にさらした?—

その映像は光秋にそんな思いを抱かせ、子供を盾にしたことを連想させる。

—自分たちが助かるために、守らなさいけない子供まで犠牲にして……それで最後

は……これか！――

その連想は静かな怒りに転化し、モニターのへりを睨み付ける。

そして、

「いい加減にしろお！」

怒りは叫びの形を以って光秋の外へ放たれ、外部スピーカーを通して周囲に響き渡る。

その怒声の響きを表すかの様にニコイチのカバーが末梢へ向かって開き、露出した節々から赤い燐光が漏れて周囲を照らす。同時に光秋の知覚もニコイチ大に拡大し、操縦席から伸びる2本の腕に頭を固定され、それに合わせてニコイチの額の角が延長する。

一体化が完了するや、光秋は叫ぶ。

「三佐！鉄球を！」

（お？・おお！）

突然の呼び掛けに一瞬驚くものの、すぐに気を取り直した藤原は鉄球をニコイチへ飛ばす。

「！」

ガトリング砲を放ると同時にそのクレーンの腕を掴むや、緑色に光るニコイチの目を

通して目標のヘリを見据え、突進する。

すぐに近くを飛んでいた戦闘機やヘリが行く手を阻むが、

「邪魔をするなっ！」

一喝するや光秋は右腕を上げ、正面のF-14の左翼を振り下ろした鉄球で粉碎し、振り上げついでに右の機の右翼を下から砕く。

続いて正面に並んだヘリ3機から銃撃を食らうものの、光秋はそれを意に介さず、

「！」

一杯に上げた右腕を左に振り、並んでいるヘリ群の上部に鉄球を叩き付ける。

ニコイチの感知機能と同調した目は目標を正確に捉え、操縦席は傷付けず、ローターだけを砕いて相手の飛行能力を奪う。

しかし同時に、無茶が過ぎたのか、鉄球も砕けてしまう。

しかしそんなことは気にせず、墜ちていくヘリや戦闘機を藤原たちに預け、光秋は目標のヘリへと距離を詰めていく。その速度はいつもの比ではなく、衝撃波を吹かせながらあつという間にヘリに追いついてしまう。

と、

「もつと急げっ！あの白いのに追いつかれるぞ！」

「こっちはこれがもう限界ですよ！」

慌てた男の怒声と、半泣きの男の声が頭に直接流れ込んでくる。

——この期に及んで！——

その声に怒りを強めた光秋は、クレーンの腕を投げやすいように持ち替えようとする。

その時、

「……」

自身の左手を伊部が強く握ると同時に、聞き覚えのある声——綾の声が脳裏に響く。

——怒っちゃダメだよ——

——……わかってるよ——

やんわりとした声は怒りの熱を少しだけ、しかし充分なくらいに冷まし、怒りの中にも冷静さを取り戻した光秋は目標を凝視し、狙いを定める。

そして、

「！」

右腕を一杯に振り上げ、クレーンの腕と鉄球を繋いでいた鎖を飛ばす。

申し訳程度に残った鉄球の欠片が重石となって鎖はしつかりとヘリの尾部に絡まり、ニコイチに引つ張られてそれ以上前進できなくなる。抵抗して無理やり進もうとするものの、それ以上の力でニコイチに鎖を手繰り寄せられ、瞬く間にニコイチの腕の中に

納まる。

左脇に抱えたヘリに怒りを再燃させようとしたのも一瞬、光秋は各部のローターを握り潰して飛行能力を奪うと、振り返ってベースへ向かう。

「急いじゃダメだよ」

「わかってますよ」

現実の伊部の声を耳で聞き、口で応じると、光秋は抱えたヘリの乗員たちを気遣って速度に注意しつつ、可能な限り素早くベースへ戻る。

ニコイチの姿を確認したベースでは所々で喝采の声上がり、それを見た光秋は少し照れる。

—どうもな……何度か同じことはあったが、やっぱり慣れないねえ……—

思いながら着地し、ヘリを地面に下ろす。

同時にニコイチの輝きも静まり、カバーが閉じていつも通りの姿に戻る。

ヘリに武装した青服数人が駆け寄り、ドアを開けて中にいる者たちを引きずる様にして外に出す。

その内の1人の顔が拡大され、静止画となったそれを見た光秋は、

—支部での説明にあつた写真の人！—

と、その時の記憶と比べながら確認する。

（目標確保お！）

直後に外音スピーカー越しに、降ろされた者たちの顔を確認していた人の宣言が響き渡り、光秋は肩の力が抜けるのを自覚する。

「終わりましたねえ……………」

「まだ安心しちゃダメ。まだ終了宣言はされてないんだから…………ところで大丈夫？ また赤くなつたみたいだけど？」

「少し疲れた感じはしますけど、そんなじゃありません。とりあえず、もうひと頑張りですね」

伊部の注意と心配に応じると、光秋は気持ちを締め直す。

その時、

……………？……………何だ？——

寒気とも違う気配を覚え、光秋は気配がする辺り——へりの周囲を見やる。

その意思を拾って、坂本の映像と入れ替わりに別の映像が表示される。

「あの時の？」

人垣の隅に立つジュースを奢ってあげた赤毛の少女の姿に、思わず声を出す。

「…………？」

同時に、少女の目つきがおかしいことに気付く。

直後、

「……………お前の所為だ」

「？」

「お前の所為でこんな！」

叫ぶと同時に、少女は右手を坂本にかざす。

「！」

直感的に危険を感じるや、光秋は考えるより先にニコイチの右拳を少女と坂本に間に叩き込み、怪力が大地を介して伝わった振動と、大きな物が急速に動いたことよって生じた突風で周囲の人々が一斉に倒れる。

当然少女もバランスを崩し、構えが解かれて事なきを得る。

「ふー……………今の……………」

「超能力で何かやろうとしたね。パンチ出して正解」

ひと安心の息をつきながらの光秋に、伊部は駆け付けた入間主任に押さえられる少女を睨む様に見ながら応じる。

「光秋くん。ちよつと降ろして」

「え？……ここですか？」

「そう。早く」

「あ、はい！」

唐突な伊部の頼みに戸惑いつつも、光秋は席を機外に出し、突き出していた右手をコクピットの前に持つてきて伊部を降ろす。

その間にも少女は、

「何で止めるんだよ！コイツが悪いんだろ！悪い奴退治しようとして何が悪いんだよ！」

と、入間の取り押さえから逃れようとしながら、数メートル離れた光秋の耳にもよく聞こえる程の声で騒ぎ続ける。

「……………泣いてる？」

その声色に、光秋は若干の湿り気を感じる。

そんなことに関わらず、伊部はニコイチの手から降り、少女の前に向う。
そして、

「！」

パァン！というよく通る音が響き渡り、光秋は心臓を跳ね上げる。

目を凝らせば少女の左頬は赤くなり、伊部は右手を大きく上げている。

「張つたいた？」

理解した刹那、

「あなた、何様のつもり！」

強い意志を含んだ伊部の怒声が響く。

「私たちの仕事は、あくまでも捕まえること。刑の執行は裁判所の仕事なの。それをあなたは、目先の感情であの人を傷付けようとした。例えば相手が犯罪者でも、捕まった人に暴力を加えることは罪なの。あなた自身の事情は知らないけど、その制服を着て現場にいる以上、その辺は守らないといけない。子供だからって言い訳も通じない。例えば未成年でも、特エスは警察権に関わる仕事なの。それに伴う責任も負わなきゃいけない。今みたいなこと、二度としないで」

――罪を憎んで人を憎まず、か……………――

怒鳴っているわけではないが強い口調で言う伊部に、光秋はそんなことを思う。

「……………」

少女の目から光るものが落ちた気がするが、さすがに光秋の視力ではよく見えない。その間にも、坂本の両腕を青服2人が掴み、護送車へ運ぼうとする。

と、

「……………」

バチツという音が聞こえたかと思うと、光秋は音が聞こえた辺り――上空を見る。

直後、

「!」

視線の先——ベース上空の一点に無数の稲妻が走る。

——あれは!——

10月の合同演習の際の記憶が浮かんだのも一瞬、ガシャーン!という音が響き、
「空が割れた!?!」

誰かの叫びの様に、稲妻が走っていた辺りに黒い大穴が空く。

そして、

「!.....」

穴から出てきた物を見て、光秋は絶句する。

それは10月の夜警の際、初めて黒球に遭遇した時に戦ったUKD—03改め、DD
—02。その頭部左側には、装甲下のNフレームが古傷の様に赤々と光っている。

56 第二の使者再び

「……！」

穴から現れたDD―02を見て絶句したのも束の間、光秋は特大の悪寒を感じると、すぐに機内に戻ってハッチを閉め、ニコイチを立ち上げて02と対峙する体勢になる。ガスマスクのレンズの様な形をした02の目が光った刹那、5つのNクラフトを吹かして急速に接近し、右手に持った赤い光の刃を伸ばした剣を振り下ろす。

「！」

光秋はそれ以上の速さで左手を伸ばし、02の手首を掴んで剣を止める。

「速く退避して！コイツは本当に危険なんです！」

足元にいる人々にそう怒鳴る間にも、02は力を掛けて剣を下ろそうとする。

付近の人々は慌てて2機の巨人の許から逃げ去り、自分の周囲に誰もいなくなつたことを確認すると、

「よしー！」

光秋は短く呟き、02の腹部に右蹴りを入れる。蹴る直前に左手を離し、体をくの字に曲げた02は吹き飛んでいく。

50メートル程飛ばされたところで02は5つのNクラフトを吹かし、蹴りの力を殺し切って地面から数メートル浮かんで体勢を立て直す。

そこで光秋は、ようやく相手の全体像を把握する。

――前に壊した左手と腹の扉のヒビはない。光の剣も背中に2本ある。唯一残っている傷は顔くらい……必要な部分は直してそうでない部分は後回し、あるいは「この傷の礼は」ってやつか？ マンガじゃないんだよ！――

心中に毒づいた直後、02は剣を振り上げて瞬間的に接近してくる。

「！」

咄嗟に右に避けてそれをかわすと、02の胸部に右突きを食らわす。

「！」

それでバランスを崩したと見るや、飛ばされていく02を追いながら腹部の赤い扉に腰溜めにした突きを連続で叩き込む。

――ココさえ貫ければ――

直後、02の背中から2つの影が跳び出す。

「？……！」

何だと思った一瞬後、左右の斜め上から白刃を突き付けられる様な悪寒を感じ、反射的に後退すると、直前まで自分がいた辺りを赤い光弾が交わる様に飛び、着弾した地面

から2本の湯気柱が上がる。

「！」

改めて見れば02の上部の羽根がなく、五角形をしたそれが光弾の来た上空に2つとも浮かんでいる。

—あの羽根、推進補助だけじゃないのかっ!?!……!——

敵の新機能に驚愕するや、先端をニコイチに向けた2つの羽根から再び光弾が放たれ、光秋は身を屈めて避けると滑るように縦横に動いて撃ち続けられる光弾を寸でのところでかわしていく。

が、その間に相手の接近を許し、正面に迫った02が右手の剣を振り下ろす。

「！」

すぐに左手で手首を掴んで止めるが、今度は左手にも剣を持ち、こちらは振り下ろそうとする直前に右手を伸ばして止め、ニコイチと02は互いに押し合う形となる。

「その細い体で、ニコイチよりも力持ちってことはないよな！」

叫ぶと同時に光秋は両腕に力を込め、02の腕を徐々に押し返す。

その時、

「！」

ニコイチの左右に先程の羽根が飛来し、光弾の狙いを定める。

「クッ……」

02を押さえているために動くことができず、その間にも左右の羽根の先端から強烈な悪寒を感じる。

刹那、

「!?」

ニコイチの前後からサン教の黄色い戦車が羽根目掛けて投げ込まれ、燃料、あるいは残っていた弾薬に引火したのか、正面衝突した2台の戦車は爆発する。それに煽られた羽根は狙いを外し。左の弾はニコイチと02の胸辺りの僅かな隙間を、右の弾はニコイチの背中すれすれを過ぎていく。

——三佐と曾我さんか！——

直感した光秋は左足を02の腹に入れ、蹴り飛ばして距離をとる。

02が着地して体勢を立て直すと同時に羽根が背中に戻り、左腕を前に出した構えで光秋は思案する。

——あの羽根、厄介だな。死角に潜り込んでくる上に、ニコイチの苦手な光線ときてる………どうする？——

しかしいい案は浮かばず、その間に両手に剣を持った02がニコイチに迫る。

「!」

光秋も迎え撃とうと両足を力を込める。

が、踏み出そうとする直前、

（農らを忘れるでないわあ！）

「？」

外音スピーカー越しに藤原の怒声が響いたかと思うと、ニコイチの頭上すれすれをサン教の戦車が飛び、02の頭部に直撃して爆発で機体を煽る。

（加藤！行けえ！）

「！」

直後に通信機から藤原の声が響き、脊髄反射で反応した光秋は02との間合いを瞬時に詰め、腰に一杯に溜めた右拳をその腹部の扉に放つ。

体勢を崩していた02は勢いよく飛んで地面に背中を着くが、肝心の扉は無傷だ。

「クソ！やっぱり赤くならないと……でも、さっき使ったばかりでまたなれるのか

？！

好転の兆しが見えない状況に、光秋は奥歯を噛み締める。

と、再び藤原から通信が入る。

（加藤よく聴け。今の様に農らが援護するから、お前はその隙を突いて攻撃しろ。それを繰り返せ）

「え?……繰り返す、ですか?」

(持久戦に持ち込んで消耗させるの)

首を傾げる光秋に、伊部の声が応じる。

(01の時もしばらく経ったらバテてきたでしょ。何で動いてるかはわからないけど、向こうもずつと動けるわけじゃない。時間が経てば動けなくなっちゃう。あとは黒い空間に巻き込まれないように気を付ければ、ガス欠になるなり撤退するなりするでしょうから)

「なるほど!了解しました」

伊部の説明で理解した光秋は、起き上がる02に対して再び構える。

と、

「!また羽根か!」

02は下部の羽根を飛ばし、左側から来る悪寒に光秋は地面を蹴って上昇し、直後にニコイチの左の足跡に湯気柱が立つ。

しかし、

——しまった!飛んだら下からも……—

思う間にニコイチの下に羽根が回り込む。

その時、

（右に避ける！）

「！」

通信機越しの声に、光秋は反射的に右へ動く。

直後にミサイルが直撃し、爆発に煽られた羽根は左にブレて光弾がニコイチの左横を掠めていく。

（オレたちもいいるんだよ！）

「タツカー中尉！」

通信機から響く声に右を見ると、F-22の編隊がベース近くまで接近してくる。

（加藤二曹。話は聞いている。奴をとにかく消耗させるぞ！）

「了解です！」

頼もしそうな古谷大尉の通信に、光秋は活力を籠めて応じる。

（各機、散開して四方から攻撃しろ！）

直後に古谷の指示が通信を駆け、それまで固まっていた編隊が崩れて四方八方から02にミサイルを撃つ。

自らに向ってくるミサイルを02は避け、羽根の光弾で撃ち落とし、紙一重で直撃をかわす。

そして、

「あさあ！」

回避でできた隙を突いて接近した光秋が右突き、左突きを腹に入れ、右飛び蹴りを食らわす。

突き飛ばされた02は3つのNクラフトを吹かして何とか止まるが、間を置かずミサイルの集中砲火を受け、今度は数発の直撃を受けて四方からの爆風に煽られる。

そこへ、

「あさあ！」

一気に懐に入った光秋の腰溜めにした右拳が腹に入り、02はまた吹き飛ばされる。しかし今度は先程よりも素早く体勢を立て直し、漂っていた2枚の羽根で迫るミサイル群を撃ち落としていく。

それによって生じた黒煙に紛れて光秋は接近し、3発目の右正拳突きを放つ。

が、

「！」

一瞬早く02が剣を突き出し、すぐに左に避けるものの伸び切った右腕に光が当たってしまう。

光に触れたニコイチの装甲が焼け爛れ、光秋自身の右腕にも焼かれる様な激痛が走る。

「！」

奥歯を噛み締めてそれに耐え、02の脇を歩き過ぎると、振り返りざまにその背に右蹴りを食らわす。

が、それは一瞬だがニコイチの動きが止まってしまうことである。

「！」

蹴った直後に光秋は左右斜め上から鋭い悪寒を感じ、視界の端に2枚の羽根を捉える。

その時、

（させるか！）

古谷の声が通信機に響くや羽根にミサイルが着弾し、爆発で煽られた羽根は狙いを外して2発の光弾がニコイチの頭部すれすれを飛んでいく。

「古谷大尉……ありがとう……ございますー！」

02から距離をとりつつ、光秋は行き過ぎた光弾に冷や汗を流しながら礼を言う。

（油断するな！）

「はいー！」

古谷の叱責に素直に応じると、光秋は羽根を背中に戻して光の剣を消した02と構えながら向き合う。

(……妙だな)

「何です？」

古谷の呟きに、光秋は問う。

(何故奴は羽根を全て使わない？その方が本体も合わせて五方向から攻撃できるのに、何故2枚しか使わないんだ？)

「……確かに！」

古谷の指摘に先程までの戦闘の様子を思い出し、光秋はハツとする。

(もしかしたら……加藤二曹、俺が合図したらアイツに仕掛けてくれ)

「？……了解！」

古谷の指示に一瞬首を傾げながらも、すぐに策があると察した光秋は気を引き締めて答える。

(ペガサス・リーダーより各機！ミサイルがまだ残っている者は奴を囲むように飛べ。ただし俺の合図があるまでは撃つな)

古谷の指示の下、02の周囲に9機のF-22が集まり始め、一定の距離を開けつつも囲む様に飛ぶ。

「……………」

それを戸惑う様に目で追う02を見つつ、光秋は呼吸を整えながら古谷の合図を今か

今かと待つ。

その間にも、02は上部の羽根を2枚放つ。

(よし。ペガサス2から5は今出た羽根を引き付けろ。足止め程度でいい)

((了解!))

間を置かずの古谷の指示に応じるや、呼ばれた4機は双方の羽根にまとり付く様に飛んで進行を妨害する。

と、F-22の1機の左翼底側を羽根が掠る。

(うお!)

「タツカー中尉!」

同時に通信機に響いたタツカーの声に、光秋は思わず声を上げる。

(掠っただけだ。心配ない)

直後に返ってきた声に、光秋はひとまず安心する。

「古谷大尉!」

(まだだ。もう少し待て)

すぐに焦った声を古谷に掛けるが、冷静な声を返される。

その間にも02の周囲に残った編隊は、進路妨害を除こうと02が振り下ろす光の剣を巧みにかわし、その周囲を囲み続ける。

そしてついに、

（よし！残った者は新しく出た羽根を引き付けろ！加藤二曹は奴にかかれ！）

「了解！」

02が残りの羽根2枚を放つや古谷は指示を飛ばし、光秋は応じると同時に02に接近する。

「！」

一気に懐に入るや腰溜めにした右拳を腹に食らわし、くの字に曲がつて吹き飛ばされる02を追ってさらに左拳を入れる。

さらに追いながら高度を上げると、

「あさあ！」

気合いの叫びと共に02の頭部に右飛び蹴りを叩き込む。

顔面に直撃を食らった02は体勢を立て直す余力もなく、眼下の森の木々を倒しながら大の字に落下する。

「行ける！」

僅かながらヒビが入った頭部に、光秋は活路を見い出す。

光を消した剣を肩に戻しながら02は立ち上がるものの、その動きには先程までのキレはなく、疲れた体に鞭打つ様にしてなんとか体を起し、直後に息を切らす様に戻って

きた4枚の羽根を背中に繋ぐ。

（思った通りだ）

古谷の確信した声が通信機越しに届く。

（羽根の誘導兵器といい、光の剣といい、奴は武器が多い分エネルギーの消費も激し。手数を増やしてやればバテるのも早くなるというわけだ）

「……………なるほど！」——古谷大尉……………すごい——

古谷の説明と、なによりもその観察眼の鋭さに、光秋は思わず感動する。

その間にも02は上昇し、ふらつきながらニコイチと同じ高度まで上がってくる。

その一連の動作を見ても、もうあまり余力がないことがわかる。

——さて、ここで引き上げてくれるか？その場合、また黒い空間に巻き込まれないように注意しないと……………

身構えながら02を見据えつつ、光秋は周囲を警戒する。

直後、

「！」

02は5つのNクラフトを吹かしてニコイチに突進する。

——玉砕覚悟かよ——

唾棄する様に心中に言うや、光秋は右拳を腰に引く。

瞬く間にヒビの入った02の顔が迫り、光秋は右拳を放とうとするが、

「？」

拳を放つ一瞬前、02はニコイチの上を飛び越えてベースへ直進する。

「？……！」

予想外の事態に束の間動転するも、すぐに気を取り直して後を追う。

しかし、

「速い……！」

もともと出遅れたこと、何よりも5つのNクラフトを全力で吹かして飛ぶ02の速度に、光秋は見失わないようにするだけで精一杯になる。

一足先にベース上空に着いた02は眼下を見下ろし、護送車の1つを見据えるとその許に急降下し、紙の箱でも破る様に護送車の外装を剥がして右手に人影を掴む。

「？……！！坂本さん？」

拡大映像に映る02に握られた坂本の姿に、光秋は驚愕する。

「人質にするつもりか？」

怒気を含んで言いながらも02との距離を詰め、ベース上空に着いたのと同時に02も坂本を掴んだまま同じ高度まで上がってくる。

「……」

身構えつつ、光秋はどうやって人質を解放するか考える。

その時、

「？」

02は腹部の扉を開け、そこに手足を振って抵抗する坂本を押し込んでしまう。

扉が閉まり、02が一瞬身震いしたかと思った、次の瞬間、

「！」

02の節々から赤い燐光が漏れ出し、各関節のカバーが胴体から末梢に向って開いて赤い骨格を露わにする。

「！……」

同時に、今までの比ではない強烈な悪寒が光秋を襲う。

―人を取り込んだ？DDシリーズも赤くなるのか？―

目の前の予想外の事態に圧倒され、戦闘中であることも忘れて動揺してしまう。

そして、これが隙になる。

「！」

動揺している間に02は一瞬でニコイチに迫り、光秋は慌てて後退する。

しかし、右手で振り下ろされた光の剣の先が前に出していた左腕を掠ってしまう。

「……………」

左腕を走る痛みに光秋はやつと現実に戻り、改めて赤くなつた02と対峙する。

—さつきより速い！それに人を抱えてるぞ……？—「どうする？」

咄く間にも02は左手にも剣を持ち、二刀流にした腕を胸の前で交差させて突進してくる。

「！」

2本の光の刃が振り払われる直前、光秋は跳ねるように上昇してそれをやり過ごす。
と、

——……独りは嫌だ……—

「え？」

消え入りそうな声を聞いた様な気がしつつも、振り返つて向かってくる02の斬撃を
右にかわす。

と、

—これで独りじゃない—

「？」

同じ様な声が聞こえたかと思うや、座敷の様な一段高い場所に座つて持論を述べ、それに大勢の人が賛同し、頼られる視線を向けられる光景が脳裏をよぎり、それに安心す

る様な、少し酔う様な気持ちが始まりを感じる。

—この感じ……テレパシー？—

綾と精神感應した時とどことなく似ている感覚に、光秋は半ば確信を抱く。

—相手は……—「坂本さんなのか？」

振り返りながら自問すると、02が再び迫ってくる。

「！」

あまりの速さに今度は避けることができず、振り上げられた02の両手首を掴んで斬撃を防ぐ。

—!? 重い!—

赤くなる前よりも強く押してくる腕力に、光秋は驚愕しつつも歯を食い縛って押さえる。

直後、

—! 不味い!—

下側の羽根2枚が放たれ、一瞬でニコイチの左右に着く。

と、

—おかしい。何かがおかしい—

「？」

坂本の声と共に、彼を取り巻く崇拜者たちの光景が脳裏をよぎる。縋る様に集まる崇拜者たちの視線からは異様な圧力を感じ、その気持ちに応えられるのか、そもそもこれが自分の欲していたものなのかという不安を覚える。

刹那、

「！」

左右から来る悪寒に、光秋は手首を押さえている手を軸にして02の上に逆立ちする。

ニコイチを外した光弾は互いの羽根を撃ち、それぞれ一部を爛れさせながら落ちていく。

「！」

手を離し、勢いに乗ったまま光秋は一回転し、その勢いを乗せた左踵蹴りを02の後頭部に食らわせて距離をとる。

——孤独を恐れる人が、孤独でなくなるために弱い人たちの受け皿になろうとした……

「！」

振り返って02を見やりつつ、先程見えた光景にそんなことを思う。

02が残り2枚の羽根を放つやソレらは縦横無尽に駆け巡り、光秋は四方八方から来る光弾に行く手を塞がれて思う様に動けなくなる。

「クッー」

ニコイチの感知機能ですぐに反応し、縦横に動いて紙一重で直撃はかわすものの、それでも所々掠ってしまう。何よりも、実質一カ所に釘付けにされてしまう。

—こんなの、いつまでも続けられないぞ？—

そう思った直後、

——しまった！——

羽根の攻撃に氣を取られて、02の懷への接近を許してしまう。

「……………」

左右から挟む様にして振るわれる斬撃を手首を掴んで押さえるものの、強力な腕力に腕が折れそうになる。

と、

—いけない！この流れは不味い！—

「……………」

崇拜者の中にテロ紛いの主張をする者が現れ、それが徐々に広がっていく危機感、自分もそれに合わせた弁を述べなければならぬという焦り、それでも何とか流れを是正したいという思いが伝わってくる。

——……周りに合わせなければ、また独りになるから？——

02の挟み込もうとする力を齒を食い縛って押さえながら、光秋は問う様に思う。さらに、

—もうダメだ。俺じやどうすることもできない！誰か止めてくれ！誰か………！
周りが望むことを声高に、笑顔で主張しつつも、心は自分の力では最早どうすることもできなくなった絶望が広がっていく。

——…弱い人間が、自分よりさらに弱い人たちの受け皿になろうとして、結局なり切れず、孤独を恐れて深みにはまっていった……—

一連の思惟を、光秋はそう理解する。

そして、

—教祖だ何だと言っても……この人も人間なんだ！孤独を恐れ、仲間を欲し、そこから漏れないように心を砕いて、いつしか自分を失ってしまった……そういう、当たり前人間なんだ！だから……—「僕は、貴方を助けたいっ！」

理解は決意を生み、決意は宣言となって現れる。

直後に光秋は02の腹部に左蹴りを入れて突き飛ばし、自身も後退して間合いを取る。

一瞬後に左右から光弾が迫り、ニコイチを撃ち漏らした弾はそれぞれの羽根を掠って表面を爛れさせる。

間を置かず02が斬りかかるが、光秋はそれを跳ねる様に上昇してやり過ごす。

「?.....さつきより遅い?」

足元を過ぎていく02の速さに対し、光秋は2枚の羽根を付けていた時よりも僅かだが遅いと感じる。

「.....そうか!」――羽根は誘導兵器だけじゃなく、補助推進機も兼ねてるんだ! Nクラフトの数が減れば、当然最高速度は下がる!――

02とその周囲を飛ぶ羽根を見比べながら理解するや、

「.....行けるかもしれない!」

希望を含んだ声で呟き、通信機を繋ぐ。

「藤原三佐! 02が出した羽根2枚、何とか押さえてください。羽根さえなければ行けるはずです!」

（何?.....了解した。意地でも押さえる。お前は本体に集中しろ!）

「はい!」

よく通る声で言い切るや、02がこちらに向き直り、光秋はニオイチを通じてそのレンズ型の目を見据え、構える。

呼吸を整えて意識を集中すると、自身を圧迫してくる悪寒の中に、微かだが違う感覚を覚える。

——……温かさ？……人の息吹……人がいる感覚——

感覚が与える印象、そして以前01や先程までの02と戦った時には感じなかった経験から、そう強く確信する。

「……やはりあそこか」

さらに意識を研ぎ澄ますと、その感覚が02の腹部——赤い扉から出ていると判る。

——あの人は、子供を盾にし、多くの人を見捨てて逃げた。それは事実だ。でも、それも弱さ——人間なら誰しもが持つものの所為。どこかで何かが違えば、あの人の所にいるのは自分だったかもしれないんだ……だから——「まず助ける！しかる後、出る所に出てもらう。人間だからこそ弱さに屈するが、そこから立ち直るのも人間だから……だからニコイチ、僕に“力”を貸せええええええ！」

判断によって生じた熱は叫びとなって広がり、それを表す様にニコイチの節々の力バーが展開して骨格から放たれる赤い燐光が周囲を照らす。

頭部の角が伸び、意識がニコイチ大に拡大するや、光秋は02に突っ込む。

赤くなったことで向上したNクラフトの推力は瞬時に02との間合いを詰め、

「！」

同じく向上した感知機能で温かさの源をより正確に見据えるや、02の腹部の扉に手を伸ばす。

が、

「！」

02は両手の剣を振り下ろし、それを掴んで止めることで両手が塞がってしまう。

しかし、

「ならっ！」

光秋は頭部に意識を集中させ、体中から湧き出る燐光が額の角に集まる。

燐光を纏った角は赤い刃となり、光秋は頭部を後ろに引くと、

「オオオオオオオ！」

雄叫びと共に体を大きく曲げて頭を振り下ろし、赤く輝く角で02の胸部から腹部を

縦一の字に切り裂く。

同時に両手に力を込め、赤く輝く手で02の手首を握り潰す。

「！」

空いた右手を扉の割れ目に突っ込んで広げ、中で気絶している坂本を取り出すや、距離を取って地上へ下りる。

屈んで右手を下ろし、駆け寄って来た青服たちが坂本を運び出すのを見届けると、

「あとは……」

振り返って上空の02を見据える。

輝きを失い、ぎこちない動きで坂本を求める様に手を失った右腕を伸ばしながら地上に迫る02に対し、光秋は呼吸を整えながら右手を腰に引き、握った拳に意識を集中する。

瞬く間に右腕全体が赤い光に包まれ、特に右拳は眩しい程の輝きを放つ。

そして、

「あさあああ！」

跳ねる様に上昇して02の懐に入るや、腹の底からの気合いと共に煌々と輝く右拳を腹部に叩き込む。

燐光を放つ拳は02の胸を貫通し、腕を引き戻すや糸が切れた様に落ちていく。

「これで、終わった……」

大の字になって地上に倒れ伏す02を見据え、そこからもう何も感じないことを確認すると、光秋は安堵の息を漏らして地上に降り立つ。

降下の間に燐光は消え、カバーが閉まり、角も縮むと、いつもと同じ姿でニコイチは着地し、雲の合間からのぞく太陽が多少汚れの浮かんだ体を白く輝かせる。

57 事後のひと時

ハッチを開けて操縦席を機外に出すと、光秋は鼻で大きく深呼吸する。

「……………」

肺を満たす冷たい空気が、長時間の戦闘で火照った体をいい具合に冷ましてくれる感覚を覚える。

「…………黒球はいつたい何がしたかったんだ？」

多少冷めた頭でそんなことを考えつつ、胸から腹にかけて刃物で斬り付けられた様な傷を走らせ、腹に大穴を空けたDD-02を見やる。

その周囲には、すでに数名の緑服や青服が集まっている。
と、

「コイツ！アタシのサイコキネシスが効かなかった奴じゃん！」

「？」

聞き覚えのある叫び声に下を見やると、いつかの赤毛の少女が左右に他の少女を、後ろに入間主任を従えて興奮気味にニコイチを見上げている。

「あの時の子……確か、桜っていったか？」

数日前の食堂での記憶を辿って名前を思い出そうとするや、

「そここの白いの！動かしてる奴！いるんだろう？下りてこいよ！」

「……………特エスなら、大丈夫か？」

半ば喧嘩腰で少女——桜は続け、表情こそよく見えないものの声から凄じい剣幕であることを察した光秋は、機密に触れるか多少迷いながらも大人しく従った方がいいと判断し、ニコイチに左膝を着かせてリフトで地上に下りる。

その間に、少女たち3人はニコイチの許に駆け寄り、その後を入間が落ち着いた足取りで付いていく。

地上に着いてリフトから降りると、光秋は正面に並ぶ3人と向かい合うことになる。

「あーあんた……………この間のオッサン……………」

「どうも……………桜さん、でよかったか？」

真っ先に驚きの顔をする桜に、光秋は努めて冷静に応じる。

「馴れ馴れしく名前と呼ぶなよ！」

「え？この人がこの間話してたジューズ買ってくれたおじさん？」

「なんか、パツとしない人だねえ？」

「ハハ、そりやどうも……………」

機嫌悪く応じる桜、少し驚いた顔をする右隣のメガネに黒い長髪の少女、品定めの視

線を寄こす左隣の茶色く長い癖毛の少女、三者三様の反応を見ながら、光秋は苦笑いを返す。

と、3人に追い付いた入間が、光秋とニコイチをそれぞれ見やり、落ち着いた声で問う。

「あなたが、白い犬？」

「え？白い犬って、京都のエース？こいつが？……エスパードと思ってた」

入間の問いに桜は、あからさまに動揺を浮かべる。

——正確な情報つてのは案外伝わらないもんなんだな……—

桜の態度にそんなことを感じつつ、光秋は改めて4人を見据える。

「そうです。紹介がまだでしたね。京都支部所属の加藤光秋です。そしてコレが我が相棒ニコイチ……またの名を、『白い犬』です」

右手の親指でニコイチを指し、少し格好付ける様な言い回しで自己紹介してみせる。

その時、

「……あれ？」

急に脚から力が抜け、崩れる様に膝を着いてしまう。

「ちよつと！大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫。ちよつと疲れただけで……—」——さすがにそろそろ限界だったか

……………決めたい時には決まらないもんだー

心配そうな顔をするメガネの少女に、光秋は右手を前に出しながら自嘲して応じる。

「……三枚目」

「……仰る通りで」――緊張の糸が切れたんだな……………でも、ようやく終わったー！――
癪毛の少女の呟きに苦笑いして返しつつ、光秋はやつと心からの安堵を覚える。

と、

「ちよつと光秋くん！大丈夫？」

伊部が慌てて光秋の左隣に駆け寄り、左腕を首に回して立ち上がるのを手伝ってくれる。

「ええ。なんとか……………」

左腕から伝わる伊部の実感、そして鼻をくすぐる体臭に、光秋は多少疲れを見せながらも安心した笑みを浮かべて応じる。

立ち上がる拍子に、伊部に警戒の顔を浮かべながら半歩程後ずさる桜の姿が目に入る。

――さっきのことでビビってるのか……………？最高レベルの超能力者といっても、一皮剥けば歳相応の子供か……………

思いつつ光秋は、気が強く暴力的だとばかりだと思っていた彼女の意外な一面を見ら

れたことへの得な気分と、特エス以外の彼女の顔を見られたことへの安心感を覚える。

と、藤原三佐、小田一尉、竹田二尉が歩み寄ってくる。

「無理が祟ったようだな。先に基地に戻れ」

言いながら、藤原は光秋の前に立つ。

「いや、でもまだ作戦が……」

「検査した者たちは順次護送している。森の中に落ちた者たちの搜索はこれからだが、それはお前がいなくとも大丈夫だ。なにより、もう体が持たんだろう?」

「……はい」

藤原の指摘に、光秋は渋々それを認める。事実、全身に鉛が付いた様に体が重く、一人で立てないことはないが足元がかなり怪しい有り様なのだ。

「心配するな。後は片付けみたいなものだからな」

「それに、足腰立たない奴がいてもしょうがないだろう」

「……そうですね」

小田の気遣いと竹田の単刀直入な指摘に、光秋は素直に応じる。

「少なくともニコイチは退げて欲しいところだが……飛ばせるか?」

「基地までなら問題ありません」

若干判断に困りながら問う藤原に、光秋は伊部から腕を離して自力で立ちながら応じ

る。

「ウム。それと伊部、念のため加藤に付いていつてくれ。加藤も、基地に着いたら念のため医者に診てもらえ。短い時間の間に続けて赤くなっただのはこれが初めてだからな。用心に越したことはない」

「了解」

伊部と同時に応じるや、光秋はリフトに歩み寄る。

「とりあえず竹田、終了宣言がされたら腹括つとけ」

「えっ！アレマジだったんすかっ!？」

「当たり前だろう。上官を振り回すとうなるか、体に教えてやる」

「ええ！そんなのパワハラじゃないっすか！三佐！助けてくださいよ！」

「……まあ、今回は竹田の無茶のおかげで加藤の負担が減ったのは事実だ」

「でしょ！」

「だが、指揮系統からの逸脱は問題だな……だから小田、ほどほどにな」

「了解です」

「三佐あ！」

——二尉……お大事に——

コクピットに上がる間に後ろから聞こえてくる藤原たちの声に、光秋は苦笑いしながら

ら心の中に言う。

リフトを仕舞つて操縦席に着き、ニコイチを起動させると、右手で伊部をコクピットへ上げる。

「二尉、大丈夫ですかね？」

「いつものことだから、あんまり気にしないで」

「はあ……」

伊部が補助席に着きながら返すと、光秋は操縦席を機内へ降ろす。

ハッチを閉めてふと足元を見ると、伊部が来て以来蚊帳の外にされていた桜たちが、好奇心と敵愾心を含んだ目でニコイチを見上げている。

「そんなにコイツが嫌いかねえ？」

思いつつ、ニコイチを立ち上げらせようと光秋は前を向く。

その時、

「！」

モニター正面——ニコイチの目の前に、黒いスーツを着た男が滞空しているのを見る。

「浮いてるってことはサイキキノ？何者だ!?」

動揺しながらも、光秋は男に観察の目を向ける。

身長は自分と同じくらいだろうか。短く切り揃えられた黒髪は少々癖があるものの、整った顔立ちと合わさって美青年という印象を与えてくる。氷点下を下回る気温にも関わらず防寒具の類は一切着けておらず、そのくせ涼しい顔で宙に浮いている。

と、男もモニター越しに光秋を見返してくる。

「……………」

睨んでいるわけでもないものの、途端に強烈な悪寒が、それこそ赤くなつた02にも劣らない程のものが光秋を襲う。

と、

「……………笑つた?—

(君は、面白い奴だね)

男は口元を少し上げると、本当に面白いものを見る様な目を向けて言う。

直後、

(物部!^{ものべ}……………お前物部か!?)

「?。」

外音スピーカーから藤原の動揺を含んだ声が響き、光秋はすぐに足元に目をやる。すぐに拡大映像が表示され、信じられないもの——さながら幽霊でも見る様な顔をしたら藤原が映し出される。

——三佐がこんなに動揺してる!?!——

普段からは考えられない藤原の様子に、光秋は驚愕する。

その間に、男は藤原の方に顔を向け、

（お久しぶりです、藤原さん。今は確か、三佐でしたね。お元気そうですねによりです）と、言葉通り久しぶりに会った知り合いに向ける様な笑みを浮かべる。

（今日は彼……白い犬でしたっけ？その様子を見に來ただけなのでもう帰りますが、近いうちにまたお会いできるでしょう。その時は盛大な催しをするので楽しみにしてください。では）

「……」

言うや男はレポートで消えてしまい、安堵した後の突然の事態に光秋は絶句してしまふ。

——あの人、三佐を知っていた？三佐の知り合いなのか？それに、僕の様子を見にきたって……——「伊部さん、あの人いったい……」

「私も、知らない……三佐なら知ってるみたいだけど……」

言いながら伊部は拡大映像の中の藤原を見、光秋もつられる様に視線を向ける。

——……三佐があんな顔するなんて……——

そこには未だ放心した様に男がいた辺りを凝視する藤原と、そんな藤原を見て顔を見

合わせる小田と竹田が映っている。

「……」

束の間迷った末に、光秋は通信機越しに呼び掛ける。

「あの、三佐……」

「！」

それで気を取り直したのか、映像の中の藤原がハツとしてニコイチを見上げる。

「今の人——」

（気にするな！）

遮る様に返すや、藤原は顔にあからさまな狼狽を浮かべる。

（それよりも早く基地に戻れ！そして休め！）

「は、はい！」

ただならぬ様子でそう続けられ、光秋は慌てて応じるやニコイチを直立させ、

「では、お先に！」

外部スピーカー越しに言うや基地へ向かって飛び立つ。

——あの、人、いったい何者なんだ？それに、何で三佐があんなに狼狽するんだ？——
答えようがない問いを心の中で弄ばせながらも、真つ直ぐに基地を目指す。
しばらく飛んで基地上空に着くと、光秋はモニター越しに下界を見下ろす。

「……これは、思った以上に騒がしいですね」

建屋の合間を忙しく行き来する大勢の人や車両に、思わずそんな言葉が漏れる。

「まだ作戦が終了したわけじゃないからね。報告とか補給とかあるんだよ。邪魔にならない所に下りて」

「はい」

伊部の説明に応じると、一時帰還の時同様に装備品置き場にニコイチを着地させる。操縦席を機外へ出して補助席を抱えた伊部を下ろし、自身も席を立つてリフトへ向かう。

「……今回はまた派手にやったなあ」

振り返った際に目に入った細かい傷が無数に付いたニコイチに思わず呟くと、光秋はリフトを出して地面へ下りる。

光秋がリフトから降りると、

「加藤二曹！」

数人の部下を引き連れた大河原主任が歩み寄ってくる。

「これは……ニコイチがここまで傷付けられるとはな」

おそらくこれまでで最大のニコイチの損傷に驚嘆しつつ、大河原は部下に指示を出して詳細を調べさせる。

「DD―02とやり合ったそうだな？」

「はい。正直、生きてるのが不思議なくらいです」

心配そうに問う大河原に、光秋は半ば冗談を言う様に返す。

「1週間の待ち惚けの末に災難だな。もつとも俺としては、新しいサンプルが手に入って儲けものだが」

「はは……」

冗談に冗談で返す大河原に、光秋は疲れた笑みを漏らす。

「話は三佐から聞いている。とりあえず今は休んでくれ。調子が整ったら武器のレポートを頼む。伊部二尉も、補助席のレポートよろしくな」

「はい」

「では、また後で」

伊部が応じたのを見ると、光秋は大河原に一礼し、2人は装備品諸々を返却して医療棟へ向かう。

「詳しいことは診てもらわないと判らないけど、気分としてはどう？」

「少し疲れた感じはありますけど、気持ち悪いとか頭痛が止まらないとかはありませんね。強いて言うなら、足元が少し頼りないかな？」

左隣を歩く伊部の問いに、光秋は感じたままを答える。

「また肩貸そうか？」

「そこまでじゃありません。大丈夫ですよ……伊部さんこそ、疲れてませんか？」

「私なんてどうってことないよ。殆ど座ってたようなもんだし」

「それでも、補佐役充分に……いえ、十二分に果たしてくれましたよ」

「……ありがとう」

光秋の素直な気持ちに、伊部は少し困った笑みを浮かべて応じる。

少し歩いて医療棟に着くと、2人はその正面玄関をくぐる。

——これは……予想以上に凄いな——

それが棟内に対する光秋の第一印象である。

病室はすでに埋まっているのか、廊下やロビーにまで人が溢れ、視界に入る者は皆必ず腕や脚を包帯で覆っている。

「まるで野戦病院だね。思ったより負傷者が出てたんだ……」

「……………僕、ここに来てよかったんでしょうか？」——すつこい場違いな気がしますが

……………

伊部の呟きに、光秋は少なくとも怪我はしていない自分に肩身の狭さを覚えながら訊く。

「なに言ってるの！過労もほつとくと大変なんだから。それに三佐も言ってたけど、短

時間に2回も赤くなつたのは初めてなんだから、異常がないか調べてもらわないと」
「……そうですね」

軽く叱る様に言う伊部に納得すると、光秋は診察室へ向かう。

幸いその周囲は空いているため、すんなりと部屋に入ることができた。

「おお、加藤。待つてたぜ」

「上杉さん！……」

診察机に座る上杉に一瞬驚きながらも、光秋はコートと制帽を脱いで床に補助席を置いた伊部に渡し、丸椅子に腰を下ろす。

「他の負傷者の手当ては済んだの？」

「ええ。ちようどひと段落したところに三佐から連絡があつて。それじゃあ……」

後ろに控える様に立つ伊部の問いに応じると、上杉は右手を光秋の額に当てる。

「うーん……多少疲れが出てるみたいだけど、心配する程じゃないかな。寧ろ合同演習で赤くなつた時よりもマシなくらいだぞ」

「……やつぱり、慣れてきてるんですね？ 僕がニコイチに」

「おそろくな」

呟く様に言う光秋に、上杉はカルテにペンを走らせながら応じる。

「オレも最初は心配したぜ。赤くなることはこれまで何度かあつたけど、2回続けてな

んてな。送られていた映像観た時はびっくりしたよ」

「映像？」

「現場の映像。仕事の合間に観たんだよ」

「ああ……」

書きながらの上杉の説明に、光秋は納得の声を漏らす。

「どっちにしろ、オレができることはないな。体調が優れないなら、水分摂って少し横になるといいさ。寄宿舎の部屋がまだ使えるかな？」

「それがいいかもね。じゃあ行こっか」

「はい。ありがとうございます」

上杉の診断に伊部が応じ、光秋もそれに相槌を打って一礼すると、伊部から受け取った制帽とコートを羽織って寄宿舎へ向かう。

医療棟を出て少し歩くと、光秋と伊部は寄宿舎の玄関をくぐる。

「ここは静かですね」

「まだ作戦中だからね。みんな外に出てるよ」

「……そうですね」

医療棟とは対照的に寂しいくらい静かな寄宿舎に漏らした感想に伊部が応じ、光秋も納得しながら返す。

途中でトイレに寄らせてもらい、自動販売機で500ミリペットボトルの温かいお茶をかうと、2人は光秋に宛がわれている部屋に着く。

布団を敷き、コートと上着、制帽をカバンの上に置くと、光秋はベッドに腰を下ろしてお茶を少し飲み、それも上着の上に置く。

「それじゃあ少し寝かせてもらいます。おやすみなさい」

「うん。おやすみ。ごゆっくり」

応じると伊部は部屋を出、その背中を見送った光秋は靴を脱ぎ、メガネを枕元に置いて布団を被る。

——……ああ、やつぱり疲れてたんだなあ……——

ドツと沸いてきた疲労感にそんなことを思う間に、意識は徐々に遠退いていく。そんなに広くない机、その椅子に腰を下ろし、学ラン姿の光秋は辺りを見回す。

——これは高校……いや、中学の頃か……—

同じ様な机が周りに並び、真正面に教卓、その後ろに黒板があるどこか見覚えのある教室に、漠然とそう判断する。

周囲には同じ学ランを着た男子たち、あるいはセーラー服を着た女子たちが三々五々にまとまってたむろしており、それを光秋は呆然と眺めている。

——この頃、周りと上手く着き合えなかったんだよね……自分のことを『社会不適応

者』って言ってたっけ――

この頃のことを思い出そうとしていると、そんなことが浮かんでくる。

それは決して周りに冷たくされたり、イジメを受けていたというわけではない。寧ろ周囲は光秋の体のことで適度に気を遣い親切にしてくれた一方、そんなことに関係なく当たり前に接してくれた。

――今にして思えば、僕の方から勝手に壁を作ってた気がする。体――障害のことで他人と違うと思い込んで、それで勝手にストレス感じて……もつと上手くやれていたら……――

そこで情景は一変し、DD―02との戦闘で見た坂本の思い出が浮かんでくる。

――独りになりたくなくて、人を集める……僕とは逆だな。でも……確かに独りは寂しいよなあ――

目の前を過ぎていく記憶に、教室で感じたことと合わさってそんな思いを抱く。

――独りは気楽な反面、どうしても寂しさを感じる。僕は気楽さから独り好きだったけど……それでも寂しい時は寂しかったからなあ……だから、独りにならないように行動するのは、人間としては寧ろ当たり前のことなのかもしれない――

そこで再び情景は変わり、綾と過ごした夏の日々が浮かんでくる。

――………思えば、この時がこっちに來て一番満ち足りていた時だったかもしれない

い。自分を必要としてくれる人……否、もうそういうことじゃなく、愛しい人と一緒に過ごせた、大事な時間だったから……でもこの時にしたって、もつと上手く向かい合っていれば……………

そこで情景は消え、周囲は深い闇に覆われていく。

……………夢、か……………

まだ覚め切らない頭でベッドに寝ている自分を認識すると、光秋は今までの情景をそう判断する。

——まとまりがあるんだか支離滅裂なんだかわからん夢だったなあ……………ま、夢だしな——
そう思うと上体を起こし、少し伸びてメガネを掛ける。

「もつと上手くやれていたら、か……後悔先に立たず、言ってもしょうがないことなのにな……………」

呟くと、上着の上のお茶を取って飲む。

寝る前はとても温かかったそれも今はすっかり冷たくなっているが、寝起きで喉が渇いている身にはちようどよく感じる。

「……………そういや、中学の友達の顔久々に見たな」

一気に半分程飲んで口を離すや、夢ことを思い出してそんなことを言う。もつとも、こうしている間にも夢の記憶は薄れていき、誰が出てきたかまでは思い出せない。

と、夢の記憶に触発されてか、今日までの忙しさの中で忘れていたことを思い出す。

「……………夜行バスに乗る前、同窓会したんだよな。結果として、あれがみんなと会った最後になったってことか……………」

思いながら、顔がどんどん俯いていく。

が、

「…………いや、何を弱気になってる！会いたければまた帰って会えばいい。それまでは何があっても生き延びてやる！友達にも家族にも、綾にだって、また会うまでは死ねない！意地でも向こう側に帰ってもう一度会ってやる！」

溜まった弱気を吐き出す様に独り宣言すると、残りのお茶を飲み干す。

「……………そういうや今何時だ？さすがにもう作戦も終わってるし、三佐たち帰ってきたかな？」

言いながら靴を履いてベッドから立ち上がり、カバンの上の上着を羽織ってポケットから腕時計を出す。

「11時20分か。どれくらい寝てたんだ？」

思いながら時計と数珠を左手首に巻き、上着のボタンを掛ける。

コートを羽織って制帽を被ると、空のペットボトルを持って部屋を出る。

途中のゴミ箱にペットボトルを捨て、トイレで用を足して廊下に出ると、

「光秋くん!? 起きたの?」

「伊部さん?」

ドアの前で通り過ぎようとしていた伊部と鉢会わせ、お互いに驚いた顔をする。

「ちようど起しに行こうと思ってたところ。三佐がみんなでお昼にしようって」

「わかりました」

応じると、光秋は伊部を追って食堂へ向かう。

「みんなもう戻ってるんですか?」

「うん。食堂のそばで待ってる。タツカー中尉や上杉君もいるよ。大丈夫だとは言っておいたけど、みんな少し心配してたな」

「タツカー中尉も?」

伊部の言った思いがけない名前に、光秋は意外な顔をする。

少し歩いて寄宿舍を出ると、2人は食堂のある建屋へ向かう。

と、

「?……光秋くん、あれ」

「なんです?」

突然歩を止めた伊部の視線を追って、光秋は近くの建屋の影を見る。

視線の先では、2人の人影が向かい合って話している。

「……古谷大尉と入間主任？」

「やっぱり、2人だよな？」

予想外な組み合わせに、光秋は半信半疑で呟き、伊部も自信ない様子で返す。

「楽しそうに話してるみたいですけど、大尉と主任は知り合いなんですかね？」

「さあ？会話までは聞こえないし、私もあの2人のことは知らないしね」

そんなことを話す間に、古谷と入間は近くの建屋に消えてしまう。

「……私たちも行こっか」

「そうですね」

人を待たせていることを思い出した伊部に光秋も応じると、2人は移動を再開する。

——古谷大尉と入間主任か……面白い組み合わせだけど、どんな関係なんだろう？——

2人が話している光景を思い出しながら、光秋は好奇心から考えてみる。

58 帰省の誘い

しばらく歩くと、光秋と伊部は食堂の前に着く。

「おお、伊部、加藤。待っていたぞ」

そこで待っていた一同を代表して、藤原が声を掛ける。

「体はもういいのか？」

「はい。寝たらすつきりしました。もともと大したことなかったみたいだし。ですよね
上杉さん？」

小田の問いに、光秋は上杉を見ながら答える。

「ああ。オレからも説明したがな。やっぱり本人の口から聞きたいんだろう」

「なんであれ、大丈夫そうでなによりだ」

上杉に続いて、その左隣に立つタツカーが安心した顔を浮かべる。

「お騒がせしました。もう大丈夫です。ところで、中尉こそここに来て大丈夫なんですか？」

「作戦は終わって、後は各所に報告書出するだけだからな。昼飯くらい何処で食おうが自由だ」

一礼しながら問う光秋に、タツカーは肩の力を抜いた様子で答える。

「まったくよー。仕事がひと段落したと思ったら、いきなりお前と飯なんてよ」

「嫌なら外で食え。凍って食い難くなっても知らねえけどな」

「嫌なこった」

上杉の右隣に立つ竹田のボヤキにタツカーが適度に噛みつき、竹田は手短に返す。

「さあ、ぼやぼやしてないで食事にするぞ。午後からは報告書を書かんとならんのだからな」

「「「はい」」」」

藤原の言葉に藤原隊一同が応じると、一行は食堂へ入る。

—報告書か……僕もN砲の奴書かないといけないんだよな。どうやって書けばいいんだろう?—

初めての報告書の書き方に不安を覚えつつ、光秋は昼食を購入して一行が待つテーブルに着く。

「うどんだけか。足りるのか?」

「ずっと寝てましたから、そんなに腹空いてないですよ」

左前に座る藤原に応じながら、光秋は一行の右端に座り、手を合わせてトレイの上のうどんをすすする。

——…そういえば、結局あの何者だったんだろう？——

大盛りの白飯片手に焼き肉定食を頬張る藤原を見ながら、基地へ帰還する直前に会ったスーツの癪毛男のことを思い出す。

——訊いてみるか？……いや、やめておいた方がいいか。少なくとも今は——

狼狽する藤原の顔を思い出すと、首まで出かかった問いをコップの水と一緒に飲み込んでしまう。

——…あ。人の事と言えば……——「タツカー中尉」

代わりに食堂に来る前の事を思い出し、光秋は正面に座るタツカーに声を掛ける。

「ん？」

「ここに来る前に古谷大尉が女の人と楽しそうに話しているのを見かけたんですが、なにかしりませんか？」

スパゲティを食べながら応じるタツカーに、光秋は古谷と人間が話している場面を思い出しながら問う。

「光秋くん。あんまり他人ひとのことを詮索するの、私感心しないよ」

「別にそんなんじゃないやしませんよ。ちよつと好奇心から訊いてみるだけです。それがわかったからどうしようって気は毛頭ありませんよ」

左隣で鯖の味噌煮定食を食べながら叱る様に言う伊部に、光秋は他意はないということ意識しながら応じる。

「女？どんな女？」

「遠くてはつきりとはわからなかったんですが、日ESO本部の入間主任って人に見えました。そうですよね？伊部さん」

「え？……うん。確かね……」

光秋の確認に、伊部はその時のことを思い出す様な顔で応じる。

「あんなこと言っても、やっぱり伊部さんも興味あるんじゃないか」

そんな伊部を見て可笑しくなった光秋は、気付かれない程度に頬を緩める。

「ESOの？……知らないな。というか古谷隊長、プライベートのことあんまり喋らないからな」

「そうなんですか」

タツカーの答えに応じると、光秋はうどんを一口する。

と、

「それよりさー」

それまで伊部の左隣で黙ってカレーを食べていた竹田が、テーブルに身を乗り出してくる。

「DDシリーズの名前、あれからずっと考えてて、やっといいのが思い付いたんだよ」
「興味ねえな」

「中尉……聞くだけ聞いてあげましょうよ」

「お前のその言い方も失礼だけどな」

素っ気なく返すタツカーに光秋が意見すると、竹田の左隣で塩ラーメンを食べている上杉が笑いながら指摘する。

そんなことにかまわず、竹田はうきうきとした顔で続ける。

「01が『ツアーング』！02が『ナイガー』だ！」

「ツアーング？ナイガー？……どういう意味です？」

「『ロイガー』と『ツアール』だよ」

「？」

胸を張って言う竹田に、由来が全く浮かんでこない光秋は質問するものの、返ってきた答えに余計に首を傾げる。

「『クトゥルフ神話』か？まさかお前がそんなものを知ってたとはな」

「ふん！なんかいいものないかなーと思って調べたんすよ」

藤原の右隣でフライの盛り合わせ定食を摘まんでいる小田が感心した様子で言うと、竹田は嬉しそうに応じる。

「ああ。20世紀にできた創作神話ですか。こっちにもあるんですね」

それでようやく話の核心がわかり、光秋は素朴な感動を覚える。

「ということは、お前の方にもあんのか。まあいいさ。いろいろ調べてよ、『人類の敵』って感じを出すにはこれしかねえだろうと思ってよ」

『人類の敵』、ですか……」——もつとも、今のところそんな感じだな——

竹田の説明に応じつつ、光秋は01——ツアリングと02——ナイガーと戦った時のことを思い出しながら心の中で納得する。

「……ん？でもなんでちよつと変えてるんですか？ロイガーとツアールでしょ？」

「そのまま付けたんじゃ能がねえだろう。相手の特徴も表現しようと思ってよ。ツアリングはゴリラみたいな見た目だったから、『コング』と『ツアール』を組み合わせ、『ツアリング』。ナイガーは騎士みたいな外見と剣で戦ったから、『ナイト』と『ロイガー』を組み合わせ、『ナイガー』。どうよ？」

『『どうよ？』と言われても……まあ、相手の特徴は確かに捉えていますね』

「お前という奴は……相変わらず興味のあることでは頑張るな」

「普段の仕事もそれくらいやる気出して欲しいぞ」

胸を張って説明する竹田に、光秋は返事に困り、藤原と小田は呆れた顔をする。

「いや、でも……興味があることで頑張れるのはみんなそうでしょう。僕だってそんな

感じですし」

「それはそうなんだがな……」

気になったことを言う光秋に、藤原が嘆息混じりに応じる。

食事を終わると、藤原隊一行は基地のコンピュータ室にあるパソコンを借りて多目的室へ向かい、光秋は伊部に手伝ってもらいながらN砲の運用とナイガーとの戦闘の報告書を作成していく。

「実際に使って感じたことを素直に書いていけばいいよ。ただし、『感想文』にならないようにね。使い勝手とか効果とか、実際に使用した時の状況をメインに書いていけばそれっぽくなるかも」

「はあ……」

左隣に座る伊部の助言に応じつつ、光秋は手元の紙にN砲本体の刃や、榴弾と散弾を使ったのことを箇条書きしていき、それがある程度まとまるとパソコンで文章にしている。

刃を付けたことで接近戦での使い勝手が向上し、もともとの射撃性能と合わさって遠近共に一層対応できるようになったことと、航空機に対する散弾の有効性を書く一方、箱型の弾倉では一度に使用できる弾の種類が限られるため、その改善を要求する。

「……こんなところですかね？」

「うん。こんな感じ。じゃあ後は一人でできるよね？私も補助席の報告書かなきゃいけないから」

「たぶん大丈夫でしょう。ありがとうございます」

伊部に礼を言うと、光秋は先程と同じ要領でナイガーとの戦闘報告を作成する。

箇条書きを書き始めて少しすると、

「トイレに行ってくる。少しの間だが頼む」

「了解です」

「……………」

テーブルを挟んで正面に座る藤原が、左前の小田に言い付けるとトイレへ向かい、光秋は両腕を上げて伸びをする。

「たあく、毎度のことだけど報告書って面倒臭えな」

「ぼやくな。これも大事な仕事だ。俺たちの報告がゴレタンの今後の方針に影響するんだからな」

右前でゴレタンの運用報告書を作成しながら愚痴る竹田に、小田が軽く説教する。

「そーっすけど……そう言う一尉は、サン教のロボットのこと書いてるんすよね？

えーつと……」

「ベースの資料には『アポロン』とあったぞ」

『アポロン』？なんか合わねえな。野暮ったい見てくれだから、もう『ヤボット』でいいんじゃないっすか？」

『ヤボット』って……DDシリーズに比べて随分雑ですね」

落差の激しい竹田のセンスに、光秋は思わず呆れた顔をする。

「あんなロボットモドキはそんなもんでいいんだよ。第一敵なんだし」

「それはそうですね……」——モドキって言うんならゴレタンもじゃ？……て言うところから黙つとこ——

そう思い、首を回して気持ちを切り替えると、光秋は作成作業に戻る。

多目的室から出た藤原はトイレには向かわず、人気のない廊下に移動して周りに人がいないことを確認すると、上着から携帯電話を出して電話を掛ける。

「……………」

（……もしもし？）

「富野か？ 儂だ。少しいいか？」

（かまいませんよ）

電話の相手は陸軍の富野大佐だ。

もつとも、電話越しの2人の間には階級の上下や所属の違いといった壁はなく、気心の知れた者同士の適度な気安さだけがある。

(どうかしましたか？今作戦の事後処理中でしょうか？)

「本当はもう少し早く連絡しようと思ったのだが、時間が取れなくなって……物部が現れた」

(……………!?)

電話の向こうから沈黙が返ってくるが、藤原は富野がどんな顔をしているのか、今の言葉を聞いてどんな気持ちでいるのかよくわかる。

——驚愕と狼狽。幽霊にでも会った様な気分だろうな——

それはそのまま、現場に癪毛の男が現れた時に藤原が感じた気持ちである。

ややあつて、電話越しの富野が応じる。

(……………確か、なんですか？)

「儂はこの目で見た。役目を終えた加藤が基地に帰還する直前だ。あれは物部だった」

(……………そんな馬鹿な話か？)

「儂自身、そう思つとる……が、奴ならあるいは」

(……………)

2人の間に、重い沈黙が流れる。

戦闘報告の箇条書きを一通り書き終えると、光秋は再び伸びをする。

「……………僕もちよつとトイレ行つてきます」

「それなら、帰りにお茶買ってきてくれないか。これで全員分」

パイプイスから立つや、小田が紙幣を差し出してくる。

「わかりました。熱い緑茶で？」

「ああ。いいよな？」

「私はそれで」

「オレもなんでも」

「了解です」

小田、伊部、竹田の返事を聞くと、光秋は受け取った紙幣をズボンのポケットに入れ、多目的室を出てトイレへ向かう。

少し歩いてトイレのドアを開けると、

「あれ？三佐がいない……他のトイレかな？」

誰もいない室内に首を傾げつつ、用を足して多目的室へ戻る。

と、数メートル先に多目的室に入っていく藤原を見る。

「やっぱり違うトイレだったか……でもなんでわざわざ？」

そんな疑問を覚えつつ、部屋の前自動販売機でペットボトルのお茶を5つ買い、それらを器用に持って部屋に入る。

「戻りましたあ」

「おう。ありがとう」

小田が応じると、光秋はお茶を配ってお釣りを返し、自分の席に座る。

「そういえば三佐」

「なんだ？」

「さつきトイレに行った時、見掛けませんでした。違う所に行きましたか？」

「……」

なんとなしに訊いた光秋の質問に、藤原は何故か押し黙ってしまう。

「あ、ああ。そうだ。運動がてら遠いトイレにな。それだけだ」

「はあ……」

あまりに不自然な態度に、光秋をはじめ小田たちも不審に思うものの、深く追求してはいけないものを感じ、その話はそれでおしまいになる。

藤原自身それを感じ取ったのか、あからさまに話題を変える。

「そういえば伊部。家にはもう連絡したか？」

「いいえ。バタバタしていたのでまだです」

「なんです？」

変な雰囲気を作ってしまった後悔もあって、光秋もその話に加わる。

「明日から3日間の休暇がもらえるだろう。せつかく近くまで来たのだから、休みの間

は家に帰るよう勧めてな」

「ああ。伊部さんの家って岩手でしたよね」

藤原の説明に、光秋は確認しながら応じる。

「そうだけど……よかつたら光秋くんも来る?」

「えっ?」

伊部の唐突な誘いに、光秋は一瞬驚いてしまう。

「突然なんです?」

「だって光秋くん、京都に帰っても寮に引き籠つてるだけでしょう?それにこんなこと言うのもなんだけど、家族にも会えないし。それだったら私の家に来なよ。両親にも紹介したいし」

「なんだ?お前らもうそんな仲だったのか?」

「違います!」

真顔で問う竹田に、伊部が空かさずハッキリと答える。

「わかつてるよ」

「はあ……」

笑いながら応じる竹田を見ながら、光秋は筋が通っているのかいないのかいまいちわからない伊部の説明に思い悩む。

「伊部さんの家、興味はあるが……」「せっかくの一家団欒に、僕なんか邪魔していいんですか？」

「……」

「!?」

問いに答える代わりに、伊部は両手で光秋の顔の左右を挟んで自分の許に引き寄せ
る。

「邪魔なんて言わないの。光秋くんは私の弟分なんだから、そんな遠慮はしなくていいの。行きたいか行きたくないか、それだけはつきりしなさい」

「それは……行きたいです」

静かだが強い語調、そして間近に迫った伊部の顔にドギマギしつつ、光秋は本音を述
べる。

「よろしいー!」

笑いながら応じると、伊部はようやく手を離す。

「でも、僕着替え持つてきてませんよ?」

「それなら大丈夫。お父さんのを借りるといいよ。サイズもだいたい同じくらいだし」

「はあ……」——思わず言ってしまったが、伊部さんの家か……どんな感じなんだろう?——

多少の不安を覚えつつも、光秋は少し楽しみにしていることを自覚する。

「ウム。そういうのもいいだろう。なんなら伊部の家で年を越してこい」

「いや、三佐。さすがにそれは俺たちが決めていいことじゃあ……しかし、偶にはいいかもな。伊部の両親によりしく言っておいてくれ」

「はい」

藤原と小田の言葉に、光秋は嬉しそうに応じ、

「はしやぎ過ぎて伊部を襲うなよ。親父にぶつ飛ばされつぞ」

「しません！絶対」

ニヤケる竹田に断言する。

「とにかく、レポートがひと段落したら電話入れておくね」

「はい。お願いします」

伊部に応じると、光秋は報告書の作成を再開する。

――伊部さんの家かあ……――

先程までの疲れを感じさせない軽やかな動きでキーボードを打ちながら、光秋は薄っすらと微笑みを浮かべる。

しばらくして戦闘報告書を書き終わると、光秋は大きく伸びをする。

「……………」

「へえ。よく書けてるじゃん」

「どうも」

横から画面を覗く伊部に、固まった首を回しながら返す。

「どれどれ?……て、『ナイガー』って打ってねえじゃねえかよ!」

席を立てて見に来るや、全て「DD-02」と表記されていることに竹田は不機嫌な声を上げる。

「いや、さすがに公式な文章には使えないでしょう? 隊内ならまだしも」

「逆だろう! 何のために名前付けたんだよ!」

光秋の返事に、竹田はますます不機嫌になる。

「落ち付け竹田。周りの人の迷惑だ。そんなに自分の考えた名前を使って欲しいなら、コードネームの意見書を書いて中央に送るこつた」

「ええー!?!」

小田の冷静な指摘に、竹田はげんなりとした顔になる。

「あれすつげえ面倒つて聞きましたよ?」

「公式の文章で使つて欲しいんだろ? だったらそれくらいの苦労はしろ」

「ええー……………」

小田に勢いを殺がれたのか、竹田は消沈して席に戻る。

—そんなに面倒なのか? ま、いいや—「またちよつとトイレ行つてきます」

そんなことは気にせず、席を立つや光秋はトイレへ向かう。
用を足し、手を洗って廊下に出ると、

「……………」

「「あ……………」」

入間隊の特エス少女3人と鉢会わせる。

「なんだ。さっきのオッサンか」

「『なんだ』とはご挨拶だね……………」

言葉こそ素っ気ないものの、「興味あり」と顔に書いてある桜に応じつつ、光秋は3人を見やる。

「君たちだけか。入間主任は？」

「別の場所で報告書書いてます」

「やっぱりどこもそうか」

「それより、えーつと……………加藤さんだっけ？体大丈夫？」

棒付きの飴を咥えながらの茶色い癬毛の答えに共感を覚えながら返すと、長い黒髪のメガネが心配そうに訊いてくる。

「ああ。問題ないよ。ちよつと疲れただけだから。休んだら治った。心配してくれてありがとうね。えつと……………」

かきぎすみれ

「柿崎 董です。こっちの赤毛が柏崎 桜で、かしわぎさくら 飴啜えてるのが北大路菊きたおおじきく」

「おい！ 董！」

「勝手に紹介しないでよ！」

メガネ——董の紹介に、桜と癪毛——菊はすぐに怒るが、

「だって加藤さんはもう自己紹介したんだから、私たちもするのが礼儀でしょ？」
と、当の董は真面目な顔で返す。

「そうかもしれないけどさー」

「この人が私たちのこといろいろ嗅ぎ回り出したら董ちゃんにも責任あるよ？」

「嗅ぎ回りません！ 『犬』 って呼ばれてるけどきちんと人間ですから」

桜と菊のやり取りに断言すると、光秋は改めて3人を見回す。

「えーつと？ 赤毛が柏崎さん、メガネが柿崎さん、茶髪が北大路さんか。とりあえずよろしく」

確認して一礼すると、光秋は多目的室へ向かう。

「どこ行くのさ？」

「僕も報告書の作成の途中でね。仕事に戻らないと……」

柏崎の問いに振り返って応じると、光秋は少し考えて、

「なんなら一緒に行くかい？ 言つとくが、ウチの隊の人たち怖そうな人が多いよ。柏崎

さんを引つ叩いたお姉さんとか」

と、イタズラの笑みを浮かべながら問う。

「！」

最後の方に反応したのか、柏崎が心なしか2人の陰に隠れる。

「ア、アタシはいいや。べ、別にあのお姉さんが怖い訳じゃないからな！」

「桜ちゃんが行かないなら私も行かない」

「2人が行かないなら私も」

「そうか。とりあえず、寒いから風邪ひかないようにな」

桜、菊、堇の返事に応じると、光秋は歩みを再開する。

歩きながら、先程のやり取りと柏崎にジュースを買ってあげた時を思い出して、少し不思議な気持ちになる。

——子供が苦手な僕が、10代になるかならないかの子3人と普通に話せてるか……やっぱり、綾のおかげかな？——

そう思うと、自然と笑みがこぼれる。

——……そういえば、あのメガネの子……柿崎さんか。どつかで見たような？……どこだっけな？——

唐突に柿崎に既視感を覚えるものの、細かいことは思い出せないまま多目的室に戻

る。

「遅かったな？腹でも壊したか？」

「いいえ。廊下で少し話し込んだりして」

藤原の軽い心配に応じながら、光秋は自分の席に着く。

「なんか三佐と関係あったような？……ま、いつか。さてとね！」

既視感と藤原に関係を感じるものの、同時に訊いても答えられないような気がしたのでなにも言わず、気を取り直して最後の報告書——鉄球の正式装備化の意見書を書き始める。

箇条書きを終えると作成に入り、重い球を振り回すだけで生まれる破壊力、それをピンポイントで作用させられる使い勝手のよさ、弾薬などを消費しない燃費のよさを強調してまとめていく。

「……こんなところかな？……！……」

眩きながら書き終えると、再び伸びをする。

それに続く様に、藤原たちも両腕を伸ばす。

「はあー！やっと終わったぜ……」

言いながら、竹田は伸ばした体を左右にねじる。

「それにしても、光秋くん報告書書くの早いよね？内容もきちんとまとまってるし」

「そうですか？ 要領がいいだけでしょ」

伊部の褒め言葉に、光秋は多少謙遜しながらも微笑んで応じる。

「いや。お前がいけない間に読ませてもらったが、なかなかいいできだと思うぞ。少なくとも竹田より上手い」

「へーへー。どうせ俺はこういうの下手ですよ」

藤原の比較に、竹田は口をへの字にして不貞腐れる。

「ま、それはともかく、みんなできたなら俺のパソコンに送ってください。まとめてに出しときます」

「わかりました」

小田に応じると、光秋はN砲と戦闘の報告書のデータを小田のパソコンに送信し、「すみませんが、1つ個人的に出したい報告書があるんで、コンピュータ室で印刷してきます」

席を立てて疊んだパソコンを左脇に抱える。

「……すみません。俺も電話が」

言いながら小田も席を立ち、2人して多目的室を出る。

すぐに立ち止まって電話に出た小田に一礼して、光秋はコンピュータ室へ向かう。

「もしもし沖一尉？……ああ、大丈夫だが」

―沖一尉か。小田一尉、なんか嬉しそうだな―

後ろから聞こえてくる小田の声に、少しだけ共感を覚える。

しばらく歩くと、角を曲がった所で並んで歩いてくるタツカーと曾我に会う。

「……あ、タツカー中尉。それに曾我さんも」

「あらワンちゃ——加藤君」

「奇遇だな。仕事終わったのか？」

「僕はあと一つ報告書を出すだけです。ちょうど印刷しようとコンピュータ室に行くところで」

「印刷？メールじゃないのか？」

「個人的に渡したい物なんです。装備の件で」

「装備？……もしかして鉄球のこと？さっきも持ってたけど」

「そうです。アレを正式化してもらおうと思って」

タツカーと曾我の質問に、光秋はそれぞれ答えていく。

「アレを正式化して……おいおい、なんのジョークだ？」

「いいえ。僕は本気ですよ。意外と使い易いし、僕の戦い方にも合ってるので。実際ここにメリットをまとめたんですから」

大袈裟に肩を竦めるタツカーに、光秋はあくまでも真顔で応じ、脇のパソコンを叩い

て示す。

「そういう訳ですので少し急ぎます。失礼ながらこの辺で」

「おお。悪かったな止めちまつて」

「いいえ。では」

タツカーに応じると、光秋はその脇を抜けていく。

が、少し進んだ所で一端止まり、

「それに、僕お邪魔みたいですしね」

と、タツカーに微笑みを向ける。

「……いや、そんなじゃないぞ！偶々そこで会って話してただけだからな！」

「フツ……なにあたふたしてるんです？中尉」

「……フフツ！」

慌てるタツカーとそれを茶化す曾我の声を後ろに聞きながら、光秋は可笑しさに小さく笑みを漏らす。

コンピュータ室の印刷機にパソコンを繋ぎ、提出用、自分用、予備の3部を印刷すると、光秋はパソコンを返却し、部屋を出て大河原に電話を掛ける。

（……二曹か。どうした？もう大丈夫か？）

「はい。お騒がせしました。鉄球のレポートを渡したいんですが、今何処にいますか？」

(……本当に書いたのか?)

「えっ!?……冗談だったんですか?」

半ば呆れた様に言う大河原に、光秋は少しでも眉を寄せる。

(まあ半分はな。しかし、せっかく書いたんだから読ませてもらおう。そこから別の案が浮かぶかもしれないからな。装備品置き場にいるから来てくれ)

「了解です」

応じると電話を上着に仕舞い、右脇に報告書を抱えて装備品置き場へ向かう。

装備品置き場に着くと、光秋は周囲を見回して大河原の姿を探す。

「二曹……こっちだ」

声のした方を見ると、ニコイチの足元に佇む大河原を見付け、そこに歩み寄る。

「こちら、電話で話したレポートです」

「ん……ほお? なかなかよく書けてるじゃないか」

「ありがとうございます」

受け取った報告書をパラパラと捲りながら言う大河原に、光秋は褒められたことを素直に喜ぶ。

「詳しいことは後で改めて読ませてもらおう。実は俺の方も君に用があつてな」

「なにか?」

「ニコイチの損傷の確認が済んだのでな。ブロックも取り寄せたから修復を頼む」
「ああそつか。了解です」

応じると、光秋はリフトに駆け寄ってコクピットに上昇する。

——終わったから安心してたんだな。すっかり忘れてた——

思いながら認証を済ませると、大河原が用意したニコイチウムのブロックを破損箇所
に当てていく。

固形石鹼を塗り付ける様な仕草は、戦闘によつて生じた穢れを落とす禊に見えなくも
ない。

「こうして見ると、やっぱり今回は凄かったですね……」

改めて見る傷だらけのニコイチに驚嘆しながら、外音スピーカー越しに呟く。

（まあな。あの光の剣と羽根の光弾——とりあえず『ビーム』と呼ばせてもらうが、それ
の前にはニコイチウムといえどこのザマというわけだ）

『ビーム』、ですか…… — 竹田二尉が食い付きそうだな —

大河原はあくまでも真面目に応じるものの、その如何にもマンガ的な表現に、光秋は
思わず竹田が喜ぶ様子を想像してしまう。

その間にも修復を続け、全ての傷を消すと多少体積の減ったブロックを箱に戻し、右
手の指先でフタを摘まんで閉めてみせる。

(だいぶ器用なことができるようになったな)

「乗れば乗っただけ馴染んできます。赤くなる時なんて自分の体と区別できませんから」

感心する大河原に応じると、光秋はニコイチに左膝を着かせてリフトで降り、カプセルに収容する。

「僕は三佐の所に戻ります。レポートの方よろしく願います」

「了解だ。とりあえず読ませてもらう」

「では」

言いながらカプセルを上着の内ポケットに入れると、光秋は多目的室へ向かう。

しばらく歩くと、光秋は多目的室の入口をくぐる。

「戻りました」

「遅かったな。印刷機が混んでたか？」

「いえ。大河原主任に直接渡しに行つて、そこでニコイチの修復頼まれました」

藤原の問いに応じながら、光秋は席に着く。

「そういえば、今回はかなり酷かったもんな……ニコイチであれ程なら、今の兵器で連中に太刀打ちできるのか？おまけに超能力が効かないときてる」

「まあ、確かに……」

心なしか怯える様に言う小田に共感する様に、光秋は薄ら寒さを覚える。
しかし、

「にしても、敵メカがビーム撃ったり剣にしたりしてよー。ニコイチもどつかからビーム出ねえのか？」

「ああ。やっぱりこうなるか……」「ニコイチは出ませんね。個人的にはほっとしてますが」

真剣に不満がる竹田を見て、その可笑しさに寒気も一瞬で過ぎ去ってしまう。
と、

「おお。藤原じゃねえか」

「鬼崎中佐！仕事は終えられたんですか？」

「取り調べが一通り終わったところでよ。ひと息つきに来た」

「！」

鬼崎中佐が藤原隊の許に歩み寄ってくるのを見て、小田と光秋は敬礼して応じる。
が、一方で、

「……」

竹田と伊部も敬礼するものの、鬼崎を露骨に睨み付ける。

「2人とも、そんな顔しないでくださいよ……」

そんな2人の態度に、光秋は薄っすら冷や汗をかく。

もつとも、当の鬼崎はそんな視線を受け流し、光秋の許に歩み寄ってくる。

「……」

近づいてくる縫い目痕の大男に、思わず生唾を飲む。

「それと、坂本からお前に伝言頼まれてよ」

「?……僕にですか?」

予想外の言葉に、思わず面食らう。

「白い犬つてのはお前のことだろう」

「はい」

「こう言ってくれとよ。『長年の憑きものがとれたみたいだ。ありがとう』、だと」

「!……ありがとうございます!」

これまた予想外の伝言に目を丸くしつつも、それを伝えてくれた感謝の意を示すために深く頭を下げる。

「フツ!この間の発言は撤回だな。命を預け合うことに不安はない。これから機会があればよろしく頼むぞ。加藤二曹」

「は、はいっ!」

「じゃあな……と、お茶買うの忘れた」

慌てて敬礼する光秋に笑って応じると、鬼崎は廊下の自動販売機に向う。

「『ありがとう、か……』」

部屋から出ていく鬼崎の背中を見送りながら、光秋は改めて声に出してみる。

「この間の護送任務で一緒になった警官の人にも言われましたけど、やっぱり素敵な言葉ですね」

「だね。言われただけで気持ちがよくなるから不思議。例え敵対した人からでも」

その時のことを思い出しながら言うと、伊部が微笑みながら応じ、自然と温かな気持ちになる。

しかし、

「もつとも、坂本やサン教の幹部たちには、この後厳しい裁判が待ってるんだろうな

……」

「……まあ、確かに」

小田の一言に、光秋は目の前の現実を見せられ、温まった気持ちが急激に冷えていく。
が、

「しかしそれも、加藤があそこで必死になった結果だろう」

「……………」

思わぬ言葉を掛けられ、光秋はそれを言った藤原を見る。

「重罪はまず避けられん。だがな、彼らは罪を償う機会を——やり直すチャンスを得られた。それは、ひと思いに肅清という名の殺害を行うよりも困難であり、だからこそ尊いのだと儂は思う。まあ、見方を変えれば甘いということなのだろうがな」

「甘い……やつぱり、そういうところはありますよね」

「だが、どんな者にもチャンスを与えることは大事なことでと儂は思うぞ。そもそも今回の任務は対象の確保であり、儂らESOの仕事は捕まえることなのだからな。その点では、加藤のしたことは理に適っていた」

——捕まえることが仕事………罪を憎んで人を憎まず……—

藤原の言葉を受けて、伊部が柏崎を叱った時に浮かんた言葉を思い出す。

「……とりあえず、この話はこの辺にしよう。儂らの仕事はもう終わった。あとは司法屋の仕事だ」

「……そうですね——あの行動が正しかったのかどうか、それは判らない。でも、後悔はしていない。あの時助けたいと思ったことに、嘘はないから——

藤原に応じながら、光秋は気持ちを整理する。

——……それで『ありがとう』と言われたんだから、それでいいじゃないか——
そうまとめると、再び気持ちが温かくなる。

「……さて、小田。報告書の送信は終わったか？」

「ちよつと待つてください。あとは……よし。今送つとききました」

「ということは、これで農らの仕事は完全に終わりだな。各自パソコンを返却後、帰り支度を始めろ」

「『了解』」

藤原の指示に応じると、藤原隊一行は席を立ち、光秋以外全員がパソコンを抱えてコンピュータ室へ向かう。

「かー。やつと帰れるぜえ」

首を鳴らしながら、竹田が疲れを含んだ声を漏らす。

「加藤は先程返してきたのだろう」

「はい」

「なら、先に行つて自分の荷物をまとめておけ。それが済んだらニコイチの用意でもしている。伊部の家の近くまではソレで行け」

「わかりました。では、お先に」

藤原の指示に応じると、光秋は一行と別れて寄宿舎へ向かう。

寄宿舎の宛がわれている部屋に着くと、光秋はすぐに荷物の確認を始める。

「……………よし。忘れ物は……………ないな」

確認を終えてカバンの口を閉めると、部屋を見回して最終確認をし、カバンを右肩に

斜め掛けして部屋を出る。

そのまま装備置き場へ向かうと、人がいないことを確認して広間にニコイチを出現させ、乗り込んで認証を済ませる。

「さて……」

モニターが点いたのを確認すると操縦席を機外に出し、伊部に携帯電話を掛ける。

（はい？）

「光秋です。ニコイチの準備終わりました。装備置き場にいるのでいつでも来てください」

（もう？早いねえ。私は今から荷物まとめるから、もう少し待つて）

「わかりました。ごゆっくり」

言う光秋は電話を切り、操縦席を機内へ戻す。

「あー、温ったけ……」

吹き付ける温風に、思わず力の抜けた声が漏れる。

しばらくすると、

（お待たせ）

外音スピーカー越しに伊部の声を聞き、光秋は下を見ると各々にカバンを提げた藤原たちが歩み寄ってくるのを確認し、ニコイチに左膝を着かせてハッチを開ける。

右手で伊部をコクピットに乗せると、抱えていた補助席を操縦席の左側に付け、そこに座ってシートベルトを締めていつでも動けるようにする。

「では、僕たちはこれで」

「ウム」

「迷惑にならない範囲でのんびりしてこい」

「伊部の親父さんたちに可愛がられてこいよ」

「ありがとうございます。では」

藤原、小田、竹田のそれぞれに応じると、光秋は操縦席を下ろしてハッチを閉める。

「伊部さん、家の住所は？」

「えつとねえ……」

伊部の答えを聞きながら、パネルを叩いて行き先の住所を入力する。

「……よしつと。じゃあ、行きます」

「うん。お願い」

伊部の返事を聞くと右ペダルをゆつくりと踏み込み、ニコイチを徐々に上昇させる。

——いよいよ伊部さんの家か……どうなるかな？——

地図を見て方向を確認し、前進を始めながら、光秋は期待と不安に胸を躍らせる。

と、不意にあることを思い出す。

「あ、そうだ。すみませんが、着いたら洗濯機貸してもらえますか？いろいろな洗いたくて」

言いながらカバンを見やり、中に入っている洗濯物のことを思う。

「いいけど……基地ランドリー使わなかったの？」

「……えっ!？」

伊部の指摘に、光秋は思わず顔を向けて驚愕する。

「……そんなの、あつたんですか？」

「うん。大浴場の脱衣所に……もしかして、気付かなかった？」

「……………」

気まずそうに訊いてくる伊部に、光秋は羞恥の浮かんだ顔を伏せて無言を返す。そんな2人を乗せて、ニコイチは入力した地点へ向けて真っ直ぐに飛んでいく。

姉貴分の帰省編

59 伊部家

基地から飛び立ってしばらく。

光秋は左耳の通信機越しにE S O岩手支部と連絡をとる。

「はい。了解です。よろしくお願いします……とりあえず一旦岩手支部に下ろしてもらって、そこからバスかタクシーで行きましょう。家にはもう連絡されたんですよね？」

「それは大丈夫。光秋くんがコンピュータ室行ってる間にやつておいたから。確かにこんな大きいのが、私の家の近所には下ろせないもんね。その前にみんなビックリしちゃう」

「近所迷惑も甚だしいですね」

左隣の補助席に座る伊部の返事に、光秋は冗談混じりに応じる。

一方で、一通り話すと、それまで頭の片隅にあったシコリの様なものを意識してしま

う。

「……どうしたの？ 浮かない顔して」

顔に出たのか、伊部が少し心配そうな顔をして訊いてくる。

「いえね……今回の作戦、死者は出てないんですよね？」

「まだ正式な発表はされてないけど、確かね。怪我人はたくさん出たつて藤原三佐が言つてたけど。それがどうかしたの？」

「主に二つ思うところがあつて。一つは、僕が攻撃した機の人たちはちゃんと助かつたんだつていう安心感。もう一つは……立場上、覚悟が足りないんじゃないかつて不安です」

「覚悟？」

「人を殺すかもしれないつて覚悟。あんな物を振り回してたら、その内あつても不思議じゃないでしょ？」

言いながら、N砲やガトリング砲を使つていた時のことを思い出す。

「そういう覚悟が、僕は足りないんじゃないかつて……」

「……私もね、始めて人に銃を向けた時は怖かつた」

「？」

突然自分のことを話し始めた伊部に首を傾げながらも、光秋は直感的に耳を澄ます。

「相手はレベル4のサイコキノで、単純な強さなら向こうの方が上だったんだけどね。

三佐の指示で連携して、なんとか無傷で捕まえた。でも、その時もし撃つて命令され

てたら、きつと撃てなかった。指が固まつてるのが自分でもわかつてたから。そのことを後で三佐に相談したらね、さつき多目的室で言つてたのと同じ様なこと言つてた」

「僕たちは捕まえるのが仕事、ですか？」

「そう。それでふつきれちやつて。私たちの仕事は捕まえること。なら、どんな強敵が相手でも殺さない覚悟で挑まなきゃいけない、きつちり司法の場に引き渡す覚悟で挑まなきゃいけないって」

「殺さない覚悟……司法の場に引き渡す覚悟……罪を憎んで人を憎ます……」

「そう。なにも人を殺すだけが手段じゃないもの。寧ろもつと難しく、だからこそ意義のある道なんだと私は思う」

「……難しいから、意義がある、か………ありがとうございます！なんかすつきり………て程じゃないけど、なにかが浮かびそうな感じがしました」

「そう？よかった！」

「ありがとうございます！」

伊部の笑顔に光秋は思わずもう一度礼を言い、深々と頭を下げる。

まだ不定形だが形に成りかけている何か。それを胸の中に転がしながら、ニコイチは雲の合間から射す夕陽に照らされて空を駆けていく。

しばらく飛ぶと、ニコイチは岩手支部上空に着く。

建物の配置は京都支部と大差ないことを確認すると、光秋は駐車場の片隅に着地し、伊部を下ろして自分もリフトで降りるとカプセルに二コイチを収容する。

「うん。じゃあよろしくね……すっかり暗くなっちゃったね」

「ですね。もうすぐ6時だ」

おそらくは家に連絡を入れていたのだろう。携帯電話を閉じてカバンと補助席を抱え直しながら言う伊部に応じながら、光秋はカプセルを内ポケットに仕舞って時刻を確認する。

「最寄りのバス停は……こっちなだね。行こう」

「はい。補助席持ちましょうか？」

「大丈夫。それにこれは私の荷物なんだし」

「はあ……」

光秋が曖昧に応じながら斜め掛けしたカバンの帯を調整すると、2人は伊部が携帯電話の地図機能で調べたバス停へ向かう。

着いて少ししてバスが停まり、2人は乗り込んで後部右側の席に並んで座る。車内には2人と運転手以外誰もおらず、エンジン音と走行音だけが律義に響いている。

「……誰もいなくてよかったかな？流石に制服でバスに乗るのって変ですかね？」

「確かにね。ていつてもタクシーはもったいないから」

「ですね」

伊部に同意しながら、光秋は右の窓を見る。

煌々と照明が灯る車内に対して外はすでに真つ暗であり、街灯や建物から漏れる灯り以外なものも見えず、景色を楽しむことなどできない。その代わり、窓を鏡にして自分の顔を確かめることはできる。

——今朝一応剃ったけど、髭伸びてないかな？……——

口周りを撫でながら、光秋は心なしか身嗜みの心配をする。

しばらくしてバスを降りると、2人は伊部家に向かって2メートルは雪が積もった街を歩き出す。

「流石岩手というか、雪が凄いですね。カバンもあるからバランス取り難いや」

「新潟も雪国でしょ。それとも光秋くんの方は違うの？」

「いいえ。僕の方も雪国ですよ。それでも半端に除雪された歩道って歩き辛くって」

「まあね。かく言う私も、久しぶりだから厳しいや」

そんな愚痴を交わしながら、人1人が辛うじて歩ける程度に除雪された歩道を、伊部、光秋の順に並んで歩いていく。雪が降っていないだけマシといったところだ。

と、2人の右手を1台のタクシーが通り過ぎていったかと思うと、すぐ前で停車し、後部席の窓が開く。

「?。」

なんだと思つて顔を見合わせると、

「やつぱり! ホウちゃん!」

「ハルちゃん!」

窓から顔を出した長い赤毛の女性に、伊部は驚きながらも嬉しそうな声を上げる。

「すみません。ここ以降ります」

そう言つて赤毛の女性は会計を済ませ、領収書を受け取るとタクシーを降り、2人の——というよりも伊部の許に駆け寄ってくる。

燃える様な赤毛を肩甲骨を覆う辺りまで伸ばし、ほっそりとした顔つきは色白な肌と合わさつて暗い中でも綺麗な印象を抱かせる。白い厚手のコートを着た体は光秋より少し小柄だ。左肩には黒い大きなカバンを提げている。

「久しぶりいっ! いつ以来だっけ?」

「いつだろう? 私も久しぶりに帰ってきたから。でも一緒になるなんて、凄い偶然っ!」
互いに手を合わせながら、赤毛と伊部は顔一杯に笑顔を浮かべる。

「……伊部さん、こちらの方は?」

隅に置かれていた光秋が、遠慮がちに加わってくる。

「あ、ごめんね。日高春菜ちゃん。ひだかはるな私の幼馴染みだよ。ハルちゃん、私の弟分の加藤光秋

くん！」

「はじめまして……」

「弟分？仕事の後輩じゃなくて？」

伊部に紹介されながら前に出された光秋の服装を見て、日高は首を傾げる。

と、おもむろに口元を歪め、

「もしかして彼氏？これから家族に紹介するとか？てつきり年上が好みかと思ってたけど」

と、笑みを浮かべながら言う。

「そうじゃないって！いろいろ事情があつて家に帰れないから、私の家で骨休みするよ」
うに言ったの。上司からの指示でもあるんだよ」

「そうなの？ま、そういうことにしときますか」

「すつごく気になる言い方なんだけど……」

日高の返事に、伊部は不満そうな顔を浮かべる。

と、日高は光秋に歩み寄り、

「光秋くん、だっけ？」

「はい？」

「じゃあ、コウちゃんだ」

『コウちゃん』、ですか……」

唐突に付けられた愛称に、光秋は返事に困る。

「改めまして、ホウちゃんの幼馴染みの春菜です。よろしくね」

「よろしくお願いします」

日高の自己紹介に、光秋は会釈して応じる。

「立ち話もなんだし、そろそろ行こう。こんな所にずっといたら風邪ひいちゃう」

「だね。わたしも家族待たせてるし」

伊部の提案に日高が応じると、3人は移動を再開する。

「そういえばさ、ホウちゃんたちはいつまでこっちにいろの?」

「明日から3日間だから、遅くても1日には帰らないと」

「3日か……それじゃあ明日、久しぶりのわたしの家に来ない? もちろんコウちゃんも」

「一緒に」

「え?」

日高から唐突に名前を呼ばれ、光秋は意表を突かれる。

「僕もですか? そもそも、僕なんて初対面の奴がお邪魔していいんですか?」

「それに年末だし、大掃除とかで忙しいんじゃない? ウチは大丈夫だと思うけど」

「ウチも大丈夫だと思うよ。31日までにやればいいんだし。一応、帰ったら確認して

メールしとくね。それとコウちゃん。初対面だからこそ親睦を深めるために家に呼ぶんだよ。ホウちゃんの弟分なら、わたしにとつても弟分みたいなもんだし。だから遠慮しないで」

「はあ……ありがとうございます」――よくわからん理屈だが、社交的な人だなあ……――自分と伊部の質問に応じる日高に、光秋はそんな印象を抱く。

その後も伊部と日高の会話は続き、話についていけない光秋は後ろでそれを静かに聞きながら2人についていく。

しばらくすると、3人は商店街の前に着く。

「じゃあ、わたしこつちだから。後でメールするから、確認よろしくね」

「わかった。じゃあね」

「……」

商店街の入り口で別れる日高に伊部は応じ、光秋も一礼して見送る。

「私たちはこつちだね……それにしても、変わんないな……」

「そうなんですか……」

懐かしそうに辺りを見回す伊部に相槌を打ちつつ、光秋も周囲を見回してみる。

道の左右を埋め尽くす様にさまざまな店が並び、地方の商店街は寂れているという予想に反して、どの店も繁盛という程ではないがそこそこに活気がある。

そんな街中をしばらく進むと、不意に伊部が足を止めて目の前の2階建ての建物を見やる。

「ここだよ、私の家」

『伊部電器』、ですか……」

伊部の視線を追うと、光秋は掛かっている看板を読み上げる。

すでに店仕舞いした小さな店の上に生活臭が漂う2階が乗っている、いわゆる店舗兼自宅というものをよく表した家である。

「玄関はこっち。ちよつと狭いから気を付けて」

「はい」

伊部に応じると、光秋は伊部家と左隣の家の間を通つて勝手口に向い、伊部に続いて中へ入る。

ドアをくぐると、台所らしき所に出る。

「ただいまー」

「お邪魔します」

よく通る声の伊部に対して遠慮がち言うと、狭い足場に靴を脱いで家へ上がる。
と、

「ああ、お帰りなさい」

家の奥つから伊部の母が歩み寄ってくる。

所々に薄つすら皺を刻んだ顔はどこか優しそうであり、肩くらいの長さに切りそろえた黒髪は実用優先の印象を抱かせる。背は光秋より頭一つ分低く、私服の上にエプロンを掛けた姿は正しく主婦である。

「こちらが連絡した？」

「加藤光秋です。しばらくお世話になります」

伊部母の視線に応じると、光秋は頭を下げる。

「あら、よくできた方ですね。さき、法子は早く着替えてきなさい。ご飯準備してるから」

「わかった」

「光秋さんはこつちに。コートは掛けておきますね」

「はい。ありがとうございます」

伊部母にそれぞれ応じると、伊部は自室へ向かい、光秋はコートを渡した母の後に続いて居間に通される。

広さは八畳程、中央にコタツが置かれ、その周りに座布団が4つ敷かれており、部屋の隅では小型の電気ストーブが煌々と照っている。コタツの上にはすき焼き鍋を乗せたコンロが置かれ、光秋が入ってきた襖の向いに座る伊部父が油を敷いている。

「おや？君が法子が話してた……」

「はじめまして。加藤光秋です。しばらくお世話になります」

提げていたカバンを部屋の隅に下ろすや、光秋はまた頭を下げる。

「光秋くんか。ああ、堅苦しいのはいいから。座つて楽にして」

「はい……」――楽にしろと言われてもなあ……―

伊部父に応じて向いに正座しながらも、伊部の両親を前にした緊張からどうしても力が入ってしまう。

そんなことは気にせず、伊部父は鍋に肉を敷き始める。

「……」

牛肉が焼ける独特の匂いに若干気持ちを軽くしながら、光秋は湯気を通して伊部父を見る。

張りを保った肌、所々白いものが見えつつも未だ黒々とした髪は20代の娘を持つにしては若々しく、30代後半から40代手前に見える。細く見開かれた目は常に笑っている様であり、私服の上に羽織った厚手の赤チエツクのちゃんたんこと合わさつて優しい印象を与えてくる。

「なにか手伝いしましょうか？」

「ん？いいよ。寧ろ一人でやらせてくれ。私料理が上手くなくてね。まともにできるの

がこうした鍋ものだから、こういう時は張り切っちゃうんだよ」

「そうなんですか……」

嬉しように肉を裏返す伊部父を見ながら、光秋は相槌を打つ。

「それより、そんな緊張しないで。上着も暑ければ脱いでくれていいよ。足も崩して崩して」

「は、はあ……」

タレを注ぎながら言う伊部父に少し困った顔で応じると、光秋は言われた通り上着を脱いでカバンの上に置き、正座から胡坐に変わる。

しかし、緊張をなくし切ることはできず、どうにも気まずさを感じてしまう。

——伊部さん、早く来てください！——

そんな願いが通じたのか、白いパーカーと藍色のジーンズに着替えた伊部と、4人分の食器を載せた盆とビールの瓶を持ってきた伊部母が居間に入ってくる。

「わあ！ すき焼き？ 豪華じゃん」

「あなたが久しぶりに帰ってくるって言うから、奮発しちゃった。ついでに彼氏も連れてくるって言うしね」

「だから彼氏じゃないって」

そんな会話を交わしながら、伊部は光秋の左に、伊部母は右に座る。

「もうすぐできるよ……と、そろそろ7時か」

柱の時計を確認すると、伊部父は手元のリモコンで伊部母の後ろに置かれているテレビを点ける。

「さあ光秋さん、遠慮せずにたくさん食べてくださいね」

「あ、ありがとうございます」

手際よく全員に器と箸、お茶の入ったグラスを配る伊部母に、光秋は軽く頭を下げる。

「さあて、いいかな」

「お父さんの料理も久しぶりだね。いただきます」

「いただきます」

伊部父に返す伊部に続いて光秋も手を合わせると、器の中の卵を割ってかき混ぜる。

伊部父が無言で差し出したグラスに伊部母がビールを注ぎ、一通りの具材を取った伊部がそれらを卵に絡めて口に運んでいく。

――肌の色こそ違うが、こうして見ると、普通の家族だよなあ……――

一連の光景にそんな感慨を抱きつつ、光秋もネギやしらたきを卵と絡めて口に運ぶ。

「ほらほら、遠慮せず肉もたくさん食べなさい。君ただでさえ線が細そうだし」

「……それ、この間も言われました」

笑顔で肉を勧めてくる伊部父に、光秋は鬼崎中佐のことを思い出しながら苦笑いで応

じ、何切れか取る。

そこでちょうど7時のニュースが始まり、光秋はお茶を飲みながらなんとなしにテレビに目を向ける。

その時、

（サン教ベース制圧作戦中に未確認機です）

「!？」

直後に流れたアナウンスに、危うくお茶を嘔き出しそうになる。

—アレは！……—

なんとか堪えて少し出た分を急いでハンカチで拭きながら、光秋はニュース映像に目を凝らす。

画面に映っているのは、遠くから撮ったために不鮮明であるものの、確かに自身の相棒・ニコイチと、黒い人型——DD—02・ナイガーの戦闘である。

少しして映像はスタジオに変わり、アナウンサーが話し出す。

（今日午前、秋田山中のサン教ベースを制圧する作戦が行われ、その際に突如未確認の機体が乱入、合軍・ESO・警察の合同部隊に攻撃を加えました）

—作戦を撮影してたカメラが撮ったんだな……………それにしても、意外とよく撮れているな。だいぶ距離があっただろうに—

アナウンスと共に流れる辛うじてベース周囲の様子がわかる映像を見ながら、光秋は思わず感心してしまう。

そこで映像は記者会見に変わり、スーツ姿の東局長と合軍の高官がフラッシュに照らされている様子が映し出される。

（今回現れた未確認機については、まだ詳しいことはわかっていません）

——実際そうでもない……

多数のフラッシュを浴びながら説明する軍高官に共感しながら、気を取り直した光秋は食事を再開する。

「怖いねえ。何者かわからないっていうんだから」

「また戦争になったりしないでしょうか？」

「さあねえ……そうなるうもんなら、迷惑極まりないよ」

食事を挟みながら伊部父と伊部母が不安そうに会話を交わす間にも、次々とニュースが流れていく。

サン教ベース制圧と、不落日光こと坂本一郎の身柄確保。

「そういえば、法子は秋田の仕事の帰りだつて……もしかしてこれに参加してたのかい？ 怪我なかったかい？」

「詳しいことは言えないけど、大丈夫だよ」

心配顔を浮かべる伊部父に、伊部は微笑んで返す。

ベース制圧に連動した関係各所のガサ入れ。

——他所^{よそ}でもこんなことがあったんだ……そりやそつか。頭だけ潰してもしょうがないし——

事務所らしき建物から拘束された人たちが連れ出され、段ボール箱を抱えた警官たちが列を成して出てくる光景、それを数回見せられて、光秋は自身の視野の狭さを感じる。サン教関連が一通り終わると政治・経済に関すること、小規模の事件の報告が続く。それらを意識の端で聞きながら、光秋は久しぶりの御馳走を堪能する。

——考えてみれば、こんなの数力月ぶりだもんな。しらたき美味いと、

「そうだ。光秋くんもどうだい？ 一杯」

グラスに注いだビールを飲み終えた伊部父が、瓶を差し出してくる。

「いえ。僕はいいです。まだ未成年なんで」

「そうなのかい？」

応じる光秋に、伊部父は意外そうな顔をする。

「けっこうしつかりしてるから、法子より1つ2つ下くらいかと思ってたよ」

「まだ19です。来年になれば飲めますが、さすがに公務員が進んでルールを破るのは

「まずいですし」

「それもそうか。残念だが、それなら来年の楽しみにさせてもらうよ……それなら、法子はどうだい？」

「私は飲めないよ。いつも言ってるでしょ」

「ちよつとだけ。お前ももう24だろう」

「ちよ！お父さん！」

伊部父が歳のことに触れるや、伊部は少し声を荒げる。

「……伊部さん、24歳なんですか？」

「この間の誕生日でね……」

光秋の興味本位の確認に、伊部はどこか恥ずかしそうに答える。

「なに法子？光秋さんに歳隠してたの？」

「隠してたっていうか……年齢不詳ってなんか格好いいから、その……」

伊部母の質問に、伊部は顔を俯けながら口籠ってしまう。

「なんか可愛いな、伊部さん。こういう子供っぽいところもあるんだ」

伊部の新しい一面を見付けた喜びを覚えつつ、光秋は鍋から取った肉を卵に絡めて口に運ぶ。

「うーん……法子もダメ、光秋くんもダメか……あれ？」

伊部父が残念そうに呟きながら瓶を傾けると、グラスの3分の1程でビールが尽きてしまう。

「母さん、もう1本」

「1日1本の約束ですよ。それで終わりにしてください」

「いいじゃないか偶には。法子も帰ってきたんだし」

「そうやって昔から理由付けてたくさん飲もうとするんだから。私をダシに使わないですよ。それに、自分の体のことも考えてよ」

「うう……………」

一家の大黒柱も、娘の注意には素直に従うしかないようである。

——ホント、普通の家族だよ……………我が家は、今どうしてるだろうか？——

一連の伊部家の光景に、光秋は当たり前の家庭が持つ温かさを感じると共に、自分がいなくなつて9カ月になろうという自宅に思いを馳せる。

「……………ん？どうしたい光秋くん？なにか口に合わなかったかな？」

「ああいえ、ちよつと考えることをしてただけです」

心配そうに問う伊部父に応じると、光秋は多少出ていたらしい暗さを振り払つて食事続ける。

食べ進めて具材が減つてくると、

「そろそろかな。母さん」

「はい」

伊部父に応じた伊部母が台所へ向かい、パックされたうどんを持つてくる。

――^{しめ}めか……

思いつつ、光秋は鍋の中に投入される麺を眺める。

少しして麺が煮えると、伊部母がそれぞれの器に煮込みうどんとなつたすき焼きを盛つていく。

「ありがとうございます」

自分の分が置かれて一礼すると、光秋は残っていた卵と絡めたうどんをすする。

「……………」

家庭的な美味さに無言で箸を進め、少ししてすき焼き鍋は空になる。

「ふうー……食べたねえ」

「ですね……ちそうさまですー」

伊部に応じながらお茶を飲み干すと、光秋は手を合わせて伊部家3人に深く頭を下げる。

「お粗末さまです。お風呂も沸いてますから、一休みしたら入ってください。洗濯物も一緒に洗っちゃうので、出しておいってくださいね」

—「ういやは伊部さん、さっき電話してたな……けど……—」「いいんですか？」

伊部母の言葉に、光秋は岩手支部のことを思い出しながら少し迷ってしまう。

「いいもなにも、洗わないと光秋さんの着替えがないでしょう？」

「ああ、そつか……—」洗つてない下着の使い回しはもう嫌だもん——「それじゃあ、お願いします」

納得すると、光秋はカバンに体を伸ばして洗濯物を入れているビニール袋を取り出す。

「洗濯機の中に入れておけばいいですか？」

「ええ。それで」

「わかりました。それと水盤つてどこですか？」

「廊下を出て真つ直ぐ行つた先ですよ」

「ありがとうございます」

伊部母の返事を聞くと、光秋は袋と歯ブラシを持って居間を出、言われた通りに進んだ先にある水盤で歯を磨く。

—他^{ひと}人^{ひと}んちの水盤つてなんか使い辛いよな……—

そんなことを考えながら歯磨きを終え、さらに先にあつた脱衣所の洗濯機に袋の中身を入れて居間へ戻る。

伊部と伊部母の姿はすでになく、鍋や食器も片付けられており、伊部父がコタツに籠ってテレビを観ている。

「……旦那さんは入らないんですか？流石に僕が一番風呂というのは……」

齒ブラシと袋、手首から外した腕時計と数珠をカバンに仕舞うと、光秋は多少呼び方を迷いながら訊いてみる。

「いや、先でいいよ。私はそういうのに拘らないから」

「はあ……」

「それより、上がった後に着る物はあるかい？」

「……あ。いいえ。寝間着は持ってきてません」

「そうか……それなら、私の作務衣さむえを貸そう。少し小さいかもしれないが、パジャマ代わりだからいいだろう」

「ありがとうございます」

言うのと伊部父はコタツから出て2階の寝室へ向かい、光秋も後を着いていく。

急な階段を上つてすぐの部屋に入ると、伊部父は3つある簞笥の内、左——部屋の奥のそれを調べ始める。

「……あれ？母さんいつもこの辺から出してたが……」

言いながら、伊部父は簞笥の引き出しを引いては中身を漁ることを繰り返す。

「どこだったかなあ?……母さん!私の作務衣知らないか?」

「ちよつと待つてください」

呼び掛けに応じるや、伊部母はエプロンで手を拭きながら歩み寄ってくる。

「(ハハ)ですよ」

「あ、そつちだったか!」

伊部母が真ん中の箆笥から藍色の作務衣を取り出したのを見て、伊部父は目を丸くする。

「それと、これタオルです。ごゆつくり」

「ありがとうございます」

礼を言つて伊部母が差し出した作務衣とバスタオルを受け取ると、光秋は脱衣所へ向かう。

—今、いかにも家事に慣れてないお父さんだったな—

先程の伊部父の間違ひを可笑しく思いながら、かごに作務衣とバスタオル、脱いで皺にならない程度に畳んだワイシャツとズボンを入れ、履いていた下着も洗濯機に入れて浴室に入る。

「ふうー……………」

人一人が屈んで入つて一杯になる浴槽に肩まで浸かると、思わず安堵の息が漏れる。

―基地にあつた様な大浴場もいいんだらうが、やっぱり僕はこういう小じんまりした風呂がいいな。落ち着く……………

そんなことを思いつつ、体中の力を抜いて湯船を堪能する。

しばらくして温まると浴槽から上がり、木組みの風呂椅子に腰を下ろして体を洗う。

……………寒い！―

タイル張りの風呂場に震え上がりつつ、いつもとは違う物の位置関係に戸惑いながらも洗い終えると、もう一度湯船に浸かり、充分温まって風呂から上がる。

脱衣所に出てバスタオルで水気を拭き取り、拭いたメガネを掛けると、着替えに用意した作務衣を手取る。

が、ここで一つ気付く。

「……………あ―いかん。下着の着替えがない―

思いつつ洗濯機を見るが、すでに回っている。

……………仕方ない。あと寝るだけだし、このまま着るか。一晚経てばある程度乾くだろうから、朝の間に一枚取ってくればいいだろう―

やむを得ずそう断じると、素肌の上から作務衣を着ていく。

冬用なのか厚手の布は肌触りがよく、心配していたサイズも思った程小さくなく、ちようどいいくらいだ。

バスタオルで髪をよく拭くと、水盤の鏡に映った自分を見てみる。

「ほお……なかなか、ねえ」

上半身しか映ってないものの、簡素な着物というべき作務衣を着た姿は我がら似合っていると感じる。

ドライヤーで髪を乾かして一通り整えると、ワイシャツとズボンを持って冷えた床を速足で進んで居間へ向かう。

「お風呂いただきました」

テレビを観ている伊部父に言いながら部屋に入ると、ワイシャツとズボン、上に置きっぱなしになっていた上着をカバンに仕舞ってすぐにコタツに潜り込む。

「どうも。どうだった？」

「いい湯加減でした。ところで、バスタオルはどこに置いておけば？」

伊部父に応じつつ、光秋は首に掛けたバスタオルを示す。

「ああ。そこにハンガーがあるから、適当な所に掛けておいて」

「わかりました」

伊部父が指さした方を見ると、部屋の隅にハンガー束の掛かった物干し竿があり、光秋はそこから一本取ってバスタオルを掛ける。

「あ、そうそう。上がったら部屋に来てくれて法子が」

「部屋?……ああ、日高さんの連絡か——わかりました。伊部さ——法子さんの部屋は?」

「2階の奥だよ。ああそれと、荷物も持ってきてくれつつ」

「わかりました」

応じると、光秋はカバンを持って部屋を出ようとする。

と、襖に手を掛けた直後、

「ところで光秋くん」

「はい?」

伊部父に呼び止められ、後ろを振り返る。

「さつき娘を名前で呼んだが、あれはどういうことかな?」

「……」

何故か寒気を感じさせる伊部父の笑顔に、光秋は昼間ナイガーと対峙した時の感覚を思い出す。

「いや、別に……この家はみんな『伊部さん』ですから、紛らわしいかと思って……」

「そうかい。いやね、私が知らない間にかなりのところまで進んでるのかと思ってね

……そうになると、親としては少し寂しくてね」

話している間に伊部父から感じる寒気は消え、代わりに言葉通りの寂しげな顔を浮か

べる。

「ご安心を。僕と法子さんはそんな関係じゃありませんよ」

そう言つて一礼し、光秋は今度こそ居間を出て伊部の部屋へ向かう。

光秋が出ていつて尚、伊部父は閉まつた襖を眺めている。

「……それはそれで困るんだけどねえ」

いろいろな思いが混ざり合つた様な顔で呟くと、視線をテレビに戻す。
と、

「お父さん。混み合うから次入ってください」

「ああ、わかつたよ」

台所からの伊部母の呼び掛けに応じると、伊部父はテレビとコタツを消して入浴の準備を始める。

急な階段を足元に注意して上り、冷えた床を速足で進んで奥まで行くと、光秋はドアをノックする。

「どうぞで」

「お邪魔します」

伊部の返事を聞くと、すぐにドアを開けて部屋に入る。

六畳程の広さにベッド、机、本棚、箆筒、電気ストーブが置かれ、女性の部屋の割に

は質素な印象を与えてくる。

「日高さんからのメールですか？」

「そう。明日大丈夫だって。お昼過ぎに行くって返しておいた」

光秋の問いに、椅子に座った伊部は携帯電話を観ながら答える。

「昼過ぎですか？」

「うん。久しぶりの休みだし、朝はゆつくりしたいでしょう？」

「……確かに」

いつまでも布団に籠っている様子を想像しながら、光秋は同意する。

と、

「……………」

机の右隣の本棚、そこに並んでいる1冊の本が目に入る。

「……………ああ、これは」

光秋の視線に気付いたのか、伊部はその本を棚から出して見せる。

「高校の卒業アルバムだね」

「アルバムですか……………ちよつと見てもいいですか？」

「いいよ」

少し迷ったものの好奇心に負けた光秋の頼みに、伊部はすぐに応じてページを開いて

くれる。

「そんな所に突っ立ってないで、ベッドにでも座ってよ」

「では、そうさせていただきます」

伊部の手招きに応じると、光秋はベッドに腰を下ろしてアルバムを覗く。

最初は卒業式後のクラスごとの集合写真。

「あ。これ伊部さんですね」

「そう。私って写真に写るとけっこう目立つんだよね。特にこうやって並んでるやつ」

「……まあ、確かに」

困りながら返事をしつつ、光秋は3列中2列目左側に佇む黒いブレザー姿の伊部を注視する。黄色系ばかりの中に1人だけの黒色系というのは、確かに目立つ。

「この右隣のは……あ、日高さんですか？」

小さくて始めはわからなかったものの、濃い赤毛に伊部家に来る途中の記憶が浮かび上がる。

「そう。ハルちゃんとは高校まで一緒だったんだ」

懐かしむ顔で応じながら、伊部はページをめくる。

数ページにわたって他のクラスの集合写真が続き、その1枚1枚に伊部は懐かしい視線を向ける。

と、下から伊部母の声が響く。

「法子ー！お父さん上がったから次入ってー」

「はい。ごめん。お風呂入ってくるから、後は勝手に見てて」

「わかりました」

言うや伊部は着替えとバスタオルの用意をして部屋を出、残された光秋はベッドに座ったまま手渡されたアルバムをめくる。

体育祭のリレー、学園祭の模擬店、水泳の授業など、ごくありふれた高校生活の１コマがいくつも並び、そうしたことごとの何処かに必ず写っている伊部を見付ける。

——ここにいるな……あ、ここにも……ここにもいた！……我ながら凄いな——

リレー走者を写した写真、その左端で大勢に混ざって応援している小さい伊部を見付けた時は、自分のことながら感心してしまう。

「……………全部、僕の知らない伊部さんだな」

一通り見終わると、知らぬ間にそんな言葉が漏れる。

——当然か。僕が伊部さんと会ってまだ１年にも満たないんだし。この周囲には、僕の知らない伊部さんがたくさんいるんだろうな……………——

思いつつ、伊部の部屋を見回してみる。

そして、不意に夏のあの日、綾が言った言葉が浮かんでくる。

——突然、知らないはずなのに、すごく懐かしく感じる人や場所が浮かぶこともあるの」……………あいつも、こんな気持ちだったのかな？自分の知らないその人の姿を見る……………否、あいつの場合、自分の中に知らない自分がある、か？なんであれ、あの時の僕の想像以上に不安だったんじゃないか？……………似た様な体験をしてようやく慮ることができるか……………つくづく人間って不便な生き物だよなあ……………もつとも、それは綾にも言えることだが——

現状認識の齟齬——こちら側に来てしまった光秋を可哀そうと思っている綾と、あくまでも現状を肯定的に捉える自分——を思い出すと、光秋はアルバムを閉じて本棚に戻す。

「……………そうそう。目薬注さない」と

感慨を振り払うことも兼ねて呟くと、カバンから目薬の袋を出して3種類を5分置きに注していく。

——……………そういえば、今何時だ？……………ああ、上着に入れたままだったな——

思うとカバンに目薬を仕舞って代わりに上着を出し、そのポケットから携帯電話を出して時間を確認する。

——8時50分。もうすぐ9時か……………——「そういえば、僕今日どこで寝ればいいんだ？」カバンの上に電話を置いて寝場所について考えていると、風呂から上がった伊部が廊

下に充満している冷氣に押される様に部屋に入ってくる。

「ふうーさむさむー！」

「さすが北国ですよね」

「まあね。久しぶりだから尚更」

光秋に応じながら、伊部は緑色の厚手のパジャマを着た身を椅子に下ろし、ベッドの上に着ていた物を置いてバスタオルで髪を拭く。

「……」

そうすることで漂ってくるシャンプーと伊部の体臭が混ざった独特の匂いに、光秋は本人に気付かれないよう注意しつつ鼻を楽しませる。

「そういうば、僕どこで寝ればいいです？」

「ああ、そうだね。お母さんに訊いてみる」

「いや、考えてなかったんですか？……まあいいや。それなら僕も行きます。冷蔵庫に目薬仕舞いたいし。いいですか？」

「どうぞで」

伊部が応じるや、光秋は後に続いて伊部母の許へ向かう。

「……………！ いかん！ いかん！——」

前を歩く伊部の後ろ姿——結っていない髪に、綾を見てしましそうなのをなんと

か堪える。

階段を下りると伊部は伊部母がいる風呂場へ、光秋は台所へ向かい、冷蔵庫に目薬を仕舞つて廊下へ戻る。

と、やや反響した伊部と伊部母の会話が聞こえる。

「お母さん。光秋くんだけど、今日どこで寝ればいい?」

「ああ、そうねえ……」

——奥さんも考えてなかったんですか……—

親子そろつて同じ考えに、呆れた様な、感心した様な気持ちを抱く。

「お客さんの寝室は温めてないから寒いだろうし………しょうがないから、今日は法子の部屋で寝てもらおうかしら?」

「そうなるかな?」

「いや、ダメでしょ!」

思いもよらぬ伊部母の提案、そして伊部の同意に、光秋は思わず脱衣所のそばまで駆け寄つて声を上げる。

「……すみません。大きい声出して……でも、それは流石にダメでしょう」

我に返つて大声を出したことを詫びつつ、今度は落ち着いて意見する。

「どうしてです?」

伊部母の問いに、光秋は思ったことを答える。

「いい歳の男女が同じ部屋に寝るのは、体面上よろしくないと思います。特に僕は職場の上司と部下ですし、法子さんだって嫌でしょう?」

「私は……別に」

「いいんですか?」

ドア越しの伊部の返答に、光秋は眉を寄せる。

「だっていつも言ってるでしょ。光秋くんは私の弟分なんだから。一緒に寝るくらいね。それに布団は別々だし」

「そうでしょうけど……」——布団が一緒だったらいいよですよ——「……本当にいいんですか?」

「私はいいいよ」

「法子がそう言うなら、今日は法子の部屋で寝てください」

「奥さんもいいんですか?」

「弟分なんて、いいじゃないですか」

——そういう問題ですか?……——

親子そろって理屈が通っているのかいないのかよくわからない受け答えに、知らぬ間に頭を抱えてしまう。

「それじゃあ法子、布団出してあげて」

「はい。おやすみなさい」

「……おやすみなさい」

伊部母に応じるや伊部は脱衣所を出て2階へ向かい、光秋も煮え切らない気持ちを抱きながらついていく。

階段を上り切ると、寝室から顔を出した赤い作務衣姿の伊部父と会う。

「下が騒がしかったけど、なにかあったのかい？」

「すみません。僕つい大声出してしまつて」

応じながら、光秋は深く頭を下げる。

「光秋くんの寝る場所どうするつてお母さんと話してたの」

「ああ、そういえば決めてなかったね。で、どうなったんだい？」

「とりあえず今夜は私の部屋に寝ることになった」

「そうかい……え？」

少々の間を置いて、伊部父の表情が曇る。

「いや、でも……光秋くんはいいのかい？」

「奥さんと法子さんに賛成されてしまつては……ご心配なく。やましいことはありません」

「なに言ってるの？早く準備するよ」

軽く叱る様に言うのと伊部は向いの部屋の襖を開け、光秋もその後を追おうとするが、すぐに伊部父に肩を掴まれてしまう。

「私もね、娘がいいのらなにも言わないし、君は誠実そうな男だから多少の信頼もしている……が、もしもの時は責任取ってもらうよ」

「……………わかつてます」

普段通りの語調、それ故に感じる悪寒を振り払ってしつかり応じると、伊部に続いて向いの部屋に入る。

「……確かにここで寝るのは不味いかもしれませんね」

入って早々、氷の中にいる様な寒さに体の危機を感じる。

「でしょ。風邪ひいちゃう」

「下手したら凍死……は流石にないかな？」

「案外なったりしてね」

あながち冗談ではない様子で応じると、伊部は押し入れから布団一式を出す。

「僕が運びます」

「え？いいよ」

「これくらいやらせてください」

言うや光秋は布団を抱え、伊部の部屋へ向かう。
と、

「疲れてるだろうから、ゆうつくり寝なさい。あと夜更かしはしない方がいいよ。おやすみ」

「……おやすみなさい」

半分は辛い、半分は牽制の意を感じさせる伊部父の挨拶に応じると、心なしか速足で部屋に入る。

——「はしやぎ過ぎて伊部を襲うなよ。親父にぶつ飛ばされつぞ」……僕から問題を起こす気なんて毛頭ないが……竹田二尉の冗談が変に現実味を帯びてきたな——

基地での竹田の言葉を思い出しながら軽い悪寒を覚えると、椅子とカバンを隅に退かしてベッドの横に布団を敷く。

——そういえば、電話のバッテリーがそろそろだよな……——「すみません。電話充電させてもらっていいですか？」

「どうぞ」

伊部の許可をもらうと、光秋はカバンから充電器を出して携帯電話に繋げ、机脇のコンセントに刺し込んで枕元に置く。

「こーやって布団並べると、友達……ううん。本当に姉^{きょうだい}みたいだね」

「え？……いや……まあ………」

言いながら伊部はドアを背にして布団に胡坐をかき、光秋はその動作に戸惑いながらも正座して向かい合う。

「……………」

広げた髪、パジャマ姿、どこかリラックスした雰囲気と、夏に見た綾に限りなく近い伊部の様子を直視できず、つい目を逸らしてしまう。

「なに？私の顔になにか付いてるの？」

「いいえ………」

「じゃあなんで目を合わせないの？」

「それは……………白状すれば、今の伊部さんを見ると、どうしても綾を思い浮かべてしまうんです……………」

「……………それが辛いのか？」

「いいえ、辛いんじゃないかもしれません。ただ……………照れ臭いというか……………普段会いたいと思っけていても、不意に会うとどう反応していいかわからない……………そんな感じがして。あとは単純に、女の人と一緒にいて他の女の人のことを考えるのは無粋っていうのが……………」

「……………光秋くんってさ、変なところで不器用だよねえ」

「自分でもそう思つてるところです……」

伊部の決定的な一言に、光秋はなにも言えなくなる。

「……………とりあえず、今日はもう寝てもいいですか?」

妙な沈黙に耐えかねて、光秋は今一番の欲求を口にする。

「えー? せつかくなんだし、もう少しお喋りしようよ」

「お喋りなら明日もできますよ。今日はいろいろあつて疲れたし、それに旦那さんも早く寝なさいって言つてたでしょう?」

「そうだけど……」

「今日しっかり休んで、明日ゆっくり話しましょうよ。日高さんも交えて」

「……………そういうことじゃないんだけどなあ」

「え?」

「なんでもない……………ただ、光秋くんの言うことも確かか。制圧戦が終わつたと思つたらDDシリーズだもんね。休みこそとつてたけど、やっぱり疲れるか」

「そういうことです。ところで、トイレつてどこですか?」

「出てすぐのとこ」

伊部の言葉に従つてトイレへ向い、用を足しつつふと思う。

「……………そういうことじゃないって、どうということだ?」

このの間中考えても見当はつかず、首を傾げながら部屋へ戻る。

伊部はすでにベッドに上がっており、光秋も布団の上に立って電灯の紐に手を掛ける。

「ストーブは？」

「消した」

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

言うところ伊部は布団を被り、光秋も灯りを豆電球にして布団にもぐる。

――9時半。久しぶりにゆっくり寝れるや……………――

携帯電話の時計で時間を確認すると、メガネを枕元に置いて目を閉じる。

60 夢の中の姉妹

「……………」

耳元で鳴る振動音に目を覚ました光秋は、音源である携帯電話に手を伸ばしてアラームを止める。

—6時か。起きないと……いや、いいのか？—

未だまどろんでいる目で周囲を見回し、伊部の部屋にいることを思い出す。

—そうだ。今日は早く起きなくていいんだ。じゃあ、もう少し……………—

思うや再び目をつむり、睡魔に導かれた意識が深いところへ落ちていく。

色の黒い、顔付きがよく似た女性が2人、ベッドに並んで腰を下ろしている。

右の女性は長い髪を後ろで一つに結び、白いパーカーに藍色のジーンズを着ている。

左の女性は髪を背中一杯に広げ、白いワイシャツに赤チエツクのロングスカートを履いている。

—あれは……伊部さんと綾か—

何故2人が並んでいるのかという疑問は不思議と湧かず、光秋は何処とも知れない視点で2人を見る。

「……こんなふうに話すの、初めてだね」

「うん。今まで上手くできなかったから……」

言葉に困りながら話し掛ける綾に、伊部も返事に困りながら応じる。

——久しぶりの会った姉妹——双子みたいだ——

2人の容姿と会話の内容に、そんな印象を抱く。

「……本当に危ない時、いつも光秋くんを守ってくれたよね。ありがとう」

「お礼なんていらない。アキはあたしにとって特別だから、少しでも“力”になりたかっただけ」

——特別……か……——

その言葉に、夏の日の思い出が蘇る。

「……あたしは、法子が羨ましい」

「私が？なんで？私光秋くんになにもしてあげられないよ？いつも隣に座ってるだけで」

「でも、いつもアキの隣にいてあげられる」

「……」

——……——

切なさを浮かべる綾に、伊部はなにも言えなくなり、光秋は何故か胸が疼く。

「誕生日をお祝いしてもらったり、風邪をひいたら看病してあげたり、アキが戦う時はいつも隣にいて、怖いのを少しでも和らげてくれる。それは、法子がいつもアキの隣にいてあげられるから……あたしは、そんなことができる法子が羨ましい」

「綾……」

——隣にいてくれるから、か……—

胸の内を正直に告げる綾に、伊部は圧倒され、光秋はその言葉が耳に残る。

少し間を置いて、綾は言い辛そうに問う。

「……法子はさ、アキのこと好きなの？」

「……そりゃあ好きだよ。大事な後輩だし、なによりも弟ぶ——」

「そういうことじゃなくて！」

伊部の返事を遮る様に、綾は叫ぶ様に言う。

「アキのこと、好きなんですよ？」

「……ごめん。私もよくわからない」

言いながら、伊部は顔を俯ける。

「私、昔から惚れっぽいところがあるからさ。いつもそばにいて優しくされると、ついその気になっちゃうから……だから、光秋くんへのこの気持ちにどうしても自信が持てないの……弟分とか言っつて、私の方から壁を作ろうとしてるのかな？」

「……そうなんだ」

——伊部さん……………

伊部の返答に綾の顔が曇り、光秋は今まで伊部の深い心情を察してあげられなかったことを悔やむ。

と、綾は表情を直し、よく通る声で言う。

「あたしは、アキのこと大好きだよ。優しいし、一生懸命だし、いろんなこと教えてくれるし、それに……」

「それに？」

「……それに、やっぱり好きだから」

「……そうだよな。本当に好きな人は、好きだから好きとしか言えないもんね」
「うん……だから、ね……」

——？——

それまで生き生きとしていた綾の声が、徐々に湿り気を帯びてくる。

そして、

——「！」——

出し抜けに綾は伊部に抱き付き、突然のことに光秋と伊部は目を丸くする。
そんなことに構わず、綾は涙を含んだ声で続ける。

「だから、お願い！……アキを、盗らないで！……アキがいないと、あたし………」
「綾………」

泣き崩れながらもなんとか言うべきことを言った綾を、伊部は同情と羨望が混ざった顔で優しく抱きしめる。

一方、光秋の心中には、綾の悲しみと伊部の複雑な気持ち痛み程に伝わってくる。

「僕は、こんなにも想われていたのか………だったら、僕のすべきことは？………」
現状を把握し、次の行動を思案する間にも、景色は徐々に遠退いていく。

「………？………夢？——」

ゆつくりと目を開けると、光秋は伊部の部屋で布団に横たわっていることに気付く。

「にしちゃあ、内容がよく思い出せるような………？——」

脳裏にチラついてくる伊部と綾のやり取りに首を傾げながら、上体を起こして伸びをする。

と、それに合わせる様に伊部も起きてくる。

「おはよう」

「おはようございます」

まだ眠気の残る目を擦りながらの挨拶に、光秋はメガネを掛けながら返す。

頭を搔く伊部を見ていると、不意に夢の中の言葉を思い出す。

—『光秋くんへのこの気持ちにどうしても自信が持てないの』……………あれは、本当に夢だったのか?—

唐突にそんな疑問が浮かぶや、光秋は知らぬ間に口を動かしていた。

「……不思議な夢を見ました。伊部さんと綾が並んで話してるんです」

「——え!？」

それを聞くと、伊部は出かかっていた欠伸を引つ込め、眠気の消えた目でまじまじと光秋を見る。

「それ、本当?」

「え?ええ……?」

予想外の真剣な反応に、光秋の方が面喰ってしまふ。

それに構わず、伊部はベッドから下りて光秋に迫る。

——……伊部さんってよく見ると肌つやがあるよな……それに、なんかいい匂いが

……

突然のことに動揺してか、パジャマの合間から覗く伊部の素肌や、鼻をくすぐる体臭に、つい場違いなことを考えてしまう。

が、

「法子——いい加減起きてご飯食べちゃって。光秋さんも起して連れてきてよー」

「あ。はい……とりあえず、ご飯食べたらゆつくり話そう」

「……そうした方がいいかもしれないね。もうすぐ9時だし」

伊部母の呼び掛けに2人は一度冷静になり、光秋が携帯電話で時刻を確認すると、そろって1階の居間へ向かう。

—危なかった……それはそうと、久しぶりに寝坊できるとは思ったが……またよく寝たもんだ—

危うい事態を回避できたことにほっとしつつ、自身の遅起きっぷりに思わず感心してしまう。

白飯にみそ汁、昨日のすき焼きの余った具材で作った炒め物の朝食を食べ終え、水盤で歯を磨いていると、光秋はふと思い出す。

—あ、そうだ。着替え持ってきてないんだっけ—

口を漱ぎながらそう思うと、顔を洗って台所で片付けをしている伊部母の許へ向かう。

「すみません、奥さん。僕、着替え持ってきてないんですが……」

「ああ、そうでしたね。ちよつと待ってください」

エプロンで手を拭きながら応じると、伊部母は2階へ向かい、光秋もついていく。

夫婦の寝室の箆笥を開けると、伊部母はワイシャツとズボン、革製のベルトを差し出

してくる。

「お父さんなのですが、いる間はこれを着ててください」

「すみません。次来る機会があればちゃんと……」

「いいんですよ」

申し訳なさそうに服を受け取る光秋に微笑んで応じると、伊部母は1階へ下りていく。

—ま、仕方ないか。それと……—

心中に言い切るや、光秋は寝室に掛かっている洗濯物に目を向ける。

—ささっと取って出よう。誤解されるのも嫌だしな—

思いながら洗濯物の許に歩み寄り、女物の下着——おそらくは伊部の物——を見ないように自分の下着の上下と靴下を取り、速足で寝室を出て向いの客人用の寝室に入る。

「さて……………」—うつ。予想はしてたが気持ち悪い……が、仕方ない。風邪ひく前にとつと着替えよう—

生乾きの下着の感触と冷凍庫の様な部屋の寒さに四苦八苦しつつ、なんとか白いワイシャツと黒いズボンに着替え終えると、暖を求めて伊部の部屋へ向かう。

ドアを開けると、パーカーとジーンズに着替えて髪を束ねた伊部が、椅子に腰を下ろして待っている。

「今朝の続き、いいかな？」

「……はい」

応じると、光秋は布団を丸めて隅に退かし、その上に畳んだ作務衣を置いて小物類をポケットに仕舞うと、伊部に勧められたベッドに腰を下ろす。

「確認するけど……私と綾が並んで話してる夢を見たんだよね？」

伊部の質問に、光秋は夢の記憶を思い出しながら答えていく。

「はい。確かこのベッドに座って」

「どんなふうに見た？」

「どんな？……強いて言うなら横から、ですかね？目の前に2人の話してる光景が浮かぶ様な感じだったので」

「私の服装は？」

「今着てるものでした。綾は白いワイシャツの赤チェックのロングスカート……夏の間、出掛ける時によくしてた格好でした」

「じゃあ……なにを話してた？」

「あー……確か、僕が好きかどうか……そんなことを」

「……私の記憶と完全に一致したね」

訊き辛そうに訊いた質問に答え辛そうに光秋が応じると、伊部は少し恥ずかしそうに

しながらそうまとめる。

―あれは、やつぱり夢じゃなかったか……しかしそうすると……―「あれはなんだつたんでしょう？ 2人が同じ夢を見たなんてことはないだろし、夢にしては詳細が思い出せる」

思いつつ、光秋は今一番の疑問を呟く。

「……やつぱり、精神感応。テレパシーの一種……ですかね？」

「その可能性が高いかもね」

思い付きの推測に、伊部は真顔で応じる。

「たぶんだけど、綾は私に用があつたんだと思う……あの話をするためにね」

言いながら、伊部は気まずそうな表情で顔を逸らす。

「それを綾を介して光秋くんは見たんだと思うな。前にも何度か言つたように、やつぱり2人は繋がつてゐるんだよ。で、綾を介して私も繋がつてゐる」

「……やつぱり、そうなりますか」

合同演習の際にツアリングと戦つた時と、夜警の際にナイガーと戦つた時に綾が現れたこと、その際の伊部の証言を思い出しながら、光秋は自然と納得する。

しかし、そうなると夢の会話の内容をどうしても意識してしまう。

「ところで伊部さん……僕のことはどうのつて……」

「……」

言葉に困りながら話を切り出そうとするが、伊部は未だ表情を固めて顔を逸らしている。

「……いや、この話はまた今度にしましょう。とりあえず、なにが起こったのかわかっただけでもよしとしましょう」

「……そうだね。そうしよう」

やや強引に言い切る光秋に伊部も賛成し、この話はこれでおしまいになる。
ただ、

「……………」

「……………」

この先どう会話を続けていいかわからず、お互い押し黙ってしまう。

——気まずい……が、なにを話せばいい……？——

なんとか居心地の悪い沈黙を破ろうと頭を回すものの、元来話し上手ではない光秋に
ろくな案など出てこない。

と、

「……あ。すみません。よく考えたら目薬注すの忘れてた。ちよつと台所行ってき
ます」

「え？あ、うん……」

ほっとした様に伊部が応じると、光秋は部屋を出て1階へ向かう。

—これで仕切り直せるかな？—

心中に安堵の息をつきながら階段を下りると、すで伊部母がいなくなった台所へ向かい、冷蔵庫から出した目薬を注す。

—そういう髪もまだだったな。夢のことに夢中だったからなあ……—

目薬を仕舞い一つ、顎周りを撫でながらそんなことを思い、伊部の部屋へ戻るとする。と、階段の近くまで来た辺りで金属が触れ合う様な物音を耳にする。

「？……」

音のする方に移動してみると、ちゃんちゃんこを羽織った伊部父が店の床に腰を下ろして、外装を剥がした大型テレビを弄っている。

「……おはようございます」

「ああ、おはよう」

起きた時から今まで見掛けなかったのとおりあえず挨拶すると、伊部父は手を止めて常に笑っている様な顔で応じる。

「それ、どうしたんです？」

「ん？ああ。昨日修理を頼まれて持ってきたんだけどね。時間が掛かって遅くなった

し、法子も帰ってくるっていったから、今日直して持っていくって言うてあるんだけど……」

光秋の質問に応じると、伊部父は工具箱から道具を取り出して作業を再開する。さつき聞こえたのはこの音のようだ。

「ああ。そういうえばここ電氣屋でしたね……」

思い出した様に呟くと、光秋は店内を見回してみる。

コンビ二より少し広いくらいの店には、照明類や電池といった小さいものから、テレビや洗濯機といった家電製品まで、個人店にしては豊富な品揃えが所狭しと置かれている。

「……よろしければ手伝いしましょうか？」

「え？」

店内を一周して伊部父の背中に目線を戻すや、なんとなしにそんな言葉が漏れ、唐突な申し出に伊部父は再び手を止める。

「正直機械には疎いんですが、ちよつとした手伝いならできます。それに今思ったんですが、このままだ家にいるだけじゃ居候みたいで肩身が狭く感じて。僕のためと思つてなにかやらせていただけませんか？」

「いや、手伝つてくれるのはありがたいんだけど……今日出掛けるって法子が言つてな

「かったつけ？」

「それは昼過ぎです。午前中はどの道暇なので」

「そうかい？……じゃあ、お願いしようかな」

「わかりました。あ、ちよつとだけ待っててください」

断りを入れると、光秋は速足で伊部の部屋へ向かう。

「すみません伊部さん。ちよつと旦那さんの手伝いしてきます」

「え？ なにか頼まれたの？」

「僕の方から頼んだんです。なにかやらせてくれって。そうしないと居候みたいで肩身狭いからって」

「別にそんなこと気にしないでいいのに」

「僕が気になるんですよ。そういうわけなんで、ちよつと外します」

言うや光秋はドアを閉め、勝手口から制靴を取ってきて伊部父の許へ向かう。

—考えてみたら、時間置いた方が尚のこといいよな—

先程の気まずさを思い出しながら靴を履き、伊部父の指示に従ってテレビの修理を手伝う。もつとも、やることは頼まれた工具を手渡すという簡単なもののだが。

はじめは道具の形と名前が一致せず手間取っていたものの、伊部父が丁寧に教えてくれることですぐに覚え、作業を観察する余裕さえ出てくる。

——……よくあんな細々したことできるなあ——

無数の配線や細かな部品の中でテキパキと手を動かす伊部父の姿——自分ではまず真似できないことに、思わず感心してしまう。

しばらくして内部の修理を終えると、外装を被せてネジで固定していく。

「ふうー。なんとか終わったねえ。思ったより早く早く進められたよ。ありがとう」

「いえ。僕はただ横で見てたようなもんですから……これは何処に？」

伊部父のお礼に応じると、光秋は中身を全て仕舞い終えた工具箱を指さす。

「ああ。レジの所に棚があるから、そこに置いといて」

「わかりました」

応じると伊部父の指さしたレジの中へ向かい。受付下の棚に工具箱を仕舞う。

それを見届けると、伊部父はズボンのポケットから携帯電話を出して何処かに掛ける。

「あ、伊部電器ですが。昨日頼まれたテレビ、修理が終わったんで持っていきたいんですが……はい……はい……わかりました。それでは」

電話を終えると、伊部父はそれをズボンに戻す。

「もうひと仕事頼めるかい？ テレビをトラックの荷台に積んで欲しい」

「わかりました」

「表に回すからちよつと待つててくれ」

光秋の返事を聞くと、伊部父は店の玄関から出て白い軽トラックを店の前に持つてくる。

軽トラックから降りた伊部父はテレビに歩み寄つて布のカバーを被せ、待機していた光秋と共に体を屈めて画面部分の端に両手を添える。

「いいかい？」

「いつでも」

「じゃあ……せーのっ！」

伊部父の掛け声でテレビを持ち上げ、2人は店内を慎重に移動して荷台に乗せる。

「届けに行くなら、ちよつと髭剃つてきていいですか？流石にこのままだと……」

「そうだね。それに天気がいいとはいえコートかなにかいるだろうし。待つてる間に用意しておくよ」

「お願いします」

12月にしては珍しい青空を見上げながら言う伊部父に一礼すると、光秋は伊部の部屋に戻つてカバンから髭剃り機を出す。

身嗜みを整える気恥ずかしさから伊部に背を向けて髭を剃りながら、光秋は出掛ける旨を伝える。

「旦那さんと一緒にちよつと出てきます」

「配達？」

「そんなところですよ」

応じながら髭を一通り剃り終わり、髭剃り機をカバンに戻す。

「そう。気を付けてね」

「はい。行ってきます」

「行つてらっしゃい」

伊部の挨拶を背中で受け取ると、極力速く階段を下りて店内へ向かう。

「お待たせしました」

「うん。じゃあ行こうか。あ、これ」

「ありがとうございます」

赤いコートに着替えた伊部父から受け取ったESOのコートを羽織ると、伊部父に続いて軽トラックの助手席に乗り込み、テレビの持ち主の家へ向かう。

商店街を抜け、除雪が済んだ国道を通つて住宅地に入る。

少し進んだ所に建つ家の前で停まると、光秋は軽トラックから降りて荷台の柵を開け、その間に伊部父は呼び鈴を鳴らして家の人を呼ぶ。

「ごめんください。先程お電話した伊部電器ですが」

「はーい」

玄関越しに男の声が応じると、50代くらいの男が出てくる。

「お待ちしてました。こつちです」

「はい。光秋くん、いいかい？」

「いつでも」

「じゃあ……せーのっ！」

歩み寄ってきた伊部父の掛け声でテレビを持ち上げると、雪に足を盗られないように注意しながら2人はそれを玄関へ運ぶ。

「見ない顔ですね。バイトでも雇ったんですか？」

「いやあ、娘の知り合いでして。今ちよつと手伝ってもらってるんです」

「……どうも」

家主の問いに伊部父はテレビを置いて答え、光秋は頭を下げる。

「娘さんの？……まさか彼氏ですか？」

「違います」

ニヤケながら問う家主に同時に応じると、2人は靴を脱いで家に上がる。

「それで、どちらに置けば？」

「……ああ。こつちです」

伊部父の問いに、先程の即答で困った顔をしていた家主は家の奥に招きながら答え、それに従って光秋は伊部父と共に慎重にテレビを運び入れる。

居間の一角に置いてカバーを取ると、伊部父が配線を繋ぎ、動作確認をする。

「……問題ないようですね。またなにかあれば言ってください」

「ありがとうございます」

「では、これから御贔屓に」

「……」

家主の礼に伊部父は笑顔で、光秋は一礼で応じると、軽トラックに乗り込んで家へ戻る。

「いやあ、助かったよ。昨日は運ぶだけでひと苦労だったからねえ……認めたくないけど、私も歳かなあ……」

「僕にはけっこう若く見えますが」

「はは。見かけ倒してやつだよ」

この様に、伊部父の呟きに光秋が応じる形で取りとめのない会話は続き、軽トラックは伊部家へ向かう。

伊部家の前で軽トラックが停車すると、助手席から降りた光秋は店内に入り、車内で説明された場所にカバーを仕舞う。

レジの上の時計を見ると、もうすぐ12時を指そうとしている。

「2人とも帰ってきたのー?」

「ああ、はい。今戻りましたー」

奥からの伊部母の呼び掛けに返すと、光秋は靴を脱いで家へ上がり、台所へ向かう。

「お帰りなさい。お昼できてますから、居間で待っててください」

「はい。あ、その前に、上にコート置いてきます」

鍋をコンロにかけている伊部母に応じると、勝手口に靴を置いて伊部の部屋へ向かう。

——伊部さんは下か——

誰もいない部屋にそう思うと、カバンの上に畳んだコートを置き、トイレに寄って居間へ向かう。

「お帰り」

「……ただ、いま……?」

コタツに入って出迎えてくれた伊部への返事に困りつつ、少しだが冷えた体をコタツで温める。

少しして軽トラックを仕舞った伊部父と、盆に4人分の食事を載せた伊部母も入ってくる。

「お疲れ様でした。光秋さんも」

「……」

うどんが入ったどんぶりを配りながらの伊部母の労いに、光秋は頭を下げる。

「お疲れなら、一杯だけ……」

「ダメです。それも昼間っから」

「あ、やっぱり……」

伊部父の要望を一蹴すると伊部母もコタツに入り、昨夜の夕食と同じ配置で食事を始める。

「どう？お母さんのうどん」

「美味しいですよ。味加減が好みです」

伊部の質問に、光秋は感じたままを答える。

「でしょ。私も久しぶりだけど、やっぱりいいな、これ」

「そんなにいいなら、もつと小まめに帰ってくればいいじゃないか？」

「そういうわけにもいかないよ。仕事だもん」

「それはそうだがねえ……」

そんな伊部と伊部父の会話を聞きながら、光秋は自分の家族のことを思う。

——僕も家に帰れば、こんなふうに感じるのかな？……そうなんだろうな。少なくとも

ここでの感覚は、家にいた時と近いから……—

目の前でなんてことのない、取りとめのない会話を続ける伊部一家に懐かしい温かさを覚えながら、うどんを一口する。

食事を終わると、光秋と伊部は事前の予定に従って出掛ける準備をする。互いに身支度を整えると、パーカーから赤いシャツの上にフード付きの白い羽織りに着替えた伊部は家に置いてある青いコートと冬用の厚手の靴を、光秋はESOのコートと制靴を着、勝手口から表へ出る。

「夕飯までには帰ってくると思うから。遅くなるようなら電話する」

「気を付けてね。光秋さんも。行つてらっしゃい」

「行つてきます」

「……行つてきます」

伊部母の見送りにまでも返事に困りつつ応じると、光秋は伊部の後を追って店側の通りに出る。

—日高さんの家か……どんななんだろう？—

61 姉貴分の友達

商店街を通って国道に出ると、雪化粧が施された景色の中を道なりに進んでいく。除雪と、今朝から出ている太陽のおかげで歩道に大した雪はなく、昨日の夜よりもずっと歩き易い。

「……この辺は田んぼかな？そういう家もあるんだ……」

道の脇に広がる窪んだ広場を見やりながら、光秋は周辺の家の様子に思いを馳せる。

「にしても、だんだん寂しくなるな……」——「こっちで合ってるんですか？」

徐々に家の数が減っていく周囲を見ながら、左隣を歩く伊部に問う。

「うん。そうだけど。どうして？」

「いや、周りがだんだん寂しくなるから」

「ああ。ハルちゃんちって少し離れた場所にあるから」

「ふーん……」

相槌を打ちつつ、2人は歩を進める。

「これは……」

先程の会話から数十分後。現在光秋と伊部が立っているのは、住宅地から少し離れた

山寄りの所に建つ日高家の真ん前なのだが、目の前に広がる光景に、光秋は束の間言葉を失ってしまふ。

そこに建っているのは、映画やドラマに出てくる様な和式の豪邸である。

敷地の周囲は瓦敷きの高い塀で囲まれ、重厚な扉が開放たれた門からは、横に長い本邸がその一部を覗かせている。年月を経て付いた微かな壁の汚れさえも家全体の風格を引き立て、同時に光秋をより圧倒する。

「ごめんください。法子です」

そんな光秋とは対照的に、伊部はいつも通りといった様子で門に備え付けられているインターフォンに語り掛ける。

『あ、ホウちゃん。入って入って』

「うん。今行くね。さ、行こう」

「……はい」

インターフォン越しの日高に应じると伊部は歩き出し、光秋もなんとか気を取り直してそれに続く。

風情が出る程度に除雪が行き届いた庭を少し歩いて玄関前に着くと、伊部が戸を開ける。

「おじゃましまーす」

「はーい」

伊部の挨拶に答えつつ、奥から赤いセーターに茶色いズボンを着た日高が、エプロンを掛けた短い黒髪の中年くらいの女性を伴って現れる。

「法子さん。お久しぶりです」

「こちらこそ」

女性の挨拶に、伊部は会釈して応じる。

「こちらがその？」

「あ、加藤光秋です。おじやまします……日高さんのお母さんですか？」——にしちゃあ、あんまり似てないが？——

顔を向けた女性に応じつつ、光秋は思ったことを言ってみる。

と、

「うんうん。この人は家政婦のそのこ菌子さん。ていっても、子供の頃からずっとお世話になってるから、お母さん代わりって言ってもいいかな」

「勿体ないお言葉ですよ、お嬢さま。佐々木ささき菌子そのこです。よろしく願います。光秋さん」

「……はい。こちらこそ……」——家政婦なんて始めて見たぞ。しかもかなりできる人みたいだ……家といい中の様子といい、本当に……—

日高の紹介で会釈する佐々木の様子に、光秋は冷静に驚愕する。

「さあさあ、立ち話もなんだから早く上がって。私の部屋行こう」

「だね。光秋くん」

「……はい。では」

日高と伊部の促しに応じると、光秋は靴を脱いで用意されたスリッパに履き替える。

「そういえば、美佳ちゃんやおじさんたちは？」

「美佳は友達の家行ってる。お父さんとお母さんは仕事」

「ミカちゃん？」

「ハルちゃんの妹」

「ああ……」

眩きに伊部が答えると、光秋は2人の後を追って家の奥へ入っていく。

「では、私はお茶の用意を」

そう言つて台所の前で佐々木と別れると、光秋は歩きながら先程から気になっていることを訊いてみる。

「かなり立派な家ですね？」

「そうだね。よく言われる」

「昔は庄屋とか大地主って言われる家だったんですか？……まさか、旧華族とか？」

「うーん。私もよくわかんないんだよねえ。いろいろ言われてるみたいだけど……昔からの地元の名士、みたいな？」

「はあ……」——でも、わからないっていうのは、少しロマンだな——

要領を得ない日高の回答に曖昧な返事をしつつも、不明瞭であるが故に僅かだが心躍らされる。

鶴の絵が描かれた襖の前で一行は止まると、開けた日高に続いて部屋に入る。

「うわあ……こも昔と変わってない」

「適当なところに座って。今テーブル出すから」

懐かしむ声を上げる伊部に応じつつ、日高は押し入れから折り畳み式のテーブルを出し、その横で光秋は部屋を観察する。

広さは十二畳程。畳の上には机と、大量の本を収めた人の背丈程の本棚が3つ置かれ、入口の向い側には障子を脇に退けた大窓があり、その外には雪の積もった中庭が広がっている。

——もう驚かないぞ。これが日高さんちの常識なんだ……——「広い部屋ですね。家そのものもそうだけど、迷子になりそうだ」

日高家のあり様に慣れつつあることを自覚しながら、思ったことを率直に言ってみる。

「うん。始めて来た人がトイレ借りると必ず道に迷うよ。さ、コート脱いで座って」

——ハハア……本当に迷うのか……—

日高の返事に心の中で苦笑いしつつ、部屋の隅の衣紋掛けにコートを掛けた光秋は、伊部と一緒に用意されたテーブルのそばに腰を下ろす。

「そういえば、小さい頃はよくこの家でかくれんぼしたよね」

「やったやった。学校でやるよりずっとやり甲斐あったよねえ」

「確かに、隠れる場所には困りませんね」

光秋の言葉を受けてか、左隣に座る伊部が懐かしむ様に言い、光秋の右隣に座る日高も昔を見る様な顔で応じ、入口を背にして座る光秋は部屋に来るまでの様子を思い出しながら感じたままを言う。

と、

「失礼します」

佐々木の声が響くや襖が開き、ティーセットを載せた盆を持って現れる。

「お茶をお持ちしました」

「ありがとう」

歩み寄った日高が盆を受け取ると、佐々木は一礼して襖を閉じる。

盆をテーブルの上に置くと、日高は薄っすらと湯気を立てる紅茶の入ったティーカッ

プをそれぞれの許に、ビスケットが入った大皿をテーブルの中央に置いていく。

「うーん！いい香り」

「冷めないうちにどうぞ」

「そうさせてもらうね。いただきます！」

「いただきます」

日高に促され、伊部と光秋は紅茶を一口飲む。

「……………うん。なかなか」

元来紅茶には詳しくない光秋だが、渋みの中にもほんのり甘さがあるこの味に大層舌を楽しませる。

加えて、

「おまけにこのティーセット、結構いい物じゃないのか？ただ『大きい家』ってだけじゃないんだ」

陶器独特の白地にほんの少し金の装飾が施されたカップとポットに、名士の家に相応しい品性を感じる。

「やっぱ、蘭子さんの淹れる紅茶って美味しいよねえ」

「当然！もともとはわたしを満足させるために編み出したんだし」

懐かしさと御満悦が混ざった顔の伊部に、日高も一口飲むや自分のことの様に胸を張

る。

「日高さんって紅茶好きなんですか？」

「というか、美味しいものを食べることそれ自体が好きって言えばいいかな。それが高じて料理記者になつたくらいだし」

「ああ、お仕事料理記者なんですか……」

図らずとも出てきた仕事の話に、光秋はビスケットを一枚摘まみながら返す。生地そのものの甘さが紅茶の渋みとよく合っている。

と、紅茶を一口飲んで口を湿らせた伊部が加わる。

「前に話したことあったでしょ。食通の友達がいるって。ハルちゃんのことだよ」

「食通？……ああ。そういえば」

言われて光秋は、風邪が治りかけた時に行ったレストランでの会話を思い出す。

「あの時のメールの相手、あれが日高さんだったんですか」

「そう」

「え？コウちゃんわたしのこと知ってたの？」

「いいえ。ちよつと聞いただけです。そもそもその後いろいろあつて、たつた今思い出したくらいで……」

言つてから自分の記憶力のなさが恥ずかしくなり、紅茶を飲んで誤魔化する。

「あ、そうだハルちゃん。卒業アルバムってない？できれば小学校と中学の時の」
「え？どうしたの突然？……あるけどさ」

伊部の唐突な頼みに日高は立ち上がると、本棚から2冊のアルバムを出して持つてくる。

「ありがとう。昨日高校のアルバム見てたら、それより前のも見なくなっちゃって」
「僕もいいですか？」

「どうぞ」

伊部と光秋に应じると、日高は小学校のアルバムを開いて見せる。

「……やっぱり伊部さんと日高さんはすぐにわかりますねえ」

卒業式の後だろうか。男子は学ラン、女子はセーラー服を着た集合写真の左上に並んで写る12歳の伊部と日高に、光秋は昨夜のことを思い出す。

「わたしたちって昔っから目立ってたからねえ……」

懐かしむ様に言いながら、日高はゆっくりとページをめくっていく。

教室での授業風景、運動会での玉入れ、文化祭のひとコマなどなど。それらの中に必ず伊部の姿を、加えて必ず同じ写真に写っている日高の姿を見付け、そんな自分に光秋は改めて感心してしまう。

「……話には聞いてたけど、お二人って本当に昔から仲いいんですね」

「私も、こうして振り返ってみると改めてそう思うなあ。なんだかんだで幼稚園からの付き合いだもんねえ……」

アルバムを見た光秋の感想に応じながら、伊部は紅茶を一口する。

「あ、そうだ。幼稚園つていえば……」

自分の発言を受けてなにか思い出したのか、伊部は日高に顔を向ける。

「私、肌の色がみんなと違うでしょ。そのことでよくからかわれてね……でも、その度にハルちゃんが庇ってくれたっけ」

「そうだったっけ？」

紅茶をすすりながら日高は首を傾げる。

「そうだよー。小学校の時なんて、やり過ぎて先生に怒られたことあったじゃん」

「……記憶にございません」

「またー！」

日高の返答に膨れながら笑うと、伊部はもう一口紅茶を飲む。

と、今度は日高が、入れ替わりにテーブルに置いた中学の卒業アルバムを見てなにかを思い出す。

「それを言ったらホウちゃんだって、中学の時わたしがカツ上げに遭った時よく助けてくれたじゃん。必要なら竹刀持ってきたこともあったし」

「えー？あつたつけそんなこと？」

「あつたよー！そつちこそ忘れてんじやん」

こうして笑いながら話す2人を見て、光秋は率直に思う。

「お二人つて、どつちかが男の人なら今頃結婚してますね」

「……そうだね。なんなら今から同性婚ができる州に移住する？……て、今のホウちゃんにはコウちゃんがいるからダメか」

「だからそういうんじゃないって！」

「はいはい。あ、お茶のお代わりね」

「……ありがとう」

日高がポットからお茶を注ぐと、伊部は膨れながらビスケットと一緒にそれを味わう。

そんな様子を見て、光秋は微笑みながら思う。

——ホント、仲いいな……

お茶のお代わりとビスケットの摘まみを挟みつつ、3人は中学のアルバムを見ていく。

——あ、ここにもいる……ここにも……ここにも……いよいよもって凄いな僕……

例の如く伊部と、その近くにゐる日高を悉く探し当てる自分に、光秋は再三感心する。その間にも、道着に身を包んで竹刀を持った伊部の写真を見付ける。

「あ。これ前話してた剣道部の頃ですね」

「え?どれどれ?」

言いながら、伊部は紅茶を一口飲んで顔を寄せる。
と、

「……あれ?」

体を傾けた途端に伊部の上体がテーブルに倒れ込み、その拍子に紅茶がこぼれる。

「伊部さん!」

「ちよつと、大丈夫!」

光秋は慌てて伊部を起し、咄嗟にアルバムを持ち上げて汚れから守った日高も心配した顔を向ける。

「んー?……だいじようぶ……ただ、なんかほんわかする……」

光秋に肩を掴まれてなんとか姿勢を保つ伊部は、どこか虚ろな目を向けて応じる。

「……とりあえず台拭きを」

「だね。ついでに蘭子さん呼んでくる」

光秋に応じると、日高はアルバム2冊をテーブルから離して部屋を出ていく。

——手を離れたら倒れるな……これは……——

掴んだ肩を通じて感じる伊部の様子——殆ど力が入っていないこと——に、光秋は既視感を覚える。

少しして台拭きを持った日高と、慌てた様子の佐々木が入ってくる。

「法子さんの様子がおかしいと……」

「はい。体に力が入らなくて。あとどこかぼーつとしてます」

歩み寄ってきた佐々木に、光秋は事情を説明する。

「失礼ですが、出していただいたものの、例えばお茶になにか入れましたか？」

「いえ、特に変わったものは……いつも使っている茶葉で淹れて、砂糖とブランデーを少量加えたくらいですが」

「……すみません、今何を加えたと？」

佐々木の答えに一瞬呆然としつつ、光秋はもう一度訊く。

「？……砂糖とブランデーを……」

「ブランデーって、酒の？」

「はい……？」

「それだ」

わからないという顔をする佐々木の後ろで、日高はテーブルを拭きながら納得する。

「ですね。この症状、どう見ても酔っ払ってる」

相槌を打ちつつ、光秋は改めて酔った伊部に顔を向ける。

「え？あの……」

「ああ、蘭子さん知らなかったつけ。ホウちゃんお酒に弱いのに」

「え！そうだったんですか？」

「ごめん。わたしも言うのを忘れてた……」

事情が解ってハツとする佐々木に、日高は尻の座りが悪そうに詫げる。

その横で、光秋はよく通る声で伊部に呼び掛ける。

「伊部さん。少し横になりますか？」

「うーん……そーだねー……」

焦点の合っていない目で伊部が応じると、光秋はその上体をゆっくりと横たわらせ、日高が渡してくれた枕を頭の下に敷く。

ほどなくして伊部は目をつむり、寝息を立て始める。

「……すみません。私がよく確認しなかったから……でも小さじ一杯くらいですよ？」

「ホウちゃんはそれでもダメなんだよ。成人式の夜みんなが集まって飲んだけど、その時は大変だったなあ……」

——大変だったって何が……って、訊かない方がいいな——

佐々木に向けた日高の説明、そして思い出話に、光秋は興味を抱きつつもそれ以上訊いてはいけないという直感を覚え、深く追求することを避ける。

ふと部屋の時計を見ると、間もなく3時になろうとしている。

―けっこういういな……潮時かな?―

そう思うと、光秋は日高と佐々木の方に顔を向ける。

「時間も時間だし、伊部さんもこんなだし、そろそろ帰ります」

「時間って……まだ早い気がするけど? まあでも、ホウちゃんがこれじゃあねえ……わかった。送ろっか? ……て、一応私もお酒飲んだから車はダメかな?」

「それなら私が」

「大丈夫です。僕がおぶつていきます」

「この雪の中をですか?」

2人の提案を断る光秋に、佐々木が少し驚いた顔をする。

「別に吹雪じゃなし、除雪もしつかりされてたから歩き易かったですよ。それに前にも1回介抱して帰ったことありますから」――……もつとも、距離と道の状態を考えると、前より少しキツイかな……? ―「それに、これでも男ですから。これくらいやらせてください」

束の間不安を覚えつつも言い切ると、光秋は自分のカップに残っている紅茶を飲み干

し、衣紋掛けからコートを取って羽織る。

伊部のコートも取って歩み寄ると、

「それなら、せめて帰り支度だけでも手伝わせてください」

言いながら佐々木が両手を伊部にかざし、物を抱え持つ動作に合わせて伊部の体が宙に浮く。

「佐々木さんてサイコキノだったんですか」

その事実の少々関心しつつ、光秋は伊部にコートを着せていく。

「はい。レベル3です。ちよつとした力仕事もこなせるので便利ですよ。特にこの時期は除雪作業が他所^{よそ}より楽で」

「なるほど……」―敷地内の除雪が行き届いてたのもこの人のおかげか―

庭の様子に合点すると、光秋は伊部に背を向けて屈み、佐々木によって伊部が背に乗ったのを確認すると、そのまま玄関へ向かう。

伊部を落さないように注意しつつ靴を履き、佐々木が念力で伊部の足に靴を履かせてくれると、光秋は日高と佐々木の方に振り返る。

「変な帰り方になってすみませんでした」

「うんうん。わたしの不注意だから気にしないで。またホウちゃんち来る機会があったら、家にも来てよ。今度はブランデー入りじゃない紅茶御馳走するから」

「そうさせてもらいます。ではまた」

「じゃあね」

「お気を付けて」

日高と佐々木の見送りに一礼で応じると、光秋は伊部を背負い直し、伊部家へ向かう。

62 伝えられる気持ち、形になる想い

酔いで眠った伊部を背負った光秋は、足元に注意しつつ伊部の家を目指す。

— 思った通り、飲み会の帰りより少しキツイな。それに……—

左の耳元に聞こえる伊部の寝息や鼻をくすぐる口臭に、以前の様に妙な気を起しそうになる。

——…いや、コートが厚いおかげで体温が伝わらない分まだマシか—

そう思うことでなんとか気を保つと、心なしか速足になる。

伊部家の前に着くと、光秋は勝手口に続く道を一見し、伊部を背負った背中に意識を向ける。

— この状態であそこを通るのは、僕には無理だな……仕方ない—

断じると、店の入り口から入る。

「戻りました—」

よく通る声で帰りを告げると、店側の玄関に伊部を下ろす。

「お帰りなさ……法子!? どうしたの?」

床に寝転ぶ伊部に、出迎えに出てくれた伊部母が目を丸くする。

「日高さんちで、間違えてブランデーの入った紅茶を飲んじやいまして……」

靴を脱いで上がりながら事情を説明すると、光秋は伊部を背負い直し、未だまどろんでいる顔を見る。

「とりあえず、部屋のベッドに寝かせればいいですか？まだ酔い醒めないみたいですし」「あら……それじゃあ、そうしてもらえますか。あ、階段は危ないから手伝います」

「お願いします」

応じると、光秋は慎重に階段を上り、伊部母もいつでも受け止められる体勢で続く。

無事階段を上り切ると伊部の部屋に向かい、伊部母が脱いだコートを片付けている間に光秋は伊部を抱えてベッドに寝かせる。

——ふうー……さすがにちよつと疲れたな——

電気ストーブを点けながら心中に呟くと、軽く肩を回す。

「どうもすみません。娘が御迷惑を……」

「いいえ。ちよつとした手違いでしたし、それに、僕は伊部さ——法子さんの弟分ですから」

申し訳なさそうな顔を浮かべる伊部母に、光秋は普段の伊部の様子を意識して言ってみせる。

「弟分……ですか」

一瞬だけ、伊部母の表情に陰が差す。

「?……あ、そうだ。水盤借ります」

「どうぞ。あ、光秋さんのコートも片付けておきますね」

「ありがとうございます」

それが気になりながらも礼を言いながら伊部母にコートを渡すと、光秋は1階の脱衣所の水盤で手を洗う。

タオルで手を拭いて伊部の部屋の戻ろうとすると、階段を下りてきた伊部母と会う。

「そういえば、旦那さんは?」

「出張修理に行つてます。光秋さんたちが帰ってくる少し前くらいに出ていったかしら」

「そうですか……」――旦那さんには悪いけど、また昨日の夜みたいにな妙な空気になるのも嫌だったし、ちょうどよかった――

伊部父不在に内心安堵すると、伊部母に一礼して階段を上がり、伊部の部屋に入る。

カーペットの上に腰を下ろしてベッドの上で眠る伊部を眺めていると、あることに気付く。

――いかん。なにか掛けてやらんと風邪ひくな――

思うや部屋の隅に置いてある自分の寝具一式から掛け布団を取り、伊部に掛けようと

する。

と、

「……………」

「伊部さん、大丈夫ですか？水持ってきましようか？」

伊部が目を開けたことに気付くと、光秋は布団を持ったまま顔を寄せて話し掛けてみる。

そして、その返事に仰天することになる。

「……………ア、キ？」

「……………え？……………まさか……………綾あ!？」

なんとか聞き取れた「アキ」という呼び方、加えて伊部とはどことなく違う雰囲気、突然の再会に心臓を跳ね上げながらも、光秋は目の前にいるのが綾だと感覚的に理解する。

と、綾はふらつきながらも上体を起こし、虚ろな目で光秋を見据える。

「あれ？なんだろう？なんかふらふらする……………けど、なんかふわふわして気持ちいい

……………」

—ああ、体が一緒だから綾も酔ってんだ…………—

酔いの影響で頬の筋肉が弛んでいるのか、笑っている様な顔で語り掛ける綾に、再会

の動揺から立ち直り切れていない光秋はついどうでもいいことを考えてしまう。

その間にも綾は両腕を光秋の首に回し、顔を近付ける。

「アキ……」

「あ、綾？何を……」

唐突な行動に再度動揺して布団を取り落とし、その間にも綾は顔を近付けてくる。

——こ、これは……——

夏以来の懐かしい感覚に、徐々に判断力が鈍り、危うい感情が湧き上がってくるのがわかる。

が、

「……あれ？……」

「？……綾？綾？」

直後に綾はもたれ掛って動かなくなり、光秋が揺すりながら呼び掛けても反応がない。

「……すうー……すうー……」

「寝たか……」——とりあえずよかった。変なことにならないで……でも、ちよつと残念だったかな？——

左の耳元で聞こえる寝息に安心しつつもどこか不満を覚えると、光秋は無意識に髪留

めを解き、両腕を綾の脇に回して抱き寄せる。

—この感じ、久しぶりだな。まさかこうも突然訪れるなんて……………」

胸中を埋める懐かしさに抗うことはできず、そのまましばらく浸ってしまう。

—……………」いかな。これ以上こうしているとダメになりそうだ—

そう思つてようやく腕を解き、綾を横にして布団を掛けると、日高家で飲んだ紅茶が効いてきたのか、気を取り直すことも兼ねてトイレへ向かう。

が、用を足して個室を出ても、すぐに伊部の部屋に戻る気にはなれない。

—今行つたらまた変な気になるうよなあ。そうじゃないと言えない自分が悔しい……………」どつか別のところで時間を……………」?—

そんなことを考えながら辺りを見回していると、光秋は伊部夫妻の寝室のドアの横に無地の襖を見付ける。

—そういうや今まで用がないから素通りしてたが、この部屋なんだろう?—「倉庫かな?—」

呟きつつ、単なる好奇心から襖を開けてみる。

薄暗く視界が悪い室内に、手元のスイッチを押して電灯を点けると、木製のテーブルが置かれた六畳間と、部屋の奥に設置された仏壇が目に入る。

「仏間か……………」なんか懐かしいな……………」

多少様式は違えど家にあつた同じ部屋を連想し、仏壇の前に座布団が敷かれているのを見るや、光秋はそこに正座し、目をつむつて開け放たれている仏壇に手を合わせる。

「……………」

そうして息を深く吸つて吐き、呼吸を整えてそれを持続させると、それに合わせて心が風いでき、雄大な“虚無”が広がっていくのを感じる。

自分が自分以外の全てから切り離された様な、そもそも“自分”さえも曖昧に感じる様な、本当に全てのものを一旦遮断し、昂つていた心が静まつて行く様な、下がつていく心地よさ。

時間も忘れてそれを堪能していると、

「……………光秋さん？」

「……………奥さん……………」

不意に開けっぱなしの襖の前に立っている伊部母に呼び掛けられ、光秋はハツとしつつ現実に戻る。

「なにをしてるんだい？」

「旦那さんも……………ああいえ……………仏壇を見付けたんでちよつと……………落ち着くもので……………」

「はあ……………」

まだ若干あたふたしている光秋の返答に、伊部母の隣に顔を出した伊部父はとりあえ

ず相槌を打ってくれる。

「ところで、お二人は？」

「法子の様子を見にね。日高さんの家から背負ってきてくれたみたいで、悪かったね」

「いいえ。大したことじゃありません……僕は法子さんの弟分ですから」

申し訳なさそうに言う伊部父に、光秋は伊部母の時と同じ調子で返す。

「弟分……か……」

「……あの、なにか？」

先程と同様に伊部父の顔にも陰が差し、伊部母も再度表情を曇らせるのを見て、光秋は2人の氣に障ったのではと不安になる。

「ああいや、大したことじゃないんだが……」

「……お父さん。いい機会ですから、光秋さんには教えてもいいんじゃないですか？」

「母さん……」

——何か、大事な話なのか？——

伊部母の提案に言い淀む伊部父の姿に、光秋はそんな予感を抱いて思わず身構える。

「いいのかい？そもそも母さん大丈夫かい？」

「私は大丈夫ですよ。今は法子がいますし……それに、光秋さんはあの子が信頼してる人ですし」

「……確かに。それに、今後のことも考えるとねえ……わかった。なら私が――」

「いえ。私が話します。話させてください」

「……わかった。じゃあ、私は法子の方見てくるよ」

伊部母の強い要望に応じると、伊部父は伊部の部屋へ向かう。

仏間に入った伊部母は光秋の前に正座し、

「！」

その改まった様子に、光秋も正座を直して姿勢を正す。

「ああ、そんなにかしこまらないでください。もう少し楽にして」

「は、はあ……」

そう言われてすぐにできるものでもなく、光秋は知らぬ間に強張る体を持て余してしまふ。

その間にも、伊部母は話を始める。

「はじめに言っておきますが、私たち夫婦は貴方のことをよく知りません。ただ、法子が信頼している人だから私たちも貴方を信じ、その上でこの話をする、そこは理解してください」

「そのつもりです。そのくらいには大事、なんですよね」

「はい……」

光秋の返事にひと呼吸置くと、伊部母は話を続ける。

「すでに気付いてる……いえ、あの子が話したかもしれませんが、私たちは血の繋がった親子ではありません」

「以前教えてもらいました。エジプトの施設にいた所を養子にしたって」

「ええ。カイロのね……私たち夫婦には、子供ができなくて。やつとの思いで授かった子も、いくら経たずにダメにしちゃったんですよ……」

「はあ……」——ダメにした？……いや、これ以上は……——

伊部母のぼかす様な言い方に引つ掛かりを覚えつつも、これ以上は触れてはいけないと察し、そもそも尋ねる勇気のない光秋は先を促す。

「誰が悪いつてわけでもないんでしようけどね……わかつてはいても、1年くらい引きずってたかな。それで落ち込んだところを、お父さんの勧めで気分転換に旅行に行くことになりましたね。どうせなら海外に行こうって。当時は三戦危機の真っ最中でしたから行ける場所も限られてたんですけど、エジプトは比較的安定してたから、そこに行くことになって。興味本位でたまたま立ち寄った孤児院で、あの子に会ったんですよ……」

言いながら、伊部母は遠くを見る様な目を伊部の部屋の方へ向ける。

「それが、法子さん？」

「ええ……お父さんは外国語に明るかったので、職員の方に事情を訊いたら、数日前に置手紙と一緒に孤児院の前に置かれていたそうで」

「置手紙？」

「向こうの言葉で、『この子の両親は戦争で亡くなった。後を頼む』って。差し出し人も子供の名前も書かれてなかったらしいですけど……」

伊部母は再び遠くを見る目をして一旦話を区切り、少ししてまた話し出す。

「ベッドを覗く私たちをじーつと見て、無邪気に笑って……生きていれば、あの子」と同じ歳頃だな、この子は「あの子」の生まれ変わりかな、なんて……そう考えたら、どうしても引き取らなきゃいけない気がして……わかつてはいたんです。そんなのは親のエゴだって。私たちの勝手で遠い異国に連れてこられたこの子は苦労するって……だからこそ、私たちは法子が日本で生きていけるように……「日本人」として生きていけるように、そして亡くなった本当の御両親の分まで幸せになれるように精一杯のことをしたつもりです……でも、どうしても考えてしまうんですね。これでよかったのか。私たちの気持ちに応える為にESOに入ったと言っていました。これも本当によかったのか、あの子の気持ちを尊重するといつて危険な仕事に就くことを止めたのか。本当に正しかったのか……未だにわからないことです……」

一通り言い終わると、伊部母は表情を曇らせて俯いてしまう。

そして一連の話を聞いた光秋は、言葉に迷いながらも口を開く。

「……今の話、正直僕に上手い返しなんてできません。ただ、何が幸せなのか、自分がどう生きたいのか、それは人それぞれなんだと思います」

「……」

黙って聞いてくれている伊部母を見て、光秋はぎこちないながらも話し続ける。

「この数カ月、よく一緒にいて感じたことなんです、法子さんは今の自分に満足——と言ったら語弊があるかもしれませんが、少なくともお二人のことも含めて肯定的に捉えていましたよ。ときどき今の自分のことやお二人のことを生き生きと話していました。仕事だって、法子さんなりにいろいろ考えた上で出した結論なんだと思います。少なくとも僕は、その考えを受け容れてあげたい」

ESOに入る直前の昼食で交わした会話、数日前の多目的室での談話、そして合同演習後の飲み会で酔い潰れた伊部を送っていった際の寝言が浮かんでくる。

「これでよかったのか、それはどんなことでも付いて回る疑問なんだと思います。でも、人間には所詮、『その時最善と思える行動』をとることしかできない。それが吉と出るか凶と出るかなんて、時間が経たないとわからないし、良し悪しなんて見方次第でどうでも変わってしまう……だからこそ、過去の自分を肯定できるように今頑張ればいいんだと思います。そしてそれは、一人一人が自分で成さなければならぬこと、誰も代

わってやることなんてできないこと……法子さんが幸せかどうかなんて正直わかりませんが、充実はしていると思いますよ。少なくとも僕にはそう見えます」

最後の方は微笑みを浮かべて言い切ると、少し照れ臭くなってくる。

「……………」

それに対して伊部母は、目をつむって沈黙を返す。

「勢いであれこれ言ってしまったが、変なこと言っただろうか?—

その反応に、光秋はどうしても不安になる。

と、

「……………確かに、あの子が信頼する人ですね」

「え?……………」

微笑みを浮かべて言う伊部母に、光秋は面喰ってしまふ。

「一つだけ、私からも教えて欲しいことがあります」

「なんででしょう?」

伊部母からの質問に、光秋は思わず身構える。

「光秋さんがESO、それも実戦部隊にいる理由……端的に言えば、戦う理由はなんですか?」

「…………戦う理由……………」

それは、ESOに入った時、あるいは初めて自分の意志でニコイチに乗った時から、心の何処かですっと考えていたこと。

向こう側での18年で抱いた想いを基に、こちら側に来てからの9カ月の体験を経て漠然とあったもの。

しかし今は、それが急速に形になっていく。まだ不完全な部分があるかもしれないが、今なら語れる気がする。

だから、光秋は口を開く。

「……守る為、ですかね。目の前にいる人を、一人でも多く」

「守る為……」

「僕、もともと臆病者で、暴力とか争いごととかが昔から苦手だったんです。ちよつとした怪我でもすぐ泣くような子供でした。でも、だからこそ他人の痛みに敏感になったのかな。怪我をした人を見ると、こっちもで痛いと感じて。子供の頃の平和教育なんか、怪我をして痛いだろうな、そんな痛いことをする戦争嫌だなんて感じて受けてたと思います。だから、ESOに入った今、そうした傷付く人を一人でも減らしたい、その為に精一杯頑張りたい、その為の“力”はもらったから……」

言いながら、左手をズボンの左ポケットに置き、そこに入っているカプセルを意識する。

「……上手く言えたかわかりませんが、それが僕の戦う理由です。青臭いと笑われるかもしれませんが、自分の気持ちを正直に表した結果です！」……そうだ。少なくとも、この気持ちに嘘はつけない！」

思いつつ、伊部母の目を真つ直ぐに見て言い切る。

「もちろん、僕一人にできることなんて高が知れてます。だからこそ法子さんや他の人たちに……仲間に関することもあります」

それまで言うことに抵抗があつた「仲間」という単語を、しかしこれ以上適切な表現がないと察し、意を決して言う。

「それに、今やつているような場当たり的な対応、もちろんそれも大事ですが、もつと根本的な部分から解決したい……せめて自分がそれに関わつたつていう証くらいは残したいと夢見たりします。もつともそれは、今のようなやり方とは違うんですが……すみません。少し脱線しましたね……」

付け加えが長引いたことを詫びると、深呼吸を一つして火照つた体を冷ます。

「いえ……ただ、ずっと口数の少ない方だと思つていたので、よく話すのには驚きました」

「きつかけさえあれば、いくらでも話す奴です」

微笑んで応じる伊部母に、光秋はありのままを伝える。

『笑う』と言いましたが、私はそんなつもりはありませんよ。寧ろ、若いのに自分の考えをしつかり持っていることは素晴らしいことだと思いますし、それを言葉で表せることは凄いことだと思います」

「……上手くできたかはわかりませんが」

伊部母の褒め言葉に、光秋は照れながら頭を搔く。

「そういう人ならば、頼めるかもしれませんね」

「頼む?……」

笑みを消して真剣な眼差しを向ける伊部母に、光秋も態度を改めて応じる。

「いろいろな言いましたが、親としては、やはりあの子の信じた通りの生き方をさせてあげたい。でもやつぱり、危険な職場へ送ることに不安はある。だから……娘を——法子を守ってあげてください」

言いながら、伊部母は静かに頭を下げる。

「親の勝手な都合なのは承知しています。ですが、光秋さんの様な人が同じ職場にいるなら、どうしても言っておきたいんです……法子を、よろしく願います」

「……………なんか、結婚の許可を取りに来たみたいですね」——もう少しマシなこと言うんだった……………」

独特の雰囲気吞まれてつい軽口を叩いてしまい、咄嗟に出てきた内容にすぐに後悔

する。

「フフツ……そうですね。ただ、光秋さんならそういうことも……」

「そういうことはまたの機会に……ただ」

顔を上げた伊部母の冗談に応じると、光秋は気を取り直して続ける。

「言われなくてもそうさせていただきます。目の前の人を守る、それは、まず仲間を守る
ことだと思うので」

「……そうですか」

真つ直ぐ目を見て言い切る光秋に、伊部母は静かに応じる。

「……終わったかな？」

いつからいたのか、襖の陰から顔を出した伊部父が訊いてくる。

「はい。終わりましたよ」

「法子さんはどうです？」

なんてことない様子で応じる伊部母に続いて、光秋は気になったことを訊いてみる。

「さつき目を覚ましたよ。水が欲しいって言うから今取りに行くところだったんだが

……」

「じゃあ、僕行きます。コップはどれでも使っていていいですか？」

「はい。あ、あと、水は冷蔵庫にあるやつで」

「わかりました」

伊部母に応じると、光秋は台所に下りて、食器棚から適当に取ったグラスに冷蔵庫から出したペットボトル入りの水を注ぐ。

2階から伊部夫妻が下りてきたのを確認すると、それを持って伊部の部屋へ向かう。

「法子さん。大丈夫ですか？」

「……うん。まだすつきりしないけどね……ありがとう」

水を受け取りながら応じると、ベッドに腰掛けた伊部はそれを一気に飲み干す。

「ふうー……少しよくなったかな？」

「もう一杯持つてきましようか？」

「いいよ」

応じると、伊部はグラスを机に置き、光秋は正面の床に胡坐をかく。

「……お父さんから聞いたけど、また酔っぱらって運んでもらったんだよね」

「はい。突然倒れたからびっくりしました」

「ごめん。紅茶にブランデーなんて、完全に油断してたよ」

「まあ、そういうこともありますよ」

恥ずかしさと申し訳なさに俯く伊部に、光秋は軽い調子で返す。

「そういえば、お父さんが来る前にも一回起きた気がするんだけど……もしかして綾？」

「え?……よくわかりましたね」

一瞬間喰ったものの、光秋はすぐに感心する。

「なんとなくね。あと、髪も解けてるし」

「ああ。そうでしたね」

伊部が解けた髪を指さすのを見て、光秋は自分が髪留めを取ったことを思い出す。

「なんか話したの?」

「話したといいますか……ふつと起きて、酔いだか寝惚けだかでふらふらして、また寝た、そんな感じですね。法子さんの意識が弱まったから、代わりに出てきたのかな? いきなりでちよつと驚きました」

「そうだろうね。考えてみれば、こういう普通の時に出てきたのって初めてでしょ?」

「……ですね。平時に出たのは夏以来か……」——待てよ?もしかして……いや、少なくとも今はやめておこう——

ある推測を浮かべつつも、光秋は今のところそれを呑み込む。

「それと、お母さんとなにか話してたみたいだけど?」

「ああ……ちよつと、法子さんのことを……」

「私?」

「法子さんを守ってくれて頼まりました。同じ職場にいるならつて。言われなくても

と返しておきました」

「……お母さん……」

光秋の説明に、伊部は嬉しい様な恥ずかしい様な顔をする。

「あと、ESOにいる理由……戦う理由を訊かれました」

「なんて答えたの？」

「守る為、と。目の前にいる人を一人でも多く。ESOに入る前に法子さんから聞いた入隊理由と似てるかもしれませんがね。ただ、その話も含めて、こつちに來てからの経験から導き出した結論でもあります。夏のこととか、殺さない覚悟の話とか……それに、その為の“力”はもらったから……違うな。“力”があるからやるんじゃないんだ。僕がそうしたいからやる、ある種の願い、夢……欲望といってもいいかもしれませんが、それを叶える為にやる。その手段として“力”を——ニコイチを、格闘技を、他にも自分の持つてるもの全てを使う……すみません。また長くなりましたね」

「うんうん。光秋くんらしい。2つの意味だね」

喋り過ぎたと申し訳なさそうにする光秋に、伊部は微笑んで返す。

「どうも………とところで法子さん。さっきの話ですが……」

若干照れながら応じると、光秋は先程呑み込んだことを再び持ち出す。

「さっきの？なに？」

「普通の時に綾が出てきた話……まさかとは思うけど、今でもやろうと思えばまた出てくるんじゃないかと思って」

「え？でもそれ、前に京都観光した時にも試したでしょ？あの時は無理だったじゃん」

「あの時はまだ一回しか出てませんでし、そういうことができるようになって日が浅かったから。あれから何度か綾が表に出てくることがありましたし、今朝とかさつきとか、法子さんの意識が弱い時には表層ギリギリまで出てきてます。その時は無我夢中であまり意識しなかったけど、坂本さんの乗ったヘリを捕まえる時にも声を聞いた気がするんです。自分の中に意識を向ければ、あるいは……」

「うーん……」

憶測の域を出ないことを承知で話す光秋に、伊部は半信半疑といった顔をしつつも目をつむって言われた通りにしてみる。

しばらくすると伊部はゆっくりと目を開け、寝惚けている様な目で辺りを見回す。

「この感じ、やつぱり……」 「綾、だな」

その状況を確認する様な仕草と、なによりもさつきまでと雰囲気が変わったことに、光秋は確信しながら呼び掛ける。

「……ア、キ？……そうだよ……アキ！」

目から寝惚けの色が消えるや、綾は顔一杯に笑顔を浮かべて光秋に抱き付く。

「綾……」——ダメ元だったが、上手くいった！こんなふうになんか会えるのを待っていた——心の中で喝采を叫びながら、光秋も綾の背に両腕を回して抱き締める。時間も忘れてしばらくそうしていると、光秋も徐々に落ち着いてくる。

——……………そろそろにしよう。いつまでもこうしてるわけにもいかない……………それに、出てきてくれたのなら、どうしても話さなければならぬことがある——

心中に断じると、ゆっくりと体を離して綾の目を見据える。

「久しぶりに会えて嬉しいよ。いつもドタバタの合間にちよつとだけだったからな」

「あたしも。いつもすぐに眠っちゃうから」

「積もる話もあるだろうけど、どうしても言いたいことが2つある。まず、今まで助けてくれてありがとう。お前さんがいなかったら、僕はこいかなかっただろうな」

「それはさ、アキも法子とのお話聞いてたなら知ってるでしょ？あたしはただアキの力」になりたかったんだよ」

「それでも、やっぱりお礼はちゃんと说着ておきたかったんだよ……………その上でもう1つの話——今度は、少し厳しいことを言う」

前置きを言うのと光秋は言葉を区切り、口の調子を整える。

「さつき出た法子さんとの話で気になることがあつてな」

「なに？」

「綾、僕がいないとダメみたいなこと言つてたよな。僕から言わせれば、そんなことはないよ」

「そんなことないよ！あたしは——」

「話は最後まで聞け。今のお前さんは、初めて会った頃と違って、もう“自分”つてものをちゃんと持つてる、自分の足で歩けるようになったんだよ。どこか僕にしがみついて生きてたあの頃とは違うんだ……ここまでわかるか？」

「……なんとなく」

話を区切つて確認する光秋に、綾は頷きながら応じる。

「結構……つまりな、お前さんはもう一人で生きていけるようになったんだよ。いつまでも僕に縋る様なことはない。ただ誤解して欲しくないのは、それは独りぼっちで生きるってことじゃない。僕は僕、綾は綾でちゃんと自分の足で立つて、その上で一緒に生きていく……そう、『手を繋ぐ』様な関係でいたいんだよ」

「……『手を繋ぐ』様な関係……」

光秋の言葉を繰り返しながら、綾は自分の両手を見る。

「もつと言うとき、こんな感じだ。ちよつと後ろ向いて」
「？」

首を傾げながらも、綾は言われた通り後ろを向く。

と、光秋も綾の背中に自分の背中を合わせてくる。

『背中合わせ』の関係ってやつかな。互いに背中を預け合う——守る・守られるって一方的な関係じゃなく、互いに守り合う、そんな感じ。綾が僕を守ってくれた様に、僕も綾を守りたい、そんな感じ」

『背中合わせ』、か……」

「さつき法子さんとしてた話、聞いてたか？僕が戦う理由」

「全部じゃないけど、なんとなく。守る為、なんだよね？」

「ああ。それにも結局、この関係が関わってくるんだよ」

「どういうこと？」

「僕一人でできることなんて高が知れてる。だから他の人にも頼る。その中には、お前さんや法子さんも含まれてる。でもそれは、誰かが誰かに頼る様なあり方じゃなくて、一人一人が自分の足でしっかり立って、その上でそれぞれの目的——夢を叶えるものなんだと思う……またいろいろ言ってしまったけど、要するに、僕は綾にも自分の足で立つて欲しいんだよ。自分の足で立って、背中合わせになつて欲しい」

浮かんできると言葉を止めることなく言い切ると、光秋は疲れた口を休める。

「……アキの言いたいことはわかるよ。けど……あたしの気持ちはどうなるの？」

「……やっぱり、そうなるよなあ……」

会話を始めた時から薄々予想していた流れに、光秋は深呼吸を一つして応じる。

「そのことについても、話さなくちやいけないよな。ただ……できれば法子さんと3人で話したいところだけど、流石にそれは無理かな……?」

「法子も?」

「ああ。法子さんも関わる話だから。一応今のままでも記憶は残るみたいだけど、凄く曖昧だしな……」

早速の難題に途方に暮れてしまう。

と、綾が少し考える顔をする。

「……それなら、あたしが3人で会えるようにしてあげようか?」

「?……できるのか?」

「テレパシーを応用すればなんとか」

「大丈夫か?前みたいに気絶されるのは嫌だぞ」

「あの時は初めてでいきなり思いつきり使ったからだよ。今度はもう少し気を付けてやる」

「ならいいが……」——薄々感じてはいたが、話し方や内容がしつかりしてきたよな。子供っぽいところはあるけど……心と体の年齢が釣り合ってたってことかな——

綾の提案を受け入れつつ、光秋はその様子が夏の頃とはいい意味で変わっていること

に安心する。

「じゃあ早速」

言うや綾は顔を近付け、光秋の口に自分の口を重ねようとする。
が、

「いや、ちよつと待った」

口が触れる直前、光秋はそれを右手で遮って止める。

「どうしてもその方法……キスしないとできないか？」

「別にどうしてもじゃないけど……なんで？」

「じゃあ、そうじゃない方法でやってくれ」

「……わかった」

不満そうに首を傾げて応じると、綾は額を光秋の額に当て、目をつむって集中する。

「……」

光秋も目を閉じて心構えをすると、視界一杯に光が広がっていく。

63 気持ち新たに

——……………ここは……………

目を開けると、そこはさつきまでいた伊部の部屋であり、光秋は床に腰を下ろしていることに気付く。

しかしベッドには、右にジーンズに赤シャツの上に白い羽織りを着た伊部と、左に白いワイシャツに赤チェックのロングスカートを着た綾が腰掛けている。

——確かに、現実ではなさそうだな——

髪を結っているかいなか以外違いのない顔が並んでいる光景にそう思うと、光秋は2人の顔を見据える。

「あの夢みたいなのから1日も経たずにこうなるとはね……」

「ですね……僕の勝手に付き合わせる形になってすみません」

伊部の感慨に謝りながら応じると、光秋は話を切り出す。

「まず、法子さんはさつきまでのやり取り覚えてますか？」

「なんとなくね」

「それは助かります……まず、綾には謝りたい」

「謝る？」

唐突な発言に綾は首を傾げるが、それに構わず光秋は正座して両手を床に付け、頭を深く下げる——土下座をする。

「夏に一緒に過ごした、その別れ際に抱いた気持ちに嘘はなく、今でも僕にとつては大事なものだ。でも……同じくらい大事に感じる気持ちを抱く人ができてしまった。それについて……ごめんなさいっ！」

ただでさえ深く下げた頭を、床に打ち付けるくらいさらに深く下げながら言々と、ゆつくりと顔を上げる。

「あたしと同じくらい大事な人って……法子？」

「はい」

綾の質問に、光秋ははっきりと応じる。

「漠然とそんな気持ちはあった。こつちに來てからずっと、法子さんは僕のことを気に掛けてくれてたし、僕もそんな法子さんの気持ちに応えたいと思ってた。昨日までなら、それがあくまでも姉貴分・弟分で納まっていたかもしれない。でも、今朝の夢で法子さんが僕をどう思ってるかを知って、僕の気持ちもそれで納まらなくなってきた。ただ……綾が大事な人であることにも変わりはない。どっちがより大事ななんて判断がつけられない。どっちの気持ちにも嘘がつけない……それが、今の僕の気持ちで

す」

長い間心の何処かに引つ掛かっていたものを吐き出す様に、思いの丈を2人にぶつける。

幻滅されるかもしれない、2人からの信頼を裏切るかもしれない、そんな不安が脳裏にちらつくものの、正直な気持ちを言い切ったことそれ自体に後悔はなく、胸の内がすつきりする。

しかし一方で、

「……あたしとさつきキスするのを断つたのも、その所為？」

「はい。こんな宙ぶらりんな気持ちじゃ、前の様に接することはできないから……」——つくづく僕の勝手だよな……上杉さんを批難できないや——

綾の問いに答えつつ、重い罪悪感が押し掛かかり、知らぬ間に顔を俯ける。
と、

「……まず、顔を上げて」

「……………」

ベッドから下りて歩み寄ってきた伊部の静かな呼び掛けに、光秋はゆつくりと顔を上げると顔を上げる。

「話してくれてありがとね。光秋くんの気持ちはよくわかった……だから、そんな思い

「詰めないで」

「……………」

「夢で言ったと思うけど、私も光秋くんのこと好き。でも、惚れっぽいこと知ってるから、自分の気持ちに自信が持てない。それでも、私にとっても光秋くんが大事な人であることに変わりない……………なんか、光秋くんに似てるね」

「……………言われてみれば」

自嘲的な笑みを浮かべて話す伊部に、少しだけ心が軽くなった光秋も自然と頬が弛む。

「だからさ、そこまで思い詰めないで。それに、これはあくまでも私たち3人の問題なんだから」

そう続けながら、伊部は綾の方に振り向く。

「綾はどう思う？ 光秋くんの気持ちを聞いて」

「……………」

伊部の問いに俯きながらも、綾は静かに答える。

「あたしは、アキが大好き。だから、アキにもあたしを好きになつて欲しい……………それがあたしの気持ち……………かな？ でも……………アキは、あたしだけを好きでいてくれないんだよね」

「……」

その一言が、再び光秋の心を重くする。

しかし、

「……今更ながら、勝手を承知でお願いしたい」

言わなければならぬことを断じ、自分の身勝手さに歯を食い縛りたくなる気持ちを抑えて口を開く。

「さつき言つたように、2人が同じくらい大事という気持ちに嘘はつけない。でも僕自身、こんな中途半端な気持ちでいるのも嫌だ。だから………僕に考える時間をくださいっ！」

叫ぶや、再び頭を深く下げる。

「短い間にいろいろあり過ぎて、少し混乱してるかもしれない。そうでなくても、すぐに理路整然と判断できることじゃないと思う。だから、この件についてゆっくり考える時間をください。どれくらい掛かるか判らないけど、いずれきちんと決着をつけたい。それまで、待つてください」——………つくづく、身勝手だよな僕も。そして結局先延ばしをお願いしてる……でも、今はこれしか思いつかない……—

言い切ると、光秋は今度こそ自己嫌悪に歯を食い縛る。

「だから、顔上げてって。私もこの件は時間空けた方がいいと思う。私だつてちよつと

混乱してるもん。それに……もう、急ぐ必要なんてないでしょ？」

「！」

伊部のその一言に、光秋はハツとしながら顔を上げる。

「今回のことで一つわかったけど、私と綾は前より自由に入れ替わることができる。そりゃあ、私たちからすればお互い窮屈な思いもするだろうけど、でも、会いたい時に会えるようになったってことでしょ。今までみたいに、短い間になにもかも済ませることに拘らなくていいじゃない。光秋くんだけじゃなくて、3人でなんとか上手くやっていく方法を考えていこう……ねえ、綾」

光秋に語り掛けつつ、伊部は綾に呼び掛ける。

「……………アキはさ、今はあたしと法子、同じくらい好きなんだよね？」

「好きというか、大事だな」

「じゃあ……」

言うや綾は跳ねる様にベッドから立ち上がり、ぶつかる様に光秋の許に顔を寄せる。

「……………」

突然の反応と、初めて見る綾の真剣な眼差しに、光秋は束の間戸惑ってしまう。

「あたしが頑張れば、あたしの方をもっと大事に思ってくれるって、そういうこと？」

「あ、ああ……………今言った理屈で言えば、そういうこともあるかな。そういうことも含

めて考えていきたい」

真剣に訊いてくる綾に、立ち直った光秋も真剣に応じる。

「そつか……………じゃあ、今まで通りじゃん」

「?……………今まで通り?」

「?」

綾の唐突な言葉に、光秋と伊部は首を傾げる。

「初めて法子の話をしてくれた時、あたし言ったよね。アキが好きになれる人になるように努力するって」

「……………ああ、そういえば」

言われて光秋は、その時のことを思い出す。

「アキは別に、あたしが嫌いになったわけじゃないんですよ。だったら、法子よりあたしのことを好きになるように努力すればいいじゃん!あたしにとつては、今までとそんなに変わらないよ!」

「綾……………」

呟く様に言いながら、3人での会話を始めてからやつと笑った綾に、光秋はようやく安堵する。

「だから法子、あたし、負けないから!」

「私はまず自分の気持ちを整理しないといけないんだけどねえ……」

——とりあえずひと段落、かな？……といつても、ここからなんだが——

勝気そうな綾に伊部は困った顔で応じ、それを見て光秋は和みつつも少しだけ気を引き締める。

そこで再び光が広がり、視界を埋め尽くしていく。

「……………」

光が納まって辺りに目を向けると、光秋は綾と額を合わせた体勢で固まっていることに気付く。

ゆっくりと額を離して顔を上げると、綾も若干疲れが浮かんだ顔を上げて目を合わせる。

「ありがとな。話し合いの場を作ってくれて……それはそうと、疲れてるみたいだけど、大丈夫か？」

「んー……ちよつとくらくらする、かな？」

「前よりは上手く使えるようになったのかもしれないけど、やっぱり負担が掛かるのか……もしくは長く使わせ過ぎたか……どっちにしろ、あんまり多用しない方がいいみたいだな。無理させてすまない」

「あたしが自分でやるって言ったんだから、いいんだよ」

頭を下げる光秋に軽い調子で返すと、綾はベッドに座ろうと一度立ち上がる。
と、

「……あれ？」

「危ない！」

立った途端に綾はバランスを崩し、倒れそうになるところを慌てて腰を浮かせた光秋が支える。

「本当に大丈夫か？」

「……ごめん。急に目が回って」

抱きかかえる様にして支える光秋の問いに、綾は弱々しく応じる。

その直後、

「2人とも、さつきからご飯だっ……て……う？」

言いながらドアを開けて入ってきた伊部父は、部屋の中で抱き合っている——様に見える——光秋と綾を見て言葉を失い、石の様に固まる。付け加えるならば2人の顔はとても近く、互いに見つめ合っていたために、現時点だけを見ればキスの瞬間に鉢合わせしてしまった様な居心地の悪さを感じる。

もつとも、光秋と、既に交代した伊部も負けず劣らずの気まずさを抱く。

「いや、旦那さん、これはですね……」

「私が、立ち眩みを起してね、光秋くんが咄嗟に……」

「い、いやあ、私こそ悪かったね。お取り込み中のところを。ただほら、夕飯できたから……ひと段落したら、下りてきて」

「『そういうんじゃないやありません!』」

尚も誤解と動揺を続ける伊部父に、2人は腹の底から否定の声を上げる。

その後、一応伊部父の誤解を解いた光秋と伊部は、そのまま共に居間に下りて夕食を摂る。

「……」

「……」

「……」

「?……」

未だ気まずさの余韻が残る光秋と伊部、伊部父、その3人を不思議そうに見つつも深く追求しない伊部母で食卓を囲みながら、食事の時間は静かに過ぎていく。

味など判らず、なにを食べたのかももう覚えな夕食を終え、食後の片付けを済ませると、光秋と伊部は気まずさから逃れる様に部屋へ戻る。

「まさかあそこでお父さんが来るとはねえ……」

「ホント、びっくりしました。テレパシー中は時間の感覚が普段と違うから、尚のことで

すね」

脱力する様にベッドに腰を落とす伊部に、光秋は知らぬ間に強張っていた体から力を抜いて椅子に座る。

少しして落ち着くと、浴室に行こうと手荷持をまとめると、

「あ、ちよつと待つて」

伊部の呼び掛けに、光秋は作務衣を抱えながら顔を向ける。

「綾が、ちよつと話があるつて」

「綾が？」

光秋が応じると、伊部は糸が切れた様に首を垂らし、数瞬後に違う雰囲気をもとって顔を上げる。

「これは、綾だな」

その感覚に確信しつつ、光秋は話をよく聞こうと綾の許に歩み寄る。

「話つて？」

「えつとね……………アキはどんな人が好き？」

膝を折って視線を合わせながら問う光秋に、綾は少し照れた様な、どこか言い辛そうな様子で訊く。

「どんな？　そうさなあ……優しい人、かな」

「そういうんじゃないくて……その………どんな女の人が好き？」

「ああ、そういうこと。でもそんなこと訊いてどうするんだ？」

綾が言いたいことを理解しつつも、その意図を察しかねる。

「アキがあたしを好きになつてくれるように努力するつて言つたでしょ。だから、アキがどんな女の人が好きか知りたいの」

「そういうことか……でも、僕は今の綾も好きだけど」

「今のままじゃダメだから訊いてるの！　いいから教えて！」

「ん、でもなあ………」

珍しく目くじらを立てる綾に応じつつ、光秋はしばし考える。

「強いて言うなら、『自分』を持つてる人、かな？」

「『自分』？」

「『自分で考えられる人』と言つてもいいかもしれない。なにについてもとりあえず自分の意見を持てる人——自分の足で立つてる人。身近な例を挙げるなら、法子さんかな。そういう人とは話していても楽しいし、さつき言つた様ように背中を預け合える………だいたいこんなところか？」

「……それつて、要は法子が好きつてこと？」

応じつつ、綾は頬を膨らませる。

「そういうことでもないんだがな……法子さんだつてぼんやりしてる時もあるし。そう言う僕もなんだろうが」

「……なんか納得いかないけど……一応わかった。でも、どうすれば自分の意見を持てるのかな？」

「まずは勉強だろうな。なんであれ、まずは知らないことにはどうにもならんから。手始めに、綾が今一番興味のあることでも調べてみたらどうだ？」

「あたしの興味のあること……」

「僕から言えのはこんなとこだな。じゃ、風呂入ってくる」

「うん。ありがとう」

綾の返事を聞くと、光秋は夕食の際に下から持つてきたバスタオルを持つて浴室へ向かう。

—最初の照れは、ああいう質問をするのが恥ずかしかったのかな？羞恥心も覚え直した奴がかなりの進歩、それなら嬉しい限りだ。しかし……また偉そうなことを言ったが、僕はそういう人に釣り合うだけの人間か……？—

階段を下りながら、光秋の胸に不安が過る。

風呂から上がって作務衣に着替え、台所に寄って冷蔵庫から目薬を取り出し、居間の

伊部父に一言告げると、光秋は冷えた床に追い立てられる様に伊部の部屋に戻る。

ドアを開けると、椅子に腰掛けた綾が高校の世界史の教科書を読んでいる。

「なにやってるんだ？」

「勉強。あたしの一番興味のあることについて調べてみたらって言ってたじゃん」

光秋の問いに、綾は一瞬顔を向けて応じると、すぐにまた教科書に視線を戻す。

「教科書は法子さんのか？……即断即行とは、頼もしいな」

熱心な表情で教科書、それもめくつている位置からして近代の辺りを読み進める綾に微笑みを浮かべながら、光秋はベッドに腰を下ろして目薬を注す。

「……あ、そうそう。法子が話があるって」

「法子さん？」

光秋が応じると、綾は教科書を机に置いて糸が切れた様に首を垂らし、違う雰囲気をもとって顔を上げる。

「これは法子さんだな……にしても、電話を代わるくらい気軽になったな」

綾と伊部の交代の様子に、嬉しくもこれでいいのか引つ掛かるものを感じる、複雑な気持ちを抱く。

「えっとね、光秋くんがお風呂に行つてすぐに、藤原三佐から電話があつてね。突然だけど大きな仕事が入つて、1日から出てくれつて。だから、明日の夕方くらいにニコイチ

で京都に戻ろう」

「また急ですね……でも仕事なら仕方ないか。了解です。大きな仕事って？」

「電話じや話せないって。それも休み明けに説明するんでしょう」

「なるほど……でもそれじゃあ、ご両親と年越しできないな……」

伊部の唐突な連絡に若干驚きながらも応じつつ、光秋は少し勿体ないと感じる。

「仕方ないよ。それこそ仕事なんだしだし。それに、こうして普通に過ごせるだけで私は満足だから……ところでさ」

「はい？」

「私起きてからこつち、光秋くん私のこと『法子さん』って呼んでるよね」

「……………ああつ！」

伊部の指摘に、今更ながら光秋は目を見開いて驚愕する。

「すみません！奥さんたちと話してたらそのまま……すみませんでした、伊部さ——？」
続く言葉を遮る様に、謝ろうと下げた頭に伊部の右手が置かれる。

「やつと名前で呼んでくれたね。自然体だったから私も気付くの遅れたよ。やればできるじゃん！」

「は、はあ……」

顔一杯に笑みを浮かべて頭を撫でる伊部、そんな予想外の展開に、光秋は東の間反応

に困る。

その間にも伊部は頭を撫で続け、髪を挟んで感じるその手の感触に、つい浸っていたくなる。

が、

「……………うふんっ！」

咳払いと共にその誘惑を振り払うや、光秋は伊部の手を押しやる様に頭を上げる。

「えー…………改めまして、すみませんでした」

「なんで謝るの？」

また撫でられないように敢えて距離を開けて頭を下げる光秋に、伊部は笑いながら首を傾げる。

「だって、先輩にそんな口の利き方は…………」

「先輩以前に姉貴分…………うんうん、大事な人なんですよ？」

「そうですが…………」

「だつたらいいじゃない。それに、この家はみんな伊部さんなんだし。ややこしいし」

——…………僕と同じこと言うなあ……………しかし、まあ……………——「わかりました。法子さん」

多少釈然としないながらも、比較的あつさり伊部——法子の意見を受け入れた自分に

内心驚きつつ、光秋は目を見てその名を呼ぶ。

と、下から伊部母の声が掛かる。

「法子ー！お父さん上がったから、次入ってちょうだいー！」

「はーいー！じゃあ、私も入ってくるね」

「はい。ごゆつくり」

光秋が応じると、法子は着替えとバスタオルを持って部屋を出る。

閉まっていくドアを見届けると、光秋はなんとなしに机に置かれた教科書を取ってパラパラとめくってみる。

——春に大雑把に習ったけど、歴史は僕の方と大方向じなんだよな。もちろん超能力関係の相違はあるが……はつきり違ってくるのは、やっぱり三戦危機からなんだよなあ……

思いつつ、三戦危機に関するページをしばし眺めると、教科書を閉じて机に戻す。

——読み書きからやり直したた綾が、こんなのを読んで、自分の考えを持つとうとするまでになったか。夏の頃は、一つ覚えた分だけ僕が必要じゃなくなっていく様に感じて、それをほんの少しだけ寂しいと感じていたが、今は寧ろ嬉しいね。頼もしい限りだ……——「もつとも、僕も他人のことばかり言ってられないけどな」

独り呟きながら、伊部母や伊部姉妹に語ったことを思い出す。

教科書を斜め読みしながら残り2種類の目薬を注し終えると、光秋はそれらを仕舞おうと部屋を出て台所へ向かう。

冷蔵庫に目薬を仕舞って廊下に出ると、風呂から上がって緑のパジャマに着替えた法子と鉢会う。

「あれ?どうしたの?」

「冷蔵庫に目薬仕舞いに」

「あ、そっか」

思い出した様に応じると、法子は速足で部屋へ向かい、光秋もそれに続く。

部屋に入ると、法子はベッドに、光秋は椅子に腰を下ろす。

「まったく、薬がないと調子が維持できないって、面倒な体です……もともと、法子さんたちに比べればどうということはないんでしょうが」

床で冷え切った足に少々の痛みを感じながら、光秋は愚痴る様に言う。

「私は、今の状況そんなに不自由に感じないんだよねえ。確かに綾が出てる時は少し窮屈に感じるけど、思ったよりしつくりくるって言うか……こんなのは人それぞれだから、比べようがないんじゃない?」

「……それもそっか」

法子の返しに納得すると、光秋は再び机の上の教科書を手に取る。

「そういえば、この教科書法子さんの？」

「うん。突然出してくれて綾に頼まれてね。やっぱり懐かしいなあ……」

光秋がパラパラめくる教科書に、法子は遠くを見る目を向ける。

「傍目からすると、随分熱心に読んでる様に見えましたが」

「実際そうだったと思うよ。私の方にもちよつとだけそんな感覚が残ってたから」

「………ますます、他人のことばかり言つてられないか」

呟くように、しかしある種の決意を込めて断じると、光秋は教科書を机に戻して法子の目を見据える。

「僕も綾にああ言つた手前、二人に語つたこと——夢を叶える為に頑張らなくちゃいけませんね。その為の来年の目標……いいえ、今後の目標が浮かびました」

「なに？」

弱火程の熱が籠つた言葉に、法子は興味を持ちつつ静かに問う。

「『自分に正直に生きる』、です」

「？……『強くなる』とかじゃないの？」

脈絡のない宣言に、法子は面喰う。

「それも含めてですよ。守る為とか、根本的な解決をしたいとか、いずれも僕がそうしたいからやるんです。夢を叶えたいから。だから、自分に正直になるんです。自分のやり

たいことを見出して、それを極める為に努力できる様な……努力を努力と思わない様な、そんな生き方がしたいんです」

「……………やつぱり、光秋先生だね。デタラメなようでそうでもないや」

威風堂々と補足する光秋に、法子は笑いながら応じる。

「……………また小難しい言い方になりましたが、とにかく、まずは自分に正直に生きる、その延長としての夢と考えてください……あとまあ、綾よろしく、ちよつと勉強も必要かな？」

多少熱が引いた辺りでさらに付け加えると、光秋は照れ笑いを浮かべる。

と、そこであることに気付く。

「……………そういえば、今日僕どこで寝れば？向こうの部屋、今日も温めてませんよね？」

「……………あつ」

普段の調子に戻った光秋の指摘に、法子は思い出した様に口を開ける。

「……………また、ここでいいんじゃない？」

「……………ですね。今から温めてたんじゃ……」

法子の提案に観念した様に頷くと、光秋は部屋の隅に置いてある布団をベッドの横に持ってきて敷き、その上に胡坐をかく。

—そういえば、今何時だ？—

そう思つて机の上の時計を見ると、もうすぐ9時を指そうとしている。

「もう9時か……時間が経つのは早いですね」

「楽しい時間はあつという間に過ぎるつてね」

「……楽しいというより、濃い時間だったと思いますが」

言いながら、光秋は今日のことを振り返る。

—日高さんちに遊びに行つたら法子さんが酔い潰れて、帰つてきたら綾が復活して、奥さんや法子さんたちと話し合つて、今後の目標ができて……本当に濃い時間だったなあ……でも……—「それでも、法子さんの家に来てよかった気がします。誘つてくれてありがとうございます」

回想を終えて浮かんできた思いを素直に伝えながら、深く頭を下げる。

「そう……よかった」

微笑みを浮かべた法子がそれだけ応じると、2人の間に沈黙が広がる。

が、そこに会話が続かないことへの気まずさなどなく、もう言葉を必要としない、伝えたいことを伝え切つた満足感で満たされている。

と、

「ああ、そうだ。綾に代わつてくれませんか」

「わかった」

光秋の突然のお願いに応じると、法子は項垂れて綾に代わる。

「アキツ！あたしのことを忘れてたでしょ！」

顔を上げるやいなや、綾は三角にした目を向けてくる。

「ごめんごめん。言うこと言つてすつきりしたらついさ……でも、ちゃんと呼んだらう？」

「……まあいいけど」

光秋が多少の罪悪感を覚えながら謝ると、綾はとりあえず機嫌を直す。

「法子さんを介して聞いてたよな。僕の今後の目標」

「だいたいね」

「それなら……綾は、何を調べようと思ったんだ？」

夏以来の綾の態度と、先程の教科書の読んでいた辺りから見当はついているものの、
敢えて訊いてみる。

「『どうすれば平和になるのか』」

「そう言うと思った」

予想が的中したこと、なにより如何にも綾らしい内容に、思わず笑みがこぼれる。
しかしそれも束の間、すぐに笑みを消し、綾に挑む様な視線を向ける。

「さつき法子さんにも言ったが、お前さんにああ言った手前、なにより僕自身の為、僕も頑張るから………だから、一緒に頑張ろう!」

「うん!」

結局最後は頬を緩めて断じると、綾も微笑みながら深く頷き、互いに固い握手を交わす。

その時に互いを見やる表情は、想い人同士というよりも、互いに切磋琢磨し合う同志のそれだった。

しばらくして握手の際の興奮も冷めると、綾は法子に代わり、どちらがというわけでもなく寝る準備を始める。

法子が布団に入ったのを確認すると、光秋は電灯の紐に手を掛ける。

「じゃあ、おやすみなさい」

「おやすみ」

法子の返事を聞くと明かりを豆電球にし、光秋も布団に潜り込む。

——結局、また法子さんの部屋で寝るか。それに今は綾もいるんだよなあ………いいかん。変なこと考えてないで、とつと寝よう………でも、そう考えるとどうも一人の布団が寂しんだよなあ………——

そんな雑念を頭の中で巡らせながら、光秋はゆっくりと眠りに就く。

「……………」

耳元の携帯電話の目覚ましに渋々目を開けると、光秋は体を左に転がしてアラーム音を止める。

—6時か……まだ休みだし、いいよな……………」

まどろみの中で時刻を確認すると、再び意識を手離そうとする。
が、

「……………」

ふと背中に柔らかく温かい感触を覚え、眠りに向いかけていた意識が少し覚める。

—……なんだ?—

思いつつ、大儀そうに体を逆方向に転がし、布団をめくってみる。

と、

「なあ!法子さ——否、綾か!」

布団の下からこちらに体を向けて寝ている綾が現れ、一気に目が覚めるとそのまま跳ねる様に起きて布団から出る。

「……………痛つ……………」

慌てて跳ねたために本棚に後頭部をぶつけ、頭に両手を添えて悶絶する。

その音で目が覚めたのか、綾が目を擦りながらゆつくりと起き上がる。

「んー……う？……あれ、アキ？もう起きたの？」

『『起きたの？』じゃないよ……他人の布団でなやつてんだ………う？』

寝惚けた様子で訊いてくる綾に、痛みが引いた光秋は呆れながら問う。

「なにつて……寝る時一人が寂しいって思ってたでしょう」

「……昨日のあれを読んだのか……まあ思ったが……まさか、だから僕の布団に潜り込んできたのか？」

「うん」

『『うん』じゃないよ……ちなみにいつから？』

「アキが寝てすぐかな。ちやうど法子も寝た頃だったし」

「てことは、一晩中一緒に寝てたと」

「そうなるね」

「……………」

「……なにか、いけなかった？」

溜め息を吐きながら渋い顔をする光秋に、綾は若干の不安を覚える。

「……………」まあ、僕もお前さんのお腹を枕にしたりと、夏にはけっこう気の抜けたことしてたから強く言えないかもしれないけど……とりあえず、お前さんも心身共に年頃になったんだから、男の人が寝てる布団に勝手に入るのはやめような」

「……うん」

努めて冷静に言い聞かせる光秋に、首を傾げつつも綾は一応了解する。

——まだ常識で欠けてる部分もあるのか？ 追い追いかしなと……しかし、早めに気付いてよかった。こんなところを旦那さんにでも見られたら……—

そう思った矢先、

「なんか音したけど、大丈夫かい？」

言いながらドアが開かれ、作務衣姿の伊部父が現れる。

「……………」

「どうしました？……あら」

今の状況——光秋の布団に腰を下ろしている綾と、屈んで見つめ合う光秋——を見て、伊部父は石像の如く固まり、その陰から顔を出した伊部母は一瞬驚きつつも、

「2人とも若いわねえ」

と、昔を見る様な目で微笑みを浮かべる。

「あ、いやあ……………」

「……………」

光秋も光秋で蛇に睨まれた蛙の様に不思議と動けなくなり、状況が理解できていない綾は周囲の様子を見て困惑するだけである。

その間にも、石像化から立ち直った伊部父が口を開く。

「……まあ……私たちの頃とは時代や考え方が違うだろうから、君らの世代はそういうのが普通なのかもしれないが………流石に娘の家でというのはどうかな？」

「誤解ですっ！」

細目のために常時笑っているように見える顔で、しかし多分な怒りと僅かばかりの嬉しさを含んだ複雑な声音で言う伊部父に、光秋は腹の底から否定の声を上げる。

その後、「どこも乱れていない！」という光秋の必死の呼び掛けと、騒ぎを感じて交代した法子の「寝惚けて布団を間違えた」という説明に、どうにか伊部夫妻の誤解は解ける。

起き抜けのひと騒動にすっかり目が覚めてしまった一同は、そのまま着替えて朝食を摂ることにする。

光秋は昨日から着ている伊部父から借りた上下を持って隣の部屋に移動すると、冷氣に鳥肌を立たせながら急いで着替える。

パーカーに着替えた法子と合流すると、先に下りた伊部夫妻の待つ居間へ向かう。

「その……なんかごめんね。綾が変なことして……」

「法子さんが謝ることじゃないですよ。でも、その辺も追い追いかないと」——またこんな騒動を起こされたらたまらんからな……—

言葉に困りながらも頭を下げる法子に応じながら、先程の伊部父の様子を思い出して再び恐怖する。

その間にも2人は居間に着き、コタツの上に用意された白飯と大根の味噌汁、納豆の朝食をいただく。

――納豆か。えらく久しぶりだなあ……――

光秋が器に盛られた納豆に懐かしさを覚えながら掻き混ぜていると、法子が両親に呼び掛ける。

「そうだ。お父さん、お母さん。私たち今日の夕方……だいたい4時頃に京都に戻るから」

「そんなに早くかい？もつとゆっくりしていけばいいだろう」

「そういうわけにもいかないよ。仕事の都合なんだし」

「仕事か……じゃあ仕方ないね……」

法子の説明に、伊部父は寂しそうな顔で渋々受け入れる。

――……やつぱり、そうなるよな……――

昨夜の法子との会話の中で感じたことを目の当たりにして多少胸が寒くなりながら、光秋はよく混ぜた納豆をご飯にかけて食べ始める。

食事と、その後の片付け等を終えると、光秋は伊部父に頼んで昨日の様に店の手伝い

を買って出る。

といつても、年末休業中のためにこれといった仕事はなく、あつたとしても手伝い程度でできることではないため、必然的に店内の大掃除を行うことになる。

伊部父と共に備え付けでない物を全て家側に退かし、広々とした店の床を箒で掃きながら、光秋は柔らかな高揚感を自覚する。

—なんだかなあ……N砲振り回したり、ガトリング砲撃ったりするより、こつちの方がしつくりくる様な………といつても、ESOの隊員がそれじゃ困るんだろうが……！—

手を動かしながらここ最近のことを思い返していると、開け放たれた玄関や窓から強い冷風が入り込んでくる。外は晴れているものの、室内用の軽装にこれは堪ったものではない。

「寒いねえ。早く終わらせようか」

「ですね」

棚の上を雑巾掛けする伊部父に即答すると、光秋は風に追い立てられる様に掃除を進める。

掃除を終え、全ての物を元あつた位置に戻したところで昼になり、伊部父と共に冷えた体を居間に引っ込ませ、コタツに潜り込む。

少ししてやってきた法子もコタツに足を入れると、

「冷たっ！……何この脚？」

「さつきまで寒い所にいたから。手なんでもっとすごいですよ」

靴下越しに触れた氷の様な光秋の脚に驚きの声を上げ、光秋も応じながら感覚が鈍くなっている手を差し出す。

「……ホントだ」

「昔から冷えやすい体質のようで」

氷の様な手に触れて呆れている法子に応じていると、伊部母がどんぶり4つを載せた盆を運んでくる。

「お疲れ様でした。これで温まってくださいね」

そう言つて伊部母が差し出したどんぶりには、もくもくと湯気を立てる雑煮が盛られている。

「ありがとうございます。いただきます」

応じるや、光秋は汁の中に沈む餅に食らい付き、熱々のそれを口の中で転がす。

コタツで脚を、鳥の出汁が効いた醤油味の雑煮で体中を温め、凍えていた体に熱さを取り戻していく。

食事とその片付けを終えると、光秋は法子と共に2階の部屋へ移動する。

「……………昼からは仕事ないって言われたけど、そうになるとけっこう暇ですねえ。夕方までまだ時間たっぷりあるし……」

「いいじゃん。明日からまた忙しくなりそうなんだし」

「……………それもそうですねえ」

椅子に座る法子に、床に胡坐をかく光秋はぼんやりと返す。

「……………せっかくいい天気だし、ちよつと散歩してこようかな?」

「いいんじゃない……………ならあたしも行く!」

窓の景色を見て眩くや、法子と代わった綾が身を乗り出す。

「ん。さて、コートはと……」

短く応じると、光秋は自分のESOのコートと、綾の青いコートを持ってきて羽織り、伊部夫妻に一言告げて勝手口から外へ出る。

表通りに出ると、光秋は気の向くままに歩き出し、綾はそれについていく。

商店街には伊部電器の様に休んでいる店もちらほらあるものの、大多数、それも食品関係の店は例外なく賑わっている。

「年末の追い込みって奴かな?……………旦那さんたちはやらないのかな?法子さん」

「……………お父さんの方針みたいだね。よそはよそ、うちはうちだって」

光秋のなんとなく浮かんだ疑問に、綾と代わった法子が答える。

そうしながら2人——あるいは3人——は商店街を出て、近くの小さな公園の前で立ち止まる。

雪の積もった公園内では、5、6人程の幼児たちが談笑する母親たちの前で雪合戦に興じている。

「やっぱこういう場所は何処にでもあるんですね」

「こういう場所っていうのがどういうのかよくわからないけど……でも、私たちが小さい頃より遊ぶ子の数は減ったかな……」

なんとなく思ったことを言う光秋に、法子は少し寂しそうな顔をする。

「……地方の過疎化ってやつですか。こっちにもあるんですね……法子さんも、あの公園で遊んでたんですか？」

とりあえず返しつつ、話題を変えることも兼ねて気になったことを訊いてみる。

「うん。この辺の公園は一通り遊んでたなあ。あとは、ハルちゃんとか」

「……確かに、あの家は遊び甲斐ありそうですね」

昨日の記憶を思い出し、心底納得する。

「隠れんぼなんかしようものなら、それは盛り上がったでしよう？」

「盛り上がったねえ。一度家の中で遭難者が出そうになったもん」

「……あるんですね。そんなマンガみたいなこと」

法子の思い出に光秋が呆然としていると、幼児の内の1人が念力で大量の雪玉を作り、それを四方八方に投げ飛ばす。

「！」

その内の1つが顔面目掛けて飛んでくるのに気付くや、光秋は咄嗟に上体を左に傾け、右耳のすぐそばを勢いのついた雪玉が通り過ぎていく。

「よかったあ！……日々鍛錬していた甲斐があつた……」

冬にも関わらず妙な汗を流しながら、光秋は訓練の成果に感謝する。

公園内では事態に気付いた母親が幼児に駆け寄り、厳しい顔で注意している。

「それは危ないからやっちゃダメって言ってるでしょう！あそこのおじさんにも当たるどころだったんだよ」

「……結局、僕は『おじさん』ですか」

こちらを示す母親の言葉に、光秋は桜たちのことを思い出しながら苦笑いを浮かべる。

その間にも、母親は幼児の手を引いて2人の許に歩み寄ってくる。

「すみません。御怪我はありませんでしたか？」

「ああ、大丈夫ですよ。避けられましたし」

「本当にすみません。ほら、リョウくんも」

「…………めんなさい」

深々と頭を下げる母親に続いて、「リョウくん」と呼ばれた幼児もちよこんと頭を下げる。

「………今後は気を付けてな。それじゃあ」

努めて笑顔で応じると、光秋は再び歩き出し、法子もそれに続く。

「………流石、超能力者のいる世界と言いますか………あんなことつてあるんですね」

「私の小さい頃もあんなことあったなあ………友達が念力で投げた雪玉が知らない人に当たっちゃって、みんなで凄く怒られた」

光秋は改めて自分が元いた世界との違いに感心し、法子は寒さとは違う理由で震え上がる。

その後も法子と綾が入れ替わりながら散策は続き、最終的に1時間半程歩いて一行は伊部家に帰ってくる。

伊部夫妻に戻った旨を伝えると、3人は法子の部屋に戻る。

床に胡坐をかけた光秋は、久々に見た日常の景色を改めて思い起こす。他の公園でも見掛けた雪遊びをする子供たちと、それを見守る親御さんたち。屋根の雪下ろしを行う近所のおじさん。年末の追い込みに精を出す商店街の人たち。

——……サン教やNPの事件がある一方で、ああやって普通に、日常の中で精一杯生き

てる人たちもいるんだよな。ほんの数カ月前の僕がそうだった様に……―

思いつつ、左ポケットに入っているカプセルをズボンの上から撫でる。

その様子を見ていた綾が、ベッドの上に腰を下ろした体を前屈みにして訊いてくる。

「どうしたの?」

「ん?……休みが明けたら、また頑張らなきゃなつて」

少し休んで散歩疲れを癒すと、光秋と、綾と交代した法子は帰り支度を始める。

手荷物をまとめ、ESOの制服に着替えると、光秋はなんとなしに法子の部屋を見回してみる。

と、部屋の隅に置かれた布団、その上に畳まれた作務衣が目に入る。

―あれももう着ないんだよな……なかなかいい着心地だったんだけどなあ―

作務衣を眺めていると、どうしても名残惜しくなる。

―……………それでも―

気を取り直して顔を上げると、準備を終えて時間潰しをしているのか、椅子に座って歴史の教科書を熱心に読む綾を見る。

―棚からばた餅、塞翁が馬、本当にいろいろあったけど、本当にここに来てよかった

―「……命を洗われた、かな?」

「え?」

「いや、なんでもない」

独り言に反応した綾に応じると、光秋は荷物をまとめたカバンを見やる。

「だから、京都に戻ったらまた頑張ろう。やりたいこともできたしな」

伊部母との会話、そして頼みを思い出しながら、静かな、しかし確かな決意を抱くと、下から伊部母の呼び声が掛かる。

「法子ー！光秋さんも！ちよつと降りてきてー！」

「はーい！なんだろう？」

「さあ……？」

首を傾げて応じながら、光秋は綾と代わった法子の後を追って、伊部母の声がした台所へ向かう。

「あ、そうだ。布団どうすればいいかも訊かないと」

法子の部屋に置きっ放しの布団を思い出しながら、光秋は法子に続いて台所に入る。

「なに？お母さ——あれ？お父さんも？」

てつきり伊部母だけだと思っていたところに伊部父もいるのを見て、法子は少し驚いた顔をする。

「それに……」

「……これは……焼肉か？——」

言いながら、法子はコンロの上に油で濡れたフライパンが置かれているのに気がき、室内に漂う香ばしい匂いに光秋は鼻をくすぐられる。

「いやあ、法子正月からまた仕事みたいだから、精をつけてもらおうと思ってね」

言いながら、伊部父は戸惑う法子に布で包まれた弁当箱を渡す。

「……このお弁当、お父さんが作ったの？」

「焼肉はね。あとは殆ど母さんだけど」

「……私のお腹大丈夫かな？」

「いや、作る時は母さんに見てもらってたし、特に変な物を入れては……」

「冗談！ ありがとうお父さん。お母さんも」

伊部父が狼狽するのを見計らって、法子は満面の笑みを浮かべて礼を言う。
が、少しして表情を曇らせる。

「……でも、こんなにしてもらって、私2人に大したことできない」

「なに言ってるんだい。こうして元気な姿を見せてくれるだけで、私たちは充分だよ」

「うん……」

「……………親孝行、か」

伊部父に肩を叩かれる法子を横に見ながらそんな言葉を浮かべると、光秋は家族に対して、今は何もしてやれない自分が齒痒くなる。

同時に、ほんの一瞬だけ見えた伊部父の寂しそうな表情に、胸の中を冷たい風が過ぎる感覚を覚える。

——旦那さんと奥さん、次はいつ法子さんに会えるかわからないんだよな……否、次がいつになろうと、その次を迎えられるように頑張ればいいんだ。僕だつて奥さんから頼まれてるんだ。守ってくれって……だから、また会えるようにするさ——

独り心中に小さな決意を抱くと、胸を過ぎる寒風を追い払う。

と、

「あと、これは光秋さんに」

「え？」

言いながら伊部母から同じ様な弁当箱を受け取った光秋は、予想外のことに思わず呆然とする。

「……いいんですか？僕まで」

それでもなんとか口を動かしてみるものの、そんな言葉しか出てこない。

「もちろん。光秋さんは法子の弟分なんですから」

「……あつ！ありがとうございます！……あ、そうだ。布団は押し入れに入れておけばいいですか？」——今訊くことじゃないだろう……——

当然の様に言ってくれる伊部母に照れ臭くなつてか、思わず場違いな問いが口を突い

て出てしまい、そんな自分に呆れてしまう。

「いえ、せっかくだから洗濯しようと思つてたので、そのままにしておいてください」

——……ええい！ 訊いちゃったもんは仕方ない。こうなりやついでに——「作務衣は？」

「布団と一緒に持つていきますから、そのままで」

「わかりました」

開き直つた光秋の後片付けに関する質問に、伊部母は優し気に答えてくれる。

と、法子が台所の時計を見る。

「そろつと4時だね。荷物取つてこよう」

「はい」

応じると、光秋は法子に続いて2階の部屋へ戻り、コートを羽織つて弁当箱を詰めたカバンを担ぎ、荷物の確認をして台所へ向かう。

勝手口で制靴を履くと、光秋は後ろに立つ伊部夫妻に頭を下げる。

「どうも、ありがとうございました！」

「いやいや、少しごたついたけど、私も楽しめたよ。機会があればまた来なさい。その時は一緒に飲もうじゃないか。法子も、何かあればいつでも帰つてきなさい」

「2人とも、体には気を付けて」

「うん」「はい。ありがとうございます」

笑顔で見送る伊部父と伊部母に、法子は頷き、光秋はもう一度頭を下げると、ドアを開けて外に出、表通りに出る。

—さて！戻ったらまた忙しくなるな。でも、負けんぞ！僕は—

もうすぐ遠くに見える山の合間に落ちようとしている夕日に照らされながら、光秋は心中に活を入れる。

と、法子が神妙な顔で話し掛けてくる。

「……ふと思っただけどさ」

「なんです？」

「……最終的に光秋くんが選んだのが私にしろ、綾にしろ、抱く時は同じじゃない？」

「いや！そういう問題じゃないでしょ！」

帰り際のとんでもない発言に、素っ頓狂な声を上げて驚愕する。

「わかつてる。冗談だよ！早く行こう」

「もう……」

イタズラが成功した笑みを浮かべる法子に脱力気味に応じると、光秋は京都へ——務めへ戻る為の一步を踏み出す。

新年祝賀パーティー編

64 仕事はじめ

2010年12月31日金曜日午後9時半。

岩手の伊部家から京都の職員寮に戻った光秋は、伊部父お手製の焼肉弁当の夕食を摂り、弁当箱を洗って入浴を終えて、あとは寝るだけというパジャマ姿をコタツに突っ込み、距離があるためにいくらか見え辛いという不満を覚えながら年末恒例の歌合戦を視聴している。

——……大晦日ってことでつい買ってしまったが……——「年越しまで起きてるわけにもいかんからなあ……」

人気の男性アイドルグループが歌う流行歌を左耳のイヤホン越しに聞きながら、冷蔵庫に仕舞ったカップ蕎麦に思いを馳せ、明日から再開する仕事のことを思う。

午後10時。

盛り上がりを見せる歌合戦に多少の心残りを覚えつつ、寝る準備を整えた光秋は梯子を上ってベッドに腰を下ろす。

——明日からまた仕事……“夢”を持って挑む初めての仕事なんだ。今まで以上に気

を引き締めよう――

静かな決意を胸に抱くと、灯りを消してメガネを枕元に置き、布団を被る。

その夜は、伊部家で過ごした2日少々のことを夢に見ながら、穏やかに眠ることができた。

2011年1月1日土曜日午前6時。

携帯電話のアラーム音に目覚めた光秋は、昨日買ったカップ蕎麦を朝食にして支度を整えると、ESOのコートを羽織り、灰色のカバンを提げて京都支部へ向かう。

5分程歩いて正門前に差し掛かると、2メートルの巨漢が目に入る。

「藤原三佐――」

「おお、加藤。今朝は早いな」

「はい。明けましておめでとうございます」

「ウム。おめでとう。今年もよろしく頼むぞ」

「はい」

藤原三佐との新年の挨拶を交わしながら、光秋はエレベーターで地下1階へ下り、藤原隊の待機室へ向かう。

部屋に入って明かりを点けると、光秋は手近な椅子の足元にカバンを置く。

「ところで、どうだった？伊部の家は」

「ちよつとドタバタしましたけど……行つてよかったです」

コートをロッカーに仕舞つて椅子に腰を下ろして新聞を広げながら問う藤原に、光秋は伊部家とその周辺のできごと——家庭の温かさや市井の活気、圧巻の日高家、自分が知らない法子の思い出、なによりも綾と会えたこと、そして三人の曖昧な関係をどうするか——を思い出し、多少胸にシコリを感じながらも嬉々として応じる。

「それはよかつたな。儂らも勧めた甲斐があつた」

「どうも……三佐たちは、あの後どうでした？」

「小田たちのことは知らんが……儂は東京の実家に顔を出しに行つた。久しぶりに帰つたからな。気を抜き過ぎてうっかり飲み過ぎて、周りに怒られてしまったわ」

質問で応じる光秋に、藤原は苦笑いを浮かべる。

「ああ、それとな、今朝は全員に連絡があるから、揃うまでここにいろ」

「……法子さんが言つてた仕事か——「了解です」

法子の部屋での会話を思い出しながら応じると、光秋はロッカーにコートを仕舞い、テーブルを挟んで藤原の正面の椅子に座る。

ちようどその時、小田一尉と法子が入ってくる。

「「おはようございます」」

「ウム。おはよう」

「おはようございます。それと、明けましておめでとうございます」

藤原に続いて応じると共に、光秋は2人にも新年の挨拶をする。

「おお。おめでとう」

「おめでとう」

小田と法子もそれに返すと、2人もコートを仕舞い、小田は藤原の右隣に、法子は光秋の左隣に座る。

——………：「そういや、今年年賀状出さなかったな。誰の住所も訊いてなかったし……」
その内訊いて来年は出すか——

今更なことを思い出しながら、光秋はドアを見て竹田二尉が来るのを待つ。
そんなことを思った直後にドアが開き、

「うーっす」

未だ眠気が抜け切らない顔をした竹田が入ってくる。

「明けましておめでとうございます」

「おー。おめでとさん」

間延びした返事を光秋に返すと、竹田もコートを仕舞って光秋の右隣に座る。

「よし。みんな揃ったな」

一同を見回しながら確認すると、藤原は説明を始める。

「先日連絡したと思うが、年明け早々に重要な仕事が入った。明後日3日みょうごにちに東京の迎賓館で開催される新年祝賀パーティーの警護だ」

—警護か……にしても、東京か……—

説明を聞いて、光秋は少しだけ不安になる。東京への苦手意識はなかなか抜けない。

「新年早々またメンドーな……」

「それが俺たちの仕事だろうが」

竹田の愚痴に、小田が叱る様に言う。

「もつとも警護と言つても、儂らは非常時の予備人員扱いだそうだ。このところ物騒な事件が多いから、念には念を入れるということだろう。万が一に備えて会場の近くで待機だ」

「……ちなみに『万が一』と言いますと？」

藤原の補足に、法子が控えめに問う。

「まあ、過激な政治団体の押し掛けや、パーティー参加者を狙ったテロ辺りだろうな。政府や軍の高官も多数参加されるそうさ。もちろん、会場周辺には検問も設けるそうだが。あとは……いや……」

——……DDシリーズ、か——

最後の方で言葉を濁した藤原に、光秋はサン教ベース制圧戦で乱入してきたDD—0

2・ナイガーのことを思い出す。

—あの時は本当に唐突だったもんな。正に神出鬼没というべきか……あんなのがいつ現れるかわからない以上、大事な行事の守りは備えておくに越したことはないか—
思いつつ、上着の内ポケットに仕舞っているカプセルを意識する。

「儂らは明日の午後に支部を立ち、東京本部で細かな打ち合わせを行い、当日はその寄宿舎に泊る。各自今日の内に準備を整えておくように。とりあえずこんなところだが、他に質問はあるか？」

追加説明を終えた藤原の問いに、一同は沈黙を返す。

「よろしい。では、各自仕事に掛かれ。加藤は儂と」

「[[[了解]]]」

号令を出すと藤原は席を立ち、一同と共に応じた光秋はその後について部屋を出る。

——…いずれにしろ、早速やりたいことをやる機会が来たってことだ—

藤原に続いて最寄りのエレベーターに乗り込みながら、改めて伊部家でのこと——伊部母との会話を思い出す。

—鬼が来るか蛇が来るか知らないが……やってやるまでだ！——
そうして不安をやる気に変えると、エレベーターの扉が開き、藤原と共に訓練へ向かう。

運動棟の屋内アリーナに着くと、光秋と藤原は準備運動で体をほぐし、基本動作の練習で手足を慣らすと、組手を一本行つて互いの様子を視る。

結果は、藤原の猛攻に光秋は防戦一方となり、2、3回蹴りや突きを仕掛けるもことごとく防がれ、何もできない焦りから腰溜めにした右拳を放とうした隙を突かれて鳩尾に一撃食らつて負けた。

―法子さんちでのんびりし過ぎたか？流石にこれはなあ……―
体の鈍りを否応なく思い知らされ、光秋は少し恥ずかしくなる。

「ウム。調子はいいいやうだな」

「いえ、何もできませんでしたが……」

そんな気持ちに反して納得した様に頷く藤原に、光秋は恥を上乗せする思いで訂正を入れる。

「儂の攻撃にはちゃんと対処できていた。最後に大きな隙を作つて墓穴を掘つたのはいいだけだが、調子自体はいいいやうだ」

「はあ……」―まあ、言われてみればそうか？……それなら―

指摘されて思い出した様に両腕に鈍い痛みを覚え、藤原の重い突きを受け止め、時には避けていたことを思い返し、少しだけ自信を取り戻す。

その横で藤原は考える顔を見ると、ややあつて話を再開する。

「……だいたい動けるようになってきたようだし、そろそろ次にいってみるか」
「次？」

唐突に出てきたその言葉に、光秋は一抹の不安と若干の期待を覚える。

「今まで僕は、敢えて超能力を使わなかった。だが、現場で対峙する超能力者、特にサイコキノやテレポーターの様な直接攻撃に向く能力の場合、それを用いて攻撃してくる可能性が高い」

「……それは、確かに」

近いところでサン教ベースのことを思い出しながら、藤原の説明に深く頷く。

「無論、そんな相手には武装したりEジヤマーを作動させた上で対峙するのが当然、お前の場合にはニコイチを用いのも手だが、まあ非常手段として身に付けておくに越したことはないということだ。選択肢は多い方がいいだろう」

「はあ……」

藤原の説明に、光秋はいまいちわかりきっていない曖昧な返事をする。

「まあいい。善は急げだ。早速やってみるぞ。もう一本組め」

「はい」——さっきの今だが、大丈夫かな？——

早速の実践——それも褒められつつも結局ついさっき負けたばかり——に不安を覚えつつも、藤原の指示に従って距離を取り、両足を肩幅に開いて軽く握った両拳を腰の

辺りに持ってくる。組手を始める際の構えだ。

それを確認して同じ構えをとった藤原は、よく通る声で説明する。

「基本は今までと変わらん。だが儂の方は少しだけ念力を使わせてもらう」

「……大丈夫なんですか？」――勝ち目が無いような……――

話の流れから察していたことではあるが、いざ口にされるとどうしても弱気になる。

「ちゃんと加減はするし、あくまでも攻撃補助だ。心配するな。始めるぞー」

「はい！」

藤原の指示に何とか不安を押し退けると、光秋は左半身を前に出して攻撃体勢に入る。

「はじめ！」

「！」

号令を聞くや一気に距離を詰め、顎に左拳を放つ。

それを藤原が左腕で受けるや、空いた左脇から鳩尾目掛けて右拳を通そうとする。

が、

「!？」

少し動かしただけで右腕が分厚い壁に阻まれた様に止まり、何が起こったのかわからないことに動揺した一瞬の間に藤原の右拳が鳩尾に叩き込まれる。

「グッ！」

胸を貫く程の衝撃に肺の中の空気が抜ける音を上げると、思わず構えを解いて数歩下がってしまう。

「……今のは？」

「念力でお前の右腕を止めた。サイコキノにはこんな戦い方もできる」

ある程度痛みが治まった光秋の問いに、藤原は簡潔に答える。

「なるほど。実戦ではこんなこともある、か……人によつては移動そのものを止められることもあるんだから、正攻法で挑んでも無理つてことか――

痛みが引き切ったので姿勢を正しながら、光秋は今の一戦の意味を噛み締める。

「二つアドバースだ。どんな者も、行動を起こす前は目を動かして未来位置を確認する。それを利用することで相手の行動を読むことができる。つまり、戦う時は相手の目に注目しろ」

「目、ですか……」――そういえば、昔空手習った時にもそんなこと聞いたな――

藤原に応じつつ、光秋は小さい頃の記憶を思い出す。

「それを踏まえて、もう一本やってみるぞ」

「……小さい頃は聞いても上手くできなかったが……いや、まずはやってみるか！――わかりました。お願いします！」

心中に断じ、不安を振り払うと、光秋は再度身構える。

「はじめ！」

―目を見る！―

号令が掛かるや藤原の目を凝視し、徐々に間合いを詰めつつ先の一手を読もうとする。

「！」

僅かに目が動いたのを捉えるや反射的に左腕を前に出し、左手を突き出す様にして放たれた念の弾を受け流す。

が、

「ゲッ！」

直後に大股で距離を詰めた藤原の右拳が鳩尾を直撃し、再び肺から空気が抜ける音を響かせる。

―今のは……フエイントか………始めたばかりとはいえ、まだまだ前途多難だな―
胸の激痛に体を曲げながら、光秋は現状を噛み締める。

午後0時。

―あー、疲れた………―

小休止を挟みつつ、午前中を超能力併用戦の練習に費やした光秋は、冬真っ只中にも

関わらず火照った体を引きずる様にして食堂へ向かう。

受付でトレイを受け取ると、藤原と共に手近の空いている席に座る。

「……あんまり進歩ありませんでしたね」

白飯とみそ汁、揚げ物の盛り合わせの定食に箸を付けながら、結局藤原に一撃入れるどころか、まともな対処ができなかったことを思い出して嘆息混じりに呟く。

「まだ始めたばかりだ。そうすぐにできるわけではない。継続こそが『力』だぞ」

「それはそうですが……」

わかっていてもつい気弱になってしまいう自分に、光秋はさらに落ち込む。

と、

「加藤二曹。藤原三佐も。ここよろしいかな？」

「……大河原主任」

灰色のツナギの上に緑のコートを羽織った大河原主任が、藤原の左隣に着席を求めてくる。

「ええ。どうぞ」

「では、失礼して」

藤原の勧めに応じると、大河原は鯖の味噌煮定食が載ったトレイを置いて椅子に座る。

「……なんか、珍しいですね。主任がここで食事なんて」

「ん？　そうでもないぞ。よく利用するが。今まではタイミングが合わなかったのかもな」

「ああ」

ふと思ったことに応じてくれる大河原に、光秋は相槌を打つ。

「東京なら女房が弁当持たせてくれるところだが、単身赴任中じゃあなあ……」

「はあ……」

冗談とも愚痴ともとれる大河原の自虐的な微笑みに、後者なら自分もその原因となっている光秋は返事に困る。

「まあ、そんなことはいいいんだ………食事中すまんが、ちょっといいか？」

「はい……？」

ややあつて微笑みを引つ込め、思い詰めた顔をする大河原に、光秋は肩が強張るのを感じつつ応じる。

「三佐はすでに知ってるでしょうが、サン教のベースから回収したあのロボット」

「ああ」

大河原の確認に、藤原は飲んでいたみそ汁のお椀を置いて頷く。

「アレについて、俺は君に謝らねばいけないかもしれない」

「?.....どういことです?」

唐突な切り出しに、光秋は戸惑ってしまふ。

「10月の演習の時、君はゴーレムの様な兵器ができることで新しい争いが起きるのではないかと危惧したな」

「.....あ、はい」

言われて、演習前日に交わした会話を思い出す。

「あの時俺は、ESOや合軍の管理体制を信じろと言ったな。しかし.....」
消え入りそうな声で続けながら、大河原は曇った顔を俯ける。

「.....まさか.....情報漏洩、とか?」

「.....」

声の大きさに注意しつつ半信半疑に問う光秋に、大河原は黙って首肯する。

「制圧戦の時に押収したサン教の機体.....確か、アポロンとかいったか、その実物と、ベースにあつた開発データを調べたところ、ゴーレムの脚部の構造が流用された可能性が出てきた」

「.....僕は殆ど対峙してなかったんでよくわからなかったんですが、やっぱり?.....それで、僕に謝らなきゃいけないって?」

「ああ.....本当にすまん」

言いながら、大河原は深々と頭を下げる。

「俺が体制側の管理能力を過大評価していたのかもしれない。あるいは葵社で……」

「葵社？」

「葵重工。ゴーレムの開発元だ」

首を傾げる光秋に、藤原が補足を入れる。

「どうであれ、君が危惧していた事態を招いてしまったのかもしれない……おそらく、他の反体制勢力にも情報が渡った可能性も……」

「……とりあえず、頭上げてください。可能性の話で悩んでも仕方ありませんよ」

弱々しく頭を下げ続ける大河原を見ていられなくなったこと、なによりも憶測の域を出ない情報に迂闊な判断はできないと感じた光秋は、まずそう促す。

「そうだが……」

「それに、主任言ってくれたじゃないですか。それで物騒なことになった時が僕の仕事だって」

顔を上げてくれたもののまだ優れない大河原に、光秋は意識して明るく続ける。

「何が来ようと、僕は僕の仕事を……一般人を守るということを続けるまでです。そして、それを続けるには主任の様に僕たちを支えてくれる人が必要なんです。だからあの日の熱弁通り、もしもの時は責任を取ってください。僕たちが仕事を一層頑張れる様に」

するという形で」

「二曹……」

多少照れながらも思つたことを言い切る光秋に、大河原はやつと力が抜けた顔をしてくれる。

「それに、情報漏れについては主任が気に病むことはありません。それはそういうことに関わつた人の問題ですから。もちろん、ゴーレムを作つた、それに関わつたことに責任は生まれるかもしれないでしょうが、それについてはさつき言つた通りに」

「……そうだな。俺は技術屋としての仕事をするまで、か……ありがとな、二曹」

さらに続ける光秋に、大河原は穏やかな表情で応じる。

と、それまで横で聞いていた藤原が髭の濃い顔を笑みに歪める。

「加藤らしいな」

「なにか？」

「いや……それより、早く食べるぞ。昼休みが終わつてしまう」

「……ですな」

藤原の指摘に光秋が応じると、3人は会話で滞つていた食事を再開する。

午後7時。

職員寮の自室に帰宅した光秋は、灯りとエアコンを点けると、浴槽の蛇口を回して風

呂を入れながら、今日一日の訓練成果を思い返す。

「結局、一度も三佐に当てられなかったなあ……………」

疲れを含んだ溜め息を吐きながら、念の拳を捌き損ねて薄っすら痣になった左頬を撫でる。他にも実物・念双方の拳によって生じた痛みが体中に走り、それがますます気分を沈めさせる。

しかし、

「…………さて、落ち込んでばかりもいられない。明日に備えて荷物まとめるか」

意識して腹から断じる声を出すと、居間に戻って灰色のカバンに着替えや必要な物を詰めていく。

少しして荷造りを終えると、制服を脱いで一杯になった風呂に入る。

「うっ……………うう……………」

お湯に浸かって血行がよくなった体にさつき以上の痛みが走り、思わず顔を歪める。

1月2日日曜日。

昨日に引き続き、光秋は藤原の超能力併用戦の訓練を続ける。

何度も続けている内に慣れてきたのか、未だ藤原の許に一撃届けることは叶わないものの、昨日よりは捌き損ねる回数が減ったように感じる。

しかし、

——……いや、これって三佐の癖に合わせられるようになっただけじゃないか？それじゃダメだよな。三佐を相手に対処するわけじゃないんだから……『目を見る』つても上手くできないし…………ニコイチに乗ってる時は、感覚的に攻撃がわかって対処できるんだけどな……——

大した進展がない焦りか、休憩中に浮かんだ誘惑を、光秋は頭を振って追い出す。

——ニコイチに頼り切りじゃダメだっと思うからこうしてるんじゃないか！……それに、昨日の今日だ。そんなすぐ上達するわけない。三佐も言ってたじゃないか。『継続こそが“力”』だっ……——

「よし、再開するぞ」

「はいー」

自身を叱責し、焦る気持ちを鎮めると、藤原の呼び掛けによく通る声で応じる。

間にいつもの基礎練習や射撃訓練、休憩を挟みつつ、転がりながらも訓練を続けると、いよいよ東京に立つ時間になる。

午後4時。

隊の待機室に集まった一行を、藤原は見回して確認する。

「よし。全員いるな。では予定通り、伊部と加藤はニコイチで先発しろ。儂らはもう少ししたら来るテレポーターの迎えを待つ。向こうの本舎前で合流だ」

「了解」

応じると、光秋はコートを羽織って荷物の入ったカバンを提げ、法子はそれに加えて折り畳んだ補助席を抱えて駐車場へ向かう。

上着から出したカプセルからニコイチを出現させ、すぐに乗り込んで認証を済ませると、光秋は右手に乗せた法子をコクピットへ招く。

操縦席の左脇に補助席を取り付け、それに座った法子がシートベルトを締めたのを確認すると、光秋は操縦席を機内に下ろしてハッチを閉め、一通りの確認をする。

「準備いいですか？」

「うん」

「じゃあ、行きます」

法子の返事を聞くと、光秋は左膝を着いているニコイチを立ち上がらせ、右ペダルを軽く踏んでゆつくりと雲の高さまで上昇する。

地図で現在地と目的地の位置関係を確認すると、針路を北東に向けて前進する。

「……そういや、岩手から戻ってから2人……いや、3人きりになるのはこれがはじめてだな――」

そう思うと沈黙が気まづく感じられるが、面白い話題を提供できるセンスなど光秋にはなく、結局静かな飛行が続く。

と、

「……そういえば、岩手から戻ってからをはじめてだね。このメンバーになるの」

「……そうですね」

法子が同じことを口にし、沈黙に耐えかねていた光秋はほっとしながら話に乗る。

「あれからどうです？ 綾との体の共有についていうのは？」——……ちよつと考えが浅かったかな？——

「私も、正直ちよつと不安だったけど、思つたよりなんでもなかったな。普段は全部私が引き受けてるし、綾と代わってる間も記憶は共有してるから。こんなふうにな……」

言つてからデリケートな問題に無遠慮に触れてしまったかと心配する光秋に対し、法子はいつも通りの様子で応じると、頭を項垂れる。

「……アキ、あたしには『明けましておめでとう』って言わなかった」

——……なるほどね——「あ……その……ごめん。考えが及ばなかった」

顔を上げるや睨みつけてくる綾に、光秋は法子の説明に納得しつつ素直に頭を下げる。

「要するに、あたしのこと忘れてたの？」

途端に綾の眼光が鋭さを増し、頭頂周りの髪が念力で上へ引つ張られる。

「……あの、綾さん、痛いです」

「ふんー」

控えめに訴えるも、綾は腕を組んでそっぽを向いてしまう。

その間も念で髪を引っ張ることはやめず、綾の機嫌が直るまでの間、光秋は頭に痛みを覚え続ける。

——でもまあ、こんなことができるのも、綾と普通にコミュニケーションが取れるようになったが故か——

形こそひどいものの、つい先日までは夢の様だったこと——綾と普通に接していることに、光秋はちよつとだけ微笑みを浮かべる。

そんな2人——3人を胸に抱えながら、ニコイチは一路東京を目指す。

1時間程飛んで東京本部上空に着くと、光秋は敷地内に手ごろな広い場所を見付けてニコイチを着地させる。

はじめに荷物をまとめた綾を右手で下ろし、自身もカバンを提げてリフトで降りると、ニコイチを収容したカプセルを上着の内ポケットに戻す。

「さてと、本舎はこつちだったよな。行こう、綾」

「うん」

上空で確認した建物の位置関係を思い出して歩き出し、綾も左隣に並んでついでく。

「その……さつきはごめん。ちよつとやり過ぎた……」

「別にいいよ。僕の落ち度でもあったんだし」

「……でも、謝った方がいいよって法子が……謝らないと嫌われるって……」

—法子さんめえ……—「あれくらいで嫌いになるなら、あの時土下座なんてしないよ……まあ、ちよつと痛かったが」

「……ごめん」

「終わったことは気にしない！」

「きやん！」

言い切るや光秋は綾の頭をわざと乱暴に撫で、綾はくすぐったそうな声を漏らす。

そんなじゃれ合いを交えつつ、2人は本舎へと進んでいく。

本舎の玄関先に着いて待つことしばし。正面に広がる駐車場に、大勢の人がテレポ―トで現れる。その殆どはESOの緑服——おそらく藤原隊の様に応援に來た者たち——だが、スーツ姿の者や合軍の青服も少数混ざっている。

「……藤原三佐！」

本舎へ入っていく人の波の中に藤原たちの姿を見付けるや、光秋は手を振って一行に呼び掛ける。

「おお。待たせたな」

「いえ。私たちもさつき着いたところです」

綾と交代した法子が応じると、藤原を先頭にした一行も人の波に混ざって本舎へ入っていく。

会議室に入って当日の打ち合わせを済ませると、部屋から吐き出された人々に混ざって一行も宛てがわれた寄宿舍へ向かう。

「オレたちは詰所で待機か。ちつとは楽ができますかね?」

「バカ言え。有事に備えての待機なんだ。リラックスならまだしも、必要以上に弛んではたら承知しないぞ」

「へーへー。了解つす」

前を歩く小田と竹田のやり取りを聞きながら、光秋は会議室での説明を思い返す。

——本当に偉い人たちが大勢来るんだな。各州の政府高官とか、軍や警察のトップとか……各地の王族とか——

統一政府が存在するにも関わらず未だに王族といわれる人々がいることに一瞬違和感を覚えるものの、すぐに藤原から習った歴史を思い出す。

——確か、合衆国樹立を急ぐあまりその辺の問題が曖昧なまま話が進んだんだつけ。といつても、合衆国樹立以前から各地の王族は直接的な“力”を持たない、“象徴”としての存在意義が強まっていたようだけど………“象徴”、か………——

その言葉に再度違和感を覚えながらも、光秋は先を行く藤原たちを追って部屋へ向かう。

午後6時。

部屋に荷物を置くと、藤原隊一行は食堂へ向かう。

各々注文を終えて1つのテーブルにまとまって座ると、光秋は刺し身定食に箸を付けながら周囲を見回す。

——ここでの食事でも査問に來た時以來だな。あの時は沖一尉もいたっけ——

「どうしたの？ さっきから遠く見て」

「ああ、ここで食事するのも久しぶりだなあつて」

左隣でアジフライを摘みながら問う法子に、光秋は鮭の刺し身を白飯と一緒に口に運びながら答え、

「……今、他の女の人のこと考えなかった？」

「言う程考えてません」

左耳に口を寄せて小声で訊いてくる綾に答えながら、背筋に寒気を覚える。

と、

「み、みなさんいらしてたんですね」

「……沖一尉!？」

やや震えた声で呼び掛けられたと思うや、法子の左隣に座る小田がトレーを持って傍らに佇む沖を見て驚きの声を上げる。

「……仕事は？」

「さつきひと段落着いたところでして。ご飯を食べに来たらまたまた藤原隊の皆さんが見えたもので……お隣いいですか？」

「ど、どうぞ……」

若干上ずった声で応じ、問い返す沖に、小田もぎこちない様子で左隣の椅子を勧める。

― 噂をすればか……にしても、なんで2人共あんなカクカクした動きなんだ？……どっか調子でも悪いのかな？―

油の切れた機械の様に鈍い動きで座る沖と、他人の手でも使っているかの様に頼りない動作で食事を続ける小田。そんな2人の心境にまで思い至らず、光秋はとりあえず体調への不安を覚える。

「二尉奴め。普段の堂々さの欠片もねえな。折角めの機会、もつと楽しいものをよ……」

「？」

2人に同情の目を向ける竹田に首を傾げつつ、光秋は鯛の切り身を白飯と一緒に口に入れる。

藤原隊——小田を見付けて隣に座れたはいいものの、その先をどうしていいかわからない沖は、味などろくに判らない夕食を機械的に口に運びながらどうにか思案する。

——何してるの沖愛！折角小田さんと生でお話してできるチャンスを棒に振るの？何の為にさり気なく今日の大まかな予定をメールで確認して、食堂で偶然会えるように仕事終わらせてきたの!?……で、でも、変なこと言つて引かれたりしたら……—

自分への叱咤激励と不安が心中に入り混じり、沖の口はますます重くなる。

その右隣では、口と両手以外石の様に固まった小田が、心の中で頭を抱えていた。

——ま、まさかここで沖さんに会うとは……！さつきからずっと黙ってるが、何か気に障るようなこと言ったか？それとも、こういう時は男の俺から話題を提供すべきか？……それがいいな。さてどんな……こんな時に限って何も浮かんでこねえ!!メー
ルの時はまだきちんと会話が成立するのに!……俺って奴は……—

こうして表向きは静かに、心の中では絶叫を続ける男女を傍らにしつつ、藤原隊の食事は続く。

独特の雰囲気醸し出す2人を傍らにした夕食を終えると、藤原隊一行はそれぞれ部屋に戻り、男性陣はシャワー室へ向かう。

脱衣所で服を脱いで各々個室に入ると、光秋は体を洗いながら、壁越しに右隣の小田に呼び掛ける。

「小田一尉」

「んー？」

「さつき調子悪い様子でしたが、大丈夫ですか？」

「調子悪い？俺が？」

「箸の進みが悪かったというか……突然口籠っちゃったし」

「！……………いや、あれは何でもない。お前が気にするな」

「はあ……」

やや強めの小田の返事に、光秋は糲糊としながらも応じる。

「みんながみんな、お前とアヤみてえに上手く進むわけじゃねえんだよ」

「綾？」

「竹田！」

「く♪」

竹田が唐突に綾の名前を出したことに首を傾げていると、小田の羞恥を含んだ怒声が飛ぶ。もつとも、怒鳴られた竹田はシャワーで体中の泡を流しながら鼻歌を歌っているが。

「そんじゃオレ、先上がりまーす」

「濃も行こう」

シャワーを止めながら言うや、竹田と藤原は水気を拭きながら脱衣所へ向かう。

——綾、かあ——

2人が移動する気配を壁越しに感じながら、光秋は夏に一度別れた時のことを思い出す。

——結果的にまた会える……いつでも会えるようになったけど、あの時は本当に悲しかった。遅過ぎたって後悔もしてたよな……——「一尉」

思い返していると、自分でも意識せずに口が動く。

「ん？」

「……大事なことは、早めに伝えた方がいいかもしれません。言わずに後悔するより、言って後悔するがいい」

「……なんの話だ？」

「……すみません。ちよつと浮かんでただけです。気にしないでください」

「?……」

首を傾げる小田を壁越しに想像しつつ、口が過ぎたと感じる。

——……それは、そのまま僕に返ってくるんだよな。法子さんと綾のこと…………ただそれは、もう少し時間を……——

自分と法子と綾——ある種の三角関係を思い出すと、光秋はシャワーを頭から浴び、

泡と一緒にややもやした気持ちを洗い流す。

脱衣所でワイシャツに着替えて上着を腕に掛けると、光秋は小田と共にシャワー室を出る。

「あ、法子さん」

「光秋くん。小田一尉も。今上がったところ？」

「ああ。三佐たちは先に行ったよ」

法子の問いに小田が返すと、3人はそのまま部屋へと向う。

「……ふと思ったんですけど、法子さんってこういう時、一人で寂しいって感じたりしますか？」

「どういふこと？」

唐突に浮かんだ疑問を口にする光秋に、左隣を歩く法子は訊き返す。

「こういう他所でなにかやる時——演習だったり仕事だったり、夜警の時もそうだ。泊りの時は法子さんいつも一人だから、寂しくないかなあって」

「まあ、藤原隊で女は伊部だけだからな」

詳しく話す光秋に、前を歩く小田が加わる。

「……ホントのこと言うと、ちよっと寂しかったかな。一尉の言う通りなんだけど、普段一緒にいるみんなと分かれて私だけ一人っていうのは……でも、今回はそうでもないか

も」

「とうとうと？」

光秋の問いに、法子は一瞬だけ顔を俯け、すぐにまた上げる。

―あたしがいるからね―

―……なるほど。仲よくな―

―うん―

「？」

テレパシーを介して綾との会話を行う光秋――傍から見れば無言で納得の様子を浮かべる2人に、小田は首を傾げながら前に向き直る。

それから少し進むと、3人はT字路に差し掛かる。

「じゃあ、私こつちですから。お休みなさい」

「お休みなさい」

「お休み」

左に向う法子にそれぞれ返すと、光秋と小田は右に向う。

「……ところで加藤」

「はい？」

「お前、ちよつと見ない間に伊部のこと名前で呼んでたな。どういう心境の変化だ？」

「そんな大袈裟なものじゃ……法子さんの家に行った時、あそこはみんな『伊部さん』だから、紛らわしくならないように名前で呼んで、それに口が慣れてしまったようである……」

言いながら、光秋は伊部家でのことを思い出す。

「そうなのか……ま、隊員同士の親睦が深まるのはいいことだからな。特にお前社交性低いし」

「そんなはつきり言わなくても……」

小田の端的な言い方に光秋が口を尖らせると、2人は藤原隊の部屋に入る。

「遅かったな2人とも」

「途中まで伊部と話しながら来ましたから」

2つ置かれている2段ベッド、その一方の上の段に胡坐をかい明日の予定を確認していた藤原に小田が応じる傍ら、光秋はカバンの上に手荷物を置いて、空いている方のベッドの下段に布団を用意する。

「……そういうや、今何時だ？」

「えー……ちようど9時ですね」

藤原の下段のベッドに寝転んで携帯電話をいじっている竹田の問いに、寝る準備を整えた光秋が、こちらも携帯電話をズボンのポケットから出して時計を確認する。

「明日も早いし、そろそろ寝た方がいいでしょう」

「そうだな」

「あ、その前に僕トイレ行つてきます」

小田と藤原のやり取りのそう返すと、光秋は部屋を出て最寄りのトイレへ向かう。

——……いよいよ明日か。何事もなきやいいが……—

そんな本音とは裏腹に胸騒ぎを覚えながら用を足すと、冷え切った廊下に追い立てられる様に部屋へ戻る。

65 新年祝賀パーティー

1月3日月曜日早朝。

携帯電話のアラーム音に起こされた光秋は、ほぼ同時に起きた藤原三佐たちと身支度を整え、部屋を出て法子と合流すると朝食を摂りに食堂へ向かう。

いずれも警護へ向かう人たちだろうか、8割程埋まっている席で掻き込む様に食事を済ませると、一行は事前に連絡があつたワゴン車に乗り込み、小田の運転でパーティー会場へ向かう。

——いよいよ来ちゃったねえ……何も起こらないといいが……——

緊張から冴えた頭で淡い期待を抱きながら、光秋は竹田、法子と共に後ろに積まれている装備品の点検を行う。

迎賓館から少し離れた場所に設けられた検問に差し掛かり、小田が身分証明を見せて通る。

それから少し走ると目的地——赤坂迎賓館に着き、西門から入った車は、現在警備本部となっている赤坂署の近くで停まる。

——着いたか……今何時だ？——

停車の感覚に手を休めると、光秋は左手首の腕時計を見る。

「9時か……」「三佐、パーティーの開始って何時でしたっけ？」

「10時からだ。終わりは2時だな」

「ありがとうございます」——あと1時間か……

藤原に礼を言いながら、光秋は生唾を飲む。

午前10時。

装備品一式——防弾ベストと各部防具、拳銃——を身に着けた光秋は、藤原隊の待機室代わりになっているワゴン車の中からおぼろげに聞こえてくる開会式の宣言に耳を傾ける。

「いよいよ始まりましたね……」

「だね……」

左隣に座る同じく装備品一式に身を固めた法子に呟くと、各装備を再度点検し、内ポケットのカプセルと右腰の拳銃に意識を向ける。

——拳銃も一応練習してるんだが、相変わらず的をかすればいい方なんだよな……やっぱ僕の最後の手段は、ニコイチか——

と、助手席に座っている藤原が顔を向けてくる。

「せっかくだ。パーティーの様子を見てきてもいいぞ」

「えう……いいんですか？待機してなくて」

予想外の申し出に、光秋は面食らって思わず訊き返す。

「ずっと狭い車内にいても仕方ないだろう。気分転換にちよつと見てきてもいいぞ。もしもの時は連絡する」

「あ……はあ……」

光秋の左耳を指さして言う藤原に、光秋はそこに着けてあるニコイチの通信機を意識しつつ、尚も迷いを含んだ返事をする。

「でも……」

「少し硬くなり過ぎている。それではいざという時柔軟に対処できん。リラックスも仕事の内と思って行つてこい」

「！」

薄々自覚していたことを指摘されて、思わずハツとする。

「……でも、この格好で大丈夫ですか？」

「あくまでも遠くから眺めるだけだ。和やかな光景を見て適度に緊張をほぐしてこい」

「……わかりました」

光秋自身、本音を言えばパーティーには興味があつたので、最後に残った懸案を解決すると車を降り、心なしか弾んだ歩調で正門側へ向かう。

太い道に沿って少し歩くと、装備品で身を固めたESO一般部隊や警察の人垣が見えてくる。

その許に近づき、邪魔にならないくらいの距離をとって背伸びすると、人垣越しに大勢の人を見る。

緑色の屋根と白を基調した洋風2階建ての造りに、2体の日本甲冑を模った屋根飾りが特徴の迎賓館、その正面に広がる主庭には晴天が降り注ぎ、会食用に並べられたテールの合間を燕尾服やドレス——気温があまり上がらないのでなにかしらを羽織っているが——といった豪勢な衣服を纏った人々が行き交い、ときに談笑している。そうした場所から少し離れた所には報道陣が詰め寄せ、無数のカメラやマイクが向けられて散発的にフラッシュが光る。

——ニュースや映画で観る光景そのままだな。流石に真っ只中にいるのは場違いといか、気圧されそうだけど、このくらいの距離間ならなかなか面白そうだ——

前方に広がる光景に、光秋は圧倒されながらも飽きることなく視線を向け続ける。
「すつこいねこれ。各界や各州の大物が勢揃いだよ」

「そうですね……て、ええ!？」

唐突に掛けられた声に慌てて顔を向けると、左隣に法子が立っていることに気付く。あまりに自然だったので、反応が一瞬遅れてしまった。

「法子さん?なんで……」

「私も見にきたの。車の中にも退屈だしね。パーティーにも興味あったし」

「……僕と同じですね」

法子の返答に感想を返すと、光秋は改めてパーティーに視線を向ける。
と、

「……あれ?ホウちゃん!コウちゃん!」

「……ハルちゃん!」

「日高さん?」

突然の呼び掛けに顔を廻らせると、2人は人垣の向こうから速足で近づいてくる日高を見つける。

途中で人垣——警備の人たちに止められるものの、歩み寄った法子が知り合いだと説明して道を開けてもらう。

「すっごい偶然!どうしたの?」

「まさか、日高さんもパーティーに?」

周囲のESO職員や警官たちが場違いさに眉を寄せるくらい嬉しそうに問う法子に続く形で、光秋はすぐに浮かんだことを述べる。

「違う違う。仕事。パーティーで出される料理の取材にね」

言いながら、日高は首から提げているカメラを抱えて示す。

よく見れば着ている服は正装用ではなくビジネス向けの黒いスーツであり、動き易さを重視してか下はズボンだ。

「だいたい、いくら実家がアレだからって、こんな盛大な場所に呼ばれるような身分じゃないよ。親戚にはそんな人も少しはいるみたいだけどね」

「……ああ、まあ……そうですね……」——にしてもなあ……—

日高の返事に一応の納得を返しながらも、先日訪れた日高家の様子と、目の前の日高本人の雰囲気、光秋は万が一というものを捨て切れない。

ビジネススーツでさえ、日高が着れば周囲の客人たちに負けない気品を醸し出すのだから、やはりその手の素質があるのだろう。

「で、そつちは？見たところ仕事中美たいだけど」

「パーティーの警護。言っても予備だけどね」

「あ、なるほど」

「ん、んんっ！」

日高の質問に法子が答えていると、傍らの男性警官が咳払いをしつつ視線を向けてくる。

「……じゃあ、そろそろ行くね」

「……それがいいね」

その視線の意図を察した日高に法子が応じると、日高は後退る様に人垣から離れていく。

「2人が警護にいるなら心強いよ。わたしも自分の仕事に集中できる。じゃ、そつちも頑張つてね！」

「ありがとうございます」

「そつちもね」

本音とも社交辞令とも取れることを言つてパーティーに戻る日高の背に、光秋と法子はそれぞれ返事を送る。

「……私たちもそろそろ戻ろうか」

「ですネ。それがいい」

周りの視線に痛みを感じながら応じると、光秋は法子と共にワゴン車へ戻る。

「……やつぱり僕、もう少しその辺歩いてきます。パーティーや警備の邪魔にならない範囲で」

「わかった。なんかあれば連絡するね」

「お願いします」

ワゴン車に着く手前で法子に言い置くと、光秋は赤坂署の前を通り過ぎ、迎賓館を右

に迂回する形で庭の反対側へ向かう。

——…東京のど真ん中だつていうのに、凄いい数の木だなあ……—「向こうなんて最早
“森”だな—」

道の両側と正面の先に生い茂る木々に圧倒されながら、一人感想を呟く。

——……そういえば、この中でもパーティー開かれてるんだよなあ。外よりすごいのか
な?—

左側に佇む迎賓館、その中の様子に思いを馳せながら、主庭の反対側の広間に出る。

—こっちは静かだな—

主庭と違ってこれといった飾り気がない、比較的殺風景な広間に意外な印象を受け
る。警備も数人配置されているのだが、主庭側とは対照的に一定間隔に離れて周囲を巡
回しているだけのようだ。来賓に至っては1人もいない。

—いや、あれは……—

そう思った矢先、光秋は迎賓館の端に佇む人影を見付ける。少し距離があるためにこ
こからはよくわからないが、青いドレスを着た女性だ。肌の露出こそ控えめだが、コー
トの類は着けていないようだ。

—ちよつと抜けて休憩か?でも、今日天気はいいが気温低めだしな……寒くないかな
?—

そう思う間にも、光秋は相手の許へ歩み寄っていく。

少し歩いて距離を詰めると、相手の女性に呼び掛ける。

「あの、すみませーん」

「……………はい？」

やや周囲を見回して光秋に気付くと、女性は首を傾げる。

—思ったより若いな。僕と大して変わらないんじゃない？……………？—

それが女性に対する光秋の第一印象だ。このような催しに参加している以上、どんなに若くても30代前後を想像していたのだが、目の前の女性は20代前半、否、はたち二十歳にも達していないように見える。

160センチ程の細身の体型に真っ直ぐに伸びた黒髪、目立った染みのない白い肌と、青一色の装飾が控えめなドレス——ローブ・モントントというらしいが、光秋にそんな衣服の知識はない——と合わさって、日系的美女を体現した様な清楚な美しさを備えている。

……………また綺麗な人だなあ……………法子さんみたいな活発そうな美しさもいいが、こういう静かな美しさもまた……………——

「あの、どうかされましたか？」

「！」

女性に呼び掛けられて、束の間見惚れていた光秋は現実に戻される。その呼び掛けさえも、どこか高貴な印象を抱かせる。

「若そう……本当に若いんだとしても、こんな所にいる以上それなりの立場ってことか……と、いかんいかん——「あ、すみません……そこ寒くありませんか？ なにか羽織る物は？」

再び何処かへ行きそうな意識を引き留めると、見掛けた時から気になっていることを問う。

「ああ、大丈夫ですよ。館内が暑かったので、ちよつと涼みに来ただけですから」

「それならいいのですが。今日は気温が低いようなので気を付けてください。失礼しました」

「お氣遣いありがとうございます」

女性が笑顔で頭を下げると、光秋は一礼してワゴン車へ戻る。

「お礼の笑顔一つとっても品があるなあ。曾我さんの猫被りとはまた違って……やっぱり、それなりの人なのかな？——

来た道に戻りながら、さっきの柔らかな笑顔を思い出す。

しばらく歩くと、

「……………」

前方に小柄な人影が佇んでいるのが目に入り、光秋は距離を詰めながら目を凝らして観察する。

と、

「……………あ！あなた…………」

「柏崎さん？」

足音に気付いてこちらに顔を向けた人影——先日サン教ベース制圧作戦の際に会った東京本部所属の特エス・柏崎桜に、光秋は意表を突かれる。

その許まで速足で歩み寄って改めて確認するが、やはり柏崎だ。短い赤毛が特徴的な顔は、今日もどこか不機嫌そうに歪んでいる。

「この前以来ですね……………今日も仕事？」

「他に何かあるんだよ」

先日の作戦の際に垣間見た彼女の事情を思い出して遠慮がちに訊くと、案の定仏頂面の回答が返ってくる。

「……………そういうそつちは？」

「仕事。パーティーの警護。ただし予備だけだね」

「じゃあ、アタシと丸つきし同じじゃん」

「そうなのか？……………まあ、サン教の一件の後だしな」

柏崎に応じつつ、光秋は藤原が初めて警備の連絡をしてきた時のことを——特に口外にDDシリーズへの警戒も含めていたことを——思い出す。

「使えるものは何でも使う、か……理屈はわかるが、こんな年頃の子をこうも立て続けにな……」

強力な超能力者を控えさせておく必要性を理解しながらも、10代になるかならないかの子供がクリスマスに家族と過ごす時間を奪われ、正月早々またも駆り出されていることに、漠然とした憤りを感じてしまう。

「……ところで、こんな所でなにしてたんだ？入間主任たちは？」

「別に。ちよつと外の空気吸いたくなつて出てきただけだよ。みんななら赤坂署の待機室じゃない？その前で別れたから」

「その辺も僕と似たようなもんか」

「……そうなの？」

光秋が漏らした感想に、柏崎は少しだけ感心を寄せる。

「こんなところ滅多にこないからな。少し見物してきた。あとは、リラックスかな。どうも変な緊張をしてみたって」

「……大人のくせにそんなことあんの？」

「大人でもあるんだよ」——厳密には僕まだ未成年だけだね——「ただ、そろそろ戻ろうと

思つて。柏崎さんは？」

「……………アタシもそろそろ戻ろうかな。少し寒くなつてきたし」

「そつか…………」

柏崎の応答に短く返すと、光秋はワゴン車への歩みを再開する。その後を柏崎がとぼとぼとついてくる。

互いにそれ以上会話のないまま、しかし気まずさを感じるわけでもない雰囲気です。署の前に差し掛かると、光秋は一旦足を止めて柏崎の方に振り返る。

「こんなことを言うのは、年上として情けないことかもしれないけど……………柏崎さんみたいな強力な超能力者が——味方がいてくれるとすごく心強く感じる。おかげでこっちの緊張もいくらかマシになったよ」

「アタシの念力が効かないロボットに乗ってる奴がよく言うよ…………」

「あ…………アレはちよつと特別というか…………訳アリでね」

口を尖らせて言われる柏崎の指摘に、光秋は苦笑いを浮かべて返す。

「訳アリねえ…………アタシの方こそ、オッサンに期待してんだからね」

「え？」

「！ちよつとただでぞ！ほんつつつのちよつとだけ！突然現れた黒いロボット倒したよ。うな奴が同じ現場にいれば、アタシもちよつとは樂できるって思っただけだから！たつ

たそれだけだからな！勘違いすんなよ！」

自分の言ったことにハツとするや矢継ぎ早に言い切ると、柏崎は返事を待たずに署内へ駆け足で入っていく。

「期待か……………」——大人が子供に縋るのは少し考えなきゃいけないのかもしれないが、一応はお互いさまつてことか——

そう考えると先程感じた憤り、それによつて重くなつていた気持ちが少しだけ軽くなる。

それを表す様に、光秋は少しだけ軽くなった足取りでワゴン車への歩みを再開する。

少し歩いてワゴン車が見える所までくると、こちらに気付いたのか、法子が車から降りて出迎えに来てくれる。

が、

「……………!?!」

法子——否、綾から放出される険のある雰囲気、光秋の緩みかけていた気持ちが否応なしに引き締まる。

「…………あのー、綾…………さん？なにか…………？」

思わず敬語になる。

「光秋、さつき女の人にデレデレしてたでしょ」

「女の人って……あ」

古井戸の底の様な暗い目で睨み付けられ、毬栗いぐりを投げ付ける様に棘のある問いを掛けられて、光秋は先程の青いドレスの女性を思い浮かべる。

「別にデレデレなんてしてないぞ。寒そうだったからちよつと声を掛けただけで……：それもこの辺一帯はEジヤマーが効いてるだろう。何でそんなこと知ってるんだ？ テレパシーなんて……」

「それは知ってるし、実際使おうとしても靄もやみたいなのが掛かる感じがしてあんまりわかんないよ。でも、光秋のことはときどきわかる……うんうん、感じるんだよ。あ、今女の人にいい顔してるなって」

「……女の勘ってやつか？」

綾の言い分に半ば呆れる一方、表現はともかく実際事実関係は合っていたので、綾の持つ不可思議な『力』に若干戦慄する。

「……とにかく、別にいい顔したとかそんなんじゃないよ。お前さんが心配するようなことは何も無い」

「本当？」

心なしか強い調子で否定する光秋に、綾は尚も探る様な視線を寄こす。

「僕の目を見ろ。それでも不安だって言うなら、そのことについて心を読めばいい。E

ジャマーの影響下でも、この距離で集中すれば嘘かどうかくらいは判るだろう?」

言いながら、光秋は左右の手で綾の両手を握り、2つの目で綾の両目をしっかりと見据える。

「……………わかった。じゃあ信じる」

「読まなくていいのか?」

「光秋が…………アキがそこまで言うなら信じる」

「そうか?…………そりゃよかった…………」

どうにか険な雰囲気収めてくれた綾に、光秋はひとまず安堵する。

「じゃあ、車に戻ろう。そろそろさ」

「うん」

綾の返事を聞くと、光秋は左手で綾の右手を掴んだまま先に行く。

―パーティーを垣間見れて、迎賓館も少し見物できて、柏崎さんに会って、綾に怒られて。短い時間にいろいろあったが……………結果的に緊張のほぐしと引き締め直しが程よくできたから……………いつか―

程よい均衡を取ることができた心持ちをそう断じると、光秋は車のドアを開け、綾の手を引いて乗り込む。

66 人の創りし巨人

午前11半。

交代まで残すところ30分という時に、荷台全体を幌で覆った大型トレーラーが迎賓館北側の検問所に近付いていた。

「……！」

気付いた中年の男性警官は慣れた手付きで誘導灯を振り、停止指示を出す。

しかし、

「？……おい、停まれ！」

トレーラーは停止どころか速度を落とす様子すら見せず、寧ろ徐々に速度を上げて検問に突っ込んでくる。

「停まれ！停まれんかあ！」

「停まらないなら停めるまでだっ」

狼狽する警官を脇に押しやるや、非常用に控えていたESO所属のサイコキノの若い男性がトレーラーの前に立ちちはだかり、顔に余裕を浮かべて右手をかざす。
が、

「!?念力が?……!」

サイコキノの予想に反してトレーラーを停止させるための力は発生せず、動揺している間に寸前まで迫ってきた車体を横に飛び退いて間一髪でかわす。

目と鼻の先を大質量が行き過ぎる恐怖に冷や汗を流す警官とサイコキノに目もくれず、大型トレーラーと、その後ろを隠れるようにしてついていく荷台を幌で覆った中型トレーラーは真つ直ぐに迎賓館を目指す。

「こ、こちら北側検問所!トレーラー2台に突破された!」

慌てて通信機に吹き込む警官の目の前で、紐の結びが甘かったのか中型トレーラーの幌が外れ、その下から大型Eジヤマーが現れる。

(繰り返す!トレーラー2台に北側検問を突破された!)

「!?」

焦りと恐怖を含んだ声がワゴン車の通信機から響くや、光秋は後部座席に腰を下ろした体を強張らせ、竹田二尉が買ってきたお茶を吹き出しそうになるのを何とか堪える。(警備本部より迎賓館周囲を巡回中の各員。至急正門前に集合してトレーラーの停止、及び乗員の身柄を確保しろ。待機中の者は外に出ている来賓らを館内に避難、一部正門側に応援を回せ)

「聞いでの通りだ。行くぞ!」

「「了解！」」

通信機から流れる赤坂署からの指示、それを聞いた藤原三佐の号令に小田一尉たちと応じると、光秋はワゴン車を降りて先頭を行く藤原の後を追う。

——結局来ちやったか非常事態……だが、〃やりたいこと〃をやる初めての機会なんだ。何が相手だろうとやってやる！——

起こってしまった〃万が一の事態〃に落胆する一方、伊部母との会話を思い出して気合いを入れ、少しでも強がりも浮かべながら主庭に出る。

「館内に避難してください！そつちはダメ！報道陣も下がって！」

他の警官やESO職員に混ざって声を上げ、八方走り回って外に出ている人々を迎賓館の中に避難させていると、

「何アレー！」

「？」

来賓の女性の1人が絹を裂く様な悲鳴を上げ、光秋は思わず正門側に顔を向ける。

「!?……DDシリーズ？」

そこには全長10メートル程の黒い巨人が、長い銃身、その付け根の上側に照準機らしきカメラを、下側に長方形の弾倉を設け、その後ろに持ち手を、さらに後ろに細長い三角形の銃床を付けた——人間が使う自動小銃を模した様な巨人サイズの銃を右手

に持つてこちらを見下ろしている。

「……………否、違う」

ヘルメットの様な丸い頭に輝く単眼を見据えながら、光秋は直感的にそう断じる。

この数分前。北側検問所を強行突破したトレーラー2台は、迎賓館へ向かつて伸びる片側4車線の国道を直進していた。

この道は迎賓館正門の手前でY字型に枝分かれしており、その分岐点には周囲を巡回していた警官やESO一般部隊員たちが集結していた。

各々警備用に支給された短機関銃を構え、後からやつて来た待機組の応援たちも加わると、場慣れした様子の中年警官が手に持った拡声器越しに呼び掛ける。

（接近中のトレーラーに告げる。君たちは交通規制が敷かれた道路を無断で走行している。至急停車し、車から降りて投降しろ。従わない場合は、実力を以て対処する）

落ち着いた、しかし壁の様に揺るがない警官の呼び掛けに応える様に、前を走る大型トレーラーは道路を抜けた先に広がるY字の分け目部分に左側を前にして停まり、Eジャマーを積んだ中型トレーラーもその陰に停まる。

もつとも、それは警告に従ったわけではない。

「お、おい？」

「何だあ!？」

大型トレーラーの荷台を覆っている幌、その下にある荷台を埋め尽くす程巨大な積み荷が動いたかと思うや、自らを固定していたワイヤーを起き上がる勢いのまま切り、幌に隠されていた黒い巨体を露わにする。

「コイツ！……白い犬？」

「バカ！黒いだろうが」

「どつちにしろ違う。とにかく撃て！」

あまりに現実離れた光景に警備たちに束の間動揺と恐怖が走るが、次の瞬間には敵性と判断した巨人に集中攻撃が行われる。

しかし、短機関銃の一斉射は巨人の装甲に目立った傷を付けることはできず、その間にも荷台から降りて迎賓館へと歩き出した巨人は足元で銃撃を続ける警備たちに右手に持った巨大な銃を向ける。

「来るぞ！」

「散れえ！」

（ふっ！）

途端に警備たちは互いの距離を離しながら後退し、蜘蛛の子を散らす様な光景を嘲笑する様な声が巨人から漏れたかと思うと、巨人は迎賓館目掛けてゆつくりと、しかし威圧感を伴った地響きを鳴らしながら足を進める。

「アレは、ゴレム?」

我が物顔で迎賓館へ歩を進める黒い巨人、その見覚えのある人のそれを模した上半身に、光秋は自分が知っている物の名前を呟く。

「……否、それとも違うか。どっちにしろ、敵か!」

ゴレムと比べてやや丸みを帯びた各部、サン教ベース以来2度目に見るニコイチやDDシリーズ以外の二本脚、両腕の手首近くにあるコブの様な膨らみといった差異を観察しつつ断じると、防弾ベストに右腕を突っ込んで上着の内ポケットからカプセルを取り出そうとする。

が、

「待て!」

「!?」

突然後ろから藤原に怒鳴りつけられ、カプセルを掴みかけていた手を止める。

「何です?」

「……でニコイチを出すな。乗る前に狙われるぞ。ここは農らが引き受けるから赤坂署の辺りで出して!」

「……でした。了解です!」

藤原の説明に合点するや、光秋は突っ込んでいた腕を抜いて赤坂署の方へ駆け出す。

が、

「?」

3歩と進まない内に脇を小柄な影がすれ違い、それを追って振り返ると仁王立ちした柏崎が巨人を睨み付けている。

「オモチャ野郎が！舐めてんじやないよ！」

怒声と共に柏崎は右手をかざし、本来なら巨人の装甲を凹ませる程の念を放つ。

しかし、

「……あれ？」

「バカ！Eジャマー効いてるっての！——

巨人の前進が止まった以外何も起こらないことに眉を寄せる柏崎に、敷地内にEジャマーが設置されていることを完全に失念していると察した光秋は、慌ててその許に駆け寄る。

（進まない?……ESOの特エスカ。例えば子供の姿をしようといようと）

正門から少し進んだ所で足を止めた巨人から冷酷な声が響くや、その左手首が柏崎に向けられる。

——不味い!——

直感的に危険を察知するや、光秋は駆けつけた勢いそのまま柏崎に飛び掛かって押し倒し、

一瞬前まで柏崎の胸があつた辺りをコブの先端に空いた穴——銃口から放たれた数発の銃弾が過ぎていく。

（ESOの一般部隊か？邪魔するならば貴様も！）

怒りを孕んだ声を響かせるや、巨人は柏崎を隠す様に倒れている光秋に左腕の銃口を向け、銃口の上に設置されたカメラが冷たく反射する。

——いかん！——

伏せている姿勢から咄嗟に回避できないと直感し、一瞬後に再度銃弾が放たれるが、

「!?……綾?」

前に綾が割り込んでくるや、両手をかざして念の壁を張り、銃弾の一連射を弾く。

「使えるのか?」

「いつもよりやり辛い……集中しないといけないけど、なんとか」

強張った顔で光秋の問いに答えるや、綾は巨人を睨み付ける様に正面に意識を集中させ、さらなる攻撃に備える。

（貴様も特エスか? Eジャマーの影響下で念壁を張るとは……だが、コレはどうだ?）

若干驚愕した声で言いながら、巨人は右手に持った巨大な銃を向ける。

「いかん!」

咄嗟にこれは防げないと断じるや、すでに柏崎を右肩に担いで立ち上がっていた光秋は左手で綾の右手を掴み、駆け出した直後に銃弾よりもずっと太い弾丸が1発飛んでくる。

——ええい！早くニコイチに乘らなきゃいけないのに！——

一瞬振り返って見えた舗装された地面にめり込んだ弾丸——目測で直径3センチ程——に、光秋は焦りを募らせながら、綾の手を引いて柏崎を担いだまま迎賓館の左脇へ駆け入る。

「おい！こつちだあ！」

「これも食らいやがれ！」

「2人共前に出過ぎです！」

（チツ……しかし貴様たちに構ってもいられんか。進むようなら……）

後を追ってくる様に響く藤原と竹田二尉の怒声、小田の注意、重い物が碎ける音と銃声、巨人の舌打ちを聞きながら、迎賓館の陰に入った光秋は柏崎を降ろすや内ポケットを探ってカプセルを取り出す。

「とりあえずここなら目立たないか」

言いながらカプセルの先を前に向け、ボタンを押してニコイチを出現させる。

「このデカいの、そんな小さい中に入ってるの!？」

「説明は後で。僕は乗り込むから、綾——法子さんは柏崎さんをお願いします」
「了解」

目の前で起こった超常的ともいうべき光景に驚愕する柏崎に応じながら、光秋はリフトを掴んで上昇し、その間に綾と交代した法子に柏崎を任せる。

『『お願い』 って何だよ！アタシだって——』

「Eジャマーが効いてる中で超能力者、それもサイコキノにできることは限られる。じきに敷地内のやつは切られるだろうから、それまで大人しくしてた方がいいよ。現にさっきだって」

「それは……」

今にも再び飛び出して行きそうな手をしっかりと掴んで言い聞かせる法子に、勢いを殺がれた柏崎は何も言えなくなる。

その間にも光秋はコクピットに座って認証を済ませ、モニターが点くやニコイチを立ち上げらせようとする。

が、

（この場にいる政府高官たち、及びその警備たちに告げる）

「？」

直前に迎賓館の真正面まで接近した巨人の声が響き渡り、咄嗟に左膝を着いたまま待

機する。

（我々は Normal People、超能力者という危険分子を討伐する勇士たちである。超能力者の危険性は度々指摘されているにも関わらず、現在の合衆国政府はこの様な者たちを管理する術^{すべ}を設けることなく野放しにし、“平等”という言葉の飾りで包み隠し、社会秩序の崩壊を放置している）

——……管理とまではいかないかもしれないが、超能力の使用を規制する法律はあるはずだが……それに……この人、狭いな——

巨人の主張に心の中で反論しつつ、光秋は言葉の隅々から感じる攻撃的な態度に居心地の悪さを覚える。

（今回の活動は、我々が新たに得た聖剣——この“フラガラツハ”で以てそのような無能な高官たちに鉄槌を下すことである。危険分子を放置するような者共は、それ自体が危険な者たちなのだ。そのことを肝に銘じろ！）

一方的に言い切るや、巨人は両手保持した銃を迎賓館へ向ける。

「やめろお！」

それを見るや光秋は右ペダルを踏み込み、立ち上がった勢いのままニコイチを上昇させると、迎賓館の陰から躍り出て巨人に飛び掛かる。

直後に弾が連射されるが、ニコイチの左手で銃口を下に向けられて放たれたそれらは

周囲の舗装を抉るだけに終わる。

その間にも右手を巨人の胸部に押し付けた光秋はNクラフトを吹かし、推力にものはいわせて巨人を迎賓館から遠ざける。

（貴様、白い犬かつ！）

「その機体から降りて投降しなさい。武装は押さえました」

単眼を介して敵意の視線を向けてくる巨人に、光秋は努めて冷静な、しかし有無を言わせない語調で呼び掛け、銃を押さえる左手にさらに力を込める。

しかし、

（私だけを相手にすればいいと思っているのか？ 甘いな）

「？……！？」

返ってきた言葉に眉を寄せたのも一瞬、先程まで意識の外にあつた無数の銃声が聞こえてくる。

すぐに銃声がする方——正門側に意識を向けると、門の前の二股道での銃撃戦を映した拡大映像が表示される。

同時に、

——……後ろ？ 2機？ それに人が大勢？——

背後から悪寒を感じ、直後に映し出された後方の拡大映像に、森の向こうからこちら

に駆け寄ってくる2体の巨人を見る。

―やられた！最初の騒ぎは陽動――否、それもあるが、DDシリーズなんかの件でこの手の物にみんな過剰反応したんだ！―

自分自身陥っていた心理状態に悔しさを覚える間に、巨人はそれまで上げようとしていた銃をいきなり引き下げ、押し返す力がなくなつてニコイチがバランスを崩した隙に地面を蹴つて距離を取り、体勢を整えるやニコイチに両手保持した銃を放つ。

「―」

反射的に両腕を前に出してそれを受け流し、光秋自身の両腕にも薄つすらとなにかが当たり続ける感覚が伝わってくる。

ニコイチにとっては1発ごとの威力は大したことないものの、当たり続けていて気持ちのいいものではない。一刻も早くこの場から立ち去りたいのが本音ではある。

しかし、

―それだと迎賓館に当たる。前と後ろから挟み撃ちつて、来賓の人たち何処に逃げればいいんだ!?―

自分の後ろにいる数十の人々、その命が脅かされている現状を打開できないことに、心の中で絶叫する。

その時、通信機に藤原から連絡が入る。

（加藤、聞こえるか？）

「三佐？何か？」

（Eジャマーの管理をしている係たちに異常が起きたそうだ。儼らはその様子を見に行くからこの場から一旦外れる。すまんが持ち堪えてくれ）

「了解です」

応じると、藤原の方から通信は切れる。

と、光秋は今更ながら疑問に思う。

——……そういえば、何でこの期に及んでEジャマーを止めないんだ？——

車載通信機で光秋に連絡を入れる間にも、藤原と小田、竹田と男性警官2人を乗せたワゴン車は、迎賓館を右に迂回して反対側に回り込む。

さらに奥まで進んで噴水のそばで停車すると、一行は赤坂署で通常の警備の装備とは別に支給された自動小銃を持って、藤原はそれに加えてトランク状の箱を背負って車から降り、森に入る。

「Eジャマーの位置は？」

「えっと、一番近いのは……こっちです」

藤原の問いに30代手前くらいの若い警官が手元の端末を見ながら応じると、彼を先頭に一行は木々の合間を進む。

迎賓館と隣接するこの森は、赤坂御用地と呼ばれる四方一キロ程に及ぶ国有地であり、現在は敷地内の文化財と自然保護のために合衆国が管理している。防犯上Eジャマーもいくつか設置されているが、今は迎賓館一帯を影響下に置く最も近い一基を指している。

本来の歩道を外れてしばらく進むと、雨避け様に設けられた屋根の下に鎮座する大型Eジャマーが見えてくる。

刹那、

「ESOの者かつ！」

「！伏せろ！」

前方からの声に直感的に叫んだ藤原に従って全員が即座に体を屈めると、直後に一行の頭上を二条の銃撃が過ぎていく。

「今のつて？サブマシンガン!？」

「徳川、とくがわ伏せてろ！」

困惑して姿勢を上げそうになる先頭を行っていた若い警官を押さえつつ、小田は銃撃が来たEジャマー周辺目掛けて自動小銃を撃ち返す。

「散れ！木の陰に隠れろ！」

藤原の叫びに応じる様に、一行はそれぞれ近くの木の陰に転がり込む。

体勢を整えた藤原が木の陰からEジャマーの周囲を窺うと、短機関銃を構えた警官2人がこちらに警戒の視線を向け、Eジャマーのすぐそばに管理係と思しきESO一般部隊2人がぐつたりと横たわっている。

―警官？NPの奴ら、こんなところにまで浸透を……―

予想外の光景に、藤原は知らぬ間に小銃を持つ手に力を込める。

「！」

直後に顔の横を銃弾が走り、隠れている木が削れるのを横目に見ながら首を引つ込める。

巨人の銃撃を両腕で受け流し続ける中、光秋は徐々に焦りを募らせていく。

―Eジャマーはまだ解除されないのか!? 僕だっていつまでも保たないぞ!……?―
本当なら声に出したい不満を心の中で叫んだ直後、巨人の銃撃が止み、腕を少し下ろして相手の様子を見る。

(これ程までに頑丈とは……弾の無駄だな。だが)

言うや巨人は銃を下ろすと、左手を左腰に伸ばし、格納されていた棒状の物を取り出す。棒の先から刃を伸ばして巨人サイズのナイフを形作ると、

(これならどうだ!)

叫びと共に地面を蹴って間合いを詰め、逆手に持ったナイフをニコイチの頭部目掛け

て振り下ろす。

——……今——

反射的に後ろに飛び退いてそれをかわすと、光秋は踏み込んだ攻撃をかわされて体勢を崩した巨人に仕掛けようとする。

が、

（みなさん落ち着いてっ！外に出ないでくださいっ！）

「!?」

外音スピーカーから響いた法子の叫びに動きを止め、声がした迎賓館の入り口を見やると、拡大映像が表示される。

入り口に詰め寄せた来賓たちが警備たちを押し退けて外に出ようとし、法子たち警備はそれを必死で押し止めている。

（外は戦闘が行われていて危険です！館内に退避しててください）

（巨大な銃を持った巨人がすぐそこまで迫ってるんだぞ！ここにいたらみんなやられるっ！）

「!?……まさか!」

映像と共に聞こえた警備と来賓の口論に、光秋は思わず迎賓館の方にニコイチを振り返らせ、すぐ近くまで迫ったもう1機の巨人が銃を向けるのを見る。

瞬間、光秋は地面を蹴って跳び上がり、ペダルを一杯に踏んで裏手で銃を構える巨人に突進する。

「やめんかあああ！」

絶叫と共に一瞬で間合いを詰めると、迎賓館の上を越える間に腰に引いていた右拳を放とうとする。

が、

——拳じゃ不味い！——

繰り出す直前に思い至るや、腕を伸ばす間に握り拳を開き、巨人の胸部に平手を叩き付ける。

光秋の意志を反映した力加減も加わって大きな破損はしなかったものの、それでも巨人の胸周りは僅かに凹み、ハツチらしき扉の上下を外側にひん曲げながら後ろへと押し倒される。

同時に撃ち出された数発の弾は迎賓館を外れて明後日の方へ飛んでいき、ひとまず事なきを得る。

しかし、

（わあああ！）（ああああ！）（いやあああ！）

「!?」

迎賓館正面から多数の悲鳴が響き渡り、ハツとした光秋はニコイチを振り返らせて高度を上げて下を見ると、今の発砲音で恐怖がいよいよ限界を迎えたのか、警備の制止を決壊させた人の波が正面玄関から溢れ出していく。

すぐそばにはもう1機の巨人が佇み、正門前では銃撃戦が繰り広げられているのだが、恐慌をきたした人々の視界には入っていないのか、我先にと正門目掛けて駆け、あるいは別の出入り口を目指して四方に散っていく。

と、人混みから少し外れた辺り——巨人の足元の近くに青いドレスの女性が足を纏れさせて両手を着く。

「あの人、さっきの！」

拡大された映像に、光秋は先程迎賓館の裏手で体を心配した女性を思い出す。

直後、

（貴様、鷹たかのみやりようこノ宮涼子か！）

足元の女性に気付くや、巨人は多分な憎悪を孕んだ声を上げる。

（相手が何者であろうと超能力者には——怪物には死を！）

迷いのない宣誓をすると、巨人は立ち上がりかけていた女性に左手首のコブを、そこに内蔵された機銃を向ける。

「！」

手首を向けた瞬間、光秋は再び迎賓館を飛び越えて巨人の胸部に突っ張りを入れるが、僅かに間に合わず数発の銃弾が放たれる。

と、

（逃げてっ！）

「!?」

聞き覚えのある声に下に目を向けると、光秋はESOのコートを羽織った入間主任が女性を突き飛ばし、代わりに当たった銃弾に両腕と両脚から血飛沫を上げる光景を見る。

散発的な銃撃が続く中、小田に「徳川」と呼ばれた若い警官が叫ぶ。

「テロリストの協力をして！お前らそれでも警察官か！」

「社会の脅威になる超能力者を擁護する者、そんな奴らに協力するお前たちに言われたくない！」

叫び返しと共にすぐそばを銃弾が掠り、若い警官は応戦の小銃を撃つ。

木々が多いために視界が悪く、加えて所属の性質上殺傷は極力避けたい思いから致命傷になり得る辺りには迂闊に撃てず、相手も似たか寄ったかの状態に、互いに決定打を与えられない状況がすでに2分程続いている。

と、小田が姿勢を低くして銃撃を避けつつ藤原の許に駆け寄ってくる。

「三佐、これ以上足止めを食らうわけにはいきません。例の新装備使いましょう」

「ウム……確かに時間を掛け過ぎているか……さっきの地鳴りも気になるしな」

小田の進言に応じつつ、藤原は自分たちの背後から響いた巨大な物が移動する様な振動を思い出し、背中の箱に意識を向ける。

—EJC—『Eジャマー・キャンセラー』。Eジャマーの効果を打ち消して影響範囲内での超能力の使用を可能とする装置か……秋田での一件で小耳に挟んでいたが、まさか今回配備されていたとはな—

支給される際に聞いた自身が背負っている装置の性質を思い出しつつ、藤原は持っていた小銃を肩に提げて、多少の不安を覚えながら紐に付いているスイッチを入れる。

「ウム……」

「どうつすか?」

小銃の応戦を続ける竹田に応じる様に、藤原は足元の地面に右手をかざし、念で一握り程の土を引き上げる。

「行けそうだな。しかし、影響範囲は約2メートルか……よし。儂が壁を張って突撃する。小田たちはそれに続け」

「了解!」

4人の返事を聞くと、藤原は木の陰から飛び出して左手をかざし、正面一帯に意識を

集中させて念の壁を張る。

「行くぞお！」

叫ぶやそのままEジャマーへ向けて駆け出し、念壁で銃弾を弾きながら木々の合間を疾走する。

「EJC!?出してきた——！」

驚愕する警官の顎に鈍器の様な右拳を叩き込んで失神させると、藤原は左手をかざしながら残った1人に距離を詰め、それに続いて駆けてきた小田たち4人もその後方から銃口を向ける。

「ク、コノッ！」

叫ぶや残った警官は短機関銃を撃つが、弾は全て念壁に弾かれて藤原を傷付けることはない。

「投降しろ！5対1、それも手持ちの武器が使えんで何ができる」

「……………チクシヨウツ！」

閻魔の顔で睨み付ける藤原に、警官は短機関銃を取り落としてその場に膝を着く。

「誰かこいつと、そこに転がっている1人を拘束しろ。倒れている係たちの様子も診てやれ」

小田たちに指示を飛ばしながら、藤原はEジャマーの停止作業を行う。

—すぐにケリが付いてよかった。バッテリーの容量上、コイツは長く使えんから—
背中のE J Cの稼働時間を気にしながら停止作業を終えたと、紐に付いているスイッチを切る。

「離反した警官2名、拘束しました」

「係2人、気絶してるだけの様です」

「よし、救護班と代わりの係を寄こしてもらう。来次第農らはその2人を連れて撤収するぞ」

若い警官と小田からの報告を聞くと、藤原は通信機を取り出して赤坂署に繋ごうとする。

が、

「……この音は?」

自分たちの許に近づいてくる地鳴りと多数のエンジン音に、藤原は体を強張らせ、通信機に伸ばしかけた手を固まらせる。

直後、

「全員動くなっ!」

威圧声と共に木々を押し退ける様に中型のトラックが2台現れ、それぞれ幌が屋根状に被せられた荷台から降りてきたNPメンバー計10人が、各々手に持った自動小銃を

向けてくる。

木々に隠れてはつきりとは見えないが、後ろにはEジャマーを積んだもう1台が控えている。

―止めたと思えばこれか!……だが、あのサイズなら迎賓館までは届かん。どうにかしてEJCを――!――

何とかして状況打開を図ろうとする藤原の思考を遮る様に、木々の上から顔を出した巨人が単眼で足元の全員を見下ろし、巨大な銃を向ける。

その時、

(EJCを入れろ!)

「!?」

頭上から響いた拡声器越しの声に、藤原は反射的にスイッチに手を伸ばす。

直前、巨人の上から黒いものが接近し、一瞬後に巨人の銃が爆発する。

「ヌォー!」

EJCが作動するや、藤原は両手をかざして影響範囲一杯の頭上に念壁を張り、爆発の衝撃や落ちてくる銃の破片から自分や小田たちを守る。

一通り防ぎ切ると、藤原は巨人の目の前に浮かんでこちらを見据えるスーツ姿の黒い癍毛の男と目が合う。

「物部……」

「どうも藤原さん。『盛大な催し』やりに来ましたよ」

サン教ベース攻防戦の終盤に現れた男は、余裕の笑みで応じる。

コート下の腕と、スーツ用ズボンを履いた脚から血を流した入間は、そのままうつ伏せに倒れこんで動かなくなる。

（入間主任っ！）

直後に叫び声が響くや、柏崎が脇目も振らず入間に駆け寄ってくる。

（貴様！さっきの！）

巨人の方もそれに気付くや、胸周りが若干凹んだ巨体をすぐに起こし、必死に入間を揺する柏崎に巨大な銃を向ける。

「！」

その間にも光秋は巨人に背を向け、柏崎と入間、入間が倒れてからずっと彼女に右手をかざしている青いドレスの女性に覆い被さる様にして銃撃から庇う。

と、

（何!?!）

「?」

4、5発程受けたところで背後に爆発音が轟き、同時に響いた巨人の驚愕の声に光秋

は後ろを振り向くと、持ち手から先が粉々になった銃を持つて佇んでいる巨人を見る。

——……上？——

上空を見上げる巨人と、ニコイチが感知した悪寒から上を見上げると、右手に銃器らしき物を持った茶色い人型が浮かんでいるのを見る。

大きさは10メートル程とニコイチや後ろの巨人と大差ないが、それらに比べて全体的に細く、直線を主体とした直角の多い外見をしている。ニコイチや巨人と違って肩や腰に装甲板は施されておらず、露出した腕や脚の接合部分が機械的な印象を強めている。頭部には巨人と同じく単眼が輝いており、それでこちらを見下ろしている。

右手に持った巨人と同型の巨大な銃の口からは薄っすら煙が上がっており、察するにアレで巨人の銃を撃ち碎いたのだろう。

——今度こそDDシリーズ？……いや、感じが違う。そこまでの威圧感を感じない。巨人を攻撃したってことは、NPでもないようだけど……——
立て続けに現れた未知の敵に、光秋は生唾を飲む。

67 神の子供たち

「……………今は！」

新たな巨人の登場に束の間呆然としていた光秋は、気を取り直すと自身の下にいる入間主任と柏崎、入間に右手をかざす青いドレスの女性に目を向ける。

（主任っ！起きてよ主任！入間主任っ！）

（……）

うつ伏せに倒れたままの入間を揺すりながら柏崎は必死で呼び掛け、右手を伸ばしながらも腰を着いたままの女性はその様子を申し訳なさそうに眺めている。

と、

（……あんたの所為だ）

（え？）

（あんたがこんな所にいたから！主任が！）

「！何やってんだっ！」

怒りを顔一杯に浮かべた柏崎が女性に右手をかざそうとした瞬間、光秋はニコイチの操縦席を機外に出しながら叫び、すぐにリフトを伸ばして柏崎と女性の間に降り立つ。

女性を庇う様に立ちはだかる光秋に、柏崎は食って掛かる。

「退けよ！そいつがこんな所でチンタラしてたから主任が——」

「馬鹿言うんじゃないっ！」

「！」

鋭い視線と共に響いた光秋の怒声に、柏崎は目を丸くして押し黙る。

「人間主任はこの人を助けたんだ。それを、主任をそこまで慕う君が傷付けたら本末転倒だろう。それに、人間主任を傷付けたのはあの巨人だ。間違えるな」——……いや、今のは——

言ってから、一言多かったことを悔やむ。

「……アイツが！」

案の定、柏崎はニコイチの陰からNPの巨人を見上げ、強力な武器を失った所為か、滞空を続ける未確認機と屈んだニコイチを警戒しつつ背中 of 推進器を吹かして正門側に後退る巨人を睨み付ける。

「ただな」

今にも右手をかざして念力を放ちそうな柏崎に気付くや、光秋は膝を折って視線を合わせ、両肩に手を置いて努めて冷静に告げる。

「君が今すべきは、やり返すことじゃない」

「じゃあ何をしろって……」

今にも泣きそうな目で柏崎が反論しようとしていると、その後ろに黒髪のメガネと茶色い癬毛の少女2人がテレポートしてくる。

「やつぱり！入間主任！」

「桜ちゃんは大丈夫？」

「え？……あ、うん……」

現れるやメガネの少女は入間に駆け寄り、癬毛の問いに柏崎は少しだけ落ち着きを取り戻す。

そんな柏崎の様子を見て、入間の脈と呼吸を確認して気絶しているだけだと把握すると、光秋は今一番しなければならないことを告げる。

「とりあえず、まずは止血だ。君のレベルならEジャマーが効いててもそれくらいできるだろう？」

「え？……止血？」

「わかったら早くしろ。入間主任を助けたかったら」

「は、はい！」

一刻を争う状況にやや強い口調で言うのと、柏崎は戸惑いながらも入間の左横に駆け寄り、腕と脚双方に手をかざし、——主に脚から——流れ出ていた血を止める。

「君たちは入間隊の……えーっと……」

「わ、私が柿崎で、そっちの巻き毛が北大路です」

咄嗟に名前が浮かばない光秋に、メガネ——柿崎が入間から一旦顔を上げて説明する。

「そうだったな……ん？テレポートで来たってことは、Eジヤマー切れてるのか？」

「私たちもそこまでは……迎賓館の方で退避したら、遠くで倒れてる主任が見えて、咄嗟にテレポートして……」

「てことは、切れてるんだな……なら……」

歯切れが悪くもなんとか説明する柿崎に、光秋は現状をどうにか把握して、入間を助けるために今できることを模索する。

——入間隊は確か、全員がレベル9の超能力者だったよな……——「柿崎さんはテレポーターなんだな？」

「は、はい！」

「北大路さんは？」

「サイコメトリーです！」

「ドンピシャ」——あとは……——

柿崎の答えに小さく歓喜すると、光秋は意識を集中して心の中に呼び掛ける。

—綾—

直後、

「アキィ！」

叫び声と共に法子と交代した綾が迎賓館の方から飛んでくる。

「ひっ!?!……この人……」

目の前に横たわる人間、その出血に、綾は思わず小さな悲鳴を上げる。

「あんまり見るな。それより、法子さんと代わってくれ」

「わかった」

その気持ちを察して頼みごとをすると、綾は顔を俯ける。

—本当はこんなところ、この子たちにも見せたくないんだがな—

光秋がそんな葛藤を覚えたのも一瞬、綾と交代した法子が顔を上げる。

「……これ、銃で撃たれた?」

「はい。今は柏崎さんに止血してもらってますけど……やっぱり、弾抜いた方がいいでしょう?」

「抜くにしたって、ピンセットみたいなものはないよ?それにどの辺りに何発あるかわからないと」

「それについては、北大路さんにサイコメトリーしてもらおうと思います」

「私？」

突然話を振られて、北大路は少し驚く。

「それで弾の状態を把握して、柿崎さんの念力で取り出してもらおう」

「そ、それなら私がテレポートでやります！」

続ける光秋に、柿崎が慌てて名乗り出る。

「いや。柿崎さんは人間主任の搬送に注力した方がいい。状況がどうなるかわからないからな。レベル9といっても、短い間にあっちこっち跳び回るのは大変だろう？だから今は、敢えて柿崎さんに頼みたい」

「……わかりました」

「でも、サイコメトリーした情報をどうやってサイコキノに伝えるの？弾の位置によって、慎重に慎重を重ねて取り出さなきゃいけない所もあるかも」

早口の追加説明に渋々納得する柿崎の横で、法子は光秋の計画の問題点を指摘する。

「そこは……綾に頼みます」

「綾に？」

「テレパシーって、思考を繋げることもできるんでしょう？北大路さんが感知したものを、綾を介して柿崎さんに伝えれば……」

「なるほどね。それならやってみる価値はあるかも」

「綾には辛いかもしれませんが……」

同意してくれる法子に、光秋は申し訳ない顔をする。

「問題は、柏崎さんが弾を取り出す間止血をどうするかですが……上着でも巻き付けるか？」

「あの……」

最後の問題点に眉を寄せる光秋に、それまで呆然としていた青いドレスの女性が声を掛ける。

「私もサイコキノです。レベルこそ4ですけど、止血くらいなら」

「……………お願いできますか？」

「はい。というか、その子が代わるまでやってました。動揺が治まらなくて腕周りしか止められませんでしたけど……」

「ああ、だからこっちの出血は少なかったのか」

女性の説明に、光秋は先程の手かざしと腕からの出血が少ないことを合点する。

「ただ……」

「はい？」

「……………脚に力が入らなくて……」

「ああ」——今ので腰が抜けちゃったか——

言い辛そうに顔を伏せる女性の状態を察するや、光秋はその許に駆け寄る。

「ちよつと失礼します」

「え?……え?ちよ……!」

断りを入れるや返事を待たずに両腕で女性を抱きかかえ、動揺する女性を敢えて無視して人間の近くまで運ぶ。

「……」

法子——といよりも綾から鋭い視線を向けられるがこれも無視して、取り出しがしやすいように弾が掠つてボロボロになったズボンを両脚とも引き裂いて腿から脹脛にかけて負った傷口を露出させる。

「……袖裂いて」

「はい」

心構えはしていたもののやはり走った背筋の悪寒をどうにか隅に押しやり、綾に頼んでコートとスーツの袖も念で裂いて同じく傷を負った両腕を露にすると、光秋は指示を出していく。

「それじゃあ北大路さん、お願いします」

「了解」

応じるや、北大路は腕と脚それぞれのそばに手を当て、両目を閉じて集中する。

「……怪我の殆どは弾が掠っただけで、出血が止まった今は落ち着いてる。でも、右脚に1発入ってる。太い血管の近くにあるから、慎重に取らないと余計酷くなるかも」

「なるほど。じゃあ綾、柏崎さん、準備を。それと……えつと……」

「涼子です。鷹ノ宮涼子」

「鷹ノ宮さん、止血お願いします」

「「はい」」

光秋の指示にそれぞれ応じると、綾は北大路と柏崎の頭に手を添え、止血役を引き継いだドレスの女性——鷹ノ宮はどこか荒かった呼吸を整え、両手をかざして双方の傷口、及び腕と脚の付け根辺りに力を掛ける。

「準備できたよ」

「それじゃあ、右脚のやつ……お願いしますー」

「「……了解」」

綾の報告に若干緊張を含んだ声で光秋が応じると、綾たち3人も硬い表情で返し、それぞれ一層意識を集中させる。

硬く目を閉じて弾の位置を把握する北大路、その頭に左手を置いた綾は薄っすら汗を浮かべつつ右手を置いた柏崎に情報を中継し、柏崎は両手をゆつくりと、非常にゆつくりと手前に引く動作をして、弾の通った跡に沿う形で弾を傷口へと引き寄せていく。

—頼む……！—

何か声を掛けたくなる衝動を覚えるが、今は余計なことは言わない方がいいと察し、口を結んだ光秋は知らぬ間に柏崎に祈る。

それを知ってか知らずか、柏崎は肌寒い気温にも関わらず大粒の汗が浮かぶ程に意識を集中させ、綾と北大路もより精度の高い情報を送ろうと先程以上に汗を浮かべる。

「……」

傍らの鷹ノ宮と柿崎が生唾を飲む中、永遠とも感じる時間の果てに、柏崎は傷口から弾を取り出す。

「はぁ………！」

赤く染まつた弾を見るや、柏崎は息を漏らしながら尻餅を着く。

「ご苦勞様。よくやってくれた！」

念力が消えて地面に落ちる弾の音を聞きながら、光秋は体の力も抜けた柏崎に労いの言葉を掛ける。

「後は然るべき所に運んで消毒なり包帯なりだな。ここですることはもうない。柿崎さん、とりあえず赤坂署に運んでくれ。後の指示はそつちで仰いで」

「わかりました！」

「じゃ……じゃあ、アタシが止血代わるよ……」

光秋の指示に柿崎が応じると、疲労困憊といった様子の柏崎が名乗り出る。

「大丈夫か？ 疲れてるみたいだけど」

「私がこのまま付いていきましようか？」

「ううん。アタシがやる」

不安そうに問う光秋と心配そうに申し出る鷹ノ宮に、柏崎は疲労を引つ込めて強く応じる。

「人間主任はアタシの主任なんだから……アタシがやらなきゃダメなんだよ」

「……わかった」

真つ直ぐに目を見て続ける柏崎に、光秋は若干の不安を残しながらも柏崎に任せるところに決める。

「鷹ノ宮さん、柏崎さんと代わってください」

「よろしいんですか？」

「お願いします」

「……わかりました」

光秋の指示に心配を拭い切れないながらも応じると、鷹ノ宮はかざしていた両手を下ろし、入れ違いに柏崎が両手をかざして止血を続ける。

「その………ありがとね。主任助けるの手伝ってくれて。それと………さつきはごめん

なさい」

「？」

先程攻撃しようとした件を思い出したのか、言い辛そうに礼を述べ、頭を下げる柏崎に、鷹ノ宮は意表を突かれながらも意識して微笑んで応じる。

「いいえ。人を助けるのは当然ですから」

「僕は君がちゃんと謝れたことが驚きだな」

「悪かったな！」

「無駄口はそれくらい。そろそろ行きますよ！」

光秋の茶化しに怒る柏崎、そんな一同を急かす様に、柿崎がやや焦りを含んだ声を上げる。

「ですね。とりあえず綾、法子さんに代わって」

「うん」

「法子さんも付いていつてあげてください。大人がいればなにかと事情説明しやすいだろうし」

「わかった」

「いいですか？じゃあ行きますよ！」

綾と交代した法子が光秋に応じると、柿崎は入間と柏崎、北大路、法子と共にこの場

から消える。

鷹ノ宮と二人きりになるや、光秋は顔を廻らせ、入間の応急処置に集中していたために意識の外になっていた周囲の状況を確認する。

ニコイチ上空には茶色い人型が変わらず滞空しているが、こちらと、敷地内に取り残されて立往生している少数の来賓たちに単眼を向けるだけで特に行動を起こす気配はない。

正門側に顔を向ければその上空にも1機浮かんでおり、これ見よがしに右手に持った銃をチラつかせている。それを警戒してか正門前で行われていた銃撃戦は停止し、警備たちは正門側に、黒い巨人と合流したNPはY字路の奥に後退して、双方がお互いとも上空の人型の様子を窺っている。

迎賓館の裏手からは爆発音らしき音が響いているが、館が壁になっていて詳細はわからない。

—戦闘はひとまず落ち着いたか。もつとも、一触即発ではあるが……とりあえず今は状況確認から膠着中であると判断するや、光秋はニコイチのリフトに歩み寄る。

「あ、あの……私まだ脚が……」

「あ、すみません」

弱々しい声で呼び止められて、光秋はリフトに伸ばし掛けていた手を止めて腰を着いたままの鷹ノ宮の許に歩み寄る。

—そうだ。この人も避難させないと。でも、この状況で何処に……仕方ない。これが無難か—「またちよつと失礼します」

「え？……ちよつ！—」

しばし思案して断りを入れるや、光秋は再び鷹ノ宮を抱え、驚く彼女をニコイチの右手の近くへ運ぶ。

「状況が落ち着くまで、コレの中に隠れててもらいます。この近くではコイツの中が一番安全でしょうから。ちよつと待っていてください」

鷹ノ宮を下ろすや光秋はリフトでコクピットへ上がり、ニコイチを再起動させて右手を寄せる。

「乗ってください。それとも、まだ脚ダメですか？」

「いい、いえ……これくらいなら」

操縦席を機外に出して直に問う光秋に、鷹ノ宮は這う様にして右手に乗り込む。

—本当は抱きかかえて掌に乗せてあげるべきなんだろうが、流石に上がったたり降りたりで手間が掛かるしな—

何度もニコイチを乗り降りするわけにはいかないとはいえ、気が利かないことに少々
の罪悪感を覚えつつ、鷹ノ宮が掌に乗ったのを確認するとそれをハッチの上に上げる。
掌をコクピットに寄せて緩く傾けると、滑り台の要領で鷹ノ宮が操縦席のそばに移
り、巻き込まれないのを確認すると機内に降りてハッチを閉める。

―さて、乗ったはいいいものの……次どうするか……―

不安定な均衡の上に保たれている現状、迂闊に行動を起こせば簡単に崩れてしまう。
その認識が、光秋に次の行動を決めかねさせる。

その時、

「！」

ニコイチの顔の真ん前にスーツ姿の男がテレポートしてきたのを見て、光秋は心臓を
跳ね上げる。

「あの人は……サン教ベースの時の……」

特徴的な黒い癬毛に、初めて会った時のことを思い出す。

と、

（やはり君も来たね、白い犬君。君も僕の晴れ舞台を楽しんでくれ）

言うや癬毛の男――藤原曰くの「物部」は、宙に浮かびながらゆつくりと後退してい
く。

光秋たちが人間の応急処置を行っていた頃、藤原三佐は突如現れた物部を凝視していた。

「物部！お前本当に物部か!？」

「そうですよ藤原さん。正真正銘の物部ものべとうま冬馬です。まさか藤原さんまでこの場にいるなんて、僕としては嬉しい誤算で——」

続く言葉を遮る様に振り下ろされた巨人の右拳を、物部は上方に念の壁を張って受け止める。

「まったく。再会の挨拶に水を差すなんて……これだからノーマルは」

不躰な者に幻滅する様に呟くや、巨人の拳がプレス機に掛けられたかの如く押し潰される。

直後にNPから銃撃の集中攻撃を受けるが、物部は足元に念の壁を張って全て弾く。背後の巨人も手を失った右腕を鈍器代わりに振り下ろすが、物部は頭上にも壁を張ってそれを止める。

「EJC。携帯用は範囲が狭いのが難点だが、この程度なら充分かな？」

「！」

涼しい顔で受け止めた巨人の右腕を見上げながら物部は呟き、それを聞いて藤原はその背に自分と同じトランク状の箱が背負われていることに気付く。

もつとも、

「ぬっー！」

それ以上の思考を働かせる暇を与えないかの様に、物部は巨人の右腕を肩の辺りまで爆散させ、藤原は念の壁を張って小田一尉たちを降りかかる破片から守る。

無論、破片はNPたちの上にも降り注ぎ、彼らが混乱している間に物部は木々の中のトラックに接近し、荷台の上に積んでいるEジヤマーの上に立つと右手をかざし、それを四方から掛けた念の圧力で押し潰す。

「超能力妨害装置、それとの同時運用を前提にした新兵器、いろいろと新しいオモチャを考え付くようだけど……」

言いながら、物部は右手をかざし、NPたちをトラックごと吹き飛ばす。

「所詮、君たちノーマルの努力なんてこの程度なんだよ」

横転した2台のトラックと、投げ出されて周囲に散乱したNPたちを冷めた目で見渡しながら、物部は上着のポケットに両手を入れて呟く。

と、腕を爆発させた衝撃で仰向けに倒れていた巨人のハッチが開き、頭から血を流した男が這い出てくる。

それを見るや、物部はテレポートでそのすぐ上に移動する。

「ひっ!？」

「残念だったね。折角の新兵器がすぐにオシヤカになって。でも、当然の結果だからね」
怯える男に柔らかな笑みを浮かべると、物部は右手をかざす。

刹那、

「！」

藤原が右拳を突き出して念の弾を放ち、物部はそれを木々の頂の高さまでテレポートしてかわす。

「なんのつもりです？ 藤原さん。久しぶりに会った後輩に手を上げるなんて」

「それはこっちの台詞だ。貴様、今その男を殺そうとしたな」

飄々と問う物部に、藤原は槍の如く鋭い視線を返す。

「だから何だっていうんです？ 彼はNP——僕や藤原さんのような超能力者の敵ですよ

？」

「……………お前は」

口周りだけの笑顔で淡々と応じる物部に、藤原は顔を伏せ、悲しみを含んだ小声を漏らす。

と、迎賓館の裏手に回っていた巨人が駆け付け、両手保持した銃を向ける。

「無駄なんだけどなあ。Eジャマーも切れてるっていうのに」

放たれる弾丸を念の壁で弾きながら、物部は呆れた顔で右手を巨人にかざす。

しかし念を放つ直前、上空に控えていた人型が機体正面に念壁を張りながら巨人に突進し、横倒しになった巨人の歪んだハッチに左手を引つ掛けてこじ開けると、胸部ハッチから顔を出した長い黒髪を後ろに結った男が念で巨人のパイロットの頭部に衝撃を与えて気絶させる。

『総裁、戯れが過ぎます。そろそろ』

「……そうだね。僕も少しはしやぎ過ぎた。長く留まると後で面倒だし、そろそろ本題といくかな」

拡声器越しの人型の声に応じると、物部は眼下の藤原を一見する。

「それでは藤原さん、見ていてくださいね。後輩の晴れ舞台を」

言うやテレポートでニコイチの許へ移動し、残された藤原は両手を握り締め、怒りと悲しみが無い交ぜになった表情を浮かべる。

「物部………」

空中浮遊をしながらニコイチから距離を取ると、物部はテーブルが倒れ、食器や食べ物が散乱した主庭の中央辺りに着地する。

（折角の晴れ舞台にコレはちよつと無粋だね。もう着ける必要も薄いし）

言いながら背負っていたトランク状の箱を外して念力で2メートル程離れた場所に置き、周囲の散乱物を退かしてスーツに乱れがないか確認する。

——……何しようてんだ？『晴れ舞台』？——

一連の言動の意味を理解できない光秋は、物部に警戒の視線を向けつつ首を傾げると、

(……よし)

身嗜みを整えた物部は迎賓館に背を向けると、何かに集中するかの様にしばし目をつむり、再び開けると同時に指を鳴らして迎賓館の中や敷地の外から多数のカメラやマイクといった撮影機材を、ある物はテレポートさせ、ある物は念力で引き寄せる。

——!?……報道陣が使ってたやつか？——

おそらくは光秋の想像通りなのだろう。カメラやマイクの何台かからはケーブルが伸びており、安全と思える辺りまで逃げたカメラマンたちが現状を収めようと物部に盗られる直前まで使われていたのがわかる。

一方、突然の一人記者会見という予想外の行動に腰が浮きそうになるものの、光秋は努めて状況を整理しようとする。

その間にも、物部は自らが念力で操る多数のカメラに向かって語り掛ける。

(御機嫌よう、お茶の間のみなさん。新年明けましておめでとう。僕は物部冬馬。現在ある団体の総裁を務めている高レベル超能力者だ。そして、今日はこの場を借りてあるお知らせをしに来た)

「……」

爽やかな笑顔を浮かべて淡々と、そして驚愕の発言をする物部を拡大映像越しに見て、光秋は知らぬ間に生唾を飲む。

（地球合衆国、及び全世界のノーマルに告げる。僕たちは『Zeus^{ゼウス} Children^{チルドレン}』。劣等種たるノーマルを排し、超能力者による新しい、そして素晴らしい世界を創る勇者たちだ！）

若干熱を帯びながらも静かに語る物部の後ろに、上空から下りてきた人型が着地する。

（現政府は、超能力者とノーマルの平等を謳いながらも、その実僕等超能力者に多大な制限を課している。そして超能力の積極的な利用を認めないばかりか、超能力者というだけで僕等の生命を脅かす者たちを野放しにしている。何処の州であろうと、そんな窮屈と恐怖を僕たちは強いられている。授かった「力」を自由に使うことができない、そんな世の中ではないのだろうか？）

——…それは、みんなが好き勝手に生きればそれこそ世の中メチャクチャになるから……そうならないようにルールを設けようって、そういうことじゃないのか？それに超能力者たちを脅かす者——NPにしたって、『野放し』になんてしてない！……手を焼いているのは認めるが……それに……この人も狭いな——

氣を抜けば吞まれそんな独特の雰囲気醸し出す物部の演説に抗おうと、光秋は心の中で反論を述べ、同時に巨人に乗ったNPに感じたのと同じ居心地の悪さを改めて覚える。

(いいわけがない！何故優れた能力を持つ僕たち超能力者がそんな縛りを受けなければならない！何故何の“力”も持たない劣等種たるノーマルに遠慮しなければならない！ならば、世界を変えよう！僕たちが神から授かったこの“力”で！ノーマルの蔓延る今の世界を正し、僕たち超能力者がのびのびと生きていける素晴らしい新世界を創り上げよう！志ある者は集え！美しき理想世界を築くための一翼となれ！僕等の“力”の象徴、この“ヘラクレス”——神の子供の下に！)

叫びながら右拳を突き上げる物部。その動きに合わせて銃を腰に懸架した後ろの人も右腕を上げ、上空に滞空する2機もそれぞれ腕を振り上げる。

「……」

その重々しい光景に、光秋は薄ら寒さを感じる。

と、物部は拡大映像越しにこちらを一見し、

(……そうだ)

新しいイタズラを思い付いた子供の様な無邪気な、しかし冷たい笑みを浮かべると、人型の左隣にNPの巨人を1機テレポートさせる。

（総裁!?何を?こんな予定は……）

人型のパイロットにも予想外のことだったのか、動揺した声が拡声器越しに問う。

（ちよつと余興を思い付いてね。コイツを決起の狼煙にする）

言いながら、物部は撮影機器を押して巨人の全体が映るくらいの所まで移動させ、糸で吊るされているかの様に手足を力なく垂らした巨人の胸部——開け放たれたコクピットの高さまで上昇する。

——NPの巨人?どうするつもり……待てよ!?今『狼煙にする』って!それに……—

物部の意図を察するや、光秋は巨人のコクピットに意識を集中させる。

予想通り仄かな温かさを——人の気配を感知する。

その間にも物部は巨人に向けて右手をかざし、ニコイチを介してその周囲に大型ミサイルの如き重圧感を覚える。

そして、

「やめろおおおおお!」

念の弾丸が放たれると同時に、Nクラフトを全開にしたニコイチは駆け出し、巨人を押し倒す様にして念の直撃を外させる。

人型が慌てて上昇するのを意識の隅に捉えつつ、巨人と共に倒れ込んだ光秋は背後に轟音を聞き、音のした方に顔を向けると、

「……………」

特徴的な青い屋根が吹き飛んだ迎賓館中央部分に息を呑む。

——なんて威力だ……飛び出さなかったらどうなったか……………」

目の前の惨状と、ニコイチの下で倒れている巨人——その中で失神しているパイロットのもう一つの可能性を想像して、背筋に強烈な悪寒が走る。

と、上の方に視線を感じ、顔を上げると、滞空した物部が笑みを浮かべてこちらを見下ろしている。

（やつぱり君は面白い奴だね。敵を庇うなんて……やつぱり藤原さんの部下だからかな？）

——……

やつぱりこの人、三佐のこと知ってる……？——

光秋が首を傾げる間にも、物部は周囲の人型を連れてテレポートでこの場から離脱し、正門側に残っていたNPも三方向に延びる道路それぞれに分散する様にして退却していく。

と、

「…………痛たたあ…………」

「あつ…………すみません！うっかりしてた！」

物部に圧倒されてすっかり意識の外に置いていた鷹ノ宮がモニター正面側に倒れて

いるのを見て、光秋は慌ててニコイチの upper body を水平にする。

シートベルトで座席に固定されている光秋はいいものの、座席前に腰を着いており、さらには突然の倒れ込みに何かに掴まる間もなかった鷹ノ宮はそのまま転がってしまったのだろう。

ニコイチの upper body が上がるにつれて、鷹ノ宮は床にゆつくりと滑り下り、完全に腰を落ち着けたのを確認した光秋は顔を寄せる。

「本当にすみません。ケガはありませんか？」

「あ、はい。ちよつとぶつかつたくらいで」

「いや、本当に失礼しました……」

背中を摩りながらも明るい笑顔を返してくれる鷹ノ宮に、光秋はますます申しわけない気持ちになり、思わず右手で頭を掻く。

と、

（光秋くーん！）

外音スピーカー越しに法子の声が響き、光秋はニコイチを振り返らせてモニター越しに顔を合わせる。

「はい？」

（指揮所から連絡。敷地内にNPやさっきの乱入集団の残りがいないか確認しろって。

ニコイチは空から全体を見て探せつていうから、私も乗せて」
「了解です」——……………あ、そういやコッチも忘れてた——

応じつつ、着け忘れていた通信機を左耳に着け、操縦席を外に出しながら右手を法子の許に伸ばしてハッチの上に上げる。

と、法子は座席のそばに腰を着いている鷹ノ宮に気付く。

「あ、さっきの……………ていうか、貴女は……………!？」

「……………どうかしました？」

鷹ノ宮を見て徐々に狼狽える法子に、光秋は理由がわからず訊いてみる。

しかし答えを聞く前に、下から新たな声が掛かる。

「コウちゃん!? 何で白い犬に……………それに涼子様まで……………!？」

「! 日高さん!」——不味い……………

所々薄汚れたスーツ姿にカメラを持った日高が信じられないものを見る様な顔でこちらを見上げ、光秋はニコイチに乗っているところを一般人の知り合いに見られたことに機密上の心配をする。

「あ……………これにはちよつと理由がありまして……………あ、撮影はやめてくださいね」

すぐに上手い言い訳など思い付かず、とりあえずカメラを警戒して注意を飛ばす。

「それはいいんだけど……………何で涼子様までそんなところに……………」

「リョウコ様?—」……鷹ノ宮さんのことですか?」

尚も動揺が治まらない日高に、光秋は鷹ノ宮を見やりながら訊き返す。先程名前は聞いたものの、入間の件で頭が一杯だったためにうろ覚えなのだ。

と、

「いや、あのね光秋くん。私も無我夢中でど忘れしてたんだけど……」

未だに狼狽を浮かべた法子が、自らを落ち着かせながらゆつくりと語り掛ける。

「この人——じゃない、この御方、鷹ノ宮涼子様……所謂“さる御方”の御一人なんだけど……」

「え………?」

言われたことがすぐには解らず、光秋はしばし呆然とし、改めて鷹ノ宮を見やる。

「……」

当の本人は曇った顔を俯けるが、そんな些細な変化に気を回せる余裕などなく、

「ええええ!!」

一瞬後、“さる御方”の意味を理解するや、操縦席から飛び上がる勢いで絶叫する。

「“さる御方”って………そうとは知らず、気安い態度の数々、失礼いたしましたっ
!」

裏手で軽々しく話し掛けたこと、何度か抱きかかえて運んだことを思い出し、なぜか

敬礼して謝罪する。

「私の方も緊急時とはいえ、いろいろと至らぬところをお見せしました……」

光秋に続く形で、心なしか小さくなった法子が深々と頭を下げる。

「いえ、気にしないでください。それこそ緊急事態でしたし、私はそういうことを気にしない方なので」

「はあ……」

言葉通り気にしない様子で応じる鷹ノ宮——涼子に、光秋は敬礼の手を下ろしながら短く応じる。本心か、こちらに気を遣っているのかはわからないが、本人が気にしていないと言う以上、これ以上謝っても仕方がない。

と、光秋の脳裏にあることが浮かび、周囲に広がった微妙な雰囲気を変えようと迷わず口に出す。

「……さる御方——平たく言えばつまりお姫様ですよね……あれが本当の『お姫様だっこ』……なんて——痛い！痛いです綾さん！」

しようもない発言をした——というよりもヤキモチから法子と交代した綾に念力で左耳を引つ張られ、下の日高には頭を抱えて呆れられる。

が、一方で、

「ふっ……ふっ……面白いと言えますね」

涼子だけは手で口を隠して笑っている。

「……ま、これでもいいか」

それだけで、光秋はどこか救われた気持ちになる。

その時、倒れている巨人の調査に来た警察とESOの合同班の1人に声を掛けられる。

「おい！MB—00はまだ動かんのか。まだ仕事は終わってないぞ！」

「！すみません。大至急」

応じるや光秋は気持ちを切り替え、ニコイチの右手をハッチの上に持つてくると涼子を見やる。

「もう降りても大丈夫でしょう。というか降りた方がいいかもしれません。その辺の警備に訊いて、安全な場所に避難してください」

「……わかりました」

どこか名残惜しい顔をしつつも、涼子は首肯する。

「ただ、一つだけお願いが」

「何ですか？」

「……あなたの名前を教えてくださいませんか？」

「え？……僕の名前ですか？」

若干迷った様子を見せつつも、最後は目を見て頼んできた涼子に、光秋は意表を突かれると同時に困ってしまう。

「いや、名前は……事情があつて……」

「他人ひとには名乗らせておいて、自分は名乗らないというのは流石に失礼では？」

「うっ……」

涼子の指摘に、茶を濁そうとしていた光秋は言葉に詰まってしまう。加えて、向けられる眼差しは偽名や誤魔化しを受け付けなないと語っている。

「……………しょうがないか——」加藤光秋といいます……………くれぐれもご内密に」

「承知しています。光秋さん！」

根負けして教えながらも念を押す光秋に、涼子はあくまでも嬉しそうに応えながら掌に移る。

「またお会いしましょう。いつかまた」

「はい。ご縁があれば」

掌の上に屈んだ涼子に応じると、光秋はそれをゆつくりと地面に下ろす。

涼子が掌から降りたのを確認すると、光秋は傍らの日高に呼び掛ける。

「日高さんも一緒に行つてください。まだ危ないかもしれないで」

「いや、折角だから少し写真撮っておきたいんだけど。流石にもうパーティーどころ

じゃないのはわかってるけど、記者根性っていうか……」

「ダメですよ」

「一般人はこちらに」

カメラを示して軽く食い下がる日高を押しやる様に、一部始終を聞いていたらしいESO職員と警官が駆け寄り、不満そうな顔の日高と満足気な涼子を誘導していく。

その様子を横目で見つつ、光秋は機内に戻るとニコイチを立ち上げらせ、指示に従って上昇して敷地内一帯を俯瞰する。

下界ではもともといた警備組と、物部の演説が終わった辺りからやってきた応援組双方によって、森の中で横転した巨人やトラックの運び出し、NPメンバーの連行、負傷者の救援などが行われており、未だ興奮冷めやらぬといった印象を抱く。

もともと、再度の戦闘の気配はないことに安心したのか、それまでどこか控えめだった綾が、枷が取れた様に思いつき頬を膨らませて不機嫌さを顕わにする。

「光秋、やつぱりあの人にデレデレしてた？」

「だからそんなことないって……」

「でも、お姫様だっこって……」

「それも仕方ないだろう。腰抜かして動けなかったんだし、緊急対処だよ……それでも、“さる御方”って聞いた時は流石にビビったな……」——あ、でも……露骨に驚いたのは

失礼だったかな？鷹ノ宮さ——涼子様も一瞬間が曇ったような……—

三角の目で睨んでくる綾に应じつつ、光秋は涼子のことを知った際の態度を思い出して少し悔やむ。

「またさっきの人のこと考えてる！」

「だからお前さんが氣い揉むようなことじゃないって……それはそうと、さっきはごめん。辛い仕事させて」

唾を飛ばす勢いの綾に应じつつ、光秋は涼子の件とはまた違う申し訳なさを浮かべて頭を下げる。

「さっきさ？」

「入間主任の弾取りの時、テレパシーで中継役を頼んだだろう。お前さんああいう大ケガ見るの苦手なのに、非常時とはいえ無理させちゃって……ごめん」

「……いいよ」

再び頭を下げる光秋に、綾は短く应じる。

「ああいうの苦手なのは本当だよ。でも……“背中合わせ”だから」

「！」

続く綾の口から出てきた言葉——数日前に自分が言った言葉に、光秋は不意を突かれる。

「アキだつて怖いのを我慢して、みんなを守るために頑張つてゐる。だからあたしも、自分のできることを精一杯やりたいから。そうやって、アキの背中をあたしの背中で支えたいから」

「みんなのためっていうか……僕は結局仕事だからやつてただけなんだが……ただ、我慢してるのは本当だね。根が臆病だから……でも、そんなふうに言われれば少しは怖いのもマシになる……かな？」

我ながら単純な思考に、光秋は自分が可笑しくなつて頬を緩める。

「ありがとう……と、人間主任で思い出したけど……法子さん、あの後どうなりました？」

気持ちが悪になつた礼を綾に述べつつ、先程の会話で思い出したことを法子に問う。

「赤坂署で包帯してもらつて、その後東京本部の医療棟にレポートで運んでもらつたから、ひとまず大丈夫みたい」

「ならよかった」

俯いて綾と交代した法子の報告に、光秋はほつとする。

「……私からも訊きたいんだけど、赤坂署に運ぶ時、涼子様の申し出を断つてサイコキノの女の子に止血役を頼んだよね。なんで余力があつた涼子様じゃなくて、疲れ始めてたあの子に任せたの？……さる御方に——厳密には涼子様は親戚筋みたいだけ——任

せるのはいけないと思ったから？」

「いえ、あの時はそんなこと全然わかりませんでしたから。一般人をこれ以上巻き込むのは不味いとは思ってましたけど……ただ、それ以上に柏崎さん——あのサイコキノの女の子の気持ちに応えるべきと思ったから、ですかね」

「どういうこと？」

「人間主任を助けるのは自分だって、そう思ってるように感じたんです。だから、ここは任せた方がいいって……もちろん今考えると、人の命がかかった場面では軽率な判断だったかもしれませんが……」

法子の問いに応じながら、光秋はその時のことを振り返って少し反省する。

「……確かにね。判断が直感的過ぎたかも」

「はい……」

「でも結果としてなんとかなったんだし、それでよかったのかもね」

「最終的にはそうなりますね……あとはまあ、保険と言ったら変かもしれないけど……綾もいましたから。いざとなれば代わってくれるかなって……て、今度は甘えかな？」

付け加えると光秋は少し恥ずかしくなり、笑みを浮かべる法子の視線から逃れる様に眼下を見下ろす。

特に不審な動きは見当たらず、事後処理作業そのものは順調に進んでいる。

しかし、屋根が吹き飛んだ迎賓館を筆頭に、所々木々が倒れた森、巨人や人型が撃つた弾で抉れた地面、担がれる様にして赤坂署に運ばれる負傷者——それらの光景が、光秋の中にある二文字を浮かべさせる。

——『惨敗』、か……『警護』という観点から見れば、言い訳はできないな。職務を満足に果たせず、少なくとも2つのグループの勝手を許した……『やりたいこと』が決まっただけからの最初の仕事は、失敗……

と、気持ち沈みそうになる中、綾や法子との会話の所為だろうか、人間や涼子、柏崎の顔が浮かんでくる。

——……いや、柏崎さんや人間主任を助けただけでも、よしとするか——

そう思うことで、僅かだが気持ちが軽くなる。自己満足であることは百も承知だが。

——それでも、何もできなかったわけじゃないんだ……

しかし一方で、

——……ただ、涼子様と日高さん——一般人に顔と名前を見られたのは不味かったよな……大丈夫だろうか？——

機密漏洩等の責任問題に触れないか、若干自己保身を心配する光秋だった。そんな悩める使い手を乗せて、ニコイチは下界の作業を見守り続ける。

68 藤原の知ること

1月4日火曜日午前8時半。

新年祝賀パーティーの警護——もとい、祝賀パーティー襲撃事件から戻った翌日。

京都支部敷地内に積もった雪の除雪を命じられた光秋は、竹田二尉、法子と共にコートを着てスコップ片手に駐車場一面に薄っすらと積もった雪を端に避けていく。

「たくよー。戻って早々にこれかよー……」

「仕方ないですよ。雪積もったままだと不便だし。それにこれくらい、どうってことないでしょ」

傍らの竹田の愚痴に応じつつ、光秋はスコップで掬った雪を駐車場の端目掛けて放り投げる。

降雪地帯新潟の出身であり、つい先日岩手の豪雪風景を見てきた光秋にとって、菓子の上に塗した粉砂糖程度の厚さしかない積雪など苦にならず、かえっていい運動になる。

寧ろ関西地方では雪が降らないと勝手に思っていた分、白が占める割合が多くなった目の前の光景に意表を突かれる。

「僕としては、京都にも雪が降るってことが意外です。昨日の内に降ったんですかね？」
「2日の夜から疎らに降ってたっていうけどね」

素直な感想を述べる光秋に、法子がニュースで聴いたことを思い出しながら手を休めずに応じる。

「で？藤原三佐と小田一尉は暖房の効いた待機室でデスクワークってんだろ？いいよなあ」

「といつても、昨日の件の報告書作りでしょ？二尉代われます？」

「無理だな」

自分の愚痴に返してきた光秋に即答すると、竹田はそれ以上余計なことを言わずに除雪作業を続ける。

光秋や法子も、黙って傍らに雪を放っていく。

光秋らをはじめとする一部職員たちによる除雪作業は始まったばかりであり、周囲を染める雪を皆黙々と除いていく。

午後0時。

午前中一杯かけて敷地内の除雪を終えた光秋ら3人は、作業に使った備品を返すと、その足で昼食を摂りに食堂へ向かう。

「へー……ようやく終わったぜ……」

「これで本来の仕事ができますね」

「……お前は元気だねえ……」

「光秋くんらしいですけどね。竹田二尉もですけど」

思い思いの会話を交わしながら3人はそれぞれ注文を済ませ、8割程埋まっている食堂内で空いている席を探す。

と、

「……あ。藤原三佐、小田一尉」

光秋が2人が向かい合って座っている席を見付け、3人はその許へ向かう。

「おお。3人共ご苦労だったな」

「どうも」

藤原の労いに会釈で応じつつ、光秋は席に着いてトレイの上のトンカツ定食に箸を付ける。

「……………」

食事を始めて少しして、光秋は自分の左前——対角線上に座って焼き鮭定食を食べている藤原を見やり、昨日から気になっていたことを思い出す。

—そういえば、あの物部つて人と三佐、知り合いみたいなこと言ってたな。ベース制庄の時は結局訊かなかったが……………でも、今後のことを考えると——

初めて物部と会った際の藤原の狼狽を思い出して束の間迷うものの、新たな社会的脅威に対する情報を得ておきたいという気持ちと、知り合いの過去に対する興味から、意を決して訊いてみる。

「……あの、藤原三佐」

「ん？」

「昨日現れたあの物部つて人、いったい何者なんです？」

瞬間、藤原は持っていたみそ汁のお椀を落としそうになる。

「本当は昨日から気になっていたので、事後処理とか今朝の雪掻きとかで訊けなかったもので……やっぱ、教えてもらえませんか？」

「……」

顔を悪くさせたことに若干の罪悪感を覚えながらも付け加える光秋に、藤原は視線を逸らす。

しかし、

「そうつすよ三佐。この間も結局教えてくれなかったし、気になるじゃないつすか。あのメチャクチャ強い奴何者なんすか？」

「三佐を信用してないわけじゃありませんが……新しい反社会的集団——本人たち曰くの『Zeus Children』、そのリーダーらしい人間と顔見知りっていうの

は、流石に具合悪いですよ？」

「……それとも、どうしても私たちに言えないことなんですか？」

光秋の一言が呼び水になったのか、竹田、小田、法子もそれぞれ明後日の方を向く藤原を見ながら問う。

「……………やっぱり、言えませんか？」

それでも沈黙を続ける藤原に、光秋は不安な表情を浮かべる。

それから少しして、顔を前に向け直した藤原は口を重そうに開く。

「……………わかった。儂の知っていることは教えよう。ただし、食ってからだ。食事の後、待機室に集合しろ。それと、ある者にも確認をとっておきたい」

——ある者……………？——「わかりました」

未だ迷っている様子を見せながらも応えてくれた藤原に返すと、光秋はそれ以上何も言わず、小田たちと共に食事に専念する。

昼食を終えた藤原隊一行は、そのまま隊の待機室へ移動する。

光秋たちがテーブルを囲む様に席に着くと、藤原は上着から出した携帯電話を右耳に当てる。

「……………ああ、富野か。今少しいいか？」

——富野って……………まさか富野大佐!? 上官相手にそんな口の利き方……………いや、でも……………——

普段の藤原からは考えられない態度に一瞬驚愕するものの、すぐに光秋は馴染むものを感じる。

—親しい感じ……そう、こっちの方が普段通りというか……—

その間にも、藤原は電話越しの会話を続ける。

「昨日の件は知っているな？……そうだ。実は加藤たちからあいつについて教えて欲しいと頼まれてな……ああ。あくまでも儂が知っていることだけだが、構わんか？………悪いな」

やや長い沈黙の後に応じると、藤原は電話を仕舞い、一同を見回す。

「よし。準備は整った。早速話すとするか」

「その前に三佐、なんで富野大佐に電話したんすか？」

「大佐もあいつの——物部の知り合いだからだ。寧ろ付き合いは儂より長いだろう。大佐のことも話すかもしれないから、事前に連絡したんだ」

竹田の問いに応じると、藤原は少し考える。

「……ちようどいい。まずは物部の過去から話そう。といっても、儂も本人や大佐から聞いたのだが……もともとあいつは高レベル超能力者で、幼い頃から日ESOの前身機関で特エスをしていたらしい。その同期が富野大佐だ」

——……そういえば、大佐も特エスだったんだっけ。確か横尾中尉と純さんのお父さん

が主任だったんだよな――

藤原の話を受けて、光秋は陸・空軍との合同演習の際に横尾姉弟と交わした会話を思い出す。

「やがて整理戦争が激しさを増し、2人も各国の高レベル特エスの例に漏れず国連軍に招集された。儂が2人と会ったのはその頃だな。自衛隊から参加してな。当時は先輩として2人の面倒を見ていた」

――……なるほど。さっきの親しげな口はそういうことか。僕にとっての小田一尉やタツカー中尉みたいなもんか――

思いつつ、光秋は先程の藤原の態度に納得する。

「当時の2人の活躍は目覚ましくてな。富野は『炎の貴公子』、物部は『微笑みの蹂躪者』の異名を取る程だった」

「……なんか、加藤の『白い犬』が霞む名前っすね」

「僕のことはいいでしょ……」

知らぬ間に過去を懐かしむ顔で語る藤原に、竹田は率直な感想を述べ、同じことを考えていた光秋は自嘲気味に返す。

「もつとも、儂は途中で本国に戻されてな。その後の2人がどうしていたかは知らん。ただ、物部についてはMIAと聞いていたから、秋田であいつと再会した時は、正直自

分の目が信じられなかった……」

「MIA?」

『戦闘中行方不明』の略だ。戦闘後の所在や生死がはっきりしない者に対して使われる……状況によつては事実上の戦死扱いだな」

聞きなれない単語に首を傾げる光秋に、小田が掻い摘んで説明してくれる。

「……つまり、死んだかもしれないと思つてた人が10年以上経つていきなり現れた、と?」——確かにこれはびつくりするだろうな——

未だに狐につままれた様な顔の藤原を見て、光秋はその心境を察する。

「いや、あいつのことだから簡単には死なないだろうとは思つていたがな……まさかあんな形で出てくるとは……」

若干訂正を入れつつ、藤原は喜んでいいのか悔やんでいいのか迷つた表情を浮かべる。

「……いかな。話を戻そう。今説明したように、物部は特エスとしても、超能力兵士としても優秀な奴だった。『力ある超能力者は、弱者たるノーマルを守らなければならぬ』。よくそんなことを言つていた」

——それつて……——「それだけ聞くと、昨日の人と同一人物の話とは思えませんね。」「力」ある者の美学を語つてた人が、昨日は守るべきとしていた人たちを貶していた……

ただ、超能力者至上主義とでもいうのかな。ノーマルを下に見ている……ノーマルというだけで弱いと決めつけているのは共通してますね」

気を取り直した藤原の説明に、光秋は襲撃事件の際の物部の演説を思い出しながら感じたままを述べる。

「加藤の言う通りだな。何故昨日のようなことになってしまったか……」

言いながら、藤原は悲しそうな顔で天井を仰ぎ見る。

「……儂が教えられるのはこのくらいだな。儂が引き上げて以降のあいつの足取りは知らん。富野なら知っているかもしれないが……とにかくこんなところだ」

「わかりました。ありがとうございます」

知っていることを語り終えた藤原に、光秋は頭を下げる。

「ただ三佐、最後に一つだけ確認させてください」

「何だ？」

探る様な視線を向ける小田に、藤原は目を合わせて問う。

「今後、あの物部という男、そして彼が率いる『Zeus Children』と対峙することになった場合、三佐はどうされますか？」

「……………」

光秋、法子、竹田の視線が集まる中、藤原は静かに応じる。

「今の儂は、ESO実戦部隊の隊員だ。嘗ての後輩であろうと戦友であろうと、その仲間たちであろうと、世を乱し、法を犯し、人に危害を加えるというのなら然るべき対応をとる。今までと一緒にだ。その点に関しては信じてくれていい」

「それなら、もう言うことはありません」

短く返すと、小田は深く頭を下げる。

「……さて、話は済んだ。そろそろ仕事に戻るぞ。加藤、アリーナに移動だ」

「はい」

ペキパキと指示を飛ばしながら藤原は立ち上がり、光秋はその背中を追って部屋を出る。

——……また、あんな人たちと戦うことに……当然か。NPはもともとだし、『Zeus Children』——ZCについては事実上の宣戦布告をしてるんだ。寧ろこれからいろいろと……いや、そういうことに備えるために、普段から鍛錬しておくんだ。それこそ、今までと一緒にだ！——

新たな勢力の登場に不安になりそうな気持ちを直すと、光秋はこれから始まる訓練に集中する。

転属編

69 転属命令

1月5日水曜日午前10時。

藤原三佐との格闘訓練の小休止に入った光秋は、運動棟の屋内アリーナの隅に腰を下ろす。

緊張が抜けると、藤原の攻撃を避け損ねた痛みが所々から響いてくる。

「痛てて……なかなかできませんね。『目を見る』っていうの」

「それでも、最初よりはいくらか儼の攻撃に対処できるようになってきた。着実に進歩はしているのだから、あとは根気よく続けていくだけだ」

「……結局、そうですよね」

左隣に座る藤原の言うことに同意しつつ、光秋は思う様に成果が出せない焦りを抑える。

その時、藤原の携帯電話が振動する。

「小田か。なんだ？……本部から？わかった。すぐに行く」

電話越しに応じつつ、藤原は立ち上がったて光秋を見る。

「東京本部から急な連絡が入ったそうなので、ちょっと行ってくる。その間は自主練だ」
「わかりました」

返事を聞くや藤原は床に置いてあったコートを持って駆け出し、広いアリーナに光秋一人が残される。

—急な連絡ってなんだろうな？本部からって言ってたし……まあいい。もうちょっと休んだら、基本動作の練習しよ—

束の間浮かんだ好奇心を隅に押しやり、2分程休むと、心の中で言った通り突きや蹴りなどの基本動作の練習を始める。

しかし5分程して、上着に入れている携帯電話が振動していることに気付いて画面を見る。

—藤原三佐……？—「はい？」

表示されている名前に首を傾げつつ、光秋は電話を左耳に当てる。

（加藤か。すまんが待機室まで来てくれ。先程の連絡はお前に関することだ）

「僕に？……了解。すぐに向かいます」——……本部からの連絡って言ってたよな。僕何かしたかな？—

現状への心当たりがないことに不安を覚えながらも、床から拾ったコートを羽織りながら駆け足でアリーナを出ていく。

運動棟を出てグラウンドを駆け、本舎裏口から入って最寄りのエレベーターに乗り込む。

若干上がった息をエレベーター内で整えると地下1階に着き、光秋は速足で待機室へ向かう。

「お待たせしました」

言いながら入室すると、自分以外の藤原隊メンバーがテーブルを囲んで座っている。

「ウム。まずはこれを見てくれ」

言いながら藤原はA4程の茶封筒を差し出し、光秋はドア側のパイプイスに腰を下ろしながらそれを受け取る。

「先程電話での連絡と同時に、本部所属の特エスがテレポートで直送してきたものだ」「テレポートで直送……ですか」——余程急ぎなのか？——

藤原の説明にますます首を傾げそうになりながら、光秋は封を解いて入っている書類を出す。

一通り書類を読み通すと、書かれていることに我が目を疑う。

「本部への転属命令!?!……ですか?」

予想外の事態に心臓を跳ね上げ、目を丸くして辺りを見合わすが、小田たちも現状についていけない困り顔を返すだけだ。

啞然としながら再び書類に目を落とすと、さらに意外な一文が飛び込んてくる。

「転属先は……特エスの主任!?」——人間主任の後任つて……柏崎さんたちの隊か?——

それを読んで先日の光景——涼子を庇つて撃たれる人間と、彼女を助けるために協力した3人の少女——が思い浮かぶが、混乱の度合いはますます酷くなる。

「……………僕は一般部隊の一隊員に過ぎないはずですが……そりやあ、ニコイチの件で“タダの隊員” ってわけでもないですが……………三佐、この命令間違いつてことは……………」

戸惑いながらも一抹の希望を込めて問うが、

「いや、それを持つてきた特エスも、届け先を念入りに確認していた。電話の内容とも合致するしな。間違いなくお前に宛てた命令だ」

「……………やっぱり」

藤原にあつさりと否定され、光秋はいよいよ目の前の現実を受け入れる。

「上はいつたい何を考えてるんだ……………」

嘆息混じりの呟きが、その現実に対するせめてもの反抗だった。

翌日から、光秋は仕事の合間を縫つて引越しの準備をすることになる。

仕事から帰つてくるやESOが手配した引越し業者の段ボール束がドアの横に置かれており、それを部屋に運び込んで3個程箱にするや、本や小物などのすぐに詰めて

もいい物を入れていく。

―出発は17日――再来週の月曜日……………東京に行ったら行ったで主任研修か……………大丈夫かな……………?―「まさか、こんなことになるなんてなあ……………」

命令書に同封されていた日程と、秋田山中の基地で柏崎たちに初めて会った時のことを思い出しながら、唐突に決まった先のことへの不安を抱えつつ荷造りを進めていく。

1月7日金曜日午後0時10分。

午前中の勤務を終えた光秋は、法子と共に食堂で昼食を摂る。

塩ラーメンのさっぱりした味に舌を楽しませていると、向かい合って同じ物を食べている法子が声を掛けてくる。

「どう。引越しの準備は?明日休みだし、私にか手伝おうか」

「大丈夫です。用意しなきゃいけないのは殆ど小物で、大きな家具なんかは当日業者の人が直接積んでくれるし……………あと、一応男の部屋ですから……………」―引越掻き回した後を見られるのは、ねえ……………

法子の申し出を丁重に断りながら、光秋は段ボール箱と詰めかけの荷物で散らかっている自室を思い出して少し恥ずかしくなる。

「そういう時は『お願いします』でしょー。気が利かないなー」

「気が利くって言いますか?」

口を尖らせて不満を顕わにする法子に、光秋は言葉の使い方に疑問を覚える。

「とにかく、手伝いはいいですよ。ひっちゃかめっちゃかの部屋なんて見せたくないし」「そんなの別にいいでしょー……………行っちゃたら、しばらく会えないんだし」

「！」

不満と入れ替わる様に寂しそうな顔を浮かべる法子を見て、光秋はようやくその気持ち察する。

「…………そんな今生の別れみたいな顔しなくても…………書類によれば、着任期間は入間主任がケガから回復されるまでで、それが済んだらまたこつちに戻ってこられるんですし」「その入間主任が回復される時機がはつきりしないんですよ」

「一応、主任への職務復帰可能まで、5カ月の見通しだそうです…………」

ますます表情を曇らせる法子——そしておそらく綾も——に居た堪れなくなった光秋は、湿っぽい雰囲気から逃れる様に音を立ててラーメンをすすする。

と、

「すまんが、隣いいか？」

「…………大河原主任。どうぞ。法子さんもいいですよね？」

「うん」

白衣姿にトレイを持った大河原に声を掛けられ、光秋は法子の了解を得て左隣の椅子

を勧める。

「悪いな。どこも混んでて」

「昼時ですからね」

言いながら腰を下ろす大河原に、光秋は7割近く埋まっている食堂を俯瞰しながら返す。

トレーをテーブルに置くと、大河原はそこに載っている焼き鮭定食に箸を着ける。

「そういえば竹田二尉から聞いたんだが、加藤二曹、東京に転属になるそうだな」

「ええ」

食べながらの大河原の問いに、光秋はラーメンをすすりながら答える。

「いつからだ？」

「京都を立つのは17日です。行ってから向こうで諸々の研修して、実際に着任するのは3月だって」

「1カ月半の研修か。大変そうだな」

大河原が思ったことを述べると、法子がさつき浮かんだ疑問を訊いてくる。

「ところで、主任今の話竹田二尉から聞いたって言いましてけど、なにかあったんですか？ゴレタンのこととか？」

「いや、昨日ちよつとな。パーティー襲撃事件で使われたNPとZCの人型メカについ

て知らないかと訊かれて」

「！」

大河原の返答を聞いて、光秋はそのことを今まで失念していた自分にハツとする。

—そういうえば、それもあの事件での衝撃の1つだったな。物部さんや転属の件ですっかり忘れてた……それを言ったら、サン教のメカの方も大河原主任に言われるまで忘れてたんだよな。主に物部さんのことで……—

自分に若干呆れている間にも、大河原は話を続ける。

「NPの方については、回収した残骸を調べたところ、外装はかなり変更されているが中身はほぼゴーレムだった。逮捕したメンバーの証言と葵社への調査から、他社が技術盗用して制作した線が濃厚と推測されている」

「……それって、この間のサン教の時と一緒にや？」

「だな。あるいはあのアポロンとかいう機体が、今回のNPのメガボディ——メンバー曰く『フラガラッハ』のテストの様なものだったのかもしれない」

光秋の感想に応じると、大河原はみそ汁で口を湿らせてさらに続ける。

「ZCの方については、実機が確保できなかったから映像と証言からの推測になるのだから……ゴーレムやフラガラッハと比べると軽い造りになっていると考えられる。超能力、特に念力を併用して使用することを前提にして、操縦者の超能力的負担を軽減す

るためにわざと軽くしてあるのだろうか。現場では大した推力もなく浮かんでいたのがその証拠だ……もつとも、外から得られた情報からの推測だからな。実機が手に入ればまた何か解るかもしれないが……」

「なるほど……ん？でも、超能力なんて使える人が、あんな大きな機械に乗る意味って……」

一連の説明を聞いて、光秋の中に疑問が生じる。

「そうでもないぞ。俺は話に聞いただけなんだが、三戦危機の時は超能力を攻撃の補助に使うケースも多々あったそうさ。念力で飛んで上から小銃をばら撒いたり、壁の展開に専念して即席のバリケードになったりといった具合にな。超能力はそれこそ十人十色だから、中には藤原三佐の様に直接攻撃するより、そういった補助的な使い方が向いている奴もいるんだろう。あのメカ——声明にあった『ヘラクレス』もその延長として捉えられているのだろうな。あくまで俺の推測だが」

「そんな発想もあるんですね？」——……いや、でも、考えられることか。超能力者は能力しか使っちゃいけないなんてルールはないんだし、普通の武器と合わせて使えば戦術の幅も広がるってことか？——

大河原の説明に盲点を突かれた様な気持ちを抱き、光秋は自分なりに少し考えてみる。

「そういえば、この間のパーティー襲撃事件の時、中継車にZCのメンバーが乗り込んできたって」

「ああ」

法子に言われて、光秋はその日のニュースや後日の報告で聞いたことを思い出す。

目撃者の証言によると、パーティー取材のために迎賓館近くに停まっていた数台の中継車の周囲に大勢の人がレポートで現れ、車内に乗り込んでくるや作業の続行を命じたらしい。この時ZCの何人かは念力で周囲の小物を壊して威嚇し、別の何人かは手に持った拳銃を突き付けてきたので、いずれも身の危険を感じた報道スタッフたちは言う通りにしたそうだ。

「考えてみれば、これも今主任が言ったようなパターンかもしれませんね。テレポートで戦闘員を現地に送って、直接攻撃できるサイキノはそのまま念力で、そうでない能力者は武器でつてことで」

「そういうことだろうな。ただ、NPのフラガラツハも侮れんぞ。確かに10メートルの巨人など、その気になれば触れずに人を殺せるような連中の前ではいいだろう。だが、Eジャマーと併用することで歩く凶器に代わる。無論戦い方にもよるのだろうが……いずれにしろ、ゴーレムの正式化を急がんと。この間言ったように、俺は俺のやり方でやるまでだからな」

「主任……」

最後の方は光秋に向かつて齒を見せると、大河原はほぐした鮭を口に運ぶ。

「今のなんの話？」

「ん？……この間ちよつと」

法子の問いに手短に応じると、光秋はどんぶりを持ってスープを飲む。

食後の片づけ等を済ませると、光秋と法子は並んで待機室へ向かう。

「……にしても、竹田二尉が自分から事件の事後調査に興味持つなんてね」

「事件というより、新しく出たロボットに興味持ったんだと思いますよ。二尉あいうの好きだし」

「言えてるかも」

そんなやり取りを交わしながら歩いていると、不意に法子が足を止める。

「……やっぱり、明日行っちゃダメかな？」

「……」

再び、そして先程よりも真剣な様子でかけられた問いに、光秋は返事に困つてしまう。

「……確かに、いつ京都に戻つてこられるか判らない以上、時間は共有しておいた方がいいかもしれない。ただ……あの散らかりっぷりを見られるのは………ええい！

土下座までしておいて今更恥も何もないか！——

羞恥心と欲求との葛藤の末に決断を下すと、光秋は法子の顔を見据える。

「わかりました。土曜日にでもお願いします。その代わり、部屋見ても驚かないでくださいよ」

「わかつてるよ……ありがと!」

小さく礼を告げるや、法子は心なしか軽い足取りで移動を再開し、光秋も未だに若干の不安を浮かべながらそれに続く。

1月8日土曜日午前9時。

無造作に置かれていた段ボール箱を部屋の端に退け、引つ越し間際という慌ただしいことこの上ない中で最低限の片付けを終えた直後、光秋は玄関の呼び鈴の音を聞く。

「来たな」

相手を察しつつ白いワイシャツに黒いジーンズの身嗜みをさつと確認し、覗き窓越し外を確認すると、鍵を解いてドアを開ける。

「どうぞ」

「おじゃまします」

言いながら青いコートを羽織った法子を招き入れて鍵を掛け直すと、後を追って居間へ向かう。

「一応エアコン点けてますけど、コタツ出しましょうか?」

「いいよ。手伝いに来たんだから気なんか遣わなくて。それより、私はなにをしたらいい？」

室温を気にする光秋に応じつつ、法子はコートを脱いで部屋の隅に退けてある椅子の背もたれに掛ける。薄黄色のセーターに青いズボンという服装が露わになり、髪は誕生日に送った赤フリルのシユシユで束ねている。

「なにをといつてもなあ……………」

腕を組んで室内を見回すものの、これといつてやつて欲しいことがない光秋は返事に困ってしまう。

——本や小物は粗方片付いたし、それ以外は当日直接運んでもらえるから手を付ける必要はない。あとは……………——「あつ」

悩みながら顔を廻らせていると、不意に台所に備え付けられている棚が目に入る。

「そうだ。食器がまだだったな……………あと一週間くらいなら、自炊ももうしないだろうし……………じゃあ、これ詰めるの手伝ってください」

「わかった」

応じると、法子は玄関脇に置いてある古新聞一束を持ってくる。

「そんなのどうするんです？」

「どうするって、これで食器包むんだよ。割れたりしないように」

「あ、そつか」

やや恍けながらも理解すると、光秋は棚から下ろした食器をコタツの上に並べ、一つ一つを法子と共に新聞紙に包んでいく。

全て包むと小さめの段ボール箱に隙間ができないように詰め込み、フライパンや包丁などの調理器具も一緒に入れてしまう。

台所周りの物を全て入れ切ると、その段ボール箱は一杯になる。

『食器類』、壊れ物つと……」

言いながら光秋はフタにマジックで記入し、手を離すのと入れ違いに法子がガムテープを張って封をする。

「とりあえずこれで一つですね……」

言いながら光秋が携帯電話の時計を見ると、ちょうど10時になる。

と、左隣で中腰になっていた法子が顔を俯けて綾と代わる。

「あたしにもすることない？ 重い物でもなんでも運べるよ」

「いや、だからそういうのはいいって。それに人の多い場所で勝手に超能力を使うと、あとと面倒だし」

「……………そつか。じゃあ仕方ないね……」

光秋の返答に、綾は言葉とは裏腹に不満そうな表情を浮かべる。やる気満々で手伝い

に來た子供が、追り返されて不貞腐れている様だ。

それを見かねて——というよりも、一緒にいる理由を荷造りに拘ることもないと判断した光秋は、不意に思ひ付いたことを言う。

「……とりあえず切りのいいところまで終わつたし、せつかく來てもらつたんだしな……どっか行きたいところあるか？」

「?……出かけるの?」

「せつかくだしな。ちよつと寒いけど、散らかつた部屋よりはいいだろうし」

突然の提案に意表を突かれる綾に、光秋は部屋を見回しながら応じる。

一応片付けたことになっているものの、段ボール箱が積み重なり、机やベッドなどの大きな家具もあるために實際よりずっと狭く感じる六畳間に続けるよりも、外に出た方がまだ気楽に感じるのも確かだ。

「どうせなら綾と法子さんが行きたい所に行こう。何処がいい?」

「……ちよつと待つて。法子と相談する」

光秋に応じると、綾は顔を俯ける。

ややあつて顔を上げると、立ち上がつてイスに掛けたコートを羽織る。

「行くのはいいけど、この格好じゃあれだから着替えてくる。一度寮に戻るね」

「じゃあ僕も行こう。部屋の前で待つてる」

応じながら光秋も茶色いコートを羽織り、エアコンを切って鍵や財布などの必要な物をコートのポケットに入れていく。

戸締り諸々を確認すると、先に外に出た綾を追って灰色の厚手の靴を履き、ドアに鍵を掛けて速足で右隣に着く。

——……手伝いに来てくれって言っておいて外出するなんて、流石に行き当たりばったりだったかな？……まいつか。大事なのは少ない時間を一緒に過ごすことなんだし——

浮かびかけた後悔を今回の趣旨を思い出すことで隅に退けると、光秋は綾と並んで路地を進んでいく。

70 少しでも一緒に

しばらく歩いて法子の寮に着くと、綾は部屋に消え、光秋はドアの横の壁に背中を預けて外で待つ。

5分程してドアが開くと、青いコートの下に黄色いシャツと膝に届くくらいの白いスカート、黒いハイソックスを着た法子が出てくる。

「お待たせ」

「いえ。じゃあ行きますか。どっか行きたいとこありますか？」

「そうだなあ……」

言いながら、2人は階段を降りて寮を出る。

「光秋くんの寮の近くにデパートあったよね。そこ行ってみよつか」

「デパートでいいんですか？」

「突然『どこ行きたい？』って訊かれても困るし、いろいろ見て回るのも面白そうだしね。お昼もそこのお店で食べればいいでしょ」

「……言われてみれば。あ、そうだ」

法子に気にしていたことを言われて苦い顔をしたのも一瞬、デパートと聞いて光秋は

あることを思い出す。

「デパート行くなら、もう一回僕の部屋に寄らせてください。ちようどあそこの旅行会社で東京行きの切符買おうと思ってたんで、路線のメモ取ってきたくて」

「電車で行くの……てそうか。仕事の都合とはいえ、引越しの移動でいちいちニコイチは使えないか」

「業者との足並みとか、いろいろ都合もありますからね」

「わかった。じゃあ光秋くんち経由でね」

「お願いします」

頭を下げると同時に路地を抜けて表通りに出ると、光秋は法子を先導する様に僅かに雪が残る歩道を進んでいく。

光秋の自室を経由し、しばらく歩いてデパートに入ると、一行はそこに店舗を出している旅行会社へ向かう。

光秋が事前に調べた路線のメモに従って切符を発売してもらい、それを領収書と合わせて受け取ると、店を出た光秋はそれらをズボンのポケットに仕舞う。

「これで足の準備はよし……と」

少しぎこちなく呟いたのも一瞬、おもむろに近くのエスカレーターに乗りながら努めて楽しそうな表情を浮かべた光秋は、1つ上の段に乗った法子に問う。

「で、どこから見ます?」

「そうだな。私こっちのデパートあんまり利用しないから……とりあえずテキトーに見てみよう」

振り返りながら法子は応じ、2階に着くと2人並んで前に進む。

土曜日ということもあつてか店内はそれなりに混んでおり、すぐに光秋が後ろに回つて縦に並ぶ。

「法子さんすみません。肩貸してもらつていいですか? 掴んでないとはぐれそうで怖くて」

「肩?」

「家族と人混みに行つた時はだいたいそうするんです」

「それなら、ほら」

光秋に頼みに応じると、法子は右手を差し出してくる。

「手の方がいいよ。私の方からも握つてた方がはぐれないだろうし」

「いや、肩でいいんですけど……」

「私が安心したいの。ほら」

「……じゃあ、お言葉に甘えて」

半ば遠慮がちに応じると、光秋は左手を伸ばして法子の右手を握る。

「……よく考えたら、途中の移動もこうすればよかったね」

「え？」

「なんでもない」

よその話し声や放送で流れる音楽に混ざって法子が何か言った気がしたが、結局確かめることはできなかった。

その代わりの様に、法子は握る手にやや力を込め、光秋を引っ張る様に店の中を巡っていく。

手を繋いだまま店内を巡り、何を買うわけでもなく辺りを見て回ってしばらくすると、光秋は携帯電話を開いて時刻を確認する。

「11時半……ちよつと早いですけど、昼にします？」

「だね。歩いたらお腹空いたし。どこにする？」

「んー……」

法子の問いに、光秋は少し考えてある店を浮かべる。

「あそこ行きましようよ。ほら、僕がこつちに來てすぐに藤原隊のみんなで行ったお好み焼き屋」

「あそこ？」

「けっこう美味かったけど、あれ以來行つてなかったから。せつかくだから行きましよう」

うよ」

「……ま、美味しいのは確かだしね。じゃあ、いったんデパート出よつか」

応じるや法子は光秋を引き連れて最寄りのエスカレーターへ向かい、1階に降りてデパートを出る。

表通りを少し歩くと、光秋にとっては約10カ月ぶりとなるお好み焼き屋の戸を開ける。

昼が近いこともあつて半分程埋まっている店内で、座敷に案内された2人は鉄板を埋め込まれたテーブルを挟んで腰を下ろす。

「……せっかくだから一通り頼んでみますか。いろいろ食べてみたいし」

「いいかもね。じゃあ呼ぶよ」

メニューを見ながら提案する光秋に応じると、法子は店員を呼んでお好み焼きの具材一通りとウーロン茶2つを注文する。

「……こうやつて鉄板眺めると、あの日のこと思い出しますね。確か食堂が壊れて支部じゃ食事ができなかつたんだっけ」

「そうだったね……そういえば、光秋くんがESOに入るって決めたのもその日だったよね」

「確か。まさかあれから1年せずに異動、しかもこんなややこしいことになるなんて、あ

の頃は想像もできませんでしたね」

「それと、その日藤原三佐の付き添いで今の寮に初めて行っただよね。で、今日はそこから出ていくための準備をした、か……………なんか、皮肉なめぐり合わせだな」

「……」

心なしに暗い顔で呟く法子に、光秋は返事に困って押し黙ってしまった。

しかし、そのすぐ後に注文の品々が運ばれてくると、2人は気持ちを切り替えて小麦粉とよく混ぜた具材の数々をよく温まった鉄板の上に敷いていく。

少ししてひっくり返す頃になると、不慣れな手付きで一部崩してしまった光秋に対し、法子は見事な一回転を披露して綺麗に返してみせる。それを見て光秋は、思わず称賛の拍手を送る。

中まで焼き上がるとソースとマヨネーズをかけて青のりを塗り、手頃な大きさに切り分けたそれを互いに取り皿に盛っていく。

「じゃあ、早速」

「うん」

互いに顔を見合わせると、2人は自分のグラスを取り、

「カンパニー！」

軽く触れさせ合つて小気味いい音を響かせると、中のウーロン茶を一口飲む。

そうしてお好み焼きを食べ始め、生地 of 程よい柔らかさと野菜や肉のほどの歯応えが混ざった独特の食感と、ソースやマヨネーズによつて引き立てられた味を堪能している、法子が綾と交代する。

「綾? どうした急に」

「さつきから法子とばつか楽しんでるんだもん。『一口食べたんだからいいよね?』つて言つて代わつてもらつた」

食べながら質問する光秋に、綾は頬を膨らませてそつぽを向いて答える。

「ああ……ごめんごめん。法子さんと一緒に回るのでいっぱいいいで、気が回らなかったよ……回るだけに」

「寒いよ」

「どうも……」

手厳しい返答に苦笑いを浮かべながら、光秋は綾の皿に豚肉入りのお好み焼きを一切れよそう。

「いいけどさ……これからはあたしと回つてね。あたしだつて、少しでもアキと一緒にいたいんだから」

「わかつてるよ。とりあえず今は食べよ。そういえば綾、お好み焼きは初めてじゃなかったか? どうだ?」

「法子が一口食べたから味はわかったけど……自分で食べてみるとやっぱり美味しい！」

「そりやよかった。まだたくさんあるんだ。どんどん食べよう」

一切れ頬張つてようやく笑顔を浮かべる綾に安堵しながら、光秋は空いた鉄板の上に再び具材を敷いていく。

食事を終え、2人そろつて手を合わせると、光秋と綾は膨れた腹を抱える様に会計へ向かう。

「さて、ここは僕が出すべきか？でも法子さんがまたなにか……いや、今は“綾”なんだから、別にいいよな——」

筋が通っているのかいないのかまいち判らない理屈を考えながら財布を取り出すと、光秋は伝票を差し出して2人分の支払いを済ませ、左腕に抱き着く綾と共に店を出る。

「で？何処に行きたい？」

「うーん………法子とはデパート回ったんだよね？」

「ああ」

「ならあたしもそこに行きたい」

「同じ場所か？」

「嫌？」

「嫌じゃないが……まあ、お前さんに合わせるからな。じゃあ行くか」

行き先を決めるや2人は歩き出し、再びデパートに入る。

―にしても、綾とデパートなんて初めてだよなあ……あ、京都駅の構内商店には行つたか。何処に行けばいいか……―

「ねえ」

「ん？」

光秋の黙考を遮る様に綾は声を掛けると、自分の髪を束ねているシュシュを指さす。

「法子のこれ、ここで買ったの？」

「シュシュ？ああ。ここの服屋で」

「そうなんだ……」

返事を聞くと、綾はほんの少しだけ険のある表情を浮かべる。

「……その服屋行つてみるか？なんだつたらなにか買い物でもしていくか」

「いいの？」

話を受けて思い付いた光秋の提案に、綾は意外そうに応じる。

「せっかく来たんだしな。それとも、他に行きたい所があるか？」

「うんうん！そこがいい！」

「じゃあ行くか。確かこっちだったよな……」

さつきまでの険は何処へやら。首を振って喜々として応じる綾を連れて、光秋は近くのエスカレーターへ向かう。

3階まで上がり、地図で位置を確認して少し歩くと、光秋と綾は目的の服屋に入る。2カ月前、光秋が法子の誕生日プレゼントを買いに訪れたあの店だ。

「ここだけの話、初めて行った時は緊張したよ。女物のコーナーを男一人が見て回るのはどうにも気恥ずかしいからな。今回はお前さんがいるからその心配はないけど」

「そうなんだ……じゃあ、思いっ切り！」

初来店した時のほろ苦い思い出を語ると、尻尾があれば千切れんばかりに振っているであろう綾に引っ張られる様に店の奥へ進む。

女物の服のコーナーを歩いていると、不意に綾は足を止め、合わせて止まった光秋は視線を追って近くのマネキンを見る。

それには薄黄色のセーターと白いパーカー、水色のチェック柄のロングスカートが着せられており、綾はスカートを注視しているようだ。

「あれがどうかしたか？」

「……夏は、ああいう格好よくしてたなって思ってた」

「暑いからな。風通しがいい方が過ごしやすいし」

「そういうのとはちよつと違うんだけど……」

ファツションへの疎さをあからさまに表す光秋の発言に、綾は呆れた顔を浮かべる。
「そういうんじゃないやなくてさ……アキ、あたしがああいふ服着てる時嬉しそうだったなあって」

「まあ、似合つてたからな」

「でも、あの時の服はみんな……」

「ああ……」

綾の言いたいことを察して、光秋は返事に困つてしまふ。

——綾の所持品は全部、戸松教授が持つてつちまつたからな。頼めば返してくれるかな……？　そういうや、教授に綾のこと報告してなかったな。今度電話しておくか……いや、今はそれより……

一瞬浮かんだ戸松の髭の顔を隅に押しやると、光秋は沈みがちな顔を浮かべている綾を見やる。

「買つていくか？」

「……いいの？」

唐突な提案に、綾は確かめる様に首を傾げる。

「もともと買い物も視野に入れてたからな。このマネキンのにするか？」

「うーん……ちよつと選ばせて」

「どうぞ」

「……アキも選んでよ」

「僕が？」

綾の頼みに若干狼狽えながらも、光秋は周囲の棚を見回し、2人でロングスカートの吟味を行う。

少しして、光秋はおもむろに目に付いた一着を取つて綾に見せる、

「……これなんてどうかな？」

ハンガーに吊るされているそれは、赤を基調としつつ所々に白いフリルをあしらった足首まで届く程のロングスカートだ。

「なんかこれ……法子のシュシュと似てるような……」

「確かに。シュシュの方は白に赤いフリルが着いてて、こつちは赤に白いフリルが着いてて、ちょうど対照的だ」

綾の指摘に、光秋はシュシュとスカートを見比べながら応じる。

「で、どうかね……やっぱ変かな？」

「うんうん。アキが選んでくれたんだもん。これにしようかな……あ、でもちよつと試着してくる」

「それがいい」

不安を浮かべる光秋に首を振って応じると、綾はスカートを持って近くの試着室に入る。

光秋も後を追ってカーテンの閉まった試着室の脇に佇み、待つことしばし。

「思つたよりいいかも！見て見て！」

飛び跳ねんばかりのはしやぎ声と共に綾はカーテンを開け、白フリルの赤いロングスカートに履き替えた姿を見せる。

——これはまた……予想以上だな——

直感的に似合うと踏んで勧めた一品と綾自身、その思つた以上の相性のよさに、光秋は心の中で喝采の声を上げる。

「いいんじゃないか？ 気に入ったんなら早速レジに行こう。着替えて」

「うん」

光秋の返答に深く頷くと、綾はボタンを外してスカートを下ろす。

「てっ!!?カーテン!カーテン!」

「あっ!」

驚愕しながら光秋は慌てて開け放たれたままのカーテンを閉め、閉まり切る直前、目を丸くした綾の顔を見る。

「……」

思わず大きな声を上げてしまった所為か、他の客や店員が自分とその後ろの試着室に注目しているような感覚を覚えるが、光秋はそうした痛い視線を無視するように努め、試着室に背を向けて綾が出てくるのを大人しく待つ。

ややあつてカーテンの開く音が聞こえて振り返ると、羞恥からか、心なしか小さくなった綾がハンガーに掛けた赤いスカートを持って出てくる。

「お待たせ……早く行こ」

「だな」

周りの目を気にする様に小声でやり取りを交わすと、2人は速足でレジへ向かい、気まずい思いを抱きながら会計を済ませて逃げる様に店から出る。

「まったくと……びつくりしたぞ……」

「ごめん……」

スカートの入った袋片手に左腕に抱き着く綾に軽く愚痴りながら、ほんの一瞬だがはつきり捉えてしまった健康的な褐色の太腿、そしてそれに強調されて余計に映えて見えた白い下着が光秋の脳裏を過り、それらは夏の同居の初期を思い出させる。

「—そういや、一緒になってからすぐは背中も見ちゃったんだよな……『羞恥心も覚え直し』なんて思ってたのが今やここまで来たが……まだまだ油断できんな—」

「……アキ、あたしの失礼なこと考えてるでしょ?」

「勝手に人の心を読むな。友達なくすぞ」

「て言われても、あたしアキ以外に『友達』っていえる人いないし。それにわざとじゃない。なんてなくわかる時があるんだよ」

「そうだったかな?」

口を尖らせる綾に应じると、光秋は服屋から充分離れたことを確認し、綾を連れて端に寄つて立ち止まり、携帯電話の時計を確認する。

「2時半か。まだ大分時間あるが、次何処行く?」

「そうだなあ……」

光秋の質問に、綾は天井を見上げながら考える。

それを追う様に光秋も天井を見上げて思案していると、不意にある場所が浮かぶ。

「……そういや、ここの本屋けっこう品揃え豊富だったよな……そこ行つてみるか? お前さん本好きだし」

「本屋さん?……いいね!行こ!」

「ならこつちだな」

返答を聞くと、光秋は綾を連れて最寄りのエスカレーターを上る。

エスカレーターを降り、少し歩いて本屋が見えてくると、光秋は思わず胸躍っている

ことを自覚する。

—そういえば、本屋来るのも久しぶりだなあ。このところドタバタして行けなかったからな……それに—

左隣に目を向けると、口元を緩ませた綾が今にも駆け出したい気持ちを堪えている姿がある。

「お前さん、本屋初めてだったよな。やっぱり興奮するか？」

「うん！本があんなにいっぱい……！好きな読んでいいんだよね？」

「立ち読みはほどほどにな。ちよつと中身を確認するくらいならいいが。気に入った物があれば買ってゆつくり読めばいいさ。僕もそのつもりだし」

はしやぎ気味な綾との会話を交わしつつ店に入ると、光秋はいったん別れて気の向くままに小説のコーナーを徘徊する。

辺りを見回し、目に留まった本を取って裏表紙に書かれているあらすじを読み、冒頭部分を軽く読んで元の位置に戻す。それを何度か繰り返し、買いたい本を選んでいく。

そうして半ば無意識に進んでいると、不意に思想書のコーナーにいることに気付く。

—こういう所も何故か来ちゃうよな……ん？……『基礎から学べる哲学入門書』？—
そんな題名の本が偶然目に入り、好奇心から手に取ってまえがきを流し読みしてみ

——……いろんな先生の思想を噛み砕いて説明してくれるのか。面白そうだな——
目次に書かれている多彩な内容に、はつきりと購買意欲が刺激される。

——……入門書か……本当なら、こういうの勉強してたんだよな………まあ、その話
はいいや。せっかくだしこれ買つてこ——

一瞬沈みそうになった気持ちをすぐに持ち直し、その本を脇に抱えて思想書のコーナーを後にする。

少し歩いた所で携帯電話を出して時刻を確認すると、4時を回っている。

——けっこういたな。さて、綾はどうしたかな？——

そう思つて周りを見回したその時、

「アキ——」

「！噂をすれば」

見計らつたかの様に掛けられた声に光秋は顔を向けると、文庫本を1冊、辞書程の厚さの本を1冊持った綾が歩み寄ってくる。

「……その厚い本どうした？」

その本のあまりの存在感に、光秋は思わず訊いてしまう。

「これ？あたしのやりたいことに必要かなあと思つて」

そう言つて綾が見せてくれた表紙には、『これからの平和の話をしよう』という題が書

かれています。

「ああ、思想書な。そういう法子さんの家でそんな話したつけ……で、もう1冊の方は？」

伊部家での一件を思い出して納得しつつ、光秋は文庫本についても訊ねる。

「これはねえ……」

言いながら、綾が再び本の表紙を見せる。

「『ハツコイ』？……これって確か、この間映画化されたってテレビで……」

「そうなの？」

「いやあ、僕もCMちらつと観ただけだから、別のと勘違いしてるかもしれないけど」

「ふーん？あたしは、単に面白そうと思って選んだんだけど……アキは？」

「ん？僕はこれを。僕もちよつとは勉強しなきゃなと思つて」

言いながら、光秋も綾に倣つて表紙を見せる。

「入門書？」

「そ。もともとこういうのに興味があつたからな。それで全部なら、会計済ませちゃうか。それともまだ見てるか？」

「うーん……今日はこれくらいでいいかな」

「じゃあ、レジ行こう」

言うとう光秋はレジへ向かい、綾もその左隣に並んでついていく。重い本を両手で抱えていて腕が組めないため、逸れないように歩調を合わせ、光秋もそんな綾を察して心なしかゆっくり進む。

購入した本3冊が入った袋を右手に持つと、光秋は左腕に綾を伴って店を出、袋を一見して苦笑いを浮かべる。

「ハハ、結構使っちゃったな……さて、今は……」

気を取り直して一度綾に離してもらった左手で携帯電話を開くと、4時10分を差している。

「4時……まだどっか行きたいところあるか？」

「うーん……」

「流石に夕飯には早過ぎるし、今から遠出するには遅過ぎる。どうも中途半端な時間だなあ……いったん寮に戻るか。買った物も置いてきたいし」

「そうだね。脚もちよつと疲れた」

自分たちの持つている袋を見ながらの光秋の提案に、綾が脚を見やりながら応じると、2人は最寄りのエスカレーターに乗って1階まで降り、そのままデパートを出て光秋の寮へ向かう。

「……あ。夕飯の買い物してくればよかったなあ」

「僕もそう思ったがさ、よく考えたら食器類はもう仕舞っちゃったし、夜も外で食べればいいだろう。その方が2人共ゆつくりできるし」

「……そういうのとまた違うんだけどなあ」

「？」

無理解に憤りを覚える様な顔をする綾に、光秋はただ首を傾げる。

少し歩いて寮の自室に戻ると、光秋はベッドの下からコタツを引き出して電源を入れ、エアコンを点けて部屋を暖める。

ズボンに仕舞っていた切符と領収書を机の上に置くと、光秋は着ていたコートを壁のフックに吊るしてあるハンガーに、綾は部屋の隅の椅子の背もたれに掛け、それぞれコタツに足を入れて温まる。

「はあー……さっきお前さんも言ってたけど、やっぱ歩きつばなしだったからなあ。脚疲れたなあ」

「だねえ……外寒かったし……コタツあったかあい……」

互いに間延びした語調で言葉を交わしながら、外の冷気で知らぬ間に力んでいた体中の力を抜いて、コタツと暖房の温かさを堪能する。

しばらくすると、玄関を背にして座っていた光秋は部屋の隅に置いていた本屋の袋にコタツから出した手を伸ばし、それをコタツの上に置いて中から自分用に買った入門書

を抜き出す。

「忘れるところだった。あと2冊、そのまま持っていくといい」

「うん」

若干前屈みになって左前に座る綾に袋を差し出しながら言う、再び手をコタツに入
れて温まる。

「……………」

「……………」

——……………会話が途絶えたな——

しばらく続いた沈黙に耐えかねて辺りを見回すと、光秋の目にテレビが止まる。

——……4時45分か……—「テレビでも観るか？土曜の夕方だからそんなに面白そう
なのはやってないと思うけど……」

机の上の時計を確認しながら問いつつ、光秋はコタツを出てテレビの許に歩み寄り、
電源を入れてリモコンを持って戻る。

「リモコン貸して。テキトーに観てみる」

「ん……そういや、お前さんがテレビ観るなんて初めてのことじゃないか？夏に住んで
た家にはなかったし」

「そういえばそうだね。法子に教えてもらって、こういうのがあることは知ってたけど

……実際に観るのは初めてかも」

「知識はあっても実物に触れるのは初めてってやつか……」

不意に思い出したことを言い合いながら、2人は綾がテキストに合わせたチャンネルの番組を呆然と眺める。

少しして時刻は5時を回り、合わせていたチャンネルはニュース番組を流し始める。

1週間の出来事をまとめて報じるその番組は、真つ先に5日前の祝賀パーティー襲撃事件とZC総裁・物部の演説を映し出し、それに続いてこの一件に触発されたと思しき過激な超能力者とNP戦闘員たちの世界各地での小規模の衝突、それを止めようとする警察やESO実戦部隊の様子が報じられる。

それを観て、それまで弛緩していた光秋の意識が少しだけ張り詰める。

―あの後も新聞でちらほら見掛けてはいたが……やっぱり、あの事件がノーマルと超能力者の関係を刺激したのは確かなんだよね―

と、こちらも緩んでいた表情から若干緊張した顔に変わった綾が、画面に映る映像とスピーカーから響く銃声や爆音から逃れる様に光秋の方に身を寄せてくる。

「また、この間みたいなきっかけが起こるのかな？」

「……少なくとも、あれだけで終わらせる気のない人はたくさんいるみたいだな……怖いか？」

若干言葉に迷い一つも応じた光秋は、綾の顔色や声から少しだけ怯えを感じ、試しに訊いてみる。

「そりや怖いよ。またこの前みたいに怪我したりする人が出るんだよ。それがあたしやアキになるかもって考えたら……」

「そりやそうだな。僕なんかはこういうことに対処するのが仕事だから、そういう目に遭う可能性は高いかも……」——こういう時期に特エスの主任なんかにかかされるつてことは、NPやZC……否、一般の超能力者とノーマルの衝突にさえ遭遇する機会も、当然増えるんだろうな……—

応じつつ、光秋は自分が置かれている状況を改めて理解し、先に待っているであろう苦難を想像して憂鬱になる。

「……去年の今頃までは、こんなことが遠い世界にいたはずなんだけどなあ……」

「それは、アキもともとこの世界の人じゃないし……」

「いや、そういうことじゃなくてさ……こういう『紛争』……いや、これくらいならまだ『事件』か？……とにかくあんな流血沙汰から離れた所で生きていた僕が、今はそういう事態に進んで関わって、あまつさえ収めるのが仕事って考えると、なんか不思議でさ。もちろん、ただの高校生が流血沙汰に関わるようなことなんてない方がいいんだろうし、ESOに入るって決めた時にある程度覚悟……といったいいかは迷うところだけど

……とにかく気持ちは決めたつもりだったから、当然の流れといたらそうなんだろうが」

綾に訂正を入れつつ、光秋は映像を観ながら現状への感慨を呟く。

「……もつとも、僕の『すべきこと』——『やりたいこと』に変更はない。こうした事件を一つでも収め、傷付く人を一人でも減らす。そうして、少しずつでも今ここにある様なものを広げていく。そのためには、目の前にあることを一つ一つこなしていく。それだけだ」

「うん」

続く意志表明に、綾は静かに頷いてくれる。

「……ただ、京都を離れると奥さんの頼みが——法子さんを守るって約束が果たせなくなるんだよねあ……その辺どうするか……」

一通り言いたいことを言っただけ頭を抱えてテレビに視線を戻す。
喉に引っ掛かり、光秋は少しだけ頭を抱えてテレビに視線を戻す。

ぼんやりとテレビを眺めてしばらく。

不意に光秋は机の上の時計を見やり、現時刻を確認する。

「5時50分か……そろそろ夕飯にするか？」

「もうそんな時間？　そういえば、大分暗くなってきたね」

テレビに見入っていて時間を忘れていたのか、綾は先程光秋が閉めたカーテンの合間から覗くすつかり暗くなった空を見る。

「食ベに行くんだよな。何処がいい？」

「あそこ。アキが風邪ひいた時に法子と行ったところがいい」

「あそこか。了解。コート着て」

促す光秋に頷くと、綾はコタツの上のリモコンでテレビを消し、椅子の背もたれに掛けていたコートを羽織る。光秋もコタツを切つてハンガーに掛かっているコートに袖を通すと、そのポケットに財布を入れ、電灯を豆電球にして鍵を持つて部屋を出る。

「忘れ物ないよな？」

「うん。アキは？」

「財布と鍵は持ったし……大丈夫だろう」

綾に応じながら各ポケットを摩り、念のためズボンのポケットに入れているカプセルも確認すると、光秋はドアの鍵を閉め、左隣に綾を伴つて寮近くのレストランへ向かう。レストランのドアをくぐると、2人は奥から駆け寄つてきた店員に空いているテーブルまで案内される。

夕食時とあつてか店内には三々五々客が固まつており、東洋系に混ざつて金髪や褐色の肌をした者の姿も目に付く。

—こんな時でも海外旅行か。流石は日本有数の観光都市京都といったところか？……ま、タツカー中尉みたいに仕事で来てるかもしれないがな—

さつきまでテレビ越しに観ていた遠い異郷の地の物々しい光景とは打って変わって、和氣藹々とした雰囲気が広がる店内に頬を緩めながら、光秋はテーブルを挟んで座る綾にメニュー表を差し出す。

「なにがいい?」

「うーん……」

なにを頼むか考えている間にグラスに入った水が運ばれてくると、ちょうど決まった2人はそれぞれの注文を店員に告げ、メニュー表をテーブルの端に片付けて料理がくるのを待つ。

「……そういえば、昼間はテンパってて気が回らなかったが、お前さんとううやって外食っていうのも久しぶりだよなあ」

「そうだね……夏の頃は、あたしがあんまり遠出したがらなかったから……」

「あの頃は生まれたばかりで、戸松教授のチームの制約もあつたんだから仕方ないよ。後半は僕が瓦礫撤去なんかで忙しかったのもあるし、柄の悪い人たちに絡まれたのも—すまん。これは余計だったな」

「いいよ。どっちもアキの所為じゃないもん。それに、ご飯の準備しながら帰り待つて

るのつて、なんか楽しかったし」

「そういうもんか？」

喋り過ぎたと思つて頭を下げる光秋に、綾は楽しいことを思い出す様な笑みで応じてくれる。

そうしている間に料理が運ばれてくると、2人は手を合わせ、光秋はカルボナーラを、綾はハンバーグセットを食べ始める。

「……あたしもさ、お昼はうつかりしてたけど……」

ナイフで適当な大きさに切り分けたハンバーグを一切れ食べるや、綾はもう一切れをフォークに差し、

「仲よしの間じゃこうするんだよね？」

それを自分の口ではなく前に方に持つてくる。

「……？」

その様子にカルボナーラを呑み込んだ光秋が首を傾げていると、

「はい、あーん！」

右手を手皿にしながら、綾はハンバーグを光秋の許に差し出してくる。

「ええ!？」

その突然の行動に、光秋は思わず変な声を出してしまう。

「『あーん!』って……お前さんそんなのどこで覚えてきた……僕もマンガくらいでしか見たことないぞ?」

「法子と一緒にたって観たテレビとか、あと本とか。なんか楽しそうだからあたしも今度やろうと思って。だからさ……あーん!」

「……………あー……………」

目の前のベタな光景に半ば呆れつつも、笑顔でフォークを向ける綾に断る気も起さず、光秋は周囲の目を少々気にしつつも差し出されたハンバーグを口に入れる。

「美味しい?」

「……………ん。デミグラスソースっていうのか、それが肉と合って美味しい」

「……………そういうことじゃないんだけどなあ」

咀嚼した上で思ったままを応じると、綾は不満そうに口を尖らせる。

と、何処からかヒュー!と口笛の音が響く。

「……………いかんいかん。あまり意識してはいかん! 食事に集中しよう—」

そう自分に言い聞かせることで顔が熱くなりそうになるのをぐつと堪え、気を紛らわす手始めにとフォークにカルボナーラを巻き付ける。

その時、

「じゃあ今度は……………あつ」

——？……まさか……

綾が唐突に口を開け、光秋は首を傾げつつも嫌な予感を覚える。

少し経つても動きがなにごとに焦れたのか、綾は口を閉じて非難の目を向けてくる。

「食べさせてあげたんだから、今度はあたしに食べさせてよ！」

——あ、やつぱり？……「お前さん、カルボナーラ好きだっけ？」

「アキに食べさせて欲しいの！いいから、あつ！」

「……りょーかい」

押し切られて観念すると、光秋は麺を巻き付けていたフォークを綾の口に持つていく。

「ちゃんと『あーん！』って言ってね」

「……あーん！」

綾が刺してきた釘に、周囲の目が気になりながらも半ばヤケクソに従ってフォークを差し出す。

「うーん……！」

「……」

それを満面の笑みを浮かべて味わう綾を見て、光秋はいよいよ周囲の目が恥ずかしくなり、以後は完食することだけを考える。

変な汗が浮かんでくる夕食をどうにか終え、2人分の代金を払って寮に帰宅した光秋は、風呂場の水盤から歯ブラシを取ってきて綾がコタツに潜っている居間へ向かう。

「暗くなってきたし、そろそろ帰った方がいいだろう。歯あ磨いたら送るからさ、それまでひと休みしてて」

「うん……」

先程までと打って変わって冴えない顔で綾が頷くと、光秋は歯磨き粉が塗つてあるブラシを口に入れる。

少しして歯磨きを終え、風呂場の水盤で口を漱いですすきりすると、居間に戻つて一度脱いだコートを再び羽織る。

「ほら、準備して」

「……うん」

動く気配のない綾を急かしながら、光秋は本2冊とスカートが入った袋を右手にまとめて持つて先に部屋を出る。

少しして綾が出てくると、持つていく物と戸締りの確認をして法子の寮へ向かう。

「遠回りになるけど、表から行こう。こっちは暗くてなんか怖いや」

「うん」

周囲の明るさを鑑みての光秋の提案に、綾は心なしか嬉しそうに応じ、空いている光

秋の左腕に抱き着く。

表通りに出てアーケードの下を進み、突き当たった十字路を左に曲がって京都支部の前を通る。

街灯や周囲の店の看板などに照らされてある程度視界が確保されている道を、2人は無言で進んでいく。

しばらく歩いて小田一尉の寮の前を過ぎた辺りで、光秋は先程から顔を曇らせて俯いている綾を見やる。

「夕飯が終わってから元気ないが、どうした？ なにか口に合わなかったか？」

「ううん。ハンバーグセット美味しかったよ……ただ……」

「ただ？」

「……もうすぐアキとお別れだと思つて……」

応じながら、綾は悲しそうな顔を浮かべる。

「……仕方ないさ。綾の……というか法子さんの住んでる場所はあそこなんだから」

「そうだけどさ……」

「……」

顔をさらに深く俯ける綾に、光秋はもつとマシな慰めを言えない自分が嫌になる。

その間にも2人は目的の寮に入り、法子の部屋の前で足を止める。

「鍵は？」

「えつとね……あ、あった」

法子の記憶を頼りにスカートのポケットから鍵を出すと、綾は開錠してドアを開く。

「……じゃあ、また月曜日」

「あ、それなんだがさ……」

俯きながら部屋に入る綾に、光秋は持っていた袋を渡しながら、歩いている間に考えていたことを話す。

「明日、また一緒に何処か行かないか？今度は電車かバスに乗って、もっと遠くまで」

「え？……いいの？」

「もちろん、お前さんと法子さんの都合が合えばだけど」

「ちよつと待って！」

やや興奮気味に応じると、綾は目をつむって集中する。

「法子は大丈夫だつて！あたしはもちろん大丈夫だよ！」

「ならよかった……とりあえず一旦落ち着こう。声が大きいと近所迷惑になるから」

「あ……うん……」

光秋の注意に、綾はさつきとは違う意味で顔を俯けながら声の音量を下げる。褐色の肌のためにわかりにくいものの、恥ずかしさに顔を「真っ赤」にしているのだろう。

落ち着いたのを見計らつて、光秋は続きを話す。

「とりあえず、10時に支部の正門前に集合つてことでもいいか？」

「もつと早くてもいいよ。8時でも7時でも」

「いやいや。そんな早く出てもどこもやってないよ……そうだな……じゃあ間を取つて9時にしよう。9時に正門前で待ち合わせ。それでいいか？」

「……わかつた」

若干不満そうな顔を浮かべながらも、綾は合意してくれる。

「じゃあ、行きたい場所があつたら今夜中に決めておいてくれ。法子さんの意見も聞いてな。じゃ、おやすみ」

「おやすみ！」

言うのと光秋は振り返つて寮の玄関へ向かい、背後にドアが閉まる音を聞きながら階段を降りる。

寮を出て路地を抜け、表通りに出ると、冬の夜の冷氣に追いつて立てられる様に家路を急ぐ。

「……こうなると、僕もいくつか行きたい場所考えておいた方がいいかもな。何処にしようか……」

速足で歩道を進みながら、行きたい場所の候補を頭の中に浮かべてみる。

7 1 久方の京都小旅行 前編

1月9日曜日。

緑のズボンに赤チエツクのワイシャツ、その上に茶色いコートを着込んだ光秋は、京都支部正門を背にして右肩に斜め掛けした灰色のカバンの帯を弄びながら、伊部姉妹が来るのを待つ。

——……約束の時間そろそろだよな？——

思いながら左手首の腕時計を確認すると、間もなく9時を指そうとしている。
と、

「ごめん！待った？」

知っている声に右を向くと、綾が速足で駆け寄ってくる。

「いや。少し前に来たばかりだ……そのスカート、早速使ってくれたんだな」
少し上がった息を整えている綾に応じつつ、光秋はその服装を確認する。

下は昨日買った白フリルの付いた赤いロングスカート、上は羽織った青コートの下から白いワイシャツが覗き、左手首には赤フリルのシュシュが巻かれている。青コートの有無こそあるものの、下ろした髪と相まって、どこことなく夏に綾がよくしていた服装を

連想させる。

「もちろん！アキがせっかく買ってくれたんだし、この方があたしっぽいでしょ」

「まあ、夏出かける時よくそんな服装だったもんな。髪も結んでないし」

「法子はそうでもないみたいだけど、あたしはこの方がしっくりくるからね。それより早く行こー！あたし八坂神社行きたい！」

「八坂神社か。僕も初めて行くな……」

「道はあたしが調べてあるから大丈夫。さっ！行こ行こ！」

右肩に提げていた小ぶりのカバンからメモを取り出すや、綾は光秋の左腕を引いて最寄りのバス停へ向かう。

少し歩いてバス停に着くと、目的のバスはすぐにやってくる。

日曜日とあつてか利用者はそれなりに多く、やや混んでいる車内に乗ると2人は後部左側の席に並んで座る。

それを待っていた様にバスが走り出すと、光秋は左隣に顔を向け、過ぎていく窓の景色に少しはしゃいでいる綾に気になっていたことを問う。

「ところで、なんで八坂神社なんだ？」

「別にあたしもどうしてもってわけじゃないんだけど……法子とは金閣寺に行つたんですよ。だから、とにかくそれ以外の有名な所に行きたくって、ネットで調べたらそこが

目に入ったから」

「またなんとも大雑把だねえ……」

「いいでしょ！」

光秋の率直な感想に、綾は頬を膨らませる。

「……ホントはさ、場所なんて何処でもいいんだよ。少しでもアキと一緒にいられて、少しでもあたしとの思い出を作ればさ……」

「……それもそうだ」

機嫌を直して断じる様に綾に、光秋も深く頷いて合意する。

バスに揺られることしばらく。

目的地である八坂神社前のバス停に着くと、2人はそれぞれ運賃を払って下車する。

他の歩行者の邪魔にならないよう注意しつつも、例によって綾が光秋の左腕に抱き着く形で歩くと、少しして右手に「八坂神社」と大きく掘られた石柱と、特徴的な朱色の門が見えてくる。

「……だよな？ 確か」

「うん。あれ西楼門にしろうもんっていうんだよ」

「そうなのか？ よく知ってたな」

「二通り調べてきたからね」

「そりやあ頼りになる。僕はさつぱりだからな……せつかくだ。門を背景に記念写真撮ろう」

「うん！」

頷くと、綾は速足で階段を駆け上がって門の左側に立ち、光秋はズボンのポケットから出した携帯電話のカメラを作動させて画面を覗く。

「これなら、ちゃんとしたカメラ持つてくればよかったなあ……」

自室の押し入れに仕舞ったままのデジタルカメラを思い出して軽い後悔を覚えつつ、綾を中心にしながらもどうにか門全体を画面に収めてシャッターを切る。

「よし。撮れたぞ」

「じゃあ今度はあたしが」

「いいよー」

「あたしが撮りたいの！」

言いながらカバンから携帯電話を出した綾と入れ替わる形で光秋は門の前に立ち、それまで背にしていた左右に所狭しと店が並ぶ大通り——四条通を臨む。

「こうして見ると、周りもけっこう賑やかだな。後で回ってみるのも面白いか……」

「アキーー！撮るよー！」

「ああ」

綾の呼び掛けに気を取り直してカメラに視線を向けると、直後にフラッシュが輝き、撮った画像の確認をする綾の許に歩み寄る。

「よく撮れてるじゃないか」

「そうかなあ？アキちよつと見辛くない？」

「こんなもんだろ。さ、行こう」

映り具合をやや不安がる綾に応じながら、光秋は右手を引いて階段を上り、西楼門をくぐる。

「？……今日は祭りでもやってるのか？」

八坂神社の敷地に入つてすぐに縁日に並んでいる様な数件の屋台が目に入り、綾を見やりながら訊ねる。

「ううん。ここはいつも何件かこういうお店が出てるみたい……と、まずは手を洗わないと」

応じると綾は光秋を連れて左の手水舎に歩み寄り、2人そろつて手を洗い、口を漱ぐ。

「こつちこつち」

言いながら綾は両脇に屋台が並ぶ道を進み、光秋も左手を引かれながらそれに付いていく。

少し歩いた先の階段を上つてもう1つの門をくぐり、その先にまた数件並んでいる屋

台の間を通ると、大きな舞殿が目につく広い境内に出る。

「下鴨神社もそうだが、こういう大きな神社の境内つてやつぱり壮観だなあ。舞台が圧巻だ」

「……そういうもん？」

目の前の光景に素直な感想を漏らす光秋に、“自身”のその手の経験が乏しい綾は首を傾げる。

「僕の中の『神社』っていうのが、家の近くの山の中にある鳥居と本殿だけみたいなのや、鳥居から本殿まで一本道が真っ直ぐ延びてる様なのだからな。こういう広々したものを見るとギヤツプがさ……もつとも、系統が違うのかもしれないが。日本の『神様』はややこしいんだよ」

「ふーん……？」

「……とりあえずその話はまたの機会にして、まずはお参りしてこよう」
「うん」

光秋の提案に綾が頷くと、2人は左前に佇む本殿へ向かう。

白壁に朱色の柱が特徴的な本殿、その正面中央に設けられた巨大な賽銭箱の前に延びる行列に並ぶと、光秋はズボンのポケットから財布を取り出し、そこから出した2枚の十円玉の一方を綾に渡す。

「2回お辞儀して、2回手を叩く。願い事があればこの時にする。最後にもう1回お辞儀。この間気になって調べたらそうだって」

「ややこしいね」

「そういうもんらしい。あんまり拘ることもないみたいだけどな」

綾の感想に返している間に順番が回つてくると、光秋は自分の分の小銭を賽銭箱に投げ入れ、綾も入れたのを見ると3つある内の一、番左の鐘を鳴らす。説明通り二拝二柏手を行い、手を合わせながら横で綾が同じようにしているのを確認する。

少しして手合わせを解くと、一礼して左腕に綾を伴いながら賽銭箱を離れる。

「アキはなにお願ひしたの？」

「なにも。特にそういうのなかったし」

「えー？つまんないのー。あたしはさ——」

「ストップ」

自分の願ひ事を言おうとする綾を、光秋は素早く遮る。

「こういうのは、話すと効果がなくなるっていわれてるんだよ」

「……そういえば、法子にもそんなこと言ってたね」

「……まあな」

不意に出てきた法子の名前に、2人の間にやや重い沈黙が横たわる。

と、それを払う様に綾がなにかを思い付いた顔をする。

「あ……『話さ』なきやいいんだよね？」

「？」

突然の問いに光秋が首を傾げていると、頭の中に声が響いてくる。

―あたしのお願いはね、アキが無事に戻ってきてくれることだよ―

「……お前ねえ……」

「『話して』はいないもん！」

しょうもないことにテレパシーを用いたことに光秋は呆れるものの、綾はそんなことは気にせず堂々と胸を張る。

「……まあいい。お参りも済んだし、少し回るか」

「うん……あ、そうだ。あたし行きたい所あったんだ」

「何処？」

「こつち」

言うや綾は光秋を引いて来た道を引き返そうとするが、絶える様子のない賽銭の行列にすぐに振り返り、舞殿を時計回りに迂回して2つ目の門の近くへ向かう。

少し前で立ち止まった綾の視線を追うと、光秋は石造りの鳥居と、その奥の小じんまりした社を目にする。

「『縁結びの神』?……そういうことか」

「そう。大國主社おおくにぬしやっていうんだよ」

右横の看板を読んで光秋は綾の意図を察し、綾は応じながら光秋を連れて鳥居をくぐって社の前に立つ。

「……ここは賽銭箱なさそうだな……とりあえず手え合わせていくか」

「うん」

光秋の提案に頷くと、綾は本殿の時と同じ要領で二拝二拍手一拝を行い、光秋も手合わせで頭を下げる。

——……流れでこんな所にお参りしてしまったが……法子さんに悪かったかな?——

思いつつ、光秋は横目で合掌中の綾を見る。

光秋の意識としては、単純に綾の行きたい所に付き合って行っているだけなのだが、縁結びの神社に参拝しているという現状だけを見ると、どうしても他意があるように見えてしまつて軽い罪悪感を覚えてしまう。

そうして悶々としている間に、綾は手を解いて一礼し、光秋もそれに続いて振り返ると、綾が看板の前に設置されている人と兎の石造を指さす。

「そういうばさ、あの像なんだろう?」

「えーつと……『大國さまと白うさぎ』?……ああ、あの話か」

台座に書かれている字と兎の像、大國主社という名前から、光秋はある話を思い出す。「大昔、大國主っていう神様がいて、海辺を歩いてたら皮を剥がされた兎を見付けたんだよ。で、事情を訊いてどうしたらよくなるかを教えてあげたって……確かそんな話だったかな？ 僕もうろ覚えだからなあ……」

「ふーん？……それを表した像ってこと？」

「そういうことなんだろう」

我ながら頼りない説明を述べながら、光秋は綾を連れて八坂神社の境内に戻り、他の観光客に混ざってしばらく周囲を歩いて回る。といっても、殆ど綾に引つ張られるままについていくだけだが。

本殿の右脇に延びる通路を抜けて裏に回り込み、鬱蒼と茂る樹々の間を歩いていくと、入ってきた西楼門の前に戻ってくる。

「ああ、一周したんだな……どうする？ここから出る？」

「うんうん。もう一つ見ておきたい所があるの」

言うとは綾は光秋を引き、入った時は気付かなかった樹々の中に佇む石鳥居、その中に建つ朱色の社の前に歩み寄る。

「疫神社えきじんじやっていつて、病気の神様がいるんだって」

「『エキジンジャ』？……ああ、『疫病』の『疫』か。なるほどな」

聞き慣れない単語に首を傾げていると、綾から伝わってきた「疫」のイメージに、光秋は手を打って合点する。

「東京行つてゐる間、アキが元気でいられるようにと思つて」

「なるほどな……」こも賽銭箱はなしか……じゃあさつきと同じ、手だけ合わせていくか」

「うん」

応じると綾は手を合わせ、光秋もそれに倣う。

ややあつて合掌を解いて一礼すると、2人は並んで鳥居を出る。

「どうする？元の場合に戻ってきたけど……そこから出るか？」

「うんうん。どうせならこつちから出よう」

西楼門を見やる光秋に首を横に振ると、綾は左腕を引いて境内へ向かう。

「あつちから出よう。南楼門みなみろうもんっていうの」

「南もあるのか……」

言いながら綾は右側に佇む朱色の門を指さし、率直な感想を漏らした光秋を伴つてそこをくぐる。

敷地を出て少し歩いた先に建つ石造りの鳥居を抜けると、光秋は一度足を止めて後ろを振り返る。

「鳥居がここにあるってことは……こっちが正面だったのか……」

「え？ 西楼門から入るんじゃないの？」

「神社は基本的に鳥居がある方から入るもんなんだよ。西門の存在感に僕も忘れてたが……こりや迂闊だった」

綾に応じながら右手を頭に当てると、光秋は大通りに出て右に曲がり、西楼門前に――四条通と東大路通というそれぞれ片側2車線の大動脈がぶつかる広いT字路に向かう。

「さて、元の場所に戻ってきたわけだが……もうすぐ11時か。これからどうする？」
左手首の腕時計を確認しながら、光秋は綾を見やる。

「僕はこの辺の商店街を回ってみたいんだが、綾はどうする？ 法子さんも」

「あたしもそれでいいよ。法子もいって」

「じゃあ、テキトーにぶらつくか」

綾の返答を得ると、光秋は手の繋がりを確認し、信号が青に変わるや目の前の横断歩道を渡る。

広いT字路を横切って西楼門から見て右側の歩道に渡ると、目の前の土産物屋が目に入る。

「ちよつと入ってみるか？ 食べ物もあるみたいだし」

「うん」

頷く綾を左に伴って、光秋は一枚ガラスのドアを開けて店内に入る。

簪に扇子、手拭、箸など、いかにも京都らしいデザインの品々が並ぶ中、ひと際存在感を放っているのが菓子類だ。

「やっぱり京都というか、八ッ橋が目立つな」

「京都のご当地お菓子なんでしょ？」

「ああ。中学の修学旅行で買っていたっけ……」

綾に応じつつ、光秋はその頃に思いを馳せる。

そうすると、無性に八ッ橋が食べたくなってくる。

「せっかくだし、1つ買っていくか。お前さんは初めてだろう？」

「うん。法子が何度か食べたことあるから知ってはいるけど……美味しそうだしね。どれにしようか」

綾が応じると、2人は大小色とりどりの箱の中から、一通りの味を収めた一番小さい物を選んでレジに持っていく。

光秋が袋を受け取ると2人は店を出て、アーケード付きの四条通の歩道に繰り出す。

「適当な所で座る場所見付けて食べよう。早く食べないと悪くなるしな」

「うん」

右手の袋を示しながら言う光秋に綾が頷くと、互いに場所探しも兼ねて辺りを見回す。

「なんていうか、いかにも観光地だな。土産物屋が目につく」

「大きなビルもたくさんあるよ」

そうして感想を言い合いながらキョロキョロしている様子は、あからさまな田舎者といったところか。

その時、

「!?!」

行き過ぎようとしていた路地から人が飛び出してくるのを見て、光秋は咄嗟に綾を後ろに隠す様にして後退る。

「……いや、今のは飛び出したというより……」

目の前の路面で仰向けに倒れている若い男——明らかに染めた金髪と、多数付けた金色のピアスやブレスレットなどのアクセサリーが相まって派手な印象を抱かせる——が後ろ向きに吹き飛ぶ様に倒れてきたのを思い出していると、男は怒りの形相を浮かべて立ち上がり、

「デメエ、超能力者が！調子に乗ってんじゃねえぞお！」

路地に向かって怒声を飛ばしながら駆け出していく。

「超能力者?」

男の発言に首を傾げつつ、光秋も周囲の野次馬に漏れず路地の先を見やる。

店と店の間、車2台がすれ違えるくらいの幅がある単なる「通り道」といつていいここでは、メガネを掛けた細身の男が派手な男に詰め寄られ、その後ろでは長い黒髪の若い女がその様子を困った様に眺め、周囲に助けを求める視線を寄こしている。

「ケンカか……」——正直面倒だが、立場さういうわけにもいかないし……メガネの人は超能力者っぽいしな——「ちよつと行つてくる。ここで待つてて」

そう言つて緩に八ツ橋の袋を預けると、光秋は常に携帯しているESOの手帳をズボンのポケットに確認しながら3人の許に速足で向かう。

距離を詰めてよく見ると、殴り掛かろうとしている派手な男をメガネの男が念で押さえ付けているのがわかる。

「テメエ! 念力なんて卑怯だろお!」

「突き飛ばしたのは悪かったです……でも、あなたがこの人にしつこいから……」
「どうかしましたか?」

興奮気味の派手と狼狽しているメガネの口論に負けない声で呼び掛けると、光秋は2人の間に割つて入る。

「何だよあんた!」

「こういう者です。とりあえず、一度念力解いてください」

「は、はあ……」

嘸み付く派手にESOの手帳を示しつつ指示を出し、メガネがそれに洩々従つて念から派手を開放する。

「……………コノオ！」

「待つて！待つて！」

途端に手を上げようとする派手の前に立ちはだかつて抑えつつ、光秋は双方に問う。

「一旦落ち着いて、まず何があったのか話してください。まずはそう……あなた、金髪のあなたから」

「何がって、その女に話し掛けてたら、そのメガネが突然念力で突き飛ばしてきたんだよー！」

応じつつ、派手は光秋の背後のメガネと女を睨む。

「突然も何も、この人が嫌がつてたから……注意してもやめないから、その……つい……」

対するメガネも、派手に非難の目を向けつつ女を指さして反論するが、自分のしたことに後ろめたい思いがあるのか、あまり強く主張しない。

「なるほど。つまり、あなたが女の人に話し掛けてたんだけど、女の人は迷惑そうにして

いた。そこにメガネの方がやって来て注意したんだけど聞かず、メガネの方はかっとなつてつい念力を使つてしまった、と？その女の方もそれで間違いないですか？」

「……はい」

「……そうです」

2人の主張をまとめて確認する光秋に、メガネと女は小さく頷く。

「そういうことなら、お互い非があつたつてことでこの場は治めましょうよ。無理強いした金髪の方も悪かつたけど、暴力に訴えてしまったメガネの方も悪かつた、両成敗ということで」

「いや、ちよつと待てよ」

2人の顔を交互に見ながら言う光秋に、派手が不満そうに眉を寄せる。

「俺はただ話し掛けただけなんだぜ。それで突き飛ばされてケガしそうになつて、それでこのメガネは何もなしつて、そんな話を通るのかよ！」

「いやでも、それはあなたにも非があつたわけですし、突き飛ばしたことに關してはこの人も悪いと思つてゐるわけですから」

「悪いと思つただけで済めば警察もESOもいらねえだろうが！こいつは超能力で善良な一般市民を攻撃したんだぜ。この間迎賓館襲つたナントカつてテロリストみてえによ！そんな連中野放しにしてていいのかよ。え？ESOの人！」

——なんとも話が飛ぶなあ……興奮状態なら仕方ないか？——

飛躍した理屈を唾を飛ばす勢いで述べる派手に内心面倒臭いと思いながらも、光秋はESO職員の義務感から根気よく話し合いと続けようとする。

しかし、

「ちよつと待った」

それまで派手から距離を取ろうとしていたメガネが、突然目を鋭くして詰め寄ってくる。

「流石にテロリスト呼ばわりはないでしょう！こっちはただ注意しただけなのに。そもそもはそれを聞き入れなかったあなたが悪いんじゃないか！だいたい、あなたのいうZCの所為でこっちだって迷惑してるんだ！ああいう連中が超能力者ってことを前面に押し出して暴れるもんだから、ぼくみたいに関係ない人間まで超能力者ってだけで警戒されて。そもそもあなたの反超能力者発言、それこそテロリストのNP寄りなんじゃないのか？」

「何だとテメエ！」

「ちよつと！ストッププツ！」

メガネの反論に派手は激昂して右拳を上げ、光秋は体全体でどうにかそれを押し止める。

その時、

「やめなさい!」

「!?!」

鋭い声が路地に響き渡り、一瞬硬直した派手とメガネが表通りの方を見やると、一同の許に1人の警官が駆け寄ってくる。

—そういうや、八坂神社のそばに交番があつたな。誰かが通報したのか?—

ここまで来る途中に道路を挟んだ向かい側に1件あつたことを思い出しつつ、派手がとりあえず大人しくなったのを確認した光秋は、再び手帳を示して警官に歩み寄る。

「ESOの加藤二曹です」

「京都府警の涼宮巡查長です」

中年くらいの警官が応じると、光秋は現状を手短かに説明する。

「……なるほど。とりあえずこの人の言う通り、ここは両成敗つてことでお開きにしましょうよ。幸いケガ人も出てませんしね。もともと、まだ続けたいと言うなら、然るべき所でやってもらいますか?」

「い、いや……」

「もう結構です……」

やんわりと、それでいて有無を言わせない中年警官の仲裁にそれぞれ応じると、派手

は表通りへ、メガネは路地の奥へ心なしか速足で向かい、隅で狼狽していた女もほつとした様子で一礼して路地の奥へ歩き出す。

3人の姿が見えなくなると、光秋は深々と頭を下げる。

「どうもありがとうございます」

「いいえ。わたしらはこれが仕事ですから……ただね、二曹」

「はい？」

「非番中だったとはいえ、あなたもESOなんだから、これくらいの揉めごと、一人で抑えられなきゃダメですよ」

「……はい……」

「それでは」

耳に痛いことを言われて消沈する光秋に応じると、中年警官は表通りに停めてある自転車に跨って八坂神社の方向へ走っていく。

——確かななあ……まあ、沈んでる理由はもう一つあるのだが……——

中年警官の指摘に嘆息を漏らす一方、先程の派手とメガネのやり取りを思い出しながら、光秋は表通りで待っている綾の許へ向かう。

「すまん。待たせた」

「うん……」

応じると、綾は浮かない顔を俯ける。

「…………どうした？」

「……アキが困ってる時、あたし何もできなかった……ケンカ止めるの手伝わなきゃって思っても、足が竦んじやって……法子が代わるように言ってた気がするけど、その時は上手く聞こえなくて……通報するようになっていうのは聞こえたけど……」

「ああ。さっきのお巡りさん呼んでくれたのお前さんか。それだけでも充分助かったよ。ありがとう」

「うん……」

礼を言う光秋に応じるものの、綾の表情は優れない。

「あんま気にすんな。お前さんがああいうの苦手なこと、知ってるからさ。過ぎたことを悔やんでも仕方ないよ……それより、早く適当な場所見付けて八ッ橋食べよう」

「うん……」

言いながら光秋は八ッ橋の袋を持ち直し、未だ引き摺っている様子の綾を左手で引いて見物を再開する。

——もつとも、僕もお巡りさんの注意気にしてるんだけどな……それより——
気分を変えることも兼ねて、光秋は先程の口論の一部を思い出す。

——巷のケンカレベルでさえNPやZCの名前が出るなんて。この間の事件の影響は

思った以上に強いようだ……あんなふうには“壁”を造り合う言動こそ、こういう事態を一層悪化させるかもしれないのに……と、偉そうなことをいいつつ、そうなるきつかけたる事件を防げなかった僕たちESOや警察にも責任はあるんだが……

俯き加減で歩き続けていると、2人は幅広の橋の許に差し掛かる。

「……川か」

「鴨川だね」

仲裁の件の反省以降ぼんやりしていた光秋が辺りを見回すと、綾が知った様子で応じる。

「……この下は歩けるのか」

橋の手前で立ち止まって下を見下ろすと、光秋はそこに寮近くの川のような河川敷を認める。

「せっかくだし、こっち行ってみるか？そこでベンチかなにか見付けてき、川見ながらハツ橋食べよう」

「いいね。行こ」

河川敷を眺めていて浮かんだ案に綾が応じると、2人は右の脇道に逸れて坂を下り、左手に鴨川を眺めながら上流側へ向かって歩みを再開する。

少し進んだ所にベンチを見付けると、2人は並んで腰を下ろし、光秋は袋から出した八ツ橋の箱を開いて2人の間に置く。

「綾から先選びな。好きなどうぞで」

「それじゃあ……まずこれかな」

勧める光秋に応じると、綾はあんこ味、抹茶味、チョコレート味がそれぞれ2個ずつ入っている中からあんこ味を選び、それを見た光秋もチョコレート味を手取る。

「じゃあ、いただきます」

「いただきます」

光秋に続いて言うと、綾は手に取った八ツ橋を一口かじる。

「うん！甘くて美味しい！」

「こつちも。チョコもなかなかいけるな。ところで、それこしあん？」

「こしあん？」

自分の分を食べ切って問う光秋に、綾は言葉の意味がわからず訊き返す。

「あんこの原材料、つまり小豆の形が残ってないあんのことだよ。ちなみに、残ってるのは粒あんな」

「……残ってないけど」

「じゃあこしあんだ。そっちの方が好みなんだよ」

さらに一口かじって中身を確認する綾に応じると、光秋は笑みを浮かべてあんこ味に手を伸ばす。

と、

「あ、待って！」

「？」

突然の綾の制止に反射的に手を止めると、綾は八ッ橋の残りを食べ切り、光秋が手を付けようとしていたあんこ味を取って、

「はい、あーん！」

言いながら、左手を手皿にして差し出してくる。

「……お前さん、またそんな……」

「いいじゃん。あーん！」

「……あ」

呆れながらも大人しく口を開け、八ッ橋を入れてもらうと、光秋は一口で口に含み切ったそれを咀嚼する。

「……うん。チョコもいいが、典型的なあんこもなかなか」

「じゃあ次は」

「……りょーかい。どっちがいい？」

もの欲しそうな目を向ける綾の意図を理解すると、光秋は八ッ橋に手を伸ばす。

「チョコ」

「ん」

返答を聞くとチョコ味を手に取り、行き過ぎる周りの人たちの視線を若干意識しながら、光秋は腹を決めてそれを差し出す。

「はい、あーん……」

「……うん！美味しいね！」

一口に食べ切り、咀嚼すると、綾は顔一杯に笑みを浮かべる。

単純に八ッ橋の味だけを言ったわけではないだろうと思いつつ、光秋は残り2つになつた箱の中身を見る。

「あとは抹茶味が2つか……」

言いながら、その内の1つに手を伸ばす。

「ちよつと待って」

「？」

「最後は食べさせ合いっこしよ」

「……そうくるか」

綾の提案に呆れ顔をさらに濃くし、しかしどこか納得もしながら、光秋は返事代わり

に途中で止めていた手で八ツ橋を取る。

綾も最後の1つを取ったのを見ると、これが最後と割り切つて声を合わせて差し出し合う。

「はい、あーん……」「はい、あーん！」

光秋は普段と変わらず、綾は嬉々として言いながら、互いの口に八ツ橋を入れ合う。

「……うん！これも美味しい！」

「……まあな。抹茶風味ってなんか美味しいよな」

「だから、そういうことじゃないんだけどなあ……」

よく味わつた上で率直な感想を漏らす光秋に、綾は不満そうな顔を浮かべる。

食べ終わった箱を袋に片付けてしばらく、2人は特になにをするわけでもなく、周囲の景色——目の前を流れる川、河川敷を疎らに行き交う人々、土手の上を走る車——を呆然と感じる。

「………そういえば、夏もこんなふうに河川敷でぼーつとしてたよな」

川を眺めて呟きながら、光秋はその時のことを思い出す。

「あの後だよな、NPの蜂起事件があつたの。そこで綾がニコイチのこと知って、ちよつと動揺して……」

「あの時は……」めん

入室拒否したことに罪悪感を覚えたのか、綾は顔を俯ける。

「いや、ちゃんと説明しなかった僕も悪いんだし……そもそもそれはもういいんだよ……で、その後陸軍に追われて、お前さんが眠っちゃって、合同演習でツアリングと戦ってる時にちよつとだけ出てきてくれて、それからいくらも経たずに黒球さんが来て、ナイガーと戦って、またお前さんが出てきてくれて……秋田での戦いでも助けられた気がするしな」

「?……黒い人型の時は、あたしなにもしてなかったと思うよ。そもそも今みたいにちゃんと起きてたわけじゃないし」

「いや、坂本さんの乗ったヘリを捕まえる時、いい具合に頭を冷やしてくれた気がしてさ」

「?」

身に覚えのないことに綾は首を傾げるが、光秋はかわまず続ける。

「その後法子さんの家に行って、そこでお前さんがちゃんと起きて、今みたいに話せるようになって、その後この間の襲撃事件、僕の転属騒動、さっきのケンカに今さっきの八ツ橋の食べさせ合い……半年にも満たない間にいろいろあったというか……波瀾万丈ってやつかね」

思い出一つ一つが脳裏を過り、その内容のあまりの多様さに、感慨深く呟く。

「……来週には行っちゃうんだよね。東京……」

「……ああ」

一度は上がった顔を再び俯けながら呟く綾に、光秋は小さく返す。

「……あたしと法子のことを考えるって言った矢先にこれだ」

「それは、不可抗力とはいえずまないと思ってる。僕自身、奥さんとの約束を果たせなくなるのは気分がいいもんじゃない。でも、ESOの職員として暮らしてる以上、さっきのケンカの仲裁と同じ様に、指示には従わなければならない……」——結局はパターンしか言えず、か……—

もつと違うことが言いたいはずなのに、結局は当たり前のことしか言えない自分に、光秋は憤りを覚える。

と、俯きから立ち直った綾が、なにか思い出した様な顔をする。

「東京っていえばさ……この間の事件でアキが助けたあの人もいるんだよね？」

「涼子様？ ああ、いるんじゃないか？」——「さる御方」って言ってたし、やっぱり東京に家があるのかな？——

応じつつ、多少の憶測を交えながら、光秋はパーティーで会った黒い長髪美女を思い出す。

——ホント美人だったよなあ。アジアンビューティーっていうのか……—「あの、痛い

です綾さん……」

迎賓館裏で初めて会った時の物静かな美しさを思い浮かべていると、綾に念力で髪を引つ張られる。

「光秋、またあの人のこと考えてたでしょ」

「……まあ、ちよつと」

隠しても無駄だと思つて正直に答えると、綾は頬を膨らませてそつぽを向く。

が、それも束の間。すぐに表情を陰らせる。

「……東京行ったら、あの人と会う機会増えるでしょ……光秋が言うみたいに、あの人綺麗だったし……」

「いや、それはない」

「？」

すぐに否定を返す光秋に、綾はついさつき聞こえてきた思惟とは違う発言に思わず顔を向ける。

「今『美人だ』つて思つてたでしょ？」

「いや、それはそうだけど……会う機会が増えるつてことはないつて言つたんだよ。見たところ僕と大して歳変わらなかつたし、さる立場ならたぶん大学通いだろう。それに対して僕は本部で仕事。そもそもああいう人がESOにしょつちゆう用があるなんてな

いし、会ったとしてもパーティーの時みたいに遠くから警護するくらいだよ。襲撃の時の距離感がおかしかったんだ」

「……そうなのかな？」

「だろうと思うよ……お前さんが何を不安がつてるかは察しがつくが……少なくとも、僕の方から目移りすることはないよ。お前さんと法子さんの問題を解決しない限り、進むも退くもできないんだ」

半分は自分に言い聞かせる様に告げながら、光秋は綾の目をしっかりと見据える。

「……そっか……そうだよねえ……それならいいや」

その様子に安心したのか、昔話を始めて以降どこか暗かった綾の顔に、ようやく微笑みが浮かぶ。

それを見て光秋も安堵すると、左手首の腕時計を確認する。

「12時か。ちょうどいい。昼にするか……て、流石に何処も混んでるかな？のんびりしすぎたか？……まあいいや。綾は何処に行きたい？なにか食べたい物あるか？」

「えっ……と……ね……う……」

「綾？……法子さん？何か？」

綾が応じようとしている途中に交代した法子に、光秋はなにごとか問う。

「別に。昨日私と交代したのが今頃だったから、そろそろ代わってって」

「ああ」

簡潔に応える法子に、光秋は納得して頷く。

「でもいいんですか？　なんか中途半端なタイミングだったけど」

「私たちには私たちの取り決めがあるの。気にしないで」

「……そういうもんですか」

「そういうもんです」

あつさり答えながら、法子は左手首に巻いていたシユシユで髪を一本に束ねる。服装は変わらないのに、それだけで途端に“法子らしく”なる。

「それより、お昼食ベに行くんですよ」

「ええ。何処か行きたいとこあります？」

「鴨川のそばはいろいろ並んでるからね。ちよつと歩いて見てみよ」

「わかりました」

応じると、光秋は袋片手に立ち上がり、左隣に法子を伴って土手の上に続いている最寄りの坂へ向かう。

と、歩き始めてすぐに、法子は光秋の左手を右手で握ってくる。それだけなら昨日の移動と同じなのだが、

「……あの、法子さん？」

互いの指を絡める様な握り方に、光秋は少し戸惑ってしまふ。

「なに？これくらいどうってことないでしょ。綾は腕に抱き着いてるんだよ？」

「そうですけど……なんと言うか……普段の法子さんだと考えられないというか、大胆というか……」

「私だつてこういう手の繋ぎ方くらいするよ。綾とイチヤイチヤしてるの見てて妬けちゃったのもあるしね」

「はあ……」

顔は穏やかだが何故か陰を感じさせる法子に、光秋は若干押され気味に応じる。

72 久方の京都小旅行 後編

坂を上り、鴨川周辺に建ち並ぶ飲食店を見て回ること数分。

中規模の蕎麦屋に入った2人は、店の隅の2人席に向かい合って腰を下ろすと、光秋は足元に、法子はその上にカバンを置く。

「やっぱけっこう混んでますね」

「お昼時だからね……」

人でごった返している賑やかな店内を見回す光秋に、法子はテーブル端のメニュー表を取って応じ、広げたそれを2人で見る。

「……じゃあ僕、きつねうどんで」

「……蕎麦屋だよ？」

「蕎麦よりうどんが好きなんですよ」

「そういえば、食堂なんかでもよく食べてるよね。じゃあ私は……天ぷら蕎麦にしよっかな」

各々食べたい物を決めるや、それを見計らったかの様に店員が湯呑に入ったお茶を持ってくる。

その店員に注文を頼むと、法子はお茶を一口飲んで口を潤す。

「……ところでさ」

「……はい？」

どこか沈んだ様子で語り掛けてくると、同じくお茶を飲んでいた光秋は湯呑を置いて向き合う。

「さつきはごめんね。ケンカの時、助けに行けなくて……」

「ああ。仕方ないですよ。さつきも言ったけど、綾はああいうの苦手なんだし」

「そういうことじゃなくてね……私あの時、代わろうとしたんだけど、どういうわけか上手いかわなくて……仕方なく通報するように言うのが精一杯で……」

「……そういえば綾もそんなこと言っていましたね。調子の良し悪しでもあるのか……？ま、それはともかく、丸く治まったんですし、綾にも言った通り過ぎたことを悔やんでも仕方ないですよ」

「そうなんだけどね……」

どうということはないふうに光秋は返すが、法子はどこか煮え切らない様子だ。

と、先程頼んだ2人の注文が運ばれてくる。

——いいところに来てくれた——「とりあえずこの話はここまで。食べましょうよ。いただきます」

「……いただきます」

タイミングのよさに内心感謝しつつ、光秋は敢えて強引に話を終わらせてきつねうどんをすすり始め、法子も渋々ざるの蕎麦を適量取って椀のつゆに浸ける。

「……………温まりますねえ」

煮え切らない話題が終わった代わりに訪れた沈黙に耐えかねて、光秋は食べたうどんの感想を漏らす、

「私は冷たいのなんだけどね」

「……失礼しました」

法子のあつさりとした返答に、すぐに話が尽きてしまう。

——またこれだ。すぐに話題が尽きてしまつて……—

再び訪れた沈黙をどうにか破ろうと、光秋はうどんをすすりながら頭を巡らせる。
と、

「そういえばさ」

「……………はい？」

唐突に口を開いた法子に内心安堵しつつ、うどんを呑み込んだ光秋は顔を上げる。

「光秋くん、綾とはけっこう仲いいよね。昨日から何度もご飯食べさせ合いつこしてたし」

「あ……いや、あれはあいつがやってたのに合わせたっていうか……」

どこか棘のある視線で聞いてくる法子、その完全な不意打ちにその時のこと——近いところで鴨川での八ツ橋のこと——を思い出し、光秋は気まずさと恥ずかしさを同時に覚える。

『『合わせた』ねえ……じゃあさ』

「?」

光秋の気持ちの整理がつかない間にさらに続けると、法子はおもむろに天ぶらの一つを取ってつゆに浸ける。

そして、

「私も、あーん!」

「法子さん……」

笑顔で天ぶらを差し出してくる法子に、光秋は既視感と新鮮さ——本来相反する2つの感覚を同時に覚える。

——既視感は服装が同じ所為……新鮮さは法子さんと綾の雰囲気の違いからくるのか?……しかし……——「法子さんまでそれやるんですか?」

冷静な部分で自己分析する一方、予想外の行動をとる法子に思わず呟く。

「綾も言ってたでしょ。仲よしの間じゃこうするって……それにさっきも言っただけ、

私だつてちよつとは妬けるんだよ?」

「……わかりました」

努めて笑顔で、しかし最後の方はどこか悲し気に応じる法子に短く返すと、光秋は静かに口を開けて天ぷらをいただく。

「……これは烏賊かな」

食べる前に衣の合間から見えた白い部分と独特の歯応えにそう思いつつ、衣につゆが染み込んだ烏賊を咀嚼する。

「どう?」

「……美味いですね。適度にふやけた衣と烏賊の弾力がなかなか」

法子の問いに、烏賊を呑み込んだ光秋は思ったままを答える。

「そつか……じゃあ……」

「……りよーかい」

それに返す様に口を開ける法子に、綾とのやり取りの経験から意図を察した光秋は、渋々うどんを数本すくつて、汁が垂れないようにどんぶりごと法子の方に寄せて口に運ぶ。

「やつぱり、あの一言言った方がいいのか?でも法子さんだし……その法子さんがこういうことしてるんだよな……ええい!ここまで来たら……」 「はい、

あーん」

「あーん！」

しばしの思案の後、結局言った光秋に、法子は喜色を浮かべて差し出されたうどんをすすする。

「うん！蕎麦屋のうどんっていうのもなかなか美味しいね」

「そりゃよかった」

笑顔で感想を述べる法子に應じると、光秋はどんぶりを自分の許に戻して食事を再開する。

——法子さんまでこれをやるとは……綾のを何度か見たからだとは思うが、なまじ似合ってるから尚のこと……………——

もやもやした気持ちを持って余しながら、光秋はうどんをすすり続ける。

食事を終え、法子が押し切る形で全額支払うと、2人は店を出る。

「で、この後どうしましょう？法子さんは何処に行きたいとこありますか？」

「そうだなあ……」

カバンを左肩に掛け直しながら問う光秋に、左隣の法子は顎に手を当てて空を見上げる。

——こういう「知的」とでも言う様な仕草は綾にはないよなあ。法子さんの場合、それ

が様になつてゐるからなんとも……—

その様子に、心の中で素直な感想を漏らす。

と、法子は下ろした顔を向けてくる。

「正直、私も何処に行きたいってないんだよね。綾が言つてた様に、光秋くんと一緒にいられることが大事っていうか……」

「言つてましたね。バスの中で……」

後半は薄つすら照れながら言う法子に、光秋も少し気恥ずかしさを覚えながら返す。

「でも、何処でもいいっていうのも困るし……」

「なんですよねえ……じゃあ、この辺テキトーに回るつてどうです？ 面白い場所を見付けたらそこに行つて、それが終わったらまた歩いて——要はぶらぶらするつてことで」

「それがいいかもね。いろいろ見れそうだし。じゃあまず右に行くか左に行くか、ジャンケンで決めよ」

「ジャンケン？」

「私が勝てば右、光秋くんが勝てば左」

「なるほど。じゃあ……」

「「ジャンケン、ポン」」

結果は光秋がパー、法子がチヨキだ。

「私の勝ちだ。じゃあ右だね」

「そんじゃ、行きますか」

「うん！」

光秋に应じると、法子は指を絡める様に手を繋ぎ、2人は四条通の方へ向かう。

十字路に差し掛かる度にジャンケンを行い、勝った側に進むことを続けて十数分。

行く宛てもなく四条通周辺をぶらぶらしていると、光秋は右前方にある店を見付ける。

「……………あそこって」

「古本屋だね」

法子が言う様に、そこは日本州内に留まらず合衆国各地に店舗を出している大型古書店だ。

歩道側にはめられた窓ガラス越しには、本を一杯に収めた多数の棚が見える。

——古本屋かあ……………

「入ってみる？」

「え？……………ああ……………」

法子からの唐突な提案に一瞬意表を突かれるものの、束の間視線が店に釘付けだった

ことを思い出し、素直過ぎる反応に光秋は少し恥ずかしくなる。

もつとも、恥じらいと誘惑に勝てるかは別問題だが。

「……じゃあ、ちよつとだけ」

ものの数秒で自分の欲求に膝を折るや、自分でもわかるくらい軽い足取りで自動ドアをくぐる。

「……………」

ガラス越しでない大量の本を前に、心なしか気分も上気する。

「ここからは昨日みたいに別々に回ろうか。しばらく自由に見て後で合流」

「それで」

「じゃあ後でね……実は、私も入ってみたかったんだよね」

薄っすら笑みを浮かべて別れる法子を見送ると、光秋も早速小説のコーナーに足を運ぶ。

「……………」

本棚に顔を近付け、容量一杯に並んだ背表紙を指でなぞりながら、右から左へ、上から下へと無心で移動していく。

「……………」この曲……歌は知らないけど、声は年末のテレビで歌ってたグループと同じみたいだな。昔の流行歌か?……どうであれ、こういうのもいいな!——

不意に聞こえてきた店内放送で流れる歌、それを聞きながら店内を回る現状にさらに気分をよくしながら、光秋は柵巡りを続ける。

気になった本を手にとって数ページ立ち読みし、それを何度か繰り返ししながら店内を一通り回る。その中で気に入った2冊の文庫本を脇に抱えてレジに向かい、会計を済ませてビニール袋を受け取ると、それをカバンに仕舞いながら出入り口のそばに移動して法子を待つ。

——とんだ掘り出し物に遭遇したな。いい買い物だった——

以前話に聞いて気になっていた本が2冊も手に入ったことに思わず頬を緩めながら、その本が入ったカバンを微笑みを浮かべて見やる。

と、ビニール袋を持った法子が歩み寄ってくる。

「ごめん、待った？」

「いえ。僕も今来たところですから。にしても、思ったよりけっこういましたよね……あ、もうすぐ4時だ」

言いながら光秋が腕時計確認すると、3時50分を指そうとしている。

「ホントけっこうでしたね。本漁りに夢中で気付かなかったけど……とりあえず出ますか」

「だね」

法子が頷くと、2人は手を繋いで古本屋出る。

少し歩いた所で一旦止まると、光秋は法子がつ持っているビニール袋を見やる。

「それもカバンに入れますよ。その方が手荷物減るでしょ」

「いいの？じゃあお願い」

申し出に素直に応じるや、法子は本の入った袋を渡し、それを光秋はカバンに仕舞う。

「さて、中途半端な時間になっちゃったけど……」

「もうちよつとぶらつかない。で、6時くらいにどつかのお店でご飯にしよう」

「……それがいつか……じゃあ、もうしばらく」

法子の提案に応じると、光秋は手を繋ぎ直して、古本屋に入る前の要領で再び歩き出す。

「にしても、古本屋もいいですね。書店にはない独特の雰囲気があつて好きだ」

「わかるじゃん。綾も気に入ったみたいでね、ちよくちよく交代しながら回ってたよ」

「あ……」

自分の感想に返してくれた法子の言葉に、光秋は古本屋巡りの興奮で頭の隅に押しやられていた今回の遠出の主旨を思い出し、法子に対して申し訳ない気持ちになる。

「そのことなんですが……なんかすいません。一緒にいることが大事って言われながら、僕一人ではしいじやって……」

「え？……ああ、さっきの古本屋のこと？いいよ。それを言ったら私や綾も一人で楽しんでたんだし。息抜きにちよつと離れるくらいさ」

「はあ……」

「それに本屋なんかは、人それぞれ行きたいコーナーが違うんだから、こればかりは2人じゃ回れないよ」

「それはそうでしょうけど……」

なんというこのない様子で法子は返してくれるが、それでも光秋は申し訳なさを拭い切れない。

——残り少ない時間、少しでも一緒にいようって話だったのに………!?——

そんな後悔を察してくれたのかはわからないが、唐突に身を寄せてきた法子に、光秋は一瞬心臓を跳ね上がる。何着ものの服を挟んどはいえ腕と腕が触れ合う絶妙な距離感は、綾の抱き付きに慣れつつある身にも別種の刺激を与えてくる。

「そういうふうと思うんだったらさ、この先はしっかり付き合つてよ。それでいいでしょ」

「……それもそうですね」

その一言でやつと立ち直ると、ちょうど十字路に差し掛かった2人はジャンケンで行く方向を決める。

光秋がグーを出して勝ったため、右に曲がる。

「それにさ、古本屋は古本屋で楽しかったでしょ？光秋くんもいい物買えたみたいだし」
「それはまあ……で、何で知ってるんです？綾のテレパシーですか？」

「店を出る前に合流した時、嬉しそうな顔してたでしょ。それで充分わかるよ」

「……敵わないなあ、法子さんには」

何もかもお見通しな様子の子の法子に心の中で諸手を挙げながら、光秋は苦笑いを浮かべて歩き続ける。

午後6時。

「そろそろ夕食にしますか？」

「そうだね。どっかいいお店ないかな……」

日が落ち、街灯や周囲の看板が辺りを照らすようになった頃、腕時計で時刻を確認する光秋に応じながら、法子は周囲を見回す。

「……せっかくだし、あそこ行ってみない？」

言いながら左手で1件の店を指さし、それを追った光秋は、普段ならまず入らない高級感溢れる洋食店を目に止める。

「また高そうなの……いやでも、『しっかり付き合う』って約束したしな……ここは腹を括るか……—」「じゃあそうしますか」

DDシリーズに対峙する時の3割くらいの覚悟を決めながら応じると、法子に先導される形で店のドアをくぐる。

ドア端の鈴が澄んだ音を鳴らすと店の奥から店員が現われ、法子が人数を告げると、2人は席に案内される。

「……ここは空^すいてますね」

テーブル下にカバンを置いて腰を下ろしながら、光秋は自分たちしかない店内を見回し、脳裏に浮かんだ昨日の同じ時間帯のレストランと比較しながら呟く。

「……やっぱ、いい店だから入り難いのかな？」

「日曜の夕方つていうのもあるんでしょ。明日からまた仕事だから。あと目立つ場所じゃないから、観光客の人には見付け難いのかも」

「ああ、なるほど……」

咄嗟に浮かんだ推測に推測で返す法子に、光秋はその方が妥当かと納得しながら応じる。

その間にメニュー表が2冊運ばれ、各々ページをめくって食べたい物を決める。

「……予想はしていたが……0^{まる}多いな……」

さつと流し読みしただけでも圧倒的に目に付く4桁の値段の数々に、光秋は思わず心の中で後ずさつてしまいそうになる。

それでもどうにか踏み止まり、好みと値段を擦り合わせて注文を決めると、ちょうど法子も決め終わつたのを見て呼び出し機を鳴らす。

「ステーキセツトを」

「私もそれで。あ、あとブドウジュース2つ」

「え？」

「かしこまりました」

付け加える様な法子の注文に意表を突かれていると、確認する間もなく店員は厨房の方へ行ってしまう。

「ブドウジュースって……2つって僕ですか？」

「そうだよ。カッコイイ大人ならワインでも頼むのかもしれないけど……ほら、私弱いし」

「ああ、なるほど」

最後の方は照れながら話す法子、その格好つけようとしてつけきれない様子を愛らしいと感じて微笑みを浮かべそうになるも、光秋はそれを失礼と思つて緩みそうになる頬を強引に抑える。

「普段まず入らないようなオシャレなお店に入ったからさ、せっかくだしせめて気分だけでも思つて……」

「そういうことですか。気遣いありがとうございます。案外ブドウジュースがちょうどいいかもしれませんね。僕まだ未成年だし、明日仕事だし」

「……明日、か」

感謝と共に思ったままを伝えると、法子は少しだけ寂しそうな顔をする。

「明日、か……今日別れたら、あと1週間なんだよな……」

その理由を察して、光秋も少しだけ胸が寒くなる。

「……………」

「……………」

そうして互いに口が重くなり、2人の間に外気にも負けない冷たい沈黙が訪れる。

しかし、それも束の間。セットメニューのサラダとブドウジュースが運ばれてくるや、光秋は頭を軽く振って寒さを払う。

「あんまり暗くなるのもいけないですね。今はとにかく、ここでの食事を楽しみましょう」

「そうだね。ちょうど来たし、早速」

言いながら法子も気持ち切り替えると、ブドウジュースが注がれたグラスを取り、意図を察した光秋もそれに倣う。

店側の配慮か、もともとそうして出すのかは判らないが、一本足のワイングラスに注

がれたブドウジュースは、その赤黒い色合いと合わさって、さながら本当にワインのようだ。

「乾杯！」

息の合ったタイミングでグラスを触れ合わせ、カチンという軽快な余韻を聞きながら互いに一口飲む。

「けっこう美味しいね。それなりの値段だったから期待はしてたけど、いいものなのかな？」

「なんじゃないですか？ちよつと酸っぱいところがいいですね」

感想を述べる法子に応じながら、光秋はグラスをフォークに持ち替えてサラダを食べ始める。

一口サイズに千切ったレタスと紫レタス、トマト、みじん切りにしたニンジン、タマネギ、パプリカなどをゴマドレッシングで和えたさっぱりとした味が、舌に残っていたブドウジュースの甘味を程よく薄めてくれる。

サラダを食べ終えて口をさっぱりさせると、それを見計らったかのように盆を持った店員が現れ、使い終わった皿とフォークの代わりに主役たるステーキと小ぶりのパンを置いていく。

「うわあ……！思ってたより美味しそう……」

「鉄板じゃなくて皿っていうのがまた豪華な感じしますよね。えーっと、フォークがこつちで、ナイフが……」

感動の声を上げながら、おそらくは日高に送るのであろう画像を携帯電話で撮影する法子に応じつつ、光秋は右手にナイフ、左手にフォークを持ってこつてりとした香りが漂うソースのかかったステーキを切り分ける。普段とは違って左手にフォークを持つ感覚に少々戸惑いながら、切れ目から赤身の覗く一切れをよくソースに絡ませて口に運ぶ。

「……………」

口の中に広がる旨味にしぼし言葉を失い、

——……………こないいもの食って、罰^{ばち}当たらないかな……………

心の中では思わず腰が引ける。

「…………『美味しそう』じゃなくて、本当に美味しいね。柔らかくてジューシーで…………」
「僕はあまりの美味さに怖くなってきましたよ…………」

目で見た時以上の感動を漏らす法子に、光秋は本音で返す。

——…………いや、しかし、いつまでもビビッているわけにもいかないよな……………しつかり付き合うって約束したんだし、ここは一丁！——

心中に気合いを入れて引け腰から立ち直ると、光秋はブドウジュースを一口飲んで気

持ちを落ち着かせ、ステーキを一切れ切り分ける。

「法子さん」

「ん？」

添えられていたブロッコリーにソースを絡めて食べている法子に呼び掛けると、光秋は切り分けたステーキにフォークを刺し、

「……どうぞで！」

僅かに緊張を含んだ声と共にそれを差し出す。

「……え？」

その行動に、法子は一瞬目を丸くする。自分や綾ならまだしも、光秋が自主的にこのような行動に出たことが余程意外だったようだ。

「……どうしたの？急に」

「いや、すっかり付き合いうって約束したから、偶には僕の方からと思って……とにかく！どうぞで！」

自分で説明して気恥ずかしくなりそうな気持ちをどうにか抑え、光秋はやや強い語調でさらにフォークを近付ける。

「……ありがとう」

あたふたしている光秋が可笑しかったのか、それとも何かしてあげたいという思いが

通じたのか、法子は礼と共に笑顔を向ける。

しかし一瞬後には、それが細目のイタズラの笑みに変わる。

「でもそういうことなら、『どうぞ!』じゃないでしょ?」

「……………やっぱり言わないとダメですか?」

「そりゃあ、中途半端じゃねえ」

言わんとすることを察して緊張で強張っていた表情をさらに硬くする光秋に、法子は可愛いものを観る様な笑みを向ける。

しかしそれも束の間、DDシリーズに対峙する時の4割5分程の覚悟を決めると、光秋は法子の顔にぶつかる勢いでさらにフォークを突き出し、

「はいーあーんっ!」

厨房にまで届くかと思える程の大声を上げる。

「…………ごめん。私もからかいが過ぎたよ……」

あまりの声と、メガネのレンズで拡大された真剣な眼差しに小さくなりながら謝罪すると、法子は差し出されたステーキを食べる。

「…………うん。美味しい」

「…………まあ、ものは一緒ですからね」

咀嚼して笑顔を浮かべる法子を見て、緊張から解放された光秋は脱力しながら呟く。

「そんな身もふたもないこと言わないでよ……え？あ、うん」

そんな光秋に口を尖らせていると、不意に法子は見えない者の呼び掛けに応える様に二、三言呟き、一瞬項垂れて綾と代わる。

「アキ！あたしにも！」

「……今法子さんの時間だろう？」

「ちよつとだけだよ。それよりさ！」

「わかったよ。ステーキでいいか？」

「うん！」

——……ホント、去年までのもどかしさが嘘みたいにお手軽になっちゃって——

目の前の光景に率直な感想を抱きながら、光秋は切り分けたステーキをフォークに差して綾に差し出す。

「はい、あーん」

「あーん！」

慣れた手付きで口元に持っていったそれを、綾は満面の笑みで口にくわえる。

「うーん！法子が食べた時も感じたけど、やっぱり美味しいね！」

「そりゃよかった」

「じゃあ、今度はアキも」

言うや綾は傍らのパンを手に取り、程よい大きさに千切ったそれを光秋に差し出す。

「はい、あーん！」

「……さすがにこの返しは予想外だな」

直接指で摘まれたパンを見ながら思ったままを呟くと、光秋は綾の指を噛まないように注意してそれを食べる。

「……なんか、ウチの犬みたい………白い犬だけにか？」

自身の様子に向こう側で飼っていた犬におやつをあげる時を連想しながら、口の中のパンを咀嚼する。

「どう？」

「……このパン、よく味わうと少し甘いな。なかなかいいぞ」

「……だからそういうことじゃないんだけどなあ……」

感じたままを答える光秋に、綾はどこか諦めた様に呟く。

しかし少しして、綾は怪訝な顔をする。

「ところでさアキ、法子の時はガチガチって感じだったのに、あたしの時はなんかあつさりしてない？」

「え？………ああ」

言われて光秋は、さつきまでの自分を振り返ってみる。と、確かに法子の時は終始緊

張気味に、綾の時は自然体で食べさせていたことに気付く。

「言われてみれば……まあ、お前さんは昨日の夕飯からこの調子だしな。慣れちゃったのかも」

「……………なんか、複雑」

その呟き通り、綾は「慣れた」という言葉に嬉しさと怒りが混ざったような混ざらなような、なんとも複雑な表情を浮かべる。

そうしている間に催促されたのか、見えない者に渋々頷いた綾は一瞬項垂れて法子と代わる。

「綾もやるねえ……」

「思わず家で飼ってる犬のこと思い出しちゃいましたよ」

少し前にパンを摘まんであげた指を眺める法子に、光秋はその時感じたことを漏らす。

「そういえば犬飼ってるんだよね……なんて名前？」

「サブローです。みんなもつばら『サブ』って呼んでるけど」

6月に見た携帯電話の待ち受けに載っていた家族写真のことを思い出しながら、好奇心から訊く法子に、光秋はすっかりご無沙汰な愛犬の白い顔を思い浮かべながら答える。

と、

「……………どうしたの？」

答えるや、ナイフとフォークを置いて表情を曇らせる光秋に、法子は顔を寄せながら問う。

「いえ、あいつとも、なんだかんだで10カ月くらい会ってないんだなって思ったら、ちよつと寂しくなっちゃって……」

応じながら、撫でた時のふさふさとした毛並みの感触を掌に思い出し、光秋は知らぬ間に自分の右手を見つめる。

——家にいる間は、毎日顔合わせてたのにな……あいつの散歩も僕も仕事だったわけ………いや！これ以上はよそう。どの道、自分の意思で京都の大学に行くって決めた時点で、長らく会えなくなるっていうのはわかってたんだ。それがちよつと歪になっただけだ……………——

そう思うことで掌の感触を——寂しさを隅に押しやると、気まずそうな顔をしている法子を見る。

「すみません。また変なこと話しちゃって」

「ううん。私の方こそごめん。今のは私の方が考え足りなかったよ……」

「そんなことは……まあいいや。今は今を楽しみましょう」

「……そうだね……………じゃあさ」

そう言つて気持ち切り替えると、法子は切り分けたステーキを光秋の口に持つてくる。

「流石に私はあそこまでできないけど、お返しをね……はい、あーん」

綾がパンをあげた時のことを思い出しか、若干照れ臭そうに言いながらそれを差し出してくる。

「……綾にはああ言つたけど……法子さんの方も慣れてきましたね……」

昼食時、さらにいえば昨日の夕食時から何度か繰り返したやり取りを思い返し、このやり取りそのものに慣れつつある自分を自覚しながら、光秋はその一切れをいただく。

それからパンをかじりながらステーキを食べ切り、カップに注がれたコンソメスープを飲み終えると、デザートに皿に盛られたバナナアイスが運ばれてくる。

それを法子が携帯電話で撮影するのを眺めつつ、光秋は半球に盛られた白にスプーンを入れ、傍らの赤いソースと絡めて口に運ぶ。

「どう？」

「……優しい甘さですね。このソース……ブルーベリーかな？その酸っぱさと合わさつてなかなかですよ」

舌の上に残った味を感じながら、法子の問いに光秋は思ったままを答える。

「どれどれ……うん。バニラの甘さとブルーベリーの酸っぱさがなんとも……」

言いながら頬を緩ませる法子を眺めつつ、光秋はアイスを食べ切り、ブドウジュースを飲み干してステーキセットを完食する。

「食べたねえ……」

「ですねえ……たまにはこういう贅沢もいいですね……さてと」

互いに満足感を覚えながらひと息つくと、光秋はカバンを提げながら立ち上がり、法子もそれに続いて会計へ向かう。

「法子さん、今回は僕にも払わせてください。せめて自分の分だけでも。流石にあれだけの額を女の人に払わせるのは気が引けるんで」

「ホント光秋くんって変なところで臆病だよね……まあでも、確かに昔上官に奢るなんてって言ったけど……今の私は光秋くんの彼女候補だしね。それくらいは甘えようかな」

「彼女候補って……」

おそらくは現状を端的に表現しただけの、しかし耳がむず痒くなる言葉に苦い顔を浮かべながら、光秋は法子と共に支払いを済ませ、手を繋いで店を出る。

「7時か……そろそろ帰りますか？」

「……そうだね」

腕時計で時刻を確認する光秋と、それに答える法子、互いに心なしか沈んだ声を交わすと、そこから一番近いバス停へ向かう。

「……」

「……」

店にいた時の緩やかな雰囲気から一転、互いに口が重くなり、それに比例する様に2人の周囲も重く感じる。

一方で、あるいはそんなだからこそ、どちらがというわけでもなく互いを握り合う手に力を込め、伝わり合う熱が「重さ」を緩和してくれる。

そうして歩くこと数分。

誰もいないバス停に着いた2人は備え付けのベンチに並んで腰を下ろし、何台も来るバスを眺めながら目的のバスを待つ。

しばらくしてやってきたバスに乗り込み、最後部席左側に並んで座ると、エンジンの微震を感じながら今朝出発したバス停へ向かう。

「……すっかり暗くなっちゃったね」

「ですね……」

道路脇の店から漏れる明かり以外暗くて何も見えない車窓を眺めながら呟く法子に、光秋はどこか寂し気に返す。

「……バス停着いたら、寮まで送りますよ」

「え？いいよ。遅くなるし」

「ちよつとくらい大丈夫ですよ。それに、法子さんも女の人なんだから」

「そういう気遣いならいいよ。私だってこれでも実戦部隊なんだし」

「そうでしょうけど……一応ね。あとは……僕の為と思つて」

言いながら、光秋は繋いだままの手に力を込める。

「……そういうことならね……」

言外の意図を察すると、法子は顔をやや赤くしつつ、小さく頷く。

バスに揺られて数十分。

各々小銭を出してバスを降りると、光秋と法子は離れていた手を繋げ、法子の寮を指す。

「………なんか喋らなきゃいけないのにな……」

沈黙に焦る気持ちとは裏腹に、光秋の口は貝の様に閉じたままで、結局はバスに乗る前の様に握り手に力を込めるだけに終始する。

そうしている間に、寮の入り口前に着く。

「………ありがとう。………まで来ればもういいよ」

「いや、………まで来たんです。部屋の前まで送らせてください」

もういいと言う割りには名残惜しそうな顔を向ける法子にやや強い調子で返すや、光秋は自分から手を引いて階段を上る。

光秋に先導される形で自室の前に来ると、法子は鍵を開けて部屋に入る。

「あ、そうだ……はい。法子さんと綾の分」

「ありがとね」

光秋が預かっていた本の入った袋をカバンから出して渡すと、法子は寂しそうに礼を言う。

「……じゃあ、また明日」

「はい。おやすみなさい」

ドアを支える法子に応じると、光秋は階段へ向かって歩き出そうとする。

と、
「あ、ちよつと待って」

「はい？」

すぐに法子に呼び止められるや、光秋は振り返って声がよく聞こえるようにと顔を寄せる。

刹那、左頬に微かな潤いと温かさを感じる。

「……………!!？」

数瞬かけてキスされたと理解すると、寄せていた顔を離れた法子がドアの合間からイタズラが成功した様な笑みを浮かべる。

「彼女候補でも、これくらいはいいでしょ。海外じゃ挨拶なんだし。じゃー」

一方的に言い切るや、法子は返事を待たずにドアを閉める。

「……………今のは、法子さん？それとも、綾……………」

自分の知っている法子ならしない行動、しかし綾の雰囲気ではなかった覚え。相反する情報と、それ以上に突然の深めのスキンシップに混乱しつつ、光秋はひとまず自分の寮へ向かう。

「……………それにしても、今日の……………実質デートは上手くいったのか？」

寮を出ながら混乱から立ち直ると、今日一日を振り返ってみる。

「……………まあ、多少踏んだり蹴ったりなところもあったけど、概ね上手くいったよな。八ツ橋もステーキも美味かったし」

ケンカの仲裁や古本屋の件が引っ掛かるものの、全体を視て可の自己判定を下すと、光秋は冷たい強風に追い立てられる様に家路を急ぐ。

73 見送る人たち

翌日、1月10日月曜日午前7時半。

いつも通りに寮を出た光秋は、晴天の下、寒気に追い立てられるに様に速足で支部へ向かう。放射冷却現象というやつだろうか、昨夜の帰り道よりも寒く感じる。

しばらく歩いて正門前に差し掛かると、正面から同じく寒気に追い立てられた法子が速足で近付いてくる。

「おはよう」

「…………おはようございます」

挨拶を交わしながら並んで歩くものの、光秋は昨日の別れ際の光景が脳裏にちらついで、どうしても法子の顔をきちんと見ることができない。

——いきなりキスだもんなあ…………ほっぺにだけ…………いや、いかんいかん！これから仕事なんだし、いい加減気持ち切り替えんと——

そう自分に言い聞かせ、軽く頭を振って昨夜のことを隅に押しやる。

それを待っていたかのようなタイミングで、法子が声を掛けてくる。

「昨日はありがとね、送ってくれて。あの後大丈夫だった？」

「はい。真っ直ぐ帰って、風呂入って寝ました……ところで、その……あの後、綾何か言ってませんでしたか？」

応じつつ、すぐにまた浮かべてしまったキスの記憶に、光秋は恐る恐る問う。

「あの後……あ……ちよつと睨まれたかな。『綾もやったでしょ』って反論しておいたけど」

「……そうですか」

自分の内外で火花を散らす法子と綾の様子を想像して気まずさを覚えるものの、それで今度こそ気持ちを切り替えると、光秋は法子と共に玄関をくぐってエレベーターに乗り込む。

——今は転属の件でいっぱいだけど、落ち着いたらこの件のことも改めて考えないとな——

午後0時。

午前中の勤務を消化した光秋は、一緒に訓練していた藤原三佐と共に食堂へ向かう。

——う……今回もキツイの避け損ねた……——

念の拳がまともに当たった右胸の下辺りを擦りながら注文を済ませ、トレイを受け取って空いている席を探す。

と、小田一尉の声が掛かる。

「三佐、加藤」

「おお、小田」

「竹田二尉と法子さんまで」

声が出た辺りに藤原隊一同がそろっているのを見て、藤原と光秋はそこに座る。

「珍しいですね、こんな時間に全員そろうなんて」

「お前と三佐がいない間に俺たちで相談したことがあってな、それを伝えようと待ってたんだよ」

トンカツ定食に箸を付けながら感想を漏らす光秋に、小田が一同を見回しながら応じる。

「伝えるって、なんだ？」

「週末に加藤の送別会開こうと思ひまして」

「送別会？ 僕のですか？」

藤原に应じる竹田の返答を聞いて、唐突に自分の名前が出てきた光秋は一瞬面喰う。

「お前以外にウチに加藤なんていないだろう。そもそもは伊部が言い出したんだけどよ」

「歓迎会はバタバタしててできなかったから、せめて送別会くらいしてやろうってな」

「法子さんが……」

竹田と小田の説明に、光秋は左隣で焼き鮭定食を食べている法子を見る。

当の法子はなにも言わず、焼き鮭をほぐしながら笑顔を返すだけだ。もつとも光秋は、その中に僅かながらの寂しさを見てしまう。

その間にも、小田は話を続ける。

「場所はいつもの店、時間は土曜の6時頃を予定してるんだが」

「いつもの店って？」

「ああ悪い。10月の合同演習の帰りに行ったとこだ。ウチはなにかあるとあそこでやるんだよ」

「……ああ、あそこですか」

小田の返答に、光秋は陸・空軍との合同演習、あるいはDD-01・ツアリングと初めて戦った日の帰りにみんなで飲み食いした店を、帰りに法子を背負っていったことと合わせて思い出す。

「僕はそれでかまいません。三佐は？」

「濃もだ」

「なら決定ですね。後で予約入れておくんで、仕事帰りにそのまま行きましょう」

「オレも後で上杉誘つときます」

一同を見回す小田に続く形で、竹田が申し出る。

「……なんかすいませ——いえ、ありがとうございます」

「気にすんな。偶にはパーっと飲ませてえ時もあるしな！」

礼を言いながら頭を下げる光秋に、竹田が心底楽しみにしているといった様子で笑顔を返す。

その笑顔と、あながち謙遜でもないらしい返事に氣を楽にさせる一方、光秋は今一つ優れない法子の顔を横目で見る。

——法子さんだつて別れるのが寂しい——綾の分も抱えているなら尚更——なのに、こんな催し思い付いてくれて……僕だつて、その気持ちに応えたい——

昼食時の小さな決意から十数分後。

食事を終えて食堂を去ろうとする法子を引き留めた光秋は、そのまま地下1階通路の自動販売機、その隣のベンチに法子を誘う。

「どうしたの突然？」

左隣に並んで座った法子の問いに、光秋は顔を向けて応じる。

「まず、送別会催してくれてありがとうございます」

改めて礼を述べながら、深めに頭を下げる。

「それは小田一尉が言つてたじゃん。バタバタしてて歓迎会はできなかったから、せめてさ」

「それでもありがたいです……何より、法子さんだつて寂しいのに、そんなこと言つてくれて……」

「寂しい？ 私が？」

「さつきそんなふうに見えたんです。綾の気持ちが出ていたのもあるかもしれませんが……とにかく、自分の気持ちを抑えて僕のことを送り出そうとしてくれるつて、その気持ちはやつぱり嬉しいですから」

寂しいといわれて若干狼狽する法子に応じながら、光秋は思つていたことを告げる。

「ん……まあ……そう言われると悪い気はしないかな？」

返しながら、法子は照れた様に右頬を掻く。

が、そんな仕草も束の間、すぐに表情を曇らせ、視線を床に落とす。

「私自身はそんな気ないつもりだったけど……寂しいつて言われると、やつぱり寂しいね。これが私の気持ちなのか、綾の気持ちなのかはいまいち判んないけど……」

「たぶん、2人共そうなんじゃないですか？……いや、それはいいんです。僕が言いたいのは、そうまでしてくれる法子さんや綾に応えたいつてことで……」

徒に言葉を重ねるだけで本題に入れない自分に、光秋は内心歯ぎしりする。

そして、

「だから……今度の日曜、また3人で出かけませんか？」

胸の中の焦れ^じったさを吐き出すつもりでよく通る声を上げ、食事中から考えていたことを提案する。

「え?でも……次の日引つ越しだし、寮で大人しくしてた方が……」

「最後くらいこれくらいやっておかないと、行つてから後悔しますよ。一緒に過ごせる最後の一日、3人で楽しみましょうよ……もちろん、法子さんや綾に都合があればそれまでですが……」

押しの強い調子で、しかし最後は弱気に告げると、光秋は祈る様に法子を見る。

「私は大丈夫だよ。綾も都合が悪くなることなんてないし……それなら、行こつかな」
「そう来なくっちゃ!」

法子の返答を聞くや、光秋は弾かれた様に笑顔を浮かべる。

その時、

「♪。いいものを見せてもらつたぜえ!」

「!?」

口笛と共に響いた第三者の声に、光秋は声がした方を振り返ると、右耳に携帯電話を当てた竹田が通路の角に佇んでいる。

「二尉!?!何で(ハハ)に?」

「いやあ、上杉に飲み会の連絡しようと思って電話してたら、お前らの話し声が聞こえて

よ」

（オレは止めとこうって言ったんだけど……）

動揺する光秋に竹田は面白いものを見る様に応じ、耳から離れた携帯電話からは気まぐすそうな上杉の声が響く。

ただそれも一瞬のことで、すぐに喜色を含んだ声に変わる。

（でもまあ、夏に合コン誘って渋顔浮かべてた奴が、自分から女をデートに誘うか……半年ですげえ進歩だな）

「デートって……別にそんなんじや……」

後輩の成長を喜ぶ先輩の様な口ぶりの上杉に小さく反論する一方、2人分のニヤケ顔を向けられる光秋は、穴があつたら入りたいという心境を否応なく抱かされる。

——……ただまあ……無事に誘えたからいつか……—

午後6時半。

今日の務めを終えた光秋は、疲れと、藤原の念の拳による痛みを抱えた体を引き摺る様に待機室へ向かう。

「痛てて……鳩尾は効いたなあ……」

鈍痛が止まない胸周りを擦り、食らった際に危うく気絶しかけたことを思い出しながら、待機室のドアをくぐる。

「あ、光秋くん。今帰り？」

「はい。法子さんも？」

部屋に入るやコートを羽織ってカバンを提げた法子と鉢合せ、その問いに応じながら光秋もロッカーからコートを出してカバンを左肩に掛ける。

「うん。せっかくだし、一緒に夕飯食べていけない？」

「いいですね。行きましょう」

法子の誘いに即答するや、光秋は部屋の明かりを消し、先に行った法子に続いてエレベーターに乗り込む。

扉が閉まり、上昇が始まるや、左隣に立つ法子が思い出した様に口を開く。

「お昼は言い損ねちゃったけど、日曜日、誘ってくれてありがとね」

「いえ。その時言ったように、2人の気持ちに応えたかったから……あとよくよく考えたら、僕自身そうしたいって気持ちがありましたから」

「それでも、私や綾は嬉しかったからさ……それにしても『最後』、『最後』って、今生こんじょうの別れみたいだったよ。目が真剣だったからますますそれっぽかった」

「冗談でもそういうのは止めてくださいよ。結果オーライとはいえ、一度そういう経験してますから」

笑って語る法子に苦笑いで返しながら、光秋は夏に綾と別れた時のことを思い出す。

その間にもエレベーターは1階に着き、2人は食堂へ向かう。

各々注文を済ませると、手近な席に向かい合って座り、食事を始める。

「そういえばさ」

「はい？」

フライの盛り合わせ定食を食べながら声を掛けてくる法子に、光秋はきつねうどんをすする手を止めて応じる。

「二尉たちの所為で訊きそびれてたけど、日曜日って何処に行くの？」

「そういうのは特に決めてませんね。昨日みたいにテキトーにぶらついて、行き当たりばつたりを楽しもうかなって。行きたいところがあるならそこにしますか？」

「うーん……私も特にないかな……綾もみたいだけど。でも確かに、ただぶらぶらするのも楽しいもんね」

「あ、ただ、法子さんと綾の交代時間ですけど、昨日みたいに午前・午後としつかり分けるんじゃないかって、その都度その都度自由に代わるっていうのどうです？もちろんお互いに話し合ってもらってますけど。その方が3人で楽しむ感じがしていると思うんですけど」

これではしばらく伊部姉妹とはまともに会えなくなる光秋にとって、それぞれの交代時間に追われてどこか焦りながら過ごすよりも、敢えて時間的制約を取り払うことで法

子・綾それぞれと一瞬ごとにしっかり接することができるようの方が重要に感じられる。

それ故の提案だったのだが、

「……………何それ？両手に華で自分だけいい思いしようってこと？……光秋？」

「え？……いや、その……………」

法子と、一瞬俯いて入れ替わった綾に睨まれ、賛成してくれると思っていた光秋は狼狽する。

直後、

「なーんてね！」

一瞬にして表情を緩ませるや、綾が右の人差し指で額を小突いてくる。

「え？えつ？……………」

「アキがそういうつもりで言ったんじゃないことくらいわかるよ。あたしたち一人一人としつかり付き合いたいんだよね。ただ、言い方がちよつと引つ掛かったからさ。法子と相談して少しからかってやろうと思って」

「…………頼むから、そういう冗談はやめてくれ。僕が保たないよ……………」

イタズラが成功した笑みを浮かべる綾に、光秋は恐怖が去った後独特の脱力感を覚えながら返す。

と、携帯電話が振動し、光秋は上着のポケットに手を伸ばして電話に出る。

—上杉さん?—「……はい?」

(あ、加藤? 悪い、昼に言えばよかったんだけど忘れててき。今週中に1回、オレんここに診察に来てくれないか)

「診察? 目ですか?」

(ああ。お前がこつちに来てからずっと診てきた身としては、転属前に最後に1回診ておきたいんだよ)

「あ、そつか……それじゃあ、明後日行けるように三佐に頼んでおきます。時間はいつでも?」

(ああ。決まったらメールしといてくれ)

「わかりました。では」

応じると、光秋は電話を切ってポケットに戻す。

「上杉君?」

「はい。転属前に1回診ておきたいから来てくれって」

受け答えから相手を察したのか、綾と代わった法子の問いに、光秋はうどんをすすりながら答える。

—『お前がこつちに来てからずっと診てきた身としては、転属前に最後に1回診ておきたいんだよ』、か……正直意外だなあ。上杉さんからあんな真面目な言葉を聞くなん

て。いや、確かに医者としての仕事はきちんとやってたから、単に僕の偏見だったんだろうが……土下座した時、真っ先に名前浮かべたのは悪かったかな？……………否、仕事と女性関係は別か……—

伊部家でのテレパシー三者面談の時のことを思い出しながら、光秋はたっぷり汁が染み込んだ油揚げに嚙り付く。

1月12日水曜日午前10時。

前日中に藤原に許可を取っておいた光秋は、事前の連絡に従って訓練を抜け、上杉の診察室へ向かう。

ドアをノックし、「どうぞー」という返事を待ってから入室すると、診察机に腰を下ろした白衣姿の上杉が出迎えてくれる。

「お待たせしました」

「いや、約束通りだ。じゃあ、ちやっちゃとやっちゃうか」

丸椅子に座りながらの光秋に応じると、上杉は右手を光秋の額に当てる。いつものように目をつむって集中しながら、光秋の目の状態を感じ取る。

「……よし。眼圧諸々いつも通りだな。お前の方で何か気になることは？」

「特には」

「なら、診察終了だ。本部の専属医の方にも紹介状送つといたし、これで問題ないだろ

う」

「あ、そっか」

言われて光秋は、今の今まで診察の引き継ぎについて失念していたことに気付く。

―転属とか、法子さんたちのこととかでいっぱいだったから、正直言われるまで忘れてたなあ……―「ありがとうございます」

言いながら深く頭を下げる。

「まあ、確か東京本部にはオレの先輩がいるから、その分安心していいけどな」

「上杉さんの先輩ですか……その人もサイコメトラーで？」

「いや、ノーマルだ。ただし、腕はオレが知る中でも群を抜いて上だ。大船に乗った気でいいぞー!」

「上杉さんにそこまで言わせますか……」―どんな人なんだろう?―

自分のことの様にその人を褒め称える上杉の姿に、光秋は思わず興味を抱く。

「そんじや、あとは会計で目薬もらってな。いつもの一本ずつでいいか？」

「はい。ありがとうございます」

確認する上杉に応じると、光秋は一礼して部屋を出る。

それから数日、大きな事件が起こることもなく、重大な予知が舞い込んでくることもなく、平穏な日々が続いた。

そして迎えた1月15日土曜日——転属前最後の出勤の日の朝。

正門前で小田、法子と合流した光秋は、そのままそろってエレベーターに乗り込む。

「光秋くんと一緒に仕事するのも、今日が最後か……」

「そんな今生の別れみたいな顔しないでくださいよ。人間主任が回復されたら戻ってくるんだから」

「そうだけどさあ……」

光秋の返答に、法子は優れない顔を天井に向けながら返す。

「ところで2人共、メールちゃんと確認したよね？」

「はい」

「仕事が終わったら一旦帰宅して着替えて、7時までに現地集合ですよね」

小田の問いに法子は頷き、光秋はメールの内容を思い出しながら答える。

「そうだ。一応返信はもらったんだが、やっぱり心配だな。なにせ、一番の新入りの送別会だからな」

「はは……」

続ける小田に光秋が苦笑いを返すと扉が開き、一行は真つ直ぐ藤原隊の待機室へ向かう。

——……でもまあ、今日でしばらく藤原隊のみんなと別れるのは確かなんだよね……

終わりよければっていうのは語弊があるかもしれないが、最後だからこそ、きっちり務めないとい——

歩きながら内心気持ちを引き締めると、光秋は小田、法子に続いて待機室に入る。

藤原との訓練、昼食後の昼休み、射撃訓練と再度の対超能力戦訓練、そんないつもと同じ日程をこなし、今日も今日とて避け損なつた念にあちこちを痛めながら、最後の務めを終えた光秋は寮の自室へ戻る。

「痛くて……」

制服から私服に着替える中、ちよつとした動きで未だに鈍い痛みを走らせる体に顔を歪める。

「もつとも、これも今日で当分なしなんだよなあ……」——いや、それはそれで不味いか？ やっぱり継続しないと意味がないだろうし、東京でも心当たり頼んでなんとか続けられるようにするか……とりあえず曾我さんかな？——

サイコキノということで柏崎の顔も浮かぶものの、その気難しい性格に協力を得るのは難しいと思い、すぐに選択肢から消去する。

その間にも白いワイシャツと緑のズボンに着替え、茶色のコートを羽織って財布等の貴重品を身に着けると、戸締りを確認して部屋を出ようとする。

と、法子から電話が掛かってくる。

「はい？」

（光秋くん？今何処？）

「寮です。これから出るところで」

（よかった。じゃあさ、私の寮近くの駅で落ち合わない？光秋くんには一駅分歩かせ
ちやうけど）

「ちやうど中間で、ということでしょう？いいですよ。今から向かいます」

（ありがと。待ってる）

法子の返事を聞くと、光秋は携帯電話をズボンのポケットに仕舞い、靴を履いて会話
にあつた駅へ向かう。

路地を速足で進むこと十数分。

階段を下りて地下鉄駅構内に出た光秋は、辺りを見回して法子がまだ来ていないのを
確認すると、目的の駅までの切符を買って改札口のそばで待つ。

少しして、灰色のパーカーに藍色のジーンズ、青いコートを羽織った法子が速足で
やってくる。

「ごめん。待った？」

「いえ。僕もさつき来たところです」

「そう？ならよかった」

言いながら、法子も券売機に小銭を入れて切符を買う。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

法子に応じると、光秋は後を追って改札機をくぐり、ホームに下りる。

ちょうど来た電車に乗り込むと、座席が全て埋まっている車内の中程まで進み、2人並んで吊り革を掴む。

電車が走り出すと、左隣に立つ法子が顔を寄せてくる。

「明日だよ。3人で出かけるの」

「はい。9時にいつもの駅の近くでいいですか？」

「うん……それはそうと、今日はお酒飲まされないように気を付けなきや。フミがいない分この前よりはマシかもしれないけど……三佐や二尉は油断できないからなあ。上杉君もだけど……」

「ははあ……」

真剣な顔で思案する法子に、光秋は10月の演習後の飲み会の帰りを思い出して乾いた笑いを漏らす。

「……………でもまあ、もしもの時はまたよろしくね」

「えー…………？」

数瞬前の硬い顔はどこへやら。薄っすらと笑みを浮かべた法子に寄り掛かれて、光秋は軽い狼狽に顔を歪める。

そうしている間にも目的の四条駅に着くと、2人は人波に混ざって電車を降り、法子先導の下に店へ向かう。

「流石四条駅……要所というべきか、今日も混んでますね」

「ちようど帰宅ラッシュの時間帯だしね……逸れるといけないからさ」

人の数に圧倒されている光秋に返しながら、前を行く法子は右手を差し出す。

「ありがとうございます」

その手をすぐに左手で掴むと、光秋は適度に力を込めてしっかりと握り締め、法子の後をついていく。

改札口をくぐり、構内を横切り、階段を上がって地上に出る。車道の両脇に建ち並ぶ店の明かりに照らされた歩道をしばらく歩いて路地に入ると、3カ月前にも入った店の暖簾が見えてくる。

「今何時？」

「6時50分。集合時間の10分前ですね」

法子の問いに、光秋は腕時計を見ながら答える。

「ちようどいいね。入ろっか」

「はい」

法子に応じると、光秋は後を追って暖簾をくぐり、先に座敷に座っていた上杉の許に歩み寄る。

「お先です」

「みんなまだ来てない？」

「ええ」

周りを見ながら問う法子に、上杉は頷きながら返すと、コートを脱いで正面に腰を下ろした光秋を見やる。

「にしても、最後まで熱いねえ。送別会に同伴とは」

「変な言い方しないでくださいよ……」

ニヤケながらの「同伴」という表現に、光秋は思わず顔をしかめる。

と、小田が入店してくる。

「一尉！こつちです」

「おう」

光秋の呼び掛けに応じると、小田は座敷に上がって上杉の右隣に座る。

「三佐と竹田はまだか」

「はい。もうすぐ来ると思いますが……」

「あと3分くらいで7時ですもんね」

店内を見回しながら言う小田に、テーブルを挟んで正面に座る法子は玄関を見やり、その右隣の光秋は腕時計で時刻を確認する。

と、上杉がなにかを思い出した顔をする。

「……本部、それに女かぁ………ところで一尉、本部の沖一尉とはどうなんです?」
「!?何だ? 藪から棒に……」

突然の、しかも全く想定していなかった質問に、小田は体を震わせて面喰らった顔をする。

「いやぁ、竹田二尉から聞いたんですけど、なんかいい感じだつて。秋田の時もメールのやり取りしてたつて言うし」

「……竹田奴^めえ……」

興味本位といった様子で訊いてくる上杉に、小田は憎々し気な顔を浮かべる。

「にしても、まさか一尉があの人とねえ……オレも何度か見掛けただけど、なかなかの上玉で。いやぁ、一尉も隅に置けないっすねえ!」

「そんなんじゃない! たまたま知り合つて、向こうが連絡先教えてくれつて……」

「だから、それを隅に置けないつて言うんでしょ?」

「だからそんなじゃないつてのっ!」

ニヤケながらの上杉に、小田の目が徐々に吊り上がっていく。

「……上杉さん。からかうのもその辺にしときましようよ」

「そうだよ。これ以上は流石に度が過ぎるよ」

「お二人がそう言うなら、この辺にしときますか」

おふぎの潮時を察した光秋と、心なしか本気の怒りを含んだ法子の注意に、上杉はニヤケたまま素直に従う。

「にしても、2人も息ピッタリっすね」

「……」

「だからそう言うふうに人をからかわないの！」

最後の反撃とばかりに返してきた一言に、光秋は返事に困り、法子は眉を寄せる。

その時、藤原と竹田が暖簾をくぐってくる。

「二尉！三佐！こっちっす」

「オウ！……て、オレたちが最後か」

「すまん、待たせたな。駅が混んで思う様に進めんな」

上杉の呼び掛けに、竹田と藤原がそれぞれ応じながら座敷に上がると、光秋は腕時計を確認する。

「いいえ。ちようどいいですよ。ちようど7時だ」

「じゃあ、早速いろいろ頼むかー」

言うや竹田はメニュー表を広げ、各々頼みたい物を決めると水を持ってきた店員に注文を告げる。

ややあつてジョッキ入りビール4つとウーロン茶2つが運ばれてくると、ジョッキの1つを取った藤原が対角線上の光秋を見やる。

「では、今日の主役、なにか一言頼む」

「一言、ですか……」

突然のフリに意表を突かれるものの、光秋は少し考えて言葉を述べる。

「えー……この度、この中では一番最後に入っておきながら、一番最初に隊を出ていくことになりました、加藤です。といっても一時的にですが……正直、今までと勝手が異なる仕事、こつちに来てから多くの時間一緒に過ごしたみなさんと離れることには、大きな不安を感じています。ですが、これも自分が選んだこと——ESOに入ると決めたことの結果なんだと受け入れ、向こうでも、死なない程度に頑張つていこうと思います……そして、必ずまた、ここに帰ってきます！……以上です」

最後は半ば自分自身に言い聞かせるつもりで敢えて強い調子で言うと、5人分の拍手に迎えられながら静かに頭を下げる。

「よおし。では加藤の新たな門出を祝って、乾杯っ！」

「カンパイッ!」

藤原の音頭の下にグラスが鳴らされると、各自が自分の飲み物を一口分飲み、見計らったかのように運ばれてきた料理に箸を伸ばす。

食べて飲み、隣や正面同士の談笑がしばらく続いた頃。

ゲソの唐揚げに舌鼓を打っていた光秋の許に、ウーロン茶を持参した小田が腰を下ろしてくる。その顔は、僅かに赤くなり始めている。

「よお。飲んでるか?」

「はい。ウーロン茶を」

返しながら、光秋は2杯目のグラスを持って示す。

「そりやそうだ。お前まだ未成年だったもんな」

微笑みながら応じると、小田は自分のウーロン茶を一口飲む。

「そうそう。今まで時間が合わなくて言い損ねてたんだが、東京には俺の後輩がいるんだ」

「後輩? 士官学校の?」

「いや、高校の」

返しつつ、小田はもう一口飲む。

「今は警察に勤めててな。徳川っていうんだが、この間の警備の仕事でもたまたま一緒

になつて」

「へー……あの仕事で、ですか……」

小田に関心の声で応じる一方、光秋はNPやZCにはぼやられっぱなしだったその時のことを思い出して少し気落ちする。

「でだ、ちやうど今東京の方に勤めてるそうだな。仕事の都合上一緒になるかもしれないから、その時はよろしく頼むように言つておいた」

「仕事つて……ああ、そつか」——主任——つまりは指揮官なら、今まで以上に警察みたいな外部の人と関わる機会も増えるんだ——

小田の言わんとすることを察しながら、光秋は自分が今までと違う立場になった、あるいはこれからなるのだということを改めて認識させられる。

「まあ、仕事以外でも都合がよければ面倒みてくれるように言つていたがな。お前の特徴は説明しておいたから、会えば向こうから気付いてくれると思うが」

「……またそんな几帳面なあ」——あるいは……——

「過保護」という言葉が浮かびそうになるものの、光秋はそれをウーロン茶と一緒に飲み下す。

「ま、そういうことだから。向こうでなんかあつたら、とりあえずそいつを頼れ」

「……ありがとうございます」

素直に礼を言つて頭を下げると、小田は自分の席に戻っていく。

「ちよつと思ふところはあつたけど……僕のこと考えて、わざわざ頼んでくれたんだよな」

若干引つ掛かりながらも感謝しながらその背中を目で追うと、光秋はゲソの咀嚼を再開する。

と、飲み会開始からまだ1時間も経っていないにも関わらず、すっかり顔を赤くした竹田がジョッキ片手に頼りない足取りでやつて来る。

「よお、主役！食つてつかあ？」

「そう来ましたか……ええ。烏賊の足美味しいです」

多少呂律が怪しい竹田の問いに、光秋はまた1本ゲソを摘まみながら答える。

「どれオレも」

「大皿から取つてくださいよ」

「硬てえこと言うなよ」。まだたんまりあるんだしよー

「そういう問題じゃなくてですね……」

自分の皿からゲソを1本手掴みで取つていく竹田に抗議の目を向けるものの、酔いも手伝つた馬耳東風な態度に興を殺がれた光秋は、代わりにウーロン茶を飲む。

「あーそうだ、忘れつとこだった……東京にゃあ、オレの知り合いがいてよー」

「二尉ですか？」

藪から棒に話を切り出す竹田、その上杉、小田と続いた同様の内容に、光秋は思わず声を漏らす。もつとも、酔っ払った竹田には聞こえなかったらしく、構わず話を続ける。「知り合いつつうか、幼馴染つてやつかな？ガキの頃からの付き合いだよ。ただあいつの方が頭よくて、高校出たらデカい大学行っただけだな……」

言いながら、竹田はジョッキのビールをぐびぐびと飲む。

「頭いいって……二尉だつてこんな難しい仕事に就いてるんだし、士官学校出ならそれなりにいいんじゃない？」

「オラアダメだあ……基本一夜漬けで乗り切るタイプだからよ……」

不意に浮かんだ疑問を投げかける光秋に、竹田はいよいよ舌をもつれさせながら答えると、ジョッキに残ったビールを一気に飲み干す。

「かーっ！おーい！ビール追加あ！」

「飲み過ぎですよ。その辺にしといた方が……」

嬉々として注文を叫ぶに竹田に、光秋はその赤い顔を見ながら注意する。

しかし、

「まあそういうわけだかんよ、なんかあつたらそいつ頼れ。いいなあ！」

竹田の耳には入っていなかったらしく、一方的に言うや運ばれてきたジョッキを受け

取つて席に戻つていく。

—『いいなあ!』と言われても……名前聞いてないので……—

危うい千鳥足を眺めつつ、光秋は心の中で困った顔をする。

「諦めな。二尉ああなつちやうとさ……後は面倒起こさないように見守つてるだけだよ……」

「はあ……」

左隣で諦観気味に語る法子は、しかしテレパシーを使わなかった、あるいは綾に教えてもらつていないらしく、光秋の困惑顔を竹田の飲み過ぎに対するものとつたようだ。

「この間はそれでも大人しい方だったんだけどね……やつぱりタツカー中尉がいたからかな?」

「さあ……? ただまあ、楽しそうに飲んでたのは確かですね」

ウーロン茶を飲みながら思案する法子に、光秋も一口飲んで当日の様子を思い出しながら応じると、また一本ゲソを摘まむ。

——……でもまあ、二尉も僕のこと氣遣つて教えてくれたんだよな。その気持ちには感謝しないと——

多少不満を抱きながらも、根底にある気持ちは理解すると、光秋は藤原と盃を交わし

ている竹田に静かに頭を下げる。

午後8時50分。

すっかり顔が赤くなつた藤原は、それでもなんとか焦点が合っている目を腕時計に向ける。

「……そろそろお開きだな。すみませーん！」

「ええ……う？もうつすああ……？」

すっかり呂律が回らなくなつた竹田の抗議の間にも、やってきた店員が差し出した表を一見した藤原は1人当たりの金額を算出する。

「みんな、小田に飲み代を渡してくれ」

言われるや各々返事をする、光秋たちは言われた額を財布から出して小田に渡す。

全員分の代金を受け取つた小田がレジに向かうのを眺めながら、光秋は残っていたウーロン茶を飲み干し、自分の皿に取つた分の料理を完食した法子を見やる。

「今回は無事切り抜けられましたね」

「だね。二尉が上杉君や三佐と話すのに夢中になってくれたのがよかったのかも」

傍らに歩み寄つてきた上杉に介抱されている竹田を見ながら、法子は苦笑いを返す。

その間に小田が戻つてくると、各自コートを羽織つて座敷から下り、暖簾をくぐつて店を出ていく。

と、光秋は上杉に支えられた竹田を見る。

「……二尉、大丈夫ですか……？」

「でーじょーぶ！でーじょー——ううっ!？」

真つ赤な顔をして見るからに大丈夫ではなさそうな状態で応じるそばから、竹田は目に涙を浮かべて身を屈める。

「だ、大丈夫ですか!？」

「これくらいならな。まだもどしてないし、いつもよりはマシだ」

突然のことに驚愕する光秋に、竹田よりは酔っていない上杉が応じると、背中を擦りながら竹田に呼び掛ける。

「二尉、とりあえずそっち行きましょう。ここじゃ邪魔になりますから」

「ううっ………」

涙目の唸り声で返しながら、竹田は上杉に誘導されて店の玄関から数メートル離れた場所に移動する。

「……いつも通り任せていいか？」

「はい。今日はそれでもいい方みたいですし」

傍らに寄ってきた小田に、竹田と並んで屈み背中を擦る上杉は慣れた様子で応じる。

「この間タツカー中尉と2人がかりで連れ回された時に比べれば、全然余裕つすよ」

「…………この間、何があつたんです…………？」

演習後の飲み会を後に竹田とタツカーに連れて行かれた上杉を思い出し、光秋は好奇心と、それ以上に恐怖を覚える。

「じゃあ頼む」

「はい…………ああそうだ、加藤！」

「はい？」

小田とのやり取りを終えるや自分を呼ぶ上杉に、光秋は応じながらそばに駆け寄る。

「東京での主任の仕事、頑張れよ。なんかあつたら、この間言つたオレの先輩を頼れ。体のこと以外でもな」

「……………ありがとうございますー」——今日の上杉さん……………なんか格好いいなあ……………——

竹田を介抱しながら自分を労ってくれる上杉に、光秋はいつもと違う頼もしい印象を抱く。

しかし直後、

「…………二尉のお守は毎度のことだが……………これがオレ好みの美女だつたらなあ……………」

——ああ。やっぱり上杉さんだ——

真剣に悔しそうな顔で愚痴る上杉の姿に、光秋は頼もしい印象が消えていく落胆と、それ以上に変わらない安心感を覚え、蹲る2人に一礼して藤原たちの許へ向かう。

竹田と上杉を残した一行は四条駅へ向かい、人波が落ち着いてきた駅構内を横切つて切符を購入、そのままホームへ下りる。

少しして入ってきた電車に乗り込むと、一行は人が疎らな車内を奥まで進み、光秋と法子、藤原と小田に別れて向かい合つた座席に腰を下ろす。

「……二尉つて、飲み会の後はいつもあんな感じなんですか？みんな口を揃えてそんなこと言うけど」

「うん。そもそも上杉君も言つてたと思うけど、今回はいい方だよ。私なんて一度とんでもないもの見せられたから……ああいうのを『トラウマ』つていうのかな……？」

「……それはまた」
左隣の法子が至極真面目に考える顔を浮かべるのを見て、光秋は「とんでもないもの」とやうに背筋を震わせる。

その間にも電車は進み、アナウンスで自分の降りる駅の名前が告げられた藤原が席を立つ。

「ではな。先に失礼する」

「はい。三佐も帰路お気を付けて」

3人を見回す藤原に小田が応じ、光秋と法子も一礼する。
と、

「……そうだ、加藤」

「はい？」

電車を降りて振り返った藤原に、光秋は顔を向ける。

「頑張れよっ！」

「！」

笑顔で言われるやドアが閉まり、返事を言い損ねた光秋は慌てて深く頭を下げる。
そうしている間にも電車は走り出し、藤原の姿は車窓の端に消えていく。

「……本当に土壇場で言うなんて……」

「三佐なりの気遣いというか、伝え方でしょう」

「それは……確かに応援してくれている気持ちは伝わってきました」

つい漏らした不満に対する法子の指摘に、光秋は藤原の気持ちを察し、脳裏に浮かんだ髭の顔に改めて一礼する。

少しして法子と小田が降りる駅に近付くと、2人は持ち物の確認をしてドアの前に移動する。

と、光秋も2人に続く。

「僕も次で降ります」

「え？……でもお前の駅、次の次だろう？寮の方向も正反対だし……」

突然の申し出に戸惑う小田に、光秋は法子を見やる。

「法子さんの送りを。もう結構遅いですし……先輩相手に生意気と思われるかもしれないけど、これくらいやらせてくださいよ」

光秋の説明に法子は嬉しそうな顔を返し、直後に開いたドアから3人はホームに降りる。

「……ま、伊部がいいんならな」

2人の様子に小田はそれだけ言って階段を上がり、光秋と法子もその後を追って改札口をくぐる。階段を上がって地上に出ると、小田を先頭に3人は歩き出す。

しばらく進んで小田の寮の近くまで来ると、小田は光秋を見る。

「それじゃあ加藤、東京でも頑張れよ。何かあれば飲み会で言った奴を頼れ」

「トクガワさん、ですよね？」

「ああ」

「ありがとうございます」

「ん。じゃあな」

深く一礼する光秋に応じると、小田は寮の玄関へ向かう。

「……あ」

ドアに消える背中を見て、光秋はあることを思い出す。

「どうしたの?」

「いや、『頼れ』で思い出したんですけど、上杉さんにもそういう人を紹介されたんですが……名前訊くの忘れてた」

「あらあ……」

今更ながらの失敗談に、法子は呆然と応じる。

「……でも、上杉さんの説明からすると、ESOの専属医なんだよな?……なら、向こうから気付けてくれるかな」「まあいいや。早く行きましょうよ」

樂觀論は承知の上で割り切ると、光秋は法子に左手を差し出す。

「あと、この辺足元不安だから……」

「だったら送りなんて買って出なきゃよかったのに」

「いや……それはそうなんですけど……」

「……わかってるよ。本当のことは」

「流石法子さん」

「あたしもだよ!」

「わかってるよ。綾も流石だ」

少しでも長く一緒にいたいという本音を察していたらしい法子、その微笑みに内心脱帽しながら、一瞬代わって目くじらを立てた綾に苦笑いを向けると、光秋は法子の右手

を握って寮を目指す。

少し歩いて路地に入り、そこをさらに進んで寮の玄関をくぐる。

210号室の前に着くと、光秋は名残惜しそうに法子の手を離す。

「それじゃあ……………お休みなさい！」

言うや否や踵を返し、早々に階段へ向かおうとする。

しかし、

「待って！」

「！」

最初の一步を踏み出す前に法子に左肩を掴まれ、光秋は思わず後ろを振り返る。

「……………その……………ちよつと、上がっていかない？」

「……………いいんですか？」

齒切れの悪い法子の申し出に、光秋は口では問い返しながらも抗い難い魅力を感じる。

「……………ちよつとだけ、さ」

「……………それじゃあ……………ちよつとだけ」

応じるや、光秋は法子に続いて部屋に上がり込む。

「テキトウに寛いでて。お風呂沸かしてくるから」

居間の灯りを点け、電気ストーブを入れてそう言い残すや、法子は部屋を出ていく。残された光秋は、とりあえずとコートを掛け、部屋の真ん中に置かれたコタツの電源を入れて脚を突っ込む。

「……………結局、上がってしまった……………」

居間を見回しながら、今更と思いつつ呟く。

「ただ……………そのことをまるで後悔してない自分がいるよな。寧ろこれは……………喜んでる——

妙に醒めた部分で現状を自己分析していると、法子が戻ってくる。

「コタツは点けてないけど？」

「さっき入れました」

「そっか……………テレビでも、観る？」

「はい……………」

気まずい沈黙に耐えかねた法子の提案に頷くと、光秋はコタツの上のリモコンを取ってテレビを点ける。

たまたま映ったバラエティー番組を2人揃って観る——というより眺めるものの、内容が頭に入ってくることはなく、そうしている間に風呂が沸いたことを告げる音楽が響く。

「……………風呂沸いたみたいなんで……僕もう帰ります」

再び名残惜しさを感じながらもそう告げると、光秋はコタツから出て立ち上がる。
と、

「待って!」

十数分前と同様に伸ばされた法子の——否、今度は綾の右手が、光秋の左手を掴む。

「もうちょつとだけ……」

懇願する様な目を向けつつ、先程法子が肩を掴んだ時よりも心なしか強い握力が手に掛かる。

しかし、

「……………否、今日はもうダメだ」

綾の手をやんわりと振り払った光秋は、未だ懇願を宿す目を見据えて、自身伊部姉妹に引かれる後ろ髪を断ち切るつもりで告げる。

「明日また会おう。明日、目いっぱい楽しもう……」

半分は自分に言い聞かせると、コートを羽織って持ち物を確認し、玄関へ向かう。

ドアを開けて廊下に出ると、振り返って見送りに来た綾を、その少しだけ潤んでいる目を見据える。

「じゃあ、また明日。9時に駅前集合だったよな」

「……………うん」

待ち合わせの時間と場所を確認する光秋に、綾は静かに頷く。

「……………それじゃあ……………」

「……………うん。じゃあね……………また明日……………」

綾と、一瞬俯いて代わった法子の返事を聞くや、光秋は今度こそ踵を返して速足で階段へ向かう。

脇目もふらず階段を下りて玄関をくぐり、大股で路地を突っ切って大通りに出る。左折して寮への帰路を進みながら、光秋は胸の中に巣食う悔いを自覚する。

「……………あのままお言葉に甘えておけば……………って思ってるな。性懲りもなく……………」

「明日だ。明日とことん楽しむ。そして、その後に控えている務めを果たすっ」
そう心なしに強く呟き、胸の中の悔いを力押しで割り切らせると、家路を急ぐ足をさらに速める。

74 別れの前に 前編

1月16日日曜日午前7時。

「……………」

まどろみを払う様に鳴り響いた呼び鈴の音に、光秋は未だ夢現ゆめうつの頭で起き上がり、梯子伝いにベッドから下りて玄関へ向かう。

—誰だあ?こんな朝早く……—

早朝の訪問者に内心愚痴りつつ、欠伸をしながら覗き窓に顔を寄せる。
直後、

—法子さん!—

窓越しに見えた予想外の人物に驚愕するや、すぐに開錠してドアを開け、青いコートを羽織って左肩に大きめのカバンを提げた法子の姿を直に確認する。

「…………おはようございます」

突然のことによっていいか判断がつかず、思わず普通に挨拶する。

「おはよう…………上がっていいかな?」

「……………」

やや遠慮がちな法子に慌てて応じると、光秋はドアから下がって法子を部屋に通す。そのまま居間に移動すると、法子はカバンを下ろしてコートを脱ぎ、先日と同じフリル付きの赤いロングスカートに白いワイシャツを着た姿を露わにする。髪留めはもちろん赤フリルのシユシユだ。

「すみません！僕こんな格好で！」

それを見て、自分がまだパジャマなのに気付いた光秋は、慌てて筆筒から赤チエックのワイシャツと緑のズボンを引っ張り出す。

「ちよつと着替えますんで、少し待つてください！」

そのまま廊下に駆け出し、仕切りのカーテンを閉めると、すぐに持ってきた服に着替える。

「別に、慌てなくていいよ。私が突然押しかけたんだし……というか、別にそのままでも……」

「そういうわけにはいきませんよ」

申し訳なさそうに声を掛ける法子に、光秋は好きな女の人がりっかりとした服装をしている横で寝間着姿でいることへの羞恥心からそう返し、着替え終わった服装をさっと確認する。

「……我ながら、大事な時はだいたいこの格好だよなあ。借りにも……その、デート

だつていうのに、その辺能がないというか……ま、お気に入りで仕方ないか――

思いつつ、畳んだパジャマを持ってカーテンをくぐる。

「あ、暖房点けるの忘れてましたね」

パジャマをベッドに置きながら思い出すと、エアコンの許に歩み寄つてリモコンで電源を入れる。ベッド下から出したコタツを点けると、ようやく腰を落ち着けて法子と話せるようになる。

「バタバタしてすみません」

「ううん。私こそ朝早くにごめん」

「で、早くにどうしたんです？」

互いに頭を下げると、光秋は本題を促す。

「そんな大したことじゃないんだよ。傍から見ればね。ただ……昨日私たちの部屋から帰つていく姿を見てたら、少しでも早く会いたいって思っちゃって……」

「……なるほど」

確かに、傍から見れば大したことではない。しかし裏を返せば、法子——というよりも伊部姉妹にとつてはとても重要なことだ。そう理解し、自身2人の気持ちに共感しつつ、光秋は静かに頷く。

と、顔を上げながら部屋の隅に置かれたカバンに視線を向ける。

「ところで、そのカバン何です?」

「ああ……………今夜さ、泊めてもらおうと思って」

「ええ!」

法子の返答に、光秋は再び驚愕する。

「泊まるって……………明日出ていくんですよ?その前に引越しの立ち合いしなきゃいけないし……………」

「別にそんな遅くまでいいないよ。私も明日仕事だし。今夜泊めてもらって、明日こちら直接支部に行くの。ここにはそのための着替え諸々が入ってるの」

「はあ……………」

多少強引ながら一応筋が通っていると感じた法子の計画に、光秋は呆然と応じる。

——もつとも僕自身、法子さんや綾と最後の夜を過ごせるというのに悪い気はしない。寧ろ願ったり叶ったりだ——「ただ……………男の一人部屋に泊まり込もうって、法子さんも大胆ですね。それとも綾の発想かな?」

「さあね。私たちにもよくわかんない。でも、私はなんとなく綾寄りの発想だと思うな……………もつとも、襲撃中にニコイチに乗り込んだり、演習の乱入者を実弾なしで迎撃したりした光秋くんも結構大胆だけだね。それに、ついこの間私の部屋で一緒に寝たくせに」

「……まあ、そうですけど……」

率直な感想に的確な返しをしてくる法子に、光秋はそれ以上言えなくなる。

「……そういや、朝飯まだだったな……」

話題を変えたいのもあつてそう呟くと、冷蔵庫を開けて買い置きしていた菓子パンと500ミリペットボトルのレモンティーを出す。

「それが朝ご飯？」

「はい。食器類も仕舞っちゃったし、もう何日もいないならこういう片付けが簡単なのでいいかなつて、この間まとめ買いしてきて……法子さんは食べてきましたか？」

「……そういえば、光秋くんところ行くのに夢中で食べるの忘れてたな……今から一度帰ろうかな。荷物も持ってきたし」

光秋の問いに思い出した様に答えると、法子はカバンを一見して立ち上がろうとする。

しかし、

「それなら」

直前に光秋が再度冷蔵庫を開け、残っていた菓子パンとレモンティーを出してコタツに置く。

「これどうぞ」

「え？でもこれ明日のつてことでしょ？」

「どうせ今日出掛けるんです。帰り際にでもコンビニ寄ってまた買えばいい。クリームパンとチョコパン、どっちがいいです？」

「うーん……それじゃあ……」

光秋の説明に頷くと、法子はチョコパンを取って袋を開ける。

光秋も残ったクリームパンの袋とペットボトルのフタを開けると、レモンティーを一口飲んでパンを一口かじる。

それからしばらくの間、2人は静かに食事を摂る。

質素な朝食を済ませ、片付けを終えると、光秋は風呂場の水盤前で身嗜みを整えて再びコタツに入る。

それを待っていた様に、法子と交代した綾が声を掛ける。

「今8時だけど、予定通り9時に出る？」

「それがいいだろう。今から出たって何処も開いてないだろうし」

「そっか………お昼はどうしよう？」

「時間になったら近くの店で食べればいいだろう。それとも、どっか行きたい店あるか？」

「………そうじゃなくて、さ………」

光秋の問いに束の間言いよどみながら、綾は求める目で応じる。

「また、アキのおにぎり食べたいな……」

「僕のおにぎり？……ああ」

言われて光秋は、夏に2人で出かけた際に用意した握り飯——本人曰く「飯団子」——のことを思い出す。

「やったなそういや……でもここには米がないしな。道具も……」

その時のことを懐かしみながら、粗方片付けてしまった台所を見やる。

「ならさ、法子の部屋行かない？ご飯も余ってるのがけっこうあつたし」

「法子さんの？……お前さんがどうしてもおにぎりがいって言うんならそれでもいいけど……部屋使っちゃっていいのか？」

「……法子は別にいいって」

「……それなら、たまにはそういうのもいいか。よし、行こう」

束の間目をつむって意識を集中した綾の返答に応じるや、光秋はコタツを切って立ち上がると、コートを羽織って戸締りを確認する。

——エアコンは……いくらもせずに帰ってくるだろうから、いいか——

そう思つてリモコンに伸ばし掛けた手を引っ込めると、携帯電話と部屋の鍵を持って玄関へ向かう。

光秋に続いて綾も部屋を出ると、ドアに鍵が掛かったのを確認し、互いに手を繋いで法子の寮へ向かう。

路地をしばらく歩いていると、綾が俯きながら声を掛けてくる。

「あのさ……この間のことなんだけど……」

「この間？」

「先週一緒に出掛けた時、ケンカの……」

「まだ気にしてたのか？ そんなに引き摺らなくても」

「だって……」

言われて先週の四条での一件を思い出しながら応じる光秋に、綾は罪悪感を抱く様に視線を地面に下げる。

「襲撃事件の時は、まだちゃんと動けてたんだよ。『アキが危ない！』って思ったら、怖いよりもそれをなんとかしたいって気持ちの方が強くなって。でも、この間のケンカは襲撃事件よりなんてことないのに、『怖い！』って気持ちで一杯になっちゃって……」

言いながら、綾は奥歯を噛み締め、光秋と繋いだ手に力を込める。

その様子と、おそらくは無意識に放出しているのであろう、怒りや悲しみ、悔しさ、情けなさといった複雑に絡み合った、自分の中から浮かんだのとは違う思惟に、光秋は綾

が自己嫌悪に陥っているのだと察する。

「……僕もさ、この間の事件にしろ、ケンカにしろ、どっちにしてもああいうのは苦手だよ。はつきり『怖い』と言つてもいい」

「……」

前を見ながら語る光秋に、綾は顔を少し上げる。

「それでもどっちも動くことができたのは、『仕事』だったからつていうのが大きいかもしれない。義務感つていうかさ。そうでなかったら、どっちも一目散に逃げてたと思うよ……襲撃事件の方は、『夢』のこともあるけど」

一応補足を入れつつも、最後の方は自嘲気味な笑みを浮かべる。

「あとまあ、どっちも『怖さ』の質が違うもんな」

「『怖さ』の……質？」

光秋の発言を繰り返しながら、綾は興味を浮かべた顔をしっかりと上げる。

それを横目で確認しながら、光秋はさらに続ける。

「襲撃事件はともかく、巷のケンカで死ぬことはまずないから……そりゃあ、やり方によつては大怪我する可能性はあるわけだから、絶対じゃないけど……とにかく、綾がケンカの時に足踏みしちゃったのは、『怖い』つてのを退けてまで行動できるところまで気持ちを持つていけなかったからじゃないかな。僕が死にかけるところまで行けば、流石

に自分の抱える怖さにどうこういつてる場合じゃなかったんだろうさ」

「……そういうもんなのかな？」

「断言はできないがね。ただ僕だって、『やらなきゃいけない！』って思える何かがないや、けっこう動けないもんだぞ」

言いながら、脳裏を過ぎていく幼き日から今日こんにちに至るまでの思い出に、光秋は薄つすら苦笑いを浮かべる。

「……とにかくだ、『悔しい』『情けない』って思いがあるなら、次はそうならないようにすればいいさ。例えば今日ケンカに遭遇したら念で張つ倒すとか」

「……やめてよ、そういう冗談」

「僕だって願ひ下げだ。最後までそんな余計なことに関わるなんて」

互いに苦笑いを浮かべ、綾の気持ちもある程度持ち直すと、大通りに出た2人は左に曲がる。

大通りをしばらく直進して路地に入り、寮の玄関をくぐって階段を上る。ドアの前に着いて綾が鍵を開けると、2人は法子の部屋へ上がる。

「今更ですけど法子さん、本当に余ってるご飯使っちゃっていいんですか？」

「うん。どうせ残してても冷凍庫塞ぐだけだし、私も光秋くんの『飯団子』食べてみたいしね」

「それなら……水盤何処です？」

「そっち」

訊きながらコートを脱いだ光秋は、法子の指さしに従って脱衣所内の水盤で手を洗う。

食べ物を直に触る都合上、石鹸で両手を丁寧に洗浄し、泡をしつかり流して傍らに掛かっているタオルで水気を拭き取って台所へ向かうと、法子が多数のタッパを電子レンジに入れているところに出くわす。

「ちようどよかった。今スイッチ入れたから、できたらそのボウルに全部移しといて戻ってきたら残りの分解凍するから」

「わかりました」

言うや法子は脱衣所へ向かい、光秋はレンジ内で温められているタッパを3つ、自分の部屋より少し広めの台所水盤の上に置かれたボウル1つと未解凍のタッパ3つを見る。

終了を告げる電子音が響くや、光秋は解凍されたタッパをレンジから出してフタを開け、熱いくらいに温まった白飯をボウルに移していく。

ちようど脱衣所から戻って来た法子が残りのタッパをレンジに入れるのを見ると、光秋は水盤の上を改めて確認する。

「ところで、具はどうします?」

「ああ、そうだね……あたし、味噌がいい!」

光秋の問いに交代するや即答すると、綾は冷蔵庫を開けて味噌の容器を取り出す。

「そういや、お前さんそれ気に入ってたつけ。他には?……」

初めて自作の握り飯を振る舞った時のことを思い出しながら、光秋は冷蔵庫の中を探る。

「……握り飯の具に使えるような物はないな。梅干しとかあればよかったんだが」

「あつてもあたし食べないよ」

「お前さんあれ苦手だもん……仕方ない、シンプルに塩結びでいくか」

真面目に嫌そうな顔をする綾に応じつつ、光秋は台所棚の食卓塩の小瓶を目に止める。

ちようど解凍を終えた白飯を交代した法子がボウルに移すと、光秋が水で濡らしたしやもじでそれらをほぐす。タッパに入っていた時の形が崩れるくらいまで混ぜると、光秋は袖をまくり、水盤で濡らした両掌を痛くなるまで叩き合わせる。

「何してるの?」

「こうしてから握ると、熱さを感じ難くなるんです」

突然のことに首を傾げる法子に応じると、光秋はボウルから白飯を一握り分取って素

早く味噌を載せ、丸く固めたそれを空いているタツパに置く。

「……こんなもんなかな？」

自作の不格好な丸おにぎりに、自嘲気味な苦笑を漏らす。

「下手だねえ」

「そんなハッキリ言わなくても……僕自身そう思ったけど……」

遠慮のない単刀直入な感想を言ってくる法子に、光秋はますます苦笑する。

「ちよつと見てな」

言うや法子は両手を濡らし、しゃもじで搦った白飯を左手に載せ、味噌を適量混ぜたその熱さをものともせずにしっかりと握り、見事な三角おにぎりを光秋作の隣に置く。

「……法子さん、ホントいい奥さんになれますね」

自分が作った飯団子との圧倒的な差に、光秋はそれこそただ圧倒される。

「なに？ 私に決めてくれた——アキツ！」

「そういう意味じゃないって！」

からかう笑みを浮かべていた法子の言葉を遮って、目くじらを立てた綾が現れるや、光秋は慌てて付け加える。

「ただ、ここまで差を見せ付けられちゃうとき……いや、弱気になっても仕方ないよ

な。それなら」

落ち込んだのも束の間、すぐに気を取り直すと、光秋は乾いてきた手を再び濡らし、まとも痛くなるまで掌を叩き合わせると、法子の見真似でしやもじで白飯を掬い、徐々に叩き合わせの効果が薄れて熱さを感じる中、味噌を混ぜたそれを歯を食い縛って握っていく。その成果か、先程よりは三角に近くなった物ができ上がる。

と、ここであることを思い出す。

「あ……6つ分のご飯でもう3個味噌で握っちゃったな……残りは塩でいいか？」

「うん……法子もいって」

「じゃあ……」

綾と、綾伝いに法子の返答を聞くと、光秋は残っている白飯を手塩で握り、綾もそれを手伝う。

そうして3つの塩おにぎりを作ると、光秋は自分が握った1つと綾が握った2つを見比べる。

「綾も握るの上手いな。見事な三角おにぎり」

「あたしが上手いわけじゃないよ……」
「法子の手」が慣れてるから……」

「……なるほどな」

光秋の褒め言葉に、異物を見る様な目で自分の両手を見つめる綾。その心境を察して

早々に話を切り上げると、光秋は辺りを見回す。

「ところで、ラップ何処です？」

「……」

返答と同時に綾と代わった法子が手渡してくれた箱を受け取ると、光秋はおにぎりをラップに包んでいく。

「さて、これで主食はできたけど……お茶とかは食べる時に買いますか？」

「だね。ペットボトルなんかは近くのゴミ箱に捨てていけば荷物にならないし」

光秋の問いの答えながら、法子は棚から出した包みにおにぎり6つを入れていく。

「保冷剤は……いいですね？ 冬に」

「いいよ。寧ろ入れたら硬くなっちゃうかも」

「じゃあ、あとはこれを片付けて……」

法子の冗談に応じつつ、光秋は使ったボウルとしゃもじ、空けたタツパを洗い、脱衣所の水盤で手に付いたデンプンを流す。

法子の方も味噌を片付けて手を洗うと、2人はコートを羽織り、光秋がおにぎりの包みを持って部屋を出る。

「ありがとうございます。部屋使わせてもらって」

「いいよ。さっきも言っただけど、私も光秋くんのおにぎり食べたかったんだし……あた

しはアキと一緒に作れて楽しかったし」

「そっか……」

法子と綾の返事を聞きながら寮を出ると、光秋は左手を伸ばし、右手を繋いだ伊部姉妹と共に自分の寮へ戻る。

寮の自室に戻ると、光秋は机の上の時計を確認する。

「もうすぐ9時か……ちよつと早いけど、出ますか？」

「それがいいね。中途半端に腰落ち着けてもかえって疲れるし……とりあえず最初の行き先だけど、何処行く？」

「んーん……………」

法子の問いに、光秋はしばし思案する。

と、ある場所が頭に浮かぶ。

「……京都駅、かな」

「京都駅？」

「なにかと思い出の場所なんですよ。綾と初めて遠出した時とか、法子さんと食事したりとか……行きは市バスでのんびり行って、着いたら周辺ぶらついて、そんな感じでいいですか？」

「……もともとノープランだしね。それでいいか」

「では」

法子の返答を聞くと、光秋は財布や携帯電話を点検して点けつぱなしだったエアコンを切り、戸締りを確認してカバンを斜め掛けする。そこにおにぎりの入った包みを仕舞って部屋を出、後から来た小振りのバッグを左肩に提げた法子が出たのを確認すると鍵を閉める。

「じゃ、行きますか。二人……じゃない、三人ぶらり旅」

「途中下車でもしてみる？……ていうか、今人数間違えたでしょー」

「ごめんごめん。さあ」

冗談に冗談で返す法子、頬を膨らませる綾に应じると、光秋はそんな伊部姉妹と手を繋いで最寄りのバス停へ向かう。

と、路地を進んで表通りに出たところで一旦止まる。

「ところで、バスどっち回りにしよう？どっちでも最終的には駅に着くけど」

「あ、そっか……」

光秋の問いに、法子は思い出した様に漏らす。

西回りと東回りの違いはあるが、殆どのバスは市内を一周する形で巡り、最終的には京都駅にたどり着く。そしてこの辺りは京都駅とほぼ向かい合う位置にあり、どちらを選んでも移動に掛かる時間は大きく変わらず、料金も同じとなれば、あとは利用者の気

分次第ということだ。

「……て言つても、違いなんて景色くらいだしね……」

「……じゃあ、またあれやります？ ジャンケンで行く方向決めるやつ」

「……それがいつか。そういうのも面白そうだし……じゃあ、今日はあたしがやる！」

光秋の提案に法子が賛成するや、交代した綾が名乗りを上げる。

「よし。僕が勝つたら西回り、綾が勝てば東回りな……じゃあ……」

「ジャンケンポン！」

結果はグーを出した光秋の勝ちとなり、西回りのバス停へ向かうべく、一行は正面の横断歩道を渡る。

バス停で待つことしばし、やってきたバスの路線番号を見た光秋は、左隣の法子に確認の目を寄こす。

「これは大丈夫ですよね？」

「うん。駅に行くやつだ。乗ろう」

事前に確認していたバス停に備え付けてある時刻表、そこに書かれている路線一覧の記憶と照らし合わせながら応じた法子はそのバスに乗り込み、光秋も後に続く。

休日ということもあつてか、車内はかなり混み合っており、前の方に1人が座れるスペースを見付けた光秋は、

「法子さん、あそこ空いています」

と、半ば押し込む様にしてそこに法子を座らせる。

「でも、光秋くん……」

「僕は立つても平気ですよ。眺めもけっこういいし」

言いながら吊り革を掴んだ光秋が応じていると、バスのドアが閉まり、重いエンジン音を響かせて走り出す。

「じゃあ、せめてカバン持つよ。貸して」

「……じゃあ」

法子の好意に甘えてカバンを差し出し、それが膝の上に置かれたのを見ると、光秋は視線を窓に移す。

眺めがいいという発言に偽りはなく、実際橋の上を通った際に窓越しに見えた鴨川と河川敷の景色は、とても絵になる。

橋を渡れば大通りの脇に多様な店が隙間なく並び、その前に延びる歩道にはコート標準装備、場合によってはマフラーや毛糸の帽子を備えた人々が行き交っている。

しばらく進むと停止を求めるブザー音が響き、停まったバス停でまとまった人数が降りて席に空気が目立つと、どちらがということもなく後部の2人掛けの席に移動して並んで座る。

「よかったね、席空いてさ」

「僕はあるままでもよかったですけどね」

「あたしが嫌なの。一緒に座れないのが」

「そうかい」

左隣の法子と綾にそれぞれ応じると、光秋は返してもらったカバンを膝の上に置き、右の窓に顔を向けて景色観賞を再開する。

「……こうして改めて見ると、この辺も賑やかというか、活気がありますよね。四条みたいな有名所の観光地とはまた質が違う……例えるなら法子さんの家がある商店街みたいな……」

「そうかな……？自分の育った町を悪く言うわけじゃないけど、ああいう田舎の商店街と観光都市の町並みを比べられてもねえ……」

「そんな難しい話じゃないですよ。なんて言うか……住むには便利で過ごしやすいというか……都会過ぎず田舎過ぎずというか……そりゃあ、都会のど真ん中でしょうけど……」

いまいち自分の意図が伝わらない様子の法子に補足を入れるものの、上手い表現がでないことに光秋は我ながらもどかしくなる。

「あたしはなんとなく解るよ。元気なものに触れてるとアキも元気になる感じが伝わっ

てくる」

「……お前さんの場合、ノーマルのコミュニケーションでは反則なところもあるけどな……まあ、とりあえず伝わってるならいいや」

綾の理解方法に多少の引つ掛かりを覚えながらも、一応の理解者の存在に少しだけ救われた気分になる。

そんな会話の間にもバスは大通りを巡り、先週訪れた八坂神社の前を通過する。名所近くでの数回の停車を経て、一行の目的地たる京都駅に差し掛かる。

「……そろそろだな。荷物大丈夫？」

「うん。バス賃は……」

注意を促す光秋に応じながらバッグを確認した綾は、そのまま取り出した財布から小銭を出す。

光秋もカバンを提げて代金を用意したところでバスは停車し、ここに来るまでに車内を一杯にした人々に混ざって、一行は京都駅の降車用バス停に降り立つ。

「来たねえ、京都駅！」

「お前さんは実に夏以来か……さて、何処を見て回ろうか……」

喜色を浮かべながら正面の駅を眺める綾に応じながら、光秋は目ぼしい場所はないかと辺りを見回す。

「とりあえず駅行つてみようよ。構内見て回るのも面白そうだし」

「……ですね。駅だけでもいろいろあるし」

法子の提案に応じると、光秋は手を繋ぎ、少しだけ前を歩く形で京都駅中央口へ向かう。

大きく開いた出入り口から見える構内は休日ということもあってか、今日も前後左右に行き交う人々で混み合っている。

「もう聞き飽きたかもしれないですけど……やっぱいつ来てもすごいですねここは……」

もう何度抱いたかわからない感想を自覚しつつも呟くと、光秋は中央口の左右を見回す。

「そういう僕、駅の周辺って歩いたことないな。反対側へはいつも構内突っ切って行くし。法子さんは？」

「……言われてみれば私もないかな。光秋くんが言うみたいに中突っ切った方が速いし……いつだか上を飛び越えて行ったこともあるよね」

「……ありましたね。そんなこと」

面白半分で混ぜ返す法子に、光秋は復帰してすぐの予知出動のことを思い出す。

—あの時、頭に血が上ってまた赤くなりかけたんだよな。振り返ってみると、未熟だったというか……それは今もか……—「まあ、それはいいんだ。せつかくだから、

ちよつと冒険してみませんか？普段行かないところ行ってみましょうよ」

「いいね。面白そうだし……あたしも」

「よしー！」

法子と綾の了承を得ると、光秋は中央口手前で右に曲がり、伊部姉妹を先導する形で左に京都駅を見ながら歩く。

仕切りのない広間をしばらく進むと、正面に2車線の道路が見えてくる。周りを見回すと、駅と周囲の高層ビルに挟まれた脇道のようなのだ。

「この先ってこうなってるんだ」

「中央口と違って寂しいっていうか……静かだね」

一気に人氣が減った脇道に、光秋と法子はそれぞれ感じたことを呟く。

「このまま進めば反対側行けるんじゃない？行ってみようよ！」

「だな。面白そうだ」

綾の提案に即答するや、光秋はその手を引いて車道脇の歩道を道なりに進んで行く。

駅の一部と高層ビルに挟まれた、都心のだ真ん中にあつては静かな印象を抱かせる道をしばらく歩くと、それまでアスファルトだった路面がタイル張りに代わった道が現れる。

「……なんか、ずいぶんレトロなところに出たな」

今まで自分たちが歩いてきた——今は右に曲がって表通りに続いているアスファルトの道と、正面に延びるタイル張りの道を見比べながら、光秋は感じたままを呟く。

「確かにね。他にもタイルの道はたくさんあるけど、ここはなんていうか……道だけ大正とかその辺だね」

「……すごい表現ですね……言いたいことはなんとなく解るけど」

若干頭を捻った様子の法子に一応同意しつつ、光秋は右と正面それぞれの道を見比べる。

「どうします？ 曲がって表通り出てみます？ 僕はこのまま真っ直ぐ行ってみないけど」

「私もそれでいいよ。この道面白そうだし」

「綾は？」

「あたしも」

「じゃあ」

2人の同意を得ると、光秋は手を引いてタイル張りの道へ踏み出す。

しばらく進むとT字路に突き当たるが、左は駅の敷地のためか柵が設けてあり、必然的に右へ行くことになる。一本道を左に曲がると、左にスロープ、右に階段が備わった下り坂が見えてくる。

「この先、2つに分かれていますけど……坂と階段で行き先違うんですかね？」

「ううん。同じだと思うよ。車椅子なんかの人はスロープで降りて、そうでない人は階段使うんだよ、きつと」

「なるほど」

法子の推測混じりの説明に応じると、光秋は坂と距離を詰めながら2つの道を見比べる。

「それなら、スロープの方にしましょうよ。階段はちよつと……」

「……やっぱり、苦手？」

「苦手って程じゃ。ただ今日は、手繋いでるから……」

「離せばいいのに」

「……今日は、できるだけ繋いでおきたいんです」

「……だよね……うん」

静かな、しかし頑なな意思を含んだ光秋の返答に、法子と綾はそれぞれ応じ、一行は一瞬前より心なしか強く手を握り合ってスロープを歩く。

坂を下り切ってT字路に差し掛かると、一行は車2台がぎりぎりすれ違えるくらいの幅の正面の道、その左右を見回す。

「……は左行けそうだな……行ってみます？」

「だね。どつかで曲がらないと反対側行けないし」

法子の返答を聞くや、光秋はその手を引いて、歩き始めて以降始めて左へ行ける道へ踏み出し、しばらく進むと重厚な高架橋が見えてくる。

「あれ、京都駅の」

「うん。線路乗ってるやつだろう……位置から考えて」

高架橋を見ながら言う綾に、光秋も左側——京都駅の方を眺めながら応じる。

「……てことは、このまま行くと……」

一人呟きながら光秋は高架橋の下をくぐり、少し歩くと4車線の太い道が見えてくる。

その歩道をさらに進むと、重なる様にして佇む2本の高架橋が現れ、その下をくぐって太い十字路に行き着くと、左側によく見慣れた景色が見えてくる。

「やつぱり。上手く反対側に出ましたね」・

「でも、やつぱり大きな駅だね。外から回り込むだけでけっこう歩いたよ」

何度か来たことがある京都駅の裏側——八条通側の光景に、光秋は小さな達成感を覚えながら呟き、法子は若干疲れた様子で足を軽く振る。

それを見て、光秋はふと思いつく。

「どつかで休みますか。そういえば、こっち側の飲食店街に前から入ってみたい店があったんですよ。そこ行きましょう」

「なんのお店？」

「確か、喫茶店みたいなどだったかな？ 少なくとも、レストランみたいにしつかり食事するようなどこじやなかったと思います」

「喫茶店ねえ……いいや。行ってみよ」

「はい。綾もいいか？」

「あたしもいいよ。アキの話聞いてたら、なんか美味しそうな浮かんできたし」

「だから、勝手に思考を読みなさんな……」

法子の返答を聞き、綾を注意するや、光秋はその手を引いて目的の店へ向かう。

「別に読んだわけじゃないよー。勝手に浮かんでくるんだもん……」

不満そうに頬を膨らませる綾の抗弁を聞きながら少し歩くと、一行は駅構内の飲食店街へ入り、しばらく中を散策する。

「……………あつた。ここだ」

目的の店を見付けるや、光秋は伊部姉妹を先導する様にそこへ入店する。

「いらつしやいませ。何名様でしょうか？」

「……2人で」

「お好きな席にどうぞ」

奥から出てきた店員に少し迷いながら人数を告げると、促しに従って奥側の2人席に

向かい合って座る。

「……なんか、小さいお店だね」

「電車やバスの時間潰しが前提なんじゃないか？京都駆ってそういうのの交差点だし、構内に休憩所みたいないところもないしな。座って休むための店なんだよ」

半分程席が埋まっている店内を見回す綾に、光秋は推測混じりに応じ、互いの荷物を足元のかごに入れると、やって来た店員が水とおしぼりを置いていく。それが去つたのに入れ替わる様に、一行はテーブル脇に置いてあるメニュー表を広げる。

「これだこれ！これが食べてみたかったんだよ」

そう言つて光秋が生き生きと指さすのは、器の真ん中に丸い抹茶アイスが載ったあんみつの写真だ。

「これ、外の看板にもあったよね」

「そう。いつだったかは忘れたけど、前にここ来た時それが見えてさ、以来食べてみたいと思つてたんだよ！」

「……そういえば光秋くん、こういうの好きだったけ」

出入り口を見やる綾に光秋は若干興奮気味に応じ、法子は思い出した様に返しながらメニュー表に目を通す。

「じゃあ、私は抹茶パフェにしようかな。来たらちよつとずつ交換しようよ」

「いいですね！じゃあ……すみません」

法子の提案に嬉々として即答するや、光秋は店員を呼び、2人分の注文を頼む。

注文を聞いた店員が厨房に消えると、綾が思い出した様に呟く。

「そういえばアキ、入る時『2人』って言ったよね？」

「ああ……正直何て言おうか迷ったけど、物理的には2人だからいいかなーって……別に他意は……」

「また変な氣遣つてるよ。私たちもその辺わかつてるから大丈夫だよ。実際、私たちの事情いちいち説明するのも面倒だし、私たちが2人分食べるわけでもないしね」

「それならいいですが……」

法子の言葉に、いろいろな考えてどこか強張ってしまう気持ちを鎮めると、光秋は水を一口飲んで氣分転換する。

「それはそうと、食べ終わったらどうするか……」

「……あたし、あそこ行きたいな」

「……あそこか……」

言いながら視線を横へ向ける綾。その言わんとすることを察しながら視線を追って壁を、その先にある「あそこ」を幻視した光秋は、少し考える。

「……確かに、折角ここに来たなら寄っていった方がいいか。法子さんもそれでいす

か?」

「私も別に……と、来たよ!」

法子の了解を得た直後、先程頼んだあんみつと抹茶パフェが運ばれてくる。

——……と、焦るな……

写真で観るよりも数倍美味そうに見えるあんみつを前に逸る気持ちを抑えつつ、光秋はおしぼりで手を拭き、一緒に運ばれてきた小瓶に入っている黒蜜を全体に均等になるように垂らしていく。小瓶を完全に空けるとスプーンを手に取り、満を持して手を合わせる。

「いただきますっ!」

言うやいなや抹茶アイスにスプーンを入れ、一口程度に掬ったそれを黒蜜の掛かった寒天や餡子と一緒に口に運ぶ。

——……うん! 予想通りだな!——

舌の上に広がるアイス、餡子、黒蜜、それぞれの少しずつ異なる甘味と、抹茶の仄かな苦み、寒天の舌触りをしばし楽しむと、また一口掬って口に運ぶ。

「ご満悦だねえ。そんなに美味しいの?」

「はい。ここに来ようって言った甲斐がありました!」

抹茶パフェを食べながらの法子の問いに、光秋は上々な気分で答える。

一方、

「そつちは？」

「ちよつと苦戦中……美味しいけどね」

「ああ……」

上に載っている抹茶アイスを落とさないように慎重にスプーンを入れていく法子に、パフェ独特の食べ難さを思い出す。

そうしながらも長グラスの淵まで食べ進めて落ちる心配が解消されると、法子は光秋のあんみつを見やる。

「食べます？」

「ありがと。光秋くんもどうぞ」

「じゃあ一口」

視線の意図を察してあんみつを勧める光秋に、法子もお返しとばかりにパフェを勧めると、2人は互いの器にスプーンを伸ばす。

「うん！寒天と……この果物は杏子かな？それに黒蜜が絡んでいい甘さだね」

「こつちも。これは白玉かな？それに抹茶アイスが合わさってなんとも……抹茶味のスポンジケーキも好みの甘さで」

「それたぶんカステラだよ」

「あ、そっか」

互いに感想を語りつつ——光秋は法子の訂正を聞きながら——2人は満足気に食事を続ける。

「じゃあ今度は……はい、あーん！」

「やると思ってたよ……」

法子と交代するやパフェの載ったスプーンを差し出してくる綾、そのどこかで予想していた行動に小さく呟きながら、光秋は店内をさっと見渡す。

客の数は入った時と大して変わらず、未だに席の半分程が埋まっている状態だが、それぞれ客は、ある者はお喋りに華を咲かせ、ある者はたまに飲み物を挟みながら読書に耽り、ある者はやってきた料理を食べるにことに夢中になっており、少なくともこちらが注目されている様子はない。

「……仮にそうだったとしても、今更か……」「ん。あー」

すでに何度か公衆の面前でやっている手前、初めての時に比べてあつさり綾の行為を受け入れてパフェをいただくと、光秋は先程とは違う過程で口に入ってきたそれを咀嚼する。

「どっつー」

「どうって……さつきも言った通り、甘くて美味いよ」

「そういうことじゃなくってさー……いいや。あたしにも！」

「あいよ」

望みの返答が得られなかったことに若干膨れると、綾はもの欲しそうにあんみつを見つめる。それに応じながら光秋は溶け始めたアイスの表面を削って寒天や餡子、さらには白玉と一緒にスプーンで掬い、それを綾の口へ持つていく。

「……やつぱり、あれ言わなきゃダメなんだよな……う？」

「当然っ！」

有無を言わせない綾に、光秋は小さく覚悟を決める。

「……はい、あーん」

「あーん！」

言いながらスプーンを差し出すと、綾は満面の笑みでそれを銜える。

「……じゃあ、今度は私にも」

「そうきますか……」

交代と同時にねだってくる法子に応じながら、光秋はそちらにもあんみつをひと掬い持つていく。

「……これ言うんですよね……はい、あーん」

「あーん！」

綾と同じ要領でスプーンを差し出すと、法子は柔らかな笑みを浮かべてそれを咀嚼する。

そんなやり取りを挟みつつ、一行の休憩を兼ねたお茶の時間は過ぎていく。

しばらくして食事を終えると、一行は互いに荷物を提げてレジへ向かう。

カバンから財布を出しつつ、光秋は法子にやや強く言う。

「法子さん、ここのお茶代、全部僕に持たせてください」

「え？ いいよ。私たちの分は私たちで出すよ」

「そういうわけにもいきませんよ。少なくとも今はね。この間法子さんが言ってた『彼女候補』ってのに照らし合わせるなら、僕は『暫定彼氏』といでも言うべき立場なんだ。こういう時は格好つけさせてくださいよ」

「そういうもんかな？」

「つまらない見栄かもしれないですけど、やっぱり『男』として、その気がある女の人に対してはこれくらいやっておきたいんですよ。僕のためと思って」

「……じゃあ、甘えようかな。『暫定彼氏』くん！」

光秋の説得、それ以上にある種の意地にその意見を受け入れると、法子は「彼氏」という単語を面白そうに言いながら持っていた伝票を渡す。

それをレジに置いて2人分の会計を済ませると、光秋は伊部姉妹の手を引いて店を

出、先程話していた「あそこ」へ向かう。

通路をしばらく進んだ先にある広間、その出入り口から外に出て、さらに左に進むと、目的の「あそこ」——夏には綾と、秋には法子と腰かけた柵が見えてくる。

「……………座りますか」

「だね。せつかくだし……………久しぶりだなあ」

来たはいいものの、その後どうしたらいいか迷ってしまった光秋のとりあえずの提案に、法子が頷き、綾が懐かしむ様に呟くと、一行は柵の上に腰を下ろす。

——……………流石に冬はなあ……………——

ズボンを挟んで伝わってくるすっかり寒気に晒された金属の冷たさに、光秋は背筋を震わせる。

「……………やつぱり冬は冷たいねえ」

「ですネ……………」

同じことを感じたらしい法子に頷くと、光秋は夏のことを思い出す。

「そーいや綾、夏に……………座ったら指熱くしてたよな。あれは注意しようとした矢先だったわけ？」

「しょうがないじゃん！あの頃はそういうの知らなかったんだし……………」

昔話に懐かしむ笑みを浮かべる光秋、それとは対照的に、綾は恥ずかしいことを蒸し

返された様に頬を膨らませる。

「それが半年くらいでこれか……ホント、お前さんは成長が早いよ」

「それは、アキがいろいろ教えてくれたからだよ……」

精神的に幼かったあの頃の綾と、多少子供っぽいところを残しながらも肉体と吊り合うようになった今日の前にいる綾、その差に光秋は軽く圧倒され、綾は左肩に顔を寄せてくる。

「あの時だよ。アキに世界が広いってこと教えてもらったの」

「そんなこと言ったっけな？」

「言ったよー！あたしちゃんと覚えてるもん！」

「……そういや、あの頃はよくそんな話してたっけ……」

口を尖らせる綾に言われて、光秋は当時のことを大まかに思い出す。

―振り返ってみれば、田舎から出たばかりの若造が、なんとも大層なことを語ってたなあ……もつとも、あの時感じたこと、語ったことに間違いはない……と思う。少なくとも、ああいったこと一つ一つが、今ここにいる僕を形作っているのは確かだろう……

―
そこまで考えた、その時、

「あー、お二人さん？いい雰囲気のところ悪いんだけど、私もいるよ？」

当時のことを振り返る光秋の思考を遮る様に、若干不機嫌さを含んだ法子の声が掛かる。

「わかつてますよ……あ」

それに応えると、光秋は所々舗装の跡がある路面を捉える。

「そういうえば、法子さんに綾とのこと詳しく話したものでしたよね。『お互いを見た』なんて、要領の悪い説明して」

「あつたねえ……NPのテロの時に怒ったことにも触れたよね」

「ちよつとだけね……」

思い出した様に呟く法子に、光秋は初めての予知出動の時のことを思い出す。

「……………不思議なものです。綾と法子さん、それぞれ違う人格の、でも体は同じ人と、会話の内容は違つても、同じ場所での会話の思い出を作つて、そこに今全員で腰を下ろして……こんな数奇な経験、そうそうできないだろうなあ」

「そりやあねえ……一方の当事者である私たちでさえ、なんか変な気分……」

不意に浮かんだ感慨を思うままに呟く光秋に、法子も、綾の気持ちも含めて感じたままに返す。

その時、ひと際強い風が一行に吹き付ける。

「……………やっぱ、冬……に長居はまずいですね。中入りますか」

「そうだね。光秋くん明日のこともあるから、風邪ひくといけないし」

その冷気に追い立てられる様に、光秋と伊部姉妹は近くのドアから駅構内へ入る。通路中に満たされた温風に力んでいた体を弛緩させると、光秋は腕時計で時刻を確認する。

「もうすぐ12時か……そのコンビニでお茶買って、昼にします?といっても、何処で食べようか……」

正面に佇むコンビニを見ながら、光秋は適当な場所はないかと思案する。

「とりあえず反対側行ってみる?そこで座れそうな場所探してさ、そこで食べようよ」

「また駅を迂回して?」

「構内を突っ切って」

「冗談ですよ」

法子の提案に冗談で応じると、光秋はその手を引いてコンビニに入り、そこでペットボトル入りのお茶を2本買うと、通路を来た方向へ向かって進む。

先程外に出た出入り口のある広間に着くと、奥にあるエスカレーターを上って左に曲がり、その先にある階段を上って広い通路を直進する。いくつもの主要路線の上を跨いでいるそこは、今日も今日とて激しい人の行き来がある。

―昼時だつていうのに、ここは衰えないな……もつとも、今の僕たちもその衰え知ら

ずを作っている一員なんだが――

左右をすれ違う、あるいは追い越していく人々の数に圧倒されつつ、光秋は逸れないように伊部姉妹を繋ぐ手の力を強める。

しばらく進んで右に曲がり、エスカレーターを下って中央口から外に出ると、少し離れた所で立ち止まって周りを見回す。

「しかし、いい場所ありますか？構内は何処もごった返してるだろうし、外は……これなら、お茶だけ買って柵のところで食べててもよかつたかな……？」

軽い後悔を漏らしつつも、光秋は適所探しに目を凝らす。

「あっち行ってみない？少し動いてみようよ」

「……それもそうか」

綾の提案に頷くと、光秋は指さされた正面の道を歩いてみる。

と、少し進んだ所にあるバス乗り場、その脇に下へ続く幅広の階段を見付ける。

「ここにするか？邪魔にならないように端っこに座ってさ」

「あたしそれでもいいよ……私も」

「そんじゃ」

綾と法子の同意を得ると、一行はバス乗り場脇の階段、その1段目の右端に並んで座り、光秋は持っていたビニール袋からお茶を、提げていたカバンからおにぎりの入った

包みを取り出す。

「あたしこれねえ！」

そう言つて綾が真つ先に取つたのは、光秋がはじめの頃に作つた不格好な丸い味噌おにぎりだ。

「いいのか？そんな団子で……」

「アキが作ってくれたんだからいいの！いただきます！」

この期に及んでまだ見た目の悪さを気にする光秋とは対照的に、綾は嬉々としておにぎりに噛り付く。

「っ！……しょっぱ……」

「ああ、急いでたから入れ過ぎたか。ほれ」

「ありがと……」

予想より多かった味噌に口を結ぶ綾に、光秋はフタを開けたペットボトルを差し出し、綾はその中のお茶を飲んで口直しする。

「じゃあ僕も、いただきます」

綾にフタを渡して手を合わせると、光秋はお茶を一口飲む。お茶に乗って温かさが喉を通り、それが全身に浸透して寒さに無意識に強張っていた体がほぐれると、法子作の見事な三角おにぎりを一口齧る。

「……たまにはこういうのもいいですね」

口の中に広がる程よい塩気と白米本来の控えめな甘さ、その自己主張の少ない質素な味わいに、いい具合に脱力した感想が溢れる。

「……ほんとにこれ、入れ過ぎじゃない？」

「そんなにひどいですか？……これは綾かな？いい味噌加減で」

大量の味噌に苦言を呈する法子に返しながらおにぎり1個を平らげた光秋は、今度は綾作の味噌おにぎりに舌鼓を打つ。

75 別れの前に 中編

持参したおにぎりを全て平らげると、光秋と伊部姉妹はおにぎりの包みをカバンに片付け、お茶を飲んで口をさっぱりさせると、満腹時独特の心地いい頭の鈍さを感じながらその場でひと休みする。

——……やっぱこの時期、外に長居はできんか？——

もつとも、光秋の感じる通り外の気温は低く、たまに吹き付ける氷でも含んでいる様な強風に、今一つ心は休まらない。
と、

「寒ければこうすればいいよ」

言うやいなや、綾が左腕に——というよりも左半身全体に体を押し付けてくる。

「……お前さん、また心読んだな？」

「そうだけど……あたしにその気がなくても、どうしても伝わってくることもあるんだよ。いいじゃん、寒くなくて」

「そりゃあ、確かにいくらかマシになったけど……」

密着することで寒さが和らいだのは事実。しかし同時に、周囲、特に左横のバス乗り

場に佇む人々の視線を意識してしまう。

「……………やつぱり場所移そう。飯も食ったし。あんまこんな所に長くいると、それこそ風邪ひくかもしれないし」

「えー!？」

言うや光秋はカバンを斜め掛けして立ち上がり、綾は密着が解けたことに不満を顕わにしながらも、手を引かれるままに中央口へ向かつてついていく。

「せつかくいい感じだったのに…………」

「そう膨れるな…………周りの視線が痛いんだよ…………」

口を尖らせる綾に応じつつ中央口をくぐると、光秋は近くの案内板を見やる。

「悪い、ちよつとトイレ行つてくる。ここで待つてて」

そう言つて飲みかけのお茶を綾に預けると、案内板の矢印に従つて最寄りのトイレへ速足で向かう。

「…………さーて、午後からどうしたもんか……………」

用を足しながらこれからの予定について考えるものの、明確な案は浮かばず、結局なにも思い付かないまま伊部姉妹の許へ戻る。

「お待たせ…………それで、これからどうするか？」

「そうだね……………」

結局は伊部姉妹に意見を求め、法子が辺りを見回しながら思索していると、

「あたし、あそこ行きたい」

交代した綾が中央口の真向かいにある9階建てのビル、その上に佇む白い塔を指さす。

「京都タワーか……まあ、いいんじゃないか？ 法子さんは？」

「私も。そうなるとうしぶりだから、なんかワクワクしてきたなあ……じゃあ行こー！」
遙か上空の頂を眺めながら消極的に賛成する光秋に、打って変わって法子が和氣藹々に続けと、綾は手を引いて一目散にタワー下のビルへ向かう。

「そんな急ぐなって。危ないから……」

弱々しく注意しながら、光秋は綾に引つ張られるままについていく。

横断歩道を渡ってビルに入ると、中には菓子類や工芸品など、多種多様な商品が並んでいる。

「土産物売り場、ですか？」

「こつちだね。行こ」

店内を見回している光秋の手を引いて、法子は棚の合間を縫って店の奥へ向かう。向かう場所がわかっている確かな足取りは来慣れていることを示し、心なしか弾みながらも落ち着いた歩幅は、先程の綾のはしやいだ様子とは月とスッポンの差だ。

—やっぱ、こういう所で違いが出るのか……—

手を引かれるままにその様子を眺めながら、光秋は同じようで違う二人のあり様を改めて実感する。

少し歩いてエレベーターの前に着くと、光秋は一旦足を止め、法子も引き摺られる様に止まる。

「……やっぱり、上行きますか……」

「展望台ね。外から見た時出っ張ってたところ……もしかして、怖い？」

「ちよつとだけ……」

法子の問いに、光秋は正直に答える。元来高い所は苦手な質だ。

「……でもまあ、ちゃんと壁ありますしね……よし！行きましよう！」

そう声に出して自分に言い聞かせ、引き気味な腰をどうにか正すと、光秋は若干汗ばむ手で伊部姉妹を引いてエレベーターに乗り込む。

扉が閉まるやエレベーターはすぐに上昇を始め、一緒に乗り込んだ人々を途中の階で三々五々降ろしていく。

そしてビル部分の最上階たる11階に着くと扉が開き、光秋たちも他の人々に続いてエレベーターを降り、タワー部分に続くエレベーターの受付へ向かう。

「……………」

もつとも、受付へ向かう光秋の手はだらだらと汗ばまみ、膝は笑いが止まらないありさまだ。伊部姉妹と繋いだ手にも知らない間に力が入る。

「……ねえ、本当に大丈夫？」

「ええ……なんとか……」

その様子にただならぬものを感じてか、法子が顔を覗き込んでくが、光秋は努めて気丈に、明るく応える。顔はだいぶ引きつっているが。

その間にも一行は受付のそばまで近付き、少し離れた所で一度立ち止まると、光秋は何度か深呼吸して昂っていた気持ちを落ち着ける。

「よし！もう大丈夫」

「ホントに？……ダメなら今からでも引き返すけど？」

周りに配慮して静かに気合いを入れる光秋に、法子は不安の残る顔で乗ってきたエレベーターを勧める。

「いいえ、大丈夫です。それにここまで来たら逃げも隠れもしません。さあ！連れて行ってください！」

応じつつ、光秋は右手を差し出す。

「そこまで張り切られもねえ……」

そんな光秋の妙な高揚に困りつつも、法子は差し出された手を左手で握って受付へ向

かう。

光秋が2人分の代金を払って入場券を受け取ると、一行は他の乗客と共に正面のエレベーターに乗り込み、タワー部分の展望室を備えた階へ向かう。

少して扉が開き、エレベーターを降りると、法子の先導の下、正面全体がガラス張りになっている展望室に入る。

「……………高いですね」

壁に背中を預けつつ、足の裏が急激に湿る感触を覚えながら、光秋は窓から見える景色——いずれも数十メートルはあろうビルの屋上をさらに上から見下ろし、その合間に延びる道路を走る車が掌に収まるくらいの大きさに見える光景——にそれだけ呟く。

「確かここ、地上から100メートルの高さだつて」

「……………」

法子の告げた具体的な数字に、光秋の足の裏はますます湿る。

「……………本当に大丈夫？」

「大丈夫です……………そりゃあ、やっぱり少し怖いけど、どうしようもないって程じゃないし……………少しづつ慣れてもきたし……………」

法子の再三の問いに応じると、いくらか落ち着いた光秋は壁から離れて窓側に寄ってみる。

法子もその左隣に歩み寄ると、そろって眼下に広がる街並みを俯瞰する。

「ニコイチじゃもつと高いところ飛んでるのに、それでもダメなの?」

「自分で動かしてる分には平気なんですよ。今みたいに立ってるだけとか、飛行機に乗ってるだけとか……自分の力の及ばない形で地上から離れるのが怖い……とでも言えばいいのか?」

「自分で動かす分には、ねえ……わからなくはないけど」

光秋の恐怖の基準説明に一応の理解を示すと、法子はタワーの下を見下ろす。

「……遠くを見るようにすればいいんだよな。遠くを………でもそんな言いつてるように、ちゃんとガラスだってあるんだし……」

自分に言い聞かせるようにして極力上の方に視線を向けながら、光秋は右手をゆつくりと伸ばし、きちんと壁があるという実感を得ようと窓に触れようとする。

その時、

「えいっ!」

「ウオオッ!!……綾っ!」

いつの間にか背後に移動していた綾に背中を押され、独特の緊張感に張り詰めていた光秋は驚愕の声を上げながら振り返りざまに怒鳴り付ける。

一瞬後に我に返って周りを見ると、突然大きな声を出した所為か、他の客たちから怪

訝な目を向けられる。

「あ……………すみません……………」

その視線の圧力にすぐに落ち着きを取り戻すと周囲に頭を下げ、怒鳴って以降縮こまってしまった綾に向き直る。

「怒鳴ったりしてごめん。僕もビックリしたもんで……………驚かせちゃったか？」

「ちよつとだけ……………」

小声で応じると、綾は目の端に浮き出ていた涙を拭う。

「あたしの方こそごめん。ちよつとイタズラしただけのつもりだったんだけど……………そんなに高いところ苦手だったなんて……………」

「こればかりは冗談抜きでダメなんだよ……………まあやっちゃったもんは仕方ないから、今後気を付けてくれ」

「うん」

それだけは真剣に答える光秋に、綾は素直に頭を下げる。

それを待っていたかのように、交代した法子が明るく呼び掛ける。

「じゃあ気を取り直して、続きというこう。あつちに面白いものあるから」

「はい……………面白いもの？」

応じると、光秋は手を繋ぎ直した法子の後をついていく。

——……怖かったとはいえ、あれくらいで声を荒げてしまうとは………僕もまだまだだな……—

怒鳴ったことに改めて恥じらいを覚えていると、法子が足を止め、視線を追って目の前に佇んでいる物を見る。

「これ、双眼鏡ですか？高い所の観光地の定番の」

「そう。けっこう遠くまでよく見えるよ」

「でもこういうのって、小銭入れないと動かないんじゃない？」

「ここのは無料なの。試しに覗いてみてよ」

「はあ……」

法子に促されるまま、光秋は固定式の双眼鏡に顔を近付ける。

「わあホントだ……！自力じゃ細々したものがあることしか判らなかったけど、これだと民家の1件1件までよく見えますね！」

レンズを介して広がる鮮明な視界に、思わず感動の声を上げる。

「……あれ？こつちって今住んでるとこじゃ……ああ！あの白いの京都支部だ！綾も見えてみろって！」

「うん」

気分が高じて少しはしやぎながら勧めると、光秋は綾と交代する。

「わあすごい！よく見える！……あ！あれアキの住んでる寮かな？」

「どれ？……」

「こちらもしやぎながら訊いてくる綾に、光秋はレンズの向きを動かさないように退いてもらって再度双眼鏡を覗き込む。

「んー……」ちやちやしてて僕にはわからんなあ……あ、あれ法子さんの寮じゃ？」

「どれ？……あ、ホントだ！」

言いながら向きを固定して双眼鏡を譲ると、それを覗き込んだ法子も楽しそうな声を上げる。

「たかが双眼鏡と思ったけど、久しぶりに見るとなかなか面白いもんだな！」

法子と綾の様子と自分自身の興奮を振り返りながら、光秋は双眼鏡による景色観賞をしばらく満喫する。

展望室全ての双眼鏡を巡り、1台ごとに舐める様に景色を見渡し、時間を忘れて展望室を一周すると、光秋は左手首の腕時計を見る。

「2時半か。結構いたな」

「双眼鏡、意外と面白かったもんね！」

時間の早さを感じる光秋に、法子が楽しそうに応じる。

「……今度は、直接上がつて見てみる？」

「それだけは勘弁してくれ」

その表情を引き継いで笑顔で問う綾に半ば本気で怯えながら即答すると、光秋はすっかり汗の引いた手を繋いで、順路案内に従って展望室を出る。

エレベーターの前に移動して下りのボタンを押すと、扉が開くのを待つ間、光秋は次のことについて考える。

「次どうしましょう？まだ結構時間あるけど」

「少しはしやぎ過ぎて疲れたからねえ。どつかでひと休みしたいな……あたしも」

「じゃあ、また喫茶店でも入りますか……」

法子と綾に応じると、光秋は近くにいい店がないか記憶を探る。

その間に到着したエレベーターに乗り込み、光秋がタワー部分1階のボタンを押すと、法子がい出した様に言う。

「そういえば、前にフミと遊びに来た時、八条側に小さなお店があったんだよね」

「じゃあ、そこ行ってみます？」

「私はいいいけど、お昼前に入ったとこと違ってコーヒーしかないよ？光秋くんそれでいい？」

「僕だってコーヒーくらい飲みますよ。どっちかっていうと加糖派だけど……加藤だけに」

「……」

咄嗟に思い付いた一言に、エレベーター内が妙な沈黙に包まれる。

「そんなあからさまに困った顔しなくても……まあいいや。とにかく、コーヒーもそれなりに好きですよ。あとは綾だけ……」

「あたしは何処でもいいよ……じゃあ決まりだね。そこ行こう」

「はい」

一行の総意がまとまる間にもエレベーターは1階に着き、今度はビル部分のエレベーターへ向かう。

エレベーターを降り、ビルを出た一行は、来た道に戻る形で京都駅中央口へ向かう。構内を突っ切つて八条側へ出ると、法子先導の下、最寄りの横断歩道を渡つて道路の反対側に佇む小さな喫茶店に入る。

「……ここが、横尾中尉が入った店ですか……」

2人掛けのテーブル席が4組にカウンター席が8つという、昼前に入つた駅構内の店以上に「小さい」という印象を与えてくる店内を見回しながら、光秋は法子に引かれるままにカウンターに歩み寄り、カバンを足元に置いて椅子に腰を下ろす。

一行と男性店員1人以外誰もいない、静かな店内だ。

「なににする?」

言いながら左隣に座る法子がメニュー表を差し出し、光秋はメガネを前にずらしてそれに目を通す。

「……………法子さんはどうします?」

「私は……………エスプレッソにしようかな」

「じゃあ、僕もそれで」

「いいの?」

「正直、コーヒーなんててんでわかりませんから。エスプレッソだのカフェ・ラテだの、トルコだのモカだのブルーマウンテンだの、名前見ただけじゃなんのことかわかりませんし……………」

確認する法子に、光秋はお手上げといった様子で応じる。

「それなら、同じものを一緒に飲んだ方が楽しいでしょう」

「そう?なら……………すみません!」

付け加えを聞くと、法子はカウンター奥の店員を呼んで2人分のエスプレッソを注文する。

「コーヒー、詳しくないの?」

「飲むのといったら自動販売機の缶か、スーパーで買ってくるペットボトル入りのやつくらいですね。家で淹れる機会も殆どないし」

意外そうな顔をする法子に、光秋はコーヒーに関する日頃の様子を振り返りながら答える。

「こういう店に来る機会も大してないし、来たとしても甘いか苦いかを気にするくらいで、こんなふういろんな種類のことなんて考えませんでしたから……法子さんは違ούνですか？」

先程のメニュー表を指さしながら続けると、今度は光秋が問う。

「私もそんなに詳しいわけじゃないんだけどね。ハルちゃんの影響でちよつとだけ知ってるっていうか」

「なるほど……日高さん食通でしたもんね」

言われて光秋は日高の特徴を、年末に家でご馳走になった紅茶のことを中心に思い出す。

その間にもカウンター奥でコンロにかけられたコーヒーの独特の香りが店内に広がり、ややあつて専用のポットから注がれたエスプレッソが2つ運ばれてくる。

「……この香りはいいいものですね」

コーヒーカップを持って鼻に近付け、改めてその香りを楽しむと、光秋はもくもくと湯気を立てる薄茶色の液体をそつと口に入れる。

「……濃いですね」

「エスプレッソだからね……」

舌の上に広がるやや強い苦みに感じたままを呟くと、カップを両手で抱く様に持った法子がすすりながら返す。

満足そうな顔を浮かべて味を楽しんでいる姿を横目に見つつ、光秋はテーブルに備え置きされている容器を取って、小さじ3杯程の砂糖を加える。

「そんなに入れるの？」

「甘めが好きなんですよ」

「……『甘め』っていうか……」

若干目を丸くしてなにか言いたげな顔をする法子を意識しながら、光秋は加糖エスプレッソを改めて口にする。

「……うん。これだ」

コーヒー本来の苦みと砂糖の甘味が好みの具合に混ざったことに満足すると、カップをソーサーに置いて視線を上に向ける。

「柵のここでの続きじゃないけど……なんかやつぱり、不思議な気分です」

「なにが？」

遠い目で上を眺める光秋の呟きに、法子もカップをソーサーに置いて訊いてくる。

「年明け早々、NPと、ZCなんて新興のテログループの襲撃があったと思ったら、京都

に戻ってくるや特務隊主任やれっといわれて、その別れの前の楽しみに騒ぎに来たらこうしてお茶飲んで……大事件に遭遇したと思ったらデートって、我ながら波瀾万丈だなあ……」

年明けから今日までの慌ただしい日々を振り返りつつ、光秋はコーヒーを一口すすめる。やや苦みの勝る甘苦さが、今は妙に口に馴染む。

「……おまけに、パーティーではお姫様といい感じになつたしねえ？」

「誤解を招く様な言い方するな」

少し棘のある視線を向けてくる綾に、光秋はきつぱりと反論する。

「……まあでも、涼子様との出会いも確かに波瀾万丈かもな。あんな人と御近付きになれる機会なんてそうないし……」

言いながら、光秋は涼子の協力の下、共に入間主任の応急処置をしたことを思い出す。

「……そういえば、涼子様は僕の名前知ってるんだよな。あの時は勢いに負けて教えちゃったが……大丈夫かな？」

別れ際のこと脳裏を過ると、改めて不安を覚える。

が、それも今更と割り切ってコーヒーと一緒に飲み込んでしまふ。

「もつとも、もう会うこともないだろうがなあ……ああいうのを『一期一会』っていうのかな……」

「イチゴ……?」

『一期一会』^{いちごいちえ}。一生に一度の出会いってことだよ。だから出会った人のことは大切にしなさいって」

首を傾げる綾に、大まかな意味を説明する。

「……下手したら、綾との出会いもそれで終わってたかもしれないもんなー

自らが呟いた四字熟語に、光秋は綾と過ごした日々、その別れの時を思い出す。一期は今生の別れと思っていた、あの瞬間を。

そして、

「あの時は、これで最後だと、心底そう思ってたからこそ、『あんなこと』もできたけど……今思い返すと恥ずかしいっ!!」

「あんなこと」——篤い口付けを交わした瞬間を思い出し、光秋の体温がコーヒーや暖房とは無関係に急上昇する。

「……アキ?……どうしたの? 顔赤いような……?」

「いえ。何でも……」

綾と法子、二人分の心配の視線に目を逸らしながら応じると、光秋はとりあえずコーヒーをすすする。

「思い出すんじゃないかった……今は2人と顔合わせられないよ……」

そんな後悔を覚えながら飲むコーヒ―は、今度は何故か甘く感じた。

しばらくして気恥ずかしい後悔から立ち直った光秋は、すっかり温ぬるくなったコーヒ―を飲み干し、伊部姉妹も飲み終えたのを確認すると、口の中に残る甘苦さを感じながら腕時計で時刻を確認する。

「3時15分か……次何処行きましょう?」

「そうだなあ……………」

光秋の問いに、法子は上を見やりながら考える。

「この間みたいにな、この辺テキトーに歩いてみる?ジャンケンで行く方向決めてさ」

「あれか……でも面白そうですね。それでそのままぶらぶらするもよし、行った先に面白いものがあれば寄るもよし。綾は?」

「あたしもそれでいいよ」

「じゃあ行きましょう」

先週のことを思い出しながら賛同し、綾の合意も得ると、光秋はカバンを提げて椅子を立ち、店員を呼んで2人分の会計を済ませる。

綾の手を引いて店を出、店の前から少し離れると、早速ジャンケンを交わす。光秋がグー、綾がパーだ。

「綾の勝ちか。じゃあ左だな」

それでもどっちに向かうかが決まると、光秋は綾の手を引いて店から見て左、方角でいうと西へ向かって歩道を進む。

しばらく歩いて横断歩道が見えてくると再びジャンケンをし、綾が勝ったので前進を続ける。

次も、その次も、そのさらに次も綾が勝ち続け、前身か直進を繰り返す中、交代した法子が呆然とした顔を光秋に向けてくる。

「光秋くん……ジャンケン弱いね」

「いや、こんなの運でしょ？ たまたま綾の方に運が向いてただけですよ……」

法子の単刀直入な言いように反論していると、一行は再び十字路に差し掛かる。

「じゃあ、今度は私とやってみよう」

「いいですよ。先日は五分五分つてところだったけど……」

先週の戦績を曖昧に思い出しつつ、光秋は法子とジャンケンをする。

光秋がチョキ、法子がパーだ。

「あちゃー。私に代わった途端負けちゃった」

「今後は僕に運が向いてきましたかね……というわけで、右行きましょう」

法子に応じつつ、光秋はその手を引いて右に曲がる。

しばらく歩くと、中規模の書店が見えてくる。

——本屋か……いや……

一瞬入りたい衝動に駆られるものの、それで先週一緒にいる時間を削ってしまった“失敗”を思い出し、光秋は目を逸らして先を行こうとする。

その矢先、足を止めた法子が傍らの書店を見やる。

「本屋か……せつかくだし、ちよつと入ってみる？」

「え!？」

降つて湧いた甘い誘惑に、しかし光秋はついさつき考えたことを思い出して抵抗を試みる。

「いや、でも……この間、それで時間潰しちやったし、こういうところは今回の主旨に反するとか……」

「んー……確かにねえ。それこそ本や音楽は人それぞれ好みがあるから、みんなじゃ回れないか……あたしも入ってみたいけど、アキの言う通りだしね……」

「……」

法子と綾の名残惜しい顔に、光秋はそれはそれで歯痒い気持ちを抱く。

と、不意にあることが思い浮かぶ。

「……ところで、先週2人は代わり番こに店内回ってたんだよね？」

「うん。法子の読んだのも面白かったから、あれはあれで楽しかったけど」

「代わり番……」

綾の返答に、光秋は束の間思案する。

「じゃあ、3人で回るか？それぞれが行きたいコーナーにみんなで行って、そこを見て回る、それを繰り返すってことで」

「それいいかも！面白そう！……なるほどね。やるじゃん！」

「いえ。2人の話聞いてたら、そういうのもありかなって……じゃあ、早速行きましょう！」

自身の提案に嬉々として賛成してくれる綾と法子。その笑顔を見て光秋も気分を高揚させながら、一行は書店の自動ドアをくぐる。

「さて、まずは誰のから回るか……」

本が満載された棚、それが所狭しと並ぶ店内を見回すと、光秋は伊部姉妹を見やる。

「光秋くん先でいいよ」

「いいえ。僕は最後でいいです。法子さんか綾、どっちを先に回るか決めてください」

「そう？じゃあお言葉に甘えて……」

法子の勧めを断る光秋。それに応じる様に、法子は目をつむって自身の中に意識を集中する。

「それじゃあ、まずあたしから！」

姉妹の話し合いの結果を告げるや、綾は光秋の手を引いて店の奥へ速足で向かう。

「おいおい、そんなに急ぐなって、危ないから……」

「うん」

他の客や店員との衝突を心配する光秋をよそに、綾は看板を見ながら自分の好きなコーナーを探す。

そして、

「あつた！」

少し歩いた所で嬉しそうな声を上げると、綾は光秋を引つ張つて本棚の合間に入つていく。

「恋愛小説か……お前さんこういうの好きだよな」

棚の上の看板と、先日の買い物の様子を思い出しながら呟くと、光秋は目に付いた一冊の文庫本を手にとってみる。裏のあらすじを読むに、難病を患った女子高生と、その恋人たる男子高校生の物語のようだ。

「……………」「限られた時間、か……………」

ページをパラパラと捲つて目に入つたその一言に夏の一件を思い出し、懐かしさとも切なさとも、恥ずかしさともつかない気持ちを持て余すと、その本をそつと本棚に戻す。

「少なくとも僕は、その後また会つちやつたんだよな……………」

嬉しさと気恥ずかしさがない交ぜになった胸中を自覚しつつ、左隣で立ち読みを続ける綾を見やる。

その視線に気付いたのか、綾は文庫本から顔を上げる。

「なに……？」

「いや……」

顔を向けてきた綾に咄嗟に返事が浮かばず、光秋は口籠ってしまう。

「……今、アキの中ざわざわしてたけど、なんかあつた？」

「……だーから、勝手に読むんじゃないよ……」

「だから、勝手に伝わってくるんだって。それに細かいことは読んでないよー」

すっかり定番となったやり取りに、綾は口を尖らせて反論する。

「……ちよつとな、いろいろ考えちゃったんだよ……それはいいんだ。ところで、お前さんさつきからなに読んでんだ？」

一応の返答の後、話題を変えることも兼ねて綾の持つている本に興味を向ける。

向けられた表紙には、『愛性——あいしやう五組の例』と書かれている。

「何組かの恋人たちの話を別々に綴ったの」

「オムニバスってやつか。ちよつといいか？」

「どうぞ」

断りを入れて綾から本を受け取ると、光秋は目次を開く。タイトルの通り、5つの短編が収められているようだ。

次にページをパラパラと捲つて、大雑把に流し読みしてみる。

「ほー……さつと見た感じ、なかなか面白そうじゃないか。ラブコメから本格的な純愛までつてどこか。『相性』と『愛性』にかけてるんだな……買つてみようかな」

流し読みの感想を呟くや、すっかりその本に購買意欲が湧いた光秋は、持ってた分を綾に返して本棚から同じ本を手取る。

「それなら、これなんかもどう？」

言うや綾は違う本を取つて勧め、光秋はそれにも目を通す。

そんなやり取りを繰り返すこと十数分。

最終的に文庫本3冊を脇に抱えることになった光秋は、綾と交代した法子に引かれて次のコーナーへ向かう。

途中でしばしの熟考を挟んだ末に入った本棚、その上の看板には「SF小説」とある。

「……………」ですか？

「普段はいろいろ見て回るんだけど、今回は3人分見て回るわけだからね。強いて一つに絞つたらここになった」

確認の目を向ける光秋に应じると、法子は綾の時に購入を決めた文庫本2冊を左脇に

挟み、おもむろに取った本を立ち読みする。

「持ってますよ。読み辛いでしょ」

「そう？・ありがと」

光秋の申し出にすぐに応じると、法子は脇の本を渡して立ち読みを再開する。

受け取った本を手持ちの分とまとめると、光秋も本棚の前を右、左と行き来する。

「……！これ、こつちにもあるんだなあ……」

不意に目に入り込んできた、光秋が元いた世界では映画にもなった——というよりも映画としての知名度が高い——タイトルに、思わず手に取って裏のあらすじを読み、数ページ捲ってみる。作品が書かれた当時は未だ未来だった2001年、突如発見された謎の板に促されて人類が宇宙を旅する話だ。

「……流石に内容は若干違うようだが……」

光秋自身は映画すらきちんと観たことはなかったものの、聞きかじりの情報では登場人物は皆この世界でいうところのノーマルだった。それに対し、目の前の本では超能力者が何人も普通に出てくるという差異に、軽いカルチャーショックを覚えずにいられない。

——今までは、こんなふうに向こうとこつちで同一の作品に出会う機会がなかったが……やっぱ、違う世界で書かれたものだと思いますね……」

そう思うことで心中の衝撃を噛み締めると、光秋はその文庫本を棚に戻し、その9年後を書いた2作目、そのさらに51年後を書いた3作目、1作目から1000年後を書いた4作目を指で追っていく。

—まあ、多少記憶と違っても、やっぱり読んでみたいからねえ。しかし、4作全部読むのは流石に大変だよなあ……………—

1作ごとにそれなりの厚さを誇る4冊の文庫本に、しばし迷いが生じる。

そして、

—とりあえず、今はこれにしよう！—

断じるや、4作目を取って脇の本の束に加える。

それが見えたのか、本から顔を上げた法子が訊いてくる。

「なに選んだの？」

「これです」

応じながら、光秋は今選んだ本を見せる。

「また名作選んだねえ」

「前から興味あったんで」—内容は微妙に違うようですが…………—

「てことは、他のも持ってるの？」

「いいえ。このシリーズはこれが初めてです」

「え？……でもそれ、最終作じゃあ……」

「自分でも変な順番かと思いましたが、どうもこれが読みたくなって」

「……まあ、そういうのは人それぞれだからね」

「そういう法子さんは、さつきからなに読んでるんです？」

言いながら、光秋は法子が持つ文庫本に顔を寄せる。これも過去に映画化された、口ボツト三原則に反した行動をとった個体の謎を追う物語、その原作だ。

「法子さんはこういうの読むんですか」

「こういうのっていうか、前にこれを原作にした映画がやってたからさ、どんなのかなあって」

「あ、こつちにもあの映画あるんだ」

「『こつちにも』って、光秋くんの方も？」

「はい……ていつても、僕はテレビで観た口ですけど」

「私も」

当時のことを思い出しながら語る光秋に、法子も笑って応じる。

互いが手に取る作品に関するやり取りを挟みつつ、さらに十数分が過ぎた頃。

最後に自分の番となった光秋は、全員分の本を右脇に抱え、左手で伊部姉妹を引きながら行きたいコーナーを目指す。

—SFはもう一通り見たしなあ……—

そう思いながら足を運んだ先は、ホラー小説のコーナーだ。

「そういうば光秋くん、こういうの好きだったよねえ。休憩時間なんかによく読んでたし……あたしにもよく買ってきてくれたしね」

「そうだっけ？……確かに、不思議な話には興味があるがさ……」

法子と綾の指摘にいまいち実感が持てないながら、光秋は本棚を指で追っていく。

「……おっ！」

鼻屑にしている作家の作品を見付けるや、手に取ってさつと読んでみる。

と、

「あ、これも映画になったよねえ」

言いながら、法子が文庫本を差し出してくる。恨みを抱いて死んだ女性によって呪われた家、それに関わった人々をめぐる物語だ。

「これもこつちにあるんだ……これは前にも観たかな……？」

「私も観たよ。高校生くらいだったかな……？」

「映画館で？」

「ううん。テレビで。公開された1、2年くらい後の夏休みに、ハルちゃんと、あと友達
の何人かで観てたかな」

「僕もテレビですね。録画して、明るい内に観てた記憶が」

「いや、明るい内に観たら怖さ半減じゃん!」

「僕はそれくらいがちょうどいいんですよ。夜中に観ようもんなら、それこそトイレにも行けなくなるってやつで……」

面白くないと言わんばかりの法子に、光秋は口にした状況を想像して一瞬震えながら応じると、購入を決めた鼻肩作家の本を脇に加えて、再び本棚を眺める。

「……あ。これもこつちにもあるんだ……」

目に入ったその作品も映画化されたものであり、映画が公開された当時、——光秋が元いた世界では——社会的ブームにもなった、呪いのビデオテープの物語だ。

好奇心から手に取ってページを捲っていると、タイトルを見た法子が怪訝な顔をする。

「ああ、それも光秋くんの側にあるんだ……」

「はい。これも映画化されるくらいのヒット作でしたよ」

「映画化……ああ、そうか……光秋くんの方は、超能力者いないんだっけ……」

「?……何か?」

怪訝ながらもどこか納得した様子で呟く法子に、光秋はその意図を図りかねて首を傾げる。

「この小説、主要人物に超能力者が出てくるんだけどね、その表現が超能力者差別じゃないかって批判が出て……作者はきっぱり否定したんだけど、超能力者やその擁護団体が抗議活動を起こして、内容よりもその騒ぎで話題になっちゃんだよね……」

「超能力者……?」

法子の説明に唖然としつつ、光秋はページの中程を開いて斜め読みしてみる。

「……本当だ……これは流石に……」

該当箇所の記述に、光秋もそうした団体が声を上げることに薄々納得してしまう。元いた世界の同作は未読なために一概に比較はできないが、超能力者を怪物然とした様子で表現するそのシナリオは、——それがホラー小説の要たる「恐怖」を醸し出してもいるのだが——確かにこちら側では一部の人々の^{ひんしゆく}響^{ひんしゆく}を醸^{ひんしゆく}してしまいかもしれない。

——僕の世界の方は読んだことないからなんともいえんが……——「これも世界の違いですかねえ……当然映画化は……」

「されてないねえ。今は流石に落ち着いて、あくまでも表現の一種、ホラー小説の1つとしてこうして販売自体は続けられてるけど……」

作品に対する世の反応と、法子の答えに再びカルチャーショックを覚えつつ、光秋はその本をそつと元の位置に戻す。

思わぬ所で世界の違い、それも激しい例を示されて呆然としてみると、法子と交代し

た綾が1冊の本を手取る。

「……『百物語』？」

「ああ、それもこつちにもあるんだ」

厚い文庫本の表紙に書かれているタイトルを首を傾げて読み上げる綾に、カルチャーショックから立ち直った光秋は感心を覚えながら応じる。

「ちよつと貸して」

そう綾に断つて本を受け取ると、『怪奇百物語』と題されたその目次に目を通す。

「……やつぱり。100話収めた短編集か」

「ねえ、百物語って何？」

目次を眺めながら断じていると、綾が当初の問いを訊いてくる。

「ああ、百物語っていうのはさ……なんていうかな……そういう遊びみたいなもんだよ。夜中に大勢で集まって、怖い話や不思議な話を100話語るっていう」

「怖い話？」

「二種の肝試しみたいなもんだろう。100話語り終わると本当に不思議なことが起こるっていわれてるけど、あくまで噂……でもないかな……？」

言いかけて、光秋は今日まで自分が体験してきたことの数々を振り返り、思わず言い淀んでしまう。

「この1年足らずでさんざん不思議というか、非常識——少なくともこつちに来るまではその範疇だったものを見せられ続けたからなあ……百物語の怪異も、今なら本当に起こりそうな気がするよ……」——常識と非常識の境界が曖昧になってきてるんだなあ……

自身の置かれた現状を意識して、光秋は困った顔を浮かべつつも、それを少しだけ楽しんでいるとも自覚する。命が脅かされるのは御免被りたいものの、不思議なもの、自分たちの理解を超えたものへの好奇心は、未だ心の広範囲を占めている。

「ならさ、今度やってみる？」

「百物語をか？」

提案してくる綾に、光秋はしばし思案する。

「……………いいかもな！夏にでもやってみるか」

「面白そうじゃない！お盆休みにでもハルちゃんちに行つてやる？」

「いいですね！日高さんち雰囲気あるし」

話に乗ってきた法子を交えつつ、3人は百物語会開催について盛り上がる。

一通り語り合ったところで各々落ち着くと、光秋は腕時計を見る。

「4時半……喋つてたのもあるけど、またけっこういましたねえ」

「だねえ……もう少し……5時くらいが帰り時かな？」

応じつつ、法子はどこか寂しそうな顔を浮かべ、一行の間に気まずさが漂う。

「……そろそろ出ますか。本もかなり溜まったし」

そんな雰囲気を変えようと、光秋は脇に抱えた3人分の本の束を示す。

「そうだね。そろそろ会計した方がいいか……次何処行く?」

「出てから決めよう。なんならまたジャンケンでも」

法子が意識してその意図に乗り、光秋が綾の問いに答えながらレジへ先導すると、それぞれ自分の本の代金を払って店を出る。

「そっちの袋貸して。まとめて入れとく」

「ありがと」

応じながら、綾は自分と法子の本が入ったビニール袋を差し出し、光秋はそれと自分の分をまとめてカバンに仕舞う。

「じゃあ……」

チャックを閉めるや、光秋は握った手を示し、それを見て心得た綾とジャンケンを交わす。光秋がチョキ、綾がパーだ。

「あーっ! お店入るまでは勝ってたのに!」

「今度は僕に運が向いてきたな。というわけでこっちだ」

パーの形をした自分の手を憎々しげに眺めつつ、悔しそうな声を上げる綾。それに

薄つすら嬉しそうに返すと、光秋は伊部姉妹の手を引いて右へ向かう。

曲がり角に突き当たるたびにジャンケンを交わし、勝った方の側に曲がるを繰り返すこと20分少々。

すっかり日が落ちた空を見て、光秋は一旦足を止め、伊部姉妹もそれに倣う。

「そろそろ駅に戻りますか。帰りのバスでまたそこそこ時間掛かるだろうし」

「そうだね……暗くなってきたしね」

法子と綾の返答を聞くや、光秋はその手を引き、手近な道を曲がつて大通りへ出る。

街灯と、周囲の建物から漏れる明かりやネオンの光に照らされた道を京都駅へ向かつて歩く傍ら、左隣を行く伊部姉妹の顔に陰が浮かぶものの、光秋は敢えて指摘せずに先を急ぐ。

しばらく歩いて駅の八条側に着き、最寄りの出入り口から構内に入って中を突っ切る。中央口から外に出ると、正面のバス乗り場へ向かう。

「行きが確か西回りだったから、帰りは東回りに乗る？」

「そうしますか。京都市一周ってね。そうなると……こっちですな」

法子の提案に賛同するや、光秋は案内板で目的のバス停の位置を確認し、それに従って伊部姉妹を先導する。京都駅から各方面へ向かういくつものバス停の脇を抜け、少しして目的のバス停にたどり着く。

すでにできている数人の列の最後尾に並んで待つことしばし。やってきたバスに吸い込まれる様にして乗り込むと、一行は後部左側の2人席に並んで座る。

ややあつてバスが走り出すと、光秋は左側の窓に顔を向けるが、

「……ハハア、流石にこの暗さじやな……」

周囲の明かりが辛うじて映るだけのほぼ真つ暗な車窓に、予想はしていたものの景色観賞を断念させられて苦笑を漏らす。

「……ま、いつか」

しかしそれも束の間で、気を取り直して窓に向けていた視線を伊部姉妹に向け直す。

「どうだった今日は？」

「楽しかったよ！高いところからあっちこち見回したり、一緒に美味しいもの食べたり。コーヒーはあたしにはちよつと苦かった気もするけど、あのお店雰囲気はよかつたし……3人で巡る本屋も楽しかったよね」

「本屋か……」

嬉々として返す綾に続いて言つた法子に、光秋は膝上のカバンを見やり、そこに入れた購入した本数冊を幻視する。

「あの本ですけどね……ほら、超能力者差別じゃないかつて問題になったやつ」

「うん」

そこから面白さとは違う理由で印象に残ってしまった作品のことを思い出し、法子が短く応じたのを聞くやさらに続ける。

「さつと読んで騒ぎが起こつてしまったことに納得してしまつたけど、それつてあくまでもここ数カ月のことがあつたからじゃないかなあつて……」

言いながら、光秋の脳裏にこちらに来てからの数々の光景が過る。NPとの抗争、綾と過ごした夏、パーティー襲撃事件でのZCの活動、先日 of 巷のケンカ。

「その所為で、僕も初めて読んだ時、この手の話に少し過敏になつてたような気がして。思い返してみれば、超能力には素人の僕でも誇張だつてわかる部分がいくつもあつたし、怖い目に遭う人の中には超能力者の登場人物もいた、それが物語——怖い話としての面白さを引き出していたとも感じます。なにより、こつちに来ることなく、向こうで一フィクションとして普通に手に取つていたら、こんな気持ちにはならなかつたかも……」

そこで言葉を切ると、光秋は背もたれに体を預けてバスの天井を見る。

—あの本が出版された時期は知らないが、少なくとも僕がこつちに来た頃にはもうあつた……来るよりずっと前にはあつたんだよな。それを法子さん……否、おそらく僕の周りの多くの人は知つていて、当然騒ぎのことも知つていた。僕だけが今まで知らな

かった……今はそれを知って、なんか釈然としない気分になつて……

そうして、胸中に不定形に渦巻いていた気持ちを整理していく中で、光秋の中にある言葉が浮かんでくる。

「……変わったのは周りじゃなくて、僕——僕の認識か」

「え……？」

「ああ……本のことについて考えてたら、そんなこと思っちゃつて……」

知らぬ間に声に出ていたらしい。唐突な呟きに首を傾げる法子に、光秋は独り言を聞かれたことへの若干の恥じらいを感じながら応じる。

と、交代した綾が懐かしむ顔を浮かべる。

「前にも、そんなこと言つてたよね」

「前……？」

「ほら、戸松先生のところでしてた、お皿の話」

「……ああ！」

言われて光秋は、町で揉めた後に戸松教授の診察室に運び込まれたこと、そこで綾に語つて聞かせたものの見方のことを思い出す。

『『同じモノでも、見方を変えることで違つて見える』……確かに言つたなあ』

『『変わったのはモノじゃなくて見方』、『自分が見方を変えたから違つて見えた』、なんか

似てるね……似てるというか、言いたいことは同じみたいだね」

「みたいというか、そうなんでしょうね……」

交代した法子に応じつつ、光秋は感心の目を綾に向ける。

「にしても綾、お前さんよくそんなこと覚えてたな？ 僕も今の今まで忘れてたよ」

「えー？ あたしはしつかり覚えてたのにい！」

「悪い悪い、あれからいろいろあつたしさ……」

膨れる綾をなだめつつ、光秋も懐かしい気持ちになる。

——そうだ。そんなことも言ったなあ……柵の思い出といい、今日はこういう話に縁があるなあ……——

7 6 別れの前に 後編

バスに揺られることしばし。

今朝出発したバス停に戻ってきた光秋と伊部姉妹は、それぞれ運賃を払ってバスを降りる。

「ふー、やっぱり外冷たい！」

「だな……で、この後どうしよう？」

バス停に降り立つや吹き付けてくる冷風に震え上がる綾に同意しつつ、光秋は今後について考える。

「とりあえず、一旦僕の部屋戻るか。戻って来たんならカバン置きたいし」

「そうしょ！とにかく風がしのげる場所！」

「そんなに寒いかな……」

若干大袈裟と思える綾の反応に啞然とする一方、日がすっかり落ちて温かさがなくなった中で吹き付けてくる風に共感しながら、光秋はその手を引いて寮の自室へ向かう。

—綾の……法子さんの……手、温ったかいな……—

こんな時だからだろうか、一日中繋いでいたにも関わらず、夜風の中で握るその手はいつも増して温かく感じ、元来冷え性な体質からすぐに冷たくなる光秋の手を温めてくれる。

そんな心地よさを左手に感じながら近くの横断歩道を渡り、路地を速足で進んで自室前に着くと、光秋はドアを開けて伊部姉妹と共に逃げる様に入。

居間に入ると電灯を点け、カバンを置くやすぐにエアコンを入れる。

——今何時だ？……

思いつつ腕時計を確認すると、間もなく6時を指そうとしている。

「もうすぐ6時……夕飯にします？」と言っても、台所は全部片付けちゃったから、どっか食へに行くか……」

「食へに行くのはいいんだけど、その前にひと休みさせて。まさかあんなに冷えるとはねえ……」

「ああ、すみません。あ、コタツ出します」

コート越しにも震えているのがわかる法子に応じると、光秋はベッド下からコタツを引き出して電源を入れ、共にその中に脚を入れる。

「ふうー……ああ、そうだ」

コタツの温かさに安堵の息を漏らすと、光秋はカバンを引き寄せて、先程仕舞った本

入りのビニール袋を取り出す。

「これ、2人の分。今の内の渡しておく」

「ありがと」

言いながら伊部姉妹の本をコタツ上のテーブルに差し出し、綾が礼を言うやそれを自分のカバンに入れる。

「さて、何処に行こうか……………」

それを見届けて独り呟くと、光秋は夕食を何処で摂るか思案する。

「いつも行く近くのレストラン？でもこれでしばらく会えないだろうし、もつと豪勢なところ……………」
「………」
「法子さん、この辺で、いつもよりちよつと豪華な食事ができる所知りませんか？」

「この辺で？……………」
「うーん……………」
「先週行ったお好み焼き屋とか？」

「あの辺か……………」

しばし考えた後、悩みながらも答えてくれた法子に、光秋は先週の昼食風景を思い出しながら返す。

「……………」
「考えてみれば、こんなに早く帰ってくる必要もなかったんだよね。それこそ、駅の地下街で食べてきたってよかったんだし……………」
「空が暗くなるのを見て、何でだか帰りたくなったんだよね……………」
「失敗したなあ……………」
「……………」

今更ということは承知しながらも、ついそんな後悔を感じてしまう。
と、綾が口を開く。

「あたしは、この近くで食べたいな。アキとご飯食べる機会もこれでしばらくないし」

「……だから、勝手に読みなさんな……」

「だから、勝手に伝わってくるんだって」

「そうなのかもしれないがさあ……じゃあ、お前さんは何処行きたい？」

「あたしは……」

しばらく考えると、綾は下げていた顔を上げる。

「やっぱりいつも行くレストランかな」

「あそこでもいいのか？」

「本当は、初めてアキと二人っきりで遠出した時に行ったあのお店に行きたいけど……」

「あそこか……」

言われて光秋は、半年近く前にハヤシライスを食べた店を思い出す。戸松教授が務めていた施設前にある、乱闘騒ぎの際の診察の後に利用したあの店だ。

「でもここからだとしんどいし、今寒いからさ。それだったら、あのレストランがいい。あそこも結構豪華なメニューあるじゃん」

「まあ、言われてみれば……」

応じつつ、光秋は記憶の中のメニュー表を探る。

―確かに、結構な値がする料理もいくつかあったよな……最後の晩餐、そういうの頼んで奮発すればいいか―「なら、あそこにするかな。法子さんは？」

「言われてみれば、私も前々から食べてみようと思って、値段になかなか手が出せないのが何個かあったなあ……折角だし、それでパーつとやろうか」

「じゃあそれで」

法子も同じ様な考えであることを聞くと、光秋はポケットから財布を出して懐具合を確認する。

―補充は……いいか―

昼間もかなり使ったものの、もともと多めに入れておいたおかげでまだ余裕がある。

「今度は私も出すよ。光秋くんとの……その、最後の食事なんだし」

「寂しい言い方しないでくださいよ……それに、今度も僕一人で持ちますよ。最後の最後だからこそ、格好つけさせてください……あ、そうだ」

財布を戻しながら法子の申し出を断ると、光秋はカバンからおにぎりを入れていた袋を取り出し、中に入っている使い終わったラップを出して台所のゴミ箱に捨てに行く。

―やっぱ、まだ出ると寒いな―

コタツから出たばかりだからこそ余計に寒く感じる室温に若干震えつつ居間に戻る

と、空になった袋を法子が自分のカバンに仕舞うのを見る。

「あ、袋といえば……」

その光景に足を止めると、光秋は台所の戸棚に目を向け、そこに仕舞つてある伊部家から借りた弁当箱を幻視する。先日法子と台所周りを片付けた際、後回しにしてそのまま忘れていたものだ。

「法子さんちの弁当箱も今の内に渡しておきます。すみませんが、また岩手に帰る用があつたら返しといってください」

言いながら戸棚から弁当箱とそれを包んでいた布を取り出すと、光秋はそれらを法子に差し出す。

「わかつた。この間も結局忘れてたもんね」

応じると、法子はそれらを受け取つてカバンに入れる。

と、

「ただし、一つ訂正……これは光秋くんがこつちにいない間私が預かつておくから、また一緒に岩手に帰つた時に自分で返すこと。いい？」

「……敵わないなあ、法子さんには……わかりました」

険しいわけではない、それでいて有無を言わせない、そんな独特の気迫で告げてくる法子に、光秋は苦笑いを浮かべながらも頼もしさを覚え、清々しい気持ちで答える。

「よろしいー……じゃあ、そろつと行こっか」

言うや法子はコタツを出、光秋はすぐにその電源を切る。

「エアコンは……いいですよ？点けてて」

「そんな遠くじゃないし、いない間温めてもらえばいいでしょう」

「ですね」

法子の返答に返すと明かりを消し、一行は玄関へ向かう。

各々靴を履き、前を行く光秋がドアを開けると、

「寒っ!!」

「早く行きましょう!」

いきなり吹き付けてくる冷風に綾が悲鳴の様な声を上げ、戸締りを早々に確認するや光秋も震えながら手を繋ぎ、一行は追い立てられる様にレストランへ向かう。

路地を抜け、横断歩道を渡り、レストランの入り口をくぐって暖房の温かさにほっとしたのも束の間、一行は店の奥から出てきた店員に促され、半分程埋まっている店内を進み、勧められたテーブルに向かい合って座る。

「本当、こつちにしてよかったね。綾が行きたいって言ってた店まで行つてたらどうなつてたか……」

「確かに……そつちはまた今度の楽しみですね。せめて温かくなつてからで……で、な

に食べます?」

外を歩いていていた時のことを思い出して再び震え上がる法子に深く頷くと、光秋はテーブル脇のメニュー表を取って広げる。

「そうだなあ……」

言いながら法子はメニュー表を見やり、光秋も値が張る品々の中で食べたいものを選んでいく。

「……よし、決めた」

「私も」

ややあつて断じた光秋に法子も続くと、光秋は呼び出しボタンを押し、少ししてやってきた店員に注文を告げる。

「特上ステーキセット、ライスで。あとジンジャーエールと抹茶アイス」

「私は、トリュフのカルボナーラとグレープフルーツジュース、あと苺のショートケーキを」

「かしこまりました」

光秋、法子の注文に短く応じると、店員は厨房へ向かう。

「……我ながら、思い切った奮発をしたものですね。これ一食分で、支部の食堂の日替わり定食が3つは買えますよ……」

改めてメニュー表に書かれている値段を見やる光秋は、その額に遅まきながら軽い戦慄を覚える。

しばらくして注文の品々が運ばれてくると、テーブルの上に分厚い牛肉が載った鉄板の食欲をそそる音が響き、薄切りの黒トリユフをまぶしたスパゲティの独特の香りが広がる。

「……じゃあ、いただきますか」

「だね……それじゃあ」

実際に来た料理を見て、先日の洋食店で感じたのと同質の威圧感を覚えるものの、光秋はすぐにそれを隅に迫いやり、法子も同意すると、2人は各々のグラスを手取る。

「カンパニー！」

言いながら互いのグラスを鳴らし、光秋はジンジャーエールを、法子はグレープフルーツジュースを一口飲む。

「いただきます！」

グラスを置いて手を合わせるや、光秋は早速分厚いステーキにナイフを通す。

切り分けたそれをナイフとフォークで挟んで皿に盛られた白飯の上に載せ、フォークで白飯と一緒に掬って口に運ぶ。

——……先週の洋食屋の肉もよかったが、こうして、普段の食事の延長として食べる高

級肉というのもいいな――

肉だけではやや濃過ぎる気がするソースも、白飯を加えて味わうことでいい塩梅に調整され、肉そのものと、ソースと肉汁が染み込んだ白飯の舌触りに、光秋はささやかな感動を覚える。

「どう？このお店で一番高いステーキは？」

「いいですよ。ご飯と一緒に食べると特に。法子さんはどうです？トリュフのカルボナーラっての」

「絶品！これはと思って、食べる前に写真撮つといたくらいだしね」

「……そういえば」

言われて光秋は、自分がステーキに手を付けたのと同時に、法子が携帯電話でカルボナーラを撮っていたことを思い出す。

「また日高さんに送りますか？」

「帰ったらね……んーんっ！」

光秋に応じながら、法子はフォークに巻いた麺を巻き込んだトリュフごと口に入れ、ご満悦な顔を浮かべる。

と、

「アキも食べてみる？」

「そろそろ来る頃だと思ったよ……」

交代した綾が麵を巻き付けたフォークを差し出してくるのを見て、もうすっかり馴染んだ光景に光秋は一言呟く。

と、麵の中にトリユフが巻き込まれていることに気付く。

「悪いが、それは遠慮しとく」

「え？……何だよ！いつもはあれこれ言っても食べてくれるのに」

「キノコ苦手なんだよ……」

目くじらを立てる綾に、光秋は麵の中のトリユフを見ながら正直に答える。

「アキ、キノコ嫌いなのか？」

「言わなかったっけな？」

「あたしは聞いてないよ……私も」

「そうだっけ？昔からどうもダメで……」

綾と法子の返答に応じつつ、光秋はいい歳になっても抱えている好き嫌いに少し恥ずかしくなる。

「キノコでなんかあったの？」

「あったというか……毒キノコの話の聞いたたり、図鑑やなんやで生えているところを観たりしてたら気持ち悪くなっちゃって……それで連鎖的にキノコ全般がダメになった

みたいで……」

綾の問いに、光秋は子供の頃のことを思い返しながら答える。

「……あれ？でも定食の味噌汁なんかに入ってるシメジやナメコは食べてたよね？」

「流石に全く受け付けない程じゃありませんよ。食べようと思えば食べられます。ただ、進んで食べないだけで……」

普段の食事風景を思い出した法子の問いに答えつつ、光秋はフォークに巻き付けられた麺、その中のトリュフに改めて消極的な視線を向ける。

「うーん……嫌いじゃしょうがないか」

「申し訳ない……」

残念そうに言いながら綾は差し出していたフォークを自分の口に運び、光秋は頭を下げる。

「それならさ」

言うや綾はトリュフを避け、今度は麺とベーコンだけを巻き付けて差し出してくる。

「これなら食べられるでしょ」

「……ありがとう」

綾の心遣いに感謝しつつ、光秋はフォークに口を近づける。

その時、

「ストップ！」

「!?」

一瞬間とは打って変わって鋭い制止の声が響き、光秋はすぐに口を開けた体勢で固まる。

そして、

「はい、あーん！」

「……あー……」——それは絶対言わないとダメなんだな……—

今度は朗らかに微笑む綾に内心そう思いつつ、光秋は差し出されたカルボナーラを咀嚼する。

「……うん。もともとカルボナーラは好きだが、トリュフ独特の香りが加わってまた新鮮な味わい」

「じゃあ今度は」

「わかってるよ」

感想を述べるやねだる目を向けてくる綾に応じると、光秋は一口サイズに切り分けたステーキを差し出す。

「ほれ、あーん」

「あーん！……ううん！」

それをじっくり味わいながら、綾は満面の笑みを浮かべる。

「満足いただけたようだなによりだ」

言いながら自分の頬も笑みに緩む感覚を自覚しつつ、光秋はまた一切れステーキを白飯と共に口に運ぶ。

いつものやり取りと談笑を交わしながら、一同は奮発した夕食を堪能する。

食事を終え、光秋が2人分の会計を済ませて店を出ると、法子が思い出した様に足を止める。

「そういうばさ、明日の朝ご飯なかったんじゃ？」

「あっ！」

言われて光秋は、今朝法子と最後の菓子パンを食べてしまったことを思い出す。

「……そうだ。しまった……帰りに買うって言つて忘れてましたね……ちよつとコンビニ行つてきます。寒いから先帰つててください」

言いながら、光秋はズボンのポケットに左手を入れて鍵を出そうとする。
が、法子はその手を右手で掴んで止める。

「私も行くよ」

「いや、でも——！」

突如吹き付けてきた冷風に、光秋は思わず口を止める。

「……ほら、寒いでしょう？先戻っててください。もともと僕のミスだし、僕の朝飯だし」「私だって明日の朝ご飯ないんだよ。一緒に買いに行けばいいじゃん……それに、私たちだけじゃつまないし……」

冷気に震えながら続ける光秋に、法子も震えながら返し、特に最後は寂し気に告げる。
「……わかりました。じゃあ、一緒に行きますか」

「うん」

その様子を見て光秋は渋々応じ、薄っすら喜色を浮かべた法子の手を繋いで最寄りのコンビニへ向かう。

コンビニで明日の朝食2人分と、綾の希望でチョコレート菓子を一袋購入すると、光秋たちは寮へ戻る。

冷たい強風に追いついてられる様に部屋に入ると、光秋は居間の明かりを点け、買ってきた物をビニール袋ごと冷蔵庫に入れて、暖房で温まった室温にようやく人心地つく。

「ふー、温かい……あ、コタツ点けるね」

「どうも……それにしても綾、あんなに食べてよくまだ食べようって気になるよなあ」

コートを脱いでコタツの電源を入れる法子に応じつつ、光秋も脱いだコートを椅子の背もたれに掛けて冷蔵庫を見やり、先程仕舞ったチョコレート菓子を思い出す。

「たくさん食べても、時間が経つと食べたくなる時があるんだよねー」

「それはわかるがな。もつとも、僕は今日はそうじゃないかも……風呂入れてくる」
少し頬を膨らませる綾に、すっかり張った腹を擦りながら返すと、光秋は浴室へ向かう。

―歯は……入りながら磨けばいいな。法子さんたちもいるし―

最後に食べた抹茶アイスの残り香を口の中に感じながらそう断じると、光秋は栓をした浴槽に蛇口を全開にしてお湯を注ぐ。

居間に戻ると、綾がコタツに足を入れて、先程買ってきた本を読んでいる。

「読書中悪いが、どっち先に入る？僕は後でもいいけど」

光秋もコタツに入りながら問うと、綾は本から顔を上げる。

「えー？せっかくだし、みんなで入ろうよ」

「流石にそこまで緩めないよ。というか、あの風呂に大人2人は物理的に無理だ」

割と真面目に言ってくる綾に、光秋は風呂場を指さしながら、1人でも脚が伸ばせない浴槽を思い浮かべて応じる。

「……というよりやつぱり、綾たち先に入ってくれ。僕が上がる時にいろいろ片付けるからさ」

「……わかった」

不満そうに綾が了承を返すと、法子が思い出した様に交代する。

「そういえば光秋くん、さつき冷蔵庫に買った物入れてたけど、コンセント抜かなくて大丈夫？ 引越す時って、こういうのの電源前の日から抜いておかなきゃいけなくて聞いたけど？」

「あつ！ そうだ……」

その指摘に、光秋は先日電話越しに聞いた引越し業者の説明を思い出し、慌てて冷蔵庫を開けて中にあるスイッチを切り、ベッドの下に潜り込むと奥右側にある冷蔵庫と壁の隙間に右手を入れ、そのプラグを抜く。

「そうだった。それで中身も早々にスツカラカンにしたんでした……けど、明日の朝飯と菓子大丈夫ですかね？」

言いながらコタツに戻ってくると、再度冷蔵庫に視線を向ける。

「一晩くらい大丈夫でしょう。余熱っていうか、切ったばかりならしばらくは涼しいだろうし。そもそも季節的にねえ」

「ですね」

法子の言わんとすることを察し、先程まで浴びていた冷風の記憶に一瞬鳥肌を立たせると、光秋は腕時計を見る。

「そろそろだな。止めてきます」

言うや再び風呂場へ向かい、8割程満たされた湯船を止めると、手を入れて湯加減を

確認し、居間へ戻る。

「わぎと熱めに入れてあるんで、入り辛かったら冷ましてください」

「わかった」

「で、タオルとかは……」

「それなら一式持つてきてあるよ」

光秋に応じつつ、法子はカバンから着替えとバスタオル、歯磨きセットを取り出す。

「ボディソープとかは貸してもらうけど」

「どうぞ。あ、僕リンス使わないんで、それはないですけど」

「そうなの？ わかった。じゃ、お風呂いただきます」

「ごゆっくり」

言うとうと法子は着替え諸々を持って居間を出、仕切りたるカーテンを閉めた光秋はコタツに入る。

と、それまで3人で騒いでいたのが急に静かになったからだろうか、起き抜けに法子が来た時からどこか浮かれていた頭が少し冷め、伊部姉妹と一晩共に過ごすことへの不安が今更ながら湧いてくる。

— 考えてみれば、この寮人を泊めてもいいのかな？ そんな注意は受けなかった気がするが……どの道、準備万端で来て風呂にも入った人を追い返すわけにもいかんしな

……………管理人さん、今夜だけですの、ごめんなさい！——

伊部姉妹がいる浴室を見やり、次いで壁越しに管理人宅の方へ視線を向けると、独り深々と頭を下げる。

——まあでも、特別何かあるわけでもないしな。そんなに気張ることもないか——顔を上げながらそう思うと、いくらか気が楽になる。

しかし、

——………本当に？ 法子さんが、綾が一つ屋根の下にいて、本当に何もなしに過ごせる？

……………！ 当たり前だろっ！ 何かあろうもんなら、それこそ旦那さんに何をされるか……………！！——

心の深い所から響いてきた声に、光秋は狼狽しながらも精一杯の否定の意志を告げ、連鎖的に浮かんできた伊部父、その悪寒を引き起こさせる笑顔に震え上がる。

そうしている間に浴槽のドアが開く音が響き、伊部姉妹が上がったことに気付く。

——上がったか……………今カーテンの向こうにいる法子さんたち、裸——少なくともタオル一枚程度なんだよなあ……………覗くなよ。わかってるよ……………——

束の間浮かんだ下心に対する警鐘に応じると、光秋は身に着けていた携帯電話諸々を机の上に出し、着替えとタオルを用意していつでも交代できる準備を整える。

ややあつてカーテンが開くと、ピンクのチェック柄のパジャマに着替えて首にタオル

を掛けた法子が、畳んだ衣服を脇に抱えて入ってくる。髪は下ろしているため見掛けは綾にも見えるが、光秋が感じる雰囲気は法子のそれだ。

「お待たせ。次どうぞ」

「それじゃあ……湯加減どうでした？」

「ちよつと熱かったから冷ましたよ」

「わかりました」

応じると、光秋はカーテンを閉めて脱いだ服を洗濯機の上に畳んで置き、浴室に入る。いつもは冷えた床と浴槽から立ち上がる湯気で独特の温度になっている浴室も、今日はお湯に濡れた床が温かい。

—このお湯、法子さんたちが入ったんだよなあ………！イカン！イカン！余計なことを考えずにとつと入ろう—

再び湧き上がる雑念を頭を振って追いやり、洗面器一杯分の湯を流して浴槽に浸かりながら水盤上の棚から歯ブラシを出し、予定通り入浴しながら歯磨きを行う。

—どうもさつきから邪念が………僕も男つてことかなあ………？—

自分の弱さに対する呆れの様な、ある種の諦観の様な気持ちを持って余してながら磨き終えると、水盤で口を漱いで湯船に肩まで浸かり、歩き疲れた体を温める。

充分に温まると浴槽から出て体を洗い、再度湯船に浸かって温まると、上がり際に栓

を抜いて湯を抜き、空になると浴槽と周辺の壁を水洗いして、自身も水気を拭いて浴室を出る。

洗濯機の上に用意したバスタオルで髪を拭き、パジャマに着替えるとカーテンを開ける。

髪の水気をさらに拭き取りながら入った居間では、綾がコタツに入って袋を開けたチョコレート菓子を摘まみながら、読書の続きをしている。

「ちよつとドライヤー使うぞ」

「どうぞー」

綾に断りを入れるや光秋は封をしていない段ボール箱からドライヤーを取り出し、台所のコンセントに繋いで髪を乾かす。

乾き切るやドライヤーを元の段ボール箱に戻し、バスタオルも仕舞い、洗濯機の上に置いていた服を椅子の上に置くと、冷蔵庫から目薬を出し、机の上の携帯電話を取ってコタツに入る。

——開けても明るくならない冷蔵庫って、なんか妙だよなあ……——

いつもとは違うことに感慨を抱きつつ目薬の1つを注し、次の分を注すまでの間、光秋も買ってきた本を開いて読書に耽る。

目薬を注しつつ読書を続け、全て注し終えてからさらに読み進めることしばらく。

切りのいい所で本を閉じた光秋は、コタツの上に置いた携帯電話を取って画面を開く。

「9時半か……明日も早いし、そろつと寝るか」

「え？もうそんな時間？」

本から顔を上げて訊いてくる綾に画面を向けて時計を示すと、光秋はコタツを出て伊部姉妹の分の布団を用意しようとする。

その時、

「……あつ……しまった……」

ハツとするや頭に手を置き、狼狽した顔を伊部姉妹に向ける。

「どうしたの？」

心配そうに訊いてくる法子に、光秋は失念を恥じながら問う。

「法子さん……寝袋は持ってきてますか？」

「……寝袋？」

「よく考えたら、僕の部屋布団一式しかなくて……」

訊き返してくる法子に応じつつ、光秋はベッドに敷かれたこの部屋唯一の布団一式を見やる。

「そういうことか……持ってきてないよ」

「やつぱり……それじゃあ……」

予想通りの返答に、光秋はコタツに視線を落とす。

—僕はこれで寝るか……—

気は進まないものの、こういう場合男は床で寝るものという意識が勝り、その旨を告げようと光秋は法子を見る。

「僕はコタツで——」

「それならさ、一緒に寝ようよ」

「……え？」

遮る様に言われた法子の提案に、光秋は一瞬何を言われたのかわからなくなる。

「……一緒に？」

「そう。布団一つしかないなら、ベッドで一緒に寝ればいいじゃん」

なんてことない様子で言いながら、法子はベッドを指さす。

その光景によりやく理解が追いついた光秋は、今度は困惑を覚える。

「いや、いいじゃんって……いいんですか!?!僕たちこれでも歳頃の男と女であつて……」

「それに、私の暫定彼氏でしょ?……あたしも、今日はアキと一緒に寝たい」

「綾、お前まで——いや、お前さんはそういう奴だったな……」

交代するや懇願の眼差しを向けてくる綾に、光秋は右手を頭に添える。
そして、

「……………わかった。そうしよう」

しばしの思案の後、不承不承法子の提案を受け入れる。

しかし、その一方で、

—ああ言いはしたものの、こんなあつさり折れて……………やっぱり僕自身、そういうのを望んでるんだな…………—

一連の言動を振り返り、加えて心なしか胸が高鳴っていることを自覚して、光秋は嬉しいような、情けないような気分を味わう。

「やったー！アキと一緒に寝れるっ!!……………そうこなくちや!」

対照的に赤裸々な喜びを浮かべる綾と法子を見やると、光秋はコタツの上のチョコレート菓子を見やる。

「とりあえず、寝るなら歯あ磨いてな。僕はちよつとトイレ」

そう告げると、光秋は読んでいた本をカバンに仕舞い、携帯電話と机の上のカプセルをベッドの上に置き、カーテンをめくって個室に籠る。

用を済ませるとその足で浴室へ向かい、水盤で口を漱いで顔を洗う。

居間に戻ると掛けてあるタオルで顔を拭き、コタツで歯を磨いている綾を見るやその

横に腰を下ろして、終わるまで待つ。

綾が浴室へ向かうと、光秋はコタツの電源を切ってベッドの下に押し入れ、ベッドに梯子を掛ける。

エアコンも切る頃合いで綾が居間に戻ってくると、光秋は梯子を上ってベッドの奥に移動し、携帯電話とカプセルを枕の脇に置く。

その間に上がってきた綾がベッドに腰を下ろすと、みしつという不安な音が1回だけ鳴る。

「……大丈夫だよな？ 今更だけど……」

「たぶんな。少なくともただ寝てる分には……」

不安気に問う綾に、光秋は今一つ自信なく答えると、携帯電話を開いて時刻を確認する。

—9時50分か……—「まあいい。おやすみ」

言うや外したメガネも枕の脇に置き、電灯の紐に手を伸ばして明かりを消すと、そのまま布団を被って右半身を下にして横になる。

「……おやすみ」

それを追う様に綾も横になって布団に潜り込むと、途端に部屋の中が静かになる。しかし、

「……」

部屋の静けさとは対照的に、光秋の心中はやや昂っていた。

元来1人用として作られたベッドは、多少広さに余裕があるとはいえ、2人も乗れば体が触れ合うくらいにまで詰めなければならなくなる。加えて枕も1つのものを共に使っているため、背中に感じる伊部姉妹の存在感にどうしても目が冴えてしまうのだ。

——いかん！いかん！明日早いんだしとつと寝ないと……それに変な気起こそうもんなら、旦那さんがただじゃおかないぞっ！——

心中に自制と、自分自身への脅しを言い聞かせ、光秋はなんとか寝ようとする。

その時、

「!？」

両肩に手を添え、体を密着させてくる感触を背中に覚え、光秋は一気に目が覚める。

「綾!……法子さんか?……何を……」

「だって、今日が最後なんだよ……」

「……」

静かに、どこか悲しそうに告げる綾の声に、それまで狼狽えていた気持ちが一度冷静になる。

「明日に……朝になったら、しばらく会えなくなるんだよ…………だったらさ…………」

僅かに湿気を含んだ声はそこで途切れるものの、光秋には背中に押し付けられた顔が何を言いたかったのかわかってしまう。

—最後だから、少しでも一緒に、近くにいたい。触れていたい……あるいは……—
同時に、涙声の中に含まれていた「甘え」を、聞いたというより感じ取り、それに魅かれそうな自分を抑えようと一つ深呼吸をする。

鼻から深く吸って、口から肺を空にするつもりで吐き出し、いくらか気分が風いだ感覚を得ると、右手を左肩に向かってそつと伸ばし、そこにある綾の左手に触れる。

「僕だつてさ、正直に言えば、お前さんたちの気持ちに応えたい……違うな。二人を求めたい」

「……………」

左手を包み込む様に握りながらの赤裸々な告白——あるいは白状——に、綾も法子も沈黙を返す。

それを把握しつつ、光秋はさらに続ける。

「こうしてるとき、温かいんだよ。できれば、ずっと浸ってたい……………でもなっ」
語調を強めると共に、右手に力が込める。

「でも、今はダメだ」

「どうして……?」

問いつつ、法子が顔を寄せてくる。

「今は、まだどっちつかずだから……法子さんと綾、本当に求めているのはどっちなのか、自分でも判断がつかないから……こんな宙ぶらりんな気持ちでやっても、後で絶対後悔すると思うからっ！……」

最後は半ば叫ぶ様に告げると同時に、右手を握り締める。
と、

「痛たたたたたっ！」

「！……すみません……」

左手を絞められて悲鳴を上げる法子に我に返るや、光秋は慌てて右手を離す。

「……大丈夫ですか？」

「手を潰されるかと思ったよ」

「すみません……」

背中から返ってきた若干険のある法子の返答に、光秋は気まずさと恐ろしさに身を竦ませる。

「……………」

「……………」

しばらくの間沈黙が続き、その静かな威圧感に耐えかねた光秋は、恐る恐る背後を見

やる。

「……とまあ……そういう理由から、今回は“そういうこと”は避けたいんですが……」
戦々恐々と言いながら、暗い上にメガネを外してよく見えない伊部姉妹の顔を窺う。

と、

「!?!」

肩から腕を回し、腰脇に左脚を絡め、横から見れば背中に抱き着く様な体勢をとった法子に、光秋は心臓を跳ね上げる。

「あの、法子さん……!?!」

「………光秋くんって、やっぱ不器用だねえ。女の子がここまで誘ってるならいっそのことって……思わないのが光秋くんか」

動揺する光秋に構う様子もなく、法子は諦めた様に、それでいてどこか誇らしそうに呟く。

「……バカ……」

「……謝らないよ。それが正しいって思ったことだから」

小さく呟いた綾に応じる傍ら、光秋は回された手をそれぞれ包み、今度は力加減に注意しつつ握る。

「その代わり……………今夜はこのままでいて欲しい。お前さんが言う通り、明日になればしばらく会えないから。少しでも、一緒に……」

「うん」

胸の内にあつたことを言い切り、綾がそれに応じてくれるのを聞くと、ベッドに入つて以降多少の差はあれど興奮していた光秋の気持ち之急速に醒めていく。

それは徐々に眠気へと変化し、自分でも無意識に伊部姉妹の方へ体を寄せていく。

— 温かい……………それに…………… —

背中に感じる伊部姉妹の体温と、鼻をくすぐる石鹼混じりの体臭、いつもなら興奮を引き起こすそうした刺激が、今宵は体中を弛緩させ、精神をより一層眠りに誘っている様に感じる。

— ああ、そうか……………二人がいてくれるから、安心してゐるんだ…………… —

自身の現状を頭の隅でそう理解したのを最後に、光秋の意識は一気に落ちていく。

「私、会いに行くよ。仕事の都合つけて、必ず……………あたしも。その時は、東京案内してよ」

「ああ……………そりゃ……………いい、な……………」

左耳の間近で告げられた法子と綾のある種の決意表明に、朦朧としかけた頭で返しを紡ぐと、光秋はいよいよ眠りの中へ落ちていった。

意識がゆっくりと浮上していくにつれて、鼻孔の中を安堵を抱かせる匂いが過ぎてい

くの気付く。

少し遅れてすぐ近くで鳴り続ける一定のリズムを持った微音を聞いた光秋は、まだ重い瞼をゆつくりと開けてみる。

—ああ……綾………法子さんか………—

いきなり視界、それももう少し動けば鼻の先が触れ合う程の至近距離に飛び込んできた伊部姉妹の寝顔に、しかし光秋は動じることなく、

—寝てる間に寝返りうつちやったかな……—

などと、いつの間にか左半身を下にして寝ている我が身の状態を推測しながら、目の前の温もりを求めて両手を姉妹の腰に回す。

——…温かあい………—

未だ覚め切っていない頭で眩きながら、光秋は姉妹が発する体温を堪能する。

しかしそれも束の間、枕元の携帯電話が午前6時を告げるアラームを響かせ、一行に起床を促す。

——…もう………少し………いや、今日はもう起きないと——

アラームを止めて再び眠りにつこうとするものの、自身と伊部姉妹——主に法子——の今日これからの思い出し、光秋は上体をゆつくりと起こす。

それに気付いてか、先程のアラーム音の所為か、法子も目を擦って起きてくる。

「おはよう……」

「おはようございます……」

互いに欠伸混じりに挨拶を交わし、今尚暗い冬の早朝の寒さに震えて否応なしに完全に目を覚ますと、法子、光秋の順にベッドを降りて活動を開始する。

エアコンとコタツの電源を入れて椅子の上に置いてある服を持つと、光秋は廊下に移動してカーテンを閉め、そこで着替える。

―それにしても……さつきは我ながら大胆なことしたなあ。昨日寝る前のあたふたも考えればなおのこと………やっぱり、寂しかったのかな？―

着替えの傍ら、まどろんでいた時の自分の行動を感心とも夢現ともつかない思いで顧みながら、その奥にある自身の本心を自覚する。

着替えを終え、少し待って法子も居間で制服のワイシャツとズボンに着替え、ゴムで髪を結つたのを確認すると、冷蔵庫から昨日買った菓子パンを出し、余っていたチョコレート菓子も含めた簡素な朝食を摂る。

食べ終え、細かな身嗜みを整える頃には、時刻は午前7時半を回る。

「……………それじゃあ、行くね」

「はい……………気を付けて」

腕時計を見ながら絞り出した様な小さな声で告げる法子に、光秋は言わずもがなとわ

かつていながら言わずにはおけない一言を添えて応じる。

コタツを出て上着とコートを羽織り、左肩にカバンを提げると、法子は重いゆつくりとした足取りで玄関へ向かい、光秋もそれに続く。

「そういえば、靴は？」

「大丈夫。ロッカーに予備入れてるから、今日はそれ使う」

光秋の今更ながらの心配に返しながら、法子は履いてきた普段の靴を履き、廊下側へ振り返る。

「昨日も言ったと思うけど……私、会いにいくよ。光秋くんが向こうにいる間も……あたしも、必ず」

法子と綾、二人分の固い決意に、光秋は深い頷きで応じる。

「僕も、都合がついたらこっちに……と言いたところだけど、向こうで何があるかまるで予想がつかないから、軽々しく約束はできないな……その代わり、また“ここ”に帰ってくる。どんなことがあるうと——例えばDDシリーズの大群と戦うことになるうと、入間主任が復帰されるまで務めを果たし切って、必ず」

「……うん」

静かな、多少の強がりも混ざった、しかし確かな意志を告げる光秋に、二人分の短い、それでいて充分な返答が、深い首肯を伴って返される。

「……じゃあ、あたしたち行くね」

「あ、ちよつと待った」

言うや光秋は、外に出ようとしていた綾——というよりも伊部姉妹——の許に身を寄せ、肩を掴むや額に唇を付ける。

「え……？」

「この間のお返し」

突然のことに戸惑う姉妹に、唇を離すと光秋はイタズラが成功した様な達成感に笑みを浮かべながら告げる。

「さあ、行つてらっしゃい！」

「―それはこつちの台詞！行つてらっしゃい！」

放つておけば永遠に続きそうな沈黙が漂いそうになる中、光秋は意識して快活な調子で振り返らせた姉妹の背中を押し、それに対抗する様に姉妹もハツラツと返すと、光秋の押した力を追い風にする様に路地へと向かつていく。

伊部姉妹が寮の敷地から出て姿が見えなくなると、光秋はノブを引いてドアを閉める。

「……………さて、最後の片付けしよう！」

数瞬前までとは打って変わって静まり返った室内、その寂しさ漂う雰囲気を押されそ

うな気持ちで奮い立たせるために敢えて気合いを入れると、光秋はコタツ布団や浴室用具など、最後までどうしても手が付けられなかった物を片付けていく。

それからいくらずき引越し業者のトラックがやって来ると、光秋はコートを羽織り、必要最低限の荷物を収めたカバンを持って部屋を出、作業服の上からでも屈強な体付きが判る男性3人がペキパキと段ボール箱の山や机などの重い家具を荷台に積み込んでいく様子を眺める。

—念力は使っていないみたいだな……みんなノーマルか？—

そんな素朴な疑問を抱いている間に積み込み作業は終わり、一足先に東京へ向けて走り出したトラックを見送ると、光秋は再度部屋に上がる。

「……この部屋、こんなに広かったっけ……う？」

すっかり空になった六畳間を眺めながら呟くと、忘れ物がないか今一度確認する。

その間に電気・ガス諸々のチェックに来た職員を何度か迎え、それら引き継ぎ作業が一通り終わると、あとは我が身だけになったことを実感し、カバンの中身、特に電車の切符を確認し、チャックを閉じたそれを右肩に斜め掛けする。

—行つた先で何があるか……少なくとも大変な目には遭うんだろうが……それでも、法子さんと綾と約束したからな—「何があるうと、また“ここ”に帰ってくるさつ！」

誰もいない部屋で、他ならぬ自分自身に宣言すると、光秋は部屋を出て東京への一歩

を踏み出す。

加藤隊結成編

7 7 転属 1 日目

1月17日月曜日。

新幹線に揺られること2時間少々。東京駅に降り立った光秋は、カバンから新しい寮までの道のりを書いたメモを取り出すと、周囲の案内表示を頼りに目的の路線を探す。

—にしても、凄い人だなあ……京都駅がまだかわいく見えるかもなあ……—

流石は州都の玄関口にして主要線の交差点ということか、午後1時半という時間帯も合わさって、構内は人で溢れており、京都駅の光景を見慣れた身でも思わず圧倒される。それでもどうにか目的の路線の改札口を見付け、最寄りの券売機で行き先までの切符を購入してそこをくぐる。

電車の乗り継ぎを繰り返すこと約1時間。都心から少し離れた閑静な住宅街に建つ駅で降りると、事前に渡されていた駅から寮までの簡単な地図を見、周りの目立つ建物と見比べながら路地を進む。

そして駅から歩くこと5分。

「……………」か

地図に書かれている名称と目の前の扉の表札を確認すると、光秋は新たな寮を見上げながら呟く。

1階4部屋の2階建てのそれは、当然ながら京都の寮より大きく、傷や汚れのない壁には新築といった印象を抱く。実際、できてからまだ10年経っていないらしい。

一通り外からの観察を終えると、寮の左隣に建つ管理人の住宅を訪ね、事前の連絡に従って鍵を受け取ると、門をくぐって新たな自室のドアの前に立つ。

—さて、新居はどんなものか……？—

新しいものに対する期待と、それを若干上回っているかもしれない不安を抱きながら開錠し、ドアを開けると、以前と大して変わらない広さの玄関に足を踏み入れる。

右に台所、左に浴室やトイレが設けられた廊下を抜け、仕切りたる白一色に塗られたドアを開けると、主要空間たる居間に出る。

「……前よりちよつと広いくらいか？もつとも、家具を入れたらどうなるか……」

八畳程のフローリング床を眺めて呟きながら、まずまずの印象を覚える。

荷物を置いてひと休みし、少しして3時になり、引越し業者のトラックがやってくると、それを合図に家具設置の指示や訪ねてきた職員への対応、箱詰めした荷物の片付け等に追われる。

それらがひと段落した午後5時。

「ふうー……こんなところかね？」

紐で束ねた段ボールを玄関の脇に置いた光秋は、粗方片付けが済んだ室内を見渡して
みる。

部屋の中央に机、その右隣にベッド、左前の部屋の隅にテレビを載せた筆筒と、物の配置は以前と大差ないが、冷蔵庫が廊下に置けるようになったこと、もともと以前よりも大きい間取りだったことから、京都の部屋より心なしか広く感じる。

「段ボールは追々片付けるとして……今日はこんなところか……」

言いながら作業が終わった実感を得ると、部屋の隅に置いていたカバンから今後の予定が書かれた紙を取り出し、椅子に腰を下ろしてそれを確認する。

——主任研修は明後日19日からか。東京本部って確か、ここから6駅くらい行つたところなんだよな。明日は特に何もなし、試しに1回行ってみるかね。道のりも確認したいし……研修——勉強かあ……ついでにノートでも買ってくるか……—

新しい生活への期待と、それ以上の不安を覚えつつ、光秋は明日の予定を立てていく。

1月18日火曜日午前10時。

茶色のコートに身を包んだ光秋は、最寄り駅から電車に乗り込み、6駅先の新しい寮の周囲と比べて都会然とした摩天楼の中に降り立つ。

右肩に斜め掛けしているカバンから昨日の内に調べた日ESO東京本部までの地図が印刷された紙を出すと、それと周囲を見比べながら歩き出す。

「……こうして自分の足で通うと、また違う印象だなあ」

ナイガー初出現の際の査問と先日迎賓館警護の打ち合わせ、都合2回行ったことがある本部だが、いずれも上空からいきなり敷地の只中に降り立ったため、今の様に歩いて赴こうとしていることに、思わず感慨を覚える。

そうして駅から歩くこと10分。目の前に周囲のビルに負けない長大さを誇る極太のビルが見えてくる。その足元には大小複数の建屋や小さなビルが並び、その周囲を背の高い塀が囲っている。

「あれだな」

それが東京本部だと理解するや、光秋は右手の塀に沿って歩を進め、少し歩いて正門前に辿り着く。

「……………デカイ」

塀のそばから見上げる本舎ビルの巨大さに、心の中でただ一言溢す。

「……とー呆然としてる場合じゃない」

しかしすぐに気を取り直すと、左手の腕時計で時刻を確認し、部屋を出た時の時間を思い出して大よその移動時間を計算する。

——……だいたい30分つてとこか。寮から駅、駅から本部までの移動は大して掛からないとして、問題は電車での移動か……そこは追々工夫していくか……」「明日からここに通うんだよなあ……」

通勤方法に関する思案を終え、改めて本舎を眺めると、今更ながら抱いた日ESOの本丸で働くという自覚に膝が笑い始める。

「……さて。せつかく来たんだし、この辺少し回ってみるか。ノートも買ってかないとな……」

そう声に出すことで気を取り直すと、地図をカバンに仕舞い、本部を中心とした周囲の散策を始める。

午後8時半。

入浴を終え、コタツに籠って新しく買った本を読んでいた光秋は、ふと顔を上げ、部屋の隅に置いていた明日の荷物を詰めたカバンと、ハンガーラックの端に掛けた黒の背広を

見やる。もともとは大学の入学式参加や、卒業が迫った頃の就職活動用に向こう側の家から持参してきたものだ。

―特エスの主任は、基本背広なんだよなあ。入間主任もそうだったし……―
秋田や迎賓館で見掛けた服装を思い出しつつ、再び本に目を落とす。
しばらくして、机の上の時計が9時を指しているのに気付く。

「……そろつと寝るか。明日早いし」

若干の緊張を含んだ声で呟くと、読んでいた本に葉を挟んで机に置き、用を足してベッドに上がる。

―いよいよ明日からかあ……―「鬼が出るか、蛇が出るか……」
胸中に渦巻く不安を端的に声に出すと、明かりを消して布団を被る。

1月19日水曜日午前6時。

転属して初めての出勤故の緊張からか、携帯電話のアラームよりも若干早く目が覚めた光秋は、朝食等を済ませていつでも出られるようにする。

「……」んなんていいのかなあ？」

慣れないネクタイに首回りを四苦八苦させつつ、背広を着た体をコタツに収め、適当

な時間になるまで待つ。

しばらくして7時を回ると、コタツを切りながら腰を上げ、エアコンも消し、私物の茶色いコートを羽織ってカバンを提げる。

寮を出て駅へ向かい、ホームに入るややつて来た電車に揺られることしばし、降りた駅から本部までの道を昨日の記憶を頼りに進み、正門前で一旦足を止めて、カバンから出した研修に関する指示が書かれた紙に改めて目を通す。

—えつと……8時までには本舎の3階に行けばいいわけで………あー、何度読み直しても緊張するう！—

周囲の寒さとは裏腹に薄っすら汗ばんだ手で紙を戻すと、光秋は本舎を眺めながら昨日に引き続き膝を笑わせる。

が、それも束の間、

「……腹決めよう………よしっ！」

小さな宣誓と共に頬を叩いて気持ちを切り替えると、門の陰から出て真っ直ぐ本舎へ向かう。

しかし、

「!?ちよっ!ちよおっ!!」

数歩進んだところ突然カバンが引つ張られ、紐を斜めに掛けていた体が引かれるまま

に足をよろけさせながら左に進まされる。

「念力？」

理解する間にもカバンを引いていた力は消え、辺りを見回すと本舎の壁に背中を預けた見知った人を見付ける。

「ハーイ、ワンちゃん。1カ月ぶりってどこかしら？」

「曾我さん……お久しぶりです」——今の曾我さんか。初めて会った時は制帽持っていて、秋田ではニコイチに雪玉ぶつけて……こういうの好きだよなあ、この人……—

制服姿の曾我に応じつつ、光秋は彼女のイタズラの数々を振り返ってみる。

その間にも、曾我は不敵な笑みを浮かべて光秋の許に歩み寄ってくる。

「秋田で大活躍したと思えば、翌月には本部に栄転、おまけに特エス主任に異動だなんで、異例の大出世じゃない」

「どうも……あれ？曾我さん僕の状況知ってるんですか？」

自身としてはそんなに喜んでもいられないことを掻い摘んで述べる曾我に、光秋はふと疑問を覚える。

「知ってるものにも、本部はその話題で持ち切りよ。良くも悪くもね」

「……まあ、そうでしょうね……」

曾我曰くの「異例の大出世」に対する人々の感想、今更ながらそれに思い至った光秋

は、多少萎えていく気持ちを自覚する。

しかしいつまでもそうしているわけにもいかず、気を取り直すことも兼ねて先程から抱いている疑問を口にする。

「ところで、曽我さんはなんでこんな所に？」

それを聞くや、曽我はますます笑みを濃くする。

「よく訊いてくれたわね。あなたを迎えにきたのよ」

「僕を？」

「そう。不慣れなワンちゃんが迷子にならないように、本部を案内してあげようと思つて」

「それはありがたいことですが……………曽我さん、何か企んですか？」

「貴方アタシを何だと思つてるのよっ！」

少し距離をとって探る目で訊ねる光秋に、一瞬前までの笑みはどこへやら、曽我は目を三角にして怒鳴る。

もつとも、不敵な笑みの所為で掴みどころがよくわからなかった姿があつさり崩れたことは、逆に光秋を安心させた。

「怒らないでください。冗談ですよ。まさかここまで本気にされるとは思いませんでした……」

「冗談ねえ？……まあいいけど」

「どうも……それはそうと」

そう言つて怒りが鎮まつた様子の曾我に、光秋は先程確認した紙をもう一度出す。
「そういうことなら、早速案内していただけますか。ここなんです」

言いながら、研修の部屋の名前が書かれた辺りを指さす。

「ここね。りょーかい！ついてきて」

応じながら笑みを取り戻すと、曾我は本舎の正面玄関へ向かい、光秋も後に続く。

少し進んで最寄りのエレベーターに乗り込むと、光秋は左隣に立つ曾我を見る。

「ところで、曾我さん」

「なに？」

「真面目な話、何で僕を迎えにきてくれたんですか？状況を考えるに、寒い中早く来て待つててくれたみたいですけど？」

「別に、寒い中待つてなんていないわよ。上の階の暖房が効いた部屋で下を見てて、ワンちゃんが来たのが見えたら念で窓から下りただけだから。早めに来たのは確かだけだね」

「……もしかして、カバン引つ張った時ですか？」

「そう」

「……曾我さんの方の状況は解りましたけど……結局、何でそこまでしてくれるんです？」

「……ホントのこと言うとね、アタシも人から頼まれたの。ワンちゃんが来たら迎えに行けって」

「人から？」——誰だ？——

思いがけない返答に、光秋は首を傾げる。

「ただそれだけじゃなくてね、アタシもワンちゃんのこと呼びに行きたかったのよ」

「それまた何で？」

「一応、ワンちゃんには何かとお世話になってるし……研修が終わって正式に主任になったら、もうこんな口の利き方も、『ワンちゃん』って呼び方もできなくなるしねえ。少なくとも勤務中は。だから、今の内にたつぷり言つとこうと思つて！」

「ああ、そうか……主任になったら、僕出世するんですね……」

どこか嬉々として語る曾我に応じつつ、光秋はまた今更ながら自分の置かれている状況、その失念していた部分を思い出す。

——特エス主任は士官が務める規定。つまり研修が終われば、僕も自動的に三尉に昇格ってことか……僕が士官……どうも実感湧かないなあ……—

率直な感想を心中に溢した直後、エレベーターの扉が開き、光秋は曾我の後を追って

3階の廊下に出る。

—これは……真面目に曾我さんがいてくれてよかったかもな。そうでなきや今頃迷子だ—

同じ様な景色が延々と続く廊下を眺めながらそう思う間にも、前に行く曾我が1つのドアの前で立ち止まったのを見て、光秋も歩みを止める。

「ハハ」よ」

「ありがとうございます。では——？」

礼を言つて部屋に入ろうとした直前、光秋が握ろうとしていたドアノブを先に回して曾我が一足早く部屋に入ってしまう。

「曾我さん……？」

突然のことに首を傾げつつ、光秋もやや速足でそれに続く。

と、ホワイトボードの前に折り畳み式のテーブルとパイプイスが置かれた室内に見覚えのある顔を見付ける。

「主任、加藤二曹をお連れしました」

「おお、ご苦労さん」

曾我がの報告に応じる間にも、テーブルのそばに立っていた獅子の鬘の様な頭をしたスーツ姿の男が歩み寄ってくる。

—この人確か、曾我さんの主任の……えー……………」

その特徴的な髪形から、光秋は10月の合同演習前に京都支部を訪ねてきた目の前の人物を思い出す。が、肝心の名前がどうしても思い出せない。

—藤原三佐みたいな名前だった気はするんだよなあ……フジ、フジ……………」
そうして悩んでいる間にも、鬘は光秋の前に到着してしまふ。

—イカン！えー……………」

焦るあまりワイシャツの下を冷たい汗が伝うが、鬘は気にする素振りもなく口を開く。

「よく来たな加藤二曹。藤岡隊主任の藤岡清ふしかわきよし一尉だ。この度君の教官を務めることになった。よろしく頼む」

「…よろしくお願ひしますっ！—そうだ！藤岡主任だ！—」

鬘——藤岡の自己紹介でようやく思い出した名前に心中で喝采を上げながら、光秋はこれから最もお世話になるであろう目の前の偉丈夫に深く頭を下げる。

ややあつて頭を上げると、藤岡が左手首の腕時計を確認しているのを見る。

「予定まではまだ少し時間があるが、とりあえず俺と君だけいれば充分だしな……時間
も惜しいことだ、早速研修を始めよう」

「はい！—」

「曾我、お前はいつも通り自主練を。何かあれば俺の携帯にかけろ」
「了解」

それぞれに指示を出すと、藤岡はホワイトボードの許へ向かい、曾我は部屋から出ていく。光秋も脱いだコートをイスの背もたれに掛けて腰を下ろすと、カバンから出したノートをテーブルに広げ、右手に持ったシャープペンシルの芯を出す。

——いよいよ、か……—

口の中で呟いた通り、いよいよ光秋の主任研修が始まった。

午後0時。

午前中の研修を終え、食堂に移動した光秋は昼食にブリの照り焼き定食を摂る。

テーブルを挟んだ正面にはここまで案内してくれた曾我が座っており、生姜焼き定食を食べる手を休めて訊いてくる。

「どう？初日の研修は？」

「いっぱいいいっぱいです」

鈍痛のする頭で即答すると、光秋は味噌汁で口を湿らせる。

「午前中を使って超能力の基礎知識——大まかな歴史とか、能力の種類とか、レベルの基

「準なんかを教えてもらったけど……正直甘く見てました」

言いながら、研修風景を振り返る。

「歴史なんかはこつちに来てすぐに三佐に教えてもらったから、その延長と違ってたけど……超能力に関して掘り下げた所為かな？ 専門用語が多くてメモをとるのがやつとだったし……種類とかレベルとか、そういう『概要』については尚のこと……こりやあただ学ぶだけじゃなくて、追々復習が必要だなあ……」

自身の見通しの甘さを認めながら、この先しばらくこの調子が続くことに憂鬱になる。

その時、何処からというわけでもなく、複数の人の囁き声が聞こえてくる。

「ねえ、もしかして彼が噂の？」

「京都から来たっていう二曹か？」

「1年も経たずにスピード昇格、入隊当初から新兵器のテストに参加してるっていう……」

「とうとう本部に、それも特エス主任なんて花形に栄転かあ」

「でも大丈夫かしら？ 今からそんなとん拍子で？」

「上るのが早ければ、落ちるのも早いさ」

「どうせなら、できるだけ高い所から豪快に落ちてくれねえかあ……」

「……」

一連のやや声が大きい囁きを、光秋はブリをほぐしながら聞き流す。

と、曾我が囁きした辺りに棘のある視線を向ける。

「なによアイツ等。これ見よがしに好き放題」

「あんまり気にしない方がいいですよ」

「ワンちゃんがちよつとは気にしなさいよ。なにしれつとしてんの？」

「別にしれつとはしてませんよ。ただ、ああいうのは聞き流すに限ると思って」

「それはそうかもしれないけど……」

「それに、嫉妬っていうのか、妬みっていうのか、そういうのは誰でも抱きますし……」

「……」

半分は自分自身に対して言った光秋に、曾我はそれ以上何も言わず、視線の棘も引つ込める。

「……………曾我さんは、あんなふうに感じないんですか？自分で言うのもなんですが、この馬の骨かもわからない、そのくせ妙に好待遇な奴が同じ職場にやつてきたら……正直に言う、僕ならちよつと思っちゃうな。流石に声には出しませんが」

出だしこそ迷いながらもほぼ直線的に問い、赤裸々に語った光秋に、曾我は少しの間考える顔をする。

「そりゃあ、何も知らなければ、アタシも少しは思うかもしれないけど……けど今朝も言ったように、ワンちゃんには何かとお世話になってるし……あなたのこと少しは知ってるしね」

「とうとう？」

「馬の骨とまでは言わないけど、確かに普段ぼんやりしてて、おまけにトロくて」

「トロいはひどいなあ……」

「ホントのことでしょう？……でも、やる時はやってくれるっていうか、いざという時頼りになるっていうか……『異例の大出世』なんて言ったけど、どつかでこの結果に納得できるとは気がするのよねえ……」

「……『納得』、ですか……」

曾我の口から出てきたその一言に何故か引つ掛かるものを覚えながら、光秋はブリ―切れを白飯と一緒に口に運ぶ。

昼食を終え、昼休みが過ぎると、光秋は藤岡との研修を再開する。

途中に小休止を挟みつつ超能力の概要について学ぶこと3時間少々。午後4時を少し過ぎたところで小休止に入った光秋は、座りっぱなしで固まった体を伸びてほぐす

と、昼食時よりさらに鈍痛が強くなった頭を俯け、テーブル上のノートを見やる。

「ホント、こりや復習が必要だなあ……」

ホワイトボードの写しを軸に、所々自分なりの理解が走り書きされたノートを眺めながら、その膨大な情報量と濃密な内容に軽い眩暈を覚える。

「こんなのが『異例の大出世』をして『納得』？曾我さんも質たちの悪い冗談を……」

話についていくので精一杯な自分に劣等感を覚えつつ、昼食時の曾我の発言を受けて自虐的に微笑んでみせる。

その時、

「……噂をすれば――」

タイミングを見計らったかの様に、曾我が部屋に入ってくる。

「あれ？主任は？」

「煙草吸ってくるって言って出ていきましたよ」

藤岡の姿を探す曾我に、光秋は少し前に聞いた言伝を思い出しながら答える。

「藤岡主任がなにか？」

「ううん。いないから訊いただけけど……だいぶへばってるみたいね」

「わかりますか……？」

単刀直入な曾我の指摘に、光秋も疲労感を隠さず返す。

「ちやうど今曽我さんのことを考えていました……僕の現状に『納得』なんて、質の悪い冗談だつて」

「そうかしら？」

「そうですよ……本当に、何でもこんな人事になったのか……」

「……噂だけど、ワンちゃんを主任に推薦したの、人間主任らしいわよ」

「え？ それどういう——」

予想外な回答を述べる曽我に光秋がさらに訊こうとしたその時、ノックもなしにドアが開く音が響き、2人はそちらに顔を向ける。

「……………君たち」

入ってきた3人の少女——柏崎桜、北大路菊、柿崎堇に、光秋は目を丸くする。それぞれ私物と思しきコートの下に紺色のブレザーとスカートの制服を着、赤いランドセルを背負っているところかして、学校帰りに立ち寄った様子だ。

柏崎と北大路が睨む様な視線を寄こしてくる中、柿崎がぎこちなく口を開く。

「ど、どうも、加藤さん……。パーティーの時はお世話になりました」

「ああ、いや、こちらこそ」

頭を下げる柿崎に返礼すると、光秋は不意に湧いた疑問を述べる。

「その後、人間主任の容態は？」

「まだこの医療棟に入院してるけど、順調に回復してるって先生が」

「それはなにより」――何はともあれ、あの時頑張った甲斐はあったか――

柿崎の返答に、光秋はNPのメガボディ――フラガラッハの腕部機銃に撃たれた入間を柏崎たちの力を借りて応急処置した時を思い出しながら、それが功を成したことに安堵を覚える。

と、それまでドアの横の壁に背中を預けていた柏崎が、柿崎の前に出て険の強い目で光秋を見据えてくる。

「主任から聞いたけど、あんたが新しい主任になるって？」

「え？……ああ。研修が終わり次第、入間主任が回復されるまでの間だけど……？」

「そう……」

質問の意図を図りかねながらも答える光秋に、柏崎は確認が済んだとばかりに呟くと、もともと険しい視線をさらに険しくする。

「局長たちがどういうつもりか知らないけど……少なくともアタシ等は、あんたを主任と認めないから！」

「……………は？」

藪から棒に言われた宣言に、光秋はどう返していいかわからず、自分でも間抜けな声を上げるのでいっぱいになる。

「確かに主任を助けるのに協力してくれたのは感謝してるし、あんた自体は別に嫌いじゃないよ。でも、アタシ等の上司になるってんなら話は別！アタシ等の主任はあくまでも人間主任だ！それ以外の奴の言うことなんて聴かないから!!」

「聴かないって……そんな話通るわけないだろう？だいたい、そうなったらここに来た僕は何をすればいい？」

「さあ？待機室の椅子に座って昼寝でもしてればいいんじゃないですか？」

光秋のやや強い反論に、それまでドアのそばに佇んでいた北大路が突き放す様な声で言ってくる。その視線は洞穴の様に暗く、こちらを見下していることを隠しもしない。

「とにかくそういうことだから。行こう菊、堇」

言うや柏崎は踵を返し、北大路も黙ってそれに続く。

「あ、あの……失礼しました！」

気まずそうに深く頭を下げて柿崎も出ていくと、光秋はしばらく一行が出ていったドアを呆然と眺める。

「……………」

「……………あの、ワンちゃん？」

「フツ……フツフツフツ……！」

迷いながらも声を掛ける曾我に、光秋はゆつくりと顔を向けると、炎天下の中に長期

間放置された鉢植えの如き渴いた笑い声を漏らす。

「勉強は解らない、部下になる予定の者たちからは拒絶される……正しく前途多難ですねっ！」

いつそ清々しいくらいの笑顔を浮かべたその時、藤岡がドアを開けて入ってくる。

「よし、研修再か……どうかしたか？」

「いえ、主任。これは……」

不自然な程にハツラツとした笑みを浮かべる光秋に、藤岡は反射的に身構え、曾我は説明の言葉を探そうとする。

が、一言も発する前に光秋が口を開く。

「いいえなんでも。それより、早く再開しましょうよ」

「……あ、ああ。そうだな……」

急かす光秋に応じると、藤岡はホワイトボードの前に移動して研修を再開させる。

光秋もシャープペンシルを持ち直し、再び概要説明に聞き入る。

が、胸の中では先程までの笑みとは裏腹に半べそをかきながら、誰にも聞かれることがないのを承知で呟く。

——安易にこの言葉は使いたくなかったが、おそらくこれ以上の適切な表現もないかもなあ………最悪だっ!!——

転属 1 日目の勤務は、新しい部署の勝手の違いを身を以って知るものとなった。

78 柿崎の歩み寄り

1月22日土曜日午後1時。

午前中の研修を終え、菓子パンに缶コーヒーという簡単な昼食を済ませた光秋は、東京本部本舎から敷地内の医療棟へ東京に来て初めての目の検査に向かう。藤岡主任には事前に許可をとって時間を空けてもらい、午後2時頃に研修を再開することになっている。

「えーとー?……こっちか」

藤岡に教えてもらった通りに敷地内を進み、医療棟の玄関をくぐると、事前連絡に従って受付で要件を告げ、指示と看板の誘導に従って指定された部屋へ向かう。

「……………」

ドアの上の表示を確認して眩くと、ノックして中へ入る。

「すみません」

「あ、はい。連絡があった加藤二曹ですね」

「はい」

「こちらへ」

歩み寄ってきた短い黒髪の女性看護師と短いやり取りを交わすと、光秋はその人の案内に従って部屋の奥に通される。

……これは――

大掛かりな眼圧測定機が壁際に設置され、視力検査用の視標がいくつか壁に掛かっている光景に、思わず懐かしさを感じる。

――こういうのを見るのもだいたい1年ぶりかあ。上杉さんだと触って終わりだったからなあ――

向こう側では定期的に見た、しかしこちら側に来てからはすっかりご無沙汰だった光景に、思わず小さな感動を覚える。

「どうぞ、こちらに座ってください」

「……あつ、はい」

看護師の呼び掛けに気を取り直すと、光秋はカバンを下ろして眼圧測定機の椅子に腰掛け、メガネを背広の胸ポケットに仕舞って小型カメラの前に突き出た台にアゴを載せる。

左右の眼圧を測り、そのまま横の椅子に移動すると、今度は看護師が手元のリモコンで操作して点灯させる円の欠け方向を答えて視力を測定していく。

――サイコメトリーでパッと済ませるのも悪くないが……やっぱりこっちの方が目

の検査に來た感じするな！——

答える傍ら、心の中で約一年ぶりの感覚に独特の尻の座りのよさを覚える。

その間にも測定を終え、メガネを掛け直した光秋は看護師の誘導に従つて部屋を出、診察室の前に移動する。

「少々お待ちくださいね」

「はい……」

看護師が部屋に消えると、光秋はドアの横の長椅子に腰を下ろす。

周囲には自分以外誰もおらず、なんとなしに膝上のカバンに目をやると、その中に入っている研修ノートを幻視してしまう。

——研修が始まつて今日で4日目。寮でも復習してなんとかついていけるが……どうにか、だな………

思わしくない研修の感触に、つい嘆息を吐いてしまう。

——本当、何でこんなことに……人間主任は何でこんな僕を推薦したんだ……？——

弱音と疑問が混ざった思いを胸中に渦巻かせているとドアが開き、先程の看護師が顔を出す。

「加藤二曹、お入りください」

「あ、はい」——……とりあえず、この話は一旦後だな——

そう思つて気持ちを切り替えると、カバンを持って診察室に入る。

部屋の内装は京都支部の上杉のそれと大差なく、診察机には黒い髪を短く切り揃えた白衣姿の男性医師が座っている。

「……………」

どこことなく刃物——「医者」という職業も合わさつてか——メスの様な鋭さを持った眼光に一瞬悪寒を覚えるものの、その傍らに微笑みを浮かべて着席を促す女性看護師を認めてどうにか気を取り直すと、光秋はカバンを足元に置いて目の前の丸椅子に腰を下ろす。

「……………お願いします」

「……………加藤光秋。実戦部隊二曹な……………」

やや緊張気味に会釈する光秋に、医師は手に持った三つ折りの紙束を見ながら唸る様に言う。机の上の封筒からして、上杉の紹介状だ。

「あ、はい……………一応、今特務部隊主任の研修中です」

「……………」

光秋の補足に医師は無言を返すと、机の引き出しからルーペとペンライトを取り出す。

「メガネ外してくれ」

「はい……」

それを見て医師の意図を察すると、光秋は言われた通りメガネを上着の胸ポケットに仕舞う。直後に看護師によって部屋の照明が消され、カーテンも閉めて暗くなると、医師がルーペを介したペンライトの光を目に当ててくる。

「……」

眩しさに耐えること少々、両目共に確認を終えた医師はペンライトを下ろし、それに合わせる様に看護師が照明を点ける。

「……上杉の奴、相変わらず仕事は丁寧だな」

—ああ、そつか。この人が上杉さんの言ってた先輩なんだ—

カルテを見ながらの医師の眩しに、光秋は異動の少し前に上杉が話していたことを思い出す。

「……特に変わりはないな。指定の薬を出すよう言っておくから、受付で受け取ってくれ」

「はい……ありがとうございます」

顔を上げた医師の診断に一礼で応じると、光秋は席を立ってカバンを肩に掛ける。

—どうも取っ付きにくいなあ。不愛想というか……僕も傍から見れば似た様なもんかもしれないけど……—

失礼を承知で医師に対する率直な感想を胸の中に漏らすと、振り返って部屋を出ようとする。

その時、医師は何かを思い出した様に顔を上げる。

「ああ、そういえば紹介が遅れたな。ESO専属医の黒澤だ。くろさわ二曹がこっちにいる間、目の調子を診させてもらう」

「……あ、はい……よろしくお願いします!」

突然の自己紹介に、医師に対して苦手意識を抱きつつあった光秋は意表を突かれ、慌てて頭を下げる。

「珍しいですね?先生が自己紹介なんて?」

不思議そうな顔をする看護師に、医師——黒澤は再びカルテに目を落としながら返す。

「俺だって、後輩が大事に面倒診てた患者には少しは気を遣うさ。あと、幼馴染の同僚でもあるしな」

「幼馴染……?」

黒澤の口から出てきた唐突な単語に、全く心当たりがない光秋は首を傾げる。

「お前さん、京都では竹田柔蔵と同じ隊だったんだろう?あいつからもそう聞いているが」

「……………あああ!」

続く黒澤の問いに、光秋は送別会で竹田が話していたことを思い出し、思わず手を打って合点する。

が、直後、

「黒澤さんが二尉の……あれ？でも、上杉さんの先輩って……？」

上杉と竹田が言っていた人物はそれぞれ別人、そう思っていたために、東の間混乱してしまふ。

「そうだ。柔蔵とは子供の頃から、上杉とは医大からの付き合いだ。なんの因果か、俺を通じて知り合った2人が、今じゃ京都で仲よくやつてるようだがな」

「……ああ、なるほど」——この人を介して竹田二尉と上杉さんが……僕が法子さんを介して横尾中尉や日高さんと知り合ったようなもんか——

黒澤の補足を充分噛み締め、自分の人間関係を例にイメージを整理してようやく納得し切ると、光秋は上杉と竹田がそれぞれ言っていたことを思い出す。

——この人を頼れ、かあ……思つたより不愛想ってわけでもないし……——「とりあえず、今日はありがとうございました」

「ああ。お大事に」

黒澤の返事を聞くと、光秋は今度こそ振り返って診察室を出る。

——この人なら安心……かな？——

受付に戻った光秋は、近くの長椅子に腰を下ろし、会計に呼ばれるのを待つ。

—遅いなあ……薬の用意でも手こずってるのか？—

待っているのは自分だけだというのになかなか呼ばれないことに若干イラつきながら、じつとしていた所為か少し凝った首を左右に回す。

と、

「……………あ」

偶然顔を向けた先の廊下が目に入り、そこからこちらにやって来る柏崎、北大路、柿崎の3人を見掛ける。服装は先日と同様、私物らしきコートと紺色の学校の制服だ。

「……………」

向こうもこちらに気付いたらしく、柏崎と柿崎はどこか気まずそうに、北大路は棒付きの飴を銜えた顔に無表情を浮かべながら近付いてくる。

「加藤……………さん……………こんにちは」

「こんにちは……………奇遇だな。こんなところで」

なんと言つていいか迷いながら挨拶してくる柿崎に、光秋は努めて自然体に戻す。気を抜くと、先日の柏崎の一方的な宣言が思い出されてつい視線が鋭くなってしまうた

め、そんな自分をどうにか抑えることに意識の何割かを回す。

「人間主任がここに入院してて、そのお見舞いに……加藤さんは？」

「僕は目の検査の帰り。今会計待ってるよ」

柿崎の問いに、光秋は受付を見やりながら応じる。

「そつかあ、人間主任ここに入院してるんだっけ……ところで、君たちその格好は？学校帰りか？」

「あ、これは——」

「土曜日に学校があるわけないだろう。普段本部に来る時は、この格好で来るように言われてんだよ」

今度は光秋の質問に柿崎が答えようとすると、それを遮る様に柏崎が呆れ混じりに言ってくる。

「そんなこともいちいち説明しなくちゃいけないんですか？主任になるとか以前に、常識を疑いますね」

——……我慢、我慢……——

銜えていた飴を離すや言ってきた北大路に腹が熱くなるのを自覚するものの、子供相手に声を荒げるのもみつともないの思いから理性を働かせた光秋は、どうにかその熱を押しやる。

「すまんね。『学校』って付くところとはもう1年近く縁がないから、つい感覚を忘れてしまつて」

「……」

実際に感じたことも含めて至極冷静に告げることがを心掛ける光秋の返事を、しかし北大路は飴を銜え直しながらそっぽを向いて聞き流す。

「……」

「加藤さーん。加藤光秋さーん」

その傍若無人を絵に描いた様な態度に再び立腹しそうになるものの、ようやく呼ばれた会計に再度怒りを鎮め、長椅子を立てて受付へ向かう。

「あ、あの……それじゃあ……」

「……ああ。それじゃあ」

おっかなびつくりと頭を下げる柿崎に、光秋も怒気が出ないように注意しつつ返すと、少女3人は玄関へ向かう。

会計を済ませ、受け取った目薬の入った紙袋をカバンに仕舞うと、一つ深呼吸して荒立ちつつあった胸中を鎮めた光秋は、少女たちとの一連のやり取りを振り返ってみる。

―北大路さんの言動、確かに失礼なところはあったものの……子供相手にああも力ツ力するとは、僕もまだまだかあ………――

もともと自制心とか忍耐力とかいったものには自信があったのだが、たった今抱いた自己認識がそれをあつさりとか押しやってしまい、心の中で溜息が漏れる。

しかしそれも束の間、先程の会話からもう一つあることを思い出し、柏崎たちがやって来た廊下に顔を向ける。

—そういや、入間主任ここに入院してるんだよなあ……………明日確か休みだったし、僕も見舞い行こうかな？ 前任者への挨拶もしたいし……………僕を彼女たちの主任に推薦した理由も訊きたいし—

不満、疑惑、怒り、興味——現状抱いているさまざまな思いが混ざった視線を一瞬廊下へ向けると、光秋はカバンを提げ直して玄関へ向かう。

医療棟を後にした光秋は、予定通り本舎に戻り、研修を再開、午後3時を回った今は小休止に入っていた。藤岡は休みに入るなり煙草を吸つてくると言つて出ていき、曽我も顔を出す気配はなく、今部屋には光秋一人だ。

「うう……………」

自分しかない室内で、勉強疲れを絞り出す様に唸り声を出しながら伸びをし、首や肩を軽く回して凝り固まった体をほぐそうとする。

—「そういや、ここんとこ体動かす機会が減ってるような……」

思いつつ、立场上仕方がないこととはいえ、ここ数日テーブルに座りっぱなしだった自分を振り返る。もちろん、今でも気付きを兼ねて簡単に体を動かしてから出勤しているのだが、京都支部で多くの時間を藤原三佐との訓練に割いていた頃と比べれば、運動量の激減は否定できない。

「……………誰もいないし、ちよつとだけ……………」

室内を見回し、誰も入ってくる気配がないことを確認すると、席を立ってホワイトボード前の広く空いている辺りに出る。

肩周りを中心とした軽い柔軟運動を行うと、障害物が少ないドア側を向き、足を肩幅に開いて拳を握った両腕を前に伸ばす。

「……」

ゆつくりと息を吐きながら腕を腰に引く動作を3回行い、左腕を伸ばして右腕を腰に引いた姿勢になる。

「……………! やっぱいいな!」

右、左、右と、突きの基本動作を3回行う。普段からやり慣れた基本中の基本である。その動きに、この時は何故か昂るものを感じ、知らぬ間に喜色を含んだ声口を突く。

「ずっとじっとしていたからかな？ 思った以上に気持ちいいや！」

独り自己分析を述べると、今度は左半身を前に出し、組手をする際の体勢をとる。

流石に室内では空いている空間は狭く、普段の様な大きな動きは行えないものの、軽く手足を出し引きして体を動かすことには充分な満足感を得る。格闘技にあまり明るくない者が見れば、それはさながらシャドーボクシングといったところか。

正面に幻視した藤原に向かって、左拳を二連打、右を出すと見せかけてさらに左を1発入れ、少し後退すると一気に距離を詰めて深めの左を放つ。

アゴに入り掛けたそれを念で止められるや、腰に引いていた右拳の一撃を鳩尾目掛けて放つ。

刹那、

「加藤さん今——!!」

「!?」

不意にドアが開くや柿崎が部屋に入ってきて、一直線に飛んできた拳に驚愕する。光秋も突然の来訪者に動揺しつつもすぐに右腕を急停止させ、慌てて柿崎の許に駆け寄る。

「すまない、大丈夫か!？」

「は、はいっ……………!!」

未だ動揺が残る声でやや強く訊ねると、柿崎は震えた声で応じる。

「……………よかったあ」

周囲を走査して怪我がないのを確認し、本当に大丈夫なのだと確信すると、思わず安堵の声漏れる。

「いや、すまない。ビツクリさせちゃったな」

「いいえ……ところで、加藤さんなんでパンチなんて……」

柿崎の問いに、今更ながら突きの練習を見られたと理解して、光秋は僅かだが恥ずかしくなる。きちんとした訓練ならいいのだが、今のようない運動程度のは、やっているところをあまり見られたくないのだ。

「あ、いやあ……………座ってばかりだったから、ちよつと体を動かそうと……………そういう柿崎さんは？こんな所にどうした？」

「私は……………これを……………」

大雑把に返答するやすぐに訊き返す光秋に、柿崎は両手で持った紙コップを差し出す。

「！」

遅まきながら紙コップの存在と、その中に微かに湯気を立てる緑茶が注がれていることに気付く、同時にさっきのことで零れてしまったのだろう、柿崎の制服の胸元に染みができているのを見て再び申し訳ない気持ちになる。

「それ熱いのだろう？ 零れてるけど大丈夫か!」

「あ、はい。ちよつと早く買い過ぎて、温ぬるくなってたし……」

「ならいいが……制服は……」

ひとまず火傷の心配はないことに安堵しつつも、光秋は制服を汚してしまったことに何と言つていいのか困つてしまう。

「あ、これなら気にしないでください。これくらいなら洗えば落ちますから」

「いや、ワイシャツならまだしも、上着はそう簡単には……」

「大丈夫ですから! 気にしないでください!」

「は、はい……じゃあ……」

短い関わりながら初めて見る強い語調で告げる柿崎に、光秋はこれ以上この話題に触れない方がいいと判断し、素直に引き下がる。

それを見るや、柿崎は手の中の紙コップを改めて差し出す。

「それよりも……あの、これ。今言つた通り、ちよつと零れちゃいましたけど……」
「?……僕に?」

「はい……もしかして、緑茶嫌いでしたか?」

「いやいや、そんなことは……それじゃあ、御好意に甘えて」

不安を浮かべる柿崎を見るや、光秋はすぐにそれを受け取る。

「あ、本当に温いな……」「そうだ。ずっと立たせててごめんな。どつかテキトーな席に座って」

紙コップ越しに伝わってくるお茶の温度に火傷の心配はないと再度安堵すると、研修中に座っていたパイプイスに腰を下ろしながら柿崎に着席を促す。

「はい」

応じると、柿崎は光秋の左隣のイスに座り、互いに向かい合う。

「……」

「あの……美味しいですか？」

「ん？……まあ、ね」――自動販売機だからね……――

お茶に口を付けるや訊いてくる柿崎に、光秋は可もなく不可もない味を感じながら曖昧に答える。

「……あ、温度はいい具合かな。これくらいの熱さが飲みやすいや」

「それはよかったです。冷めて美味しくなくなったかと思ってたので」

「猫舌にはちようどいいよ……とところで、どうしてここに？ お茶まで買ってくれて。柿崎さんと北大路さんは？」

柿崎と会話を交わしながらお茶をすすりつつ、光秋は先程から気になっていたことを問う。

「2人は、休憩室……て言え方がいいのか?とにかく、違う部屋で休んでます。私は……その………」

「?……どうした?」

急に口籠る柿崎に、光秋は紙コップをテーブルに置き、背中を丸めて視線を合わせ、その表情をよく読み取ろうと心なしか顔を寄せる。

「あ、あの、加藤さん………近いです」

「ああ、すまない」

その所為で狼狽えることになった柿崎に詫びを入れつつ、光秋は顔を少し引く。

それでやつと落ち着いたのか、柿崎は口を開く。

「その……さつき桜と菊が失礼な態度をとったでしょう?それで、怒ってるんじゃないかと思って……」

「……謝りに来たと?」

「謝りっていうか……は、はい。ごめんなさい」

「機嫌を窺いに来た」と出掛かった声を呑み込み、包んだ言い方をする光秋に、柿崎はぎこちない口取りで応じ、頭を下げる。

その様子に、光秋は出掛かった表現の方が適切だったのだと察する。

「まあ、ちよつとは怒ったかな。特に北大路さんの言い方には」

「は、はい……」

そうとわかればその時のことを思い出して薄っすら怒りに顔を歪め、それを見た柿崎は途端に小さくなる。

「でもな」

それを見計らってやや強く告げると、光秋は小さな怒りを微笑みに変える。

「それは柿崎さんが気にすることじゃない。僕が怒ったのはあくまで北大路さんだからな。それにしたって、僕の方もいろいろおかしな所があったんだし……」

「そうですけど……」

消え入りそうに返す柿崎を見つつ、光秋はお茶をやや多めに飲んで口を湿らせる。

そして、

「ただ、そういうのとは別に、そうやって進んで行動できる柿崎さんはいいと思うよ」

褒めているのとは違う、その態度に素直に感心し、感じたままを告げた光秋は、知らぬ間に伸ばした左手で柿崎の頭を撫でる。

「!?……あ、あの……加藤さん……?」

「そういう部分は大事にしなさい……というのが、君たちより少しだけ長く生きている、僕のような無取り柄な人間が言える、数少ないことかな」

突然のことに戸惑う柿崎にそう続けると、光秋は手を離してお茶を飲み切る。

「ふー……リラックスにはいいお茶だったな。ありがとう」

「い、いえ………どういたしまして」

礼を言いながら軽く頭を下げる光秋に、柿崎もぎこちなく頭を下げ返す。

そこでふと手元の腕時計を確認すると、間もなく休憩時間が終わろうとしているのに気付く。

「いかん。もうすぐ休みが終わる」

「あ……じゃあ私、これで」

言うや柿崎は席を立ち、ドアへ向かおうとする。

「……あ、そうだ柿崎さん」

直後にあることを思い出した光秋は、その背に声を掛けて呼び止める。

「はい？」

「突然ですまないが、明日ちよつと付き合ってもらえないか？入間主任のお見舞いに行きたいんだが、部屋まで案内してほしくて」

「主任のお見舞い……ですか？」

「ああ………やっぱり都合悪いかね？」

「………いいえ！そういうことなら！」

我ながら唐突な頼みに不安になる光秋に、柿崎は明るい笑顔を浮かべて応じてくれ

る。

「じゃあ頼むよ。あ、詳しい打ち合わせだけど、6時頃にまたここに来れるかね？それくらいに研修終わるからさ」

「わかりました。それじゃあ、また後で！」

「ああ、後で」

言うと柿崎は退出し、一人になった光秋は珍しくよく喋った口を揉みながら、普段ただぼんやりと時間が過ぎるのを待つだけの休憩よりも、少しだけ疲れがとれた——というよりも活力とでもいうものが湧いてきた我が身を自覚する。

—言いたいこと言ってスッキリしたからかな？柿崎さんには重ねて感謝だ—

そう思った直後に藤岡が部屋に入って来るのを見て、心中に再び気合いを入れる。

—さて、もう一丁頑張りますか！—

光秋がいた部屋を出た柿崎は、とぼとぼと柏崎たちが待つ部屋に歩みを進めつつ、先程の一連のやり取りを思い返す。

—『そうやって進んで行動できる柿崎さんはいいと思うよ』、『そういう部分は大事にしない』……か……—

特に頭を撫でられた時のことを思い出しながら、自分の手で撫でられた辺りを触ってみる。

「大きな手だったなあ……お父さんと同じような……ちよつと違うような……」

自分よりもずつと大きな手の感触に、互いの都合からなかなか会えない父親を連想するが、それともまた違うと感じる。

「あ、そうだ。6時にまたさっきの部屋行かないと……」

そんな曖昧な気持ちを持って余しながら、柿崎はこの後の予定を頭の中で確認する。

午後6時。

「では、今日はここまで」

「ありがとうございました」

今日の研修終了を告げる藤岡に席を立てて頭を下げた光秋は、その背中がドアの陰に消えるのを見ると、すっかり疲れを溜め込んだ体をパイプイスに預ける。

「はあ……今日んとこまた復習しとかんと……」

頭に鈍痛を感じながら溜め息混じりに呟くと、テーブルの上の筆記用具をカバンに片付け、いつでも帰れる準備を整える。

それを待つていたかの様にドアが開くと、約束通り柿崎が姿を現す。

「加藤さん、お待たせしました」

「いやいや、僕の方も今研修終わったとこだから。こっちこそ悪いね、呼び付けて」

「いいえ」

「じゃあ、早速明日のことだけど……10時頃に本部の正門前に待ち合わせて、そこで合流して入間主任の病室に向かうってことでいいかね？」

「はい」

「確認するが、主任明日予定ってないよな？」

「いえ、特に聞いてませんけど」

「ならいい……あ、見舞い行くな、なにか持っていった方がいいか？柿崎さん、主任の好きなものってわかるか？あ、それとも食事制限出てた？」

「え？……いえ、すみません。わかりません」

「そっか……なら今回はやめとくか………だいたいこんなところかね」

柿崎の「わからない」を食事制限の意味で受け取ると、光秋は席を立ててカバンを右肩に斜め掛けし、背もたれに掛けていたコートを右手に掛ける。

「さてと……僕はこれから食堂に行くけど、柿崎さんはどうする？」

「私は………じゃあ、私も」

「なら、君の分は僕に奢らせてくれ」

「え？でも、それは流石に……」

「昼過ぎのお茶のお礼だよ。気にしない」

やや強引かと思いつつも言い切ると、光秋はドア脇のスイッチで室内の照明を消して食堂へ向かい、その後ろを柿崎が不安そうな顔をして続く。

食堂に着くと、2人はそれぞれ食べたい物を頼んでトレーを受け取る。

柿崎は最後まで遠慮するものの、光秋が強引に2人分の代金を払って席を探す。

——すっかりしてることなのかもしれないが、子供がそこまで気を遣わなくても……で、ちよつと前までの法子さんも、僕のことこんなふうに見てたのかな？——

2人で出掛けても食事代を自己負担していた法子を思い出してそんなことを考えながら、光秋は7割程埋まっている食堂を見回し、空いているテーブルを見付けるとそこに柿崎と向かい合つて座る。

「いただきます……どうした柿崎さん。食べないのか？」

言うや光秋は生姜焼き定食を食べ始めるものの、なかなかトンカツ定食に手を付けない柿崎を見て一度箸を置く。

「え？……いえ、その……」

「なんだ？まだ奢ったこと気にしてるのか？」

「……はい」

「そんなのいいから、早く食べなさい。冷めちゃうぞ」

「……でも」

『『でも』も『行進』もないよ。さつきも言ったが、僕にとってはお茶のお礼でもあるんだし、ちゃんと食べてくれないと僕が困るよ。僕の為と思って、さあ』

「……それじゃあ……いただきます」

再三にわたる光秋の強引な促しに、ようやく膝を折った様子の柿崎はすつと手を合わせ、トンカツ定食を食べ始める。

その時、

「あら？面白い組み合わせね？」

「……曾我さん」

聞き覚えのある声に首を廻らせると、光秋は左隣に曾我の姿を認める。

「……いいかしら？」

「どうぞ。柿崎さんもいいかね？」

「……はい」

光秋と柿崎の了承を得ると、曾我は持っていたトレーをテーブルに置いて光秋の左隣に座る。

「……えつと……加藤さんの知り合いですか？」

「あれ？知らないのか？」

曾我を見やりながら訊ねてくる柿崎に、てつきり勤め場所が同じなので顔見知り同士だと思っていた光秋は意表を突かれる。

「無理もないわよ。直接話すのはこれが初めてだろうし」

光秋にそう言いながら、曾我は柿崎の顔を見る。

「初めまして、でいいのかしら？特務部隊藤岡隊所属の曾我ガイアです」

「……入間隊所属の柿崎董です……あ、いや！今はまだ入間隊ってことになってるんですけど、もうすぐ加藤さんが主任になるんで……えーつと……」

「落ち着いて。事情はだいたい解ってますよ」

「……すみません」

光秋を見やりながら自己紹介であたふたする柿崎に、曾我は自然な笑みを浮かべてフォローを入れる。

——出た。『猫被りの曾我』——

その笑顔の下にある真の表情を幻視し、それを知る前のことに思いを馳せていた光秋

は少し懐かしい気分になる。

「ワンちゃん。今アタシのことで失礼な想像しなかった？」

「いいえ」

鋭い指摘を投げ掛けてくる曾我に、しかしどこかでそれを予想していた光秋は自分でも白々しいと思えるくらいきつぱりと即答してみそ汁をすすする。

『『ワンちゃん』？』

『『白い犬』ってあだ名だからだろう』

「その通り」

首を傾げる柿崎に光秋は掻い摘んで説明し、曾我も首肯する。

「ああ……」

それで納得すると、柿崎は曾我に多少の迷いを浮かべた顔を向ける。

「……ところで、曾我さんの名前って……その……」

「変わってる？」

「い、いえ！そうじゃなくて、その……すごい名前だなあって……」

曾我の端的な表現を慌てて訂正しながら、柿崎は言葉に困った口を誤魔化す様にみそ汁をすすする。

「いいのよ。よく言われるから。でも、アタシは気に入ってるの。大地の女神ガイア、格

「好いでしょ？」

「確かに、字面は凄いですよね。『地球』と書いて『ガイア』。僕も初めて見た時は驚きました。親御さんも大胆な名前付けますね」

「家^{うち}つて、そういうの好きな人多いから」

10月の演習の際に名簿を見た時のことを思い出し、その時感じたことを呟く光秋に
応じながら、曾我はフオークに巻き付けたナポリタンを口に運ぶ。

そこで会話が途絶えたのをきっかけに、3人はそれぞれの食事に集中する。

―曾我さんと柿崎さん……本部付きの特エス2人と夕食ねえ………確かに、面白い
組み合わせかな。たまにはいいものだ―

一連のやり取りを振り返って満足気にそう思うと、光秋は白飯を巻いた生姜焼きを口
に運ぶ。

79 前任者の思惑

1月23日日曜日午前10時。

昨日柿崎と交わした約束に従って、光秋は電車を降りて本部の正門前へ向かう。

厚手のズボンにコートを着込んでいるものの、顔に吹き付ける風は今日も冷たい。

——うー寒っ……今更だが、本当に見舞いの品用意しなくてよかったかな？——

冷風に震え上がりながら、手ぶらの身に遅まきながら不安を覚える。

——……いや、昨日柿崎さんとも話した通り、状態がわからないんじや下手に持つて行かん方がいいか。何か言われたらキチンと謝っておこ——

そう思うことで不安を押しやり、寒さに追い立てられる様に歩を速めていると、いくらかもせずに正門に着く。

周囲を見回すが、柿崎はまだ来ていないようだ。

「……待つか………寒いっ！」

吹き付ける強風にコート下の肌を粟立たせていると、駅側から声が掛かる。

「加藤さんー！」

「おお、柿崎さん。おはようございます」

「おはようございます！」

挨拶を交わしつつ、ここまで来るのに駆け足だった柿崎は一旦呼吸を整え、改めて光秋に顔を向ける。

「すみません。遅れちゃって」

「いや、僕も今来たところだから……ところで、柿崎さんって確かテレポーターだったよな？」

「はい……？」

「いや、走って来たみたいだからどうしたのかと。もちろん、超能力の私的利用はあんまり歓迎されないけど……」

「……それもありますけど、人間主任が、『超能力ばかり使っていると体が鈍^{なま}るから、普段はできるだけ歩きなさい』って」

「なるほど……じゃあ、その人間主任の部屋に案内してもらおうか」

「はい」

不意に浮かんだ疑問を解決すると、光秋は柿崎に続いて正門をくぐり、医療棟へ向かう。

その間にも、光秋は思ったことを訊いていく。

「そういえば、駅の方から来たみたいだけど？」

「住んでる寮がその近くなので」

「寮？家から通ってるわけじゃないのか？」

「私、奈良出身ですから」

「奈良？また遠いなあ。僕の前の職場の方が近いくらいだ」

「……加藤さんは確か、京都支部から来たんですね？」

「ああ。でも出身は新潟」

「新潟！……京都と新潟もかなり遠いですよね？」

「まあね……『遠い』ねえ……」

目を丸くする柿崎に、光秋は空を見やり、「向こう側の新潟」を思い浮かべながら返す。そうしている間にも医療棟の玄関をくぐり、柿崎先導の下に廊下を進み、突き当たりにあるエレベーターに乗り込んで上昇する。柿崎が押した階で降りると、また廊下を少し進んで入間の病室の前に着く。

「……です」

「うん……」

柿崎の言葉に応じてドア横の表札を確認すると、光秋はドアをノックする。

「はい？」

「失礼します」

中から入間の返事が聞こえると、光秋はドアを開けて病室に入り、柿崎もそれに続く。「どうも入間主任。御加減はいかがですか？」

「加藤さん。董もまた来てくれたの？」

「私は、加藤さんに道案内頼まれて……」

一礼する光秋に、ベッドの上で上体を起こしている入間は嬉しそうな顔を浮かべ、柿崎は少し照れる。

「そう。おかげさまで、だいぶいいですよ。先日はどうもありがとうございました」

「それはなにより……」

柿崎と光秋にそれぞれ応じ、深々と頭を下げる入間に、光秋はその腕を見やりながら返す。

殆ど病床衣のゆつたりとした袖に隠れて見えないものの、手首の周りからは腕全体に巻き付けられた包帯がちらつと覗き、その下にあるだろう銃弾が掠つてできたいくつもの傷を想像する。

「……」

今は掛布団に隠れて見えない脚の方も似た様な状態だったことを連動的に思い出すと、暖房が効いているはずの病室で背筋を震わせ、心なしか手足に切られた様な痛みを薄っすら覚える。

「……あ、お見舞いが遅れてしまつて申し訳ありません。研修のことでもいいいいで、恥ずかしながら頭が回らなかったもので。それと、主任の状态がわからず手ぶらで来てしまい……」

そんな感覚を忘れたいこともあつて、光秋は今回の見舞いで気になつていたことを詫び、頭を下げる。我ながら言い訳がましい物言いに恥ずかしくなるが、今に限つてはその恥ずかしさが悪寒と幻覚痛とでもいふべく感覚を上書きしてくれるのありがたい。

「ああ、いいんですよ。突然の転勤でいろいろ大変だつたでしょうし、こうやつて来てくれるだけで、部屋から出られない身には嬉しいものです。なにより加藤さんは命の恩人なんですから、あまり気にしないでください。それより、いつまでも立つてないで座ってください。董も」

「……では、失礼します」

「……」

詫びに返しながらベッド脇の丸椅子を勧める入間に光秋は応じ、柿崎もちよこんと頭を下げてそれに続く。

——言われてみれば、個室で一人きりの身に、来客は嬉しいよなあ……—

柿崎の分の椅子を用意しながら、中学の頃に虫垂炎で入院した時のことを思い出した光秋は、入間の言葉に一人共感しながら自分の椅子に腰を下ろす。

「……………」

途端、何を話していいかわからなくなる。

—どうしょ？一応推薦の件は訊きたいけど、流石にいきなりは……かといって、他に気の利いた話題も思い付かないし……………柿崎さん、なんかいいか？—

小学生に頼ることに情けなさを覚えながらも、沈黙に耐えかねた光秋は左隣の柿崎に期待の目を向ける。

その思いが通じたのかはわからないが、タイミングを合わせる様に入間が柿崎を見ながら口を開く。

「昨日は殆ど桜ばかりが話して、董は隅で黙ってたけど、なにか言いたいことあったんじゃない？—」

「……………うん。具合のこととか、いつ退院できるかとか、知りたいことは全部桜が訊いちやったから……………」

「そう？……………加藤さんも、何か言いたいことがあるんじゃないですか？—」
「……………そちらから振っていただいたのは、正直ありがたいです」

意図的と判る入間の目配りと問い掛けに、踏み出す機会を与えてくれたことに感謝しつつ、光秋は本題に入る。

「本部に来てから——いいえ。祝賀パーティーの後に転属の指示を受けてからずっと気

になっていました……何故、僕が主任の後任に指名されたのでしょうか？ご存知かと思いますが、僕は一般部隊の一介の隊員に過ぎません。しかもESOに入ってからまだ一年にも満たない……自分で言うのもなんですが、まだ『新人』と言つていい。ましてや特エス主任——というより、『人を使う』ことそのものが丸つきり素人というか、畑違いの分野です。そんな人間が、何でこんな『花形』に就けたのか……」

現状に対する愚痴も交えていることを自覚しつつ、気になっていることを言い切ると、真つ直ぐに人間の目を見据える。

それを見返しながら、人間はゆっくりと語り始める。

「あなたの認識は、概ね正しいでしょうね。確かに、通常の人事ではまずあり得ないことでしよう。私が復帰するまでの間、他の主任に任せる方が理に適っている」

「そうです。それなのに何故……小耳に挟んだ話では、そう言う人間主任自らが僕を推薦されたとか。どういうことですか？」

「……一番大きな理由としては、加藤さんがUKD—01——いえ、今はMB—00というのでしたね——その試験要員だったからだそうです」

「ニコイ——00の？」

思わぬところで出てきたニコイチの識別番号に、光秋は意表を突かれる。

「これは私も断片的に聞いた話なのですが、サン教のベース制圧の際にDD—02が乱

入した一件以降……というより、もっと前からそれらしい話はちらほら聞こえていたのですが……本格的な人型兵器の開発が急がれていたそうです。それと並行して、超能力戦力の新しい運用方法を開発できないかと。こうした流れに加えて、テロリストによる人型兵器を用いた先日的一件が、それに拍車を掛けたとも」

「……つまり、人型兵器の試作品を試験的に使っている僕と、レベル9の入間隊の特エスたちのセット運用を試みたい……と？」

「そのように考えている者もいるようです」

自身の要約を肯定した入間を見て、光秋は否応なしに合点する。

——なるほど。要するに、DDシリーズによる襲撃、NPやZCによる人型兵器を用いた攻撃、そうした「新たにできた状況」に対して、新しい対処法を研究する……その実験要員つてことか。DDシリーズこそ超能力は無効化されるが、それ以外——NPやZCに対しては、確かにそういうの也需要か。人型兵器——メガボデイつて新兵器に関しても、追々いろいろ調べる必要があるんだろうし……ただ……—

さらに大まかな状況整理を行いながら、それでも引つ掛かるものを感じる。

「それでも解らないのは、僕に主任までやらせることです。今の話に従うなら、僕はあくまで00の運用要員であつて、柿崎さんたちとは連携だけすればいい。わざわざ僕が指揮を執る理由としては、どうにも弱い気がするのですが……？」

「……私があなたを推薦した、と言ってましたね」

明文化された光秋の「引つ掛かり」に、入間は確認の声で応じる。

「そういう話……噂とでもいうようなものを聞きました」

「……推薦と言う程明確に推したわけではないんです。ただ、東局長から負傷中の董たちの扱いについて意見を求められた時、パーティーでの一件を語らずにはいられなくて」

「パーティー？……もしかして、柿崎さんたちを指揮して入間主任を助けたことですか？」

他に心当たりがなかったので言ってみるものの、その時の入間の状態を思い浮かべる光秋はいまいち発言に自信が持てない。

「でも、主任はあの時……」

「加藤さんは気絶していると思っていたようですが……いえ、実際それに近い状態だったのでしょうか……」

「？……どういうことだ？——」

要領を得ない入間の言い方に、光秋は首を捻る。

「沈んでいく意識の中、なんとなく感じたんです。『あ、あの子たちが頑張ってる』って」
「……わからない話ではありませんが」

自身ニコイチ関係で何度か氣を失った際、意識が戻る直前くらいに周囲の会話がぼんやりと聞こえてくることを思い出し、光秋は一応の同意を示す。

——氣絶したと思つたのは診断ミスで、實際は辛うじて意識が残つてたつてことか？ 朦朧としてゐるつていうのか——

「そうして氣が付いたら、ここに運ばれていて。感じたことが氣になつて董たちに聞いてみたら、加藤さんが指示を出して、桜たちの力で私を助けてくれたと」

「いえ、まあ……確かに指示は出しましたが……」——實際には法子さんや綾、涼子様も協力してくれたし、僕が動く前から止血をしていたのは涼子様だし……—

事実關係を述べながら視線に感謝の意を含んでくる入間に、目の前の危機を乗り越えることにただ無我夢中だった光秋は、その視線にむず痒いものを感じながら心中に反論を呟く。

「そもそも僕、口しか出してないし……」

そしてその一部が、思わず口を突いて出る。

しかし、入間はそれに返す素振りを見せず、変わらぬ視線を光秋に向け続ける。

「……本部で桜たちと初めて会つた時、どう思いましたか？」

「どう？……」

唐突な問いに束の間首を傾げるものの、光秋はすぐに本部での初対面の記憶——研修

室での拒絶宣言を思い出す。

「……正直に言うと、腹が立ったといえますか……こつちで会ってすぐに『お前の言うことは聴かない！』なんて言われて、その時は可笑しくなりました」

「……」

その時のこと、加えて目の検査後の会話を振り返って若干眉を寄せる光秋に、柿崎が気まずそうに身を縮こませる。

「やはり、そうでしょうね……」

言いながら、入間は深く頷く。

「それがあの子たちの普段の様子です。高過ぎる能力の所為で不相应なプライドを抱いて、他人の言うことなんてろくに聴かなくて、そのくせ歳相応に脆くて……そんな子たちなんですよ、入間隊の特エスは。それでも今は、私が初めて会った時よりだいぶ丸くなったんですけどね」

「はあ………」

非難するような口ぶりとは裏腹に穏やかな表情で語る入間に、光秋は呆然と応じながらも秋田での一件を思い出す。基地の廊下でぶつかった際にジュースを溢されたことに激怒し、クリスマススを家族と過ごせないことを悲しんだ、本当に初対面だった頃の柏崎の姿を。

——入間主任の評価は正確だな。強力なくせに、変なところで幼いのか……………
 そういえばベース制圧の時、補給から戻る途中で“声”を聞いたような……………？あの声音
 ……というより雰囲気、柏崎さんに似てたような……………？いや、今はそれより——

不意に浮かんできた連想を押しやると、光秋は目で続きを促す。

「そんなあの子たちが、あなたの指示を聴いて私を助け、赤の他人であるあなたに称賛の言葉を告げた……………それで私も、信じてみたくなったのかもしれない。あの子たちが信じた、あなたを」

「……………それを局長に話して、結果このような人事が通った、少なくとも判断する上で
 の参考にされたと？」

視線に熱を込めながら語る入間。その視線に耐えられなくなった光秋は目を逸らし
 つつ、確認の声で問う。

「そこまでは断言できませんが……………先に話した人型兵器の件もありますし……………」

「……………確かに。総合的な判断の結果、ということなのでしょうが……………」

曖昧に応じる入間に一応の同意をすると、光秋は再び何を話していいかわからなくな
 る。

——『信じる』、と言われても……………僕は主任やあの子たちの気持ちに応えられるもの
 なんて、持ち合わせてませんよ？——

そんな不安を心中に眩いた直後、病室のドアがノックされる。

直後に返事を待たずにドアは開き、入ってきたチリ毛が目を引く人物を見て、光秋は意表を突かれる。

「古谷大尉？」

思わず目の前の人物——古谷合空軍大尉の名を声に出す。

「加藤二曹？どうしてここに……」

古谷の方も驚いた顔を浮かべるものの、数瞬してなにかを思い出した表情に変わる。

「ああ、そういえば本部に異動になったんだな。鈴子すずこから聞いた」

「スズコ？」

「あ、私のこと」

初めて聞く名前に首を傾げる光秋に、入間が自らを指さす。

「ああ……はい。今日は入間主任のお見舞いに……古谷大尉は？」

入間に頷きを返して理解を表しつつ、自分の目的を述べた光秋は、そのまま古谷に訊き返す。

「俺もだ」

短く応じると、古谷はベッドに歩み寄る。

「！どうぞ」

「ありがとう」

慌てて席を譲った光秋に礼を言うと、古谷は入れ替わりに丸椅子に腰を下ろす。

—古谷大尉と入間主任かあ……—

2人の顔をそれぞれ見やると、光秋はサン教ベース制圧の後、法子と建屋を移動している途中に2人らしき人影を目撃したことを思い出す。

「……あの、お二人は知り合いなのですか？」

「付き合ってる」

思わず口を突いて出た光秋の問いに、古谷はすぐに答える。

—あ、やっぱり—

「えっ!？」

2人の人影を目撃して以降、漠然とそんな予感を抱いていた光秋はすぐに合点し、一方で柿崎は困惑を浮かべる。

「主任、今までそんなこと一度も……」

「あら?言ってなかったかしら?」

「今知りました……」

「……ごめん。言った気になってたかも」

哑然と返す柿崎に、入間は自分の小さな失敗が可笑しかったのか、微笑みを浮かべて

詫びる。

その様子を見て、光秋はもう一つあることを思い出す。

「ときに古谷大尉、今の話、タツカー中尉に——隊の方々にはされましたか？」

「隊の奴等？……ああ、言われてみればしてないな。話す機会もなかったし」

——なるほど……中尉に心当たりがないわけだ——

目撃した後の食事の席でタツカーが言っていたことを思い出し、その理由にまたも合点する。

「……それじゃあ、僕そろそろ。なんかお邪魔のようですし」

最後の方は冗談めかして言うや、光秋は踵を返してドアへ向かう。

「あ、私も——」

柿崎も慌てて続けと、2人は一礼して退出し、医療棟の玄関へ向かう。

「柿崎さんは別にいてもよかったのに」

「いえ、主任に好きな人がいるってわかって、その人が同じ部屋にいて……とにかくなんか混乱しちゃって……」

「ま、確かに居辛い雰囲気だよなあ……」

柿崎に共感しつつ、加えて入間との会話も途絶えていたことを思い出した光秋は、独特の雰囲気から脱した解放感に肩の力を抜く。

と、左隣を歩く柿崎が、若干の迷いを含んだ視線を向けてくる。

「……その……加藤さんは、好きな人とかいないんですか？」

「……………」

あくまでも子供の好奇心と理解しつつも、その方面に関する自身の事情を思い返した光秋は、束の間言葉に詰まる。

「……………いるよ」

嘘をつく気にもなれず、かといって詳細を語る気も起らず、要点だけを短く告げる。

——細かく語るわけには……いかなきゃなあ。綾の件は今でも機密扱いつてのもあるが、それ以上に……特殊な事情こそあれど、僕がしてることつて要するに『二股』だもんなあ……とても小学生には語れないわ……—

伊部姉妹との関係をそのように振り返ると、光秋は苦いものを噛む様に顔を歪める。

「そうですね……………」

消え入る様な声でそう応じると、柿崎は顔を俯ける。

「……………」

「……………」

そうしてしばらく沈黙が続くと、おもむろに顔を上げた柿崎が、今度はどこか不安そうな顔を向けてくる。

「その……入間主任が話してたことですけど……私たちのこと……」

「ん？……ああ、君たちの評価か？僕も短い付き合いだから断言はできないけど、的を射った評価だったと思うが」

「そう……ですか……」

聞いた時に抱いた感想を告げる光秋に、柿崎は視線を下げながら応じる。

「あ、ただ、柿崎さんに関してはおちよつと違うかな？柿崎さん、ちゃんと他人の話聞くし」

「……………」

そう付け加える光秋に、柿崎はどこか申し訳なさそうな顔を浮かべる。

「……入間主任、言ってましたよね？私たちが加藤さんのこと褒めてたって」

「ああ。言ったな」

「あれ、一番いろいろ言ったの私なんです。『加藤さんが助けてくれた』、『ペキパキ指示を出す加藤さんが凄かった』って……」

「……」

言葉を重ねることに表情が陰っていく柿崎に、しかし光秋は敢えて無言を通し、先を促す。

「……だって、弾を取り出す時はなにもできなかったから……そりゃ、加藤さんにそう言われたのもあるし、結局それでよかったんだけど………桜や菊が主任助けるのに一生

懸命になつてゐるのを、私はただ見てることしかできなかったから……だから、協力してくれた加藤さんのことを少しでも教えてあげようと思つて、たくさん話して……でも、それが加藤さんを困らせることになつたのなら……私………！」

先程の光秋の包み隠さない応答を思い出したのだろう。メガネのレンズ越しに柿崎の目が潤んでくる。

それを見るや光秋は足を止め、柿崎の正面に回り込むと、膝を折つて目線の高さを合わせる。

「あのな、君一人の行動でどうなるつて程、世の中単純じゃないんだよ」

柿崎の肩に左手を置き、その目を真つ直ぐに見据えながら告げる。

「……」

それで半べそをかいていた柿崎が泣き止むと、さらに続ける。

「確かに、いろいろ困ることや面白くないことはあるよ。そりや仕事だもの、当然だ。ただ、それは柿崎さんが何かしたからじゃなく、僕らの要領とか、柏崎さんたちの気持ちとか、上の人たちの考えとか、いろんなもんが絡まつてそうなるだけだよ。そもそもESOに——組織に入るつて決めた時点で、意に沿わないこともやることになるつて、覚悟………て程じゃないかもしれないけど、心構えみたいなのはしてたんだよ。今の状況も、結局その内つてことだ」

そこで一旦言葉を区切ると、柿崎の様子を窺う。目の周りこそ濡れているものの、その目はしっかりと光秋を捉えている。

「そもそも、こっちはもうやってやろうって決めてるんだ。今更泣かれる方が迷惑だ……だから、シャキツとしてなさい」

「……………」

言いながら肩に置いていた左手を柿崎の頭に持つていき、掌で包む様に撫でると、柿崎は顔を赤くする。

「わ、わかりました！わかりましたから！シャキツとしますからそれやめてください！恥ずかしい……………」

「……………よろしい」

慌てたり恥じらったりする柿崎の様子が可愛らしく、また可笑しくもあつたために多少の名残惜しさを覚えながらも、完全に泣き止んだのを確認した光秋は手を離す。

「……………そうだよな。もう決めたんだ。組織の一員としての義務もある。期待されるなら、それに応えたいって欲求もある。できる・できないは、やりながら見極めていけばいい。その為の研修なんだし……………なんだ。結局それだけのことじゃないか――

柿崎に言ったことを振り返り、改めて咀嚼することで、乱れがちだった気持ちが急速に整理されていく。

——他人に言つて聞かせなければわからないこともある、か……—「ありがとな、柿崎さん。入間主任のお見舞い、来てよかったよ」

「え？あつ……どういたしまして……？」

自然と口を突いて出た礼。その唐突な言葉に戸惑いつつも、柿崎は小さく返礼する。それを見届けて立ち上がると、光秋は腕時計を確認する。

「さて……もうすぐ11時つて頃合いだが……なにか食べに行くか？」

「え？……でも私、そんなお金……」

「心配なくていいよ。僕が持つ。というか、持たせてくれ」

「いや、でも、お茶のお礼ならこの間……」

「お礼なら、今新しくできたよ。そもそもこの間も言つたが、子供がそういうことに気にするんじゃない……あ、でも、もしかしてこの後用事あるか？」

「いえ、そういうわけじゃ……」

「なら付き合つてよ。いい店教えてくれ。そこでいいもの食べよう」

「……………わかりました」

少し強めに迫る光秋に根負けすると、柿崎は首肯で応じ、2人は歩みを再開する。が、すぐに柿崎が思い出した様な顔をする。

「あ、でも……私もこの辺のお店よく知りません」

「そうなのか？」

「外で食えることがあんまりなくて……」

「ああ……それなら、歩いて探すか。気に入った店があつたら教えてくれ」

「……わかりました」

そうして柿崎が了承すると、2人は町内散策へ向かう。

80 “次の人”

1月24日月曜日午後0時。

午前中の研修を終えた光秋は、いつものように重く感じる頭を抱えて食堂へ向かい、注文が載ったトレーを受け取って空いている席を探す。

と、傍らに同じくトレーを持った曾我が現れる。

「あらワンちゃん。今からお昼？」

「はい。曾我さんもですか……ただ、席が……」

応じつつ、光秋は混み合う室内を見回し、空席を見付けられずに途方に暮れる。

「あそこ空いてるじゃない。行きましょう」

「……あ、ホントだ。ありがとうございます」

曾我がの視線を追ってようやく空席を見付けると、光秋は礼を言いながらその後についていく。

テーブルを挟んで向かい合って座ると、それぞれ自分の昼食に箸をつける。

「そういえば、休憩時間中に藤岡主任から聞いたんだけど」

「？……」

焼き鮭定食を摘まみながら声を掛けてくる曾我に、光秋はフォークに巻き付けたカルボナーラを口に運びながら視線を向ける。

「休みが明けてからのワンちゃん、研修に対する身の入り様が変わったって……週末なんかつたの？」

「いや特に心当たりは……そもそも身の入り様が変わったって、研修が開始した時から真面目に受けてるつもりですよ……劣等生な自覚はあるけど……」

最後の方は小声で言いながらも、心外な気持ちを抱いた光秋は少し眉を寄せる。

「いや、主任もそれは言ってたんだけど、なんていうか……『熱意』、みたいなものを感じるようになったって……」

「『熱意』？」

「主任もなんて表現していいかわかんない様子だったけど、とにかくそんなこと言ってた」

「……『熱意』、かあ……ああ……」

その言葉に、光秋は昨日、入間主任の見舞いに訪れた時のことを思い出す。

「あそこでいろいろあったからな。入間主任の想いとか、気持ちの整理とか、腹の括り直しとか……ただ、一番大きいのは……」「“味方”ができたから、ですかね」

言いながら、柿崎の顔が浮かぶ。

『味方』って？」

「味方というか……自分に好意的な人、気に掛けてくれる人とも言えばいいのかな。そういう人が一人いてくれるなら、こつちもそれなりに頑張らなくちやなつて、そんなところです」――それが近い未来の部下なら、なおのこと……――

口の中でそう付け加えると、光秋は水を一口飲む。

「あ、でも、そう考えると曾我さんも『味方』の内ですかね？ なんだかんだで気に掛けてくれるし」

「別にい……前にも言ったけど、アタシがあなたに対してイバれるのは今の内だし、出世するのがわかつてるなら恩を売つとくつて手もね……」

「そういう言い方、こちらも気が楽です」

「生意氣っ」

「どうも……」

口を尖らせる曾我に短く応じると、光秋は麺をまたひと巻き口に運ぶ。

昼食を終えた光秋は曾我と別れ、一路研修室へ向かう。

途中、催したので近くのトイレに立ち寄り、ドアを開けると、

「……………富野大佐……!?!」

「おお、加藤二曹。面白い所で会うな」

たった今小さい方を済ませた様子の富野大佐に遭遇し、思わぬ事態に束の間固まる。

「……………お、お久しぶりです!」

ややあつて立ち直るや踵を揃えた直立不動の姿勢をとり、若干震えた声で挨拶する。

「そうだな。10月の合同演習以来か?本部付きの特エス主任に転属したと聞いたが、本当だったんだな」

「……………まだ、研修中ですが……………」

洗った手をハンカチで拭きながら感心した様に告げる富野に、光秋は未だ微震が収まらない声で付け加える。

「そうか……………君が主任なあ……………」

「……………」

どこか遠くを見る様な目でそう呟く富野に、光秋は首を傾げつつも、次の発言に備えてつい身構えてしまう。

—やっぱり、二曹が大佐に接するのは緊張するとか、富野大佐が緊張するというか……………いや、マオ司令よりはマシか……………?—

つい抱いてしまう緊張を無意識にほぐそうとしているのか、我ながらついしようもな

いことが浮かんてくる。

その時、

「何をしている？ 済ませに来たんだろう。というか、入り口の前に立っていると邪魔になるぞ」

「あ、はい。すみません……」

富野の指摘に光秋は慌てて奥へ進み、青服姿の背中がドアに消えるのを見ると、どつと脱力感が襲ってくる。

「はあー……何で富野大佐の前だと緊張するかな？ そもそも、何で大佐がESO本部に……」

いくつかの疑問を小声で呟きながら、思い出した様に用を足し、手を洗って退出する。
と、

「そういえば、幼少の特エスを預かるそうだな」

「!?……大佐、まだいらしたんですか……」

ドアのすぐ横に控えていた富野に声を掛けられ、すでにいないと思っていた光秋は跳び上がらんばかりの勢いで驚く。

「ああ。これから会議なんだな」

「会議？」

「例の新興の武装勢力……Zeuss Childrenとかいったか。その対策会議というかな。陸軍とESO、警察の連携に関する打ち合わせとえばわかりやすいか？」

「はあ……なるほど……」——敵が増えたから他機関との連携を密にする、その打ち合わせ、か……—

富野の説明を自分なりに咀嚼する一方、光秋はその表情に違和感を覚える。

——大佐の顔、何だろう？ 懐かしいような、憤つてるような……物部さんの話が出た時の藤原三佐と同じような……あ、そつか。大佐は物部さんと顔見知りなんだっけ……やっぱり、いなくなった知り合いがこんなことになって、大佐も悩んでるのかな？

藤原から物部のことをひと通り聴いた時のことを思い出して表情の理由を察し、その心境を想像していると、富野が怪訝な顔を向けてくる。

「何だ？ 会った時はお化けでも見た様に驚いたかと思えば、今度はまじまじと見つめて。挙動不審だぞ？」

「！失礼しました！」

指摘にすぐに頭を下げる光秋に、富野は今度は考える顔を向けると、左手首の腕時計を見る。

「12時半……昼休みは1時までだったな？」

「あ、はい……？」

「なら、少し付き合え」

「え？」

唐突に告げるや富野は歩き出し、話についていけない光秋はしばし呆然とする。

「何をしている。早く来い」

「あ、はいっ！」

急かされて我に返るや、慌ててその背中を追う。

——『付き合え』って……大佐、何をなさるんです？——

不安で一杯な胸中に小さく漏らしながらも、足は富野の後を追い続ける。

廊下を歩くこと少し。近くの自動販売機の前で立ち止まった富野は、上着のポケットから財布を取り出す。

「何にする？好きなのを頼んでいいぞ」

「え？いや、そんな……」

突然の申し出に、光秋は両手を前に出して遠慮の意思を示すが、

「気にするな。たかが自販機の飲み物だ。そもそも連れ出したのは私だからな。お茶代くらい出させてくれ」

「はあ……では、緑茶を……」

「これか」

結局は富野の申し出に膝を折ると、買ってもらった缶入りの温かい緑茶を受け取る。

富野も缶コーヒーをかうと傍らのベンチに腰を下ろし、視線の促しに従って光秋もその右隣に座る。

缶のフタを開けてコーヒーを一口飲むと、富野は遠くを見る様な目で話し始める。

「藤原さんから聞いていると思うが、私もESOの特エス出身だった」

「はい。先日三佐から……いや、その前に純さん——横尾中尉の弟さんに教えてもらいました。10月の演習の時に」

「純から?……そうか」

光秋の返しに、富野は意外そうな顔を浮かべる。

一方、光秋は話し始めて間もないにも関わらず、富野の話し方に違和感を覚える。

「なんか、これまで会った時と雰囲気が違うような……親しげ?力を抜いてる?でも完全じゃないような……?——」

そうして違和感の正体を考察する間にも、富野は続ける。

「当時はレベル8のサイコキノでな。多くの幼少の超能力者がそうであるように、図に乗って無茶ばかりして、横尾主任には大変迷惑をかけた」

「はー……？ 『当時は』？」

冷静で思慮深そうな今とはまるで違う幼少期像が浮かばず悩んでいると、不意にその一言が思い出される。

「ああ。『当時』——12歳くらいまでの話だ。NPが起こしたテロの鎮圧に向かった時、主任の指示もろくに聴かず、まんまと不意打ちを喰らってな」

言いながら、富野は前髪を上げ、隠れていた額を露わにする。

そうして現れたのは、額の右側を左上から右下に向かつて斜めに走る切り傷の痕だ。

「……それは」

すでに完全に塞がっているものの、そこだけくつきりと浮かんだ一本線に、光秋はそれ以上なんと言っていないかわからなくなる。

「その時の傷だ」

案の定の答えを告げながら前髪を下ろすと、富野は苦い顔を浮かべる。

「この負傷が原因、かどうかは定かでないが、以来8だったレベルが6まで下がった挙句、汎用性の高かった念力が変質したのか、発火能力限定になってしまった」

「レベルの増減は聞いたことがあります。危機的状况——所謂『死にかけて』レベルが上

がったとか、頭部周辺を負傷して低下したとか。でも、能力の変質って……そんなことが？」

研修で習ったことを記憶から引つ張り出しながら、光秋はたった今抱いた疑問を訊いてみる。

「あるんだろう。実際ここに1人いるしな。超能力はまだ不明なことが多い。その僅かに解っていることの1つが、中枢が脳にあるということだ。君が言ったように、その周辺を負傷すれば、何が起きてもおかしくないかもしれない。もつともそれ以前に、私の場合は頭を負傷してなお、こうして達者でいられる現状を感謝すべきなんだろうな」

「それは、まあ……」

苦笑を浮かべながらもつともなことを告げる富野に賛同しつつ、光秋は模糊とした返事を告げる。

——……結局、大佐はどういう目的で僕を誘ったんだ？お茶を奢ってくれたのは嬉しいし、思わず昔話を聞けたのもなかなか面白かったが……——「ところで、大佐。失礼ながら、先程から全く話が見えてこないのですが……まさかご自身の昔話をするために僕を誘ったのですか？」

「ああ、すまん。今のは余計だったな」

焦れながらも恐る恐る問う光秋に、富野は苦笑を消しながら応じる。

「君が、そんな昔の私と似た様な特エスたちの主任になると思うと、感慨深くてな。旧入間隊のメンバーがそんな感じだと聞いていたし」

「……大佐の幼少期の様子が今一つ浮かんてこないのですが……まあ……」

光秋が曖昧に応じると、富野は心なしか表情を引き締める。

「だからこそこというのか、私が特エス時代にお世話になった横尾主任が少し面白いことを考えていてな。それを伝えておきたかったんだ」

『面白いこと』、ですか……」

その一言に、光秋は小さく興味を抱く自分を自覚する。

「“次の人”、という言葉葉を聞いたことは？」

「……………いいえ」

唐突に訊いてくる富野に、光秋は記憶、特にこちら側に来て以来の日々を振り返りながら首を横に振る。

——日常会話で使うような意味合いではないよな。思想史には時に独特な言い回しが出てくるが、その類か……………？——

自分なりに推測を巡らせる間にも、富野は真面目な中にも懐かしさを浮かべながら語る。

「そうだろうな。横尾主任が独自に考え、結局は発表どころか、満足にまとめることも叶

わずに残されていったアイデア、その根幹を成す造語だからな」

「横尾主任は思想家かなにかだったんですか？」

「いや。本人によるとあくまでも趣味の範囲内だったそうだが……整理戦争が始まる前後くらいにはすでに構想されていたそうだ。方法はどうであれ、一つにまとまっていくな人類——今の地球合衆国に生きる人の在り方を提示しようとしていたらしい」

「……………新しい人の在り方」、ですか」

富野の言葉をそのように理解した瞬間、光秋の心臓が1回強く脈動し、その後の鼓動自体少し速くなる。

「そのように解釈してもらっていいだろう……もつとも、さつきも言ったように構想の途中で主任が亡くなられて、残された資料も断片的なメモくらいだったから、具体的にどんな在り方を示そうとしていたのか、結局わからず仕舞いなのだがな……」

「超能力者とはまた違うんですか？その『次の人』っていうのは？」

途方に暮れる富野に、光秋は高揚しつつある気持ちを抑えながら不意に浮かんだことを訊いてみる。

「違う。それだけははっきり言える。そもそも主任は、超能力者とかノーマルとか、そういう括りを打開するようなアイデアを求めていたらしい」

「……『括りの打開』、ですか」

「私が辛うじて聞いていることは、曰く『自分の価値基準で物事を判断しないこと』」
『『自分の価値基準』?』

「『偏見』とか『先入観』とも言っていた気がするな。曰く、『洞察力に秀でていること』」
曰く、『争わないこと』……これくらいだ」

「……………自分の判断基準でものを測らず、高い洞察力によつて本質を見極められる人……?」

富野自身断片的な情報を整理する様に語る中、それを聞いた光秋は自分なりにまとめたことを呟いてみる。

そうして不完全ながらも明文化された認識が、不意に既視感の様な感覚を覚えさせる。

—何だろう?似た様なことを何処かで聞いたような。そんな昔じゃないよな……去年くらい?……何処だっけ……?—

首まで出掛かった答えは、しかしそれ以上先に進むことなく喉の中で霧散し、瞼の裏に夏の陽光がチラつくことに終始する。

と、

「やはり、食い付いたな」

「!」

予想的中と言わんばかりの笑みを浮かべる富野の声に、光秋は現実引き戻される。

「何度か会う内、君はこの手の話が好きな口の気がしてな。話してみても正解だった」

「それは……ありがとうございます」

実際興味津々に聞き入っていた自分を振り返り、前置き通り面白かったこともあって、光秋は深めに頭を下げる。

「いやいや。こちらこそ興味を持ってくれたようだなによりだ。何なら、今度主任が遺したノートをくれてやろう。いろいろと理解が深まるかもしれない」

「！それは……」

今一番興味のあること、その情報の塊といつても過言ではないものを提供してくれるという申し出に、光秋は思わず腰が浮きそうになる。

が、一方で疑問も覚える。

「大変嬉しいのですが……そんな大切なものを僕などに渡していいのですか？そもそも、何故大佐は僕にそこまでしてくれるのですか？」

「なに、私が持っていてても宝の持ち腐れになる、それなら活かせそうな奴に渡した方がいいと、それだけのことだ」

なんてことのない様子で言いながら、缶コーヒーを飲み終わると、富野はベンチを立って傍らのゴミ箱に空き缶を捨てる。

「さて、そろそろ切り上げるとするか。付き合ってもらってありがとうな」

言うや富野は踵を返し、脇目も振らずに歩き出す。

「……こちらこそ、ありがとうございました」

慌てて立ち上がるやその背中に深く頭を下げると、光秋は右手にすっかり温ぬるくなったお茶が握られているのに気付く。

「あ、飲むの忘れてた……缶だし、後で飲めばいつか……にしても、“次の人”、かあ……」

言いながら、富野との会話を改めて振り返る。

「先入観に囚われず、高い洞察力で以って物事の本質を見極められる人、地球合衆国の時代を迎えた人類の、“新しい人の在り方”……つくづく興味深いな！……さて、僕も」

弾んだ声で眩くと、光秋も研修室へ向かう。その足取りは、富野との会話の前に比べて、心なしか軽かった。

8 1 お姫様との再会

1月27日木曜日午後9時。

寮の自室、その浴室で汗を流してしばらく経った光秋は、今日一日分の疲れを抱えた体を椅子に預け、先日京都で購入した本を読んでいた。

「ふうー……東京に来てから、かれこれ10日かあ……………」

切りのいい所で本を閉じると、壁に掛けたカレンダー、その斜線で消された日付の数を眺めながら感慨を抱く。

一方、

「といっても、肝心の研修は相変わらずというか、劣等生一步手前って感触から抜け出せないよなあ……………」

目の前に依然として横たわる大きな課題に、思わず嘆息が漏れる。

「こつちに来て10日……それはつまり、法子さんや綾と会ってなくて10日ってことでもあるんだよなあ……………」

それに続く形で思い出した様に浮かんできた認識に、思わず目頭が熱くなる。

『ホームシック』ならぬ、『法子^{ホーコ}シック』ってか？……………なんて言っていると、綾が怒りそう

だが」

我ながらしようもないと思えることを考えて気を紛らわそうとするものの、一度胸中に湧いた寂しさはなかなか消えない。

その時、机の上に置いていた携帯電話が振動する。

「電話か……う……!!? 法子さん……う?」

見計らったかのようなタイミングに目を丸くしたのも束の間、すぐに通話ボタンを押して電話を左耳に当てる。

「もしもし!?!」

（こんばんは光秋くん! 今大丈夫?）

少し動揺を含んだ光秋の声に、法子も方も心なしか弾んだ声を返してくる。

「大丈夫ですよ。ちょうど暇してたんで」

（よかった……10日ぶりだね。元氣?）

「綾か……まあ、ぼちぼちかな? 研修は思った通り大変だけど、なんとか……ギリギリついていける……かな?」

変わって沈んだ声で訊いてくる綾に、光秋は自分でも煮え切らないと思える返答を返す。

「そつちこそどうだ? 僕がいなくて泣いたりしてないか?」

(していないよー！そこまで子供じゃないしっ)

さつきまでの寂しさを吹き飛ばすつもりで茶化す様に言う光秋に、綾の電話越しにも膨れた顔が浮かんでくる声が返ってくる。

「そっか……そりや結構」

その声音は、何よりも光秋を安心させる。

(アキの方こそ、大丈夫?)

「大丈夫って?」

(ここ最近、いろいろ感じてからさ。さつき訊いた時も返事いまいちだったし……)

「……………」

おそらくはテレパシーによる感知なのだろう。心配の声で訊いてくる綾に凶星を突かれた気がして、光秋は何も言えなくなる。

(言っとくけど、勝手に心読んだわけじゃなくて、いつもみたいになんとかなく感じたっていうか……)

「いや、わかってる。それは大丈夫」

慌てて補足説明する綾に、光秋はこうしたことにすっかり慣れた心境で応じる。

「こっちの生活にしたってさ、さつきも言ったように研修は大変だし、知らない土地での再スタートだから当分はいろいろごたつくだろうし、それを引いても組織——人と人の

中にいるんだから、そりやいろいろあるさね。それは必然だから」

半分は自分に言い聞かせるつもりで述べると、光秋は柿崎のことを思い出す。

「それにさ、悪いことばかりでもなかったんだよ。『味方』っていえる人もできたし」

（あ、そのことなんだけど……）

少し盛り返した語調で告げるや、若干低くなった綾の声が返ってくる。

「……え？この声は……」

心中に動揺の声を漏らしながら、光秋は電話の向こうに古井戸の様な目をした綾を視る。

（まーた女の人にデレデレしてたでしょ！）

「してないってのー！」

案の定の言葉に即否定の声を上げると、一度深呼吸して気持ちを落ち着ける。

「そりやあ、ちよつといい顔はした気がするよ。でも別に、変な意味じゃないさね。右も

左もわからない中、気に掛けてくれたのがありがたかったからさ……」

（……そういうことなら……）

その説明に納得してくれたのか、綾の声から怒気が抜けていく。

——しかし、こうして声に出してみて思うが……小学生に気に掛けてもらうとは、僕もかなり情けないような……いや、そういう気持ちは主任になった後、行動で挽回し

ていけばいい。それより……」

先程までとは違う理由で再び盛り下がりがりそうになった気分をどうにか持ち直すと、先日の富野との会話を思い出した光秋は、今まで以上に弾んだ声で語る。

「そういえばこの間、富野大佐がこっちに来てさ」

（トミノ……う……え？大佐が？）

首を傾げる綾に代わって、法子が意外そうに応じる。

（またどうして？）

「ZC対策の会議だつて言つてました。トイレ行つたらばつたり会つたんですけど、その後少し話しまして……“次の人”って聞いたことありますか？」

（「次の人」？……なにそれ？）

法子・綾共に予想通りの返答が返ってくると、光秋はさらに気分を向上させる。

「もともとは横尾主任——横尾中尉のお父さんが考えていたことらしいんですが……」

それから富野との会話で得た概要を嬉々として語ると、法子の納得した声が返ってくる。

（なるほどね。光秋くんが好きそうな話だ）

「どうも……法子さんは、横尾中尉からそんな話聞きませんでしたか？」

（全然。純君からみただけ。2人も私も、あんまりそういうこと話さないしね）
「そっか………そういえば、そっちの気候どうです？ 寒くないですか？」

法子の返答と、自分だけ一方的に話し過ぎていたかもしれないという反省から、光秋は話題を変え、その後はとりとめのない会話が続く。

京都は雪がちらつく、雪の積もった道は滑るから大変だ。研修室は暖房が効いていてありがたいが、ときどき暑く感じる、休憩時間に飲むお茶が気持ちいい。

そんな傍から見ればなんというこのない話題の積み重ねに、光秋は10日ぶりの充実感を覚えていく。

時間を忘れて話しを続ける中、ふと机の上の時計を見ると、間もなく11時を指そうとしている。

——いけね。もうこんな時間か……—「すみません。もう遅いから今日はこの辺で」
（え？ もうそんな……ああ……）

電話の向こうでも時刻を確認したらしい法子の声が漏れる。

（だね。また今度）

「はい………今日はわざわざ掛けてきてくれてありがとうございます」

（いいんだよ、私たちが話したかっただけだし）

「それでも、僕にとっては凄くありがたいですよ」

(……あたしも、アキとおしゃべりできて楽しかった)

「僕もだ……それじゃあ、また今度。おやすみなさい」

(うん。おやすみ……おやすみなさい)

三者共に寂しさを含んだ声を交わすと、光秋は電話を切って充電器に繋ぐ。

「……………それでも、久しぶりにたくさん話せてよかったんだ」

気を抜けば再び広がっていきそうな寂しさをその言葉で押し込め、それ以上の楽しさ・充実感を思い起こしながら、光秋は床に就く。

と、先程の会話の影響だろうか、暗い中布団を被って仰向けに寝ていると、不意に綾との精神感應の思い出が浮かんでくる。

—そういえば、あんな超常的な感知能力……コミュニケーション手段とでもいうのか?……あれを使っても、結局認識の齟齬は残ったよな。今ではかなり曖昧になったけど、体験していた時も、「綾になっていた」というより、「綾の視点であいつの今までを見ていた」だけだった気がする。カメラの位置を変えた様に、綾の見聞きしたもの、感じたことは解つても、その根底には僕の——「加藤光秋の価値基準」があつたような。綾の方も似たり寄つたりじゃなかったか?……………確かにこの部分があれば、どんなにセンサーが優れていても、本質を見極めるっていうのは難しいかもなあ……………—

そうして一度回り出した思考は止まらず、結局完全に寝付いたのは日付が変わってか

らだった。

1月28日金曜日。

昨夜の夜更かしが祟った所為か、その日の光秋は朝から瞼が重かった。

それでも通勤のために足を動かしたり、外の冷気に晒されたりでどうにか覚醒状態を保ち、物は試しと缶コーヒ―を飲んできちんと目を覚まそうとするものの、研修の専門用語の羅列は容赦なく意識を眠りへと誘^{いざな}っていく。

——……………！いかん！とにかく手を動かして……………！

しかし光秋も黙って誘われるわけにもいかず、意識が飛びそうになる度にハツとしては意識してノートにペンを走らせ、睡魔への抵抗を試みつつ覚えるべきことを覚えていくとする。

そうして午前の部の前半はどうにか乗り切ったものの、10時の休憩を挟んで始まった後半、それも半分を過ぎた11時頃。

「……………」

ついに睡魔に屈した光秋は、上半身を真っ直ぐに保ちながらもこくこくと舟を漕ぎ出す。

思考能力が低下し、心地いい浮遊感に包まれる中、

「……………!!？」

唐突に頭頂に走った激痛に一気に意識を再浮上させると、目の前に右手を手刀にした藤岡主任が、鋭い視線を向けてくるのを見る。

「マンツーマンで居眠りとは、いい度胸だな、加藤二曹。誰の為の研修だと思っている？」

「……………僕の為です……………」

低い声で訊いてくる藤岡に、光秋は恐怖と恥ずかしさに小さくなりながら答える。

「わかつているなら質問に答えろ。念壁を張った敵に対する対処法は？」

「え、え……………」

手刀を引つ込めながら出された藤岡の問いに、光秋は朦朧とした意識で聞いた研修の記憶から答えを探そうとする。もともと、大部分が虫食い状態となっているため、回答の構築は困難を極めた。

「……………高火力、例えば機銃の集中砲火によつて念壁を飽和させ、そのまま本体を攻撃する……………」

「間違つてはいない。が、それはスマートな方法ではないと教えたぞ」

言いながら、藤岡はホワイトボードの記述を指さす。

「念壁は張り方によつて強度に差が出る。より狭い範囲に集中して張れば、それだけ頑強なものとなる分、範囲以外からの攻撃を受けることになる。一方広範囲、それこそ自分の周囲を囲む様に張れば全方位からの攻撃を防げる反面、一力所ごとの防御力は低下し、極一点に集中して力を加えられれば突破されてしまう。また展開時間が長引けばそれだけサイコキノの消耗も激しくなり、均等に張ったつもりの念壁にもムラができてしまう。意識が向いていない方向からの攻撃、つまり不意打ちに弱くなるというわけだ」

「……………」

重ね重ねの失敗を恥じらいながら、光秋はホワイトボードの記述と、藤岡の口頭説明を自分なりにノートにまとめていく。

それを見やりながら、藤岡は肝心な部分に話を進める。

「そうなつてくると、二曹が言つた様な集中攻撃も確かに効果はあるが、攻撃側の消耗が激しい上に時間も掛かりやすい。大口径火器による一点突破は低消耗・短時間で決着できる一方、サイコキノにも攻撃を予見されて防がれてしまうこともある。そうになると……………」

「……………一番効果的なのは、不意打ち?」

不自然に言葉を切つた藤岡に、光秋は先程の解説から予測したことを言つてみる。

それに対し、藤岡は一回深く頷く。

「そういうことだ。ただし、これにしたって相手の注意を引き付ける囹役はいるし、攻撃側は相手に気取られないよう慎重に、かつ迅速に行動しなければならない。要は連携ができていなければならないということだ」

「……なるほど」

「また、我々特エスを運用する側の人間としては、こうした攻撃に晒されないように目を光らせる必要がある」

「攻撃される……ああ、NPとか」

「それが一番大きいな。あとは直接攻撃には向かないが、攻撃を補助する能力に長けた超能力者とかな」

「なるほど……」

藤岡との問答を重ねながら、光秋はそれらもノートに書き加えていく。

一方、頭頂の痛みはなかなか引かず、それが研修中に居眠りしていたという事実を否応なしに思い知らされる。

— やってしまった……… —

午後0時。

「はあー……………」

午前中の研修を終えた光秋は、1階へ下りていくエレベーターの中で先程の居眠りを思い出し、独り嘆息を漏らす。

—やっぱり、昨日の夜更かしがいけなかったか……？まさか寝てしまうとは……—
藤岡への申し訳なさや失敗に対する羞恥から顔を俯けていると、扉が開き、とぼとぼした足取りで1階に降りる。

正面玄関に近いエレベーター乗り場の周囲はそこそこの往來があり、

—ま、過ぎたことを悔やんでも仕方なし。今後は就寝時間に注意しよ—
そう反省しながらその人波に乗って食堂へ向かおうとする。

その時、

「すみません！」

「？」

周囲の複数の話声を押しやる様によく通る声が背後から響き、思わず足を止めた光秋は、振り返った先に自分の許へ真っ直ぐに向かつてくる人影を見る。距離が近付くにつれて、癖のある茶髪を背中を覆う程に伸ばし、黒縁メガネを掛けた白いコート姿の日系女性と判ってくる。

「やっぱり！光秋さんですね！」

「……あの、どちら様でしょうか……？」

自分の前で止まるや、少し息を上げながらも嬉々と言うメガネの女性に、見覚えのない光秋はど忘れの不安を覚えながら訊ねる。

「ああ、これじゃわかりませんよね……ちよつとこちらに」

周りを行き交う人々を一見するや、女性は光秋の手を引いて近くの曲がり角へ向かう。

「あ、あの……!？」

突然手を引かれたことに加え、——コートで正確な太さはわからないもの——女性の細い腕からは想像できない程の力を感じ、光秋の不安は小さな動揺に変わる。

その間にもエレベーターからある程度離れた人^{ひと}気のない所まで移動すると、手を離れた女性は光秋と向き合い、

「私です。私！」

と、メガネを上げて裸眼を見せながら告げる。

「……………えー……………」

それでも心当たりのない顔に光秋が困惑していると、女性は再度周囲を見回し、声の大きさに注意しながら言う。

「祝賀パーティーの時はお世話になりました。まさかこんな所でまたお会いできるなん

て！……………ご縁がありましたね！」

——『ご縁』？……………——「ああっ!!」

女性の説明と、何よりも最後に強調して言われた「ご縁」という言葉に、光秋は半月程前の新年祝賀パーティー——警護で会ったさる家系の女性——鷹ノ宮涼子のことを思い出し、驚愕の声を上げる。

「た、たか……………りよ、りよう……………!!」

動揺のあまりすっかり回らなくなった口に、涼子はそつと左手を当てて塞ぎ、右の人差し指を自分の口の前に持つてくる。

「……………」

その動作に静かにしてくれという意思を読み取ると、光秋は口の調子を整えることも兼ねて一度押し黙り、3回程深呼吸して動揺を鎮める。

そうして口も気持ちも落ち着くと、今一番の疑問を、声の大きさに注意しながら問う。

「……………本当に、涼子様なんですか？」

「はい。あ、ただ今は、『鷹野^{たかの} 涼^{すず}』と呼んでください。この格好の時の名前なんです」

「はあ……………で、何で変装なんて？」

「先日お会いした時にも触れましたが、いろいろとややこしい身の上なもので。外出の時は人目を気にしなければいけませんから……………」

「なるほど……」

最後の方はどこことなく自虐気味に話す涼子に、光秋はその複雑な立場を完全とはいえないまでも察し、一応の納得を覚える。

「それともう一つ、何で本部に？」

「気になる予知を感知したので、その報告に」

「予知？」

「私、レベル6の予知能力者ですから。小さい頃から、能力の検査やこういう報告で、本部にはよく訪れていて」

「そうなんですか……」――予知ってこんなふうに算出してるのか？――

涼子の説明に、光秋は傾げていた首を伸ばしつつ、新たに素朴な疑問を抱く。

と、今度は涼子の方が訊いてくる。

「私からも訊きたいのですが、光秋さんはいつからこちらに？定期的に通っていましたか、今日まで一度も見掛けたことがありませんか？」

「ああ、10日くらい前に、京都から異動になつて」

「京都から………もしかして、特エスの主任ですか？」

「何でわかつたんです!？」

自分の現状を的確に当てた涼子に、光秋は先程とは違う質の驚愕を覚えるものの、当

の涼子も若干の困惑を浮かべる。

「え？本当に……？いえ、パーティーでお会いした時はESOの制服を着ていらした光秋さんが、今はスーツを着ているので……ESOで私服勤務の仕事と聞いて真っ先に思いつくのが特エス主任だったので、試しに言ってみたのですが……」

「ああ……なるほどね……」

推測過程を説明されて納得する一方、光秋はふと思う。

——結果的には偶然の正解だったとはいえ、服装つてよく目に付くものを手掛かりに、その場で手に入れられない情報は事前に知り得たこと——「知識」とでもいうのか？——で補いつつ、状況を正確に把握しようと努めるか………こういうのを「洞察」っていうのかな？——

「……あの、光秋さん？」

「……ああ、すみません」

不安そうな涼子に声を掛けられて、光秋はようやく現実に戻ってくる。

「私の顔になにか付いてましたか？先程からじつと見られて……」

「あ、そんなに見てましたか？」

心なしか照れた様子で言う涼子に、光秋は無意識の内にしていたことを指摘されて少し恥ずかしくなる。

「すみません……ちよつと前に変わった話を聞きまして、その所為か、涼子様——」
「涼です」

「ああ……スズ……さん？……の仕草を見ていたら、ついいろいろ考えてしまつて……失礼いたしました」

鋭い訂正に若干困惑しながら応じつつ、光秋は頭を下げる。

と、後ろから声が掛かる。

「お嬢様！こんな所にいたんですね！」

「？」

やや焦りを含んだ声に振り返ると、光秋はこちらに速足で近付いてくる黒髪を後ろに1本に結った女性を見る。歳は20代後半くらいだろうか。黒のビジネススーツに茶色いコート^{こいずみ}を羽織り、すたすたと歩を進める様子が活動的な印象を与えてくる。

「古泉さん？なににか？」

「なにかじやありませんよ。ずっと車で待つてたのに一向に戻つてこないから、予知部の方に電話を入れたらまだ来てないと言われて、何かあったのかと慌てて探しに来たんですよ」

「えい！そんなに時間が……」

「古泉」と呼ばれた女性が若干怒りを込めながら告げると、涼子は慌てて左手首の腕時

計を確認し、途端に狼狽を浮かべる。

「えっ!? もうこんな!!……すみません光秋さん! 今回はこれで!!」

「あ、はい……?」

「さ、早く!!」

突然の事態についていけない光秋を差し置いて、古泉に急かされた涼子はエレベーター乗り場へ駆けて行く。

——……涼子様って「さる家系」——厳密にはその親戚筋なんだよなあ……あのコイズミって人、侍女ってやつか? もしくは護衛か……いやでも、だとしたら今まで涼子様一人だったのは何で……——

静かになったのを機にふと浮かんだ疑問を考えてみるものの、圧倒的情報不足の中で浮かんでくるものはなく、仕方なく思考を中断した光秋は、当初の目的通り食堂へ向かう。

——それにしても、まさかこんな形で涼様と再会するとは。変装には驚かされたが……でもよくよく考えると、立場のある人だからなあ。私生活とか何かと気を遣うんだろうし、必要なことなのかあ……?——

祝賀パーティー以来の予想外の形での再会、その時の動揺を思い出しながら、光秋はよく知らないなりに涼子のことを察してみる。

そうしながらも食堂に入り、注文を済ませてトレーを受け取ると、混み合っている中でどうにか見付けた席を素早く確保し、頼んだ塩ラーメンをずるずるとすすっていく。

食後、気分転換に本舎の中をふらついていた光秋は、不意に目に入った構内地図の前で足を止め、遊び感覚で現在位置を探してみる。

—今いるのは……ここか………あ—

さらにその周囲を見回すと、進む先に予知関連の部署があることに気付き、食前に交わした涼子との会話を思い出す。

—涼子様、あの後この辺りに行ったってことか………—

その時、

「!・光秋さん!」

「?」

驚きを含んだ声で名前を呼ばれ、声がした方を向いた光秋は、先程と同じ癖のある長い茶髪にメガネ姿の涼子と、その後ろに控える様について来る古泉を認める。

「涼子さ——スズさん? まだいらしたんですか」

「今終わったところです」

勝手に帰ったと思っていた光秋は意表を突かれながら言い、涼子は少し疲れた様子で応じる。

と、急に何かを思い付いた様に顔を上げ、迷った様に視線を泳がせたのも数瞬、涼子は光秋の目を見据えて告げる。

「その……この後お時間あるようでしたら、少しお話できませんか？」

「この後？」

言いながら、光秋は腕時計で時間を確認する。

「12時35分……1時から用があるので、それまででしたら」

「ありがとうございます！」

光秋の返事に涼子は笑みを浮かべると、後ろの古泉を見やる。

「大丈夫ですよ？古泉さん。今日はこの後用事はありませんし」

「ええ、確か……ところでお嬢様、この方は？」

「ああ、ESOの加藤光秋さんです。先日パーティーでお会いしました。光秋さん、こちら私の……掻い摘んで言うところ、マナージャーの、古泉奈々未さんです」

「古泉です……パーティーでお会いしたということは……もしかして、襲撃からお嬢様を守ってくれたんですか!？」

「えっ?」

途端に真剣な眼差しで訊いてくる古泉に、光秋は一瞬どう答えるべきか悩む。

—これはどうしたもんかな？正直に話すとニコイチ関連に話が及んで具合が悪いが……いや、別れ際、涼子様にはその辺りについて釘を刺した記憶がある。なら、それとなくはぐらかすくらいでも大丈夫か？—

多少の不安は残りながらもそう断じると、光秋は不自然に長く空いてしまった気がする間を埋める様に口を開く。

「……ええ、まあ……守ったというか、避難していたところを誘導したんですが。そうですよね？」

努めて自然体に語りつつ、同意を求める目を涼子に向ける。

「え？……ええっ！そんなんです。何処に行けばいいかわからなかったところを案内していただいて……」

——……大丈夫か!?——

一瞬ハツとして慌てて応じる涼子の様子に、光秋の中の不安は増大する。
が、

「……そうですか」

一瞬訝しむ様な顔をしたものの、古泉は特に追及することなく、姿勢を正して光秋を見据える。

「何であれ、お嬢様を助けていただいたこと、私からも感謝いたします。ありがとうございます」

「あ、いえ、僕も自分の仕事しただけですから……」

深々と頭を下げる古泉に戸惑いながら、光秋は思ったことを告げると、

「仕事をした、ですか……………」

——……何だ？どこか張り詰めているような……悔やんでるような……？僕変なこと言ったかな？——

何気なく言った自分の一言を顔に少し影を落としながら呟く古泉に、光秋はさつきとは違う不安を覚える。

もつともそれも束の間のこと、すぐに涼子が光秋の手を引いてくる。

「それはそうと、早く行きましょう！時間が勿体ないです」

「え？あの……………」

再び女性にしては強く感じる力で引かれることしばし、光秋は最寄りの自動販売機の近くに誘導される。先日富野大佐と話した場所だ。

「いいんですか？あの人……コイズミさんでしたっけ？置いてきちやつて」

「彼女は千里眼持ちですから。レベルが高いからEジャマーが効いていてもおぼろげに

感知できますし、すぐに駆け付けられる距離にいれば大丈夫です」

「ああ、あの遠くのことがかかる能力ね……とっ」

涼子の説明に抱いていた心配を払拭するや、光秋は自動販売機に小銭を入れようとしていた涼子を制する。

「ここは僕が持ちます」

「いいえ、そういうわけには。誘ったのは私ですから」

「女の人に奢らせたら格好がつきませんよ。僕の顔を立てると思ってここは」

食い下がる涼子に応じながら、光秋は自動販売機に小銭を入れる。

「何にします?」

「……では、レモンティーを」

「ホットで?」

「はい」

遠慮がちな涼子の注文を聞くと、光秋はレモンティーのボタンを押し、自分も熱い緑茶を購入して傍らのベンチに腰掛ける。

「……正直、さつき会った時は驚きました……その髪、染めたんですか?」

「ウィッグです……ほら」

率直な感想を述べながら疑問を投げ掛ける光秋に、左隣に座る涼子は茶髪を搔いて、

隠れていた首元に短くまとめた黒髪を見せる。

「ああ、こうなってるんだ。メガネは？」

「伊達です」

「やっぱり」

案の定な返答に、光秋は納得しながら短く返す。

「今度は私から訊きたいのですが……先程飲み物のお代を払っていただいたのは……その……私がそういう立場の人間で、気を遣ったからですか？」

「気を遣う……？」

言っているのか迷った様子で訊いてくる涼子に、質問の意図をいまいち把握し切れていない光秋は返事に困ってしまう。

涼子も涼子で、言ってしまったことを後悔する様に顔を俯け、両手で持て余しているレモンティーの缶に視線を逃がす。

「すみません……本当はこんなこと、訊くようなことじゃないし、普段ならそんなに気にならないんですけど……何故か今日は気になってしまつて……」

「……まあ、そりや多少は気を遣いますね。さる家系の親戚筋……僕みたいな庶民からすれば『お姫様』と言つてもいいような立場の人が一緒にいれば。それは確かだ……ただ、それを差し引いても、やっぱり男が女の人にお金を出してもらうってい

うのは格好がつかないというか……て、これじゃ聞きようによっちゃ性差別かな？」

言いながら、光秋は自分の返答に苦笑を漏らす。

「とにかく、半分以上は僕の個人的な美学ですから。あんまり気にしないでください」

「……………それなら、いいのですが」

そう付け加える光秋に、涼子は俯いていた顔を少し上げ、缶のフタを開けてレモンティーを一口飲む。

と、今度は顔を上げて、遠くを見る様な目で語り出す。

「赤裸々に言えば、小さい頃から不特定多数の人にいろいろな感情を向けられるのは慣れていました。生まれもそうだし、さつき説明したように高いレベルの予知能力がありましたから、昔からそれでESOに協力していて、それを強調する形でマスコミにも取り上げられ続けて……………だから、初対面の人に突然親しげに声を掛けられたり、逆に突然罵倒されて指を指されたり、そういうのには慣れっ子でした……………でも、初めて会った時の光秋さんは、そのいずれとも違うと感じました」

「初めて会った時？……………ああ、迎賓館の裏手ね」

聞かれているかどうかはあまり気にせず、胸の内にあるものをひたすら声に出そうとしていた様子の涼子に、光秋は確認しながら応じる。

「あの時、光秋さんは純粋に私のことを心配してくれたと、少なくとも私はそう感じまし

た。生まれや能力に関係なく……その、何と言つていいのか………
 “私”を見てくれたと感じました」

「そりやあ、まあ……あの日は寒かったですから……」——というか、あの後法子さんに教えられるまで、涼子様のことなんて全く知らなかったからな。単純に『薄着の人が立つてる』くらいしか考えてなかったような……—「あーでも、『けっこう美人だなあ』くらいは思つたかなあ……」

「……………美人、ですか？ 私が？」

「ええ」

その時のことを思い出して湧き上がってきた無知に対する恥じらい、それを誤魔化す様に呟いた光秋に、涼子は心なしか顔を赤くする。

「……………大丈夫ですか？ 顔赤いけど」

「え？……………ええ、大丈夫ですつ。レモンティーで温まつたかな！」

「それならいいですが……………まだまだ寒い日が続くだろうから、風邪には気を付けてくださいね。僕もだけど」

そんな涼子を多少心配しつつ、光秋は不意に東京に引越す前日、京都巡りから寮に戻るバスの中で伊部姉妹と交わした会話を思い出す。

—『変わったのは周りじゃなくて、僕の認識』……………考えてみれば、涼子様の素性を知

る前と後で、確かに僕の態度も変わってきたような。さつき正直に言ったように、多少は気を遣っているというか——どうしても『壁』を感じちやうよな。それは、『さる家系の親戚筋としての涼子様』を知ってしまった——先日の富野大佐との話で言うところの『偏見』・『先入観』を持ってしまったから、と言い換えることもできるか……—

そこまで考えると、光秋は改めて涼子に視線を向ける。未だ赤みを残す顔でレモンティーをすすする涼子は、その視線に気付くことはない。

—涼子様が『慣れっ子になったこと』っていうのも、結局はそういうことなのか？ 一人一人が断片的な、あるいは強調された情報から抱いた『鷹ノ宮涼子というイメージ』を、こうして実体を持った本人に投影している——偏った見方をしている。そして、僕もそれに陥りつつある……—

そうして導き出された理解に、光秋はひどくもの寂しい気持ちになる。

—初めて会った時のことを話す涼子様、どこか嬉しそうだった。それは、知らなかったとはいえ、僕が彼女に対して偏った見方をしなかったから……か？ 小さい頃から不特定多数の感情を向けられてきた涼子様にとっては、あんな些細な接し方でも嬉しかったってことか……—

胸の中で決意と言っては大袈裟な、しかし確かな判断を下すと、光秋は上着のポケットから携帯電話を取り出す。

「すまないがスズさん、連絡先教えてくれないか？」

「……え？あの……」

藪から棒な申し出と、何よりも急に砕けた口調になった光秋に、涼子は目を丸くする。「ああ、いろいろ考えてさ、少なくともその姿でいる時——2人だけの時は、これくらいの距離感がいいのかなって思って……びつくりしたかね？」

「……いきなりだったので、ちよつと」

「そりゃ失礼」

「いえ……私の方も、そうしていただけると助かります！あ、連絡先ですよね！」

説明する光秋に嬉々として応じると、涼子はコートのポケットから携帯電話を出し、それぞれ連絡先を交換し合う。

「あ、僕と同一歳……1カ月お姉さんか」

送られてきた情報を確認するついでに拝見した生年月日——「1991. 05. 05」という日付に、光秋は思い付いたことを言いつつ、画面端の時計を確認する。

「あつと、そろそろ戻らないと」

「もうそんな？……わざわざ付き合っていただき、ありがとうございます」

言いながら腰を上げる光秋に、涼子は少し寂しげな顔を浮かべつつ、こくりと頭を下げる。

「いやいや、こちらこそいろいろ勉強になった。なにより、スズさん——『涼しい』って書くのか?——とは、なにかと縁がありそうだしな。東京に一人で来た身には、今後とも仲よくしてくれると助かる」

「はいっ!こちらこそ!」

画面を一見して字を確認しながら応じる光秋に、涼子——涼は柔らかな笑顔を返してくれる。

——ホント、笑顔が素敵な人だなあ……。「じゃあ、僕行くから……あ」

言って歩き出したものの、不意に浮かんだ疑問にすぐに足を止めた光秋は、振り返って涼に問う。

「そういえば、今日ここに来た理由の予知って、何だったんだ?」

「ああ。この近くにある住宅地の1件に空き巣が入る光景が視えたので、念の為に」

「……意外と地域密着型だったんだな」

てつきり大事件を予想していた割に身近な事案が返ってきて、拍子抜けした感想を溢しながら、光秋は今度こそ研修室へ向かう。

——……あ。またお茶飲むの忘れた——

買ってからずっと左手に持っていた緑茶の缶を伴って。

速足で離れていく光秋の背中を見送りながら、涼子は寒さにも似た寂しさを和らげる様に、いくらか温ぬるくなったレモンティーを口に注ぐ。

「随分と楽しい時間でしたね」

「……古泉さん」

光秋が去つたのを感知してやって来たのだろう古泉に、涼子は顔を向けながら応じる。

「……ええ。いろいろありましたけど……急に口調が変わつた時は驚きましたけど、それでも、光秋さんがそういうふうに接してくれることは、嬉しかった」

「私としては、お嬢様にあのような口の利き方をするのはいただけないのですが」

会話中、特に連絡先の交換をした時のことを思い出して少し気分が回復する涼子に対し、古泉は角を曲がって消えた光秋の背中に若干険を含んだ視線を向ける。

「私はそれが嬉しかったんです。連絡先だつて教えていただいたしっ」

「……恋ですか。お嬢様も乙女ですねえ」

「ハ、恋っ……!？」

からかう様な、感心した様な緩い顔で言われた古泉の一言に、狼狽を浮かべた涼子はそれ以上何も言えなくなる。

午後8時半。

寝間着に着替えた光秋は椅子に腰を下ろし、涼子——涼からもらった連絡先を改めて確認する。

——自分から申し出たこととはいえ、まさか「お姫様」の連絡先を知ることになるとは………一いちえ会では終わらなかつたか——

以前鴨川で綾に語ったことを思い出しつつ、目の前の現状について感慨深くなってしまう。

その時、持っていた携帯電話が振動し、着信を知らせる。

「法子さん？またか？」

一日経って再び掛けてきた法子、あるいは綾の意図を測りかねつつ、昨日の失敗を繰り返さないよう自戒しつつ、それでも心なしか弾んだ心境で光秋は電話に出る。

「もしもし？」

直後、

（……………光秋、まーた女の人にデレデレしてたでしょ）

「!？」

灰暗い井戸の底から這い出してきそうな綾の低い声がスピーカーから響き、光秋は途端に戦慄する。

「いや、だから、別にデレデレなんて——」

（嘘ッ！お昼頃女の人と……この間のパーティーの人と話してる気がしたっ!!）

「……………お前さんのセンサーはどうなってるんだ……………」

妙に的確な綾の感知能力に、呆れと感心がない交ぜになった声を漏らしつつ、光秋はどう説得するか頭を抱えることになる。

法子も進んで弁護してくれることもなく、伊部姉妹を納得させるのに再び夜遅くまでかかってしまった。

82 合衆国の機械巨人 前編

1月29日土曜日早朝。

「……また、やってしまった………」

昨夜の夜更かしに瞼を重くつつ、どうにか睡魔に抗いながら、光秋は東京本部に出勤し、ノート執りと手を抓る痛みで眠気を抑えながら午前中の研修を乗り切る。

——どうにかなったな。眠気も粗方治まってくれたし……流石に、2日続けて同じ失敗は格好悪いよな……—

昼食時、食堂の片隅でうどんをすすりながら、今日は藤岡主任に怒られなかったことに内心ほっとする。

その時、食堂の端に置かれた大型テレビから流れるニュース番組が目に入り、本部近くの住宅地で予知出動によって空き巣が捕まったことと、その予知の算出に鷹ノ宮涼子が加わっていることが放送される。

——昨日涼さんが言ってたやつか。こんなふうに強調されたら、確かにいろんなイメージ持たれるわな。「有名税」っていうのか……—

うどんを食べながら、光秋は涼子——涼の心境に思いを馳せてみる。

—あ、予知で捕まった場合は未遂になるのか。それもそうか。まだやってなかったんだから—

続く詳細な報道に一人頷いていると、右側から聞き覚えのある声が掛かる。

「加藤さん」

「?……柿崎さん?」

声のした方に顔を向けると、学校の制服の上にコートを羽織った柿崎が、ぽつぽつと席が空き始めたテーブルの間をこちらに向かって歩いてくる。

「よかった、やつぱりここにいた」

「学校は——で、今日は土曜日だったな。で、どうした? 僕に何か?」

安堵した様子で呟く柿崎に、光秋はうどんを運ぶ手を休めて問う。

「いえ、特に用があるってわけじゃないんですけど……」

「?」

「その……お隣いいですか?」

「ああ、どうぞ」

歯切れ悪く訊いてくる柿崎に、光秋は左隣の椅子を引いて勧める。

「ありがとうございます」

礼を言いつつ、柿崎は光秋の後ろを通ってその椅子に座る。

「こつちこそ済まないな、余計に歩かせて。ただ、2人で会話するなら左に来てもらった方が楽なんだよ」

「なんでです?」

「僕、右耳殆ど聞こえないから」

軽い好奇心から訊いたのだろう柿崎に、光秋も当たり前のことを話す調子で答える。途端に柿崎の顔に罪悪感が浮かび、慌てて頭を下げる。

「……………すみません、知らなくて……………」

「いや、謝ることないさ。そういえば言わなかったけな。僕、生まれ付き右耳と左目が悪くてさ、話し掛ける時はなるべく左から掛けてくれると助かる。重要な話なら特にな」
「……………はい。わかりました……………」

補足説明の要領で告げる光秋に、柿崎はどこか哑然とした様子で応じる。

その様子に、光秋は食事を再開しながら問う。

「なんだい? 鳩が豆鉄砲食らった様な顔して?」

「あ! いえ、その……………悪いこと聞いちゃったなって……………」

「『悪い』って何が?」

「それは……………加藤さんが、その……………障害者だって言わせちゃったから……………」

「まあ、それは事実だから……………『悪い』ってそのことか?」

「……………はい」

うどんをすすりながら根掘り葉掘り訊く光秋に、柿崎の顔は徐々に俯いていく。

麺と具材を食べ切り、つゆを飲み干したどんぶりをトレーに置くと、光秋は柿崎の方に体を向ける。

「何でそれが『悪い』って思うんだ？」

「……………何でって、それは……………」

その質問に、顔を上げた柿崎は答えに詰まってしまふ。言葉を選んでいる——というよりも、そもそもなんと返していいか迷った様子で。

「その……………その所為で、いろいろ大変だし……………」

「確かに。現に席順とか、周りに配慮を求めることはある。でも、そういうのを明らかにするのを『悪い』っていうのは、また違うんじゃないか？ 寧ろこつちとしては、そういうことは知っておいてもらった方が助かるし」

「……………そう、ですね……………すみません、変なこと言つて」

『『変』っていうか……………柿崎さんなりの氣遣いなんだろう？ 空回りしたかもしれないけど、それ自体は悪いことじゃないよ』

言いながら、光秋は右手で柿崎の頭を撫でる。

「！だ、だから！それは恥ずかしいからやめてくださいっ！」

「ああ、すまん。ちようどいい位置にあつたんで、つい」

途端に慌てた柿崎に応じながら手を離すと、光秋はコップの水を飲み干し、空になった食器を載せたトレイを持って席を立つ。

「ちようどいい位置つてなんですか……………」

不満そうに言いながら柿崎も席を立ち、トレイを返した光秋を追って食堂を出る。

「そういえば結局、柿崎さんどういう用で来たんだ？うっかり話し込んだじゃったが」

「えっ。いえ…………別に用があるとかじゃなくて……………その、時間ができたから、ちよつと本部に遊びに行こうかなあとか……………そんな感じで」

「そういうもんか？…………まあ、僕も中途半端に時間が空いた時とか、建物の中散歩したりしてるしな」

どこか歯切れの悪い柿崎の説明に多少引つ掛かりながらも、光秋は自分の行動パターンを思い出して一応納得する。

「そうなんですか……………あの、それで…………この後、研修が始まるまで一緒にいていいですか？もちろん時間の余裕とかあるから、研修室でいいんですが…………」

「僕とか？別に構わんが」

柿崎の頼みに、特に断る理由もない光秋はすぐに了承する。

「あ、その前に歯あ磨かせて。研修室のカバンに入れてあるから、取りに行ったらそこで

待ってて」

「わかりました!」

そう付け加えると柿崎は嬉々として返し、研修室に着くや光秋は最前列中央の机の下に置いたカバンから歯ブラシと歯磨き粉の入ったケースを出して最寄りの水盤へ向かう。

歯磨きを済ませて戻つてくるとケースをカバンに仕舞い、椅子に腰を下ろすと、左隣の椅子に座って待っていた柿崎に向き合う。

「……………そういえば、気になってたんだが」

メガネが掛かった柿崎の顔を眺めていると、不意にあることを思い出す。

「はい?」

「柿崎さんもメガネだけど、目え悪いのか?」

「え? ええ、まあ…………でも加藤さん程ではないかと…………」

「…………そうみたいだな」

遠慮がちに応じる柿崎に、光秋は自分のメガネと比べるとずっと薄いレンズを見やりながら返す。

「いつから掛けてるんだ? 食堂でも言ったが、僕は生まれ付き悪かったからずっとだけど」

「……私も……一応、物心ついた頃から」

「なんだあ、その理屈で言えば似た者同士じゃないか。思わぬ所にお仲間がいたな」

「お仲間、ですか……………」

軽口の語調で告げた光秋に、しかし柿崎は表情を曇らせる。

「……すまない。何か気に障ったかな？」

「あ、いえ、その……………この話してたら、食堂での会話思い出しちゃって……」

「食堂って……………空回りのことか？」

「……」

返事の代わりに、柿崎は首肯で応じる。

「それは失礼した。僕の方も考えが足りなかった……………ああでも、柿崎さんみたいなことって、結構みんなしてるんじゃないかな？ 思い込みで物事を決めちゃったり、一つのことに関われて他を見失う——『木を見て森を見ず』っていうのをさ」

「……『木を見て森を見ず』？」

咄嗟に浮かんだ言葉を口にした光秋に、柿崎は小さな好奇心を含んだ目を向けてくる。

「僕も実際、昨日そんなことやっちゃったんだがね……」

ちようど1日前の涼とのやり取りを思い出して苦笑いを浮かべながら、光秋は思った

ことを語る。

「さっきの柿崎さんの例でいえば、僕という“森”の中の、『障害者』って1本の“木”に気を取られて、他の“木”を見失っちゃった……『偏った見方をしてしまった』とも言えるよな。僕が昨日やってしまったもの、つまりそういうことなんだろう。何か一つの事に気を取られて、全体像とでもいうものを見失ってしまう。それが『偏見』や『先入観』とでも言うものになって視野を狭め、物事の本質を見失わせる……それが“今の人”だっていうなら、“次の人”はこの部分を克服できた人ってことなのか………?」

「……………あの、加藤さん?」

「…ああ、すまん」

話している内に自分の世界に入り込んでいたらしい。柿崎の遠慮がちな呼び掛けに、光秋は慌てて現実に戻ってくる。

「いいですけど……ぶつぶつ言っていましたけど、『今の人』とか『次の人』って、なんのことです?」

「あ、声に出てたか。この間ある人から聞いた言葉なんだが……すまないが、それについてはまた今度で。そろそろ時間だし、何より僕がまだ自分のものにできていない言葉だからな」

柿崎に応じつつ、光秋は一時を指しつつある腕時計を確認する。

「もうそんな時間?……わかりました」

どこか寂しそうに言いながら、柿崎は席を立つ。

「あの……またこうして、お話しに来てもいいですか?」

「休憩時間なら構わんよ。僕も柿崎さんと話してみて、いい刺激になったし……て、話してたのは殆ど僕だった気がするが……」

一連の会話、特に先程の一人語りを思い出して、光秋は気まづくなる。

「いえ、それはいいんです。加藤さんが話してたこと、なんて言うのか……面白そうだったから。だから、もっと聞きたいって」

「それなら助かるんだがね……」

気を遣っているわけではない、本当に興味を惹かれた様子の柿崎に、光秋はいくらか救われた気持ちになる。

その時、ドアを開けて藤岡が入ってくる。

「じゃあこれで」

「ああ」

それを見て柿崎は入れ違いに部屋を出、見送った光秋は体を前に向ける。

「入間隊の子か。確か柿崎とかいったか。何かあったのか?」

「いいえ、時間まで雑談……というか、僕の話に付き合ってもらってたんですが」

ホワイトボードの前に立ちながら訊いてくる藤岡に、光秋は会話の大よその流れを思い出して苦笑いしながら答える。

「そうか……そうだ、さつき二曹宛ての連絡が来た」

言いながら、藤岡は脇に抱えていた用紙を差し出す。

「僕への連絡？ 藤岡主任の所にですか？」

「研修が終わるまで、君に関する連絡は一度俺の所に来る段取りになっているからな。メールで来たのを印刷したんだが、来月一日に模擬戦が入つたらしい」
ついたち

「模擬戦？」

疑問への返答と合わせて述べられた藤岡の言葉に、光秋は意表を突かれながら用紙に目を通す。

「……本当だ。2月1日——来週の火曜日に陸軍の新設部隊と……でもそうになると、この日の研修はどうなるんです？」

「仕方がない。その週の日曜——6日に振り返る」

「……やっぱり、そうなりますか」

薄々察していた流れに、光秋は思わず気落ちしてしまう。

しかしそれも数瞬のことで、次の藤岡の言葉に気を取り直す。

「とりあえず、細かなことは後で確認してもらうとして、今は研修を再開するぞ」
「はい」

応じると、光秋は用紙をカバンに仕舞い、シャープペンシルを持って聴く準備を整える。

―模擬戦つて、もちろんニコイチのだよな。軍の新設部隊とつて……………まさか……

―
そんな一抹の不安とも期待ともつかない気持ちを覚えたのを最後に、藤岡の言葉に集中する。

2月1日火曜日午前8時。

藤岡から渡された用紙に書かれていた指示に従って、光秋は本舎正面玄関前で迎えを待つ。

―いつもならこういう時、ニコイチで直接飛んでくの、今日に限って何だろう？―
「……………寒い……………」

指示の意図に疑問を覚える一方、吹き付けてくる冷風に、スーツの上にコートを羽織った体を震え上がらせる。

そうしている内に、本部敷地の奥から1台の白いワゴン車が現れ、光秋の目前で停車すると左の窓が開く。

「加藤二曹か？」

「はい……？」

開いた窓から問い掛けてくる黒縁メガネに短い黒髪 of 男性に、光秋は声がよく聞き取れるように車に近付きながら応じる。

「模擬戦の迎えに来た福山だ。ふくやま乗ってくれ」

「はい。お願いします」

メガネの男性——福山に应じると、光秋は左前の助手席に乗り込み、提げていたカバンを膝の上に置いてシートベルトを締める。

それを確認すると、福山はワゴン車を走らせ、正門をくぐって車道に出る。

「このような形での移動を指定してしまつてすまない。模擬戦の前に、どうしても君と話しておきたかつたからな」

「僕と……福山さんが、ですか？」

てつきりただの運転手だと思つていた福山の言葉に、光秋はその意味を測りかねながらその身に目を凝らす。

改めて見ればその服装は黒のスーツであり、その上にESOの緑色のコートを羽織つ

ている。外見上は自分とそう歳が離れているようには見えないが、メガネ越しの視線はやや鋭く、どこか知的な印象を与えてくる。

「そうだ……そういうえば、言ってなかったな。福山泰三、ふくやまやすみ葵重工で新兵器——メガボディ

の開発計画に参加している技術者だ。現在はMB—00の調査と、今後のメガボディ開発のデータ収集の為にESO東京本部に出向している。つまり二曹が東京にいる間、僕が00の調査・整備主任を務めさせてもらう」

「……………あなたが、ニコイチの……？」

淀みなく淡々と自己紹介をする福山、その最後の一言に、光秋は思わず驚きの声を上げる。

「……………大河原主任の代わり……ということですか？」

「そうだ。大河原主任、それと君の報告にもいくつか目を通してもらった。なかなか興味深い」

自身の中で整理した考えを告げる光秋に、福山は極僅かだが活気を含んだ声で応じる。

「付け加えるなら、今回の模擬戦で使用する実用試験機、MB—01・ゴーレムの開発主導者の一人でもある。その点から、今回は模擬戦に付き合ってもらって感謝している」
「福山さんがゴーレムを作ったんですか？そもそも、今回の模擬戦ってやっぱりメガボ

デイの……」

までも予想外なことを告げる福山に、光秋は再三驚く一方、藤岡から今回の件の連絡を受けた時から予想していたことが当たってしつくりくるものを感じる。

「無論、僕一人で作ったわけではない。あくまで複数いる主要スタッフの一人だ。もつとも、かなり広い範囲で意見を反映させてもらったが」

「はあ……………」

謙遜というわけではない、あくまでも事実関係を淡々と告げる様子で話す福山に、光秋は物事とは得てしてそういうものだと思いつつも、目の前にいる若者がメガボデイという新しい技術の開発に関わっているという現実にしても圧倒されてしまう。

——新しい技術の開発っていうのがどれくらい大変かは想像し難いが、僕と大して歳が離れているように見えない福山さんがそれに関わってる——本人の言葉を信じるなら、かなりの影響力を持つてゐるっていうのは……………凄い、としか出てこないなあ……………
胸中に感嘆を漏らしつつ、その様な表現しかできない自分の語彙に独り恥ずかしくなる。

そんなふうに圧倒される中、光秋の口から無意識にある言葉が零れる。

「……………福山さんって、おいくつですか？」

「19歳。今年の7月で二十歳^{はたち}になる」

「つまり、僕と同一歳と……あれ？でもそうになると、最終学歴って高卒？」

「14の頃に飛び級で技術系の大学に進んで、18で卒業した。付け加えるなら、その後すぐに葵社に勤めて、去年の夏……その初め頃からこの計画に参加している」

「……………そうなんですか」

返って来た福山の返答の数々に再度啞然としつつ、胸の奥にシコリの様な違和感を覚えていると、光秋の中である言葉が浮かぶ。

——僕と——生きてきた世界こそ違えど——同世代の人が、飛び級つてので既に大学を出て、大きな計画の中枢に腰を据えて……………——「正に『天才』ですね……………」

「僕は『天才』という評価を受けることをあまり好まない」

「あ、声に出てましたか？」

視線だけを向けて言ってくる福山に、少し茫然としていたらしい光秋は慌てて返す。

しかしそれに構うことなく、福山はさらに続ける。

『天才』とは、常人には到底思い付かない発想を引き出し、またそうした頭脳を持つが故に日常を常人のように送ることが困難な者のことだ。この観点でいえば、僕は多少社交性に劣るところがあるようだが、日常の大部分においては特に問題なく過ごしている」

「……………見ているもの——世界観が大多数の人と根本的に異なる人……………」

？福山さんに言わせれば」

「その理解で概ね問題ない」

「……それで、福山さんはそれ程『大多数』の世界観とはズレていない、だから『天才』ではない……と？」

「そうだ」

自分なりの理解を述べながら確認する光秋に、福山はあくまでも淡々と答える。

「確かにゴーレム開発に当たって、僕なりに斬新な発想を提案したり、新しい試みを行ったりしてきたつもりだ。しかし、ゴーレムがここまで形になったのは……メガボディという新技術の実用化の目処が立ったのは、それ以上に斬新な発想を多数提供した者がいたからだ。僕はその人こそ、真の『天才』と思っている」

「……………福山さんの上を行く人がいるってことか？—」

「加えて、そうした発想を理解し、協力してくれた周囲あつてこそだ」

「……やっぱり、最後はそうなりますか」

福山の言葉に、光秋は一部引つ掛かるものを感じながらも、最後の一言には親近感を

——自分と同じ感じ方をしてくれることへの安心感を覚える。

「なるほど。この感じ方が『天才にあらず』ってことか—」

そのように納得していると、福山は仕切り直す様に告げる。

「僕のことはいいい。君とこうして2人きりにしてもらったのは、話したいことがあったからだ」

「そういえば、そんなこと言ってましたね。なんですか?」

「君はDDシリーズをどう思う?」

「……………」

唐突に出た、光秋にとって恐怖の象徴といつていいモノの名に、束の間口が動かなくなる。

「……………どう思う、とは?」

どうかそれだけ告げると、福山は変わらぬ淡々とした口調で言ってくる。

「僕も縁あってソレらの記録映像を観ているのだが、君は何度か直接目撃——交戦している。そんな君から見て、DDシリーズとはどのようなものか、率直な意見を聴きたい」
「…………率直な意見、と言われても……………」

問い掛けの意図を理解しつつも、実際にどう表現していいか思い浮かばない光秋は、これまで3回戦った時のことを思い返してみる。

1回目——陸軍・空軍・ESOの合同演習にDD—01・ツァーングが乱入してきた時。

—あの時は、こっちの武器がまるで通じなくて、あまつさえ砲撃の集中砲火に放り込

まれても無傷で戦い続けて……ようやくバテたと思ったたらニコイチごと「黒い空間」に連れていかれて、そこでさんざんボコボコにされて……綾が再起させてくれなかったら、今頃……—

そこまで考えて、暖房が効いているにも関わらず強烈な寒気に体を震わせると、それを押しやる様に2回目——初めての夜警の際にDD—02・ナイガーと初交戦した時を思い出す。

—あの時は確か、戦う直前に初めて黒球さんと遭遇したんだよな。その後生身でナイガーと対峙したもんだから、余計に怖かった。光の剣——ビームを初めて見たのもあの時だ。ツアーングの三枚刃もそうだが、ニコイチを傷付けられる武器なんてそう見ないから、尚更怖かった。その所為で動きも鈍ったような……あの時も、法子さんが一緒にいてくれたから乗り切れた気がする——

相乗りした法子と撤収するナイガーの姿を思い出すと、3回目——サン教ベース制圧戦の最中にナイガーと再戦した時の記憶を振り返る。

—あの時は、夜警の時はあんまりわからなかった素早さに翻弄されたつけ。おまけに羽根が外れて四方から攻撃してくるからな。人を取り込んで力を増すのを見た時は、驚愕したつけ……もつとも、あの時も法子さんや綾……否、藤原三佐や曾我さん、タツカー中尉や古谷大尉、他にもあの場にいた大勢の人の助力を得て、今度は完全に墜

とすることができた……………そう考えると……………

以上3つの交戦の記憶を振り返って、光秋の中の考えがまとまってくる。

「率直に言わせてもらおうなら、恐ろしいと思います。人類の持つ武器は効かず、超能力さえ無効化する、ニコ——00でも単独で立ち向かうのは厳しい……………あまつさえ頑強な装甲を壊せるときた。理屈が通じないデタラメさという点では、恐ろしいという以外ありません」

「僕もそう思っている」

思ったままを語る光秋に、福山は深く頷きながら応じる。

「合同演習に乱入した個体と、秋田に出現した個体の戦闘記録の一部始終を観させてもらったことがあるが……………重火器の直撃を何度受けても——DD-01に至っては集中砲火に巻き込まれても——目に見える損傷を負わない防御力、空中を高レベルサイコキノよろしく自在に飛び回る運動性、超能力耐性、未知の武器……………いずれも君の言う『デタラメ』な域に達した、正に恐ろしい者たちだ」

—あ、福山さんも怖がったりするんだ—

言いながら、極僅か、それこそ注意して見ていなければ見落としていたくらい僅かに表情を強張らせる福山を見て、光秋は再度親近感を覚える。

「何より恐ろしいのは、そんな恐ろしいDDシリーズに対抗できる手段を人類が保有し

ていないということだ。所謂大量破壊兵器並みの火力を与えればまだ手傷を負わせられるかもしれないが、行動不能の域にまで持っていけるかは不明だ。今のところ00のみを優先して攻撃し、これを妨害した者を消極的に撃退しているだけだからいいものの、あれだけの力が本格的に人類に牙を向いたらと思うと……僕は恐ろしい」

「……………確かに」

言いながらハンドルを握る手を強張らせる福山に、今度は光秋が同意の頷きを深々と返す。

「……………結局、こうして二人で話したいことって、DDシリーズの認識ということですか?」

「そうだ」

「でも、何でそれをこのタイミングで?」

「メガボディには、対DDシリーズ用兵器としての側面も持たせたいと考えている。無論、現状ではその目的からは程遠いだろうが、そうした現状認識も含めて研究を続けていくつもりだ。可及的速やかに。今回の——というより、今後もこうした機会は増えると思うが——模擬戦に対して、君にはそうした部分も意識した上で当たって欲しかったからだ。現状、DDシリーズに限りなく近いモノを動かせる者として」

「……………つまり、『デタラメな恐ろしい者』を演じてくれと?」

「その理解で概ね問題ない」

「……………」

自分の投げ掛ける問いに淡々と応じていく福山、その最後の返答に若干腹を立てながらも、光秋は一応の理解も抱く。

——言い方はアレだが、確かになあ。皮肉だが、ニコイチが現状最もDDシリーズに近いモノであるのは事実だし、仮想敵としてはこれ以上の適材もない、か……………」

車窓越しに行き過ぎていく街並みを眺めながらそのように気持ちを整理する一方、不意に先程福山の自己紹介の時に感じた違和感のことが頭を過る。

——そういうえば、あのシコリみたいな違和感……………不快感……………ああ、そつか。あれ、嫉妬だ——

自分と歳の変わらない者が大きな才を持ち、新しい物事の最前線で活躍しているということへの羨み。そう自己分析を下すと、若干の自己嫌悪を抱き、本部への転属初日の昼食時に曾我と交わした会話を思い出す。

——ほーら、やっぱり僕だって人並みに嫉妬するんだ。そういう部分もあるんだ……………その理解に不思議と安心感とでもいうような感覚を覚えつつ、福山の運転の下、ワゴン車は目的地へと向かっていく。

83 合衆国の機械巨人 後編

高速道路を經由し、徐々に樹々が茂っていく細い道を走ること1時間程。

今回の模擬戦の舞台となる演習場に到着すると、光秋はワゴン車の助手席から降りて体を伸ばす。

「……………」

座りっぱなしで固まった体をほぐすと、ワゴン車の後部から大小いくつかのケースを降ろす福山が目に入る。

「それは？」

「今回の模擬戦で使う機材だ。せっかくなので一部積んで持ってきた」

「半分持ちます」

「助かる」

福山の承諾を得るや、光秋は肩から提げていたカバンを尻の辺りに回し、大振りのケース2つを重ねて抱え、落とさないように注意しつつ小振りのケース2つを両手に持った福山についていく。

少し歩いて樹々が開けた広場に出ると、光秋の目に奇異な、それでいて多少見慣れた

モノが2体飛び込んでくる。

「アレは……………」

全体的に直線を主体とした輪郭に、人のそれを模した5本の指を備えた手、自身の体をしっかりと支えている太い脚、一つ目にも見えるカメラを備えた頭部で構成された青い機械の巨人。

「今回の模擬戦の相手となる…………地球合衆国初のメガボディ——MB—01・ゴーレムだ」

「アレが……………」

途中不自然に詰まった福山の説明に応じながら、光秋は指定された場所にケースを置いて、改めて悠然と佇む2体の巨人を凝視する。

そうしていると、これまで見てきたニコイチとDDシリーズ以外のロボットの姿が浮かんでくる。

——説明は聴いていたが、やっぱり上半身はほぼゴーレム・タンクだな。脚は秋田で見掛けたヤボット——もとい、アポロンとかいうのに似てる……いや、あれよりもっと引き締まっているような……というか——「大河原主任から聞いてはいましたが、輪郭が丸くなったら、それこそNPのフラガラッハですな」

「アレは、言ってみればコレの模倣だからな」

いつからいたのか、左隣に移動していた福山が、光秋の感想に応じてくる。

「ただ、輪郭以外にも相違点はある。手首を見てくれ」

「手首……？」

言いながら福山が指した指を追って、光秋は直方体状のゴーレムの手首を注視する。

「フラガラツハにはあの辺りに機銃が1挺内蔵されていたが、ゴーレムにはそれがない。おそらく、NPで用いるに当たって、低レベル、あるいは直接攻撃には向かない能力者を攻撃する為に追加されたのだろう。付け加えるなら、超能力者への攻撃を妨害するノーマル——要は君たちESOの職員も入っているのだろうが」

「事実なんでしょうけど、さうつと怖いこと言わないでくださいよ………」

表情一つ変えることなく述べる福山に、光秋は祝賀パーティー襲撃事件の際の入間主任が負傷する光景を思い出しながら、気温とは違う悪寒に震える。

その時、後ろから声が掛かる。

「おーい。もしかして加藤二曹かー？」

「ーはい？」

知らない声に呼ばれて慌てて振り返ると、光秋はこちらに向かってくるコートを羽織った青服2人を認める。2人共短く揃えた黒髪と制服の上からでもわかる屈強な体付きが目につく男性だが、一方は白色系、もう一方は黄色系の顔付きだ。

「よく来てくれた！陸軍特殊装備教導団・スフィックス所属のロレンツイオ・デ・パルマ少佐で、この部隊の指揮官だ。今日の模擬戦、よろしく頼むぞ！」

「……………連絡にあった新設部隊の方々ですか？こちらこそ、よろしくお願いします！」
歩み寄ってくるや取った手を上下に激しく振って快活に告げる白色系男性——デ・パルマ少佐に、光秋は初めこそ戸惑いつつもすぐに手を握り返し、負けじと明瞭な声で応じる。

「同じく、スフィックス所属の関智己大尉だ……………ときに君、京都では法子……………伊部と同じ隊だったそうだな？」

「？法子さ——伊部二尉を知っているんですか？」

その傍らから、デ・パルマとは打って変わって落ち着いた様子で告げてきた黄色系男性——関大尉の言葉に、光秋は意表を突かれつつ、デ・パルマと繋いでいた手を離して顔を合わせる。

「士官学校で同期だった。横尾もそうだが、今では疎遠になっちゃったけどな。それでも偶に連絡は取り合っていてね。君のことも2人から聞いている」

「同期、ですか……………」——男の人……………もしかして、前に法子さんが話してた人……………？——

関の説明に、光秋は風邪で休んだ時に法子から聞いた士官学校時代の想い人のことを

思い出し、目の前の関に疑念の目を向ける。

が、それに割り込む様にデ・パルマが加わってくる。

「ちなみに、俺はその時教官をやつてたんだが……伊部の後輩か……どうだ？ あいつの尻、なかなかの触り心地だろう？」

「……………はっ？……………えっ……………？」

藪から棒に振られた話題、その内容に、光秋は関への疑念どころか、思考がしばらく止まる。

「……………いや、触り心地といわれても……そもそもそれ、いわゆるセクハラじゃ……」
やつとの思いでそれだけ返すと、デ・パルマは嘆息を吐きながら両肩を深く沈める。

「おいおい？ お前元祖メガボディのテストパイロットだろう？ 未知の領域に挑む者にとって、大胆さとの確な判断力は必須。女との付き合いはそれを鍛えてくれるのであつてだな——」

「あんまり気にしないでくれ。教官——少佐つて僕等が初めて会つた頃からこんなだからさ。ホント、よく警察のお世話にならないと思うよ」

「おい、関。恩師に向かつてなんだその言い草は？」

「本当のことでしょう。伊部にも、他の女子にも、在学中にちよつかい出してよく怒られてたじゃないですか。よくクビにならなかつたと思いますよ」

「ふん。今日^{きょう}日の女は短気だなあ。我が祖国イタリアじゃ、あんなの挨拶代わりだぞ?」
「勤めてたのは日本の学校でしょ? だいたいイタリアにしたって……………」

「……………」

唐突に始まったデ・パルマと関の口喧嘩に、光秋は互いの柔らかな表情や会った時から変わらない声色から本気ではないことを理解する一方、すっかり会話に参加できなくなったことに呆然とする。

その時、福山が両手を叩いて出した大きな音に、2人は冗談半分の口論を中断する。

「失礼。挨拶が済んだようなら、早速模擬戦の準備に入りたい。いくつか説明したいこともあるので」

「……………そうだな。悪い福山主任。よし、打ち合わせするぞ」

「了解」

「……………了解!」

言うやデ・パルマと、それに応じた関が福山を追って近くのテントへ向かい、一瞬遅れて光秋も慌ててついていく。

大股で進んで一行に追いつくと、それに気付いた右隣に行く関に手招きされ、光秋は顔を寄せる。

「なんです?」

「いろいろ言っただけ……でも、根はいいというか、いざという時頼りになる人なのは確かなんだよ。こういう機会今後もあるだろうから、その辺は覚えておいて」

「はあ……関大尉は、デ・パルマ少佐……？」

『デ・パルマ』ね。『デ』と『パ』の間は区切って」

「はい……デ・パルマ少佐を慕っていらっしやるんですね」

「まあ、あれでも一応恩師だからね」

訂正を加えられながら感じたままを告げる光秋に、関は若干苦笑を含んだ微笑みを返す。

長いパイプ脚に布の屋根を付けた簡易テント、その下には折り畳み式のテーブルやパイプイス、ホワイトボードが設置され、席に着いた光秋、デ・パルマ、関は、ホワイトボード前に立った福山の説明に聴き入る。

「今回の模擬戦の目的は、人型兵器との戦闘におけるゴーレムの稼働データ収集、問題点の洗い出し、乗員の練度向上である」

——『メガボディ同士』と言わず、『人型兵器』と言うか……やっぱ、DDシリーズ意識してるのかな？——

福山の言い回しに、光秋は移動中の会話を思い出しながらその意図を考えてみる。

「模擬戦のルールだが、MB-00に対しゴーレム2機で挑んでもらう。攻撃手段はメガボディ用火器として開発された90ミリキャノン砲、弾はペイント弾。00は5発、ゴーレムは2発の被弾で撃墜と判定する。なお、各自は盾を装備、これに当たった弾は1発無効となる。ここまでで質問は？」

「はい。僕の方は1人なんですか？」

言葉を切つて周りを見回す福山に、光秋は手を挙げ、数的不利に不安を抱きながら問う。

「そうだ。今回00はあくまで仮想敵だからな。加えてゴーレムとの性能差やパイロットの練度差を考慮した結果、先程言ったようなルールを採用した」

「ああ、ニコ——00の方がたくさん当たってもいいっていう」

「その通りだ」

確認する光秋に福山が応じると、テーブルの中央——光秋の右隣に座っていたデ・パルマが顔を向けてくる。

「そういうこつた。寧ろ俺たちの方が不利な要素多いからな。2対1のハンデくらいくれよ。先輩！」

「先輩って……ああ、そうか。あの手のモノの操縦経験は、僕の方が長いんですね」

笑顔で付け加えられた一言に一瞬戸惑ったものの、光秋はすぐに自分の立場を理解する。

—『先輩』かあ……といっても、殆どニコイチの機能に助けられてただけだったような……一応、僕の方からの努力もしたけど……—

もつとも、ニコイチに乗ってからの自分を大まかに振り返ってみると、デ・パルマの一言に対して再び釈然としないものを感じてしまう。

「他に質問は？……なにようなら、機体の起動準備に入ってくれ。加藤二曹はこちらに新しい装備の説明と、予備弾倉の荷台の取り付けを行う」

「はい」

無言の周囲を確認して告げた福山に応じると、光秋は席を立てて後を追う。デ・パルマと関もそれに続く。

テントからしばらく歩き、ゴレム2機が佇む辺り、装備品置き場に差し掛かると、光秋はスフィックスの2人と別れ、福山を追ってメガボディサイズの銃器——砲身からやや末広がりの銃床まで一直線に構成され、下側に持ち手が伸びた射撃武器の傍らに着く。

「これが、新しい装備ですか？」

「そうだ。早速00を出してくれ。ソレで実際に持つて説明する」

「わかりました」

福山に応じると、光秋はスーツの内ポケットからカプセルを出し、その先端を近くの広場に向けて左膝を着いたニコイチを出現させる。すぐに乗り込んで起動させ、立ち上がりらせると、操縦席を機外に出して装備を手に取り、直接観察の目を向ける。

その間にも、ニコイチの両脚では荷台の取り付け作業が開始される。

「形の所為かな？ N砲なんかよりも銃らしいというか、いかにも巨人サイズの武器だな」
さつと見回して感じたままを呟いていると、左耳に着けた通信機から福山が呼び掛けてくる。

（いいだろうか？ 二曹）

「はい。コレが、さつき説明に出てきた90ミリキャノン砲ということぞ？」

（そうだ。N砲の運用データを参考にしつつ、戦車砲の技術を基にメガボデイの手持ち火器として効率のいい使用ができるよう設計した。ただし君が今持っているのは、00用に一部改造したN型というものだ）

「00用に改造？ 何が違うんです？」

（ゴーレムの方を見てくれ）

言われて光秋は、前方で待機しているすでに起動を済ませた2機のゴーレム、その右手に持ったキャノン砲を注視する。

「……………あれ？向こう、引き金がない？」

（そうだ）

真つ先に目に付いた違いを呟くと、福山が肯定の声を掛けてくる。

（というより、正式なメガボダイの装備としては向こうの造りの方が正しい。本体掌と装備品持ち手に備えられた端子を介して双方を接続、照準から発射までの操作は全てコクピットから行う。しかし、00には端子などないからな）

「なるほど。それでN砲から引き続き、人間用の銃器のそれを大きくしたような引き金が付いていると？」

（そうだ。そして他にも相違点はある）

福山にそう言われるや、光秋は再び双方のキャノン砲を見比べてみる。

「……………あ。こっちは砲身の付け根上にレーザーポインターが付いてるけど、向こうはカメラなんですな」

（その通り。あれが機体本体のカメラと連動して、照準を合わせる。主な違いはそんなところだな……………付け加えるなら、N砲が105ミリ口径だったのに対して、本装備は90ミリ。威力や反動制御、キャノン砲自体の重量その他諸々のバランスをゴーレムに合わせた結果そうなった。100ミリ代の弾をゴーレムで標準的に使用する場合、現状では不安が大きかったからな……………もつとも00に限っていえば、その腕力を以ってす

れば大して問題にはならなかったようだがな)

「はあ……」

(無論、いずれは何らかの形で克服したいが……それと、弾倉1つ分の弾数を5発から6発に増やした。僕の方からはこんなところだが、二曹から何か質問はあるか?)

「……今のところは特に。結局、基本的な使い方自体はN砲の時と大差ないってことでいいんですね?」

(概ねそうだな)

「なら、後は使って覚えます」

(了解した。では、ちょうど荷台の取り付けも終わったようだし、盾を装備後、弾倉を積んで模擬戦開始の準備を)

「了解」

応じると、光秋は操縦席を機内に下ろし、モニター越しに取り付けを行っていた作業員たちがいなくなったことを確認すると、傍らに置かれた一枚板の盾、その裏側に備えられた固定腕を左腕にはめ、ペイント弾が入った弾倉を掴んでいく。

2つを荷台に積み、1つをキャノン砲の砲身付け根下に差し込み、盾がきちんと固定されたか確認すると、周りの誘導に従って模擬戦開始の位置に移動する。

身長10メートルの巨人にしてもグラウンドに思えてしまう大広間、その端に到着す

ると、5キロ程離れた地点に右手にキャノン砲を、左腕に盾を備えたゴーレム2機を認める。

光秋の意思を拾って表示された拡大映像をよく観ると、向かつて左の機体には「01」、右の機体には「02」の数字が左肩の装甲に書かれ、それぞれ右肩の装甲には、腕が鳥の翼になった人間の上半身がライオンの胴体と繋がった奇妙なマークが施されている。

—あのマーク……スフィンクス？部隊章つてやつか？でもスフィンクスっていったら、ライオンの体に人の頭が付いたあれじゃ？何で上半身なんだ……？—

「スフィンクス」と聞いて真っ先に想像するエジプトの石像を思い出しながら、光秋は素朴な疑問に首を傾げる。

が、それも束の間。

「……と。今はそれよりも……福山さ——主任。キャノン砲の試し撃ちつてできますか？」

すぐに気持ちを切り替え、通信越しに今一番の懸案事項を問う。

（すまないが、弾の余分はない。模擬戦の中で覚えてくれ）

「……わかりました」

返ってきた福山の返答に若干の不満を覚えながらも、自身装備品置き場に1機につき

3つ、計9つの弾倉しかなかったことを思い出してそれ以上追及せず、光秋は視線を通常映像の中のゴーレム2機に向ける。

—基本的な使い方はN砲と同じなんだろうが、初めて使うからやつぱり不安だが……が、仕方ない。やってやるさっ—

心中に小さく気合いを入れ、キャノン砲左側面から伸びる支持棒を左手で掴んで両手保持すると、開始の合図に身構える。

(双方、準備はいいか?)

「はいっ」

(いつでも!)

(早く始めようぜっ)

福山の問い掛けに、光秋、関、デ・パルマはそれぞれ明瞭な声で応じる。

(ではこれより、MB-01・ゴーレム2機とMB-00・ニコイチによる模擬戦を行う。制限時間はなし、ゴーレム2機、あるいは00の撃墜判定を以って終了とする……開始っ)

「!」

通信機から福山の号令が響くや、光秋はペダルを踏んでNクラフトを吹かし、地面すれすれを大広間の縁^{ふち}をなぞる様に右に滑る。

—手始めに……—

思いつつ、02と書かれたゴーレムに狙いを定め、その意思に反応して赤いマーカーが表示される。ニコイチの指でキャノン砲持ち手脇のスイッチを入れ、作動したレーザーポインターがマーカー中央——通常映像に映る02の胸部に合わさるや引き金を引き、砲口から勢いよく弾丸が発射される。

が、それと同時に02は地面を蹴って跳躍、加えて背部に設置された2基の推進器を噴かして高々と飛び立ち、撃ち出された弾はその下を虚しく過ぎていく。

—流石に今のは当たらないよな。狙ってるのが見え見えだったろうし。だが、僅かだが感覚は掴ん——！——

福山の説明通りN砲とはまた違う感触——ソチラに慣れた身には軽く感じる重量や反動、そこからくる感覚を覚えようとしていると、上空の02から反撃の1発が迫り、光秋はハツとしつつ右に滑り続けてそれをやり過ごす。

直後に進行方向に悪寒を感じるや、咄嗟に左に戻り、その脇を01が撃った弾が過ぎていく。

「そうだった。2機いるんだ」

言いながら02に意識が向き過ぎていたことを自覚し、すぐにモニターを走査して2機の位置関係を把握しようとする。

が、そうしようとする間にも駆け寄ってきた01が1発撃ってくる。

「っ！」

咄嗟に地面を蹴って右に避けるものの、その所為で再び全体への意識が途切れてしまう。

そして、

「！」

間髪入れずに02が撃った弾が左肩に当たり、白い装甲を赤く染める。

「やられたっ——」

内心に舌打ちしつつ、光秋はニコイチを上昇させ、上からゴーレム2機を俯瞰する。

「飛ぶなどとは言われてない。寧ろDDシリーズを演じることを求められてるんだから、いいよなっ——」

思うや01に照準を合わせ、即引き金を引く。

01はすぐに右に避けるものの、間に合わず左肩に当たってしまう。

「あと1発——っ！」

そのままもう1発当てる撃墜判定を出そうとするものの、02からの1発が右上腕に命中し、体勢を整えた01も加わったさらなる応戦に、回避に集中せざるを得なくなる。

「……やつぱり、今はダメか——」

自身と01、02、各々が前後左右に駆け、片や飛行、片や推進器の補助による高度跳躍を織り交ぜた不規則な回避運動を行い、双方からキャノン砲の応酬が加わる乱雑とした現状に、光秋は4発撃ったところで攻撃を中断し、さらに高度を上げて距離をとる。

「ならっ」

空になった弾倉を左脚の予備と交換しつつ呟くや、表示された2つの拡大映像、その一方に映る02に狙いを定め、通常映像に映し出された赤マーカー目掛けて急降下する。

01、02双方から応戦射撃が加わるものの、前者は少しでも速く進んで後ろに受け流し、後者は真一文字に伸ばした機体を僅かに振ってギリギリで回避する。

それでも避けきれなかった1発が迫るが、反射的に盾を前に出して防ぐ。

そうして辛うじて輪郭が判る程度だった02が瞬く間に大きくなってくると、光秋は両手でしっかりと保持したキャノン砲をその胸部に合わせる。

刹那、

「！」

あと一息で衝突する間合いに入るや引き金を引き、同時に鋭角な軌道修正を行って再度急上昇する。

昇りながら下を見やると、02の胸周りが赤く染まっているのを確認する。

同時に、

「やられた。3発目か……」

左脹脛が01が撃った弾で染まっているのを認め、自分の方も追い詰められたことに表情を曇らせる。

「盾はもう使えない。残りの被弾回数は2回。ゴーレムはどちらも1回だけど、どちらも盾は残ってるから実質2回……どう出る？………？——」

現状を整理しつつも、次の手が浮かばないことに苛立ちを感じていると、眼下にキャノン砲の弾倉を交換しながらゆっくりと後ろに下がる01が目に入る。

と、不意に01は駆け出し、走り幅跳びの要領で跳躍したかと思うと、背部推進器から長大な光の尾を伸ばして滞空しているニコイチに迫ってくる。

「!?」

そのあまりの跳躍力に光秋は驚愕し、脊髓反射で撃った1発も盾に防がれてしまう。

そうして一気に距離を詰めた01がキャノン砲を撃ってくるや、慌てて回避する。

しかしゴーレムが「飛んだ」ことへの動揺は思った以上に大きかったらしい。乗り手の心境を引き写した様にいくらか動きがぎこちなくなつたニコイチの右膝に、1発当たってしまう。

—あと1発!?

そう理解するや、動揺にさらなる拍車が掛かり、衝動的に01へと距離を詰める。

—今ならっ!—

推進器を止め、重力に任せて落下するだけの01を好機と見るや、ソレを追う形で高度を下げ続ける光秋はすぐにキャノン砲の照準を合わせ、引き金に指を掛ける。

が、

「!」

背後から感じた悪寒に咄嗟に身を翻すと、頭部右脇を弾丸が過ぎていく。

撃ってきた先を見据えると、地上にしっかりと両足を着け、両手保持したキャノン砲をコチラに向ける02の姿があった。

—01は囷——!——

理解し切る前に再び背後から悪寒が迫り、振り返るや、目の前には01の持つキャノン砲が、ニコイチの胸部にぴつたりと合わさる光景があった。

—やられた……………

脱力しながら胸中に呟くと同時に、極至近距離から放たれたペイント弾がニコイチの胸部に命中し、白い体を赤く染める。

(00への5発の被弾を確認、模擬戦終了。スフィックスの勝利)

「……………」

淡々と結果を告げる福山の声を呆然と聞きつつ、光秋は速度に注意しながらニコイチを着地させ、ほぼ同時に推進器を噴かして落下の速度を相殺しながら着地する01を眺める。

「……………あ、流石にあの推進器じゃ完全には勢い殺せないのか……………」
若干地面にめり込んだ01の足を見て、ふとそんなことを思う。

誘導に従って装備品置き場に戻り、盾とキャノン砲、余った弾倉を指定された位置に置くと、光秋は操縦席を機外に出し、厚い雲の合間から僅かに覗く青空を見上げる。

「はあ……………」

今の自分の心境を表している様な曖昧な空模様には、思わず深い溜め息を吐きながら俯くと、ハッチからリフトを引き出し、直立姿勢のニコイチから地上に降りる。

足元のサイコキノたちによって浮かばされ、脚の荷台の取り外し作業に掛かるスタッフたちを一見すると、少し離れた場所に2機並んで佇むゴーレムの許へ向かう。

「負けたあ……………実践回数、機体性能、他にも僕の方が優位な条件が揃ってるっていうのに……………負けたあ……………」

胸の内を占める悔いをそのように明文化し、さらに顔を俯けながらも歩き続けていると、

「ひどい顔だな」

「……富野大佐？」

突然掛けかれた聞き覚えのある声に顔を上げた光秋は、向かいから左脇に茶封筒を抱えて歩み寄ってくる富野大佐を認める。その傍らには横尾中尉も控え、会釈してくる。

「横尾中尉もお久しぶりです……またどうしてこちらに？」

それに返礼しつつ、光秋の方から2人の許に速足で歩み寄って問う。

「模擬戦の見学だ。このメガボディとやらには、私もそこそこ注目していてな。NPやZCへの対策を練る上で参考くらい得られるかと思っていたが……まさか、今を駆ける白い犬の負け面を見られるとはな」

「……お恥ずかしいところを……」

包み隠さない富野の言い方に、ぐうの音も出ない光秋は悔しさに加えて恥ずかしさも感じるようになり、心なしか小さくなる。

「ま、他にも理由はあるが」

言いながら、富野は脇に抱えていた茶封筒を差し出してくる。

「……？」

「この間話していたノートだ。いい機会なので渡しておこうと思つてな」

「ノートつて……………“次の人”の!？」

富野の説明に、光秋は先日交わした会話を思い出し、一瞬前までの沈んだ気分など忘れて目を輝かせ、ゆつくりと伸ばした両手で茶封筒を受け取る。辞書くらいの厚さを誇る茶封筒は見た目以上に重いものの、両腕一杯に感じる手応えさえ今は嬉しさを掻き立てる。

「ありがとうございますっ!!……………ただ……」

嬉々として礼を述べながら深く頭を下げると、そこで一度気を鎮めて、ノートを渡す会話をした時から多少引掛かつていたことを訊ねる。

「本当にもらつてよろしいんですか？先日の話を聞く限り、大佐にとつてもかなり大事な物のようですし……………それに、もともとは横尾中尉のお父さんの物なんでしょう？」

言いながら横尾の顔を一見し、改めて富野の目を見る。

「言つただろう、私が持つていても宝の持ち腐れだと。それならそこに書かれていること——横尾主任の遺志を活かせそうな者にやつた方が有意義だ。そうだろう？横尾中尉」

「はい。父ならば、それで納得してくれると思います。寧ろ、倉庫の奥で埃を被らせておく方が怒られそうですし……………だから、受け取つてちょうだい」

最後は富野の問い掛けへの応答ではなく、光秋本人に直接投げ掛けてくる横尾の言葉に、光秋は先程までの嬉しさに加えて、なんともいえない重圧感のようなものを感じる。

「……………はいっ」

それを振り払う様に腹に力を込め、富野と横尾の顔を見据えてはつきりと応じると、茶封筒を左脇にしつかりと抱える。

と、ゴーレムの方から福山と、頭部全体を覆う程の大きさのヘルメットを抱えたデ・パルマと関が歩み寄ってくる。

「よう、仮想敵！お勤めご苦労さん」

「あ、はい…………」

右手を挙げながら言ってくるデ・パルマに、光秋は改めて模擬戦の結果を思い出し、気まずそうに応じながら福山に視線を向ける。

その横では、デ・パルマが富野に声を掛ける。

「炎の貴公子殿も、ご足労いただきました。整理戦争の英雄にお目に掛かれるとは光栄です」

「こちらこそ。なかなか面白いものを見せていただきました。実機が完成してから3カ月と経っていないと聞いていましたが、見事なものです」

「御褒めにあずかり恐悦至極…………でもって、お前とは久しぶりだな、横尾。相変わらず美

人だな」

「こちらこそ、よくも悪くも相変わらずでなによりですデ・パルマ教官。関くんも久しぶり。大変ね、まさか教官のお守役になるなんて」

「ホントだよ。いつセクハラで更迭されるんじゃないかってひやひやで」

「お前らな。もうちよつと恩師を敬えよなあ……」

横尾と関も加わって、社交辞令と和氣藹々織り交ぜて語り合う傍ら、光秋は福山に歩み寄り、重く感じる口をどうにか開く。

「福山主任……その、すみませんでした。あんな一方的な負け方をしてしまつて……僕では、DDシリーズを演じられませんでした……」

言いながら、深々と頭を下げる。

「……確かに、僕の期待には届かなかった」

「……」

感情の読み取れない表情で告げる福山の言葉を、光秋は黙って聞く。

「ただ、模擬戦である以上、条件を満たすことで勝敗が決まるのは必然であり、対DDシリーズ——もとい、対人型兵器戦を想定したものとしては、条件設定が甘かったところもある。今回の件の反省を踏まえて、追々工夫していこう」

「はい……」——でもそれって、『条件が同じ——ないしは近い——ならこの程度』っ

てことなんだよなあ……—

その理解は、ノートの中で大いに持ち直していた光秋の気分を再度沈めるのに充分過ぎた。

そこに、デ・パルマたちとの会話から抜けた富野が加わってくる。

「落ち込んでいるようだな」

「そりゃあ、機体の性能とか、実戦経験とか、他にも僕の方がいい条件が揃っていて、その上で負けたとなれば……」

「まあな。しかしそれを言ったら、君は1年程前の模擬戦でも負けていたのだから」

「1年前……?」

「飛行起動実験の時だ」

「……………あ」

言われて光秋は、タツカー中尉らと初めて会った頃を思い出す。タツカー機の撃ったミサイルが直撃確定だったため、心の中で撃墜判定の覚悟をしたことを。

「サン教の乱入で有耶無耶になっちゃったが、何事もなく進行していれば間違いなく君は負けていた。今日はそうした結果が、はつきり出たということだ」

「……………そう、ですね……………」

富野の言葉に、光秋はそれだけ言うので精一杯になる。

「『条件を揃えられれば弱い』っていうのは、その時からかもな。考えてみれば、一番『同じモノ』というべきDDシリーズとだつて、終始一人つきりで戦つて勝つたことなんてない。いつも横から誰かしらがフォローしてくれた……………」

そこまで考えると、悔いも恥も一周したのか、かえつて清々した気持ちになる。

ちようど教え子たちとの談義も落ち着いたのか、デ・パルマも話に加わってくる。

「しつかし話には聞いてたが、やっぱり『白い犬』つて名前を取るだけはあるな。完全な自由飛行とスピードには冷や冷やしたぞ」

「いえ、僕からすれば、相棒の性能におんぶにだつこしてもらつてるだけです。もつといい所を活かしてやれる使い方をしてやらないと……………こちらこそ、御二人の技能には感服しました。特に終盤、推進器を併用した高高度跳躍には度肝を抜かれました。あれはどちらが?」

「ああ、俺だ。といつてもあれば、燃料喰うわ、着地の時脚に負担が掛かりやすいわで、あんま使えないんだけどな。もつとも、00——お前さんの周りじや『ニコイチ』つて言うのか?——アレ相手じや、多少の無茶もしなきや勝てなかつたからな。関が上手く援護してくれたのもあるし」

「関大尉……………確かにそうですね」

言いながら、関が乗る02に注意を割かれたことでデ・パルマに最後の一撃を喰らわ

された流れを思い出し、光秋は静かに納得する。

「さて、反省会もひと通り済んだのなら、そろそろ東京本部に戻る準備をしたいのだが」「だな。報告書の作成なり、収集したデータの分析なりあるし。おい、関」

話の区切りがついたのを見届けた福山の申し出に応じつつ、デ・パルマは関を呼んで撤収の打ち合わせに入る。

それを横に見ながら、光秋は福山に問う。

「帰りは、またさっきのワゴン車に？」

「いや、今は時間が惜しい。車も含め、ここにある機材と人員はレポートで順次本部に送る。君は00で直接向かってくれ」

「わかりました」

「模擬戦の報告書は今日中に僕の所に提出してほしい。帰路はなるべく急いでくれ」

「了解。ただし、安全運転で行かせていただきます」

福山に应じると、光秋は踵を返して荷物を取りにテントへ向かう。

――「報告書」っていうより、「反省文」になりそうな気がするな……………反省かあ……………確かにな。結局、悔いるところがあるなら、そこから改善点を引き出して次に活かすしかないんだよな――

そう思うと自ずと気持ちも楽になり、左腕に掛かる重さがそれを補強してくれる。

1

「インクまで拭いてくださったんですか？ありがとうございます」

起動を確認すると徐々にペダルを踏み込み、ゆっくりと上昇したニコイチを本部へ向

「……そういえば、あのゴーレムってどうやって動かすんだ？機会があれば今度見せて

不意に抱いた好奇心、その内容に、思わず竹田の顔を思い出す。

新たに見えた自分の一面に感慨深さを覚えながら、光秋は少し晴れてきた空を本部へ

向かつて飛ぶ。

84 姫君からの誘い

2月5日土曜日午後6時。

「ふうー……終わったあ………」

今日一日の研修を終え、藤岡主任が部屋から出ていくのを見届けた光秋は、座りっぱなしで固まった体を伸ばしつつ、少々の疲れを含んだ声を漏らす。

と、藤岡と入れ替わる様に曾我が入ってくる。

「研修終わった？」

「はい」

「これからどうする？」

「食堂で夕飯食って帰ります。曾我さんは？」

「アタシもそうしよっかな」

「なら、お付き合ひお願いします」

言いながら、光秋はカバンにノート諸々を仕舞い、椅子の背もたれに掛けていたコートを羽織ってその上からカバンを右肩に斜め掛けすると、曾我と共に食堂へ向かう。

各々注文の品を受け取って空いている席に向かい合って座ると、互いに食事を始め

る。

「そういえば、この間陸軍の部隊と模擬戦やってきたそうじゃない?」

「……ああ、そうですね」

曾我の問いに、光秋は口の中の唐揚げを呑み込むと、4日前のスフィンクスとの一件を思い出しながら答える。

「詳しいことは機密がどうかかってうるさいから敢えて訊かないけど、結果はどうだったの? 勝ったか負けたかくらいは訊いてもいいでしょう?」

「負けました」

我ながら清々しい即答に、つい自分が可笑しく思えてしまう。

「……訊いておいてなんだけど、なにその潔い即答」

案の定、曾我が呆れた顔を浮かべる。

「いや、これでも模擬戦が終わってすぐはいろいろ悔やんだんですよ。でも、周りの人たちの話聞いてたら、くよくよしてても仕方ないって思ってきて。それに、本部に帰ってきてから報告書まとめたり、今日までの研修でバタバタしてたら、流石に割り切れてしまったというか……」

東京本部帰還後から今日までのことを振り返りながら、光秋は自分の単純さに苦笑いを浮かべる。

その時、横から声が掛かる。

「……、相席いいですか？」

「沖一尉！」

声のした方に顔を向けると、光秋は約一カ月ぶりの顔を目にする。

「どうぞ。曾我さんもいいですか？」

「どうぞ」

「ありがとうございます」

曾我の了承を得た光秋の勧めに応じると、沖は光秋の左隣に腰を下ろす。

「ご無沙汰してます。祝賀パーティーの前日以来ですね……あ、そういえば挨拶しに行きませんでしたね。すみません」

「いいんだよ。加藤君は研修で忙しかっただろうし、私もこのところバタバタしてて」

今更ながら思い出して気まずそうに頭を下げる光秋に、沖はどこか疲れた表情を浮かべながらみそ汁をすすする。

「なにワンちゃ——加藤君？局長秘書と知り合いなの？」

「ええ、まあ。いろいろと縁がありました」

意外そうな表情を浮かべて訊いてくる曾我に、光秋は初めて沖に会った時——こちら側に来た最初の夜からのことを思い出しながら答える。

「あ、ただ、僕より前の所属の上官の方がもつと縁あるかな。沖一尉とはときどきメールのやり取りしてますよね——」

「ごほんっ！ごほんっ！」

思い出す中で小田一尉と関わっている場面がいくつも浮かび、なんとなしに話を振ろうとした直前、沖は顔一杯に動揺を浮かべながら激しく咽る。

「大丈夫ですか!？」

「ごほっ……………だ、大丈夫…………ごめんなさいね突然…………」

慌てて身を寄せる光秋に、沖はまだ少し咳き込みながら返す。

「…………ワンちゃんって、変なところでデリカシーないわね」

「？」

その様子を見ながら曾我がなにか言ってくるが、小声な上に沖の咳も重なって、光秋にはよく聞き取れなかった。

と、ズボンのポケットにいられている携帯電話が2回振動する。

——メール…………？——

思いつつ、光秋は画面を開いて送り主を確認する。

——涼さんか？——

画面に映る「鷹野涼」の文字に先日の癖毛茶髪に伊達メガネの顔を想起しながら、そ

のままメールを開く。

『突然の連絡失礼します。明日、よろしければ一緒に出かけませんか?』

—明日か。明日は研修の振り替えあるんだよなあ……………—

思いつつ、ボタンに指を走らせて返信を打つ。

『ごめんなさい。明日は用があります。代わりに来週の日曜、13日でもいいんですか?』

—こんなところかな?—

読み直しておかしな所がないか確認すると、そのまま送信して電話をポケットに戻す。

「メール?誰から?」

「知り合いです。一緒に出かけないかって誘われて」

一連の様子を見ていた曾我の問いに、光秋はキャベツの千切りを載せた白飯を口に運びながら答える。

「へー?加藤君を遊びに誘うような知り合いがいたの?」

「ヒドイな……………」と言いつつも、やっぱそんなふうに見えますかねえ?」

わざとらしく驚いた表情を浮かべる曾我に、光秋も形だけの非難を返しつつ、日頃抱いている自己認識と、周囲の人の自身に対する印象の合致に苦笑を浮かべる。

「知り合いつて、男の人？」

「いいえ、女の人です」

光秋がすぐに答えるや、質問してきた沖は微笑みを浮かべる。

「じゃあ、デートだ。いいなあ」

「え？メールの相手、伊部二尉なの？」

「いいえ、こつちでできた知り合いです。沖一尉も、デートなんて大袈裟なあ。ちよつと遊びに行こうつてだけでしょ？」

沖、曾我双方に応じながら、光秋は沖の表現に訂正を入れる。

が、その一言に沖は笑みを消し、いくらか真剣な眼差しを向けてくる。

「それを『デート』つて言うんじゃないの？男の人と女の人が揃つて遊びに行くのを」

「……そう、なんですかねえ……？」

心なしか力の籠つた沖の言葉に、光秋は反論を浮かべることができず、かといつて沖の言うことを素直に受け入れることもできず、自分の中でもまとまり切らない思いを持って余しながら黙つてしまう。

「小田さんから聞いたけど、京都の同じ隊に仲のいい人がいたんでしょ？今の話だと、その人とは違う人と出かけようつてことみたいだけど、あんまりそういう——て！ごめん！今のは、ちよつと、そのお……………」

「あ、いえ。僕の方こそ、少し考えが足りなかったみたいで……」

沖は他人の私的な部分に踏み込み過ぎたことに、光秋は自分の思慮不足かもしれないなかつた判断に、それぞれ気まずい表情を浮かべる。

「……………ただ、どうしても素直に『デート』って表現を受け入れられないんですよねえ……………」

「不器用者……………」

それでも胸の内に渦巻く気持ちの一端を呟いた光秋に、曾我が少しだけ口を尖らせて言ってくる。

食事を終えると、光秋はコートを羽織つて駅へ向かい、帰宅時間帯ということをやや混み合う車内で吊り革を掴みながら、先程沖たちと交わした会話を振り返ってみる。

——今回の涼さんの誘い、沖一尉が言うように『デート』ってことなんだろうか？……………でもやっぱり、どうしてもそういう感覚を抱けないんだよなあ。法子さんや綾と出かけた時は、多少そんな気にもなったことがあるが、涼さんからの誘いは……………この感覚は強いていうなら、友達と遊びに行く時のそれに近いような……………——

眉間に皺を寄せながら電車に揺られることしばらく、降りる駅名を告げるアナウンス

に一度思考を中断すると、光秋は出入り口前に移動し、扉が開くと共に電車を降りて改札口へ向かう。

——…定期券、買おうかなあ？ ESOへの交通費の申請が面倒そうだが……—

改札機に切符を通しながらぼんやりとそんなことを思うと、冷風に速足になりながら寮を目指す。

自室に着いてコートを脱ぎ、暖房を入れると、再び携帯電話を取り出して先程の返信が来ているのを確認する。

『いいですよ。何時に何処で待ち合わせましょう？』

「1週間ズレてもいいか。助かる」

こちらの都合に合わせてくれた涼に感謝しつつ、光秋は携帯電話の画面を凝視し、改めて沖たちとの会話を考えてみる。

—今はつきり自覚できるのは、法子さんや綾から感じる気持ちを、涼さんからは感じていってことだ。ただ同時に、こうして新しくできた知り合い——友達と遊びに行くつていうのを楽しいと思ってる自分も確かにいる。なにより、涼さんとはなにかと縁があるようだし、それを大事にしたいって気持ちもある——

そこで携帯電話の画面を閉じると、視線を天井へ向ける。

—なら、そういうことでいいんじゃないか？ 少なくとも、友達と遊びに行くのを楽し

んで悪いことはない。だったら、今回はとにかくそうしよう。あまり難しいことは考えず、涼さんとの東京観光を楽しもう――

断じるや、再び携帯電話を開き、細かな予定を詰めていく。

2月12日土曜日午後8時。

パジャマに着替えた光秋は、ベッド下から引き出したコタツに足を入れると、スフィックスとの演習から帰ってきて以降、机の上に置きっ放しになっていた茶封筒を手に取る。

「さて、ようやく落ち着いたし、一度拝見してみるかねっ」

自分でもはしゃいでいるとわかる声で呟くと、茶封筒から横尾主任直筆のノート、その1冊を取り出し、すっかり色あせた表紙を捲る。

「……………横尾中尉のお父さん、随分癖のある字だなあ」

それが1ページ目に目を通して最初に抱いた感想だった。

独特の癖で書かれた文字の数々、特に画数が多い漢字などは、判読できないわけではないものの、滞りなく読めるようになるには若干の慣れを必要とし、加えて箇条書きにも満たないくらい短い、そして近くに書かれていても話が繋がっているわけではなさそ

うな、本当にメモの様な文章の羅列に四苦八苦することとなる。

それでも“次の人”に対処する好奇心を糧に根気よく読み続け、途中からは押し入れから余っているノートを取り出して自分なりに読み取ったことを整理していくこと約2時間。

午後10時を回る頃には、すっかり首が固まっていた。

「……我ながらよくやるわなあ……研修もこれくらい上手くやりくりできればいいんだが……」

固まった首を回していくらか整然とまとめることができた自分のノートを見返しながら、光秋は自分に苦笑を浮かべる。

「まだ1冊目も全て読み通したわけじゃないが……やはりポイントは『先入観に囚われないこと』、かあ……？ 似たようなメモが結構あったなあ……」

自分が書いたノートを読み返しながら、気になった箇所を呟いてみる。

「……先入観、かあ……」

その一言に、普段から注意はしていてもつい偏った見方をしてしまう自分を振り返って、今度はそんな自分の姿に苦笑を浮かべてしまう。

「理屈を解つていてもやってしまう辺り、所詮僕も“今の人”か……」

自虐的にそう呟くと、不意にコタツの上の携帯電話が2回振動する。

画面を開くと、涼からのメールが届いていた。

『明日はよろしくお願いします。おやすみなさい。』

「そういえば明日だったな。出かけるの……」

それを読んで1週間前の約束を思い出すと、その時やり取りしたメールを確認する。

—9時に本部近くの駅集合だよな。8時半……10分くらいには出られるようにしない……—

そう頭の中で算段を立てながら、コタツの上のノート類を閉じて机の上に置き、コタツをベッドの下に戻す。

「なら、そろつと寝ないと」

10時15分を指した携帯電話の時計を見ながら呟くと、立ち上がってトイレへ向かった。

85 ご近所めぐり 前編

2月13日日曜日午前8時20分。

黒いチェック柄の上着に緑のズボン、上に茶色のコートを羽織った光秋は、普段に比べていくらか人が少ない電車に乗り込むと、扉近くの棒を掴む。

直後に走り出した電車の揺れを足を踏ん張ってやり過ごすと、右肩に斜め掛けしたカバン、その中に部屋を出る直前に入れた横尾主任と自分のノートを見やる。

―咄嗟に持ってきてしまったが……でもまあ、機会があれば話のタネにしてみるのも面白い―

そう思いながら30分程揺られると目的の駅に着き、普段の出勤の要領でホームから階段を下りて改札口を通る。

周りを見回して涼の姿がないのを確認すると、そこであることに気付く。

―そういうえば、駅で待ち合わせといったものの、具体的にどの辺りとは決めなかったなあ……ま、改札口の近くで待ってればわかるだろう―

思うや近くの柱を背にして改札口に向かい合い、涼が来るのを待つ。
しかし、

「……………遅いなあ」

左手首の腕時計で時間を確認し、9時5分になっても現れない涼に、光秋は僅かながらの苛立ちと、それ以上の不安を覚える。

―何かあったか？それとも涼さんって時間にルーズなのかな……？―

いくつかの憶測が頭の中を行き交う中、ズボンのポケットから携帯電話を出し、メールを開いて約束の時間と場所が間違っていないことを確認すると、そのまま涼に電話を掛ける。

呼び出し音が数回鳴るや、すぐに電話は繋がる。

（光秋さん？よかった、今連絡しようと思ってたんです。今どちらですか？）

「もう駅だけど？涼さんこそ何処にいるんだ？」

まさに今自分が訊こうとしていたことを安堵を含んだ声で訊いてくる涼に答えつつ、光秋も訊き返す。

（え？私も駅にいますけど……？）

「えっ？」

返ってきた答えに一瞬意表を突かれながらも、すぐに仕切りのない大広間となつている改札口付近を柱の裏側の含めて見回すものの、涼らしき人影を見付けるとはいたらない。

「何処だ？姿が見えないが……」

（出入り口の前ですが……）

「出入り口？」

聞くと光秋は出入り口へ向かい、その端で佇んでいる癖のある茶髪——のウィッグ——に伊達メガネを掛けた涼をようやく見付ける。

「……いいいたかあ……すまない、改札口の前で待ってたんだが、あそこからじゃ見えなくて……」

言いながら切った携帯電話をポケットに戻すと、軽く頭を下げる。

「わ、私もすみません！車で送ってもらって、そのままここに立って待ってたもので……」

「車かあ……」

少々狼狽えながら言ってくる涼に返しながら、光秋は出入り口前を走る2車線道路を見る。

「それは考えてなかったなあ……」——『駅で待ち合わせするから電車で来る』って、そう思ってた——思い込んだ。あるいは、『涼さんも電車で来る』って……これまた『先入観』——『自分の価値基準でものを見た』ってことか？——

昨夜の『自習』から一晩経て早速見付けてしまった自分の『今の自分』な部分、そして

それに起因する失敗に、光秋は氣まずさに頭を搔く。

「……私の方こそ、すみません……そうですよ。『駅で待ち合わせる』っていえば、電車で来るのが普通だし、その上で見付かりやすい所にいる方が……」

「いや、僕の方も考えが足りなくて……というか、今回のすれ違いは、具体的に駅の何処で待ち合わせるかをちゃんと決めてなかったのが原因だろうな。次からはお互い、その辺も氣を付けよう」

意氣消沈に頭を下げる涼に、光秋は頭にやっていた手を下ろしながら、今回の失敗の原因と、そこから得た反省を述べる。

と、

「はい………て、次、ですか……!?!」

同意の言葉を返した数瞬後、涼は先程とは違う狼狽えを見せる。

「そりゃあ、今回一回だけっていうのはね。少なくとも、僕が東京にいる間は定期的にこういう機会を作ってくれるとありがたい。もちろん、互いに都合が合えばだけど………もしかして、涼さんはそういの嫌だったかな?」

そんな涼の様子を見て、光秋はまたも自分の基準でものを言ってしまったかと——その所為で涼を困らせてしまったかと不安になる。

「い、嫌ではありませんっ!」

「……それならいいんだが……」

途端に興奮気味な顔でその不安を否定してくる涼に少し圧倒されながらも、光秋は内心安堵する。

「……じゃあ、とにかく出発しようや。ただでさえ時間押しちやったし、これ以上は時間が勿体ない」

「……ですね」

半ば押し切る様に告げた光秋に頷くと、涼はおもむろに歩き出し、光秋もその右隣に並んでついていく。

「それで、どこ見て回る？」

「光秋さんはどこに行きたいですか？」

「僕かあ……」

質問に質問で返してきた涼に、光秋は少し考える。

「どこに行きたいとか考えてなかったからなあ………それなら、この辺テキストに歩いてみるのもいいかもなあ。正直越してきてから職場か、寮の近くのスーパークラシカ出かけないから、せっかくだし土地勘つけたい。ガイド頼める？」

「……いえ、そのお………」

光秋の質問に、涼は気まずそうな顔を浮かべて足を止める。

「……私もこの辺はあまり詳しくなくて……」

「そうなのか？」

「ESO本部にはときどき行きますが、それにしたって車で送迎してもらいますし、普段出歩く場所からは離れていて……」

「そうか……ならなおのこと、2人で行きたい方向をテキストに決めて進んでみないか？ 最近何度かやったが、けっこう面白いぞ」

「では、それで……」

光秋の提案に涼が応じると、2人は歩みを再開する。

線路を載せた陸橋の下を通る道路に沿って歩くことしばらく。

不意に涼は足を止め、それに倣った光秋はその視線を追って車道を挟んだ反対側に建つ建物を見やる。看板を見るに、ペットショップのようだ。

「あの店が気になるんで？」

「ええまあ、ちよつと……でも、反対側の道ですし……」

光秋の問いに、涼は控えめに答える。

「なら、次の横断歩道で向こう側に渡って、そこから戻って入ってみればいい」

「いえ、そんな……そこまでしなくても」

「いいじゃないか。特に目的地があるわけでもなし。興味持った所に行ってみようや」
「……では」

控えめな、しかし明らかな喜色を浮かべた顔で涼が応じるや、2人は最寄りの横断歩道を渡って駅の方へ戻り、先程見付けた店の前で止まる。

道路側に面した大窓からは、囲の中で戯れる多種多様な仔犬たちの様子が窺える。

——……………サブ——

思い思いに駆けたりじやれたりしている仔犬たちを眺めていると、光秋の脳裏に向こう側の家に残してきた飼い犬の顔が浮かび、胸の辺りに風が過ぎる様な寒さを感じる。

「……どうかしましたか？」

心なしか表情も険しくなっていたらしい。涼が不安そうに訊いてくる。

「もしかして、動物嫌いでした？」

「あ、いや、そうじゃない。寧ろ動物は……特に犬は好きだ。ただ、じやれてる犬見てたら、家の犬のこと思い出しちゃって……」

言いながら、光秋は涼を不安にさせてしまったことにバツの悪さを覚える。

「ああ、犬飼ってるんですか……………寂しくなりましたか？」

「寂しい……そうだろうな。最後に会ったのが去年の3月で、今が2月だから、かれこれ

1年近く会ってないことになる……」——同時に、それは僕がこっちに来て1年近くのことか……………」

遠慮がちに訊く涼に答えながら、光秋は不意に抱いた理解に再び寒いものを感じる。

「……そんなことはいいいんだ。せつかく来たんだ。中に入ってみよう」

それを追いやる様に意識して表情を緩めながら言う、大窓の横のドアを開けて店に入り、涼も後を追う。

天気こそ曇りだったものの、2月の風はまだ肌寒く、店内から吹き付ける緩やかな温風が心地よく感じる。

と、光秋を追い抜いた涼は傍らの囲に歩み寄り、駆け寄ってきた仔犬たちに手を伸ばす。その表情は、ガラス越しに眺めていた時以上に嬉々としたものだ。

「涼さんも犬好きなのか？」

そんな涼を見て先程の寂しさもいくらか緩和すると、光秋はその隣に歩み寄り、一緒に囲の中の仔犬たちを眺めながら問う。

「はい。犬もそうですが、猫なんかも好きですよ」

「猫かあ……」

「……光秋さんは嫌いですか？」

「いや、嫌いって程じゃないが……犬に比べてわかりづらいっていうのかな？ なにかと

気を遣う」

たまに猫に接する時のことを思い出しながら、頭を撫でるのすら遠慮がちな手探りな交流に、我ながら苦笑いが浮かぶ。

—交流といえば……付き合い始まって間もないとはいえ、涼さんのあんな顔初めて見るなあ—

思いつつ、やって来る仔犬たちを次から次へと撫でる涼の綻び切った穏やかな顔に、光秋は祝賀パーティーで初めて会った時に抱いたどこか超然とした美しさとも違う、もっと身近な愛らしさともいうような印象を感じる。

—高貴さだけが涼さんじゃなかったか……—

その理解は、光秋の気持ちをとっても楽にさせる。

ペットショップ内を見て回ることしばらく。

名残惜しむ様子を浮かべた涼を引き連れて外に出た光秋は、腕時計で時刻を確認する。

—10時10分。けっこういたなあ……—「たまにはこういうところもいいもんだな。入ってよかった」

そもそもは涼の興味から入店することになったことを思い出しながら、満ち足りた気分を表すつもりで告げる。

「私も、久しぶりに来ましたけど、やっぱり楽しいです!」

名残惜しみを追いやる様に、涼も喜色を浮かべて応じる。

「……ただ、はしやぎ過ぎちゃったかな?少し疲れました」

「じゃあ、どつかで休憩するか。近くに喫茶店かなにかあるかね……?」

涼に応じると、光秋は周囲を見回しながら歩き出す。

涼も後からついてくるのを確認すると、ふと浮かんだことを訊ねる。

「ところで今、久しぶりにペットショップに来たって言うたが、よく来るんで?」

「たまにです。こんなふうに散策してる時、目に入るとどうしても入りたくなっちゃって」

「分野は違うが、気持ちはなんとなくわかるな……動物が好きなんだな」

涼の返答に、光秋は本屋を見付けるとどうしても入りたくなってしまう自分の姿を重ね、若干の共感を抱く。

その間にも周囲を見回して喫茶店を探していると、また別の疑問が浮かぶ。

「話は変わるが、今日は御付きの人はいないんで?」

「古泉さんですか?車から降りてからは見てませんけど……でも、離れた所で感知はし

てると思います。あの人千里眼ですから」

「そういえばそんなこと言ってたな……でも、四六時中監視されるのって、それはそれで窮屈じゃないか？」

「どうでしょう？確かにそう思うこともありますが……私の場合、小さい頃から常に誰かしらに観られていたようなものですから……たまに鬱陶しいと思うこともありますけど、基本は気にならない、そんなところでしょうか？」

「……そういうもんか」

涼——涼子自身考えを整理しながら述べた返答に、光秋は育ってきた環境の違いを意識させられながら短く応じる。

と、ようやく1件の喫茶店を見付ける。

「あ、あった。とりあえずあそこでもいいかね？」

涼が頷くと、光秋は店のドアを開け、ドアベルの音を伴って中へ入る。

ぼつぼつと席が埋まっている店内、その奥から駆けてきた店員の先導についていくと、2人は長椅子を備えたテーブル席に通される。

テーブルを挟んで向かい合って座り、端に立て掛けてあるメニュー表を広げた時、

「……？」

ふと光秋は視界の端に隣のテーブル席で談笑する男女、その女の人の長髪に目が行っ

てしまう。

―あれって……―

顔付きや髪形の全容はしつかり被ったフードに隠れて見えないものの、その陰から覗く胸の辺りにまで届きそうな長髪は赤毛――というよりも濃いピンク色をしている。

「……光秋さん？」

「―ああ、ごめん……―

首を傾げながら声を掛けた涼に我に返ると、光秋はメニューに目を走らせてすぐに飲みたい物を決める。

「涼さんは決めた？」

「はい」

「じゃあ」

確認すると呼び出しボタンを鳴らし、少ししてやって来た店員にそれぞれ注文を告げる。

店員が立ち去るのに合わせる様に隣の男女も席を立ち、光秋はもう一度だけ女の人、その独特な髪の色を本人に気付かれないよう注意しつつ凝視する。

「……………」

「……………あの人たちがどうかしましたか？」

「あ、いやあ……」

男女が会計を済ませて店を出るちょうどその時、再び声を掛けてきた涼に、光秋は顔の向きを戻しながら応じる。

「あの女の人の髪、自然にはないピンク色だったから、ちよつと物珍しくて、ついな……ちよつとはしたなかつたよな……」

言いながらさつきまでの自分の仕草を振り返って、少し恥じらいを覚える。

「髪？」

「ほら、隣のテーブルに座ってた2人組、フード被ってた人。はみ出た髪が不自然なピンク色でさ、染めてたのかな？」

「……すみません。私その時メニユー見ていて周りに気が向かなくて……」

「いや、謝らなくていいんだよ。僕が勝手に気になっただけで」

そう光秋が返すと、涼は少し表情を曇らせる。

「その女の方が気になった、ですか……」

「変な意味じゃないぞ。ただ独特な髪の色が気になったただだから」

内面を引き写した様に沈んだ声音で呟く涼に、光秋は内心焦りつつも努めて冷静に訂正を入れる。

「……もつとも、髪の色くらいで物珍しいなんて思う辺り、僕もまだまだ田舎者ってこと

なのかな？考えてみればここは東京——日本の州都、それこそいろんな人がいるからな。オシヤレで独特な色に髪を染めてる人がいてもおかしくない、と考えるべきだったか……………」

一方で一連の自分の言動を改めて振り返って、そんな反省を覚える。

と、先程注文した飲み物が運ばれてくる。

光秋は抹茶ラテを、涼はカプチーノをそれぞれ受け取り、薄っすら湯気を上げるそれを各々一口飲む。

——熱っ！——

予想以上の熱さに束の間悶絶し、冷めるまで待った方がいいと判断すると、光秋は先程までの話題を変えようと、横に置いていたカバンに手を入れる。

「そうだ涼さん、ちよつと話は変わるが……」

「はい？」

言いながら、カバンから横尾ノートの1冊と自分のノートを取り出し、それらを涼の前に並べて置く。

「実は先日、知り合いから気になる話を聞いてな…… “次の人” って知ってるかね？」

『次の人』……………」

予想通り、涼は首を傾げる。

「地球合衆国という新しい時代に合わせた人の在り様といったところなんだが、それについて個人的に考察してた人がいて、先日その研究ノートを譲ってもらったんだが……」

やや興奮気味にそこまで語ると、光秋はメガネのレンズ越しに遠い目をした涼を認める。

「……ごめん。いきなりこんなこと聞かされても困るよな」

それを見て自分の世界に入り過ぎていたこと、涼が楽しめない話をしてしまったことを実感し、意気消沈しながらノート2冊を自分の方へ引き寄せる。

「すまない。なかなか面白いアイデアで……といっても僕自身まだ完全に把握し切れてるわけじゃないんだが……とにかくそれを知り合いの一人でも多く共有したいと思って、つい……」

「……あ、謝らないでください！光秋さんが折角楽しそうに話してくださったのに、それをちゃんと聞けなかった私の方が……」

「いや、僕も急ぎ過ぎたんだ。この話はこれでお仕舞にしよう。機会があれば、また別の時に」

涼は涼で罪悪感に顔を歪める傍ら、断じた光秋はノートをカバンに戻し、気分転換に抹茶ラテを慎重に一口飲む。

——いかな。少しはしやぎ過ぎたかも……………そういえば…………—
カップを置いて自己反省しつつ、光秋はふとあることを思い出す。

「涼さんって、大学生なんだっけ？」

「え？あ、はい」

「学科は？何の勉強してる？」

「民俗学を」

「ほお？また面白そうな分野だなあ」

涼の返答に、光秋は好奇心が刺激されるのを自覚しながら応じる。

「具体的にどんなことを学ぶんだ？」

「そうですね……………現在、私たちが当たり前に感じている習慣や風俗といったもの、その起源を伝承を頼りに探っていく……………こんなところでしょいか？」

「習慣の起源ねえ……………またすごそうな分野に飛び込んだけど、なんかきっかけってたのか？」

「いえ、きっかけという程明確なものは……………ただ、小さい頃からそういう話に興味があつて、そうした興味から学びに行つた、そんな感じですよ」

おそらくは入学する前のことを思い出しているのだろう。天井を向いて話す涼に、光秋は多分な共感を覚える。

「興味から、かあ……僕と同じだな」

「……同じ、ですか？」

「僕もさ、ESOに入る前は大学、それも哲学科への入学目指してたんだよ。それこそ涼さんが言うように興味からな」

「哲学、ですか……」

「もつとも、事情で進学を諦めて、こうしてESOで働いてるんだけど」

言いながら、光秋は自虐的な笑みを浮かべる。

「……ちなみに、その事情というのは？」

「悪いな、それは言えない。機密ってやつでね」

「！すみません……」

「謝らなくていいって。当然訊きたくなるよな」

バツの悪い顔を浮かべる涼をなだめながら、その心境を察する。

「でも、こればかりは部外者には話せない。そこはわかってほしい。でないと僕的首が飛ぶかなら」

「……」

「……すまない。今の冗談というか、ふざけて言っただけなんだが……流石に文脈上わかりにくかったよな……」

「いえ……そのお………」

完全にすべった発言に、光秋は続く言葉に詰まってしまい、涼も返事に困ってしまう。

「……………まあその、なんだ」

再び抹茶ラテを飲んで気を取り直すと、光秋は話を再開する。

「つまりだ、興味があることを勉強できるのは楽しいよなつて、そう言いたかったんだよ。僕は事情で大学こそ行き損ねたが、こうして新しい興味を得た」

言いながらカバンを叩いて、中のノートを示す。

「それを勉強するのは楽しい、そしてその楽しさを誰かと——身近な人と共有したかったつて、さっきのはそういうことだったんだ」

「……………そう、ですか……………？」

「そう。だから、あんまり気に病まないで……………て、お仕舞つて言つといてこれもないよなあ……………」

言つてから気付いた自分の言動の矛盾に、光秋は思わず右手を頭に添える。

と、それを見た涼が、どこか力の抜けた笑みを浮かべて言つてくる。

「……………光秋さんつて、意外と不器用ですね」

「意外？ いやいやあ、元から不器用な方だと思うが？ 現に今も会話踏んだり蹴ったりだし」

その微笑みにつられて光秋も頬を緩ませながら、今度は気持ちの切り替えではなく、単純に味わうために抹茶ラテをすする。

——…これだこれ。この甘苦さがいいんだ！——

程よく冷めたこともあってか、四口目にしようやく好みの味に舌を楽しませることができた。

その後は大した会話もなく、それぞれ注文した飲み物で味覚を楽しませ、互いに飲み終えたのを確認すると、光秋と涼は席を立ててレジへ向かう。

「あ、涼さん、ここは僕が持つから」

「そんな、悪いですよ」

「いいんだよ。いつかの本部の時と同じ。僕に格好つけさせてくれ」

遠慮がちに言う涼にやや強く返しながら、光秋は2人分の代金を払い、ドアベルの音を伴って店を出る。

少し歩いた所で止まると、左隣の涼を見る。

「さて、次は何処行くか？」

「……引き続き、この辺りを適当に歩いてみますか？それで面白そうな所があったらそ

ここに行くということだ」

「それがいいか」

応じると、光秋は歩みを再開し、涼もそれに続く。

「ところで涼さん、さっきのカプチーノどうだった？」

「美味しかったですよ。光秋さんは抹茶ラテ頼んでましたが、好きなんですか？」

「抹茶風味は好きだな。そういうチョコ菓子とかけっこう買おうよ」

「そうなんですかあ……」

一連の他愛無い会話を重ねながら、光秋は喫茶店での空回りな会話とつい比べてしま
う。

——ああいう席でこそ、こういうなんでもない、でも楽しい話ができればよかったんだ
よなあ……涼さんは『意外』なんて言ってたが、どっこい、やっぱり不器用じゃないか

……

胸中に軽い悔いを覚えつつ、光秋は面白そうな場所はないかと辺りを見回す。

その時、

「?……あれって……」

車道を挟んだ向かいの歩道に、見覚えのある長い黒髪の少女を捉える。よく見ればそ
の周囲にはこれも見覚えのある赤毛と癖のある茶髪、そして知らない黒髪の少女が2人

おり、5人でまとまって光秋たちと同じ方向に向かっている。

「どうしました？」

「いや、反対側に知り合いがいたような……あの5人でまとまってる子たち」

涼の問いに、もともと視力に自信がない光秋は不安そうに少女たちを指さす。

と、それに合わせるように黒髪の少女がこちらを向き、そのメガネを掛けた顔に、光秋は相手が柿崎だと確信する。

「柿崎さん！」「加藤さん！」

同時に呼び合うや、2人は互いの連れを伴って最寄りの横断歩道へ向かい、先に達した光秋が涼と共に向かいの歩道へ渡る。

「やっぱり、柿崎さんだ」

「奇遇ですね！なにしてるんですか？こんな所で」

近くで改めて確認する光秋に、白いコートを着込んだ柿崎は嬉しそうな顔を浮かべて訊いてくる。

「ん？知り合いと周囲の散策に」

答えつつ、光秋は傍らの涼を示す。

「涼さん、こちら僕の知り合いの……」

「柿崎堇です」

「鷹ノ——鷹野涼です……光秋さん、ちよつと」

互いに自己紹介を交わすと、涼は光秋の左耳に口を寄せる。

「彼女……というより、あの赤毛の子と茶髪の子ですけど、もしかして祝賀パーティーに来てた……？」

「お察しの通り。ただ、特エスの身分はデリケートだから、あまり大きな声で言わないでくれ」

確信の声で訊いてくる涼に、光秋は祝賀パーティー襲撃事件で入間主任が負傷した際に柿崎らと顔を合わせていることを思い出しながら、制す声を返す。

「わかっています。私も『デリケートな身分』ですから」

「『さる家系の親戚筋』という自身の立場を言っているのだろう。涼は自虐的な微笑を浮かべながら応じる。

「……あの、加藤さん？」

「ああすまない。どうした？」

控えめに声を掛けてくる柿崎に応じつつ、光秋は涼から顔を離す。

「えつと……前に好きな人がいるって言っていましたよね？」

「え？……ああ、言ったな。それが？」

遠慮がちな柿崎の質問に、光秋は入間の見舞いに行った後でそんな会話をしたことを

思い出す。

「その……その好きな人って、もしかしてその人ですか？」

さらに歯切れ悪く続けながら、柿崎は涼を見据える。

「……えっ？」

ややあつてその視線に気付くや、涼は軽い動揺を浮かべる。

「いや、違う。涼さんとは仕事というか……とにかく東京に来てから知り合った仲で、なにかと仲よくしてもらってるんだよ」

「……そ、そうなんです。光秋さんにはなにかとよくしていただいて……」

それに対して光秋ははつきりと答え、動揺から立ち直った涼もそれに続く。

「……そう、なんですか……」

そんな2人の答えに、柿崎はどこか安心したような、落胆したような、見ただけでは判断がつかない顔を浮かべる。

と、それまで柿崎の後ろに控えていた光秋が知らない2人の少女の内、長い黒髪を両側に1本ずつ、いわゆるツインテールにまとめた薄い紫色のコートを羽織った子が前に出てくる。

「ねえ董、お話中悪いんだけど、この人たち結局誰？桜たちに訊いても教えてくれないんだけど？」

「ああ、ごめんね此方」^{コナタ}

ツインテールの少女に応じつつ、柿崎は光秋と涼を示す。

「こつちの男の人が加藤さん。ESOの職員さんで、この間本部の方に転属になったんだって」

「加藤光秋といいます。そちらは柿崎さんたちの友達？」

柿崎の紹介に続く形で、光秋は少女に問い掛ける。

「金此方」^{キムコナタ}です。董たちと同じ学校に通ってます。こつちは妹の彼方」^{カナタ}

「……はじめまして。金彼方です……董ちゃんたちと同じクラスです……」

ツインテールの少女——此方の紹介に、姉の陰に隠れる様に立っていたお揃いの薄紫色のコートを着た短い髪の少女——彼方が控えめ、というよりも恥ずかしそうに頭を下げてくる。

「えーつと、お姉さんがコナタさん、妹さんがカナタさんね……もしかして双子？」

「二卵性です」

歳の違いがある姉妹にしては伸長が大して変わらないことから試しに訊いてみた光秋に、此方がすぐに応じる。

「やっぱり。それにキムって……もしかして半島の方の？」

「お父さんがソウル出身で、私たちも生まれはそっちです。5歳の頃にこつちに越して

きました。加藤さんは？さつき董が最近本部に來たつて言つてましたけど？」

「前は京都の方に勤めてた。ちなみに出身は新潟」

「新潟かあ……」

「……………」

互いに質問と返答を交わす光秋と此方の横で、彼方が関心のある、しかし自分からはやり取りに入つていくことができず足踏みしている様子を見せる。

——社交的な姉と、消極的な妹。髪型こそ違えど顔付きはどことなく似ているが、中身は正反対だなあ……もつとも、僕んところこんな感じだった気がするな——

並んだ金姉妹の様子にそんな印象を抱きながら、光秋はふと家のことに思いを馳せる。

と、そこで涼が会話の外に置かれてしまつていることに思い至る。

「あ、それでこちらは、鷹野涼さん。僕の知り合いだ」

「はじめまして」

すぐに紹介する光秋が続いて、涼は金姉妹、そして鉢合わせ以降ずっと離れた所で黙り込んでいる赤毛と茶髪——赤いコートを羽織つた柏崎と灰色のコートを着込んだ北大路に一礼する。

「はじめまして」

「……はじめまして」

「……………」

「……………」

「……あー、それでみんな、何処行こうとしてたんだ？見たところ同じ方向に向かつてたみたいだが？」

それに此方と彼方が返す傍ら、沈黙を通す柏崎と北大路に気まずさを覚えた光秋は、それを誤魔化すことも兼ねて気になったことを訊いてみる。

「この近くのデパートに買い物に。光秋さんたちは？」

「僕等は……強いて言えば散策だな。その辺テキトーに歩いてたんだが……デパートかあ……………」

答えると同時に訊き返した柿崎に、光秋は少し考え、涼を見やる。

「僕等もそこ行くか？ちようど次何処行こうか考えてたところだし」

「いいかもしれませんね。いろいろ見て回れそう」

頷く涼の返事を聞くと、今度は柿崎たちを見やる。

「というわけなんだが、どうだろう？せっかくだし、一緒に行かないか？」

「えっ!？」

「えっ…………？」

少女たちを見て提案する光秋に、柿崎は意表を突かれたとばかりに動揺を浮かべ、涼は予想外な展開に狼狽する。

「あの、光秋さん、一緒に行くって……」

「いや、目的地一緒だし、知り合いとこんな所ではったり会ったんだから、せっかくだし一緒に見て回ろうかなあって。もちろん、柿崎さんたちがよければだけど……」

涼の問いに、光秋は先程考えた通りのことを答えながら、少し不安そうに少女たちを見る。

「私は……光秋さんたちがそう言うなら……みんなは？」

真つ先に柿崎が嬉しそうな顔を浮かべながら答え、他の4人の意見を伺うと、姉の陰から顔を出した彼方がおどおどと言ってくる。

「え、でも……お母さんや先生から、『知らない人について行っちゃいけません』って……」

「いや、彼方、それ本当に知らない人のことだから。加藤さんは董たちの知り合いだから。ただ……」

妹の認識に訂正を入れつつ、此方も表情を曇らせる。

「そうか……」——まあ、そうだよなあ……—

そんな金姉妹の様子に、いくら友達の知り合いとはいえ、今会ったばかりの知らない

大人と行動を共にすることに対する抵抗感を察した光秋は、そのまま同行を断念しようかと考える。

が、そんな考えを遮る様に、柿崎のやや緊迫した声が響く。

「い、いやでも！大人がいればなにかと安心じゃない？此方も出発前言ってたじゃん。『近所のデパートとはいえ、子供だけで大丈夫かな？』って！」

「……いや、確かに言っただけ……」

おそらくは此方にとつてもあまり見ない光景なのだろう。普段の物静かな印象とは裏腹に強く迫ってくる柿崎に、若干気圧されている。

「だったら、ここはついてきてもらった方がいいじゃん！光秋さんもいいんですよね！」
「あ？……ああ……」

さつき真つ先に返答した時の消極的な態度から一転、こちらを引き留めようとする意志が直に伝わってくる様な柿崎の強い眼差しに、光秋も思わず圧倒される。

——柿崎さんって、こんな顔もするんだな……—

「……でも、まあ、確かに董の言うこともね………そういうことなら、私も別にいいけど」

そんな感想を抱く傍ら、此方も逡巡の末に賛成票を投じる。

「……お姉ちゃんがそう言うなら……私も……」

それを聞いて彼方も自分の意見を告げたのを見ると、光秋は未だに黙ったままの柏崎と北大路を見る。

「あー……柏崎さんと北大路さんはどうかな？一緒に رفتてもいいか？」

「3人の返事聞いてなかったの？5人の内もう3人が賛成してるんじや、多数決で一緒に行くしかないでしょ」

「同じく」

「あー……まあな……」

投げやりな柏崎と壁の様な態度の北大路に、光秋はそう返すだけで精一杯になってしまふ。

——どうも転属して最初に会って以来、この2人との関係が難しくなったな。柿崎さんこそ好意的でいてくれるものの……——

そんな2人の様子に、光秋は居心地の悪さと漠然とした不安を覚える。

「……じゃあまあ、行こうか」

「はいっ」

気まずさに耐えかねて告げた光秋に柿崎が喜色を浮かべて応じると、一行はデパートへ向かう。

86 ご近所めぐり 中編

しばらく歩き、デパートが見えてくると、光秋は右に並んで歩く柿崎に目を向けながら、ふと思ったことを問う。

「そういえば柿崎さんたち、デパートの何処に行くつもりだったんだ？」

「今更それ訊くかよ？」

「……」

後ろから柏独り言にしては大きな柏崎の呆れた声が聞こえるものの、自分でもそう思っていた光秋に返す言葉はなく、黙って柿崎たちが答えるのを待つ。

「一応、服を見にです。ただ、他にも見て回ろうって」

「なるほどな」

少女一同を代表する様に答えた此方に応じると、光秋は左に目を向け、歩き出して以降どこか表情が優れない涼を見る。

「涼さん？」

「……あ、はい？」

「さつきから顔色優れないけど、大丈夫か？デパート入ったらどつかで休むか？」

「あ、いえ……具合が悪いわけじゃないんです。心配かけてすみません」

「ならいいんだが……」

努めて笑顔で応じる涼に返すと、光秋は別のことに考えが及ぶ。

「……もしかして、デパート行きたくなかったか？無理強いさせちゃったかね？」

「いいえ。そういうことじゃないんです」

「……なら、いいんだが……」

それっきり黙ってしまった涼にそれ以上追及する気になれず、その間にも一行はデパート入り口の自動ドアをくぐる。

「それで、服売り場って何処なんだ？」

「え？光秋さんこのデパート初めてですか？」

「ああ……あ、いや、この間この辺歩いた時に見掛けた気はする……かな？」

柿崎の問いに、光秋は出勤の道のり確認のために本部を訪れた後、研修で使うノート購入を兼ねて周囲を散策した時のことを思い出しながら、うろ覚えな記憶を頼りに応じる。

その間にも、此方が一行の先頭に進み出る。

「確かこつち。ついてきて」

そう言って歩き出した此方に続く形で、一行は服売り場を目指す。

少し歩いてエスカレーターに乗ると、最後尾に立つ光秋は柏崎たちを挟んで彼方と共に先頭の段に立つ此方を感じの目で見上げる。

「えっと、ツインテールの方がお姉さんの此方さん、だったよな？リーダーシップがあるというのか、あの歳頃にしてはかなりしつかりしてるよなあ」

「そうですね。私が10歳くらいのは時は、どうだったかなあ……………？」

思わず口を突いて出た光秋の此方に対する感想に、左隣の涼が遠くを見る目をしながら返す。

と、光秋たちの1つ前の段に1人で佇む柿崎が顔を向けてくる。

「加藤さん、此方のことは名前で呼ぶんですね」

「ん？ああ、まあ。『金^{キム}さん』だと2人いるからな」

「……………それに、鷹野さんのことも」

「ん？……………ああ……………」

言われて光秋は、今の様なくだけた口調になって以降、涼——涼子のことをずっと「涼さん」と呼んでいたことを改めて自覚する。

同時に、そうしたやり取りから柿崎が言わんとすることを自分なりに察してみる。

「なんだ？柿崎さんも名前で呼んでほしいのか？」

「はい……………！あ、いえ、その……………その方が親しみが湧くというか、仲よくなれそうという

か……………その代わり、私も『光秋さん』って呼んでいいですか？」

消え入りそうな声で答えたかと思うや、柿崎は急に慌てた様子で補足し、やや緊迫した視線で訊いてくる。

「まあ確かにな……あ、でも、今はまだいいが、仕事が本格的に始まって、上下のメリハリをつけなきゃいけなくなつた時——要するに仕事中はダメだぞ。それが守れるなら、好きに呼んでくれていいよ。董さん」

「……………はいっ、光秋さんっ！」

釘を刺しながら了承する光秋に、柿崎——董は満面の笑みを浮かべる。

「おっと、前、前」

「……………」

ちようどそこでエスカレーターの終点に差し掛かり、後ろを見ていた董を注意しつつ光秋も涼と共に段を降りると、先を行く此方に続いて別のエスカレーターに乗り換える。

と、再び左隣についた涼が、いつもの様に明るい、しかし心なしに優れない顔を向けてくる。

「光秋さん、慕われてるんですね」

「かきぎ——董さんにはね……」——問題は残りの2人なんだが……………——

董を挟んでさらに前の段に並んで佇む柏崎と北大路の背中を見やりながら、光秋は再び不安を覚えてしまう。

そうして一行は目的の階に着き、此方先導の下にしばし歩くと、中規模の服屋に入る。「で？どんなの買うんだ？」

多種多様な衣服が所狭しと並ぶ店内を見回しながら、光秋は少女たちに問う。

「春物の服を」

「光秋さんも一緒に選んでくださいよっ」

「僕？僕そういうセンス疎いよ……？」

此方の回答に董がやや高揚した声で続くと、光秋は不安を覚えながらも董に袖を引かれるまま店の奥へついていく。

少し進むと董は光秋を離し、壁伝いのハンガーラックに吊るされた色とりどりの上着を見ていく。

「これなんてどうです？」

「ん？ああ、いいんじゃないか？」

おもむろに取った服を示す董に、光秋は深く考えずに返す。

途端に、董は頬を膨らませる。

「もうっ！ちゃんと考えて言ってください」

「あ、ああ……」

言いながらその服をラックに戻して別の服を選ぶ葦を見、近くで同じ様に服選びに精を出す金姉妹や柏崎、北大路を確認した光秋は、その光景に昔聞きかじったことを思い出す。

「女は男より精神年齢が高いなんていうが、本当みたいだなあ……」

「……なんです？」

「あ、いや、こつちの話」

知らぬ間に出ていた声に反応した葦に応じながら、光秋は少しだけ気持ちを切り替える。

——僕が10歳くらいの頃は、こんなふうにおしゃれに気を遣うなんて考えたこともなかったような……？もちろん人によりけりだろうが。なら、真剣に服を選ぶ葦さんに、僕も少しは真剣に付き合いますかっ——

胸中に小さく気合いを入れると、光秋は葦のそばに歩み寄り、ラックに並んだ服を見渡してみる。

「……………これなんてどうだろうか？」

そう言つて目に付いた一着を手に取り、葦に示す。濃い青色のシャツだ。

「青、ですか？」

「あくまでも僕の感じたことなんだがね。董さんつてこういう色が似合いそうな気がするんだよ。青とか、他の色が混ざった黒系とか」

示された服を眺めながら問う董に応じながら、光秋はシャツを董の前に重ねてみる。

「普段よく話すからつていうのもあるんだろが、僕の中では董さんつて“大人”つて印象なんだよな。ちよつと空回りすることもあるが他人に気を遣えたり、受け答えも整然としてたり。もちろん、入間隊の他の2人や此方さんたちと比べればだがね。で、そんな“大人”な印象を与えてくる董さんには、色合いもデザインもシンプルな服が似合うかなと思つて、とりあえず目に入つたこれを勧めてみたんだが……どうだろうか？」

選んだ理由を思つたままに伝えつつ、最後の方は不安を覚えながら反応を窺うと、董は薄つすらと頬を赤くする。

「……『大人』、ですか……？ 私が……？」

「ああ……あ、もつと正確に言うと、『落ち着きがある』とか、『考え方が筋道立つてるとか、そういうことだったんだが……やっぱり、女の子が着るには地味だったかな？』若干回りの悪い舌で訊いてくる董により具体的な説明を返しながら、薄々感じていたことを声に出した光秋は、そのままシャツをラックに戻そうとする。

が、その手は董によつてすぐに止められる。

「そんなことはありません！ 私も落ち着いてていいかなあつて思つてたので……それ

に、折角光秋さんが選んでくれたんですし……」

「落ち着いてる……そうか。そう言えばよかったな」

最後の方はより赤みを増した顔を逸らしながら告げる董に、光秋はその表現に感心しつつ改めてシャツを示す。

「じゃあどうする？とりあえず試着してみる？サイズは大丈夫だと思うが」

「はいっ！」

即答するや董はシャツを受け取って最寄りの試着室へ向かい、光秋もそれについて行く。

シャツごとカーテンの向こうに消える董を見送ると、光秋は試着室の近くに立つてなんとなくに辺りを見回す。

と、涼がこちらに歩み寄ってくる。

「本当に慕われてますね、光秋さん」

「董さんにはね……」

優れない表情の涼にエスカレーターの時と同じ返答をしつつ、光秋は離れた場所で服選びをしている柏崎と北大路を見る。

「董さんはいいんだよ。今はどうにかして、あの2人からの信用というか、信頼というか、とにかくそういうものを作りたいところなんだが……そうしないと、この先手く

いかないだろうし、僕も居心地悪いし……」

「赤毛の子って、確かパーティーで光秋さんに注意されてた子ですよ?」

「ああ」

「あの時は、彼女が一番光秋さんと親しいように感じましたけど……」

「親しいかどうかはともかく、あの時点で3人の中では一番距離感が近かったのは確かだろうな。ただ、あれからいろいろあつたからさ……それこそこういう時にひと声掛けて、関わるきっかけを作っていくべきなんだろうが、『いろいろ』の所為でその勇気も湧かないし………すまない。完全に愚痴だな」

言ってみて、自身の弱さを涼に押し付けている自分が恥ずかしくなる。

一方、涼は先程よりも心なしか顔色が優れてくる。

「いいえ、いいんですよ。なんというか……嬉しいですつ。私に対して、そういう弱いところを見せてくれるの」

「あ、そう……?」

薄つすら笑みを浮かべて言う涼。その言葉の意図がいまいち理解できない光秋は、首を傾げて返すのがやっとだ。

「……それに」

「?……」

言いながら涼は柏崎と北大路の方を見やり、光秋もその視線を追うと、慌てて顔を逸らす柏崎を認める。

「光秋さんが董さんと服を選んでる間から、何度も顔を向けてたんです。少なくとも、あの子との距離はそんなには開いてないと思いますよ」

「そう、なのか……………」

涼の言葉と、自分で実際に目にした光景から、光秋は自身の中に微かな望みが生じるのを自覚する。

と、試着室のカーテンが開いて、光秋お勧めの青いシャツに着替えた董が現れる。

「どうですか光秋さん？ 似合いますか？」

訊きながら、董はその場で一回転して前後左右からの眺めを見せてくる。

「ああ、やつぱりいいと思う……………」

それを見て自分の見立てが合っていたことに満足感を覚える一方、光秋は体の輪郭がくつきり浮き出る程薄いシャツの厚さに見落としを実感する。

「すまない、これじゃ薄過ぎだな。今は暖房が効いてる所にいるからいいが、今の時期は寒い……………」

言いながら、右手で頭を搔く。

「あ、大丈夫ですよ。さつき此方が言ってたけど、今回買うのは春物の服ですから。これ

くらいでも充分……それにほら、寒ければこの上にもう一枚羽織ればいいんですし」

「……そうだっけな？ならよかった」

少々慌て気味な董の説明を聞いて、光秋は小さく安堵する。

「本当に、よく似合ってますよ」

「……ありがとうございますっ！」

それに続く様にかけられた涼の微笑みの一言に、董は一瞬面喰いながらもハツラツとした表情で応じる。

その時、此方と彼方、柏崎、北大路が試着室の許に集まってくる。

「董はもう決まったの——て、いい物見付けたじゃん！似合ってる」

「ふふっ！光秋さんに選んでもらったの！」

此方の称賛に、董は誇らしげな笑顔で応じる。

その傍らでは、柏崎がそっぽを向きながら、非常に小さな声で呟いていた。

「……いいな」

と、

「?……桜ちゃん？」

「！そ、その……董の服いいなって！」

それを辛うじて聞き取ったらしい彼方に強い語調で慌てて返すと、そのまま光秋を睨

み付ける。

「言つとくけど、あんたの服のセンスを認めただけだからな！それだけだからなっ！勘違いすんなよっ！」

「あ、ああ……」――僕、何も言つてないんだが………

藪から棒に怒られたことに釈然としないものを感じながらも、目くじらを立てた柏崎に、光秋は無暗に刺激しない方がいいと断じて口をつぐむ。

と、シャツ姿の菫を見回していた北大路が、思い出した様に口を開く。

「でも、これだと薄過ぎない？春先用といつても冷える時は冷えるだろうから、これに合う上着もあつた方が……」

「それも、光秋さん選んでくれませんか？」

そんな北大路の言葉を受けて、菫は期待の籠った目を光秋に向けてくる。

「ん？ああ。さつきみたいな要領でよければ……いや、折角集まつたんだ。みんなの意見も取り入れてみたらどうだ？涼さんも」

「……私も、ですか？」

急に話を振られてか、涼は一瞬戸惑った顔を浮かべる。

「ああ。知恵……というより、センス貸してくれ………せんす扇子のセンス、か……フフッ

！」

「フツ……!!」

自分で言った洒落に光秋は自分で吹き出し、涼も口元を隠して笑いを溢す。

「「……………」」

ただ、少女たちの間には、暖房が効いた屋内にも関わらず、外と大差ない冷気が流れる。

「……………早く上着選びませんか?」

鳥肌の浮かんだ両腕を薄手のシャツ越しに撫でながら、堇が渴望する様に告げた。

しばらくすると、それぞれ服の入った紙袋をいくつか提げた少女5人と、光秋と涼が服屋から出てくる。

出入り口から少し離れると、光秋は腕時計を確認する。

—もう12時か。けっこういたもんなあ……—「ちようどお昼だけど、どつかで食事にするか?」

「賛成です」

「そうしましょう」

「お腹なかぺこぺこ……」

光秋の提案に、董、此方、彼方がそれぞれ応じ、涼、柏崎、北大路も首肯を返す。

「そうなる……みんな何が食べたい？」

「あ、このデパート、ファミレスありますからそこ行きましょうよ。こっちです」

さらに訊ねる光秋に、此方は応じながら歩き出して一行を先導する。

「……此方さん、このデパート詳しいようだが、よく来るのか？」

「はい。家の近所ですから。必要な物はだいたいここで揃えますよ。下のスーパーなんかも、お母さんと一緒によく来るし」

「ということは、彼方さんも？」

「……あ、はい……でも私、何処に何があるか今もよくわかんなくて……お姉ちゃんがいないと、すぐ迷子になっちゃって……」

「なるほどな……でも、初めて来る分には道案内が1人いると安心かもな。いろいろあり過ぎて確かに迷子になりそうだ」

此方と彼方に思い付いたことを投げ掛けながら、光秋は同じ階でも多様な店が並ぶ周囲を見回し、少し不安を覚える。

その間にも、一行は此方先導の下にファミレスに着き、店員に案内されて奥に2つ並んだ4人席に通される。

「4人席が2組——8人掛けか。こっちは7人だが、どう分ける？」

言いながら、光秋は一行を見回す。

「……私は、光秋さんと同じ席が……」

「私も、お姉ちゃんと一緒に……」

董と彼方が控えめに申し出ると、此方が柏崎、北大路、涼を見やる。

「じゃあ、私と彼方、董と加藤さんで4人分決定ね。桜たちは？」

「アタシは……それなら此方たちと同じテーブルにしようかな」

「私も」

柏崎に続いて北大路も応じるや、2人はすぐに並んで席に着き、金姉妹もその向かい側に腰を下ろす。

それでテーブル1つが埋まるや、光秋は涼を見やる。

「じゃあ、涼さんは僕と董さんと一緒に……いいかな？」

「はい」

一応の確認を取ると、3人ももう1つのテーブルに座る。壁を右手にして光秋が奥に着き、その左隣に董、テーブルの向こう側に涼という席順だ。ちなみに光秋と董の後ろ、長椅子の背もたれを挟んだ向かいには、金姉妹が座っている。

席が埋まるやそれぞれのテーブルではメニュー表が広げられ、各自注文したい物を選んでいく。

ややあつてテーブル脇のボタンを押し、やって来た店員に各々注文を告げ終えろと、董がふと声をかけてくる。

「そういえば光秋さん、さつきから気になつてたんですけど……そのカバン、なんですか？」

「ん？」

言われて光秋は、右脇と壁の間に挟む様に置いたカバンを見る。

「なにつて、いつも使つてるカバンだが？ こういうの1つ持つてくとなにかと便利なんだよ、両手空いて」

「あ、いえ、そういうことじゃなくて……なにか入つてるんですか？」

「ん？ まあ……一応な……」

董に答へつつ、光秋は涼を見やり、少女たちと合流前の喫茶店でのやり取り、その失敗したという感覚を思い出して少し気まづくなる。

「でもまあ、董さんにいちいち隠すようなことでもないか？……それに、折角持つてきたんだし……」

一方で横尾ノートの話題を共有したいという欲求も思い出し、しばしの逡巡の末、光秋はカバンを開けてノートをテーブルの上に出す。

「先日知り合いからいただいた物で、〃次の人〃 って考え方に關する考察が書かれた

ノートだ」

「“次の人”……この間話してましたよね？」

「ああ、そういうえば董さんにはちよつと話したんだけ……」

言われてスフィックスと模擬戦を行う数日前のやり取りを思い出した光秋は、そつとノートを董の許に寄せると、ほんの僅かに期待を抱きながら問い掛ける。

「よかつたら、ちよつと読んでみるか？」

「いいんですか？」

予想外とでも言いたげに目を丸くする董に、光秋の方がかえつて意表を突かれると同時に、この話題に興味を持つてくれたことへの嬉しさを覚えずにいられなくなる。

「ああ、どうぞ！ あ、汚さないように気を付けてな。こっちは僕なりに読み取ったことを整理したノートだから、参考程度に」

「ありがとうございます！」

自分でも弾んでいるとわかる声で応じつつ、ちよつと注意もすると、董は横尾ノートを開きながらそれに返す。

「……………」

そうしてノートを読むことに集中し出した董を見届けると、光秋は軽い満足感を覚えながら右の大窓越しに外の景色を眺める。

都市部だけあつてか数十階建ての高層ビルが目立つ一方、その合間には集合住宅らしき比較的低身長なビルや一軒家もちらほら確認できる。下を見れば多種多様な自動車が途切れることなく道路を行き交い、その両端に設けられた歩道にも人が絶えず歩いている。

——……ここに人の生活が——暮らしがある、か……僕も含めた——

おもむろにそんな言葉が浮かぶや、何故か年末に伊部母と交わした会話を思い出す。

——『光秋さんがESO、それも実戦部隊にいる理由……端的に言えば、戦う理由はないんですか?』

『……戦う理由……守る為、ですかね。目の前にいる人を、一人でも多く』

『守る為……』

『僕、もともと臆病者で、暴力とか争いごととかが昔から苦手だったんです。ちよつとした怪我でもすぐ泣くような子供でした。でも、だからこそ他人の痛みに敏感になったのかな。怪我をした人を見ると、こっちもで痛いと感じて。子供の頃の平和教育なんかも、怪我をして痛いだろうな、そんな痛いことをする戦争嫌だなんて感じて受けてたと思います。だから、ESOに入った今、そうした傷付く人を一人でも減らしたい、その為に精一杯頑張りたい、その為の“力”はもらったから……上手く言えたかわかりませんが、それが僕の戦う理由です。青臭いと笑われるかもしれませんが、自分の気持

ちを正直に表した結果です!』……………」

我ながら鮮明に思い出せた伊部母とのやり取りに懐かしさを抱く一方、胸の中がざわつく感覚を覚える。

—なんだろう? 景色の感想といい、奥さんとの思い出といい……………何か、繋がるような……………」

「……………どうかしましたか?」

「!」

涼の呼び掛けに、光秋はハツとしつつ思考の世界から帰ってくる。

「いや、こうやって街の景色を眺めるのも久しぶりだなあって……………眺めてたら、ついいろいろ考えちゃって……………」

涼に応じつつ、光秋は眉間に皺を寄せて横尾ノートと睨めっこをしている菫を見る。

「菫さん」

「……………あ、はい?」

「やつぱり、ちよつと難しかったかね?」

「いえ、難しいというか……………字がその……………達筆で……………」

「なるほど。『達筆』ときたか」

遠慮がちに告げる菫に、光秋は初めて横尾ノートを読んだ時のことを思い出すと共

に、董なりの表現に少し可笑しくなる。

「わかるわかる。僕も初めて読んだ時、すらすら読めるようになるのに時間掛かったからねあ……………」

何度も頷いて共感の気持ちを述べていると、先程頼んだ料理が順次運ばれてくる。

いくらか掛からず全員分の料理が2つのテーブルに並ぶと、一行はそれぞれ食事を始め、光秋もカツ丼セットに箸をつけた。

87 ご近所めぐり 後編

しばらくして各自が食事を終えたのを確認すると、光秋は後ろのテーブルにも聞こえるくらいの声で呼び掛ける。

「みんな食べ終わったな？じゃあ、ここは僕が持つから、先に出てて」

「いいえ、そういうのは流石に」

間髪入れずに応じると同時に、此方が光秋たちのテーブルまで駆けてくる。

「遠慮しなくていいんだぞ。僕がそうしたいだけなんだし」

「いや、遠慮というか……そういうことしてもらうと、お母さんが後で……」

「……ああ、なるほどな」

気まずい顔を浮かべる此方に、光秋は家族が気を遣うのを心配しているのだと察する。

「確かにそうか……すまない、考えが及ばなかった」

「いいえ。こちらこそ、折角言ってくれたのに……」

「此方さんは本当にしつかりしてるな。でも、そこまで気にすることでもないんだよ。とりあえず金姉妹は自分たちで持つとして、他はどうする？」

「私も自分で払います。他人のお世話にはなりませんから」

確認する光秋に、北大路が真つ先に応じる。

「アタシも……言つとくけど、あんたの財布の心配したわけじゃないからな」

「私も。流石にお昼代は自分で出します」

「……私も」

「わかった」

柏崎、涼、董の返答も得ると、光秋はカバンを掛け直し、一行に混ざつてレジへ向かう。

金姉妹は一度に2人分、残りは自分の分をそれぞれ払うと店を出、少し離れた所にまとまつて立ち止まる。

「さて、これからどうしようか……」

言いながら光秋が一行を見回すと、北大路が口を開く。

「ご飯も食べたんだし、一度家に帰らない？ 彼方ちゃんこの前新しいゲーム買ったつて言つてたよね？ 服置いたらみんなでやらない？」

「え？……あ、うん……」

「家に集合つてこと？ たぶん大丈夫だと思うけど、一度お母さんに訊いてみないと」

「ありがとう、此方ちゃん」

彼方と此方の返答を聞いて北大路が礼を言うや、堇が不満そうな顔を浮かべる。

「此方たちの家なら、光秋さんと涼さん来れないけど？」

「別にいいんじゃない？ 2人共途中で私たちのグループに割り込んできただけなんだし」

——手厳しいなあ……—

絶壁の様な拒絶の意志を隠すつもりもない北大路の直球な言い方に、あながち間違っているわけでもないと思っている光秋は言い返すこともできず、心中に苦笑いを溢す。

「そんな言い方………桜は？これからどうしたいの？」

不満顔をさらに色濃くしながら、堇は柏崎を見やる。

「アタシは………」

言いながら、柏崎は少女たちと光秋を交互に見比べ、そのまま言い淀んでしまう。

「………わかった。じゃあ、今日はここでお別れだ」

それを見て、光秋は自分から少女たちと離れる意志を見せる。

「付き合ってもらってありがとう。帰るにしろ、また出掛けるにしろ、車に気を付けてな。涼さん」

「はい。それでは」

目配せする光秋に心得た様子で頷くと、涼も少女たちに一礼し、光秋先導の下に2人

はその場を離れる。

「悪いな、意見も聞かずに付き合わせちゃって。でも、あのままあそこにおいても気まずいだろうし……」

「気にしないでください。わかってますから。それに北大路さんの言い方に従えば、私はどう転んでも光秋さんについて行くだけですから」

「……ありがとう」

微笑みを浮かべて言ってくれる涼に、光秋は深めに頭を下げる。

と、

「光秋さーん!」

「? 董さん?」

後ろから掛けられた声に足を止めて振り向くと、光秋はこちらに向かってくる董を見る。周囲の人々にぶつからないようスピードには注意を払っているようだが、それでも2人の許に着く頃には若干息が上がっていた。

「どうした? みんなと逸れたか?」

「はー……はー……違います」

真っ先に思い付いたことを問う光秋に、董は荒くなっていた息を整えながら答える。

「その……この後、私も2人と一緒に緒がいいですか?」

「一緒って、董さんだけ？他のみんなは？」

「さつき帰りました。私だけ、もつと2人と一緒にいたくてついてきたんです。それで、いいですか？」

「僕は構わないが……」

心なしか真剣な眼差しで訊いてくる董に、光秋は応じながら涼に意見を求める。

「私もいいですが……董さんはいいんですか？友達と一緒にでなくて？」

「みんないつも会ってるんです。それに明日学校だし、どうしたってまた会います。でも、2人とはなかなか会えないから……その、いい機会だから、もつと一緒にいたいと思つて……」

「……そういうことですか……わかりました」

最後の方はどこか不安そうな顔で続ける董に、涼は何かに納得した様子で呟くと、深く頷いて同意を示す。

「じゃあ、改めて……これからどうする？」

気持ちの切り替えも兼ねてそう問い掛けると、光秋は涼と董を見る。

「とりあえず、デパートの中歩いてみませんか？いろいろお店あるから、見て回ってみましょうよ」

「それがいいか？涼さんは？」

「私もそれで」

董の提案に光秋と涼が同意すると、光秋の左隣に涼、右隣に董という順番で並んで歩みを再開する。

「それにしても……」

「なんです?」

知らぬ間に口から溢した光秋の呟きに、董が顔を向けてくる。

「あ、いや、お昼の時からそうだったんだろうが……見事にメガネ組だけ残ったもんだなあって」

「言われてみれば確かに。面白い偶然ですね」

光秋が素朴な感慨を溢すと、涼は光秋と董の顔を見やり、自身も掛けているメガネを触って、小さな感動を覚える。

「ところで董さん、服の袋持ったままだよな。カバンに入れようか……て、皺んなるか?」

「……じゃあ、お願いします。上手に入ればなんとか……」

ふと気付いた光秋の提案に、董は持っていた紙袋を中身に注意しつつ丸め込み、光秋のカバンに入れる。

と、

「……………涼さん？」

おもむろに足を止めて通路の脇を見つめる涼に声を掛けつつ、光秋はその視線を追ってみる。視線の先にあつたのは、CDショップだ。

「……………入ってみるか？」

涼の様子、なによりも顔に浮かんだ欲求に、光秋は試しにと提案してみる。

「……………いいんですか？」

「もともと見て回ろうって言ってたんだ。一つ入ってみようや。董さんも、とりあえずここでもいいかね？」

「私は何処でも」

「決まりだな」

3人の意見がまると、一行はそのCDショップに入ってみる。

広さこそ大してないものの、店内に並べられた棚の中には多様なジャンルのCDが一杯に詰め込まれている。

「私、こういうところ来るの初めてです」

「僕もだ。音楽なんて殆ど聴かないからなあ……………涼さんは——？」

董の呟きに率直に応じつつ、光秋は涼を見やるものの、その顔には心なしか恍惚としたものが浮かんで見える。

「涼さん？」

「！あ、はいっ。なんです？」

若干強い調子で呼び掛けると、涼は慌てて光秋を見る。

「……もしかして、音楽好きなのか？」

その様子にどこか自分と似通ったものを感じた光秋は、当てずっぽうに訊いてみる。

「ええ、まあ……一応、大学では軽音楽部に所属するくらいには……」

「軽音楽部って……バンドですか？へえ、カッコイイ！」

それに涼は少し照れながら答え、莖は憧れの眼差しを向ける。

「いえ、バンドという程では……確かにそういうグループのカバーを歌ったりしますが

……」

「なるほど……好きなんだな。ちなみに、役職というのか、ポジションというのか、それ

は？」

「ボーカル——歌う人です」

「ほお」

投げ掛けた質問に、まだ照れを残しながらも楽しそうに答える涼に、光秋は音楽——

歌が好きなのだと思ひ知らされる。

「具体的にどんなの聴くんだ？やっぱりバンドとか？」

「それも聴きますけど、流行歌なんかもけっこう聴きますよ。そう、この辺りに並んでいくような……」

光秋の問いに応じつつ、涼は柵の表示を見ながら歩き出し、光秋と董もそれについて行く。

「……………あ、これなんか最近よく聴きますよね?」

そう言つて涼が手に取ったケースに書かれているタイトルに、光秋は見覚えがあった。

「ああ、年末の歌合戦でやってたな。確かにいろんな所で流れてる」

言いながら、伊部家から京都の寮に帰ってきた夜に観たテレビ番組、そこに映つていたグループを思い出す。

「あ、これも流行つてますよね。この前も給食の時間に流れてました」

そう言つてケースを差し出してくる董に、しかし光秋は違う部分に関心してしまう。

「給食か、懐かしいなあ……もう4年くらい縁がないけど」

思わず感慨深く呟いていると、涼も懐かしむ顔を向けてくる。

「離れてみると妙に懐かしくなりますよね。子供の頃は毎日当たり前のように食べていたのに」

「コーヒー牛乳が出る日はなんか盛り上がったよなあ。今じゃ飲みたい時に飲めるけ

ど、それともなんか違うというか……」

「私も、コーヒー牛乳の日はなんかわくわくして学校行ってます」

「ほお。流石現役小学生……と、いかんいかん。つい給食談義で盛り上がってしまった」
 堇に応じながら気を取り直すと、光秋は正面の棚をさっと見回してみる。

「うーん……タイトルを見ても見事に歌詞がわからん曲ばつかだな」

元来歌、というよりも音楽という分野への関心が低いために、我ながら清々しいくらい啞然としてしまう。

「……そういえば光秋さんは、普段はどんな曲聴くんですか？」

「あ、私も知りたいです」

先程の質問を受けてか、訊き返してくる涼に、堇も続く。

「普段そもそも音楽を聴く機会がないからなあ。偶にチャンネル回して興味持った歌番組観たりするけど、プレイヤーなんかを使ってゆっくり聴く習慣はない。そもそもそういう音楽機器持っていないし……代わりといったてはなんだが、本はよく読むよ。この間も何冊か買って、まだ全部読み切れてないのが」

2人の問いに応じつつ、光秋は異動直前に行った伊部姉妹との本屋巡り、その時買ってた今は寮の机の上に積まれている本数冊を思い出す。

—あの積んだ本も追々読まないとなあ。勿体ないし、なによりも読みたいし—

「そう……なんですか……」

頭の中でそんなことを思っていると、涼が心なしか寂しそうな顔で返してくる。

そんなやり取りを挟みつつ、一行は柵の合間を次々と巡っていく。

「あ、これこの間の歌番組に出てたグループですよ」

「どれです？……わあ、懐かしいなあ。私が董さんくらいの歳に流行ってたんですよ」

「へー」

ときどき立ち止まってケースを眺めながらそんな会話を交わす董と涼。そんな2人を見ていると、光秋は内心安堵を覚える。

―北大路さんが言った様に董さんたちのグループに割り込む形になったり、涼さんが元気なかったり、いろいろな気になることはあったが……ひとまず、楽しんでもらえてるようだなによりだ―

微笑みを浮かべた2人を見て、胸の内に薄っすら漂っていた不安が和らいでいくのがわかる。

そうして店内を巡り切り、結局誰も何も買わずに店を出ると、光秋は腕時計を見る。

「1時40分。結構いたなあ……董さん、家ってここから近いのか？」

「えっと……歩いて20分くらい……かな？」

「なら……まだ日が暮れるのも早いからな。遅くとも4時頃には帰ろう。帰り送るよ」

「本当ですかっ!」

光秋の提案に、董は目を輝かせる。

「涼さんもそれでいいかね?」

「はい。私は迎えも来るので、時間はあまり気にしなくても」

「なら、あと約2時間少々、どうするか……………」

涼の確認もとると、光秋は次の行き先を思案する。

「また歩きながら決めませんか? 誰かが気になった所に入るってことで」

「……………やっぱり、それがいいか」

「では、行きましょう」

董の提案に光秋と涼が応じると、3人は再びあてどなく歩き出す。

「……………」

「? すまない、なに?」

右隣を歩く董がなにごとか話し掛けてきたようだが、周囲の音で上手く聞き取れなかった光秋は顔を向けて訊き返す。

「えつ、えつと……………そういえば光秋さん、本好き……………なんですすよね?」

「ん?……………ああ、まあな。暇があればなにかしら読んでるかな」

再度の問い掛けに答えつつ、光秋はCDショップでの会話を思い出す。

「それがどうした？」

「いえ、ちよつと気になって……その、好きなジャンルとかないんですか？」

「特にそういうのはないな。結構いろいろ読むぞ。気になったら読んでみるというか……強いて挙げるなら、SFとホラーかな？この辺はけっこう読んでる気がする」

「SFとホラー………」

「折角ですし、次は書店に行ってみましょうか？」

さらに光秋と董がやり取りを続けていると、涼が横から言ってくる。

「……………そうだな……………次何処行こうかって考えてたところだし……………」

その提案に自分でも気持ちちが昂っていることをわかりつつ、努めて平静に振る舞いながら、光秋は董を見やる。

「……………行きますか？」

「よしっ……………えっと、この辺に地図は……………」

頷く董に思わず弾んだ声を上げてしまった光秋は、その一瞬の様子を誤魔化そうと、位置関係の確認も兼ねてデパート内の地図を求める。

「……………」

その若干挙動不審な様子に、涼と董は傾げた顔を見合わせる。

エスカレーターで上の階に上がり、そこから歩くことしばらく。

デパート内の書店に着いた光秋は、傍らの涼と董に気を配りつつ、逸る気持ちを抑えて店内を見回してみる。

「ここもいい品揃えだな！これは回り甲斐が………」と、董さんと涼さんもいるんだよな――

目に入った2人の顔に落ち着きを取り戻しながら、光秋はそれぞれを見やる。

「それで、どう回ろう？2人共見てみたいコーナーあるか？」

「光秋さんは、普段どの辺りを見るんですか？」

「僕……？」

訊き返してきた董に、光秋は少し考える。

「……重点的に見るのは、小説のコーナーかな？そこを出版社やジャンルを問わず行き来するとうか」

「小説がお好きなんですネ」

答える光秋に、涼が微笑みを浮かべて言ってくる。

「とうか、物語が好きとうかのかな。面白い話なら、それこそ小説以外でもマンガだったりテレビだったりで観るぞ。『面白い』と感じられればそれでいいとうか」

「……全部ではないけど、少しならわかります」

— やっぱり……? —

補足に対して共感を示す涼に、光秋はCDショップでの恍惚とした表情を思い出す。

「それじゃあまずは、小説のコーナーから行ってみますか」

「いいのか?」

訊き返す様な言い方とは裏腹に、光秋の足は董の提案に素直に従う。

涼と董もそれに続くと、3人は出版社ごとに区分けされた棚の間を行き来する。

「……そういえば本で思い出したんだが、董さんの学校って、読書習慣ってあるのか?」

「読書習慣……?」

不意に浮かんできた疑問を訊ねる光秋に、言葉の意味が解らなかつたらしい董は首を傾げる。

「言い方は学校によって違うのかもしれないけど、とにかく意識して本を読もうとする習慣。僕の場合は、高校までであつたかなあ……」

説明を述べつつ、光秋は少し懐かしい気分になる。

「ああ。それならありますよ。桜なんかはいつもメンドーそうにしていますけど」

「柏崎さんだよな? 確かに文学少女って柄でもないか。偏見だけだ」

答えてくれた董に、光秋は冗談混じりに返す。

そうしながらも棚の合間を歩いていると、足を止めた涼が1冊の本を手取る。

「これ……………やつぱりそうだ!」

「どうした?」

裏表をよく確認するや懐かしむ笑みを浮かべる涼に、光秋はその本の表紙を見やる。
『学校の怪異』と題された、見るからにホラーものようだ。

「これ、私たちが董さんくらい……………もつと下だったかな?……………とにかく小さい頃に映画になって、結構流行ってましたよね。私も、流石に映画館には行けませんでしたけど、ビデオ借りて観たことがあります。光秋さんは?」

「あ……………その……………」

楽しそうに話を振ってくる涼に、光秋はどう答えるべきか悩んでしまう。

—おそらく、同世代の共有できる思い出話をしているんだろう。が、残念ながら僕はその話題を共有できない。董さんくらいの歳の頃は向こう側にいたからな、こっちの流行なんてわかるわけない。その本についても今知ったくらいだ……………しかし、当然そんなことをここで言うわけにはいかない……………—

思いつつ、涼と董を横目に見る。

「……………そのさあ……………僕、今でこそこんなんだが、昔は怖い話って苦手でさ、そういうの一切関わりたくないように生きてきたんだよ。だから、こういう話はよくわからないというか

……少なくとも、その映画は観てない」

「……そうですか……………」

笑顔から一転、少し寂しそうな顔を浮かべる涼に、光秋は僅かながら罪悪感とでもいうような気持ちを感じる。

——……超能力の有無以外大きな違いはないと思いますが、こういう思い出した様に出てくる『細かな違い』、共有できない昔話、そういうの、けっこう来るよなあ……………」

思いつつ、罪悪感の様な気持ちの中に、寂しさ——疎外感とでもいう様なものが混ざっているのを感じる。

「董さんは？今の子供たちの間で流行ってる作品って知ってるか？」

そんな気分を紛らわしたいという思いもあってか、光秋は董に問い掛ける。

「えっと……………こういう小説の方はそんなに知らなくて……………マンガならいくつか知ってますけど……………」

「マンガか……………なら、そっちのコーナー行ってみるか？涼さんもどうだ？」

どこか恥ずかしそうに応じる董、その答えを聞いて思い付いた光秋は、2人に確認の視線を向ける。

「マンガか……………面白そうですね。行きますか」

「……いいんですか？この辺もまだ回りかけですけど……？」

すぐに賛成する涼に対して、董は気まずそうに訊いてくる。

「別に、順番決めて回ってるわけじゃないからな。興味が湧いた所に行けばいいだろう」
応じながら、光秋はマンガのコーナーへ向けて歩き出し、涼と董もそれに続く。

「マンガの棚を回るのも久しぶりだなあ……」

出版社ごとに区分けされた棚を眺めながら、光秋はふと思ったことを呟く。

「光秋さんも、マンガとか読むんですか？」

「家にいた頃はそこそこ読んでたかな。仕事に就いてからは買ってなかったが……」

董の問いに応じながら、光秋は棚一杯に並べられたマンガの数々をしげしげと眺める。

「それで？最近はどうなのが人気なんだ？」

「えっと……」

光秋の問いに、董は棚を見回すと、1冊取って示す。

「これなんか私たち——さつきまで一緒にいたみんなの間では人気ですよ」

「……『ヒーロー候補生』、ねえ。ESOを題材にした話か」

タイトルを読み上げると、光秋は董から受け取ったマンガの裏に書かれているあらすじに目を通す。

——……中途半端なレベルの特エス少年が、凄腕の主任の指導を通じて成長していく話か。ESOを舞台設定に使ってるものの、これを読む限りストーリーライン自体は典型的なものみたいだな——

第一印象を胸の中でそのようにまとめると、光秋はそのマンガを棚に戻す。

「なかなか面白そうだな。後で買ってみるか？」

「……………あ、ありがとうございますっ！」

一応の興味を眩くと、董が歓喜の声を上げてくる。

「いや、何故に董さんがお礼を言う？ 君はこのマンガの、あるいはその関係者の回し者か？」

そんな董の様子に内心驚きながら、光秋は冗談のつもりで言ってみる。

「そういうつもりじゃ……………ただ、その……………えっと、自分の好きなものを他の誰かも興味持ってくれると、なんか嬉しいじゃないですか」

「そりやそうだ」

言葉に迷いながらの董の返答に、光秋は深い首肯で応じる。

それからまた少し歩くと、涼が1冊のマンガを手に取る。

「これ……………」

「どうした？」

遠い目でそれを眺めながら呟く涼に、光秋は横から問う。

「いえ、この作品、子供の頃によくテレビで観てて……まだ新しい話が出てるんだと知ったら、ちよつと嬉しいというか、懐かしい気持ちになりました」

言いながら涼が見せてくれたマンガの表紙には、柔らかな線で縁取られた青く丸いキャラクターが描かれている。

「……このマンガ、こつちにもあるんだな……竹田二尉たちの話からクトゥルフ神話はあるようだったし、あり得ないことじゃないか」

自身子供の頃から目に馴染んでいるその青いキャラクターとの意外な所での遭遇に、光秋は妙な関心を覚える。

「私もこのマンガのアニメ観ますよ。涼さんも観てるなんて」

「いえ、最近はそんなに……」

「僕もだな……というか、涼さんもこういう番組観てたんだな」

「それは観ますよ。面白かったし」

葦、光秋の感想に、涼はそれぞれ応じる。

「今も面白いですよ。よかつたら今度観てみてください。金曜の夜です」

「時間も変わらずか……」

「……そうですね。久しぶりに観てみようかな……」

薦める董に、光秋は再び感慨を溢し、涼は思案顔で応じる。その後もしばらく、3人は書店の中を気ままに回っていく。

書店内をひと巡りし、光秋が董に薦められたマンガを購入すると、3人は店を出る。ビニール袋に入ったマンガをカバンに入れると、光秋は腕時計を見る。

「3時か。またけっこういたなあ……予定ではあと1時間だけど、次何処行く?」
「その前に、少し休憩しませんか?どこか軽食が摂れる所で」

2人を見ながら問い掛ける光秋に、涼が若干の疲れを浮かべて応じる。
「……それもそつか。僕も少し疲れたしなあ。董さんもそれでいいか?」

「はい。私もちよつと……」

「じゃあ、近くに喫茶店かなにかないか地図で見ましょう」

光秋、董も疲労感を浮かべて頷くと、涼の先導の下、3人は最寄りのエスカレーターへ向かい、そのそばに描かれている地図で休憩できそうな店を探す。

「……同じ階に喫茶店らしき店があるけど、ここ行ってみるか?」

「そうしましょうか」

「はい」

地図の一点を指さす光秋に涼と董がそれぞれ応じると、3人は位置関係を覚え、その店へ向かう。

少し歩いて店の前に着くと、光秋は入り口横の看板を見る。

「……軽食も摂れるみたいだ。値段もいいし、入ってみるか」

確認の視線に涼と董が頷くと、一行は店に入り、店員の案内に従って奥の4人席に通される。

光秋の左隣に涼が、テーブルを挟んで向かいに董が座ると、光秋は脇に置いてあったメニュー表をテーブル中央に広げる。

「なににする？先選んでくれていいが」

「そうですね……」

促す光秋に、涼はメニュー表を捲ってみる。

「少しお腹も空いたし……よし、決めました」

「じゃあ次、董さん」

言いながら、光秋はメニュー表を回転させて董の許へ寄せる。

が、

「私は後でいいです。それより、光秋さんはなににするんですか？」

「僕か？そうだなあ……」

それを返してきた董の問いに、光秋はひと通りページを捲つてみる。

「そういうやさつきから、甘いものが食べたかったんだよね……抹茶アイスがあるから、これにしようかな」

「抹茶アイスですか……」

答えながら改めてメニュー表を差し出す光秋に、董は呟く様に返す。

「じゃあ、私もそれで」

「ん。全員決まったな」

「はい」

確認の声に涼と董が同時に応じたのを聞くと、光秋はメニュー表をテーブルの脇に戻し、隣に置いてある呼び出しボタンを押す。

やつて来た店員にそれぞれ注文を告げると、自分でも知らない内に歩き疲れていたらしい光秋は、体を椅子に預けながら溜め息を漏らす。

「ふうー……休憩を選んで正解だったかな……」

誰に言うわけでもなく独り呟くと、注文を聴きに来た店員が置いていった水を一口飲む。

と、涼が思い出した様に声を掛けてくる。

「そういえば午前中に入った喫茶店でも、抹茶ラテ頼んでましたよね。本当にお好きな

んですね、抹茶」

「抹茶風味な」

訂正を入れつつ、光秋はその時のことを思い出す。

「……午前中も、ですか……」

「ん？……ああ、董さんたちと合流する少し前にな」

どこか俯き加減で呟く董に返すと、光秋はあることを思い出し、足元に置いたカバンを見やる。

「そういや、ここにいる2人にはあのノート見せたんだよな」

「ノート……ああ、“次の人”の」

「ああ……」

記憶を辿りながらの呟きに、董は下向きだった顔を上げ、涼は喫茶店でのぎこちない会話を思い出してか表情を曇らせる。

「さつきも言ったように、字が独特で大して読めなかったんですけど……結局、“次の人”って何なんですか？」

「……僕も、まだ明確にこうだって言える程じゃないんだがねえ……」

好奇心の目で訊いてくる董に、光秋は返事に困りながらも、富野大佐との会話やこれまでのノート拝読——“自習”の記憶を振り返りつつ、自分でもぎこちないと思いが

ら言葉を紡ぐ。

「初めてその言葉を教えてくれた人によると、『自分の価値基準で物事を判断しないこと』、『洞察力に秀でていること』、『争わないこと』、『こうした性質を備えた、地球合衆国を生きる“新しい人の在り方”を示したもの……らしい。もっともその人自身、このアイデアを考えた人から断片的な情報を聴いて、それを又聞きした僕が大雑把にまとめたものだから、思想としては不完全——未熟も甚だしいんだろうが……で、この説明……の様なもので解ってくれたかね？」

「……………」

なんとなく答えを予想しながら訊ねる光秋に、董と涼は遠い目を返してくる。

「ま、そうだよなあ。こんなんで解る方がすごいよなあ……」

正に予想通りな2人の反応に、つい自嘲気味な呟きが漏れる。

「……すみません。察しが悪くて……」

「いや、気にしないでいい。さっきも言ったように、僕だってまだ明確に語れるだけのものを持ってないんだ。他人に解つてもらうなんて時期尚早だったんだよ」

縮こまる涼に光秋が応じていると、アゴに手を当てて考えていた董が口を開く。

「……『新しい人』っていうと、超能力者についての考えなんですか？」

「いや、それは無い」

その発言を即座に否定すると、直後に先程頼んだ物が運ばれてきたので、光秋は一旦話を切る。

光秋と董の許に器に盛られた抹茶アイスが、涼の前に肉厚な苺が乗ったショートケーキが置かれ、それらを運んできた店員が立ち去ったのを見ると、光秋はスプーンで掬ったアイスを一口舐めて話を再開する。

「うん、この味だな……でだ、超能力者とは違うと言ったが、アイデアを考えた人によると、そもそもノーマルとか超能力者といった括りを打開する目的もあったらしい」

『括りの打開』……?」

「その辺も、『自分の価値基準で物事を判断しない』ってのと同係あるんだろう。僕は『偏見や先入観といったものの克服』と捉えているけど……なんというかな……考え無しに『こうだ』と思ってるものを一度横に退けて、別の角度で改めて見てみるというか……」

涼の呟きにさらなる説明で応じようとするものの、途中で表現に困った光秋は、そのまま押し黙ってしまう。

「……『相手の立場になって考えなさい』ってやつですか? 学校ではときどきそう言われますけど……?」

「……………それが一番簡潔な表現かもな」

遠慮がちに告げてられた董の言葉に、光秋は膝を折る様な気分ですれを認める。自分が考えていることとはいくらかの齟齬があるのは承知しているが、他にいい表現が浮かばない以上そちらを取り入れるしかなく、しかし同時に悔しさを覚えずにいられない。

「……すまない。やつぱり僕自身、まだきちんと語れるだけのものを持ってない……」
胸の中に渦巻く悔しさを呟きという形で漏らすと、アイスをもたひと掬い口に運ぶ。甘苦いはずの抹茶味だが、今回は苦みが少しだけ強く感じる。

「ただ、今までとは違う『新しい人の在り方』を示そうとしていた……それは確かなんだよ……」

せめてもとそれだけは言葉にすると、光秋はアイスの咀嚼に集中する。

「……」

「……」

涼と董も困った様に視線を交わすものの、結局なにをするわけでもなくそれぞれの頼んだ物を口に運ぶ。

と、ややあつて董が控えめに光秋を見やる。

「ホントのこと言うと、光秋さんが言いたかったこと、いまいちよくわかりません……そもそも、『新しい人の在り方』っていうのを考えて、どうなるんです？」

「どうなる、か……」

董の問い掛けに、光秋はスプーンを一旦器に置く。

「正直に言えば、別にこのアイデアをまとめ上げたところでどうなるつてもんでもないだろうな」

「?……どうにもならない……?」

返ってきた答えがあまりに意外だったのか、メガネ越しに目を丸くする董に、光秋はさらに続ける。

「例えば……そう、これが新しい機械——掃除機とか洗濯機とかの研究・開発なら、それは人々の暮らしをより楽なものにできる。病気の研究なら、それまでなかった治療法を確立して、失われていくだけだった命を救う術すべを作れる……でも、今僕がやっているようなこと——一般的には『哲学』なんて呼ばれることは、実はこうした実益的な価値つてまるでないんだよな。『新しい人の在り方』なんてものを示したところで、それで何かが便利になるわけでもなければ、誰かの命を救えるわけでもない、何らかの利益に結び付くわけでもないし、腹も満たされない。寧ろそうした世間一般の考え方から一步退いた所から改めて物事を見直す行為といえるだろう……別の言い方をすれば、正しく『役に立たないこと』だ。少なくともすぐにはな」

そこで一旦口を休め、再びアイスを口に運びながら2人の反応を窺う。

「役に立たないって……なら尚更、何でそんなこと考えるんです? ノートまで取って」

「一番の理由は、そうやって考えること自体が楽しいからだ」

早速訊いてくる輩に、光秋は普段思っているままを答える。

「少し僕の話になるが、あれは高校生くらいだったかあ、昔読んだ本に面白い言葉が載ってたんだよ——『実存^{じっせん}は本質に先立つ』って」

「……………ジツゾン……………?」

「……………どこかで聞いた言葉ですね。確か、実存主義という考えで出てくるんですけどっけ?」

——ああ、よかった。こつちにも似たようなことを考える人はいたんだな。もしくは同じ人がこちら側にいたのか——

聞き慣れない単語に目を点にする輩に対し、涼は古い記憶を辿る様に目を閉じる。その様子に、光秋は話が比較的円滑に進む予感と、若干の好奇心を覚える。

「僕もきちんと勉強したわけじゃないんだがね。それこそ別のテーマを扱っていた本の中に、比較する様にちよつと書かれてただけだから。ただその本の解説によると、サルトルという人が提示した考えで、簡単に言うと、人間っていうのはまず実存——存在して、その上で『本質』——『自分は何であるのか』ってことが決まってくるってことらしい。初めてこの考えに触れた時、僕は大分胸が軽くなつたともいうのかな、『そういう発想もあるんだ!』って、それまでとは違うふうに周りが見えた気がして、凄く面白

かったんだよ。それからかな、こういう……思想っていうか、いろんな考え方に触れたり、今みたい自分で作って——作ろうとしてみたり、そういうことが楽しいと感じるようになったのは」

自分でも声が弾んでいると感じながら語ると、光秋はまたアイスを一口食べる。

「……あと付け加えるとしたら、*“夢”*の為……かな」

『夢』……?」

再三首を傾げる董を横目に見ながら、光秋はさらに続ける。

『傷付く人を一人でも減らしたい』って、この間そんな気持ちを抱く機会が——気持ちをも明確にする機会があったんだよ。『何の為にESOにいるんだ?』って。その時抱いたものに名前を付けるなら、それは『目標』とか『目的意識』とか……*“夢”*っていうんだと思う。*“夢”*を現実にしていくのに、この*“次の人”*って発想は足掛かりになりそう……初めてこの考えに触れた時、そんな直感を抱いたからさ……まあ、いろいろ言っただけ、要は自分の為、それが楽しいから、自分の目指すものに必要な気がするから、役にも立たないことにもの好きに取り組んでるって、そんなもんだろうけど……」

最後の方は自嘲気味に語ると、光秋はまた一口アイスを食べる。

「……………」

それに対して涼も董も何も返さず、涼はショートケーキに、董は抹茶アイスに視線を向けながら、それを黙って食べ続けた。

88 帰路の寄り道

沈黙が続くことしばらく。それぞれあと数口で食べ終わる頃合いになると、光秋は一旦スプーンを置いて腕時計を見る。

「3時45分? いかんな。もうすぐ帰る予定の時間だ」

若干の困惑を含んだ声で呟きながら、涼と董を見やる。

「すまない。話し込んだ所為か、思ったより時間が経つてた。どうする? 帰りの時間延ばすか?」

「私は構いませんが。董さんは?」

「私は……………」

光秋に応じながら訊いてきた涼に、董はしばし考える顔を浮かべる。

「……………いえ、やっぱり予定通りで……………というか、これ食べ終わったら帰りましょう。予定決めた時、光秋さん言つてたじゃないですか。今は暗くなるの早いからって」

「そうだが……………本当にいいのか? 僕と涼さんはまだしも、董さんの行きたい場所には行つてないが?」

「CDショップと本屋さんだけでも充分面白かったですよ……………それに、ちよつと考えた

いこともできたし……」

「考えたいこと？」

「!その、変な意味じゃなくて、その……なんでもないですつ」

「……」

引つ掛かる一言ではあるものの、本人に強く言い切られてしまつては、光秋にはそれ以上追及することはできない。

「とにかく、これ食べ終わつたら帰りましょう。あ、ちゃんと送つてくださいね」

「……ああ、わかつた。涼さんもいいかね？」

「はい」

董と涼、双方の意見を確認すると、光秋はスプーンを持ち直し、残つた抹茶アイスを一気に食べていく。

少しして3人は軽食を終え、コップの水を飲み切つた光秋は2人を見る。

「じゃあ、今度こそここは僕が持つよ」

「え? いいですよ」

「そうそう。悪いです」

「いいんだよ。僕が勝手に格好付けたいだけなんだから。さ、行こ行こ」

涼と董に応じながら伝票を取つて席を立つと、光秋は2人を急かす様にレジへ向か

う。

3人分の代金を払って店を出ると、出入り口近くで邪魔にならないように先に出ていた葦を涼と合流する。

「じゃあ、行くかね」

「はい」

「……はい。お願いします」

葦宅へ向かう号令を告げる光秋に涼が応じ、葦も若干俯きながら返すと、一行はデパートを出て葦先導の下に歩道を歩いていく。

4時を少し回った現在、日は沈み掛け、街灯や周囲の建物から漏れる光が足元を照らしている。

——……日が落ちた所為……もあるが、ずっと暖房が効いた所にいたからかな？デパートに入る前より寒い気がする……？——

頬を叩く冷風に背筋を震わせながら歩いていると、光秋は向かう先に小さな人ばかりを見掛ける。

「何でしょう、あれ？」

「ちよつと見ていきます？」

「だな」

同じ疑問を抱いたらしい董の問い、それを受けた涼の提案に光秋は頷き、3人は人だかりへ歩み寄る。

近付くにつれ、人だかりの奥からギターの旋律と女性の歌声が聞こえてくるようになる。

人だかりの外側に着いた光秋が背伸びをすると、背の高い白色系男性の弾くギターに合わせて歌う黄色系女性の姿を目にする。

「ストリートライブってやつか？実際に見るのは初めてだなあ……」

目の前の光景の感想を呟きながら、左隣で同じ様に背伸びをして2人の歌に聴き入っている様子の涼を見る。

「……聴いていくか？面白そうだし」

「……いい、ですか……？」

自分の提案に遠慮がちに応じながらも、すぐに聴き入る態勢に戻った涼を見届けると、光秋は右隣で人だかりの合間から奥の様子を窺おうとする董に問う。

「董さんも……て、それじゃ見辛いよな。ちよつと失礼」

「え？——！！」

一言断りを入れるや、光秋は董を抱きかかえ、突然のことに董は心臓を跳ね上げる。

「あ、あの、えつと……光秋さん……!？」

「見えるか？もう少し上げた方がいいか？」

董は動揺を乗せた声を掛けるものの、歌と周囲の雑音で上手く聞き取れない光秋は、左腕に腰を掛けさせ、脇から回した右腕で体を固定した董をより高く上げようとする。

「……その……肩車してもらっていいですか？その方が……」

「そうか？じゃあ」

ややあつて落ち着きを取り戻した、しかし僅かに恥じらいを含んだ董の頼みに、光秋はその身を一度降ろし、屈んで首を跨らせた状態でもう一度立ち上がる。

「これならよく見えます！」

「そうか？ならよかった」

頭の上で嬉々とした声で応じる董に、光秋は人一人を乗せたことで変化したバランス感覚に注意しつつ返すと、その間にも流れ続ける歌を聴きながら周囲を見回してみる。

ざつと見たところ、20人はいるだろうか。暗くてはつきりとは判らないものの、殆どは自分たちと同じ20歳前後の日系のようだが、僅かに白色系や浅黒い肌の者、3、40代くらいの者も混ざっている。

と、

「……………？あれって……………」

殆どが黒髪、ごく少数が金髪といった顔ぶれの中、光秋は歌い手2人を挟んだ反対側

に、赤毛というには特異な、濃いピンク色の長髪をフードの陰から伸ばした女性を見付ける。

— やつぱり、昼間喫茶店で見掛けた……？ —

顔を隠す様な服装と、何よりも独特の色をした髪に数時間前の記憶が過るものの、周囲の明かりが心許ないために断定を躊躇してしまう。

—— …… まあ、仮に同じ人だったとしても、こつちが物珍しく感じるだけで、特に用があるわけでもないしな……… —

そんな思いもあつてか、それから特に行動を起こすこともなく、光秋は涼と董と共に初めてのストリートライブに聴き入った。

十数分くらいそうしていただろうか。

何曲か歌い終えた2人組は姿勢を正すと、周囲を囲む観客たちに向かって深々とお辞儀をする。

そのまま踵を返して立ち去っていく者もいるが、多くは開け放たれたギターケースに心ばかりの小銭を入れ、快活な拍手を送っている。

その光景に、周りに混じって拍手をしていた光秋は一旦手を止め、肩の上の董に声を

掛ける。

「董さん、ちよつと降りてもらつていいか」

「……あ、はい」

歌の余韻に浸っていたのか、夢中で手を叩いていた董はハツとして応じると、屈んだ光秋の肩から降りる。

十数分ぶりに肩が軽くなると、光秋は立ち上がりながらポケットから財布を出し、小銭を2枚取り出す。

「これ、あのケースの中に入れてきてくれ。僕と君の分。董さんは……」

言いながら左隣に目を向けると、恍惚とした表情を浮かべた涼が、歌い手2人を眺めて固まっている。

「涼さん?……涼さん?」

「!あ、はい……?」

2度目の呼び掛け、そして肩を揺すつての3度目の呼び掛けでようやく我に返った様子に、光秋はケースを指さす。

「小銭、入れてきますか?」

「……そうですね。じゃあ」

言々と涼も財布を取り出し、小銭を1枚取り出す。

「じゃあ董さん、頼む」

「わかりました。けど、私の分は私が出しますっ」

「そうか？……じゃあ」

やや強い調子で返してきた董に、光秋は小銭1枚を財布に戻し、残った1枚を董に渡すと、涼と一緒に歌い手2人の許に歩み寄っていくその背を見送る。

「……………」

不意に湧いた好奇心から周囲を見回してみるものの、ピンク髪フードの女性の姿はもうない。

——帰ったか……—

特に惜しむわけでもなく、目の前の事実を無感情にそう認識すると、董と涼が戻ってくる。

「すみません。ちよつと話し込んでしまつて」

「構わんよ。随分熱中してたみたいだしな。董さんも」

「はいっ！歌って生で聴くとこんなに楽しいんですね！」

「そりゃよかった」

詫げる涼に応じ、少し高揚した顔で告げる董に頷くと、光秋は気持ちを切り替える。

「さて、じゃあ改めて董さんちに向かうか。大分寒くなつてきたし」

「はい」

2人分の返答が響くと、3人は再び董先導の下に歩き出す。

大通り脇の歩道を行き、入った路地を道なりに進むことしばし。

正面に3階建ての集合住宅らしき建物が見えてくると、董がそれを指さす。

「あれです、私のウチ」

「……マンションか？」

暗がりの中目を凝らしながら、光秋は指さされた建物に観察の目を向ける。外壁に目立った汚れや破損はなく、比較的新しいことがわかる。

「ESOが管理してる寮です」

「寮……か……」

その返答にも寂しいものを感じたものの、声に出すことはなく、光秋は塀の前で涼と共に足を止める。

「じゃあ、今日はこの辺で……と、いかんいかん。忘れるとこだったな」

別れの挨拶を告げようと思ったのも束の間、ハツとした光秋はカバンを開け、中から紙袋を取り出す。

「昼間買った服。うっかりしてたよ」

「！ありがとうございますっ」

董の方も失念していたらしい。驚きを浮かべた顔で差し出された紙袋を受け取ると、深く頭を下げる。

「じゃあ、この辺で。また本部でな」

「今日はとても楽しかったです。御機嫌よう」

「……………はい」

光秋、涼の言葉に心なしか寂しそうに感じると、董は寮の入り口に向かい、光秋たちも来た道を戻っていく。

迎えを頼むためか、コートから携帯電話を取り出した涼を横目に見ながら、光秋は今日のことを董の姿を中心に振り返ってみる。

―服を選んだり、食事をしたり、初めて聴いた歌に感動したり、特エスという前にやっぱり小学生の子供……なんだが、同時にやっぱり特エスなんだよな……―

少し前に見掛けた、「寮」と言った建物に一人で入っていく董の背中に、光秋は切なさを覚える。

―あの子じゃ、あそこに一人暮らしなんだろうな。董さんの家庭事情はよく知らないが、10歳の子が一人暮らし……僕が10歳の頃、そんなこと考えられたか？

……でもって、そんな董さんの上司が僕になるんだよなあ……—

思案の果てに至った現状認識に、光秋は数分前の肩車の時とは質の異なる“重み”が肩に掛かる様な感覚を覚える。

「……どうかしましたか？」

「……あ、いや、なんでも」

重圧感が知らぬ間に顔に出ていたらしい。いつの間にか電話を終えた涼に努めて平静に応じながら、光秋は路地から大通りに出る。

「それより、今の迎えの電話？」

「はい。今朝降りた駅に行っている」と

「じゃあ行くか。僕もあそこから電車乗るし」

話題を変えたいこともあつて涼に確認をとると、光秋は駅へ向かつて歩き出す。

「……そのさ、今日はどうだったかな？」

「どう、と言いますと？」

「いや、2人で騒ぐはずが、いろいろ予定外のことがあったし、董さんの送りにも付き合わせちゃって……て、それは今更か」

言いながら、光秋は気まずさに頭を掻く。

「そうですね……確かにいろいろありました。それこそ小学生のグループと一緒に過ご

すことになるなんて、予想外も予想外です」

「……………」

淡々と語る涼に、返す言葉が思い付かない光秋は口を閉じているしかない。

「当初の予定——といっても、明確に立てていたわけではありませんが、2人で過ごす前提で来た身には、困惑もたくさんありました」

「……………」

「ただ、同時に楽しさもありました」

「……………」

「董さん——10歳近く歳の離れた子とあちこち歩き回って、好きな歌の話題だったり、懐かしいマンガや給食のことを話したり、ストリートライブと一緒に感銘を受けたり……そういう、予想外の楽しさは、光秋さんがあの時みなさんに声を掛けてくれたからあるんだと思います」

「……確か、午後から一緒に周ったのは董さんの意志だったと思うんだが……」

「それにしたって、董さんたちのグループと一緒にいなければ——光秋さんがそうなるようにしてくれなければできませんでした。それに董さんの送りに付き合ったからこそ、いい歌にも巡り合えましたし」

「……………」

「……ありがとう」

その時は良かったものの、時間が経つごとに自分の行動に若干の不安を感じていた光秋にとって、自分のしたことを肯定的に受け止めてくれる涼に他に返す言葉はない。

「そういえば、ライブかなり熱中していたよな。董さんもだが」

「はい！不意にあんない歌を聴けるなんて……加えて嬉しいかったのは、董さんのような若い子にもそれがわかったということですよ！」

「そうか……」

「そうかつて……光秋さんにはわからなかったんですか？あの歌の良さが!？」

「いや、ほら、昼間も話したと思うが、もともと音楽全般にはあんまり興味なかったし……よくわかんないし……」

「知識の問題ではありません。感性とでもいうのでしょうか？とにかくどう感じたかという問題です」

「それもそうなんだろうが……肝心の歌詞もよく聴き取れなかったし……ほら、僕耳そんなよくないから」——ピンク髪の人気がなくなったのもあるんだがな……——

原因の1つを述べながら、光秋はそれ以上の原因と考えることを胸の中に眩く。

「……………それならしょうがないですが……」

そんな返答とは裏腹に、涼は不満気な顔を浮かべる。

そうして駅の前に着くと、道の脇に停まっている車の運転席の窓が開き、涼曰くの
「マネージャー」たる古泉が手招きしてくる。

それを見て、涼は光秋に向き合う。

「光秋さん」

「ん？」

「いろいろありましたが、今日は一日付き合ってください、ありがとうございます。また機会があれば是非」

言いながら、涼は深く頭を下げる。

「そうだな。その時は、董さんも誘うか」

「……そう、ですね……」

光秋がなんとなしに思い付いたことを告げると、涼は不満と嬉しさが混ざった様な、なにかに迷っている様な顔を浮かべる。

「……では、御機嫌よう」

「ああ、また」

ややあつてその顔を引つめると、涼は車の後部席に向かい、光秋の返事を背中に受けながら乗り込む。

窓越しに古泉が一礼すると車は走り出し、角を曲がって見えなくなるまで見送ると、

光秋は構内の出入り口をくぐって券売機へ向かう。

買った切符を改札機に通し、階段を上がって風の吹くホームに佇むことしばし。やって来た電車に乗り込み、ドア近くの席に座ると、膝の上に置いたカバンが目に入る。

—そういうや、マンガ買ったんだよな……30分くらい暇だし、読んでみるか—

思ふやカバンの口を開け、ビニール袋から葦お勧めの一冊、『ヒーロー候補生』を取り出すと、早速表紙を開いて読んでいく。

「……………」

読み始めて数秒で物語の世界に入り込み、意識の殆どを読むことに割きながらページを捲っていく。

「……………」

時間も忘れて読み進め、最初からもう1度読み直すとして、不意に周囲に向けていた僅かばかりの意識が降りる駅名を告げるアナウンスを聞き取り、慌ててマンガをカバンに戻してドアの前に移動する。

少しして電車が停まり、開いたドアからホームに降りると、冷風に押される様に改札口へ向かう。

—予想以上に面白いな！帰ったらもう1回読もつ！……………と、その前に夕飯どうすつかだなあ……………—

改札機をくぐりながらそう思いつつ、光秋はこの近くの飲食店をひと通り思い浮かべてみる。

その時、携帯電話の振動音を聞き取る。

「電話?……法子さん?」

画面に表示された名前に喜んだのも一瞬、すぐに通話ボタンを押して左耳に当てる。

「はい?」

(……………お楽しみもほどほどにね)

「……………あ、はいっ……………すみません……………」

洞窟の奥から聞こえてくる様な仄暗い声に、光秋は反射的に頭を下げる。

それっきり向こうから通話は切れ、規則的に鳴り続ける電子音に、冷風とは異質な寒さを感じる。

—えつと……………今の雰囲気からして綾だよな?…………『お楽しみ』つて?『ほどほど』つて何が!—

十中八九ある程度の怒りを含んでいた一言に、その意図を測りかねる光秋は、夕飯もマンガのことも忘れてしばらく困惑することになる。

89 レールガン

2月14日 月曜日 午前6時。

起床した光秋は朝食のトーストをかじりながら、未だ眠気の残る頭で昨日のことを考えていた。

「綾のあの電話、どういふことだったんだろうな……………」

その時は反射的に謝ってしまったものの、あれから今まで考えてもこれといった意図は解らず、かといってこちらからそれを訊くような度胸もなく、未だ綾の態度に対する疑問が徒に頭の中を回り続ける。

そうしながらも食事を終え、着替え諸々の出勤準備を済ませると、コートの上から力バンを肩に掛けて玄関へ向かう。

「……………これ以上考えてもろくな答えは出そうにないし……………次の機会にそれとなく訊いてみるか—

我ながら思考放棄を自覚する一方、徒に考えごとばかりしているわけにもいかない自分の現状も理解している光秋は、そう思うことで半ば強引にこの懸案を割り切ると、戸締りを確認して東京本部へ向かう。

電話の件を記憶の隅に押しやり、藤岡主任の研修に集中して過ごす午前中。

理解の程度こそ相変わらず不安が残るものの、この1カ月程ですっかり馴染んだ時間の経過過程に身を委ねていると、気付けば昼食の時間となる。

混み合う食堂で掻き込む様に生姜焼き定食を食べ終えた光秋は、すっかり膨れた腹を抱えて研修室に戻つてくると、いつも使っている椅子に腰を下ろす。

「ふー……混んでたなあ……」

少し前までの食堂の様子を思い出し、そんな状態で昼休み中に食事を終えられたことに安堵にも似た気分を抱いていると、上着のポケットに入れた携帯電話が振動する。

——また綾……なわけないか……福山主任？——

唐突な着信に数時間ぶりに電話の件も思い出したのも一瞬、先日のスフィックスとの模擬戦で初めて会ったメガネの青年を思い出しながら、携帯電話を左耳に当てる。

「もしもし？」

（福山だが。今いいだろうか？）

「はい。何です？」

（MB—00用の新装備が完成したので、近い内にそのテストを行いたい。19日が空

いていたと思うのだが」

「ニコ——00の新装備、ですか……19日？ちよつと待ってください」

その一言に興味と不安を同時に抱く自分を意識しつつ、光秋はカバンから手帳を取り出してカレンダーのページを開く。

「土曜日ですね。確かにこの日休みです」

（では、当日は00で直接試験場に来てくれ。後ほど位置をメールしておく）

「わかりました」

応じるや、福山の方から電話は切れ、光秋は携帯電話をポケットに戻す。

「この間ニコイチ用の90ミリ砲を見せてもらって、もう新しい装備か……何だろう？」
改めて興味半分、不安半分の気持ちを意識しつつ、19日の空白に「テスト」とメモしていく。

午後6時。

研修を終えた光秋は、念のため藤岡にテストの件を伝えた後、すっかり馴染んでしまった頭の鈍痛を抱えながら食堂へ向かう。

「……………董さん？」

食堂の出入り口前に見覚えのある人影が佇んでいるのを見て声を掛けるや、学校の制服の上にコートを羽織った董が駆け寄ってくる。

「研修終わったんですか？」

「ああ……董さんは？こんな時間にどうした？検査でもあったのか？」

「いいえ。光秋さんにお願いがあつて」

「僕に？」

「今度の週末、空いてますか？」

「週末？……土曜は用があるが、日曜なら」

「じゃあ日曜日、光秋さんのお家にお邪魔してもいいですか？」

「家に？」

「はい。昨日あれから“次の人”についていろいろ考えたんですけど、それについて光秋さんとまたお話したくて」

「……なるほどな」

唐突な申し出に一時意表を突かれたものの、さらに続いた董の説明に、光秋は魅かれるものを感じる。

「面白そうだな。家ならゆっくり話せるだろうし……わかった、予定しておく」

「ありがとうございますっ！」

今のところ予定がないことを頭の中で確認して頷くと、董が嬉々とした顔で深々とお辞儀する。

「詳しい時間……とかは食べながら話すか。流石にそろそろ何か詰めないと保たない」
「わかりました」

言いながら光秋は腹を擦りながら食堂に入り、董もそれについていく。

券売機の前で食べたい物を選んでいると、光秋はふと抱いた疑問を董に投げ掛ける。

「ところで、本部に來た用事ってこれか？」

「はい。これくらいの時間にここで待つてれば会えると思つて」

「わざわざそれだけのことで来なくても、電話すればいいのに。メールでもいいが」

「最初はそう思つたんですけど……番号もアドレスも知らなかったから……」

「えっ？」

バツが悪そうに董が答えるや、光秋は慌てて携帯電話を取り出して電話帳を確認する。

「……………本當だ。教えたつもりになつてたな……………すまない」

「いいえ、私もうつかりしてて」

互いに気まずそうに頭を下げ合うと、注文を決めた光秋は食券を買い、董も買ったのを見ると受付へ向かう。

「席に着いたら交換しとこう。柏崎さんと北大路さんの方も追々な」
「そうですね」

言いながら、光秋はうどん、董はミートソースの載ったトレーを受け取り、近くのテーブルに向かい合って座る。

「じゃあ、忘れない内に」

「はい」

言うや光秋と董は互いの連絡先を交換し、それぞれ携帯電話をポケットに戻すと、董が思い出した様に訊いてくる。

「そういえば、土曜日は用事があると言ってましたけど、なにがあるんですか？」

「ん？ニコイチの新装備ができたから、そのテストしてくれって」

答えつつ、光秋はうどんを一口する。

「ニコイチ……あの白い一本角のロボット——メガボデイのことですよ？」

「そう。僕の大事な“相棒”にして、ある意味生命線かな？」

「生命線……？」

胸ポケットの中のカプセルを意識しながら少し自虐的に言ってみせる光秋に、董は首を傾げる。

「詳しくは言えないが、アレがあつたからこそ僕はESOで働けてるようなものだから

な。強いて言えば一芸入社だよ。もし今ニコイチが無くなろうもんなら……もしくは
“上”に『価値が無い』と言われようもんなら、少なくとも今の僕はESOにいられな
いだろうな……」

うどんをすすりながら当たり前のことを話す様に言ってみるものの、内心では今まで
漠然と感じていたものが明文化され、自分でそれをやっておきながら不安を覚えずには
いられない。

——『今の』というか……これからもニコイチに関係なくESOにいられるかわからな
いんだけどな……——

加えて今日までの研修の様子を振り返れば、不安は和らぐどころかより強くなり、知
らぬ間に苦い笑みが浮かぶ。

「……………」

そんな光秋を見た所為か、董は居心地の悪そうな顔を浮かべて押し黙ってしまった。

「……すまんすまん。僕のことはいいんだよ。それより、日曜のことだけど」

「あ、はい」

それを見るや、光秋は雰囲気を変えたいものあつて先程の話題を持ち出し、渡り船と
ばかりにそれに乗った董と詳しい予定を詰めていく。

予定を決め、食事を終わると、光秋と董はそれぞれトレイを返して食堂を出る。

「確認するが、当日は董さんが僕の寮近くの駅まで来て、僕が10時にそれを迎えに行く。その後寮に行つて、2人で話し合う。これでいいな？」

「はい。その日はよろしくお願いします」

正面玄関に向かいながら先程決めた予定を確認する光秋に、董は頭を下げながら応じる。

顔を上げると、董は思い出した様に訊いてくる。

「……そういえば、土曜日は装備品のテストに行くんですね？」

「だな」

光秋が応じると、董はしばし考える顔をし、若干迷いを含みながら言ってくる。

「……それ、私も見学することつてできますか？」

「董さんが？ どうだろうな……そもそも、突然どうした？ 董さんもああいうのに興味あるのか？」

「いえ、確かに物珍しい感じはしますが……それよりも、この前入間主任が話してたことが気になつて」

「入間主任？……なんだっけ？」

「ほら、この前光秋さんとお見舞いに行った時、メガボデイと超能力者をセットで使うかもしれないって」

「……ああ」

言われて光秋は、初めて入間の見舞いに行った時の会話を思い出す。

「もしそうなら、私もニコイチが動くところを観て、一緒にやっていく上での感覚を覚えなきゃいけない、その新しい装備が出るなら、私も観ておかなきゃいけないって……そう思ったんですが……」

「……なるほど。言われてみれば確かにな」

態度こそ気弱そうながらも整然と語る菫の姿に舌を巻き、語られた内容を噛み締める
と、光秋は深く頷く。

「少なくとも、今回の人事にそういう部分もあるかもっていうなら、確かに菫さんたちにもこういう機会には顔を出してもらった方がいいかもな。柏崎さんと北大路さん……については今置いておくが……今回についてはそうだな。後で僕から福山主任に——テストの主導者の方に電話して訊いてみるよ。流星に無許可じや不味いだろぅからな。詳しいことは追って連絡する」

「ありがとうございます」

言いながら福山に連絡するタイミングを考える光秋に、菫は再度頭を下げる。

そうして気付けば玄関をくぐって外に出、正門の前まで歩くと、不意に光秋は足を止め、董もそれに倣う。

「そーいや、董さんの寮ってこの辺だよな？最後まで送ろうか？」

「……いいんですか？」

突然の申し出に、董は浮かびそうになる嬉しさを抑えて探る目で訊いてくる。

「まあ、駅に向かう道から少し逸れるが……暗いしな」

「それなら……よろしくお願いします！」

日が落ちて久しい周囲を見回しながら応じる光秋に、董は今度こそ弾んだ声で頼むと、2人は董の寮へ向かう。

2月19日土曜日午前7時半。

早朝の冷気の中、コートを羽織った背広下の肌を粟立たせた光秋は正門前に着くと、近くに董の姿を探す。

「……………まだ来てないか」

周囲を見回していいことを確認すると、正門のそばに佇んで来るのを待ちながら、4日前に福山に董の見学の許可を得た時のことを思い出す。

―思ったよりあっさりOKしてくれたよな、福山主任。一応理由も説明したが……―
思いつつ、入間が推測し、先日の董との会話で思い出したことを電話越しに述べた時
のことを思い出すと、再び董への感心を覚える。

―しっかりと子だとは思っていたが、まさか僕がそのお世話になるとは……僕もも
う少しその辺考えられるようにならんなあ……―

それは自身の至らなさへと転化し、胸の中に自戒を抱かせる。

そんな気持ちを表す様に頭を掻いていると、本舎の方から声が掛かる。

「あ、光秋さん!」

「董さん?来てたのか?」

本舎の方から駆け寄ってくるコートを羽織った董に、寮の方から来ると思っていた光
秋は意表を突かれる。

「すみません、お待たせしました」

「いや、僕も今来たところだが……何で本舎から来たんだ?」

「一応ESOのお仕事ですから、着替えておこうと思つて」

少し息を上げながらも、董は光秋の質問に答えながらコート下の緑服を指さす。

「ああ、そっか………そこも考えてなかったな……」

思っていた矢先の再度の失敗に、光秋は再び頭に手を当ててしまう。

「こういう考えが足りないとか、それこそ『今の人』かね？」

「……えつと……何です？」

「いや、こつちの話だ」

思わず漏れてしまった呟きに、話の前後関係が見えない董は首を傾げるものの、光秋は短く応じて駐車場の中ほどに進み出る。

—なにより、こういうのは次気を付けるしかないんだよな—

そう思つて割り切りながら上着の内ポケットからカプセルを取り出すと、正面に左膝を着いたニコイチを出現させる。

「そこから出すんですか。テレポートの応用かなにかですか？」

「さあな。僕も詳しくは知らないが、そんなとこなんじゃないか？ちよつと待つてて」

掌くらいの小さな物から全長10メートルの大きな物が出てくる、そんな光秋にはすっかり馴染んだ、しかし一般的には充分超常的な光景に若干啞然としながら訊いてくる董に応じると、光秋はリフトを伝つてコクピットに上がる。

認証を済ませてニコイチを起動させ、操縦席を機外に出すと、右手を董の許に差し出す。

「乗つてくれ。それでこつちに上げる」

「はい」

応じると、董は掌に乗ってその中央で体を安定させ、光秋はそれを慎重に上げてコクピットの前に持つてくる。

座席の左側面に移動した董が背もたれに掴まったのを確認すると、光秋は操縦席を機内に下げ、ハッチを閉じてニコイチを立ち上がらせる。

「えー、試験場の位置は……こうだな」

言いながら、携帯電話を開いて福山から送られたメールに書かれている位置情報をパネルに入力し、地図に案内が表示されると、光秋は傍らの董を見やる。

「行くぞ。椅子がなくて悪いが、その辺に座っててくれ」

「わかりました」

返事を聞くとペダルをゆっくりと踏んでニコイチを上昇させ、地図に赤点で示された場所へ向かって飛行する。

「……董さんたちとニコイチに乗る機会が増えるなら、また補助席かなにか作ってもらった方がいいか……テストの後に福山主任に頼んでみるか？」

操縦席の側面に背中を預けて床に座る董を横目に見て、光秋は法子が使っていた折り畳み椅子のことを思い出しながら、少し真面目に検討してみる。

雲の少ない青空をしばらく飛ぶと、目的地たる山間部の試験場が見えてくる。

木の葉が落ちてすっかり寂しくなった山々の合間にひっそりと広がる平地にニコイチを着地させると、光秋は掌に乗せた葦を地面に降ろし、自分もリフトで降りると、ESOのコートを羽織った福山がやって来る。

「福山主任、今日はよろしくお願いします」

「こちらこそ。早速新装備の説明に入りたい。降りてきてもらったところ悪いが、キャノン砲の時のように実物を見せながら行うので、また乗ってください」

「わかりました」

応じえると、光秋は踵を返してリフトへ向かおうとする。

と、

「あ、あのっ!」

「?」

突然の声に振り返ると、葦が緊張した面持ちで福山を見上げているのを見る。

「光秋さ——加藤二曹から紹介があつたと思いますけど、本日見学を許可させていただきますました、特エスの柿崎葦です!よろしくお願いしますっ!!」

心なしか震えた、最後は若干裏返った声で言うや、葦は直立不動の体を直角に折り曲げて深々と頭を下げる。

「よろしく……見学なら、間近で直に観た方がいいだろう。君も00に」

「は、はいっ!」

返事と指示を告げるや福山は振り返って歩き出し、董は逃げる様に光秋の許に駆け寄る。

「……………私、何か変なこと言っちゃいましたか? 今の人、なんか機嫌悪そうでしたけど……」

「そうかな? 僕もまだ付き合い短いから福山主任のことよく知らないけど、いつもと変わらなかつたと思うが?」

不安そうに訊いてくる董に、光秋は先程見たままを答える。

「緊張でそういうふうに見えたんだろう。それよりまたすまないな。僕の方から一言紹介するべきだった……とまあ、そういうのは一旦後だ。早く乗ろう」

数十分ぶりに再び抱いた悔いを隅に押しやりつつリフトでコクピットに上がると、光秋はニコイチを再起動させ、董を乗せて福山の後を追う。

と、

(よお、加藤二曹。新しい装備のテストだつて?)

「? その声はデ・パルマ少佐? どちらです?」

突然通信機から響いてきた聞き覚えのある声に、光秋は半月前に見た白い顔を思い浮

かべながら辺りを見回す。

（こつちだこつち。お前から見て右側）

「右……あ」

通信越しに言われて右を見やると、森の手前に佇んだゴーレムがこちらに左手を振っているのを確認する。

その右腕には銃器型の装備が握られており、90ミリキャノン砲に比べてずっと細身なソレは、遠くから見れば巨人サイズの自動小銃に見えなくもない。

「ソレ、新しい装備……少佐たちもテストですか？」

（ああ。といつても、関は今休憩中だな。口径30ミリのメガボディ用マシンガンだつてよ。数が撃てるのは助かるな）

「はあ……………」

言いながらデ・パルマが掲げて示してくれたソレは、確かに連射に向いた装備のようだ。細長い銃身、照準カメラや持ち手を備えた本体、末広がりの銃床、銃身付け根下に差し込まれた長方形の弾倉と、細部に若干の違いはあってもNPのフラガラッハやZCのヘラクレスが持っていた物とほぼ同じ形をしたソレに、祝賀パーティー襲撃事件のことを思い出した光秋は、寒さとは異質な寒気を覚える。

その時、

（加藤二曹、何をしている）

「すみません、今」

外音スピーカーから響いた急かす様な福山の声に、我に返った光秋は寒気を追いや
る。

「すみません少佐。これで」

（おう。そつちも頑張れよ）

「ありがとうございます」

デ・パルマに一言告げ、意思を拾ったニコイチが人間そのものの挙動で一礼すると、光
秋は歩みを再開する。

「……今通信してきた人、さっきのメガボディに乗ってた人ですよね？」

「ああ」

「お知り合いですか？」

「この間模擬戦やったんだが、その時相手してもらったんだよ。陸軍の新設部隊の指揮
官だつて」

董の質問に答えながらニコイチを歩かせること少し、光秋は目の前に鉄板の上に載つ
た新装備と思しき機材を捉える。

「コレは………拳銃、ですか？」

キャノン砲やマシンガンに比べてずっと小さく、しかし少し奇妙な形状のソレに、光秋は表現に困りながら呟きつつ、手に取って観察の目を注ぐ。

幅広の直方体を中心に、後部下にニコイチ用と一目でわかる引き金を備えた持ち手、前部に細長い砲身、それらでL字状に形成された全体像は、確かに人間用の自動拳銃に近い形をしている。

しかし拳銃として見た場合、砲身がやや長く、弾倉の差し込み口と思しき穴が砲身の付け根に空けられ、加えて他の部分に比べて異様に肥大しているように見える直方体部分——本体に、どうしても違和感を覚えてしまう。

そんな疑問に答える様に、通信越しに福山の声が響く。

（もともとは対高レベルサイコキノ用に開発されていたレールガン、それを00の手持ち火器に転用した物だ）

「レールガン……って、SFなんかに出てくるアレですか？」

言われて光秋は、未来や宇宙を舞台にした作品をいくつか思い浮かべる。

「本当にあるんだ……」

（理論上は実現可能な技術だからな。詳しい説明をする前に、二曹はレールガンについてどの程度知っている？）

「『火薬を使わずに弾を発射できる武器』くらいにしか」

(そうか)

「ちなみに、どうしてそうなるのかも全く知りません」

(わかった……………)

質問に正直に答え、念のため補足も加えると、福山はしばし黙る。

ややあつて、再び通信越しに声が響く。

(ではまずレールガンの原理を説明しよう。日本語では『電磁加速砲』とも訳されるレールガンだが、掻い摘んでいうと、砲身内に電気伝導体でできたレールを2本設置し、そこに同じく電気伝導体でできた弾体を挟む。この状態でレールに電流を流すことによって弾体を加速させ、砲口から撃ち出すというのが大まかな仕組みだ)

「えっと……………つまり、電気を流すことで弾が動く……………」

(そんなところだ)

聞き慣れないいくつかの単語に少し頭を重くしながらも、光秋は電流の流れる2本の棒と、その間を高速で進んでいく弾を想像してどうにか理解しようとする。

(話を本装備に戻すと、今説明したレールを砲身内に、電源たる燃料電池を直方体部分からグリップ部にかけて内蔵してある。見てもらったからわかると思うが、砲身の付け根辺りに弾倉を差し込み、引き金の動きと連動した押し棒で弾体を砲身内へ移動させ、弾体後部に付加した伝導体とレールを接触、電磁加速によって高速で撃ち出す)

「燃料電池ですか……だからこんな独特な形してるのか」

福山の説明に、光秋は所々理解し切れていない箇所があることを自覚しつつも、少なくとも初めて見た時から気になっていたその奇妙な形の理由によりやく合点する。

（さて、説明はこれくらいにして、早速実射してみよう。弾倉を持つてこちらに）

「はい」

言いながら福山は別の方向へ歩き出し、光秋もレールガンの隣に置いてあつた長方形の弾倉を左手に持ち、ニコイチを歩かせてそれについていく。

「……なんか、思ったより凄い物が出てきましたね」

「だな。もつとも、動いてるメガボディとか、他にもいろいろ見た後だと、これくらいななんてことない気もするんだよな」

モニター越しにニコイチの右手に握られたレールガンを見ながら呆然と呟く董に、光秋は一応の共感を覚えてつつも、初めて神モドキや超能力、DDシリーズを見た時のこと、その時の驚きの程度とつい比べてしまう。

その間にも福山の後についてしばらく進み、前方に10メートル四方のコンクリート塊と思しきの設置された場所に案内される。

（弾倉に30ミリ口径の徹甲弾が7発入っている。約2キロ先に設置した的目掛けて撃つてくれ。全弾使い切ってくれて構わない）

「わかりました」

福山の指示に応じると、光秋は左手の弾倉を砲身付け根下に差し込む。

—この状態だと、『刀』って字みたいだな。ちよつと不格好ではあるが—

砲身も含めた長い本体部と、そこから下に向かつて伸びる弾倉と持ち手で形成された全体像についてそんな感想を抱きながら、砲口を的に向け、生身での拳銃の射撃訓練の要領で右手で握った持ち手の下に左手を添える。

（本体後部に燃料電池の起動スイッチがある。それを押すことで砲身への通電が開始される。発砲する時は通常の火器同様引き金を引けばいい）

「はい……これだな」

福山に応じつつ、光秋はレールガンの後部、持ち手との境目辺りに丸い出っ張りを見付け、右手の親指を伸ばしてそれを押してみる。

すぐに微かな振動がニコイチの掌を介して自身の掌にも伝わり、燃料電池が動き出したのだと直感的に理解する。

「そういうば、コレにはレーザーポインターないんですね？」

（構造上無理があつたので、導入を断念した）

「そうですか……」

淡々と告げる福山について苦い顔を浮かべながら、光秋は赤いマーカーが重なった的を

目を細めて凝視する。

——ないものは仕方ないか……………さて、どんなもんか……………——

思いつつ、初めて扱う——しかも今までと原理が異なる——装備に緊張し、それを引き写して心なしに動きがぎこちなくなつたニコイチの右人差し指を引き金に掛ける。

「！」

引き金を引き絞ると砲口から弾丸が放たれ、それは正に瞬時に的へ向かつていく。

引き金を引いてから1秒経つたかどうかという頃に轟音が轟き、外音スピーカー越しにも耳を若干痛めながらそれを聞いた光秋は的の中央部を注視し、表示された拡大映像に深々と突き刺さつた弾丸を見る。

「……………速い……………ですね」

一連の光景に唾然としながら、知らぬ間にそんな感想が漏れる。

先程の福山の説明や、以前触れた創作物で得た知識から、弾速が速いことが特徴の武器であることは予想していたのだが、実際に目にしたそれは正に「瞬間的」といえる程であり、その圧倒的な光景と、的の壊れ具合に、現状を受け止めるのに少し時間が掛かつてしまうのだ。

そんな光秋の心境を知つてか知らずか、語調の変わらない福山の声が通信越しに応じる。

（そうだな。構造上、他の種類の弾も使えなくはないが、レールガンの前提は圧倒的弾速——つまり弾丸の強力な運動エネルギーを以って対象を破壊することだ。開発段階ではそれを利用して、強力な運動エネルギーを一点に集中して高レベルサイコキノの念壁を突破することを試みていた。こうしてメガボディ用の火器に転用してからもそれは変わらない。が……）

「あわよくばDDシリーズの頑丈な装甲も抜けるかもしれない……ということですか」（その通りだ）

これまでのやり取りから予想したことを光秋が告げると、通信越しにも深く頷いていることがわかる福山の声が返ってくる。

——確かに、念壁対策に一点突破も手だとは習ったし、この威力なら真正面からぶつかっても通じる気はする……けど、DDシリーズは流石にどうか……？——

手の中のレールガンと、弾丸が埋まった的を見比べて一方の前提には頷くものの、四方からの集中砲火を受けても、ミサイルの直撃を何度受けても傷を負わなかったツァーングのことを思い出した光秋は、もう一方の前提には疑問を抱く。

と、傍らの董が迷った様子で声を掛けてくる。

「あの、光秋さん……まだ弾残ってますよね？ 福山さん全部使ってくれて……」
「そうだったな」

その一言に脳裏を漂う疑問を隅に押しやると、光秋は再び的に向き直る。

―それについては、次の機会に実際に試してやるまでか。その為にも、今はコイツの感覚を掴むことが大事か―

そう思うことで気持ちを切り替えると、以後はレールガンの発砲感覚に慣れることを意識しながら、1発ごとに丁寧な試射を繰り返していく。

少しして弾倉1つ分を撃ち切り、電源を切ったレールガンを下に向けると、光秋は操縦席を機外に出し、7つの穴が空いた的を注視する。

「……………凄いいんだな……………」

7つとも弾が深々と突き刺さった穴を、次いで右手のレールガンを見て、映像ではない、直に目にした威力に、改めて驚嘆の声を漏らす。

「ですね……………まともに当たったら桜でも危ないかも」

左隣に佇んで呟きに応じた董の言葉に、光秋は柏崎の顔を思い浮かべる。

「福山主任が言ってたように、元は高レベルサイコキノの念壁を突破する為の武器だからな。レベル9の全身全霊の守りがどの程度かは知らないが、柏崎さんに近い董さんがそう言うなら、可能性は大なんだろうな……………」

そう返す一方、光秋の脳裏には再びツァーングとの交戦記憶が過る。

—もつとも、肝心のDDシリーズ相手にはどうか……………至近距離で撃てばいけるか……………?—

不安と検討が頭の中を交錯していると、福山の声が通信から響く。

（全弾撃ち終わったようだな）

「あ、はい」

その声に思考を中断すると、光秋も通信越しに応じる。

（こちらでも観測させてもらったが、発射動作そのものに問題はなさそうだな）

「はい。撃つ要領自体は他のニコ——00用の武器や、人間用の拳銃と大きな違いは感じませんでした……………ただ、感覚とでもいうのかな？撃った時の反動の具合が、やっぱり火薬式と違うような……………欲を言えば、もう少し撃つてその感覚に慣れておきたいですが」

（すまないが、それはまたの機会に頼む。どの道、レールガンに積んだ燃料電池ももう殆どないだろうしな）

「そうなんですか？」

（全体の大きさとの兼ね合いから、7発分の容量が限界だったんだ。だから弾倉1つ分の弾数も7発にしてある）

「なるほど……」

（それに、全弾使用した後の内部の状態も調べたい。ということで、先程レールガンを渡した地点まで戻ってきてくれ）

「了解」

ひと通りのやり取りを終えると、光秋は葦に目配せして操縦席を機内に戻し、指示に従ってレールガンを渡された所にニコイチを歩かせる。

少しして指定された場所に着くと、敷かれたままの鉄板の上にレールガンを置き、歩きながら外していた空の弾倉をその隣に置く。

（よう。そつちも終わったみたいだな）

「デ・パルマ少佐」

通信越しの呼び掛けに振り返ると、右肩にスフィックスのマーク、左肩に01の番号が描かれ、右手にマシンガンを持ったゴーレムが歩み寄ってくる。

ニコイチのそばまで来ると、ゴーレムは両膝を着いて姿勢を低くし、胸部ハッチから出てきたデ・パルマが、下側に開いたハッチ、その先に内蔵されたワイヤーを伸ばして降りてくる。

「董さん、一旦降りるぞ」

「はい……?」

それを見て直接挨拶に行こうと思った光秋は、返事をしながらもいまいちこちらの意図を測りかけている様子の董を掌で地面に降ろし、自分もリフトで降りてデ・パルマの許に歩み寄る。

「その新装備——レールガンだっけ？遠巻きにちよつくら見物させてもらつたが、凄いいもんだな」

「どうも。少佐も、テストお疲れ様です」

被つていたヘルメットを左脇に抱えて話すデ・パルマに、光秋は軽く頭を下げる。

と、デ・パルマの目が光秋の左隣、より正確には光秋の陰に隠れる様にして立つ董に向く。

「で、そのガキは？何でテストに連れて来てるんだ？」

「ああ、紹介が遅れましたね。彼女は——」

「もしかして妹か？メガネくらいしか共通点ないが」

光秋の答えを遮つて、デ・パルマはいかにも当てずっぽうなことを言ってくる。

「い、妹!?……私が……光秋さんの………妹……」

「いえ、違います」

それに対して、董は何故か変に動揺を浮かべ、光秋はすぐに訂正を入れる。

「こちら、東京本部所属の特エス、柿崎董さんです。僕の部下——になる予定の人です。

来月からね」

「ああ、そういうや特務部隊主任の研修受けてんだっけな。で？特エスにしたって何でこんなところにいる？」

「今後、メガボディと超能力の連携が増える機会が予想されるので、その参考にと同行してもらいました。福山主任にも許可はもらってますよ。ほら、董さん」

ひと通りの説明を終えると、光秋は董の背中を叩いて挨拶を促す。

「……『加藤董』………いいかも！」

「？……董さん？」

「ーは、はいっ!？」

さつきより大きな声で呼び掛けると、自分の世界に浸っていた様子の董は緩みつつあった口元を引き締め、若干困惑しながら応じる。

「こちら、陸軍のデ・パルマ少佐。さつきも話したと思うが、先日模擬戦でお世話になった人」

「ロレンツイオ・デ・パルマだ。よろしくなお嬢ちゃん」

「……柿崎董です。はじめまして……」

光秋の紹介に続いて気さくに告げるデ・パルマに対し、董は心なしに硬い表情で応じる。

「……………」

「……あ、あの……………何ですか？」

そんな董にデ・パルマは舐める様な視線を注ぎ、董は余計に緊張する。

「……………」

「……あの、少佐、董さんがどうしましたか？」

それにも構わずアゴに手を当てて注視を続けるにデ・パルマに、流石にただならぬ心配を感じた光秋は慎重に声を掛ける。

と、デ・パルマはおもむろに呟く。

「あと6年……………いや、7年くらいしたら芽が出るか……………」

「……………」

あくまでも真剣な顔で独り告げるデ・パルマに、咄嗟に何を言われたのか解らない光秋と董は、互いに困惑した顔を見合わせる。

その時、若干怒気を含んだ声がスピーカーを通して響き渡る。

（少佐。それ以上は冗談が過ぎますよ？）

声と同時に微かな振動を感じると、光秋は声のした方へ顔を向け、こちらに歩いてくるもう1機のゴーレムを見る。その右肩にはスフィックスのマークが、左肩には02の番号が描かれている。

「その声、関大尉ですか？」

(そう)

光秋の問いに短く応じると、そのゴーレムもニコイチの傍らに両膝を着き、開いたハッチから関がワイヤーを伝って降りてくる。

「すまない加藤君。ウチの指揮官が迷惑を」

「いや、僕というか……」

ヘルメットを取りながら詫びてくる関に、光秋は葦を見やりながら訂正を入れる。

「おいおい、迷惑はないだろう？ 俺は美しい女性を……その素質がありそうな少女を正直に称賛しただけだぜ？」

「怖がつてるじゃないですかっ！」

あつけらかんと言うデ・パルマに、関は先程以上に光秋の陰に隠れてしまった葦を見やりながら怒鳴る。

「へーへー、わかったよ……怖がらせて悪かったな、お嬢ちゃん」

「え？……その………いいえ」

不承不承といった様子で関に返すと、デ・パルマは葦に向かって軽く頭を下げ、葦は意外そうな顔を浮かべて頷き返す。

「……あー、ところで、こうして近くで見るとやっぱり壮観ですね。ゴーレムって」

一連のやり取りで広がってしまった妙な雰囲気、それを変えたいこともあって、光秋はさつきから気になっていたことを言ってみる。

実際、数歩歩けば触れられるくらいの近さに2機揃って膝を着ける全長約10メートルの巨人たち、それらが作り出す光景には奇妙な興奮や好奇心を抱かずにはいられない。

「それを言ったら、00も充分壮観ではないか？」

言いながら、ニコイチの陰から現れた福山も一同の許に歩み寄ってくる。

「それもそうなんですが……」

それに一応の同意を示しつつ、光秋は背後に左膝を着いて待機しているニコイチと、その傍らのゴーレム2機を改めて見比べてみる。

「確かにニコイチ——00もいいデザインをしています。見た目だけでいえば、コッチの方がより洗練されている印象すらある。でも、ゴーレムはゴーレムでいいと思うんですよね。あっちこっち太い体付きだったり、一つ目だったり……そういう、武骨なところが格好いいというか……」

「お、嬉しいこと言ってくれるねえ！」

表現に迷いながらも感じたままを告げる光秋に、デ・パルマが白い歯を見せて応じる。そんな「関係者」の一人の様子を見ると、光秋は思わず言ってしまう。

「よかったら、なんですが………ちよつと乗せてもらつてもいいですか？」

「構わんよ」

「えっ？」

まさかの福山の即答に、一瞬意表を突かれる。デ・パルマに対してさえダメでもとものつもりで言つた分、どうしても嬉しさよりも先に困惑を抱いてしまう。

「……いいんですか？」

「僕としては00を目標にメガボディ開発に挑んでいる。その00の専属パイロットに現状のゴーレムはどう見えるか、意見を求めるのも重要だろう。突発的な申し出なのが少し気に入らないが、いい機会なのかもしれない」

「ありがとうございます！」

相変わらずの淡々とした口調で告げる福山に深々と頭を下げると、光秋はデ・パルマと関を見る。

「そういうことなら、俺の機体を使え」

「ありがとうございます！悪い董さん。少し待つてくれ」

申し出るデ・パルマにもう一度深く頭を下げると、傍らの董に一言告げ、光秋はデ・パルマ機の許へ向かう。

「……気を付けてくださいーい」

その背中に向かって、堇は気遣いの声を掛けた。

90 試乗体験

左肩に01と描かれたゴーレム——デ・パルマ機に駆け寄った光秋は、屈んでいる膝の近くに立ち止まり、デ・パルマ少佐に促されて垂れ下がったワイヤーをおっかなびつくりに掴む。

「このスイッチで上昇な。ハッチまで上がると自動で止まる。あとこれ被つてけ。通信機が内蔵されてる」

「はい」

言われるままに渡されたヘルメットを被り、持ち手に設けられたスイッチを押してワイヤーを上っていく。

「関、ちよつとお前のゴーレム借りるぞ」

下でデ・パルマがそう言う間にワイヤーを上り切ると、光秋は慎重にハッチに足を掛け、転がり込む様にコクピットに入る。

「外から予想はしてたけど、ニコイチに比べてやつぱり狭いな。もつとも、向こうの方が豪華な造りなんだろうが……」

座席に腰を下ろし、それで一杯になってしまふ空間しかないコクピットに独り感想を

溢していると、ゴーレム・タンクに乗り始めた頃の小田一尉が似たようなことを言っていたのを思い出す。

—あの時の一尉も、こんなふうに感じてたのかな？ なまじニコイチの方に先に乗っちゃうとなあ……………

思いながらニコイチの内装を思い浮かべると、光秋はゴーレムのコクピットを見回してみる。

普通の椅子ならば肘掛けに相当する部分には、左右共に大小色とりどりのスイッチが鈴なりに設けられ、その先には操縦桿と思しきレバーが1本ずつ——いずれも先端前部に装備品の引き金らしきスイッチが1つずつ付いている——と、カーナビ程の大きさの小型モニターが1つずつ備えられている。ハッチ手前には左に1つ、右に2つ——計3つのペダルが、左右と真上の壁には大画面のモニターが埋め込まれ、よく見ればハッチ上部には外側に向かって開いているモニターがもう1つある。

今は動力が落ちている所為かどれも灯っておらず、ハッチが開け放たれているためあまり感じないものの、この状態でハッチを閉じてコクピットを密閉した場合、とても窮屈に感じるかもしれない。

—広さといい、この座る感じといい……………感覚的に一番近いのは、トイレの個室かね？ ちようど1人用だし——

目の前の光景と、記憶の中にあるものを照らし合わせてそうまとめると、ハッチの穴からもう1機のゴーレムが顔を覗かせ、同時にヘルメット内のスピーカーからデ・パルマの声が響く。

（どうだ？合軍初のメガボディは？）

「00に比べたらですが、やっぱり狭い印象がありますね……それこそトイレの個室みたい……あつ！」

口が滑ったと思った時にはもう遅く、光秋は恐る恐るデ・パルマのゴーレムを見る。

その視線に気付いたのか、正面のゴーレムは胸の高さを合わせ、ハッチを開いて姿を現したデ・パルマが直接声を掛けてくる。

「トイレの個室、ねえ……？」

「いえ、別に変な意味は！ただ広さといい、狭い場所に一人で座ってる感じといい、一番近いのがそれだったので………」

慌てて弁明していると、デ・パルマは不意に口角を上げてくる。

「怒ってるわけじゃないさ。言われてみればそうかもなと思ってな」

「はあ………」

様子を観る限り本心らしい。投げ掛けられた感想を確かめる様にコクピット内を見回すデ・パルマに、光秋は相槌と共に安堵の息を漏らす。

「ま、それはともかくとして……まずは起動だな。左の白くてデカイスイッチ押してしろ」

「白くてデカイ……あ、これですか？」

デ・パルマの指示に従って辺りを探し、左のレバーの近くにそれらしいスイッチを見付けると、ほんの僅かだが汗ばんだ指でそれを押してみる。

すぐに何処からともなく微かな振動が伝わり、両側と真上、左右の肘掛けに備えられた大小のモニターが灯り、それまでハッチから入ってくる外の光だけが頼りだったコクピット内を一気に照らしていく。

「……………」

数秒前までと比べてずっと見通しがよくなったコクピットに啞然としながら、光秋はより明確になった細部を改めて見回す。

膝掛け周り以外にも所々大小のスイッチが備えられ、3つの大画面モニターにはゴーレムの頭部から捉えたいらしい周囲の映像が映し出されている。

肘掛けの小型モニターの内、左にはゴーレムの概要図を中心に機体の状態——現在は全て異常がないようだ——、装備品の情報——右手にマシンガンを持ち、両腰部にナイフを1本ずつ内蔵していることを図で表している——、電力と燃料の残量が表示されている。右には自機を中心としたレーダー映像が映し出され、正面すぐ近くにもう1機の

ゴーレムと思しき光点が表示されている。

2度目の観察もひと通り済むと、頃合いを見計らったかの様にデ・パルマの声が掛かる。

「よし、起動したな。じゃあ次は立たせてみるか。右側に赤いツマミがあるだろう。それを上に上げろ。あ、シートベルトはちゃんと締めてな」

「はい」

言われて光秋は、両腰部と両肩部から伸ばしたベルト4本を締めて体を座席に固定する。

「赤いツマミ……これですか」

軽く引つ張って締まり具合を確認すると右側に顔を向け、鈴なりになっているスイッチの内、赤いツマミ型のものを見付けると、下になっているそれを上に上げてみる。

すぐに曲がっていたゴーレムの両脚が真っ直ぐに伸び、連動してモニターとハッチから見える視界が数メートル高くなる。

—この高さ、ニコイチではさんざん見慣れているが……慣れない機体からだとちよつと怖いな—

約10メートルの視点から見る景色に若干震えていると、立ち上がって再びコクピットの高さを合わせてきたデ・パルマを正面に捉える。

「おいおい？立っただけでビビッてんのか？」

高さに対する怯えが顔に出ていたらしい。少し呆れた様に言ってくるデ・パルマに、光秋は強がってもしかたないと素直に応じる。

「もともと高い所苦手なもので……それと、初めて乗る機体ですからね。どうしても緊張して……」

「ま、わからなくはないが……まあいいさ。立ち上がったんなら、次は軽く歩かせてみよう」

「はいっ！」

ようやくそれらしい操作ができることに、光秋は高さへの怯えを緩和させながら少し高揚した声で応じる。

「と、その前に……」

「？——!?」

急に言葉を区切ったデ・パルマに首を傾げていると、不意に正面のゴーレムが右手で自機を押してきて、突然のことに光秋は驚愕し、傾いたコクピットに全身を粟立たせる。押されたゴーレムはよろめきながらもすぐに体勢を立て直し、コクピットが水平に戻ったことに安堵したのも束の間、光秋は悲鳴混じりの怒声を投げ掛ける。

「な、何ですか突然っ!!」

「この通り、ゴーレムにはオートバランサー——つまり自分の平衡を自動で保たせる機能が付いている。多少のことじゃ簡単には転ばないから、気楽に行けよ」

「……そういうことは事前に一言言つてからやつてください。気楽にと言うなら尚のこと——」

今したことを平然と説明するデ・パルマに、未だ動悸が治まらない光秋は非難の目を向ける。

「そうか？ そりゃ失礼」

「……………」

それに対してからかう様に微笑を浮かべるデ・パルマに、今度は呆れながら脱力する。

「加藤くん！ 諦めろっ！ それがデ・パルマ流の教え方だから——」

「……わかりました——」

一連の様子になにかを察したのか、下から呼び掛けてくる関大尉に、どこか納得しつつあった光秋は口元に両手を添えて叫び返す。

「それで、歩かせるにはどうすれば？」

デ・パルマの顔を見て動悸も治まり、関とのやり取りで気を取り直すと、光秋は改めて問い掛ける。

「よし、まず左のレバーを見てみる」

「左……」

言われて改めて左のレバーに目を向けた光秋は、その根元に一直線の溝が走り、その横に手前からS、1、2、3と書かれているのを見る。

「それは変速機だ。機体の移動速度の調整に使う。今はちゃんとSに——STOPに合ってるな？」

「えー……はい、合ってます」

今までに比べて若干慎重な声で訊いてくるデ・パルマに、光秋も緊張感を改めつつ、左レバーに目を凝らして応じる。

「じゃあ、それを1に入れて」

「はい」

言われるまま、さつきより汗ばんだ手でレバーをSから1段進めて1に合わせる。

「合わせました」

「よし。これで最低速度で移動できるようになった。あとは右のレバーを進みたい方向に倒せばそつちに歩く……が、ここじゃ00に近過ぎるな……ちよつと、右に曲がつてみる。ゆっくりでいい」

「はい」

「関たちは離れてくれているから大丈夫だが、念の為足元の確認は忘れずにな」

「はいっ」

デ・パルマの指示と念押しに硬い声で応じると、光秋は右のモニターで足元周囲を走査し、障害物がないことを確認すると右レバーを右にゆつくりと倒す。

「……………」

レバーが倒れるのに合わせてゴーレムはゆつくりと向きを変え、ニコイチでの歩行と比べるとやや大きな振動を感じながら移り変わっていく景色に——そうなるように操作しているのが自分だという事実、光秋は静かな、それでいて大きな感動を覚える。

（よし、そんなもんだ。ストップ！）

「はいっ」

真横を向いたあたりでヘルメットのスピーカーから響いたデ・パルマの指示に応じながら、光秋は右レバーを中央に戻し、それに合わせてゴーレムは平衡を保った上で動きを止める。

（その向きなら結構動けるだろう。今教えた通りに、少し好きに歩かせてみる）

「はいっ……………」とここで、乗ってからずっとハッチ閉めてないんですが、大丈夫なんですか？」

ヘルメットのスピーカー越しに言ってくるデ・パルマに、光秋は左モニターに顔を向け、そこに映るデ・パルマのゴーレムを見ながら問う。

（ただ歩かせるだけなら別に問題ないが……そうだな……折角だし、完全に閉めてやってみるか。さっき起動させる時に押したデカイスイッチあるだろう。その横のひと回り小さいやつだ）

「横の……これか」

少し考えた上で出されたデ・パルマの指示に、光秋は言われた箇所を探って見付けたスイッチを押す。

それまで上側に上がっていた正面モニターがハッチの穴を塞ぎ、足場となっていた下側の装甲板が閉まったらしい音を響かせると、正面モニターに映像が映し出され、いよいよ視界全てがモニター越しとなる。

「閉まりました。モニターもちゃんと点いてます……じゃあ、少し歩いてきます」

（おう。さっきも実演したが、簡単に転ぶもんじゃなし。いざという時は自動でバランスとってくれるから、気楽に行けよ）

「はいっ」

自身気楽そうな声で告げるデ・パルマに応じると、光秋は左レバーが1に合っているのを再確認し、右レバーをゆっくりと前に倒す。

それに合わせる様にゴーレムはゆっくりと前進し、モニターを流れる景色と下から伝わってくる振動に、光秋は先程以上の感動を覚える。

——……………凄いつ！動かしてる。これ、僕が動かしてるんだよな……!!?——
もちろん、冷静な部分では同じことをニコイチでさんざんやっていること、さらには
より激しい動作をすでに何度もしていることは自覚している。が、ゴーレムの操縦はそ
れともまた違うものであり、やはり昂揚せずにはいられない。

左右への進路変更や後退などを織り交ぜた歩行を続けることしばし、再びヘルメット
から聞こえてきたデ・パルマの声に、光秋はゴーレムの足を止めて聴き入る。

（だいぶ手慣れてきたみたいだな）

「なんとか」

（じゃあ次のステップだが、足元にペダルがあるだろう、3つ）

「はいっ」

応じながら、光秋はハッチ前のペダルを見る。

（左レバーをSに、右レバーを中央に合わせた状態で左のペダルを踏んでみる）

「……何が起こるんです？」

（踏んでからのお楽しみだ）

「そういうのいいですからっ」

突然の突っ張りに全身が粟立ったことを思い出しながら、企みの声が混ざるデ・パル
マに抗議の声を上げる。

（いいから踏んでみろって。別に爆発するわけじゃなし……あ、でも、ゆつくりとな。そんな深く踏まんでもいいから）

「……………わかりました」

話してくれる気が全くなさそうな返事に諦めの声で応じると、光秋は指示通り左レバーをSに合わせ、右レバーが中央に合っているのを確認し、左足を左ペダルに置く。

—ゆつくりと、深く踏まず……—

デ・パルマの注意を心中に復唱しつつ、ゆつくりとペダルを踏み込む。

「!!」

それに合わせて唐突にモニターの景色が下に流れ、束の間の浮遊感を感じたかと思うと、次の瞬間には歩行の時よりやや強い振動がコクピットを揺らす。

「今のつてまさか……………跳びました?」

（その通り!）

数メートル上下した景色と独特の浮遊感から感じたことを告げると、デ・パルマのイタズラが成功した様な笑みを含んだ声が返ってくる。

（左のペダルは跳躍の為のものだ。今みたいにSに合わせた場合は脚の力だけで、1から先は背中への推進器の噴射を加えて跳ぶ。細かい調整はペダルの踏み具合だな）

「なるほど……」

説明するデ・パルマに、光秋は納得の声を返す。

（ちなみに、右のペダルを踏みながら右レバーを行きたい方に倒すと、推進器の噴射を利用した高速移動ができる）

「……………なるほど」

補足するデ・パルマに応じつつ、光秋は周囲を見回し、程よい広さと障害物のない方向へゴーレムを向ける。

「少し試させてください」

（いいぞ。ただし、1より上には絶対には上げるなよ。あと一番右のペダルがブレーキだから、いざという時はそれ踏んで急停止しろ）

「わかりましたっ」

釘を刺す様にやや強い語調で言ってくるデ・パルマに緊張を新たにすると、光秋はモニター越しに再度障害物がないことを確認し、左レバーを1に合わせて右レバーをゆっくりと前に倒す。

「さて、どんなもんか……」

とぼとぼと歩き出したゴーレムに揺られながら、不安と好奇心が入り混じった声を漏らすと、右足で右ペダルを慎重に踏み込んでいく。

ややあつて推進器のものと思しき轟音が後ろから響いたかと思うと、モニターの景色

が風の様に後ろへ過ぎていく。

「!!」

同時に前から来る強大な力に体を座席に押し付けられ、戸惑った光秋は反射的に一番右のペダル——ブレーキを深く踏み込む。

少ししてゴーレムの加速は止まり、座席への押し付けから解放されると、光秋は未だ激しく鼓動する心臓に手を当ててそれを治めようとする。

——速く動く時に強い力が加わるって聞いたことはあるが、こういうことか………——
「ニコイチではそういうのからも守られてたからなあ………」

加速度に関する聞きかじりの知識を思い出し、思わぬところでそれを体験したのだと理解する一方、連想的にニコイチの操縦者保護機能の凄さを思い知る。

(どうだ? ゴーレムのスピードは)

「強力ですね。1以上に上げるなど言った理由がわかります。それこそ下手すれば敵にやられる前に、ゴーレムのパワーにやられそうだ」

ヘルメット越しに訊いてくるデ・パルマに、ようやく落ち着いてきた光秋は今感じたままを述べる。

と、スピーカーから細々した音が聞こえたかと思うと、今度は福山の声が響く。

(二曹、ひと通りの基本操作を終えたなら、そろそろ戻ってきてくれ。流石にそろそろ切

り上げないとこの後の予定に影響が出る」

「わかりました……ただ、最後に一回、推進器付きの跳躍をやらせてください。それです」

（了解した）

福山の返事を聞くと、光秋は左レバーを1に合わせ、左ペダルに足を置く。

——1でもかなりの力だったからな。注意しないと……—

高速移動のことを思い出して身構えると、ペダルを踏んでいく。

「っ……………」

推進器の轟音が轟く中、先程感じた力が今度は上から押し寄せるものの、2回目とあってか今度は戸惑うことはなく、しかし高速で過ぎていく景色にはどうしても圧倒されてしまう。

ある程度まで跳ぶとゴーレムは速度を上げながら降下し、自動で器用にバランスをとりながら着地する。もつとも、コクピットは脚力だけで跳んだ時より少し強い振動に襲われる。

「…………これがゴーレム——合衆国初、人類が作り出した人型機械……か……………」

今の跳躍をはじめ、乗り込んでからの一連の動作を振り返り、それらをニコイチのものと照らし合わせながら呟くと、光秋はゴーレムを跪いているニコイチ、そこで待つデ・

パルマたちの許へ歩かせる。

少しして一同の許に着くと、先程の記憶を頼りにコクピット右側の赤いツマミを下げ、ゴーレムに膝を着かせ、左のスイッチを押してハッチを開ける。左のひと際大きなスイッチを押してゴーレムを停止させると、ワイヤーを伝って地面に降り、自分の脚でデ・パルマに歩み寄る。

「御指導ありがとうございます！ちよつと腑に落ちない部分もあったけど……それで勉強になりましたっ」

ヘルメットを返しながらかけると、光秋は深く頭を下げる。

「まあ、教えたのは移動方法だけだな。折角だから模擬戦の一つもやらせてみたいとも思ったが……流石に今は余裕ないしな」

「はあ……………」

ヘルメットを受け取りながら名残惜しそうに告げるデ・パルマに、それまで動かすことだけで頭が一杯だった光秋は、両レバー先端のスイッチや小型モニターに映っていたマシンガンの絵を思い出し、連鎖的に先日 of 模擬戦の様子——縦横無尽に駆け回る2機のゴーレムの姿——を思い出す。

「言われてみれば……………それこそデ・パルマ少佐と関大尉は、あのコクピットで先日の様な戦闘向きの動きをしてたんですね？」

「まあな。ただ動かすのと違って、細かな動作をさせるためにいろいろ手間掛かってな。その辺の改善点の洗い出しも俺らの仕事なわけだが」

「……………頭が下がります」

デ・パルマの言葉に鈴なりのスイッチ類を思い浮かべ、そのようなコクピットであれだけの動きをやってみせた——あまつさえ基本性能や操作性では上を行くニコイチに墜落判定を出させたスフィンクスの2人組に、光秋は感銘を畏怖が混ざった表情を浮かべて再度頭を下げる。

と、福山が間に入ってくる。

「頭を下げるくらいなら、二曹も僕等の仕事に協力してほしいな。本部に帰還後、レールガンと合わせて今の体験のレポートも出してくれ。できれば00との相違点を明確にして」

「……………わかりました」

それで次にすべきことが決まると、光秋はニコイチへ歩み寄り、コクピットに上がって起動させると右手で董を乗せて帰る準備を整える。

—今の動作一つ取っても、ニコイチならこんな簡単に、こんな滑らかにできるんだよなあ…………—

普段何気なくやっているその動作も、ゴーレムを動かした後だからだろうか、今はと

でも画期的なことに感じる。

「今日はありがとうございました。では、お先に失礼します」

コクピットから足元の3人にそう呼び掛け、左隣の董が体を安定させたのを確認すると、光秋は操縦席を機内に降ろし、ゆっくりと上昇して本部へ向かう。

「すまなかつたな董さん。僕のワガママで待たせちゃって」

「いいえ。ニコイチ以外を動かしてる光秋さんも新鮮というか……その………かつこよかつたです!」

「……嬉しいこと言ってくれるな……もつとも、けつこうおつかなびつくりだんだんだがねえ……」

心なしが強張った面持ちで言ってくる董に、光秋はゴーレム操作中の自身の様子を思い出しながら苦笑を漏らす。

一方、それは普段の自分を振り返るきっかけともなった。

―僕の意思を動きに直接反映させるニコイチ、それによってずつと簡易になっている操作性……ゴーレムに乗った後だからこそ、その凄さ、ありがた味を認識させられる―
今でもその機能によって滞りなく移動、それも飛行が行えている自分を意識すると、タツカー中尉と初めて会った時の模擬戦で負けそうになったこと、先日デ・パルマと関との模擬戦で負けた記憶が脳裏を過る。

——改めていい条件で戦わせてもらってたことを思い知らされる……と同時に、そんないい条件を——凄い機能を誇るニコイチを活かせるかは、最後は僕次第なんだよな

……………

そのように理解すると、知らぬ間に操縦桿を握る手に力が籠る。

「……あの、光秋さん……どうかしましたか？」

顔の方にも力が入っていたらしい。堇が心配そうに訊いてくる。

「ん？ いや、別に。ゴーレムに乗ることで、ニコイチの凄さやありがたさってものを実感してたんだよ。で、そんなものに乗せて仕事させてもらってる以上、もつと頑張らなきゃなつて」

意識して顔の強張りを緩めつつ、光秋は今考えていたことを述べる。

「もつとも今は、帰ってからの報告書作りを頑張らなきゃだけど……」

苦笑いを浮かべながらそう続けると、光秋は遙か前方の東京本部へ意識を向ける。

——……報告書、か……………

その一言に微かな“引っ掛かり”を感じたものの、それを言葉にするだけの思考は働かなかった。

9 1 少女たちとの語らい

2月20日日曜日朝。

起床後、寮の自室を簡単に掃除した光秋は、机の上の時計を見て時刻を確認する。

「9時40分……約束は10時だったよなあ……少し早いが、そろつと出るかね」

先日の董との約束を思い出しながらそう決めると、ベッド下からコタツを出して電源をい入れ、エアコンを点ける。

掃除のために大窓を開けていてすっかり冷え切った部屋に温風が吹く中、白いワイシャツとベージュのズボンの上に茶色いコートを羽織ると、鍵諸々の小物の確認をして駅へ向かう。

——しかし、小学生と……あまつさえ来月には部下になる予定の子と寮の自室で語らうことになるとは……なんとも面白い流れになったもんだなあ——

冷風に迫い立てられながらそんな感慨を抱いている間に駅に着くと、改札口近くの壁に背中を預けて董が来るのを待つ。

「……………」

行き交う人の波を無言で眺めていると、ふと昨日のテストからの帰路で感じた“引つ

掛かり”——報告書の作成を進めていく内に明確になっていった“不安”を思い出す。

——昨日のデ・パルマ少佐たちや福山主任の言動から、ゴーレム……もつと言えばメガボデイの改良は日々続いている。それは当然だろう。期待の対DDシリーズ兵器なんだから……でも、そうやって福山主任が目標に掲げる様なニコイチ並みの——ニコイチを超えるメガボデイができた時、ソレが量産された時……僕はどうなるんだろうか………？——

レールガンの報告書の後に書き始めたゴーレムの試乗報告書、その一文を書き加えるたびに大きくなっていった今後への不安に対して自答できるものを光秋は持つておらず、未だにその気持ちを持て余しているのが現状だ。

と、悶々とした気分を払う様に董の声が耳に入る。

「光秋さーん」

「！ああ、董さん。おはよ……？」

掛けてくれた声に返そうと顔を上げた時、目に飛び込んできた意外な人の顔に、光秋は束の間唖然とする。

特徴的な短い赤毛は、一度見たらそう忘れられるものではない。それが自分に関わる者ならなおのことだ。

「柏崎さんも来たのか？」

僅かに驚きを含んだ声の問い掛けに、白いコートを羽織った菫の横に立つ赤コート姿の柏崎は不機嫌な顔を浮かべる。

「別に。菫があんたんとこ行くって言うから、変なことが起きないようにいつてきたんだよ。要するにボディガード」

「変なことって……………」

鋭い目線を寄こしながら言ってくる柏崎に、光秋は返事に困りながら頭を掻く。

「すみません光秋さん。昨日出掛けるって話したら、ついて行くって聞かなくて…………『突然2人で行ったら迷惑になる』って何度も言っただけですけど…………」

「いや、確かに驚いたが、1人くらいは別に…………ただ、用意した菓子が足りなく…………あつ！」

軽く頭を下げながら言ってくる菫に返していると、光秋は遅まきながらミスに気付く。

「しまった…………お茶菓子買っとくの忘れた……………」

朝起きてからというものの、客を迎えるために部屋を片付けることばかりに意識が向いていた自分を振り返り、そんな自分への呆れを表す様にまたも頭を掻く。

「…………まあ、ちょうどいいか？行く途中、そのコンビニでなにか買つてこう」

言うや光秋は駅近くのコンビニへ向かい、菫と柏崎もそれについていく。

自動ドアをくぐると、近くに重ね置きされている買い物カゴの1つを取る。

「2人の好きな袋菓子テキストに買ってここに入れてくれ。あと飲み物も」

董と柏崎にそう告げると、光秋は自分の分の飲み物を買おうと店の奥へ向かう。

「……………」

飲み物のコーナーで逡巡することしばし、最終的にコーラーに決めると、そのペットボトルをカゴに入れる。

それに合わせる様に、董と柏崎もそれぞれ2、3点の袋菓子を持って歩み寄ってくる。

「……………」

一緒に来た柏崎が持っていた物をすぐにカゴに入れる傍ら、董は少し迷った顔を浮かべて佇む。

「言つとくが董さん、変な遠慮とかいらなからな。僕も食べるんだし」

「……………はい」

これまでの言動を顧みて掛けた光秋のその言葉に、董は押される様に菓子袋をカゴに入れていく。

そうしている間にも自分の飲み物をカゴに入れる柏崎を横目に認めると、光秋は董を飲み物の棚へ促す。

「さ、あと董さんだけでぞ」

「はい。えっと……」

また変な気遣いをされる前に、光秋は敢えて急かす言葉を投げ掛ける。その効果かは判らないが、今度は迷う様子を見せなかった葦は、しばし思案して自分の分をカゴに入れる。

「他にいる物は？……なら、レジ行こう」

少女2人に確認を取ると、光秋はレジへ向かう。

駅のすぐ近く、それも休日とあつてか店内には疎らに人がおり、ちょうど他と時間が重なったのか、2つあるレジの双方に列ができている。

その一方の最後尾に並ぶと、光秋は後ろをついてきた柏崎を見やる。

「柏崎さん」

「……なんだよ」

声を掛けると、刺々しい声が返ってくる。

「この期におよんでんだけど、本当に僕の部屋に来るのか？」

「なんだよ、来られちゃ不味いもんでもあんのかよ？ 葦に変なことする邪魔すんなってか？」

「桜っ！ いい加減に——」

メガネの奥の目を鋭くして声を荒げようとする葦を、光秋は肩に手を置いて制す。

「董さん、とりあえずここで大きい声出すのは止そう」

「……………すみません」

注意されてすぐに声を吞み込むや、董は若干紅潮した顔を俯け、光秋は柏崎に向き直る。

「でだ、柏崎さん。君が僕のことをどう思ってるかいろいろ気になるところではあるが、それは一旦置いとして……僕と董さんがこれからなにをするかは知ってるのか？」

「なんかについて語らうんだろう？ 聴いてもよくわかんなかったけどさ」

「つまり、大よそのことがわかった上で来たんだな？」

「そうだよ。何が言いたいんだよっ」

念を押す様に確認する光秋に焦れたのか、柏崎は苛立った声を寄こす。

「いや、わかつてるんならいい。少なくとも要点はな。ただ……………わからない——加わりようがない会話の横にいるのは、けっこうキツイぞ」

「はあ……………」

自身小さい頃からときどき経験してきたことを踏まえた警告に、しかし柏崎の理解は及ばなかったらしい。

そうしている間に会計の順番が回ってくると、光秋は会話をそこで取り止め、財布の準備をする。

代金を払って買った物が入ったビニール袋を受け取ると店を出、董と柏崎を寮へと先導する。

—ま、柏崎さん自身わかって来てるって言ってるんだし、あとは自己責任かね？どの道好きな菓子買ってやった後で追いつ返すのもどうかと思うし—

ちらりと後ろを見やり、未だ先程の警告が解せない様子の柏崎に一抹の不安を覚えながらも、結局それ以上この点に触れないことにした光秋は黙って寮へ向かう。

少し歩いて寮の自室に戻ると、外の冷気で冷えた光秋たちをエアコンの温風が迎えてくれる。

「コートだけど、その椅子の背もたれに掛けて。あと水盤は風呂場だから、手洗いうがいな。ちゃんと石鹸で」

「はい」

「わかってるよっ」

自分の指示にそれぞれ応じてコートを脱いだ董と柏崎が浴室に備え付けられた水盤に向かう一方、光秋はビニール袋から先程買った袋菓子をコタツの上に出し、居間に戻ってきた董たちと入れ替わりに自分も手洗いにいく。

手洗いから戻ると、すでにコタツに足を入れている2人の姿が目に入る。今立っている廊下側から見ると、柏崎が左側に、董が背を向けて座っている形だ。

「董さんそのシャツ、この間の?」

廊下から見て右側——ベッドの下側からコタツに入りながら、光秋はコートを脱いだ董の上半身を包んでいる服に既視感を覚える。濃い青色に目立つた装飾のない落ち着いた造詣のそれは、見覚えや記憶違いでなければ先日デパートで光秋が選んだ物だ。

「!はいっ!この前光秋さんが選んでくれたやつですっ!」

「やつぱり……あれ?でもあの時選んだのって、春物だよな?今着ると寒いんじゃないか?」

嬉々として答える董に、光秋は選んだ時の記憶を振り返りながらさらに問う。

「あ、それは、その……へ、部屋着としてなら今からでも着れますし、あと、着慣れておこうかなあつて……それに、暖房効いてますからっ」

「ならいいが。寒かったら言えよ」

「はいっ」

どこか慌てた様子で答える董に一応納得すると、光秋は注意を促してコタツの中央にまとめて置いていた飲み物をそれぞれの許に配る。

「董さんがレモンティーで、柏崎さんがオレンジジュースだったよな」

「ありがとうございます」

「……」

礼を言う董と無言を返す柏崎をそれぞれ見ると、光秋も自分の許にコーラを寄せ、机に手を伸ばして横尾ノートと自分のノートを取る。

それを見て、董も横に置いていたカバンからウキウキした顔でノートと筆箱を取り出す。

「じゃあ、早速っ！」

「はいっ」

かく言う光秋も緩む口元を止めることはできず、応じる董と同時に自分のノートを開く。

「おつ。随分いろいろ書いてあるな」

董が「次の人」という考えに触れた時間はまだ短く、また現状唯一の資料たる横尾ノートを読んだ時間はもっと短い。それでも所狭しとノートに綴られたメモ文の数々に、光秋は舌を巻く。

「光秋さんには負けるかもしれませんが……私もあれからいろいろ考えましたから。しばらくは私が考えてきたことを聴いてもらっていいですか？」

「わかった、聴かせてくれ。君がこのノートから何を受け取ったか、“次の人”をどのよ

うに理解したか」

横尾ノートを示しながらそう返すと、光秋は董の話に聴き入っていく。

どれくらいそうしていただろうか。

小学生ということもあって、まだまだ未熟な論理や拙い表現が散見されながらも、未熟なりに自分の考えを表していこうとする董。その初々しくも熱い姿に見惚れ、語るところを夢中で聴いていた光秋は、束の間話が途切れたのをきっかけに、数分——あるいは数十分ぶりに周囲に意識を向ける。

コタツの上の菓子袋はいくつか封が切られており、その周囲にはチョコレート菓子や飴玉の包みが転がっている。自分の正面に着いている柏崎は床に寝転び、持参してきたらしい携帯ゲーム機を虚ろな目で眺めている。

——やっぱり、こうなるよなあ……………

自身今の今まで董の話に夢中で気付かなかったものの、ある程度の予備知識がなければ立ち入れない会話を独り横で聞いているのが楽しいわけもなく、コンビニで覚えた不安の通りになった柏崎に、光秋はどうしたものかと心の中で頭を抱えてしまう。

「……………あ……………そういえば今何時だっけ……………」

現状を変えるきっかけになればと2人に対して話をふりながら机の上の時計を見ると、11時15分を指そうとしている。

「ちゃんと確認したわけじゃないが、部屋に來たのが10時半少し前くらいだったよなあ……つまり、柏崎さんのこと1時間近く蚊帳の外に置いちゃったわけか……」改めて把握した柏崎の様子に、光秋の中の気まずさがさらに強くなる。

と、レモンティーを飲んで口を整えた堇が声を掛けてくる。

「もう11時ですか……ちよつと早いけど、お昼にしますか？」

「！そうだな。柏崎さんもそれでいいかい？」

渡り船とばかりにその話に乗りながら、光秋は柏崎に顔を向ける。

が、

「別にいい。さっきまでみたいに2人で決めればいいじゃん……」

柏崎の方は視線を寄こすこともなく、ゲーム機を操作しながらすつかり拗ねた様子で言ってくる。

「……弱ったなあ……」

それ以上柏崎が口を利く気配はなく、代わりの様に響くゲーム機を操作するカタカタという無機質な音が、光秋の中の焦りをさらに掻き立てる。

そんな心境を知ってか知らずか、堇が再び、今度はやや遠慮がちに声を掛けてくる。

「その、お昼なんですけど……………光秋さん、作ってくれませんか？」
「僕がつ？」

思わぬ頼みに、光秋は東の間柏崎のことを隅に置いてハツとする。

「光秋さんの作ったものが食べたくて……………ダメ、ですか…………？」

「ダメというか……………」

上目遣いに不安そうな視線を向けてくる董に、光秋は腕を組んでしばし考える。

——まあ、夏に綾と一緒にいた頃、みそ汁とか野菜炒めくらいなら作ったことはあるが……………あれからちゃんとした料理なんてしたことないから、どうも自信ないんだよなあ……………もつとも、それ以上に……………「そもそもこの部屋に食材といえる物がないんだよな。カップ麺やパンならあったと思うが……………」

「そういうのじゃなくて」

「だよなあ……………」

案の定な返事をしてくる董に頷くと、光秋はコタツを出て、董の後ろに移動して立ち上がる。

「じゃあない。近くのスーパーでなにか買つてこよう。スパゲッティくらいならできるだろう」

「！私も行きますっ」

コートを手織りながら光秋がそう告げるや、董もすぐにコタツを出てコートに手を伸ばす。

「……………じゃあ、アタシも行く」

柏崎もそう言つてコタツを出ると、すかさず光秋を睨み付けてくる。

「言つとくけど、他人^{ひと}んちに1人でいんのもなんか気まずいから、それでついでにだけか
らなつ」

「ん？ああ…………」——僕はなにも言つてないんだが…………と、それならコタツは切るか——

その視線に内心眉を寄せながら、光秋は誰も入らなくなつたコタツの電源を切り、その間に準備を整えた少女2人を見る。

「いくらもせずに帰つてくるから、エアコンは入れっぱなしでいいよな。財布も持ったし…………行くかね」

「はいっ」

「…………」

光秋の呼び掛けに董が応じ、柏崎が無言を返すと、一行は部屋を出て近所のスーパーへ向かう。

最寄り駅の近くにあるスーパーの自動ドアをくぐると、董と柏崎を伴った光秋は買い物カゴを手に取り、ひとまず店の奥へ向かう。

「パスタのコーナーは……………ここか」

棚の合間に置かれた札を注視しつつ目的の場所を見付けると、棚を走査してスパゲツティの麺の袋を探す。

「……………あつた。それと……………これだな。2人共、希望の味つてあるか？」

見付けた麺の袋をカゴに入れつつ、近くに味付け用の袋詰めを見付けた光秋は、それらを指さしながら2人に問う。

「私は……………たらこ以外ならなんでも」

「柏崎さんは？」

「……………ミートソース」

「じゃあ、これ3つでいいか」

董と柏崎の意見を訊くと、光秋はミートソースの袋詰め3つをカゴに入れる。

「とりあえずこれで最低限の物は買ったけど、他にいる物はあるか？」

「別に。あとは作ればいいだろう？」

「やっぱそうか……………」

柏崎の返答に、光秋も頷こうとする。

と、

「あの、野菜コーナー見て行きませんか？」

「野菜？」

董の提案に、光秋は一瞬首を傾げる。

「野菜コーナーなんか見てどうすんのさ？これで充分作れるだろう？」

「いいからっ。光秋さんもっ」

「あ、ああ……？」

同じく首を傾げる柏崎の問いを流しながら、董は光秋のカゴを持っていない方の手を引いていく。

「……………にしても、こうして小さい女の子2人とスーパーに来てるって、なんか不思議な気分だな」

戸惑いながらも引かれていく光秋は、そんな自分の様子も含め、董と柏崎、周囲の景色を見回しながら感じたことを呟いてみる。

「なんだよ、それ」

すかさず、柏崎が怪訝な目を向けてくる。

「いや、なんというかな……………傍目には僕等ってどう見えてるのかとか、そんなとこ。この間董さんと一緒にいたら兄妹に間違えられたことがあったけど、やっぱりそんなとこ

かな？」

言葉にしてみても自分の感じたことを整理しながら、光秋は先日テストでデ・パルマ少佐に言われたことを思い出す。

と、柏崎の表情が微かに曇る。

「へー？ 兄妹に間違われた、ねえ？ ふーん？」

「……な、何？ 桜っ」

言いながら、柏崎は葦に棘のある視線を向ける。

「別にい？……まああれだ、兄妹でなかったらさしずめ、小学生2人を引き連れて歩く口リコン野郎だね」

「そりや手厳しいな。警察のお世話にはなりたくない……ああ、2人は超能力者だから、場合によってはESOが来る可能性もあるのか」

「そんなこと真剣に考えないでくださいよ！」

辛辣な柏崎に、光秋は半分以上冗談のつもりで返す一方、葦は真面目な顔で言う。
「冗談だよ。言ってみただけだ……ああ、そういえばこの前は、葦さんと涼さんの3人で歩いたよな」

そんな葦をなだめるように努めながらそう言うと、今度は先日のデパートのことを思

い出す。

「あの時はさながら、親子とでも思われてたかな？ちょうど3人共メガネだったし」
「！」

ただ単に思ったことを冗談を織り交ぜて呟いた直後、堇が急に顔を紅潮させ、その場に力カシの様に佇んで何事かぶつぶつ言い始める。

「親子？私と光秋さんが親子……うん、別に悪くない。涼さんのことは少なくとも嫌いじゃないし、どっちにしろ『加藤堇』って名乗れるし……で、でも、親子だとそれはそれでいろいろ——」

「堇さん？」

「は、はいっ!!」

若干大きな声で呼び掛けた光秋に、堇は一瞬ハツとして現実に戻ってくる。

「突然どうした？顔赤くして立ち止まって。親子がどうかカトーとかぶつくさ言ってたけど、具合でも悪いのか？」

「！だ、大丈夫です！そ、それより、早く野菜コーナー行きましょう！」

「ならいいが……調子悪いようならすぐに言えよ」

「は、はいっ」

「……………」

「?……」

なぜか焦りを含んだ董の返事を聞くと、光秋は怒りと呆れが混ざった様な目を向けてくる。柏崎に内心首を傾げながら野菜コーナーへの歩みを再開する。

多様な野菜が並んだ棚の合間をしばし巡っていると、董が突然立ち止まり、光秋と柏崎もそれに倣う。

「これですこれっ。麺と一緒に茹でてみましょうよ」

そう言いながら董が指さすのは、青々としたキャベツだ。

「キャベツと一緒に茹でるのか?」

「はいっ。一緒に茹でると時間も省けるし、食べる時は野菜の栄養も摂れて美味しいって、この前テレビでやってました」

思わぬ提案に首を傾げる光秋に、董は嬉々として説明する。

「なるほど、そんな手もあるのか……ただ、流星に丸ひと球はなあ……!これくらいがちようどいいんじゃないか?」

台所の広さや調理する際の手間、食べる時の量などを考慮しながら周囲を見回した光秋は、少し離れた所にフィルムに包まれた半球を見付ける。

「それとも、2人共けっこう食べるか?それならひと球買うが?」

「あ、いえ。言われてみれば丸1個は多かったかな……?」

「アタシはミートソースが食えればそれでいいけど」

「じゃあこつちで」

董と柏崎に確認をとると、光秋は半球キャベツをカゴに入れる。

「他にいる物はあるか？董さん、他に入れてみたいものは？」

「今日はこれでいいです」

「アタシも。ていうか、そろそろお腹減ってきたから、早く帰って食べたい」

「なら、これで行くか」

董と柏崎の返事を聞くと、光秋はレジで会計を済ませ、ビニール袋に詰められた食材を持って寮へ向かう。

自室に戻ると、光秋はビニール袋の中身を台所に広げ、よく手を洗った上で調理を始める。

キャベツからフィルムを剥がすや、それをそのまま蛇口から流れる水で洗い流し、何層もの葉を束ねている茎を千切って手頃な大きさに破っていく。

「大雑把」

「豪快ですね」

「『男の料理』って感じだろう？」

柏崎、董それぞれの感想に——主に柏崎の方に——共感しつつ冗談めかして返しながら、千切った葉を鍋に入れ、全て入れ終わるとそこに水を注いでお湯を沸かす。

キャベツ入りの鍋が沸く間、光秋はスパゲッティ麺の袋を破り、手頃な量に束ねられた麺と、居間のコタツで寛ぐ柏崎と董を見比べる。

——とりあえず1人1束で足りるか？でも董さんたちたくさん食べる年頃だしな……ま、キャベツも入るし、菓子もそこそこ食つてたし、足りなきやまた茹でればいいだけだしな——

そうして入れる麺の量を決めるのと前後してお湯が沸き、袋から出した3束を鍋の縁に沿って広げる様に入れていく。

少量の塩を入れ、箸で鍋の中を掻き混ぜることしばらく。

——……そろそろかな？——

机の上の時計で時間を確認すると、光秋は麺の1本を取って試食する。

——……こんなとかな。キャベツは……うん、ちゃんと煮えてるな——

同じくキャベツも1片試食して、それぞれいい具合に茹で上がったことを確認すると、台所棚から出したザルを水盤に置き、そこに鍋の中身を開けていく。

熱湯が勢いよく流れる中、持ち上げたザルを軽く振って中の麺とキャベツの水を切

り、棚から皿を3枚出して適量盛っていく。

「よし、できた」

目分量で均等に盛り分けると、なんとか様になったキャベツ入りスパゲッティに安堵の息を漏らしながら、それらを居間のコタツに運んでいく。

コタツに載っていた菓子や飲み物を董が机に移動させる傍ら、光秋は董と柏崎の分の皿を置き、もう一度台所に戻って自分の分とミートソースの袋詰めを3つ、箸を3つ持ってくる。

「おっと、水忘れた……て、この部屋コップ3つもなかったな……」

「大丈夫ですよ。喉そんなに渴いてないし」

「ジュースもまだあるしね」

「そうか？……じゃあ、各自でかけて食べて」

今更気付いたことに董と柏崎が返すと、お言葉に甘えた光秋は袋を破って中のミートソースを麺にかけていく。

ひと通りかけ終わると手を合わせ、キャベツ入りミートソースに箸をつける。

「……………僕はそこそこ美味く感じるな。ソースと絡んだ麺もそうだが、茹でキャベツも思った以上に合う。問題は……………」
「どうかね、董さん？」

自作の自分に自分は満足する一方、提案者である董の意見を仰ぐ。

「美味しいですつ、とつても！……すみません。もつといい言い方があるかもしれないのに、上手く言えなくて……」

『『美味^{うま}い』を上手^{うま}く言えないときたか……うふんつ。まあとにかく、お気に召したよう
でなにより」

嬉々とした、しかし微かに語彙の少なさへの悔しさを浮かべた顔をする董に、光秋は反射的に思い付いたことを言ったあと、一瞬外よりも低くなつた室温を咳払いで誤魔化し、提案者の満足顔に改めて安堵する。

が、

「ま、買った物茹でてかけたただだからね」

「桜ッ！そういうこと言わないの！」

麵をすすりながら告げられた柏崎の一言に、董の目が途端に吊り上がる。

「まーまー董さん。一応ホントのことだから」

「そう、ですけど……」

自身痛いところを突かれたと思いつながらも、もともといくらかはそういう認識もあった光秋は素直に柏崎の言葉を受け入れ、身を乗り出そうとする勢いの董をなだめる。

「それで、柏崎さんとしてはどうだ？買った物の組み合わせは？」

「別に……フツ……」

「不味くはないってことだな？ そりゃ結構」

そつぽを向いて答える柏崎に勝手に満足しながら、光秋はキャベツ入りミートソースをまた一口すすする。

3人共スパゲッティを完食すると、光秋は皿と箸を台所に運び、鍋やザルと一緒に洗っていく。

普段より少し多い量にやや時間を掛けながら、洗い終えた食器類を水切り用の棚に並べ、自分の手を水洗いして居間に戻ると、コタツに突っ伏した董と横になっている柏崎を見る。よく見れば董の手元にはノートが広げられ、先程まで書き込みがなされていたのがわかる。

―あちやあ、うたた寝しちやったか。とりあえず、董さんこのままだと風邪ひくよな

2人の微かな寝息を聞くと、光秋は部屋の端に退けた椅子の背もたれに掛かっていた董のコートを取り、それを背中に掛けてやる。

―柏崎さんは……腰から下こそコタツに入ってるが、とりあえず掛けとくか―
思うやコタツ布団から露出した柏崎の上部にもコートを掛け、光秋は今の定位置たる

ベッドの下に腰を下ろす。

「コタツも切ろう。余熱でも充分温かいし……腹が一杯になって眠くなつたかな？」

手元のスイッチでコタツの電源を切りながら、少女2人の穏やかな反応に、つい頬が緩んでしまう。

「こうして見ると、2人共つくづく普通の子供にしか見えないが……これで特エス、しかも最高のレベル9なんだよなあ……………」

目の前で安眠する董と柏崎に微笑みを浮かべる一方、サン教ベースでの戦いや祝賀パーティー襲撃事件の時の入間隊——特に柏崎——の働きが脳裏を過り、それらは先のことへの不安となつて光秋の胸を押してくる。

「順調に行けば、あと10日としない内に僕がこの子たちの上司に——少なくとも仕事の中においてはこの子たちの身を預かる立場になるんだよなあ……………」正直なところ、藤岡主任の講義を理解するので精一杯に感じてる現状、果たしてきちんと務まるのだろうか？……………それに、メガボデイの——今後のESOでの立ち位置にしたつて……………」

不安は別の不安を誘発させ、徒に胸を重くしていく。

それを解決するどころか、軽減する術すら持たない光秋は、身の内に生じた“重さ”

を持て余すしかなかった。

少女2人のうたた寝に気付いてしばらく経った頃。

諸々の不安を誤魔化そうと買い溜めていた本を読んでいた光秋は、コタツを挟んで正面に寝転んでいた柏崎の起きる気配に顔を上げる。

「んー……ふぁー……」

「おはよう」

掛布団代わりのコートを押し退けてのっそりと起き上がり、大口で欠伸をして目に涙を浮かべる柏崎に、光秋は事務的に声を掛ける。

「……………寝ちゃった?」

「ああ。けっこう寝てたよ。もう2時だしな」

まだ少し眠気を含んだ目で問う柏崎に、栞を挟んだ本をコタツに置いた光秋は机の上の時計を見ながら答える。

「そう……………」

短く返しながら周りを見回した柏崎は、コタツに突っ伏して寝ている董を見る。

「董も……………! あんた、董に変なことしてないだろうな?」

「君にとつての僕って、つくづく何なんだろうな……………」

途端に眠気を引つ込めて鋭い視線を向けてくる輩に、光秋は若干の頭痛を感じながら呟く。

「逆に訊くが、君の言う『変なこと』って何だ？ 君から見れば、僕はそういうことをするような人間なのか？」

「それは……………その……………」

意識の片隅では大人気ないと思つていても、少し頭にきていた光秋のやや強い言い返しに、柏崎は口籠る。

「…………君が僕のことを嫌うのは勝手だよ。他人の気持ちだけはどうすることもできないからな。ただ、この機会に言つておくが、僕が正式に君たちの主任になつた後、せめて仕事中は言うことを聴いて欲しいもんだな」

言つてから、先程抱いた不安を思い出して、少し後悔する。

「…………いや、今のは僕が利いていい口じやなかったな。劣等生が……………」

発言に対して実力が伴つていない。そんな自己認識と、それに気付いたことによる小さな羞恥に口を閉じていると、それまで黙つていた柏崎が言ってくる。

「一つ訂正だけど、アタシは別にあんたが嫌いなわけじゃないよ。前にも言つたじゃん」

「…………そうだっけ？」

思いもよらぬ言葉に、光秋は羞恥を一旦隅に置いて驚く。

「言ったよ。あんたが初めて本部に来た時」

「初めて本部に来た時……………ああ」

言われて光秋は、初めて本部に出勤した午後、学校の制服姿の柏崎に自分の言うことを聴かないと言われた時のことを思い出す。

「でもあの時、僕の言うことは聴かないって」

「その時言ったじゃないっ。『あんた自体は嫌いじゃない』って…………アタシが嫌なのは、人間主任以外の人がアタシ等の上司になること、それだけだよ……………」

……………そんなこと言われたっけ？『言うこと聴かない』の方が印象強くて忘れてたかな……………？もつとも、立場上は結局困るわけだが……………今は、それよりも――

柏崎の言ったことを自分の中で整理すると、光秋は隅に置いていた羞恥を再び手元に持ってくる。

「それなら、僕も一つ訂正――いや、謝らなきゃいけないな」

「……………なに？」

首を傾げて注目する柏崎に、光秋はさっきの件を思い出しながら告げる。

「さっき、せめて仕事中は僕の言うことを聴いて欲しいと言ったが、あれば僕の……………少なくとも今の僕の利いていい口じゃなかった。すみませんでした」

思つたままの謝罪の言葉を告げると、やや深めに頭を下げる。

「……だから、こう言い換えよう」

そして言いながら頭を上げ、柏崎の目を見据える。

「僕のが嫌いでないと言うのなら、せめて困らせるようなことは言わないでくれな
いか？」

「……………まあ、そういうことなら……聴いてあげなくてもいいけど……？」

「助かるよ」

どこか居心地が悪そうに視線を逸らし、心なしか齒切れ悪く応じるに、光秋は安堵を
含んだ声で返す。

「……………それと、アタシからもう一つ言いたいんだけど」

直後に柏崎は顔を向け直し、やや強い視線を寄こしてくる。

「アタシは『桜』だから。『君』だの『柏崎さん』だのじゃないから」

「……………知ってるが……？」

言われたことが今一つ理解できない光秋は、応じながらも柏崎に問い掛ける視線を寄
こす。

それを見て、柏崎はイラついた顔を浮かべる。

「だから、今から名前と呼べって言ってるの！変なところで鈍いんだから！」

「あ、ああ……わかった……桜さん」

その劍幕に、光秋は思わず身を後ろに退く。

「……………その代わり、アタシもあんたのこと『光秋』って呼ばせてもらうから」

「ああ、それは構わんよ。好きに呼んでくれていい」

と、今度はまた居心地が悪そうに視線をあらぬ方向に向けながら柏崎——桜は一方的に告げ、特に断る理由のない光秋は素直に承諾する。

「ただ、今みたいな私的な時だけな。仕事中はダメだから」

「わかつてるよつ。ガキじゃないんだから」

「ならいいんだがね」

それでも念のためにと注意する光秋に、桜は不貞腐れながら応じる。

が、次の瞬間にはコタツの上に広げたままになっている菫のノートを見やる。

「ところでさ、あんたたち結局何の話してたの？横で聞いててもまるでちんぷんかんぷんだったんだけど」

「まあ、そうだよな」

自身ある程度知識のある者同士でしか解らない会話をした自覚がある光秋は、その時感じたのであろう戸惑いを思い出した様に浮かべる桜の心情を察しつつ、気まずそうに頬を掻く。

「……………折角だし、桜さんも聴いていくか？ “次の人” って考えについてなんだけど」
『次の人』……………」

同時に、この概念を広めるチャンスと感じた光秋は机の上の横尾ノートを手に取り、極僅かだが興味を抱いた様子の桜の前にそれを差し出す。

「僕も知り合いから聞いた考え方なんだけどね、地球合衆国という新しい時代を迎えた人の在り方で……………」

それに加えて自分なりの理解を語りながら、桜に “次の人” について説明していく。

我ながらよく回る口で説明を続けることしばし。

“次の人” に関するひと通りの説明を伝えた光秋は、机の上に退かしてそのままだったペットボトルを取り、飲み掛けのコーラで口を湿らせると、自分の話を終始黙って聴いてくれていた桜に窺う目を向ける。

「とまあ、こんなところなんだが……………わかったかな？」

自分ではきちんと伝えたつもりでも、相手に伝わっていないければ意味はなく、そんな不安を含んだ光秋の問いに、桜はしばし思案顔を浮かべる。

「うーん……………ちよつと確認するけど、超能力者とは違うの？」

「違う。そもそもノーマルとか超能力者とか、そういう区別なしに適用されるのが『次の人』なのかもしれない」

「……………そうなんだ……………」

光秋の返答に小さく返すと、桜は再び考える顔をする。

「やっぱり、わかりづらかったかな？ ついあれこれ言っちゃった気がするし…………—説明中、つい余計な話を挟んでしまったかもしれないことを思い出し、光秋の不安はますます増していく。」

と、2人の横で突つ伏していた董がゆっくりと目を開き、体を起こす。

「……………いけない、寝ちゃった……………今何時です？」

「もうすぐ3時だな」

メガネを外して目を擦りながら訊いてくる董に、光秋は机の上の時計を見ながら答える。

途端に董は慌ててメガネを掛け直し、自分の目で時計を確認する。

「えっ？ そんな……………あ……………」

我が目で見て光秋の返答を改めて認識したのか、悔やむ声を上げて顔を俯ける。

「午後からも光秋さんとたくさんお話ししようと思ってたのに…………」

「まだ帰るまで…………暗くなるまで少し時間がある。これから話せばいいさ…………食べて眠

くなつたかね？」

悔いを言葉にする董に、光秋は大窓から日の傾き具合を確認しつつ、2人が寝入ったのに気付いた時から気になっていたことを訊いてみる。

「どうでしょう？ 光秋さんが洗い物してる間に、思い付いたことをノートに書いてたら、だんだん意識が……」

「アタシもそんなところかな。思い切つて横になつたけど、まさか2時まで寝るとはねえ……」

董に続いて、桜もその時のことを思い出しながら呟く。

と、董が桜に口を尖らせる。

「2時つて、私より1時間くらい先に起きてたの？ もうつ。それなら起こしてくれてもいいでしょう？ 光秋さんも……」

「悪い悪い。桜さんとちよつと話し込んで、気が回らなかつたよ……そうでなくとも、あんなぐつすり寝られたら、起こすのも悪いと思っちゃうけどな」

自分にも回ってきた予先に謝つて応じつつ、光秋は寝入っている真つ最中の2人の様子を思い出す。

「……………そういうことなら……………まあ……………！ 痛つ……………」

その返答に洩々と、しかし微かに嬉しそうに返したのも一瞬、董は突然顔を歪め、首

の後ろに手を回す。

「首が……」

「何だ？寝違えたか？」

苦悶の表情で呟く董に問いつつ、光秋は左手を伸ばして董が擦っていた辺りを揉んでみる。

が、

「！痛っ！いい、痛いです光秋さん!!」

「ああ、悪い。強過ぎたか」

途端に苦悶から苦痛の表情へと変わった董が悲鳴に近い声を上げ、慌てて手を放した光秋は、今度は力加減に注意しながら首を揉んでいく。

「どうだ？」

「今度は大丈夫です……ああ、気持ちいい……」

改めて触れてみると、自分のそれよりずっと柔らかく感じる肉、ずつと細い首。それをやや恐る恐る揉んでいく光秋の確認に、董は顔を緩ませながら答える。

「……ずいぶん慣れてるじゃん？」

「そうか？……まあ、家にいる時、よく親に揉まされてたからな」

その様子を感じと、そして心なしか不満を浮かべて見ている桜に、光秋はまだ家にい

た頃、親に頼まれてなんだかないながらも肩や背中を揉んでいたことを思い出しながら応じる。

『揉まされてた』、か……そういえば今は離れて暮らしてんだよね』

「まあな」

確認の声で訊いてくる桜に、首を揉む手を休めることなく応じる。

「……やっぱり、今でも寂しいって思う？」

「え……？」

さらに掛けてきた問いの意味が一瞬解らず、今度は手が止まってしまう。

「今でもって……？」

「前に言ってたじゃん。家族と離れて寂しい、会いたいって」

「……………」

「ほら、去年のクリスマス、サン教の基地潰すのに集まった時っ」

「……………」ああ、あの時な。話の後でジュース買った」

じれったそうに言われた桜の言葉に、光秋は突然怒鳴って食堂を出て行く桜と、その後に関わった会話を思い出す。

「そうだよっ。忘れてんじゃねえよっ」

「いやあ、悪い。あの後もいろいろあったからさ……」

不服そうに言ってくる桜に、光秋は記憶が飛んでいたことに罪悪感を覚えながら頭を下げる。

「まあでも、確かに寂しいとは感じるかな。ときどきだけど」——今は家族だけじゃなくて、伊部姉妹ともだけどな——

気を取り直して桜の問いに答えつつ、光秋は脳裏に法子と綾の顔を浮かべる。

「……やつぱり？」

「ときどきだけどな。疲れた時とか、不意に。基本一人好きだから、今の暮らしの方が気楽と言えば気楽だけど」

確認する様に訊いてくる桜に応じると、今度は光秋が問う。

「2人はどうなんだ？ やつぱり寂しいとか——あつ……」

言い掛けて、光秋は慌てて口をつぐみ、微かに表情が暗くなつた桜と董を見る。

——馬鹿垂れ！。そんなの訊くことじゃないだろうが……——「すまない……」

クリスマスの際の桜の様子や、先日出掛けた時に見た一人寮に消える董の背中を思い出し、自身の思慮の浅さに呆れながら、一言詫びを告げた光秋は止まっていた董の首揉みを機械的に再開する。

「……………」

「……………」

「……………」

それからは誰も何も言わず、重苦しい沈黙が3人の間に流れる。

——不味い。この嫌な感じ、なんとかしないと……………！——

この状況を作ってしまった責任感もあって内心焦りながら思索していると、光秋の脳裏に先日董から薦められて購入したマンガの表紙が浮かぶ。

「そういえば董さん、この間薦めてくれたマンガ……………えつと、『ヒーロー候補生』だっけ？あれなかなかいいな」

「……………そう、ですか……………」

重い沈黙を払うつもりで努めて明るく、しかし感じたままを告げると、俯いていた董の顔に微かな活気が戻ってくる。

「え？光秋あのマンガ読んでんの？」

「この前董さんに薦められてな。まだ1巻だけだけど」

桜も興味を持ったらしい。顔を上げて訊いてきたことに答えつつ、光秋は初めて読んだ時に感じたことを思い出す。

「主人公の這い上がっていく感じっていうの？不向きではないけどいまちパツとしない特エスの子が、主任の助言を受けて少しずつ力を付けていく様子とか、ダメな自分に不貞腐れてたのが、少しずつ自分を認めていったりとか、ゆっくりだけどきちゃんと前に

進めてる姿に元気付けられるな」

「そう！そこなんですよね。あの話の面白いところは！」

「……けっこうわかってんじゃない」

董が若干昂揚して応じ、桜が意外そうな目を向けて返す。

それを皮切りにマンガや最近の流行り物へと会話は続き、それを明るい顔で語り合う桜と董に、光秋は内心ほっとする。

——よかった…………——

少女2人から最近の流行を教えられることしばらく。

会話の合間にふと窓を見た光秋は、空がすっかり暗くなっていることに気付いてハッとする。

——！今何時だ？——

思うや机の上の時計を見ると、4時を少し過ぎたところだった。

「……いかん。だいぶ話し込んでみたいだな」

「え？うわっ、真っ暗」

「！そんな……」

光秋の眩きに、桜も外を見て驚き、葦は残念そうに顔を俯ける。

「午後から『次の人』の話、全然できなかった……」

「また今度機会を作ろう。暗くなってきたし、今日のところはこれでお開きにしよう。帰り送るよ」

落胆の声を漏らす葦に応じながら、光秋はコタツを出てコートを羽織る。

「菓子の残りで食べたいのがあったら持つてつて。飲み物もな」

「はい」

それに続く様に桜と葦も帰り支度を整えるのを横目で見ながら、ポケットに小物を詰め、コタツを切つて玄関へ向かう。

「あー、雨だな……」

いつから降り出したのか、ドアを開けて真つ先に入つた濡れた周囲に、光秋は荷物をまとめて出てきた桜と葦を見やる。

「2人共、傘持つてきたか？」

「ううん。来る時晴れてたから」

「私も……」

「だよなあ……」

予想通りの返答にしばし考えると、光秋は玄関脇の傘を取る。

「少し厳しいかもしれないが、これに3人で入ろう」

「大丈夫?」

「駅までですぐだしさ。さ」

「……わかりました」

光秋の提案に、桜は不安そうに、董も心配を浮かべて応じると、3人は1本の傘の下に寄り合う様に入って駅を目指す。

「大丈夫か?濡れてないか?」

前を横に並んで歩く桜と董を窺いつつ、光秋は2人の頭上に常に傘があることを意識しながら手元を調整する。

「アタシ等は平気だけど……」

「光秋さんは?」

「大丈夫」

問いに答えながら訊き返してくる桜と董に、実際は傘からはみ出したズボンの後ろ側が少し濡れているのを感じながらも、光秋はするように即答する。

速足ながらも器用に固まって歩くこと少し。駅構内に入った光秋は傘を畳み、改札口へ向かう董と桜を見る。

「あれ?切符は?」

「いや、アタシ等カードあるし」

券売機に寄らず改札口へ直進する2人に思わず問い掛けた光秋に、桜は財布から出したICカードを示す。

「ああ、そうか……今は小学生でもそんなの持つてるんだよね……」

それを見て、光秋は桜たちとの世代差を思い知らされる。

「あ、そうだ。向こうの駅と君たちの寮も距離あるよな」

「はい、そうですね」

先日董を送った時の記憶を頼りに大よその距離感を想像する光秋に、董が頷きながら応じる。

「ならこれ持つてけ」

言うや光秋は傘を差し出し、近くにいた桜の手に持たせる。

「え？でも、光秋帰りどうすんの？」

「すぐそこだ。差さずに行っても大丈夫だよ」

「悪いですよ。それならコンビニでビニール傘でも買つて——」

「そんなもつたいない。いいから持つてけ。明日学校帰りにでも本部に寄つて、その時返してくれればいいから」

桜と董にやや強引に応じつつ、光秋は半ば押し付ける様に傘を渡すと、後退つて2人

——というよりも改札口から距離をとる。

「暗くなってきたから、足元気を付けてな」

「……じゃあ」

「ありがとうございます……」

未だ迷いが残っている様子で応じながら、桜と董はそれぞれ自動改札機の読み取り機にカードをかざし、光秋の傘を持ってホームへ向かう。

その背中を見送る間、光秋は今日一日のことを大まかに振り返ってみる。

——“次の人”について語り合うって趣旨からは少し外れたけど、桜さんとのギクシヤクが治まったのは大きな収穫だな。あとは北大路さんだが……ありやなかなかの強敵みたいだからなあ……——

思いつつ、頑強な壁の様な表情を浮かべた北大路を想像して、つい苦笑が漏れる。

と、連鎖的に桜と董の浮かんでくると、苦笑は不安へと代わる。

——昼も思ったけど、あと数日であの子たちの上司になるんだよなあ……本当にやっていけるんだろうか？……そもそもこの先、ESOで……——

特エス主任就任への不安に続いて、メガボディ開発による自身の今後の立場に関する不安も連鎖して抱きつつ、光秋は機械的に駅を出て、雨の中を寮へ向かう。

「……やっぱり、お言葉に甘えてビニール傘買ってもらったかな？」

思った以上のいい降り具合に微かな後悔を覚えながら、少しでも早く雨から逃れようと寮へと駆け、そのことで思考が一杯になる。

——……ま、いつか——

それによつて胸が重くなりそうだった不安が、一時的とはいえ流されたことに、深い部分で感謝しながら。

9 2 試験前夜

2月21日月曜日午後6時。

—今日もなんとか終わったなあ……—「さて、飯食つて帰ろう」

今日の研修を終えた光秋は、勉強疲れを含んだ声でそう呟くと、机に広げていたノート諸々をカバンに片付け、それを肩に提げて食堂へ向かおうとする。

その時、研修室のドアを開けて、学校の制服にコートを羽織った桜と董、北大路が入ってくる。

「あれ？君たち……」

「はい、これ」

言いながら桜が差し出した傘を見て、一瞬戸惑った光秋は昨日の別れ際の会話を思い出す。

「ああそうだ。学校帰りに返してくれて言つたな。ありがとう」

「こちらこそ、昨日は貸していただいてありがとうございます」

言いながら傘を受け取る光秋に、董が頭を下げる。

「ほら、桜も」

「……ありがとう」

目配せして急かす董に、桜もちよこんと頭を下げる。

「どういたしまして……で、どうだった？濡れずに帰れたかな？」

「はいっ、おかげ様で」

「女同士で相傘っていうのも、ちよつと恥ずかしかったけどね」

「そりやどうも」――まあ、少し濡れて帰った甲斐はあつたつてことかな？――

はつきりと応じる董と、その時のことを思い出して少し照れる桜の姿に、光秋は小さな満足感を覚える。

と、その様子をドアのそばで黙って見ていた北大路が、冷静――というよりも冷めた声を寄こしてくる。

「さ、用は済んだんだし、とつとと帰ろう」

「……北大路さんの言う通りだな。もうすっかり暗いし、早く帰った方がいい」

その言い方に若干皺が寄るものの、実際窓からすっかり日が暮れた外を見た光秋は、小さな不愉快さを呑み込みながら2人に告げる。

が、

「……せつかくまた会ったんだから、夕飯くらい……」

「夕飯？」

「べ、別にあんたと一緒に食べたいとかじゃなくてだな！腹減って寮まで保たないっていうか……」

「せつかくですから、一緒に食べませんか？」

「ああ……まあ、いいが」

桜と董の誘いに、特に断る理由がなかった光秋は頷き、部屋の明かりを消して食堂へ向かう。

——向こうから食事に誘ってきてくれるか……少なくとも2人に関しては、安心していいかな——

あからさまに喜びを浮かべる董と、何かを抑え込もうとして、しかし微かに漏れ出るのを止められない顔の桜、前に行く2人の姿にそんなことを思う一方、光秋はそつと後ろを振り向く。

——問題は…………——

視界の端に捉えた壁の様に硬い表情を浮かべた北大路に、つい憂鬱になる。

4人での夕食を終え、少女3人を寮まで送った光秋は、食堂へ向かう時から先程の別れ際までを振り返って、思わず嘆息を漏らす。

「はあー……………結局、北大路さんとはろくに口利けなかったな……」

主に食事の際、桜や董とは学校のことや最近の流行などを話題にそこそこ会話できたものの、北大路とは一切それがなかったことを思い出し、食堂へ向かう際に抱いた憂鬱がますます強くなる。

——流石に桜さんや董さんが話を振れば返してたけど、僕には返さない……というか、僕が殆ど振れなかったからなあ……………なんか話し掛けるのを躊躇っちゃうんだよなあ……………こんなん、彼女の上司やっていけるんだろうか……………——

先日から再三に渡って抱いた不安、その形をとって投げ掛けられた自問に答える術はすべなく、光秋はとぼとぼと駅へ向かう。

2月26日土曜日午後6時半。

研修を終え、そのまま食堂で夕食を済ませた光秋は、疲れと満腹感を抱きながら本部正門に差し掛かる。

「いよいよ明後日か……………」

明日一日の休み——という名の自習時間を挟んで行われる特務部隊主任就任試験のことを思い出し、先日の北大路のことと合わせて重い不安が押し掛かってくる。

その時、

「来た来たっ！コウちゃん！」

「!?」

突然響いた聞き覚えのある声と、それ以上に使う人間が限られる自分の呼び方に、光秋は祝賀パーティー以来の顔を思い出しながら、すっかり暗くなった周囲を見回す。

と、右の街灯の足元に特徴的な赤い長髪の女性を見付け、その許に速足で歩み寄る。

「日高さん?どうしたんです、こんなところで」

思わぬ再会に戸惑いながら、ビジネススーツの上に黒いコートを羽織り、首に赤いマフラーを巻き、左肩に大きなカバンを提げた日高を見やる。

「いやね、この前ホウちゃんと電話した時、コウちゃん仕事の都合でこっちに來てゐるって聞いてね。待つてれば会えるかなあとと思って」

「待つてればって……」

気楽そうに言ってみせる日高に、重そうなカバンと、コートを着けていても肌寒く感じる気温を改めて知覚した光秋は、つい啞然としてしまう。

「……ちなみに、どれくらい待つてました?」

「うーん……30分くらいかな?6時にはもうここにいたと思うけど」

「こんな寒いところに、そんな重そうなカバンを持つて?……電話してくれれば——て、連

絡先教えてませんでしたね……………」

呆れながら言い掛けて、途中で根本的なことを思い出した光秋は、それ以上言えなくなる。

「ああ、大丈夫。これくらいの寒さわたしは平気だし、カバンにしたつてずつと使ってる
商売道具だからね。これくらい軽々運べなきや、料理記者にあらずつてねっ」

「はあ……………」

笑みを浮かべてカバンを上下させる日高を見て、光秋は自ずと納得させられる。

「とまあ、立ち話はこれくらいにして……コウちゃん今日の仕事終わったんだよね？」

「はい」

「明日は休み？」

「ええ。一応、明後日大事な用があるんで、その準備はありますが……………」

日高の質問に答えながら、光秋はその言わんとすることを探ろうとする。

「準備って？」

「勉強です。週明けに仕事で必要な試験控えてて」

「そっか……………」

光秋の返答に、日高はしばし思案顔を浮かべる。

「……それってさ、少なくとも今夜は空いてるつてことだよな？」

「?.....ええ、まあ.....?」

「じゃあ、このあと付き合つてよ。わたしのマンションで一杯やろう!」

「また唐突ですね.....」

確認の後の日高の提案に、光秋は思ったままを返す。

「いいじゃん。弟分が近くにゐるってわかつてから、誘いたくて仕方なかったんだから。さっ!」

「!!」

言うや日高は光秋の手を掴み、虚を突かれた光秋は引き摺られるままについていく。

「いや、ちよつと——」

転びかけた体を安定させて反論を試みようとするものの、日高はすぐにタクシーを停め、後部席に押し込まれる様に座らされた光秋は出かかっていた言葉を霧散させる。

間を置かず日高も隣に乗り込み、運転手に行先を告げると、タクシーはすぐに走り出す。

「.....日高さんって、思ったより強引ですね」

自分の意志に関わらず一方的に進んで行く状況と、それ以上にそんな状況に甘んじてゐる自身への苛立ちから、光秋は先程霧散させた言葉の代わりにそう告げる。

「女はね、時に強引なの。勉強になったでしょ?」

「大いに……………」

自分の言葉を風と受け流す日高にそっぽを向くと、光秋は街灯やネオンに照らされた街並みを車窓越しに眺める。

—まあ、日高さんのマンションに行くのは悪くない。それを面白そうだと思ってる自分がいるのも確かだ。だから手を引かれた時も、タクシーに乗せられた時も、大して抵抗しなかったのかもしれない……………ただ、せめて主任関係のゴタゴタが終わってからにしてほしかったなあ……………—

景色を眺めて気持ちを整理しながらも、その一点だけは譲れない光秋だった。

周囲から漏れる明かりの下を走ること十数分。

おもむろに路肩に寄ったタクシーが停車し、日高が運転手に運賃を払うと、後部左のドアが自動で開く。

そこから降りる日高に続いて、光秋もカバンを確認して下車すると、ドアを閉めたタクシーはすぐに走り去っていく。

「……が、日高さんのマンションですか……」

車の波に消えていくタクシーを見送ったのも束の間、背後を振り返った光秋は、目の

前に佇む4階建てのビルを見やる。

一軒家や2階建ての小ぶりな集合住宅が目につく中にぽつんと佇むそのビルは、高さこそあれどずいぶん小ざっぱりした印象を抱かせてくる。

「そうだよ。ここの2階」

「……思ったよりもなんというか………質素ですね」

言いながらマンションの玄関へ向かう日高を追いつつ、光秋は少し意表を突かれた気持ちを出す。年末に訪ねた日高邸の記憶が強く残る光秋にとって、目の前の建物に日高が住んでいるという現実には、理屈では解つていても深い部分でどうしても腑に落ちないものを感じてしまうのだ。

そんな気持ちを持って余しながら玄関をくぐり、エレベーターに乗り込んでしばし。扉が開くと光秋は日高の後を追って吹き抜けの廊下を進み、一つのドアの前で立ち止まる。

「入って」

そう言つて鍵を開けた日高に従つて、光秋は開いたドアから日高の部屋に足を踏み入れる。

「……おじゃまします」

不安と好奇心が混ざった声で応じながら靴を脱ぎ、風呂やトイレと思しきドアや台所

が並んだ廊下を日高を追って進むと、突き当たりのドアに通される。

日高がドア横のスイッチを押して明かりを点けると、8畳程の広さにコタツや座布団が置かれた居間が露わになる。

—広さは僕のこと大して変わらないかな……？外から見た時もそうだが、思ったより普通………？—

光に照らされた居間を見回して当初の印象を覆そうとしたその時、光秋は部屋の端に置かれた棚、その中に並べられた物に思わず顔を近付ける。

「……日高さん、プラモデルなんてやるんですか？」

そう訊きながら光秋が注視するのは、棚の中、それも数段にかけて並べられた人の形をしたロボットの数々だ。合軍のゴーレムやNPのフラガラツハ、ZCのヘラクレスの様な工業製品然した無骨なデザインや単調な色彩をしたものもいくつかあるものの、大多数は妙に突起物が多かったり、数色の凝った配色がなされていたり、十メートル単位の大きさにしたら自重で折れてしまいそうな程に脚が細かったり、中には執拗な程に人のそれに似せた顔が付いていたり、いかにもマンガやアニメに出てきそうなものばかりだ。

—これ、昔観たような……こつちでもやってたのかな？こつちはこの前宣伝してたよな……—

実際その印象は正しく、いくつかは光秋も見覚えのあるものだった。

「そう。わたしの趣味なんだよねえ」

答えながら日高が左隣に寄つてくると、光秋は棚に寄せていた顔を離して日高を見やり、並べられたプラモデルたちを観るその目に既視感を覚える。

「……………ああ、そうだ。この前CDショップに入った時の涼さんも、今の日高さんと似たような目をしてたよなあ……………本当に好きなんだなあ——」

その篤い眼差しは、日高の気持ちを端的に物語っているように見えた。

そんな光秋の観察の視線に気付いたのか、気を取り直した日高は棚から顔を離す。

「ごめんごめん、つい……………着替えるからちよつと待つてて」

「あ、じゃあ僕、廊下出てます」

言うや光秋は居間を出、ドアに背中を預けて日高が着替え終わるのを待ちつつ、さつき見た光景を思い返す。

——女の人にもプラモとか好きな人いるんだなあ……………いや、女とか男とか関係ないか。その考えがもう『古い』ってことなのかな……………どっちにしろ、僕はああいうの苦手なのだが……………——

自身の性分に苦笑を浮かべていると、ドア越しに日高の声が掛かる。

「いいよ——」

声を聞くと、光秋はゆつくりとドアを開き、赤いセーターと紺色のジーンズに着替えた日高を見る。

「テキトーになんか用意するから、コタツに座つてて。コウちゃんお酒飲めるつけ？」
「ダメです。まだ未成年なんで」

「りよーかいっ。そうなると……」

自分の返答に応じながら入れ違いに廊下に出て行く日高を見送ると、光秋はひとまず部屋の隅のハンガーラックに脱いだコートを掛けてコタツに入り、冷えた脚を温める。

—ふうー………あ、電気ストーブも点いてるか………—

温かさにひと心地つきながら室内を見回してぼんやりとそんなことを考えていると、廊下から盆を持つて戻ってきた日高が正面に腰を下ろす。

「ごめんねえ、今これしかなかった」

言いながら、日高は光秋の許にグラスを置き、そこに2リットルのペットボトルに入ったコーラを注いでいく。

「いえ、お構いなく」

「お酒OKなら、もつといういろいろ出すんだけど、一人で飲んでもつままないしねえ。ちよーど買つてそのままだったこれも片付けられたから、これはこれでよかったかな」

応じる光秋にそう返しながら自分のグラスにもコーラを注ぐと、日高はそれを持ち上

げ、意図を察した光秋もグラスを持って軽くぶつける。

カチンという小気味いい音を聞きながらコーラを一口飲むと、光秋は当初から気になつていたことを問う。

「ところで、何で今日飲みに誘つたりなんてしたんです？」

「え？タクシー乗る前に言つたじゃん。わたしが誘いたかつたんだよ。久しぶりに弟分と飲みたかつたから」

「……そうですか？」

「なに？その目」

「なんというか………なんでもなさそうにしてる割りに必死、とでも言いましようか？僕は日高さんのことまだよく知らないけど、『らしくない』というか………とにかく、なんか引つ掛かるものがあつて」

我ながら歯切れの悪い説明をどうにか終わると、光秋はコーラを一口飲む。

『らしくない』、か………」

「そう感じると言いますか………」

コーラを飲んで天井を見上げながら呟く日高に、光秋は気に障つたかと不安を覚えながら返す。

「んー………ある意味そうかもねえ。実は一つ言わなかつたことがあつてさ」

「とうとう?」

「コウちゃんと飲みたいって思ったのは本当だよ。でもその前にホウちゃんから頼まれたからね」

「法子さんから?」

思わぬところで出てきた名前に、光秋は日高に耳を寄せる。

「先週の日曜、夜だったかな?……電話があつてね。コウちゃん最近元気なさそうだから、わたしの都合のいい時に元気付けてくれないかつて」

—法子さん……ん? 待てよ、先週の日曜……?—

日高の口から語られた法子の氣遣いに胸が温くなる一方、光秋は日高の説明を再度思い返す。

—確か、董さんと桜さんが来た日だよな……あ、そういえばあの日、先のことでいろいろ不安がつたつけ。綾奴、また心読みやがつたな—

思いつつ、おそらくはそのことを法子に伝えたことで今のようになつたのだと察し、そんな綾の想いにまたも胸が温くなる。

「それは……後で御礼言わないといけませんね」

「わたしとしてはこんなネタバラシなんかせずに、もつと自然体で語らいたかつたんだけどねえ」

胸の内をそう言葉にする光秋に、日高は少し不貞腐れた顔を浮かべる。

「コウちゃんつてさ、変なところで鋭いよね」

「……鋭い、ですか？ただ気になったことを言っただけだけど」

「それを鋭いつて言うんだよ……ま、それはそうとして」

そこで一旦言葉を区切ると、日高は不貞腐れ顔を引っ返めて光秋を注視する。

「最近なんかあった？」

「……本題に入りますか……」

その様子をそう理解するや、光秋はしばし考える。

——確かにこのところいろいろ不安を感じるのは事実だ。でも、それを日高さんに相談したつて……機密に触れるかもしれないし……—

そんな思いから、つい口を閉じてしまう。

「もしかして、『わたしに話しても』とか思ってる？」

「……………」

図星を突いてくる日高に、光秋の口はますます重くなる。

「そりゃあ、わたしはコウちゃんの仕事のことよくは知らないし、カウンセラーつてわけでもないよ。でも、言うだけ言ってみてよ。声に出すだけでけっこう楽になるもんだよ」

「はあ……………」——といってもなあ……………どれもかなり個人的なことだし……………」

思いつつ、光秋は俯いてしまう。

「……………ま、言つてと言つて言うようなら、そもそもホウちゃんに頼んでくることもないか……………わかった、今の件はもうおしまい。せつかく来たんだから、さ、飲んで飲んで。あ、そういえばこの前買い置きしたやつが……………」

気持ちを切り替えた様子でそう言いながら、日高は再び廊下へ向かい、少ししてポテトチップの袋を持つて戻ってくる。

「あら、なんか久しぶりに見ますね、それ」

日高によつて封を開けられた袋から覗く薄い揚げ芋の山を見て、普段こうしたものを食べる機会がない光秋は懐かしみながら告げる。

「あれ？もしかして嫌いだった？」

「いいえ。あんまり関心が向かないだけで。いただきます」

不安がる日高に首を横に振つて返しながら、光秋は摘まんだ一枚を口に運び、適度に硬い舌触りと、舌に広がるジャガイモと塩の質素な味わいに、懐かしさをさらに強める。

「久しぶりに食べると美味いですね」

飾らない素朴な塩味にそんな感想を呟きながら、コーラを一口飲む。

「日高さんつて——」

「春菜」

「？」

ふと思った質問を遮られ、光秋は日高の意図に首を傾げる。

「わたしの名前は『春菜』^{はるな}、いつまで名字で呼んでるか」

「はあ……………春菜、さん…………」

「よしつ。で、なにかな？」

——…………最近、他人^{ひと}を名前で呼べるようになる時間が短くなつたなあ…………——

嬉々とした日高——春菜とのやり取りや、入間隊の少女たちとの関わりを思い返しながら自分の変化にそんな感慨を抱くと、光秋は当初の問いを改めて投げ掛ける。

「春菜さんって、こういうのよく食べるんですか？」

言いながら、また一枚ポテトチップを摘まむ。

「たまーにかな。どっちかっていうと、スルメとかビーフジャーキーとか摘まむことが多いかも。晩酌^{さかな}の肴^{さかな}にね」

答えつつ、春菜もポテトチップに手を伸ばす。

「晩酌かあ…………よく飲まれるんで？」

「今日みたいに、明日休みの日の夜なんかは割とね。冷蔵庫の中とか、台所の棚の中とか、けっこういろいろ入ってるよ」

「へー」

春菜の視線を追って廊下に好奇心の目を向けながら、光秋はコーラを一口飲む。

「ほら」

「あ、ありがとうございます」

ちょうどグラスの半分まで飲んだのに気付いた春菜が追加で注いでくれるのを見て、光秋は礼を言いながらも一口飲む。

「そういうのも、やっぱり食通の性^{さが}ってやつですか？」

「そこまで大袈裟なもんでもないと思うけど……そういうコウちゃんは？　なんか好きなものつてないの？」

「僕は……甘いものはけっこう好きですね。チョコレートとか」

「へー、甘党なんだ」

「あとは饅頭とか……洋菓子より和菓子の方が好みですね」

「なるほどね。じゃあ、今度そういうのが美味しいお店連れてってあげようか？」

「いや、そこまでしなくても……それに、それ以上に好きなものもあるし……」

そこまで言って、光秋は喋り過ぎたかと思ってしまう。

「なに？」

そして案の定興味を示す春菜に、どうしたものかと少し考える。

「さすがに喋り過ぎたか？でも日高——春菜さんも興味見せてるしな……………そこまで大したことでもないし、いいかな……………」

まだ若干迷いながらも決めると、光秋はコーラで口を湿らせて続ける。

「本ですね。昔から物語というものが好きで、書店なんかに行くといついろいろ見ちゃって」

「なるほど……………ちよつとわかるような気がする」

言いながら、春菜は部屋の隅の棚に並べられたプラモデルを見やる。

「やつぱり、ああいうの好きなんですか」

「うん。家にいた頃は部屋に飾ってたんだけどねえ。買い溜め過ぎて箱が押し入れから溢れ出てきた時は流石に怒られたっけ……………」

「あの部屋に、ですか……………」

遠くを見る目で呟く春菜の話を聞きながら、光秋は冬に訪ねた日高邸、その春菜の部屋を思い出し、そこにプラモデルを並べた棚や押し入れから箱が溢れてくる様子を想像してみる。

「ま、生活の基盤がこつちに移ってからは、全部こつちに持ってきたんだけどね」

「……………ということは、あそこにも？」

コーラを飲みながらそう続ける春菜に、光秋はクローゼットと思しき扉を恐る恐る見

ながら返す。

―あそこ開けたら、布団雪崩ならぬ、箱雪崩が起こったりするのかな?―
思いつつ、上から落ちてくる大量の箱に埋められる自分を想像してみる。

「そういえば、コウちゃんもロボット乗ってるんだよね。この間見たけど」

「ーいや、その……………」

言われて祝賀パーティー襲撃事件の時のことを思い出し、光秋は返事に困ってしま
う。

「ああ、ごめん。これはあんまり話題にしない方がいいのかな?」

「……………そうしてくれると助かります。されても話すことに困るので」

「機密つてやつか……………OK。ただ、この前の活躍は、やっぱりカッコよかったよ!」

やや熱の入った声で告げる春菜に、光秋は意表を突かれる。

「見てたんですか?この前の……………」

「そりゃあ、あんな大きいのがすぐ近くを動き回れば気になるよ。全部つてわけじゃな
いけど……………NPの黒いのと取っ組み合ったり、ZCつてとこのボスの攻撃から別の口
ポットを庇ったり。それで涼子様と一緒に出てくるんだから、もう驚きっぱなし」

「あー……………そういえばそうでしたね……………」

ポテトチップを摘まみながらしみじみと語る春菜に、初めて乗っているところを見ら

れた時のことを思い出した光秋は気まづくなる。

「……言わせていただくと、あの時は非常事態でしたから、外歩いてるよりはいいと思つて乗せたのであつて……」

「わかつてるよ。プロの判断つてやつでしよ?」

「プロ……ですか……」

春菜のなんとなしの受け答えに、ここ最近のことを思い出した光秋はますます気まづくなる。

「プロねえ……ニコイチを動かせるだけに取り柄みたいなもので、それ以外は努力してるつもりでもいまいな奴が、果たしてそう名乗つていいものか? 現に、主任研修で四苦八苦してるあり様だしなあ……」

思う間にも視線は下がり、控えめに炭酸を弾かせ続けるコーラのグラスを無感動に視界に収めると、知らぬ間に口が動く。

「そんなんじやありませんよ……」

それがきつかけになつたのか、これまで胸の内に押し止めていた不安が、次々と口から零れてくる。

「半ば一芸入社、それも雇い先のお情けで今の仕事に就いて、その一芸以外はまるでダメ。今だつて新しい仕事に——その前段階に右往左往して、情けない姿晒して……」

おまけに、なけなしの一芸さえも……それを基に作ってきた地位——と言ったら変ですが……立場……も危うい感じだし………そんなプロとかなんとか、称賛されるような器じゃないんですよ、僕は………」

言葉を重ねるごとに、目の奥が熱くなる。が、決壊だけは辛うじて堪える。

——なけなしの自制……否、自尊心の所為か？ さんざん泣き言垂れてるくせに………

冷静な部分でそんな自分に苦笑を浮かべていると、コーラを一口飲んでグラスを置いた春菜が、ゆっくりと顔を近付けてくる。

「ようやく喋ってくれたね。コウちゃんガード堅いよ」

「……………あつ」

言われて、自分は今先日からの不安を口にしたのだと気付く。

「今のは……………」

「わたしもね、だいたいそんな感じだよ」

弁明——というよりも言い訳をしようとして言葉が出ない光秋に構わず、春菜はポテトチップを摘まみながら続ける。

「小さい頃から美味しいものを食べるのが好きで、その内に『こんな美味しいものがあるならみんなにも教えてあげたい、美味しいって気持ちをは分かち合いたい』って、そう思

うようになつてね。中学の頃に料理記者って仕事があるのを知って、『さつき言つたよ
うなことができるのはこれだ!』『なりたいなあ』って漠然と思つてたんだよ……………」

言葉を重ねるごとに天井に向けた目が遠くなつていく春菜。それを見ていると波
立つていた光秋の心境は不思議と落ち着いていき、ただ春菜の語ることを聞き漏らすま
いと集中していく。

「高校卒業して、東京の大学行つてる頃にね、何がきっかけだったか忘れたけど、料理記
者になりたいって思いが強くなつて、家族と相談の上で今の会社探して、大学中退して
入ったんだよねえ……………」

—そこまでして、か……………—

コーラを飲んで一旦言葉を区切る春菜を眺めながら、光秋は今までの内容に一つ思い
を抱くものの、告げるのは春菜の話が終わってからと口をつぐむ。

「入る前は、料理のことにはある程度自信あったから、余裕とまではいわないけどそこそ
こ行けると思つてたんだよ……………」ところがいざ働いてみると、記者としての仕事なんてな
かなか来ないし、来たとしても先輩のアシスタントだったり、どうにか記事一つ任され
てもダメ出しの連続だったり……………一晩かけて練りに練つて書いた原稿が赤字まみれに
なつて突き返されてきた時は流石に心折れかかったねえ。『わたしこの仕事向いてない

んじゃないかあ』って」

——…春菜さんも、そんなことが………

その頃のことを思い出しているのか、表情に微かだが悲壮が浮かんでいる春菜の言葉を聞いていると、光秋は親近感の様なものを覚えてくる。もちろん自分が今置かれている状況と春菜が歩んできた過程は違うことは理解しているが、一方で自分が今感じていること、春菜がかつて感じたこと——状況に置かれた際の心境とでもいうものに似通ったものを見出して、それが親近感とてそういう思いを抱かせるのかもしれない。

「家に泣きながら電話したことも1回……いや、2回くらいあったかな。辞めようかと思って思ったことも何度もある。でも、それでも辞めずに続けてこられたのは、やっぱり料理記者になりましたから——『美味しいものをみんなに知らせたい』って気持ちがあったからだと思う。だから1回されたダメ出しは次言われないうちに注意したり、赤字修正されない文章が書けるようにそっちも自分なりに勉強したり、わたしなりにいろいろやってみて………なんだかんだでこうして同じ会社に勤め続けられてるわけだけどねっ」

「はい………」

最後は何かを吹っ切る様に笑顔で告げる春菜に、光秋は啞然としながらも相槌を打つ。

「まあなんだろう、何が言いたいかって言うかね、仕事なんてみんなそんなもんじゃないかなってこと」

—『そんなもん』、か……………」

その一言を聞いて、光秋の肩がふっと軽くなる。

「そりゃあ、好きで入ったかやむを得ず入ったかって違いはあるかもしれないけど、やっていく分にはね…………できないことがたくさんあって、失敗して、情けない姿晒して、弱音も吐いて…………それでもどうにかしようって試行錯誤して、勉強して、恥もいっぱい晒して…………そうやって、どうにかこうにか続いていくもんなんじゃないかな。わたしはそう思ってる」

「…………恥を晒して、それでもどうにかこうにか続いていく…………か…………いいですね、それっ」

ぎこちなくも語り切った春菜に、すっかり身が軽くなった光秋は微笑んで応じる。

「ありがとうございます。完全…………てわけにはいかないけど、おかげで大分楽になりました」

「よかった。わたしも辛い過去思い出して語った甲斐があつたよ」

「それについては、すみません…………」

「いいよっ。弟分の為、お姉さんひと肌脱いじゃう！」

「ホントに脱がなくていいですよ……」

言いながらセーターを上げて少しだけ腹を見せる春菜に呆れながら返すと、光秋はふと思つたことを告げる。

「軽くなつたおかげかな？ちよつと考えたら、そこまで心配することもない気がしてきました。情けない姿なんて今更だし、立場にしたつてすぐにどうなるわけでない、心配なら今の内にたんまり貯金しておきますさ」

「そうそう、その意気！……どうしても仕事に困つたらわたしに声掛ければいいよ。使用人もう1人くらい雇う余裕はあるだろうし」

「姉貴分その2の家で使用人ですか……それも悪くないかもしれませんがね！」

「でしょ……あ、そういうえば週明けにも取材の仕事があつてさ」

どこまでが本気か、どこからが冗談か、そんな区別も曖昧な、しかしやり取りを重ねるごとにどこからか活力が湧いてくる会話を重ね、さらに別の話題へと広がりながら、光秋と春菜の夜は更けていく。

その中で子供のコーラをまた一口飲みながら、光秋は胸の中で強く思う。

——本当に来てよかった！お膳立てしてくれた法子さんと綾には大感謝だつ！——

ポテトチップとコーラを挟みながら語ることしばらく。いよいよ9時に差し掛かる時計を見た光秋は帰宅の意志を告げ、春菜も渋々それに同意する。

—すっかり話し込んだんじゃないかなあ……でもまあ、元気出た！—

春菜との一連の会話をそのようにまとめながら、コートを羽織った光秋はカバンを提げて忘れ物がないか確認し、玄関へ向かう。

「今日はありがとうございます」

「うんうん。わたしも楽しめたし。次はお酒をお供にやりたいね」

「その時は、僕に奢らせてください」

右手でお猪口ちよこを作つて示す春菜に、光秋は真面目な口調で申し出る。

「こらっ、弟分が生意気だぞ」

「今日の御礼ですよ。それこそ、弟分の顔を立てるためと思って、その時は付き合ってください」

「むー……そう言われるとなあ……」

若干迷った様子の春菜を見ると、光秋はドアノブに手を掛ける。

「それじゃあ、お邪魔しました」

「ホントにタクシー呼ばなくていいの？」

「勿体ないですよ。いくら離れてないところに駅もあるし。では」

「うん。気を付けてねえ」

春菜の返事を聞くと、光秋はドアを開けて廊下に出、来た道を辿ってマンションを出る。

「えつと……あつちだな」

周囲を確認しつつ駅を目指し、構内に入るといつもより若干多めの小銭を券売機に入れて切符を買い、ホームへ向かう。

少し待ってやって来た電車に乗り込み、席に座ると、伊部姉妹の顔が浮かんでくる。

—2人にも帰ったら礼を言わないとなあ。まだ起きてるかな?—

思う間に電車は目的の駅に着き、ホームに降りた光秋は逸る気持ちと冷氣に迫り立てられて寮を目指す。

寮の自室に戻ると、光秋は荷物を下ろして暖房を入れ、法子に電話を掛ける。

数回の呼び出しの後、久々の声がスピーカーから響く。

(もしもし?)

「あ、法子さん?今大丈夫ですか?」

(うん、ちょうどテレビ観てたところだけど。どうかした?)

「いや、今日帰ろうとしたら、春菜さんに誘われまして……」

(ああ……)

光秋の一言に、用件を察した様子の法子は納得の声を漏らす。

「おかげ様で、いろいろ溜まっていたのがだいぶ楽になりました」

(そう、それはよかった)

「ですね……春菜さんに手を回してくれて、ありがとうございます」

自分のことの様に嬉しい声を返してくれる法子に、光秋は電話越しに深々と頭を下げる。

(もしかして、それ言うために電話してきたの？ いいのに……)

「いいえ。これはきちんと言わないと……法子さん、綾、気遣いありがとうございます
たっ」

改めて礼を告げながら、さらに深く頭を下げる。

(……まったく。どういたしまして！……アキ、ちよつとだけど元気になってよかった
よ)

それに対して、法子の呆れと嬉しさが混ざった声と、綾の安心した呟きがそれぞれ応じる。

「それですね……ちよつと訊きたいことがあつて」

2人の返事を聞くと、光秋は春菜から事情を聞いた時から抱いていた小さな疑問を告げる。

「不安を和らげるために話しをするというのはわかります。ただ、それならこうやって電話越しでもよかったような？ わざわざ春菜さんに直接会わせたのは何ですか？」

（それはさあ……………やっぱり、人に直に接した方が、声だけのやり取りより効果的かなと思って……………念には念と思ってね。で、私がそつちでこんなこと頼めそうな人っていったら、ハルちゃんしかいなかったから……………）」

「なるほど……………それは確かに」

どこか暗い響きの法子の声に引つ掛かりを覚えながらも、言っていること自体には先程の実体験から深く頷く。

（……………できることなら、あたしがそうしてあげたかったけど……………）」

「綾……………」

もどかしさを滲ませる綾の声に、光秋は法子の声に感じた引つ掛かりを——伊部姉妹の想いを察し、胸が疼く。

（できるなら、今すぐにでもアキの所に行つてあげたいよ。でも、それだと法子に迷惑になるし……………私も、綾を通じて光秋くんのことが漠然とわかつて、直接何かしてあげることができないっていうのはね……………もちろん、一社会人として仕事ほったらかして

遠出するわけにもいかないんだけど……………)

—二人とも……………—

電話越しに聞く伊部姉妹の苦悩や哀愁の染み出た声に、光秋は疼きが強くなった胸を擦る。

—ああ、今僕、二人のところに飛んで行きたいって、そう思ってるな。でも他の——主に仕事の都合でそれができないことも解ってる……二人が感じてるのも、こんな気持ちなのかな?—

胸の疼きをそのように理解しながら、光秋は努めて明るい声音を電話に吹き込む。

「そんな思い詰めないでくださいよつ。とりあえず、僕の方はどうにかなったんだし、今回はそれでいいでしょう?」

(……………そう……………だよね……………うんつ、そうだね)

綾か、法子か、あるいは二人の意思が同時に告げているのか、返ってきた普段に近い声音に、光秋はひとまず安堵する。

「なんかすいません。変に気を遣わせちゃって」

(そこは『ありがとう』とか、そういうのでしょうか?……………気ぐらい遣わせてよ)

そう告げると、法子と綾の笑みを含んだ声が返ってくる。

(それにさ、実は来月くらいにそっちに行こうと思ってるね)

「！都合付きそうなんですかっ？」

法子のその一言に、光秋の胸は一気に高鳴る。

（末頃に休めるように調整してるところ。本当は正確な日にちが決まってから連絡しようと思ってただけど）

「それは……今から楽しみですね！」

電話越しの法子に、光秋が思いを赤裸々に告げる。

「ならその時、少しでもいい格好見せられるように任官試験頑張らないと！」

（なににい？その理由っ。そもそもそうやって張り切り過ぎて、また気落ちしたりしないですよ）

「大丈夫ですよ。言ってみただけです」

咄嗟の発言に笑いながらも心配してくれる法子に、光秋は肩の力を抜いて返す。

「……ただ、試験自体はちゃんと頑張ろうと思います。その為の研修だったわけだし、これに合格しないことには新しい仕事に就けないし……教えていただいた藤岡主任の為に、こんな僕を待っていてくれる子たちの為にも、ちゃんと受かって、次に進みたいです」

（……そっか……でも、根詰め過ぎないでね）

「はいっ」

法子の氣遣いに、光秋は深く頷きながら応じる。

（アキが元氣ないの、あたし嫌だから……）

「ありがとな」

綾の言葉に微笑みながら礼を言うと、光秋は机の上の時計を見る。その針は、間もなく10時を指そうとしていた。

「すみません。今日はもう遅いんでこの辺に」

（わかった……あんなこと言った後で変かもしれないけど、試験頑張つてっ）

「はい！」

（来月会えるの楽しみにしてるから！）

「僕もだ。待つてるっ……それじゃあ、おやすみなさい」

（おやすみ）

法子と綾の激励にそれぞれ応じ、別れの挨拶を交わすと、光秋は携帯電話を閉じて机に置く。

——さて、とりあえず今日のところは風呂に入つてすつきりして、明日のテスト勉強に備えるか——

そうと決めると、光秋は風呂を沸かそうと風呂場へ向かう。

2月27日曜日午前9時。

起床後、朝食等を済ませた光秋は、研修で使っているノートを用意し、コタツに足を
入れる。

「さてと……じゃあ、始めるかつ！」

小さく呟いて気合いを入れると、予定通り試験に備えた最後の勉強を始める。

昼食と数回の休憩、夕食に入浴を挟みながら一日を研修の復讐に費やし、夜もすつかり更けた頃、鈍痛を抱えた頭を揉みながらノートを閉じる。

「ふうー……こんくらいにしとくか」

呟くと、両腕を上げてすっきり縮こまった体を思いつ切り伸ばす。

「つー……………もう10時か……」

机の上の時計を見ながら呟くと、コタツの上のノートをカバンに仕舞い、机の隅に積まれた本の山に手を伸ばす。

―気分転換にちよつと読んで、それから寝よ―

思いつつ、読みかけの1冊を開いてしばし物語の世界に浸る。

もつともそれも本当にしばしのこと、10ページ程読み進めて切りがいいと判断すると、葉を挟んだそれを本の山に戻し、コタツを切つてトイレへ向かう。

戻ってくるとエアコンも切り、明かりを消してベッドに潜り込む。

―さて、いよいよ明日か……………どうなるかねえ……………―

若干の不安を覚えながらも、勉強で疲れた頭はすぐに眠りへと落ちていった。

93 修了試験 前編

2月28日 月曜日 午前8時。

コートの下にスーツ、肩にはカバンと、いつもと同じ出で立ちで出勤した光秋だが、その胸中は緊張と不安が激しく渦巻いていた。

「いよいよ来ちゃったなあ、この日が……昨日さんざん復習したつもりだが………さて……」

そんなことを思いながらも研修室に向かい、いつも座っている最前列中央席に腰を下ろし、藤岡主任が来るのを待つ。

「……………最後の足掻きだ、主任が来るまでノート読み返しとこー」

思うやすぐに足元に置いたカバンに手を伸ばし、ノートをパラパラとめくって今一度ひと通りの内容に目を通す。

そうして貧乏ゆすりをしながら最後の復習をしていると、ドアが開き、藤岡が現れる。

「ーおはようございますー!」

「おはよう。最後の追い込みか?だが、そろそろノート仕舞えよ」

「はいっ」

手に持ったノートを一瞥されて、光秋は慌ててそれをカバンに戻す。

今の机の上にあるのはシャープペンシルが1本に消しゴムが1つ、予備の芯が多数入ったケースが1つと、いつでも試験を始められる状態だ。

「準備万端なようだな。では、試験について説明する」

「はいっ」

教壇に立ちながら告げる藤岡に、光秋は多分な緊張を乗せた硬い声で応じる。

「今から試験用紙2枚を裏にして配る。開始の合図があるまでは絶対に裏返すな。開始時間は9時、終了は1時間後。カンニング等の不正行為は厳禁だ。携帯電話の電話は切っておくように」

「あっ！」

言われて上着のポケットに入れたままだった携帯電話を出して電源を切り、それをカバンに仕舞う。

それらを行った掌は、薄っすらと汗で湿っている。

——ハハッ、やっぱりテスト前はこうだよなっ——

学生の頃から変わらない体質に懐かしきを感じる一方、いよいよ最高潮に達しつつある緊張の所為か、不思議と笑みを浮かべながら、藤岡が差し出してきた用紙2枚を表を見ないよう注意しつつ受け取る。

それらを机の上に置いてホワイトボードの上の時計を見ると、8時59分、秒針にいたっては間もなく30秒を指そうとしている。

「……そろそろだな」

「……………」

自分の腕時計と部屋の時計の両方を見比べて時間を確認する藤岡の呟きに、光秋は意識して息を深く吸って早鐘を打つ心臓をどうにか抑える。

そして、

「始めっ!」

「!」

時計の針が9時を指すと同時に発せられた藤岡の号令に、光秋は即座にシャープペンシルを持って用紙を裏返し、真っ先に名前を記入するや解答欄に筆を走らせた。

試験用紙にシャープペンシルを走らせる音以外、ほぼ完全な沈黙が始まって早1時間。

「止めっ!」

「……………」

それを破る様に響いた藤岡の声に、制限時間ギリギリまで解答欄の空白を埋めようと頭を捻っていた光秋はシャープペンシルを机に置き、試験用紙2枚を重ねて藤岡に手渡す。

「では、これより採点を行う。終わり次第呼び出しをするから、それまで楽にしていてくれ」

そう言つて、試験用紙を持った藤岡は退室する。

ドアが閉まるや、途端に緊張の糸が切れた光秋は、それこそ糸が切れた様に脱力した上体を机に突つ伏せる。

「はー……………とりあえず終わったあ……………」

安堵の息を吐きながら大儀そうに体を起こして呟くと、ドアを開けてESOの制服に身を包んだ曽我が入ってくる。

「やり切ったつて、そんな顔ね？」

「ああ、曽我さん。おはようございます……………ええまあ……………解答欄自体はなんとか全部埋めましたから。あとはそこからどれだけ引かれるかだけど……………」

「ま、落ちたとしても、合格するまでやるだけだけどね」

「え？……………そういうもんですか……………」

曽我の言つたことに、光秋は狼狽する。

「そりやそうでしょ。主任として認められない以上、特務部隊主任の仕事はできないんだから」

「……………そういうもんですか……………」——まあ、言われてみれば確かに……………」

曾我の言うことに納得すると、光秋は先程とは質の異なる脱力——拍子抜けを感じる。

「もつとも、あまりに不合格が続いて主任就任が滞るようなら、上から何か言われるかもしれないけどね。アタシの予想だけど」

「予想でも、それは嫌ですね……………まあいいや。今はさっきの試験の結果を待つとして……………っ！」

曾我に応じつつ立ち上がると、光秋は体を思いつ切り伸ばして、緊張で強張っていた筋肉をほぐす。

「ふう……………しばらく座学と復習で籠り切りだったからなあ……………ちよつと鈍ったかな……………」

「じゃあ結果発表までの時間潰しに、アタシと手合わせしてみる？」

両肩を回しながらほんの独り言のつもりで呟いたことに、曾我が自然な様子で応じる。

「え？」

その返事に意表を突かれた光秋は、軽い驚きを覚えながら曾我を見やる。

「手合わせって……僕と曾我さんがですか？」

「そうよ？」

「……確かに去年、ニコイ——00に乗った状態で勝負したことはありますけど、今言ったのはそういうことじゃなくて……」

「わかってるわよ。自分自身の体でつてことでしょう。アタシだって特エスなんだから、いろいろやつてるわよ」

「……そうなんですか……それもそうか」

曾我の説明に一応納得すると、光秋は少し考える。

「……じゃあ折角ですし、お願いします。どちらでやります？」

「運動場があるわ。ついてきて」

言われて光秋は机の上の筆記用具を仕舞ったカバンを提げ、先を行く曾我の後を追う。

しばらく移動して一本道の通路に差し掛かり、そこをさらに進むと、正面に壁の様に佇む扉が見えてくる。

先に行く曾我が左右両開きの内右の扉を横にずらして開け、それに続いて入り口をくぐった光秋は、床一面に畳が敷かれた広大な部屋——運動場を目にする。

「ここが、運動場……？」

「そうよ」

「……なんか、『道場』って感じですね」

「あながち間違っていないかもね。本部所属の職員、特に実戦部隊員は、たいていここで格闘技の練習をするから」

「へー……」

曾我が説明に感心しつつ、入り口付近で靴を脱いで上がった光秋は、柱のない広々とした運動場内を見回して独特の解放感を覚える。

「さ、早く始めましょう」

「その前に、軽く準備運動させてください」

そう曾我に応じると、光秋は肩のカバンと腕に掛けていたコートを運動場の端に置き、腕や脚、体の各部を適度に動かしてほぐし、深呼吸をして調子を整える。

「お待ちせしました」

言いながら、同じく準備運動を済ませた曾我が許に歩み寄る。

「じゃあ早速……と、その前にルール決めておきましょうか」

「ルール……ちなみに、曾我さんは何ができるんです？」

「簡単な格闘技、それも『基本を押さえてる』くらいかしら。ただ、アタシの場合念力の併用が前提だから」

――藤原三佐のレベルを少し下げたくらいか……―

曾我の説明に、光秋は記憶の中の藤原を参考に程度を測る。

「なら、まずは様子見ということで、念力は防御以外では使わない、それ以外は寸止めつてことでもいいですか？」

「了解」

曾我が頷くと、2人は適度に距離を取り、互いに向かい合う。

「審判は……僕が兼任します」

「ズルするんじゃないわよ」

「しませんよ」

曾我の冗談に応じると、光秋は左半身を前に出して構え、曾我也同じような姿勢になる。

「始め！」

自ら号令するや、光秋は一足に間合いを詰め、曾我の顎目掛けて左突きを入れる。
が、

「!?」

その拳を曾我は念力で宙に固定し、動揺した光秋の腹に間髪入れずに右蹴りを入れる。

足先が接触する寸前に止めると、曾我は勝ち誇った笑みを浮かべる。

「これで一本かしら?」

「……ですね」

わかりやすい結果を素直に受け入れると、構えを解いた光秋は念力から解放された左手を見据える。

—そうだ、超能力者——特にサイコキノにはああいう戦い方もできるんだった——
年が明けて間もない頃にやった藤原との組手を思い出し、その時の感覚が鈍っていることに軽い焦りを抱く。

—もともと訓練始めてすぐの異動だったから、元の経験もまるで足りてないしな。この上なけなしの分まで失うというのは……—「すみません。もう一本お願いします」

「何度でもいいわよ! 藤岡主任からの呼び出しがあるまでね」

焦りから少しでも経験を積もうと——体を動かそうと意識して頼み込む光秋に、曾我は乗り気で応じてくれる。

「では……」

そんな曾我の厚意に応えようと、光秋は適度に距離を開けて再び構える。

―落ちて光秋。確かに鈍ってはいるが、それでも三佐とそこそこやつたんだ。あの時のことを思い出して、慎重に………―「始め!」

内心に言い聞かせて号令を叫ぶと、今度は進んで間合いを詰めることなく、曾我的出方を窺う。

「……………」

曾我が少しずつ間合いを詰めようとするや、光秋は同じ分だけ後ろに下がり、横に回り込もうとすれば、反対方向に体を逸らして常に曾我を正面に捉え、付かず離れず、一定の距離を保った睨み合いが続く。

と、出し抜けに曾我がひと息に間合いを詰め、勢いの乗った左拳を打ち込んでくる。

―ここっ!―

反射的に左腕を出してそれを受けるや、光秋は腰に引いた右拳を突き出す。

が、

「!?!」

曾我の胸、その寸止めの有効距離に届くほんの寸前に、それは再び念力の壁に阻まれ、入れ違いに曾我的右蹴りが光秋の胸を捉える。

「……………届かなかった……………か……………」

「甘いわよ。アタシこれでも反射神経はいいんだから」

反応が追いつく前に叩き込められる、そんな予想が浅はかだったことを噛み締める光秋に、曾我は僅かに冷や汗を掻きながらも再び勝者の笑みを向けてくる。

「もう一本お願いしますっ」

その笑みにさらに焦りを抱きながら、光秋は再度頼む。

「いいわよ、何度でもね！」

意気揚々とした曾我の返答を聞くや、光秋は速足で距離をとり、自覚している焦りを抑えようと深呼吸する。

— 落ち着け光秋、焦ってたら勝てるもんも勝てない……………そうだ、こういう時こそ

……………

内心に言い聞かせる中、不意に研修時の記憶が過り、それでいくらか落ち着いた光秋は再度構える。

— 上手くいくかはわからんが、このままだ負け続けるよりはマシだろうからなっ—

「始め！」

胸の内にそう割り切るや号令し、同時に少しずつ曾我との間合いを詰めていく。

曾我も距離を保とうとはせず、微笑を浮かべて光秋が近付いてくるのを待っている。

——余裕の表れか、挑発か……どちらにしろ、やることは一つ——

その笑みに一抹の不安を抱いたのも一瞬、一気に間合いを詰めた光秋は拳を握った左腕を伸ばす。

が、それは曾我に届く遥か前ですぐに引き戻され、身構えていた曾我はあからさまに拍子抜けする。フェイントというやつだ。

そして腕を引き戻しながら光秋は間合いを開け、やや右にずれた上で再度間合いを詰め、またフェイントの左拳を振るい、再び急速に間合いを開ける。

曾我からの攻めを避けながらこれを何度か繰り返すと、頃合いを察した光秋はこれまで以上に曾我へ向ける目を細くする。

——そろそろかな……参る！——

胸中に叫ぶや、この手合わせで最も速く間合いを詰め、曾我にぶつかる勢いで突っ込む。

「！」

ひと息に接近するや、光秋はフェイントではない本気の左拳を放つ。が、顎を狙ったそれはすぐに曾我の念力に捕らわれ、がら空きになった胴部に腰に引いた右拳が入れられようとする。

しかし、

「!」

曾我が右拳を放つ前——左拳が念力に止められたのと同時に光秋は後ろに伸ばして
いた右脚を上げ、倒れんばかりの勢いで蹴りを放つ。

「ぐほっ!」

左拳の拘束、そこからの反撃に意識を向け過ぎていた曾我は咄嗟に対応できず、腹に
まともに入った一撃がくぐもった声を吐き出させ、くの字に曲がった体が崩れ落ちる。

「やった!」

畳に倒れ込む曾我を見て、ようやく取った一本に光秋は心の中で喝采を上げる。
が、

「いや、待てよ……今って確か、寸止めだったよな?……………!!——「曾我さん!」

一瞬後に状況を理解するや途端に血の気が引き、慌てて曾我に駆け寄る。

「曾我さん!大丈夫ですか!」

上体を起こしながら大きな声で呼び掛けると、ぐったりとしていた曾我はゆつくりと
目を開け、直後に光秋を睨み付ける。

「後で覚えてなさいよっ……………」

「……………と、とりあえず、医療棟に連絡してきます」

未だ痛みが残る所為か声こそ小さいものの、視線に乗せて発せられた気迫はさつきま

での比ではなく、光秋は震え上がりながら近くの内線に駆け寄り、医療棟へ連絡を入れる。

少しして数人のスタッフがやって来ると、光秋も本部に来てから目の検査で世話になっっている黒澤が調子を診る。

「蹴りが腹に当たったと言ったな」

「はい……………」

曾我を診ながら訊く黒澤に、原因たる光秋は気まずさを覚えながら答える。

ややあつてひと通り調べ終えると、黒澤の指示に従って曾我は担架に乗せられ、医療棟へ運ばれていく。

——……………ムキになり過ぎてやつまったなあ……曾我さんじゃないが、覚えておかないと……………」

悔やみつつ、曾我の怒りに恐怖しながら、光秋もスタッフたちの後に続く。

「本当にすみませんでした！」

診察室の片隅に置かれた簡易ベッド、そこに横たわる曾我に、光秋は深々と頭を下げ

医療棟に運ばれるや踏み込んだ検査を受けた曾我は、特に異常は見られなかったものの、様子見のために黒澤の診察室で安静にしているように言われた。

その様子と、検査の際に聞いた蹴りが当たった所に薄っすらだが痣ができていたという情報に、運動場を出た時以上に肩身が狭くなった光秋はただ謝ることしかできず、直角に曲げた上体を石像の如く固めていた。

—まさかこんなことになるとは。それに女の人の体に痣って……いろいろ不味いよなあ……………

目を固く閉じてそう思いつつ、曾我の次の言葉を黙って待つ。

しかし、

「……………」

いくら待っても曾我の声は聞こえず、沈黙の重圧に耐えかねた光秋は、恐る恐る顔を上げる。

「曾我さ——ん？」

直後、目に入ったのは右手で組まれた指鉄砲の先端だった。

「ぱんっ！」

「痛って!？」

弱々しくも刺々しい声で曾我が擬音を発すると同時に、額に小石を高速で当てられた

様な激痛が走り、光秋は両手を痛みのする辺りに添えながら膝を折って悶絶する。

「な、なっ……………!!?」

「さっきのお返し」

突然の痛み——おそらく指鉄砲の先から放たれた念の弾によるもの——に困惑の目を向ける光秋に、曾我はしれつと応じる。

「ていつても、Eジャマーの影響下だし、アタシ自身まだ痛みで調子出し切れてないから、返済率は3分の2つてとこだけど」

「まだ何かあるんですか?」

具体的な割合を言ってくる曾我に、光秋は残りの分をどうする気なのか戦々恐々となる。

「もちろん。ワンちゃんに蹴られた時の痛みはこんなもんじゃなかったんだから」

「それは……………まあ……………」

蹴りの件を持ち出されては光秋に返す言葉はなく、曾我の次の言葉を黙って待つ。

「そうねえ……………夕方にはさすがに治まってるだろうから、今日の晩御飯奢ってもらおうかしら」

「そんなんでいいんですか……………?」

どんな無茶を言われるのか内心冷や冷やしていた分、実際の要求に光秋は拍子抜けす

る。

「確か本部の近くに気になるお店があったのよ。前々から入ってみたかったんだけど、予算がねえ」

「……そういうことですか……承知しました」——どうであれ、財布は「痛く」なるわけか……

が、そう続いた曾我の言葉にその意図を察し、さつきまでとは違う方向性で腹を括る。その時、耳を貫く様な警報音が辺りに鳴り響く。

「!？」

本部中に響いているとわかる大音量に、光秋と曾我は反射的に身を硬くし、直後にアナウンスが流れる。

（沿岸部工場地帯にてZCとNPの衝突あり。実戦部隊各隊は至急集合せよ）

——沿岸の工場地帯、か……

アナウンスにあつた区域に、光秋は一昨日春菜と交わした会話を思い出す。

——『……あ、そういうえば週明けにも取材の仕事があつてさ。沿岸部の工場地帯にあるお店なんだけどねえ』

『面白い所にあるんですね?』

『一応、工員さん向けのお店だからね』……まさかとは思うが、春菜さん巻き込まれ

てないよな……………」

思いつつ、戦闘から逃げ惑う春菜の姿が脳裏を過る。

瞬間、光秋の足は診察室のドアへ向かっていた。

「ちよつと、何処行くつもりよっ?」

後ろから掛けられた曾我の声に、辛うじて残っていた冷静な部分が反応したのか、ドアの前で一旦歩を止める。

「何処つて、現場ですよ。その前に詳しい情報教えてもらわなきゃだけど」

「あなたは今研修中でしょう。正式な主任にもなっていない、元の隊に戻ったわけでもない、そんな中途半端な身分の人間に、出勤許可が出るわけないでしょう」

「……………」

一時的に失念していた自分の現状を面と向かって言われて、光秋は言葉に困る。

「…………いや、それでも、僕にはニコ——00があります。戦力的には——」

「いくら強力でも、立場が曖昧な人を現場に出したらいろいろ面倒でしょう。そもそもワンちゃんが本部に来てから今までだって、こんなこと何度かあったじゃない。今回に限ってどうしたのよ?」

「それは……………」

最後の一言に、光秋は今度こそぐうの音も出なくなる。

——曾我さんの言う通り、研修中も警報が鳴ることは何度かあった。その度に別の実戦部隊の人たちが出勤して事を収めた。今回僕が出たといって思ってるのは、春菜さんが……見知った人が巻き込まれるかもしれないって、そういう恐怖が——エゴがあるからだ。今までは他の人が何とかするくらいにしか思わないで平然と研修を受け続けて、自分のことが少しでも絡むとこれって……ESO職員としてどうかってのもそうだが、人としても……これが「今の人」ってことなのか……—

その理解は、ドアに向かった時から抱いていた「自分が行かなければ」という使命感と「春菜が危ない」という焦りに加えて、身勝手な自分に対する自己嫌悪を覚えさせる。

——落ち着け光秋。曾我さんの言う通りだ。今までだって他の隊や警察の人たちが上手く捌いてきた。いざとなれば軍だって出るだろう。立場がはっきりしない奴が行っても現場が混乱するのも確かだ。よしんばそういうことを無視して勝手に出勤なんてしたら、主任就任どころじゃなくなる。送り出してくれた藤原三佐や小田一尉、竹田二尉の期待を、1カ月半僕に付き合ってくれた藤岡主任の苦勞を、信じてくれた董さんや桜さんの気持ちを……こんな僕を励まして、確かに支えてくれた法子さんと綾を、一番酷い形で裏切ることになるんじゃないや……—

思う間にも浮かんでくるいくつもの顔。それが一つ浮かぶ度に、先程までは羽の様に軽かった足が鉛の様に重く感じられるようになり、「裏切る」という言葉に全身に悪寒が

——恐怖が走る。

——……………皮肉だな。1年くらい前は浮かんできた顔たちに無茶を後押ししてもらったけど、今は逆に制されている——

こちら側に来た次の日、京都支部を攻撃するNPにニコイチで突っ込んでいった時のことを思い出しつつ、それからすっかりかけ離れた現状に、思わず苦笑いが漏れる。

——でも、仕方ないじゃないか。曾我さんの言うことはもつともだし、顔たちを……法子さんと綾を裏切るなんて——！——

そこまで考え、伊部姉妹の顔が浮かんだその時、不意に伊部母の顔が過る。

——『守る為、ですかね。目の前にいる人を、一人でも多く』——

それに合わせる様に、冬に交わした会話——戦う理由が耳の奥に響く。

——……………そう………だよな——

ほんの2カ月程前の自分の口が発したその言葉が、今の光秋の気持ち固めさせる。
「曾我さんの言うことはもつともです。確かに僕はおかしなことをしようとしている」

「だったら、ここで大人しくして——」

「でも、それでも行きます」

「……」ぞとばかりに畳みかけようとする曾我の言葉を遮り、明瞭な声で告げる。

「何でよっ!」

解せない苛立ちに声が荒くなる曾我に、光秋は逸る気持ちを抑えながら述べる。

「ここで行かなかつたら、行かなかつたことを後悔すると思うから。戦う理由を果たせなかつたことを……知り合いが巻き込まれるかもしれない時に何もしなかつたことを。無論、自分勝手な理由で動こうとしていることは百も承知です。それでも、やつぱり」
そこまで言う、光秋は踵を返してドアへの歩みを再開する。

「もちろん、行ったら行つたで後悔するだろうがな。さつきから頭の中に浮かんでるあれやこれやを……それでも、なっ――

そう自嘲してなければしの迷いを端に退けると、ドアの取っ手に手を伸ばす。
が、

「!!」

触れる前にドアは開き、現れた藤岡に光秋は絶句する。

「藤岡……主任……」

「今の話、ドア越しに聞かせてもらつたぞ」

どうにかそれだけ言う、藤岡は診察室に一步踏み出しながら告げ、光秋は一步下がる。

「曾我が運ばれたと聞いて様子を来てみれば……自分の信念に従う者、啖呵を切つ

て飛び出していこうとする奴は嫌いじゃない。が、それと規律違反とは話が別だ」
「……………それでもっ」

さらに一步踏み出しながら告げる藤岡、その低い声と屈強な体から壁が迫ってくる様な威圧感を感じながらも、光秋はさらに下がりそうになる足を踏み止めて返す。

―ははっ、さっきまでの威勢はどこへやら。我ながら情けない声しか出ないな……………だが、やっぱり行かないや。そもそももう腹は決まってるんだっ。寧ろ藤岡主任を倒すつもりで行かないでどうする！―

心中に自分を鼓舞すると、縮みがちな身を大きくして藤岡と向かい合う。

「それでも、僕は行きますっ。勝手は承知、規律違反も知ってます。それでも――」
「ちよつと待て」

喉に意識を向けて張り上げる言葉を、藤岡の冷静な声が遮る。

「頭は悪くないようだが、どうにも変なところで足りんようだな……」

呆れを含んだ声で呟きながら、さらに続ける。

「話は最後まで聞け。加藤二曹、お前は今、修了試験の最中だったな？」

「……………最中と言いますか……………結果待ち――」

「最中なんだな？」

「……………はい」

返答を遮つてより強い語調で訊いてくる藤岡に、光秋は気圧されながらとりあえず頷く。

「わかった。では、これより実技試験を行う」

「……え？実技……？」

そうして続いた一言に、一瞬何を言われたのかわからず困惑する。

「……………そういうことか」

「ぼさつとするな。行くぞ」

「？」

一方で曾我はどこか納得した顔を浮かべるものの、未だ戸惑う光秋は藤岡に言われるままに診察室を出、後についていく。

「……あの、藤岡主任、実技試験ってどういうことですか？」

「そのままの意味だが。研修で教えたことをきちんと理解しているか、それを実戦で見せてもらう」

「そんなの、研修予定には書いてませんでしたか？」

「なら連絡ミスだな。どうであれ関係ない。やってもらうぞ」

「はあ……………」

質問しても一方的に進んでいく話に戸惑いを強めながら、光秋はどうか考えてみ

る。

―連絡ミスって、こんな大事な話が土壇場まで抜けてたなんて、いくらなんでも変だろう？ 実際、今の今まで『実技試験』の『じ』の字も聞かなかったんだし………もしかし――

ふとある予想が浮かぶと、駆け足で先を行く藤岡の背中を見る。

―藤岡主任、僕が出動できるように “お膳立て” してくれたのか？ 頭が足りないとかなんとか言ってたし………ならば――

半信半疑ながらそう思うと、先に行く広い背中に小さく頭を下げる。

いまいち確信が持てないままに藤岡の後を追って本部内を駆けることしばし。半円屋根の建屋が並ぶ区画に來た光秋は、藤岡に続いてその内の1つに入っていく。

―ここって確か……福山主任がニコイチの装備置いてたところだよ……―

初めてゴーレムを見た日やレールガンの試験をした日の帰りの記憶を頼りに入った建屋を確認すると、案の定中にはN型90ミリキャノン砲と盾が床に敷かれた鉄板の上に置かれている。

一方、そこにいた思わぬ顔ぶれに光秋は驚嘆する。

「！ 董さん!? 桜さんに、北大路さんも!?」

キャノン砲のそばに並んだESOの制服に身を包んだ3人に思わず声を上げながら、

光秋は藤原を追い抜いてその許に駆け寄る。

「みんな、どうして……」

「どうしても何も、緊急招集で呼び出されたんだよ。ドッジボールいいとこだったのにさ……」

啞然とする光秋に、桜が不満そうに答える。

と、追いついた藤岡が述べる。

「今からその3人、およびMB—00を用いて沿岸部の騒動を鎮圧してもらう。任務達成もそうだが、その過程をどうするかによって評価も変わり、それが試験結果にも影響するのでそのつもりで。お前の出せる手札、俺に見せてみる」

——……やつぱり、そういうことなのか——

最後は挑む様な目で告げる藤岡に、移動中に感じたことが正しかったと半ば確信した光秋は、話に乗ることを意識して問う。

「質問があります。00の装備ですが、現在用意されているキャノン砲と盾のみなのでしょうか？」

「いや、それはすぐに用意できる物を出しただけだ。希望があれば言ってくれて構わん。ただし現場への移動を始めてから追って届けることになるが」

「では、試作型レールガンとキャノン砲の弾をひと通り用意してください。あと、4人分

の防具一式と通信機、EJC3つを大至急」

藤岡にそう言っていると、光秋は桜たちの許に歩み寄り、胸を張ることを意識して告げる。

「聞いている通りだ。これより出動する。君らには僕の指揮下で動いてもらう」

「！ちよつと——」

「すぐに防具を装着。準備ができた者から乗り込め！」

途端に目を鋭くした桜の声を掻き消すことも兼ねて、光秋は上着の内ポケットからカプセルを出し、その先を近くの広間に向けてニコイチを出現させるや、有無を言わせぬ号令を上げた。

94 修了試験 中編

左腕に盾を付け、右手にN型90ミリキャノン砲を持ったニコイチが、シャッターの
開け放たれた建屋から歩いて出てくる。

その間にも背広の上から防具一式を着込んだ光秋はパネルに指を走らせ、藤岡主任を
通じて聞いたZCとNPが衝突している沿岸部工場地帯、その詳細な位置を地図に入力
していく。

「これでよしと。盾よし、キャノン砲は弾倉もしっかり付いてるし。準備完了、いつで
も行けますっ」

建屋から完全に出ると同時に位置情報の入力を終え、装備品の確認を済ませるや、左
耳に着けた通信機越しに藤岡に告げる。

（了解した。俺も準備が整い次第現場付近に向かい、そこで観戦させてもらう。あとは
二曹の判断に任せる。せいぜい頑張れ）

「了解っ。MB-00、加藤出動しますっ！」

通信越しに叫ぶや、光秋は右ペダルを踏んでニコイチを飛び立たせ、地図で方向を確
認しながら現場へ直進する。

——……さて、そろそろ向き合わんとなあ——

移動が開始されてひと段落すると、それまで敢えて意識の外に置いていた傍らの防具で身を固めた特エス少女3人、特に多分な不満を込めた目でこちらを見据える桜を見る。

「……………えつとだな——」

「アタシ、あんたのこと主任って認めてないって、前にそう言つたよね？」

言葉を選ぶ暇を与えず、桜の怒りを含んだ声が閉ざされたコクピットに響く。

「それなのにあんたの下に付いて出勤って、どういうことさ！」

「桜！今はそんなこと——」

「董は黙ってて！」

メガネ越しに怒気を乗せた視線を向ける董を遮って、桜は声の荒さを増しながら続ける。

「出勤前の話聞いてりや、要はあんたの試験に付き合つて出るってことじゃん。アタシらはお試し用か何か？この前はいろいろ言つといて、あんた結局アタシらを出世の道具くらいにしか思つてないの？えっ!?!どうなのさ!!」

「……………確かに、そういう見方も成り立つよな」

桜の言つたことに小さく頷くと、光秋はその目を見据え、努めて落ち着いた声で応じ

る。

「桜さんの言う通り、そういう形で出ることになったのをまずはお詫びしたい。ただ、藤岡主任や上層部の思惑は知らないが、僕なりに出たい理由もあったんだ」

「何だよ？ やっぱり出世？ 正式な主任になる前に手柄立てようって？」

「……僕の戦う理由の為——助けたい人を助ける為だ」

棘のある声で訊いてくる桜に、光秋は春菜の顔を浮かべながら答える。

「助けたい……人………？」

「……………」

その答えがあまりに意外だったのか、顔一杯に不機嫌さを浮かべていた桜は啞然とし、董はどこか安心した様な表情を浮かべる。

ただ一人、北大路だけが特に興味のない様子でモニターに背中を預けながら上着のポケットから出した飴玉を口の中で転がしているのを確認して、光秋は現場に近付いていることに内心焦りながらも、最低限言うべきことを言おうと口を動かす。

「今向かつてる現場、その近くに僕の知り合いがいる………かもしれないんだ」

「かもって——」

口を挟もうとする桜を手で制して、さらに続ける。

「その人が傷付く………かもしれないのが、僕は恐ろしい。その人が傷付くこと自体も、そ

れが現実になって自分で決めたことが果たせなくなるかもしれないことも。だから藤岡主任に協力してもらって、こういう形で特別に出動させてもらった。ここまではいいかな？」

そこで一旦言葉を区切り、見回した3人からそれぞれ首肯を得る。

「ただ、その所為で……半分は僕の我儘を実現させる所為で、君たちを巻き込んでしまったことはすまないと思う。だから——」

一瞬藤岡の顔が浮かぶものの、光秋は胸の中で詫びを告げて先を告げる。

——藤岡主任、お膳立てありがとうございます。でも、やっぱり大人の我儘に子供を巻き込むのはいけないと思うから……——「だから、この出動に納得できない者は今から機体を降りてもらっていい」

「!？」

「……」

その言葉に桜と董は驚愕を浮かべ、北大路もようやく関心を持ったのか、それまで明後日の方に向けていた顔を光秋に向け直す。

「いや、でも……それって問題じゃ……」

「藤岡主任は僕に指揮を任せると言った。その僕が、降りなければ降りていいと言ったんだ。なら、後は僕の責任だ」

戸惑う桜に、光秋はしっかりと目を合わせて返す。

「掻い摘んでだが、僕の方の事情は話したつもりだ。それに賛同できるなら一緒に来てほしい、できないなら適当な場所で降ろす。現場到着までもう時間がない。『はい』か『いいえ』か、即決してほしい」

「……………」

コクピット全体を見回しながらの問い掛けに、3人はしばし思案顔を浮かべる。

そして数瞬の後、真つ先に沈黙を破ったのは董だった。

「私は行きますつ。人助けっていうなら、それこそ私たち特エスの仕事です！……………」それに光秋さんのお役に立てるなら……………」

「ありがとう。あとの2人は？」

董に深く頭を下げた光秋の問いに、今度は桜が答える。

「それなら、アタシも……………」言つとくけど、別にあなたの為とかじゃないからなつ。あくまでの人助けだからな！」

「充分だつ……………」それで、北大路さんは？」

「2人が行くなら、私も行きます。あなたに任せっ切りにしてケガされるのも嫌なので。それに一緒にいれば、減点の理由とかいろいろ見付けられそうですしね」

「なら、せいぜいボロを出さないようにしないとなつ」

桜と北大路、双方の返事に応じると、光秋は改めて3人を見据える。

「最後にもう一度確認する……………一緒に来てくれるんだな？」

「はいっ」

「くどいよ」

「……」

董と桜の返事と、北大路の領きを確認すると、光秋は胸の内の迷いを払うつもりで声を上げる。

「よしっ。では改めて、君らはこれから僕の指揮下に入る。地図によればもう間もなく現場に差し掛かる。各自いつでも動けるように準備しておくように！」

「了解！」……………

桜と董の返事と、北大路の首肯を確認してしばし。

モニター越しに大小複数の埋め立て地を浮かべた東京湾が見えてくると、所々に遠目にも判る散発的な爆発の光と、立ち込める黒煙が見えてくる。

——いよいよだな……………

引き返せない所まで来た、そう自覚しながら、光秋は高度を下げつつ黒煙の許へ距離を詰めていく。

「各自、アクセサリーの電源切っておけ。いつでも出られるように」

「了解」

基本的な手順に従って特エスのアクセサリ解除を指示し、それに返答しながら自分の出した指示に従って各々のアクセサリを切っていく3人を見て、光秋はぎこちないながらも特エス主任として動いている自分にひとまず安堵する。

「大丈夫、ちゃんと指示が出せてる。久々の防具付きの操縦もちゃんと馴染んでるし、あとは落ち着いていけば……さて、まずは状況確認………て?」「アレは!」自分を鼓舞しながらある程度近付くと、意思を拾ったモニターが拡大映像を表示するが、そこに映った光景に光秋は啞然とする。

工場らしき建物がいくつも破損し、所々から煙が上がる中、銃器で武装した生身の人間や戦車、武装ヘリに混ざって、複数の人型ロボット——メガボデイが混戦を繰り広げているのだ。

「これまで生身での抗争は聞いていたが、メガボデイを出してくるなんて!それこそ祝賀パーティー襲撃事件以来だぞ?……今まで双方“大人しかった”——ここまでやらなかったのは、準備期間に入ってたから……操縦者を育てていたからってことか?いや、今はそんなことより……—

目の前に広がる驚愕、その背景に向きそうになる意識をどうにか引き留めると、光秋は一旦距離を保って状況をさらに精査する。

「黒い丸いのがNPのフラガラツハで、茶色で細身なのがZCのヘラクレス……だったよな。装甲板が付いた奴は防御力向上型か？」

祝賀パーティー襲撃事件の後に聞いた情報と外見からの推測から、この場には大きく3種類のメガボデイがいると判断する。

地上を闊歩してマシンガンを撃ち続けるNPのフラガラツハ、空中を自在に飛んで上から攻撃を加えているZCのヘラクレス、ヘラクレスの全身に装甲板らしきものを追加して地上から援護を行っているZCの新機種——「防御力向上型」といえるもの。

これら3種類の巨人たちが、戦車やヘリといった見慣れた兵器たちに混ざって弾丸の応酬をしているのだ。

あるフラガラツハはNPの90式戦車の援護射撃を受けつつマシンガンを斉射しながら建物の合間を駆け回り、ある防御力向上型ヘラクレスは放たれたマシンガンの弾を肩に乗せた仲間に念壁で防いでもらってマシンガンの応射を行い、あるヘラクレスは手持ちのマシンガンや各部に装備した機銃で地上を攻撃しつつ妨害してくるヘリを足蹴にする。

そんな光景があちこちで繰り広げられる工場地帯一帯を俯瞰して、光秋は思わず眩く。

「頼むから、そういうのはマンガかなにかの中に留めといってくれよ……………」

間の前の現実に対する苦い感慨を抱いたその時、戦闘域から離れた場所——本土寄りの埋め立て地の一角に、胴長の車体に8つ程のタイヤを備えた兵員輸送車と思しき車を5台ほど率いたにフラガラツハともヘラクレスとも異なる機影を2つ捉え、映し出された拡大映像に目を凝らす。

「アレはー！」

それが合衆国軍のゴーレム、さらには右肩のマークからスフィックス隊の機体だと判るや、光秋はすぐに通信を繋ぐ。

が、

「デ・パルマ少佐——っ!？」

直後に通信機のスピーカーから鼓膜を掻き回されるような雑音が響き、慌てて通信を切る。

「どうかしましたか?」

「電波障害だ……直接降りるしかないか」

心配そうな顔を浮かべて問う輩に応じつつ、光秋は周囲に警戒しながらゴーレム2機の許に降下していく。

その間にも、ゴーレム2機と車列は戦闘域から本土側に向かっていたフラガラツハ1機と90式戦車1台と鉢合わせる。

——いかん！——

そう思つて光秋がペダルを踏み込もうとした寸前、マシンガンを装備したゴーレムが跳躍しながら地上に向けて散発的な発砲を行い、フラガラッハと戦車の注意がそちらに向いた隙に、キャノン砲を構えたもう1機がフラガラッハのマシンガンを撃ち抜き、それを持つていた右前腕を大きく凹ませる。

そして跳躍したもう1機はフラガラッハを飛び越えて戦車の真ん前に砲身を跨ぐ形で着地し、腰に収納していたナイフを左手に持つてその砲身を根元から叩き切つてしまふ。

「……スゲエ、あの2機」

「ああ……」——出会つて瞬く間に1機と1台を無力化。伊達に『教導団』を名乗つてるわけじゃないか……

こちらの気持ちを代弁する様に呟く桜に相槌を打ちつつ、光秋は戦闘能力を失つたフラガラッハと戦車に砲口を向ける両ゴーレムにデ・パルマ少佐と関大尉の顔を重ね、戦慄の混ざつた感嘆を抱く。

直後、フラガラッハと戦車がやつて来た方向からさらに防御型ヘラクレスが現れ、背部推進器の左側面に装備された肩部砲身をゴーレムたちに向ける。

「！各自、何処かに掴まれ！」

「「!？」」

ゴーレム2機はフラガラツハと戦車の乗員の相手をしている為に対処できない、そう直感的に断じるや、光秋は少女3人に声を掛けるのとはほぼ同時にペダルを踏み込み、防御型ヘラクレスと他の一団の間に割って入る。

落ちる様な着地と同時に左腕を前に突き出した刹那、防御型の左肩部砲身から砲弾が放たれ、腕に装備した盾を叩く。

「!」

着弾の瞬間、自身の腕にも何かが当たった様な微かな感触を覚えるものの、それに構わず光秋はNクラフトを噴かし、防御型との間合いを瞬時に詰める。

よく見れば防御型の右肩には人が乗っており、おそらくは念壁を張って動きを封じようとしたのだろう、反射的な素早い動きで右手を突き出してくる。

が、超能力耐性を備えたニコイチに念力が効くことはなく、白い巨人は留まることなく防御型に肉迫し、勢いの乗った左肩を相手の右肩付け根に叩き込んで転倒させる。

と、防御型の右肩に乗っていた人が宙に投げ出される。

——不味い!——

思いうやキャノン砲を離れたニコイチの右手が走り、光秋の意思を汲んだ相手を潰さない絶妙な力加減でその身を掴む。

「ふう……」

ニコイチ、つまりは敵のメガボデイに掴まれたのに気付いて焦った顔を浮かべる人——
歳格好は二十歳前後の男性——の無事な様子を見て、思わず小さな吐息が漏れる。

その時、

「光秋さん、前！」

「！」

董の声が響くと同時にニコイチを通じて感じた正面からの悪寒に、光秋は咄嗟に背を向けて手の内の男性をニコイチの陰に隠す。

直後にニコイチの背中を連射された弾丸が叩き、頭部を巡らせた光秋は背後にもう一機の防御型ヘラクレスを捉える。

（や、やめろっ！俺がいるんだぞ!!）

——味方もお構いなし……あるいはニコイチしか見えていないのか？——

外音スピーカー越しに手の内の男性の悲鳴を聞きながら、光秋はマシンガンの連射を続ける背後の防御型に苛立ちを覚える。

その時、左肩に「01」と書かれたゴーレムが背部推進器を噴かしながら跳び上がり、両手保持したキャノン砲を一射する。

放たれた砲弾はマシンガンごと防御型の右腕を砕き、その間に間合いを詰めた左肩に

「02」と書かれたもう1機のゴーレムがコクピットを内包した胸部に左手に持ったナイフを突き付ける。

「キャノン持ちが01で、マシンガンの方が02つてことは、今相手を抑えた方が関大尉つてことか。凄い連携だな……………」

胸部ハッチを開けて両手を挙げて出てくる防御型のパイロットと、それを見てすっかり意気消沈した様子で両手を挙げる手の内の男性を見ながら、光秋はスフィックス隊2人の連携に脱帽する。

「だって、あんなゴチャゴチャしたコクピットで操縦してアレだぞ？ニコイチならまだしも、僕だったら——!?!—」

試乗した時のことを思い出しながら2人の凄さを噛み締めていると、その思考を遮る様に脚をやや強く蹴られ、慌てて蹴ってきた方を見やると桜が目を三角にして言う。

『『凄い連携だな』、じゃねえよバカ! ああいう時こそアタシを出せよ! 全部一人でやろうとしてさっ』

「……………ああ、すまない。今後気を付ける」

その叱責に一時的とはいえ特エス主任を任されている自身の立場を思い出して頭を下げると、手に持っていた男性を地面に降ろす。

—いかな。いつもの調子でつい……しつかりしろ光秋つ。今は桜さんたちもいるんだ。彼女たちがいることを前提に動かないといけないんだつ—

胸の内に言い聞かせる間にも、輸送車から降りてきたと思しき全身防具で固めた軍人たちが、項垂れた男性を後ろ手に拘束していく。

「桜ちゃんも別に教えることないと思うけどなあ？その分減点させられて私はいいいんだけど」

「べ、別に、今だけとはいえ不甲斐無いリーダー見てんのはなんか嫌だから言っただけだしつ。別にこいつに合格してほしいとか思ってたねえし！」

「菊……桜も………」

「君らなあ………」

北大路と桜のやり取りに、董は2人に若干の怒りを含んだ目を向け、光秋は苦笑を浮かべる。

その時、

（テメエら、何勝手に降参してやがる!!）

拡声された怒声が周囲に響き渡ると同時に、声の主たる砲身付きの防御型が起き上がる。

起き上がった拍子にニコイチの体当たりで破損していた右腕が肩から外れ、各部の装

甲板も剥がれ落ちてヘラクレス本来の細身な輪郭や接続部分が剥き出しの腰回りが露わになるが、パイロットは構うことなく左肩から突き出た砲身をニコイチに向ける。

「！」

それを感知した光秋は振り返りざまに両腕を前に出して砲撃に備えるものの、

(クソッ！ポンコッが!!)

転倒の際に不調が生じたのか弾が放たれることはなく、多大な苛立ちを乗せた声を上げたパイロットはヘラクレスの左手で砲身を掴み、背部接続部から無理矢理引き抜いたそれを棍棒にしてニコイチに叩き付ける。

が、ニコイチの頑丈な外装に叩き付けられた砲身、その後部は呆気なく弾け飛ぶ。

刹那、

——今だ！——

接近したヘラクレスを両手で押して距離をとった光秋はハッチを開け、桜に呼び掛ける。

「さく——柏崎さん、アイツを無力化しろ！」

「え？あ、了解！」

突然の指揮官の声に戸惑ったのも束の間、桜は頭上のハッチから飛び立とうとする。が、

「あ、あれ？」

「EJC！」

NPの戦闘区域ということもあって当然のごとく効いているEジャマー、それを忘れて念力が働かないことに困惑する桜に、光秋の慌てた声が掛かる。

「わ、わかつてるよっ！」

気まずさと焦りが混ざった声で応じるや、桜は床に置いていたトランクに肩掛け紐が付いた様な装置——EJCを掴むと、その電源を入れてニコイチのハッチから外に飛び出していく。

その間にも正面のヘラクレスは残った砲身を尚も叩き付けようとするが、その背後に回り込んだ桜は手をかざしてその左肩を圧壊させ、両脚も腰部の付け根から歪ませる。

それによって歩行はおろか安定して立っていることも困難になったヘラクレスは仰向けに倒れ込むが、

（畜生っ！）

ハッチを開けて出てきた男性は懷から出した拳銃を上空の桜や正面のニコイチ、その背後の軍人らに乱射して尚も抵抗を試みる。

——不味いな。どうする……………？——

迂闊にニコイチの手で止めようとすれば、相手を刺激して余計に抵抗するかもしれない

い。そんな恐怖から光秋が手をこまねいていると、桜が浮遊しながらゆつくりと男性の正面に回り込む。

「！」

（待って！）

「？……」

それを見て驚愕した光秋は慌てて止めに入ろうとするが、モニター越し桜の声に一旦踏み止まる。

その間にも男性は近くに來た桜に拳銃を何度も撃つものの、銃弾は桜の周囲に重点的に張った念壁によってことごとく弾かれ、あつという間に弾切れになってしまう。

それを見てすかさず、桜の威圧的な声が響く。

（まだやる？言つとくけど、容赦しないよ？）

言いながら、足元に横たわっているヘラクレスの脚の残骸を念力で押し潰してみせる。

（……………クソッ……………）

それを見て、男性は顔一杯に悔しさを滲ませながら膝を折り、間髪入れずに軍人たちが身柄を拘束していく。

——威嚇による戦意喪失……………なるほど、あんな使い方もあるのか。けど…………——

後ろ手に押さえ付けられて輸送車へ運ばれていく男性を見ながら、光秋は桜の今の戦い方をそう理解し、感心し、少し引つ掛かるものを感じる。

その間にも、開けっ放しのハッチから桜が機内に戻ってくる。

「凄いな。てつきり力押しで行くかと思っただけど、威嚇で相手を鎮めちゃうなんて」

「べ、別にっ？見たところサイコキノでもなかったし、そんな力^{りき}む程の相手じゃないと思っ……」

ハッチを閉めながら思っただままと告げる光秋に、桜は背負っていたEJCを床に下ろしながら心なしか顔を赤くする。

が、直後に光秋は少し険しい顔をする。

「ただな、不用意に銃を持った相手の正面に回り込んだり、撃たせるに任せたり、そういうのは極力控えてくれ」

「!?別に、アタシは銃くらい平気——」

「平気とかそういう問題じゃない」

唐突な注意に食い下がる桜に、しかし光秋は大きくはないが強い声で続ける。

「確かに、桜さんのレベルなら拳銃くらい余裕で防げるかもしれない。でも、相手に攻撃の機会を与えてることに変わりはないだろう？万が一弾があらぬ方向に飛んで、それで桜さんが傷付かないとも限らない………えっと、つまりだ、必要以上に危ないこと、自

分の力を過信するようなことはしないでくれ。そうしないと、桜さんが傷付くことになる」

「……………わかったよ」

先程の戦い方を見て感心と同時に抱いた引つ掛かり——桜自身への危機感を目を見据えて述べると、桜は渋々ながら応じてくれる。

その時、耳の通信機から雑音混じりの声が響く。

（おいおい、ESOの御犬さ……………がこんな……………何の用だ？しかも子連れ……………）

「デ・パルマ少佐？」

辛うじて聞き取れた声色からそう断じると、光秋はニコイチを振り返らせ、モニター越しに正面に立つゴーレム・01を見る。

「特務部隊主任就任の実技試験を兼ねて東京本部より応援に参りました。現状の説明をお願いします」

通信機のマイクに自身の事情を手短に吹き込むと、光秋は雑音の所為でデ・パルマの返答を聞き漏らさないよう左耳に意識を集中する。

（応援？）

「その説明は後程。今どうなってるんです？」

（どうって言わ……………てもなあ……………）

「ええいつ。距離を詰めたことで少しはマシになったかと思つたが、やつぱり雑音が酷いな……………少し危なっかしいが、情報を得なきや動きようがないしな」

耳障りな雑音に苛立つ一方、一抹の不安を覚えながらも断じると、光秋は桜を見やる。「柏崎さん、今からコクピットを外に出す。不意打ちに備えて周囲に念壁を張つてくれ。漏れなくな」

「?……了解」

その指示に桜は一瞬首を傾げるものの、すぐに頷き、それを見た光秋はニコイチを01に歩み寄らせると、ハッチを開けてコクピットを機外に出す。

(お、おい!?)

主戦場からはまだ距離があるものの、たつた今NP、ZC両勢と交戦したばかりの場所、未だ隠れてこちらを攻撃する機会を窺っている者がいるかもしれない所で一見無防備な姿を晒した光秋に、案の定デ・パルマの困惑した声がスピーカーから響く。

「この子はESOの特エス、高レベルサイコキノです。今コクピット周囲に念壁を張らせています。通信じや雑音が多くて埒が明かないので、少佐ももう少しこちらに寄つて出てきてください。そちらも念壁に入れるので」

EJCを背負つて周囲を見回しながら両手をかざす桜を示しながら告げる光秋。それを見て状況を理解したのか、光秋が言つた通りデ・パルマはゴーレムをニコイチ、そ

の胸部に寄せてくる。

「少し屈むぞ」

言うとき光秋はニコイチの膝を折り、頭部の前に位置する自機のコクピットと、胸部に位置するゴーレムのコクピットの高さを合わせ、直後に開いたハッチからヘルメットと防具一式を身に着けたデ・パルマが出てくる。

「特エス3人連れとは、またやるじゃねえか？ そのメガネはこの間の嬢ちゃんか？」
「どうも……………」

ハッチから身を乗り出したデ・パルマに応じながら、初対面の時のことを思い出したらしい董は、そっと光秋の陰に隠れる。

「それで、状況は？」

「そう焦るな。そもそも、俺たちもそれを調べに来たばかりなんだよ」

「え？」

デ・パルマの予想外な返答に、光秋は一瞬哑然とする。

それに構わず、デ・パルマはさらに続ける。

「近隣住民の通報を受けて警察がやって来たら、NPもZCもメガボデイでドンパチやってたからな、当然普通の警察じゃ歯が立たないから、やむなく工場地帯一帯の一般人を避難させて、周囲を封鎖したわけだ。で、逃げ遅れがないかの確認も兼ねて俺た

ちが偵察に來たわけなんだが、なにぶんこの通信障害とEジャマーの所為でまだ何もわからず、そうこうしてる内にさっきの連中と鉢合わせちまったわけだ」

「……………なるほど」

デ・パルマの説明に一応納得すると、光秋は途方に暮れた顔を浮かべる。

「それじゃあ、どう動くべきかわからないということですか？となると、このまま偵察の続行を？」

「まあ待て。情報源なら今手に入ったところだ」

「……………ああつ」

冷徹な笑みを浮かべて輸送車の1台を指さすデ・パルマを見て、光秋はすでに身柄を拘束したZC、NP双方数名のことを思い出す。

デ・パルマの様子を見るに、こうしている間にも輸送車の中で尋問が行われているのだろう。

その時、デ・パルマのヘルメットに内蔵されたスピーカーに通信が入る。

「何だ？」

ヘルメットから伸びるマイクにデ・パルマが応じるが、辛うじて漏れ聞こえた相手の声が光秋の耳にも届くものの、離れている所為か、通信障害の所為か、殆ど意味を成さない雑音にしか聞こえない。

— 凄いなあ、あれが聞き取れるなんて—

おそらくは通信障害の影響と思った光秋は、自分の耳に多少問題があることを承知しつつも、感心せずにはいられない。

「普通、みんな聞き取れると思いますけど？」

「？」

手の甲を指先で突かれたと思った直後、出し抜けに今思ったことに応じる様なことを言ってきた北大路に首を傾げるものの、直後に通信を終えたデ・パルマが渋い顔を浮かべるのを見て、光秋は出かかった北大路への問いを呑み込んでデ・パルマを見る。

「どうかしましたか？」

「いや、尋問の結果、今がどういう状況かわかってきたんだが……………」

「……………思わしくない？」

「ああ……………」

その表情から予測した答えを控えめに告げる光秋に、デ・パルマは重々しい首肯を返す。

「とりあえずお前にも伝えておくとして……………関、輸送車の連中も、聞こえてるか？」

光秋を見やりつつ、デ・パルマは通信越しに他の者たちにも呼び掛ける。

「まず大まかな現状を説明する。周囲に効いているEジャマー、これは例によってNP

が仕掛けたもんだ。そもそもこちらの工場のいくつかはNPの隠れ家、ないしは支援者だったらしく、Eジヤマーをはじめ各種装備が保管されていたらしい。で、それ以上に厄介な通信障害だが、こいつはZCによるものらしい。情報によると、メガボディ数機と一緒に妨害装置と思しき物が上空からレポートしてきて、そのまま向こうから攻撃、NP側も応戦して今の事態になったらしい……で、問題は俺たちの今後だが……」

「戦闘に介入して、双方鎮圧するんじゃないんですか？」

「だから、どういう手順でそうするかって話だよ」

「……すみません」

苛立った声を返すデ・パルマに、焦りからつい余計なことを言ってしまった光秋は気まずく謝る。

「とりあえず、俺たちが真つ先に対処しないといけないのは通信障害装置だ。これさえ潰せば円滑な連携ができて後々楽だろうが……」

「じゃあそうすれば——なんて迂闊に言おうもんなら、また怒られるだろうからな。実際、僕も少し焦ってるようだ。ここは少佐の言うことに集中して、気分を落ち着けよう——」

喉まで上がってきた言葉を呑み込みながら胸の内にそう言い聞かせると、光秋はますます渋顔を強めるデ・パルマに努めて耳を集中させる。

「敵……それもNP、ZC双方の詳しい戦力は不明ときてやがる。今のメンツで切り込んでいいものか……連中がその件で口を割ってくれればいいんだが……………」

「……いつそ後退して、充分な戦力を整えて出直しますか？」

「俺もそれは一応考えたがな……」

控えめに提案する光秋に、デ・パルマはヘルメット越しに頭を抱える。

「その間に連中が逃げちまえば、それはそれで後々面倒だし、輸送車の奴等とはとかく、俺と関はゴーレムの稼働データ収集も兼ねて出てる以上、少しは戦つとかねえと福山がなあ……」

——なるほど——

デ・パルマが決断を迷う理由を聞いて、光秋は胸の中で手を打つ。

その時、何かに気付いた様子のデ・パルマが光秋を、それ以上に特エス少女3人を見据える。

「そういえばお前、特エス連れてきたんだよね？」

「ええ……？」

「能力は？」

「えー……」

唐突な質問に内心戸惑いながらも、光秋は少女たちの顔を見て記憶を引き出す。

「それぞれサイコキノ、テレポーター、サイコメトラーですが……？」

「それを先に言えよ！」

「「!?」」

「……」

怒りとも喝采ともつかない声を上げたデ・パルマに、光秋と堇、桜は心臓を跳ね上げ、北大路はようやく興味が湧いた様子で目を向ける。

「サイコメトラーがいるなら話は早い。今すぐそいつを尋問に加えろ」

「…………いや、でも、そういうのって厳しい制限があるんじゃない……」

続く言葉デ・パルマの言葉に先程の大声の理由を察したのも一瞬、研修で習った聴取における超能力の制約を思い出した光秋は、やや制する声を掛ける。

が、

「超法規的措置ってやつだ。状況を考えるに、今が使い時だろう」

「…………やつぱり、そうなりますか……………」

薄々予感していた返答をしてくるデ・パルマに観念しつつ、同時にその言い分に理解もした光秋は、渋々ながら北大路を見やる。

「…………わかりました。聞いての通りだ、北大路さん。一旦降ろすぞ」

「……」

掛けた声に答えることなく、北大路は自分のEJCを背負ってコクピットに寄せられたニコイチの右手に乗り、そのまま地面に降ろされる。

「待った、僕も行く」

「え？ちよ？」

「光秋さん!？」

「柏崎さん、悪いがコクピットの守り、引き続き頼む」

言うや席を立った光秋は傍らに置いていたヘルメットを被り、戸惑う桜と葦を残してリフトで地上に降りる。

「輸送車の方には連絡を入れた。一番前のやつにNPの奴等を、その後ろにZCの連中を入れてある。会話は通信越しに随時聞いてるんで、一つよろしく頼む」

「了解」

ゴレムのコクピットから見下ろすデ・パルマに応じると、光秋は北大路を伴ってまず一番前の車両へ向かう。

車列の周辺には自動小銃を持った軍人たちと、若干だがESO一般部隊の隊員たちも佇み、四方へ警戒の目を向けている。

——しかし、本当に充分な審議もなく尋問にサイコメトリーを使っているのだろうか？デ・パルマ少佐の言い分や、状況が急を要することはわかってるつもりだが……………な

により、10歳かそこの女の子にこんなこと……—

その間にも我ながら性懲りもなくそんなことを思っていると、一瞬手の甲に触れた北大路が蔑む様な目を向けながら言ってくる。

「あの、別にそういうのいいですから。寧ろ変な氣遣いとかうざったいだけなんで」

「……まさかつ」

その口ぶりから、コクピットでの唐突な声掛けと合わせて考えていることを読まれたと理解した光秋は、思わず表情が険しくなる。

「ここまで急なのは初めてですけど、人間主任の頃から似たようなことさんざんやってたし。今更中途半端に同情とかされても迷惑なだけなんで」

「っ—」

その言い方に、つい握り拳に力を込めてしまう。

「そもそも、そんなに私にサイコメトリーさせることが不満なら、あなたが捕まえた人たちを拷問して情報を訊き出しますか？」

「それは……」

「所詮、その程度の偽善ってことでしょ？」

「……………」

そう言い残し、軽蔑の目でこちらを一見して先を行く北大路。それに対して言い返す

言葉を持たず、かといって拳に込める力をますます強めてしまう光秋は、しかし冷静な部分の訴えに溜飲を下げる。

——落ち着け光秋。今のは北大路さんの言うことが妥当だ。どんなに納得してなくても、それに代わる方法を取る勇氣——あるいは蛮勇……いや、冷徹さか？——がない以上、黙って現状を受けれるのが妥当だ——

そうしてどうにか冷静になると、一番前の輸送車、その後部のドアから車内に入っていく。

壁に沿って左右6つ、計12の座席が並び、その内奥側の6つに両手を手錠で拘束されたNPのメンバーが座らされている。いずれも体のどこかしらを包帯やガーゼで覆い、内1人は左脚に添え木が巻かれている。

——これはまた……………——

敵対者とはいえ、思った以上の負傷具合に内心唾然としてみると、NP6名の近くに控えていた、おそらくは尋問役をしていた初老くらいの軍人が声を掛けてくる。

「御苦勞様です」

「どうも」

それに応じることで光秋が気を取り直した直後、初老軍人はやや威圧的な声でNP6人に告げる。

「今からESSOの特エスによるサイコメトリーを行う。抵抗せず素直に受けるように」
「制約違反じゃないか！人権侵害だ！」

「非常事態による特例措置と理解している」

1人の反論に取り付く島もない様子で応じると、軍人は光秋に目配せする。

「……やるしかない、かつ」

思うや光秋も北大路に目配せしてサイコメトリーを促し、それに目立った返答を返すことなく北大路は手前側の左脚を痛めた女性に手を伸ばす。

が、

「待て」

「？」

触ろうとしていた女性の向かいに座っていた、20代半ばから30代程の顔ぶれの中で唯一50に手が届きそうな白髪混じりの男性の硬い声に、北大路は思わず手を止める。

「要は素直に答えればいいんだろう。何が知りたい？」

「そんな！」

「いや、社長！それは……」

おそらくはこの一行のリーダー格なのだろう男性の言葉に、他の面々は動揺と悔しさ

が滲んだ声を漏らす。

—『社長』?……ああ、なるほど—

その呼び方が引つ掛かった光秋が目を凝らすと、全員同じデザインの作業服らしきものを着ていることに気付く。

—そういえば、少佐がこの辺の工場のいくつかはNPの隠れ家だって……この人たちもその口か—

デ・パルマの言葉を思い出しつつ、普段は工員として活動しているのだろうと察していると、社長と呼ばれた男性は他の者たちに静かに応じる。

「悔しいが、我々は負けた。怪物の支援者共にな。これ以上の抵抗は、もう無理だろう………だが、心までは屈しはしない。超能力で俺たちの心に土足で入られるくらいなら、自分の口で語ろうじゃないか」

「「……………」」

社長の穏やかな語りかけに、メンバーたちは静かに俯く。

「それで?何が知りたい?」

「……あなた方の戦力、その規模を」

打って変わって鋭い眼光を向けてくる社長に悪寒を覚えたのも一瞬、下がりそうな足をどうにか踏み止めた光秋は、怒鳴るわけではないが腹の底から意識して声を出す。

「……………ここら一帯に限っていえば、90式が7台、フラガラッハが6台、あとは重機関銃や対物砲が数点といったところだ。ただ、騒ぎを聞き付けて救援に来た同志がいて、そちらについては交信が錯綜していた所為ではつきりしない。こちらが最後に見た時は、フラガラッハが10台、90式が6台くらいだった。ああ、ヘリも2、3機飛んでいるのを見掛けたな」

「……Eジャマーは何基設置しましたか？」

思った以上に淀みなく淡々と語る社長に意表を突かれながらも、光秋はさらに続ける。

「かなり高出力なものを7台程、工場地帯を囲う形で設置した。もつともコレも同志たちが新たに持ち込んだらしく、そちらについて俺たちは知らない」

「……わかりました。御協力感謝します。行こう」

こちらを見据えて告げた社長に一礼すると、光秋は北大路に声を掛けて輸送車を出ようとする。

が、直後に後ろから声が掛かる。

「これで勝ったと思うなよ、ESOの若造、そして怪物の少女！ 実際、外では我が同志が未だ戦い続けているんだからな」

「！怪物って！」

隠す気のあるでない憎悪を乗せた北大路への一言に、咄嗟に血が上った光秋は振り返って社長を睨み付ける。

「おい、やめんか」

軍人も制止の声を掛けるものの、社長は臆することも耳を貸すこともなく続ける。

「お前はすっかり騙されているようだがな、例え愛らしい少女の姿をしていても、中身は我々ノーマルのことなど虫けらとしか思っていない化け物だ。なまじ念力や瞬間移動といった目に見えて『らしい』能力でないからわかりにくいだろうが、超感覚——サイコメトリ——程度でも充分人を傷付けることはできる。人を構成する最も脆い部分——心をな。俺はそれで何度連中に嘲笑されてきたことか。何度惨めな思いをしてきたことか……」

「それは……」

社長の言葉に、去年の夏、サイコキノの不良に首を絞められたことを連想した光秋は、最後の方の怒りと悲しみを含んだ一言も合わさって、返す言葉に困ってしまう。

「おい、いい加減にしておけ」

（もうい……次、Z……頼……）

「……了解」

先程よりも強い語調で軍人が制すと同時に、耳の通信機から雑音混じりのデ・パルマ

の声が響き、それに小さく応じると、光秋は後ろ髪を引かれながらも輸送車を後にし、北大路も無感動にそれに続く。

「さっきのおじさんに、何も反論してくれませんでしたね」

「……………」

「別にいいですけど」

指摘する北大路に重くなった口は開かず、心底軽蔑した顔を向けられる。

——北大路さんの言う通りだ。彼女の暫定上司として、せめて何か一言言うべきだったんじゃないか？……………ただ、僕の中にも確かにあるんだよな。超能力者——自分よりずっと力のある者を恐れる気持ちが……………——

その自覚が去り際の社長の表情に過度な感情移入をさせるのだと理解しつつも、かといってすぐに気持ちを切り替えることもできず、悶々とした気分を持て余しながら、光秋は2台目の輸送車の後部に回り込む。

——……………そろそろ止_よそう。もうひと頑張りしなきゃいけないからな——

ドアの前でそう自分に言い聞かせ、沈殿した重い思いを無理やり退かすと、光秋は北大路と共に2台目の輸送車に入る。

先程と同じ左右に6つずつ並んだ座席、その奥側にいずれも二十歳前後といった年格好の男性たちが3人腰掛け、ドア側と運転席側に控えている軍人2人がそれを監視して

いる。NP側程ではないが3人も負傷しているらしく、内1人——ヘラクレスが停止した後も拳銃で抵抗していた男性は頭に包帯を巻いている。

——こうして間近で見ると、やつぱりみんな若いな……？——

着崩したり、わざと裂いて痕を作った服を着たり、日系の顔立ちではどこか違和感を抱いてしまう金髪に染めていたり、テロリストというよりも不良少年の一団を想起させる3人の格好にそんな感想を抱きながら、光秋は威圧を意識した声を出す。

「これより、サイコメトリーによる情報収集を行う。抵抗せず素直に受けるように」

さっきの車両で会った軍人を做って告げると、頭に包帯を巻いた男性がこちらを、特に北大路を睨んでくる。

「ガキがESOの制服？まさか、特エスか!? ノーマルに尻尾を振る裏切り者が!!」

「おい、勝手に喋るな」

すぐに軍人の制止の声が飛ぶものの、包帯は北大路に向ける目の険しさを弱めることはない。

「特エスって、あの歳でか？なら相当レベル高けえじゃねえかよ!」

「そんなの相手に白切れるわけないっすよ……………」

——……これは……行けるか?——

一方、他の2人はすっかり意気消沈し、それを見た光秋は内心小さな望みを感じる。

いずれも小型Eジャマー内蔵の手錠で拘束されているものの、あくまでも慎重にその内の一人に歩み寄ると、膝を折って目線の高さを合わせる。

「……………話していただけませんか？あなた方の戦力がどれくらいか」

「！」

車内に入って来た時の第一声とは逆に、穏やかさを心掛けた声を掛けると、その男性は俯いていた顔を上げてハツとした表情を向けてくる。

「話したら、罪軽くなるっすか？協力したら俺のこと、ZCから守ってくれるっすか!？」

「！ええ、まあ……………詳しいことは裁判所や弁護士の方と相談する必要があると思います
が、ある程度はプラスになるはずですよ。みなさんも、ちゃんと聴いてますよね」

すっかり怯えた様子で縋りついてくる男性に一瞬困惑しながらも、証言者は多い方がいいと思って車内の面々に呼び掛けた光秋に、傍らの軍人2人がそれぞれ頷いて応じる。

―にしても、ZCから守るって……………？―

その一言が引つ掛かっていると、包帯が声を荒げる。

「佐賀、テメエ！何裏切ろうとしてんだよ!!」

「おい！やめんか!!」

叫んだ勢いで光秋が話していた男性に飛び掛かろうとするものの、すぐに軍人に押さ

え付けられて座席に戻される。

そんな包帯に、「佐賀」と呼ばれた男性は半泣きになりながら返す。

「だって俺らもう捕まったんすよ？ 特エスのサイコメトラーまで来たんすよ!! もういいじゃないっすか！ これ以上頑張る必要ないじゃないっすか！ 先輩こそ、まだあんなとこにいたいんすか!!」

「あんなとこ……?」

その最後の一言に、光秋は顔を寄せながら問い掛ける。

「ZCつすよ！ 俺らも行くまでわからなかったけど、あそこはヤバい奴等の巣窟つす。俺らもともとは『デビルズ』って超能力者の不良グループで、関東でもそこそこ名が売れてたんすよ。年明けの放送を観たリーダーの決定でZCにグループ丸ごと加わることになって、俺も最初は張り切ってた……でも、実際行ってみたら……」

——なるほど。第一印象はあながち間違ってたか——

顔を青くさせながら語る佐賀の話聞きながら、光秋は小さく納得する。

「あそこにいる連中に比べたら、俺らがやってたことなんてガキの火遊びつすよ！ 俺もうついてけないっすよ！ もう嫌つすよ……」

——構成員からここまで恐れられるって……ああ、だから『ZCから守ってくれ』なんだ——

いよいよ本格的に泣き始めた佐賀を見て、光秋はそこから伝わってくるZCのメンバーの恐ろしさに上着の下の肌を粟立てつつ、先程の言葉の意図を察する。

「事情はだいたい理解しました。身の安全については僕の方からもよく言っておきます。その代わり、質問に答えてくれますね？」――……嫌な言い回しだなあ――

自然と出てきた自分の言葉に内心眉を寄せつつ、光秋は佐賀の肩にそつと手を置いて語り掛ける。

「答えるつす！何でも訊いてくれつす!!」

「……………ここに来たあなた方の戦力はどのくらいですか？」

途端に向けられる鋭る目に罪悪感を抱きながらも、問うべきことを問う。

「佐賀！この裏切り者があ!!」

「おい！いい加減にしろ！」

「暴れるな!!」

直後に包帯が怒声を上げながら立ち上がるものの、傍らの軍人2人に取り押さえられる。

「!!」

「……佐賀の言う通りつすよ、先輩……俺ら、もう負けたんす……………」

その様子に内心肝を冷やし、それまで黙っていた3人目の弱々しい呟きを意識の隅に

聞きながらも、光秋は冷静であろうと努めながら佐賀の答えに意識を集中させる。

「えつと……確かヘラクレスが10機に、イピクレスが20機……全部で30機つす！」

『イピクレス』?」

震えた声で告げられた佐賀の情報、その聞き慣れない単語を光秋は訊き返す。

「ヘラクレスに装甲くっ付けたヤツつすよ。俺らが乗つてた」

「あの防衛力向上型のことか?」

佐賀よりはいくらか落ち着いた——あるいは諦観した——様子の3人目の説明に、光秋は今回初めて目にした装甲板で身を固めたヘラクレスを思い出す。

「まあ、そういう言い方もありつつすかねえ。俺らみたいな戦闘向きじゃない、あるいはレベルが低い能力者向けにヘラクレスを改修したモデルつて、そう聞いてるっすけど」

「なるほど……」——とりあえず、ZC側は30機か……『社長』つて人の証言から——曖昧な部分も多いが——NP側も似たような規模みたいだし……都合60近くの敵対者と考えるべきか……?——

さらに続いた説明に応じつつ、今わかってることを整理した光秋は、その結論に悪寒を覚える。

「……御協力感謝します。行くぞ」

意識的に明確な声で告げることでどうかその悪寒を追いやるとドアへ向かい、北大

路も特に反応を示すことなくそれに続く。

が、すぐに包帯の怒声に呼び止められる。

「テメエ、勝った気でいんのも今の内だぞ！こいつ等とはともかく、俺はまだ諦めちやいねえ。テメエ等がどんな頑丈な檻にぶち込もうが必ず抜け出して、またZCに戻ってやる！戻って今度こそノーマル共と裏切り者の特工ス連中皆殺しにしてやる!!」

「まだあんなとこ戻りたいんすか先輩は!!? そんなにあんなヤバい連中と一緒にいたいんすか——」

「黙れえっ!!」

いよいよ本格的に泣きながら告げた佐賀に、包帯はひと際強い怒声を押し被せてくる。

「……………」

手錠を掛けられ、防具の上からでもわかる屈強な体格の男性2人に押さえ込まれていても、その耳を直接殴り付けられた様な声に、光秋は冷や汗をかかずにはいられない。「俺だって、正直あそこ怖えよ。これ以上いたらヤバいかもって思ってるし、あんな連中と平気な顔して一緒にいられるリーダーたちってどうなんだとも思ってる……でもなつ、俺が超能力者だってだけで——直接人を傷付けることなんてまず不可能なサイコメトラーって知ってるくせに、やれ化け物だ、やれ悪党だと言って物を投げ付けてきた、

そうでなきや遠巻きにこそこそ囁き合つてた、そういうガキの頃から俺を虚仮こけにしてきた連中に一泡噴かせるには、ZCで似たような境遇の連中と一緒に戦うしかねえだろうっ!!」

—ああ、これは……………」

主張の内容と、それ以上に唾を飛ばす勢いで語りながらも、少しずつ嗚咽を含んでくる包帯の声色に、光秋は先程のNPの「社長」の姿を重ねて見る。

静かに怒り泣いていた社長と、湧き上がる感情を躊躇も遠慮もなく放出する包帯、表現こそ正反対なのだが、それがかえって両者の根底にあるもの、その共通項を際立たせているように感じて、微かに胸が痛くなる。

—違う者——そう規定した者を排そうとする動き……………人の——“今の人”の性さが……………否、今はそれよりも——

放っておけばいつまでも浸つてしまいそうになる感傷、それを現状を思い出すことで振り払い、それを表すつもりで足を前に出して輸送車を降りると、意識した速足でニコイチの許へ戻る。

「ちよつと待つてくれ。すぐ上げる」

北大路に一言断つてリフトで上昇すると、コクピットに残してきた桜と董が出迎えてくれる。

「光秋さん！大丈夫でした？」

「待たせたな。話聞きに行っただけだから大丈夫だよ」

心配した顔で歩み寄ってきた董に努めて明るく応じると、今度は桜が訊いてくる。

「菊は？」

「下で待たせてる。これから上げるとこだが、その前にコイツを動かさないといけない。悪いが2人共、ちよつと少佐のゴーレムの方に行つてくれ」

そう言つて少女2人を隣接したままのデ・パルマ機のコクピットへ退避させると、光秋は操縦席に着いて認証を行う。

ニコイチが再起動するやすぐにコクピットを機外に上げて桜と董を迎え、ニコイチの手に乗せた北大路を上へ上げる。

と、デ・パルマがゴーレムのコクピットから顔を出す。

「ご苦労だったな。結局サイコメトリーは使わなかったか」

「言つたら向こうから話してくれたので。ただそれよりも、敵の規模が明らかになったとはいえ、どう対応します？単純計算でも20倍近い戦力差ですが？」

労いに応じながらも、光秋は自分のニコイチ、デ・パルマと関のゴーレム、5台の兵員輸送車とその周囲に佇む人々を見回し、途方に暮れた顔を浮かべる。

その時、

(いや……でもな……さ)

雑音混じりの通信が聞こえたかと思うと、それまで2機から離れた所に立っていた機関がニコイチの傍らに歩み寄り、ハッチを開けて本人が身を乗り出してくる。

「軍とESOの合同部隊——つまり僕たち、NP、ZCと、この場にいる勢力の中では、確かに僕たちの規模が一番小さい。馬鹿正直に挑めば、よくて大苦戦、普通に考えたら全滅だろうな。もつとも、NPとZCが拮抗しているなら、付け入る隙はある」

——……拮抗、か…………——

言いながら横を向く関の視線を追って、光秋も海側を見やる。その方向からは未だ発砲や破損と思われる轟音が鳴り響き、建物の合間からは何本もの黒煙が上がっている。

「つまり、こういうことか？」

同じく視線を追ってその方向を見ていたデ・パルマが、察した様子で言ってくる。

「膠着状態に陥っているNPとZCの間を突っ切り、目下最大の懸案たる妨害装置を破壊、そうして通信を確保した後本隊に適切な装備を備えた増援を要請し、戦闘区域一帯を一気に鎮圧する」

「突っ切るのは流石に無理でしょうが、だいたいその通りです。実際、これだけ一カ所に留まっただけでも、NPもZCも最初に遭遇した人たち以外こっちに向かってきません。状況を見るに、負傷者を連れて離脱しようとしていたNPの団をZCのあの2機が独

自の判断で追撃、そこを僕たちと鉢合わせて捕まったと、こんなところでしよう。つまり、双方目の前の相手に手一杯で、僕たちに回せる余力はない、あるいは極端に少ない。目的地を絞って回り込めば、勝ち目はあります」

「……………凄いな」

決して多いとはいえない情報からこれだけのことを、本当に短時間で思い付き、それを理路整然と語ってみせる関と、その意図を少ない言葉から察したデ・パルマに、光秋は近い仕事に携わる者としての格の違いを見せ付けられた気がして、2人のゴーレムの操縦技術を見せられた時以上に圧倒され、つい小声を溢してしまう。

「そうなる、あとは妨害装置までのコースだな。大よその位置はさっきの報告でわかってるから——と、加藤はまだだったな。関、教えてやれ」

「了解」

デ・パルマの指示に応じるや、関はニコイチのコクピットに移って位置情報を教え、それに基づいて光秋はパネルに指を走らせる。

その間にデ・パルマは考えをまとめ、関がゴーレムに戻るのを見計らってこの場の全員に告げる。

「よし。まずコースだが、最短コースで行く」

「!？」

その一言に驚愕しつつ、光秋は地図上に表示された妨害装置の凡その位置を確認し、建物の向こうから響く轟音の位置——戦闘区域をその上に当てはめてみる。

——まるつきり突つ切る形じゃないか！——「少佐！それは流星に無茶——」

「黙って最後まで聞け」

「……………」

思わず口を挟んだものの、デ・パルマの險を含んだ声にすぐに押し黙ってしまった。

「行くのは俺と関、3から5番車、そしてESOの白い犬だ。内輸送車たちは適当な所まで同行した後、戦闘区域の間に隠れて待機、状況に応じて可能な限り援護してもらう。一部の人員は付近のEジャマーを搜索、通信回復後、俺が指示を出したら停止させてくれ。1番車と2番車は後退、本隊への現状報告と捕縛した連中の身柄引き渡しを頼む。今から15分経過しても通信が回復しない、もしくは遠くから見ても大きな変化があった場合は、そちらの判断で次の行動をとるようにとも伝えてくれ。質問は？……………」

（「了解！」）

「……………了解」

デ・パルマの号令に通信や叫びを通じて全員が応じる中、光秋も多少の不安を抱きながらそれに続き、本土側に引き返していく2台の輸送車を見送ると、放ってそのまま

だったキャノン砲を右手に持ち直してデ・パルマ率いる一行に続く。

95 修了試験 後編

「……………少佐、やはり戦闘区域を突っ切るというのは無理があるのでは？ 探せばもつと危険の少ないコースも割り出せるはずです」

移動を開始して少し。モニター越しに一行の先頭を歩行するデ・パルマ少佐のゴーレムを見ながら、光秋は通信越しに声を掛ける。作戦開始が宣言された現在、今更とは重々思いながらも、やはり言わずにはいられない。

（まあ、おま……………の不安もわか……………でもな……………が）

雑音混じりの通信越しに、デ・パルマの返事が返ってくる。言葉こそ切れ切れで解り難かったものの、こちらをなだめようとしていることはなんとなく伝わってくる。

（この作戦の肝は、2つの勢いよ……………が互……………相手に手一杯で他に……………せる余裕がないってことなんだよ。当然激戦区に行け……………ほど、その傾向は強まつ……………と考えてい……………逆にそういう区域を避けて、うつか……………まだ余裕のある後方なんかには鉢あわ……………たら、それこそこの戦力だけでそいつらを相手取らなきゃ……………なくなるだろう。それなら……………敢えて渦中の真っ只中に突つ……………んで、目的地たる妨害装置まで一気に駆け……………た方がいいって……………だ）

「……なるほど」

途切れ途切れだがどうか要点は伝わったデ・パルマの説明、それを聴いて光秋は、どこか負けを認める様な納得を覚える。

（もちろん……お前の危惧がわか……わけじゃない……この案にした……気紛れで俺た……襲ってくる奴も出てくるかも……ない……流れ弾に当たる可能……は常……るんだ。我ながら無茶な作戦だろ……俺と関だけならまずやらな……だろうさ。だが、ここにはお前さんが——お前さんたちがいる。今を駆ける白い犬と、ESO御自慢の特エスが3人もな）

「？僕たちが……ですか……？」

不思議と今までで一番明瞭に聞こえたその言葉に、光秋はデ・パルマ機の背中をしばし凝視し、次いで桜。葦、北大路の顔を見回す。

（これだけデタラ……な顔ぶれが揃っ……んだ。多しよ……無茶……く戦でもいけるって！）

（結局無茶……あること……変わりありま……けどね。ときに少佐……そろ私用無線になりつ……ますよ。控えてください）

（へいへい）

そう付け加え、関大尉の注意に応じると、デ・パルマ機からの声は聞こえてこなくな

る。

「僕たち……かつ」

無言で歩き続けるデ・パルマ機の背中を見やった直後、光秋は改めて少女3人を見回す。その表情は、自分でもこんな時にといいながらも、何故か柔らかに緩んでいる。

それを見て、桜が不機嫌そうに訊いてくる。

「何だよ？こんな時にニヤニヤして」

「悪い悪い。今デ・パルマ少佐が言つてたことが、さつき桜さんが言つてたことと同じ……というか、重なって聞こえて、なんか可笑しくてさっ」

言いながら、光秋は自分の脚を蹴りながら言つてきた桜の言葉を思い出す。

——『ああいう時こそアタシを出せよ！全部一人でやろうとしてさっ』……御尤もつ。今は3人がいるし、寧ろこれからこうやって出る機会の方が増えるんだ。その分、できることも増えてくるはずだ……。……なにより、どんなに置かれた状況が変わっても、僕のやりたいこと——藤岡主任に御膳立てしてもらつてまでここに来た理由が変わることではない！——「……だつたら、それを遂げる為に必要と思えることをするまでだ」

頼れる者がいる、独りではない。そう思えたことが気持ちをは落ち着けてくれたのか、不意に再浮上してきた最初の動機に突き動かされて、光秋はデ・パルマと関に通信を繋ぐ。

「そういうことならばデ・パルマ少佐、僕から提案が」

（何だ？）

「突撃時の布陣ですが、ニコ——〇〇を先頭に、その後ろに少佐と関大尉が続く形にすることを勧めます。ご存知の通り、〇〇の防御力はそれこそデタラメな域ですので、先陣を切つて敵の攻撃を防ぎつつ、道を拓くことに向いています。ただ、こちらは急いで出てきたために弾薬の数が不安です。そこは後ろについた少佐たちに援護してもらおうと考えているのですが……………」

言いながら、期待と不安の入り混じった目でデ・パルマ機を見やる。

（いい……………ないか。確かにソイツの頑丈……………デタラメの域……………な。一気に駆け抜ける……………向いて……………しれない。俺らの負担も減りそうだしな。関……………思う？）

（いい案……………います。ただ、加藤く——二曹の負担が……………）

「それについては御安心を。ホント、コイツ丈夫にできてますから。フォローさえしっかりしていただければ」

（……………なら、それ……………行きま……………）

「ありがとうございますっ」

デ・パルマの即決と、こちらへの気遣いをしてくれながらも首肯してくれた関に、光秋は通信越しとわかっていながら頭を下げる。

「その上でもう一つ提案ですが、こちらのサイコキノをお二人の方に付けたいと思います」

「!ちよつ、ちよつと待てよ!」

続けてそう告げた直後、桜が戸惑った顔を浮かべて迫ってくる。

「何でアタシだけあつちに——」

「……」

それを手をかざして制しながら、光秋はさらに続ける。

「先程も言ったように、00の防御力はデタラメ級です。が、ゴーレムはそういうわけにもいかない。少佐が先程言ったように流れ弾の危険が常にある以上、彼女は護衛役としてそちらに付けた方がいいと考えます」

（なるほどな……ならありがたく）

「ありがとうございます」

即答を返したデ・パルマに、光秋は再度頭を下げる。

「というわけだ。桜さん、悪いが頼む」

顔を上げながら言うのと、桜は横目で睨みながら訊いてくる。

「それは命令?」

「……まあ、主任——指揮官として言っている以上、命令つてことだろうな」

返答してみても、光秋は不相応な身の振り方に軽い自己嫌悪を抱く。

「ただ実際問題、このまま行くと少佐たちが危ういのも確かだ。だから、君の力を貸して欲しいってことでもあるが……ああつ、我ながら煮え切らないやつ！」

補足しようとして上手く伝えられず、自分の表現力の低さについて苛立ってしまう。

一方、桜は、

「……………そういうことなら……まあ聴いてあげなくもないよ」

と、どこか納得した様子で応じてくる。

「……………悪いな」

「謝らなくていいっての。あんたを困らせることはしないって、前にも言ったことだし」

「？」

言われたことがすぐにわからず光秋が困っていると、桜は少し目を尖らせて言う。
る。

「ほら、董とあんたの寮に行った時、そんな話したじゃん！」

「……………あーあー！ そうだったな」

言われて、少女2人が自室に来た時のことを思い出す。

「もしかして、忘れてたんですか？」

「光秋さん……………」

そんな光秋の態度に、北大路は改めて輕蔑の目を向け、董は若干呆れる。

「仕方がないだろう。あれからいろいろ、特に今バタバタしてて、突然言われてもさ……」

言ってみて、反論のしようがない言い訳を言ってしまったと自覺した光秋は、少し恥ずかしくなる。

その時、通信から雑音混じりのデ・パルマの声が響く。

（さあて、そろそろだぞ）

「！」

さつきまでとは違う、若干の緊張を含んだその声に、光秋は氣を引き締め直す。

「「……」」

それを見た少女3人も、僅かに表情を強張らせる。

「じゃあ、柏崎さん、さつき言った通りに」

「了解」

応じると、桜は背負ったEJCの電源を入れる。

「電氣の残量には充分注意してな。危なくなったら少佐か大尉、どつちかのゴーレムに入れてもらえ」

「わかったよ」

言いながら光秋はハッチを開け、そこから飛び立った桜はデ・パルマ機の許へ浮遊していく。

少し進むと一行は停止し、メガボデイ3機はニコイチ、関機、デ・パルマ機の順に縦隊を組む。

（じゃあ、Eジャマーの確保頼んだぞ）

（了解。御武運を）

「……………」

デ・パルマと輸送車の乗員のやり取りを通信に聞きながら、光秋は移動している間にすっかり大きく、はつきり聞こえるようになった轟音に、改めて手が汗ばんでいるのを感じる。

—始まったら、とにかく妨害装置に辿り着くことを考える。自分から迫ってくる者、こちらの進路を妨害する者以外は徹底的に無視—

心中にそう言い聞かせていると、地図情報と連動したモニターの一点に赤い丸マークが表示され、向かうべき方向を示してくれる。

直後、デ・パルマの声が通信に響く。

（よし、カウント5で一気に駆け抜けるぞ……………5、4、3、2、1、ゴー！）

「！」

号令と同時に光秋はペダルを一杯に踏み、Nクラフトを噴かしたニコイチが地面から数センチ上を滑る様に駆ける。

背部推進器を全力で焚いたゴーレム2機もそれに続き、瞬く間に3機はNPとZCが乱戦を繰り広げる只中に躍り出る。

フラガラッハが乱射したマシンガンを肩に乗せたサイコキノに防いでもらったイピクレスが肩の砲身で応射し、手に手に自動小銃やロケットランチャーを持つてヘリに群がろうとしているサイコキノたちにフラガラッハの手首の機銃が放たれ、そんな中を外装に弾丸や何かの破片が当たった様な音を散発的に聞きながら、光秋はひたすらマーカ―が示す先を目指す。

そんな時、こちらに気付いたイピクレスが進路上に立ちはだかり、両手保持したマシンガンを向けてくる。

――構ってる暇はないんでな！――

思いつつ、光秋は放たれる弾丸を左腕の盾で防ぎ、ついに大穴が空いて腕の装甲で直接受けることになっても構わず、速度を落とすことなくそのイピクレスへ――その先にある妨害装置へ直進する。

その猪突猛進な姿に恐れをなしたのか、イピクレスは衝突の直前に地面を蹴って横に避け、すれ違ふ一瞬に光秋は左腕を叩き付けて一行との距離を開けさせる。

直後、

(ぐっ!!)

「! 柏崎さん! 大丈夫か!」

関機目掛けて放たれた戦車砲、その徹甲弾を右側面に躍り出た桜が渾身の念壁で弾くものの、外音スピーカー越しに聞こえた苦悶の声に光秋の意識が思わず後ろに向く。

が、

(構うな! 進めえ!!)

「!」

通信機から返ってきた桜の叱責に頬を引つ叩かれた様な衝撃を感じたのも一瞬、今の自分の役目を再認識した光秋は足を止めることなくマーカー目掛けて突き進む。

「ちよつと! 桜ちゃんが——」

「大丈夫だ。関大尉がフォローしてくれてる!」——どの道、今僕が立ち止まるわけにはいかない。こんなふうになる可能性を知りつつ、桜さんにこの役目を命じた。どこまでわかっていたかは知らないが、桜さんはそれを引き受け、今の役目を果たしてくれてる。だったら僕も、それに応えないとっ——

北大路の抗議をやや強い語調で封じつつ、モニター端に表示された映像にマシンガンを応射する関機の後ろに回り込んだ桜を一瞬捉えた光秋は、胸の内にそう言い聞かせな

がらマーカーを見据える目を鋭くする。

一行の前を横切ろうとする戦車を跳び越え、物陰から放たれたロケット弾を半壊した盾で受け流し、離れた所からマシンガン撃つてくるフラガラツハの頭部に進路上に落ちていたコンクリートと思しき瓦礫を投げ付けて転倒させる。

そんなことを間を置くことなく繰り返し、気付けば乱戦の勢いが大分落ち着いた2車線の一本道を進んでいた。

（どうやら激戦……抜けたようだな……となる……いよいよ本題だぞ）

「はいっ」

こちらの注意を喚起させるデ・パルマに応じつつ、光秋は道路の先に表示されたマーカーを凝視する。

少し進んだところでT字路に差し掛かり、同時にデ・パルマの指示が飛ぶ。

（よし、全機停まれ。こっからは別の作戦でいく）

言いながらニコイチと関機が停まり、桜がニコイチの右肩に着地したのを確認すると、デ・パルマはさらに続ける。

（地図……よれば、この建物の向こう……コンテナ置き場があって、妨害装置はそこに設置さ……いるようだ。ZCも守……固め……だろうから、正面から一気に攻めるのは得策じゃない。ということで、00を囫に使う）

「囧……ですか……」

雑音混じりの包み隠さない言い方に、何かしら考えがあるとは思いながらも、光秋はどうしても怪訝な顔をしてしまう。

（こいつを囧って、オッサン——）

「柏崎さん、やめろっ」

同じ感触を覚えたのか、目を三角にして通信越しに声を荒げる桜を制しつつ、光秋は先を促す。

（そんな顔す……って。コイツのデタ……級な防衛……踏まえた上で言ってるんだよ。ついで……00はよくも悪くも目立つからな。囧には最適だ）

——言ってることは妥当なんだけどなあ……………——

胸中ではデ・パルマの指摘を理解しながらも、表現の所為かどうにも釈然としないものを感じてしまう。

（で、地図……よれば、俺たちが今い……のT字路は左右それぞれが妨害装置の置かれたコンテ……き場……続いているらしい。一方から00を先行……ZCの注意を引き付け、反対側から進……俺たちが隙を突いて装置を破壊、とまあ、シンプルな囧作戦が……思うんだが？）

（……戦力を考えたら、今はそれが最善かもしれませんね）

「……こちらも、異議ありません」

パネルに映る地図を確認してデ・パルマの意見を自分なりに理解すると、光秋も関に続いて首肯を返す。

（光秋っ！）

「今は仕事中だぞ。せめて『加藤二曹』と呼べ」

ニコイチの目を見据えて憤った顔を向ける桜を律しながらも、光秋はそつと声を掛ける。

「大丈夫だよ。僕の相棒は頑丈さに定評があるんだ。中にいる限り柿崎さんたちは……少なくとも死にやしないよ。転んでケガはするかもだけど」

（……それもそうだけど……そうじゃなくて……）

「どの道、僕たちは装置を壊す為にここまで来た。その最も妥当な方法がこれだっていうなら、やってみせるまでさ。さ、もう行くぞ。柏崎さんも少佐たちの援護よろしくな」
（……………うん）

言い足りない不満を顔に浮かべながらもどうにか頷いてくれた桜。その許に光秋は左手を差し出し、桜が肩からそこに移ると、人が小鳥を放つ様にゴーレム2機の方へ後押しする。

「では、行きますっ」

（おう。すっかりアチラさんたちの注意を引き付けてくれよ）

（柏崎さん、だっけ？この子は僕がすっかり見てるから）

「よろしくお願いします」

デ・パルマと関に应じると、光秋はニコイチを数センチ浮かせて滑る様に右の道を進む。

「2人とも、適当なところに掴まっててくれ。少し荒い操縦になるかもしれない」

「はいっ」

「……」

光秋の注意に董は硬い声で応じ、北大路も心なしか緊張を浮かべながら背もたれを掴む。

ややあつて左に曲がる道に差し掛かり、地図を見てそこがコンテナ置き場までの一本道だと確認すると、光秋は思わず生唾を飲む。

「いよいよ、だ……………行くぞ！掴まれ！」

「――」

叫ぶと同時に曲がり角に突入、董と北大路が背もたれにしがみ付いたのを一見するやペダルを一杯に踏んでやや長い道路をひと息に駆け抜けけると、いよいよ海辺に面した広いコンテナ置き場に出る。

本来なら広い敷地を埋める様に並んでいるはずのコンテナの数々は、今はそれらを運ぶためのクレーンやトレーラー諸共端に押し退けられ、そうして空いた広間のど真ん中に複数の大型コンテナに囲まれた妨害装置と思しき黒い直方体状の箱を捉える。

それにマーカーが重なって見えたのも束の間、背中から2本の砲身を伸ばしたイピクレス3機と、その上空に滞空したヘラクレス1機——計4つの視線がこちらに注がれる。

刹那、イピクレス3機が各々2門の砲身から砲弾を放ち、それを追い風にしたヘラクレスが背中から巨大な噴射光を輝かせて接近してくる。

「！」

既に半分以上欠落して左手周辺しか覆っていない盾を反射的に前に出しつつ、ニコイチを左右に振って砲撃をやり過ぎた光秋は右手のキャノン砲の狙いを付けようとする。

が、距離を詰めるやヘラクレスは空手だった両手を両脇に伸ばし、そこに提げていた刃渡り3メートル程、メガボデイサイズの短剣とでもいうべき物を抜き、加速の勢いを乗せた刃を振るってくる。

「剣って——!!」

これまで銃器くらいしか持つところを見ていなかったメガボデイが接近戦向きの武

器を使ってきた。その目の前の現実には驚愕する間もなく、光秋は振り下ろされた二刀を盾で――それを斬り裂いて露わになった左腕で受け止める。

「っ……！」

自身の左腕にも縦一の一の字に走る、弾丸を受け流した時とも異質な圧迫感を2力所覚えたのも一瞬、少し引いた腕を突き出して剣を弾くや左蹴りをヘラクレスの腹部へ伸ばし、相手は上昇して距離をとる。

間を置かずキャノン砲の砲口を向けるものの、殺到したイピクレス3機のマシンガンに、既に露わとなった左腕を前に出して回避に集中する。

そこに再びヘラクレスが剣を振りながら迫り、脊髄反射で地面を蹴った光秋は右に跳んでそれをかわす。

――射撃で牽制、剣が本命か？ゴーレムだったら確かに危なかっただろうな――

留まることなく突き出される2本の切っ先を、右に左にと上体を引きながら後退することであり過ぎず傍ら、デ・パルマたちとはまた違った4機の連携に内心舌を巻く。

「だが、相手が悪かったな！」

通信障害で相手には聞こえないことを承知で叫ぶや、光秋は突き出しで一杯に伸ばされたヘラクレスの右腕を掴み、それを引いて相手の胴部を寄せながら右膝蹴りを叩き込む。

放たれた膝は生命の温かみを内包した胸部、そのすぐ下の上半身と下半身を繋ぐ細めの接合部を砕き、引き寄せた勢いのままに右腕も肩から引き千切られて胴部と左腕だけになったヘラクレスは、背部推進器3基を噴かしてニコイチから距離をとる。

―推進器を増設してたのか。道理で速いわけだ……………―

本体背部に設けられた1基と、その左右に付け加える様に設置されたやや小振りの2基の推進器を見て独り納得しつつ、左手に握られたままの剣に目を向ける。

―左腕の剣が気掛かりではあるが……………あそこまでやられればおいそれと前に出てこないだろう。今の内にイピクレスとかいう方を！―

一抹の不安を覚えながらもそう断じると、光秋はヘラクレスの離脱援護の為にマシンガンを斉射するイピクレス3機を見据える。

が、その時、

「?・コンテナを開けて……………」

援護射撃でイピクレスたちの後ろに回り込むや、半壊したヘラクレスは妨害装置周囲に置かれたコンテナの1つの上に滞空し、念力と思しき力でその上ブタを開ける。

そして、

「!?!」

中から無傷のヘラクレスの右腕、両脚、腰部が引き上げられる様に現れ、それらが欠

損部分を埋める様にコンテナの上のヘラクレスに接続され、瞬く間に完全な形のヘラクレスが1機完成する。

「手足を付け替えて復活つて? あんなのアリですか!?

「アリなんだろうっ?」

驚愕するニコイチ内一同を代表する様に叫んだ董に投げやりに返しつつ、光秋はマシンガンの弾雨をかわしながら、新たな手足を得て迫るヘラクレスを注視する。

その時、先程引き抜いたヘラクレスの右腕、そこに握られたまま地面に落ちている剣を捉える。

—使えるか?—

咄嗟にそう思うや、ニコイチの腰を落として低姿勢で弾雨をやり過ごしつつ、数センチ上を滑る様に飛んで腕の許に駆け寄り、通りすがりざまに剣を左手に掴む。

直後に背後から迫るヘラクレスを感知するや、光秋は振り返りざまに左手の剣を振るい、叩き込まれたヘラクレスの剣とぶつかった両者の間に火花が散る。

(この野郎! 俺の剣を返せえっ!!)

「っ!」

自分の武器が使われたことが不愉快なのか、スピーカー越しにヘラクレスのパイロットの怒声が響くものの、それに応じる余裕がない光秋は左腕を伸ばして鏢迫り合った剣

を押していく。

—行けるか?—

剣を介してニコイチの腕力に押されて曲がつていくヘラクレスの左腕を見て、今度は体重を掛けて一歩踏み込もうとする。

直後、

「!?」

ヘラクレスは急に後ろに下がり、突然抵抗を失ったニコイチの体勢が崩れる。

（バカかー今だーやれえ!!）

—御尤もっ—

ヘラクレスの罵声につい力勝負に気が向き過ぎていた自身を自覚したのも一瞬、光秋はNクラフトの出力を上げて迫りくる6発の砲弾を飛んで回避する。

そこに間を置かず念力で浮かんだヘラクレスが3基の推進器を焚いて迫り、両者は再度鏖迫り合う。

その時、自分が入って来たのと反対側の道路、その建物の陰からキャノン砲の砲身を伸ばしたゴーレムが目に入る。

—デ・パルマ少佐!—

理解するや光秋は妨害装置に目を向け、その周囲に佇んでいたイピクレス3機が少し

離れた所で横並びになり、機会があれば砲撃をしようとこちらを注視しているのを確認する。

それはつまり、囃の役目を充分に果たしたということで、

——少佐！今ですっ！——

小さな達成感を抱きながら胸中に叫ぶや、それを聞いたかのようなタイミングでデ・パルマ機のキャノン砲が放たれ、撃ち出された徹甲弾は吸い込まれる様に妨害装置を貫いた。

(!?ジャマーが——!!)

「！」

大穴を空けた妨害装置にヘラクレスのパイロットが驚愕の声をスピーカーに漏らしたのも一瞬、光秋は左腕に力を込めて相手の剣を押しやり、そのまま丸ノコのように一回転しながら空きになった頭部に右踵落としを叩き込む。

回転の勢いも乗ったその一撃はヘラクレスの頭部を砕き、胸部上部も若干凹ませてヘラクレスを地上に叩き落とす。

コンテナ置き場の只中に大の字になって倒れたきり動かなくなったのを確認するや、光秋はすぐにデ・パルマ機に通信を繋ぐ。

「少佐！聞こえますか？」

（おうっ。そつちも感度良好みたいだな）

「！」

雑音のない鮮明なデ・パルマの声に、作戦成功の実感を得た光秋は思わず口角を上げる。

直後、動きが滞っていたニコイチにイピクレスの砲撃が迫る。

「!!」

「まだ終わってないんですけど？」

「だったなっ！」

北大路の非難に応じつつ高度を上げてそれをかわすと、光秋は先程砲撃を加えてきた1機を注視し、キャノン砲の狙いを付けながら接近する。

相手はマシンガンを斉射して応戦し、それを縦横に動いて回避、一部は左腕で胴部を庇って受け流しつつ距離を詰める。

と、イピクレスのマシンガン斉射が出し抜けに止まり、慌てた様子で2門の砲口をこちらに合わせてくる。

——今っ！——

砲弾が放たれる直前、少し高度を下げてそれをやり過ぎすや、充分に距離を詰めたと判断した光秋はキャノン砲のレーザーポインターを点け、イピクレスに重なったマー

カー中央にそれを合わせる。

「！」

直後に放たれた徹甲弾はイピクレスの右脚を砕き、バランスを失った機体が仰向けに倒れ込む。

その時、

（加藤二曹！その剣！）

「！」

通信越しに閔の声が響くや、光秋は反射的に左手の剣を閔機の方に投げ、地面に突き刺さったそれをゴーレムが左手で抜くのを視界の端に見る。

が、それも束の間で、すぐにイピクレスに意識を戻すと、仰向けの機体の上に落ちる様に降下し、着地ついでに両肩を踏み砕き、左手で砲身2本を押し折って胸部のコクピットにキャノン砲を向ける。

ややあつてハッチが開くと、慌てた様子のパイロットが手を挙げて出てくる。

——この人も、若いな……………——

震えながらコチラを見上げる男性パイロット、その20歳になるかならないかという歳格好に、光秋は輸送車の3人を思い出し、不良グループ丸一つがZCに加わったということを改めて実感する。

その間にも、傍らの関機はもう1機のイピクレスをマシンガン斉射で牽制しつつ距離を詰めていく。

当然相手もマシンガンで応戦し、もう1機の方も肩の砲口を合わせてくるものの、マシンガンは肩に乗った桜が機体正面全体に張った念壁でことごとく弾かれ、砲撃を行おうとしていたイピクレスはデ・パルマ機のことを失念していたのか、物陰から放たれたキャノン砲に腰部を碎かれて上体が背中から地面に落ちる。

そんな両者のフォローを受けつつ関機は最後のイピクレスに肉迫し、左手の剣を振り下ろしてマシンガンを持った右腕を肩の付け根から切断し、間を置かず胸部コクピットにマシンガンの砲口を押し付ける。

「デ・パルマ少佐、コンテナの破壊を！中にコイツ等の予備部品が入ってます！」

ヘラクレスのことを思い出して通信とスピーカー双方に叫びつつ、光秋も手近なコンテナをキャノン砲で撃っていく。

警告を聞いてデ・パルマ機もキャノン砲を撃ってそれに加わり、関機の肩を足場にした桜も両腕を一杯に挙げて一気に振り下ろし、その動きに合わせる様に関機周囲のコンテナが見えないプレス機に掛けられた様に押し潰される。

そうしてコンテナの9割方を潰し、ZCの4機も降伏、あるいは機体の著しい損傷による戦闘継続不可能を確認すると、光秋は意識の半分を足元のパイロットに割きながら

も通信に達成感を含んだ声を乗せる。

「やりましたねっ……あ、そうだ。本隊への連絡は？」

（俺が通信が回復してすぐにやっておいた。激戦区の方が優先だろうが、少しすればこっちにも応援が来るだろう。輸送車の一部もここに向かってるらしい）

キャノン砲の弾倉を腰の後ろに提げた2つの内の1つと交換しながらデ・パルマが説明すると、光秋は念力で潰された多数のコンテナを見て先程のことを思い出す。

「そういえば、柏崎さんが普通に念力使えてましたね」

（そっちの方も、上手くやってくれたみたいだね）

コクピットからワイヤーを伝って降りてくるイピクレスのパイロットにマシンガンの砲口を合わせながら、関がEジャマーの確保に向かった一団を労う様に言う。

（ちよつと・アタシも頑張ったんだけど？ 関さんのゴーレム守ったし、コンテナだって殆どアタシが壊したのにいつ！）

話題に挙がらなかったことが不服だったのか、関機からニコイチの方に飛んできた桜が膨れながら言う。

「悪い悪い。忘れてたわけじゃないよ。柏崎………桜さんもよくやってくれたなっ」

（っ！………べ、別に、それが特エスの仕事だからねえ。よくわかったか！ 主任見習い）

すぐに光秋が応じると、何故か照れながら腰に両手を当てて胸を張ってくる。
その時、デ・パルマたちとは違う声が通信に響く。

（加藤二曹、聞こえるか？）

「藤岡主任？何か？」

本部を出発して以来の藤岡の声に、光秋は足元のパイロットと周囲に注意を割きながら返す。

（通信妨害の所為で連絡が遅れたが、頼まれていたレールガンと砲弾ひと通りを持ってきた。本土側の本隊に置いておいたので、必要なら取りに来てくれ。それと、俺も少し前に現場に着いた。今ヘリからお前のことを見ている）

「ヘリ？どの辺りです？」

（お前が今いる埋め立て地と本土の間、だいたい激戦区から少し離れた辺りだ）

「激戦区から少し離れた……ああ」

言われた辺り、何本もの黒煙が昇る所から少し離れた空に一点の影を捉え、光秋の意思に反応したモニターが滞空するヘリの拡大映像を映し出す。

「了解しました……引き続き、騒動の鎮圧に当たります」

（ん。合格の為にも、せいぜい頑張れ）

言うや藤岡の方から通信は切れ、光秋もヘリを意識の外に置いて拡大映像を消すと、

装備品の話をされたことを思い出してキャノン砲を見やる。

—そういえば、イピクレスに1発、コンテナ壊すのに4発……残り1発しかないんだったなあ……取りに行つた方がいいか………?—

補給に向かうか、ZCメンバーの監視を継続するか、逡巡の後、ゴーレム2機と桜の姿を見て判断を決める。

「デ・パルマ少佐、関大尉、柏崎さん、すみませんが、補給で一旦退^さがります。ここをお願いします」

（ああ。お前の持ち弾つてそれだけだったなあ……）

通信にそう告げると、デ・パルマ機がこちらのキャノン砲を一見しながら呟く。

（わかった。ここは俺たちが持つ。輸送車の奴等もそろそろ合流する頃だしな。折角だ、補給が済んだら本隊に指示仰いで、もつと面倒な所に回してもらえ）

「ありがとうございます。そうさせていただきます」

実技試験という名目でここに来させてもらった都合上、もつと積極的な動きを見せなければならぬかと思つていた矢先のデ・パルマの勧めに、光秋は一人頭を下げる。

「柏崎さんも、しばらく頼む。都合がついたら追つて連絡する」

（アタシは居残りかよ……）

「悪いな。柏崎さんは百人力だから。EJCの電源は？まだ余裕あるか？」

（ま、まあ、そこまで言うなら………あと、今は電源切ってるから、いない間にEジャマー点けられても大丈夫だと思うよ）

「わかった。いざとなったら少佐たちに頼りな。じゃあ、後で」

桜に対する気掛かりを一応解決すると、光秋はペダルに足を掛ける。

瞬間、

「！」

背後から刺す様な悪寒が走り、脊髄反射で前に出した左腕をマシンガンの一連射が叩く。

すぐに攻撃が来た方を見上げると、右手にマシンガンを持ったヘラクレスが1機滞空していた。

（流石、総裁注目の白い犬ってか？やっぱ不意打ちは無理かあ）

直後に若い男の声がスピーカーを介して響くものの、光秋の意識は相手の機体の方に向いていた。

「アレもヘラクレス……なのか……？」

思わずそう感じてしまう程に、上空のヘラクレスはこれまで見てきた物と大きく違っていた。

まず、両脚の膝から下が大きく膨らんでいて、足の裏から覗く大型ノズルが大出力推

進器であることを物語っている。そして左腕も異様に太く、長さに至っては先端が足の先を越えてしまっている。その先端に設けられた3本の指——というよりも「爪」は見るからに装備を持ったりそれを使用したりすることには向かないものの、太く長く、緩く歪曲したそれは建物の解体工事などで使う破碎機のような高握力と痛々しさを想起させる。胴部と右腕は流石に通常の型で、そこまで変わっていたらヘラクレスという認識すら持てなかっただろう。

そんな異形の敵機に慄いている間にも、相手は頭部を巡らし、下界を俯瞰する。

（つーかお前ら、なにやられてんだよ？こっちは1人も倒せてねえし、装置は壊されるし……使えねえ——）

おそらくはZC側のリーダー格なのだろう。部下たちの様子に心底呆れた声を流している、後方からデ・パルマ機の徹甲弾が放たれる。

が、直後に激戦区の方から飛んできたヘラクレスが割って入り、範囲を絞った濃密な念壁で徹甲弾を弾いてしまう。

その光景を単眼で一見すると、爪付きのヘラクレスのパイロットは苛立った声を流す。

（おい、スナイパーさんよお、人が話してんの邪魔するもんじゃねえぞ？……まあいいや。ヤス、足元の兵隊連中頼む。俺は——）

「掴まれえ！」

「!?」

爪付きが言い切る直前、光秋はニコイチの左腕を前に出しながら董と北大路に叫ぶ。

（白い犬をやるっ！）

言うと同時に爪付きはマシンガンを斉射し、それを左腕で受け流しながら光秋は上昇する。

それに合わせる様に爪付きも脚部と背部の推進器を焚いて急激に距離を詰め、突き出した左腕、その先の3本爪が大きく開かれる。上から2本、下から1本伸びたソレは、巨大化した肉食獣の顎を思わせた。

「!!」

原始的な恐怖による悪寒が全身を走ると同時に、光秋は宙を蹴る様に後ろに下がり、一瞬前までニコイチがいた辺りを3本の爪が空を切る。

（ちっ！）

「おい！大丈夫か？」

スピーカーから漏れた爪付きの舌打ちを意識の端に聞きつつ、光秋は董と北大路を見る。やる。

「だ、大丈夫ですっ」

「一応、ね……」

予想通り、突然の急発進に反応が遅れたらしい2人は、それぞれ背もたれを掴みながら頭を擦っていた。

「すまない。突然で——！」

謝罪もそこそここのところにさらにマシンガンの斉射が加えられ、光秋はニコイチを縦横に振ってそれを避け、気付けば海の上に出ていた。

——どうする？ キヤノン砲は残り1発、補給場所は遠い、デ・パルマ少佐たちの援護も期待できないときてる……………」

背中と両足の側面に増設された推進器による高い移動速度と、不規則で立体的な軌道、念壁による守り、両手でしっかり構えたマシンガンによる散発的な射撃、それらを備えたヘラクレスに翻弄されるデ・パルマたちのゴーストを見やり、隙あらば再び迫ろうとしている爪付きの執拗さに光秋は焦りを募らせる。

その時、

（アタシの主任に何するかああ!!）

叫びと同時に潰れたコンテナが爪付きに迫り、爪付きが距離をとってそれを避ける間に桜がニコイチの許に飛んでくる。

「柏崎さん!! 少佐たちは？」

（今はそれよりこつちでしようが！てか、何で一方的に追い詰められてんだよ！ソイツのパンチならあんな奴一撃だろう!?）

「理屈はそうだが……」

桜の指摘に応じながらも、光秋は上空からこちらを窺っている爪付き、その3本爪を恐れを含んだ目で注視する。

「あの爪、掴まれてもニコイチなら千切られることはないと思うが、抜け出すのは難しいだろう。なにより、一度捕まったらどうなるか………だから、迂闊に近付きたくないんだが………」——だからと言って、弾がなあ………——

通信越しに理由を説明しながらも、射撃戦が満足にできる状態でもないことを再認識させられ、光秋の焦りはますます強まる。

と、それまで背もたれにしがみ付いていた董が前に躍り出る。

「！柿崎さん！危ないから掴まって——」

「私に弾を取りに行かせてください！」

注意を遮って言われたことが一瞬解らず、光秋は困惑する。

「君が、弾を……？どうやって？」

「テレポートで本隊まで行つて、そこからここに跳ばします」

「……確かに、それならすぐ補給できるだろうが……」

それを聞いて董がテレポーターであることを失念していたことを内心恥じながら、一つの疑念を抱く。

—そうするとして、それには董さんをニコイチから出す必要がある。爪付きと睨み合いを続けている今、迂闊にハッチを開けるのは……………—

逡巡について動きが鈍くなり、それを見逃す相手ではなかった。

(なーにボサツとしてんだよっ！)

言いながら爪付きは左腕を真つ直ぐに伸ばし、前腕部の前後に1基ずつ設けられた推進器が火を噴いたかと思うや、上腕部の中程からケーブルの尾を引きながら噛み合わせ、3本爪が飛んでくる。

「!!」

あつという間に距離を詰めるや3本爪は一杯に開き、咄嗟に高度を上げてそれをかわした光秋は背中に冷や汗を感じながら、3本爪がケーブルの巻き戻しによつて再び左腕に接続されるのを見る。

—腕を飛ばすつて、また思い切つたものを……………これは、もう—

一連の光景に迷っている暇はないと悟ると、再度3本爪の狙いを付けようとしている爪付きの気配を察して縦横織り交ぜた複雑な軌道を描いてそれを防ぎつつ、急な動きでモニターに頭をぶつけて悶絶している董に告げる。

「柿崎さん、さっき言ったこと、本隊までの弾取り——否、こつちが指示を出すから、それに応じた武器のテレポート頼む」

「！は、はいっ！」

痛みに歪めていた表情を一瞬で整えた董のよく通る返事を聞くと、光秋は不規則飛行を続けながら未だ3本爪の狙いを付けようとしている爪付きの様子を窺いつつ、離れた所で潰れたコンテナを3つ周囲に浮かべて爪付きに投げ付ける機会を窺っている桜を見やり、通信を繋ぐ。

「柏崎さん、聞こえるか？」

（何っ？今狙い付けてて忙し——）

「これから柿崎さんを外に出す。テレポートでまずそちに跳ばすから、その後本隊まで護衛しろ」

（……………ええ!!）

予想外の指示に動揺した桜の声がスピーカーから返ってくるが、光秋は構うことなく続ける。

「柿崎さんもよく聴いてくれ。ニコイチから出てすぐ、柏崎さんと合流したら、まず藤岡主任が乗っていたヘリに跳べ。そこで装備品が置かれてる場所を確認してそこに跳び、着き次第連絡、あとは追って指示する。わかったか？」

「了解ですー！」

（……わかったよ）

董の明瞭な返事と桜の渋々といった返答を聞いたその時、各部推進器を噴かして急接近してきた爪付きが左腕を突き出してくる。

「！」

勢いよく閉じる3本爪から紙一重のところで上昇して逃れると、全身を震わせる悪寒を振り払う様に光秋は爪付きの頭部目掛けて左蹴りを入れる。

が、相手も機体を左に傾けてギリギリのところでそれをやり過ごし、

（チッ！）

と舌打ちしながら距離をとっていく。

それを見て、光秋は反射的に通信機に叫んだ。

「柏崎さん、コンテナを投げろー！全部！」

（え？ええ……？）

「早くっ！」

（ああん、もうっ!!）

突然の指示の戸惑ったのも束の間、桜は周囲に浮かべていたコンテナ3つを投石の要領で投げ、突然の重量物襲来に爪付きは回避で精一杯になる。

その一瞬前、光秋はハッチを開け放っていた。

「行け！柿崎さん！」

「はいっ！」

光秋の叫びに応じると同時に董はコクピットから消え、次の瞬間には桜の隣に現れ、並んで浮かぶところを見たと思つた一瞬後には2人共その場から消えた。

―頼んだぞ―

すでに藤岡のヘリにいたのであろう2人に祈りつつ、不安だつたハッチを開いたニコイチや外に出た董が狙われる事態が杞憂に終わったことに少し安心しながら、すぐにハッチを閉める。

直後、爪付きが正面に回り込んでくる。

「！」

その左腕の爪に先程桜が投げ付けたコンテナの1つが掴まれているを見て、反射的に投げ返しを警戒した光秋は身構える。

が、爪付きは嬉しそうな声を響かせてくる。

（やってくれたな、白い犬。そんでもって、ありがとよっ！）

そう言うや、念力によるものか、コンテナの隙間から無傷のマシニングの弾倉が引き出され、それと合わせてマシニングに差し込まれていた弾倉が海に落ちる。

——しまった——

（弾数が不味かつたんでよっ！）

光秋が相手の意図を察すると同時に新しい弾倉は差し込まれ、早速襲ってきた弾丸を咄嗟に右に動いてかわす。

が、

（そこだっ!!）

「!!」

叫びを伴って爪付きはコンテナをニコイチの回避先に投げ付け、正面からの直撃を食らった光秋は束の間バランスを崩す。

そして、

（もらったあ!!）

その隙を突いて爪付きは左腕を飛ばし、ニコイチの右脚を銜え込んだ爪がしっかりと噛み合わされる。

予想通りニコイチウムの外装が切られることはなかったものの、自身の右脚にも感じた圧迫感に、光秋は直感的に背後に手を伸ばす。

「北大路さん！掴まれっ！」

「!?」

戸惑う北大路に構わずその身を自身に抱き寄せ、左腕をシートベルト代わりにして固定した直後、爪付きは左腕をデタラメに振り回し、その先端に捕らえられたニコイチ、そのコクピットに収まる2人を四方八方から不規則に加わる加重が襲う。

「っ……………」

「口を閉じて、舌を噛むな！」

自分がそうならないように手短に告げつつ、光秋は胸の中に抱えた北大路を繋ぎ止める左腕に一層力を込める。

同時に気を抜けばあらぬ方向に飛んでいきそうな右手を右操縦桿に留めながら、あらゆる方向から不規則に加わる大きな力に悶絶する。

—もつとも、ニコイチだからこんなふうに感じられるんだろうな。これが航空機とかゴーレムとか、とにかく「当たり前前の機械」だったら、今頃気絶……潰れてたかな？っ
!!—

こんな時にも妙に冷静な部分でそんなことを思いながらも、背もたれ側に向かって掛かる力、その際に迫ってくる北大路の重みにはやはり堪える。

そんな中、こちらを嘲笑う爪付きの声が耳に入る。

（ギャハハハハハ!!流石の白い犬も綱に繋がれりやただの犬ツコロってか!?ざまあねえなっ!!）

「……」

その一言と、胸の中の北大路の苦悶の表情、何よりも無性に耳障りに感じる甲高い笑い声に、力の働く方向とは無関係に光秋の頭に血が上る。

それを感じて、パネル操作を待たずに外音スピーカーが作動する。

「……………白い犬を——」

（あ?）

言いながら、光秋は左腕にさらに力を込め、北大路の体を自身に密着させる。

「——舐めんじゃねええ!!」

腹の底から発せられた叫びはスピーカーを通じて周囲に轟き、叫びの力を表す様にNクラフトが高出力で作動する。

途端に見えない壁に当たった様にニコイチは宙の一点に留まり、左手で3本爪の手首を鷲掴みにする。

そのまま腕を引いて右脚を銜えたままの爪部分を引き千切ると、光秋は左腕を大きく掲げ、それに合わせて爪付き本体も上空に引っ張り上げられる。

（!?うお!!）

「繋いだくらいで、犬を制せると思うなっ!!」

胸の内から浮かんできた言葉を直感的に叫びながら、光秋は立場逆転に狼狽える爪付

きを振り回し、知らぬ間に近くまで戻ってきていたコンテナ置き場、その中心に佇む妨害装置の残骸へ叩き付ける。

（舐めんなあ！）

一方の爪付きも背部と脚部の推進器を全力で噴かし、念力も使って残骸に激突する寸前に自機を停止させる。

その間にも光秋はNクラフトを噴かして爪付きの懷に迫り、パイロットを収めた胸部へと開いた左手を伸ばす。

—確保っ！—

しかし、

（チキシヨオオオ!!）

ニコイチの指が触れる寸前、爪付きは悔しさを滲ませた声を上げて左腕を切り離し、念力で浮かべたそれを投げ付けてくる。

「!!」

思わぬ衝撃に光秋はバランスを崩し、手が空を掠ったと感じた頃には、爪付きは足裏から勢いよく炎を吹かして後退していた。

徐々に距離を離していく爪付きを見て、光秋はやつと腕の中の北大路に意識を向ける。

「大丈夫か北大路さん？どっか怪我とかしてないか!?」

「……別に、何とも——!」

左腕の力を緩めながらの問いに、北大路は変わらぬ険のある態度で答えようとするが、すぐに両手で口元を押さえ、すっかり青くなつた顔を俯ける。

——無理もないか。安全なんて何処吹く風の絶叫マシンに突然乗せられた……いや、その何倍も酷い目に遭つたんだからな……—

どうにか堪えている北大路の体調をそう察すると、光秋はせめてもその背中に左手を伸ばす。もつとも、防弾ベストに覆われた背中を擦ることは叶わず、少し不満を覚える。

（ダメエ、覚えてろよっ！俺の左腕は高けえぞおっ!!）

そう怒鳴りながら、通りすがりざまに放置されていたイピクレスの左腕を引き抜いて自機に付け替えた爪付きは、こちらも左脚と右腕がイピクレスのそれに置き換わっている——加えて右腕の肘から下が欠損した——ヘラクレスを伴つて本土側へ一目散に飛んでいく。

——撤退したか……—

小さくなつていく2機を眺めながらそう思うと、光秋は周囲を見やり、道中別れた輸送車が2台コンテナ置き場の隅に停まり、撃退してそのままだったイピクレスやヘラク

レスの手足が自分たちが壊した部分以外も所々なくなっているのを見る。

——一部破損しても、近くの僚機の無事な部分を付け替えて即修復か………ちよつと面倒かな………？——

明らかにになったZCのメガボデイの特徴に、思わず眉間に皺を寄せる。
と、

（光秋さん！準備できました！指示を！）

「あつ、柿崎さん………」

耳の通信機から響いた董の緊迫した声に、光秋は少し気まづくなる。

「そのー、だな………悪い。爪付きのヘラクレス、今撃退しちゃった………」

脅威を除いたことはいいのだが、自分から行かせておいて相手の仕事を盗ってしまった形に、バツが悪そうにそう告げる。

（えっ？………そう、なんですか………）

「うん………」

案の定、董からも気まづい声が返ってきて、光秋はどう応じていいか困る。

と、デ・パルマと関のゴーレムが歩み寄ってくる。

（どうした？ぼつさとして）

（まさか、どつか調子悪くなつた？）

「ああ、いえ。大丈夫です」

通信越しにデ・パルマと関に応じながら、光秋は2人のゴーレムを見る。

本体こそ微かな凹みや小さな傷がいくつか付いているくらいで目立った損傷はなさそうだが、左腕の盾は双方とも端部が著しく削れ、関機に至っては先端部に大きな割れ目が入り、先程拾った剣はすっかり刃こぼれしている。

「お二人こそ、大丈夫でしたか？少ししか見えませんでした、だいぶ苦戦していた様子でしたか？」

（まあ、Eジヤマーを点け直さなきゃ危なかったかもな。機体ごと浮遊して、90ミリ弾を真正面から防いで……ありやかなりレベルの高いサイコキノだな）

（もしくは、あれがヘラクレスって機体の想定された使い方なのかもね……）

心配する光秋に、デ・パルマと関はそれぞれ冷静に応じながらも、その声には微かな畏怖が混ざっていた。

が、次の瞬間にはそれを押しやる様に、デ・パルマが活力のある声で告げる。

（さて、俺らも激戦区の鎮圧、手伝いに行くか）

「！そうですね。董さん」

その一言に我が意を得るや、光秋は通信に呼び掛ける。

（はい？）

「今から激戦区の方に向かう。さつきまでいたコンテナ置き場にキャノン砲の弾倉、そうだな……徹甲弾を1つ送ってくれ」

（！わかりました！）

董の方も役割を得られて嬉しいらしく、嬉々とした声が返ってくる。

が、すぐに戸惑った声が続く。

（……………あの、もしかしてそこ、Eジャマー効いてます？）

「え？ああ、そういうええさつき……」

董の質問に、光秋は先程デ・パルマが話していたことを思い出す。

「効いてると、やっぱり送れないか？」

（頑張ればできなくはないと思いますけど……やっぱり不安で……………）

「わかった。ちよつと待つてろ」

確認すると、光秋はデ・パルマ機を見やる。

「少佐、この辺のEジャマー、切ってもらってよろしいですか？」

（ん？ああ、倒したメガボディに乗ってた連中も確保したしな……デ・パルマだ）

コンテナ置き場端の輸送車をゴーレムの単眼で一見しながら応じると、デ・パルマはEジャマーに付いているスタッフに指示を送り、Eジャマーを切らせる。

（切ったぞ）

「ありがとうございます。柿崎さん、切った。今度はどうだ？」

応じる代わりに、妨害装置の残骸の近くに弾倉が1つ現れる。

（送ることはできました。ちゃんと行きましたか？）

「ああ。ありがとう」

董に返しながら、光秋は送られてきた弾倉を左手で拾う。

—そういうや、結局1発余ってるんだよなあ……どうするか……—

新しい弾倉と既に差し込まれている弾倉、2つを見比べながら逡巡していると、デ・パルマの声が掛かる。

（そーういや、特エスの1人はテレポーターって言ってたか。悪いが、俺たちの弾も送ってくれないか。手持ち分が危うくてよ）

「わかりました。キャノン砲と、関大尉はマシンガンですよね？」

（ああ。頼む）

デ・パルマに応じ、関に確認をとると、光秋は再び通信機に告げる。

「柿崎さん、悪いがキャノン砲とマシンガンの弾倉も、もう1つずつ——」

（僕は2つ）

「はい。訂正、キャノン砲の弾倉を1つ、マシンガンの弾倉を2つ送ってくれ。わかるか？」

（今確認しますっ）

関の頼みを加味しつつ告げ、董の返事から少しして、また残骸のそばにキャノン砲の弾倉が1つ、そしてマシンガンの弾倉が2つ現れる。

（行きましたか？）

「来た。問題ない」

（助かったぜっ！テレポーターの嬢ちゃんにも伝えといてくれ）

「わかりました」

董とデ・パルマ、それぞれに返すと、光秋は差し込まれた方の弾倉を見てふと思う。

「少佐。少佐の機体、まだ弾倉積みそうですか？」

（ん？あと1つくらいなら積めるが？）

「それなら、これも持つて行ってください」

言いながら左手の弾倉を足元に置くと、光秋はキャノン砲から弾倉を抜いてデ・パルマ機に差し出す。

（持つてけって、それお前の分だろう？）

「あと1発だけなんです、予備の弾倉を積んでおける所がなくて。いつもは脚に付けた荷台があるんですが。それなら、少佐が持つて行ってください。僕はいざとなればまた送ってもらえますから」

(……まあ、それなら)

少し考えた様子で応じると、デ・パルマ機は弾倉を受け取り、それを腰裏に提げる。
(ところで、脚のそれ、取らないのか?)

「あつ。ありがとうございます」

関の指摘に、キャノン砲を置いた光秋は両手を伸ばし、少し力んで右脚を銜え込んだままの3本爪を外して爪付きの左腕のそばに置く。

——ついでだ。こつちも——

そのまま外す機会がなかった左腕のボロボロになった盾も外すと、光秋は右手にキャノン砲を持ち直し、そこに新しい弾倉を差し込む。

——よしつ、準備完了。もうひと頑張り——!?!——

心中に気合いを入れて激戦区へ向かおうとしたその時、自分たちの頭上、雲が少し出ていくくらいの青空に数条の稲妻が走り、次の瞬間ガラスが割れる様な音を伴ってそこに赤い穴が空く。

「あれはっ!!」

目を見開いて驚愕の声を漏らした刹那、穴から黒い影が3つ現れ、ややあつてソレらがDD—01・ツァーニング1機とDD—02・ナイガー2機と理解する。

96 使者の隊

DDシリーズ、それも一度に3機の出現という現実を否が応でも受け入れるや、光秋は全身の肌が粟立ち、口の中が急速に乾いていくのを実感する。

—何で奴等が、こんな時に——？—

そんな怯えた思考すら遮る様に、3機の内の一機——中央に滞空するツァーリングが右手に持った細長い黒い筒の先を眼下のこちらに向けてくる。

「！散れっ!!」

(！)

銃床のない長銃という趣のソレに直感的な危険を感じるや、光秋は通信機に叫びながら地面を蹴り、同じくデ・パルマ少佐と関大尉のゴーレムも跳び退くや、直後にツァーリングの筒から赤色の細い光が放たれ、直前までニコイチが立っていた辺りの地面を焼き払う。

「やっぱり……『ビーム』っ!」

コンクリートで舗装された地面に細く、しかし深々と空いた穴と、その周囲を囲む赤々と燃える破片に、ニコイチ最大の天敵の再来を理解した光秋は生唾を飲む。

「それでもっ!」

そう声に出して自身に喝を入れ、気を抜けばすぐに動けなくなりそうな我が身——それを引き写すニコイチに鞭打って身構えさせる。

が、予想に反して次の攻撃は来ず、それどころかナイガー2機を引き連れたツアーングは一行に背を向け、ガスマスクのレンズの様な目でニコイチを一見したのを最後に激戦区の方へ飛んでいく。

——不味いつ!と、その前にっ——

すぐにペダルに足を置いて追おうとする直前、光秋は膝の上のすっかり顔色が悪くなった北大路を認識するや、ハッチを開いて葦に通信を繋ぐ。

「葦さん、今ニコイチのハッチを開いた。北大路さんをそっちに回収して」

（えっ? えっと……）

「早くっ!」

（は、はいっ!!）

「!ちよっ、ちよっ——」

怒鳴って急かすや、反論しようとしていた北大路が膝の上から消え、ハッチを閉めるやペダルを深く踏んで飛び立つ。

「先走りますっ!」

通信越しに告げるや、デ・パルマと関の返事を待たずにDDシリーズたちの後を追う、不安な目で右手のN型90ミリキャノン砲を一見する。

―手持ちの武器はこれだけ―いや、董さんに頼めば試作レールガンも回してくれるだろうが、それでもあのデタラメに頑丈な装甲を貫けるか……赤くなればまだ勝機はあるだろうが、自在にやるのはまだ自信が……―

そう思っている間にも、正面前方にDDシリーズ3機を捉え、それぞれに赤いマーカ―が重なる。

―やるしかない……かつ。それに、消耗させて、黒い空間と人を取り込むことに注意さえすれば勝ち目はある。3機だろうとそれは変わらないっ。やってやるっ!―

そう思いながら自分を鼓舞すると、光秋は汗ばんだ手で操縦桿を握り直し、それと同時にナイガーの1機とツァーニングがこちらを振り返る。

「!」

同時に今回の出動において群を抜いて強烈な悪寒を感じ、光秋は反射的にニコイチを右に逸らすと、ほぼ同時にその左脇をツァーニングの撃ったビームが掠めていく。

「……っ!」

機体を介して自身の左脇にも、それも1センチに足るか足りないかといった至近に感じた膨大な熱気に冷や汗を流したのも一瞬、両手でしっかりと保持したキャノン砲を放

ち、徹甲弾がツアーング目掛けて飛んでいく。

が、ツアーングは左腕の前に出し、弾は前腕部に備わったひと際分厚い装甲に跳ね返されてしまう。そして案の定、着弾した辺りには傷一つない。

—やっぱり……否、もっと近付けば—

挫けそうな心はどうにか持ち直しつつ、光秋はビーム砲に注意しつつ接近を試みる。

その矢先、ツアーングの後ろに控えていたナイガーが高度を上げ、こちらも右手に持ったビーム砲を向けてくる。

「お前もかよっ！」

思わず怒鳴りながらこちらも高度を上げ、足の裏を熱線が過ぎる感覚に靴の中を一気に湿らせつつ、応戦のキャノン砲を撃ってさらに上昇する。

そうして下を見ると、そこが激戦区の真っ只中であり、ZCとNP、両者の鎮圧に出た合軍主体の部隊が三つ巴を繰り広げ、その内の極一部がこちらに攻撃を試みながらももう1機のナイガーのビーム砲、あるいは周囲に発射した羽根によって妨害されている光景を目にする。

—もう1機のナイガーは妨害に徹してる？少なくとも3対1じゃなく2対1……て、大して変わらんかっ—

一瞬浮かんだ楽観論を殺到した二条のビームが打ち壊し、光秋は縦横に回避しつつ

キャノン砲で応戦する。

いずれもことごとくかわされて当たらず、あつという間に弾が尽きるや空になった弾倉を2機に投げ付け、上昇して距離をとりながら莖に通信を送る。

「柿崎さん！弾の補給を！」

（はいっ！）

直後に上空に弾倉が現れ、迫るビームを避けつつそれを取ると、すぐにキャノン砲に差し込む。

「といつても、このままじゃな……………」

両機の素早さの前にこちらの砲撃は当たらず、当たっても損傷を与えられず、消耗させようにも2機分の攻撃を前にこちらが先にバテてしまいそうな状況に、光秋は焦りを抱きながら2方向から迫るビームをかわしていく。

そんな中、右太腿部をツアーンが放った1発のビームが掠っていく。

「っ!!……………」

自身の同じ位置にも感じた熱さを伴った激痛に奥歯を噛み締めて耐えつつ、キャノン砲で応戦するものの、ツアーンは左腕を前に出してあつさりとそれを弾き、さらなる応戦のビームを撃ってくる。

「どうするっ!？」

既に脚の痛みは引いたものの、一向に勝機の見えない戦いに、光秋は思わず叫ぶ。

（だから、こういう時こそアタシを出せよっ！）

「!?」

藪から棒に聞こえた声に驚愕しつつ周囲を見回すと、EJCを背負った桜が上空から急降下してニコイチの前に滞空し、DDシリーズ2機に向けて右手をかざす。

「なっ！バカっ!!」

すぐに引つ込めようと左手を伸ばすも間に合わず、一条のビームが桜に、そしてもう一条がニコイチの胸部へ迫る。

——ダメか……—

思った刹那、迫っていた二条のビームは桜の前に広範囲に張られた念壁に当たって霧散し、2人はことなきを得る。

「……防いだ？」

（や、やった!?どんなもんよっ!）

「いや、君が一番驚いてるように見えるんだが——!」

思わぬ光景に困惑したのも一瞬、予想外の成功を喜んでいる桜に改めて左手を伸ばしてその身を掴むと、そのまま手を胸部に寄せてさらなる2機の攻撃から距離をとる。

キャノン砲の応戦を交えつつ後退しながら、桜を掴んだ手を胸部に寄せ、開けたハッ

ちに強引に押し込む。

巨大な、そして得意の念力も通じない掌に成す術もなく押しやられた桜が膝の上に落ちるのを確認すると、光秋はすぐにハッチを閉め、なけなしの徹甲弾を撃ち尽くすと董に通信を送る。

「柿崎さん、榴弾を」

（は、はいっ！）

返答を聞きながら空になった弾倉をナイガーに投げ付け——身を翻してかわされた——、直後に現れた弾倉を回避と後退を交えたやや危な気な手付きでどうにか受け取ると、装填したそれを早速ツアーングとナイガーそれぞれに1発ずつ放つ。

可能な限り頭部を狙って撃たれた榴弾は着弾と同時に爆発し、即席の目くらましで2機の視界を塞いでいる間に急降下した光秋は適度な大きさのビルの陰にニコイチを屈ませる。

——流石に頭に爆発を喰らえば効いて……ないだろうなあ。そういう話はとりあえず後にして……………

そう思い、慌ただしくなっていた気持ちはどうにか落ち着けると、膝の上の桜を見据える。

「何で来たっ？」

「董に跳ばしてもらって」

「そうじゃなくて、どういうつもりで出てきたんだ？ 指示は出してないはずだぞっ」
「アタシだって聞いてないよ。だから直接聞きに来たら、あの黒い奴等にやられそうになつてたから助けてやつたんじゃん。少しは感謝してよね」

「それは、まあ……助かった。ありがとう……」

どこか強気な桜に調子を乱されながら、光秋はとりあえず頭を下げる。

「……まあ、それはいい。とにかく本隊に戻れ。そこで待機してろ」

「嫌だっ」

「！」

挑戦的な目で指示を一蹴する桜に、いつDDシリーズたちに見付かるかわからない焦燥感も抱いていた光秋は、思わず頭に血が上る。

「こんな時に我儘を言うなっ。遊びじゃないんだぞ、アイツ等は本当に危険なんだぞっ。冗談抜きで死ぬかもしれないんだ……そもそも、DDシリーズに君の力は——」

「さつきは効いたじゃん。光線防いだじゃんっ」

つい語調を荒くして話す光秋に、その一言を待っていたとばかりに桜は得意気に言い返す。

「それは、そうだが……」

「アタシだって、アイツ等に念力が効かないのは聞いてるよ。だから、さつき防いだ時も、正直上手いくかわかんなかった。でも防げたつ。だったら、アタシと一緒に戦えば勝てるよっ！」

——……………勝てるかどうかはともかく——

ニコイチにとつての大きな弱点たるビーム攻撃と、それを防いでみせた桜の念壁。なまじ実証の場面を観てしまったが為に、光秋は桜の主張に抗い難い誘惑を覚える。

一方、

——でも、流石にDDシリーズ戦、それも複数相手の場に連れて行くのは…………—

こちらは何度か対峙し、その力、手強さ、恐ろしさを肌で感じている分、桜を——子供と一緒に戦わせることに迷いが生じ、それ以上に恐怖を抱く。

「……………」

その相反する、それでいて互いに譲れない二つの気持ちが決断力を鈍らせ、時間がなるとわかっていながら光秋の口は重くなる。

それを見て、桜が顔一杯に不満を浮かべて言うてくる。

「何グズグズしてんのさっ！ 答えなんて一択しかないだろう。だいたい、さつきアタシのことを『我儘』って言ったけど、そもそもこの出動そのものがあんたの我儘じゃん。来る途中に自分でそう言ったじゃんっ。アタシは自分の意志でそれに付き合ってたんだよ。」

だったら、最後まで『我儘』通せよっ!!」

「……」

怒鳴られて、光秋は現場に向かう途中に少女3人に語ったことを——無理を通してでも出ようという気になった春菜の安否を思い出す。

「そうだったな……………」

小さな声で呟きながら、光秋の胸の内に混沌と渦巻いていた気持ちが一つにまとまっていくのを感じる。

桜をDDシリーズ戦に巻き込むことへの迷いや恐怖、あるいは罪悪感といったものが完全になくなったわけではない。しかし、そうしてでも叶えたいことが急速に像を結んでいく、それを叶えたいという欲求は、確実に迷いを隅に追いやっていった。

——DDシリーズをこのままにすれば、それは春菜さんの危機に……………更には合衆国民の危機になる。それを防ぎ、原因を除くのが僕の役割であり、『やりたいこと』ならば、確かに選択肢は一つだ……………「わかった。柏崎さんの協力を頼む」

なけなしの迷いが舌の動きを鈍らせようとするものの、「やりたい」という想いが短いながらも明確な一言を紡がせる。

「そう……なくっちゃっ!」

それを聞くや桜は上機嫌な笑みを浮かべ、一方で光秋は一瞬前以上に険しい目で桜を

見据える。

「ただ、これだけはしっかりと守ってくれ。必ず僕の指示に従うって」

「わかつてるって。あんたを困らせるようなことはしないよ」

「じゃあ、一つ指示を出す……………もし、僕がD Dシリーズにやれた場合、柏崎さんは全速力で逃げろ」

「はっ?」

思わぬ指示に桜は目を丸くするが、光秋は構わず続ける。

「何なら柿崎さんに頼んでレポートするもよし、とにかく本隊まで逃げろ。そして3人揃って近くの大人に……………否、藤岡主任に指示を仰げ。わかったな?」

有無を言わせぬ語調で言い切った直後、背にしているビルの向こうから強烈な悪寒が近付いて来るのを感じ、光秋は桜の返答を待たずに次の指示を出す。

「さて、行くぞ。外に出て、どっか適当なところに掴まって」

「ちよつ、押すなよっ」

ハッチを開けるや背中を押して桜を急かし、ニコイチの額の角に跨つたのを見ると、ハッチを閉めながら通信越しに続ける。

「念壁だが、ニコイチ正面全体に可能な限り満遍なく張って。あと、守りをあてにして荒い動きをするかもしれないから、落とされないようにしっかりと掴まってな」

(無茶言い過ぎ……)

「今更言いなさんな。頼りにしてるぞ、桜さんっ」

できる限りリラックスした声で最後の一言を付け加えると、光秋はニコイチを直立させ、キャノン砲の具合を確認すると、角の上の桜を見やりながら告げる。

「それじゃあ……行くぞっ!」

言うや地面を蹴ってNクラフトを噴かし、ビルを越えると同時に背後を振り返ると、こちらに向かってくるツアーングとナイガーを捉える。

向こうもこちらの姿を捉えるや早速ビーム砲を撃ってくるが、ニコイチの正面全体に張られた桜の念壁が確実にそれらを防いでくれる。

—守りは順調か……ならば!—

自らの直前で霧散する光弾に手応えを感じるや、光秋はキャノン砲を両手でしっかりと構え、ひと足先を行くツアーングに狙いを定めて急接近する。

当然応戦の射撃が激しくなるが、桜は若干表情を強張らせたくらいで耐えてくれる。

「このまま突っ込む!もう少し頼む!」

(アタシに構わないで!行けえっ!!)

通信機から響いた桜の叫びを追い風にして一気に距離を詰めると、光秋はツアーングにぶつかる寸前に若干高度を下げながら地面を背にし、至近距離から腹部の赤い扉に榴

弾を撃ち込んで足元を歩き過ぎていく。

（無茶な飛び方……）

「言つたろう。荒い動きをするつて」

2機から充分に距離をとった辺りで滞空するや渋い顔で言ってくる桜に返しつつ、光秋はこちらを振り向くツアーニングの無傷な腹部を見据える。

―矢張りこれでも無理、か……それなら―

思うや、通信を董に繋ぐ。

「柿崎さん、レールガン頼む」

（はいっ）

返事の直後、ニコイチの少し上に銃身の長い拳銃とでもいう様な形の試作レールガンが現れ、光秋はソレに左手を伸ばす。

が、直後にナイガーが背部に備えた4基の羽根の内上側の2基を射出し、一気に距離を詰めた羽根の先からそれぞれビームが放たれる。

「ヤバッ!!」

それを見て光秋は反射的に手を引っ込め、掴み損ねたレールガンが落ちていく光景に慌てて後を追おうとする。

が、それより一瞬早く桜がニコイチから離れ、落下以上の速さでレールガンに追い付

いて念力で捉えたソレを投げて寄こしてくる。

（光秋ッ！）

「おうっ！」

投げると同時に通信機から響いた声に応じると、光秋は今度こそ左手にレールガンをしつかりと掴み、すぐに内蔵された燃料電池の起動スイッチを押す。

刹那、羽根の1基が桜目掛けて突撃してくるのを見る。

「念を張れ！自分の周りになるべく濃く！」

叫びながら光秋はキャノン砲を放ち、爆発に煽られた羽根の軌道が僅かに逸れる。近くにはいた桜も爆発に巻き込まれるものの、そこらは指示通り念壁を張って迫りくる爆風や高熱、細かな破片から自分を守っていた。

そこに光秋はニコイチを急接近させ、それに気付いた桜がすれ違いざまにニコイチの角に再び跨ったのを確認すると、DDシリーズ2機と羽根2基に注意を払いながら問う。

「すまない。大丈夫か？」

（何とかね。言われた通り念壁張ったし。でも、やっぱ爆発をすぐ近くで見るのは心臓に悪い……）

「重ねてすまない。怪我は？」

（そつちは全然。アタシならあれくらい完全に防げるから）

「ならいいが……なら、引き続き盾役頼む」

（了解っ！）

自分で告げた指示と、それに快活に答えた桜の声に、光秋の胸中に思い出した様に小さな罪悪感が湧く。

——……否、それに浸るのは後——だっ！——

ビームを撃ちながら突撃してくる羽根を身を捻ってかわしながらその気持ちを隅に押しやると、光秋はツアーングの後ろに控えるナイガーを注視する。

——やつぱりこの羽根、厄介だな。ビームもそうだが、突撃じゃ念壁は効かないし、死角から迫られるのも。なら、本体を先に潰すしかっ——

思うやナイガーに狙いを定め、正面からのビームを桜に防いでもらいながら距離を詰める。

そんな中、左右から鋭い悪寒を感じる。

「！」

咄嗟にそれから逃れる様に上昇すると、足元を羽根から放たれたビームが交差して行き過ぎていく。

——つくづく厄介だな……——「柏崎さん、正面のビームはいい。羽根の方を警戒して」

（でもそれじゃ——）

「見えてる分はかわすきつ」

言うや光秋は弧を描く様に降下してナイガーへの接近を再開し、正面から迫るツア—ングとナイガーのビーム砲を上下左右に動いてやり過ごしていく。

死角から飛んでくる羽根のビームは桜がニコイチの周囲に張った念壁に阻まれ、背部や側面に霧散したビームが煌く。

そうして瞬く間に2機の許に接近すると、光秋はツア—ングの右脇腹に右蹴りを入れて距離を離し、その勢いのままにナイガーの懷に入ると、腹部の扉にレールガンの砲口を突き付ける。

「これでっ！」

言いながら引き金を3回引き、電磁加速された弾丸3発が立て続けに至近距離からナイガーの腹部を叩く。

しかし、

——やっぱり、ダメか……

着弾の衝撃でナイガー本体を多少揺することはできたものの、肝心の腹部には目立つた傷はなく、心のどこかに抱いていた悪い予想が的中したことに齒軋りする。

その間にも、ナイガーは空いている左手を左肩から生えている棒に伸ばす。

——いかんっ！——

ソレがビームの刀身を発生させる柄だと思い出すや、光秋は慌てて後退する。

が、10メートルと進まない内に背後から強い悪寒を感じ、先程蹴り飛ばしたツァーングが左腕の装甲の先から3枚の刃を^{やいば}伸ばして迫ってくるのに気付く。

——こっちもっ！——

その刃もビーム同様にニコイチの装甲を傷付けられるものだと思い出し、前と後ろからの挟み撃ちに、光秋は咄嗟にツァーングにキャノン砲を撃って爆発で動きを鈍らせた。

もつとも、その一瞬間の間にナイガーは柄を掴み、抜き放たれた先端から伸びた光の刀身がニコイチに振り下ろされる。

「！」

反射的に左腕を前に出して本体を庇うと、光秋は数瞬後に迫りくる腕を焼かれる痛み^にに身構える。

が、直後に地上からナイガーの右脇腹に徹甲弾が撃ち込まれ、破損こそしなかったものの斬り掛かろうとしていた体勢が崩れる。

「！」

それを見るや光秋は腹部に蹴りを入れ、駄目押しとばかりに最後の榴弾も撃ち込んで

距離を空けると、後ろから再度迫ってきたツアーングにも振り返りざまの回し蹴りを入れてこの場を離脱すると、低空飛行で徹甲弾が飛んできた辺りに移動し、眼下のビルの陰にキャノン砲を持ったゴーレム——デ・パルマ機を確認する。

「少佐っ！」

（ようっ。危機一髪だったな。流石の『デタラメ』も、同じ『デタラメ』相手じゃ分が悪いか？）

「ええ、まあ……」

自身痛感していることを通信越しに言われて、光秋は苦い顔を浮かべる。

「とっ、そんな場合でなく……」

気を取り直しながらデ・パルマ機の許に着地して同じビルに身を潜めると、弾がなくなっただけを思い出して董に通信を繋ぐ。

「董さん、弾の補給頼む」

（また榴弾ですか？）

「ああ」

（わかりましたっ……ただ……）

「？.どうかしたか？」

自信のなさそうな董の声に、光秋はDDシリーズ2機への焦燥感を抱きながらも、努

めて落ち着いて問う。

（光秋さ——加藤さんが今いる辺り……と言っても、私もニコイチの位置はだいたいしかわかんないんですけど……そこ、Eジャマーの効いてるとこみたいで……）

「ああ……」

董の言いたいことを察して、光秋も表情を曇らせる。

「跳ばすのは難しいか？」

（頑張ればできなくも……ただ、やっぱり難しいというか……）

「と言つてもなあ……」

董に応じつつ、光秋はビルの陰からDDシリーズ2機の様子を窺う。

が、ここから見える範囲で2機の姿を確認することはできなかった。

「……少佐、この辺りのEジャマーを切ることでできますか？」

（何だ？）

「テレポートで弾の補給をしたくて」

（難しいだろうな。いくらも離れていない場所が激戦区の一部だ。超能力者相手のところを迂闊には切れん。といっても、羽根付きがちよっかい出した所為でNP、ZC共に退却ムードだけだな。だから俺もお前の援護に來れたわけなんだが……）

「……ありがとうございます」

困った様子で状況説明するデ・パルマに、光秋は一応礼で応じる。

（切れないとなれば、Eジャマーの範囲外に移動するかだが……）

「さつきまでは高い所にいましたからね。だから範囲外つてことで問題なく跳ばしても
らえたんだろうけど……途中で確実に2機に見付かりますね」

言わずもがなとわかっていながら言ったデ・パルマに、光秋は通信の向こうの苦い顔を想像しながら返す。

（それなら、アタシが範囲外まで行つて取つてこようか？）

「いや、柏崎さんが動いても結局見付かるだろうな。それ以上に、DDシリーズの近くを
一人生身で飛ぶのは危険だ」

角の上からニコイチの頭部を見下ろす桜に応じると、光秋はふと気付く。

「……そういえば、関大尉は？」

（あいつは激戦区の方だ。というか、あいつが残った敵の相手を引き受けてくれたから
俺が来れたんだがな……）

「そうですか……」——少佐と大尉のコンビで援護してもらえれば、まだ何とかなると思っ
ただけだなあ……………

デ・パルマの返答に、甘い見通しを崩された光秋は胸中に落胆の声を溢す。

刹那、

「!?」

そんな感傷を押し流す様に鋭い悪寒が正面から迫り、直後に向かいの曲がり角から現れたナイガーの羽根の1基がこちらに迫ってくるのを見る。

そして自分と羽根との間には、デ・パルマ機が接近に気付くことなく佇んでいる。

「少佐っ!!」

一瞬後に光秋はデ・パルマ機を右に押しやりながら羽根の射線から逃れるものの、刃の様に鋭い端部が背中を掠っていく。

「っ！柏崎さん、念壁！」

背中の中心部——ニコイチでいえばNクラフトの辺り——に切り傷の様な痛みを覚えつつも指示を飛ばすと、上昇して上から迫る羽根に向き合う。

ある程度まで上昇すると反転してビームを撃ってくる羽根に、光秋も桜の念壁に守られながら接近する。

「左に念を集中して。加速する！」

(了解っ！)

桜の返事を聞くや、光秋は縦横に動きつつ左側を守られながら羽根に迫り、Nクラフトと同様の機構を備えた側面に左蹴りを入れる。

渾身の一撃が効いたのか、撃ち過ぎて消耗したのか、蹴り飛ばされた羽根は体勢を立

て直すでもなくゆらゆらと頼りなく浮遊する。

—もう少し粘れば、コレだけでも落とせる——活動停止に追い込めるか?—
が、そんなけなしの希望を押し潰す様に、左右と下、そして特に上空と後ろから、強烈な悪寒を感じ取る。

「!」

反射的に羽根が力なく漂うだけの前に避けると、一瞬後にニコイチがいた辺りを五条のビームが交錯し、後方に周囲に展開していた羽根を背中に回収するナイガーを、上空にビーム砲の砲口でこちらを追うツァーングを認める。

—結局見付かったかつ—「念壁、周囲に張って。正面からの何とかなする」

(了解つ)

補給もままならない中で再び対峙してしまったことに奥歯を噛みながら、光秋はナイガーの羽根を警戒した指示を桜に出し、威嚇にもならないであろうことを承知でレールガン砲口をツァーングに向けてビーム砲から逃れようとする。

その時、関の緊迫した声が通信に響く。

(少佐! 加藤君も聞こえるか? 撤退したNPの一部がそっちに向かった。消耗はしていると思うが、規模自体はかなり大きい。注意をつ!)

「!」

（こんな時にっ！）

報告に唾然とする光秋の気持ちを代弁する様に、桜は四方八方から迫るナイガーの羽根のビームを防ぎながら忌々しげに叫ぶ。

光秋もニコイチを不規則に振りながらツァーングとナイガーからのビームをギリギリのところであわし続け、気付けばEジャマーの影響外の高度まで上がっていた。

「こうなりや今更か……柏崎さん、念壁をニコイチの周囲に。あとレールガンをちよつと持ってっ」

言うや桜の返事も待たずにレールガンを左手から離し、慌てた桜がソレを念力で受け止めたのを意識の端に見ながら董に通信する。

「柿崎さん、Eジャマーから出た。弾をつ」

（はいっ！）

言いながら外した空の弾倉をツァーングに投げ付け、直後に現れた弾倉を差し込んだ直後、

「!?」

未だビームを撃ち続けるツァーングとナイガーのさらに後ろから3つ目の強烈な悪寒を感じ、光秋の意思を拾ったモニターが2機の向こうの光景を映し出す。

拡大映像の中に映し出されたのは、先程関が報告したものと思しきNPのメガボディ

や戦車などの一団と、それらを追う様に迫る2機目のナイガーだった。

「いよいよ3対1……? 勘弁してくれよ……………」

非情な現実を前に、怒りや憤りよりも呆れの声が漏れる。

その間にもナイガーの援護射撃を受けたツアーンクが刃を伸ばしながら迫り、光秋は桜に預けていたレールガンを受け取りながら変則的な羽根の攻撃を回避しつつ詰められそうな距離をどうにか一定に保とうとする。

そんな時、こちらに迫るNPの一団——というよりもそれを追う2機目のナイガーに迫ろうとするデ・パルマ機が目に入る。

「! 少佐、何を!?!」

(もう1機の羽根付きの足を止める。ソイツ等は任せたぞつ)

「無茶ですよゴーレムで!」

(無茶も何も、合衆国製のメガボディが最終的に対峙すんのはDDシリーズなんだ。俺はただ自分の本分を果たすまでだよ。そもそもたかが足止めだ。頃合いを見て退散するさつ!)

最後の方は笑い声で告げると、デ・パルマ機はキャノン砲を構えてナイガーへ向かっていく。

—それはそうでしょうけど……—

心の中で応じつつツアーングの胸部に榴弾を当てて体勢を崩し、突っ込んできた羽根を蹴り飛ばしてこの場を離脱すると、光秋は迫りつつあるナイガーを拡大映像越しに確認する。

放たれた2基の羽根は、あるいはビームを撃ってフラガラツハの腕を溶解させ、あるいは羽根そのものを突撃させて90式戦車の砲塔上面を切り裂き、一定時間飛行して本体に戻ると別の2基がまた飛んでいく。

NPの方もフラガラツハの手持ちのマシンガンや手首の機銃、戦車砲やロケット弾などを撃って反撃するものの、空中を自在に動き回るナイガーにはろくに当たらず、当たっても多少揺さぶられる程度で損傷を生じさせることができないでいる。

「……」

そんな理不尽なまでの差を見せ付ける相手の許に向かいつつあるデ・パルマ機を改めて見やり、逡巡したのも一瞬、光秋は桜に指示を出す。

「柏崎さん、少佐の援護に行け」

（はっ？ バカ言うなよ！ アタシが抜けたら、誰がビーム防ぐのさっ！）

桜の怒りも尤もなことで、現に回避運動を行っている今もツアーングとナイガーから執拗なビーム攻撃が加わっており、それらを桜が念壁で防いでくれていることで保たせている状況だ。

「そうだが、ゴーレム1機でDDシリーズと戦わせるわけにもいかん……いかに少佐の腕が立っても、アレは別次元だ」

（今嫌って程思い知らされてるけどさっ！）

それを解っている上で羽根の突撃をかわしながら言う光秋に、桜は背中から飛んできたビームを防ぎながら苦い顔を浮かべる。

「とにかく行けっ。こっちは何とかする！」

（ああもう！わかったよ！行けばいいんだろっ！）

急かす光秋にヤケクソに応じると、桜はニコイチの角から飛び立っていく。

（言ったからには何とかしろよな！アタシがいなくなってやられたなんて承知しないぞっ！）

「そのつもりだっ！」

通信越しに桜に応じると、光秋は跳ねる様に急上昇しつつ近くの羽根にキャノン砲を撃って2機の注意を引き付ける。

直後、ツアーンと2基の羽根の援護を受けたナイガーが左手に持ったビーム剣で斬り掛かってくる。

「！……！本くらいくれないもんかねっ！」

咄嗟に高度を上げて空振りしたナイガーの後頭部に左の踵を叩き込んで距離をとり

ながら、右肩から伸びたもう1本の柄を羨ましそうに見て思わず呟く。

その間にも3方向からビームが迫り、念壁の守りを失った光秋は先程以上に俊敏な回避を行う。

「っ！」

それでも、背後から飛んできた1発が左の脹脛を掠っていく。

と、

（！加藤お前、どういいうつもりだ!?!）

「?」

デ・パルマの困惑した声が通信に響き、見るとデ・パルマ機の肩に辿り着いた桜が念壁によるビームの防御を始めている。

「ああ。少佐の援護に向かわせました。念壁ならビームを防げ——」

（そんなことは訊いてない！すぐに戻せっ！）

（そんな言い方ないだろうオッサン！それよりアタシが防いでやるから早——うわっ
!?!）

「!?!」

焦った様なデ・パルマに目くじらを立てながらもビームを防ぐ桜だが、その寸前を高速で過ぎていく羽根を見て、光秋は回避運動の最中にありながら驚愕する。

（ほれ見ろっ！ゴーレムじゃ00と違ってアレに対処し切れな——！）

言ったそばから反転して背後から迫ってきた羽根を寸前でかわすデ・パルマ機を見て、光秋は反射的な回避を続けながらも心中に愕然とする。

——ビームは念壁で防ぐ、DDシリーズそのものの直接攻撃は避けるなり受けるなりメガボデイで対処する……それはあくまでも、ニコイチだからこそ成立していた連携ってことなのか？僕は、桜さんを危険に晒したっていうのか………!?——

そう思う間にも羽根の1基はデ・パルマ機に執拗な突撃を続け、念壁では防げないこの攻撃にデ・パルマの紙一重の回避で守られている桜の姿に、光秋は血の気が一気に失せていくのを感じる。

そんな時、

「!?」

（白犬うううっ!!）

DDシリーズとも異質な悪寒を頭上に感じ、反射的に後退した直後、目の前をスピーカー越しに叫びながら爪付き——といっても3本爪の腕は既にないのだが——のヘラクレスが上から下へ猛スピードで行き過ぎていく。

「さっきの!?!」

既にこの辺りから撤退したと思っていた光秋は思わぬ、そして間の悪い再会に驚愕

し、同時にイピクレスのそれに交換された右腕に剣が握られていることに気付く。

—まさか、斬り掛かろうとしたのか？自分もビームに巻き込まれるかもしれないって
いうのに……………

未だこちらを射抜かんと八方から迫るビームに冷や汗をかきつつ、そんな中に自分を討つ為に自ら飛び込んだ爪付きの無謀とも蛮勇ともつかない行為に、思わず呆れと感心を五分五分に抱く。

その間にも爪付きは両脚に内蔵された大型推進器を噴かして勢いを殺し、滞空したと思うや急上昇して再び斬り掛かってくる。

「待って！今は人間同士で争ってる場合じゃないっ！コイツ等をなんとかしないと——」

（知るかあつ！腕は高けえって言っただろぅがあつ!!）

外部スピーカーに乗せた呼び掛けも虚しく、間合いを詰めるや振り下ろし、振り上げ、横薙ぎと何度も振るってくる爪付きの剣を後退してやり過ごしながら、既にDDシリーズ2機で手一杯だった光秋はさらなる負担に苛立ちを抱く。

その時、ニコイチと爪付きの間——というよりも爪付きに向けて地上からマシンガンの一連射が放たれ、爪付きは反射的に脚部推進器を前に突き出して急速後退する。

—マシンガン？関大尉か……………？——

付きまといつていた相手と距離が開けたことにほっとしたのも一瞬、銃撃が来た方向に顔を向けた光秋は、両手保持したマシンガンを空に——というよりも爪付きに——向けているフラガラッハを見付けて意表を突かれる。

直後、フラガラッハのパイロットがスピーカー越しに告げる。

（超能力者とは目先の優先順位の判断もつかんのかっ！）

多分な苛立ちを含んだ怒声を響かせるや、その単眼がこちらを捉え、光秋は反射的に身構える。

が、

（白い犬、貴様と組むのは不本意だが、状況が状況だ。援護くらいはしてやる）

「……………協力してくれるんですかっ？」

これまた予想外の申し出に、思わず目を丸くする。

その間にもフラガラッハは上空に向けてマシンガンを斉射し、傍らに寄つて来た90式戦車も戦車砲を撃つてニコイチへの再接近を試みようとしている爪付きを牽制する。

（この黒い奴等を倒すまではな。周りの見えない“怪物”と違って、我々にはそのくらの判断はできる）

フラガラッハのパイロットの言葉に呼応する様に、後から来たナイガーの方でもデ・バルマを中心とした密な牽制が開始され、状況を見て自己判断したのか、桜がこちらに

戻ってくる。

「……………」

その光景に、未だD Dシリーズへの有効打を与えられていない危機的状況であること
を承知の上で、光秋は胸が熱くなるのを実感する。

共通の敵を前に、逃げ切れぬことを悟った者たちがなし崩しに協力した。光景の根底
にあるものがそんな打算であることも重々承知している。

しかし、

—それでも、これだけの人が僕等に協力してくれたんだ。今はそれで充分じゃないか
！—

自分でも呆れるくらい単純な受け取り方に自然と笑みを浮かべ、光秋は足止めをく
らった爪付きから距離をとると再びツアーングとナイガーに対峙する。

—さて、また“お膳立て”してもらった以上、しつかりやらんとなっ！—

胸の内にそう気合いを入れ直した直後、通信機から桜の声が響く。

（お待たせ！今合流する——）

「！後ろっ！」

その最中、ナイガーの羽根の1基が桜の背後から迫り、光秋の叫びで気付くや反射的
に手をかざして念壁を張る。

勿論本人もそれで防げないことは理解しており、瞬く間に距離を詰めた羽根がその鋭利な先端で無防備な体を引き裂こうと迫る。

「桜さんがやられる？ 僕がデ・パルマ少佐の方へ行けつて——ニコイチから離れろつて命令したから？……僕の所為で？」

1秒にも満たない時間にそんな思いが脳裏を駆けつけた刹那、光秋は身の内から湧いた言葉に自ら叫んで応じた。

「そんな……と……させるかあああつ!!」

1カ月少々のぎこちない交流を通じて抱いた楽しさや気まずさ、憤りやこれからへの想い、それらが不可分に混ざり合った叫びは光秋の感覚を押し広げ、ついにはニコイチの節々のカバーを押し上げて露出した骨格から赤い燐光を噴き上げる。

燐光を追い風にしたニコイチは羽根よりも数瞬早く桜の許に駆け寄り、左腕を前に出してその身を庇う。

光秋自身も羽根の激突、その際の激痛に備えて左前腕に力を込め、それを引き写す様にニコイチの同じ箇所にも燐光が集中すると、密集した光がニコイチの前腕程の直径を誇る円を形成し、腕を、ひいてはその後ろの桜を守る光の盾を形作る。

直後に勢いのついた羽根がその盾に突撃し、コンクリート壁に当たった小石の如く明後日の方向へ弾き飛ばされていく。

(……………光……………秋……………?)

「よかった……無事だなっ」

目と鼻の先で起こった瞬間的な出来事に呆気にとられながら、桜は頭部の角を引き伸ばしたニコイチの顔を見上げ、完全に同期したニコイチの視覚でそれを捉えた光秋は無傷な姿に安堵の声を漏らす。

「すまなかった、考えの浅い指示を——と、それは後だな！」

デ・パルマの指摘以降ずっと胸の内に溜めていた言葉を告げようとした矢先、普段以上に敏感になった感知機能が上空から迫る悪寒を捉え、そこに向けて突き出した左腕、その前に張られた燐光の盾をツァーングのビームが叩き、盾に触れた光弾は念壁の時の様に霧散する。

——やっぱり！行けるぞっ！——

その光景に、ナイガーと初めて交戦した際にビーム剣を同じような——しかし今ほど洗練されていない——方法で防いだことを思い出し、光秋の中によりやく活路を見出した手応えが生まれる。

「桜さん！乗れっ！」

(えっ?ちよっ!?)

言いながら光秋は手首で桜を押しやり、再び角に跨つたのを確認すると、光の盾で迫

りくるビームを防ぎながらツアーングに肉迫する。

「―」

懐に入るや腹部の扉に右蹴りを叩き込み、背後に回り込んだ羽根を悪寒だけを頼りにキャノン砲で撃つ。

命中した榴弾の爆発に煽られて明後日の方へ飛んでいくビームを視界の端に捉えると、バランスを崩しているツアーングを蹴って羽根の側面に接近し、高々と上げた左足、その踵に力が籠っていく様を思い描くと、それに合わせる様に左足、特に踵に燐光が集
中する。

「あさあつ―」

自身思いの丈を表す様に気合いを上げ、一杯に上げた踵を振り下ろすと、光るハンマーと化した一撃は羽根を煎餅せんべいの様に真つ二つに叩き割る。

「まず羽根―基つ―」

（凄げえ……………）

落ちていく羽根の残骸を見て手応えが強まるのを感じながら光秋は叫び、角の上の桜は口を力なく開けて小さく溢す。

直後に背後から迫ってきたツアーングの左手首の刃を右に避け、そのまま振り返る勢いで右脇腹に燐光を纏った左回し蹴りを叩き込むと、ツアーングの装甲に僅かだがヒビ

が入るのを見る。

—行けるっ！このまま押し込んで——！——

やっとなることができた明確な損傷に気を昂らせ、さらに追撃を行おうとした刹那、左右から悪寒を感じた光秋は反射的に両腕を上げ、それぞれに張られた光の盾が羽根からのビームを防ぐ。

が、その数瞬の間にツアーングは体勢を立て直してしまう。

——前と、また左右かつ！——

目の前に再び刃を突き入れようとするツアーングを認める一方、左右に付いた羽根からも再びビームの発射を感じし、3方向からの致命的な攻撃と、3つ全てを防ぎ切るには力が足りないという直感に、光秋はつい迷い、硬直してしまう。

が、

（ビームはアタシがつ！）

「!!」

刹那に響いた桜の声に、咄嗟に両腕を正面で交差させ、腕ごとに集まっていた燐光を一つに集約させてニコイチの上半身に達する程の巨大な盾を形成する。

直後に3方から攻撃が迫り、左右のビームは桜の念壁が掻き消し、正面から来たツアーングの刃は光の大盾に阻まれて止まる。

「っ！」

それでも尚ツアーングは刃を突き入れようと前進を試み、光秋もそれ以上の接近を阻もうと交差させた両腕に更なる力を込める。

それに比例する様に大盾もその輝きを増し、ツアーングの刃が微かに押されていく。そして、

「！」

迫ろうとする刃を押しやる様に光秋は交差させていた両腕を前に押し出し、合わせて前進した大盾がツアーングを突き飛ばすと、バランスを崩して無防備になった腹部、その扉に燐光を纏った右跳び蹴りを入れる。

「あさあつ！」

気合いを伴って放たれた蹴りは腹部を貫き、すぐに脚を引き抜くと同時に、機能を停止したツアーングが糸が切れた様に地上へ落ちていく。

「ようやくー機っ!!」

その光景に僅かな疲労が混ざった歓喜を上げたのも束の間、2機のナイガーがそれぞれの羽根を2基ずつ放ちながら迫ってくる。

が、すぐに内1機——羽根が3基しかない方——は地上からの弾雨に捕まり、先程よりも苛烈化した攻撃への対応に手一杯になってしまう。

—NPの人たちと……！鎮圧に出ていた部隊も合流したのか！—

弾雨に捕まらなかったもう1機のナイガーからのビームを避け、あるいは死角から来る羽根のビームを桜に防いでもらいながら状況を確認した光秋は、もう1機のゴーレムを筆頭とした増援の姿と、ナイガーを確かに抑えてくれている光景に、今まで以上の頼もしさを感じる。

—ならば、僕はコイツに専念するまでだっ！—

現状における自分の役割を明確に自覚するや、縦横に動いてナイガーからのビームをかわしつつ、少しずつ間合いを詰めていく。

相手もそれがわかってか、より変則的な、それでいて密な羽根の射撃を続けるものの、
「桜さんっ！」

（任せろっ!!）

それらは全て桜の念壁に遮られてニコイチに届くことはなく、迂闊に近付けばニコイチの攻撃で撃墜されることを警戒してか突撃もしてこない。

（へへっ、何だろう？さつきから後ろに目が付いてるみたいに、羽根がどつから来るのかわかるよ……）

角の上の桜が頼もしくも少し気味悪そうに呟く間にも、光秋はナイガーとの間合いを縮め、あと一足跳びといった所まで来ると右脚に意識を集中させ、同時にニコイチの右

脚も燐光に覆われていく。

そして、

——今っ——

充分に間合いを詰めた刹那、光秋は輝く右脚を伸ばしてナイガーに突撃をかける。
が、

（俺を忘れてんじやなねえよっ!!）

「っ!？」

直後に左から斬り掛かってきた爪付きに、意識の殆どをナイガー本体と羽根に割いた光秋は完全に不意を突かれ、反射的に右に避けて後退してしまう。

——しまったっ——

同時にナイガーも放っていた羽根を回収して急速に距離を空け、離れていく黒い影に内心舌打ちする。

（悪い、逃し——!）

「少佐っ？」

直後に入ったデ・パルマの通信の不自然な途切れに、光秋は地上を見回し、爪付きと共に撤退したと思っていた別のヘラクレスが、上空からナイガーを牽制している一団に両手に1挺ずつ持ったマシンガンの掃射を加えているのを見る。デ・パルマ機をはじめ

とした一団の一部がそれに巻き込まれ、防御や回避で手一杯になっているようだ。

「！」

それを隙と見たらしいナイガーも羽根による射撃をデ・パルマたちに加え、ビームに炙られていくメガボデイや車両たちに光秋はその許に向かおうとする。

が、

「！またかつ!!」

すぐにさつきまで相手していたナイガーからの射撃に捕まり、さらには爪付きの斬り掛かりも加わって、その場に足止めされてしまう。

先程スピーカー越しに話したフラガラッハがマシンガンによる援護射撃を行うものの、高速で飛び回る2機にはなかなか当たらず、ナイガーが差し向けた羽根の1基に逃げ惑うことになる。

「ええいつ——」

一時は自分たちの側にあつた「流れ」が崩れつつあることに苛立ちながら、光秋は何度目かの接近をかけてきた爪付きの一振りを薄っすら燐光を纏った右腕で受け止め、外部スピーカー越しに怒鳴り声を上げる。

「いい加減にしてくれ！今貴方たちと争つてる場合じゃないんだつ！早く残りのDDシリーズを倒さないと、ここにいる全員死ぬことになるかもしれないんだぞつ!!」

（だから知るかってんだよっ!!）

爪付きの方も負けず劣らずな声で怒鳴り返しながら、ニコイチの右腕にさらに剣を押し付けてくる。

その時、

（南！いい加減にしろっ！）

（!?!）

拡声器を介した怒声が響いたかと思うや、絡み合う2機の間にマシンガンの一連射が放たれ、両者は慌てて後退する。

「アレは……アレもヘラクレス、なのか？」

射撃が来た方向に顔を向けた光秋は、そこに浮かぶまでも見慣れぬ機影に、爪付きの時程ではないが判断に迷う。

ヘラクレスと、その低レベル、もしくは攻撃向きでない超能力者仕様たるイピクレスとの境界が未だ判らないものの、宙に浮いていることからおそらく前者ということなのだろう。が、プレーンな状態では露出している肩や腰の接合部、そして左腕部全体とコクピットを収めた胸部周りに装甲版を増加した防御に重点が置かれた外見は、ヘラクレスとイピクレスの中間といった印象を抱かせてくる。

右前腕部には機銃が、両脛の側面には3連装ミサイルランチャーが1基ずつ装備さ

れ、右手に握ったマシンガンの砲口は未だこちらに向けられている。

―どつちにしろ、ZCの増援ってことだよな？なのに何であんなタイミングで撃ったんだ？―

一歩間違えれば同士討ちになりかねない射撃に疑問を抱いたのも一瞬、新参のヘラクレスはマシンガンの口をやや上に向け、ニコイチに迫っていた羽根を牽制しながらスピーカー越しに呼び掛けてくる。

（援護する。行けっ！）

「？……協力してくれるんですか!？」

一方的に告げられたまま予想外の言葉に、先程の疑問もまだ解消されていない光秋はフラガラッハの時以上に困惑する。

しかしナイガーからの絶え間ない攻撃にゆっくり考える余裕はなく、やむなく四方から来るビームを回避、あるいは桜に防いでもらいながら半分鎧を纏った様なヘラクレスに接近し、互いに背を向けてナイガーからの攻撃を警戒しつつスピーカー越しに問い掛ける。

「申し出はありますが、これだけははつきりさせておきたい。先程の攻撃は何です？危うく同士討ちでしたか」

（手荒い仲裁になってしまったことは素直に詫びる。こうでもしないと、あの聞かん坊

は止まらんのでな)

言いながら、半鎧はんよろいは2機のプレーン・ヘラクレスに剣を没収されて押さえられた爪付きを頭部の単眼で一見する。

さらに周囲を見渡せば、デ・パルマたちを攻撃していたもう1機のヘラクレスも同じくプレーン2機に拘束されており、ナイガーへの牽制にはイピクレスが何機か加わっている。

(その上で、我々は黒い奴等撃退の為に、貴官を援護する)

「……………了解っ」

念を押す様に続けた半鎧に、周囲の状況から光秋は首肯を返し、それっきり目の前のナイガーに意識を集中する。

(黒い奴と戦ってる最中にも仕掛けてきた奴の仲間だよ、いいの?)

「正直、いろいろ引つ掛かるものはあるがな。危ない人たちを取り押さえて、攻撃にも協力してくれた。少なくともこの半鎧の人とそのグループらしき人たちは、今に限っては信じていいだろう」

不安そうに訊いてくる桜に通信を介して胸の内を伝えた直後、光秋は頭上に悪寒を感じ、一瞬後に飛来した羽根のビームが直前に張られた桜の念壁に当たって散る。

——つくづく僕の感じ方に合わせてくれるな、桜さんっ——

先程から自分が感知した危険を的確に防いでくれる桜に改めて舌を巻きながら、光秋は散発的にビームを撃つて不規則に移動し続けているナイガーを目で追い、背後の半鎧を一見する。

—加えて、敵さんたちに仕切り直させてもらったんだから……少しは決めないとなつ

！—

胸中に叫ぶや、微かに動きが鈍ったナイガーへ突進する。

直後に放たれたビームを桜がニコイチの胸部の一点に正確に張った念壁で防いでもらいながら更に距離を詰め、懐に入るやナイガーが肩から抜いたビーム剣を振り下ろすより先に腰に引いた右脚を勢いよく突き出す。

「あさあつー！」

気合いと共に放たれた燐光を纏った右蹴りはナイガーの腹部の扉を貫き、腕一杯に掲げられたビーム剣の刀身が消えると同時に黒い細身は地上へと落ちていく。

放たれていた2基の羽根も親機の後を追う様に力無く地上へ落下し、ついにナイガーただ1機となる。

—よしっ！このまま——!?—

勢いに乗って最後の1機を畳み掛けようと振り返ったその時、光秋は押さえ込んでいた2機のヘラクレスの腕を念力で押し折って抜け出た爪付きが剣を奪い返してこちら

に突っ込んでくるのを目撃する。

（白犬うう!!）

「いい加減にしろお！」

スピーカー越しに絶叫しながら迫る爪付きに逃れられないと直感するや、いよいよ忍耐の限界が近付いていた光秋も腹の底から怒声を発しながらキャノン砲を向け、剣を大きく掲げた右腕目掛けて1発撃つ。

が、放たれた砲弾は腕の前に張られた念壁に防がれ、爆発で爪付きの速度を多少殺いだ程度に終わる。

「ならっ！」

途端に光秋は左手のレールガンを向け、見る見る大きくなってくる爪付き、その右腕に狙いを定めて撃つ。

電磁加速された徹甲弾はニコイチの感知機能と完全同期した光秋の狙いに従って吸い込まれる様に進み、キャノン砲の時同様に念壁に接触する。

刹那、

（何っ!?!）

一瞬の拮抗の後、念壁を貫いた徹甲弾は爪付きの右前腕を砕き、剣を握ったままの右手が細かな破片に混じって落ちていく。

（つの野郎オオオ!!）

「だからいい加減に……」

武器を失つても爪付きは機体正面に念壁を濃厚に張って尚も突撃を続け、それを見た光秋はキャノン砲を上にと放ると、空いた右手を握り締め、燐光が集中する拳を腰に引く。そして、

「しろって言うてんだろがアアア!!」

爪付きが自分の間合いに入った瞬間、高度を下げつつ身を屈めた光秋は突撃をかわし、先程以上の怒声を叫びながら輝く右拳を爪付きの腰部に叩き込む。

念壁を無視した拳は止まることなく本体に達してその身を粉碎し、腰から下——主推力たる2基の大型推進器を失った爪付きが背後へと不安定な軌道を描きながら過ぎていく。

（ほい）

「ありがとう」

その様子を横目で追いながら、光秋は右手に集まっていた燐光を散らして、桜が念力で持ってくれていたキャノン砲を受け取り、再び爪付きが攻めてくる気配がないと見や改めて最後のナイガーの許へ向かうとする。

が、ナイガーはすでに本体と4基の羽根、合わせて5基のNクラフトを噴かして戦域

を離れ、そのまま進行方向に開いた赤い穴へと撤退した。

―逃げた……が、とりあえず終わったか……―

取り逃がしてしまったことを悔いたのも数秒、脅威が去ったことに光秋はひとまず安堵し、それを表す様にニコイチの輝きも治まり、節々のカバーも閉じていく。

その時、

「！」

ニコイチが通常の状態に戻るのを待っていたかの様なタイミングで地上から悪寒が迫り、反射的に前に出した左腕に榴弾が命中して視界が黒煙に覆われる。

「桜さん、無事か？」

（アタシは大丈夫だけど……？）

困惑した桜の返事を聞きながら腕で黒煙を払うと、援護を申し出てくれたフラガラッハが砲塔をこちらに合わせた90式を伴って本土側へ駆けて行くのが目に入り、直後にスピーカー越しの声が届く。

（赤坂での借りは次に返す）

「赤坂つて……！あの人、迎賓館襲撃に参加してた人か！」―そういえば、あの声……―捨て台詞に相手のことを察すると同時に、迎賓館で取っ組み合いを演じたフラガラッハのパイロットと声色が似ていることに気付いた光秋は、ペダルを踏んで追撃を試み

る。

が、

「つ!!」

進もうとした矢先に強烈な頭痛が襲い、動きが鈍ったところに再び戦車砲を撃たれて慌てて防いでいる間に、フラガラッハと90式は遠くに逃げてしまう。

「……………」

周りを見渡せば何処も似たようなもので、ZC側も半鎧を筆頭に半壊した爪付きやその相方を引き摺る様に海岸側へ移動し、三々五々にまとまってレポートで跳んでしま

う。

「こつちも逃げられた……………か……………」

未だ鈍痛が残る頭に手を添えながら呟くと、光秋はひとまず鎮圧部隊の許へ降下する。

と、ニコイチのハッチの上に下りた桜が、頭部越しにこちらを窺いながら声を掛ける。

（ねえ、ちよつと開けて）

「ああ」

応じると、光秋は開閉ボタンを押して桜をコクピットに招く。

「……………」

その一連の動作の間にも、光秋は先程感じた頭痛に顔を歪め、少しでも和らげようと頭を撫でる。

―秋田からだいたい3カ月ぶりか……………最初の頃に比べたらずっとマシになってるんだろが、やつぱり赤くなると後がキツイな……………―

そう思っている間に桜が床に足を着けるのを見ると、光秋はハッチを閉める。
と、傍らに降り立った桜は不安そうな顔をこちらに向けてくる。

「どうかしたか？」

「こっちの台詞だったの。光るのやめてから具合悪そうだけど、大丈夫なの？」

「……………まあ、なんとかな。これくらいなら、少し休めば回復すると思うけど……………」
―果たして、その時間はあるのか……………?―

思わず出かかった不安をどうにか呑み込むと、光秋は未だ警戒厳となすといった様子の鎮圧部隊、その隅の方に並んで佇むデ・パルマ機と関機のそばに降り立つ。

(ようつ、御犬様! やったな)

(DDシリーズを一度に2機撃墜、とんだ戦果だつ)

「いえ、みなさんの協力のお陰です。みなさんが他の機を足止めしたり、援護したりしてくれたから得られた結果ですよ。それこそ僕一人で対処してたら、どうなってたか

……………」

幾度も自分の脇を掠っていくビームを思い出し、それによつて装甲の所々に刻まれた痕に鳥肌を立てながら、光秋は傍らの桜を見る。

「特に桜さんには大感謝だな。君が念壁でビームから守ってくれなければ、今頃蒸発してたかも」

「冗談の顔で言うことかよ……………」

意識してやってみたことが思いの外上手くいったらしい。怪訝な顔をする桜に、光秋はあながち冗談でもない恐怖を誤魔化した自分に内心拍手を送る。

「お二人も無事……………」とはいかないでしょうが、とにかくなによりです」

掛けるべき言葉を迷いながら、光秋はデ・パルマと関のゴーレムを改めて見回す。

ZCやNPとの交戦で負った凹みや欠けにはじまり、ナイガーの羽根が掠ったできた深めの切り傷、至近距離を通過したビームの熱に炙られてできた爛れ、そうした損傷が全身隈なく付いた両機に痛々しさを覚える一方、それでも基本的な稼働には問題がない域に抑えてどちらも欠けることなくここに立っている事実、改めて2人の技量を思い知る。

（ま、お陰様でな。もつとも、これ以上は流石にキツイからな。事後処理、例えば逃げ遅れた住人やら残敵やらの搜索は他のとこに任せて、一度本土側まで戻ろうかって話して

たところだ)

「確かに、そうした方がいいかもしれませんが………それ、僕も一緒に行かせてください」

ボロボロのゴーレムを再度見てデ・パルマの言葉に相槌を打ちながら、自分の状態を顧みた光秋はそれについて行くことにする。

—正直、さつきからの頭痛が敵わん。次戦闘にでもなつたら、どんな小規模でもちやんと対処できるか自信ないからな………いや、でも……—

そこまで考えた時、あることが脳裏に浮かんで判断に迷いが生じる。

「あ、でも、NP、ZC両方撤退したなら、残りは逃げ遅れた残敵ですよね。それなら最後までいた方が——」

(いいや、僕たちと一緒に行くこう)

「……」

関の思った以上に強い語調の反論に、光秋はつい面喰う。

(残敵と言つて侮つてはいけない。寧ろ追い詰められている分、何をするか予想がつかないから怖い。そんなのに疲労状態で当たつたら………)

「………窮鼠猫を噛む、ですか………わかりました」

戒める様な関の言葉に、光秋は袖下の両腕を微かに粟立てながら素直に頷く。

「その前に、連絡をとりたい相手がいるので少し待ってください」

（おう。俺もその間に本隊の方に一報入れとく）

（じゃあ、僕はここの指揮官に一言）

デ・パルマと関の返答を聞くと、光秋は左耳の通信機を藤岡主任に繋ぐ。

「藤岡主任、加藤です」

（何だ？）

「NPとZC、あと一応乱入してきたDDシリーズの撃退が終わりました。ただ、こちらの消耗も激しいので、一度本土まで後退します」

（わかった。ならそこで落ち合おう）

「了解」

応じると、光秋は桜を見る。

「というわけで、一度退くぞ」

「りょーかい。ならアタシは角んとこいるよ。途中で何かと出くわした時、その方がすぐに動けるし」

「悪いな。もうひと頑張り頼む。EJCの電源は？」

「まだ大丈夫だよ」

桜の返答を聞くと、光秋はハッチを開けて桜を額の角へ向かわせる。

（よし、こっちはいいぞ）

（こちらも。ケガ人の護衛も頼むとのことす）

デ・パルマたちの方もちょうど終わつたらしく、それぞれ武器を構え直したゴーレム2機と、角に桜を乗せたニコイチ、負傷者を乗せた数台の車両が、各々身を寄せながら本土側へと歩き出す。

——……………そういえば、春菜さんは無事なんだろうか？落ち着いたら、誰かに訊いてみるか……………

結局状況の只中にいてはわからなかった懸案に、光秋はニコイチの歩を進ませながら小さく決意する。

97 撤収

移動開始から十数分後。結局残敵に遭遇することも他のトラブルに遭うこともなく本土に待機していた部隊と合流した光秋は、デ・パルマ少佐と関大尉のゴーレム2機と並んで、負傷者を乗せた車両たちが治療所の設置された奥へ走っていくのを見送ると、デ・パルマ機に通信を繋ぐ。

「着きましたけど、このまま解散ということですか？」

（いや、俺らはゴーレムを指定された場所に運ばないと。お前だって、両手のソレ装備品置き場に持つてかなきゃだろう？）

「それもそうでした」

デ・パルマの指摘に両手に持ったままのキャノン砲とレールガンを見やりながら応じると、光秋は2人の後につきながら一人頭を搔く。

— いかな。春菜さんのこと訊こうつてことに気が行き過ぎて、他のことが疎かになつて……—

そのように自己反省をしている間にも、ふと外音スピーカーに耳を傾けると、周りの人々がこちらを見ながら言うてくる音が聞こえてくる。

（凄げえ、白い犬だ）

（生で観たの初めてだなっ）

（でもあっちこっちボロボロだね）

（それだけ激しい戦いだっただってことだろう）

（というか、何で角んとこに子供乗せてんだ？）

（ちよつと待って。あれ入間隊の子供じゃない？　そういえば、白い犬がその新しい主任になったって）

（あの面倒な特エスたちの？　そりやまた……）

——……周りの反応はこんなもんか——

主に自身への、加えて若干桜への羨望と批判が混ざった声を聞きながら、光秋は角の上の桜に意識を向ける。

「桜さん、疲れてないか？」

（ホント言うとか、ちよつとだけね。でももう終わりだろう？）

「これ以上問題が起こらなければな。どの道これだけ人が来た以上、君が出ることもないだろう。もう少しだけ頑張って、その後ゆっくり休んで」

（んじや、最後のひと頑張りだねっ）

言葉通り若干の疲れを見せた、しかし先程聞こえてきた声には特に反応した様子のない

い桜の返事に内心安心しつつ、光秋はデ・パルマたちに続く。

少して即席の装備品置き場となっている駐車場に着くと、モニター越しにこちらに駆け寄ってくる董と、その後続く北大路と福山を捉える。

（光秋さん！）

「董さん。迎えにきてくれたか」

駆け寄りながら手を振って叫ぶ董にスピーカー越しに応じると、光秋は機外に出ながらニコイチに膝を着かせ、その姿を直に見据える。

「装備のテレポートありがとな。お陰でなんとかやれたよ」

「いいえ！お役に立てて私も嬉しいですよっ！」

戦闘中のことを振り返りながら告げた光秋の礼に、董は遠くからでも判るくらい顔一杯に笑みを浮かべて返す。

「北大路さんは体調大丈夫か？最後見た時顔色悪かったけど」

テレポートで回収させる直前までのことを思い出しつつ、視線を董の後ろに佇む北大路に合わせながら問い掛ける。

「……………」

「……………北大路さん…………？」

しかしいくら待っても返事はなく、俯いたまま無反応を返す北大路に、光秋は聞こえ

なかつたかと再度を声を掛けようとする。

直前、おもむろに顔を上げた北大路が、遠目にも判る程の怒りを浮かべて叫ぶ。

「とつくによくなくてますよっ！それよりいいんですか？片付けも途中のまま駄弁つて
!？」

「お、おお……………!？」

近くなら唾を被つていそうな程の怒声に光秋が慄いていると、少女2人の後ろに佇んでいた福山がニコイチに歩み寄ってくる。

「彼女の言う通りだ。ひとまずキャノン砲とレールガンをそこに置いてくれ。レールガンは電源を切るのを忘れずにな」

「……………わかりました」

未だ北大路の怒りに戸惑いながらも、福山の言うことももつとも感じた光秋は、指さされた辺りに敷かれた2枚の鉄板の許にニコイチを歩ませる。

—にしても、何で北大路さん突然怒ったんだ？いや、確かに僕、彼女にはなにかと嫌われてるようだが……………それでも、まさかあんな激しいところを見せるなんて……………鉄板の上にキャノン砲を置き、その横に外した弾倉も置きながら、初めて見る北大路の一面に面喰っていると、不意に怒鳴った時の北大路の声色が思い起こされる。

—いや、待てよ。あの時の声は『単なる怒り』というより……………苛立ち……………憤り

……………？――

もともと耳には自信がないために確信は持てないものの、記憶の中の声にどうしてもそんな印象を抱いてしまう。

と、最早跨るというより完全に角に寄り掛かった桜が不満気に呟いてくる。

「なんだよ菊の奴。珍しく大きな声出したと思ったら、勝手に怒り出してさ……」

「やつぱり、北大路さんがあんなふうになるの珍しいのか？」

電源を切って弾倉を抜いたレールガンを隣の鉄板に置きながら、光秋は桜を見上げて問う。

「まあね……………珍しいっていうか、アタシも5歳くらいからの付き合いだけど、あんなふうにな怒った菊って初めて見たかも……………」

「怒ったというか……………憤ってた……………」

戸惑う桜に先程思ったことを呟くと、光秋は董たちの許へ戻る。

「キャノン砲とレールガン置いてきました」

「了解。そうだと二曹、今回もDDシリーズと交戦したそうだな」

「はい……………」

報告の返事に返ってきた福山の質問に、光秋は首を傾げながら答える。

「詳細が知りたい。本部に帰ったら僕の所に報告書を提出してくれ。新装備の使い勝手

も合わせてな」

「了解です」

説明を聞いて納得しながら応じると、福山は踵を返してゴーレム2機が置かれた方へ行ってしまう。

「……………とりあえず降りよう。桜さん」

「アタシは自分で降りられるよ」

言われるだけ言われて取り残された気まずさを感じたのも束の間、光秋はニコイチの手を角の近くに差し出すが、桜は念力で浮かんでそのまま地面に降下してしまう。

「そうだったな……………」

その光景に相乗りした時の習慣が抜けないことに自嘲しながら、光秋もリフトを伝って地上に降りる。

情報収集で一旦降りて以来十数分ぶりに自分自身の足で地面に立つと、董が駆け寄ってくる。

「光秋さん!」

「……………留守番してた犬みたいだな」

喜色と不安が半々な顔で駆けて来る董の姿にそう思いながら頬を微かに緩めると、光秋は特に意識することなく手をその頭に持つて行く。

「遅くなったが、出迎えご苦労。そして改めて、協力ありがとうございます」

「いい、いいえ。私は光秋さんの指示に従っただけで……」

頭を撫でながら改めて労いを告げる光秋に、董は顔を赤くしながら少しずつ小さくなる声で応じる。

「……………」

以前は嫌がられてすぐにやめたものの、今回はそういった様子を見せることがなかったので、光秋はしばし撫で心地のいい董の頭を堪能する。

と、隣にやって来た桜が仏頂面を浮かべているのに気付く。

「なんだ？桜さんもやってほしいか？」

「べ、別に。子供じゃありまいし——！」

すぐにそっぽを向いて言ってくる桜に構わず、光秋はもう一方の手を伸ばしてその頭を撫でる。

「ちよっ！おま……」

「桜さんも、改めてありがとな」

「……………」

こちらにも改めて礼を告げると、桜は仏頂面を浮かべ続けながらも大人しく撫でられる。

両隣の少女2人の頭を撫で、自身その感触に掌を楽しませる一方、光秋は自分たちから離れた所に俯いて佇む北大路を見る。

― やっぱり、まだ調子悪いのか……あるいは精神的な問題かな？ 実際いろいろあったしな……―

確保したNPのメンバーにあれこれ言われていたことを思い出し、それが堪えているのではと感じた光秋は、なんと声を掛けていいかわからないものの、とりあえず傍らに歩み寄ろうと足を踏み出そうとする。

その時、

「あ、もしかして、白い犬かな？」

「はい……？」

後ろから知らない声で呼び掛けられて、咄嗟に踏み出そうとしていた足を引つ込めた光秋は声のした方を振り返り、こちらに歩み寄ってくる1人の警官を認める。

歳格好は光秋より少し上くらいだろうか。制帽の下には耳に届くくらいの長さの黒髪が伸び、背は光秋より若干高い。さらによく見れば、その手にはスポーツドリンクのペットボトルが数本入ったカゴが握られている。

「ようやくお目にかかれたな。あ、これ、水分補給に」

「……………ありがとうございます」

最初の一言に引つ掛かりを覚えながらも、差し出されたスポーツドリンクを受け取った光秋はフタを開けてそれを飲む。実際喉は渴いていたため、手頃な温度の飲み物が体に染み渡るのはありがたかった。

その間にも、警官は少女3人にもスポーツドリンクを配っていく。桜と董は受け取ってすぐに口をつけるが、北大路だけは無反応を通して受け取らなかった。

その様子を横目で見ながら光秋は四半分程飲み切り、それを待つていたように警官が再び声を掛けてくる。

「まさか、こんな形で会うとはな……」

「……………あの、先程からなんです？どこかでお会いしましたか？」

それが何であれ一方的に気持ちを向けてくる警官に多少の不信感を抱きながら、光秋はペットボトルのフタを閉めながら問う。

「ああ悪い。紹介がまだだったな。俺は徳川真とくがまこと。ご覧の通り警察官で、小田仁って人の後輩だ」

「……………あなたが…………？」

小田の後輩という一言にハツとしつつ、光秋は異動の少し前に開かれた飲み会での小田の言葉を思い出す。

「警察に知り合いがいるから困ったら頼れとは聞いていましたが、それがあなた…………？」

「そういうことだ。と言っても、なかなか会う機会がなかったけどな」

「まあ……………」

警官——徳川の返事に、東京に来てから今日までの大部分の時間を寮と本部の往復に費やし、その中で小田の言葉を半ば失念していたことを思い出した光秋は、目の前の徳川と京都の小田、2人に対して申し訳ない気持ちになる。

「…………ああそうだ。こちらこそ申し遅れました。ESO東京本部所属の加藤と言います」

合わせて自己紹介がまだだったことを思い出して一礼すると、桜が脇を小突いてくる。

「あのさ、名前教えちゃつていいの？」

「……………あつ！」

言われて今度はニコイチのことを失念していたことに気付き、慌てて徳川に向き直る。

「あ、あの、徳川さん！今言ったことは……」

「あー、まあ、とりあえず落ち着こう。な？」

「は、はい……………」

若干狼狽しながらもなだめてくる徳川に応じると、光秋は2回程深呼吸して冷静にな

ろうと努める。

「まあその、俺も小田先輩からいろいろ訳ありな奴だつてことは聞いてるし、深く詮索しないようにとも言われてる。特にコイツに関しちや、いろいろ黙つてなきやいけないだろう?」

「そうです」

ニコイチを指さしながら確認する徳川に、光秋は深く頷く。

「なら、俺も今のことは黙つとくさ。先輩に頼まれた時からそのつもりだったしな」
「ありがとうございます」

徳川の返答に、光秋は深々と頭を下げる。

と、光秋の脳裏に春菜の顔が再浮上してくる。

——……この人、警察官だつて言つてたよな。もしかして……——

思うや、本土へ向かった時から気になっていたことが口を突いて出る。

「あの、警察の方なら避難者について知りませんか? 長い赤毛の女の人なんです。たぶん、カメラとかメモ帳とか持つてるか?」

「赤毛の女……ちよつと待つてな」

応じると、徳川は肩に備え付けた通信機に呼び掛け、避難者の照会をしてくれる。
と、

「……………すみません」

出し抜けにポケットの携帯電話が振動し、断りを入れた光秋は画面を開く。

「！春菜さんっ？」

表示された名前に驚愕したのも一瞬、すぐに通信機を外して電話を左耳に当てる。

「もしもしっ？」

（あ、コウちゃん？）

耳の穴に押し当てる様にしたスピーカーの向こうからは、先日会った時と変わらない

春菜の声が響いた。

「春菜さんですよ？無事でしたかっ？」

（やっぱりコウちゃんか）

「やっぱり……………」

（うん。工場地帯の騒ぎのことでしょう？撃ち合いが始まってすぐに警察やESOの職員の人に来て、誘導に従ってずっと近くの……公民館っていうのかな？とにかく広い建物に避難してただけだね。職員の人やESOの人が安否確認を求めてるって言うてきたから、まさかと思ってかけてみたんだけど）

「ああ、なるほど……」

春菜の説明に納得しつつ、光秋は徳川を見やりながらお辞儀をする。

「それで、春菜さん無事なんですか？怪我とかしてませんか？」

（うん。すぐに逃げたから、掠り傷一つしてないよ）

「よかったあ……………」

最も聞きたかった一言を春菜の口から聞けて、光秋は安堵すると同時にずっと強張っていた体から力が抜けていくのを感じる。尻餅こそ着かなかったものの、踏ん張れなくなった脚のせいで思わず中腰になってしまう。

（なに？心配してくれたの？）

「当たり前でしょうっ」

若干の笑みを含んだ春菜の声に、光秋はからかわれたような気がして、つい眉間に皺を寄せてしまう。

「だって、僕なんかによくしてくれて、その上弟分だって……だったら、姉貴分を心配するのがいけないことですかっ？」

（ごめんごめん。怒らせるつもりはなかったんだよ）

先日自室に招いてもらった時のことを思い浮かべながら声を荒げる光秋に、春菜はなだめる様に返す。

と、光秋は遠くにこちらに歩み寄ってくる藤岡の姿を捉え、まだ脱力気味な脚で慌てて立ち上がる。

「あ、すみません。ちょっと用が入ってしまつて……とにかく、怪我はないんですよ？」

（ないよ。心配してくれてありがとう）

「ならいいんです。失礼します」

（うん。研修頑張つてね！）

春菜の激励を最後に電話を切ると、それを待つていたように徳川は藤岡を見やり、ポケットから出した紙を光秋に渡す。

「また取り込むみたいだからな。これ、俺の連絡先。時間が空いたら連絡くれ」

「！ありがとうございますっ」

言うのと徳川は立ち去り、光秋は渡された紙をすぐにポケットに仕舞うと、近くまで来た藤岡と向き合う。

「すまん。本隊といくつか確認してたら遅くなった」

「いえ……それで、結果の方は………？」

詫げる藤岡に、光秋は春菜の安否の次に気になっていたことを問う。

「最終判断は本部に帰った後でだが、俺が見た限りでは、そうだな………」

「……………」

アゴを撫でて考え込む藤岡に、光秋も思わず緊張する。

——一応“御膳立て”ってことなんだろうが、それでも『試験』って名目で来たわけだからな。無我夢中でどんなふうにしてたかう覚えただけど、変なことしなかっただろうか？これが研修結果に反映されたりするんだろうか………？——

杞憂と思う一方、自身の評価に影響するかもしれないという気持ちも捨て切れず、春菜の無事を知って一度は抜けたはずの強張りが再び体中に広がっていく。

「……………60……………65点といったところか」

「!?……………半分以上、ですか……………」

思った以上に高い点数に驚きつつ、光秋は理由を窺う目を藤岡に向ける。

「100点満点とするなら、そうだな、半分はやっていい。サイコキノによる防御、レポーターによる装備交換や給弾など、基本は押さえていたと言っていい。だが、運用にはまだ粗が目立つ。なにより、多くの局面を00の力を主体に切り抜けてきた印象がある。特エス主任としての評価である以上、やはり減点対象にせざるを得ないだろうな」

「……………はい」

言われるごとに蘇ってくる記憶を振り返りながら、自身思っていたことを言葉にしてくる藤岡に、光秋は素直に頷くしかない。

「まあ、さつきも言ったように俺の見た限り、いわば暫定評価だな」

「本部に帰って各方面の情報を加味した上で、どれだけ足し引きされるか……………ですか」

「そういうことだ」

確認する光秋に、藤岡は頷いて返す。
と、

「?……ねえ、あれ何?」

「ん?」

袖を引きながら問い掛けてくる桜の指を追って、光秋も空を見上げると、遠くビル群の上空に強い赤い輝きを捉える。

「……信号弾か?」

「でも何でそんなの——!?!」

同じく赤い光を見上げる藤岡に光秋が相槌を打った直後、数回の爆音が轟き、ビルの合間から黒煙が上がる。

「攻撃っ?」

「ちよつと見て来ますっ!」

驚く藤岡にそう告げるや、光秋は外していた通信機を左耳に着け直してニコイチに乗り込み、先程鉄板の上に置いたキャノン砲を持って弾倉を差し込む。

（光秋さん!大丈夫なんですか!?!）

「様子見て来るだけだよ」

心配そうに問い掛ける輩にスピーカー越しに応じると、光秋はニコイチを飛び立たせて黒煙が上っている辺りに向かう。

と、念力で浮かんだ桜が角に跨ってくる。

「何してんだ。藤岡主任のところで待ってろ」

（様子見なんだろう？ だったらアタシも行くよ）

「いや、そうだけど……」

（ここですぐやれば、いろいろプラスしてもらえさるだろうしさ）

「……………」

単純に状況が気になって向かっただけで、評価を上げるために向かったわけでもないものの、桜のその言葉に魅かれるものを感じたのも事実であり、光秋は否定できない自分に顔を険しくしながら、黙ってニコイチを飛ばした。

少し飛んで黒煙の上空に着くと、何台かの戦車が破損、あるいは横転している光景を見る。砕かれた地面の所々は激しく燃え、その合間を消火器を持って火を消そうとしたり、残骸と化した戦車から乗員を助けようとしている人たちが駆け回っている。

「やっぱり攻撃だったか……桜さん、右の横転してる戦車の方行つて。起こすなり壁壊すなりして救助手伝つて。僕は左をやるから」

（わかった）

応じると桜は角を離れ、手近の1台に近付いて変形したハッチを念力でこじ開けてみせる。

それを横目に見ながら光秋もひっくり返った1台の許に降り立ち、持っていたキャノン砲を地面に置くと、乗員たちに気を配りながらゆつくりと起こして上下をもとに戻す。

すぐに数名の兵士が駆け寄って救助作業が開始されるのを見て、光秋は外部スピーカー越しに問い掛ける。

「何があつたんですか？」

（さあな。俺らも何がなんだか……）

（急に後ろから砲撃されたと思ったら、前からNPの奴等が雪崩れ込んできて……！よし、開いたぞー！）

救助作業の片手間に語ってくれた話を記憶しながら、光秋は周りを改めて見回す。

「……………なるほど。ここは埋め立て地の包囲網、その一部か」

いずれも埋め立て地側に砲口を向けた戦車が並ぶ光景にそう察しながら、光秋はもう1台横転した戦車を起こす。

——もつとも、1台ずつ相手してちや結構かかるだろうな。火の手も上がってるから急いだ方がいいだろうし……………！——

そう思った時、脳裏に董の顔が浮かんでくる。

「すみません。この辺ってEジャマー効いてますか？」

（いや、もともとNPとやり合うのを想定してたから、大丈夫だと思うが）
「ありがとうございますっ」

近くの兵士の返答を聞くや、光秋は董に通信を繋ぐ。

「董さん、聞こえるか？」

（はい。聞こえます）

「悪いがこつちまで来てくれるか？Eジャマー効いてないって言うから、テレポートが使えるはずなんですけど」

（了解ですっ）

通信越しに返事を聞いた次の瞬間、ニコイチの胸部の上に董が現れる。
と、

（うわあ!?!）

「危ないっ!」

足を滑らせた董が胸部の上から滑り落ち、光秋は咄嗟にニコイチの右手を伸ばして掌に董を受け止める。

（ちよっ!董、大丈夫!?!）

(な、なんとか……)

「すまない。ハッチ開けとけばよかったな」

突然のことに驚いて飛んでくる桜に、董は掌の上で冷や汗を浮かべながら応じ、光秋は言いながら操縦席を機外に出して董の乗った掌を持つてくる。

「ケガないか？」

「はい。ありがとうございます」

言いながら光秋は掌を傾けて滑り台の要領で董をコクピットに移し、座ったまま伸ばした手でその手を掴んで自分の許に引き寄せる。

「いや、礼を言われるより、寧ろ謝らないと。僕の不注意だった」

「いえ！私が変なところに出たから——」

「いや、まあ、この話はとりあえずこの辺にして……」

言い返そうとする董を遮って周囲を見回しながら、光秋は先程浮かんだことを告げる。

「周りに壊れてる戦車がたくさんあるだろう」

「?……はい」

「あの中にまだ何人が閉じ込められてるみたいなんだが、その人たちを一度に外に出せるか？」

「……ちよつと待つてください」

言うとは菫は目をつむり、呼吸を整えながらしばし沈黙する。

「……………一度についていうのはちよつと難しいかな……………3回くらいに分ければいけると
思いますけど……………」

「なら、早速取り掛かってくれ」

渋い顔を浮かべる菫に応じると、光秋は外部スピーカー越しに周囲に呼び掛ける。

「今からテレポートによる救助を始めます。救助活動をされてる方は一旦戦車から離れてください」

呼び掛けた直後、菫によつて破損した戦車の周囲に十数人の負傷者が現れる。

その人たちが周囲の人々によつて応急処置を施され、あるいは後方へ運ばれる傍ら、菫はさらに2回に分けて乗員たちを車外へ跳ばし、顔に少し疲れを浮かべる。

「御苦労様。これで全員かな？」

「私を感じた限りではそうです、けど……………集中力が鈍つてて少し自信ないかな……………」
運ばれていく負傷者たちを見ながら独り呟く光秋に、自分に訊かれたと思つたらしい菫が不安そうに答える。

「ああ、ごめん。独り言だ。でも、残つてたら確かに大変だよなあ……………使ってみるか？」

詫びてからのしばしの逡巡の後、サン教ベース以来使えるようになった生命感知の機能を思い出すと、光秋は董を自分の許に寄せる。

「!?」

「悪いな。ちよつと……」

突然引き寄せたことに驚いたらしい董に一言謝りつつ、光秋は席を機内に下ろしてハッチを閉める。

「ちよつと試したいことがある。テキトーなところに座つてくれ」

「あ、はい……………じゃあ……………」

控えめに応じると、董は光秋の膝の上に腰を下ろしてくる。

「っ？董さん……………」

「その……………床に座るのはなんだか……………椅子もここしかないし……………」

「まあ、それもそうか……………悪いな。今度なんとかしとく」

「……………私はこのままでも別に……………」

董がごそごそとなにか言つたのを半ば聞き流しながら、光秋は試しに呼吸を整え、目をつむつてモニター越しに周囲に注意を向けてみる。

—これまで戦闘中に感じたことは何度かあるが、そうでない時に使うのは初めてだよ。上手くいくといいが……………—

一抹の不安を覚えながらも、自身の知覚がニオイチを通して拡大し、周囲に波紋の様に伝播していく様子を想像する。

と、自身の周囲、主に戦車の付近にいくつかの微かな温かさを捉える。

「これは……………外にいる軍の人たちか。一応作動はしてるみたいだな。なら、次は本題だが……………」

感知機能自体は動いてくれたことに安堵すると、そこから意識を破損した戦車1台ごと集中させ、取り残された人がいないか確認していく。

「……………いない……………みたいだな」

周囲に感じる温かさを一つも感じなかったことにそう呟くと、ちょうど応急処置を済ませた一団も後方へと移動を始める。

負傷しなかった人たちの手が空くのを捉えるや、光秋は手近の1人に声を掛ける。

「すみません。全員救助完了ですか？」

（ああ。人数はそろつてた。協力に感謝する）

「ありがとうございます」

教えてくれたことに礼を返すと、今度は未だ燃え続けている周囲の火事が目に入る。所々で消火器の噴射が行われているものの、火の勢いは停滞こそすれど衰える気配はない。

—あれも何とかならないか……………そういえば…………—

胸の内に呟きながら光秋は正面に目を向け、その先にある海を幻視する。

「董さん、ちょうど近くに海があるだろう。その水をこの上に持って来て、消火することってできないか？」

「水、ですか…………一応、やれるとは思うけど……………」

空を指さしながら訊ねる光秋に不安そうに応じながらも、董はハッチを開けるよう視線で促す。

それに応えて光秋はハッチを開放し、開かれた穴の上に桜が飛んでくる。

「救助終わったみたいだね——て、何してんの董っ!？」

「静かに！今ちよつと集中してるの」

「悪いな桜さん。少し静かにしてくれ」

コクピットを見下ろすや仰天して大声を上げる桜に、光秋の膝の上に座る董は目をつぶりながら苛立った声で応じ、光秋も上を見ながら桜をなだめる。

「……………っ！」

数秒の沈黙の末、董は出し抜けに目を見開き、それに合わせて上空一帯に巨大な水の塊が出現する。

「よしっ、成功——!!」

喝采を挙げようとした刹那、光秋は脊髄反射で開閉スイッチを押してハッチを閉め、直後に上空に現れた大量の水がニコイチをはじめ辺り一面に降り注ぐ。

（わっ!!）

「！いけねっ……」

機体越しに聞こえた桜の声にハツとしたものの、時すでに遅く、一瞬後には頭からずぶ濡れになった桜がモニターの真ん前に映る。

（……………）

「……………」

何かを溜め込む様に黙り込んだ桜に恐々としつつも、周囲を見回した光秋は所々で燃えていた火が完全に鎮火したのを確認する。

（……………）

同時に、桜同様頭からずぶ濡れになった消火活動に当たっていた人々の感謝と、それ以上の怒りがない交ぜになった視線が多数突き刺さり、光秋はますます身が縮こまる。

「……………すみません。やり過ぎちゃいました……………」

「いや、僕ももつと周りに呼び掛けるべきだった。あと、桜さんも入れるべきだったな……………」

こちらも膝の上で気まずそうに縮こまる輩に応じた直後、それまで水を滴らせて俯い

ていた桜が顔を上げ、目を三角にしてモニターに迫ってくる。

（コラア光秋ッ！董ッ！何しやがるッ!!）

「……………」

おそらくニコイチの顔面にしがみ付いているのだろう。正面モニター一杯を占めた桜の怒りの形相に、光秋と董は気まずさと申し訳なさを覚える。

同時に光秋はその合間からこちらを注視する人々を捉え、気まずさがいよいよ最高潮を迎える。

「あ…………救助は終わったし、鎮火もしたようなので、我々はこれで失礼します……………すみませんでしたっ！」

ニコイチの頭を下げながら言うや、地面に置いていたキャノン砲を拾い、一目散に藤岡と北大路が待つ地点へ戻る。

「とりあえず桜さん、いい加減離れろ。前が見えない」

（だった開けろっ!）

…………嫌な予感が…………しかし――

そう思いながらも光秋はハッチを開け、すぐに落ちる様に入ってきた桜が頭突きでもする勢いで顔を寄せてくる。

「コノヤロー！なんてことを…………！」

「いや、悪かったよ……」

「光秋さんを怒らないで。私のミスだし……」

「いや、僕の声掛け不足の所為でもあるし……」

罪悪感と至らなさから光秋と董は互いに庇い合うものの、それを見た桜はますます不機嫌さに顔を歪める。

「だいたい、何で董が光秋の膝に……へっ、クシユンっ！」

「ああ悪い。閉めるの忘れてた……」

言葉の途中でくしゃみをして身を震わせる桜を見て、光秋は慌ててスイッチを押してハッチを閉める。

その間にも、ニコイチは藤岡と北大路の許に到着する。

（なんでずぶ濡れだ？ゲリラ豪雨にでも遭ったか？）

「まあ、そんなところで……」

水浸しのニコイチに怪訝そうな顔をする藤岡に応じながら、光秋はニコイチを着地させる。

（まあそれはそうと、さっきの爆発について情報がきた）

「NPによるものなんですよ？現場にいた人たちがそんなふうに言っていました」

（ああ。本土側に隠れていた部隊が、工場地帯に向かった部隊の撤退を援護したものら

しい。お陰で、今回出てきた連中の足取りを見失ってしまった……)

「逃げられた、ということですか……………」

(ああ……………)

機体越しに迎賓館で出会い、一時はDDシリーズ相手に共闘したフラガラツハのパイロットを思い浮かべながら告げる光秋に、藤岡は心なしか悔しそうに頷く。

(一応、周囲に搜索を出すらしいが……………とにかく、お前たちのここでの役目は終わった。本部に戻り次第、特エスたちを解散させろ)

「了解」

(それと、加藤二曹は3時まで俺に報告書を提出しろ。その出来も評価に関わるから、そのつもりでな)

「報告書ですか……………了解。本部に戻ります。北大路さん」

藤岡の指示に応じると、光秋は弾倉を外したキャノン砲を再び鉄板に置き、北大路に手を伸ばしてコクピットに乗せると、本部を目指して飛び立つ。

「ところで桜ちゃん、何でびしょ濡れなの?」

「……僕のミスだ」

「違います! 私のミスです」

「もうこの際どっちでもいいよ——クチュンっ!」

北大路の問いに光秋と董がまたも底い合っていると、桜がまたくしやみをする。
「……とりあえず」

それを見て光秋はシートベルトを外し、防弾ベストも外すと、脱いだ上着を桜に掛ける。

「これ羽織つとけ。本部に帰ったらシャワーだな。場所わかるか？」

「一応……」

頭から被った大きな背広の陰から桜が応じるのを聞きながら、光秋はシートベルトを締め直す。

「あ、でも、着替えはどうします？」

「あ、そつか……」

思い出した様に問い掛ける董に、光秋はしばし考える。

「予備なんて持ってきてないよな？」

「うん。寮に行けばあると思うけど……」

「てことは、誰か取りに行かないと……」

確認に頷く桜を見て、光秋はさらに思案しようとする。

と、北大路が手を挙げながら言う。

「それなら、私が取ってきます」

「頼めるか？」

「はい」

光秋の確認に、北大路は短く応じる。

「……？」

が、そんな北大路の態度に、光秋は微かな違和感を覚える。

「短い付き合いだから断言はできないけど、いつもなら返事ついでに、『あなたに桜ちゃんの下着なんて見せられませんか』とか、もっとキツイこと言ってきたらこっちは、今回は妙に大人しいな？ いや、そもそも戦闘が終わって戻ってきたからこっちは、どうも北小路さんの調子が普段と違うようだな……」

関わる機会の少なさから断言はできないことを自覚しつつも、胸の内に引つ掛かるその感触に、微かに首を傾げる。

そうしている内に、ニコイチは本部上空に差し掛かろうとしていた。

「じゃあ、備品は僕が片付けとくから、桜さんはシャワー浴びてきて。北大路さんは着替え頼む。董さんは……」

「片付けお手伝いします」

「そうか。じゃあ頼む」

少女3人に指示を出し、桜はシャワーへ、北大路は自分たちの寮へ向かうのを見ると、光秋は董と共に4人分の防具一式とEJCの片付けを行う。

桜が付いていた分の水気を拭き取り、管理担当に搔い摘んだ事情説明をして返却を終えると、光秋は腕時計を確認する。

—もう12時か……報告書の提出は3時まででつて言つてたから、ひとまず腹ごしらえかな……………寒っ—

ワイシャツ姿の上半身を震え上がらせながら、腹の具合と相談しつつこの後の大よその予定を立てると、傍らの董を見やる。

「二応、董さんたちはもう解散だけど、これからどうする？学校に戻るのか？それともこのまま寮に帰る？」

「私はひと休みしたら学校に行こうと思つてますけど、どの道その前に桜の様子見てこないと」

「それもそうだな。僕も行つてみるか。上着も返してもらわんとだし。道案内頼む」
「わかりました」

董が頷くと、光秋はその後をついて行く。

—とりあえず、昼食つたら報告書書いて……情報提供してくれたZCの人のことも書

いとかないとな……司法的な話については一度藤岡主任に相談してみるか……ニコイチの修復もやっとなきやいけないんだよな。後で福山主任にブロック出してもらつて——そうだつ、福山主任にも報告書書かなきやいけないんだよな……期限は特に言われてないが……—

歩きながら今後やるべきことを思い浮かべいくと、その数と、いずれも急ぎの用であることに、若干気分が萎えてくる。

それでもさらにしばらく歩くと、2階建ての横に広い建屋が見えてくる。

「あれつて、宿舎か？」

「はい。ときどき泊まつて、シャワー使うんです」

光秋の問いに、先導する董は顔を向けながら応じる。

会話の間にもドアをくぐつて廊下を進むと、2人はシャワー室の前に差し掛かる。

「じゃあ、私ちよつと見てきます」

「ん。頼む」

女性用の方に入っていく董を見送ると、光秋は近くの壁に背中を預け、ワイシャツの袖の上から鳥肌が立った両腕を擦る。

——もうすぐ3月、春の訪れも近いというものの、薄着はやっぱり堪えるな………もつとも、桜さんはこの気温の中でずぶ濡れになって、そうなった原因が僕にある以上、

そんなことも言つてられないんだらうがなあ……「避けろつ」とか「念で防げ」とか、一言言つてやるべきだった……………」

引き上げ間際の水が滴る桜に思いを馳せてさらに震え上がりながら、胸の内にその時の思慮の浅さを反省する。

と、学校の制服に着替えた北大路が、肩に大きなカバンを提げてやつて来るのが目に入る。察するに、カバンの中に桜の着替えが入っているのだろう。

「ああ、北小路さん。持つて来てくれたか。ご苦労さま」

「……………いいえ」

ぼそつと応じると、北大路はシャワー室へ入っていく。

と、

「……………あつ。そうだったなあ……………」

ドアの陰に消える北大路の背中を見ながら、光秋はあることに思い出し、同時にいかに慌ただしかつたとはいえそのことを今まで失念していたことに軽い自己嫌悪を抱く。

―出てきたら、北小路さんに言わんとなあ……………―

そう小さく決心してしばし、少女3人がシャワー室から出てくる。最後に見た時はESOの制服姿だった桜だが、今は学校のそれに着替え、肩に北大路が持つてきたカバンを提げている。

「お待たせしました」

「まったく、最後の最後にひどい目に遭ったよ」

「悪かったって……」

董に続いて出た桜の一言に、光秋はやや低姿勢で応じる。

「ところで、今何時？」

「12時半だが」

「あー、やっぱダメか……今日の給食、コーヒ―牛乳だったのに……」

「それは……重ねて申し訳ない……」

時間を聞くや悔しそうな顔をする桜に、その気持ちに多少共感できる光秋は先程までとは異なる申し訳なさを抱く。

「まっ、いいけどさ。ずぶ濡れにしたお詫びに奢ってくれれば……」

「わかった。それも兼ねて、みんなで食堂で昼食にしよう」

若干圧力の籠った視線を向けてくる桜に応じると、光秋は北大路を見据え、先程の小さな決心を実行する。

「それと北大路さん。遅くなったが、さつきはすまなかった。NPの人にいろいろ言われて、何も言ってやらずに」

「……別に……今更謝られても……」

北大路はそっぽを向いて応じるものの、そんな反応を薄々予想していた光秋は構わず続ける。

「そうだな。確かに『今更』だ。それでも、僕は暫定上司としてあの時何か……北大路さんが悪く言われたことに対して何か言うべきだったんだ。それに思い至らなかったのは、完全に僕のミスだ。すみませんでした」

北大路の返事を重々承知の上で告げながら、深く頭を下げる。

「!?……………何を……………」

「いや、悪いと思ったなら謝るのが筋だと思って」

それを見て北大路は目を丸くし、光秋は顔を上げながら応じる。

「……………」

理由を聞いても北大路は釈然としない様子だが、光秋はそれ以上構わず、切り替えた気持ちを表す様に少女3人に呼び掛ける。

「さ、食堂行こう。さっきも言ったようにお詫びも兼ねてだ。全額僕が持つから、3人共好きなもの頼んでいいぞ」

「フフーン！なに食べよっかなあ!!」

「すみません……………」

「……………」

上機嫌な桜、遠慮がちな董、浮かない顔の北大路、それぞれの反応を見ながら、光秋は3人を伴って食堂へ向かう。

と、唐突に曾我の顔が浮かんでくる。

—そういや、奢り……………あつ、そうだ。曾我さんのお詫びも控えてるんだったなあ……………大丈夫だろうか……………？—

これもまた失念していた事案に、今更ながら懐の具合を心配した。

食堂に移動後、光秋奢りの下で各々注文を済ませると、4人は1つのテーブルを囲む形で座って食事を摂る。

「いやあ、まさか本当に2本出してくれるなんてねえ。言ってみるもんだねえ！」

「桜……………すみません、光秋さん……………」

「いいって、奢るって言ったんだし。これで許してもらえりや、安いもんだよ」

コーヒー牛乳2本にすっかりご満悦な桜、そんな桜を見て申し訳ない顔を向ける董に、光秋は醬油ラーメンをすすりながら本心からの返事をする。

—3人合わせても思ったより負担少なかったし、途中ATMにもで寄れば曾我さんの方もなんとかなるかな……………—

桜のナポリタンとコーヒー牛乳2本、董の揚げ物の盛り合わせ定食、北大路のビーフシチューを見ながら胸の中で安堵の息を漏らすと、また一口ラーメンをすすする。

その時、上着のポケットに入れていた携帯電話が振動する。

「涼さん？悪い、ちよつと」

画面に映った相手の名前を見て少女たちに断りを入れると、光秋は電話を左耳に当てる。

「もしもし?」

（あ、光秋さんですか?今大丈夫ですか?）

「ああ。どうかしたか?」

電話越しの心なしに焦った様子の涼の声に、光秋は首を傾げながら応じる。

（その……さつきニュースを観まして……）

「ああ……もう放送してるのか……」

その一言で光秋は涼の語調の理由を察し、率直な感想が思わず口から零れる。

（私も大学の食堂のテレビで観たんですが……その、御怪我とかは……）

「僕の方は大丈夫だよ。確かにいろいろと手強い状況だったけど、周りがしつかりしてくれたし。ピンピンしてるっ!」

傍らの少女3人を見渡し、デ・パルマや関の顔を思い浮かべながら、光秋は澆漓とし

た声をスピーカーに吹き込む。

（ならよかったです……じゃあ私、次の講義があるのでこれで。お忙しい中ありがとうございます）

「ん。勉強頑張つてな」

安心した様子の子の涼に応じると、光秋は携帯電話を切つてポケットに戻す。

「誰から？」

「この間一緒に買い物した時、メガネ掛けた女の人がいただろう。涼さんっていうんだけど、あの人」

「買い物……ああ、此方たちと行つたあれか……」

光秋の返答にその時のことを思い出したらしい桜は、それまでナポリタンの旨さとコーヒ―牛乳の甘さに浮かべていた笑みを、微かに苦いものを噛んだ様な表情に変える。

「……まあでも、僕が『お姫様』から心配される日が来ようとはなあ。本人の前で言うとは嫌がるだろうが……」

そんな桜の表情が気になったのも一瞬、自分の交友関係の変化に感慨を抱きながら、光秋はチャ―シューを一枚口に運ぶ。

その時、再び携帯電話が振動する。

—またか?……春菜さん?—

数十分空けてからの着信になにかと思ったものの、すぐに桜たちに目配せして電話に出る。

「もしもし?」

（あ、コウちゃん。今いい?）

「はい。どうかしました?」

（実は今、さっきの騒ぎのニュース観てね。なんでコウちゃんまで出たって教えてくれなかったの?）

「え?……あれ、言ってませんでしたっけ?」

春菜の指摘に唾然としたのも束の間、埋め立て地一帯から本土側に引き上げてからのやり取りを思い返した光秋は、遅まきながら自分もあの場にいたことを伝えていなかったことを思い出す。

（言っていないよ。わたしも研修の合間にテレビでも観て言ってきたんだろうなと思って、つい軽い調子で返しちゃったけど……出てきたんならそう言つてよ……）

「……その……すみませんでした」

怒られているのとも違う、しかしどうしても軽い罪悪感を抱いてしまう春菜の言葉に、光秋は頭を低くしながら応じる。

（まったく。わたし心配されてる場合じゃないじゃん……それで？コウちゃんこそ大丈夫なの？怪我とかしてない？）

「ええ、それは全然。ピンピンしてますっ」

（ならいいけど……）

涼の時と同じく澆漖とした声を送ると、春菜の声に安堵が籠ったように感じる。

「その……わざわざありがとうございます。電話くれて」

（言ったでしょう。わたしはコウちゃんの姉貴分なんだから。なにかあれば心配くらいさせなさいっ。まあ、大丈夫そうならいいや。じゃあ、わたし仕事戻るから）

「はい。ありがとうございます」

再度の礼を告げると、春菜の方から電話は切れる。

——涼さんにも一言御礼言うべきだったかな。またうつかりしてた……後でメールでもしとくか——

本日何度目かの失敗に内心で頭を掻きながら、光秋は携帯電話をポケットに戻す。

「また違う人ですか？」

「ん？ああ。僕が今回飛び出していく理由になった人だよ」

董の問いに、光秋はラーメンをすすりながら答える。

「……あれ？それってさっき電話したんじゃない？」

「お互いちよつと行き違いがあつてな。そのことで軽く注意された」

「ふーん……………？一応訊くけど、その人つて女？」

「女……………ああ、そういえば3人は会ったことないっけな……………」

目を細めながら訊いてくる桜に、光秋は双方の面識がないことを思い出しながら答え、また一口、今度はやや多めにラーメンをすすする。

「人気者だねえ……………タラシ」

その所為か、桜の呟きの最後の方がすすする音に紛れてよく聞こえなかった。

「……………からしは流石にテーブルには置いてないと思うが……………ナポリタンにかけるのか？」

「違うよっ！」

仕方なく聞こえたように光秋が応じると、桜はそっぽを向いてフォークに多めに巻き付けたナポリタンを大口を開けて頬張る。

「……………まあそれより、涼さんに続いて春菜さんにも気に掛けてもらえる、か……………いいじゃないかっ」

桜が不機嫌になった理由に首を傾げたのも数瞬、ここ数カ月間に知り合った女性2人から労ってもらったことに気をよくしながら、光秋はまた豪快に麺をすすする。

「遅まきながら、さつきは連絡ありがとうございます。姫君からの辛い痛み入ります……と」

食後、そう打ったメールを涼宛に送ると、光秋は少女3人と共に食堂を後にする。

——『姫君』云々の部分、流石に冗談が過ぎたかな……？まあでも、感謝の意図は伝わらるだろうし、気に障るような心配があればその都度補足すればいいだろう——

咄嗟の思い付きで付け加えた一文に若干の不安の覚えたものの、すぐに気を取り直すと、傍らを歩く北大路を見やる。

「ところで北大路さん、結局残してたけど、本当に体調大丈夫なのか？」

桜や堇が電話に反応している間にも黙々と食事を続け、しかし最後の何口分かを残してトレーを返したことを思い返しつつ、光秋は戦闘中に振り回されたことがやはり堪えているのではと心配しながら問う。

「……別に。お腹が一杯になったから残しただけですけど」

「ならいいが……これから学校行くって言ってたけど、ホントに大丈夫か？」

内心「もったえなかったなあ」とビーフシチューのことを思いながら、さつきよりは心配の度を弱めて訊いた刹那、足を止めた北大路が刃物の様な鋭い視線を向けてくる。

「だから、それがウザったいって言うんですつ！どうせ入間主任が戻るまでの代理なんだから、いちいち上司面しないでもらえますかつ？」

「！ちよつと菊！その言い方はないだろうつ。光秋だつて心配して言ってくれてるのに！」

苛立ちを爆発させた様な北大路に、桜も声を荒げて返す。

「だからそれがウザいのつ！桜ちゃんこそ何？あんなにこの人のこと毛嫌いしてたくせに、この間から変だよ？弱みでも握られた？それとも秋田で何か——」

「っ！」

「!!」

言葉を重ねるごとに激昂しつつある北大路、それを遮るように桜は平手を上げ、咄嗟に2人の間に割って入った光秋がそれを押し止める。

「何すんだよっ！」

「理由はどうあれ、手を挙げちやいかんよ……」

平手打ちを邪魔されて非難の目を向ける桜に応じると、光秋は小さな自己嫌悪を覚える。

—手を挙げちやいかんて……ニコイチでドンパチ・殴り合いを、それもついさつきやってきた僕がそれを言うか……それでも、今のは言うべきだったろうか……—

若干の迷いを抱えながらどうか自分を納得させると、振り返って北大路を見やるが、すでに北大路の姿は背後になく、数メートル離れた先を駆けていた。

「北大路さ——」

「荷物まとめて学校戻りますからっ！」

脇目も振らず叫んで光秋の呼び掛けを遮るや、北大路は最寄りの階段を駆け上がって上の階へ消えてしまう。

「おい、菊！」

「桜さん！」

「わかつてる。暴力反対でしょ」

先程の様子を踏まえて声を掛けた光秋に応じながら、桜も北大路の後を追う形で上へ行ってしまう。

「……………大丈夫かな…………？」

その光景を頭を掻いて眺めながら追おうかどうか悩んでいると、隣に立った董が言うてくる。

「私も行きます。どの道着替えて学校に戻らないと」

「そうだがな…………」

「2人のことなら任せてください。菊はともかく、桜はいざとなったら遠くに跳ばしま

すから」

「また極端だな……」

「いざとなつたらですつ。それに、光秋さんこの後もいろいろ忙しいみたいです」

「まあなあ……」

言われて光秋は、報告書をはじめとした諸々を思い出す。

「とにかく、私も着替えて行きます。お仕事頑張ってください！」

「ん。すまん。ありがとう。気を付けてな」

言うや輩もESOの制服から学校のそれに着替えるために上へ向かい、光秋は右手を挙げてそれを見送る。

階段を上つて姿が見えなくなると、光秋は頭を掻きながら胸の内に呟く。

——やれやれ。北大路さんはそれこそDDシリーズ並みの難敵だなあ。どう対処していいかまるでわからん………近い内、また入間主任のところ行っていろいろ訊いてみるか……？それと、対応を桜さんと輩さん……いや、ほぼ輩さんに丸投げした形になっちゃったよなあ。僕がなにか言つても北大路さんが余計怒るだけだから、その点では妥当な対応かもしれないが………——「こんなところでも子供に頼るとはなあ………」

自分の情けなさに、思わず声が出る。

——まあいい。ここは董さんに甘えさせてもらって、今しなきやならんことをしよう。
それこそ、次々やらんといかんのだし——

そう思いながらこれからやらねばならない諸々の用事を思い浮かべ、気持ち切り替えると、光秋は手始めに報告書を書こうと歩き出した。

98 加藤隊結成

「……………こんなところかなあ……………っ！」

本部のノートパソコンを借り、研修室に籠ることしばし。ひと通り書き上げた画面の中の報告書を眺めると、光秋は両腕を上げて体を伸ばす。

そのまま部屋の時計に目を向けると、2時15分を指そうとしていた。

——提出期限は3時だったよな。要点はだいたい押さえたつもりだし、時間的にもちょうどいいか。あとは出してみてもう言われるか……と——

流し読みで内容を確認しながらそう考えていると、情報提供をしたZCの構成員の記述が目にとまる。

——一応協力してくれたことは書いたつもりだが、これじゃまだ弱いかな……？もつとも、これ以上のことは藤岡主任に訊いてみないとほんとにもなあ……………まあいい。誤字や変な表現もなさそうだし、とりあえず提出というこう——

そう思うや気持ち切り替え、携帯電話を出して藤岡に連絡をとる。

（なんだ？）

「あ、藤岡主任。報告書の作成が終わりました。今どちらでしようか？」

（待機室だ）

「ではそちらに持っていきます」

（ん。頼む）

藤岡の返事を聞くと電話を切り、パソコンを脇に抱えて部屋を出る。

「待機室か。確か違う棟だよな。初めて行く場所だけど大丈夫か……………」

一抹の不安を呟きながらも歩を進め、報告書の印刷とパソコンの返却を済ませると、外に出て、近くの地図を頼りに特務部隊の待機室が入っている棟へ向かう。

—提出と一緒に、例の件も訊いてみるか…………—

ZCの構成員のことを考えながら目的の棟の玄関をくぐり、少し進んだ所で歩を止める。

「さて、藤岡隊の部屋はどこか……………」

今更ながら待機室の詳しい位置を訊き忘れていたことを思い出し、報告書片手に左右に伸びる廊下と正面のエレベーターを見比べながらしばし途方に暮れる。

その時、

「……………」

持っていた報告書の束が滑る様に手を離れ、不規則に宙を漂いながら左の廊下の奥へ流れていく。

「風……じゃないよなあ。これは……」

一見風に煽られた様な、しかしピンで留めたわけでもない数枚の報告書がまとまったまま吹かれる不自然な光景、加えて明らかな意思の存在を思わせるその動きに、光秋は去年の秋に自分の制帽がよく似た動きをして京都支部本舎の屋上へ舞い上がったことを思い出しながら後について行く。

玄関からしばし進んだ所で報告書は曲がり角に消え、すぐに同じ角を曲がった光秋は正面に階段を見る。

そして、

「曾我さん………」

その一段目の手前に、宙を舞っていた報告書を引き寄せる様に——というよりも念力で引き寄せた曾我を認める。

「今の、エサに誘導される本物のワンちゃんみたいね」

「お願いですから、もう少し普通に案内していただけませんか……」

イタズラが成功した微笑を浮かべる曾我に、本部への初出勤早々にカバンを引つ張られたことを思い出しながら光秋は応じる。

「今回も藤岡主任の指示ですか？」

「そつ。例によって道案内ね。こつち」

気を取り直して報告書を返してもらいながら訊ねると、曾我は頷いて階段を上り、光秋もその後についていく。

「……そういえば、体調はもういいんですか？」

「特エス舐めないでよ。あれくらい、少し休んだらすつかり治まったわよ。むしろ様子見だかドクターストップだからで出勤止められて、やり甲斐のありそうな現場に行けなかったのが惜しいくらい」

思い出した罪悪感から少し気まずさを抱えながら訊ねると、曾我は言葉の通り機会を逃した悔しさに顔を若干歪める。

「それならよかった」

「なにがよー。もうっ」

その様子に完全に回復したらしいと感じた光秋は安堵し、それに対して曾我は口を尖らせながらも笑って返す。

その間にも2人は2階に差し掛かり、廊下を少し歩いた先のドアの前で立ち止まる。

「ここがアタシたち藤岡隊の待機室よ。このところ研修で主任はいないことが多かったけど、何もなければ基本ここににいるから」

「ここが……ありがとうございます」

左右にも同じドア——いずれも札の記述からして他の特務部隊の待機室——が並ぶ

のを横目で見ながら、光秋は曾我の説明と案内に礼で応じる。

「主任、連れてきました」

「失礼します」

それを見ると曾我はドアをノックして待機室に入り、続いて入室した光秋は、正面に机の上のパソコンのキーボードに指を走らせる藤岡を認める。

「藤岡主任、報告書をお持ちしました」

「おう。ご苦労」

言いながら光秋は机に歩み寄り、藤岡が画面から顔を上げると、報告書のページをめくって例の記述を探す。

「ただ、一つ訊きたいことがあります……あ、ここだ」

記述を見つけるや光秋はそのページを開いて机の上に置き、そこを指さしながらZCの構成員の件を掻い摘んで話す。

「……」一応報告書でも触れてはおいたんですが、これ以外に何かすべきことつてありますか？」

「いや、報告したのならそれで充分だろう。少なくとも、今のお前にできるのはここまでの」

ひと通り説明を終えた光秋の問いに、藤岡はアゴを撫でながら答える。

「他にも情報提供するところを見ていた者がいたんだな？」

「はい。北大路さんと、あと軍の人たちが」

「なら、その方面からも報告が上がるだろう。俺も一応追記しておくが。その先はそれこそ裁判所の仕事だ。証言の裏をとるために呼ばれるようなことがあれば、その都度協力すればいい」

「わかりました。ありがとうございます。では、こちらよろしくお願いします」

藤岡の説明に一礼して応じると、光秋はページを閉じた報告書を机の中央に寄せる。

「あと何かすることは？」

「いや。これで全部だ。あとは最終判定も含めて俺がやっておく。でき次第連絡する」

「それなら、少し格納庫の方にいます。ニコ——00の修復をしたいので」

藤岡の返答に應じると、光秋は振り返ってドアへ向かう。

「では、失礼します」

一礼して部屋から出ると、来た道に戻って階段へ向かう。

——修復もだが、福山主任に報告書の期限とか訊けるかな？ ああそういうや、連絡先は教えてもらってたつけ。棟を出たら電話してみるか……—

そう思う間にも階段に差し掛かり、手摺りを掴んで1階へ下りる。

と、後ろから迫ってくる足音に気付く。

「?……曾我さん?」

踊り場で立ち止まって背後を振り返ると、曾我が小走りで階段を下りてくる。

「あのデツカいの出すんでしょ? アタシも行く」

「かまいませんけど……いいんですか? 仕事とか」

「別に。出勤がかかったわけじゃないし、トレーニングなら別の時にちゃんとやるし。

藤岡主任はしばらくデスクワークで手が離せないしね」

「そういうもんですか……」

呆然と返しながら、光秋は曾我と共に階段を下り、玄関をくぐって外に出る。

「すいません。ちよつと待ってください」

少し歩いたところで言うて立ち止まると、ポケットから携帯電話を出して福山に電話をかける。

「……………? 忙しいのかな?」

しばらく鳴らしても出る気配はなく、かけ直そうかと耳から離そうとした直前、やつと福山の声が響く。

(福山だが)

「あ、加藤です。すみません、変な時にかきましたか?」

(いや、少し手が離せなかったただけだ。もう済んだ。なにか?)

「今から00の修復を行おうと思って。ブロックはどこですか？」

（……そうだな。こちらで用意しておく。格納庫まで来てくれ）

「わかりました……お待ちせしました。こっちです」

応じると光秋は電話を戻し、曾我にひと声かけて格納庫へ向かう。

「今回、結構酷かったの？」

「ニコイチですか？ええまあ、DDシリーズも出たし……3機も……」

「えっ？」

その時のことを思い出して震えながら答えると、それを聞いた曾我は思わず顔を向ける。

少し歩いて格納庫の建屋が並んでいる区画に差し掛かると、光秋先導の下に2人はシャッターが開いている建屋に入る。

と、格納庫の端に佇むZCのイピクレスとNPのフラガラツハが真っ先に目に付く。

「アレって、敵が使ってたロボット？メガボディだっけ？」

「はい。回収した奴かな……」

曾我の質問に答えつつ、2機から目を離れた光秋は格納庫内に福山の姿を探す。

と、2機の足元に集まっていた人だかりの内の1人がこちらを見やり、すぐに駆け寄ってくる。

距離を詰めると、光秋はそれが福山だと気付く。

「すまない。話し込んでた」

「いえ」

「ブロックはあそこだ。ただ、修復前に破損の状態を記録しておきたい」

「わかりました」

応じると、光秋は懷から出したカプセルを格納庫の空いている方へ向け、ボタンを押してニコイチを出現させる。すぐに乗り込むと左膝を着いていたのを直立させ、そのまま福山を中心としたスタッフたちの調査が終わるのを待つ。

「そういえばあの2機、やつぱり現場から回収した物ですか？」

その間は特にすることもなく、ニコイチの視線をフラガラツハとイピクレスに向けながらふと浮かんた疑問を投げ掛けてみる。

（そうだ。比較的状态のいいものを回してもらった。コレらも追って調査するところだ）

手にしたカメラを光らせながら福山は応じ、その間にも調査を終えたことを手を挙げて示すと、光秋は先程指さされた方へニコイチの手を伸ばし、そこに用意されていたブロックを取って破損箇所塗りに塗り付けていく。

（……………ずいぶんボロボロよね。普段は鉄壁の防御力のくせに）

「人間が作ったものなら、苦戦はしてもまずやられることはないでしょうね。超能力耐性もあるし。ただ……DDシリーズと当たればこのザマですけどね……………」

下で修復中のニコイチを見上げる曾我に、光秋は苦笑を浮かべながら応じ、同時に桜やデ・パルマ、関の顔を思い浮かべる。

——本当、今回はみんなに感謝だな……今回も、か。DDシリーズ相手に一人で勝ったことなんてないしな……………そういえば……………

苦笑を浮かべたままそこまで考えると、不意に疑問を抱いた光秋は離れた所で修復を見守る——あるいは観察している——福山を見やる。

「そういうえば、福山主任。今回も2機程行動不能にしたと思いますけど、ソレもやっぱり回収しましたか？」

（無論だ。今は別の場所に保管している）

「やっぱり……………」

予想通りの返答に領きながら、光秋は手を休めることなくブロックを塗っていく。

——そりゃあ、人類にとつちや貴重なサンプルだからなあ。何かわかればいいが……………

その成果が自分にも回ってくることに多少の期待を込めると、ちようど傷も全て塞ぎ終わり、残ったブロックを元あった位置に戻してニコイチを降る。

「とりあえず、こんなところかな？」

損傷が消えて綺麗になった相棒を見上げながら安堵の声を漏らすと、傍らに歩み寄ってきた福山が声を掛ける。

「遅くなつたが、戦鬪ご苦労だったな」

「いえ。半分は自分で行つたようなものですから」

労いの言葉に、多少私情の入つた出勤だったことを思い出して若干気まづくなりながらも、光秋は頭を下げたて応じる。

直後、

「ところで、報告書は持つて来てくれたか？」

「……………あッ！」

何気ない様子で投げ掛けられた福山の一言に、バタバタしている間のそのことを完全に失念していた光秋は驚愕に目を見開く。

「すみません！まだ……………今から書いて来ますっ！」

「急かすようで悪いが、DDシリーズへの対抗策確立は急を要する。その点を踏まえた上で頼む。できれば今日中に」

「はい……………」

自分も感じていたことを整然と言われて、光秋はぐうの音も出ないままニコイチを力

プセルに収めて格納庫を後にする。

「それで？これからどうするの？」

「とりあえずまたパソコン借りて、あとはひたすら書くしかありませんね。今回初めて使った装備の具合は押さえておくべきか……………」

隣を歩く曾我に応じながら、光秋は再び報告書の作成に頭を捻ることになる。

午後6時半。

「つ、疲れたあ……………福山主任鋭いなあ……………」

疲労困憊を体現しながら格納庫を出た光秋は、本舎へとぼとぼした足取りで向かいながら呟く。

報告書は藤岡に渡した分も参考しつつ書いたので比較的早く終わったものの、直接届けに行った先で福山に根掘り葉掘り追加でいろいろ質問され、それを踏まえた全面書き直しを要求されたために、結局遅い時間になってしまったのだ。

——出来には自信あったんだけどなあ。僕もまだまだつてことか…………とりあえず、今日のお勤めはこれで終了だよな……………さて、あとは曾我さんだが……………——

思いうや携帯電話を取り出すと、曾我に電話をかける。

（あ、ワンちゃん？）

「お待たせしました。今終わりました。荷物取りに行つてくるんで何処に向かえば？」

（あ、それなんだけど……ごめん。さつき友達から連絡が来て。これから会えないかつて）

「ああ……」

（お互い都合が合わなくて滅多に会えないから……）

「じゃあ、食事の件はまたの機会に」

（ごめんなさいね。ワタシの方から言つといて……）

「友達の誘いじゃ仕方ありませんよ。お詫びなら別の日にもできるし。とりあえず、今度の土曜日でどうです？」

（じゃあ、夕方。詳しい時間と待ち合わせ場所は後で連絡するから）

「わかりました。楽しんできてください」

（ありがとつ）

礼を言うつ、曾我の方から電話は切られる。

「曾我さんの友達かあ……」

思わぬ断り理由に興味が湧くものの、今どうこうできるものでもなく、ひとまず光秋は食堂へ向かう。

—さて、夕飯なににしようか……………—

食堂でハンバーグ定食の夕食を終え、荷物をまとめて駅に向かうと、光秋はすぐにやって来た電車に乗り込む。

帰宅ラッシュは少し過ぎたためか、乗車率の高いものの座席はちらほら空いていた。もつとも、光秋に腰掛ける意思はなかった。

—……やめとこ。今座ったら立てない—

そんな軽い強迫観念を抱きながら吊り革に掴まることしばし、目的の駅で降りると、真っ直ぐ寮の自室へ向かう。

到着するやすぐに風呂を沸かし、お湯が溜まる間にエアコンを点けて部屋を暖め、背広をハンガーに掛けていつでも入浴できる準備を整える。

風呂が沸くと下着を脱いで洗濯機に入れ、体を湯船に沈める。

「ふう……………」

やや熱めの湯に全身を浸けていくらもせずに、体の奥から今まで以上の疲労感が湧き上がってくるのがわかる。

—今までは仕事で気を張ってたからよかったんだろがな……………やっぱり疲れてた

んだなあ……………」

自分の状態を改めて自覚すると、瞼が重くなってくる。

「……………っ！いかんいかんっ！……ここで寝たら溺れる……」

口元にお湯を感じて慌てて沈んでいた頭を浮上させ、それでいくらか目が覚める。

少しして風呂から出ると体を洗い、また湯船に浸かって充分温まったところで浴室を出ると、寝間着に着替えて髪を拭きながら居間へ戻る。

と、机の上に置いていた携帯電話が振動しているのに気付く。

「電話？……藤岡主任？」

画面の名前を見るや、光秋はすぐに電話に出る。

「もしもし？」

（二曹。さつき試験の正式結果が出てな。概ね可、合格だ）

「！ありがとうございますっ」

思わぬタイミングでの報告に、軽く動揺しつつも反射的に頭を下げながら礼を言う。

（でだ、明日早速、略式だが就任式を行う。8時までいつもの研修室に来てくれ）

「……了解しました。何かこっちで用意するものは？」

（特にない。いつも通り背広で来てくれ。式が終わり次第、待機室諸々の説明をする）

「わかりました」

（俺からは以上だ。じゃ、よろしくな）

「はい。連絡ありがとうございます」

光秋が礼を言っていると、藤岡の方から電話は切れる。

「そうだ。藤岡主任もあれからいろいろやつてたんだよなあ。主に僕関連のことで……僕より遅い時間まで……」

言いながら、19時半を指している携帯電話の時計を見る。

―仕事内容違うから単純な比較はできないけど、やつぱりあれくらいでバテてうたた寝してるわけにも……いや、今日はDDシリーズが3機もいたんだっ。あれくらいは仕方ないだろう―

そう思うことでどうにか自分の状態を肯定すると、携帯電話にメールが1通届いているのに気付く。

「あ。メールも来てたのか……法子さんっ?」

差出人の名前を見て微かに胸を高鳴らせながら、メールを開く。

『少し話したい。都合のいい時に電話ください。』

「電話か……いや、その前に……」

そのまま電話をかけようとした手を一旦止め、髪がまだ濡れたままだったのを思い出して首に掛けたままのバスタオルをハンガーに掛けてドライヤーを取り出す。

逸る気持ちを抑えて髪を乾かすと、ベッドの下から引き出したコタツを点けて足を入れる。

「よしっ」

それでやっと準備が整うと、法子の番号に電話をかける。

（あ、光秋くん？）

「法子さん？メール見ました。今大丈夫ですか？」

（うん。さつきから待ってたところ……アキツ!!）

「綾……元氣そうだな」

法子、そして綾。電話越しとはいえ久々に聴いた2人の声に、光秋は無意識の内に口元を緩ませ、全身の力が目に見えて抜けていくのを感じる。

「それで、話ってなんですか？」

（うん……今日の東京の騒動、ニュースで観てね……）

「あ、やつぱり……？」

薄々予想していた法子の答えに、光秋は一人納得する。

（NPとZCの小競り合い自体は連日報道されてたけど、今回は結構大きなやつだったみたいだし……）

「メガボデイもかなりの数出ましたからねえ」

（そうみたいね。それにほら、DDシリーズも出たって……）

「ああ……………」

明らかな不安を乗せた法子の声に、光秋は心配してくれたことへの喜びと、それ以上に心配させてしまったことへの申し訳なきを抱く。

（そもそもまだ研修期間の光秋くんが出てくること自体予想外だったからね。テレビで飛んでるニコイチ観た時は思わず声出しちゃったよ。ちようどお昼時で食堂に人大勢いたのに……）

「それはまた……………すみません……………」

自身の行動の思わぬ影響に、光秋はますます申し訳なくなる。

「まあ、出勤は僕が無理言って出させてもらったんですけどね。現場近くに春菜さんがいるかもしれないと聞いてたから、どうしても行かなきゃって……………どう言ったところで我儘でしかなかったんでしょーうけど……………」

（ハルちゃんのこととは私も昼休みに電話もらったけど……………その点じゃあ、友達を助けてもらったことに感謝すべきなのかな。ありがとう）

「いや、春菜さん、僕にとつてももう姉貴分みたいなのですし……………それに助けたというか、僕がどうこうする前にもう避難してたみたいだし……………」

電話の向こうで頭を下げる法子を幻視しながら、戦闘後の電話での会話を思い出した

光秋は自虐の苦笑を浮かべる。

と、

（姉貴分、かあ……）

「？………法子さん……？」

心なしか低くなつた法子の声に妙な悪寒を感じ、光秋は恐る恐る訊き返す。

（私の他に姉貴分ねえ……？）

「いや、別に深い意味はないですよ。春菜さんはもともと僕より年上だし、なにかと氣に掛けてくれるのがお姉さんぽいなあつてだけで……法子さんだつてそうしてくれたでしょう？」

（そうだけどねえ……『姉貴分』つて深い意味ないんだあ？）

「いや……その……」

どうにも危うい方向に転がりだした会話に、光秋は未だ冷氣の残る居間でなぜか薄っすら汗をかく。

と、

（ごめんつごめんつ。からかうのが過ぎたよつ）

「えっ……？」

打って変わつて笑みを漏らす法子に、光秋は戸惑いながらも危機から脱したと理解し

て安堵する。

「……冗談だったんですかっ？」

（冗談っていうか、なんか面白くないなって思ったのはホントだけだね。思った以上に動揺するからさっ）

「勘弁してくださいよお……………」

笑いながら答える法子を非難しながらも、光秋の顔にも自然と笑みが浮かぶ。

（ちよつとアキッ！法子とばっか喋り過ぎっ!!）

「悪い悪いっ。お前さんともご無沙汰だなあ」

声だけでふくれっ面を作っているとわかる綾も加わり、光秋の笑みはますます濃くなる。

（あたしだって心配したんだよ……）

「わかってる。ありがとなっ」

（……あたしたちがいなくて大丈夫だった？怖くなかった？）

「そりや怖かったよ。DDシリーズが3機も出てきた時なんて、生きた心地がなかった。改めて振り返ってみれば、よく生きてこうして電話できてるって思えてくるし……………ただ、今回は僕の我儘の結果としてそうなったわけだし、それに付き合ってくれた人たちもいたしな……」

言いながら、光秋の脳裏に桜や菫、北大路の顔が浮かぶ。

（付き合ってくれた、ねえ……？）

「変な意味じゃないからな」

（わかってるっ………まあ、大丈夫ならよかったよ）

「うん。ありがとうっ」

不貞腐れた顔から安心した顔へ。そんなふうには忙しく表情を変える綾を声の向こうに見ながら、光秋は帰路からこっち抱えていた疲労感がいくらか和らいでいくのを実感する。

——ああ、やつぱり、法子さんと綾と話すと、いいなあ………——

今の気持ちを胸の内に明文化すると、不意に先程の藤岡の電話の件を話したくなる。

「あ、そういうええさつき電話があつて、研修試験合格だつて」

（よかったじゃない！……おめでとうっ！）

「ああ。これでいよいよ、特務部隊主任就任つてわけだ」

法子と綾の賛辞に、光秋は若干苦笑を浮かべながら応じる。

「当然、今日みたいな機会もこれから増えていくわけだけど………部下になるのはいずれもよくできた子たちだ。あとは僕が研修で……もつと言えば今までの仕事で学んだことをどれだけ活かせるかってことで……要は、腕の見せ所だなっ」

何かの拍子に顔を出そうとする不安をどうにか抑え込みつつ、努めて前向きに告げる。

しかし、

(……………)

「……………あの、法子さん?……………綾……………?」

話に乗って気の利いた返事の一つもしてくれるだろうという予想とは逆に返ってきた沈黙に、光秋はさつきまでとは違う意味で不安になる。

(……………私、近い内にそっちに行くからさ)

「?……………いきなりなんです?この間もそんな話したけど……………」

(流石にすぐは無理だけども、この前も言ったように、今休みの調整してるところだから、絶対行くから。だから……………その時、もつといろいろ聴かせて)」

「……………わかりました」——ああ、見抜かれたか……………」

藪から棒な宣言と、どこか安心させるような声音に、光秋は先程の発言の裏にあった強がりを見抜かれたと察し、法子の鋭さに感服すると同時に、自分のことをわかってくれたことに対する微かな喜びを覚える。

(だから、それまで、ね……………)

「わかってるよ。話すには相手が必要だからな。ちゃんと迎えられるようにしておく

………それこそ、D・D・シリーズの大群に遭つてもなつ」

続く綾の弱々しい呼び掛けに、京都での別れ際の会話を思い出しながら応じ、自分の中の決意を新たにする。

(うん……………)

それに綾、そして法子が小さく応じると、法子が潮時を察した様子で言ってくる。

(じゃあ、その時に……………明日も早いし、今日はこれで)

「ですね。電話ありがとうございました」

(うん。じゃあね……………気を付けて……………)

「ん」

法子の別れと綾の気遣い、2つ分の領きを返すと、光秋は電話を切つて携帯電話をコタツの上に置く。

「やはや、まさか主任就任前夜にして、また気持ち改める機会を得るとはな……………」

一連の会話に感慨を抱きながら呟くと、電話の前よりも胸の内が軽くなっていることを改めて実感する。

「やつぱり、あの姉妹と話すと違うな……………さて、寝る前にちよつと」

時計を一見して寝るまでまだ時間があることを確認すると、机の上に置いていた先日菫に薦められたマンガ——『ヒーロー候補生』1巻を手にとって読み始める。

—んー……………何度読み返しても面白いな。今度2巻以降も買おうかなあ……………？—
すでに1回読破しているにも関わらず飽きることもない面白さに感心しつつ、就寝前
の安息のひと時を堪能する。

そして、午後10時。

「……………さて、そろそろ」

机の上の時計を確認してマンガを閉じると、光秋はコタツやエアコンを切って戸締り
を確認し、布団に足を入れる。

—明日からまた忙しくなるからな。今夜はしっかりと寝ないと……………法子さんと綾の気
持ちに応える為にもな—

脳裏に一瞬二人の顔を浮かべると、照明を消して布団を被った。

翌日——3月1日火曜日午前8時半。

「……………」

この1カ月半、すっかり行き慣れた研修室で、光秋はいつにない独特な緊張に包まれ

ていた。

「では、略式ながら就任式を行う。加藤光秋三尉」

「はいっ！」

部屋の前に立つ藤岡に新しい階級で名を呼ばれると、これもすっかり定位置になった最前列中央の机から立ち上がり、その単純な動作の間にも心なしか肩に力が入った我が身を自覚する。

それでも脚を動かして藤岡の許に歩み寄り、踵を揃えて直立不動の姿勢をとる。

それを見て藤岡は近くの机の上に置いていた辞令を取り、両手で丁重に持ったそれを光秋に差し出す。

「貴官の三尉昇格、および特務部隊主任就任をここに認める。今後もESOの一員として頑張ってくれ」

「はいっ。藤岡主任に教わったことを活かします」

軽い激に応じると、光秋は差し出された辞令を両手でしっかりと受け取って脇に抱える。

そこそこ立派なファイルに挟まれたA4程の紙。重量を考えれば本当に大したことのないそれが、今は実際よりもずっと重く感じる。

——ああ。これで僕は、短い間とはいえあの三人——桜さん、董さん、北大路さんを背

負うことになったんだなあ……………

唐突にそんな言葉が浮かぶと同時に、感じる重さの理由を漠然と理解すると、部屋の隅に控えていた曾我の拍手が目に入る。

……………やつてやるさねっ！

気を抜けばさらなる不安が湧いてきそうな曾我の挑発的な笑みに、昨夜の伊部姉妹との会話——特に近い内の再会の件——を思い出すことで対抗しながら、光秋はその想いを表す様に辞令を持つ手に力を込めた。

午後0時。

就任式以降、藤岡から待機室を含めた諸々の説明を受けた光秋は、頭に若干の鈍痛を抱えながら食堂へ向かう。

——晴れて特務部隊主任になったものの……………まだまだ覚えることはあるってことか……………

午前中一杯を使って詰め込まれた様々な情報を思い返ししながら小さく溜め息を吐くと、醤油ラーメンを買って空いている席に腰を下ろす。

——にしても、僕が三尉……………あまつさえ主任か……………辞令や更新された身分証こそ見た

し、その時は責任感とでもいうのか、“重い” 感じは覚えたけど……時間を開けて改めて考えると、まだ実感薄いなあ……………」

今朝渡された辞令や、待機室に移動してからもらった現在の役職に直された身分証明書、その時感じたことなどを冷静になった今の感覚で思い返しつつ、空腹の体にラーメンを運んでいく。

――主任、かあ……………」

そこでふと、入間主任の顔が浮かぶ。

――正式に就いた以上、改めて挨拶してきた方がいいかな？ 考えようによっちゃ、入間主任が面倒見てた子たちを預かるようなもんだし……………」ちやうど説明もひと通り終わって午後は空いてるしな。行ってみるか――

今は暇でも、時間が経てばまた忙しくなる。そんな思いも合わさって食後の予定を決めると、厚めのチャ―シユーを頬張る。

昼食を終え、歯を磨くと、光秋は医療棟へ向かう。

「えつと……………」つちだったよな……………」

以前董と来た時の記憶を頼りに棟内を進んでいくと、不意に再び空手で来てしまった

ことを思い出す。

— やつちやつたなあ……でも、今から買いに行つてゐる時間も………いつか。それはまたの機会に……—

多少の罪悪感を覚えつつもそう断じ、廊下を進んで行くと、入間の病室の前に着く。

「失礼します」

ノックして告げると、ドアを横にずらし、病室に入る。

「あら、加藤さん」

「突然お邪魔してすみません」

ベッドの上で読んでいた雑誌を下ろしながら応じる入間に、光秋は頭を下げながら歩み寄る。

「この度、無事特務部隊主任に就任することになりました、前任者に挨拶をと思いまして」

「ちようどよかったです。少し待ってくださいね」

「？」

訪問の理由を説明するや、入間はベッド横の棚の引き出しに手を伸ばす。

「確かこの間新次郎しんじろうに持つてきてもらつて………あつた」

— シンジロウ？—

知らない名前に光秋が首を傾げる間にも、入間は引き出しから取り出した大きめの茶封筒を差し出してくる。

それを受け取った光秋は、中に数冊のノートが入っているのを確認する。

「これは？」

「あの子たちに関する私なりの記録です。といつても、殆どは能力関係ですけど。あの子たちの主任をするに当たって、役に立つかと思ひまして」

「！ありがとうございますっ！」

全く予想していなかった贈り物に驚きつつも、光秋は封筒を両手でしっかりと持ち直しながら深く頭を下げる。

同時に、訪ねておいて何も持ってこなかったことへの罪悪感が蘇ってくる。

「すみません、こんな大事な物までいただいておきながら……また手ぶらで来てしまつて……」

「いいんですよ。加藤さんも忙しいでしょうし。昨日まで研修、おまけにNPとZCの大規模衝突ですからね」

「まあ………」——あくまで忘れてただけなんだけどなあ………」

入間の気遣いに、ますます肩身が狭くなる。

「それに、このノートを今必要としているのは加藤さんです。動けない私が持っていて

も仕方ありません」

「それは……………いえ、改めまして、ありがとうございますっ！」

自身にとっては辛い現実であろうことを平然とした様子で告げる入間に一瞬返事に困りながらも、光秋は姿勢を正してもう一度深く頭を下げる。

「早速待機室に戻って読んでみようと思います」

「そうしてください。あの子たちのことを少しでも知っていただければ」

「努力します。では、これで。慌ただしい見舞いで申し訳ありません」

入間に詫びを入れると、光秋は部屋を出て速足で来た道に戻る。

―御膳立ての礼は、実際の仕事で返す。その為にも、せっかく授けてくれたものは活用しないとな……………

封筒、その中のノートを一見しながら、新しい仕事に対する気合いを改めて入れる。

―ただまあ……………見舞いの失敗は、それはそれでいつか改めんとなあ……………

医療棟から今朝宛がわれた待機室に戻ると、光秋は机に腰を下ろして早速封筒の中のノートを開く。

「……………流石というか、凄い情報量だなあ」

パラパラめくっただけでも途切れることのない文章量に圧倒されつつ、手始めに昨日の出勤で最も活用頻度の多かった桜に関する記述から読んでいく。

午後からは急ぎの用はなく、緊急の要件も入らなかったことから、長い時間に渡って集中して読むことができた。

そうして気が付けば、時刻は午後5時を回っていた。

「んっ……………」

ちやうど3人の記述をひと通り読み終えると、光秋は両腕を挙げて体を伸ばす。

―研修でも習いはしたが、念力―触れずに物を動かす、物の動きに干渉できる力、やっぱり応用が利くんだな。攻めてよし、守ってよし。桜さんはそれに加えて出力自体高いし……惜しむらくは、細かなコントロールに難あり、か……………

ノートから目を離して頭の中で記述内容を要約しながら、昨日の戦闘の記憶も参考にしつつ今後の活用について思案してみる。

と、ノックもなしにドアが開き、制服の上にコートを羽織った桜、堇、北大路が待機室に入ってくる。

「ちーっす」

「3人ともつ、来たのか……」

一行を代表した桜の挨拶に、光秋はやや驚きを浮かべつつ、机から立って少女たちの許に歩み寄りながら応じる。

「なんだよ？来ちゃいけなかった？」

「いや、そういうわけじゃない。ただ、来ると思ってたからさ。少しびつくりした」

「今日から光秋さんが正式に私たちの主任ですから、なにか挨拶に行った方がいいかなって」

「なるほどな。ありがとう」

桜と董にそれぞれ応じると、光秋は礼を言いながら無意識の内に董の頭に手を置いていた。

「ちよつ、光秋さんっ！」

「ん？……ああ、すまん。つい」

途端に顔を赤くした董に、光秋はハツとしつつすぐに手を引つ込める。

「……………いいなあ」

「なんだ？桜さんもしてほしいのか？」

「！べ、別につ!?ガキじゃあるまいしっ！」

——いや、ガキだろう……?——

何故か狼狽しながら否定する桜に、思わず心の中で反論する。少なくとも声に出すとさらに機嫌を損ねそうなのはわかったので、漏れないように口に注意を払いながら。そうしながら、ドアのそばに控えめに佇む北大路に顔を向ける。

「……………北大路さんも来てくれたのか」

昨日の別れ際の衝突を思い出して気まづくなりながらも、とりあえずひと声掛ける。

「……………すでに行く方に2票でしたから。私だけ寮に一人でいるのも……………」

「そうか……………ありがとう」

相変わらず壁のある態度ではあるものの、無視される可能性も考えていた光秋には返事がもらえただけでもありがたかった。

「……………」

——とりあえず、平常通りってことかな?——

礼に対して明後日の方を向いて応じる普段の北大路の姿に、昨日の件は響いていないと感じてさらに安堵を覚える。

「とにかく、今日から晴れてアタシ等の主任になったんだ。ひとつよろしく頼むよ」

「入間主任が戻るまでってことですけど、よろしくお願いします」

……………なんか、ようやく主任になったって実感が湧いてきたな——

腕を組む桜と頭を下げる董の姿を見てそう思うと、自分でも今更と思える感慨に光秋は口元が緩む。

「ああ。ここにこそ、よろしくお願いしますっ！」

口元から広がった清々しい笑みを顔一杯に浮かべながら、3人に向かって深く頭を下げてみせる。

——『加藤隊』、ここに結成だなっ！——

不審事件捜査編

99 手探りの主任業

3月2日水曜日午後6時。

今日の勤めを終えた光秋は、食堂で夕食の揚げ物定食を食べていた。

―入間ノートのおかげで、桜さんたちの能力の把握は進みつつある……と思う。が、やっぱり実践第一というか、どこかで実際に情報に基づいた運用を試したいところだなあ……今週末辺り、ちよつと頼んでみるか……？―

せつかくの休みを削るようで悪いとは思いつつも、唐揚げを頬張りながら半分真剣に検討してみる。

と、上着のポケットに入れていた携帯電話の振動に気付く。

「……竹田二尉？」

開いた画面に約1カ月半ぶりの名前を見るや、通話ボタンを押して携帯電話を左耳に当てる。

「もしもし？」

（よう、加藤！元氣してつか？伊部から聞いたが、昨日晴れて主任になったそうじゃねえ

か)

—ああ、竹田二尉だ……—

久々に聞く快活な声とやや一方的な話し方に、光秋は思わず懐かしさを覚える。

(おい、竹田。加藤の方の都合も訊いてから話せ)

「!小田一尉もおられるんですか?」

電話の奥から聞こえた咎める声に、光秋はまたも懐かしくなりながら声を出す。

(おう。三佐もいるぞ)

(加藤、元気か?)

「三佐っ!」ご無沙汰しています。おかげ様で元気にやらせてもらってます!」

竹田の声に続いて電話から聞こえてきた藤原三佐の声に、電話越しとわかっていながら頭を下げる。

(それで、お前今電話して大丈夫なのか?)

「あ、はい。食堂で夕飯食べてたところで」

(ならオレたちと一緒にやねえか。どうよ、本部の飯は?)

小田の確認に応じるや、竹田が訊いてくる。

「どう、と言われても……本部とそんなに差はないかと……ところで、法子さ——伊部二尉の声がさつきから聞こえないんですか?」

（ああ、あいつはまだ仕事だ）

「え？残業ですか？」

（残業つつうかなあ……書類とか諸々の細かい仕事片付けてんだよ。今月どうしても一回休みとりたいからって）

「ああ……」

竹田の説明に、光秋は一昨日の夜の電話を思い出して納得する。

と、声が小田に代わる。

（それでどうだ、特務部隊主任の仕事は？）

「まだ就任して2日目なのでなんとも……一応、前任の方から特エスの子たちの情報をもらって、今把握に努めるところです」

（そうか……すっかり指示する側だな）

「からかわないでくださいよ。実感すらまだ中途半端なんですから……」

若干の笑みを含んで言ってくる小田に、光秋は情けなさを承知で軽く反発する。
と、今度は藤原が電話に出る。

（まあ、何はともあれ、今後はこれまで以上に忙しくなるだろう。昨日の件もあるしな）
「……」

言われて光秋は、工場地帯でのNPとZCの抗争、あまつさえメガボディを積極的に

用いてのそれを思い浮かべる。

（お前からすれば慣れぬ土地で、その点でもいろいろ苦勞するだろう。だからこそ、体には気を付けてな）

「……はい。死なない程度に頑張らせていただきますっ」

典型的だがこれ以上ない気遣いに、光秋は意識して覇気のある声で返す。

（では、農等はこれだな）

（ニコイチの新しい活躍期待してるぜっ！）

（無理せずにな）

「はい。電話ありがとうございます」

藤原、竹田、小田にまとめて返すと、向こう側から電話は切られる。

—離れてからまだ2カ月経ってないはずなのに、3人の声がずいぶん懐かしく感じるようになって……—

久しぶりに聴いた藤原たちの声に感慨を抱きながら、光秋は携帯電話をポケットに戻す。

—できれば法子さんと綾の声も聴きたかったが、それこそ贅沢だろうな。そもそも月末には『声を聴く』どころか、『会える』んだし、そう思えばな……—

つつい抱いてしまう不満をそう思うことで割り切ると、箸を持ち直して食事を再開

する。

食事を終え、寮に帰宅すると、光秋は風呂にお湯を入れ始める。

「……………こんなところかな。まだ肌寒いしなあ……………」

蛇口から流れる湯の温度を触って確認すると、居間に戻って適量溜まるのを待つ。
と、帰ってきてすぐに机の上に置いた携帯電話が振動する。

—また電話？ 多いな今日…………—

思いつつ、手に取った携帯電話の画面を開く。

「タツカー中尉？……………もしもし？」

そこに表示されていたこれまたご無沙汰な名前に驚いたのも一瞬、すぐに通話ボタンを押す。

（よう、ジャップ。元気か？）

「それ、こっちの台詞な気がするんですが……………」

思わずそう言ってしまう程に、電話の向こうのタツカーの声は疲れ切っていた。

「なにかあったんですか？」

（いや、なに。ちよつと面倒な仕事やっててな）

「仕事？」

その言葉に、光秋は昨今のNPとZCの抗争を連想する。

「どつか遠い地域の応援かなにかですか？　そういうえば最近、武装勢力同士の抗争も激しいし」

（いや、そういうのとも違う。寧ろ俺としては、そっちの方がまだ気が楽だったかもない……）

「違う……？」

返ってきた返答に、光秋はしばし首を傾げるものの、タツカーの態度にあることを察する。

「もしかして、機密に属することですか？」

（まあな）

「失礼しました。ではこの話はこれで」

そういうことならばタツカーにこれ以上訊くわけにもいかず、すぐに話題を変える。

「それで、中尉はなんで電話してきたんですか？」

（なんでとはご挨拶だな。お前の出世祝いだよ。ESOの花形職——特務部隊主任になつたんだらう。知り合いとして一言言おうと思つてよ。おめでとう）

「！　ありがとうございますっ」

思わぬところからの祝辞に、光秋は反射的に頭を下げる。

「……あれ？でも僕、中尉に主任のこと話しましたっけ？このところバタバタしてたからその辺の記憶が曖昧で……確か、研修中に古谷大尉には会いましたが……？」

（隊長に？いや、それは知らないが、俺はさつき上杉から聞いた）

「上杉さんから？」

（上杉は竹田から聞いたって言ってたけどな）

「ああ。そういう伝達でしたか……」——こういうのを『口コミ』っていうのかな？——

明らかにになった情報伝達の過程に、光秋は胸の中で手を打つ。

（まあなんだ、すでに何度か言われていると思うが、頑張り）

「はい。中尉も無理のない範囲で」

（ありがとよ……じゃあな。俺は寝る）

「おやすみなさい」

言うのとタツカーの方から電話切れ、光秋は画面の時計を確認する。

「まだ7時だつていうのに寝るって、相当な激務なのかな………？」

結局訊かなかったタツカーの今の仕事に思いを馳せていると、遠くから聞こえる水の音に気付く。

「！いっけねっ。風呂入れてたんだ」

言うやすぐに風呂場に駆け、浴槽から溢れる寸前のお湯を止めた。

3月3日木曜日午後0時15分。

あまりの混み具合に食堂での昼食を断念した光秋は、本部近くのコンビニでおにぎりを3つ程とお茶を買ってくると、それを待機室の机で頬張りながら昨日から抱いていた懸案について考えていた。

―桜さんたちの実践、やつぱ一度やつてみた方がいいよなあ……週末時間あるか後で訊いてみるか……―

そこまで考えると、不意にノックの音が響き、曾我が部屋に入ってくる。

「あら、お食事中でしたか。加藤三尉」

「……今、昼休みですよ？」

先日までとは打って変わって丁寧な言葉使いで話す曾我に、光秋は多分な違和感を覚えつつ、口の中に残っていたおにぎりを呑み込んで応じる。

「それでも、勤務中のようなものですからね。せめて勤務時間を終えるまでは、公私の区別はつけな」と

「それは、まあ……」

そう返されては、光秋に反論の言葉はなく、渋々首肯する。

——もつとも、この間まで人を『ワンちゃん』って呼んでた人が、急に低姿勢な態度をとつても、違和感しかないんだよなあ……………」

特務部隊主任就任に伴う三尉への昇格と、それによる准尉相当の曾我との上下関係の変化、それによる——少なくとも勤務中の——接し方の変化は理解しているものの、それが光秋の率直な感想だった。

その間にも、曾我は机に歩み寄ってくる。

「それで、曾我さんどうされたんです？ 昼休みに」

「いえね、三尉が主任就任以降、なにかに悩んでいる様子だったので」

「……………ああ」

はじめこそなにを言われたのかわからなかったものの、すぐに桜たちのことと察する。

「悩みつて程じゃ…………ただ、部下になった子たちの能力を正確に把握したいと思つて、週末にでも時間とつてもらおうかと考えて……………というか、夕方にでも連絡しようかと思つてたところです」

「もうそこまで？ 仕事熱心ですねえ？」

「いろいろな気に掛けてくれる人がいますからね。それに応えたいって想いはあります。

そうであっても、ただでさえ畑違いの分野、試験も及第点つてとこでしたからね。念には念をというか……」

入間や伊部姉妹の顔を浮かべながら応じると、光秋は残っていたおにぎりを頬張る。会話中に物を食べるのは失礼だと思わなくもなかったが、昼休みの時間が限られている以上、どうしてもせつかちになつてしまう。

「……………」

その様子を見ながら、曾我しばし考える顔を浮かべる。

そして、

「それ、ワタシも協力しましょうか？」

「……………曾我さんが？」

唐突に告げられた申し出に、光秋はお茶で口の中のおにぎりを流し込みながら訊き返す。

「はい」

「でも協力つて、具体的にどうするんです？」

「特エス目線でのアドバイスとか、模擬戦の相手とか、いろいろできると思いますが？」
「確かに……………いてくれればなにかと助かりそうだけど……………いいんですか？そこまでしてもらつて。あと、予定とか」

「以前お話したように、三尉にはお世話になつてますし……無能な主任の下で働く特工
スほど可哀そうなものはいませんからね。それを少しでも防げると思えば」

「手厳しいなあ……今のところ事実なんでしょうが……」

口調こそ丁寧だが包み隠さない曾我の返答に、光秋は苦笑を浮かべる。

「それに予定については、土曜日にやってくればこちらも都合がいいし」

「土曜日？……ああ、そうか」

続く曾我の言葉に、光秋は工場地帯での騒動の後に交わした会話を思い出す。

「そういうえば、お詫びの食事その日の夕方でしたね。確かに実践の後、その足で行けば

……………」

そこまで考えて、光秋はあることを思い付く。

「そういうことなら、子供たちも食事に連れて行つていいですか？」

「ワタシは構いませんよ。三尉の出費が増えますけど？」

「それくらいは前提ですよ。ありがとうございます」

応じつつ、思い付きを了承してもらつた光秋は頭を下げる。

「じゃあ、詳しいことは董さ——柿崎さんたちと話してみないとわからないけど、とりあ
えず土曜日に。詳しい時間が決まるか変更があればこちらから連絡します」

「了解。週末を楽しみにしています」

若干挑む様な笑みで応じると、曾我は部屋から出て行く。

それを見送った光秋は机の上のおにぎりの包みや空のペットボトルを片付けながら、少女たちのことを考える。

——とりあえず、これで休みを削ってしまったお詫びもできるかな？ 夕方董さん辺りに電話して……財布も補充しておこうかな？——

そして、午後6時。

「……さてと」

腕時計を見て勤務時間が終わったのを確認した光秋は、上着のポケットから携帯電話を出して董にかける。

（もしもし？）

「あ、董さん？ 今いいか？」

（はい。どうされました？）

「実は今週末、土曜日にな、君たち3人の能力を詳しく把握したくて、それでちよつと時間割いてほしいんだが、大丈夫かな？」

（私たちの能力……ですか？）

「ああ。今後のことも考えて、今の内に実演してもらって、僕が詳しく知っておきたいんだけど……休みだし、もう予定あつたかな？」

（私は大丈夫ですけど……）

「桜さんと北大路さんは？近くにいるかな？」

（あ、私が訊いてみます。一旦切るので、少し待っててください）

「わかった」

応じると、光秋は電話を切り、座っている椅子の背もたれに体を預ける。

――董さんの方から申し出てくれたのは、正直ありがたかったな。桜さんはまだしも、北大路さんにはまだ苦手意識があるから……――

胸の中で赤裸々に呟きながら待つことしばし、再び電話がかかってくる。

「もしもし？」

（光秋さん？2人にも確認しましたけど、土曜日は空いてるそうです）

「わかった。じゃあ、9時半頃に正門前に集合。2人にもそう伝えてくれるか？」

（わかりました）

「じゃあ、当日よろしく」

（はいっ。よろしくお願ひします！）

董の元気のいい返事を聞くと、光秋は電話を切る。

「さて、曾我さんにも一報入れとくか……あつ、いけね。帰り食事に誘うのも忘れてた……メールしとくか」

小さなミスを思い出してすぐに董宛にメールを送ると、そのまま曾我にも土曜日の九時半集合のメールを送る。

「こんなところかな？……さてと、当日のメニュー考えとかないとな……」

呟きながら席を立てて荷物をまとめ、食堂へ向かう道すがら、光秋は入間からもらったノートの記事を思い浮かべる。

3月4日金曜日午前10時。

昨夜から週末の実践について考えていた光秋は、その一環として福山の許を訪ねていた。

「福山主任っ！」

「なにか？」

整備区画の建屋の1つ、そこに収まるメガボディ・ゴーレムの足元に福山の姿を認めると、呼び掛けながら駆け寄る。

「すみません。実は頼みがありまして……」

そうしてここに來た目的を告げ、福山に少々協力してもらいながら明日の準備を進める。

3月5日土曜日午前9時20分。

一昨日の連絡に従つて本部正門前に着いた光秋は、周囲を見回してまだ誰も来ていないことを確認する。

「ま、まだ10分あるしな……」

腕時計を確認しながら呟くと、斜め掛けしたカバンを提げ直して少女3人と曾我が來るのを待つ。いつもよりやや膨らんだカバンは、僅かだが右肩を圧迫する。

「……………」

3月に入つて気温は上昇傾向にあるとのことだが、放射冷却の影響か、晴天の割に吹き付ける風はまだ冷たく、スーツの上にコートを着けていてもそこそこ堪える。

そうしてスーツ下を薄つすら粟立たせて待つことしばし、聞き覚えのある声の呼び掛けに、光秋は歩道の先を見やる。

「光秋さん!」

「おお。おはようございます」

学校の制服の上にコートを羽織り、同じ服装の桜と北大路を伴って駆けて来る董に、光秋は軽く頭を下げて挨拶する。

「おはようございませ……すみません、お待たせして……」

「いや、僕もさつき来たところだ。それに、時間はちょうどいいし」

気まずそうに謝る董に、光秋は9時半を指す腕時計を確認しながら応じる。

「だから言ったじゃん。そんな焦らなくてもいいって」

「光秋さん待たせるのも失礼でしょ。それに、そう言う桜だって行きたそうにもじもじしてたくせに」

「なっ！ し、してないってのっ!!」

眉間に皺を寄せる董とムキになつて応じる桜を横目に見ながら、光秋は辺りを見回す。

「あと来てないのは曾我さんが……まさか、約束の時間送り間違えたか?」

未だ姿を見せない曾我に不安を覚え、光秋は携帯電話を出して送ったメールを確認しようとする。

直前、提げていたカバンの紐が本部の敷地の方へ引っ張られる。

「そーがーさーん?」

本部務めになつて以降すっかり馴染んだその感覚に、光秋は紐に巻き込まれて引かれ

るままに曾我の名前を呼ぶ。

「おはようワンちゃん。柿崎さんたちも」

それに普段通りの調子で応じながら、本舎の陰から藍色のコートに身を包んだ曾我が現れる。

「おはようございます……今日は前と同じなんですネ？口調」

「だって、今日のこれは仕事つてわけじゃないしね。あくまでワンちゃんが自主的に始めたことに、ワタシが勝手に付き合うだけだもの。公私の区別は付けないと、ね？」

引つ張られながら挨拶を返して素朴な疑問を投げ掛ける光秋に、曾我は口調こそ違えど今日の件の協力を申し出てきた時と同じ調子で応じ、近くまで引き寄せたところでようやく解放する。

「ま、それはそうですが」

曾我のこの行為にすっかり慣れた様子で返すと、光秋は若干ズレた紐の具合を調整する。

「ところで、今日のカバンやけに重かったけど、何が入ってるの？」

「そりゃあ、入間主任からもらったノートに、僕なりの理解をまとめたメモ、今日の実践のメニュー表に……あと諸々、実践に必要な小道具をね」

いつもよりやや膨らんでいるカバンを見やりながら問う曾我に、光秋は昨日の福山と

のやり取りを思い出しながら応じ、ちようど後を追ってきた葦たちも合流する。

「えっと、曾我さんだっけ？ウチの主任に何すんだよ！」

「落ち着け桜さん。ちよつとふざけたただだよ。ノリはともかく、もう何度もやられて慣れた」

「とりあえず、特エスの信用は得てるみたいね？」

2人の許に駆け寄るや曾我を睨みながら噛みつく桜、それを光秋はなだめ、曾我は感心した様子で呟く。

「一応ですがね。一人例外もありますが……さ、全員そろったんだし、制服に着替えて運動場に集合。僕は先に行つて準備してるから」

今日も仏頂面を浮かべる北大路を見やりながら返したのも束の間、曾我たちに指示を出した光秋は、一足先に先日曾我と利用した運動場へ向かう。

道中で鍵を借り、それで運動場の扉を開けて中に入る。

入り口近くのスイッチを押して場内の照明を点けると、光秋は隅にカバンを置いて腕時計と携帯電話を仕舞い、入れ替わりに今日のメニューが書かれた紙を取り出して桜たちが来るまでの時間潰しも兼ねてその内容の最終チェックを行う。

そうして待つことしばし、ESOの制服に着替えた桜たちがやって来る。

「お、来たな」

「お待たせしました」

メニューから顔を上げた光秋に董が代表して応じると、光秋はやって来た4人を見渡す。

「じゃあ早速……と、その前に準備体操しよう」

「えー? いいじゃんメンドクサイ」

「そう言いなさんな。これから激しい運動もするんだ」

口を尖らせる桜を光秋がなだめていると、曾我も頷きながら言う。

「ワンちゃんの言う通りね。変なところって痛い思いをするのは自分なんだから」

「ちえ。わかったよ」

「じゃあ、みんなぶつからない程度に離れて」

桜が渋々応じると、光秋指示の下、全員羽織っていたコートを運動場の端に置いて互いに距離をとり、体全体をほぐしていく。

各部をひと通り動かし、深呼吸で息を整えると、光秋はメニューを改めて手に取って一同を見回す。

「じゃあ改めまして、本日はよろしく願います」

「よろしくお願いしますっ！」

光秋の軽い挨拶に、董が元氣よく応じる。

「頼もしいな董さん。それで、まずはウォーミングアップを兼ねて、君たちの能力、その基本部分を一度きちんと見ておきたい。まずは桜さんから」

「アタシ？へっ！OK！」

一番手を指名されて驚いたのも一瞬、桜はやる気満々な顔を浮かべる。

「まあ、本当に基本的な部分からなんだけどな。桜さんは確か、サイコキノだったな？」

「レベル9のねっ」

「てことは、浮遊もできると」

「余裕！余裕！」

言いながら、桜は2階分の高さがある運動場の天井まで舞い上がり、そのまま遮る物がない吹き抜けの中を気ままに飛び回ってみせる。

「これで外の広場でも駆け回ってたら、はしゃいでる犬みたいだな……」「OK。降りてきてくれ」

その光景に広い場所に連れて行った時の飼い犬の反応を重ねながら呼び掛けると、桜は矢の様に一直線に光秋に向かってきて、2メートル程手前で一気に減速、

「おとと……」

多少よろけながらも手を伸ばして届くくらいの所に着地してみせる。

「どうよっ？」

「見事なスピードだな。そこから念力の出力自体かなり高いことも伝わってくる」

「当然！力勝負でアタシに勝てる奴はまずいないだろうね」

「と同時に、入間主任も懸念されていたコントロールの不足も見取れた。実際、着地の時よろけてたしな」

「うっ……」

ゆっくり観察してみても実際にわかったこと、それこそ長所・短所を包み隠さず述べる光秋に、それまで得意気に胸を張っていた桜の表情が曇る。

「あ、あれは——」

「いや、いい。今日はあくまでも君たちの現状を確認するのが目的だからな。桜さんに限らず、〃今の君たち〃を包み隠さず見せてくれればいいから」

慌てて反論しようとする桜を制しながら、光秋は持参したノートに桜の能力に関するメモを記していく。

「わ、私たちのこと、包み隠さず……っ！」

「？」

その傍らで何故か顔を赤くする輩に首を傾げつつ、ひと通りメモを終えた光秋はアゴ

を撫でながら考える。

—この高出力、より精度の高い運用ができればより使い勝手がよくなるよな。今度卵でも持つてくるか……いや、詳しいことはまた後として—

そこで一旦考えを中断すると、今度は董を見やる。

「じゃあ次、董さん」

「！は、はいっ！」

呼び掛けに戸惑いを見せたのも一瞬、董はすぐに赤面を引つ込め、土気旺盛な返事をする。

「董さんは確か、テレポーターだったな？」

「はい」

「人間主任のノートによると、1回で移動できる距離が世界でも五本の指に入るとか」

「はい。去年の検査でそういう記録が出たって。頑張れば沖縄から北海道まで1回で跳べます」

「若干10歳でそんな記録？すごいじゃない」

光秋の確認に応じる董の返答に、曾我が目を丸くする。

『頑張れば』……つまり、やればそれなりに負担になるわけか」

「それは………」

しかしあくまで平然とした態度でさらに確認する光秋に、董は口籠ってしまふ。

「桜さんの時も言っただけ、今日は『今の君たち』を確認しに来たんだ。包み隠さず、正直に教えてくれ」

「……………はい」

膝を曲げて目の高さを合わせながら語りかけると、董は重そうな口を開いてくれる。

「検査の時もそうでしたけど、1回にそれだけ跳んだ後、凄く疲れてしばらくろくに歩くこともできませんでした……」

「去年って言ったよな。記録出したのまだ9歳の頃？」

「いえ、10月頃にとったので、もう10歳になってました。私9月生まれなので」

「その時の格好は？」

「今のこの、ESOの制服でした」

「それだけ？」

「はい」

気になったことをひと通り訊き終わると、光秋は再びアゴを撫でる。

「てことは、董さん自身の体も含め、ほぼ必要最小限の質量だけで跳んだってことだな。テレポートは一度に移動させる質量が増えるに連れて、最大移動距離が縮むと習ったが……身一つで日本列島縦断したとなると、比較的近距离なら結構重い物——例えばニコ

イチの武器なんかは軽く跳ばせる、と考えていいのかな？」

「はいっ、それは。Eジャマーが効いてるかどうかもありますけど、この間も割と余裕ありました」

「なるほど」

確認に深く頷きながら答える董を見て、光秋は先日 of 工場地帯での戦闘を思い出す。

― 実際あの時も、Eジャマーの不安こそあったけど、基本滞りなく僕が求めた物を跳ばしてくれたもんな……やっぱ、董さんは補給要員として使った方がいいか………

そのまま実戦のことに思考が飛んでいく中、北大路の若干険を含んだ声が光秋を現実
に引き戻す。

「それで？ 私は何をすればいいんです？」

「！ああ、失礼。北大路さんは……」

一瞬ハツとすると、光秋はカバンに歩み寄り、中からひと抱え程ある丸みを帯びた箱
状の機器を取り出す。

「なに？ その箱」

「ゴーレムの腕の部品。確かアクチュエーターとか言ったかな？ 昨日福山主任に頼んで
借りて来た」

「いやに重いと思ったら、ソレだったのね……」

桜の問いに、光秋は昨日福山の許を訪れた時のことを思い出しながら答え、先程念力でカバンを引っ張った際の謎が解けた曾我は呆れを浮かべる。

「で？」

「どうもコレ、調子が悪いみたいでな。確か北大路さんはサイコメトラーだから、その能力で何処がどのように悪いのかを調べてほしい」

「……わかりました」

光秋の説明が変わらぬ仏頂面で応じると、北大路は渡されたアクチユエーターを両手で抱え、目をつむって意識を集中する。

その横で、桜が光秋に小声で言ってくる。

「なんか、菊は地味じゃね？」

「それはな。桜さんみたいに空飛んだり物動かしたり、そういう目に見えてわかりやすいものじゃないからな。それを言ったら、董さんは話を聞いただけで実演してもらってないし。もつとも、限られた空間で高レベルのレポート能力を見せられても、いまいち凄さがわからないし——」

「わかりました」

目を開けた北大路の呼び掛けに、桜との話しを中断した光秋はノートを開いてメモの

準備をする。

「ん。教えてくれ」

「この辺りを繋いでる3本のコード、その内の赤いやつが断線してます。他にはこれと
いつておかしな所は見付からないので、それが原因かと」

「なるほど……よし、週明け福山主任と確認してみるよ」

アクチュエーターの外装の一部を指でなぞりながら説明する北大路に応じると、メモ
を終えた光秋はソレを受け取ってカバンに戻す。

「それで？まさかこれでおしまい？」

「まさか。せつかく曾我さんにも来てもらって、あまつさえ準備体操までしたんだ。寧
ろここからが本番だよ」

やや不満そうに訊ねる桜に、光秋は口角を上げながら返すと、4人に向かって告げる。

「今から曾我さんと、僕たち加藤隊の4人で模擬戦を行う」

「そう来なくっちゃ！」

「ようやくワタシの出番ってわけねっ」

それに桜はやる気満々な笑みで両拳を叩き合わせ、曾我は不敵な笑みを浮かべる。

「というわけで、まずは作戦会議だ。桜さんたちはこっちに」

言いながら光秋は少女3人を壁際に招き、曾我と距離をとる。

と、董が遠慮がちに訊いてくる。

「ところで、光秋さん」

「ん？」

「流石に4対1は差があり過ぎというか、その……少し卑怯じゃ……」

「まあ、董さんの感じ方もわからなくもないが……この模擬戦の主旨は、君たち3人を連携して運用しつつ、そこに僕——というより、ニコイチをどう絡ませるか、現状それがどういう形でできるかの確認だからね。単純な勝ち負け以上に、できることとできないことの洗い出しが目的だから。数の差とかはあまり気にしないでいいよ」

「……はい」

渋々ながらも納得した様子で董が頷くのを見ると、光秋は3人を見回しながら続ける。

「でだ、とりあえず桜さんを主力としつつ、僕が近くで援護、董さんはレポートでそれをフォローしてほしい……で、北大路さんだが」

少し気まずい顔をしながら、光秋は北大路に確認の目を向け、実際に身振りを交えて問う。

「こう、床に手を着いて、離れた場所にいる相手の思考を読む、なんてことはできるか？」

「一応。直接触るのに比べて精度はグンと落ちますけど」

「でも、大まかなこと、例えば次にどんな行動をするかくらいはわかるか？」

「だいたいはい」

「よし。じゃあ董さんと後ろに控えて、サイコメトリーした曾我さんの行動を僕に伝えてほしい」

「……了解」

すっかり馴染みつつある仏頂面で北大路が頷くと、光秋は再度3人を見回す。

「じゃあ、今言った通りの役割と基本としつつ、各自僕の指示で行動して。質問がないようなら、この後曾我さんとルールの確認に入るが」

「あのさ」

言つてすぐに、桜が手を挙げる。

「なんだ？」

「光秋がアタシを援護するって言ったけど、なんか武器でも持ってきたの？」

「いや、今回は持つて来てない。というか、本来この位置には僕というよりニコイチが入るべきなんだろうが、流石に今日は出せないからな。言つてみればその代わりだよ」

「いや、アレの代わりに光秋って……無理あるでしょ？」

「わかつてる。でも言いなさんな。次はもつとちゃんと準備整えてやるからさ」

桜の笑いながらの指摘に、光秋は重々承知の上で応じる。

「さて、他に質問は？……ないようなら、曾我さんのところこう」

3人がそれ以上なにも訊かないのを確認すると、光秋は少女たちを伴って曾我の許へ向かう。

「曾我さん。こっちは済みました。そっちがよければ、ルールの確認したいんですが？」

「ワタシはいつでも」

曾我の返事を聞くと、光秋は一同を見回す。

「ルールは、相手から1発——拳でも念力による攻撃でも——もらったらアウト。ただし、攻撃する際は怪我を負わせない程度に注意して」

「そういう中途半端、苦手なんだよなあ……」

「訓練なんだから、いちいち怪我するわけにもいないでしょ」

不満そうに感想を漏らす桜に、堇が注意を入れる。

「時間制限はなし。全滅した側の負け。基本的にはこんなところだ」

「なんか、ワタシが一方的に不利じゃない？」

「あくまでもこのチームでの連携の確認ですからね。そこは勘弁してください」

説明を終えるや案の定の指摘をしてくる曾我に、光秋は軽く頭を下げながら詫びる。

「ま、そうなんだけどね」

「すみません……他に質問がある人は？……ないようなら、早速始めよう。3人はこっ

ちに」

納得した様子の曾我を見ると、質問がないことを確認した光秋は桜たちを伴って運動場の端に移動する。

「とりあえず、各自さつき決めた役割を基本に動いて。桜さんは僕と前に、董さんと北大路さんは後ろ、それこそ壁際辺りに控えて。北大路さんは曾我さんの情報収集よろしく」

「命令なら従います」

「董さんはいつでも僕の指示に対応できるようにな」

「はいっ!」

仏頂面の北大路とやる気の籠った董の返事を聞くと、光秋は桜と共に運動場の中程に止まり、壁際へ歩いていく2人を見送る。

そんな中、

「董さんはまだいい。やることはこの間の実戦の時と大差ないだろうしな。問題は北大路さんというか……自分で頼んどいてなんだがなあ……」

離れていく北大路の背中に、光秋はこれから起こることへの不安を抱かずにはいられない。

「……光秋?」

「!あ、ああ……」

「どうしたのさ?早く始めようぜ。向こうも準備OKみたいだし」

言いながら、桜は腕を組んで待つ曾我を指さす。

「……そうだな。始めよう」

それに頷くと、光秋は胸の内の不安をどうにか押しやる。

——どの道、心配しても始まらない。何もかもが初めてなら、とにかくやってみるまでか。もともと失敗するための訓練みたいなものだしな……よしっ——「曾我さん、準備いいですか?」

「いつでも」

「それじゃあ……」

董と北大路が位置に着いたのを確認すると、光秋は深めに息を吸い、通りのいい声と共にそれを吐き出す。

「始めっ!」

刹那、曾我が指鉄砲に構えた右手を正面に向ける。

「回避っ!」

直後に脊髓反射で声を出すと、光秋は右に、桜は左に跳ねる。

——これが『怪我をさせない』程度の威力か!?!——

念の弾が脇を通った際の小規模な突風が肌を叩き付け、その強さに光秋は背広下の肌を粟立てる。

「桜さん、僕の前に出て。念壁でガード」

「おうっ！」

体内の悪寒を吹き飛ばすつもりで指示を出すと、念力で体を浮かせた桜が床すれすれを滑る様に移動して前に躍り出て、右手を前にかざす。光秋には直接見ることができないが、正面一帯に念壁を張ったのだと理解する。

「流星はレベル9。簡単には抜けないわね？」

「へっ！力勝負なら負けないよっ!!」

一点突破を狙ってか指鉄砲による念撃ちを続ける曾我に、桜が生き生きした様子で応じる。互いに競い甲斐のある相手を得られた為か、それぞれの顔にはやや凶暴な笑みが浮かんでいる。

「膠着状態の今がチャンスか——北大路さんっ！」

そんなサイコキノ2人の様子を見るや、光秋は後方の北大路に情報提供を求める。

が、

「わ、わかenらい……」

「何っ？」

「わからないんです！その人が何を考へてゐるかっ！」
「？」

レベル9のサイコメトラ——事実上隠し事など不可能な者の口から出た予想外の言葉に、光秋は一瞬啞然とする。

と、その反応を待つてゐた様に曾我が告げる。

「ダメよワンちゃん。そういうのは対戦相手が見えない所でやらないと。対策なんて簡単、触れてなきやいいんだから」

「触れてなきや……っ！」

言われて散発的に指鉄砲を続ける曾私の足元を見た光秋は、今更ながら曾我が僅かに浮いてゐる——床に足を着けていないことに気付く。

——やっぱりこうなる——！！——

始まる前から薄々予感してゐたことが実現してしまつたことに舌打ちした直後、曾私は上空に迂回して桜と光秋を飛び越え、そのまま2人の後ろに控えてゐた董と北大路に指鉄砲を向ける。

「董さん回避っ！」

「は、はいっ！」

咄嗟に叫ぶや、董は壁際から光秋と桜の許にレポートして指鉄砲から逃れる。

北大路を残したまま。

―バカッ、そこは一緒に逃げろ―

苛立ちのあまり光秋が胸の内に悪態をつくのと同時に、曾我の人差し指の先が北大路を捉える。

「ごめんねっ。パンツッ！」

「っ！」

曾我が挑発的な笑みを浮かべながら告げた直後、北大路は苦悶の表情で額を擦る。それを見て光秋たち加藤隊は、念力の弾が当たったのだと理解する。

「デメエ!!」

「待て! 熱くなるな」

すぐに突進して行きそうな桜の肩を掴んで止めると、光秋は少女たちを見やる。

―残るは桜さんと董さん―サイコキノとテレポーターか……―「桜さん、曾我さんを下に下ろせ。とにかく高度をとらせるな」

「おうっ！」

応じるや、一瞬前よりは落ち着いたらしい桜は高度を上げながら曾我に接近し、指鉄砲を念壁で防ぎつつ高出力の念力を放って曾我を落とそうとする。

曾我も縦横に動いて回避しつつ反撃を繰り返し、サイコキノ同士による乱戦が繰り広

げられる傍ら、共にレポートして距離をとった光秋は、隣の董に指示を出す。

「曾我さんが床に近付いてきたら、僕を彼女の背後に跳ばして。合図はする」

「はいっ！」

董の緊張した返事を聞くと、光秋はサイコキノ同士の縦横無尽な戦いを注視する。

—これだけの乱戦だ。互いに目の前の相手に意識の大半が持っていかれて、周囲が疎かになっているはず。必ず隙ができる。もっとも、一発勝負であるのも確かだからな。タイミングが重要だが……………

掌を若干湿らせながら機会を待つことしばし、曾我の高度が少しずつ下がっていく。

そして、

「今だっ！」

「はいっ!!」

ついに床に足が着く直前まで下がってきた刹那、董に跳ばしてもらった光秋は曾我の背後に回り込む。

—もらったっ!!—

胸中に叫びながら左足を踏み出し、曾我の背中に右拳を叩き込もうとする。
が、

「っ!?!」

踏み出した左足が突然後ろに引つ張られ、バランスを崩した光秋はそのまま前のめりに倒れ込む。

「光しゅ——痛てっ!」

—あ、不味い—

咄嗟に両手を着いて上体が床に叩き付けられるのだけは防いだものの、視界の外に桜の苦痛の声を聞いた瞬間、光秋は勝負の行方を察する。

「……………」

「何してんのよ……………」

戦闘時のそれとはまた質の異なる恐怖を抱きながら顔を上げると、目の前には曾我の顔があった。もつとも、その顔に浮かんでいるのは挑発的な笑みではなく、心の底からの呆れだった。

「…………いや——あいたっ……………」

思わず弁解しようとした矢先、向けられていた右の人差し指から念力が放たれ、額に感じたデコピン程の痛みに口を閉じる。

「っ、光秋さ——っ!!」

その光景に動揺した葦にも念力の弾が当てられ、ここに加藤隊の敗北が確定する。

—そもそも、何を踏んだ?—

そう思つて光秋が足元を見やると、ニコイチのカプセルが転がつていた。

—えっ？何でコレが……あつ。そうか桜さんと曾我さんから距離をとる時……—

上着の胸ポケットにカプセルがないことを確認しつつ、思わぬ物を目にして動揺したのも束の間、桜と曾我の乱戦から距離をとるためにテレポートを使ったこと、なによりも模擬戦を始める前にカプセルをカバンに仕舞わなかったことを思い出す。

—時計と携帯電話は一応仕舞つたけど、コレだけ忘れてたんだ。でもつて、カプセルにも超能力耐性があるから、テレポートした時に落つこととして……曾我さんの背後にテレポートした時に踏んで足を盗られた、ということか……—

カプセルを拾つて立ち上がりつつ状況を整理すると、自分の間抜けぶりに思わず頭を抱える。

—董さんのことを心の中でバカ呼ばわりしたが、これじゃ他人のこと言えないな………とつ—

そのまま気持ち沈みそうになった矢先、こちらを注視する桜と董、北大路の視線に気付く。

—立场上、落ち込んでばかりもいられない、か………つ！—

いずれも自分の次の言葉を待っている眼差しに、なし崩し的に気を取り直して胸の内に喝を入れると、光秋は曾我を含めた一同を見回しながら告げる。

「よし、みんなお疲れさま。勝負にこそ負けたけど——いや、違うな……僕のミスだ、負けてしまつて申し訳ない」

言いながら、少女3人に対し深く頭を下げる。

「それでも、実際に君たちと戦つてみて感触はある程度掴めたと思う。とりあえず、各自一旦休憩。ひと息ついたらもう1回やってみよう。よろしいですね？曾我さん」

「いいものにも、あんな勝ち方しても締まらないしねえ。望むところよ」

「それはよかった」

先程の失態を遠慮なく蒸し返す曾我に苦笑いを浮かべると、光秋はカバンに歩み寄つて今度こそしっかりカプセルを仕舞い、入れ替わりに腕時計とノートを取り出す。

——とりあえず疲れがとればいいから、今から5分後くらいに再開かな。その間に、今の反省点をメモしとこう——

思いながら今の時間を確認すると、ノートにペンを走らせる。

と、

「……う？どうした？3人とも」

自分の周りに集まつて来た少女3人、その浮かないような、気まずそうな表情に、光秋はノートから顔を上げる。

「いや、その……………」

「私たち、さつきはあんなにアピールしてたのに、あっさり負けちゃって……すみませんでした」

桜が言葉を詰まらせる間にも、董が言いながら頭を下げ、それに倣うように桜も頭を下げる。

「……」

北大路でさえも、無然とした表情ながら申し訳程度に頭を傾ける。

それを見て、光秋の中に先程の失態に対する羞恥や罪悪感といったものが濃度を増してぶり返してくる。

「謝らなきゃいけないのは僕だよ。君たちはよくやってくれた。それを上手く活かしてあげられず、あまつさえつまらないミスまでしてしまつて……」

実際に言葉にしてみても、いよいよ気持ち沈みそうになる。

が、

「もつとも、落ち込んでばかりもいられない。失敗したのなら反省して、次同じことをしないようにするまでさね。というわけで、5分くらいしたら再開するから、各自しっかり体を休めておくこと。いいか？」

「！は、はいっ！」

「了解……」

自身を鼓舞することも兼ねて、努めて前向きな語調でそう告げると、桜と董は弾かれた様に、北大路も心なしか力の抜けた顔で応じ、3人そろって光秋の近くに腰を下ろして休憩に入る。

—さつ、子供らにここまで言ったんだ。少しはマシになるようにしつかり練らないとっ—

思いうや光秋はノートに顔を戻し、再びペンを走らせる。
と、

—?……曾我さん?—

視線を感じて少しだけ目を動かすと、離れた場所に座っている曾我がこちらを、より正確には自分を注視しているのに気付く。

距離があつてはつきりとは判らなかつたものの、その顔には例の挑発的な笑みが、そして僅かながら別のものが浮かんでいた。

—なんだ?……懐かしさ……?……—

それが何なのか気にはなつたものの、時間を惜しんだ光秋はそれ以上考えるのをやめ、休憩の5分をひたすら反省に割いた。

昼食と数回の休憩を挟みつつ、模擬戦を続けること数回。

——今度こそ——！！——

董のテレポートで曾我の背後に回り込んだ光秋は、そのまま畳み掛けようと一歩を踏み出そうとするも、

「甘いわよっ」

「っ！」

一瞬速く曾我の指鉄砲を受けてしまい、もう何度目かもわからない額の痛みと悔しさを抱く。

「ううっ……」

同時に戦闘の緊張から解放されたせいとか、不慣れなテレポートを——それも短時間に何度も——行ったが故の酩酊状態、いわゆる「テレポート酔い」に襲われ、治まるまでその場でしばらく耐えることになる。

——一瞬で自分のいた場所が変わると、理屈は理解できてもやつぱり混乱するんだよなあ。秋田の包囲の交代でもなりかけたけど、こんなにキツイとはなあ……——

それからいくらかもせずにまたも加藤隊は全滅し、今度の模擬戦も曾我の勝利に終わる。

「これで全戦全勝ですか……」

運動場の中央にゆっくりと舞い降りる曾我を眺めながら疲労を含んだ声で呟くと、光秋は出入り口の上に掛かっている時計を見やる。その針は、間もなく5時を指そうとしていた。

「今日はこの辺にしますか。そろつと食事に行く準備も始めないと」

「えー、もう?」

光秋が一同に呼び掛けると、桜が不満を浮かべて応じる。

「結局アタシら、曾我さんに1回も勝てなかったじゃん。ていうか、何で4対1で1回も勝てないのさ?」

「それは、ワタシだって伊達に何年も特エスやってたわけじゃないから。もつときちんと連携されたら流石に厄介だけど、今は個人プレーに毛が生えた程度だからねえ」

「ぐぬぬっ……」

曾我の小バカにしたような返答に、桜は心底悔しそうな顔を浮かべる。

「『年の功』ってやつですか——いたい……」

「そこは『ベテラン』と言いなさいっ」

それを聞いて感じたままを呟いた光秋の額に、出力控えめの指鉄砲が炸裂した。

「まあとにかく、みんな着替えてきて。なんだつたらシャワーも浴びてきて。このまま行くからさ」

「えっ？」

そう言つて急かす光秋に、董が驚いた顔を浮かべる。

「いや、連絡しただらう？」

「そうですけど……ちよつと寮に戻るくらい……」

「なんだ、忘れ物か？」

「いえ、そういうえわけじゃないですけど……」

「？」

「ああ……」

はつきりしない董に光秋が首を傾げていると、曾我がなにかを察した様子で告げる。

「女の子にはいろいろあるのよ。まだ時間の余裕はあるんでしょ？」

「？……ええ、一応。そう思つて早く切り上げたのもあるし」

「だったら、一度解散して、5時、そうね……40分くらいに正門に再集合つてことにしましょう」

「僕は構いませんけど……董さんたちはそれでいいか？」

「はい。できればそうしてもらえ」と

「アタシはどっちでもいいけど」

「私も」

董、桜、北大路の返答を聞くと、光秋は一同に告げる。

「じゃあ、曾我さんの言う通り5時40分までに正門集合つてことで。各自一旦解散だな」

言うのと中身を確認したカバンを提げ、コート片手にそのまま運動場を出て行く。

—それなら、待機室に寄つて今日全体の反省でもするか。アクチユエーターも置いていけば、週明けカバンが軽いし—

そんなことを考えつつ、光秋は一路待機室を目指す。

—……………いろいろ不甲斐ない点はあるだろうが、一番の問題は、やはり僕が3人の能力——もつというと、性格とか考え方の癖を把握し切れていないということか……………結局、今後も今日みたいな、あるいはもっと条件の整った機会を設けて、地道に感覚掴んでいくしかないか……………—

待機室に到着後、椅子に腰を下ろしてノートの記述を読み返す光秋は、今日一日を嘆息混じりに振り返る。

「にしても、やっぱり桜さんの念力は魅力だよなあ。応用範囲も広いし。これでコントロールがもつとつけば……………やっぱり、近い内に生卵持つてくるか？」

さらにそんなことを呟いていると、上着のポケットに入れた携帯電話が振動して着信を知らせる。

「董さん?……もしもし?」

（あ、光秋さん?今どちらです?もうみんな集まってますけど）

「……えっ!?!」

電話越しの董に言われて、光秋は思った以上に時間が経っていたのだと理解する。

「ああ、ごめん!今待機室だ。すぐ行くからっ!」

言いながら片手で広げていたノートを片付け、そのまま電話を切ってコートを羽織り、ノートを仕舞ったカバンを提げる。

「アクチュエーター……よし、出したな。他の荷物は持ったし……よしっ」

机の端に置いたアクチュエーターと、カバンの中身を急ぎ足で確認すると、待機室を出た光秋は正門へと駆ける。

本舎内を駆け抜け、玄関から正門へ全力疾走することしばし、すでに集まっていた桜たちの許へたどり着いた光秋はすっかり息が上がっていた。

「ハーッ……ハーッ……すっ、すみませッ……模擬戦振り返ってたら時間忘れ——ッ」

「ちよつ、大丈夫かよ?」

荒い呼吸の苦しみに耐えつつどうにか遅刻の謝罪をすると、桜が心配そうな声をかけてくる。

「ツ……………はぁ……………ん、大丈夫。いきなり走つてちよつとな」

ようやく呼吸が整つて応じると、光秋は改めて一同に頭を下げる。

「いや、本当に、自分で言つておいて遅刻して、すみませんでした」

「まあ時間の余裕はあるからいいけど」

それに対し、曾我は腕時計を見ながら返す。

「まあいいわ。行きましよう」

そう続けて歩き出すと、光秋たちもそれを追つて続く。

——これは、この件をダシにさらにサービスさせられるのも覚悟しておかんな……—
最後尾で一行の後を追いつながら、光秋は胸の内に小さく決意する。

本部から歩くことしばし、午後6時を少し過ぎた頃に目的の店に到着した一行は、そのまま店員の案内に従つて店の奥へ進み、1つのテーブルを囲んで腰を下ろす。

「さあ、煮るなり焼くなり好きにしてくれ。僕の財布をな」

「大袈裟だなあ」

冗談7割・本気3割で、やや大儀そうな手ぶりも交えて光秋がそう宣言すると、桜がメニュー表を開きながら呆れた笑みを返してくる。

「へー、思った以上に充実してるわねえ。このお店指定して正解だったかもっ」

「でも、値段もそこそこしますね……」

嬉々としてメニューを眺める曾我とは対照的に、董は遠慮がちに光秋に目配せする。

「あー、董さん。言つとくがさっきのは半分以上冗談だからな。もともと君たちへの先日の感謝も兼ねてるんだから、遠慮せずに好きな頼んでいいから」

そんな董の様子を見て不安になった光秋は、念のため一言添えておく。

「いえ、でも……」

しかし董の態度は大して変わらず、それを見た光秋は董に身を寄せてメニューを見下ろす。

「！ちよつ、光秋……さん……？」

「あ、パスタもいろいろあるんだな」

突然の接近に董は動揺するものの、光秋は構わずメニューを眺め続ける。

「カルボナーラか……これにしようかな？董さんもどうだ？」

「えっ!?……えっと…………」

「もうっ！くっつき過ぎー！」

光秋の問いに董が顔を赤くしながら返事に窮していると、桜が2人の間に割り込んでくる。

「アタシは肉にするよ。ステーキ。一日中模擬戦してたんだからね。夕飯はガッツリいかないとー！」

「その意気だな桜さん。しかしそうか、ステーキという手もあるか……董さんもどうだ？」

「えっと……」

「なんでいちいち董にふるのさっ！」

活き活きと述べる桜を鼓舞しつつ、光秋は再度董に勧め、それを見た桜が目を三角にして軽い頭突きを入れてくる。

「ワンちゃんモテモテねえ？」

「からかわないでくださいよ……あと桜さん、そろそろ痛いんでやめて」

その様子を見ていた曾我は茶化す様に言い、光秋は頭突きを喰らい続けた脇腹に徐々に痛みを感じながら返す。

と、曾我は隣の北大路に、お馴染みの挑発的な笑みを向ける。

「北大路さんはいいの？あの輪に入らなくて」

「つ！私は関係ありません！」

声を荒げながら応じると、北大路はメニュー表に視線を落とす。

そうしている間にも各々食べたい物を決め、呼び出した店員にそれぞれ注文すると、あとは頼んだ物が来るのを待つだけとなる。

と、曽我が光秋に怪訝な顔を向ける。

「ところでワンちゃん、さつきから思ってたんだけど」

「はい？」

「あなた、なんか汗臭くない？」

「えっ？」

唐突な指摘に驚きつつ、光秋は右手首を寄せて臭いを嗅いでみる。

が、自分で自分の臭いを感じることはできなかった。

「いや、まあ……待機室から走ってきましたからねえ……」

それでも集合前のことを思い出してそう返すと、今度は桜が言ってくる。

「ていうか、模擬戦のあとシャワー浴びたの？服も着替えてなかったし」

「あつ」

その指摘に、光秋は解散してから電話で呼び出されるまで待機室でひたすら今日の反省をしていたことを——つまり体の清潔さを保つようなことを一切していなかったこ

を思い出し、曾我と桜の言ったことに合点すると同時に、急に気まづくなる。

「ちよつと。お詫びと感謝の為に誘ったんでしょ。それは失礼じゃない？」

「曾我さんの言う通りだよ。アタシ等にはシャワー浴びとけて言つてたくせに」

「すみません……」

胸の内の気まづさをことごとく明文化してくる曾我と桜に、ぐうの音も出ない光秋は小さくなる。

「いや、でも、終わつてからずつと反省を………」

それでもどうにか弁明しようとするものの、言つてみてどうにも言い訳がましいものを感じ、途中で口を閉じてしまう。

「ま、まあ、それだけ光秋さんが仕事熱心つてことですよね？時間も忘れて私たちのことについて考えてくれて……」

「いや、でもこれはさあ……」

それを見た董がどうにか援護を試みようとするが、結局桜に怪訝な顔で一蹴されてしまう。

「ありがとな、董さん」

「い、いえっ！」

もつとも光秋にとっては、その程度のことでも充分ありがたいことであり、礼を言う

と沈みがちだった董の表情も途端に晴れ晴れとしたものになる。

「ちえつ。優等生」

それと反比例するように、桜の顔色は曇る。

「まあでも、桜さんと曾我さんが言う通り、これは僕のミスですね。失礼しました」

そして一連のやり取りで悪いと感じた光秋は、一同に深く頭を下げる。

そうしている間に料理ができたらしい。先程頼んだ物が順次運ばれてくる。

光秋と董の許にはカルボナーラが、桜と曾我にはステーキセットが、北大路にはオムレツセットが、それぞれ飲み物と合わせて置かれ、食事の準備が整ったのを見届けた光秋は、一同を見回しながら姿勢を正して告げる。

「えー改めまして、本日は、曾我さんには先日の事故のお詫び、桜さんたちには感謝の為の食事会に集まっていたいただき、ありがとうございます。と言いつつ、さっきまた失敗を指摘されましたが……まあそれはそうと、今日は好きなだけ食べて飲んでいってください」

そこで一旦言葉を切り、ジンジャーエールが注がれたグラスを手取る。

他の4人もそれに倣ったのを見ると、光秋は多少周囲に配慮しつつも、活気の籠った声で告げる。

「それでは、お詫び兼感謝の食事会を開催します。乾杯ッ！」

「『カンパーイッ!』」

「……」

曾我と桜、董が応じ、北大路も無言ながらグラスを合わせると、各々自分の頼んだ料理に口を付ける。

—うん。疲れた体に、このこつてりとした味はいいな—

ひと巻きしたカルボナーラに内心で舌鼓を打ちながら、光秋は4人の様子を窺う。

桜と曾我は切り分けたステーキをいかにも美味しそうな表情で食べ、北大路も仏頂面を僅かにほころばせてオムレツを堪能している。

—みんな満足してくれるようだな。董さん……もなつ—

思いつつ視線を動かすと、先程は消極的な様子だった董も嬉しそうにカルボナーラを食べているのを見て、光秋自身も気持ち満たされるのを感じる。

「さつきも言ったけど、遠慮せずどんどん食べて。今日は財布が空になる覚悟で来てるからな」

「言ったなツ? じゃあアタシ、これが終わったらアイス追加! あとオレンジジュースおかわり!」

「ワタシも、ケーキでも頼もうかしら? それとカシスソーダ追加」

「その意気ですよ、お二人とも!」

自分の宣言に本当に遠慮なく応じる桜と曾我に、光秋は呼び鈴を押しながら多少のヤケクソも含めて返した。

料理を食べ、飲み物を次々とおかわりし、各々デザートも平らげると、一行は満腹感に満たされて店を後にする。

「いやはや、こうまでとは……でもま、みんな喜んでくれたようでよかったかな？——来店前に比べてずっと軽くなった財布に一人戦慄する一方、そうまでして作った今の少女たちの表情に、光秋も腹以上に胸が満たされる感覚を抱く。

——少なくとも、お詫び兼感謝は成功ってことか——

当初の目的が満たされたことに安堵していると、曾我が肩に腕を回してくる。普段は色白な顔が、今日はアルコールを多く摂ったためにやや赤くなっていた。

「よしワンちゃん、二次会行こう！二次会！」

「に、二次会、ですか……？」

もつとも、酔いの度合いは見た目以上らしい。普段あまり見ない高揚した様子と多少怪しい足取りに、光秋は妙な緊張を覚える。

「そうそう！飲み直すわよお!!」

言いながら、曾我は光秋に身を寄せてくる。

「つ……」

それによつて押し当てられてくる胸の感触と、間近で発せられるアルコールを含んだ独特の口臭に、光秋は腕を回された時はまた異なる緊張を抱く。

—曾我さん、当たつてゐる。当たつてますよ……にしても、酒臭さを含んだ口の匂いつて、なんか……—

同時に、気を抜けばそのまま溺れかねない怪しい誘惑を感じ、光秋自身妙な昂りを覚える。

—い、いや待て光秋！早まるな！こんな様子を綾にでも知られたら——感知されたらまた何て言われるかっ！—

思いつつ、奈落の底の様な目でこちらを見据える綾の顔を強く思い浮かべ、3月の夜のそれとはまた異なる寒気を多少覚えながら自分を抑える。

と、

「だからっ、くつつき過ぎだつての！」

「そ、そうです！こんな道の真ん中で！ハ、ハレンチですっ！」

目を三角にした桜と堇が間に入り、桜は曾我を、堇は光秋を押して2人を離す。

—助かった……のか？—

董に押されながら、光秋は若干首を傾げながらも曾我から解放されたことにほつとする。

一方、曾我の方では、

「なあに？小学生がイッチョ前にヤキモチ？もうつ、おませさんっ！」

「ちよつ、やめろ！酒クサツ！」

離れていった光秋の代わりに、自分を押してくる桜に絡んでいた。

「結局、か……曾我さん。いい加減にしてくださいよ……」

「バツカみたい……」

その様子に嘆息したのも束の間、離れた所で北大路が呆れるのを意識の端に聞きながら、光秋は曾我を抑えに向かった。

少しして曾我をどうにか抑え込むと、光秋は車道を見渡し、タクシーがやって来るのを見ると手を挙げる。

——このままこの状態の曾我さんといったら、どうなるかわからんからな。ここは多少出資してでも、真っ直ぐ家に帰ってもらおう——

思いつつ、目の前で停まったタクシーの後部席に曾我を押し込める様に座らせ、手に

紙幣を握らせる。

「これで家に真つ直ぐ帰ってください。家の場所は言えますね？」

「えー？付き合い悪いわねー……」

口を尖らせながらも、曾我は運転手に行き先を告げ、光秋が車内から身を引くとドアを閉めたタクシーは走り出す。

「大丈夫かな？曾我さん」

「まあ、一応運転手さんも付いてるし、なによりあのままぶらぶらされてもな……」

遠くなつていくタクシーを見ながら呟く桜に、光秋は不安を拭い切れない声で応じる。

「それはそうと、僕等も帰ろう。寮まで送るよ」

3人を見回しながら言うと、光秋は桜たちの寮へ歩き出す。

「じゃあ、また。今後こんな機会あると思うから、引き続きよろしく。次以降はもっと環境整えておくよ」

しばらく歩いて寮の前に着くと、光秋は敷地に入る手前で少女3人にそう告げ、そのまま駅へ向かおうとする。

と、

「あ、あのつ、光秋さん！」

「？」

董の呼びかけに足を止め、3人の方を振り向く。

「その……こちらこそ、引き続き私たちの主任、よろしく願いますっ！」

「負けっぱなしは嫌だかね。あんたが担当の間に1回くらいドーンと見返してやるんだから！」

「……ああ。よろしく頼むよッ」

深々と頭を下げる董と、やる気満々の桜、それぞれに心強さを感じた光秋は、頬を緩めながらそれに応える。

「あ、あと、その……おやすみなさい」

「おやすみ！」

「……おやすみなさい」

「おやすみ」

董と桜、北大路、それぞれの挨拶に応じると、光秋は改めて駅へ向かう。

——まつ、あの子たちとの距離を多少詰められただけでも、収穫かな？——

食後とはまた違う満足感を抱きつつ、口元に笑みを浮かべて。

100 捜査協力 前編

3月7日月曜日午前7時半。

まだ若干眠気を残した顔を浮かべながら、光秋は東京本部の門をくぐる。

——まったく、久しぶりにのんびりできたつてのに、まだ休み足りないってか？我が身ながら情けないというか……—

欠伸をしながらそう思いつつ、昨日一日の過ごし方を振り返る。久しぶりに10時近くに起床し、部屋の最低限の掃除と土曜日の模擬戦の反省を少々やった以外、買い溜めていた本を読み進めたり、録り溜めていたドラマを観たり、横尾ノートを読み返したりと自由気ままに過ごしていた昨日を。

——……実際、このところ研修なり戦鬭なりで忙しかったから、思いつ切り休めたのは大いに助かったが……それももう終わりだぞ、光秋。気合い入れて行こうッ！手始めに、待機室に着いたらアクチュエーター持って福山主任のこと行かないと—

胸中に気合いを入れつつ今後の予定を組むと、なけなしの眠気を吹き飛ばした。

待機室に着き、机の上に置いたままのアクチュエーターを確認すると、光秋は携帯電話を取り出して福山に連絡を入れる。

（もしもし？）

「おはようございます、加藤です。先日借りた部品返したいんですが、今どちらですか？」

（……借りた時の建屋の来てくれ。そこで待っている）

「わかりました」

応じると、光秋は電話を切り、アクチュエーターを抱えて部屋を出る。

「今朝の主任、なんか様子が変だったような……何かあったか………う」

電話越しのいつもと若干違うように聞こえた福山の声に不安を覚えながら、光秋は先日訪ねた建屋に急ぐ。

建屋の入り口をくぐると、光秋は屋内に福山の姿を捜す。

しばし周りを見回すと、奥の方に佇むゴーレム、その足元に数名のツナギやスーツを着た者たちと何事か会話している白衣を見付け、すぐに駆け寄る。

「福山主任っ」

「ああ、加藤三尉。失礼、また後で」

光秋の呼び掛けに振り返ると、福山は会話を中断し、光秋の方へ歩み寄る。

「今回は協力ありがとうございました。先日借りた部品……アクチュエーターです」

言いながら、光秋は抱えていたアクチュエーターを福山に差し出す。

「うむ……」

ソレを短く応じながら受け取ると、福山はいろいろな角度から観察しながら訊いてくる。

「それで、特エスたちの訓練の役には立てたかな？ 不全箇所を調べると言っていたが」

「はい。この辺の3本のコードの内、赤いやつが断線してるって」

応じつつ、光秋は先日北大路が示していた辺りを指さす。

「……ちよつと調べてみよう」

言うや福山は踵を返して近くに置いてある道具箱に歩み寄り、光秋もそれについて行く。

流れるような手際で指さした辺りの外装を剥がすと、福山はメガネの位置を微調整して中を観察する。

「……確かに、1本切れてるな。稼動中の負荷か……？」

言いながら福山は顔を上げ、入れ違いに中を覗いた光秋は、3本ある内の赤い線が中

程で切れているのを直接捉える。

―なるほど。北大路さんの能力も大したもんだ―

そのサイコメトリーの感度に感心すると、光秋はアクチュエーターを抱えて思案を続ける福山を見、ふと先程電話をかけた時から気になっていたことを訊ねる。

「話は変わりますが……主任、最近何かありましたか？」

「何か、とは？」

「いえ、さつき電話した時、いつもと違う感じが……そう、不機嫌そうな感じがしたので、何か気に障ることもあったのかと」

「……すまない。雰囲気に出ていたか」

その時感じたままを告げた光秋に、福山はどこか気まずそうに詫げる。

「あ、いえ、そんな謝るようなことじゃ。ただちよつと気になって……」

「実は、土曜の午前中に葵社から連絡があつてな……ゴーレムを正式採用して陸軍とESOに提供すると」

「……えつ？」

苦虫を噛み潰した様に告げる福山に、しかしそんな顔をする理由がわからない光秋は首を傾げる。

「それって、むしろ喜ぶべきことなんじゃ……？ 正式化つてことは、福山主任たちがやつ

できたことが認められたってことじゃ——」

「違う」

断言すると、福山は普段殆ど変化のない顔に目に見えて不満を浮かべる。

「MB—01・ゴレムは、あくまでも『メガボディ』という技術……存在そのものの試作品なんだ。それはつまり、実用化——実戦で用いるに当たって、まだ多くの問題を抱えているということ。特に対DDシリーズ兵器としては、まだまだ形にさえなっていないと言っている——はつきり言って、『未完成品』だ」

「……なるほど」

険しい目付きで淡々と話す福山に、光秋は思わず気圧される。

「いや、でも、そうなるって何でそんな『未完成品』を正式化することになるんです？」

「……NPとZC——現在代表的な反社会的勢力との抗争で、その有用性を示したから……だそうだ」

それでもふと浮かんだ疑問を呟くと、福山は多少険の退いた表情で、澁々といった様子で応じる。

「Eジャマー、もしくはEJCと併用することで、メガボディは対高レベル超能力者兵器、あるいは超能力者の補助装備としての高い価値を示した。先日の出動や、これまでのNP、ZCの活動を含めてな」

「……確かに」

福山の説明に、光秋は深く納得しながら頷く。実際、サイコキノが乗っていたらしいヘラクレスやイピクレス、特に爪付きには苦戦したし、Eジャマーによつて超能力の有効範囲が限られた中で車両よりも自由度の高いフラガラツハの動きは——特に桜たちにとつて——脅威だった。

「そうなれば、軍やESOとしても対抗手段を早急に用意しなければならない。そして現状、ちよつとの手直しですぐに実戦投入できるのはゴーレムしかない……」

「なるほど……」——要するになし崩しですか……——

不満を抱えながらも事態を呑み込まざるを得ない様子の福山に、光秋は胸の中で半ば同情的に呟く。

「もちろん、僕もNP、ZCの脅威は把握しているし、そちらへの対処も必要なことも理解している。だから、そのように説明されれば、意固地になつて拒否し続けるわけにもいかない。そもそもそこまでの権限がない」

「はあ……それが、不機嫌の原因と？」

「そういうことになるな。僕は上手く自制していたつもりだったが……」

そう応じる福山の顔には、僅かだが恥じらいが浮かんでいた。

そんな珍しく表情の変化が激しい今の福山に、光秋は出会つて以降最も親近感を覚え

た。

「まあ、多少出ちやうのは仕方ないというか……主任も人間ってことですね」

「三尉は僕を何だと思ってたんだ……？」

失礼を承知で微笑を浮かべて呟くと、福山は眉間に皺を寄せる。

「もつとも、僕も開発陣の一人として、『今のゴーレム』を提供することだけではどうしてもできなかった。そこで週末中に会社の上層部と交渉して、これまでの稼働データ、それこそ先日の実戦も含めたそれから導き出した改良型——現状『ゴーレムⅡ』と呼んでいる仕様が形になるまで待つてもらうことになったがな。今日からそのプロジェクト開始というわけだ」

「改良型ですか……ん？ いや、そうなると……あちゃあ……」

皺を吹き飛ばす様に心なしか力の籠った様子で福山が述べると、光秋は自分が今この場において、しかも福山に時間を割いてもらっていることに軽い罪悪感を抱く。

「それじゃあ、変なタイミングでお邪魔しちゃったみたいですね。すみません」

「それは構わんさ。今話したことを三尉は知らなかったんだからな。そもそも全て、この週末中に決まったことだし。それに仕事が始まるのは8時からだ。体操代わりにはちようどよかった」

「ならいいですが」

アクチュエーターを示しながら告げる福山に、光秋は軽く頭を下げる。

「それじゃあ、時間もいい感じなので、僕はこれで。福山主任も頑張ってください」
「ありがとう」

短い挨拶を交わすと、光秋は建屋の出入り口へ歩き出す。

が、10歩程歩いた所で不意に足を止め、福山の方を振り向く。

「主任っ」

「?」

呼び掛けに福山が顔を向けたのを見ると、光秋はおもむろに浮かんできたことを告げる。

「お互い都合がついたら、一度飲みに行きましょうよ。男の知り合いがいないのも、なんか寂しいんで」

「……………ああ」

やや長い間の後、それでも遠目にもわかるくらいはつきり頷いてくれた福山を見ると、光秋は今度こそ建屋を後にする。

その胸中には、我ながら自分らしくない行動をとったことに、多少の戸惑いがあつた。

—まさか僕が、福山主任を食事に誘うなんて……しかもあんな碎けた調子で……この間観たドラマか何かの影響かな?—

そんなふうに自己分析する一方、そんなことが自然とできた今の自分に、光秋自身は好感を覚えた。

午前9時。

福山の許から待機室に戻って以降、光秋は桜たち3人の能力のおさらい、そして入間主任のノートを参考にした運用方法を考えていた。

そこに机の上に置かれた内線電話が鳴り、突然のことに一瞬ハツとしつつも、光秋は受話器を取る。

「はい、加藤隊待機室です」

（藤岡だ。悪いがちよつと俺の待機室まで来てくれ）

「?.....わかりました」

突然の呼び出しに首を傾げたのも束の間、受話器を戻し、机の上に広げていた筆記用具をまとめて端に寄せると、光秋は席を立てて藤岡主任の待機室へ向かう。

「えーつと確か……こつちか」

記憶を頼りに廊下をしばらく進むと、目的の部屋の前に着き、ネクタイを締め直してドアをノックする。

「失礼します。加藤三尉参りました……?」

言いながらドアを開けると、光秋は室内に藤岡の他、もう1人いるのを見る。

歳は30代初めといったところか。やや癖のある黒髪をほどほどに伸ばし、アゴには剃り残しと思しき中途半端な長さの髭が2、3本くっ付いている。少しくたびれてきた黒いスーツと合わさって、身嗜みに無頓着な印象を与えてくる。

——せめてきちんと剃ればいいのに。でなきや藤原三佐みたいに伸ばすか……—

どうにも目が行ってしまいう髭にそんなことを思いながら入室すると、椅子に座っていた藤岡が立ち上がって見慣れぬ男性を紹介してくれる。

「来たか三尉。こいつは本郷武。ほんごうたける俺の中学からの友人で、今は警視庁捜査一課の刑事だ」

「本郷だ。よろしく」

「加藤隊主任、加藤光秋三尉です……捜査一課って確か、殺人や強盗といった凶悪犯罪を扱う部署ですよ。よくドラマの題材になったりする」

手を挙げて挨拶する男性——本郷に応じつつ、光秋は聞きかじったことを言ってみる。

「まあな。君が噂の加藤三尉か。入隊1年で一般の一隊員から特務部隊主任に出世したっていう」

「御存じ、なんですか……?」

「こいつからいろいろ聞いてるよ。機密つてのに触れない範囲でね」

「はあ……」

藤岡を親指で指しながら本郷は告げ、光秋はどんなことを言われたのか好奇心と不安を覚える。

「……話に聞いてたよりも男前だねえ」

「え？あー……ありがとうございます」

束の間観察の目を向けて本郷は言い、突然の褒め言葉に光秋は戸惑いながらも頭を下げる。

が、直後、

「実は俺、娘がいるんだがねえ……どうだい？婿にならないか」

「ええっ!？」

さらに突然の、そして全く予想していなかった類たぐいの誘いに、光秋は今度こそ返答に困ってしまう。

「こんな感じの子なんだがねえ」

その間にも本郷はスーツの胸ポケットを探り、取り出した写真を見せてくる。

「……………ええ……………」

それを見て、光秋は本日3度目の困惑を覚える。

写真に写っていたのは、熊のぬいぐるみを抱えて楽しそうな笑顔を浮かべる、左右に結った黒髪が似合う2、3歳程の女児だった。

「どうだ！かわいいだろう。あと15年もしたら間違いなく美人になるぞ！」

「は、はあ……………考えておきます」

自信に満ちた顔でぐいぐい迫ってくる本郷に圧倒されつつ、拍子抜けした光秋はお茶を濁すつもりで返す。

「言つとくが、真に受けなくていいぞ。おとし一昨年に子供を授かってから、若い男を見れば誰彼構わず自慢ついでに言ってくるだけだからな」

「誰彼構わずとは何だ。これでもちゃんと優良そうなやつを選んで声かけてるんだぞ」

すつかり見慣れた様子で呆れながら忠告する藤岡に、本郷は振り返って若干目くじらを立てる。

「…………あの、それで、警察の方が来られたということは、ESOへの捜査協力の要請でしようか？」

すつかり脱線し、放っておけばさらに面倒な方向に行きそうな気配の会話に終止符を打つ為、なにより部屋に入った時から気になっていたことを知る為に、光秋は意を決して藤岡と本郷に訪ねる。

「おおっと、そうだったな。清にはもう話したんだが…………とりあえずこれを見てくれ」

それにハツとした本郷は手招きし、歩み寄った光秋は机の上に大きな地図が広げられているのを見る。それには、所々に赤いシールが貼られていた。

「これは……？」

「東京都一帯の地図、そこにここ半年程の間に起こった人身事故や暴力・傷害事件の現場を示したもののなんだが……ここを見てくれ」

光秋の疑問に応じつつ、本郷は地図の一点を指さす。

「……………この辺りに集中してる？」

都内一帯を書き記した地図の一点、本当に極めて狭い範囲に下の絵が隠れる程に貼られたシールの数に、光秋は思わず啞然とする。

「いや、でも、半年の間ですよ？それも人身事故や事件って、要は人が傷付いた事柄を区分なしに示したんでしょう？それだったらこれくらいの数に……なりますか？」

「まあ確かに。実際都内全体を見渡せば、他にもシールが集中してる箇所はいくつかあるしな。ただ、この辺りに限っては被害者にも特徴があつてな」

若干動揺しながら自信なく訊ねる光秋に、本郷は胸ポケットから取り出した手帳を開く。

「不良学生、暴力団組員、ニユースで取り上げられた事件の容疑者など……」

「…………？特に共通するものなんて……それこそ町の不良から犯罪者まで、いわゆる “悪

い奴がピンからキリまでって感じではありませんが……」

「まさにそこだ」

手帳を読み上げる本郷に、光秋は首を傾げながらも直感的に思ったことを告げると、藤岡が断じる様に言ってくる。

「どういふことですか？」

「君の言う通り、被害者たちにこれといった共通点はなかった。経歴も現在の立場もバラバラ。一時期世の中を騒がせて顔が知られている者から、良くも悪くも無名な者までさまざま。ニュースに取り上げられた奴にしたって、その後実刑判決を受けた者から無罪放免になった者もいる。被害にしたって、高所からの落下から喧嘩による負傷と実に多様。一応確認したが、被害者同士面識もなかった。こちらが確認できた範囲ではな」

「……どういふことですか？」

曖昧な補足に、嫌な予感を感じながらも結局訊いてしまった光秋に、本郷は案の定の返答をしてくる。

「被害者の内何人かはすでに死亡しているからな。それじゃあ、全員の細かな交友関係を把握するのは難しいだろう」

「……確かに」

あつさりと言われた本郷の答えに薄ら寒さを覚えながらも、光秋は努めて平静に返

す。

「でもそうなつてくると、ますますわかりません。それならこれらの事件・事故は、単に同じ場所で発生しただけの偶然つてことになりませんか？それこそこうしている間にも、どこかしらで何らかの事件や事故は起こつてるんでしようし……いったい、何がこの人たちを結び付けたつていうんです？」

「そこで君がさつき言つたことが出てくるんだよ」

「？」

本郷に言われて、光秋は先程自分が言つたことを思い出そうとしてみる。

「不良にヤクザ、犯罪者やその容疑者、まさに『悪い奴』のピンキリだ。そういう嫌われ者たちが、短い期間に狭い範囲でこんなにも大勢何かしら酷い目に遭つてゐる。こうなると流石に作爲的なものを感じないか？」

「そうかもしれないが……」

言われて納得しそうになるものの、どうしてもあと一步のところ腑に落ちない。「それとまあもう一つ、被害者やその時近くにいた人から気になる供述があつてな」

—それを先に言つてくれればいいのに……—

イタズラが成功したような微笑を浮かべる本郷に、明らかに焦らされていると感じた光秋は内心眉を寄せる。

「例えば、赤信号を無視して横断歩道を渡った奴の場合、みんな口を揃えて青だったと言っている。歩道橋の階段から落ちた奴は、『まだ床が続いていると思つて歩いたら落ちた』と供述した。乱闘騒ぎで捕まった不良2人は、それぞれ『自分が最初に殴られた』と言っている」

「……実際と認識の齟齬?……………それつて……」

「ここまでの説明を聞いて、研修の記憶から光秋はある能力を連想する。

「催眠、ですか?」

「正解!」

クイズ番組の司会者の様な語調で応じると、本郷はさらに続ける。

「半年の間にこの範囲で起こった事件・事故を詳しく調べると、被害者はみんな何かを誤認、もしくは周囲の証言とは明らかに異なることを、しかし嘘は一切ついていない様子で供述していた。事件発生時に近くにいた者たちからも、被害者の様子が少しおかしいという趣旨の供述をほぼ必ずもつた。これらのことから、この一連の事件・事故は催眠能力者によつて故意に起こされたものである可能性が高くなつたつてわけだ」

「……なるほど」

淀みも迷いもなく述べられた本郷の説明に、光秋はようやく腑に落ちる感覚を覚える。

「それで、ここに来られたのはその捜査協力と？」

「まあな。もつとも正式なものじゃない」

光秋の問いに応じながら、本郷は藤岡を見やる。

「さつきも言ったが、俺たちは中学からの腐れ縁でね。なんの因果か、お互いお堅い職業に就いちまって、しかも警官になった俺は、気が付けば超能力絡みの事件専門みたいになっちまってさ。捜査に行き詰まると、よくこうして昔のよしみで助けてもらってるんだよ」

「無論、その過程で本格的な協力体制が必要になった場合は、正式な手続きも踏むがな。今回は最初からそのつもりだが」

感慨深い顔で語る本郷に、藤岡が補足する。

「はあ……それで、僕——私をお呼びになった理由は？」

一連の会話で事態の概要は把握したもの、その中で自分の立ち位置が未だわからない光秋は、藤岡と本郷を見回しながら問う。

「ああ。今回の件だが、お前に任せようと思う」

「!？」

あつさりと告げられた藤岡の言葉に、思わず衝撃を受ける。

「僕に……ですか……？」

「お前も晴れて特務部隊主任になったんだ。その初仕事にはちょうどいいと思つてな」
「はあ……まあ……」

指摘されて、自分の今の立場を改めて認識する。

「そうだ。今の僕は特務部隊主任、こういうことが仕事なんだ。遅かれ早かれ、形はどうあれ、いずれ『実戦』には出ないといけないってことか——」

同じESOであっても、京都での一般部隊とはまた異なる特務部隊の仕事——新しいことに對する多分な不安を自覚しながらもどうにか自分を律すると、光秋は踵を揃えて背筋を伸ばし、藤岡をしっかりと見据える。

「了解しました。加藤三尉、捜査協力に専念しますっ」

「まっ、そういうわけで、よろしく頼むわ」

多分に力んだ光秋とは対照的に、本郷はどこか呑氣そうに応じた。

藤岡の部屋から退室すると、一緒に出た本郷が声をかけてくる。

「そんじゃま、早速現場行つてみるか」

「じゃあ、特エスの子たち呼び出します。少し待つてください」

言うところ光秋は、一旦自分の待機室へ向かう。

「じゃあ、俺車で待つてるよ。表の駐車場な」

「わかりました」

後ろからの本郷の呼び掛けに応じつつ、光秋は速足で部屋へ向かい、机の引き出しから桜たちが通っている小学校の電話番号が掛かれたメモを取り出す。

「まさかこんな早くに仕事がくるとはなあ。とつと登録しとくんだった……」

自分の見通しの甘さを悔やみつつも、携帯電話にメモの番号を打ち込んでいき、一回深呼吸して気持ちを落ち着けてから通話ボタンを押す。

（はい、おぐに雄国小学校です）

「あ、ESO特務部隊の加藤と申しますが、柏崎さん、柿崎さん、北大路さんにお仕事が入りました」

（あ、わかりました。3人にお知らせします）

ESOと提携し、特エスの生徒も何人か抱えているだけあって、電話に出た職員対応はスムーズだった。

（今お知らせしました。少しお待ちください）

「わかりました。ありがとうございます」

しばしの保留音の後にそう告げられると、光秋は電話を切って部屋を出る。

―道中、学校に寄ってもらうように本郷さんに頼まないとな。そこで3人拾って―

そんな算段を立てつつ、本郷の待つ駐車場へ速足で向かう。が、5メートル程進んだところで着信の振動に足を止める。

—董さん?……そういや待ち合わせ場所何処にするか言つてなかったな。校門前つて言つとこ——「もしもし?」

(あの、お仕事というので正門の近くに來たんですけど、光秋さん今何処にいますか?)
「えっ?……正門つて、本部の?」

(はい)

董たちが通う学校の住所は光秋も知らされており、東京本部との凡その位置関係も把握している。車でも軽く10分以上はかかる道のりであり、だからこそ電話を終えてから3分と経たずに到着の連絡が來たことに、激しく困惑してしまう。

「もう着いた? 正門つて……?」

(その……テレポート使つて……どつかよそにいて呼び出しがあつた時は、こうやつて來なさいつて入間主任が……)

その困惑に不安を感じたのか、董は恐る恐る説明する。

「ああ。なるほどな……」——そうだった。董さんの能力それだし、急を要するなら当然使ふよな……—

それでようやく状況を合点すると同時に、部下の能力を失念していたこと、それに

よって余計な困惑をしてしまったことに、学校の電話番号の登録を忘れた以上の悔いを覚える。

（……………光秋……………さん？）

「！ああ、ごめん。なんでもないんだ……………正門前だよな？ だったらそこで待ってて。こつちもすぐに行くから」

（わかりました）

不安そうに訊いてくる菫に我に返り、指示を出すと、光秋は携帯電話を仕舞って歩みを再開する。

——超能力者、それも高レベルの人と仕事する感覚がまだ掴めないんだろうな。京都でだって、移動時間が極端に短い体験なんてしなかったし……………

反省とも自己弁護ともつかない思いを持て余しながら、先程よりも速い足で本郷の許を目指す。

廊下を速足で抜けて玄関を出ると、光秋は駐車場一帯を見渡して本郷の姿を捜す。

「車で待つてゐるって言ってたよな……………特徴訊いとくんだった」

広い駐車場にちらほらと停まっている車を見比べつつ、本郷らしき人影が見付からな

いことに途方に暮れる。

その時、クラクションの音が鳴り響く。

「……………あそこか」

音がした辺りに目を凝らし、黒い乗用車の運転席の窓を開けて手を振っている本郷を見付けるや、光秋はすぐに駆け寄る。

「すみません。お待たせしました」

「いやあ、いいんだがさ……………特エスは？」

「正門の前で待たせてます。今呼んできます」

言うや、今度は正門に向かい、そこで待っていた学生服姿の桜、萠、北大路の許に駆け寄る。

「すまない。待たせた。あそこに車待ってるから、それに乗って。黒いやつ」

「いや、その前にさ、アタシたち制服のままなんだけど。着替えなくていいの？」

「あ……………」

着ている学生服を示す桜に、光秋は本日すでに何度目かわからない失念に気付く。

「……………調査しに行くだけだし、別にいいかな？本郷さんも待たせてるし……………」

「いや、そのままでもいい。こっちに」

多少迷いながらも断じると、3人を手招きして本郷の車に向かう。

「本郷さん、お待たせしました。こちらが加藤隊の桜——柏崎、柿崎、北大路です。みんな、こちらが警視庁捜査一課の本郷さん」

両者の間に立つと、光秋は双方の簡単な紹介をする。

「こりやまた、おチビさんぞろいだな……刑事の本郷だ。よろしくな、嬢ちゃんたち」

「よろしくお願いします！」

「よろしく」

「……」

車窓から身を乗り出して告げる本郷に、堇は快活に、桜はあつさりと、北大路はこくりと頷いて返す。

「あー、ところで、3人とも学校の制服だが？」

「はい。調査なので着替えはいいかと思ひ——」

「バカヤロツ」

指摘に応じようとした光秋の言葉を、本郷のやや陰を含んだ声が遮る。

「平日の真つ昼間に制服着た女兒連れ回してたら、俺らの方が誤解されるわ！待っててやるから着替えてこい」

「はい……3人とも、やっぱり着替えてきて」

「どつちだよ……」

注意されてすっかり意気消沈した光秋の指示に、桜が苛立ちを含んだ呟きを漏らしながら、3人は本舎へ駆けていく。

「……つくづく踏んだり蹴つたりだなあ、今日は……」

玄関に消えていく3人を見送りながら、光秋はまだ始まってさえない新しい仕事の大変さを思い知った。

学校の制服からESOのそれへと着替えを終えた少女たちが戻つてくると、本郷の運転する車は件の現場へと向かう。

「……………本郷さん。こちらの不手際で余計な時間をとらせてしまい、申し訳ありませんでした」

その道中、助手席に座る光秋は、右隣でハンドルを握る本郷に頭を下げる。

「一応、清から初仕事とは聞いてたけどなあ……意外とおつちよこちよいなんだな？」

「……………」

怒っているわけではないものの、どこか呆れた様子で返す本郷に、光秋は何と応じていいかわからず、仕方なく後部席に座る桜たちに顔を向ける。

「桜さんたちも。僕の考え不足で振り回してしまつて申し訳ない」

「いいえ。私もちゃんと教えてあげれば……」

「董が悪く思つてどうすんだよ……」

それに落ち込み気味に返す董に、桜が呆れた顔で呟く。

「桜さん——柏崎さんの言う通りだ。君らは僕の指示に従つただけ。それで生じた問題は、全部僕の責任だよ。柿崎さんが気にすることじゃない」

それに続く形で光秋も告げる。できることなら頭を撫でて直接的に励ましてやりた
いとも思つたが、走行中に変な体勢になるのは危ないとの認識から、一旦却下する。

「まっ、俺も新人の頃は、警察手帳忘れて訊き込みに行つたりしたからな。それで先輩に
大目玉喰らつて、慌てて署にとんぼ返りしたことあつたっけ……だからまっ、あんま
他人のことは言えねえけど」

「はあ……」

おそらくは本郷なりの気配りなのだろう。変わらぬ呑気さで語つてくれた失敗談に、
しかし反応に困つた光秋は曖昧な返事をすので精一杯だった。

そうしている間にも、一行を乗せた車は繁華街へと差し掛かる。

「……この辺だな」

周囲を見回しながら呟くと、本郷は路肩に車を寄せて外に出、光秋たちも後をついて
行く。

平日の真つ昼間にも関わらず人の行き来が多い歩道を、特に光秋などは本郷の姿を見失わないように注意して進み、少しすると歩道の端に置かれた3、4つの花束が見えてくる。

「これって……献花台ですか？」

「台つつうか、直置きだけだな。本件の一番新しい被害者、その現場がこの辺だ」

呟く様な光秋の問いに応じつつ、本郷は車道を指さす。

「今から1週間前の夜9時頃。グループでたむろしていた青年の一人が車道に飛び出して、ちやうど走ってきたタクシーに跳ねられた」

「……その時の様子が、どこかおかしかった？」

「ああ。一緒にいた奴等の証言では、突然何かを避ける様に車道に出て、それで跳ねられたらしい」

「……」

本郷の説明を聞きながら、光秋は置かれた花束を見る。

「……………」

特に意識したわけでもなく、自然とそのそばに歩み寄り、膝を折ると、そつと手を合わせて黙祷する。

「なに——」

「しつ。ちよつと静かにしてあげよ」

唐突な合掌に桜が問い掛けようとするが、堇に遮られる。

ややあつて目を開けると、光秋はちょうど同じくらいの視線の高さになっている少女たちに顔を向ける。

「いやなに、大したことじゃないよ。ただ、これくらいはやつといた方がいいかなあつて。一応、この人の死んだ原因調べるのに関わるわけだしさ……要は僕個人の気持ちの問題」

そう言い、もう一度花束を見やると、光秋は膝を伸ばして本郷を見る。

「それで、我々の仕事は？」

「事件当時、被害者がどんな状態だったか——より詳しく言うと、その時何が見えていたのか知りたい。確か、サイコメトリーならそういうのもできるんだろう？」

「わかりました。北大路さん」

「……了解」

光秋の呼び掛けに応じると、北大路は路面に手を当て、目をつむつて意識を集中する。

——残留思念……その人が触れたものに残る思いの痕跡。サイコメトラーや、一部のテレパンなんかは、それを読み取ることができると思うが………

その様子を黙つて眺めながら、光秋は研修で聴いたことを思い出す。

―触っただけでその時の状況が把握できる……まるでオカルトだな―

これまでに見てきた超能力、そして神モドキや黒球といった超存在の持つ超常的な、正に理解を超えた“力”。それらに対する信頼や畏敬を思い出す一方、目の前で行われているマジックの様な光景に多少の胡散臭さも感じてしまい、それらが合わさってついそんな感想が胸の内に漏れる。

「特工スの主任がそんなこと言うんですか？」

「？……もしかして、今の……」

「今ここに、それもすぐ近くにいる人の考えなんて、1週間前の残留思念を読み取るよりも簡単ですよ」

「……………」

唐突にかけられた北大路の棘のある言葉、そのさらに続いた一言に、光秋はバツの悪さを覚える。

―そうだった。そういうのがわかるのが北大路さんだな……―

そんな思いと、また心の中の独り言を読まれるのではという若干の警戒心から、光秋はつい北大路から後退ってしまう。

それを認識しているのか否か、読み取りを終えたらしい北大路は路面から手を離し、本郷を見やる。

「どうだった？何が見えた？」

「もの凄い速さで向かってくる自転車。それを避けようとして、咄嗟に……」
「なるほど」

北大路の説明を聞きながら、本郷は手帳にメモをとる。

「自転車……念のため訊きますが、そういうのが向かってきたっていう証言は……」

「もちろん無い。さっきも言ったように、周りの奴等はみんな『何かを避ける様にして車道に飛び出した』って言ってるからな。自転車とすれ違ったんなら、まず気付くだろう」

「ということは、その自転車が何者か——犯人が見せた幻影……」

「そういうことだな」

初めての特務部隊主任としての仕事に緊張しているのか、自分でも訊くまでもないだろうと思っていることであっても、一つ一つしつこいくらい丁寧に、噛み砕いて理解したいというのが今の光秋の心境だった。

——自転車を避ける——危険を回避してとった行動が、逆に危険への誘いだった、か

……

その上で、ここできこったことをそのように呑み込むと、改めて花束を一見する。

「ほんじゃ、次行くか。この調子で何力所か回って、今みたいに被害者が見たものを確認していくから」

「わかりました。北大路さん、引き続き頼む」
「……」

本郷の呼び掛けに向き直って応じ、ひと声かけた北大路が無言で頷くのも見ると、光秋は再び車に乗り込む。

それからしばらくの間、一行は本郷の運転する車で繁華街のあちこちを周り、北大路が事件現場をサイコメトリーするということを繰り返す。

「これさ、必要なのは菊だけで、アタシと董が来ることなかったんじゃ……」
「だな。すまない……」

何力所目かでそんなことを言ってきた桜に、光秋は本日何度目かの申し訳なさに身を縮ませる。

そんな光景を横に添えつつ、本郷は北大路が読み取った情報をメモしていく。自分から車道に飛び出していった者たちは、皆追ってきた自転車などを避けるか、信号が赤のところを青と思って渡っていた。

歩道橋で転落した者たちは、まだ足場が続いていると思つて一步を踏み出してそのまま階段を転げ落ちた。

乱闘騒ぎが起こった現場では、相手が突然殴り掛かってきた思念が2人分読み取れたらしい。

「2人同時に相手を殴った？」

「そうじやありません。『突然自分を殴ってきたイメージ』、それが2人分あるんです」
理解の齟齬を防止のために確認する光秋に、北大路ははつきりと応じる。

「突然殴られたイメージが2人分……2人同時に催眠にかかったということでしょうか？」

「さあねえ。少なくとも、喧嘩してた奴等は『自分が先にやられた』と思っていたんだらうが……」

腕を組んで思い付いたことを言ってみる光秋に、本郷はメモの手を休めずに返す。
その時、近くでクラクションの音が鳴り響く。

「!？」

突然の大きな音に驚きつつ、光秋は辺りを見回す。

と、今度は聞き覚えのある声がかかる。

「おーい、加藤！」

「!」

声のした方を見やると、路肩に停まったパトカーの助手席に座った警官が、窓から出

した手を振っている。

その顔付きと雰囲気、工場地帯での戦鬪がひと段落した時に会った小田一尉の後輩のことを思い出すと、光秋はパトカーへと歩み寄る。

—えつと……この人の名前なんだつけ……？確か「川」が付いた名前……—
ど忘れしてしまった相手の名前を焦って思い出そうとしながら。

—野川^{のがわ}?……戸川^{とがわ}?……!——富川^{とみがわ}さん!—

「いや、徳川^{とくがわ}だ」

「……………失礼しました」

結局間違えて本人に訂正され、多分に恥じらいながら頭を下げる。

「なに、徳川。知り合い?」

と、運転席に座っていたもう一人が訊ねてくる。

頭部を覆う程度に短く切り揃えられた黒髪に、やや黒く焼けた肌と引き締まった顔付き、座っていても長身な印象を与えてくる細くも大柄な体格と、活発そうな外見をした人だ。

「ああ。中学・高校と先輩だった人の知り合い。この間会ってた」

運転席の人に応じると、徳川は光秋に向き直る。

「奇遇だな。こんなところになしてんだ?」

「一応仕事を……徳川さんたちは？」

先程の間違いの記憶に一瞬怯みながらも、光秋も訊き返す。

「一応仕事を。パトロールしてらお前が見えてさ」

「ああ。警官とは聞いてましたけど、こういうお仕事ですか」

光秋の調子を真似て返した徳川に応じつつ、光秋は目に前に停まるパトカーをしげしげと眺める。

——パトカーに乗ってあちこち回って……密着とかによく出てくる仕事だよな——
眺めていると、偶に観るその手の番組のワンシーンが浮かんでくる。

と、後ろから本郷の声がかかる。

「なんだ、君にも警察の知り合いいたのか」

「いえ、知り合いといえますか……」

確かに、互いに顔と——光秋は今思い出したが——名前を知り合う間柄ではあるが、徳川の個人的なことについては全く知らない光秋は、素直に頷くことに抵抗を覚える。

と、徳川の方も本郷に気付く。

「そちらは？」

「ああ、^{もん}こういう者だ」

応じながら、本郷は懷から出した警察手帳を開いて見せる。

「警部補？」

「失礼しましたっ」

それを見て、車内の2人はすぐに姿勢を正す。

「……そんなに高い位なんですか？」

徳川たちの反応の意図がいまいちわからない光秋は、つい訊いてしまう。

「まあ、俺らよりは上だな。ちなみに俺たちは巡査長だから」

「ああ、9つある警察の階級の内、下から2番目というか、1番下と2番目の間ですよね」
徳川の返答に、光秋は以前テレビかなにかで聞きかじったことを思い出しながら応じる。もつとも、肝心の本郷の立ち位置は未だに理解できない。

「まあ俺の階級——警部補ってのは、下から3番目だ。それと、これくらいからチームリーダーみたいな仕事に就くようになるんだ」

「ちなみに、俺たちの直接の上司も警部補だ」

「ああ」

本郷の説明と徳川の補足に、光秋はようやく合点する。

「ところで、お二人さんこの辺を担当してるのか？」

「ええ」

本郷の質問に、運転手が頷く。

「じゃあ、ちよつと前にここであつた乱闘騒ぎも知つてますか？」

「知つてるもなにも、それに対処したの俺らだぞ」

「！」

徳川の予想以上の返答に、もしやという程度の軽い気持ちで訊いた光秋は意表を突かれる。

「よろしければ、その時のこと詳しく教えてくれませんか？」

「詳しくついても……男2人が殴り合つてたあれだろう……」

すかさず頼む光秋に、徳川は目をつむつて記憶を辿る。

「パトロール中に喧嘩の連絡受けて、それで止めに行つたんだよな？」

「そうそう。私らが来たころには野次馬もそこそこいて、それ掻き分けて取っ組み合つてる2人を離したんだよ」

確認するように目配せする徳川に、運転手も首肯しながら続く。

「その時、何かおかしなことつてありませんでしたか？不自然なこととか」

「おかしなことつて言われてもな……」

さらに問う光秋に、徳川は眉間に皺を寄せる。

「喧嘩の仲裁なんてしよつちゆうだからな。一応署に連行して詳しく訊いた時も、特におかしなこととは言つてなかつたし」

「身体検査しても特に異常は見られなかったしね」

腕を組んでさらに記憶を辿る徳川に、運転手も頷いて返す。

「……例えば、どっちが先にやった、とか……」

「ああ。それは両方『相手が先にやった』って言ってたぞ。もつとも、そういう証言ってよく聞くけど」

「……そうですか。ありがとうございます」

徳川の口ぶりからこれ以上新しい情報は得られないと察し、光秋は礼を言つてパトカーから離れる。

「お手間をとらせてすみませんでした」

「いや、俺が停めてもらったただだからさ。仕事頑張れよ！羽柴^{はしば}、やつてくれ」

頭を下げる光秋に激励で返すと、徳川は運転手に頼んでパトカーを走らせる。

「……すみません。時間をとらせて」

「いいさ。そんじゃ、捜査再開すつか」

「はい」

本郷の言葉に頷くと、光秋は少女たちを伴つて再び現場を巡る。

昼食などの休憩を挟みつつ最後の現場のサイコメトリーを終え、ふと腕時計を見ると時刻は午後3時になっていた。

「けっこういう時間になったなあ」「みんな、疲れてないか？特に北大路さん」

「私は別に……」

「アタシはどっちかてえと待ちくたびれてるよ」

問い掛けに董と桜が応じると、光秋は無言を返す北大路に再度問う。

「北大路さんは？」

「疲れてたらどうなんです？……ここで解散させてくれるんですか？」

「それは……」

若干イラつきを含んだ表情で訊き返してくる北大路に、光秋は返事に困りながら本郷を見る。

「いや、現場はこれで終わりなんだが……この後、署に保管してある事故車両の調査も頼みたいんだけど……」

「……わかりました」

その視線に心苦しそうな顔を浮かべながらも返ってきた本郷の言葉に、光秋は北大路を横目に見ながらも頷いて返した。

「というわけで、みんな車に乗って」

「まだ続くのかよー」

「文句言わない！これが私たちのお仕事でしょ」

光秋の指示に、桜は包み隠さない嫌々を表し、それに対して堇の叱責が飛ぶ。

そんなやり取りをしながらも後部席に乗り込む2人に続いて、北大路もドアに足を掛けた直後、一瞬光秋の方を振り向く。

「堇ちゃんと桜ちゃんは完全にとぼちりだけだね」

「……………」

その一言が自分の人事ミスを責めているのだと察した光秋に言い返せる言葉はなく、黙って助手席に乗り込んだ。

繁華街近くの警察署に移動した光秋たちは、車を降りると本郷案内の下に事故車両の保管場所へ向かう。

「……」が、そうなんだが……」

言いながら、本郷は建屋のシャッターを上げ、後に続いて中に入った加藤隊一行は、照明に照らされたタクシーから高級感溢れる外車まで、実に多種多様な数台の車両を目にする。

—これはまた……—

事故車両というだけあつていずれも多かれ少なかれ破損しており、最も酷いもので車体前部が完全に潰れている車に、光秋は気温が高めな日にも関わらず薄ら寒さを覚える。

「……つまり、コレらに乗っていた人たちの事故当時の様子をサイコメトリーする、と？」

「ああ。乗り物に乗つてたなら、通つた道を調べるより乗つてた物を調べた方がより精度が高いらしい。前に協力してもらつた特エスの受け売りだな」

「なるほど……じゃあ、北大路さ——」

本郷の説明を聞いていざ指示しようとした矢先、北大路は最後まで聞かずに手近な車に触れる。一見なんの変哲もないタクシーだ。

——……完全に威厳無しだなあ——

部下のそんな様子に内心頭を抱えている間にも、タクシーから手を離れた北大路は一同に向き直る。

「コレって、最初の方に見に行つた飛び出しの？」

「そう。飛び出した奴を撥ねた車だ」

北大路の質問に、本郷は手帳とプレートของナンバーを照らし合わせながら答える。

「なにが見えた？」

「突然飛び出してきた男の人を撥ねるところが。それこそ突然出てきたから、ブレーキを踏む暇もなかったみたいです。凄く動揺してる」

「本人の証言とも一致してるな」

光秋の問いに北大路が答えると、本郷は手帳を確認しながら呟く。

「……運転手が催眠にかかった感じは？」

「特に不自然な記憶の繋がりはないから、可能性は低いと思います。仮にかかっていたとしても、高度な催眠ほどかけられている人は自覚しにくいって入間主任も言っていたし」

「つまり、本人の記憶を探っても、その時催眠にかかっていたかどうか判断するのは難しいわけか……ありがとう」

不意に浮かんだ疑問を答えてくれた北大路に、光秋は先程からの気まずさを誤魔化すことも兼ねて礼を言う。

その間にも、北大路は次々と車を触って知り得たことを報告していく。

ある車は青信号と思って進んだところを横から追突され、ある車は突然強烈な眩暈めまいに襲われて歩道に乗り上げ、ある車は車道を真っ直ぐ進んでいたはずが突然目の前に現れた電柱を避けきれずにそのまま突っ込んでしまった。

『真つ直ぐ走っている』という催眠をかけられつつ、電柱の方へ誘導された……ということでしょうか？」

「おそらくな。ドライブレコーダーとか付いてたらかもつと詳しくわかったかもしれないが」

ちょうど悪寒を抱かせた前部が潰れている車、それに触れる北大路を見ながら推測を述べる光秋に、本郷はメモをとりながら悔しそうに呟く。

その時、携帯電話の振動音が響く。

「あ、俺だ……わかった。すぐ行く」

上着のポケットから取り出したソレに出た本郷が短い言葉を交わすと、通話を切りながら光秋を見やる。

「部下に任せてた監視カメラの方で気になる点が見付かったらしい。こっちは一旦中断して、一緒に来てくれ」

「わかりました。3人とも」

本郷に応じると、光秋は少女たちを手招きし、一行は保管場所となっている建屋を後にする。

本郷の後をしばらくついて行くと、加藤隊一行はいくつもの机が並んだ事務所らしき部屋に通される。

部屋の奥には大きめの画面のパソコンが2台並んでおり、それぞれに男性が1人ずつ付いて画面を食い入るように観ている。

「おう、待たせたな」

言いながら本郷がそちらへ歩み寄ると、男性2人は画面から顔を離して本郷へ向き直る。

「本郷さん、お待ちしてました」

「そっちは……ESOの？」

「東京本部加藤隊主任、加藤三尉です」

疑問の目を向ける1人に応じつつ、光秋は一礼する。

「今回協力してもらってるスタッフたちだ。で、何がわかったんだ？」

「はい。これをちよつと観てください」

本郷の問いに頷くと、1人がパソコンを操作して画面に3つの映像を映し出す。監視カメラのものらしき上から路上を映したものが2つと、ドライブレコーダーのものらしき車道を映したものだ。

「まずこれなんです、この辺に注目しててください」

言いながら映像の右上を指さすと、男性は映像を再生する。

夜の繁華街、疎らながらも滞ることなく人の行き来が行われている歩道。そこに6人程が固まって現れたかと思うと、前の方を歩いていた1人が不意によろけ、体勢を立て直すや後ろにいた1人に殴り掛かり、2人の間で拳の応酬が始まる。

「これって……」

「ああ。両方とも相手の方が先に殴ったと証言している乱闘騒ぎだな」

思わず呟いた光秋に応じつつ、本郷は示された右上辺りに目を凝らす。

光秋も視線を追って注視すると、終始佇んでいる人影に気付く。映像で見える限りではフードを被っているため人相はおろか男か女かも判らず、体形もこれといった特徴のない中肉中背だ。

「……この人、ずっと動きませんね。あ、今動いた」

光秋の言う通り、それまで黙って佇んでいた人影は騒ぎに気付いた野次馬たちが集まってくるのと入れ違うように映像から消えていく。

「次はこちらを」

言いながら男性は映像を止めると、今度は違う監視カメラの映像を再生する。夜の十字路を上から撮ったものだ。

「今度はこの辺をよく見ててください」

言われて光秋は男性が指さした左下——ちょうど横断歩道の手前辺りに目を凝らす。多数の車が途切れることなく映像の中を上と下へ往来する中、信号が赤へと変わって今度は左右へと車が行き来する。

と、そこへ映像下から速度を緩めることなく1台の車が交差点へ侵入し、右から来た車と激しく衝突する。

——これって、さつき北大路さんが調べた車の1つか？信号を誤認して横から追突されたっていう。それに……

映像全体を眺めながら保管場所でのことを思い出す一方、先程示された左下を見ていた光秋は、そこにも終始佇んだままのフードの人影がいることに気付く。

「すみません、この映像もう一度再生していただけますか」

「はい」

頼みに応じるや男性は映像を頭から再生し、人影に改めて目を凝らした光秋は、それが微かに向きを変えているように見えた。

「……」このフードの人、事故車両を目で追ってるように見えませんか？ちよつとわかりにくいけど」

人影自体映像の端に小さく映っているだけなので詳細は見えず辛く、元来の視力の低さも合わさって大した自信もないことを承知で感じたことを言ってみた光秋だが、それに

対して男性2人は深く頷いてくれた。

「自分らもそう思ってたんです。後で補正をかけて改めて観てみますけど。そして最後が……」

応じると、男性は3つ目のドライブレコーダーの映像を再生する。夜の繁華街を走っているところのようだ。

「今度はこの辺を見ててください」

言いながら左端辺りを男性が指さした矢先、歩道から突然人影が飛び出し、止まる間もなくそのまま撥ねてしまう。

「……………」

人が撥ねられる瞬間という生々しさに思わず目を逸らしたくなるのをどうにか堪え、指さされた辺りを注視した光秋は、ここにも例のフードの人影を見付ける。

「これって、最初に行った現場の……」

「みたいだな……たむろしてる連中の後ろに映ってる……つけてるのか？」

光秋の呟きに返しながら、本郷も映像の中のフードに目を凝らす。

「このフードの奴が犯人ってこと？」

「……ってことなのかな？3件も現場にいたわけだし」

一連の映像を横で見ていた桜の言葉に、光秋も半ば同意しながら本郷を見る。

「どうでしょう?」

「立場上、はつきりとした証拠が出てくるまでは犯人と断言するわけにもいかない……でもまあ、重要参考人ではあるかな。2人は引き続き映像のチェック、それと画像解析も」

「了解」

男性2人に指示を出すと、本郷は光秋と少女たちに向き直る。

「俺たちはもう一度現場を洗ってみよう。今度はこのフードについてサイコメトリーしてほしい」

「了解——と言いたいところですが……」

すぐに頷こうとした直前、壁に掛かっている時計が目に入った光秋は、少女たち、特に北大路を見ながら口籠る。時計の針は、すでに5時半を指そうとしていた。

「午前中からずっと働き詰めですし、子供たちだけでも今日はこの辺で帰していただけないでしょうか? 明日の朝一番に再開ということ……?」

胸中に多大な不安を抱きながら、本郷の顔色を窺う。

「さすがに警察の捜査でそういうのはなしかな? でも、そろそろ帰した方が……」

「そうだな。暗くなってきたし」

「いいんですか?」

「君が言ったんじゃないか」

「そうですか……」

あつさり了承してもらえたことに拍子抜けする一方、桜たちを寮に帰せることに安堵する。

「実際、特エスとはいえ小学生を遅くまで働かせていると世間に知れたら、評判悪くなるし」

「そうそう。祝賀パーティーの時も散々叩かれたもんな……」

「祝賀パーティー？」

男性2人の会話に出てきた思わぬ単語に光秋が首を傾げていると、本郷が少し呆れた様子で言ってくる。

「おいおい、ニュース観てなかったのか？ 襲撃事件の後、たびたびやってただろう。警備に当たっていた警官の中にNPのメンバーが紛れ込んで、そいつ等が襲撃犯たちの活動を手助けしたって」

「ああ、それは聞いてます」

言われて、事件後から東京へ引越すまでの間に藤原三佐たちがそんな話をしていたの思い出す。

「その件が報道されてからしばらくの間、警察の方に山の様な苦情が来たんだよ。『市民

を守る警察の中にテロリストがいるのか!』ってな」

「酷いもんだと、署に直接怒鳴り込みに来る人もいましたよね……」

本郷の説明に続いて、男性の1人が苦悶の表情を浮かべる。

「まあ、さすがに今は苦情の方は落ち着いたが……とにかく、市民の警察への信頼が揺らいでいる今、あんまり無茶な捜査は控えた方がいいってことさ」

「なるほど……」

一連の説明に、光秋は深く頷きながら納得する。

「なんなら、俺が家の近くまで送っていくぞ」

「……ではお言葉に甘えて」

本郷の提案に、光秋は少し考えて頷く。

「よし、こつちだ」

「失礼します」

言うや本郷が部屋を出ていくと、光秋も男性2人に会釈し、少女たちを引き連れて後続く。

全員が車に乗り込むと、本郷は光秋の説明に従って桜たちの寮へ向かった。

警察署からしばらく走って寮の近くに差し掛かると、助手席に座る光秋は暗くなってきた周囲を注視する。

「そこです。その辺で停めてください」

「はいよ」

街灯に照らされた車道の一角を指さしながら告げると、本郷はそこへ車を寄せて停車し、座席から腰を浮かした光秋は後部席に座る少女たちに振り向く。

「明日だが、柏崎さんと柿崎さんはいい。北大路さんだけ頼む」

「そうでしょうね」

無愛想に応じる北大路に若干苛つきながらも、光秋はさらに続ける。

「学校の方には僕から連絡しておくから、明日の朝8時までに東京本部に来てくれ。本郷さんもそれくらいに迎えに来ていただけますか？」

「いや、そういうことなら、俺が明日直接ここに迎えに行くぞ？」

「いいんですか？」

「それで真つすぐ現場に向かえば、時間も短縮できるしな」

「……ではそれで。北大路さんは8時くらいに寮の前で待ってて。僕もそれくらいにここに来る」

「わかりました」

思わぬ申し出を交えた明日の確認を終えると、北大路はそのままドアを開け、少女3人は歩道に降りる。

「今日はお疲れ様でした」

「またなっ」

「ああ。3人とも気を付けてな」

董と桜の挨拶にまとめて応じると、頃合いを見た本郷が車を発車させる。

「このまま君の家に向かえばいいか？」

「いえ。本部に向かってください。明日出舎せずに直接現場に行くつて連絡と、北大路さんが休むつて学校に連絡したいので」

「了解」

応じると、本郷は差し掛かった十字路を曲がって本部へ向かう。

「にしても、本当にあのサイコメトラの子と2人だけでよかったのかい？」

「?……いいも悪いも、あとの2人の能力はこういった調査には不向きですし、それなら北大路さんだけ呼んで、あとは学校に行かせた方がいいでしょう。今日、まさにそういうミスをしたばかりですし……」

本郷の問いに答えつつ、光秋は数時間前の悔いを思い出す。

「いや、そういうことじゃなくなつてな……君、あの巻毛の子とあんまり仲よくないだ

ろう？」

「ああ……」

言われてようやく質問の意図を解すると、光秋は窓から漏れる明かりが目立ち始めた町並みを眺めながら少し考える。

「……確かに、あまり上手くいつているとはいえないでしょうね。初めて会った時から妙な距離があつたというか……主任になると決まってから、ずっと敵意向けられてるような気がします。他の2人が間に入ってくれるからこそバランスが保たれているというか……」

「やつぱりな……俺も仕事柄、特エスやその主任とはよく関わるんだが、あれくらいの年頃の特エスを抱える主任は苦勞するみたいだ。ノーマルの子供なら最悪力づくでどうにかなるワガママも、高レベル超能力者なら力で押し通したりするからな。あと、大人の都合に振り回されることに、子供なりに思うことあるみたいだし」

「……やつぱり、そういうもんですか……？」

自分の中にも薄々あつた感覚——大人の都合に子供を巻き込んでいること、それを他人の口から告げられて、光秋は胸の奥に言いようのない疼きを覚える。

——今では——今正に、僕もそういうことに関わってるんだよなあ……——
そこでちょうど赤信号に差し掛かり、車が停車すると、本郷が赤いランプを眺めなが

ら呟く。

「もつとも、そういう子がいるからこそどうにかなることもたくさんあるからな。実際の今回の事件だって、超能力なしの捜査だったらもつと時間が掛かったかもしれないし、その間に被害者も増えてたかもしれないからな。だから一晩休んでからの捜査再開くらいどうってことないというか……事件の多くは週末の夜に起きてるから今日くらい大丈夫というか……俺自身娘を持つ身としては、それくらいはしてやりたいっていうかな……」

——……………本郷さんも、同じ気持ちなのかな？——

どこか煮え切らないように語る本郷に奇妙な共感を覚えると、光秋は車窓に向けていた顔を本郷へ向け直す。

「……少なくとも、明日については大丈夫です。北大路さん、仕事はちゃんとしてくれるし。今日だつてそうだったでしょう？」

「まあね」

応じると同時に信号は青へ変わり、本郷は車を走らせる。

——いろいろ腑に落ちないことはあるけど、少なくとも今は事件解決に——北大路さんたちに過度な負担が掛からない程度に——尽力しないと。それだけは動かせないよな

そう思うことで一応の納得を覚えると、光秋は再び流れ出した景色を眺めながら、本部に帰ってからの片付けごとの段取りを考えた。

101 捜査協力 後編

3月8日火曜日午前7時50分。

昨日の連絡に従って自分の寮から直接少女たちの寮に向かった光秋は、門の前に着くと誰もいない周囲を見回す。

「……北大路さんはまだか。出てくるの待つか」

呟きながら寮の玄関を一見すると、そのまま門を背に北大路を待つ。

「昨日日本郷さんにはああ言ったが、いざこうしてみると、やっぱり北大路さんと二人つきりつていうのは緊張するな……変なことにならなきやいいが………」

なまじ時間ができてしまったために湧いてきた不安を持て余していると、後ろでドアの開くが響き、振り返るとESOの制服に身を包んだ北大路が出てくる。

「おはようございます」

「……おはようございます」

光秋の挨拶に素っ気なく応じると、北大路は光秋の左に並ぶ。

「よかった。挨拶しても返してもらえないかと思ってたからな………」しかし………会話がないな………」

思っていたよりも良好な北大路の感触に安堵したのも束の間、挨拶を交わしたきり訪れた沈黙に、内心焦りながらもこれといった話題が思い付かないことに頭を抱え、そもそも話し掛けていいものか躊躇してしまう。

—何を話していいかわからん。そもそも、迂闊に話し掛けるとまた怒るんじゃないか……—

そんなふうに10歳の少女におっかなびくりしていると、北大路の方から声を掛けてくる。

「……………加藤さんは、なんでESOに入ったんですか？」

「なんだい、唐突に？」

どうにか破られた沈黙にほっとしながら、光秋は問いの意図を探ろうと訊き返してみる。

「別に。ただ気になったから訊いただけです。とても向いてそうじゃないのに、どうしてこんなところに就職したんだろうって」

「はつきり言うな……まあ、向いてないのは事実なんだろうが………主任やつてることに關しては、そうなんだろうな。これは僕が志願したんじゃないくて、上の指示でそうなっただけだから」

「だから、なんでそもそもESOに入ったんです？」

「いろいろ理由はあるが、一番大きいのはとにかく仕事が必要だったからかな。食べていく手段がさ。そこにタイミングよく京都支部からスカウト受けて、あとは実質一芸入社つてとこかな」

「ふーん……………」

そこまで話すと、北大路は興味を失ったように等間隔で車が往来する車道に目を向ける。

「……………そういう北大路さんは、なんで特エスなんてやってるんだ？」

北大路の質問が刺激になったらし。光秋もふと浮かんだ疑問を投げ掛けてみる。

「……………高レベル超能力者だからです」

「……………」

返ってきた答えが上手く解せずに光秋が首を傾げていると、北大路はもどかしそうに続ける。

「私がレベル9のサイコメトラードとわかったのは1歳くらいだそうです。当時から日本警察の幹部だった父の意向で、5歳くらいでESOに預けられて、ずっと普通の子が受けるような教育と合わせて、特エスに必要なこと——能力の上手な使い方とか、その抑え方とか、そういうことを教わってきました」

「……………珍しいな——」

初めて会って以来、顔を合わせる機会が少なかったものがあるが、基本的に口数が少なかった北大路が今日がよく喋ることに内心関心しながら、光秋は黙って先を促す。

「私も話にしか聞いたことはないけど、普通の子が親から教わる読み書きとか、簡単な数のこととか、そういったことを全部その時だけの赤の他人に教えてもらって……ある日家に帰った時、思い切つて父に訊いたんです。『何で私はこんなことするの？』って……そうしたら父は、『お前が高レベル超能力者だからだ。優れた能力を持つ者は、それを活かす義務があるんだ』って……だから、私は特エスでいるんです。それ以外の生き方なんて、私には……私たちみたいな人間には無いんですっ」

「……なるほどな」

最後の方は北大路にしては珍しい熱の籠った声で言い切ると、光秋は両腕を組みながら静かに応じる。

「北大路さんのお父さんがどういう意図でそんなことを言ったかはわからないが、実際問題、君がいてくれることで大分助かっているのは事実だな。今回の件が正にそうだし、昨日本郷さんもそんなこと言ってた……だから、お父さんの言う『義務』っていうのを否定することは僕にはできないな………たださ」

そこで一旦言葉を区切ると、それまでぼんやりと車道に向けていた視線を北大路に向ける。

「他に生き方がないっていうのは、やっぱり違うと思うぞ」

「！知ったふうに言わないでください。私がどんな思いで生きてきたか、貴方なんかにわかるわけないでしょう!？」

そうして告げられた一言が余程頭にきたらしい。福山程ではないが変化に乏しい顔に怒りを浮かび上がらせ、北大路は光秋を睨み付ける。

「ああ、わからんね。というか、今ようやくわかり始めたところだ。ただ、今の話で一つだけ思ったことがある……義務だ何だと言つて、本当は北大路さん自身が今の自分の在り方に納得してないんじゃないか？」

「つ……………そんな……………ことは……………」

その目をしっかりと見据え、強くはないが明確であろうと意識した光秋の言葉に、北大路は途端に口籠つてしまう。

その時、見覚えのある黒い車が自分たちの許へ寄ってくるのを見て、本郷が来たと理解した光秋は、無意識の内に昂揚していた気分が一気に鎮まり、これからひと仕事あるのだということを思い出してやや気まづくなる。

「……………すまない。これから仕事だつていうのに、変なこと言っちゃったな……………たださ、これだけは覚えておいてほしい。どんな時でも、選択肢が一つだけつてことはないよ」

そこでちょうど車が2人の前に停まり、開いた窓から剃り残した顎の髭が目につく本郷が顔を出す。

「おはよう。待たせたな。乗ってくれ」

「おはようございます。今日もよろしくお願いします」

本郷との挨拶が会話の終わりを告げると、光秋は助手席に、北大路は後部席に乗り込み、車は昨日見た現場へ向けて走り出す。

— 僕も迂闊というか、これから一緒に仕事する相手との間に嫌な雰囲気作るとはな
.....

先程の会話を悔やみながら、光秋は後ろに座る北大路を見やる。

「北大路さん。さつきはいろいろ言ったが、とりあえず今は——」

「わかってます。仕事はちゃんとやります」

「.....ならいい。よろしく」

窓の外を見ながらの返答にひとまず安堵すると、顔を前へ向け直す。

「.....大丈夫か？」

「なんとか.....」

その様子を見て不安そうに訊いてくる本郷に、光秋も不安そうに返すことしかできなかった。

しばらく走って昨日最初に訪れた現場に到着すると、一行は近くに停めた車から降りて早速捜査を始める。

「例のフードが映ってたので……」

「確かあの辺りだな」

周囲を見回しながら呟く光秋に本郷が指さしながら応じると、そこへ北大路が駆け足で歩み寄って路上に右手を触れる。

「……………確かに自分の前に行く集団に注目してますね。催眠は……………かけたっ」

「ビンゴだな」

固く閉じていた目を一気に開きながら告げられた北大路の報告に、本郷はメモを取りながら確かな手応えを感じた顔を浮かべる。

「フードの人——否、もう犯人だな。その人の詳しい情報ってわかるか？せめて足取りとか」

「ちよつと待ってください……………」

光秋の問いに応じるや、北大路は再び目をつむり、意識を集中させる。

が、その表情は徐々に曇っていく。

「“ノイズ”がひどくて、はつきりとは……」

『『ノイズ』?』

「まあ、ただでさえ人通りが多い上に、時間も結構経ったからな。そもそも犯人がこの辺りに実際にいた時間もそう長いもんじゃなかったし……」

「……ああ、なるほど」

眉間に皺を寄せる本郷の言葉に、光秋は北大路が溢した単語の意味を察する。

——『亡くなる直前の記憶』や『催眠——“攻撃”の意志』といった“強い思い”ならまだしも、特定の個人の情報を毎日不特定多数の人間が行き来する場所で読み取るのは難しいってことか。ましてや事件から時間も空いて、路上に堆積した情報——思念とでもいうものが増えていればなおのことか——

研修で習ったことも引つ張り出して北大路の苦悶をそのように理解すると、本郷に顔を向ける。

「ここからこれ以上の情報を引き出すのは、やっぱり難しいでしょうか?」

「俺の経験上はな。レベル9っていうからもう少し期待してたんだが……」

頭を掻きながら本郷が応じた、その直後、

「馬鹿にしないでください。できます!」

目を三角にした北大路は怒鳴り声を上げ、さらに目を固く閉じてサイコメトリーを継

続ける。

「……未成年……高校生くらい？ 男の子で……ここまでは歩いてきた……？
……」

そこまで呟いたところで再び黙り込んでしまい、再び曇り始めた表情に、光秋は思い切って告げる。

「無理せんでいいよ。この場所はここまでにしよう」

「大丈夫です！ ちゃんと全部わかりますっ！」

「いや、加藤主任の言う通りだ」

案の定光秋を睨み付けて怒り出した北大路に、本郷も冷静に声を掛ける。

「他にも現場はいくつもあるし、どの道ひと通り回らなきゃならん。それに、ここで下手に粘るより、もっと読み取りやすい場所で調べた方が効率いいだろう」

「でも……」

論す本郷に、しかし納得できないらしい北大路は逃げるように路上に当てた手に視線を落とす。

「……………まあとにかく、次行ってみよう」

その様子に強い焦れつたさを感じるや、光秋は北大路の右手首を掴み、そのまま車に引っ張っていく。

「ちよつと、何するんですか！」

「このままじや埒が明かないからな。悪いがさ」

激昂する北大路に多少の罪悪感を覚えながらも、徒に時間^{いたずら}が経つことが我慢ならなかった光秋は、敢えてその気持ちを無視して北大路の手を引つ張っていく。

北大路は足を踏ん張ってどうかこの場に留まろうとするものの、小柄な少女が大の男の腕力に勝てるわけもなく、多少の動きにくさを感じながらも車に着いた光秋は、そのまま押し込む様に北大路を後部席に座らせ、自分もその隣に座る。

間を置かず本郷が車を発車させると、不機嫌に顔を歪めた北大路を乗せた一行は次の現場へ向かう。

——急ぎとはいえ、ちよつとやり方が拙かったかな………？まあ、今は事件の早期解決が最優先か——

横目で北大路を見ながら改めて罪悪感を抱く一方、そう思うことで気持ちの区切りをつけると、光秋は流れていく外の景色に目のやり場を求める。

数分走って次の現場——信号の誤認による衝突事故があつた交差点に着くと、光秋は素早く降りて北大路を促す。

「さ、北大路さん」

「……………」

目を三角にして無言で応じながら車を降りると、北大路は映像に従ってフードの立っていた辺りに歩み寄り、地面に手を着ける。

「……………さつきと同じ人……………明らかに狙ってやつてる……………高校……………1年生……………？
……………ここには徒歩で……………」

……………ここでも読み取れるだけの情報を読み取るとまた次の現場へ移動し、それを繰り返すこと数回。一連の情報をメモした手帳を眺めながら、本郷は顎を撫でて唸り声を鳴らした。

「ん……………まさかとは思ってたが、未成年の犯行か……………」

「いずれの現場にも徒歩で来ていたということは、この近くに住んでるんでしょうか？」
そんな難しい顔の本郷を見ながら、光秋も北大路が言っていたことを思い出しながら言ってみる。

「北大路さん、犯人の足取りについて、結局詳しいことはわからなかったか？」

「……………はい」

確認する光秋に、北大路は悔しさを滲ませて応じる。

「いずれの現場も人の行き来が多くて、数日もすれば古い情報はどんどん埋もれて読み

辛くなつてしまつて……………」

「そうか……………」——これは、思つた以上に厄介か……………」

俯きながら告げる北大路に、光秋は難航捜査の不安を覚える。

と、

「……………待てよ」

手帳を眺めていた本郷が不意に顔を上げ、速足で車に向かつていく。

「本郷さん？」

「？」

突然のことに首を傾げながら光秋は後を追ひ、北大路もついて行くと、本郷は車から例のシールが張られた地図を取り出し、それを車の屋根に広げて手帳と交互に見比べる。

「どうしたんです？」

「いや、犯人がどっちから来たか、もしくは犯行後にどっちに向かったか、そういうのが短い距離だけわかつた現場が何か所かあつたよな」

追いついた光秋に応じながら、本郷は手帳のメモを頼りにボールペンで地図に矢印を書き加えていく。

犯人がやつて来たを方向を示すシールを指した矢印、もしくは去つていった方向を示

すシールから伸びた矢印、それらが十数本程引かれると、北大路が目を丸くする。

「これって……！」

「やつぱり、そうだよな……」

「?……………何です?」

北大路に合わせる様に納得の頷きをする本郷に、一人話に置いて行かれた光秋は居心地の悪さを覚えながら問い掛ける。

「今書いた矢印の方向を見てみる。特に帰り道の方」

「帰り道……」

本郷の助言に従って、去っていった方向を示す矢印を見回してみる。

「……………これって……同じ方向を指してます?」

「正解っ!」

初めて会った時にも聞いたクイズ番組の司会者の様な語調で応じるや、本郷は地図中に書いた矢印を指で追いながら説明する。

「それぞれの矢印を見比べてみると、犯人は犯行後に同じ方向に向かって去っている。そう考えてみると行きも同じで、同じ方向からやって来ている。そして矢印の延長線上には……」

「……………住宅街」

言いながら本郷が指した一角、その意味する箇所を、光秋は生唾を飲みながら答える。
「ということとは、犯人はこの何処かに……?」

「可能性は大だろうな。そしてもう一つヒントがある」

住宅街を表す一角を凝視しながら緊張の声で呟く光秋に応じながら、本郷は北大路を見やる。

「嬢ちゃん、確認するが、犯人は高校生くらいなんだな?」

「はい。正確に何年生までかはわかりませんでしたけど」

「学校の名前はわかるか?」

「それは………ただ、制服のデザインとか、校舎の形なんかはぼんやり伝わってきましたけど」

それを聞いて、光秋は早速問う。

「どんな感じだ?」

「口では説明できません」

「だよな……」

予想していた答えに途方に暮れながらもなしに周囲を見回していると、不意にコンビニが目に入る。

「……すみません。ちょっと待っててください」

本郷と北大路にそう言い残すや、そのコンビニに駆け、ルーズリーフとボールペンを買つて戻ってくる。

「これに描いてみることはできるか？」

「それなら」

差し出されたビニール袋の中身を見て頷くと、北大路は束になっているルーズリーフを一枚取り、車の屋根を机代わりにしてボールペンを走らせていく。

―僕もメモ帳とか買った方がいいかな……？―

一連の行動を振り返りながら、本郷の手帳を見た光秋はふと思う。

その間にも、北大路は描き終えた絵を光秋と本郷に見せる。

「……………これって…………」

急いで描いた所為か、もともと絵心には恵まれていなかったのか、ややバランスが歪な制服らしき絵を眺めていると、光秋は胸の辺りに描かれたマークが目につく。特に力を入れて描かれたらしい、他の部分よりいくらか丁寧なそのマークは、翼を広げた鳥の様な形をしていた。

「ああ、それですか？読み取りをかけるとかなりの確率で伝わってくるんです。制服の胸の所にあるのも何度か視えたから、学校のマークかなって……校舎はこんな感じですよ」

「ほいよ」

光秋の視線に気付いたらしい北大路はするように説明しながら、もう1枚描き上げた校舎の絵を本郷に渡す。

「……………とりあえず、嬢ちゃんに画家は務まらないみたいだな」

「大きなお世話ですつ」

渡された絵に対する本郷の感想に、北大路は拗ねた様子で応じる。

「とりあえず、この制服と校舎の絵が何か手掛かりになりますかね？」

「ああ。ちよつと待ってくれ」

手元の絵を改めて眺めながら光秋は呟くと、本郷はポケットから出した携帯電話を掛ける。

「ああ、俺だ。これからある高校とその制服の絵を送るから、どこのもんか調べてくれ」

言うや電話を切り、北大路の絵2枚をそれぞれ携帯電話で撮影すると、それをメールで送信する。

「あの、今のは…………？」

「署の方にいる部下に頼んだ。直^{じき}にわかるだろう」

一連の行動を確認する光秋に答えると、本郷は携帯電話をポケットに戻す。

「その間に、俺たちは住宅街の方を調べる」

「訊き込み……ですか？」

本郷の言葉に、光秋は不安を覚えながら問う。

「ああ。それと、嬢ちゃんのサイコメトリーも並行してやる。犯人の新しい手掛かりが……欲をいえば、名前とかがわかるかもしれないからな」

「わかりました」

本郷の返事に光秋が頷くと、一行は車に乗り込み、繁華街近くの住宅街を目指す。

住宅街に差し掛かると、一行は一旦車から降り、北大路による路上のサイコメトリーを試みる。

「……どうだ？」

「……………一応、この辺りにはいるみたいです。微かに感じる」

やや不安を抱きながら訊ねる光秋に、北大路は触れた路上に意識を集中させながら答える。

「とりあえず当たりと見ていいか。具体的に何処にいるかはわかるか？」

「そこまではさすがに……」

今度は本郷が訊ねるが、それに対しては北大路自身齒痒そうに返す。

「繁華街ほどじゃないにしろ、ここにも何十人と人がいて、それが毎日行ったり来たりしてるんです。その中から狙った人の感覚だけを見付けるなんて……その人が普段よく使ってる物でも用意してもらわなきゃ無理ですよ」

「……警察犬が犯人の臭いを追うようなもんか?—

苛立ちながら述べられた北大路の説明に、光秋は以前テレビで観た光景を思い出しながらそう思う。

途端に、北大路の鋭い視線に射抜かれる。

「それと、余計なことを考えて “ノイズ” を増やさないでください。そもそも犬は貴方の方でしょ!」

「すみません……」

その形相と、今思ったことを読んだらしい口ぶりに、光秋は小さくなりながら頭を下げる。

「そんじゃ、俺はテキトーに訊き込みしてくるから。2人は目ぼしい箇所のサイコメトリーと記録頼む」

「あ、はいっ」

言いながら本郷はルーズリーフの入った袋を差し出し、光秋が応じながらそれを受け

取ると、車に乗り込んで走り去っていく。

「……………」

あつという間に角を曲がって車が見えなくなると、光秋は今朝ぶりに北大路と二人きりになったことを実感し、直前に怒らせたこともあつて再び気まづくなる。

「……………」とりあえず、その辺回って読み取ってみるか？」

「それしかないでしょうね」

ビビりながら声を掛けると、北大路はおもむろに歩き出し、光秋もそれについて行く。少し進んだところで北大路は路上に触れ、事件に関係ありそうな情報を光秋がルーズリーフにメモし、また移動してをしばらく繰り返す。

それから1時間経った頃。

歩き回って疲れた2人は、途中で見付けた公園のブランコをベンチ代わりにしてひと休みしていた。

—犯人が住んでる街なら、何かかわかると思ってたんだけどな……………」

これといって決定的なことが書かれていない——というよりも、ほぼ白紙なルーズリーフを眺めながら、光秋は小さく落胆の溜息を漏らす。

—それに、これだとやっぱりかさ張るな。やっぱり帰りにでも、手帳買ってくるか……—

使用中のルーズリーフの使い勝手を思い出しながらそんなことも考えていると、不意に左隣のブランコに座る北大路が、顔に疲労感以上の悔しさを浮かべているのに気付く。

「……大丈夫か、北大路さん？」

「大丈夫って、何がです？」

「いや………疲れてそうだったから……—」

それでも衰える気配のない眼光を向けてくる北大路に、つい慄いてしまった光秋は悔しさの正体を訊くことを躊躇ってしまふ。

「それは、疲れますよ。あちこち歩き回ってるんですから。しかもサイコメトリーしなから」

「だな………—」

何を今更と言いたげに告げる北大路に、光秋はそれ以上何を言っていないかわからなくなる。

「………—」

「………—」

——……ますます気まづくなったな……—

そうして始まった沈黙に内心狼狽していると、それまで光秋を睨んでいた北大路が視線を地面に下ろし、心なしか影の差した顔で呟いてくる。

「そうまでして、結局これといった手掛かりは掴めなかつたんですけどね。なんですか？ 1時間前にその電柱に犬がオシッコしたとか？ ……私だって、レベル9なのに……」

「……………」

そのどこか自虐的な、あるいは自分を責めているような様子に不思議と共感を覚える
と、光秋は自分でも意識しない内にブランコから腰を上げ、持っていたルーズリーフを
北大路に押し付けるや公園の出入り口へ向かっていた。

「加藤さん？」

「すまない。ちよつと待つてくれ。すぐ戻るから」

慌てて声を掛ける北大路に応じながら、歩き回っていた時の記憶を頼りに最寄りのコ
ンビニへ向かう。

「……………あつた」

目ぼしい棚を探して目当ての品を見付けると、すぐに会計を済ませ、買った物が入っ
ているビニール袋片手に北大路の許へ駆け足で戻る。

「悪い。待たせた」

「なんです？突然」

戻ってくるや訊いてくる北大路に、光秋は返事の代わりにビニール袋に手を入れ、先程コンビニで買った物——どら焼きを差し出す。

「……………」

「疲れてるみたいだったからな。そういう時は甘いものだろう」

渡されたどら焼きに目を丸くしている北大路にそう告げると、光秋もブランコに座り直しながらも1個を取り出し、包みを開いて一口かじる。

「うん。やっぱり疲れた時に食べる甘いものはいい……」

口の中に広がる馴染んだ甘さに和んでいると、未だに口を付けずにどら焼きを眺めている北大路が目に入り、その様子に少し不安になる。

「どうした、食べないのか？それとも、シュークリームとかの方がよかったか？」

「……いいえ。そういうわけじゃ……」

応じると、北大路はようやく包みを開け、軽く一口かじる。

「ああ、悪い。預けっぱなしだったな」

その様子を見ながらルーズリーフの入った袋を返してもらうと、光秋は一気に半分程食べ切ってしまう。

と、北大路がちょうど頭上を流れていく大きな雲を眺めながら声を掛けてくる。

「……どうして、こんなことするんです?」

「こんなことって?」

「急にお菓子なんて買ってきて」

「別に。さっきも言つたように、疲れてるみたいだつたからな。それで買ってきただけだよ。僕も甘いものが欲しいと思つたし」

応じながら、光秋は一口、また一口をどら焼きをかじつていき、ついに最後の一切れとなつた分を口に放つて咀嚼する。

「……桜ちゃんも、そうやって誑たふらかしたんですか?」

「誑たふらかしたって……」

視線こそ向けないもののやや棘のある追及に、光秋は返事に困つてしまう。

「董ちゃんがどうこうするのはまだわかるんです。あの子は優しいから、非情になれないところがあつて。でも桜ちゃんは……」

悶々とした様子でそこまで語ると、北大路は空に向けていた顔を俯ける。

「……………あの2人が好きなんだな。北大路さんは」

「……………何でそういうことになるんです?」

「いや、ただ今の様子を見て、感じたことを言つてみただけなんだがね」

呆れた顔を向けてくる北大路に素直に応じながら、光秋はさらに続ける。

「言つとくが、僕は誑かすなんてしてないぞ。少なくともそんなことをした覚えはない。今北大路さんにしてるようなことは何度かしたけど、それは僕がそうしたかったから……そうした方がいいと思つたからしたことではないよ。他意はない」

「……そうしたかつたから……う？　そうした方が……う？」

一層強調して告げたその言葉に、北大路は首を傾げる。

その様子を見ながら、光秋は寮の前で交わした会話を思い出す。

「今朝、本郷さんと合流する前、『どんな時でも、選択肢が一つだけつてことはない』つて話したよな？」

「……」

確認の声をかけると、北大路は思い出した様な顔を浮かべる。

「それと通じているかもしれないな。つまり、どんな場面でも選択肢はいくつか——最低でも二つはあるんだ。『何かをする』か、『何もしない』かつてのでもう、立派な選択だよ。『何もしない』というのも選択であつて、選んだ以上、『何もしなかった』の結果^おが出てくる。そして結果は、選んだ者自らが負^おつていかなければならない。例えば納得できないものであつてもな」

「選択……ですか……う？」

北大路が一応の相槌を打つのを横に見ながら、さらに続ける。

『何もしなかったなりの結果』が、『納得できる結果』になるなることはまずない。だったら、少しでも『こうしたい』って気持ちがあるなら、それに少しでも近付ける選択をした方がずっといいだろう……というのが、この頃の僕の考えだ。どら焼き買ってきたのだって、つまりはそういうことだよ」

「……………」

自身ぼんやりと考えていた、そして言葉にすることである程度の形を持ち始めた発想を語り切ると、それを聴いた北大路は食べかけのどら焼きを眺めながら考える顔をする。

「……………」でも、『こうしたい』って選択をしたって、必ず『納得できる結果』が得られるわけではないでしょう？ 寧ろ辛い思いばかりして、結局何もできずに終わることだって……」

「そりやそうだよ」

「？」

その返事が余程予想外だったらしい。自分の指摘にあっさり頷いた光秋に、北大路は鳩が豆鉄砲を食らった様な顔をする。

「寧ろ、意識してやろうとしたことでさえ、望む結果に繋がるとは限らないんだ。前提の

ズレや見通しの甘さといった自分の落ち度もあるし、時には運つていう自分ではどうすることもできない要素だつて影響してくる。自分の手が届かない所で始まった他の人の行動だつてそう。最近じゃ、祝賀パーティー襲撃事件がいい例だろう。僕等の知らないところで事件を計画した人たちがいて、その場にいた僕たちは否が応でもそれに対する対処を――選択を迫られてしまった……てね」

「……………」

その例えに、北大路自身思っていることがあるらしい。これまでになく表情が神妙になる。

「……まあ、なんだ。ちよつと話が逸れた気もするが……要するに、そうしようと思つても上手いかなんかことがあるなら、なにもしないで上手いことなんてまずない。だったら、少しでも確率のある『そうしようと思つた方』に賭けた方が賢いんじゃない？……………てことだ」

「……………」

我ながら大雑把なまとめに対し、北大路は無言を返す。もつとも無視しているというわけでもなく、その顔には何かを感じ、考えている様子が見て取れた。

「……おつといかん。さすがにそろそろ捜査再開しないとな」

そこで腕時計を見て時刻を確認するや、光秋はブランコを立つて公園の出入り口へ向

かう。

「北大路さんっ?」

「……」

振り返りながら呼び掛けると、北大路は残っていたどら焼きを食べ切り、駆け足で光秋の許に歩み寄るとそのまま追い抜いてしまう。

と、出入り口に差し掛かったところで一旦足を止め、光秋がある程度距離を詰めると、振り向くことなく告げる。

「……………どら焼き、ぶちそうさま……」

言うや駆け足を再開し、光秋を置いていく勢いで先へ行ってしまう。

少しずつ遠くなっていく背中を見ながら、光秋は直前の一言まで含めた公園内での北大路の態度を振り返る。

―ま、最初の頃に比べたら、ずっと棘がとれてきたかな……?―

極めて微妙な変化に苦笑を浮かべながらそう思うと、離れる一方な北大路との距離を詰めようと、光秋も駆け出した。

それからさらに周囲のサイコメトリーを続けること1時間。

再び休憩に入ろうかと光秋が思案していると、上着のポケットに入れた携帯電話が振動する。

「本郷さんだ。少し待って」

傍らで屈んだ姿勢から立ち上がろうとする北大路に断りを入れると、通話ボタンを押した携帯電話を耳に当てる。

「もしもし?」

（犯人の学校が特定できたぞ）

「!?」

何の前置きもなく告げられた重大情報に、喜びよりも先に驚愕を覚える。

「……」

それを見た北大路も何かを察したらしく、緊迫した視線を向けてくる。

「……どちらです?」

その様子を視界の端に見ながら、光秋は膝を折って北大路と高さを合わせ、こちらの意図を察して携帯電話に耳を寄せた北大路と共に先を促す。

（この住宅街の近くにある公立高校だ。向かう道中で拾うから、今いる場所を教えてください）

「今は……」

言われて光秋は、周囲を見回して住所がわかるもの、あるいは目印になりそうなものを探す。

と、北大路が肩を叩いてくる。

「2丁目です」

「ありがと。2丁目です」

（了解）

応じると本郷の方から電話は切れ、光秋は立ち上がりながら携帯電話をポケットに戻すと、北大路と道の端に寄って本郷が来るのを待つ。

が、しばらく待つても本郷が来る気配はなく、光秋は苛つきながら腕時計を確認する。

—遅いな……何かあったかな？—

来る途中で事故に遭った光景が脳裏を過ぎると、逡巡しながらも携帯電話に再び手を伸ばそうとする。

その時、ようやく見覚えのある黒い車が2人の前で停車し、開いた窓から本郷が顔を出す。

「悪い。待たせた。後ろに乗ってくれ」

「はい」

応じると、光秋は北大路と共に後部席に座り、2人が乗ったのを確認した本郷は車を

走らせる。

「遅くなつて悪かったな。これ買つてたもんで」

言いながら本郷は助手席に手を伸ばし、手に持った大振りなビニール袋を光秋に差し出してくる。

「おにぎりですか？こんなたくさん」

その中に入っていた優に10個以上はあるおにぎりに、光秋は思わず啞然とする。

「そろそろ昼時だし、これから体力使うだろうからな。2人とも好きな味軽く食べとけ」
「体力……ああ………ありがとうございます」

本郷のその一言に、これから犯人と対峙するのだと改めて実感した光秋は、緊張を覚えながら袋の中を探る。

「北大路さん、何か食べたいのあるか？」

「……………おにぎりばかり。サンドイッチがよかった」

「君ねえ……」

遠慮など微塵もない北大路の返答に、光秋は呆れと気まずさを覚えながら背もたれに隠れている本郷の様子を窺う。

「悪いな、急いでたもんで。今度また一緒に仕事する機会があれば、参考にさせてもらおうよ」

「すみません……で、どれにする？」

特に気にした様子もなく応じる本郷に頭を下げると、光秋は改めて北大路に尋ねる。

「じゃあ……ツナマヨで」

「ん」

応じながら北大路の頼んだものを渡すと、光秋もおかか味を取って囁り付く。

いくらもしない内に1個を食べ切り、今度は梅味を取ろうとした時、北大路もすでにツナマヨ味を食べ切っていることに気付く。

「次はどうする？」

「もういりません」

「1個だけで大丈夫か？」

「刑事さんも軽くって言ってたので」

「そうだが……」

これ以上食べる意思がなさそうな北大路に、とりあえず袋の中に入っていたペットボトルの緑茶を渡すと、光秋は梅味を頬張る。

それを食べ切り、お茶を飲んで喉を潤していると、車窓越しに校舎らしき四角い建物が見えてくる。

——「ん」が…………！——

観察の目を向けていると、見える範囲で一番高い棟の上に北大路が描いたのと同じ翼を広げた鳥の様なマークを見付け、ここに犯人がいるのだと確信し、無意識の内に掌が汗ばんでくる。

門をくぐった本郷が駐車場の一角に車を停めると、光秋は若干強張りそうになる体で外に出、本郷と北大路に続いて校舎へ向かって歩き出す。

「事前に連絡は入れているから、まずは職員室に……て、おいおい。まさか緊張してるのか？」

「……そうみたいですわね」

傍から見てもわかるくらいには出ていたらし。本郷の指摘に、光秋は観念するつもりで正直に頷く。

「……ちなみに、ESOに入ってどのくらい？」

「もうすぐ1年です」

「1年も勤めてたら、流石にもう場慣れするんじゃないか？俺はだいたいそんな感じだったと思うが」

「僕の場合、根がビビリですからね。それにこんな感じの仕事は初めてだし……そうではなくとも、時間に間まがあるるとつい身構えてしまつて………」

「そういうもんか……？」

最近のところでサン教ベース包围の時のことを思い返しながら答えると、本郷は首を傾げながら応じる。

そうしていると、玄関から教員と思いきスーツ姿の中年男性が出てくる。

「先程お電話いただいた……」

「ああ。警察のもんです。こっちはESOの」

「どうも」

教員に懐から出した警察手帳を見せながら応じる本郷に倣って、光秋もESOの手帳を開いてIDカードを見せながら頷く。

「ESOの方も……そちらの女の子は？」

「僕——私の部下の特エスです」

「ああ、なるほど……ひとまず、応接室にお通しします」

光秋の返答に納得すると、教員はスリッパを3足用意し、玄関先でそれに履き替えた3人は後を追って廊下を進んでいく。

と、

「……!?!」

「どうした？北大路さん」

急に立ち止まって背後に視線を巡らせ始めた北大路に、光秋も一見変わったところが

見られない背後の廊下を眺めながら訊ねる。

「今、後ろの方で『ヤバイッ!』って感じが……」

「?……」

言われてさらに目を凝らすものの、相変わらず目に入る物といえば部屋の戸や壁に沿って伸びる柱くらいしかない。

—まさか……—

そんな廊下の状態を見てあることが浮かぶと、光秋は半信半疑に一步進む。

直後、

「柱の陰!奥の方のっ!」

「!!」

屈んで床に手を着けた北大路の叫びに咄嗟に走り出すや、その言葉の通り、奥の柱の陰から男子生徒が現れ、光秋たちを振り返ることもなく脱兎の如く疾走する。

「待てっ!」

反射的に叫び掛けるものの、男子生徒が立ち止まる気配など微塵もなく、少しでも距離を詰めようと光秋は足を速める。

数瞬駆けて男子生徒が右に曲がるや、光秋も速度を落とすことなく角を曲がる。

そして男子生徒を追おうとさらに足を踏み出した、刹那、

「ッ!？」

顔全体、特に鼻の辺りを強烈な激痛が襲い、束の間前後不覚に陥りながら思わず鼻を両手で覆う。

「な、何だっ!?!……?」

数瞬してある程度痛みが引いたところで改めて前を見ると、そこに曲がり角などなく、見るからに頑丈そうな壁があった。

「壁!?!いや、でもさっきここを曲がって……」

「何してるんです! 逃げられちゃいますよッ!」

「!!」

ついさつき見た光景と目の前の現実との乖離に困惑していると、追い越すついでに北大路に怒鳴られて先を行く男子生徒を再度捉え、ひとまず追跡を再開する。

直後、

「うわっ!!」

今度は北大路が何もない廊下で驚きの声を上げ、慌てて後ろに飛び退く。

「どうした?」

「どうしたって、今その壁が——あれ……?」

おかしい行動に光秋が足を止めて問い掛けると、北大路は一瞬苛ついた顔を向けるも

の、すぐに何の変化もない廊下を見て混乱の様子をみせる。

「突然壁が崩れてきて、それで逃げようと……でも、壁崩れてない……う！」

「決まりだな」

何の変哲もない壁を北大路が困惑の目で見ていると、2人に追い付いた本郷が確信の
声で告げてくる。

「やつぱり、あの生徒が犯人？……ということは、今僕や北大路さんが受けたのは……」
「おそらく、例の催眠だろう。まさか撒くために使つてくるとはな……これは迂闊に俺
たちだけで追跡すると危険かもしれん。とりあえず、俺は一旦署に連絡する。お前も本
部に連絡入れとけ。あと残りの嬢ちゃんたちも呼んどけよ」

「は、はいっ！」

緊迫した顔で告げる本郷に応じると、すぐに携帯電話を取り出した光秋は東京本部に
連絡を入れた。

102 追跡の乱入者 前編

電話を終えて5分後、事前連絡に沿って校門前で待機していた光秋と北大路は、レポートで駆け付けた董と桜と合流する。

「犯人見付かったの？」

「ああ。本郷さんも応援を呼んでくれたが、到着まで少し掛かるらしい。僕等はこれから先行して追跡する」

桜の問いに応じつつ、光秋は傍らで固く目を閉じて犯人の外履きをサイコメトリーしている北大路を見やる。

「どうだ。わかったか？」

「流石、ほぼ毎日必ず身に着けるだけのことはあります。あの人の名前は『小林雅』こばやし まさし、去年の夏頃から犯行を繰り返していたようです。そして、捜す相手の情報がわかれば！」
言うや北大路は地面に左手を触れ、右手に持った靴と合わせて意識を集中する。

「こっちですー！」

数瞬して告げると同時に駆け出し、光秋たちもそれに続く。

——たかが靴から名前や最近の行動、あまつさえ現在位置まで探知するか……北大路さ

んの高レベルありきなんだろうが、勢いに乗ったサイコメトラーは情報戦じゃ無敵だな

迷うことなく走り続ける北大路を追いながら、光秋はその背中に感心を抱く。

「相手との距離、結構あるか？」

「いいえ。そんなに遠くには行っていない。さつき感じた時は、民家の塀の陰に隠れてるようでした」

「なら、近付いたら……その民家が近くなったら教えてくれ」

応じた北大路にそう指示すると、光秋は桜と堇もちやんとついて来ていることを確認しつつ駆け続ける。

大通りから細い道に入り、住宅の合間を走ることしばし。何度目かの角を曲がったところで、北大路が前方に建つ一軒家を指さす。

「あそこです。犯人が隠れ——」

「よし。全員止まれっ」

興奮しているのか、いつもよりやや声が大きいい北大路の言葉を遮って、光秋は足を止めながら少女たちに告げる。

「なんだよっ！このまま一気に——っ!？」

「静かにッ！」

不満そうに声を荒げる桜の口を慌てて手で塞ぎながら、光秋は北大路と董にも視線で声を潜めるよう促す。

「北大路さん、もう一度犯人がここにいるか確認してくれ。できれば今の心境も含めて」
「心境？」

「慌てるとか怖がつてるとか、これからどう動こうとしてるかとか、とにかく考えてることを可能な限り」

「……わかりました」

双方声の大きさに注意しつつ、応じた北大路は再び地面に触れ、意識を集中させる。

「……………今もちやんとします。すぐく焦つてるみたいです。『どうしよう？どうしよう？』つて」

「僕等には気付いてる？」

「いいえ。それはないみたいです」

「ありがとうございます」

報告に礼を返すと、民家の敷地の奥、ここからでは家や塀に隠れて見えない犯人の追い詰められた様子を幻視しながら思索する。

——窮鼠猫を噛むというか、ここは警察の応援が来るまで待った方がいいか？さつきは逃げることを優先したから『壁に当たって痛い！』程度で済んだかもしれないが、極限状

態の中で攻めたら、今度は同士討ちさせられる可能性も……………」

先程の鼻の痛みを思い出しつつ、緊張感を浮かべた堇と北大路、何故か顔を赤くして口周りを撫でている桜の3人を見た光秋は、袖の下の肌を薄つすら粟立たせる。

その時、

「おうおう！そこにいんだろう？催眠能力者の殺人鬼さんよ！」

「!？」

こちらの心境などまるで無視した怒声が民家の陰の通りから響き渡り、心臓を跳ね上げた光秋はすぐに声のした辺りに目を凝らす。

「おい、黙ってねえで何か言ったらどうだ？」

「……………ここで待っていてくれ」

小声で少女たちに断りを入れると、なおも続く怒声の元を探ろうと忍び足で近付き、曲がり角の陰からそっと顔を出す。

「……………若い？学生か？」

そこにいたのは、いずれも着崩した服装に派手な色、奇抜な編み方の髪をした3人の男性だった。

怒声の主はその内の中央に立つ癪毛の茶髪のようなだ。

「やり過ぎそうだったって無駄だぞ。こっちはオメエが学校から逃げてきたところから

バツチリ追跡してんだからな。ウチの千里眼舐めんじゃねえぞ」

言いながら、癬毛は右隣りに立つ左頬に縦一の字の古傷がある金髪を指さす。

刹那、癬毛が手をかざしたのと、光秋が物陰から出していた顔を引つ込めた——どころか、その場から後ろに飛び退いたのはほぼ同時だった。

「……………」

明らかに念力によるものだろう。一瞬前まで自分の上半身があつた辺りのコンクリート塀が踏まれたクツキーの様に粉々に砕け崩れる光景に、背筋を冷たい汗が伝う。

「当然、さつきからそこでこそこそしてるESO野郎共のことも知ってたんだよー」

「バレてたかつ」

不機嫌極まりない癬毛の言葉に、光秋は少女たちの許に駆け戻りながら悔しさを漏らす。

同時に、

「ひiiiiiiiiiiii!!」

塀の陰から先程の男子生徒が悲鳴を上げながら駆け出て、脇目も降らず少女たちの横を全力疾走していく。

「……の野郎っ!」

咄嗟のことに反応が遅れたことを悔やむ様に、桜が慌ててその背中に手をかざす。

が、

「桜さん、後ろー！」

「!?」

様子見に背後を振り向くや1階の屋根ぐらいの高さに浮かんで右手をかざしている癪毛を見た光秋の反射的な叫びに、桜も咄嗟に振り返って犯人に放つはずだった念力を癪毛に向けて放つ。

当たる直前に癪毛は右に避けるものの、放たれた念力は犯人の進む先にあった電柱を掠り、中程に深く抉った痕を刻む。

——催眠魔の方も気になるが……——

その光景に少女たちの許に合流した光秋は、振り返って曲がり角から出てきた3人に制す声を投げ掛ける。

「こちらはESO、特務部隊の者です。どういふつもりか知らないが、すぐに引き上げなさい。これ以上やるというのなら、公務執行妨害と器物損壊で逮捕するぞ」

険しい目を向けた光秋の忠告に、しかしリーダー格らしき癪毛は臆することなく応じる。

「へっ。逮捕上等だよ。こちとらルール無用のZCだ！」

「……………はっ？」

出し抜けに告げられたことが束の間理解できずに思わず啞然としていると、癖毛は左隣の男性に目配せする。

「おい」

「了解っ」

「?——!?!」

それに男性が微笑を浮かべながら応じた直後、3人の背後にヘラクレスとイピクレス、そして先日 of 工場地帯で戦った巨大な3本爪の左腕を備えたヘラクレス——爪付きがテレポートで現れ、特に爪付きの出現に光秋は驚愕する。

「コイツ、この前の……!?!」

そう溢す間にも、3人はそれぞれ機体に取り込み、起動した3機が次々と頭部の単眼に光を灯していく。

「!・柏崎さん!・念壁!・しばらくバリケード頼む!」

「オウツ!」

それを見るや光秋は桜に指示を飛ばし、同時に懷から出したカプセルを後ろに向けてニコイチを出現させる。

「!・テメエが白い犬だと!?!」

向こうも思わぬ物の登場に困惑したらしい。スピーカーが漏れた声を意識の隅に聞

きながら、光秋はリフトを伝ってコクピットに上り、認証を済ませるや跪いていたニコイチを直立させる。

（野郎ッ！）

直後にイピクレスが両手保持したマシンガン撃ってくるが、ニコイチは前に出した両腕で迫る弾丸を全て弾く。

が、光秋の目は弾かれた弾、あるいは吐き出された葉莖があらぬ所へ飛んで周囲の民家や塀、道路を傷付ける光景を捉える。

——不味い。このままじゃ被害が拡大する。このまま取り押さえ——否、下手に迫れば相手は逃げて余計に激しく攻撃してくる。となると……………

逡巡しつつニコイチの足元に目をやると、少女たち3人が脚の陰に隠れているのを見付ける。

「柏崎さん！念力で相手の弾倉を抜け！」

（！了解！）

外部スピーカーに叫ぶや、応じた桜はイピクレスの持つマシンガンに手をかざし、掲げていたその手を一気に下す。

その動きに合わせる様に刺さっていた弾倉は地面に落ち、間髪入れずに光秋はニコイチを突進させる。

「!」

勢いよく入った左肩はイピクレスの胸部装甲板を凹ませ。そのまま後ろに倒れようとする機体の頭部を掴むや再度桜に告げる。

「柏崎さん、コイツの手足を潰せ。マシンガンも」

（了解!）

応じると同時に桜はイピクレスに手をかざし、その手足とマシンガンが不可視の力によってアルミ缶の様に押し潰されていく。

「あとの2機は……!?!」

それを見てイピクレスを無力化したと判断するや、光秋は周囲を見回して爪付きとヘラクレスを探す。

瞬間、背後から強烈な悪寒が襲う。

「!」

（やっぱ白い犬だな! もう1機撃墜かよ!!）

脊髄反射で振り返るや爪付きの左腕が3本爪を閉じた状態で撃ち込まれ、胸部に届く寸前に両手で受け止めるや癖毛の興奮した声が響く。

「……………もう1機は? ヘラクレスはどうした!?!」

辺りを見回して他に機影がないのを確認するや、光秋はモニターに映る爪付き、その

中に収まる瘵毛に鋭い視線を向けながら問う。

（あ？んなもん催眠魔追わせたに決まってるだろう。俺らはもととその為に来たんだからよ。ま、俺は予定を変更して、タナボタで会ったお前と再戦させてもらうことに――）

「北大路さん！すぐに犯人の居場所を再確認。柿崎さんと柏崎さんと一緒に後を追え！身柄を確保しろ！」

（りよ、了解！）

瘵毛の返答を聞くや光秋は足元の少女たちに叫び、北大路が路上を触るや3人はテレポートでその場から消える。

直後、瘵毛の怒声が響く。

（オイッ！人の話は最後まで聞けよッ!!）

怒りを表す様に3本爪に設けられた推進器が激しく火を噴き、一杯に開いた爪が大蛇の口の様に迫ってくる。

「ッ!!……………」

それを両手で押さえ付けてどうにか前進を防ぐ一方、光秋の脳裏には先日この爪に捕らえられて振り回された時の記憶が過る。

——この爪自体はニコイチを切り裂くことはできない。でも、掴んで振り回して、僕自

体に負担を掛けることはできる。加えてここは住宅街の真っ只中だ。前みたいに見境無しに振り回されたら、周囲の被害も馬鹿にならんぞ……?—

他人の家の塀を平気で壊し、一歩間違えれば電柱が倒壊する惨事になったにも関わらず、それに対して平然としていた搭乗前の癪毛。その様子に、この男はメガボディ戦においても周囲の被害など一切考慮しないという確信と、それ故の恐怖を覚えた光秋は、少しでも気を抜けば今にも自分を捕えそうな大爪を見据えながら思考を巡らせる。

その時、3本爪を進ませる上下の推進器が目に入る。

「……やるかつ!」

一瞬の思考の後に断じると、光秋は地面を蹴って爪付きの頭上に回り込む。未だ勢いよく炎を噴き続ける3本爪を持ったまま。

—今つ!—

(なッ!?)

爪付きの真上に差し掛かると同時にNクラフトを作動させ、3本爪を起点に空中で一回転してその射線から逃れる。そしてそれまで拮抗していた力を失った3本爪は遠慮なく空へ上昇し、あつという間に伸び切ったケーブルで繋がった爪付き本体も引つ張られて瞬く間に小さくなっていく。

「さて、アレはアレで心配だが……今は犯人確保……北大路さんたちが……」

着地と同時に爪付きが離れていったのを確認するや、光秋は住宅街がある程度一望できる高さまで上がって少女たちの姿を探す。

その脳裏には、少女たち同様に犯人を追っていったヘラクレスの姿がちらついていた。

「あそこか——!!」

そんな光秋の意思を拾ってモニターの左側に矢印が表示するが、同時にそれが指し示す辺りのすぐ上空にマシンガンを構えたヘラクレスを捉える。

「待てえっ!!」

叫ぶと同時にペダルを踏み込んで一気にその射線上に躍り出るや、連射される弾丸を左腕で受け流しながら距離を詰め、胸部に平手にした右手を叩き込む。

「柏崎さん!」

（オウ!）

それでヘラクレスが束の間前後不覚に陥るや、光秋の呼び掛けに応じた桜が右手をかざし、ヘラクレスの手足とマシンガンを押し潰していく。

（クソッ!）

手足と武器を失った自機に唾棄しつつ、胸部を若干歪ませたヘラクレスは背部推進器の力も借りてニコイチから距離をとっていく。

直後、光秋の脳天を貫く様な鋭い悪寒が上から迫る。

「!」

(さつきは舐めたマネしてくれたなワン公ツ!!)

見上げると同時に癬毛が激昂の声を上げながら3本爪を発射し、足元の桜たちを視界の端に見た光秋はその場に滞空して大口を開いたソレを正面から受け止める。

「柏崎さんッ!」

(わかつてるちゅうのっ!)

反射的に下を見ながら叫んだ光秋に心得た様子で応じながら、一気にケーブルの中程まで上昇した桜は右手に構えた手刀で空を斬り、その動きに合わせてケーブルが切断される。

「はあっ!」

直後に推進器が止まった3本爪のケーブルを両手で掴むと、光秋は上昇しながらその先端を本体たる爪付きに振り上げる。

(アアアア!!)

その攻撃自体は念壁によって防がれたものの、3本爪以外に武器を持っていなかった爪付きは癬毛の怒声を伴って上昇し、追い付いたヘラクレスと共にレポートでその場から消える。

「撤退したか……」

ひとまずの脅威が去ったことに安堵したのも一瞬、すぐに通信機を左耳に着け、本郷に連絡をとる。

「本郷さん？加藤です。聞こえますか？」

（ああ。随分派手にやつてるようだな。まさかZCが乱入してくるとは）

本郷が何処にいるかはわからないが、少なくとも向こうも今の騒動を把握しているらしい。通信機から聞こえてくる声に、光秋は本郷が渋顔を浮かべている様子を想像する。

「一応、2機は撤退、さつと見た限り周囲にも大きな被害はありませんでした。もちろん、後でちゃんと調べてもらう必要はあるでしょうが……あつ、そうだ。あのイピクレスー！」

本郷への報告を続ける中、光秋は倒して以降失念していたイピクレスのパイロットのことを思い出し、慌てて先程の場所へ戻る。

（ちよー！どうしたんだよ？）

（こうしゅ——加藤主任？）

その後ろを、桜の念力で浮かんだ少女3人が戸惑いながらついていく。

「コクピットは……」

その間にも仰向けに倒れたイピクレスの許に着くと、光秋は胸部を中心とした拡大映像を見据える。

と、内部に向かって浅く凹んでいた胸部の裏から金属を叩き付けた様な大きな音が響いたかと思うと、直後に歪んだハッチが重々しく押し上げられ、中から左頬に古傷がある金髪の男性が這い出てくる。

(ぜえー、ぜえー……！白い犬——てかソレ、みなみ南さんの……………)

「ミナミ…………？」

ニコイチ、というよりもその手元を見て驚愕する古傷に、光秋もその視線を追ってみると、先程拾った3本爪が持ちっぱなしになっていることに気付く。

——いっけね………というか、あの人『ミナミ』っていうのか……—

先の戦闘で初遭遇して以降、その独特のデザインから印象に残っていた爪付き。その乗り手を直に見、間接的にはあるが名前を知ったことに、つい感慨を抱いてしまう。

と、古傷は恐怖と怒りが混ざった顔で訊いてくる。

(デメエ、南さんを殺ったのか!?)

「……この腕を付けてたヘラクレスなら、さつきもう1機と撤退しました。この場にいますZCはもう貴方だけですよ」

それに対して威圧感を意識した声で答えると、古傷は糸が切れた様にハッチの縁ふちにへ

たり込んでしまう。

（嘘だろう……？南さんっ！俺を置いて行くのか!?デビルズの頃からずっと一緒に暴れ回ってた俺を!!俺を見捨てるのか……………）

「……………」

すぐ近くに敵対者がいるのも忘れて泣き崩れる古傷の姿に、光秋はつい胸の辺りに疼きを感じてしまう。

（おーい?どうなった?）

「!すみませんっ」

思い出したように通信機から響いた本郷の声に気を取り直すと、古傷に改めて観察の目を向ける。

「残りの1機ですが、機体は大破、パイロットも戦意喪失している模様です。これから拘束します」

（いや、それはこつちでやろう）

「?……………」

思わぬ返答に首を傾げたのも一瞬、機体越しに徐々に大きくなっていくサイレンの音を聞き、さらによく聞けば通信機の向こう側からも同じ音が響いているのに気付く。

いくらか経たない内に数台のパトカーが駆け付け、その先頭の黒い車——今は屋根に

赤ランプを載せた覆面パトカーから本郷が現れ、周囲を見回すと、制服警官2人と共に未だすすり泣いている古傷の許へ歩み寄る。

「柏崎さん、念の為警戒を。あの人、たぶん念力持ちでもある。さつきコクピットの中から聞こえた音、念力でハッチの周りを壊した音だろう。いつでも相手を押さえ込めるようにして」

（了解）

先程の光景を思い出して危惧を感じた光秋はすぐに指示を出し、傍らに浮かぶ桜が古傷に向けて右手をかざす。

しかし実際にはこれといった騒ぎも起こらず、すでに泣くのもやめて茫然自失となった古傷はされるがままに手錠を掛けられ、両脇を警官2人に囲まれてパトカーの1台に乗せられて連行されていく。

「ふう……」

危惧が杞憂に終わったことに安堵したのも一瞬、イピクレスの残骸の横に立つ本郷がこちらを見上げながら言ってくる。

（とりあえず、そのデカいのから降りてきてくれ。状況を確認したい）

「！はいっ」

応じると、光秋はニコイチを本郷の許に着地させ、持ちっぱなしだった3本爪をイピ

クレスのそばに置いて、リフトで路上に降りて駆け寄る。

「随分派手な乱入者が来たもんだな。俺たちが来る前に何があった？」

「はい、それが……」

傍らのイピクレスの眺めながら問う本郷に、光秋は犯人追跡を開始してからの一部始終を語る。

「……犯人が隠れてる所にいきなり来たってわけか？」

「はい。その上でこちらまで攻撃して、あまつさえメガボデイまで……そもそもよく考えたら、超能力者至上主義を掲げるZCが、何で超能力者に攻撃なんて……」

確認する本郷に返しつつ、不意に浮かんだ疑問を呟く。

「それについては、あちらさんが何を話してくれるかな」

それに応じながら、本郷は古傷を乗せたパトカーが走り去っていった方を見やる。おそらくは署に着き次第取り調べが開始され、今回のことも含め、ZC関係のさまざまなことを追及されるのだろう。

「まあZCと、ここの片付けは他の奴らに任せるとして、俺たちは当初の仕事を続行するでしょう」

「……そうですね。北大路さん、まだ犯人の場所わかるか？」

「少し待ってください」

未だミナミ一行の行動が気になるものの、本郷の一言に気持ちを切り替えると、光秋は北大路に問い掛け、再び上履きを用いたサイコメトリーが行われる。

「……………」つちです」

「待て」

ややあつて駆け出そうとした北大路を声で止めると、本郷は自分の車を指さす。

「俺の車で行こう。道はわかるな？」

「はい」

問い掛けにすぐに頷くと、北大路は車に駆け、光秋に促されて桜と堇もそれに続く。

「お前もそのデカいの何とかして乗れよ」

「あ、はい」

本郷に言われてニコイチをカプセルに戻すと、光秋も後部席に乗り込む。

「まずこの先を真っ直ぐ、しばらくしたら左に」

「ん」

助手席の北大路の誘導に頷くと、本郷は車を走らせる。

「……ああそういえば、3人ともケガないか？さつきヘラクレスに狙われてたけど」

腰を落ち着けて少し余裕ができたのか、自分でも遅い質問と思いながら光秋は少女た

ちに訊ねる。

「それは大丈夫。アタシならマシンガンくらい余裕で防げたし」

「まあ、確かにな」

なんでもない様子で答える桜に、その念壁の防御力の高さを知る光秋は納得の頷きを返す。

「ただ、あのヘラクレスなんか妙でした」

「というത്？」

直後にそう告げた董に、光秋は視線を向けながら訊き返す。

「私たち、菊のサイコメトリーした地点に直接跳んで、すぐに犯人見付けたんです」

「うん」

「そのすぐ後にヘラクレスもやって来て、最初は犯人にマシンガン向けてたんですけど、何故か私たちの方を撃ち出して」

「……………」

董の言った状況を一度頭の中に思い浮かべて整理すると、光秋は気になったことを訊いていく。

「確認するけど、誤射ってわけじゃないのか？ 君たちが犯人の近くにいて、砲口がちよつとブレたとか」

「そんなじゃないよ。アタシたちそこそこ………だいたい10メートルくらい離れたと

ここにいたし、ソイツ最初は犯人に向けてたマシンガンを、直前になってアタシらに向け直して撃ってきたんだし。そのあともしつつこく追い回してさ。光秋が来たのは、ちょうど弾倉交換した時だね」

「今は『加藤主任』な……結果、その対応に手一杯になつて、犯人を見失つた？」

「ま、まあ……そう、だけどさ………」

さらに問いを重ねると、補足説明をしてくれた桜は気まずそうに渋々と頷く。

その様子を意識の端に捉えながら、光秋の脳裏には学校で犯人を追いかけて始めた時のことが浮かんでいた。

——確かあの時は、まず僕が催眠をかけられて壁にぶつけられ、次に北大路さんがかけられたつけ——2人別々に、時間差でかけられた。2人一度にかけてもよかったものを………そういえば本郷さんの最初の説明でも、原則的に1つの事件における被害者は1人だけだったよな。乱闘騒ぎとか、巻き込まれて怪我をした人とかはともかく、明らかに狙ってやられた——催眠をかけられた人は一度に1人だけだった………もしかして——

多少粗い推測であること自覚しつつも、光秋の中に一つの予感が生まれようとしていた矢先、北大路が若干緊張した声で呟く。

「そろそろです」

それから一分を経たずに車は細い道の途中で停車し、すぐに降りた北大路は改めて地面に手を着ける。

「最後に感じたのはこの辺りなんだけど……………」

言いながら確認のサイコメトリーを続ける間にも、その表情は目に見えて曇ってくる。

「……………どうした?」

その様子に、光秋は嫌な予感を覚えながらも窓を開けて訊ねると、北大路は助手席に戻って光秋に手を差し出してくる。

「さっきのルーズリーフまだありましたよね。あとボールペン」

「ああ…………」

言われて光秋は車内に残していたそれらを渡し、受け取った北大路は紙の上にボールペンを走らせていく。

「結論から言います。犯人が人質をとりました」

「!!」

手を休めることなく告げられた情報に、光秋をはじめ、車内の一同に動揺が走る。

「場所は、この先の一軒家。配置はこんな感じです」

言いながら、北大路はおおよその間取りが描かれた紙を一同に見せ、特に広い空間に

描かれた3つの丸をペンで示す。丸にはそれぞれ「犯人」、「女性」、「赤ん坊」と書かれ、いずれも殆ど密着するくらい近くに固まっている。

「……………旦那が留守にしている家に押し入り、奥さんと子供を人質にした……………といったところか？」

「人質の素性までは調べる時間がなかったのでわかりませんが、おそらくどこか忌々しげに紙を見つめる本郷の確認に、北大路は淡々と応じる。

直後、

「クソツタレがッ！」

「[C:]」

声を荒げると同時に本郷はハンドルに拳を振り下ろし、その形相に光秋と桜、董は思わず震え上がる。

「……………本郷さん、とりあえず落ち着いて……………今は犯人逮捕——以上に、人質の解放を考えないと」

それでも本郷の怒りは収まる気配はなく、初めて見る本郷の激しい一面に慄きながらも、光秋は今言うべきことを言う。

「……………そうだな。すまない、取り乱して……………」

それで本郷も気を取り直したらしい。表情からは激しい怒りは消え、代わりに鋭い眼

光を伴った真剣さが浮かぶ。

「……それでは、まず現状を整理しましょう。僕等が追っているのは強力な催眠能力者、今は民家内で親子2人を人質にとり、北大路さんの図解に従えば2人とも犯人のすぐ近くにいる。現状の優先事項は、第一に人質2人の救出、第二に犯人の身柄確保。こちらの手札は、柏崎さんの念力、柿崎さんのテレポルト、北大路さんのサイコメトリー……と、こんなところでしょうか？」

光秋自身、人質の存在を知ってからざわついている心境を落ち着けることも兼ねて噛み砕いた説明を述べると、桜が首を傾げてくる。

「光秋のニコイチは？」

「加藤主任な。アレは目立つというか、10メートルの巨人が見下ろすのは威圧的だ。ただでさえ犯人も追い詰められて焦ってるし、今回のようなデリケートな仕事には出さない方がいい」

「よしんばあんなデカブツ出したとしても、犯人の手が届く範囲に人質がいたらどうしようもないしな」

光秋の返答に補足しつつ、本郷は自分の懷に手を当てる。

「手札といえば、俺は拳銃を持ってきた。それと車のトランクに携帯用のEジヤマーとショットガンが入ってるぞ」

「シヨットガン……ですか？」

思わぬ情報に、光秋は車体後部へ顔を向ける。

「研修で習わなかったか？ 州にもよるが、日本の警察では事件に超能力者の関与が認められた場合、相手の能力やレベルに関わらず、俺みたいな刑事でも使用許可が下りるんだぞ？」

「それは聴いた……気がします」

若干注意するように説明する本郷に、光秋は気まずさを覚えながら頷く。実際のところ、試験以降制度に関する記憶はかなり怪しく、今言った本郷の説明も含めて、「超能力者に対して強権的」という印象を抱くのが精一杯だ。

「もつともデカブツと同じで、今はコイツも迂闊に出せないだろうが……応援を呼んでも結局な……下手に近づいても催眠の餌食だし、大勢で迫って刺激すればその分人質が何をされるか……」

「あの、一つ気になることが」

腕を組んで悩む本郷に、光秋は移動中に抱いた予感を語る。

「今回の犯人ですが、催眠能力って一度にどれくらいの人数に効くんでしょう？」

「……………どういことだ？」

光秋の言葉を噛み締める様にしばし間^まを空けると、本郷は鋭い眼光をこちらに向けて

くる。

「約半年分の事件の内容とか、さつき追いかけて実際に催眠をかけられた時に感じたんですが、もしかしてこの犯人、1人にしか能力使えないんじゃない？……？」

刹那、本郷は我が意を得たとばかりに清々しい笑みを浮かべる。

「お前、結構見込みあるなっ」

「……ありがとうございます」

自身半信半疑だったことを明確に褒められて、光秋は若干戸惑いながらも頭を下げる。

「え？じゃあなに？みんなで囲んで一気にやればいいってこと？」

「人質がいなければな」

「あ、そうか……」

桜の発言に指摘を入れつつ、本郷は再び思案顔を浮かべる。

「………よし。これで行こう」

「？」

そうして何か思いついた様子を見せると、光秋は顔を寄せて本郷の提案に耳を傾ける。

数分後。本郷の提案に従って準備を終えた光秋は、作戦開始前の不安を持て余していた。

—大丈夫かなあ……………？—

「情けない顔すんなよ。しつかりしろよな」

「……………だな」

自分で思っている以上に顔に出ていたらしい。傍らの桜の指摘に、なけなしの強がりで応じる。

「桜さんも、打ち合わせ通りにな。頭に血が上って勝手なことするなよ？」

「しねーよっ」

これまでの短い付き合いの中で抱いた危惧もあるが、若干の対抗意識も手伝ってそう釘を刺すと、桜はふくれっ面を浮かべる。

そんなやり取りに区切りがつくのを見計らったかのように、運転席の本郷が直前まで指示を吹き込んでいた車載通信機のマイクを置きながら声を掛ける。

「そろそろ行くぞ」

「はいっ」

言われてやや硬い声で応じると、光秋は車の後部席から降り、本郷の後に続いて車か

ら少し離れた辺りに移動する。

その際、本郷が両手でしっかりと持ったシヨットガンが視界の隅にちらつき、ただでさえ高まっている不安がさらに増えていく感覚を覚える。

「っ……」

この後のことを考え、それ以上に強張る体を少しでもほぐそうと両腕を軽く回すと、所定の位置で立ち止まる。

「……さてっ、行くか！——

胸の内に喝を入れてどうにか不安を押しやると、光秋は車の近くに控える董に指示を出す。

「やってくれ」

「はいっ」

聞きようによつては光秋以上に硬い声で応じると、董は離れた位置に佇む光秋と本郷を注視する。

直後、光秋はそれまで立っていた屋外の路上から、畳の敷かれた八畳間に跳んでいた。
——相変わらず、この感覚慣れないな——

瞬く間に全く違う景色の中に移動するテレポート独特の感覚に酔いにも似たものを感じそうになったのも一瞬、周囲に瞬時に目を走らせ、本郷も共にいること、脚の短いテーブルを挟んだ向かいに一才にも満たないであろう赤ん坊を抱いた若い女性が座っていること、そしてその後ろに中腰の犯人が驚愕の表情でこちらを凝視していることを確認する。

「ESOの者です！」

「こっちは警察だ。すぐにその親子を開放しろ！」

一連の状況——殆どが事前に北大路がサイコメトリーした通りだった——を把握すると、光秋は両手を構えながら威嚇の声を出し、本郷もショットガンの銃口を犯人の頭に合わせながら押し殺した怒りの声で告げる。

「な、なんだよお前ら……、コレが見えないのかっ！」

それに対して犯人は震えた声を上げながら、女性の背中に当てていた包丁を示す。

「そ、それにな、僕は……僕はこんなことだつてっ!!」

叫ぶや、犯人は本郷に視線を合わせる。

「っ!」

「本郷さ——！」

直後に石像の様に硬直したのも束の間、本郷はそれまで犯人に向けていたショットガ

ンの銃身を両手で掴み、その銃床を光秋目掛けて振り下ろしてくる。

——本郷さんがやられたか！——

その様子、特に先程まで犯人に向けていた怒りの目をこちらに向けてくる姿に、催眠をかけられたと察した光秋は咄嗟に後ろに下がって紙一重で銃床をかわす。

が、

「あああああああ!!」

「ッ……!!」

怒声を上げながら本郷はショットガンの打撃を続け、それらをギリギリでかわし続ける光秋はあつという間に壁際へ追い詰められていく。

そして、その光景に不安と恐怖を押し退けて勝利の笑みを浮かべる犯人の顔が視界の隅に入る。

それは、犯人の注意がこちらに向いていることの証だった。

「今だっ!!」

「オオウッ!!」

思うや光秋は声の限りに叫び、応答と同時に桜が天井を突き破って犯人の背後に着地する。

「!?——痛っ!」

思わぬ所からの乱入者に犯人は狼狽しつつも振り返ろうとするが、殆ど動かない内に苦悶の表情を浮かべ、持っていた包丁を落としてしまう。

「――!?」

それに合わせて本郷もショットガンを振り回すのをやめ、怒りと入れ替わりに自分の置かれた状況に戸惑った顔を浮かべ、その横を光秋は親子の許へ駆けていく。

「こちらに。北大路さん!」

「わかつてます」

親子を犯人から離しながら落ちている包丁を拾い、同時に天井に呼び掛けると、先程桜が空けた穴から北大路の声が返ってくる。

数秒後、犯人は苦痛の表情をいくらか和らげ、それを合図に光秋は数歩分の間を開けた距離まで歩み寄り、強い語調を意識して告げる。

「Eジヤマーを作動させました。お得意の催眠は使えない、人質もいない、そしてこんな大勢に囲まれている。逃走劇もここまでですよ」

言い切るや、そつと身構えながら犯人の出方を窺う。

と、

「……僕は……僕は……凄いいんだ。凄いいのに………っ」

誰に言っているわけでもなさそうに弱々しく呟くと、そのまま犯人は泣き崩れてその

場に両手を着いた。

と、催眠後の困惑から回復した本郷が犯人の許に歩み寄り、懷から手錠を出す。

「13時43分、逮捕・監禁罪の現行犯で逮捕」

腕時計を一見しながら硬質な声で告げると、犯人の両手首に手錠が掛けられる。

「手錠のEジャマーを作動させた。そっちはもう切つていいぞ」

天井の穴に向かって本郷が声を掛けると、桜が上に手をかざし、穴から携帯用Eジャマーを抱えた北大路と董が下りてくる。

——とりあえず、目的達成か……………——

同じ部屋に集まった一行と、すっかり戦意喪失した犯人、壁際に佇む未だ表情に恐怖を残しながらも無事な様子の親子をそれぞれ見回して、光秋は胸の中に安堵を漏らす。

「できることなら、こんなデリケートで心臓に悪い役回りは、金輪際ごめんこうむりたいところですが……………」

「バカ言え。特務部隊の主任なんてやってれば、これからもこんな機会はいくらでもあるぞ」

安堵し過ぎてつい口が緩くなったらしい。一連の作戦に対する率直な感想が思わず零れ、即本郷に注意される。

「ですよねえ……………」

「とりあえず、外見てこい。そろそろ来てるかもしれない」
「はい」

応じると、光秋は作戦前に見た北大路の間取り図の記憶を頼りに玄関へ向かい、外に出るとちようどやって来たサイレン音も赤ランプも点けていないパトカーに手を振る。タイミングと存在を示そうとしない状況から見て、作戦開始直前に本郷が犯人逮捕の後、に備えて要請した応援だ。

民家の前で停車すると、パトカーから警官2人が降りてくる。その内の1人に、光秋は見覚えがあつた。

「徳川さん？」

「あ、応援要請したのつてお前だったのか」

言いながら、徳川は後部のトランクを開け、その中から携帯用Eジャマーとケースに入っていたショットガンを取り出す。

Eジャマーをもう1人に預け、徳川もショットガンに弾を込めると、2人は門を通過して光秋の許に歩み寄る。

「状況は？」

「あ、はい。中で犯人が手錠を掛けられて、本郷さんとウチの特エスたちに見張られています。親子が人質にとられてましたが、今は解放されて中に控えてもらってます。こつち

です」

もう1人の問いに応じながら、光秋は玄関を開けて2人を先程の部屋に案内する。

「こちらです。本郷さん、応援来ました」

部屋の内外それぞれに告げると、光秋の脇を通って警官2人がその場にしゃがみ込んだ犯人に歩み寄っていく。

「あ、昨日の警部補」

「ん？ああ、加藤の知り合いの。悪いが、こいつを署まで連行してくれ。俺は人質になった親子の様子見と事情説明してから行くから」

2度目の知った顔との遭遇に関心した徳川に要件を告げると、本郷は光秋にも目を向ける。

「加藤もついていけ」

「わかりました……ところで、あの親子は？柏崎さんもないみたいですけど？」

「あつちの部屋に待機してもらってる。流石にいつまでも犯人と同じ部屋は嫌だろうしな。赤毛の嬢ちゃんにはそつちに着いてもらったんだが……用心に越したことはないな。あの子も連れてけ」

「はい」

応じると、光秋は本郷が指さした隣の部屋へ向かう。

台所らしきその部屋の隅に親子は身を寄せ、それを桜が見守っていた。

「柏崎さん、犯人の連行だ。一緒に来てくれ」

「わかったよ。じゃあなっ」

応じると、桜は親子——というよりも赤ん坊に挨拶して部屋から出てくる。

「……」

「なんだよ？」

「いや。今の、なんかお姉さんぽいなと思ってさ。しつかりしてるじゃないか」

さっきの光景を見て思ったままと答えると、光秋は桜と共に八畳間へ戻る。

と、部屋に着くとあることを思い出す。

「あ。すみません本郷さん、ちょっと柿崎さん使います。用心なら、アレも持って行った方がいいでしょう」

「……そうだな」

「徳川さんたちもすみません。少し待っててください。董さん、本郷さんの車まで跳ばして」

「はい」

本郷と徳川たちに断りを入れると、光秋は董とテレポートする。

「……………」

数秒かけてテレポート直後の独特の感覚をやり過ぐすと、車の後部ドアを開け、作戦前に座席に置いていったカプセルを取る。

「すみません。私のテレポートじゃソレ運べなくて……」

「葦さんでなくてもだけどな。しょうがないよ、そういうもんなんだから。もつとも、この超能力耐性のおかげでいろいろできるわけだが」

申し訳なさそうに呟く葦に応じながら、光秋はカプセルを胸ポケットに仕舞い、速足で民家へ戻ろうとする。

が、いくらも進まない内に足を止めることになる。

「あいつ等……………」

ほんの2、3分離れている間に、民家の周辺は15人程の人影と1機のイピクレス、そして新しい3本爪を備えた爪付きに囲まれていた。

103 追跡の乱入者 後編

—まだ諦めてなかったのか。爪付きまで復活してるし……—

光秋が曲がり角の陰に隠れて様子を窺っていると、玄関の前に犯人を家の中に押し戻しながらZCたちにショットガンを向ける徳川が目に入る。

—既に目的の者がいることは確定している。本郷さんたちの戦力は桜さんの念力と徳川さんのショットガンくらいか……本郷さんの銃は催眠にかかることを見越して全部弾抜いてきたし。ZC側はメガボディが2機、足元の人だかりも殆どが自動小銃持ち、5人くらいいる手ぶらはサイコキノか？なかなか踏み込まないのが気になるが……しかし桜さんもいるにしろ、流石にあの数は……—

外から見ても疑いようなない絶体絶命な光景に焦りを覚えながらも、どうにか落ち着いて状況の分析を試みていると、爪付きから癖毛——南の声が響く。

（白い犬！いるんだろうっ！出てきやがれっ!!）

「!?」

この状況で自分が名指しされたことに戸惑ったものの、次の瞬間には決断を急ぐことになる。

（出てこねえと、家ごとぶっ潰すぞッ!!）

「……………やりかねんな」

周囲への被害などお構いなしだった先程の戦闘の様子、そして今これ見よがしに掲げた3本爪を開閉して示す爪付きに、その言葉が脅しではないと察するや、光秋は胸ポケットのカプセルに手を伸ばす。

「いや、でも……………ただ出ていってもな。家から出られない本郷さんたちが……………九死に一生を得た親子の顔が脳裏にちらつき、カプセルを掴んだまま固まりそうになる中、董が声を掛けてくる。

「あの、光秋さ——加藤主任。私がレポートで桜たちを拾うから、それからZCをやっつければ」

「……………ちよつと待ってくれ。本郷さん、柏崎さん、北大路さん、徳川さん、その相方さん、犯人、親子……………全部で8人……………この距離でいけるか？」

「Eジヤマーは効いてないし、本郷さんの車までなら余裕でいけますっ」
「なら頼む。僕の方も準備する」

自信を込めた董の返答に決心すると、光秋は曲がり角の奥の引っ込み、なるべく背の高い建物のそばに駆け寄ると、屈んだ体勢のニコイチをその陰に隠れるように出現させる。

——癡毛たちの意識は民家に向いてるから大丈夫だと思うが……——

リフトを伝って地面から足が離れる最も無防備な状況下、こちらに気付いたＺＣに攻撃されるのではないかという多大な不安を抱きながら上がり切ると、すぐに操縦席に着いて認証を済ませる。

起動すると元の位置で待機している董を見やり、深く息を吸って外部スピーカーに告げる。

「いいぞ。やってくれ！」

言うと同時に、短距離走の走り出しの要領で立ち上がりながら走り出すと、曲がり角を出てＺＣ一行の前に躍り出る。

（デメエ、いつの間に——）

「！」

ずっと家の中にいると思っていた白い犬が後ろから現れて動揺したのだろう。南の戸惑った声を遮る様に、光秋はペダルを踏んで一本道を一気に駆ける。

直後に爪付きは３本爪を発射し、大きく開かれたソレを光秋は足裏のツメを地面に突き刺して踏み止まりながら受け止める。

——さて、出てきたはいいが……この後どうする？どう戦う？——

住宅街の只中、しかもＺＣたちの背後には先程の親子の家があるという認識からあま

り激しく動くわけにもいかず、そうした不都合をどうにかできるアイデアがすぐに思い付くわけもなく、勢いよく炎を噴き上げる3本爪を押さえ込んだまましばし膠着状態に入る。

と、爪付きの傍らに控えていたイピクレスが手に持ったマシンガンを向けてくる。

——不味いっ！——

ソレでニコイチが傷付くことはまずないものの、跳弾や流れ弾が被害を拡大させるかもしれない。そんな危惧を覚えながらも、勢い衰えぬ3本爪を抱えている身を動かすこともできず、わかっていても何もできない自分に奥歯を噛み締める間にも砲口から多数の弾丸が吐き出される。

刹那、

「!?」

ニコイチの胸部前に桜が割込み、両手を前にかざしたかと思うと、迫っていた砲弾が寸前で停止し、しばし留まった後で次々と地面に落ちていく。

「桜さん!？」

(分かってる! 跳ね返すと危ないんだろうっ!)

光秋は思わぬ登場に驚いただけだったが、桜には注意に聞こえたらしい。応じる間にも、絶え間なく迫る弾丸の勢いを直前で殺して地面に落とすという防御方法を続行

していく。

しばらくしてマシンガンの連射は止んだものの、今度は15挺の自動小銃の弾雨が迫り、同じ防御方法を続ける桜の表情に焦りが浮かんできく。

—あの弾の落ち方、普段の念壁とも違うようだけど……やっぱり負担が大きいのか？

……………

一連の様子に不安を覚えたその時、光秋は人だかりの中から銃を持っていない1人が飛び立ち、桜の後ろ側へ回り込むのを目撃する。

—不味いッ！—

思ったものの光秋自身動ける状態ではなく、桜もここにきてマシンガンも加わった弾雨を防ぐのに手一杯で回避も追加の念壁を張る余裕もなく、あつという間に接近してきたサイコキノの右手が背中に向けてかざされる。

その直後、

「!?」

桜の後ろにいたはずのサイコキノは爪付きの付近に跳ばされ、桜の背中に放たれるはずだった念力が3本爪のケーブルを左腕側の付け根から切断する。

—今のは——董さん！—

突然の展開に困惑したのも一瞬、ニコイチを通じて先程まで隠れていた曲がり角の辺

りに董の気配を感じて合点するや、光秋は切断されたケーブルを掴み、噴射の止まった3本爪をマシンガンの連射を続けるイピクレス目掛けて振り回す。

「桜さん！退がれっ！」

3本爪自体は当たる直前に念壁によって防がれてしまうものの、同時に弾雨の射線上に割り込んだ光秋は背後の桜に向かって叫ぶ。

それと同時に、自動小銃の火線が1本、また1本と減っていく。

「？」

弾倉の交換かと思いつつ人だかりに目を向けると、小銃を撃っていた者たちの服に火が点き、皆急いで服を脱いだり叩いて消そうとしたりと銃撃どころではなくなっている。

「自然発火？……いや、徳川さん？」

あまりの光景にさらに周囲を走査すると、民家の塀の陰にZCたちに向かって手をかざす徳川を見付け、特別意識した所為かその眩きが聞こえる。

（マツチー本火事の元つてな……あんまりやりたくないんだが……）

——……徳川さん、発火能力者だったのか——

どこか不満を含んだその声に、光秋は銃撃を止めてくれたのが徳川なのだと独り納得する。

（たぐどいつもこいつも！おいつ、左腕！）

その光景を南も爪付きの頭部を通して観るや怒声を上げ、隣のイピクレスの左腕を念力で引き寄せて自機のソレと付け替えると、一気にニコイチに迫るや取り外した左腕を両手で持つて棍棒代わりに振り下ろしてくる。

「！力勝負なら！」

反射的に手元に引き戻していた3本爪を両手で抱え持つて受け止めるや、ニコイチの腕力にものをいわせた光秋は爪付きの左腕を押し戻してがら空きになった胴部へ右蹴りを入れる。

が、脚部から炎を噴き上げた爪付きは飛翔してそれを避け、ある程度まで上昇すると再び左腕を両手持ちして迫ってくる。

が、いくら進まない内にその両腕が壊れた左腕諸共見えない力に押し潰される。

（光秋！やれえ!!）

「桜さんか——！」

爪付きの背後に手をかざした桜の姿を捉えたその時、さらに背後に先程桜の後ろに回り込んだサイコキノを見付け、その手が桜に向けられているのを凝視する。

刹那、

「！」

弾む様に上昇したニコイチが爪付きに左肩からぶつかり、そのまま肩で退かすようにして正面の視界を確保するや、光秋は3本爪を大きく振りかぶる。

「桜さん！来いッ！」

声の限りに叫ぶと同時に3本爪が右側からサイコキノへ迫り、重量物の接近に慌てて急降下したサイコキノは桜への攻撃の機会を逃してしまふ。

その直後に、桜がニコイチの角に跨ってくる。

「無事か？」

（何とか。ありがと……でも、爪付きが……）

不安そうに呟く桜の視線を追って地上を見やると、両腕を肘の先から失い、左肩の装甲板も凹んだ爪付きがゆっくりと道路に下りていく。

――両腕を潰した、得意の念力もニコイチには効かない、あとできることといえば体当たりくらいか……？――

相手の方もこちらの様子を窺うように単眼を向ける爪付きを観察する一方、桜を狙っていたサイコキノが迷ったように滞空しているのを視界の端に見る。

――あちらさんもさっきの一振りが効いたのか、迂闊に動く気配はない………決めるなら今、か………？――

そう断じようとした直後、遠くにサイレンの音を複数捉える。徐々に大きくなってい

くそれは、明らかに四方から、今一同が戦鬪を繰り広げている一帯を囲む様に近づいてくるのがわかった。

「……応援か？」

（チツ！）

映像越しに家の合間を走るいくつもの赤ランプを観た光秋が呟くと同時に、舌打ちを漏らした南は残っていた爪付きの両肩を外してこちらに投げ付けてくる。

「！」

それを見た光秋は反射的に避けようとするが、

――避けたら周りの民家に当たる!?――

咄嗟にそう思うと同時に、角の上の桜に叫んでいた。

「桜さん、キャッチして！」

（!?!）

突然呼ばれて驚いたのも一瞬、桜は言われた通り念力で2個の肩部を拾い上げ、引き寄せたそれらをニコイチの手で掴んだ頃には、爪付きは滞空していたサイコキノを伴って先程の民家の前のZCたちの許へ向かっていた。

（テレポーター、準備しろ！ずらかるぞっ！）

（！待ちや――）

「待てっ!」

南の叫びを聞くや角から飛び立とうとする桜を、光秋はニコイチの手で行く手を遮って止める。

（何だよっ!）

すかさず桜は抗議するものの、その間に民家の前に集合したZC一行は忽然と消えてしまう。

それを見るや、ニコイチの胸部に移動した桜はハッチを足で叩いてくる。

（おい、光秋！開けろ！出てこい!!）

「……とりあえず叩くのやめなさい。あと加藤主任な」

モニター越しに言いながらハッチを開けると、桜が落ちる様に入ってくる。

「何だよ今のは？何で止めた!」

「向こうは撤退の気配を見せた。そこを迂闊に刺激するとかえって危ないって思ったのと、下手に集団に近づくとテレポートに巻き込まれて相手の拠点に単身連れていかれると思ったからだ」

詰め寄って訊いてくる桜に、光秋はさつき咄嗟に思ったことをそのまま告げる。

「アタシは離れた所からでも充分に攻撃できるよ。そもそもあとほんのちよつと足止めすれば、一網打尽にできたかもしれないじゃないか!」

そう言つて桜が指したモニターの一角には、民家の前を囲む様に集まつた数台の帕特カーとESOの車両が映つていた。

「確かにそうだが……」

それを観て、光秋の中の判断が束の間揺らぐものの、敢えてそれを横に退けて返す。

「でも、彼らにはまだ余力があつた。そしてここは住宅街のど真ん中だ。下手に包囲なんてすれば、ヤケクソになつて周囲への被害が拡大するかもしれない。メガボデイドつて、辛うじてとはいへ2機とも健在だったし……」

言いながら、先程の戦闘の余波で生じた道路の舗装や周囲の建物の破損を見やる。

「ただ、桜さ——柏崎さんの言うことも一理あつたな」

「え？」

その上で続けた一言が余程意外だったのか、桜は一瞬意表を突かれる。

「ここで逃がしたつてことは、遠からずまた何処かで彼らは事件を起こすということ、その機会を与えてしまつたつてことだ。だから、一網打尽にできるチャンスを棒に振つたという指摘には言い返せない」

「いや……アタシは別に、そこまで……」

数瞬の揺らぎの間に感じたことを告げると、桜は居心地の悪そうな顔を浮かべる。

「だから、次の機会にはその辺も踏まえた上で判断するように努める。とりあえず、今の

僕たちの最優先事項は催眠事件の犯人の方だ。一度本郷さんたちと合流しよう」

「……………了解」

桜が頷くのをを見ると、光秋は民家の前にニコイチを降下させる。

と、桜が思い出したように呟く。

「あつ、そういうえば、刑事のおっさんさつき怒ってたよ」

「えっ？何で…………？」

藪から棒な報告に、これといって身に覚えのない光秋は狼狽する。

「ほら、藪がレポートでアタシらを逃がしてくれた時、犯人だけいなくてさ。それ見た時、おっさん『あのヤロー！』とか言ってたけど」

「レポートして犯人だけいない…………？あつ！」

そこまで言われて、今更ながら致命的なミスに思い至る。

—そうだよ。犯人には手錠を掛けてた——E・ジャマーが効いてたんだ。超能力は原則効かなかった…………—

思う間にも地上に近付き、玄関のそばでこちらを見上げる本郷を捉える。

「つ……………」

こちらを真っ直ぐに見据えるその眼光に委縮しつつも、逃げるわけにもいかず、ひとまず着地したニコイチの膝を着かせ、浮遊した桜と共にリフトで地面に下りる。

「……完全武装した超能力者たちに囲まれて逃げ場を失ったところを助けてもらった、それには礼を言おう」

「はい……」

静かに告げられた本郷の言葉に、光秋は消え入りそうな返事をする。

「ただ、その時に犯人を取りこぼし、一人命の危機に晒してしまった、それはいただけん」

「……………はい……」

声を荒げるわけではないがいくらか眼光を強めながら言われたことに、さらに小さくなつた声で恐る恐る応じる。

「……………まあ、説教はこのくらいにして……………ここらの処理は他の奴らに任せるとして、俺たちは当初の予定通り犯人を署まで連行する。準備しろ」

「……………はいっ」

その指示に、気を取り直すつもりで意識して力のある声で応じると、光秋はひとまず後ろのニコイチをカプセルに戻した。

後部席中央に手錠をしつかりとはめた犯人を、その左右に光秋と桜を乗せた本郷の車が発車し、その後ろを董と、事情聴取に同行してもらった親子を乗せた徳川たちのパト

カーがついていく。

「……………」

隣ですっかり意気消沈した犯人を見て、車内からトラブルが発生することはないとひとまず結論すると、光秋は窓から見える範囲をさっと見回してみる。

「さすがにもうZCは来ない……よな？でも二度あることは三度あるって言うしなあ……………もう来ないでくれっ。もう来ないで、もう来ないで、もう来ないで……………」

今一番の願いを口の中に呟き続けていると、不意に犯人の「ごそごそした声」が耳に届く。

「……………」

「なに？」

桜の方も聞こえたのか、隣で俯く犯人に警戒の目を向ける。

と、助手席に座っている北大路が応じる。

「ただの独り言。気にしなくていいよ」

北大路の持つサイコメトリーは強力であり、Eジヤマーの影響で多少読み取りにくくなっているものの、同じ車内にいる犯人の大まかな様子を監視、場合によっては一足先によからぬ事態に対処するための合図を送るには充分だった。

「……………」

そんな北大路が特に警戒した様子もなくそう言うなら大丈夫かと、光秋は再び車外へ意識を向けようとするが、

「僕は凄いだよっ!!」

「……………落ち着きなさいっ」

出し抜けに叫んだ犯人に3秒と経たずに再び向き直り、今にも北大路に詰め寄ろうとするその肩に手を置いて押さえ込むことになる。

しかし、それでも犯人の怒りは収まらない。

「特エスだからって、小学生くらいが生意気言つてんじゃないぞっ！僕はこの半年で大勢の悪人共を成敗してきたんだ。誰にも気付かれず、直接手を下さずにな！それがどれだけ——」

「少し静かにしてくれないか。気が散って運転の妨げになる」

興奮気味に犯人が語る中、少し強い語調で告げられた本郷の一言に、車内に再び沈黙が訪れる。

「焦らんでも、署に着いたら取り調べでたつぷり話を聴いてやる。根掘り葉掘りな。それまで、もう少し静かにしてくれないか」

「……………」

「……っ」

一見穏やかだが、その下に隠れた有無を言わせない強制力に犯人はすっかり押し黙り、光秋も自分に向けられたわけではないにも関わらず思わず縮こまりながら押さえていた手を離す。

と、本郷がバックミラーを介して後部席に視線を寄こしているのに気付く。

「ただ、今の内にこれだけは言っておく……もし、君が陰ながら悪を倒す『正義の味方』なんてものを気取ってるんだとしたら、抵抗する術すべのない女子供を楯にした時点で、その妄想さえ破綻しているぞ」

「……………」

本郷の一言が堪えたのか、先程以上に気の抜けた表情を浮かべた犯人は、そのまま静かに顔を俯ける。

「……………」大きな力を得たことによる増長と、それでもなお曲げられなかった現実を知ったことによる挫折、か……………」

その丸まった背中に何故か共感のようなものを覚えながら、ふとそんな言葉が浮かんでくる。

その間にも車は署の駐車場に着き、下車した光秋は犯人の横に寄り添いながら建物内へ入っていく。

——とりあえず、三度目はなかったか……—

事後処理本番がこれからだということを承知しつつも、当初の危惧が杞憂に終わったことにひとまず安堵した。

事情聴取がひと段落し、署内の留置所に犯人が入れられたのを見届けた光秋は、その足で近くの自動販売機に寄って加糖の缶コーヒーを購入する。

取り出し口から取ったそれを持ってふと腕時計を見ると、間もなく6時を指そうとしていた。

——順調に進んでいたと思ったが、意外と時間経ったんだな………疲れたあ……—
思いつつフタを開けたその時、廊下の奥から徳川が歩み寄ってくる。

「よう、加藤」

「……徳川さん」

応じると、疲れの溜まった体に温かいコーヒーを一口注ぐ。

「お疲れみたいだな」

「ええ。初仕事っていうのもあるのか、思った以上に………あ、そうだ。子供たちは……？」

「ちゃんと寮まで送って行っただけ」

「ありがとうございます」

「ついでだからさ……」

頭を下げる光秋に応じながら、徳川も缶コーヒーを購入する。

犯人を署内に送り届け、逃走や襲撃の心配が護送中に比べて減ったと判断して解散を考えた光秋だったが、寮、あるいは学校への移動手段に困っていた。そこに名乗りを上げてくれたのが徳川であり、人質になっていた親子の送迎と合わせて少女たちを送っていつてくれたのだ。

「それで、取り調べの方はどうだった？」

「ほぼ順調でしたよ。ときどき犯人が興奮することがあつて冷や冷やしたけど………志望していた進学校の入試に落ち、やむなく今通つてる公立校に入学。しかし周囲との確執だったり、当人の強過ぎる自尊心だったりの所為で孤立。いろいろ鬱憤が溜まつていたところ、去年の夏に初めて催眠能力を使用。校内の不良グループを仲間割れさせて自滅に追いやったのに味を占めてその後の犯行を繰り返した………主張を要約すれば、こんなところでしょうか」

自身犯人の言つたことをまとめたこともあつてひと通り説明すると、光秋はまた一口コーヒーを飲む。

「なるほど。超能力犯罪じゃよく聞く話だな」

「やつぱり、そういうもんなんですか? 『大きな力を笠に増長する』というか……」

「こんな仕事してると、偶に聞こえてくるもんだぜ」

応じると、徳川もコーヒーを一口する。

「……………そういうもん、ですか…………」

「……………なんだよ?」

「あ、いえ……………なまじ大きな力を持つてしまったがために増長する……………少しキツイ言い方をする、『バカにナイフ』といいますか……………前に住んでいた所では、ノーマルでもそういうことに陥る人の話がちらほら聞こえてきて、そう考えると、超能力者もその辺そんなに変わらないのかな?……………て」

「ん……………そう言われるとなあ……………」

光秋が感じたままを語ってみせると、徳川は天井を見上げる。

「……………あとは、少し前の自分の面影を見たような気がして……………」

「ん?」

「いえ、なんでもありませんっ」

思わず零れた一言に徳川の視線が戻ると、光秋はやや強い語調で返しながらコーヒーをすすって誤魔化す。

「それよりも、この後も報告書書いたりとか、なにかと大変です……あつ、桜さんが壊した天井の修理費も手配しないと……………」

そのままさらに誤魔化すことも兼ねて今後の予定を告げると、さらなる疲労感が襲ってくる。

「そりやまた……」

「ま、主任になるって聞いた時からある程度覚悟はしてましたが……………さてとっ」

コーヒーを飲み干して少し力を込めた声を出すと、光秋は自動販売機脇のゴミ箱に缶を捨てる。

「とりあえず、一度本部に戻ります。今日はありがとうございました」

「おう。せっかくだ、落ち着いたら一緒に飯でも行こうぜ。いい店知ってるんだ」

「その時はよろしくお願いします」

徳川の誘いに一礼して応じると、光秋は本郷を探しに歩き出した。

東京本部前の道路に本郷の車が停車すると、その助手席から降りた光秋は運転席の本郷を見る。

「わざわざすみません。本郷さんも調書作りとかあるのに」

「なに。休憩がてらドライブというのも悪くない。こちらこそ、今回は世話になったな。また機会があれば一緒にあちこち廻ろうや」

「その時は、今回よりはマシな仕事ができるよう善処いたしますっ」

軽い意志表明を告げた光秋は車から離れ、走り出した車はいくらもせずに角を曲がって見えなくなる。

と、スーツのポケットに入れている携帯電話が振動する。

「涼さん?……もしもし?」

画面を確認するや、すぐに電話を左耳に当てる。

（光秋さん? 今よろしいでしょうか?）

「ああ。どうした?」

（夕方のニュースでZCの事件が……住宅地のだ真ん中でメガボディ戦があつたって聞いて、もしかしてと……）

「ああ……」

多分な不安を含んだ涼の声に相槌を打ちながら、光秋は待機室のある棟へ向かう。

「まあ、確かにその場にはいたよ。別件で仕事してたら突然絡まれて。ただ、僕も含めてとりあえずみんな無事だった。わざわざ連絡してくれて、ありがとな」

（いいえ。光秋さんが……みなさんが無事ならいいんです）

「重ねてありがとう。とりあえず、特務部隊主任としての初仕事はまずまずといったところかな……これから事後処理があるんだけど……」

（！すみません！変な時にかけて）

「いや、今は休憩中みたいなもんだったから……ただまあ、そろそろな」

（……わかりました。引き続き、お仕事頑張ってください）

「ああ。涼さんも、最近物騒だから気を付けてな」

（はいっ）

涼の返事を聞くと光秋は電話を切り、玄関をくぐりながら携帯電話をポケットに戻す。

最寄りのエレベーターに乗り込むと、壁に背中を預けながらふと思う。

—この間の工場地帯の時といい、涼さんもなにかと気にかけてくれるよな………姫君から心配されるとは、僕も出世したもんだ。本人の前じゃ嫌がるだろうから絶対言わないだろうが………

決して悪い気はしない、さりとてどうにも落ち着かない、なんともむず痒い気分を持て余している間にもエレベーターの扉は開き、光秋は待機室へ向かう。

部屋に入ると机に腰を下ろし、カバンから出したルーズリーフに今回の捜査協力の流れを箇条書きしていく。

と、

「……あつ、絡んできたZCについては……………」

流れの把握も終盤に差し掛かったところで一旦手が止まり、事態に乱入してきたZCたちをどう処理したものかと頭を抱える。

「こつちは事情聴取に立ち会ったわけでもないし、今回はあくまでも催眠魔事件の協力だったし……………とりあえず、さつと触れるくらいでいいか？何かあれば後で別件で報告求められるだろうし……………」

多少の不安を抱きながらも簡条書きを終えると、机の端に退けてある支給されたノートパソコンを手元に引き寄せ、報告書を作成していく。

しばらくしてひと通り形にしたところで手を休め、強張った体を伸ばす。

「つ……………」

その時、再び携帯電話が振動する。

「春菜さん？もしもし？」

姉貴分の名前を確認すると、すぐに電話に出る。

（もしもしコウちゃん？今いい？）

「……………ええ、まあ……………」

読み直しが残っている報告書を一見し、ひと休みがてらと頷くと、春菜は話し出す。

（さつきニユース観ただけど……なんかまた戦闘あつたつて……大丈夫？）

「ああ……大丈夫ですよ」

先程の涼と同じようなことを訊ねる春菜に内心「またか」と思う一方、2人目の心配してくれる人に薄っすら笑みが浮かぶ。

（……なんか、随分呆気ない返事だけど？）

「いや、そんな変にリアクションとか期待されても……実際どこも怪我してないですし、一緒に行動してた人たちもみんな無事でした。あまつさえ、今報告書書いてたところですよ」

（！ごめんっ、邪魔した？）

「あ、いや、休憩入ろうと思つてたんでそこは大丈夫ですよ」

無事であることを強調しようとしてつい滑つてしまった一言に慌てる春菜を落ち着けようと、光秋もやや慌てながら付け加える。

「しかし、工場地帯の時といい、春菜さんからこうも劳いの電話をもらえらるとは」

（わたしはコウちゃん姉貴分だからね。これくらいのことはするよ）

「こんな美人から『大丈夫？』なんて言われるとは、男冥利に尽きますね」

（コラッ、からかうんじゃないの！）

先程の滑りを誤魔化すことも兼ねてふと浮かんだことを言つてみると、春菜からもし

い反応が返ってきて口元の笑みがますます濃くなる。

(……ま、それだけ口が達者なら、本当に大丈夫かな?)

「どうも……でも、春菜さんが美人なのは事実でしょう?」

(コウちゃんって意外と軟派なんぱなんだね。もっと真面目な子かと思ってた)

「僕はただ感じたままを言ってみただけです」

(ならいいけどねえ……それでホウちゃん泣かせたりしたら、わたし本気で怒るからね)
「法子さんを泣かせるような事態なんて、僕の方から願ひ下げですよ」

今までとは異なる割と真剣な一言に、光秋も心底からの気持ちで応じる。

(……ごめん。つい話し込んでしまったね。まだ仕事あるんでしょ? 頑張つて)

「ありがとうございます。春菜さんも、ご覧の通り最近物騒なのでお気を付けて」

(ありがと。じゃあね)

応じると春菜の方から電話は切れ、携帯電話を仕舞った光秋は背もたれに体を預けてふと思う。

——涼さんどころか、春菜さんにまで労ってもらえるか……まあ春菜さんの方はやっぱりな弟に対する気苦労みたいなもんなんだろうが……いよいよいい身分になったもんだなあ……——「さてつ、いい身分の人はちやつちやと仕事終わらせちゃうかつ」

再びむず痒い気分を持て余しながら気合を入れると、書き上げた報告書の確認に取り

掛かる。

完成した報告書を提出すると、机の上を軽く整理し、帰り支度を整える。

―結局、ZCのことは本当にさらっと触れただけだったが……ま、何かあれば言うてくるだろう―

提出してもまだ残っていた不安をそう思うことで割り切ると、室内を大まかに見渡し、待機室を出る。

玄関に向かいながら腕時計を確認すると、7時を過ぎていた。

「食堂やつてるかな？……いや、偶には外で食べるのもいいか」

夕食をどうするか決めると、帰路の途中にいい店はないか思い返してみる。

電車で揺られ、冷風に追いついて立てられながら街中を歩くこと少々。結局寮近くのラーメン屋に入った光秋は、注文した醤油ラーメンにメガネを曇らせる。

―……………ラーメンって、あったかい……………―

視界不良の中でも器用に箸を動かして麺をすすっていると、ふとそんなことを思う。

実際、日没後の未だ衰えぬ寒さの中を歩いてきた身にその熱は安堵をもたらし、麵に絡んだ油分は疲れた体を慰めてくれる。

そうして1杯完食し、いくらか温まった体で残りの道を歩き切ると、部屋に着くや荷ほどきをして風呂を沸かす。

「熱っ……………ふう……………」

肩まで湯船に浸かると、抜けていく疲労感に思わず声が漏れる。

—犯人追いかけて、人質救出して、さらにはZCの乱入に対処……………主任業、最初からえらいこっちゃだよなあ。こうして無事に風呂に入れる現実に感謝だ……………—

今日あったこと——度重なる危機を紙一重に何度も潜り抜けたことを振り返りながら充分に温まると、体を洗って風呂から出る。

寝巻に着替えて髪を拭きながら暖房の効いた居間に戻ると、机の上の時計を確認する。

—もう9時回ってんのか……………寝る前に買い溜めた本の1冊でも読もうかと思ったが……………—

未だ体の奥底に感じる疲労に、名残惜しくも早く寝るべきかと考えてみる。

そうしながら髪を乾かし、冷蔵庫から目薬を出して1本注す。

と、机に置いていた携帯電話が振動する。

「法子さんっ!」

画面に表示された名前に涼や春菜の時とは段違いに喜んでいる自分を自覚しつつ、すぐに電話に出る。

「もしもしっ?」

（光秋くん? 今いい?）

「はい。ちょうど落ち着いたところで……住宅街の件、ですか?」

（うん……………アキ、大丈夫だった?）

「綾か……………うん。大丈夫だよ。ちよつと危ない目にも遭ったけど、なんとか無事だ」

（よかつたっ……………）

法子と綾、二人分の安堵が電話の向こうから聞こえると、光秋も自然と肩の力が抜けていく。

「その……………この前といい、いつもありがとな。心配してくれて」

（当たり前じゃんっ!）

知らぬ間に零れた一言に、綾が語気を強めてくる。

（……………ごめん。怒鳴っちゃって）

「いいよ……………当たり前、か……………」

普段から特に意識することなく使う、何の変哲もないこの言葉が、この時は声に出し

てみると不思議と胸の辺りが温かくなった。

「……そつちこそ、暖かい日が多くなってきたけど、体調管理とか大丈夫ですか？季節の変わり目が一番体調崩しやすいっていうけど」

（それこそ心配なくつ。私たちの体は丈夫にできてるから）

「それはなにより」

（光秋くんこそ、忙しいからって不摂生な生活送つてない？ご飯ちゃんと食べてる？）

「母親みたいなこと言わないでくださいよ……ちゃんと食べてるけれども」

法子の訊き方に、光秋は苦笑いを浮かべながら応じる。

それから先は、とりとめのない会話が続いた。勉強漬けの日々が終わってほつとした、自分より階級が下の者がいなくなつたと竹田がぼやいている、買い溜めた本をなかなか読み進められなくて困つた、出勤時にいつも通る道に生えている桜の木に蕾がついていた。

そんななんでもない話題を一つ重ねる毎に、光秋は胸の内に隙間風が通る様な切なさを感じる。

—ああ、さつきまで疲れてたのがどんどんよくなつていく。やつぱり、法子さんと緩と話す楽しい……けど………声だけで、触れられないんだよな………—

そんなことを思う間にもスピーカーから聞こえてくる伊部姉妹の声を聴きながら、お

もむろに前に伸ばした右手、その掌に最後の夜に感じた二人の手の感触を思い出している。

——ちよつと前までは、毎日でも触れられたのに………今だつて、なりふり構わず会に行けば触れられるのに………——

記憶の中の感触は胸の中の隙間風をさらに強め、知らず知らずの内に視線が机の上のカプセルに引き寄せられる。

その時、

（会いに行くからっ！）

「!?」

唐突に響いた法子とも綾ともつかない——あるいは二人分の叫びに、光秋は飛び上がりそうになりながらもカプセルに伸ばそうとしていた手をすぐに止める。

（今月末、会いに行くからさ………）

「……わかつてる………待つてますっ」

引き留める様な一言に、静かなながらも一言一句噛み締めるつもりで応じると、光秋はふと時計を見る。

「！いつけねっ、もうすぐ11時だ」

（えっ？もうそんな……）

間もなく1周しようという長針に反射的に慌てた声を吹き込むと、それを聞いた法子も電話の向こうで時刻を確認する気配が伝わってくる。

(……今日はこの辺にしようか)

「ですね。そろそろ寝ないと明日が怖いし。遅くまですみませんでした」

(いいんだよ。あたしたちだってお話したかったんだし)

「ありがとう……じゃあ、おやすみなさい」

(おやすみなさい……おやすみっ)

法子と綾の返事を聴くと、光秋は切った電話を充電器に繋ぎ、歯を磨くとすぐに布団に入る。

——しかし、さっきは危なかったなあ。危うく出来心に負けてひと騒ぎ起こすところだった……自分の中の“弱さ”に負けて、なまじ持っている“大きな力”を闇雲に振るってしまう……スケールや方向性はともかく、考えようによっては僕も今回の犯人と同じようなことをするところだった——否違う、すでに一回やつちまつてるんだな……

脳裏を過るのは蜂の巣での戦い——崩れ落ちる法子と、怒りに我を忘れてニコイチを振り回す自分の姿だった。

——そう考えると、今回の事件、少なくともその発端はそう珍しいものでもなくて、誰

にでも生じ得るものかもしれない。誰の中にも「弱さ」はあつて、些細なきっかけでそれは自分を負かしてしまう、か……………今回僕が負けずに済んだのは、法子さんと綾がいてくれたからだ。蜂の巣の時だって、法子さんが止めてくれたからこそだった……………何かを起こすのが人なら、それを止めるのも人つてことなのかな……………？――妙に覚めた頭で思案を繰り返しながらも、意識は少しずつ眠りへと落ちていった。

平手の音編

104 徳川の誘い

3月9日水曜日午前8時。

出勤して早々に昨日の一件——通称「催眠能力者通り魔事件」の際に起こったZCとの戦闘に関する報告書の提出を指示された光秋は、ルーズリーフと睨めっこをしながらどうにかメモを書き進めていた。

——結局こうなったか……えっと、あんなった経緯の発端は、犯人がZCの身分を隠して街中でたむろしていたメンバーの1人を殺してしまったこと。その人が爪付きのパイロット——あの南つて人の派閥の一員で、他のメンバーがその死に不自然さを感じて自分たちの能力とZCの情報網を駆使し、加藤隊が捜査を開始した頃には僕らさえも遠くから監視して利用し、偶然にも僕らと同じタイミングで犯人を追いつめ、「報復」を行うおうとした……か。「復讐」じゃなくて「報復」という辺り、なんとも世知辛いなあ………それで、最初は確か………

昨夜の小さな不安が現実になったことに頭を掻きながら、警察から提供された拘束されたイピクレスのパイロットの証言を整理し、昨日の記憶を頼りに戦闘の流れを辿って

箇条書きを一つ一つ書き加えていく。

その時、机の上の電話が鳴る。

「はい、加藤隊待機室」

（総務部です。外部からお電話がありましたのでお取次ぎします）

「はい……？」

スピーカー越しの女性の声に応じると、数回の電子音が鳴り響く。

—外部？桜さんたちの学校かな？—

相手の心当たりを考えていると電子音は止まり、今度は男性の声が響く。

（あ、ESO東京本部の加藤主任でしょうか？）

「はい？」

応じながら、光秋は未だ「主任」という呼び方に慣れない感じを覚える。

（わたくし、弁護士坂田と申します）

「弁護士……？」

そうして告げられた全くの予想外の職業に、微かに動揺を抱く。

（実は現在、先日の沿岸工場地区の抗争で逮捕されたZC構成員の佐賀光一^{さがこういち}被告の裁判の準備をしております）

「はあ……」——サガ……？——

相槌を打ちながら、何処かで聞いたような名前に記憶を探ってみる。

（確か拘束された際、主任に情報提供をしたと聞いているのですが……）

——情報提供……工場地帯の……——「ああつ」

言われてようやく、兵員輸送車の中で半ベそをかいていた男のことを思い出す。

「ああ、はいはいつ。それで？」

（その情報提供の件について詳しく伺いたいです。できれば直接お会いして。なので明日、本部にお邪魔してもよろしいでしょうか？）

「明日ですか……」

言われて手帳を取り出し、明日の予定を確認する。

「わかりました。具体的に何時頃来られますか？」

空白の日付を見るとすぐに話を詰め、まとまると受話器を置いて新しい予定をメモする。

「そつかあ、あの事件の裁判もうすぐ始まるんだ……」

感慨深く呟くと、手帳を片付けて報告書の作業に戻る。

——……昨日の子も、その内裁判受けるのかな？——

箇条書きの手を一瞬休ませると、微かながら共感を抱いていた通り魔事件の犯人の顔が浮かんだ。

午前10時。

書き終えた報告書を提出した光秋は、製作作業で固まった体を伸ばしながら、出てきた足で運動場へ向かっていた。

—このところ、ろくに基本的な練習もできなかったしな。幸い今は時間あるし……あつ—

そこまで考えたところで、桜たちのことが書かれたノートが頭を過る。

—いや、まあ……昨日のことを振り返って今後の特エス運用に反映させる——つまり反省会もやらなければいけないけど………僕自身の鍛錬も重要なわけだし、こつちがひと通り済んでからやればいいよなっ—

面倒ごとを後回しにすることへの罪悪感をそう思うことで緩和させると、少し足取りを速める。

以前曾我に案内してもらった時の記憶を頼りに進んでいくと、

「あら、加藤主任」

「曾我さん……」

道中の自動販売機の横のベンチでお茶を飲んでいる曾我本人に遭遇し、応じながら歩

み寄る。

「どうしたんです？こんな所で」

「いや、ちよつと体動かそうかと思つて……」

曾我の問いに応じながら、光秋は今の曾我の口調がどうしても気になつてしまう。未だに馴染まないのだ。

「……………あの、曾我さん。今は二人だけなんですし、別に前の口調でも……」

「そういうわけにもいきません。ワタシは准尉相当で、加藤主任は三尉。せめて勤務時間の間ははじめをつけまさんと」

「それは……………まあ……………」——変なところで真面目だなあ——

キツパリと応じる曾我に返す言葉は思い付かず、ある種の感心を抱く一方で、やはり猫を被っている態度はどうにも落ち着かない。

「ところで、曾我さんここでなにを？トレーニングの休憩ですか？」

そんな気分を払いたいのもあつて、先程から気になつていたことを問う。

「ええ、そうです。そろそろ再開しようと思つてたところですけど」

「それなら……………」

その返答を聞いて、光秋は顎を撫でながらしばし考える。

「せつかくだし、また組手の相手してもらえませんか？念力とかどんな使つてくれて

いいいで」

「え……………」

光秋の申し出に、曾我は目に見えて嫌そうな顔を浮かべる。

もつともその理由を知る光秋としては、その点に関して特に指摘することはできなかった。

「この前みたいな事故が起きないように注意しますよ。それこそ、そう何度も “お詫び” をしていちや、あつという間に懷が寂しくなりますしね。他方でやつぱり訓練はやつておきたいし、頼めそうな相手が今曾我さんくらいしかないんですよ。お願いできませんか？」

「……………」

光秋の頼みにしばし沈黙で応じた後、曾我はやや警戒を含んだ目を向けてくる。

「本当に今回は大丈夫なんですね？ 前のパンチも結構痛かったんですよ？」

「注意します。曾我さんこそ、念力の出力間違えて僕の骨折らないでくださいね？」

「それこそ大丈夫です。ワタシ、コントロールには人一倍自信ありますからっ」

言いながら曾我は飲み終えたペットボトルを宙に放り、それはかざした手の動きに合わせて少し離れた所にあるゴミ箱の口に吸い込まれていく。

「それなら安心だ」

一連のパフォーマンスに胸を張って歩き出した曾我に応じながら、光秋も運動場への移動を再開する。

― 相手を得られたのは助かったな。一人でやっても正直どうかと思つてたし。だからこそ、引き受けてくれたからには、今回は本当に注意しないと……―

先を行く曾我の背中を眺めながら、光秋は胸の内に改めて自戒した。

運動場に着くと、光秋は簡単な準備体操で体をほぐし、突く、蹴る、受けるなどの基本動作の確認を軽くやってから曾我と向かい合う。

「時間無制限、攻撃は寸止め、念力の場合は出力低めで。それ以外はほぼ実戦形式で。審判は僕が行います」

「了解。お手柔らかにっ」

「それはこつちのセリフですよ……」

挑発的に微笑む曾我に皮肉に返すと、光秋は左半身を前にして構える。

曾我の方も表情から準備が整ったと察すると、早速号令をかける。

「始めっ!」

叫ぶと同時に、光秋は両腕で胴部を庇いながら後ろに下がり、曾我の様子を観察する。

—相手の目を見る。相手の目——をつ！—

転属前の訓練で藤原三佐に言われたことを意識していると、不意に曾我の目が自分の頭を捉え、同時に向けられた指鉄砲に反射的に腰を落とす。

「……」

直後に頭頂に感じた強い風に、思わず背筋が震える。

もつともその間にも、体は特に意識することなくさらに後退を続ける。

「流石、回避率が高いですね。でも、逃げていてはワタシを倒せませんよっ！」

「っ……」

凶星を突きなが曾我はさらに念の弾を撃ち続け、それらを視線と指先の向きを読んで回避、いくつかを左腕の前に出して殴られるくらいの痛み能耐えながら受け流しつつ、曾我の言葉を受けた光秋は思う。

—確かに、ここまじや何もできずにやられてしまう。近付かないことには僕には手が出せない……ならっ—

刹那的に断じるや、正面に曾我を捉え、床を蹴って一気に間合いを詰める。

曾我はさつきよりも威力を上げた指鉄砲を放つものの、光秋は腰を深く沈めてそれを頭上にやり過ごし、そのまま左足を大きく踏み出して肉薄、

「あさあ！」

気合と共に腰に引いていた右拳を鳩尾目掛けて放つ。

しかし、

「!?——ッ!」

寸止めの距離に入る直前、拳は念力に捕まってその場に押し止められ、がら空きになった額に念の弾が撃ち込まれる。

「……………曾我さんの勝ち、ですね…………」

撃ち込まれた拍子にその場に尻餅を着き、ほどほどの痛みが引いて顔を上げた光秋は、正面に佇む曾我を見ながら、審判しての義務感の声で告げる。

「ホント、攻める時は思いつ切り攻めるんだから。大胆というか、なんとというか…………」

「それでも、結局一本とられちゃいましたからね。踏み込みには自信あったんだけど…………」

呆れ顔で呟く曾我に応じながら立ち上がると、光秋は今の手合わせを思い返してみる。

——目を読んでの回避、久しぶりだけどそこそこできたな。もつとも、問題は攻め……やっぱり、曾我さんくらいのサイコキノ相手には、僕くらいの腕が多少鍛えたところで正攻法寄りのやり方じゃ敵わんか……………となるとやっぱり、相手の意表を突く……裏をかくような戦い方を心がけるべきか。フェイントの多用とか……………——

ひと通りの反省を終えたところで再び手合わせを行い、終わったらまたすぐに反省に入り、それがあと10回程繰り返された。

午前11時15分。

曾我の念力を腹に受けた末に10回目の手合わせを終えた光秋は、運動場の隅に腰を下ろして上がった息を整えると、入り口の上の時計を確認する。

「ちよつと体を動かすつもりが、随分経ちまったな……なにより……」

息が整い、腹を筆頭とした各部の痛みが引いてくると、それまで高揚感で抑えられていた空腹感が広がってくる。

「昼休みまであと45分……なんとか保たせねば——」

思うや少し重く感じる体を立ち上がらせ、傍らに佇む曾我を見る。

「今回はこの辺にしておきます。ありがとござ——痛ててえ……」

礼を言いながら一礼した拍子に、手合わせ中に念力を避け損ねた右脇腹の痛みがぶり返してくる。

「大丈夫ですか？他にも何か所か当たってたけど」

「これくらいなんでも。むしろ久しぶりの苦痛に懐かしくなるくらいですよ」

曾我は心配そうに訊ねるものの、光秋としてはその独特の痛みに転属前の藤原との訓練風景を思い出せて、全く平気とまではいかないがいくらか得したような気分になる。

「苦痛が……ですか……」

「言つときまずけど、被虐趣味とかそういうのじゃないですからね。なにかがきっかけで連鎖的にある思い出が浮かんでくることがあるでしょう。それですよ」

一言を強調し、心なしか白い目を向けてくる曾我に、光秋は相手の目をしっかりと見て説明する。

「まあ、とにかくありがとうございます。一度待機室に戻ります。曾我さんは？」

「……ワタシも一旦戻ろうかな」

言うとな人は運動場を出て、来た道に戻っていく。

その道中、曾我がひと休みしていた自動販売機の近くに差し掛かる。

「……運動した後だし、水分摂つていた方がいいかな。曾我さん、なにか飲みますか？ 相手してくれたお礼に」

言いながら、自動販売機に歩み寄った光秋は財布を出して示す。

「それじゃあ……これで」

「はい。じゃあ僕は……」

紙幣を入れると曾我は冷たいレモンティーを指さし、光秋も同じ物を購入して歩みを

再開する。

「加藤主任はこの後、どうされるんです?」

「とりあえず、昼休みまでは昨日の事件の反省会かな。主に特エス運用に関して」
歩きながら訊いてくる曾我に、光秋は運動場へ向かう前のことを思い出しながら答える。

「いかにも特務部隊主任の仕事ですね。どうです? 旧入間隊メンバーの使い心地は」

「使い心地って……まあ、言い方はアレだけど、3人ともやつぱり大したものですよ。柏崎さんの念力は強力だから、攻めてよし、守ってよしって感じだし、柿崎さんの瞬間移動は00との連携で武器の交換や給弾に大いに役立ってくれる。北大路さんのサイコメトリーだって、あれを用いた素早い情報収集があつたからこそ、昨日の事件を早期解決できたと思っています………本当、僕なんかの手に余る子たちですよ……」

昨日の一件、そして工場地帯での戦闘を振り返りながら、光秋は微かに身を竦ませる。もつとも、それも数瞬の間のことだったが。

「もちろん、3人ともに長所があるように、短所もある。実際昨日も、何度か窮地に立たされましたからね。そうした場面を振り返って、次に似たような状況に陥った時の対抗策を練る、もしくは陥らないようにするにはどうしたらいいか考える、というのが今回のテーマですが」

そう付け加える間も歩を進め、少しして待機室のある棟に着いて曾我と別れると、光秋は机の上に入間から貰ったノートと自分用のノートを広げる。

—曾我さんに言ったように、3人は性能——『^{たい}体』自体は高い水準なんだ。あとは、僕が『^ぎ技』を整えてやれば——

空きっ腹を抱えながらそう思うと、昼休みまでの残り時間をノートに筆を走らせて過ごした。

午後6時半。

午後一杯を反省会に費やし、食堂で夕食を済ませた光秋は、そのまま帰路につこうとしていた。

—今日の反省、近い内に桜さんたちに伝ええないとなあ……帰ったら電話してみるか？

思いながら正門をくぐると、ポケットの中の携帯電話が振動する。画面を覗くと、徳川からだ。

「はい？」

（あ、加藤。今いいか？）

「はい。なんですか？」

応じながら、堀に寄り添って足を止める。

（いやあ、小田先輩からお前のこと頼まれてたわけだけど、東京に来てからろくに話す機会なかっただろう。だから週末、一緒に飲みに行かないかと思って）

「飲み会ですか？」

（そう。渋谷にいい店があるんだよ）

「渋谷……」

告げられた地名に、光秋は興味と若干の不安を覚える。

「面白そうですね。土曜日でいいですか？」

それでも興味の方が圧倒的に勝って、詳しい話を始める。

（ああ。6時にその店に集合な。『ロブスター』って名前だ）

「ロブスター……なんか、高級そうな名前ですね」

教えられた店名に、大きなエビを想像しながら感じたことを呟く。

「あー、ただ、僕渋谷はあまり詳しくなくて……何処かで合流して、案内していただいけませんか？」

（それなら、渋谷駅の改札出て、その場で待っていてくれ。俺が迎えに行く）

「お願いします……あつ」

電話越しに頭を下げたその時、不意に桜、堇、北大路、そして藤岡と曾我の顔が浮かぶ。

「それと、僕の知り合いも誘っていいですか？」

（誰だよ？）

「部下の特エスの子たち、それと本部の知り合いです。せつかくの機会だから、親睦を深めようかと思って。あと、普段なにかとお世話になってますし……ダメ、ですか？」

（いや、別にいいぞ。実を言うと、俺も知り合いと一緒に行こうと思つてたからさ）

「ありがとうございます。じゃあ、知り合いたちにはあとで連絡しておきます。土曜の6時、渋谷駅の改札口で待つていればいいんですね？」

（ああ。当日はよろしくな）

「こちらこそ、よろしく願います。それでは」

一礼すると、電話を切つてポケットに戻し、寮への歩みを再開する。

——面白いことになったなあつ。とりあえず、3人には反省報告の件と合わせて帰つたら連絡しとこ。曾我さんたちは明日来た時に直接訊いてみるか………明日かあ……

嬉々としてそこまで考えたところで、ふと昼間来た電話の件を思い出す。

——そういうば、聞き取りも明日だったよなあ………どんなこと訊かれるんだろう？——

こちらは興味よりも不安が上回りながら、駅の改札機をくぐった。

3月10日木曜日。

出勤以降、昨日の反省会程ではないが桜たちの運用について思考を巡らせていた光秋は、ノートに筆を走らせていた手を一旦止め、腕時計を確認する。時計の針は間もなく10時を指そうとしていた。

—確か、昨日電話してきた弁護士の人、そろそろだよな……—
そう思っていると机の上の電話が鳴り、すぐに受話器を取る。

「はい、加藤隊待機室」

（受付の佐々木と申します。弁護士の坂田様が加藤主任に会いたいと）

「わかりました。本舎に行けばよろしいので？」

（はい。坂田様は2階の応接室にご案内するので、主任はそちらに向かってください）
「わかりました」

応じると受話器を置き、席を立てて部屋を出る。

—本舎2階の応接室……初めて行くな。迷わないといけど—
道のりに若干の不安を覚えながら、受付嬢に言われた場所へ速足で向かう。

少しして部屋の前に着くと、表示を確認し、ネクタイを締め直す。

「さてっ」

小声で呟くとドアをノックし、

「失礼します」

と言いながら中へ入る。

8畳程の部屋の中央にテーブルを挟んで向かい合うように置かれた椅子、その片方に座っている30代前後のメガネを掛けた男性が腰を上げ、軽い笑顔を浮かべて訊ねてくる。

「加藤主任でしょうか？」

「はい。お待たせしてすみません」

頭を下げながら言うと、光秋は男性の向かいの椅子に歩み寄る。

「いいえ。こちらこそお手間をとらせてすみません。改めまして、弁護士坂田と申します」

「あ、これは」丁寧……」

言いながら男性——坂田はスーツの内ポケットから出した名刺を差し出し、光秋はその小さな紙を両手で几帳面に受け取る。

——名刺、か……—

なし崩しに社会人になって1年近く経つが、それまで自己紹介など口頭か身分証の提示で行っていた身には、自分のことを簡潔に説明した紙をもらうことがとても新鮮に感じられた。

「それでは早速なのですが、被告人を拘束した時のことについて詳しく聞かせていただけますか」

「……ああ、はいっ」

感慨にふけっている間に坂田は椅子に座り直してメモの準備を整え、声をかけられた光秋は慌てて名刺をポケットに仕舞って傍らの椅子に座る。

そしてしばらくの間、坂田の根掘り葉掘りな質問に答えていった。

坂田の質疑を終えた光秋は、その足で食堂へ向かい、昼休みが明けてからは再び特工ス運用方法の思案を行う。

間に休憩を兼ねた軽い突きの練習を挟みながらノートと向かい合うことしばらく。午後4時40分を回ろうとするところで、待機室のドアがノックされる。

「……どうぶつ……」

そろそろまた休憩に入ろうかと思っていた時の来客に応じると、それまで屈めていた

背中を背もたれに預け、両腕を一杯に挙げて体を伸ばす。

そして入ってきたのは、東京に来て以降すっかり見慣れた3人——董、桜、北大路だった。

「おお。どうした?」

通っている私立校の制服に薄手のコートを羽織った3人を認めるや、光秋は挙げていた両腕を下ろしながら訊ねる。

「いえ、大したことじゃないんですけど……その、昨日はお誘いありがとうございました」

それに対して、3人を代表する様に董が頭を下げる。

「ああ、いいんだよ。君たちにはこっちに来てから世話になってるし、こういうのは大勢の方がいいだろうからな。そうだ、ついでに確認するけど、土曜日の10時に運動場に集合してこの前の事件の反省を報告、そのままそれに沿った訓練をして、4時に一旦解散。5時に君たちの寮の前に集合して渋谷へ向かう……そう報告したよな?」

「はい」

「心配しすぎ……」

店に行く件を受けて、昨日董を通して3人に連絡したことを再度告げる光秋に、董は頷き、桜は苦笑いを浮かべる。

「用心に越したことはないよ。僕はうつかり癖があるようだから……………あれ？」

それに応じようとしたその時、光秋は違和感を覚える。

—何だろう？　なんか忘れてるような……………—

「あ、ところで、藤岡主任と曽我さんはなんて？」

「——！！」

直後にかけられた桜の問いに、光秋は軽い衝撃を感じる。

「そうだったつ。言ってるそばから……………電話は…………」

違和感の正体に気付くや、すぐに内線の受話器を取って番号を押す。

「ありがと桜さん。やっちまうところだった」

呼び出し音が鳴っている間に礼を告げ、そのすぐ後に藤岡が出る。

（藤岡隊待機室）

「加藤です。今よろしいですか？」

（何だ？）

「ちよつと話したいことがあつて、今からお邪魔してもよろしいでしょうか？」

（緊急の要件か？）

「いえ、そこまでではないんですが……………できれば今の内に伝えておきたい…………」

（…………まあ、特に急ぎの用もないから構わないが？）

「では、今から伺わせていただきます。失礼します」

言うや光秋は受話器を置き、跳ねる様に椅子から腰を上げて部屋を出ていく。桜たちもそれに続く。

速足で進む光秋の左隣に着くと、桜はなんとなしに訊いてくる。

「別にあのまま電話で訊けばいいんじゃない？」

「いや、もともと直接訊くつもりだったし。桜さんたちの方は時間が遅かったし、訓練の話もしたかったから電話だったけど。それより、改めてありがとう。聞き取りの件に意識が向き過ぎて忘れてたんだなあ」

応じつつ、光秋は失敗の原因を自己分析してみる。

「聞き取りってなんですか？」

「ああ、言ってなかったっけ？この前の工場地帯での戦闘、あの時ZCのメンバーを尋問しただろう。ほら、北大路さんと一旦ニコイチを離れた時」

「あ、はい」

右隣に着いた董の問いに、光秋は少女たちと歩く速さを調整しながら応じる。

「あの時のメンバーの裁判がもうすぐ始まるっていうんで、その時の様子を訊きに来た弁護士の人と話したんだよ。そのことに頭が向き過ぎて、曾我さんへの報告忘れちゃったんだって」

「弁護士さんと……なにを話したんです？」

「殆ど報告書に書いたことの確認だよ。こつちの尋問に素直に応じて、そうして得られた情報が抗争鎮圧に多少なりとも貢献したって。あ、実際に裁判が始まったら、もしかしたら証人として出てもらうかもしれないって言われたな。その際は事前に連絡するって」

「大変そうだなあ……」

聞き取りの終盤のやり取りを思い出しながら答える光秋に、横で聞いていた桜は両手を頭の後ろに組んで心底面倒くさそうに呟く。

「まあね。でもそういうルールだから」

「……メガボデイに乗って重火器を乱射して、街を滅茶苦茶にするとこまでやったんでしよう？ どう考えても有罪確定なんだから、わざわざ裁判なんてする必要ないと思いますけど？」

それに対する光秋の返答に、桜の斜め後ろを行く北大路がやや苛ついた顔で呟く。

「ま、大多数の人はそう思うかな。実際、僕だつていくらかは有罪確定だろうと思ってるし」

自分の内心を振り返りながら、光秋は北大路に視線を向けて告げる。

「でもまあ、被告人はあの時情報提供してくれた人で、協力の見返りに減刑を求めてたわ

けだからね。提供された側としては、できる限りのことはやらなきゃいけないさ。それを差し引いても、やっぱりこういう最低限の手続きってやつは必要だと思うよ。歯止めというか……僕たちは有罪確定だろうと思っけても、見方を変えれば違うものが見えてくるかもしれないし……無論、裁判がそういう方向に進むかどうかは、やってみたいとわからないんだが………」

「……………」

最後の方は頭を掻きながら話すと、北大路は不機嫌そうな顔を明後日の方へ向けた。その間に藤岡隊の待機室の前に着くと、光秋はドアをノックする。

「どうぞ」

「失礼します」

ドアの向こうから藤岡の声が応じると中へ入り、少女たちも続く。

室内には机の椅子に腰を下ろした藤岡と、その傍らにパイプイスを出して座っている曾我がいる。

「あ、曾我さんもいらしたんですね。よかった」

「訓練がひと段落したので、一度戻るかと思つて。よかったつて？」

「これから話します」

曾我に応じながら机のそばまで歩み寄ると、光秋は藤岡と曾我を見ながら告げる。

「突然お邪魔してすみません。実は今週の土曜日、知り合いに食事に誘われまして。せっかくなのでお二人もどうかと思ひまして」

要件を述べると、2人はそれぞれ考える顔を浮かべる。

「土曜か……何処でだ？」

「渋谷です。店の具体的な位置は知り合いの紹介なので知りません。駅で合流して案内してもらおうことになっています」

藤岡の質問に、光秋は徳川との会話を思い出しながら答える。

「渋谷か……その日は本郷と飲む約束が入っていてな。ハシゴするにも距離的に難しいだろうし、俺は遠慮させてもらおう」

「わかりました。曽我さんは？」

「ワタシは大丈夫ですよ。せっかくだし、参加させていただきます」

「ありがとうございます。それを確認したかったもので。失礼します」

言いながら2人に一礼すると、光秋は少女たちと共に部屋から出ていく。

――曽我さんには後で詳しい時間とかメールしておかないとな――

また忘れてしまわないように、その件はしっかりと記憶に刻んだ。

3月11日土曜日午前10時。

先日の連絡に従って、加藤隊の4人は東京本部の運動場に集合していた。

約2カ月の間にいくらか肌に馴染んだ背広を身に着け、左手にこれまでの考察を書いたメモを持った光秋は、正面に並んで立つESOの制服に身を包んだ桜、董、北大路を見やる。

「えー、せっかくの休みだというのに本部に来てもらったこと、まずは感謝します。先日も連絡したように、今日はこの前の事件の反省報告と、そこから導かれた改善案の訓練をしていきます。各自、よろしくお願いします」

「よろしくお願いしますっ！」

「……よろしく」

「……………」

集合の概要説明の後に頭を下げると、董は返礼しながら元気な声で、桜はちよこんと頷いてぼそつと応じ、北大路は仏頂面で無言を返す。

「えーではまず、先日の事件、特に犯人と、現場に乱入してきたZCへの対応に関する反省ですが……」

言いながら、光秋は左手のメモを読み上げる。

定期的に休憩を挟みつつ、メモに書いた反省点の改善を試みる訓練を続けて間もなく6時間になろうという頃。

運動場の壁際で手元の腕時計が3時50分を過ぎたのを確認した光秋は、低威力の念力攻撃を連射する桜と、それをテレポートでかわし続ける董によく通る声で呼びかける。

「はい、そこまでっ」

呼びかけると桜と董はそれぞれ攻撃と回避をやめ、息を上げてこちらに歩み寄ってくる。

「おつかれさま」

「サンキュー」

「ありがとう、菊」

傍らに控えていた北大路がタオルを、次いでスポーツドリンクのペットボトルを差し出すと、2人は薄っすら浮かんだ汗を拭き、手頃な温度になったスポーツドリンクに口を付ける。

少しして2人の様子が落ち着くのを見計らって、光秋は腕時計を確認しながら告げる。

「もうすぐ4時だ。予定通りそろそろ切り上げようと思う」

「……思っただけどき、5時に出発するのに、わざわざ1時間も前にやめる必要あるの？・今更かもだけどき」

「本当今更だな……みんな汗もかいたし、まさか制服で行くわけにもいかないだろう。シャワー浴びて身支度整えればちょうどいい時間だよ。移動はちゃんと徒歩でな。車に気を付けるように」

「はい」

桜に応じ、そのまま事前に連絡したことを確認する光秋に、董が頷く。

「じゃあ、各自軽いストレッチをして一旦解散」

「はいっ」

「……」

光秋の指示に桜と董が応じ、北大路が無言で頷くと、4人は体をほぐして運動場を後にする。

「そういえば董さん、何発か当たってたようだけど、大丈夫か？」

「はい。そんなに強いわけじゃなかったし。心配してくれてありがとうございます！」

訓練時の様子を思い出して移動しながら訊ねる光秋に、董は嬉しそうに答える。

と、それを見ていた桜が膨れっ面で言ってくる。

「ちよつとー！それじゃアタシが悪モノみたいじゃん。アタシは光秋がやれつて言うからやったんだよ？それこそ董がケガしないように、力加減に注意してさ」

「悪い悪い。そういう意味で言つたわけじゃないんだがな。ただ、テレポートの連続使用、その精度を上げるには、実際に攻撃してもらうのが手っ取り早いわけで、相手役は桜さんが適任だったんだよ。桜さんの方も、念壁の特訓ご苦労だったな」

「あー、あれねえ……」

光秋の労いに、その時のことを思い出した桜は表情を曇らせる。

先日の事件でZCと交戦した際に見せた、ただ弾き返すのではない、向かつてきた弾の勢いを殺^そいで地面に落としていく独特の念壁——光秋曰く、「クツション式念壁」。その活用による市街戦における周囲への被害軽減を考えた光秋は、今日の訓練にもそれを織り込んでいたのだが、その方法は拳銃で撃つたゴム弾をクツション式念壁で止めるという、レベル9のサイキノにとっても少々危なっかしいものだった。実際、体への直撃こそなかったものの、止め損ねた弾が桜のすぐ脇を過ぎていくことが1回あったのだ。

「……いや、僕もこの方法はどうかとは思つたんだよ。ゴム弾とはいえ、当たったら痛いじゃ済まないこともあるし、打ち所が悪ければケガだつてするわけだし……ただ、そこそ明日にでもまた出動するかもしれないし、そうになると、どうしても即効性を期待し

てしまうというか……………」

「言い訳、みつともないですよ」

「御尤も……」

言つていく中で薄々感じていたことを単刀直入に口に出してくる北大路に、光秋は首肯を返すしかなかった。

そうしている間に一行は外に出ると、一度立ち止まって互いに顔を見合わせる。

「じゃあ、僕はちよつと待機室行つてくるから。後で君らの寮の前でな」

「はい」

少女たちを代表した董の返事を聞くと、光秋は3人と別れて待機室へ向かい、部屋に入ると持っていたメモを机の引き出しに仕舞つて、その近くに置いていたカバンとコートを持って部屋を出る。

「……………僕も浴びてくるか。董さんたち程じゃないが汗もかいたし、どっち道着替えないと——」

自身の状態を観察しながら建屋を出ると、速足で駅へ向かった。

電車を降りるや速足で改札口をくぐると、一目散に寮へ向かう。

部屋に着くやシャワーを浴びて汗を流し、体を拭いて居間へ向かうと、訓練に向かう前に用意しておいた黒いチェックのワイシャツとベージュ色のズボンに着替える。

—45分……ちよつとギリギリかな？—

腕時計を確認して予想より余裕がないことに内心焦りながら茶色のコートを羽織り、最低限の戸締りと手荷物の確認をして再び電車に乗り込む。

—これなら、着替え持参して宿舎のシャワーでも使えばよかったかな？脱いだ方は待機室に置いて週明けに持つて………もつとも、当直でもないのにシャワー室使うのつて、なんか抵抗あるんだよなあ………—

吊り革を掴んで窓の景色を眺めながら、今回の手際を反省してみる。

しばらくして電車が停まると、ホームを速足で進み、改札口をくぐるや桜たちの寮へ向かつて周囲にぶつからないよう注意しつつ駆け出す。

——………あっちゃあ………—

しばらく走って寮の門が見えてくると、その前に集まった桜、董、北大路、そして曾我の姿に遅刻してしまったことへの気まずさを抱きながら、せめてもとさらに速度を上げ、すっかり息を上げて4人の許へたどり着く。

「すつ、すみませんっ！遅くなつて………！」

胸回りを苦しくさせながら詫びると、曾我が返してくる。

「ちよつとー？時間を指定した側が遅れてくるってどうなの？」

「つ……すみません。思ったより移動に時間かかっちゃって」

「まーた言い訳してる」

「はい……………」

息を整えて弁明してみたものの、北大路が返してきた一言に、再びぐうの音も出なくなる。

「まあいいわ。待たされた分はワンちゃんの奢りで返してもらうから。行きましょう」

「はい」

言うや曾我は駅に向かって歩き出し、桜と北大路も応じながらそれについていく。

「え……………」

「ちよつとーみんなー！」

それに対して光秋は茫然としながら、董は目を三角にしながら後に続く。

「……………」

もつとも歩き出して数秒後には、光秋は違うことを感じていた。

「……………光秋さん？どうかしましたか？」

その様子を感じとったのか、隣を歩く董が訊いてくる。

「ん？ああいや……………曾我さんに『ワンちゃん』って言われたの、久しぶりな気がしてさ

.....
└

105 ロブスター

最寄り駅から電車に乗り込むと、少女たち3人を席に座らせた光秋は曾我と並んでその正面の吊り革を掴む。

電車が走り出すと、すっかり暗くなった中によく映える街の明かりが窓の中を流れていく。

「確か、渋谷駅で知り合いと合流するのよね？」

「はい。その予定です」

曾我の確認に応じると、光秋はぼんやりと夜景に見入る。

「……………夜景、好きなんですか？」

その様子を見て、董がやや遠慮がちに訊いてくる。

「え？……………ああいや、そういうわけでもないんだが……………ただ、この間からバタバタしてたからさ。こうしてのんびり景色を眺めてたら、なんか感慨深くなっちゃって」

答えながら、光秋は夜の闇に浮かぶ明かり、それも民家や集合住宅の窓から漏れるその1つ1つに目を凝らしてみる。もちろん電車に乗って移動しているために、精度はお世辞にもいいとはいえないが、それでも可能な限り視界に収める。

——あの明かりの一つ一つに、——それが当人にとって良いものか悪いものかともかく——人の暮らしがあるんだよね……………そしてそれは——あの明かりの“元”は、事件させ揃えば呆気なく消えてしまう……………——

そう思いながら脳裏を過るのは、先日関わった催眠能力者通り魔事件の被害者たち、そして犯人の人質にとられた母子の顔、そしてZCの攻撃と、その余波に晒される街並みだった。

「光秋さんっ?」

「ん?」

そんな中、電車の駆動音や周囲の雑談を押し退けるようにやや強くかけられた董の声が、光秋を目の前の現実と呼び戻す。よく見れば並んで座っている桜と北大路も、程度の差はあれど心配そうな目をこちらに向けている。

「なんか顔色悪そうだったけど、具合悪い?」

「え?……………ああ、大丈夫大丈夫。その……………ちよつと夜景に見惚れてた」

先程の考え事が顔に出ていたらしい。桜の問いに、光秋は右手を振りながら答える。その時、コートの合間から覗いた董の上着が目につく。

「董さん、その上着……………」

「あ、これですか?」

指さしながら呟くと、董は頬を緩める。

「この間デパートで買ったやつ……だよな？」

「はいっ。あの時選んでもらった！」

「やっぱり」

研修を行っていた時期、涼や他の少女たちと共に行った買い物の記憶を引つ張り出しながら確認する光秋に、董は嬉しそうに頷く。

「もう着始めたのか。寒くないか？」

「はい。少しずつ暖かくなってきたし、コートも着てるし………せっかく光秋さんが選んでくれたんだから、早く着たいし」

——………僕が………何………？——

最後の方は下を向いてぼそぼそと言われた董の言葉を、光秋は聞き取ることができなかった。

「チエッ。董ばかり………」

——そして、桜さんは何で不機嫌になるんだ………？——

同時に、一連のやり取りを聞いたらしい桜が膨れる理由もわからなかった。

「……………痛てっ!？」

「主任としての勉強も大事かもしれないけど、女心ももう少し勉強しなさいよっ」

「……………」

加えて、曾我に耳を引つ張られた理由も理解の埒外だった。

電車が渋谷駅に到着すると、光秋一行も人混みに混じってホームへと降りる。

「みんな、大丈夫か？近くにいますか？」

「大丈夫。ちゃんと5人いるわよ」

「心配し過ぎだって」

曾我と桜が若干呆れながら言ってくるが、気を抜けばあつという間に他の人々の陰に紛れてしまいそうな周囲に、光秋の危惧は尽きない。

それでもどうにか5人そろって改札をくぐると、事前の連絡に従ってその傍らに並んで徳川が来るのを待つ。

そして、

「……………遅いな」

連絡では6時の待ち合わせだったが、腕時計はすでに6時15分を指している。が、人混みの中から徳川が現れる気配は一向にない。

10分以上の遅刻にイラ立つと同時に、徳川の身に何かあったか？待ち合わせ場所を

間違えたか？と不安も湧いてくる。

そんな時、聞き覚えのある声が耳に届く。

「あ、加藤お！」

「！徳川さん……」

自分の名を呼びながら人混みを掻き分けて速足でやってくる徳川を見て、光秋は安堵の声で応じる。

そしてよく見れば、その隣にはもう1人が徳川に手を引かれていた。

「悪い、待たせたな。電車がちよつと遅れちまつて」

「ああいえ……そちら、話にあったお連れの方ですか？」

詫びる徳川に、自身桜たちを待たせてしまった手前あまり責める気にならない光秋は、話題を変えたいこともあつて気になっていたことを訊く。

言いながら改めて見ると、連れはフードを被つていて顔がよく見えなかった。

「ああ。俺の知り合いで、今ちよつと面倒看てる……」

「リオカ……です。はじめまして……」

言いながら連れ——リオカは光秋たちに顔を向け、どこかぎこちない語調で自己紹介する。

「……加藤光秋と申します。こちらはESOでお世話になっている曽我ガイアさん。赤

毛の子が桜さんで、メガネが董さん、癖毛の子が北大路さんです」

こちらでも自分を含めた一行の紹介をしながら、光秋はやつと見えるようになったリオカの顔を観察する。

フードの下に収まる顔は線が細く、肌は白い方だった。第一声の語調と合わさって、西洋人という印象を抱かせてくる。そして光秋が最も注目したのは、フードの左右の合間から垂れた赤——というよりもピンク色の長い髪だった。

—フードを被ったピンク髪……………何だろう？どつかで見た気がするんだよね。それもそんな昔じゃない、東京に来てから……………何処だったかなあ……………？—

妙な既視感の正体を探ろうと記憶を辿るものの、連日の慌ただしさでそれもあり曖昧になっており、どうにもすつきりしない感覚が胸の中に溜まっていく。

「あの……………光秋さん……………？」

「ーあ、ああ……………」

心配そうな声をかけながら董に袖を引っ張られて一旦考えるのを止めると、思い切って訊いてみる。

「えつと……………リオカさん？」

「はい？」

「その……………前にどこかでお会いしたことありませんか？ここ1、2カ月の間に——っ!？」

言つてすぐ、桜に左の向う脛すねを蹴られる。多少加減はしていたようだが、それでもかなり痛い。

「会つてすぐにナンパなんてしてんじゃねえよ！この不良主任っ！」

「ナ、ナンパって……別にそういうんじゃない……」

蹴られた箇所をさすりながら目を三角にした桜に反論を試みるものの、痛みで上手く言葉を続けられない。

「さっ、早く行こう。腹減つてんだよ」

「お、おお………」

桜の気迫に圧されて徳川は歩き出し、他の面々もその先導についていく。

「ちよつ！待つて！」

やつと痛みが引き始めた光秋も慌ててそれに続き、一番後ろを歩いていた輩に追いつく。

「大丈夫ですか？」

「まあな。そこまで強くなかったけど、打ち所がなあ」

「その………光秋さんって、ああいう感じの人が好みなんですか？」

「だからナンパじゃないってのっ！」

知らないところで広がりつつある誤解を払拭しようと、光秋は強く否定した、

徳川先導の下に地下通路をしばらく進み、階段を上ると渋谷名物スクランブル交差点のそばに出る。

——こりやまた……………——

切れ目なく横断歩道を行き交う人の波に圧倒されたのも束の間、地下鉄出入口近くの細い道へ向かう徳川とその一行を追って、光秋も人々の往来の中を進んでいく。

「けっこう歩くんですか？その店って」

「ここからだ、徒歩10分ってとこかな」

はぐれないように注意しながらふと思ったことを訊ねる光秋に、先頭を行く徳川は後ろを一見して答える。

そうしながらも左右に途切れなく立ち並ぶ商店、そこから漏れる明かりが照らす道を入波を掻き分けるように進んでいくと、一行は一軒の店の前で止まる。左右の建物の間を埋めるように建つ、1階分の高さしかない、見た目の雰囲気も小ぢんまりとした店だ。

「ハハ」が……」

両腕のハサミを強調したエビの絵が描かれた入口上の看板、そこに書かれた「ロブスター」という打ち合わせの際に聞いた店名に、光秋は確認の目を徳川に向ける。

「そう。俺の一押しのお店だ。早速入ろうぜ」

応じると、徳川はいの一番に嬉々としてドアをくぐる。

「……」

新しい場所への期待と不安を半々に、光秋もドアベルの音色に迎えられながらドアをくぐり、他の面々もそれに続く。

全員入ったことを確認した上で改めて見回した店内は、左に4人掛けのテーブル席が2つと、右に丸椅子が10ほど並んだL字型のカンター席が設けられた、外観同様に小ぢんまりという印象を与えてくる。

と、ドアベルの音に気付いたのか、店の奥から頭に赤いバンダナを巻いてエプロンを掛けた長身の男性が現れる。

「おお、まこっちゃん。いらつしやい」

「どうも」

現れた男性と親しげに挨拶を交わしながらテーブル席の椅子に腰を下ろすと、徳川は他の一同に呼びかける。

「テキトーに座って。リオカはこっちに」

「……」

言われて光秋は徳川の向かいに座り、徳川の隣にはリオカが腰を下ろす。

曾我と北大路が光秋から見て後ろのテーブルに着く中、桜と董は光秋の隣の椅子をめぐってケンカを始めた。

「ちよつと桜！私の方が先っ！」

「いやっ、絶対アタシの方が先だった！先に背もたれにタッチした！」

「……ないやつてるんだ二人とも……向こうのテーブルがまだ空いてるだろう？」

その様子に呆れながら2人の間に入ると、光秋は後ろのテーブルを指さす。

「いや、だって……」

「どうせならそこが……光秋さんと同じテーブルで……」

「……ま、仕方ないなあ——」

言われて、桜と董は小声で何か言ってくるがよく聞き取れず、辛うじて伝わった「こちら側のテーブルがいい」という意思に、光秋は胸の内に溢しながら後ろのテーブルの椅子を1つ取って、自分たちが着いているテーブルの側面に置く。

「すみません。椅子1個動かさせてください」

そう男性に断りを入れると、改めて桜と董を見る。

「そんなにこつちのテーブルがいいなら、どっちかこつちに座れ」

「いや、その……光秋さん……」

「そういうことじゃなくて……」

「……？」

さつきとは立場が逆転したように呆れ顔を浮かべる董と桜に、光秋は首を傾げる。

「……………まあ、同じテーブルなら……………じゃあ、私が座ります」

言いながら、董が渋々納得した様子で側面の席に座り、桜も光秋の隣に座る。

「モテモテだな？」

「っ！」

「べ、別にそういうんじゃないっ！」

「……………？」

こちらに微笑みを向けながらの徳川の呟きに、董はなぜか顔を赤くし、桜はなぜか声を荒げて反論し、そんな2人の様子に頭を掻きながら光秋も席に着く。

「さてそれじゃあ、なににするか……」

「……………」

言いながらカウンターのの方を見る徳川の視線を追って、光秋も上に張られたメニュー表に目を凝らす。が、字が小さいせいで全く読めなかった。

「すまん。なんて書いてある？」

仕方なく、隣の桜に訊いてみる。

「えっと……………生ビール、日本酒、焼酎、赤ワイン、白ワイン、ウイスキー」

「酒ばかりか？」

「まあ、一応ここ飲み屋だからな」

2人のやり取りが聞こえたらしい。男性がカウンターの向こうから言ってくる。

「えっ？」

「なんだ？今まで気付かなかったのか？」

その説明に光秋は一瞬面食らい、徳川がメニューを見る片手間に訊いてくる。

「いや、確かに雰囲気のある店だとは思いましたけど……その、今更ながら大丈夫でしうか？子供も何人かいて……その、飲み物とか……？」

「あ、ソフトドリンクもありますよ」

真つ先に浮かんだ懸念を口にする、いつの間にかテーブルのそばまでやって来ていた女性の店員が教えてくれる。やや茶色がかった長い黒髪を後ろに結った、色白な肌の若い女性だ。

「雪さんも久しぶりだな。あ、俺は生で。あと唐揚げとシーザーサラダ」

女性の方にも親しげな様子を見せながら、徳川は挨拶と共に注文をする。

—そうとう行き慣れてるんだな、この店—

そんな徳川の様子に、光秋は行き付けの店を持っていることへのある種の憧れを抱く。

と、

「加藤は？」

「えっ？あー……」

考えごとをしている間に、自分以外の全員は注文を済ませてしまつたらしい。徳川の呼びかけに、光秋は判読できないことを知りつつ反射的にメニュー表に目を向ける。

「……じゃあ、ウーロン茶を」

「かしこまりました」

注文に応じると、女性はいんターの奥へ向かう。

ひとまずやることを済ませると、光秋は改めて店内を見回してみる。

「……………なんか、いい店ですね。小ぢんまりしてて落ち着くつていうか。店員さんたちとも親しそうですけど、長いんですか？」

「ああ。俺が警察官になつてしばらくしてからときどき通つてるな。店主の子規しきさんが気さくでさ」

「シキさん、ですか……」

徳川から教えてもらった名前を呟きながら、光秋は頼んだものを盆に載せて持つてきた男性——子規を見やる。

「ほい、全員の飲み物と、シーザーサラダ、あとこつちはポテトサラダね」

言いながら子規は光秋たちのテーブルにシーザーサラダを、曾我と北大路のテーブルにポテトサラダを取り皿と合わせて置き、各々の飲み物を配っていく。

それがひと段落すると、改めて来客全員を見回し、徳川に告げる。

「にしても、また大所帯で来たな。全員まこっちゃんの知り合い？」

「ああ、紹介します。俺の高校の先輩が今ESOに勤めてるんですけど、その人の同僚で、今京都から東京に来てる加藤です」

「！加藤ですつ」

徳川の紹介に、光秋は反射的に頭を下げる。

「加藤、なに君？」

「ああ、光秋といいます。『光』^{ひかり}に季節の『秋』^{あき}と書いて光秋^{こうしゅう}」

「『光』に『秋』、ねえ……」

言いながら、子規はあごを撫でてしばし考える。

「じゃあ、『アキくん』って——」

「すみません。その呼び方はやめてください」

ややあつて口を開いた子規が言いかけた矢先、光秋は反射的に強い意志を込めた声でそれを遮る。

「「……………」」

その直後、店内に張り詰めた雰囲気が漂う。

「……………あー……………そのお……………」

「ごめん。その呼ばれ方嫌だった?」

図らずとも場の雰囲気を悪くしてしまった気まずさに、光秋は何か言おうと口を動かすものの、その前に子規が頭を下げてきた。

「いえ、嫌いというわけじゃないんです。ただ……………その呼び方は、僕にとって特別だから……………」

それにますます気まずさを感じながら応じる光秋の脳裏には、綾の顔が浮かんでいた。

その様子を見て、子規の方はなにかを察したように口角を上げる。

「なるほど。それはすまなかった……………じゃあ、『コウくん』と呼ばせてもらおう。俺は海老原^{えびはらしき}子規。ご覧の通りここの店主だ。よろしくな」

「よろしくお願ひします」

宣言と共に自己紹介してくる子規に、光秋も頭を下げて応じる。

「ESOに勤めてるっていつてたけど、この女の子たちも?」

「ああ、すみません」

少女たちを見回しながら訊いてくる子規に、光秋は席を立つ。

「こちらが曾我さん。その隣が北大路さんで、こっちが桜さん、そこに座ってるのが董さんです」

言いながら、1人1人を指さして紹介していく。

「全員、一応ESOの関係者なんですが……」

「ああ、外には言えない話ね。了解」

「すみません……」

特エスと言えば機密に接触する恐れがあるためそれ以上のことは言えず、さりとして上手い誤魔化しを思い付くこともできず困っていたところに差し出された子規の助け船に、光秋は再び頭を下げる。

「いいんだよ。こういう商売していると、大きい声で言えないことの一つ二つ抱えてる客なんてしょっちゅうだから。それより折角来たんだから、たくさん食べていって！」

「！ありがとうございますっ」

笑顔でそう告げられて、光秋は再三頭を下げる。

「他のみなさんも、今日は楽しんでいってくださいっ！」

「じゃあ、まず乾杯しようか」

そう言い残して子規がカウンターの奥に戻ると、徳川が自分のグラスを持ちながら言い、他の面々もそれに倣う。

「じゃあ加藤、乾杯前の一言よろしく」

「えっ？僕がですか……？」

「さつきから頭下げてばかりだからねえ。せめて場の雰囲気くらい上げてもらわないと」

「曾我さん……」

徳川から突然の大役を振られたところに、曾我からも薄々気にしていたことをネタにされ、光秋は困惑しながらも立ち上がって一同を見渡す。

「えー、このたびはお集りいただきありがとうございます。最近忙しいこの頃、このような場を設けていただいた徳川さんに、まずは感謝を捧げたいと思います。ありがとうございます」

そこで一旦言葉を区切り、徳川に一礼する。

「えー……今この場には、ESOの関係者と警察官がいるわけですが、昨今の情勢を鑑み^{かんが}て、今という時は我々にとって非常に厳しい時であると認識しています。そんな中でのこうしたひと時、今夜は思いつ切り楽しみたいと思います。グラスを」

言うと同時に自分のグラスを持つと、一同もそれに続く。

「今夜はよく食べ、そして楽しみましょう。乾杯ッ！」

「乾杯ッ!!」

告げるや、光秋は徳川たちとグラスを鳴らす。

「ワンちゃんツ、こつちも」

「あ、はい」

呼ばれて曾我ともグラスを鳴らし、一口飲もうとした時、こちらに向かつて無言でグラスを突き出す北大路が目に入る。

「……………これは、やれつてことなのか……………?」

その意図を図りかねながらも、恐る恐るグラスを近付ける。

「北大路さん、乾杯」

「……………どうも」

念のため声をかけてグラスを鳴らすと、ぼそつと返した北大路は中のオレンジジュースを飲む。

「……………まあ、いっか」

どこか不機嫌そうな、あるいは照れくさそうな北大路の態度が多少気になりながらも、それ以上なにかしてくる気配もなかったのでこの件を一旦隅に置き、光秋もウーロン茶に口を付ける。

それを見届けると、徳川が手を鳴らし、それに倣って一同も拍手をする。

「さあ!・どんどん食べてくれっ!」

「肉はまだー？これでも腹ペコなんだよー！」

「野菜もちよつと食つときな」

徳川の音頭に桜はサラダしか来ていないテーブルに不満を浮かべ、光秋はその手元に小皿によそつたシーザーサラダを置く。

董にも用意すると、後ろの北大路を見る。

「北大路さんは？葉っぱ食べるか？」

「……ポテトサラダがあるので……その、少しだけ……」

問い掛けに小声で応じながら、北大路はポテトサラダの盛られた小皿を差し出し、光秋はそれに少量の葉物野菜を載せて返す。

「大変ねえ、ワンちゃんも。あ、ワタシにもちよつとちようだい」

「はい」

応じながら、光秋は曾我の皿にも葉を載せる。

と、桜が不満そうな顔で言ってくる。

「ていうかさー、何で光秋こっちのテーブルに座つちやつたの？」

「……どういふことだ？」

「だからさ、まだ誰も座つてない時に、あつちのテーブルにアタシらいつもの4人が座れば、キレイに収まつたじゃん。そしたらアタシと董もケンカすることなかったし……」

口を尖らせながら、桜は曾我と北大路が座っているテーブルを指さして言うてくる。

「いや、一応今回の集まり、僕と徳川さんの間で交流を持とうってところから始まったわけで、僕としては徳川さんと同じテーブルに座らないと意味がないというかね……」

その指を追いながら光秋が事情を説明していると、子規がカウンターの奥から盆に載った料理を運んでくる。

「ほいつ。鶏とタコの唐揚げ、あとフライドポテトお待ち」

言いながら、子規は光秋たちのテーブルに鶏の唐揚げとフライドポテトを、北大路と曾我のテーブルにタコの唐揚げを置いていく。いずれももくもくと湯気を立て、揚げ物独特の香ばしい匂いを漂わせている。

「おー来た来たー」

それを見て多少は機嫌が直つたらしい。桜はいい笑顔を浮かべて大きく開けた口に鶏の唐揚げを運ぶ。

「いや、桜さん、あんまり一気に行くと——」

「ー！熱つつツ！」

その様子に嫌な予感を抱いた光秋が注意しようとするが間に合わず、一口に嚙り付いた桜は嚙んだ所から漏れてきた肉汁に慌てて口を離し、口に手を当てて悶絶する。

「大丈夫か？ ほれ、冷やせ」

「っ……」

言いながら光秋は桜のグラスを差し出し、受け取った桜は中のオレンジジュースを口に流し込む。

「そんなに慌てなくても、君の取った分は誰も盗らないよ。とりあえず、僕も2つ、あと芋も……」

徐々に落ち着いていく桜にそう告げると、光秋も唐揚げとフライドポテト数切れを皿に取っていく。

と、今度は董が、

「あつ、熱いッ!」

桜同様に唐揚げに勢いよく噛り付き、その熱さに口周りを痛めた。

「董さんもなにやってるんだ……」

「すみません……口、火傷してませんか?」

「んー……?」

たった今日の前で起きた失敗を繰り返す董に、“らしくない”と思いつつも光秋は呆れの声を漏らし、訊かれたことを調べようと董の許に顔を寄せる。

「…………ざつと見、とりあえず大丈夫そうだな。まだ熱いようならそれ飲んで冷やさない」

「も、もうちよつとよく診て——」

「ほらっ、とつとと飲め！」

言いながらグラスを指さす光秋に、董は物足りなさなそうな顔を浮かべるものの、それを絶つ様に桜がグラスを押し付けてくる。

「……………お前、あと5年かそこらしたら苦労しそうだな」

「?……………どういうことです……………」

そんな3人の様子を見ながら唐突に言ってきた徳川の意図がわからず、光秋は董から離れながら首を傾げる。

「それよりもリオカさん、店に入ってからずっとフード被ったままですけど、取らないんですか?」

そのままサラダをぱくぱくと食べているリオカを見やり、駅で会ってから今までずっと被ったままのフードを見ながら徳川に問う。

「ん? あー、えつとだな……………」

「……………」

途端に徳川は表情を曇らせ、リオカもサラダを運んでいた口元が微かに強張る。

「……………なんか、変なこと訊いちやったかな……………」

そんな2人の様子に不安を抱きつつも、ややあつて徳川が答え出す。

「そのー……………そうーこいつけっこうシャイでさ。フード被つてないとダメなんだよっ」

「……………そ、そうです！私シャイだから……………」

「……………なるほど」

どこか歯切れの悪い徳川と、その説明に念を押すように続くリオカに、光秋は内心不信感を抱きつつも首肯を返す。

気になるという気持ちが消えたわけではなかったが、先程の2人の困った様子に、それ以上追究する気にはなれなかった。

――駅で感じた既視感のこととか、結局どういう関係なのかとか、他にも訊きたいことはたくさんあるけど、お世話になった徳川さんが困るのは本意じゃないしな。その知り合いらしいリオカさんもしかりだ……………なにより、自分のことを曖昧にしか説明しなかったのは、僕の方が先じゃないか。お互い様だ――

工場地帯での戦闘の後で初めて会った時のことを思い出して気持ちを割り切ると、光秋はいい具合に冷めた唐揚げを1つ頬張る。

そうすることで気分転換すると、もう1つ気になっていたことを徳川に問う。

「話は変わりますが、徳川さんって超能力者なんですか？この前使ったようなところ見かけましたけど」

「あー、それなあ……………」

困り顔に替わって苦々しい顔を浮かべると、徳川はビールを一口飲んで答える。

「俺、発火能力者なんだよ。レベル3の」

「やっぱり。てことは、この前ZCたちの服が突然燃えたのも？」

「俺がやった。本当は嫌だったけど、四の五の言ってられる状況でもなかったしな……」

先日の光景を思い出しながら確認する光秋に、徳川は渋い顔を浮かべながら頷く。

「嫌だったって……………昔、何かありましたか？超能力関係で……………」

そんな徳川の様子に、光秋は悪いと思いながらも好奇心に負けてつい訊いてしまう。

「まあ、あることはあったな……………あ、言っとくけど、それが原因でいじめられたとか、そ

ういうことじゃないからな。むしろ俺の自業自得というか……………」

「……………何があったんです？」

「あれはそう、高1の頃だったなあ。休み時間に教室の隅で仲間と駄弁ってたんだよ……………確か小田先輩もいたな……………そこで、細かい流れは忘れたけど超能力の話題になって、俺もふざけて掌に小ぶりの火の玉出したりしてたんだが、駄弁ってた奴の1人が『もつとデカいの出せないのか？』って言ってきて、俺もムキになって普段やらない力の入れ方したら、思った以上にデカい火の玉が出たんだよ……………」

「……………まさか」

そこで一旦言葉を切り、渋い顔をさらに深める徳川に、「火」という要素から光秋は嫌な予感を覚える。

「……まあ、そのまさかだ……思ったよりデカイ火の玉に驚いた俺がつい動揺して、ちょうど窓際で話してたんだが、近くのカートンに引火してさ……そっからはもう、みんなして必死に消して、教師たちからも大目玉喰らって……まあ、要するに、この嫌な思い出を思い出したくなくて、普段から使わないようにしてるんだよ」

「なるほど………」

嘆息を漏らしながらビールに口を付ける徳川に、光秋はウーロン茶を飲みながら納得の相槌を打つ。

と、

「嫌な思い出、か………」

「？」

隣で残りわずかになったグラスを持ちながら遠くを見るような目で呟く桜の声が耳に入り、顔を向けた光秋は、普段の桜からはあまり見られない陰気さに不安を覚えながら訊ねる。

「桜さん……どうかしたか？」

「！な、何もっ!？」

「……………ならいいが」

明らかに何かを誤魔化すように快活な様子で応じる桜にますます不安を覚えるものの、そんな反応が自分の踏み込んではいけない話だという印象を抱かせ、光秋の言葉を詰まらせる。

「……………なにかあれば言えよ。頼りないかもしれないけど、今僕は君たちの主任なんだ。僕じゃ解決できなくても、解決できそうな人に話を繋げることくらいはできるし……………て、これじゃ結局他人任せだよなあ……………」

それでもどうにか言葉を紡ごうとして、しかしこんなことしか言えない自分に、我ながら情けなくなる。

「つ……………」

一方、桜は顔を微かに赤らめ、居心地悪そうに体をくねらせる。

「その、さ……………駅ではごめん。蹴ったりして……………」

「ん？ああ、別にいいけど……………？それより、さっきからどうした？……………トイレか？」

「ちげーよッ！」

当てずっぽうで言った瞬間、再び向う脛を蹴られた。

「光秋さん……………」

「ワンちゃん、あなたねえ……………」

「さっきの発言に訂正。5年も経たずに苦勞しそうだな……」
「!?……………」

直後に董、曾我、徳川の順に呟かれた呆れの声に、意図がまるでわからない光秋は痛みに悶絶しつつ困惑するしかなかった。

料理を食べ、ジュースや酒を飲み、食事の席は徐々に温まっていく。

蹴りの痛みから回復した光秋も、3杯目のウーロン茶を口に注ぎ、塩の効いたフライドポテトを摘まんでいた。

と、その背中に曾我がもたれ掛かってくる。

「あれー? ワンちゃんまたお茶あ? なんか飲みなさいよー!」

——うわあ、これは……—

朱が差した顔色と垂れた目を浮かべた曾我に、首に腕を回されて体重を掛けられた光秋は若干の危機感を覚える。

「いや、僕まだ未成年ですから。酒はダメですよ」

「今いくつよ?」

「19です」

「誕生日は？」

「6月」

「あと3カ月じゃないのよつ。それくらい誤差の範囲内だつて。ほらあつ」

「いや、ダメですつて」

言いながら手に持ったカシスソーダのグラスを押し付けてくる曾我に、光秋は強い意志で抵抗を続ける。

「ほら、お巡りさんが目の前にいるんだら。その辺にしときましようよ、曾我さん」

「ははっ、今は非番中だけだな」

牽制のつもりで徳川に話を振ると、曾我程ではないがこちらも顔が赤くなってきた徳川はビールを飲みながら苦笑を浮かべる。

そしてそんな一連のやり取りの間にも、背中に柔らかなものを無遠慮に押し付けられ続け、光秋は自分の中の『男』の領域が活性化していくのを自覚する。

—これはこれで、少々不味いかな……？………もつとも、こうも遠慮も恥じらいもなく押し付けてくる辺り、僕って曾我さんにとって『男』として意識されてないつてことなのかなあ……？からかい甲斐のあるオモチャっていうか………—

そう思うと、昂りそうになっていたものは目に見えて鎮静化していき、ひとまずの安堵を覚えつつも寂しさも感じる。

そんな時、桜が2人の間に割って入ってくる。

「ああもうっ。くっ付くなつての！ほら、曾我さん離れてっ！」

「ああーんっ！」

言いながら、多少は念力も使っているのか、自分より体の大きな曾我を光秋の背中から引き離していく。

―助かる……が、何で目が三角になつてるんだ？―

どうにも心乱される状況から解放してくれた桜に内心感謝しつつも、その異様に険の強い目付きに光秋は首を傾げる。

そうしながら腕時計を見ると、すでに8時を回っていた。

「8時か……けっこういましたね」

「もうそんな時間か？」

腕時計を見ながら呟く光秋に、徳川はビールを飲む手を休めて意外そうに応じ、桜とじやれはじめた曾我を見ながら言う。

「……今日はここまでにしとくか」

「……ですね。腹もいっぱいになつてきたし。みんなもそれでいいか？」

その視線を追つて光秋も頷くと、曾我と桜以外の口々から同意の声が上がり、それぞれすでにテーブルの上にある料理を平らげて各自の飲み物でやる。

「すみません。会計を」

「はい」

徳川の呼び掛けに女性店員が応じ、店の奥から出てきて伝票を差し出す。

「……………とりあえず、僕と徳川さんで半分ってことでいいですか？」

書かれてある値段を一見して、光秋は控えめに申し出る。

「俺はかまわないぞ」

「いやでも、光秋さん……」

頷く徳川に対し、董が申し訳なさそうに言うてくる。

「いいんだよ。もともと君たち3人の分は持つつもりだったし……曾我さん今ちよつと危ういし……」

言いながら光秋は再度曾我を見やると、桜に抱き着いて真っ赤な顔を笑顔に緩ませていた。

「ちよ！光秋！助けるお！」

「ああ。ちよつと待つてな」

曾我を鬱陶しそうに離そうとする桜に、光秋は総額の半分のお金を徳川に渡し、2人の許に駆け寄って曾我を後ろから羽交い絞めにする。

「ほら曾我さん、帰りますよ」

「ああんつ、桜ちゃーん！」

名残惜しように叫ぶ曾我に構わず出入口まで引き摺って行き、そんな光秋の後を董と北大路、警戒心満載の桜、会計を済ませた徳川とり才力が続く。

「ありがとうございます」

「また来てなあ！」

「ごちそうさまでした」

女性店員と子規の見送りに徳川が応じると、一行は徳川先導の下に渋谷駅に向かう。

「ううー……………」

「大丈夫ですか曾我さん？お茶でも飲みますか？」

外に出て興奮も冷めたのか、優れない顔色で唸り声を漏らす曾我に、店から引つ張り出した流れのままに肩を貸していた光秋は目の前の自動販売機を指さしながら訊ねる。

「……………そうする。そこまで連れてって……………」

「はい。徳川さんすみません。ちよつと待っててください」

先を行く徳川たちに断りを入れると、光秋は危うい足取りの曾我を自動販売機の前まで誘導し、緑茶を購入した曾我はペットボトルのフタを開けてそれを勢いよく飲む。

一気に半分近くまで飲んだペットボトルのフタを閉めたのを確認すると、光秋は曾我の足を気遣いながらもやや速い足取りで徳川たちに追い付く。

「すみません」

「いや、俺らはいいけど……大丈夫か？曾我さん」

頭を下げる光秋に返しながら、徳川は光秋に引き摺られる様に歩く曾我に不安を浮かべる。

「……やつぱり、このままだと移動が遅くなりますよね……仕方ない。曾我さん」

光秋も視線を追って改めて曾我を見ると、しばし逡巡してその場に屈む。

「……………」

「乗ってください」

焦点のやや怪しい目でそれを見て首を傾げる曾我に、光秋は顔を後ろに向けながら促す。

「え……………」

「千鳥足が見てて危なっかしいんですよ。ほら」

戸惑う曾我にさらに告げると、桜が目を三角にして言ってくる。

「べ、別におんぶなんてしなくていいだろうっ？」

「と言つても、今の曾我さんの足取りじゃ危ないだろう。それに時間もかかるし」

「だったらアタシがつ」

光秋の説明にさらに目を鋭くするや、桜は曾我に手をかざして浮き上がらせる。

「えっ？ちよつとっ!?」

「お、おいっ。あんまり無茶するなよっ」

急に30センチ程浮かばされた曾我はさらに戸惑い、やや荒っぽい念力に光秋は不安の声を漏らす。

「大丈夫だよ。これで問題ないだろう。行こっ」

不機嫌に応じながら桜は曾我を浮かばせたまま移動を再開し、他の一同も不安を浮かべながらもひとまず歩き出す。

「……………大丈夫ですか？曾我さん」

「自分の力じゃしよっちゅう浮いてるけど……………誰かに浮かされたことってあんまりないから、なんか変な感じ」

どう言葉をかけていいのか迷いながら一言告げた光秋に、曾我はどこか落ち着かない様子で答える。

「……………気分が悪くなったりしたら言ってくださいね。僕ちよつと」

それでも目に見えた体調の変化があるわけでもなく、肩貸し役を解かれた光秋は断りを入れるや先に行く徳川の許へ歩み寄る。

「どうした？」

「いえ、今日なんですけど……………すみません。徳川さんとあまり話せなくて」

気配を感じて顔を向けた徳川に、店での様子を思い返した光秋は頭を下げる。

「別に謝るようなことじゃ……」

「そうかもしれないが……元を正せば、僕と徳川さんの関係を深めるつもりで用意してもらった機会なのに、その辺が不十分だった気がして……まさか、子供たちや曽我さんと多く話すことになるなんて……」

最後の方は言い訳と承知しながらも、つい口から漏れてしまった。

一方、徳川は微笑みを浮かべて返す。

「俺としては、お前がどんな奴かある程度知ることができていい機会だったと思ってるよ」

「そう………ですか……？」

「ああ………だから言わせてもらうが、本当、女の扱いには注意しろよっ」

「は、はあ………？」

肩に手を置き、念を押すように強く言う徳川に、その意図を図りかねた光秋は困惑の声で応じた。

スクランブル交差点に近付くにつれて、道を行き交う人の密度が増してくる。

その様子に、光秋は曾我を浮かせて歩く桜を見やる。

「桜さん、そろそろ曾我さん下ろして。人の多い所で超能力は控えた方がいい」

「……………わかった」

周囲の反応を心配して声をかえると、桜はやや不機嫌そうに応じながら曾我を地面に下ろす。

「っ！」

「おっとっ」

途端にたたたらを踏む曾我に光秋は手を伸ばし、店を出た時のように肩を貸す。

「酔いは覚めましたか？」

「さつきよりはいいかな……………」

お茶が効いたのか、桜に浮かさる前よりはいくらか赤味が引いた顔で曾我は応じ、光秋に押しかかる様に歩みを再開する。

人混みを縫う様に進み、地下構内へ続く階段をいつも以上に注意深く降りて、行きの合流場所に行っていた改札機の前に着いた一行は一旦足を止める。

「……………でお別れだな。俺たち違う路線だから」

「そうですか……………今日はありがとうございました」

リオ力を隣に寄せて告げる徳川に、光秋は頭を下げながら応じる。

「ああ。お互い、また仕事頑張ろうや。機会があればまた飲みに行こうぜっ」
「はいっ。ぜひ」

言う徳川は、一行に別れの一礼をしたりリオカを伴って違う路線へ向かい、光秋は次の機会に期待を込めながら2人を見送る。

2人の姿が人の波に紛れて見えなくなると、光秋は曾我たちに顔を向ける。

「僕たちも行きますか」

「そうね」

代表する様に曾我が応じると、一行は改札をくぐる。

「あ、すみません。ちよつとトイレ。すぐ済ませるんで、そこで待つててください」

直後に催した光秋はひと息に告げるや、近くのトイレに速足で向かう。

たくさん飲んだせいか思った以上に長く佇んでいると、再びリオカに感じた既視感が蘇ってくる。

——やっぱり、終始フード被つてるとこといい、そこから出たピンク色の髪といい、どっかで見掛けたよな、リオカさん。何処だっけなあ……………——

曖昧な記憶を辿っている間に出し切ると、水盤で手を洗う。

——……別に思い出せないからってどうなるってわけじゃないが……………一度気になり出すとなんかすつきりしないよなあ……………——

結局思い出せなかった不満足さを持って余しながらハンカチで手を拭き、外に出ると、曾我たちの姿を探す。

「……………あれ？」

しかし周囲に一行の姿はなく、はぐれたかと不安に駆られながらもさらに辺りを見回している、後ろから董の声がかかる。

「光秋さーんっ、こっちです」

「！董さん。よかった……」

トイレ近くの壁際に佇む董の姿にほっとしながら、光秋は速足で歩み寄る。

「出てきたらいらないからびっくりしたぞ。みんなは？」

「えっと、光秋さんがトイレに行った後、他のみんなも行こうってなって。私も今出てきたところなんですけど」

「てことは、曾我さんたち今中か……」

董の説明を聞くと、光秋は女子トイレの入り口を見やる。

と、ちょうど北大路が、その後ろからは曾我と桜が出てくる。

「いないんで最初びっくりしましたよ。僕が行く時に一言言ってくればよかったのに」

「光秋とつとに行っちゃったじゃん。それに言う暇があつたって、そんなこと言えるも

んじゃ……………」

「そういうもんかい？」

「そういうもんなのっ！」

「ワンちゃん……………」

首を傾げる光秋に、説明していた桜は目を三角にして怒り、その様子に大分赤味の引いた曾我は呆れの声を漏らす。

「…………まあ、いいわ。ホーム行きましょう」

仕切り直すように言うや曾我は階段を降り、光秋たちもそれに続く。

ホームに降りて少ししてやって来た電車に乗り込むと、人でごった返す車内をはぐれないよう注意しつつ5人で奥まで進み、光秋と曾我は吊り革を、桜たちは2人の体を掴んで体勢を安定させたところでドアが閉まり、電車が走り出す。

「そういうえはどうでした？今日の店は。桜さんたちも」

不意に浮かんだ疑問を光秋が一同に投げかけると、真っ先に董が応じる。

「すつごく楽しかったですよっ！ご飯は美味しかったし、店員さんたちも親切そうだったし…………それに、光秋さんと一緒に食事できるっただけでもうっ!!」

「わかった、わかった。電車中だからもう少し静かにな」

何故か先程までの曾我に迫るくらい顔を赤くして嬉々と語る董に、光秋は楽しかった

らしいと理解しつつも鎮める言葉をかける。

「曽我さんはどうでした？」

「いいところだと思うわよ。お酒……カクテルの種類もけっこう多かつたし、また行こうかしら？」

「それは誘った甲斐がありました」

好評価を告げる曽我に、光秋は思わず笑みが浮かぶ。

と、今度は桜が訊ねてくる。

「光秋はどうなのさ？ 気に入ってたみたいだけど」

「まあな。機会があればまた行ってみたい……いや違うな。機会作ってまた行ってみたって思ってる」

「そうとう気に入ったんですね」

若干昂揚した返答に、北大路がどこか関心した様子で相槌を打つ。

「もつとも道はうる覚えだから、その時はまた徳川さんに案内してもらう必要があると思いますけど……座りな」

そう付け加えた直後に電車が停止して正面の座席が空き、光秋は少女たちの背中を軽く押してそこへ座らせた。

渋谷から離れるにつれて、乗客も徐々に減っていった。

気付けば同じ車両内の人影も疎らになった頃、アナウンスが東京本部の最寄り駅の名を告げ、席に座っていた桜、堇、北大路、曾我が立ち上がる。

「寮まで送るよ」

「いいんですか?」

それを見た光秋も席を立ちながら告げると、堇が嬉しそうに応じ、直後に開いたドアから一行は下車する。

「そういえば、曾我さんの家もこの近くなんですか?」

「そう。アパート借りてる。道も途中までは一緒だったはず」

「そつちも送りましょうか?」

「いいわよ。酔いもだいぶ醒めたし、下手な暴漢よりもワタシの方が強いし」

「そりやそうですけど……」

涼しい顔で言ってみせる曾我に、光秋は日頃の光景を思い出して強く納得する。

そんな話しをしながら一行は改札口をくぐり、構内を出て少女たちの寮へ向かう。

しばらく歩くと曾我が足を止め、光秋たちもそれに倣う。

「じゃあ、ワタシこつちだから」

「はい。気を付けてください」

手を振って違う道に入っていく曾我に光秋が代表して応じると、4人は歩みを再開する。

またしばらく歩くと、桜たちの住んでいる寮が見えてくる。

「じゃあ、僕もこれで。今日はお疲れ様でした。またな」

「「お疲れ様でしたー」」

3人の返事を聞くと、光秋は来た道を辿って駅へ戻る。

——いい店を見付けられたのは大収穫だったな。徳川さんには感謝だつ。あとは……………今日の訓練の成果を実践で——いや、こういうことに焦りは禁物。なにより、僕自身がまだ桜さんたちの扱いに慣れてないのもある。焦って無茶をせず、もうしばらくは『ゆつくりだけど確実に』で行くか……………

今日一日のことを振り返りながら、まだ肌寒い夜風に追われる様に駅への歩みを急いだ。

106 渋谷予知捜査線 前編

3月15日月曜日午前8時半。

加藤隊待機室、その机に腰を下ろした光秋は、週末の桜たちの訓練風景を振り返りつつ、腕を組んで悩んでいた。

——僕なりに、桜さんたちにはいろいろ施しているつもりだが、その効果の程は今一つ解らないのが実状だ。この前は『ゆっくりだけでも確実にで行こう』と思ったものの、昨今の情勢を顧みるにそこまで悠長なことも言ってられん気がしてきたんだよねあ……………

脳裏に浮かぶのは、休日の間にニュースで観たZCとNPの抗争に関する映像の数々だった。

小規模なものは鉄パイプのような簡素な武器や低レベルの念力を用いた公共物の破壊、大規模なものではメガボデイや戦車などの兵器を用いた拠点の潰し合い。

そうしたことが日本はおろか世界各地で頻発していることを日曜の夕方に耳にして、事態に直接関わる立場にある光秋は若干の焦りを感じていた。

——今の様なやり方とペースで訓練を続けても、いざ事件が起きた時、『ほぼぶっつけ本

番』ということにもなりかねん。桜さんたちがもつと思いつ切り力を振るったり、メガボデイとの戦闘体験ができる機会に乏しいのもあるよな……………やっぱり、デ・パルマ少佐たちに相談してみるか?—

考えを巡らせる果てに浮かんできたのは、右肩にスフィックスのマークが描かれたゴーレム、ソレを操るデ・パルマ少佐と関大尉の顔だった。

その時、思考を中断する様にポケットの携帯電話が振動する。

「大河原主任?もしもし?」

画面に書かれた東京に来て以来ご無沙汰だった名前に驚いたのも束の間、すぐに電話に出る。

（おお二曹——失礼、今は三尉だったな）

「どうも。こちらこそお久しぶりです。どうかなさいましたか?」

スピーカーから聞こえてくる久しぶりの声色に、思わず懐かしさを覚える。

（いやな、年末に提案したニコイチの新装備が完成したから、その連絡にな）

「ニコイチの新装備…………?」

（ほら、サン教ベースの戦いの後にレポートを出したろう。鉄球だよ）

「……………ああっ!」

「鉄球」という言葉に、それまで失念していた記憶——年末の秋田で重機のそれを振り

回した光景が蘇り、思わず驚きの声が漏れる。

（忘れてたのか？自分から提案しておいて……）

「すみません……あれからまたいろいろあつて、すつかり……」

呆れの声で言ってくる大河原に、言い返せない光秋は気恥ずかしいと思いながら応じる。

「……とにかく、作っていただいたんですね。ありがとうございます」

そんな気持ちを誤魔化すことも兼ねて強引に話しを続けながら、電話の向こうの大河原に向かって深々と頭を下げる。

（まあ、それでだ。明日には本部に届くだろうから、近い内に試験運用のレポートを送ってくれ。場合によっては今後のメガボディ開発に反映できるかもしれないからな）

「明日ですか……承知しました」

応じながら、光秋は自身の胸中に嬉々としたものを感じる。例えるなら、楽しみにしていた贈り物が届く間近の様な、そんな気持ちを。

―飯にも武器だ。少々不謹慎かもしれないのは自覚しているが……それでも、自分の意見が形になったものに触れるのは、やっぱり悪い気はしないからな―

多少の自戒を覚えながらも、その独特の昂りを抑え切ることではできなかった。

アナウンスが流れたのは、まさにその時だった。

(予知部より連絡。次に呼ばれる方は至急会議室に集まってください。加藤光秋三尉……)

「!?!」

いきなり名前を呼ばれてハツとしたのも束の間、光秋は大河原に告げる。

「すみません。急用が入ったのでこれで」

(らしいな。少し聞こえた)

「レポートの件は追々。それでは」

ドアに向かいながらそう告げ、電話を切ると、光秋は廊下に出てアナウンスが言っていた会議室へ向かう。

—予知部って言ってたよな……何だろう?—

途中、自分の後にも呼ばれたらしい主任たちに混ざって歩みながら、激しい胸騒ぎを覚えた。

人波に混ざって会議室に入った光秋は、そのままコの字状に並べられたテーブルの隅に腰を下ろし、顔を巡らせて室内の様子を窺ってみる。

こんなことは珍しくもないのか、パイプイスに座る主任の大多数はこれといった戸惑

いも浮かべず、いたって平静だった。外から呼び出されたい警察や合軍の高官たちも似たようなもので、皆説明が始まるのを静かに、あるいは隣同士で軽い会話を交わしながら待っている。

―流石、というのかな？みんな場慣れしてるな―

その光景は、光秋に経験の差をいうものを否が応でも突き付けた。

その時、

「……にいたか」

「……藤岡主任」

すぐ近くでかけられた声に顔を向けると、スーツ姿の藤岡主任がそこにいて、光秋が応じるや左隣のイスに座る。

「随分急な呼び出しですね。警察や軍の方まで呼んで」

「軍人はともかく、俺にはそこそこ見慣れた光景だがな」

どこか慌ただしい今の心境を含んだ声で告げる光秋に対し、藤岡は周囲同様に落ち着いた様子で返す。

「……やつぱり、慣れてらっしゃいますか」

「そりゃあ、この仕事も長いからな。偶にあるんだ。規模が大きく、発生までにあまり時間がない、そういう緊急の予知ってやつがな。それで、これからそれについての対策会

議を行うってわけだ。むしろこのくらいの猶予がある内はまだいい方だぞ。発生確率が9割を超えるような予知が突発的に出て、慌てて出ていくなんてこともザラだからな」

「ああ……………」

言われて光秋は、去年の夏、蜂の巣戦後の復帰早々に予知出動に出た時のことを思い出す。

その間にも、会議室に1人の男性が駆け込んできて、それを合図にしたように室内のざわめきが止む。

「つ……………」

その光景にいいよ只ならぬ緊張感を覚えた光秋が息を呑む一方、息を整えた男性は正面の台に歩み寄り、その上のマイクを手取る。

（えー、予知部所属の岡部です。早速ですが本題に入らせていただきます。先程、明日渋谷において数十人規模の死傷者が出るとの予知が出ました。発生確率は95パーセント）

—渋谷？というか、95パーセントって……!?—

つい一昨日行ったばかりの地名が挙がったことにも驚いたが、なによりほぼ確実に起こると言っているようなその高確率に、光秋は愕然とする。

（これ以上の詳細は今のところ不明です。引き続き予知能力者たちによる情報収集を行っているので、何かわかり次第追って連絡します。集まっていたいた皆様には、この予知の阻止、ないしは被害軽減に尽力していただきたい）

——いただきたい……と言われても……——

死傷者数十人という規模と異様に高い発生確率に対し、場所以外の情報がほばない——何をすべきなのかわからないという状況に、光秋はつい途方に暮れてしまう。

そんな中、警官の1人が手を挙げる。

「昨今の情勢を見るに、NPとZCの抗争、あるいはテロ事件が原因である可能性がいかと思われます。ひとまずは今日から明日にかけて渋谷区一帯の巡回の強化を図るべきかと」

——……………確かにな——

その発言に周囲から同意の声が上がる中、光秋も心の中で頷く。

同時に大河原から電話がかかってくる前に思い返していたニュースの映像が再び脳裏に流れ、その光景と予知の内容の合致に強い納得を覚える。

その後もNP、ZCの蜂起を前提としつつ、渋谷区一帯の巡回を強化する方向で話は進み、各自の細かな役割が決まるや会議は解散、それぞれ自分の仕事をする為に会議室を出ていき、光秋もそれに混じって待機室へ戻る。

——加藤隊の役目は周囲の調査か………とりあえず、まずは北大路さんと呼ばんな。また変な時間に抜けさせてしまうことになるが………ま、やむを得んか………それまで漠然としていたものが一応の形を持った——自分のやるべきことが明確になったことで気持ちが多楽になる一方、再び北大路に負担を掛けることへの多少の罪悪感を覚える。

その時、隣を歩く藤岡が何かを考える様に視線を天井に向けているのが目に入る。

「藤岡主任、どうかされましたか？」

「ん？ああ、いや………」

「？」

曖昧に応じながら、藤岡は足を速めて先を行き、残された光秋は人波にその背中が消えていくのを呆然と見ていることしかできなかった。

——………いや、今は予知の阻止に集中——

藤岡の様子は気になるものの、現在の最優先事項を思い出すことで気持ちを切り替えると、光秋も待機室へ向かう足を速めた。

「北大路さんだけ呼んでください………はい、あとの2人はいいです。校門の前で待つよ

う言つてください。こちらから迎えに行くので……はい。お願いします」

待機室に着くや速度を緩めることなく机の上の電話を手に取り、受話器の向こうの教員に要件を伝えると、光秋は手早く持ち物を確認してカバン片手に部屋を出る。

速足で進んで駐車場に出ると、周囲を見回して自分の送迎をしてくれることになっている車を探す。

と、聞き覚えのある声がかけられる。

「おーい、加藤」

「！徳川さん」

声のした方を見ると徳川がパトカーの助手席の窓を開けて手招きしており、すぐにその許へ駆け寄る。

「えっと、運転手付きで車を1台付けてくれるとは聞いてたのですが、もしかして徳川さんが？」

「一応手伝うように言われて来たから間違つてはないが、運転手はこいつだ」

「どうもっ」

光秋の確認に徳川は体を逸らし、後ろに隠れていた浅黒い肌の警官が微笑んでくる。

座つていても大柄な印象を与えてくる体格と活発そうな雰囲気には光秋も覚えがあった。先日 の催眠能力者通り魔事件の捜査中に顔を合わせ、犯人確保時の応援にも来

てくれた、なにかと徳川と一緒に見かける機会の多い人だ。

「ちゃんと名乗ったことなかったね。はしばひでみ羽柴秀美、徳川とコンビ組んでいます」

「あつ。ESOの加藤です。本日はよろしくお願いします」

運転手——羽柴の自己紹介に、光秋も頭を下げて応じる。

「まあ、とにかく乗れつて。時間なくなるだろう」

「！そうでしたっ」

徳川の指摘に、光秋は慌てて後部席に乗り込み、シートベルトを締めるやパトカーはすぐに発車する。

「真っ直ぐ渋谷まで行けばいいの？」

「いえ。雄国小学校という所に寄ってください。そこで特エスの子が待ってます」

「了解」

光秋の指示に、確認してきた羽柴は頷き、車道に出るや北大路たちが通う学校に向けて走り出した。

車道をしばらく走ると、小学校の校門が見えてくる。

その傍らに佇む北大路の姿を窓越しに確認した光秋は、パトカーが停車するや歩道側

に面した後部ドアを開ける。

「待たせた。乗って」

言いながら奥の席に引込んだ光秋が手招きし、乗り込んだ北大路がドアを閉めたのを合図にパトカーは再び走り出す。

「とりあえず、これ羽織って。今回は制服に着替えてる時間も場所もないから」

言いながら、光秋はカバンから取り出したESOのコートを北大路に渡す。

「それはいいですけど、今回のお仕事は何なんです？」

「ああ、そうだな。実は……」

背負っていたカバンを座席同士の境に置いてコートを受け取りながら訊ねる北大路に、光秋は予知出勤の件を掻い摘んで説明する。

「でだ、僕等の役割はサイコメトリーによる危険箇所の搜索。見付け次第本部に連絡して対策班を寄越してもらおう。ここまでで何か質問は？」

「……………特には」

確認する光秋に、北大路は窓を眺めながら短く応じる。

「わかった。じゃあ、現場に着き次第頼む」

「……………」

それに光秋が一言返すものの、北大路は応じることなく窓の外を眺め続け、そんな北

大路の態度が馴染んできた光秋も特に気にすることなく現場到着を静かに待つ。

「……」

「……」

前の席に座る徳川と羽柴が気まずそうに視線を交わすものの、後ろに座っている光秋の感知できることではなかった。

どこか重い沈黙が漂いながら走ること十数分。

「渋谷まであとどのくらいですか？」

「もうすぐ区内には入るけど」

「じゃあ、ここに向かってください」

問い掛けに羽柴が応じると、光秋はカバンから地図を取り出し、そこに書かれた自分たちの担当区域を指さす。

「了解」

応じると羽柴はパトカーを右折させ、それからさらに数分走って目的地たる繁華街に到着する。

パトカーが停車するや光秋はすぐに降り、北大路もそれに続く。

「早速頼む」

「了解」

光秋に事務的に応じると、北大路は地面に手を着け、目をつむって意識を集中する。と、パトカーから降りた徳川が光秋の許に歩み寄ってくる。

「ちよつといいか？」

「何か？」

応じると、徳川はサイコメトリーを続ける北大路を一見し、口元を光秋の左耳に寄せ
る。

「この前から気になってたんだが……お前、あの北大路つて子と仲悪いのか？」

「仲が悪いと言いますか……………」

躊躇いを含みながらも結局訊いてしまった様子 of 徳川に返しながら、光秋も改めて北大路を見やり、東京本部に来てからの関わりを思い返してみる。

「まあ、よくはないでしょうね。何でだか僕、彼女に嫌われてるみたいだし」

「何かあったのか？」

「心当たりは特にないんですけど……桜さんなんかは東京に来たばかりの頃、入間主任

——僕の前任者以外に命令されるは嫌だつて言っていましたけど。一応、そんな内容で1
回北大路さんに怒鳴られたことがあるから、その辺りが関係してるんじゃないかとは思

いますけど……………」

さらに訊ねる徳川に、光秋は工場地帯での戦闘の後のやり取りを思い出す。

—『どうせ入間主任が戻るまでの代理なんだから、いちいち上司面しないでもらえますか？』……………あ、いや。あれはちよつと違つたかな……………？とにかく—「あとはもう、僕が無自覚の内に北大路さんの機嫌を損なうことをした、もしくは今もしているつてことですけど……………その場合、言ってくれないと改めようもないんだけど……………」

多少記憶と認識の修正を行いながら、最後は途方に暮れた声を漏らす。

「……………俺はあんまり特エスのこととかわからないが、そんなんで大丈夫なのか？火種抱えてるようなもんだろう」

「まあ、ご覧の通り仕事はちゃんとやってくれますから、その辺に関しては信じていいかと。実際、この前の事件でも多少ギクシャクはしましたが、調べるべきことはきちんと調べてくれたし」

不安を浮かべる徳川に、光秋は北大路に視線を向け、先日催眠能力者通り魔事件の捜査の様子を思い出しながら応じる。

「まあ、それなら……………余計なことかもしれないが、一応お前の方が大人なんだからな。人間関係の問題はお前の方から解決するようにしないとダメだぞ」

「それを言われるとぐうの音も出ませんね……………」

私的なことでは今一番の懸案を言葉にしてくる徳川に、自身どうにかしなければと思っている光秋は反論もできず、さりとて北大路との関係における現状を顧みて前向きな返答もできず、あてどない視線を北大路に向けて溜息混じりに応じるのが精一杯だ。と、それまで黙ってサイコメトリーをしていた北大路が、俯いていた顔を上げ、険のある目を光秋たちに向けてくる。

「人がサイコメトリーしてるそばでひそひそ話されると、気が散るんですけど？続けたいならもつと離れた所でやってももらえませんか？」

「すまない。静かにしているよ」

すぐに光秋が返すと、北大路は不機嫌な顔を下げ、再びサイコメトリーに集中する。

「すみません。この件はまたの機会に」

「まあ、もともと俺が口を挟んでいい問題でもないしな……」

そのまま頭を下げる光秋に、徳川も煮え切らない様子を残しつつも頷き、以降は必要最低限の会話を除いた沈黙の下に調査が行われた。

移動中の休憩を挟みながら、北大路はサイコメトリーによる危険個所の調査を続け、建物の老朽化や配線の劣化、重量物の無理な積み上げなど、危険と思われるものを大小

に関わらず見付けていった。それに対し、光秋たちも本部に連絡して専門家たちを寄越してもらくなり、その場の判断で自分たちで対処するなりを繰り返して危険要素を一つ一つ排していき、そうして担当区域の最後の地点に着く頃には午後4時になっていた。

「……………この辺りには特に目立った異常は見られません」

「了解。これでひと通りだな」

言いながら地面に着けていた手を離す北大路に応じると、光秋は手元の地図と照らし合わせ、自分たちの担当区域を全て回ったことを確認する。

そのまま携帯電話を出して東京本部に調査終了を報告すると、本部への帰還が指示される。

「……………了解しました」

電話の向こうの相手に応じながら通話を切ると、光秋は傍らに停車したパトカーの中で待機している徳川と羽柴に告げる。

「二度本部に戻るよう言われました。すみませんが送ってください」

「了解。じゃあお前ら送り届けたら、俺らも一旦署に戻るかな」

徳川の返事を聞きながら、光秋は北大路と後部席に乗り込み、一行を乗せたパトカーは本部へ向かう。

「……………」

何度か休憩を挟んではいたものの、数回におよぶ極度の集中、それも午前中から長丁場は堪えたらしい。背もたれに体を預けた北大路の顔には、疲れが色濃く浮かんでいた。

「……………ここで労いの一つもかけておくか？北大路さんのことだから、また噛み付かれるかもしれないが……………でもまあ、やつぱり一言あるべきか―

無言で渡されたコートをカバンに仕舞いつつ、多少迷いながらも決めると、光秋は視線を隣の北大路に向け、努めて自然体で声をかける。

「お疲れ様……………その、大丈夫か？」

「別に。仕事ですから……………」

窓を眺めながら素っ気なく返すと、北大路は若干棘のある視線を向けて続ける。

「それと、『噛み付く』のはそちらの領分じゃないですか？」

「……………あ、聞いてた”の？”」

言われて数秒して、サイコメトリーで先程の考えを読み取られていたと察し、光秋は気まずくなる。

「……………」

もつとも、北大路はそれ以上何も言うことなく窓に視線を戻し、車内は行き同様に沈黙に包まれる。

——ダメだな。僕…………——

そんな展開に慣れつつある——甘んじつつある自分を自覚し、光秋は自身への情けなさを持って余した。

本部の駐車場に着くと、光秋は北大路と共にパトカーを降り、全開にした窓から前部席の徳川と羽柴に頭を下げる。

「今日はありがとうございます」

「おう。俺もお前と正式な形で一緒に仕事ができてよかったよ。小田先輩への面目も立つってもんさ」

「今のところ、予知に変化はないの？」

徳川が満足した様子で返す一方、羽柴は不安げに訊ねる。

「それは本部に問い合わせてみないとわかりませんね。でも、変化があれば連絡が入ると思いますけど」

「てことは、変化なしか」

「だと思えます」

「じゃあ、明日もまた出勤……というか、明日が本番だね。頑張つて」

「ありがとうございます」

不安を引つ込めて激励してくれる羽柴に、光秋は再度頭を下げる。

直後に羽柴は窓を閉め、パトカーをＵターンさせて車道に流れていく。

塀の陰に隠れて見えなくなるまで見送ると、光秋は隣の北大路を見やる。

「それで北大路さん、この後だけど——」

「あつ。いただいた。菊っ！」

口を開こうとするや聞き覚えのある声に遮られ、声のした方を見ると、正門からブレザー姿にカバンを背負った桜がこちらに駆けてくる。その後ろには董と、研修中に一度出会った少女たちの友人である双子の姉妹が歩いてついてきている。

「桜ちゃん。此方ちゃんたちも……？」

北大路にも予想外の展開だったらしい。その表情には若干の戸惑いが浮かぶ。

と同時に、それまで棘の様に鋭かった目元が、本当に申し訳程度に丸くなる。

——喜んでる？……まあ、時間を考えると、登校して本当にすぐの呼び出しだったからな。北大路さんからすれば、友達とあれこれするはずだった時間を潰されて、嫌な奴と一日一緒にいる羽目になったわけで、それがようやく終わった上でのお出迎えなら、少しは嬉しいと感じるものか？——

どうにか捉えることができた表情の変化から北大路の胸中をそのように分析し、その

結果に光秋は軽い申し訳なさを覚える。

と、2人の許にやって来た桜が機嫌よく呟く。

「試しに来てみるもんだな。ちように会えるなんてさ」

「北大路さんのこと、迎えに来てくれたのか？」

「迎えについていうか、様子見にね」

「急な検査が入ったって聞いたけど、菊大丈夫？」

光秋の問いに桜が応じる横で、心配そうな顔をした此方が北大路に問い掛ける。

「うん。大丈夫。特に問題なかったって」

—ああ、表向きはそういうことになったのね—

それに対して北大路は滞ることなく応じ、そのやり取りに光秋は特エス周囲の機密保持がなされたのだと察する。

と、一行の後ろ側に隠れるように佇んでいた彼方が、遠慮がちに訊いてくる。

「えつと……この前一緒に買い物したお兄さんですよね？」

「そうだけど……？」

「菊ちゃんのお見送りですか？」

「ん？まあ、そんなとこ」

努めて自然体で答えると、光秋は北大路と桜、堇に目配せする。

「とりあえず、今日はこれで終了だから。帰ってゆつくり休んで。みんなも車に気を付けてな」

言うとそのまま踵を返し、待機室へ向かう。

——詳しいこと……特に明日は桜さんと董さんも出てもらうことは、後でメールしとくかな。流石にあの場じゃ不味いだろうし。なにより……——

思いつつ、一旦足を止めて振り返ると、桜たちと一緒に正門へ向かう北大路を見る。距離があるためにはつきりとはわからず、何を話しているのかも聞こえなかったが、自分といった時は揺るがなかった仏頂面が、今は柔らかな笑顔に変わっていた。

——北大路さんの大事なひと時を邪魔したら、いよいよ後ろから刺されかねないからな

冗談半分に思いながら苦笑を浮かべると同時に、そんな北大路の表情に先程から抱いていた申し訳なさが多少軽くなるのを感じながら、光秋は待機室への歩みを再開した。

待機室に戻ってすぐに、肩からカバンを下ろした光秋は董にメールを送り、疲れた体を椅子に預ける。

——羽柴さんも言ってたが、予知に変化がないってことは、本番は明日だよな………

死傷者数十人規模の事件……やっぱりNPやZC絡みだろうか……?—

北大路との調査でもいくつもの危険を見付け、対処したものの、いずれも予知とか関係なかったらしい。原因の最有力候補たるNP、ZC関連の動きも聞こえてこず、振り出しに戻ったような印象に、光秋は再びわからないことへの不安を抱く。

そんな時、携帯電話が振動して着信を知らせる。

「董さん?……はい?」

（光秋さん?今メール見ました）

「ああ、そうか……メールにも書いたと思うけど、改めて。明日……というか、場合によっては今夜、日付が変わってすぐに呼び出しがかかるかもしれないから。いつでも対応できるようにしてな」

（はいっ）

「ただまあ、とりあえずは早寝して、ゆっくり休むことだろうがな。間違っても夜更かしとかするなよ」

（しませんが）

「ならよかった。桜さんと北大路さんにもよろしく言っておいて」
（了解ですっ）

元気のいい董の返事に、光秋は胸の内が少しだけ軽くなる。

「ところで……その、北大路さん、今近くにいますか？」

（菊？はい、いますけど。代わりますか？）

「いや、それはいいんだ。その………様子はどうかかな？」

（様子？）

— 董さんに何を訊いてるんだ僕は……—

言つてから、口を滑らせてしまったことを後悔する。

「いや、何でもない。気にしないで——」

（ちよつと董！さつきから一人だけズルいぞツ）

（わっ！桜！ちよつと！）

すぐに誤魔化そうとした矢先、スピーカーの奥から桜の不満そうな声が響き、董の慌てた声がそれに続く。

（もしもし光秋？）

「桜さんか？」

（董とばつか話し過ぎだつてのツ。ただでさえ今日は菊に独り占めされてたのに……）

「独り占め？」

（！な、何でもないッ！）

ぼそつと呟かれた一言を光秋が訊き返すと、桜は慌てて訂正する。

(……それで？董となに話してたの？)

「いやあ、夜中に呼び出されるかもしれないから、今夜は早く寝ろって……桜さんも、夜更かしとかするなよ」

(しねえよッ)

もののついでとばかりに一度は董に伝言したことを直接自分の口から伝えると、桜の膨れた声が返ってくる。

(それはそうと、光秋はこの後どうすんの？)

「主任は本部で待機を命じられてるからな。とりあえずこの後、着替えを取りに寮にとんぼ返りして、戻ってきたら夕食、あとは仮眠をとりつつ明日の朝まで待機ってところかな」

(……入間主任もときどき本部に泊まり込むことあったけど、やっぱ大変そうだね)

「でもまあ、やつぱり指揮をする人は、すぐに指示や情報が得られるとに残ってないといけないからな」

(そうだけどさあ……)

「まあ、僕にとつてはこれも仕事の内だからな。その分、君たちには明日頑張ってもらうからな。だから、体調を万全にな」

(…………了解っ)

念を押す様に言うと、電話の向こうから今までとは少し違う、いい具合に力の入った桜の声が返ってくる。

「じゃあ、そろそろ切るな。流石にそろっと動き出さないと」

（わかった。じゃあ、また明日ね）

「ああ」

（！ちよつと桜！勝手に切らな——）

電話を切ろうとした直前、奥から葦の慌てた声が聞こえたものの、ボタンに伸ばした指は止まらなかった。

「……………まあ、いつか」

変なタイミングで切ってしまったことに気まずさを覚えたものの、桜に語ったこの後の予定を思い出してそれを流し、まだ疲労の残る体を椅子から立ち上がらせる。

「とりあえず、まずは着替えを取りに——と、その前に北大路さんのコート片付けんと」
直後に別の用を思い出し、部屋に入ってから床に置きっぱなしだったカバンを開けて北大路のコートを取り出した。

午後6時10分。

一度寮に戻って着替えを用意し、すぐに本部に戻ってきた光秋は、その足で食堂へ向かい、生姜焼き定食を頼んで空いている席に腰を下ろす。

時間帯も合わさってか食堂内はかなりにぎわっており、会議に呼ばれていた特務部隊主任の顔もいくつか見えた。

―あの人たちも今夜は待機か……真夜中の呼び出しだけは勘弁してほしいが………

今一番の願望を口の中に呟くと、光秋は手を合わせて定食に箸を着ける。

「こちら、よろしいですか？」

「沖一尉」

聞き覚えのある声に前を見ると、沖一尉がトレーを持って佇んでいた。

「どうぞ」

すぐに応じると、沖は正面の席に座り、光秋は食事を口に運びながらふと思ったことを呟く。

「なんか、また久しぶりって感じですね。1月から同じ職場にいるっていうのに」

「そりゃあ、お互い仕事内容も使ってる部屋も別々だからねえ……」

それに疲労を含んだ笑みで応じながら、沖はトレーの上のラーメンを勢いよくすすむ。

「そういえば、加藤君今回主任になって初めての予知出勤だね。やっぱり大変？」

「まあ……といつても、普通の出勤も充分大変なんですけどね」

沖の問いに苦笑で応じながら、光秋は肉一切れを白飯と一緒に口に入れる。

「ただまあ、起こるとはわかっていても原因がわからない、そこから来る独特の緊張感……と、あと焦りもあるかな。今日一日、特エスの子と担当区域を探し回ったけど結局予知に繋がるものは見付からなかったし、今もってNPやZCに動きありつて話も聞こえてこないし……そういう、わからないことから来るじれったさでもいうようなものはあります」

そう続けて味噌汁で口を湿らせると、改めて沖の顔色を観察する。

「そういう沖一尉こそ大丈夫ですか？少し疲れてるようですが」

「……ちよつとね。今回は規模が規模だから、警察や軍との連携が重要になってくるから……」

「上層部は組織間の調整をしなくちゃいけないし、局長秘書である一尉もその補助に出なければいけないと……やっぱり、仕事量とかすごいですか？」

「量はそこまでじゃないと思うけど、それ以上に人間関係っていうのかな？外部の、それも偉い人たちと関わるのは、やっぱり気を遣うなあ」

「……お疲れ様です」

「いえいえ、こちらこそ」

嘆息混じりの沖の話を聞いていると、光秋は自然と頭を下げ、沖は微笑みながら返礼する。

——どこも、その質こそ違えど、やっぱり大変なんだなあ。それこそ僕等がこうしてのんびり飯食つてる間も、渋谷では今でもパトロールなり調査なりに駆けずり回つてる人たちがいるわけで……とりあえず、今の僕——加藤隊に求められているのは、予知の原因が判明した時に即応できるようにすること、その為に心身の調子を整えておくことか——

自身の役割を再認識すると、光秋は先程よりもよく嚙んで肉と白飯を呑み込んだ。

「それはそうと……話は変わりますが、小田一尉とは最近どうです？」

「……どう、というところ？」

「いや、連絡とり合つてゐるのかなあつて。あんまり気苦労が多いといろいろ堪えるでしょう？ 偶には会う約束して、どっかに遊びに行つたりとか。実を言うと僕も——」

月末の伊部姉妹との約束を思いながら嬉々と語っている最中、光秋は沖が困った様な顔を浮かべていることに気付き、慌てて口をつぐむ。

「……………すみません。なんか変なこと言っちゃいましたか……………」

「いや、変というかね……………うん……………」

視線を逸らして曖昧な返事をしながらラーメンのスープを飲む沖に、光秋はそれ以上何も言わず、静かに味噌汁をすする。

——余計なこと言っちゃったかな……………？——

沖への罪悪感を覚えたものの、それを口にする勇氣はなく、気まずさを持て余しながら食事を続けた。

食後、沖と別れた光秋は、そのまま待機室が入っている建屋のシャワー室へ向かい、やや熱いお湯を頭から浴びて今日一日の汗を流していた。

そんな中で胸中に浮かぶのは、先程の沖との会話で抱いた罪悪感だった。

——沖一尉には悪いことしちゃったなあ……………小田一尉と上手くいつてないんだろ
うか……………？——

ふとそんな疑問が浮かぶものの、それこそ沖、あるいは小田に訊いて確かめる勇氣などなく、悶々とした気分のままシャワーを浴び続ける。

——……………まあ、仮にそうだったとしても、それこそ人と人の関係に僕が横から口出すもんでもないか？それよりも、今は予知のことを気にかけるべき、か……………——

深い部分では未だ納得し切れていないと感じつつも、そう思うことで気持ちに一応の

区切りをつけると、シャワーを止め、体を拭いて個室から出た。

シャワーを終えて待機室に戻ると、光秋は机のそばにカバンを置き、火照った体を椅子に預ける。

「ふうー……………すつきりした……………かな……………」

上着のボタンを開け放ち、ネクタイも巻いていない、シャワー後の余韻が残る体から吐息混じりに声を溢すと、背もたれに預けていた上体を起こし、現時点で追加連絡がないことを確認する。

「NP、ZCの動きは未だなし、予知の方も相変わらず変化なし、か……………」

半ば予想していた結果ではあるものの、どうにも逸ってしまう気持ちを感じずにはいられない。

「……………いかな。また気持ちだけ先に行こうとしてる」

そう声に出すことで、どうにか気持ちを抑える。

——いつ呼び出されるかわからないのは確かだからな。とりあえず仮眠とるか——

思うや携帯電話を取り出し、午前0時にアラームを設定すると、そのままメガネを外して机に突っ伏す。

―深夜出勤だけは遠慮したいところだけどねえ……―
なけなしの願望を胸の中で呟くと、光秋は眠るように努めた。

107 渋谷予知捜査線 後編

3月16日火曜日午前6時。

結局夜中に出動命令がくだされることはなく、0時以降は1、2時間置きに起きては眠つてを繰り返して一夜を過ごした光秋は、眠気を含んだ目で食堂で朝食を摂っていた。

——中途半端に寝起きすると、かえつて余計眠くなるもんなんだなあ……今夜はガッツリ寝たいなあ……あとなんか腰……というか背中全体が痛い……——

囁り付いたトーストを牛乳で流し込みながら、今一番の願望や不満をぼんやり思っている、前の席に曾我が腰かけてくる。

「おはよう。締まりのない顔ね？」

「おはようございます……昨日中途半端な寝方をしたもので……ふあ……」

応じた拍子に盛大な欠伸をかき、光秋は手で口元を隠す。

「ところで、今朝は丁寧語じゃないんですね？」

「まだ勤務前だしねえ。いただきまーす」

ふと抱いた疑問を投げかけると、曾我はそれに応じながらトレーの上の定食を食べ始

める。

——……もつとも、眠い眠いばかりも言つてられん。それこそ今日は“本番”なんだから、気合入れていかんとっ——

胸中に喝を入れてどうにか眠気を押しやると、光秋は残りの分のトーストをよく噛んで食べた。

食事を終え、待機室で身なりを整えると、光秋は椅子に座つて腕時計をちらちら見ながら桜たちが来るのを待つ。

——本部出発が8時だから、7時半には来るように伝えておいたが……——

時計の針は間もなくその7時半を指そうとしているが、少女たちが現れる気配は一向になく、知らぬ間に貧乏ゆすりが止まらなくなる。

それでもしばし待つて半に差し掛かると、ドアの向こうからノックの音が響き、ESの制服を着た董、桜、北大路が入ってくる。

「おはようございます」

「オッス！」

「……」

「おはよう。来たなっ」

董と桜の挨拶と、北大路の黙礼に応じつつ、やっと現れた3人に光秋は内心少しほつとする。

と、直後にポケットの中の携帯電話が振動する。

「すまない、ちよつと」

3人に断りを入れながら画面を開くと、福山から着信が入っていた。

——福山主任？朝早くに——それもこのタイミングで——何だ？——

難しそうな事案での出勤を控えている時にかけてきたことについて苛立ちながら、通話ボタンを押す。

「はい？」

（おはよう加藤三尉。少しいいか？）

「おはようございます。なにか？」

（少し耳に入れておいてほしいことがあつてな。今日の9時頃、MB—00用の新装備が本部に届く。なんでも三尉発案の装備だそうだが）

「僕の……？ああ、はいはいっ」

言われて光秋は、昨日の大河原主任との電話を思い出す。

（覚えがあるようだな）

「昨日もその件で電話がありました。ただ詳しい時間まではわかりませんでした。9時頃ですね。了解です」

（ん……機会をみて運用試験のレポートを送ってくれ。僕からは以上だ）

「承知しました。ありがとうございます」

言いながら一礼すると、光秋は電話を切ってポケットに戻す。

「誰からです？」

「福山主任。今日の9時頃に新しい装備が届くつてさ」

待機室の隅に置かれているテーブルに座りながら訊いてくる堇に、光秋は椅子に背中を預けながら答える。

「新しい装備つて？」

「秋田で僕がニコイチに鉄球持たせて戦っただろう。あれを基にしたもの」

「ああ、あれね……」

光秋が答えると、訊いてきた桜は懐かしさと恐れが混ざったような顔を浮かべる。

——……ああ。そういえば桜さん、あの時法子さんに引つ叩ばたかれたんだっけ。その時のことでも思い出したかな？——

そんな顔をする理由を察していると、桜は入れ替わる様に不満を浮かべて言うてる。

「ていうかさー、出るのは8時なんだろう？何で30分も早く集合するのさー？」

「なに、ごとも余裕をもつてだよ。ギリギリに来て焦るよりいいだろう」

「流石、光秋さんです！」

「大袈裟なんだよ、董も……」

光秋が答えるや即感銘の声を上げる董に口を尖らせると、桜はそのままテーブルに突っ伏した。

それを見て、光秋は背中に再び痛みを感じた。

——少なくとも、あの体勢で一晩過ごすもんじゃないか……—

7時50分。

「さっ、そろそろ行くぞ。忘れ物ないか確認して」

言いながら椅子から立ち上がった光秋は、自身も背広の上からあちこち触って手荷物を確認し、カバン片手に少女たちが座っているテーブルに歩み寄る。

「ほら、桜さんも起きてっ。行くぞ」

「んー……」

揺すられながら言われて桜も洩々体を起こし、光秋と、すでに準備を終えた董と北大

路を追って待機室を出る。

駐車場に着くと光秋は周囲を見回し、ぽつぽつと停まっている車の中から自分たちの送迎に來ているものを探す。

「えつと、どれか……………」

その時、

「おーい、加藤」

「この声は……………」

今やすっかり耳に馴染んだ声に昨日ぶりの既視感を覚えながら辺りを見回すと、ワゴン車型のパトカーの助手席の窓から手を振る徳川を捉え、少女たちを連れてそこへ向かう。

「おはようございます、徳川さん。今日も僕たちの送りを？」

「ああ。昨日署に帰ったらそう言われてさ」

「私もいるよ」

確認する光秋に徳川が応じ、運転席の羽柴もそれに続く。

「さつ、乗って」

「はい。みんな乗って」

後部席に目配せする羽柴に応じると、ドアを開けた光秋は先に少女たちを乗せ、3人

乗ったのを確認してから自身もパトカーに乗り込む。

「では、本日もよろしくお願いします」

「了解。出発！」

シートベルトを締めながら告げると、羽柴は意気揚々とハンドルを握り、パトカーは渋谷区へ向けて走り出す。

「それじゃあ、移動しながら今日の説明するぞ」

パトカーが車道を走り出してしばし。中央列に収まる光秋はカバンからメモを取り出すと、後部列に並んで座る桜と北大路、隣に座る董を見やりながら言う。

「基本的な流れは昨日と同じ。サイコメトリーを行いながら担当の区域を巡って危険を察知する。ただ、その道中、もしくは僕たちのいる所から離れた場所で予知の原因が発生するかもしれないから、柏崎さんと柿崎さんにはそのつもりで待機してもらう」

「私が現場にテレポートして、一緒に行つた桜が対処するって、そんな感じですか？」

「だいたいな」

董の確認に、光秋は頷きながら応じる。

その間にも、パトカーは渋谷区に差し掛かる。

「それで、今日はどっから？」

「ああ、まずここに向かつてください」

羽柴に訊かれて、光秋は昨日と同じように地図を指さす。

「ここね。了解」

応じると羽柴はハンドルを右にきり、少ししてパトカーは最初の担当場所に到着する。

「じゃあ、北大路さん。早速頼む」

「……わかりました」

降りながら告げた光秋に應じると、北大路はパトカーから少し離れた地面に手を着けた。

北大路によるサイコメトリー、パトカーによる移動、ときどき発見した危険箇所の報告や対処を繰り返すこと3時間。

11時を少し回った現在、光秋一行は本日何度目のサイコメトリーを行っていた。

「……………この辺りにはこれといった危険はなさそうですね」

「了解。じゃあ、次行くか」

屈んでいた体勢から立ち上がりながら報告する北大路に應じると、光秋は徳川たちが待つパトカーに向かって歩き出す。

—これまで何度か危険を発見したけど、今もって予知は消えないんだよなあ。NPやZCが動く気配もないし………いったい、何が死傷者数十人なんて大惨事をもたらすっていうんだ？—

北大路には努めて平静に応じたものの、未だ変化のない状況に再び焦燥を覚えてしまう。

その時、ポケットの携帯電話が振動する。

「すみません。ちよつと」

車内で待つている一同に断りを入れると、光秋はパトカーから少し離れた所で画面を開く。

「藤岡主任？もしもし？」

（加藤か。少しいいか？）

「はい。どうされましたか？」

（そつちの状況はどうなっている？）

「どうって……3時間程サイコメトリーによる調査を行っていますが、目ぼしいものはまだ」

（俺の方もだ。サイコメトラーがいる別の隊と同行してあちこち回っているが、未だ予知に繋がるものは発見できていない）

「そちらも……」

思わぬ形でもたらされた他^{よそ}所の情報に、ますます焦りが増してしまう。

「いったい何なんでしょうね？ 死傷者数十人の原因つて……NP、ZC共にこれといった動きはないし、昨日からいくつもの危険が発見されてるのに予知は変化しないときてる。本当に、いったい………」

（……それなんだがな）

先程から抱いていた焦りを思わず声に出すと、藤原が慎重な声で返してくる。

（俺もそうだが、みんな『予知の原因は渋谷区内のどこかにある』、もしくは『NPかZCの攻撃だ』、主にこの2つの範疇で考えていないか？）

「原因が渋谷区にあるか、NPかZCの攻撃………ええまあ、そうだと思います」

言われたことを少し時間をかけてでもしっかり呑み込んでから、光秋は頷いて応じる。

（これは海外の例なんだがな。人っ子一人いないはずの荒野のど真ん中で、数十人の死者が出るという高確率予知が出たことがあった。現地当局は半信半疑ながらも調査を行ったが目ぼしい成果は上がらず、算出ミスじゃないかと疑い始めたその時、エンジン

トラブルを起こした旅客機が落ちてきたそうだ)

「無人の荒野に旅客機……ですか……？」

(ちょうど現場に出ていたサイコキノ数名によつて旅客機は受け止められて事なきを得た。そして同時に、その予知も消えたそうだ)

「……………つまり、予知にあつた『数十人の死者』というのは旅客機の乗員・乗客で、『無人の荒野』は偶々その墜落場所になつた……………予知の原因が現場から離れた場所からやつて来た……………ということですか……………？」

(そういうことだな)

一語一句噛み砕き、慎重に呑み込み、自分なりの理解を確認する光秋に、藤岡は静かに応じる。

(会議の後から何か引つかかっていたんだが、さつきようやくこの話を思い出してな)

「……………ああ」

言われて、会議の後、待機室へ向かう途中の藤岡が思案顔を浮かべていたのを思い出す。

「でもそうすると、いよいよ予知の原因が何かわからなくなりませんか？原因が現場の外からやつてくるって……………それこそ渋谷は人の往来が激しい土地ですよ？」

(それも承知している。その点についてはこれから本部に進言するところだ。その前に

俺の方でも考えを整理したくてお前に連絡したんだが。手間をとらせたな)

「あ、いえ……」

詫びに啞然と応じると、藤岡の方から電話は切れる。

「……………」

すでに何も聞こえてこなくなった携帯電話を眺めながら、光秋は今回の予知を知らされて以降、最も途方に暮れている自分を自覚する。

—原因が外からやってくるかもしれないって……いよいよ何でも起こり得るってことじゃないか。それこそ手頃な大きさの隕石が高層ビルを直撃して、倒壊なり破片が道にばら撒かれるなりすれば、それこそ死者数十人なんてあつという間に成るぞ。どうすればいい……………?—

胸の内に投げかけられた問いに答えてくれる声はなく、困惑の視線をなんとなく空へ向ける。

「おーい、光秋!」

「光秋——加藤主任?」

「……あ。ああ、すまない。今行く」

桜と董の呼び掛けにどうにか気を取り直すと、握ったままだった携帯電話をポケットに戻してパトカーへ乗り込む。

しかし生じてしまった困惑は早々消えず、窓越しに空を眺めることは変わらなかった。

—原因は何だ？何処から来るっていうんだ？—

藤岡との電話から10分程経った頃。

次の調査場所に移動した光秋は、北大路が地面に手を着いてサイコメトリーを行う横で、視界に収まる限りの空を落ち着きなく眺めていた。

「……………あの、加藤主任」

そんな時、控えめな董の声がかかる。

「さっきの電話で、なにかありましたか？」

「なにかって？」

あてどなく上空を見回すのを一旦やめ、光秋は隣の董に顔を向けながら訊き返す。

「その……………さっきからなにか焦っているというか、困っているというか……………もちろん今朝からそんな感じはありましたけど、さっき誰かと電話で話してから、それが強くなったというか……………」

……………いかな。事情がどうであれ、子供にこんな顔させて—

応対こそどこかぎこちないものの、こちらのことを心底心配していると明瞭に物語っている董の表情に、そんな顔をさせてしまったことに情けなさを覚えた光秋は、それでかえって落ち着きを取り戻す。

「別に大したことじゃないよ。ただ、藤岡主任からちよつと気になる話を聞いて……」
「気になる話って、なんですか？」

「いやさ………」

董の問いに、光秋は先程聞いた予知出勤のことを話す。

特に声の大きさに気を配っていたわけではなかったせいか、ひと通り話し終えると、少し離れた所に停まっているパトカーの助手席の窓から身を乗り出した徳川が言ってくる。

「そういえば何年か前にあったな、そんなこと。で、さつきから空ばっかり見てるのはその影響か？」

「……………見られちゃってましたか……………」

「旅客機」という単語のせいとか、電話が終わって以降、空に意識を向け過ぎていることを薄々自覚し始めていた光秋は、その指摘に気まずさを覚える。

——『旅客機』……………つまり『飛行機』と聞いたせいか、どうしても空ばっかり見てるよなあ……………この先入観というか、意識の偏り、まさに「今の人」だな……………——

それはますます光秋の気まぐさを増幅させ、自分の認識のあり方に情けなささを感じてしまう。

「まあ、だからというか、どうにもきつきから空にばかり目が行ってしまつて……でも、今の話で言いたかったのは、きつとそういうことじゃないんですよね。それこそ予知の原因はどこから来るかわからないから注意しろつて、そういうことなんでしょう。でもそうになると、いよいよどう対処したものかつて……………」

何度目かの自問を声に出して徳川たちに投げかけると、いよいよどうしたものかと頭を搔く。

「…………えつと…………その……………」

その様子に、董はなにか言おうとして言葉が見付からず、顔を俯けて言いよんどんてしまう。

と、

「あのー、ちよつといいかな…………？」

「…………どうした？」

どこか居心地の悪そうな桜が遠慮がちに手を挙げ、光秋は搔いていた手を下ろしながら応じる。

「結局さ、光秋つて何に困つてるの？」

「いや、だから、何が原因で予知された事態が発生するのかって。その原因がいよいよわからないって話」

「だから、それを調べんのが今のアタシらの仕事なんだろう？アタシらっていうか、殆ど菊だけだよ」

「いや、それはそうなんだけど……」

「ここに来て、何故か根本的な部分で話を通じなくなつた桜に先程までとは質の異なる困惑を覚えながら、光秋はどうにか説明文を組み立てる。

「つまりな、この方法で原因を突き止められるか、いよいよ確信が持てなくなつてきたってこと。それこそ藤岡主任から聞いた話みたいに、発生直前に現場の外から突然やつて来る可能性もあるわけだし……」

「それだつてさ、光秋来る途中に言つてたじゃん。調べてる途中とか、遠くで予知の原因が起こつた時は、アタシと董で対処するって」

「まあ……確かにそう言つたけど……」

言われて、光秋は藤岡との電話以降失念していた渋谷へ向かう道中で出した指示を思い出す。

「でも、柏崎さんの力で対処し切れる事態かどうか——」

「心配すんなってッ！」

言いかけた不安でいっぱいな言葉を、桜の活気溢れる声が掻き消す。

「こっちはレベル9のサイコキノだぜ。大抵のことはどうにかなるよ！それこそデカイ飛行機が落ちてきたって、アタシなら一人で受け止める自信あるし」

「隕石ならボールみたいに宇宙に打ち返したりね」

「隕石？んーまあ、そうだなー！」

——北大路さんめ……さっきの想像「聞いて」たな——

いつのまにかサイコメトリーを終わっていた北大路の唐突な言葉に、桜は首を傾げながらも胸を張って応え、話の出所を察した光秋は少し睨む。

「そりゃあ、DDシリーズとかいう黒い連中が来たら流石にあれだけど………そんなときや光秋と一緒にやればなんとかなるさっ」

「……………一緒に……………」

何の気なしに発せられたその一言に、光秋は先程まで張り詰めていた気がみるみる弛んでいくのを感じる。

「……………それもそうかあ……………」

気が付けば知らぬ間に張っていたらしい肩の力が抜け、数瞬前に比べて遙かに軽くなった体から脱力の声が漏れる。

「考えてみれば、この先何が起こるか分からないなんて、寧ろ普通なんだよな。今回は、

『少なくとも今日中に大規模な事件が起こる』ってことが漠然とわかっただけで。それこそ、突然警報が鳴って慌てて出動したり、演習と思つて行ったら敵が乱入してきたり、家で寛いでたら地震に遭つたり……そういうのと実はそんなに変わらないんだよねあ………」

こちらは「DDシリーズ」という単語の影響か、連想されるこれまで遭遇した予想外の事態を次々挙げていくと、いよいよ胸の内まで弛緩していくのがわかる。

「いや、すまない。初めての主任としての予知出動つてことで少し……いや、大分気張つてみたいだ。やることはいつもとそんなには変わらないんだよね。遭遇した事態、目の前のことに全力で対処するつてことではさ……ありがとな、桜さん」

「ーちよつ、撫でるなあつー」

礼を言うと同時に、光秋の右手は自然と桜の頭に置かれ、当の桜はみるみる顔を赤くする。

「……むう」

それに比例するように、隣でその様子を見ている董の頬が徐々に膨らんでいく。

それを見て、光秋の左手が董の頭に置かれる。

「董さんもありがとな。心配してくれて」

「ーえっ？ いえ、その………と、当然です！ 加藤主任は、私たちの主任なんですから！」

「……君たちの主任、か……だな。ありがとう」

途端に顔を赤くしながら告げられた董の言葉を胸の中で噛み締めながら、光秋は撫でる手に一層力を込めながら改めて礼を言う。

「どうやら、悩みは解消したようだな」

「……すみません。お手間をとらせて」

微笑みながら言う徳川に、桜と董から手を離れた光秋は時間を食ってしまったことへの気まずさを覚えながら頭を下げる。

「ま、初めてのことでテンパるのはよくあることさ。俺もそうだったし」

「そうそう。初めての職務質問で危うくケンカになったりねえ」

「なっ！羽柴それは……！」

「ははあ………」

思わぬ暴露を行った羽柴に慌てる徳川を見て、光秋は苦笑を返す。

「……まあ、とりあえず……北大路さん、ここに異常は？」

「特にありませんでした」

「わかった。じゃあ次だな」

「その前に、ちよつと早いけどお昼にしない？アタシお腹空いた」

桜に言われて、光秋も自分の腹に意識を向けてみる。

「だな。区切りもいいし、今の内に食べちゃうか。羽柴さん、すみません。近くのコンビニに寄ってください」

未だ徳川に睨まれている羽柴に声をかけながら、光秋は少女たちとパトカーに乗り込んだ。

先の調査場所から少し行った所にあるコンビニ。一行を代表してそこに向かった光秋と董は、みんなの注文を書いたメモを片手に昼食を買っていた。

「えっと、お茶におにぎり、コーラにサンドイッチ……」

「よし、揃ってるな」

董と一緒にカゴの中身をメモと照らし合わせ、買い忘れないことを確認すると、光秋はそのままレジに向かう。

昼時とあつてか店内はそこそこ混んでおり、しばし並んで待つことになる。

「予想はしてたが、やっぱり混んでるな……」

「そうですね……」

「こりゃあ、桜さんの機嫌がますます悪くなるかな……？」

「……そう……かもしれませんね……」

未だ先の長いレジを眺めながら、買い物に行く前の桜を思い出してぼんやりと呟く光秋に、董がわからなくもない様子で応じる。

—董さんと2人で行くと言ったら、『アタシも行く!』って聞かなかったからなあ。理由——買い物に3人もいらないうことと、買い物中に何か起こったら董さんのテレポートですぐにパトカーに戻るようにすること、その時桜さんはすぐ動けるように外で待機していてもらわなきゃいけないこと——を説明したら、嫌々ながら納得してくれたようだったけど……我が強いところはあるけど、あれはどつちかというと『幼児の駄々』って感じだったよな。何でだろう……?——

買い物前の桜の様子を思い返して改めて考えてみるものの、結局その胸中を察することとはできなかった。

その間によろやくたどり着いたレジで会計を済ませると、董と共に速足でパトカーへ戻る。

「お待たせしました」

「ご苦労さん。ほれ、コレ」

ドアを開けた光秋を労いながら、徳川が買い物に行く前に預けておいたカプセルを渡してくる。

「ありがとうございます」

礼を言つて受け取つたソレを内ポケットに戻すと、光秋の脳裏に先日曽我との模擬戦の記憶が過る。

——緊急時にはテレポートで戻る——といっても、コレを落としてきちゃ、話にならないからね——

思い浮かぶのは、カプセルの超能力耐性を失念してテレポートを行い、さらには落としてしまったソレに躓いて我ながら無様な敗北を喫したこと。それ故に自戒の効果は強く、今回のように超能力との併用は以前よりも慎重になつたところがある。

「えーと、徳川さんは鮭と辛子明太子のおにぎり、あと緑茶で、羽柴さんはホットドッグとカフェオレでしたよね」

言いながら、光秋はビニール袋から出した昼食を頼んだ者たちに渡していく。

「ほれ、柏崎さんたちも」

前部席の徳川たちに渡し終えると、そのまま後部席の董に袋を手渡す。

「……これって」

受け取つた董が中身を配る傍ら、袋の中を覗いた桜は、誰も頼んでいないチョコレートや飴玉など、数種類の菓子の袋が入っていることに気付く。

「ああ。休憩の合間になにか摘まめたらと思つてさ。僕も甘いものが欲しいと思つてたし。品揃えは董さんと相談して決めた。後でよかつたら食べて」

その様子を見て光秋が説明をする間にも、羽柴運転の下にパトカーは再び走り出す。

「ま、桜さんが思ったより怒ってなかったのは、よかったかな……」

戻ってきてから微かに尖った目付きだった桜が、菓子袋を見て薄っすら微笑んでいるのを見て、光秋は小さく安堵した。

昼食を兼ねた移動を終えると、光秋一行はサイコメトリーによる調査を再開した。
しかし、

「ここもダメだったか……」

移動と小休止を挟みながら調査を続けるものの目ぼしい成果は出ず、間もなく午後2時を指そうとしている腕時計を一見しながら、光秋はさつきほどではないが再び焦りを抱きつつある己を自覚する。

そんな時、再び携帯電話が振動する。

「涼さん？すみません。ちよつと」

これまた予想外な相手に意表を突かれつつ、徳川たちに断りを入れて通話ボタンを押す。

「もしもし？」

（光秋さんですか。今少しよろしいでしょうか？）

「いや、今仕事で外に出てて……」

（渋谷の予知出動ですよね）

「よくわかったな」

現状をぴたりと当ててみせた涼に、光秋は軽い関心を覚える。

（私もその件で本部に来ていて。受け付けで訊いたらいらないと言われたので、もしかしたらと）

「なるほど……渋谷の件で本部に来たってことは、涼さんも何か予知したのか？」

涼の返答に、光秋は涼が予知能力者であり、その方面でESOにも協力していることを思い出して、少し興味を持つ。

（はい。すでに予知部の方には報告したので、じきに光秋さんたちにも連絡が行くとは思うのですが……その……早めに伝えた方がいいかと思ひまして）

「それは助かるつ。是非教えてくれ」

歯切れの悪さが多少気になったものの、新しい情報が手に入る機会を前にして、光秋は気持ちを抑えながら涼に先を促す。

（私も大まかなイメージしか視ていなのですが……橋が崩れるところが視えました。そしてたくさんさんの車がそれに巻き込まれて……）

「橋?.....ああ、車ってことは、もしかして陸橋か?」

(おそろく)

「でも、渋谷に陸橋……? 確認するが、本当に今の渋谷の件に関する予知なんだよな?」
(それは断言できます。この光景は渋谷で起こる、その可能性が非常に高いって……何でそう思うのかと訊かれると、説明しづらいのですが………)

「予知能力者の直感ってやつか……」

言いづらそうにしている涼に、光秋は返事代わりに感じたままを言ってみる。

「にしても、橋が崩れるイメージか……他には?」

(それで全部です……すみません。さすがに漠然とし過ぎてますよね……)

「いや、正直行き詰ってたところに、新しい情報が入ってきたんだ。これを参考にすれば、何か進展があるかもしれない。少なくとも、ないよりずっといい。わざわざ連絡くれてありがとう」

申し訳なさそうにする涼に対し、光秋は詰りが取れたようなすつきりとした顔で礼を言う。

(それならよかったです。では、私はこれで。お仕事頑張ってください!)

「ああ。そっちもな」

数瞬前とは打って変わって嬉しそうな声で言う涼に応じて電話を切ると、光秋は徳川

たちの許へ速足で向かう。

「すみませんお待ちせして。ちょっと地図出してもらえますか」

「これか？」

詫びながら頼むと、徳川が車内に置いていた担当場所の描かれた地図を手渡してくれる。

「ありがとうございます」

札を言いながら受け取ると光秋は地図を広げ、涼が言っていた陸橋のある辺りを探してみる。

「なにやってんの？」

「ん。区内の陸橋のある場所探してるんだよ……と言っても、この地図見にくいな」

桜の問いに地図から目を離さずに応じるものの、道の細さに苦言を零す。

「この辺で陸橋っていったら、山手線だな。それがどうかしたのか？というか、さっきの電話誰からだよ？」

「ああ。予知部に協力している人に知り合いがいて、その人から教えてもらったんです。橋が崩れるところが視えたって……あ、これか」

徳川の問いに応じながら山手線を示す線を指でなぞっていくと、確かに道路と交差している箇所をいくつか見付ける。

「僕らの担当場所から少し外れるな……」

「なら、その辺担当してる班に連絡して、調べてもらうか？」

「……………」

位置関係の把握と徳川の提案に、光秋はしばし逡巡する。

― 普通なら徳川さんの言う通りだろうけど、いかんせん情報が曖昧だしな。もちろん、もう少しすればさらに集計された詳しい情報が入ってくるんだろうが、その前に事が起こる可能性もあるわけで……………」

中途半端な情報で他者を振り回してしまうかもしれない不安と、涼の協力に応えたい思い、こうしている間にも予知が実現してしまうかもしれない恐怖。いずれも独自の質量をもった気持ちを胸の内に渦巻かせることしばし、光秋は結論を告げる。

「いえ、それなら僕らで行きましょう。確かに担当場所は外れるけど、陸橋周りを少し見てくるだけだし。何も無いようならすぐ本来の仕事を再開すればいいでしょう。それで周りに何か言われたら、僕が受けますので」

「新人がナマイキ言ってるじゃねーよっ」

「……………すみません」

言うや徳川に小突かれるものの、それで方針が固まった一行は、手始めに一番近い陸橋と道路の交差点へ向かう。

「ところで加藤主任。電話の相手って、涼さんですよ？電話に出る前に名前呼んだのが聞こえましたけど」

「そうだけど……？」

走り出してすぐに訊いてくる董に、光秋はその意図を図りながら頷く。

「……確か、あのメガネの女の人だね？この前光秋と一緒に歩いてた」

「加藤主任な。そうだけど？」

呼び方に訂正を入れつつ質問してきた桜に応じると、その顔は少し膨れてくる。

「へー、そう。ふーん………」

「……………」

「？」

それに合わせるように董の顔からも僅かだが活力が抜けていく様子に、光秋は首を傾げる。

「だから、女の扱いには注意しろっての……」

「？」

藪から棒に先日の飲み会で出た言葉を呆れ気味に呟いた徳川に、光秋の首の角度はさらに深くなった。

十数分程走ると、ビル群の只中に2車線道路を跨いだ陸橋が見えてくる。

交通の妨げにならないように少し手前で停車すると、光秋は北大路を連れて陸橋の下に向かい、着くと早速サイコメトリーが開始される。

「……どうだ？」

「ざっと調べた限り、特に異常は感じません」

「どこか脆くなつてるとか、傷が入つてるとかは？」

「ありません」

「そうか……」

北大路の返答に、光秋は頭上に架かる陸橋を見上げながら呟くように返す。

「まあ、候補地は他にもあるしな。次行ってみよう」

「了解」

気を取り直して告げると、北大路と共に速足でパトカーへ戻る。

「ここは違うみたいです。次お願いします」

「了解」

乗り込むと同時に告げるや、応じた羽柴は陸橋に沿うようにパトカーを走らせ、少しして2か所目の車道との交差点に差し掛かる。4車線の上に架かる、先程よりも広々と

したものだ。

ここでも邪魔にならない位置で停車すると、光秋と北大路は陸橋の下へ向かい、サイコメトリーを行う。

「……………どうだ？」

「……………こも、特に異常は感じません」

「そうか……………」

簡単には原因に辿り着けないとは思っていたものの、2度目の空振りに、光秋はつい落胆の声を漏らしてしまう。

「——いかにいかに。また焦ってるな。さっきも言ったように、候補地は他にもあるんだ

——

気を取り直して「次へ行こう」と声をかけようとしたその時、路上に手を着いた北大路が目の前を通り過ぎて行ったスーツ姿の女性を目で追っているのを見る。

「……………あの人がどうかしたか？」

その視線を追って、光秋も陸橋の下の歩道を歩いていく女性を眺めながら訊ねる。

「いえ、他に何か手掛かりがないかと思ってもう一度サイコメトリーを始めたら、すぐにあの人が近くを通りかかったんですけど……………なんか、具合悪そうだなって」

「……………言われてみれば」

北大路の答えに改めて女性に目を凝らすと、その足取りがどこか危うく、時折体を屈めて咳込んでいることに気付く。

——出勤したはいいいものの、思った以上に具合が悪いから早退して家に帰る途中つて、そんなところか？僕も秋に似たようなことあったけなあ……風邪ひいた時の帰り道つて、普段よりずっと長く感じるんだよなあ——

女性の状況を当てずっぽうで勝手に推測しつつ、これまた勝手に数力月前に自分が陥った状況、その時に感じたことを重ねていた、その時、

「!?」

ひと際激しい咳に見舞われて女性が蹲^{うずくま}ると同時に足元に微かな振動を感じ、光秋は反射的に身構える。

「地震かつ?——!!」

言った直後、蹲った女性を中心に路面に亀裂が走り、それらは瞬く間に四方へ広がっていく。

「なッ!?!」

「行っちゃダメッ!」

あまりの事態に絶句しながらも女性に駆け寄ろうとした光秋の背中に、路面に手を着いた北大路の悲鳴に近い声が投げかけられる。

「あの人、念力が暴走してます！迂闊に近付いたら巻き込まれる」

「暴走？ッ！」

言う間にも亀裂の一本が陸橋を支える柱に迫るのを見るや、光秋は脊髄反射で後ろのパトカーに向かって声の限りに叫ぶ。

「董さん！あの人をテレポート！橋から離せっ！」

「はいっ！」

返事と同時に、窓から顔を出していた董は女性をパトカーの近くに跳ばすが、今度はその周囲の路面が割れていく。

「桜さん！その人の周囲を念壁で覆って！その人の念力を押さえ込んでっ！」

「オウっ！」

直後に光秋は桜に指示を飛ばし、パトカーから降りた桜が女性に向けて両手をかざすと、四方に広がっていた路面の破損が止まる。

それを見るや、助手席から降りた徳川がパトカーの後部から携帯用Eジヤマーを持つてくる。

「これで……」

言いながらEジヤマーを作動させた徳川は、それを持って慎重に女性に近づく。

「桜さん、念壁を解除。その場で待機して」

「了解っ」

徳川の様子を見てそう指示を出しながら、光秋も北大路と共に女性に駆け寄る。

「大丈夫ですかっ？」

「……………」

そう声をかけた女性は力なく徳川に抱きかかえられ、応じる代わりに焦点の定まっていない目を向けてくる。

「ひとまずEジャマーで念力は封じた。といつても、暴走そのものが終わったわけじゃないけどな。それにこの人、凄げえ熱だぞ」

「えっと、こういう場合は……………」

代わりに徳川が応じ、赤い女性の顔を見て具合が悪いことを改めて確認しながら、光秋は研修で習った超能力が暴走した時の対処法を思い出そうとする。

その間にも光秋たちが来た方向から、Eジャマーを積んだESOの装甲車と数台のパトカー、そして救急車がサイレンを響かせながら走り寄ってくる。

光秋たちが乗ってきたパトカーの後ろに停まるや、車から降りてきたESOの職員たちが女性の許に駆け、カバンから出した無針注射器を首筋に押し当ててる。

「あれはっ——」

その様子にな光秋は、注射器の中身が脳にある超能力中枢の働きを抑制する薬品であ

り、一連の行為が超能力の暴走に居合わせた時の基本的な対処法であることを思い出します。

注射器を離れた女性が糸が切れた様に項垂れると、後ろに控えていたストレッチャーに乗せられ、すぐに救急車に運ばれていく。女性を乗せた救急車はサイレンを響かせる、そのままESOの車を伴ってやって来た方向へUターンしていく。

そしてその一方で、パトカーから降りた警官たちが陸橋の周囲を封鎖し、交通整理を始めていく。

「……これで一件落着……てことでしょうか……？」

「さあな。予知がどうなったか、本部に照会してみろよ」

「そうします」

徳川の返事に、光秋はすぐに電話をかけ、予知の状況を訊ねる。

「……………承知しました。ありがとうございます」

電話の向こうから告げられた報告を肅々と受け入れて通話を切ると、再び徳川たちを見る。

「予知、消えたみたいです。ほんの1分くらい前に」

「……………てことは、これが予知の正体……？」

「そういうこと……………なんでしょうね。タイミング的に……」

応じた徳川の視線を追って、光秋も改めて陸橋の下を見る。女性が蹲っていた所を中心に蜘蛛の巣状の亀裂が深々と刻まれ、その内の一本があと数センチで陸橋の柱に達しようとしている光景に、今更ながら薄ら寒さを覚える。

「お前はいつぱいいつぱいで気付かなかったみたいだけどな、ちょうど女の人を橋の下からテレポートさせた時、上を電車が通って行っただよ……」

「……そう……なんですか……」

何かを合点し、それ故に恐怖を覚えたらしい徳川の呟きに、光秋も深い共感を覚えながら応じる。

——もしあのヒビが柱に届いて崩れたら……あと数秒長くあの人が橋の下にいたら……なるほど。数十なんて人数、余裕で達するわけだ——

崩れた陸橋から走行中の電車が勢いのままに落ち、橋の瓦礫と共に下を流れている車列を巻き込んでいく。そんな光景を脳裏に思い浮かべ、体中を強烈な悪寒が襲う。

と、背後から羽柴の声がかかる。

「おーいっ。今東京本部から連絡がきて、調査に行った班は一旦戻ってこいってさ」

「……この事後処理は？」

「私がさつき連絡して、引き継ぐって。現に今何人か来てるでしょう」

陸橋の下を指さして訊ねる光秋に、羽柴は車載通信機のマイクを示しながら応じる。

「わかりました」

領くと光秋はパトカーに戻り、徳川と桜、北大路もそれに続く。

全員乗ったのを確認すると、羽柴はパトカーをＵターンさせ、本部へ向かう。

――終わったあ……………――

パトカーが走り出すと、昨日からの肩の荷がようやく下りた光秋は一気に安堵し、脱力した体を背もたれに預けた。

108 平手の音

しばらくして疲労がある程度引いた頃、隣に座っている董が声をかけてくる。

「遅くなりましたけど、お疲れ様でした」

「ああ。董さんもな……」

かけてくれた労いの言葉に応じると、そつぽを向いた桜がぽつりと呟くのが聞こえる。

「アタシだって……」

「桜さんもお疲れ様。最後の方、決めてくれたな」

「！べ、別に、アンタに言われた通りにしただけだし……」

光秋なりの誉め言葉をかけると、桜は何故か居心地悪そうな顔で視線を外に逃がす。

「？あつ、そうそう。北大路さん——」

そんな仕草に首を傾げつつ、光秋は北大路にも声をかけようとする。

が、

「[[[:]]」

直後に轟いた爆音が続く言葉を掻き消し、車内は騒然とする。

「お、おいつ。あれ！」

「……煙ですか？」

すぐに周囲を見回した徳川の視線を追って、光秋もビルの陰から立ち上る黒煙を捉える。

「えっ？何で!? 予知は阻止したんじゃない?」

「いや、もうとつくに渋谷区は出た。これは予知とは関係ないんじゃない?」

戸惑う桜に羽柴が応じる間にも、ビルの向こうから散発的な銃声が響く。

「とにかく、行ってみましょう」

「だね。飛ばすよッ！」

光秋に応じるや、羽柴はサイレンを鳴らして黒煙の立ち上っている辺りにパトカーを向かわせる。

最寄りの十字路を左に曲がり、向かう方向から逃げてくる人波や車列とすれ違う。少し走った所で右折して4車線の大通りに入ると、2基のEジヤマーを積んだトレーラーを中心に銃器を持った30人程の人々と3機のフラガラッハが展開して、正面の8階建てのビルに銃撃を仕掛けている光景があった。

ビルの4階部分からは黒煙が上がり、こちらからも所々から応戦の発砲、あるいは机やロッカーの投擲が行われている。さらに目を凝らせば、銃撃の多くはビルに届く直前

に見えない壁に弾かれていた。

「これって……」

「フラガラツハってことは、路上の人たちはNPか？それが攻撃を加えてるってことは……重量物を投げる戦法や念壁を張っているとところを見ても、ZC？」

ひと段落後の唐突な銃撃戦に葦が絶句する傍ら、光秋は戦闘を交える一団を推測する。

「とにかく止めないと！パトカー止めてください」

「あ、ああ」

応じるや、羽柴は十字路付近の路肩に停車し、歩道に降りた光秋は隠れる様にパトカーの後ろに移動すると、正面にニコイチを出現させる。

路上、ビル内共に目の前の相手に精一杯なためか、攻撃されることなく無事コクピットに乗り込み、起動させると、ニコイチの頭部を足元のパトカーに向け、左耳の通信機を繋ぐ。

「車内、聞こえますか？」

（ああ。聞こえてる）

徳川の声が応じる。

「今から双方の鎮圧に向かいます。柿崎さんは本部に戻ってEJCを3つ取ってきて。」

柏崎さんはソレを受け取り次第鎮圧に加わる。北大路さんは別命あるまで車内で待機。その間は徳川さんと羽柴さん、お願いします」

言うことを言うと言光秋は膝を着いていたニコイチを直立させ、徒歩で銃撃戦の許へ近付いていく。

ビルの上空に3機のヘラクレスがテレポートしてきたのは、まさにその時だった。

「ヘラクレスまでっ?」

周囲に倉庫らしき建物はなく、これ以上の戦力増加はないという油断していた光秋にとって、メガボデイの追加出現は完全に不意打ちだった。

「ー」

動揺している間にもヘラクレスの1機が手に持ったマシンガンを路上に向け、反射的にNクラフトを噴かして射線上に割り込んだ光秋は、ニコイチに銃撃を浴びせられながら外部スピーカー越しに叫ぶ。

「こちらはESO東京本部であるっ。双方武器を収めて、投降しろっ!」

叫んですぐ、返事代わりと言わんばかりにビルから投げ込まれた机がニコイチの右頬の辺りに当たって碎ける。

直後にヘラクレスの1機が左側の路上に降り立ち、足元から放たれたロケット弾やフラガラッハのマシンガンを念壁で防ぐ。

—反撃の気配がない?……………!—

受け身に徹しているヘラクレスに首を傾げたのも一瞬、3機目のヘラクレスが地上に降下したのを視界の端に捉える。

そのヘラクレスは機体前面に念壁を張って迫る銃撃を防ぎ、腰部の両脇に増設された大型推進器の推力に物をいわせて突撃する。途中で妨害を試みたフラガラツハを撥ね飛ばしてEジャマーに肉迫すると、すれ違いざまにマシンガンを叩き込んで2基とも粉砕する。

—やられたっ!—

NP側が仕掛けたものとはいえ、超能力に対する抑制を失ったことに光秋が内心舌打ちすると、機外からもそれに合わせる様に動揺と殺気の声が聞こえてくる。

(Eジャマーがつ!)

(不味いぞっ!?)

(今だッ!一氣にたたみかけろ!)

(NPの奴ら、よくもやってくれたなッ!)

叫びと同時に、路上のNPたちは蜘蛛の子を散らす様に逃げ惑い、ビル内にいたZCたちは猛禽類の様にその頭上を飛び交う。

—さつきまで拮抗状態だったのに、Eジャマーを失った途端にこんな一方的な

.....

捕食者と化したZCと、狩りの獲物となったNP。眼下で繰り広げられる光景にそんな印象を抱いて、光秋は戦慄する。

そんな中、外れた念が隣のビルの壁を砕くのを目撃する。

「!？」

よくよく周りを見渡せば、周囲のビルの中には未だ多かれ少なかれ人がおり、拡大映像に映る表情はいずれも恐怖で引き攣っている。

——考えてみれば、今は平日の昼過ぎ、まだまだ働き盛りの時間帯じゃないか！——

思う間にも、2機のフラガラッハがマシンガンを闇雲に連射し、ばら撒かれた弾や葉莢が周囲のビルや路上を傷付ける。

「やめろッ！まだ避難していない人が大勢いるんだぞ!!」

（そんなこと言ってる場合か！Eジャマーが壊れた！奴らを抑えられる力がなくなつたっ！）

咄嗟に近い方のフラガラッハに取り付いてマシンガンを下に向けさせながら怒鳴ると、相手からは悲鳴混じりの声が返ってくる。

——ああ、こういうのを『錯乱』っていうのか……——

こんな時でも妙に覚めた部分でそんな感想を呟いた矢先、念力でマシンガンを爆破さ

れたもう1機のフラガラツハが衝撃に押されて背後のビルに倒れ込む。

——いかんっ——

思ったものの目の前のフラガラツハから離れることもできず、瞬く間にその背部がビルに迫る。

その時、

（倒す方向くらい考えろッ!!）

EJCを背負って飛んできた桜がビルに触れそうだったフラガラツハを念力で支え、そのまま仰向けに横たえると、近くで念の弾を放ちながらNPたちを追い詰めているサイコキノに突進する。

（やっと思知出動が終わったていうのにッ!!）

叫びと共に勢いの乗った頭突きをその背中に叩き込み、不意を突かれたサイコキノはその場に倒れ込む。

直後、四方から無数の念力や銃弾が迫る。

（知るかよ！ESOの飼犬がつ！）

（くッ……!）

それらに加えて怒声を浴びせられながら、桜は周囲を念壁で囲って攻撃をやり過ごす。

「桜さん！」

その様子を見るや光秋は正面のフラガラツハを見据え、マシンガンの発砲が止まつて
ることを確認する。

——今っ！——

思うや、それまで下向きに押さえ込んでいたマシンガンを勢いよく上に上げ、がら空
きになったフラガラツハの胸部に右蹴りを入れて突き飛ばすと、勢いに負けて手から離
れたマシンガンを折って桜の許へ滑る様に向かう。

「柏崎さん！飛べっ！」

叫ぶと同時に桜のいる近くに右拳を打ち込み、生じた激震に足を盗られたZCたちの
攻撃が束の間止む。

（！・）

巨大な拳が地面に触れる直前に桜は飛び立つと、そのままニコイチの腕とすれ違う様
に上昇し、頭部の角に跨る。

「無事かつ？」

（オウッ！）

元氣な返事にひと安心しつつニコイチを上昇させ、距離をとった所から下を俯瞰して
みる。

フラガラツハは3機とも動きと止め、NPのメンバーたちはなけなしの反撃を行いながらもZCの念力、あるいはヘラクレス3機の巨体から逃げ惑っている。よく見ればZCのビルの後ろの2車線道路でも同じような光景が繰り広げられ、逃げるNPとそれを追うZCによって戦闘域は少しずつ広がり、周囲一帯がその余波で少しずつ壊されていく。

——一応はZC優位といったところか……もつともこいつら、超能力が自由に使えるようになったのをいいことに遊んでるな——

念の弾をわざと外して追い立てたり、ヘラクレスの脚部を振って足蹴にしたり、相手をいたぶるようなZCの戦い方に、戦闘の恐怖を押しやるように苛立ちが募っていく。

——状況を見るに、仕掛けたのはNPの方だろう。だから、彼らが酷い目に遭うことはまだわかる。ある種の自業自得だろうさ。でも、こんな時間のかかる戦い方をすれば、その分周囲への被害も拡大する。ZCの人たちはそのことを解っているのか？——

思った矢先、混戦から少し離れた所に停まっていた空のトレーラー——状況からしてフラガラツハを運んできたもの——が徳川たちの乗ったパトカーの方向へ走り出し、少ししてそれに気付いたEジャマーを破壊したヘラクレスがサイコキノ2人を連れて後を追う。

荷台に乗り込んだ者たちが自動小銃を撃ってくるが、ヘラクレスのパイロットが張つ

たらしい念壁によつてそれらは弾かれ、返しとばかりに肩回りに浮かんだサイコキノ2人が念の弾を撃つてくる。狙いが甘いのか、狩り立てて楽しんでいるのか、念はトレーラーに当たることなく進路上の路面を穿ち、それらを避けようと蛇行したトレーラーが路上に面したビルのガラスや標識の看板を砕きながら進んでいく。

―思つたそばからっ！―

思ふや光秋はパトカーを見やり、通信を繋ぐ。

「柿崎さん、戻つてゐるか？」

（はいっ。ここにいますっ）

応じるや、窓から身を乗り出した董が手を振ってくる。

「悪いがもう一度本部に行つて、今度はEジャマーを取つてきてくれ。なるべく広範囲のやつ。とにかく超能力を封じないことには収拾がつかない」

（わかりましたっ！）

（念の為俺もついて行く。さつき本部に連絡入れたから、もう少しで応援も来ると思うが）

「わかりました」

董に続いた徳川の報告に応じると、光秋は角の上の桜を見やる。

「とりあえずあのトレーラーと、追いかけてるヘラクレスを止めるぞっ」

（了解っ！）

返事を聞くやニコイチを急降下させ、ついにビルに突っ込んで動きの止まったトレーラーと、それににじり寄るヘラクレスとの間に割って入る。

「もう一度言う。双方武器を収めて投降しろ。従わない場合、実力を以って対処するっ」（やってみやがれッ！）

威圧を意識して告げた勧告に対し、ヘラクレスは挑戦的な怒声と共にマシンガンの連射で応じる。

同時に肩回りに浮かんでいたサイコキノ2人がトレーラーへ接近し、荷台に乗っているNPたちに手をかざす。

「柏崎さんっ！」

（！）

呼びかけと同時に桜は角からトレーラーの上空に移動し、トレーラーの周囲に張った念壁でサイコキノたちの念力を防ぐ。

（（!?!））

（お優しいウチの主任に——白い犬に感謝しな。そうでなきや誰がアンタたちなんか助けるかっ）

困惑の目を向けるNPたちに、桜が憎々しげに言ったその時、サイコキノの1人が拳

を握り締める。

(図に乗んなよ! ESOの犬がつ!)

叫びと同時に距離を詰めると、腰に引いた右拳を突き出し、念壁を貫いたそれは桜の胸に当たる。

(ッ!)

「!桜さんっ!」

痛みに顔を歪めながら桜は路上に落ち、それを見ながらもヘラクレスの銃撃を防いでいる光秋はその場から動くことができず、その間にももう1人のサイコキノがうすくま蹲る桜に指鉄砲を向ける。

—不味いッ!—

思った刹那、一瞬辺りが暗くなる。

(えっ!?) (何だ!?)

「!?」

それと同時に、それまで宙に浮いていたサイコキノたちが糸が切れた様に地面に落ち、その様子に光秋は周囲を精査する。

—念力が消えた? Eジャマー? 董さんが間に合った? 否、それなら連絡が入るはず。

それに今一瞬陰ったのは……………!—

周囲に目を巡らせながら逡巡していた最中、上空から複数の悪寒を感じ、見上げた先に上部4か所にパラシュートを広げた正方形の物体が3つと、その少し下に6機のフラガラツハを捉える。さらにその先には、輸送機らしい影が3つあった。

—NPの増援？さっきの陰はあの輸送機か—

状況を整理する一方、痛みから立ち直つたらしい桜を見てひとまず安堵する。

「柏崎さん、EJCをつ」

（わかつてる！）

応じながら桜は肩紐のスイッチを操作し、自分を殴りつけたサイコキノに勢いの乗つた頭突きを、指鉄砲を向けた方に念力を相乗させた突つ張りを入れてニコイチの頭部近くを上昇する。

「！」

ちょうどその時、途切れることなく続いていたヘラクレスのマシニングの連射が止み、ひと足に距離を詰めた光秋は左腕でマシニングを上払い、腰に引いた右手刀を突き出してヘラクレスの右腕を肩部から切り落とす。

右腕ごと武器を失つたヘラクレスは慌てて距離をとり、それと同時に桜が角に跨つてくる。

（NPの奴ら増えやがったよ！どうするっ？）

「落ち着け。少し様子を見る」

半分は自分に言い聞かせるつもりでそう桜に返すと、光秋は背部推進器を噴かしながら徐々に降りてくるフラガラツハの一団を改めて見据える。

—Eジヤマーのお陰で超能力の効果範囲が制限されたことはありがたいが……さて、どう来なさる……？—

思う間にもフラガラツハたちは路上に着地し、その内の1機から聞き覚えのある声が響く。

（援護する。展開中の同志は速やかに撤退しろ。勝手に動いた落とし前は帰還してからつけさせてもらう）

「……この声、赤坂の！」

怒りを押し殺しているようなその声は、赤坂迎賓館で初めて遭遇し、工場地帯でのDシリーズ戦でなし崩しに共闘したNPメンバーのそれだった。

同時に、こちらに歩み寄ってくる1機のフラガラツハが目につく。

—何だありや………？—

その手にしている装備に、光秋は束の間困惑した。他のフラガラツハが見慣れたマシンガンを持っているところを、その機は細く長い円錐にこれまた長い柄が付いた、中世の騎士が持っているような馬上槍を備えていた。

(……………槍?)

「僕にもそう見えるが……」

声色から、桜も自分と同じような顔をしているとわかった。10メートルの機械仕掛けの巨人が、自身の身長を少し上回る長大な槍を持って摩天楼の只中に現れるという光景は、非常時にあつても思わず反応に困ってしまうくらいシュールだった。

そんな槍持ちフラガラツハに向かって、ニコイチから距離をとっていた片腕のヘラクレスは突進していった。

(邪魔だ！ノーマルの雑魚がつ！)

怒声を上げて背部と両脇の推進器を勢いよく噴かすヘラクレスに、槍のフラガラツハは避ける素振りを見せず対峙し、その穂先を正面に向けてこちらもビルの合間を駆ける。

——サイコキノの機体に接近っ？自殺行為だ！——

いかにEジャマーの影響下とはいえど、EJCを内蔵しているヘラクレスに近付けば念力に捕まってやられてしまう。そうでなくとも、機体正面に張った念壁に弾かれて、最悪木端微塵に四散する。

そんな予測を抱いた直後、フラガラツハはそれまで槍に目が行き過ぎて見落としていた両腰部に増設された大型推進器——形からしてヘラクレスが装備しているのと同型

——を噴射してさらに速度を上げ、ものの数瞬でヘラクレスとの距離を詰める。

案の定穂先は念壁に触れ、両機の前進が一瞬止まった直後、

「ッ!？」

見えない壁に遮られていた穂先は前進を再開し、数メートルと進まない内にヘラクレスの上半身と下半身の繋ぎ目を貫いた。

腰から下を失ったヘラクレスは背部推進器の勢いのままにフラガラツハの脇を抜いていくものの、バランスを崩した機体は数秒後には左肩から路上に墜落する。

(……マジかよ? あんな槍で念壁貫いて……………)

「……………なるほど」

桜の方もフラガラツハの悲惨な末路を予想していたらしく、それが覆ったことが信じられないといわんばかりの声を漏らす一方、一連の光景を見た光秋はようやくフラガラツハの意図を察する。

(なんだよ?)

「さつき柏崎さんが喰らったサイコキノのパンチと原理は同じだ。広範囲に張った念壁は、一か所ごとの防御力がどうしても落ちてしまう。つまり、極一点に集中して強い力を掛けられると突破されてしまう。機体本体の推力を底上げして、得られたスピードをあの槍を通じて破壊力に変換、一点に掛かった力は念壁を突き破り、サイコキノ、もしくは

はそれが操る機体という『本体』を破壊する……と、こんなところか？」

自身考えを整理するために言葉にしてみたものの、そうして改めて得られた認識は槍持ちのフラガラツハ——そのパイロットに対する畏怖を抱かせるのに充分だった。

——一点突破って理屈は単純だが、実際やれるかというところと早々できるもんでもない。もし貫く力が足りなければ、自分の方が機体ごと弾かれてしまう。仮にその場に留まれたとしても、さつきも思ったように、迂闊に近付けば念力でやられる可能性だって高くなる——

思いつつ脳裏に過るのは、Eジヤマーが作動する前のNPたちが一方的に追い詰められる光景。手持ちの武器が効かないという絶望と、不可視の力でいたぶられることへの恐怖だった。

——それに加えて、——具体的な値こそわからんが——それだけの力を生み出す為に得た加速、当然パイロットに掛かる重圧も相当なものだろう。自分より格段に強い相手に対峙する恐怖と、肉体的な大きな負担、それらを乗り越えて、あの槍持ちのパイロットはこれをやってみせた……………

上下が泣き別れになったヘラクレスを改めて見て生唾を飲んだその時、ヘラクレスの胸部のハッチが開き、中から若い男性が這い出てくる。

それを頭部の単眼で捉えると、フラガラツハは槍を右肩に担ぎ、ヘラクレスの残骸に

歩み寄る。

（おいおい。人を雑魚呼ばわりしておいてもう終わりか？超能力に加えてそんな大口叩くもんだから、こつちもそれなりに期待したんだぜ。だらしねえなあ……）

スピーカー越しに落胆の声を漏らすと、フラガラツハは左手首のコブをハツチにもたれ掛かっているサイコキノに向ける。

—あれはっ！—

（やめ——）

そこに機銃が内蔵されていることを光秋が思い出したのと、桜の静止の叫びが銃声に掻き消されたのは同時だった。

（……………）

放たれた弾丸はハツチの縁——サイコキノの頭の数センチ横を掠り、僅かに欠けた痕を目にして顔色をなくしたサイコキノはその場に膝を着く。

（……………本当、だらしねえ）

その様子に落胆の色を強くして呟くと、フラガラツハはこちらを振り向く。

（お前はどうか？噂の白い犬）

「っ！」

言いながらフラガラツハは再び槍を構え、途端に全身を剣山で撫でられる様なヒリヒ

リとした痛みが襲ってくる。

「警戒しろ、柏崎さん。向こうはやる気満々のようだ」

（みたいだね……）

言うまでもないがと思いつつも注意すると、返ってきた桜の返事は、少し震えていた。

「……ッ」

自分も気を抜けば恐怖で動けなくなりそうな体に喝を入れ、ニコイチを身構えさせてフラガラツハの突撃に備える。

その時、槍持ちの後ろからもう1機フラガラツハが近付いてくるのを見る。

—もう1機——いや、アレは……っ!?—

増援かと思つた直後、拡大映像に近付いてくるフラガラツハの胸部が映し出され、開けっ放しのコクピットに収まる人影に、光秋は恐怖ではなく困惑から息を呑む。

「何で……北大路さんが……!？」

この数分前。光秋の指示を受けた董が徳川と共にテレポートした後。

パトカー内に残つた北大路は、自分たちの横を過ぎて行つたトレーラーと、それを追うニコイチを窓から眺めていた。

「……これ以上ここにいても巻き添えになるだけだね。北大路さんだっけ。一旦離れるよ」

「……離れる？」

収まる気配のまるでない周囲の争乱を見ながら告げる羽柴に、北大路は窓から顔を離すことなく訊き返す。

「そう。少し飛ばすから、シートベルト確認して——」

「それって、逃げるってことですか？桜ちゃんたちがまだ戦ってるのにつ」

言いながら振り返ったその顔は、怒りに歪んでいた。

「言い様によつてはそうなるかな。でも、私たちがこれ以上ここにいたって——」

「意味がありますっ！」

そう叫んだのと、車のドアを開けて外に飛び出したのは同時だった。

「ちよつと！北大路さんっ!？」

羽柴の静止も耳に届くことなく、北大路は一直線に横たわったままのフラガラッハに駆け寄る。

——『どんな時でも、選択肢が一つだけってことはないよ』……だったら——

先日の通り魔事件の際に光秋が言っていたことを脳裏に浮かべながら機体をよじ登り、仰向けになっている座席に体を収める。

「私だつてっ！」

言いながら操縦桿に触れると、フラガラツハの状態と動かし方が頭に流れ込んでくる。

——主電源は入ってる。ハッチは……開閉機構が爆破されて閉められないか。武器は両腕に内蔵された7・62ミリ機銃と腰に収納されてるナイフ2本だけ、他にも所々不調が出ているけど………私ならっ——

サイコメトリーによつて、手にした物の使い方は完璧に把握できている。自分にできないことはない。そんな自信の下に、得られた情報に従つて操縦桿やボタンを操作してフラガラツハを起き上がらせると、不調のせいか覚束ない足取りでトレーラーとニコイチの後を追ひ、少しして槍持ちのフラガラツハと対峙しているところに遭遇した。

近付いてきたフラガラツハのコクピットに北大路の姿を認めた光秋は、未だ困惑しながらも通信を繋ぐ。

「北大路さん、何してるっ？すぐに降りろ！いや、その前に距離をとつて——」

（私だつてっ！）

動揺のせいで上手く指示をまとめられない光秋を遮つて、北大路は乗っているフラ

ガラツハの右手にナイフを持たせる。

(私だつてできるッ!!)

叫ぶやフラガラツハを駆けさせ、同時に背部推進器を噴かして槍持ちに接近する。

そのまま右腕を伸ばし切り、手にしたナイフを未だ背を向けたままの槍持ちに切り付けようとする。

が、

(!?)

右脚を軸にした槍持ちは腰部の推進器を軽く噴射しながら独楽こまの様に翻つてそれかわし、的を失った北大路機は勢いのままにニコイチに突っ込んでくる。

「!!……………大丈夫かつ!!」

上体を逸らしてナイフをかわしつつフラガラツハの胸部を受け止めた光秋は、推進器の噴射が止まるのを見計らつてコクピットの北大路の様子を窺う。

改めてよく見れば、北大路はきちんと座席に座っているわけではなかった。もともと大人が座ることを前提にした席の前に方に引つ掛けるように腰を置き、長さの足りない脚を無理やりペダルに伸ばしている。機体の方も、至近距離での爆発に晒されたのか、右腕を筆頭に所々に深い傷がついており、右半身の数か所に大小の破片が突き刺さっている。機体の状態にしろ、乗り手にしろ、見るからに実戦に出していいものではなかつ

た。

「とにかく、そのフラガラッハを捨てて降りろ。さあ！」

厄介そうな敵を前に光秋も焦っていた。先程の返事も待たずに急かす声をかけると同時に、開けっ放しのコクピットにニコイチの左手を差し出して乗るように促す。

しかし、

（嫌です！）

「っ!!」

返ってきた拒否の言葉に、もともとの焦燥感も合わさって頭に血が上っていく。

「いい加減にしろっ！ワガママが通じる場面じゃないんだよ。いいから早く降りろ!!」

これまで抑えていたものが外れた遠慮のない怒声と共に、ニコイチの左手をコクピットに突き付ける。

（——言ったくせに）

「んっ？」

（選択肢は一つじゃないって、自分で言ったくせにッ!!）

光秋にも劣らない怒声を発するや、北大路はニコイチを突き飛ばし、再び槍持ちに向き直る。

「なっ！待て——」

たたらを踏みながらもかけた制止の声は推進器の噴射音に掻き消され、北大路の駆るフラガラッハは再び槍持ちに切りかかる。

今度もあつさりと避けられるものの、直後に北大路は機体を振り返らせ、再度向かい合おうとする。しかし、機体の不調か、操縦者の技術の問題か、その動きは戦闘中にあつてはあまりにも遅いものだった。

（キャッ！）

完全に振り返る直前、間合いを詰めた槍持ちは長柄の先で北大路機の胴部を突き飛ばし、ついにバランスを崩した機体は仰向けに倒れる。

間を置かず槍持ちは穂先を肩に担ぎ、倒れた北大路機の腰部に右足を乗せて、単眼でコクピットを覗き込む。

（……まさかとは思ってたが、やっぱりガキかよ……）

失望とも呆れともつかない声を漏らしたのも束の間、槍持ちから冷たい声が響く。

（ガキをいたぶる趣味はねえが……嬢ちゃんもそんなモンに乗つてこんなところに来たんだ。覚悟はできてるよな？）

確認するように告げると、槍持ちは左腕を下に向け、手首の機銃の照準を北大路に合わせる。

その時、

「ッ!!」

(ヌオッ!?)

北大路に意識が向いていると見るやペダルを踏み込んだ光秋は左肩から突つ込み、がら空きだった槍持ちの背部をさらに押して北大路機から離しながら角の上の桜に叫ぶ。

「柏崎さん!今の内に北大路さんを回収つ。一度羽柴さんたちと合流しろ!」

(了解ッ!)

返事と同時に桜は角から飛び立ち、倒れたフラガラツハのコクピットから北大路を抱えてビルの合間に消える。

それを見届けた直後、押されるがまだだった槍持ちは腰部の推進器を噴かして自ら速度を上げ、機体同士が離れるや槍を地面に突き立てて急停止する。

そのまま槍を軸に推進器の噴射を加えて機体を回転させ、その勢いのままに脚部を二コイチに叩き付ける。

「ッ!」

受け身も満足にとれないまま、まともに喰らった二コイチは横に飛ばされ、自身にも伝わってきた痛みに悶えながらも槍持ちを見据えて構える。

(部下を逃がすために自ら突撃してきたってか?随分粹じやなねえか!気に入ったぜっ!)

「それはどうも……ならお願いとして、そろそろ引き上げていただけませんか？」

心底から嬉しそうに告げながら槍を向ける槍持ちに反射的に応じつつ、ダメでもともとと言ってみる。

（冗談言うな。俺にとつてはここからが本題だっ！）

「そうですか……」

案の定、喜色に富んだ声で拒否の返答を得ると、光秋もいよいよ意識を臨戦態勢に移行する。

——高推力で打ち込まれたあの槍で、ニコイチの外装を抜けるか？ 答えは限りなく否といつていいだろう。が、伝わってくる衝撃は馬鹿にできない。ニコイチがいくら保つても、衝撃や痛みで僕がダメになったら元も子もない。さっきの蹴りだって結構痛かったしな……故に、迂闊には当たれない……—

現状最大の脅威を整理すると、渴いた喉に生唾が流れる。

「……………」

（……………）

互いにカメラの視線を交わして出方を窺い、膠着状態に陥る。

が、それも10秒と続かなかった。

唐突に槍持ちが後ろに跳び退いた直後、それまで立っていた場所に上空から大振りな

徹甲弾が撃ち込まれる。

反射的に両腕を前に出して飛び散った破片を受け流すと、光秋は上を見る。

「今の……上？まさか!？」

思わぬ形での中断に戸惑いながらも弾の来た方を見上げると、予想通りヘラクレスが、しかも5機も滞空していた。その内の1機は左肩から砲身を伸ばし、大口な先を下界に向けていた。

「っ?」

さらにもう1機——中央に浮かぶヘラクレスには見覚えがあった。左腕とコクピット周りを中心に装甲板を増設した仕様は、工場地帯でのDDシリーズ戦で共闘した機体だ。

「半鎧まで……」

あの時は頼もしく感じた機影から、今は槍持ちと同じ痛々しい敵意を感じることに、つい感傷的な声を漏らしてしまう。

と、半鎧は未だ続くビル前の乱戦に頭部を向ける。

（申し訳ありません。フラガラッハを仕損じました）

（いい。あの槍持ちはできる。それよりもだ……この連中は、研修係に何を教わってきたんだ。即行を心掛けろとあれほど……）

砲身付きの謝罪に苛立った声をスピーカーから漏らすと、周囲の4機に目配せする。

(お前は俺とここに残れ。残りは撤収の援護をしろ)

((了解))

応じるや、3機はビル前へ飛んでいく。

「っ……」

残った1機をよく見ると、その左腕は爪付きと同じ3本爪の腕に換装されており、ニコイチそのものではなく自分自身に損傷を与えようとしていると察した光秋は息を呑む。

(♪)。こいつはまた、面白れえ奴らが来たもんだぜ！)

ご機嫌そうに口笛を吹きながら再び距離を詰めてきた槍持ちも加わって、いよいよよつつ巴となる。

一流石に殴る・蹴るじやいよいよ限界だよな。3本爪にしろ、槍にしろ、タフさでやり過ぎせるものでもないし。かと言って、未だ避難が完全とえないこんな場所で、キャノン砲やレールガンは迂闊に使えない。それ以前に、Eジャマーの影響下で董さんが取り寄せられるかどうか……………

自分の出方を思案するも決定的な案は出ず、その間にも槍持ちは再び突撃の構えをとり、半鎧の目配せに頷いたヘラクレスも3本爪を開いて向けてくる。

桜の叫びが響いたのは、その時だった。

（光秋ウウウ!!）

「!」

上空を見上げると、身長を優に超える鉄球を従えた桜が落ちる様に迫ってくる。

（受け取れエエエツ!!）

再び叫ぶと同時に、桜は鉄球をニコイチ目掛けて投げ飛ばす。

——大河南主任が言ってたやつか!——

昨日の電話を思い出しつつ、上昇した光秋は鉄球に手を伸ばす。

すぐに半鎧とヘラクレスがマシンガンを撃ってくるものの、射線に割り込んだ桜が念壁で防いでくれた。

そしてニコイチの右手は、長さ一メートル程の柄を確実に掴んだ。

「よしッ!」

ニコイチを通して伝わってきた感触は活の籠った声となり、そのまま背中引いた柄を半鎧とヘラクレス目掛けて勢いよく振り下ろし、ワイヤーで繋がった鉄球が拳の様に迫る。

結局2機には避けられてしまったものの、銃撃が止んだことで盾役から解放された桜が再び角に跨ってくる。

「無事か？それと、コレどうした？」

（無事だよ。それとソレは、菊連れて引き上げた先で徳川さんたちと合流したんだけど、本部からこつちに戻る時に、あの福山って人に持っていくように言われたんだって）

「福山主任が……」

答えられた名前を呟きながら、光秋は改めて手にした鉄球を観察する。

長さ1メートル程の柄は、一方が杭の様に鋭く尖っており、もう一方からはざつと50メートルはあろう細長いワイヤーが伸びている。ワイヤーの先には直径が2メートル程、表面に鋭い棘がいくつも生えた鉄球が付いており、試しに引き寄せて左手で持ってみると、強い腕力を誇るニコイチの腕越しにもずつしりとした手応えを感じた。

直後、半鎧とヘラクレスが銃撃を再開してくる。

「念壁！クツションで」

（了解！）

回避による流れ弾や受け流しによる跳弾を氣にして瞬時に断じると、桜はEジャマーの影響下にあつて可能な限り広範囲に念壁を張る。

ニコイチの頭部を中心に張られた念壁、それに触れた弾丸は一度宙に留まり、数秒後に糸が切れた様に真つ直ぐ地上へ落ちていった。

「近場の爪付きに仕掛ける。しつかり掴まつて！」

（オウツ！）

桜の返事を聞くや、光秋はマシンガンを撃つのをやめたヘラクレスとの距離を詰める。同時に右手を背中に引き、鉄球を叩き付けようとする。

が、

——この位置じゃ不味い！——

ヘラクレスがビルを背にしていることに気付き、当たって壊してしまうのではという危惧からつい動きが止まってしまう。

その隙を突くように、ヘラクレスは左腕の爪を伸ばしてくる。

「！」

咄嗟に高度を上げてかわすと、そのままヘラクレスの左斜め上に移動する。その位置からなら、振った時の射線上に巻き込んでしまいそうなものはなかった。

「この位置なら！」

言うや光秋は右手を振り下ろし、ワイヤーの先の鉄球はヘラクレス目掛けて飛んでいく。

ヘラクレスは念壁を張って受け止めようとするが、ニコイチの腕力を引き受けた質量はその止めようとする力を上回り、本体に達した鉄球は左腕の付け根を内部へと深く歪める。

すぐに左腕を切り離すや、ヘラクレスはマシンガンの砲口を向けてくるが、

(ここはいい。ビルの方へ行け)

半鎧の指示に踵を返し、ビルの方へ飛んでいく。

――残るは2機……

それを見届けると、光秋は正面に滞空する半鎧と、その後ろの地上でこちらを見上げている槍持ちを見据える。

刹那、槍持ちは路上を駆け、走り幅跳びの要領で飛び跳ねると、背部と両腰部の推進器を噴かして背を向けたままの半鎧に迫る。

(！)

半鎧の方も接近に気付くや振り返って正面に念壁を張るが、槍持ちは跳躍の勢いのままにそれを槍で突き破り、穂先が半鎧の胸部に迫る。

直後に半鎧は装甲板で覆われた左腕で胸部を庇い、腕を貫いたところで槍が止まるやソレを切り離し、右手に持ったマシンガンの砲口を槍持ちの胸部に合わせて発砲する。

(面白エツ!!)

叫びながら槍持ちは左腕が刺さったままの槍をマシンガンに叩き付け、射線を変えられた一連射は明後日の方へ撒き散らされる。

(チッ！)

その一振りで砲身が歪んだのを見た半鎧は舌打ちしながら上昇し、槍持ちの方も両腰部の推進器を噴かしながらゆっくりと地上へ降りていく。

「……………凄い」

一連の攻防を観ていた光秋は、そう漏らすのが精一杯だった。

—今の一戦、どちらも一瞬の判断ミスが命取りつて、そんなギリギリの戦いだった。それをあの2人は、片や機体特性を、片や度胸を武器に、互いに乗り越えてしまった

……………

心の中で感じたことをどうにか整理する間にも、全身から冷や汗が湧き出てくる。

その間にも槍持ちは路上に着地し、直後に崩れる様に右膝を着く。

（チツ。さっきの蹴りか……）

「……………まさか」

スピーカーから漏れた舌打ちに、光秋は先程喰らった蹴りのことを思い出す。

—結構な痛さだったが、その分相手側にも響いてたつてことか？……………半鎧の方はビルの方に行つたか。そうならっ—

半鎧の位置、なにより戻ってくる気配がないことを確認すると、槍持ちと向かい合う位置に着地し、鉄球の柄を左手に持ち直す。右手でワイヤーの中程を持つて長さを調整すると、300メートル程の距離をゆっくりと詰めていく。

「桜さん。いつでも念壁が張れるように待機してて」

（了解……）

歩きながら出した指示に、桜の緊張した声が応じる。

残り200メートル程まで近付くと、槍持ちは槍を杖代わりにして強引に立ち上がり、光秋もいつでも鉄球を投げられるように身構えながら立ち止まる。

（まったく、ついてねえな。せつかくノツてきたところで機体不調なんてよ）

どうにか機体が安定すると、槍持ちのパイロットは軽い通り雨に遭った程度の気軽さで愚痴ってくる。

「……………」

そんな気軽さに反して、加えて機体が万全でないにも関わらず、槍持ちから感じる威圧感は衰えを知らず、気を抜けば震えそうになる声を抑えて光秋は告げる。

「ただちに武装解除して投降してください。従わない場合は、実力を以て対処します」
（……まあ、そつちはそれが仕事だもん……）

返ってきた声は頷いているものの、了承する気配は一切なかった。

（だが、俺としちゃあ、なかなか面白い状況になってきたわけだよ……それを終身刑をくらって檻の中でお預けっていうのは、これ以上ない苦痛ってわけなんだよ。だから……）

言いながら、それまで杖にしていた槍をニコイチに向けてくる。

（最後まで抗わせてもらうぜ！）

「……………承知しました。では、こちらもッ」

曲がることのない強い意志を乗せた返答に肅々と応じると、光秋は右手を軽く振って鉄球を縦回転させ、残り200メートルの間合いを詰める機会を窺う。

「……………ッ！」

そんな張り詰めた時間を終わらせたのは、背後から迫ってきた鋭い悪寒だった。

「！」

振り返ると同時に前に出した左腕に弾丸が殺到し、路上の先にマシンガンに向けたフラガラッハを見る。

（潮時だ。引き上げるぞ）

「！この声、赤坂の！」

直後に聞こえたのは、耳に馴染みつつあるNPの声だった。

（北沢きたざわッ！テメエ水を差すんじゃないやねえ!!）

途端に槍持ちから殺気を乗せた怒声が響くが、赤坂——槍持ちから「北沢」と呼ばれた男は氣にした様子のない冷静な声で応じる。

（悔しいが、怪物たちとの戦いでお前を失うわけにはいかん。機体も不調なんだろう？

満足のいく戦いがしたいというのなら、今は退け)

(チツ……!)

言い負かされた悔しさを含んだ舌打ちをすると、槍持ちは両腰部の推進器を下に向けて噴かし、一気に高高度へ上昇していく。北沢機も背部推進器を噴かしてそれに続くと、ちょうど頭上に差し掛かった輸送機に取りつき、一目散にこの場を離れていく。

(逃げんのかよ!)

「いや、待てっ」

輸送機を追おうとする桜を手で制しながら周囲を見回すと、ビルの周囲に5機のヘラクレスと十数人程の人影が集まり、Eジヤマーの影響外までまとまって急上昇すると、そのままテレポートして跡形もなく消え去るのを見る。

「……」先ず終わった……か……」

路上にフラガラツハやヘラクレスの残骸を残しながらも、数秒前とは打って変わって静かになった周囲を見て、光秋は警戒心を残しながらも呟く。

と、ニコイチの胸部上に下りた桜がハッチをノックし、開けると不満げな顔でコクピットに入ってくる。

「また止めたっ」

「まあ聞きなさい。今回はビル街のど真ん中、しかも避難も充分にされてない所だ。こ

れ以上戦闘が長引けば、それこそどうなるかわかったもんじゃなかった。終わってくれるならそれに越したことはない。だいたい、レポートで逃げたZCはともかく、飛行機で逃げるNPを下手に追いかけたらしたら、それこそ被害が拡大しかねない。うつかり墜落させようもんなら……っ」

「……そりゃあ……そうだけどさ……」

輸送機が落ちて火の海になるビル街を想像して震え上がる光秋に、言わんとすることを察した様子の桜は、しかし不満を拭い切れない声を返す。

「あとは——というか、理由としてはこっちの方が大きいんだが——ただでさえ予知出動の帰りで消耗してたんだ。これ以上続いたら、疲れで絶対取り返しのつかないことが起こるよ」

「……………」

光秋自身不思議と強い確信を持って告げた言葉に、桜は押し黙って俯く。

それに反する様に光秋は空を見上げ、一面の青色の中にすでに見失った輸送機、そこに乗り込んだ赤坂のNPメンバーを思い浮かべる。

——『キタザワ』っていうんだ、あの人……………」

ZCの爪付きのパイロット——南の時もそうだったが、年が変わってからというものの、何かと遭遇する機会の多いNPメンバーの名前を間接的に知ったことに、思わず感

慨を抱いてしまう。

その時、こちらに近付いてくる振動を感じ取る。

—この揺れ、メガボディの歩く時の？それも複数……まさか、また!?—

NPか、ZCか、あるいはどちらも無い戻って来たかと思うや、すぐに鉄球を構え直す。

が、ビルの陰から現れたのは、右肩にスフィックスのマークが描かれたゴーレムだった。

「あのマーク、スフィックス！デ・パルマ少佐か……」

直後に左肩の「01」の番号にも気付くや、味方の到着を理解して安堵の音が漏れる。その間にもビルの陰からはさらに3機のゴーレムと5台の兵員輸送車が現れ、こちらに気付いたデ・パルマ機が歩み寄ってくる。

（よう。いるとは聞いていたが）

「やっぱり少佐でしたか。どうしてここに？」

通信越しにかけられた声に、真っ先に浮かんだ疑問を返す。

（どうしてって、連絡受けたから鎮圧しに来たんだよ。一応データ取りも兼ねてな。ま、完全に出遅れちゃったようだが……）

落胆の色を乗せながら、デ・パルマ機はすでに戦闘が終結してしまった周囲を見回す。

「なるほど……あー、ところで、あちらのゴーレムは？ 2番機は関大尉として、他の2機は誰が？」

返ってきた答えにどうにも気まずさを感じ、話題を変えることも兼ねて2つ目の疑問を問う。

（ああ、そういうやお前は知らないんだっけ。スフィンクスのパイロットは、俺を含めて全部で4人いるんだよ。3番機と4番機の奴は、この前まで別のところでテストしてたんだ）

「そうなんですか……」

相槌を打ちつつ、改めて「03」、「04」と書かれた2機のゴーレムを見やる。

「……すみませんが、事後処理をお願いします。我々はもともと予知出動の帰りだったもので、全員消耗していて。せめて特エスたちだけでも本部に帰りたいので」

（了解。俺たちもとんぼ返りってわけにもいかないからな。後は任せろよ）

「ありがとうございます」

一礼して応じると、光秋は徳川たちと合流しようとニコイチを歩かせる。

—それと、個人的に改めなきやいけないこともあるんで—

思いつつ、後ろに横たわるフラガラッハに陰の強い視線を向ける。それは、先程北大路が動かしていた機体だった。

徳川たちと合流すると、光秋は福山主任に一報入れて董に鉄球を東京本部にテレポートしてもらい、桜と共にパトカーへ乗り込んで真つ直ぐ本部へ向かう。

「……………」

「……………」

お面の様な無表情を貼り付けた光秋に、車内はこれまでの比ではない重い沈黙に包まれていた。

しばらく走って本部の門をくぐると、パトカーは本舎の近くに停車する。

「今日はありがとうございました」

「ああ……………」

事務的な語調で礼を言う光秋に徳川が不安そうに応じる傍ら、少女たちは次々と降りて待機室のある建屋へ向かう。

その背中に向かって、光秋はパトカーから降りながら声をかけた。

「北大路さん。ちよつと」

呼ばれて足を止めた北大路は、こちらを振り返る。

「何ですか？」

「……………」

その挑戦的な視線に、もともと危うかった光秋の自制心がついに決壊した。

「っ—」

気が付けば右手が空を走り、パアン！という生々しい音が駐車場一帯に響き渡っていた。

「「「……………」」」」

「……………!?!」

光秋の平手打ちに徳川たちが啞然とし、赤くなつた左頬に手を添えた北大路が目を丸くする中、光秋は腹の底から叫んでいた。

「何ですか、だと……？貴様はっ！自分が何をしたかわかつてるのかっ！！一歩間違えたら、自分が死んでたかもしれないんだぞッ!!それを、それをツ——っ」

そこまで言つて言葉が詰まり、同時に息が詰まつた。

2、3回咳き込んでどうにか呼吸は整つたものの、怒りを体現するような動悸の激しさは一向に収まらず、血が上り過ぎて頭の中もごちゃごちゃしてくる。

それに対して、周囲は数瞬間の反動のように途端に静かになり、それに耐えられなくなった光秋は先を行つていた桜や堇を追い抜いて、独り速足で待機室の建屋へ向かう。

そんな背中に、今度は北大路の声がかかる。

「……そつちが言つたくせに……」

かけられた声には光秋にも負けない怒りと、同じだけの湿度があつた。

「選択肢は一つじゃないって、『そうしようと思つた方』に賭けた方が賢いって、そつちが言つたくせにツ!!」

叫ぶや、北大路は右の靴を脱ぎ、それを渾身の力を込めて光秋に投げ付ける。

「ツ」

靴は見事に背中に命中し、大した痛みはなかつたものの、ただでさえ怒りを持て余していた光秋は思わず振り返る。

「……………」

そうして、こちらを睨み付けてくる北大路と目が合つた。その目元には、数メートルの距離があつてもわかるくらい涙が溢れていた。

途端に言おうとしていた文句は口の中で霧散し、今度こそ振り返ることも立ち止まることもなく建屋へ向かう。

少し歩いて建屋の玄関をくぐつたものの、待機室へは向かわず、何処へ行こうというでもなくひたすら建屋の奥へと歩を進めていった。

109 菊の氣持ち

あてどなく歩き始めてどれくらい経っただろうか。

しばらく進んだ先に自動販売機とベンチを見付けると、光秋は引き寄せられる様にそこに腰を下ろす。

そして、

「やっちまつたあ……!」

弱々しい声を漏らしながら俯き、その頭を両手で抱えた。

それと同時に、思い出したように右の掌にひりひりとした痛みを感じ、その手をしげしげと眺める。

——僕は……何てことを……——

同じだけの痛みを北大路は頬に感じた——それを自分が与えたのだと思うと、その時抱いていた主張を押し退けて強い罪悪感が胸を覆ってくる。

——『選択肢は一つじゃないって、「そうしようと思った方」に賭けた方が賢いって、そっちが言ったくせにツ!!』……あれは、この前の催眠魔事件の時に僕が言ったことだよな。その上でのあの行動……——

先程北大路が言ったことを思い出すと、唐突にフラガラッハに乗って現れたこと、注意しても降りることなく戦闘を続けようとしたこと、その理由がわかってくる。

「なるほど、あんな言葉をかけられれば、こういう受け取り方もする。その可能性はあったわけだ……—「つまり、今回の件の原因、その一端は僕にもあるってことか……—」

わかりはしたものの、その先どうしていいかはわからず、再び頭を抱え込んでしまう。
そこに、

「……あの、光秋さん……?」

「?」

遠慮がちな声をかけられて顔を上げると、正面に涼が立っていた。

「涼さん?……どうしてここに?」

「予知のことで本部に来たことはさっき電話で話しましたよね。その後様子見というか、その……新しい動きがないかと思つて、そのまま待機して……そうしたら、光秋さんたちが戻ってくるのが見えて——あ、いえ、実際は古泉さんが千里眼で感知したのを教えてくれたんですけど……それで、本舎の前に行っただけ……—」

「ああ………それなら、『あれ』も見ちゃったか……—」

「……はい……—」

状況を察して気まずそうに訊ねる光秋に、涼も言いにくそうに小さく頷く。

「……その……隊の子たちと何かあったんですか？ すごい大きな声出して……」

「そのお……なんと言うかなあ……」

迷いながらも結局訊いた涼に、光秋は頭の中で整理したことの経緯^{いきわづらひ}を話す。

予知の原因を解決して本部に戻る道中、NPがZCの隠れ家を襲撃するところに居合わせてしまったこと。それを鎮圧する最中、突然北大路がフラガラツハに乗って戦闘に介入し、危うくやられそうになったこと。それを本部に帰って咎めようとした際、頭に血が上って手を挙げてしまったこと。そのことを、今凄く後悔していること。

「……いや、言ったこと、叱った内容自体に悔いはないんだよ。実際危なかったんだし。ただ、引つ叩いたのは流石にやり過ぎたかなというか、そこは少し感情的過ぎたかというか……」

補足——というよりも言い訳を重ねることに情けなくなってきた、頭を掻きながら口を閉ざす。

——ますます何やってんだろうな、僕は。涼さんにも心配かけて……——

思いつつ、頭を掻く手に力を込める。

その時、2人目の知っている声がかけられる。

「加藤主任。戻られてたんですね」

「曾我さん……」

言いながらこちらに歩み寄ってくると、曾我は涼に怪訝な目を向ける。

「失礼ですが、どちら様でしょうか？」

「あつ……予知の算出に協力させていただいております、鷹野と申します……」

訊かれて、涼はバツが悪そうに答える。

「予知の？この棟は関係者以外立ち入り禁止ですよ。協力者といえど、そこは守っていただかないと」

「すみません……」

やや強い語調の曾我に、涼は小さくなりながら応じる。

——ああ、保安上の問題か……—

2人のやり取りを見てほんやりそう思うと、光秋は涼の前に立つて曾我に告げる。

「いえ、僕の所為なんです。ちよつとしよげてたところを心配してついてきてもらつて、それに気付かなくて……とにかく、すぐに出来ますので。さあ、涼さん」

言うとき光秋は涼の手を取り、そのまま玄関へ向かうとする。

「ちよつと待った」

が、いくら進まない内に曾我に呼び止められる。

「しよげてつて、主任何かあつたんですか？そういうえさつき本舎の前を通つた時、特工

スの子たちがパトカーのそばにいましたけど」

「ああ……………実は……………」

少女たちの現状を見られているなら隠しても仕方ない。そう思つて、涼に話したことをもう一度話す。

「……………なるほど。そんなことが」

「……………」

聞き終わつて合点がいった顔をする曾我に対し、2度話したことで情けなさが増した光秋は床に目のやり場を求める。

「幼少の特エスじゃ偶にあるトラブルですね。ワタシも他人ひとのことは言えませんが。それで？これからどうされるんです？」

「どうつて……………そりやあ、ずつとこのままつてわけにもいきませんからね。そろそろあの子たちの所に戻つて、ちゃんと……………話を……………」

口にして、光秋は自分が今どんな状況に陥っているのか自覚する。

—そうだよ。この後また会わないといけないんだ。ただでさえ北大路さんとは不仲だつていうのに、こんなことの後でどの面下つちげて会えばいいんだ……………—

途方に暮れそうにながらも、遠からず北大路と再び顔を合わせなければならぬ現実から逃げられないことも理解しており、足は玄関へと向かう。

直後、

「それなら、まずワタシが行きますよ」

「……え？」

後ろからかけられた曾我の言葉に、思わず立ち止まって振り返る。

「行きますって……？」

「話し合いをする気はあるんでしょう？ だったらまずワタシが間に入つて、子供たちを落ち着かせた上でここに連れてきます。加藤主任はそれまで待つていてください」

言うや曾我は光秋と涼を追い越し、玄關へ向かう。

「いや、でも……いいんですか？ 曾我さんにそこまでしてもらつて」

「今主任が行つたところで、反発されて話し合いにならないでしょうからね。大丈夫、特エスには特エスだからこそ通じるものがありますから」

私的な事情に巻き込んでしまったようで後ろめたさを覚える光秋とは対照的に、歩きながら自信満々に応じた曾我はそのまま廊下の奥へ消えていく。

「……………」

残された光秋は、その背中が見えなくなるまで見送ることしかできなかった。

と、それまで横で2人のやり取りを見守っていた涼が訊いてくる。

「……今の方、お知り合いですか？」

「ああ……そういえば、涼さんは初めて会ったわけ。曽我さんっていうんだ。曽我ガ
イアさん。彼女も特工で、本部に来てから何かと世話になってる」

「……ソガさん……ですか……」

言いながら、涼は曽我が歩いて行った方を眺める。

「………とりあえず、外出るか。僕は子供たち待ってなきゃいけないから、せめて玄関
まで送るよ」

言うとき光秋は、再び涼を伴って玄関へ向かおうとする。

が、一歩踏み出したところで後ろから涼に肩を掴まれて足を止める。

「もう少しだけいさせてください」

「いや、でも、見付かるとまた怒られるぞ？」

「これ以上先には行きませんし、光秋さんからも離れません。ちよつと、いろいろ訊きた
いことがあって………とりあえず、座りましょう。ちやうど自動販売機もありますか
ら、何か飲みましょう！」

「……………」

珍しく押しの強い涼に圧倒されて、光秋は結局その場に留まってしまふ。

その間にも、涼は自動販売機の前に立って財布を取り出す。

「光秋さん、なに飲みますか？」

「いや、それは流石に自分で——」

「付き合ってもらうのは私ですから。なにがいいですか？」

「……………じゃあ、緑茶で」

強くはないが有無を言わせない涼の様子に膝を折ると、光秋は買ってもらった緑茶の缶を受け取り、同じ物を買った涼に続いてベンチに腰掛ける。

「それで、訊きたいことって？」

もらった緑茶の缶を持て余しながら、光秋は左隣の涼に訊ねる。

「えっと、北大路さんって言いましたっけ？勝手な行動をとったっていう子」

「ああ……………そういうえば、涼さんはあんまり関わりなかったっけな。あの3人の中じゃあ、董さんくらいか」

「そうですね。だから、その子がどんな子かはよく知らないんですけど……………そもそも、何で戦闘に加わるなんてことをしたんでしょうか？」

「何でって……………あれ？」

言われて、光秋は北大路の意思に考えが及んでいなかったことに気付く。

——一応、この前僕が言ったことが影響しているのは確かだろう。『そう思う方に賭けた方がいい』って……………じゃあ、あの時北大路が『思ってたこと』は何だ？何を思ったからこそ、彼女はあんな行動に出たんだ……………？——

思考を巡らせてもこれといった目星は浮かばず、それは連鎖的に北大路との交流の乏しさを思い起こさせた。

「……どう、だろうな……北大路さんとはあんまり話す間柄じゃなかったから——否、それこそ言い訳だな。そういう部分もしっかりこなしてこそその特務部隊主任だつて、そう自覚してたはずなのに……」——今回の件は、そのツケが回ってきたつてことか……—

言葉にしてみても、改めて自分を至らなさを実感する。

「その子の能力つて、なんですか？」

「……サイコメトリー」

「他には？」

「それだけだが」

「後の2人は？」

「桜さんが念力で、董さんが瞬間移動。一応言つとくと、2人ともそれ以外の能力はないよ」

「……………」

ひとしきり質問すると、涼は考える顔を浮かべる。

「……………」私、特エスの仕事つてテレビやネットで観た範囲でしか知らないんですけど、今の説明を聞いた印象だと、一番活躍するのはサイコキノの桜さんじゃないですか？ 昨

今のNP・ZCの抗争に関わる機会も多いならなおのこと」

「ああ。それはそうだな。実際さつきも、一緒に前に出て戦ってた」

「では、2番目は董さんですか？」

「……そうだな。装備や弾の補給とか、主に戦闘のサポートで頑張ってくれてる」

「そうですか……では、北大路さんは？ 戦闘中、どんなふうに活躍してますか？」

「北大路さんは……いや、まさか……」

そこまで言われて、光秋は直前の問いの答えを通り越して、涼の言わんとしていることに思い至る。

「光秋さんの話を聞く限り、北大路さんはあまり活躍していないのでは？」

「いや、まあ……確かにそうだが……でも、捜査とかそういう時は大活躍なんだぞ？ この間の通り魔事件の時だって、今回の予知出動だって、北大路が頑張ってくれたから……」

涼の指摘に動揺しつつ応じながらも、言葉を重ねることに光秋はそういうこととはまた違うのだと察していく。

「それでも、やはり戦闘は隊全員に大きな負担が掛かる時では？ 他の時にどれだけ活躍したとしても、チーム全体が大変な時に何もできないというのは、その一員としてやはり辛いものがあると思います」

「……………やつぱり、そういうもん、か……………」

自分の中に浮かんだことをことごとく言葉にしてくる涼に、光秋は応じながらその洞察力に感服していた。

「もちろん全て私の推測にすぎませんが……………それでも、周りの——自分に近い人の力になりたくて、でもなれないという辛さは、私も知ってますから……………」

「涼さんも、なんか悩んでんのか？」

「え？……………あつ！」

補足と、その後の半ば独り言のような呟きに光秋が応じると、涼は口が滑ったことに気付いたような気まずい顔を浮かべる。

「いえ……………そのお……………」

「今は自分のことに手一杯だから無理だがさ、この件が落ち着いたら、よかつたら相談してよ。今日のこともあるしさ……………涼さん程上手くやれるかは、流石に保障できないけど」

言い淀む涼に、最後の方は苦笑いを浮かべて言ってみせる。

その時、

「加藤主任」

「ああ……………曾我さん」

曾我の声に顔を向けた光秋は、その後ろに桜、堇、そして北大路の姿を認め、結局開けなかった缶をベンチに置いて4人の――北大路の許へ歩み寄る。

「……………」

自分が涼と話していたように、曾我となにかやり取りがあつたのか、北大路の態度はどこかしおらしく、気まずそうに視線を下に向けている。

―何であれ、まずやるべきは……………―

思いつつ、呼吸を整えて緊張を和らげると、立ち止まった光秋は北大路をしつかりと見据える。

そして、

「すみませんでしたっ!」

よく通る声で告げながら、90度の深さに頭を下げる。

「……………!?!」

突然の謝罪に動揺したのか、北大路は目を丸くして黙り込んでしまうものの、光秋は構わず続ける。

「急に怒鳴ってしまつて…………いや、言つた内容は悪いとは思つていないけど…………とにかく、引つ叩いたのはやり過ぎた。すみませんでした」

もう一度謝罪の言葉を告げて頭を1つ分さらに下げると、そのまま膝を折つて北大路

と視線の高さを合わせる。

「……その上で、教えてほしい。北大路さんは、何であんなことをしたんだ？」

自身逸りそうな気持ちを落ち着けようと、敢えてゆっくりとした口調で先程からの疑問を投げかける。

「……………」

それに対して、北大路は視線をそらし、沈黙を返す。

「……………」やっぱり、今更こんな話しても手遅れかな？それこそ、「何を今更っ」とか思ってた………」

不安が募っていく中、不意に桜が声をかける。

「ほら、菊」

「……………」

それに後押しされてか、北大路はようやく顔を上げ、ゆっくりと話し始める。

「……………」桜ちゃんが、前に出て戦って……董ちゃんが、テレポートでいろんな物を取り寄せて、それを手伝って……………」それに……加藤さんだって……ノーマルの加藤さんだって、メガボデイに乗って戦ってるのにつ、私はそういう時、見ていることしかできなくて……………」

「……………」までは推測通り、か……………」

徐々に声に熱と、微かな湿度が籠り出した北大路の言葉を、光秋はそう思いながら黙って聴き続ける。

「メガボデイに乗れば——もつと大きな“力”を持てば、私でもみんなと一緒に戦えると思って……サイコメトリーなら操縦方法もすぐに把握できるから行けると思って……思つて……でも……っ……」

「みんなの——このメンバーの力になりたかつたんだな？」

言葉が詰まり、手を握り締めて小刻みに震え出した北大路に、光秋は確認の声をかえる。

「っ……でもっ……」

それに鼻をすすつて頷くと、北大路の声にいいよ嗚咽が混ざってくるのがわかる。

「その感じ方は、正しいと思う」

言いながら、光秋は震える北大路の両肩にそつと手を置く。その胸中は、目の前の北大路への共感でいっぱいだった。

——桜さんや董さん——自分に近い人を守りたくて、その力になりたくて、でも果たせなかつた無念……今の北大路さんは、僕がなるかもしれない姿かもしれない。ほんの1年前まで、僕も“力”らしい“力”なんて持つてなかつた。神モドキさんにどういう意図があつたにせよ、僕からすれば偶然授けてもらった“力”を糧に、今日までど

うにかこうにかやつてきただけのことだ………ほんの1年前まで、僕も自分の無力に涙する側だったんだ――

浮かんできた言葉を口の中で噛み締めながら、さらに続ける。

「なるほど。それが北大路さんの『そうしようと思ったこと』か。それで実際に行動に移したなら――今の自分ができる最大限のことをしようとしたなら、それは大したものだ。でもな……」

そこで一旦息を整え、北大路の肩から手を放してその目を見据え直す。

「でもな、あんなやり方じゃ、北大路さんが死んじゃうよ。それだって同じくらい、僕にとつては曲げられない一線だ。死後の世界なんてのがどんなものか知らないが、少なくとも、もう大事な人に会えなくなると思うぞ？　そうまでして力になろうとした桜さんにも董さんにも……昨日本部まで迎えに来てくれた、此方さんや彼方さんにもさ」

「――」

最後に挙げた2人の名前が余程予想外だったらしい。それまで堪える様に泣いていた北大路は涙を引つ込め、光秋の顔をまじまじと見る。

「これでもさ、桜さんと董さん以外に友達がいるって知った時、ちょっと驚いたんだぞ」その視線がどうにも気まづくなって、苦笑を浮かべながら言った。

「それにさ、確かに戦闘ではいまいち活躍できなかったかもしれないけど、捜査活動にお

いては北大路さんの独壇場だったじゃないか。現に今回の予知出動だって、北大路さんが女の人の不調に気付いたから早く対処できたわけだし、念力の暴走を察知して声をかけてくれたから僕も巻き込まれずに済んだんだぞ。あれ？そうになると、北大路さんは僕の命の恩人ってことなのかな？」

「……………」

最後の方は冗談半分で言ってみると、北大路はどう反応していいか困った顔を向けてくる。

「……まあ、なんだ。過ぎたことをどうこう言うのはこれくらいにしてさ……とりあえず、北大路さんがどうしたいかっていうのはわかったから、次の訓練は、その辺も踏まえたものにしよう」

「……次？」

誤魔化しも兼ねて告げられた光秋の言葉に、北大路は意表を突かれた顔をする。

「そりやそうだろう。あくまでも今回の一件が終わったってだけで、これで全てが終わったってわけじゃないんだ。次がある以上、僕らはそれに備えないと」

言うとき光秋は膝を伸ばし、桜と堇に顔を向ける。

「桜さんと堇さんも、ひと仕事の後に嫌な思いをさせてすみませんでした。それと本当に遅くなったけど、みんな今日は御苦労だった。学校には今日1日休むって連絡してあ

るから、各自でゆっくりしてくれ。疲れを明日に引き摺らんようにな」

言うとう度は曾我と、後ろの涼をそれぞれ見やる。

「涼さんと曾我さんも、いろいろお騒がせしました。ありがとうございます」

言いながら、2人に深く頭を下げる。

「いいえ。お力になれたのなら嬉しいです」

「また貸し一つですね。楽しみにしてますから！」

「……敵わないなあ、曾我さんには」

嬉しそうな涼と、期待の笑みを浮かべる曾我を見ると、光秋は頭を掻きながら歩き出す。

「じゃあ僕、報告書書かなきやいけないんでこれで。あ、そうだ桜さんたち。ゆっくりしてくれとは言ったけど、羽目を外しすぎないようにな」

「わかつてるよっ」

「はいっ」

「……………」

不服そうな桜、素直に応じた菫、未だ気まずさを残しつつもこくりと頷いた北大路を見ると、光秋は足を速めて自分の待機室へ向かう。

「て、光秋さん！お茶忘れてますっ」

「あっ……」

無意識にベンチに置いてそのままだった緑茶の缶を示す涼の呼びかけに、慌てて引き返した。

午後5時。

予知出勤と帰り途中の抗争鎮圧の報告書を書き上げた光秋は、椅子の背もたれに体を預け、固まった体を伸伸ばす。

「っ……………」

と、ポケットの中の携帯電話が振動する。

「徳川さん？……もしもし？」

（加藤？今いいか？）

「はい。どうされました？」

（帰り途中に暴れてたNPとZC、その捕まえた連中の取り調べがひと通り済んだんで、一応報告しようと思ってさ）

「！お願いします」

自身気になっていたことの思わぬ申し出に、電話越しに頭を下げる。

（じゃあまず、発端から話そう。やっぱりというか、仕掛けたのはNP側だった。といっても組織の方針ってわけじゃなくて、あの近くを拠点にしている支部——と言つていいかもわからない小グループの独断だったらしいけどな）

—『勝手に動いた落とし前は帰還してからつけさせてもらう』……赤坂の——あのキタザワって人が言つてたのは、そういうことか—

徳川の説明に、光秋は現地で聞いた北沢の言葉に内心で合点する。

（工場地帯での抗争で拠点が潰されてからこつち、日本州内ではどうも負けがこんでるみたいで、その焦りからあのビル——というか、ZCの隠れ家を攻撃して、どうにか士気を保とうとしたらしい）

「抗争は連日ニュースになってますけど、NPって今追い詰められてる形なんです。でも、あのビルがZCの隠れ家だつて何でわかつたんです？」

（NP独自の情報網があるらしい。それについては詳しいことを知つてる奴を逮捕できなかったから、これ以上はなんとも言えないがな）

「なるほど……でも、何でよりによつて今日決行したんです？ビルから少し離れた渋谷に警察やESOが大勢集まつてるような、NPにとつてはある意味最悪なタイミングで」

（それについては、実行グループの間でも直前まで意見が割れてたそう。お前が言っ

たようにタイミングが悪いから日を改めようって派閥と、秒読み段階で中止したらそれこそ士気に関わるから強行しようって派閥。強行派については、予知調査で人手が割かれてるならかえって邪魔が入らないんじゃないかって考えてた奴もいたらしい。まあ、これについては俺たちが居合わせたわけだが」

「まあ、狙つてた人たちからすればとんだ誤算つてことなんでしようがね……」
徳川の説明を聞いて、光秋はどんな顔をすればいいか迷つてしまう。

——対処すべき側である僕らからすれば、すぐに現場に行けたのは幸運であり、実行グループからすれば追い詰められているところに追い打ちをかけた不運ということだったんだろう。僕個人にとっては北大路さんとの悶着の所為か、素直に喜べない『幸運』だけど……死中に活を見出すというのか、敢えて高リスクと考える方を選ぶって、それこそ工場地帯でのデ・パルマ少佐みたいだよな。今回の人たちは見事にハズレたってことなんだろうが……—

その行動自体には決して賛同できないことを重々承知しながらも、先日の自分たちとどこことなく似通った精神性を見出してしまった光秋は、実行グループに対してついつい同情にも近い気持ちを感じてしまう。

もつともそれも数秒のことで、すぐに頭を振つてそれを追い出す。

「で、ただでさえ思った以上に苦戦しているところに僕たちが来て、Eジャマーも壊れて

ZCに返り討ちに遭って、救援こそ来たものの実行グループの多くはお縄に、ZC側も巻き込まれる形で御用に……と、こんなところですか？」

（あらずじとしてはそんなところだろうな）

「……なんか、踏んだり蹴ったりですね」

聞いた説明と実際に見た光景を整理したものに、徳川はあつさりと頷き、光秋は自分で言っておきながらも他人事とは思えないたたまれなさを感じた。

「……………まあ、だいたいわかりました。ありがとうございます」

（ああ……落ち着いたら、また飲みに行こうぜ）

「是非っ」

誘ってくれた徳川に、この時だけは仕事の疲れもさつきから感じる妙なたたまれなさも忘れて力強く応じる。

（じゃあ、またな）

「はい。ありがとうございます」

一礼しながら応じると、光秋は電話を切る。

その直後、待機室のドアがノックされる。

「はい？」

携帯電話をポケットに戻しながら応じると、学校の制服を着た北大路が入ってくる。

「北大路さん？」

「……………どうも」

予想外の訪問者に少し驚いていると、北大路はちよこんと頭を下げる。

「どうした、こんな時間に？まさか、解散してからずっと廊下で待ってたのか？」

「いいえ。一旦寮に帰って、シャワー浴びて、すつきりしたらいろいろ考えちゃって……

その……………光秋さんにお話しが……」

「……………僕に？」

北大路の言い方に微かな違和感を感じたものの、それを一旦横に退けて、席を立った光秋はその許に歩み寄る。

「それで、話って？」

「……………」

言葉を促すものの、北大路は気まずそうに視線をそらして俯いてしまう。

「……………なにか、言いにくいこと？」

「言いにくいというか……………言いづらいというか……………」

「それだったら別に無理しなくても」

「そういうわけにも行かないんですっ」

切り上げを提案しようとする光秋を、北大路には珍しい強い語調が止める。

「言わないといけないことだから……私が、自分でちゃんと言わないといけないことだから……だから、言いますっ」

自分に言い聞かせるように、心の準備を整えるように告げると、北大路は顔を上げて光秋を見据える。

そして、

「……………さつきは、すみませんでした」

決して大きくはない、しかし確かな声で告げながら、北大路は頭を下げる。

「えっと……………」

「よく考えたら、メガボディに勝手に乗ったことまだ謝ってなかったし……靴、投げ付けちゃったし……」

「あっ…………」

言われて、突然の謝罪に唖然としていた光秋は、いろんなことで頭が一杯になって今の今まで失念していたことを思い出す。

—そういや、そうだったな…………—

そう思うと、背中に靴が当たった時の軽い衝撃さえも蘇ってくる。

「……………もしかして、忘れてました?」

「いや、その……………あの後いろいろあったからさ……………」

呆れた顔で訊いてくる北大路に、光秋は目をそらして応じる。

「それはそうと……なんか意外っていうか、新鮮だな。北大路さんが頭下げるなんて」そんな気まずさを誤魔化すことも兼ねて、今一番感じていることを口にする。

「そつちが謝ったんだし、私も謝らないと、なんか気持ち悪いでしょう……それと、さつきから言おうと思ってたんですけど」

不貞腐れた顔で応じると、北大路はすっかりお馴染みになった仏頂面を向けてくる。

「いつまで私だけ名字呼びなんですか？」

「……………えっ？」

おそらくは知り合って以降、一番予想外な問いかけに、光秋は目を丸くする。

「いつまでって……」

「桜ちゃんや董ちゃんはとくに名前と呼んでるくせに、私だけいつまで経っても名字って、なんか嫌な感じです。差別ですか？」

「いや、そういうわけじゃないけど……」

「だったら」

挑発するような、あるいは期待するような目で促してくる北大路に、光秋はぎこちなく応じる。

「……………菊、さん…………？」

「はいっ」

そうして返してきた北大路——菊の顔には、ほんの微かではあるものの、出会ってから初めて見る笑みが浮かんでいた。

「……………ようやく、かな？」

その微笑みを見据え、脳裏に桜と堇の顔を思い浮かべると、光秋は妙な達成感を覚えながらそう思った。

「……………よかったら、この後一緒に夕飯食べていくか？」

「えっ？」

唐突な光秋の提案に、今度は菊がハツとする。

「いやさ、平手打ちのお詫びっていうか、せつかく本部まで来たんだしさ。僕の方ももう少しで仕事片付くから、それまで待っててくれればだけど」

「……………」

そう続けると、菊は考える顔を浮かべる。

と、光秋の携帯電話が振動する。

「悪い、ちよつと」

断りを入れて画面を開くと、福山からだった。

「はい？」

（先程の戦闘で使用した鉄球だが、報告書の進捗はどうだ？）

「……………はいっ？」

菊関係のごたごたで完全に失念していた、そして間もなく仕事が一と段落すると思っていた身には強烈過ぎる問い掛けに、弛緩しつつあった神経が一気に緊迫する。

「えー……………報告書って…………？」

（京都から送られた00用装備だ。その使い勝手のレポートのことなんだが）

気が動転しているのか、口が無意識に言わずもがななことを訊ねると、薄々予想していた答えが返ってくる。

（メガボディの完成度を高める為、今はどんな些細なデータでも欲しいんだ。まだのようなら、今日中に僕の方に提出してくれ。頼んだぞ）

告げるや、福山の方から電話は切れる。

「……………」

通話後の電子音を律儀に鳴らし続ける携帯電話を耳から離すと、光秋は気まずそうに菊を見やる。

「あー……………すまない。まだ用事が残ってた……………食事の件はまた今度ってことで」

「ホント、三枚目……………」

恐る恐る告げる光秋に、菊は呆れ顔を浮かべた。

午後7時。

福山から催促された鉄球を含め、報告書を全て提出した光秋は、その足で帰路についた。

吊り革に掴まって電車で揺られながら窓の外を眺めていると、菊のことが浮かんでくる。

——自分から言った矢先に断るって、悪いことしちゃったな。その点も含め、お詫び頑張らないと……………

そう思いつつ、罪悪感に混じって喜びを覚える。

——北大路——菊さんとこんなふうに関われる日が来るとはなあ……………いろいろ大変な——どころか、危うい場面もたくさんあったが……………雨降って地固まる、といったところかな？——

初めて見せてくれた笑顔を思い出しながらそう思うと、光秋の頬も自然と弛んでいく。

しばらくして電車を降り、駅近くのラーメン屋に入ると、カウンターの端に座ってメニューを確認する。

と、携帯電話が振動する。

—メール?—

思いつつ画面を開くと、差出人は法子だった。

—法子さん?—

思わぬ相手に心弾ませながらメールを読もうとしたその時、カウンターの向こうから店員の声がかかる。

「ご注文は?」

「あー、ラーメン一つ」

ひとまずそれに答えると、改めてメールを見る。

『今電話してもいいですか?』

「……………」『すみません。今はダメ。都合がつき次第こつちからかけます。』

少し考えてそう返信すると、携帯電話をポケットに戻す。

—電話……………何だろう……………?—

気になったものの、店の中でかけるのもどうかと思い、出てきたラーメンをなるべく早めに食べて寮に戻った。

「さて、なんだろう?」

カバンを置くや携帯電話を取り出し、法子の番号にかける。

(もしもし?)

「法子さん? お待たせしました」

数回の呼び出し音の後に響いた法子の声に、微かに喜び、同時に安堵を覚える。

(うんうん。私の方は大丈夫)

「すみません。ちょうど夕飯にしようと思つてた時で。それで、今回はどうされたんです?」

(あ、うん。実はね……25日の夜、そっちに行くことになりました!)

「!25日??」

心底からの喜びを乗せた綾の声に、待ち侘びていた日をついに知った光秋は、その突然さに思わず動転しつつカレンダーを見る。

「……来週の金曜日か」

(うん。仕事終わつてすぐに向かつて、電車の都合も考えると、東京駅に着くのは8時過ぎかな)

「じゃあ、その日迎えに行きます」

(え? いや、でも、悪いよ。光秋くんだって仕事終わりで疲れてるだろうし)

「そこまで軟じやないですよ。それに東京駅から僕の寮の最寄り駅まで乗り継ぎとかちよつとややこしいし……それに………」

（それに？）

「……とにかく、当日は東京駅まで迎えに行くので。改札の近くで待っててください。それじゃあ、当日楽しみにしてます」

言う通話を切り、天井を仰ぎながら、先程言いかけたことを零す。

「少しでも早く会いたいし——なんて言うのは、流星にちよつとな………あつ」

そこでふと、ある失態に気付く。

「なんですぐに切っちゃうかなあ。もつと話せばよかった………」

自分から切った携帯電話を名残惜しそうに見ながら呟くものの、数秒後には来週に迫った伊部姉妹との再会に心躍らせる。

「ま、来週にはたくさん話せる——どころか、久しぶり顔を合わせられるんだし、いつか。とりあえず、来週末は予定が空くようにしとかなと………」

嬉しそうに呟きつつ、数日内の予定を頭の中で調整しつつ、今日一日の疲れも忘れて風呂の用意を始めた。

伊部姉妹東京再開編

110 お詫びの席

3月17日木曜日午前8時。

伊部姉妹から東京行き連絡を受けた翌日、光秋は早速用事の消化に取り掛かった。

—通常業務はともかくとして、一先ずやるべきは菊さんへのお詫び……と、曾我さんへのお返しだな。特に曾我さんの方はやっとかないと後が怖いし——

そこで真つ先に思い浮かぶのは、昨日の出動後にあつた菊とのトラブルであり、その解決に協力してくれた曾我の姿だった。

もちろん、菊を蔑ろにしていというわけではないものの、万が一この時の貸しを先延ばしにした場合曾我から何を言われるか、それが光秋にはちよつとした恐怖だった。

—またみんなで食事会ってことでいいかな。できれば今週末には済ませておきたいが……そこは各々と調整だな。菊さんたちは夕方電話してみるとして、曾我さんは今から訊きに行つてみるか——

思うと机から立ち上がり、藤岡隊の待機室へ向かう。

—昨日の予知出動と戦闘の反省会は今日中にやっておくとして、今のところ片付けな

きやいけないことはそれくらいか。あとは来週中に急用が入るかどうかが、それは流石に運だな……………」

一抹の不安を抱きつつ廊下を進むと、藤岡隊の待機室の前に着く。

「失礼します」

ノックしてドアを開けると、机で書類整理をしている藤岡主任と、その横でパイプイスに座って念力で自動車のプラモデルを組み立ている曾我を見る。

「曾我さん、ちよつといいですか？」

「どうかしましたか？」

組み立てを中断して応じると、曾我は光秋を追って廊下に出る。

「昨日の件のお返し——もといお礼なんです、今週末って空いてますか？」

「あら、早速ですか？土曜日でよければ構いませんよ」

「よかった」

待つてましたとばかりに微笑む曾我に応じると、光秋はもう一つ確認する。

「それで当日なんです、ウチの特エスたちも同席していいでしょうか？菊さんへのお詫びも兼ねてつてことで」

「構いませんよ。加藤主任の甲斐性を見られる面白い——いい機会ですし」

「曾我さん……」

露骨に言い直しながら、異動以来すっかり馴染んだ挑戦的な視線を向けてくる曾我に、光秋は今日も慄く。

「ところで、お店はどこにするんです？」

「あ、そうだな……………この前徳川さんたちと行ったところは？ほら、渋谷にある、エビみたいな名前の店」

「わかりました」

「じゃあ、夕方に菊さんたちにも確認して、今日か明日中にまた連絡します」

「ええ……………ところで」

応じると、曾我はまじまじと光秋に顔を近付けてくる。

「っ？」

「主任、なにかいいことでもありましたか？朝早くからなんか楽しそうですけど」

「えっ？……………いやあ……………」

自分ではわからなかったものの、伊部姉妹との件は思った以上に顔に出ていたらしい。凶星を突いてくる曾我に、光秋は思わず狼狽してしまう。

「その……………大したことじゃ——」

「なにかあったことは認めるんですね？」

「っ……………」

誘導尋問さながらの曾我の切り込みに、背筋が寒くなる。

と、次の瞬間には、それまで険しい顔を浮かべていた曾我が急に吹き出す。

「ふっ！失礼。イジワルがすぎました。主任があまりにいい反応をするものですから、
つい」

「勘弁してくださいよ……」

そこでようやく寒気から解放されて応じると、曾我は待機室へ戻る。

「それでは、連絡お待ちしています」

「はい」

「あ、そうそう」

「？」

「嬉しいことがあつて喜ぶのは結構ですけど、それで浮かれて、またしょうもないミスしないくださいね」

入室間際に釘を刺すと、曾我は待機室に入っていく。

「……………」

一人廊下に残された光秋は、たった今刺し込まれた釘に苦笑を浮かべる。

「参ったな……そんな出でてるだろうか……？」

頬を揉んで自重を心がけると、自分の待機室へ戻った。

午後7時。

一日の大半を昨日の反省会に費やして業務を終えた光秋は、寮に帰るや董に電話をかける。

（もしもし？）

「あ、董さん？今いいか？」

（はいっ！どうしましたかっ？）

その声は、心なしか弾んでいるように聞こえた。

「今週の土曜日だけど、昨日騒がせちゃったお詫びというか、また食事会を考えてるんだよ。渋谷まで出てこれないかね？桜さんと菊さんも」

（渋谷って、この間みんなで行ったお店ですか？）

「そう。当日空いてるかな？桜さんと菊さんにも訊いてもらえないか？」
（ちよつと待ってください）

董が応じると、しばしの沈黙が訪れる。

（もしもし）

「どうだって？」

（2人とも大丈夫だそうです。私も）

「わかった。じゃあ、5時に董さんたちの寮に集合つてことで。曾我さんの方にもそう連絡しとくから」

（曾我さん？）

「あ、言い忘れてたつけ？昨日の件では曾我さんにも世話になったからさ、そのお礼も兼ねてなんだけど」

（……そうですか）

遅れながらの補足に、董は微かに沈んだ声を返してくる。

「……どうかしたか？」

（……いいえ。何でもありません。5時に寮に集合ですよ。桜と菊にも伝えておきます）

「頼む。じゃあ、当日よろしく」

（はい。おやすみなさい）

「おやすみ」

言うとき光秋は電話を切り、曾我のメールアドレスを探す。

「さて、曾我さんの方にも連絡つと」

3月19日土曜日午後5時。

先日の連絡に従つて桜たちの寮を訪れた光秋は、すでに門の前に曾我たちが集まつているのを見て、足を速める。

「すみません。遅れちゃつて」

「ちよつとー？ 大人は5分前行動なんじゃないんですか？」

駆け寄るや頭を下げる光秋に、菊の三角目が向けられる。

「面目ない……電車の時間を1本間違えて……」

余計に情けなくなるとわかつていながら、つい言い訳が漏れてしまう。

「まあいいわ。この後奢つてもらうんだし。行きましよう！」

「オーツ！」

非番とあつてすっかり普段通りの口調で嬉々として言う曾我に桜も元気に応じ、それを合図に一行は駅へ向かう。

―にしても、ここんとこ流石に食事会が多いような……今日のこれと、法子さんたちの分が終わつたら、しばらく自重しないと――

歩きながら懷の重さを気にしていると、菊が左隣に歩み寄ってくる。

「……………」

「……どうかしたか？」

歩幅を合わせてちらちらと視線を寄こしてくる菊、その意図がいまいちわからない光秋は、遠慮がちに訊いてみる。

「……光秋さんって、気が利かないってよく言われませんか？」

「なによ、突然？」

「今日は私へのお詫びが目的なんでしょう？ だったら……」

言いながら菊は足を止め、なにかをねだる様な目を向けながら右手を差し出す。

——あー、なるほど……——

ここでもうやく菊の求めていることを察したものの、同時に菊が高レベルのサイコメトラであること——加えてこれまで何度か無断で思考を読まれたこと——が脳裏を過り、手を伸ばすことをつい躊躇ってしまう。

——て！ここで尻込みしてどうするか！菊さんが言った通り、今日は彼女へのお詫びが目的の一つなわけで、その希望は可能な限り叶えてあげるべきだ。それにここで拒否なんてしたら、いよいよ取り返しのつかないことになるぞ——

そう胸中に喝を入れると、光秋は自身の左手を菊の右手に伸ばす。

未だサイコメトリーに対する不安は拭い切れないものの、なけなしの勇気を振り絞ってその小さな手を包む様に掴んだ。

——……事情が事情とはいえ、小学生と手を繋ぐだけでどれだけ緊張してんだ僕は。初心^{うぶ}にも程があるつての……—

高まった緊張をほぐそうと、敢えて自虐的なことを思い浮かべてみる。

「……………私、もうしませんから」

「？」

そんな中、ぼそつと呟いた菊に、光秋は聞き返す目を向ける。

「今後は勝手に思考を読んだりしませんから。あんまり強い思いはその気がなくても読み取っちゃうことはあるけど、その時はなるべく忘れるようにしますから……」とにかく、今までみたいなことはもうしませんから」

「……………それはありがたいが……………またどうした？」

「……………光秋さんには嫌われたくないって……………そう思うようになったから……………」

「僕が何だつて？」

すぐそばを通る車の音に掻き消されそうな小声が上手く聞き取れなかった光秋が聞き返すと、菊は顔を薄つすら赤くし、目を三角にして言ってくる。

「大人にならなきやつて思ってたんです！さすがにイジメが過ぎたかなって思つて！」

「お、おお……………そりや感心だな……………」

その迫力に、思わず腰が引ける。

「……ま、まあ……とにかく、今後ともよろしくな」

「……よろしく」

気を取り直すことも兼ねてかけた言葉に、菊は未だ不機嫌面を浮かべながら応じる。その一方で繋いだ手には明確な力が籠り、その強い握り返しこそが、光秋には百の言葉以上の安心材料になった。

「……………そういえば、気になってたんですけど」

それまで後ろを歩いていた莖が、光秋と菊にやや尖った視線を向けながら言ってくる。

「ん?」

そんな態度を多少気にしながらも、光秋は特に指摘することなく先を促す。

「この前の出勤の反省会、まだしてませんよね? てつきり今日やるのかと思ってたけど……もしかして来週ですか?」

「あ、それな……」

言われて、いけないと思いつつもつい先送りしていることへの罪悪感を覚える。

「来週は用があるから、とりあえずそこはない。日取りがはつきりしたら改めて連絡するよ」

「……………そうですか」

「悪いな。心配かけて」

「そういうわけじゃないですけど……」

謝る光秋に、董はなぜ嬉しそうな顔を浮かべる。

「っ」

「？」

直後に頬を膨らませた菊に脇腹を小突かれるが、光秋にその理由を察することはできなかった。

しばらく電車で揺られて渋谷駅に着き、ホームから人の波の中を進んで地上に上がると、一行はスクランブル交差点の前に出る。

「よし、全員いるな」

「だから心配しすぎだつて……」

全員そろっていることに安堵する光秋に、桜が呆れ顔を浮かべる。

「そうは言うけど、人が多いからさ。うっかりはぐれたら後が大変だし……まあいいや。確かこつちだったよな？」

軽く反論を返すと、先日行つた時の記憶を頼りに歩き出し、桜たちもそれに続く。

「……確か、こつちでしたよね？」

「ここはこつちに曲がらなかった？」

「そうでしたっけ……？」

道中曾我たちとうろ覚えな道筋を確認しつつ、徳川に連れて行ってもらった時以上の時間をかけて、ようやく見覚えのある左右の建物の合間を埋めるように建つ小ぢんまりした店を見付ける。

『『ロブスター』。ここですね』

「あの絵は確かだね」

看板に書かれた店名を読み上げる光秋に、桜も両腕のハサミを強調したエビの絵を指さしながら頷き、2人のそのやり取りを合図に一行はドアをくぐる。

ドアベルの音を伴って店内に入ると、奥から赤いバンダナを巻いた店主——子規が現れる。

「おお、コウくん！嬢ちゃんたちも」

「どうも」

こちらを見るや笑みを浮かべる子規に、光秋は会釈を返す。

「5人なんですけど、大丈夫ですか？」

「全然っ。好きなどこ座って」

光秋の問いに、子規は嬉々として応じながらまだ誰もいない店内を示し、一行はテーブル席へ向かう。

「そういえば、ここ4人席なんですよね……」

自分たちの人数と、テーブル1つ辺りの人数を見てどう座ろうかと光秋が考えていると、桜が隣のテーブルから椅子を1つ持ってきて側面に置く。

「いいじゃん、これ借りれば。光秋もこの前やっただろう?」

「そうだけど……大丈夫ですか? 椅子1つ貸してもらつても」

「どうぞ。まだ混んでないし」

「ありがとうございます」

了承してくれた子規に頭を下げると、光秋は桜に勧められて側面の椅子に座り、そこから見て右に菊と董が、左に桜と曾我がそれぞれ腰を下ろす。

「さてと、なに頼もつかなあー」

「妙に気合い入ってんな。珍しいじゃん菊」

「そりゃあ、今回は私へのお詫びつてことで来たわけだしね。またとない機会、しっかりとしまない!」

「ハッハッハッ……煮るなり焼くなり好きにしてくれ……」

桜の言葉に菊は意地の悪い笑みを浮かべ、その顔でちらちらと視線を向けられた光秋

はヤケクソ気味に応じながらカウンター奥のメニュー一覧を見る。

「僕はとりあえずウーロン茶、あと唐揚げ」

「私は……」

光秋が言つたのを皮切りに菊たちも注文を挙げ、やつて来た女性店員にそれを告げて待つことしばし、全員分の飲み物とシーザーサラダが運ばれてくる。

「みんな、飲み物は回つたな？」

「「「はーいっ」「」」」

テーブルを見回しながら光秋が確認すると、4人は各々にグラスを持つて応じる。

「えー、このたびは先日 of 僕の不祥事でみなさん、特に菊さんに多大な迷惑をおかけしました。そのことについて、改めてお詫びいたします」

自分のグラスを持つて言いながら、光秋は軽く頭を下げる。

「そして曾我さんには、その時の解決に協力していただいたこと、改めて感謝いたします。ありがとうございます」

言いながら、曾我に頭を下げる。

「今回はその時のお詫びと、感謝のための食事会です。みなさん満足いくまでお楽しみいただければ幸いです。では、グラスを」

促すと、桜たちはグラスを前に掲げ、光秋も自分の分をそれに近付ける。

「乾杯ッ！」

「「カンパーイツ!!」」

嬉々とした号令と共に5つのグラスが小気味いい音を響かせ、一同は各々自分のグラスに軽く口をつける。

「オッシャー! 食うぞッ!!」

「おう。煮るなり焼くなりしてくれ。僕の財布をなっ」

グラスから口を離すや気合いを入れる桜に光秋がヤケクソに応じたのを合図に、今宵の宴の幕は上げられた。

食事会の開催が宣言されて1時間が経とうかという頃。

―さて、曽我さんがそろそろ危ういか……?―

2杯目のウーロン茶を飲みながら、光秋は顔が赤くなってきた曽我に警戒の目を向ける。

その手には3杯目のカクテル――今はジントニック――が握られ、見ている間にもちびちびと口に注がれていく。

―位置関係からいって、今回は桜さんが絡まれるかな? 適当なところで止めないと

……にしても……」

そこまで考えて、ふと涼と徳川、羽柴の顔が思い浮かぶ。

―菊さんと曾我さんのことを優先するあまり、3人のことがおぎなりになってたかな？ 徳川さんと羽柴さんには変なところ見せて迷惑かけただろうし、涼さんには曾我さんにも負けないくらい世話になったのに………まあ、とりあえずこっちは、法子さんと綾の件が落ち着くまで待つてもらおうか………」

勝手だという自覚は充分ありつつも、伊部姉妹と再び会うことが現在の最優先事項である光秋は、お礼やお詫びを先延ばしにすることへの罪悪感を覚えつつもそのように予定を立てる。

と、董がグラスを置きながら声をかけてくる。

「光秋さん？ どうかしめましたか？」

「ん？ ああ、徳川さんたちにもお詫びとか感謝とかしなきゃなって」

「……またこのお店に誘うんですか？」

食べていた物を飲み込んだ菊が訊いてくる。

「今のところはそのつもりだけど、都合が合わなければ他の方法も考える」

答えると、光秋はフライドポテトを一つ摘まむ。

その時、

「えへへへ、桜ちゃん！飲んでるう？」

「ちよ、くつつくなよ！酒臭っ」

「始まったよ……」

赤い顔をすっかり緩ませた曾我が隣の桜に抱き着き、予測していた展開に光秋は席を立てて2人の後ろに回り込む。

「ほら曾我さん、桜さんが困ってますよ」

言いながら曾私の肩を掴み、引き摺るように桜から引き離して椅子に座り直させる。

「ほら、ワンちゃんも飲んで飲んでっ」

「だから、僕はまだ飲めませんって」

すると今度はこちらにグラスを押し付けてきて、光秋はどうかその手をテーブルに戻させる。

そこでドアベルが鳴り響き、新しい客が4人入ってくる。

「いけね」

それを見るや、光秋は自分が座っていた椅子を慌ててもう1つのテーブルに戻す。

「ちよっ、椅子戻してどうすんのさっ」

「仕方ないだろう。他のお客さん入ってきたし。カウンターにでも移動するよ」

桜に応じながら、光秋は自分のグラスと皿に手を伸ばす。

と、

「だつ、だつたら、ここに座るのはどうですか？」

どこか強張つた声をかけながら、董が自分の座つていた椅子を勧めてくる。

「いや、それだと董さんが座れないだろう。椅子取りゲームじゃないんだから」

「だ、だから、ここに光秋さんが座つて、その上に私が座ります。それで全員座れるでしよ？」

「あー、なるほどな……て、ダメに決まつてるだろう」

あくまでも大真面目に言ってくる董に、光秋は呆れ顔で応じる。

「そうだよつ、何で董が？ そういうことならアタシがつ！」

「今日は私のお詫びで集まつたんだから、ここは私でしよつ!!」

「2人も落ち着きなさい」

そして何故か興奮し出した桜と菊をなだめつつ、光秋はテーブル席に着いた4人に「すみません……」と頭を下げる。

「とにかく、僕はカウンター行くから。まだ欲しい物があつたら好きに頼んで」

言うや光秋は自分の食器を持ち、そのまま真後ろのカウンター席に移る。

「あの子らに懷かれてるんだな、コウ君は」

「一応、それなりに好かれる努力はしてきましたからねえ……今は3人そろつて睨んで

きてますけど」

カウンターを挟んで向かいに立った子規に、光秋は主任研修初日の「最悪」な始まりから今日までをしみじみと振り返りながらウーロン茶のグラスに口をつけ、背中に感じる3人分の視線に内心首を傾げる。

「……そういえば、この前は大丈夫でしたか？」

「予知があつた日？」

「はい。僕もあの日、巡回に出てたんですけど」

「そういえばESOに勤めてるんだったね。ウチは別に。ガス周りで注意がきたくらいかな」

「それならよかったです。おかげでこうして、またここで食事ができるってもんで」

「けっこう口がお上手じゃない？」

「本心ですよ」

不意に浮かんた問いから始まったやり取り、それを重ねるごとに、子規と光秋の口元は少しずつ緩んでいく。

と、それぞれ不服そうな顔を浮かべた少女3人がカウンター席にやってくる。

「どうした？」

「別に。アタシたちもこつちがいいと思って」

尖った声で応じながら桜は光秋の右隣に、同時に菊は左隣、董はその隣に座る。

「君たちなあ……」

よく見れば自分用の食器すら持ってきていない3人に呆れていると、子規がニヤニヤした顔をこちらに向けてくる。

「女の子3人は当然として、コウ君もまだ酒飲めないんだっけ？」

「はい……？」

「いやあ、4人が飲める年頃になったら、なかなか絵になるかなあつて」

「気が早すぎますよ………」

どこまで本気かわからない子規の言葉に、光秋はウーロン茶を飲みながら応じる。

ただ一人テーブルに残された曾我が気だるげな声を上げたのは、そんな時だった。

「マスタあ、カシスソーダあ……」

「はーいつ」

それに応じて奥へ引つ込む子規の背中を見送り、すっかり赤くなつた顔でテーブルに突っ伏している曾我を見た光秋は、皿の上の唐揚げを摘まみながら思った。

—そろそろ、潮時かな？—

十数分後。

曾我がカシスソーダを飲み干したのを見届けた光秋は、それを合図にカウンター奥の子規に声をかける。

「すみませーん、会計お願いしますっ」

「はーいっ」

子規の返答を聞きながら椅子を立つと、それに合わせるように渋々テーブル席に戻っていった桜、堇、菊も帰り支度を始める。

「ほら曾我さん、行くよ」

「うーん……………」

そんな中でただ一人テーブルに突っ伏して動く気配のない曾我を、桜は手をかざして椅子から浮き上がらせる。常に1メートル程の間合いを空けているのは、迂闊に近付いてまた抱き着かれるのを警戒してだろうか。

「あんまり無茶するなよ。こっちが終わり次第僕が肩貸すから」

「大丈夫だよ。アタシに任せろって」

子規に代金を渡しながら注意の声をかける光秋に、桜は少しムキになって応じる。

——心配してるのは、桜さんの腕だけじゃないんだけどな——

思いつつ、もう1つのテーブル席に座っている4人組をちらりと見やる。

入店以降、光秋たちにも負けない楽しい談笑を続け、今もそれを継続している彼らではあるが、桜が曾我を浮かせた辺りから、散発的に2人に視線を向けていた。

―興味と警戒が半々……いや、後者がやや多いかな？どっちにしろ、何かしてくる気配はなさそうだが―

目分量で彼らの心境を量ると、子規からお釣りとレシートを受け取った光秋は頭を下げる。

「ごちそうさまでした」

「おう。また来てなあ」

子規の声に見送られて、一行は店を出る。

「ほら、曾我さん」

外に出るや、光秋はされるがままに地面から30センチ程浮かされている曾我に屈んで背を向けるが、

「だからいいってつ。このままアタシが連れてくから」

浮かばせている桜は頑なな様子で返し、そのまま曾我を連れて駅に向けて歩き出してしまふ。

「わかったよ……その代わり、駅に近付いたらもう念力はなしだからな。そこからは僕が代わるから。あと、曾我さんが落ちないように気を付けてな」

「わかってる！」

光秋の注意が余程小うるさかったのか、高レベルサイコキノとしてのプライドか、桜の荒い声での返事を聞くと、光秋もその後が続く。

と、左右から菊と董が追いついてくる。

「さっきの人たち、桜ちゃんのこと見てましたね」

「ああ、菊さんは気付いてたか」

右隣を歩く菊のやや険のある呟きに、光秋は少し気まづくなりながら返す。

「……やっぱり、街中で念力を使うのってまずいですか？」

「まあな……」

左隣をついてくる董の不安そうな問いに、光秋は言葉に困りながらも言うべきと思っただけで、口を開く。たこと言う。

「ZCのこともあって、一般人は超能力者、特に高レベル能力者には敏感なご時世だからな。それこそ目の前で小さい子供が、女性とはいえ大の大人を浮かばせたら注目しちゃうだろうし、多少の警戒心も抱いちゃうだろうさ」

「……光秋さんでも、そんなこと言うんですね」

そう返した菊の顔は横を向いて俯いていたために見えなかったが、声は少し震えていた。

「ま、僕だってノーマルだからな。超能力者——自分より強い相手には多少の恐怖心は抱くさ。それに1回、超能力者関係で危ない目にも遭ったし」

「京都に勤めてた頃、そんな事件が？」

「いや、あくまでもプライベートな場面で」

董の問いに応じながら思い出すのは、去年の夏。綾と知り合って少し経った頃、出かけた先でサイコキノの不良に念力で首を絞められた記憶だった。その時の苦しみまでも思い出したのか、無意識の内に首を撫でる。

「あの時は、他のことでいっぱいいっぱい気が回らなかったけど、後で思い返すと、離れた所から一方的に、それも何の道具もなしに、自分の体一つだけでこつちを攻撃できるサイコキノは、やっぱり怖いなって思った」

「……………」

赤裸々な光秋の語りに、董と菊の顔は徐々に強張っていく。曾我を抱えて先を行く桜のことを思ってたか、「サイコキノ」と限定した言い方をしつつも言外に超能力者全般を指していると感じたのか。いずれにしろ、二人からは先程の食事で得た温かさは抜け始めている。

「ただ、それでもサイコキノの——超能力者の全てを怖がらずにいられるのは、そうじゃない人もいるって知ってるから……暴力とは違う“力”の在り方を示してくれる人た

ちがいるからなんだろうな」

傍らの2人の様子を把握しつつ、敢えて言い続けた光秋の脳裏に真つ先に浮かんだのは、いつも自分に寄り添ってくれた綾の姿だった。

「……誰のことです？」

「ん？……ちよつと、知り合いにな」

好奇心の目で訊いてくる董に、何故か照れ臭さを感じて曖昧に返すと、それをはぐらかすことも兼ねて連鎖的に浮かんできた人々のことを語る。

「あとは、京都にいた頃の上司がサイコキノで、よく助けてもらったし、曾我さんだつてそうだ。あと、涼さ——鷹ノ宮涼子様だつて、超能力を活かした社会貢献に積極的だろう？」

「最後の方おかしくありません？いきなり有名人出してきて」

少なくともはぐらかすという目論見は成功したらしい。菊が怪訝な目を向けながらも、綾のことを追及してくる気配はなかった。

「それに、やっぱり桜さんだな。特に東京に来てからは彼女の念力によく助けられてる。もちろん、董さんと菊さんの力にもな」

「なーんか、取って付けた感じ」

不満そうに言いながらも、菊の顔からはすでに力は抜け、猫に猫じやらしでも見せた

ように光秋の右手にじゃれついてくる。

「……『木を見て森を見ず』、ですか？ 悪い超能力者もいるけど、良い超能力者もたくさんいるって」

「おつ、いい線行ってるじゃないか董門下生よ。『良い・悪い』っていうのは個人的に気に入らないところはあるが、ちゃんと勉強してるな！」

研修中の頃に話したことを取り上げてきた董に、おふざけ半分・自分の話したことを覚えていてくれたことへの嬉しさ半分に、いかにもな芝居がかった語調で返ししながら、光秋はその頭を撫でる。

「えへへへっ！」

それに董は、人懐っこい仔犬のような笑みを浮かべた。

「…………この先生ですか…………」

そんな2人に菊は呆れと、なぜだか不満そうな顔を浮かべ、それまでじゃれついていた光秋の右手を自分の頭の上に持つてくる。

「ちよつとつ。さつきからアタシ抜きで盛り上がってんじゃねえよー！」

そこで先を行っていた桜が急に立ち止まって振り返り、不満一杯の顔で3人の許へ駆け寄ってくる。その横には、店を出て以降浮かんでいた曾我が、上下に激しく揺れていた。

「ちよっ！揺らさな——ううっ!？」

「！曾我さんっ!」

急激に顔色を悪くして口を押える曾我を見るや、光秋の方も慌てて駆け寄る。

そんな騒動を挟みながらどうか渋谷駅に着いた一行は、夜の地下鉄へ乗り込んでいった。

111 迎えに

3月24日木曜日正午。

半日分の業務を終えた光秋は、食堂でうどんをすすりながら、いよいよ明日に迫った伊部姉妹との再会に申し訳程度に心躍らせていた。

—京都から異動になったのが1月の中頃だから、かれこれ2カ月半ぶりか。今のところ週末までずれ込む用事もなし。この分なら、明日の夜には予定通り法子さんと綾とまた会えるぞ!—

気を抜けばどこまでも浮かれそうになる心境を抑えながらも、僅かな顔の緩みだけは止められなかった。

そんな中、不意に徳川と羽柴、そして涼の顔が脳裏を過り、浮かれ気味な胸中に一瞬重い罪悪感を抱く。

—終わったらっ。法子さんたちの件が終わったら必ずこの前の埋め合わせはするのです。それまでどうか待っていてください……………—

胸の中で3人に詫びを入れ、それでようやくバランスがとれたのか、自分でも不安になるくらい躍っていた心境も落ち着いてくる。

ポケットの中の携帯電話が震え出したのは、そんな時だった。

「福山主任?……もしもし?」

画面の名前を見るや箸を置き、すぐに電話に出る。

（少しいいか?）

「はい。なにか?」

（初めに確認するが、今食事中か?）

「ええ」

（ではそれが終わり次第、いつもの格納庫に来てくれ。MB-000の件で話がある）

「ニコ——000の?わかりました」

言うのと携帯電話をポケットに戻し、少しでも早く食べ終わろうと箸でより多くのうどんを掴む。

——ニコイチのことってなんだろう……?週末に臨時の訓練だか運用試験だか入らないといけないけど——っ!——「熱っ!!」

不謹慎とは思いつつもそんなことを考えた直後、掻き込むように口に入れようとした麺の束の予想以上の熱さに、思わず声を上げた。

昼食を終え、近くの水盤で軽く口をすすぐと、光秋は先程の電話に従って本部に異動して以降使う機会の多い格納庫へ向かう。

しばらく歩いてシャッターの開け放たれた入り口前に着くと、立ち止まって中の様子を窺う。

「……………」

「加藤三尉。こつちだ」

「！」

言いながらこちらを手招きする福山を見付け、すぐに駆け寄る。

「お待ちせしました。それで、00の件って？」

「まず、アレを見てくれ」

言いながら福山は自分の後ろを指さし、それを目で追った光秋は、ざっと全長10メートルはあろうやや太い筒状の機器が置かれているのを見る。

「……砲身……ですか？」

「当たらずとも遠からずだな。正解はレーザー砲だ」

「レーザー砲っ？」

淡々と告げられた福山の回答に、思わず怪訝な顔を浮かべる。

「なんというか……………またなんともSFチックな物が出てきましたね……………」

思わず口から零れた、それが率直な感想だった。

「というか、レーザー砲って実在したんですね？」

「確かに、SFのガジェットとしてはいつかのレールガン以上にメジャーかもしれない。しかしレーザーの原理自体はすでに確立しているし、兵器としての利用も次世代の対空防衛用として研究が進められている。本装備は、それを対DDシリーズ用に転用したものだな」

「やっぱり、そういうことですか……」

ニコイチのことで呼び出された時から薄々予感していた単語がついに出て、光秋は袖の下の肌を粟立たせる。

「これまで回収したサンプルを調査した結果、DDシリーズの外装を構成している物質——便宜上『DDマテリアル』と呼んでいるが——それは分子レベルで相互に強く結び付いていることが判明した」

『DDマテリアル』、ですか……——ニコイチというニコイチウムだな。少なくとも竹田二尉ならそう言うだろう——

説明の過程で福山の口から出てきた新しい言葉に、思わず久しい顔が浮かぶ。

「これはつまり、DDシリーズの外装を弾丸等を用いた運動エネルギーによって破損させる——平たく言うと、『叩いて壊す』ということはほぼ不可能ということだ」

「……何度かの交戦と、なによりも00の性質からそんな気はしてました。そこでレーザー砲というわけですか？」

「そうだ。物質的に破壊することができないなら、高エネルギーの照射による溶解を試みてはどうかということになった。レーザーとはまた原理が違うが、00とDDシリーズの交戦時にも似たような事例は報告されているしな」

「……」

言われて光秋は、DDシリーズが用いるビーム兵器、それがニコイチの外装を掠つていく時の熱さや痛みを思い出して、思わず顔を歪める。

「叩いて壊せないなら燃やしてしまえ……発想はシンプルでしょうが、具体的な方法論をこうして見せられると、なんとというか……凄まじいですね」

一連の説明を自分なりに呑み込むと、目の前に鎮座するレーザー砲にも感慨が湧いてくる。

「それで、どういう原理なんです？できるだけ噛み砕いて教えていただけると……」

「噛み砕いて、か……」

自分が関わるものへの好奇心、と同時に抱いた難解な理論が展開される不安から出た光秋の問い掛けに、福山は少し考える。

「掻い摘んで説明するとだ、あの砲身——より厳密にはそれに似た形で組まれた装置の

中に数種類のガス状化学物質が入っていて、それらを混ぜて反応させたところに光子こうしを加えることで誘導放出が行われ、高エネルギーを持ったレーザーが生成される……こんなところか？」

「はあ……………」

福山なりに「噛み砕いて」説明してくれたことは充分承知しながらも、「コウシ」だの「ユウドウホウシュツ」だのという単語が出た時点で、光秋の頭には散発的な鈍痛が走っていた。

「えっと……………ガスの混ぜ物にコウシつてのを当てることによって、あらゆる物を焼き払う光線、つまりレーザーを発射できるようになる…………と？」

「その理解で概ね問題ない」

それでも痛む頭で整理した自分なりの理解を述べると、返ってきた福山の返答に内心でほつとする。

「それで、ここからが本題なのだが、00によるコレのテストを行ってもらいたい」

——来たっ！——

福山の口から出た今一番の懸案に、一度は弛緩した心を引き締め直す。

「…………ちなみに、いつ頃？」

「今週の土曜日だ」

「法子さんと綾が来る時じゃないかつ!」「……また急ですぬ?」

福山の返答に思わず出そうになった叫びをどうにか呑み込み、努めて冷静に返す。

「それは僕も申し訳なく思っている。本当ならもう少し早く連絡するつもりだったんだが、今回のテストの準備や、ゴーレムⅡの件でバタついていて遅れた」

「ああ……………」

連絡が遅れたこと以上に、久しぶりに伊部姉妹と過ごす予定だった週末の前半を潰されたことに憤りを抱いていた光秋だったが、ゴーレムⅡの名前を聞いた途端にそれが少し引いてしまう。

「もしかして、すでに予定が入っているか?」

「あ、いや……………」

福山の問いに、光秋は返事に詰まってしまう。口の方は今すぐにも断る為の言葉を言いたがっている。

しかし、

——福山主任だってゴーレムⅡの開発——対DDシリーズ兵器の開発を目指す主任からすれば寄り道ともいえることを頑張っているわけで……なにより、対DDシリーズ戦では現状唯一まともな戦力の僕が、その為の装備品のテストを疎かにするわけにもいかないか……………」

数瞬かけてどうにか気持ちを整理すると、やや重くなった口を開く。

「いいえ。あるにはありますが、調整はつくので。大丈夫です」

「わかった。後で詳細をメールしておくから確認してくれ」

「わかりました……では」

応じると、光秋は一礼して格納庫を後にする。

——とりあえず、メールを確認したら法子さんたちに連絡だな………一応承知はしたものの、こういう時に限ってこんな用事が入るって………ままならんなあ……—

拭い切れないやり切れなさに、思わず嘆息が漏れた。

3月25日金曜日午後6時。

「いよいよだなっ！」

今日一日の勤めを終えて帰り支度を整えながら、光秋は嬉々として呟いた。体には週末独特の疲労感が溜まっていたが、胸中はどうやく直じかに会える伊部姉妹のことで軽々と弾んでいた。

——急な試験で一緒にいられる時間こそ減ったものの、これから東京駅に迎えにくつていうのは変わらないからな。これから直接会えるだけでも嬉しいもんだ！——

そう思うと、無意識の内に頬が緩んでくる。

と、待機室のドアがノックされる。

「はい？」

「失礼します」

応じると、学校の制服に身を包んだ董が入ってくる。その後ろには、同じ服装の桜と菊もいた。

「どうした？3人して。それもこんな時間に」

「別に。ちよつと時間できたから、光秋の様子見に來ただけだよ」

光秋の問いに、桜がドア近くの壁に背中を預けながら答える。

「様子見つて……」

「なんだよ？」

「いや、ありがたいけどね」

不服そうな顔をする桜に応じると、光秋は荷物の確認を終えた足元のカバンを肩に提げる。

「といつても、今日はもう上がりだけだな」

「じゃあ、これからみんなでご飯食べに行きませんか？帰る途中にあるお店で」

光秋が呟くように続けると、歩み寄ってきた菊が提案してくる。

「悪い。この後用事あつてさ」

「……用事、ですか？」

その返事に董が残念そうな顔をする横で、菊が好奇心の目で訊いてくる。

「用事つてなんです？」

「ん？京都にいた頃お世話になった人がこれから来るから、その出迎えに」

答えると、今度は桜が訊いてくる。

「……もしかして、秋田でアタシにピンタした人？」

「よくわかつたなっ」

ここまでのろくな情報を与えていないにも関わらず迎えの相手を的確に当てた桜に、思わず感心の声を返す。

途端に桜は目を鋭くし、大股でこちらに歩み寄ってくる。

「それならアタシも行く！」

「……？」

近くに寄るや言い放たれた言葉に、光秋は束の間困惑する。

「……行くつて……」

「それなら私も」

「！じゃ、じゃあ、私もっ！」

言葉に困っている間にも菊が、さらにはそれを見て慌てた様子の董までもが手を挙げてくる。

「いや、待て待て。これからか？」

「当たり前じゃん。光秋と一緒に行くんだから」

「いや、待ち合わせ場所、東京駅だぞ？ここからだとそこそこかかるし、早く着いたとしても相手が来るのは8時過ぎ。そこからすぐ帰ったとしても、けっこう遅くなるぞ？」

「いいじゃないですか、ちよつとくらい夜更かししたつて。明日は休みだし」

「そうかもしれないが……でも、子供をあんな遠くまで連れ回すのは……」

「この前も渋谷まで連れて行ってくれたじゃないですか」

「そうだけど……」

桜、菊、董——3人それぞれの反論に、光秋はいよいよ言い淀んでしまう。

——まあ、確かに。いつかはこの3人とあの「二人」を会わせたいとも考えてはいたが
 ……………

光秋にも、自分が今深く関わっている桜たちを伊部姉妹に会わせてみたいという思いはある。が、それはあくまでもまた別の機会であり、今回は姉妹との「三人」きりの時間を1分1秒でも多く取りたいという欲求の方がずっと強いことも自覚している。

その一方で、計算的な部分が「断った場合」の予測を脳裏に見せてくる。

——もつともこの3人のことだ。断ったにしても、自分たちで無理にでもついて来る気がする。少なくとも東京駅に行くってことはもう言っちゃったから、テレポートなりなんなり、行こうと思えば行けるわけなんだよなあ……………」

「あの、光秋さん。さっきから私たちのことで失礼なこと考えてませんか？」

「！」

菊の指摘に、光秋は思案を中断してハツとする。

「……………触った？」

「触ってません。顔に出てました」

「私も見ました」

「アタシも」

「……………そうなのか」

質問に対して菊はキツパリと答え、董と桜も頷く様子に、光秋は疑念を霧散させながらも気まずさに頭を掻く。

「……………わかった。一緒に行こう」

「！」

「ヨッシャー！」

「ありがとうございます！」

そんな気持ちも手伝つていよいよ観念するように告げた返答に、菊と桜は達成感の笑みを浮かべ、董は嬉しそうにお辞儀を返す。

「じゃあまず、君たちの寮に寄つて着替えて行こう。さすがに制服だと学校に連絡が行つて後が面倒そうだし」

「わかりました!」

「……いや、でもさ、大の男が女の子3人連れて歩いてる時点で、いろいろ誤解されそうじゃね?」

「歳の離れた兄妹かなんかだと思うんじゃないか。あるいは…… “そういうこと” になつたら、そんな時考えるさ……」

明るく応じる董に続いてかけられた桜の疑念にどこか投げやりに返すと、光秋は机周りの最終確認をして部屋を出、少女たちもそれに続いた。

桜たちの寮に着くと、光秋は門の前で3人の着替えを待ち、その間に法子に3人がついて来ることをメールする。

「自分で決めておいてなんだが、“三人” きりの時間がさらに減つたことは、やっぱり惜しかったなあ……」

軽い悔いを覚えながらメールを送信し、それから少し経って私服に着替えた3人が寮から出てくる。

「お待たせしましたっ」

「じゃあ、行くか」

3人を代表した菫に光秋が応じると、4人は最寄り駅へ向けて歩き出す。

しばらく歩いて駅構内に入ると、光秋はポケットから財布を出しながら券売機へ向かう。

「先行ってるよー」

「ああ。すぐ追い付く」

改札機にカードをかざして先を行く桜たちに返しながら小銭を入れ、切符を購入すると、自分も速足で改札機をくぐって3人の後を追う。

——ホント、僕もカード買おうかなあ……………——

少女たちと電車に乗るたびに思うことを口の中に転がしながら、光秋はホームに繋がる昇りエスカレーターで3人に追い付いた。

電車を乗り継いでしばらく行くと、光秋一行は東京駅の地下鉄ホームに降り立つ。

「みんないるな?」

「大丈夫だつて」

少女たちがはぐれていないか確認する光秋に、桜が鬱陶しそうに応じながら、4人は人波に沿って階段を上り、改札機をくぐる。

—そういえば、この駅を利用するのも来た時以来か………相変わらず凄い人だな—
目の前に広がる引越しの途中で見た駅構内の風景に感慨を抱き、それ以上に普段の通勤・帰宅ラッシュがかわいく思えてくる人口密度に圧倒される。金曜日の夜ということもあってか、それは一層多く感じられた。

—ただ帰宅するだけじゃなくて、仕事帰りに飲みに行ったり、週末を利用して旅行に行ったりする人なんかも混じってるんだろな。特に東京駅は、他県との玄関口みたいなもんだし。実際、僕らや法子さんたちもそういう口だしな—

思いながら辺りを見回し、構内の地図を見付けて駆け寄る。

「えっと、現在地は……」

「ここですね」

「ありがと。で、新幹線乗り場は……」

菊に手伝ってもらいながら位置関係を確認すると、光秋先導の下に一行は新幹線乗り場の改札口へ向かう。

案内板を確認しながら人の波を縫うようにしばらく進んでいくと、目的の改札口が見えてくる。

「こつちだ。もう少し寄つて」

周囲の邪魔にならないように光秋は近くの壁に背中を預け、注意を促された3人もそれに倣う。

その体勢でしばらく待っていると、改札機の奥から人が途切れることなく現れる。

「電車、来たのかな？」

「みたいね。迎えに来た人の乗ってるやつでしょうか？」

「ちよつと待つてな……」

未だ衰えない人波を眺めながら桜が眩き、それを受けた菊の問いに、光秋は腕時計を確認する。

「8時回つてるから、時間としてはそうだな……追加の連絡もないし、もう着いてると思ふけど……」

携帯電話も確認して応じると、光秋は心なしか動悸が速くなっているのに気付く。

「いよいよ、か……」

思うと同時に、人波の中に伊部姉妹の姿を探そうと目が細くなる。

「……………」

そうして人波を凝視し続けて2、3分が経過し、改札機をくぐる人数も疎らになった頃。

「あれえ?……」

未だ発見できない伊部姉妹に、光秋は腕時計と携帯電話にそれぞれ不安の目を向ける。

——到着時間とはつくに過ぎてる。遅れるって類の連絡も未だない。だというのに、まだ来ない……まさか、何かのトラブルにでも巻き込まれたかつ?——

浮かんだ疑念は瞬く間に体中を駆け巡り、もしそうならどうしようかと思考が向かいそうになる。

その時、

「……………ッ!」

すでに人の流れが落ち着いた改札機、その奥から旅行用の大きなカバンを提げてやって来る人影を見て、不安のあまり硬直気味だった光秋の心臓が跳ね上げる。

——色黒の肌、後ろに1本に束ねた髪……それに、この感じ——

もともと視力の低い目を凝らして収めた相手の容姿と、向こうもこちらに気付いたのか親しげに手を振ってくる仕草、そして何より胸の内に湧いて来る自分のそれとはまた違った喜びに、光秋は確信を持って改札機に歩み寄る。

ちやうど相手の方も改札機をくぐると、一直線にこちらに駆け寄ってくる。

「光秋くんっ！」

「お待ちしてましたっ!!」

満面の笑みで呼ばれた名前にこちらも頬をほころばせながら応じると、光秋は駆け寄ってきた女性——伊部法子の肩に両手を置く。

——ああ、法子さんだ。本当に、法子さんだっ!——

我ながら何を当たり前のことをと思いつつも、2カ月ぶりに間近に見る浅黒い顔、コート越しに感じる肩の実感、どこからともなく漂ってくる安心感を与える体臭、そうした感覚の一つ一つが、それまで声だけのやり取りしかなかった法子の存在を確かなものにしてくれたような気がして、思わずにはいられなかった。

「……………」

欲をいえば、このまま背中に腕を回して抱き寄せ、法子の存在をよりしつかりと感じたかった。が、浮かれ気味な頭でもここが公共の場であることは把握していたし、なにより後ろの少女たちの視線が気になって、どうにかそれは自制した。

少しして再会の喜びも落ち着いてくると、光秋は気になったことを訊いてみる。

「そういえば——」

「あの子——」

が、法子も同時に話しかけてきて、妙な気まずさに互いに押し黙ってしまう。

「……なんですか？」

「光秋くんからどうぞ」

「じゃあ……その、出てくるのにだいぶ時間かかってましたけど、何かあったんですか？」

「ああ、降りた場所がここの改札から遠かったみたいでさ。おまけに思った以上にすごい人混みで、ただでさえ長めの距離を人を掻き分けて進んでたら、思ったより時間がかっちゃって……ごめんね、心配かけて」

「ああいえ、大したことじゃなかったんならいいんです」

謝る法子に、光秋は慌てて応じる。

「それで、法子さんの方は？」

「ああ、うんとね……」

先程言いかけたことを光秋が促すと、法子はこちらをまじまじと見つめ、おもむろに右手を伸ばしてくる。

「少し、瘦せた？」

問われながら左頬をそつと撫でられ、久しぶりの法子の手の感触に、光秋は意識が弛緩しそうになる。

「いや、そんなはずは……」

「光秋くんは元から細いけどさ、短い間にいろいろあつたじゃない」

「……まあ、確かに濃厚な2カ月ちよつとでしたね」

心配そうな顔の法子の指摘をきっかけに、光秋の脳裏には本部転属以降の記憶が早速で流れていく。畑違いの知識に四苦八苦した主任研修。半ばの勢いと周囲のお膳立てで行ったNP・ZCの抗争への介入と、DDシリーズ3機との偶発戦。今までとは違う能力が要求されるようになったことを実感した催眠能力者通り魔事件。心身共に疲労した渋谷区の予知出勤。頻発するようになったメガボディを用いた戦闘。そしてなにより、それまで指示に従う側だった自分が、指示する側になったこと——部下を持つたこと。

「……………あつ」

そこでもうやく、少女たちのことを失念していたことに気付く。

「すみません。紹介が遅れましたね」

言いながら慌てて体を退かし、後ろに控えていた少女たちを示す。

「赤毛の子が柏崎桜さん。メガネの子が柿崎堇さん。癪毛の子が北大路菊さん。僕の……一応、部下です」

藤原隊では一番下だった自分の口から、同じ隊にいた人に向かって「部下」と言うの

は、なんとも照れ臭かった。

「で、3人とも。こちらが伊部法子さん。僕が京都にいた頃、いろいろお世話になった人」

気を取り直して今度は少女たちに法子を紹介すると、後頭部の髪が誰も触れていないのに引つ張られる。

「……………あのお、綾さん。痛いです—

これもまた2カ月少々ぶりの感覚に、光秋はいつの間にか目を三角にしている法子—
—から入れ替わった綾に胸の中で告げる。

—さつきから法子のことばかり!—

—悪かったよ。なかなかお前さんの方に話を振れなくて…………でもまあ、お前さんの気持ちにはさつきから感じてたけどな—

テレパシーにふくれっ面を乗せてくる綾に、伊部姉妹を視界に捉えて以降感じている自分のものとも異なる喜びを踏まえて応じる。

—それはあたしだって!—

そしてその感覚は綾の方にもあったらしい。嬉しさと不満が混ざったような顔で頭を光秋の胸に押し付けてくる。

「……………!」

そのまま少し痛くも心地いい感覚に浸りそうになる寸前、少女たちの棘のあるような、あるいはどこか戸惑っているような視線に気付き、光秋は慌てて気を取り直す。

「ま、まあ、立ち話もなんですし、そろそろ行きましょうか。あ、荷物持ちます」

「え、いいよ。これくらい」

「いいからっ」

言いながら光秋は法子から取ったカバンを右肩に提げ、左手で法子の右手を掴むと、再び人波を縫って来た道に戻っていく。

そうしながら、光秋はただ握っただけだった伊部姉妹の手、その指の間に自分の指を入れ、離れてしまわないように力を込める。

—ああ、二人がいる。法子さんと綾が、確かにこの手の中に居てくれる—

その実感は、この2カ月少々で一番の歓喜だった。

「なーんか、いい感じだよね。あの2人」

先に行く光秋と法子、その2人の固く繋がれた手を射るように見つめながら、菊は不服そうに呟く。

「うん、そうだね……………」

「……………」

それに対して董が俯き加減に応じる中、桜は2人の様子を眺め続ける。

「……………」

「桜？」

「ふえっ!？」

董に肩を叩かれて、ようやく桜は2人を見回す。

「どうしたの桜ちゃん？」

「桜が考え事なんて珍しい」

「悪かったな!」

心配する菊に対し、董の感心した様子に目を尖らせながら、桜は改めて光秋と法子を見やる。

「いや、なんて言うかさ……………光秋って、アタシたちにあんな顔するっけ?」

言いながら向けた視線の先には、心底から嬉しそうに微笑む光秋の顔があった。

もちろん桜も、自分が光秋とはそんなに長い付き合いでないことは承知しているし、だからこそまだ知らない一面もたくさんあるのだろうことも理解している。ただでさえ出会った当初は仲が悪く、その後も緊迫の事態が続いて笑顔を浮かべる機会が少なかったことも分かっている。だからこそ、これから笑っているところを見られる機会も

増えてくるかもしれないと想像したりもする。

しかし一方で、妙な直感も感じていた。

「……………アタシたちには、あんな顔見せないんじゃない？」

「……………」

迷いながらも結局声に出した『直感』に、堇と菊は言葉を返すことができなかった。

人の中を掻き分けて無事に帰りの電車に乗り込むと、満員ギリギリの車内で光秋は少女たちを席に座らせ、その前に伊部姉妹と並んで吊り革を掴む。

—久しぶりの再会。話したいことはたくさんある。そのはずなんだが……………まずどう切り出しているかがわからない—

久しぶりに直に会ったせいか、どうにも接し方がぎこちなくなってしまう。

そうして悶々していると、法子の方から声をかけてくる。

「さっき紹介してもらったけど、この子たちが部下なんだよね？」

「え？ ええ、まあ…………」

咄嗟に答えながら、結局法子に先導してもらったことに軽い悔しさを覚える。

—こういう時は男の方がリードしなきゃって思ってたのに…………—

思う間にも、法子は体を屈めて少女たちに顔を近付ける。

「えっと、はじめまして。改めまして、伊部法子です」

「あ、いえ、はじめましてじゃないです。お正月の迎賓館で会ってます。入間主任を助ける時に」

探るように声をかける法子に、董が遠慮がちに訂正を入れる。

「あ、そうだっけ？……ああ、そっか。あの時ね……そうだねえ………」

言われて思い出したらしい。法子は気まずい笑みを浮かべる。

―法子さんも董さんたちとの距離感掴みかねてるみたいだな。こういう時こそ、僕がしっかりフォローしないと―

その様子に先程の挽回のチャンスが巡ってきたと感じるや、光秋は会話に加わろうとする。

が、桜の方がひと足早かった。

「ていうか、アタシは年末にビンタ喰らったけど」

「ッ！」

桜自身は何の含みもない、ただ事実を淡々と喋っただけだったが、光秋はその一言に一瞬硬直した。

―桜さんッ！何でこのタイミングでその話を……―

法子と桜を合わせる以上、どこかで訪れる展開とは思っていたものの、実際に訪れた時のあまりの唐突さにどうしていいかわからず、視線を忙しく動かして両者の様子を窺う。

「……ビンタ？」

「サン教のボス捕まえた時。『何様のつもり！』ってさ」

「……………あぁッ!!」

言われて、法子は驚愕の声を上げる。

あまりの声に顔を向けてきた乗客たちに「すみません……」と小さく謝ると、未だ動揺の残る目を桜に向ける。

「まさか、忘れてたの？」

「うん……忘れてたわけじゃなくてね、特エスの女の子を怒ったことは覚えてるんだけど……………」

「…あ、あれからだいぶ時間も開いたし、その間もいろいろありましたからね。細かい部分はどうしても忘れちゃいますよね。僕もよくやつちゃうし」

桜の問いに、法子は焦りを募らせる。それを見て、今度こそ至らなさを挽回するチャンスと感じた光秋は思い付く限りのフォローを試みるものの、妙な緊張感が晴れる気配は全くない。

「……………桜さん。まさか、その時の仕返しをする為に着いてきたって——」

「違げーよっ!」

光秋が恐る恐る訊ねると、桜は声の大きさに気を付けながらも強く否定する。

「別に仕返しとか、あの時のことをどうこう言おうとか、そういうことじゃなくてさ……まあ、人にビンタしといて忘れてたっていうのはちよつとムカついたけど」

「ごめんなさい……」

それはそれとばかりに付け加えられた一言に、法子は静かに謝る。

「その、なんて言うかさ……………ありがとう」

「っ?」

言葉に迷いながらも出した桜の、その予想外の一言に、光秋は目を丸くする。

「……………」

隣を見れば、法子も同じような顔を浮かべている。

「……………どうして、『ありがとう』なんだ?」

光秋の問いに、桜はむず痒い顔を浮かべながら答える。

「いやさ……あの頃、アタシいろいろあつてムシヤクシヤしててさ、それを敵にぶつけてたところもあつたんだよ」

——言われてみれば…………——

その言葉に、光秋は初めて会った頃の桜を思い出す。サン教ベースの包囲が長引いてしまい、予定していた家族とのクリスマス会に行けず荒れていた頃を。

「でさ、その勢いでサン教のボスにも一発かましてやろうとしたところを、光秋に止められて、その後すぐに……えっと、イベさん……? のビンタ喰らって怒られてさ。最初は、『アタシのことを何も知らない大人が勝手なこと言つて!』とか思つたけど、少し時間が経つたら、そうかなつて……。アタシあの時、勢いのままに人を傷付けようとして、それを土壇場で止めてもらつたんだなあつて……。だからさ、一応お礼言つとこうと思つて」

法子から視線をそらしながらも、桜は照れ臭さを浮かべて言い切る。

「そっか……。どういたしまして」

それを聞いた法子は、桜の意思を受け止めるように静かに応じた。

「桜さん、そこまで考えていたとはな……」

「悪かつたなっ」

「! いや、別に変な意味で言つたわけじゃ……」

一連の話を聞いてふと感じたことが口から漏れてしまったらしい。三角の目を向けてくる桜に、光秋は慌てて付け加える。

「そういや、話は変わるけど、二人ってホント仲いいよね?」

言いながら桜は、電車に乗ってからずっと繋ぎ合わされた光秋と法子の手に視線を移す。

「え？ああ、まあね……？」

唐突な話題の変更に、未だ角のとれない桜の目付きこそ気になったものの、光秋は反射的に首肯を返す。

「その……もしかして、付き合っていたり……？」

「いや、そういうんじゃないよ」

それに続く形で恐る恐る訊いてきた堇に、光秋は明瞭な声で即答する。その胸中には、久しぶりに感じる罪悪感——法子と綾の間で揺れ動き、堇の問いにすんなり「そうだよ」と返せないことへの自己嫌悪があつた。

「そういうんじゃないんだ………」

「「……………」」

「……………」

俯きながら光秋は独り呟き、それを見た少女3人は顔を見合わせ、そんな顔をする理由がわかつている法子——と綾——は静かにそれを見守り、5人の間には妙な沈黙が広がった。

——……………不味いな——

あと10分程で桜たちの降りる駅に着こうという頃。未だ続く沈黙に、光秋はそれを引き起こしてしまったことへの罪悪感を覚える。

——もう少し言い方があっただろうに……………いや、過ぎたことを言っても仕方ないか。しかし、このままっていうのもなあ……………——

今もって誰も口を開く気配を見せず、自ら招いてしまった嫌な雰囲気を払拭しようと、光秋は思考を巡らせる。

結果としてその話題を出してしまったのは、短い時間でどうにかしなければという焦りもあるが、先程の会話が印象に残っていたからだろう。

「そういうえば、菊さんもこの前僕にビンタされたっけな」

「「「?!」」」

瞬間、4つの驚愕の視線が向けられる。

——……………いかん。僕ってばなんてことをっ——

その時ようやく自分の迂闊さに気付くもののすでに遅く、法子が目を丸くして訊いてくる。

「ビンタって、光秋くんが? えっ!?!」

「いや、あのお……」

——この前なんか嫌な感じがしたけど、もしかしてその時のっ？——

「いや、だからだなっ」

綾まで腰の引けたテレパシーを送ってきて、生じつつある誤解を解こうとつい声が大きくなってしまう。

それさえも遮って声を上げたのは、菊だった。

「私の所為なんですつ。私が馬鹿なことしたから」

「……どういふこと？」

「えつとですねえ……」

それでいくらか落ち着きを取り戻した法子の問いに、光秋は先日の予知出動帰りの遭遇戦、そこでの菊の行いを掻い摘んで説明する。

「それで、その場はどうにかなったんですが……本部に戻ったら、僕がちよつと、その……頭に血が上っちゃって……」

今思い出しても羞恥を覚えずにはいられないことを、口ごもりそうになるのをどうにか堪えて告げると、法子は察した様子で言ってくる。

「ビンタ、しちゃったと……？」

「……………はい」

曲げられない事実に、光秋は小さく頷くしかなかった。

「でも、そもそも私が勝手なことをしたから——」

「いや、それにしたってあれはダメだろう……」

庇おうとしてくれる菊の言葉を、しかし光秋は首を横に振って遮る。

「これがもう少しちゃんとした大人なら、もつと上手く叱ることもできたんだろうが、それにしたって手を挙げた時点でアウトだろうし。そもそもあれは叱ったとかそんなよくできたもんじゃなくて、本当にただカツとなつてやつただけだし……」

言葉を重ねるごとに自分のいたらなさが強調されるようで、ますます肩身が狭くなつてくる。

直後に駅到着のアナウンスが流れ、電車が減速を始める。

「と、そろそろ降りる準備して」

光秋の言葉に少女たちは席を立ち、少しして開いたドアから一行はホームに降りる。

「すみません法子さん。付き合ってもらつて」

「いいよ。いくら超能力者でも、小さい子だけで夜道を行かせるのは危ないもんね」

事前に途中下車することは伝えていたものの、伊部姉妹に余計な手間をかけさせたような気がして、光秋はどうしても頭が低くなつてしまう。

「……この駅から桜さんたちの寮までけっこう距離あるし、なんだつたらこのままホーム

で待つててもらってもいいですよ？改札出たらいよいよ切符買い直さないといけないし——」

「いいよっ」

光秋の言葉を遮ると、法子——というよりも綾は繋いだ手に一層力を込めて改札口へ歩き出し、腕を引かれた光秋はやや引きずられながらついて行く。

そのまま改札機をくぐると、

「それじゃあ……」

と、それまで引つ張られていた光秋はゆつくりと綾を追い抜き、少女たちもついて来ていることを確認しつつ寮への道を先導する。

しばらく歩いて遠くに寮が見え始めた頃、それまで後ろの方を歩いていた菊が急に駆け出し、光秋の前に立ちふさがる。

「光秋さんっ」

「お、おう……？」

「さっきの……ビンタの話ですけど、やっぱり悪いのは私だと思います」

「またその話か？もういいじゃないか——」

「よくありませんっ」

ただでさえ気まずかった雰囲気蒸し返されそうな気がして光秋は先を急ごうとす

るものの、菊の力の籠った声が足を止めさせる。

「電車から降りたり、ここに来るまで歩いたりで有耶無耶になってたけど、このまま別れちやいけないっていうか、私が気持ち悪いっていうか……とにかく、これだけは言わせてくださいっ」

「……」

ある種の決意を宿した菊の目に、光秋も知らぬ間に姿勢を正す。

「改めて……………調子に乗って、勝手なことをして、すみませんでしたー」

言いながら、菊は腰を直角に曲げて深々と頭を下げる。

「調子に乗ってた……………まあ、サイコメトリーでメガボディの操縦方法は把握できるから行けるっていうのは、確かにそうかもな。思ったよりけっこうきつかっただろう？ おまけにあんな壊れかけの機体で出てきて」

「はい……………」

ゴーレムに試乗した時の体験を思い出しながら告げる光秋に、頭を上げ直した菊は小さくなりながら頷く。

「でもさ、僕も改めて確認するけど、それは加藤隊——桜さんや董さんのことを思ってたことなんだろう？ 自分も力になりたいって」

「それはそうです……………でも、結局みんなに余計迷惑かけて……………」

「こうしたいって気持ちがあつても、実際はなかなかそうは運ばない——そういう空回りなんてよくあることだよ。僕なんかしょっちゅうだぞ。研修中なんて、勉強のわからなさに何度自己嫌悪に陥ったことか……」

言葉にしたせいかその時の感覚がまじまじと蘇ってきて、光秋は束の間表情が強張る。

「それに今話題になつてる件にしたつて、見ようによつては僕の空回りかもしれないだし」

「?」

「どゆこと?」

頭を掻きながら光秋が言ったことに、菊は首を傾げ、それまで黙つて2人のやり取りを聞いていた桜も思わず質問する。

「『どんな時でも、選択肢が一つだけってことはない』、『そうしようと思つた方に賭けた方が賢い』……この前の通り魔事件の時に言つた言葉。あの時の菊さんの行動には、この言葉が多少影響していたんだろう?」

「それは……………はい……………」

光秋の確認に、菊は居心地悪そうに頷く。

「光秋くんらしいね」

「なんだよ。いい言葉じゃん。その何が問題なの？」

感心する法子に続いて、桜がさらに訊いてくる。

「問題っていうかな……これだけ聞くとさ、やるべきだと思ったことはどんな無茶をしてもやり通すべきだ、というふうにも受け取れるだろう？もちろん、本気で何かを為そうとする時は、そういう気概も必要なんだろうが。まあ、要するに、この言葉を聞いた後なら、菊さんがあんな行動に出る可能性も充分あつたってことで………」

「？」

「……なるほどね」

桜と董が未だ腑に落ちない様子で顔を見合わせる中、法子は察しがついた、それ故に渋い顔を浮かべる。

「なにかわかったんですか？」

「私は、董さんたちのことについては光秋くんから聞いた以上のことは知らないんですけど」

そう前置きを挟んで、法子は董の問いに応じる。

「桜さんと董さんは、戦闘の時は主に光秋くんのサポートをしてるんだよね？念力で相手の攻撃を防いだり、テレポートで武器を届けたり」

「そうだけど」

「はい……?」

「それに対して、サイコメトラの菊さんは戦闘中はこれといってできることがない。みんなが大変な時に遠くで見ていることしかできない。そんなふうに思つてるところに、目の前に戦うのに必要な力が転がつてきたら……しかもさっきの光秋くんの言葉を聞いた後だつたら、どうだろうね?」

「……………あつ!」

法子の説明と、その後しばしの思案のあと、桜と堇はハツとした顔で菊を見やる。

「適確な解説ありがとうございます」

本来は自分が語らなければならないことを法子に代わつてもらつたことに若干の情けなさを覚えながら、改めて少女たちを見る。

「つまりだ、菊さんのあの行動は、よく考えれば充分予測できたことで、思い至らなかつたのは主任たる僕の落ち度。あるいは、あの言葉を言つたことが、そもそも余計なことだった……かもしれないってこと」

「そんなことは——」

「もちろん、僕だつてあんなことをさせるためにさっきの言葉を言つたわけじゃない」
力を込めて否定しようとする菊の声を遮つて続けると、光秋は膝を折つて菊と視線の高さを合わせる。

「でもな、さっきの法子さんの説明にもあつたように、状況や気持ちなんか重なれば違う——僕の意図しない受け取られ方をされる場合もあるんだよ。誰かに……自分以外の人に自分の思つてることや考えてることを伝えるのは、それだけ難しいつてことなんだろう」

言つている光秋自身、日々の暮らしの中でついやってしまう些細な思い違いの数々を脳裏に浮かべる。

「今回の件は、『その極端な例』ともいえるかもな——これが、『今の人』つてことか……」

そんな感慨を抱きながら改めて菊の顔を見ると、これまでになく深々と俯いていた。

「まあ、いろいろ言つたけれども……最後にもう一つだけ」

その様子にやや焦りつつも、この話題が再開された時から言うべきと思つていたことを告げる。

「結果はどうであれ、そもそもは桜さんたちの力になりたいつて想いからしたことなんだろう?」

「それは……そうです。でも……」

「だったら、せめてその気持ちだけは大切にしないといけないよつ」

すっかり弱々しくなつた菊の返事に、光秋は大きくはないが力を込めた声で言う。

「反省をするのはいい。でもその気持ちまで否定しちゃったら、いよいよどうしたらいいか分からなくなっちゃうだろう」

「……そうかもしれないけど」

「この前のことは、やり方が悪かったってだけのことだよ。あの後も言つたろう？次に備えようって。要は転んでもただでは起きなきやいいんだよ。小銭の1枚でも拾つてみせればさ」

言いながら、光秋は菊の頭に大きく広げた右手を置く。

「さ、お互い言いたいことは言つたんだし、いよいよ時間も遅い。土日にくつくり休んで、月曜からは今言つたことを踏まえてまた頑張ろうや。行こう」

言うのと曲げていた膝を伸ばし、伊部姉妹の手を引いて寮への歩みを再開する。

「！待つてくださいっ」

「ほら、菊も行くよ」

「う、うん……」

菫、桜、菊も慌ててそれに続き、少しして一行は寮の門の前に着く。

「それじゃあ、また月曜に。おやすみ」

「おやすみ」

「……おやすみなさい」

「おやすみなさい。帰り道、気を付けてくださいね」

桜、菊、堇の返事を聞くと、光秋は伊部姉妹と共に来た道を駅へと戻る。

「なんか、変わらないね」

「なにが？」

歩きながら声をかけてきた綾に、光秋は視線を向けながら訊き返す。

「東京駅で久しぶりに顔見た時にさ、ちよつと思つたんだよ。『大きくなつたな』つて」
「流石にもう成長期もないと思うが……」

「背のことじゃなくなつてさつ。なんていうか……立派になつた？最後に顔を見た時と比べて、とにかくなんか変わったつていうか……」

「そりゃあ、畑違いの分野を必死こいて勉強して、それまで使われる側だったのが人を使う立場になつて、出勤すればメガボデイなんてのがそろそろ出てきて……変化の要因なら、それこそいくらでもあつただろうからな……」

言いながら、綾と別れてからの時間がいかに慌ただしいものだったかを改めて実感する。

「でもさ、それでも今みたいに変わらないところもあつたんだなって」

「どういふことだ？」

「いろんなことを考えてたり、それで誰かを助けたり」

「助けたって、そんな大層なことか？ さっきの」

「あたしはそう思ったの。それと……」

声が若干低くなつたと思うや、繋ぎ合つた綾の手から骨に響くくらいの圧力がかかつてくる。

「女の人に見境なく優しくするところもね」

「人を女たらしみたいに言わんでもらえるか……」

向けられた夜空よりも暗い2つの目に、光秋は夜風など吹いていないにも関わらず震え上がった。

「それにこの力……念力で握力を底上げしてないか？」

「ふんっ」

訊かれた綾はそれには答えず、握る力を緩めると光秋の左腕に寄りかかってくる。

「……どうした？」

「別に。ただ、一緒にいないとこういうのできないから」

まだ若干の膨れを残しながら応じると、綾は光秋の左肩に顔を置いてくる。

「まあ、確かにな……」

多少の歩きにくさは感じるものの、光秋自身綾の——ひいては伊部姉妹の存在感を強く感じられるこの体勢を拒む理由など微塵もなく、左半身からくる穏やかな快楽と、未

だ向けられている仄暗い視線への恐怖を半々にして駅へと向かった。

改札を再びくぐつてホームに出ると、いくらもせずに次の電車が入ってくる。

すでにラッシュの時間は過ぎたせい、乗り込んだ車内に乗客はおらず、光秋と伊部姉妹はドア近くの席に並んで座る。

「そういえばあの子たち、寮住まいなんだよね？」

「はい」

「門限とかないの？」

「一応あるらしいけど、特エスつて都合上夜中に出勤つてこともありますからね。常に鍵を持つてるみたいです」

「そうなんだ……」

ふと浮かんだ法子の疑問に光秋が答える間にも電車は進み、光秋が普段降りる駅に着する。

ホームに降りて改札をくぐり、寮へ向かう道中、手を繋いで歩く綾はすでに暗くなつた辺りを見回してみる。

「……」が、アキが今住んでる所の近所？」

「そうだな」

きよろきよろしながら呟く綾に返しながら、寮が見えてきた光秋はポケットから鍵を取り出し、ドアの前に着くやすぐに開けて中へ入る。

「……………」

光秋がエアコンとコタツを点ける傍ら、綾は照明に照らされた室内を途中の街並み以上にしげしげと眺める。

「……」が、アキが今住んでる部屋？」

「そうだな。京都の時よりちよつと広いだろう。あつと……」

再び綾に応じると、光秋は持ちっぱなしだったカバンを差し出す。

「風呂入れてくるから、コタツ入って待つて。点けたばかりだけど、すぐあつた温まるから」

言うど風呂場に向かい、湯加減を調整した蛇口から浴槽にお湯を注ぐ。

携帯電話で時間を確認しながら居間に戻ると背広を脱いで、すでに伊部姉妹が入っているコタツに自分も足を入れる。

「10分くらいでいい具合に溜まるから、先に入ってください」

「いいの？」

「入った後、片づけないといけないし」

「じゃあ……」

法子とのやり取りがひと段落すると、途端に遠くの水音がよく聞こえるくらい静かになる。

——いかんつ。何か話さないと。いや、話さないというか、話したいことはたくさんあったんだ。あったのに………何で思うように口が動かないっ——

自分自身への焦れったさを感じるもののなかなか言葉は出ず、それでもどうにか口を動かす。

「どうかな？今の部屋——」「特エスの主任って——」

見事に法子の言葉と重なり、もとの沈黙と合わさってさらに気まづくなる。

「……………なんですか？」

「光秋くん先どうぞ」

「いや、法子さんから——」

「お風呂は私が先だから、ここは光秋くんが先っ」

「……………それじゃあ」

筋が通っているのかいまいち引つかかったものの、法子の押しの強さと、なによりもこれ以上の沈黙に耐えられなかった光秋は、その言葉に甘えることにする。

「その、今の僕の部屋、どうですか？綾はさつきよく見てたようだけどう」

「うん。さつきアキも言ってたけど、京都で住んでた部屋より広いかもね。でも、雰囲気っていうか、そういうのはあんまり変わった感じしないな。すつきりしてるっていうか」

「まあ、基本本部と寮の往復だからな。休みの日もそんな散らかるようなことはしないし」

「寮の周りには他の家やお店なんかがすぐ近くにあつて、こつちも前のこと雰囲気は似てたかな。暗くてはつきりとはわからなかったけど……」

「そりゃあ、もうすっかり夜だからな。でもまあ、前の京都にしろ、今の東京にしろ、どつちも大都会の片隅だからな。雰囲気自体はどことなく似るのかもな」

「だからさ、明日一緒にこの近くを散歩——」

「あ、ごめん。明日はダメだ」

誘う綾に、光秋はレーザー砲のテストのことを思い浮かべながらきっぱりと応じる。

「……そう、だったね。ごめん……」

事前に連絡を受けていた綾もそれを思い出してか、申し訳なさそうに、それ以上に残念そうに返す。

「……あー、話が出たからついでに言っておくけど、朝は早いし、帰りも何時になるか断言できない。だから、明日はどれくらい一緒にいられるかわからない」

「……………わかった」

少し迷いながらも結局告げた光秋に、もともと俯き気味だった綾はますます下向きになる。

「そのお……………ごめんな……………」

「謝らなくていいよ。アキの所為じゃないんだし。それにDDシリーズ対策のテストなんでしょう？ だったら一層頑張らなきゃ！」

言いながら俯いていた顔を上げて笑みを浮かべてくれる綾だったが、光秋にはそれがかえって心苦しかった。

「なんだったらさ、せっかく東京まで来たんだ。春菜さん誘って名所めぐりでもしてきてくださいよ。綾はまだしも、法子さんにとってはこつちも久々の再会でしょ？」

「……………うん、そうだね。あとでメールしてみる」

それを誤魔化したいこともあつて言ったことに、法子は小さく頷いた。

「ところで光秋くん。時間大丈夫？」

「時間？……………あつ！」

法子に言われて思い出すや、慌てて風呂場へ向かう。

濃い湯気を掻き分けて蛇口を閉めると、狙いより少し多いところで止めることができた。

「湯加減は……よし」

浴槽に手を入れてこれも狙い通りなのを確認すると、速足で居間へ戻る。

「風呂沸いたんで入ってください。寒いと思つてわざと熱めにしてあるんで、ダメだったら水入れて」

「わかった。じゃあ、お先に」

言うとな子はカバンから着替えとタオルを取り出し、浴室へ向かう。

「……さて」

伊部姉妹が湯船に浸かった音を遠くに聞くと、光秋は時間潰しにと机の上に積んであったまだ読んでいない本の1冊を手取る。

と、

—それで、さっきの続きだけど—

—……綾、お前さんなあ……—

当たり前のように頭の中に聞こえてきた声に、光秋は開きかけていた本をコタツの上に置いて眉間に薄っすら皺を寄せる。

—わざわざテレパシーまで使つて続けるのか?—

—仕方ないじゃん。最初は大きな声で言おうと思つたけど、法子に止められたし—

—そりやそうだろうな。絶対近所迷惑になるだろうから—

—それにアキ、耳あんま聞こえないし。近くで話そうと思ったたら寒い床に座らせちゃうし……でもやつぱり、もっとおしやべりしたかったから……あたしの「力」なら、そういうのもできるから……—

—……………

切なさを乗せた綾の「声」は、そのまま光秋の心境を代弁していた。

—わかったよ。僕も暇になると思ってたんだ。お前さんと法子さんの風呂の邪魔にならないっていうんなら、このまま続けよう—

—やったッ!—

—じゃあ、早速だけど—

光秋が応じるや、綾は歓喜を返し、タイミングを見計らっていたように法子が話し出す。

—さっき訊こうとしたことだけど、特エスの主任の仕事ってやつぱり大変?—

—そりゃあ。たびたび言ってると思いますが、そもそもが畑違いですからね。一応勉強はちゃんとしたけど、それでも抜けることが何度もあつて。立場にしたって、人に使われる側から人を使う側になったわけで、それだけでも僕にとつては激変で。実際の仕事にしたって、自分の判断ミスであの子たちを危険に晒すんじゃないかって不安が常にどこかにあつて。日常業務にしても、自分だけじゃなくてあの子たちのことにもい

くらかは意識を向けなきゃいけないわけだけど、それが上手くできなくて、電車の中で話したような失敗しちやつて……………本当、踏んだり蹴ったりですよ……………

思っていた以上にいろんなものが溜まっていたらしい。予想以上に長々と「語ってしまったことに自分で驚きながら、光秋は言葉と同時に脳裏を過った失敗談の数々に自嘲を浮かべる。

……………そっか――

それに対して、法子はそつと返してくれた。

――私も、士官学校時代はいろいろあつたなあ……………

――そういえば、デ・パルマ少佐に教えてもらったことがあつたんですね？――

ほろ苦い思い出を浮かべる法子に、光秋はスフィックスとの初の模擬戦の際に聞いたことを思い出してなんとなしに訊いてみる。

――あー、うん。そういえば光秋くんも会ったんだよね――

――はい。模擬戦の時に――

――どう思った？――

――……………そうですね……………

唐突な法子の質問に、光秋はデ・パルマに関する記憶を振り返ってみる。

――一番最初、何も知らない状態で会った時は正直、『この人大丈夫かな？』って思いま

した。だって出会い頭に法子さんの尻の触り心地はどうだって訊いてくるもんだから

—あー……教官なら確かに、挨拶代わりにそんなこと言うかな——
第一印象を赤裸々に語る光秋に、法子の呆れた声が返ってくる。

—でも、その後の模擬戦とか、数日後の工場地帯での戦闘を見て、そんな気持ちはすぐになくなりました。操縦技術とか判断力とか、やっぱり凄いなって。操縦技術については僕もゴーレムに試乗たからこそ思うんですけど、あの操縦系でツアーニングの羽根を避け切ってみせるとか、もう言葉も出なくて——

—そんなに操縦上手なんだ、教官——

—はい。それに判断力も。僕が主任として初めての出勤でどこかあたふたしている横で、あの人は得られた情報から大胆な作戦を考えて、それを実行してみせて——

——……光秋くんがあたふたしてたのは初めての仕事だったからで、ある程度は仕方ないんじゃない？——

—そうかもしれませんけど……それにしたって、少佐のあの判断力というか、行動力というのか、とにかくその辺は見習わなきゃなって、そう思わせてくれるところがあります——

——………そっか——

そう静かに応じた法子の「声」には、ほんの微かだが喜色が籠っていた。

「……………法子さん、もしかして少佐のこと好きだったんですか?—

—えっ!? どうしてそうなるの?—

—いや、僕が少佐を褒めるようなことを言ったら、なんか嬉しそうだったから—

—考えすぎっ。そりゃあ、一応恩師だからね。褒められて悪い気はしないよ。その相手が光秋くんだったというならなおさらね—

—僕ならって……………?—

そこで法子の方からテレパシーは切られ、光秋が言われたことに首を傾げている間にも、寝間着に着替えた法子がタオルで髪を拭きながら居間に戻ってくる。

「お風呂ありがとう。いいお湯だったよ」

「あ、はい……………じゃあ、僕も入っちゃいます」

どうにもさっきのことを改めて訊く機会を失って、光秋はタオルと着替えを持って足早に風呂へ向かう。

脱衣所で服を脱いで浴室に入ると、湯加減を調整したのか浴槽のかさが少し増していた。

—法子さんと綾が入ったお湯か—

おもむろに浮かんだ雑念を頭を振って払うと、湯船に肩まで浸かって温まる。

——まったく僕って奴はつ。しょうもないことを。こんなことを綾にでも「聞かれ
たら……」

——「聞こえてる」よ——

——……やっぱりか——

頭の中に聞こえてきた「声」に、観念した光秋は残っていたなけなしの力を抜き、壁に頭を預ける。

——そんなこと考えるくらいなら、さつき一緒に入ればよかったのに。あたしはできればそうしなかったけど、アキは嫌がるかなと思って……—

——そんな氣遣いができるとは、お前さんも成長してんだな——

——バカにしてるでしょっ——

——純粹に感心してるんだよ。夏に生まれたお前さんが、半年ちよつとでここまでつてな……僕ももう少し上手に変わっていきたいよ……—

間違いなく膨れているだろう綾の「声」に応じながら、そんなやり取りに明らかな安堵を感じる。

——内容はともかく、やっぱり綾と法子さんと話すのはいい。それだけでリラックスできるといふか、力がどんどん抜けてえ……—

そんな思いが表れるように、光秋の体からはどんどん力が抜け、瞼も徐々に下がって

いく。

そして、

「ッ!？」

瞼の下がりに合わせるように体全体も湯船の中に下がっていき、ついに鼻が沈んだ。

「光秋くんッ!？」

突然の息苦しさが伝わったのか、法子が慌てて浴室に飛んできた。

「先程は、大変お騒がせしました……」

溺れかけたところを法子に救ってもらって以降、特に問題なく入浴を終えて居間に戻ってきた光秋は、寝間着を着た身を申し訳なさや恥ずかしさで縮ませて深々と頭を下げていた。

「いや、別にそこまでしなくても……アキはどうなの？大丈夫？」

「ああ。ちよつと鼻浸けただけで、水もそんなに飲まなかつたし」

法子が返事に困る中、心配そうに訊いてきた綾に、光秋は顔を上げながら答える。

「まさか風呂で溺れかけるなんて。しかもそれを法子さんに助けられるなんて……」

思わぬ失態をしかしてしまったこと、それを意中の相手に見られてしまったこと、あまつさえそこから助けてもらったことへの羞恥心から再び顔が下を向きそうになるものの、どうにかこらえて机の上の時計を確認する。

「というか、もう１１時回ってるな。僕は明日早いからそろそろ寝ますけど、法子さんたちはどうします?」

「あたしたちも寝ようかな……仕事終わりの長旅で疲れたしね」

綾と法子の欠伸混じりの返事を聞く間にも、光秋は冷蔵庫から出した目薬を注し、「わかりました。布団は……」

と、「二人」の返事を受けて顔を巡らせ、ベッドに目を止める。

「……………また、雑魚寝つてことでいいですか?」

「私はそれでも……………あたしはいいよっ」

どうしても浮かんでくる異動前夜の光景に気まずさを覚えながら訊ねると、法子は少し恥じらいながら、綾は嬉々として応じる。

「……………じゃあ……………寝ますか」

未だ引かない気まずさと、綾にも劣らない嬉しさを込めて返すと、光秋はコタツとエアコンを切るや梯子を上ってベッドの奥に詰め、すぐに伊部姉妹も入ってくる。

「電気消すよ」

「お願いします」

光秋が応じるや法子は照明を消し、薄暗い中で“三人”は手探りで布団を被る。

「……………」

横になるや左側を下にし、伊部姉妹に背を向ける形で光秋が寝ようとしていると、綾はその背中に体を寄せてくる。

「……………言つとくが、僕今日は早く寝るんだけど」

「わかつてるよつ。いいじゃん、くつつくくらい。久しぶりにこうして会えたんだしさ」
頬を膨らませて言いながら、綾は肩から両腕を回して抱き着いてくる。

「そりゃあ、まあね……………くつつくくらいは……………」

伸ばしてきた両腕に触れ、背中に感じる綾の感触に異動前夜以来の強い安心感を覚える一方、光秋にはその感じ方こそが不安だった。

「明日仕事だつていうのに、こんなに力が抜けて大丈夫だろうか？流石に安心し過ぎなんじゃ……………いや、そんなことより今は寝ることに努めよう。そうしようっ——」

思うや雑念を払い、呼吸を整えると、もともと感じていた伊部姉妹がいることへの安心感もあつてか、5分としない内に眠りに落ちつていった。

「……………」

背後の綾、もしくは法子——あるいは“二人”が不安そうな顔を浮かべていることに

は、
ついに気付かなかつた。

1 1 2 一筋の光

「……………」

うつらうつらしていた意識が速足で明確になつていくのに合わせて、光秋は独り暮らしを始めて以来すっかり馴染んだ布団以外に、自分の背中を覆うように触れているものを感じる。

——……………ああ、そっか。法子さんと綾だ。昨日来たんだっけ……………」

覚め切るまでもう一歩といったところの意識で昨夜のことをぼんやりと思い出しながら、肩から前に回された伊部姉妹の手を握り、背中以上にその存在感を感じ取ると、安心感から再び寝そうになる。

が、そんな中でも抜けきらない一抹の緊張感が辛うじて意識を繋ぎとめる。

——あれ？このまま寝ちゃ不味いような……………今日つて……………——「ああっ!？」

微睡みの中に先日東京本部で見たレーザー砲のことが浮かぶや、慌てて体を起こして枕元に置いていた携帯電話を開く。表示されている日付は3月26日土曜日、時刻は午前6時だ。

「いっけねっ!」

今日の予定を思い出して完全に目を覚ますや、すぐにベッドから下りようとする。が、梯子の手前で寝ている伊部姉妹を前につい足踏みしてしまう。

「んっ、んーっ……う？なに？」

そうこうしている間に、先程からの騒ぎで目が覚めたらしい法子が目をこすりながら訊いてくる。

「……すみません。ちよつと」

それを見ていよいよ割り切るや、光秋は天井に頭がぶつかからないように四つん這いの体勢で伊部姉妹の体を跨ぐ。

「……………」

寝間着越しに体と体が触れ合った瞬間、その場に根が張られていくような抗いがたい誘惑に襲われるものの、なけなしの自制心でどうにか梯子に手を掛け、勢いのままに下りて急いで朝食の支度を始める。

「朝ごはん？私がやるよ」

「いいですよ。法子さんと綾は寝てて。昨日疲れただろうし、そうでなくてもせつかくの休みだし」

まだ瞼が下がり気味な法子の申し出をトースターに食パンを放り込みながら断ると、光秋は服を抱えて脱衣所へ向かい、手早くズボンとワイシャツに着替える。

ちようど食パンが焼き上がると、コップに注いだ牛乳と一緒にコタツに運び、事前に電源を入れておいた布団の中に足を入れてそれらを食べ始める。

「……………」

しばらくはその様子をベッドの上で眺めている伊部姉妹だったが、トーストを半分食べ切ったところで下りてきて左横に入る。

「寝ていいのに」

「同じ部屋にわざわざしてる人がいれば、どっち道目が覚めちゃうよ」

「そういうもんですか？」

法子の言い分に首を傾げながらもトーストを食べ切り、牛乳を飲み干すと、光秋は空いた食器を台所の水盤に運び、その足で脱衣所に移動して歯磨きを始める。

コタツにもぐり直しながら歯を磨き、終えて再度居間に戻つてくると、法子が言うてくる。

「お皿は私が片付けるよ。自分の分もそろそろ食べるし、ついでに」

「じゃあ、お言葉に甘えて。洗ったらその水切り棚に置いてください」

その厚意を素直に受け取ると、光秋は目薬を注して背広を羽織り、カバンを斜め掛けして玄関へ向かう。

「じゃあ、行つてきます。合鍵はそこに置いたんで、部屋を出る時使つてください」

「わかった……その、いつ頃帰れそう？」

「今のところはつきりとは……目途がついたら連絡します」

「……わかった」

靴を履きながら応じると、見送りに来てくれた法子——そして綾は少し寂しそうに返す。

「……………じゃあ、行つてきますっ」

「行つてらっしゃいっ」

そんな顔に後ろ髪を引かれそうになるも、努めて覇気の籠った声で告げ、それに合わせるように同じ調子で返してくれた伊部姉妹の声を背中に部屋を出る。

——なんか、本当に同棲してるみたいだな……結婚したら、こんな感じなのかな——
くすぐったい気持ちを持て余す中、不意に浮かんだ思いに自分で自分が恥ずかしくなった。

もつともそれも数秒のことで、頭を振つて雑念を払うと、速足で駅へ向かった。

本部に着くや、光秋は事前に決められた予定に従つてニコイチに乗り込み、一路試験が行われる演習場を目指す。少し前にレールガンの試射やゴーレムの試乗を行ったあ

の場所だ。

位置情報を入力した地図に従って山の合間に降りると、すでにレーザー砲が運び込まれていた。

「ニコイチの目線から見ても、やっぱりデカいな。アレを今日——どころか、場合によつては今後のDDシリーズ戦で使っていくかも知れない、か……」

敷かれた鉄板の上に横たわるレーザー砲の長さに改めて圧倒されつつ、今更ながら新しいものに触れる時独特の不安が湧いてくる。

その時、レーザー砲の近くにこちらに手を振っている人影を見付ける。

「福山主任」

思うやレーザー砲の許にニコイチを進ませ、膝を着かせてコクピットから降りると、福山に駆け寄る。

「おはようございます」

「おはよう。今日はよろしく頼む」

「はいっ」

昨夜からどうしても緩みそうになる気持ちを引き締めようと、意識して力を込めた声で応じる。

「早速だが、レーザー砲の使い方を説明する。降りてきてもらって早々悪いが、もう一度

乗り込んでくれ」

「了解」

再び力を込めることを意識して応じるや、駆け足でコクピットに戻った光秋は直立したニコイチの目線から福山を見下ろす。

「準備できましたっ」

（では、まずレーザー砲を持ってみてくれ）

「了解」

応じると、鉄板の上のレーザー砲を見やる。全長の大部分を占める長大な砲身、その後部に備えられた箱状の部品の下側に持ち手らしきものを見付けると、ソレを右手で掴み、砲身部分に左手を添えて抱えるように持つ。

——……バランスとるのにコツがいるな——

そのあまりの長さ故か、特異な形状のせいかな、気を抜くと一方に傾きそうになる独特の感覚に思わずヒヤリとする。

（後部の箱状の部品、その砲身部との付け根の近くにボタンがある。それが内蔵された燃料電池のスイッチだ。まずそれを押してくれ）

「了解……コレか」

言われて指示された辺りを探し、上側に丸く出っ張った部分を見付けると、光秋は恐

る恐るそれを押す。直後に箱状部品から風が吹くような稼働音が鳴り出し、レーザー砲が起動したと理解する。

「押しました」

（では、後部を肩に担ぐように構えてくれ。側面の支持棒を奥に回すことで照準器が作動する）

「はい」

言われた通り箱状部分を右肩に担ぎ、側面から伸びる支持棒を左手で掴んで砲口を前に向ける。掴んだ支持棒を奥に回すと、砲身部の付け根辺りから赤いレーザーポインタが照射される。

——レーザーポインタ復活か。動作は改良前のN砲と同じなんだな——

懐かしい感覚に思いを馳せそうになったのも一瞬、光秋は持ち手部分に備えられた引き金を見やる。

「照準器で狙いを定めて、あとは引き金を引くと？」

（そうだ。ここまでで質問は？）

「特には」

（では、実射試験に移る。電源を切ってついてきてくれ）

「わかりました」

応じると光秋はレーザーポインターを消し、箱状部分のスイッチを再度押して福山の後についていく。

移動の合間、福山はこちらを見上げながら声をかけてくる。

（ところで三尉、ふと思ったんだが）

「なんです？」

（今日は特エスたちを連れてこなかったのか？）

「？……………！」

言われてようやく、この瞬間まで桜たちを見学に誘うということを失念していたことに気付く。

「あ……………」

（レールガンの時は1人連れてきたから、てつきり今回も連れてくるのかと思っていたが）

「その……………連絡がきたのがギリギリでしたからね。予定の都合とかで今回は断念したというかあ……………僕も、いろいろバタバタしてましたし……………」

忘れていたとはどうしても言い出せず、つい曖昧な言い回しで誤魔化してしまう。

（そうか）

……………すみません。法子さんと綾が来ることで頭が一杯になって誘うの忘れてま

した。すみません……—

短く応じた福山はそれ以上言及してこなかったものの、遅まきながら気付いたミスとそれを誤魔化してしまった罪悪感から、光秋は胸の中で謝罪しつつ見えていなことを承知で足下を歩く福山にコクピットの中で頭を下げた。

それから少し進むと、5キロ四方はあるかという開けた場所に出る。

と、遠くに見えた黒い物影に、光秋は思わず心臓を跳ね上げた。

「アレってっ……？」

驚きを拾ったモニターが拡大映像を表示すると、映し出されたのは案の定というべきか、腹部に大穴を空けたDD—01・ツアーングだった。

（去年の合同演習に乱入してきた機体——人類が最初に遭遇したDDシリーズだな。調査がひと通り終わったので、試射の標的に回してもらった）

「はあ……」

外音スピーカーから漏れたらしい声に福山が説明してくれるものの、未だ困惑が収まり切らない光秋は生返事を返すのが精一杯だった。機能を停止していることは充分わかっていても、DDシリーズに対する恐怖は心の深い所から少しずつ湧いてきてしまうのだ。

「でも、その……いいんですか、アレ撃っちゃって？ 貴重なサンプルなんじゃ……」

そんな心境を改めたいと思つて、ふと浮かんだ疑問を投げかけてみる。

（レーザー砲は元々対DDシリーズ用に作られたものだ。試射の標的にこれ以上の適材もない。そもそもDDシリーズに対抗できる力を得る為の装備開発であり、その為の今日の試験だからな）

整然とした語りこそ普段とそこまで変わらないものの、それを述べる福山の声にはほんの微かに「熱」が籠っていた。

「……確かに」

その声を聞いて恐怖心も落ち着いてくると、気を取り直した光秋は改めてツアーング、その残骸を見据える。

——合同演習に乱入してきたヤツつて言つてたから、だいたい半年前のヤツか……——
さつきよりは動揺の少ない心持ちでそう思うと、その時の光景が脳裏に浮かんでくる。

——あの時は、とにかくこつちの攻撃が効かないことが何より恐ろしかった。どれだけ弾が当たろうが傷一つ付かず、お構いなしに迫ってきた。その上での黒い空間での再戦……本当、綾がいなかったらどうなつてたか——

思いつつ、右肩に担いだレーザー砲を見る。

——でも、今は違う。ようやく赤くなつたニコイチ以外でDDシリーズに効く攻撃がで

きるようになるんだ。その第一歩をこれから踏み出すんだ！――

現状をそのように再認識することではけなしの動揺もいよいよ収まり、活力を宿した目をモニター越しに福山へ向ける。

「そういうことなら……早速始めますかっ」

（そうだな。まず、標的の2キロ手前まで移動してくれ）

「了解っ」

応じるや、指示された位置に速足で向かう。

「移動しました」

（では、先程説明した手順でレーザー砲を起動させてくれ）

「はいっ」

言うと同時に箱状部分の電源スイッチを押し、送風音を聞きながら砲口をツアーングへ向ける。

「レーザー砲起動しました」

（では、試射を開始してくれ。狙いは左胸だ）

「了解っ」

応じると同時にツアーング、その胸部を映した拡大映像に赤いマーカーが表示され、支持棒を回して点けたレーザーポインターをマーカーの中心に合わせる。

——実戦なら腹部の赤い扉を狙うところだが、今は壊れてるしな——
思うや、少し硬くなった声を通信機に入れる。

「照準よし。撃ちますっ！」

叫ぶと同時にニコイチの指が引き金を引き、砲口が一瞬強く輝く。

それとほぼ同時に、拡大映像の中のツアーニングの左胸には周囲が赤々と縁どられた直径3センチ程の穴が穿たれていた。

「……凄………本当に………」

人間の作った物がDDシリーズに傷を負わせた。どれだけ攻撃してもまともな傷など付けられなかったその非常識なまでの耐久性を目の当たりにしている光秋にとって、目の間の光景は想定通りとはいってもやはり衝撃的だった。

「……………」

（三尉）

「！は、はいっ」

福山に声をかけられてようやく我に返ると、そんな自分を誤魔化すように張りのある声で応じる。

（システムは問題なく作動しているようだ。その調子で左の上腕部と前腕部、左脚部にも1発ずつ頼む）

「了解つ」

早速指示された左上腕部に狙いを定めると、再び引き金を引き、一瞬の煌めきの後にツアーングの左腕に穴が空けられる。

「……」

今度も息を呑んだものの気持ちの切り替えは早く、そのまま前腕部、脚部へと続けて撃つていく。

「……………突っ立ってるだけの——しかも形が人型の——相手を撃ち続けるっていうのは、なんだか妙な気分になってくるな——

不意に胸の奥に覚えたむず痒さにそう思いながら、拡大表示された3つの穴を改めて観察してみる。

——上腕の方は結構深く入ったな。前腕は……盾の部分に当たった所為かそれ程深くないか。あそこは厚いから通りにくいのか？脚も厚手の所を撃ったせいかな似たようなもんか——

数をこなして当初の驚きが冷めたせいかな、場所によつては思ったよりも軽度な損傷に少し拍子抜けする。一方で、

——それでも、重装甲部分にも傷を負わせてみせた。1回当たってこれなら、2回、3回と続けば……——

思いながらその想像を目の前のツァーニングに重ね合わせ、レーザーの連射によって腕部装甲がボロボロになっていく様子に、これが想像だとわかっていても強い達成感を抱いてしまう。

（……ひとまずこんなところか。4発撃つてみたわけだが、使い心地はどうだ？三尉）

「そうですね……」

福山の問いに現実に戻るや、光秋は使用時の感覚を振り返ってみる。同時に、直前まで抱いていた達成感、それを表すように頬が僅かに緩んだことに、我がことながら少し怖くなる。

——さっきの感覚は、危ないな。努力や成果を喜ぶことはいいが、今のはなんか……大事なことを忘れそうになるような……—

（三尉？）

「！」

やや急かすような福山の声にハツとするや、レーザー砲の使い勝手に思考を注力する。

「そうですね……まず、これまで使ってきたキャノン砲やレールガンなんかと違って、弾じゃなくて光線……と言っているのかわからないけど、とにかく根本的に違うものが飛んでいくわけでしょう。その辺の感覚はやっぱ違いますね。あと、今回は止

まっている標的相手に使ったけど、実戦ではDDシリーズは常に動き回ってるわけだから、その違いがどこまで影響するかって不安はありますね。威力に関しては申し分ないです」

（なるほど）

赤裸々に告げる光秋に、福山は短く応じる。

と、さつき言ったことを受けてか、光秋は不意に思い付いたことを言う。

「少し、コレを持って飛んでみてもいいですか？」

（飛ぶ？）

「はい。持つて飛んだ時の感覚の違いとか、今の内に感じておいた方がいいかと思って。

発砲はしません」

（……………そうだな。いい機会だし、そういった方面の具合も見ておいた方がいいか。

レポートをしつかり頼むぞ）

「了解。では、早速」

福山の了承を得るや、光秋はレーザー砲を抱え直し、早速上昇を始める。

「……………やっぱり」

そうして最初に感じたのは、薄々予感していた進む際の違和感だった。ニコイチの全長に並ぶ程の長さ、それ故の空気抵抗の変化ということか、普段よく使うキャノン砲を

持つて飛ぶ時と比べて右側に「引っかかる」ような感覚を覚えた。

加えてその重量と「肩に担ぐ」というこれまでにない姿勢のためか、安定して飛ぶためのバランス感覚も今までのそれと違っていた。右側に適度に気を配って飛ばないと、すぐそちらへ傾きそうになるのだ。

—この感覚……強いていうなら2リットルのペットボトルをいくつか買った時の帰り道のそれに近いかな。油断するとすぐ腕が引つ張られそうになって—

日常の体験談を思いつく間にも充分な高度に達すると、光秋は地上のツアーングを改めて見る。

—とりあえず高度はこんなところかな。さて—

胸の中に眩くと、再びツアーングにレーザー砲を向けてポインターを点ける。拡大映像越しに赤い点がきちんと当たっていることを確認すると、そのままゆつくりと右に移動する。その間も、レーザーポインターは決してツアーングから外さない。

結果としてツアーングを中心にその周囲を反時計回りに旋回し、それが3周目を終わると今度は時計回りに切り替わる。

それも3周目を終わると、今度は弾むように急上昇し、ツアーングの真上に差し掛かると同時にその頭上にポインターを当てる。

「……………なるほどな」

ひと通り飛んでレーザー砲装備での飛行を体感すると、電源を切って福山の許へ着地する。

（どうだ？）

「詳しいことはレポートの方で改めて書きますが、そうですね。思っていた通り、大きさと重量からこれまで使ってきた装備とは移動する時の感覚がかなり違います。あと、担ぐっていう持ち方のせいかな、ときどき箱部分が肩からズレるような感覚があつて不安ですね。なにか固定できるものを付けてもいいかも」

（そうか）

大まかなながらも赤裸々な光秋の言葉に小さく頷くと、福山は手元の通信機に何ごとか吹き込む。

（今撤収の指示を出した。三尉も本部に戻ってレポートの作成を頼む）

「了解……何か手伝いましょうか？」

応じると同時にレーザー砲を鉄板に戻そうと操縦桿を倒そうとして、不意に目に入つたツアーンングを移動させようとしているスタッフたちに思わずそんな言葉をかける。

（いや、いい。それよりレポートの方を頼む）

「わかりました」

福山の返事に頷くと、光秋はレーザー砲を鉄板の上に戻す。

「では、お先に」

そう言い残すとニコイチを上昇させ、真っ直ぐ本部を目指す。

「思ったより早く済んだのはよかったかな。あとはレポートを書くだけか」

そう確認を呟く口元は、すでに伊部姉妹と過ごす休日を想像して緩んでいた。

本部到着後、速足で自分の待機室へ向かった光秋は、部屋に入るや法子にメールを送る。

『今本部に着きました。これからレポートの作成に入ります。昼頃には帰れると思います。』

送信したメールをなんとなしに読み直した直後、すぐに法子から返信が来る。

『わかりました。部屋で待ってます。』

「……さてとね。最後のひと頑張りっ」

その一文で気合いを入れ直すと、ノートパソコンとルーズリーフを用意して机に座り、早速レポートの作成に取り掛かる。

「……………にしても、ついにここまで来たんだ」

考えをまとめるためもあつて試験場での光景を振り返っていると、改めて感動にも似

た深い感慨を覚える。

—DDシリーズを傷付けられる武器、それが実現できた。もちろん、実戦で通用するかはまだわからないが……その可能性を少しでも高めるのが、今の僕の役割なんだよなっ—

その自己認識は少し疲れていた体に活力を取り戻させ、伊部姉妹に一刻も早く会いたいという単純な欲求も合わさって筆を進めさせていく。

小休止を挟みながら書き進めることしばし、どうにか形になった報告書をパソコンの画面の中で読み返すと、そのファイルをメールに添付し、先日教えてもらった福山のアドレスに送信する。

「よしっ。終わったあ」

ひと仕事終えた安堵の声を漏らす一方、手はすでに荷物をまとめ、帰るための準備を始めていた。

「これでやつとっ」

気持ちの方もそれに追い付け、追い越せとばかりに緩やかに高まり、1分とかからずに支度を終わると速足で部屋を出る。

—もうすぐ11時半。寮に着く頃には昼時か……せつかくだし、観光がてら食べに出るかなっ！—

腕時計を確認しながら帰宅後の伊部姉妹との予定を思い浮かべ、疲れを忘れた足は軽やかに建屋を出、門をくぐり、普段以上の速さで駅へと向かった。

113 食い違い、確かめ合い

車窓を流れる景色を貧乏ゆすりをしながら眺めること30分程。最寄り駅の名前がアナウンスされるや、もともとドアのすぐ横の席に座っていた光秋は跳ねるように移動し、減速が始まった車内でドアが開く時をまだかまだかと待つ。

普段より長く感じる数十秒の後、ようやくドアが開くと駆けるようにホームに降り立ち、待機室を出発した時のように——あるいはそれ以上に俊敏な足取りで寮を目指す。

——駅を出た。あとはこの道を真っ直ぐ行つて——よしっ、寮が見えてきた——ドアまであと1メートル——

普段無感動に通つていゝ、そしてお世辞にも長いとはいえない道も、その先に伊部姉妹が待つていゝと思えば部屋に近付いていゝことを示す景色一つ一つが鼓動を速めていく。

ドアノブを回すという当たり前な動作にさえも妙な力が籠り、ついに自室にたどり着いたと認識した途端、自分のものとは咄嗟に思えないほどの朗らかな声が出た。

「ただいまっ！」

自分の口から発せられたその何の変哲もない言葉に、しかし高揚を続ける光秋のまだ

辛うじて冷静な部分が感動を覚える。

——『ただいま』。帰ってきた時——自分を待っていてくれた人にかける言葉……こんなに素敵な言葉だったんだ！——

思う間にも廊下を速足で過ぎ、居間のドアを開けると、コタツに籠っている法子がこちらを見返してくる。

「おかえり。お昼は？」

「まだです。それなんですけど――」

「それじゃあ」

「これから食べに行きませんか？」と続けようとした光秋を遮つて、コタツから出た法子は台所へ向かうと、さつきは氣付かなかつたが鍋の乗つた電気コンロのスイッチを押す。

「温つためるだけだから、手洗って待ってて」

「いや……あー……」

その様子にすでに昼食を用意していたと察した光秋は、気まずさと煮え切らなさの中で言いかけた言葉を呑み込んだ。

「……じゃあ、そうさせてもらいます……！……そうだ。それ食べたらどっか行きませんか？法子さんと綾の、東京で行ってみたい所」

代わりに新たに思い付いたことを告げるも、法子の反応は薄い。

「え？いいよ。光秋くん休日出勤の帰りだし、普段の仕事だつてただでさえ大変なんだから、今日くらいゆっくり——」

「僕のことなんて大丈夫ですよ。休日出勤っていつでも、そこまで大したことはしなかったし。それより、せっかく法子さんと綾がいるんだ。家に籠つてないで、どっか遊びに行きましょうよ！」

伊部姉妹と久しぶりに楽しい時間を過ごしたい。今回来ることを聞いてからずっと抱いていた願望を端的に、やや強い語調で告げるが、言われた法子は視線を落とし、長髪が目元を隠す。

刹那、

「……………なんで」

「？」

「何で、そんなこと言うのっ！」

顔を向けたかと思うや法子——というよりも綾は大声をあげ、端に涙の浮かんだ目でこちらを睨む。

「何でつて…………？」

唐突に向けられた怒りに光秋が困惑する間にも、綾は構うことなく続ける。

「普段大変だから、あたしたちがいる時くらいゆっくりしてもらおうと思ったのに！大変だつてわかつてるけどいつもはどうすることもできないから、せめて今だけはつて思つてゐるのに！何でそれをわかつてくれないのッ!!」

叫ぶや綾は玄関へ駆け、突き破らんばかりの勢いでドアを開けて出て行つた。

「……………」

勢いよく開けた反動で強く閉まつたドアの音が響く中、残された光秋は茫然と伊部姉妹が出て行つたドアを見つめる。

「……………何でつて……………」

少ししてどうにか頭が回り出すと、不条理ともいえる怒りをぶつけられたことへの苛立ちが湧いてくる。が、それを上回るように浮かんできるのは、怒声と同時に感じた綾と法子の気持ちだった。

——会えない寂しさ、元氣でいるかすらわからない不安、昨今の情勢から否が応でも抱いてしまう心配……………それらを感じながら、何もしてあげられない無力さ——悔しさ……………僕が「会いたい」つて強く思つていたように、法子さんと綾もいろいろ思つてたつてことか?——

断片的で、整然としておらず、しかしその一つ一つが鮮烈に脳裏を過るたびに、光秋は伊部姉妹にとってこの2カ月半がどんな時間だったのか、未だ理解し切れていないこ

とが多いのを承知で考えを巡らせてみる。

——………考えてみれば、ここ最近“二人”と話す時といえば、電話越しのわずかな間だけだった。そのくせ、綾のテレパシーは——正確な感度こそわからんが——僕の感じたこと、抱いた気持ちを、その一部でも拾ってしまっていたらしい。加えて、意識しなくても入ってくる物騒なニュース……さぞ心配だっただろう。でも何かしてあげられるわけでもなくて、悔しかつただろう。その上で、ようやく久しぶり会えると思つた日に今日の試験。法子さんと綾からすれば、近くにいる今だからこそ労おうとしてくれたつてことか。そしてそのことを僕がよく考えず、安易にあんなことを言つてしまつたがための、この状況か………

思いつつ、独りきりになつた室内を改めて見回してみる。

——もつとも、こんなふうにな比較的冷静に考えられるのも、綾のテレパシーのおかげつてことなんだろうな。考えるための手掛かりをくれたつていう。そうでなきゃ、今頃どうなつてたか………

そんな不安を抱いたのも数秒のことで、漂わせていた視線をドアに据え直すや、光秋は浮足立つていた気持ちを整えようと意識して強い声を出す。

「とりあえず今すべきは………追いかけるかつ」

言うと同時にドアへ駆け、ノブに手をかける。

直後、

「！いつけね！」

鍋を電気コンロにかけたままだったことを思い出して慌てて引き返し、電源を切ったことを充分に確認すると、今度こそ伊部姉妹を追うために部屋を出た。

「——と言ったものの……………」

部屋を出て5分程が経過した頃。ひとまず寮の周囲を歩き回った光秋だったが、いっように伊部姉妹が見付からないことに途方に暮れていた。

——よくよく考えたら、東京で法子さんたちが行くあてなんて……………あ、春菜さんのマンションがあつたか。その場合、春菜さんにも後で怒られるのかな……………

法子を泣かせた、その為に鬼の形相となった春菜を想像して、割と本気で震えた。

「さて、どうしたものか……………」

それが春菜の件に対してか、それとも伊部姉妹の件に対してか、自分でも曖昧な呟きを漏らすと、なんとなしに一軒家や集合住宅が建ち並ぶ周囲を見回してみる。

「……………？」

鼻をすすするような“音”を“聞いた”のは、そんな時だった。

「……………」

もともと聞こえにくい耳を可能な限り澄ませて音源を探るものの、そうすると途端に聞こえなくなってしまう。だというのに、「悲しんでいる」という感覚だけは今も強い確信となっていた。

「この感じ……………まさか……………」

思い出すのはほんの数分前、怒鳴ると同時に綾が発した気持ち、それを受け取った時の感覚だった。

「……………」

アパートを出て以降、焦りやら罪悪感やらでどこかごつた返していた気持ちを、呼吸を整えることで鎮め、入ってくる感覚に意識を集中する。

そのなんとも曖昧な、しかし不思議と信じられる感覚に従って、よりはつきりと感じる方へ進んでいく。家と家の間、細い路地を何度か曲がっていくと、気付けば申し訳程度の砂場とブランコが設置された小さな公園に出ていた。

——アパートの近所にこんな場所があったんだ……………——

住宅街の只中に隠れるように設けられた公園に感慨を漏らしたのも束の間、2つあるブランコの一方に腰を掛けた人影に、光秋はゆっくりと、しかししっかりと相手を見据えて歩み寄る。

「……………法子さん、綾」

「……………」

そつと声をかけると、腰掛けていた人影は顔を上げ、伊部姉妹がこちらを見返してくる。

「……………なんで、こういうことはわかるかな……………」

「すみません……………」二人の感じがこっちからして、辿ってきたら着いたというか……………」

部屋でのやり取りを受けてだろう。皮肉げに投げかける法子に、光秋は気まづくなりながら返す。

「その……………さつきは、すみませんでした」

それでも固まってしまいそうな口を動かして、いの一番に言うべきことを言いながら頭を下げる。

「考えが足りなかったというか……………」二人の気も知らずに、勝手なことと言って……………」

「……………それは、あたしもだよ」

顔を上げながらそう続けると、今度は綾が視線をそらして言い辛そうに言うてくる。

「アキがあたしたちと会うの楽しみにしてたって、わかってたはずなのに……………だから遊びに行こうって言うてるんだって、わかってたはずなのに……………」

言う間にも、綾の目元が少しずつ潤んでくる。

「でも、それは僕の体を氣遣つてくれたからだろうか？」

「それは、そうだけど……」

「僕は、そんなことにも考えが及ばずに……」

「いや、でもあたしだって——とりあえず、この話はここまでにしない？ 堂々巡りになっちゃうから」

「……そうですね」

薄々感じ始めていたことを綾と代わった法子に言われて、素直に頷いた光秋は隣のブランコに腰を下ろす。

「なんていうか……踏んだり蹴ったりですね、僕ら。お互いがお互いのことを考えて行動したはずなのに——僕の方は我欲が強かったかもしれないけど——、それが上手く噛み合わなくて、こうしてすれ違つて。綾がテレパシーでいろいろ聞かせてくれたら、もっとこじれてたかも……」

呟きながら自身の慮る力のなさを実感して、光秋は自分が少し嫌になる。

「それこそお互い様だよ。私や綾だって、寮ではああ言つたけど、光秋くんは何もしてあげられなかったのが悔しくて、機会がきたから料理とかしただけで……今思い返すと、押し付けみたいになつてたよね」

「そんなことは！」

法子の自分を貶めるような発言に、光秋は叫んだ勢いで立ち上がっていた。

直後、

「……！」

「光秋くん？——アキツ?!」

急に足をふらつかせて倒れるようにブランコに座り直す光秋に、今度は伊部姉妹が立ち上がって正面に駆け寄る。

「どうしたのっ？ やっぱり疲れが溜まって——」

「いや………腹、減った」

さっきまでの憤りなどすっかり忘れて心配一色の顔で問い掛ける綾に、光秋は感じるままを正直に答えた。

「………え？」

「いや、よく考えたら、昼飯食ってなかったなあって………さすがにそろそろ限界というか………」

目を丸くする綾にそう続けるも、空腹を自覚した声からは徐々に力が抜けていく。

「………」

「………すみません。こんな時に………」

「あ、ううんつ。それは別に……………そうだよね。今お昼なんでもんね…………」

場違いなことを言わなければならないことに情けなさを感じる光秋に対し、それを聞いた綾の、そして法子の顔からは少しずつ力が抜けていく。

「とりあえず、部屋に戻ってお昼にしようか」

「そうしてもらえると」

伊部姉妹を探し出すという目的を果たし、そこに生理的欲求も加わった光秋には、法子の申し出はとてもありがたいものだった。

自分でも頼りない足取りでどうにかブランコから立ち上がり、寮へ向かおうと歩き出すとすると、なにも言うことなく左隣に歩み寄ってきた伊部姉妹が、そつと手を差し出してくる。

「……………」

光秋もなにも言うことなく手を伸ばし、また離れてしまわないように強く握ると、
三人は寮へと戻った。

「すぐに温^あつためるから、手洗って待ってて」

「お願いします」

部屋に着くや自分も台所の水盤で手を洗って鍋を再度温める法子に応じると、光秋も脱衣所の水盤で手を洗って居間のコタツにもぐる。

少して法子も居間にやってくると、持ってきたどんぶりを光秋の前に置いて行く。もくもくと湯気を立てるその中身は、野菜がたくさん盛られたうどんだ。

自分の分も持ってきた法子が隣に座ると、光秋は早速手を合わせる。

「いただきます！」

法子に頭を下げながら言うや、熱さに注意しつつ麺を口へ運ぶ。空腹ということも手伝ってか、醤油ベースのスープが絡んだ程よい歯ごたえのそれは食欲を刺激した。

「どうかな？」

「美味うまいですっ」

自分も食べながら訊いてくる法子に即答する間にも、光秋は麺に続いて具材の野菜、特に白菜を重点的に咀嚼し、味と食感に口を楽しませる。

「……………さっきの話だけだよ」

「……………さっき？」

箸を一旦止めて告げる法子に、光秋も口の中の分を吞み込んで訊き返す。

「ほら、この後遊びに行こうって話」

「いいんですか？ 反対してたのに」

「反対っていうほどでもないけど……私たちはそもそも光秋くんの体を氣遣って言っただけで、本人が行きたいていうなら行くのもありかなって……私だって、べつに行きたくないとかじゃなくて、むしろ行けるなら行きたいていうか……」

先程の口論を思い出してか、法子の態度はどこかよそよそしいというか、バツが悪そうだった。

が、光秋はそんな様子さえ愛らしく思えて、つい口元を緩めてしまう。

—こんな法子さんが見られるなら、さっきのケンカもよかったかな?—
思わずそんなことまで思ってしまう。

「じゃあ、食べ終わったら行きましょうよつ。どこに行きますか?」

「そうだなあ……」

それから、うどんをすすりながら午後の予定について語り合った。

昼食を食べ終え、その片付けを終え、出かけるための準備を整えると、光秋と伊部姉妹は一先ず最寄り駅へ向かう。

「行き先、本当に渋谷でよかったんですか?」

「うん。私も光秋くんの言ってたお店、行ってみたいし」

食事中の会話で光秋がロブスターのことを話すと、伊部姉妹、特に法子も興味を示し、それなら店が開くまで近くを観光しようと、行き先が渋谷になったのだ。

「でも法子さん、酒飲めないけど、本当に大丈夫なんですか？」

「ソフトドリンクもいろいろあるんでしょう？……現に小さい子たちとも一緒に行つてたんでしょう？」

「いや、そうだけど……」

綾のどこか棘のある視線に、思わずたじろぐ。

その間にも駅に着くと、渋谷までの切符を買つて改札をくぐる。

「やっぱり、カード作ろうかな……」

「毎日乗るならねえ」

言いながらホームに出て、少しして入ってきた電車に乗り込む。

車内を見回すと座席は殆ど埋まつており、辛うじて空いていた一人分のスペースを見付けるや、伊部姉妹を連れて速足で向かう。

「法子さんどうぞ」

「いいよ。光秋くん座りなよ」

「いいからっ」

譲ってくる法子の肩を押してやや強引に座らせた直後に電車は走り出し、光秋もすぐ

に近くの吊り革を掴む。

「……………なんか、異動前の遠出でもこんなことあったよね」

「ありましたっけ？」

「あったよ。1つしかなに席に私を強引に座らせたこと。あの時はバスだったけど」

「……………ありましたっけ？」

「あ、もしかして忘れてるっ？」

「いや、そのお……………」

頬を膨らませる法子に、しかしどうしても法子が言っている時のことを思い出せない光秋は、また怒らせてしまったか？と不安がりながら目のやり場を車窓から見える景色に求める。

「……………」

流れていく街並みをぼんやりと眺めていると、不意に既視感が湧いてくる。

——法子さんたちを座らせて、窓の景色を眺める…………街並み——いや、あの時は歩道を行き交う人たちを……………あつ——

「やつと思ひ出したね」

それでようやく法子の言っていた時のことを思い出し、察した法子が膨らみの引いた顔で言ってくる。

そのすぐ後に電車は駅に停まり、何人か降りて座席にも空気が生まれる。

「ほら」

自分の隣が空いたのを見るや法子は手を引いてきて、光秋は引かれるままにその隣に座る。

「そのお……すみませんでした。すぐに思い出せなくて」

「まあ、確かにちよつと頭きたけど……そこまで怒つてないよ」

小さい棘が刺さった様な罪悪感から詫びる光秋に、法子は肩に顔を寄せ、微笑みを浮かべて安心させてくれた。

何度かの停車を挟みつつ走り続けること数十分。電車が渋谷駅に着くと、光秋と伊部姉妹は席を立ってドアへ向かう。

「はぐれるといけませんから」

「うん」

言いながら、光秋と伊部姉妹は差し出し合つた手を繋ぎ、開いたドアから人波の荒いホームへ降りる。油断すればすぐに大勢の人に紛れてわからなくなつてしまいそうなかを進む「三人」の手は、互いの指と指を絡めてしっかりと握られている。

光秋先導の下に改札をくぐり、地下の駅構内から階段を上って地上へ向かうと、ここ最近ですっかり見慣れたスクランブル交差点の近くに出る。

「うわあ、人が……」

「ああ。僕も初めて見た時、そうだったよ」

ホーム以上の人の往来に圧倒される綾に、光秋自身初めてこの光景を直に見た時のことを思い出す。

「そういえば、この前ここで予知の阻止したんだよね」

「はい。桜さんたちのお陰もあってなんとか」

ニユースかなにかの記憶を受けて言ってくる法子に、その時の正にギリギリの光景を改めて思い出した光秋は、今更ながら少し震えた。

「……さて、さすがにまだ早すぎますよね」

気を紛らわすことも兼ねて腕時計を確認する。時刻はもうすぐ3時になろうという頃だが、ロブスターに行くにはまだ早い頃合いだ。

「じゃあ予定通り、その辺見て回ろうっ」

「だな。とりあえず、こっちに行ってみるか」

うきうきした顔で応じる綾に返すと、光秋はロブスターに続く細い道へ向かった。

伊部姉妹の手を引いて商店の合間を歩く中、光秋は建ち並ぶ店の1つ1つを普段よりよく眺めていた。

―普段はロブスター目指してそそくさで行っちゃうけど、こうしてよく見ると、いろんな店が並んでるんだなあ―

服屋に小物屋、海外の料理店にチェーンのファストフード店など、多種多様な店が途切れることなく並び、その間を活発に行き来する人の流れに、スクランブル交差点への圧倒感とも違う、どこか浮つきそうな気持ちが生じてくる。

「なんというか……改めて見ると活気がありますよね。渋谷」

「何度か来たんでしょう?」

「来たことは来たけど、いずれも日が暮れてからだだったから、今みたいに周りがよく見えなかったし、一緒に来た人たちとはぐれないように必死だったから、こんなふうに雰囲気をつくり味わう余裕ありませんでした」

法子の問いに答えながら、光秋はさつきから感じる気持ちに既視感を覚える。

―そういえばこの気持ち、どこかで感じたような……………あつ―

考えを巡らせていると、不意に昔の光景が脳裏をよぎる。

「どうしたの?」

「ああいや、この街の雰囲気、何かに似てるような気がしてたんですけど、地元の縁日のそれかなあって」

「また独特の感じ方だね」

「自分でもそう思います……でも、なんだろうなあ。左右に途切れなくいろんな店があつて、そこを大勢の人が楽しげに行き来して……自分の中でこの雰囲気に一番近いものが、それだったから……もちろん、縁日は年に1回だし、出店としっかりした建物に入ってる店舗とじゃ規模も全然違うことはわかつてますけど……」

言いながら、自分でも独特と思える感じ方に気恥ずかしくなってくる。

「……………そういうものの？」

「そういうもの……だと思うけど。どうした？」

法子に代わってどこか浮かない顔で訊いてくる綾に、顔を寄せながら問う。

「あたしは、縁日とかよくわからないから……」

「っ」

その一言に綾の境遇を思い出した光秋は、今の発言が迂闊だったと悔いる。

「わからないっていうか、法子の思い出からどんなものかはなんとなくわかるよ。でも今アキが言ったふうには感じられないっていうか……知ってるだけっていうか……」

「……………」

地面に視線を落としながら言い続ける綾を見て、なんともいえない空虚さを感じた光秋は、それを埋めるように一層強く手を握った。

「いつか行こう」

「行くって？」

「縁日。京都に戻ってきた後とか、また岩手に里帰りした時とか、とにかく夏になれば全国どこかしらでやってるんだ。それに行けばいいさ」

手に込めた力を引き写すように、明確な声で言ってみせる。

しかし、

「……まあ、その『いつか』をいつと言えないのが、今の状況なんだけど……」

先行きが不透明な自身の今後を思い出して、少し不甲斐なくなる。

「……………うんっ！」

そんな不甲斐なさに頭を掻く光秋に、綾は笑顔で頬を寄せてきた。

「……………」

その“返答”こそが、光秋には百の言葉以上に安心を与えてくれた。

街中をあてどなく歩き続けてしばらく。歩き疲れた“三人”は近くの喫茶店に入り、

テーブル席に向かい合つてひと休みしていた。

「改めて歩いてみると、渋谷つてけっこういろんな店があるんですね」

これまで巡つた場所を思い浮かべながら、光秋は抹茶ラテのカップ片手に呷く。

「そりゃあ、東京……ううん、日本でも有数の繁華街だからね。知らなかったの？」

「いや、今まで来ても飲み屋しか行かなかつたから実感が湧かなかつたというか……さつきの綾じゃないけど、知つてただけだったというか……」

カプチーノを飲みながら訊いてくる法子に、光秋は自分の視野の狭さを指摘されたような気がして、気まずさから傍らの窓に視線を逃がす。

その窓の向こうには、今も途切れることのない人の行き来があつた。

「それにしても、やつぱりすごい人ですよ。ついこの前、あんな騒ぎがあつたのに」

「それを光秋くんたちが防いだからこそ、今日のこの光景があるつてことでしょう。私もニュース見たけど、山手線そのものは無事だったからすぐに運転再開できたつて」

「まあ、今思い返しても、本当にギリギリでしたけどね……」

言いながら、光秋は陸橋を支える柱に迫る地面の亀裂を思い出す。

「それと、『たち』つて言つても、実際に頑張つてくれたのは桜さんたちですよ。菊さんが気付いて、董さんが陸橋から遠ざけて、桜さんが押さえ込んで……あと、徳川さん——こつちで知り合つた警察の人がEジャマー持つてきて、後から来た他の隊の人たちが

抑制剤打って救急車で運んで……僕はその間、殆ど棒立ちでしたから……」

その時の自分の行動、特務部隊主任として上手く動いていなかったことを思い出して、どこかやり切れなくなってくる。

「それでも、ちゃんと指示は出してたんでしょ？」

「そりやそうですけど……」

「だったらいいんじゃない？ 少なくとも主任としての最低限のことはやっただし。それに、その後の騒ぎでは、流石に棒立ちってわけにもいかなかったでしょ？」

「そりやあ……まあ……」

帰り途中のNPとZCの抗争のことを言っているのだと察して、確かにその時は激しく動き回っていた光秋は一先ず頷く。

「やつぱり、主任になっても現場でニコイチ乗ってるんだ？」

「そりやあ、僕はニコイチありきの人材みたいなもんですからね。それこそ超能力者との併用も視野に入れての異動だったみたいだし。実際主任になってからは、桜さんたちと一緒に戦うことが殆どですよ………そういや、対メガボデイ戦の演習、そろそろ真面目に計画しないと――！ すみませんっ。今する話じゃなかったですね……」

思わず漏れてしまった、今一番すべきではない仕事の話に、光秋は滑った舌を軽く噛む。

「……ふっ！」

それに対し、法子は柔らかな笑みを浮かべた。

「？」

「いや、だつてさ……今、確かに主任の顔してたから」

笑いの意図が読めない光秋に、法子は微笑んで、どこか誇らしげに答える。

「そりやあまあ……主任ですから」

「そうなんだけどね。光秋くんが“こつち”に来てからずつと見てる身としては、なんというかなあ……『大きくなつたなあ』つて」

「………保護者ですか？ 法子さんは」

その表現に対する、率直な感想だった。

「いいでしょう？ 光秋くんは一応私の彼氏なんだから、立身出世を喜んだつて」

「立身出世つて……いや、喜んでくれるのは、僕としても嬉しいですけど」

そう言われては光秋に返す言葉はなく、あまつさえ頬が緩みそうになる。

「………あたしは、こうしてまた会えたことが、ただ嬉しいけどね。あれだけ危ないことがたくさんあった後で、こうして無事でいてくれたことが」

「綾………」

法子が浮かべていた笑顔を消して、一言一句を噛み締めるように告げる綾に、光秋も

緩みかけていた頬が引き締まる。

「……ごめん。今の重かったよね」

「いや、無事が何よりって、その感じ方は正しいと思う。実際、よくこうして五体並べてここに座ってられるなって、そういう日々だったからな」

修了試験という名目でのZCとNPの抗争鎮圧に始まって、行った先でのDDシリーズ3機との遭遇戦、催眠能力者通り魔事件での犯人逮捕、その途中のZCとの小競り合い、先日の渋谷での予知阻止、そして帰りに遭遇した抗争の鎮圧と、振り返ってみれば、今言葉にした思いは強まるばかりだ。

「だから、ありがとな。そういうふうに——会えたことがただ嬉しい、なんて言ってくれて」

言うとき光秋は、無意識に、そうすることが当たり前といわんばかりに、綾の頭を撫でていた。

「……………アキ？」

「…わ、悪いっ。最近ついた癖で……」

独特の心地よさと少々の困惑を乗せた綾の声に、自分のしていることを意識した光秋は慌てて手を引つ込める。

——いかななあ。ここんとこ董さんたちにこうしてたせいか？——

撫でていた右手を眺めながら自己分析を試みてみると、不意に正面から痛覚を刺激するような視線を感じる。

視線の元は、当然綾だった。

「いや、ほらっ、最近小さい子たちと関わる機会が増えたから……」

「まだ何も言つてないんだけど？」

僅かな沈黙さえも耐えられずに早口で告げると、綾は多少険の引いた声で応じてくれる。その間も、念力で光秋の髪の毛を引っ張ることは忘れない。

「……こんと……こうしてた、ねえ？」

「ちゃんと『聞いて』るんじゃないかよ……」

「あたしだって、アキの仕事はわかつてるつもりだよ。でも、それはそれっていうか、やっぱり面白くないっていうか……」

言いながら、今度は綾が不貞腐れた顔を窓に向ける。

「……まっ、これもこれで綾か——」

その様子からは昼の一件のような不安は感じず、むしろ久々に見る綾の一面に、光秋は髪を引っ張られながら和んでいた。

お茶を飲み終えて店を出ると、日はだいぶ傾いていた。周囲が徐々に暗くなつていき、それを薄めようとするかのように周りの建物からは照明やネオンサインの明かりが漏れ出し、渋谷が夜の街に移行しつつあることを視覚的に感じさせた。

「そろそろ行くか」

周囲の風景から腕時計に目を移してそう告げると、光秋は伊部姉妹の手を引き、これまでの記憶と今日の散策である程度ついた土地勘を頼りにロブスターへ向かう。

「えつと……こっちな？」

駅から直行する普段と違って、おおよその位置関係を頼りに進む足はどこかきこちなく、曲がり角に差しかかるたびに周囲を確認してしまう。

それでもどうにか見覚えのある通りに出て少し進むと、ハサミを強調したエビの看板を掲げた店が見えてくる。

「ここです。この店」

「へえ、ホントにロブスターなんだ」

看板を見た法子が真つ先に浮かんだ感想を告げると、
“三人”は店のドアをくぐる。

「いらつしやあい。おお、コウくん」

「どうも。また来ました」

早速カウウンターの向こうから出迎えてくれた店主の子規に、光秋は店の雰囲気胸躍

らせながら返礼する。

「今日はまた見ない顔のお連れさんだね。もしかして彼女さん?」

「まあ、そんなところです」

「♪やるね!」

法子と綾の間で揺れている都合上、素直に「そうです」と答えられないのが心苦しい光秋であったが、そこまで知るよしもない子規は関心した様子で口笛を返してくる。

「……ああ、法子さん。こちらこの店の主人の、海老原子規さんです。子規さん、こちら僕の知り合いの、伊部法子さん」

「はじめまして。法子といいます」

「こちらこそ。子規です」

光秋の紹介に、法子と子規は互いにお辞儀を交わす。

「……………」

それを見ながら、光秋は綾を紹介できないことに胸を痛める。

——一応、あの体はもともと法子さんのだし、社会的にもそう認知されている。だから、今の紹介は間違っではない。間違っではないが……………どの道、詳しく説明するといろいろややこしいだろうし、子規さんくらいならこの辺が妥当か…………?——

そう思うことで少し強引に胸の疼きを抑えると、「まあ座って」と勧める子規に頷いて

カンター席の隅に腰を下ろす。法子もその左隣に座る。

「じゃあ……とりあえずウーロン茶を。法子さんは？」

「私もそれで」

「はい。少々お待ちを」

手元のメニューを見ながら一先ずの注文を告げると子規は奥に引つ込み、光秋は少し歩き疲れた体を申し訳程度の背もたれに預ける。

「なんか、気さくな店主さんだね」

「ええ。僕はけっこう好きですよ、子規さん………人柄が好きだっていう意味であつて、他意はないから。だから耳引つ張らないでいただけませんか？綾さん」

「ま、そうだろうとは思ってたけど……」

言うと綾は光秋の耳を引つ張つていた念力を解き、若干ツンとした顔で店内を見回す。

「でもなんていうか、お店の雰囲気も確かにアキ好みかもね」

「そういうのわかるのか？」

「なんとなくだけだね。あんま広くなくて、落ち着いてることとか」

「さすがだな」

自分が気に入っている所を的確に挙げてくる綾に、小さく称賛の声が漏れる。

と、子規が2つのグラスを持って戻ってくる。

「はい、ウーロン茶2つね」

「ありがとうございます」

「俺は奥の方にいるから。注文があつたら呼んで」

光秋の礼を聞くや、子規はグラスを置いて再び奥に行つてしまふ。

「……忙しいのかな？全然混んでないけど」

子規とも話したかった光秋は不満そうに呟きながら、自分たち以外誰も来ていない店内を見回す。

「カップルが二人きりのところを邪魔しちやいけないって、気を遣つてくれたんでしよう」

「そういうもんですかね？」

「たぶんね。それよりも」

「ああ」

言いながら法子はグラスを持ち、それを見て光秋も自分の分を手取る。

「乾杯ッ」

互いに合図をすることなく、息を合わせてグラスを鳴らすと、一口飲みながら法子は自虐気味に呟く。

「私くらいの歳なら、こういうお店に来たら洒落たカクテルでも頼むところなんだろうけどねぇ」

「そんなの人それぞれでしょう。自分が楽しいと思うようにやればいいじゃないですか。それはそうと、料理頼むの忘れてましたね」

それに返すと、光秋は壁に張られたメニューを見、法子もその視線を追う。

「なんにします?」

「うーん……じゃあ、唐揚げとポテトサラダ。光秋くんは?」

「僕もそれで。すみませーん」

頼むものが決まるや光秋は奥の方へ声をかけ、すぐに「はい」と言いながらやって来た女性店員に注文を告げる。

ウーロン茶を飲みながらしばし待っていると、まずポテトサラダが運ばれてくる。

——……ポテトサラダか……

頼んだ時はなんでもなかったが、実際に来た実物をみて、光秋はふと初めてこの店に来た時のことを思い出す。

「……どうかした?」

「!ああ、いえ。ちよつと思ひ出しちゃつて。初めてここに来た時のこと」

小皿に取り分ける手を止めて訊いてくる法子に応じると、光秋も自分の分を取り分け

る。

「あの時も確か、ポテトサラダ頼んだなあつて。それと唐揚げも」

「よく覚えてるね」

「なんか、印象に残っちゃつて……あ、唐揚げといえば」

そこまで言つて、光秋はあの日の桜と董のことを思い出す。

「この店で初めて唐揚げ食べた時、桜さんができたてを思いつ切りかじつて、すごく熱がつたことがあつたんですよ」

「……うわあ、確かに熱そう」

言いながら浮かんできたその時の桜の様子が伝播したらしい。綾は痛々しげな顔を浮かべる。

「でなんですけど、その後董さんも同じようなこととして熱がつて。目の前で起こった失敗を繰り返すなんて、しっかり者の董さんらしくないなあつて……あの、綾さん。今度の本気じゃありませんっ?」

「……………」

藪から棒に念力で引つ張られたした右耳と、再会以来一番のその強さに光秋は慄くものの、当の綾はそっぽを向いて無言で引つ張り続けるだけだった。

そこに、子規が唐揚げを持ってやつて来る。

「あれ？確かホウコさんじゃなかったっけ？」

「！え、ええつ。法子さんですよっ」

先程の叫び声が聞こえたらしい。確認する子規に、光秋は強く言い切る。

「でもさつき、確か『アヤ』って……」

「聞き違いじゃないでしょうか？ねえ、法子さん」

「……うん。私も『法子』って呼ばれた気が」

「そうかなあ……………」

2人分の意見に、子規は煮え切らない様子を見せつつもそれ以上追及することはなく、唐揚げを置いて奥へ戻っていく。

「……………」

そんな子規の背中に少々の罪悪感を乗せた視線を送りつつ、光秋は綾へ意識を向ける。

「ごめんな。隠すような——否、『ような』じゃないな。隠すことになってしまつて……ちゃんと紹介できなくてさ……」

「いいよ。あたしも自分のこと、ちゃんとわかつてるから——」

「そうなんだけどさあ……………」

テレパシーを通じてそう返してくれる綾だったが、入店直後にも感じた疼きは、今度

はなかなか治まらなかった。

そこに、箸に摘ままれた唐揚げが差し出される。

「？」

「暗い顔はなし。それよりも……は、あーん！」

「……敵^{かな}わんなあ。お前さんには」

心底楽しそうな笑顔で言ってくる綾を見て、少し気が楽になる。

そんな自分を単純な奴と胸の中で笑いながら、光秋は唐揚げに噛り付く。

子規が慌てて戻ってきたのは、その時だった。

「ごめんごめん。レモン付けるの忘れて……」

「っー」

ちようど綾に食べさせてもらっているところをまともに見られて、光秋は口の中の唐

揚げの熱さも忘れて硬直する。

「くっ♪見せつけてくれるねえ」

「……………」

口笛を吹きながらレモンを皿に置いて去っていく子規に、光秋は見られてしまったことへの恥ずかしさから何も言うことができなかった。

そして恥ずかしさが胸を占めたせい、今回はしぶとかった疼きは、次に気が付く頃

には完全に治まっていた。

追加の注文を何度か行い、入店してかれこれ30分は経とうかという頃。

ウーロン茶のおかわりと一緒に焼きベーコンを注文した光秋は、ふと浮かんだことを法子に訊ねる。

「そういえば、法子さんの方はあれからどうしてたんです?」

「どうしてたって?」

「いや、会ってからこっち、僕の近況報告しかしてない気がして。僕がいなくなってから2カ月半、藤原隊ではなにがあったのかなあって」

「そうだなあ……………」

応じると、法子は飲みかけのグラスを揺すりながらしばし考える。

「真っ先に思い浮かぶのは、仕事の危険度が増したかなって」

「!?…………どういことですか?」

いきなり返ってきた不穏な答えに、光秋は早まりそうになった動悸を抑えてさらに訊ねる。

「光秋くんの話にもよく出てくるNPやZC絡みの事件だけだし、京都の方でもあった

んだよ。この2カ月半の内に2回くらいだけど。どっちもメガボディが1機か2機くらい出てきて、それを見て、前より余計危なくなつたと感じるようになって」

「……………そんなこと、電話じゃ一度も…………」

「まあ見たつていつても、私は避難誘導の合間に遠くから見ただけだから。光秋くんがニコイチに乗つて直に戦うのに比べたら、まだ安全つていうか、楽な方だと思うけど」
「……………そうかもしれないですけど……………」

何てことのないように言う法子に言い返そうとして、しかし動揺のせいかな言うべき言葉を上手く組み立てられない光秋は、一旦黙つて今の気持ちを整理する。

胸の中に渦巻く気持ちは、自分の知らない所で法子が危険に晒されていたことへの驚愕、何度か連絡をとる機会があつたのにそのことを自分に言つてくれなかつたことへの憤り、そして、

……………結局僕は、自分のことで手一杯だつたつてことか？—

自分から法子の近況を知ろうとせず、想像力を働かせることもなかつた器量の狭さに対する自己嫌悪だつた。

「……………言つてくれればよかつたのに」

「？」

その上で零れた一言に首を傾げる法子に、光秋は少し苛立ちながら続ける。

「そういうことがあったなら、僕にも一言くらい言ってくれてもよかったですか。いつも僕の気遣いばかりして……いや、それはそれですごくありがたいんですけど、そういうことじゃなくて……せめて、教えてくれてもよかったですか……」

それで「憤り」の方をひと通り出し切ると、次に待っていたのは「自己嫌悪」の方だった。

「もつとも、僕もちゃんとアンテナ張ってなかったのも悪いんですけどね。そんな事件なら絶対ニュースになってるだろうに、よく観なかったし。法子さんたちが電話してきた時も、積極的にそっちの状況訊こうとしなかったし。そりゃあ、この2カ月半は新しい仕事に慣れたり、桜さんたちとの関係を固めなきゃだったりで、言われても困ったと思うけど——て、これじゃただの言い訳ですよ……」

言葉を重ねるごとにだだ漏れになる弱音にますます自分が嫌になり、頭を抱えてしまう。

それに対して法子は、

「……………くすっ」

微笑を零しながら、体を寄せてきた。

「……………わ、笑うことはないでしょうっ」

その仕草の意図を図りかねる一方、笑われたことに光秋はムツとする。

「ごめんごめん。別にバカにしたとかそういうことじゃなくつてさ。なんか、嬉しかったんだよ」

「……嬉しかった？」

「うん。私に対して、こんないろいろな話してくれたことが——“弱い”ところを見せてくれたことがさ」

「……はあ………」

法子の言わんとすることはいまいちわからなかったものの、一先ず光秋は先を促す。

「それでなんだけどね………さっきみたいに言われると、確かに悪いことしちゃったかもね。それについては、ごめんなさい」

「いや、悪いというか………」

先程の笑いながらのそれとは違い、気持ちの籠った謝罪の言葉に、そもそも自分の都合や感情を押し付けているだけという自覚のあった光秋は返事に困ってしまう。

「別にそこまで大層なことじゃ………ただ教えてくれなかったことが納得できなかったというか、突然のことに驚いて動揺したというか………」

「でも、そういうふうと思うのは、私のことを心配してくれてるからでしょう？」

「心配………ああ。それが一番いい言葉かもしれませんね。法子さんたちが、僕のこ

とを心配してくれているように」

その返しは9割程が伊部姉妹への感謝だったが、残りの1割にはさつき笑われたことへの当てつけも込められていた。

と、それまで黙って2人のやり取りを聞いていた綾が、目を鋭くして言うてくる。

「そうだよ。あたしたちの気持ちかわかったか？」

自分がそうであるように、綾も昼間の件を少なからず根に持っていたらしい。その視線には、光秋に対する非難が改めて籠っていた。

——……やっぱり、そういうことなのかな？ 昼間の綾たちとの口論が、僕への心配とその裏返しに端を発するっていうのなら、今の僕の気持ちも、——「知っているからこそその不安」と「教えてもらえなかったことへの不満」とか、多少の違いはあるだろうけど——少なくとも根つこの部分は同じなんじゃないだろうか？——

かけられた言葉を基に、今までの自分たちを振り返って出てきた考えが、妙に腑に落ちた。

「……………そうだな。完全……とは言えないだろうけど、だいたいわかった気がする。だからこそ……………改めまして、すみませんでした」

先程の綾の言葉に応じると、光秋はどこかすっきりした心境で頭を下げた。

「今のやり取りで思ったけど、どうも僕は他人の気持ちを慮る力が足りていないらし。

この前の菊さんとの件も、この辺が原因なのかもしれないな。これで“次の人”を云々しようって……」

——分不相応だな。口の中でそう続けると、自嘲を浮かべて頭を搔く。

——いや、あるいは“次の人”っていう目標を持ったからこそ、自分の中の“今の人”としての欠点が目につきやすくなったのかな？——

そう思ってはみたものの、法子との会話や綾の指摘から得た認識が変わるわけでもなく、ますます自嘲の色を濃くした。

「まあ、私の方とも言わなかったのも悪かったんだし、そこまで思い詰めないでよ。お互いコミュニケーション不足だったってことに気付いたなら、今後はもっと自分の近況も話すように気を付ければいいじゃん」

「いいじゃんというか……まあ、そうなんでしょうね。気付いたらその都度ダメな所を直していくしかない、か……」

当たり前のこととは充分自覚しているものの、そう声に出すことで少しは気が楽になる光秋だった。

「……………とりあえず、仕切り直しになんか頼みますか」

「そうだね」

「ずっとお茶だったから、ここらでジュースでも頼んでみようかなあ……」

「あ、あたし鶏の軟骨揚げ食べたい」

この数分のギクシヤクを埋めるかのように、
三人は今まで以上に楽しそうに食事を再開した。

来店してかれこれ1時間が過ぎた頃。

「ふうー、お腹いっぱい」

「この辺でお開きにしますか」

いくつもの空いた皿を前に腹をさする法子に、自分も満腹感を覚えていた光秋はオレ
ンジジュースを飲み干しながら応じる。

「そうだね。あ、私ちよつとトイレ」

「じゃあ、その間に会計済ませてますね」

席を立った法子にそう言うと、光秋は財布を出しながら子規を呼ぶ。
カウンター越しに言われた額を渡すと、ちやうど法子も戻ってくる。

「ごちそうさまでした」

「ありがとね、来てくれて」

光秋の一礼に応じると、子規は法子を見る。

「法子さんも、来てくれてありがとね。氣に入ってくれたら、またのおこしを」

「はい。次がいつになるかは、さすがにわからないけど……でも、光秋くんが東京にいる間は、また来ようと思います」

子規の言葉に氣まずそうな顔を浮かべたのも束の間、法子は朗らかに答える。

「それじゃあ」

「はい。氣を付けてねー」

子規の声を背中に聞きながら、光秋は伊部姉妹の手を引いて店を出る。

「思った以上にいいお店だったね。連れてつてくれてありがとう」

「そりゃよかった」

心底楽しそうな法子に手をしっかりと握り直しながら応じると、光秋は駅へと向かう。

「そもそもが飲み屋だから、酒が飲めればもっと楽しめるんでしょうけどね……」

「だから、私は飲めないよ。こればかりはどうしたって無理だから」

ロブスターに振り返りながら名残惜しそうに呟く光秋に、法子はキツパリと告げる。

「法子さんじゃなくて、僕がです」

「光秋くんが？ ああ、そっか。次の誕生日で二十歳はたちだっけ」

「はい。そうしたら、晴れて飲酒も可つてことです」

法子が合点すると、光秋はまだ知らない酒の味を想像しながら頷く。

「そうだったら、今度はあたしがアキをおんぶして帰るのかな？」

「いや、さすがにそこまで酔うことはない……と思うけど……」

法子を通じて岩手に帰省した時のことを思い出したらしい綾の素朴な疑問に、酒への強さがわからない光秋は自信なく返すしかなかった。

―でも、綾のおんぶか。それはそれで魅力が……いや、彼女におんぶされる彼氏ってというのは、さすがに格好悪いか……―

ほんの好奇心から綾におんぶされる自分を想像して、気恥ずかしくなつてすぐに頭を振った。

駅に近付くにつれて人混みは激しくなり、はぐれないようにと双方の握る力は自然と強くなる。

握った手を通じて伝わってくる伊部姉妹の実感こそが、都市の喧騒の中にあつても光秋に安らぎを与えていた。

―昼のことといい、さっきのロブスターのことといい、法子さんと綾とは今日一日ギクシヤクシヤしたし、問題点もたくさん浮彫になつた。自分の足りない部分を知ることにもなつた……でも、それでも。やっぱり、こうして“二人”がいてくれるのは、いいな……—

電車に揺られ、駅からしばし歩いて寮に戻つてくると、光秋はすぐに浴室に向かう。
「……こんなところかな？」

蛇口の湯加減を調整して居間へ向かうと、伊部姉妹がコタツにもぐつて待っていた。
「風呂入れてきたんで、10分程待つてください」

「うん」

綾の返事を聞きながら、光秋もコタツに入る。電源を入れたばかりとあつてか、中はまだ冷たかった。

「明日はどうしようか？」

「明日かあ……………」

綾の問いに、光秋はコタツに突つ伏しながら呟く。

「帰りの電車って何時発です？」

「東京駅を明日の5時」

「じゃあ、遅くても4時半くらいには向こうに着いてないといけないですね……………」

法子の答えに返しながら、光秋はしばし考える。

「いっそ、一日中寮でゴロゴロしてましようか？」

「え？出かけないの？」

そうして出した提案に、綾は意外そうな顔をする。

「そりゃあ、せっかく綾と法子さんがいるんだから、あつちこつち遊びに出てみたいけど、それは今日ある程度叶ったし。だったら昼間の“二人”の心配も汲んで、明日は一日のんびりして体休めようかなって。これはこれで、“三人”一緒でないとできないでしょう?」

「そうそれは……そうだけどさあ……」

応じながら、綾も両腕を枕にしてコタツに突つ伏す。

「不満か?」

「不満ってわけじゃないよ。アキと一日中ゴロゴロするのも、それはそれで楽しそうだし。でも、ほんとにいいのかなって」

「まあ、昼間行こう行こう言ってた奴が今度はなにをって感じなのは確かだけど……実際、半日仕事して半日騒いで、僕も少し疲れちゃったからさ。明後日のことも考えると、明日は一日のんびりして、それに備えた方がいいかなって」

「……………光秋くんらしいね」

言いながら、法子は腕に乗せた顔をくすりと歪めた。

「じゃあ、とりあえずそういう方向で」

「うん」

その微笑みを賛成と受け取った光秋の言葉に、綾はこくりと頷く。

「ところで、お風呂大丈夫？」

「あつ」

直後の法子の指摘に、すっかり温かくなったコタツを出た光秋は慌てて浴室へ走った。

114 姉妹の時間

入浴を終えた光秋は浴室を片付けてから脱衣所に出て、温まった体に寝間着を着て居間へ戻る。

ドアを開けると、先に入浴した伊部姉妹が寝間着姿で待つていた。

「やつぱり、一緒に入ればよかったんじゃない？ 時間も減るし」

「まだ言うか……」

入浴前から続く綾の小さな執念に、光秋は呆れを通り越してある種の感心さえ感じてしまう。

「だつてえ……」

「裸の付き合いなんで、まだまだできないよ」

むーつと頬を膨らませる綾を見ながら腰を下ろすと、光秋は首に提げていたタオルで濡れた髪を拭く。

と、四つん這いで近寄ってきた綾が、光秋の肩に顔をすり寄せてくる。

「ちよつ、今髪乾かしてるから。というか、犬かお前さんは」

「いいじゃん、これくらい。お風呂ダメだったんだし。それに、犬はアキもじゃん。わん

わんっ」

動きにくさに髪を拭いていた手を止めて言う光秋に、綾はますます気分が乗ってきた様子で応じる。

「まったく……………」

そんな子供じみた態度に呆れる一方、互いの体全体を使った触れ合いに、光秋はこの上ない安心感を抱いた。

すり寄ってくる綾をテキトーにいなしながら髪を乾かすと、光秋は冷蔵庫から目薬を取り出す。

「それ、いつも使ってるよね」

「まあねえ。初めて注し始めたのが小学生の頃で、以来ときどき種類は変わっても、ずっと注し続けてるな」

綾に応じながら目薬を終えると、光秋はそれを冷蔵庫に戻す。

「そんなに続けて、よくならないの？」

「まあ、もともと治療のための薬じゃないからな。どっちかっていうと、これ以上悪化させないための薬っていうか。そもそも僕の場合、生まれつきこうだからな。こういうふうに作られて生まれてきたっていうか」

「作られてって……………」

「まあ言い方はあれだったけど……でも、遺伝子っていう生物の設計図があつて、『こう作りなさい』っていう情報に従つて生き物が形作られてるのは確かだろう？ 僕の場合、『目はこういうふうに作りなさい』つてなつてたんだろうさ。超能力の有無は遺伝で決まるつて話もあるだろう？ あれと同じだよ」

「ふーん……………」

いまいち釈然としない顔を浮かべながらも、綾は一応の返事をした。

「やっぱり、いろいろ大変？」

「たまーにね。というか、さっきからどうした？ 僕の目のことばかり訊いて」

「別に。ただアキのそういうところ、ちゃんと聞いてこなかったなーと思つて」

「そうだったけ？」

「そうだよっ」

首を傾げる光秋に、綾はムツとしながら肩を小突いてきた。

「つ……………」

そんなたわいのないやり取りが、それを綾と直接向かい合いつてできることがあまりに嬉しくて、光秋の顔に浮かんだ微笑みはなかなか消えなかった。

「……とりあえず、そろそろ寝るか」

「えー。もう？」

「疲れたんだよ。なんやかんやでもうすぐ日付も変わるし。とりあえず歯磨いてくる」

不満そうな綾に机の上の時計を指さしながら応じると、光秋は脱衣所へ向かう。

その水盤で歯を磨いていると、少しして法子もやってくる。

「確かに、今日はちよつと疲れたかもね」

こちらは光秋に同意を示すと、持参してきた歯ブラシを取り出す。

「ホント、これだけ見てると同棲だよな」

水盤に備え付けられた鏡に並んで映る自分と伊部姉妹の姿に、自分たちの曖昧で不安定な関係を充分承知しながらも、光秋は歯ブラシを咥えた口を緩めずにはいられなかった。

“三人”そろって磨き終わると口をすすぎ、居間へ戻る。

と、

「……っ!？」

居間に足を踏み入れた瞬間、光秋は突然バランスを崩し、膝を着きそうになる。

「!大丈夫っ?」

「あ、ああ……」

咄嗟にその背中に手を伸ばした法子が崩れかけた体を支え、光秋は何もない所で転びそうになったことに戸惑いながらもそれに応じる。

「おかしいな。なんで……」

「本当に疲れてるみたいだね。早くベッドに入ろう」

きちんと立ち直りながらも未だ困惑の目で足元を見やる光秋に、法子はベッドを示す。

「……………そうですね」

それに深く頷きながら梯子を上り、法子もそれに続く。

光秋が奥の側に詰めて横になると、法子が照明を消し、“三人”で一枚の布団を被る。

「……………」

横になつてはみたものの、何もない所で転びかけたことへの戸惑いから未だ抜け出せない光秋は、伊部姉妹に背を向けて先程のことを考えていた。

―疲れてる自覚は確かにあった。だから明日はゴロゴロしようなんて言つたんだ。でも、自分の部屋の、それも足を引っかけられるようなものなんて何もない所で転びそうになるなんて……………そんなに疲れが溜まつていたんだらうか?―

今日一日を含め、ここ数日そんな気配など微塵もなかった。それ故に、無自覚な不調に対する恐怖が少しずつ湧いてくる。

伊部姉妹が背中に身を寄せてきたのは、そんな時だった。

「っ!」

突然の密着に心臓を跳ね上げたのも束の間、伊部姉妹は脇から手を伸ばし、それぞれで光秋の手を包むように握ってくる。

「……………法子さん？綾？」

「今日は、ゆつくり休んで」

さつきまでとは別の戸惑いから一先ず持ち直した光秋に、法子と綾は柔らかな声ですう返した。

「あたしたちがいるから」

「……………ああ」

続く綾の一言に、一瞬前まで慌ただしかった胸中が急速に凪いでいくのを感じて、光秋はさつきの疑問への答えを得たような気がした。

—慣れない指揮とか、環境の変化とかで、疲れてたのは確かなんだろう。それこそ自分か思ってる以上に。でも、それが今になってさつきみたいに現れたのは……………法子さんと綾が、こうしてすぐそばにいてくれるから——安心してゐるから、なんだろうな——

思うと同時に光秋の方から伊部姉妹に体を寄せ、背中越しにその実感を確かめる。そうすることで自覚した安心感はますます増していき、単なる疲労によるものとも違う、心地いい眠りに誘われていった。

最初に感じたのは、痛みにも似た喪失感だった。

——……………？——

唐突に湧いたその感情に、光秋は戸惑いながらも目を開けると、自分が京都にいた頃に住んでいた寮、その近くの道を歩いていることに気付く。

——これは……………——

見えている光景もさることながら、全身を包むように感じるどこか懐かしい感覚の正体を探ろうとしていると、不意に口が開く。

「アキ……アキっ……………」

——……………綾？——

光秋の意思と関わりなく漏れた悲しみの声は、綾のものだった。

続いて、胸の奥から法子の“声”がかかる。

——綾、そのくらいにして……………——

戒めるように告げるその“声”にも、綾にも劣らない湿度があつた。

——ああ。これは……………——

自分自身が綾や法子の視点で周りを見聞きし、あるいは内面に浮かんだことをさも自

分が思ったように感じるこの感覚に、光秋は夏の終わり頃に綾とテレパシーで深く繋がった時のことを思い出す。

―法子さんたちが近くにいるから……あるいはたまたま波長が合ったのかな？引つ越し当日に別れた後の“二人”の記憶が流れ込んでくるのか―

自身が体験していることの正体に納得したのも束の間、綾の嘔み付くような“声”が届く。

―法子は寂しくないの？アキとしばらくお別れするんだよ!?―

―寂しいに決まってるよっ！でも、仕方ないことだし……それに、約束してくれただから。『また“ごご”に帰ってくる』って。だから、寂しくはあっても、泣くほど悲しくはないよ―

そう返す法子ではあったが、胸の奥の喪失感が和らぐことはなかった。

しかしそれを強引にでも抑えて、法子の“声”は告げる。

―だから私は――私たちは待つてなくちやいけないの。光秋くんが帰ってきた時、ちやんと迎えてあげられるように。その為には、日々の業務を無事にこなし続けなくちやいけないの。いつまでもめめめそしてたら、事故つて怪我して、光秋くんに余計な心配かけちやうでしょ？―

――……………そう……………だね。そうだ―

そう言われて綾もいくらか落ち着いてくると、体を法子に代わる。

綾が目端に浮かべていた涙を拭うと、法子は綾の時よりもしつかりした足取りで京都支部へ向かった。胸の中に湧き続ける喪失感を押し殺して。

——………あの後に、こんなことが………

同じ頃に最後の荷造りをしていたことを思い出しながら、光秋は伊部姉妹の悲しみとそれを耐えようとする気持ちに、自分の意識の中の奥歯を噛み締めた。

光秋の引越してから10日後。伊部姉妹の中の喪失感がなくなりはずともある程度落ち着いてきた頃。

今日も無事に勤めを終えて寮に帰ってきた法子に、綾がじれったそうに言うてくる。

—ねえ、今日はいいでしょう？電話しても—

—うーん、10日か………

返事を迷う法子は、壁にかけたカレンダーに目のやり場を求める。

—まあ、さすがにそろそろいいかな？向こうの生活にも慣れた頃だと思うし……それに………

言いかけて、法子はこの10日の間に散発的に感じた胸騒ぎを思い出す。綾を通じて

光秋とのテレパシーを感知している身としては、ずっと気がかりではあったのだ。

——とりあえず、かけてみようか。ただ、疲れてるようだったらすぐにやめるからね——

——うん——

綾が頷くと、法子は手にした携帯電話を光秋に繋ぐ。

スピーカーの向こうからすでに懐かしく感じる声が響いたのは、すぐのことだった。

(もしもし!!?)

「こんばんは光秋くん！今大丈夫？」

多少動揺を含みながら返ってきた声に、伊部姉妹はそろって嬉しくなり、法子の応じる声も思わず弾む。

——あの時か………——

東京に移ってから初めてきた伊部姉妹からの電話。それを法子たちの側から見ていることに、光秋は奇妙な感覚を覚えた。

簡単な近況報告、光秋の「次の人」談義、最近あったとりとめのない話題の語り合いと、光秋の記憶にもある通りに会話は続き、一言交わすたびに法子と綾の喪失感が徐々に薄れていくのを感じる。

——……………同じだったんだ。法子さんと綾も——

同じ会話で自分が久しぶりの充実感を得たように、伊部姉妹も同じ——あるいは近し

い感情を抱いてくれていたことが、光秋は無性に嬉しかった。

それから数日後。

食堂にて藤原隊一同と昼食を摂っていた法子は、たまたま目を向けたテレビのニュース映像に啞然とする。

「光秋くん!?!……っ!」

思わず上げた声に周りの視線が向けられて恥ずかしさを感じながらも、画面の中でDシリーズと戦うニコイチからは目が離せなかった。

——ああ、これは……——

遠くから撮影されたらしいその映像を法子の目を通じて観る光秋は、これが修了試験で赴いた工場地帯での戦闘だと理解する。

同時に、伊部姉妹の中に急速に不安が広がっていくのを感じる。

——アキ……アキが、戦った? D Dシリーズと!?!——

特に綾の動揺は凄まじく、法子に体の主導権がある今であつても表情に表れてしまい
そんな勢いがあつた。

「……………」

それを法子はなけなしの理性でどうにか防ぐものの、その胸中は決して穏やかではなかった。

―帰ったら、連絡しよう―

再開した食事もどこか上の空ながら、その決意だけはしっかりと刻んでいた。

寮に帰宅後、法子は電話してほしいというメールを光秋に送り、待っている間に気持ちを落ち着かせようと風呂に入る。

温かい湯舟に肩まで浸かっていると、綾が「声」をかけてくる。

―アキ、大丈夫だよ？―

―うん。大丈夫だよ。お昼にハルちゃんも言ってたでしょう。電話で話したけど元氣そうだったって―

半分は自分に言い聞かせるつもりで応じながら、法子は昼食の後にかかってきた親友からの電話を思い出す。

―ハルちゃんを助けるために出てきた、か……………―

その時春菜から聞いた光秋の行動理由を思い出すと、相変わらずの不安に混ざって、なんともいえない嬉しさ、あるいはもつと強い感情が湧いてくる。

——…法子、嬉しいの？——

——ん？ああ……嬉しい……といえば嬉しいかな——

——アキが危ない目に遭ったのにつ？——

——うん。それも確かにそうなんだけど……——

“声”に陰を含ませてくる綾をなだめながら、法子は自分の気持ちを整理する。

——なんて言うかなあ………光秋くんが、私の大切な人の一人のハルちゃんを助けるために動いてくれた。そのことが、すごく嬉しいんだよ。嬉しいっていうか……私の大切な人を助ける為に、自分から動いてくれた。私の大切な人がそれをしてくれた。それが、凄く誇らしいんだよ——

——…

言葉にすることで自分の気持ちを実感する法子に対し、光秋への心配が大部分を占めている綾にはいまいち理解できない心境だった。

話している間に充分温まると、体を洗って浴室を出る。

寝間着に着替えて髪を乾かしながら待つことしばし。テーブルに置いていた携帯電話話が振動するや、すぐに手に取って通話ボタンを押す。

「あ、光秋くん？」

（法子さん？メール見ました。今大丈夫ですか？）

「うん。さつきから待ってたところ」

久しぶりに聞く光秋の声に、法子の口は応じる間にも少しずつ緩んでくる。

と、その口が今度は綾の言葉を発する。

「アキツ!!」

(綾……元氣そうだな)

返答こそ短いものの、頬が緩んでいることがわかる光秋の声音に、綾の口元も笑みに歪んでいく。

(それで、話ってなんですか?)

「うん……」

光秋が案の定の質問をしてくると、法子は表情を引き締め直し、本題に入る。

それでも話す内になけなしの不安は解消され、不意に湧いたイタズラ心で光秋をからかって、相変わらずな反応に安心の笑みを浮かべる。

「ちよつとアキツ! 法子とばつか喋り過ぎっ!!」

(悪い悪いっ。お前さんともご無沙汰だなあ)

それがどこか面白くない綾が、相手には見えないことがわかっていながら頬を膨らませて言い、光秋がなだめるように応じる。

それから言い溜めていたことを言い切つてスッキリし、なにより会話を通して光秋の

安全を実感して、綾の顔にも昼以来の安堵が浮かぶ。

(あ、そういえばさつき電話があつて、研修試験合格だつて)

「よかつたじゃない!……おめでとうつ!」

思い出したように光秋が告げると、法子と綾はその頑張りが報われたことへの喜びを込めた言葉を送る。

しかし歓喜も束の間のこと、今日のようないく機会がこれからも増えるだろうと光秋が不安混じりに告げた現実には、法子も綾も言葉をなくしてしまう。

(……あの、法子さん?……綾……?)

その沈黙が効いたのか、声に不安を増した光秋に、姉妹を代表して法子が決意を込めて応じる。

「……私、近い内にそっちに行くからさ」

(?……いきなりなんです?)

突然の宣言に困惑する光秋を敢えて無視して思っていることを伝え、綾もそれにと、二人の想いを察したらしい光秋の返事が返ってくる。

(ちゃんと迎えられるようにしておく……それこそ、D・D・シリーズの大群に遭つてもなつ)

「うん………」

光秋の方も決意を込めたその言葉に、伊部姉妹は短いながらも気持ち伝わった喜びを込めて電話越しに頷いた。

そこで法子が時間を確認して話を切り上げようとすると、了承した光秋の方から電話は切られる。

律儀に鳴り続ける電子音に名残惜しさを浮かべたのも少しのこと、今言った決意を再認識した上で肩の力を抜いた法子は、おもむろにテレビを点け、たまたま映ったバラエティー番組をぼんやりと視聴し出した。

——会いに行くの、楽しみだね——

——うん。楽しみだ——

画面を眺めながら綾に应じるその顔には、決意を実行しようとする強い意志と、それ以上に楽しみができたことへの喜びが浮かんでいた。

——…………… “二人” も、今日のことを楽しみに待っていてくれたんだ。それと法子さん、僕のことを『誇らしい』って……………——

浴室での会話を思い出して、光秋は照れ臭さを感じた。

その日、東京行きを見据えて溜まっていた仕事をいくらか片付けた法子は、京都支部

の食堂で一人遅い夕食を摂っていた。

「……………」

―法子、大丈夫？―

疲れた体に坦々とうどんを入れていく中、綾が不安そうに訊いてくる。

―うん。ごめんね。そっちにまで疲れ感じさせちゃって―

―それは別にいいけど…………―

―とりあえず、もうひと頑張りつてとこかな。それで仕事が片付けば、いよいよ―

綾に応じながら進捗具合を思い返し、終わる見通し、それによる東京行きが現実味を帯びてきたことに、顔色に活気が戻ってくる。

東京の住宅街にZCのメガボデイが現れたというニュースが流れてきたのは、その時だった。

テレビには携帯電話かなにかで撮影したらしい映像が流れ、民家が建ち並ぶ中でニコイチと3本爪を備えたヘラクレスが対峙している様子が映し出される。

―ああ、これは……………―

それが催眠能力者通り魔事件の時の戦鬪だと光秋は察し、それまで殆ど食べることに集中していた法子、そして綾の注意がテレビに向く。

―またか……………―

DDシリーズがないからか、心配にはなったものの、法子の不安は以前程ではなかった。

一方、綾の方は、

—アキが、また……………っ—

今は法子が体を制御しているにも関わらず、僅かに箸を持つ手が震えるほどに、その胸中には困惑が渦巻いていた。敵の種類など関係なく、「光秋が危険な目に遭った」という事実こそが恐怖を掻き立ててくる。

—綾、落ち着いて—

力を込めて手の震えを止めると同時に、法子はやや強い調子で胸の中に言う。

—だってアキが!—

—光秋くんなら大丈夫。ニコイチならあれくらいの相手はどうってことないし、現に負傷者が出たってアナウンスもなかったでしょう?—

—……………でも……………—

—帰ったらまた電話しよう。ね?—

—……………うん—

説得に綾が渋々応じると、法子は早口でうどんで平らげて、速足で家路についた。

帰宅後、法子は気持ちを落ち着かせようとまず風呂に浸かった。

―法子、アキに電話……―

―上がってからね。光秋くんだって、事後処理とかで遅くなってるだろうし―

……………うん―

焦りがちな綾が渋々応じると、充分温まった法子は体を洗い、寝間着に着替えて居間へ向かう。

手早く髪を乾かすとテーブルのそばに腰を下ろし、携帯電話を耳に当てる。

(もしもしっ?)

数回の呼び出し音の後に聞こえた光秋の声は、思った以上に元気そうだった。

「光秋くん? 今いい?」

(はい。ちょうど落ち着いたところで……住宅街の件、ですか?)

「うん――アキ、大丈夫だった?」

向こうも察した様子で本題に入ろうとするや、綾が携帯電話をひったくるイメージを伴って体を代わり、夕食時以来溜め込んできた不安をマイクに吹き込んだ。

(綾か……うん。大丈夫だよ。ちよつと危ない目にも遭ったけど、なんとか無事だ)

「よかったっ……………」

いつもと変わらない様子で光秋の言葉が返ってきて、綾は強張っていた肩を緩めて安堵の声を漏らす。

—よかったっ……………

もつともその中には綾だけでなく、こちらも多少の不安を抱いていた法子の想いも混ざっていた。

(その…………この前といい、いつもありがとな。心配してくれて)

「当たり前じゃんっ……………ごめん。怒鳴っちゃって」

そう言ってきた光秋になぜか腹が立って、気付けば怒ってしまった綾は慌てて謝る。

(いいよ……………当たり前、か……………)

特に気にした様子もなく光秋はそう応じ、そこからはとりとめのない世間話という名の近況報告が続いた。その間も、綾は先程の自分の反応が引つかかっていた。

—あたし、なんでなんなに怒っちゃったんだろう……………

冷静になって考えれば、光秋は自分のしたことにお礼を言ってくれたことはすぐにわかる。しかしわかっててもなお、そんな一歩引いたようなというか、自分を遠くに感じるような態度が、どうしても面白くなかった。

光秋の「声」が聞こえてきたのは、そんな時だった。

—やっぱり、法子さんと綾と話すとき楽しい……………けど……………声だけで、触れられない

んだよな……………ちよつと前までは、毎日でも触れられたのに……………今だつて、なりふり構わず会いに行けば触れられるのに……………

肌寒さを感じさせる“声”は頭の中にニコイチのカプセルを思い浮かばせ、綾は唐突な危機を感じた。

「会いに行くからっ!」

(!?)

それは法子も同じだったらしい。“二人”同時に直感的に浮かんだ言葉を叫ぶと、危機感は風に流されるように消えていった。

「今月末、会いに行くからさ……………」——だから、“そこ”にいてよ……………

それでも拭い切れない不安に、綾は押し止める意思を込めてそう続ける。

(……………わかつて……………待ってますっ)

スピーカーから確かな意思を乗せた光秋の声が返ってきて、ようやく伊部姉妹は安堵した。

直後に遅い時間になっていることに光秋が気付き、今回の通話は終了となる。

切った携帯電話をテーブルに置くと、綾は先程の光秋の様子を思い返していた。

……………アキ、寂しそうだったね——

——うん……………でも、もうちよつとだから——

——…そうだね——

——そのためにも、明日も仕事頑張らないとっ——

——そうだね………——

法子の現実的ながらも前向きな言葉に頷くと、綾は法子に体を代わり、寝る準備を始める。

それを伊部姉妹の視点で眺めながら、光秋は思った。

——綾のやつ、あの時のことをこんなに心配してくれてたんだ………あの時の出来心を、こんなふうに通じてたんだ………——

労いに対する感謝の気持ちを忘れたわけではなかったものの、その背後に自分が思っていた以上に強い想いがあったことに少し圧倒され、同時にそこまで想われたことが嬉しくてたまらなくなった。

催眠能力者通り魔事件、およびそれに絡んだZC騒動の電話から数日が経った頃。

その日も法子は、藤原隊の待機室の隅で黙々と仕事を片付けていた。

出勤がかかったのは、そんな時だった。

藤原たちに続いて車に乗り込み、現場に急行すると、NPとZCのメガボディ同士が

路上のど真ん中で取っ組み合いを演じていた。

—これって、さつき法子さんが話してた……—

ロブスターでの会話を思い出しながら、光秋は伊部姉妹の目を通じて状況を観察する。

メガボデイの種類はフラガラツハと、ヘラクレスの防御強化型たるイピクレス。すでに火器や剣の類を使い切ったのか、互いをひたすら殴り合っている。

流れ込んできた法子の記憶によれば、別の場所で発生したNPによるZCの隠れ家攻めの戦闘が拡大し、交戦に夢中になった2機がここまで来てしまったらしい。

しかしパイロットたちの思惑がどうであれ、10メートルの巨人同士の殴り合いは周囲に大きな余波を与えていた。弾け飛んだイピクレスの装甲板が近くの民家に突き刺さり、反撃にと突き飛ばされたフラガラツハがビルに激突して壁が崩れ、見ている間にも両側の建物が次々と倒壊していく。

巨人たちの鳴らす地響きと崩れた建物が巻き上げる砂煙に追い立てられた人々が悲鳴を上げて逃げていく中、法子は藤原の指示に従ってそれらを誘導する。

—メガボデイ同士の戦闘って、あんなに激しいんだ………光秋くんは、いつもあんなのの真っ只中にいるんだよね—

パニック寸前の避難者たちに声をかけながらイピクレスとフラガラツハの戦いを横

に見た法子は、ふと両機の間に光秋の乗るニコイチを幻視する。

その時、フラガラッハの右腕が付き出され、イピクレスがそれを払い除ける。至近距離からイピクレス目掛けて放たれるはずだった手首の機銃はあらぬ方向へ向けられ、ばら撒かれた弾丸が法子たちの方へ飛んでくる。

「!」

—!?

突然の窮地に法子は——そしてそれを見ている光秋も——一瞬固まるものの、咄嗟に入れ替わった綾が念壁を張って流れ弾を防ぎ切り、周辺にいた避難者たちも含めて事なきを得る。

—ありがとう綾—

—ぜんぜんっ。ここで怪我なんかして、アキに会えるのが遅くなったら嫌だからね—
胸をなでおろしながら礼を言う法子に、綾は少し震えながらも強い意志を乗せた“声”で応じる。

そうしている間に特エスらしき者たちが数人駆けつけ、2機のメガボディを包围するのを見るや、法子は周囲に逃げ遅れた人がいないことを確認して退避した。

背後から抵抗と思しき轟音が響き続ける中、走りながら綾が言ってくる。

—怖かったね。さっきの戦い—

—うん—

——…あの時テレビに映ってたアキも、やっぱり怖かったんだよね—

——…：そうだろうね。光秋くん、なんだかんだで臆病だから—

工場地帯の戦闘と催眠能力者通り魔事件の時の映像を思い浮かべる綾に、法子は普段の光秋の性格を思い出しながら頷いた。

—東京行ったら、せめてあたしたちがいる間は安心させてあげないと—

そのやり取りを受けて、綾は胸の中で小さく決意した。

そして一連の光景を見た光秋の胸には、困惑と喜びが渦巻いていた。

—ロブスターでは大したことないような言い方だったけど、流れ弾とか結構危なかったじゃないか！それなのに……それなのに、僕のことを優先的に考えて……安心させてあげなきゃなんて言ってくれて……—

綾が今回の訪問に抱いていた想いを知って、胸が熱くなると同時に、昼間の罪悪感を思い出して少し痛んだ。

月末まであと数日という頃。

狙い通りに仕事を終わらせた法子は、すっかり暗くなった帰り道を疲れを感じさせな

い軽い足取りで歩いていった。

―仕事はだいたい片付いたし、休みの申請もちやんと通った。切符もとれた―

―いよいよだねっ!―

指を折って1つ1つ確認すると、綾が顔に浮かびそうになる程の笑みで言ってくる。

―準備万端!あとはアキに連絡するだけ。早く電話しようよ!―

寮に戻ってくるやさらにはしやぐ綾に、法子は時計を見ながら、努めて落ち着いて返す。

―7時過ぎか……念のため、まずメールさせて―

言うのと携帯電話を取り出し、光秋に向けて『今電話してもいいですか?』と送信する。

少しして、『すみません。今はダメ。都合がつき次第こっちからかけます。』と返ってくる、綾はじれったそうに膨れた。

―むー。早く言いたいのに……―

―仕方ないよ。光秋くんにも用があるんだし。待つてる間に片付けちゃおう―

言うとな子は提げていたカバンの中身を整理し、部屋着に着替えてぼんやりテレビを見ながら光秋からの着信を待つ。

しばらくして振動音が響くと、法子はテーブルの上に置いた携帯電話を取る。

「もしもし?」

（法子さん？お待たせしました）

スピーカーから聞こえた光秋の声は、どこか安堵を含んでいた。

「うんうん。私の方は大丈夫」

（すみません。ちょうど夕飯にしようと思つてた時で。それで、今回はどうされたんです？）

「あ、うん。実はね——」

そのまま要件を言おうとした矢先、綾が待ちきれないとばかりに口を動かした。

「25日の夜、そっちに行くことになりました！」

（！25日っ？）

返つてきた声には多分な驚きが含まれていて、電話の向こうで目を丸くしている様子が想像できた。

（……来週の金曜日か）

「うん」

少し間を置いて落ち着いた声が返つてくると、口を取り戻した法子は当日の大まかな予定を伝える。

「仕事終わつてすぐに向かつて、電車の都合も考えると、東京駅に着くのは8時過ぎかな」

（じゃあ、その日迎えに行きます）

「え？いや、でも」

思わぬ申し出に、法子は微かに喜ぶものの、それ以上に申し訳なさを覚える。

「悪いよ。光秋くんだつて仕事終わりで疲れてるだろうし」

（そこまで軟じやないですよ。それに東京駅から僕の寮の最寄り駅まで乗り継ぎとかちよつとややこしいし……それに……）

「それに？」

（……とにかく、当日は東京駅まで迎えに行くので。改札の近くで待っててください。それじゃあ、当日楽しみにしてます）

「あつ——」

応じる前に光秋の方から通話は切られ、法子は事務的な電子音を鳴らすだけになった。携帯電話を耳から離す。

—そうだった。この後、すぐに切っちゃったことを後悔したんだっけ……—

光秋が当時のことを思い出していると、綾が不満の“声”で言ってくる。

—法子ばっかりズルい！あたしもつと話したかったのにっ！—

—そう言われたって、光秋くんの方から切っちゃうから……—

法子も法子で不満を返すと、携帯電話をテーブルに置く。

——でも、本当にもうすぐだから。来週になれば、好きなだけ話せるからさ——
 ——……………そうだね。話せるどころか、一緒にいろんなことができるんだし——
 半分は自分を鼓舞するつもりで呟いた法子の言葉に、綾も期待を抱いて素直に頷いた。

——……………法子さんと綾も、同じ気持ちだったんだ——

ちようど同じ時、東京の寮で自分も似たようなことを考えたことを思い出して、光秋は胸が熱くなった。

——……………“二人”は、こんなことがあって、こんなことを想って、その果てに、僕の所へ来てくれたんだ……………——

同時にこれまで視てきたことの一部始終が脳裏を駆け、目頭が熱くなるのを感じた。

「……………」

ゆつくりと目を開けて最初に感じたのは、目の端が薄っすら濡れていることだった。

ぼんやりした頭で反射的に目元を拭うと、目の前に伊部姉妹が横たわっているのに気付く。

「どうしたの光秋くん？ 涙なんか流して」

薄っすら開けた目でそう訊いてくる法子だが、その目元にも涙の跡があった。

「法子さんこそ……………視ましたか？」

その理由がなんとなくわかった光秋は、目元をそつと拭ってあげながら訊き返す。

「うん。光秋くんがあれからどんなふうに通つてきたのか、どんな気持ちだったのか、私たちが今回ここに来ることが、光秋くんにとってどういうものだったのか……………」

「……………僕もです」

思つた通りの答えに頷いて返しながら、光秋は伊部姉妹を抱き寄せる。

「他にも、いろいろ視ました。死にかけるような思いをしたのに、それでも僕のことを真つ先に考えてくれて……………僕のことを『誇らしい』と思つてくれて……………」

「ありがとうございます」と続くはずの言葉は、しかし強烈な嗚咽に喉が詰まって言えなかった。

未だ思考がまとまり切らない中、止めどなくいろんな想いが溢れ出てきて、光秋は伊部姉妹がここに確かにいることを少しでも明確に感じ取ろうと、回した両腕に力を込めることしかできなかった。

それに応えるように、伊部姉妹も回した腕に力を込め、綾が涙声で言ってくる。

「あたしも知つてるよ。アキがどんなに怖かったか、どんなに大変だったか、どれだけ一生懸命だったか……………あたしたちとの時間をどれだけ大切に思つてくれたかっ！」

「……………うんっ……………うんっ！」

最後の方は叫びに近い声で言われると、未だに喉が詰まっている光秋はひたすら深く頷いた。

それから少しして互いに落ち着いてくると、光秋と伊部姉妹は回していた腕を解き、涙を拭う。

「……………すみません。なんか、感極まっちゃって」

「私も……………こんなに思いつ切り泣いたの、いつ以来だろう？」

冷静になったせいとか、感涙に震え合っていた先程までの自分たちを振り返って、光秋と法子は気恥ずかしくなった。

それも少しして引いてくると、光秋の中には伊部姉妹が今回の東京行きに抱いていた想い、それを知ったが故の新たな罪悪感が湧いてくる。

「それと……………昼間のこと、改めてすみませ——」

「それはもう言いつこなし」

反射的に言おうとした謝罪は、法子に人差し指を口に当てられて遮られてしまった。

「私たちだつて悪かつたんだし、ずっと言つてたら切りがないでしょう。だから、この話はもうおしまいっ」

「……………それもそうですね」

薄々感じていたことを強い調子で言われてしまつてはこれ以上言い返すこともできず、かといつて完全に目が覚めてしまったためにすぐに寝直すこともできそうにない光秋は、別の話題はないものかと今視た伊部姉妹の記憶を振り返つてみる。

「……………」

そうして浮かんできたのは、伊部姉妹の視点から見た入浴風景だった。

——つて、バカか僕は！そんなの話題にできるかつ！——

思わず自分を張り倒したくなったものの、一度浮かんできた光景——特に褐色の肌を映したもの——はなかなか頭から離れず、何度も瞼の裏にちらついてくる。

そしてその心境は、伊部姉妹には筒抜けだった。

「……………あ、あのさ…………アキ」

「——はいっ?」

迷いながらも声をかけた綾に、光秋は肌色の記憶を押し込む試行錯誤を一旦止めて応じる。

「その、さ…………どう、だった…………?」

「……………どうつて?」

綾にしては珍しい歯切れの悪い言い方に、嫌な予感を感じつつも思わず訊き返してしまふ。

「だから……あたしの——あたしたちの裸………」

「……………あー……よかった、と、思います、よ……………」

予想していた答えを視線を逸らしながら言う綾に、光秋は話し方を忘れたような口を強引に動かしてどうにか返す。

「ッ!!」

瞬間、目を固く閉じた綾は、顔を光秋の胸に叩きつけるように押し付けてきた。

暗さで細かな表情こそはつきりわからないものの、密着したことで伝わってくる微かな震えから、羞恥に悶えていることは察することができた。

「そんなに恥ずかしいなら、訊かなきゃいいのに………」

「だってっ……だってえ……………アキが頭の中でぐるぐるさせてるから………」

「それはすまない」

顔を合わせずに言われたことがあまりに凶星だったので、光秋は謝ることしかできなかった。

「……もつとも僕としては、お前さんに羞恥心があると知ったことが、今回一番の驚きかもな」

「どういう意味!」

感じたままを素直に呟くと、綾はようやく顔を上げ、三角にした目を向けてくる。

「いや、だって、会ってすぐのころは、裸見られても平然としてたし……………」

そう答える光秋の頭に浮かぶのは、綾の精神がまだ幼かった頃、不注意から着替えの途中を覗いて一糸まとわぬ背中を目撃してしまった時だった。

「いつの話っ!」

「それに今だって、機会があれば風呂に入ろうって誘ってくるし……」

「それは……………」

心外だと言わんばかりに詰め寄る綾だったが、そう返されると途端に言い淀む。

「それは?」

「…………だから、その…………アキと入りたいからで、別に変な意味は…………ああ

んっ、もうッ!」

ぼそぼそと応じると、綾は再び光秋の胸に顔を押し付ける。

「……………」

答えには今ひとつ納得できなかったものの、頬を膨らませながらも自分に身を寄せてくる綾が愛おしくて、光秋はそっとその体を抱きしめた。

と、綾と交代した法子が思い出したように言ってくる。

「私も、さっきのこと思い出して思ったんだけどさ。光秋くん、思った以上に大変だったみたいだね」

「そりやあ、畑違いの仕事でしたからね。慣れるまでは……いや、今もって四苦八苦の日々ですよ」

「だろうね……訓練中、テレポートで落としたカプセルにつまずいたりしてたし」

「それは言わないでくださいッ」

なんとなしに法子が挙げた実例に、今度は光秋が恥ずかしさに悶える番となった。桜たちの主任になって間もない頃に行った曾我との模擬戦、そこでの失敗を思い出すと、今でも穴があつたら入りたくなるのだ。

「……………そこまで?」

「そこまでなんですよ」

思つた以上に激しい反応に困惑する法子に、光秋は被つた布団の隙間から氣まずそうに顔を覗かせて応じる。

「ふーん?」

その様子に法子は愛おしそうな笑みを浮かべ、光秋の頭をそつと撫でた。

「……………」

その子供をあやすような仕草に照れ臭い憤りを感じるものの、同時に法子に触れられることへの安心感や嬉しさもあつて、光秋は先程までとは質の異なる恥ずかしさに悶えながらもしばらく撫でられるままに任せた。

「すみません……………」

聞こえているかはわからないが、一応壁越しに謝しておく。

「……………ふっ。ふふっ！」

そんなしょうもなさまでが無性に可笑しくなって、今度は声の大きさに気を付けながら再び笑い合った。

しばらくすると笑い疲れたのか、少しずつ声は治まり、“三人”は再び眠りについていった。

「……………」

互いに向け合った寝顔は、最初に寝付いた時よりも穏やかで、何よりも楽しそうなものだった。

115 姉妹との休日

翌朝。すっかり日が昇った頃に起きた光秋と伊部姉妹は、一緒の布団から出ることを多少惜しみながらもベッドを下り、トーストとコーヒーを用意して遅い朝食を始める。

「……………すごい体験でしたね。昨日の夜」

コタツにもぐってトーストをかじりながら、光秋は未だ夢見心地の残る顔で昨夜のことを振り返る。

「だねえ……………隣の人に怒られちゃったけど……………」

「ハハア……………」

深く頷く綾に対し、法子は壁を見やりながら不安を浮かべ、光秋はコーヒーを飲みながら苦笑を漏らす。

「大丈夫かな？ なにかあったら光秋くんが……………」

「まあ、あれから静かにしてた……………少なくとも大きな音は立てなかったし、大丈夫でしょう。なにか言われたら、また謝っておきますよ」

ちびちびとコーヒーを飲みながら申し訳なきそうにする法子に、光秋は努めて前向きに応じる。

「それも含めて、昨日は本当に楽しかった」

「……そうだね。でも……」

残っていたコーヒーを飲み干してしみじみと呟く光秋に頷きながら、法子は再度壁を見る。

「それで光秋くんがご近所トラブルに巻き込まれるかもつていうのは、なんかねえ……私は今日帰るからいいようなもの——あつ」

言つてから、このタイミングにおいてその話題は言うべきではなかったとハツとする。

「……………」

そんな法子の危惧を表すかのように、起床以降おおむねほのぼのとしていた“三人”の間に、重い気まづさが漂う。

しかしそれも十数秒程のことと、光秋は食べ終わった食器を片付けながら言う。

「だからこそ、帰るまでの残り時間を楽しいものにしましょうよ。もちろん近所迷惑にならない範囲でね」

最後の方は冗談気味に微笑んで言うと、重ねた食器を台所の水盤に持っていく。

「……………」

それに応えるために笑みを浮かべると、法子も台所に向かう。

「ああ、いいですよ。洗い物くらい僕一人で。というか、2人並ぶと狭いし」

「それもそうか。じゃあ、着替えたりして待つてるよ」

言いながら、法子は居間に戻る。

光秋も皿洗いを終えて居間のドアを開けると、着替えを済ませた伊部姉妹がコタツに入って待つていた。

「すみません。僕も着替えちゃいますね」

言うとき光秋は服を持って脱衣所へ向かい、そこで素早く着替えを済ませて戻ってくる。

ひと心地ついたと感じながらコタツに入ると、伊部姉妹を見ながら問う。

「それで、これからどうしましょうか？」

「そうだなあ………とりあえず、テレビでも観る？」

応じると、法子は机の上のリモコンを取り、テレビの電源を入れた。

点けた時にたまたま流れていたバラエティー番組をぼんやりと眺め、それに飽きた光秋が積んである本を1冊取って読みだすと綾も1冊借りて読み始め、静かで穏やかな時間がいばらく続いた。

切りのいいところで本を閉じた光秋が時計を見ると、すでに12時を過ぎていた。

「もうお昼か……昼飯どうします?」

「もうそんな?」

訊ねる光秋に、綾は本から顔を離して時計を見やる。

「なにか食べたいものがあれば、私が作るけど?」

「と言つても、そんなに腹減つてないんですよ。ほら、朝が遅かったから……」

訊き返す法子に困った顔でそう返しながらも、光秋はどうしたものかと考えてみる。

「……………ちよつと、出てみますか?それで腹が空けば帰つてきてから食べればいいし、行つた先でいい店を見付けたら入つてみればいい。どうです?」

「……………そうしよつか。帰る時間までずつと家の中にいるのもどうかかつて思つてたところだし。ご近所案内してよ……あたしもそれがいい」

「それじゃあ……」

法子と綾の返事を聞くと、光秋は財布の中身を確認し、コートを羽織つて外に出る。すぐに伊部姉妹も出てくるとドアに鍵をかけ、手を繋いで歩き出す。

「さて、どこに行つたものか……」

「どつかおすすめのお店とかないの?」

「案内してと言われておいてなんですけど、僕もこの辺そこまで詳しいわけじゃないで

すからね。せいぜい寮と駅の最短コースくらいで。その間にある食べ物屋といったラーメンくらいだけど、そういうのとも違うような……………」

会話を重ねながらも、「三人」は光秋先導の下にあてどなく街を歩いていく。

「……………」

「……………」

しばらく行くと綾が立ち止まり、光秋もつられて止まる。

「どうした？」

「あそこ」

答えながら、綾は路地の一角を指さす。光秋が指先を追って見ると、小じんまりした

喫茶店らしき店があった。

「……あんな所にあるもんなんだな」

浮かんできた感想をぼんやりと呟くと、綾が手を引いてくる。

「入ってみようよ」

「あそこでもいいのか？」

「うん。入ってみよう」

「法子さんは？」

「私もいいよ」

「じゃあ」

“二人”の賛成を得ると、光秋は路地に入り、少し行つた先にある店のドアに手を伸ばす。くすんだ丸ノブを回すと、小気味いいベルの音が迎えてくれる。

「いらつしやいませ。何名様で？」

カウンターの向こうに佇む白いものが目立つ店主の問いに、光秋は伊部姉妹を見て、少し迷いながらも答える。

「……2人です」

「では、そちらのテーブル席にどうぞ」

言いながら店主は近くの席を示し、“三人”はそこに腰を下ろす。

「その……………ごめん」

「なにが？」

「いや……………さつき『2人』って……」

「ああ……」

椅子に座るや言い辛そうに告げる光秋に、綾は言いたいことを察して少し呆れる。

「気にしなくていいよ。あたしたちもわかつてるから」

「……………助かる」

本当に気にした様子もなくそう言ってくれる綾に、これ以上伊部姉妹に対する申し訳

なさを引きずっていても仕方ないと感じた光秋は、意識して気を取り直すとテーブル脇のメニュー表を取って伊部姉妹に見せる。

「それで、なににする?」

「うーん……………」

うなりながら綾がページをめくっていくと、デザート項目で手が止まる。

「…………じゃあ、これと、あとカフェラテにしよう」

「…………パンケーキか」

綾が指さしたメニュー名を見て、光秋は自分の腹に意識を向ける。そこそこ歩いたものの空腹はあまり感じず、いつもならもう少し軽いものか、あるいは飲み物だけにする塩梅だ。

が、この時に限っては、綾が指さしたその料理を無性に食べたいと感じた。

「じゃあ、僕もそれと、あとコーヒーを」

自分の頼む分も決めると、呼び鈴を鳴らして店主に注文を告げる。

一礼した店主が奥に消えると、改めて店の中を見回してみる。テーブル席が4つとカウンター席が並ぶ店内に客は自分たちしかおらず、コーヒーの香りを乗せたほどよい静けさがあつた。

「…………個人営…………でしょうか?」

「お店の雰囲気を見ると、そんな感じだね。昨日渋谷で入ったチエーン店も悪くないけど、こういう質素な感じもいいかもね」

周りを眺めながらぼんやりと告げる光秋に、法子も好奇心の目を辺りに向けながら返す。

少しして店主が戻ってくると、運んできた料理をテーブルに並べていく。

「コーヒーは？」

「あ、僕です」

「こちらカフェラテになります」

光秋、伊部姉妹の順にカップを置くと、店主は再びカウンターの奥へ去っていく。

「うわあ、美味しそう！」

感動の声を上げると、法子は携帯電話で自分の分のパンケーキを撮影する。

「春菜さんに送るんですか？」

「うん。その時、せっかく東京に来たのに顔合わせなかったことも謝ろうかなあつて」
言うとな子は携帯電話を戻し、見事なキツネ色の生地にバターを塗って付属のハチミツを垂らしていく。

「……………なるほど」――僕も、後で一言言つといた方がいいだろうか……………」

自分もハチミツを垂らして応じながら、光秋は親友を独占してしまったことに対する

姉貴分への罪悪感を覚えた。

もつとも、それも数秒のことだった。

「さあ、食べよう」

「だな。いただきます」

互いに食べる準備が整うや、綾に領いて光秋は手を合わせ、初めにコーヒーを少しする。ブラック独特の苦みが口の中に広がると、ナイフでパンケーキを切り分け、フォークに刺した一切れに皿の中に垂れたハチミツを追加で付けて口に運ぶ。

「……………！思った以上にいけますね」

コーヒーの苦みで強調されたハチミツ、そしてパンケーキそのものの甘さは、予想以上に自分好みのものだった。

「本当……すごく美味しいっ！」

綾も感動の声を上げて次々とパンケーキを口に運び、その様子に光秋はハチミツやパンケーキのそれともまたひと味違う、胸の辺りに感じる甘さに頬を緩めた。

——いいな、こういうの。一緒に美味しいもの食って、『美味い』って気持ちを共有して、そんな時間を一緒に過ごす。例えばそれが、傍から見ればどれ程些細で、ありふれた、なんの変哲もない光景だったとしても——

浮かんできた想いをしみじみと噛み締めながら、コーヒーを一口飲む。

「……………そういえば」

「ん？」

カップを置きながらなんとなしに呟くと、綾が顔を向けてくる。

「パンケーキとホットケーキって、なにが違うんだろう？」

「さあ？どっちも美味しいからいいんじゃない？」

「それもそっか」

言った光秋自身が他愛無いと思えるような会話を交えながら、“三人”はパンケーキと、パンケーキを食べることを通じて共に過ごすこの時間を堪能した。

パンケーキを食べ終えた“三人”は店を出ると、来た道を辿って寮へと戻った。

「美味しかったね。さっきのお店」

「ですね。歩いて行ける距離にあんなところがあつたなんて……出てみて正解でした」
コタツにもぐって寝そべる法子に、光秋は軽い感謝さえ覚えながら頷く。

「こういうのを、『犬も歩けば棒に当たる』っていうんだっけ」

「まあ、あながち間違つてないかな……？」

十中八九自分の異名を受けて言っている綾に、光秋も少し可笑しくなって笑って返

す。

それから少しして充分に温まると、光秋はコタツを出て机に歩み寄り、その上のノートを取って戻ってくる。横尾ノートと、その内容を自分なりに整理・考察したノートだ。

「それ、前に言ってたフミのお父さんの？」

「はい。なんか触りたくなっちゃって」

顔を上げて訊いてくる法子に、「三人」だけの時に悪いと思いながらも誘惑に負けてしまった光秋は、軽い申し訳なさを抱きながら頷く。

「寝ててもいいですよ。なんだったらテレビでも点けて」

「……ちよつと見せて」

言いながらリモコンを差し出す光秋だったが、綾は構わず横尾ノートの一冊をパラパラとめくっていく。

「……………横尾さんのお父さん、字汚いね」

「はつきり言うな、お前さんは……」

いの一番に出てきた感想に、自分もそう思ったことがある光秋は思わず苦笑いを浮かべてしまった。

「まあ確かに。僕もすらすら読めるようになるには、少し時間がかかったけどな」

横尾ノートを読み始めた時のことを思い出して、何カ月と経っていないはずなのにし

みじみと懐かしさを感じた。

「こつちがアキのノート？」

ひと通り目を通した横尾ノートを返すと、綾はその手で光秋のノートを取って開く。

「へー、こつちもいろいろ書いてあるね」

「まあな。『次の人』について知りたい。それが僕の……強いて言うなら趣味だからな。気付けばいつもけっこう書き込んでる」

「それで？ 研究の程はどうですか？」

「んー……ぼちぼち……いや、全然……かな？」

冗談半分の声で法子が訊いてくると、光秋は表情を曇らせて視線を下げる。

「全然？」

「ああ。暇さえあれば、僕なりにいろいろ勉強してるつもりだけど……いまいち付いてこないっていうか……昨日のケンカのこととか、ね……」

脳裏に過るのは、昨日の昼の口論。それを通じて伊部姉妹の気持ちを察してやれなかったと知った時の後悔だった。

「ああいう経験をするたび、自分はつくづく『今の人』なんだと実感するというか……『次の人』というものを知ったからこそ、そういうものについて深く学ぼうとすればするほど、自分の中の『今の人』の部分に敏感になるというか……」

気付けば、ここ最近よく抱く自分自身への不満が口を突いて出ていた。

「前に読んだ小説だけに、『学べば学ぶほど、目指すものから遠くなっていく』って、確かそんな一文があつた気がしたけど、正に今の状況がそうかもしれないね」

言うのと、光秋は自嘲を浮かべる。

「またなんとも自虐的だねえ……でも、ちよつとわかるかも」

そんな光秋の様子を法子が言い現わす一方、綾は憤つたような顔を浮かべて共感を示す。

「年末にさ、調べたいことがあるって言つたの覚えてる？『どうすれば平和になるか』って」

「ああ。法子さんの部屋でな」

「アキが引つ越してからさ、法子に近所の図書館に連れてつてもらつて参考になりそうな本を読んだり、ネット見たり、あたしなりにいろいろ調べてみたんだよ。でも、調べれば調べるほど、あたしが思つてたのとなんか違ふなつて、そう思うことが増えるようになった」

「……どういうことだ？」

今度は綾が視線を下げる中、光秋は綾への心配と、調べた結果への興味を織り交ぜて訊ねる。

「……調べ始める前はさ、武器をなくせば、戦うって気持ちをなくせば平和になるんじゃないかって、そんなふうに考えてたんだよ。でも調べれば調べるほど、平和を維持するには武器が必要だって、そういう考えをたくさん知っちゃってさ」

「ああ……」

綾が何を観聴^{みき}きしてきたのか具体的なことは知らない光秋だが、普段の仕事で武器、あるいは攻撃性のある超能力を扱い、それによつて事件を解決してきた身には、わからない理屈ではなかった。

「むしろ、武器をなくしたからこそ周りの国に狙われて、その結果戦争になってしまつたって……そういう歴史もあるって知ったら、なんかさ……」

視線どころか顔まで下がり、ついに綾は虚ろな表情を浮かべてコタツに突つ伏す。

「なるほどな」

それをしげしげと眺め、先程の自分と同じか、よく似た気分を抱いているのだろうかに深く頷きながら、光秋は言った。

「でも、それでも調べることをまだやめてないんだろう？」

「え？……あ、うん……」

そつと投げかけられた問いに、綾は一瞬戸惑いながらも顔を上げて頷く。

「僕も同じさ。自分の『今の人』つづりをいくら見せつけられても、それでも『次の人

“つて夢を追い続けずにはいられない。追えば追うほど遠くなるとわかっていても、それで苦しむと理解していても、今現在、目の前の現実には満足できないから、別の何かを求めてやまない……そんなところがさ”

言葉を重ねることに、光秋自身下向き気味だった顔が少しずつ上へと向いていく。

「……………そう、だね。そうだつ」

束の間光秋の言ったことを吟味すると、綾は快活な笑顔を浮かべて深く頷いてくれた。

「ていうか、アキに励まされちゃったよー」

「それはよかった。こつちに來てから、どうにも謝るようなことばっかしてきたからな」
ふざけ半分で拗ねる綾に、光秋は少しでもためになることができたと喜ぶ。

そして、意識を法子へ向ける。

「法子さんも、ありがとうございました。綾に付き合ってくれて」

「別に。私にとっても勉強になってたしね。というか、光秋くんは綾の保護者かなにか？」

「そういうわけじゃないですけど……なんというか、綾に関連することなら、僕もお礼の一つくらい言うべきかなって。もちろん、法子さんの場合もですけど。なんか、そうした方がいいかなって思ったから……」

「……………そっか」

法子はそれ以上なにも言わず、ただ黙って頷いた。

その無言の首肯が、光秋には百の言葉を用いた返答以上に「分かってくれている」という感触を抱かせてくれた。

と、伊部姉妹は急にコタツから出て、光秋の後ろに回り込む。

「どうしました？」

「別に。ちよつと暑くなつて」

応じながら光秋の後ろに座ると、姉妹は背中を寄せてくる。

「ああ、これは……」

互いに背中を預けた体勢に、伊部家で過ごしたひと時を思い出した光秋は、

「そうですか」

と応じただけで、すぐに横尾ノートの読み取りに集中する。

伊部姉妹は特に話しかけることもなく背中を寄せ続け、エアコンの風音くらいしかない静かな時間が過ぎた。

電車の発車時刻や東京駅までの移動時間を考えると、この時間が今回の訪問で「三人」一緒に過ごせる最後のひと時となる。それにしても随分と質素で賑わいのない過ごし方だったが、光秋はむしろその静かで落ち着いた雰囲気が好きだった。何より伊部姉

妹の実感を背中全体で感じられることが、掛け替えのない至福だった。

——いいな、こういうの。好きな人のすぐそばで、好きなことをする。あちこち遊び回
るのもいいが、こうやって落ち着いて、特別意識せずに同じ場所で、同じ時を過ごすの
も、また……………

ふと後ろに目をやると、伊部姉妹もこちらを振り向いていた。

不意に合った視線に「可笑しいっ！」と言わんばかりに微笑む伊部姉妹を見て、光秋
は“二人”も同じ——少なくとも近しい気持ちを抱いてくれていると感じて、ノートに
筆を走らせながらも思わず頬が緩んだ。

「……………そろそろ行くよ」

それまで光秋に預けていた背中を離して言うと、法子は立ち上がって荷物の点検を始
める。

「じゃあ、僕も」

それに頷くと光秋もノートを片付け、財布と携帯電話を用意する。

それぞれ準備を整えると、“三人”は光秋の部屋を出る。

「持ちます」

「ありがとう」

光秋の申し出に素直に応じると、法子は旅行カバンを渡し、駅へ向かう。

太陽はすでにビルの合間に沈みつつあり、どこからともなく肌寒い夜風が吹いてくる。

そんな中を「三人」は手を繋ぎ、互いに寄り添い合つて駅のホームまで歩いて行った。

電車に乗ると空いている席に並んで座り、揺られながら肩を寄せ合つて窓の景色を眺める。

何度か乗り継ぎをして東京駅に着くと、今日も人の波が激しく行き交う構内を一層強く手を握り合いながら進んでいく。

そうして気付けば、新幹線乗り場の改札機の前に着いていた。

「……忘れ物はありませんか？」

「このタイミングでそれを訊く？」

「いや……」

笑いながら訊き返してくる法子に、自身もそう思った光秋は頭を掻く。

と、法子は笑顔を消し、光秋の目を真つ直ぐ見つめて言ってくる。

「また、会いに来るよ」

「……………」

言わずもがな質問の裏にあった本心を察しているその言葉に、光秋は見透かされたことへの照れ臭さを感じながらも、わかってもらえたことがやはり嬉しかった。

「はい。僕も約束はできないけど、こっちからも京都に行けるように頑張つてみます」
「うん。楽しみにしてる！」

何の見通しもない、しかし言わずにはいられなかった言葉に、綾が楽しそうに頷いてくれた。

「……………それじゃあ、行くね」

名残惜しそうにそう告げたのは、法子か、綾か、珍しく光秋には判別できなかった。あるいは、伊部姉妹“二人”の言葉だったのかもしれない。

「……………はい」

後ろ髪を引っこ抜かれるかというくらい強く引かれる思いを抱きながらも、光秋は頷き、改札機へ向かう伊部姉妹の背中を見送ろうとする。

しかし、直後、

「——ちよつ、ちよつと待つてください！」

3歩と離れない内に叫ぶや、振り返った伊部姉妹を強く抱き締めていた。

「ちよつ！光秋くん！」

「すみません。少しだけ、もう少しだけですから」

戸惑う法子に詫びながらも、光秋は回した腕に一層力を込める。

衆人環視の中での抱き着きに、好奇の目を向けてくる者、初々しい光景に微笑みを浮かべる者、露骨に嫉妬の籠った目を向けてくる者、視界の端にすら入れることなく忙しそうに通り過ぎていく者、様々な視線が四方から向けられるものの、そのいずれも光秋の関知することではなかった。

今はただ、腕の中の伊部姉妹の実感を少しでも長く感じていたかった。その為に、持てる全ての感覚を動員していた。

伊部姉妹の方も最初の戸惑い以降、抵抗や拒否の態度は示さず、むしろ自分たちの腕を光秋の体に回してきた。

—ああ、“二人”も同じか—

今でも同じ気持ちでいてくれることが、光秋にはひたすらに嬉しかった。

それでも、伊部姉妹——特に法子はまだ冷静だった。回してきた腕を解くと、光秋の体をそつと押して離す。

「今度こそ行くね。さすがに乗り遅れちゃう」

「はい……すみません。最後にワガママやつちやつて」

その言葉に頷くと、光秋は自分の意思で法子から離れ、改札機を通るのを静かに見て

いた。

最後に振り返って手を振る伊部姉妹に、こちらも手を振って応じると、それっきり前を見て速足になった“二人”の背中を見えなくなるまで見送った。

「……………!？」

直後によくやく様々な目で見られていることに気付いた光秋は、さつきまでの自分の行動に顔を赤くしながら、逃げるように改札機前から立ち去った。

—僕って奴は！我ながらこんな場所で何てことを……………—

今更ながら、自分のしたことが恥ずかしくなってくる。

もつとも羞恥に悶えたのも数秒のことで、すぐに伊部姉妹がいなくなったことへの実感に胸が一杯になる。

—法子さんも綾も、もう行っちゃったんだよな……………—

そう思うと、左側が妙に寒く感じる。ついさつきまでそこを埋めていたはずの温もりが、ごっそり欠けてしまったような。

それに合わせるように、研修や桜たちとの人間関係、自分が出動した事件の数々と、東京に来てからの大変だった思い出が次々と浮かんできて、それらは先のことへの不安を思い起こさせた。

—明日からまた、これまでのような——あるいはこれまで以上に大変な事態に遭うか

もしれない。次に会う時——が、来るんだろうか？——

思いながら、数分前まで伊部姉妹と繋いでいた左手を見る。

——……………否、『だろうか？』じゃない。来させるんだ。それこそ異動の時に言ったじゃないか。DDシリーズの大群と戦うことになつてもまた会うつて。今回はそれが叶ったんだ。一つ一つのことをこなし続けて、その機会を得た。だったら次だつて、その次だつてやつてやるさ！——

見つめていた左手を強く握り、そこに伊部姉妹の体温の残りを感じ取ると、胸の中にそう宣言した。

「……………さて、帰るか」

それで少しは気が楽になると、顔を上げてしっかりと前を向き、さつきよりはいくらか軽くなった足取りで寮へ向かった。

翌日——3月28日月曜日。

伊部姉妹と別れてからの初仕事に多少不安があつた光秋だったが、いざ待機室の机に座れば、体はここ数週間の内に馴染んだ習慣のままに動いてくれた。

——始まる前はちゃんとやれるかと思つたが……いやはや、便利なもんだな——

ひと休みに近くの自動販売機で買ってきた緑茶を飲みながら、滞りなく平常業務を片付けていく自分の体に心底感心する。

と、ポケットに入れていた携帯電話が振動する。画面を開くと、涼からだった。

「もしもし?」

（光秋さんですか? 変な時間にかけてすみません。私の方が今くらししか連絡できる時間がないくて）

「いや、いいよ。ちょうどひと休みしてたところだから。で、どうした?」

（その……………4月16日って、空いてますか?）

「4月16日?」

心なしが強張った涼の声を不思議に思いながらも、光秋は手帳を開いて言われた日の予定を確認する。

「ああ。今んとこ空いてるけど」

（!よかったあ…………）

心底安堵した声を漏らすと、涼はひと呼吸置いて言ってくる。

（実はその日、私が入っているグループのコンサートがありました、よかったら来ていただけませんか?）

「コンサート? グループって?」

（大学の軽音楽部の）

「ああ。そういう前にそんなこと言ってたな」

言われて光秋は、研修期間中に輩も交えて訪れたデパートでそんな会話をしたことを思い出す。

「なるほど、そのコンサートってわけか……………わかった。行かせてもらうよ」

もともと予定がなく、涼が歌っている姿にも興味があつたことから、電話越しに頷いた。

（本当ですかっ！）

「ッ!!」

直後に返ってきた涼の大声に、慌てて携帯電話を耳から離す。

「あ、ああ…………ホント、ホント…………」

（……………すみません）

恐る恐る耳を当て直して応じる光秋に、さつきと打って変わって小さな謝罪が返ってきた。

「それで、コンサートって何処に行けばいいんだ？」

（後で会場の地図を送ります。チケットも一緒に）

「本格的だな。まあ、楽しみにしてるよ」

（ありがとうございます。では、私はこれで。お仕事頑張ってくださいっ）
「ああ。ありがとう」

応じると、涼の方から電話は切れた。

ソレをポケットに戻すと、光秋は涼の顔を思い浮かべながら呟く。

「なんか、面白いことになってきたな。涼さんのコンサートか……」

元来音楽関係のイベントにはあまり興味が湧かないものの、相手が涼となれば話は別だった。今からステージの上で歌っている姿を想像して、思わず口元が緩む。

——楽しみだなあ………楽しみ、か……—

深く考えずに口の中に呟いたその言葉が、昨日までの伊部姉妹と過ごした時間を思い起こさせる。

——法子さんや綾と過ごしたあの時間も、確かに楽しいものだった。なんなら胸を張ってそう言えるくらいだ。でも今、涼さんのコンサートを楽しみにしてるのも確かだ。もちろん、それぞれでまた意味合いは変わってくるだろうが……—

そこまで考えると、昨日の東京駅の帰りと対になるかのように、異動後の「楽しい」、「面白い」と感じた思い出が次々と浮かんでくる。

——例えば研修期間に涼さんとあちこち歩いた時、あの時も確かに楽しかった。その後董さんたちと合流した時だって、桜さんや菊さんとのギクシャクがあつたとはいえ、あ

れはあれで面白い時間だった。それに、春菜さんに元気づけてもらった時だって………

脳裏にその時の光景が一つ過るたびに、喝を入れたとはいえ昨日からどこか低温気味だった胸が、少しずつ熱くなってくる。

そこに伊部姉妹と過ごしたこの2日少々の思い出も加わった時、光秋は唐突に思った。

—もしかして……僕が本当に守りたいのは、“これ”なんじゃないか？—

瞬間、法子に綾、涼、桜、堇、菊、曾我と、こちら側に來てから深い関わりを持つようになった人たちの顔が浮かんでくる。

—自分の身近な人たちを……その人たちと一緒に過ごす時間——“日常”こそを守りたい。それが、僕のやりたいこと……—

同時に、年末に伊部母と交わした会話、そこで抱いた気持ちを思い出す。

—目の前の人を一人でも多く守りたいって、あの想いは今でも変わらない。実際、この前の催眠能力者通り魔事件の時も、人質にされた親子を助けたって思ったのも確かだ。そもそも桜さんや涼さんにしたって、最初はそういう気持ちから始まった気がする

—
思いつつ、新年祝賀パーティー襲撃事件のことを思い出す。

「なんと言うかな……………要は優先順位というか、最終的な足場をどこに置くかってことか」

声に出すことで、自分の中の想いが纏まっていく感じがした。

「……………さてとね」

胸の中に感触を得たところで残っていたお茶を飲み切ると、一言呟いて気持ちを切り替える。

—そういう気持ちが自分の中にあるとわかったなら、それらしいこととしてみるかね

胸の中に告げると、予てから考えていたこと、その手順の確認をするために、藤岡主任の部屋へ向かった。

その後、出勤要請が出ることもなく、本部内で何らかのトラブルが発生することもなく淡々と時間は過ぎ、気付けば日は傾き始め、窓の外は朱色が目立つ頃となっていた。

桜、堇、菊の3人が待機室にやってきたのは、そんな時間だった。

「おっす」

「ああ、桜さんたち。学校帰りか」

3人を代表するような桜の挨拶に、光秋はペンを走らせていた書類から一旦顔を上げて、制服姿の少女たちを見ながら応じる。

「何書いてたんですか？」

「ん？予てから、スフィックスと模擬戦をやりたいと思っててさ。その申請書類」

机に歩み寄りながら訊いてくる菊に、光秋は机の上の書類を示しながら答える。

「スフィックスって、あの合軍のオッサンがいるところだろう？この前光秋を囿に使った」

「まあ、そうだけど……そういう言い方はやめなさい」

憎々しそうに言う桜に、光秋は自分を慕ってくれているのだらうとは思いつつも、そつと注意した。

「そもそも、なんでそこと模擬戦なんて」

「それなんだがな……」

董の質問に、光秋は少女3人をそれぞれ見やり、前から考えていたことを語る。

「君たちも知っているだろうが、昨今のNP、ZCの抗争ではメガボデイが積極的に使われている。実際僕が主任になってからは、関わった事件で必ずと言っていい程出てきただろう？」

「まあね」

桜が応じ、董と菊も頷いて返す。

菊の顔色がどこか優れなかったが、また先日 of 独走を思い出して罪悪感を抱いているのだらうと察した光秋は、敢えて触れずに話を続ける。

「そうなる、僕ら加藤隊の対メガボディ戦への練度をもっと上げたいと思つてね」

「あ、だからスフィックスなんですね。あそこはメガボディ戦を研究してる部隊だから」
「その通り」

先を察して告げた菫に、光秋は首肯で応じる。

「僕らにとつてはいい練習相手だらうし、それに向こうにとつても、超能力者との戦闘、特に対ZC戦の参考になるだらう。なにより、対DDシリーズ戦の参考にもなるつてことだ」

「DDシリーズって、あの黒いロボットの？」

「一応、福山主任はそれを目標にメガボディの研究をしているらしい」

おまけ程度に付け加えた一言に桜が首を傾げるのを見て、光秋は以前本人がそう言っていたのを思い出しながら答える。

「もつとも、福山主任なら本当にやりそうな気がするけどな。そうなつてくれたら、僕ももう少し楽ができていいんだけど」

これもついでのつもりで仕事面における順位の高い願望を呟くと、少女たち、特に桜が不満そうな顔を浮かべる。

「あんな奴ら、アタシらのチームワークで充分倒せるじゃん。それだけじゃ物足りないっての?」

「別にそこまでは言っていないよ。ただ負担が減るならそれに越したことはないってだけで。それに、確かに今は僕らの力だけで何とか対処できてるけど、今後ともそうとは限らないだろう?」

「……新型が出てくる……とか?」

「あるいは、僕らの知らない戦法を使ってくるとか。実際、すでに違う型が2種類確認されてるわけだし、初めは1機ずつしか出てこなかったのが、この前一度に3機も出てきたりしたし。まだまだイメージを固定するのは早いかな」

菊に応じながら、光秋は秋田で初めてナイガーに遭遇した時、工場地帯の戦闘で初めて3機同時に現れて連携をとられた時のことを思い出す。

「もちろん、君らとのチームワークだつて蔑ろにするつもりはないよ。そういう部分の強化も含めての模擬戦計画なわけだし」

言いながら、机の上の書類を叩いて示す。

「とりあえず必要なことはひと通り書き終わつたし、出してくるかな」

最後に書類を走査して書き漏らしや誤記がないのを確認すると、立ち上がって窓口へ向かう。

「アタシらも行つていい?」

桜が言いながら、菊と董も後に続く。

「いいけど、書類出してくるだけだぞ?……あ、ならその足で模擬戦行くか?」

「それはイヤです!」

「じゃあ今日はやめとくか」

即答で拒否する菊に、光秋は軽く笑つて返した。

その様子を見て、董が控えめに訊いてくる。

「なんて言うか……今日の光秋さん、調子よさそうですね。その……このお休みになにかありました?」

「……………」

菊と桜もどこか緊張した様子で聞き入り、それに首を傾げながらも、光秋は感じているまゝを素直に語った。

「そうだなあ……あつたと言えばあつたな。少なくとも、僕にとってこの週末はいい時間だったよっ」

午前中の涼との会話をきっかけに抱いた想い、そして法子と綾の顔を思い浮かべながら、胸を張つて言った。